精霊幻想記（Ｗｅｂ版）

北山結莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
https://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊幻想記（Ｗｅｂ版）

【Ｎコード】
Ｎ１０９４ＢＺ

【作者名】
北山結莉

【あらすじ】
主人公のリオは異世界のスラム街で最底辺の孤児として暮らしていた。だが、日本で暮らしていたとある青年の記憶と人格が、七歳のリオの身に宿る。その後、王女誘拐事件に巻き込まれ、恩人兼重要参考人として、お姫様も通う超名門校に一人放り込まれたリオの運命は……。
◆コミック版「精霊幻想記」から作品に入ってくださる方からのご質問も多いので最初に説明を。小説の「精霊幻想記」にはＷｅｂ版

と書籍版の２種類がございます。コミック版「精霊幻想記」の土台となっているのは書籍版のストーリーでして、小説もご覧になる場合は書籍版から先にご覧になった方が違和感は少ないと思われます（書籍版とＷｅｂ版とで物語の展開が大きく異なるのでご注意ください。書籍版の方がストレス要素がマイルドで、戦闘要素や主人公の活躍も書籍版の方が多めです（５巻以降は特に）。なので、ストレス耐性のない方は書籍版のみをご覧いただくことを推奨いたします）。

◆ＨＪ文庫様より書籍版「精霊幻想記」１～１０巻とコミック版「精霊幻想記」１巻が好評発売中。書籍版はＷｅｂ版を土台にリメイクしている関係上、Ｗｅｂ版とはほぼ別展開の別作品になりました。設定も一部異なります。

◆書籍版「精霊幻想記」が「このライトノベルがすごい！　２０１８」の読者投票（ＨＰ票）で総合４位にランクインしました。ありがとうございます！

◆拙作は処女作であり、習作でもあるため、章ごとに様々なテーマを盛り込んで執筆しております。

◆感想返信は諸事情により誤字・脱字等のご指摘をメインに行っております（著者の側で客観的に瑕疵が明白だと判断できない表現に対する修正のご依頼等にはご対応しかねる場合もございますので、ご了承くださいませ（例：誤字、脱字、文法ミス等以外のご指摘）文法的なご指摘には理由を明記していただけると幸いです）。事実に対する評価の妥当性や、登場人物の言動や価値判断の妥当性といった、作品の内容面に触れてしまうご感想への返信は控えさせていただいております。内容に立ち入らない設定面に関するご質問などには返信する場合もございますが、詳しくは２０１５年１月１８日の活動報告をご参照ください）。

◆書籍化に伴いタイトルを「精霊幻想記　～こんな世界で出会えた君に～」から「精霊幻想記」に変更しました。

第1話　前世（前書き）

コミック版「精霊幻想記」から作品に入ってくださる方をはじめ、新規読者の皆様から「書籍版とＷｅｂ版どっちから先に読めばいいの？」とのご質問が多いので、最初に下記の通り説明いたします。こちらのご質問に興味がない方は説明を読み飛ばして下の本編へ進んでください。

記

まず、小説版「精霊幻想記」にはＷｅｂ版と書籍版の２種類がございます（登場人物は同じですが、Ｗｅｂ版をリメイクして書籍版を執筆している関係上、それぞれ大きく異なる展開を経て物語が進んでいきます（書籍版の方が後々のストレス要素がマイルドであり、戦闘要素や主人公の活躍もだいぶ多いです）。

なお、コミック版「精霊幻想記」の土台となっているのは書籍版のストーリーでして、コミック版をご覧になった後に小説もご覧になる場合は、書籍版から先にご覧になった方が違和感は少ないはずです（コミック版で発生しているイベントがＷｅｂ版では発生していないぞ？とか、コミック版とＷｅｂ版小説とで展開が違うぞ？とか思うことが少ないはずなので）。

なので、上述の事情を踏まえた上で、Ｗｅｂ版と書籍版のどちらから先にご覧になるかお決めいただけると幸甚です（２０１８年４月現在、書籍版「精霊幻想記」は１０巻まで発売されておりまして、おかげ様でたくさんの方々からご好評いただき、「このライトノベルがすごい！　２０１８」の読者投票でも総合４位にランクインしました）。

説明は

以上です。

第1話　前世

天川春人（あまかわ はると）は東京に暮らす大学生であった。

季節は夏。

透き通るような青空には燦燦（さんさん）と光り輝く太陽が浮かんでいた。

地面に敷き詰められたアスファルトからは、空気をも溶かすような熱気を孕（はら）んだ陽炎（かげろう）が立ち昇っている。

そんな悪環境の中、春人は、どこか冷めた表情を浮かべて、自らが通う大学のキャンパスへと続く緩い坂道を歩いていた。

道中、春人を発見し、近くを歩いていた女子大生のグループが密かに黄色い声を上げる。

近寄りがたい雰囲気はあるが、春人は背が高く、見た目も端麗である。

また、古武術で鍛えていることから、体格も良い。

それゆえ、春人は大学に通う異性達からちょっとした有名人であった。

とはいえ、春人はそういった噂には一切興味はなかった。

別に男色家というわけではない。

だが、生まれて二十年以上、春人に彼女がいたことはない。

春人には一人の想い人がいる。

その人物は春人の幼馴染だ。

だが、その想いが実ることはない。

憧れた彼女は春人の手が届く場所から消え去ってしまったのだ。

春人の幼馴染が失踪したのはもう五年も前のことである。

そして、春人が幼馴染と最後に話したのは十三年も前のことだ。
春人が彼女と出会ったのは物心がつく前であったからか、彼女のことを好きになるのに時間はかからなかった。
毎日のように彼女と一緒に遊んで、気がつけば彼女のことを好きになっていたのだから、当たり前だ。
だが、幼くして春人の両親が離婚することとなり、春人は田舎にある父親の実家へと連れて行かれることになった。

その時、二人はある約束をする。
いつか出会えた日に二人は結婚する、と。
何の拘束力もない、幼い日の淡く儚い約束だ。

それから、春人は、少女と結婚する将来を夢見て、一生懸命に努力することを誓った。
努力すれば願いは叶うのだと、何の根拠もなく信じて、勉学に励み、農業や家事など家の手伝いをし、祖父からは道場で古武術を習った。

会いたい。
彼女に会うためなら立ち止まってなどいられない。
何でもいいから努力して、成長すればするだけ再会の時は早まるんだと、春人は本気でそう信じていた。
努力し続ける春人の想いが親に届いたのか、春人は幼馴染が住む近くにある有名な高校へと進学することを父から認められた。

その高校で春人は衝撃的な再会を果たすことになる。
偶然、幼馴染の彼女も同じ高校に進学していたのだ。
どくん、と心臓が高鳴るのを、その時の春人は感じた。
間違いなく彼女だった。

大きくなっても見間違えるはずはなかった。
遠く、だけど、とっても身近で、ずっと大切な人だったのだから。
艶(あで)やかで見る者を魅了する背中まで伸びた黒い髪。
小顔に整った目鼻立ち。
雪化粧をしたかのような白い肌。
小柄だがバランスの良い体型をしており、お淑やかで清楚な雰囲気を持っている。
そんな絵にかいたような美少女だった。

春人は彼女と再会できた運命に歓喜した。
そして、同時に、運命を呪った。
彼女の隣には春人の知らない男がいたのだ。

春人は怖くなった。
もしかしたら二人は付き合っているのではないだろうか、
そう考えると、自分から彼女に声をかけることはできなかった。
そして、そんな風に悩んでいるうちに、春人の幼馴染は失踪してしまった。

それ以来、春人は後悔し続けてきた。
いなくなって初めて、ようやく春人は自らの犯した過ちに気づいたのだ。
心が砕けそうだった。
声にならない悲痛な叫びが身体中に響いた。

けど、諦められない。
諦めきれなかった。
諦めきれるはずがなかった。
まだ自らの想いすら告げていないのだから。

東京に来れば彼女に会えるのではないかと漠然と淡い希望を抱き、地元を出て東京の大学に進学した春人。
だが、いまだに彼女の消息は掴めないままだ。

東京へ来て三年目。
最愛の幼馴染のことを忘れることができた日はない。
幼馴染が失踪した事件については警察も捜査に乗り出したが、真相は謎に包まれたままである。

大学で講義を終えた春人が家の近くまでバスに乗って帰る。
夕方になる前の時間帯はバスに乗る人間も少なく、現在、車内にいる乗客は春人を含めて三人しかいない。
静寂に包まれる車内。
春人は、バスに揺られながら、流れる景色を見つめていく。

その時、突如、バスに大きな揺れが走った。
舞い上がる浮遊感、全身に襲い掛かる大きな衝撃、春人の意識は一瞬で真っ暗になりかけた。

『……て……』

完全に意識を失う間際の最後の瞬間、美しい声が、自分の知らない言葉で、春人の脳内に響いた気がした。

「次のニュースです。本日、午後三時三十五分、東京都〇〇区の路上にてバスと中型トラックがぶつかる交通事故が発生しました。この事故でバスに乗っていた乗客三名が死亡、トラックとバスの運転手は重傷を負ったものの一命を取り留めました」

第2話　覚醒

神聖暦九九一年。

ユーフィリア大陸にあるベルトラム王国。

その王都にあるスラムの一角で、胸を締め付ける悔恨の念に押されて、少年は飛び起きた。

「はぁ、はぁ……」

眼が覚めても逃れられない苦しみを紛らわすように、少年は胸を強く握りしめる。

そこで自らの全身がびっしょりと汗で濡れていることに気づく。

全身が熱い。

身体が内から燃え上がるような感覚だ。

だが、不思議と、少しずつ、その感覚がぽかぽかとしたようなものへと変わっていく。

（なんだろう……）

よくわからないが、不快感が少しずつ消えていくことは理解できた。

余裕もできたので、ふと、辺りを見渡す。

すると、薄暗く汚れた路地に、粗末な木製の家屋が立ち並んでいるのが見える。

饐えた臭いが鼻を刺激し、不快な臭いに眉を顰めつつも、その悪臭のおかげで少しずつ頭も覚醒してきた。

しかし、いつの間に眠っていたのか、記憶がない。

ドサリ、と地面に寝転がる。
服が汚れてしまうと思ったが、もう少し横になっていたい気分だ。
仰向けになったまま上を見つめると、澄んだ青空が視界に映った。

（酔っぱらって路上で寝たのか？）

まだ覚醒していないおぼろげな思考力でそんなことを考えたが、酒を飲んだ覚えはなかった。
周囲にある建物も、日本式の木造家屋とは異なり、見慣れないものばかりだ。
何とも言えぬ違和感を少年は覚えていた。
それにあまり体調もよろしくない。路上で寝て冷え切ったせいか、身体の節々が痛い。

（っ！？）

再度起き上がろうとして、気がついた最大の異変に、少年の脳内で悲鳴が上がる。
そう、少年の視界に入って来た手足は幼い子供のものだった。
自分は大学生だったはずだ。
いや、自分は孤児だったはずだ。

（どういうことだ？）

重複する記憶に少年は混乱する。
疑問に思った少年は自分の手足をゆっくりと見つめた。
それは飽食の日本で暮らしている子供のように綺麗な肌ではない。
栄養失調で細くなりすぎているうえに、乾燥して荒れており、しかも垢で薄汚れている。

少年としての記憶を前提にすると、風呂になんて入った記憶はない。

（マジかよ……）

思わず自分の不潔さに引きつった。
身に着けているのは麻製のボロい布の服だけだ。
靴なんて上等なものはもちろん履いていない。
それでも身に着けるものがあるだけ感謝するべきだろうか。
どのような目鼻立ちをしているかはわからないが、伸びきった髪の毛は、薄汚れていながらも黒であることはわかった。

骨のような手足に、身に纏うボロい服を眺めながら、混乱する頭とは別に、冷めた思考でこの状況を俯瞰する自分がいた。
少年の名前はリオ、そして天川春人だった。
この世界で生きてきた七年間の記憶、そして日本人として生きてきた二十年間の記憶がある。

空腹感による立ち眩みを感じつつも、自らに起きた非常事態を確認するために、地面へと座り、頭を働かせる。
天川春人としての記憶は死ぬ直前までだいたい思い出すことはできる。
リオとしての記憶も今までどのように生きてきたかを普通に思い出すことができた。
こうして路上で意識を失った理由はいまいちわからなかったが、とりあえず今はその点については放置しておく。

天川春人としての記憶とリオとしての記憶とを照らし合わせた結果、今の自分がいる場所は地球ではないとの結論が導き出された。
孤児であるリオに碌な教養はないが、自らの居る国の名前はわか

る。
文化水準、それに話している言葉等の諸般の事情を考慮して判断した結果、ここが地球上の国ではないとの結論が出たのだ。
おそらく自分は生まれ変わったのだろう。

（信じがたいけどな……。いや、まだ夢の可能性もあるか？）

しかし、夢の可能性は低そうだと、リオは考える。
夢にしては意識がはっきりとしすぎているのだ。
頭は冷静で、思考にどこか靄（もや）がかかったような感じもしない。
何よりも、風邪でも引いたかのような身体の節々の痛みが、ここが現実であることを力強く主張していた。
聞いたことのない国が存在する世界、王様や貴族等の特権階級が存在する世界、都市に孤児や浮浪者が無数にいて奴隷もいる世界、電化製品といった科学の産物が何一つ存在しない世界、魔物がいる世界。
夢であるわけが、そして、ここが地球であるわけがなかった。

リオが今いる場所はベルトラム王国の王都にあるスラム街だ。
現状は最低であると言っても過言ではなく、このままでは自分の命が長く続くことはないだろう。
ここまで生きて来られたこと自体が幸運である。

最も運が良い孤児院に暮らす孤児を除いて、スラムに暮らす孤児は、残飯を漁るか、盗みを働くか、運が良ければ雀の涙ほどの賃金で日雇い労働にありつけてその金で安く固いパンでも買うか、食料を得る手段などそれくらいしかなく、必然的に栄養失調となる。
リオもご多分に漏れずそうした生き方をして今日まで生きてきた。
はっきり言っていつ野たれ死んでもおかしくはない。

とりあえずまともな食事にありつきたいが、どうしたものかと考える。
力が弱い孤児達は必然的にグループを形成することになるが、黒い髪の色が物珍しいリオはどこの孤児のグループからも仲間外れにされていたようだ。
それゆえ他の孤児と協力して事に対処するのは難しく、自力でこの状態をどうにかしなければならない。

（できれば何らかの仕事に就きたいところだけど……）

この厳しい社会の中で孤児を雇ってくれる人がそう簡単に見つかるわけがない。
それが簡単にできれば孤児など存在しないはずだ。
仮に見つかったとしても、相当に安い賃金で働かされる可能性が高い。

ならば、自分にできることは何があるだろうかと、この世界でも役立ちそうな自分の特技を思い出していく。
特技といえば前世で培ったものが大半である。
まず、計算が出来るというのは大きなアドバンテージであろう。
幸運なことにこの国でも十進法が採用されている。
他に役に立ちそうなのは、古武術、料理、その他の前世で培った日常生活の知識くらいか。

それらのスキルを活用する方法を頭の中で模索する。
だが、社会的身分もコネもない現状では、それらを活かすことすら非常に厳しいと言わざるを得ない。
かといって、この場にいても何も問題は解決しない。
自ら動かなければ何も始まらないのだ。

空腹を感じる身体に鞭を打って、リオは街の中を歩き回ってみることにした。

すると、リオは記憶が覚醒してから現れたもう一つの変化に気づいた。

リオが気づいたのは街を歩いている人たちがそれぞれ身体からごく微量の淡い光を放っているということだ。

最初は錯覚かと思ったが、目を凝らして視るとそうでもなかった。

溢れる光の量は個人差があるようだが、大抵は本当にごく僅かだ。

記憶が覚醒してから何百人、何千人と人とすれ違ったのだからかなり正確な平均値を測ることはできたはずだ。

ふと、自らの身体を見てみると、いつの間にか同じような光が溢れていることに気づいた。

量は他の人に比べてかなり多い。

いや、むしろ垂れ流しになるくらいにあり余っている。

他のどの人間を見ても、身体の中から無尽蔵に光が溢れ出している人間はいない。

沸騰した水が蒸気となって空気に溶け込むように、リオの身体から淡い光が溢れ出している。

しかもその光の量は少しずつ増えている。

同時に、光を介して徐々に感覚が鋭敏になっていく気がした。

まるで五感が大気に広がっていくようだ。

光を介して触れる世界は目で見る以上に、手に取るようにわかる。

無限に広がっていく感覚、そこには眼に視えない何かが存在していた。

（これ以上増えるのはなんか不味い気がする……）

広がっていく感覚に身を任せてみたい気もしたが、これ以上増えると周囲の人間が異常に気がつくのではないかと思い始めた。
この光が見えるのが自分だけとは限らない。
その可能性を最初から除外することは危険だろう。
今のリオから溢れる光の量は明らかに異常なのだから。

とにかく人が少ない場所に行かなければと、急いで人通りのない路地裏へと移動すると、リオは地面へと座り込んだ。
まだ溢れる光の量は増えていたが、体調に変化はないようだ。
焦る必要はない。
そう考えて心を落ち着ける。

リオは瞑想を行い、いったん心を無の状態へとリセットさせることにした。
こんな時に祖父に鍛えられた古武術が役に立つのだから世の中何がどうなるのかわからない。
どれほどの時間が経ったのか、いつの間にか通りから聞こえる人々の喧騒も、意識の中にあって枠外の状態になっていた。

心が落ち着いたことを悟ると、リオは自らから溢れ出る力強いエネルギーのような何かを感じた。
それは全身をめぐる血液以上に自分の身体を高密度に満たしていた。
その正体は淡い光、魔力である。
魔力は身体中の表面に存在する眼に視えない無数の小さな穴から溢れている。
リオは本能でそれを理解すると、魔力をコントロールすることをイメージした。
不思議と、それができない気はしなかった。

（いける……）

そう確信すると、ゆっくりとだが、リオの身体から垂れ流されている魔力の量が減った。

どこか気配を殺すのと要領が似ている気がした。

完全にイコールではないが、共通点に気づいた。

それに気づくと、リオは一気に魔力のコントロールをモノにしていく。

今、リオの身体からは一切の魔力が溢れていない。

感覚的なものだから言葉では説明のしようがないのだが、なぜかそれがわかった。

リオは薄っすらと笑みを浮かべる。

だが、この光はいったい何なのだろうか、と疑問が湧いてきた。

今のところ感覚が鋭くなったという変化がみられる。

そして、多かれ少なかれ人間はみな魔力を体内から放出している。

なら何らかの利用方法があってもおかしくないのではないか。

量、質、手段、条件はなんだろうかと、考える。

頭の中に浮かんだ疑問を解消するためにも、とりあえず身体中に魔力を巡らせてみた。

色々と検証した結果、魔力はゆっくりとだがイメージ通りに動かすことができ、特定の部位に魔力を集めることもできることがわかった。

しかし、それができたところで何になるのかがわからない。

情報が不足しすぎているのだ。

周囲に人の気配がないことを確認すると、リオは身体から多めに魔力を放出してみることにした。

ふと、身体のエネルギーなら身体に作用させることができるのではないか、と閃いた。
そう、たとえば身体能力を強化するとか。
漠然と身体能力の強化をイメージしてみたところ、リオの身体に変化が起きた。

（……身体が軽い）

まるで身体の中から力が漲ってくるような感覚であった。
試しに力を込めてジャンプしてみると、子供の肉体であるにもかかわらず、プロのバスケットボーラー並みの高さを跳躍することができた。

身体能力の強化がもたらされたのはイメージがきっかけだった。
なら、今度は漠然とではなく、明確に身体能力の強化をイメージしてみることにした。

脳のリミッターを外し、全力以上の身体能力を獲得するイメージで魔力を纏う。
果たしてその考えは正解であった。
リオがイメージするとその通りに身体能力が強化されたのだ。
その効果を確認するために軽く体を動かしてみる。
すると、通常時では考えられない動きをすることができた。

（っ、これ以上強化を続けるとまずそうだ……）

ところが、一定量以上の魔力を流し込んで強化を行うと、肉体が悲鳴を上げてきた。
これ以上は筋肉や骨にダメージが出そうである。

強化された身体能力に肉体がついていけないのだろう。
なら、肉体ごと強化すれば、ふと、そう考えて、筋繊維や骨などの肉体の強度を強化するようにイメージを行う。
すると、急激に肉体の負荷が軽減していった。
これも正解のようである。
とりあえずの実験の結果にリオは満足する。

だが、身体能力と肉体が強化できたところで腹は膨れない。
胃袋が大きな悲鳴を上げた。
興味深いことはわかったが、食料の確保がままならない現状で、このまま訓練し続けるのも得策ではない。

空を見上げると、既に日は傾き始めていた。
そろそろ暗くなり始めるだろう。

まともな手段で食料を得るなら金がないと話にならない。
最悪、今日は何も食べられないことを覚悟するしかないが、何らかの目途はつけておきたいところだった。
今後の自らの暮らしのためにも、金を得るヒントを見つけるため、リオは路地裏から歩き出した。

ふらふらと市場を歩いていると、ふと、大きな建物が目に映った。
建物に書かれてある字を読むことはできないが、その建物が冒険者ギルドであることをリオは知っていた。
冒険者になるのは一つの手段だ。
だが、今のリオの年齢だと冒険者になることはできない。
冒険者ギルドの規則で就労可能年齢が十二歳からとなっているのだ。
かつて冒険者について他の孤児達が話していたのを小耳に挟んだこともあり、冒険者の年齢制限については心得ていた。

十二歳から働けるというのは日本の労働環境からすればかなりブラックなようにも思えるが、そもそもこの世界では年齢制限などない仕事の方が多い。
単純な肉体労働が主とされるこの世界では子供の労働力でも立派な戦力となるからだ。
ただ、冒険者の場合は、子供という労働力では達成できない内容の仕事が多いために、年齢制限がかかるのである。

だが、と、リオは考える。
冒険者の仕事といえば、漠然とではあるが、冒険で手に入れた素材を売るというイメージがリオの中にあった。
ならば、金になる物を採取してきて自分で売ることができるのではないだろうか。
売るだけなら別に相手は冒険者ギルドでなくたっていい。
取引相手には商人だっているのだ。
そこで、リオは商人が買い取ってくれそうな物を調べてみることにした。
考えたことは即行動に移す。
リオは頭の中に入っている王都の地図に従って市場へと向かった。

「おい、ガキ、何ジロジロ見てやがる？　さっさと失せろ！」

ところが、リオが市場の中で店の商品を見ていると、それに目ざとく気づいた店員がリオを怒鳴りつけるように注意してきた。
市場で孤児を見たら盗みを働かないか注意しろと言われるくらいに、市場内での孤児の扱いはよろしくない。
中には金を持っている孤児もいるから、問答無用に市場から叩き出されることはないが、商品を盗まれないように店員達は孤児の動向には注意を払っていた。
店先に並べられた商品をジロジロと観察している孤児など真っ先

に怪しく思われるだろう。
おかげで堂々と店先に並べてある商品を観察することすらできない。

このままじゃ明日以降も生計を立てる手段は見つかりそうになかった。
そうなれば残飯に手を出さなければならない。
リオとしての自分はそれをやむを得ないと思ったが、天川春人としての自分がそれに大きな抵抗感を抱いていた。

そこでリオは前世で古武術の鍛錬から培った技術を活かすことにした。
周囲に溶け込むように気配を殺したのだ。
リオの存在が一気に薄くなったせいか、それとなく孤児に注意を払っている店員も、リオにあまり意識が向かないようになった。

（よし……）

気配を殺した状態で、店先に並べてある商品を俯瞰（ふかん）するように眺めていく。
何が売れるのか、何処で手に入りそうか、そういったことを考えながら、ゆっくりと歩く。
このスキルがあれば短絡的に盗みに走ることだってできる。
だが、それをするのは気が引けてしまった。
天川春人の有する日本人としてのモラルがそれを忌避しているのだ。
そうして歩き回っているうちに、店先には様々な商品が置いてあることがわかった。
その中でもリオが眼に付けたのは薬草や野菜といった植物類である。

そういった品物が並べてある店の店員に出来る限り礼儀正しく品物について尋ねてみたところ、店員はリオを警戒していたものの、少ししつこく頼むと教えてくれた。
都市周辺の農地で栽培に成功している物も多いが、中には自然環境でしか育たない植物もあるようだ。
そうした物は都市圏から離れた土地にあることから、冒険者を雇って集団で採取しに行くのが一般的なようである。
冒険者等が小遣い稼ぎで採取した物を買い取ることはしているようだが、子供が一人で行ってものたれ死ぬだけだと同情的な視線とともに忠告を送ってきた。
店員のアドバイスに、リオは愛想笑いを浮かべて礼を言った。

命のリスクはあるが背に腹は代えられない。
自分には身体能力と肉体を強化する術がある。
前世では古武術もならっていたから、戦闘で立ちまわることもできそうだ。
ならば行かない手はないだろう。

だが、既に日は暮れている。
もう今日中に食料を腹に入れることは断念せざるをえなかった。
いつものように残飯を漁りに行くことはせず、リオはスラム街へと帰ることにする。

空腹感を紛らわす意図も込めて、今日一日で色々とあった衝撃的な出来事や新鮮な出来事を思い返していく。
一番大きな出来事は前世の記憶が覚醒したことだ。
記憶に目覚めてからはどうにも天川春人としての意識が主となっているが、リオとしての記憶と意識も残っており、二つの意識が融合して一つの自我を形成しているようだ。
両方とも表には出てきているが、矛盾することなく混ざり合って

いるというところか。
だから、天川春人は自分がリオとして生きてきたことを自然に受け入れることができている。
そして、孤児として生きてきたリオは自分が天川春人であることを受け入れている。

天川春人としての自分は、前世において、幼馴染を探すという目的意識を持って生きていた。
その目的は、現状において実現可能性があるのかはともかく、今のところも持ち合わせている。
だが、今はリオとして今を生きぬかなければならない。

リオにはこの世界でなさねばならぬ目標があった。
リオは何も最初からスラム街で暮らしていたわけではない。

リオの父は冒険者であり、リオの母も冒険者だった。
二人は異国の出身で世界を旅しながらコンビを組んでいたのだ。
リオの母はリオを孕むと冒険者を一時的に引退する。
当然稼ぎはリオの父に頼ることになる。
今まで母とコンビで依頼をこなしてきたリオの父は他の冒険者と組んだ任務でしくじることとなった。
そしてあっさりと死んだ。

リオの母は夫の死にもめげずにリオを育てた。
二人で冒険者をして稼いだ金を切り詰めれば、何とか子育てをしても生きていくことはできた。
だが、それが続いたのはリオが五歳の時までだった。
リオの母は異国情緒あふれる美人だった。
そして、リオという子供はいたが、周囲の男から下卑た視線を送られるくらいには若かった。

リオの母はリオを人質にとられ、冒険者時代の知り合いだった男に辱められ殺されることになる。
リオは優しかった母が自宅で強姦されるのも目撃した。
その時のことを、相手の名前と特徴も含めて、リオは覚えている。

リオが諦めずに残飯を啜りながらも生きてきたのは、いつかその復讐を果たそうと誓ったからだ。
そう、リオが残飯を啜(すす)ってでも生きてきた理由は復讐だった。
その復讐心は今もリオの中で静かに燃えたぎっている。
だが、その一方で、天川春人は復讐に対して否定的なイメージを抱いていた。
ふと、頭の中に母が犯された当時のことがよぎり、リオが忌々しげに顔を顰(しか)める。
リオは顔を左右に強く振って、歩む速度を速めた。

第3話　誘拐

入り組んだ道を歩いて、角を曲がって、裏道に入っていくと、やがて娼館街へとたどり着く。
道中、やけに警備の兵士達が慌ただしかったが、娼館街はいつも通りであった。

娼館街は市場や平民街よりかはスラム街にほど近い場所に位置する。
そこには、日が傾いて暗くなり始めたために、大勢の春を売る女、そしてそれを買う男達が、溢れていた。
通りを歩けば各所から甘い会話や値段交渉をする声が聞こえてくる。

娼館街の治安は悪いようで意外と良い。
というのも娼館の利用者の中には貴族もいるからだ。
大半は国の許可を取って営業している優良な娼館ばかりである。
中にはほんの一部の違法な娼館もあり、暗黙の了解の下、それらはスラム街に近い場所に建てられていた。

リオがその区画へと入り込む。
正規の娼館街と比べてここらは一気に人が減り、客引きのために表に出ている人間も一人もいない。
リオは足早にそこを突っ切っていく。
あまり気分の良い場所でもない。
一分もしないうちに、リオはスラム街にたどり着いた。

「離しなさい！」

そこでリオは厄介な場面に鉢合わせる。
そこには粗野な革の軽鎧を着て腰に安物の片手剣を下げた四人の男達がいた。
何やら騒がしく、男達は見るからにゴロツキといった風貌をしている。
男達のうち二人はそれぞれ一つずつ袋を担いでいた。
そのうちの一つが、まるで中に生き物でも入っているかのように、大きく揺れている。

「何よ、これ！？　何処なの？　誰よ？　ここから出しなさい！　こんな真似してただで済むと思っているの？　お父様が許さないんだから！」

暴れる袋と男たちの様子をリオが疑問に思っていると、暴れる袋の中からまだ幼いと思われる少女の声が聞こえた。

「ち、目を覚ましやがった。煩せーな！　暴れんじゃねーよ！」

袋を抱えていた男が大きな声で怒鳴った。
すると、萎縮したように、袋の揺れが小さくなる。

「馬鹿野郎！　声がでけぇ！」
「へ、へい。すんません、兄貴」

兄貴と呼ばれた男の声もかなり大きな声であったが、怒鳴られた男は恐縮した様子で謝った。
この中では兄貴と呼ばれた男がリーダーのようだ。

「け、ただの荷運びで金貨十枚なんて怪しいと思ったが、案の定、

碌でもねぇ荷だったな」

兄貴と呼ばれた男は、顔を顰めて舌打ちをすると、面倒くさそうな表情で少女が入っている袋を見つめた。

「へへ、それにしたって金貨十枚は美味しすぎですぜ。こんだけありゃ俺ら全員が数か月は酒を飲んで女を抱いて遊んだまま過ごせまさ」

取り巻きの男達は揃って欲望に染まった笑みを浮かべる。

リーダーの男も満更でもない笑みを浮かべていた。

この国では金貨が一枚あれば平民の家族が節約して二ヶ月は生きていくことができる。

ちなみに、硬貨の交換レートは、小銅貨十枚で大銅貨一枚、大銅貨十枚で小銀貨一枚、小銀貨が十枚で大銀貨が一枚、大銀貨が十枚で金貨が一枚、金貨が五十枚で魔金貨一枚となっている。

「それにしても中にどんな奴が入っているんですかね？　サイズと重さからして女のガキだとは思いますが」

どうやら好奇心を抑えられないようで、袋を持っていた男がリーダーの男に尋ねた。

「おおかた貴族か商人の娘だろうよ。……、おい、袋を開けてみろ」

好奇心があったのはリーダーの男も同じだったようで、下卑た笑みを浮かべて袋を開けるように命じる。

「いいんですかい？」

「ふん、あの男は袋を開けるなとは言っていない。ガキにちょっと顔を見られたくらいで足が出ることもねぇだろ。依頼された目的地もすぐそこだしな」

と、伺いを立てる手下の言葉に、リーダーの男は鼻を鳴らして言った。

「お前は、人が来ないように周囲を見張ってろ。ま、ここまで来ればその心配もねぇだろうがな」

リーダーの男が袋を持っていなかった一人の男へと指示を出すと、命令された男は「俺にも面見せてくださいよ」と言って周囲を警戒し始めた。

ただ、それでもリオからすれば穴だらけの警戒の仕方ではあった。

「それじゃ……」

周囲に人がいなさそうなことを確認すると、男が乱暴に袋を地面に置いた。

「きゃ」

ドサリ、という柔らかい音と一緒に、袋の中から少女の悲鳴が漏れた。

「へへ、これで入っているのが年頃の女なら楽しめたんだがな」

少女の悲鳴を聞いて笑みを浮かべると、逸る手つきで袋を締めていた麻の紐をほどいていく。

十秒もすると男が完全に縄をほどき終えた。

そして、中から現れた少女を見て、その場にいた男達が感嘆の声を漏らす。

現われた少女はリオと同年代の子供だった。
輝くようなバイオレットブロンドに、淡い紫の瞳、少々勝気な表情をしているが、見た目は天使のように可憐な美少女と言っていい。
顔立ちと身に纏ったドレスからして高貴な雰囲気が漂っていた。

おそらくあの子は貴族だ。
見た目からリオは瞬時にあたりをつけた。
その貴族の令嬢と思しき少女が誘拐されている最中であることは間違いないようだ。
だが、どうしてあんな大したことのなさそうなゴロツキが運び役をしているのか。
リオは何とも言えぬ違和感を覚えていた。
あんな連中に誘拐されるほどに貴族の屋敷の警備はずさんなのだろうか。

「あー、好奇心を抑えられずに命令しといてなんだがよ。相当ヤバい件に足を突っ込んじまったな」

リーダーの男は頭を掻きながら面倒くさそうな表情をした。
高貴な人物を誘拐したことを知って、事の重大さをようやく認識することができたのだろう。

「ま、ここまで運んじまったもんはしょうがねーけどな。目的地まで運ばねーと依頼金の残りももらえねーし。さっさと行くぞ。仕舞いなおせ」

少女にとっては不幸なことに、男が犯行を中止することはなかっ

た。
少女がきつい目つきで男達を睨む。
「ま、そういうわけだ。大人しく袋の中に入りなおしな」
「嫌よ！　『炎弾魔法（フレイムショット）』……がはっ」
少女が手をかざして何かを唱えると、ゆっくりとだが掌から魔力が放出していった。
が、その魔力が魔法として事象化しようする前に、リーダーの男が少女を蹴り飛ばした。
「かは……かは……」
少女が自分の方に吹き飛んできたのを見て、リオが驚愕する。
同時に、少女が引き起こそうとした魔法に、僅かに興味を惹かれていた。
リオが身体能力と肉体を強化した光、それをあの少女は自分の知らない方法で利用しようとしたのだ。
少女の手の先からは幾何学文様みたいな図形が浮かびかけていた。
「ちっ。ガキだと思って油断してたがコイツ魔法を使いやがるのか。流石は貴族の娘だな。危ねぇ」
魔法という聞きなれない単語がリオの耳に届いた。
「うう……」
少女は苦しそうにお腹を押さえてうずくまっており、その様子を見て取り巻きの男の一人が口を開いた。

「えっと、そいつ死んじゃいませんよね？」
「大丈夫だろ。呻いているし」
「傷物だと知れたら報酬がもらえないんじゃ……」
「あん？　……あー、まぁ、そん時は、なぁ？」

リーダーの傍若無人な振る舞いに、取り巻きの男達は、冷や冷やとしながら、愛想笑いを浮かべていた。
そうやって男達が碌でもない会話をしている中で。

（どうする……）

心の中の焦りを押さえつけながら、リオは自問自答した。
あの程度の蹴りでは少女が死ぬことはないだろう。
だが、あの少女をこのまま見捨ててもよいのだろうか。
仮に、自分が少女を助けるためにあの場所に入っていったらどうなるか。
碌な目に合わないのは簡単に予想できた。

敵の数は四人、実力は気配からして大したことはないとリオは踏んでいる。
それでも勝負に絶対はない。
しかも全員が武器を所持している。
こっちは丸腰だ。
相手は躊躇なくリオの命を奪いにくるだろう。
前世では本格的に古武術を叩きこまれていたとはいえ、リオは人を殺したことはない。
すなわち、相手が武器を持って複数人で殺しにかかってくる中、リオは素手で戦わなければならないのだ。
さらに、万が一、あんな安物の剣で切られれば、かすり傷でも病気になる可能性は非常に高い。

殺しを厭わない者はそれだけで強い。
かつて師である祖父から聞いたその言葉をリオは思い出していた。
このまま隠れて眺めていればそのうち事は勝手に終わるだろう。
碌な目にはあわないだろうが、少女はあのままどこかへ連れて行かれてそれで終わりだ。
ここら辺には少女を対象とした加虐趣味の連中が集う違法な娼館もあるという噂をリオは聞いたことがある。
もしかしたらそういった場所に彼女は連れて行かれるのかもしれない。
だが、自分には何の影響もない。
ここで見送ったとしても後味は悪いが、見知らぬ赤の他人のために高い命の危険を冒してまで助ける必要はない。

果たして本当にそれでいいのだろうか。
リオがそんなことを思っていると、偶然、本当に偶然だが、少女とリオの視線が重なる。
少女の顔は恐怖と怒りで歪んでおり、リオは急にいたたまれない気持ちになった。
その時、別の男が担いでいた袋がもぞもぞと動き出す。
突然に動き出したこともあって、倒れていた少女に意識が集中していた男はその袋を手放してしまった。

「あっ」

ドサリ、と中に柔らかく重たい物でも入っているかのような湿った音が響いた。

「きゃ」

同時に、袋の中から、蹴られた少女と同じくらいの年齢と思われる少女の声が響く。

「ちっ、怪我してねーだろうな。おい」

面倒くさそうな声で、リーダー格の男は、袋を担いでいた男に安全を確認するように指図した。

指示された男がばつの悪そうな顔をして袋を開ける。

一瞬の油断、やるなら今しかなかった。

（クソッ！）

リオは、瞬時に全身に魔力を纏い、子供の身体能力とは思えない速度で、弾丸のように飛び出した。

かつてない加速と負荷を感じて内心で驚愕したが、強化された肉体は、子供のものであっても、それをものともしなかった。

一気に勝負を決めるために、リオは制圧行動に移る。

「なっ」

いち早くリオの接近に気づいたリーダー格の男がとっさに剣を抜こうとした。

が、その瞬間、先んじて男の懐に入り込んだリオが剣を弾き飛ばす。

「ぐはっ」

そして、そのまま掴みとった腕を、関節を外すように捻って、投げ飛ばした。

実戦で用いたことのない前世で培った技術が見事に発揮された瞬

間だった。
魔力で強化したリオの腕力は、自らよりも倍近く背の高い巨体な男をも、投げ飛ばすことを可能としている。
受け身のとり方を知らなかった男が鈍い音を立てて地面にぶつかった。

（いける！）

リオはそのまま身体を動かした。

「えっ？」

呆然とすぐ側に立っていた男の腹部に全力でとび蹴りを叩き込み、勢いと体重を利用してそのまま地面へと押し込む。

「がっ」

相手が気を失ったのを確認して、リオは他の相手との臨戦態勢を整える。

「このクソガキが！」

仲間をやられて激昂したのか、残った二人の男がリオへとまとめて向かってきた。
ここで少女達を人質に取られていたらリオに勝ち目はなかっただろう。
人数が多ければそれだけ採れる選択肢は多くなる。
リオはそれを恐れていた。
だが、男達は感情に流されて最善の手段を採ることを忘れてしまった。

「死にやがれ！」

大きく振りかぶりながら、刃渡り五十センチほどの片手剣が、袈裟切りで、リオに襲い掛かる。

半歩横にずれてそれらを避けると、リオは男の顎に向けて鋭い掌底を放った。

それが綺麗に決まり、男の意識が途切れる。

「て、テメェ！」

最後の一人が焦ったように剣を振り回す。

その剣がリオを捉えることはない。

お粗末な剣技を避けてあっさりと男の懐に潜り込み、男の手を捻り剣を強制的に装備不可能にすると、そのまま投げ飛ばして気を失わせた。

「はぁ……はぁ……」

やった。

やってしまった。

気がつけば身体が動いていた。

命の危険を冒してまで、見ず知らずの、縁もゆかりもない少女を助けてしまった。

大して動いてもいないのに息切れが止まらない。

身体が熱く、心臓の鼓動が大音量で全身に響き渡る。

うるさい、と思わず叫びそうになった。

手ごたえからして殺してはいないはずだ。

明確に殺意を抱いていたわけでもない。
だが、骨の数本が折れたか、内臓に軽くダメージが入っているはずだ。
それほどのダメージを負ってこの世界で生きていくことはできるのだろうか。
それが致命傷になって死んでもおかしくはない。
次々と頭の中に負のイメージが浮かんでいく。
もしかしたら死につながりかねないダメージを与えてしまったことに、リオは罪悪感を覚えた。

人を殺す覚悟もないのに何をしているのだろう。
人を殺しかねないことを平然とやってのけてしまった。
あれは仕方なかったんだ。
きっと死んでいない。
だから自分は人を殺したわけじゃない。
と、次々と自己弁護の言葉が頭の中に浮かんできて、そんな自分に嫌悪感を抱く。

やってしまったものは仕方がない。
少なくとも何の咎もない少女達を救うことはできたはずだ。
複雑な感情に顔を歪ませている中、ふと少女たちの存在を思い出すと、ちょうど彼女達の視線を感じたった。

そこにいたのは見た目が似通った二人の少女だった。
どうやら袋の中に入っていた少女は、蹴られた少女のもとへ、移動していたようだ。
少女達の髪はバイオレットブロンドの色、そして、似通った目鼻立ち、おそらく二人は姉妹なのだろうと、リオは判断した。
ちなみに先に起きて暴れて袋から出された少女が姉で、後から袋から脱出した少女が妹だろう。

「大丈夫……ですか？」

いまだ荒れ気味の呼吸で、リオは恐る恐る二人に声をかけた。
すると、姉と思しき少女が鋭い目つきでリオを睨みつけてきた。
自分と同年代の少女が出しているとは思えないくらいに迫力がある。
と、リオがぼんやりと思った。
その手には発光する幾何学文様を浮かべて、男に蹴られた部位を押さえていた。

（あれも魔法……なのか？）

「かは、がは、もっと、早く助けなさいよ！」
「お、お姉様。まだ、『治癒魔法（ヒール）』をかけたばかりです。無理をしては……」

妹の制止を聞かず、姉はリオのところまでやって来てビンタを叩きつけてきた。

「えっ？」

パン、と乾いた音が周囲に響き渡る。
突然のことに、何をされたのか分からなかった。
何故、目の前の少女は怒っているのか。
何故、助けた自分が叩かれたのか。
混乱する中でじわじわと頬の痛みが響いてくる。

「あんた遠くからずっと私達のこと見ていたんでしょ？　だったらもっと早く助けなさいよね！」

今一度、平手打ちがリオの頬に襲い掛かろうとしてきた。
今度は反射的に先んじて少女の腕をつかむことでそれを未然に防ぐ。
すると彼女は綺麗な顔を悔しそうに歪め、逆の手で平手打ちをしてきた。

「っ……」

ヒステリックに暴れる少女、理不尽な行動に怒りを覚えるが、下手に少女を傷つけるわけにもいかない。

「離しなさいよ！　汚い！　臭い！」
「お、お姉様、助けてくれたんだから、そんなに怒ったらだめですよ、ね？」

暴れる姉を嗜める妹。
そういう彼女もリオのことは臭いと思っているようで、それが顔に表れていた。
その様子を見て大きくショックを受ける。
とはいえ、妹の一声で、ようやく姉の少女はリオに向かって暴力をふるうのを止めた。

相手は幼い少女だとわかっていても、初っ端から理不尽な対応をされ、リオの中でふつふつと怒りが沸いてきた。
自分はこんなに葛藤したというのにだ。
思わず野暮ったい前髪の下から姉を睨みつけてしまった。

「あ、あの、ありがとございました。助けていただいて」

リオが不機嫌になったことを察知したのか、妹がリオのもとへやって来て頭を下げた。

「いや、別にいいよ」

こうしてキチンと礼を言ってくれる少女のことを無視することは流石にできず、言葉少なげにだが、返事をした。

ややふてくされたように少女達から視線を外す。

「何よ？　その態度は？」

そんなリオの態度を姉は気にくわなかったようだ。

「お、お姉様！」

再び険悪な空気になることを恐れた妹が姉を嗜(たしな)めた。

「ふん、フローラに免じて許してやるわ」

どうやら妹の名前はフローラというらしい。

矛先を収めた姉の様子に安堵するフローラだったが、その直後に姉が再び火に油を注ぐような発言をした。

「貧民、貴族街まで案内しなさい。それとそこの男を……そうね、二人ほど引きずって連れてきなさい」

スラスラと紡がれる命令口調に、リオが唖然とする。

「投げ飛ばしていたんですもの、それくらい出来るんでしょ！？」

そんなリオの態度が気に入らないのか、付け加えるように、ややヒステリックな口調で言った。
少女もパニックから解放されたばかりで気が動転しているせいか、カリカリしているのだが、今のリオにはそんなことに気づく余裕はなかった。

「っ、それが人にものを頼む態度かよ？」

少女達の立場上、必要な願いだとはリオもわかっていた。
だが、あまりに頭越しからの命令に反発心を抱く。
少しは自分の気持ちを察してほしかった。

「あ、あの、すいません！　私からもお願いします。その、父にお願いしてお礼は必ずしますから！」

現時点で貴族に対するリオの印象は最悪である。
かろうじてフローラのおかげでストップ安には至っていないというところだ。

きっとこれまでこの少女達は何一つ不自由することなく生きてきたのだろう。
望めば全てが与えられてきた。
我が身可愛さにあれこれ卑しいことを考えている自分には眩しくて、春人としての自分はともかく、リオとしての自分は、フローラをまっすぐと見つめることはできそうになかった。

「……わかった」

リオは渋々といった感じにフローラのお願いに対して承諾の返事をした。

「ありがとうございます！」

さっそくリオが作業に取り掛かった。

少女達が詰め込まれていた袋を千切ると、リオは男たちを拘束する。

武器と金目の物はすべて持っていくことにした。

嵩張（かさば）ってしょうがないが、現状では少しでも多くの金が必要となる。

さっきから犯罪紛いの行動ばかりだが、もう開き直ることにした。

この国の法律で犯罪者が持っていた所有物の扱いがどうなるかはわからないが、もし自分の物になるというのなら、金目の物を持っていかない手はないだろうと思ったのだ。

「ふん、意地汚い……」

その様子を見て姉、クリスティーナというらしい、が見下したように言った。

多少の不快感は覚えたがもはや耐性は付いていたので、聞こえないふりをして、リオは作業を継続する。

作業を終えるとリオ達は娼館街を通って市場へと進んだ。

道中、娼館街の大人達が野次馬根性丸出しでリオ達の様子を眺めていたが、厄介ごとの臭いしかしなかったため、声をかける人物は誰一人としていなかった。

市場へとたどり着くと警備の兵士がすぐにリオ達を発見することとなり、クリスティーナとフローラは無事に保護されることとなる。

第４話　尋問

現在、リオは王城の牢屋の中にいる。
クリスティーナとフローラは兵士達に発見されると迅速に保護された。
すると、どういうわけか、あれよあれよという間に、リオだけは拘束され牢屋にぶち込まれることになった。
そこでリオはクリスティーナとフローラがこの国の姫だということを知った。

それから既に三日が経っていた。
最低限の睡眠と食事、そしてそれ以外の時間は全て取調べに充てられる。
ここに来てからというもの、リオの一日はこの牢屋で完結していた。
体感的な睡眠時間からして、一日のうち五分の三以上は取調べを行っているのではないか。

「知っている情報を吐け」

三日目にして何度目の質問だろうか。
聞き飽きた言葉に嫌悪感すら抱く。

「だから言った通りですって。たまたま路地裏を通りかかったところで、あの子達……クリスティーナ様とフローラ様が誘拐されているのを目撃した。そして、俺はそれを助けた。それだけです」

あの子達と言いかけたところで取調官の顔付きが険しくなった。

それを察して敬称を付けて呼ぶと、うんざりとした様子でリオは同じ内容の供述を告げた。

「嘘を吐くな。貴様はスパイなのではないか？」

同じ内容の質問の連鎖が続く。

「違います」

と、リオは短く否定した。

「なぁ、一応、貴様がクリスティーナ様とフローラ様を助けたということが事実であることは認めているんだ。信じがたいことだがな」

妙に芝居がかった口調で、取調官の男が語る。

「だからこうして穏便に取調べしてやっている。だが、これ以上手を煩わせるようなら手段を改める必要もある」

牢獄という環境、長時間にわたる取調べ、しかも取調官の態度は威圧的ときている。

これで穏便と言ってのける取調官に、リオはある種の敬意すら覚えた。

「へぇ？　具体的にはどんな手段を使うんですか？」

やや反抗的な目つきでリオが微笑む。

すると取調官が微笑み返しながらリオの胸ぐらをつかんだ。

そのまま勢いをつけてリオの顔を机へと叩きつける。

「がっ」

再度、リオの頭を持ち上げて、またすぐに顔を机へと叩きつけると、口の中を噛んで、リオが出血する。

せめて肉体を強化してダメージを減らしたいところだが、魔力を操作しようとしても上手くいかない。

何やら両手に付けられた手かせが身体の魔力のコントロールを阻害しているのだ。

「不自然じゃないか？　お前のような子供がゴロツキ紛いとはいえ武装した大人を四人も相手にして勝利する。しかも何の訓練も受けていない孤児が、だ。不意を打ったとしてもおかしい」

解せない、と言わんばかりに、取調官の男は首を横に振った。

「まるで平民が作った不出来な三文芝居のようだ。私の言っていることがわかるか？」

親の仇をにらみつけるかのような視線をリオに向けると、髪を掴んだままリオの顔を引き上げる、

すると、そのままリオの腹部に拳を叩きこんだ。

「かはっ」

リオの口から小さく呻き声が出たのを見て、男は満足そうに微笑む。

きっとサディスティックな性格をしているのだろう。

腹の痛みにリオは顔を歪めた。

「国王陛下はお前に最大限の配慮をしてくださっている。なにせ王

族であるクリスティーナ様とフローラ様の両王女殿下を助けたのだからな。当然だ」

だったらこの仕打ちは何だというのだろうか。

リオの中で怒りは溜まっていく一方だ。

「だが、貴様は危険でもある。理由は今言った通りだが、怪しい。怪しすぎるのだよ、貴様は。情報を聞き出すためなら多少の実力行使もやむを得ないというわけだ。わかるな？」

頭を掴んで、至近距離からリオの顔を覗き込む。

二人の視線が重なったが、リオは小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「そんなこと言われても知らないものは知らない」

リオは何の迷いもなく即答した。

事実なのだからそれ以外に答えようもない。

「ふん。犯罪者風情に国王陛下の御心を理解しろと言う方が無理か。まぁいい。クズの貴様にもわかりやすいように簡潔に聞いてやる」

そう言って、挑発するように、取調官の男はリオの顔をぺたりと撫でる。

「要するにな。此度の件の黒幕を教えろと言っているのだよ。いるんだろう？　どこぞの貴族とかな」

的外れな推理に、リオは何度目とも知れぬ溜息を吐いた。

「だから知らないと言っているだろ。実行犯に聞いて、がっ」
リオが喋っている最中に、取調官がリオの顔面を殴打した。
「実行犯どもはみんな死んだよ。殺された。生き残っているのはお前だけだ」
その言葉を聞いて、リオが怪訝な顔をした。
一瞬、自分が攻撃したダメージが響いたのかと思った。
だが、怪我を回復させる魔法があるのならば、尋問するためにそれを使用しているはずだと考え直す。
「殺されたってなんで？」
「知るか。毒殺だよ。食事に毒が入っていたそうだ。良かったな、お前の食事に毒が入っていなくて」
疑問を口にすると、取調官の男からそのような事実が語られた。
「っ」
その言葉に、ヒヤリ、とリオは全身が冷たくなった気がした。
実行犯を容易に毒殺できるほどに、今回の誘拐事件の黒幕は王城の内部に入り込んでいるのだ。
だが、どうして自分は殺されていないのか。
それは、リオが生きていても黒幕たちにとっては痛くもかゆくもないからだ。
すぐにそう思い至った。
なぜならリオと黒幕は一切関与していない。
リオが取り調べられても、黒幕たちにとってはどうでもいいことなのだろう。

だから、あえて毒殺に及ぶリスクを避けている。
ならば自分の命はひとまず安心と言える。
ただし、黒幕との関係においては、という限定がつく。

下手をすると国側に殺されかねないのだ。
仮にも王族を救出した人物に対して、容疑があるからといって、このような扱いをする国である。
このままいけば拷問もどんどんエスカレートするおそれがあるだろう。
そうすれば最終的には殺されてもおかしくない。

（クソっ。このままだと本当に殺される……）

不安とともにリオのイライラが増していく。
こんなことなら本当にクリスティーナとフローラを助けなければよかった。
そうすれば今頃こんな拷問は受けていないはずなのだ。
感情に流されて行動した結果がこれである。
あの時は散々葛藤したが、結局は利己的な人間が得をするのだと、思ってしまった。

「ふん、どうだ。怖くなったか？　情報を吐けば死ぬ恐れもないぞ？」

得意げな表情で的外れなことを言う取調官に、そんなわけないだろう、とリオは鼻で笑った。
その様子が鼻についたようで再び殴打される。

「誰の指示だ？　貴様とあのゴロツキ達に直接の関係がないにしても黒幕を介して間接的に関係があったというのが私の上司の見解だ」

リオはいい加減うんざりしている。
まるでそうでないと不都合でもあるかのような物言いである。
もしかしたら宮廷内の権力闘争でも絡んでいるのではないかと、リオは考えた。

そうであるとすれば色々と説明がつく。
輸送役の男達が簡単に毒殺されたこと、リオは毒殺されていないこと、自白を取らせるために強硬にリオの取調べを行っていること。
与えられた情報の中で現状を冷静に分析していく。

おそらく今回の誘拐事件で得をする人間と損をする人間がいるのだろう。
まず、得をする人間が今回の誘拐事件を仕組んで、証拠隠滅に実行犯達を殺した。
そして、損をする人間が、窮地（きゅうち）に陥り、情報をリオから吐き出させようとしている。

仮に国王が黒幕だというのならその国王は自分の娘を手駒にする冷酷な人物ということになるため、絶対にないとは言いきれないが、その可能性は低い。
それゆえ、得をする人間はおそらく国王以外の有力貴族だろう。

また、仮にも王族を助けた人物に対してこのような仕打ちをする動機が国王にあるとは考えにくいから、国王が損をする人物だという可能性も低い。
だから、おそらくその損をする人間も国王以外の有力貴族である。

となると、有力貴族同士の争いにリオは巻き込まれているということになる。

（冗談じゃない）

リオは狂気めいた笑みを内心で浮かべた。

その損をする有力貴族は、リオに対して取り調べを強行できるくらいに権力を持っていて、強硬にリオのことを取り調べている。

だとすると、その損をする人間がリオのことを白だと思わない限り、リオは解放されないことになってしまう。

その疑いを解消することはリオには難しい。

ここまで疑心暗鬼になって強硬に取り調べをしている以上、下手をすると嘘でもいいから自白を取らせようとしかねないはずだ。

（その損をする有力貴族が今回の件で影響力を削がれているのなら、俺が助かるシナリオに傾きやすいはずだ）

もはやそこにかけるしかなかった。

「貴様に指示を送った人物はどのような男だった？　貴様は本当はどこぞの下級貴族の子弟だったりするのではないか？　戦闘訓練はそこで受けた、違うか？」

飽きもせずに取調官はリオに訊問し続ける。

手に持った棒でペタペタと頬を挑発するように叩かれた。

「……ぺっ」

リオは取調官にむかって血の混ざった唾を吐いた。

少しは今感じている鬱憤を晴らしたかったのだ。

この男に逆らった程度で自分の運命が変わることはないだろう。

命令のない限りこの男はリオを殺すわけにはいかないはずだ。

「……貴様っ！」

激高した男がリオを怒鳴りつけようとしたその時、牢獄の扉が開いた。

扉から現れた人物を見て、男が慌てて姿勢を正す。

「こ、これは近衛騎士副団長閣下！」

「よい。調子はどうだ？」

現れた男の名前はアルフレッド＝エマール。

エマール伯爵家の次男で、王族と宮廷の守護を任務とする近衛騎士団の副団長である。

アルフレッドは、部屋に入るなり手を振って男にそう言うと、リオを一瞥した。

「はっ。多少の実力行使も行いましたが、やはり一向に口を割りません。態度は反抗的です。子供とは思えないほどに強じんな精神力を持ち合わせているものと考えます」

その言葉を聞いてアルフレッドは自らの手を軽く口元にあてて考えるそぶりを見せる。

「それで、その……近衛騎士団長閣下は？」

何かを気にしているような口調で取調官の男が尋ねた。

「団長は今回の件で忙しいそうだ。代わりに私がやって来た」

その言葉に、少しだけ呆れの色がアルフレッドの顔に浮かんだように見えた。
男に事情を説明すると、アルフレッドがリオをじっと見つめる。
「ふむ。貴様が姫様達を救った孤児か」
「……」
アルフレッドの厳かな声が牢屋に響き渡る。
歳は三十代とまだ若いが、放たれるプレッシャーは常人には耐えることが出来そうにない程の威圧感を持っている。
だが、リオはアルフレッドからの質問を無視した。
「無礼者が！」
叫んで、アルフレッドの隣に控えていた別の近衛騎士が、リオを殴りつけた。
身体をずらして可能な限り衝撃を受け流すと、リオは冷たい視線で騎士を見つめ返す。
「っ……」
視線の合った騎士はリオの視線に押されて思わず半歩後退した。
「よい、浮浪者の小僧に言っても仕方があるまい」
アルフレッドは品定めをするようにリオを見つめており、リオも真っ直ぐとアルフレッドを見つめ返す。
「なるほど……な」

数秒ほど見つめ合って、何かを悟ったかのように、アルフレッドが徐に呟いた。

「ふむ、その小僧を外の修練場へ連れ出せ」

「承知しました！　言われたとおりだ。動け！」

命令を受けた取調官がリオに着けられた首輪から伸びる鎖を力強く引っ張ると、別の近衛騎士に鎖を引き渡した。

リオは特に抵抗するわけでもなく、引っ張られるがままに男の後ろをついて行く。

牢屋は地下室にあるが、修練場は地上の外にある。

ベルトラム王国の王城の外観は、剛健な石壁に包まれた狭い城ではなく、白い石材を基調とした芸術性の高い宮殿である。

しかし、外敵からの侵入に耐えられるように、広大な敷地を囲う堅牢な城壁も建設されており、実利的な部分もある。

城内には豪華な貴重品が随所に散りばめられ、現在リオが歩いている外に面した幅の広い廊下には等間隔に円柱が立ち並び、床には朱色のカーペットが敷き詰められていた。

移動の最中には宮廷の警備兵や使用人達にジロジロと見られることになった。

案内の騎士はサッサと移動していくのでじっくりと鑑賞する暇もない。

（まるで猿の見世物だな。いや、もっとひどいか）

リオを見る目つきは同情と侮蔑の織り交ざったそれだ。

街を歩いていて稀にいる富裕層の住民が見せる表情と同じだった。

目が合うと、使用人はサッと視線を逸らした。

「着いたぞ」

されるがままリオは修練場へと連れてこられた。
周囲には王国に仕える貴族やその騎士達が野次馬のように集まり、一種の見世物のようになっている。
そこで模擬剣を渡されると、リオは修練場の中央にて一人の近衛騎士と対峙することになった。
訳も分からないまま戦わされることになったが、疑問を抱いても仕方がない。
今は目の前の勝負に集中することにした。

幸い魔力の動きを阻害していた手かせが外された。
最悪、これなら身体能力を強化して強行突破で逃げることができる。
だが、逃げるのは勝負をしてみてからでも遅くはない。
穏便に済むのならそれが一番なのだから。

模擬剣を構え、金属製の軽鎧と盾を身に纏った近衛騎士は、見下すような視線をリオにぶつけてきた。
両者の距離はおよそ十メートル。
近衛騎士はかかって来いと言わんばかりにその場を動くことはない。
対するリオも無言のまま近衛騎士を見つめている。

剣を持ったまま特に構えることもしないリオだが、目端の利く一部の実力者だけはどこかリオがただの子供ではないと感じていた。
だが、対峙している近衛騎士はリオにやる気がないと思ったようだ。
リオの様子に舌打ちをすると自分から仕掛けることを決めた。

「ハァァッ！」

それなりの速度で間合いを詰めると、リオの胴体を薙ぐように全力の一撃を放つ。

持っているのは訓練用の模擬剣だ。

だが、籠められている力からして、当たれば痛いというレベルでは済まないだろう。

明確な敵意を感じたリオは近衛騎士の剣を避けることを決めた。

半歩身体を横にズラすことでアッサリと攻撃を避ける。

すると、近衛騎士に顔に驚愕の色が浮かんだ。

そして、それを見ていた周囲の者達は大きく目を見開いた。

最低限の魔力で筋肉と肉体強度を強化したリオは、その隙を見逃さないように、瞬時に近衛騎士の喉元に模擬剣を突きつける。

修練場が静まり返った。

「ま、待ってくれ！　今のは油断していただけだ！　次は本気でやる！」

自らの負けを悟った近衛騎士が慌てたように異議を申し立てた。

その様子がおかしかったのか、静寂が止み、修練場にいた者達が失笑しだす。

「……、く、は、ははは！　まさかあんな子供に負けて言い訳をするとは。近衛騎士の質も落ちたものですな。これでは此度の失態もやむを得ないと言える」

と、周囲の者にも聞こえるようなわざとらしい大きな声で、修練場の一角で模擬戦を観戦していた貴族の一人が言った。

「え、ええ！　ユグノー公爵の仰せの通りです。あのような言い訳を誇り高い近衛騎士団の者が述べるとは言語道断ですな」

それに賛同するようにその男の周囲にいる貴族達も囃し立てる。

離れた位置にいる貴族のグループが、苦虫を噛み潰したような表情で、それを聞いていた。

リオは無表情でその光景を眺めている。

「馬鹿者が！　頭を冷やせ！　油断していたのだろうが負けは負けだ。名誉ある近衛騎士なら素直に負けを受け入れろ」

アルフレッドがリオと対峙していた近衛騎士に喝を入れる。

流石に副団長の言葉を聞いて冷静になったのか、近衛騎士は悔しそうにしつつも頭を下げた。

アルフレッドがリオの方へ視線を移す。

何やら考えているような表情でリオのことを見ているが、すぐに口を開いた。

「ふん、見事だ。少年。これで君がクリスティーナ様とフローラ様を助け出すだけの実力があることが証明された」

「そのことに何か意味があるんですか？」

少し高圧的なアルフレッドの言葉に、臆した様子もなくリオが尋ねた。

「ああ、国王陛下から直々に感謝の御言葉を頂戴することができる。この上ない栄誉だろう。君に対する沙汰もその際に御下しになられる。部屋も用意される。牢屋から出ることができるぞ」

完全に一方的で上から押し付けてくるような喋り方だった。
国王が絶対の存在で、誰もが畏怖する対象であることをかけらも疑っていない。
そんな感じだ。
牢屋から出られるのはともかく、国王の言葉はいらなかった。

「……それは光栄です」

大してありがたさの籠っていないリオの返事に、アルフレッドが顔をわずかに顰める。
そのまま見下したような視線でリオを見つめると、口を開いた。

「ふん、とりあえず今日は用意した部屋に戻るといい。取調べで受けた傷の手当てをする魔道士を用意させよう」
「ありがとうございます」

そもそも怪我を負わせたのが同じ組織に属する人間であることに不満を覚えたが、一応は感謝の意を伝えた。

こうしてリオは牢屋からようやく出ることができた。
怪我の治療を受け、沐浴をするとそのまま部屋へと案内される。
そこにいたのはリオよりも何歳か年上の少女であった。
まだ十代前半といったところであろう。
しかし少女の美しさは名のある芸術家が生涯を賭しても生み出すことができないような輝きを誇っていた。
一言で評するならば完成された美しさである。
少女は入室してきたリオに深々とお辞儀をすると絶妙な間をとって口を開いた。

「はじめまして。私はアリア＝ガヴァネスと申します。王城に女官見習いとして勤めておりますが、この度はリオ様のお世話役の任を仰せ付けられました。どうぞよろしくお願い致します」

と、感情が一切垣間見えない能面で、少女は言った。

淀みのない綺麗な声であった。

「これはどうも、私のような者にご丁寧に。リオと申します」

恭しく一礼すると、リオは少女の美しさを大して気にした様子もなく、丁寧な挨拶を返した。

相手が丁寧な対応を心がけるのならば、こちらも丁寧な態度をもって接するのがリオのスタンスである。

その逆も然りであるが。

この国のマナーに則った礼の仕方ではなかったが、なかなか堂に入ったリオの対応に、極僅かだがアリアの目に驚きの色が浮かんでいた。

相応の観察力がなければわからないものであるが、リオはそれに気づいた。

どうやら無表情であっても無感情ではないようだ。

「王城にいる間は私がリオ様のお側に仕えさせていただきます。御用命の際はなんなりと命じください」

しかしアリアもなかなかのもので、リオに対して抱いた好奇心をそれ以上見せることはなかった。

「ではとりあえず一つだけ質問を。国王陛下からのお言葉を頂戴した後はすぐに王城から出ることはできるのでしょうか？」

「申し訳ありません。その点につきましては私の方で存じておりま

せん。国王陛下との謁見は明日となっております。その際にリオ様の処遇について言い渡されるかと」

つまり明日以降もこのような実質的軟禁状態が続く可能性があるということである。

予想通りの返答にリオは失意を感じた。

だが、牢屋の中に入れられていた状態よりは悪くない。

「なるほど。ありがとうございました」

「いえ、それが私の役目でございますから。他に御質問がないようでしたら御食事をお持ちいたしますがどうでしょうか？」

「それは素晴らしい。是非ともよろしくお願いします」

数日ほど碌な物を食べていなかったリオは年相応の笑顔を浮かべて返答をした。

（どうせすることもないんだ。慰謝料代わりに豪勢な食事を食べられるだけ食べてやろう）

心の中では強かなことを考えつつ、リオは運ばれてくるだろう宮廷料理に思いを馳せた。

第5話　謁見

リオの模擬戦が行われてから少しばかり時は過ぎる。
ベルトラム王国の国王であるフィリップ三世は、近衛騎士団長であるヘルムート＝アルボーから直訴を受けていた。

「陛下！　私はあの小僧に対してさらなる尋問を行う必要があると愚考しております！　どうか御許可を！」
「ならぬ。そもそもあの模擬戦は他の間者が誘拐犯達を倒したというそなたの言により行われたのだぞ？　あの孤児が娘達を助けたことが事実であることはあの模擬戦の結果からも裏打ちされたではないか」

力強く語りかけてくるヘルムート。
だが、フィリップ三世はヘルムートの言を受け入れるのに消極的な態度を見せている。

「その通りでございます。しかし、一介の孤児が近衛騎士を制するだけの力を持っていることはどう考えても不自然です！　どこかで戦闘訓練を受けたとしか思えません！」

それでもヘルムートは憤った様子でフィリップ三世に食ってかかった。
あまりにも必死なヘルムートの様子に、フィリップ三世は内心で苦笑した。
リオが不自然に強いことはフィリップ三世も十分に承知している。
だが、とある思惑もあって、今はそれを取り合うことはしない。

「それはおかしいな。ヘルムートよ。ならばどうして近衛騎士との模擬戦を行わせた？　悪漢を四人も撃退する能力があるのなら近衛騎士を相手取ることもできると、そなたが申していたと記憶しているのだがな」

フィリップ三世はヘルムートの供述の矛盾点を指摘した。

だが、ヘルムートは想定していたと言わんばかりに即座に受け答える。

「それは、たとえあの小僧が近衛騎士に勝てずとも、姫様方を救う実力の持ち主であることを証明できると考えたからです。しかしあの小僧は近衛騎士に勝利した。いまだ十にもなっていない孤児がです。明らかに異常としか思えませぬ！」

先ほど同じことを殊更に強く主張する。

たしかに、ヘルムートの言うことはもっともだ。

リオのあの実力は一介の孤児が持ちえるものではない。

油断していたとはいえ仮にも騎士である者を十歳にもならない孤児が苦も無く御したのだ。

それが普通ではないということは先に述べたとおりフィリップ三世も理解している。

しかし、今回の件はフィリップ三世にとってはある意味で好都合であった。

というのも、これまで宮廷内で絶大な影響力を持っていたヘルムートが、フィリップ三世には少々厄介な存在であったからだ。

王族を守護する近衛騎士団が王宮の中で王族であるクリスティーナとフローラの誘拐を見逃してしまった。

近衛騎士にとっては大失態である。
そして、その監督責任は近衛騎士団長であるヘルムートにも当然に及ぶ。

現在、ヘルムートは窮地に立たされていた。
何とかして自らの失脚を防ぐことができないかと、彼は必死になっているのだ。
その唯一の方法は黒幕をヘルムートが暴くことだった。

彼は黒幕が自らの失脚を狙う反対勢力だと確信していた。
が、恐ろしい程に鮮やかな手つきで、黒幕はほとんど証拠を残していない。
唯一の証拠が実行犯である四人の男達だが、彼らも気がつけば毒殺されてしまった。
看守を死刑にしてやりたいところだったが、それどころではなかった。

残ったのはクリスティーナとフローラを助けたリオという名の孤児だけだ。
冷静に考えればリオだけが毒殺もされずに放置されている時点で、黒幕にとっては、リオが取るに足らない人物であることを意味するのだが、そのことに気づけるほどに冷静ではいられなかった。

そこで、ヘルムートは残された最後の権力を振り絞ってリオに対する取調べを強行することにしたのである。
何でもいい。
僅かな情報でもいいから、黒幕に繋がる情報を吐かせなければならなかった。

ヘルムートが稼ぐことができた時間は三日が限界だった。

それ以上時間が経てば先に自分が失脚してしまう。
そこで、三日にわたって取調べを行わせてみたが、リオは何も情報を吐かないという。
王族を救ったという功績があることからあまり手荒な真似はできなかったが、タイムリミット間近になってはそんなことも言ってられず、多少強引に尋問するように取調官に命令もした。
だが、結果としてそれも功を奏することはなかったと、取調官から報告が上がってきている。

取調べと並行して、最後の手段として、ヘルムートはリオと近衛騎士を戦わせることを提案してみたが、これも失敗している。
そもそもヘルムートがリオと近衛騎士と戦わせようとしたのはリオの実力に疑問を感じていたからだ。
何の訓練も受けていない孤児が王族の誘拐犯を倒した。
その報告をヘルムートは信じることができなかったのだ。
クリスティーナとフローラはリオが助けたと供述していたが、きっと別な人間が裏で援護したのではないかと、ヘルムートはもはや妄想に近いことを考えていた。

リオがとんでもなく弱いことを証明できれば王女達の供述の信用性を揺るがすことができるのではないか。
そう思ってリオの実力を確かめてみたいと国王や貴族のいる前で言うと、かなりあっさりと周囲の者達の同意も得られ、決闘が行われることとなった。
その結果はヘルムートにとって信じがたいものだった。
リオはその場からほとんど動くことなく近衛騎士を制してしまったのだ。
呆然としながら観客席に立っていると、宿敵の一人であるユグノー公爵と視線が合った。
ユグノー公爵は嫌味垂らしそうにヘルムートに微笑んでいた。

ヘルムートは思った。
この男はリオとかいう小僧の強さを知っていた。
だから、この試合を止めなかった。
きっと私に恥をかかせるつもりだったのだ。
こいつだ。
きっとこいつが犯人だ。
まるで妄執するかのように、ヘルムートはそう信じ込んだ。

そうして、今に至るわけだが、ヘルムートの言葉はもはやフィリップ三世には届かなくなっている。
そのことを、自らの敗北を、ヘルムートは察していた。
ヘルムートは、自身がフィリップ三世にとって目の上のたんこぶ的存在であると、自覚している。
ここまで来たらもはや敗北を覆すことはかなわないだろう。
だが、理解はできてもまだ納得はしきれていない。
だからまだ足掻きたかった。

「武勲には応えねばならぬ。それがたとえ孤児だとしてもな。仮に貴様の言う通りあの小僧がいずれかの勢力に属するとしてだ。その証拠はあるのか？」

フィリップ三世の言葉に、ヘルムートは苦々しい表情をした。

「……逆にあの者が潔白である証拠がございません」

流石に聞き苦しいヘルムートの言葉に、フィリップ三世が顔を顰(しか)める。
リオがこの場にいたら思わずふざけるなと叫んでいたかもしれない。

「だから拷問して自白させるというのか？　確実な容疑もないのだ。仮にも王族の恩人に対して行うべきことではないな」

不機嫌さを隠そうともしない冷たい口調であった。

「あ、あの異国の風貌。あの年齢にしてあの実力。あれが噂に伝え聞くアサシンではないかとも私は思っております」

と、そんなフィリップ三世の不機嫌さを察しながらも、ヘルムートは苦し紛れの弁を口にした。

「もうよい……。ヘルムートよ。そもそも今回娘たちが誘拐されたのは近衛騎士の怠慢ではないのか？　王族の楯となるべき近衛騎士があのような年端も行かぬ子供に負けたのだ。これは近衛騎士の質の低下と思った方が良いかもしれぬのう」

フィリップ三世はヘルムートの妄想ともいえる言葉を切って捨てた。

「そ、それは……」

ヘルムートが押し黙る。

ここで引きたくはない。

ここまで来るのにどれだけの労力をかけてきたのかは計り知れないのだ。

ヘルムートは野心家で強欲な男であった。

ベルトラム王国には二つの騎士団が存在する。

国土全域の守護を任務とする国の正規軍の中核をなす王国騎士団

と、王族と宮廷の守護を任務とする近衛騎士団である。
王国に仕える騎士の数は約六千人、そのうち実に九割以上が王国騎士団に所属し、残りが近衛騎士団に所属している。
国に仕える魔道士と並んで騎士は国に所属する立派な貴族の一員だ。
平民や爵位を有しない貴族の次男坊以下でも、試験を受けて騎士になれば、一代限りではあるが、騎士爵が与えられて名実ともに貴族となれる。
つまり、騎士は成り上がりの登竜門であるとともに、爵位を継げない貴族達にとっては最大の雇用口でもあるのだ。
その就職口は先に述べた通り王国騎士団と近衛騎士団の二つがある。
では、その違いは何か。
それは構成員の家格である。
王国の貴族を構成するのは、騎士爵、魔道士爵、準男爵、男爵、子爵、伯爵、侯爵、公爵である。
騎士と魔道士の中には上級貴族扱いされる称号を持つ者が少数いるが、子爵までが下級貴族、伯爵から上級貴族である。
このうち国内に領地を保有するのは伯爵以上の貴族だけであり、騎士爵を除いて宮廷貴族でない下級貴族は、上級貴族から領地の一部を借りてそこを管理したり、上級貴族や自分よりも高位の下級貴族を補佐したりする。
一方、王国騎士団の主要な構成員が平民や下級貴族の中でも低位の家の出身であるのに対し、片や、近衛騎士団の主要な構成員は有力な下級貴族や上級貴族の家の出身である。
この違いが生み出されたのはヘルムートが近衛騎士団長に就任してからだ。
かつて近衛騎士の任命権は国王が保有していた。
しかし、その任命権をヘルムートは先代の国王から巧みに勝ち取

った。
先代の国王が現役の頃は忠実にその任命権を行使していたヘルムートだったが、死の間際になるとその本性を現し始めた。
フィリップ三世が王位に就くまでの間に、ヘルムートは、近衛騎士団の任命権を背景に、爵位を継げない有力な貴族の子弟達を近衛騎士に任命して恩を売っていったのだ。
その結果、ヘルムートは宮廷内に大派閥を形成することに成功し、軍人の身でありながら宮廷内で絶大な政治的影響力を手にすることとなった。
その影響力は国王であるフィリップ三世も無視できない程であった。

（あと、少し！　あと少しで元帥の地位に就けたんだ！　そうすれば国の全軍が私の手中に入った！　その構図はできていた！）

ヘルムートは国王が兼任するのが習わしとなっている国軍で最高の権力を有する地位を掠め取ることすらも狙っていた。
そこまでいけばヘルムートの影響力は国王を遥かに凌ぎかねない。

だが、今回の失態によりヘルムートの権威は大きく失墜する。
ヘルムートは欲をかいて敵を作りすぎたのだ。
ヘルムートを妬ましく思う貴族は少なからず存在し、彼に敗れて宮廷を去ることになった政敵も多い。
自らの娘が二人も誘拐されたことは許せないが、フィリップ三世にとって今回のヘルムートの失墜は歓迎できるものであった。

「かねてより近衛騎士の質の低下も問題となっていたな。今回の件で近衛騎士団の改革を図る必要があるかもしれん」

これ幸いにと近衛騎士団が抱えてきた問題を解決するために、フ

ィリップ三世はついにその重い腰を持ち上げる。

「今後、近衛騎士の選任権は国王である余の元に戻すこととする。そなたには此度の件の責任をとってもらい近衛騎士団の団長の座を辞職してもらう。近衛騎士団長の後任は現副団長であるアルフレッドがよかろう」

と、フィリップ三世はヘルムートの処遇を言い渡した。

それはヘルムートが役職を失い王宮から立ち去らなければならないことを意味した。

（くっ、いつか、いつか必ず返り咲く！　そしてあのユグノーの若造に目に物を見せてやる……）

どす黒い負の感情を抱いたまま、ヘルムートは臣下の礼をとった。

だが、再び顔を上げた時にはその感情を打ち消していた。

「畏まりました。陛下の御心のままに。しかし、此度の件の黒幕がいまだ判明していないのも事実であり、万が一の事態に備えて諫言を呈するのが我が役目にございます」

顔色一つ変えずにそう言ってのけたのは、流石に歴戦の大貴族といったところか。

「あの小僧が黒幕と関与しているという可能性もゼロではありませぬ。適当な理由をつけて我が国で飼い殺すのが得策だと申し上げます」

と、ヘルムートはリオの危険性を仄かに示す。

それはフィリップ三世も懸念していたことであった。

「ふむ。そなたの忠心に感謝を。あの孤児が得体のしれぬことは余も理解しておる。ゆえにその扱いについては頭を悩ませておった。騎士爵を与えようとも思ったが、七歳では流石に、な……」

リオを騎士に取り立てるという言葉を聞いてヘルムートは思わず驚きの表情を浮かべた。

「僭越ですが、七歳の小僧に騎士爵は破格の待遇にすぎると存じます。騎士ともなれば相応の教養も求められます」

「わかっておる。結局、成人となる十二歳までの間は教養をつけさせるという名目で王立学院に特待生として入学させるつもりだ。その後どうなるかはあの孤児次第だがな」

「それならばまぁ……妥当な線かと。学院の講師を使えば管理もしやすいでしょう」

「ああ」

リオと呼ばれる特異な孤児の存在を頭の中に思い浮かべながら、フィリップ三世は今回の件の複雑さに頭を悩ませる。

フィリップ三世も今回の件が十中八九ヘルムートの力を削ぐことを狙いとした勢力の演出であることを察していた。

宮廷内は、王族が外部の者に易々と誘拐されるほどに、間抜けな警護が敷かれているわけではないのだ。

しかし、いかんせんヘルムートに宿敵が多すぎるために、その黒幕を特定することはできない。

本当に厄介な男である。

おそらく黒幕は最初からクリスティーナとフローラに命の危険が及ばないように配慮していたのだろうが、それでも可愛い娘達を利用したことは許せなかった。

いや、実際には、クリスティーナは軽傷ではあるが怪我を負ってしまった。
しかし、大切な娘が二人も同時に誘拐されたことに対して怒りを感じていることは確かであるが、それで視点を曇らせるほどに王として耄碌しているわけでもなく、フィリップ三世は冷静に犯人を分析していた。
とはいえ、ここですぐに次の行動に移すほど黒幕も愚かなことはしないであろう。
今後、確実に起こるであろう宮廷内の波乱を想像し、フィリップ三世は内心でため息を吐いた。

☆★☆★☆★

翌日、謁見に先立ってリオは身だしなみを整えた。
無造作に伸びきって口元にまで届きそうだった前髪はバッサリと切られ、幼いながらも整った目鼻立ちを露わにしていた。

リオの容姿は前世の天川春人のものにそこそこ近かった。
だが、瓜二つという程ではない。
あくまでも人種的に日本人の容姿に近いというだけで、せいぜい前世の自分の顔とこの世界の人間族の顔を足して割ったハーフと言ったところだろう。

この国では珍しい黒髪はエキゾチックな雰囲気もあり、先日の近衛騎士との模擬戦の際とは別人のようになったリオに、現在、謁見の間にいる人物達は感心と好奇の混ざった視線をリオに投げかけている。
周囲の視線が降り注ぐ中、リオは謁見の間の下段で俯いたまま国王の言葉を待っていた。

アリアから教わった謁見の際の最低限のマナーは既に頭の中に叩き込み済みである。
とはいえ、曲がりなりにも一介の孤児風情が謁見のマナーを踏んでいる姿は貴族達から見れば奇異に映った。
中には鼻についたように不機嫌な顔をする者もいる。
やがて謁見の間に王族達も集まると、ようやく謁見が開始した。

「リオよ、面を上げよ」
「はっ」

国王の許可を得たリオが顔を上げる。
壇上にある玉座には国王であるフィリップ三世が座っており、その一段下には王妃と娘であるクリスティーナとフローラが座っていた。
クリスティーナとフローラはリオの容姿の変化に驚いているようだ。

「此度はよくぞ娘達を救いだしてくれた。大義であったな。礼を言うぞ」
「恐れ多くもありがたきお言葉を賜り、恐悦至極に存じます」

と、深く頭を垂れると、リオは淡々とした口調で言った。

「ほお。なかなか堂に入った振る舞いだな。それはどこで身に着けた？」
「付け焼刃で身に着けた所作にすぎませぬ。王族の方々に不敬があってはいかぬと、昨晩のうちに私にお付けいただいた女官の方に教えを乞いました」

その言葉を聞いてフィリップ三世は感心した表情を浮かべた。

「なるほど。殊勝な心がけだ。とても七歳の孤児であったとは思えぬ。そなたがどのようにして育ったのか興味があるな」

フィリップ三世の目がスッと細くなり、探るような目つきでリオを見つめた。

内心で溜息と悪態を吐きつつも、リオは笑みを浮かべたまま畏まった様子を見せた。

「はっ。私はこの王都で生まれこの王都で育ちました」

「ほう。我がベルトラム王国、それも王都の出であったか。そなたの両親の話を聞いてもよいか？」

他国の間者か何かと一部で疑われていたリオだったが、自国の出身だったと聞いて、フィリップ三世の目に好奇の色が浮かんだ。

もちろんその言葉をそのまま鵜呑(うの)みして信じるわけではない。

どのような話が聞けるものかと、フィリップ三世はリオの両親について尋ねた。

「はい。父と母は国を跨(また)いで旅をする冒険者だったと聞いております。旅の途中で私を出産することとなりこの国に定住することを決めたそうですが、父は依頼の最中に死に、母は私が五歳の時に亡くなりました。それ以降はその……一人でスラムにて暮らしておりました」

母親の死に際を思い出し、リオは僅かに顔を顰めた。

フィリップ三世はリオの過去に何かがあったのだろうことを察する。

「それは何とも……。辛いことを聞いたな。髪の色からして東の国

の出身かと思ったが、そなたの両親がそうであったのだろうな」
「はっ。場所はわかりませぬが、父と母はヤグモの出身だと聞いております」
「ほう。ヤグモとな。東の最果てにある地方だか国の名ではないか。それはまたずいぶんと遠いところから来たのだのう」
「はい。いずれはその地へ赴くのが私の目標でございます」
「む、そうか。ところでな、娘達を二人も助けてもらったのだ。そなたに恩賞を与えようと思っておるのだが――」

いったん言葉を切って、フィリップ三世がリオを見据える。

「どうじゃ、我が国の王立学院初等科に特待生として入学することを認めよう。そなたが望むのであればその後の働き口も優遇するぞ。成績が良いようであれば中等科への進学も支援しよう」

と、褒賞の内容を口にした。
この世界の教育を受けることができるというのなら、リオにとっては願ってもない幸運ではあった。
とはいえ、この国の文明水準からしておそらく通うのは富裕層が中心となるだろう。
そんな場所に貧民層の代表であるリオが行けば厄介なことになりそうでもある。
だが、こうした場で王から与えられた褒賞を無意味に拒否するということは不敬に当たりかねない
だから、何らかの理由か覚悟でもない限り断りようもないと、ここに来る前にアリアから教わっている。

「ありがたき幸せ。身に余る光栄ではありますが、お言葉に甘えさせていただきたいと存じます」

瞬時に損得を計算したリオは国王の褒美を受け入れることとした。

ちなみに、ベルトラム王立学院は国中から富裕層の子弟が集い通う唯一の国営教育機関である。

生徒は貴族の子弟がメインであるが、中には貴族よりも金を持っている豪商の子弟もいる。

学院には地方から通う子弟のために寮も完備されている。

教育年数は初等科が六年、中等科が三年、高等科が二年となっており、初等科は六歳以上、中等科は十二歳以上、高等科は十五歳以上であれば試験を受ける資格を得ることができる。

七歳であるリオも試験を受ける資格は保有しているが、国王の推薦により特待生として無試験により学費免除で入学することとなったというわけである。

今は年度途中なのでリオは中途入学することになる。

王族以外で特待生として入学が認められたのは、千年近い歴史を誇るベルトラム王国史上でもほぼなく、極めて異例の事態である。

そのことに謁見の間にいた貴族たちは驚きの声を上げるが、その場でフィリップ三世の裁定に逆らう者が出るわけでもなく、リオの王立学院入学は確定事項として決定された。

なお、王国の教育水準は日本と比べると恐ろしく低い。

まず人口の九割以上を占める平民は一部の富裕層を除いて文字や数字を読むことすらできない。

平均的な下級貴族もせいぜいが小学校低学年程度の教養を有しているにすぎない。

国の唯一の教育機関である王立学院を卒業した者は、小学校高学年程度の教養を身につけることはできるが、王立学院は慈善事業ではない。

初等科の入学にあたっては魔金貨が一枚必要となり、年間の授業料も金貨が十枚必要となる。
つまり入学から卒業までの間に魔金貨が二枚と金貨が十枚も必要となるのだ。
そんな大金を支払える者は豪商といった富裕層の子弟、有力な下級貴族、それか上級貴族くらいだ。
さらに、リオには金貨四十枚の褒賞が与えられ、それとは別に王立学院の初等科を卒業するまでの間に一年ごとに金貨十枚の奨学金も与えられることとなった。
ちなみに金貨四十枚というのは下級貴族の年収程度である。

そして、数日後、リオは王立学院へ入学する。

第6話　入学

ベルトラム王立学院の新年度が始まって既に二か月が経過している。

リオは中途入学することになったわけだが、当然のように注目を集めることとなった。

初めてのホームルームではリオが自己紹介をすることとなった。

「今日から皆様と同じこの教室で学ばせていただくこととなりました。リオと申します。どうぞ六年間よろしくお願いします」

と、リオは淀みのない口調で淡々と挨拶をした。

「中途入学生？」

「家名を名乗らぬとは、平民か」

「平民がどうして中途入学を？」

「私聞きましたわ。何でもクリスティーナ様の危機を助けた孤児がいると。その恩賞で国王陛下の推薦により王立学院に入学することになったとか」

「孤児？　そんな奴がこの栄えある王立学院に入学するというのか？」

拍手の一つも起こらない。

代わりに品定めをするような会話が随所で行われ、似たような視線がリオに集められた。

随分と小憎たらしいが、それは七歳にして貴族社会に染まっている姿だった。

王城に勤める上流貴族の子弟は親から、既にリオの情報が与えられているようである。
当然のようにリオが孤児であったということも知られており、特権階級である彼らはリオを珍妙な生き物でも見るような視線を送っていた。
リオにとっては完全に予想通りの展開である。
まったく気にした様子のない冷静な表情を浮かべて、リオは視線だけ動かしてクラスを一瞥した。
見渡してみたところ百人ほどの生徒が教室の中にいた。

一学年三クラスで、一クラスの人数が百人である。
平民と貴族の間には身分の差という明確な壁が存在し、貴族の中でも家格という壁が存在するが、学院の中での関係に身分を持ち出さないというのが建前として校則となっている。
だが、クラスの雰囲気からすると、それは形骸化しているようである。

（まぁ学院で関係なくとも卒業したら関係が大有りだからな。ん……？）

ふと、リオは一人だけ見知った顔を見つけた。
その人物は教室の後ろの席に座っている。
周囲にはいかにも家柄の高そうな人物達が座っており、リオのことを見下したように見つめている。
リオと視線が合うと、クリスティーナは不機嫌そうにそっぽを向いた。
ずいぶん嫌われているようだと、リオは内心で皮肉げに笑った。
リオとしてもクリスティーナとは関わるつもりは毛頭ない。
あちらがリオに嫌悪感を抱いているというのならば、むしろ好都合であった。

「ふむ、生徒からの質問は……ないようだな。よし。リオ。空いている席に座れ。基本的に席は自由だが、今空いている席に座ることをお薦めする。以上だ」
「わかりました」

リオの横で立っていた講師は簡潔にそう言うと、リオに着席を促した。
リオとしても、これ以上教室の前に突っ立っているのは好ましくなかったので、さっさと空いている席へと移動する。
こうしてリオの学院生活は始まった。
授業は一日四コマ、一コマあたり一時間半をかけて行われる。

最初の授業で、問題は起こった。
それは算術の時間だった。

「そうね。じゃあ、新しく入ったリオとか言ったわね。アンタこの問題解いてみなさい」

クラスの担任となる講師はいるが、科目ごとに担当する講師は異なるようであった。
算術の授業を担当しているのはかなり若い少女の講師である。
日本ならばまだ小学校高学年、百歩譲って中学生程度にしか見えない、そんな少女がリオを指した。
指定された問題は日本の小学一年生ならば誰でも解けるような非常に簡単な問題であった。
しかし、リオがそれを理解することはできない。

「えっと、書いてある数字が読めません」

そう、リオは数字が読めないのだ。
そのことを伝えると、一瞬の静寂の後にクラス中から笑いが起こった。

「おいおい。数字も読めないのに王立学院に入学できたのかよ」
「数字すら読めぬ下賤なものと一緒に学ぶことになるとは……」
「あー、あれでしょ。アイツ試験受けてないんでしょ」
「これだから下賤な奴がいると嫌なんだよな。頭悪いし」

クラスの子弟達は他者を貶(けな)して優越感に浸ることをこの歳にして覚えている。
至る所でリオを小馬鹿にする会話が繰り広げられた。

「そっか、数字を読めないのね。そこから教えないといけないのか。……いいわ。あんたには後で私が数字を教えてあげる。放課後になったら私の研究室に来ること。今日のところは訳が分かんないだろうけどそのまま授業を聞いてなさい」

と、少女は頭を抱えながら言った。

「わかりました」

リオは特に気にした様子もなくその決定に従った。

「ねぇ、あなた」

算術の授業が終わったところでリオに声がかけられた。
相手の方を見ると、典型的なお嬢様といった可愛らしい少女が、何人かの取り巻きを連れて立っていた。
リオはクリスティーナの近くに座っていた集団だったことに気づ

く。

「はい、何か？」

「何か？　じゃ、ありませんわ。先ほどの講義はどういうことですの？」

嘆かわしいと言わんばかりの表情を少女は浮かべた。

「数字すら理解できないなんて。この歴史ある王立学院に、しかもクリスティーナ王女殿下や私のいるクラスに、猿が紛れ込んだと思ってしまいましたわ」

どうやらこの少女はリオにクレームをつけにきたらしい。

リオは内心でため息を吐きつつも、向き合って対応することにした。

「すいません。何分、無学なもので」

この世界で無学なのは事実だ。

これからこういった相手が腐るほど沸いてくるのだろう。

こういう手合いはまともに相手をせずに、言わせるだけ言わせておくのが無難だ。

今までにあった特権階級の人間達のおかげで、ストレス耐性と処世術は十二分に身に着けることができた。

「中途入学するくらいだから、平民でも算術の基礎である四則演算は楽々こなせるのかと思いましたけど、とんだ期待外れでしたわ」

少女はリオを蔑むように見つめた。

「まったくです。さすがにクリスティーナ王女殿下やフォンティーヌ公爵の令嬢たるロアナ様と比較するのは可哀そうですが、私もこいつがどれくらいできるのかと期待していたのです」

どうやら取り巻きのリーダーである少女の名はロアナというらしい。

ロアナに同調するように傍に立っていた気障な男が言った。

「それを数字すら理解できないとはなかなか笑わせてもらいました。いや、かえって期待通りだったのかもしれません」

言って、道化でも見ているかのような視線を、少年はリオに向けてきた。

「はぁ。これじゃ他の講義も期待できそうにありませんわね」

ロアナが小さく溜息を吐く。

「まずは貴方が今この場所に座っていられることを疑問に思いなさい。そしてそのありがたみに気づいて感謝の念でその身を焦がすのです。貴方はそれくらいに場違いな場所にいるのですから」

「わかりました。ロアナ様。お気遣いいただきありがとうございます」

と、礼儀正しく頭を下げながら、リオが言った。

その様子を見て感心したようにロアナが口を開く。

「あら、一応、礼儀はわきまえているみたいですね。いいのよ。これもクリスティーナ様の名代としてクラス代表を務めさせていただいている私の責務ですから。それにそうでなくとも平民を導くのも

貴族の役目です」
「ありがとうございます」
それが当然のことであるかのように、少女は自信に満ちた表情で言った。
本心からそう思っているのだろう。
「さすがはロアナ様です」
取り巻きの連中もすかさず賛同する。
ふと、周囲の連中を見てみるとニヤニヤとリオの方を見ていることに気づいた。
どうやら自分よりもレベルの低い者を見て自尊心を満たしているようだ。
リオはロアナよりも取り巻きの連中の方が質が悪そうだと思った。
「次は歴史の授業ですけれど、どうせ文字も読めないのでしょう？
悔しいと思うのなら努力して少しでも早く這い上がってくることね」
そう言うと、ロアナは自分達が座っていた席の方へと戻っていった。
そして間もなくして次の講義の先生がやって来る。
案の定、リオは文字も読めないので黒板に書かれたことは理解できなかった。
それゆえ、ノートはとらないで、話の内容を暗記することに集中して過ごした。
そして、本日最後に行われたのが武術の講義である。
武術と魔法の講義は二コマを通して行われるが、武術の講義に関

しては身体を壊さないためにも初等科の段階では過酷なことは行われない。
初等科一年生の段階では各々の得意なジャンルを見つけるために幅広い内容の武具に触れることになる。

「さて、今日は剣の型について学んでもらう。こないだの講義で教えた型を十分その後の休憩が十分でワンセットとする。まずはそれを三セットだ。やれ」

そう言われると生徒達は木剣を手に習った剣の型を再現する。
指示を終えると教官の一人がリオの所へやって来た。

「リオ。お前は一人だけ進行が遅れているから俺が直々に型を教えてやる。付いて来い」

教官の指示に従い付いて行く。
やって来たのは生徒達の位置から離れた場所であった。

「お前、剣を握ったことはあるのか？」
「はい。一応は」
「む、そうか。なら、まずはお前がどの程度できるのかチェックしてやる。その剣で俺に一撃でも当ててみろ。いつでもかかって来い」

そう言うやいなや、教官は剣を構えた。
それを見て、実戦的な無駄のない構えだと、リオは思った。
教官の構えを見ながらどうしたものかと考える。
おそらく魔力で身体能力と肉体を強化すれば一撃を与えることは容易だろう。
だが、魔法を習っていない段階でそれをするとどう思われるかが不安であった。

クリスティーナとフローラを助けたという事実は知れ渡っているため、ある程度の強さを見せても不自然に思われることはないだろう。
だが、身体能力と肉体の強化は封印することにして、素の肉体でどの程度やれるのかを確認することにした。
自分の中で制約を定めると、リオは剣を構えた。

「それは我流の構えか？」

構えの美しさを見て、疑問に思ったのか、教官が尋ねる。

「……いいえ」
「剣を握ったことはあると言っていたな。なるほど。才能はあるようだ」

教官が言い終わるやいなや、リオは走り出した。
教官に近寄ると、様子見の意味を込めて剣を薙いだ。

「ほう。良い太刀筋だ。それなら手首も痛めない」

リオの剣を受け止めると、教官はその剣の持ち方と刃の立て方を見て、そう言った。
教官というだけあって観察眼は優れているようだとリオは判断する。

身に付いた基本的な技量は隠そうと思って隠せるものではない。
その程度は見せてもいいだろう。
だが、あまり本気を出しても目立つだけろうと考えて、適度に力を抜く。

「うむ。いいぞ！　リオ、お前は騎士に向いている！」
と、笑顔でリオの打ち込みを捌きながら、教官は言った。
どうにも熱血な気質があるようだ。
正直、少しばかり暑苦しい。

「あいにく騎士に興味はありません」
「何？　そうか。まぁ学院生活は長い。騎士の剣術を教え込んでやる、安心しろ」
「っ！？」

突如、教官の側から鋭い一撃がリオに放たれた。

「ほう。今の一撃に反応するか」
「先生の方から攻撃はしないんじゃないんですか……」
「そんなルールはない！　が、お前の実力はわかった。もういいぞ」

教官が剣を降ろす。
それに合わせてリオも剣を降ろした。

「パワー、スピードはともかく、基礎的な技量について言えば満点……、非常に綺麗な動きだ。まぁ、学院で教える王国流の剣術とは大きく違ったがな。どこでその剣術を身に着けた？」
「死んだ母に教わりました」

と、便利な言い訳だと思いながら、リオは言った。

「そうか……。すまない。よほど反復練習したのだろうな」
「いえ」

特に気にした様子もなくリオは返した。

「まぁ基礎はどの剣術にも通じるところがある。それだけ基礎が身に付いているのならば王国流の剣術を学んでも弊害はないだろう。型を教えてやる」

型を習った後はリオもクラスに合流して剣を振るうことになった。

（ん？）

戻ってくると、ふと、リオは視線を感じた。

そちらを見てみるとクリスティーナとロアナがいた。

クリスティーナはリオと視線が合うやすぐに目を逸らしたが、ロアナは驚愕の表情でリオの方を見て固まっていた。

見られていたのだろうか。

それほど大したことはしたつもりはなかったが、どうしたのか。

リオは僅かに疑問に思った。

が、それ以上は考えることはなく、型の練習を始めた。

第7話　魔法

放課後、リオは算術の講義で言われたとおりに少女の講師がいる研究室へと向かった。
研究室の場所は図書館棟の地下にある一室である。
リオが研究室の扉をノックする。

「……」

しかし、返事はない。
リオは改めてノックをした。
今度は先ほどよりも大きな音だ。
しかし、またしても返事がない。

（いないのか？）

今度はさらに大きな音でノックしてみた。

「すいません。先生！」

加えて、少し大きい声を出すと、勢いよくドアが開いた。

「っだー！　うっさいわね！　今良いところなんだから！　って、あんた、リオだっけ？　どうしたのよ？」

危うくドアが額に直撃するところで、リオは超反射でドアを避けた。
現れたのは、一見すると窓際で優雅にお茶でも飲んでいそうな深

窓の令嬢、といった綺麗な少女だ。
だが、見た目と一致しないあまりの豪放ぶりに、リオは唖然としかける。

「い、いえ。今日先生に言われた通りに数字を教えてもらおうと思ってきたんですが……」
「あー、そっか。今日は悪かったわね。私の配慮不足だったわ。あんたがどれくらいできるのか知る意味で指したんだけど、恥をかかせてしまったわね」

と、どこか申し訳なさそうな表情で謝った。
その様子に悪い先生ではないようだとリオは判断する。

「あ、いえ。効率的に生徒の学力を把握する上では必要なことだったでしょうから。こちらこそわざわざ先生のお時間を割いてまで教えを乞うことになってしまい恐縮です」

女講師はリオの対応に目を丸くした。

「へぇ。平民の子供なのにその年齢でずいぶんと小利口そうじゃない。あんた七歳よね？」
「はい。と言っても、先生こそだいぶ若いですよね？　あまりに若い方が講師をやっているので驚きました」
「そりゃそうよ。私まだ十二歳だし？　本当ならまだギリギリ初等科に通っているんだろうけど、飛び級で高等科も卒業しちゃったの」

リオの言葉に少し気を良くしたように少女が語る。

「本当は魔法の研究を専門としていてそっちに専念したいんだけどね。片手間に講師業をやらないといけないの」

ローブに包まれた小さな胸を突き出して誇る様子を、少しリオは微笑ましく感じた。

「それは、すごいんですね」

「まぁね！　あ、そういえばあんた中途入学生だから自己紹介してなかったわね。私はセリアよ。セリア＝クレール。一応、伯爵家の貴族だけど堅苦しいのは嫌いだから畏まらなくていいわ」

「はい。自分はリオと言います。どうぞよろしくお願いします」

「はいはい。よろしくね、リオ。じゃ、そんなところに突っ立ってないで部屋の中に入りなさいな」

セリアに案内されてリオが部屋の中へと入る。

（き、汚い……）

そしてあまりの部屋の散らかりように引いた。

「あー、ちょっと散らかっているけど、そこの椅子に座ってちょうだい」

（……ちょっと？）

大きく異論を唱えたくはあったが、ぐっと我慢することにした。

リオが着席するとセリアは羊皮紙を取り出して机の上に広げた。

「さて、まずは数字ってものの意味はわかっている？」

「わかります」

「ふーん、じゃあ、ここに八冊の本があるわ。あんたは六冊の本を読み終わった。まだ読んでない本は何冊？」

確認する意味を込めてセリアはリオに簡単な計算問題を出した。
「二冊です」
それに即答するリオ。
「あら、暗算で引き算ができるの？　足し算も？」
予想外と言った様子でセリアが尋ねる。
この世界の平民は現物を一つずつ数えながらでないと簡単な計算もできないのが普通だからだ。
「はい」
「じゃあこれの意味は？」
セリアは先ほどの計算と同じことを羊皮紙の上に数式で書いた。
「わかりませんが？」
数字の読めないリオは数式を理解できない。
「えっと、数字は読めないけど計算はできるってこと？」
「そうなります」
「何よ、そのちぐはぐな状態は……まぁ、ありえないこともないか。紙は平民にとっては高いだろうし……」
セリアが呆れた顔でリオを見る。
「じゃあとりあえず数字だけ教えればいいってことか。そうね、と

りあえずここに一から九までの数字を書くわ。それを覚えて頂戴」

そう言うと、セリアはすらすらと数字を書いていった。

書かれた数字はさほど難しいものではない。

それらの数字を凝視すると、リオはほんの数十秒で数字を暗記した。

「覚えました」

「え、もう？　じゃあ一から九までここに書いて」

セリアは羊皮紙を裏返しにリオにして渡した。

リオはスラスラと数字を書いていく。

「正解。しかも字綺麗ね……」

「あの、できればゼロを表す数字と四則計算の記号も教えてほしいのですが」

「……あんたゼロの概念を理解しているの？　しかも数字が表意文字だってわかってるし、四則計算もできるってこと……よね。……こうよ」

セリアがリオに言われたことを羊皮紙の上に書いていき、リオはそれを覚えていく。

「なるほど。ありがとうございます。これ以上、セリア先生の時間を割くのも心苦しいのでそろそろお暇しますね。この紙は一応貰っていってもいいですか？」

セリアも忙しいようだし、用件も済ませたことから、リオはさっさと部屋から立ち去ろうとする。

「ちょっと待ちなさい！　その紙はあげるけど、せっかくだから学力診断をしてあげるわ。今問題を作るから、ちょっと待ちなさい！」

身を乗り出して迫るセリアにリオがたじろぐ。

新たに羊皮紙を取り出すと、セリアがスラスラと問題を作っていく。

その数、実に五十題、四則演算の問題が全て入っている。

「それじゃ開始」

渡された問題をザッと眺めると、リオからしてみれば極めて簡単な問題が散りばめられていた。

ほんの五分で見直しも含めて解き終える。

その様子をセリアは驚愕した表情で見ていた。

「できました」

セリアは羊皮紙を受け取ると瞬時に答え合わせをしていく。

リオが解くのを見ながら答え合わせを行っていたのか、すぐに結果を通知することになった。

「全問正解よ……」

と、僅かに苦笑いを浮かべて、セリアは言った。

「まぁ、その程度の問題でしたら。クラスの皆さんもそれくらいならできるのでは？」

リオの言葉に、セリアが堪えきれないといった様子で笑いをもらす。

「ふ、ふふ……ふふ……。まぁ中には出来る子もいるでしょうね。でもね、それはいても学年で数人程度よ。しかもあんたほど早くしかも暗算で解ける子はいないわ」

ここでリオは自らがやらかしたことに気づいた。

貴族の中でも上位の貴族ばかりが通う学校というからには、それなりの学力を有する生徒が大勢いると思っていたのだ。

実際、子弟達は自らの学力を誇示するように振る舞っていた。

それならば、この程度は出来て当たり前だと、リオは勘違いしていた。

「あの、本当に御迷惑でしょうし、そろそろ……」

不味い、と思ったリオが席を立ちあがろうとする。

「いいわ。時間ならあるもの。気にしなくていいの。ちょっとお話しましょ」

立ち上がろうとしたリオの両肩を、セリアががっしりと押さえつけた。

ふわり、と花の香水の匂いがリオの鼻をくすぐった。

「さて、たしかあんたつい最近まで孤児だったのよね？」

その情報はセリアのような一介の講師にも伝わっているようだ。

「はい」

取り立てて隠すべきことも出ないし、隠せることでもないことか

ら、リオは素直に肯定した。

「その言葉づかいといい、算術の基礎をマスターしているところいい、どう考えても孤児が身に着けてるものじゃないわよね？　どういうことよ！？」

と、興奮した様子で加速していく口調で言った。

年相応の可愛らしい笑みとは別に、有無を言わせぬ迫力があった。

「えっと、王立学院の中だと言葉づかい一つで苦労すると思ったので必死に覚えました。母が丁寧な言葉づかいをする人だったのでそれを参考にしています。算術についても幼いころに将来役に立つからって母に教わりました」

嘘ばかりである。

だが、母親の言葉使いについてだけは事実だった。

リオの記憶ではリオの母は冒険者とは思えぬほどに綺麗な言葉づかいをする女性であった。

汚い言葉づかいをしようものなら怒られた記憶は懐かしい。

といっても、母の喋り方から学んだのは丁寧語の表現方法だけだ。

一部の尊敬語や謙譲語の表現方法については、謁見の前にアリアから簡単に習っている。

しかし、算術の習得経緯については完全に嘘である。

まさか前世で習いましたというわけにもいかない。

リオはポーカーフェイスで嘘をつくことにした。

「その、そっか、お母さん死んじゃったんだ。ひょっとして元貴族とかだったのかしら。いずれにしても素晴らしい人物だったのね。悪いことを聞いたわ。ごめん」

リオの母が死んでいることを聞いてしまったことに罪悪感を抱いてしまったのか、セリアは雰囲気を一変させて申し訳なさそうに謝った。

「いえ、一応、心の整理はついていますから」

「そういうところが……。はぁ、いいわ。ずいぶんと大人びているのね」

どうやらリオの発言に納得しきったわけではないようだ。

だが、リオの過去を掘り下げて聞くのも悪いと思っているようで、突っ込んで聞いてくることはしなかった。

なかなかお人良しな人間のようだ。

（貴族にはこんな人もいるのか……）

今までに見てきた貴族の選民意識が強すぎたため、リオはだいぶバイアスがかかった状態で貴族と接してきた。

とはいえ、彼女のような存在は極一部の例外なのだろうが。

「セリア先生こそずいぶんと大人びた雰囲気を持っていますよ」

「え、あら、そう？　そっかー。リオにはわかっちゃうかー」

どうやらリオの言葉にセリアは気を良くしたようだ。

（意外と扱いやすい人なのかな……）

と、感情豊かなセリアを見て、リオは思った。

「っと、まぁ、それは置いておいて、算術について言えばリオが一気に学年トップに躍り出たわよ。ついさっきまで数字すら知らなか

ったのに、ね」

だが、すぐに真面目な表情を浮かべ直すと、セリアは話を元に戻した。

「もう算術の授業に出なくてもいいんじゃない？　似たような内容が初等科の三年まで続くから」

貴族の用事で休む生徒が大勢いるため、王立学院の講義の出席は任意となっている。

それでも用がない限りは真面目に出席するのが一般的ではあるが。

「はは、さすがにそれはまずいでしょう。他の生徒達から反感を買うでしょうし」

遅れてやって来た劣等生が授業に参加しないとなればあまり良い眼で見られないだろう。

「あー、まぁそっか。めんどくさいもんね。人間関係がさぁ。特に貴族がいるとねぇ」

貴族社会の煩わしさを思い出したのか、明け透けな様子でセリアは嫌そうな顔をした。

「先生も貴族じゃないですか」

「まぁそうなんだけどねー」

だいぶ素が出てきたのか、セリアの仕草も口調も砕けてきている。

姿勢を少しだらしなく崩し、ぐったりと伸ばした細く色の白い肢が、年齢に似合わぬ蠱惑的な魅力を醸し出していた。

黙っていれば深窓の令嬢にしか見えないため、正直、見た目とのギャップが激しすぎる。
スカートが捲り上がりそうになって、リオにとっては目の毒であった。

「ところで先生は魔法を専門に研究していると仰っていましたが、具体的にどのようなことをしているのですか？」

セリアの無防備さに内心でため息を吐くと、リオは話題を変えるようにセリアに質問を投げかけた。

「あら、魔法に興味ある？」
「はい」

リオがそう返事をすると、セリアは、近くの棚から、複雑な幾何学文様が刻み込まれた無色透明な水晶を取り出した。
セリアが手に持った瞬間から、その水晶は白く光を放ち始めた。

「えっと、これは？」

机の上に置かれた水晶を見てリオが尋ねる。
セリアが手を放した瞬間には、水晶は発光を停止した。

「これは魔法の適性を判断してくれる魔光結晶という名前の魔道具よ。表面の幾何学文様は魔石の粉を用いて刻み込んであるの。特殊な品でかなり高いんだから」
「魔石ですか？」
「魔石っていうのは魔物が体内に保有している物質よ。で、魔物は魔石を核として動く超常生命体って言われているわ。まぁ死んだら魔石を残して文字通り跡形もなく消滅しちゃうから何もわかってな

いんだけど……、一説によると迷宮が魔物の発祥地と言われているわね」
「魔物、魔石、迷宮……」
と、あまりよく知らないが、名称だけは知っている興味深い単語を、リオは呟いた。
「で、話が逸れたから戻すけど、魔光結晶は身体の表面に滞留している魔力に反応して、これに触れて光るようなら下級の魔法程度なら使えるだけの魔力があるってことを意味するの。別名、測定石って言われているわね」
その名称と効果をセリアが説明する。
人間は誰もが魔力を持っているが、その量は個人差がある。
中には魔法がまったく使えないくらいに魔力が少ない人もいる。
これはそんな魔法を使うための前提条件を判断するための魔道具らしい。
「それと光る時の色でどんな魔法が得意かもわかるわ。魔法使いとしてのタイプ分けもしてくれるってわけ」
セリアの言葉を聞いて興味深そうにリオが水晶を見る。
魔法使いとしての適性を判断する方法はともかく、どうして魔力の有無を調べるのにこんな迂遠な真似をしなければならないのか。
リオは不思議に思った。
「へぇ、魔力って目で見えないんですか？」
そう、リオは魔力と考えている光を目で見ることができるのだ。
だからわざわざ測定石など使わずともよいのではないかと疑問に

思った。
その疑問をそれとなく聞いてみがら、リオは目に意識を集中させてセリアを見つめた。
王立学院の生徒たちもなかなか多い魔力を持っている者が多かったが、その中でもセリアはかなり多い部類に入る淡い光を纏っている。
ちなみに少し訓練したところ、今のリオは淡い光を見るにあたってオン、オフの調節ができるようになっていた。
コツは目を魔力で覆うことだ。
「純粋な魔力は漠然と感じとれても目で見ることはできないわ。魔法が発動する時の魔法光は目で見えるんだけどね」
（……おかしい。じゃあ俺が見ている淡い光は何だ？　感じとることはできる？　この光も感じとれている……よな）
「ほら、試しに置いてみなさい」
セリアに促されておそるおそる水晶に触れると、無色透明な水晶が白く発光した。
（セリア先生と同じだ。白く光った。これは魔力を吸い取るのか？　いや、魔力を帯びて可視化している？　俺が手を置いた瞬間に白い光が水晶を覆った。となると俺が見える淡い光は魔力か？）
頭の中で冷静に分析していく。
その横で、セリアが水晶の光を見て、目に僅かに驚きの色を浮かべた。
「おぉ、光っているじゃない！　しかも白ってことは万能型よ！

魔力制御さえこなせればどんな魔法でも使いこなす適性があるとされる色よ！　私とお揃いね。白く発光する人間は少ないんだから」

セリアがリオの隣でニコニコと笑っている。

魔法使いのタイプには、他に道士型と闘士型が存在する。

道士型なら赤く、闘士型なら青く発光することになっている。

「えっと、ありがとうございます。万能型ですか？　なんかあまり実感がわかないですけど」

「まぁ、まだ魔力を感じとることもできないしね。魔力の感知、魔力の操作、術式契約と魔法を使うにはやることが多いんだから」

「なるほど。魔力の感知はどうすればできるようになるんですか？」

「一番簡単なのは魔力を扱える他人に魔力を身体の中に送り込んでもらってその違和感を察知することかな。まぁなかなか気づけない人もけっこういるんだけどね。魔力の操作はその後に習うことになるの」

「なるほど。その、質問だらけで恐縮なのですが、術式契約とは？」

疑問に思ったことを解消するため、キーワードとなる単語の説明を求める。

「んー、一般的な定義を言うと、世界に干渉するためのフレーズを身体に染みこませる儀式が術式契約かな。小難しいわよね。まぁやってみるのが一番早いわよ。最初のうちは魔法の感知をするだけだからつまんないと思うけど、魔法の講義が進めば術式契約もやることになるからその時のお楽しみにとっておきなさいな」

「はい」

第8話　失敗

既にリオが入学してから五か月が経過している。
現在、リオはイジメにあっていた。
入学当初こそ、数字が読めなかったり、文字が読めなかったりと、嘲笑の対象とされていたリオであった。
だが、図書館で本を読んだりして、自力で文字を学んでいるうちに、メキメキとクラスの学習速度に追いついていった。

そもそも前世で大学生程度の教養は有していたのだ。
この世界の常識以外は特に覚えることもないことから、この結果は必然であったといえる。
これでも本人は目立たないようにだいぶ手を抜いていたのではある。
だが、いかんせん周りのレベルを掴みかねているので、どこまでやっていいのかがわかっていなかった。
周囲のレベルを把握し始めた頃には、リオの成績はかなり上位の方に位置することになってしまったというわけである。

周囲の生徒はリオの成長が面白くなかった。
幼くして他者を蔑むことで自尊心を満たすすべを知ってしまった彼らの中には、一度敗者となった者はそのまま敗者でいることを望む者が多い。
ましてやそれが元孤児となればなおさらである。

とはいえ、リオとしては、自分から他の生徒に積極的に話しかけるつもりもないので、周囲からどう思われていようが関係はなかった。

リオは、この世界の知識をつけるために学院という場所を利用しているにすぎないと、心の中で割り切っているのだ。

現在は周囲から無視されて独りぼっちの学院生活が続いているが、前世で大学に通っていた時は一人で授業を受けるのは当たり前だった。

他の生徒とコネを作ったり、他の生徒から学んだりすることもないので、リオにとって無視される程度は何の障害にもならない。

裏では色々と陰口を叩いているようであるが、表だって馬鹿にすることはリオの成績がそれを邪魔していた。

ところが、周囲の生徒がリオに対する鬱憤を晴らす出来事が、魔法の授業で起こった。

魔力の感知ができるようになったことが不自然でないタイミングになると、リオもようやく魔法の術式契約をすることとなった。

術式契約のやり方は非常にシンプルである。

地面に契約陣と呼ばれる幾何学文様の陣を描いて、その上で瞑想をし、魔力を放出して呪文を唱えるのである。

成功すれば地面に描かれた契約陣が消滅して、自らの身体の中に術式として刻まれていく。

ちなみに、高位の魔法になればなるほど契約陣の紋様は複雑になる。

「やった！　できたぞ！」

「まぁ、初歩の『発火魔法（イグニッション）』の術式だからな。これくらい出来て当然だろうよ。失敗したなんて話は聞いたことないぜ」

講義は魔法使いのタイプごとに講師がついて行われる。

リオは万能型であるために、道士型と闘士型のグループの両方を行き来することになる。

同時期に術式契約をすることとなった周囲の生徒達が次々と契約を成功させて喜びの声をあげる。
だが、リオはいまだに契約に成功する兆しがなかった。

（なんだ？　これは……術式がどういったものかは何故かわかる。だが契約しようとすると弾かれる）

リオは戸惑っていた。
術式陣の上に乗って契約を結ぼうと魔力を放出すると、どういうわけか取得しようとしている魔法の内容がどういったものか感覚的に理解できてしまったのだ。
だが、いざ術式契約が完了しようとなると、身体がそれを拒絶するかのように受け入れない。

一人、二人と生徒が契約した術式の呪文を唱えて魔法を使う生徒が増えていく。
そんな中、最終的にリオだけが取り残された。
それを目ざとい生徒が見つける。

「おい、リオの奴まだ術式契約に成功してないぜ！」

魔法を使えるようになって、浮かれていた多くの生徒がリオに視線を集めた。
魔法が使える者と魔法が使えない者との間には歴然たる事実として大きな力の差がある。
特に戦争においては魔法を使える者は戦の花形となる。
そのことから、実際に前線に出ることがなくとも、魔法が使えるということは一種のステータスとされている。
また、魔力感知に目覚めた者は、通常の人間よりも若々しく肉体

を保つことができる。
さらに、寿命も魔力の感知に目覚めていない人間よりは長くなる。
それゆえ、特権階級に位置する者は、特権階級の証左として、魔法を習う者が多い。
王立学院において魔法の講義が魔力を持つ者の必修科目としてカリキュラムに組み込まれているのはそのためである。
そして、魔力の量は親から子へ遺伝するものであるが、王立学院に通えるような家柄の者は魔法を扱うに足る魔力を有している者と交配していくため、必然的に大半の生徒が魔法の実技の講義を受けることになる。

最近、身分不相応に賢くなって気に食わない元孤児の平民が術式契約に失敗した。
新たな揶揄の口実ができたのであるから、リオのことが気に食わない生徒にとってはまさしく朗報であった。
魔法は選ばれた者にしか使えない、万能型というのは嘘だ、やはり元孤児は所詮孤児なのだと、彼らは嬉々として囃し立てる。
そのうち、魔光石が反応したのも何かの間違いだの、リオが王立学院にふさわしくないだの、成績が良いのは不正をしているからだの、生徒達は好き勝手なことを言い始めた。
収拾がつかなくなりはじめたところで講師が注意するも、生徒達はひそひそとリオに対する批判をし続けた。
そして、その日、リオは術式契約を成功させることはできなかった。

「リオ。ちょっと放課後に私の研究室に来なさい」

その後の算術の講義の終わりにリオはセリアに呼び出された。
放課後になると図書館棟の研究室へと赴く。

「失礼します」

セリアとはそれなりに話す関係になっており、こうして研究室に来るのも珍しくはなかった。

不思議とセリアとは息が合うのか、自然体で会話ができるので、リオはセリアに呼ばれて話す時間が好きだった。

「よく来てくれたわね。聞いたわよ。術式契約ができないんですって？」

「はい」

リオが部屋に入ってくるなり、セリアが用件を切り出す。

よくあることなのでリオも普通に受け答えた。

どうやら早速リオが術式契約に失敗した話を聞きつけたようである。

「魔力の感知はできているのよね？」

「ええ」

そう言うとセリアは顎に手を当てて考えるそぶりを見せた。

こういった状態になると、ちょっとやそっとのことでは反応しなくなるのはわかっているので、リオも黙る。

「……初歩の術式、たとえば『発火魔法（イグニッション）』とか『生水魔法（クリエイトウォーター）』なんかが契約できなかったのよね？」

「はい、残念ながら」

肩を竦めてセリアの質問に答える。

もともとそういったものがない世界にいたためか、どうしても使いたいというほどではないが、それでも未知の技術を使ってみたい

という気持ちはリオにもあった。
だから、現状には少々不満を覚えている。
「……おかしいわね。術式契約ができないことの原因として考えられるのは……魔力制御ができていないから？　いや、でも初歩の術式なんて魔力感知さえできりゃ契約できるもんだし……」
俯きながらぶつぶつと呟いて自分の世界に入り込んでいるセリア。
「ごめんなさい。確実にこれだと断定できる原因が私にもわからないわ」
やがて考えの整理がついたのか、顔を上げたセリアは悔しそうにそう言った。
「かまいませんよ。まだ術式契約ができないと決まったわけじゃありませんし、まぁできたら儲けものぐらいの考えで気楽にやってみます」
「そっか、まぁ、私にわかることならいくらでも相談に乗ってあげるから何でも聞きなさい」
「ありがとうございます。そうですね、術式契約が成功する時ってどんな感覚なのですか？」
早速リオは質問してみることにした。
術式契約する時の自分の感覚が気になったのだ。
「どんな感覚？　んー、そうね。身体の中に何かが入ってくるようなのと、後ちょっとだけ身体が熱くなるような気がしないでもないかな」

リオの質問にセリアは不思議そうに答えた。

「その術式がどんな内容なのかわかったりはしませんか？」

「術式の内容がわかる？　どういうこと？」

「えっと、なんていうか、その術式がどういう理屈で世界に干渉して事象を起こそうとしているのかってことですかね？」

リオは術式契約しようとした時のことを思い出して可能な限り具体的に噛み砕いて説明してみた。

「なんで疑問形なのよ。まぁ、いいけど、そんなことわかるわけがないじゃない。それがわかったら魔法の研究はもっと進んでいるわよ。っていうかそれを研究するのが私のテーマだし」

（俺は普通じゃないのか？　他人が解らないことが解る……不味くないか？）

セリアの回答にリオは何とも言えぬ感覚を覚え、すぐにその危険性を理解した。

この世界では人間族の多くが信仰する神々がいる。

魔法とはその神々が人間族に与えた神聖なものというのが通説的な理解である。

そんな神聖な技法の内容を、術式契約を実行しようとするだけで理解してしまう。

敬虔な信者、いや下手をすれば一般的な信者達から見ても、異端扱いされかねない。

「そうなんですか。成功する時の感覚がわかれば参考になるとも思ったんですが」

リオはセリアに自分の感覚のことを話さないことにした。
セリアのことが信用できないわけではないが、もう少し調べてみる必要があると思ったからだ。

「参考にならなくてごめんなさいね」
「いえ、曖昧なことを聞いたってわかっていますから。感覚なんて人それぞれでしょうし。こちらこそ変なことを聞いてすみません」
「そうね……。でも、ちょっと面白い着眼点ね。術式契約が成功する時の感覚か。今まで特に考えたこともなかったわ。統計をとってみれば興味深いことがわかるかも……」

リオの言葉を聞いてセリアは何らかのひらめきを得たようだ。
興味深そうな顔をしながら再び自分の世界へと没頭し始めた。

(根っからの研究者なんだな)

そんなセリアの様子をリオは苦笑しながら見ていた。

「あ、ごめんなさい。考えごとをし始めるとすぐ自分の世界に入っちゃって」

と、セリアは少し恥ずかしそうに笑った。

「いえいえ、先生の可愛らしい顔をじっくりと拝見させていただきましたから」
「な、ば、馬鹿！」

セリアは照れた様子で薄っすらと顔を赤くした。
どうもこの手の冗談には弱いようである。

「そ、そんなことより、リオは大丈夫なの？　なんかリオのクラスの生徒がずいぶんと嬉しそうにあんたの悪口を言っていたけど、ひょっとしなくともいじめられたりしてる？」

話を逸らしたい気持ちもあるのだろうが、純粋に心配した様子でセリアは尋ねた。

「ありがとうございます。まぁ特に問題はないですよ」

リオはそんな気遣いを嬉しく思ったが、特に気にした様子もなく答えた。

「リオって本当に歳不相応にドライよね……。本当に大丈夫なの？」

セリアは遠慮がちに再度尋ねた。

「イジメというか。まぁまだ可愛い子供のいたずら程度ですけど。今のところは無視される程度ですね。後は陰口程度じゃないですか」

「それ、立派ないじめだから。はぁ、貴族のいじめは質が悪いからなぁ」

セリアはローブのフードの上からゴシゴシと頭を掻いた。

「私、リオのことは私と同じくらいに頭が良いと思っているのよ。教えたことはすぐに吸収するし、学院での成績も信じられない速度で上昇しているし」

と、突如、真面目な表情でセリアは言った。

「それは買いかぶりかと。……他の人よりも少しだけ多く努力して

いるだけですよ」

セリアがリオのことを賢いと思っているのは自分に前世の記憶があるからだと、リオはそう思った。

「リオが努力しているのは知っているわ。いつも図書館で遅くまで勉強しているものね」

そう言って、微笑ましいと言わんばかりの表情で、セリアはリオを優しく見つめた。

「けどね、努力するのは当たり前なのよ。努力しない天才なんていないわ。努力するからこそ頭が良くなる。頭が良いからこそ努力する。そういうものよ。だからリオは頭が良い。天才と呼ばれたこの私が保証してあげる」

「それは……光栄です。ありがとうございます」

「ええ。どういたしまして。それだけにね。リオが心配なの」

そう言うと、セリアの顔に僅かな影が差した。

「学院の中には貴族が多いからさ。あいつらすぐに他人と比較したがるじゃない？　あんまりリオが優秀すぎると嫉妬を受けるんじゃないかと思ってさ。リオは小利口なタイプだと思うから内側で溜めこんじゃうんじゃないかって……ね」

と、どこか恥ずかしそうに言うセリアに、リオは薄っすらと微笑んだ。

「ありがとうございます。大丈夫ですよ。こう見えてストレスとの向き合い方は心得ていますから。それに神経も図太い方ですし」

「七歳のガキがストレスとの向き合い方を語るんじゃないの……」
呆れたように、だが、微笑みながら、セリアは言った。
「まぁどうしても駄目な時はセリア先生を頼らせてください」
と、悪戯めいた笑みを浮かべてセリアを見る。
そんなリオを見て、ニヤリと笑うと、セリアは口を開いた。
「よろしい。その時は私の胸を貸してしんぜよう」
小さな体で抱きかかえるように、セリアは腕を開いた。
「ま、セリア先生はちっこいから抱き着くには位置的にちょうど良さそうですね」
「なっ！？　ちっこい言うな！　まだ、伸び盛りなの！」
「はは、わかっていますよ。まだ十二歳ですもんね」
「じ、自分よりも子供な奴に子ども扱いされている気がする……」
セリアは妙な敗北感を味わった。
その後も、セリアと笑いあい、この日は楽しく一日を終えた。
そして、翌日、リオが登校すると、リオはいつもとは異なるイジメのやり口に気がついた。
いつもリオが座っている机が、刃物で削ったかのように、乱雑に傷ついているのだ。
そして、机の上には花が添えられていた。
この花はベルトラム王国で死者に供えるものとされており、決して生者に贈るものではない。

どうやらいよいよ有形力の行使に出てきたようである。
きっかけは昨日の魔法の授業だろう。
ここまで低俗だと、怒りよりも呆れの方が強かった。

リオは机と椅子の様子を見ると、周囲を見渡した。
中にはリオと視線を合わせないようにしている生徒もいるが、大半はリオの方を見てニヤニヤと笑っている。
特にクラスの中で高位の家柄の貴族の子弟達はひどかった。
リオに対する侮蔑の感情を隠そうともしていない。
ふと、リオの視線が上流貴族のグループの側にいるクリスティーナとロアナを捉えると、二人とも不機嫌そうにそっぽを向いていた。
やがて講義を行うために講師が教室に入って来ると、いつもリオが座っている前方の席の異変に気づいた。

「お、おい、なんだその机は？」

添えられた花の意味に気づいた講師が戸惑ったように生徒達に尋ねた。

「そこはいつもリオが座っている場所です。リオが犯人では？」

そう言ったのはロアナの取り巻きの一人である。

「そうなのか？」

話を聞いた講師がリオを問いただす。

「いえ。自分が朝来たときには既にその状態になっていました」
「本当か？」

講師は疑うような視線でリオを見つめてきた。
正直どうでもいいが、このまま冤罪をかけられるのは面白くない。
少しばかり意趣返しをしてみようと考え――。

「どうしていつも自分が座る席を自分で壊さないといけないのでしょうか？　しかも王国の法にて公の施設の器物を損壊することは罰金に加え鞭打ちの刑に値する立派な犯罪行為になると記憶しております」

と、淀みのない口調でリオは弁明した。

「とはいえまさか品位ある王立学院の生徒の皆様がそのような低俗な真似をするとは私も思いません。きっとゴブリンでも迷い込んだのでは？　学院まで侵入したとなれば一大事です。都市の警備を強化することを具申します」

さらに付け加えるように、真面目な表情で、リオが語った。

「む、そ、そう……だな……」

そして、このリオの発言に講師の顔が引きつる。
講師としてもリオがやったとは思ってはいないし、犯人にもおよそ見当はついていたのだが、立場上貴族の子弟達の側に立たねばまずいと考えていた。
それゆえリオを疑うような発言をしたのだが、返ってきた回答は予想を遥かに上回るものであった。

ゴブリンという生物はこの世界に存在するもっともポピュラーな魔物と言ってもいい。
それは知能が低く性欲だけは強く繁殖力のある最低の魔物として

知られており、他人をゴブリンに例えて揶揄することは人間性そのものを否定する表現であった。

とはいえリオは明確に誰かを指してゴブリンとは言っていない。学院の生徒が犯人ではないと言ったうえで、あくまでもゴブリンが犯人だという推測しか言っていないのだ。

屁理屈ではあるが、あえてそれを指摘して事を荒立てるのも上手くない。

犯人たちからしてみれば、この上なく気に食わない侮蔑表現だろう。

しかし、表だってリオに反論することは叶わない。

それをすれば自らが犯人だと自白しているようなものだからだ。

即興で考えたにしては実に凝った返しであった。

今の講師は草むらに石を投げたらドラゴンが現れた気持ちであった。

ふと教室を見渡してみると、案の定、一部の上級貴族の子弟達がリオを呪い殺すような視線を送っている。

おそらく彼らが犯人なのだろう。

「……すまんがリオは他の席に移ってくれ。その花は講義が終わった後に私が回収する」

「はい」

講師はこれ以上のトラブルを避けるためにさっさと講義を始めることにした。

リオも言われたとおりに近くに空いていた席に移動する。

その講義の後、一部の生徒達がリオに聞こえるようにリオを中傷した。

リオが術式契約に失敗したことをいいことに、再び表だってリオを馬鹿にする空気ができてきた。
リオに対して不満を抱いていた子供達は一気にその流れに乗った。

対するリオはシカト一択である。
ここにいる生徒達とは卒業するまでの関係だと割り切っているのだ。
今のリオは、そんなことよりも、術式契約が失敗した理由、そして魔法とは何なのかについて考えていた。

リオは魔力を用いて身体能力と肉体を強化することができる。
それなのに術式契約をすることはできない。

今リオが魔法関連で自身について把握していることは少ない。

一つ、魔力が目で視える。
二つ、魔力を使って身体能力と肉体を強化することができる。
三つ、術式契約を行おうとすると、その術式がどのように世界に干渉しようとしているかを理解できる。
四つ、しかし、いざ術式契約を行おうとすると体内で術式の刻印が弾かれる。
五つ、術式の刻まれた魔道具に触れても術式の内容は理解できない。

これらのことから術式契約ができない理由を導き出すにはピースが足りないように思えた。

だが、術式契約ができなくとも魔法は使えるのではないかと、リオは考えていた。

なぜなら、リオは魔法の発動原理である術式を理解しているのだ。
ならば、その原理を真似て魔力を操作してやればよい。
そう考えるのに時間はかからなかった。

術者というハードウェアが術式というソフトウェアを用いて魔法を発動させる。
リオは魔法をそのように捉えている。
そして、そのソフトウェアである術式契約について、リオは言葉で言い表せぬ歪みを感じとっていた。
たしかに、術式を用いれば世界に干渉することはできる。
だが、そのソフトウェアは何か大切なものを決定的に無視している。
そのように思えたのだ。
しかし、理由はわからない。

そもそも自分は規格外な点が多すぎるのだ。
規格外なものに無理やり規格をあてはめる必要はないのかもしれない。
術式契約ができなくとも魔法が使えるというのならば、術式契約ができないことに拘る必要もないだろう。
そう考えればいいのかもしれない。
そうであるならば今必要なのは理論の証明だ。
近いうちに覚えた術式による魔力の流れを再現してみようとリオは考えた。

第9話　成長

リオが王立学院に入学して五年の月日が流れた。
十二歳になったリオは初等科の六年生である。
入学してからまもなくして始まったリオに対するいじめは、今なお継続して行われている。
さらに、学年が上がるにつれて罵詈雑言の悪質さもエスカレートの一途を辿っていた。

いわく、術式契約が一つも成功していない学院史上一の落ちこぼれである。
いわく、不正をしてペーパーテストだけ優秀な成績を修めている。
いわく、女子生徒を脅してふしだらなことをした。
いわく、後輩を脅して金を奪い取った。

これらのうち術式契約が一つも成功していないということ以外は、すべてが事実無根であり、そんな証拠もない。
だが、学院側はその噂を取消す真似もせずに放置している。
その真意をリオが知ることはできないが、どうでもいいことであった。
だから、リオも噂を否定するような真似を一切せずに放置している。
本人にそのつもりが毛頭ないのだ。
その結果、噂だけが一人歩きをして、リオは王立学院史上有数の問題児であると生徒の間では認識されていた。

ところで、初等科も高学年にもなると選択制の講義が増える。
貴族の子弟の多くが教養面の講義を選択する中、リオは自らの知

的欲求を満たす講義を優先的に選択していた。

「じゃ、魔法理論概論を始めるわよ。ご存知の人も多いのだろうけど今年から私がこの講義を持つことになったわ。ぶっちゃけ理論なんて知らなくても魔法は発動するっていうのが学生たちの間の一般的な認識なんでしょうけど、ここにいるってことは、みんなは魔法理論に興味があると思っていいわよね」

リオが選択した講義の一つである魔法理論概要、担当講師はセリアである。

十七歳になった彼女だが、容姿面での成長は中学生レベルで停止していた。

魔法理論概要は小難しい上にあまり実用的ではないとされていることから敬遠されている科目であるが、天才と呼ばれた彼女の講義を受けるために受講者はそれなりにいる。

ちなみに彼女の容姿に惚れて講義を受ける一部の男子生徒がいるのはご愛嬌である。

今教室にいるのはリオを含めて三十人。

その中にはクリスティーナやロアナ、そして一つ年下の学年であるフローラがいたりする。

「今回はそもそも魔法というものがなんなのか、そして魔法がどういったプロセスで発動するのか。それについて学びたいと思います。それじゃあみんなが魔法について抱いているイメージを聞いてもいいかしら？　そうね、クリスティーナ姫どうですか？」

「はい。魔法とは世界の法則に干渉して様々な事象を引き起こす技法です」

と、クリスティーナは淡々と自らの見解を述べた。

「おぉ、最初から非常に良い答えが聞けました。さすがは王女殿下」

セリアの称賛を聞いて、周囲の生徒達も流石だと言わんばかりの表情でクリスティーナに尊敬の眼差しを送った。

「魔法は色んな観点から定義づけされているわ。今クリスティーナ姫が仰っていたものは魔法の本質・効果面に着目した定義ね。魔法とは世界に干渉して様々な事象を引き起こす技法である。かの高名な大魔導師ディーラ様の著作でも書かれていることよ」

セリアの言葉を興味深そうに生徒達は聞いていく。

「さて、他に有名な定義として魔法の発動プロセスに着目した定義が存在するわ。じゃあ魔法の発動プロセスについてみんなが知っていることを話してくれるかしら。そうね、スコット君」

セリアに指されたスコットと呼ばれた生徒が自信に満ちた様子で立ち上がる。

「はい。魔法は術式と契約して呪文を唱えることで発動します」

「んー、それじゃ下準備と発動プロセスがごっちゃになっているわよ。はい、じゃあ、次は、ロアナさん」

自らの発言が正解でなかったことを知ると、スコットと呼ばれた少年は悔しそうに席に着いた。

そして、次に指名されたロアナが席を立つ。

「はい。大きく分けると、契約した術式のイメージ、魔力の放出、呪文の詠唱、この三つによって成り立っていると理解しておりますわ」

と、ロアナは淀みなく答えた。

「さすがロアナさん。魔力の発動プロセスは今言われた通り三つの工程から成り立っている。でもその三つを支える大事なものが一つある。それって何だと思う？」

「それは……わかりませんわ」

わからないことがあることが悔しい。

そういった表情で、ロアナは口元を歪めた。

「そうね、じゃあリオは？」

「魔力制御です」

「正解。流石ね」

クラスの中で小さく舌打ちが響いた。

その主は上級貴族の子弟であった。

ロアナにわからなかったことがリオにわかった。

それが気に食わないようである。

その音を聞いて、内心でため息を吐きながら、セリアは講義を継続することにした。

「案外、着目されていないけど、魔力制御というのは魔法の肝となるものよ。契約した術式を用いてみんなが呪文を唱えると魔法が発動するわよね？　それはみんなが無意識のうちに魔力制御を行っているからなの」

リオを除く教室の全員が初耳だったようで、それぞれが興味深そうな顔をする。

「魔力制御が大事なのは魔法の発動プロセスだけじゃないわ。魔力制御は魔法の習得段階でも必要となるものなの。どうして人によって契約できる術式とできない術式があると思う？　それは魔力制御が大きく関係しているからよ」

教室の中にいる生徒全員が食い入るようにセリアの話を聞いていた。

「先生！」

そんな中で沈黙を破った一人の少年がいて、彼は大きな声を出して手を挙げた。

「はい、スティアード君」

セリアが手を挙げた生徒、スティアードを指名する。

「つまり術式契約ができない者は魔力制御が下手くそであるという理解でよろしいでしょうか？」

スティアードはリオの方を見てニヤニヤと笑っている。
他の大半の生徒も同様である。
リオは涼しい顔をして前を向いて聞き流していた。
その一方でセリアは僅かに顔を顰めている。

「……極端な言い方をするとそうなるわね。でも少し言葉づかいが悪いわよ」
「すいません。気をつけます。ありがとうございました」

セリアに注意されながらも、スティアードは満足した様子で着席

する。

「じゃあ、講義を再開するわね。そもそも……」

その後は、特に問題もなく、セリアの講義は順調に進み、またたく間に講義の終了時間を迎えた。

「さすがはセリア先生！　王立学院史上に名を残す天才と言われるだけのことはありますね。先生の深い識見に僕は感動しました！」

講義が終わると感動したようにスティアードがセリアのもとへ歩み寄った。

スティアードはリオの一つ下の学年の生徒で、とある公爵家の子息である。

「あはは。どうもありがとう」

セリアが苦笑いしながら礼を述べる。

その合間に、リオはさっさと自分の教材を整理して、教室から立ち去ろうとしていた。

「あ、リオ」

それを見かけたセリアがリオに声かける。

「おい、下民。魔法も碌に使えないくせに、口先と小手先の器用さだけが売りの卑しい愚図の貴様がどうしてこの講義をとっている？

貴様のような卑劣漢がこの教室にいるとなるとこの場にいる婦女子の方々に危険が及びかねないだろうが」

が、そこにスティアードが割って入るように声を出した。
セリアとリオの間に立ちはだかるように、スティアードがリオの前へ歩み出る。
「何方かは存じませんが、それはこの講義を選択したからですが」
リオは、この手のトラブルは日常茶飯事なので、いつものように淡々と対応することにした。
「ふん、まぁ貴様のような下賤な平民に顔を覚えられていても怖気が走る。何やら勘違いしているようなので忠告してやる」
「何をでしょう？」
「はっ。聞けば小賢しい悪知恵も働くそうだな？　その卑しい手腕でこうして名誉ある王立学院への入学が認められたそうだが、勘違いするなよ？　下民はあくまでも下民、愚図があまりでしゃばるな。不愉快だ」
先ほどの講義で舌打ちをした生徒の中にはこの少年も含まれているのだろうと、リオは当たりをつけた。
「左様でございますか。では、今後はこの講義で極力目立たないようにしましょう」
「ん？　は、はは、何を言っている？　今後この講義に出てくるなと言っているんだぞ、僕は」
しん、と教室の中が静まり返る。
周囲の生徒達は冷めた目つきでリオを見ていた。
その中で、クリスティーナは我関せずといった様子で、フローラはそわそわとした様子で、ロアナは不機嫌そうな様子で、リオ達の会話を聞いていた。

「貴様に騙されて被害にあった女子生徒もいると聞いている。このまま貴様の存在を見過ごすことはできんな」

地位、血統、名誉、収入。

いずれも貴族の少女達が将来的に追い求めることになる結婚条件だ。

貴族の少女達は、より優れた相手と結婚することを、産まれた時から義務付けられているからだ。

だが、十二歳前後といえばちょうど異性へ興味を持ち始める年齢である。

この年頃だと、そういった即物的な条件よりも、単純に容姿の優れた異性に興味を持つ子が多いのが事実だろう。

貴族の少女たちもその例に漏れることはなかった。

いまだ少年っぽいあどけなさを残すリオであるが、生来の中性的な容姿は年々磨きがかかってきている。

加えて、この国では珍しい黒髪がエキゾチックな雰囲気を醸し出していた。

そのせいか火遊び感覚でリオにちょっかいを出す貴族の令嬢がしばしば登場した。

リオはその都度そういった令嬢達をすべて袖にしてきた。

それを気に食わない生徒達がリオに関して根も葉もない噂を流しているのだ。

リオを弾劾しているスティアードは根拠なくそうした噂を信じ込んでいる口である。

リオが女性の敵だと信じて疑っていない。

まぁ仮に噂がなくともリオのことを気に食わないのではあろうが。

「こら。スティアード君、貴族たる貴方が確たる証拠もなしに人を弾劾するんじゃありません」

その様子を見かねたセリアが仲裁に入る。

「ですが……」

セリアの登場にもなお食い下がるスティアード。

「仮にリオがそういう男の子でも、講師である私の目が黒いうちはこの教室でそんなことはさせません」

と、きっぱり言い切った。

この言葉でスティアードが渋々引き下がる。

「……貴方がそう仰せになるのでしたら。……覚えておけ、下民。貴様が何かしたら僕の実家であるユグノー公爵家を敵に回すと思え」

「覚えておきましょう」

そう言うとセリアに一礼してリオはその場から立ち去った。

去り際に放課後に研究室に来るように合図をして、リオが苦笑したのは、セリアしか知らない。

放課後、リオはセリアの研究室にやって来ていた。

「ったく、相変わらずの嫌われようね」

「もう慣れましたけどね」

苦笑しながら紅茶を口にする。

といってもその紅茶を淹れたのはリオなのだが。
セリア曰くリオが淹れた方が美味しいらしく、こうしてセリアの研究室で会談するときはリオが紅茶を淹れている。

「私も周囲から嫉妬されてちょっといじめられたことはあったけど、リオのはそれ以上ね。まぁ何だかんだ言われつつも陰であんたを慕っている女子生徒もいるみたいだけど？」

ちらり、とリオの反応を窺いながら、セリアは言う。

「興味ないですから」

その朴念仁ぶりにセリアはため息を吐く。

「逆玉の輿のチャンスよ？」
「それはないでしょう。仮に俺がそういった付き合いをしたとしても実家が許すわけがありません」

あくまでもリオは冷静な判断をする。
その様子から本当に興味がないのだなと、セリアは思った。

「まぁ、ねぇ……」

曖昧に頷きながら、どうしてリオがここまで朴念仁なのだろうかと、セリアは不思議に思っていた。
異性に対する興味というのは、リオくらいの年齢だと、そう簡単に断ち切れるものではないはずだ。
なのにこの男はそれをことごとくぶった切っていく。

（もしかして本命がいる……？）

一つの可能性にセリアが行き当たる。
だが、そのような人物に心当たりはない。
そもそも学院の中でリオは友達すらいないのだ。

（唯一の話し相手が私だしね）

そう、リオはセリア以外にまともに話す相手はいないのだ。
それはセリア自身もそうなのだが、その話は棚に上げた。
リオは、学院の講義、食事、睡眠時間以外は、図書館にいるか、外で自主練習をしているか、そのどちらかしかしていない。
いつ見かけても一人なのだ。
女の影など自分以外にない。
それを見てその都度セリアから声をかけているうちに、リオと仲良くなったのはセリアにとって良い思い出である。
だから、リオに本命がいるとは思えなかった。
セリアはその可能性を除外してしまった。

（もしくは人の好意に鈍感とか。これは十分にあり得るわね。というよりもそうとしか思えないわ）

セリアが目の前へ視線を移すと、リオが貴族のように優雅な仕草で紅茶を飲んでいた。
正直、憎たらしいくらいに様になっている。

（これが見られるのも残り僅かなのよねぇ。卒業したらどうするのかしら？　こいつ自分のことを一切話さないからなぁ。ったく、少しは話しなさいよね。こっちは気になってんのにさ）

リオの将来が気になって、セリアは思い切って本人にその話題を

振ってみることにした。

「それにしてもリオもあと一年で卒業か。卒業後はどうするのか決まっているの？」

「そうですね。今のところしばらくはこの国にいるつもりですが、そう遠くない将来に旅に出ようかと思っています」

「えっ！？　この国からいなくなるの？」

リオの言葉にセリアが驚愕する。

まさか国を出るとは思っていなかったのだ。

武術の成績は優秀なため、てっきり騎士や兵士にでもなるのかと考えていた。

「まぁ、この国は俺には居づらいですからね」

「……ねぇ、私の研究室で働かない？　リオがいないと私もう生きていけないんだけど」

と、研究室の中を見渡しながら、セリアが言う。

リオと出会ってもう五年間が経った。

当初、セリアの研究室の散らかりようはリオの目に余るものであった。

だが、何度か呼び出しを受けてこの研究室に来るうちに、リオは自発的に片づけをすることを申し入れた。

その結果、セリアは、目を丸くするほどにリオの家事スキルが高いことを知る。

今では部屋の整理だけでなく、前述の通りお茶入れから研究の一部までも手伝ってもらっていたりする。

「セリア先生も貴族としていい歳なんですから結婚の話もあるでし

ょう？　それなのに得体の知れない平民の男が研究室にいるのはよくないですよ」

結婚という単語を聞いてセリアがげんなりする。

「私、当分結婚する気はないのよ。実家はうるさいけど研究を盾に縁談は全部断っているし」

「結婚の時期はセリア先生の自由だと思いますけど、いいんですか……その……結婚適齢期のうちに」

リオ自身はそう思ってはいないが、貴族の結婚適齢期が十代中盤から後半にかけてであることは周知の事実であった。

となると、今のセリアは既に結婚適齢期に突入している。

とはいえ、セリアのように目覚ましい功績を持つ女性や非常に高貴な身分の女性であるのなら、二十歳を超えても結婚相手を探すのはさほど難しくもなかったりする。

「あー！　行き後れになるって思っているでしょ！　ったく、何なのかしら女は二十歳を超えたら行き後れになるっていうこの国の男達の発想は……」

だが、セリアは自分の結婚適齢期の話題についてかなり気にしていたようだ。

「まぁ、俺個人は貴族の女性の結婚適齢期は早すぎると思いますけどね。セリア先生は永遠の十七歳ですよ」

「永遠の十七歳……。なによ、それ、良い響きじゃない」

ブツブツと呟くセリアの様子を微笑ましく思いながら、リオは空になったティーポッドを見て新しく紅茶を淹れる準備に取り掛かる。

セリアの好みは心得ているのだ。

紅茶に煩いセリアと長年付き合ってきたことから、紅茶に関して言えば執事クラスの働きができるとリオは自負している。

どこの貴族の令嬢にも満足してもらえることだろう。

「そういえばもうすぐ野外演習の季節よね。男子は強制参加だっけ？　あれってどれくらい歩くの？」

いつの間にか自分の世界から現実に戻ってきたセリアがリオに声をかけてきた。

「全部で二十キロの行程だそうです」

「うへぇ。私、無理。そんなに歩けない。ここから校舎に行くのだってめんどくさいのに」

想像しただけでぐったりしたと言わんばかりに、セリアが机に突っ伏した。

長く美しい白い髪が机を覆うように広がった。

「セリア先生も少しは運動した方がいいと思いますよ」

と、呆れながらもセリアを心配するように、リオが言った。

いかんせんセリアは講義以外では研究室から碌に外に出ないのだ。

いくら上級貴族の令嬢といえどこの運動量の少なさは人間として問題があるのではなかろうか。

「はい、はい。移動には馬車があるからいいのよ。そういうのは」

典型的な引きこもり発言に苦笑すると、リオは出来上がったセリ

アの好みの紅茶を差し出すのだった。

第１０話　演習（前編）

ベルトラム王国王立学院では、初等科の最終学年度の生徒を主な対象として、クラス対抗の野外演習を恒例行事として行っている。

野外演習といっても参加者は貴族の子弟が中心である。

スタート地点からゴール地点までルートはお膳立てされており、生徒達は決まった通りに動いていれば基本的に演習をこなすことができる上に、特段ペナルティはない。

しかも、男子生徒は演習の参加が必須となるが、女子生徒の参加は任意である。

なお、参加するのは初等科の六年生であるが、それを補助するのと次年度の予行演習を兼ねて五年生も参加することができる。

「さて、これから今回の総合演習の対策会議を行う。やるからには栄えある一位通過を目指したいと思う」

リオのクラスのリーダーとなったのはロダン侯爵家の次男坊であるアルフォンスだ。

彼は近衛騎士への入団を目指して中等科への進学が決まっている。

とはいえ、家格や成績の面においてはクリスティーナやロアナといった面々の方が圧倒的に優れている。

だが、伝統的にクラスリーダーは男子生徒が務めるという慣習が存在していることから、彼がリーダーとなった。

少し気障なところもあるが、その態度に見合う容姿を持つ美男子だ。

「我がクラスには王族であるクリスティーナ王女殿下と魔道大家フォンティーヌ公爵家のロアナ様がいるのだ。二人とも天才魔道士と

名高い。しかも五年生からは神の癒し手と名高いフローラ様も応援に来てくださる。長い歴史を誇る学院においてもこれほどメンバーに恵まれた演習はなかったはずだ」

クラスの大半のメンバーがアルフォンスの説明を真剣に聞いている。

「道中ではゴブリンといった下級の魔物に遭遇する可能性があるが、我々が力を合わせれば奴らがいくら現れようとも物の数ではない。私の指揮に従っていれば大丈夫だ」

お膳立てされている演習ではあるが、危険が全くないわけではない。

進行中には魔物が生息する森の近くを通ることになるのだ。

下級の魔物であれば、魔法が使える生徒達が後れをとることはそうそうありえないが、ピクニック感覚で行うべき演習ではないことは確かだ。

この野外演習は、ゴブリンといった人型の魔物を殺させることで、殺人への耐性をつけさせることも狙いの一つとしているのである。

「なお、演習にあたっては必要な荷物を厳選する必要がある。黒板に必要な物と不必要な物を詳細に記載しておいた。各自よくチェックしておくように！」

クラスのメンバーはそれぞれ黒板に書かれたことを羊皮紙の上にメモしていく。

その様子を満足そうに眺めると、アルフォンスはリオを睨みつけた。

「おい、下民……。リオ、貴様だ！　よく聞け。王女殿下に恥をか

かせるわけにはいかない。絶対に一位でゴールしなければならない」
と、きつく言い聞かせるように、アルフォンスは言った。
「魔法も使えない貴様が足を引っ張ることは目に見えているが、まぁ安心しろ。貴様は私の指示に従っていればいい。荷物持ちとして貢献してもらうからそのつもりでいろ」
「承知した。君の指示に従おう」
散々な言いようであるが、卒業まであと少しの辛抱なのだ。
特に言い返すわけでもなく、リオは相手の要求を受け入れた。
そして、演習当日がやって来る。
出発地点では二百人以上の生徒が集まっていた。
一クラスの部隊人数は七十人程度である。
それぞれ武装したうえで、訓練用制服と革製の軽鎧を身に着けており、訓練用制服の色はクラスごとに決まっていて、リオ達のクラスの色は白だった。
なお、行軍にあたっては個人持ちの荷物の他にクラス単位の荷物もある。
その運搬にはリオが指定されていた。
完全に雑用扱いである。
「あ、あの、大丈夫ですか？　そんなに荷物を持ったら重いのでは……」
クラス中が三十キロ近くある荷物をリオに運ばせることを当然の了解としている中、唯一リオのことを案じて声をかける人物がいた。
フローラである。

リオがフローラと喋るのは誘拐現場で話した時以来である。
学院に入ってからもフローラと話したことは一度もない。
思わぬ人物から声をかけられて流石にリオも驚く。

「その、私も少し持ちましょうか？」

リオが反応に困っていると、フローラが手伝いを申し出てきた。

「いえ、大丈夫ですよ。ご心配いただきありがとうございます」

ここでフローラの申し出を受けるという選択肢はない。
そんなことをすれば部隊中から非難されてしまう。
彼女は特権階級とは思えない程に優しい性格をしているのだろう。
その心遣いは嬉しい。
だが、自分の行動により周囲にどのような影響をもたらすかについては少々疎いようだ。
それゆえリオは感謝の言葉だけを告げて断ることにした。

「フローラ様、そんな下賤な男とお話になられてはなりません。雑用などその下民に任せればよいのです」

そこにアルフォンスがスティアードを引き連れてやって来ると、二人はリオとフローラの間に入って距離をとらせた。

「ほぉ、野蛮人だけあって馬鹿力だな」

と、リオが個人の荷物の他に三十キロもある行軍装備を担いでいるのを見て、スティアードが嫌味たらしく言った。
嫌味を言われることは慣れているので、リオは適当に受け流し出発を待つ。

それからすぐに部隊は行軍を開始した。
出発地点から一時間ほど歩くと、最初のチェックポイントである森へとたどり着く。

「諸君、朗報がある。五年生のユグノー公爵家のスティアード君の協力を得て近道を発見した。場所はもう少し進んだところにある」

チェックポイントを通過して森を迂回するように歩き出したところで、アルフォンスは近道が存在することを打ち明けた。
ざわりとメンバーが騒ぐ。

「静粛に。このルートを使えば一位通過は間違いない。地図上ではこの森を迂回するように目的地へと進むことになるが、近道はこの森の中を突っ切っていくことになる」

その言葉を聞き、リオは現在地を確認するために地図を見た。
演習で使用される森は事前に騎士団が入念に調査を行っている。
それゆえ、既定のルートを通っている限りは、そう大した危険が生じることない。

「反対ですわ。規定外のルートを進んで万が一の事態が生じた時にクリスティーナ王女殿下とフローラ王女殿下に対する責任をとることができませんもの」

アルフォンスの提案にロアナが反対意見を述べる。

「クリスティーナ王女殿下はどう思われますか？」

ロアナの意見を無視することはできないのか、アルフォンスがク

リスティーナの意見を窺う。

「私もそう上手いルートがあるとは思えないわね。危険は回避するべきだと思うわ。まぁこのクラスの指揮官は貴方だから私が決定することじゃないけどね。けど、王族である私とフローラに万が一のことがあったら擁護しきれないわよ」

と、どこか突き放したようにクリスティーナは言う。

その言葉にアルフォンスは万が一の時のリスクを想像したのか、怖気づいてしまったようである。

「アルフォンス先輩と私の調査は完璧です。あまり目立たないのですが、ちゃんと森の中に通じる道があります。かつてそこに街道があったようです。そこを通って行けば何も心配することはありませんよ」

と、顔色の悪いアルフォンスの横に控えていたスティアードが、自信に満ちた表情で言った。

「アルフォンス先輩。ここで王女殿下に恩を売れれば私達の覚えも良くなるはずですよ」

アルフォンスだけに聞こえるように小声でスティアードが呟いた。

それに自信をつけたのか、アルフォンスの顔に覇気が戻る。

「ええ、歴代最速の記録を樹立することをお約束しましょう。それをもってクリスティーナ王女殿下への卒業祝いとさせていただきます。なぁ、みんな！？」

するとクラスと五年生の補助メンバーで構成された部隊の面々も

同調した。

周辺の地図を見ながら、リオはアルフォンスの言った地図上に乗っていない近道について考える。

たしかに、正規ルートを進むと、遠回りしているようにしか思えないように森の外を迂回することになる。

森の中を進めば半分近く単純な直線距離を短縮することができるだろう。

だが、スティアードはその近道をかつての街道だと言った。

森を切り開いて街道を設置することは別に珍しいことではない。

国土の大部分を森が覆っているこの国では、森の中であっても移動ルートに組み込まざるを得ないからだ。

しかし、中には今では使われなくなった古い旧道もある。

一度設置された街道をわざわざ放棄する理由には、利便性、交通量、地形条件の変化とさまざまな要因がある。

しかも、人の手が一切入っていない森の中だと、魔物や獰猛な生物が生息する危険性がかなり増大する。

たしかに、リオを除くこの人数のすべてが魔法を使えることを前提にすると、下級の魔物が群れを成して襲ってきたところで大した脅威にはならない。

中級の魔物だって倒せるかもしれない。

だが、それはこの部隊が十全のパフォーマンスを発揮した場合に限られる。

碌な行軍訓練も行っていない即席の部隊では、その能力全てを十分に機能させることはまず無理だろう。

それなのに彼らは根拠のない自信を持っている。

貴族である自分達にできないことはない、と。

ベルトラム王国の貴族全体に言えることだが、彼らはその選民思想ゆえ、自らの力を過信しすぎるきらいがある。そのせいで少々思慮が浅くなる傾向があった。

アルフォンスも例外に漏れずそのタイプであり、王族に対する忠誠心の高さは目を見張るものがあるが、典型的な武人タイプの貴族で、柔軟性がなく命令されたことだけを忠実にこなすことから、指揮官よりも一兵卒として用いた方が資質の面で適していた。

それがリオのアルフォンスに対する評価だ。

指揮官の器ではないのだ。

現に簡単に目上の者の意見に踊らされてしまっている。

だが、クラスの総意で選ばれた以上、リオが口出しをすることはできない。

勘弁してくれとしか思えなかった。

「クリスティーナ王女殿下やロアナ嬢の御心配もお察しします。ですが実際にその道を確認すればお二人の不安も晴れることでしょう。こちらです」

スティアードがアルフォンスとともに率先して歩き出した。

件の道は森を沿って歩いていればすぐに見つけることができた。

たしかにその道は数人が歩いて通れるくらいに幅が広いが、草木が生い茂っており中は薄暗い。

確実に近道ができるとわかっていなければとても中に入ろうとは思えない。

それほどに寂れた道だった。

「……どうです？　一時期この森を開発しようとして国が切り開いたようです。今ではその計画は途切れたようですが、冒険者達は今でもよくこの道を使って森に入っているそうです」

少し言葉の歯切れが悪い。
アルフォンスとスティアードも、この道の様子を実際に見て、少しだけ自信を無くしたようだ。
しかし、今更引き下がることはできないのか、意見を変えることはない。
あの様子ではどうせ伝聞の情報だけを頼りにして碌な調査もしてなかったのだろうと、リオは見当をつけた。
自信を持って大丈夫だと言った手前、面子にこだわって発言を撤回することもできない。

貴族とは本当に難儀なものである。
面子にこだわって失態を見せる方がよっぽど恥になるのというのに、面子を重視するのだ。
もはや性分なのだろう。
内心でため息を吐きながら、リオは貴族の見栄からくる彼らの行動を呆れた眼で見ていた。

どうやらクリスティーナやロアナも似たような目でアルフォンスとスティアードを見ているようだ。
珍しく意見が合うなと思った。

先が思いやられるが、トラブルが起きないことを祈り、リオは自らに渡された荷物を背負い直した。
心なしか荷物も重くなった気がする。

結局、一行は森の中へと入っていくことになった。
森の奥へと突き進んでいくと、道中、稀に現れる下級の魔物を男子生徒達が競って切り殺していく。

「これで僕も殺しの処女を捨てられたよ」
「おめでとう」

生まれて初めての生命の略奪に、男子生徒達は舞い上がっていた。
そんな様子をリオは呑気だと思った。

リオはまだこの世界で明確な殺意をもって人や動物を殺そうと思ったことはない。
だが、クリスティーナとフローラを助ける時に命のやり取りをした経験はある。
あの時は、リオが前世で武術を習得していたことから身体を動かすことはできたが、それでも十全に動けたとはいいがたかった。
緊張が動きの細部に表れてしまったのだ。
戦闘が終了した後は、碌に動いてもいないのに、息切れも止まらなかった。
命のやり取りをするという実戦経験を踏まなければ、いざ戦場に立っても従来のパフォーマンスを発揮することはできないだろう。
圧倒的多数で弱い魔物をいたぶり殺したところで、そういった実戦経験を得られるとは思えなかった。
彼らがやっていることは一方的な略奪なのだから、実際に命のやり取りをしていない以上、あのまま戦場に立っても足が震えて碌に使いものにならないだろう。

彼らが貴族である限り、戦争の際には軍を率いて前線に立つ可能性は高い。
常に自分達が奪う側にいると思って生きてきた、その勘違いのツケを払わされる日が、いつか来るだろう。
その時に彼らが生きようが死のうがリオにとってはもはや関係のないことであった。

考えごとをして大量の荷物を背負いながら歩いているが、周囲に対する警戒は怠っていない。
先ほどから散発的にゴブリンがやって来ていることをリオは気づいていた。
そして、進めども、進めども、森の出口が見えてこない。
元気が有り余っていた生徒達も徐々に険しくなっていく道のりに疲れを見せてきていた。
話し声はまばらでおしゃべりをする気力はもはや残っていない。
傍から見ると、一番辛いのは人一倍重い荷物を黙々と運んでいるリオであるのは、一目瞭然である。
だが、こっそりと身体能力と肉体の強化を施しているため、一番平然としているのもリオであった。

「我々は本当に一位で目的地にたどり着けるのか？」

いくら進んでも出口が見えないことに、生徒の一人が遂に疑問を口にした。

「このままじゃ最下位だぜ？」
「今からでも正規ルートに戻った方が良くないか？」

それをきっかけに各所から好き勝手な意見が飛び交う。
それぞれ自分勝手に騒ぎ出し、それが魔物をさらにひきつけていた。

「またゴブリンか」
「なんかさっきからゴブリンが多くないか？」

ゴブリンは数が多く下級魔物の代表格のような存在である。
繁殖力が高く、一匹見つけたら三十匹はいるものと思えと言われ

ているくらいである。
自らの失点を補おうと、アルフォンスとスティアードは、特に張り切って、ゴブリン達を切り殺していく。

「せ、静粛に！　あ、安心してくれ！　大丈夫だから！　ちゃんと予定通りなんだ。なぁ、スティアード君？」
「え、ええ。私達の計画に狂いはありません。この部隊の指揮官はアルフォンス先輩です。我々は黙ってそれに従えばいい。それに現れる魔物はしょせんゴブリンばかりです。魔法が使える我々の敵ではないですよ。それにゴブリンの魔石でもまぁ良い小遣い稼ぎくらいにはなるじゃないですか」

ゴブリンを切り殺したところで騒がしいクラスの様子に気づき、アルフォンスとスティアードが苦し紛れの言い訳を饒舌に語り、少しでも士気を高めようとした。
その言葉を聞いて一応は生徒達も黙った。
アルフォンスの実家もなかなかのものだが、スティアードの実家であるユグノー公爵家の影響力はそれよりもずっと絶大なのだ。
そんな彼に表だって逆らうような者はこの場にはいなかった。
だが、部隊内の雰囲気はどこか悪い。

少しずつ増えていくゴブリンの数に特に気にした様子もなく、彼らは進んでいく。
しかし、遂にそれ以上先に進むことが叶わなくなる時がやって来た。

ある程度進むと忽然と木々が途切れた。
目の前に唐突に開けた空間が広がる。
しかし、それは彼らが待ち望んだ森の出口ではなかった。

「おい……、出口なんてないじゃないか」
「あ、あるだろう？　ほら、あそこに目的地点が見える！」
「ふざけるなよ？　どうやってここから進むというんだ！？」

今、部隊は崖っぷちに立っていた。
ここら一帯が小高い丘のようになっており、高さは三十メートルもある。
何の準備もなく、下に降りるのは自殺行為に近い。

これが街道の設置を断念した理由であった。
ある程度森を切り開いて初めて崖の存在に気づいたのだ。

適切な技量と勇気があればこの崖を降りることはできるだろう。
だが、ここにいる人員の大半にそのいずれもが欠けていた。
仮に一人、二人いたところで全員で進まなければ意味もないのだ。

一度爆発しかけた不満はここで完全に爆発することになる。
有力な上級貴族の子弟であるスティアードに直接矛先を向ける者はいないが、アルフォンスを罵倒する者は多かった。

「ねぇ」

収拾がつかなくなり出したところで、今まで沈黙していた生徒が遂に声を出した。
その声の主はクリスティーナである。
静かだが良く通る声、貴族の生徒達でも流石に王族から声をかけられて無視することはできない。

「この部隊の指揮官は貴方だから反対意見はあえて今まで言わなかったけど、この事態をどのように考えているの？　仮にも指揮官な

ら相応の指揮をしてほしいわね。貴方の指揮で部隊が崩壊しかけているじゃない」
「そ、それは……」
「このままいくと、正直、何も起こらなくても、私じゃカバーしきれないわよ。厳重注意は確定でしょうね」

冷たい視線で睨みつけられ、何か喋ろうとしても言葉が出てこないといった感じで、アルフォンスは言葉に詰まった。

「それとスティアードとか言ったかしら？　貴方、補助要員として参加しているにすぎない割には随分とでしゃばっているわね。どういうことかしら？」

クリスティーナが視線の矛先を変え、スティアードにもその行動を責問する。

「ぼ、僕は……」

その迫力に、スティアードの顔が真っ青となる。

「軍隊において指揮官の言葉は絶対よね。今の私達は訓練だけど軍隊と同じことをしているの。指揮官である貴方が進めと言うならば進むしかない」

スティアードに興味を失ったかのように視線を外し、クリスティーナは再びアルフォンスへと視線を戻した。

「貴族としての面子が大事なのは私にも理解できるわ。でも、貴方の命令一つで万が一の事態が生じかねないということを、いずれ人の上に立つ貴方にはよくわかってほしいわね、指揮官殿」

部隊内に静寂が流れる。
同時に、どこか居たたまれない感情の込められた視線がアルフォンスへと集中した。

「みんな……」

アルフォンスが居たたまれない様子で何かを口にしようとしたその時、森の中から飛んできた勢いのある数本の木の槍が数名の生徒に突き刺さった。

「え……？」

身体に木の槍が突き刺さった生徒達が、何が起こったのかを理解できないように、戸惑いの声を漏らす。

「あ、あれを見ろ！　ゴブリンの群れだぁ！」

異変に気付いた生徒が大声を出して森の中を指差す。
森の中は薄暗いが、葉の隙間から覗ける木漏れ日のおかげか見通しはそれなりに良く、ある程度先まで見通すことはできる。
だから、生徒達はそれを見るができた。
森の中を埋め尽くすように、ゴブリンとオーガ達がリオ達の部隊を包囲している光景を。

「お、おい……、あれ、全部ゴブリンか……」
「オ、オーガもいるぞ！」

ゴブリンはせいぜい人間の子供程度の身長しかなく、腕力も人間の大人には負けてしまう弱い魔物だ。

群れれば厄介であるが、大人が武装さえすれば、素人でもそうそう後れを取る相手ではない。
だが、オーガはゴブリンとは比べ物にならないくらいに凶暴な魔物だ。
体長は二メートルを超え、その腕力は人間の大人を遥かに凌ぎ、ゴブリンと群れれば彼らを指揮する統率力を発する。
今、生徒達の目の前にいる魔物たちはゴブリンとオーガの群れであった。
自分達が奇襲を受けたという事実――、生徒達がその現実を受け入れる前に、さらに数本の木の槍が飛んでくる。
槍を投げたのは群れの中にいる少数のオーガ達だ。

「オーガがいるわ！　槍を投げているのはそいつらよ！」
「はい！　幸いオークはいないようです！　アルフォンス、早く指示を！　くっ」

クリスティーナとロアナが部隊に情報を伝達していく。

「うわぁぁぁぁ」

しかし、ここで槍の刺さった生徒が何名か発狂して暴れ出した。
その中にはスティアードもいた。
当たり所が悪ければ即死しかねない速度で木の槍が飛び交っているが、幸い致命傷を負った者は今のところ一人もいない。
だが、この場にいるほとんどの生徒が、今まで他人から害意を持って傷をつけられたことのない者達ばかりである。
そんな彼らが槍の突き刺さった状態でパニックを引き起こさないわけがなかった。

「抜いて、抜いてくれぇぇ！」

スティアードが恥も外聞もなく大声でわめき散らす。

「うわぁ！　やめろ！」

「お、おい、来るな！」

槍を抜いてもらおうと他の生徒達に詰め寄るが、部隊を恐慌状態に陥れるだけである。

「父上、母上ぇぇぇ！」

肩に槍が刺さって暴れまわるスティアードを生徒達が突き飛ばすと、そのまま勢いよくフローラに衝突してしまった。

玉突きのようにフローラが弾き飛ばされる。

「きゃあ！」

フローラが崖のふちに倒れ込んでしまった。

「フローラ！」

あと少しで崖に落ちそうになったフローラを見て、クリスティーナが大声を出した。

脆くなっていた崖先の土がガラガラと崩れ落ちる。

それに引きずり込まれて、フローラの身体を支えていた地面も崩れ落ちようとしていた。

「ひっ！？」

落下していく浮遊感に、フローラが恐怖で怯えた表情を見せる。

「っ！」

それを見て、リオの身体がとっさに反応する。
気がつけば荷物を振りほどき、瞬時に強化した身体能力と肉体で弾丸のように走り出していた。

その頃、フローラはふわりとした浮遊感を感じとり、心臓が宙に浮いたような不安に襲われていた。
既にフローラの身体は崖に隠れて半分以上見えなくなっている。
フローラが何かを掴もうと手を伸ばした。

その時、虚空を掴みかけたその手を、リオがしっかりと掴みとる。
あと一秒、リオが走り出すのが遅かったら間に合わなかっただろう。
リオとフローラの視線が重なる。
リオが読み取ったフローラの表情は驚愕だった。

後先を考えぬまま咄嗟に飛び出した、そんな数秒前の自分をリオは悔いていた。
目立って行動しても碌なことにならない。
五年前に経験したはずのことだった。
それなのに何故か同じ失敗を繰り返そうとしている。
自分はまたくだらない偽善に駆られてしまったのだろうか。
それとも何も考えていなかったのか。
何も考えていなかったとしたら、どうして身体が動いたのだろうかと、不思議に思った。

だが、身体が動いてしまった以上、今はできることをするだけだ。
掴みとったフローラの手を引っ張り、身体を引き寄せると、リオ

はコマのように身体を回転させた。
そして、その遠心力と強化された腕力で、フローラを崖の上へと投げ返す。

「きゃあ！」

ドサリ、とフローラが崖の向こうに降り落ちた。
あの位置なら大丈夫だなと、リオがぼんやりと思う。
多少のかすり傷は負ったかもしれないが、そこらへんも勘弁してほしい。
フローラを救ったことの代償、それが今まさにリオに襲い掛かっていた。
そう、リオの身体が崖の下へと落下することになった。

第１１話　演習（後編）

リオが崖の下に落ちていく光景を見ていた部隊の面々が唖然とする。

「っ、今はあいつらを殲滅することが先ですわ！　アルフォンス！　いい加減に正気に戻りなさい！　魔法が使える我々が力を合わせればゴブリンとオーガの群れ程度倒せます！　早く！」

いち早く正気に戻ったロアナが部隊指揮官であるアルフォンスに活を入れた。

「ま、守れ！　男子前衛はクリスティーナ様とフローラ様の壁となれ！　後衛組は攻撃魔法で弾幕を張る。隊列を組め！　使用する魔法は火属性以外だ。出来る限り氷属性にしろ。次に風属性か水属性だ。僕の合図とともに魔法を撃て！　『治癒魔法（ヒール）』が使える者は負傷者の治療を頼む！」

ロアナの言葉により目を覚ましたのか、生徒達のパニックを鎮めるように、アルフォンスはようやく少しはまともな指示を出した。

「撃てぇ！」

タイミングを見計らってアルフォンスが攻撃の指示を出す。

すると、部隊にめがけて進軍してくるゴブリンの群れに、数十の攻撃魔法が一斉に襲い掛かった。

放たれた魔法は、木々にぶつかりながらも激しい音をたて、前衛のゴブリンたちに直撃して土埃を舞い上げる。

「やった！」
「はっ、所詮は畜生だぜ！」
「人間様の生み出した魔法の前にかかればゴブリンなんて雑魚だな」
その光景を見て生徒達が自分達の勝利を確信したように喜びの声を上げる。

「ぐぎゃっ」

だが、その時、部隊の中から鈍い声が聞こえてきた。
煙の中からオーガの投げた無数の木の槍が飛んできたのだ。

「ぞ、ぞんな……」

煙の中から投げられたためか狙いは甘かったものの、飛んできた槍により一名の犠牲者が出た。
合計で既に十名近い生徒が槍によって負傷している。
本来ならば死者が出ていてもおかしくはない。
だが、『治癒魔法（ヒール）』を使える魔導師が複数人いるのと、即死に至るような攻撃を受けている者がいないため、いまだに死者は出ていない。

「慌てるな！　回復系の魔法が使える者は引き続き負傷者の治癒を頼む。所詮は単発だ！　もう一度いくぞ。撃て！」

指揮官が正確に機能している生徒達は強かった。
この場にいる生徒はほぼ全員が何かしらの魔法を使えるのだ。
そして、魔法が使えることは人間の中では絶対的な強者であることを意味する。

十秒前後で幾度も、数十にも及ぶ攻撃魔法の雨が、ゴブリン達に降り注ぐ。
魔法の雨を避けて近づいてくるゴブリン達は、魔法で身体能力を強化した前衛達により、斬り伏せられている。
ゴブリンとオーガの群れ程度では相手になるはずがなかった。

数分後、生徒達は遠距離から魔法を一方的に撃ち続けることで魔物の群れを壊滅させた。

「負傷は九名。幸い死者はいませんわ。重傷者もクリスティーナ様やフローラ様のおかげで無事に治癒されました。ですが、行方不明者が一名おります」

負傷した生徒達の様子を確認したロアナが渋い顔をしてアルフォンスに報告する。
行方不明者が出た事実を知らない者はおらず、部隊内に気まずい空気が流れた。

「と、とりあえずは報告を！　あの時の一部始終をすべて目撃していた生徒はいるか？　そもそもフローラ様はどうして転んでしまったのでしょうか？」

部隊の指揮官であるアルフォンスが、焦ったように言った。
今の彼はこの不祥事の責任をどう切り抜けるかで頭がいっぱいであった。
アルフォンスがフローラへ視線を送る。

「あ、あの、私は後ろから急に人がぶつかって来て……、誰にぶつかられたかまでは……」

戸惑ったようにフローラが言った。
後ろからスティアードがぶつかってきたために、フローラは何がどうなってあんなことになったのかを全く察していなかった。
すると、ふと、一人の生徒がおずおずと手を挙げ、遠慮がち喋り始めた。

「あの、王女殿下が転んだのはスティアード君がぶつかったからだと……」

その様子は多くの者が見ていた。
この者が言わなくとも誰かが言っていただろう。
だが、スティアードを恐れているのかその生徒の声色は固い。
スティアードが鬼のような形相でその生徒を睨みつけた。

「僕が悪いと言うのか！？　僕だって突き飛ばされたんだ！　僕は被害者だぞ！」

心の底からそう信じて疑っているような形相で、スティアードが言った。

「あ、いえ。スティアード君が悪いというわけではなくですね」

スティアードに睨まれ、発言をした生徒が委縮する。

「じゃあ誰が悪いと言うんだ！？」

「あ、いえ、それは……スティアード君を突き飛ばした人でしょうか？」
「そうだ！　あの時、僕を突き飛ばした奴らがいる！　そいつらが

犯人だ！　僕は複数人に突き飛ばされたぞ！」
「あの時はパニック状態でしたからそれもやむをえませんわ。魔物に注意が向かっていて周りの状況も視えていなかったでしょうから。今は犯人探しをしている場合ではないのではなくて？」
と、話の展開に辟易したような表情で、ロアナが話題を誘導した。
一方でスティアードはムッとした表情でロアナを見た。
「ではどうすれば？」
アルフォンスがその真意を尋ねる。
「彼を助けるのか、この森から出るのか。そのいずれかではなくて？」
何を当たり前のことを、と言わんばかりに、ロアナがやや不機嫌な表情で言った。
「そ、それは私の一存では……」
アルフォンスの指揮官にあるまじき発言にロアナは呆れた。
「何を言っているんですの……、こういう時のための指揮官でしょうに」
「ぶ、部隊内の意見も尊重したいと考えております。みんなはどう思う？」
アルフォンスは部隊の構成員に意見を仰いだ。
「そもそも生きているのか？」

「流石に助からないんじゃないか？　この高さじゃ」
「さっさと森から出た方がいいだろ。こんな場所、いつまた魔物の軍勢が現れかねないぞ」
「まぁ、何の後ろ盾もない平民一人の命でフローラ様のお命が救われたと考えればな」
「そうだな。名誉の戦死と言える」

リオの救出に消極的な意見が飛び交う。

「ふむ、僕を押した人物ですがね。実は一人だけ顔を見たのですよ」

と、アルフォンスと何やら話していたスティアードが、意味深長な表情を浮かべて、言った。

「それはあのリオという下民でした。あの時、あの臆病者は戦闘の空気に怯えて槍が刺さった僕を押し倒したんです。そのせいで僕はやむなくフローラ姫に衝突してしまった。王族殺しの罪を恐れたあの男は必死になってフローラ様を助けようとしたが、間違って自分が崖から落ちてしまった。そういうことなんじゃないんですかね？」

その場にいた生徒達の大部分が、ごくり、とつばを飲み込む。

「そ、そんな！？」

そんな中でフローラが納得できないというように声を出した。

「本当に目撃したのね？」

今までフローラの隣で黙っていたクリスティーナが、静かだが力強い声で、スティアードに尋ねた。

冷たい視線をぶつけられたスティアードが一歩だけ後退する。

「え、ええ。間違いありません」

「……そう。わかったわ」

じっとスティアードを見つめていたクリスティーナだったが、やがて視線を外した。

「あいつの証言に反する他の証言が出てこない限り、あいつの証言を覆すのは無理よ。諦めなさい」

と、フローラにだけ聞こえるような小さな声で、クリスティーナが呟いた。

クリスティーナも誰がスティアードを突き倒したかは見ておらず、嘘をついてまでリオを庇う発言をすることはしなかった。

そして、仮に目撃者がいたとしても、おそらくこの場でスティアードに反する証言をする者はいないだろうと、クリスティーナは見越していた。

この中にスティアードに逆らえるような影響力を持つ貴族の子弟はいないし、この中には彼の親の派閥に属する生徒しかいない。

敵対貴族同士のもめ事が生じないように、学院はクラス分けには注意を払っているのだ。

「っ！？　お姉様！」

クリスティーナの言葉を聞いて、フローラが非難するような声を出した。

「その、命の危機に瀕したフローラ姫の御気持ちは察するに余りあります。ですがあの男の自業自得にございます。姫の御心を悩ます

必要など何もないのです」

と、納得できない表情のフローラに、アルフォンスが口にした。

それはスティアードの意見に賛同するという意思表示だ。

彼としても一番面倒事にならない方向で話を持っていきたいようだった。

「なっ……」

その物言いにフローラは言葉を失う。

アルフォンスはクリスティーナに視線を移した。

「とりあえずこの森から脱出する、という方向でよろしいでしょうか？　王女殿下と部隊の命を預かる身としてはこれ以上ここに留まるわけにもいきません。残念ながら今からでは一位獲得は無理でしょうが、いち早くこの件を報告しなければなりませんゆえ」

「そうね。貴方が指揮官なんだから貴方の裁量でやりなさい」

一切干渉をする気はないように、クリスティーナが告げた。

「待ちなさい！　あの人を見捨てるというのですか！？」

と、話をまとめようとするアルフォンスに、フローラが食い下がった。

「あの男を助けに行けば王女殿下や部隊の命を見捨てることになりかねませんゆえ」

アルフォンスは強い口調でリオの命を切り捨てる言葉を口にした。

「な、ならば私が助けに行きます！」

その場にいた多くの生徒が戸惑いの表情を浮かべた。
フローラの言っている言葉が理解できない。
そういう顔つきだった。

「なりません。フローラ様の御身に何かあれば我々の沽券にもかかわります。その、フローラ様、どうしてあのような平民にそこまでこだわるのですか？」

アルフォンスは心底不思議だといった表情を覗かせた。

どうして？
何を言っているのだろうか。
本気で言っているのだろうか。
温厚なフローラだが、アルフォンスの言葉に怒りを覚えた。

「何を言っているのですか！？　そもそも貴方がここに入ると言わなければこんな事態にはならなかったのでしょう！」
「そ、それは……、私としてもこの件で無罪となれるとは思っておりません。部隊を危険に陥れた何らかの責任をとることになるでしょう。ですが御身の御命に代えることはできません」

ちらり、とアルフォンスがスティアードに視線を送った。
スティアードが力強く頷き、そのままフローラへと声をかける。

「フローラ姫、アルフォンス先輩は此度の件について深く責任を感じているのですよ。彼の立場上これ以上犠牲者を出すわけにもいきません。何卒、ご理解なされますよう」
「っ……」

何か言いかけたところで、フローラは周囲の生徒たちの視線に気づいた。
言葉が出てこなかった。
フローラは自分を支持してくれる仲間がいないことを察した。
ここにいる全員が自分のことを敬ってはいるが、自分の話を聞いて賛同してくれる人がいないのだ。
そんな視線で彼らはフローラのことを見ている。
フローラはゾッとした。

「……だ、だってあの人は私の命を助けてくれたんですよ？」

と、消え入りそうな声で、かろうじて声を捻り出す。

リオのことを思う。
この国では珍しい黒髪、端正な顔、自分の一つ上の学年にいる、この学院の落ちこぼれであり問題児とされている少年だ。
フローラはこの少年のことを知っていた。
五年以上前に姉と自分を誘拐犯達から助け出してくれた少年だ。
フローラはこの少年に対して後ろめたさという罪悪感を抱いていた。
きっとこの人は自分のことは嫌いなのだろうとも思っていた。

だってそうだろう。
あの時、フローラは助けてくれたお礼をすると言った。
その結果、色々と面倒な事に巻き込んでしまった。
少年は牢屋に拘束されたばかりか、近衛騎士と戦うことになっていた。
近衛騎士と戦っていた時のことはフローラも覚えている。
なぜならフローラも修練場にいたのだから。

少年は何故か助けてもらった時以上にボロボロだった。
顔は少し腫れた様子で口からは血が滲んでいた。
あれはおそらく牢屋でつけられた傷なのだろうとフローラは思っている。

フローラがよくわからないうちに、少年は王立学院に入学することになっていた。
謁見の間で見た少年の変わり様に少し驚き、目を奪われたことは置いておくとして、何とかお礼をすることができたとこの時は思った。
だが、フローラが一年遅れで王立学院に入学すると、リオが孤立していることを知った。
それどころか揶揄の対象にもなっている。

姉にリオのことをそれとなく聞いてみたことはあるが、不機嫌そうな顔をされ、あの男のことは忘れろと言われた。
理由はわからないが、どうやら姉はリオのことをあまり快く思っていないようである。

フローラは思った。
結局、自分はあの少年に何のお礼もすることができていないのではないかと。
王族と言ってもフローラには何の権力もない。
それどころか、一個人のために何かしようと思っても、王族であるということの柵に捕らわれて何もできない。
できることは誰かにお願いすることだけだ。
何かをするにはすべて人任せになってしまう。
あの少年は自分に関わったせいで碌な人生を歩めていないのではないか。
あの少年はいつも無表情だ。

けど、いつもどこか悲しそうな顔をしているようにも思える。
それは自分のせいではないのか。
学院の中でリオの姿を見る度に、フローラはそんなことを思っていた。

その少年がなぜかまたしても自分の命を助けてくれた。
しかも自分の身を危険に晒してまでだ。
見捨てられるわけがなかった。
フローラが言葉を失ったのを機に、生徒達が森から脱出するために行動を開始した。
そんな中でフローラは呆然と立ち尽くしている。

「フローラ、納得しなくてもいいわ。でも、これ以上事態を重くしないためにも移動しなければいけないのよ。今ならかろうじて厳重注意を受けるだけで済ませることができるの」

と、取り残されているフローラにクリスティーナが声をかけた。

「死者が一人出たかもしれないんですよ、それを厳重注意って……」

消え入りそうな弱い声だった。

「人の命の価値は平等じゃないってことよ。貴方や私とあの男では比較するにおこがましいくらいに重みが違う。現実に王族である私達の身に何かあってみなさい。この場にいる連中に責任がとれるわけがないでしょう？」
「そんな言い方、私達は自らの意思で演習に参加しているんですよ。危険は承知の上です」

と、どこかふて腐れたような口調で、フローラが言った。

「安全の確認された当初のルートを外れている今の状況ではその危険性が段違いなの。野外演習なんて言っているけど死者はおろか負傷者だってずっと出ていない名ばかりの演習のはずだったのよ、これは。そうじゃなきゃ私達の参加が認められるわけがないでしょう？」

苦々しい表情でクリスティーナがフローラへと語る。

「本来ならそれでも参加は認められるかどうかってところなんでしょうけど、お父様は私達に甘いから認めてもらえたのよ。そのお父様に無用な心配をかけるわけにはいかないわ」

大好きな父親のことを持ち出され、フローラは何も言えなくなる。

「……わかり……ました」

森のざわめきにかき消されそうな小さな声で返事をすると、フローラは上の空で準備を始めた。

☆★☆★☆★

ほんの十五分ほど前、リオは木が広がる森へと真っ直ぐに落ちていた。

流石に三十メートルもの高さから落ちるのは怖い。

ジェットコースターに乗っていたら途中で放り出された、と言えばイメージがしやすいだろうか。

（ああ、くそ。強化された肉体の耐久値テストをこんな形ですることになるとはな……）

高速で接近してくる地面を見て、ぼんやりとそんなことを思った。
おそらく強化された肉体ならば痛みは感じても死にはしないだろう。
全力で強化すれば岩だって拳で突き破れるのだ。

だが、怖かった。
死なないとわかっていても、高所から紐もつけずに飛び降りたことなど一度もないのだから、当たり前だ。

リオは少しでも落下の衝撃を和らげるために、体内から魔力を放出し、魔力を制御することにした。
魔法とは同じようでいて、全く異なる原理で、世界へ干渉していくと、リオの目の前に突風が解き放たれた。

術式契約の魔力の流れをコピーしたまがい物の魔法、おそらく精霊術と呼ばれるものであるはずだ。
本来ならばエルフ、ドワーフ、獣人が用いるものである。

普通の魔法を一切用いることはできないリオだが、なぜか人間に使うことの出来ない精霊術をつかうことはできた。
人間族の中にも極稀に精霊術の使用者が現れるそうだが、いかんせんその絶対数が少ないことから、詳細な資料は一切存在しない。
リオも大分古い書物を読んで精霊術の概要に触れただけだから、精霊術についてはよくわかっていない。
リオがわかっていることは、術式契約を必要としないこと、呪文の詠唱も必要としないこと、魔法に出来て精霊術に出来ないことはないこと、それくらいだ。

暴風ともいえる突風を目の前に作りだすことで、リオは落下にブ

レーキをかけた。
すると、リオの落下速度が減少していく。
だが、重力が働いている以上、完全に落下を阻止することはできない。
とはいえここまで速度が落ちれば充分であった。
風で落下地点を調整すると、そのまま木々の中へと突っ込んで行く。
その中で手ごろな太さの木の枝を掴むと、勢いをさらに殺した。
グローブ越しに手にかなりの負荷がかかってきたが、気合でそれを無視する。

「っ、と」

結果、ほぼ無傷で着地することができた。
痛んだ手を治癒の精霊術で治療すれば何も問題はない。

だが、どうしたものかと、崖の上を眺めながら、リオは内心でぼやいた。
上に戻って合流するのはさほど難しいことではない。
絶壁ともいえる崖だが、三十メートル程度の高さなら登れないこともないのだ。

しかし、三十メートルもある崖の下に落っこちたにもかかわらず、魔法も使えないリオがほぼ無傷ですぐに崖の上に現われれば異常に思われるだろう。
それは少し面倒だった。

そこで、とりあえず様子だけでも隠れて窺うことにした。
生徒達に気づかれないまま上に登ることを決めると、リオは、身体能力と肉体を強化し、軽業師のように崖を登って行く。

ほんの数秒で上へ到達すると、木の陰に隠れて生徒達の会話を探った。

（まぁ、そんなことだろうと思ったけどな）

と、生徒達の会話の内容を聞いて、内心で呟く。

最初から期待などしていなかった。

フローラだけは自分のことを気にかけてくれたようだが、最終的に周囲の空気に飲まれて移動をすることを決めたようだ。

奇跡的に生還したことを伝えるにしても、すぐに合流するのは少し不自然である。

数日は時間を置いた方がいいだろう。

（くそ、やっぱり面倒なことになったな）

森の外へと出るためにその場を立ち去って行く部隊の面々を見ながら、リオはこの森でサバイバル生活をしなければならないことを億劫に思った。

第12話　冤罪

野外演習が終了した日の夜、王立学院の首脳陣は今回の件の処理で頭を悩ませていた。

「既定のコースを抜け出した原因はロダン侯爵家とユグノー公爵家の御子息に原因があるそうです。フローラ姫が危うく崖から落ちかけたというのも事実のようですな」

王立学院の学院長であるガルシアが、目下の悩みの種である事件の報告を、主任教諭から聞く。

生徒達が安全性の確認された既定のルートを外れてわざわざ森の中へと入っていき王女を危険な目にあわせた。

さらにゴブリンとオーガの群れに襲われた。

一連の行動には有力派の貴族が大きく関与している。

最初にこれらの報告を聞いた時は、思わず逃亡を画策しようかと、真剣に考えたくらいである。

「負傷者はいましたが『治癒魔法（ヒール）』の使い手が多くいたおかげで大事にはならなかったようです。死者、というか行方不明者は一名おります。リオという生徒です」

一応、無視しえない問題はないことにガルシアが安堵の溜息を吐く。

幸い王族や上級貴族には目立った被害はない。

負傷者はいるようであるが、教諭の報告を聞く限り、本人たちも

事を大きくしたくないというのが本音であるようだ。
それはガルシアにとって非常にありがたかった。
「あの元孤児の小僧か。それはまぁ不幸中の幸いというべきかのう」
リオには保護者はおろか後見人となる人間すらいない。
この国ではただの平民にすぎない人物だ。
リオの推薦人である国王が後見人と言えなくもないが、国王はリオが入学してからは完全に放置である。
怪しい動きがあれば知らせろと言ってきただけだ。
宮廷内の派閥争いに目を光らせなければならない以上、多少得体のしれぬ小僧の一人ごときに気を配る余裕はないのだろう。
リソースは有効に活用しなければならないのだ。
だから、そんな人間が一人いなくなったところで特に問題があるわけでもない。
心を痛めるどころか、完全に他人事であった。
「一点だけ問題があります。フローラ王女殿下が危うく崖に落ちかけた原因となった人物についてです」
嫌な問題であってくれるなよと考え、キリキリとガルシアの胃が痛む。
「ふむ、話を聞こう。続けなさい」
だが、表面上は完全に冷静さを取り繕っているのは、この老人の胆力のなせる業である。
「まず、ユグノー公爵の御子息を始めとして大多数の生徒はリオに

責任があると主張しています。その一方で、王族であるフローラ王女殿下だけは明確に違うと主張しています。ですが実際に目撃はしていないようです。クリスティーナ王女殿下とフォンティーヌ公爵令嬢は沈黙を貫いています」
「む、それは……、しかしフローラ姫は目撃はしていないのだな？」

たった一人という人数であるが王族の意見は無視できない。
だが、目撃をしていないというのであればどうにでもなる。
沈黙を貫いている他の大物の娘二人は無視していいだろう。

「はい。それと、その、早速ですがユグノー公爵家から強い圧力がかけられてきています」
「予想通りだのう」
「どうなされますか？」

報告を上げる教諭がガルシアの意見を窺(うかが)う。

「ユグノー公爵に今失脚されると国王陛下にとっても面白くないだろうからのう。上手い具合に人身御供もおることだしの。無暗に事を大きくするのは悪手よな」
「では、リオという生徒に問題があったということで王宮に提出する報告書をまとめてよろしいでしょうか？」
「そうじゃのう。王宮での処理はユグノー公爵が上手くやるじゃろ。せめてそれくらいはやってもらわんとな」

正直、事実がどうであるかはガルシアにとってはどうでもいい。
一番、事が大きくならず、都合の良いシナリオが事実なのだ。大多数の証言もとれているというのならば何も問題はない。

「では、王宮に報告する資料はそのようにいたします」

☆★☆★☆★

野外演習から三日後、リオは王都内に潜入していた。
王都は広い。
それゆえ、そのすべてを城壁で囲うことはできず、城壁の外部は出入りが自由であった。
逆に、城壁の中のブロックに入るにあたっては身分証明を行う必要がある。
王立学院が存在する区画は城壁の中にあったが、今リオは身分を証明して正規に入っているわけではない。
自らが死亡扱いされていると考えたリオは内密に情報を集めたかったのだ。

厚く高い壁に囲まれた王立学院が存在する貴族街の警備は厳重であるが、魔力により圧倒的な身体能力を取得できるリオにとってはさほど侵入も難しくはない。
とはいえ真昼間のうちの潜入は目立つので、夜闇にまぎれて、屋根伝いに目的地へと移動していく。

（まだいるといいんだけど……）

リオは学院の中で唯一信頼できる人物のもとへと真っ先に赴いた。
貴族街の中心にある王立学位で万が一の事態が起こるとは思っていないのか、巡回の警備兵の警備はザルであった。
あっさりと図書館の中に入ると、目的の部屋へとたどり着いた。

扉の隙間からは魔道具の灯りが漏れている。
どうやらまだ中に、目的の人物、セリアはいるようだ。
リオはノックをしてセリアが出てくるのを待った。

「誰よ、こんな時間にっ！？」

不機嫌そうな表情で扉を開けたセリアだったが、リオの顔を見て驚愕と歓喜の表情へと一瞬で変わる。

思わずあげかけた叫び声は、そっと添えられたリオの手によって塞がれる。

「しっ。お騒がせしてすいません。ちょっとお話が聞きたくてやってきました」

口調、雰囲気、仕草、目の前にいるリオが本物だということを実感すると、セリアは眼に涙を浮かべてリオに抱き着いた。

「リオ！　貴方、生きていたの！？」

背の低いセリアが至近距離からリオの顔を見上げた。

今ではリオはセリアよりも背が高いのだ。

「ちょ、先生、静かに……。って、やっぱり俺は死んだことになっているんですか……」

慌てて扉を閉め、そのまま中に入ると、セリアに尋ねた。

死人扱いされていることについては予想していたが、その他の情報も欲しいのだ。

「話はこっちが聞きたいくらいよ！　野外演習でリオが崖から落ちて死んだって聞いて、おまけにリオがフローラ姫を巻き込んで危険な目に合わせたって話だし」

「えっと、俺がフローラ王女殿下を危険な目にあわせたことになっ

ているんですか？」

少しばかり想像の斜めを行く展開だった。

だが、あの時の会話の様子ならやりかねないと思い、すぐに納得はできてしまった。

「その様子だとやっぱり嘘みたいね。何があったのか聞かせてくれる？」

リオがそんな真似をするわけがないとセリアは信じていてくれたようだ。

そのことにリオは薄く微笑む。

そして、手短にセリアに真相を伝えた。

「何よ、それ！　リオは無実どころか勲章ものの大殊勲じゃない！……でも、ちょっと不味いかもしれないわ」

話を聞いたセリアが怒る。

だが、すぐに何かを心配するように思案するような表情になった。

「そうですね。その話だと俺には王族の殺人未遂の容疑がかけられていることになる」

リオもセリアの心配をすぐに察した。

「リオが生きているとわかったら、最悪……ううん、ほぼ確実に処刑されるわね」

リオの処遇を想像して、セリアは苦い表情をした。

既に宮廷内でも事件の処理は決まっているだろう。

この国では権力者たちが一度決めた裁定を覆すのは非常に難しい。
ましてやリオは何の後ろ盾もない平民なのだ。
リオがいくら無罪だと主張しても、意味がないことは容易に想像できた。

「となるとこの国を出た方がよさそうですね」

リオの中で導き出された結論はこのまま国を出ることだった。
現状はリオとしても面白くはない。
学院を卒業したらこの国で調べたいこともあったのだ。
しかし、それ以外に選択肢はなかった。

「……そう、ね」

セリアとしてもその選択肢は受け入れたくなかった。
だが、自分では彼の無罪を証明してやることはできない。
だから、それ以外に選択肢はないと理解してしまった。

「まぁ、なんとかなりますよ」

と、飄々（ひょうひょう）とした様子でリオは言った。

幸い逃亡資金は下級貴族でも二年間は暮らせるくらいに大量にある。
クリスティーナとフローラを助けて褒美としてもらったお金がほとんど手つかずで残っているのだ。

「私にしてあげられることがあればいいんだけど……」

申し訳なさそうにセリアが言う。

「大丈夫ですよ。セリア先生がいなかったら情報を集めることすらできませんでしたし、俺の話もこうして無条件で信じてくれました。先生には本当に感謝しています」
「リオ……」
「先生にだけは生存報告ができて良かったです。後は旅の支度をしてここを出るだけですから」
「リオ、大丈夫？　心配だわ。私もついて行こうか？　お金は持っているの？」

実の姉のように心配するセリア、その様子にリオは苦笑する。

「先生が失踪したら大事件になりますよ。学院の中ではあまりお金も使わないので、今までにもらった金貨がほとんど手つかずの状態で残っています」
「そう……」

それでもセリアの不安は止まない。
そんなセリアの様子を察して、リオはとっさに思いついたことを口にする。

「とりあえずは父と母の故郷であるヤグモに向かうつもりですが、道中で偽名を使って先生宛てに手紙を出しますから、心配しないでください。きっとまた会えますよ」

流石にリオと名乗る人物から学院の講師に宛てて手紙が届くのは不味い。
だが、名前を変えて送ればそのリスクは回避できるだろう。

「本当？　絶対よ？　忘れたら、許さないんだからね。それに、ヤ

グモなんて遠くてよくわからないうえに、危ないんだから、無理だと思ったら絶対に引き返すのよ？」

セリアはリオの提案に笑顔で食いついた。

その様子にホッとして、リオは手紙で名乗る名前を考えた。

☆★☆★☆★

クリスティーナはここ数日ふさぎ込んでいた可愛い妹のもとへと訪れた。

出来ることならば言いたくはない。

だが、その役目は自分がと父から引け受けた。

彼女の私室に入ると窓辺で暗く肩を落としているフローラがいた。

「フローラ」

「お姉様……」

クリスティーナの存在に気づいたフローラが弱い声で姉に答えた。

その様子を見て今は言わない方がいいのではないかとも思ったが、遅かれ早かれフローラの耳には必ずあの男の処遇が入るだろうと考え、クリスティーナは意を決して声をかけた。

「今回の件に関して処理が決まったわよ。アルフォンスは一か月の停学、スティアードは実質の無罪、それと……リオは王族の殺人未遂で死罪らしいわ。生死不明だけど国内で賞金付きの指名手配もするみたい」

「なっ……、王族殺人未遂ってどういうことですか！？　それに指名手配って！？」

案の定、クリスティーナの予想した通りの反応であった。

今回の件については政治的判断も多分に含まれている。
そのことを、クリスティーナは王族として理解していた。
だが、フローラはそのことを理解していない。

現在、宮廷の中で最も勢いを持つユグノー公爵家、そして、それに対抗するのは少数派であるが侮ることのできないアルボー公爵家である。
五年前の失脚により宮廷から姿を消したヘルムートであったが、その息子を介してアルボー家はいまだに宮廷内で政治的影響力を取り戻そうと画策していた。
特に両貴族はベルトラム王国の北方に国境を接するプロキシア帝国との対抗方針について決定的な意見の対立が生じている。
このまま緊張関係を維持して国力をたくわえるべきだと主張する穏健派がユグノー公爵、他方で、積極的攻勢論を主張するが強硬派のアルボー公爵家次期当主である。
今はまだユグノー公爵の派閥が大きな影響力を持っているが、ここで失脚されれば一気に天秤はアルボー公爵に傾くだろう。
そうなればいつ開戦になってもおかしくはない。
そして、国王であるフィリップ三世がユグノー公爵の方針に賛同していることを、クリスティーナは把握していた。

そうなると今ここでユグノー公爵に失脚されるのは不味いのだろう。
ユグノー公爵自身も次期当主の経歴に傷をつくのを全力で阻止しにかかったようである。
ご丁寧に部隊の中にいた自らの勢力に属する貴族の子弟に目撃証言の口裏合わせをさせてまでだ。

犠牲になった男は何の後ろ盾もないただの平民である。
たとえ白でも黒とすることはさほど難しいことではなかったので

あろう。

「貴方の気持ちは私にも理解できるわ。けれどもう決まったことなの」

心優しい妹にはそういった特権階級の汚い部分を理解することはまだできないのだろう。

できれば、今後もそういったこととは無縁でいてほしいと、姉心としてクリスティーナは思う。

「……嫌、嫌です！」

そう口にすると、フローラは突如立ち上がり部屋から飛び出した。

我慢できない。

我慢ならなかった。

そんな表情をしていた。

「フローラ！　待ちなさい！」

普段から想像もできないほどに激情したフローラを止めようと、クリスティーナが慌てて声をかける。

だが、フローラは、止まらずに真っ直ぐと、父親がいるだろう執務室へと向かった。

執務室の前は近衛騎士が警備をしているが、フローラは制止を無視して部屋の中へと入った。

「お父様！　学院長！？」

そこには何故か父親であるフィリップ三世の他に王立学院の学院

長であるガルシアもいた。
だが、フローラはすぐにフィリップ三世へと視線を移す。
「……何事だ？　フローラ」
その用件の予想はついていたが、それでもフローラがここまで積極的な行動に出ることなどいまだかつてなかった。
普段の娘からは想像もつかない様子に、フィリップ三世は小さく目を見開いた。
「先日の事件について納得のいかない処遇がなされていることを知り参りました」
やはりその件かと、フィリップ三世は内心でため息を吐く。
「……フローラよ。話は聞いた。そなたが嘘をついているとは思えんが此度の件について忘れなさい」
「っ、お父様もそのようなことを仰せになるのですか！？　あの人は私を助けて代わりに崖から落ちたのです！　それがどうして王族の殺人未遂など！　ガルシア学院長、そのように事実を書き換えて報告したのは貴方なのですか！？」
「ほほ、これは異なことを。私は生徒達の証言を取りまとめただけですぞ」
と、ガルシアは食えないことを好々爺染みた笑みを浮かべて言った。
「公爵家はすべて王族に所縁のある家だ。となるとその恥は王族と全く無関係というわけでもない。その恥を公表するような真似はあまり外聞のよいことではないのだ。いざとなれば処断することも必

要となるが、死んだ平民一人の犠牲でその名誉を保てるのならばそちらを選ぶのが道理だ。そなたも王族であるならばこの意味を理解してほしい」

フィリップ三世が建前的な理由を述べる。
フローラは賢い子であるが、心が優しく情に厚いところがある。
裏に隠された汚れた本当の理由を伝えることは憚られた。

「っ……」

フローラも大好きな父の言うことならば理解はしたい。
今までならばすべてそうしてきたのだ。
だが、今回だけはどうしてもそれができそうになかった。

しかし、目の前にいる父親は国王の顔をしている。
この顔をしている時の父親にはこれ以上何を言っても意味がないことを、フローラは無意識のうちに理解していた。

「わかり……ました……」

かろうじて心にも思っていないことを口にした。
辛い。
これほど辛い思いはしたことがないのではないかというほどに、辛かった。

「フローラ姫、感情と行動が一致しないことなど特権階級に生きる者ならば日常的に経験することですぞ」

それができないのは子供であり、そもそも今回の事例は感情と行動が一致しないものですらない、とまでは思っても言わなかった。

「ガルシアよ、あまり余の可愛い娘を苛めるな」
「ほほ、これは申し訳ありませぬ」

フィリップ三世に軽く睨まれて、ガルシアが笑いながら謝罪を口にする。

フローラは生死のわからぬリオの生存を信じて神にその安寧を祈った。

時は神聖暦九九六年、既にリオがこの世界で生まれ変わってから五年以上の月日が流れていた。

第13話　指名手配

王立学院で一晩を過ごし、朝になって抜け出したリオは、旅の準備を整えるために王都の市場で歩いていた。
これまで王立学院の外に出ることはめったになかった。
久々に歩く王都の街並みはリオが孤児だったころと全く変わっていない。

だが、今は感傷に浸っている暇はない。
できるだけ早く準備を整えて王都から脱出しなければならないのだ。
リオは王立学院の訓練用制服を着ているために非常に目立つ格好をしていた。
王立学院の紋章が刻まれた軽鎧は既に廃棄してある。
それでも、王立学院の制服を着る者はほとんどが貴族であるため、時折すれ違う警備兵はリオを見ると道を空けて敬礼していた。
平民達も一定の距離を空けてリオには近寄ろうとはしない。

ふと、ここ数日間、水以外に何も口にしていなかった、リオの腹が、空腹で大きな悲鳴を上げた。
さっさと服を着替えて胃に何かを入れたいところだが、なにぶん、この五年間、リオの生活は学院の中で完結していた。
購買のような場所で日常生活に必要な最低限の衣類を購入していたことから、あまり市場に来ておらず、どこに服屋があるかを把握していなかった。
適当に歩いているうちに、市場の大通りから外れの通りの方にまで、来てしまったようだ。

そんな時、食欲をそそる良い匂いがリオの鼻を刺激した。
市場には至る所に露店が出ている。
その中の一つから放たれているものだった。
立地条件があまり良くないのか、客はいない。

（あそこで何か買ってついでに服屋の位置を聞いた方が早いか）

そう思ったリオは露店へ向けて足を動かした。
露店の台から小さな少女が顔を出しているが、客の入りがないのでどこかつまらなさそうな顔をしている。
その後ろには母親と思しき人物が何か作業をしていた。

「あ、いらっしゃいませ！」

リオが露店に近づくと、少女が気づいて元気よく接客の挨拶をしてきた。
歳は七、八歳というところか。
この国ではありふれた栗色の髪をしたあどけない少女だ。
少々痩せてはいるが可愛らしい。
少女はリオの身なりを見ると少し驚いた表情をしていた。

「あ、えっと、その……」

リオの着ている制服の見栄えの良さから貴族だと思ったのだろう。
少女は緊張しているようだ。
平民に対して横暴な貴族が多くいることは、平民にとって一般的に知られていることである。
おそらく少女も親から貴族にあまり関わらないように教えられているのだろう。

「そんなに緊張しないで大丈夫だ。ちょっと腹が減っていてな。良い匂いがしたからやって来たんだ。ここは何が売っているんだ？」

と、少女を安心させるように、リオは優しい声色で喋った。

「えっとね、パンの中にソースと野菜と焼いたお肉を入れるたの、です」

頑張って丁寧語で喋ろうとする少女の姿を見て、リオはそっと微笑む。

「あ、あら、まぁ、貴族様でしょうか？」

屋台の裏で調理と仕込みをしていた母親がリオに気づいてやってきた。

少女の母親のようで若い綺麗な女性である。

身なりから機敏にリオのことを貴族と勘違いしたようだ。

「驚かせてすいません。良い匂いがしたので立ち寄ったんです。お腹がかなり減っていて、二人分もらえますか？」

「ですが、その、うちのお店の物は貴族様に食べてもらえるような味かどうか……」

と、恐縮した様子で少女の母が言った。

注文していざ食べてみて貴族から不味いと怒鳴られれば、少女の母にはどうすることもできない。

それを恐れているのだ。

「大丈夫ですよ。こういう買食いは慣れていますから。ケチをつけ

る真似もしません」

少女の母を怖がらせないように、リオが軽く頭を下げた。
その様子で母親の警戒心が薄まったようだ。
ちなみに買食いするのはこの世界では初の体験である。

「では、その、二つで大銅貨二枚になります。食べ方はわかりますでしょうか？」

貴族は手づかみで何かを食べるということはまずしない。
食事はナイフ、フォーク、スプーンを使って食べるものだと思っている。

「ありがとうございます。食べ方は心得ているので大丈夫です。お釣りはいりませんので、これを」

リオは小銀貨を一枚差し出した。
慌てて釣銭を取り出そうとした母親に、釣りはいらないと伝える。

「そういうわけには……」
「驚かせてしまったお詫びです。その子に美味しい物を食べさせてあげてください」

リオは薄っすらと微笑んで少女を見た。

「ですが……」
「いいんです。でしたら代わりに服屋と武器や防具が売っている店の場所を知っていたら教えていただけないでしょうか？　実は道に迷ってしまいまして」

そう言うとリオは少し恥ずかしそうに苦笑した。
そんなリオの様子に、少女の母は、一瞬だけ呆けた顔をしたが、すぐに薄く笑った。

「はい。新品の服が売っているようなお店ですと、中央通りに大きな商会の服屋がありますよ。この道を真っ直ぐ進んで行くと大通りに合流しますので、そこを左に曲がってください。一分も歩かないうちに右手に服屋があるはずです。武器と防具を売っている店もすぐ近くにあるからわかると思います」
「なるほど。助かりました。ありがとうございます」

リオが軽く頭を下げてお辞儀する。
少女の母は恐縮したように頭を下げ返すと、調理を始めた。

「どうぞ」

差し出されたのはホットドッグ程の細長いライ麦パンに、肉と野菜が挟まれたサンドイッチのようなものだった。
リオがそれを慣れた様子で頬張る。
次の瞬間、塩の効いたソースと肉汁が混ざり合った味が口の中に広がった。

「美味しいです」

と、満足したような笑顔を浮かべて、手短に感想を言う。
少女の母はどこか安心したような表情を浮かべていた。

使っている素材の品質は、王立学院の中で食べられる食事に利用されている物の方が、圧倒的に上である。
調理師の腕もそうだろう。

だが、外出先でこうして買い食いをした前世の経験が懐かしくなり、最高のスパイスとなって、美味しく感じられた。

あっという間に二つのサンドイッチを平らげると、店先で母親と元気に手を振る少女に見送られて、リオは教えられた店へと向かった。

大通りに近づくと、活気と熱気が伝わってきた。

大勢の人々が行き交う中を、先ほど教えられたとおりに歩いていく。

地面は城壁の中のように石畳で舗装されているわけではなく、土がむき出しのままになっている。

（ん？）

ふと、リオはねちっこい視線を感じた気がして立ち止まった。

視線を感じた方を見たが、人が多すぎて視線の主は特定できない。

（気のせいか？）

違和感を覚えながらも先を急ぐ。

一分ほど歩くとすぐに目的の店は見つかった。

二つとも石造建築で三階建ての建物である。

それぞれの店に入って手早く必要な物を購入していくと、三十分ほどで買い物を終えた。

着替えを終えたリオは冒険者に成りたての少年といった風貌であった。

腰に片手剣、ナイフ二本、矢筒を差し、胴体には、フード付きの黒いロングコートを羽織り、その下に緑を基調としたクロースアーマーと茶色の革の軽鎧を身に着けている。

コートの下には手投げナイフがいくつも収納されていた。
さらに背中には弓とバックパックを背負っている。
バックパックの中には最低限の替えの下着、靴下、それと厚手の毛布が入っていた。
スペースは食料品のためにまだまだ余裕がある。
デザイン性よりも森林や夜間での隠密性と実利性を重視したチョイスであった。
といっても、リオくらいの年齢だと、ここまで完璧に装備を整える資金力はないのが通常である。

「おい」

次の用事を済ませようと歩いていると、リオはチンピラといった容貌の男に声をかけられた。

「何か？」
「お前、リオっていうんじゃねぇか？」

じろじろと無遠慮に下から上へと眺めていくようにリオのことを観察しながら、男はリオに誰何してきた。
リオはわずかに目を薄くして男を見定めるような視線を送った。
そして、先ほどの視線の主はこいつかと見当をつける。

「……いえ、違いますけど。急いでいるので、それじゃ」

どうして男が自分の名前を知っているのかについては疑問を覚えたが、男の目つきから碌なことになりそうにないと考え、リオは先を急ごうとする。

「まぁ、ちょっと待てよ。ついさっきな、リオって黒髪のガキの手

配書が掲示されたんだ。まだ一時間も経ってねぇ。情報屋の俺はいち早くそれを察知してな。まだ、警備兵にも通達が行き渡っていないんじゃねぇか」

男はリオの前に強引に割り込むと、自分の目と耳の良さを自慢するように語りだした。

やむを得ずにリオも足を止める。

「で、飯でも食おうと市場を歩いていたら、黒髪のガキが歩いていたのを見かけてな。声をかけたってわけなんだが」

下卑た笑みを浮かべながら、歩み寄ると、男は目を丸くむき出してリオを覗き込んできた。

「何の話でしょうか？」

「とぼけんじゃねぇよ。黒髪のガキなんてこの国にはそうそういないぜ。しかも、さっきまで王立学院の制服を着ていたのに、今は逃げるかのように旅人の姿をしてやがる。おめぇがリオなんだろ？」

男は至近距離からリオを睨みつけた。

リオの話を信じる気はないようで、なれなれしく、それでいて、ねっちこく絡みつくように、リオにまとわりついてくる。

「いい加減しつこいですね。俺は急いでいると言いましたけど？」

怒気の中に僅かな殺気を混ぜて、リオは冷たい視線で男を睨みつけた。

「っと、と！　待て、待て。慌てなさんな。俺が大声を出せばすぐに警備の連中がやって来るぜ。警備兵はそこかしこにいるんだ」

そんなリオの迫力に押されて男が後ずさる。
「お前がリオじゃなくても警備の連中は信じないだろうな。それはお前も困るだろ？　な？　すれ違った巡回の兵士達も黒髪のお前の存在に気づき始めてる奴はいるだろうぜ」
早口で、脅迫めいたことを、男はまくし立てた。
「……」
リオは無言のまま男を見つめている。
客観的容姿の一致とリオのこれまでの反応で、男は自分の中で確信を強めていた。
「へへ、それにお前がリオならこの王都どころか国中でお前の逃げ場はないぜ。もう魔道通信機でお前の情報が国内の各都市に通知されているはずだからな」
男はリオの反応を見逃さないようにねっとりとその仕草を観察するが、リオが表情を崩すことはない。
魔道通信機とは古代のアーティファクトを参考に作られた無線映像通話機である。
通話可能範囲は三十キロ程度だ。
高価で数も少ないが各都市に一台は設置されている。
そのため三十キロ圏内を目安に都市が隣接していることが多い。
「ちっ、食えねぇガキだな。まぁいいけどな。ずいぶんと羽振りが良いみたいじゃねぇか。お前、金持ってんのか？」

（ああ、強請りか）

男の目的を察知し、自分の心がスッと冷たくなっていくのを、リオは感じていた。

リオは生死不明だが高確率で死んだ者扱いされているのだ。

まさか指名手配までされているとは思っていなかった。

万が一でも自分が生きていると不味いからの処置だろうか、それとも王族殺人未遂というのがそれほど重大な犯罪だからこその処置だろうか。

いずれにしろ、冤罪をでっちあげられた上に、ここまで実害を被ることになったのだ。

人間不信に陥ってもおかしくないくらいである。

流石にそれはないだろうと、リオは冷たい怒りを覚えていた。

それがじわじわとリオの心を蝕む。

ふと、目の前にいる強請り魔にそのいら立ちをぶつけたくなった。

「まぁ、とりあえず金貸してくれね？　王立学院の制服着ていたってことは金持ってんだろ？　そんな装備を整えられるくらいだしな。代わりと言っちゃなんだが匿う場所くらいは用意してやるぜ？」

強請の男は、自分の優位を欠片も疑っていないように、図々しい言葉を平然と言ってのけた。

おそらくここで金を渡しても男はリオを強請るだろう。

それか、金を受け取った後に、リオを警備兵に付き出して懸賞金でも貰うかもしれない。

リオはそう思った。

「ははは」

何故かおかしくて、リオは笑い出してしまった。

男が眉を顰める。

「あん？　何笑ってやがる？　気でも触れやがったか？」

男の言葉を無視して、リオは笑い続ける。

笑っていないと何かが爆発してしまいそうだった。

しばらく笑い続けると、真面目な表情を浮かべ、リオは開口する。

「いや、別に。俺はリオじゃない。強請るならそのリオって奴にやってくれ。アンタの世迷言に付き合っている暇はないんだ。じゃあな」

そう告げると、リオは男に背を向けて歩き出した。

男はどのような反応をするのだろうか、そう思ったが答えはどうでもよかった。

男は一瞬だけ唖然とした表情を浮かべたが、すぐに怒りの形相を浮かべ直す。

「おい！　こいつ指名手配の小僧だ！　警備兵！　ここだ！」

近くにいた警備兵に向けて大声でそう叫ぶと、男はリオの肩に強引に手を掛けた。

リオはその手を引っ張り、そのまま自分の前へと投げ倒す。

「がっ……ぎっ」

受け身を取れなかった男の口から鈍い声が漏れた。

そして、リオはそのまま男の腕を捻る。
鈍い音が聞こえたが、リオが表情を変えることはない。
その様子を警備兵達も見ていたため、大声を出してリオを呼び止める。
だが、その声を無視し、全力で走りだし、リオは王都から抜け出した。

☆★☆★☆★

そして、その日の夜、貴族街にあるユグノー公爵邸の一室で、高価な椅子に深く座ったユグノー公爵がローブを身に纏った一人の少女と対面していた。
少女はペールオレンジの髪を背中まで真っ直ぐに伸ばしていた。
年齢はまだ十歳に満たない。
少女の頭には小さな狐耳が、そしてローブの下に着ているスカートからは狐の尻尾が生えていている。
そう、少女は狐獣人だった。

人間族の国に獣人族を含む亜人全般はほとんど住んでいない。
そもそも亜人族自体が人間族の領域には滅多に姿を現さない。
亜人は奴隷としての価値が高く、問答無用で奴隷狩りに襲い掛かられることも多いからだ。

中でも獣人族の扱いは酷い。
獣と人間の半人である獣人を不浄の存在として考え見下す者が多いのだ。
人間族の貴族の高尚な趣味として獣人の奴隷を飼うことがある。
不浄な存在であっても、高貴な自分が飼ってやることで、ペットとしての存在価値ができる。
彼らは本気でそう思っている。

少女の母は狐獣人だった。
亜人の領域付近に侵入してきた人間族の奴隷狩りに運悪く捕まったのだ。
そして少女の母はユグノー公爵に買われた。
少女の母は、十五歳で少女を産み、二十歳にして死んだ。
少女の目の前にいるユグノー公爵は少女の父親だった。
スティアードは腹違いの兄である。

少女は碌な扱いを受けていなかった。
物心がついた時から調教を受けており、身体には至る所に鞭の跡がついている。
スティアードからはおもちゃのように扱われており、先日も何やらミスを犯したとかで、怒りの発散のはけ口とされたばかりである。
さらにユグノー公爵は少女に戦闘訓練を受けさせていた。

獣人族は人間族に比べて身体能力が格段に高い。
五感も優れており、たとえば狐獣人の嗅覚は犬獣人と同じくらいに優れている。
表舞台では使いにくいが、育てれば優秀な戦闘人形になるのだ。
ちなみに、人間族と獣人族で交配すると片親の特徴を完全に受け継いだ子が産まれるので、少女は純粋な獣人である。

「それが暗殺対象の衣類だ。臭いを覚えろ」

ユグノー公爵は少女に一枚の衣類が投げ渡した。

「はい」

短く返事をすると、少女は衣類に鼻を当てて匂いを覚える。

「死ぬことは許さん。だが刺し違えてでも殺して来い。そのためにお前を育ててやったんだからな。見た目が子供のお前なら油断させて殺すこともできるだろう。その首輪がある限りお前が逃げることは叶わん。行け」
「わかり、ました」

たどたどしい言葉でどこか怯えたように少女が頷く。
最低限の日常会話はできるが、少女は碌な教育も受けていない。

少女の目にはほとんど光がない。
その代りに、少女に着けられた首輪に嵌められた魔石が、鈍く光っていた。

少女はフードを被ると、命じられるがまま部屋を出て、屋敷を出た。
臭いの主を探すように王都の中を走り回っていると、かすかに対象の匂いを嗅ぎとった。
そのまま少女は走り出し、やがて王都を立ち去った。

第１４話　交易都市アマンド

リオはベルトラム王国の国境へ向かって森林地帯を走っていた。
既にリオがベルトラム王国の王都を出発してから二日が経過している。

移動手段は徒歩である。
一般的な徒歩旅の移動距離は、整備された街道を歩くことを前提にして、一日の移動時間八時間で合計三十キロを平均とする。
ところが、リオは、強化した身体能力と肉体に物を言わせて、道なき道を一日で三百キロ以上も走破していた。
これは、馬を休ませることなく常時疾走させていなければ、追い越すことができない移動距離である。
この調子で行けば今日中には国境を越えることができそうであった。

ベルトラム王国の東に位置するのは同盟国のガルアーク王国である。
ガルアーク王国は、ベルトラム王国と同程度の歴史と国力を誇る、ユーフィリア大陸の列強に数えられる大国の一つだ。

（ガルアークにまで俺の手配書が届いていないといいが……）

王都から逃げ出すように出てきたせいで食料品の調達が不足していた。
万が一、ガルアーク王国内でも指名手配が有効であると、最悪その先にある未開地に何の食料の準備もなしに突入することになりかねない。

ちなみに、未開地とは人間族の支配が及ばない空白地帯である。
そこの一部の地域にはエルフ、ドワーフ、獣人といった亜人達が暮らしている。
人間族と亜人の交流はゼロであり、どちらかというと亜人は人間族に敵対的である。
リオが目的地とするヤグモはその未開地の更に東にある地方である。
定期的な移動手段は存在せず、数十年に一度、大使のやりとりがあるかどうかだ。

移動ルートは三つ、陸路、海路、空路である。

陸路については必然的に亜人達のテリトリーを移動しなければならない。
詳細な地図は存在せず、大森林や山岳地帯など徒歩で移動するには地形条件が悪く、下手をすると凶暴な生物や魔物が生息する地域に迷い込むこともある。
リオでも移動速度が道中で大幅に落ちることを考えれば、二か月は到達に必要と考えた方がいい。

海路については海岸線沿いに航行していくことになるが、移動速度が気候条件に左右されることから、移動には時間がかかる。
海中にはシーサーペントと呼ばれる亜竜を始めとして獰猛な生物や魔物も数多く存在する。
その危険性は下手をすると陸路よりも高いことから、移動に必要なコストも考えると現実的な移動ルートではない。

一番安全な移動ルートが空路である。
古代のアーティファクトに魔道船と呼ばれる空を飛ぶ船がある。

移動速度は通常運行時で五十ノット弱ほどであり、空の生物や魔物に襲われる可能性はあるが、海上よりは比較的対処がしやすい。
ただし、魔道船は現存数が非常に少ない上に移動には大量の魔石を消費することになる。
また、空を飛ぶ生物をテイムしている者がごく少数ながらにいることから、そういった人物は空路で移動することができる。

これらのうち安全性とコストの関係で個人が採りうる選択肢はほぼ一つしかない。
陸路である。
とはいえ、先に述べた危険性が存在するので、行くとすれば命がけで、まともな精神をしていればまず行こうと考える場所ではない。

それでもリオがヤグモに向かうのは、前世の自分である天川春人からすればその国の名がどこか懐かしい響きがすることに興味を持っているというのもあるが、そこがリオの父と母の故郷であるからだ。
ベルトラム王国に二人の墓はないが、故郷であるヤグモには二人の墓を作ってやりたい。
リオはそんなことを考えていた。

そして、その時までに自分の中で一つの答えを出そうと考えていた。
母親の仇をとりたいという気持ちは今でもリオの中で燻っているが、他方で復讐に対してどこか消極的なもう一人の自分もいるとリオは感じていた。
それゆえ、もし相手と相対した時に、自分がどのような行動に出るのかリオ自身にもわからないのだ。
だから、その時、両親を弔ったその時になってもまだ復讐を忘れられないというのであれば、リオは母を殺した男を探し出して何ら

かのケリをつけようと考えている。
相手がどこにいるかは判明していないが、王立学院に在籍している間に王都のギルドで調べた情報によれば、その名前の男は割と名の知れた傭兵団を率いて各国を転々としているらしい。
各地の冒険者ギルドに寄って情報を集めれば、いつかその人物に巡り合うこともあるだろう。
そんなことを考えながらも、ほぼ無意識的に、着地と離陸の瞬間に絞って、脚に部分的な身体能力と肉体の強化を施すと、リオは爆発的な加速を得て前へと進んで行く。

街道は山岳地帯を避けて平原、森林、盆地に切り開かれる。
街道が百パーセント安全というわけではないが、人の手が及ばない領域には国内であろうとも野生の生物や魔物が暮らしていることが多い。
魔物と遭遇する道なき道を進む覚悟があるのならば、ある程度安全の確保された街道を通らなくとも国境を越えることはできる。
指名手配されていることを考えると、リオは正規のルートで国境を越える気にはなれなかった。
道中で稀に遭遇する魔物は下位のものばかりだったので、足の速い魔物以外はすべて無視して突っ走って来ている。
一度街道に戻って確かめた標識によれば、そろそろベルトラム王国の国境を越えていてもおかしくはない。

ベルトラム王国が横に長い国であるならば、ガルアーク王国は縦に長い国である。
ガルアーク王国に入ってそのまま横に突っ切って未開地へと入っていくのならば、二日もあれば十分だろうとリオは踏んでいる。
ガルアーク王国で指名手配されていないようであれば、どこかの都市で食料品等の調達を行わなければならない。
そして、セリアに手紙を書くと約束した手前、どうにかして手紙

を送れないかとも考えていた。
既に午後に突入してそれなりに経過した。
もし都市がすぐに見つからなければ野営することも考えなければならない。
リオはガルアーク王国に入ったことを確かめる意味も込めて、街道がある方へ向かった。

数分も進むと森を切り開いて作られた街道にたどり着いた。
道幅は十メートルほどで、馬車が三台は余裕で通れるくらいの広さがある。
街道が続く先に目的の都市があるはずだとそちらの方角を眺めると、遠くで煙が立ち上っているのが見えた。
どうやら都市が近いようである。

周囲に人や馬車がいないことを確認して少し早目の速度で走り出す。
一時間も走ればそこに着くだろう。
そうすればここがガルアーク王国内かどうかわかるはずだ。

都市の近くまでやって来ると、周囲の開けた土地一帯に穀物畑、菜園、ブドウ畑、放牧地、家畜小屋が散在していた。
耕作地と放牧地で作業している人達が視界に映る。
すぐ傍には湖畔もあり、都市へと続くいくつかの街道には今まさに都市に到着する馬車が数台あった。

この都市はガルアーク王国クレティア公爵領にある都市の一つでアマンドという。
定住人口は五千人と少ないが、ベルトラム王国を繋ぐ交易地点として多くの旅人や行商人が行き交うことから、人口以上の賑わいを

見せる都市である。
都市の周りは三メートル程度の石壁で囲まれており、入り口には警備の兵もいるが、出入りのチェックは緩かった。
ここでリオはガルアーク王国に侵入したことと指名手配が及んでいないことを知った。
とりあえずは一安心である。
まだ情報が届いていないだけの可能性もあるが、魔道通信機の存在を考えればその可能性は低いだろう。
仮に前者だとしてもこの都市にいる間くらいなら、目立たなければ大丈夫だろうと判断した。

都市の中に入ると多くの店舗や露店が立ち並んでいた。
武具、魔道具、食材、衣類、家具、アクセサリーと大抵の物は揃うのではないかというほどの品ぞろいだ。
都市の住人も活気に満ち溢れており、至る所で威勢の良い呼び込みの声が聞こえる。
存外に早く着いてしまったせいか、まだ都市の中を見て回る時間はあった。
数多くある露店から縦横無尽に溢れる食べ物の香りを無視することは、今のリオにはできなかった。
朝から小休憩を挟む以外は、何も食べずにひたすら走り続けてきたのだから、無理もない。
リオは牛肉の串焼きを売っている露店へと足を向けた。
「おじさん、ベルトラム王国の貨幣はこの国でも使えたりしますか？」
もし使えないとなると今リオが持っているお金は使い道がなくなる。

隣の国の貨幣ならおそらくは使えると考えてはいるが、確認の意味を込めて聞いてみる。

「お、兄ちゃん知らないのか。貨幣は商人ギルドが各国から委託を受けて発行しているんだ。だから商人ギルド設置国ならどの国でも同じ貨幣が使えるぞ？」

（へぇ、この世界の文明水準で国際間の共通通貨が発行されているのか）

リオの心配は杞憂だったようだ。

その利便性に感心するとともに安心する。

「なるほど、初めて知ったよ。ありがとう。五本ください」

「あいよ！」

大銅貨を二枚と小銅貨を五枚渡して、牛肉の串焼きをまとめ買いする。

シンプルに塩だけで味付けされた牛肉が実に食欲をそそる。

空腹は最高の調味料とはよく言ったものだ。

貴族が食べるような上質の肉ではなく、少々歯ごたえはあるが、あっという間に五本の串焼きを胃袋に入れていく。

「兄ちゃん、良い食いっぷりだな！　あんがとよ！」

「美味しかったですから。ところで、おじさん、この国について少し教えてくれません？　俺、この国に来たばっかりでして」

店主の男性が納得した表情を浮かべる。

「兄ちゃんは見るからに冒険者って感じだもんな。その割には礼儀

正しいし、若えのに大したもんだ。いいぜ、任せな！」

リオの中では初対面に接する相手との会話としてはそれなりに砕けた口調で喋っているが、それでも丁寧な口調として捉えられたようだ。

リオくらいの年齢で冒険者をやっている者は磨（す）れている子が多いのだろう。

そんなリオに男が得意げに語りだす。

どうやらかなり話好きな性格をしているようだ。

ガルアーク王国とベルトラム王国は同盟関係にあり、宿敵のプロキシア帝国とは敵対関係にあるが今は冷戦状態であることを語ったかと思えば、ガルアーク王国の王室の色恋話のようなどうでもいいようなことも語る。

「んで、この都市は、クレティア公爵唯一の御息女であり、ガルアーク王国一の才女であるリーゼロッテ様が治める交易都市さ。兄ちゃん、こっちの肉『メン』スープもどうだ？」

リオ達の話を聞いていたのか、隣の露店にいた男も客の入りが空いたようで話に加わって来た。

きちんと営業も忘れないあたり、商魂たくましいと言うべきか。

「肉『メン』スープですか？　へぇ、そっちも美味そうだ。じゃあ一杯もらえます？」

『メン』という発音の単語に興味を持ち、リオは注文することを決めた。

代金の大銅貨二枚を支払い、出来上がりを待つ。

「なんでい、兄貴。それは俺っちがこれから話そうと思ったのによ」

リオと話していた男が、美味しいところをとられて、ふてくされたような顔をする。

「へへ、まぁそういうなや弟よ。それにうちの肉『メン』スープはそのリーゼロッテ様が考案なされた料理だしな。へい、お待ち！」

どうやら二人は兄弟のようだ。

現れた料理を見て、リオが一瞬だけ硬直する。

「これは……」

現れた料理の見た目はスープパスタだった。

具材は肉と僅かな野菜しか入っていないが間違いない。

「これをその公爵令嬢が考えたんですか？」

「おうよ。正確にはその『メン』と調理方法をだけどな。『パスタ』っていう『メン』の一種らしい」

「この『メン』を……。『パスタ』……。『メン』、『麺』。なるほど……」

合点がいったというようにリオが呟く。

それはこの世界の単語ではなかった。

口の中に入れて触感を確かめる。

みずみずしく、もちっとした食感をしていることから、使用しているのは保存用の乾麺ではなく生パスタだろう。

味付けはシンプルな塩味だ。

ガーリック、鷹の爪、胡椒、コンソメ、オリーブオイル等で味付けを調整すれば、さらにリオ好みの味になりそうだった。

（乾麺があるなら保存食にいいな。あとは、米……はここら辺にないけど、大麦で代用すればいい）

「これって元は乾燥している『麺』じゃないですよね？　乾燥しているのもあったりしますか？」

生パスタが作れるのなら乾麺を作るのもさほど難しくはない。

そう考えて、リオは早速質問する。

「おお。輸出用に保存用の乾『麺』ってのも出来たみたいだぜ。リーゼロッテ様が出資して設立されたリッカ商会の直営店に行けば買えると思うぞ。なんだ、坊主すでに『麺』を知っていたのか？」

「いえ、初めて食べました。ただ、すごく美味しくて、これなら毎日食べたいなと」

「ほう、そんなに気に入ったか。へへ、流石はリーゼロッテ様だぜ！」

と、兄弟は二人そろって嬉しそうに言った。

「リーゼロッテ様でしたか。そんなにすごいお方なんですか？」

この『パスタ』を作った公爵令嬢に興味を持ち、リオは質問を投げかけてみた。

すると、二人は競うようにリーゼロッテのことを語りだした。

いわく、ガルアーク王国の王立学院を飛び級で卒業した。

いわく、ガルアーク王国有数の天才魔道士である。

いわく、クレティア公爵領に農業革命を引き起こした。

いわく、今までに考えたことのないような料理レシピを数多く考

案している。
いわく、様々な娯楽を考え付いた。
いわく、その才能を認められて、十歳の時から、クレティア公爵領にある都市の一つである、このアマンドの管理を任せられている。
いわく、この都市にある最大の商会であるリッカ商会は彼女が裏から経営している。

と、リーゼロッテの偉業の数々が語られる。

「なるほど、たしかにすごいお方のようだ」

感心したように、リオは呟いた。

「おうよ！　俺ら平民に対しても驕ったところが一切なくてな。たまに市場の視察に来たりするんだが、こないだなんか俺に微笑みかけてくれたのよ」
「そりゃお前の勘違いだ。あれは俺に対して微笑んだんだからな」
「なんだと！？　いくら兄貴でもそれは聞き捨てならねぇぜ！」

もはやアイドルである。
聞けば可愛らしい容姿をしているようだが、年齢はまだ十一歳だという。
ゆうに三十歳過ぎの男達がそんな少女に何を言っているのかと、リオは呆れかえる。

「お二人のリーゼロッテ様に対する愛の深さはよく理解できました」
「ば、馬鹿野郎！　愛なんてそんな恐れ多い！」
「そ、そうだ！　確かに俺ら二人、リーゼロッテ様のためなら死ねるけどよ！」

二人の必死さに、リオは苦笑しながら顔をひきつらせていた。

「ま、他にも露店でリーゼロッテ様の考案した料理で公開されたもんが売っているから食べてみろよ。どれも激ウマだぜ！　俺のおすすめは肉『マンジュー』だ！」

（肉『マンジュー』、ね……。発音は微妙だが、間違いない、か）

この世界の人間が考え付かなかったことを、いくつもの分野で、次々に立案していく。

天才だから、この世界の人間はその一言で理解するしかないのだろうが、その少女が考えついたものはリオ、そして天川春人が知っているものばかりだ。

だからリオはその結論にたどり着くことができた。

『メン』は『麺』に該当する食材がないから、肉『マンジュー』とやらは『饅頭』に該当する料理がこの世界にないことから、そのまま『麺』と『饅頭』という日本語の単語を採用したのだろう。

（そのリーゼロッテという少女は俺と同じ転生者だ。しかも日本人）

思わぬところで、リオは同郷の人間をこの異世界で発見することとなった。

第15話　リッカ商会

リーゼロッテという少女について、自重する気がないのではといくらいに目立っているのは個人的にどうかと思うが、功績や評判を見れば悪い人物ではないだろう、とリオは思っている。

とはいえ、進んでどうこうしようとは考えていなかった。

相手もリオが転生者であることに気づいて聞かれたのならば答えるのも吝かではないが、自ら教えに行くという気にはなれない。

（仮にお互いが転生者だということがわかっても何を喋るのかって話だしな）

同郷話で話を咲かせることはできるだろう。

故郷に帰りたくもなるだろう。

リオだって地球に帰って幼馴染の少女を探したいという気持ちはある。

相手の子にも地球に未練があってもおかしくはない。

だが、この世界で生を受けてしまった自分が今更地球に帰るという選択肢をとることはできないと、リオは気づいてしまった。

戻ったところで戸籍はどうなるのか、同じ時代に戻れるのか、そもそもどうやって戻るのか。

それに容姿だって地球にいた時と異なるのだ。

これは、仮に地球に戻る手段が見つかったとしても、解決できる問題ではない。

世界を移動する方法についてはリオも探してみたことはあるが、この世界の魔法にそのような魔法は存在しない。

仮にも王立学院にある図書館で調べて見つけられなかったのだから、他の国の図書館に行っても見つかる可能性は少ないだろう。
だからリオはもう地球に帰ることは諦めた。
未練があるにもかかわらずその決意ができたのは、仮にあのまま地球で暮らしていても幼馴染の少女が見つからないと、どこか心の中で諦めているからなのかもしれない。

それに、素性の知れない子供がいきなり貴族の令嬢に会いに行って会わせてくれるはずもない。
そういう巡りあわせならいずれ会うこともあるはずだ。
代わりに、今は彼女が考案したという春人にとっては懐かしの料理を食べさせてもらうことにした。

懐かしの味が食べられるということに心を躍らせながら、リオはリーゼロッテが陰から経営しているという商会の店舗を訪れることにした。
都市の構造は綺麗に区分けされて整備されていた。
店舗が立ち並ぶブロックへ入ってすぐに目的の建物が目に入る。
五階建てとの石造建築で、他の建物と比べてひときわ大きく小奇麗であった。
そのまま入口の中へ入っていく。
建物の内部も綺麗だ。
良い材質を使っており、一階の奥にカウンターがあり、オープンフロアの各所に商談用のスペースが設置されている。

（これは……入る格好を間違えたか？）

さっと目を通したところ、中にいるのは商人と思われる身なりの者ばかりだ。
それなりに小奇麗な格好をしている者が多いので、旅人スタイル

で武装している自分が完全に浮いているように思えてしまった。
すると、カウンターの奥にいたリオと同年代程度の少女がリオの存在に気づき、笑顔で話しかけてきた。

「いらっしゃいませ。ようこそ、リッカ商会へ。何かご入り用でしょうか？」

気品の溢れる仕草で少女が愛想良く微笑む。
薄い水色のウェーブのかかったロングヘアに、愛らしくおっとりとした顔立ち、制服を着ていることから従業員のようであるが、お洒落をしてドレスでも着れば貴族の令嬢と間違えそうなくらいである。

「これはどうもご丁寧に。こちらでパスタを販売していると聞きまして、乾燥していて保存が効くものがあれば少し多めに購入したいと思ったのですが。それと他の食料品もあるのなら揃えたいと考えております」

流石一流の商会だけあって教育が行き届いているなと感心しながら、リオは丁寧に挨拶を返した。
武装した冒険者のような見た目とは裏腹に、恭しい態度で挨拶をするリオを見て、少女の目に少しだけ興味深そうな光が灯った。

「はい。乾麺タイプのものもございますよ」
「それは良かった。保存期間はどの程度でしょうか？」
「なにぶん製造が開始してからまだ一年も経っていない商品ですので実証されたものではありませんが、湿気が少なく高温でない環境でしたら少なくとも二年は保管できるものと自負しております」
「なるほど、では値段は如何程でしょうか？」
「五百グラムでお値段は大銅貨一枚と小銅貨五枚です」

この世界の食材にしてはそれなりに高い値段である。
だが、リオとしては親しみのある食材なので惜しくはない。
というよりも、食事に対して妥協する気は一切ない男なのだ。

「なるほど。ちなみに大麦の粒をこの商会で扱っていたりはしませんか？」
「はい。もちろんございます。値段は一キロで大銅貨一枚です」
「では、パスタを十五キロ、それと大麦の粒を五キロ、それぞれご都合をつけていただくことはできますか？」

個人で食べるにしては相当多いが、精霊術のおかげで水を携帯する必要がないし、身体と肉体の強化もできるので、多少の無理は効くはずだと、食い意地を優先させた。
他の食材をすべてそろえれば四十キロは容易に上回りそうである。

「パスタについては五百グラムで六人前ほどの量があるのですが大丈夫ですか？」

全部で百八十人前となる。
商人が一度に購入する量としては少ないが、一個人で一度にこれだけの量を買う人間はそうはいない。
冒険者の恰好をしているリオがこれだけ大量のパスタと大麦を購入することを、少女は不思議に思った。
リオくらいの年齢の平民だと、重さをよく理解していない者も多い。
ひょっとしてリオもそうなのではないかと考え、少女はわかりやすく何人前となるのかを教えてみた。

ちなみに、リオはパスタや大麦を旅の携行食として用いようとし

ているが、少女はその選択肢を頭から完全に除外していた。
なぜなら、その二つは旅の携行食には向かない食材であるからだ。
乾燥パスタを茹でるにしろ大麦で麦飯を作るにしろ多くの水が必要となるが、旅において水は僅かでも無駄に消費できるものではない。
たしかに水を生み出す魔法はあるが、魔道士の魔力は有限であるため、よほど余裕がない限り水を魔法で創りだすことはしないのだ。
また、大麦についてはビールの製造にしか用いられていないというのもある。

「はい。パスタは全部で百八十人前で、小銀貨四枚に大銅貨五枚ですよね。大麦は五キロで大銅貨五枚ですか。合計で小銀貨五枚ですね」

パスタが普通は旅の携行食に向かない食材であることはともかく、少女の意図はリオにも理解できたので、てっとり早く量と値段を計算してわかっていることを示す。

「……失礼しました。では、乾麺タイプのパスタ十五キロと大麦を五キロずつご用意させていただきます」

商人以上の暗算の速さに、少女が目を僅かに見開いて言った。

「その、準備に少し時間がかかりますので、代金のお支払いと一緒にあちらのテーブルでお茶でもいかがでしょうか？」

と、フロアの商談用スペースに置いてあるテーブルとソファーを眺めながら、少女が提案した。

「ああ、それはありがとうございます。是非、お願いします」

待機時間に手持無沙汰になるのも何なので、リオはありがたくお誘いに乗ることにした。
近くにいた職員に紅茶を淹れるように指示すると、少女が席まで案内する。

「さて、他にご入用の物がございましたらご用意いたしますがどうでしょうか？」

リオが柔らかいソファーに深く座ると、少女がそう切り出した。

「そうですね。旅に持ち運びできる調理器具、それとできれば調味料が欲しいです。あとは携行できる保存食一人分を一ヶ月分ほど。それに持ち運びしやすい丈夫で大きい袋ですかね」

ヤグモまでの距離を考えるとそれでも心許無いが、大量のパスタがあれば大丈夫だろうとリオは判断した。

「なるほど。でしたらこちらでご用意いたしましょう。ご予算は如何程でしょうか？　それによってご用意できる質も変わるのですが……」

結構な食材の量を購入するリオに少女は大きく好奇心を動かされたが、それを表情に出すことはしない。

「そうですね。保存食については大銀貨一枚ほどで、調味料については特に上限は定めません」

ユーフィリア大陸の中でも、ベルトラム王国やガルアーク王国がある地方で栽培されていない調味料については、値段が高騰する傾

向にある。
特に香辛料の類は高い。
「それだけあれば保存食は良質な物が買えますよ。調味料についてはどういったものを御所望でしょうか？」
ふと、リオ達がいるスペースにメイドの姿をした女性が現れた。
一商会にメイドがいることに少し驚いたものの、慣れた手付きで優雅に紅茶を淹れていくのを見て、視線を少女に戻すと口を開いた。
「そうですね。塩、ガーリック、ハーブ、オリーブオイル、できれば胡椒、グローブ、ナツメグ、唐辛子も欲しいですね」
本当は醤油や味噌も欲しいが、今までにリオはその二つを見たことも聞いたこともない。
大豆はあることから、稲の代わりに大麦を使えばいずれも作ることは可能である。
（パスタや肉まんを考案したんなら、そのリーゼロッテさんが醤油と味噌を作っていてもおかしくはないけど、そういった話は聞かなかったしな。まぁ、自作する人はあんまいないし、作り方を知らなくても無理はないけど。どこかで定住するようなら自分で作ってみるか）
前世では田舎で暮らしていたことから、リオは二つとも作り方を心得ていた。
「あはは、ずいぶんと食通なようですね。もちろん全部ご用意しております。塩、ガーリック、ハーブ、オリーブオイルはさほど高くありませんが、胡椒以下については百グラム当たり小銀貨一枚から

となっております」
「それはありがたい。それなら全部で金貨一枚もあれば足りそうですね。さて、お茶、いただきますね」

せっかくなので断りを入れて冷めないうちに出されたお茶を楽しむことにする。
差し出された陶器製のカップとソーサーの色合いと絵柄を楽しむと、続いて胸の位置にソーサーを置いて水色と香りを楽しんだ。
最後にソーサーを添えてカップの紅茶を口に含む。
一連の優雅な所作を少女が驚きつつも感心したように見ていた。

「その、飲み慣れているんですか？　ずいぶんと仕草が洗練されていますけど」
「ああ、知り合いに紅茶に煩い人がいましてね。飲むのに長年付き合っていたせいで自然と身についたんですよ。独特の香りと少し渋みのある風味、これ、リズ産の茶葉ですよね。良い等級のものを使っていらっしゃる」

セリアと一緒に紅茶を長年飲み続けてきたおかげで、自然とその仕草が表れてしまう程度に、リオは貴族式のティータイムのマナーを身に付けている。

「ご明察の通りです。素晴らしいですね。貴族の殿方でも紅茶について無知な方が多いというのに」

嘆かわしいと言わんばかりの表情を一瞬だけ覗かせると、話の合う相手に巡り合えた幸運を喜ぶように、少女は上機嫌に微笑んだ。
そして、優雅な仕草で紅茶を口に含む。
その仕草を見つつ、リオはカップとソーサーに視線をやる。

「テーブル、ソファー、そして食器……オープンフロアにある商談用スペースにしては、ちょっと上等すぎやしません？」

ちょっとした話題にしてみようと話を振る。

食器は大銀貨数枚、ソファーとテーブルについてはセットで確実に金貨数枚はするはずだと、リオは見抜いていた。

「ふふ、最高の商談を行うには場所も大事になりますから。良客を招く当然のおもてなしです」

と、少女は誇らしげに言った。

「流石はガルアーク王国一の才女であるリーゼロッテ様が陰から経営すると囁かれる商会なだけはありますね。先ほどのパスタもリーゼロッテ様がご開発なされたとか」

「え、あ、はい。そう仰っていただけるとお喜びになると思います」

リーゼロッテの名が出ると、少女が少し動揺したようにリオには見えた。

（まさか……な）

一瞬、突拍子もないことが思い浮かんだが、リオは頭の片隅に沸いたその疑問を端に追いやった。

「ところで、個人的な質問で恐縮なのですが、お客様は冒険者でいらっしゃるのですか？」

と、少女が個人的な疑問を口にした。

今は商談というよりは歓談中でもあるし、この程度のプライベー

トな質問ならば無礼になるわけでもない。
少女に聞かれた質問に答えるためにリオが開口する。
「いえ、冒険者登録はしていないのですよ。実は旅の最中でして、今のところ路銀には困っていないので冒険者登録をするつもりはあまりないですね」
（そもそも指名手配されている状態で冒険者ギルドに登録できるかも怪しいしな）
胸元のカップを眺めながらそんなことを考えると、リオは視線を少女へと戻した。
「なるほど。それでお客様の髪はあまり見かけない色なのですね」
教養の溢れる丁寧な仕草と言葉づかい、複雑な計算を即興で暗算する知能、紅茶に関するマナー、どれをとっても見た目を大きく裏切るものばかりだ。
しかも商談をするにあたっても値切るということを一切してこない。
少女はリオのことを異国の貴族の御曹司がお忍びで旅でもしているのではないかとあたりをつけていた。
その勘違いはリオにとっては非常にありがたいものである。
「ええ、この国だと黒い髪というのはあまり見かけないですよね。東の方だとさほど珍しくはないらしいのですが……。ああ、そうだ。実はベルトラム王国の王都に知り合いがいるのですが、手紙を送る方法を御存じないでしょうか？」
尋ねて、リオが少し冷めた紅茶を口にした。もしかしたら手紙の

郵送業も営んでいるかもしれないと思ったのだ。

「ベルトラム王国の王都でしたら私どもの商会で配送いたしますよ。そういった業務も行っておりますから。商談をまとめて商品を用意する間に手紙をお書きになりますか？」

「是非、お願いします。そろそろ商談を再開しますか」

すると雑談を止めて商談を再開し、リオが旅に必要な物を購入していく。

必要な商品の量を伝えて金貨で料金を支払うと、従業員が手紙を書く羊皮紙、羽ペン、インクを持ってきた。

「では、商品の準備をしてまいりますね。手紙を書き終えましたらお声掛けください」

「ありがとうございます」

手紙は二十分ほどで書き終えた。

近くにいる従業員を呼ぶと、何故か先ほどの少女が再度カウンターの奥から出てきた。

「ではこれをベルトラム王国の王立学院宛てに届けてください」

「はい、宛先人はセリア＝クレール様ですね」

リオは手紙を少女へ渡し、少女がその手紙を大切そうに受け取った。

その手紙の宛先人を見て極僅かに目を見開くと、少女は宛先が間違っていないことを確認した。

「はい。よろしくおねがいします」

リオとしてはリッカ商会ほど大きな商会に頼めばほぼ確実に依頼は達成されると踏んでいるので、特に手紙が配送されなくなる心配はしていない。

「畏まりました。では、こちらがご依頼の品です。お受け取りください」

脇に控えていた従業員が荷物の入った袋を担いでリオに引き渡した。

かなりズッシリとした重みがあるが、身体能力と肉体を強化すればこの程度なら苦にはならない。

少年の背格好をしているリオがあっさりと荷物を持ってしまったのを見て、その場にいた全員が目を見開く。

「ありがとうございました。それでは」

リオは苦笑しながら挨拶をすると、リッカ商会の本店を後にした。

少女が一歩前に出て、リオの姿が建物の中から消えるまで、見届ける。

「あのセリア＝クレールと個人的に知り合い？　本当にどんな人物なのかしら？」

ぼそり、と少女が好奇心から来る疑問を口にした。

クレール伯爵家といえばガルアーク王国でも有名な貴族だ。

その娘のセリアといえば天才の名を欲しいがままにする人物としてさらに有名である。

今、少女が手にしている手紙の宛先人は、そのセリア＝クレールだという。

そんな大物と個人的に知り合いであるのだから流石に少女も驚い

てしまった。
詮索することは失礼にあたるのでそれはしなかったが、可能ならば是が非でもしたかった。
（やっぱり異国の貴族なのかしら。まぁ、この手紙をあの子に届けさせる時にそれとなく聞いてくるように頼んでおくとしますか）
自分の部下の中でも懐刀というべき女性が、セリア＝クレールの友人だと言っていたことを思い出し、少女はこの手紙を彼女に配送させることを決めていた。
明後日にはベルトラム王国に大事な商談をしに行くことになっているのだ。
その護衛として彼女も同行することになっている。
（この世界で初めて見た黒髪に興味を持って話しかけたけど、中々面白い出会いに巡り合えたものね）
リーゼロッテとリオ、二人の転生者はお互いが転生者だと実際に気づくことなく初対面を済ませることとなった。

第16話　宿屋

リッカ商会の本店を後にすると、夕日が差した空の下、リオは宿屋街を歩いていた。
宿屋街は市場からさほど離れていない区画にある。
酒場や食堂を兼ねた店が多いために既に多くの人が集まっており、どの店も活気に溢れている。
ざっと店を見渡しながらどこがいいかと判断していく。

（せめて風呂桶がある宿屋に泊りたい）

ベルトラム王国やガルアーク王国にも沐浴文化はあるが、湯船に浸かるという意味での風呂は一部の地域にある温泉しか存在しない。
お湯を作るのにもコストがかかる。
そこで、風呂桶と呼ばれる底の浅い直径一メートル前後の木桶に、釜の余熱で温めた湯を張り行水して身体を洗うのだ。
裕福な家だと湯を温めるのに魔道具を使ったり、サウナ風呂が設置されていたりもする。

安い値段だと風呂桶がない宿屋もざらにあるが、他方でサウナ風呂が設置されているような宿屋もある。
リオはサウナ風呂にそこまでの魅力を感じていないので風呂桶がある宿屋を狙っていた。

「ねぇねぇ。そこの黒髪のお兄さん！」

きょろきょろと宿屋を見ていると、リオは突如声をかけられた。
黒髪の人間はこの国では非常に少ない。

自分しかいないだろうと振り返ると、そこにはチュニックドレスにエプロンをかけた町娘といった容貌の少女がいた。
年齢はリオよりも二、三下といったところか。

「えっと、俺かな？」
「うん、そうだよ！　ひょっとして宿屋をお探しですか？」

と、客を逃がさないようにリオの腕に抱き着きながら、少女は言った。

「ああ。そこ風呂桶はある？　風呂に入りたくてさ」
「うん。あるよ！」

少女が元気よく返事をする。

「なるほど。じゃあ一泊でお願いしようかな。相部屋じゃなくて個室で」
「個室？　やった！　一名様ごあんなーい！　こっちだよ！　早く、早く！」

少女がぐいぐいとリオを近くの宿屋へと引っ張る。
二階建ての木造建築で、それなりの歴史を感じさせる佇まいだ。

一階に入ると入口にカウンターがあり、右手には食堂兼酒場に繋がる扉があった。
扉の向こうからは騒がしい声が聞こえる。
大声で歌う声、喧嘩をしているような怒号、そういった喧騒は中にいる人間達が既に酔っていることを如実に表していた。

「個室は夜朝食事付きで一泊小銀貨一枚だよ。湯とタオルは別料金

で大銅貨一枚。料金は前金払い！」

騒がしい喧騒にリオが苦笑していると、少女が元気よく声を出して料金の説明を行ってきた。

少女はこの宿の立派な従業員のようだ。

「じゃあ湯とタオル付きで」

最初から湯を浴びるつもりだったリオは悩まずに即答すると、小銀貨一枚と大銅貨を一枚を差し出した。

「了解！　まいどあり～！　お名前はなんていうの？」

と、少女はご機嫌に笑いながら言う。

元気な子だな、とリオは思った。

王立学院で磨れた子供ばかり見てきたので新鮮な感覚である。

「リオだよ」

「リオだね。私はクロエっていうの、よろしくね！」

にっこりとクロエが笑う。

「ああ、よろしく」

そんなクロエを相手にも、リオの表情はあまり色がない。

「むー、そんな仏頂面してないでもっと笑いなよ！　笑顔！　笑顔！」

「はは……」

リオは苦笑した。

「むー、ま、良しとしよう。じゃあお部屋にご案内するね！」

そう言ってクロエはリオの手を握り引っ張っていく。

「ここがお部屋だよ。トイレはあっち。井戸は外にあるから好きに使っていいよ。お湯とタオルは必要な時に言ってね！　それと、これが鍵ね。貴重品は部屋に置かない方がいいよ。何か質問はある？」

と、クロエはまくしたてるように一気にしゃべった。

「大丈夫。ないよ」

その様子が微笑ましくて、リオが今度は本心から笑った。

「おー、ちゃんと笑えるじゃない！　お兄さん恰好いいから笑った方がいいよ！　何かあったらいつでも言ってね！　もう夕食の時間だから荷物を置いたら一階に降りて来てね。食堂は一階の右手の酒場と兼用になっているから。あ、冒険者の人に絡まれないようにね」

「あー、そういうのあるんだ」

と、リオが面倒くさそうな声を出して言った。

「うん、どこの宿でも日常茶飯事かな。特に若い子が来るとすぐ絡む人が多いから。大人の男の人って馬鹿ばっかり！　すぐ暴力振るうし……」

最後の方に少しだけクロエに影が差したように、リオには見えた。

「ま、無視するからいいや」
「うーん、頑張ってね？　なんかリオってなんか頼りないというか……」
心配そうにそう言い残すと、クロエは小走りで1階へ戻って行った。
鍵を開けて部屋の中へ入ると、荷物を置き、すぐに酒場へと向かう。
一階に下りて酒場の扉を開けると、賑やかな騒音とアルコール臭が漂っていた。
多数の視線がリオに向けられる。
どこに座ろうかと迷っていると、クロエがカウンター席へと案内してくれた。
「すぐにお料理を出すね。飲み物はどうする？　一杯だけ無料だけど」
「何があるの？」
と、どうせならアルコールが飲みたいなと考えていると――。
「無料なのはアルコールだとビールとワインと蜂蜜酒、後はお茶とミルクかな」
と、クロエが無料で飲めるものを教えてきた。
「じゃあビールで」
有料で飲めるものにも興味はあるが、とりあえず無料なもので選択肢の中から選び答える。

「うぇ、あんな苦いのを飲むの？」

どうやらクロエにはまだビールの良さは理解できないようだ。
ちなみにこの世界では子供でもお酒を飲むことはできる。

「まぁね。お腹減ったから大至急料理も頼むよ」
「りょうかーい！　今日はお母さんの自信作だから期待してね」

やや小走りで、クロエがキッチンの中へと戻って行く。
すると、待っていましたと言わんばかりに、体格のいい冒険者風の男が三人やって来た。
リオは男達がやって来たのに気づいてはいるが、特に視線は送らない。

「がははははは！！　おーい、にいちゃん。一丁前にビールなんか頼んだけど飲めんのか？ここはお酒の飲めない坊やがくる場所じゃないぜぇ～」
「そうだ、そうだ。んなナヨっとした身体しやがって！　お家に帰ってママのミルクでも飲んらどうだ～？」
「まぁまぁおまえら。びびって何も言えないみたいじゃないか」

男達は既に酔っぱらっているようだ。
他のテーブルに座っている客もリオの方を見てニヤニヤとしている。
男達の口臭の臭さにやられて、リオが顔を顰める。

「こーら、あんまりリオをいじめちゃダメですよ。リオ、パンとスープはおかわり自由だからね。パンは私が焼いたんだ」

そこにクロエが困った顔で料理を持ってきた。

木製の皿の上にはなかなかボリュームのある料理が並んでいる。
「へぇ、ありがとう。じゃあパンは後でおかわりするよ」
「なんだ、リオっていうのかおまえ。男のくせに自分より小さい女の子のクロエちゃんに守られやがって」
冒険者の男達が脇で挑発してくるが、リオは、それを無視し、自前のカトラリーを取り出して、食事を開始した。
味はなかなかのもので、ナイフにフォーク、スプーンの進みは早い。
「ちっ、上品に食器なんか用意しやがって。お貴族様かってんだ」
周囲の客が鷲掴みで料理を口に入れている中、食器を使って食事を食べるリオの姿は男達からすれば上品に映った。
そこがさらに男達の鼻につくようだ。
「おい、聞いているのか！？」
リオはパンを口に入れて美味しそうに食べているが、冒険者たちがその様子を見て怒る。
その様子を、キッチンからハラハラとしたとした表情で、クロエが眺めていた。
「おい！！」
「無視すんじゃねぇ！！　こっち見ろ！！！」
男が大声を上げ、そのままリオの胸ぐらをつかんで立ち上がらせた。
今のリオの身長は百六十センチに少し届かないといったところだ。

相手の男たちは二メートル近くある。
「うわ、口臭いな。なに？」
と、リオが面倒くさそうに言った。
「なんだと！？」
「てめぇ。せっかく人様が話かけてやったのに何無視してくれやがってんだ？　あぁ！？」
いつの間にか周囲の喧騒は止み、周りの客はリオ達の様子を面白そうに眺めている。
「そもそも俺は貴方達を知らないので、俺以外の人に話しかけているのかと思いました。それより口が臭いんで喋るの……いや、息吸うの止めてくれません？」
リオが不快そうにそう言うと、男たちの肩がプルプルと震えた。
この発言で酒場中から大爆笑が起きる。
「がはは。おいおい。そんな坊主になめられてるぜ～」
「そうだそうだ。ジーン！　いいのか～」
周囲の客がリオに絡んでいる男達を囃し立てる。
その目論み通りに、ジーンと呼ばれたリーダー格の男が顔を真っ赤に染めた。
「き、貴様～！」
リオの胸ぐらをつかんだままジーンがこぶしを振りかぶると、す

かさずリオが顎に掌底をかます。

「がっ」

ジーンが脳震盪を起こし、膝から地面へとダウンする。

早ければ数分で目を覚ますだろうが、周囲は何が起こったのか理解できておらず、呆然と倒れたジーンを眺めていた。

リオがカウンターに座り直して食事を再開する。

「おい！　てめぇ、ジーンに何をした！？」

取り巻きの男がリオを怒鳴りつける。

「さぁ？　酒を飲んでいるのに怒鳴るから急性アルコール中毒にでもなったんじゃないですか？」

と、演技めいて白を切ると、せっかくの美味しい食事を妨害された恨みを晴らすかのように、パンとスープをかき込んでいった。

「あ、クロエ、パンとスープのお代わりお願い」

「は、はい！」

呆然としていたクロエだったが、リオに声をかけられると我に返った。

なんとか返事をすると、慌ててキッチンの中へと戻って行く。

「おい！」

すると、ジーンの仲間の男が大きな声を出した。

「ありがとう。パン美味しいよ。危ないからキッチンに下がってな」
パンとスープを持ってきたクロエに礼を言うと、リオは溜息を吐いて立ち上がった。
「う、うん。ありがとう」
クロエはリオの指示に従い怯えた様子でキッチンへと戻った。
「何したのかって聞いてるだろうが！」
怒りの形相でリオを見つめ、男の一人が腰に差していたナイフに手をかけていた。
それを見たリオが口を開く。
「それは抜かない方がいい。それを抜けば俺も手加減はしない」
冷たい声と真剣な表情でそう告げた。
「やってみろやぁ！！！」
だが、男は既にだいぶ酔っぱらっているのか、その言葉は通じなかったようだ。
男は怒り狂ってナイフを腰から抜き放った。
もう一人の男はリオの言葉に酔いが醒めたのか少し顔が青ざめているが、自分たちから仕掛けた手前引き返すことはできず、腰のナイフに手をかけたまま固まっている。
リオが相手の踏み込んだ足を蹴りはらうと、そのまま男は派手にこけた。
手に持っていたナイフが傍で棒立ちになっていた男の太ももに突

き刺さる。

「ぐあああああ！！！」

刺された男が大声を上げてうずくまる。

転んだ男は何が起こったのか理解できておらず呆然としていたが、すぐに状況を受け入れ顔を青ざめて我に返った。

「ア、アシル！？　お、おい、てめぇ！！　何しやがる！！！」

アシルと呼ばれた男に刺さったナイフを見ると、焦ったようにリオに怒りの視線を向けた。

「何って正当防衛ですけど。貴方もひどいな。仲間を刺すなんて」

あくまでも冷めた口調で、リオが言う。

こういった手合いには冷徹に対処しなければならないことを、先日王都で絡まれたことで、リオは学習していた。

面白半分で人に害悪をぶつけてくる人間に碌な人物はいないというのが、この世界でリオが学んだことだ。

ここで非を認めれば一方的に攻め立ててくる人間もいる。

リオは心を鬼にして男を突き放した。

「なんだと！？　それはお前がやったんだろうが！」

だが、そんな言葉で納得できるはずもなく、男はリオに食ってかかった。

「それは貴方のナイフでしょう？　こんな密集地帯でナイフを抜けばこういう事態が起こるのは想定できていたはずだ。それにナイフ

を抜いて切りかかってきた以上は正当防衛くらいはしますよ」
と、温度の籠っていない冷たい視線を向けながら、リオが言った。
「まさか黙って刺されろと？」
そして、とどめを刺すように、そう告げる。
「い、いや……、でも……」
完全に酔いが醒めたのか、男の表情は青白い。
「どうでもいいけど早く止血した方がいいですよ。死にはしないですけど、放置していい傷でもないはずだ」
冷たい視線を向けて男を見下ろすと、リオはカウンターに座って食事を再開した。
さすがに今までリオを眺めてニヤニヤとしていた周囲の男達も黙りこんでいた。
「ア、アシルさん！　大丈夫ですか！？」
そこに顔色を変えた女性が駆けつけてきた。
歳は二十代中後半歳くらいか、美人だがくたびれた感じの人物である。
「がぁぁ」
女性の呼びかけにも応じず、アシルと呼ばれた男はナイフが突き刺さった太ももを抱えて、大声で悲鳴を上げている。

「い、今ナイフを抜いて止血しますから。痛いけど我慢してくださいね」

そう言うと、女性は治療のためにアシルの傷口からナイフを抜いた。

「いてぇ！」

すぐに女性が包帯を巻きつけていくが、溢れた血が白い包帯を赤く染めあげていく。

慌てふためく女性を見て、ため息を吐くと、リオは男に近づいた。

「どいてください」

「え？」

女性の戸惑うような声をリオは無視した。

そして、自分よりも一回り以上大きいアシルを部屋の端に運ぶと、リオは一度包帯をほどいた。

リオが軽々しく男を持ち上げたこともあり、周囲の者達は呆気にとられたように黙ってその様子を見ていた。

「『治癒魔法（ヒール）』」

患部に手をかざしてカモフラージュの呪文を唱えると、リオの手から光が溢れた。

リオが使っているのは魔法ではなく精霊術である。

魔法ならば幾何学文様が浮かぶはずであるが、精霊術にはそれが浮かばない。

周囲の者がその異変に気づかないように、リオは自らの身体で覆

い隠すように男を治療した。
あまり長く続けるのも憚られたので、手早く応急措置で傷口が塞ぐ程度に治療を施す。
「これで血は止まりました。とはいえ激しい運動は数日ほど控えてください」
と、周囲の者達にも聞こえるようにリオが言うが、その場にいた全員が唖然として反応がない。
「マ、マジかよ……」
「い、今の『治癒魔法』……だよな？　初めて見た……」
「あんなガキが魔道士だと……」
「ひょっとして貴族なんじゃないか？」
「ま、不味くないか……。貴族に手を出したら最悪死罪だぞ」
やがてちらほらと今リオがしたことを理解した男達が騒ぎ始めた。
そもそも平民で魔法を習得している者が少ないこともあるが、中でも『治癒魔法』は魔力制御が難しいために特に習得者が非常に少ない。
そんな魔法をまだ成人したばかりのような少年があっさりと使ったことに、その場にいた全員が驚愕していた。
酒場の空気がざわつくのを感じてリオはうんざりする。
「クロエ」
「は、はい！」
風呂に入って寝ようかとクロエに声をかけたが、怯えたようにクロエが声を出した。
リオを見る目つきも先ほどのように親しみのあるものではなかっ

た。

「ごめん。何でもない。ご飯美味しかったよ。ご馳走様」

そう言い残すと、リオは食堂を後にして部屋へと戻った。

第17話　出発

翌朝、日が昇り始めて間もなく、リオは宿を後にすることにした。

「昨日は怪我したお客様の治療をしていただいてありがとうございました。おかげで大事には至らずに済みました」

宿の女将、昨日怪我した男を治療しようとした女性が、リオに深く頭を下げて謝罪した。

「いえ、気にしないでください。この年齢で旅をしているとああいったトラブルも多いんでしょうし。女将さんが謝ることじゃありませんよ」

恐縮した様子の女将に気を使わせないように、リオは飄々（ひょうひょう）と答えた。

「その、本当は私が仲裁できれば良かったんですが、いつもの喧嘩だと思って気づくのが遅れてそれもできませんでした。本当に申し訳ありません」

酒場を経営していると喧嘩は日常茶飯事なのだろう。

とはいえ、女将の話を聞く限り刃傷沙汰はそうそうないようだ。

「いえ、あの人達を怒らせた原因は自分にも一端がありますから。まぁ絡み酒の気質があるのに大量の酒を飲んだあの人達の完全な自業自得だと思いますけど」

あの男達のことを思い出してリオが呆れた表情をする。
酔っぱらっていたとはいえ、品のある行動とはいえないように感じたからだ。

「その、あの人達も悪気があったんじゃないと思うんです。普段は良い人達で。可愛がってもらっているクロエが同年代の少年に親しげに接しているのを見て、酔っぱらっているのも重なって、ついからかいたくなってしまったというか」

女将はリオを害そうとしたあの男達の弁護をした。
きっと情に厚い人なのだろう。
だが、人によってはこういった対応は不快に感じるのだろうなと、リオは思った。

「そうですか……」

あの男達に対しては既に深く含むところがあるわけではないため、怒りはしなかったが、何とも言いようがなく、リオは曖昧な返事をする。

「申し訳ありません。それに、お風呂の代金もお支払い頂いたのに昨日の騒ぎで沐浴できなかったんですよね？　ご迷惑をおかけしましたので代金をお返しいたします」

そう言って、女将は宿代を全額返却しようと、貨幣の入った小包を差し出してくる。

「いいですよ。騒がしくしてしまいましたし、料理も美味しかったですから。ご馳走様です」

そんな女将の申し出をリオは断る。

「ですが朝ご飯も食べて行かれないようですし。その、少々お待ちいただけますか？　すぐ戻ります。代わりにお弁当を作らせていただきますので」

そう言うと、貨幣の小包をカウンターに置き、リオの返事を聞くよりも先に女将は厨房へと小走りで走っていった。

（律儀で良い人なんだろうけど、なんていうか騙されやすそうな雰囲気があるな。代金を俺の目の前に置いていくあたり無防備だし）

リオが女将に対して抱いた印象だった。

なんというか、苦労人という言葉が妙に似合う雰囲気を女将は持っているのだ。

厨房の方をふと覗くと、クロエと見知らぬ少女がエプロンをつけてリオの方を見ていた。

リオと視線が合うと、二人はサッと厨房の中へ隠れる。

（クロエと……妹か？　まだ小さいな）

見ればまだ小学校低学年程度の年齢である。

クロエもせいぜいが小学校高学年程度だろう。

あのくらいの年齢の少女でもこの宿では働かなければならないのかと思うと、女将の苦労が透けて見えて気がした。

（ここは女性三人で切り盛りしているのか？　旦那の姿は一切見かけないけど）

この宿に入ってからリオは一度も亭主の姿を見ていなかった。

厨房に籠っているのかとも思ったが、調理場は女将が主になって切り盛りしているようだ。

（まぁ、いいか）

特に自分が気にすることでもないだろうと、リオが思考を放棄したところで、女将が弁当の入った小包を抱えて戻ってきた。

「昨日の残り物との混ぜ合わせで恐縮なんですが、具材をたくさんパンに詰めておきました。クロエが早起きして焼いたので是非食べてください」

「これはどうも。ありがとうございます」

リオが笑みを浮かべて礼を言う。

「おい！　帰ったぞ！」

すると入口から見るからに酔っ払った男が宿屋に入って来て、女将を見つけるとふらふらとした足取りで歩いてきた。

「あなた！　また、朝からそんなに酔っぱらって！」

「うるせぇ！　酒は飲みてぇ時に飲むもんだろうが！」

怒鳴り散らすと、男がいきなり女将をひっぱたいた。

その様子を見てリオが驚く。

どうやらこの男が旦那のようだ。

朝帰りに酔っぱらって帰ってくるあたり、碌な主人ではないようにリオには思えた。

居たたまれない気持ちになったが、家庭の問題に第三者が口出ししても余計にややこしくなる気がして、それをする気も起きない。

「うう」

だが、殴られた箇所を押さえて女将がうずくまっているのを見ると、リオはため息を吐き、女将へと近寄り精霊術で怪我を治療した。

殴られた痛みが一瞬で消えて、女将は驚いた顔をしたが、リオが何をしたのかを理解し、礼を言って頭を下げる。

「なんだ？　何しやがった？」

リオが何をしたのかはわからなかったが、女将を庇うような行動に、旦那が不機嫌そうな顔で睨んできた。

「やめて！　この方はお客さんなの！」

慌てて女将が旦那の前に立ちはだかる。

（それじゃあまた殴られるだろう……）

リオは呆れた。

責任感が強いのはわかるのだが、不器用な女性だった。

旦那が激昂して再び女将に殴り掛かろうとすると、旦那の動きをいなして、リオはそっと頭に触れた。

「『解毒魔法（デトキシファイ）』」

すると僅かにリオの手が光り、数秒もすると旦那の目に理性が戻った。

「酔いざめの魔法です。すっきりしたでしょう？」

と、リオが冷めた口調で告げる。

「え……？　あ、ああ。すまなかった」

一瞬でクリアになった思考に戸惑ったように旦那が言う。

「謝るなら俺じゃなく、女将さんに謝ってあげてください」

呆れたような声でそう言うと、リオはチラリと女将に視線を移した。

「す、すまん」

旦那がばつの悪そうな表情で女将に謝る。

酒乱の気はあるが、酩酊していなければ無暗に暴力をふるう人間ではないようだ。

「ほ、本当に申し訳ありません！」

非常に恐縮した様子で、女将が頭を下げてきた。

「いえ、あんまり騒ぐと他のお客さんの迷惑になりますよ。お弁当ありがとうございました。それじゃ」

これ以上ややこしくなる前に立ち去ろうと決め、別れを告げると、リオは宿の外へ出た。

（まぁ何の解決にもなってないんだけどな）

本来ならば当事者で解決すべき問題だったにもかかわらず、一時の偽善に駆られて行動してしまったことを少しだけ後悔する。
朝から少し憂鬱な気分になってしまった。

「肉まんでも食うか」

気分を入れ替えるため、昨日食べそびれた懐かしの郷土料理を食べることにした。
女将からもらった弁当はお昼に頂くつもりだ。
市場の朝は早い。
そもそもこの世界の人間の行動開始時間が早いのだ。
商人や農家の人間でなくても、遅くとも朝六時には起きるのが一般的だ。
すでに市場には朝食を販売する露店が立ち並んでいて、良い香りがそこかしこから立ち上っていた。

「肉饅頭を二つください」
「はいよ！」

大銅貨を二枚支払って肉まんを受け取る。
ほかほかと湯気を立てているが、見た目は肉まんというよりはお焼きに近かった。生地のもっちり具合も少々物足りない。
想定外なジャブを喰らったが、とりあえずは食べてみようと口の中に含む。
すると、塩で味付けされた豊満な肉汁の旨味が口の中に広がった。
美味い。だが、肉まんというよりはハンバーグに近い。リオはそんな感想を抱いた。

（レシピを知らない……。いや、味付けに使う生姜やオイスターソース、それにごま油がないのか）

物足りない味の原因を考察する。
美味しくないわけではない。
だが、期待していた味と異なっていたために少しだけ落胆した。
肉まんのレシピはリオも知っている。
いっそのこと、旅をする間に自分で世界各地の素材や調味料を集めて作ってみようかという考えが、頭の中に浮かんだ。

前世では一人暮らしをしていたこともあり、料理は数少ない趣味であり、レシピも頭に色々と入っている。
そのおかげで、各ジャンルの本職には及ばないものの、材料さえあれば一通りの食事は作ることができる。
人間以外の人族が存在したり、地球には存在しない生物が多数存在したりするこの世界であるが、地球と同じ動植物も数多く存在する。
もしかしたらこの地域にない食材でも他の地域にはあるのではないかと想像を膨らませた。

（片手間で探してみるか）

旅をする間に立ち寄った場所で見慣れた食材があれば、その種を持ち帰ろうとリオは考えた。
そんなことを考えながら東の通行口から都市の外へと出る。
森の中を縫うように街道が続いているが、リオはわざわざ街道から外れて森の中へと入っていった。
ガルアーク王国内であれば指名手配はされていないようであるが、リオは通常の人間族の移動速度とは比較にならない程に速く移動していく。
移動速度を上げるなら人目に付かない場所を移動した方が良いだろうと思ったのだ。

まだ朝も早いために森の中には霧が立ち込めている。
いつもよりはややゆっくりと、だが視界の悪さをものともしないような速度で、リオが走りだす。
リオは靄がかかった視界の中で迫りくる木々の群れを巧みに避けていった。
そんな中でリオの視界に人影のようなものが写った。
進行方向に真っ直ぐ三十メートルも進んだ位置だ。
その人影は地面にうつ伏せになって倒れている。

（……死体か？）

滅多にいるわけではないが、都市の近くでも、森の中に入ってしまえば魔物や肉食動物がいることはある。
そういった生物に運悪く襲われた人だろうかとリオは思った。
倒れている人影に近づくと、全身を覆い隠すようにローブを羽織っていた。
大きさからして、リオよりも年下の子供だろう。

（……子供。行き倒れか？　なんだ？）

疑問は覚えたが流石にそのまま放置するのも後味が悪い。
仕方なくリオは声をかけることにした。

「おい、大丈夫か？」

揺さぶってみるが反応はない。
顔が見えるように抱きかかえると、肌のぬくもりがローブ越しに感じられた。

（生きてはいるみたいだな）

ひとまず安心して顔を覗き込むと、フードから少女の顔が覗けた。

（っ！？）

突如、少女が目を開ける。

同時に僅かな殺気に気づいた。

リオが少女の手元に視線をやると、その手には刃渡りの長い一本のナイフが力強く握られていた。

第１８話　暗殺者の少女

少女のナイフを目にして、リオがとっさに身体を捻る。
だが、少女の腕が蛇のようにうねると、軽鎧の隙間から、鋭いナイフがリオのわき腹に突き刺さった。

「っ」

グサリ、と刃物が身体の中に入ってくる感覚に、リオが思わず顔を顰める。
とっさに少女を突き飛ばすと、少女と一緒にナイフがリオのわき腹から抜け、緑の衣類が血で滲んだ。
少女が離れていくのを確認し、少女の行動に対応できるようにバックステップを踏んで距離を保つ。
突き飛ばされたことで少女の態勢が崩れ、顔を隠していたフードが外れてその容姿が露わになった。
少女の頭に狐の耳が生えているのを見てリオが目を丸くする。

（獣人！　っ？）

初めて見た獣人族に驚く一方で、刺された痛みとは別に、熱のような倦怠感が腹部に走ったのを、リオは感じた。

（これは……毒か）

すぐにナイフに毒が塗られていたことに気づく。
どうやら速効性の毒のようだ。
全身に毒が回りきる前に、患部に手を当てて精霊術により解毒と

治療を開始する。
少女は、リオが倒れて動けなくなるのを待っていたが、逆にリオの顔色が良くなっていくのを見て驚くと、勢いよく足を踏み出して走り出した。

（速い！）

少女の走る速度にリオが驚愕する。
少女の速度は今までリオが見た中で一番速い。
そこらにいる騎士が『身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）』を使用しても敵わないだろう。

まだ刺された部位と身体に不快感はあるが贅沢は言っていられなかった。
少女から漂う殺気を吹き飛ばすように魔力を放出し、瞬時に身体能力と肉体を強化すると、リオは真横に飛び出した。
少女もそれに反応して進行方向を変える。
走りながら距離を詰めてくる少女の脚を狙って、リオが手投げナイフを放つ。
少女は、放たれたナイフを避けるために飛び上がると、手ごろな木の枝に掴まり、そのまま逆上がりの要領で身軽に木の上に立った。

今度はリオが跳躍して少女に対して間合いを詰める。
それは突風のように迫る強烈な突進だった。
慌てたようにローブの中に手を突っ込むと、懐から手投げナイフを三本ほど取り出し、少女はリオに向けてそれを投げつけた。
リオは、鞘から剣を抜くと、少女の放った手投げナイフを受け流すようにすべて弾き、再び剣を鞘に収めた。

足場の悪い木の上でリオと相対することを逃れるように、少女が

木の枝から素早く降りる。
跳躍により生み出された勢いを殺すように、リオは少女が立っていた木の枝に飛び込んだ。
その運動量によって枝をへし折ると、リオはそのまま前方に進むように落下していく。
地面に着地したところで、少女がリオに近づきナイフを突き出してきた。
少しでも掠れば毒が身体を蝕むだろう。
少女のナイフの軌道を逸らしながら、リオがカウンターで少女の顎に当たるように掌底を放つ。
だが、少女は頭をズラすことでリオの拳を避けた。

（すごいな。まだ子供なのに身体能力が人間族とは段違いだ）

リオは戦いながら少女の強さに感心していた。
負けるとは思わないが、少女の身体能力は強化したリオに匹敵していた。

（だが動きが雑だ）

確実に負けることはないと断言できる。

（いや、それも慢心か……）

勝負に絶対はない。
前世で鍛えた古武術に精霊術があればそうそう不覚をとることはないと、リオは薄々思っていた。
実際、それだけ精霊術のアドバンテージは大きい。
だが、今回はそれが油断に繋がり、刺されるに至った。
力を持っていてもそれを使う前に不意打ちされたら意味はないの

だ。
確実に勝利を得るために、少女の動き一つ、一つをつぶさに観察し、少女が突き出してくるナイフをリオが正確に捌く。
少女が打ち込む攻撃をすべて素手でいなし、リオが打撃を打ち込んでいく。
少しずつ少女は押され始めていた。
リオとの地力の差が現われてきたのだ。
今のリオは殺傷性のある攻撃を極力使わないようにしている。
精霊術を用いれば勝負はとっくについていたはずだ。

「っ」

少しずつ少女の顔に焦りが浮かんできた。
少女もリオに敵わないことを薄々と察したのだろう。
焦ったようにリオの心臓めがけて少女が突きを放つ。

「うがっ」

だが、リオは僅かに体を捻ることでそれを躱し、右拳で少女の腹に掌底を打ち込んだ。
少女の口から鈍い悲鳴が漏れ、意識が飛びかけてバランスを崩したところで、リオが左手で少女の頭を右から左へと押し込む。

「がはっ」

少女の身体が地面へと勢いよく叩きつけられた。
手に持っていたナイフを弾くと、リオは少女を仰向けの状態にして拘束した。
少女は、暴れようと全身に力を入れたが、自身の身体が全く動か

ないことを悟る。

「ここまでだ。言葉は解るか？」

と、少女の胴体と両手に体重を押し込んで、リオが言った。

「ひっ、ひっ、ひうっ、うううっ、ひぐうううっ」

すると、何かに怯えたように顔を歪ませ、全身を震えさせて足をじたばたと動かし、狂ったように、少女は泣き出した。

「うぐうううう……っ」

トラウマでも刺激されたかのように、悲鳴にならない声を上げて、少女は泣いている。

「おい。落ちつけ」

余りに必死な様子にリオが宥める。

「うううっ。はな、はな、じてっ！　や、やめで！」

とても話ができそうにない少女に、リオは小さく舌打ちをする。少女をうつ伏せにさせると、首筋に手刀を当て、一度、意識を失わせた。

「……どんな育ち方をしたらこうなる？」

と、怪訝な表情を浮かべながら、気絶した少女を眺めて言った。戦闘中の機械のような冷酷さが嘘のような情緒不安定さだった。

組み伏せられた瞬間に、何かを極度に恐れ出したようである。

「これは……」

リオは少女に首輪が嵌められていることに気づいた。

「服従の首輪……、奴隷……か」

服従の首輪とは奴隷に着けられる魔道具である。

これをつけると奴隷は主と定めた者の命令に逆らうことが難しくなる。

何かを命令されるとその命令に従おうという気持ちが湧き上がり、命令に反した行動をとろうとしたり、特定の呪文を唱えられると、身体に激痛が走るのだ。

『解呪魔法（ディスペル）』という魔法を解除する魔法は存在するが、習得の難しい上級魔法であり、所有者の許可なくそれをすれば死罪となる。

また、装備者が自ら解除の魔法をかけることはできない。

そういった魔道具だ。

先ほどの少女の泣き方は異常だった。

おそらく組み伏せられることに極度のトラウマを抱いているのではないかと、リオは考えた。

しかし、完全に動きを野放しにしたら、主の命令を遂行しようと、再びリオを殺しにかかるだろう。

苛立ったようにため息を吐くと、リオは、バックパックから縄を取り出し、少女の手足を縛った。

腰からナイフを抜き去り少女に突きつけると、少女を揺さぶり、目が覚めるのを待つ。

「ん……、っ！？」

リオに気づくと、ビクッ、と反応し、少女が動き出そうとする。
だが、自らの身体が動かないことを知ると、必死に縄を外そうとし始めた。
そこにナイフをちらつかせ、リオが少女と至近距離から視線を合わせる。

「んー！」

どうやら今度は先ほどのように会話もできないわけではなさそうである。
相変わらず目に光はないものの、さっきのように理性を失っているわけではない。

「目が覚めたか？　死にたくなければ俺の質問に答えろ。質問の答えがイエスなら首を縦に振れ。ノーなら黙っていていいぞ」

淡々とそう告げると、首筋に手をあて、顔を覗き込み、リオは少女の仕草を観察し始めた。
最初から少女が本当のことを言うとはリオも思ってはいない。
それゆえの行動だ。
自分を見透かすような行動に、少女は怯えた様子でリオのことを見ていた。

「お前は奴隷だな」
「……」
「主はベルトラム王国の貴族か？」
「……」
「そいつに命令されて俺を殺しに来た」
「……」

少女は沈黙し続けている。
だが、これまでの質問の答えはすべてイエスだと、リオは踏んでいた。
そして、リオが聞きたいこともすべて聞くことができた。
もう少女に用はない。
後はこの少女をどうするかである。

「……奴隷から解放されたいか？」

ため息を吐いた後に、リオはそう言った。

「っ……」

少女の瞳にほんの一瞬だけ僅かに光が戻ったのを、リオは見逃さなかった。

「そうか」

少女がどこか窺うような視線でリオを見ている。
リオの真意が理解できないといった感じだ。

「奴隷から解放された場合、俺のことを殺すつもりはあるか？」

「……」

しばしの沈黙の後、少女は顔をゆっくりと横に振った。
脈、視線の動き、呼吸、発汗、少女の反応すべてを、リオはつぶさに観察する。

「そうか……。俺がお前を解放すれば人間族の国では逃亡奴隷扱い

されることになるがそれでもか？　……どうだ？」

少女は周囲をキョロキョロして戸惑った様子を見せたが、リオの真剣な表情に見ると、最終的に小さく縦に頷いた。

少女の返答を確かめ、リオは少女の首筋に右手をかざした。

リオの手に小さな光が溢れると、少女の首輪が外れて地面に落ちる。

「……」

外れた首輪が少女の目に映る。

少女は呆然としていた。

しばらくすると少女は首の感覚を確かめるように顔を動かし始めた。

「ぇ……、ふぇっ、ふぇ、ひっく、ひっく、うぇえええん」

そして、首輪が完全に外れていることを理解したのか、突如、少女が泣き出した。

その光景を見て小さなため息を吐くと、リオはナイフを腰に収めた。

少女が泣き崩れて十分以上が経過すると、ようやく泣き疲れてきたのか、泣き声が収まってきた。

「そろそろいいか」

リオが少女に声をかける。

少女は、ビクリと反応して、リオのことを見つめた。

「毒は拭いておいたが、お前のナイフは返す。もう逃げていいぞ」

攻撃した部位を軽く治療してやり、そう言うと、リオは少女を拘束していた縄を切った。
ついでに少女の装備品であるナイフを渡してやる。
「え……？」
リオの言葉に少女が戸惑いの声を上げる。
「だから、逃げていいぞ。人間の領域はお前には暮らしにくいだろうけど、亜人の領域ならそうでもないだろ」
と、少女に言い聞かせるように、リオは言った。
「ここから東に行けば亜人の領域がある。俺も東に向かっていたんだが、あいにくと服が破れたからな。一度都市に戻ることにする。ここでお別れだ」
そんなリオの言葉を、呆然と少女は聞いていた。
奴隷の首輪をつけたままだと少女はリオのことを殺そうとし続けるだろう。
その場合はリオも少女を殺さなければならない。
だが、首輪がなければ話は別だ。
殺す必要がないのなら殺すこともない。
そう考えたから少女を解放した。
この少女が一人で生きていくことができるかどうかまで、面倒を見るつもりは、リオにはなかった。
獣人族は同胞に対して情に厚いという話をリオは聞いたことがあ

った。
それならば彼らと合流した方が彼女にとって良いだろうとも思っている。

解放した少女にそう告げると、リオはアマンドに向けて歩き出した。
もはや少女にリオに対する敵意や殺気はない。
少女は、呆然と立ち尽くして、リオが立ち去るのを眺めていた。

アマンドへ戻り、服を買うと、リオはそのまますぐに都市を出た。
再び街道を抜け出し、森の中へと入って行く。
リオは人の目がなくなったところで移動速度を一気に上げた。
木々の隙間を縫うように進んで行くと、いきなりリオが立ち止まった。

「……出て来い」

先ほどからずっと後ろをつけている人物に向かって、リオが呆れたように声をかけた。
そこにいたのは先ほどの狐獣人の少女だ。
声をかけられたことに少し驚いたようだが、少女は恐る恐る姿を現した。

「どうした？」

何の用かと、リオが尋ねる。

「あ、あの、東、行く、一緒……」

少女の言葉にリオが一瞬だけ硬直する。

たどたどしい喋り方たが、伝えたいことはリオにも理解できた。
だが、少女の真意がリオには理解できなかった。
どうして少女はこのようなことを言うのだろうか。
ひょっとして自分が良い人間だとでも勘違いしているというのか。
そんなことをリオは考える。

「あのな、俺は善意からお前を助けたわけじゃないぞ。お前を連れていくつもりもない」

と、少女の勘違いを正すようにリオは言う。
殺人に抵抗感を抱いていた。
罪悪感を抱きたくない。
そういう自分勝手な理由から、少女を解放した。
リオにとってはそれだけのことなのだ。

「……行きたい、です」

消え入りそうな声で少女が言った。
それが聞こえてしまったリオが、小さくため息を吐く。

「俺は人間だぞ。自分勝手な存在だ。お前を奴隷として扱っていた連中と同じなんだぞ？」

リオの言葉を聞いて、少女が首を左右に振る。

「嫌な感じ……しない、です。変な臭い、も、しない」

と、少女はリオを指差して言った。
変な臭いと聞いて、リオは少しだけ疑問に思ったが、少女にはリオを信用するに値する根拠になるらしい。

「それに俺は獣人のテリトリーには入れない」

少女の意思が思いの外に固く、リオが戸惑ったように言った。

といっても、苦し紛れの理由ではない。

同胞を奴隷として扱っていることから、人間族に恨みを抱いている獣人族は多いはずだ。

リオが獣人族の少女を連れてそこに入っていけば、高確率で外敵認定されることは容易に想像できた。

「じゃあ、そこまで、一緒……行きたい……です」

と、どこか強い意志を感じさせるように、少女は言った。

少女は今までずっと隷従して生きてきた。

同時に、奴隷から解放されたいと心の中でずっと思っていた。

だが、少女は今までずっと他者の命令を受けて生きてきたのだ。

いざ自由になってもどうすればよいかわからなかったのである。

少女は、リオが都市の中に入ってからも森の中をうろうろと歩き回り、リオが都市から出てくると、何となくその臭いを察知して後をつけてきたというわけだ。

左手で頭を掻き毟り、小さくため息を吐くと、リオは観念したように開口した。

「……好きにしていい。ただし、獣人族のテリトリーに入ったら別行動だ。わかったか？」

このまま後ろをついてこられるよりかは一緒に行動した方がいいだろうと、消極的な理由を自分の中で作り、リオは少女の同行を了

承することにした。

「は、い」

少女は戸惑いながらも頷いた。

リオがそんな少女の恰好を確認する。

前に切れ目の入った全身を覆う緑のローブを纏っており、その中には色々と装備を収納しているようだ。

「食料と水は持っているのか？　それに毛布は？」

最低限の必需品を持っているかを確認する。

「食料は、もらったの、ある、少し。水は、川の、飲む。毛布は、これある、です」

ローブをヒラヒラさせて少女が言った。

それを見てリオがため息を吐く。

それだけでは旅の準備はできていないも同然である。

「わかった。食料も水も俺が用意してやる。となるともう一回あの都市に戻った方が良さそうだな……」

出たり入ったりを繰り返すことを億劫に思うが、同行を許可した以上は世話を見てやらなければならないだろう。

「少しここで待ってろ。都市に行ってお前の必需品を買ってくる。そうだな、一時間で戻ってくる。わかったか？」

言い聞かせるように少女に語りかける。

おずおずと少女が首を縦に振るのを確認すると、リオはアマンドへ向けて歩き出した。

「そうだ、名前はなんていうんだ？」

ふと、思い出したかのように、立ち止まって振り返ると、リオは少女に名を尋ねた。

「ラティーファ」

「そうか。俺はリオだ。よろしくな。ラティーファ」

第19話　交流

ラティーファの野営装備と追加の食糧を買って森の中に戻って来ると、二人は東へ向けて走り出した。

ラティーファは『身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）』だけを教えられて習得しているようだ。

この魔法は有益だが問題点も多い。

まず、リオのように肉体をも強化できるわけではないので、長時間の使用により強化された身体能力に肉体がついていけず悲鳴を上げることが多々ある。

また、使用中は常時魔力を消費していくので燃費もあまり良くない。

もっとも、これは精霊術による強化も同様に抱える問題ではあるが。

その点、獣人族は人間族よりも柔軟で強靭な肉体を持っているために『身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）』との相性が良い。

保有魔力もラティーファはリオが知っている限りでは断トツに豊富であったために、リオのように長距離の移動に利用できるくらいに持続して強化を施すことが可能である。

魔法で身体能力を強化した時の最高速度はリオに匹敵しうるラティーファだったが、持久力はあまりないようだった。

三十分も走り続けると息切れを起こす。

リオは、移動速度を少し緩め、ラティーファがついて来られるくらいの速度で移動していくことにした。

また、時間はかかるが、小まめに休憩もとってやった。

「ほら、水だ」
彼女に買ってあげた水筒に精霊術で水を注ぎ渡す。
「ありがと、です」
ラティーファが小さな口でゴクゴクと水を飲んでいく。
リオもラティーファに向き合って自分の水筒に入った水を飲む。
ぐう、とラティーファの胃袋から悲鳴が聞こえてきた。
ラティーファへとリオが視線を向けると、勢いよく首を横に振った。
その様子を見て、リオが苦笑する。
「昼にするか。……ほら」
アマンドの宿で女将からもらった弁当のパンを調理用のナイフで切り分けると、ラティーファへと渡した。
ところがラティーファは戸惑ったように差し出されたパンを見た。
そして、キョロキョロとリオとパンを行き交う様に見ている。
「どうした？」
「食べて、いい、ですか？」
と、少し怯えた様子で尋ねた
ラティーファは常に主人の顔色を窺い生きてきた。
明確な命令がなければ何もできないように調教されてきたのだ。
ご飯を差し出されても食べていいと言われなければ食べることはできない。
それをして躾を受けたこともある。

勝手に何かをすれば怒られる、という恐怖心から、ラティーファは何をするにしても他者に指示をまず仰ぐという依存症のような状態になっていた。
いわば他者の意見に従うことで精神の自己防衛を行っているといえ、その習性が奴隷から解放された今でも彼女に染みついてしまっているのだ。
奴隷から解放されてリオに付いていこうと思ったのも、そういった精神の自己防衛作用から来る当然の行動であった。

「遠慮しなくていい。食べていいんだ」

リオは、ラティーファの心の病ともいえる依存症についてまで察したわけではないが、命令を受けることが習慣と化していたのであろうと察し、優しい声色でゆっくりと言い聞かせた。

恐る恐るラティーファがパンを口に含む。
その味を確かめると、今度は慌てたようにパンにかぶりついた。
与えられた食事は特別に豪勢というわけではない。
だが、奴隷として生きてきた彼女にとっては今までで最高の御馳走であった。

「はく、はくはく、っぐ、はぐ、ひっぐ、うっぐ」

しゃぶりつく様にむしゃむしゃとパンを頬張っていると、ラティーファは食べながら泣き出してしまった。

「とったりしないからゆっくり食べろ。身体に悪いぞ」

泣きながら食事をするラティーファの背中を、リオがあやす様にゆっくりとさすってやった。

「うっ、う、ご飯、ひっぐ、餌だって、お兄様、っぐ、あいつ、毎日、私に、うう」

今までの食事のことを思い出し、ラティーファの鳴き声が強まった。

いったいラティーファは食事の度にどのような扱いを受けていたのだろうか。

それを想像してリオは顔を歪めた。

ラティーファがリオの身体に顔を埋めると、リオは、そっと頭を撫でてやり、ラティーファが落ち着くのを待った。

「獣人は同胞を大切にする種族だと聞いた。彼らの所に行けばラティーファのことも歓迎してくれるはずだ。そうしたらもうそんな思いをすることはないさ」

泣き止んだラティーファを安心させるため、何を言うべきか悩んだリオは、そう言った。

「そう、なんですか？」

ラティーファが不思議そうな目でリオを見上げる。

「ああ、きっとな。人間族の国よりはずっと良い場所だよ」

ラティーファから視線を逸らし、どこか遠くを見るようにリオは言う。

「さて、まだ明るいからな。そろそろ動くぞ。どの程度進めば獣人族のテリトリーに入るかはわからないが前に進むしかない」

胸に抱いた何らかの感情をかき消すように、リオはラティーファに出発を促した。
ここに立ち止まっていても何も解決するわけではないのだ。
身体を動かしたい気分だった。
ラティーファはリオの顔を見て小さく頷いた。

それから数時間程は移動と休憩を繰り返した。
すれ違う魔物達はほとんど無視している。
いちいち相手にしていたら進行速度は大幅に遅れるからだ。

「今日はここまでだ。ちょっと待っててくれ」

陽が傾き始める前に野営に適した窪地を発見すると、リオはラティーファに停止するように指示した。
手慣れた様子で草木を集めると、リオは簡易テントを作りだす。
草木のテントは地球に暮らす現代人からすれば中で寝るには少々心理的に抵抗のある外観だが、魔物や獰猛な生物が数多く存在するこの世界ではメリットが多い。
草木しか用いていないので自然に溶け込みやすいのだ。
しかも、臭いもある程度ごまかせる。
さらに、夜の森は冷え込みやすく、天候も不安定になりやすい。
草木のテントならば、仮に雨が降ったとしても、葉を下から上へと重ねるように置くことによって水が漏れにくくなる。
風雨を凌げるだけでも体力の消耗度合いは大きく異なるのだ。
また、常に木々の隙間から空気の換気がなされるので室内は意外と快適な環境が保持されるし、ナイロン製のテントと異なり中で焚火をしても火事が起きにくく室内に煙が充満することもない。
あっという間に寝床を作ってしまったリオに、ラティーファが尊敬の眼差しを送った。

「ちょっと食事を作ってくる。出来たら呼ぶからその中で待っていていいぞ。鼻が利く分、俺よりも索敵範囲は広いだろうから異常があったら迷わず教えてくれ」

ラティーファはコクリと頷いた。

それを見てリオは野営地から離れる。

本来、野営において大量に臭いを発生させる料理は望ましくないが、前世で美食に慣れ親しんだリオとしては味気ない食事を食べるつもりはなかった。

そこで、野営地から離れた場所で料理を作り、食事をとることにした。

適当な場所を見つけると、リオは調理を開始した。

精霊術を使って水を創り塩と一緒に鍋に入れる。

作るのはパスタだ。

拾った木々に火をつけて鍋を温める。

同時に、パスタを茹でている鍋の中に収納できるワンサイズ小型の鍋にも、水を入れて火で温める。

味付けはアマンドで購入した香辛料がある。

また、移動中で食べられる野草も適宜積んでおいたので、栄養バランスにも配慮している。

鍋が暖まるまでに野草を水洗いして、食べやすいサイズに自前のナイフで切っていく。

野草を切り終えると、今度は保存食の干し肉を細かく切り刻んだ。

嗅覚の優れていない魔物までもがやって来ないように、定期的に精霊術で風を生み出して臭いを上空に散らす。

貴族の旅でも野営でここまで本格的に料理は作らないだろうと思

われる贅沢さだ。

「ん？」

近寄ってくる気配を察知して振り向くと、匂いに釣られてラティーファがやって来ていた。

鼻をひくひくと動かしている。

リオが苦笑しているのに気付くと、恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「ほら、スープパスタだ。味付けはオリジナルだけどな」

中身の入った容器をラティーファに差し出す。

リオとしてはスパイシーな味が好みだが、ラティーファが苦手かもしれないのであえて子供でも食べやすい味にしてある。

「……『スパゲッティ』？　これ、『スパゲッティ』、ですか！？」

容器の中身を見て、ラティーファが驚きを隠せないように声を出した。

「あ、ああ……、食べていいぞ」

戸惑ったようにリオが返事をする。

リオの許可を得たラティーファは目を輝かせてパスタを食べ始めた。

ラティーファはフォークを上手に使って、まるでパスタを食べ慣れているかのように、スープの中のパスタを巻き取りながら食べている。

リオはそんなラティーファのことをじっと見ていた。
パスタはこの世界では元から存在しなかった食材だ。
それをこの少女は『スパゲッティ』と言った。
奴隷であったラティーファは食事にフォークを使っていたとも思えない。
それなのにパスタをどうやって食べたらいいのかを知っている。

（どう考えても転生者……だよな）

そうとしか思えなかった。
つい先日に別の転生者の存在を発見したと思ったら新たな転生者の存在である。
しかもこうして対面までしている。
リオは奇妙な巡りあわせに戸惑っていた。

「はふ、はふはふっ」

熱いパスタをラティーファが必死に食べている。

「熱いからあんまり急ぐとやけどするぞ。ほら、パンがそのままだと固いからスープに浸して食べるんだ。そうすればスープも少し冷めるしな」

リオがラティーファに保存用の固いビスケットのようなパンも勧める。
ラティーファがリオの指示に従いパンをスープに浸して食べると、その味に満足したように笑顔になった。
リオはラティーファの精神年齢について測りかねていた。
これまでの交流からして、どう考えてもラティーファは見た目相応の精神年齢しか持ち合わせていないのだ。

前世で相応の社会経験を積んでいるようには思えない。

（演技……、いや、そんなことをする必要はない。……なら前世でも幼かった？）

リオが一つの結論にたどり着く。

その可能性は非常に高いと考えた。

ゆっくりとパスタを味わいながらラティーファのことを考える。

リオの推測が正しければ、ラティーファは、どんなに成長していても小学校高学年程度の年齢で、ある日いきなり奴隷になってしまったことになる。

ラティーファがいつ記憶を取り戻したのかはわからないが、一桁の年齢であることは間違いない。

一桁の精神年齢と小学生の精神年齢を足して、単純に合計した年齢の精神年齢になるとは思えなかった。

（だとすれば転生者でこの幼さも納得できるか）

リオはラティーファの過酷な運命を想像して複雑な気持ちになった。

リオはまだよかった。

孤児というスタートも決して選びたいものではないが、運が良かったのか悪かったのかは別にして、まともな教育を受けて、こうして生きることができている。

冤罪で犯罪者にはされているが、奴隷のように自由までも拘束されて生きてきたわけでもない。

また、世の不条理を受け入れられるくらいには精神も成熟していた。

だが、ラティーファは違う。
現代日本で豊かな生活を送っていた幼い子供が、いきなり人権をはく奪されて、ペット扱いされたのだ。
おそらく想像を絶する虐待も受けてきたのだろう。
年齢に似合わぬ残酷性も持ち合わざるを得ないような訓練も受けさせられたはずだ。

それでも、前世の記憶を取り戻すまでは、奴隷として生きることを当然のように受け入れていたのかもしれない。
ラティーファは生まれながらにして奴隷だったのだから。

だが、前世の記憶を取り戻した以上は、そのまま奴隷として生きることを当然のように受け入れることができるはずがない。
奴隷から解放されたい、元の世界に帰りたい、間違いなくそう思いながら生きてきたのだろう。
きっとトラウマという言葉では言い表せない程の心的ダメージをラティーファは負っているはずだと、リオは推測した。
生まれながらの奴隷ならば自由意思を持つことはない。
最初から自由意思などないのが当たり前だからだ。
だが、記憶を取り戻した彼女は自由意思を手に入れてしまった。
それを幸運というべきか不幸というべきか。

（情緒不安定なのはそういった理由もあったからか……、くそがっ）

ラティーファの境遇を想像し、リオは胸糞が悪くなった。

ラティーファは一心不乱にリオが作った料理を食べている。
前世のことを思い出したのか、いつの間にか目に涙も浮かべていた。
最後の一口を飲み干すと、ラティーファは空になった容器を名残

惜しそうに舐めていた。
リオが空になった容器におかわりを掬ってやる。
するとラティーファはリオに笑みを浮かべて頭を下げて食事を再開した。
リオはそれ以上食事をする気にもなれず、最初の一杯を平らげると、鍋の残りをすべてラティーファにあげた。
リオは、自らが転生者であることを、ラティーファに伝えることはしなかった。

第２０話　襲撃

ラティーファと出会い、アマンドを出発してから一ヶ月が経過した。
現在、リオとラティーファはガルアーク王国の領域を抜け出し、未開地の奥深くに入っている。
「お兄ちゃん！　お昼ご飯！　何！？」
昼休憩になると、ラティーファが笑顔でリオに昼食の内容を尋ねた。
「昼はあんま凝ったものは作らないぞ。せいぜい保存食を加工してサンドイッチにするくらいだ」
食欲旺盛なラティーファにリオが苦笑して答える。
最初こそ怯えた様子のラティーファだったが、この一ヶ月でリオと接するうちにだいぶ明るくなった。
道中ではリオにすっかり懐き、いつの間にか、リオのことを、お兄ちゃん、と呼ぶようになっているほどである。
「お兄ちゃんの料理！　何でも美味しいから好き！」
今では言葉も少しずつ明瞭になってきている。
リオと会話をして口数が増えたことで急激に発音を覚え始めたのだ。
「今日もお兄ちゃんと一緒に寝る！　いい？」

サンドイッチを作り始めたリオの顔を覗き込むように、ラティーファがリオと一緒に寝ることをねだってきた。
ラティーファは眠っている間にうなされることが多い。
酷い時には泣き出すほどだ。
ラティーファがリオに懐くようになったのは、夜中に何かに怯えるように身体を小刻みに振るわせているラティーファを、リオがあやしたのも大きい。
今では毎晩のようにリオに抱き付いてきている。
リオに抱き付いて寝ていればラティーファはうなされなかった。

「……ああ、いいよ」

リオは現状に悩んでいた。
当初はここまで接近を許すつもりはなかった。
既に獣人族のテリトリーに入っていてもおかしくはない。
そうすればラティーファとの別れがやって来る。
だが、気がつけば、手遅れなくらいに、ラティーファはリオに依存していた。
仮にこの状態で少女に自らが転生者であると告げた時のことを想像すると、ゾッとした。
それは奴隷として染みついた習性なのか、それともずっと孤独に生きてきたことの反動で触れた優しさに溺れてしまったのか。
いずれにしてもこのままでは別れが来た時にラティーファは簡単に離れないのではないかと、リオは懸念していた。

（まぁ、それでも案外簡単に離れていくのかもしれないけどな……）

どこか嘲笑するように、リオは内心でうそぶいた。
人と人の別れは唐突だ。

どんなにお互いの距離が近くとも、どんなにお互いがそれを拒絶しても、それを避けることができない時がある。
そして、その時、お互いの想いが等価値であることはない。
一方がどんなに相手のことを想い続けても、他方が自分のことを想い続けてくれるとは限らない。
多かれ少なかれ、人はそのようなものだと、リオは思っている。

だから、別れを寂しがってはならない。
相手に過度の気持ちを抱いてはいけない。
相手に期待してはいけない。
少なくとも自分の方から別れを惜しむことはないはずだと、リオは自分自身に言い聞かせた。

「それにしてもやっぱりあの樹すっごく大きいね！」

思考に没頭していたリオを現実に引き戻すかのように、ラティーファがリオに話しかけてきた。
木々の隙間から映るはるか遠方にある巨大な大樹を、ラティーファが指差している。

「そうだな。ただの樹とは思えないけど……」

その存在に気づいたのは昨日からだ。
気が遠くなるほどに広大な森の中に、ポツリとそびえたっている一本の大樹があった。
最初は遠目から見て小さな塔のようにしか見えなかったが、接近するにつれてその大きさと存在感を実感していた。
まるで天空に突き刺さるかの如く、圧倒的な存在感を放ち、その樹はそびえ立っている。
何故かリオはその樹に惹きつけられていた。

何とも言えぬ心のざわつきをリオは感じているのだ。
「もう少し近くまで行ってみるか？」
「うん！　行ってみたい！」
ちょっと寄り道してみるくらいならいいかもしれない。
そう思ってラティーファに聞いてみると、彼女は笑顔で即答してきた。
「じゃあ昼を食べたら行ってみるか。ほら、できたぞ」
会話しているうちに出来あがったサンドイッチをラティーファに渡すと、ラティーファはそれを嬉しそうに頬張り始めた。
それを見てリオも食事を始める。
保存食のパンはフランスパンよりも固いが、食材を入れて味をつけて食べるのならば、歯ごたえがあってなかなか捨てたものではない。
その出来に満足し、数分ほどかけてサンドイッチを食べ終えると、リオとラティーファは巨大な樹へ向けて移動を開始した。
「お兄ちゃん！　さっきからここらへんに何か知らない匂いがある！　それも複数！」
移動を開始してから数時間、いつものように走りながら順調に進んでいると、ラティーファがそんなことを言い出した。
「知らない匂い？　動物か魔物じゃないのか？」
「違う。そういった生き物の臭いはもっとツンとする感じ。身体を洗っていない人間とはまたちょっと違うけど」

いまいち伝えたいことはよくわからないが、ラティーファの中には何らかの基準があるようだとリオは判断した。

「それが何かある程度特定はできないのか？」

「……人が密集しているみたいに混ざり合っていて、人間とは違うような。でも少し似ているような……、なんか懐かしい気がする。お母さんじゃないけどそんな感じ」

ラティーファの言葉は要領を得ないが、その鼻はリオとは比べ物にならないくらいに当てになる。

その鼻が何らかの存在を感知したのだ。

無視するわけにはいかなかった。

「その臭いの主がどこにいるかわかるか？」

リオがそう聞くと、ラティーファは周囲の臭いを嗅いだ。

「あっち！　どれくらい離れているかはわからない……。でも少ししか臭いが残っていないから、ここに来てから結構時間が経っているかもしれない」

その言葉を聞いてリオは考えるような仕草をし、やがて口を開いた。

「なるほど、な。そろそろいい時間だし、……とりあえず今日はここまでにしておくか」

「わかった！」

それから、リオとラティーファは適当な野営スポットを発見し、ラティーファが手慣れたように草木を集め出した。

その間にリオが野営地から離れて料理を作り始める。
最近ではこれが二人の役割分担となっていた。

リオは鍋に大麦を入れて水で数回ほど研ぐと、他の容器に一度移し、具材である保存用の乾燥肉、野草、チーズを切り刻んだ。
鍋にオリーブオイルを定量入れて火にかけると、肉と野草を入れてサッと炒めた。
そこに大麦を手でほぐして入れて加えてさらに炒めていく。
良い感じに大麦が透き通ってきたところでお湯と調味料を入れる。
やがて鍋の中身が沸騰すると、そのまま蓋をして十分強かけて炊き上げる。
火を消して中身を蒸らし、胡椒を振ればチーズリゾットの完成である。

「お兄ちゃん！　良い匂い！」

料理が出来あがったところで、寝床を作り上げたラティーファが匂いに釣られてやって来るのは、お馴染みの光景だった。

「先に手を洗うぞ」

土で汚れたラティーファの手をリオが精霊術で水を創りだし洗ってやると、ラティーファは小さく日本語で「いただきます」と言って早速料理を食べ始めた。
ラティーファは日常生活でこのように日本語を喋ることがたまにあるが、リオはあえてそれを指摘することはしていない。
出来あがったリゾットは質素だが、野営の食事としては最高級の御馳走だった。

「このリゾット美味しいよ！」

リゾットもリオが知る限りこの世界の人間族の間では存在しない料理だが、この世界の人間族のまともな料理を食べたことがないラティーファがそれを知ることはない。

「ありがとう。いつも似たような味付けばっかで悪いけどな」

本来ならば和洋中と各調味料が揃っているのが理想だが、今リオの手元にあるのは最低限の洋食向けの調味料しかない。

それでも毎日美味しいと言って自分の作った食事を食べてくれるラティーファをリオは微笑ましく感じていた。

「それを食べたら身体を洗って早く寝るか。疲れているだろうし、明日も早いからな」

「うん！」

ラティーファが笑顔で頷く。

食事を終えて、野営地に戻って、洗った鍋でお湯を沸かすと、二人は草木のテントの中で別々に身体を洗った。

可能なことならば日本式の風呂に入りたいが、旅の最中にそんな贅沢を言うわけにもいかないとグッと堪える。

不快な臭いを身体につけることがないだけマシだろう。

「お休み、お兄ちゃん」

明かりを消して真っ暗になった室内で、ラティーファがリオに引っ付いてそう言った。

異変を察知して瞬時に動けるように、神経の一部を張り巡らせて薄く意識を落とすと、リオも眠りにつく。

寝ている間に何があっても動けるようにとスラムで育っているう

ちに身に着けたスキルだった。
それが旅で役立つのだから孤児だった経験も唾棄すべきものではないのかもしれない。

それから、何が起きたのか、リオにはわからなかった。
気がつけばリオの眼前に見知らぬ少女がいたのだ。
顔の作りからして年の頃は十六歳前後だろうか。
どうやらリオは膝枕されているようだ。
何故かされるがまま、リオはその状態を受け入れていた。

その少女が実在しているのかを確認するために、リオは眼を瞬かせる。
何度目を瞬かせてもそこには彼女がいた。
どうやら本当に少女はそこに存在するようだ。

リオは驚いていた。
少女は、表情がなく、寡黙で儚げというか、実在感の薄い無機質な顔をしていた。
だが、それは何の欠点にもなっていなかった。
なぜなら、かつてこれほど美しく愛らしい少女を見たことはあっただろうか、そう感じていたからだ。
その美は圧倒的で神々しさすら放っている。
いや、美という言葉で表現することすらおこがましい。
リオはそう思った。

そんな神の芸術品ともいうべき可憐な少女が、上から覗き込むように、リオの顔を見ていた。
ふと、少女のピンクブロンドの長い髪がリオの髪をくすぐった。
それをこそばゆく感じて、リオがそっと少女から視線を外して周囲を見る。

白い、真っ白な空間だ。
それがどこまでも広大に広がっていた。
ひどく殺風景な空間だなと、リオは思った。
そして、何故だろうか、その光景を見ていると、胸が掻き毟られるように、酷く寂しく感じられた。
なんというか、酷く、酷く、不快だった。
リオは思わず顔を顰めた。
嫌なものから目を逸らす様に、リオが目の前にいる少女に視線を戻す。

『貴方は誰？』

すると、少女が透き通るように耳触りの良い神秘的な声で話しかけてきた。

――俺？　俺はリオだけど……。

不思議だ。言葉を発しようとしても、何故か声が出なかった。

『リオ、リオ……、リオ……』

だが、少女にはリオの言葉がわかったようだ。
何故かそれを疑問に思うことはなかった。
ぼんやりとした表情でリオの顔を見つめると、少女はリオの名前を刻みこむように繰り返し呟いた。

――そう言う君は誰なんだ？

リオは再び声を出さずに言葉を発した。

『……私？　私、私は……わからない』

少女がどこか困ったような表情を浮かべた。

――わからない？

『うん……』

――そっか……。

今にも消えてしまいそうな雰囲気が少女から発せられ、リオは、少女を気遣う様な、そして困ったような声を出して、そう言った。

『でも、リオと一緒にいればわかるかも……』

――俺と……一緒に？　どういうこと？

その言葉を聞いて、少女の言っていることが解らないという様子で、リオが首を傾けた。

『私は貴方と繋がっているから……。そんな気がする』

ますます意味が解らなかった。
けど、不思議と、心が温かかった。
何故だろうか、すごく安心できる。
こんな風に思えたのはいつ以来だろうか。
こんな気持ちがいつまでも続くならいい。
そんなことを思って、リオは口元がうっすらと笑みを浮かべた。

『でも、まだ眠い……』

意識が朦朧としているかのように少女の目が薄くなる。
その目を見ているとなんだかリオも眠くなってしまった。

そして、意識が再び薄れていき、ぱちり、と、リオは目を開く。
視界には草木が敷き詰められたテントの室内が映った。
何だろうか、とても深い眠りから覚めたような気がした。
何か夢を見ていたような気もする。
だが、夢の内容を思い出すことはできない。
深く眠ってしまったことを不味いと思ったが、何も異変はない。

周辺に危険な生き物の気配もないようだ。
辺りはは静かでまだまだ暗い。
実は深い眠りについていたというのは勘違いで、あまり時間が経っていないのだろうかと、リオは思った。
すぐ側に体温を感じてそちらを見てみると、ラティーファがぐっすりと熟睡していた。
少し離れるくらいなら夜泣きも大丈夫だろうと、ラティーファが深い眠りにつくように精霊術をかけ、リオはテントの外に出ることにした。

野営地に何があってもすぐに対応できる距離を保って周囲をうろつく。
なぜか心はとても落ち着いていた。
肌に当たる夜風は寒いが、頭を覚醒させるのにはちょうど良い。
明日に響かない程度に少し夜風にあたろうか、そんなことを考える。
適当に座れそうな岩を見つけると、リオは深く腰を下ろした。
特に何かを考えるわけでもなく、ぼんやりと静かな森の景色を眺

める。
夜の森は恐ろしい程に静かだった。
魔物に比べると野生の獣に襲われる可能性はそこまで高くない。
そもそも一定の知能を持つ動物ならば、やむを得ない場合を除いて、戦闘は避けるのが通常である。
野生の獣が他の動物を襲うのは狩りや子の防衛といった一定の目的がある場合だけで、積極的に戦闘を仕掛けてくるのは魔物くらいだ。
どういうわけか魔物は他の種族に攻撃的であるが、その攻撃性ゆえに気配を隠すという真似を一切してこないため、こういった野営時には索敵範囲に入ってきた瞬間に気づくことが可能である。
どれほど夜風にあたった頃か、ふと、リオは自らの索敵可能範囲の相当深くに入ってきた気配を察知した。
ここまで接近を許してしまったことにリオが驚きを感じる。
一般的な獣と比べても気配が非常に希薄だったのだ。
（……狼？）
気配の主がリオの視界に入って来る。
それは薄っすらと銀色の光を放つ一匹の大きな狼だった。
獣特有の湿った気配の感覚が存在せず、無機物的で実在感も薄い。
まるで生物ではないようだと、リオは感じた。
同時に、これと似た感覚をリオはどこかで見知っている気もした。
その狼の動きを見逃さないようにリオがジッと視線を送る。
すると、いきなり狼が発光し、周囲一帯を光の奔流が照らした。
（しまったっ！）

視界が真っ白に染まりかけ、リオは瞬時に目を閉じる。
五感のうち視覚が一時的に失われた。
だが、その他の五感は無事だ。
その時、突如、リオは索敵範囲の外から中に急接近して来る存在を感知した。
それも大量にいる。
どうやらリオの索敵範囲を察して外で待機していたようだ。
いつの間にか目の前にいた狼の気配は完全に消えている。

（この戦術的行動……、獣じゃない。ラティーファの言っていた臭いの主か）

リオは襲撃者の正体を推測した。
そして彼らがいずれ接触を図って来るということもあらかじめ予想はしていた。
だが、ここまで行動が早く攻撃的とは予測していなかった。
ラティーファが相手の匂いの残り香を察知したように、相手もリオ達の匂いを遠くから察知したのか、それとも別の方法でリオ達の侵入に気づいたのか、それについて今は考慮するべきではないだろう。
万が一のことを考え、リオは瞬時にラティーファが眠っているテントの近くへ移動する。

「おい！　待て、あんたら亜人だろ？」

声が届くであろう位置に相手の気配がやって来ると、機先を制して、リオが大きな声を発した。
戦闘中ゆえに丁寧な言葉づかいをしている暇もない。
だが、その声が聞こえていないのか、単に無視されているだけのなのか、あるいはリオの言葉を理解できていないのか、その気配の

集団の動きが止まることはない。

（人間族を警戒しているのならば人間族の言葉が解る奴がいても不思議じゃない。なら、聞こえていてあえて無視しているという可能性が高いのか？　まさか相手が俺の予想通りの連中じゃないということはない……よな）

事態を考察している間にも、集団は、殺気ではないが強い敵意を持ったまま、リオに近づいてきている。

その中から一体だけ急速に突出してリオに接近してくる個体がいた。

リオが目を瞑ったままその相手に向き合う。

「っ！？」

すると相手が驚く様子が伝わってきた。

だが、そのままリオに接近して来ている。

間違いなくリオに攻撃しようとしているのだろう。

相手の気配が直前まで来て敵意が膨れ上がった瞬間、リオは横にステップを刻んだ。

攻撃音、空気の流れを頼りに、相手が無手であることを予測する。

武器は持っていないわけではないだろうが、今のところ殺すつもりはないようだ。

「だから、待ってくれ！　あんたら亜人か？」

相手が次の攻撃行動に移る前に、リオが機先を制して口を開いた。

すると、目の前で相対している相手とは別の位置から、誰かがリオの知らない言葉で何かを叫び、その声に反応して目の前にいる相手の動きも止まった。

「その名で私達のことを呼ばないでほしいですね」
続いて、人間族の言葉でリオに話しかけてきた。
考えた通りに、人間の言語が通じる相手がいることに、リオが薄っすらと微笑む。
声の感じからすると、相手はリオと同年代程度の少女だろう。
「それはすみません。では何と呼べばいいでしょう？　獣人か、エルフか、ドワーフか」
リオが口調を改めて少女に尋ねる。
「……一纏めにする時は精霊の民と」
あっさりと謝罪したリオに、声の主が短くそう言った。
どうやら会話をする意思はあるようだとリオは判断する。
そして、今の受け答えから、この場に精霊の民を構成する種族がすべてであろうことも察した。
「ではその精霊の民に聞きます。貴方達の狙いは？」
「我々のテリトリーに侵入した存在がいると精霊が騒いでいたために撃退のために来ました。既に我々の同族を拉致しているようですね」
と、ラティーファが眠っているそのテントを睨みながら、少女が言った。
後半の台詞に強い敵意が込められていることから、どうやらリオを奴隷狩りか何かと勘違いしているようである。

「ならばその子を保護してくれるか？」
「保護する？　当たり前です！　攫(さら)っておいて何をぬけぬけと……」
相手の怒気がリオに伝わってきた。
事態の展開がややこしくなっていることに、リオは内心で舌打ちをした。
「待ってくれ。そのことで貴方達に話がある……」
リオが事情を説明しようとすると、テントの方からリオの知らない言葉で、今話している少女とは別の女の子の声が響いた。
その瞬間、リオに攻撃を仕掛けてきた存在の怒りが膨れ上がり、いきなりリオの腹部に打撃を打ち込んできた。
「がはっ」
肉体は強化していたが、会話が続いているものと油断していたリオは、不意の打撃の衝撃を吸収しきることができず、悶絶するようなダメージを負った。
（なんて馬鹿力だ……。殺す気か！？）
不意を打たれて衝撃を逃すことができなかったとはいえ、強化した肉体の上からダメージを与えてきたのだ。
おそらく薄い鉄板くらいならぶち抜く程の威力があったはずである。
リオの身体は軽々と宙を舞い、勢いよく地面に叩きつけられた。
ようやく戻り始めた視力で辺りを見渡すと、ぼんやりとだが一定の距離を保ってリオの周囲に精霊の民達が大勢いるのが見えた。

弓を構えて狙いを定めているエルフ、剣やダガーを構えた獣人、斧や鉾を構えたドワーフの姿がそこかしこに見える。
少なくとも三十人はいるだろう。
その中でもリオの近くにいるのは四人だ。
金髪のエルフと思しき少女、灼髪のドワーフと思しき少女、銀髪の狼獣人と思しき少女、灰色髪の翼獣人と思しき女性である。
前三人はリオと同年代程度で、最後の一人はリオよりも一回りは年上のようだ。
リオに攻撃をしたのは翼獣人の女性のようだ
彼女は呪い殺すかのように忌まわしい目つきでリオを睨んでいた。
他の精霊の民達も似たような視線ばかりだ。
リオをどこか非難するような、軽蔑するような、そういった類の感情が込められている。

（ここまで敵意を持たれているとは予想していなかったな……）

自身の認識の甘さにリオが苦笑する。
ラティーファと過ごすうちに、説明すればわかってもらえると、無意識に思っていたのかもしれない。
朦朧とした意識の中で、翼獣人の女性がリオを拘束しようと接近してくるのを察知した。
気合で立ち上がり、僅かに抵抗したリオだが、腹部のダメージは大きく、制圧されてしまう。
そのまま首筋に手刀を撃たれてリオは完全に意識を失う。

狼獣人の少女が翼獣人の女性に何か注意すると、慌てた様子でエルフの少女がリオの怪我の応急処置をし、精霊術を使いリオに手かせを嵌めた。
翼獣人の女性がリオを担ぎ、別の獣人が深く眠っているラティーファを抱きかかえると、彼らは揃って同じ方向に移動を開始した。

第２１話　夢の中で出会えた君と

リオは見慣れない室内で目を覚ました。
身体が風邪でも引いたようにだるく、気分は最悪だった。
状況を確かめようと、起き上がろうとすると、腹部に激痛が走る。

「っ」

すぐに精霊術で治療を施そうとして手を動かそうとしたが、手かせを嵌められていた。
しかも昔ベルトラム王国の牢屋で着けられた手かせと似たような効果があるようだ。
体内の魔力を操作しようとしても妨害されて上手くいかない。

小さく舌打ちをすると、リオは仰向けになったまま天井を見上げた。
部屋の片隅にある小さな窓から差し込む月夜の明かりが、薄っすらと室内を照らしている。
腹部はズキズキと痛んでいた。
痛みがやわらぐまでは動かない方がいいだろう。

いつの間にか装備品と身に着けていた衣類は剥がされていた。
要するに下着だけの恰好である。
肌寒い。
窓から風が入り込んでくるので、外部の冷気が部屋の温度を下げているのだ。
時期的に今は春前である。
まだ夜は明けおらず、室内の気温は十度を容易に下回っていた。

身体を動かして少しでも体内の熱量を生み出したいが、腹部の痛みがそれを邪魔する。

今は自然回復に専念しよう。

そう思って黙ったままじっと耐える。

そうしてどれほどの時間が経ったのだろうか。

肌寒さはピークを迎えており、だが、同時に心地よさも覚えてきてしまった。

眠い。

このまま眠ってしまおうか。

そんなことを考える。

だが、寝たら確実に風邪をひくなと思い、意識を覚醒させるために目に力を入れる。

何度かそれを繰り返しているうちに、目に力を入れる感覚が長くなっていき、リオは自らが気づかないうちに意識を失った。

「ハル君」

――ん？

「ハル君、起きてってば～」

ひどく懐かしい呼ばれ方と、心地良い声に、春人は重い瞼を持ち上げた。

視界に映ったのは、もう遥か昔に春人が暮らしていた部屋の天井、そして最愛の幼馴染の困ったような顔だった。

「あ、ハル君、起きた！」

春人が眼を開けたことに気づくと、少女の顔に満面の笑みが咲いた。
それだけで、ぽかぽか、と心が温かくなった。
「どうしたんだよ……。せっかく気持ちよく眠っていたのに」
ふと、室内の時計を見てみるとまだまだ早朝だった。
「どうしたの、じゃないよ。今日は遠足の日だよ！　早く起きないといけないんだよ！」
そうだ。
この日は小学校一年になって初めての遠足だ。
それで昨日の夜は中々寝付けなかったことを、春人は思い出した。
「んー、おやすみ」
だが、幼馴染の困った顔を見たくて、春人はつい意地悪してしまった。
本当は遠足のことを思い出した時点で頭は覚醒していたのだ。
「だ、ダメだよ～。バスでお隣の席に座って一緒に行くって言ったでしょ～！」
今にも泣き出しそうな表情で、少女が春人を揺さぶる。
「んー」
と、春人はどこか気の抜けた返事を返す。
するとベッドの周囲で少女がそわそわとしている様子が伝わって

きた。

「うう、もう。絶対に起こすんだからね！」

流石にそろそろ起きてあげようと思ったその時、少女が布団の上から春人に乗りかかってきた。

「ぐほっ。ちょ、待て！　待って！　降参！　起きるから！」

予期せぬ衝撃を受けて布団から顔を出すと、得意げな表情で春人を見ている幼馴染の少女がいた。

してやったりという表情を浮かべている少女に、反撃をしてやろうと、春人に悪戯心が芽生える。

「わわ、ハル君！」

少女を布団の中に引きずり込んで、ぎゅっと抱きしめる。

温かい。

目の前に少女の顔がある。

少女の体温と息遣いが、すく傍に感じられる。

すごくぽかぽかした。

「うう～」

少女が顔を真っ赤にして口ごもる。

自分の顔もきっと赤いはずだ。

なかなか大胆なことをしてしまったと春人は思った。

「というわけでこのまま寝るか。おやすみ～」

そんな恥ずかしさをごまかすようにとぼける。
このまま一緒に寝られるのなら、遠足に行けなくなっても悪くない。
妙案だと思った。
「起きてください」
だというのに誰かが、春人を、いやリオのことを起こそうとしていた。
誰だろうか。
少女の声だ。
だが、幼馴染の少女ではない。
もしそうならリオはすぐにわかる自信がある。
まぁ、誰でもいいか。幼馴染の少女を抱きしめて寝たふりをしよう。
そう思ってリオは腕にそっと力を籠めようとした。
だが、何かに拘束されたかのように、その手が動くことはない。
そして、いつの間にか、幼馴染の少女の温もりも消えていた。
「あの、起きてください」
リオが目を開ける。
先ほどまで目の前にいたはずの幼馴染の少女はいつの間にか姿を消していた。
代わりに、そこにいたのは非常に可愛らしい金髪のエルフと銀髪の狼獣人の少女達だった。
幼馴染の温もりの代わりにあるのは火照りと倦怠感だ。
喪失感でリオの顔から表情が消える。

ああ夢か、と、リオは現状を思い出してしまった。

そして、はらり、とリオの目から涙が漏れる。
ここは彼女がいる世界ではないのだ。
なのに、自分はまだ彼女のことを好きなのだと実感してしまった。
夢の中とはいえ彼女の温もりに触れてしまった。
蓋をしていた記憶を思い出してしまった。
幼馴染に再会することを、リオは諦めてなんかいなかった。

今でも彼女に会いたい。
今すぐ彼女に会いたい。
会ってさっきの会話の続きをしたい。
そう思うと無性に泣けてきた。

エルフと狼獣人の少女が戸惑ったようにリオのことを見ている。
リオはいつの間にか毛布をかけられていることに気づいた。
流石に異種族とはいえ同年代の少年の半裸を見るのは忍びなかったのだろう。
そう考え、リオは投げやりに苦笑した。

その時、牢屋の扉から一人の少女が走り込んできた。
ラティーファだった。
そして、その後を追うように灼髪のドワーフの少女と翼獣人の女性が入ってきた。
わんわんと泣き声をあげながら、ラティーファがリオに抱き着く。
ラティーファは人間族の言葉で「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「行っちゃやだ」と繰り返し言っている。
そんなラティーファを見ていると、リオはなんだか先ほどの感傷や倦怠感、腹部の痛みも忘れてしまい、苦笑してラティーファにされるがままにした。

その光景をその場にいた全員がじっと見ていた。
心なしかその顔つきは、少し、いやかなり青ざめている。
するとそこに齢をとった狐耳の獣人が入ってきた。

「何やら騒がしいようじゃな。こんな時間に牢屋の中で何があった？　例の人間がいるのじゃろ？」

リオには理解できない言語で、そう言いながら、女性が室内を見渡し、ラティーファの存在を発見した。

「……ほお、同種族の娘か。見たことはないが、可愛い子じゃの」

老人がラティーファを見て笑みを浮かべた。
そして、すぐにラティーファが抱き着いているリオの存在にも気づいた。

「例の侵入してきた人間とやらか。今日の昼にでも長老会議を行うことになっているはずじゃが、そやつがどうかしたのか？」
「その、この狐獣人の女の子なんですが……」

銀髪獣人の少女が事情を説明する。

結界に侵入してきたリオを拘束してラティーファと一緒に里に連れ帰ったこと。
ラティーファに深い眠りにつくような魔力の乱れがあったことからリオを奴隷狩りと勘違いしていたこと。
里に帰りしばらくすると夜中にラティーファが夜泣きして目覚めたこと。
傍にリオがいないことに気づくとさらに大泣きしてしまったこと。
少女がたどたどしい精霊の民の言葉しか話せないこと。

事情を確かめようと慌ててリオがいる牢屋に来たこと。
するとすぐにラティーファが匂いを嗅いでリオがいる部屋に来たこと。

「なるほどのう……」

すべてを聞き終えた狐獣人の老人がラティーファとリオに視線を移した。

「その少女が懐いているのは本当のようじゃな……っ！？」
「貴方達、お兄ちゃんに酷いこと、した。許さない」

その話を聞いていたラティーファが、片言の精霊の民の言葉で、怒りを伝えた。

「む、たしかに、我らの言葉は喋れるようじゃな。それにしてもこの殺気は……」

濃い。
あまりにも濃すぎる。
この年代の少女が出せるものでは到底ない。
その場にいたリオ以外の全員が冷や汗をかく。
ちりちり、と肌が焼けるような感覚に、少女達を守るように、翼獣人の女性が一歩前へ出た。
するとそれを老人が手で制止する。

「すまぬ。とりあえず事情を知りたい。その上でこちらに非があれば謝罪もする。まずはその者の手かせを外そう。今はそれで納得してくれぬか？」

と、深く頭を下げて、老人は言った。

「……なら、早く外して。何かしたら、殺す」

老人の誠意が伝わったのか、殺気を込めて老人を見ながらも、ラティーファはそう言った。

「うむ……。それを着けたのはオーフィアか。儂では解くのは少々骨じゃな。オーフィア、彼の手錠をほどいてあげなさい」

老人がエルフの少女に指示する。

「な、最長老！　よろしいのですか？　奴は人間ですよ！？　まだ事情を聴いてもいないのに！」

と、焦ったように、翼獣人の女性が老人に言った。

「たわけ。その子がその人間族の子供に懐いているのは事実じゃ。そんな相手の話を聞きもせずに罪人扱いしては誇り高き精霊の民の教えに反するわ。オーフィア、早くなさい」

「わ、わかりました」

オーフィアと呼ばれたエルフの少女がリオに歩み寄った。

言葉が解らないため話の流れはわからなかったが、おそらくこの手かせを外してくれるようだと、リオは空気の流れで状況を読んだ。

黙ったまま手を差し出す。

オーフィアがリオの手かせに手をかざすと、その手に光りが灯る。

綺麗な光だった。

リオはその光に思わず見とれてしまった。

（これが精霊術……）

それは魔法と似ているようで全く別の代物だった。

そして、リオが魔法を模倣して使っている精霊術とも全く違った。

おそらくは『解呪魔法（ディスペル）』と似たことを行って手錠を外しているのだろうが、リオの精霊術のように『解呪魔法（ディスペル）』の魔力の操作を真似たものではない。

オーフィアの精霊術は、リオの精霊術よりもはるかに自由であると、リオはそう思った。

術式契約の魔力の流れを模倣しているだけの自分とは決定的に違う。

彼女の精霊術は、もっとダイレクトで、なのに複雑で、より高次のものである。

リオは、今まで、魔力を操作して発動させることができる事象は一定のものであり、魔力で事象を引き起こすには術式に沿った魔力の制御が必要だと考えていた。

だが、その考えは間違ったものだったのかもしれない。

（ひょっとして精霊術に魔力の制御はさほど関係はないのか？　いや、さっきのエルフの子の精霊術を見ている限り魔力の制御を行っていないわけじゃなかった。となると別の要素……事象に対するイメージとかも重要なのか？　そういえば俺は漠然と身体能力と肉体を強化していたけど、それはそうやってイメージしていたからだ……）

頭の中で分析を加えつつも、これが本当の精霊術だと、リオはそう思った。

「ありがとうございます」

外れた手かせを見て、人間の言葉を理解できるかはわからなかったが、リオはオーフィアに礼を言った。

「い、いえ。こちらこそすみませんでした！」

すると慌てた様子でオーフィアがぺこりとお辞儀をした。

彼女は人間の言葉も話せるようである。

「ラティーファ、俺は大丈夫だからその殺気を鎮めるんだ」

いまだにリオのすぐ側で周囲を威嚇するように殺気をまき散らしているラティーファに、リオが言った。

「でも！」

ラティーファがギュッとリオの衣類を掴む。

「いいから」

「……うん」

ラティーファを安心させるようにそっと頭を撫でてやると、ようやくラティーファは殺気を消した。

室内の空気が一気に弛緩したのを確認すると、老人が口を開く。

「さて、人間族のお若いの。話を聞かせてもらってもいいじゃろうか？　と、言ってもこんな牢屋じゃなんじゃしの。部屋を用意しよう」

と、老人がリオに人間の言葉で話しかけてきた。

やっぱりここは牢屋だったかと、リオは苦笑する。
牢屋に入るのはこれで二度目だ。人生で二度もそんな体験をすることはそうそうないのだろうなと、そう思いながら、リオは老人の申出を受けることにした。
立ち上がろうとしたところで、腹部の痛みが急激にぶり返し、リオが顔を顰める。

「っ、すみません。少し怪我の治療をさせてもらってもいいでしょうか？」
「む、それは、すぐに治癒しよう」
「いえ、自分でできますから」

老人たちの感じからしておそらく酷い扱いを受けることはないだろうが、それでも今後の扱いが確定していない今の時点で、少しでも借りを返させておくのはあまり上手くない。
そう考え、慌てたように動こうとした老人の申し出を、リオは断った。
リオが腹部に手を当てて治癒を開始する。
いつものように『治癒魔法（ヒール）』の術式による魔力の流れを基本としつつも、先ほどの少女の精霊術を思い出し、頭の中で治癒のイメージを強く抱いて魔力をコントロールしてみた。
この痛みのとれない感じだと内臓にもダメージが届いているかもしれなかった。出血もしているかもしれない。

本来、術者にもよるが、体内のダメージは『治癒魔法（ヒール）』では時間がかかり治療がしにくい。
だが、現在、リオは、いつもよりも魔力の消費が少なく、さらに治癒のスピードも速いことを実感していた。
どうやら少女の精霊術を参考にしてみたのが功を奏したようだ。
あまりの違いの大きさにリオ自身が驚く。

そして、その場にいる精霊の民達も目を丸くしていた。

「そなた、今のは……？」

アースラが代表して口を開いた。

「精霊術……だと思って今まで使ってきたのですが違いますか？」

本場の精霊術者達の意見を聞きたいと考え、包み隠すことなくリオが尋ねる。

「……確かに、少々オドの制御が固いが、それは精霊術のようじゃ……。そなた、どんな精霊と契約を結んでいるのじゃ？」

「精霊と契約？」

そんなことをした覚えはないという様に、リオが首を傾げた。

その様子を見て、アースラはリオが精霊と契約を結んでいないことを察した。

「む、人間族が精霊と契約せずにそれほど巧みにマナを操っていると言うのか？　よほど精霊に愛されておるのう。どういうことじゃ……」

アースラは何かを考えるように複雑な表情を浮かべている。

「オーフィア、お主は何かわかったか？」

「いえ、私も彼がマナに、精霊に愛されているのだろうということしか……」

と、エルフの少女オーフィアも困惑したような表情を浮かべて言

った。

「むぅ、無契約の状態でハイエルフのそなた以上に巧みにマナに干渉しておったぞ」

「ガハッ、ガハ」

その時、リオが咳き込み口を抑えた手に血を吐いた。

「お兄ちゃん！」

と、今まで心配するように様子を見ていたラティーファが叫んだ。

「だ、大丈夫か！？」

リオが血を吐いたのを見て、アースラ達も心配したように声をかけた。

「ええ、ちょっと内臓で出血していた血が溜まっていただけですから」

何でもない、と言うようにリオが言った。

「そうか、大至急ゆっくりできる場所に移動したほうがよさそうじゃな。もう夜明けも近い。そういえば少年の名前は何というのじゃ？　儂はこの精霊の民の里に暮らす長老の一人でアースラという」

「私はリオといいます」

「そうか。では、リオ殿、部屋へ案内しよう。付いて来なされ」

老人に引き連れられ、リオはその場を後にした。

第２２話　謝罪

リオはアースラ達にラティーファを引き連れていた事情を説明した。

リオがヤグモへと旅をしている途中であったこと。
ラティーファが人間の奴隷として育てられてきたこと。
リオが旅の途中でラティーファと出会ったこと。
リオがラティーファを奴隷から解放したこと。
ラティーファを精霊の民に引き渡そうとしていたこと。

「やはり全面的にこちらが悪いようじゃな。すまなかった……」

全てを聞き終えると、アースラが沈痛な表情を浮かべて深く頭を下げた。

証人であるラティーファは、疲れたのか、小難しい話を理解するのを放棄したのか、途中でリオの膝の上で眠ってしまったが、彼女のリオへの懐き具合が何よりの証拠であった。

「ウズマよ、お主の先走りがこのように事態を複雑にしたと言っても過言ではないわけだが、何か申し開きがあるとでもいうのなら聞いてやってもよいぞ？」

アースラが精霊の民の言葉でウズマと呼ばれた翼獣人の女性に尋ねた。

「その、ラティーファ嬢に何やら深い眠りにつくようなオドの乱れと虐待の跡が見つかったとオーフィア様から聞きまして、そこの…

…彼が彼女に行ったのかと勘違いしてしまい……つい激昂してしまいました」

ウズマが有無を言わせずにリオに襲い掛かった理由を供述した。その額には大量の冷や汗が浮かんでいる。

「話を聞く限りその子が夜泣きをしないように深い眠りにつかせたんじゃろうな。だいたいお主はいつも早とちりがすぎるのじゃ。いつも言っておろうが、もう少し思慮深くに物事を考えよ、と。後先考えずに殴ってしまうとはこの馬鹿者が。戦士長たる者が何というざまじゃ。大半がお前の責任ではないか。色々と不自然だとは思わなかったのか？　ん？」

「さ、最長老様。申し訳ありません！」

ウズマが委縮してアースラに謝罪をする。

「謝るのは儂じゃなかろうに。今日の長老会議で此度のお前の罰が決まるだろうが心して反省するがよい。きちんとリオ殿に謝罪をするのだ。わかったな？」

「はい……」

「それにサラ、オーフィア、アルマ、お前たちもじゃ。いずれはお前たちも里の運営に関わってくる者達なのじゃぞ。それをウズマ一人の暴走を止められんとは、修行中の身とはいえ嘆かわしい」

「は、はい」

狼獣人、エルフ、ドワーフの少女の順に名前を呼ばれてそれぞれビクッと反応する。

「お前たちに罰が下されることはないだろうが深く反省しておくように」

「しょ、承知しました！」

三人の少女達は深く頭を下げた。

「すまんな。リオ殿、こやつらの説教に少々熱くなりすぎてしまった」

説教を終えたアースラがリオに向き直って再度頭を下げる。

リオとしては怒られている四人が気の毒とは思ったが、会話の内容がわからないので黙って見ていた。

「それはそうとリオ殿、ひょっとして風邪を引いておりゃせんか？」

と、リオの顔色の悪さに気づいたアースラが指摘する。

「ええ、少し肌寒くて……」

リオは、ちらり、と毛布の下の肌着姿を見せた。その姿を見てアースラがため息を吐く。

「……それもこちらの落ち度じゃな。すぐにエルフ特製の薬を用意させよう。夜が明けたら長老会議が開かれる。その後に精霊の民全体から正式に謝罪をすることになるじゃろう。その時までそこのベッドで眠っていてくだされ」

「ありがとうございます」

アースラが指差したベッドを見て、リオが礼を言う。

その時、ウズマが、青ざめた表情を浮かべて、狼獣人の少女サラに何かを話しかけた。サラがウズマの言葉を翻訳するために口を開く。

「その、リオ様、ウズマが貴方に謝りたいと……」
ウズマは畏まって正座をして、必死な様子で地に頭をつけていた。
いわゆる土下座である。
「それと私達からも謝罪をさせてください。同胞を保護してくれた恩人に対してする仕打ちではありませんでした」
サラがそう言うと、オーフィアとアルマも謝罪を口にして、三人そろってリオに土下座をしてきた。
「……気にしていない、と言えば嘘になりますが、謝罪を受け入れます。こちらからウズマ殿に怪我をさせる可能性もあったわけですし」
土下座文化がこの世界にあることに驚きを覚えつつも、年上の女性と同年代の少女達に土下座をさせている事態に居心地の悪さを感じる。
リオとしては思うところがないわけでもないが、今後の関係を考えれば徒に事を荒立てるのも好ましくないだろう。
そう考えて、リオは謝罪を受け入れることを表明した。
それから運ばれてきたエルフの薬を飲むと、リオは眠りにつき、目が覚めた時は既に昼となっていた。
身体を起こそうとすると、隣でラティーファがリオにくっついて眠っていることに気づく。
身体の肌寒さはすっかりとれていた。
どうやらエルフの薬の効果は人間族の薬とは比較にならない程に優れているようだ。

ラティーファの頭を撫でたまま横になっていると、部屋の扉がノックされた。

「はい。起きていますよ」

外に聞こえるように返事をすると、ゆっくりと扉が開けられた。
入ってきたのは、狼獣人の少女サラ、エルフの少女オーフィア、ドワーフの少女アルマだった。

「おはようございます」

部屋に入ってくると三人が目覚めの挨拶をしてきた。

「どうかしましたか？」

ゾロゾロと入ってきた三人にリオが尋ねる。

「臨時に私達がリオ殿の世話をするようにと仰せ付けられましたので、再度挨拶を思いまして参りました」

と、三人を代表してサラが言った。
三人の中ではサラが年長であり、何かと姉的な役割を務めることが多かった。

「この精霊の民の里にいる間は基本的に私たち三人の誰かがリオ様のお側にいることになると思います。以後、よろしくお願い致します」

精霊の民の中でも人間族の言葉を話せる人物は非常に少ない。
一部の指導的立場に立つ者だけがそれを可能としている。

それゆえ、リオの世話をできる者も限られ、オーフィア、サラ、アルマは、既にリオとも面識があり、人間族の言葉を喋ることができることから、臨時の世話役として任命されたのである。

「それはご迷惑をおかけいたします。どうぞよろしくお願いします」

と、リオは礼儀多正しく頭を下げながら言った。

「い、いえ、こちらこそ」

それぞれ雰囲気は異なるが、どこか恐縮したように、三人も頭を下げ返した。どこか固い印象がある。

どうやらリオに対して罪悪感というか苦手意識のようなものがあるようだ。

「早速なのですがお知らせがあります。先ほどまでこの里の長老達が集まって会議が行われていました」

気持ちを入れ替えたのか、引き締まった顔をすると、サラが話し出した。

「そこでリオ様に対する謝罪と御礼をお伝えすることが決定しました。予定では本日の夕方に行うことになっております。もしリオ様がお目覚めのようならば昼食を摂るついでにお知らせするようにとのことです」

「承知しました」

正式な場で謝罪をされるというのもどこかむず痒いものがあるが、必要なことだと割り切り受け入れる。

それよりも今は精霊の民の食事に興味があった。

「それでよろしければ食事をお持ちいたしますが、どういたしましょうか？」
「それはありがとうございます。是非お願いします」
願ってもないことなので即答する。
「はい。では、ラティーファちゃんの分もお持ちしましょうか？」
「そうですね。じきに起きるでしょうから」
すやすやと眠っているラティーファを見て、リオがそっと微笑する。
「かしこまりました。ではすぐにお持ちしますね。オーフィア、アルマ、お願いしますね」
「うん！」
「はい」
オーフィアは天真爛漫な笑みを浮かべて、アルマは畏まった様子で、それぞれ返事をし、部屋を出ていく。
残ったのはリオとサラ、後は眠りについているラティーファだけだ。
しばらくの間、二人の間に沈黙が落ちた。
「その、ラティーファちゃんは奴隷だったんですよね？」
ある時、何か言いたそうな表情を浮かべていたサラが徐に口を開いた。
「ええ」

短くリオが頷く。
サラが話題にしたのはラティーファのことだ。
「リオ様はラティーファちゃんが奴隷だったころのことを御存じなのでしょうか？」
「いえ。どのような扱いを受けていたのか想像はつきますが、奴隷だったころのことを思い出させたくはなかったので特に聞くことはしていません」
「そうですか……。あの、もしよろしければリオ様のわかる範囲でお聞かせいただけないでしょうか」
「決して面白い話ではありませんよ？」
興味本位で聞く話ではない。言外にそう匂わせる。
「……はい。ですが、それでも知りたいのです」
強い意思を秘めた目で、サラはリオを見つめた。
「わかりました」
その意思が伝わったのか、リオは自分の推測も踏まえてラティーファがどのような扱いを受けていたのかをサラに教えることにした。
当初は感情が希薄だったこと。
身体中に虐待の跡が見受けられること。
戦闘訓練を受けさせられていたであろうこと。
暗殺者のようなことをさせられていたこと。
碌な食事も食べていなかったであろうこと。
極度のトラウマを抱えているであろうこと。

と、ラティーファについて自分の知る、およそすべてのことを、サラに教えた。
ラティーファが任務でリオを殺しに来ていたという事情を説明するとサラが戸惑ったような表情を浮かべたが、すべてを話し終えたころには、身体中の血が沸き立つような怒りを覚えたのか、サラの身体が小さく震えていた。

「彼女は物なんかじゃありません！　それをっ……！」

やり場のない怒りを発散させるかのように、サラが声を荒げた。

「ええ」

リオとしても抱いた感情だ。
同胞意識の強い種族である彼女ならば、より一層強い感情を抱くのは当然だろう。

「それにしても……、立ち聞きはあまり良い趣味とは言えませんよ」

扉の外に向けてリオが声をかける。

「……むぅ、気づいておったか。鋭いのう。すまない」

そう言って部屋の中に入ってきたのはアースラ、そして二人分の食事を持ったオーフィアとアルマの三人だった。
話を聞くことに集中していたサラは三人の接近に気付かなかったようだ。

「その子の話じゃがな。リオ殿に伝えたいことがある」

と、アースラが神妙な顔を浮かべて言った。

「おそらくなんじゃがな。その子は儂の曾孫かもしれん」

その言葉に、リオの目がわずかに見開く。

「儂の孫娘は十年以上前に失踪していての……。もともと自由奔放だった子じゃ。当初こそ里での暮らしに飽きてそこら辺をうろついているのかと思ったが、ついぞ帰ってくることはなかった。消息も分からぬまま、魔物か獣に襲われたとも思っておったが……」

リオの服を掴んで眠りに就いているラティーファへと、アースラは視線を送った。

「その子の顔に妙に懐かしい面影があってのう。その子の母の名を聞きたくも思うが怖くもある……。その子の母は既に生きてはいないのだろう？」

「ええ、既に死んでいると聞いています」

「そうか……」

アースラは沈痛な面持ちを浮かべた。

「ん……お兄ちゃん……」

その時、繰り広げられている話し声に反応したのか、ラティーファが薄っすらと目覚めた。

「起きたのか。おはよう、ラティーファ。ご飯だそうだ」

「うん。おはよう。ご飯、食べる……」

と、ラティーファが眠気眼で甘えるような声を出して言った。

「リオ殿、そなたに感謝するぞ」

リオに懐くラティーファは一見するとただの甘えん坊な少女だった。

その様子を見てアースラが深く頭を下げる。

「いえ、自分は礼を言われるようなことは何も……」

アースラの礼にリオが僅かに顔を顰めた。

そもそもリオはラティーファを救おうと思って一緒に行動してきたわけではない。

たしかに、ラティーファの事情を知るにつれて保護者に近い役割を担うようにはなった。

だが、それで素直に感謝を受け入れられるような、面の皮の厚さをリオは持ち合わせていなかった。

僅かな表情の変化に気づきながらも、熟練のアースラも今のリオがどのような感情を抱いているのかは理解することはできなかった。

「ふむ、せっかくの食事が冷めてしまうの。ほれ、どうぞ食べてくだされ」

場の雰囲気を変えるようにアースラが食事を促した。

それから完全に目を覚ましたラティーファが明るく屈託のない笑顔を浮かべて食事を開始する。

遅れてリオも食べ始めた。

どれこれも初めて食べる料理ばかりだったが、ラティーファの口には合ったようだ。

リオとしても満足のいく味だった。

食事を終えるとサラ、オーフィア、アルマ達がラティーファと親交を深めていく。

その様子をリオがアースラと離れて眺めていた。

歳の近い少女達との会話は新鮮なようで、最初はリオが傍にいないと恥ずかしがって何も喋らなかったが、ラティーファもすぐに彼女達と仲良くなった。

そうしてあっという間に夕方を迎えた。

ラティーファをサラ達のもとに残し、アースラに案内されて、リオは精霊の民の長老が集う部屋へと案内された。

長老達が集う部屋は一際大きな木に建てられたツリーハウスの最上階にあった。

移動の最中に精霊の民の里の暮らしぶりをリオは知る。

彼らの生活は完全に自然と一体化しており、森の中に粘土や石を使った家屋やツリーハウスを建築していた。

なかなか幻想的な光景にリオは興味深く建築物を眺めている。

木の周囲を囲むらせん状の階段を上っていると、圧倒的な存在感を放つ大樹が視界に入ってきた。

おそらくあれがリオ達が目指していた大樹だったのだろう。

奇しくも精霊の民たちの居場所に自ら突っ込んでいたことにリオは内心で苦笑した。

やがて最上階へとたどり着くと、長老達がいる部屋の中へと入る。

部屋の中では三十人近い精霊の民がコの字型に並べられた木の椅子に座っていた。

入口の正面奥には齢をとったドワーフとエルフが座っており、一

つだけ空席ある。

「ではリオ殿はこちらにお座りくだされ」

アースラは入り口付近にある椅子にリオを座るように促すと、入り口の正面奥にあった空席に腰をつけた。

「人間族の子よ。此度の件について話は聞いている。奴隷として捕えられていた同胞を解放してくれた件、そして、勘違いにより同胞がそなたに多大なる迷惑をかけた件について、厚く謝意を表する。有難う」

アースラの隣に座るエルフの老人がそう言うと、その場に座っていた長老達が一斉に立ち上がりリオに頭を下げた。

その行動と真剣な声色からリオは彼らの誠意を感じとった。

だが、これだけの人達に一斉に頭を下げられて少し居心地の悪さも覚えた。

「まずは、感謝の御言葉、確かに承りました。人間族と精霊の民の間には拭うことのできない黒い歴史があると聞いております。貴方方の同胞がとった行動はそういった哀しい歴史に引き起こされたものでしょう。今までに積み重ねてきた私の同族の行いが悪かったとも言えます。取り返しのつかない被害を受けたわけでもありませんし、私としては誤解が解けたのなら問題はありません。どうぞ頭を上げてください」

と、礼を尽くした態度でリオが返答する。

その言葉に長老達は戸惑ったように頭を上げると、意外そうな表情を浮かべてリオを見つめてきた。

「うむ。そう仰っていただけると我々としても助かる。だが、我らが恩を受け、それを仇で返すようなことをしたことも事実だ。そこで君から何らかの願いを聞き入れようという話になったのだが……」

どこか困ったように、だが厳かな表情を浮かべて、エルフの老人が言った。

「願い……ですか？」

「リオ殿。シルドラ……、この男が言っていることは、要するに、ラティーファを助けてくれた礼をしたい、そして勘違いしてリオ殿に迷惑をかけた慰謝料を支払いたい、そういうことじゃ。じゃが、儂等では人間族のリオ殿が何を欲するのかがわからなくてのう。何か願いはないか？　こやつらは何を要求されるか恐れているんじゃよ」

アースラの言葉に、エルフの老人、シルドラを始めとして長老達はバツの悪そうな面持ちを浮かべた。

そしてアースラの言葉にリオは得心がいったという表情を浮かべる。

精霊の民からすれば同胞を奴隷として扱う人間族は醜悪な生き物に見えるのだろう。

そうであるならば彼らの心配も頷けるものがある。

人間族が何を欲するのかがわからないが、礼はしなくてはならない。

いっそのこと何が欲しいかをストレートに聞いてしまえというのがアースラの考えのようだ。

なかなかに豪胆である。

「なるほど……。では、ラティーファを引き取っていただきたいです」

リオは最初から考えていたことを口にした。
その言葉を聞いて、長老達は、困惑した表情を隠そうともせずに、リオの顔を見つめてきた。
「それだけ……か？」
と、シルドラが呆気にとられたように口にした。
「うむ、薄々とリオ殿が無欲な人物だというのは儂も察しておったがな。リオ殿、我々は最初からそのつもりなんじゃ……、それじゃ願いになっておらんぞ」
と、少し呆れたような声でアースラが言った。
「わかっています。ですがいきなりこの里に住んでもあの子が馴染めるとは思えないものですから。可能な限りあの子を大事にしてあげて欲しいというのが私の願いです」
室内に一瞬の静寂が訪れる。
「くっくく。こいつは傑作だぜ！　あの人間族が、自分の利益をそっちのけで、他人のことを、それも他種族のことを優先しやがったぜ！」
するとシルドラの隣に座っていたドワーフの老人が愉快そうに大声を出して笑い出した。
「ドミニク、儂の言った通りじゃろ。リオ殿は非常に理性的な人間じゃ。人格的に何の問題もないから、そう大したことを要求される

とは思えんとな」
「そりゃアースラが実際に面と向かってあの小僧と話したからだろ。見知らぬ奴、それも人間族を警戒するのは当たり前のことだぜ」
と、ドミニクと呼ばれたドワーフの老人が愉快そうにアースラに言う。
「気に入ったぜ！　小僧！　なんならうちの曾孫娘のアルマが望むなら嫁に差し出してもいいくらいだ！　遠慮することはねぇよ。何でも願いを言ってみろ」
ドミニクは大見得を切ってそう言った。
「そうじゃな。もう少し欲のある願いを言ってほしいのう。こちらとしても受けた恩、そしてそれを仇で返した詫びに相応するだけのことはしなければならん」
アースラもドミニクに賛同する。
「そうだな。何か欲しいものはないのかね？」
ドミニクとアースラの様子に、ため息を吐いて、シルドラが言った。
「……そうですね。と言っても、この里の食材が欲しい、精霊の民が有する知識について教えてほしい、後は精霊の民の言葉について少し興味がある。それくらいですかね。後はラティーファがこの里に慣れるまでの間でいいですから、私をここに住まわせていただければ」

考えるような仕草をしながらリオが願いを口にする。
「本当に欲のないお方じゃのう……」
感心したようにアースラが言う。
「いや、別にそう言うわけでは……。物欲はそれなりにありますよ」
「そう言う意味じゃなくての。人間族に特有の俗な欲求が少ないといった方が正確かのう」
「はぁ……」
よくわからない、といった表情をリオが浮かべる。
「基本的にはどれも問題はなさそうだが、知識というと？」
と、シルドラがリオの願いについてその詳細を尋ねる。
「精霊術の使い方、それと精霊の民が知っている日常生活で役立ちそうな知識全般そういったものですね。もちろん無暗に口外するなと言われればそれを第三者に教えることはしません」
「特に問題のある内容ではないと思うが異論のある者はいるか？」
シルドラの言葉にその場にいる全員が首を横に振った。
「ふむ、では今言った内容の願いを聞きいれるということでよろしいかな？」
異議がないことを確認してシルドラがリオに最終確認をとる。
「はい。お願いします」

そう言ってリオが軽く頭を下げる。

「では、続いて戦士長であるウズマの罰についてだが、我らの掟でな、その内容はリオ殿にも伺わなければならない。リオ殿は何か意見があるかね？」

シルドラの言葉を聞いて、リオが咀嚼して考える。

部屋の隅にはウズマが畏まったように立っていた。

「いえ、特には……。個人的に罰は必要ないとも思っていますが、そうはいかないのであればそちらの慣例に従います」

「……本当に我らの心配は杞憂だったようだな。すまぬ。リオ殿、貴殿の誇りに泥を塗るような疑いをかけていた。重ねて謝罪せねばなるまい」

どんな罰をウズマに科すと思っていたのであろうか、とリオは少しだけ引きつった笑みを浮かべた。

「いえ、特に気にしていませんから」

「うむ、本当に感謝する。ではウズマにはこちらで取り決めた処罰をするということでよろしいだろうか？」

「ええ」

結局、ウズマにはしばらくの間の謹慎生活が言い渡されることとなった。

その後、長老達の自己紹介を受け、そのまま細やかな宴が行われ、リオは精霊の民の長老達と親睦を深めた。

第２３話　精霊術

精霊の民の里に来てから数日、里の外れに位置する広場で、リオはアースラから精霊術の教えを乞うていた。

「精霊術を教える前に聞いておきたいんじゃが、リオ殿の髪の色からすると出身は東の人間族の国なのか？」

「両親はそのようです。ヤグモの生まれだとか。自分が生まれた地は西にあるベルトラム王国という国です」

その言葉を聞いて、アースラは得心したといった表情を浮かべた。

「ならリオ殿の両親が精霊術に長けていた可能性は高いのう」

「……どういうことでしょう？」

生まれた地によって精霊術の適性が決まるかのような発言にリオが尋ねる。

「まずはオドとマナについて説明する必要がありそうじゃな。リオ殿はオドとマナについて知っておるか？」

「いえ」

リオは頭を軽く左右に振った。

「ふむ、オドとは生物が体内に保有する生命力で、マナとは世界が有する自然力じゃ」

漠然とした定義でこれだけではよくわからないため、アースラを

見据えて、リオは説明の続きを待つ。

「じゃが、聞いたことがない単語ではよくわからないじゃろう。人間族が魔力と呼ぶものがオドじゃ。リオ殿はオドの感知も視認もできるのではないか？」

感知はともかく、オドを視認できることを言い当てたアースラの言葉に、少しだけ驚きながら、リオは首肯した。

「マナについては眼で視えんし口では説明しづらいのう……。リオ殿も精霊術を使えている以上はマナを感知しておるはずなんじゃが、感覚を研ぎ澄ませると何かが感じられはせんか？」

「……身体からオドを放出すると感覚が鋭敏になります。その時、大気中を満たす様に眼に視えない何かが存在するのはわかります」

喋りながら、リオは身体からオドを放出する。

すると、オドの光を介して触れる世界に、小さな粒子のようなものが浮遊しているのを、リオは感じた。

それは、この世界に来て最初にオドの光が身体に溢れた時から、リオがずっと感じとっていたものだった。

「それじゃよ。やはり感知はできているようじゃな。それにしても淀みなく力溢れるオドじゃのう。リオ殿は人間族にしては保有するオドの量も多そうじゃ」

リオの発するオドの光を見て、アースラが小さく笑みを浮かべた。

「マナは自然が存在する限り世界中に溢れておる。すなわち自然の力そのものじゃ。そのマナに働きかけて世界を操るのが魔法であり、精霊術でもある」

では、両者の違いは何なのか、リオが当然のように抱くその疑問に対する答えを、アースラが口にする。

「異なるのはマナへの働きかけ方じゃ。魔法が体内に術式を刻みその術式を発動させることでマナへと働きかけるのに対して、精霊術は術者本人が直接にオドを操ってマナへとイメージを伝えて働きかけることになる」

その言葉を聞いて、魔法が術式によってマナへの干渉をあらかじめプログラム化しているのに対して、精霊術はマニュアル操作でマナへと干渉しなければならないものなのではないかと、リオは解釈した。

「そもそも精霊術はマナの感知さえできれば誰でも使える。じゃが人間族はあらゆる人族の中で最もマナの感知を不得手とする。そこでマナの感知ができない人間族でも精霊術の真似事ができるようにと作られたのが魔法じゃ。千年以上前に七賢神と名乗る者達が大陸の西に暮らす人間族に与えた技法じゃな」

「七賢神……？　六賢神ではなくてですか？」

六賢神という名称ならばリオも聞いたことがあった。

それらは西に暮らす人間族達が信仰する神々だからだ。

「七人目は他の六人から追放された者なんじゃよ。千年以上前に起きた神魔大戦が起きる前にの……。人間族の中では歴史から抹消されておるのじゃろ」

と、何かを考えるように遠い目をしながら、アースラが言った。

その七人目のことをどうしてアースラ達精霊の民が知っているの

か、リオは疑問に思った。
だが、今は順序的に精霊術の説明を聞くべき時だと考え、尋ねることはしない。
「術式の有用性は我等も理解はしておる。精霊術では不向きな事象を引き起こすのに術式が役立つこともあるからの。術式を利用してマナに干渉する技術はもともと魔術と呼ばれるものじゃった。本来、術式は霊具、人間族が言う魔道具や結界を作るために開発されたものじゃ」
と、術式本来の活用の仕方をアースラは語る。
魔術という名称は魔法以外で術式を利用した技術一般を指すものとして、今日でもシュトラール地方の人間族の間で呼称されていた。
「しかし体内に術式を取り込むことは肉体の改造を意味する。術式を体内に刻めば刻むだけ身体は不自然なものになっていく。その代償として精霊術を使うことができなくなってしまうくらいにの」
人間族に精霊術の使い手がほとんどいないことの理由がわかり、リオは腑に落ちたという表情を浮かべた。
「特に西に暮らす人間は魔法を与えられたおかげで精霊術の使い手がほとんど存在せんようじゃな。東の人間族には魔法を使えない代わりに精霊術を使える者がそれなりにおる」
アースラが最初にリオの両親が精霊術を使えた可能性が高いと言った意味を、リオは理解した。
「……ラティーファの体内には術式が一つだけ存在します。彼女はもう精霊術を使うことはできないのでしょうか？」

その術式は『身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）』である。
暗殺者として働かせるためにラティーファに刻み込まされた唯一の魔法だ。

「うむ、複数の術式を体内に刻み込んでいる者はともかく、一つ程度の術式ならば取り除くのはさほど難しいことではない。やり方は解呪と似た要領じゃな。そう遠くないうちにあの子の体内から術式を取り外すつもりじゃ。その時には我が里有数の精霊術者であるオーフィアにあの子を指導してもらうように頼んである」

現在、ラティーファにも、サラ、オーフィア、アルマの三人が精霊の民の里の知識を教えていたりする。
ラティーファをいち早く精霊の民の里に馴染ませたいという意味が込められており、この件については、ラティーファは知らないが、リオは承諾済みである。
いずれリオはこの里を離れなければならない。
その時までにこの里の中でラティーファが定着できるようにと、リオから頼んだことでもあった。
同年代の少女ならラティーファの良き友人になれるだろうと考え、自らの案内役としてつけられたサラ、オーフィア、アルマの三人をラティーファのもとに付けたのである。

「その、ですが、アースラ殿が直々に教えなくともよろしいのですか？　ラティーファは貴方の曾孫かもしれないんですよね？」

ラティーファがアースラの曾孫であるかもしれないということについて、ラティーファはまだ何も知らされていない。
時が来れば自分から告げるとアースラが言ったことや、今はラティーファをこの里の暮らしに慣れされる時であると考えていること

もあり、リオはこの件についてはアースラに一任していた。

「ふふ、儂じゃあの子に厳しく指導してやることはできそうにないからのう。あの子が嫌じゃと言えば儂はそのまま言うことを聞いてしまいそうなんじゃ。これはあの子の祖父母とも相談して決めたことじゃ」

ラティーファの顔を思い出したのか、アースラがその顔をほころばせて破顔させた。

「……いらぬ心配をしてしまいましたね。申し訳ありません」

リオがアースラへと頭を下げる。

「いや、そのようなことはないぞ。種族は違えど、あの子はリオ殿のことを間違いなく兄のように感じておるはずじゃ」

「そうですか……」

ラティーファのためにと行動はしているが、ラティーファに黙っていることもある。

自分も彼女と同じ転生者であるということだ。

その部分においてリオはラティーファのことを騙していると言ってもいい。

そんな大切なことを告げていない自分が彼女の兄として慕われる資格があると思うことはできなかった。

だが、自分にはそのような資格はありません、とは言えなかった。

「ところで、一つ質問があります。精霊術を扱える人間が術式契約を結ぶことは可能ですか？」

話の流れを打ち切るようにリオがアースラへと質問を投げかけた。
アースラはリオがラティーファに何らかの後ろめたい感情を抱いていることは気づいていたが、微笑を浮かべてリオの質問に正面から答えることにした。

「精霊術の有用性を知っておる限りそんなことを考える者はおらんじゃろうが、することはできるぞ」

想定していなかった回答にリオが少しだけ硬直する。
それだと自分が術式契約に成功しないことの説明がつかないからだ。

「ただし、精霊と契約を結んでいる者は話が別じゃがな」

と、付け足す様にアースラが言う。
精霊と契約を結んでいる者は、術式契約を結ぼうとすると、術式の内容を理解できる代わりに、体内への術式の刻印が弾かれてしまうようだ。

「……自分は術式契約が成功しないのですが、つまりは精霊と契約しているということでしょうか？」

身に覚えはないが、その例外に当てはまる以上はそうとしか考えられなかった。

「むっ、やはり精霊と契約しておったのか？　……しかし、その様子じゃと自覚はなさそうじゃのう」
「ええ、まったくありません」

困ったようにリオが肩を竦める。

「契約精霊は契約者の体内かすぐ側にいるものじゃが……」
「感じたことも見たこともありませんね」
やはりリオに身に覚えはなかった。
「感じたことも見たこともない、か。となるとリオ殿の中で休眠状態にある可能性が高いのう……」
「休眠ですか……」
自分の中で知らない存在が眠っていると言われたが、リオに自覚は一切ない。
「そもそも精霊とは何なのですか？」
精霊が自分の中に眠っているかどうかはともかく、リオは精霊がどんな存在なのかすら知らない。そこで精霊という存在について尋ねることにした。
「精霊とはマナが明確な自我を持った存在じゃと言われておる」
「マナが自我を持った存在……。どういった形をしているのですか？」
この説明だけではいまだにイメージが沸かなかった。
「この世界に暮らす何らかの生物の姿を真似て実体化する個体が多いのう。動物が多いぞ」
「動物……。ひょっとして自分が襲撃された時に見た狼は精霊ですか？」

突如光を発して自らの視界を奪った狼の存在をリオは思い出した。
「狼の精霊じゃと？　ああ、それはたぶんサラの契約精霊じゃの。あの子が契約しているのは中位精霊じゃ。他にオーフィアやアルマも中位精霊と契約しておるぞ」
「あれは彼女の精霊でしたか。あれが精霊……」
普通の獣と比べると無機物的な感じが強いが、傍目には普通の狼にしか見えなかった。
精霊はおよそああいった動物の姿をしていて、似たような気配を放っているのだろうと、リオは考えた。
「彼女達の契約精霊の姿をほとんど見かけないのですが、普段はどうしているんでしょうか？」
「ああ、普段は霊体化して契約者の体内におるんじゃろうな。精霊にとっては契約者の体内はオドの供給源に直結しておるから居心地が良いんじゃよ」
「なるほど……、では、精霊との契約の結び方はどうすればいいのでしょうか？」
「精霊の方が勝手にやってくれる。される側が明確に拒絶の意思を持っていなければ契約の締結完了じゃ」
「それじゃ複数の精霊と契約し放題なんじゃ……」
リオは群がるように一人の者に集まる精霊の姿を想像した。
「ほほ、例外がないとは言わんが、ほとんどそんなことはない。そもそも契約を結んでくれる精霊が希少じゃからな。精霊と契約を結ぶには精霊からよほど好かれなければならん。それにある者が一体の精霊と契約を結ぶと、他の精霊が遠慮して契約を結ばないようだしの」

だが、リオが考えるような事例は非常に少ないようだ。

「なるほど。では、精霊と契約を結ぶことの利点は何なのでしょうか？」

「ふむ、代表的な利点はマナへの干渉が非常に上手くなることだの。契約精霊は術者と深く結びつくからの。正確には契約精霊が術者のイメージを読み取って精霊術の制御の補佐をしてくれるのじゃが、下位の精霊と契約するだけでもその恩恵は莫大じゃ」

アースラ達の目の前で初めて精霊術を使った時、アースラがリオは精霊と契約しているのではないかと言ったことを思い出した。

アースラからすればリオのマナへの干渉は非常に巧みに見えたということだろう。

とはいえ、自分が精霊術を使えるのは両親ではなく精霊のおかげなのか、あるいはその両方のおかげなのか、依然としてわからないことは多い。

だが、長年、頭の中でつかえていた疑問の多くを氷解させることはできた。

「さて、以上で精霊術を扱う上であらかじめ説明しておかなければならん前提知識は語ってしまった。後は実践するのみだの。リオ殿、こないだ怪我を治療するときに思ったんじゃが、精霊術で人間の使う魔法を模倣しておりゃせんか？」

「その通りです」

魔法によるオドの流れを模倣して事象を発生させていたリオの精霊術の特徴をアースラは一度目にしただけで見抜いたようだ。

「それでも事象を引き起こすことはできるが、十全に精霊術を活か

しきれているとはお世辞にも言えぬのう。精霊術とは魔法よりも自由自在なものなのじゃ」

魔法は術式によって自由度を狭めている代わりに、オドの感知と制御さえできればマナの感知ができなくとも使うことができる。

対する精霊術はオドの感知と制御に加えてマナの感知と制御もこなさなければならず、扱いはピーキーだが自由度が高く効果の調節もしやすい。

アースラが言っているのはそういうことである。

「オドの量と術者の適性という制約はあるが、精霊術は術者次第で魔法よりも自在に事象を操ることができるようになる。大事なのはマナにイメージを伝えて事象に干渉することじゃ」

「マナにイメージを伝える？」

「そう。オドをマナに溶け込ませることで術者のイメージをマナが読み取ってくれる。マナには漠然とした自我があるのじゃ」

「マナに自我が……」

明確に自我を持ったマナの集合体が精霊、ならばマナは精霊の前段階の存在ということになる。

「マナにイメージを自在に伝えられればこのようなこともできる。ほれ」

アースラは、正面に掌を突きだすと、手の上に小さな火球を発生させた。

人、動物、物と、火球は目まぐるしい速度で様々な形へと変わっている。

「他の属性の精霊術ができないわけではないが、儂は特に炎術と幻

術が得意じゃ。個人ごとに得意な精霊術の適性があるのが普通じゃな。種族ごとの傾向もあるが絶対とは言えんから一般論化するのは無理じゃが、自分の得意な精霊術を見極めてみるのもよいだろう」

「自分の得意な精霊術……ですか」

「うむ。苦手な属性の精霊術じゃと発動はしても効果がイマイチということがあるんじゃ。一応、エルフ、ドワーフ、獣人、種族ごとに特異な精霊術の特徴もあるの。例えば……」

「お兄ちゃん！」

アースラが説明を続けようとしたところで、ラティーファがリオのもとへ走ってきた。

「こら、ラティーファ！」

その後を追う様に、銀髪のロングヘアを風に靡かせて、タイトな黒いシャツと赤いプリーツスカートを着たサラが走ってくる。

「二人とも速すぎだよっ」

さらにその後ろから、白いワンピースを着たオーフィアが、風を身に纏い、長い金髪を舞わせて、空を飛びながらやって来た。

一気に慌ただしくなった場の雰囲気に、リオが目を丸くする。

「極めればあんなこともできるというわけじゃ」

オーフィアを見て、アースラが得意げな口元に笑みを浮かべて、言った。

「なるほど……」

空を飛ぶオーフィアの速度はなかなかのものである。
そして、その追従を許さないで走りぬくラティーファとサラの身体能力もかなりのものであった。
ラティーファは『身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）』で身体能力を底上げしているようだが、サラはリオのように精霊術で身体能力と肉体を強化しているようだ。

「お兄ちゃん！　お姉ちゃん達、優しいけど、お兄ちゃんと会っちゃ駄目って言うの！」

やって来るなりラティーファがリオにそう言った。

「そう言う意味じゃありません！　ラティーファは先に精霊の民の言葉を覚えなくてはいけないんですよ！」

サラがラティーファの言葉を釈明する。

「嫌だもん！　ふんだ、サラお姉ちゃんの怒りんぼ！」
「なっ、ラティーファ！　そこに正座です！　座りなさい！」

リオの中では大人しくて真面目そうなイメージのサラだったが、なかなかの剣幕でラティーファに詰め寄る。

「嫌だよー！」

ラティーファがサラに向けて舌を出してあっかんべーをする。

「くっ、この子は……」

サラが小さく震える。

「だ、ダメだよ。サラちゃん。ラティーファはまだこの里にも慣れてないんだし」

今にも耳と尻尾を逆立てそうに怒るサラをオーフィアが宥める。どうやら落ち着いた物腰を感じさせる見た目通りに、彼女はおっとりとした性格をしているようだ。

「オーフィアは甘すぎなんです！　この子のためにも心を鬼にしないと！」

「躾をするのはわかりますが、姉さん達も少し騒がしすぎます。それではラティーファと一緒ですよ」

そこに、サラやオーフィアと比べても、一際小さいドワーフの少女がやって来た。

アルマである。

燃えるような灼髪のショートカットが僅かに褐色の入った肌の顔を覆っているのが印象的な少女だ。

「そ、それはラティーファが抜け出したから……」

「サラ姉さんならラティーファの匂いを追跡すればいいだけでしょう？」

アルマの説教染みた言葉に、サラが力なく反論したが、アルマは理路整然とサラを追い立てた。

アルマは、白を基調とした赤い文様のチュニックに赤い短ズボンを着ており、ボーイッシュな見た目をしているが、性格はなかなか落ち着きがあり理知的なようである。

「う……」

反論の余地のないサラが言葉に詰まる。
救いを求めようとオーフィアを探したが、いつの間にかラティーファを連れてリオとアースラの場所へ避難していた。

（オ、オーフィア～）

「いいですか。そもそも僅かとはいえサラ姉さんは私達の中で年長なのですから……」

ちゃっかりと逃げ出したオーフィアにジト眼を向けつつ、サラは自らよりも年下のアルマから十分以上にわたって説教を受けることとなった。

第２４話　模擬戦

精霊の民の里に来てから既に半年以上の時間が経過し、リオはいつものように里のはずれにある広場で精霊術の練習を行っていた。

「精霊術に関してもはや儂が教えるべきことは何もないのう」

目の前で完璧に精霊術を行使するリオの姿を見て、感心したように、アースラが呟いた。

「これもアースラ殿のおかげです」

薄っすらと微笑みながら、リオは自分に精霊術を指導してくれたアースラへと感謝の言葉を伝えた。

「僅か一年足らずでこれほど自在に精霊術を扱えるようになったのは、リオ殿の才能によるところが大きい。儂は少し助言をしただけじゃよ。リオ殿は万能型の精霊術師でもあるし、素晴らしく精霊に愛されておるのじゃろうて」

礼を言われたアースラがにこやかな笑顔を浮かべる。

アースラの言う通り、リオにはあらゆる精霊術に適性があった。火、水、氷、風、土、雷といったあらゆる自然現象を巧みに操り、その他にも様々な事象を引き起こすことができる。

もちろんアースラだってそれらの現象を操ることはできる。だが、あらゆる事象をすべて同じように自在に操るというのは無

理である。
どうしても得意な火の精霊術や幻術に比べると扱いが劣らざるをえないのだ。
「精霊術絡みで残っている課題はリオ殿の契約精霊が不明なことじゃな」
いまだに判明していないリオの契約精霊にアースラが言及する。
「契約精霊を知る方法は何かないのですか？」
アースラの指示のもと、今まであえて放っておいた課題を解決する手段についてリオが尋ねる。
「うーむ、一人、もしかしたらそなたの中で眠りについている精霊を知ることができるお方に心当たりがないわけでもないのだが……」
と、アースラは妙に歯切れの悪い物言いをした。
「何か問題でもあるのですか？」
「うむ。まぁ、少々な」
少しばかり歯切れの悪い言葉に、リオが首をかしげる。
「精霊の民の里に暮らす人物なのですよね？」
「いや、そのお方は精霊なのじゃよ。それも限りなく高位に近い存在じゃ。言うならば準高位精霊というところかの。大樹の精霊ドリュアス様じゃ」
「大樹の精霊、ひょっとして……」

リオは里の近くにある巨大な大樹がそびえ立っている方を見た。
「うむ、ドリュアス様が暮らす場所はこの原生林の中心地にあるあの大樹よ」
リオの言葉に、アースラが頭を縦に振った。
だが、リオには、一つ、腑に落ちないことがあった。
「他の精霊では自分の中にいる精霊の正体をわからないのですか？」
そう、同じ精霊であるならば、何もドリュアスである必要はないのではないかと、リオはそう考えた。
「たしかに精霊は他の精霊の存在を感知することができる。じゃが、普通の精霊は知恵があっても言葉を発することはできぬからのう。契約者の意思を読み取って行動したり、漠然と何かを伝えてきたりすることはあっても、契約者に明確に何かを伝えることはできぬのじゃ。人と意思の疎通が完璧にできるのは相当に上位の精霊だけだの」
その言葉に、リオが納得したという表情を浮かべる。
「なるほど……。その大樹に行くことは私でもできますか？」
「そこが問題じゃ。その場所は儂ら精霊の民にとって聖域みたいな場所でのう。年に一度行われる精霊祭のとき以外は儂ら精霊の民でもそう無暗には立ち入ることはできんのじゃ。それ以外の時期の立ち入りには許可が必要でな」
その言葉でリオは真意を掴んだ。

「部外者の自分では立ち入りが認められるかはわからないということですか？」

と、アースラの懸念をリオが言い当てる。

「うむ、恩人のリオ殿ならばあるいは……と言ったところかのう。すまぬが未だに人間族のリオ殿を完全に信用しきれておらんものが長老陣の中にはおるからな」

僅かに眉根を寄せ、申し訳なさそうな表情を浮かべて、アースラが言った。

人間族の少年が精霊の民の少女を救った恩人として里に滞在しているという情報は里の中に通知が行き届いているようだが、今のリオは一部の精霊の民との接触を除いて隔離されたように生活を送っていた。

精霊の民が人間族に対して良いイメージは持っていないのはもちろん、里を導く長老陣でさえ、いや里を導く長老陣だからこそ、リオに対して特に強い警戒心を持っている者がいるのだ。

大樹の場所に行く許可を与えるのが長老陣である以上、限りなく完全な意味で彼らの信頼を得ることが必要となる。

「なんとか大樹のもとへ行けるように儂から取り計らってはみるとしよう。気長に待ってくれるとありがたい。まぁ、リオ殿には他にも知るべきこともたくさんあるしの。ドミニクの奴もリオ殿にドワーフの知識を教え込むと意気込んでおったぞ。シルドラからもエルフが有する知識について直々に享受するそうじゃ」

当面の気がかりを払しょくするように、アースラが努めて明るく語った。

精霊の民の最長老達から直々に教えを乞うことができる。

種族間の問題上、他の者ではリオに知識を教えるのに差しさわりがあるという意味もあるのだろうが、リオにとってはこの上なく好都合でもあった。

「キリも良いし今日はこの辺にしてラティーファの様子でも見に行ってみるとするかの？」

可愛い曾孫のことを思い浮かべたのか、アースラは晴れやかな笑みを覗かせた。

「そうですね。あの子もどれくらい成長したのか見てみたいです」

リオがアースラの提案に賛同すると、それから二人はラティーファが精霊術の訓練をしているという広場へと向かった。

そこにはラティーファ、オーフィア、サラ、アルマ、ウズマの五人がいた。

「こ、これはアースラ殿にリオ殿、どうも……」

五人の中でいち早くアースラとリオの存在に気づいたウズマが、恐縮したように頭を下げて、挨拶をしてくる。

「うむ」

「こんにちは。ウズマ殿」

そんなウズマにリオが少しぎこちない精霊の民の言葉で挨拶を返した。

リオが精霊の民の言葉を操ることにウズマが驚く。

「もう精霊の民の言葉を話せるようになったのですか？」

と、興味深そうな視線を向けて尋ねてきた。

「ええ、アースラ殿に付きっきりで教えて頂いたおかげで、日常会話程度なら。まだまだぎこちないですけどね」

日常生活のほぼ大半を費やして精霊の民の言葉で会話をすることで、リオは実地訓練で彼らの言語を学び続けていた。

そのおかげで日常会話程度ならば支障のない程度に精霊の民の言葉を操ることができるようになった。

「それでも凄い習得速度だと思いますが……」

傍にいたアルマが感心した声色で言った。

他の者達からも感心したような視線を向けられ、リオがむず痒さを覚える。

「ありがとうございます」

と、リオは気恥ずかしそうに短く礼を告げると、うずうずと自分が会話を終えるのを待っていたラティーファの方を向いた。

「ラティーファ、ちゃんと勉強しているか？」

「うん！　精霊術もだいぶうまく使えるようになったよ！　今は模擬戦をしてたの。ウズマさんすごく強かったよ！　次はサラお姉ちゃんと戦うところだったんだ」

話しながらラティーファがリオに抱き着いてくる。

リオの胴体に顔を埋めると、ラティーファはリオを見上げてきた。

「そうなのか。じゃあラティーファが戦うところをアースラ殿と一緒に見てもいいか？」
「うん、いいよ！　サラお姉ちゃん！　早くやろう！」
リオに良いところを見せようと、ラティーファが張り切って広場の中央へと駆けだす。
「まったくもう。リオ様が来たからと言って張り切りすぎですよ」
仕方ないなといった感じでサラがラティーファの後ろを追う。
二人が広場の中央に移動すると、オーフィアが試合開始の合図をした。
合図とともに強化された肉体と身体能力で二人が瞬時に動き出す。
既にラティーファも精霊術の習得を開始しているため、精霊術による身体能力と肉体の強化を行っている。
（速い）
その速度にリオが内心で驚く。
ラティーファの速度はリオと出逢った時よりも遥かに上昇していた。
身体能力の強化しか恩恵のない『身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）』と、身体能力だけでなく肉体の強度をも強化してくれる精霊術との違いだろう。
しかし、精霊術で肉体と身体能力を強化しているのはサラも同じである。
リオの見立てではスピードはほぼ互角である。
ならば二人の技量が物を言うことになるのは必定だろう。
今はまだお互いに様子見のようだが、牽制するように攻撃を打ち

合っている。
武器はそれぞれ木製の模擬ナイフだ。
リオはウズマの隣に立って二人の試合を黙って見守っていた。
ところが、しばらくして、隣にいるウズマはどうも落ち着かない様子であることに気づいた。
精霊の民の里に来てからそれなりに時間は経過したが、ウズマはリオに対して避けるような態度をとっている。
敵対心はないようであるが、どうにもぎこちない。
「自分はもう気にしていませんよ。ウズマ殿も気にしないでください」
と、このままの関係でいるのも窮屈と考えたリオが言った。
するとウズマが驚いたような顔をしてリオを見てきた。
「違いましたか？」
勘違いしてリオに深手を負わせたことを、ウズマはいまだに悔いているのではないかと、リオは考えていた。
だが、ウズマの反応から、リオに対する態度は完全にもう一つの原因によるものだったのかと、リオは考え直した。
ならばどうしたものかと、リオが何を話そうかと悩んでいると、ウズマの方から喋りだした。
「……いえ、違いません。正確にはそれもあるのですが、私の中の人間族のイメージとリオ殿があまりに乖離しているというのもありまして、その、どう接してよいか悩んでいたというのもあります。申し訳ありません。全ては私の不徳と致すところです」

やはりリオに対する態度のぎこちなさは種族間の問題も絡んでいたようだ。
おそらく、同胞の少女を救い出してくれたことに対する感謝の念、誤解からリオに深手を負わせてしまったことによる罪悪感、そして種族間の問題から来る苦手意識がウズマの中で渦巻いているのだろう。
種族に対する偏見というのは歴史も絡んでいるため、ちょっとやそっとのことで拭い去るのは難しいはずだ。
「種族に対して抱くイメージはそう簡単に拭い去ることはできないでしょう。その辺のことも踏まえて私は気にしません。ですから変に肩肘を張らないで頂けると幸いです。そう気を張っていると疲れてしまうでしょう？」
と、リオは、困ったように微笑みながら、肩を竦めて言った。
「……リオ殿の心遣いに深く感謝します」
生粋の武人であることを感じさせる所作で、ウズマはリオに頭を下げた。
そんな二人の様子を傍で見ていたアースラ、オーフィア、アルマは興味深そうな表情を浮かべていた。
他方で、二人が会話をしている間に、サラとラティーファの試合は佳境を迎えていた。
ラティーファも善戦しているようだが、サラはその上を行っている。
暗殺者として鍛えられたラティーファを上回る戦闘能力は、年齢差もあるが、サラ自身の才能も大きいとリオは考えていた。
鍛錬を積み続け成長したラティーファもサラと同程度の強さを誇ることはできるだろうが、しばらくはラティーファが年長者である

サラの後ろを追う形になるだろう。

「うぅ、サラお姉ちゃんにも負けた～」

悔しそうな表情を覗かせながら、ラティーファが言った。

「私の方が年上なんですから当たり前ですよ。私は精霊の民の戦士達からずっと手ほどきを受けてきましたから。ラティーファの年齢でそれだけ戦えれば精霊の民の戦士としても十分にやっていけます」

地面に寝転がって悔しがるラティーファをサラが労う。

「うん、すごい強かったよ。私じゃ手も足も出ないな」

オーフィアもラティーファを労う様に声をかけた。

「オーフィア姉さんは後衛型の精霊術師なんだから、前衛型のサラ姉さんやウズマさんに接近戦で勝てなくて当然でしょう」

そこにアルマが突っ込みを入れる。

生真面目な性格ゆえか、思ったことを口にせずにはいられない質なのだろう。

「でも、サラお姉ちゃんよりも、ウズマさんよりも、お兄ちゃんの方が強いもんね！」

と、ラティーファがリオの勝利を確信しているように言った。

「む、それは戦士として聞き捨てならないのですが……」

ラティーファの自信ありげな言葉に、ウズマの戦士長としてのプライドが刺激されたようだ。

「私じゃ手も足も出なかったんだから！　ウズマさんも私よりずっと強いけど、お兄ちゃんよりはまだ勝てる気がするもん！」

「ラティーファ、ウズマは里の中では若手一の戦士なのですよ。いくら精霊術に長けているとはいえ流石に人間族の子供であるリオ様が勝つのは……」

ウズマの強さをよく知るサラがラティーファに異論を唱える。

「じゃあ戦ってみればいいんだよ。ね、お兄ちゃん？」

リオの方が強いと心の底から信じているような目でラティーファが見上げてきた。

中々面倒な展開に、視線を逸らしたい気は山々だったが、ラティーファの純粋無垢な期待を裏切れるほどリオの神経は図太くはなかった。

「やってみますか？」

内心で苦笑しつつも、リオはウズマへと模擬戦を申し込む言葉を送ってみることにした。

「ええ、是非」

するとウズマが即答した。

彼女の方は十分にやる気があるようだ。

模擬戦用の武器を用意すると、二人が広場の中央へと移動する。

ルール上、使用していい精霊術は身体能力と肉体の強化だけだ。

ウズマの装備は木の槍で、対するリオは木剣を装備している。

「はじめ！」

試合の開始と同時にウズマがリオへと突進してきた。

翼が生み出す推進力も相まって、その速度はまるで矢のようである。

涼しい顔をして内心では随分と熱くなっているようだ。

よほど自分の強さに自信と誇りを持っているのだろう。

リオは、ウズマの直向きさに好印象を覚え、薄く笑った。

ウズマは、一瞬でリオへと間合いを詰めると、魔力で強化された天性の圧倒的な身体能力と肉体でリオを押し出すように突きを放ってきた。

雪崩のように迫り来るウズマの乱れ突きをリオが受け流していく。

無駄のない動きで自分の攻撃を捌いているリオに、ウズマが驚いたような表情を浮かべる。

ウズマはいったんリオから距離をとると、地を這うような低い姿勢でリオに迫り、懐に入り込み逆流するように下から槍を振るった。

リオはそれを正面から受け止めるが、ウズマがそのまま力任せに押し込む。

ふわり、とリオの身体が宙に浮かぶ。

そのまま押し込むように足を踏み込み、翼を羽ばたかせ、その勢いでウズマはリオを吹き飛ばした。

リオとウズマの距離が一瞬だけ開く。

が、宙に舞ったリオを逃さないように飛び立つと、ウズマが空中で正確にリオの手足を狙って一息で四点の突きを放った。

手足をずらし身体を捻ることでそれを躱すと、リオは剣でウズマ

の槍を弾く。
一閃、そのまま剣を引いて横薙ぎにウズマの胴体を斬る。
が、ウズマは、瞬時に翼を羽ばたかせて後ろへと下がることで、それを躱した。
空中で彼女を捉えることは難しいようだ。
二人が距離を保って地面に着地する。
次の瞬間、ギリギリで保たれていた二人の間合いは、リオが一歩前へと足を進めたかと思うと、瞬時に詰められた。

「っ！」

攻守逆転。
ウズマが一瞬だけリオの姿を見失った。
だが、天性の勘でとっさに反応し、体勢を崩しながらもかろうじてリオの攻撃を防ぐ。
体勢を立て直すためにとっさに離れようとするウズマだった。
だが、リオは、それを逃さないように距離を詰め、槍を自在に使うスペースを殺し、防御の隙間を縫うよう鋭い突きを放っていく。

「くっ」

今度はウズマが劣勢に立たされる番だ。
かろうじてリオの攻撃を防いでいるが、手数の多さではリオが勝っている。
用いているのが実剣ならば無数の切り傷がウズマに出来ているだろう。
押されているウズマの一瞬の隙をついて、リオが大きく振りかぶって強力な一撃を放つ。
それを受け止めたウズマの身体が小さく吹き飛ばされた。
羽ばたいて空を飛ぶことで衝撃を殺すと、ウズマが地面にゆっく

りと着地する。
「……貴殿を戦士として認めよう。どうやら本気でやる必要があるみたいだ」
と、平常時と異なる口調で、ウズマが言った。
同時にウズマから放たれる雰囲気も豹変する。
ぞくり、とリオの全身に寒気が走った。
刹那、ウズマが瞬時に間合いを詰め、リオの胴体目がけて激しい突きを放った。
押し潰されるようなプレッシャーに、リオはとっさに横にステップを踏んだ。
続けて首筋にピリピリと嫌な物を感じて、首を逸らす。
次の瞬間、空気を切り裂くような音をたてて、リオの顔面のすれすれの位置をウズマの蹴りが通り過ぎた。
「ほうっ、よく躱したものだ。だがこれはどうだ！」
その言葉とともに痛烈な薙ぎ払いがリオを襲う。
しかし、それをリオが受け止める。
リオが顔を歪めて両手で支えている片手剣を、ウズマが涼しい顔をして押し込む。
その力をいなすように、リオは後ろへ大きく後退した。
「ちょっと模擬戦の領域を超えちゃいませんか？」
と、リオが苦笑して言う。
「当然だ！　これほどの強者を相手にして楽しまないわけがない！」

獰猛な笑みを浮かべてウズマが叫んだ。
どうにも少しばかりバトルジャンキーの気質があるようだ、とリオは思った。
リオの口元に薄っすらと笑みが浮かぶ。
どうやら自分も人のことは言えないようだった。
久々に全力でぶつかり合える相手と戦うことで、少なからず熱くなっているのを、リオは感じていた。
たまにはこうやって何も考えずに戦うのもいいのかもしれない。
だが、現状の身体能力ではウズマが大きく勝っている。
このまま戦うのは少しばかりきつい。

（なら条件を互角にすればいい）

すると、リオの体内から溢れるオドの量が跳ね上がり、その密度も格段に濃くなった。

「むっ、なんというオドの量と密度だ」

リオの身体を包み込むオドの鎧に、ウズマが目を見開く。
精霊術による身体能力と肉体の強化は肉体に纏わせるオドの量に比例して上がる。
素の身体能力と肉体の強度が獣人族のウズマに劣っているのならば、それを上回る程にオドで身体能力と肉体を強化してやればいい。
リオはそう考えてそれを実行した。
だが、やろうと思ってできることではない。
大量にオドがあっても、それを一度に扱えるかどうかは別の話であるからだ。
大量のオドを凝縮させて身に纏うには相当なオドの制御力が必要となる。

「今までは本気ではなかったということか」
ウズマは薄っすらと笑みを浮かべた。
「いえ、本気でしたよ。ただ、これほどの強化を行って戦う機会はなかったものですから全力だったとは言い難いかもしれません」
「なるほど。とはいえまだまだ上限ではなさそうだがなっ」
いつの間にかリオの前へ移動すると、ウズマが槍を振るう。
「いえ、結構いっぱいいっぱいですよ」
と、ウズマの膂力を真っ向から受け止めながら、リオが言った。
「涼しい顔をしてよく言う！　はぁっ！」
緩急をつけた乱れ突きがリオを襲う。
その一つ一つを最低限の動作で躱していくと、呼吸の合間を見計らったように、ウズマが突き出した槍の懐に入り込み、リオが剣を振るった。
「くっ」
危うい様子でリオの攻撃を受け止めると、木剣を受けた部分を起点にして槍を回し、ウズマは横薙ぎの打撃をリオの顔に目がけて打ち込んだ。
リオが顔を逸らしてそれを避ける。
直後、リオとウズマの武器が幾度も重なり合う。
金属製の武器ならば轟音と火花が散っていることだろう。

痛烈な連続攻撃がリオに降り注ぐ。
しかし、それらすべてをリオは一歩も動かないで捌いていた。
「すごいな。どう打ち込んでも攻撃が当たる気がまったくしない！」
ウズマが嬉しそうに声を出した。
意地でもリオを動かそうと、捨て身を覚悟で、槍の先を蹴りあげるように跳ねあげ、ウズマが奇襲の一撃を入れる。
リオは半歩横に移動することでそれを避けると、返す刃で反撃を放った。
「ぐっ」
遂にリオの木剣がウズマの胴体を捉える。
寸止めはされたものの、確実に避けることのできない一撃であったことを察し、ウズマが悔しそうに顔を歪めた。
「……私の負けです。申し訳ない。少し熱くなりすぎました」
が、すぐに普段の冷静な声色に戻り、礼儀正しくリオに対して頭を下げた。
リオは彼女の顔が少しだけ赤くなっていることに気づいた。
熱くなりすぎたことを恥ずかしく思っているのだろう。
「いえ、自分も同じですから。楽しかったです。よろしければまたお相手をしてください」
「ええ、是非とも」
ウズマが微笑みながら、朗々とリオの申出を快諾する。
既にリオに対するぎこちなさは完全に消えていた。

どうやらウズマの中で何か感じるものがあったようだ。
そんな二人の激戦の果てに、サラ、オーフィア、アルマ、アースラは唖然とした表情を浮かべていた。
「ね、言ったでしょう！　お兄ちゃんの方が強いって！」
そんな中、ラティーファだけは、得意げな表情で、当然だと言わんばかりに、慎ましやかな胸を張っていた。

第２５話　料理教室

精霊の民の里はエルフ、ドワーフ、獣人によって構成される一個の国だ。
千年以上昔に繰り広げられた神魔戦争を機に勢力を拡大した人間族との抗争を嘆き、原生林と呼ばれる未開地の奥深くに自らを封じ込め、およそ外部との交わりを絶ち、彼らは独自の発展とともに千年にも及ぶ悠久の時を過ごしてきた。

そんな精霊の民は、人口こそ人間族に比べると非常に少ないものの、農業、工業、医療、建築、あらゆる分野で、人間族の技術を凌駕している。
彼らを大きく支えるのは精霊術だ。
そして、人間族よりも長い寿命によりもたらされる知識の積み重ねである。

武具や魔道具の作成についても目を見張るものがあったが、リオからすれば一番驚きを受けたのが風呂文化と食文化である。
まず、精霊の民は、綺麗好きであり、自在にお湯を生み出せることから、日本式の風呂に入る習慣がある。
今まで行水で我慢してきたリオはいたく感動し、連日、精霊の民の風呂を堪能している。

また、精霊の民の里はリオからすれば食材の宝庫といえた。
膨大な種類の食材と、それを育む精霊術で管理された土壌により、あらゆる食物が一級品の状態で収穫される。
人間族の領域では育っていない作物はもちろん、同じ作物でも人間族の世に出回っている物とは品質が桁違いである。

精霊の民独特の料理が多く存在するが、リオは、最長老達から教えを乞う一方で、前世の料理を和洋中問わず数多く再現することに腐心していた。
当初は精霊の民の里の官庁施設にあった客間に暮らしていたリオだったが、正式にこの里に滞在することが決まってからは、アースラの自宅にラティーファと一緒に住まわせてもらっている。
食べ慣れたリオの料理を食べたいというラティーファの懇願がきっかけで、リオも料理をすることになったのだが、アースラ達家族の評判はすこぶる良かった。
ラティーファに呼ばれてやって来たサラ、オーフィア、アルマも、一度リオの料理を食べてからは、頻繁に足を通わせるようになっている。

お土産を渡したりして少しずつリオの料理を食べる者が増えてくると、そのうち長い歴史を持つ精霊の民ですら知らないレシピの豊富さが話題になる。
やがて、今までリオとの接触が避けられていた一般の精霊の民達の間でも、リオの料理に関する噂が広がっていった。
そこで、ラティーファが里の者達と交流を図る良い機会であったし、リオがこの里を離れた後にもラティーファが前世の料理を食べられるようにと、ラティーファにせがまれ、リオは定期的に料理教室を開催してはどうかとアースラに提案した。
すると、最初は長老陣の親族を限定にという条件で、試験的に料理教室を行うことが認められるに至った。
そんな料理教室が初めて開催される日、宴の際に利用される巨大な調理施設に、多くの精霊の民の女性陣が集まっていた。
彼女達は精霊の民の里の中でも上層部の家庭に暮らす者達である。
「米は色んな食べ方のある食材です。短粒種が炊いたり蒸したりするのに適しているのに対し、長粒種は煮るのに適しているのはみな

さんご存知の通りだと思います。ただ、これも絶対というわけではありません」

精霊の民の里でお米を発見したリオは、初手となる第一回目の料理教室において、米料理を教えることを決めた。

キッチンに立ったリオを多くの精霊の民の女性が囲んでいる。その中にはラティーファ、サラ、オーフィア、アルマの姿もある。

「中には短粒種と長粒種を問わずに米を炒めて味付けをする料理もあります。こういった料理を作るときは利用する食材やどんな味付けをするかによって米の炊き方も微調整しなければいけません」

と、精霊の民の言語でリオは女性達に料理の解説をする。

「というわけで今日はオムライスという料理を作ってみようと思います。利用するお米は好みもありますので短粒種でも長粒種でもかまいません。他に最低限用意すべきものはタマネギ、塩、コショウ、それとトマトケチャップと呼ばれる加工した調味料です。ただより美味しく作るならバターも必要ですね。後はお好みでマッシュルーム、ハム、グリンピースなどを使います」

オムライスを作るのに必要な材料は既にキッチンの台の上に並べてある。

「では早速作ってみましょうか。本格的に作るために、まずは、バターライスと呼ばれるご飯を炊き上げます」

リオがバターライスの炊き方を指導する。

白米に味を加えて炊きこむという料理は精霊の民も知っていたので、この点について驚きはないようだ。

「バターライスにトマトケチャップと具材を入れて炒めたものがオムライスのベースになるチキンライスです。ただ、バターライスは違う味付けをして炒めることでピラフという料理にもなりますし、上からいくつかのソースをかけて食べる料理もあります。それについては後日教えるとしましょう」

バターライスの活用の幅に僅かに感心したような声が女性達から上がった。

色んな料理に利用できるのならば、多少手間がかかっても夫や子供のために作ることに吝かではないというのが女性たちの心理だろう。

「続いて、バターライスが炊き上がるまでの間にトマトケチャップを作りましょう。必要なのは、トマト、玉ねぎ、にんにく、しょうが、砂糖、塩、コショウ、ローリエ、唐辛子、コンソメ、シナモンです」

別の位置に取り分けておいたトマトケチャップの材料に視線を送ると、手順と必要な分量を教えながら、リオが手際よくトマトケチャップを作り始める。

「トマトケチャップは色んな料理に活用できるので便利ですよ。ある程度は保存もできますので作り置きしておくといいでしょう」

バターライスが炊き上がるまでの間にリオが女性達から寄せられる質問に答えていく。

「そろそろバターライスが炊き上がりますね。後はチキンライスを作り卵で包むことでオムライスの完成です。ちなみにチキンライス

だけでも料理としては完成した品なので食べることはできます」

フライパンとヘラを巧みに使ってリオがチキンライスを作っていき、半熟のオムレツを作り、それを上手に包んだことでオムライスが完成する。

「これが一般的にオムライスと呼ばれるものです。さらに色んなソースをかけることでアレンジできますが、本日はトマトケチャップを少量かけることで食べてみましょう。では、みなさん試食してみてください」

調理の過程で放たれていた香りで、女性陣の食欲はこれ以上ない程に刺激されていた。

リオが試食の合図をすると、綺麗な仕草だが競う様に素早く女性達のスプーンがオムライスへと向かっていく。

蓋の役目をはたしていた半熟卵が破られると、周囲一帯にいっそう食欲をそそる香りが充満する。

分量は多いとはいえ一度に無理なく作れる程度の量しか作っていないことから、あっという間にオムライスが乗っかっていた皿は綺麗になってしまった。

一人一人が食べられたのは一口程度だろう。

それぞれ名残惜しそうに皿とスプーンを見比べていた。

「お気に召していただいたようで何よりです」

と、女性達の食欲旺盛ぶりに、リオが微笑を浮かべて言った。

リオが笑っていることに気づき、女性達が僅かに顔を赤らめる。

「今回教えたのは本格的なオムライスの作り方ですが、時間がない時や冷や飯が残っている時は、風味は劣りますがバターライスを作

らずとも、白米をトマトケチャップで炒めて卵で包むだけでお手軽に作れたりもします。では、今度はみなさん自身で作ってみましょう」

それから、あらかじめ決まっていたいくつかのグループに分かれ、女性達が調理を開始した。

ラティーファもサラ、オーフィア、アルマを含んだ同年代の少女達と一緒の班になってオムライス作りに挑戦している。

手順にわからないところが出てくると、女性達から質問が寄せられ、リオが駆けつけて答える。

「いくつか完成したグループも出てきたようですね。出来あがったグループから食事を開始してけっこうですよ。本日はこれで終了なので、食べた後は片づけをして帰っていただいて結構です。お疲れ様でした」

その後、全てのグループが調理を終えたことを確認すると、リオはそのまま調理教室となっているキッチンルームから出て行こうとした。

が、そこでラティーファもいる少女達のグループから声を掛けられた。

「よろしいんですか？　自分がいてはみなさんの気が休まらないのでは……」

何故か少女達が作ったオムライスを一緒に食べることになり、十人以上の異種族の少女達に囲まれたリオが、少しばかり居心地が悪そうに言った。

自分は人間族なのだ。

あまり良い思いを抱いていないのではないかと、リオは少なから

ず危惧していた。

「そんなこと言わないでいいの。ラティーファがお兄ちゃんに食べてもらうって張り切って作ったんだから。お兄さんなら妹の作った料理を食べてあげないとね」

と、面倒見の良さそうな一番年上の猫獣人の少女が言った。

年は十六、十七歳といったところか。

「それに、リオ君、もう一年近くもこの里に暮らしているんでしょ？　なのにあんまり里の人達と交流がないからさ。ずっと気になっていたんだよ」

「皆さんの所には自分に関してどの程度の情報が行き渡っているんですか？」

「私達はサラ様、オーフィア様、アルマ様、ラティーファ達から色々と聞いたんだよ。礼儀正しくて、精霊の民の言葉もすぐに覚えるくらいに頭が良くて、顔も良い、ウズマ姉と同じくらい武術の才がある、オーフィア様を凌ぐくらいに精霊術に長けている、何らかの精霊と契約を結んでいる、しかも料理も上手とくれば、気にしないわけがないでしょ」

「ア、アーニャさん！」

焦ったようにサラ達が声を出した。

自分達がリオに対して抱いているイメージを暴露されたようなものなので、気恥ずかしさを覚えたのだ。

「お世辞でもそう言っていただけると嬉しいです」

アーニャと呼ばれた少女の言葉を受け流す様に、リオは謙遜した。

「お世辞じゃないよ。人間族っていうのは寿命が短いから年齢の割に大人びていて早熟だって聞いたことがあるけど、謙虚だねぇ。今日の料理教室の様子を見たら人間族だとかそんなみみっちいこと関係なしに君の評判もグッと上がるんじゃないかな。ね、みんな？」

サラ達の視線を気にした様子もなく、アーニャがその場にいた少女達に話を振ると、周囲の少女達もそれに賛同するようにコクコクと頷いた。

「はい、なのです！　この料理美味しいですよぉ！」

と、物凄い上機嫌な様子でオムライスを食べながら、ラティーファと同年代の狼獣人の少女が言った。

「えへへ、ベラちゃん、お兄ちゃんの料理は美味しいって言ったでしょ」

「はい！　流石はラティーファちゃんのお兄様なのです！」

ずいぶんとラティーファとは仲が良いようだ。

二人の仲睦まじい様子にリオが薄く微笑む。

「ありがとう。ラティーファのことをよろしく頼むよ」

「ふふ、もちろんですよぉ！」

オムライスを食べながらも、じゃれつくような笑みを浮かべてベラが頷いた。

「こら、ベラ、喋りながら食べるんじゃありませんよ」

サラが姉の表情を浮かべてベラをやんわりと叱る。

「わふ、サラお姉様、ごめんなさいなのです！」
「あらあら、ベラちゃん」

子犬のようにしゅんと小さくなったベラ。
そんな彼女をオーフィアが宥めた。
その様子を見て少女達が仕方がないなと笑う。

「それにしてもリオ兄様はどのような精霊様と契約を結んでいるのですか？」

と、ベラが敬意と好奇心の織り交ざった視線をリオに向けて聞いてきた。

（に、兄様？）

聞き慣れぬ敬称に戸惑いを覚えながらも、不快感を覚えることはなかった。

どうもベラという少女は人懐っこい気質を持っているようだ。

「実は自分でもわからないのですよ。どうも休眠状態にあるらしくて、霊体化した状態で私の身体の中で眠っているそうです」

と、どこか困り顔を浮かべてリオは語った。

「へぇ。どんな精霊なんだろうね。精霊と契約を結べるっていうのは私達にとって最大級の憧れだから羨ましいな」

と、アーニャが、オムライスを口にし、相好を崩して言った。

アーニャの言う通り、精霊と契約を結ぶと言うのは精霊の民にとってこの上ない名誉である。

それゆえ、精霊と契約を結んでいる者に対しては一定以上の敬意を支払われることになり、それは人間族であるリオであっても例外ではなかった。

今回の料理教室の開催が認可されたのも、リオに契約精霊がいることがアースラの口から語られて、長老達に知られるに至ったというのが大きい。

「ま、今日はせっかくの機会だから色々とお話をしてみたいな。そういうわけでたくさん質問するからね！」

その言葉を皮切りに、少女達から様々な質問を投げかけられ、終始にぎやかな雰囲気の中、リオは少女達と何気ない会話を繰り広げて交流を深めた。

第２６話　大樹の精霊

「大樹に行く許可が下りたのですか？」

リオが料理教室を開いてから幾ばくかの時が過ぎたある日、アースラからリオに大樹の下へ行く許可が下りたことが告げられた。

「うむ、リオ殿が始めた料理教室が好評のようでな。その評判が後押しとなったんじゃ。それに大樹に連れて行く理由を説明するにあたってリオ殿が何らかの精霊と契約をしている状態にあるということを長老陣に教えたのも大きいの。儂らは良くも悪くも精霊を信仰しておるからな。精霊と契約できる者はそれだけで一目置かれることになる」

と、許可が得られるにいたった経緯も踏まえてアースラは語る。

「なるほど」

その話を聞いて、リオがどこか苦笑めいたものを覗かせた。

どうやら険悪とまではいかないが、リオに対して向けられていた不信感はだいぶ拭われたようだ。

奇しくもラティーファのために始めた料理教室が、巡り巡ってリオの利益となったというのだから、リオとしてはどこか滑稽なことだった。

「では、大樹に向かうのは次の精霊祭の時になるのでしょうか？」

リオの知る限りでは次の精霊祭は二週間後の予定だったはずだ。

「いや、精霊祭の前に行けるように取り計らっておいたぞ。あまり大勢に見られていても落ち着かないじゃろうしな」

精霊祭の時はほぼすべて精霊の民が大樹のもとに集うことになる。そんな衆人環視の中で行うべき用事でもないだろうというアースラの配慮だった。

「それは、御配慮痛み入ります」

そんなアースラの配慮に、リオが口元に微笑を浮かべて礼を言った。

「ほほ、若い者がそのように畏まるものではないぞ。それにリオ殿は儂個人にとっても恩人じゃからな。このくらいはたやすいことよ」

と、アースラも優しい笑みを浮かべて語る。

「それで案内にはサラ、オーフィア、アルマ、ウズマ、それに儂の五人が付くことになった。案内人の同行が許可条件になっておるから了承してくれると助かるの」

「はい。問題ありません」

リオとしては、全く異論のないことなので、その場で即答する。

「うむ、では出発は三日後じゃ。距離は遠くないから三十分もあれば行くことができるぞ」

そして、三日後、リオはアースラ達に案内されて準高位精霊ドリュアスが暮らす大樹へと向かった。

ちなみに顔見せということでラティーファも一緒に付いて来ている。
里で暮らしていれば日常的に見ることになる大樹だが、近くまで来て見ると改めてその圧倒的な存在感をリオは実感していた。
「なんというか。ここら辺の木はどれも大きいですけど、その中でも言葉にできないくらいに圧巻の存在感と神々しさを放っていますね」
と、心底感心したようにリオが大樹を目にした感想を口にした。
「あら、そう言ってもらえると嬉しいわね」
すると、何処からともなく美しい女性の声が聞こえてきた。
言葉が聞こえた瞬間に、サラ、オーフィア、アルマ、ウズマ、アースラの五人が勢いよく跪いた。
リオとラティーファもそれに習う。
「初めまして。私はこの大樹に宿る精霊のドリュアスよ」
綺麗な花をあしらったワンピースを身に纏って、リオの前に姿を現した妙齢の女性は、無邪気な笑顔を浮かべてそんなことを言った。
地面に届きそうな程に長い緑の波打つ髪、エメラルドのような瞳、実在感の薄い作り物のように美しい顔のつくりをしているが、どこか柔らかな印象を与える雰囲気もある。
「申し遅れました。私はリオと申します」
神出鬼没に登場したドリュアスに、戸惑いながらもリオが恭しく挨拶をする。

「うん、リオね。よろしく」

と、ドリュアスは、見る者を魅了するように、にっこりとほほ笑んだ。

「で、私に何の用かしら？　精霊祭はもう少し先よね？」

ふわり、と宙に浮かぶドリュアスが、リオの後ろに控えているアースラ達の方へと視線を送った。

「はい。本日はこの人間族の少年の中で休眠状態にある精霊について、ドリュアス様に心当たりがないかおうかがいしたいと思い、参った次第ですじゃ」

そう言ってアースラがリオの方を見る。

ドリュアスの視線も再びリオへと戻った。

「その子の中にいる精霊？　確かにその子から同族の気配がするみたいだけど……、貴方は自分の中に眠っている精霊について何も知らないのかしら？」

不思議そうな顔をするドリュアス。

「はい。まったく知りません」

どう足掻こうとも、記憶の欠片もない以上、返答となる言葉はシンプルに一つしかない。

リオは苦笑めいた表情を浮かべてその事実を口にした。

「そっか。んー、ちょっと調べてもいいかしら？」
「ええ。むしろ是非お願いします」

そう言って、リオが頷いたのを確認すると、ドリュアスはそっとリオの身体に触れた。
何やら自分の中に異物が入って来るような感覚を覚えたが、されるがまま受け入れる。

「貴方、すごいオドの量ね。美味しそう。本当に人間族？　それに、うん、回路が出来ているから契約状態にあるのは間違いないみたい……っ！？」

リオの中にいる精霊の状態を確認するようなことを口にすると、何かに驚いたようにドリュアスがビクリと身体を反応させた。

「何かわかったのですか？」

ドリュアスの異変に感づいたリオが尋ねる。

「……貴方の中に人型の精霊が眠っているわ」

と、戸惑ったような声でドリュアスが言った。

「っ！？」

そんなドリュアスの言葉を聞いて、この場にいるリオとラティーファ以外の者達が驚愕したような表情を浮かべた。

「人型の精霊ですか？」

明らかに変わった空気に、事情を理解できていないリオが疑問を口にする。

「その様子だと人型精霊がどのようなものかわかってないみたいね。うーん、人型になれるっていうことはそれだけ高位の存在であることを意味するの。少なくとも私と同格以上の存在でないと無理ね。そんな存在はほとんどいないから私もあの子達も驚いたってわけ」

と、ドリュアスが簡潔に事情を説明する。

「……貴方、一年ほど前に精霊の民の里にやって来たでしょう？」

ふと、何かを思い出したようにドリュアスが告げた。

「ええ、確かに自分が精霊の民の里にやって来たのはそれくらいのころですけど……」

ドリュアスの質問に肯定しつつも、どうしてそんなことがわかるのだろうと、リオは僅かに首を傾げた。

「その頃、ほんのわずかな時間だけど力の強い精霊の存在を感知したことがあるの。強い精霊同士の共鳴反応みたいなものかしら。貴方の中に眠っている精霊はその時の精霊と同じ感じがしたわ。本当に僅かだけど、その時に少しだけ貴方の中の精霊が目覚めたはずよ。心当たりはないかしら？」

「……いえ、ありません」

口に手を当てて、真剣に考えてはみたものの、リオに心当たりはなかった。

「うーん。そっか。となると私にもお手上げかなぁ……」

と、困ったようにドリュアスが言った。

あっさりとした降参宣言に、リオは拍子抜けしたように微かに姿勢を崩した。

「ドリュアス様、リオ殿の中で眠っているのは高位精霊様なのでしょうか？」

そこにアースラが恐る恐る口を挟んで尋ねてきた。

「それはありえないと思うわ……。かつて六体いた高位精霊がこの世界から姿を消したのは今から千年以上前の話よ。その後に新しい高位精霊が誕生したとは思えないし」

ドリュアスは何かを考えるような仕草をしつつも、きっぱりとアースラの質問に対して頭（かぶり）を振った。

それは千年以上前のことだ。

ユーフィリア大陸の西に暮らす人間族が、今のように栄えていない時代、魔法が存在せず、各地に小さな国家を作って細々と暮らしていた、暗黒時代ともいえる、そんな時代に、六賢神、精霊の民の間で伝えられている七賢神、が人間族の歴史に姿を現した。

そして、六賢神に対抗するかのように、その時代に姿を現した勢力もいた。

それは魔王達に率いられた魔族の軍勢である。

彼ら魔族は、ユーフィリア大陸の最西にある死の半島に存在する迷宮から姿を現すと、地上のすべてを破壊し、自身の障害となるべき存在を抹殺して、世界に君臨しようと侵略を開始した。

それに対抗したのは六賢神が率いる人間族である。

神々により魔法の習得方法と多くのアーティファクトを与えられた人間族の軍勢は魔物の軍勢と熾烈な争いを繰り広げる。

歴史上、神魔戦争と呼ばれる大戦であり、戦争は百年以上にもわたって繰り広げられることとなった。

戦火により詳細な記録は残っていないが、膨大な数の犠牲者を生みだしたと伝えられており、現在の魔法技術では再現することのできないアーティファクトと呼ばれる魔道具の大半はこの時代に作られたものである。

そして、ユーフィリア大陸の西で起きた神魔戦争は、大陸中央に暮らしていた精霊の民にとっても、決して無関係ではいられなかった。

戦域は拡大していき、魔族は精霊の民の領域にも侵入してきた。精霊の民が用いる精霊術は強力で数多くの魔族を撃退したが、多くの犠牲者も出た。

世界を守護していた当時の高位精霊達も、神魔戦争が世界規模に広がることを危惧し、六賢神と人間族の側で神魔戦争へと参戦することとなった。

高位精霊達の参戦により魔王軍をユーフィリア大陸西部へと圧倒することとなったが、魔王軍の罠にかかると、高位精霊達はすべて消失した。

やがて魔族を撃ち滅ぼす神装を装備した勇者達の登場により戦争は終結を迎えることになる。

と、ここまでは人間族の間でも一般的に知られている知識である。

ドリュアス達が言っている高位精霊とはその精霊達を意味しているのだろうと、リオは考えた。

「おそらく私と同じ準高位精霊だとは思うのだけれど、深い眠りについているから聞き出すこともできないわ」

自分の中に眠っている精霊がかなり高位の存在だと知り、リオは言葉に出来ぬ不思議な感覚を抱いた。

そんな偉大な存在が自分の中にいる実感がまったくないのだから無理もない。

「起こすことはできないのですか？」

眠っているのならば起こせばいいのではないかと考え、リオが質問する。

「だいぶ深い眠りに就いているみたいだから、かなり力を消費していると思うのよね。貴方と繋がっている回路から貴方のオドを吸収して回復中みたいだから無理に起こさない方がいいわ」

と、リオの中に眠る精霊を案ずるように、ドリュアスは諭すように語った。

「なるほど……、わかりました」

いまだに解せないところはあるが、リオはドリュアスの言葉に頷いた。否、頷かざるを得なかった。

「貴方もその子のことを知らないとなると、貴方が物心つく前に貴方とその精霊の結びつきが出来たんだと思うわ。眠りは深いけどだいぶ安定しているから、かなり回復はしているはずよ。おそらくそう遠くない未来に目を覚ますと思うわ」

リオの疑問を少しでも解消してあげるように、ドリュアスが自分の予想を告げた。
結局、自分の中に眠る精霊の正体を知ることは先送りになってしまうわけだが、現状、特に不都合もない以上、仕方がないと、リオはひとまず捨て置くことにした。

「それにしても、まさかリオ殿が人型精霊と契約状態にあるとは想像もしておらんかったのう。こうなると里の中でのリオ殿の位置づけも変わるやもしれん」

と、何かを考えるように黙り込んでいたアースラが、静かに、だが良く通る声で告げた。

「自分の位置づけですか？」

アースラの言葉の真意を尋ねるように、リオがオウム返しで質問を発する。

「うむ、儂らが精霊を敬っていることはリオ殿も先刻ご存知じゃろ。それゆえ精霊と契約を結んでいる者は里の中でも特殊な立ち位置に置かれることになる。ここまでは言いましたな。じゃが、準高位精霊程に高位の精霊と契約を結んでいるとなれば話はさらに変わる。リオ殿は我らの中で聖人扱いされるやもしれん。いや、確実にされるじゃろうな」

アースラの言葉に、サラ、オーフィア、アルマがコクコクと頷いた。

「えっと、聖人ですか……」

特に何もしていないのに、そんな大それたものにされてしまうことを想像し、リオは少しばかり気後れしてしまった。

「はは、そう身構える必要はないですじゃ。むしろリオ殿にとっては色々と好都合ですぞ。この場に来る許可が下りたのもリオ殿が何らかの精霊と契約を結んでいることがあったからこそじゃからな。その扱いが更に良くなると思っていただければよい」

リオの心配を吹き飛ばすように、カラカラとアースラが朗らかに笑う。

「しかしそうなると次の精霊祭でも……」

そしてアースラは何かを考え込むようにぶつぶつと呟き始めた。

他方で、いつの間にかドリュアスの興味はラティーファに向かっていたようで、サラ、オーフィア、アルマ、ウズマを交えて楽しそうに話していた。

「あなたはラティーファって言うのね。可愛いわ。次の精霊祭では私から祝福のキスをしてあげるから楽しみにしててね」

ドリュアスは小動物のような見た目のラティーファのことをお気に召したようだ。

「はい！　よろしくお願いします！」

満面の笑みを浮かべてラティーファが挨拶を返す。

「はぁはぁ。本当に可愛らしいわね……。ねぇ、ちょっと抱きしめてもいい？」

そんなラティーファに僅かに欲情したような表情を浮かべると、ドリュアスは勢いよくラティーファに抱き着いた。

「ふぇ？　ええ！？」

どうやら噂通りに自由な性格をしているようだ。

天真爛漫なドリュアスの態度に慌てふためくラティーファを、リオは苦笑しながら眺めていた。

第27話　精霊祭

精霊祭。
それは、年に一度、精霊の民が精霊達に感謝の祈りを捧げる儀礼である。

「大いなる精霊の深き恵みの下に、その祝福と加護が我ら精霊の民の行く道にとこしえにあらんことを――」

厳かな雰囲気が周囲一帯を支配する中、エルフ、ドワーフ、獣人の最長老であるシルドラ、ドミニク、アースラの三人が精霊に捧げる祝詞を唱える。
同時に、この日、最低限の警備を除いて集まったほぼすべての精霊の民が、ドリュアスの宿る大樹の下で祈りを捧げていた。
シルドラ達が祝詞を唱え終えると、儀式用の装束を羽織ったオーフィア、アルマ、サラの三人が精霊に捧げる舞を踊る。

「綺麗……」

それは非常に幻想的な光景だった。
三人の舞をリオが真剣な表情で眺めている隣で、ラティーファはその神秘的な光景にぼんやりと見惚れていた。
ドリュアスも三人の舞を楽しそうに見つめている。

「皆の者よ！　今年も無事に精霊祭を執り行うことができた。これも皆の者の日頃の協力と精霊に対する尊い祈りがあってのものだ。今後もゆめ精霊達への感謝を絶やさぬように」

精霊への奉納の舞を終えると、シルドラが厳かな口調で精霊の民達に呼びかける。
決して大声で話しかけているわけではないが、精霊術により拡音がされているために周囲一帯にその声が響き渡っていた。
「では、引き続き、ドリュアス様の加護の下、祝福の儀を執り行う」
その声に、ビクり、とラティーファが身体を震わせた。
例年、一定の年齢に達した精霊の民の子供達は、精霊祭の時に、簡単な紹介とともに、ドリュアスから精霊の祝福を受けるのが習わしとなっている。
ラティーファは既にその年齢を経過しているが、途中から里に合流したため、この場でドリュアスの祝福を受けることが事前に取り決められていた。
なお、ドリュアスの祝福を得ることにより、精霊契約ほどではないが、僅かにオドの総量と精霊術の適性が向上し、子供達はドリュアスの祝福を受けた状態で精霊術を習得することになる。
シルドラ、ドミニク、アースラの三人が精霊の民の子供達の簡単な紹介を行い、紹介された子供達が次々とドリュアスのもとへ向かっていく。
自らの下にやって来た子供達の額に、ドリュアスが祝福のキスを贈ると、子供達の身体を僅かな光が包み込んだ。
「――また、昨年より我等に加わった新たな仲間もいる。狐獣人の子ラティーファだ」
最後にラティーファの名前が呼ばれ、名前を呼ばれたラティーファもドリュアスの傍に近寄った。
無数にいる精霊の民達の視線を受け止め緊張しているのか、その

仕草はどこかぎこちなく、固まった状態で直立しているラティーファを、リオは苦笑しながら眺めていた。
やがてドリュアスが祝福のキスをすると、ラティーファの身体にも淡い光が灯る。

「そしてラティーファを救い出してくれた御仁もこの場で紹介したい。彼は人間族でありながら同じ人間族の貴族により奴隷として捕らわれていた彼女を救出し我が里まで連れて来てくれた。その際、我らの誤解により少なくない迷惑を与えることになってしまったが、彼にはそのこともすべて水に流してくれた恩がある」

ドリュアスがラティーファに祝福のキスをしたところで、シルドラが最後の一人の紹介をするために開口した。
そう、この場において紹介されることが決まっていたのはラティーファだけではなかった。
リオも紹介されることが事前に決まっていたのである。

「紹介しよう。彼がラティーファの、そして我らの恩人であるリオ殿だ」

シルドラの紹介に合わせて大樹の根元にある壇上に登っていくと、リオは深く頭を下げた。
すると、リオのおかげで新たなレシピが精霊の民にもたらされたことを指摘し、その功績を褒め称えるようにシルドラが語る。
さらに、リオが準高位精霊と契約を結ぶ人物であることを告げると、精霊の民達が大きくざわめいた。

「静粛に。リオ殿の中に人型精霊が眠っていることはドリュアス様がご確認なされたことである以上、間違いはない。準高位精霊と契約を結ぶ程の御仁を蔑ろにすることは我等にはできない。そこで我

ら精霊の民の盟友としてリオ殿を受け入れることが決まった。ドリュアス様に祝福の口づけを賜ることをもってその証とする」

厳かだが朗々とした声でシルドラが告げると、周囲一帯に沈黙がおりた。

「ふふ、よろしくね。人間族の小さな英雄さん」

そんな厳粛な雰囲気の中、ドリュアスがにっこりとほほ笑みリオの額に祝福のキスをする。

リオの身体に強い光が灯った後、僅かな静寂がながれると、精霊の民達が一斉に拍手を捧げた。

「さぁ、これにて式は終了だ！　宴だぜ！　戻って準備だ！」

拍手が止み始めた頃、厳かな空気を打ち壊す様に、ドミニクが式の終了を告げた。

この後はドリュアスも交えて里で宴を開くのが習わしとなっており、ドミニクの言葉により精霊の民達の空気も宴に向けて高揚し始める。

一気に騒がしくなった雰囲気に、シルドラが僅かに呆れたように苦笑し、宴の準備へ移行することを告げる。

「うむ、そういうわけだ。新たに加わった同胞達を歓迎するためにも盛大に執り行おうではないか」

シルドラの言葉をきっかけに、精霊の民達が里へと戻るために綺麗に散っていった。

「リオ殿、掌を返したかのような我らの要望を受け入れていただき

感謝の言葉もない」

すると、周囲一帯が騒がしくなっている中で、そう言ってシルドラがリオに深く頭を下げてきた。

「いえ、自分にとっても悪い話ではありませんでしたから」

と、薄く微笑を浮かべてリオは頭(かぶり)を振った。

そもそもどうしてリオが精霊の民の盟友となることが決まったのか。

それは、リオがドリュアスと会った日以降、アースラが手際よくかつ早急に事を運んだからだ。

彼女は、リオに準高位精霊が宿っているという話を長老達に伝え、リオを精霊の民の盟友とするように取り計らった。

アースラが狙わんとしていることはリオにも薄々と呑み込めてはいた。

これまでリオは、人間族であるにもかかわらず、客人として例外的にこの里に暮らすことが認められていた。

だが、リオがいずれラティーファを残してこの里を立ち去った後、再度里への立ち入りが認められるかどうかは話が別であった。

たしかにリオが精霊の民にとって恩人であるということは彼らにとって友好的な事情であるが、それと同じくらいにリオが人間族であるということも見過ごすことのできない要素である。

異種族であり部外者でもあるリオをそう簡単に何度も里の中に招き入れるのは、里の運営上あまり好ましい事態とはいえなかったのだ。

だが、リオが精霊の民の盟友として扱われることになるのならば

話は変わる。
一度里を出たとしても再度の立ち入りはすんなりと認められることになり、リオとラティーファが再会することも容易になる。
それを見越した上でのアースラの采配であった。

「そう言っていただけると助かる。今までリオ殿に不信感を抱いていた者達も今日限りでその疑念を払拭したことだろう。今後、リオ殿の流す血は我らの流す血と考えてリオ殿と接していくことを、最長老の一人である私の名をもって約束させてもらう」

と、真剣な面持ちでシルドラが誓約を行う。

「ありがとうございます。私も精霊の民を裏切ることはないとラティーファの名に懸けて誓いましょう」

それにリオも答えた。
薄っすらと笑みを浮かべたまま、二人は固い握手を交わした。

それから、里に戻り、間もなくして精霊祭の宴が開始された。
里の各所にある広場には所狭しと料理が並べられ、杯を片手に精霊の民達が談笑している。

「がはははは！　リオの小僧、中々良い飲みっぷりじゃねぇか！」

と、リオと一緒に酒を飲んでいるドミニクが豪快に笑いながら言った。

「ええ、精霊の民の里はどれも実に素晴らしい酒ばかりですね」

飲み干して空になった杯を、リオは見惚れたように見つめた。

宴には多くの種類の酒が出されているが、どれも人間族が飲む超一級の酒以上の品であると言っても過言ではない程の美酒ばかりである。

「当たり前だ！　俺等の里で作るのは本当の酒だけだからな！　人間の作る酒みたいに酔えりゃ良いってもんじゃねえのさ！」

自分達の作る酒を称賛され、ドミニクが上機嫌に笑う。

「んで、こいつは精霊の民とっておきの霊酒だ！　飲んでみろ」

ミスリル製のカラフェとグラスを取り出すと、ドミニクが酒を注いでリオに差し出してきた。

「これは……」

グラスに酒を注いだ瞬間に、香りだけで酔ったと錯覚してしまうような芳醇な香りが、リオの鼻を刺激した。

ドロリとした液体に惹きつけられるように、グラスを口へと運ぶと、リオはその中身を口に含んだ。

瞬間、リオの全身に衝撃が駆け抜ける。

口に含んだ瞬間に蒸発したかのように酒が消失した。

否、酒はリオの喉を確かに通過した。

だが、あまりの味わいにさらりと一瞬で飲み干してしまったのだ。

度数が非常に高く、なのに飲みやすく、まさしく霊酒の名にふさわしい極上の味わいだった。

「どう？　それ、私の樹液も含まれているのよ」

と、脇からそんなことを言いながら、杯を片手に持ったドリュア

スが現われた。
「ガハッ、ガハッ」
思わず、といった感じでリオが咽(むせ)る。
「きゃ、何よ、もう。急にどうしたの？」
迷惑そうな表情を浮かべて、ドリュアスはリオを軽く睨んだ。
「じゅ、樹液ですか？」
自分の一部が材料になっていると平然と言ってのけたドリュアスにその真否を尋ねる。
「そうよ。霊酒って言ったでしょ。精霊である私の本体の樹の液を材料に作りだしているからこそ霊酒って名づけられているの。私の樹液は霊薬の材料にもなるんだからね」
と、ドリュアスは得意げな表情を浮かべて言った。
「な、なるほど……」
確かに至高という言葉がこれ以上にふさわしい酒は存在しない。これほどの酒を生み出せる材料になるのならば良い薬にもなると思えた。
「それにしてもリオって酒豪なのね。そのお酒をまともに飲めるなんてドワーフ並みよ」
「まったくですな。人間族にしておくのがもったいないですわ」

感心したように言ったドリュアスに、並々ならぬ量の酒を飲んでも平然とした顔をしているドミニクが賛同する。

「確かに強いお酒ですね。それなのにするりと飲みこめてしまうのが恐ろしいですが」

ある種の畏敬の念を込めて、リオは新たに霊酒を注がれたグラスを見つめた。

「でしょう。普通はああなるのよ」

と、どこか愉快そうな表情を浮かべて、ドリュアスが視線をリオの後方へと移す。

それをリオが追った。

「っ」

すると、傍目から酔っているとわかるくらいに顔を赤くしたオーフィアが、ふらふらとした足取りで、リオ達の所へやって来るのが見えた。

「リオひゃま、にょんでまひゅか？」

普段の彼女からは考えられない姿にリオが意識を奪われている中、ぺたり、とリオの隣に座りこむと、オーフィアは回らない呂律でそんなことを言った。

「え、えっと、オーフィアさん。少し飲みすぎなのでは？」

引きつった笑みを浮かべながら、とりあえずリオはオーフィアの身を案じる言葉を投げかけてみた。

「ぁ、ら、らいじょうぶれすよ。こんにゃの、にゃんでもありまひぇんから」

全然大丈夫には見えないだろう、と、リオは内心で突っ込みを入れる。

すると、何故かオーフィアがリオにくっつくように身体を寄せてきた。

「しょんなことよりリオひゃん！　いつまでそんなに堅くるしい話し方をしゅるんでひゅか？」

「えっと、堅苦しい話し方とは？」

「でひゅから、その人と距離をおいたようなひゃべり方のことれすよ」

いつものおっとりとやや天然なイメージに反して、オーフィアは妙に据わった目つきでリオを見つめている。

そのどこか有無を言わせぬ迫力にリオはたじろいでいた。

「ラティーファひゃんとはとっても仲よひになれたのに、リオひゃんとはひっとも仲よひになれてまひぇえん。れあってから一年以上経つのにこんなの許へまへん」

酔っぱらって熱く語るオーフィアの扱いに困り、助けを求めようと周囲の人物達に視線を送ろうとしたが、いつの間にかリオの周囲には誰もいなくなっていた。

（おい！）

遠巻きに不敵な笑みを浮かべてドミニクとドリュアスがリオのことを見ていることに気づき、リオが内心で突っ込みを入れる。
そんなリオとオーフィアの場所へ、一人だけ、近寄ってくる人物がいた。
サラである。

「あー、もう！　オーフィアったら、リオ様が迷惑するでしょ」

そう言って、手に持っていた杯を空にすると、サラもスッとリオの隣に座った。
一見すると意識がしっかりしていそうなサラだったが、この時点でリオの警戒センサーは最大限の警報を鳴らしていた。
オーフィアといい、サラといい、こうやって積極的に交流を図ろうとしてくる程、リオと仲が良いわけではない。
ラティーファを起点にして会話をすることはあるが、ラティーファがいなければ仲良く話す間柄ではない。
友人というよりかは顔見知りに近い、そんな距離感になるようにリオは二人と接してきた。
だというのに、サラも、オーフィアと同じように、密着するようにリオにくっついて来てきている。

「けどリオ様もよそよそしくないですか？　リオ様もドリュアス様の祝福を受けて私達の盟友になったんですから、私達はもっと仲良くしたいです」

どこか焦点の合っていなさそうな目でサラがリオを見上げてきた。

「そーれす。サラひゃんの言うろーりれす」

それに賛同するように、反対側からオーフィアがリオの腕を引いてきた。

（どうしてこうなった？）

何故か、ハイエルフと銀狼獣人という精霊の民の中でも高位に位置する美少女達を、両手に侍らせるリオ。

周囲の男達からすれば殺意を抱きかねない状態だが、当の本人からすれば何とも居心地の悪い状態であった。

「むぅ、オーフィアお姉ちゃんとサラお姉ちゃんずるい！」

そこに追い打ちをかけるようにラティーファがリオの背後から抱き着いてきた。

「ラティーファ、も酔っているのか……」

首を動かし至近距離まで顔を近づけてきたラティーファへと顔を向けると、その口から僅かに霊酒の甘い香りが漂ってきた。

遥か後方にはアースラが愉快そうにカラカラと笑っている姿が見える。

「まったく、いくら美味しいからといって三人とも霊酒の飲みすぎです」

と、呆れたようでいて、どこか楽しそうな声色でリオに語りかけてきた少女がもう一人。

「こんばんは。私もご一緒してもよろしいですか？」

アルマであった。

「ええ。どうやらアルマさんはまだ酔っていないようですね」

二人の視線が交差して、軽く挨拶をすると、酒の入った小瓶を片手に、アルマはリオの正面に座った。

「ドワーフはお酒に強い種族ですから」

少し照れくさそうにはにかんでアルマが言った。

「アルマひゃん可愛い～」

するとオーフィアがアルマに抱き着く。

「わわ、オーフィア姉さん。くすぐったいですよ」

アルマは照れながらも、されるがまま抱き着かれている。

「昔のアルマは泣き虫で私達の後を追いかけてきたというのに、最近ではすっかり大人になってオーフィアも寂しいんですよ。昔は今みたいに姉さんって言う呼び方じゃなくてお姉ちゃんだったというのに、それに――」

「わっ、サラ姉さん！　何を言っているんですか！？　少し酔いすぎです！」

昔話を語ろうとしたサラをアルマが慌てた様子で止める。

「アルマちゃんの昔話は私も聞きたいな！　ね、お兄ちゃん？」

慌てるアルマのことを楽しそうに眺めながら、ラティーファが言った。

「そうだな」

そんなラティーファの言葉に、リオが少し愉快そうに賛同する。

「り、リオ様まで……。い、今はリオ様と親交を図る時です！」

と、アルマはサラとオーフィアに遠まわしの休戦協定を申し向けた。

「そーれす！　わらひはリオ様ともっと仲良くなりたいれす！」

それにオーフィアが乗っかる。

酔っぱらってはいるものの、何かを訴えかけるような姿勢はリオにも伝わってきた。

「自分と……ですか？」

僅かに解せないという表情をリオは浮かべた。

「はい、ラティーファの兄というのならば私達にとっても兄弟と同じです。ずっと仲良くなりたいとは考えていたんです。だけど、リオ様が疎遠というか、そのきっかけがなかなか掴めなかったというか、とにかく、積極的に仲良くなろうって私たちなりに考えたんです。嫌とは言わせませんよ？」

そんなリオに酔いながらもどこか真面目な雰囲気でサラが事情を説明する。

笑ってはいるものの、どこか言い逃れを許さない迫力があった。
すると、リオの口から思わずといった感じに笑いが漏れた。
「な、何がおかしいんですか？」
酔いのせいか、面と向かって仲良くなりたいと告げたことの気恥ずかしさのせいか、サラは顔を赤くしてリオに尋ねた。
「いえ、すみません。おかしくて笑ったんじゃないんです。ラティーファが貴方達のような方に恵まれて良かったなと思いまして。嬉しさから来る笑いです」
「そ、そうですか。なら、いいですけど……」
リオの視線を正面から受け止め、その言葉に、どこか恥ずかしそうにサラが頷いた。
「そう言えば、きちんと礼を言っていませんでしたね。サラさん、オーフィアさん、アルマさん、ラティーファと仲良くして頂いて本当にありがとうございます」
と、微笑を浮かべて、リオは礼を告げた。
「い、いえ。当たり前の事ですから」
「そうれすよ」
「サラ姉さんの言う通りです」
と、どこか気恥ずかしさを覚えたように、三人は言った。
「それと私で良ければ是非友人として接してください」

少し照れくさそうな笑みを浮かべ、リオが軽く頭を下げる。

「は、はい！」

その言葉に三人は非常に嬉しそうに返事をした。

酒の勢いを借りてはいたものの、リオと仲良くなろうと思っていた気持ちは本物のようだ。

「ふふ、これでようやくみんな仲良しだね！」

と、リオに抱き着いたまま、ラティーファが嬉しそうに言った。

「がはは。上手いことまとまったみたいだな。どれ、料理と酒を持ってきたぞ。これで親交を深めてくれ」

そこに豪快に笑いながらドミニクがやって来た。

すぐ後ろにはアースラもいた。

「やはり貴方達も一枚絡んでいたんですね……」

「ほほ、想像通りに上手くいったようじゃな」

と、アースラが好々然とした笑みを浮かべて言った。

「ドミニク大爺様。これで親交を深めろとは？」

差し出された大量の料理と酒を目にして、アルマが不思議そうに尋ねる。

「んなもんお前もドワーフなんだから、一緒に酒飲んで飯食って笑えばいいに決まっとるだろうが」

と、ドミニクは豪快だが人を不快にはさせない笑い声をあげて言った。

「私までそういう脳筋な種族として括らないでください」

それをアルマが冷たい視線をもって叩き斬る。

「ぐはっ。ったく、こいつは。どうだ、リオの小僧。少々きつめのジョークも言う奴だが、器量は良いし、これでなかなか可愛いところもあるんだ。せっかく精霊の民の盟友になったんだし、ここは一つ精霊の民から妻を娶ってみるというのは」

晴れやかな笑みを浮かべてドミニクがそんなことを言い出した。そういえば初対面の時もそんなことを言っていたような気がすると、リオは思い出した。

（どこまで本気なんだか……。ま、冗談なんだろうけど）

「ばっ、馬鹿なことを言わないでください！」

ドミニクの言葉を受け流すように笑みを浮かべていたリオだったが、アルマが顔を真っ赤にして抗議する。

「そうですよ。そういうのは本人の意思を尊重すべきでしょう」

と、リオも少し呆れたように彼女を擁護する。

「なんでぇ。アルマはリオの小僧が気にくわねぇのか？」

「い、いえ、別にリオ様が嫌というわけではなくてですね……。ま

だ私達も若いんですし、もう少し手順というものが……」

顔を赤くしながらも変に生真面目に答えてしまうアルマ。

「アルマひゃんは可愛いなぁ。じゃあわらひもリオ様のお嫁さんになる～」

と、そんなアルマの事が可愛くて仕方ないという様子で、彼女の頭を撫でながら、オーフィアが言った。

「ほほほ。これは負けてられんな、ラティーファ。それにサラもな」

「うん！」

「ど、どうしてそこに私も含まれるんですか！？」

素直に返事をするラティーファに対して、サラは顔を赤くして抗議した。

「がはは。なんなら四人揃ってリオの小僧に嫁いじまえ。精霊の里は一夫多妻だぞ～」

霊酒を片手に顔を赤くしたドミニクがガラガラと大声で笑って囃し立てる。

「本格的に酔っぱらってしまっていますね。このご老人は……」

そんなドミニクにアルマが呆れた視線を送る。

本当に幸せな時間だった。

こんなに笑えたのはいつ以来だろうか。

気がつけばリオも笑っていた。

そうして、笑って、騒いで、余興をする者が現れて、気づいた時には広場にいる精霊の民の大半が酔いつぶれていた。
リオの傍ではすやすやとラティーファ、サラ、オーフィア、さらには酒に強いアルマまでもが眠っている。
アルマは恥ずかしさを紛らわすように強い酒をほいほいと飲んでいたのが原因だ。

「うむ。なかなかの惨状じゃな」

アースラが苦笑しながらリオに話しかけてきた。

「そう思うのならばもう少し早く助けてくださいよ……」

少し酔ったように顔を赤くしているが、リオは淀みなく返答した。

「かっかっかっ、リオ殿もいつになく楽しそうだったではないか。精霊術を使えば酔いなどすぐに回復できるが、せっかくの祝いの席でそんな無粋な真似をするわけにもいくまい。皆本心から楽しんで酔っ払ったのじゃよ。リオ殿ももう少し羽目を外してもよかったんじゃぞ？」

「いえ、十分に楽しめましたから」

愉快そうに語るアースラに力ない苦笑を返すと、リオは幸せそうに眠っているラティーファへと視線を移した。
リオと出会ったころは栄養失調気味でガリガリだったラティーファだったが、今では第二次成長期を迎えた年相応の身体つきをするようになっている。
身体中にあった虐待の跡もエルフの薬のおかげで完全に消えている。
良くなったのは外見だけではない。

今のラティーファはよく笑いよく喋る活発な少女になった。
もちろん完全に心の傷が癒えたわけではないのだろうが、すやすやと眠る少女の寝顔からはかつて奴隷だった頃の冷たさは感じることはない。

「そろそろラティーファに伝えようと思っています」

具体的に、何を、とは言わない。
それはリオがこの里を出ていくとラティーファに告げることだが、それを言わなくとも二人の間ではその件についてだと共通認識が出来ている。

「そうか。少し早い気もするが頃合いかもしれんのう。それでもまだ一年くらいはこの里におるんじゃろ？」

シルドラやドミニクからの教えを受ける時間を考えると、それくらいが目途だろうとアースラは考えていた。

「ええ、少なくともそれくらいはいるつもりです」

リオとしてはラティーファの生活が安定している今の時点で伝えるのが最善だろうと考えている。
あまりに直前だとかえって彼女の覚悟の時間がなくなるかもしれない以上、ある程度早めに伝えて考える時間を与えてあげたかった。

「ふむ、当事者は二人じゃからな。その子が寂しくならないようにできることは最大限するつもりじゃが、第三者である儂が解決できる問題でもない。せいぜい説得を頑張ってくだされ、兄上殿」

穏やかな寝顔でリオの膝で眠るラティーファを愛おしそうに見る

と、アースラはリオに激励の言葉を贈った。

第２８話　優しさの理由

精霊祭が終了した翌日、窓の隙間から漏れこんでくる日差しで目を覚まし、朝食を食べると、人気のない里の広場で日向ぼっこをしながら、リオはラティーファと向き合っていた。

精霊の民として必要な知識を学ぶために連日のようにサラ達のもとへ通っているラティーファだが、今日は精霊祭の翌日ということもあり休日となっている。

それゆえ日中からこうして二人で話し合うのは久々だった。

「この里に来てからもう一年以上が経ったが、どうだ。この里の生活は楽しいか？」

楽しそうに喋るラティーファに、ふと思い出したように、リオは質問を投げかけた。

「うん！　お兄ちゃんの言った通り、この里は優しい人ばっかりですごく楽しいよ！」

突如問われた質問に、満開に咲いた向日葵の花のような笑みを浮かべて、ラティーファが答え、リオも優しく微笑する。

「そうか、ところでラティーファ、話があるんだけどいいか？」

と、改まった様子でラティーファを見据えて、リオは言った。

「えっと、何の話？」

リオの雰囲気が一変したことに気づき、戸惑いつつもラティーファが身構える。

「俺はそう遠くないうちにこの里を出て行こうと思っている」

するとリオは単刀直入に話題を切り出した。

「っ……」

びくり、とラティーファが身体を震わせる。

「準備……というか、この里で学べることを学べたら、一度この里から出て行くつもりだ」

「……や」

淡々と告げるリオにラティーファが小さな声で何かを呟く。

「それでな――」

「……やだ！　絶対に嫌！」

やがてその声はリオの話を遮るように大声へと変わった。

「ラティーファ……」

迷子の子供が母親を見つけた時のように、縋(すが)る眼で抱き着いてきたラティーファに、リオは困ったような表情を浮かべる。

「どうして行っちゃうの！？　人間族の場所に戻るの？　せっかくお姉ちゃん達とも仲良くなったんだよ？　ずっとこの里にいればいいじゃない！」

強く訴えかけるように、ラティーファが矢継ぎ早に口を動かす。
「そうしたいのは山々なんだけどな。俺は外で色々とやらなきゃいけないことがある」
と、リオは意味ありげに呟いた。
「どうして……、私を置いて行っちゃうようなことなの……？」
まるで捨てられた子犬のように、ラティーファはリオを見上げた。
そんなラティーファの頭をゆっくりと時間をかけて撫でてやると、少しずつ彼女は落ち着きを取り戻す。
「そういえばラティーファには俺が東に向かう理由を教えていなかったな」
話が聞けるくらいに落ち着いたところで、リオが徐に呟いた。
一度ラティーファから視線を外し、どこか遠くを眺めるように見つめると、リオは再び正面からラティーファの瞳を覗き込む。
そしてラティーファの眼尻には涙が浮かんでいることに気づく。
「俺は両親の故郷で墓を作ってやりたいんだ。特に親しい人もいないまま異国の地で死んでしまったからな。二人とも俺が小さい時に死んでしまったけど、それくらいは親孝行をしてやりたい。それに――」
何かを言いかけてリオが口を閉じる。
「それに……なに？」

黙ったまま聞いていたラティーファだったが、リオに話の続きを促した。

「いや、なんでもない」

と、リオは口元に含みのある冷笑を浮かべた。

「……私、お兄ちゃんのことを何も知らなかったんだね」

しばしの沈黙の後、ラティーファが力なく呟いた。

「俺だってラティーファのことで知らないことはたくさんあるよ」

そう言って、苦笑めいた笑みをラティーファに向ける。

「それは……そうだけど……」

どこか納得しきれていないようにラティーファが頷く。

やがて瞳を閉じて何かを考えるようなそぶりを見せると、ラティーファは決然とした表情を浮かべた。

「あのね、私からもお兄ちゃんに伝えたいことがあります。いきなり……何を言っているのかって思うかもしれないし、お兄ちゃんは信じてくれるかわからないけど……」

どこかラティーファの雰囲気がいつもと違うことを、リオは機敏に察した。

リオの奥深くを覗き込むように、ラティーファはどこか不安そうな表情を浮かべている。

「あのね、お兄ちゃんは前世って信じられる？」
と、静かに、だが良く通る声で、彼女は尋ねた。
「ラティーファ……」
僅かに目を見開き、リオは彼女の名前を呟いた。
「私はね、一度は死んでいて。もともとは人間で。それで生まれ変わって今の私になって……。えっと、なんて言ったら信じてもらえるのかわからないんだけど……」
どう語ったらいいものかと、思案するように、ラティーファは必死に言葉を紡いでいく。
その言葉は要領を得ないが、リオには彼女が何を言っているのかがはっきりと理解できる。
言葉に詰まったラティーファが沈黙すると――。
「……知っているよ」
と、そんな沈黙をリオが破った。
「……え？」
リオの言葉の意味を理解できない、そのような声をラティーファは出した。
「ラティーファはもともと日本で暮らしていたんだろ？」

だが、リオはラティーファの秘密の核心を突いた。

「ど、どうして……」

激しく動揺し、言葉を失いかけたラティーファだったが、かろうじて疑問を口にした。

「それは俺も日本人だったからだよ」

すると、リオは日本語でラティーファへと喋りかける。

「っ！？」

今度こそラティーファの表情は驚愕に染まった。

「日本……語……、日本……人……、お兄ちゃんは日本人？」

まさしく予想だにしなかったといったという表情である。

「そうだ。元、だけどな」

非常に落ち着いた口調でリオは言った。

「知っていて、知っていて、黙っていた……の？」

驚きを通り越して、ラティーファの表情から感情が抜け落ち、呆然とリオに尋ねた。

「ああ。ラティーファが日本人の生まれ変わりだと気付いたのは初めてパスタを作ってやった時だ。あの時『スパゲッティ』って言っ

ただろ？　パスタは元々この世界には存在しない食材なんだ。それに食事の度にいただきますと言っていたしな」

そんなラティーファに、言語をこの世界のものに戻し、リオが彼女を元日本人だと知るに至った理由を説明する。

「ど、どうして！　どうして言ってくれなかったの！？」

そんなリオの説明に、ラティーファは思わず感情的になってリオへ質問を投げかけた。

「どうして、か。どうして生まれ変わったのか。どうして記憶を取り戻したのか。俺も考えたことはある。考える時間ならたくさんあったからな。けどな、前世の記憶があるからってそれがどうしたっていうんだ？　俺達はもうこの世界の住人になってしまったんだ。仮に戻れたとしても、もう俺達の居場所は元の世界にはない」

そう言いながら、リオは口元に陰鬱な含み笑いを漏らした。

「っ……」

長年の間リオが考えてきたことのすべてがラティーファに伝わったわけではないが、リオの言わんとしていることの意味の何割かはラティーファも理解できた。

とはいえ、リオの言葉に、ラティーファは今初めてリオの指摘した事実に気づいたといった表情を覗かせてはいたが。

「それなのに変に未練を残すようなことを告げるべきではない。そう思った」

深くため息を吐いて、リオは言った。

「じゃあどうして今になって……」

「それはラティーファが俺に前世のことを教えてくれたからだよ。もし君がその事実を口にしたら、俺からも自分の前世のことを教えようと最初から思っていたからな」

リオがそう語るのを、ラティーファは黙って聞いていた。

「それに俺が日本人かもしれないというヒントはあったはずだ。俺の作る料理やその名前とかな。元の世界のままの名称だったろ？ラティーファはそのまま受け入れていたみたいだけど」

「あ……」

当たり前に作って出されていたために疑問に思うこともなかったのだろう。ラティーファは何かが腑に落ちたというような顔つきになった。

「そして同時にもう一つの話も伝えようと考えていた。俺達が旅をする時、最初に言ったよな。一緒に行動するのは精霊の民の領域までだと。最初は本当にそのつもりだったんだ。ラティーファを助けたのだって可能な限り人殺しをしたくないっていう自分勝手な理由だった」

今度はリオが何かを決意したような表情で、ラティーファに語りかけた。

「……」

リオの話に、返す言葉もなく、ラティーファは、ただ茫然と、リ

オを見つめている。

「けど、ラティーファが元日本人だと知って、俺は君の境遇に少なからず同情してしまった。やがて君は俺のことを兄と慕ってくれるようになった」

この時、淡々としたリオの口調が僅かに優しさを感じさせるものとなったのを、ラティーファは察した。

「俺は悩んだよ。この子をどうしようかってな。最初は単に消極的な理由で君を助けただけだっていうのに、自分勝手で傲慢にも、いつの間にか君のことを保護してあげないといけないと思うようになっていた」

何かを苦悩するかのような表情を、リオはわずかに覗かせた。

「それでとりあえず君をこの里の者達にきちんと引き渡すところまでは付き合おうと決めた。まさかここまでずっと一緒にいることになるとは思っていなかったけどな」

ここで一旦話を止め、リオはラティーファを真剣な面持ちで見据えた。

全てを覗きこまれるかのようなリオの視線に、ラティーファが僅かにたじろぐ。

「ラティーファ、俺は同情して独善的な使命感に駆られて一丁前に君の保護者面をしているだけの偽善者だ。本当は君に兄と呼ばれる資格はないのかもしれない。いや、ないんだ。だから俺のことを実の兄のように思ってくれなくたっていいんだ」

そう言うと、リオは黙してラティーファの返答を待った。
こうして今ラティーファに心のうちを告げているのだって自己満足にすぎない。
だから、このままラティーファに嫌われてもいい。
そんな覚悟を持って告げた事実だった。
やがて、ラティーファは何かを考えるように目を瞑り、唇を噛みしめると、意を決したようにリオを見据えた。

「やっと……、やっと貴方の心に、触れることができた気がします。どうしてこの人は私のことを助けてくれたんだろう。どうしてこの人は私に優しくしてくれるんだろう。頭の片隅でずっとそう考えながらも、それはこの人が私のお兄ちゃんだからって、私は深く考えずにそう思うようにしていました。だって、貴方から感じた優しさが本物だったから」

と、突如、ラティーファが日本語で語りだした。

「……その優しさは偽物だよ」

僅かに眼を見開くと、リオは短くそう告げた。

「いいえ。本物ですよ。だって、私、人の害意にはすごく敏感なんです。ペットとして毎日のように人間の害意を、ぶつけられていましたから」

どこか嘲笑を含んだ笑みをラティーファは漏らした。

「私は人の害意に敏感です。だというのに、人に従属する以外の生き方が出来ないようになっていました。だから、この人はどこまで私のわがままを許してくれるんだろう、どんな時に私のことを叱る

んだろう。優しそうな貴方に付いていきたいと言って、最初はそうやって貴方の害意を図ろうと打算的なことを考えていたりもしたんです」

そう語るラティーファの面持ちはまさしく沈痛であった。

「けど、貴方と接するうちに、すぐにそんなことを考えるのは止めました。だって、貴方から感じた優しさはこの世界の私のお母さんから感じたものと一緒だって気づいたから」

そしてラティーファは愛おしそうな視線をリオに向けてきた。

「貴方と出会った頃の私はいつ人格が崩壊してもおかしくなかった。そんな私に、貴方は……、貴方は、この世界のすべてをくれました。優しさを、自由を、安らぎを、幸せを、喜びを、家族を、友達を。だから――」

僅かな溜めを作ると、ラティーファは意を決したように口を開いた。

「だから……ね。やっぱり貴方のことをお兄ちゃんって呼んでもいいですか？」

どこか怯えた様子を見せるラティーファ、それは最初に彼女がリオと一緒に行動したいと言った時と同じ表情であるということに、リオは気づいた。

「……ああ、俺が精霊の民の里を離れてもラティーファは俺の妹だ」

安らかな笑みを浮かべて、リオは深く頷いた。

「お兄ちゃん！」

すると、感極まったように、ラティーファは涙を浮かべてリオに抱き着いた。

そんな彼女をリオはしっかりと受け止める。

どれほどの時間をそうしていたのだろうか。

泣き続けるラティーファをリオがあやし続ける。

何故かラティーファの泣き声が心地よかった。

やがて泣き声が止むと、胸元に顔を埋めてきたラティーファがリオを見上げた。

「……あのね、まだまだ私は未熟だし、だからお兄ちゃんと一緒に付いていきたいなんて我儘は言わない。けど、お兄ちゃんのことをもっと知りたい。そうすればお兄ちゃんがこの里にいない間も寂しくないから。だからお兄ちゃんの前世の話を聞かせてくれませんか？」

と、ラティーファはそんなことを言いだした。

どこか寂しそうな笑みを覗かせながら、リオは小さく頷いた。

「そうだな。……あまり面白い話じゃないかもしれないけど、いいぞ」

そう言って、ラティーファの頭をそっと撫でると、彼女はくすぐったそうな表情を浮かべた。

そして、リオは前世の自分のことを語って聞かせた。

大学生だったこと、幼馴染の少女がいたこと、その幼馴染のことを生涯愛し続けていたこと、しかし彼女が失踪してその想いは報われなかったこと。

同じように、ラティーファも前世の自分のことをリオに語る。
小学生だったこと、たくさんの友人がいたこと、両親は共働きで家では一人でいることが多かったこと、それでも家族の仲は良かったこと。
意外なことにおそらく二人は同じ交通事故で死亡したということも判明した。
気がつけば夕方になるまで二人は語り合っていた。
この日から、二人は本当の意味で兄妹となったのだろう。

「おやおや。これは……いつも以上に仲が良いのう。上手くいった、ということかの？」

帰宅すると、リオに引っ付くラティーファを見て、アースラが目を丸くしてそんなことを言った。

「ええ……。ラティーファにはいずれこの里を出ていくことを伝えました」

アースラの視線を受け止めて、リオが結果を報告する。

「うん！　私ね。お兄ちゃんが里から出て行ってもちゃんと帰りを待っていることにしたの！」

屈託のないラティーファの笑顔を見て、ふいにアースラの瞳から涙が漏れた。

「ほほ……、歳をとると涙もろくなっていかんのう……。リオ殿、貴方がこの子を救ってくれて本当に良かった」

拝むように、アースラはリオの手を握った。

第２９話　旅立ち

精霊祭の日から瞬く間に一年近くの月日が流れた。
盟友となったリオは精霊の民達とそれまで以上に深く交流を図ってきた。
幾度となく料理教室を開いたり、ウズマを始めとする精霊の民の戦士達と模擬戦を行ったり、里の仕事を手伝ったりと、本当に色々なことがあった。

そして、ヤグモに向けて出発する日が近づいたある日、リオは最長老達から呼び出しを受けた。

「うむ、よく来てくれたな」

リオが呼び出しを受けた部屋に入ると、シルドラ、ドミニク、アースラの三人が笑顔でリオを歓迎した。

「いえ、本日はどのような用件でしょうか？」

歳は離れているが、既に最長老達とも気の知れた仲だ。
リオも軽く微笑して挨拶を返す。
するとシルドラが代表して用件を切り出してきた。

「今日リオ殿をここに呼んだのはほかでもない。これから旅立つ盟友に対して我らに出来る援助をしたいと思ってな。まずはこれを受け取ってくれ」

と、リオの見立てではミスリル製であろう精霊石と術式の埋め込

まれた腕輪を差し出してきた。

「これは……」

その凝った意匠にリオが目を見開く。

「それは時空の蔵という霊具だ。核となる精霊石が登録した所有者のオドを吸い上げ、時間的空間的に隔離された独自領域を構築する次元魔術が込められている」

登録以降、物を収納したいときは、時空の蔵にオドを込め、登録者が対象に触れて『保管（ストレージ）』と唱える。

逆に、中に入っている物を取り出す時は、時空の蔵にオドを込め、取り出したい物を想像し、『解放（ディスチャージ）』と唱えることになる。

なお、作成される空間は登録者の魔力の量に比例する。

「っ、……そのような貴重な品を受け取るわけには」

時空の蔵の効果を聞いてリオが驚きを露わにし、受領を拒む。

人間族にとっては神魔戦争期のアーティファクト級に貴重な品物だ。

リオの想像では値段をつけることもできない。

「気にしなくともよい。これも盟友の証だ。それに、こちらから知識を与えるどころか、リオ殿からも色々と知識をもらってしまったしな」

だが、シルドラが差し出した手を引っ込めることはない。

アースラ達から精霊の民の知識を教えてもらう一方で、リオは自分の知りうる限りでこの里の発展に役立ちそうな知識を前世のもの

を含めて精霊の民に教授していた。
レンズ、爪切り、ハサミといった日常生活で何気なく使う日用品のアイデア、料理と加工調味料のレシピや、農作業に使う道具、さらにはチェス、将棋、トランプといった娯楽の品々、果てには法整備などにもリオは口を出している。
そういったリオの功績も踏まえて贈呈する品だとシルドラは言っている。

「しかし……」

それでも自分が行った功績と時空の蔵の価値が釣り合っていない。
リオはどこか納得できていないように声を出した。

「細けぇこたぁいいんだよ。それが盟友ってもんなんだからな。それに贈り物はそれだけじゃねぇぜ」

と、気風の良い声でドミニクが話しかけてきた。

「俺からはドワーフ特製の武具一式をプレゼントする。リオの坊主はまだまだ成長するだろうからサイズには少し余裕を持たせてある。里に戻って来た時には再度調整してやるぜ」

背後に置いていた装備一式の存在には気づいていたが、まさかそれらが自分への贈り物だとはリオも気づいていなかった。

「そんな……」

一目見て高級品とわかるそれらを見てリオが戸惑ったような声を出す。

「いいから受け取っておけ。もうお前専用に作っちまったんだ。受け取り拒否はできないぜ」

そう言うと、ドミニクは武具一式の説明を始めた。

ミスリル製の片手剣、ミスリル繊維のクロースアーマー、黒飛竜革の鎧、篭手、靴、ロングコート、どれも時空の蔵には及ばないものの、人間族の技術では加工するのが難しい品々ばかりである。

すでに十四歳になっているリオの身長は百七十センチ中盤に差し掛かっている。このまま成長すれば百八十センチには届くことだろう。

どれもリオが成長した時にも使えそうな非常に質の良いものであった。

「これほどの武具を……」

その出来具合に見惚れたように、リオが呟く。

「良い出来だろ？　俺直々に作った品々だからな」

ドミニクは誇らしげな表情を浮かべた。

「さて、贈り物があるのはドミニクだけではないぞ。私からはエルフの薬を一通り用意した。効用を書いたメモもあるから確認するといい」

そう言うと、リオに一枚の紙を渡し、シルドラは傍に置いていた大きな木箱に視線を移した。

それらの中に薬が詰められているのだろう。

エルフの作る薬は素材が貴重なことに加えて精霊術を用いて作成されるものが多い。その効果は人間族が作る薬とは桁外れである。

渡されたメモの一覧には秘薬や霊薬と呼ばれるものあり、リオは目を見開いた。

「秘薬や霊薬まで頂いてよろしいのですか？」

「ははは、遠慮しないでいい。材料さえあればリオ殿ももう作れるだろう？」

窺うようなリオの視線に、シルドラが大したことではないという風に言った

「その材料が貴重なのでは？」

なにぶん人間族では栽培が困難なものばかりだ。

中にはドリュアスの樹液を必要とするものもある。

「なに、人間族の領域では見つけることが難しい素材ばかりだが、この里ならばそうでもない。遠慮せずに持っていきなさい」

ドミニクとシルドラの厚情に言葉もなく、リオは深く頭を下げる。

「さて、まだ儂の分が残っておるぞ。儂は食糧を用意した。一人で食べるなら五年分は容易にある。量が量だけにこの場には持ってきていないから、後で時空の蔵の中に入れるとよい」

そこに止めと言わんばかりにアースラは五年分の食糧を用意したことを告げた。

それだけ大量の食糧であっても、時空の蔵があれば腐ることなく保存することが可能である。

時空の蔵と三人の支援とを併せて、これ以上は考えられない程に十分な支援であった。

「しかし……これほどの支援を受ける理由が見当たりません。どうして……」

あまりにも多大な援助にリオが戸惑ったように呟く。

「同胞であるラティーファを救い出してくれた恩、手違いで迷惑をかけたことを水に流してくれた件、里の生活をさらに豊かにしてくれた功績、さらには準高位精霊と契約せし盟友であること。我々には君を援助すべきこれだけの理由がある。十分な理由だろう」

そんなリオの疑問にシルドラが答える。

「これは長老会議でも正式に決議されたことだ。我々が君に行ったこと、君が我々にしてくれたことの対価として見合うものだと、我々が悩み導き出した答えなのだ。是非、受け取ってほしい」

揺るぎない口調だった。

心の底からそのように思っているのだろう。

シルドラ達の視線を真っ向から受け止めると、リオは言葉を紡ぎだした。

「……至らぬ我が身に皆様方の重ね重ねの御厚情、誠に感謝の言葉もありません。万が一、精霊の民に危機が及ぶ折りには、盟友としてこの身を差し出し助力することを誓いましょう」

同時に、精霊の民が宣誓する時の所作で、決然と告げると、深く頭を垂れて、リオは深い謝意を示した。

☆★☆★☆★

そして、つい先日に二度目の精霊祭を終えると、遂にリオが精霊の民の里を出発する日がやって来た。

「みなさん、この二年間、本当にありがとうございました」

見送りにやって来た面々に向けてリオが礼を告げる。

「行ってらっしゃい。お兄ちゃん！」

旅の別れを惜しむように、先ほどからラティーファがリオに強く抱きついている。

「ラティーファ、リオさんが苦しくなっちゃうわよ」

引っ付く様に身体をくっ付けるラティーファを制するように、サラが声をかけた。

「しばらく会えなくなるからお兄ちゃん成分を今のうちに補充しておくの！　サラお姉ちゃんも抱き締めたいなら今のうちだよ！」

と、ようやくリオから離れたラティーファが言った。

「なっ、わ、私は抱き締めたいわけじゃありません！」

顔を真っ赤にしてサラは否定する。

「ふーん。オーフィアお姉ちゃんとアルマお姉ちゃんはちゃんと挨拶をしているみたいだけど……」

ちらり、とラティーファがリオの居る場所へ視線を送る。

「え、あ！」

すると、いつの間にオーフィアとアルマがリオのもとへと移動していたことに気づく。

「リオさん、行ってらっしゃいませ。帰って来たらまた一緒に料理を作りましょうね！」

にっこりと満面の笑みを浮かべて、リオの門出を祝福するように、オーフィアはリオを軽く抱擁した。

このように軽く抱擁することは精霊の民が特に親しい者に対して行う親愛表現の一種だ。

とはいえ同年代の異性に対して無暗に行うものではない。

恥ずかしげもなく行えるのは、非常に温和でおっとりとしたオーフィアの性格ゆえである。

少しうっかりしたところもある天然な少女だが、その笑顔はいつも曇ることがなく周囲の者を明るく照らしている。

「ええ。旅の間に新しい料理を覚えておきますね。ついでに美味しい食材があれば見つけてきます。それに良い茶葉も」

料理が趣味であるオーフィアとは、料理教室以外でも一緒に料理を行うことは多かった。

また、彼女は大のお茶好きでもあることから、お茶を淹れ合ってティータイムで語ることもあった。

彼女には良い食材や茶葉があれば買っていこうとリオは考えていた。

そして、オーフィアが抱擁を終えると、続いてアルマがリオの前へとやって来た。

「き、気をつけて行ってきてください。旅の安全をお祈りしています」

そう言うと、アルマも顔を赤くしながらリオを軽く抱擁する。

リオとアルマでは既に四十センチ近く近く身長差があるので、傍から見ると大人と子供のようにも見える。

理知的でどこか背伸びしたところのある女の子、というのがアルマに対して抱いているリオの印象だ。

それでいて気を許した相手にはどこか甘えん坊なところもあるギャップのある少女だった。

「ええ。お土産に外で美味しいお酒があったら見つけてきますね」

「う……、はい。お願いします」

ドワーフの性（さが）なのか、アルマは酒豪であり、天性の酒好きであった。

同じく酒好きなリオは彼女と一緒に飲み交わすことも多く、その嗜好は心得ている。

お土産に酒というのは自分でもどうかと思ったのか、いっそう顔を赤くしながらも、外の酒を飲んでみたいという気持ちに逆らうことはできず、アルマはリオに酒を買ってきてもらうことを頼んだ。

「ほら、サラお姉ちゃんも！」

オーフィアとアルマの挨拶が終わるのを見計らって、ラティーファがサラの背中を押してリオのもとへと移動させた。

「わっ！　こら、ラティーファ。　あ、えっと、リオさん！」

どこか照れた様子でリオの前で直立するサラ。

彼女とは幾度となく模擬戦を行ったが、リオの全勝で終わっていた。

サラは、模擬戦で負けるたびに悔しそうにして、徐々に躍起になって、言葉使いも変わってくる負けず嫌いな少女だが、それを悟られると慌てて恥ずかしそうにするお茶目な女の子である。

その反面、非常に生真面目で、他者に厳しくしながらも無償の優しさを贈ることができる子だ。

サラはこの一年間でリオから武術を学ぶようになっており、リオのことを師匠としても敬っている。

「はい、なんでしょうサラさん」

模擬戦の時に覗かせる恥ずかしがり屋な彼女の一面を思い出し、どこか可笑しくて仕方がない風の笑みをリオは口元に浮かべた。

「か、帰って来たらまた鍛えてください！」

やたら早口な口調でそう言うと、サラも焦った様子でリオに軽い抱擁を行う。

「ええ。サラさんにも何かいいお土産を見つけてきますので、楽しみにしていてください」

「はい。期待して待っていますね。お気をつけて！」

晴れやかな笑みを浮かべて、サラはリオの旅の安全を祈った。

そして、サラが挨拶を終えるのを待っていたウズマが入れ替わるようにリオのもとへやって来た。

「リオ殿。お気をつけて。サラ様と同じく再び貴方と戦えることを楽しみにしています。リオ殿に習った武術とやらもその時までにさらに鍛えておきますので」

ウズマにとってリオは模擬戦とはいえ死力を尽くして全力でぶつかることのできる数少ない相手であった。

誇りが高く、礼儀正しく、強者である者に敬意を払うウズマにとって、リオは非常に相性の良い相手である。

今では当初の苦手意識もなく、リオのことを好敵手として好意的に接していた。

さらには彼女もリオから武術を習っている一人だ。

人間族と異なり、精霊の民は、同族を相手に戦うことを前提としておらず、魔物や自然界に生息する生物を相手取ることを想定している。

それゆえ、型にはまった対人戦闘向けの技術である武術は存在せず、なまじ個の身体能力が突出しているせいか、感覚で戦闘を行うものが多い。

結果、身体能力は凄いが、対人戦闘を前提にして隙を無くすことを追求している者達からすれば、動きが単調に見えてしまうという弱点があった。

そんな彼らにリオはこの一年間で自らが身に着けている武術を教えることにしたのだ。

一年程度ではまだまだ技術は未熟だが、鍛練を積めば彼らはさらに強くなることだろう。

抱擁こそしなかったものの、二人は再戦を約束し固い握手を交わした。

「ええ、ウズマ殿もお土産を楽しみしていてください」

「ありがとうございます。貴方の御武運を祈ります。お気をつけて」

清爽な笑みを浮かべ、力強く頷くと、ウズマは後ろへ下がった。
「ほほ。では、いつまでも引き留めるのも悪いからの。老人どもはまとめて挨拶をするぞい。いつでも帰って来きなされ。ここはリオ殿の里でもあるからな」
すると、長老陣を代表して最長老の三人がリオのもとへとやって来た。
「おうよ、いつでも帰って来いよ！」
豪快な笑みを浮かべて、小柄だがガタイの良いドミニクがリオの腕をがっしりと掴んで言った。
「ああ。我等一同、リオ殿の帰りを待っている。貴殿の旅に精霊の導きがあらんことを」
シルドラは安らかな笑みを浮かべてリオの旅の安全を祈願した。
「みなさんには本当にお世話になりました。改めてお礼を言わせてください。ありがとうございました」
リオが深く頭を下げると、三人はどこか照れたように謙遜した。
「では、そろそろ頃合いかな。あまり出発が長引いても未練が残るだろう」
「そうじゃな。じゃがその前に……」
ちらり、とアースラが視線を後ろへ戻した。

「またね！　お兄ちゃん！」

すると、これで最後だと言わんばかりに、再びラティーファがやって来て、リオを力強く抱きしめた。

「ああ、行ってくる。またな、ラティーファ」

名残惜しそうにラティーファの頭を撫でたが、やがてリオは踵を返した。

「みなさん！　この身が精霊の民とともにあることこそは我が最高の誉れです。不肖の身ながら私を精霊の民の盟友に加えて頂いたこと、誠にありがとうございました」

大きな声でそう告げると、精霊術により風を操り、ふわり、とリオの身体が宙に浮き上がった。

「それでは！　またお会いできる日を楽しみにお待ちしています！」

そう言って、軽く手を振ると、はるか上空へと舞い上がり、そのまま勢いよく彼方へと、リオは姿を消した。

精霊の民達もリオの姿が見えなくなるまで手を振っていた。

「行っちゃいましたね」

リオの姿が完全に見えなくなったところで、アルマがぼそりと呟いた。

「サラお姉ちゃん、オーフィアお姉ちゃん、アルマお姉ちゃん。私、負けないよ」

と、リオの消えて行った空を眺めながら、ラティーファが言った。

「……えっと、負けないとは？」

と、どこか戸惑ったようにサラが返事をする。

「お兄ちゃんの心の中には私たち以外の人がいるの。けど、私はそれでもお兄ちゃんをいつか振り向かせて見せる。もしお姉ちゃん達がお兄ちゃんを狙っているなら今のうちに宣戦布告しておこうと思って。まぁ、サラお姉ちゃんがリオお兄ちゃんのことをどうでもいいって思っているならいいけどね」

と、不敵な笑みを浮かべながら、ラティーファはサラを見据えた。

「な、わ、私は別にどうでもいいとは！」

顔を真っ赤にしてどちらともとれない曖昧な言葉を口にするサラ。

「ふふ、素直じゃないなぁ。サラちゃんは」

と、オーフィアがにっこりとほほ笑みながら言った。

「まったくです。恥ずかしがり屋で素直じゃないのはサラ姉さんの良くないところですよ」

アルマは仕様がないと言わんばかりに首を横に振った。

「そ、それはアルマも似たようなものじゃないですか！」
「私はちゃんとアピールする時はしていましたから」

そっぽを向きながらしれっと言ってのけたアルマ。
こういう態度をする時は恥ずかしがっている時だと、長年の付き合いでサラは心得ている。

「ほら、そういうところです！　恥ずかしがり屋で素直じゃないのは一緒じゃないですか」
「今はそういう話じゃないでしょう」

そうしてヒートアップしていくのはいつもの四人の姿だった。
この場にリオがいればきっとそれを横から楽しそうに眺めていただろう。
騒がしく語り合う四人の姿を、その場にいた精霊の民達も微笑ましく眺めている。

神聖暦九九八年。
リオがこの世界で記憶を取り戻してから七年以上の月日が流れた。
歴史が動き出す日は近い。

閑話　ラティーファの軌跡　その一（前書き）

転生前と、転生後にリオに会うまでのラティーファについての話です。
彼女は奴隷という身分にいたため、後半は少々辛い内容になっているかもしれません。
耐性のない方は心の準備をしてお読みください。
次の話からは本話ほど辛い描写はありません。
リーダビリティを重視した結果、語り手であるラティーファの精神年齢が高めになっております。
成長した彼女が追憶的に語っていると思いながらお読みくださると良いかもしれません。

閑話　ラティーファの軌跡　その一

私は遠藤涼音、小学四年生の九歳でした。

季節は夏、つい先日、夏休みに入ったばかりです。

ですが、水泳開放日に合わせて毎日小学校まで通っています。

夏休みだというのに、学校には、友達に会うためにプールにやって来る生徒達がたくさん、かく言う私もその一人です。

ごめんなさい。

少し嘘を吐きました。

友達と会うのも楽しみですけど、実はもう一つだけ理由があります。

その理由は帰り道に乗るバスです。

（あ……、やった！　今日も乗っている！）

今日もプールで泳いで家に帰るためのバスに乗ると、既に一人のお兄さんが乗っていました。

見た目はとても整っていて、芸能人と見間違えるくらいに格好良くて、見惚れてしまうくらいです。

名前も歳もわからないけど、たぶん大学生です。

そのお兄さんはいつも同じ時間帯のバスに乗車しています。

たぶん生活リズムが整っている人なんだと思います。

私がプールに通うのも、帰り道だけバスを利用するのも、全てはこのお兄さんのことを一目でも見たいからです。

けど、お兄さんの良いところは見た目だけじゃありません。

お兄さんは性格もすごく優しいんです。
それを知ってもらうには私とお兄さんの出会ったきっかけを語らないといけません。
そう、私とお兄さんとの出会いは一年以上前でした。
お兄さんはもう忘れているかもしれないけど、私はお兄さんに助けてもらったことがあります。

それは私が普段は滅多に使わないバスに乗った日でした。
その日は午後から土砂降りの雨が降って、家の遠い私が歩いて帰るには、少し大変な日でした。
そこで、私はバスに乗って家に帰ることにしました。
こういう日のためにお母さんから最低限のお金はもらっていたんです。
けど、その日は運動会の準備があってすごく疲れていて、バスの中で寝過ごしてしまいました。
お金も足りなくなり、普段あまりバスを利用しないこともあり、私はどうしたらいいのか分からなくなり、あろうことかバスの中で泣き出してしまいました。
そんな時に声をかけてくれたのがお兄さんです。

「どうしたの？　乗るバス間違えちゃった？」

優しい声でそう言われて、ふと、顔を上げると、そこにはお兄さんがいました。
少し大げさですが、その頃、少女漫画を読むのが流行っていて、私はそのお兄さんを物語の登場人物と錯覚してしまいました。

「え、あ……乗り過ごし……です」

と、少し呆気にとられたように、私は言いました。

「あぁ、なるほど。本当はどこで降りなきゃいけなかったの？」
どこか納得したような表情を浮かべて、お兄さんが言いました。
私が降りなければいけないバス停を告げると――。
「わかった。じゃあ、次のバス停で降りようか」
と、私を安心させるように優しく言ってくれました。
本当は知らない人に付いていったらいけないと教えられているんですが、心の中で私はお兄さんに頼ることを決めていました。
「あ、でも、お金足りないかも、です……」
「大丈夫だよ」
お兄さんがそう言うと、すぐに次のバス停に到着し、私はお兄さんと一緒にそこで下車しました。
ちなみに運賃はお兄さんが払ってくれました。
それから、特に迷うそぶりもなく、お兄さんは乗るバスを決めて、失礼なことに私は黙ったままお兄さんに従っていました。
「本当は知らない人間に付いていったらいけないと思うんだけど、今は緊急事態だから許してね」
黙っている私がお兄さんのことを不審がっていると思ったのか、お兄さんが苦笑しながらそんなことを言いました。
「ち、ちがっ。そんなことないです！」
慌てて否定しましたが、かえって肯定しているように見えたかも

しれません。
それから、時折、お兄さんは、私に気を使ってか、気まずくならないように会話を振ってくれました。
けど、私は、緊張してしまって、要領の得ないことばかり言っていた気がします。
今思えば元の世界でお兄さんとあんなに話せた機会は後にも先にもこの時だけだったのに、この時の私は本当に何をしていたのでしょうか。
照れ屋な自分の性格が憎たらしいです。
私が降りるバス亭まで短い時間でしたが、本当にあっという間に過ぎ去ってしまいました。

「ここまで来れば大丈夫かな？」

と、私の家から最寄りのバス停に到着すると、お兄さんが言いました。

「え？　あ……」

この時、魔法が解けたかのように、私は現実に戻ってきました。

（これで……終わり？）

嫌だ。
まだ、ありがとうも伝えていません。
よく控えめな性格をしていると言われる私ですが、この時ばかりは今までにないくらいに強くそう思いました。

「お、お礼！　お礼を！　バス代も払わないと！」

と、気がつけば捲し立てるように声が出ていました。

「いいよ。当たり前のことをしただけだから」

と、本当にそう思っているような顔をして、お兄さんは言いました。

けど、私はそんなことはないと思う。

このお兄さんの優しさはなんていうか先生や友達のものとはなんか違う。

もっと無償の、そう、まるでお父さんやお母さんのようなものだと思えました。

「あ……、ダメ……」

立ち去ろうとするお兄さんに、そんな言葉を投げかけます。

伝えたいことはたくさんあるのに、一言も口から言葉は出てきません。

どうすればいいんだろうと、思わず泣きそうになってしまいました。

「ああ、えっと、じゃあお礼をしてもらってもいいのかな？」

と、少し慌てた様に、お兄さんが言いました。

たぶん私が泣きそうになったからです。

「あ、ありがとうございます！」

慌ててお礼を言おうとして、緊張のあまり舌を噛んでしまった私。

お兄さんを見上げると小さく笑っていました。

すごく恥ずかしかったです。

「あ、ありがとうございました……」

再度、今度は顔を真っ赤にして、お礼を言う。

「どういたしまして」

「は、はい。こっち……です」

そう言って、私はお兄さんを自分の家に案内します。

バス停から家までは歩いて一分くらいです。

家に辿り着くと、私はチャイムを鳴らしました。

インターホンのカメラ越しに私とお兄さんの姿を確認すると、すぐにお母さんが出てきました。

「涼音、お帰りなさい。どうかしたの？」

と、私とお兄さんの顔を交互に見て、お母さんは少し不思議そうな顔をしました。

「お、お礼、しないといけないの！　お兄さんに助けてもらって、その……」

気持ちだけが先行し、要領を得ない私の言葉を聞いて、お母さんはさらに困惑したようです。

「実は――」

そんな私の言葉を補完するように、お兄さんがお母さんに事情を説明してくれました。

「あらあら、それはこの子がご迷惑をおかけしました。ありがとうございます」

と、お母さんはお兄さんに深く頭を下げてお礼を言いました。

「いえ、無事に送り届けることができて良かったです。それではそろそろお暇させていただきますね」

微笑みながら別れの挨拶を告げると、お兄さんはそのまま立ち去ろうとします。

「えっと、お茶でも飲んで行きませんか？」

すると、お母さんがお兄さんを引き留めました。

ナイスだよ、お母さん。

「すみません。この後バイトがありますのでお気持ちだけで……。ありがとうございます」

けど、お兄さんには用事があるようで、このまま帰らないといけないようだった。

すぐにお母さんが家の中に戻り、お兄さんに運賃以外に多めにお金を渡していました。

お兄さんは頑なに断っていましたが、お母さんもなかなか強引で、無理やり渡していました。

そして、お兄さんは、申し訳なさそうに礼を言い、帰っていきました。

「すごく良い人だったわね」

去っていくお兄さんを見送ると、お母さんが言いました。

「うん……」

それだけじゃない。

すごく格好良かったもん。

「それにすごく格好よかったわね、涼音」

私の心の中を読んでいたかのように、お母さんが言った。

「うん……、っ！？」

私は思わずつられて返事をしてしまいました。

慌ててお母さんの方を見上げると、ニコニコと微笑みながら私の方を見ていました。

私の顔は真っ赤です。

「うふふ、どんなことがあったのか詳しく教えてね」

お母さんに隠し事はできません。

「明日からバス通学にする？」

今日お兄さんとの間であったことをすべて説明すると、お母さんがそんなことを言いました。

「え？　い、いいの！？」

思わず声が上擦ってしまいました。

「いいわよ。あのお兄さんと仲良くなれるといいわね」
くすくすと笑うと、お母さんはそんなことを言いました。
好きだとは言ってないけど、確実に私の気持ちはお母さんにバレています。
お母さんってすごいな。

そして、次の日から、私のバス通学が始まりました。
同じ時間のバスに乗ってみると、お兄さんを発見できました。
バス後方三列目の窓際席と、乗っている位置も昨日と同じです。
この時間帯は人が少ないからすぐに発見できました。
けど、私は、恥ずかしがっていたので、足早に移動し、お兄さんのすぐ斜め後ろの席に陣取りました。
気づかれないようにそっと視線を送ります。
しばらく見つめていると、お兄さんが私の視線に気づいたようで振り向きました。
私は慌てて視線を逸らします。
お兄さんは私のことに気づいていたとは思いますが、特に声をかけてはきませんでした。
安心したような、残念なような、そんな気持ちです。

それから一年以上もバスに乗り続けています。
朝は会うことはできないけど、帰りのバスに乗ると、よくお兄さんを見かけることができます。
どうやらほぼ毎日同じ時間に乗っているようです。
恥ずかしがって隠れるようにチラチラと視線を送る私。
この一年間でだいぶ視線を気取られないようにするスキルも上がりました。
今日も同じようにお兄さんのことを見つめます。

もう一人、綺麗な女子高生の人がよくこの時間帯のバスに乗って、お兄さんのことを見ていることが多いです。
負けられません。
それはそうとお兄さんはどこか物憂げな様子で外を見つめることが多いです。
（どうしてなんだろう……）
その理由が気になって仕方がありません。
話しかけたいけど、今更という気持ちもあります。
何の進展もないままバスに乗り続ける私を、お母さんは励ましてくれています。
（いい加減勇気を出して声をかけてみようかな）
そんなことを思っていると、バスが大きく揺れて、私は意識を失いました。
そして、眼が覚めると、私は薄暗い石の部屋の中にいました。
（どこ……ここ？）
肌寒さを感じて身を寄せる。
身に着けているのは薄いボロ布だけです。
粗末なベッドの上にかかっている毛布を強く引き寄せて、少しでも暖を取ろうとします。
そこで、視界に入って来た手が、私のものよりも小さく、真っ白で、ガリガリであることに気づきました。

（え……？）

髪の色も黒ではなくて日本人の肌の色に近いようなそんな色です。
その時、私は自らに起こった異変に気づきました。
そう、私の中に知らない私の記憶があるのです。
ラティーファという奴隷の少女の記憶です。

（な、なん……で……）

寒さとは別に、私の身体が小刻みに震え始めました。

（う、嘘……）

それは恐怖から来る震えです。
ラティーファとしての私の中にある記憶。
その中で今まで受けてきた仕打ちの数々が私を震え上がらせるのです。
どうやらラティーファの自我は薄いようで、私の自我が全面的に表に出ています。
だからこそ、感じる恐怖もラティーファが感じるものとは比べ物になりません。

（夢、夢だよ……。これは夢……）

強くそう思い込んで毛布を被ります。
けど、毛布の中にいつまで包まっていても夢は覚めません。
身体の震えも止まりません。
やがて、おそるおそる毛布から顔を出して、薄暗い部屋の中を見渡してみました。
妙に記憶に馴染んだこの薄暗い部屋が、ここが現実であることを、

強く主張してきます。
ふと、頭の中に私よりも二歳年上のお兄様と呼ばせる少年の顔が思い浮かびました。
あんなのは兄じゃない。
私が知る兄はお兄さんみたいな人だ。
だというのに、私を痛めつけて愉悦で歪むその少年の笑顔が頭の中から離れません。
部屋の中には彼が私で遊ぶための器具が散乱しています。
言うのもおぞましい変な道具ばかりです。

ガチャリ。
と、その時、部屋の中に扉の開く音が響きました。

「ひぃ！」

思わず私は叫び声をあげてしまいました。
後になって思い返せば最悪の行動です。

「ん？　なんだ？　なんだ、なんだ！？」

中に入って来た少年はスティアードとかいう私の兄です。
私の反応を見て、一瞬だけ不思議そうな表情を浮かべると、その少年は今にも小躍りしそうな歓喜の表情を浮かべました。

「ひっ、こ、こな、こない、で！」

勢いよく私に近づいてくるスティアードに向かって、片言の言葉を話します。
まともに会話をすることもないし、きちんと言葉を教えられたこ

とがないおかげで、どうにも私は喋るのが苦手なようです。
私が喋れる言語は日本語以外に二種類ありますが、私の種族の言葉を教えてくれた今の私のお母さんは二年前に亡くなっています。
だからその二種類とも不完全な言語能力しか備えていません。

「はは、なんだ？　今日はずいぶんと良い声で鳴くじゃないか！」
「お、おに、お兄、様」

満面の笑みを咲かせながら、お兄様が私の目の前に顔を寄せてきました。
この少年は私にお兄様と呼ぶように強要しています。
お兄さん以外にそんな言い方は絶対にしたくないのに、首に着けられた首輪のせいで、命令に従わなくちゃという気持ちになってしまいます。
荒い鼻息が気持ち悪くて、全身に鳥肌が立ちました。
ふと、股下が温かくなるのを感じて――。

「は、はは、失禁したのか！？　ええ！？　何してんだよ！　お前ぇ！？」

どうやら私は怖さのあまり失禁してしまったようです。
お兄様は、言葉は怒っているのに、顔は笑っています。
それがすごく怖くて、私は泣いてしまいました。

「ご、ごめ！　ごめ、んなさい！」

許してもらいたくて必死に謝ります。

「そうだなぁ」

お兄様が馴れ馴れしく私の身体にべたべたと触れてきます。
「最高に気分が乗ってきたぞ。今日は特別に可愛がってやるよ」
お兄様は家来の人を呼ぶと、私の部屋の掃除をさせました。
そして、四肢を拘束して、ベッドの上に仰向けにして私を縛り付けました。
怖い。
怖くて暴れたいのに、動くなという命令と首輪のせいで何もできない。
無理やり心をいじられているようで、すごく気持ち悪い。
「お前は獣臭いくせに顔だけは綺麗だからなぁ」
「お、お兄様！　ゆ、許して！」
私が何を言ってもお兄様は手の動きを止めません。
ひたすら私の全身を撫でまわします。
「おいおい。湿っているじゃないか。さっき失禁したからか？」
お兄様が何を言っているのか理解できません。
けど、すごく不快です。
身の毛がよだつほど気持ち悪いです。
お兄様が臭い。
すごく臭い匂いがします。
まだお母さんが生きていたころに、お父様のところから戻って来るとまき散らしていた臭いと似ています。
「ふふふ、お前が成人になったら処女を奪ってやるのもいいかもしれないな」

ひたすら私を撫でまわし続け、私が泣き叫ぶのを楽しむと、その日はそんなことを言って、去っていきました。
それから、しばらくの間は、この日の私の反応に気を良くしたのか、お兄様は頻繁に私のところに来るようになりました。
記憶を取り戻して最初の頃こそ、私はこの日のように過剰な反応をしていましたが、日が経つにつれて、お兄様は私のそういった反応を好むということに気づきました。
だから、心を押し殺して、少しずつ反応を薄くしてみることにしました。
すると、お兄様が私の所に来る頻度が少し減りました。
けど、今度は、躾と称して、鞭で私のことを痛めつけたり、地面にぶちまけた食事をそのまま食べて綺麗にするようにと命令したりするようになりました。

また、お父様に命令されて、この頃から戦闘訓練の頻度が増え始めました。
来る日も来る日も人を殺す技術を身に着けていました。
獣人の私は人間よりも肉体が強いらしく、見た目は子供なのに人間の大人以上の身体能力を持っているから、優秀な暗殺者になれるんだとか。
私は言われるがまま訓練に取り組むことにしました。
訓練中はお兄様と会うこともありません。
そして、命令されて初めて人を殺しました。

初めて人を殺した時は、すごく怖かったし、抵抗感もあったけど、不思議と身体は普通に動きました。
これも首輪のせいなのでしょうか。
そう思ったけど、すぐに違うと気づきました。
首輪をつけると命令には逆らえくなるけど、感情までなくなるわ

けじゃない。
たぶん、この頃には私の心は壊れ始めていたんです。

閑話　ラティーファの軌跡　その一（後書き）

以降、その二から、その六まで番外編が続きます。
その二、その三、その五は本編の後追い要素の意味合いが特に強い話になっております。
直接本編で描かれていない情報が出る話は、その一、その四、その六となっております。
そういった情報だけを読み取りたい方はそちらの話をお読みください。

閑話　ラティーファの軌跡　その二

私は自分で自分の心がよくわからなくなっていました。
やられること、やらされること、すべてに、すごく嫌悪感を覚えているし、すごく恐怖感も覚えているのに、命令には平然と従うようになりました。
この世界で身につけた私なりの処世術です。

けど、四肢を拘束されて仰向けの状態にされると、この世界に来た最初の体験を思い出してしまい、発狂しそうになってしまいます。
他の事は耐えられても、それだけは耐えられません。
そのことに気づくと、お兄様は定期的に私の四肢を拘束して虐待するようになりました。

時折、お兄様は人が変わったように私に優しくしてくれることもあります。
けど、こいつは決して私の兄なんかじゃない。
こいつの優しさは偽物です。
もうスティアードのことはお兄様という生き物だと思うことにしました。
私の本当の兄はこいつじゃなくてお兄さんだ。
今の私のお母さんや、前の私のお母さんとお父さん、そしてお兄さんのことを思い出せば、完全に心が壊れることはありませんでした。

「ああ、クリスティーナ姫」

ある日から、お兄様は私に別の女の子を重ねるようになりました。

クリスティーナという名前やセリアとかいう名前をよく聞きます。
彼女達に操を捧げているのか、私の身体に触れることはほとんどなくなりました。
でも、変な臭いは発しています。

そして、ある日、何があったのか、お兄様の機嫌がすごく悪い日がありました。
なにやらお兄様が通っている学校で何か失敗をやらかしてしまったそうで、その日は執拗に鞭で打たれました。
断片的な言葉からすると、リオという名前の少年のことを恨んでいるようです。
その名前は何度か聞いたことがあります。
セリアとかいう人と仲が良いらしく、多くの婦女子を誑かす破廉恥な男だとか言って、よく私に鞭を打ってきたからです。
この人はどの口で何を言っているのだろう。
私にはよくわかりません。

そして、それから数日後、私はお父様に呼び出されました。
お父様が私を呼び出す時はたいてい誰かを殺せと命じる時です。
必要な暗殺道具一式を用意してもらって身に着けると、私はお父様がいる部屋に向かいました。

「それが暗殺対象の衣類だ。匂いを覚えろ」

と、お父様が冷たい声で言いました。

「はい」

短く返事をすると、私は言われたとおりに衣類を嗅いで匂いを覚えます。

どういうわけか少しだけ懐かしさを覚えました。
けど、首輪のおかげで即座に行動しなければという気持ちがわいてきて、その気持ちもすぐに流されてしまいます。

飼われている屋敷を出て、私は匂いを追跡しました。
どうやら匂いの主は王都の外へ向かったようで、私はその匂いの主を追跡するために走り出しました。
そうして走っているうちにおかしなことに気づきます。
匂いの痕跡は強く残っているのに、いっこうに匂いの主の姿が見当たらないのです。
走れども、走れども、暗殺対象に追いつくことはできません。
ようやく追いつけたのは二日以上経った後でした。
どれだけ走ったのでしょうか。
王都からこんなに遠くに来たのは初めてです。

遠目から暗殺対象が賑やかな都市の中に入っていくのを確認します。
驚いたことに対象は黒い髪の人間でした。
この世界で黒髪の人間を見たのは初めてのことだったので、珍しく私は動揺してしまいます。
しかも私と歳の近い子供です。
少しだけ話をしてみたい気はしましたが、首輪のおかげで暗殺の命令に逆らうことはできません。
もし逆らえば全身に激痛が走るからです。
一度、命令に逆らおうとして、気が狂いそうになるくらいの痛みが全身を襲ったことがあります。
あの痛みはもう嫌だ。
やむを得ず、私は彼を殺す段取りをつけることにしました。

フードを被っていても獣人の私が都市に入ると目立ってしまう可

能性があったので、ひとまず都市の外で機会をうかがうことにします。
すると一日で暗殺対象の少年は外に出てきました。
それを好機と考えた私は先回りをして死んだふりをすることにしました。
暗殺というのは最初の一撃で決まります。
相手が油断している瞬間に素早く殺すのが常套手段です。
森の中で倒れている人間がいればとりあえず声をかけるはずです。
だから、近寄ってきたところで毒の塗ったナイフで刺すことにしました。

その少年は予想通り私に声をかけて、死んでいるかどうかを確認するために、私を抱きかかえました。
いざ少年を殺そうと思い、間近で少年の顔を見てみると、私は少しだけ動揺してしまいました。
少年の雰囲気がどことなく私の知っているお兄さんに似ている気がしたからです。
黒髪だからでしょうか。
それもありますが、決定的なのは違います。
目です。
この少年の目は、バスの中で物憂げに外を眺めるお兄さんの目に、似ている気がしました。
けど、首輪が私に少年を殺せという感情を冷酷に呼び起こし、私は少年のわき腹目がけてナイフを突き刺しました。

少年はかつてないくらいの反応を見せてナイフを避けようとしましたが、これだけ密着した状態で私のナイフを躱すことなどできません。
少年は慌てて私を突き飛ばしましたが、私は任務達成を確信しました。

あのナイフに塗られている毒は即効性の猛毒だからです。
フードが取れて私の耳を見ると驚いたような顔を浮かべましたが、案の定、少年は顔色は急激に悪くなっています。
だというのに、傷口を押さえる少年の手が光ると、少年の顔色が良くなっていきました。

（な、なんで……？）

驚いた私はとっさにその少年に止めを刺そうと近寄ります。
毒の塗られたナイフを刺したのに、その人は元気よく動き出しました。
まるで毒が効いていないみたいです。

（つ、強い……）

しばらく戦ってみると、私はその少年の強さを実感しました。
見た目からして私よりも少しだけ年齢は上のようですが、種族的に身体能力は私の方が圧倒的に上回っているはずです。
なのにその少年は私並みかそれ以上の速度で動きます。
訓練で鍛えた私の攻撃もまったく通じません。
どれだけナイフで突こうとも、そのすべてを受け流されてしまいます。
攻撃が当たる気がしないんです。

（か、勝てない……）

そして、私のすべてを出し切った時、私は敗北を予感しました。
このままだと私が殺されてしまいます。
ゾッと背筋が冷たくなりました。
今までさんざん人を殺しておいて、私は死にたくないと思ってい

たのです。
焦った私は大振りな突きを放ちました。
すると、次の瞬間、私の腹部に衝撃が走ります。
意識が吹き飛びそうになりました。
けど、そのまま鮮やかに地面に叩きつけられ、無理やり意識を現実に引き戻されます。
そうして四肢を拘束され、仰向けにされると、私の頭の中は真っ白になりました。
この体勢だけは無理です。
この世界で記憶を取り戻した最初の記憶がフラッシュバックしてしまうんです。

「ひっ、ひっ、ひうっ、ううううっ、ひぐうううっ」

私は我を失って泣き叫びました。
少年が何かを言っていますが、私の耳には入ってきません。

じたばたともがいていると、いつの間にか意識を奪われ、気がつくと、手足をロープで縛られていました。
目の前には暗殺対象の少年がいます。
首輪のせいで、殺せという命令に従わなくてはならないという気持ちが、私の中で沸き上がってきました。
何とか脱出して暗殺を試みようとしてみますが、それはできそうにありません。

すると、暗殺対象の少年が、涼音としての私が昔ドラマで見たような方法で、尋問してきました。
私は黙ったままですが、すべてを見透かされたような気がして少し怖いです。
黙ったまま少年の質問を聴いていると――。

「……奴隷から解放されたいか？」

と、何やら悩ましげな表情を浮かべて、そんなことを言ってきました。

感情の希薄な私ですが、明らかに動揺したと思います。

当たり前です。

それが叶うと良いなって。

大切な人達にもう一度会いたいって。

心は摩耗しても、ずっとそう思って生きてきたんです。

けど、奴隷として、ペットとして生きるしかないんだって、半ば諦めかけてもいました。

だから、その言葉は私の心の奥底に響いてやみませんでした。

「そうか」

そんな私の反応から、少年は私の気持ちを察したようです。

けど、私は少年の意図が読めずにじっと彼のことを見つめていました。

（私、奴隷から解放されるの？）

一度沸き上がった希望が急激に私の中で芽吹いているのがわかりました。

ドキドキと胸の鼓動が止まりません。

すると、少年は再度私に奴隷から解放されたいかと尋ねてきました。

奴隷でなくなった後も少年のことを殺す気かと聞かれましたが、奴隷から解放されればそんなことは絶対にしません。

この少年に対する私の殺意は首輪によって作られたものなのだから。

（でも、あいつらが仕組んだ罠じゃない、よね？）

もしかしたらお兄様達が近くにいるんじゃないかと、私に希望を持たせてどん底に突き落とすんじゃないかと、どこか疑心暗鬼になり、私は周囲を見渡してみました。

だけど、この場には私と目の前の少年しかいません。

意を決しておそるおそる小さく頷くと、少年は私の首輪に手をかざしました。

すると、カン、という高い音をたてて、私を拘束し続けていた首輪が外れます。

私は呆然と外れた首輪を眺めました。

首輪の感覚を確かめるために、縛られた状態で必死に首を動かします。

だけど、そこには、長年の間、私を縛り付けていた首輪の感触はありませんでした。

「ぇ……、ふぇっ、ふぇ、ひっく、ひっく、うぇえええん」

水道の蛇口が壊れた様に、私は泣き出してしまいました。

涙が止まりません。

どうして泣いているのか、最初はよくわかりませんでした。

けど、すぐにこの感情が喜びだということに気づきました。

それに気づけたことが、自分にまだ感情が残っていたことが、嬉しくて、さらに泣いてしまいます。

どれだけ泣いたんでしょうか。

少しずつ泣き声が収まってきた私に――。

「そろそろいいか」

と、少年が声をかけてきました。

ビクリ、と私の身体が震えます。

あろうことか私はすっかり少年の存在を忘れていました。

嬉しいけど、何を言ったらいいのかわからず、私は、戸惑いながら、少年を見つめました。

「毒は拭いておいたが、お前のナイフは返す。もう逃げていいぞ」

そう言うと、少年が私にナイフを返してくれました。

少年は、私を拘束していたロープも切ってくれ、攻撃してきたお腹の治療もしてくれました。

「え……？」

されるがままの状態で、私は戸惑いの声を上げました。

逃げていい。

逃げる。

どこに？

恥ずかしいことに、いきなり逃げていいと言われても、私にはどうしたらいいかわかりませんでした。

「だから、逃げていいぞ。人間の領域はお前には暮らしにくいだろうけど、亜人の領域ならそうでもないだろ。ここから東に行けば亜人の領域がある。俺も東に向かっていたんだが、あいにくと服が破れたからな。一度都市に戻ることにする。ここでお別れだ」

と、戸惑っている私に言い聞かせるように、少年が言いました。

東……。

東ってどっちだろう。
匂いを追って走ってきた私には方向がよくわかっていません。
（この人が東に進んでいたっていうことは……王都の反対側に行けばいいの？）
どうすればいいのかわからないまま悩んでいると、少年は足早に都市がある方に戻って行きました。
（あ、行っちゃった……）
立ち去る少年の後ろ姿を呆然と眺めます。
それから私はしばらくうろうろと周囲を歩き回りました。
私の帰る場所ってどこだろう。
王都の屋敷？
違う。
違う！
あんな場所は私が帰る場所じゃない！
けど、そこ以外の場所を私は知らない。
（東に行けば私の仲間の種族がいるの？）
この世界で唯一私に優しくしてくれた存在が私のお母さんでした。
そのお母さんと同じ種族の人達なら私に優しくしてくれるんだろうか。
そんな希望が胸の中で芽吹きました。
だけど、漠然としたまま東に向かうのは怖いです。
どうしよう。
そんなことを思っていると、近くに先ほどの少年が近づいてきて

いることに気づき、どういうわけか私は慌てて隠れました。

（あ、あの人に付いて行けば……）

私達が戦った場所を通り過ぎていく少年の姿を見守ると、私はなんとなくその後ろを付いて行ってみることにしました。

少年の移動速度は速いけど何とか付いていけます。

そうしてしばらくその後を付いていると、ふと、少年が立ち止まり――。

「……出て来い」

と、どこか呆れたような声色で言いました。

ビクリ、と私の身体が反応します。

気配は消していたはずなのにどうして？

そんなことを考えましたが、私ではあの少年には勝てません。

だから私の追跡くらい割と簡単に見破れるんでしょう。

私はおそるおそる少年の前に姿を現しました。

「どうした？」

と、少年に尋ねられました。

「あ、あの、東、行く、一緒……」

何を言っているんだろうか、私は。

いくら首輪で心を操られていたとはいえ、自分のことを殺そうとした人間が一緒に付いて行きたいと言っても、承諾するはずがありません。

でも、あのお兄さんと似た雰囲気があるこの人なら、もしかした

ら私のお願いを聞いてくれるかもしれない。
どうしたらいいか途方に暮れていたあの時のように、私のことを助けてくれるかもしれない。
そんな淡い期待を抱いてしまいました。
少年は私の同行を渋るようなことを言っているけど、私は勇気を振り絞って自分の意思を伝えてみることにしました。

「……行きたい、です」

今の私なら、あの時、お兄さんに話しかけることができたのかな。

ふと、そんなことを思いました。

「俺は人間だぞ。自分勝手な存在だ。お前を奴隷として扱っていた連中と同じなんだぞ？」

少年は困ったように私の同行を拒否するようなことを言っています。

「嫌な感じ……しない、です。変な臭い、も、しない」

けど、ここまで来たらもう私も引きたくありませんでした。
私にはこの少年が私のことを飼っていたあの男達と同じようには思えません。
だって、私を苛めて興奮した時にスティアードが発する変な臭いもしません。
それに、ピリピリとした雰囲気もない。
なんていうか、優しいオーラが出ている。
そんなところがあのお兄さんに似ているんだと思いました。

「それに俺は獣人のテリトリーには入れない」

どうやらこの人は獣人のテリトリーに入れないみたいですが、私はそこまで一緒に行ってみたいと伝えてみました。

すると、この少年は私の我儘を聞いてくれました。

ふと、私の中で、この人はあのお兄さんの生まれ変わりなんじゃないかって、そんな突拍子もない考えが浮かびました。

そんなはずはないのに。

この少年がやさしくしてくれたせいで、そんなことを思ってしまいました。

「少しここで待ってろ。都市に行ってお前の必需品を買ってくる。そうだな、一時間で戻ってくる。わかったか？」

なにやら少年は私に必要な荷物を買ってくれるみたいです。

私が小さく頷くと、少年は都市へ向かって歩き出しました。

「そうだ、名前はなんていうんだ？」

ふと、少年が立ち止まり、私の名前を聞いてきました。

「ラティーファ」

私はこの世界のお母さんが与えてくれた名前を名乗りました。

私の宝物です。

「そうか。俺はリオだ。よろしくな。ラティーファ」

すると、少年も名乗ってくれました。

リオというそうです。

なんて呼べばいいのかな。
リオ、リオ君、リオさん。
リオさんでいいかな。
リオ……お兄ちゃん。
ふと、そんな呼び方が私の頭の中をよぎった。

お兄さんはあの人だけの呼び方だ。
けど、この人から感じる優しさは、なんかあのお兄さんのものと似ている気がする。
だから、この人のことをお兄ちゃんって呼べたらいいな。
なんて、立ち去るリオさんの後姿を眺めながら、私はそんなこと考えた。

閑話　ラティーファの軌跡　その三

リオさんが都市から戻って来ると、私達は東に向けて走り出しました。
私は魔法を使って身体能力を上げているんですけど、リオさんは精霊術というのを使って身体能力を上げているらしいです。
精霊術というのはリオさんが言うには私と同じ種族の人達が使う技術だとか。
じゃあなんで人間族のリオさんは使えるんだろう。
そんなことを考えたけど、すぐにどうでもいいやと思いました。
うん、リオさんはリオさんだもん。

それで、リオさんが言うには私の魔力は多い方らしい。
魔力っていうのは身体の中にエネルギーみたいなものです。
よくわからないけど、体力みたいなもので、休めば回復する。
空っぽになるまで使ったことはないけど、空っぽにならないということは多いんだと思います。
身体能力を上げる魔法を使っている最中は体内の魔力が減っている感じはするけど、それでも余裕はあります。

平常時のリオさんの身体能力は私よりも下だけど、精霊術を使うと私が魔法を使っても負けるくらいの身体能力になるんです。
それにリオさんは体力もかなりあります。
私も鍛えてはいるけど、普段は室内に閉じ込められていた私とは走り込んでいる量が違うんでしょう。
走っていると私の方が先に体力の限界が来てしまうくらいです。
私が息切れしてリオさんに付いて行けなさそうになると、リオさんは機敏にそれを察して休憩をとってくれます。

リオさんは優しい人だと思う。
やっぱりあのお兄さんに似ているな。
お兄ちゃんって呼んでみたい。
呼んだら怒られるかな。
口数の少ない私に気を使っているのか、時折話しかけてくれるのも、あのお兄さんを思い出させます。
そんなことを考えていると、また私の走るペースが落ちてきました。
リオさんならきっとあのお兄さんのように私の異変に気づいてくれる。
そうして私を助けてくれるんだ。
そんなことを考えていると、リオさんが減速して立ち止まりました。
ほら、やっぱり。
リオさんは、私に近づいてきて、水を作ってくれました。
その水を私は一生懸命に飲みます。
ああ、美味しいな。

ふと、私のお腹が鳴ります。
不味い、と思って、私は条件反射的に首を勢いよく左右に振りました。
スティアードの前で私がお腹を減らすと碌なことが起きた覚えがない。
私が食事をするにあたってあいつの中で儀式が必要になるのです。
私は粗末な食事を食べるためになんだってやらされました。
だから、お腹が鳴った瞬間にそれを否定するようなまねをしてしまいました。
だけど、リオさんは優しく笑って――。

「昼にするか。……ほら」

と、言って、たくさん具の入った美味しそうなパンを私に差し出してくれました。

こんな美味しそうなパンはこの世界で初めて見ました。

これは食べてもいいってことなのかな。

私はリオさんとパンの間に何度も視線を往復させた。

「どうした？」

リオさんが不思議そうな顔して尋ねてきました。

「食べて、いい、ですか？」

リオさんなら、食べてもいいって言うんだろうけど、それを聞かないで食べるのが怖い。

もはや習性みたいなものです。

「遠慮しなくていい。食べていいんだ」

ああ、やっぱりリオさんは優しいな。

「はくっ、はくはく、っぐ、はぐ、ひっぐ、うっぐ」

私はしゃぶりつく様にむしゃむしゃとパンを食べ始めました。

すごくお行儀の悪い食べ方だったと思います。

でも、目の前に御馳走を置かれて、それを我慢しなくてもいいんだと思うと、我慢なんかできなくて、そのパンはすごく美味しくて、いろんな感情があふれ出して、私は思わず泣いてしまいました。

気がつくと、リオさんが私の背をさすってくれました。

リオさんに依存してしまいそうで怖い。
リオさんを私だけのものにしてしまいたい。
この人は私の仲間が暮らしている場所に行ったら別れると言っていたんだから、そんなのは無理だとわかっているのに。
そう思わずにはいられませんでした。

ふと、私の中で、リオさんはどこまで私のわがままを許してくれるんだろうかって考えが沸きました。
私が我儘を言えばこの人は私とずっと一緒にいてくれるんでしょうか。
どうだろう。
試してみたい。
でももう少し仲良くなってからでないとダメかな。
なんて考えて――。
ああ、私ってすごく嫌な子だ。
そう、思いました。
こんな世界で生きている間にずる賢くなってしまったんでしょうか。
でも、それでも、リオさんの優しさはまるでお母さんみたいに温かくて、私はリオさんに溺れてしまいたいと強く思ってしまいました。

その後、しばらく走り続けて、その日は野営をすることになりました。
リオさんは手慣れた様子で草と木だけでテントを作ってしまいました。
すごいです。
そして、料理を作るからその中で待っていてくれと言われました。
しばらくすると、どこからかすごく良い匂いがしてきて、私は思

わずテントの中から出てしまいました。
今の私の鼻は前世の私の鼻とは比べ物にならないくらいに利きます。
鼻をひくひくと動かしながら、匂いをたどっていくと、リオさんがいました。
（うっ、笑われている……）
リオさんが私を見て笑っていることに気づき、私は顔を赤くして俯いてしまいました。
それでもその匂いに耐えることはできずにリオさんに近づきます。
「ほら、スープパスタだ。味付けはオリジナルだけどな」
そう言って、リオさんが器とフォークを差し出してきた。
私はその中身を見て驚愕してしまいました。
「……『スパゲッティ』？　これ、『スパゲッティ』ですか！？」
思わず大きな声を出してリオさんに聞いてしまいます。
「あ、ああ……、食べていいぞ」
私が大きな声を出して呆気にとられたのか、リオさんは戸惑ったように言いました。
けど、今はそんなことを気にしている余裕はありません。
だって、スパゲッティです。
前世でお母さんが作ってくれた私の大好物の一つです。
ああ、フォークを使って何かを食べるのも懐かしい。

息を吹きかけて、私は必死に熱々のスパゲッティを冷まします。
一口食べると、口の中に塩気の効いた最高の味が広がりました。

「はふ、はふはふっ」

私は我慢できずに口の中が火傷するような勢いでスパゲッティを食べていきます。
途中でリオさんから勧められたビスケットのようなパンをスープに浸して食べると、また違った味わいがあって最高でした。
スープの味も絶妙にマッチしていて、昔お母さんが作ってくれた手料理を思い出します。
そう、私は前世のお母さんとお父さんのことを思い出してしまい、ここでまた泣き始めてしまいました。
けど、スパゲッティが美味しくて、泣きながら食べるという器用な真似をしてしまって、気がつけば最後の一口を飲み干してしまいました。

（あ、空っぽ……）

思わず空になった容器も舐めてしまいます。
前世に比べて、ずいぶんと私も行儀が悪くなったものです。
すると、そんな私を見かねて、リオさんがお代わりをよそってくれました。
私は眼を輝かせてリオさんに頭を下げ、再びスパゲッティを食べ始めます。
食事を食べ終えると、テントに戻って身体を拭き、一日の疲れを癒すために早めに眠りに就きました。

そして、問題が起こります。
いい年をしてみっともないんですが、時々、私は夜泣きをします。

この世界のお母さん、前世のお母さんとお父さん、それにお兄さんの夢を見ると確実に夜泣きします。
酷い時は大声を出して泣きます。
そして、その日はちょうど夜泣きをしてしまう日でした。
それもかなり本格的なやつです。
泣き始めればすぐに意識は覚醒しますが、起き始めは気が動転しているため、状況判断もままなりません。
すぐ側ではリオさんが眠っていましたが、そんなことも忘れて私は泣いてしまいました。
もちろんすぐ側で眠るリオさんは私が泣いた瞬間に眼を覚ましました。
すると、リオさんはそっと私を抱きしめてくれました。

（あ……）

はたと、私の泣き声が小さくなります。
それは私の大好きな人達の温もりを感じた瞬間でした。
相手がリオさんだとはわかっていなかったけど、私はリオさんをギュッと抱き締めました。
そして、顔を擦りつけ、すすり泣き、やがて私は再び深い眠りに落ち、その夜はもう泣くこともありませんでした。
翌朝、目覚めると、私はリオさんに抱き着いていました。
既にリオさんは起きていたみたいですが、私があまりにも強く抱きしめていたこともあり、身動きをとらないでいてくれたみたいです。
顔を真っ赤にする私に対して、リオさんは――

「おはよう」

と、薄く笑って挨拶を言ってくれました。

その顔は涼音としての私の記憶の中にあるお兄さんにそっくりでした。
だから、この時から、私の中でリオさんをお兄ちゃんと呼ぶことにしました。
お兄ちゃんは、私が夜泣きしたことに特に触れず、普通に接してくれました。
それが私にはすごく嬉しかったです。

どうしてこの人は私に優しくしてくれたんだろう。
ふと、そんなことを思いました。
私はこの人を殺そうとしたのに……。
けど、この人から感じる優しさは本物だと思う。
それはどうして？
この人がお兄ちゃんだから？
ああ、きっとそうだ。
何故だかその言葉は私の胸にストンと落ちた。
だからもっと甘えてみてもいいよね？
そう考えて、私は、この日を境に、露骨にお兄ちゃんに甘えてみることにしました。

そうして何日も時間は経っていき、恥ずかしくて言葉ではお兄ちゃんと言えないけど、私はお兄ちゃんにたくさん話しかけてみました。
お兄ちゃんは私の言うことをなんでも聞いてくれるし、夜泣きしてうるさくしても嫌な顔せずに私に優しくしてくれる。
だからやっぱりこの人はお兄ちゃんなんだと私は確信を抱いていました。
それと私は以前に比べてよく夜泣きするようになりました。
たぶんお兄ちゃんの温もりを知ってしまったせいだと思います。
ある日、夜泣きした私は、いつものようにお兄ちゃんに抱き着き、

思わず――。

「お……兄……ちゃん」

と、言ってしまった。

心の中の呼称が現実の呼称となった瞬間でした。

その時は寝ぼけていたけど、翌朝目覚めると、たしかにその時の記憶が残っていました。

それを思い出した時の私の顔は真っ赤になっていたはずです。

だけど、一度言ってしまった以上は、もう気持ちを抑えきることはできませんでした。

「お兄ちゃん！」

と、私は日常的にお兄ちゃんをそう呼ぶようにしました。

真っ赤な顔の私に、お兄ちゃんはどうしたのかと、聞いて来たけど――。

「だって、お兄ちゃんはお兄ちゃんだから……」

と、私が言うと、苦笑しながらも納得してくれたみたいです。

私の中でお兄ちゃんの存在がどんどん大きくなっているのがわかりました。

そして、その反動として、旅を続けているうちに、私はどんどんお兄ちゃんとの別れを恐れるようにもなりました。

お兄ちゃんは私と同じ種族の人達が暮らしているところまでしか一緒に行かないと言っていた。

けど、そんなのは嫌だ。

見ず知らずの人達と一緒に暮らすくらいならこのままお兄ちゃんと一緒がいい。

自分がどんどん図々しくなっていくのがわかる。
でも、もうお兄ちゃんの温もりを失いたくはなかった。

私は四六時中お兄ちゃんにくっつくようになりました。
食事を作っている時も、ご飯を食べる時も、眠る時も、引っ付きました。
お兄ちゃんに抱き着いていれば夜泣きだってしない。
お兄ちゃんは駄目って言うけど、お兄ちゃんならトイレや着替えをするときだって一緒にいて欲しい。
お兄ちゃんには私のすべてを見てほしい、すべてを知ってほしい。
お兄ちゃんになら私のすべてを差し出したってかまわないんだ。

そんな風に考えるようになって、ある日、遠くにすごく大きな樹が見えるようになりました。
前世で東京に出来たばかりの高い塔みたいな建物とどっちが大きいかなと悩むくらいに、それくらいに大きい樹だと思います。
私達はその樹に近寄ってみることにしました。
すると私は見知らぬ匂いを感知しました。
言葉では上手く説明できないけど、動物や魔物とは違う匂いです。
私が要領を得ない言葉でお兄ちゃんにそう言うと――。

「なるほど、な。そろそろいい時間だし、……とりあえず今日はここまでにしておくか」

と、お兄ちゃんは言って、その日はそこで野営をすることになりました。
いつものようにお兄ちゃんの作った美味しいご飯を食べます。
今日のご飯は大麦のリゾットです。
お粥とはまたちょっと違うけど、すごく美味しい料理です。
ご飯を食べると、テントに戻り、お兄ちゃんに抱き着き、私は深

い眠りに就きました。

どれくらい眠ったんでしょうか。

どういうわけか眠りながらお兄ちゃんの感触がないことに気づき、私は久々に夜泣きしてしまいました。

ふと、目が覚めると、まったく見知らぬ場所に私はいました。

すぐ側には、私と同じくらいの小さい女の子と、綺麗な翼を持つ女の人がいます。

でも、お兄ちゃんがいません。

いない。

お兄ちゃんがいない。

そのことに気づくと、私は大泣きしてしまいました。

何やら女の子達がお母さんに教えてもらった言葉で話しかけてきたけど、私はなんて答えたかわかりません。

「お兄ちゃんはどこ？」

ただそう繰り返す様に叫んでいたんだと思います。

すると、ふと、お兄ちゃんの匂いを、私の鼻が捉えました。

間違いない。

間違えるはずがありません。

私はお兄ちゃんがいる場所へと急いで走り出しました。

（行っちゃやだ！　お兄ちゃん！）

お兄ちゃんは黙ったまま私をここに置いて行ってしまうんでしょうか。

ここが私と同じ種族の人達が暮らす場所だから？

嫌だ。

絶対に嫌だ。

お兄ちゃんと離れるのが怖くて、私は必死でした。
建物の中は広かったけど、匂いをかぎ分けていたので、道に迷うことはありません。

やがてお兄ちゃんがいる部屋を見つけて、扉が開いていたことから、私はその中に飛び込むように走り込みました。
いた。
いました。
お兄ちゃんだ。
良かったと、そう思って、私はお兄ちゃんに抱き着きます。
すると部屋の中に次々と人が入ってきました。
やがて私と同じ狐耳のお婆ちゃんが入って来ると、その場にいた女の子たちが何やら事情を説明し始めました。
完璧ではないですが話の内容はわかりました。

（この人達がお兄ちゃんをこんな目に！）

それを理解した瞬間、私は本気でこの人達に殺意を抱きました。
お兄ちゃんの敵は私の敵だ。
女の人が私の殺気に反応して身構えて、まさしく一触即発の状態でしたが、流石に人数的に私が圧倒的に不利です。
どうやってお兄ちゃんを連れてここから逃げようかと頭の中で考えていると――。

「すまぬ。とりあえず事情を知りたい。その上でこちらに非があれば謝罪もする。まずはその者の手かせを外そう。今はそれで納得してくれぬか？」

と、私と同じ狐耳のお婆ちゃんが言ってきました。
このお婆ちゃんは私や私のお母さんと同じ種族だ。

この人の言うことは信用できるだろうか。
お兄ちゃんはこの人達は優しい種族だと言っていた。
今の状況からすると、そうだとはとても思えないけど、お兄ちゃんの言葉だ。
一度くらいは信じてみてもいいかもしれないと思いました。

「……なら、早く外して。何かしたら、殺す」

私がそう言うと、狐耳のお婆ちゃんはお兄ちゃんの手かせを外す様に綺麗な女の子に命令しました。
なにやら背中に翼のある女性が慌てていましたが、狐耳のお婆ちゃんはその女性を叱りつけます。
耳の長い綺麗な女の子がお兄ちゃんの手かせに手をかざすと、すぐにお兄ちゃんの手かせが外れました。

「ラティーファ、俺は大丈夫だからその殺気を鎮めるんだ」

安堵する一方で、いまだ警戒して殺気をまき散らす私に、お兄ちゃんが優しく言いました。
少し納得はできなかったけど、お兄ちゃんが頭を撫でてくれたらすぐに落ち着くことができました。
それからお兄ちゃんが怪我の治療をすると、部屋を移動して話し合いをすることになりました。

何やら小難しい話をしていたので、私は途中で眠ってしまいましたが、目が覚めるとお兄ちゃんが私の隣で眠っていることに気づきました。
それに安心してお兄ちゃんに抱き着くと、私は二度寝をすることにしました。
そして、次に眼を覚ますと、お兄ちゃんと一緒にお昼ご飯を食べ

ました。
すぐ傍には先ほどお兄ちゃんと話しをしていた女の子達が三人いて、私に話しかけてきます。
最初はお兄ちゃんに意地悪をした人達だし、あまり話そうとは思えなかったけど、お兄ちゃんが仲介してくれたおかげで、少しずつ私からも彼女達と話すようになりました。
どうやら悪い子達ではないみたいです。
歳の近い女の子達と話すのは新鮮で、少し恥ずかしかったけど、気がつけばだいぶ仲良くなれました。

夕方になると、お兄ちゃんは偉い人達と面会すると言って、私を残してどこかへ行ってしまいました。
すごく不安だったけど、大丈夫だというお兄ちゃんの言葉を信じて、待つことにしました。
一緒に残った女の子達とお話をすると、ここが精霊の民の里と呼ばれる場所であると教えられました。
女の子達は、銀狼獣人のサラお姉ちゃん、ハイエルフのオーフィアお姉ちゃん、エルダードワーフのアルマお姉ちゃんといって、それぞれ私よりも年が上でした。

しばらくしてお兄ちゃんが戻って来ると、小さな宴会が催されることになったそうで、私はお兄ちゃんと一緒にそれに参加しました。
詳しい話はよくわからないけど、どうやらお兄ちゃんはしばらくこの里に暮らすことになるそうです。
つまり、まだまだお兄ちゃんと一緒にいられるということです。
それが嬉しくて、お兄ちゃんと離ればなれになることに対する恐れはすっかり忘れて、私はその宴会を楽しむのでした。

閑話　ラティーファの軌跡　その四

つい先日から、精霊の民の里での私の生活が始まりました。
何やらお兄ちゃんはアースラというお婆ちゃんから精霊術について学ぶそうです。

その間に、私は、精霊の民として学ばなければいけないことを、サラお姉ちゃん達から教わることになりました。
お兄ちゃんと一緒にいられる時間は減るけど、それが私のためになるらしいです。
お兄ちゃんの言うことなら素直に従おうと思います。
今までお兄ちゃんの言う通りにして間違ったことはないもん。
けど、毎日のように朝から夕方まで続くお勉強に少し飽き飽きとしてきました。
ああ、もっとお兄ちゃんに会いたい。

「ねぇ、サラお姉ちゃん。お兄ちゃんに会いに行ってきてもいい？」

そんな私の想いが思わず口から漏れてしまいました。

「ダメです。ラティーファは今私達の言葉を学んでいるんですから」

その願いをサラお姉ちゃんがバッサリと切ります。
むぅ、いじわる。
サラお姉ちゃんは優しいけど厳しい人です。
スパルタの先生みたいに私を叱咤激励してくれます。
仕方ないので、この時はもう少しだけ頑張ってみることにしました。

夜になればお兄ちゃんと一緒に寝られるからね。
今の私はお兄ちゃんが泊まっている部屋で一緒に寝ています。
サラお姉ちゃん達は同年代の異性が一緒に寝るのは良くないって渋っていたけど、私が頑なに譲らなかったら折れてくれました。
この里でもかなり偉いアースラさんのお墨付きで許可ももらっています。

「そもそも精霊というのはですね――」

今はアルマお姉ちゃんの授業です。
アルマお姉ちゃんが精霊とは何なのかについて私に教えてくれました。
アルマお姉ちゃんの説明は筋道が立っていてすごくわかりやすいです。
難点を言うのならば話が小難しくなりやすいということでしょうか。
そういう話は聞いていて眠くなります。
寝るとサラお姉ちゃんに怒られるけど。

それはそうと、精霊の民というだけあって、精霊は特別な存在のようです。
精霊というのは自然を司る存在で、精霊の民達が信仰する神様みたいなものなんだとか。
だけど、地球の神様みたいな存在ではなくて、ちゃんと生きているみたいです。
普段は霊体化してあまり姿を現さない精霊が多いみたいだけど、中には実体化して人前に姿を現したり、力を貸してくれたりする精霊もいるみたいです。
特に個人と結びついて力を貸してくれる存在を契約精霊というみたいで、契約精霊を宿す人は精霊の民の中でもすごく少ないそうで

す。
なんでも精霊は人の心を読み取る力があるみたいで、本当に清い心と魂を持つ者とのみ契約するみたいです。
サラお姉ちゃん達は三人とも契約精霊を宿しているみたいです。
普段は霊体化してお姉ちゃん達の中で眠っているらしいけど、特別にその姿を見せてもらいました。
普通の動物の姿なんだけど、すごく幻想的で思わず見惚れてしまいました。
サラお姉ちゃんは狼、オーフィアお姉ちゃんは鷲、アルマお姉ちゃんはサイの姿をした精霊でした。
それぞれ中位精霊で、契約精霊としてはほぼ最高峰に位置する存在です。
精霊には下位精霊から高位精霊まで階級があるみたいだけど、今確認されている精霊は準高位精霊が最高位で、高位精霊はお留守番みたいです。
お姉ちゃん達の精霊は言葉を喋れないみたいですけど、準高位精霊以上にもなるとお話ができるんだとか。

でも、話はできなくても、私の心は全部お見通しなんだよね……。
つまり、私のお兄ちゃんに対する想いは、すべて精霊には知られているということです。
そう考えると私も精霊の凄さを実感しました。
うん、私も精霊の民に近づけたってことなのかな。

精霊を敬い、仲間を大切にし、欲に負けずに、己を律して生きる。
そういう人達の集まりが精霊の民みたいです。
特に、欲に駆られて自制心を見失うことは、精霊の民の中では最も恥ずべき行為であるそうです。

だから、私も精霊の民だから自制心を持って生きなさいと、サラお姉ちゃんから教えられました。
だけど、私はお兄ちゃんのことになると自制できる気はしません。
逆に人間族は自制心があまりない種族らしいけど、私がお兄ちゃんに関して自制できないのは元が人間だから？
ラティーファとしての私の気持ちと、涼音としての私の気持ちは別物なんだろうか。
姿は獣人でも、心は人間と獣人の混ざりもの。
それは私だけが知っている秘密です。
それを誰かに教えたことはいまだかつてありません。
そう、お兄ちゃんにも私が元々日本人であったことは教えていないんです。
そんなことを言ったら頭の変な子だと思われるんじゃないか。
お兄ちゃんには私のすべてを知ってほしいけど、そのことだけは言うのが怖いです。
それでも、いつか、いつかお兄ちゃんにはこのことを伝えたい。
この気持ちも自制しないといけないんだろうか。
私はよくわからなくなってしまいました。
だから、私は、オーフィアお姉ちゃんに、自制心とやらについて尋ねてみることにしました

「たしかに精霊の民は自制心を大事にするけど、それはまったくの無欲というわけじゃないんだよ」

自制心というのは何でもかんでも欲求を我慢することを意味するわけではなくて、他者との衝突を調整するために各人が備えていなければならない弁えなんだそうです。
お腹が減ったからご飯を食べる。
眠いから眠る。
生きているんだから、そういった欲求があるのは当たり前です。

だけど、そういった欲求から争いを生じさせてはならない。
それは結局お互いの利益を生むどころか害悪しかもたらさない。
それほど無益なことはないないんだそうです。
だから、自分の欲と向き合っていくうちに自制心を獲得しなければならない。
里の中でも、子供達が色々と欲求に従って行動するけど、大人達も最初のうちは好き勝手にやらせるそうです。
けど、そうすると、やがて必然的に他の子供との間で争いが発生することになります。
そうした時に自制心の意味について大人達が教えるんだとか。
いつまでたっても欲求に逆らえないで、他者と争いを繰り広げてばかりの人は、未熟者扱いされて里の中では重用されないようです。
自制心の意味を理解し、他者を尊重できるようになって、ようやく一人前の精霊の民になれるんだそうです。
そして、そういった自制心がないゆえに、過去に取り返しのつかない戦争を引き起こしてきたのが、人間族らしいです。
そのせいか、里の中では、欲に駆られて失敗したエピソードとして、人間族に関する逸話が多いです。

でも、どうなんだろう。
たしかに、人間族は自制心のない人がいると思う。
私を奴隷として扱っていたあの家の人間達はそういった自制心とは無縁だった。
でも、人間の中にも自制心のある人はいると思う。
だって、お兄ちゃんは自制心の塊みたいな人だもん。
お兄ちゃんが欲に負けて誰かと争う姿は私にはとても想像できない。

「もちろんすべての人間族がそうだと言うことはできないよ。私もリオ様はすごく素敵な人だと思うもん」

そう言うオーフィアお姉ちゃんを私はじっと見つめました。
もしかしてオーフィアお姉ちゃんもお兄ちゃんのことが好き？
いや、今のところそういった感じではなさそうです。
優れた自制心を持つ者を敬うのが精霊の民という人達です。
オーフィアお姉ちゃんはそれを地で行っているんでしょう。
なんていうかオーフィアお姉ちゃんは天然なようだけど、実はすごくしっかりしているんじゃないだろうか。
お母さんみたいな包容力のある優しさがあって、すべてを導いてくれる気がします。
もちろんサラお姉ちゃんやアルマお姉ちゃんがそうでないというわけじゃないけど、ほんわかとした普段のオーフィアお姉ちゃんの雰囲気とのギャップのせいでしょうか。

それはそうと、私がお兄ちゃんのことを好きっていうこの気持ちは自制心で我慢しなくてもいいってことだと、この時の私は単純に考えてしまいました。
そう、この時、私はまだまだお兄ちゃんの気持ちについて考えられるほどの余裕はありませんでした。
それを理解することができたのはもう少し先のお話で、それができたのもやっぱりお兄ちゃんのおかげだったんだけど、お兄ちゃんはお兄ちゃん、そのことだけに間違いはなかったことだけは確かです。

こうして私が色んなことをお姉ちゃん達から学んでいるうちに、あっという間に半年以上の時間が過ぎてしまいました。
お兄ちゃんはお兄ちゃんで最長老の方々から色々と教えてもらっているようで、日中に私と会う時間はありませんが、夜になればたくさん話すことができます。

今、私とお兄ちゃんはアースラさんの家で暮らしています。
アースラさんは娘さんの夫婦と一緒に暮らしていて、孫の女の子がいたけど既に亡くなってしまったそうです。
同じ狐獣人のおかげか、アースラさん達は私のことを特別に可愛がってくれます。
最近ではお兄ちゃんじゃなくてアースラさん達と一緒に寝ることもあります。
なんか前世でお爺ちゃんやお婆ちゃんの家に泊まりに行った時のことを思い出して、少しだけワクワクしてしまったり。
ああ、私、この里に来られて良かったな。
本当にお兄ちゃんの言った通りでした。

ある日、お姉ちゃん達に用事があって勉強がお休みの日がありました。

「あ、ラティーファちゃんなのです！」

邪魔しちゃいけないけど、お兄ちゃんのいるところへ見学しに行こうと外を歩いていると、私と同い年の少女が話しかけてきました。
ベラちゃんという狼獣人の少女で、サラお姉ちゃんの妹です。

「おう、ラティーファも一緒に遊ぼうぜ」

すると、アルスラン君という獅子獣人の少年も私に話しかけてきました。
彼らはこの里の中でできた私の友達で、私と一緒にお勉強をしている子供です。
そう、里の中でお勉強をしている子供は私だけではありません。
里の中では子供達に勉強を教えるのは少し年上の賢い子供達と決まっています。

そうやって身近な年の近い子に教えることで、教えを浸透させていくんだとか。
お姉ちゃん達は里の重役の子供達であることもあり、すごく頭が良くて、多くの子供達に勉強を教えていたります。
今までは個別で勉強を習っていた私ですが、最近になってようやく一部の授業だけですが、集団講義の方に混じることができるようになりました。
そこで私はたくさんの友達を作ったのです。
アルスラン君はその中でもガキ大将といったポジションにいる子です。
ベラちゃんは、やや堅物のサラお姉ちゃんと違って、天真爛漫な性格をしている子です。
二人とも私に積極的に仲良くしてくれるすごく良い子達です。

「ごめんね。今からお兄ちゃんのところへ行かないといけないんだ」

みんなと一緒に遊ぶのは魅力的だけど、今日は久々に日中からお兄ちゃんと会えるチャンスです。
だから私はアルスラン君のお誘いを断ることにしました。

「えぇ、お兄ちゃんって人間族の男だろ……」

と、アルスラン君はどこか不満そうに言いました。

「そうだけど。それが何？」

そう言う私の口調は少しきつくなってしまったかもしれません。
欲望のままに人間族が繰り広げてきた争い、人間族が私達に対してしてきたこと、そういった過去の歴史もあって、精霊の民の人間族に対する不信感は強いです。

視野の広い長老クラスの人達でもそういった不信感は抱いているし、ましてや今は未熟な若い世代はなおさらそういう不信感が強いです。
サラお姉ちゃん達はお兄ちゃんに対してあまり偏見を抱いていないみたいだけど、そういう人はごく一部の例外です。
だから、お兄ちゃんが里の中で暮らしている情報は一般に知れ渡っているけど、接触は避けるように通達が行き渡っていたりします。
私自身が人間族に奴隷扱いされてきたこともあるし、人間族に対して過去の歴史も聞いたから、そういった不信感も理解できます。
でも、それを理由にお兄ちゃんに対して不信感を抱くのは止めて欲しいというのが私の気持ちです。

「いや、だったら俺らと遊ぼうぜって話。せっかく今日は休みなんだからさ」

と、どこか困ったようにアルスラン君が言います。

「う～ん。じゃあとりあえず先にお兄ちゃんのところに行ってくるね。邪魔しちゃいけないからすぐ帰って来るし、そしたら遊んでくれる？」

そこで私は折衷案を出すことにしました。

「うーん、わかった！　そこの広場にみんなでいるから早く戻って来いよ！」

アルスラン君はその案を受け入れてくれたようです。
ベラちゃんと一緒に広場に向かって走っていきました。
今はこれでいいけど、いつかお兄ちゃんが精霊の民の人達に受け入れられるといいな。

みんな悪い人達じゃないからきっと触れ合えればわかると思うから。
そうすればお兄ちゃんもずっとこの里で暮らすことができます。
いつかお兄ちゃんはこの里から立ち去ってしまうんでしょうか。
それを考えると胸が締めつけられるように切なくなります。
お兄ちゃんがずっとこの里に住めるように、何かお兄ちゃんが精霊の民の人達に受け入れられる方法はないでしょうか。

……そうだ。
みんながお兄ちゃんの料理を食べれば考えも変わるんじゃないだろうか。
お兄ちゃんが作る料理はどれも美味しい。
里の料理も美味しいけど、お兄ちゃんが作る料理はどれもこの里にはないものばかりだ。
アースラさんの家に暮らすようになってからお兄ちゃんが作った料理はアースラさん達にもすごく好評だ。
その料理を皆に食べてもらえたら？
それはとても素敵なことじゃないだろうか。

名案とばかりに思いついた私は、まずは身近な人達から、お兄ちゃんの料理を食べてもらうことを計画したのでした。
そして、後日、アースラさんの了承と協力を得て、私はお姉ちゃん達をアースラさんの家に招待しました。
それとウズマさんも来ています。
ウズマさんはお兄ちゃんに対して苦手意識を持っていたようですが、先日、お兄ちゃんと模擬戦をしたことで何か感じるところがあったようで、急激にお兄ちゃんのことを尊敬するようになった節があります。
ウズマさんは、まだ若いのに、里の戦士団の一つで戦士長を務める凄腕の戦士さんです。

性格は少し不器用だけど真っ直ぐですごく優しい人です。
そんなウズマさんならお兄ちゃんの力強い味方になってくれると思うんです。
料理は私が我儘を言ってお兄ちゃんに作ってもらうようにお願いしました。

お姉ちゃん達が来るタイミングに合わせてお兄ちゃんが料理を作ります。
居間のソファーに座ってみんなで歓談していると、出来立ての御馳走の数々が机に運ばれてきました。
その料理を見てみんな目を丸くしています。
ふふふ、驚くのはまだ早いです。
お兄ちゃんの料理は見た目だけでなく味も最高なんですから。
案の定、お兄ちゃんの料理を食べると、みんなそれを大絶賛しました。
当たり前です。
お兄ちゃんは私のリクエストに応えて、前世で私が食べていた美味しい料理の数々を再現してくれるんですから。
地球で暮らす人間が長い歴史をかけて発展させてきた料理の味付けが美味しくないわけがありません。
しかもそれを作るのはお兄ちゃんです。

それから週一くらいのペースでみんなを呼んで、お兄ちゃんの料理に夢中になってもらい、ずるずると私の陣営に引きずり込みました。
そして、頃合いになると、私はお兄ちゃんに料理教室を開けばどうかと提案してみました。
里の重役にその娘達と、既に根回しは済んでいます。
後はお兄ちゃんがやると言ってくれれば、すぐにでも料理教室を開催することが出来るでしょう。

すると、お兄ちゃんは料理教室を開くことを承諾してくれました。
そして、素早くアースラさんが動いて、あれよあれよという間に、お兄ちゃんの料理教室が開催されることになりました。

第一回目は里の上層部に夫を持つ婦人とその娘達だけに向けて開催されることになりましたが、それでも参加人数は大勢います。
最初はオムライスを教えることにしたみたいです。
お兄ちゃんの作るオムライスは半熟玉子の洋食屋さんで食べるような本格的なものです。
あれならきっとみんなも気に入ってくれるでしょう。

教室が始まると、みんなお兄ちゃんの話を真剣に聞き始めました。
まずはその手慣れた手付きで女性達を感心させます。
そして未知のレシピとその芳しい香りで関心を引きます。
最後に出来あがったオムライスを食べればミッションコンプリートです。
食べられる量は一人一口だけでしたが、それが未練を呼び、かえって効果的なようです。
今度は私達が自力で作ることになりましたが、みんなが美味しく作ろうと積極的にお兄ちゃんに話しかけていきます。
その質問に一つ一つ丁寧に答えるお兄ちゃんの姿はすごく好印象に映ったようです。

「ラティーファちゃんのお兄様はすごいのです！」

私の隣にいるベラちゃんもお兄ちゃんのことをキラキラとした目で見ています。
オムライスを作った後、颯爽と帰ろうとしたお兄ちゃんを引き留めて、私達の場所に呼びます。

「えへへ、ベラちゃん、お兄ちゃんの料理は美味しいって言ったでしょ」

はしゃぎながらオムライスを食べるベラちゃんに私は言うと、ベラちゃんは満面の笑みで肯定してくれました。

周囲に視線を移すと、この場にいる女の子達はみんなお兄ちゃんに興味を持ってくれているようで、どうやらお兄ちゃんに契約精霊がいるのもずいぶんと大きいみたいです。

精霊と契約できるということは清い心を持っていることの証明みたいなものですからね。

サラお姉ちゃん達がお兄ちゃんにどんな印象を抱いているのかを、アーニャさんが語ってくれたのも興味深かったです。

「ラティーファの兄ちゃんに教えてもらった料理を母ちゃんが作ってくれたけどすっげー美味かったぜ！　お前の兄ちゃんすごいな！」

後日、アルスラン君がそんなことを言ってくれました。

今、私は、最高に、幸せです。

閑話　ラティーファの軌跡　その五

やった。
やったよ！
お兄ちゃんが精霊の民の盟友になりました。
これでお兄ちゃんはこのまま里で暮らせるということです。

先日、お兄ちゃんと一緒に里の近くにある大樹に行きました。
そこにいるドリュアス様という準高位精霊の方に、お兄ちゃんの中で眠っている精霊を調べてもらうことになったんです。
すると、お兄ちゃんの中にドリュアス様と同じ準高位精霊様が眠っていることが判明しました。
私は単純にお兄ちゃんはすごいって思っただけだったけど、その場にいた他のみんなはもっと深い衝撃を受けていたみたいです。
調べていたドリュアス様も驚いていたくらいです。

その後、私はドリュアス様と少しだけお話をしました。
なにやらドリュアス様が私のことをすごく気にいってくれたみたいで、もみくちゃにされるくらいに抱き着かれました。
私も精霊と契約できるんでしょうか、と尋ねると――。

「貴方ならきっと素晴らしい精霊と契約できるわよ」

と、ドリュアス様は仰ってくれました。
できるといいな。

それはそうと、現状において、準高位精霊と契約を結んでいる存在はお兄ちゃん一人だけだそうです。

精霊を崇める精霊の民としてはそんな重要人物を放っておくことはできません。
そこで、お兄ちゃんを正式に精霊の民の盟友にすることが決まりました。
お兄ちゃんが準高位精霊と契約を結んでいる事実は、里の人達に通達され、精霊祭という重要行事で大々的に発表されることになりました。

精霊祭は、私が想像していたような騒がしいお祭りではなくて、とても幻想的で厳かな祭典でした。
最長老の中でも年長のシルドラ様が祝詞を唱えると、サラお姉ちゃん、オーフィアお姉ちゃん、アルマお姉ちゃんの三人が、儀式用の装束を身に纏って舞を踊りました。

「綺麗……」

と、思わずそんな言葉が漏れてしまうくらいに、お姉ちゃん達は綺麗でした。
お兄ちゃんもその様子を興味深そうに真面目に見つめています。

祭典が進んで行くと、祝福の儀が行われることになりました。
祝福の儀というのは、準高位精霊であるドリュアス様から、精霊の祝福を受けるという儀式です。
ドリュアス様の祝福を受けることで、精霊に愛され、健康に長生きすることができると、言われています。
その儀式の中で、ベラちゃんやアルスラン君と一緒に、私もドリュアス様の祝福を受けることになりました。
精霊の民の子供が一人一人名前を呼ばれると、その場に集まったみんなの前で最長老様達から簡単な紹介をしてもらい、ドリュアス様から祝福のキスを賜ります。

キスされた子供たちの身体が淡く光っていますが、これが祝福を受けた証しなんだそうです。
聞いた話によるとオドの総量が増える上に、精霊術も上手に使えるようになるみたいです。
まだ精霊術を使えるようになって間もない私にはすごくありがたいことです。

私は緊張した様子で儀式の様子を眺めていきます。
今、祝福を受けているのは私の友達ばかりです。
ベラちゃんが名前を呼ばれると、台の上で転んでしまい、場内の笑いを買っていました。
アルスラン君や他の男の子達はドリュアス様にキスされて顔を真っ赤にしていました。
後日、私がそのことをからかうと、必死に違うんだと主張していましたが、どう見てもドリュアス様に見惚れていたのはバレバレでした。
そして、遂に私の番です。
新しく精霊の民になったばかりの私は、最後に名前を呼ばれて、紹介されました。
私も相当緊張していたので、転んでしまったベラちゃんのことは笑えません。
ぎこちない足取りで壇上に上がると、そこにはドリュアス様がいました。

（うわぁ、やっぱりすごく綺麗だな……）

そう、ドリュアス様はまるで女神様のように綺麗な方です。
これだけ綺麗ならアルスラン君が顔を真っ赤にしたのもわかる気がします。
そんなドリュアス様の綺麗な顔が、私のすぐ目の前に映ったかと

思うと、額にそっとキスをされました。
すると、私の身体が薄く光り、ぽかぽかと温かくなった気がしました。
「おめでとう、ラティーファ。これであなたにも精霊の加護が宿ったわ」
と、優しい笑みを浮かべて仰るドリュアス様に――。
「あ、ありがとうございます」
と、私は緊張した声でお礼を言うのでした。
深く頭を下げて壇上から降りると、シルドラ様がお兄ちゃんの紹介を始めます。
私は、興奮していて、シルドラ様が何を仰っていたのかはよく覚えていないけど、お兄ちゃんのことを褒め称えていたのはわかります。
みんながお兄ちゃんに注目して、私もまるで自分のことのように鼻が高いです。
お兄ちゃんの中に眠る準高位精霊様に感謝しなければなりません。
この方がいなければお兄ちゃんが精霊の民の盟友になることは難しかったと、アースラさんが言っていました。
ドリュアス様がお兄ちゃんの額にキスをしたのを見てほんの少しムッとしたけど、お兄ちゃんにとっても私にとっても必要なことなので我慢します。
最後に盛大な拍手が鳴り響き、お兄ちゃんが精霊の民の盟友になったことを、精霊の民みんなで歓迎します。
「さぁ、これにて式は終了だ！　宴だぜ！　戻って準備だ！」

と、エルダードワーフのドミニク様が大きな声で叫びました。
すると一気に場の雰囲気が騒がしくなったではありませんか。
お兄ちゃんの方に視線を移すと、何やらシルドラ様と会話をしているようでした。

「ラティーファ」

二人の様子を遠目に眺めていると、儀式装束を着たお姉ちゃん達に声をかけられました。

「あ、お姉ちゃん達！　すっごく綺麗だったよ！　近くで見ても本当に綺麗！」

私はすぐにお姉ちゃん達を褒め称えます。
本当に綺麗なんだもん。

「ありがとうね。それでラティーファに相談があるんだけど……」

興奮して感想を伝える私に、何やらお姉ちゃん達が思案顔で言いました。
私からお姉ちゃん達に相談することはあっても、お姉ちゃん達が私に相談することはありません。

「任せてよ！」

だから、嬉しくて、私は二つ返事で相談を引き受けるのでした。

「実はね――」

お姉ちゃん達のお話を聞いて、私は是が非でもその相談の内容を

叶えたいと思いました。
どうやらお姉ちゃん達はお兄ちゃんともっと仲良くなりたいみたいです。
というのも、お姉ちゃん達は何やらお兄ちゃんから避けられている節があるんだそうです。
その話は私にもわかる気がします。

お兄ちゃんは口数が多い方じゃないし、あまり積極的に他人と関わろうとする人でもありません。
その理由はわからないです。
性格なんて人それぞれだから、理由なんてないのかもしれません。
ただ、お兄ちゃんは人との距離に敏感な人間だなとは思います。

でも、私は知っています。
お兄ちゃんが色々と考えていて、常に他の人に気を使っていることを。
そして、私は知っています。
お兄ちゃんは、こちら側から深く歩みこめば、きちんと受け止めてくれる人だってことを。
だって、最初はお兄ちゃんを殺そうとした、こんな私だって、勇気を出してお願いすれば、お兄ちゃんは受け入れてくれたんです。

だから、私はお姉ちゃん達にお兄ちゃんの攻略法を伝授することにしました。
その攻略法を実行する場面がこれから開かれる宴です。
事前に近くにいたドミニク様とアースラさんも味方に引き入れました。
横で聞いていたドリュアス様も、面白そうだと言って、計画を見守ってくれるみたいです。

「ほ、本当にそれで大丈夫なんですか？」
「すごく抵抗を覚えるのですが……」

私が教えた攻略法を聞くと、サラお姉ちゃんとアルマお姉ちゃんがそんなことを言いました。
どうも二人は素の状態だと私の攻略法を実行するのを躊躇（ためら）ってしまうみたいです。
オーフィアお姉ちゃんはというと――。

「うーん、じゃあ、酔っぱらってリオ様のところに行けばいいんじゃないかな？」

と、眩しい笑みを浮かべて言いました。
うん、この中だとオーフィアお姉ちゃんがお兄ちゃんと仲良くなる素質が一番あるかもしれません。

「うっ、たしかに……それしか……」

サラお姉ちゃんが躊躇いの声を出しますが、最終的にお酒の力を借り入れることにしたようです。

「がはは、じゃあ、まずは俺が一献交わしてくるぜ」

と、ドミニク様は何本ものお酒を持ってお兄ちゃんの所へ向かいました。
お兄ちゃんは酒豪なようで、ドミニクさんとお酒について興味深そうに語っています。
その一方で、お姉ちゃん達が、この里で、一番強く、一番美味しい、霊酒というお酒を飲んで、気分を高揚させていきます。
緊張のせいかお酒の進みは早いです。

私も霊酒を飲んでみたけど、今まで飲んだどんなジュースよりも美味しくて、すごく楽しい気分になってきました。

「いよいよ面白くなってきたわ。私も現地に向かうから早く来なさいね」

と、声を弾ませて言うと、ドリュアス様はお兄ちゃん達のところに行きました。

「えへへ、これでリオひゃまとなかよひになれるね！」

どうやらそこまでお酒に強くないようで、最初に出来あがったのはオーフィアお姉ちゃんです。

「よし！　じゃあ切り込み隊長はオーフィアお姉ちゃんだね！　行ってみよう！」

私はオーフィアお姉ちゃんの背中を押して、お兄ちゃんのところへ行かせました。

オーフィアお姉ちゃんはなかなか大胆で、お兄ちゃんにしな垂れかかるようにくっつきました。

でも、それは私の教えたことを忠実に実行しているがゆえです。

そう、お兄ちゃんと仲良くなる秘訣はお兄ちゃんに甘えることだったのです。

オーフィアお姉ちゃんと入れ替わるように、ドミニクさんとドリュアスさんがお兄ちゃんのところから離れます。

「どうやら上手くいっているみたいだね！」

オーフィアお姉ちゃんにくっ付かれているお兄ちゃんを見て、私

が言いました。

「う、上手くいっているんですか？」

自信ありげな私の言葉に、何やらサラお姉ちゃんが困惑した声で返してきました。

まったく、サラお姉ちゃんは照れ屋だなぁ。

「ここでサラお姉ちゃんが行かなかったら計画は失敗だよ！　はい、行ってきて！」

そう言うと、私はサラお姉ちゃんを立たせて、お兄ちゃんのところに送り込みました。

流石のサラお姉ちゃんも腹をくくったのか、お兄ちゃんの隣に素早く座りこみます。

顔が赤いのは霊酒の効果だけなのかな。

「後は私達だけだね！　行こう！　アルマお姉ちゃん！」

「私はまだ酔っていないんですが……」

呑兵衛なアルマお姉ちゃんを引き連れて、いよいよ私達も参戦します。

お兄ちゃんの後ろに回り込むと、私はお兄ちゃんに抱き着きました。

「むぅ、オーフィアお姉ちゃんとサラお姉ちゃんずるい！」

お兄ちゃんはいきなり抱きつかれて少しだけ硬直しましたが、抱き着いたのが私だと気づくと、すぐに力を抜いてくれました。

それが嬉しくて、私はさらに強くお兄ちゃんに抱きつきます。

少し遅れてアルマお姉ちゃんもやって来て、五人で飲むことになりました。
少しずつ会話を温め、遂にお姉ちゃん達がお兄ちゃんと仲良くなりたいという意思を伝えました。
お兄ちゃんは少し困惑していたようですが、お姉ちゃんたちの話を聞いて優しく笑うと、きちんと三人の気持ちを受け入れました。

「ふふ、これでようやくみんな仲良しだね！」

と、お兄ちゃんに抱き着いたまま会話の様子を眺めていた、私が言いました。

「がはは。上手いことまとまったみたいだな。どれ、料理と酒を持ってきたぞ。これで親交を深めてくれ」

すると、そこにドミニク様とアースラ様が大量のお酒と食べ物を持ってきてくれました。
二人も加わって改めて飲み直します。

すると、何やらドミニク様がみんなでお兄ちゃんに嫁げと言い始めました。
サラお姉ちゃんとアルマお姉ちゃんは、脈があるようなないような、よくわからない反応をしています。
逆に、オーフィアお姉ちゃんはどこまで本気なのかわからない発言をしました。
私はというと、できることなら、お兄ちゃんと結婚したいです。
ええ、こんな私でもいいと言ってくれるなら、是非ともお願いしたいです。
仮に結婚できなくてもずっと一緒にいたいです。
だから――。

「うん！」

と、お酒の力も借りて、私は言ってしまいました。

たぶんお兄ちゃんは冗談だとしか思っていないんだろうけど、本当なんだよ。

その後、私はもう楽しくて仕方がなくて、お酒がこんなに美味しいものだと知らず、あっという間に酔いつぶれてしまいました。

他の人達も酔いつぶれて、アースラさんとお兄ちゃんだけが最後まで残っていたらしいです。

そんな私達を、別の場所で飲んでいたシルドラ様やドミニク様がやって来て、お兄ちゃんと一緒に運んでくれたんだとか。

そして、翌日、少しだけ二日酔いになったけど、お兄ちゃんに精霊術で治してもらい、私は久々にお兄ちゃんと二人きりで日中からお散歩に行くことになった。

昨日の余韻もあって、私はすごく幸せそうにお兄ちゃんと色々喋ります。

「この里に来てからもう一年以上が経ったが、どうだ。この里の生活は楽しいか？」

ふと、聞き役に徹していたお兄ちゃんが、私にそんなことを聞いてきました。

「うん！　お兄ちゃんの言った通り、この里は優しい人ばっかりですごく楽しいよ！」

だって――。

お兄ちゃんがいる。

お姉ちゃん達がいる。
友達がたくさんいる。
優しい大人の人達もたくさんいる。
たくさんの幸せと優しさにあふれているこの場所にいて、楽しくないわけがありません。

「そうか、ところでラティーファ、話があるんだけどいいか？」

と、何やら改まった様子で、お兄ちゃんが言ってきました。

「えっと、何の話？」

その時、私は何か嫌な予感がして、おそるおそる尋ねるのでした。

「俺はそう遠くないうちにこの里を出て行こうと思っている」

その予感は当たってしまって――。

「っ……」

びくり、と私は身体を震わせました。
それはどこか心の中でずっと予想していた言葉で、それを避けようと色々と頑張ってきて、ようやくお兄ちゃんが精霊の民の盟友になれて、この里にお兄ちゃんの居場所ができて――。
なのに、お兄ちゃんが、里を出ると言ってきました。
嘘、どうして。
もうその必要はないんじゃないの？
私は頭の中が真っ白になりました。
大好きなお兄ちゃんが何かを言っているけど、その言葉は耳に入ってきません。

嫌。

「……や」

嫌。

やだ。

「……やだ！　絶対に嫌！」

気がつけば大声を出して、そう言ってしまいました。

「ラティーファ……」

困った顔をするお兄ちゃんを逃がさないように、私は必死に抱き付きます。

嫌だ。

やだよ。

私、捨てられちゃうの？

いらない子なの？

「どうして行っちゃうの！？　人間族の場所に戻るの？　せっかくお姉ちゃん達とも仲良くなったんだよ？　ずっとこの里にいればいいじゃない！」

頭の中に湧き出てきた言葉を、私は矢継ぎ早に紡ぎました。

「そうしたいのは山々なんだけどな。俺は外で色々とやらなきゃいけないことがある」

やらなきゃいけないこと？

何？
私は知らない。
知らないよ。
頭の中でそれがどんな用事なのかを必死に考えます。
けど、それが何なのか、私にはまったくわかりません。
どうして？

「どうして……、私を置いて行っちゃうようなことなの……？」

それを口にした瞬間、本当に今更ながら、私はあることに気がつきました。
私は、お兄ちゃんのことを何も知らないんだと。
そう、この時、初めて、私は自分の気持ちを伝えるばかりで、お兄ちゃんの気持ちを聞くことをまったくしてこなかったことに、気がつきました。
だから、私がお兄ちゃんの用事のことを知らないのも当たり前でした……。

「そういえばラティーファには俺が東に向かう理由を教えていなかったな」

私が自己嫌悪に陥っている中で、お兄ちゃんはその事情を私に教えてくれました。
どうやらお兄ちゃんには両親がいたけど、すでに亡くなっていて、その両親のお墓を故郷の地に作ってあげたいみたいです。
聞けばすぐに教えてくれそうなことを、どうして私は今まで聞かなかったんだろう。
答えは簡単です。
お兄ちゃんが消えるのが怖くて、私はその話題から逃げていたんです。

はは……。
今も目の前にいるのに、お兄ちゃんが急にどこか遠くに行ってしまったように、私は感じていました。
「それに……なに？」
お兄ちゃんが何かを言いかけて、言いよどんだので、私はおそるおそる聞きました。
「いや、なんでもない」
と、お兄ちゃんは薄く笑って言いました。
本当になんでもないんでしょうか。
聞きたい。
けど、今更、私がそんなことを聞き出していいんでしょうか。
今までこの話題から逃げていた私が、いざお兄ちゃんがいなくなることを知った瞬間に、それを知りたがるなんて。
それは……少し、都合が良すぎやしないでしょうか。

今までの私ならここで即座にお兄ちゃんに事情を聞き出していたんでしょう。
でも、ふとしたことで、今までの自分を振り返ることができたおかげで、現在、私の中で急激に罪悪感が湧き上がっていました。
盲目的にお兄ちゃんに依存して、本当のお兄ちゃんと向き合わないで、お兄ちゃんの優しさに甘えてしまう。
ああ、それはとても甘美な誘惑です。
今まで私が浸かってきたぬるま湯なんだから、当たり前です
でも、いい加減、私はお兄ちゃんときちんと正面から向き合わないといけないんじゃないでしょうか。
じゃないと、自分の都合の良いように優しいお兄ちゃんを利用し

ている気がして、お兄ちゃんから話を聞くなんて図々しい真似はできない。
私はお兄ちゃんのことが大好きだから、それは嫌だ。
そう、思ってしまったんです。

「……私、お兄ちゃんのことを何も知らなかったんだね」

私にはお兄ちゃんに言っていない秘密があります。
それを言わないと、私はお兄ちゃんと向き合ったことにはならないのでしょう。
でも、私は臆病者です。
人の害意に触れるのが怖くて、人の目ばかりを窺ってしまいます。
そんな私にとって、優しいお兄ちゃんは拠り所なんです。
そのお兄ちゃんにですら、伝えるのを憚(はばか)っていた事実。
一歩を踏み出すのが怖い。
けど、それを、今、言おう。
その勇気をくれたのは、今私の目の前にいる人です。

「あのね、私からもお兄ちゃんに伝えたいことがあります。いきなり……何を言っているのかって思うかもしれないし、お兄ちゃんは信じてくれるかわからないけど……」

だから、言おう。
本当の私のことを。

「あのね、お兄ちゃんは前世って信じられる？」

どんな答えが返ってきても、私はそれを受け入れてみせる。
そう、思って、私はお兄ちゃんに自分が生まれ変わる前のことを話すことを決めました。

「私はね、一度は死んでいて。もともとは人間で。それで生まれ変わって今の私になって……。えっと、なんて言ったら信じてもらえるのかわからないんだけど……」

けど、思い当たりばったりでそんなことを言い出したせいか、私はそんな荒唐無稽な話をどうやって説明したらいいのかわからなくなってしまいました。

混乱する頭の中で必死に言葉を発しようとすると――。

「……知っているよ」

なぜか、まったく予想外の言葉がお兄ちゃんから発せられました。

「……え？」

その言葉を理解するのに、私は時間を要しました。

「ラティーファはもともと日本で暮らしていたんだろ？」

だというのに、お兄ちゃんは平然と話を進めていきます。

「ど、どうして……」

気が動転している中で、かろうじて、その疑問を口にしました。

「それは俺も日本人だったからだよ」

その言葉は、驚愕とともに、とても懐かしい響きを、私の耳に届けました。

「日本……語……、日本……人……、お兄ちゃんは日本人？」

お兄ちゃんが日本人。

そういうこと……だよね。

「そうだ。元、だけどな」

つまり、私と同じで生まれ変わったということ。

お兄ちゃんは私と同じで元日本人……。

「知っていて、知っていて、黙っていた……の？」

思考停止寸前の頭の中に浮かんだ疑問を、呆然と、私は尋ねました。

そんな私の質問に、お兄ちゃんは私が生まれ変わったと気づいた理由をゆっくりと語ってくれます。

でも、教えてくれてもよかったんじゃないでしょうか。

どうして教えてくれなかったのでしょうか。

「ど、どうして！　どうして言ってくれなかったの！？」

思わず、私は怒りそうになってしまいました。

いえ、怒ってしまいました。

お兄ちゃんに対して、初めて、私は怒りという感情を抱いたのです。

「どうして、か。どうして生まれ変わったのか。どうして記憶を取り戻したのか。俺も考えたことはある。考える時間ならたくさんあったからな。けどな、前世の記憶があるからってそれがどうしたっ

ていうんだ？　俺達はもうこの世界の住人になってしまったんだ。仮に戻れたとしても、もう俺達の居場所は元の世界にはない」

けど、そんな私に、どこか突き放すように、いつもの落ち着いた口調で、お兄ちゃんはその理由を説明してくれます。

お兄ちゃんの「もう俺達の居場所は元の世界にはない」という、その言葉が私の心にひどく響きました。

仮に今の私が地球に戻れたとしても、お父さんにとっても、お母さんにとっても、お兄さんにとっても、友達みんなにとっても、私は見知らぬ他人なんです。

今の私はラティーファであって遠藤涼音でもあるけど、遠藤涼音という存在ではありません。

地球にいる遠藤涼音という人物は既に死んでいる人間なのです。

そんなことは……最初から私にもわかっていました。

けど、おそらくお兄ちゃんと出会った当時に、お兄ちゃんが元日本人だと教えられていたら、人格崩壊寸前だった私は、二度と引き返せないくらいに、お兄ちゃんに依存していた自信があります。

私が地球に対して抱いていた未練のすべてをお兄ちゃんに凝縮してぶつけて、私は壊れたまま朽ちていったことでしょう。

でも、お兄ちゃんのことも元日本人の生まれ変わった人間だと気づくことのできるヒントを、お兄ちゃんは私にたくさん用意してくれていました。

お兄ちゃんは私が立ち直るのを、私から前世について語るのを、待っていたんです。

それに気づかなかったのは、私がお兄ちゃんに依存しすぎて、視野が狭くなっていたからです。

結局、今の今まで視野は狭いままだったけど、私の心は壊れかけていたあの頃のものじゃない。

たしかにお兄ちゃんが同郷であることにショックを受けたが、少

なくともそれを理由に今後もお兄ちゃんに依存しようとは思わない。
もう、今の私にとって、お兄ちゃんは、お兄ちゃんだから。
後は私がこのままお兄ちゃんに依存し続けるかどうかを選ぶだけだ。
もし依存し続ける道を選べば、ここでお兄ちゃんと別れた後、私の心は再び壊れてしまうだろう。
そんな未来が私の頭の中に浮かびました。

は、はは……。
すごいな、お兄ちゃんは。
お兄ちゃんに対して怒りを抱いた自分が馬鹿みたいです。
たしかにそれでも言ってほしかったという気持ちもあります。
それに、仮に壊れたままお兄ちゃんに依存し続ける未来を選んでも、お兄ちゃんならそんな私でも受け入れてくれると思います。
でも、壊れた私の心が治るのをずっと待っていてくれていたんだと思うと、私が抱いた怒りなんてとうに消え去っていました。

けど、ずるいな。
今、お兄ちゃんは、自分のことを、自分勝手だとか、独善的だとか、偽善者だとか、そんな風に言って、わざと私がお兄ちゃんのことを嫌いになるように仕向けています。
もし優しい言葉を言われたら私がお兄ちゃんに依存し続けて堕落してしまうから、私を突き放そうとしているんです。
お兄ちゃんは私に自立してほしいと思っているんです。
そんなお兄ちゃんの気持ちに気づけたら、もう私は自立せざるを得ないじゃないですか。
寂しくても、お兄ちゃんから離れても大丈夫だって姿を、見せたくなってしまうじゃないですか。

言わないで。
私が貴方のことを嫌いになるようなことをわざと言わないでください
そんなこと、言わなくてもいいんです。
本当のお兄ちゃんの優しさに気づけて、私はもう自立できるから、少し危なかったけど、私はそれに気づくことができたから。
私はそのことに最初から気づけたじゃないか。
ただ、私が臆病だからそう思わなかっただけだ。

私はお兄ちゃんのことを、優しい、優しい、って漠然と思っていたけど――。
お兄ちゃんは本当に優しい人だって。
上辺だけじゃなく、私のことを気遣う様に、そっと私の心に触れてくれる人だって。
私が勇気を出せばいつでも気づけたんです。

なのに、人間の心の汚さに怯えて疑心暗鬼になって。
首輪のせいとはいえ散々この手で人を殺してきて。
お兄ちゃんすら殺そうとして。
我が身可愛さに自分のことしか考えていないのに。
そんな薄汚れた私に――。
手を差し伸べてくれたのは、この人だ。

今、私は、依存ではなく、自らの生涯を、この人のために捧げようと思いました。
だから、この気持ちを伝えよう。
私が何を思って、何を考えて、貴方が私に何を与えてくれたのか、を。
そして、伝えよう。

「やっぱり貴方のことをお兄ちゃんって呼んでも、いいですか？」

私を貴方の妹でいさせてください、と。

「……ああ、俺が精霊の民の里を離れてもラティーファは俺の妹だ」

そんなお兄ちゃんの返答は私の思った通りで――。

本当に――。

ありがとうございます。

「お兄ちゃん！」

閑話　ラティーファの軌跡　その六

精霊祭の翌日。
この日は、ラティーファとしての私、遠藤涼音としての私、そのどちらにとっても大きな意味を持つ日になりました。
私はこれから先ずっとこの日を大切にし続けることでしょう。
今から順を追ってその理由を語ります。

まず、お兄ちゃんの旅立ちを見送ることを決意し、私はもうお兄ちゃんに依存しないことを決めました。
けど、妹として甘えるのは話が別です。
だって、お兄ちゃんは私を妹だって認めてくれたんですから。
それくらいは妹の特権のはずです。
というわけで、妹としての我儘権を行使し、私はお兄ちゃんの前世について尋ねてみました。
そうすればもっとお兄ちゃんを好きになれる。
そして、お兄ちゃんがいない間も、お兄ちゃんのことをすぐ傍に感じていられる。
そう思ったんです。

すると、お兄ちゃんは私に前世の話を教えてくれ、幼少期から大学生になるまでの色々な話を聞きました。
そんなお兄ちゃんの前世にはキーパーソンになる一人の人物がいます。
お兄ちゃんの幼馴染である少女です。
その人がお兄ちゃんにとってどれだけ大きい存在か、私は嫌というほどに実感させられました。

正直、私はその人のことが羨ましくて仕方がありません。
だって、間違いなく、今も、お兄ちゃんはその人のことを想っているんです。
前世と今世、両方合わせれば少なくとも二十年以上も、お兄ちゃんの心の中にはその人がずっと存在し続けているんです。
同じ人物のことを二十年以上も片想いし続ける。
お兄ちゃんはとても一途な人間だと思います。

その人との幼少期の思い出を大切にして――。
何年も、何十年も、ずっと会えなかったのに――。
もう会えるかどうかもわからないのに――。
それでも、ずっと、ずっと、今でも、その人のことを想い続けているんです。
そんなお兄ちゃんの気持ちを、恋とか、憧れとか、未練とか、そういった言葉で言い表すことはできないように思いました。

そのことを知って、私はお兄ちゃんを振り向かせることができるんでしょうか。
それでもお兄ちゃんを振り向かせようと、思えるんでしょうか。
少し、自分の気持ちと見つめ合ってみる必要があると、私は考えました。
まず、私の初恋は間違いなく前世にバスの中で私を助けてくれたお兄さんです。
でも、今の私にとっては、あのお兄さんよりも、お兄ちゃんの方が大事な存在です。
私はお兄ちゃんに自らの生涯を捧げると決めたんです。
それくらいにお兄ちゃんに対する私の想いは強いんです。

ところで、初恋のお兄さんに対する私の気持ちは憧れから来るものです。

その一方で、私にとって、お兄ちゃんは、憧れの対象なんかじゃなくて、そこに存在するだけで、たったそれだけで、安心感を与えてくれる人です。
そんな私の想いならば、お兄ちゃんを振り向かせる資格として十分でしょうか。
それとも諦めなければいけないのかな。
それで私は諦められるの？

……嫌だ。
そんなのは嫌です。
この想いが報われなくたっていいです。
お兄ちゃんが他の人のことを好きになっても、嫌だけどかまいません。
でも、それでも、できることならば――。
私はお兄ちゃんが許してくれる限り、ずっと傍にいたいです。
それで、きっと、いつか、私はお兄ちゃんを振り向かせてみせたい。
お兄ちゃんが旅をしている間は離ればなれになるけど、心は常にお兄ちゃんと一緒にあるんだって、今なら言えます。
だから、お兄ちゃんがいつでも帰って来られる場所であろうと、私は思うんです。

でも、この話にはまだ続きがあって――。
それを奇跡と言えばいいんでしょうか。
それとも、それを運命と言えばいいんでしょうか。

「その、お兄ちゃんはどうして死んじゃったの？」

きっかけは私が投げかけた、ちょっと聞きにくい、そんな質問でした。

「大学から家に帰る間に乗っていたバスに事故が起きたみたいだ。一瞬で意識を失って、気がついたらこの世界で孤児として生きていたよ」

すると、まるでそんな過去がとるに足らない出来事だったと言わんばかりに、お兄ちゃんは僅かに苦笑を浮かべて言いました。

他方で、私は少しだけ呆気にとられていました。

「えっと、私も乗っていたバスが交通事故を起こして死んじゃったみたいなんだ、よね」

そう、私もお兄ちゃんと同じで乗っていたバスが事故を起こして死んだのです。

それにお兄ちゃんは私と同じで前世は東京に住んでいました。

も、もしかして――。

その時、ドクン、と、私の鼓動が高鳴りました。

「そうなのか？　そういえばラティーファも東京に住んでいたと言っていたな……」

どうやらお兄ちゃんも不思議に思ったみたいです。

逸(はや)るような口調で、私は、自分が住んでいた地名と乗っていたバスの情報を、詳細にお兄ちゃんに教えます。

「……たぶん同じバスに乗っていたんだろうな。だとしたらあの子は……」

すると、私とお兄ちゃんが同じバスに乗っていて、同じ事故で死んだ可能性が非常に高いということがわかりました。

何やらブツブツとお兄ちゃんは呟いていますが、今の私はそんな言葉は耳に入ってきません。
だって、前世で、私達は同じバスに乗っていたということは――。
あの時、私が乗っていたバスに男の人は運転手さん以外に一人しかいなくて――。
でも、お兄ちゃんは大学生だから――。
それはつまり――。

ど、どうしたらいいんでしょうか。
それを理解した時、私の頭の中は真っ白になってしまいました。
さっき自分の中で考えをまとめて答えを導き出したばかりなのに、お兄ちゃんが私の初恋のお兄さんだったなんて、そんなことを知ってしまったら――。
急に胸がドキドキし始めました。

お兄ちゃんのことを想うと胸が安らぐのは間違いありません。
けど、同時に、お兄ちゃんのことを想うと、すごく恥ずかしくて、顔が真っ赤になってしまいそうです。
今はとてもお兄ちゃんの顔を正面から見ることなんてできそうにありません。
お兄ちゃんに私を一人の女として見てもらいたいという気持ちが、急速に強まっているのがわかります。
この気持ちの正体は何なんでしょうか。

お兄ちゃんがお兄さんだとわかるまでは、そんな承認欲求は抑えられたのに、この想いが報われなくても、お兄ちゃんに尽くそうと思っていたのに――。
今は、胸の鼓動を抑えきれなくて、お兄ちゃんのことを強く焦がれています。
先ほどまで私の中で占めていたお兄ちゃんに対する感情の大半が

愛情だというのなら、今は恋愛感情という感情も同じくらいに強くなっています。
私は本当に単純で現金な人間です。
お兄ちゃんに対する想いとお兄さんに対する想い。
その二つが混ざり合って、私はそれまで以上にお兄ちゃんのことを好きになってしまったのです。

それはお兄さんが転生して生きていると知ってしまったから？
それともお兄ちゃんがあのお兄さんだったから？
仮にあのお兄さんがお兄ちゃん以外の人として転生していて、今後ほかの場所で、そのお兄さんが現れたとしたら、私はその人のことをどんな風に想うのでしょうか。
そんなことを考えたけど、すぐのそんな仮定の話は無意味だと気がつきました。
だって、そんなことを考えなくても、お兄さんはお兄ちゃんとして、私のことを助けてくれました。
深く考える必要なんてないんです。
結局、私を助けてくれたお兄ちゃんはあのお兄さんで、私が好きになったお兄ちゃんもあのお兄さんなのですから。

つまり、私は同じ人を二回も好きになったということです。
一人に対して二人分の気持ちを抱くことができる人なんてまずいません。
それは、とっても贅沢で、とっても幸せなことだって、思うんです。
姿形は違うけど、二人は同一の存在で――。
お互いに生まれ変わっても、お兄ちゃんの容姿が変わっていても、私はお兄ちゃんのことを好きになる運命だったのでしょう。
私がお兄ちゃんのことを好きになるのは必然だったんです。
だから、そこに野暮な仮定の話を入れるなんて無意味なことです。

「あのね、お兄ちゃん……」

私はお兄ちゃんに伝えることにしました。

私が前世でもお兄ちゃんに助けてもらったことがあることを。

そのことを伝えると、お兄ちゃんは優しく微笑んでくれて、私の頭を撫でてくれました。

ちなみに、私がお兄ちゃんのことを愛していることは、伝えるまでもなくわかっているだろうから、言いません。

そして、私がお兄ちゃんに恋をしていることも話しません。

今はまだまだ私なんかじゃお兄ちゃんに釣り合わないんです。

だから、お兄ちゃんが振り向いてくれるように、今は精いっぱい努力し続けなければいけない時です。

そうして、いつか、お兄ちゃんを振り向かせて見せよう。

そう、思いました。

そんなわけで、なにはともあれ、精霊祭の翌日、この日が私にとってどれだけ大切な日になったかは、これまでの話でわかっていただけたかと思います。

その後も、たくさんお話をして、お家に帰ると、アースラさんに何があったのかを軽く伝えました。

すると、アースラさんはすごく感謝したようで、お兄ちゃんを拝むように礼を告げました。

この時、その理由を私はいまいち把握しかねていました。

たしかにアースラさんは私を実の孫のように可愛がってくれます。

ですが、その時のアースラさんの様子は、それだけじゃ理由が説明できないくらいに、強く温かい感情を見せていたんです。

そして、それから何日かが経過して、私はその理由を知るに至りました。
なんと、アースラさんは私のお母さんのお婆ちゃんだったのです。
つまり、私にとっては曾お婆ちゃんということになります。
その話を聞いて、お母さん以外にもちゃんと肉親がいたんだと、私のことを心から心配してくれる人がいるんだと気づけて、私はとても嬉しくなって、思わず泣いてしまいました。
それから私はアースラさんのことをアースラお婆ちゃんと呼ぶことにしました。

お兄ちゃん、アースラお婆ちゃん、お姉ちゃん達、それに友達のみんな。
私の周りには私のことを想ってくれる人がたくさんいます。
そんな人達に囲まれて過ごす日々はとても楽しくて、あっという間に過ぎ去っていきました。

お兄ちゃん、お姉ちゃん達、それに私の友達みんなと一緒にピクニックに行ったり。
精霊の民の戦士のみんなと一緒にお兄ちゃんから武術を習ったり。
お兄ちゃんの料理教室に来る人達が増えすぎて授業の回数が増えたり。
何やらアルスラン君がお兄ちゃんにライバル宣言をしたり。
私とお兄ちゃんにとって二回目の精霊祭があったり。
その後の宴会で去年と同じように酔いつぶれたり。
その次の日には一日中お兄ちゃんに甘えたり。
本当にいろんなことがあって――。
そして、遂に、お兄ちゃんが里を出る日がやってきました。

私は寂しかったけど。
それでも、きちんと笑顔で見送ることができました。

行ってらっしゃい、って。
ちなみに、里を出るにあたって、お兄ちゃんは精霊の民の里の長老様達から色々と援助をしてもらっていたようです。
なにやら、すごい霊具をもらったり、すごい武具をもらったり、すごい量の薬や食料をもらったり、ずいぶんと盛りだくさんだったようで、お兄ちゃんはかなり恐縮していました。

里を出発する時も多くの精霊の民の人達がお兄ちゃんを見送りに来ました。
この里に来たばかりの頃は色々と誤解されていたけど、今ではお兄ちゃんもこの里の立派な一員なんだと、そう実感させてくれる光景でした。
だから、お兄ちゃん。
いつでもここに帰って来てください。
私は、ううん、私だけじゃなく、みんなが、ここでお兄ちゃんの帰りを待っていますから。
行ってらっしゃい。

「行っちゃった……」

飛び去っていくお兄ちゃんの姿が見えなくなると、私は呆然と呟きました。
心の覚悟はできていても、寂しくないというわけじゃありません。
お兄ちゃんはどれくらいしたら帰って来るんだろうか。
今からもうお兄ちゃんが帰って来たことを考えてしまって、思わず私の目から涙が出てしまいました。

「盟友としての援助とは別に、儂個人からリオ殿に贈り物を渡しておいた。リオ殿とラティーファのためにな」

そんな私に、隣にいたアースラお婆ちゃんが優しく語りかけてきました。

「お兄ちゃんと私のため？」

アースラお婆ちゃんを見上げて私が尋ねます。

いったい何でしょうか。

「転移結晶という霊具じゃ。それを使えば帰りはこの里に一瞬で戻ってくることができるというすごい品なんじゃぞ」

なんと、アースラお婆ちゃんは、お兄ちゃんに、一瞬で空間を繋げる霊具を渡していたようです。

すごい！

それなら毎日それを使ってここに帰って来れるんじゃないでしょうか。

そんなことを思って尋ねてみると、どうやらそんなに都合の良い道具ではないみたいでした。

それを使うにはまず帰還地点となる原点座標を決めなければなりません。

原点座標を決めた後は、転移結晶を使えば、所持者がいる現在座標から原点座標へと空間を繋げることができるんだとか。

ですが、その逆はできません。

一度原点座標に帰って来て、扉が閉まってしまったら、元の場所に戻るにはまた普通に移動して行かなければならないそうです。

それに、移動する距離によっては、転移結晶の中に内包されているオドが大量に消費されてしまうみたいです。

それでも、オドを補充すれば何度も使えるし、すごい道具であることに変わりはありません。

どうやらすごく貴重な霊具みたいで、そんなに大量に生産できる品ではないみたいです。
お兄ちゃんに渡した転移結晶の原点座標はこの里に設定してあるんだそうです。
これで帰り道分の時間だけお兄ちゃんと早く会えることになります。
ありがとう、アースラお婆ちゃん。

再び、私は再びお兄ちゃんが消えていった空を見上げました。
次に会える時までに成長した私を見てもらおう。
そう、決意して。

第３０話　両親の足跡

リオが精霊の民の里を出てから既に半年以上が経過した。
風の精霊術で空を飛ぶことができるようになり、リオの移動速度は段違いで上昇し、精霊の民の里を出て僅か一週間ほどでヤグモへと到着することとなる。

ヤグモとはユーフィリア大陸東側地方の総称であり、そこには大小様々な国が三十以上も存在している。
ヤグモ地方にはベルトラムやガルアークが存在するシュトラール地方のように冒険者ギルドや商人ギルドといった組織が存在せず、使用されている貨幣もシュトラール地方のものとは異なる。
また、ヤグモ地方ではシュトラール地方で使用されている人間族の言葉とは異なる言語が用いられている。
だが、長い年月を暮らしている精霊の民の最長老であるアースラはヤグモの言語にも通じており、日常会話ができる程度にはアースラから言葉を習っていた。
今では発音はぎこちないものの、日常会話に支障がない程度には言葉を習得してある。

リオは、ヤグモの各国家を西側からしらみ潰しにあたって、現地の住民達に両親の名を聞き、知り合いがいないか探していた。
だが、両親の名前とヤグモという地方名以外に両親の出身を知る手がかりがなく、捜索は難航しているというのが現状である。
ヤグモ地方には大小三十近い国家が存在しているのだ。
それだけの国々の中から二人の人物を探し出すのは、砂漠の中で針を探すのに等しい作業とまでは言えなくとも、相当に困難であることは間違いない。

リオが一つの国家に滞在する時間はおよそ一月から二月程度であり、既に四つの国を巡っていた。
ヤグモを構成する各国家には、それぞれ一つの巨大な都市と、その周辺に衛星のように広がる街や村があるのが特徴である。

今、リオは、カラスキと呼ばれる国家の都市に向かっており、その近辺に位置する少し大きな村にやって来たところである。
聞いた話によればカラスキは今までにリオが巡って来た都市と比べて段違いに人口が多いという。
両親の情報が手に入る可能性も他の都市より高いかもしれない。
すべての人間に聞いて回ることはできなくとも、今回は少し長めに滞在してみるのもいいかもしれないと、リオは考えていた。

だが、その前に今は眼前の村で情報を収集しなければならない。
立ち並ぶ家屋の数からして人口は三百人程度といったところか。
村を囲むように柵が展開しており、集落の中心部には木材、石灰、粘土等によって作られた少しばかり粗末な家屋が立ち並んでいる。
そして居住地域を取り囲むように田園、放牧地、家畜小屋が散在しており、リオの視界に耕作地と放牧地でちらほらと人が作業しているのが映った。
どこにでもあるような素朴な村の光景である。
村の入口へとリオが足を運ぶ。
見張りの人員は配置されておらず自由に出入りができるが、部外者がやって来たことに気づいた人間達が遠巻きにリオのことを見つめている。
思わず足を踏み入れることを躊躇してしまいそうな雰囲気だが、このまま立ち去るわけにもいかない。
手早く用件を済ませようとリオは村の中へと足を踏み入れた。
村の中心部を見渡し、村長宅と思しき一際大きめな家を発見すると、真っ直ぐとそちらへ歩き出す。

「えっと、お客さんかな？　見たところ商人ってわけじゃなさそうですけど、武士様でもお侍様でもない……ですよね？　浪人さん……か、旅人さんですか？」

すると、リオと同年代と思われる少女が不思議そうな顔をしてリオに声をかけてきた。

珍しい。

リオはそう思った。

大抵はこちらから話しかけない限り村人の方から話しかけてくることはないものだ。

話しかけたとしてもどこか余所余所しい態度をとられるのが普通である。

少女は、服装は質素で、農作業等をしているせいか多少は肌荒れもしているようだが、短髪が良く似合い、愛らしい顔立ちと人懐っこさを感じさせる子だった。

ちなみに、武士とはベルトラム王国やガルアーク王国でいうところの騎士と同じ役職だ。侍は武士の下に就く一般の兵士よりは高位の身分にある者をいう。浪人は冒険者のようなものである。

武装はしているが、リオの見た目はこの国の標準的な武士や侍の恰好からはかけ離れていた。

というよりもこの国の武装スタイルからおよそかけ離れたものになっている。

少女はリオがどこか異国の地からやって来た旅人かとあたりをつけた。

「はい、まぁそんなものです。実は人探しをしていまして。この村の村長とお会いしたいのですが、あちらが村長宅でよろしいでしょうか？」

「あ、は、はい！　そうですけど……」

荒事になれた浪人や旅人とは思えぬリオの丁寧な物腰に、少女が畏まったように返事をする。

「それはよかった。村長は御在宅でしょうか？」

「えっと、はい。おります、です？」

改まった言葉づかいを苦手とするのか、首を傾け、疑問形で少女が言った。

「よろしければ案内していただいてもよろしいでしょうか？　いきなり訪ねるとあまり良い顔をしない方もいらっしゃるものでして」

と、どこか困った風にリオは言った。

いくら村の渉外役を務める村長とはいえ、完全な部外者にいきなり訪問されれば、不審がるというのはこの旅の中で幾度も経験済みである。

面談をスムーズに行うためにも彼女の存在はリオにとって好都合であった。

「あ、はい！　じゃあ、えっと、付いて来てください」

すると少女は特に嫌がる顔もせずリオの頼みを承諾してくれた。

そのまま少女に案内されて、リオは村長の家まで歩いていく。

少女はどこか緊張しているのか、黙ったままだが、道すがら何度も興味深そうな視線をリオに向けてきた。

行商人以外で外から来る人間が珍しいのだろうかとリオが思っていると、ちょうど村長宅へとたどり着いた。

「お婆ちゃん！　お客さんだよ～！　何か人探しをしているんだって～」

村長宅の中に入ると、少女が大きな声を出して村長を呼んだ。
建物に入ってすぐの位置には広間があり、中央に暖をとる囲炉裏が設置されている。

「そんなに大きな声を出さずとも聞こえておるわ。客だと、行商人じゃなくてか？　……おや、あんたは……見かけない顔だね」

そこに一人の老人が姿を現し、リオの姿を目にすると、怪訝そうな表情を浮かべて言った。

「どうもはじめまして。自分はリオと申します。以後、お見知りおきを」

リオは慣れた様に礼儀正しく挨拶をした。

「リオ……。昔の王様にそんなような名前の人がいたっけね。っと、私はユバだ。以後見知りおくかどうかはさておき、こんな何もない村にどんな御用で？」

と、慇懃だが、ユバと名乗った老人はどこか訝しそうな物言いをした。
やはり不審に思われているなと内心で苦笑しつつも、速やかに用件を済ませてしまうためにリオはお決まりの質問を聞くことにした。

「では、早速ですがお尋ねしたいことがあります。ゼンという男とアヤメという女性に心当たりはないでしょうか？　少なくとも十五年以上前にヤグモのどこかで暮らしていたはずなのですが」

と、目当ての人物達の名前を口にする。
ゼンとアヤメ。
リオの父と母の名前である。
これまでに同じ質問を何度聞いてきたことだろうか。
かつてこの質問を口にして芳しい答えが返って来たことはない。
今回もおそらく似たような返答が帰って来るのだろうと思いつつも、心のどこかで期待せずにはいられない。
もし駄目ならばすぐにこの村から立ち去ることになるだろう。
だが、今回ばかりはその期待がリオを裏切ることはなかった。

「……ゼン？　ゼンだって？　それにアヤメ様だと……」

目の前にいるユバの反応はこれまでリオが目にしてきたものとは異なるものであった。
この老人は明らかに何かを知っている。
そう思わせる反応だった。

「ご存知なのですか！？」

普段はあまり動揺しないリオも、思わず語調を強めて尋ねる。

「……あんた、何者だい？」

ユバはどこか見定めるような視線をリオに向けてきた。

「……自分は二人の息子です」

真実を告げるか少し悩んだものの、質問をしている以上、こちらから情報を開示するのが筋だろう。

そう考えてリオは質問に答える。

「息子……。あんたが……」

どこか呆けたような表情を浮かべると、ユバは何かを確かめるようにリオの全身をジロジロと眺めた。

「……ルリ、あんたはあっちに行ってな」

すると、傍で興味深そうに公然と聞き耳を立てていたルリと呼ばれた少女に、人払いを言づけた。

「ええ～。なんでさ？」

と、ルリはどこか不満そうに頬を膨らませて言った。

「いいから。私はこの子と大事な話がある。今ここでした話を村の連中に話すんじゃないよ」

「え～？　わかったけど……。ちぇ。ちょっと面白そうな感じなのに」

ブツブツと文句を言いながら、ルリが家の外へと出て行く。

「で、あんた、リオと言ったね。あんたがさっき言ったことは本当かい？」

ルリが出て行ったのを確認し、ユバが鋭い視線をリオに向けてきた。

「さっき言ったことというと自分がゼンとアヤメの息子ということ

ですか？」
「ああ」
と、真剣な面持ちで、ユバは短く答えた。
「はい。と、言っても証明できるものはありませんが。父の記憶はありませんので、せいぜい母の特徴や生前に母から聞いた話を語れるくらいでしょうか」
「悪いがそれを教えてくれるかい？　私はあんたが本当にあの二人の息子か測りかねていてね」
ユバの視線にどこか疑うような節の感情が混ざっていることにリオは気づいていた。
「なるほど。確かに仰る通りですね。では自分の知る範囲のことで語らせていただきます」
そう言って、リオは母の特徴と父との思い出話を語り始めた。
その話をユバは黙って聞いていく。
話の途中から、ユバはどこか懐かしそうな表情を浮かべ、じっとリオの顔を見つめていた。
「……疑って悪かったね。あんたがあの二人の息子だと信じさせてもらうよ」
ある程度語ったところで、納得したような表情を浮かべ、ユバからリオがゼンとアヤメの息子であることを認める発言が出てきた。
「いえ、二十年近く前に立ち去った人物の子供だと名乗る者が目の前に現れても、すんなりと信じることはできないでしょうから」

リオがユバの考えに同意するように小さく頷く。

「そう言ってもらえると助かるよ。あんたはアヤメ様の面影があるからね。半ば信じかけてはいたんだけど確信が欲しかった。それで、ゼンは、アヤメ様は、どうしてるんだい？」

と、僅かに加速した口調でユバは尋ねた。

二人がどうしているのか気になって仕方がないという感じだ。

この人物がゼンとアヤメの知人であり、二人のことを気にかけている以上、彼らが既に死んでいるという情報を伝えないわけにもいかないだろう。

「父は自分が赤ん坊の折りに他界しました。それに母も私が幼少の頃に……」

と、質問に答えながらも、好奇心を隠さない風のユバについて、リオは彼女が両親とどのような関係にある人物なのかを考えていた。

「……そうか。あの子は逝ったのかい。ったく……」

どこか寂しそうな表情をユバは覗かせる。

「その……、父と貴方の関係をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

と、リオはユバに質問を投げかけた。

「私はあの子の母親さ」

返ってきたのは予想していた答えの一つだったからか、不思議と

驚きはなかった。

「そう、でしたか……。そうなると貴方は私の祖母ということになりますよね？」

両親以外の肉親に初めて出会えたことに、どこか気恥ずかしさを覚え、苦笑しながら、リオが言う。

「ああ。そうなるね。なんとも不思議な感覚だよ。だが、よく生きていてくれた。今まで大変だったろうに」

先ほどまでの緊張がとれたような優しい顔つきで、ユバがリオを見つめた。

「まぁ、それなりに大変ではありました。ですが、今こうして生きていますから」

ユバの視線を受け止め、リオが曖昧に微笑む。

その表情から、ユバは今までリオがどのように生きてきたのか、その境遇と、それに対するリオの感情を、読み取ることはできなかった。

「そうか……。それで、あの二人はちゃんと西の果てにたどり着けたのかい？」

西の果て、というのはおそらくシュトラール地方のことだろう。

「ええ。そこにある国で自分は生まれましたから」

「そうか。それは良かった。あんたという息子を産めたのなら二人も幸せだったろうね」

「それは……、はい。そうだと思います」

父は仕事の最中に死に、母は強姦の末に殺された、という過去の出来事が一瞬だけ頭の中に過ぎり、リオが言いよどむ。

「……そうか。それは、良かったよ。……それで、あんたは西の果てからわざわざここまでやって来たってことだよね？　どうしてまたそんな大変な思いをして？」

ユバは長年の経験で僅かなリオの表情の変化に気づいたが、特に深く聞くことはせず、リオが遠い異邦の地からこの場所までやって来た理由を尋ねた。

「はい、両親の墓をこの地で作ってあげたいと思っていまして……」

遺品も何もないが、あんな出来事があった地よりは二人の故郷に墓を作ってあげた方が喜ぶだろうと、リオは考えている。

「……実はね、あの二人の墓はもう作ってあるんだよ」

すると、ユバがリオの予想していなかった言葉を口にした。

「墓が……作られてある？」

どういうことだ、とリオは考える。

生きている人間の墓を生前から作ることもありえないわけではない。

だが、墓というのはその地で眠ることを前提に作られるものであるはずだ。

年単位で移動に時間をかけて、危険な道のりを進み、大陸の反対側まで移動したリオの両親であるゼンとアヤメ。
シュトラール地方とヤグモ地方は同じ大陸にはあるが、お互いに地方名以外はほとんど何も知らないような異邦の地だ。
そんな場所へ向かった二人は再びこの地に戻ってくるつもりだったのだろうか。
少なくともリオの知る限りで母がヤグモへ戻るそぶりを見せたことはない。

そもそもどうしてゼンとアヤメはこの地を離れなければならなかったのか、それを知ることができれば推測できることもたくさんあるのではないか。
考えてみても答えが出ることはないが、生き証人に尋ねることはできる。
リオは頭の中に沸いた疑問をユバに尋ねるべく開口した。

「父と母はどうしてヤグモから立ち去ったのでしょうか？」
「あんたは何も聞いていないのかい……」

と、何かを悩むような表情を浮かべて、ユバが呟いた。
その様子から彼女ならその理由を知っているのだろうと考え、リオが事情の説明を求めようとしたところで、徐にユバが口を開いた。

「……悪いが私の口から事実を告げることはできないんだ」

非常に申し訳なさそうな表情を浮かべ、ユバは謝ってきた。

「今の私にかろうじて言えることは、あの二人が重罪人であるということ、この国では死んだ者として扱われていること、そしてこの村の外れに小さな墓が建てられているということだけさ」

そして、追加するように三つの情報をリオに開示した。

「重罪人……ですか」

僅かに困惑した声色でリオが言った。

いったい二人に何があったというのだろうか。

気にはなったが、無理やりユバから聞き出すわけにもいかないし、ユバの態度からどれだけ頼み込んでも話してくれそうな感じではない。

今は諦めるしかないだろう。

「とりあえずゼンとアヤメ様の墓まで私が案内しよう。二人を供養してやってくれるかい？」

リオが押し黙っていると、ユバがそんなことを言ってきた。

「ありがとうございます。是非お願いします。そのために来たようなものですから……」

背筋を伸ばし、微笑して、リオは言った。

そのまま村長宅を出ると、村の外れにある小高い丘へとやって来た。

周囲一帯を見下ろして村の様子を眺めることができるどこか居心地の良い場所だった。

そこにポツリと建てられている少し立派な石柱が二つ、日常的に手入れはなされているようで、風化している様子もなく小奇麗だ。

「これがゼンとアヤメ様の墓だよ。骨は埋まっていないけど二人の思い出の品が入っている」

ユバは優しい目つきでその石柱を見下ろした。
「この墓がゼンとアヤメ様の墓だと知っているのはこの村じゃ私だけさ。そもそも村人達はこれが墓だとも思っていない。ルリを含めてこの村の者達には内緒にしておくれよ」
「……わかりました」
いまだ事情は掴み兼ねているが、リオは小さく頷いて了承した。
「もしかしたら時が来れば二人に何があったのかを説明ができるかもしれない」
と、何を考えているのか、ユバはそんなことを呟いた。
ちらり、と、リオが石柱からユバへと視線を移す。
「だからその時までこの村で暮らしてみる気はないかい？」
それはどこか人を安心させる慈愛に溢れた面持ちだった。
「よろしいんですか？」
眼を瞬き、リオが尋ねる。
「あんたは私の孫なんだよ。孫が祖母に遠慮しちゃいけないよ」
晴れやかな笑みを浮かべてユバは言った。
「それに部屋ならたくさん空いているんだ。ルリの父親が戦争で死んで、あの子の母は流行り病で亡くなって、今じゃあの家は儂とあ

の娘の二人暮らしだからね」

そう言うユバの表情はどこか寂しそうである。

「ルリさんですか。彼女は……」

彼女とリオの間柄を予測し、リオが質問を投げかけようとした。

「あんたの従姉妹になるね。年は今年で十五歳だ」

そんなリオの言葉を繋ぐように、ユバが言った。

「そうですか……。このことも彼女には内緒になるんですよね？」

「ああ、あの子は自分に従兄弟がいるなんて知らないからね」

予想通りの答えに、了承の意味を込めてリオが頷く。

「わかりました。では、お言葉に甘えてしばらくこの村でお世話にならせてください。お願いします」

第３１話　村での生活　その一

翌日、今日からリオはかつて自らの父親であるゼンが暮らしていたというこの村でしばらく生活することになる。
何もせずに居させてもらうのも申し訳ないと考え、リオは滞在中に村の仕事を手伝うことをユバに申し入れた。

村の朝は早い。
日の出前に起床すると、リオはユバの家の広間へと姿を現した。

「おや、ずいぶんと早い起床だね」

既にユバは目覚めていたようで、囲炉裏に火をいれ、広間の椅子に座っていた。

「う～ん、お婆ちゃん、おはよ～」

すると、そこに寝惚け眼のルリもやって来た。

「おはよう。あんた、リオがいるのを忘れとりゃしないかい？」

縫い目の荒い下着姿ともいえる寝間着を身に着けたままの彼女に、ユバが苦笑する。
リオよりも一つ年上の彼女の肢体は、日々の農作業と若干の栄養不足により痩せているとはいえ、十分に女性らしい柔らかさを持っており、上半身の薄着にはふっくらとした乳房が浮き立っていた。

「へ……。っ～～～！」

自分の目と鼻の先に、昨日から同居することになった同年代の異性がいることに、ルリが気づく。
リオは既に彼女から視線を逸らしているようだが、それは一瞬とはいえ自分のあられもない姿を見られたことを意味することに気づき、ルリの顔が熟れた林檎のように真っ赤になった。

「き、着替えてくる！」

そう言うと、ルリは脱兎の如く自分の部屋へと駆けだした。
その後、しばらくして彼女は部屋の中から戻って来たが、どこかリオのことをジト眼で眺めていた。

（いや、まぁ、仕方ないけどさ……）

なるべく彼女と視線を合わせないようにして、リオが引きつった笑みを浮かべる。

「で、ずいぶんとお早い起床だけど本当に手伝う気はあるんだね？
遠慮なく使わせてもらうよ？」

リオとルリの間の空気を払拭しようと考えたのか、ユバが愉快そうに笑いながらも、そんなことを言った。

「ええ。任せてください」

そんなユバの言葉に、早急に今の気まずい状態から脱したかったリオが、素早く返答する。

「と、言ってもあんたは何ができるんだい？　それによってやって

もらう作業内容も異なってくるからね」

期限付きとはいえ新たな労働力を確保した以上は、そのリソースを有効に活用しようと、ユバは村長としての表情を覗かせた。

「料理、農作業、狩り、工作作業、薬作り、後、目立つようならあまり人に言いふらさないでほしいですが、精霊術も使えます」

精霊の民の里にいる間にリオもずいぶんと多芸になった。

ドワーフ仕込みの工作知識によりその気になれば建築だってできるし、エルフ仕込みの知識で材料さえあれば大抵の症状に対応する薬を作ることもできる。

次々と列挙されるリオの特技にユバとルリが目を丸くする。

「まぁ使えても悪目立ちまではしないけど……、本当かい？　別に見栄を張らなくたっていいんだよ？」

出来ると出来そうとでは大きく違う。

農作業、狩り、工作など村の男に回される仕事は肉体労働が多いが、いきなり上手くこなせるほどに簡単なものでもない。

万が一、リオが見栄を張っているようであれば、他の者の作業効率にまで影響が出かねないのだ。

「ええ。問題ありません」

淀みなくリオは断言する。

「そうか。なら信じるとしよう。じゃあまずはとりあえず顔見せからだね。ルリ、リオと一緒に朝の食材交換に行ってきな。ついでにこの子のことを女衆に紹介するんだ」

揺るぎないリオの自信を感じとったのか、ユバは一応その発言を信じることにしたようだ。
そこで、まずは村人達にその存在を知らせるためにも、ルリにリオを紹介してくるよう言づけた。

「えっと、はい。じゃあ、リオ……。行こっか」

いまだ先ほどの痴態を見られた恥ずかしさが残っているのか、少し照れた様子で、ルリはリオに声をかけた。

「ええ、よろしくお願いします」

そのまま二人して村長宅の玄関から出て行くと、まずは村で運営する田畑とは別にある家庭菜園で育てた食材を収穫した。
自宅の食事用の分を別に確保すると、一定の量を籠の中へと入れていく。

「村の中だと物々交換が基本だからね。毎日の食事に使う食材を朝に収穫して、広場に集まって各家庭と交換するんだ」

と、ルリがリオに作業内容を説明する。

「なるほど……」

どこか感心した風にリオは家庭菜園と籠の中に入った野菜を眺めた。
税金は村単位で課されることになるが、課税の対象となるのは村で経営する農地からとれた食材だけである。
そうして事務的な内容の会話をしながら、二人は村の広場へと向

かった。
質素な藁屋根の木造家屋が立ち並ぶ中、村の中心に小さな学校の校庭くらいの広場があった。
既にちらほらと村の女衆が集まっているようで、朝の挨拶と何気ない会話を繰り広げている。

「みんな、おはよう！」

と、そこにルリが元気よく挨拶をした。
女衆達はルリの存在に気づくと、笑顔で挨拶を返したが、すぐ後ろにいる見知らぬ男が視界に映り、誰なのか窺うようにリオへと視線を向けた。

「彼は昨日からうちで暮らすことになった子でリオっていうの。お婆ちゃんの古い知り合いの息子で、年は十四歳だってさ。今日からしばらくの間は村の仕事を手伝ってもらうことになるから顔見せしに連れてきたんだ」
「ご紹介の通りリオと申します。至らぬ点が多々あると思いますが、どうぞよろしくお願いします」

初対面の相手に向ける笑顔としては完璧な笑みを浮かべると、リオは慇懃に挨拶をした。
礼儀正しさ、すなわち挨拶と言葉遣い、は人間関係の潤滑油であるというのがリオの持論だ。
相手が礼をもって接してくるというのなら自分も礼をもって接するし、こちらから相手に接しようとするときは礼をもって接するように心がけている。

「えっと、よろしく……」

リオの態度にどこか照れた様子で、女衆達は挨拶を返した。
「そんな貴族様みたいに丁寧な言葉遣いをする必要はないって。リオみたいな子にそういう態度で接されるとみんな緊張しちゃうよ」
と、ルリは自らの体験談として語った。
粗野な荒くれ者ばかりのこの村に住む女性達からすれば、中性的で整った綺麗な顔立ちをしているリオは非常に魅力的に映る。
そんな人物が丁寧な言葉遣いで話しかけてくるとなれば、気恥ずかしさから緊張してしまうのも無理はない。
「はは、まぁ、努力します。少しずつ改善していくんで」
一度、丁寧に接した初対面の相手に対しては、よほどの理由がない限り露骨に言葉遣いを変えることが、リオは苦手であった。
それなりに接する間に少しずつ変えていけばいいだろう。
そんな風に考えてリオが苦笑しながら返事をする中、女衆達はそろってルリに視線を向けていた。
見た目からして超優良物件としか思えないこの男は誰だ、と。
言い逃れを許さぬと言わんばかりの肉食動物を連想させる目つきにルリがたじろぐ。
特にいまだ独身の若い少女達の視線はすさまじい。
(は、はは……。まぁ、こうなるんじゃないかと思ったけどさ。うぅ、絶対に仕事の時に根掘り葉掘り聞かれるよ)
ルリとしてもいまだにリオのことはほとんど何も知らないし、一緒に暮らすことに緊張だってしているのだ。
昨日、仕事が終わって家に帰ると、突如、自分の祖母からリオが

一緒に暮らすことを告げられた。
聞けばユバの古い知人の息子だという。
さりげなく人脈の広いユバならば外部に古い知人がいてもおかしくはないのだが、いきなり歳の近い異性が同じ屋根の下で暮らすことになったと言われて戸惑わないわけがない。
しかもリオの容姿は美青年という言葉がしっくり来るくらいに整っており、物腰も非常に落ち着いている。
昨日、たまたま外を出歩いている時にその姿を目撃した時は客と思って案内をしようと声を掛けたが、その容姿の良さに思わず声をかけるのを戸惑ってしまったくらいである。
明け透けな性格をしているという自分ですらどこか緊張してしまうのだから、村の若い少女達が見惚れて緊張するのも無理はない。
今までガサツな男ばかりと接してきたルリとしては、これからリオのようなタイプの男とどのように接すればいいのかを、いまだに掴み兼ねていたりする。

先ほどからちらちらと少女達の視線がリオとルリを行ったり来たりしている。
朝食後の仕事の時に寄せられるであろう質問の嵐を想像し、ルリは気が重くなった。
ちらり、とルリはリオに視線を向けてみる。
女衆達と視線だけで会話が成立しているのは、ルリが彼女達と長年の付き合いがあることと、同性であるがゆえだ。
少女達から寄せられる視線に、隣に立っているリオは不思議そうな顔をしていた。
ふと、リオとルリの視線が重なる。
（うぅっ、人の気も知らないでさぁ～）
先ほど自らの肢体を肌着越しに見られたことを思い出し、僅かに

ルリの顔が赤くなった。
その様子に女衆達は何かがあったのだなと女の勘を働かせる。
そして、その辺のことも聞かなければと瞬時に彼女達は共通認識を作り上げた。

「はぁ、さっさと今日の食材交換を済ませちゃおうよ。みんな家に帰って朝食を作らないといけないでしょ」

一時凌ぎとはいえ今は早く家へと戻りたい。
気恥ずかしさもあり、小さく溜息を吐くと、ルリはその場を仕切るように動き出した。
手早く他の家の家庭菜園で採れた食材と交換していくと、あっという間に籠の中身が入れ替わる。

「はい、じゃあ戻ろっか。リオ」

用事を終えたことを確認すると、食材の入った籠を背負ったリオに素早く声をかける。
女衆達はリオと話したがっているようだったが、お互いに牽制しあってタイミングを掴みかねていたようだ。
背中から感じる女衆達の突き刺さるような視線を無視し、ルリはリオを引き連れてさっさと家へと戻った。

「ただいま、おばあちゃん」
「ただ今戻りました」

ルリが元気よく帰りの挨拶を言うと、リオもそれに続いた。

「おかえり」

どうやらユバは料理に用いる器具や薪の準備をして待っていたようだ。

「料理、手伝いますよ。自分も旅の過程で得た食材と調味料を持っているので使ってください」

食材はアースラからもらったものが五年分はあるし、調味料もかなり多めにもらってきている。

とはいえ、流石にそれらすべてを一度に出して分け与えれば、何処に収納していたのかと不自然に思われるだろう。

そこでカモフラージュ用のバックパックに入る程度の食材と調味料を渡すことを決めた。

「それは助かるよ。特に調味料の類は不足しているからね」

調味料、特に塩は定期的に村へとやって来る行商人に完全に依存している。

輸送費がかかる関係で値段も都市で買うよりかは割高となってしまうため、一度に大量に購入することは難しく、村の中で塩は貴重品であった。

それゆえ、食材と調味料ならば優先すべきなのは不足している調味料の方だろう。

食材があっても味付けがなければ、そっけない料理しか食べられなくなってしまうのだから。

そう考えて、部屋に戻ったリオが時空の蔵から食材と大量の塩を取り出し、バックパックに詰め、キッチンと繋がっている広間へと戻った。

「とりあえず塩はこれですね」

バックパックの中から十キロ以上の塩が入った袋を取り出し机の上に置いた。

「む、こんなに大量に塩を持っているのかい」

「うわぁ、こんな大量の塩、うちだけじゃ使い切れないって。節約して使えば二年分はあるんじゃないの？」

その袋の大きさにユバとルリが目を丸くする。

「あとは自前の調味料の類がちらほらとあります。食材は乾燥肉が多いです」

流石に旅をしていた人間が採れたての野菜を持っているというのも不自然なので、いくつか保存食を選んでバックパックの中に入れていた。

肉類は贅沢品なので、乾燥肉が中心である。

「それにしてもよくもまぁこれだけの量の荷物を持ち運んでいたもんだ。見かけによらず体力はありそうだね」

リオは背が高く筋肉質ではあるが、線は細い方だ。

服を着ていれば力があるようには見えないために、ユバは意外そうな声を出した。

「伊達に一人旅などしていませんよ」

そんなユバの言葉にリオが苦笑する。

「じゃあ朝食を作りましょうか。米を炊いて、汁物を作って、後は野菜と俺が持ってきた乾燥肉でなんか適当に作りましょうか。これ

に漬物があれば完璧ですね」

ヤグモ地方ではパンの代わりに米と雑穀が主食となっていた。
とはいえ、品種改良は行われていないため、精霊の民の里で採れる米や雑穀と比べると何段も味は落ちる。
また、味噌に似た調味料も多く存在することから、シュトラール地方よりかは日本人好みの味を再現しやすいだろう。

「よし。じゃあお手並みを見せてもらう意味も込めて朝食はリオに作ってもらおうか。ルリは変なところがないか一応見ておきな」
「はーい」

元気よく返事をしたルリから食事やキッチンの勝手等を聞くと、リオは調理を開始した。
村での一日の食事は朝と夜の二回。
朝食は一日の活力を得るために豪勢なものが作られ、夕食は宴会でもない限り質素なものになる傾向があるそうだ。

「おぉ。本当に精霊術が使えるんだね！　やるじゃない」

リオが精霊術で薪に火をつけると、ルリがご機嫌な様子で言った。
初めて精霊術を見たにしては驚きが少ないように思えた。

「精霊術を見るのは初めてだったりするんですか？」

どこか精霊術を見慣れているようなルリの反応を不思議に思い、リオが尋ねた。

「ううん。実は私も精霊術が使えるんだ。この村だと他にはお婆ちゃんもね」

少し意外な事実を告げられたが、彼女が精霊術を見ても特に驚かなかったのはそういうことかと、リオは納得した。

「なるほど。となると精霊術はユバさんから習ったんですか？」

「うん。どうもうちの家系は平民にしては精霊術の適性が高いみたいでね。お婆ちゃんが村長をやっているのもそれが関係しているんだ」

となると、やはりゼンも精霊術の使い手だったのだろうなと、リオは思った。

村の女衆に挨拶をしている間に水に浸されていた米に火をかけて炊き始めると、味噌汁を作るために鍋の中に水を作りだし昆布や鰹節を入れて弱火でだし汁を作る。

「本当に手慣れているんだね。うちの村の男どもに見習わせてやりたいくらい」

すぐ側でリオの料理の様子を眺めていたルリが感心した様子で言った。

村の中では家事は女がするものという固定観念が存在しており、村に暮らす男達は基本的に料理を作ることはしない。

そんな村の中で暮らすルリからすれば男が料理を作る光景は非常に新鮮に映ったようだ。

「まぁ旅をしているとこれくらいは作れないとやっていけませんから」

ルリと会話をしながらも、リオの料理をする手が止まることはない。

米の炊き上がりとだし汁の完成を待つ間に、キノコや野菜を適当な大きさに切り刻んでいき、それを終えると今度は乾燥肉を切り刻んでいく。

「うわぁ、私よりも包丁使うの上手いし……」

鮮やかなリオの包丁さばきにルリが引きつった声を出す。

そんな彼女の様子に苦笑しながら、少しずつコミュニケーションも図っていく。

いつの間にかどこか緊張していた彼女の様子もだいぶほぐれてきたようだ。

きっと柔軟性のある性格をしているのだろうなと、リオは感じていた。

「そろそろ米も炊き上がりそうですね」

少し焦げた臭いがしてきたので、リオは米の入った釜を火から遠ざけた。

そのまま蓋をとらずに蒸しておき、その間にだし汁を濾(こ)して別の鍋に移し、具材となるきのこと野菜を入れて煮たせる。

その間に先ほど切り刻んだ乾燥肉を野菜と一緒に炒めて、味付けをし、皿へと移した。

鍋の中身が煮立ったところで味噌を少しずつ溶き入れていき、中身が沸騰すると火を消して、囲炉裏へと運ぶ。

「できました」

蒸らした米の蓋を取り外すと、ピカピカの米が炊き上がっていた。

ほぐしたご飯を茶碗によそい、味噌汁をお椀に入れていくと、完成した品々を机の上に並べていった。

「うわぁ、美味しそう。リオの持ってきてくれた乾燥肉のおかげでいつもより一品多いし、今日は良い日になりそうだよ！」

ご機嫌な表情を浮かべてルリが言った。

どうやら見た目は彼女のお気に召していただけたようだ。

「これだけの料理が作れるとなれば当番に組み入れても大丈夫だね」

ユバも満足したように完成した料理を眺めている。

「じゃあ冷めないうちに食べちゃおう！」

三人が食卓に着くと、待ちきれないといった風に、ルリが食事の開始を合図した。

「ん～！　この御味噌汁美味しいねぇ。絶妙な出汁の効き具合だよ。こっちの炒め物も美味しい！」

一品一品を食べるごとに幸せそうな表情を浮かべるルリ、これならリオも作った甲斐があったというものだ。

「ああ、本当に良い腕をしているよ。大したもんだ」

ユバも一口一口を噛みしめるようにリオの料理を味わっている。

「ありがとうございます。そう言っていただけると作った甲斐もあります」

上々な二人の感想にリオが微笑を浮かべる。

「さて、朝食を食べたらリオの職場に案内するよ。とりあえずは狩りを手伝ってもらおうかと思っているんだが大丈夫かい？」

と、食事も進んで会話が弾んできたところで、ユバがリオに語りかけてきた。

それは今日から始まるリオの仕事に関する話題だった。

「ええ。任せてください」

ユバの言葉に、いったい今日からどんな生活が始まるのだろうかと思いを馳せながら、リオは静かだが力強い声で頷いた。

第３２話　村での生活　その二

「ドラ、今日からうちの村でしばらく暮らすことになったリオだ。あんたんとこの娘から既に情報は行き渡っているだろ。こう見えてなかなか体力もある子だからみんなよろしくやっておくれ」

朝食を食べたリオはユバに案内されて村の狩人のもとへと案内された。

「ご紹介に与かりました。リオと申します。未熟者ですが助力できれば幸いです」

ユバの紹介に続けて、自らも簡単に自己紹介を行う。

「おう！　よろしく頼むぜ！」

すると、ドラと呼ばれた男は晴れやかな笑みを浮かべて答えてきた。

大熊のような体格の男だが、性格もなかなかに豪快なようである。

「だが、どうして俺だけのとこに？　ひょっとして……」

何か思い当たる節があったかのように、ドラがユバに視線を送る。

「ああ、あんた、狩りの後継者が欲しいって嘆いていたからね。この子は経験があるみたいだから丁度いいと思ったんだ。おそらくだがかなりのやり手だと私は踏んでいるよ」

と、妙にリオのことを信頼した様子でユバが言った。
先ほどの料理でリオの言の一部は実践証明されたことになる。
その影響だろう。
ドラも長老であるユバの言葉なら信用できるのか、素直に喜びの表情を露わにした。

「狩猟経験者か。そいつは助かるな。でも話からするとリオはずっとここに住むってわけじゃないんだろ？」

しばらく暮らすという冒頭のユバの言葉を思い出したのか、ドラがそんなことを言った。

「ああ。だから、この子の狩りの具合を見て余裕が出来そうだったら、若手から後継者候補を見繕ってその育成に時間を充てればと思ってね」
「本当か！？　そいつは助かる！」

妙案だ、と言わんばかりの表情を浮かべて、ドラが喜色めいた声を出した。

「じゃあとりあえず今日はペアで行動してみるか。どれくらい出来るのか確かめてみたいしな」
「わかりました」

精霊の民に里においては、メンデルの法則を踏まえて食肉用の牛、豚、鶏等の家畜化にも成功しているが、生活態様や気性等の関係で家畜化は難しいが美味い肉を持つ生物もいた。
そういった生物達は狩猟の対象となり、リオも精霊の民の里で狩りについて行かせてもらって狩猟に必要な技術を学んでいた。

他方で、人間族の社会の中でも家畜を飼っている。
だが、それらは、物に満ち溢れている都市を除いて、肉体作業の労働力、食卵用、搾乳用、売買用の資産であることを前提に飼われることになる。
それゆえ、村で飼われる家畜は、野菜の採れなくなる冬場、祭りの時、怪我や年齢の関係で働けなくなった時でもない限り、食用となることはほとんどない。
狩人は村の食生活に肉をもたらすという重要な役割を担うことになり、その後継者がいないということはわりと深刻な問題であった。
「後は二人に任せてよさそうだね。後継者については二人までなら労働力に余裕があるから、良さそうな子がいたら教えておくれ」
リオとドラの様子を見て、とりあえず上々な初対面を終えることができたと判断し、ユバがそう言った。
「わかった。一人はうちの娘の許嫁にでも任せようと思っている。後の一人はどうすっかなぁ。まぁ、決まったら長老のとこに伝えに行くぜ」
というドラの言葉に頷くと、ユバは自宅がある方へと歩いていった。
「おし、じゃあ今日からよろしくな。リオ」
ユバが立ち去ると、ドラが爽快な笑みを浮かべて言ってきた。
「はい。こちらこそよろしくお願いします。ドラさん」
気風の良い人だなと思いながらリオも再度挨拶を返す。

「はは、むず痒いし、そんな堅苦しい口調じゃなくていいぜ。狩りの最中に非常時が起きたら言葉遣いなんて気にしていられないしな」

どこか照れた様子で、ドラが言う。

「そう、ですね。では、よろしく。ドラ。緊急時はもっと言葉を砕きますけど、今はこれで勘弁してください。癖みたいなものなので」

リオは少し恥ずかしそうに苦笑めいた表情を浮かべた。

「ほう、変わった奴だな。だが、そういうの、嫌いじゃないぜ」

そう言って、ニヤリ、とドラが笑う。

どうやらこの人物とは上手くやっていけそうだと、リオは思った。

リオに狩猟を行わせようとしたユバの采配はドラの人柄も関係しているのかもしれない。

「じゃあまずは簡単なハンドサインでも決めておきますか」

と、狩猟を行うにあたってリオがそんなことを言った。

「ハンドサイン？　なんだそりゃ？」

するとドラが不思議そうな声を出す。

「音をたてたくない時に、手の動きだけで意思の疎通を図ることができるように、あらかじめルールを取り決めておくことですよ」

リオがドラにハンドサインの意味を教える。

「ほう。そいつは便利そうだな。なるほど、やってみるか。どんなのがあるんだ？」

なかなか乗り気なドラに、リオが精霊の民の里でも用いていた狩猟用の簡単なハンドサインを教えていく。

ドラは興味深そうにしつつも、ハンドサインの重要性をすぐに理解したようで、真剣にリオの説明を聞いていた。

「よし。んじゃ早速行ってみるとするか！」

その後、ドラから、この辺りで生息している動物や、ドラが決めている狩りのルールを教えてもらうと、二人は狩りに向けて村の近くにある林の中へと歩きだした。

林に入ってからは少しずつ会話を減らしていき、やがて最低限の会話以外はしないようになり、視線とハンドサインを織り交ぜて意思の疎通を図っていく。

「上手いな」

レンオウ鳥という身が柔らかく脂の乗った鳥に、リオが射った矢が突き刺さったのを見て、ドラが感嘆したように小さく呟いた。

自然に溶け込むように気配を消し、獲物の痕跡を目ざとく発見する観察力を持ち、獲物の習性に対する知識も備えており、獲物の足取りを追跡する洞察力もあり、獲物を見つけると素早く確実に一発必中の矢を放つ。

傍目から見て文句のつけようのない程に完成された狩人の姿だった。

肉に臭いが付かないように行う血抜き作業も手慣れたものだ。

犠牲となる生き物へ感謝の念を捧げている姿もドラからすれば好

印象に映った。

それから、林の生態系を崩さないように一カ所で獲物を狩りすぎず、適度に拡散して狩りを行っていった。

次に見つけた獲物は野兎だ。

野兎が通った僅かな痕跡を発見すると、その足取りを追跡していく。

ふと、その足取りが消えるポイントがあった。

おそらく天敵から身を守るために意図的に強くジャンプして痕跡を隠したのだろう。

だが、被捕食者に回ることの多い動物がこういった行為を行う場合は、たいていその付近で休息をとる時だとリオは経験則で弁えていた。

気配と物音を消して、付近を念入りに捜索していくと、じっと動かない一匹の野兎を発見した。

運が良いことにまだ野兎はリオとドラの存在には気づいていないようだ。

ハンドサインで合図を告げると、リオは野兎の脇に回り込んだ。

そして静かに弓を構える。

狙うべきは頭だ。

胴体に矢が当たると出血で肉が傷んでしまうのだ。

全神経を集中させて獲物の呼吸と自分の呼吸を同調させていくと、リオが矢を射る。

矢は静かな風切音を立てて進んでいき、グサリ、と野兎の脳天に突き刺さった。

「よくやった。流石だな」

野兎を仕留めたことを確認し、リオが野兎の元まで歩んで行くと、

ドラがやって来てそう言った。
野兎はまだ生きているようで、足を動かそうとして逃げようとしている。
だが、上手く動くことはできず、そのまま息の根を絶つため、リオが止めを刺した。
何かを祈るように目を瞑り黙祷を捧げると、ぐったりとした野兎の血抜きを始める。
そして、ものの数分で水洗いも含めて血抜きを終えた。

「ご苦労さん。じゃあ次の獲物だな」

リオの作業を黙ったまま見つめていたドラだったが、リオが作業を終えると、労う様に優しくそんなことを言った。
リオは小さく頷き、狩り終えた野兎を腰の袋に入れた。
それから、何匹か獲物を狩ると、いつの間にか昼前の時間となっていたので、二人は村へと戻ることにした。

「いやはや、大したもんだぜ。俺なんかよりもずっと素質があらぁ。今日は久々に大猟だ」

村の手前まで戻って来たところで、ドラが豪快に笑いながら言った。
それまでのピリピリとした空気が嘘のようであった。

「ドラさんが追い込みを手伝ってくれたのも大きいですよ」

そう、ドラはリオが狩りを行いやすいように獲物の注意をひきつけたり、追い込みをかけたりしていた。
ハンドサインのおかげもあるのだろうが、即席の連携にしては実に息の合ったものとなった。

「ははは、謙遜すんな。その腕前なら何処に行っても一流の狩人になれるぜ。お前の姿を見てたらウズウズしてきちまった。午後は別の狩場をいくつか案内するが、次からはもうその必要もなさそうだな」

と、陽気な様子でドラがそんなことを提案してきた。

「そうですね。ドラさんには後継者の育成もありますからそちらを優先してください」

「ああ、ありがとな」

村へ戻ると、狩った獲物たちを逆さ吊りにして、解体を行った。

精霊の民の里で本格的に狩りを習い始めた頃はリオも抵抗感を覚えていたが、今ではその残酷な行いを必要なこととして受け入れていた。

人は他の生き物の犠牲なしには生きていけない弱い種族で、こういった作業も誰かが行わなければならないことだ。

生きるとはそういうことなのだから。

だが、血抜きの瞬間もそうだが、何度経験しても、死んだばかりの生き物を解体するのが気持ちの良いことではないことは確かだ。

自分が何を糧にして生きているのか、人がどれだけ傲慢な種族なのか、それを目の当たりにして、罪悪感を覚えずには、心が震えざるにはいられない瞬間だった。

だからリオは狩った動物たちに感謝を捧げるのだ。

自分の糧になってくれてありがとう、と。

その後、仕事を終えて家に帰ると、狩った食肉を土産に、リオはまっすぐに家に戻った。

身体にこびり付いた獣の血の臭いを落とすため、石鹸を使って身

体を洗う。

「うわ、リオからすごく良い匂いがする！」

身体を洗って広間へ行くと、リオから放たれる香りにルリが機敏に反応した。

「石鹸を使ったんですよ」

そう言って、リオはルリに液体の入った瓶を見せた。

「せ、石鹸！？　これが？」

石鹸は高級品で、おいそれと平民に手を出せるものではなく、ましてやこのような村で目にすることなどまずないものである。

ちなみに人間族の間で用いられているのは固形の石鹸で、平民の間では一般的に石鹸の代用品として酢が用いられることがある。

そんな物が目の前にあると言われて、ルリが驚きの声を上げた。

「ええ。薬が作れると言ったでしょう。石鹸も作れるんですよ」

リオは手洗い用と髪洗い用の液体石鹸を常時持ち運んでいる。

旅の最中だと身体に匂いをつけてしまうために使用する場面は選ばなければならないが、衛生面から欠かすことのできないアイテムである。

「ふええ～、お婆ちゃんも薬師だけど石鹸の作り方は知らないと思うよ。リオ、すごいね」

ルリがリオに尊敬の眼差しを送る。

「材料さえあれば結構簡単に作れるものなんですよ。家に置いておくのでルリさんも自由に使ってください」
「え！？　わ、私が？　石鹸なんて貴族様が使うものだって聞いているから、なんかむず痒いな」

どこか恥ずかしそうにそう言うルリの手は、日々の作業でささくれて荒れている。

「そのうち肌荒れ用の薬と一緒に村人達の分も作りますから遠慮しないでください」

そう、リオは村の中の衛生面を改善しようと考えていた。
例年、村人の中で病気にかかる者は多い。
酷い時は死者がである有り様だ。
その原因が衛生面にあるとリオは踏んでいる。
不衛生は万病の元だ。
下手をすれば村が壊滅しかねない。
石鹸を使った手洗いを習慣づけるだけで感染症による被害をかなり防ぐことはできるだろう。

「ええ？　そんな高級品を村人に配っちゃっていいの？」
「まぁ、村人達の分程度なら問題はありませんよ」

たしかにその人数の石鹸を作るのは面倒だが、村人の人数などたかが知れている。
自分の家だけで衛生面を徹底させても、村人経由で病原菌が運ばれては意味がない。
さすがにここが街や都市ならば無料での配布は諦めるが、そこをケチってユバやルリが病気にかかる方が問題だろう。

「う、うん。じゃあ、ありがたく……」

リオから瓶を受け取ったルリが恐る恐る石鹸を手につける。

「やっぱり良い香り。これ金木犀の匂いだよね？」

リオの指示通りに手を動かし泡立たせると、ルリが匂いの成分を尋ねた。

「ええ、そうですよ」

興味深そうにすんすんと鼻を動かすルリに、リオが微笑を浮かべて答えた。

「良い匂いだよね～」

鼻歌交じりで手を洗うルリは非常にご機嫌な様子だ。

そんな彼女のためにも、新たな石鹸を作るため、早いうちに近場で薬草の採れる位置を調べなくてはならないなと、リオは思った。

第３３話　村での生活　その三

リオがこの村に来てから二週間が経過し、いまだ村のすべての者と会話をしたわけではないが、リオの存在は村人全員に知れ渡っていた。

村長であるユバが後見人となっている。

ユバの孫娘であるルリが気安く会話を行っている。

村に肉を供給するという重要な役職に就いている。

ドラもその狩りの腕前を褒め称えており、リオがやって来たことで肉の供給量が増えた。

さらには、若い女衆達からの評判も上々だ。

そんなわけで、どこか閉鎖的な村人達の残りの多くも、とりあえずはリオのことを臨時の村人として認めるに至っている。

さて、狩りを手伝うことになったリオだが、何も狩りは毎日行うわけではない。

毎日のように狩りを行えば、林に暮らす動物達が減少してしまい、警戒されてしまう。

そんなわけで、狩りは適度に休みの日を入れることになっていた。

今の季節は秋手前、収穫に向けて忙しくなる時期だ。

この村の総人口は三百人を超える。

だが、各家の次男以下の働き手となる男の中には、兵士として砦に勤めていたり、外部へ出稼ぎに行く者もいる。

それゆえ、この村で実際に暮らしている人間で、働き手となる若い男の数は決して多くはない。

となれば、少しでも時間の余った者は、他の作業の応援に駆り出されることになることになるのが当たり前であった。

そんなわけで、狩りが休みの日には、リオも農作業を手伝うようになった。
ところが、実際に村の農作業を手伝い、そのやり方を聞くと、リオが思いつく限りでも様々な改善点が出てくるではないか。
そこで、リオは少しユバに相談してみることにした。

「今よりも豊作にする秘訣があるじゃと？」

リオの相談に、ユバがどこか訝しげな表情で言った。
そんな上手い方法があればとっくに誰かが試しているはずであり、その噂が広がっていてもおかしくはない。
祖母としてはリオの言葉を信じてやりたいが、村の民達を預かる身としては安易にその意見を聞き入れるわけにもいかない。
ユバが不審に思うのも無理はなかった。

「ええ。流石に既に芽吹いている作物を豊作にするのは無理ですけど、これから先に育てる作物について今よりは確実に豊作にする方法があります」
「ううむ……」

と、何かを考えるように、ユバが唸り声を出す。
ユバの懸念はリオも容易に想像できていたので――。

「まぁ、とりあえず話を聞くだけ聞いてみてくれませんか？」

と、リオは気楽な様子でユバに言った。

「うむ、そうだね……。じゃあ、どんな改善点があるのか教えてもらってもいいかい？」

どうやら話だけは聞いてくれるようだ。
「まずは土ですね。肥料という土の薬を使うことで、作物が育ちやすい土壌を作ります」
と、リオは最初に土壌の改善を提案した。
「肥料？　土に薬かい？　ふむ、まぁ、豊作のおまじないと似ているね」
そう、この村では、毎年、豊穣祭の際に、大地に感謝をささげるためにおまじないを行っている。
それは農学的にはあまり意味のない物を土に撒いているだけなのであるが、土に何かをするという行為は理解してもらえるようだ。
これならば説得もしやすいだろう。
「で、具体的に土に何をするんだい？」
と、薬師でもあるせいか、ユバが少しばかり興味深そうに尋ねてきた。
「ええ、それをするには少し特殊な土が必要になってきます」
なかなか好感触なユバの反応に、リオが薄く笑みを浮かべる。
「少し特殊な土？　なんだい？　それは？」
「見た目は黒で、落葉樹や広葉樹の葉が土壌に分解されたものです。山林に行けば簡単に手に入りますよ。葉があれば自作もできます」

そう、それは腐葉土である。
腐葉土は現代農業でも非常によく利用されるものだ。
自然の腐葉土は成分が偏っていることもあるので、自作をして、成分調整をしたものを用いるのが望ましいだろう。

「そんな土があるのかい。今まで見たこともないねぇ」

どうやらユバもその存在は知らなかったようだ。

「はい。その土を混ぜるだけでもだいぶ状況は改善しますよ」
「なるほどねぇ。その程度ならすぐにでも試してみることはできそうだ」
「ええ、不安だというのならまずは試験的に裏庭の家庭菜園で試してみてもいいかと」

と、心理的に受け入れやすいよう、まずは身近なところから始めてみるように、リオは提案してみた。

「いや、どうせやるなら来年の春に使う村の農地の一画を利用してやってみようと思う。その方が他の土地との比較もしやすいからね」

予想以上に乗り気な答えである。
リオは僅かに微笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。では、その土の選出と運搬は自分がやっておきます」
「他の男を応援にやってもいいんだよ？」
「いえ、自分が言い出したことですから。それに精霊術を使って肉体を強化すれば、一度に大量の土を運べますしね」
「そういえばそうだったね。なら、あんたに任せるとするよ」

信頼の込めた視線を送って、ユバは言った。
「はい。それで次の話なんですが、土と同じくらいに大事になるのが水です」
「ああ、それはその通りだね」
と、納得の声をユバは返した。
水の重要性はわざわざ語らずとも理解はしてくれているのは当たり前か。
「現状だとため池を村の外れに作ってありますけど、これだけだと天候状態によってはため池の水が日照りでなくなってしまいますよね？」
村の各所に設置されているため池を頭の中に思い浮かべながら、リオは言った。
「ああ、だが、歩いていける距離に川があるよ？　ため池の水が不足した時はそこから水を汲んで来るようにこの村は設置されたからね」
と、リオの質問にユバが答える。
だが、川の水を利用するにしても人力作業では非常に効率が悪い。
「川の水を利用するのは正しい着眼点です。ですが、問題はその利用方法です。シュトラール地方には水汲み水車と呼ばれる灌漑用施設が存在するんですが――」
リオはユバに水汲み水車について簡単な説明をすることにした。

水汲み水車はシュトラール地方では一般的に利用されている技術だ。
人間族の古い言い伝えによれば六賢神の与えた知識の一つであるという。
もし水汲み水車がリオの言葉通りの役割を持っているのなら、ため池と二重の保険ができることになる。

「川の水を汲み上げて用水路に流すって言ったって、それが出来たら便利なんだろうけど、具体的にどういう仕組みで水を汲み上げるんだい？　それにどれくらいの量が流せる？」

簡単なリオの説明に、ユバもその旨みは十分に理解できた。
だが、問題はそんな物が本当に作れるのかだ。

「水汲み水車というのはですね――」

ユバの疑問を解消するため、リオは水汲み水車の仕組みと性能を具体的に説明する。

「すごいもんだ。それをあんたは作れるっていうのかい？」

仕組みはともかく、それがリオが語る通りの性能を有しているというのなら、農業で水不足を心配することは格段に少なくなるはずだった。
ユバがどこか感心するような目線をリオに向ける。

「はい。ため池と接続する用水路についても一日もあれば自分が精霊術で作ることが可能です」

ネックだったのは用水路を建設する人員的コストだが、それすら

もリオがいれば解決できてしまうという。
やってみる価値は十分にありそうだった。
「話だけ聞くと非常に魅力的に思える。けど、その何から何まで全部あんた任せになってしまうけどいいのかい？」
ユバが少し申し訳なさそうな声を出す。
「ええ、水汲み水車については来年の春までを目安に作ろうと思っています。それだけの時間的余裕があれば土壌の改善と併せても自分一人で問題ないはずです。少し自由な時間をもらうことが増えそうですが」
ヤグモ地方には存在しない未知の技術。
そんな時代を先取りした技術をひけらかせば、外部からこの村にいらぬ注目を集める可能性があるだろう。
だが、こんなことは時間さえ経てばいずれは誰かが思いつくことなのだ。
現にシュトラール地方ではすでに利用されている技術だし、精霊の民も水車や風車を利用している。
不作の年になれば飢餓で身体が弱り寒さにやられて病気になり死ぬ者が出てくる。
実際にルリの二歳年下だった弟は四歳の時に飢餓と寒さにやられて死んだそうだ。
もし、水汲み水車を作れば、そんな事態を少しでも解決する手助けができるはずだった。
なら、この村がその先駆者になってもかまいやしないだろう。
そう思ってしまった。
今まで会ったことがなかったとはいえ、ここはこの世界で唯一の

親族であるユバとルリが暮らす村なのだから。
明らかに効率の悪いやり方を見て、そのまま見ぬふりをすることは、リオにはできなかった。

それに、代替性のない技術や能力がなければ使いこなせない知識ならばともかく、リオが教えるのは誰にでもすぐに試せるような知識ばかりだ。
仮にこの村が注目を浴びたとしても、知識を周囲に流通させれば深刻な問題が生じる危険性は少ないだろう。

「他にも農具の形をより効率的にしたり、種まきの仕方を変えたり、休耕地を上手く活用したりする方法があります」

だから、リオはこの村のために出来ることをしようと思っている。
まだまだこの村の農業の方法について改善できる点は多い。
その一つ一つをリオはユバに語っていった。

「ふむ、種まきの方法については先ほどの土壌の改良と併せてやってみる価値はありそうだね。それに農具の改良も少数なら用意はできそうだ」

リオの説明を真剣な表情で聞くと、しばし考えた後に、ユバが呟いた。
だが、休耕地の利用方法については、短期的にみると収穫量が減りかねないので、抵抗があるようだ。
まぁ、いきなりすべて改革を進めても付いてくることができないのは当たり前だろう。
他のことで成果がでたらそちらをやっていけばよい。

「わかりました。農具については村の野鍛冶の方に相談してみます」

「ああ。種まきの方法については土壌改良の件と併せて来年の春に用いる農地の一画の監督権をリオに渡すとしよう」
「よろしいのですか？」

自分のような余所者に、と言いかけて口を噤んだ。
臨時とはいえユバはリオのことを村人として認めてくれたのだ。
そういったことを言うのは野暮だろう。

「ああ、かまわないよ。その代わり、何が何でも成果を出しておくれよ？」

気風の良い笑みを浮かべて、ユバは言った。

「はい」

そんなユバを見据えて、リオは力強く頷く。
許可を得た後、リオの行動は素早かった。
狩場にもなっている林へと向かうと、適当に土を掘り返して腐葉土を発見し、管理を任された農地に運んで行った。
この辺りの土壌はリオの見立てだと酸性で日本の土壌に近いから、多少は草木灰を蒔いてもいいだろう。
他に人間や動物の糞を混ぜるのも有益だが、心理的抵抗が大きいはずだ。
幸いこの辺りは稲がとれるので、扱いは難しいが米ぬかで代用するのもいいかもしれない。
冬場になる前に米ぬかを入れれば、春には発酵が終わって土が健康になるはずだ。
結果が出るのに時間はかかるが、それが農業というものだ。
リオがどれくらいこの村にいるかはわからないが、少なくとも農業面で成果が出るまではいることができればいいなと考えた。

そうすると、少なくとも来年の秋くらいまではいることになるのだろうか。

それに、いずれリオの両親について情報を開示できるかもしれないというユバの言葉も気になる。

両親の墓参りをすることはできたが、色々と考えたり、することもあるし、気になることもある。

この村にはしばらく居続けなければならない。

そのためにも、今はこの村に馴染むことを優先した方がいいだろう。

ユバの許可を得ているとはいえ、あまりに不審な人間だと思われれば追い出されてしまいかねない。

こういった閉鎖的な社会の中では、自分から歩み寄らなければすぐに居づらくなってしまう。

それは前世で田舎暮らしをしていただけあって心得ていた。

幸いこの二週間で一定数以上の人々から好感触を得るには至っている。

ここ最近のことだ。

リオは、脆くなって壊れた家屋や道具の修理を行い、村を歩き回っていた。

村人の中にも職人がいるにはいるが、人手は少なく、手が回りきっていないというのが現状である。

それゆえ、どうしても後回しになってしまっていた作業を、リオが行ってくれるというのは、非常にありがたい話であった。

「大したもんだ！　助かったよ。うちの旦那が直すとか言って任せたら、余計にひどくしやがって困っていたんだ」

恰幅の良い女性が陽気に笑いながらリオに言った。
彼女の名前はウメ。
村の女傑という立ち位置の人物である。
「いえ、お役にたててよかったです。また何かあればお呼びください」
つい今しがた、リオはこの女性の家の壁を修繕し、隙間風が入らないようにしたところである。
「助かるよ。ユバ様の家に余所者が来たと聞いた時はどんな男が来たのかと心配したけど、あんたみたいな良い男なら大歓迎さ」
さっぱりとした笑顔を浮かべて、ウメがリオに礼を告げる。
その後も、何軒もの家を回って、挨拶がてら修繕すべきものがないかを聞いていった。
最初は訝しげな視線を送って来る者もいた。
だが、一緒について来ているルリがリオの腕前が優れていることを証言すると、試しにということで簡単な物の修繕を頼んでくる。
それで見事な修理をこなして見せると、感心したような反応をして、新たな物の修理を頼んでくるということが続いた。
成果はなかなかに上々と言えた。
「いやぁ、リオって本当に多芸だよね。料理はできるわ、狩猟はできるわ、農業にも明るいわ、手先は器用だわ。薬も作れるんだっけ？　村に一人は欲しいって感じだよね」
仕事を終えた帰り道、二人で村長宅へ向かって村の中を歩いていると、晴れやかな笑みを浮かべながら、ルリがそんなことを言ってきた。

「器用貧乏っていうやつですよ。どれも一流の人間には敵いませんから」

苦笑しながら、リオが答える。

「んー、そんなことないと思うけどなぁ。仮にそうだとしても何でもできる人がいてくれた方が村としてはありがたいしさ」

僅かに首を傾げて、ルリはリオの顔を横から窺った。

「ありがとうございます。少しでもこの村の役に立てているなら嬉しいですね」

そんなルリの言葉は本心から告げているように感じられた。

まるで出来の良い弟を信頼するように。

だから、気恥ずかしそうに、リオは礼を言った。

「おい」

すると、いきなり、後ろから、友好的とは言い難い声で話しかけられた。

二人が後ろへ振り向く。

そこに立っていたのは、リオよりも少し年上の少年だった。

歳は十六、十七といったところか。

「長老とルリはお前のことを認めたみたいだけど、俺はお前のことを認めてなんかいないからな！」

と、姿を現すやいなや、敵意を露わにして、少年が言ってきた。

「えっと……」

目の前にいる敵意を隠そうともしない青年を見て、リオが思わず言葉に詰まる。

「いきなり何よ、シン。リオに失礼じゃない」

リオが何を言えばいいのか困っていると、リオを守るように、隣にいるルリが一歩前に出て、そんなことを言った。

リオとしては少年がどうしてこのような行動をとっているのかはある程度予想がつく。

これまでの平穏とこれまでの生活、村人達が築き上げてきたそれらを、リオという外部者が掻き乱す可能性があると考えているのだろう。

そういった平穏と生活を守りたい。

そう考えての行動だろう。

閉鎖的な社会の中ほどこういった人物は現れやすい。

そういった気持ちはある意味では正当だとは思う。

狭いとはいえ、ここは、彼らの住む大切な世界なのだから。

だから、リオは反応に困ってしまったのだ。

「っ、ルリには関係ないだろ！　そいつは余所者なんだぜ！」

ルリの言葉に、シンと呼ばれた名の少年がムキになって反論した。

「余所者も何もお婆ちゃんがこの村に滞在することを許可しているんだけど？　それに村の仕事も手伝ってくれているわよ？」

と、呆れたような眼差しで、ルリはシンを見据えた。
「っ、はっ、村の女衆はどいつもこいつもそんな軟弱野郎にヘラヘラとしやがる」
だが、リオへの嫌悪感を隠そうともせず、シンは言った。
そして、侮蔑するようにリオを睨みつける。
「あら、リオは軟弱なんかじゃないわよ。こう見えて筋肉質だし」
「なっ……、おま、そいつと……」
ある意味誤解を与えかねないルリの言葉を聞いて、シンは絶句し顔を赤くした。
（そういう意味での平穏も害されるってことか）
その反応を見て、なんとなく、リオはシンが自分のことを敵対視しているもう一つの理由に想像がついてしまった。
「それにあんたドラさんに弟子入りすることが決まったんでしょ。リオは狩りの腕も良いからアドバイスとかもらえるわよ？」
リオを擁護する意図で言ったのだろうが、リオの予想が正しければその言葉は逆効果だ。
「は、はっ、だ、誰がそんな奴なんかに。すぐにそいつよりも良い狩人になってやるさ！」
案の定、シンはリオに対する対抗心をより強く抱くことになってしまったようだ。

「はは……」

剥き出しにした敵意を受けて、リオが渇いた笑いを漏らす。

そんな態度が気に食わないようで、シンは舌打ちをすると、足早にその場から立ち去っていた。

「ったく、私よりも年上のくせして、あいつは子供なんだから。ごめんね、リオ」

「ああ、自分は気にしていませんから。いきなり自分のような余所者がやって来て、彼も自らの居場所を守りたくて必死なんですよ」

去っていくシンを見つめ、そう語るリオ。

それはどこか我儘を言っている子供を見るような困った目つきだった。

「うん。……ありがとね」

安易に彼らに怒りを向けないリオの言葉が嬉しかったのか、ルリは薄く微笑んで礼を言った。

あんな男の子でもルリにとっては同じ村に暮らす仲間なのだ。

その後、すぐに家へと帰り、リオは夕飯を食べた。

そして、誰の姿もない闇夜の中、月明かりに照らされて、リオはドミニクからもらった剣を片手に素振りに励んでいた。

一日サボると、三日は響く。

そう考えて、この世界に来てからも、旅の最中も、この村に来てからも、鍛錬は極力欠かさないようにしている。

もはや鍛錬をするのは習性と言ってもいい。

幾度も剣を振り続け、身体に染みこんだ動きが鈍っていないかを

確認していく。
リオが剣を振る度に鋭く風を切る音が聞こえるが、周囲では虫が合唱を奏でるがごとく鳴き声を響かせていた。
夜霧を含んだ少し冷たい風が実に気持ち良い。
そんな風に吹かれて木々がざわめいて小さく揺れる。
一通り剣の素振りを終えると、今度は体術の動きを確認する。
飽きもせずに数十分ほど集中してそんな動きを続けていると、いつからかそんなリオのことをルリがじっと眺めていることに気づいた。

「見ていても面白くないでしょう？」

と、苦笑しながらルリがいる方に声をかける。

「あはは、やっぱり気づいていた？」

すると照れくさそうな笑みを浮かべてルリが反応した。

「お疲れ様。すごく綺麗だったからつい見惚れちゃったよ。なんか演舞みたいだね」
「そんな良いものじゃないですよ。人殺しの技術ですから」

感心したようなルリの言葉に、リオが苦笑する。

「えっと、その、リオは人を殺したことがあるの？」

すると、おずおずと、少し緊張したような声色で、ルリがそんなことを聞いてきた。

「……今のところはまだありません」

リオもやや硬い声色で答える。

「そっか……」

リオの言葉に、ルリがどこかホッとしたような声を出した。

この世界において人の命は軽い。

病気で死ぬ人もいる。

戦争で死ぬ人もいる。

盗賊に襲われて死ぬ人もいる。

だから、武装して旅をしているリオが、旅の過程で誰かに襲われ、誰かを殺していたとしても、別に驚くようなことではない。

だが、先ほどの舞のように美しいリオの動きが、人殺しのために用いられたものでないことに、どういうことかルリは安堵してしまった。

「どうしてリオは武術を学ぼうと思ったの？」

ふと、ルリの口からそんな疑問が漏れた。

あれほど素晴らしい動きだったのだ。

素人目に見ても、きっと才能や生半可な努力だけで到達できるようには思えなかったからこそ、その理由が気になった。

「はは、小さい頃の男の子なら、誰でも一度は考えるようなすごく単純な理由ですよ」

と、苦笑しながら、リオは言った。

「男の子なら？」

そんなリオに、ルリが不思議そうに尋ねた。
「好きな子がいて、その子を守る力が欲しいって考えたんですよ」
と、照れたように言った。
「へぇ〜、リオ好きな子がいるんだ」
興味深そうにルリが尋ねる。
「はい、います」
力強い意思を感じさせる言葉だった。
そうやって何ら臆すことなく好きと言ってのけるリオに、ルリが感心したような視線を向ける。
「すごく良い理由だと思うわ。今その子はリオの故郷にいるの？」
「ええ、たぶん。幼いころに離れ離れになってしまって今はもう疎遠なんです。仮に戻れたとしても会えるかどうか……」
そう言うリオの顔はどこか寂しそうだと、ルリは思った。
だが、それに触れることは少し憚(はばか)られた。
「その子に会えないのに、まだリオは武術を続けるの？」
「……長年かけて築き上げてきたものを失うのが怖いんです」
どこか遠くを見つめるように、リオは言った。
本当に失うのが怖いのは幼馴染との繋がりだ。
リオが武術を習い始めたのは幼馴染のためだ。
自分で勝手に舞い上がって始めたものだが、それを止めてしまう

と彼女との繋がりが本当に失われてしまうのではないかと恐れていた。

「なら、きっと会えるんじゃないかな。リオが会いたいと信じている限り可能性は皆無じゃないもん！」

リオの不安さをそれとなく感じとり、ルリが励ます様に言った。

「そう、ですね。ありがとうございます」

真摯なルリの言葉に、リオは薄く笑う。

「身体も動かさないのにいつまでも外にいると冷えます。そろそろ戻った方がいいですよ」

季節は秋前とはいえ、夜風は既に冷たい。

特に運動もしないのに外に居続けるのは少し寒いだろう。

「うん。明日も早いしそろそろ寝ようかな」

リオの言葉にルリは頷いた。

そして、本当に肌寒さを覚えたのか、体を寄せるように身を縮こませる。

「ええ、おやすみなさい」

「おやすみ。リオも遅くまで起きていちゃだめだよ」

立ち去るルリの後ろ姿を眺めると、リオは無意識に夜空を見上げた。

その時、偶然、一筋の流星が尾を引きながら流れていった。
その光景はとても美しくて、しばらく、リオは夜空を見上げていた。

第３４話　望まれぬ来客

季節は秋。
収穫の時期を迎えていた。
女衆が陸稲や麦を刈り取り、その後を追う様に男達が鍬を担いで地面へと振り下ろしている。
その中にはリオの姿もあった。
刈り取った陸稲の根を掘り返して、畑を耕し直しているのだ。

本当は精霊術を使えば一瞬で畑を耕すこともできる。
だが、そんなやり方は、リオがいる間しかできない一時凌ぎの方法だし、下手に周りの村人の仕事を奪うことになりかねない。
いつの間にか、剣ダコとは違ういくつものマメが、リオの手に出来ては、潰れていた。
それでもリオは一心不乱に畑を耕している。
単調な作業だが、前世で農家を手伝っていた頃の記憶を思い出し、どこか懐かしく、不思議と楽しかった。

リオが提案した農業改革のうち、農具改造については既に成果を出している。
今も何人かの村人がリオの教えた鍬を使っており、彼らはその使いやすさに感心していた。
土壌の改善については休耕地にそれを行ったため、種まきも含めて、成果がでるのは来年になるだろう。
それまでまだまだ時間はたくさんある。
そして、やることもたくさんある。

「おーい。そろそろ休憩だってさ！」

作業がある程度進んで区切りが出来たところで、ルリが大きな声で作業をしている者達に休憩を宣言した。

「はい！　今日は昼食があるよ。一人一個までだからね！　リオが持ってきてくれた塩を使って作ったから、みんなリオに感謝するように！」

普段は出ない昼食だが、今日ばかりは一人一個とはいえ塩のおむすびが振る舞われることになっていた。

ルリを含めた一部の女衆が村長宅で作ったもので、材料は村で作った共同財産である米とリオが持ってきた塩だ。

「ありがとな！　リオ！」

妻子持ちの村の男連中が、おにぎりを受け取り、ご機嫌な様子で、大声を出してリオに礼を告げていく。

「いえ」

そんな彼らにリオも笑みを浮かべて返事を返す。

「ちょっと、あんた達もリオにお礼を言いなさいよね！」

ムスっとした表情をしつつも、黙っておにぎりだけは受け取っていく独身の若い男連中を、ルリが叱りつける。

そんな彼女の言葉を聞こえないと言わんばかりに無視して、若い男達は群れになっておにぎりを頬張った。

普段よりも贅沢に使われている塩に驚き、目を見開く。

だが、その美味さがリオの所有品である塩のおかげだと思うと、

彼らは複雑な気分だった。

「ったく、あいつら子供ね。なんなのよ」

一通り村人におにぎりが行き渡ったのを確認し、最後におにぎりを受け取りに来たリオに、ルリがそんなことを言った。

「いや、まぁ自分はいずれこの村も出て行くんだし、気に食わないのも無理はないと思いますよ」

と、苦笑しながら、リオはそんな彼らを擁護するような発言をした。

「そんなことないよ。リオはちゃんと村人達に受け入れられているもん。あれはあいつらが子供だから拗ねているだけよ。ほら、一緒に食べましょ。みんな呼んでいるし」

そう言って、ルリがリオの手を引っ張り、既婚者の男達と村の女衆達が集まっている場所へと連れて行く。

ガヤガヤと談笑する中で、リオの到着を待ちわびていた若い少女達が、爛々とした声で二人を呼び、自分達の近くに座らせる。

「みなさん、まだ食べていないのですか？」

若い少女達の誰もがおにぎりに手を付けずに待っていたことに気づき、リオが目を丸くして尋ねた。

「はい！　みんなで食べた方が美味しいですから！」

と、リオよりも一つ年下の少女が、目を輝かせて、そんなことを

言ってきた。

「それは、お待たせしてしまったようで、すみません」

申し訳なさそうな表情を浮かべて、リオが軽く頭を下げる。

「え～、みんなっていうよりはリオ様と一緒にご飯を食べたいだけでしょ、サヨは」

「ち、ちがっ！　あ、いや！　リオ様と一緒に食べたくないわけじゃなくて！」

サヨと呼ばれた少女をからかう様に、他の少女が言った。

すると、サヨは顔を真っ赤にして慌て始めた。

それは小動物を連想させる愛らしい姿で、どこかラティーファのことを思い出させた。

そんな彼女の様子を、周囲の者達が微笑ましげに眺めている。

きっと、いつもこうやって周囲の者達から可愛がられているのだろう。

「まぁ、私はリオ様と一緒に食べたかったから待っていましたけどね」

と、サヨをからかった少女が言った。

「はは、ありがとうございます。でも、様はやめてください」

爽やかに、だが苦笑めいた笑顔で、リオが応える。

「ええ～。でもリオ様ってなんか高貴な感じがしますもん」

「うん、なんていうか村の男達とは物腰が違うよね。ほら、あいつ

ら今も何か睨んできてるし」
「うわ、何、あれ、感じ悪い」
「なんかさ、同じ男とは思えないよねぇ」
「比べちゃ駄目だって、リオ様に悪いもん」
「あはは、それもそうだね」

姦しく喋る少女達に一人混ざるリオ、そんな環境に居心地の悪さを覚える。
遠くから、若い男衆達が、リオのことを睨みつけているのをひしひしと感じていた。
彼らは村の若い女衆がリオをちやほやするのが気に食わないのだ。

「あ、それはそうと、リオ様の発案した農具すごい好評みたいですよ！」
「うん、うちのお父さんも褒めてました」

リオが提案し、村の野鍛冶と協力して作成した農具は、少数の人間が既に利用しており、反応は上々なようである。
そのうち壊れた物から少しずつ新しい物へと入れ替えていくことになったようだ。

「それよりも石鹸って良いですね、リオ様」
「うん！　あの匂いを嗅ぐとなんか貴族のお姫様になった気分になれるよね」

リオが作って各家庭に配布した石鹸も好反応を得ている。
衛生面を徹底させるために、外出した際には遠慮せずに使えと周知させている。
こうしたリオの功績のおかげで少しずつ村が住みやすいものへと変わり始めている。

そんなこともあって、一部の若い男衆を除いては、リオに対して非常に歓迎的な空気が出来あがっていた。
少女達の自分へのちやほやするような態度や、少年達の敵対的な態度に、少しばかり気が重くなるが、僅かでも前進できているのは確かなはずだ。

「リオ？」

そんなことを考えていると、隣に座っていたルリがリオに声をかけてきた。

「どうしたの？　ボーっとしちゃって」

不思議そうな顔をしてリオの顔を覗き込んでくるルリ。

「ええ、ちょっと考えことを。すみません」

苦笑して軽く頭を下げる。
すぐ思考に没頭してしまうのはリオの悪い癖だ。
ルリは村の少女達の中で唯一リオに対して普通に接してくれる子である。
彼女自身は知らないことだが、従姉妹というのもあるのかもしれない。
リオとしてもあまり気を使わなくて済むため、村の中での貴重な話し相手だった。

「それでさ、ここから荷馬車で一日ほどの距離に王都があるんだけどね。収穫が終わったら税として納める分以外の余剰分を都市に売りに行くことになっているんだ」
「へぇ、面白そうですね」

ルリが切り出してきた話題に、リオが興味深そうに応えた。
「本当？　それで道中の護衛にリオが付いて来てくれないかって、お婆ちゃんとドラさんが話していたんだけど、どうかな？」
「自分は別にかまいませんよ」
「じゃあお婆ちゃんに伝えて来るね」

嬉しそうに微笑むと、ルリはユバがいる方へ走り去った。
颯爽と去っていくルリの後ろ姿を眺めると、リオも作業を再開するべく立ち上がる。

「それじゃ、みなさんお仕事がんばりましょう」
「はーい」

立ち去る前に挨拶を告げると、少女達が間延びした返事をしてきた。
それから、引き続き、リオは作業に精を出した。
そのおかげか、この日の仕事は一足早く終えることができた。
ルリは今ごろ村の特産品を作る作業に取り組んでいるだろう。
帰りはもう少し遅くなるはずだった。

時間も空いたことから、先に自宅へ戻って、リオは夕飯の支度をすることにした。
家の中にはユバがいて、村人から何やら報告を受けているようである。
邪魔をしては悪いと思い、軽く挨拶をし、お茶を出してあげると、リオは料理に取り掛かった。
しばらくすると台所から良い匂いが放たれ始めた。

「相変わらず今日も良い香りだ。いつも悪いね」
すると、そこに話し合いを終えたユバが顔を出してきた。
「いえ、時間は効率的に活用した方がいいですから」
最近のルリは仕事で帰りが遅くなることが多い。
また、ユバのもとには頻繁に村人が訪ねてくる。
そこで、リオが彼女達の代わりに夕食の当番を引き受けたのだ。
三人分の料理を作るくらいならさしたる手間でもない。
そんな風に村が準備に取り掛かっている中、何やら家の近くから大きな声が響いてきた。
リオとユバが目を見合わせる。

「喧嘩かい？」

怪訝な顔で、ユバは呟いた。
今の声は明らかに怒声だった。
村人同士の喧嘩はまったくないというわけではないが、滅多なことでは起きない。
どこか訝(いぶか)しく思うのも当然だった。

「少し様子を見てきましょう」
「私も行くよ」

そう言って、玄関に近づき扉を開けると、二人は外に出た。
すると、家から少し離れた場所で、男達が二つの集団に分かれて睨み合っているのが見える。
一方は村の若い男連中、他方はリオがまったく見知らぬ若い男達であった。

人数的には村の連中が上回っているが、見知らぬ男達の中にはひときわ体格の良い大柄な男がいる。
もし素人同士の単純な殴り合いになったら、その人物が確実に大活躍するだろうという迫力を持っていた。
そして、あと一人、村の若い男達に守られるように一人の少女が立っていた。
ルリである。

いったい何があったというのか。
とりあえずリオは近づいてみることにした。

「テメェが村長宅に泊まりたいとはどういう了見だ？　ああ？」

すると、シンが怒鳴りつけるように体格の良い男を威嚇した。

「はっ、俺は客だぜ。それも余所の村の村長の息子だ。なら、村長の家に泊まるのは当たり前のことだろうが」

と、シンが睨みつけていた男が不敵な笑みを浮かべて返す。

「あぁ？　来客用の小屋で泊まりやがれ！　しかも二日は泊まるだと？　図々しい野郎だな」

対するシンは少し熱くなりすぎているようだ。

「仕方がないだろ。こっちは大事な馬車が壊れちまったんだ。今日はもうすぐ暗くなるから修理もできねぇ」

と、何やら芝居がかった口調で、男はシンに語りかける。

「とくれば明日に修理して、出発は明後日になる。つまり二泊しないといかん。当たり前のことじゃないか？　お前、馬鹿なのか？」

憐れむような表情を浮かべ、男は肩をすくめた。

「ちっ。ペラペラと図体の割に口が回りやがる。だったらなおさら来客用の小屋に泊まりやがれ。二日も村長宅に貴様みたいな奴を泊める余裕なんてねぇよ」

「ああん？　弱い奴が何をいきがってやがる？」

「ハッ、テメェが泊まるとルリの身があぶねぇって言ってんだよ！」

そんなシンの言葉に、村の若い男達も声を大きくして賛同した。

そんな様子を見て、男はニヤリと笑みを浮かべた。

「ああ、なんだぁ。お前ら、ルリの恋人でもないのにそろって独占欲か？　しまらない奴らだぜ」

と、小馬鹿にするように語る。

「んだとっ！？」

すると、火に油を注がれたかのように、村の男達の怒りを爆発させた。

「なにせ俺様は隣村の村長の次男だからな。跡取りのいないこの村でルリと結婚してゆくゆくは村長になるかもしれん。今から親睦を深めるのは当たり前のことだぜ」

今にも喧嘩が始まりかねない空気の中で、体格の良い男はさらに挑発するような言葉を投げかける。

「ふざけやがってっ！」

村の男達は今にも殴りかかりそうな雰囲気だ。
まさしく一触即発の状態である。
二人が近づくにつれて不穏な空気が伝わってくる。
ちらりと隣を歩いているユバへ視線を送ると、何やら呆れたような表情を浮かべていた。

「五月蠅いよ！　ゴン、いったい何の用だい？　とりあえずこれ以上騒ぎを起こすっていうんなら、村から出て行ってもらうよ！」

今まさに開戦の火蓋が切って落とされようとした時、ユバは一喝するようにその場にいる全員に声をかけた。

「ちっ」

大柄な男、ゴンが小さく舌打ちをする。
村の男達も不機嫌そうにユバと目をそらしてそっぽを向いた。
そんな彼らをリオはユバの隣で見渡していた。

（あの男、最初から喧嘩をするのを狙っていた……のか？）

観察するような冷たい視線を、リオはゴンへと向けた。
あの男の行動はまるで喧嘩を引き起こしたかったかのような言動だった。
ただの考えなしというのなら馬鹿で終わる。
考えがあってあのような真似を引き起こしたというのなら、何が目的なのかが問題となるが、いずれにしてもあまり性格のよろしい人間ではないようだ。

「で、喧嘩を売りに来たっていうんなら、お帰りはあっちになるけど？」

有無を言わせぬ物言いで、ユバは村の出口を指差した。

「ちっ、話は聞いていたんだろ？　収穫の余剰品と交易品を売りに行く最中なんだよ。馬車が壊れたからこの村に泊まらせてもらうぜ」

と、ゴンはユバに村に立ち寄った目的を語った。

「そうかい。この時期はふらりと行商人もやって来るからあんた達に割り当てられる小屋は一つしかないよ。どれか一つを選んで使いな」

「おいおい、俺をそこら辺の空き小屋に雑居寝（ざこね）させる気か？」

これほどのもめ事を起こしておきながら、なかなかのふてぶてしさである。

リオは呆れたように男を見据えた。

「当たり前だろ。騒ぎを起こした罰としてうちには絶対に泊まらせないからね。さっさと行っておくれ」

有無を言わせぬ厳しい顔つきで、ユバは言った。

「ちっ、わーったよ。どけ！」

ゴンが不機嫌そうに返事をする。

そのまま軽く体当たりするように、ゴンはシンを押しのけた。

身体をぶつけられ、僅かにムッとした表情を浮かべるシン。

「はっ。ざまぁねぇな。しまらねぇのはお前じゃねぇか」
だが、すぐに挑発するような笑みを浮かべて、そう言った。
「あん？　弱いのに粋がってるんじゃねぇよ」
すると、苛立った様子で、ゴンが徐にシンの首へと手を伸ばした。
そのまま首を掴むと、片腕で軽々とシンの身体を持ち上げる。
「ガッ……」
首を掴まれたシンが苦しそうにもがいた。
顔をゆがめながらゴンの腕を掴んで離そうと力を入れるが、その太腕はビクリとも動かない。
ゴンは苦しむシンを楽しそうに眺めていた。
「シン！」
ルリが慌てたような声を出して、シンのもとへ近寄ろうとする。
流石にこれは止めないと不味いと考え、リオもシンを助けようと身体を動かそうとする。
「止めな！　本当に村から出て行ってもらうよ！」
だが、二人がシンのもとへたどり着く前に、ユバがゴンを怒鳴りつけた。
するとゴンがシンの首を掴んでいた手を放す。
「おいおい。村の客に対して挑発してきたのはこいつだぜ。余所の

村の村長の息子である俺にな」
地面に崩れ落ちて、首を押さえて苦しそうにしているシンを見下ろして、ゴンが言った。
「あんたが先に挑発したんだろうが。三度目はないよ？」
温度を感じさせない冷たい声色で、ユバが最終勧告を告げる。
「はっ。わーったよ。こんな何もない寂れた村なんざ、すぐに出ていくさ」
力に物を言わせてシンをあしらったことで多少の鬱憤は晴れたのか、ゴンは捨て台詞を残してその場から大人しく立ち去った。
「シン！　大丈夫！？」
立ち去るゴンを背にして、いつの間にか駆け寄っていたルリがシンを介抱していた。
「ああ、大丈夫だ。わりぃ」
悔しそうな顔つきでシンが謝罪を口にする。
「シンが謝ることじゃないでしょ！　まったく……」
そんなシンをルリが引っ張って立ち上がらせた。
やめろよと言いながらも、満更でもなさそうな表情で、シンが立ち上がる。
ふと、リオと視線が重なると、勝ち誇ったような笑みを向けてき

た。
リオは思わず呆れたように苦笑した。
それから、ゴン達は大人しく空き家の中で休息をとっているようで、これといった騒動は起きていない。
リオ達もゴンの存在を忘れて、家で夕食を食べていた。
「おぉ、今日も美味しいねぇ～」
リオの作った食事に、ルリが目を輝かせる。
お米との相性は抜群で、箸の進みも早い。
ご満悦な表情のルリを見ていると、作った甲斐があるというものだ。
招かれざる客の訪問もあり、騒がしい一日であったが、夕食時の村長宅ではいつもの平穏が戻っていた。
一方、その頃、貸し与えられた小屋で、ゴンは男達と酒を飲み交わしていた。
机の上には、調理も施されていないツマミが、夕食も兼ねて乱雑に並んでいる。
「ルリの奴、良い女になってましたね、兄貴」
脇に控えている小柄な男が、ゴンに酒を注ぎながら、言った。
「ああ、あの強気なところがたまんねぇな。屈服させてやりたくなる」
ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべると、ゴンは注がれた酒を一気に飲み干した。

幼い頃から、短気で、乱暴で、ゴンは自分の村でも問題児として扱われていた。
なまじ体格が良く、腕っぷしが強いせいで、村人達もゴンを恐れて強く言うことができない。
本当は、長男である兄が次期村長として期待される中で、ゴンは少しでも自分に構ってほしかっただけの子供だった。
だが、表だって非難することも憚(はばか)られ、取扱いに困っているが故に放置され、やがてゴンは非常にずる賢く自分勝手な人物へと成長してしまった。
もうゴンは十六歳。
今からその性格を変えることは難しいだろう。

そして、そんな性格でも次男以下の若い男達の中にはゴンのシンパがおり、コバンザメの如く付き従って問題児グループを形成していた。
ここ数年は特にひどく、親である村長も扱いに困っているくらいだ。
今回の王都への交易も、本来ならばゴン達のような粗暴な人物に行かせていいものではない。
いつものようにゴンが我儘を言って、強引に交易のメンバーに加わっているのだ。
なので、ゴン達は物見遊山(ものみゆさん)の同行人にすぎず、交易隊の渉外役は別の男が担っている。

とはいえ、そんなゴンを一時的にとはいえ、体裁よく村の外へ出して、村人達のストレスを発散させることができるのは魅力的だった。
そこで、村長はこの時期になると毎年のようにゴンを王都への交易品の出荷へと送っていた。
その過程でゴンはルリと知り合い、彼女に目をつけたのである。

ゴンは次男であるため今の村で村長の座を継ぐことはできないが、この村に村長の跡継ぎがいないこともあって、公然と自分がその跡を継ぐと宣言するようになった。

村長は国の兵士になってみてはどうかと勧めてきているが、自分を追い出したい気持ちが透けて見えてしまった。

そんなことをしてたまるか。

俺は俺の生きたいように生きる。

その野望への架け橋となる人物がルリだった。

おまけにルリは容姿がゴンのタイプだった。

性格もどこか母性を感じさせる。

小さい頃に村長に連れられてこの村にやって来て、初めて会った時から惚れているのだ。

最初は優しくしてくれた彼女だが、自分が起こした行動のせいで既にルリからもゴンは嫌われている。

だが、そんなことはゴンには関係ない。

それならば力で振り向かせればいい。

「お、おい、あまり問題事を起こさないでくれよ」

先ほどのもめ事を見かねて、この交易隊のリーダーとして渉外役の任に就いている男が、ゴンに注意を呼びかける。

「あん？」

すると、ゴンは威嚇するような声を出した。

「ひっ、あ、いや、だから、できれば騒ぎを起こさないでくれと言っているんだ」

ギラリ、と猛禽類のような視線を浴びせられ、男は情けない声を出した。

「はっ、別に悪いようにはしねぇよ。俺があの村からいなくなった方が村の連中とって好都合なんだろ。なら、お前は王都での取引のことだけを考えてろ」

「っ……、べ、別にそんなわけじゃ」

包み隠さぬゴンの言い様に男が言いよどむ。

だが、そんな男のことはもはやゴンの意識にはなかった。

今考えているのはルリのことだけだ。

「それにしてもユバのババアは厄介なタイミングで来やがりましたね」

と、コバンザメの一人が残念そうに言った。

「ふん。シンの野郎が切れて殴り掛かって来る前にあのババアが来やがったからな」

小さく鼻を鳴らしてそう言うと、ゴンはぐびりと酒を飲んだ。

「あのまま行けば村長宅で泊まれて今頃はルリに酌をさせられたんですがね」

そう、当たり屋の真似事をして、ゴンは村長の家に強引に泊まろうと企んでいた。

あの時、シンが殴りかかってきたら一発は大人しく殴られてやるつもりだったのだ。

自分がルリにもこの村の連中にも嫌われていることは知っている。

それゆえの搦め手だった。

「まぁ、忍び込んでやっちまえばいいだけだ。大して手間は変わんねぇよ」

ゴンからすれば昨年はまだガキっぽさが残っていたが、ルリはこの一年でずいぶんと女らしい身体つきになっていた。

今は完全に食べごろだろう。

いざ事に及んであられもない姿を晒してしまえばこちらのものだ。

それでも多少反抗するようならば力で脅してしまえばいい。

夜這いという文化と既成事実を作ってしまえば勝ちという村社会の暗黙の掟から、やってしまえば自分とルリの結婚を認めざるを得ないだろう。

とはいえ、夜這いは同意を前提にした文化ではあるのだが。

そこら辺の道徳観がゴンには欠けていた。

どう料理してやろうか。

今夜は油断させるためにも大人しくしているべきだろう。

そのためにわざわざ馬車の一部を簡単に壊したのだ。

決行は明日の深夜、村が寝静まった後だ。

気丈なルリが泣く姿を想像し、ゴンは愉悦に浸った。

第３５話　新たな来客

そして、翌日、ここ最近では毎日のことではあるが、村の中は慌ただしい雰囲気に包まれていた。
収穫期となる秋は一年間でもっとも忙しい季節だ。
陸稲、麦、雑穀、野菜類、果実と作物を収穫しなければならないのはもちろん、冬が来る前に保存食も作らなければならない。
また、納税物品の仕分けをも行わなければならないし、余剰分を王都に出荷する準備もある。
加えて、来年の豊穣を祈って豊穣祭の準備もしなければならない。
さらに、秋には村へ行商人達がやって来る機会も増えてくる。
冬になると農業をすることはできなくなり、あまり外にも出歩けなくなることから、村人達は冬を乗り越えるために消耗品を買いだめするのだ。
当然、みな塩を買っていくが、基本的に行商人から買うしかない塩はちょっとした贅沢品である。だから、保存食を作るにしても塩漬けよりは乾燥や発酵させたものの方が多い。
行商人にとっては商売繁盛の季節であり、村にとっては一年を通して最も慌ただしくなる時期であった。
リオも本来ならば今日は狩りに行く日なのだが、予定を変更して午前中は農業の手伝いを行っていた。

他方で、昨日、この村にやってきたゴン達一行はすっかり鳴りを潜め、大人しく馬車の修理を行っている。
まるで昨日の騒動が嘘のようであった。

昼も過ぎて、仕事も一段落し、ユバと二人で家の中で休憩していると、家の扉を叩く音が聞こえた。

「自分が開けますね」
「すまないね」
椅子に座ったままのユバを制して、リオが素早く立ち上がって扉へと向かった。
「ああ、ウメさん。どうしたんですか？」
村の女衆のまとめ役的地位にいるウメが少し急いだ様子でそこにいた。
「リオ、徴税官としてハヤテ様がお越しになったからユバ様に報告しに来たんだ」
と、面倒見の良さそうな笑みを浮かべて、ウメが言った。
「ふむ、話は聞いたよ。どれ、じゃあ早速参るとしようかね」
広間から二人の会話を聞いていたようで、ユバが立ち上がり家の外へと歩き出す。
「ああ、リオ。今日は夕食を五人分くらい増やして作ってくれるかい？　今日来ている来客の一部が我が家で夕食を食べることになるだろうからね」
扉から出る前に振り返って、ユバがリオにそう言づけた。
「はい、わかりました。なら、少し豪勢な食事にした方がよろしいですか？　それなら午後の狩りで多めに獲物を狩ってきますが」

「おぉ、そうか。なら頼むとしようか。ありがとうね。材料が足りなければ菜園の野菜も適当に使っていいよ」

リオの申出に、にっこりとした笑みを浮かべて、ユバが応える。

「はい。行ってらっしゃいませ」

「ああ、いつもの夕食の時間にはこの家に戻ってくるよ。仕事の方も頑張っておくれ」

「承知しました」

リオに見送られてユバが外に出て行った。

容器の中に残った茶を飲み終えると、茶器を片付け、リオも再び仕事へ戻っていく。

農業の手伝いは一段落したことから、リオは午後から狩りに行くことが決まっていた。

近くの狩場を何ヶ所も周って、いつもよりも多めに獲物を狩っていく。

そんな思いもあって順調に狩りは進んでいき、少し早めに切り上げて解体作業を行うことにした。

その後、家に帰ったが、まだユバもルリも帰ってはきていない。

先に石鹸で身体にこびりついた獣と血の臭いを入念に落とすと、リオは夕食の準備をすることにした。

ユバに指示された人数分を作るとなると、合計で八人前の食事を用意しなければならない。

一度にこれだけの人数の料理を作る経験はあまりなく、久々に腕が鳴った。

メインディッシュには先ほど獲ったレンオウ鳥が良いだろう。

後は、白米、味噌汁、漬物といったところか。

頭の中で献立を思い浮かべると、リオは調理を開始した。
作り始めてからしばらくすると、広間に充満するように食欲をそそる香りが広がっていく。
そこにユバが数人の男達を引き連れて帰ってきた。

「お帰りなさい」

と、見事な接客スマイルを浮かべ、リオが入って来た者達に声をかけた。

「うん。ただいま。良い匂いだね」

室内に充満する香りに、ユバが相好を崩し挨拶を返す。
後ろにいる人間達も部屋の中の香りに食欲を刺激されたのか、好奇心に満ちた表情を浮かべていた。

「実に素晴らしい香りですな、ユバ殿」

室内の香りに食欲を刺激されたようで、ユバのすぐ後ろにいた身なりの良い青年が関心したように言った。

「ほう、なにやら見かけない少年だが……」

続けて、室内にいるリオを発見すると、青年は好奇心に満ちた視線を向ける。

「あの子はリオと言います。しばらくうちの村に滞在することになったのです」

と、ユバがリオのことを軽く紹介する。

その言葉に合わせて、いったん料理を中断し、リオは一歩前へ出た。

「初めまして。ご紹介に与(あず)かりました、リオと申します。以後、お見知りおきを」

そして、深く頭を下げて、挨拶をする。

「む、そうか。私はサガ＝ハヤテという。この村の徴税にやって来た者だ。よろしく頼む」

きりりとした顔付きを浮かべ、青年は名乗りを上げた。

ヤグモ地方では苗字を先になのる習慣があることから、サガが苗字で、ハヤテが名前となる。

質のいい生地の作務衣(さむえ)のような服の上に、見事な意匠の羽織を身に着けており、腰には二本の直刀を差している。

年齢はリオよりも何歳か年上のようである。

「はい、よろしくお願いします。サガ殿」

軽くお辞儀をして、頭を上げてハヤテを視界に収めると、何やら只者ではなさそうな風格が伝わってきた。

その立ち振る舞いからして腰に差した直刀は飾りではないだろう。

「ああ」

そして、ハヤテも、重心の位置や足の運び方から、リオが強者(つわもの)だと判断していた。

その礼儀正しさにも好印象を覚え、ハヤテは感心したような表情を浮かべる。

「さて、じゃあ少し早いけど夕飯としようかね。ルリは帰って来ているのかい、リオ？」
「いえ、ですが、そろそろ帰って来るんじゃないでしょうか？」

すでに日は暮れ始めている。
時刻はもう夕方だ。
もう仕事を終えて自宅へと帰っていてもおかしくない時間帯である。

「ただいま～！」

と、噂をすれば何とやらで、ルリが元気な挨拶をして家へと戻って来た。

「こ、これはルリ殿っ！？」

すると、それまで凛々しかったハヤテの態度が、急に落ち着きのないものになった。

「あ、ハヤテ様。お久しぶりです」

そんなハヤテに、人懐っこい笑みで、ルリが挨拶をする。

「う、うむ、久しぶりだな。元気そうで何よりだ」
「はい。おかげさまで。他の皆様もこんにちは」

どこかそわそわとしたようなハヤテに、ルリが微笑を浮かべて言った。
ついでに、そのままハヤテの部下達にも軽く挨拶を済ます。

「では、ちょっと台所に行ってきますね」
そう言い残すと、ルリは真っ直ぐとリオがいる方へ歩を進めた。
「いやぁ、外にまで良い匂いがすると思ったら、今日はいつにも増して豪勢そうじゃない」
と、リオの作った料理を眺めて、ルリがご機嫌な様子で言った。
その表情は餌を与えられるのを待っている子犬のようで、ずいぶんと空腹なようである。
「もうすぐできますから、先に手を洗ってきてください」
「うん、ありがとね。こんなに大勢の料理を一人で作るの大変だったでしょ？　お疲れ様。配膳を手伝うよ」
感謝と労いの言葉を告げて、水場で手を洗うと、ルリはリオが作った料理を個別に配膳していった。
「これは、まさかこうして貴重な肉を振る舞っていただけるとは。それもこれは保存用の肉ではないな。この人数分を用意するのは大変だろうに……。かたじけない」
その料理を見ると、驚いたようにハヤテが語った。
作られた料理は保存用の加工された肉ではなく、新鮮なものが使用されているのが一目でわかった。
狩人がいるとはいえ、こうした新鮮な肉をこの人数分用意するのはなかなかできるものではない。
「あはは、リオは良い腕の猟師ですから。今日はたくさん獲って来

てくれたんだと思います」

と、ルリがこうして新鮮な肉を振る舞える理由を教えた。

「おぉ、この肉はリオ殿が狩ってきてくれたものであったか。たしか調理もリオ殿がやったと言っていたな。男の身でありながら天晴れなものだ」

そんな説明を聞いて、ハヤテはリオを褒めちぎる。

それから、旅先で満足な料理も食べてこなかった一行は、目を輝かせて自分に配膳されていく食事を眺めていた。

配膳が完了したところで全員が席へと着く。

「今日は私が旅をしてきた中で知った異国の料理も作ってみました。どうぞお食べください」

そして、リオの言葉を皮切りに、夕食が始まった。

「サガ殿、まずはそちらのレンオウ鳥の料理から食べることをお勧めします」

と、対面に向かって座ったハヤテにリオが言った。

「ほう、食欲を増す実に良い香りだな。調理者の提案だ。では、こちらからいただいてみるとしよう」

リオの言われるがまま、ハヤテは切り分けられたレンオウ鳥の肉切れに箸を伸ばした。

「それは香草焼きといいます。少し独特な香りがするのが特徴です

ね」

リオの言葉に釣られて、ハヤテが鼻をひくつかせる。

「ふむ、たしかに……美味い！」

ほのかに鼻をくすぐる香りが何とも食欲を刺激し、その香りを堪能しつつ、ハヤテは口の中に肉の切れを入れた。

その瞬間、レンオウ鳥のジューシーな味わいが爆発し、ハヤテは目を見開いて感想を告げた。

「へぇ、ハヤテ様がそれほど仰るということは興味ありますね。どれ……」

と、その様子を横で眺めていた彼の副官が、同じようにレンオウ鳥へと箸を伸ばす。

その料理を同じように口に入れたところで――。

「っ、美味い！」

と、これまたハヤテと全く同じように感嘆の声を漏らした。

他の者たちも興味を惹かれたようで、次々とレンオウ鳥へと箸を伸ばし、その料理に舌鼓を鳴らしていく。

「どうやったらこのような味付けを出せるのだ？」

その味付けが気になったらしく、ハヤテが興味深そうに尋ねてきた。

「塩、コショウ、ローズマリーという香草、オリーブオイルと呼ば

れる油、それに蜂蜜を隠し味として使っています」
本来ならばにんにくを入れてもいいのだが、香草の香りが消えて風味が落ちると嫌う者もいる。
リオは気分次第で食べ分けるが、最初に食べてもらえるなら、風味を楽しんでもらえる方をと選んで作った。
「ふむ、塩とコショウと蜂蜜以外は聞きなれぬものばかりだな。コショウといえばトリコニアの名物香辛料ではないか。ピリっとした味わいがあると聞いていたが、なるほど……」
肉の味を噛みしめ、唸るようにハヤテは言った。
「ええ、どれも旅をしながら手に入れてきたものです」
トリコニアというのはヤグモ地方の中でも南西に位置する温暖な気候の国であり、リオはその国には行ったことがない。
だが、コショウといった香辛料はシュトラール地方の一部の国でも栽培は成功しており、精霊の民の里でも栽培されているので、リオは大量に所有している。
「なるほど。貴重な香辛料を使ってこうして料理を振る舞ってくれたこと、深く感謝する。よかったら後でゆっくりと君の話も聞かせてくれないか？」
「ええ、かまいませんよ」
「感謝する」
綺麗なお辞儀をし、ハヤテは食事を再開した。
リオも食事を始める。
すでに周囲の者たちは黙々と食事を食べており、レンオウ鳥の香

草焼きと米との相性が抜群なため、次々と箸が動いていった。
味噌汁もしっかりと味付けされており、しっかりと味噌を使っていることが覗(うかが)えた。
その料理の美味さに、ハヤテも夢中になって食べ続けているし、他の男達も黙々と料理をかき込んでいた。
やがて村の特産品の一つである醸造酒が振る舞われ、男達の酔いも少しずつ回り始めてくる。

「お前ら、そんなに大量に飲んで明日に響かせるなよ……」

と、少し顔を赤くしている部下たちに忠告するように、ハヤテが僅かに呆れたように言った。

「はは、わかってますよ。大将」

そんな彼に、部下たちは苦笑して返事をした。
少し気分を良くしているようだが、上官の前でだらしない姿を見せるわけにもいかないだろう。
彼らは節度はわきまえて飲み続けた。

その一方でハヤテは一切酒に触れる様子はない。
尋ねてみたところ、飲めないわけではないようだが、こういった任務中は宿泊先でも酒を飲まないように決めているようだ。
なかなかストイックな人物である。

「リオ殿は飲まないのか？　別に私に遠慮することはないのだぞ？」

と、酒を飲まずに自分の話に付き合ってくれる年下の少年であるリオを、ハヤテが気遣うように言った。

「いえ、この後は片づけもあります。それに日課の鍛錬もしなければいけないので」

リオも自らも酒を飲まない理由を説明した。

日中は村の仕事の手伝いに追われていることから、この村に来てからは夜に鍛練をするようにしていた。

酒を飲むのならば必ず鍛錬の後でなければならない

「ああ、やはり何か武術を修めているのだな。足の運びや重心の位置から予想はついていたが」

「はい。まぁ、たしなむ程度ですが」

「謙遜しなくていい。君くらいの年齢で一人で旅をしてきたのだ。そのことが君の強さを証明しているさ」

そう言って、ハヤテは柔らかい笑みを見せた。

獰猛な野生の動物、人に敵対的な魔物、さらには盗賊と、旅をしていれば道中に様々な危険がある。

多少、武術を嗜んでいる程度では、とても一人で旅ができるはずもない。

普通は集団を組んで旅をするものなのだから。

「先ほども言ったが、よければ君の旅の話を聞かせてくれないか？拙者もこうして村々を渡り歩いてはいるが、国と国をまたいで旅をしたことはないのでな」

興味深そうな視線を向けて、ハヤテが聞いてきた。

「ええ、自分の話でよければ――」

小さく頷き、教えても特に支障のない範囲で、リオは旅の話を語

ることにした。

「そうか。君の両親がユバ殿の古い知り合いで、彼女を探して旅をしてきたというのだな。やはり一廉（ひとかど）の人物であったようだ」

ある程度リオの話を聞き終えると、ハヤテが感心したように言った。

「いえ、身に余る評価です」

気恥ずかしさから、うっすらと微笑を浮かべて、リオは頭（かぶり）を振った。

話してみて、ハヤテはお世辞を言うタイプの人間ではないと、リオは感じている。

そういった人間からストレートに褒められるとなるとこそばゆいものがあった。

それからも少し話を続けてみると――。

「ところでリオ殿の名前はリュオという昔の王様を由来にして名づけられたものなのか？」

と、そんな質問をハヤテが投げかけてきた。

「リュオ？　いえ、わかりませんが……」

非常に響きは似てはいるが、その名前に聞き覚えはなく、リオは不思議そうな表情を浮かべた。

「ふむ、そうなのか。まぁ伝説上の王様だし、口述による簡単な伝承しか残っていない。あまり知られてもいないからな」

と、ハヤテは簡単にその王様の話をリオに語った。
千年以上前。
かつてカラスキ王国のあった地に存在した王朝に、君臨していたと伝えられる一人の王様がいた。
強くて、賢くて、優しくて、とても偉大な王様であったという。
そんな彼を慕って多くの者達が集まった。
だが、彼は頭がよすぎた。
そして、優しすぎた。
だから、彼の本当の顔を知る者はほとんどいなかった。
それでも、彼は孤独ではなかった。
彼にはたった一人の理解者がいたからだ。
だから、彼はみんなのために頑張ることができた。
しかし、その後、一度、どうしても避けることのできないたった一度の、大きな犠牲が生じた。
これまでの実績から、リュオが完璧な王様だと信じて疑わなかった者達は、その犠牲に憤怒する。
大きな期待に対する裏切りは怒りとなり、国民達は彼を徹底的に咎(とが)めた。
リュオはその失敗を謝罪をすると、責任を取って王朝の変更を宣言する。
そうして今のカラスキ王国が生まれたという。
彼の功績によって国は大きく安定しており、その少し後になって、当時リュオが出した犠牲がなければ、国が倒れかねない混乱が確実に生じていたことが判明した。
その時、彼らは初めてリュオの偉大さに気づいたという。
だが、その時にはもう、その国にリュオはいない。
彼の部下だった当時のカラスキ王国の王は、せめてもの感謝と誠意を伝えたいと、彼の功績を称えた伝承を語り継ぐようにと国民達に命令をした。

その伝承の一部は今でも残って、一部の者に語り継がれている。

「そのような王様がいたのですか。初耳です」

「まぁ実在は疑われているがな。あまり有名な存在でもない。父から初めてこの話を教えてもらった時はその王が可哀想にしか見えなかったが、最近では違うように思えるようになったんだ。いずれにしても君の名前は良い名前だとは思う……」

そういうハヤテの顔は薄く微笑んでいた。

なにやらその伝承の王様のことを気に入っているようだ。

「ハヤテ様、リオ、お茶どうぞ」

と、そこに、ルリがお茶を持ってやって来た。

「ああ、ごめんなさい。ルリさん。片づけを任せてしまって」

ハヤテと話しているうちに、ルリが最低限の片づけをしてしまったようで、申し訳なさそうに、リオが謝った。

「ううん。最近はリオに夕食を任せっきりだし、これくらいはしないとね。どうぞ、ハヤテ様」

微笑を浮かべて、そう言うと、ルリはお茶をハヤテに差し出す。

「す、すまない。いただこう！」

すると、ハヤテの動きが目に見えて固くなった。

そんな彼の様子を見て、リオは和んだ。

実直で不器用なところもあるが、ハヤテは純粋で誠実な人間だ。

聞けばハヤテはまだ十八歳で、上級武士の家の出身であるそうだ。
だというのに、家柄を笠に着て不必要に威張り散らさないところには非常に好感が持てる。
どこかの貴族達に見習わせたいくらいであった。
とはいえ、普段は凛とした物腰のハヤテだが、ルリを目の前にすると、急に初心（うぶ）な反応を見せるではないか。
彼がルリに対してどのような感情を抱いているかは明白だった。

「あはは。大したお茶じゃありませんからお口に合うかわかりませんけど」

ぱっ、と笑みを浮かべて、ルリはハヤテに笑いかけた。

「い、いや、そのようなことはない。ルリ殿が淹れてくれた茶だ。そこいらの茶とは比べ物になるまいよ」

まだ飲んでもいないうちに、ハヤテがルリの入れた茶を称賛する。

「えぇ？　村人が飲むような普通のお茶ですよ。それにまだ飲んでもいないのに。まったくもう」

過剰な称賛に困ったように、ルリは笑った。
なにやらお世辞と勘違いしているようだ。

（間違いなさそうだな）

だが、ハヤテの言動に、リオは自らの確信をさらに強める。
あれはお世辞なんかじゃなく本心だろう。
なぜなら、リオの見立てでは、間違いなく、ハヤテはルリに惚れていた。

これほどわかりやすい者はいないのではないかというくらいにだ。
だが、それも無理はない。
従兄弟のリオから見てもルリは非常に魅力的な少女だ。
見た目も性格も文句なしで、まるで野に咲く一輪の花のように力強い美しさを持っている。

村の若い男衆達の多くも競ってルリを口説こうと躍起になっている。
それゆえ、村の若い男連中のリーダー格であるシンを中心に、リオに対する対抗心はいまだに継続して燻っている最中である。
意中の異性と一つ同じ屋根の下に暮らす男がいれば嫉妬を覚えるのも無理はないだろう。
とはいえ、二人の間に彼らが疑うような事実は一切存在しない。
リオはリオで意中の相手がいるし、そのことはルリも承知している。
そして、従兄弟であることを本能的に察知しているのか、ルリはリオに対して兄弟のように接してくる節がある。
あるいは、彼女には幼い頃に亡くなった弟がいたはずだ。
もしかしたら、その弟とリオのことをどこか重ね合わせているところがあるのかもしれない。
そんなわけで、彼らの気持ちはまったくの杞憂ということになるのだ。

そんな彼らの感情をわずらわしく思う気持ちがないわけではないが、同じ男として彼らの気持ちは理解できないわけではない。
だから、リオは彼らの嫉妬を暖かく受け流していた。
とはいえ、そういったリオの態度がいけ好かないと、彼らの反感を買う一因にもなっているわけだが、そこまではリオとしても面倒を見てあげるつもりはなかった。
また、そんな彼らがルリと恋仲になるように応援してあげる気持

ちにもなれなかった。

だが、目の前にいるハヤテのことは、何となく応援してあげたいと、リオは思った。

従姉妹の将来の安定を願うのならば、下手に村の男達と結びつくくらいなら、優良物件であるハヤテと結婚した方がいいのではないかという想いもある。

しかし、リオがそう言った気持ちになっているのは、ハヤテの人柄によるところが大きい。

まだ会って間もないが、どういうわけか、彼ならば生涯ルリのことを一途に愛し続けてくれるのではないかという期待を抱くことができるのだ。

もっとも、当事者であるルリにその気があって、身分上の障害も発生しないというのが前提条件にはなるのだが。

ルリが村の中で好きな異性がいるというのならば、そちらとの恋仲を応援しなければならないだろう。

とはいえ、ルリはそろそろ結婚を考えても十分によい年齢なのだが、ルリはリオから見てもそういったことには興味が薄いように思えた。

特定の異性との浮いた話はないし、浮いた話を作ろうと近寄ってくる男達のアプローチもことごとく気づいていないくらいだ。

そのくせ誰に対しても平等に接する性格のせいで、男達の勘違いを加速させる一因になっていたりもする。

身分上の問題については、この国の武士の結婚事情に明るくないために、リオとしては何とも判断のしようがない。

だが、少なくともハヤテがルリに惚れていることは間違いない。

ならば、ささやかながらも、目の前にいる好青年を援護するのは吝(やぶさ)かではなかった。

リオはお茶を運んできたルリも話に加わるように上手いこと計らい、ハヤテに会話を振っていく。
ハヤテはぎこちない様子ながらもルリとの会話を楽しみ、時折リオに感謝の視線を向けてきた。
そんなハヤテにとっては夢のような時間は、あっという間に過ぎていき、いつの間にか寝るのにいい時間帯となってしまった。

「そろそろお開きとしましょうか」

意中のルリとの会話にもうつつを抜かしすぎず、ハヤテはきっちりと引き際を心得ていた。
そういったところがリオが好ましく思うところであった。

その後、片づけを行い、ハヤテ達が就寝できる部屋に案内すると、リオは庭先でいつものように日課の鍛錬を行うことにした。
身体能力も肉体の強化も施さず、ひたすら型を繰り返す。
稀に夜闇にまぎれて木の枝から舞い落ちる葉っぱがあれば、それを目がけて剣を振る。
そうして葉を切り刻むと、思い出したかのように型の動きに戻る。
リオの身体は火照り、白い靄のような湯気が立ち上っていた。
ミスリル製の片手剣が鋭い音をたてて空を切ると、ちょうどリオの視線の高さでピタリと静止する。

「……ふぅ」

そして、大きく息を吐くと、持っていた剣を腰の鞘に収めた。

「今日はこれくらいにするか」

修練の量に満足すると、小さく呟き、踵を返す。

その時、リオは遠くから観察するような視線に気づき、瞬時にそちらへと視線を向けた。

「……」

相手は静止しており、距離も離れている。
夜闇のおかげもあり、その姿形を視認することはできないが、確実に誰かに見られていたとは断言できる。
リオは激しく動いていたことから、相手からは遠目でもリオの物影を見ることはできたはずだ。

村の中に侵入者が入ってきた様子はない。
実は村の中には防犯のために密かにリオが侵入者探知の魔術結界を張り巡らせているのだ。
だから、外部から侵入者が来ればすぐにリオが察知することができる。
だが、魔術結界の中に誰かが入って来た反応はない。
それゆえ、リオのことを見ているのは村の内部の者となる。
すでに村人たちは寝静まった時間であるが、外出する人間が絶対にいないとまでは断言できない。

こんな夜闇の中で動いている物影がいれば、疑問に思って眺めるのも無理はないか。
そう考えて、僅かな違和感を覚えながらも、リオはそのまま家の中へと戻る。
それから身体を洗い、軽く水分を補給すると、自室へと戻り、リオは眠りに就いた。

第３６話　夜這い

時刻は少し遡る。

ハヤテ達一行が村に到着し、リオが外で狩りをしている頃、馬車の修理には一切加わらず、ゴンとその一味は貸し与えられた小屋の中で暇を持て余していた。

そこで、早くから酒を飲み始め、会話を楽しみつつも、今夜の段取りについて語っていた。

そんな中、バタン、と小屋の扉が乱雑に開かれる。

誰が入って来たのかと、ゴン達が扉のある方へ視線を向けた。

そこにいたのはまだ声変わりを終えたばかりのような年齢の少年だった。

「はぁ、はぁ……」

と、何やら息切れをしたようで、急いで小屋へと戻って来たようである。

少年はゴン達の連れ合いの中では最年少で、何かと小間使いのように扱われることが多く、今もゴン達の代わりに馬車の修理を手伝わせに行かせているところであった。

「なんだよ。もう馬車の修理が終わったのか？」

他の村の連中が来ると内密に会話がしにくくなる。

せっかくの盛り上がっていた場の空気を中断されてしまったこともあり、不機嫌そうな表情を浮かべて、ゴンが尋ねた。

「あ、兄貴、まずいですよ！　徴税官が来ましたぜ！」
と、息を荒くし、焦ったように、少年は告げた。
「あん？　徴税官だぁ？」
ゴンは訝しげな声を出した。
徴税は国の収入を支える大事な仕事だ。
だが、仕事内容は非常にきつく、必要となる能力も高いものが必要とされる。
収穫量を粉飾していないかも確認しなければならないから、相応の教養と事務処理能力が要求される。
職務内容的に村人から嫌われやすく、強い精神も要求される。
各地に無数に存在する村々を歩き回らなければならないことから、道中には盗賊、魔物、冬を前にして飢えた獣等が襲いかかってくる可能性があり、危険に対処できるだけの強さも要求される。
それゆえ、徴税官といえば教養、人格、武功とあらゆる面で優れていると判断されなければ、就くことのできない重要な役職とされていた。
そう、いわば、徴税官は文武両道のエリートのみが就くことのできる仕事の代名詞なのだ。
その認識は田舎の村に暮らすような人間にも浸透している。
だから、そんな人物が寝泊まりする家に夜這いを仕掛けるというのは、少しばかり、いや相当に無謀な行いであるといえた。
「い、いや、まずくないっすかね。徴税官ってめっちゃ強いって聞いたことありますよ……」
そんなゴンの迫力に気圧されたように、一歩後ずさって、少年は

言った。
時期的には今はちょうど徴税の季節だ。
だから徴税官がやって来てもおかしくはない。
だが、よりにもよってこのタイミングで来たというのは、今夜ゴンが行おうとしていることを考えると、決断を中止せざるを得ない程に不味い事態だった。
少年が焦るのも無理はない。

「はっ、関係ねーだろ。今夜、実行するぜ」

だが、据わった目つきで、ゴンは実行を宣言した。
傍目から、一切、ゴンに躊躇(ためら)った様子はない。

「ま、まじすか。流石に徴税官がいる家に手を出すのはやべーんじゃ……」

と、その場にいた他の男が弱気な声で言った。
その男の発言に内心で賛同しつつも、周囲にいる他の男達は、覗(うかが)うように、ゴンを見ていた。

「ああ？　別に寝静まった頃に行くんだから問題ねーだろ。寝たら徴税官だろうが武士だろうが農民だろうが同じ無防備な人間だぜ」

しかし、そんな連れ合いの男達の懸念を、ゴンはバッサリと切り捨てた。

「い、いや、まぁ、確かにそうなんすけど……」

眠ってしまえば武士だろうが、徴税官だろうが、怖くはない。
ゴンの言いたいことはつまりそういうことである。

戦いの素人である彼らからすれば、殺気や気配といった曖昧なもので、他者の存在を感知できる人外ともいうべき者達がいることなど想像もつかない。
だから、たしかに大丈夫かもしれないと、僅かに思ってしまった。
「まぁ、夜這いをかけるのは俺だしな。覗きたければ好きにしろよ。ただ、明日の朝に俺が帰って来た時に、悔しがる顔を見るのも面白れぇかもしれねぇな」
ニヤリ、と不敵な笑みを浮かべて、ゴンは男達を眺める。
言外に臆病者と言われているような気がして、男達の自尊心が刺激された。

それだけではない。
彼らは思春期の男だ。
異性に対する憧れとか、濡れ場に対する興味は、人一倍強い年頃である。
ならず者として普段から同年代の少女達から倦厭されている彼らにとっては、そういった欲求はいっそう強いものであった。
それゆえ、酒を飲んでいることもあるのだろうが、性欲が高揚し、男達は変な気分になった。
「まぁ、夜までに決めておけよ。行く時になったら起こしてやるから、せいぜい後悔しないようにな」
言って、ゴンは機嫌を良くしたような表情で、ぐびりと酒を飲みこんだ。
そして、その日の深夜、遂にその時はやって来た。
同行した村人達が眠る中で、ゴンは自分の連れ合い達だけを起こ

し、夜這いを仕掛けることを教えて回った。

「行ってくるぜ」

何やら無駄に自信にあふれた様子で、ゴンは悠々と小屋から出て行った。

「お、おい。どうすんだよ？　ゴンさん、行っちまったぞ……」

そんなゴンの後姿を見て、一人の男が上ずった声で言った。

「ど、どうするって……」

ゴクリ、と唾を飲む複数の音が小屋の中に小さく響く。
短い沈黙が小屋の中に降りた。
男達の心拍数はこの上ないほどに上昇している。

「へ、へへ……。俺は行くぜ」

すると、一人の男が徐に呟き、立ち上がった。
そのまま真っ直ぐに、小屋の外に向かって歩き出す。
残った男達は暗闇の中でお互いの目を見合わせた。

「行く……か……」

一人が動くと、二人、三人と、釣られるように立ち上がり、小屋の外へと歩き出した。

深夜ならば気づかれることもないだろう。
あのルリの濡れ場が見れる。

そう思うと、彼らは自分の欲望に逆らうことはできなかった。
そして、ゾロゾロと、彼らはユバの家に向かって夜闇の中を歩いた。
悪趣味かつ愚かにも程がある蛮行だった。

その頃、村長宅であるユバの家に忍び寄る一人の物影があった。
侵入者の足取りに迷いはない。
以前、一度だけ、村長宅に入ったことがあるため、目的の人物がいる場所はわかっていた。
だから、侵入者は迷うことなく外から目的の部屋へと向かう。
その部屋の前に来ると、侵入者は立ち止まった。

ゆっくりと木製の引き窓を開けると、ガラガラ、と、決して小さくない音が響く。
だが、この時点でルリが目覚めることはなく、寝莫蓙（ねござ）の上で、小さく寝息を立てて眠っていた。
中からルリの寝息が聞こえることを確認すると、そのまま部屋の中に入り込み、侵入者はそっとルリの側へと歩み寄る。
ニヤリ、と侵入者が悦に染まった笑みを浮かべた。

「へへ……」

布団代わりの厚手の着物をそっと剥ぎ取ると、薄い夜着を身に着けたルリが姿を現す。
その無防備な姿に、男の性欲が一気に猛りだした。

「はぁ……、はぁ……」

我慢できない、そう言わんばかりに、男はルリの身体をまさぐろ

うと乗りかかる。

「ん……っ！？」

流石に異変を察知し、ぼんやりと目を開けたルリ。

自らに大柄な人物がのしかかっていることに気づくと、瞬時に意識を覚醒させて、大声で叫ぼうとした。

だが、そんなルリの口を男が塞ぐ。

「騒ぐんじゃねぇよ。大人しくしていたら気持ちよくしてやっからよ」

キスが出来るくらいに顔を近づけて、男が言った。

そのおかげで、ルリは相手が誰なのかに気づくことができた。

あまり人を嫌うことのないルリでも唯一苦手とする男、ゴンである。

子供の頃、最初に会った時は、ルリも普通に彼と接しようとした。

だが、我儘で乱暴者なゴンに色々と嫌がらせをされ、あまり人を嫌うことのないルリもその存在が少しずつ苦手となった。

今ではそんな男が自分のことを嫁にすると公言もしていて、生理的嫌悪感すら覚えている。

「ん～！　ん、ん～！」

そんな男に襲いかかられているという事実に、ルリが必死の形相を浮かべた。

力を入れて拘束から抜け出そうとするが、ゴンの巨体を前になすすべもない。

「ちっ」

暴れようとするルリのことが癪に障ったようで、ゴンは小さく舌打ちをした。

そして、力強く、ルリの顔の真横に拳を振り降ろす。

ドシリ、と鈍い音を立てて、巨大な拳が寝莫蓙(ねござ)に食い込み、ビクリ、とルリの身体が硬直した。

「いいかっ？」

小さい声だが、迫力のある形相で、今度はルリの顔面にめがけて、ゴンが拳を振り降ろす。

だが、ルリの小さな顔にその拳が当たると思われたところで、ゴンは拳を寸止めした。

「次に暴れたら今のを腹にぶち込むぞ？」

と、至近距離から視線を合わせて、ゴンが凄む。

あまりの迫力に負けて、ルリの身体から一気に力が抜け落ち、代わりに全身が小さく震えだした。

「暴れるなよ。静かにしてろ」

微妙にアルコールの混じった臭い息がルリにぶつかり、顔を歪める。

「わかったか？　んん？　聞いてんだ。首を振れよ」

その言葉に、ルリは小刻みに顔を縦に振った。

「うっ、ぐすっ」

あまりの恐怖にルリが小さく泣き出す。

「へっ、すぐに別の鳴き声に変えてやるよ。んじゃ味見させてもらうとするか」

そして、ルリの肌着を持ち上げようとしたその時――。

「ルリ！」

慌てたような叫び声とともに、窓の外からリオが入り込んできた。

「ん、ん～っ！？」

すると、僅かだが、ルリの身体に力が戻り、くぐもった声が室内に響いた。

そんなルリの声に、リオが顔を顰める。

ルリが大柄な男に抑え込まれながら暴れようとしているのを視認すると、リオは瞬時に男との間合いを詰めた。

「なっ！？」

眼前まで迫って来た相手に、ゴンが慌てたような声を出す。

迎撃しようと、ゴンが身体の向きを変えようとしたが、その前にあっさりと腕を掴まれ、あっという間にルリの上から地面へと投げ飛ばされてしまった。

「がっ」

ふわり、とした浮遊感の後に、勢いよくゴンの身体が床に叩きつけられる。
肺の中の空気が口から漏れ、ミシリ、と床が軋み、大きな衝撃音と揺れが家中に響いた。
「がはっ、がっ、がっ、あ、ぁ、ぁは」
受け身もとることが出来ず、ゴンは呼吸困難に陥った。
そのまま胸ぐらを掴んで巨体を持ち上げると、リオは拳を思い切りゴンに叩き込む。
「がっ」
ゴンの口から痛みを訴える鈍い声が漏れる。
だが、リオはその手を止めることなく、再度、ゴンの顔面に拳を打ち込んだ。
簡単に気絶なんてさせてやるものか。
人が意識を失わない限界まで痛めつけてやる。
そして最後には殺してしまえ。
今のリオの頭の中には、負の感情が止めどない奔流のように流れ出していた。
「ぁー、っぁー、っー」
呼吸困難と相まって声にならない叫びが、ゴンの口から漏れる。
だが、リオはそんなゴンの顔をひたすら殴り続ける。
身体能力も、肉体も強化せずに、拳が痛むのも厭(いと)わずに、殴りつけていた。

「ふざけやがって！」

そう叫ぶリオの目には僅かに涙が浮かんでいた。

その様子を、ルリが怯えたように見ている。

普段ならそういったことも機敏に察するリオだが、今はそのことにすら気づかない。

それくらいに怒っていた。

暗闇の中だからか、ルリはリオが泣いていることに気づけなかった。

リオが激しく怒っていることは伝わってきても、その他にどんな感情が渦巻いているのかは、わからなかった。

だから、ルリはそんな鬼気迫るリオに怯えることしかできない。

「ま、待て！　リオ殿！　それ以上は死んでしまう！」

胸ぐらを掴んだまま、馬乗りになって殴りつけようとしたところで、リオを制止する声が響いた。

ハヤテの声だ。

死ぬ？

当たり前だ。

それだけのことをこいつはやろうとしたんだ。

ハヤテの声は耳に届いていたが、リオはそれを無視して、そのままゴンを殴ろうとした。

だが、そんなリオの拳は、ハヤテに掴まれた。

「待て、怒りはわかるが、ルリ殿が怯えている！」

焦ったように顔を動かし、視線をルリがいる方へ送り、ハヤテが言った。

「その男には後で然るべき報いを受けさせよう。だが、色々と話も聞かなければならないだろう。だから少し待ってくれ、頼む！」

強く訴えかけるような面持ちで、ハヤテが語った。

それはゴンに対する同情といった類の感情からくる行為ではない。

その証拠に、ハヤテは怒りをかみ殺したような表情を浮かべている。

だが、こんな場所でこの男を切り捨てれば、ルリの部屋がゴンの血で汚れてしまうし、ルリを怖がらせることにもなる。

そういったことに気づけるくらいに、リオに比べれば、まだハヤテはいくらか冷静だったのだ。

先にリオが動いてゴンを徹底的に痛めつけたことから、僅かに溜飲が下がったという気持ちもあった。

リオとしては最後にこのまま首が折れるくらいに全力で拳をゴンに叩き込んでやりたい。

だが、布団の上で怯えていたルリの姿が目に入ってきて――。

リオの拳を掴むハヤテの手から震えが伝わってくることに気づいて――。

ようやく、振りかぶった拳から力を抜いた。

「はぁっ」

いら立ちを発散させるように、リオは強い溜息を吐く。

この怒りを何かに八つ当たりしたくてたまらなくなった。

視界を前へ戻すと、すっかり腫れてしまったゴンの顔が映ったため、ゴンを突き飛ばすように、リオは胸ぐらを掴んでいた手を離し

た。

「がぁ」

勢いよく後頭部を床にぶつけて、ゴンの口から痛みを訴える小さな声が漏れる。

既に顔が赤く膨れ上がって、ゴンの顔は酷いことになっていた。

「ひゅー、ひゅはぁー、はぁー」

顔を殴られた衝撃と、背中から床に投げつけられたことも相まって、ゴンの呼吸は荒い。

そんな姿を見ても、今のリオに罪悪感など微塵もわかなかった。

ざまあみろ。

リオは心の中で思い切り罵った。

「ぁー、っぁー、っー」

呼吸をして肺に息を入れようと、ゴンの口から小さな呻き声のような音が漏れる。

その様子に、普段は浮かべないような暗い笑みを、リオは覗かせた。

「何事じゃ！？」

すると、その場に、騒ぎに気付いたユバとハヤテの部下達が駆けつけてきた。

「強姦魔です。ユバ殿、ルリ殿の安全を確認してください」

事態を把握しかねているユバに、ハヤテが簡潔に事情を説明した。
「なっ、……わ、わかりました」
驚きはしたものの、瞬時に状況を察知し、ユバがルリのもとへ歩み寄る。
「お前達は外で気絶している男達を拘束してこい。強姦現場の覗きをしようとした幇助者どもだ」
続けて、ハヤテは部下の男達にも冷たい声で命令を下した。
そのままハヤテは精霊術を使ってゴンの顔を治療し始める。
だが、治癒の精霊術が苦手なのか、ワザとそうしているのか、治療を止めてもゴンの顔は腫れあがったままだ。
怪我の治りが遅かったことから、おそらく前者だろう。
こんな男の治療をする気は起きない。
リオは黙ってゴンのことを見下ろしていた。
このままここにいると、いつまで経っても怒りは収まりそうにない。
その顔を見ているだけで、今も我を忘れてしまいそうなくらいに怒りが湧き上がってくる。
そんな自分の気持ちを落ち着けるために、リオは目を閉じて、深く息を吸った。
もしあの時ハヤテが止めていなかったら、リオはゴンのことを殴り殺していただろう。
それくらい、リオの中で憎悪の炎が煮えたぎっていた。

リオは強姦という犯罪に対して人一倍嫌悪感を抱いている。
幼少期に自分の目の前で母親を強姦されたからだ。
先ほど、ゴンがルリを強姦しようとした姿を目撃した時、リオの中でその時の光景がフラッシュバックしてしまった。

その瞬間――。
思い出してしまった。
人間の最も薄汚れた原始的な悪ともいえる本能と欲求を。
触れるだけで吐き気を抱くようなそれらを。
リオとしての自分が知りつつも、天川春人としての自分が今まで目を背けてきたそれらを。

そういった黒く薄汚れた人間の業を間近で見せつけられたことがあったからこそ。
自分だけは絶対にそういったものを抱かないように――。
そういったものに支配されて自制心を失わないように――。
自分がされて嫌なことは絶対に人にはしないように――。
そう考えて、リオは今まで生きてきたのだ。
これからもその決意が変わることはない。

だが――。
理屈なんて関係ない。
道徳なんて関係ない。
強者であることに踏ん反り返って弱者を弄ぶような屑だけは生かしておくべきではない。
そんな奴原（やつばら）はきちんと区別しておかなくては――。
そう、思ってしまった。

痛い目を見なければ、いや、痛い目を見ても学習しない奴らだけは、痛めつけたって、最悪殺してしまったって、かまいやしない。

奴らは図々しくも他者を食い物にして、悦に入るような連中なのだから。
そんな奴らが本能と欲求に逆らえるはずもない。
だから、今後もしそんな奴らが自分とその身内に手を出そうというのなら、反撃するのを厭(いと)う必要もない。
リオの中で何かが吹っ切れた瞬間だった。

その時、禍々（まがまが）しい何かが、リオに覗けた。
それは殺気なんて単純なものではない。
もっと深く、もっと濃くて、もっと哀しくて――。
だが、何か強い意志を秘めたものだった。

どれくらいそうしていたのだろうか。
いつの間にか思考の渦に引き込まれていたリオは、ようやく目を見開いた。

リオの前では、ハヤテが怒気の籠った形相でゴンを問い詰めている。
ハヤテとしても意中の人物が悪漢に襲われたのだ。
誠実で、正義感の強い彼ならば、その怒りは一入(ひとしお)強いものだろう。
その光景を、まるで別人のような能面を浮かべて、リオは見つめていた。

「貴様！　許さねぇ！」

相変わらず顔は腫れてしまっているが、ハヤテに治癒してもらったおかげで、ようやく普通に喋れるようになったらしい。
常人なら震えあがるような恐ろしい怒気と殺気をリオに向けて放ちながら、ゴンが言った。

「だったら？」

冷たく、凍りつくような声を出して、リオはゴンを見据えた。
ゴンのことなど、とるに足らない、まるで人を人と見なしていないような、そんな寒気を抱く目線だった。

「っ！」

それがゴンにとっては、たまらなく屈辱だった。
まるで自分の存在を全否定されたようで、これほどの屈辱を抱いたのは生れて初めてのことだった。
ぶん殴ってやりたい気持ちが今にも爆発しそうで――。

「おあああ！　はなぜぇ！」

と、自らを組み伏せるハヤテに大声を出して叫ぶ。
だが、ハヤテの拘束は完璧で、ゴンの馬鹿力でもそれを外すことはできなかった。

「哀れだな」

ちっぽけなゴンの自尊心をさらに削り取る言葉を、リオが投げかける。

「き、さま！　貴様！　絶対に許さねぇぞ！」

親の敵に遭遇でもしたかのような形相で、ゴンがリオを睨みつける。
だが、もはやゴンに興味を失ったようで、リオは視線をハヤテへと移した。

「サガ殿、聞きたいことはもう聞けたのですか？」
「あ、ああ。もう十分だ」
ぞっと寒気がした。
リオと視線が合った瞬間、ゴンの拘束のことも忘れて、ハヤテは思わず後ろへ身を引きそうになった。
だが、武士としての矜持が彼を押しとどめた。
「そうですか。で、そいつの処分は？」
それは確かにこの場においてふさわしい話題であるはずだ。
だが、なぜかそれを語るのは憚(はばか)られるような気がした。
「強姦は未遂とはいえ重罪だ。証人がいる上に現行犯だから、最悪この場で切り捨てても構わん。だが、国に突き出せば死罪か犯罪奴隷の刑を科されるだろう。他の覗き魔達は突き出してもむち打ちが関の山だろうな……」
地球に暮らす現代人からしてみれば野蛮なことこの上ないであろう。
だが、この世界においては、生命、身体、財産の安全を害する罪について、国の力を借りないで自分達で解決するのが一般的な常識として浸透している。
その方法には、和解、仲裁、決闘、死闘とあり、犯罪の種類によって対応の手段として認められる範囲も異なるが、基本的には同害報復でなければならない。
同害報復の範囲を超えない限りは、その者が人を殺したとしても罪に問われることはない。
そして、強姦罪は非常に重い犯罪として数えられており、報復の

程度として殺人も認められる重罪であった。

しかし、こういった慣習は弱者の泣き寝入りを促進する面もある。
被害者を脅してバレなければ何をしてもいい。
力の強い物が弱い物を屈服させてしまえばいい。
そういう風に考えてしまう愚か者が現れてしまうことも決して少なくない。
そういった連中に対応するために村や都市といったコミュニティを作っていくわけだが、それでも犯罪を抑止しきれるわけではない。

そこで、犯罪者を国に裁いてもらう制度も存在する。
ただし、国に犯罪者を裁いてもらうためには裁判を経なければならない。
たいてい犯罪は目撃者となる証人が存在しない場所で行われることから、犯罪者の特定と証明が難しく、国に裁いてもらうのは難しく、抑止力の程度としてはやや弱い。

だが、今回は証人が複数いる上に、国の重要な役職に就くハヤテもいる。
ゴンを国に裁いてもらうことは十分に可能であった。
犯罪奴隷の刑とは非常に悪環境な下で死ぬまで強制労働させられる刑だ。
毒ガスの発生する鉱山、獰猛な生物の暮らす地域、戦場など、碌な職場がなく、ある意味、死罪よりも辛い刑だと言われている。

「そうですか……」

リオとしてはこの場でゴンを殺してやりたかった。
もしこの場にリオとゴンの二人だけだったら、リオが殺していたはずだ。

だが、いかに自分達の手でゴンを裁くか、はたまたゴンを国に突き出して国に裁いてもらうか、それを選択するのは被害者であるルリと長老のユバだ。
自分が激情に任せて何も考えずに殺してしまえば、ゴンの村との関係で軋轢が生じる可能性もある。
一度、ゴンの村と話し合う必要もあるだろう。

ようやくリオは頭の中が冷静になってきた。
我を忘れてゴンを痛めつけたことに対する後悔はない。
だが、何も考えずに殺しを視野に入れてしまったことには、深く後悔と反省の念を抱いた。
深く息を吸い、リオが憤懣(ふんまん)やるかたない表情を浮かべる。
深く吸った息を吐くと、リオはルリの方に視線を移して――。
「ルリさん、大丈夫ですか？」
と、それまでとは人が変わったかのように、優しく、言った。
「う、うん。もう大丈夫……。ありがとうね、リオ」
戸惑ったようにルリが礼を告げる。
それはいつものリオのはずだ。
なのに、どこかルリはうすら寒さを覚えてしまった。
その様子をリオが機敏に察知する。
ああ、いけない。
今、一番辛いのは彼女なのだ。

こんなことで、ルリを怯えさせていいはずがない。

「見苦しいところを見せてしまいました。申し訳ありません。一番辛いのはルリさんだというのに……」

苦虫をかみつぶしたような表情で、リオはルリに頭を下げた。

「う、ううん。私はもう大丈夫だから……」

そんなリオに、怯えはしているものの、ルリはどこか気遣うような声をかけた。

――リオこそ大丈夫？

そう、聞きたかったが、尋ねることは憚(はばか)られた。

聞いても、リオなら、大丈夫、と答えるに違いないと思えてしまったから。

「ユバさん、サガ殿。ルリさんのことを任せても大丈夫でしょうか？」

これ以上ここにいる人間に気を使わせたくはなかったため、リオはこの場を離れることを告げた。

散々暴れて、場をかき乱して、ルリを怯えさせて、そんな自分がさっさとこの場から立ち去ることに、忸怩(じくじ)たる思いを抱く。

だが、自分がこの場にいても皆に迷惑をかけてしまうだけだ。

だから、明日までにいつもの自分に戻ろう。

そうすればいつもの平穏が戻ってくるはずだ。

そう、信じて。

自分はその平穏を護ろうと、リオは誓った。

「ああ、ここは私とハヤテ殿に任せておくれ。少しゆっくり休みなさい」
「うむ。任せてくれ。他の男達の尋問も部下達がやっている。何も心配はいらない」

そんなリオを気遣うように、ユバとハヤテが言った。

「すみません。明日の朝食は私が作りますので。ルリさんもユバさんもゆっくりしていてください」

頭を深く下げ、短くそう告げると、リオはルリの部屋から立ち去った。

部屋に戻ってから、リオが眠ることはなかった。
ほぼ一晩中、何かを悔やむように、縮こまって、リオは身体を震わせていた。

そして、翌朝、この夜の激情がまるで嘘だったかのように、リオは普段通りだった。

第37話　決意の日

翌日、村の中では昨晩の事件の話題でもちきりであった。

朝、目覚めて、外を出歩くと、村人達は広場で珍妙な光景を目にする。

広場にゴンとその連れ合いの男達が晒し者として拘束されていたのだ。

彼らは羞恥心で顔を真っ赤にしていた。

すぐ側にはハヤテの部下である男が見張っており、やって来た村人達に事の推移を説明する。

彼らがルリに対して強姦と覗きを企てたと聞くと、村人達は決まってゴン達に憤怒の視線を投げつけた。

だが、その後、リオとハヤテの活躍でルリの貞操が無事に守られたことを聞き、安堵する。

続けて、ゴンはリオに徹底的に痛めつけられ、他の者達と一緒に冬の近づいた秋の夜空の下に放置され、凍えそうな思いで夜を過ごしたということを聞き、溜飲を下げた。

正式な処罰は今後の話し合いで決めることになるが、いずれにしても主犯のゴンには決して軽くない罪が科されることになるだろう。

その日、村人達は、リオとすれ違うと、そろって良くやったと声をかけた。

ゴンが行ったのは夜這いだ。

それは、性交を目的として、男が夜中に寝ている女のもとを訪れて求婚する、という村社会にはよくある風習である。

お互いの信頼関係があることを前提に、夜這いされた女が性交を承諾すれば婚約関係が成立する。
だが、女性が断った場合は大人しく男は帰らなければならない。

今、リオがいるカラスキ王国は、シュトラール地方とは異なり、一夫一妻制度の国である。
例外は世継ぎを生まなければならない極一部の特権階級にしか認められていない。
だから、一度、男女間で既成事実を作ってしまうと、よほどの理由がない限りは、その相手と添い遂げなくてはならないという暗黙の慣習がある。
それだけに未婚の女性が処女であるという事実は重い。
それは生涯ただ一人の異性に捧げるべきものという社会的認識が共有されているのだ。
それゆえ、カラスキ王国において、強姦は殺人や放火と同列に語れる重大な犯罪であった。

ましてや、夜這いにおいて強姦を仕掛けるなど、許されざる悪行として忌避されるべき行為である。
今回、ゴンは脅迫を行い、夜這い制度を利用し、ルリに強姦の事実を秘して同意が存在したことを認めさせようとしていたのである。
彼の犯した罪が重いのは明白だ。

幸い今回の事件は未遂で済んだことから、ルリの貞操が奪われることはなかった。
だが、心に深い傷を負ってしまったことは絶対に許すことはできない。
今、広場に晒されているゴンに、自らの腕力に自惚れて道を踏み外したゴンに、同情の視線を向ける者などいない。

ゴンとその他の覗き魔達が仕出かしたことに対する処罰については、ゴンの村の村長を呼び出して話し合いの席を持つことが決められた。
現在、この村に滞在していた者達に、一度帰還して村長を呼びに戻らせている。
数日後には話し合いをしてゴン達の処罰を決めることになるだろう。
話し合いの末にどのような処罰を加えるかは決まっていないが、強姦をした者が和解や仲裁で慰謝料のみで済んだという話など聞いたこともない。
自分達の手で裁くにしろ、国に突き出して裁いてもらい犯罪奴隷にするにしろ、ゴンの未来は明るくないだろう。
それに、もし裁判を行うというのであればハヤテが証人になるということを確約してくれている。
ゴンの処罰はほぼ決まったようなものであった。

村の中に噂が広まっている頃、ユバの家では朝食を食べ始めるところであった。

「さぁ、みなさん、食べましょう。朝食ですよ」

努めて、明るく、リオが告げた。
まるで憑き物が落ちたように、昨日の激情が嘘であったかのように、リオは普段通りであった。

「う、うん……」
「う、うむ……」
「あ、ああ……」

暗闇の中とはいえ、昨晩のリオの様子を目の当たりにしていたこ

とから、ルリ、ハヤテ、ユバの三人は、戸惑ったように返事をした。
自らの態度が彼女達を困惑させている。
そのことを、リオは、いつもの如く、機敏に察した。
思わず後ろめたさから顔を歪めてしまいそうになる。
だが、リオは何とか苦笑することで誤魔化した。
自分達が表面上だけでも元通りの関係になるには、今、ここが最大のチャンスだと思ったから。

「みなさん昨日は取り乱してしまい本当に申し訳ありませんでした」

昨晩の件について、何の謝罪もせずにうやむやにしてして終わらせることができるとは、リオも思ってはいない。
困惑、不信、心配、どのような感情を抱せてしまったにしろ、リオが彼女達に大きな迷惑をかけてしまったことに違いはないのだ。
特にルリに対してかけた迷惑の程は量り知れない。
ゴンに襲われて怯えていたところに、助けるどころか、追い打ちをかけるように場をかき乱して怯えさせてしまったのだから。
だから、今、このタイミングで、きっちりと彼女達に謝罪を行うつもりだった。
その謝罪の念に嘘はない。

できれば今後とも彼女達とはいつも通りの関係を構築したい。
心の中に僅かな疑惑や心配が残るかもしれないが、少なくとも表面上だけは日常を取り戻したかった。
迷惑をかけてしまったのは自分だから、自分からその関係を修繕するように積極的に動かなければならない。
リオはそう思った。

リオの謝罪はいきなりの不意打ちでしかなかったが、その勢いは大切だった。

下手に腫れ物に触れるような対応をしても、余計な心配をかけてしまうだけだろうから。

「はぁ……、ルリが大丈夫だというのなら今は私から言うこと何もないよ」

「そうだな。ルリ殿が許すというのなら拙者からも何も言うことはない。あの時、リオ殿が殴っていなかったら、拙者も自分の怒りを抑えられていたかはわからぬしな」

小さく溜息を吐くと、ユバがルリに視線を送りながら言った。

ハヤテもそれに続く。

「リオは……もう大丈夫なの？」

どこか心配するような、それでいて核心に触れるのを躊躇(ためら)うように、ルリは尋ねた。

「はい。自分のことよりもルリさんに迷惑をかけたことが問題です。昨日は怯えさせてしまい申し訳ありませんでした」

自分の件については語ることはなく、言って、床に頭が付いてしまうのではないかというくらいに深く、リオは頭を下げる。

「う、ううん。リオは私を助けてくれたんだし……。その、確かに少し怖かったけど、リオは私のためにあんなに怒ってくれたんだと思うし。だから、私は大丈夫だよ」

僅かに口ごもりながら、ルリが言った。

まだ、どこかぎこちなさは残っている。

完全に元通りというわけにはいかないのだろう。

当たり前だった。
彼女の心境がいかなるものなのかについて、リオは知りようがない。
だが、決して良い状態でないことはたしかである。
これも自分の行為がもたらした罪の一つだ。
その罪をリオは背負わなければならなかった。
リオは改めて自分の行った行動の責任の重さを感じ取る。
「本当に申し訳ありませんでした」
強い謝意を感じさせる声で、今一度、リオは謝罪の言葉を口にした。
あとは今後の行動で彼女達の信頼を取り戻すしかない。
それから、一同は食事を開始し、何とか平穏な朝の風景を覗(のぞ)かせることとなった。

食事を食べた後は、ハヤテは午前中には次の村へと向かわなければならず、税となる作物を馬車に積み込む作業を指揮しに行った。
他方で、リオは村の仕事を手伝いに外へ出る。
そんな中、ユバの計らいにより、ルリは今日の仕事は休むこととなった。

ハヤテの出発の準備が整ったところで、村の中に連絡がいきわたり、リオやルリはその見送りにと村の広場に集まった。
別れの挨拶を交わすにあたって、ハヤテはリオへと声をかけてきた。
「その、リオ殿にはルリ殿のことを気にかけてやってほしいのだが、頼めないだろうか？」

と、どこかやるせない心残りを抱いているような表情で、ハヤテが言った。
ハヤテとしてはルリのことが心配で仕方がないが、国から課された大切な職務を放棄することもできない。
それゆえ、リオに頼むことしかできない無力さに、心を締め付けられているのだろう。
その言葉にはとても真摯な想いが込められていた。

「ええ、もちろんです」

そんなことは、頼まれるまでもなく、当たり前のことだ。
リオは即座に力強く返答した。

「彼女は何やら昨晩のリオ殿のことを気にかけていたようだ。まだ出会って間もない拙者が聞くことでも言うことではないのかもしれないが、あまり彼女に心配をかけないでやってくれ」
「はい……。心して気をつけます」
「うむ、かたじけない。リオ殿とはまた語らいたい。いずれ逢おうではないか」

ハヤテは安らかな笑みを浮かべた。
リオは深く頭を下げる。
そして、固い握手を結んだ。

「ハヤテ様」

と、二人の会話が終わったことを見計らい、ルリがハヤテのところへやって来た。

「これは、ルリ殿……。いかがなされたかな？」
「あの、これ……」
ルリに向けて晴れやかな微笑を浮かべるハヤテ。
すると、どこか気恥ずかしそうに、ルリは手に平に納まるほどの小さな袋を差し出した。
「これは？」
と、ハヤテが不思議そうな顔で袋を見て言った。
「えっと、お守りです。急いで作ったのでちょっとほつれちゃってますが。その、旅の安全を祈願しようと思いまして」
ルリが渡したのはこの国独特のお守りだった。
小さな袋の中に、名前を刻んで、自分の半身を現す木の板を入れておくのだ。
こうすることで持主に何か身の危険があった時に身代わりになってくれると伝えられている。
「っ、こ、これは！　かたじけない！」
その慣習はハヤテも知ってはいるが、まさかこれがそうだとは露も思っておらず、慌てながらも嬉しそうな表情を浮かべた。
感激したように、僅かに震えた手で、そのお守りを受け取る。
「い、いえ。昨日は一晩中側にいてくださりましたから。そのお礼です。こんなことしかできませんけど……」
「そのようなことはない！　最高の餞別となった。これをルリ殿と思って生涯大事にしよう！」

今にも小躍りしかねないような勢いで、何やら告白と間違えられてもおかしくない言葉を、ハヤテが力強く述べた。
もっとも、本人は自分の言っている言葉の意味に気づいていないようであるが。
そんなハヤテの様子に、照れたように、ルリは口元に微笑を浮かべた。

「拙者からも何か贈り物ができればいいのだが……。すまない。次に来る時までに必ず何かを用意しておこう。その、決して心の傷は軽くないとは思うのだが、心を強く持って生きてくれ。拙者に出来ることであれば何でもしよう。何かあったら王都にある我が家を訪ねてきてくれ」
「はい。ありがとうございます。……それでは、お気をつけて」

言って、ルリはお守りを持つハヤテの手をそっと握りしめた。
思わずハヤテは顔を真っ赤にする。
そうして硬直してしまいそうになったところに――。

「さて、私からもよろしいですかな？　ハヤテ殿、王都に戻ったらこの手紙をゴウキ殿に渡してくださりませんかな？」

と、言いながら、ユバがやって来た。
我に返ったように、ハヤテはビクリと身体を震わせ、ユバに向き合った。
その様子にユバは僅かに愉快そうな微笑を浮かべた。
軽く咳払いをして、ハヤテが差し出された手紙を受け取る。
口頭ではなく、貴重な紙を用いて手紙を書いたということは、それなりに重要な案件なのだろう。

「父にですか？　ええ、お届けいたしましょう」
「助かります。大事な手紙ですから、くれぐれも無くさぬよう気をつけてくだされ」
「承知した」
念を押すユバに、ハヤテは真面目な面持ちで手紙を受け取る。
「ご馳走も頂き、今回は誠に世話になりました。心より感謝します。それでは、また会いましょう。達者で！」
受け取った手紙を大切そうに懐に忍ばせると、ハヤテはその場にいた者達に別れの挨拶の言葉を告げた。
そのまま精悍な顔つきを浮かべたかと思うと、ハヤテは踵を返し、移動に用いる馬に乗った。
黒い体毛とその巨体から相当な迫力を放つ名馬だ。
走ればさぞ早いことだろう。
とはいえ、並走する馬車に速度を合わせるため、その歩みはゆっくりとしたものになる。
ハヤテが馬に乗ったのを確認すると、御者が馬車を走らせる。
カタカタ、と車輪が音を立てながら、ゆっくりと村の外へと向かっていった。
そんな馬に乗って去っていく彼の後姿をリオ達は微笑みながら眺めていた。

☆★☆★☆★

そして、それから二日後。
現在、村にはゴンの村の村長と交易隊の渉外役の男が呼び出されていた。
もちろん、用向きは今回の事件についての抗議とゴン達の処遇で

ある。
村の中で犯罪を引き起こしたとはいえ、彼らは余所の村に所属する者達だ。
別にそれを無視して、こちらの裁量で私刑を科すなり、国に突き出して公刑を科してもらってもよい。
だが、それでは後々苦情を言ってくる可能性もあるため、一応、相手の村に配慮したというわけだ。

「今回の件、あんたらはどう落とし前をつけるつもりだい？」

共通の認識を作り上げるために、最初に一通りの事の顛末について語ると、不機嫌さを露わにした声で、ユバが尋ねた。

「うむ、俺としてもあいつらには困り果てていた……。今回の件については申し訳ないとは思うが不幸な事故だった」
「へぇ、あんたはゴンの父親なわけだけど、その非を認めるということでいいんだね？」

妙に落ち着いたゴンの父親である村長の対応に、ユバは眉根を寄せて言った。

「それとこれとは別だろう。あいつの処遇に関してこちらから言うことは一切ない。だが、あいつももう成人した大人だ。そんなあいつの行動の責任を俺達にとれと言われても困るんだが……」
「なんだと？」

それは実に落ち着いた口調だった。
だが、言っていることは自分勝手極まりない。
そんな言葉にユバは怒気のこもった声を出した。
脇でその話を聞いていたリオはゴンの父親の言葉に内心で呆れて

いる。
確かに、成人したら自分の責任を自分で取るのは当たり前で、彼が自分勝手な人格を形成して育ったのも、最終的には彼自身の責任であることは確かだ。
だが、そのきっかけを与えてしまったのは村の大人達にも一因はある。
村の中でも腫れ物扱いされて育ってきたゴン。
それを叱ることなく放置すれば、ああいった性格になるかもしれないということは容易に予想できたはずだ。
そう、ゴンをあんな風に育ててしまったのには、後継ぎの長男ばかりを優遇してきたゴンの父親の教育方針も少なからず関係しているのだ。
それを開き直って知らんぷりをするというのはなかなかに神経の図太い男であった。
まぁ、これくらいでないと村長を務めることはできないのだろうが。

「子供は村が育てるもんだろ。そこんとこにあんたらの監督責任があるんじゃないのかい？」
「そうは言われてもな。ああいう人格になったのはあいつ自身の責任だろう。それに、あいつのことはおそらく犯罪奴隷にでもするんだろう？　そうすれば一般奴隷よりは格安となるが僅かな金も得られるはずだ。それを慰謝料代わりにするしかないだろ」

ユバの詰問する言葉にも、ゴンの父親はのらりくらりと言葉を返すだけだ。
ユバとしては大事な孫娘の一生を台無しにされかけたのだ。
僅かなはした金を受け取ったところで満足できるはずもなかった。
ゴンの父親がこれほどに腰が据わっていることからすると、最初からゴン達が問題を起こせば嬉々として切り離す心づもりで色々と

考えていたのかもしれない。
そう勘ぐってしまわずにはいられなかった。
ゴンの父親の態度に呆れていると、ちらり、とユバがリオに視線を向けてきた。
その視線を受けとめると、リオは小さく頷く。
「あなた方は彼らを交易隊の人員に組み込むことで利益を得ていたはずです。ならば彼らが引き起こした損害についてはそこから補填するのが筋でしょう。利益だけもらっておいて、損害は引き受けないなんて自分勝手な話が通じると思っているんですか？」
「その通りだね」
淡々とした口調で告げるリオ。
それにユバが深く頷いて賛同する。
そう、問題児達を被使用者として用いていた以上、ゴンの父親は彼らが他者に損害を発生させないように監督すべき義務があったはずなのだ。
従業員の出した利益は受け取るが、従業員の出した損害は受け取らないということほど、都合の良い話はない。
現代社会では当たり前の話として通じる理屈だが、この世界で通じるかどうかは不明であった。
「む、だがな……」
どうやらリオの言葉で、ゴンの父親も流石に都合の悪さを感じたようだ。
だが、言葉に詰まりながらも、責任は取りたくないといった空気が伝わってくる。
この場を設けるにあたって、リオは事前にユバと協議し、相手の対応を予測したうえで、こちらが採るべき理屈と行動を決めていた。

ここで納得してもらえないというのなら、これ以上議論を進めても平行線になるだけだろう。
そうなれば強硬手段をチラつかせるしかない。
リオとユバはゴンの父親の言葉の続きを待った。

「こちらとしても村の若い働き手達を失い、今後の村の経営に支障が生じてしまうんだ。同じ被害者として、ここは痛み分けにするべきではないのか？」

ゴンの父親の採った選択肢はそれでも責任を採らないという道だった。
自分のことを被害者呼ばわりするとは片腹痛かった。
とはいえ、今回の件で関与していた若い衆はゴンを含めて五人。
その扱いがどうなるかはまだ不明だが、ゴン以外の者は仮に村に戻ったとしても碌な目に合わないだろう。
良くて村八分が確定した生活が待ち受けているはずだ。
そんな問題児達を抱えておく選択肢を採るくらいなら、ゴンの父親は追放の道を選ぶのだろう。
そうなると村の貴重な労働力が一気に失われることになる。
それは決して少なくない損失であった。

「そうかい。ああ、とりあえず、あんたらの交易隊の出荷品は既にこちらで差押えさせてもらったよ」

そんなゴンの父親に、ユバが今まで残しておいた切り札を切った。

「な、なんだと！？　そんなの泥棒じゃないか！　ふざけるな！」

その切れ味は抜群だったようで、ゴンの父親は血相を変えて立ち上がり怒鳴った。

「まぁ、待ちな。お互いにとって都合の良い話がある」
「……どんな条件だ？」
意味深なユバの言葉に、ゴンの父親は持ち上げた腰を再び下ろす。
とりあえず話を聞く気はあるようだ。
「まず、ゴンについては犯罪奴隷とさせてもらう。この件について異論はないね？」
「ああ」
その点についてはあらかじめ心の中で承知していたことだ。
問題児とはいえ自分の子ではあるが、犯罪奴隷になるほどの問題を起こした以上はもう見限るしかなかった。
「あんたはあの男達の責任はあいつら自身がとるべきだと思っている。そういうことでいいかい？」
「そうだ……」
「なら話は早い。残りの連中については一般奴隷として売り払えばいいのさ」
ユバの言葉に、ゴンの父親は戸惑ったような表情を浮かべた。
「だが、あいつらは犯罪奴隷になる程の罪を犯したわけでもないし、皆一定の年齢に達しているぞ？　借金以外の理由で成人を奴隷として売るには本人達の同意が必要だろう。いくら覗きをしたとはいえ、そう簡単に同意するとは思えんが……」
「借金ならルリにしてるだろ。慰謝料というね」
「いや、慰謝料じゃ借金奴隷にすることはできないだろう」

何をおかしなことを言っているんだと、ゴンの父親は不思議そうな表情を浮かべて言った。

ある者を借金奴隷とするためには、お金の貸し借りがあったことを証明する証文が必要となる。

だが、慰謝料というのは厳密にはお金の貸し借りではない。

もちろん、加害者の協力があれば慰謝料の支払いをお金の貸し借りだと偽装することはできるが、加害者が被害者のためにわざわざそんな協力をすることは通常ありえない。

そもそも、契約関係にもない者に損害を発生させたところで、慰謝料の支払いを踏み倒すような者がざらにいるのだ。

だから、誰かを傷つけて損害を発生させた場合、慰謝料自体は発生するが、それは絵に描いた餅であって、慰謝料の不支払いを理由に加害者を借金奴隷にすることはできない。

「ふむ、その慰謝料はあんたも負担してるもんだという前提で話を勧めさせてくれ」

「……ああ、前提でな」

「その慰謝料はあんたとあの男達が全員で負担しているもんだ。つまり、あんたが一人でその慰謝料を支払えば、あんたは自分の負担額を除いて全額をあの連中に対して請求することができるようになる」

「まぁ、そうなるな……」

だが、そんな請求をできたとしても、ルリに害を加えようとしたあの男達に支払能力がなければ何の意味もない。

村の次男以下である彼らに大した財産があるはずがなく、慰謝料を支払えと言っても踏み倒されるのが落ちだ。

だから、ゴンの父親は自分達の村が損をしないように必死にあの男達に責任をなすりつけているのだ。

ユバが最初からあの男達に慰謝料の請求せずに、まずは十分な支払能力のある村長であるゴンの父親に対して慰謝料の請求を行っているのもそういった理由があるからだ。

「なら、あんたは自分にも慰謝料を支払うべき義務があることを認めて、それを全額ルリに支払っちまえばいい」

「何を言っているんだ……」

呆れたような声をゴンの父親は出した。

それでは話が振出しに戻ってしまう。

あの男達から回収できる財産が存在しないから、自らの慰謝料の存在を否定しているというのに、その存在を認めるどころか全額支払えとユバは言っているのだ。

その真意がゴンの父親にはまったく理解できなかった。

「そうすればあいつらはあんたに借金ができるだろ？　村長のあんたならあいつらに恩に着せてその証文を作るのも難しくないはずだ。それを上手く使えば簡単にあいつらを借金奴隷にできるさ」

「っ！」

ようやく、ゴンの父親はユバが何を言っているのかを理解した。

今まで、ユバ、ゴンの父、ルリに害を加えようとした者達は三つ巴の関係にあったが、ユバはゴンの父親を交渉相手から協力者に引きずり込もうとしているのだ。

「あんたは交易品を私達に引き渡す。その代わりにあの男達を借金奴隷にしてその代金を回収できる。別に私らが交易品の代わりにその代金を受け取ってもいいけどね。その選択は選ばせてあげるよ。あの馬鹿者共は犠牲になるけど、双方の村に損はないはずだ」

そう、犠牲になるのはルリに害を加えようとした連中だけだ。
彼らのやったことは自業自得ではある。
だが、ゴンの父親は――。
「たかが覗きだぞ……？　そこまで……」
と、自分達の村人であった問題児達に対して僅かに良心の呵責を覚えた。
「それは未婚の乙女の貞操を軽く見る発言として受け取っていいのかい？」
「い、いや……」
ユバの迫力に押されて、ゴンの父親の声が上ずる。
「それにあいつらはゴンを止めるどころか積極的に囃(はや)し立てていたそうじゃないか。ただの覗きとはわけが違うと思うがね」
「むぅ……」
「こっちは大事な孫娘に一生もんの傷を残されそうになったんだ。そう簡単に許すことはできそうにない。この条件を受け入れられないというのなら、交易品はこちらで強制的に引き受けさせてもらうよ。まぁ、そうなると必然的に村同士の抗争に発展しかねないけどね。その判断はあんたに任せるよ」
「それは……」
ゴンの父親は即座に損得を計算した。
王都で売却する出荷品によって得られる利益は翌年の村人全員の生活を支えるものとなる。
それは決して少なくない額の金銭になるだろう。
だが、働き盛りの男四人を一般奴隷として売った金と比較すると、

甲乙をつけがたい。
子供ならまだしも、全員が働き盛りの年齢であることを考えれば、かなりの値段で売ることができるはずだ。
犯罪奴隷は終身刑なので奴隷の身分から解放されることは永遠にないが、一般奴隷なら本人の働き次第で奴隷身分から脱出できる可能性も十分にある。
このまま彼らを村から追いだしてもせいぜいが野盗に身を窶(やつ)すだけだろう。
ならば、彼らの仕出かしたことを考えれば自業自得であるし、むしろ慈悲なのかもしれないと、ゴンの父親は思ってしまった。
「わかった……。なら出荷品についてはそちらに譲渡しよう」
ゴンの父親はルリを害そうとした男達を自らの手で奴隷として売却することを決めた。
そんな彼のことをリオは黙って見つめていた。
そして、ユバ達は確実に慰謝料を回収するために話を進めていった。

☆★☆★☆★

その日の夕方、リオは父と母の墓がある小高い丘へとやって来た。
ここ数日は仕事を終えると毎日のようにここにやって来ている。
そこから眺めることのできる景色は秋の色に彩られていた。
リオは、両親の石柱の前に立って、夕陽が溶けて紅く染まった空を見つめている。
数日前に、リオは我を忘れて激情した。
一晩かけて冷静さを取り戻したものの、自分の中に言葉に言い表せぬ怒りが眠っていることを、その後もリオは強く自覚していた。

それから数日をかけて、リオは自らの心と向き合い続けた。
己の心というものは測り知ることのできないものだ。
リオとしての自分は母の敵(かたき)に対して強い復讐心という感情を抱いている。
そして、天川春人としての自分も、リオの母を殺した男のことを許せないという思いを抱いている。
だが、復讐という言葉の意味が重すぎて、今までリオは、いや天川春人はもう一人の自分から逃げ出していた。
その道を選べば決して後戻りをすることができなくなるのではないかと、臆してしまっていた。
その復讐心がなるべく表面に出てこないように、天川春人としての自分はそれをずっと押さえつけてきたのだ。

だが、不謹慎な言い方になってしまうかもしれないが、先日の一件は良い機会だったのかもしれない。
この世界で生きていく決意を新たにするのに、あれ程に相応しい事件はなかったはずだ。
あの事件は母の死を思い出させ、リオの心の闇を深く切り開くものだった。

復讐なんて何も生まない。
復讐を遂げたとしても、その後に残るのは虚しさだけだ。
母を殺されたからといって、復讐を正当化するなんて、悪人を裁く特別な存在にでもなったつもりか。
それじゃあの男達と同じ存在になってしまう。
そんなエゴイストになるのは嫌だ。

それらは今まで春人が並び立ててきた綺麗事だ。
そうやって、臭い物に蓋をするように、春人は自らの復讐心が爆

発するのを抑えていた。
もう一人の自分と向き合うこともせず、リオとしての自分を否定してきたのだ。

それをしてしまったら――。
自分の醜さに気づかざるをえないから。
自分の傲慢さを自覚せざるを得ないから。
癒えない傷口を抉る行為に等しいから。
だから、春人は自分と向き合うことが怖くて仕方がなかった。
そんなことをせずに傷口を舐めたままでいたかった。
それはとても楽で心地良かったから。

怒りのままに、開き直って、自分勝手な人間になることなんてできなかった。
そんなことをすれば母の死を冒涜してしまうような気がした。
リオを産んですぐに夫を亡くして、苦しい生活の中でも自分に愛情を注いでくれた母なら、きっとそんなことはしない。
そんな理由を自分の中で作って、リオは自分から逃げてきたのだ。

ああ、自分は理性的な人間であろう。
決して自制心を失ってしまってはならない。
本能と欲求のままに行動してはいけない。
良い人である必要はないけれど、人に迷惑をかけない人になろう。
みんながそうすれば、きっと世界は上手くいくから。

それはすごく素敵なことだ。
けど、自分一人がそんなことを心がけたって、世界が上手くいくはずもない。
嫌でもそれを実感せざるを得ないくらいに、この世界は残酷だ。
善人に見える人でもシビアな価値観を持っている。

命が軽くて、悪意が満ち溢れている。
本能と欲望のまま、簡単に他人に悪意を向けてくる人間がいる。
他者に悪意をまき散らす者達と対面した時、人間はどこまでも人間とならざるを得ない。
本能と欲求のままに行動せざるを得ないのだ。
それは避けることができない運命だ。

リオも今までにそういった場面に何度か遭遇してきた。
その度にリオは本能と欲求のままに反撃を行い自分の身を守ってきた。
その度にどこか釈然としない後味の悪さを覚えてきた。

きっと、それは、自分も所詮は人間でしかないことに、心のどこかで気づいていたからだ。
突き詰めて言えば復讐心だって本能や欲望の塊である。
それは否定できない事実だが、リオはそれと向き合いたくなかったのだ。
復讐心に対してどこか忌避感を覚えていたのも、自分の醜さから目を背けていただけである。

本能と欲望のままに生きる人間を恨む自分が、本能と欲望のままに生きているなんて――。
ありえないことだった。
それはあってはならないことだった。

だが、あの日の激情の末に、リオはそんな自分の矛盾に嫌でも気づかざるをえなかった。
自分も欲望と本能のままに生きる人間なのだ、と。
それを理解した時、何かうすら寒くて、同時に、憑き物が落ちた

ような気がした。

今でも理性的な人間であろうと、自制心を強く持とうと、そういった人間であり続けたいとは思う。

しかし、自分もどうしようもなく人間なんだということに気づいた今は――。

己の醜さと向き合わないで、傷を舐めて、偽善者ぶって、そんな生き方をするのは、もう嫌だった。

この世界は残酷で、自分にとって心地良いものだけを選びとって生きていけるほどに、優しい世界ではないのだから。

だから、今後、地獄のような場面に出くわしたって、逃げ出してはいけない。

自分はどこまで行っても人間だから、その時に採るべき行動は必然と決まってくる。

その時、自分の手が汚れるのを厭(いと)うのはもう止めようと思った。

必要なら下手な手加減もしない。

己の醜さから逃げない。

それが独り善がりのエゴだと言われても、そうしよう。

どんな罪も、どんな地獄だって、背負ってみせる。

もう逃げない。

もう正当化なんてしない。

とりあえずここでの用事が済んだらシュトラール地方に戻ってみようと思った。

あの男が死んでいたら死んでいたでかまわない。

だが、もし生きているというのなら、罪を償わせる。

いい加減、前に進もう。

これは決別だ。

弱かったかつての自分との。
それが自分で決めた心からの望みだと、今なら胸を張って言える。
そう思い定めて、かつての無力さを、かつての悔しさを、この日、
リオは決意へと変えた。

第３８話　戻り始めた日常に

それは、ゴン達の引き起こした事件について、話し合いが持たれたその日の夜のことだ。

「リオ、少し話がある。いいかい？」

リオが両親の墓から戻って来て、夕食を食べると、ユバが僅かに神妙な雰囲気を纏ってリオに話しかけた。

「はい。もちろんかまいませんが……」

そんな彼女の雰囲気を察し、リオは彼女の誘いを承諾する。

「ちょっとついてきてくれ」

すると、ルリを一人で広間に残し、夕食の後片付けを任せ、リオを連れて自らの部屋へと連れていき、ユバは扉を閉めた。

その行動からして、どうやらルリには聞かれたくない話のようだ。

「いきなりすまんね。あの馬鹿者が騒ぎを起こしてここ数日は色々とゴタゴタしすぎていたからね。ゆっくりと話をする時間もなかった」

「いえ、色々とお疲れ様でした」

部屋に入り茣蓙（ござ）の上に腰を下ろすと、ユバがそんなことを言い出した。

リオが彼女を労（ねぎら）い、相槌を打つ。

ゴンがあの事件を引き起こしてからこの数日間は本当に忙しかった。
そもそも村の仕事が忙しい時期だし、ゴンの父親との示談にあたって色々と煮詰めなければならなかったというのもある。
てんやわんやの忙しさで、ここ数日はゆっくり腰を落ち着けて話をするような雰囲気でもなかったのだ。

「話というのは他でもない。リオに礼と謝罪をしたくてね」
「礼と謝罪ですか？」

ユバの言葉に、不意に意表を突かれたように、リオは不思議そうな表情を浮かべた。
どうやら、礼を言われることについても、謝罪されることについても、リオには心当たりがないようである。

（この子にとっては礼や謝罪を言われるようなことじゃないんだろうね）

そんなリオの様子に、ユバは口元に柔らかい微笑を浮かべた。
リオのことをじっと見つめてみると、息子の妻であるアヤメの面影が色濃く残っていることを改めて実感する。
人の感情に機敏で、そういったところに配慮できるところもアヤメによく似ていた。

（ゼンはなかなか不器用な息子だったが、まぁ、そこら辺も似ているといえば似ているのかね）

ゼンは寡黙で、努力家で、言葉よりも態度で自分の意思を表現する男だった。

それゆえ少しだけ誤解されやすいところがあったが、実直でゼンのことを慕う者も数多く存在した。
リオも自分のことについてはあまり多くを語る人間ではないため、ゼンの気質も少なからず受け継いでいるように感じられた。

（親と子っていうのはやっぱり似てしまうもんなのかねぇ）

リオはそんな二人の良いところを受け継いだ素晴らしい息子だ。
このくらいの年頃の少年とは思えないくらいに落ち着いてもいる。
本当に手のかからない子なのだ。

聞けばリオは五歳の時には孤児になっていたという。
そんな子がどうやって育ち、どうやってこんな果ての地までやって来たのか。
その詳細をユバは知らない。
リオの過去については漠然としか説明を受けていないのだ。
そんな彼の過去を尋ねようと思ったことは何度かあった。
だが、それは生半可な覚悟で聞いて良いことではないように思えた。
リオが漠然としか自らの経歴について説明をしなかったのも、その過去を聞いてほしくないように考えているからなのではないか。
そう考えると、ユバはなかなかリオの過去を尋ねる踏ん切りがつかなかった。
アヤメの死因についてもそうだ。
リオは彼女が死んだという事実は教えてくれた。
しかし、その原因については言葉を濁している。

いずれにせよ、リオは、凄惨な環境の中で育ち、一人で世界を渡り歩いてきたのだ。
これまでつらいことだらけの人生だったであろうことは容易に想

像ができた。
それなのに捻くれずにこうして成長しているのは只々感服するほかはない。
（私はそんな子に甘えていたわけだ。年をとるといけないねぇ。手を抜けるところはとことん手を抜いちまう）
あの日の晩のリオは明らかに様子がおかしかった。
そう、あの夜、ユバ達は普段から考えられないようなリオの激情を垣間見た。
だが、翌朝になるとそんなリオの感情は嘘のように消えていた。
深い心の闇の名残といったものが完全に払拭されており、表面上は完全にいつも通りのリオに戻っていたのだ。
まだ少年という年齢にもかかわらず、強靭な精神力を持ち合わせていることが覗えた瞬間だった。
だから、ゴンの事件が起きて以降、忙しいことを言い訳にして、ユバはリオに甘えてしまっていた。
そう、ユバは、精神的に安定していたリオよりも、不安定なルリを優先して目にかけてしまったのだ。
ルリはどこにでもあるような村で平穏に育ってきた少女だ。
早くして両親や弟を失ってはいるが、その程度のことならばこの世界ではさほど珍しくもない不幸である。
ルリはどこの村にでもいるような普通の少女なのだ。
そんな子が、平和な村で暮らしてきて、初めて他人から強く明白な害悪を向けられ、貞操を奪われそうになった。
大きな衝撃を受け、精神に深い傷を負ってしまうことは容易に想像ができた。
実際、ここ数日、ルリは精いっぱい明るく振る舞おうとしてはいるが、いまだにどこかぎこちない様子がある。

個人差はあるのだろうが、心の傷というのは耐性や対処法を備えていなければそう簡単に回復できるものではない。
それゆえユバは注意深くルリのことを気にかけてあげる必要があった。

リオとルリ。
二人ともユバにとっては大切な孫だ。
比較するような話でもないし、二人とも同じように大事に思っている。
本当は二人同時に気をかけてあげることができればいいのだろう。
だが、あいにくとユバも一人の人間に過ぎない。
日常的な村長業務の他に、事件の後処理、ルリへの配慮、リオへの配慮、何でもかんでも一人で同時にこなすことはできなかった。
だから、ユバは二人の対応に優先順位をつけてしまった。
強靭な精神力を持っているリオに甘えて、彼をこの数日間もの間にわたって放置してしまった。

あの事件の翌朝、リオが謝って来た時、完璧に普段通りだった彼に、ユバはひとまずリオのことは大丈夫だろうと判断してしまった。
あの時は朝食を食べ始める時で、客人も大勢いたことから、とてもリオの話を掘り下げて聞くような空気ではなかったというのもある。
だが、一時とはいえ、あれ程の感情の爆発を見せたのだ。
リオの過去に何があったのかは知らないが、リオだってつらかったはずだ。
精神力が強くたって、心にかかる負担は同じはずなのだ。
祖母として決してリオのことを放置していいわけがなかった。
だというのに、リオがしっかりしていることをいいことに、ユバはリオへの対応を後回しにしてしまった。

「まずは礼を言わせておくれ。ルリをゴンの魔手から救い出してくれてありがとう。それに、ここ数日、リオも大変だろうに示談の相談にまで乗ってもらった。本当に感謝している」

言って、深く、ユバは頭を下げた。

「それに、忙しさにかまけて、あんたのことを気にかけてやれなかった。本当にすまない。あんただってつらかっただろうに」

ユバが僅かに頭を上げると、彼女から苦虫を噛み潰したような表情が覗(のぞ)けた。

そんなユバに、ゆっくりと首を振ると、リオは柔らかく微笑んだ。

「お礼なんてやめてください。僕達は家族なんです。当たり前のことをした。それだけです。それにつらいってことはありませんから、謝るのもやめてください」

リオはユバを見据えてはっきりと言い放った。

自らの内面と向き合って、不思議と、今のリオの心はすっきりとしている。

事件直後は確かにつらかったが、今はそうではない。

復讐は自分が背負うべき業だ。

どんなにつらくたって自分で抱えなければならない。

あえて自分から誰かに語ろうとも思わない。

だから、ユバが自分のことを気にかけてくれなくて、不満を抱いていたなんてことは一切なかった。

自分よりもルリの方が大変だったはずだ。

なら、ルリを優先してみるのは当たり前である。

リオはそう思っている。

それに対して不満を抱くなんて、とんでもなかった。
ユバがリオと正面から視線を合わせる。
リオは微笑んだままだ。
何かを深く悟っているような、まるで聖人のような、そんな笑みだった。
大河のように、静寂だが力強い迫力を感じ、ユバは思わず息をのんだ。

「いや、だがね……」

ちらりと、ユバの頭の中にあの夜のリオの姿が浮かぶ。
あの夜のリオの激情は只事ではなかった。
まるで阿修羅にでも取りつかれたかのような、そんな鬼気めいた怒りを感じさせた。
だというのにリオはたった一晩で表面上の平穏を完全に取り戻してしまった。

とはいえ、他人の前では何事もないように振る舞ってはいても、実は取り繕っているだけというのはよくあることだ。
だから、ユバはリオもそうなのではないかと予測していた。
あの時の激情に今もなお悩まされているのではないか、と。
だが、今目の前にいるリオにはそんな様子が一切ない。
恐ろしいくらいに、リオの目には迷いがなかった。
悟りを開いているのか、過ぎ去ったことだと割り切っているのか。
それを窺(うかが)い知ることはユバにもできない。

どういうことだろうか。
聞きたいことはたくさんある。
しかし、自分にそれを聞く資格はあるのだろうか。

自分だってリオに伝えていないことはある。
リオの両親のことだ。
それは伝えることのできない理由があるからなのだが、それを伝えないままリオの過去について尋ねるのは公平ではない気がした。

いっそ教えてしまおうか。
そんなことをユバは思う。
しかし、先日、その件について伺いを立てるため、手紙を送ったばかりだ。
まずはその手紙の返信を待つべきだろう。
そうすれば十中八九あの事件の真相を伝える許可が下りるはずなのだから。
早まってはいけない。

「わかった……。だが、あんたばかりに負担を強いているのは事実だ。だから、これだけは言わせてくれ。すまなかったね」

結局、出てきたのはそんな言葉だった。
だが、その言葉に嘘はない。
揺らぐ心を抑えつけ、ユバは深くリオに頭を下げた。

「わかりました」

ユバの確固たる意思を感じ取ったのか、リオは苦笑して彼女の謝罪を受け入れた。

「今はルリもいっぱいいっぱいだろうけど、少し落ち着きを取り戻せば、あの子もあんたに謝罪すると思う。その時はあの子のことを許してやってくれないか？」
「それこそ謝られるようなことが何もないんですが……」

困惑したように、リオは苦笑した。
「あの子の態度に関してだよ」
「態度ですか？」
リオが尋ねると、ユバは苦笑してリオを見据えた。
「あの子はあんたに助けられたんだ。怯えたままあんたと接するのはあの子の本意じゃないはずさ。心のどこかで悪いと思ってはいるんだろうけど、まだ心の整理がついていないんだと思う」
「それは……」
この数日間、ルリはどこかリオに怯えたように接している。
一生懸命に普通に接しようとしてはいるが、どこかぎこちないところがあるのだ。
そのことにはリオも気づいている。
とはいえ、あの晩、リオは自分でも引くくらいに殺気をまき散らしてゴンを殴りつけていたのだ。
今まで人の闘争と一切無縁だったルリが、いまだにリオに怯えてしまっているのは無理もない。
耐性のない人間では暴力への恐怖に抗うことは難しい。
それをわかっていたからこそ、リオは機先を制して自分から彼女達に謝罪の言葉を送ったのだ。
従姉妹である彼女とぎこちない関係でいるのはリオとしても本意ではないから。
彼女に悪いところなんて何もない。
ルリは、リオに怯えつつも、あんな真似をしてしまった自分のことを心配してくれている。

実に情けないことだが、後は時間をかけて関係を修復していくしかない。
リオはそう考えていた。
「彼女に悪いところなんてありませんよ」
だから、リオはルリを咎める意思がないことを言葉にして示した。
「……あんたならそう言ってくれると思ったよ」
リオの言葉を最初から予想していたのか、ユバは苦笑しながら言った。
その表情には、嬉しそうだが、同時に、僅かに寂しそうな色が籠っている。
まるで一人前になって巣立ってく雛鳥を眺めているかのように。
ふと、ユバはこの出来すぎている孫に少しは祖母らしいことをしてやりたいという気持ちに駆られた。
何ができるのかはわからない。
これから先にその答えが見つかるのかもわからない。
何かしてやるどころか、リオには色々としてもらっているばかりなのだ。
（ダメな祖母だね、私は……）
今は亡き忘れ形見ともいうべき孫の頼もしさを実感する反面、情けなさを覚え、ユバは心の中で深く長い溜息を吐いた。

第３９話　王都へ向けて

村の交易隊が王都へ向けて出発する日がやってきた。
時刻は早朝、広場には出発する者達とそれを見送る村人達が集まっている。
すぐ側には交易品が詰め込まれた馬車が十台ほど停まっており、その中に、この村の交易品だけでなく、ゴンの村の交易品も積まれていた。
王都に向かう人員は十五名の大所帯となっており、その中にはリオの姿もある。
普段は村の中で武器と防具を装備することはほとんどないが、この日ばかりはリオも完全武装で身を固めていた。

「リオ」

積荷の確認作業を終えて、手持無沙汰になったリオを、ルリがやや堅い声で呼びかけた。
すぐ後ろにはユバがルリを見守るように立っている。
リオは二人に向けて気さくに微笑んだ。

「ルリさん、ユバさん。行ってきますね」

穏やかな口調で、二人に出発の言葉を投げかける。

「うん。気をつけてね」
「私からも同じ言葉を送らせてもらうよ。気をつけておくれ」
「はい」

二人も微笑み返し、リオに見送りの言葉を送った。
そんな二人にリオが力強い返事をする。

「それで……ね。その……」

何かを伝えたそうに、だがどうやって伝えたらいいのかと悩むように、ルリが言葉を紡ごうとした。
微妙に不思議そうな表情を浮かべ、リオはルリの顔色をそっと窺(うかが)う。

「どうかしましたか？」
「うん……。その、……ごめんなさい！」

問いかけたリオに、大きく溜めを作ると、何やらものすごい勢いで、ルリが頭を下げた。
リオが驚いた顔を浮かべる。
だが、すぐに彼女が何を謝っているのかに気づいた。
先日、ユバが言っていたことだろう。

「私、リオにひどいことしちゃったよね。リオは私のことを助けてくれたのに、リオのことを怖がっちゃって……」

申し訳なさに押しつぶされてしまいそうな、悲しげな色の漂う声で、ルリはリオに謝り始めた。
肩に力が入っているのか、その仕草は硬い。

「いえ、元を辿れば自分が見境を忘れてあの男を殴ってしまったのが原因ですから。ルリさんは悪くないです」

と、どこか困ったような笑みを浮かべて、リオは答えた。

「で、でも……」

なおも申し訳なさそうにするルリに、リオは申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「それでもルリさんは自分のことを心配してくれました。だから、やっぱり悪いのは自分です」

ゆっくりと、かみ砕いて説明するように、リオが言った。

怖がらせてしまった手前、あまり積極的に近寄ろうとしても逆にルリを怯えさせるだけなのではないかと、リオは過度にルリと接触をとってこなかった。

それでも、ルリはリオがあんなに激昂したことを心配して、怯えながらも普通に接しようとしてくれた。

つまり、お互いがお互いを気にかけて、完全に正反対な行動をとっていたということである。

リオは自分の選択した行動について反省していた。

ここまで悩ませてしまったのならば、最初からもっと彼女とコミュニケーションを図っておけば良かったのかもしれない、と。

人間関係においては、良かれと思ってしたことが、裏目に出ることもある。

やはり自分はあまり人付き合いが上手い方じゃないようだと、リオは内心で溜息を吐いた。

「ううん！　リオは悪くないよ！　本当は私がお礼を言わなければいけない立場なのに。リオのことを怖がって、それどころかリオに謝らせちゃって。本当にごめんなさい！」

リオの自分が悪いという言葉を力強く否定し、落ち着きのない風に、ルリが謝罪の言葉を告げる。

「いえ、原因は自分の配慮不足ですから。助けるにしてもやり方に問題がありました」

「ち、違うよ！　私が悪いんだって」

「いや、ルリさんが怖がるのは当然ですよ。そのきっかけを作ったのは自分です」

「だから！　リオは悪くないってば！　私が悪いの！」

互いに互いが謝罪する展開に、ルリがむっとして言った。

「ですが……」

「いいの！　私が悪いんだから！」

なおも自らに非があると述べようとするリオの言葉に被せるように、きっぱりと、ルリは断言した。

一歩も譲りそうにない強い意志が感じられ、リオは思わず目を瞬(まばた)かせる。

「わかりました……。ならお互いが悪かった。そういうことにしませんか？」

言って、確固たる意思を感じさせる目つきで見つめてくるルリに、リオは苦笑してみせた。

リオはルリを助けるにあたって怒り狂って暴れて彼女を怯えさせてしまった自分が悪いと思っている。

ルリはリオに助けられたにもかかわらず怯えてしまった自分が悪いと思っている。

お互いのことを想いあっているのに、お互いの気持ちは平行線だ。

それは少しばかり悲しい。
なら、お互いが歩み寄るために、ありきたりな言葉だが、そう言ってみるのは悪くない気がした。
「いや、……うん。そう……だね」
一瞬、そんなリオの言葉を否定しかけたが、ルリもリオの言わんとしていることは何となくわかったのか、その言葉を受け入れた。
どこか納得しないような思いが目に浮かんではいたが、口元は優しく微笑んでいた。
リオも柔らかく微笑んだ。
これまでの彼女の態度に、リオに対する誠実な想いが覗(うかが)え、胸を温かくしたのだ。
リオは、ルリにそっと歩み寄り、少し恥ずかしげに手を差し出した。
「仲直りの印に握手をしてもらってもいいですか？」
一瞬、呆然としていたルリだが、まじまじとその手を見つめると、ハッとした表情を浮かべて、その手を掴んだ。
「うん！　うん！　ごめん、ごめんね、リオ……」
目に涙を浮かべ、ルリは力強くリオの手を握った。
「こちらこそ……。帰ってきたらまたたくさんお話ししましょう。行ってきますね」
「うん、約束だよ！」

気負ったところのない風にリオがそう告げると、ルリの表情に喜色満面の笑みが浮かんだ。
そんな二人の様子をユバは後ろから微笑ましげに眺めている。
「ユバさんも行ってきます。道中での村人の方々と交易品の安全は自分が守りますのでご安心ください」
ユバから向けられている視線にどことなく気恥ずかしさを覚え、その気持ちをはぐらかすように、真面目な表情を浮かべ、リオは言った。
「うん。頼んだよ。だが、優先するのは自分の命だ。それは忘れないでおくれ」
「そうだよ。気をつけてね、リオ」
「はい」
自分のことを心配してくれる家族達に、つい嬉しさが滲(にじ)み、リオは安らかな表情を浮かべて返事をした。
こうして何やら近づきがたいアットホームな雰囲気を纏っていた三人の会話が一段落し、しばし歓談していると――。
「あ、あの！　リオ様、今日はよろしくお願いします！」
それまで遠くからその様子を窺いウロウロと歩いていたサヨが、意を決したようにリオに話しかけてきた。
いつもは村娘といった格好の彼女だが、今日ばかりは旅装束を身に着けている。
そう、王都へ向かうメンバーの中にはサヨも含まれていた。
本当はルリが同行するはずだったのだが、先日あんな事件があったばかりだ。

ユバがルリの同行を控えるように伝え、その代わりとして未だに王都へ一度も行ったことがないサヨを交易隊のメンバーに入れたというわけである。

「はい。こちらこそよろしくお願いします」

リオが落ち着いた声で挨拶を返す。

緊張した様子のサヨを、ユバとルリが温かい目で見守っていた。

「は、はい！　リオ様に迷惑をおかけしてしまうと思いますが、お兄ちゃん共々よろしくお願いします！」

「ええ。道中の安全は自分が確保しますが、非常時はこちらの指示に従ってください」

「気をつけてね、サヨちゃん」

万が一の事態が生じたときに備えて、サヨに最低限従わなければならない絶対の注意事項を説明する。

「はい！」

その言葉に、サヨは力強く返事をした。

「おい、サヨ。何を余計なことを言ってやがる。俺は自分の安全くらい自分でも守るぞ」

すると、そんな二人のやり取りを聞いていたのか、シンがやや不満そうな表情を浮かべて会話に入って来た。

リオは僅かに目を見開いた。

やや不満そうとはいえ、こうやってシンからリオに近づいてくることはほとんどなかったことだ。

いったいどういった心情の変化なのだろうか。

「お兄ちゃん、リオ様に突っかかったらダメだよ」

そんなシンに、子供に言い聞かせるように、しっかりと、僅かにきつい口調で、サヨが言った。

サヨの兄というのはシンのことである。

腕白なシンと控えめなサヨと、対照的な性格をしているが、サヨも兄に対してだけはハッキリと意見を言うようだ。

「な、なんで俺がそいつに突っかからないといけないんだ」

すました風に言ってはいるが、その声は僅かに上ずっていた。

「もう、お兄ちゃん、リオ様がルリさんを助けたのは認めてもいいって、こないだ言っていたじゃない。いつまでも子供みたいにツンケンしてるのは良くないよ」

「ば、ばか！　そういうことを言うなよ！」

自らの心の内をひけらかすようなサヨの言葉に、慌ててシンが反応する。

その様子にリオとルリは意外そうに眺めていた。

「ふ、ふん、お前がルリを守ったことは感謝している。よくやったな」

僅かに顔を紅潮させて、リオのこと睨みながら、捲(まく)し立てるように、シンが言った。

そんな子供のような彼の態度に、リオとルリが可笑しそうに微笑んだ。

「ありがとうございます」
「そうやって最初から素直になればいいのに。本当に子どもなんだから」

憎まれ口は相変わらずだが、どうやらリオのことを認めてはもらえたようだ。
からかうようにルリから声をかけられ、シンはそっぽを向いた。
「ちっ、じゃあな。俺も気にかけてやるが、何かあったらお前もサヨのことは守ってやってくれ」

ぶっきらぼうにそう言うと、背を向け、シンはその場から立ち去った。
はたから見ると恥ずかしがっているのは丸わかりだった。

「すみません。兄が素直じゃなくて」

姉と弟、まるで立場が入れ替わっているかのような目線をシンに向けながら、サヨはリオに謝った。

「男なんてのはみんな不器用なんですよ、いろいろと。心の中で思っていることと行動が一致しないなんてこともよくあります。ああいった態度に思うところがないわけでもありませんが、彼が本当に悪い人じゃないっていうのはわかりますから」
「はい……。あ、ありがとうございます」

リオの言葉に、驚いたような表情で、サヨが礼を告げる。
シンは少し誤解されやすい態度をとることが多々ある。
それに幼稚なところもある。

だから、村の者達と喧嘩をすることもよくあるが、それでもシンはいつの間にか村の若い男達の中心にいることが多い。
そんなシンが他の村の若い男達とは仲が良いのに、リオとだけはいつまでも仲がよろしくないのをサヨは嘆いていた。
なんとかできないものかと常々考えて、シンにリオの話をし続けてきたが、あまり反応はよろしくなかった。
ところが、先日、リオがルリを助けて、遂にシンがリオのことを認めるような発言をした。
これで二人も仲良くなれるかもしれない。
後はシンの不器用な性格をリオに理解してもらえれば、そう思っていた矢先に、リオがシンの性格をちゃんと理解してくれていた旨の発言をしたのだ。
それを驚くとともに、嬉しく思い、会話がなくとも男同士で互いに意思が通じているのをうらやましくも思っていた。

「よし、そろそろ行くぞ～」

そこに交易隊の隊長であるドラの声が響いた。
どうやら出発の時間のようだ。

「時間みたいですね。馬車に乗りましょう。ルリさん、ユバさん、それでは行ってきます」
「うん！　気をつけて！」
「行ってらっしゃい」

最後に再び挨拶を告げると、自らが乗車する荷馬車へと近づき、リオは御者席に座った。

「よろしくお願いします。ドラさん」
「おう！　こちらこそ頼むぜ」

道中、馬車で隣に座ることになるドラへと、リオが挨拶の言葉を送る。
すると、ドラは人の良さそうな笑みを浮かべて挨拶を返してきた。
交易隊におけるリオの役割は、交易品と村の面々、そしてこの馬車の中に載っている人物の護送だ。
リオは荷台を覆う幌（ほろ）の中を覗き込んだ。
そこにいる人物と視線が合うと、相手はリオを呪い殺すような目つきで睨みつけてきた。
そう、そこにいるのは犯罪奴隷として裁かれることになるゴンだった。

「はっ。テメェの顔を見たくて仕方がなかったぜ！　今も殺したくて仕方ねぇ！」

リオの顔を見るなり、呪詛めいた言葉をゴンは叫んだ。
ゴンはギラギラとした目つきでリオのことをじっと睨み続けている。
全身を縛られ、その巨体でも流石に身動き一つとることはできないが、相も変わらず迫力だけはある男だった。
リオが小さく溜息を吐く。
どうやら元気はあり余っているようだ。

「うるせぇなぁ。よし、じゃあ行くか。出発だ！」

荷台の中から聞こえるくぐもったゴンの怒鳴り声に眉根を寄せると、ドラは出発の合図を告げた。
空はまだ薄暗く、太陽の日差しが薄っすらと遠くの地平線を照らしている。

秋とはいえ、吐息は白く、早朝の寒さは堪えた。
そんな中、村人達に見送られ、一行は王都に向かって馬車を走らせた。

「行ってらっしゃ〜い！」

遠く後ろから村人達の声が響く。
後ろの方の馬車に乗っている者達はいまだに手を振っているようだ。
ちなみにリオは先頭の馬車に乗っている。

村と村を繋ぎ、王都へと辿り着く街道は、馬車が進めるように簡単に整備されており、馬車同士がすれ違うことができるくらいに幅も広い。
とはいえ、乗っている馬車の質がよろしくなく、石で舗装された綺麗な路面でもない以上、乗り心地は良くない。
村から王都までの距離は馬車でちょうど一日もあれば着くことのできるくらいだ。
道のりは長いわけではないが、短いわけでもない。
道中で尻を痛めないように、毛布を敷いて、リオはその上に座っていた。

「にしても傲慢な男だよな、お前も。あんなに俺を憎悪して散々ぶっ叩きやがって。暴君様かってんだ」

すると後ろの荷台からそんな言葉が響いてきた。
ゴンは先ほどから憎まれ口をずっとたたき続けている。
内容は主にリオに対する嫌味や悪意のこもった嘲笑ばかりだ。
そうやって詰(なじ)られ続けるリオだが、特に何も感じることはない。

悪意というのは人にぶつけた瞬間に目的を達成すると言われることがあるが、ゴンから何を言われても、するりとリオの心の中を通り抜けてしまうのだ。
喚く姿をうるさく感じても、哀れと思うことも、憤りを感じることもなかった。

「おい、聞きやがれ！　俺は好き勝手やって生きてきたが、テメェだって好き勝手やって生きてるって言ってんだよ！　俺とテメェは同じ穴のムジナよ！」

いくら喚いてもリオが平然と無視し続けていることから、ゴンの方も怒りが募ってきたようだ。
徐々にその声は大きくなっている。
こうしてゴンが元気でいるのは現時点では望ましいことだ。
少なくとも犯罪奴隷として売却するまでの間は、ゴンには生きていてもらわなければならない。
そうでなければルリへの賠償金も受け取れないのだから。
犯罪奴隷になった後は長く人生が続くわけでもないだろうが、その辺に関してはもはやリオも興味は持っていない。

「テメェのように善人面して、しっかりと汚いことをやりやがる人間が、俺様は一番嫌いなんだ！」

先ほどからよくもまぁ色々と罵詈雑言を思いつくものであると、リオはある意味ゴンに感心していた。
喚きたいならいくらでも喚いてもらってかまわないが、少々、声が大きい。
道中、こうして喚かれ続けても面倒だ。
そう考えて、リオはゴンに近づいた。

「あぁ？　なんだ？」

自らに近づき、ゆっくりと手を伸ばしてきたリオに、ゴンは怪訝な表情を浮かべた。

リオは面倒くさそうな表情を浮かべるだけで、自分のことをよく吠える犬のようにしか思っていない。

気分を害して怒らせてやろうと散々文句を言ってはみたが、その効果は騒音程度の嫌がらせにしかなっていないのだ。

（ふざけやがって！）

ここまで自分のことを虚仮にした人物はリオが初めてだった。

今までゴンの周りには自分に恭順するか怖がる人間しかいなかったのだ。

稀に敵意を露わにする人物はいたが、そういった連中はすべて力で屈服させてきた。

それなのにリオはゴンに無関心だ。

憎たらしい。

憎たらしくて仕方がない。

リオが気分を害して自分を殴ろうとすれば、相手の汚い部分を見透かしたように笑ってやろうと考えていたのに、そんな考えすら見透かされているような気がした。

「少し眠っていろ」

言って、リオはゴンに眠りの精霊術をかけた。

オドの操作に長けていれば抗うことはできるが、精霊術を使うことのできないゴンでは無理だ。

ほんの一瞬でゴンは眠りに落ちてしまった。

「すげぇな。それが精霊術ってやつか」
瞬きをするような時間で眠ってしまったゴンの姿に、ドラが感心したような声を出した。
「えぇ。これで静かになりますよ」
一変して静かになったことに苦笑し、リオは言った。
だいぶ強い精霊術をかけたから、王都に着くまでは眠っていることだろう。

それから、どこの馬車の中でも談笑が繰り広げられ、和やかな空気が流れていた。
道中は野生の獣や魔物に襲われる可能性もあるが、交易隊の人数はそれなりに多いので、よほど規模の大きな群れでもない限りはその危険性もあまり高くない。
それに、道中で盗賊や凶暴な生物に襲われた時に備えて、村人達は槍や短剣で簡単に武装している。
盗賊の類もよほど大規模な人数でなければ警戒して攻めあぐねるだろう。
リオも気を張り詰めない程度に簡単に周囲を警戒している。
万が一、襲撃があればすぐに気づくことができるはずだし、すぐに対応することもできる。

村を出発してから数時間が経ち、カタカタと馬車を進ませているうちに、日も昇ってきた。
雲一つない青空の下、穏やかな日差しが降り注いでいる。
周囲一帯には緑溢れる広大な草原が広がっており、遠方には山林が視界に映っていた。
秋風に吹かれながら、牧歌的な風景だなと、そんなことを思い、

リオはゆっくりと流れゆく景色を眺めていた。

第４０話　カラスキ王国王都

村を出発した日の夕方、リオ達はカラスキ王国の王都に辿り着いた。
王都の面積は六百ヘクタール程で、人口は三十万人と、ヤグモ地方では最大クラスの規模を誇る。
ちなみにシュトラール地方に存在する各国の王都と比べると、中堅の規模である。

周囲は城壁に囲まれており、城門には門番がいる。
王都に暮らす以外の人間で、行商目的で都市の中に立ち入るには、通行税を支払う必要があった。
ドラが税金を支払うと、納税証明証が発行される。
これがあれば一定期間の間は自由に王都の中を出入りすることができるのだ。

馬車を預けると、リオはドラとシンと一緒にゴンを拘束したまま兵士の宿舎に連れていくことになった.
その一方で、残りの者達は今夜宿泊する簡易宿泊所を押さえに行くらしい。
簡易宿泊所とは国が運営する集団向けの宿泊施設だ。
素泊まりになるが、大勢で宿屋に泊るよりかはだいぶ費用を安く済ませることができる。

後で合流することを約束し、他の村人達と別れると、ドラが先導し、リオとシンでゴンを囲み兵士の宿舎へと向かった。
王都の中は建物が雑多に立ち並んでおり、道の幅はそれほど広くはない。

人はそれなりに歩いており、なかなか活気がある。

だが、そんな王都の風景をゆっくりと観察するような空気でもなかった。

先ほどから隣でシンとゴンが罵倒し合っているのだ。

シンがいちいち噛みつくせいで、ゴンも気を良くしておちょくっているという悪循環に陥っていた。

精霊術で眠らされて目覚めて以降、ゴンはリオと視線を極力を合わせないようになり、リオに向けて悪態を吐くことはなくなった。

どんな心境の変化があったのかはわからないが、シンに対しては相変わらずの態度であるようだ。

悪態をつくゴンに呆れるリオ。

これから自分がどうなるかわかっていないのだろうか。

犯罪奴隷になればゴンの寿命はどんなに長くても数年で終わりを迎える。

それなのにこうして人に害悪をまき散らして悦に入る真似しかしていない。

状況を楽観しているだけなのか、それとも開き直っているのか。

いずれにしても相当な神経の図太さである。

（まぁ、どうでもいいか）

たしかに自分の身内であるルリに危害を加えようとしたゴンは許せない。

しかし、自分が手を加えるまでもなくそう遠くないうちにこの男は確実に死ぬのだ。

ゴンが何の処罰も受けずにのうのうと暮らしていけるというのならば手を下すだろうが、筋が通って確実に処罰を受けるのならばそれでいいと、リオはゴンに興味を失っていた。

「へっ、ルリの柔肌は極上だったぜぇ。シン、お前あいつの地肌に触れたことなんてねぇんだろ？」

シンが嫉妬でもすると思っているのか、ゴンがそんなことを言い出した。

安い挑発だった。

「なんだと！？」

だが、その安い挑発に乗ってしまうのがシンという青年だった。

リオはゴンがそんな真似をする暇もほとんどなかったことを知っているが、シンは、案の定、顔色を変えてゴンの言葉に食いつく。

「ふん、なんだ。お前、やっぱりあいつのことが好きなんだろ？残念だったなぁ。俺が汚した後でよけりゃ、あの女を口説いてみろよ、ははは！」

そんなシンの反応にさらに気を良くしたようで、得意げな表情を浮かべて、ゴンがケラケラと笑いながら言った。

「ちっ、テメェ……」

シンが剣呑な空気を纏ってゴンを睨みつける。

いつ殴りかかってもおかしくないような不機嫌さを身に纏っていた。

二人の言い争いは目立っているようで、かなり周囲の注目を集めている。

この国では珍しい恰好をしているリオと、縄で後ろ手に拘束されて連れられているゴンが目立っているのも大きい。

周囲から多くの視線を感じて、リオが小さく溜息を吐く。
ドラはどう思っているのか知らないが、黙々と先へ進んでいる。
「ったく、何言ってんだ、お前ら。ほら、着いたぞ」
リオが流石に注意しようかと思い始めたところで、二人の言い争いに呆れたような表情を浮かべ、ドラが目的の地に着いたことを告げた。
現在地は王都の中心部にほど近く、王城のすぐ側である。
そこには、一際、大きく、堅牢な建物があった。
どうやらこれが兵士の宿舎らしい。
「入るぞ。付いてこい」
「ちぃ！」
ゴンの首に着けられた紐を引っ張り、リオが宿舎の中へと入っていく。
ちらりと横目から冷めた目つきで眺めてきたリオと視線が合うと、ゴンは顔を歪めて小さく舌打ちをし、そっぽを向いた。
「何用だ？」
宿舎の中に入ると、兵士がリオ達に声をかけてくる。
「強姦を働こうとした犯罪者を連れて来たんでさ。証人はここにいる三人で、罪人はあいつです。徴税官のサガ＝ハヤテ様が証人になってくれると仰ってました」
落ち着いた口調でドラが手短に事情を説明する。
ハヤテの名が出ると目に見えて兵士が驚いたような表情を浮かべ

た。

「なるほど。サガ様が証人になるというのならば間違いはなさそうだな。事情を聞かせてもらってもいいか？」

「もちろんです」

兵士に案内されて、四人は取調室のような部屋へと連れて行かれた。

そこでゴンがどのように強姦を働こうとしたのかを語っていく。

「まさかサガ様が滞在している家に忍び込んで犯罪を働こうとする愚か者がいるとは……」

その蛮勇に、兵士は呆れたような視線をゴンに向けた。

話の信憑性を確かめてみるためにハヤテに聞いてみる必要もあるだろうが、証人として徴税官を用意したなどと嘘をついて他人に冤罪を着せればすぐにわかってしまうし、バレれば重罪となる。

そのこともあってドラ達の話をそのまま信じることにしたようだ。

「一応、サガ様から事情を聴く必要もあるだろうが、本人も開き直っているようだし、この場で有罪としよう。いくらで買い取るか審査してくる。少し待っていてくれ」

「承知しました」

慣れた手つきでゴンに首輪を嵌めると、兵士はゴンを引き連れて部屋の外へと出て行こうとした。

去り際にリオに向けて唾を吐きかけてきたが、リオが精霊術で見えない風の障壁を作ると、あっさりと防がれる。

「くそがっ！　人を見下したような目しやがって！」

最後の抵抗と言わんばかりに、感情を爆発させて、ゴンはリオを怒鳴りつけた。

「その余裕こいた目が気にくわねぇんだよ！」

「おい、黙れ！」

「がっ」

暴れ喚くゴンに、手に持っていた槍の太刀打で、兵士が頭を殴りつける。

なかなかの力で殴りつけたようで、ゴンは大きくバランスを崩した。

「ちくしょうがぁ……」

うなだれ、心底悔しそうに、ゴンは力弱く呟いた。

これがリオ達の聞いたゴンの最後の言葉となる。

「行くぞ」

荒っぽく縄を引っ張られると、ゴンはふらふらと兵士に連行されていった。

兵士とゴンが部屋の外に出ていき、室内に静寂が降りる。

「ま、若いうえに、体格良いし、健康状態も良いときてる。それなりの値段で買い取ってくれるだろ」

そんな辛気臭い空気を打ち壊すように、ドラが朗々とした声で言った。

「……そうだといいですね」

小さく溜息を吐き、リオは苦笑めいた表情でそれに乗っかった。

「あの野郎、少しでも高く売れないと気が晴れないぜ。クソがっ！」

だが、シンだけはゴンに対する憎悪をいまだに抑えつけられないようで、やるせない怒りを発散させるように、大声で叫んだ。

「まぁ、あいつは犯罪奴隷になるんだ。碌な死に方はできねぇさ。それにあっちの村から慰謝料もとれた。気持ちはわかるが、そこらへんにしておけ。疲れるだけだぞ」

年長者だけあって、こういった事態にはドラの方が耐性があるようだ。

ストレスに対する受け流し方を心得ている。

その言葉で不機嫌さを若干押さえたようだが、シンは終始ムスッとしていた。

三十分ほどすると、部屋の中に先ほどの兵士が一人で戻って来る。

「これが売却金だ。良かったな、最高値で売れたぞ。金銭十枚だ」

金銭は一枚もあれば王都でひと月は何もせずに一人で遊んで暮らせる価値がある。

十枚もあれば平均的な王都の家庭が一年は暮らすことができるだろう。

一般奴隷として売却すれば少なくともこの数倍の値段はついてもおかしくないのだが、犯罪奴隷は消耗品扱いされているゆえに値段は安くなってしまうのが常だった。

ちなみに、犯罪奴隷の値段は、マニュアルに従って状態を確認し、

等級を決めて、既定の代金を支払う決まりになっている。

「ありがとうございます。行くぞ」

差し出された金銭十枚を大切にしまうと、ドラはリオとシンを引き連れて宿舎から立ち去った。

「暗くなってきたし、まっすぐ俺らが泊まる宿泊先に行くとするか」

言って、唯一この中で王都の地理に詳しいドラが歩き始めた。

それにリオとシンが続く。

二十分ほど歩くと、宿泊施設が密集している区域にやって来た。

宿屋だけでなく、簡易宿泊所もこの中にあるようだ。

「お、あそこみたいだな」

外で待機している村人の姿を発見し、ドラが言った。

簡易宿泊所はそれなりの数が建っているが、一定数以上の人間がいる団体しか利用することはできない。

建物の中には簡易台所と寝室となる部屋しかなく、一つの建物で三十人くらいまでなら同時に寝ることができる。

「お疲れさん。待ってたぜ。今日はみんな外に飯を食いに行くことになった。荷物を置いたらお前らも行ってこいよ」

どうやらリオ達がやって来た時に備えて、宿泊所の外で待機していてくれたようだ。

一つの団体で一つの簡易宿泊所を利用できるとはいえ、盗みに入る者達もいる。

その見張り番としての役割もあった。

「おう。ありがとな。じゃあカムタンでも食いに行くか」
「マジか？　やったぜ！」

リオの聞きなれない料理の名をドラが口にすると、先ほどまでの不機嫌さも吹き飛んだのか、シンが喜びの声を上げた。
ドラがシンの反応に僅かに苦笑する。

「カムタンですか？」
「おう、リオはカムタンを食うのは初めてか。なかなか村で作ることはないが、この地方じゃ伝統的な料理よ。小麦を使った細い加工食材を茹でて、スープに入れて食べるんだ」
「へぇ、美味しそうですね」

カムタンという名称は聞いたこともないが、その説明を聞いて、リオの中で何となく料理のイメージができた。
そのまま宿泊所の中に入って荷物を降ろすと、リオはドラとシンの三人でそのカムタンを食べに行くことになる。

「あそこの店にすっか」
「どこでもいいよ。早く入ろうぜ！」

どこの店が美味しいかなど全く分からないので、リオはドラの案内に従うことにした。
シンも王都に来たのはまだ二回目で店には詳しくないようであるが、カムタンは大好物のようだ。
急いで店の中に入っていくシンに苦笑しながら、リオとドラがその後を追っていく。

店の中は賑わっており、どの客も箸を使って麺料理を啜っていた。

その光景にリオの予想は外れていないことを悟る。
とはいえ、どういったものがお勧めかわからないので、リオはとりあえずドラに注文を一任してみることにした。

「カムタンを三人前頼む。大盛りでな。肉もトッピングしてくれ」
「はいよ！」

料理の完成を待っている間に、ドラとシンからカムタンの特徴を聞いていく。
それは間違いなくラーメンであった。
他にもうどんやそばに似た料理もあるようだ。
とはいえいずれも名称は地球とは異なる。
この地方の郷土料理らしく、古くから食べられている料理なので、以前シュトラール地方で見つけたパスタのように、製作者が転生者である可能性は低いように思えた。

「へい、カムタン三丁おまち！」

やがて店員がどんぶりに入ったカムタンを持ってきた。
透き通った醤油ベースのスープに縮れ麺が入っており、ホカホカと香ばしい香りを立ち昇らせている。
麺の上に大量に乗った肉はチャーシューとは少し違う見た目をしているが、特に気になるようなものではなく、これはこれで美味しそうであった。

「カムタンは音を立てて食うのが粋ってもんよ」

得意顔で説明すると、シンはカムタンを勢いよく啜(すす)りだした。
元が日本人のリオだから啜る行為に抵抗がないが、シュトラール地方にしろ、ヤグモ地方にしろ、音を立てながら食事をする行為は

階級を問わず行儀が悪いと嫌われやすい。
だが、ヤグモ地方において、このカムタンだけは例外的に庶民の間では音を立て啜って食べられるようになっていた。

そんな彼らに倣ってリオも慣れた様子でカムタンを食べる。
それは混じりけのない非常にシンプルなスープだった。
標準的な日本風の醤油ラーメンとは少々味付けが異なり、若い日本人ならもう少し濃くて複雑な味を好むだろう。
だが、久々に食べたラーメンにリオは胸を熱くした。
ゆっくり、じっくりと味わいながら、僅かにご機嫌な様子で、リオは空腹を満たした。

第４１話　王都散策

リオ達が王都にやって来た翌日、眩しい青空が広がる下で、リオはサヨと一緒に王都の街中を二人で歩いていた。
二人は村人達に頼まれた嗜好品の購入を行っており、他の村人達は交易品の売却に行ったり、村の日常生活に必要な大量の物資を買い付けに行ったりしている。

「やっぱり王都はたくさん人がいますねぇ」

王都に初めてやって来て、色々と感銘を受けているのか、サヨが感嘆の声を漏らす。
サヨの言葉に、リオも周囲に広がる王都の風景に目をやった。
リオもこの国の王都にやって来たのは初めてだ。
カラスキ王国には漆喰で覆われた木造建築家屋が多く、どことなく東洋建築に似た雰囲気の家屋が立ち並んでいる。

なにぶん二人ともおのぼりさんであるため、どんな店で嗜好品が売られているのかはほとんどわからない。
そんな二人に買い出しを任せるのはどうなのかと村人達に尋ねてみたが、人が足りない上に、リオは計算もできるだろうとだけ言われた。
いまいち釈然としない理由だったが、こうしてサヨと一緒に買い出しに来たというわけだ。
現在、二人は商業区画を歩いており、色んな店を巡っては目的の品がないか探している。
今日一日は買い出しのついでに王都の観光をしてきていいと言われているため、ゆっくりといろんな店を回っていた。

「サヨさんは村から出ること自体が初めてなんですよね？」
「はい。お兄ちゃんが前に一回王都に行って帰って来て、色々と話を聞いて、ずっと来てみたいと思っていたんです」
「それは願いがかなってよかったですね」
「はい！　本当に夢みたいです！　それにこうして観光もできるなんて」
「きっと私達は初めての王都だから、みんなが気を使ってくれたんでしょうね」
「は、はい。そう、だと思います」

最後の言葉はどこか歯切れが悪く、僅かに頬を赤らめてもいた。
とはいえリオは周囲の人波に押されないように注意を払っていたため、その様子に気づくことはなかった。

「そ、それにしても下から見上げる王城の眺めは素晴らしいですね！」

どこか焦ったような声を出して、サヨが言った。

「そうですね。色んな国を旅してきましたが、あれ程の城は見たことがありません」

カラスキ王国王都は小高い丘を囲むように作られており、その中心部となる頂上に王城が存在する。
市街地から見た王城の眺めはまさしく圧巻であった。
そんな景観を楽しみつつ、街中を歩いていると――。

「そこの若いお二人さん、デートですか？」

と、露店を経営している女商人から声をかけられた。
どうやら女性向けの小物を販売しているようだ。

「あ、いや、えっと……」

女性店員の言葉に顔を真っ赤にして、サヨはしどろもどろに返事をしようとした。

「村から王都にやって来て、交易のついでに買い出しをしているんですよ」

思考回路がショート寸前で、言いよどんでいるサヨに代わって、リオが事情を説明する。

「あら、そうなんですか？　へぇ」

言って、女商人は顔を赤くして縮こまっているサヨに視線を向けた。

どこか見透かされたような視線に、サヨはさらに顔を紅潮させる。

「お兄さん、せっかくこうして王都にやって来たんですから、記念に彼女に何か買ってあげたらどうですか？」

にやり、と営業スマイルを浮かべると、彼女は商品の購入を促してきた。

最初から営業目的で話しかけてきたことはわかっていたが、なかなかに断りにくい話の持っていき方である。

ここで断っては少しばかり空気が読めていないようにリオには思えてしまったのだ。

「……そう、ですね。サヨさん。何か欲しいのありますか？」

苦笑を浮かべ、リオはサヨに尋ねた。

この国でも利用できる路銀をリオは十分に持っている。

別に一つくらいサヨへプレゼントを買ったところで懐が痛むわけでもない。

この状況で誘いを断るのも少し気が引けたので、リオは女商人のセールストークに乗ってあげることにした。

「ふぇ！？　そんな、悪いです！」

慌てたように、サヨはリオの申し出を辞退しようとする。

両手を前に出し、首を左右に勢いよく振る姿がオーバーリアクションで、リオは可笑しそうに笑った。

「遠慮しないでも大丈夫ですよ」

「そうですよ！　せっかく男の人が贈り物を買ってくれるって言っているんですから、ここは女としてしっかりと買わせてあげるのが礼儀ってもんです」

サヨに遠慮させないよう、気楽な風に、リオが促すと、女商人がそれに便乗した。

「そういうことなんで、どうぞ」

「え……あ、じゃ、じゃあ……」

二人の言葉に押されて、戸惑いながらも、サヨは陳列されている商品を眺めてみることにした。

最初はおそるおそるといった感じだったが、すぐにサヨは真剣な表情を浮かべた。

女商人の説明を受けながら、そうやって商品をじっと見つめているのを、リオが黙って待つ。
やがてサヨは花の文様が描かれた可愛らしいデザインの簪(かんざし)を手に取った。

「おお。お目が高い。センスが良いですね。それは一品物なんです」
「えっと、高いんですか？」

どこか遠慮したように、サヨが尋ねる。

「ん～、銅銭六十枚ってところでどうですか？」

一般的な平民でも手が出せない程に高いというわけではない。
だが、村で暮らしており、あまり貨幣を持っていないサヨにとっては大金であった。

「それでいいんですか？　サヨさん」
「え、あ、でも……」

気負ったところのない風に、リオがサヨの意思を確認する。
だが、サヨは、簪(かんざし)とリオを交互に見て、戸惑った様子を見せた。

「お姉さん。それをください」
「え？」

そんなサヨの様子から、それを気に入っていることがわかったため、リオはその簪(かんざし)を購入する意思を伝えた。
銀銭を一枚差し出すリオの姿を見て、サヨが呆けた表情を浮かべた。

「毎度あり！　女性へのプレゼントを値切らないところは好印象ですよ！」

村からやって来たと聞いて、そこまで持ち合わせもないのかと、もう少し値引いてあげても良かったのだが、あっさりとお金を支払ってきたリオに、女商人は目を丸くする。

が、すぐに満面の営業スマイルを浮かべ、銀銭を受け取ると、女商人は銅銭四十枚を差し出した。

それをリオが受け取ると、女商人は簪（かんざし）を持ってサヨに近づいた。

「さて、じゃあさっそく着けてみますか？」

「え、あ、はい」

すると、手慣れた手つきで女商人はサヨの頭に簪（かんざし）をセットした。

サヨはやや夢現状態（ゆめうつつ）で、されるがままそれを受け入れていた。

薄紅色の花柄の簪（かんざし）は、肩まで伸びたセミロングの黒髪と、サヨの白い肌とのコントラストで、良く映えている。

「とても良く似合っていますよ！」

「ええ、素敵だと思います」

「あ、ありがとうございます！」

ニコリと愛想良く笑みを浮かべて、女商人が感想を告げる。

続けてリオも感想を告げると、サヨは頬を赤く染めて礼を言った。

「頑張ってモノにするのよ。この少年、競争率高そうだから」

と、軽いウィンクを寄こすと、女商人はサヨだけに聞こえるように告げた。

「っ～～」

その言葉に、サヨは身を縮めて俯いた。

「それじゃあそろそろ行きますか。サヨさん」

「は、はい！」

「またのお越しをお待ちしていますね～！」

再び買い物を再開しようと、二人が歩き出す。

女商人はそんな去りゆく二人の背に声をかけた。

しばらく歩いたところで、喜色満面な笑みで、サヨが「ありがとうございます！」と、リオに勢いよく頭を下げるのを、彼女は微笑ましげに眺めていた。

その後、しばらく王都の中を歩き回って、二人は簡易宿泊所に戻る。

すると、サヨが頭に着けている簪（かんざし）を村人達が目ざとく発見し、色々と追及されて、サヨは顔を真っ赤にするという展開になった。

交易の方は順調に商品を売り払うことができたらしく、その二日後に村へ向けて出発することが決まる。

村に帰ってからも、サヨの頭にはリオに贈られた簪（かんざし）が四六時中着けられており、女衆達から追及の言葉が投げかけられた。

☆★☆★☆★

リオ達が王都を立ち去ってから数日後。

カラスキ王国の上級武士であるサガ家にて、現当主であるサガ＝ゴウキは自らの息子であるハヤテと向き合っていた。

「ユバ殿から手紙だと？」

力強さを感じさせる低い声で、ゴウキが言った。
「はい。何やら大切な手紙であるらしく、必ず届けてほしいとのことでした」
「うむ、そうか……。して、その手紙は？」
「こちらです」

ハヤテが差し出した手紙を受け取ると、ゴウキは体格に似合わぬ丁寧な手つきでその封を破った。
不機嫌というわけではないのだが、ゴウキは厳格で少々気難しい性格をしている。
何事があっても動じず、どっしりと腰を構えて物事を見る人物だ。
鬼神ゴウキという二つ名で、かつて隣国のロクレン王国の兵士達を震え上がらせたという逸話もある。
それがハヤテがゴウキに対して抱いているイメージであり、そんな父親のことをハヤテとその弟妹（きょうだい）は尊敬していた。
特に、ハヤテの八歳下の妹などはゴウキよりも強い人でなければ結婚しないと公言しているくらいだ。
父よりも強い人間がこの国にいるはずもないというのに。
それはさておき、今もゴウキは何やら小難しい顔をして、ジッと手紙を見つめている。

「っ！？」

だが、ある時、そんなゴウキが明らかに驚愕した表情を覗（のぞ）かせた。
その様子を察し、ハヤテの表情にも驚きの色が浮かぶ。

（父上が感情を表に出すとは珍しいこともあるものだ。そんなに大事な知らせなのか？）

気にはなるが、手紙を読んでいる父親に向かって話しかけるわけにもいかない。
ハヤテはじっと手紙を読むゴウキの姿を見つめていた。
何やらゴウキはものすごい速度で視線を動かし、手紙に書かれた文章を追っている。
沈痛な面持ちを浮かべているかと思えば、何かに喜んでいるかのように笑みを浮かべてもいた。
一度読み終えた後も、間違いがないように、何度も繰り返し読み直しているようだった。

「リオという少年について詳しいことを教えなさい」

何度も手紙を読み、その事実に読み間違えがないかを確認すると、ゴウキはリオについて尋ねた。
どうしてリオの話がここで出てくるのだろうか。
ゴウキの声は震えていた。
それは怒りか、悲しみか、はたまた喜びによるものか。
ハヤテはその感情を掴みかねていたが、命じられたままリオについて語ることにした。

「はっ、歳は十四歳だと言っておりました。礼儀正しく、人格は極めて良好、武人としても並みの者ではないことを感じさせる一廉（ひとかど）の人物でありました」
「そうか……」
およそ手放しに称賛する人物鑑定に、ニヤリ、とゴウキが猛るような笑みを浮かべた。
「こうしてはおれん。今すぐ陛下のもとに参上せねば。ハヤテよ、

よくぞこの手紙を持ち帰った。大儀であったな」

言って、ゴウキは素早く立ち上がった。

「アヤメ様はお亡くなりになられたか。ゼンめ……。いや、今はいち早くリオ様の存在を陛下にお伝えしなければ……」

複雑な感情の籠った呟きを残すと、ゴウキは颯爽と部屋から立ち去る。

その後ろ姿を、ハヤテは呆然と眺めていた。

「いったいなんだったというのだ……」

第４２話　収穫祭の日に

リオ達が王都から村に帰って来て数日が経過した。
晩秋を迎えた現在、村では収穫祭が開催されている。
収穫祭とは、その年の豊作に感謝し、次の年の豊作を祈る祭りである。
いつもは忙しい村人達の生活だが、この日ばかりは仕事もない。
村の広場では、昼間から酒を飲み、食事を食べ、歌を唄い、ダンスを踊る村人達が集っていた。

ユバの家の台所は村の中で一番広いことから、毎年、この行事の際には、村中から料理自慢の女達が集まって腕を振るっている。
現在も、何人かの村の女性達が、テキパキと動き、下ごしらえを行っているところだ。
その中にはリオの姿もある。
台所は女の戦場であって、男の立ち入る領域など本来はないのだが、リオの料理の腕はユバとルリがお墨付きを出していることもあって、例外的に立ち入りが認められていた。

リオはこちらの地方では食べることのない料理を作っていた。
すぐ側にはルリとサヨがおり、リオからその調理法を学んでいる。
その料理はアップルパイとミートパイである。
既にパイ生地は作ってあるため、今はフィリングを作成しているところだ。
アップルパイについては村で採れた冬林檎を、ミートパイについては村の牛を用いている。
今後も村人達が作りやすいようにと、アップルパイについては、あえて高級品である砂糖と、この地方で製法が知られていないバタ

ーは使用していない。
この地方で採れる香辛料を僅かに混ぜて、リオは冬林檎をクタクタになるまで煮込んでいた。
「すごい良い匂いだよ。リオは料理の引き出しが多いねぇ」
「はい、とっても美味しそうです。リオ様すごいです！」
周囲に漂うほのかな甘い香りに鼻をひくつかせ、ルリとサヨは顔をほころばせた。
そんな彼女達の称賛に気恥ずかしさを覚え、はぐらかすような笑みを浮かべ、リオは調理を行う。
寝かせていたパイ生地の上にフィリングを乗せ、さらにその上にパイ生地を敷く。
後は釜を使って焼き上げれば完成だ。
ミートパイも作らなければならないし、結構な人数の分量を造らなければならないため、気を休める暇はない。
それから二時間ほどかけて料理を作り終えると、リオを含めて調理をしていた者達も祭りに加わった。
広場では高揚感をもたらしてくれる祭りの空気が出来上がっていた。
リオは広場の端で腰を下ろし、ドラやウメと一緒に村の特産品である醸造酒を片手に会話を楽しんでいた。
自ら騒ぎこそしないが、食事と酒を堪能しつつ、楽しそうに歌い踊る村の若い者達の姿を眺めている。
「それにしてもリオがこの村に来てからもう二か月くらいか。早いもんだなぁ」
「本当だよ。今じゃリオがいるのが当たり前になっちまった」

まだリオが来てから二か月程度しか経過していないが、ドラとウメの中ではすっかりとリオは村人の一員になっていた。

「皆さんには本当に良くしてもらって、ありがとうございます」

感慨深そうにしているドラとウメに微笑みながら、リオが礼を告げる。

「なに、あたりめぇのことよ。こっちだってリオには――」

「お～い、ドラ！　ちょっとこっち来いよ！」

何かを言いかけようとしたところで、ドラを呼び出す声が響いた。

「おっと、呼び出しだ。まぁ、こっちだってリオには世話になってんだ。そんな水くせぇことは言わなくていいってことよ。じゃあ、ちょっくら行ってくる」

晴れやかに笑うと、軽い足取りでドラはその場から立ち去った。

「そういうことだよ、リオ。あんたのおかげで少しずつこの村の生活は良くなってんだ。そんな水臭いことは言わないでおくれ」

「はい」

立ち去るドラの後姿を眺めながらウメがそう言うと、薄く笑ってリオが返事をした。

「それにしてもいずれリオがこの村から出て行っちまうと思うと、今から寂しくなっちまうねぇ」

「それは……はい……」

リオがこの村をやがて去ることは最初から村人たちに伝えてある。
今までもこうやって旅をして色んな場所を巡り、たくさんの人達と出会ってきたが、別れ話をする時はどうもしんみりとした空気になりやすい。
こういった時にどんな表情をすればいいのか、リオはいまだに正しい対処法を見いだせておらず、曖昧な笑みを浮かべていた。

「それに村の若い女どもの中にはけっこう本気であんたに惚れている子もいるんだ。あの子らも悲しむだろうねぇ」
「え、えっと……」

僅かに呆気にとられた表情を浮かべ、リオが言葉に詰まる。
そんなリオを横目で見て、ニヤリと笑みを浮かべると、ウメはこう続けた。

「リオ、好きな子でもいるんだろ？」
「え……？」

その言葉に、リオが戸惑ったような表情を覗(のぞ)かせた。
ぴたりと自分の心の内を言い当てたウメに驚いたのだ。

「どうしてわかるのかって顔をしてるね。まぁ、女の勘ってやつさ」
「女の勘……ですか？」

少しばかり訝(いぶか)しげな声で、リオが言った。
そんなものが本当にあるのだろうか。

「はぁ、その様子だとリオは女ってもんをよくわかっていないねぇ」
そんなリオの考えが伝わってしまったのか、ウメが呆れたように

首を左右を振った。
ウメの言葉に否定できないものを感じ、リオは苦笑する。
「あの子らもなんとなくわかっているはずさ。はなから自分に勝算がないことくらい。リオがいずれこの村から出ていくことも知っているだろうしね」
単純な労働作業が主となる農村は女達が生涯一人で生きていくには辛い場所で、女達は若いうちから自分の生活を支えてくれる男を見つけなければならない。
理想ばかり追いかけていつまでも結婚できませんでした。
そんなことになることだけは絶対に避けなければならないのだ。
だから、女達にとって男が自分に気があるかどうかを察するスキルは必須となる。
彼女達は現実を直視する。
叶わぬ恋はしないし、引き際も早い。
「だからあんたのことをちやほやしても、過度に言い寄る子は一人もいないだろ」
ウメの話は続く。
「それでもあんたから言い寄ってくる分には大歓迎だろうから、アピールだけはしてるけどね」
「は、はぁ……」
僅かに引きつった面持ちで、リオは言葉を濁した。
どうやら村社会の女達の恋愛事情は思っていた以上にシビアだったらしい。

「まぁ中にはそれでも気持ちを抑えつけられない子もいるみたいだけどね……」

と、寂しそうな笑みを浮かべ、付け加えるように、ウメは言った。

その表情の変化に気づき、リオは改めて真面目な表情を浮かべる。

「サヨの気持ちには気づいているんだろ？」

と、ウメはストレートに人物を名指しで特定した。

「え？　えっと、いえ、まぁ……」

戸惑い顔で言葉を濁しつつも、リオは肯定に近い返事をした。

他の村の少女達が気があるのかなと思わせるくらいの素振りしか見せてこない中で、サヨだけはリオに真っ直ぐと気持ちを伝えるような行動に出ることが多い。

サヨ自身は必死に隠そうとしているのだが、他の少女達のように上手に立ち振る舞えていないのだ。

だから、流石に、リオも彼女の想いには薄々と気づいてはいた。

とはいえ、どうして彼女が自分のことをこんなにも想ってくれているのか、それはよくわかっていないのだが。

「あの子はあんたからもらった贈り物を大事にしているよ」

と、ウメは先日リオが彼女に送ったプレゼントについて言及した。

そう、先日、王都に行った際に、リオはサヨに簪（かんざし）をプレゼントしたのだ。

普段のリオならば無暗に異性にその気があると受け取られかねない行動をすることはない。

だが、あの時だけは、女商人のセールストークにより巧みに空気

を演出され、例外的な行動をとってしまった。
リオとしては深く考えずにした行為だったが、空気を読まずに贈り物などしない方が良かったのだろうか。
そんなことを思ってしまった。

「別にあんたがあの子に贈り物をしたこと咎めているわけじゃないさ。そんなことを言ったら人と人の関わり合いを否定しちまうことになる。人の心を弄ばない範疇でなら私も怒りはしない」
「……」

リオは黙ってウメの話を聞いていた。

「ただ、あの子は少し純粋だからね。あの家は両親を早いうちに亡くして兄妹だけで暮らしている。シンはああ見えて過保護だから、それが災いしてサヨはちょっと精神的に未熟なところがあるのかもしれない」

男女の恋愛観や結婚に対する現実的な一面というのは、本来ならば親が子に教えていくものだ。
サヨはそれを教えてくれる母がいなかったせいか、周囲の大人の女性達が教えることになったわけだが、兄のシンがいる手前、過度に口を出すことも憚(はばか)られた。
その結果、サヨはあまり恋愛に対して擦れたところのない純情な少女になってしまったというわけである。
だから、ある日、外からやって来たリオに一目惚れし、今日まで一途に恋をし続けてきた。

「あの子の気持ちを弄ぶようなことはしないでくれると助かる。リオはそんなことをする子じゃないっていうのはわかるんだけど、どうも私はおせっかいな性質(たち)みたいでね」

言って、苦笑するウメ。

「まぁ、あんたがこの村に残り続けるっていうんなら、あの子とくっつくのは大歓迎さ。相変わらず憎まれ口をたたいているけど、シンも反対はしないはずだ。いや、むしろ裏ではサヨを応援してておかしくはないね」

そんな彼女に、リオは曖昧な微笑を浮かべて応えた。

リオはいずれこの村から出発する。

それは絶対に変わることのない事実だ。

だから、この村でリオがサヨと一緒に暮らす未来を選ぶことはできない。

その事実を教えた方がいいのだろうか。

そう考え、遠まわしにでも伝えてみようかと口を開きかけたその時――。

（っ？）

何やら村の魔術結界の中に立ち入ってくる者達がいる事に、リオは気づいた。

人数は十人。

気配を隠すつもりはなく、敵意も感じられない。

現在、外出している村人はいないはずだ。

ならば部外者となる。

「……すみません。少し席を外しますね」

申し訳なさそうにウメにそう告げると、リオは立ち上がった。

雑を撃ちに行くのだろうと、ウメも特に引き止めることはしない。

リオはそのまま村へとやって来た者達がいる方へと足を進めた。

そこにいたのは十人の男女だった。

それぞれが只者ではないことが身のこなしから窺(うかが)える。

特に先頭にいる高価な衣類を身に纏った二人の男女の実力はずば抜けていることがわかった。

武器は時空の蔵の中だ。

取り出すとすれば一瞬のタイムラグがある。

相手に敵意はないが、警戒しておくにこしたことはない。

「この村に何かご用でしょうか？」

相手もリオが只者ではないことに気づいたのか、僅かに構えた様子が伝わってきた。

だが、先頭の二人だけは僅かに反応が違った。

まるで巌(いわお)のような風格を持った年配の男に、温和で物静かな雰囲気を纏った同年代の女性は、身体を震わせたようにリオの顔を見つめていた。

「も、もしや……リオ様……、リオ様であらせられるのでは？」

「え、あ、はい……」

まったく見知らぬ年配の男性にいきなり様付けで呼ばれたため、リオが呆気にとられて目を見開く。

「おぉ！　やはり！」

すると何やら感極まったような声を男が出した。

「えっと……」

いまいち事情が呑み込めず、リオが困惑したような声を出す。
目の前にいる人物達とはどこかで会った記憶もない。
この国に来てからというもの、リオはほとんどこの村に滞在していたのだから、それ以外の場所で会った人間の顔はどれも覚えているはずだ。

「申し訳ありません。お会いした記憶がないですが、どちら様でしょうか？」

冷静さを保った声色でリオは静かに男達の素性を確かめた。
その若さにそぐわない落ち着きを感じさせる物腰に、先頭の男は感心したように小さく唸った。

「これは失礼しました！　サガ＝ゴウキめにございます！　こちらは家内のサガ＝カヨコであります。後ろに控えているのは連れの配下の者共です」

ゴウキと名乗った男性が、慇懃な笑みを浮かべて、一行の紹介を行った。
一行は衣類が汚れることを厭(いと)いもせずに、地に足をつけて跪(ひざまず)いている。
それはまさしく臣下の礼だった。

「は、はぁ……」

唖然として、リオはゴウキ達を見つめた。
あまりの急展開に、流石にリオも事態を理解しきれていない。
だが、こうして跪かれると、居心地悪いのは確かだ。

「衣類も汚れてしまうので、とりあえず立ち上がってください」

困ったように、リオが言う。

「しかし……」

渋ったような声を出して、畏まった様子で、男達はその場に跪き続けた。

「まずは事情をお聞きしたいので、本当にお願いします。とりあえず移動しましょう」

と、リオが緊迫感を感じさせない口調で言った。

「……はっ、それでは、畏れ多くも失礼仕ります」

リオの想いが伝わったのか、ゴウキが頷き、男達はゆっくりと立ち上がった。

「それでは参りましょう」

そう言って、リオは男達を広場の外れへと案内し、ユバを呼び出した。

ユバはゴウキ達の姿を見ると、大きく目を見開いて――。

「やっぱりゴウキ殿がこの村に直接やって来ましたか……」

と、苦笑めいた表情で、言った。

「久しいですな、ユバ殿。どうやら豊穣祭を行っているようだが、お騒がせして申し訳ない」
「いえ、もうそろそろ落ち着いてくる時間ですので」
どうやら会話の内容からして、二人は旧知の仲であるようだ。
「とりあえず我が家に移動いたしましょう。話はそちらで」
「かたじけない」
「いえ、呼び出したのはこちらですからな。では、参りましょう。リオも付いてきておくれ」
「わかりました」
事情はよくわからないままだが、只事ではないようだと判断し、リオはユバの言葉に従うことにした。

第４３話　両親の過去

現在、ユバの家の広間には四人の人間が一堂に会していた。
そこにはリオ、ユバ、ゴウキ、カヨコの姿がある。
ゴウキやカヨコと一緒にやって来た者達は万が一にも話を聞かれないようにと、家の周りで警戒にあたっている。

「リオ様におかれましては、ご多忙のところ、お時間を拝借することになり、誠に申し訳ありません」

何とも畏れ多そうに、跪(ひざまず)いて、ゴウキが慇懃(いんぎん)に挨拶の口上を述べる。
その脇にいるカヨコも徹底的に恐縮した様子で顔を伏せていた。

「えっと、いまだに話が呑み込めないのですが……」

釈然としない話の流れに、リオが事情の説明を遠まわしに求めた。

「ゴウキ殿がこの場におられるということはリオの両親について話をする許可が下りたということさ」

そんなリオにユバが簡潔に事情を説明する。

「自分の両親について、ですか？」

待望の知らせに対しても、動じることなく、リオが静かな声で尋ねる。
見るからに身分の高そうな人物がこうして現れ、リオに敬意を払

っていることからすると、どうやら予想以上に複雑な事情がありそうであった。

「然様でございます。本日はその事情を説明するためにリオ様の下へ参上しました」

と、恭しい所作でゴウキは告げた。

今の状況からすれば事実を知ってもリオが悪いように扱われる可能性は低そうであるが、構えずに聞くことのできる話ではなさそうだ。

「とりあえず、座りませんか？」

彼らに向き直ると、腰を落ち着けて話をするべく、リオは座ることを勧めた。

本当はその慇懃すぎる態度も控えて欲しかったが、言って止めてくれそうな雰囲気ではないので、リオは話を聞くことを優先することにした。

「失礼します」

ゆっくりとゴウキが腰を下ろし、それにカヨコが続く。

「では、話をお聞かせいただいてもよろしいでしょうか？」

「畏まりました」

リオの言葉に承諾の返事を返すと、どこか沈鬱な表情を浮かべて、小さく息を吐き、ゴウキは口を開いた。

「そうですな、……今から二十年近く前のことでございます。まず、

ゼンについて話しましょう」

リオの父親であるゼンはカラスキ王国に仕える一兵士であった。

当時、カラスキ王国は長年にわたって敵対関係にあった隣国のロクレン王国と緊張状態にあり、しばしば小競り合いが生じていた。

国全体に重税が課され、ユバの村の生活も苦しかったという。

「ゼンは自分が次男だからって、口減らしを買って出てね。ある日、フラっと兵士に志願しに行っちまったんだ」

当時のことを思いだしているのか、遠い目をして、ユバがボソリと口を挟んできた。

ゼンには、精霊術の素質があり、加えて、体格も恵まれていて、武に関して天賦の才能もあったという。

魔法の導入により精霊術が廃れてしまったシュトラール地方と異なり、ヤグモ地方では非常に少ないとはいえ精霊術を使える者が存在する。

そういった者達は軍の中では非常に重宝されることとなる。

準戦時中のカラスキ王国において、ゼンが兵士として頭角を現すのに時間はかからなかったという。

小規模とはいえ戦では次々と首級を挙げて、友軍が危機の際には自ら殿(しんがり)を買って出て、どんなに困難な状況でも必ず生還したそうだ。

その功績を称えられ、ゼンは国の英雄として国王から褒賞を与えられることになった。

「その時からゼンは国に仕える武士になったのです。新たに武士になった者は慣例として先達と手合せを行うことになるですが、奴の実力は本物でした」

ゼンの実力を判断するために行われた手合せで戦ったのがゴウキ

だった。
そのころ、王族守護の任に就いていたゴウキは、まだ若いとはいえ、当時から国の中でも有数の使い手であったという。
動きは我流だったものの、ゼンとゴウキの実力は拮抗した。
その結果、ゴウキが辛勝したものの、ゼンが正式な剣術を身に着けていれば、負けていたのは自分だったかもしれないとゴウキは思ったそうだ。

「いやはや、手合せとはいえ、あれ程、心の奮った戦いはそうそうありませんでしたな」

ゴウキは当時のことを思いだし感慨深そうに言った。
そんな夫の姿にカヨコは薄く笑みを浮かべる。
その手合せで自らの実力を証明することになったゼンは、ゴウキの強い推薦もあり、一緒に王族の守護を行う役職に就くことになったそうだ。

「その王族がアヤメ様でございました」
「っ……」

母が王族であると聞き、リオが目に見えて驚いた様子を見せる。
何となく身分の高そうな人間だとは思っていたが、まさか王族だとは露にも思っていなかった。
そんなリオの反応にゴウキやカヨコがフッと柔らかい笑みを浮かべる。

アヤメは王位継承権こそ高くはないが、美姫として近隣の国にも名を馳せる人物だったようだ。
そんな彼女の護衛に就くことになった成り上がりの武士であるゼン。

武功的には何の問題もなかったが、教養と家格の面では不足している点もあり、当初はそれを理由にやっかむ者達も多くいたそうだ。

「とはいえ、他にアヤメ様の守護の大任を任されていたのはこのゴウキとカヨコでありました。私めは上級武士の中でも有数の家系にありましたし、カヨコの実家も少々特殊で武士でないものの有力な家系でした」

そんな二人でゼンを支え、表面上は何の問題もなく、ゼンはアヤメの守護の任を務めていたそうだ。

また、ゼンとアヤメとの仲も良好で、世間知らずなアヤメにゼンは外の世界について色んなことを教えてあげた。

ゴウキとカヨコの見立てでは、そう遅くないうちにお互いに惹かれあうようになっていたそうだ。

特にアヤメのゼンへの好意ははた目から見てもわかりやすいものであったという。

ゼンに興味を持ち、時にはゼンの故郷であるこの村にお忍びで遊びに来たこともあるらしい。

しかし、王族であるアヤメと英雄とはいえ平民の出の武士であるゼン。

二人の身分の差は大きく、ゼンはその想いを押し殺していた。

「そんな折にロクレン王国は我が国に休戦協定の締結を申し入れてきました」

長年の争いの中で休戦協定は幾度も締結されてきたようだ。

そもそもがロクレン王国の側から仕掛けられた戦争であったが、カラスキ王国としても戦争の継続は国庫の点から望ましくないため、その都度、休戦協定は受け入れてきたという。

休戦を祝い、国民の不満を発散させる意味も込めて、カラスキ王

国の王都では盛大にセレモニーが執り行われることになった。
そこに休戦協定の締結のために大使として相手国の王子がやって来たという。
協定も無事に締結され、後は何事もなく王子が帰れば一時とはいえ平和が戻ってくるはずだった。

ところが、その日の夜、何者かがアヤメを誘拐しようとした。
それは休戦協定を締結しに来たロクレン王国王子の付き人の一人で暗部に所属する者だった。
アヤメを陰から守護していたゼンは見事にその者を撃退して捕える。
事情を吐かせようとしたが、仕込んでいた暗器で自害を図り、その者は死亡したという。

翌日、カラスキ王国側が事情の説明を求めたところ、ロクレン王国の王子は自らの付き人が殺されたと言いがかりをつけて憤怒した。
誘拐を仕掛けてきたのは相手側だが、実行犯は死亡しているために、カラスキ王国側は慎重に振る舞うことを決めたそうだ。
しかし、ロクレン王国王子は聞く耳を持たず、こうして敵国にまで赴いた自国の信頼が裏切られたと騒ぎ立てた。
両国の交渉はこじれ、そのまま休戦協定を破棄せざるを得ない状態に陥ったという。

「するとロクレン王国王子は休戦協定を結び直すために条件を追加してきました」

怒りをかみ殺したかのような口調でゴウキは続けた。

「自らの付き人を殺したゼンの処刑、およびアヤメ様の身柄の要求です」

それが事実だとすれば実に厚顔無恥な要求である。
当時、どういった事情が裏に控えていたかはゴウキの言葉から判断するしかないが、ロクレン王国の王子は加虐趣味で女癖が悪いという噂のある人物であったそうだ。
そのままアヤメを引き渡したら、どのような扱いを受けるかは想像に難くない。
そもそもロクレン王国に休戦協定締結の意思はあったのか、もしかしたら最初からアヤメの身柄が目的だったのではないか。
そう邪推せざるをえなかった。

だが、時として、そんな滅茶苦茶な要求であっても外交においては検討せざるを得ないことが多々ある。
何とも根回しの上手いことに、ロクレン王国の王子は家臣の者を利用して、市井（しせい）にその事件の概要を歪曲（わいきょく）して広めていた。
せっかくの休戦協定が台無しになりかけていると国民を煽り、休戦協定を締結するように世論を操作したという。
国民の不満は溜まり、ゼンを処刑し、アヤメをロクレン王国に差し出せという空気があっという間に出来上がってしまった。
また、王城の中では決して少なくない数の貴族が戦争に反対していたという。
彼らの不満を王権で押さえつけることはできるが、そんなのは表面上だけだ。
真実を公表すれば国民は怒りに燃えるかもしれないが、ロクレン王国側の面子を表だって潰す形になってしまうため、そうすれば開戦は免れない。
ロクレン王国側の行いは国際上の信頼関係を破壊する行為だが、先手を打たれ、カラスキ王国側は不利な立ち位置に追い込まれていた。

しかし、カラスキ王国としてはもはやロクレン王国に対する信用は皆無である。
仮に条件を呑んだからといってロクレン王国が休戦協定を履行するかについては大いに疑問を抱いていた。
ロクレン王国の要求を呑むわけにはいかない。
かといって、真実を公表したり、要求を突き返せば、正面からの全面衝突が発生し、戦局は泥沼となる。
国民や一部の貴族の不満を押さえつつ開戦し、なおかつカラスキ王国が戦略的に優位に立つ計画を練る必要があった。

「そこで国王陛下は、表向きは要求を呑んだフリをして、ゼンにアヤメ様を連れて逃げるように内々に命令を下しました」

これによって僅かではあるが、国内の反対勢力とロクレン王国との関係で時間を稼ぐことができた。
その間に国王と一部の者が主導して秘密裏に計画を遂行する。
国内の反対貴族とロクレン王国に察知されない程度の規模で、精鋭中の精鋭で構成された武家の軍を、ロクレン王国に見つからぬように派遣したのだ。

「私も含めロクレン王国に対する武家の不満は溜まりに溜まっており、その作戦に参加した武士達の士気は最高潮に達していました」

それから間もなくして、ゼンはアヤメを連れて逃亡した。
その事実をカラスキ王国は公表する。
もちろんロクレン王国はふざけるなと憤慨した。
戦争に反対していた勢力の不満はゼンとアヤメにぶつけられることになったが、そのおかげで国内で開戦ムードが上手くできあがったという。
その後、ロクレン王国の王子は怒ったまま自国へと帰還し、戦争

の火蓋が切って落とされることとなった。

カラスキ王国は、陽動のために大軍を編成し、ロクレン王国へと進軍させて注意を引いた。

もちろんロクレン王国も迎え撃つために軍を動かさざるをえないため、大軍を編成してそこに派遣させることになる。

そうして国境付近でロクレン王国軍はカラスキ王国軍と睨み合った。

その背後ではカラスキ王国の武家による精鋭軍が一気に内部まで進軍していることも知らずに。

武家の精鋭軍はロクレン王国に一方的に深刻なダメージを負わせた。

ロクレン王国本軍も後方の慌ただしい動きを察したが、目の前にいる敵軍を無視して立ち去ることもできない。

精鋭軍が反撃を食らう前に手早く撤退してくると、遂にカラスキ王国本軍はロクレン王国本軍に攻撃を仕掛けた。

ロクレン王国本軍はやむを得ずにこれに応戦したが、背後から迫って来た少数精鋭の武家軍に戦局を大幅にかき乱され、将軍の首をあっさりと討ち取られることとなる。

侵攻軍に混ざっていたロクレン王国の王子も捕虜として拘束された。

まさしくカラスキ王国の歴史的大勝利であった。

「ロクレン王国は必死に休戦協定を申し入れてきましたわ」

実に愉快そうな表情を浮かべ、ゴウキはその時の状況を語った。

休戦協定にあたってはロクレン王国側に開戦の非があったことを全面的に認めさせ、その首謀者である王子はカラスキ王国の手により国民の面前で処刑し、さらには多額の賠償金も支払わせることに

なった。
国民の不満は解消され、賠償金により国も潤(うるお)った。
ロクレン王国は大きく国力を低下させ、現在はカラスキ王国の属国状態にあり、戦争を起こそうなどと考えることもできない状況にあるという。

国王が最終的に下した判断は結果から見れば大成功だったかもしれない。
しかし、十分な勝算があったとはいえ、国民を騙したことには違いなく、一歩間違えれば取り返しのつかない膠着状態に陥っていた可能性もあった。
だから、国内においてもやむを得ずに開戦したという風に説明するため、ゼンとアヤメが冤罪を恐れて勝手に逃亡したことだけは事実として扱わなければならなかった。
近隣諸国に対してもアヤメとゼンの指名手配も行い、その態度を徹底させたという。
そのおかげで彼らは行き場所を失い、シュトラール地方にまで足を運ぶこととなった。
当時、アヤメがゼンのことを好いているのは国王の目から見ても明らかであった。
しかし、当時のままでは身分の壁が邪魔をして二人が結ばれることはなかっただろう。
娘を敵性国の外道王子に慰み者とされるか、望まぬ相手との政略結婚の駒にするくらいならば、過酷な逃亡生活を送ることになったとしてもゼンに託した方が遥かに良い。
それも踏まえて、国王は決断したそうだ。

公的に見ればゼンとアヤメの行いは国家反逆罪となる。
ゼンに限って言えば王族誘拐罪と脱走罪も付け加えられる。
二人の秘密はカラスキ王国の秘中の秘として取り扱われることに

なり、真相を知るのは一部の上層部の者達とゼンの母であるユバのみとされた。
ユバがリオに両親の話をすることができなかったのは国王の命令があったからである。

「我らはアヤメ様に付き添うことができなかったことをずっと悔いて生きてきました」

ゴウキとカヨコが沈痛な表情を浮かべる。
当時、カヨコの腹の中にはゴウキの息子であるハヤテの命が宿っていた。
表向きはゼンの暴走により逃亡したことにしなければならなかったこともあり、アヤメの守護の任に就いておりながら、ゴウキとカヨコはカラスキ王国に留まることになったのだ。

「ですが、過日、ユバ殿から一通の手紙が届きました。そこにはアヤメ様とゼンのご子息がこの村に滞在していると書かれてあったのです」

他の者ならばいざ知らず、それを言っているのは祖母であるユバだ。
本物か偽物か確信は持てなかったが、真否の判断を誤る可能性は低いように思えた。
そこで、ゴウキは直ちにその件を国王に報告し、指示を仰いだ。
すると、ゴウキとカヨコの目で判断して、リオがアヤメとゼンの息子であると確信したのならば、二人の過去を説明し、リオを招集するように命じられた。
命令を受けたゴウキは信頼できる部下を厳選し、飛ぶようにこの村へとやって来たというわけである。

「リオ様のご尊顔を拝し奉った暁には感極まりました。確信したのです。この方はアヤメ様のご子息に違いないと」

リオとしては少々早計な気がしないでもない。
それほどに自分がアヤメに似ているということだろうか。
今は亡き母の顔を思い出してはみたがわからない。

「リオ様、国王陛下はリオ様とお会いになることを望んでおられます。どうか私と一緒においで頂けないでしょうか？」

真摯な口調で訴えかけるようにゴウキが語った。

「国王陛下とですか……」

一応、リオの祖父にあたる人物である。
実感は湧かないが、この空気で面会を拒否できるとも思えない。
彼らも引き下がらないだろう。
これまでのゴウキ達の態度からすれば身の安全も保障されそうである。

「わかりました」

予想外の大事に内心で苦笑しながらも、リオはその願いを承諾した。
ゴウキ達の表情に歓喜の色が写る。

「ありがとうございます！　現在、この場にいる者達には事情を説明してあります。この者達は実力もあり、確実に信頼できると陛下と私が断言できる暗部の者達です。王都までの道のりは我らが護衛に就きます」

そう言って、今一度、ゴウキ達はリオの前に跪き、その忠誠を示した。

第４４話　祖父母との面談

ゴウキ達が村へやって来てから二日後。
アヤメの過去の処遇からリオの存在は公にすることはできず、リオと国王夫妻との会談は秘密裏に行われることが決まった。
現在、リオは客人として王城に滞在しており、その素性を知る者はリオを案内したゴウキ達と国王夫妻のみである。
うかつに知らせると騒ぎが生じかねないため、事情を知る一部の上層部の人間達にすらその素性を教えていない。
そして、今まさに、カラスキ王国の王城にある一室で、リオは自らの祖父母である国王夫妻と密会しようとしていた。
ゴウキとカヨコに案内され、部屋の中に踏み入ると、リオは国王ホムラと王妃シズクに出迎えられた。

「おぉ、そなたがリオか」

歓喜の笑みを浮かべ、なめらかな声で、ホムラはリオの名を口にした。
シズクは感極まったようにリオの顔をじっと見つめている。
二人に会うまで、いったいどのような人物なのだろうかと、リオは想像をめぐらしていたが、どこか品を感じさせるものの、予想外に気さくな印象を夫妻に抱いた。
その表情は柔らかく、爛爛（らんらん）と光り輝く目の奥には、リオに対する慈愛の念が籠っている。
これから先に高確率で語ることになるかもしれない話のことを考えると、その温かな表情が痛々しくて仕方がなかったが、リオは何とか平静を取り繕った表情を浮かべた。

「はっ。お初にお目にかかります。リオと申します」
慇懃な所作で畏まったようにリオが挨拶をする。
緊張した様子は見てとれず、非常に落ち着いた口調であった。
「可愛い孫との再会なのだ。公式な場でもない。そのような無粋な作法はよしてくれ」
「そうですとも。貴方は私達の孫なのですよ」
そんなリオの余所余所しいともいえる態度に寂しさを覚えたのか、国王夫妻は困ったような表情を浮かべた。
リオは苦笑めいた表情を浮かべて夫妻の言葉に応える。
いきなり自分の母が王族だと言われて、ならば自分も王族だと、笠に着るような真似が出来るほどにリオの神経は図太くない。
リオはどう接すればいいのかを計りかねていた。
「我々も戸惑いがないと言えば嘘になる」
そんなリオの考えを察したのか、ホムラはなめらかな声でそんなことを言った。
どうやら戸惑っているのは国王夫妻も同じようである。
「だが、こうして巡り会えたことを嬉しく感じているのは確かだ」
言って、ホムラは柔らかな笑みを浮かべた。
シズクもそれに賛同するように深く頷いている。
「まずは長年会うことのできなかった家族の親交を温めようではないか」
「ええ、言いたいこと、聞きたいこと、たくさんあります。密会で

きる時間は有限ですが、精一杯お話をしましょう」
真っ直ぐにリオを見据えて、国王夫妻は心から安らいだ表情を浮かべた。
「はい」
最初からいきなり重たい話をするのも気が引ける。
束の間とはいえ、今は少しでもそれを語るにあたって心の準備をしたい。
そう考え、リオは僅かに相好を崩し、返事をした。
「まずは席に座ってくれるかな？」
「はい、失礼します」
ホムラに勧められ、リオが席に着く。
すると、待ちきれないと言わんばかりに、二人はリオに向かって話しかけた。
繰り広げられるのは当たり障りのない話ばかりだ。
意図的に避けているのではないかというくらいに、アヤメとゼンに関する話題が出てくることはない。
二人から投げかけられる言葉に、落ち着いた口調でリオは答えており、緊張のそぶりもなく、時折、出されたお茶の入った容器を見下ろしていた。
「貴方の雰囲気は本当にアヤメによく似ているわ」
柔らかく静謐（せいひつ）なリオの雰囲気に、今は亡き娘の面影を重ねたのか、シズクが穏やかな笑みを浮かべて言った。
ふと、出された母の名に、リオが僅かに目を見開きシズクを眺め

る。

「そうなのでしょうか？」

不思議そうに疑問を口にしながらも、リオはじっとシズクを見据えている。

精霊術を扱えるおかげで、シズクの容姿はまだまだ若々しい。

仮にアヤメが生きていたとしたら、歳の離れた姉妹といえば通じそうなくらいだ。

リオの記憶の中にあるアヤメが歳を重ねたら、こういった女性になるのではないかと想像できる人物だった。

「ええ、そうよ」

そんなシズクがリオに微笑んだ。

その柔らかい笑みに引き込まれるように、リオも薄く微笑む。

この笑顔だけでシズクの人柄がよくわかる。

リオはシズクに亡き母の面影を感じとった。

「聞かせてくれるかしら？　アヤメとゼンのことを」

それまでと打って変わって顔つきを引き締めると、シズクはその話題を口にした。

決して興味本位からくる質問ではない。

既に二人が死亡したという情報はホムラとシズクにも届いているはずだ。

その具体的な死因を知らぬとはいえ、国を去って遠い異邦の地へ向かったゼンとアヤメが過酷な人生を歩んだであろうことは容易に想像ができるはずだ。

だから、軽々しい思いで質問したはずがなかった。

質問を投げかけたのはシズクだが、ホムラの目にも決然とした覚悟を覗(のぞ)くことができる。

「二人が亡くなったのは自分が幼少の砌(みぎり)です。父については母から伝え聞いたことしか知りません。記憶もあいまいな部分もありますが、それでもよろしければ……」

と、胸を締め付けるような心の動きに抗いながら、リオは言った。

「もちろんかまいません」

「……わかりました」

二人の真摯な視線を受け止め、小さく深呼吸をすると、リオはゼンとアヤメについて差しさわりのないことを語った。

その内容はユバに対して語った事とほとんど同じだ。

ゼンに関して語れることはほとんどなく、アヤメに関しての話が中心となる。

リオが語るアヤメの話に、ホムラは懐かしそうな表情を浮かべ、シズクはそっと涙を流した。

話は進んでいき、やがてアヤメの死について語られることになる。

「そして自分が五歳の時に母が亡くなりました」

強姦の末に殺されたという事実を教えるのはやはり憚(はばか)られ、リオは事実を抽象化して死んだという結果だけを伝えた。

「五歳の時に……、それでは……、貴方はそれからどのように生きてきたというのですか？」

おそるおそるとシズクが尋ねる。

リオとしては母の死因を突っ込んで尋ねられるかと思っていたが、どうやら自分が五歳で孤児になった事実の方がインパクトが強いらしい。
ユバに話した時と同じだった。
心の中でほっと息をついて安心する自分がいることにリオは気づいた。

「……孤児です。王都にあるスラムで暮らしていました」
飄然(ひょうぜん)と、リオはかつて自らが孤児だった事実を口にした。
自らの過去の境遇に一切不満を感じさせないその物言いに、夫妻は僅かに圧倒される。

「っ……」

だが、すぐにシズクが泣きそうな顔を浮かべた。

「といっても孤児だったのは七歳の時までですが」

リオが苦笑いを浮かべながら告げる。

「そうか……、では、七歳からはどのように生きてきたのだ？」

ホムラがその後のリオの生活について尋ねた。

「七歳からはちょっとした事情もありその国の教育機関に通うことになりました」

話題は自然とリオのことに移っていく。

「教育機関にか？　我が国もそういった場所はあるが、その……」

とても孤児が通えるような場所ではない。

そういった機関は一部の富裕層に向けて設立されたものだからだ。

どこの国でもそう違いがあるようには思えない。

どうして孤児だったリオがそんな場所に通うことになったのか、それを尋ねようとしたが、ただならぬ事情が透けて見え、ホムラは言葉を濁した。

「たまたまその国の偉い人を助ける機会があって、その関係で教育を受けさせてもらえることになったんです」

と、その背後にある詳しい事情は伏せて、リオはその経緯を説明する。

「そうか……、逆境にもめげずにそうやって他者を助けることできたことは誇っていいはずだが……」

嘘は言っていないのだろうが、リオは何かを隠しているのではないか。

そんな疑問をホムラは抱いた。

薄らと目を細め、リオの表情に変化がないか探る。

だが、王として多くの人間と接してきた歴戦のホムラをしても、リオの感情を読み取ることはできなかった。

その間にもリオは滔滔（とうとう）と王立学院での話を述べていく。

リオの話を聞かなければならないと、ホムラはその疑問を一先ず捨て置いた。

学院生活で貴族達からいじめを受けていたことについて触れることはせず、リオはセリアにお世話になった話を中心に語っていった。

そうやって苦労話を一切語ることのないリオだが、元孤児がそのような場所にいて苦労しないはずがない。
リオがあえて辛い話をしていないことに薄々と気づき、夫妻はどこか沈痛な表情を浮かべて話を聞いていた。

「それから、まぁ色々とありまして、父と母を故郷の地で弔おうと思い、十二歳の時にヤグモへ向かいました」
「……本当に苦労をしてきたのだな」

唸るようにホムラが呟いた。
抽象化されて事実を聞くだけでも、リオの生い立ちが凄絶(せいぜつ)なものだということは嫌でもわかる。
五歳で孤児になり、十二歳の身で両親を弔うためにシュトラール地方からヤグモ地方へ渡ろうなどと、普通は考えることすらしないはずだ。
部屋の中で黙って話を聞いているゴウキとカヨコも難しい顔を浮かべている。

「いえ、この国にやって来て本当に良かったです。父と母の過去について知ることができました。それだけでもこの国に来た甲斐があったというものです」

軽く笑いを浮かべ、一同が感じているであろうやりきれない気分を払拭するように、リオが澄んだ明るい声で言った。
そんなリオの笑みにホムラ達は息を飲む。

「そうか……」

かろうじて苦笑を浮かべると、ホムラは目を瞑り押し黙った。
決して短くない沈黙が室内に降りる。

深く深呼吸を行うと、ホムラはリオが濁した事実を尋ねるために口を開いた。

「ところで、ゼンの死因についてはともかく、アヤメがどうやって死んだかについては聞いていない。その話を教えてくれないか？」

濁したということはそれを教えたくないということだ。

どうしてリオがそれを隠すのかは予想はつくが、ホムラは聞かなければならなかった。

「……あまり面白い話ではないかと思いますが」

ホムラ達に警戒を促す意味も込めて、リオは遠まわしにその覚悟の程を尋ねた。

本当に聞きたいのか、と。

聞けば確実に胸糞が悪くなるような話だ。

「我々はそれを知らなければならない。あの子達を国から追いやり、そなたにまで苦労をかけてしまった我々はな」

「ええ、貴方にその事実を語らせてしまうことが残酷なことだとわかっていても、私達は聞かずにはいられないの。ごめんなさい……」

かすかにうなだれて、だが、強い意志を感じさせる落ち着いた口調で、シズクは言った。

それを聞くことで辛い過去を思い出させ、リオに不快な思いをさせてしまうことは夫妻にもわかっている。

それが自分勝手な選択だとわかっていても、リオから罵られるかもしれないと思っても、それでも二人はリオにアヤメの死について尋ねることを選択した。

「そうですか……」

と、リオが力弱く呟く。

何かを戸惑うように目を瞑り、小さく深呼吸を行う。

「母は……殺されました。俺の目の前で」

そうして心を決め、リオは端的に事実を告げた。

「っ……」

ある程度予想はついていたものの、ホムラ達は大きな衝撃を受け、その動揺を隠すことはできなかった。

彼らがその動揺を抑えるのに時間を置く必要があることは明らかだが、リオは母が死んだ当時の状況を語り始めることにした。

「まず、母を殺した人物はルシウスという名の男です」

リオの父であるゼンが死んでから五年の間、リオはベルトラム王国にある質素な家で母アヤメと二人で暮らしていた。

最愛の夫には先立たれ、アヤメに残ったのはまだ赤ん坊のリオだけだ。

働こうと思っても赤ん坊のリオを置いて外に行くことはできず、貯えを切り崩して生活を送るしかなかった。

幸いゼンもアヤメも浪費家ではなかったため、リオがある程度成長するまでの間ならなんとか生きていけるくらいの蓄えがあった。

だが、生活は予想以上に大変で、ちょっとした買い物へ行くにしてもリオから目を離すことはなかなかできない。

そんな時にアヤメを助けてくれたのがルシウスという名の冒険者

の男だった。
ルシウスとアヤメが初めて出会ったのはベルトラム王国の冒険者ギルドへと最初に訪れた時だ。
腕は立つがいまだ異国の地に慣れぬ異邦人のゼンとアヤメに声をかけて、あれこれと面倒を見たのがルシウスである。
アヤメがリオを身籠った時も積極的にゼンに割の良い仕事を紹介し、時には一緒のパーティを組むこともあったようだ。

一見すると無精髭の目立つ粗野な容貌のルシウスだったが、その振る舞いは実に紳士的であった。
ゼンの死亡後には一人でリオを育てるアヤメの日常生活をルシウスは援助した。
リオもルシウスが母のもとによく訪れていたのは覚えている。
気さくな雰囲気でリオと遊んでくれたりもした。

だが、それらはすべて演技だった。
リオが五歳になったある日、どうしても外出しなければならない用事が出来て、アヤメはルシウスにリオの子守りを任せることになる。
その日、ルシウスは人が変わったように冷酷な人物へと豹変した。
アヤメが消えた直後、ルシウスはそれまで抑えつけてきた感情を爆発させたかのように愉悦に染まった表情を浮かべた。
そんなルシウスの顔を間近で見て、リオが恐怖を覚え思わず後ずさる。
だが、ルシウスは足を前に踏み出し、リオの腹を勢いよく蹴りつけた。
「がっ」

鈍い声を漏らし、まだ幼いリオの身体が勢いよく宙に舞う。
そのすぐ後にすさまじい衝撃がリオの全身を襲った。

「おーい、もう入ってきていいぜ」

腹を抱えて苦しむリオを放置して、家の外に出ると、ルシウスは見知らぬ男達を家の中に招き入れた。
朦朧(もうろう)とした意識でリオがその光景を眺めている。
どうして自分は腹を蹴られたのか。
あの優しかったルシウスはどこに消えたのか。

「ど……し……て？」

息も絶え絶えに、リオは疑問を口にする。

「どうして？　んなもん食べごろになったからに決まってんだろ」

言って、我が意を得たとばかりに、ルシウスは口元を歪めた。

「そういうわけだ。リオ君、少しお寝んねしてようか」

妙な薬品の染みた布で口をふさがれ、リオが意識を失った。
そして、リオが目を覚ました時、アヤメはルシウスに犯されていた。
当時のリオにはルシウスが何をしていたのかを理解はできなかったが、アヤメが嫌がっていたことだけはわかった。
目覚めたことに気づくと、ルシウスはリオに見せつけるようにアヤメを犯し続けた。
アヤメは嫌がっていたが、リオに害を加えると言われれば、黙って言うことに従っていた。

「おい、こいつをスラムにでも捨てて来い」
ルシウスの手により首を絞められアヤメが死に、すべてが取り返しのつかないことになった時、ルシウスは取り巻きの男にリオをスラムに捨ててくるように告げた。
「へっ、処分しないんですか？」
不思議そうな顔をして男が尋ねる。
「おいおい、そんなことしたら面白くねぇじゃないか。こいつはまだ収穫期じゃないぜ」
「し、収穫期ですか？」
随分と上機嫌なルシウスに、男は上ずった声を出した。
「もし生き延びたらこいつは俺に復讐しに来るかもしんねぇ。そういう輩を返り討ちにすると極上に美味ぇんだ」
「は、はは……」
ぼんやりとした意識の中で、狂気に染まったルシウスの暗い笑みが、リオの視界に写った。
それから、リオはスラムに捨てられ、曖昧な記憶で王都中を歩き回ってようやく家に戻ったが、家の鍵は固く閉じられ、私財もすべて無くなっていた。
まともな戸籍が存在しない以上、リオがアヤメの息子であると証明する手段もない。
そうして、リオは二年もスラムを彷徨(さまよ)うことになった。

「以上です」

静かに微笑みながら、冷たく、淡々とした口調で、リオは話の終わりを告げた。

室内には暗澹(あんたん)とした雰囲気が流れている。

ホムラは震えながらじっと目を閉じ、シズクは顔を伏せて泣いていた。

ゴウキは憤怒を露わにした表情を、カヨコは氷のように冷たい表情を、それぞれ浮かべている。

そんな彼らをリオはじっと見つめていた。

「リオよ、そなたは我々のことを恨んでいるのだろうな……。アヤメをそのような目に遭わせた我々のことを……」

リオの沈黙に耐えかねたように、何らかの感情をぐっと押し殺したような声で、ホムラが呟いた。

「恨んでいます」

僅かな逡巡(しゅんじゅん)さえなく、リオはきっぱりと言い切った。

「っ……」

罵られる覚悟もしていたのであろうが、その一言はホムラ達の胸に深く突き刺さり、ビクリとその身体が震わせた。

だが、数瞬の間をおいて語られる次の言葉が彼らを現実に引き戻す。

「と、言う人がいてもおかしくはない状況なのかもしれませんが、別に自分は貴方達のことを恨んではいません」

リオは苦笑していた。
そんなリオを呆然とした面持ちでホムラ達が眺めている。
では、どうしてリオはホムラ達を驚かせるような真似をしたのか。
リオはホムラ達の少々的外れな加害者意識に呆れを抱いたのだ。
こうやって驚かせて灸を据えるくらいのことをしてやりたいと思うくらいに。
「本当に貴方達に恨みなんて抱いていないんですよ」
言って、どこか悲しげな微笑を浮かべながら、リオは首を左右に振った。
「ゴウキ殿から当時の状況を聞いた限り、父と母が国を出たのは仕方がなかったというのもありますが――」
面子のために国から追いやられたとはいえ、ゼンとアヤメは望んでこの国を出て行ったはずだ。
国を出なければ二人が結ばれることはなかったのだから。
「自分は短かったとはいえ母を身近で見てきましたから――」
リオは知っている。
アヤメは国を出たことを後悔なんてしていなかった、と。
「だから、母は幸せだったと断言できます。貴方達を恨むのは筋違いでしょう」
母との想い出を偲ぶように、リオは遠い目を浮かべた。

ゼンが亡くなっても、アヤメは自らの人生を嘆くことはなかった。
アヤメはゼンと過ごした日々を大切にし、ゼンの分までリオに愛情を注いでくれた。
リオと接し、ゼンのことを語る時、アヤメの表情は本当に幸せで満ちていて、辛そうな顔つきをリオに見せたことなんて一度もなかった。
そんな彼女が国を出たことを後悔しているはずがなく、ましてやホムラ達を恨んでいるはずもない。
ならば、自分がホムラ達を恨むのは的外れだ。
恨むべきは母を殺した人物だろう。

「っ、そうか……」

リオの言葉に、身体を震わせ、ホムラは深くうつむいた。
先ほど恨んでいると言われた時よりも、今のリオの言葉は胸に深く突き刺さった。
自分の無力さに本当にどうしようもないやるせなさを覚える。

「アヤメ……」

シズクのすすり泣く声が室内に響く。
いや、シズクだけではない。
この場にいるリオ以外の誰もが目に涙を浮かべていた。
そうしてどれ程の時間が流れたのだろうか。
やがてシズクの泣き声も収まり、室内に静寂が訪れた。
ある時、ホムラがうつむかせていた顔を上げて――。

「ルシウスといったか。リオよ、そなたはその男のことを……。その男に復讐をするつもりか？」

ふと、堰(せき)を切ったように、そんな言葉を口にした。
それは大切な者を奪われたものなら誰もが抱く感情だろう。
だから、ホムラがこの質問を投げかけたのは必定であったのかもしれない。

「はい」

予想していた答えに、やりきれない表情を浮かべ、ホムラは内心で深く息を吐いた。

「そうか……。儂とてその男のことは憎い。だが、そなたがその道を歩むというのならば言っておかなければならないことがある」

言って、ホムラはリオの覚悟の程を見定めるように目を細めた。

「なんでしょうか？」

そんなホムラの視線を真っ向から受け止め、リオが尋ねる。

「復讐は正義ではない。復讐は復讐を呼ぶこともある。そのことを理解してはおろうな？」
「はい」
「そうか、それでも殺すか？」
「ええ、あの男が今ものうのうと生きているのならば自分の手で殺します」

端正な顔を少しも歪ませることなく、落ち着いた明瞭な声で、リオは淡々と自らの意志を表明した。
その瞳には復讐に囚われた執着心は存在せず、気の迷いといったものも存在せず、何かを気負ったところもない。

それは、この世に絶対的な価値観が存在しないと知りながらも、自らの価値観を貫き通すと決めた者の目だ。

「そうか。ならば儂はそなたの復讐を止めまい」

人の感情は綺麗事で流せるほどに軽いものではない。

もしリオが己を見失っていたというのならば、祖父として辛い道を進まぬように誘導するような発言をしたであろう。

だが、今のリオにはそんな真似をしても意味はない。

国王として長年生きてきた経験でホムラはそのことを理解していた。

「……だが、そなたにその意志を成し遂げるほどの強さがあるのかを知りたい。ゴウキと手合せをしてみてはくれんか？」

数瞬の沈黙の後、ホムラはそんなことを言った。

第４５話　鬼神と呼ばれた男

「……ゴウキ殿と手合せですか？」

ホムラの言葉に対し、リオは一瞬、返答に間を置いた。

そして、胡乱（うろん）げな声で疑問を口にする。

「いきなり不躾なことを言って戸惑わせてしまったな。すまぬ」

「いえ、ただ少し真意を掴みかねていると言いますか……」

苦笑しながら謝罪の言葉を口にするホムラに、リオは自らの心情を吐露した。

「少し言葉も足りなかったな。そなたの手助けをしたいと思ったのだ。復讐をするにしてもそれを成し遂げる力が必要となるだろう？」

「それは……はい」

ゴウキに視線を向けながら、ホムラは話を続ける。

「ここにいるゴウキはこの国はおろか近隣諸国でも最強と名高い歴戦の武士だ。この男と戦うことで何か学べることがあればと思ってな」

戦場に出れば一騎当千、鬼神の二つ名を持ち、戦場で屠ってきた強者どもの数は計り知れない。

長年にわたって積み重ねてきた実績と信頼により、ホムラはゴウキの強さに全幅の信頼を寄せている。

そんな彼の下でなら孫に貴重な経験を積ませることができるはず

だとホムラは考えていた。

「本当はまだまだそなたとゆっくり話をしたいところなのだが、立場上、今日はもうあまり時間が残っていなくてな」

小さく溜息を吐き、ホムラは苦笑した。

こうしてリオと密会する時間を作り出すのにも少なくない手間がかかっている。

あまりリオと密会する時間が長いと、ホムラとシズクの空白の時間を不審に思う家臣達が現れる可能性もあり、細心の注意を払っているのだ。

リオの存在を隠蔽しておく以上、目立つ行動は控えなければならない。

「明日また密会する時間を設けてある。今日はゴウキの家に泊まってもらうことになるが、そこでゴウキと手合せをしてみてはどうだ？」

「なるほど……」

リオはようやくホムラの発言の意図が呑み込めた。

「そういうことでしたら、ゴウキ殿さえよろしければ……」

微笑を浮かべ、リオはホムラの提案を受け入れることにした。

ゴウキが只者でないことはリオにもはっきりとわかっている。

精霊の民の里にいた頃はこういった手合いの相手には事欠かなかったが、ヤグモへ旅を始めてからは自己鍛練しか行っていない。

久々の強者との手合せは望むところであった。

後はゴウキ次第だ。

「私も一向に構いませぬ。リオ様はかなりの実力者とお見受けしておりますゆえ」

ゴウキも不敵な笑みを浮かべて手合せを快諾した。
ホムラと違い、ゴウキはリオの強さを見抜いている。
自ら手合せを願い出ることは無礼だと控えようとしていたが、ホムラの命令であるというのならば望むところであった。

「ふむ。では、決まりだな」

満足したようにホムラは小さく頷いた。
そのまま解散の流れになると――。

「リオ、こちらに来てくれるかしら？」

部屋を出る直前に、シズクがリオを呼び寄せた。

「はい……」

戸惑いながらも、返事をし、リオがシズクに近づく。
するとシズクはリオをそっと抱きしめた。

「たった一人でこんなに大きく成長するなんて。よくここまで来てくれたわね。本当にありがとう」

およそ六尺もあるリオの身体に身を埋めながら、シズクは涙ぐんだ声で言った。
突然、抱きしめられ、リオが僅かに身体を強張らせる。
だが、シズクのぬくもりを感じとり、すぐに力を抜いた。

「いえ、私も貴方達にお逢いできて嬉しかったです。今後はそう気軽に会えそうにはありませんが、今は明日また会えることを楽しみにしています」

おそるおそるシズクの身体を抱きしめ返し、安心させるように優しい口調で語りかける。

「ええ……」

今にも消えてしまいそうな儚い笑みを浮かべ、シズクは至近距離からリオの顔を見上げた。

リオが間近から見たシズクの顔は、王族としての表情ではなく、愛する孫を愛しむ一人の祖母のものであった。

もっとも、祖母というには少々外見年齢が若いが。

そんな二人の様子を、慈愛に満ちた表情を浮かべ、ホムラが眺めている。

「行こう、シズク」

「はい……」

自由に孫と会う時間すら満足にとれない王族の身が実に嘆かわしい。

そう言わんばかりの面持ちで、ホムラはシズクに声をかけた。

澄んだ涙を浮かべ、シズクがこくりと返事をする。

そのまま二人は部屋から立ち去った。

「では、リオ様。ご案内いたします」

部屋からホムラとシズクが立ち去ると、ゴウキが静かに言った。

「はい。お願いします」

平静な声で、リオが返事をする。

それから、ゴウキとカヨコに連れられ、リオは王城を後にした。

サガ家の邸宅は王都の中心部に近い武家街にある。

武家街には閑静な雰囲気が漂っており、人通りはあまり多くない。

各々の邸宅の周囲には松に似た木が計算しつくされた配置で生え揃っていた。

「こちらでございます」

ゴウキとカヨコに案内されたのは見る者を威圧するような巨大な屋敷であった。

武家街の中でも、サガ家は一際、立派な屋敷のようだ。

家の素材には木と漆喰が用いられており、重厚感のある屋敷が紅い塗装で彩られている。

その見事な外観にリオが感嘆の視線を向けた。

そのまま足を進め、庭の中に入ると、まだ年若い少女の声が響く。

「父上、母上！　お帰りなさい！」

現れたのはまだ十歳くらいの可愛らしい少女だった。

白い胴着に赤の袴姿で、その手には一本の木剣が握られている。

大粒の宝石のように美しい瞳、細いながらもはっきりとした目鼻立ち、非常に柔らかく肌理（きめ）細やかな陶器のように白い肌、そのどれもが極上のパーツとして、あどけない彼女を彩っている。

首下と背中まで伸びた漆黒の絹糸のような髪が、さらさらと衣に擦れて、美しい音を奏でていた。

「おぉ、コモモよ。ただいま」

ゴウキがそのいかつい顔に似合わぬだらしない笑みを浮かべる。こんな表情もできるのかと、リオは僅かに目を見開いた。

「父上、その方は……」

リオの存在に気づき、コモモと呼ばれた少女が不思議そうに尋ねる。

「リオ殿、紹介が遅れましたな。この子は私とカヨコの娘でコモモと申します。コモモ、リオ殿にご挨拶なさい」

この屋敷に滞在する間はリオを一客人として扱うことが道中で決められた。

といっても注意すべきことはゴウキとカヨコの口調くらいだが。年若いリオに対する口調としてはやや丁寧だが、ゴウキとカヨコにも妥協できないラインがあるらしい。

「はい！　サガ＝コモモです！　よろしくお願いします」

天真爛漫な笑みを浮かべ、コモモはリオに頭を下げた。

「初めまして。リオと申します」

リオも頭を下げ返し、慇懃に名乗りを上げる。

「それでは早速となりますが道場へ行きましょうか。コモモよ、ハヤテは道場か？」

「はい！　私も先ほどまで稽古をつけてもらっていました」

「そうか。今からリオ殿と儂が手合せをする。お前も見学するといい」
「はい！」
二人の手合せに興味を持ったのか、コモモが元気よく返事をする。
コモモを引き連れ、道場へ行くと、そこではハヤテが黙々と木剣を振るっていた。
「ああ、父上に母上、二人とも帰って……リオ殿！？」
ゴウキとカヨコの姿を目にして、ハヤテが晴れやかな笑みを浮かべる。
だが、この場にいるのが想像もつかぬ人物の姿を目にし、素っ頓狂な声を出した。
「こんにちは。ハヤテ殿、それほど久しぶりというわけでもありませんが」
ハヤテの反応に苦笑しつつ、リオはハヤテに再会の挨拶を告げた。
「ああ、久しぶりというわけでもないが、どうしてリオ殿がここに？　もしやルリ殿に不埒な真似をしたあの男の件か？　あの男ならしっかりと処罰をして今ごろはどこぞで強制労働をしているだろうが……」
ハヤテは何やら見当はずれな方向に勘違いをしているようだ。
リオがこの場に姿を現す理由などそれくらいしか思いつかなかったのだろう。
とはいえ、ハヤテはリオの素性を知らぬのだから、無理もない。

「リオ殿は我が家の客人としてこの家に滞在することが決まった。これからリオ殿と手合せをするからお前も見てなさい」
「は、はい……」

戸惑いながらも、ハヤテが首肯する。
リオがこの家にやって来た理由は気になるが、今はそれを尋ねる雰囲気でもない。
ハヤテが戸惑っている間にもリオとゴウキの手合せの準備は着々と整っていた。
木剣を手にし、リオとゴウキが道場の中央で向き合っている。
審判役のカヨコが二人の側に近寄った。

「取り決めは命を奪わないことのみです。怪我については精霊術による治癒がありますゆえ、遠慮せずに打ち合ってください」

静かな声でカヨコが試合のルールを説明する。

「うむ」
「はい。わかりました」

ゴウキが力強く返事をし、リオも朗々と返事をする。
木剣を手に馴染ませるように何度か握ると、リオが構えをとった。
ゴウキも準備が整ったのか、静かに構えている。

「始めっ！」

カヨコの合図を皮切りに試合が始まる。
瞬間、ゴウキの威圧感が膨れ上がった。
その場にいるだけで逃げ出したくなるであろう気迫だが、この場から逃げ出す者はいない。

とはいえ、ハヤテは僅かに額に冷や汗を流し、コモモはだいぶ緊張した様子を見せている。
リオとゴウキ以外で冷や汗を流していない者はカヨコだけだ。
ゴウキの威圧感を正面から当てられているリオはというと、いつも通りの冷静そうな顔で悠然と構えていた。

一秒、十秒、一分と時間が過ぎていくが、二人は黙ったまま向き合っている。
いつまで経っても動き出さない二人に、普段のゴウキを知るハヤテとコモモは驚いていた。
ゴウキは果敢に攻め込んで相手を一瞬のうちに屠(ほふ)る猛者として知られている。
それは慢心などではなく、圧倒的な状況判断能力と実力差があるからこその芸当だ。
鬼の如き武者振りからつけられた二つ名が鬼神であり、指導稽古の際にも自分から動いて相手を誘導するようなタイプの武人である。
そんなゴウキが身動き一つとれずに釘づけにされている。
ハヤテとコモモが驚くのも無理はなかった。

リオと向き合い、ゴウキは微妙な力の入り具合を読み取られていることを察していた。
下手に動けば後の先をとられる。
それだけでリオがどれほどの実力者であるかは容易に測ることができた。
ゴウキの顔に獰猛な笑みが浮かぶ。

対するリオはゴウキが予想以上の使い手であったため、かつてない程に集中していた。
下手に実力を隠したり油断すれば危うい。
直感でそれを察し、実力を隠すことは早々に諦めていた。

チリチリと放たれるゴウキのプレッシャーが次第に膨れ上がっていく。
ゴウキの身体に筋肉の緊張は一切なく、完全に脱力したまま気迫だけを放っている。

刹那、力の入る瞬間を見せずに、無拍子で、ゴウキがリオとの間合いを詰めた。
踏み込んだ勢いを借りて振り払われたゴウキの木剣を、リオが難なく受け止める。
互いの木剣が激しくぶつかり、甲高い音が道場に響いた。
つばぜり合いになった二人が至近距離から視線を交わす。
一切の攻撃の予兆を感じさせなかったはずの完璧な初撃をいとも簡単に防がれたことに、ゴウキは感激していた。
リオの技量が未熟なようであれば指導するようにとホムラから命令を受けていたが、そんな余裕は一切なさそうである。

「その歳でこの技量とは。当時の儂やゼンを遥かに上回りそうですな。これでまだ経験的にも肉体的にも全盛期でないと考えるとゾッとします」
「父がどれほど強かったのかについては存じませんが、鍛えてはいますから」

なんとか身体を押し込もうと、ゴウキは力を入れた。
だが、そんなゴウキの力を受け流し、リオがその勢いを利用して体を反転させる。
そのままリオが脇からゴウキに斬りかかると、激しく木剣のぶつかる音が道場の中に響き渡った。
ゴウキがかろうじてリオの攻撃を受け止めたのだ。

「……まいりましたなぁ」
的確に隙を突くリオの容赦ない攻撃を受け止め、ゴウキが楽しそうに笑みを浮かべた。
「そうは見えませんが？」
言いながら、ゆったりとした動きでリオが片足を引く。
すると、木剣を滑らせ、伸びるようにゴウキの首をめがけて切っ先を突き刺した。
「くっ、かような戦い、そうそう味わえるものではありませぬからな！　臆するなどとんでもない！」
紙一重でそれを避け、力強く踏み込み、ゴウキは神速ともいうべき速度で三連突きを放った。
しかし、リオは鮮やかにそれらを弾く。
「はは」
リオの口から乾いた笑いが漏れる。
今の突きは恐ろしいほどに技量を磨き上げた容赦のないものだった。
何年、何十年と剣を振り続けてきたのだろう。
技量だけで言えばゴウキは今までリオが戦った者達の中でも明らかに突出している。
人間族であるゆえに素の身体能力は低いはずだが、精霊術により超人的な身体能力を獲得していることから、近距離戦闘に限っていえば今までリオが会った者達の中で最強クラスのはずだ。

「ゼンも天賦の武の才能を持った男でしたが、リオ様はそれ以上ですなっ！」

先ほどの三連突きよりもいっそう鋭い、二連突きを、ゴウキがリオめがけて容赦なく放つ。

柄を狙って、リオはそれらを弾いた。

「ぐっ」

ゴウキの剣が逸れて、その隙に、リオが胴体に強烈な蹴りを叩き込む。

とっさに左腕でガードしたが、ゴウキが勢いよく吹き飛ばされる。

その光景をハヤテはおろか冷静なカヨコまでもが驚愕して見ていた。

一人だけ、コモモだけはその光景に目を輝かせている。

蹴られた勢いを利用し、ゴウキがリオから距離をとる。

だが、瞬間、一気に間合いが縮まったかと錯覚するような、神速の踏込で、リオがゴウキに迫った。

「くっ」

一瞬で眼前に現れたリオに、ゴウキは本能で応戦した。

苦しそうな声を出し、かろうじてリオの剣を弾く。

リオは続けざまにゴウキに追い打ちをかけた。

ほんの一瞬の間に無数の剣打音が道場に響き渡る。

「むん！」

押され気味のゴウキが、リオの一瞬の隙をついたかのように、鋭く剣を振り下ろす。

必中するはずだった攻撃は、リオが体を回転させると、あっさりと避けられた。
すぐさまリオに斬撃を叩き込まれたが、ゴウキがとっさにそれを受け止める。
「ぐっ、今の隙はわざと作ったものですか。素晴らしいですな」
苦しそうな声を出しながらも、ゴウキは実に愉快そうに笑った。
反射でリオの攻撃を防げたのは何となく嫌な感じがしたからだ。
「反射で今のを防いだのも十分凄いと思いますが」
「戦闘経験ならそこいらの強者とは比較にならない程に踏んでおりますからな！」
再度、二人の間で無数の斬撃が飛び交った。
もはやどちらから仕掛けているのかわからないほどに激しく鋭く斬り合っている。
脱力したままに不意を打って攻撃し合う二人だが、経験と天性の勘で、捌き、捻り、お互いの攻撃を防いでいる。
そうして数百という剣撃がお互いを行き交い、ハヤテとコモモは唖然とした面持ちでその攻防を眺めていた。
「父上が押されている……」
唖然としながらもハヤテは戦況を分析していた。
ゴウキはカラスキ王国はおろか、ヤグモ地方でも最強と名高い武人だ。
伊達に鬼神と呼ばれているわけではない。
そんな自分では手も足も出ないゴウキを、自分よりも年下の少年が圧倒している。

いまだ一度も有効打を与えられていないゴウキに対し、リオは何度かゴウキに有効打を加えている。
もし実剣だったならば、ゴウキの身体にはいくつもの裂傷ができているだろう。

剣主体のゴウキに対し、リオの戦闘スタイルは剣術と体術を織り交ぜた変則的なものだ。
片手で剣を扱い、残った手と足で相手の不意を突くように鋭い打撃を放ってくる。
しかもまともに当たれば悶絶するか、意識を失いかねないようなものばかりなので質が悪い。
その動きを読み切れずに、何発か良い打撃をゴウキはもらってしまった。
とっさに体をずらしたりガードをして威力を殺したが、足が僅かに震えている。
だが、それでもゴウキに怯む様子はない。
こんな血肉が湧き踊る戦いをそう簡単に終わらせてたまるかと言わんばかりに、猛々しい笑みを浮かべ、果敢にリオに攻撃を仕掛けていた。

「はっはっは。ゾクゾクしますな！」

戦いとはこうでなくてはと大声で叫ぶと、ゴウキが手放しでリオを称賛する。
その間にも無数の攻撃が行き交っているが、やがてリオの攻撃を捌ききれなくなったところで、ゴウキはリオから距離をとった。

「ま、まさか父上！　あの技を！？」

距離をとり剣を構えたゴウキの姿を見て、ハヤテが驚きの声を上

げた。
それは何度か見せてもらったことのある技をゴウキが放つ予兆だ。
すべてを飲み込む雪崩のように激しいプレッシャーを、ゴウキはリオに向けて放った。

「サガ流、奥義一の太刀、断空！」

そう叫んで、ゴウキが剣を振ると、一閃の斬撃がリオに向かって放たれた。
それは精霊術により生み出された真空の刃だ。
精霊術は魔法と違って呪文の詠唱は必要ないことから、別に技の名を言う必要はないように思える。
だが、精霊術は魔力の操作に加えてイメージの強さがそのまま威力に直結する。
無駄なように見えて技名を言うことはイメージの手助けとなるのだ。

加えて、ゴウキは長年にわたってひたすら剣を振り続けてきた。
そんな彼が、長い歴史の中で先達が考え抜いた一切無駄のない動きで、相手を切り捨てることだけを考えて剣を振り、風の精霊術を放ったのだ。
その威力はまさしく一刀両断、攻撃範囲こそ広くはないが、人間程度なら数人まとめて簡単に真っ二つにできるだろう。

ゴウキの放った真空の斬撃が瞬時にリオの眼前まで迫る。
込められたオドの乱流によりその刃を視認し、リオはその切れ味の鋭さを本能で察知した。
このまま木剣で受け止めても剣ごと切り捨てられるだろう。
そんなイメージが頭の中に浮かんだ。
瞬間、圧縮した水の刃を精霊術で生みだし、リオは左手を振るっ

てそれを真空の刃にぶつけた。
衝撃とともに、破裂音が道場に響きわたり、周囲に大量の水が飛び散った。
「むぅ……っ！？」
水しぶきで視界が鈍り、ゴウキが唸り声をあげる。
その隙にリオがゴウキの背後をとって剣を突き刺した。
「私の負けですな。まったく水気のない場所で瞬時にこれ程の水を精霊術で作り出すとは……完敗です」
体から力を抜くと、晴れやかな笑みを浮かべ、ゴウキは自らの負けを宣言した。
周囲には水浸しともいえる量の水が降り注いでいる。
水属性に適性のある精霊術者でもそう簡単に生み出せる水量ではなかった。
それを一瞬で生みだし、ましてやそれを瞬時に凝縮して刃状に形状を変化させたのだ。
恐ろしいほどの精霊術の技量である。
「ここまでのようですね」
周囲の者達が唖然とする中、いち早く我に返り、カヨコが冷静な声で試合の終了を告げる。
「ち、父上！　最後の一撃はやりすぎだったのでは！？」
ハヤテもようやく我に返ったようだ。
すると、先ほどゴウキが奥義を使用したことを咎めだした。

「リオ殿ならなんとかする。そう信じたからこそ儂はあの奥義を使った。実際に大丈夫だったではないか」

彼の戸惑いをよそに、苦笑を浮かべ、ゴウキは言った。

「そ、それは結果論でしょう！？」

ゴウキの釈明を聞いても、ハヤテが納得した表情を浮かべることはない。

防げたからいいものの、当たっていればリオは身体を両断されていたはずだ。

「ハヤテよ。ああして立ち会ったからこそ解ったことがあったのだ。リオ殿にあの攻撃が当たることはないとな」

「たしかにリオ殿は尋常ならざる強さを誇っていましたが……」

納得することはできないが、上手く言い返すこともできず、ハヤテが言葉に詰まる。

「ゴウキ殿は私が対処できると考えたからこそあの技を放ったんだと思いますよ」

そこにリオが言葉を挟んだ。

「そう、なのですか？」

「ええ、戦闘中に不意を打つように放ってきたならともかく、あんな真正面から正々堂々と放てば対処してくれと言っているようなものです」

「それは……」

来るとわかっていてもあの技に対処できる人間はそうそういるものではない。
まず真正面からあの気迫を受け止めるだけで足を竦ませてもおかしくないのだ。
その上であの真空刃を見切って対処するなど、少なくともハヤテは絶対にやりたくない。
先ほどの技が自分に放たれたことを想像し、ごくりと、ハヤテは唾を飲んだ。

「ご明察でございます。ハヤテよ、そういうことだ。まぁ、儂は避けるかと思ったのだがな……」

前半はしたり顔であったが、後半は消えるような声でぼそりと呟いた。
ゴウキとしては見せ技としてあの奥義を使用しただけで、リオが避けることを前提に放っていたりする。
リオが避けた場合は道場の壁を切り裂いていたであろうが、そんなことはどうでもいいと思えるくらいに熱中していたのだ。
ちらりとカヨコに視線を向けると、ゴウキは冷たい視線を向けられていることに気づいた。

（むぅ、少し熱くなりすぎた。これは後で確実に説教を受けるな……）

確実に対処されるとわかっていたとはいえ、敬うべき相手に危険な技を放ったことに違いはなく、その件についてお咎めを受けるのは必至である。
普段は物静かな最愛の妻が冷たく怒った時のことを想像し、ゴウキは冷や汗を流した。

「とはいえ危険な技を使用したことに違いはありませんでした。リオ殿、すみませぬ」

少しずつ頭が冷めてきて、ゴウキはリオに深く頭を下げた。

「いえ、大丈夫ですよ。素晴らしい技を見せていただきました」

リオとしてもあれが見せ技とわかっていたので、別に気を悪くしているわけではない。

「あ、あの！」

不意にコモモの弾んだ声が道場に響き、全員の視線がコモモに向いた。

「私とも勝負してください！」

きらきらと目を輝かせ、コモモがその大きな瞳でじっとリオを見上げる。

「えっと……」

突然のコモモからの頼みに、リオは言葉に詰まった。

「ふはは、コモモは強き者に惹かれるところがありますからな。今のリオ殿の戦いを見て興味を持ったのでしょう」

そんなリオにゴウキが事情を説明する。

「はい！　先ほどは素晴らしい戦いでした！　父上を負かした人なんて初めてです！」

無邪気に笑みを浮かべ、コモモは言った。

「お願いします！」

言って、コモモが勢いよく頭を下げる。

その直向きな様子がリオには微笑ましく映った。

「そうですね。いいですよ」

「リオ殿、ありがとうございます。コモモよ。リオ殿はコモモの遥か上にいる人物だ。胸を借りるつもりでやってみなさい」

「はい！　ありがとうございます！」

コモモの願いを承諾したリオに、すかさずゴウキが礼を述べる。

眩しい笑顔を浮かべて、コモモもリオに礼を言った。

「では、まずは部屋の水を何とかしましょう」

そう言うと、リオは部屋に散らばっている水を一か所に集めて渦を作った。

そのまま窓から道場の外へと動かし排水する。

その間、実に数秒、ゴウキ達は目を丸くしてその光景を眺めていた。

「リオ殿は精霊術も生半可ではありませぬな……」

「いえ、そこまでは……」

ゴウキ達の反応からすると、どうやら今リオが精霊術で行ったこ

とは彼らにとってはだいぶ難易度の高いことのようだ。
リオはこの国の人間族がどれくらい巧みに精霊術を扱えるのかをあまり把握していない。
このくらいならハイエルフのオーフィアは容易くやってしまうだろうし、他にも水の精霊術に長けた精霊の民ならば普通にやってしまうはずだ。
だからこの程度なら大丈夫かと考えていたのだが、少しやりすぎたのかと、リオは内心で僅かに冷や汗を浮かべていた。
ちなみに人間族よりも精霊術の適性が高い精霊の民達と比べている時点で、リオは比較対象を間違えていたりする。

「それではコモモさん。やりましょうか」

それ以上の追及を受ける前に、さっさとリオは道場の中心に向かった。

「はい！」

その後を興奮したコモモが追っていく。
道場の中心に立つと、心を落ち着かせ、コモモは凛々しい顔つきを浮かべた。
そして、木剣を両手で持って、正眼で構える。
コモモの雰囲気が一変したことに、リオが感心したような視線を向けた。

それから、試合はすぐに始まり、リオは気が済むまでコモモの鍛錬に付き合うことにした。
果敢にコモモに攻撃させ、それらを巧みに捌き、隙が大きければ反撃を行い指導する。

「はぁ、はぁ……」

十分ほど打ち合うと、息を切らし、コモモは倒れるようにペタリと地面に座り込んだ。

疲れてはいるが、その表情は満足気なものである。

普段、家族と戦っているだけでは決して得られない経験を積むことができ、心の底から喜びを噛みしめているのだ。

まだ自分はもっと上に行ける、もっと強くなれる、と。

今も目の前でまったく息を切らすことなく佇むリオの姿が眩しくて、コモモは心を奪われたようにリオを見上げていた。

第４６話　村へ

ゴウキと手合せを行った翌日、リオは再び国王夫妻と密会していた。

「話は聞いた。ゴウキに勝利したようだな。見事としか言いようがない」

開口一番に、ホムラが畏敬の念を込めてリオを褒め称える。

この密会の前にホムラはあらかじめ手合せの結果をゴウキから聞いていたのだ。

国で最強の剣士と名高いゴウキがまだ十四歳の少年に負けた。

最初は何の冗談かと思ったが、ゴウキがそのような冗談を言う人間でないことはホムラが一番よく知っている。

その事実を受け止めるのに決して少なくない時間を要したが、こうしてリオと対面するまでの間には何とか落ち着きを取り戻していた。

「凄いわ、リオ。あのゴウキに勝つなんて」

シズクが邪気のない笑顔でリオを褒める。

称賛の中に困惑が混じっているホムラとは異なり、シズクは純粋にリオの勝利を喜んでいるようだ。

「ありがとうございます」

シズクによる手放しの称賛に妙なむずがゆさを覚え、リオは照れ臭そうに頭を下げた。

「ゴウキの下で修業をと考えたのだが、無用な気遣いだったようだな……」

言って、どこか寂しげな笑みを浮かべるホムラ。

ホムラとしてはリオさえ望めばゴウキの下で修業をつけさせるつもりだった。

そうなれば必然的に王都で暮らすことになり、リオと密会できる頻度も増えそうだと密かに考えていたりもしたのだ。

諸々の事情からリオの素性を明らかにできない以上、リオと過度に接触することは控えなければならないのだが、それでもリオと会いたいという気持ちはあった。

残念ではあるが、これで良かったのかもしれないと、ホムラは止む無くその思いを断つことにした。

「いえ、貴重な経験を積むことができました。ゴウキ殿のような方と戦える機会はそうそうありませんから。ご配慮くださりありがとうございました」

そんなホムラの心情を知ってか知らずでか、リオがホムラに礼を述べる。

ある意味で嫌味とも受け止められかねないが、その声色には厚い謝意が込められていた。

「それは……そうであろうな」

唸るように、ホムラがリオの言葉の一部に同意する。

その一部とはゴウキ程の人物と手合せを行う機会に恵まれるという点であるが、ホムラの声色には名状しがたい感情が含まれていた。

この国でゴウキ以上の武士は存在しない。

近隣諸国を探し回ってもおそらく見つけることはできないだろう。
だというのにリオはそんなゴウキよりもさらに上にいるという。
そうでなければシュトラール地方からヤグモ地方へと一人で旅をすることもできないのだろうが、この年齢でそれだけの実力を備えていることには畏怖の念を抱かざるをえない。
いったいどれほどの才能を有しているというのか、あるいはどれ程の修羅場を潜り抜けてきたのか。
いずれにしろリオを取り巻く複雑な事情が存在しなければ、国で抱えようと考えていてもおかしくはなかった。
ついつい国王としての顔が現れてしまうことに、ホムラは苦笑せざるをえない。

「ところでリオはこの国にはどのくらい滞在する予定なのだ？」

国王としての思考を断ち切るため、ホムラは少しばかり不自然に話題を変えることにした。
本当は昨日のうちに聞いておくべき事柄であったのかもしれないが、諸々の事情から時間も足りなかったし、そういう雰囲気でもなかった。
思考を切り替えるためとはいえ、尋ねておくべき話題であることに違いはない。

「来年の秋頃まではこの国に滞在したいなと考えております」

ホムラの質問にリオはよどみなく受け答えた。
リオが提案して取り組んでいる農業の改善作業はまだ終わっていない。
その成果をきちんと見届けるため、リオは次の収穫期までは村に滞在したいと考えていた。

「ほお。思ったよりも長く滞在するのだな」
「はい。村の仕事を手伝ったりしないといけませんから」
「む、そうか……。そうだな……」

平民に混ざって働いているリオの姿を想像し、ホムラは一瞬、複雑な表情を覗(のぞ)かせた。
リオが王族である事実が非公認であり、今後もリオが公の場で王族として扱われることがない以上、リオが王族の常識が通じない世界で生きていることは当たり前である。
リオとホムラとでは住む世界が違う。
それはホムラも当然の如くわかっている。
だが、こうして実際にリオの暮らしぶりを耳にするまで、ホムラは無意識のうちにリオを自分と同じ世界にいる存在だと思い込んでいた。
リオの過酷な過去の経歴を聞いたばかりだというのに、今の今までリオが現実で生々しく暮らす姿を想像していなかったのである。
それはリオに対するホムラの隠れた願望の表れであり、思慮の浅さでもあった。
そんな自分を恥じるようにホムラが苦い顔を浮かべる。

「時折でいい。こうやって王城へ来て我々の話し相手となってくれないか？」

こうしてリオを呼び出すことでリオの暮らしを邪魔することになるのはわかっている。
だがそれでもまたこうしてリオと会って話をしたいという気持ちを抑えつけることはできなかった。
リオがやがてこの国を立ち去るというのならば少しでも話をしておきたい。
たとえそれが我儘だとしてもだ。

「それは……はい。自分でよろしければ」
そんなホムラの内心を知る由もなく、リオは控えめに返事をした。
確約はできずとも、リオにもそうしたいという気持ちは少なからず存在する。
「そうか。ありがとう」
非公式の場であるとはいえ、王族であることも忘れ、ホムラはリオに深く頭を下げた。
隣にいるシズクもリオに頭を下げている。
「頭を下げるのはやめてください」
そんな二人の姿に目を丸くし、リオがホムラとシズクに呼びかける。
王族たる者、簡単に頭を下げるべきではないはずだ。
例外は付き物だろうが、今はその時ではないとリオは思った。
「いや、我々の我儘に付き合わせてそなたの時間を奪うことに違いはない。そなたには迷惑と苦労を掛けてばかりだ」
「そのようなことはありません」
心苦しそうに語るホムラに、リオはきっぱりと頭(かぶり)を振った。
「貴方達と会うのが嫌なら、自分はこの場に来ることを拒否しています」
たしかに召喚にやって来たゴウキ達の雰囲気からして断りにくい

というのもあった。
だが、それでも本当に嫌だと思っていたら最初からこの場所には来ようとはしていなかったはずだ。
リオは自らの意志でこの場にやって来たのだ。
「まだ実感は薄いですが、見知らぬ家族に会ってみたいという気持ちがあったからこそ、この場にやって来たのです」
少し気恥ずかしさを覚えながらも、リオは話し続ける。
「自分はやがてこの国からいなくなりますが、今後も家族として親交を温めたいという気持ちは私も同じです」
ユバにしろ、ホムラやシズクにしろ、リオの両親が好きだった人達に違いない。
そんな人物達と自分も仲良くなりたい。
そして自分の知らない両親の話を聞いてみたい。
そう考えるのはおかしなことではないだろう。
「リオ……」
感極まったように、シズクがリオの名を呼ぶ。
「ならば少しでも親交を深めなくてはな……」
言って、ホムラも顔をほころばせた。
しんと、部屋の中が静まり返る。
決して気不味い沈黙というわけではなかった。
どこか居心地の良い空気が流れ、やがてお互いの距離感をつかむように、ぽつりぽつりと会話が繰り広げられる。

会話の内容はお互いにとっての共通項であるゼンとアヤメにまつわる微笑ましいエピソードが中心だ。
今、この場で、復讐という無粋な話題を語ることは許されない。
そんな暗くなる話をしようとはとても思えなかった。
そうして三人は心行くまで歓談を続けることとなる。

「もうあまり時間も残っていないのだが、何か聞いておきたいことはあるか？」

そんな温かな時間も無限ではなく、瞬く間に密会は終わりを迎える時間を迎えようとしていた。
この会談の後、ゴウキの家でもう一泊し、リオは村へと帰ることになっている。
後日、再び再会する約束を交わしはしたものの、折を見てゴウキが使者として村へやって来ることが決まっているだけで、具体的な日取りは一切決まっていない。
次に会うことができるのがいつになるのかはわからず、何か言いたいことがあるのならばこの場で伝えておく必要があった。

「今、私が暮らしている村に父方の従姉妹の少女がいます。その子に私の素性を話してもよろしいでしょうか？」

リオがルリに関して自らの情報を開示することの許可を求める。
無暗にリオの素性を知る者が増えるのは好ましいことではないが、ルリには自分との関係を教えておきたかった。
リオは自分がルリと親族関係にあることを知っているのに、ルリはそのことを知らない。
それなのにルリはリオと家族同様に接してくれている。
そんな彼女にいつまでも本当のことを隠したままでいるのは騙しているようで気が引けた。

どこまで情報を開示するのかは難しいところだが、中途半端に教えて下手な好奇心を持たれても困るので、教えるのならばその全容を語ることになるだろう。
もちろん教えることで僅かだが秘密が漏洩するリスクが生じるが、ルリが黙っている限りは何の問題もない。

「ふむ。従姉妹か。秘密を厳守できるというのならば問題はない。そなたの判断を信頼しよう」

僅かに考えるそぶりを見せたものの、ホムラはすんなりと許可を与えた。
それだけリオのことを信用しているということだろう。

「ありがとうございます」

翌日、コモモの鍛錬に再度付き合い、ハヤテとも簡単な手合せをすると、リオはサガ一家に見送られてゴウキの家を出発した。
通常ならば半日かけて移動する距離でも、リオならば走ってほんの一時間足らずで村へと辿り着く。
村に戻ると、村人達から「おかえり」と歓迎され、出会う村人達にリオも声を出して挨拶を返していく。

「リオ、おかえり」

今や住み慣れた家に入ると、広間の茣蓙（ござ）に座っていたユバが朗（ほが）らかな笑みを浮かべてリオを歓迎した。

「はい、ただいま戻りました」

王都へ行く前と変わらぬ笑みを向けてくれることが嬉しくて、リ

オも思わず顔をほころばせる。
「ちゃんと話はしてきたみたいだね」
「ええ」
「二人きりの時は口調を改めた方がいいかい？」
「やめてください」
冗談めいたユバの提案をリオが苦笑して断る。
するとユバはカラカラと笑った。
「リオが王族だろうと私とあんたは祖母と孫さ。私はそう思っている。あんたがそう思ってくれている限りこの関係は続いていくよ」
「……ありがとうございます」
表情を柔らかくして頷くと、リオはユバの正面に腰を下ろした。
「ルリさんに自分の素性を明らかにする許可をもらってきました。彼女にその話をしても大丈夫でしょうか？」
挨拶代わりの会話を交わすと、真剣な面持ちでユバを見据えて、リオはおもむろに話を持ち出した。
リオの真摯な視線を受け止めながら話を聞き、ユバは小さく深呼吸をした。
「あの子もリオと血が繋がっている。それにこうして一緒に暮らしている以上、ルリにも知る権利があるはずさ。私はあんたを支持するよ」
数秒の間を置き、ユバは悠々とした声で答えた。
お互いに真っ直ぐな視線を交わし合う。

「ルリさんは今どちらに？」
「村の女達とお茶でもしてるんじゃないかね。村人経由でリオが帰って来た噂を聞きつけたのならそろそろ帰ってくるかもしれないよ」
収穫期も終えた現在は村の仕事も少なく、村人達は暇を持て余し気味であった。
何もない村の中で仕事以外にすることは特になく、その仕事さえ無くなってしまうとなると、村人同士で駄弁るくらいしかすることはない。
最近ではルリも仕事がなく、日中から村の同年代の少女達と歓談をする日が増えていた。

「ただいま～！　リオ、おかえりなさい！」
噂をすれば影がさすとやらで、間もなくしてルリが家に帰って来た。
すぐさまリオの存在を確認すると、花が咲いたような笑みを浮かべてリオに話しかけた。
自らの帰宅とリオの帰宅に対する挨拶を一度に行ったことが少し可笑しくて、リオがくすくすと笑った。

「はい。ただいま戻りました、ルリさん」
「うん！　なんかいきなり王都に行っちゃったから驚いちゃったよ。お婆ちゃんに聞いても事情を説明してくれないしさ」
何も教えてくれなかったことに僅かな不満を感じさせるように、ルリは肩を竦めた。
ストレートに何があったのかを聞いてはこないが、やはり気になってはいたようだ。

「実はその件でルリさんにお話がありまして。ただ、聞いてもらうとなると話の内容を秘密にしてもらう必要があるんです」

そこはかとなく心苦しそうな笑みを浮かべ、リオは語った。

「う～ん、どういうこと？」

漠然とした説明に、ルリが首を傾げて尋ねる。

「語る内容は主にこうして自分がこの家で暮らすことになった理由についてです。これ以上は秘密を守っていただくと約束して頂けない限り説明することができないんですが」

先だって詳しく事情を説明することもできないため、どうしても意味深長な言い方にならざるをえない。

ルリの答えを見極めるべく。リオはその顔を覗き込んだ。

「……わかった。約束するよ」

静かだが力強い声でルリが首肯する。

その真摯な眼差しを受け止めると、リオはルリに事情を説明することにした。

一つ一つ順序を追ってリオが置かれていた境遇を語っていく。

「え？　え？　リオは私の従兄弟だけど、お母さんは王族で……、え、え～！？」

リオの母が王族だと告げると、ルリはまさしく鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。

「えっと、何かの冗談だよね？」

同意を求めるように、おずおずとルリが尋ねる。

「本当のことだよ。リオの父親……あんたの叔父はこの国の王女様と結ばれたんだ」

真面目な表情を浮かべて、ユバがリオの話が事実であると証言した。

その様子からするとユバが嘘を吐いているようには見えない。

ユバとリオの顔を何度も見比べると、

「え、えっと、リ、リオ……様、申し訳ありませんでした！　今まで数々の非礼を！」

ルリは泡を食ったように平伏した。

これまで馴れ馴れしくリオに接してきたことを思い返し、非常に無礼な行いをしてきたと思ってしまったのだ。

「そういうのは止めましょう。これまで通りでいいですから！」

そんなルリを制止するように、リオは慌てて言った。

「で、でも……、リオ様は王族になるんですよね？」

「この話は公に出来るものじゃないんです。王族なんてのも非公認の事実にすぎませんし、俺も自分が王族だなんて思っていません」

おそるおそるリオを見上げるルリに対し、リオが苦笑しながら語りかける。

「だからお願いします。どうかこれまで通りに接してください」
非常に居心地の悪そうな苦笑を浮かべるリオの顔が視界に映り、ルリはリオが本心からそう思って口にしているのだと、これまでの付き合いから判断した。
そうだ。
リオは何かにかけてそつなくこなす人間だが、決してそういった才能を鼻にかけるような真似はしてこなかった。
それが今さら自分が王族だと判明したからといって、とたんに態度を変えるような鼻持ちならない人間ではないことはルリもよく知っている。

「わ、わかりました……」

そう思ってルリは首肯した。
だがまだ緊張した声色である。
それに無意識のうちに口調も硬いままだった。

「口調、戻ってませんよ？」

リオが茶化すように指摘する。

「あ、は、……うん」

思わず硬い口調のまま答えそうになったが、何とか思いとどまり、ぎこちないながらも笑みを浮かべ、ルリは頷いた。

「いきなり従兄弟が現れて戸惑いも大きいかと思いますが、今後もよろしくお願いしますね」

改まったように頭を下げるリオ。
だがその顔は嬉しげにほころんでいた。

「あ、うん。そっか……、私とリオは従兄弟なんだ」

ルリも頭を下げ返し、再びその頭を上げると、目を瞬かせた。
今までリオが王族の息子であるという事実の衝撃が大きすぎて、ルリはリオが自分の従兄弟でもあるという事実をすっかり失念していた。
そもそもリオとしてはルリと従兄弟であるという事実を伝えたくて事情を説明したのだ。
予想はしていたものの、リオとしてはルリの反応は本末転倒である。

「そっか、お婆ちゃん以外にも家族がいたんだ……。あ、となると私の方が一つ年上だからお姉ちゃんだよね……」

次第にその事実が何を意味するのかを呑みこみ、ルリは喜びを噛みしめるように笑みを浮かべた。

「あ、ごめん！　えっと、こちらこそよろしくお願いします！」

何やら色々と考えていたのか、少しばかりだらしなく破顔していると、ルリはリオから可笑しそうに見られている事実に気づいた。
そうやって我に返り、少し顔を赤らめ、ルリは慌ててリオに頭を下げた。

「……あ、でもリオに一つだけ言いたいことがあるの。いい？」

何かを思いついたのか、頭を上げると、ルリは真面目な顔つきでリオを見据えた。

「はい。なんでしょう？」

リオも真面目な表情を浮かべてルリを見つめ返す。

その視線を受け止め、なにやら芝居がかったように小さく咳ばらいをすると、ルリは思い切ったように口を開いた。

「リオの口調を直してくれると嬉しいな。最初に会った頃に注意したけど、今までずっと丁寧な口調で話していたじゃない。従兄弟なんだからもっと親しく接してほしいんだけど」

と、どこか遠慮がちに、だが少々不満げに口を尖らせ、ルリは語った。

「えっと、以前も言いましたがこれは癖みたいなものでして。一度、こういう口調で接した相手にはよほどの理由がないと、口調を戻すのに戸惑ってしまうというか……」

困ったように苦笑し、リオがその事情を説明する。

別に人と話をするのが苦手というわけではないのだが、これはもう本当にリオの性分なのだ。

相手が子供か傲岸不遜で敵対的な相手でもない限り、リオは初対面の相手に馴れ馴れしく話しかけるのが苦手である。

もちろん親しくなれば打ち砕けた喋り方をすることもあるが、何らかのきっかけがない限り気恥ずかしさを覚えてしまって、そのまま惰性で硬い喋り方をするように心がけてしまうのだ。

「私達が従姉弟だっていうのはそのよほどの理由にならないの？」

そんなリオの説明に納得することはできないのか、ルリはジト目でリオを見つめた。
リオとは決して少なくない時間を一緒に過ごしているし、たくさんの恩を受けている。
加えて、自分とは従姉弟の間柄だというではないか。
それなのにリオが硬い口調のまま接してくるのがルリは寂しかった。
拗ねたルリの視線を受け止めると、僅かに呆けたような顔を浮かべて、リオはすぐに気恥ずかしそうに苦笑した。
「……ごめん。そうだね。これからはルリとはこうやって喋ることにするよ。これでいいかな？」
リオはそう言って、はにかんだ。
どこかむず痒そうな感じが伝わってきたが、それがルリには嬉しかった。
「うん！」
勢いよく頷き、ルリは嬉しそうに返事をした。

第４７話　いつか訪れる別れに

冬が終わり、春がやって来た。
既に水汲み水車と水路の設置は完了し、水車は必要に応じて稼働し村へと続く水路へと水を流している。
そうやって水車が水を汲んで水路へと流していく光景に、村人達も当初は仰天していた。
だが、すぐにその利便性に慣れ、今では村の農作業に欠かせない存在となっている。
土壌の改良も完了しており、現在、リオは何人かの村人と一緒に今年の収穫の向けて種まきを行っているところであった。

「リオ～。私の担当している範囲は言われた通りに種まいたよ～」
「ありがとう。じゃあまだ終わってない人の作業を手伝ってあげてくれる？」
「了解！」

やや離れた位置から繰り広げられる二人の会話が周囲に響き渡る。
リオがルリに自分との関係を明かしてからというもの、二人は以前にもまして仲が良くなった。
もともとルリが人懐っこい少女であるというのもあるが、リオがルリとの喋り方を変えたことで、傍から見ると以前よりも気さくに接しているように見えるのだ。
若い村の女達は競うようにリオが口調を変えた理由をルリに尋ねたが、本当の理由を教えるわけにもいかず、適当にはぐらかして答えるしかなかった。
結局、ルリが「一緒の家に暮らしているわけだし、いつまでも堅苦しい喋り方は疲れるから止めてほしいってお願いしただけだよ」

と述べただけである。
一応、納得できなくもない理由ではあったが、リオとルリが男女の仲になったのではないかと勘ぐる者達が増えることになる。
この二人の間柄の変化により、今まで密かにリオを狙っていた少女達も大半はそのレースから完全に脱退することになった。

（あの二人、やっぱり付き合ってたりするのかなぁ……）

だが、それでもまだ諦めきれていない少女がここにいた。
サヨである。
リオの手伝いを申し出て作業に取り組む彼女であったが、今はリオ達の様子が目について気が気でなかった。
ルリはリオのことを狙っていないとサヨは踏んでいたのだが、今の二人の関係を見る限りは考え直した方がいいのかもしれない。
いや、考え直さなければならないと強く感じていた。
なんといえばいいのかわからないが、二人の喋る様子を見ていると何か胸がもやもやするのだ。
ルリに対するリオの言葉遣いが他の村の女達では超えられない壁を現しているようで、サヨは不安で仕方がない。

「サヨさん、種まき手伝いましょうか？」

そうやってぼんやりとリオのことばかり考えていると、当のリオがサヨのところへやって来た。

「え、あ、リオ様！　す、すいません！　ボーっとしてて！」

リオが苦笑して手伝いを申し出てきたことで、サヨが我に返る。
慌てて周囲を見渡してみると、サヨの作業ペースが際立って遅いのは明らかであった。

それに気づき、サヨはほんのりと日焼けした白い顔を真っ赤にする。

「しっかり覚えてくださいね。自分が村からいなくなった後に、サヨさんにもこの種まきの仕方を村の皆さんに教えていただくことになりますから」

サヨがきちんと手順を覚えていないとでも思ったのか、リオがそんなことを言った。

「え……？」

リオの言葉を聞いて、寝耳に水と言わんばかりに、サヨの顔から血の気が引いた。

「あ、あの！　リオ様！　この村から出て行っちゃうんですか？」

既に種まき作業を始めているリオに慌ててサヨが尋ねる。

リオがこの村から出て行く。

そういえば、この村にリオがやって来て最初の頃に、そんなことを聞いた気がする。

だが、今の今まで、サヨはリオが村から出て行くという事実を完全に失念していた。

「はい。次の秋にはこの村を出ることになるはずです」

少し離れた位置でリオが答える。

どこか寂しそうな笑みを浮かべてはいるが、この村を出て行くというリオの意志に揺らぎは感じられない。

「次の秋……、そう……なんですか。行っちゃうんですね」
そんなリオの意志が伝わってきて、サヨが力弱く言葉を返す。
「どうかしましたか？」
サヨの返事が聞こえず、リオが不思議そうな表情を浮かべて尋ねた。
「あ、いえ！　なんでもないです！」
慌てたようにサヨは首を振った。
もしかしたら急に落ち込んだように見えてしまったかもしれない。
だが、これ以上リオに迷惑をかけるわけにはいかないと、サヨは一生懸命に作業に没頭することにした。
そうしていなければ今すぐにでも泣き出してしまいそうだったから。
「みなさんお疲れ様でした！　おかげさまで今日中に所定の作業を終えることができました。今日教えたことを忘れずに、来年からも同じように種をまいてください」
その日の作業を終え、あらかた教えるべきことを教えると、リオは作業の終了を宣言した。
ついでにこの場を借りて、リオは次の秋になればこの村を出て行くことを村人達に告げた。
村に来た当初に言っておいたことだが、ここで再度伝えることでリオが教える知識を意欲的に覚えてもらおうと考えたのだ。
水車と水路の功績もあって今ではリオの知識を疑う者は村の中にはいない。

すっかりリオの存在が当たり前になってしまったようで、村人達は衝撃を受けたようだが、取り乱す者は現れなかった。
時刻はもう夕方で、その場で村人達は解散していく。

「リオ！　お疲れ様〜。早く帰ろう？」

住む家が一緒のリオとルリは当然のように一緒に帰っていくことになる。
サヨが暮らす家は反対方向だ。
一緒に帰りましょうなんて不自然すぎてとても言えない。
サヨはルリが羨ましくて仕方がなかった。

「了解。ルリもお疲れ様。今日の夜ご飯は何にしようか？」
「あ、じゃあ残っている野菜を使って雑炊が食べたいなぁ」

楽しそうに喋りながら歩いていく二人の後姿を、サヨが呆然と眺める。
会話の内容からしてまるで夫婦のようだと、ぼんやりと考えた。
そのうちサヨもとぼとぼと帰路に着く。
その雰囲気は異様に暗く、道中ですれ違った村人達はみなサヨに声をかけることを躊躇うほどであった。

「っ……」

家に帰ると、膝から力が抜けて、サヨは玄関で座り込んでしまった。
そのまま地面にうずくまって、堰（せき）を切ったように泣き出す。

「ただい……、お、おい、サヨ！？」

そこにちょうどシンが家に帰って来て、泣いているサヨの姿を目にする。
慌てたように声をかけるが、サヨが顔を上げることはない。
途中でシンとすれ違った村人達がサヨの様子がおかしかったと言っていたことを思い出し、慌てて声をかけた。

「どうした？　何かあったのか？」

サヨの反応は薄い。
シンは必死にサヨが泣く原因を考えた。

「あいつ……か」

サヨが泣く原因にシンの心当たりは一つしかなかった。
他の原因もあるのかもしれないが、これだけの感情の変化をサヨに起こすことができる人物は一人しか想像がつかない。

「リオの野郎……何しやがった」

サヨはリオから貰った簪（かんざし）を大切そうに眺めている。
家の中でリオの話を振ってあげると嬉しそうに喋り出す。
両親が死んで以来、自分の前では気丈に振る舞い、見せることが少なくなった幼い頃の笑みを、最近では日常的に覗かせている。
だから、今サヨを泣かせている人物はリオに違いないと、シンはそう決めつけた。

「ち、ちがっ……。リオ様、悪くない……」

怒りで震えたシンの声がサヨの耳に届き、サヨが慌てて弁明した。
涙ぐんでいるせいで上手く声が出せていない。

シンからすればそんな妹の姿はいっそう怒りを湧き上がらせてくるだけだった。

「あんな奴、やっぱりこの村に来なきゃ良かったんだ」

言って、シンはひどい抵抗感を覚えた。

リオが来たおかげでこの村の暮らしは明らかに良くなっている。

リオが来ていなければルリはゴンにひどい目に遭わされていたかもしれない。

そうやってリオの存在を認めている自分が心の中にいるのだ。

だが、目の前で泣いている妹を見ると、それでもリオがこの村に来ない方が良かったんじゃないかと思わざるをえなかった。

そうであったなら、少なくとも今、妹は泣いていないはずなのだから。

「違う、違うから、リオ様が村から出て行くって……、それで……」

サヨはリオが悪くないこと説明しようとした。

だが正直に説明すればシンはリオが悪いと決めつけてしまうかもしれない。

「違くて、リオ様は関係ないから……」

それがかえって逆効果だということに気づき、サヨはすぐにリオは関係ないと言い直した。

しかし、もはや手遅れだ。

「あいつが村から出て行く……。それか……」

それが妹を泣かせている理由かとシンは合点がいった。

苦虫を噛み潰したような顔を浮かべる。
リオがいずれこの村を出て行くという事実はシンも知っていた。
最近では村に馴染みすぎているせいでそんなことはすっかり失念していたが、それはリオがこの村に来た当初から知らされていたことである。
臨時の村人にすぎないくせに村人達がへらへらと受け入れ、挙句にはルリと仲良くしていたからこそ、当初シンはリオのことが気に食わなかったのだ。

「……」

シンは考えた。
どうすればいい。
どうすればサヨは泣き止むのかと。
だが、自分はあまり物事を考える人間ではないと、シンは誰よりもそのことを自覚していた。
考えているうちに頭に血が上って来て、次の瞬間、シンはその場から走り出した。
考えるよりも直感に従って行動することにしたのだ。

「お、お兄ちゃん！　ま、待って！」

後ろから制止しようとするサヨの声が聞こえたが、シンは構わず全力で走り続けた。
そうしてすぐにユバの家へたどり着く。

「おい、リオ！」

血相を変えて、家の扉を開き、シンはリオの名を叫んだ。
その姿に広間で夕食の準備を行っていたリオ、ユバ、ルリの三人

が驚いたように目を見開く。

「リオに何の用だい？」

数瞬の間をおいて、訝しげな声でユバが用向きを尋ねた。

あのシンがリオに用事があるというのもかなり稀有な事態だが、その必死な形相から伝わってくる気迫も只事ではない。

いったい何の用事だというのか。

「頼む！　村に残ってくれ！」

言って、シンは土下座をした。

「なっ……」

リオ達が絶句する。

「勝手なことを言っているのはわかっている！　だが、何も言わずに聞いてほしい。これからも村にいてくれないか！？」

サヨが泣いているんだ。

その言葉を口にすることはできず、シンはひたすらリオに頭を下げ続けた。

シンの突拍子もない行動にリオ達が二の句を継げずにいると――。

「お、お兄ちゃん！　す、すいません！　兄がご迷惑をおかけして……」

そこに息を切らせたサヨがやって来た。

土下座しているシンの姿に目を丸くしたが、焦ったようにシンに

声をかける。

「ほら、お兄ちゃん。リオ様達にご迷惑だから。ほら、ね？」

サヨがシンの身体を引っ張る。

ちらりと覗けた妹の素顔には精一杯の笑みが浮かんでいた。

その目じりには涙の痕もある。

口調はやんわりとしているが、その必死さが伝わってきて、シンは力弱く身体を持ち上げた。

「あ、ああ……。わりぃ」

その気迫に負けて、シンは呆然と謝罪の言葉を口にした。

「本当にすみませんでした！　兄とはきちんと私が話しておきます！」

サヨが深く頭を下げる。

シンも居心地が悪そうにその隣で一緒に頭を下げた。

頭に血が上るとシンが後先考えずに行動をしてしまうのはいつものことだ。

そうして何度サヨに迷惑をかけたかはわからない。

またやってしまったと、シンは何ともばつの悪い思いをしていた。

「……わかった。何があったかは今は聞かないでおくよ。それでいいかい、リオ？」

シンがこうして突拍子もない行動を起こすことがしばしばあることをユバはよく知っている。

そういった行動を起こす時にその背後にどんな理由があるのかに

ついてもわかっている。
絶句したままのリオとルリを尻目に、深く頭を下げ続ける兄妹の姿を見て、小さく溜息を吐き答え、ユバはリオに尋ねた。
「はい。自分はかまいませんが……」
呆然と二人の兄妹が頭を下げているのを見て、何とも居たたまれない気持ちになり、リオは首肯した。
正直、リオも何がなんだかよくわかっていないのだ。
そろそろ節目だろうと村人達に自分が村を出て行く時期を告げた矢先にこれである。
しかもあのシンが自分を引き留めるなんて、その衝撃は大きかった。
二人が何でもないというのならば自分が突っ込んで聞くべき問題でもないのかもしれない。
その場で答えを出すことはできず、リオはユバの提案に従った。
「ありがとうございます！」
リオ達の言葉を受け、再度、礼を告げると、そのままシンはサヨに引きずられるようにして帰っていった。
「とりあえず食事にしようか」
その後ろ姿に深く溜息を吐くと、ユバが言った。
それを皮切りにおずおずとリオとルリも行動を開始する。
夕食はどことなくぎこちない雰囲気で、シンの行動が話題に上がることはなかった。
「リオ、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいかい？」

夕食後、片づけを終えると、リオはユバから話しかけられた。
「はい、なんでしょう？」
「あんたがこの村を出て行った後に何をしようとしているのか聞いてもいいかい？」
やがてリオが村を出て行くであろうことは滞在することが決まった当初から聞いていたが、その理由はこれまで深く尋ねてこなかった。
何となく気が引けてこれまで聞けなかった話題だが、今日はシンがあんな事件を起こしたばかりだ。
ユバはリオが村を出て行く理由の一つについて薄々と察しているが、リオの様子を見ていると他にもいくつか理由があるように思えた。
そこでユバは意を決して尋ねてみることにしたのだ。
傍で話を聞いているルリはじっとリオを見つめている。
「この村を出て行った後ですか……」
その質問に答えるのにリオは僅かに間を置いた。
村を出た後はシュトラール地方へ戻るつもりだが、その前に精霊の民の里に顔を出すことになるだろう。
シュトラール地方に戻ってからはルシウスの情報を集めるつもりだ。
それと恩師であるセリアに自分が無事であることを報告しておきたい。
セリアには一度だけ偽名を使って手紙を出しただけで、それ以降は何の接触もとっていない。
ベルトラム王国の貴族達とは肌が合わないが、セリアだけは別だ。

現在、ベルトラム王国内でのリオの扱いがどうなっているかは不明だが、今なら身の隠しようもいくらでも存在する。
セリアに会いにベルトラム王国に潜入するのもいいかもしれない。
「血は繋がっていないのですが、自分のことを兄と慕ってくれている子がいまして。その子に会いに行きます。あとは向こうに恩人もいますから、その人のところにも顔を出したいですね」
「へぇ、そんな子達がいたのかい」
初めて聞いたリオと親密な者達の存在に、ユバが興味深そうな声を出した。
ルリも関心を寄せているようだ。
「はい。妹は今は十二歳ですね。恩人の方はちょうど二十歳になっているはずです」
「ふむ、二人ともまだまだ若いね」
リオにそういった人物達がいるのは好ましいことだ。
その者達に会いに行くというのならばユバも引き止めるわけにはいかない。
「いつかこの村に戻ってくる気はあるのかい？」
「そうですね。いつになるかはわかりませんが、またこの村に顔を出したいなとは思っています」
そう頻繁に使えるものではないが、転移結晶で移動時間を短縮すれば、リオはシュトラール地方からヤグモ地方へ小旅行程度の感覚で来ることができる。
色々と繋がりもできたことだし、用事を済ませ、時間さえ許せばこちらに戻ってきたいという思いはあった。

「そうか。いつでも戻ってくるといい。もうあんたはこの村の一員として完全に認められているからね」
「……はい。ありがとうございます」

温かな微笑を浮かべるユバに、リオは気恥ずかしそうに礼を告げた。

そんなリオの笑顔にユバは微かに寂しそうな笑みを浮かべ直す。

「それと今日のシンのことだがね。どうしてシンがあんな行動に出たのかは薄々と予想はつくわけだけど……」
「あー、うん。よくよく考えると私もその件に関わっているような気がする」

ちらりとリオに視線を送ると、ルリが苦笑いを浮かべて同意した。
リオはその意味がいまいちよくわかっていないようで、首を傾げている。

そんなリオの反応に二人は苦笑した。

「今度、私の方からそれとなく話してみるよ。あんた達はあまり立ち入ったことは聞かないで今まで通りに接してあげてくれるかい？」
「うーん。私としてはちょっとサヨと話しておきたいこともあるんだけど……、とりあえずはおばあちゃんに任せてみるよ」

複数人が同時に事情を聞きにいくのは好ましくないと考えたのか、ルリはやや不承不承の態（てい）を見せながらも承知した。

「ええ、自分も承知しました」

いまいち腑に落ちないところはあったが、リオも承諾の返事をし、

その場は解散することになった。

第４８話　旅立ちに向けて

季節は夏の手前、リオは国王夫妻と密会していた。
今、リオは村の中で成果が出始めている農業の改善についてホムラ達に話をしている。
リオが関わった農地では、収穫量が他の農地に比べて明らかに多く、育った実も大きい。
その差は一目瞭然で、村人達は狂喜乱舞しリオに感謝をささげ、次年度からはリオのやり方で農業を行うことが満場一致で可決されることになった。
そういった経緯を話したところ、ホムラが深く興味を示したのだ。
実は最初からホムラに興味を持ってもらうためにリオはこの話をしており、この流れは想定通りであったりする。
リオとしてはさっさと技術を拡散してあの村に過度の注目が集まるのを避けたいと思っているため、安全かつ確実に知識を広めておきたいと考えていたのだ。
国王であるホムラが関与してくれることで、その目論見は見事に達成されることになるだろうと、リオは踏んでいる。
農具の形、種まきの仕方、休耕地の利用方法、土壌の改善、水汲み水車の設置、水路の作成等について、リオが説明を行っていく。
その話を真剣な面持ちでホムラは聞いており、傍で聞いているシズクやゴウキも興味深そうに耳を傾けていた。
ホムラは特に水汲み水車に興味を持ったようだ。
「随分と有意義な話ができた」
小一時間ほど語って、実に満足したように、ホムラが言った。

「ゴウキよ、この件について早急に実地調査をしてくれぬか？　上手くいけば来年度から国内に普及させようと思っておる」

リオの話が本当だというのならばその改善をしない手はない。信頼できる者に調査を任せ、その上で実現可能性があるのならば次の年から実行することをホムラは視野に入れていた。

ゴウキならばリオとの連携も取りやすいはずだ。

「御意に」

「うむ、頼むぞ。となると色々と条件を煮詰める必要があるな」

その後もしばらくの間はこの件について話が繰り広げられることになった。

話が一段落したところで、ホムラがゴウキとカヨコに目配せを行う。

ゴウキ達がその視線に応えたところで――。

「それでの、リオ――」

何やら神妙な面持ちを浮かべ、芝居がかったように、ホムラはリオに話を持ち出した。

「今日はそなたに大事な話がある」

「大事な話ですか？」

怪訝な声色でリオが尋ねる。

ホムラからは只ならぬ雰囲気がが伝わってきた。

その気概を正面から受け止めるべく、リオは姿勢を正す。

「ああ。そなたの復讐に関する話だ」

ぴくり、とリオの眉が動く。
これまで、復讐に関する話題については触れない、という暗黙の了解が何となくリオ達の間にあった。
簡単に触れるべき話題ではないし、触れたところで出てくるのは恨み辛みだけで生産的な会話が繰り広げられるわけでもない。

「何の話でしょう？」

こうして話を持ち出してくるからには、恨み辛みといった思いを吐露する以外に何かがあるということだろうか。
リオは少しばかり姿勢を正してホムラを見据えることにした。

「うむ……」

質問を投げかけるリオの瞳を、ホムラが深く覗き込む。
その朽葉（くちば）色の瞳は現実をしっかりと見据えていた。
迷いもためらいも伝わってこない。
良い目をしていると、今までに数えきれないほどの人間と接してきたホムラは思った。

「……儂もルシウスという男のことは憎い。本当は儂の手ずからそなたを手伝ってやることができればよいのだがな。生憎とこの国を離れるわけにはいかん」
「それは当然かと……」

いまだに話の真意は呑み込めていないが、リオは相槌を打った。
ホムラは一国の君主である。
そんな人間が、いくら娘を殺されたからといって、国を捨てて遥か彼方の地まで復讐に行くことができるはずもないのは当然のこと

であるからだ。

「そこでな、少数ながらそなたに家臣を与えようと思っている。儂やシズクの代わりにそなたに力を貸す存在だ。好きに使うといい」

「は、え……？」

引き続き語られた話に意表を衝かれ、リオは思わず硬直した。

まさしく寝耳に水である。

唖然とするリオの顔をホムラは少しばかり可笑しそうに眺めた。

「い、いえ、しかし、そんなわけには……」

ようやく理解が追いついてきたが、それでもリオはまだ戸惑ったままだ。

リオの耳にはホムラの発した言葉がいまだに鳴り響いている。

ホムラは本気で言っているのだろうか。

もしかして何かの聞き間違いなのではないか。

「そなたに与える家臣は十人いる。最初にそなたを村へ迎えに行った者達だ」

あの時にいたのはゴウキとカヨコを含めてちょうど十人だった。

「まさか……ゴウキ殿とカヨコ殿もですか？」

そんな馬鹿なと、リオは言葉に詰まりかけた。

「その通りだ。既に二人の意志は確認しておる」

落ち着いた口調でホムラは語る。

「……ゴウキ殿ほどの方が国からいなくなれば、決して小さくない問題が生じるのではないですか？」

ゴウキは国の上級武士だ。

その実力は一騎当千で、この国で積み重ねてきた実績と信頼がある。

それを投げ打ってゴウキがふらりと消えれば間違いなく国に問題が生じるはずだ。

「その辺りの根回しは既に済んでおる。国内ではゴウキの引退について密やかに噂を流していてな。年齢的にゴウキはもう隠居しておかしくはない。実はだいぶ前からこの件について考えていたのだ」

「……」

その言葉を聞いて、リオは唖然とした。

非公式の場とはいえ国王自らが重臣であるゴウキを家臣として与えるなどという重大な発言をしたのだ。

既にお膳立ては整っているのだろう。

そのことは分かったが、リオは形容しがたい感情を抱いていた。

「ゴウキ殿達には息子さんと娘さんがいらっしゃるでしょう？　彼らはどうするというのですか？」

ゴウキ達にはハヤテとコモモがいる。

それに会ったことがないがハヤテと歳の近い次男と三男もいるとリオは聞いていた。

彼らはどうするというのか。

「行くのはゴウキとカヨコに……コモモも付いて行くと言っておっ

たか。そうなると同行者は十一人かのう」

言って、ホムラはゴウキとカヨコに視線を送った。

「はい。コモモは連れて行きますが、息子達は全員この地に残していきます」

決意は固いようで、ゆるぎない口調でゴウキは答えた。

「シュトラール地方はそう簡単に戻って来れる場所ではありませんよ？　移動は徒歩で、ゴウキ殿でも数か月はかかるはずです」

道中には地形が険しい場所もあるので、徒歩で移動するとなると速度は落ちるし、迂回したりしなければならず、相当に時間を消費することになる。

リオのように精霊術で空を飛べるというのならばその時間は一気に短縮することができるが、精霊術で身体能力を強化しただけでは辛い旅になるはずだ。

そんな旅をしてシュトラール地方に行ったとしても、ルシウスが生きている確証はない。

それなのにそう簡単に戻ってこれない場所に付いて来るなんて、その意味を本当にわかっているのだろうか。

リオは困惑していた。

「家督はハヤテに譲ります。リオ様に付いていくことに何の支障もございませぬ」

「いや、そういう問題では……。ハヤテ殿達には話をして納得しているんですか？」

ハヤテ達だって意味も解らず両親が消えてしまえば動揺するはず

だ。
彼らはゴウキが国を離れることをどう思っているというのか。
「息子達はいずれも武士にございます。親と離れる覚悟は疾うに出来ておりましょう。ハヤテには内々に事情を説明済みです」
「ですが他に同行する方々も似たような問題があるでしょう……。いくら命令とはいえ異国の地に行って帰ってこれなくなるというのは酷なはずです」
「他の者達もリオ様に付いて行くことに何の異存もありませぬ。あやつらはちとわけありで、それぞれ暗部に仕える者達です。親類はおらず、忠誠心も高く、手練れ揃いですから、足手まといになることはないでしょう」

リオは開いた口が塞がらなかった。
武士の子供だからといって、親と離れるのを許容しなければならないなんて。
それでも一緒にいたいはずだと、釈然としない思いを抱く。
王命があれば断ることができないのは臣下の理だろう。
だが、それでも従いたくない命令もあるはずだ。

「別に命令されたからといって付いて来る必要はないのですよ？自分は一人で大丈夫ですから」

遠まわしにその申し出を辞退するように、リオは語った。

「ルシウスなる者を許せぬというのも大きいですが、今回の話は儂とカヨコにとっては過去に果たせなかった悲願でもあります。リオ様に付いて行けるというのならばまさしく本望でございます」
「……しかし他の人達はそうではないでしょう」
「他の者達はサガ家に仕える者達です。その忠誠心は非常に高い。

彼らも嬉々として付いて来ますぞ」
「しかし……」
ゴウキ達は既に固く心に決めているようだ。
そんな彼らに何と言ったらいいかわからず、リオは言葉に詰まった。
「……やはり力添えを受けるわけにはいきません。お気持ちは嬉しいですが、これは自分がなすべきことですから」
しばし沈黙し、心を決めたのか、リオは決然とした口調で彼らの助力を断った。
「むぅ、やはりそうなるか……」
リオがこうして助勢を辞退することをあらかじめ見越していたのか、ホムラが苦笑しながら口を挟んできた。
「しかしな。これはそなただけの問題ではないのだ。ルシウスが憎いのは我らも同じ。ケジメはつけねばなるまい。そなた一人に復讐の荷を背負わせるわけにはいかんよ」
「それは……」
彼らもルシウスの制裁を望んでいるということだ。
それならば強く同行を望む理由として理解できなくはない。
とはいえ仲間ならともかく自分の家臣として同行するとなるとリオとしては抵抗感が強い。
いきなり忠誠を誓われてもどう接すればいいのかわからないのだ。
家臣にすると言うことは彼らの命を背負わなければならないことも意味する。

それに彼らがリオと同行するにしても色々と問題が生じてしまう。過度に人間族のコミュニティに所属すると精霊の民との関係で支障が生じうるし、一人で行動する場合に比べて移動速度に支障が生じてしまうことになる。

「自分とゴウキ殿達とでは移動速度に大きな違いがあります。おそらくゴウキ殿達では自分に付いて来ることはできないでしょう」

仕方なく、彼らとの同行を望まない理由の一つを、リオは口にした。

「そなたが精霊術に長けているというのはゴウキから聞き及んでいるが、それでもそなたに付いて行くのは我が国でも一流の使い手ばかりぞ？　まったく付いて行けぬとは思えぬが……」

リオの移動手段を知らず、ホムラが戸惑ったように語る。

「自分は空を飛びますから」

言って、頭のおかしい人間と思われても仕方がないなと、リオは自嘲した。

「空を……飛ぶ？」

案の定、リオの言っていることを計りかねているようで、ホムラが怪訝な表情を浮かべた。

「こういうことです」

わかりやすく、リオは実践して見せることにした。

室内に風が巻き起こり、リオの周囲を囲い込むように凝縮すると、浮力を持ったようにリオの身体が宙に浮いた。

「っ！？」

その光景にホムラ達が瞠目する。

「今は浮かんでいるだけですが、移動しようと思えばかなりの速度で空を飛んで移動することができます」

いまだに呆気にとられているホムラ達に、苦笑しながらリオは説明を行った。

「それは精霊術か……。よもやそんなことが出来ようとは……。ゴウキ、このような真似ができる人物に心当たりはあるか？」

自身も精霊術の使い手であるが、ホムラが知る限りではリオの真似をできる者に心当たりがなく、呆然とゴウキに尋ねてみた。

「……ありませぬ。突風を吹かせて身体を吹き飛ばすことはできましょうが。こうも安定して宙に浮かぶとなると……」

宙に浮かぶリオの姿に釘づけにされたまま、ゴウキも唖然としたように答える。

常時微細なオドのコントロールを要するはずであり、ここまで安定して宙に浮くとなると、生半可な制御力ではないはずだった。

「ちなみに通常の巡航速度で精霊術で身体能力を強化して走るくらいに速く移動できて、山、谷、森といった障害物もすべて無視できます」

とどめを刺すように、リオは情報を追加する。
自分の移動速度を格段に落としてまで彼らと一緒に長い旅をするのは流石に遠慮願いたいというのもリオの本音だ。
それにリオは精霊の民の里にも寄らなければならない。
盟友としての地位が認められている自分はともかく、ゴウキ達が同行するとなると高確率でややこしい事態になることが予想される。
リオが頼めば立ち入りの許可は下りるかもしれないが、あまり良い顔はされないだろう。

「むぅ、そうなると、確かにそなたに同行するにしても足手まといにしかならぬか……」

深く思案するように、ホムラが顎に手を当てる。

「わかった。今はこれ以上そなたにこの件について許可を求めるのはやめておこう。だがこの話を頭の片隅に置いてくれ。出発までに気が変わるやもしれんからな」
「わかりました……」

そんなことはないだろうなと考えながらも、リオは承諾の返事をした。

☆★☆★☆★

それから一週間後、村の中を歩くリオの隣にコモモがいた。
紫の着物を身に着け、にこにこと笑みを浮かべる彼女はその可憐さで村中の注目を集めている。
さらにその隣にはゴウキと国の技官もいた。
コモモはともかく、ゴウキ達が村へとやって来た理由はこの村で

行われている農業改革の実地調査だ。
ゴウキを案内するべく、リオは村の中を歩き回って農業の改善点について説明を行っていた。
「リオ様！　ぐるぐる～って回って水を汲み上げてますよ！　これが水車なんですね！」
水汲み水車までゴウキとコモモを案内すると、次々と水を汲みあげる水車を見て、コモモが目を輝かせた。
「これが水汲み水車というものですか。いやはやこうして実際に目にすると圧巻ですな……」
ゴウキも呆然と水車が水を汲みあげる光景に目を奪われている。
その横にいる技官達も目を丸くしていた。
「構造はさほど複雑なものではありません。今設置している物は川の流水の力を動力としていまして――」
その構造をリオが説明する。
ゴウキ達はリオの話を聞き洩らさぬように真剣に耳を傾けていた。
一通りの説明を終えると技官から質問が投げかけられ、リオがそれに丁寧に答えていく。
その後も、村の各所を回ってリオが関わった農業の改善作業について説明を行っていった。
「どうだ、実現はできそうか？」
「はい！　これはもはや技術革命ですよ！　あの水汲み水車だけでも相当に我が国の農業改善に寄与すると思われます」

ゴウキの質問に技官達が興奮したように答える。
しばらくの間はこちらに住み込み、技術を搾り取れるだけ搾り取ることで決まったようだ。
「それで、リオ様。此度の件の褒美と言いますか対価なのですが……」
技官達があれこれと意見を交わし合っている横で、ゴウキがリオに語りかけてきた。
「その件については不要だということをお伝えしたはずですが？自分はこの国で名を上げようとはまったく思っていませんし、自分がこの国で注目を集めることもあまり好ましくはないでしょう？」
先日の密会の際に技術の発案者がリオであることは公にしない方向で話はまとまっていた。
技官達にも固く口止めがされており、アイデア料についても辞退する旨をホムラには伝えてある。
「それは仰る通りなのですが。陛下から手厚く礼をするようにと厳命を受けておりまして。何かお望みの物があれば可能な限り取り計らうようにと命を受けております。何か必要なものはないでしょうか？」
「そうは言われても……」
「何でもいいのです。なければ財宝をお渡しすることになります」
ゴウキの声色は確たるものだった。
どうやらはぐらかして答えても対価を受け取る件については確定事項のようである。
この場で言い逃れても、すぐに同じ話を持ち出されるだろうし、

最終的には財宝を渡してきそうだ。

「そう……ですね。では、少し考える時間を頂いてもよろしいですか？」

すぐに答えを出すことはできず、リオは返答を待ってもらうことにした。

第４９話　シュトラール地方へ

ゴウキ達が村へやって来てから数日が経過した。
既に一通りの説明も終わり、技官達はそれぞれが好き勝手に技術の実現に向けて調査を行っている。
その一方で、ゴウキはリオと一緒に狩りを行って、コモモもそれに同行していた。
そうやって仕事が終わった後はゴウキと一緒にコモモの鍛錬に付き合ってあげるのが最近の日課となっている。

「リオ様は遥か西の地へ向かわれるのですよね？」

鍛練を終えたある日、リオの顔を覗き込みながら、コモモが尋ねた。

「ええ、そうですよ」

リオの返答を聞いて、コモモは純真無垢な笑顔を浮かべた。

「あの！　私、リオ様と一緒に行きたいです！」

にっこりと微笑みながら、コモモがリオを見上げる。

「ダメ、ですか？」

コモモの上目遣いは男女問わずに誰もが了承しかねない魅力を伴っていたが、リオは何とか思いとどまった。

「ダメです」
苦笑を浮かべ、リオはきっぱりと頭(かぶり)を振る。
「むぅ……」
コモモが僅かに頬を膨らませる。
その姿がまだまだあどけなくて、リオは口元をほころばせた。
「ゴウキ殿、娘さんを使って誘惑させないでください」
だが、きっちりと教唆者は取り締まらねばならないだろう。
リオはコモモを唆(そそのか)したと思われるゴウキに呆れを含んだ視線を送った。
「む、見抜かれましたか」
これまでもゴウキは折にふれてリオの旅に同行したいと嘆願していた。
その度にリオは首を横に振り続けていたのだが、コモモの愛らしさならばあるいはと考えていたのか、絡め手を用いてきたようだ。
「バレバレですよ。いくらコモモちゃんとはいえ、まだまだあの年齢の子には相当に過酷な旅路となるはずです。無茶を言わないでください」
「コモモは精霊術による強化も習得しております。長い旅路は良い修行になることでしょう」
「いや、修業って……」
ヤグモ地方からシュトラール地方までは精霊術で身体能力と肉体

を強化したとしても数か月はかかる険しい旅路だ。
確かに結果として良い修練を積むことはできるのだろうが、それを修行と片づけてしまう脳筋な思考回路に、リオは小さく溜息を吐いた。
しかもコモモが望むところだといわんばかりに奮い立っているから手に負えない。

「いずれにしろシュトラール地方には私一人で向かいます」

これまでも何度と口にした言葉をリオは決然と述べた。
そうは言っても簡単に引き下がらないのがゴウキなのだが。
どうしたものかとリオは空を仰ぎ見る。

「……ここまで仰るのでしたらもはや同行は諦めるしかありませんか」

だが、返ってきた答えはリオの予想から外れていて――。

「え？　あ、はい……」

あっさりと食い下がったゴウキに目を丸くして、リオは返事をした。
いつもならば言質（げんち）を取ろうとあれこれ食い下がるわけだが、今日は引き際が早すぎる。
しかも同行を諦めるとまで言っているではないか。
いったいどういうことだ。
リオは僅かに怪訝な表情でゴウキを見やった。

「む、どうかなされましたかな？」

そんなリオの視線に気づき、ゴウキが尋ねた。

「あ、いえ、ゴウキ殿がよろしいというのであれば特には……」

少々違和感を覚えつつも、藪蛇（やぶへび）になることを恐れ、リオはこの件についてこれ以上深く尋ねることを止めた。

その後も、ピタリとゴウキから同行を願われることはなくなり、リオは肩の荷が下りたようにほっとすることとなる。

☆★☆★☆★

それから、瞬く間に時は過ぎていき、季節は秋へと移り変わる。

村での生活は平和に過ぎていき、しばしばコモモがゴウキやハヤテを伴って村へとお忍びで遊びに来た。

人懐っこいコモモは村人達から愛され、四六時中リオにくっつき、ルリとも姉妹のように仲が良くなっている。

リオは今年も交易隊に加わり、それ以外にも単身で幾度か王都へ行き、ホムラとシズクに会って話をしたりもした。

その際、農業の改善に対する報酬として、カラスキ王国の特産品や料理の製法などを教わっていたりする。

また、精霊の民の者達にお土産を買うべく、コモモと一緒に王都の中を散策したりもした。

そうして時間が過ぎていき、豊穣祭の日が再びやって来た。

この豊穣祭の数日後にリオは村を出発することが決まっている。

昨年度と比べて今年は明らかに豊穣で、村の雰囲気は非常に明るく、リオの送迎会の意味も込めて昨年以上に盛大に宴を行うことになった。

今回もリオは村の女衆達に混ざって料理を作っており、そのすぐ側にはルリとコモモがいる。

そんな三人の様子を少し離れた位置でサヨが羨ましそうに眺めていた。
だが、その目には何か決意めいたものが宿っている。
料理を作り終えるとリオ達は村の広場へと向かった。
コモモと一緒にやって来たハヤテのところへ向かい、四人で談笑する。
自然とリオはコモモの相手を、ルリはハヤテの相手をするような空気が出来上がっていた。
コモモからリオへと数々の質問が投げかけられ、リオがそれに答えていくという形で会話が繰り広げられている。
外の世界のことを知りたいのか、コモモはシュトラール地方に関する話を積極的に尋ねた。
リオとしては何が楽しいのかはわからないが、ニコニコと笑みを浮かべながら話を聞いてくれるコモモに様々な話を語ることにした。
そうして小一時間ほど話をしていると――。

「あ、あの！　リオ様！　少しいいですか？」

何やらひどく緊張した面持ちで、サヨがリオに声をかけた。

「はい。なんでしょうか、サヨさん？」

僅かに目を丸くし、リオがサヨを見つめる。
シンがリオのことを引き留めるように懇願して以来、サヨはどういうわけか頻繁にユバの家にやって来るようになった。
だが、それはリオに会うためではなく、ユバに会うことが目的でやって来ているようだった。
サヨがユバのもとで何をしていたのかは知らないが、今、サヨの頭にはリオが一年前に贈った簪（かんざし）が飾られている。

それが視界に映り、いまだに大事にしてくれていることに名状しがたい感情をリオは抱いた。

「ちょっとお話がしたくて……」

おじおじとしてはいるものの、どこか強い想いを秘めた瞳で、サヨはリオを見つめた。

「はい。かまいませんが、この場じゃない方がいいですか？」

何となく他の人間がいては話しにくそうであることを察し、リオが尋ねた。

「は、はい。出来れば、その、お願いします」

「わかりました。それじゃあ移動しましょうか。コモモちゃん。ごめんなさい。少し席を外しますね」

「あ、はい……」

立ち去り際に残したリオの言葉に、呆気にとられたようにコモモが返事をした。

そのままリオとサヨは人気のない場所へ移動する。

といっても村の中にいる人間達は全員が広場に集まっているため、少し広場から外れた場所に移動しただけだ。

「それでお話とは？」

周囲に人気のないことを確認すると、リオが尋ねた。

「あ、はい……。えっと……、その……」

頬を紅潮させ、どぎまぎとした様子で言いよどんだが、やがて深呼吸をして、サヨは思い切ったように口を開いた。

「あの、こんなこと言われても迷惑かもしれないんですけど、私……リオ様のことが……好きです！」

勢いよく頭を下げて、サヨはリオに告白した。

「サヨさん……」

悩まし気な声でリオは呟いた。

リオの声が耳に届き、サヨがびくりと身体を震わせる。

リオと視線を合わせたくないのか、サヨはずっと頭を下げたままだ。

なんて声をかけたらいいのだろうか。

いや、かけるべき言葉は決まっている。

だが、その言葉をかけるのを少しでも先延ばしにしたい自分がいることに気づき、リオは一瞬だけ苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。

「ごめんなさい。貴方の気持ちに応えることはできません」

ぐっと手を握り締め、心苦しさを押し殺し、リオは落ち着き払った声できっぱりとサヨの告白に答えた。

それは拒絶である。

「っ……。それはリオ様が村を出て行くからですか？」

「そうです」

あらかじめその理由を予想していたのか、サヨがそんなことを尋

ねた。
震え声のサヨの質問に、リオが静かに返答する。
「な、なら！　私も一緒に連れて行ってください！」
勢いよくサヨは言い切った。
心臓が飛び出してしまうかもしれないと思うくらいに胸の鼓動が高鳴っている。
きっと顔もひどく紅潮している。
サヨはそう思った。
「えっと……」
一瞬、リオはサヨが何を言ったのかわからなかった。
「それは無理ですよ」
数瞬の間を置いて、言った内容が頭に入ってきたが、答えは決まっている。
リオはどこか困ったように答えた。
「大丈夫です！　ユバ様に精霊術を教えてもらって、私、最近になって少しだけ使えるようになったんです！」
言って、サヨが前のめりになってリオに迫った。
サヨがここ半年ほどユバのもとへ通い詰めていたのはそういうことだったのか。
リオは気づき、ハッとした顔でサヨを見据えた。
だが、リオにはまるでわからない。
どうしてサヨはここまでするのか。

リオとサヨは出会ってから一年程度しか経っていない。
まったく会話をしないわけではないが、頻繁に会話をするほどの仲であったとも言い難い。
それなのにどうして……。
リオは戸惑う。

少しとはいえサヨは精霊術を使えるようになった。
それこそ、日々の仕事の合間を縫って、一生懸命、努力したのだろう。
サヨがユバのもとに通いだしたのはほんの半年ほど前だ。
半年で精霊術を使えるようになる人間族はそうそういない。
それこそ血のにじむような努力をしても、人間族ではごく簡単な精霊術を使えるようになるまで平均で一年以上はかかると言われている。
実戦で使えるようなものになると数年はかかる。
おそらく元々の才能が豊かだったのだろう。
それは凄いことだ。
だが、少し精霊術を使える程度ではリオの足手まといにしかならない。
彼女なりに何か思うところがあって移した行動だったのだろうが、その努力は水の泡でしかないのだ。
だが、そんな事実を彼女に伝えることは憚(はばか)られた。

「だから、私、リオ様の足手まといには――」
「ごめんなさい。俺には好きな人がいるんです」

サヨの言葉を遮り、リオが硬い声で言った。
言って、胸が痛んだ。
自分の心の中には一人の女性が存在している。
彼女は天川春人の想い人だ。

彼女はこの世界には存在しない。
だというのに彼女のことを考えると、他の異性と付き合おうとかそういう考えは全く浮かんでこない。
いつまでも非現実的な恋に捕らわれている。
そんな自分がまるで道化師にすぎないとわかっていても――。
彼女の存在しない世界でこうして生きているとしても――。
リオは、天川春人は、彼女のことが好きだ。
そんな自分の気持ちに嘘はつけない。
それが出来たら天川春人は死ぬまで幼馴染に囚われていたりはしなかったのだから。

「し、知っています！　わかってます。でもっ！」

とても愛らしい目に涙を浮かべ、サヨは叫んだ。

「でもっ、私、行きたいです！　一緒に行きたいんです！」

サヨは必死だった。
初めての恋に自分のすべてを捧げていた。
リオが好きで好きでたまらない。
そうやって、ただひたすらリオのことだけを想って、ともに歩みたいと一途に努力してきた。

「わ、私、どこまでだって行きます！　どんな道だって歩きます！
だから、置いていかないでください！」

サヨの真っ直ぐな想いが伝わってきて、リオが悲しそうに顔を歪めた。
こんなにストレートに想いをぶつけられたのは初めてのことだった。

「俺はあなたの気持ちに応えるつもりはないんです」
「い、いいんです！　私を見てくれなくてもいいです！　何もしてくれなくてもいいです！　でも、せめて、せめて傍にいさせてください！」

見えない明日を恐れて、絶対に離すまいと、サヨはぎゅっとリオの手を握りしめた。

「サヨさん……」
「お願いします！」

縋るようなサヨの視線を避けるように、リオは顔をそむけた。
それでも無理なものは無理だ。
リオは彼女を連れていくことはできない。
その先に彼女の幸せがないとわかっているから。
彼女の気持ちに応える気はないから。
だが、それをどうやって伝えればいい。
どうすればサヨは納得してくれるのか。

「ごめんなさい」

リオは考え考え、結局、そうやって言葉を紡ぐしかなかった。
言葉足らずな自分の愚かさを悔いる。
それはサヨに対する罪悪感か、同情心か、はたまた自分に対する嫌悪感によるものか。
リオにはわからない。

「ふぇっ……、うっ……ぐ……ぐすっ」

初めての失恋に堪えきれず、ほろほろと目から涙を流し、サヨは泣き始めてしまった。
サヨはわかっていた。
予想もついていた。
なんとなくこの恋は実らないものだと。
だが、それでも無駄だと諦めてしまうなんて、可能性をすべて閉ざしてしまうなんて、サヨにはできなかった。
どうにかしなければならなかった。
リオを引き留めても意味はない。
シンがリオに土下座をした件でユバと話し合って、この村を出て行くというリオの意志が揺らぎないものであることはサヨも知っていたから。
ならば、自分がリオに付いて行けばいいのではないか。
そう考えついて、サヨはユバに精霊術を習うことを決めた。
リオの足を引っ張るわけにはいかない。
今の自分ではリオの隣を歩くことはできない。
その想いに突き動かされて、周囲を見渡すことも忘れて、サヨは必死に努力し続けた。
盲目的に努力して、その献身さを認めてもらうしかなかった。
そうやって自分の頑張りが認めてもらえたのなら、もしかしたら自分にも可能性があるんじゃないか。
そう思えたから。
だが、それでもダメだった。
ふと、サヨは胸に穴が開いたような喪失感に襲われた。

「……」

やりきれない表情を浮かべ、リオは泣き崩れるサヨを見下ろした。
思わず彼女の肩に手をかけてしまいそうになったが、きつく手を握り締め、思いとどまった。

リオが今のサヨにかけるべき言葉は存在しない。
何か優しい言葉をかけてもリオがサヨにそれ以上してあげられることはない。
リオはサヨの想いに応えてあげることはできないのだから、中途半端な優しさは彼女を傷つけるだけだ。
心苦しそうに顔をしかめると、踵(きびす)を返し、リオはその場から立ち去る。

「リ、リオ様、待って……」
「……」

力弱く呟いたサヨの声に対する返答はなかった。
確たる足取りでリオはゆっくりとサヨから遠ざかっていく。
その距離は近いようで絶望的に遠かった。
サヨは為す術もなく、ただその場で泣き続ける。
音もなく、気配もなく、リオの知覚範囲外からその光景を眺めていた一人の影が、決然とした様子でサヨへと近づいていた。

☆★☆★☆★

それから数日後、ホムラ、シズク、サガ家の面々と事前の別れを済ませ、リオが村を出発する日がやって来た。
リオを見送りに村人達がやって来ているが、そこにサヨとシンの姿はない。
サヨがリオに告白して振られたという事実は何となく村人達も察している。
別れを寂しいと思う気持ちはあるが、リオがこの村を去っていくことはずっと前からわかっていたことだ。
村人達は既に心の準備を済ませており、リオを笑顔で送り出そうとしていた。

「リオ、気をつけて行ってきてね」
村人達との別れの挨拶を一通り済ませると、締めくくるように、ルリがリオに近づき声をかけた。
そのすぐ後ろにはユバの姿もある。
昨日のうちに何度も別れの挨拶は済ませたのだが、ルリは寂しそうな笑みを浮かべている。
「次にこの村に来る時には甥か姪の姿を見せてくれると嬉しいかな」
寂しい別れの雰囲気を茶化すように、リオはそっと囁(ささや)いた。
「ば、馬鹿！」
顔を赤くし、口をパクパクさせて、ルリが叫ぶ。
そんな彼女に微笑むと、リオはユバへと視線を移した。
「ユバさん、今までお世話になりました」
「お世話になったのはこっちの方だよ。ありがとう、リオ。いつでもここに帰っておいで」
「はい。ありがとうございます」
顔を見合わせ、リオが気恥ずかしそうに口元をほころばせる。
そうして頷きあうと、二人は別れの抱擁を交わした。
「ルリもありがとう。こんな俺を名実ともに家族として扱ってくれて本当に嬉しかった。戻ってきたらまたたくさん話をしよう」
「当たり前だよ。人には言えなくても私達は従姉弟なんだから」
「うん、ありがとう」

視線を交わし合い、小さく噴き出すと、二人は別れの抱擁を交わした。
ほんの数秒だが、お互いの身体をしっかりと抱き寄せる。
かすかに疼く寂寥感を胸に抱えながらも、やがてその身を離した。
「行ってきます！　みなさん、本当にありがとうございました！」
きっぱりと告げ、村人達に深く頭を下げると、リオは踵を返した。
そうして足を踏み出し、村の外へと歩いていく。
村人達がリオに別れの挨拶を投げかけ、リオは何度も後ろを振り返って手を振った。
そうしてルリ達が最後に見たリオは、穏やかな笑みを浮かべながら、遠くで大きく手を振る姿だった。

神聖暦九九九年、晩秋。
リオが村の中でルリ達と一緒に暮らす日々は終わりを告げた。
これから先は別々に生きていくことになる。
それでも心が離れたわけではない。
いつか再会することを心に誓い、リオはシュトラール地方へ向けて歩み出した。

☆★☆★☆★

リオがヤグモ地方を立ち去ってから一月と少しが経過したある日。
神聖暦一〇〇〇年、シュトラール地方で、赤、青、緑、茶、白、黄の六本の光柱が天空を穿った。

（世界に穴が開いたか。間違いなく、あの光だ）

今より千年以上前に見たあの六本の光柱の記憶は、今もなお色褪(いろあ)せることなく、観測者の心に刻まれたままだった。
大地を穢(けが)す魔の軍勢、それを向かい討つ道化の軍勢と道化の英雄達。

（この道は千年前に確定していた。疑いようのない程に明確にな）

観測者はただ眺める。
六本の光柱が巻き起こしている異常なオドとマナの奔流は遥か彼方のこの地も震わせている。
そう遠くない未来に歴史は再び繰り返されるであろう。
歴史はもう動き出したのだから。
その時に動くのは自分の役目ではない。
自分は何もできない。
ただ眺めるだけだ。
始まりから今の今まで世界を観測してきた者は、懐かしそうな笑みを浮かべると、瞳を閉じた。

☆★☆★☆★

場所は変わってガルアーク王国の西部にある交易都市アマンドの領主館にて。

「本当にあの眉唾物の伝承通りね……」

天空を穿つ光柱を眺めながら、クレティア公爵家の令嬢たるリーゼロッテは呆然と呟いた。
それは王族や貴族達に語り継がれてきた御伽話。
神魔戦争が終結してから数十年、神聖暦が始まった年に、六賢神はある予言と一緒にブレイブストーンと呼ばれる六個の聖石を残し

たという。

「千年後、六本の光柱がシュトラールの天空を穿(うが)ちし時、聖石のありし場所に六勇者が再来し、世界に永久の安寧がもたらされる」

この予言を最後に六賢神は人間族の前から姿を消し去った。

勇者とは人々の希望であり神の使徒である。

神魔戦争期には数えきれぬ魔族を屠ったそうだ。

そんな勇者を再び呼び寄せると六賢神が告げた聖石、ブレイブストーン。

その正当な所有者たる地位を巡って、幾度も争いが繰り広げられることになる。

そうしていつしかブレイブストーンは権威性を示す神具と化した。

現在、六個ある聖石の所在はそのすべてが公式に判明しているわけではない。

そのうちの二つはベルトラム王国に、一つがガルアーク王国、もう一つはセントステラ王国にある。

リーゼロッテが所在を掴んでいるものについては、その所在通りに光柱は立ち昇っているが、ベルトラム王国で立ち昇っている二つの光柱は位置が少し離れているようだ。

「所在が不明だった聖石はガルアークからだいぶ遠い場所で立ち昇っているみたいね。近くて手空きなようでしたら勇者を配下にと思ったんだけど」

言って、まだあどけなさを残すものの、おっとりと優しく美しい顔立ちをした水色の髪の少女、リーゼロッテはフフッと笑った。

その透き通った水色の瞳は今も光柱を映している。

「このきな臭い世の中で勇者の再来は何を意味するのかしら。最近

では魔物が活発化しているみたいだし、つい先日にはベルトラム王国でクーデターも起きたし、とても世界の安寧がもたらされるとは思えないんだけどねぇ。どう思う、アリア？」

と、リーゼロッテはその場にいた腹心の女性に問うた。

「それがわかればまさしく神の所業かと。何やらきな臭い感じはしますが」

リーゼロッテと同等の美貌を有する妙齢の女性、アリア＝ガヴァネスが感情の乏しい顔で答える。

「そうよね。出たとこ勝負ってあまり好きじゃないんだけど、世の中そう上手く行くものじゃないし」

少々げんなりとリーゼロッテが言ちる。

「で、伝説の勇者に貴方は勝つ自信はある？」

「伝承通りの戦闘能力を有しているとしたら、遠距離戦を仕掛けるのは少々愚かしいですね。近接戦闘に持ち込めばどうなるかはわかりませんが、いざという時には勝たないといけないのでしょう？」

リーゼロッテの投げかけた質問に、アリアは起伏はないがどこか呆れを含んだ声で答えた。

アリアの主がこういった茶目っ気のある質問を投げかける時は、その質問通りの事態が生じると見越している時だ。

「ええ、勇者が人格者なんて保証はどこにもないしね。もし今後戦争が起きるとしたら高確率で勇者が戦場に出てくるはずよ。基本的に貴方に表舞台に出てもらうつもりはないけれど、国が傾かざるを

得ない事態になれば裏で動いてもらうことになるわ」

腹心の及第点な回答に満足すると、リーゼロッテは話を続けた。

「ま、戦争が起こらないにしろ、今後は忙しくなるはずよ。今ごろは我が国にも勇者が降臨しているでしょうからね」

ガルアーク王国が所有するブレイブストーンが本物ならば勇者はこの国にも現れているはずだ。

現に光柱はガルアーク王国の王都の方角にも一本だけ立ち昇っている。

そう遠くないうちにリーゼロッテもその勇者と面談することになるだろう。

「それにベルトラム王国で昇った光柱の位置関係からして、反革命軍も勇者を一人確保したみたいね。王政府は反革命軍の受け入れを了承したみたいだから、斥候と使者を送るように手配しておいてちょうだい。王都へ向かうなら確実にこの都市を通ることになるでしょうからね」

「御意に」

答えて、アリアはその場から静かに姿を消した。

第５０話　とある勇者の降臨

シュトラール地方で六本の光柱が天空を穿(うが)った日、ベルトラム王国領に存在する街道にて、約七千名からなる旅団規模の集団がガルアーク王国へ向けて行進していた。

その集団の一角で、今まさに一本の光柱が舞い上がっている。

その目の前で、呆然とした表情を浮かべ、ベルトラム王国第二王女フローラ＝ベルトラムが立っていた。

部隊の面々も、突然に立ち上がった光の柱に驚きを露わにしており、呆然とその光景を眺めている。

光柱を立ち上げているのはフローラが保管していたブレイブストーンと呼ばれる聖石であり、突然光を発し始めたと思ったら、いきなり周囲に何もない場所まで勝手に移動したのだ。

「え、ちょ、なんだよ、これ？　どこだ、ここ？」

光柱の光が止むと、その中から、聖石の代わりに、一人の黒髪の青年が現れた。

どうやら彼も事態が呑みこめずに困惑しているようで、周囲をきょろきょろと見渡している。

見た目は平凡で、特に鍛えた風でもなく、やや童顔というか、年齢は一見すると掴みにくい。

「っ……」

その黒髪を見て、フローラは一人の少年の存在を思い出した。

黒い髪に、朽葉(くちば)色の瞳をして、顔立ちの整った少年。

元が孤児の子供とは思えないくらいに礼儀正しい話し方をして、

異常なくらいに達観した落ち着きを見せていたあの少年のことを。
そんな彼のことを思い出し、フローラが一瞬、悲しげに顔を歪めた。
だが、今目の前にいる青年はあの黒髪の少年ではないようだ。
目を瞑り、小さく息を吐くと、フローラは小さく首を振った。

「これは……まさか、伝承の……勇者？」

その一方で、フローラの隣にいるユグノー公爵が呆然と呟く。
庶民の間には簡単にしか知られていない勇者に関する御伽話。
その裏で王族や歴史に造詣（ぞうけい）が深い貴族の間では詳細な伝承が語り継がれている。
その話をユグノー公爵は知っており、まさしくその話通りの出来事が起きていると考えた。
その内容は聖石が存在する場所に勇者が現れるというものだ。

「ゆ、勇者……様？」

その言葉を隣で聞いていたフローラが目を瞠（みは）り、呆然と呟いた。
その伝承はフローラも父から聞いたことがある。
聖石が消えて代わりに人が現れた。
目の前で起きた出来事はまさしくその伝承通りの出来事なのではないか。
そう考え、やがて何かを決意したような表情を浮かべ、フローラが口を開く。

「あ、あの、貴方は……もしや勇者様ではないのでしょうか？」

その言葉を聞いて、青年がきょとんとした表情でフローラの顔を見つめ返す。

「勇者？　何を言っている？」

怪訝な表情を浮かべた青年であったが、自らを取り巻く周囲の様子を見渡すと、何かが腑に落ちたような顔になった。

「あー、とりあえず説明をお願いしたいんだが？」

自らに視線を送る周囲の人物達をチラチラと見渡しながら、青年は問うた。

僅かな静寂が周囲に降りた後、フローラを警護するように囲んでいた貴族達が、ハッと我に返り、顔を顰める。

「フローラ王女殿下に向かってなんと無礼な口を……」

その貴族の一人、アルフォンス＝ロダンがぼそりと呟いた。

「勇者？　本当か？」

信じがたいように青年を眺めて、その隣にいたスティアード＝ユグノーも言った。

「申し遅れました。私はフローラ＝ベルトラム。ベルトラム王国の第二王女です」

突然の事態に落ち着きを取り戻し始め、周囲の貴族がひそひそと語り合う中で、フローラは自己紹介を始めた。

「王女様ぁ？　日本語も通じるし、テンプレすぎるだろ」

その呆れを含んだ物言いに、フローラがびくりと震える。
「えっと、勇者様のお名前をお聞かせいただいてもよろしいでしょうか？」
「勇者って……。俺は坂田弘明（さかた ひろあき）だ」
おそるおそるフローラに名を尋ねられると、青年が物怖じした様子もなく名乗りを上げる。
「サカタヒロアキ様ですね」
「あー、一応言っておくと、坂田が苗字で、弘明が名前だ。年齢は十九歳だな」
「姓があるということは、ヒロアキ様はもしや貴族の方なのでしょうか？」
そもそも人間なのかという疑問もあるが、はた目から見ると弘明は普通の人間にしか見えなかった。
「苗字がある人間は貴族って、そこもテンプレか。俺は貴族じゃないぞ。日本……俺が暮らしていた場所だと誰でも苗字を持っているんだ」
「そのような国があるのですね」
弘明の説明にフローラが感心したように呟く。
とりあえず会話が通じて、悪人ではなさそうであることに、胸をなでおろす。
「ああ……」
優しく微笑みながら顔を覗き込まれると、弘明はフローラの容姿

に見惚れたように顔を紅潮させた。
凝視して見返すだけの度胸はないようで、視線を定めないでキョロキョロとフローラの顔を見ている。
「んん。ちなみに聞いておきたいんだが、日本、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、中国っていう国の名前に聞き覚えはあるか？」
自分のペースを取り戻すべく、わざとらしく咳払いをすると、弘明がそんなことを尋ねた。
「えっと、……ありません」
弘明の質問に心当たりがないかを真剣に検討したが、フローラがそれらの国名を聞いたことはなかった。
「やっぱりか。で、あんたが俺をここに呼んだのか？」
今更だがフローラが王女だと知っても口調を改めることはなく、弘明は現状を確認するべく次々と質問を投げかける。
「あ、いえ、私が呼んだのではなく、聖石……ブレイブストーンが勇者様を召喚してくれたんです」
「聖石？　ブレイブストーン？　なんだそれは？」
この質問を皮切りに、フローラは弘明に六賢神や勇者に関する概略を説明することになった。
「以上です。何かご不明な点はございますか？」

一通り説明し終えると、フローラが弘明に尋ねる。
「まぁテンプレすぎて状況は簡単に理解できた。でだ、一つ、質問したいことがある？　いいか？」
「はい、なんでしょうか？」
先ほどから弘明が言っているテンプレという言葉の意味を考えていたフローラだったが、質問があると言われて姿勢を正す。
「俺はどうやったら元の場所に帰れるんだ？」
「え？　帰る？　えっと、それは……」
予想外の質問に、フローラが言葉に詰まる。
彼女にとって勇者とは六賢神が遣わした人間族の救世主だ。
どこからやって来たかなんて考えたことはなく、漠然と神様がいる場所からやって来たくらいの認識しか持っていない。
そもそもこの人は私達を助けに来てくれたんじゃないのか。
フローラは困惑していた。
「えっと、そもそも勇者様はどちらからいらしたのでしょうか？」
「俺は地球という世界にある日本という国からやって来た」
「六賢神様がいらっしゃる場所からこちらへお越しになられたんですよね？」
「あー、会話が上手く噛み合っていないみたいだが、六賢神なんて存在は見たことも聞いたこともないな」
「そんな……」
フローラの困惑がいっそう強まる。
弘明は本当に勇者なのだろうか。
いや、聖石の代わりに弘明が現れたのだから、彼が勇者であるこ

とに間違いはなさそうだ。

「えっと……」

じっと自分の顔を覗き込んでくる弘明の視線に耐えかねて、フローラは目を逸らした。

弘明にとってはそれが答えである。

「おいおい、呼び出しておいて帰れませんってのはないんじゃないのか？」

嘲笑するようにそう言うと、フローラが答える前に解答を決めつけ、弘明は話を進めることにした。

「これって誘拐じゃないのか？　この世界の法律でどんな刑罰が下されるかは知らないが、犯罪行為だよな？」

心なしかその口調はどこか弾んでいる。

それは現状に対する不満を訴える言葉であるはずなのに、彼の顔は、まるでこれから面白くなりそうだと言わんばかりに、薄っすらとにやけていた。

「あ、えっと……」

生来の穏やかな気質がこういった交渉に向いていないのか、フローラは狼狽えているばかりだ。

フローラだってよくわかっていないのだ。

聖石が勝手に弘明を召喚しただけで、誘拐しようだなんて事実誤認も甚だしい。

フローラ達からすれば弘明が勝手に現れたにすぎないのだから。

「やれやれ、困っているのはこっちなんだぜ」
流石にイジメすぎたかなと、弘明が溜飲を下げる。
どこか満足したように笑みを浮かべると――。
「貴様、先ほどから無礼ではないか？　それで本当に勇者なのか！？」
弘明の態度に耐え兼ねたスティアードが口を挟んできた。
「おいおい、俺はいきなり拉致されてこの場に呼ばれたんだぜ？
その勇者になるってのにも承知した覚えはないぞ。いいか、俺は被害者だ。そこんところをはっきりとさせておこうか？」
そんなスティアードに対して小さく溜息を吐くと、弘明は被害者であることを殊更に強調して語った。
「なんだと？」
挑発するような態度に、不快気な表情を隠そうともせず、スティアードは弘明を睨んだ。
周囲にいる貴族達も弘明に対してあまり好意的な視線を向けてはいない。
ピリピリとした空気が辺りに流れる。
「フローラ様、恐れながらよろしいでしょうか？」
すると、今まで値踏みするように黙って弘明を眺めていたユグノー公爵が声を出した。

突如、声を出したユグノー公爵に、弘明を含め周囲の者達の視線が集まる。

「はい。何でしょう？」

緊迫した空気が僅かに霧散したことに安堵し、フローラがユグノー公爵に尋ねた。

「先ほどの光でアルボー公爵の放った追跡部隊にこちらの位置を気取られた可能性が高いです。お話は馬車の中でするとして、今は早く部隊を動かしたいのですが」

と、落ち着いた口調で、ユグノー公爵は言った。

「わかりました。今すぐ出発しましょう。勇者様、今はあまり時間がありません。とりあえずご同行いただけないでしょうか？」

その言葉を受け、どこか焦ったように、フローラが弘明に尋ねる。

「んー、まぁいいぞ。まだ聞きたいこともあるしな」

特に考えた様子もなく、弘明は即答した。

仮にいきなりこの場で残されたとしても、弘明に行き場はなく、情報も圧倒的に不足している。

付いて行かないという選択肢は彼の中になかった。

にもかかわらず、これまで挑発的な態度に出ていたのは、自分のことを絶対に置いていくはずがないと高を括っていたからである。

挑発して相手の対応を見てやろうという意図も含まれていたりする。

そのままフローラに案内され、弘明はユグノー公爵と一緒に馬車

に乗ることになった。

「ロアナ君、君も一緒に乗りたまえ」

「はい。承知しましたわ」

ユグノー公爵に声をかけられ、近くにいたフォンティーヌ公爵の娘であるロアナも馬車に乗る。

そうして、この世界では極めて品質の高い馬車の中で、フローラ、弘明、ユグノー公爵、ロアナの四人が一堂に会することになった。

馬車の中は広く、四人が乗ってもまだまだ余裕はある。

ただ、弘明にとっては乗り心地が悪いようで、尻を押さえて辟易とした表情を浮かべていた。

「現在、我が国においてクーデターが生じております」

それぞれの簡単な自己紹介を済ませると、フローラに命じられ、ユグノー公爵が弘明に事情を説明することとなる。

つい先日、ベルトラム王国でクーデターが起きた。

首謀者はヘルムート＝アルボー公爵、八年前にユグノー公爵との政争に敗れた元近衛騎士団長であった男だ。

きっかけは、過日、敵国であるプロキシア帝国が大規模な侵攻を開始し、ベルトラム王国が国家の重要拠点を奪われ甚大な被害を被ったことにある。

対プロキシア帝国に対して強硬路線を主張していたアルボー公爵家とその配下の軍閥貴族達。

彼らは穏健派の筆頭であったユグノー公爵とそれを支持していたフィリップ三世を徹底的に糾弾した。

話し合いにより強硬派の不満を解消しようとしたフィリップ三世とユグノー公爵であったが、ヘルムートは水面下で根回しを行った上でその不満を武力行使によって訴える。

その時点で、ユグノー公爵に従っていた貴族達は、責任を免れられない側近の貴族を残して、大半がヘルムートの軍門に下っていた。
穏健派の幹部に位置する貴族達を捕えるため、ヘルムートは粛清と称して強引に兵を動かす。
失脚によって近衛騎士団に対する影響力を失ったヘルムートであったが、軍部に対しては息子を傀儡とし、長い年月をかけて確固たる地位を確保することに成功していた。
穏健派の主だった貴族はユグノー公爵や一部の貴族を残して投獄され、その中にはロアナの父親であるフォンティーヌ公爵も含まれている。
加えて、粛清によって勢いをつけたアルボー公爵は失政を理由に王族の軟禁も目論んだ。
その結果、国王フィリップ三世、王妃ベアトリクス、第一王女クリスティーナが王城に軟禁されることになる。
穏健派の筆頭貴族であるユグノー公爵は粛清の手をいち早く察知すると、自らの保身のために反革命軍を組織した。
スティアードと一緒に王立学院に通っていた第二王女のフローラの救出に成功すると、ユグノー公爵はそのまま彼女を指導者として擁立し、ガルアーク王国へと亡命することを決めたのである。
フローラは自分にそんな求心力があるとは思えなかったが、ユグノー公爵に説得され、家族、自分に賛同してくれる家臣、そして国民のために立ち上がることを決意していたりする。

「んー、もしかしなくともフローラ姫達の状況ってものすごく悪いよな」

ユグノー公爵の説明を聞き、歯に衣着せずに弘明がフローラ達が置かれた状況を言い当てた。
そう、フローラ達が背水の陣に追い込まれていることは火を見るより明らかである。

国王であるフィリップ三世を押さえられている時点で、形式的に見ればどちらかといえば逆賊はユグノー公爵になるのだから。
しかも、兵数だけ見ても限界まで徴兵されれば最大で二十倍近く戦力の開きがあり、こちらは兵力の増員もままならない以上、正面から争えば勝利はほぼ不可能であった。
逆転の手を打つためにユグノー公爵はガルアーク王国へ亡命の渡りを付けたわけだが、それでも状況は非常に悪いと言わざるをえない。

「い、いえ、勇者様、ヒロアキ様がいてくだされば我々にも勝機はあります！」

フローラが慌ててその言葉を否定する。
ここに来て伝説の勇者である聖石により弘明が召喚された。
そもそも聖石にまつわる伝説はおとぎ話として信憑性の程は不明であったが、権威を示す象徴として聖石自体が有する価値は高い。
王族であるフローラの身柄と併せることでその権威の正当性はより確たるものとして扱われることから、ユグノー公爵は王国が二つ有していた聖石のうちの一つを意地で持ち出していた。
現在、聖石は弘明の召喚とともに消えてしまったが、弘明が本当に勇者であるのならば、ただ権威づけの道具としての価値しかない聖石よりも、弘明はよほど高い価値を有することになる。
弘明がおとぎ話に出てくる伝説の勇者と同じ戦闘能力を有しているのならば、反革命軍は権威の面でも戦力の面でも大きな力を得たことになる。

「ヒロアキ様、どうか我々をお救いくださいませ！」

弘明の存在が最後の希望であると言わんばかりに、フローラは頭を下げた。

ユグノー公爵も、そして側で黙って話を聞いていたロアナも一緒に頭を下げている。

「さっきも言ったけど俺は勝手にこの場に呼ばれただけの被害者だ。勇者なんかじゃない。命をかけて戦う理由なんてないな。それに現時点で俺に戦う力があるとは思えないぞ」

そんな三人の懇願を受け流し、物おじせずに弘明は自らの意見を主張した。

フローラは絶望したような表情を浮かべ、ロアナは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

ユグノー公爵だけは顔に感情を出さずに弘明を眺めていた。

「勇者様は膨大な魔力と神装といわれる武具を有していたと言われております。その力は絶大であり、一振りで数千にも及ぶ魔物の軍勢を薙ぎ払うことも出来たとか。弘明様も勇者ならばそれと同じ力がありましょう」

ユグノー公爵は柔らかな笑みを浮かべて弘明に勇者が有する力を説明した。

「神装ね。少なくとも今の俺はそんな物を持ってはいないが、仮に持っていたとしても俺があんたらのために戦う理由にはならん。内紛のゴタゴタはあんたらの問題だろ。お断りだな」

そんなユグノー公爵に対してあからさまに警戒するような視線を向けると、弘明は決然と頭(かぶり)を振った。

「そんな……お願いします！　私達にはもう勇者様しかいないのです！」

「私からもお願いしますわ。我々にはヒロアキ様のお力が必要なのです！」

そう言って懇願するフローラとロアナの顔は文字通り必死であった。

そんな二人に弘明が困ったように苦笑する。

「そうは言われてもな。あんたらは俺に戦争をやらせようってんだろ？」

どこか軽蔑を含んだ声色で弘明が言い放つ。

「戦争に出れば人を殺すことになる。俺のいた国じゃ殺人は重罪だ。無罪でも、どんな事情があろうとも、人を殺した人間はスティグマを捺されることになる」

非難めいた視線をフローラとロアナに送り、弘明は語り続ける。

「それにさっきの話を聞いた限りだと、勇者ってのは魔族を倒すための存在なんだろ。魔王や魔物を倒すためならともかく、人殺しに使えっていうのはおかしくないか？」

弘明は憤慨して、ここぞとばかりに語った。

「俺は人殺しをするつもりはない！　人殺しをして、わざわざ身の危険を冒してまで、あんたらを救う義理もない！」

吐き捨てる弘明。

馬車の中に短くない沈黙が降りた。

「いやはや、流石は勇者様。立派な志をお持ちだ」

すると、どこか悲痛な笑みを浮かべ、ユグノー公爵が口を開いた。

ぴくりと弘明が反応し、ユグノー公爵に警戒するような視線を送る。

「勇者様の仰る通りです。我々としても泥沼の戦場になることだけは避けたいと考えております。むろん私個人もそんなことはしたくもありません」

言って、ユグノー公爵は深々と息を吐いた。

「ですが、このままいけば泥沼の争いは必至です。アルボー公爵は背後で敵国と内通している節があり、加えて多くの罪なき人間を浅はかな主張で手にかけている。我々はそんな奴を野放しにはできないのです」

歴戦のユグノー公爵の雰囲気に呑まれ、弘明は身を固くして、その言葉を聞いていた。

「フローラ姫のご家族は王城に軟禁されていますし、ロアナ君のご家族は投獄されその身の安全は定かではありません」

深く息を吐き、ユグノー公爵は暮れ始めた窓際の風景に遠く目をやった。

「アルボー公爵はずる賢く悪逆な男です。このままいけばいずれ勢力的に劣る我々が逆賊として裁かれる未来が待ち受けているかもしれない」

ユグノー公爵は弘明の理論武装を揺り動かすように話し続ける。
「私はそんな奴の魔の手から彼女達を守ってあげたい」
言って、まるで子供達を見守る父親のような眼差しを、ユグノー公爵はフローラとロアナに向けた。
「ですが私は非力です。小賢しい知恵は回りますが、何の力もない」
ユグノー公爵は言い、辛そうに溜息を吐いた。
「そんな、ユグノー公爵は精一杯やってくれています！」
「そうですわ！　ユグノー公爵がいらっしゃらなければ今ごろ私もどうなっていたことか……」
気弱な表情を見せたユグノー公爵に、フローラとロアナが焦ったように声をかける。
彼女達二人はユグノー公爵に助けられた恩があった。
それはユグノー公爵にメリットがあったからなのだが、二人はその点に気づいてはいない。
いや、気づきつつも、ユグノー公爵に対する恩から、彼女達はそれを捨て置いているのだ。
「確かにロアナ君は物好きな貴族に奴隷として売却されていたかもしれんが……」
その言葉が妙に生々しくて、弘明は顔を顰(しか)めた。
こんな綺麗な少女がどこの誰ともしれぬ下衆に慰み者にされる場面を思わず想像し、無性に腹が立ったのだ。
この場にいないアルボー公爵に弘明が微かとはいえ確かに敵意を

抱いた瞬間であった。

「勇者殿にこのようなお願いをするのは甚だ見当違いであるということは私も重々承知しているのです。ですが恥を忍んでお願いしたい。どうか我らを助けてくれないでしょうか？」

語って、ユグノー公爵は悲しげに頭を下げた。

「何も人を殺すだけが戦争のやり方ではありません。勇者様には勇者様にしかできない戦いがあるのです。勇者様が一緒に来てくれれば、犠牲者が減る未来を掴みとれるのです！」

熱の入ったその声は弘明に対する信頼が込められているように聞こえる。

この時、弘明の中で男としての何かが燻られ、心が大きく揺れ動いていた。

「少し考えさせてくれ……。あんたの言うことは理解できるが、俺にはまだ覚悟ができていない」

眉間にしわを寄せ、強く拳を握りしめながら、弘明は答えた。

☆★☆★☆★

「父上！　あのような男が勇者だと、私はいまだに信じられません！」

その日の夜、ユグノー公爵のために野営地に設置された天幕の中で、スティアードが憤慨したように声を出した。

現在、弘明はフローラやロアナと一緒に夕食を食べているため、

話を聞かれる恐れはない。

「あの男は勇者だよ。間違いなくな」

弘明が召喚され、馬車に乗って行軍を開始した後も、若い貴族を中心として弘明に対する不満は溜まっていた。

彼らの多くがフローラの親衛隊と呼ばれる組織の構成員である。

その筆頭にいるのがスティアードであり、アルフォンスもそれに追従していた。

「どうしてそうだと断言できるのですか！？」

「聖石が消えて代わりにあの男が現れたのだ。情況証拠ならばそろっているだろうに……」

お前はそんなこともわからないのかと、ユグノー公爵は言外に言い放った。

その気迫に負け、スティアードは当初の勢いを失い、怯んだ。

「それにお前が好きなあのセリア＝クレールが開発した新型の測定石であの男の魔力量を算定した。結果は計測不能だ。我々とは比べ物にならん魔力を持っている」

ここ最近では珍しく上機嫌な様子でユグノー公爵が語る。

「なっ……」

新型の測定石は、宮廷魔道士百人が同時に触れなければ測定不能の結果は出せないと、あのセリア＝クレールが断言した代物だ。

従来の測定石では魔法を扱うに足る最低限の魔力しか調べることができなかったが、スティアードが敬愛するセリアによって発明さ

れた新型の測定石はその魔力量を大まかにとはいえ計測することを可能とした。
そんな彼女の傑作が誤作動を起こすはずはないと盲目的に信じており、スティアードは驚愕することになる。
「物おじせず変に小賢しいところはあるが、それだけの温い小僧だ。ある程度、会話をして、およその人柄は掴めた。何の問題もないさ」
すべてを見透かしたかのような父の発言に圧倒され、スティアードは息を飲んだ。
「お前は同年代の貴族達が不満を表に出さぬように監視しておけ」
二の句が継げずにスティアードが黙っていると、ユグノー公爵がそんなことを言ってきた。
「わかりました……」
目を伏せ返事をすると、スティアードは天幕を発ち去る。
その後ろ姿を鼻を鳴らして見つめると、ユグノー公爵は側近を呼び寄せた。
「何の御用でございましょうか？」
即座に現れた男が慇懃な所作で尋ねる。
「房中術を仕込んだ献身的な女を見繕って、それとなく勇者に嗾(けしか)けてみろ。あくまでもそれとなくだぞ。できれば処女がいいが無理は言わん」

嘲笑を浮かべ、ユグノー公爵は男に指示を出した。
女の身体は武器だというのがユグノー公爵の考えだ。
使い方一つで大抵の男を意のままに操ることができる。
先ほど、弘明はフローラとロアナの美貌に何度も視線を奪われていた。
本人は意識していないつもりだろうが、傍から見れば不自然に何度も視線を送っているのは丸わかりだった。
だというのに視線を気取られないように猿芝居をしている。
ああいう手合いは男女の関係に自分勝手で愚かな理想を抱いているが、場を演出してやれば割と簡単に据え膳に食いつくタイプだ。
肉体関係を持った女を置いてどこかに行くような度胸があるようにも思えない。
ユグノー公爵はそう分析していた。

「よろしいのですか？　相手が勇者となると相応の身分の女がよろしいのでは？」

今の言葉でユグノー公爵の要求している女を的確に判断し、脳内で候補を見繕りながらも、落ち着いた口調で家臣の男が尋ねた。
彼の仕事は確認作業だ。
こうして主の決定に対して逐一、反対意見を提示することで、思考をブラッシュアップさせる。
勇者に色仕掛けをすることには何の抵抗も抱いていない。

「いきなり最高級品をくれてやる必要もあるまい。求められている役割も異なる。今は奴を我らの駒にするのが先決だ」

勇者と身分的に釣り合うのは王族か、最低でも上級貴族でなくてはならず、現在の反革命軍にいる者だと、候補となるのはフローラ、ロアナ、後は数人の貴族の令嬢くらいしかいない。

だが、特権階級として生まれた彼女達は当然のごとく処女であるから床上手ではなく、それを専門に教育を受けた女の性技には遠く及ばない。
それに彼女達には別の用途で用いる可能性も少なからずある。
わざわざ軽率に勇者に抱かせてやる必要もない。
色仕掛けを仕掛けるのならばもっと適した人員がいるのだ。
要は向き不向きの問題である。

「御意に」

恭しく礼をすると、男はそのまま天幕から立ち去った。

「ふん、逆賊がどちらか思い知らせてくれるわ。アルボーの老害めが……」

一人残されたユグノー公爵が忌々しげに吐き捨てる。
彼にとって弘明はまさしく降って湧いた幸運だ。
これならば勝算はある。
だが、焦ってはいけない。
ユグノー公爵は頭の中で未来のプランを着々と練っていた。

☆★☆★☆★

翌日、弘明の雰囲気は昨日とは打って変わっていた。
どこか精悍な顔つきを浮かべ、その態度にはどこか自信が漲(みなぎ)っている。

「まぁ、こちらの動きは革命軍とやらに察知されているだろうが――」

馬車の中で広げた周辺の地図を眺めながら、弘明は得意げな口調で語っていた。

「俺がアルボー公爵ならこの地点まで進めば追跡は諦めるだろうな。峡谷では数の利が効かない。待ち受けされたら手痛い反撃を受けると警戒するからな」

そうして確信あり気に断言する。

「素晴らしい。流石は勇者様だ。実にご聡明であらせられる。このような戦略眼も持ち合わせていらっしゃるとは……」

ユグノー公爵はおだてるよう弘明を褒め称えた。

表面上は温和そうな笑みを浮かべながらも、ユグノー公爵の目は笑っていない。

そんな彼の曲者ぶりに気がつくことができるほどに人生経験は豊富でなく、もともとの洞察力も高くなく、弘明は気を良くした。

「実に頼もしいですわ。ヒロアキ様は軍略を修めていらっしゃるのですか？」

ロアナも弘明を褒め称え、質問を投げかける。

「いや、俺はゲーマーというかオタクでな。そういう話に散々触れてきたから色々と知っているだけだ。気になることはなんでもネットで調べていたしな」

自分の知識ネタにそれなりの自信があるのか、弘明が満更でもなさそうに謙遜する。

ゲーマー、オタク、ネットという言葉の意味は不明であったが、

ロアナは弘明が勉強家であると判断した。

「あの、ヒロアキ様。こうしてご助言を頂けるということは我々にお力を貸して頂けるということなのでしょうか？」

どこか期待するような視線で弘明を見つめ、フローラが尋ねる。

こうして乗り気になってくれているということは彼女にとっては非常に好ましいことだった。

「……とりあえず当面は行動を一緒にしてようと思う。ただし、あんたらの進む未来が間違っていると判断したら俺は離れさせてもらうぞ」

と、決然とした口調で弘明は答えた。

弘明は理解していない。

彼らと行動を共にすると決めた時点で、相当数の人間の命を自分の双肩で担うことになったという事実を。

勇者として関わるだけ関わって、途中で一抜けたをすることがどれほど無責任なのかを。

「勇者様の御心のままに」

言って、慇懃にユグノーは頭を下げた。

その口元はほくそ笑んでいる。

「あんたの言った言葉を信じさせてもらうぞ。よろしく頼む」

真剣な面持ちで弘明がユグノー公爵に語りかける。

先入観から貴族が一律に腐っていると考えていた弘明からすれば、ユグノー公爵の慇懃な態度は実に意外であった。

それにフローラとロアナは弘明の直球ど真ん中で好みのタイプである。
すべての貴族が腐っているわけではないのかもしれないと弘明は考えていた。

「ええ、こちらこそよろしくお願いします。勇者殿」

口元に小さく微笑を浮かべ、ユグノー公爵は弘明に手を差し出した。
弘明がその手を握り返す。

「ありがとうございます、勇者様！　民や私に付いてきてくれた者達を救いたいという私の気持ちに嘘はないと誓います。これからよろしくお願いしますね」

続けて、フローラが弘明の手を握って礼を告げる。
これなら上手く行くかもしれない。
家族を、民を、自分を慕って付いてきてくれる者達を救い出すことができる。
そんなビジョンが思い浮かび、フローラはホッとしたように笑みを浮かべていた。

「ああ。幸い勇者としての力は強大のようだしな。使い方を間違えなければ抑止力となるはずだ」

にやりと不敵な笑みを浮かべ、弘明が満を持して語った。

「勇者様のお力ですか？」

不思議そうにフローラが尋ねた。

弘明の隣でユグノー公爵がぴくりと眉を動かし、興味深そうに弘明を見やる。

「ああ、これが俺の神装だ。来い、ヤマタノオロチ！」

手を掲げて叫ぶと、弘明の手に一振りの太刀が収まった。

第５１話　精霊の民の里へ

時は少し遡り、神聖暦九九九年、晩秋。
村を出たリオは街道から外れて人気の少ない森の中へと足を踏み入れた。

「解放（ディスチャージ）」

呪文を唱えて時空の蔵を使用すると、傍らに小さな灰色の空間の渦ができ、リオは青く光り輝く石を掴みとった。
それは転移結晶と呼ばれる霊具で、現在リオがいる座標から転移結晶の帰還地点として設定した原点座標へと転移できるという眉唾物の効果を有している。

「転移（テレポート）」

今度は転移結晶を使用するべく、その発動キーとなる呪文を唱える。
すると青い虚空の渦がリオの身体を包み込んだ。
渦はリオを中心に半径３メートルほどの広がりを持っている。
次の瞬間、渦が消えると、リオの姿も消えて、気がつけば転移結晶で設定されていた原点座標の上に立っていた。
使用したのが初めてだったため、瞬時に景色が入れ替わったことに、リオが僅かに目を見開く。
視界に広がったのはどこか懐かしさを覚える風景だった。

「どうやら無事に帰って来たみたいだな……」

言って、リオは小さくほころんだ。
穏やかな木漏れ日の差し込む森の中、新鮮な空気を鼻で吸い込み肺を満たす。
手に持っている転移結晶は、内包していたオドを大量に失い、青から黒に近い色へと変わっている。
これでもうカラスキ王国まで一瞬で戻ることはできない。
急に遠くに離れ、リオは僅かに寂しさを覚えた。

「……」

そんな感傷に僅かに浸りながら、リオは周囲の景色をぼんやりと眺めた。
現在地は精霊の民の里からほど近い泉だ。
この場所は霊脈と呼ばれ、マナの濃度が高い場所として知られている。
転移結晶の原点座標を設定するには、こうしたマナの濃度が一定以上の場所を選ばないと、転移に要するオドの量が格段に増えてしまうのだ。

「とりあえず顔を出すか」

既にリオがこの場に現れたことは感知能力の高い精霊の民には判明しているだろう。
オドを視認でき、オドとマナの感知能力も高い精霊の民は、それらの乱れを感じ取り、何らかの魔術か精霊術が用いられていることを推察できる。
他方で、オドの感知しかできず、オドの視認とマナの感知ができない人間族は、たとえ魔術や精霊術が用いられても、すぐ傍でないとそれに気づきにくい。
また、精霊の民の里には広域の魔術結界が敷かれており、一定量

のオドを持った未確認の侵入者が現れると反応するようになっている。
他にも鼻の利く種族がいるし、感知能力に長けた精霊を使役している者もいる。
一定範囲に侵入者が現れればかつてのリオとラティーファのように瞬時に捕捉されることになるのだ。
リオが向かう先は精霊の民の里の中心街が存在する方である。
もう少し歩けば森の中に切り開かれた広大な農園が見えてくるはずだった。
土と水の精霊術を自在に操る精霊の民に育てられない作物などない。
種さえあれば、どんなに育て方が難しい植物でも、大樹の精霊であるドリュアスにその知識を借りて、育てることができる。
周囲の景色を楽しみながらリオは歩を進めていく。

「……ちゃん！」

どこか遠くから懐かしい声が響いた気がした。
リオが周囲を見渡す。
すると、声の主が見つかって――。

「お兄ちゃん！」

今度はハッキリと聞こえる。
彼女の声だ。
リオの義妹として心の中にいる少女。
その人物は気配を包み隠さずにリオのもとへ近づいてきている。
自分のことをこうやって呼ぶ人物は一人しか覚えがない。
リオは思わず顔をほころばせた。

「お兄ちゃん！　お兄ちゃん！」

そこには想像した通りの少女がいて、リオに向かってかなりの速度で走ってきている。

少女は満面の笑みを咲かせていて、リオも少女に笑みを向けた。

そうして彼女の姿を観察する。

少女、ラティーファはリオと会わない間にずいぶんと成長したようだ。

彼女はもうすぐ十三歳だったはずだ。

「ラティーファ」

近づいてきたラティーファに、リオは優しい声音で、その名前を呼んだ。

「っと……」

駆け寄ったラティーファがそのままリオに強く抱き着く。

やっぱり成長しているようで、身長も伸び、その身体つきはだいぶ女性らしくなっていた。

少し押されかけたが、肉体と身体能力を瞬時に強化して受け止める。

「ただいま、ラティーファ」

少女の温かさに懐かしさを覚え、リオは耳元で小さく囁いた。

「お帰りなさい！」

リオの顔を見上げ、ラティーファが満開の笑みを咲かせる。

「お兄ちゃんだ〜！」

ラティーファがぐりぐりとリオの身体にその可愛らしい顔を埋める。

「お帰りなさい、お帰りなさい！」

「ああ、ただいま」

繰り返し告げる彼女の頭をそっと撫でてやると、リオはラティーファの背後に視線を向けた。

「サラさんもお元気そうで何よりです」

遅れてやって来た一人の少女にリオが挨拶を告げる。

背中まで伸びた綺麗な銀髪を風になびかせ、その透き通るような翠眼でリオを見つめていた。

彼女も少し成長したようで、ずいぶんと女性らしくなっている。

「あ、は、はい！　お帰りなさい！　リオさん」

リオに話しかけられ、まともに目が合うと、銀狼獣人の少女サラがどぎまぎとした様子で返事をする。

「どうかしましたか？」

そんな彼女の反応に、不思議そうな視線をやるリオ。

「あ、いえ、なんかリオさんの雰囲気がだいぶ変わったというか……」

以前から芯が強くてしっかりとしているように感じられたが、サラが見知っていたリオにはどこか儚い雰囲気があった。
今は一本筋が通ったような凄みが滲み出ていて、揺れのようなものが感じられない。
動きにも相変わらず隙がなくて、さらに強くなったんじゃないだろうか。
体つきもなんだか逞しくなっている。
じっとリオのことを眺めていると、再度、視線がぶつかり、サラはサッと目をそらした。

「そうですか？　身長はまぁ少し伸びたかもしれませんね。もうそろそろ打ち止めでしょうけど」

だらしなく破顔したラティーファを腕に引っ付けたまま、リオがサラに歩み寄る。
リオの身長は百八十センチを少し上回っているくらいで、近くからだとすらっとしているサラでも見上げる形になってしまう。
サラは至近距離からリオの顔を見上げた。

「身長も伸びたみたいですけど、なんていうかすごく大人っぽくなった気がします」

昔から落ち着いた雰囲気はあったが、当時はまだ外見にあどけなさがあった。
それに、旅をしている間に精神的にも成長したのかもしれない。
きっとそういうところが雰囲気に滲み出ているのだ。
サラはそう思った。

「他の皆さんは一緒じゃなかったんですか？」

「あはは、アースラ様の家にみんなで集まってお茶を飲もうとしている時に、転移魔術陣が敷かれている泉の方にオドとマナの揺らぎがあったのに気づいて、ラティーファが無我夢中に走り出しちゃったんですよ」

その時点ではオーフィアとアルマはまだやって来ていなかったため、サラだけがラティーファの後を追いかけてきたというわけである。

おそらくオーフィアやアルマもオドとマナの揺らぎを感じ取っていることだろう。

二人がリオを挟み込むように並ぶと、三人は自然と街へ向けて歩き出した。

「そうなんですか。お土産も買ってきましたから楽しみにしててください」

鈍い冬の日差しが照らす下、旅の話をしながら歩いていると、道すがら大勢の精霊の民達とすれ違うことになった。

サラとラティーファと一緒に歩くリオの姿を見て、多くの者達から好意的な声を投げかけられることになる。

「あ、リオ兄様なのです！　帰ってきたのですね。お帰りなさいなのです！」

「おー、リオの兄貴か。お帰り」

里に無数にある広場の一つを通りかかったところで、サラの妹であるベラと獅子獣人の少年であるアルスランが話しかけてきた。

「二人とも、ただいま」

人懐っこい笑みを浮かべるベラ。
アルスランは、ラティーファがリオにくっついている姿を見て、一瞬、僅かに複雑な表情を浮かべたが、リオの帰還を歓迎するように素直な笑みを浮かべた。
そんな二人にリオが微笑み返事をする。
ベラとアルスランも加わり歩を進めていると、自然にラティーファ達の友達が集まって来て、いつのまにかちょっとした集団が出来上がってしまった。

「お帰り！」
「あー、リオ兄だー！」
「帰ってきたの？」
「里のお外に行ってたんでしょ？」
「里の外ってどんな場所なの？」
「お土産はー？」
「リオお兄ちゃん背伸びた？」

外の世界に興味があるのか、少年少女達がこぞってリオに質問を投げかけていく。

「貴方達、一度にそんなに質問をしてもリオ様が答えきれないでしょ。少しは順番を考えて質問しなさい」

話が盛り上がり、わーわーと騒ぐ少年少女達を、サラが呆れたように叱責する。
それでも少年少女達の楽しそうな声が止むことはなく、にぎやかに集団は移動していく。
微笑みながら少年少女達に答えるリオの横顔をサラがじーっと眺める。
それは無意識の行動で、サラ自身どうしてリオのことを見つめて

いるのかには気づいていない。
その時、一陣の風が吹いて、サラの頬を撫でた。
「リオさん、お帰りなさい！」
透き通るような美しい声が響くと、ふわりと白いワンピースを身に着けた艶やかな金髪の少女が舞い降りた。
天使の如き可憐な仕草で、にこにこと笑みを浮かべ、ハイエルフの少女オーフィアはリオを出迎える言葉を投げかける。
その可憐さにはますます磨きがかかっていて、彼女も少し成長したようだ。
「はぁはぁ、リオさん、お帰りなさい。お久しぶりです」
オーフィアとは別の方向から、少し遅れて、薄い褐色肌の小柄な赤毛の少女もリオに声をかけてきた。
リオのもとまで走って来て、エルダードワーフの少女アルマは僅かに息を弾ませている。
ドワーフである彼女だけはまったく外見は変わっていなかった。
いや、ちょっとだけ顔つきが大人っぽくなった気がしないでもない。
「二人ともただいま戻りました」
視線が交差し、三人が薄く微笑む。
そのままオーフィアとアルマも合流して一行は長老達が勤める官庁施設へと向かう。
施設の近くまで移動すると、少年少女達と別れる。
建物の前まで行くと、長老陣がリオのことを待ち構えていた。

「久しいな、リオ殿。よくぞ帰ってきた」
相も変わらずの悠然とした口調で、最長老の一人であるシルドラがリオを出迎える言葉を投げかけた。
「……はい。ただいま戻りました。お久しぶりです、みなさん」
答えながらも、総出で出迎える彼らに、リオはきょとんとした顔を浮かべた。
「ん？　どうしたかね？」
そんなリオの表情の変化に気づき、シルドラが尋ねる。
「いえ、まさかこうして皆さんが総出で出迎えてくれるとは思ってなくて。少し気恥ずかしく思いました」
どこか照れたように、リオが曖昧な笑みを浮かべる。
「ほほ、それもこれもリオ殿の人徳によるものじゃて」
愉快そうな笑みを浮かべてラティーファの曾祖母であるアースラが言った。
「ありがとうございます」
はにかんでリオは頭を下げる。
「ずいぶんと逞しくなったじゃねぇか！　顔つきも男らしくなったぜ！」

晴れやかな笑い声を響かせて、エルダードワーフの最長老ドミニクが言った。
近くへやって来てガシガシとリオの腕を叩いてくる。
「ふむ、まぁ積もる話もあるだろう。とりあえず腰を落ち着けることのできる場所へ移動しよう」
シルドラの提案を受け、それからリオ達は官庁施設であるツリーハウスの上部に設置されたオープンテラスに移動することになった。
そこでお茶会が行われることになる。
メンバーは最長老の三人に、ラティーファ、サラ、オーフィア、アルマだ。
テラスに置かれた大きな丸テーブルの上にはお茶請けのお菓子。
それぞれが椅子に座ったところを見計らって、オーフィアがお茶を運んできた。
ティーコージからティーカップを取り出し、ポットからお茶を注ぐ。
「さぁ、冷めないうちにどうぞ」
にっこり笑ってオーフィアがお茶を配っていく。
テラスに微かな微風が吹きこみ、湯気とともに香りが広がると、リオは思わず顔をほころばせた。
「それではお言葉に甘えて……」
言って、リオが紅茶を口に含む。
瞬間、口の中を力強い味が侵食した。

「相変わらず見事なお手前で」
しっかりと茶葉が開き、紅茶の濃度と味もムラなく均一に仕上がっている。
「えへへ、今度はリオさんの淹れたお茶が飲みたいです」
照れくさそうな笑みをオーフィアが浮かべた。
リオも笑って応える。
「このパン？　ですか？　甘くて美味しいですね！　中身の具がなめらかなのにすごいしっとりしてます」
どこか独特な二人の世界が構築されたところで、脇からその様子を眺めていたアルマが少しムッとした表情でその存在感を主張するように口を挟んだ。
彼女の口にはリオがお土産として持ってきたヤグモ地方のお菓子が入っている。
「本当、チョコとはまた違った上品な味付けですね」
お菓子をお行儀よく口に入れ、その味を噛みしめると、サラも顔を輝かせて間髪を容れずに同意した。
「これはこれは、儂はチョコよりもこっちの甘さの方が好きじゃな」
アースラもその味に顔をほころばせる。
「うむ、甘味は苦手だが、これなら食べられそうだ」
「酒には合わんが、なかなかいけるな」

シルドラとドミニクも饅頭を口に入れると、目を丸くして感想を述べる。

「それはヤグモ地方にある饅頭という高級菓子で、中身は小豆と呼ばれる植物の実を餡にしたものです。レシピを教わったので自作してみたんですが、お口に合ったようで何よりです」

彼らの反応の良さにリオが嬉しそうに笑みを浮かべる。

「色んな料理に応用できそうですね。特にパンとの相性が良さそうかな。紅茶にも合いますね」

言いつつ、饅頭に手を伸ばし、ぱくりと一口で頬張るオーフィア。しっとりとした食感と甘みが咀嚼するごとに口の中に広がり、思わず顔がほころんだ。

「ええ、この小豆餡をパンの中に入れるだけでも美味しく食べられますよ。小豆の種も持ち帰ったのでこちらで栽培してみてください。あちらの茶葉とその植物の種もお土産として持ち帰ってきました」

「やった、頑張って育てますね！　それに小豆餡の作り方も教えてください！」

にっこり笑って、オーフィアが返事をする。

「はい。近いうちにシュトラール地方に向かおうと思っているのですが、その前でよろしければ」

言って、少し冷め始めたお茶を再度、口にする。

「ええ！？　お兄ちゃん、また里を出て行っちゃうの？　それにシュトラール地方って……」

ラティーファがリオの言葉に食いつく。

行き先がシュトラール地方だと聞いて、不安そうにリオを見つめた。

「ああ、ちょっと人探しをしなきゃいけないんだ。昔の知人に用事があってな」

苦笑して、リオが答える。

「むぅ……」

「ふむ、となるとこの里にはどれくらい滞在するつもりなんじゃ？」

心配そうに唸るラティーファの横からアースラが尋ねてきた。

「そうですね。一か月程度で出ようかと思っています」

「となると年内にはこの里を出ることになるのかな？」

リオが新たに旅立つことについて異論はないようで、その詳しい理由を尋ねてくることもない。

里の内部情報を知っているリオを自由に行動させているのは、リオへの信頼の表れだろう。

「そのつもりです」

「そうなるとラティーファはその間に甘えておかないといかんの」

その頭を撫でてやりながら、困ったように笑って、アースラはラティーファに語りかけた。

「うん」

不承不承ながらも頷き、ラティーファはリオへ熱い視線を送った。これはどうやって甘えようかとあれこれ考えている時に浮かべる表情だ。

この顔を見るのも久々だなと、リオは口元をほころばせた。

「じゃあ、そろそろ皆さんにお土産を配ろうかと思います。まずはシルドラさんから――」

努めて明るい声を出して、リオは話を持ち出した。

場の雰囲気を明るくするため、旅をしている間に購入したお土産を配っていくことにしたのだ。

どんな品なのかを説明しつつ、そこから土産話に花を咲かせ、リオ達は大いに語らいあった。

☆★☆★☆★☆

こうして里へと戻って来たリオであったが、精霊の民と過ごす日々はあっという間に過ぎていく。

約束通りオーフィアと一緒にお菓子を作ってお茶を飲んだり。

サラやウズマに混ざって里の戦士の戦闘訓練に参加したり。

ラティーファと一緒に里の子供達に混ざって遊んだり。

アルマやドミニクと一緒に酒を飲んだり。

期間限定で料理教室を再開したり。

里全体へのお土産として持ち帰った作物、果実、茶樹の種を配って、ドリュアスに里の気候風土に合った育て方を教えてもらったり。

「おーし、じゃあ！　次はそっちの岩を固定するぞ！　そっちの露

天風呂は後まわしだ！」

そして、里にいる一ヶ月の間にリオが精力的に取り組むことにしたのが自分の家造りである。

いつかどこかで定住する際に利用できることを視野に入れているのはもちろんであるが、その主目的は移動中の旅住まいとして利用することであった。

長距離の旅の間はリオの移動速度をもってしても野営せざるを得ないというのがこの世界の実情である。

野営となると食事を作るのは不便だし、風呂は入れないし、睡眠中も気が休まることはないし、ストレスが溜まることが多い。

しかし、そんな状況でもより快適な環境で過ごしたいと思うのが人間というものだろう。

だったら輸送可能な家を作ればいいんじゃないか。

時空の蔵に収納すれば大きな家でも簡単に持ち運ぶことはできるのだから。

そのことにリオが気づいたのはヤグモ地方を転々としている頃のことであった。

また、シュトラール地方で行動する際に都市以外に本拠地を構えられるのは悪くない。

今回、里に帰還したリオはその間に家を作ることを大きな目標の一つとして掲げていた。

里のドワーフ達の手を借りて作業は急ピッチに進められていく。

リオの発案した家は岩を素材としたもので、野営の際に自然環境に溶け込めて、外敵からの攻撃も防げることをコンセプトに置いている。

自ら造りたい家の概要を説明していくと、ドワーフ達も職人魂を刺激されたようで、遊び心を取り入れつつも全力で作業に取り組んでくれることになった。

彼らは土の精霊術を活用して恐ろしいスピードで岩を加工してい

く。
見た目は非常に無骨でただの岩にしか見えないのだが、中は素晴らしく快適な生活空間が出来上がっているところだ。
「このサイズの岩だと予定よりも室内の部屋数を増やせそうですね」
「ああ、どうせなら嫁がたくさん住めるような家を作るつもりだ！」
製作の指揮をしながら話し合っていると、ドミニクが豪快に笑って答えた。
「あはは……」
ドミニクは事あるごとにリオに一夫多妻を勧めてくる。
どういう意図があってそんな真似をしているのかは掴みかねているのだが、彼自身も四人の妻がいるのが関係しているのだろうか。
リオとしては現時点でそんな気はないので、毎度控えめに返事をするしかなかった。
（いや、まぁ、住みやすい家になる分にはかまわないから、好きにさせておけばいいか）
作業ペース的に家の完成は里を出発するまでの間には十分に間に合う。
リオは開き直ってドミニクの作りたいように作らせることにした。
すると、ドミニクだけでなく他のドワーフ達もずいぶんと熱が入っているようで、どんな家がいいのかあーだこーだと議論を重ねていく。
そのうちどんどん熱が入って行って、家自体に隠蔽用の結界魔術をかけたり、家具も特注で作ってもらったりと、なんだかもうリオが申し訳なってくるくらいで。

出来上がった家は一人で暮らすには広すぎるなんてレベルじゃないものになってしまった。

「は、はは……。ありがとうございます」

こうしてリオが里に滞在する日々は終わりへと向かっていく。
本当にあっという間の一か月だった。

☆★☆★☆★☆

里を出発する前日の夜、リオはアースラの家のバスルームにいた。
顔を洗い、身体を洗って、髪を洗うと、風呂に浸かる。

「はぁ……」

今日は里の子供達を連れてピクニックへ向かった。
子供達の相手は嫌いではないが、旅、鍛練、単純な肉体労働とは違った種類の疲れが溜まりやすい。
その疲れを吐き出すように大きく息を吐くと、リオはぼんやりと天井を見上げた。
明日にはこの里を出発することになる。
いつまでもこの里にいられたら幸せなのだろう。
だが、リオにはやるべきことがある。
この束の間の幸せに溺れているわけにはいかない。
気持ちを入れ替えなければ――。

「お兄ちゃん、入っていい？」

リオの顔から感情が消えかけ、そうやって考え事をしていると、脱衣所の方からそんな声が聞こえた。

「ああ……」

何も考えずに反射的にリオが答えかけると――。

「え？」

我に返り、リオは入り口に視線を送った。

スッとバスルームの扉が開く。

中に入ってきたのは――。

「えへへ」

恥ずかしそうにはにかむ狐獣人の少女ラティーファだった。

「な……な……」

開いた口が塞がらず、リオは目を丸くして慌てふためく。

薄橙色の長い髪を結んで演出された艶やかな白いうなじ、慎ましやかながらもタオル越しに感じさせる小さな膨らみ、スレンダーながらもバランスのとれたウエストとヒップ、さらには健康的で細く引き締まった白い素足。

ラティーファは十代前半の少女とはいえ、女性らしい魅力を放ち始めていた。

「ラ、ラティーファ！　何をやってるんだ！？」

泡を食ったようにリオが叫ぶ。

普段は決して見せることのないリオの動揺した姿に、ラティーファが思わず嬉しくなってしまった。

妹ではなく、異性として自分を見てもらうこともできるんだと、実感できたからだ。
だが、恥ずかしいことに違いはない。
そう、凄く恥ずかしい。

「えっとね、お兄ちゃんの背中を流したいなと思って……、ダメ？」

小首を傾げて、ほんのりと顔を火照らせたまま、ラティーファは尋ねた。
抱え込むように両手で身体を引き寄せ、もじもじと恥ずかしそうにリオを見つめている。

「ダメって、ダメだろ。今すぐ出て行かないと」

慌ててラティーファの身体から視線を外し、リオが答える。
若干混乱しているせいか、口調が早い。

「うぅ、私だって恥ずかしいけど、お兄ちゃん、明日には里を出て行っちゃうんだもん……」

声を震わせて、拗ねたような口調でラティーファは呟いた。
しゅんとした顔を浮かべて、窺うようにリオを見ている。

「いや、でもな……」
「今日だけ！　お願いします！」

拒絶の言葉をかけようとしたところで、ラティーファが慌てたように被せてきた。
彼女としてもここまで来たら引くに引けないのだ。

「いや、けどさ……」
戸惑い顔でリオが拒絶の言葉を投げかけようとする。
「とにかくダメだよ」
上手い断り方が見つからず、そんな言葉しか出てこない。
「むぅ、じゃあこのまま帰らないでお話をし続けるよ！」
少し頬を膨らませて、ラティーファは徹底抗戦の意志を示した。
そう言って、近づいてきたラティーファの素肌が視界に映り――。
「わかった、わかったから！　背中を流すだけだぞ」
慌ててリオは承諾の返事をしてしまった。
観念したようにリオが溜息を吐く。
「えへへ、やった！　じゃあこっちに来て！」
にこっと笑って、ラティーファがはしゃぐ。
背中を流すくらいでそんなに嬉しいものなのかと、リオは微笑ましげに彼女を眺めた。
「じゃあ、出るから」
「うん」
ラティーファに視線を外してもらって、リオが湯船から上がる。
そのまま腰にタオルを巻くと、リオはラティーファに背を向けて風呂椅子に座った。

「えっと、じゃあ、いきます」

タオルを泡立てると、ラティーファはおそるおそるリオの背中を洗い始めた。

先ほどはあんなに積極的に迫って来たというのに、緊張しているのか、擦る手つきはぎこちない。

痛いというわけではないが、少し力が入りすぎているかもしれない。

バスルームの中にしばしの沈黙が降りて――。

「……やっぱりお兄ちゃんの背中大きくなったね」

やがてラティーファが感慨深げに呟いた。

「そうかっ……」

返事をしようとすると、いきなり、柔らかな感触が背中に押しつけられた。

後ろから囲い込むようにリオに抱き着いてきたのだ。

リオの背中がびくっと跳ねる。

タオル越しにラティーファの体温を感じ取れた。

湯船につかっていないため、地肌の部分は冷たい。

頬がくっ付きそうなくらいの位置にラティーファの顔があった。

「ラ、ラティーファ？」

身体を硬直させたまま、リオがラティーファの名前を呼ぶ。

「……えへへ、気をつけてね。お兄ちゃん。あの国に戻るんでしょ

……」

数瞬の間を置いて、ラティーファが答えた。
その声と身体は小さく震えている。
彼女にとって、シュトラール地方には、特にベルトラム王国には良い思い出がない。
あの地には凄惨な思い出しかないのだ。
リオがいったいあの地に戻って何をするというのか。
ラティーファは自分のことを心配しているのだろう。
リオはそう思った。

「……大丈夫だ。どれくらいかかるか、分からないけど、定期的にこっちには帰って来るつもりだから」

安心させるように優しく言うと、手を伸ばし、そっとラティーファの顔を撫でる。
その手に伝わる温もりに、リオがそっと顔をほころばせた。

「……行ってくるよ、ラティーファ」

言って、リオは気持ちを引き締めた。
人間族の世界で旅をしていればリオはこの手で人を殺すことになるかもしれない。
この里の中と違って、あそこは悪意で満ち溢れている。
少なくともルシウスを見つければこの手で殺すつもりだ。
けど、それがどうしたというのか。
もうとっくに覚悟は決めた。
そんな世界でも歩いていくと。
その時、何か失うものがあるとしてもそれは変わらない。
たとえこの手に伝わる温もりが離れて行っても……。

そんなことを考えていると――。

「あのね、私はどんなお兄ちゃんでも大好きだよ。だから、行ってらっしゃい」

なんて、リオの心を見透かしたように、聖母めいた笑みでラティーファが言ってきて――。

「……ありがとう」

リオはその手を強く握りしめた。

第52話　異変

まばらに浮かぶ白い雲を掻き分けながら、リオは西に向かって真っ直ぐに空を飛んでいた。
彼方に連なる山々を映して、鮮やかな青空が地の果てまで広がっている。
かなりの速度で飛行しているが、周囲を覆う風の結界により空気抵抗を感じることはない。
眼下に広がるのは岩の散乱した平原で、遠く離れた湖を起点に川が幾筋もの支流を作り伸びていた。
ぐんぐんと周囲の風景が映り変わっていく中、目を凝らすと遥か彼方に人間族が暮らすシュトラール地方が見える。
精霊の民の里を出発してからは早六日、目的の大地はもうすぐそこまで迫っていた。

かつて自分が立ち去った大地が近づいている。
その事実にリオは何とも不思議な想いを抱いていた。
ふと、当時のことを思い返す。
正直、シュトラール地方には良い思い出がほとんどない。
前世の記憶を取り戻す前もそうだし、記憶を取り戻してからも碌な目に遭っていないのだ。
記憶を取り戻し、二人の王女を助けたかと思えば、恩人扱いされずに尋問された。
それから、何とか誤解は解け、学院に通うことになる。
孤児で拠り所がなく、この世界の教養が欠落していたリオにとっては降って湧いた良い話でもあった。
だが、周囲の貴族達に悪意をぶつけられ、悶悶（もんもん）とした日々を過ごすことになる。

おかげで好き勝手言われることに耐性はできたが、気にはならなくてもまったくストレスが溜まらないというわけではない。
あの頃、セリアという理解者がいなければ、そういった不満の発散もできていなかっただろう。
とはいえ、最終的には、濡れ衣を着せられ、指名手配され、国から逃げ出すことになってしまった。
簡単に並べ立てても本当に碌な想い出がない。

あの頃、自分は無力だった。
純粋な力はあったかもしれないが、身分や立場といったしがらみを断ち切るだけの地位や権力は持っていなかった。
別にそんなものを欲しいと思ったことはなかったが、湧き上がる怨嗟（えんさ）の感情を抑えつけるだけで、何もできなかったのは事実だ。
リオがしたことといえば心の中で甘い戯言を言って抵抗しただけ。
それでもあの学院に通っていたのは、孤児であったリオには碌に常識がなく、定まった住居もなかったからだ。
その代償として、為す術もなく、悪意は自分の生活にあっさりと入り込んできた。

だが、この世界の凄惨さはもう十分に知っている。
身分や立場といったしがらみを気にしないだけの拠り所も手に入れた。
今はもうあの頃とは違う。

「……」

小さく息を吐くと、リオは再び、西の空へと目を向けた。

☆★☆★☆★

翌日、ベルトラム王国からほど近いガルアーク王国の領域内、街道から外れた隅っこの森の中で、灰色髪の少年が一人で木々の隙間を縫うように走っていた。
年の頃は十六歳くらいか。
全身を覆うのは黒いローブ、腰には綺麗な装飾が施されているが実用的な片手剣が差してある。

灰色髪の少年の正体はリオである。
今、リオは自作した首飾りの魔道具で髪の色を変えていた。
道具の核として精霊石を用いれば、より強力な魔術を込めて、容姿の変化も可能になるが、精霊石は貴重であまり無駄遣いはしたくない。
そこで、精霊石は用いずに比較的簡単な髪の色だけを変える変化幻術を込めた魔道具を作ったのである。
首飾りを着けている間はリオの魔力を勝手に吸い取り、髪の色を変え続けてくれる。

リオの足取りに迷いはなく、最寄りの都市であるアマンドへと歩を進めていた。
やがて森を抜けると、アマンドが視界に映る。
遠くから眺めるその都市の光景は、リオの記憶の中にある数年前のものとは、大きく異なっていた。
都市の規模からして、暮らしている人間の数は、当時の数倍を超えるのではないか。
それくらいに都市は大きくなっていた。
どうやら、リオがこの都市を立ち去ってからたった数年の間で、ずいぶんと発展を遂げたようだ。

都市の周辺部まで近寄ってみたが、鼻を刺すような都市特有の生活臭が漂ってくることはない。

衛生面の管理に力を入れているのだろうか。
そういえばアマンドを治めているのはリーゼロッテという公爵家の令嬢だったはずだ。
彼女ならば、この都市が急成長し、衛生管理の配慮も行き届いていることに、納得することができる。
リオはそう考えた。

城壁の建設もままならない状態であるため、都市の周辺には柵が並べられているだけで、何の検査もなく東西の門から立ち入ることができるようだ。
とはいえ治安が悪い様子はない。
都市の内部も計画性を持って建物の配置をしてあるようで、主要な通りは地面の舗装までされている。

東から都市に入って中へ進んでいくと、宿場街には当時一泊した宿屋がまだあった。
宿屋の外観に変化はないように見える。
だが、それ以上は気に留めることもなく、リオは先へと進んでいく。
やがて商業ブロックへとやって来た。
かつて来た時と同じように、この都市は商業が盛んであるようだ。
商業ブロックには活気があふれ、至る場所に出店が開かれ、客を呼び込んでいる。
この場所でかつて食べた肉麺スープが懐かしくなって、リオは周囲を見渡した。
すると、麺を扱っている出店が何店舗かあった。
あの時の店がまだ営業しているのかはわからないし、営業していたとしてもどの店がその人物の経営する店なのかも不明である。
懐かしさを覚え、リオは適当な店にふらりと立ち寄ることにした。

「おじさん。肉麺スープを大盛りで一杯お願いします」
「おうよ！　茹でるのにちょいと時間がかかるがいいかい？」
「ええ、かまいませんよ」

注文を受け、店主の男がパスタをゆで始める。
リオがこの都市に訪れた理由はベルトラム王国に立ち入る前に簡単な情報収集をしておくことが目的だ。
注文をするついでに情報を集めたかったので、リオとしては時間が多少かかった方が好都合であった。

「これからベルトラム王国に行こうと思ってるんですけど、最近、何か変わったこととかあります？」

こういった場所で情報を収集するには露店の商人に話しかけるのが一番だ。
商人は情報通であるし、商品を買えば口も軽くなる。

「お客さん、旅人かい？　ベルトラム王国は今ちょっと色々とゴタゴタしているみたいだぜ。落ち着くまで旅をするのはちょっとお勧めしかねるな」
「何かあったんですか？」
「それがな。クーデターが起きたんだよ」

うんざりとした声色で男は言った。
アマンドはベルトラム王国との交易地点となる都市だ。
隣国で面倒事が起きたというのはあまり好ましくない出来事なのだろう。

「……クーデターですか」

穏やかではない話題だ。
リオの心は僅かにざわめいた。
「おう、つい先日、プロキシア帝国が突発的な侵略を行ったらしくてな。ベルトラム王国がその動きを掴み切れずに手痛いダメージを受けたのがクーデターの原因らしい。細かいことは俺もよくわからねぇんだがよ」
と、店主の男はリオに事情を語り始めた。
「侵略された直後にクーデターとは呑気ですね」
呆れたような声でリオが答える。
「だな。クーデターの首謀者はプロキシア帝国と背後で繋がっているんじゃないかってのが専らの噂だ。実際、侵略後のプロキシア帝国の動きは大人しいみたいだしな」
「随分ときな臭いですね。クーデターということは死傷者も大勢でたんですか？」
「何やら随分と手早く行動を起こしたおかげで一般市民には被害は出てないみたいだな。ただ、一部の貴族が投獄されて何人かは処刑されたって噂は聞いたな」
「貴族が……」
物憂げな表情を浮かべて、リオが呟く。
リオはベルトラム王国の貴族であるセリアに用があるのだ。
その中にセリアが含まれていなければいいのだが。
リオは思った。
その後もリオは商人から簡単に噂話を聞き出していく。

今になって見ればクーデターの火種は先代の国王が死んだ時点で存在していたという。
先代国王の死後に絶大な影響力を振るうようになったアルボー公爵であったが、十年近く前に起きた王女誘拐事件を機に失脚する。
それを機に雌伏の時を経て力を蓄えていたユグノー公爵がのし上がり、以降、長きにわたって王宮内の覇権を得るために政争が繰り広げられることになった。
特にここ数年は激しい争いが繰り広げられていたようで、こうして隣国の市井で噂になる程に泥沼に陥っていたようである。

「なるほど。ありがとうございます」
「いや、別にこれくらいならこの都市で商人をやってればすぐに知れる情報だしな。ちょうど肉麺スープもできたところだ。お待ち」
「どうも」

茹でたパスタを容器に入ったスープに放り込んで、その上に大量の肉が積まれる。
差し出された肉麺スープの入った容器を受け取ると、リオは屋台に備え付けてある飲食スペースに腰を下ろした。
フォークを使って黙々とパスタを食べていく。

別にリオにとってはベルトラム王国が滅びようが存続しようがどちらでもいい。
だが、無事を願わずにはいられない一人の女性の安否だけが気になった。
流石にこの都市で一貴族にすぎない女性の安否を知ることはできないだろう。
もう少し聞いて回ってみてもよさそうだが、これ以上の情報がここで聞けるとも思えない。
無駄に時間を消費することを考えると、さっさとこの都市を出発

した方が良さそうだ。
そう決めて、リオはこのままアマンドを発つことにした。
去り際、古いものも含めて指名手配書のチェックを行う。
だが、リオの指名手配は行われていないようだった。

☆★☆★☆★

リオがアマンドを出発してからほんの数十分後。

「っ！？」

赤、青、緑、茶、白、黄の六本の光柱がシュトラール地方の天空を穿(うが)った。
光柱を中心にオドとマナがほとばしり、大気を震わせている。
東西南北の至る場所に光柱が立ち昇っていて、そんな光景を呆然と見つめていると――。

「っ……」

ふと、リオは大きく目を見開いた。
その瞳に光柱は映っていない。
瞬間、内から熱を発したように身体が温かくなった。
それは一瞬のことだったが、確かに温かみのある何かを感じた。
我に返ったように、ハッとした表情を浮かべ、リオは自らの胸に手を当てる。

「誰だ……？」

なぜだろうか、リオのオドとマナの知覚精度が格段に上昇していた。

今ならこれまで以上に自在に精霊術が使える気がする。
だからだろうか、自身の中に眠る何かを感じ取ることもできた。
まだ眠っている。
だけど、そう遠くないうちに目覚めてもおかしくはない。
そんな気がした。

やがて、リオは周囲を見渡した。
まだ光柱は立ち昇ったままだ。
自らに起きた変化も大事だが、シュトラール地方に何が起きているのかも気になる。
小さく首を振って意識を切り替えると、リオは体内のオドを研ぎ澄まして、周囲に感覚を広げた。

「あれは時空魔術……？　それに、光柱は立ち昇っていないけど、あっちにも……」

リオの研ぎ澄まされた感覚が、光柱とは別の地点で、オドとマナの巨大な奔流が生じているのを感じ取った。
方角的にはやや南東、ちょうどガルアーク王国とその南にあるセントステラ王国の国境付近だ。
目で見ることはできないから、どんな魔術もしくは精霊術が発動しているのかは断言できないが、オドとマナの震え方から、時空魔術に特有の歪みが感じ取れる。
この距離から感じ取れるとなると相当大規模な魔術が用いられたはずだ。
その地点のさらに南、セントステラ王国の奥深くに一本の光柱が立ち昇っている。
西のベルトラム王国の方角にも位置は別々だが、二本の光柱が立ち昇っており、そのうちの一本はだいぶガルアーク王国に近い位置にあった。

また、ガルアーク王国の奥深くからも一本の光柱が立ち昇っている。
つまり、近場だと四本の光柱があり、さらには原因不明のオドとマナの巨大な乱れが付近で生じていることになる。
一番近いのはベルトラム王国で立ち昇っている光柱か、原因不明のオドとマナの乱れが生じている場所だろう。
どちらもここからだと空を飛んで一時間といったところだ。
今は少しでも早くベルトラム王国に向かいたいところだが、正直、何が起こっているのかは気になる。
自分には関係のないことかもしれないが、何か妙な胸騒ぎがした。
この胸騒ぎはなんだというのか。
光柱はあれだけ目立っているのだ。
あの場所にはすぐに人が集まるかもしれない。
なら、光柱の立ち昇っていない場所に行ってみよう。
そう決めると、胸騒ぎに突き動かされ、リオは南東に向けてその場を発った。

第53話　異世界漂流

ガルアーク王国の南に位置するセントステラ王国、その国境付近にある街道からほど近い草原に三人の少年少女がいた。
三人の年齢はバラバラだが、全員が十代であることは間違いない。
どこまでも透き通った青い空の下で、彼らは呆然と周囲に広がる広大な自然風景を見渡している。
視界に映るのは草原、岩、丘、山ばかりで、人工物はまったく見当たらない。

「……ここ、どこ？」

状況が全く掴めていないようで、一人の少女が呆けた様子で呟いた。
年齢は十三歳前後といったところで、この三人の中だとちょうど真ん中に位置する。
セミロングの黒い髪をポニーテールにして束ねた学生服姿の少女は、一見するとお淑やかな雰囲気を持っているが、なかなか勝気な目をしていた。

「どこって……、それは俺が聞きたいくらいだよ、亜紀姉ちゃん」

顔をひきつらせて少年が答えた。
年齢は勝ち気目の少女よりも僅かに年下といったところだ。
長袖シャツの上にジャケットを羽織り、デニム生地の長ズボンを穿いている。
少年ながら整った顔に、癖のない髪の毛を短く切りそろえ、活発そうな雰囲気を放っていた。

「私達、途中で沙月さんに会って道を歩いていたはずよね？　雅人」
「え？　うん」
「そうよね。……美春お姉ちゃんも同じ？」
顎に手を当て何やら考えるそぶりを見せると、亜紀は最年長の少女に水を向けた。
「うん。私も同じかな。けど、貴久君と沙月さんはいないみたいだね」
困ったように曖昧な笑みを浮かべて、美春と呼ばれた少女が頷く。
ふわりと柔らかい風が吹き、背中まで伸びた艶やかな黒髪が、さらさらと衣擦音を奏でて、ベージュ色のブレザーとチェック柄のスカートを撫でる。
細いながらもはっきりとした目鼻立ち、触れれば溶けてしまいそうな白い肌、柔らかい物腰で、お淑やかで清楚な美少女であった。
歳は年長で十五歳前後といったところだ。
「お兄ちゃんは沙月さんと話をしていて、私達とは少し離れた位置にいたよね……」
まだ現実を受け止めきれていないのか、亜紀は呆然と周囲を見渡していた。
少なくとも彼女にとって周囲が見慣れた光景でないことは明白である。
先ほどまで彼女達がいた場所は、文明の発達した都会の真ん中で、こんな周囲に人はおろか人工物すら見当たらないような場所ではなかったのだから。
元々彼女達がいた場所から、数キロはおろか、数十キロ移動した

としても、このような景色が広がる場所はないはずだった。
「うん。そういえば貴久君と沙月さんから変な光の渦が広がったような気がするけど……」
錯覚だったのではないかと思い、美春が躊躇いがちに言った。
そもそも現状が非科学的な状況である。
都会のど真ん中から、気がついたら草原のど真ん中にいたのだ。
一言で語るとすれば「ありえない」と言うしかない。
場違いな自分の制服姿が非現実感をいっそう際立たせている。
三人一緒だったことから危機感が麻痺していたが、少しずつ現状の危うさを実感し始め、美春達は深刻な顔を浮かべ始めた。
「どうしよっか？」
最年少の雅人が年長の美春と姉の亜紀に判断を仰いだ。
ちなみに雅人と亜紀は姉弟関係にあるが、美春は二人とは血が繋がっているわけではない。
「あ、そうだ！　携帯電話！」
この中で唯一、携帯電話を所持している美春が慌てて鞄をまさぐった。
数瞬の時を経て、美春が目的の物を取り出す。
電源ボタンを押してスマートフォンを起動させたが、画面の右上には無情にも圏外の表示が映っていた。
「駄目、電波が通じないみたい……」
ほんの少し顔を伏せて、美春が力弱く呟いた。

唯一の通信手段も役に立たないとなると、いよいよ三人は何の準備もなしに秘境に取り残されたことになる。

「と、とにかく人を探そう！」

慌てたように亜紀が叫ぶ。

その声は周囲に虚しく響き渡ったが、それ以外にこの状況を解決する手段はない。

顔を見合わせると、三人は行動を開始することにした。

「じゃあどっちに向かう？」

と、雅人が尋ねる。

「うーん。あっち？　とりあえず反対方向は森みたいだし」

「私も亜紀ちゃんに賛成かな」

そうやって歩くべき方向を定めると、三人は黙々と足を進めた。

一定のスピードを保ってゆっくりと移動する。

十分、二十分と歩いていくが、人影は見当たらない。

空気が乾燥していて、歩くと喉が乾いてくる。

道中、美春は自分のために買ったペットボトルを差し出して、亜紀と雅人に飲ませてやった。

飲料水はこれしかないために節約して飲むことを決める。

さらに歩いていくと、ようやく前方に影が見えてきて――。

「あ、人だ！」

嬉しそうな声を出して亜紀が叫んだ。

距離は遠く離れており、まだ相手は亜紀達の存在に気づいてはい

ないようだが、確実に人影だった。
何やら箱のような人工物までである。
しかも集団で行動しているようで、複数の人影を確認することができる。
遠目で姿はよく見えないが、何かに跨(またが)っている者もいた。
ようやく人と遭遇できた事実にほっと胸をなでおろし、三人の顔に自然と安堵の笑みが浮かんだ。
人間がいる。
原因不明の漂流状態において、その事実が三人の精神状態にもたらした影響は計り知れないほどに大きい。

「おーい！」

無警戒に雅人が大声を出した。
両手を大きく振って、自分達の存在をアピールする。
すると相手も雅人達の存在に気付いたのか、群れの中から急速度で接近してくる者達がいた。

「……え？」

振っていた手をぴたりと制止して、雅人が硬直する。
その人物達は騎乗していたのだ。
雅人の知る限り、自分達が暮らしていた国の中で、馬を通常の交通手段として用いている地域は存在しない。
牧場や競馬場といった施設にでも行かない限り、馬はお目にすることがない生き物である。

「う、馬？」

唖然と亜紀が呟いた。

大地を踏みしめ、砂埃を巻き上げ、今も三騎が亜紀達のもとへ近づいてきている。
馬に乗っているのはいずれも粗暴な印象の男達で、明らかに亜紀達とは人種が違う。
革製の軽鎧で大柄な体格を覆い、腰には重厚感のある金属製の剣が差してあった。

「あ、えっと……」

咄嗟に、亜紀と雅人を庇うように、美春が一歩前に出た。
震えた声で何かを尋ねようとしたが、それが言葉になることはない。

「ヒュ〜」

そんな美春の容姿を目にすると、一人の男が小さく口笛を吹いた。
そして、にやりと笑みを浮かべ、口を開く。

「＊＊＊＊＊＊＊？」
「え？」

男の一人が何かを喋ったが、美春にはその内容を理解することはできなかった。
男が喋った言葉は彼女が知っている言語とは異なるものだったのだ。

「えっと、ここがどこだか教えてくれませんか？」

それでも、勇気を出して、淡い期待とともに、美春は日本語で質問を投げかけてみることにした。

「＊＊＊＊＊＊？」

訝しげな表情を浮かべて、男が答える。

やはり自分達の言葉は通じないようだと、美春は肩を落とした。

「『こちらはどちらでしょうか？』」

気を取り直し、今度は彼女が喋れる唯一の外国語を使って語りかけてみることにした。

「＊＊＊＊＊＊？」

だが、男の反応は先ほどと同じだった。

「え、英語もダメなの……。どうすれば……」

焦ったようにおろおろと困惑する美春。

その後ろでは亜紀と雅人も似たような反応をしていた。

日常生活でほとんど見ることのない外人を相手にして、完全に委縮してしまっているようだ。

「＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊？」

「＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

美春達の困惑をよそに、何やら男達が会話を始めた。

美春とその後ろにいる亜紀に視線を送り、にやにやと表情を緩めている。

何となく嫌な予感がした。

亜紀達を庇うように両手を広げて、美春が一歩後ずさる。

「＊＊＊＊」

すると、男の一人が馬から降りて、無造作に美春達に近づいた。

「こ、来ないで！」

美春に後ろにいた亜紀が叫んだ。

その声は震えている。

「＊＊＊＊！」

そんな二人の様子を見て、男達が大声を出してゲラゲラと笑った。

「な、なによ！？」

威嚇するように亜紀が美春の後ろから男達を睨みつける。

一瞥して、男は動じることなく腰の剣を抜き放った。

その光沢と重量感からして間違いなく本物の剣である。

振れば容易く人の命を刈り取るように思えた。

「＊＊＊＊＊！」

スッと顔に浮かべた笑みを消し、男が怒鳴るように何かを言い放った。

ビクリと亜紀達の身体が震える。

おそらく今のは警告だったのかもしれない。

男の表情は決して友好的であるとはいえなかった。

それどころか突き刺すように亜紀達に向けて殺気を放っている。

「あ、えっと……」

男の一人が凄みのある表情で矢面に立つ美春を睨みつけ、視線が重なった。

チリチリとした嫌な感覚が全身を襲い、美春の胸を締めつける。

「な、なぁ、これ、逃げた方がいいんじゃないの？」

「う、うん。私もそう思う」

なんて会話がひそひそと後ろから聞こえて――。

「二人とも、逃げちゃダメ」

慌てて美春は亜紀と雅人の手を握った。

男の剣幕は普通じゃない。

あの手に持っている剣が偽物とは美春には到底思えなかった。

しかも相手は馬に乗っている。

逃げられるとは思えないし、逃げたら殺されるかもしれない。

美春はそう考えた。

「え、あ……」

いきなり手を掴まれ、美春に声をかけられたことで、亜紀と雅人がビクリと身体を震わせる。

二人の手を掴んだまま、美春は両手を挙げて無抵抗をアピールした。

「＊＊＊＊」

抵抗の意志を失った美春達を見やると、小馬鹿にしたように小さ

く鼻を鳴らし、男は騎乗している二人の男に何かを命令した。
男達は馬から降りて、亜紀達に近づくと、手を縄で縛った。
これで抵抗することはもはや不可能である。
逃げるそぶりを見せようものなら何をされるかはわからない。
いや、そんな真似をしなくとも、碌な目に遭わないのは確実なように思えた。
案の定、美春を縛っていた男が厭らしい目つきで彼女を至近距離から眺めている。
全身を這うようなねっとりとした視線だ。
美春の顔を何度も凝視し、胸と尻にその視線を熱くぶつけている。
男の一人が美春の体を触ろうとしてきたが、リーダー格の男に怒鳴られ、手を引っ込めた。
脳裏に考えたくもない嫌な想像が浮かび、美春の全身に鳥肌が立った。
亜紀には絶対にそんな目には遭わせたくない。
そう思い、美春は小さく深呼吸して心を落ち着けた。
幸運なことに、その場で乱暴されて慰み者にされることはなく、美春達は男達が所属している集団へと連れて行かれることになる。

「＊＊＊＊＊」

そこには馬車が八台あった。
中にはボロ衣を身に着けた人間が数えきれないくらいに乗っている。
そして馬車の周囲を取り囲むように武装した人間が大勢いた。
随分と物々しい雰囲気を放っている。

「＊＊＊＊＊？」

身なりの良い一人の男が何やら美春達に声をかけてきた。

「＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊。＊＊＊＊＊」

美春を拘束していた者達のリーダーと思われる男がほくそ笑んで答える。

美春達の所持品が身なりの良い男に手渡された。

その中身を不思議そうに見つめていたが、すぐ興味を失ったようで、視線を美春達に移す。

ニヤリとした表情を浮かべると、品定めをするように美春達を眺める。

「＊＊＊＊。＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」

美春を指さし、何かを言って、身なりの良い男は顎をしゃくった。

示した先には一台の馬車がある。

続けて、残った亜紀と雅人を指さし、別の馬車に向けてしゃくりなおす。

「美春お姉ちゃん！」

身なりの良い男の命令に従い、配下の男達が馬車に乗せるように亜紀と雅人の腕を引っ張った。

自分達とは違う馬車に乗せられる美春に、亜紀が慌てて声をかける。

「大丈夫だから。きゃ……」

亜紀達に薄く微笑みかけると、美春は乱暴に引っ張られ、そのまま馬車に乗せられた。

「ま、待って！　美春お姉ちゃん！　きゃ！」

喚(わめ)き叫ぶ亜紀。

そんな彼女のすぐ近くで鞭を打つ鋭い音が響いた。

威嚇するように何度も勢いよく鞭が打たれると、亜紀は完全に沈黙する。

「うぅ……」

身体を縮こまらせて、亜紀は萎縮した。

震える彼女の腕をつかみ取って、男がそのまま馬車へと引っ張る。

その後、街道の分かれ道で、隊は二つに分けられ、美春だけが亜紀と雅人とは別々の方角へ向かっていくことになった。

「美春お姉ちゃん……」

離れていく美春が乗った馬車を見て、亜紀がぼそりと呟く。

すると。

「や、やばいって。亜紀姉ちゃん。声を出したら……」

周囲を気にするように、雅人が亜紀に囁(ささや)いた。

亜紀達が乗る馬車の荷台には同年代の少年少女が乗っている。

全員の目に活力はないが、どこか咎めるような視線を二人に視線を向けていた。

余計な真似はするなという意思表示だろう。

仕方なく、亜紀と雅人は彼らに混ざって大人しく座ることになった。

「……」

監視しやすいようにか、馬車の荷台には幌がかけられていないため、中からも外の景色が良く見えた。
美春が乗った馬車が完全に姿を消し、ほんの少し時間が経過する。
やがて部外者らしき一人の少年が亜紀達の乗っている馬車に近づいてきた。
少年の容姿は整っており、灰色髪で、歳は美春と同年代といったところだろうか。
少年は隊の男達に声をかけている。
その少年の姿を見つめて――。

「た、助けて！」

藁にもすがる思いで、亜紀は叫んだ。
言葉は通じないかもしれない。
けど、もしかしたらこれが最後のチャンスかと思うと、叫ばずにはいられなかった。

「……」

すると、少年が亜紀に視線を向けてきて、二人の視線が重なった。
少年は僅かに目を見開き、硬直したように亜紀と雅人を見つめている。
すぐに男達に視線を戻すと、そのまま少年は男と何かを喋り始めた。
時折、その視線が亜紀達の方に向けられている。
亜紀はそっと手を合わせ、祈るようにその様子を眺めた。

第５４話　こんな世界で出会えた君は

少し時は遡り、リオはベルトラム王国に向かう途中で感知したオドとマナの震源地にやって来た。
だが、事象の発生から既に一時間近くが経っているため、現場には誰もいない。
視線を張り巡らせ、リオは周囲を注意深く観察した。
すると、薄らとだが、草を踏みしめた痕跡を発見する。
この場に人がいたようだ。
足跡は三つ、大きさからして女子供のものだろうか。
方角は森とは反対の方向に伸びている。

「あっちは街道があったな……。行ってみるか？」

今、シュトラール地方でいったい何が起こっているというのか。
この場には明らかに大規模な魔術を使用したオドとマナの乱れが残っている。
先ほどの光柱と何らかの関係があるのか。
言葉で説明できない妙な胸騒ぎがして、リオは足跡を辿ってみることにした。
この先には街道がある。
途中で馬が大地を踏み荒らした跡を見つけた。
どうやらこの場で転移してきた人物達は馬に乗った人間と遭遇したようだ。
争った形跡は存在せず、三人はそのまま馬と一緒に街道へと向かったようだ。
リオはさらに足跡を辿り、やがて街道にたどり着いたが、街道は踏み荒らされているため、どちらに行ったかまでは足跡からでは判

断できない。

「……」

小さく舌打ちをすると、周囲に人がいないことを確認し、リオは風の精霊術で空へと高く舞いあがった。

すると街道の遥か先に複数の馬車が存在するのが見える。

馬車群は二手に分かれて街道を進んでいくところであった。

もしかしたらあの馬車のどれかにオドとマナの震源地にいた三人が乗っているのかもしれない。

このまま放置するか悩んだが、追ってみることにした。

どっちから行くべきか。

再び地面に降りると、二分の一の確率に任せ、一方の馬車群へと近づいていく。

すると、ほんの一、二分で集団に追いついた。

荷台に乗っている少年少女達の様子から、リオは運送者が奴隷商であることを瞬時に察する。

周囲を囲む武装集団は護衛の傭兵達だろう。

嫌な予感が強まり、リオは部隊を護衛するように展開している男達と接触してみることにした。

「ああ、なんだ、お前？」

接近してきたリオの姿に気づき、どこか警戒するような視線を向けて、護衛のリーダーと思しき男が話しかけてきた。

「すみません。人を探しているんです。ここ一時間くらいの間に三人で行動している者達を見かけませんでしたか？」

とりあえずは敵意がないことをアピールしてリオが尋ねる。

「ああ？　三人で行動している奴らだぁ？」
素知らぬ顔で、この隊の代表格の男が答えた。
男はジロジロとリオの全身を眺めている。
ロングコートの隙間から覗けるリオの剣に、凝った意匠が施されていることに気づくと、僅かに目を丸くした。
そのまま目を薄めてリオの剣を見ている。
リオは内心で警戒の度合いを強めた。
「そんな奴らは知らね――」
男が視線をリオの顔に戻して、白を切ろうとしたところで。
「た、助けて！」
一人の少女の切羽詰った声が鳴り響いた。
男が小さく舌打ちをして、少女に視線を送る。
リオもハッとした顔つきで声の発信元に視線を送った。
そこにいたのは黒髪の少女だ。
その隣には慌てた様子の黒髪の少年がいる。
リオは一瞬、目を見開いたが、すぐに男達に視線を戻して――。
「……ああ、彼女が自分の探し人です。どうして奴隷と一緒に荷台に載せられているのでしょうか？」
と、冷たい視線を向け、尋ねた。
状況証拠からしてあの二人が転移してきたのはほぼ間違いないとリオの直感が告げている。
何よりも彼女の喋った言葉が決定的だった。

この世界に存在するはずのない言語、そう、日本語である。

「あ、あー言葉が通じないんだが、迷子になっているみたいだったから保護してやったのよ。奴隷と一緒なのは生憎と他に人を乗せるスペースがなくてな」

急に変わったリオの雰囲気に気圧されつつも、へらへらとした声色で男が答える。

「彼女は助けてくれと言っていますが？」

尋ねて、いっそう鋭い視線を男に向ける。

すると、男がつまらなさそうな表情を浮かべた。

「ちっ、言葉がわかるのかよ。探しているってのは本当みたいだな」

と、悪びれた様子もなく、男は言った。

リオはそれに――。

「では、あの少女と隣にいる少年を解放していただけますね？」

そう言って、男を見据える。

男はちらりと周囲にいる男達と目配せをし、剣呑な空気を発し始めた。

「あー、犯罪行為を見られてはいどうぞって帰すわけにもいかねぇ……」

何やら脅迫めいた言葉を言いながら、剣を抜こうとした瞬間、リオから凝縮された濃密な殺気が噴出した。

そのすべてがリオと対面している男に凝縮して向けられる。
「っ！？」
殺される。
男は瞬時にそう思ったが、身体が微動だにしない。
手を剣の柄に触れたまま、小刻みに身体が震わせる。
不味い。
実力が違いすぎる。
対応を間違えた。
ただのガキじゃない。
勝手に動けば殺される。
勝手に喋れば殺される。
逆らう気概を見せれば殺される。
そう思わずにはいられなかった。

「別にあんたらが正規のルートで手に入れた奴隷まで奪おうなんざ思っちゃいない」
沈黙した男にリオが口調を変えて語りかけた。
そんなことをすればリオが奴隷の強盗犯となってしまう。
わざわざそんな重罪を犯してまで見知らぬ奴隷を解放しようなんて使命感はリオにはない。
「俺は大人しくあんたらが拉致した二人の奴隷を渡せって言っているだけだ。わかるだろ？」
氷のような微笑を浮かべ、リオは淡々とした声で続けた。
「し、しかしな。俺らも仕事なんだ。そう簡単に渡すわけにはいか

ねぇんだよ」

身体を震わせながら、男は声を絞り出して答えた。

荒事を生業として生きてきたが、今、人生の中でこれほどの恐怖を覚えたことはないというくらいに男は怯えている。

それでも自らの仕事に対して有するプライドから、必死の抵抗を試みようとしているのだ。

「奴隷の拉致は違法行為だろ。あんたらの仕事には違法行為も含まれてるのか？」

「そ、そんなのよくあることじゃねぇか」

「そうだな。よくある話だ」

男の言葉に、間髪を容れずに、リオは無感情な声色で同意した。

そう、何も珍しいことではない。

弱肉強食。

人が法を守るのは権力の支配が及ぶ範囲だけ、そうでない場所では力を持つ者がルールとなる。

圧倒的な強者の前には弱者は何をされても文句を言うことはできない。

それはリオにもわかっている。

「でも俺はそういう話が嫌いだ」

「な、なんだよ。勇者ごっこか？　そういうのは流行らねぇぜ。お前ならもっと楽に生きていける道がある。なんなら俺らと一緒に行動しねぇか？」

「さっきから話をずらすなよ。言っただろ。こっちはあの二人に用事があるから助けるだけだ」

「へ、へへ……。仰る通りで」

「わかったら早くしろよ。これ以上、無駄に時間を稼ぐようなら本

当に力ずくで奪うぞ？」

最後の言葉が決定打だった。

馬車の近くで待機していた部下に声をかけるべく、男は焦ったように口を開いた。

「……わかった。おい、鍵を開けろ！　二人を出せ！」

「ふ、副団長？　いいんですかい？　勝手に解放なんかしたら団長に……」

副団長と呼ばれた男以外の部下は、リオの殺気に気づいておらず、戸惑ったように尋ねてきた。

その言葉に男が激怒する。

「うるせぇ！　馬鹿野郎！　お前は死にてぇのか！？　こっちは金をもらって生きてる傭兵だぜ。引き際を見極めろや！」

目の前にいる相手の実力に気づく分析力。

それは傭兵として生きていくうえで不可欠の能力だ。

それを備えていない者は傭兵として長生きすることはできない。

普通は歴戦の凄みとともに実力が滲み出るものだが、中にはその強さがすぐに分からない者もいる。

男は知っていた。

そういう連中の多くが普段は虫も殺さぬような顔をして、いざ実戦になると躊躇なく人を殺すのだ。

リオはまさしくそれだった。

男がリオの強さに気づくことができたのは運が良かっただけ。

もしリオが殺気を放つ前に一気に仕掛けていたら確実に殺されていたはずだ。

「分かったらさっさとあいつらを連れ出せ！」
「へ、へい！」

副団長と呼ばれた男に予想以上に激しく叱責され、部下の男は慌てて馬車の扉を開いた。
そうして亜紀と雅人が丁重に連れ出される。
馬車を降りたところで解放され、二人はおそるおそるとリオのところにやって来た。

「もう一人はここにいないのか？」
「ああ、もう一人は娼婦として高く売れそうだったんで、別ルートで向かっちまった」

リオの質問に、男が包み隠さずぺらぺらと答える。
亜紀と雅人に確認をとられれば美春がこの馬車にいないことはすぐにわかることだが、少しでもリオの心証を良くしようとしてのことだ。

「ここに来る前の街道で別れたんだな？」
「ああ。そうだ」

必要な事実を聞き出すと、リオは男達に興味を失ったかのように亜紀と雅人に視線を移した。
瞬間、何となく亜紀に既視感を覚えて、僅かにハッとしてその顔を見つめたが、すぐにそれを捨て置く。

「……行こう。今は時間がない。あと一人いるんだろ？」

どこかぎこちない発音で日本語を操り、二人に喋りかけた。
この二人を助けた以上、残りの一人を助けない理由もない。

むしろ助けた方が恩を売れて話を聞き出しやすいだろう。

「え？　あ、日本語？　外人？」

亜紀はリオの言葉を理解してくれたようだが、発音が片言に聞こえたのか、その容姿と相まってリオを外人と勘違いしたようだ。

「これから少し走ることになる。君、俺におぶさってくれ」

雅人に向けて、リオが言った。

「え？　そんなことしたら逆に遅くなるんじゃ……」

戸惑ったように雅人が答える。

雅人の常識では人を背負って走るなんて非効率的極まりない行為だった。

「いいから早く。残りの一人を助けられなくてもいいのか？」

その言葉がきっかけとなり、雅人はおずおずとリオの背に乗っかった。

既に成長期の終盤を迎えているリオとこれから成長期に入る雅人では、身長に二十センチ以上の開きがあるため、とりわけアンバランスというわけではない。

「君も。ちょっと恥ずかしいかもしれないけど、我慢してくれ」

言って、リオが亜紀を抱きかかえる。

「きゃ……」

亜紀が小さく悲鳴を漏らす。
はたから見ると珍妙な光景だが、周囲の男達は馬鹿にすることなく黙ってその様子を見つめていた。

「二人ともしっかり掴まっているんだ。特に、後ろの君は自分でしっかりと捕まっていないと振り落とされるぞ。いいな？」
「え、はい」

リオに促され、雅人がリオにしっかりと捕まる。
それを確認すると。

「うわ！」
「きゃ！」

リオが一気に走り出した。
予想以上の反動がかかり、二人が小さく悲鳴を漏らす。
ぐんぐんと急激に加速していくリオに、亜紀と雅人は唖然としていた。

「あんなガキの噂、聞いたこともねぇぞ。ありゃ団長以上の化けもんだぜ」

その場に取り残されたのは護衛の傭兵達と奴隷の少年少女達だけだ。
二人を抱えて馬以上の速度で走っていくリオの後姿を見て、先ほどのリオの躊躇ない殺気を思い出し、男は身震いをしながら呟いた。

「あ、あの！　ここってどこなんですか？」

走り続けるリオの顔を至近距離から見上げて、亜紀が尋ねた。
先ほどからリオはとても人間が出すことは敵わない速度で走り続けているが、息切れの一つも起こしていない。
これなら話しかけても大丈夫かもしれないと考え、思い切って現状を確認してみることにしたのである。

「ここはユーフィリアス大陸のシュトラール地方、そこにあるセントステラという国の国境付近だ」

亜紀の質問に対してリオが的確に回答する。

「え、ここは日本じゃないんですか？」

まったく聞き覚えのない大陸名、地名、国名に亜紀が呆然とした表情を浮かべた。

「日本……。違うよ」

感慨深げに日本という国名を口にすると、リオは亜紀の疑問を否定した。

「じゃ、じゃあ地球のどこかだったりするんですか？」

おそるおそる亜紀が尋ねる。
その視線には何かを期待したような感情が籠っていた。

「地球ではないね。君たちにとっては残念ながら」

だが、リオはそんな亜紀の期待を断ち切るような回答を突き返した。

亜紀が事実を呑み込めず、怪訝な表情を浮かべる。

「え、じゃあここは……。それになんで言葉が……」

亜紀が呆然と小さく呟いた。

身体能力と一緒に五感も強化されているリオの耳にはその声が届いている。

だが、リオはあえてそれを聞こえないフリをした。

咄嗟に亜紀達を助けてしまったが、今は少しでも頭を整理する時間が欲しい。

そもそもどうしてこの世界に日本人がいるのか。

その理由を詳しく聞いておきたい。

それに――。

（どうする。この子達……）

問題はどこまで亜紀達と関わるべきかである。

見た目からして亜紀は中学生、雅人は小学校高学年くらいの年齢のはずだ。

一緒にやって来たというもう一人の人物が何歳かは知らないが、言葉も通じない世界に放り出されて自力で生きていくことなどまず不可能だろう。

待ち受けている運命は死か、はたまた先ほどのように悪意ある者に拉致されて隷属するか、おそらくはその二つに一つだ。

（流石に事情だけ聞いてさようならっていうのは後味が悪いか）

言葉を教え、最低でも自分達で生活ができるようになるまで、面倒を見てやる必要があるだろう。

そうなると自分の前世の情報も含めてどこまで自分の素性を明ら

かにするかが問題となる。
今、リオは身分を隠している。
クーデターが起きたようだが、リオは数年前にベルトラム王国で指名手配されていた。
当時は逃げるだけであまり戻って来るつもりもなかったが、これから先はしばらくこの地方で活動しなければならない。
極力、素性は隠さなければならないだろう。
だからこそ、こうやって魔道具まで自作して変化している。
亜紀と雅人とはしばらくの間は一緒に暮らすことになるが、いずれ離れていくことを前提にするならば、あえて自分の素性を教える必要はないようにも思える。
しかし、これから長いこと一緒に生活していくとなると、いっそのこと教えてしまった方が色々と楽なのも否定できない。

「……」

とりあえず今は偽名を名乗って、様子を見たうえで事情を説明するのが正解かもしれない。
リオはそう思った。

「あ、あの、どうして貴方は日本語を喋れるんですか？」

リオが考えている間に、亜紀は困惑から立ち直ったようで、そんなことを尋ねてきた。
日本語を使わなければコミュニケーションが成立せず、情報も収集できなかった以上、日本語を使ったことには後悔していない。
もちろん、やや面倒なのは否定できないが。
既にこうして会話をしている以上、その理由を誤魔化すのは難しいだろう。
名前と違って、下手な嘘を吐けば色々と勘ぐられるかもしれない。

何個か適当な嘘は思いついたが、咄嗟に思いついたものにすぎず、あからさまに怪しいと思われるようなものばかりである。
そもそも嘘を吐くべき様な事柄なのだろうか。
「……それは俺がかつて日本で暮らしていたからだよ」
数瞬の間を置いて、リオはそう答えた。
「え、日本で暮らしていたんですか？」
亜紀は首を傾げて、不思議そうな表情を浮かべた。
ここは地球ではない。
だが、目の前にいる少年は日本語が喋れて、かつては日本で暮らしていたという。
どういうことだ。
少なくともリオの容姿は純粋な日本人のものではない。
髪の色もそうだし、顔つきも純粋な外人かせいぜいがハーフといった感じだ。
（留学生とかハーフの帰国子女だったのかな？）
亜紀はそのように勘違いした。
「その話はひとまず置いておこう。とりあえず名前を聞かせてもらってもいいか？」
二人が微妙にすれ違っているまま、話は進んでいく。
「あ、私は千堂亜紀です」
「千堂亜紀。亜紀……？」

呟き、リオが亜紀の顔をじっと見つめる。
「あ、はい。変な名前ですか？」
近くからじっと見つめられ、亜紀が僅かに顔を赤くして尋ねた。
「いや、良い名前だと思うよ」
なんて、リオが答えて――。
「あ、ありがとうございます……」
亜紀はさらに顔を紅潮させる。
「で、後ろの君は何て名前なんだ？」
そんな亜紀の変化に気づく様子もなく、リオは後ろで背負っている雅人に名前を尋ねた。
「あ、俺は千堂雅人です！」
と、どこか興奮した口調で、雅人が名乗る。
目まぐるしく移り変わっていく風景に感動しているようだ。
「そうか。俺はハルトだ」
「……ハルト？」
リオが偽名として用いている前世の名前を名乗ると、亜紀の雰囲気が僅かに変わった。

どこか無機質な声でリオの偽名を呟いている。
「……俺の名前がどうかした？」
「あ、いえ、何でもないです……」
勢いよく首を振って、亜紀は何でもないと否定する。
「そうか……。二人は姉弟なんだな。もう一人も君達の兄弟か何か？」
「いえ、もう一人兄もいるんですけど、えっと、さっきまで一緒にいたのは血は繋がっていないけど私達にとっては姉みたいな人で――」
「っと、ごめん。どうやら追いついたみたいだ。少しここで待っていてくれるか？」
亜紀が質問に答えているところで、リオが言葉を被せる。
強化されたリオの視力が遥か彼方で移動中の馬車を捉えたのだ。
亜紀達にはぼんやりとしか見えていないだろう。
「連中と話をつけてくる。その女の子も君達と同じ黒髪の子かな？」
手ごろな岩場の影に隠れるように立ち止まり、リオは二人をそっと下ろした。
「は、はい。そうです。その、よろしくお願いします！」
「ああ、大丈夫だ。危ないからこの岩の影から動かないでくれ。周囲に危険な生物はいないはずだけど、岩から顔は出すなよ」
真剣な顔で、リオが二人に言い聞かせるように言った。
遠目とはいえ、もしかしたら嫌な光景を見せてしまうかもしれな

い。
その予防という意味もあるが、純粋に二人の身の安全も考えている。
その可能性は低いが、万が一、空を飛ぶ攻撃的な生物が近づいてくるとも限らないため、自衛できない二人がむやみに姿を出すのは好ましくない。

「わ、わかりました」
「はい！」

リオに注意され、亜紀と雅人が緊張した声色で答える。

「良い子だ。戻ってきたらまた話の続きをしよう」

安心させるよう微笑むと、リオは軽快な足取りでその場を後にした。
リオの動きは亜紀から見ても非常に洗練されている。
自分達を助けてくれたリオなら大丈夫なはずだ。
無条件にそう信じて、亜紀は祈りをささげた。
岩場の影から躍り出て、リオはまっすぐに馬車の進行方向にある街道の先へと近づいていく。

「ちょっとよろしいでしょうか？」

そうやって馬車の前に先回りすると、街道に立ち止まり、相手を警戒させないよう、リオは丁寧な口調で話しかけた。
すると、商隊が歩みを止める。

「なんだ？」

護衛の傭兵のリーダーと思しき大柄な男が、馬の上からリオを見下ろし、冷たい声色で尋ね返した。
筋肉質な身体を上質な革鎧で包み込み、その下にはクロースアーマーを着込んでいる。
油断なくリオを睨みつけ、腰に差した剣を抜き放つ。
先ほどリオが相対した男のようにリオを子供に毛が生えた程度だと侮っている様子はない。
同じく武装したリオが剣を抜けば、瞬時に斬りかかってくることが窺えた。

「こちらの商隊で黒髪の少女を保護して頂いたと伺いまして――」
「何事だ！？」

リオが用件を切り出そうとしたところで、後続の馬車から身なりの良い男が姿を現し、言葉を挟んできた。
この男が商隊を率いる奴隷商人なのだろう。
いきなり進行が停止したためか、機嫌が悪いようだ。
リオは小さく溜息を吐いて。

「つい先ほどこちらの商隊で黒髪の少女を保護して頂いたようでして。私はその子の保護者です。無事に保護して頂きありがとうございます」

そう言ってから、にっこりと感情のない笑みを浮かべた。
相手が美春を拉致したのは明らかであるが、リオはあえてこのような言い方をしている。
穏便に済ませたかったらこの話に乗れという遠まわしなアピールだ。
もしこれをスルーされたならば、先ほどのように威嚇するか、最悪、実力行使に出るしかない。

「……そんな奴は知らんな」
だが、奴隷商は平然と白を切った。
スッと目を細めて、冷たく笑うリオを見返す。
二人の視線が交差した。
「おかしいですね。一緒に保護してもらった二人はすでにこちらで回収済みなのですが……。何なら後ろの馬車を確認させていただいてもよろしいですか？」
困ったと言わんばかりに、リオは肩をすくめた。
その表情は変わらず冷たい笑みを浮かべたままだ。
奴隷商の表情が不快気に歪む。
「……殺せ」
冷たい声で奴隷商はリオの殺害を命じた。
傭兵のリーダーは小さく笑い――。
「わかりました」
頷いた。
そのまま一気に馬を走らせ猛々しくリオへと迫る。
男は瞬時にリオとの間合いを詰めた。
この段階だと殺気をぶつけて威嚇したところでもう遅い。
リオは小さく溜息を吐いた。
「……」

瞬間、リオの姿がブレたかと思うと――。
肉の断たれる音が響き渡った。
馬上の男の身体が傾き、少し遅れて血が噴き出る。
瞬間、むせ返るような血なまぐささが鼻を衝いて、リオは僅かに顔を顰めた。

「っぁ！？」

その光景に悲鳴にならない声を奴隷商が上げる。
周囲で見守っていた他の傭兵達も驚愕して目を丸くしている。
いつの間にか抜き放たれたリオの片手剣は、返り血を一滴も付けないまま、鞘に収まった。
同時に、走り続けている馬の上から男の身体が地面に崩れ落ちる。
周囲に静寂が降りた。

「出来れば今ので最後にしてくれるとありがたいんだが」

冷たい瞳で奴隷商を見据えて、だが困ったように、リオが言った。
そのリラックスした声色が奴隷商の戦慄を掻きたてる。
眼下には、胴体を真っ二つに切断され、自らの死に気づかぬまま絶命した歴戦の傭兵の死体があった。
その目が合ってしまい、奴隷商の膝が崩れそうになる。
かろうじて堪えたが、その代わりに傭兵の男に対して抱いていた全幅の信頼が音を立てて崩れ落ちた。

「あんたらが拉致した子はどの馬車に乗っている？」
「ひっ、う、後ろから二台目……」

呼ばれ、奴隷商は小さく悲鳴を漏らした。
震えた声で答える奴隷商を一瞥し、周囲を警戒した様子もなく、

リオは悠然とした足取りでその馬車に近づいく。
いや、警戒する必要もないのだ。
武人ではない奴隷商にもそれだけの実力差があることがはっきりとわかった。
先ほどリオが斬り殺した男はそこそこ名の知れた傭兵である。
それこそ、この場にいる他の傭兵全員を相手にしても、負けるビジョンが思い浮かばないくらいに強い。
そんな男をリオは神速と言ってもいい速さで剣を抜き周囲が気づかぬ間に斬り殺した。
周囲の傭兵達もリオが馬車へ近づく姿を呆然と眺めているだけだ。
傭兵である彼らには商人である自分以上に実力差をわかっているのだろう。
リオの進行上にいる傭兵達が顔を青ざめさせて勢いよく退いていく光景を見て、奴隷商はそう思った。

☆★☆★☆★

その頃、美春は形容しがたい不安を覚えていた。
突如、馬車が止まったかと思えば、急に周囲が物々しい空気になったのを機敏に感じ取っていたのだ。
美春の周囲で薄汚れた衣類を纏っている年若い少女達も似たような反応を見せている。
車内には少しキツイ体臭が漂っているが、そんなことは今は気にならない。
ふと、一人の人間の足音が耳に届いた。
その人物はゆっくりと自分達の馬車に近寄ってくる。
すると足音の主が自分達の馬車の前で立ち止まった。
一気に美春の心臓の鼓動が高鳴る。
おそるおそる視線を送ると、そこには一人の少年が立っていた。
視線を動かし馬車の中に乗っている少女達の顔をきょろきょろと

眺めている。
どうやら人を探しているようだ。
やがて少年の視線が美春に固定された。
少年は呆けたように美春を見つめている。
美春は思わず少年の瞳に吸い込まれそうになった。
そのまま少年と美春は黙って見つめ合う。
まるで時が止まったかのように、少年は身動き一つしない。
それは美春も同じだった。

「みー……ちゃん？」

少年が何かを小さく呟くと、その瞳から涙が零れ落ちる。
それはとても綺麗で儚いように思えて、何故だか美春も泣きたくなった。

第５５話　綾瀬美春

天川春人の初恋は物心がついた時だった。
相手は綾瀬美春という同い年の可愛い女の子だ。
たまたま家が隣同士で、たまたま同じ年の春に生まれた。
春に生まれたから春人、春に生まれたから美春。

二人は赤ん坊のころから一緒に育って一緒に遊んだ。
幼馴染。
何も珍しいことはない。
ただそれだけのありふれた関係だ。
だが、春人にとって美春は特別な存在だった。
当時は恋とか愛なんて言葉の意味は知らなかったけど、美春は本当に特別な存在だったのだ。

只々、美春のことが好きだった。
どういう仕組みで彼女のことを好きになったのかなんてどうでもいい。
彼女が喜ぶと自分も嬉しくなった。
彼女が怒ると自分も怒りを抱いた。
彼女が泣くと自分も哀しくなった。
彼女が笑うと自分も楽しくなった。
だって、その人が大好きだから、春人は美春に夢中だったから。
好きになったことに、理由なんかあってもなくても、どうでもよかった。

だが、二人が一緒だったのは七歳の時までだ。
天川春人は平凡な家庭に生まれた。

父と母がいて、春人がいて妹が一人いる。
普通の家庭だ。
だが、そんな家庭は春人が七歳の時に崩壊した。
両親は離婚し、春人は父に引き取られ、妹は母に引き取られる。
離婚の理由は春人が成長した時に聞かされた。
父から聞いた限りだと母の浮気が原因らしい。
春人の妹は父の娘ではなかったのだ。

しかし、そんな理由は当時の春人には関係がない。
美春と離ればなれになるなんて想像できなかった。
だから、春人は泣いて父と母に懇願する。
離婚しないで、と。
父は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべて黙り、母は泣きながら春人に謝った。
まだ物心がついたばかりの妹は何もわかっていないようだったが、母のことを大好きだった彼女は悲しそうな母の姿を見て泣いていたのを覚えている。
二人の離婚は決定的で、覆せない絶望的な運命を悟った時、春人は震えた。
春人は美春の傍にいられれば、それだけで嬉しかったのに、それすら叶わないなんて。
自分の無力さを嘆いた。
それが現実だと知って、悔しくて、虚しくて、震えを隠しきれなかった。

「ハル君、行っちゃやだ！」

別れを告げた時、美春は泣いた。
泣いて、行かないでと、懇願された。
どうしたらいいかわからない。

自分にはどうすることもできない。
思わず春人も泣きたくなったが、何の根拠もなく必死に強がった。
また会おうとか、迎えに来るからとか。
色んなことを言って、美春を泣き止ませようとした。
それでも泣き止まない彼女に――。

「次に会ったら結婚しよう！」

と、春人はそう言った。
すると、はたと泣き止んで、美春が春人の顔をぼーっと見上げる。

「……駄目、かな？」

おずおずと春人が尋ねる。

「……うん。する。する！」

ようやく美春が笑った。
それがとても嬉しくて――。
絶対にこの約束を叶えよう。
春人はそう思った。
どんなに歳月が流れたってかまわない。
守ろう。
この笑顔を守ろう。
そう誓って、春人は美春と別れた。

☆★☆★☆★

今、リオの目の前に美春がいた。
見間違えるはずがない。

何年経ったって、生まれ変わったって、高校の時に僅かに見た彼女の顔は、絵に描いたように思い出すことができるんだから。

「っ……」

頬を濡らす感覚で、リオは我に返る。
理由はわからないけど、今、目と鼻の先に美春がいる。
それだけで胸が熱くなり、幸せな気分になった。
どくんと、心臓が高鳴るのを感じる。
嬉しさで思わず我を失いそうになったが、何とか踏みとどまった。
今はこの場所からいち早く美春を連れ出すことが先決だ。
美春のことは自分が守らなくてはいけない。
どんなことからも守ってみせる。
そう誓って、天川春人は生きてきたのだから。

馬車の荷台に乗り込み、リオは美春のもとへ歩み寄った。
怖がらせちゃいけない。
だから、リオは薄く笑って――。

「助けに……来ました」

優しく、そう言った。
大好きで、大好きでたまらない美春を怖がらせないように。

「あ……はい。ありがとうございます」

呆けて、自分を見つめる美春に、リオはそっと手を差し出した。
周囲の奴隷の少女達が呆然とその様子を眺めている中、美春がリオの手を掴んだ。
温かくて、柔らかい手だった。

白く、か細い、綺麗な手だ。
剣ダコでごつごつした自分の手とは違う。
ついさっき初めて人を殺したばかりの自分の手とは……。
人が絶命する瞬間の表情、吐き気を催す死の香り、初めて人を殺した手の感触が、脳裏に焼き付いて離れない。
だが、もう引き返すことはできない。
もう覚悟は決めたのだ。
どんな地獄も背負ってみせると。
それにこの残酷な世界から美春を守らなければならない。
小さく頭(かぶり)を振って、リオは美春に微笑みかけた。
そして美春の手を優しく引っ張る。

「亜紀ちゃんと雅人君が外で待っています。行きましょう」

そう言って、連れ出そうとすると――。

「あ、えっと、彼女達は……」

馬車の中に取り残された周囲にいる奴隷の少女達を見つめて、美春が言った。
リオは困ったように微笑する。

「彼女達は奴隷です。おそらくですが貴方と違って正規の手続を経て奴隷になっています。勝手に助ければ犯罪者になってしまう」

奴隷は物扱いされている。
だから、盗めば窃盗、詐取すれば詐欺、奪えば恐喝か強盗だ。

「そんな……」

呆然と、美春は少女達に視線を送った。
彼女達の視線が美春とリオに突き刺さる。

「行きましょう」

そんな視線から引き離すように、くいっと、リオは美春の手を引っ張った。
されるがまま、黙って美春は歩き出す。
そのままリオは美春を連れて馬車から立ち去った。
決して後ろを振り向かせないようにして、近くにあった岩場まで連れて行く。

「ここで少し待っていてください。危ないですから顔は絶対に出さないで」

言って、美春を岩場に隠すと、リオは再び馬車へと戻った。
ぎこちなく行動を再開した奴隷商と護衛達だったが、リオが戻って来たのを見てギョッとする。

「な、なんだ……？」

明らかに狼狽した様子で、奴隷商が尋ねた。
この男達は美春を娼婦として売り払おうとした。
絶対に許せない。
リオは本気で殺意を抱いた。
だが、今は用事を済ませて一刻も早く美春のもとへ戻る必要がある。
こんな男達を殺している場合ではないし、それをして近くにいる美春を怖がらせたくもない。
だが、制裁は受けさせるつもりだ。

リオは奴隷商を刺し殺すように冷たい殺気を浴びせた。

「ひっ、ひぃぃ」

奴隷商が情けない悲鳴を漏らす。

美春達が受けた恐怖はこんなものではない。

せいぜい恐がればいい。

リオはそう思った。

「拉致した三人の荷物を持っているんだろ？　返せよ」

冷たい声で、リオが命令する。

「あ、ああ！　返す！　返すから！」

答えて、奴隷商は慌てて馬車へ走り込んだ。

すぐに荷物を抱えて戻ってきて、リオに三人の所持品を手渡す。

「これで全部だろうな？」

荷物を受け取ると、感情の籠っていない目で奴隷商を見据えて、リオが尋ねる。

「も、もちろんだ！　すべて入っている！　か、金も入れておいたから！　信じてくれ！」

ぶんぶんと勢いよく首を縦に振って、奴隷商は答えた。

ちらりと受け取った鞄を覗き込むと、確かにその一つに少なくない量の金貨が詰め込まれている。

慰謝料のつもりだろうか。

「そうか。もし嘘をついていたら戻って来るからな」
そう言い残すと、リオはその場から立ち去った。
リオの姿が見えなくなって、奴隷商の膝が崩れ落ちる。
「行きましょう」
美春の所に戻ると、リオは薄く微笑んで声をかけた。
奴隷商と接している時の冷たさは微塵も感じられない。
温かい笑みだった。
「は、はい」
そんなリオの姿を目にして、美春はようやく我に返ったように、ホッとした表情を浮かべた。
「あ、荷物、ありがとうございます！　その、鞄持ちます！」
自分達の荷物を取り戻してくれたことに気づき、美春は礼を言った。
そして小走りでリオに駆け寄る。
「いえ、自分が持ちますよ。ここから少し歩きますから」
「でも……」
「大丈夫です。任せてください」
「えっと、すみません。じゃあ、お願いしてもいいですか？」
「はい、任せてください」
譲りそうにないリオのきっぱりとした態度に、美春は頭を下げて

頼むことにした。
そして、二人は歩き出す。
いつの間にか日は傾きかけ、アマンドを出た時には青く澄んでいた空が、暖かみのあるスカーレットに染まり始めている。
日本では見ることのできないとても綺麗な光景だ。
美春はそう思った。

先を歩くリオと、その後を追う美春。
そうやって少し先を歩くリオの後ろを、美春が三歩下がって歩く。
何となく、それが自然な距離だった。
リオの歩く速度に追いつけなさそうになる度に、小走りをして、美春がその距離を保つ。

「……」

二人の間に会話はない。
先ほどからリオがちらちらと自分の方を窺っていることに気づいているが、美春は何を喋ったらいいのかわからなかった。
それはリオも同じようで、時折、後ろを振り返る以外は何となく気まずそうに空を仰いでいる。

これは夢なんだろうか。
今の美春は夢の中にでもいるような気分だった。
だって、これまでに起きた出来事にはまったく現実感がない。
気がついたら文明の存在しない見知らぬ草原にいて、そこを彷徨い歩いて、時代がかった者達に拘束されて、実は奴隷にされかかっていたなんて。
とても信じられない。

だが、ここが夢の世界だとしても、リオに助けてもらったのは事

実だ。
きちんとお礼を言いたい。
強くそう思っているのだが、何故だかリオに話しかけようとした瞬間に夢から覚めてしまいそうな気がして、怖かった。

（怖い？）

美春は自分が何を恐れているのだろうかと疑問に思った。
それはお礼も言えずにこのまま目の前にいる少年が消えてしまうことか。
確かにそれは嫌だ。
でも、何故だかそれとは少し違うような気がする。

ふと、美春は最初に少年と視線を交わした時のことを思い出した。
少年は何かをボソリと呟いていたが、残念ながらそれを聞き取ることはできなかった。
少年が何を言っていたのか、何故かとても気になる。

なんて、ぼんやりと色々なことを考えていると――。
ふとした瞬間、美春はいつの間にか自分が小走りをする必要がなくなっていることに気づいた。

（もしかして……）

美春は目の前にいる少年の背中をじっと見つめた。
先ほどからチラチラと後ろを振り返っていたのは、美春の歩く速度を掴むためだったのではないか。
今のリオの歩調は当初よりも緩く、自分に合わされたものだとわかった。

（私の歩く速度に合わせてくれたんだよね？）

そんな不器用な優しさに気づき、美春がくすりと笑みを浮かべる。

何故かとても懐かしい気がした。

どうしてだろう。

だが、今はそれよりも。

（ダメだな、私……）

先ほどからリオに気遣わせていてばかりだ。

それに気づき、美春は自分の未熟さを恥じた。

あれこれと考える前に、自分にはしなければならないことがあるはずだ。

まずは名前を聞いて、きちんとお礼を言おう。

そう決めると、ほんの少し先を歩くリオの背中を眺めながら、美春は小さく息を吸った。

「あ、あの、すみません。よろしいでしょうか？」

急に話しかけられて、リオの身体がびくりと震える。

おそるおそると後ろを振り返り、二人は向き合った。

「えっと、はい。何でしょう？」

「いきなりすみません。あの、私は綾瀬美春といいます。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

何故だか高まっている胸の鼓動を押さえて、美春が尋ねた。

「あ、はい。えっと、……ハルト、といいます」

ぎこちない日本語の発音で、リオが答えた。
その瞳にはどこか期待するような想いが籠められている。

「ハル……ト……」

呆然と美春がリオの偽名、いや、かつての彼の名を口にした。
美春の幼馴染である少年の名前を。

「……自分の名前が何か？」
「あ、いえ、私の幼馴染と同じ名前で……」

懐かしそうな笑みを浮かべ、美春が答えた。
その笑顔にはほんの少しの憧憬が籠められているように思える。
いや、リオはそう思いたかった。

「そう、なんですか……。すごい偶然ですね」

曖昧に笑って、リオが答える。
思わず後先を考えずに自分がその幼馴染だと口にしそうになった。
自分は天川春人で、死んでしまったけど生まれ変わって、この世界で貴方のことを想って生きてきた。
もちろん、仮に美春が他の者を好きだというのならば諦めるしかないのだろうが、それを確認するためにもこの想いは伝えなければならない。
天川春人は自分の想いを告げる前に美春から逃げ出したことをずっと悔いていたのだから。

だが、この場でいきなりそんな荒唐無稽な話を伝えて信じてくれるだろうか。
不気味に思われたりしないだろうか。

下手をすると異常者扱いされかねない。
少なくとも戸惑うはずだ。
仮に信じてくれたとしても、自分の気持ちは重すぎて美春は受け止めることはできないのではないか。
リオは美春に対する自分の想いが偏執病染みていることを自覚している。
美春に対する想いは誰にも負けない自信があるが、それを一方的に押し付けることがストーカー行為でしかないこともわかっていた。
考えなしにその想いをぶつければ美春を怯えさせたり不快にさせるだけだ。
そう考えると、急に怯んでしまった。

あれだけ美春に会って伝えたいことを強く想い描いていたというのに、いざ目の前にいると上手く立ち回ることが出来やしない。
なんて不器用な男なんだ、自分は。
そんな男が一人前に人を好きになっているんだから笑うしかない。
リオは自分の首を絞めてやりたくなった。

少し頭を落ち着ける必要がありそうだ。
その間に、ゆっくり、ゆっくり、仲良くなればいいじゃないか。
今はこうして目の前に美春はいるんだから。
これからは自分が美春を守っていくつもりなんだから。
まだ焦る必要はない。

「……はい。そう、ですね」

しばし沈黙し、寂しそうに微笑みながら、美春は答えた。
その笑みにリオが引きこまれそうになる。

「それで、その、ハルトさん」

呼ばれて、リオは震えた。
昔とは少し呼び方は違うけれど、名前を呼ばれることがこんなにも嬉しいことだったなんて、知らなかった。

「は、はい！」

いつになく舞い上がっているリオが、勢いよく返事をする。
その勢いに押されて、美春がたじろぐ。

「あ、えっと……、なんでしょうか？」

美春を驚かせてしまったことに気づき、リオがバツが悪そうな笑みを浮かべて返事をする。
何故だか美春はそんなリオの様子が可笑しくて、くすくすと笑い始めた。

「ごめんなさい。……ハルトさんがいなければ私はどうなっていたかわかりません。それに亜紀ちゃんや雅人君も。本当にありがとうございます」

笑ったことに対して小さく謝罪をすると、美春はリオに深く頭を下げた。

「いえ、当然のことですから」

そう、当然のことだ。
自分が美春を助けるのは息を吸うのと同じくらいに当たり前のこと。
美春さえいれば、美春さえいれば、ただそれだけで、自分はこん

なにも幸せを感じられるのだから。
ひょっとしたら自分が生まれ変わった意味は今日この日に美春を守るためなんじゃないか。
そのために自分はこんな世界で生きてきたんじゃないか。
そう思えて仕方がない。

「本当にありがとうございます」

再び礼を告げて、美春がリオに柔らかな笑みを向ける。
それがとても嬉しくて。

「行きましょうか。二人をいつまでも待たせるわけにはいきませんし。すぐそこです」

胸の高鳴りを覚え、リオは少し逸るように言った。

「はい。そうですね」

微笑して美春が頷く。
それから、二人は再び無言で歩き出した。
だが、先ほどのようなぎこちなさは存在せず、どこか温かな空気が二人の間に流れている。
その色を完全に緋色へと変えて、陽光が二人を優しく照らしていた。

第５６話　事情説明　その一

亜紀と雅人が隠れている岩場へと戻ると、リオと美春の姿を見て、二人は目を輝かせた。
そのまま抱き着く様に亜紀と雅人が美春に近づく。

「美春お姉ちゃん！」
「美春姉ちゃん！」
「二人とも良かった……」

無事に再会した三人の姿を見て、リオは小さく息を吐いた。

「ハルトさん、本当にありがとうございました」

代表して美春がお礼を言い、亜紀と雅人と一緒に頭を下げる。

「三人が無事に再会できて良かったです」

そんな三人にリオは小さく手を振って答えた。
自然と顔がほころぶ。

「それじゃあ、これが三人の荷物なのですが、実はこの鞄の中に金貨が入っています」

そう言って、リオは荷物を差し出した。
ずっしりとした重みがある学生鞄の中には、実に五十枚以上の金貨が無造作に詰め込まれており、その重さは三キロを超えている。

「あ、はい……」

美春がきょとんとした顔で鞄を受け取る。

金貨の入っている鞄は美春のものだ。

ちなみに金貨五十枚という値段はこの三人を奴隷として売りさばく時に出る儲けだと奴隷商が予想していた額である。

リオは奴隷を購入したことがないので相場はわからないが、人を違法に奴隷にして人生を台無しにしようとしたのであるから、この額が高すぎるとは思っていない。

奴隷は用途、性別、能力によって値段が大きく異なるが、基本的にはその者を従業させて稼ぐことのできるであろう収入が目安となる。

妙齢で健康で美しい女は娼婦にできることから大した能力がなくとも価値が高く、逆に何の能力もない男は価値が低い。

美春達のような拉致奴隷は訳あり品として安くなるが、言葉が通じないとはいえ、美春はまさしく上記の条件を満たしているし、亜紀もまだ少し幼いが需要はいくらでもあった。

それゆえ、先の値段のほぼすべてが美春と亜紀の価格であり、雅人はほぼ捨て値同然の価値しかつけられていなかったりする。

「えっと、この金貨は？」

困惑した様子で美春が尋ねる。

「それは慰謝料だと思います。三人は危うく奴隷にされかかっていましたから……」

なんとも伝えづらそうにリオが答えた。

拉致奴隷は違法であるが、表面化しないだけで相当数が存在しているというのが現状である。

また、騙されて奴隷になる者もおり、その大半が子供か若い女であった。
今回のような事件はこの世界では決して珍しいことではない。
「そ、そんな……。奴隷って」
亜紀がショックを受けたように呟く。
無理もない。
彼女にとって奴隷という存在は非日常極まりないものなのだから。
美春もショックを受けているようだが、先ほどリオに奴隷の存在を聞いていたため、亜紀よりは衝撃が小さいようだった。
「なんだよ、奴隷って？」
そんな中で一人、雅人が首を傾げて尋ねる。
「あんたそんなことも知らないの？」
呆れたように雅人を見つめる亜紀。
「奴隷っていうのはね。……えっと……」
そのまま奴隷について説明をしようと試みたが、亜紀は言葉に詰まった。
単語の意味は知っていても、上手く言葉で説明できないようだ。
美春も困ったような顔を浮かべている。
「簡単に言うと物として扱われている人間のことだよ」
そこでリオが口を挟んで説明することにした。

「物として扱われる？」
それでもイメージが沸かないようで、雅人が首を捻る。
「人間を動物みたいに売り買いの対象にするって言えばいいのかな。売られた人間は買ってもらった人間の言うことを何でも聞かないといけなくなる」
そう言って、リオが説明を加えた。
「な、なんだよ！　そんなのペットじゃん！　俺達そんなのにされかかっていたのか！　なんでそんなことをするんだよ！？」
流石に今の説明で意味を理解したらしく、雅人は憤慨して叫んだ。
「自分の思い通りにすることができる人間が便利だからだよ」
歯に衣着せず、リオが簡潔にその理由を告げる。
「そんな奴を相手にして何が楽しいんだよ？　人形じゃん！」
「まぁ、そこは人それぞれだろうね。面白いかどうかじゃなくて、必要だから使う人もいるから」
リオは苦笑して答えた。
奴隷制の存在を当たり前のものとして受け入れている自分と違って、まだこの世界で擦れていない雅人が眩しく見えたのだ。
「なんだよ、それ……」

力弱く、雅人が呟く。
おそらく名状しがたい感情が彼の中で渦巻いているのだろう。
「ハルトさんがいなければ、あのままじゃどうなっていたことか……」
すると、黙って話を聞いていた美春が怯えた様子で言った。
「本当に。こうして無事でいられて良かったです……」
美春の横で震えながら、亜紀が言った。
リオが助けに来なかった時のことを想像して恐ろしくなったのだろう。
「いや、大したことはしてないよ」
そもそもリオも必要があったからこそ亜紀達を助けようと思ったのだ。
今でこそ事情は大きく変化しているが、当初の動機は好奇心程度のものにすぎなかったし、そこまで深入りするつもりもなかった。
「……本当にハルト兄ちゃんのおかげだ。ありがとう！」
雅人も何とか立ち直ることができたのか、リオに礼を告げた。
ぎこちないながらもその顔には感謝の笑みが映っている。
「いや、かまわないよ」
「いや、ハルト兄ちゃんがいなかったら、本当にどうなっていたかわかんねぇよ！　あいつらすげぇ怖かったし」
「ああ、どういたしまして」

力強く礼を告げる雅人に、リオが微笑を浮かべて答えた。
と、そこで。
「ところで、さっきから何よ。そのハルト兄ちゃんって……」
やや不機嫌そうに亜紀が雅人に尋ねた。
「え？　あー、いや、だって、ハルト兄ちゃんは俺より年上みたいだし。普通だろ？」
特に大した理由もなく、雅人は何となくリオのことをハルト兄ちゃんと呼んでいたようだ。
「……そうだけど」
その回答にどこか納得がいかないように、亜紀が不満げに呟く。
そんな彼女の反応に雅人は意味がわからないといった表情を浮かべた。
「亜紀ちゃん……」
困ったように美春が亜紀の名を呼ぶ。
それに気づき、亜紀はいっそう顔を顰めて。
「ごめんなさい……」
苦々しく謝罪の言葉を口にした。
その謝罪は誰に向けられたものだったのか。
やるかたないと言わんばかりに、亜紀は顔を俯かせた。

「……」

リオがそんな亜紀の様子をじっと見つめる。

何となく既視感を覚え、苗字は違ったが、名前を聞いた時にもしかしてと、リオは思った。

だが、今はかなりの確信を持っている。

おそらく千堂亜紀は天川春人の妹だ。

美春と一緒にいることがリオの確信を補強している。

家を出て父と一緒に田舎へ赴いた天川春人と異なり、妹であった天川亜紀は母と一緒にあの街に残り続けていたはずだ。

そのままあの家に住んでいたかどうかは不明であるが、あの街に残り続けていたのならば亜紀が美春と繋がりを持っていてもおかしくはない。

春人はいつも美春と一緒に遊んでいたが、亜紀もその中に混ざって遊ぶことはよくあった。

今の亜紀は見間違えるくらいに成長しているが、どことなく春人の知っている母と面影が重なっている。

「すいません。ハルトさん。変な空気にしちゃって」

亜紀がリオに向けて謝罪の言葉を口にした。

「いや、俺は気にしてないよ」

曖昧な笑みをたたえたまま、リオが答えた。

もしかして――。

いや、もしかしなくともだ。

千堂亜紀は天川春人を嫌っているのではないか。

今、目の前にいる亜紀の様子を見て、リオはそう思った。

「ありがとうございます」

申し訳なさそうに小さく微笑して、亜紀が頭を下げる。

そんな亜紀を見て、何となく胸が締め付けられるような想いがしたが、彼女達にしてみればリオは出会ったばかりの者にすぎない。

今のリオは天川春人であっても天川春人ではなくリオなのだ。

そんな人物がずけずけとデリケートな領域に首を突っ込むようなデリカシーのない真似をしてもいいものか。

素性を偽り、存在そのものを誤魔化して、一方的に判断材料を得ている時点で今更だが、自分が天川春人であることを説明しなければそのことを尋ねるにしてもフェアではない。

しかし、この時点で自分が天川春人だと説明すれば火に油を注ぐような真似になりかねないのではないか。

（どうしろっていうんだ……）

ここに来るまでの間にリオも少しは心の整理ができていた。

今の美春達が最優先で知るべきことは、春人の素性ではなく、彼女達に何が起きていて、これから先にどうなるのかだろう。

だからこそ、ある程度の時間を置いて、美春達の状態が安定した後に、リオは自分の前世について美春に語ろうと決めていた。

なにせ話す内容が内容である。

混乱している今の段階で私情を交えた不要な情報を与えて余計に混乱させるべきではないし、気持ちが重すぎるがゆえに、聞いてもらうのならば心が落ち着いている状況が望ましいと考えたのだ。

だが、ここにきて事態はいっそう複雑になった。

安否不明のセリアが無事か確認しにも行きたいし、今さらになって復讐を放棄するつもりもない。

（いや……、最終的にすることに変わりはない。今みーちゃん達が置かれた状況を説明して、現状を受け入れてもらって、状態が落ち着いた後に言えばいい。ただ、ちょっと配慮するべき事柄が増えただけだ）

そう決めると。

「……じゃあそろそろ本題に入りましょうか」

言って、小さく微笑し、リオは美春達を見据えた。

鞄の中に入っている金貨については後回しだ。

そろそろ暗くなってきているため、とりあえずこの場でするべき話をしておきたい。

「一番気になっているのはここが何処なのかということだと思います。亜紀ちゃんと雅人君には説明しましたが、ここは地球ではありません」

これは主に美春に向けての説明だ。

この時、そういえばどうしてリオは日本語が話せるのだろうと、美春は不思議に思った。

だが、そこで。

「……あの、私達は地球に帰れるんでしょうか？」

不安そうに亜紀がそう尋ねた。

それは当然に抱くであろう疑問であろう。

リオもその質問が寄せられるであろうことを予想はしていた。

「それは……」

だが、リオは返事に詰まった。
答えとしてはほぼ不可能だとリオは思っている。
しかし、それをそのまま伝えてもいいものか。
今回の事態は、精霊の民の里で魔術や精霊術について人間族を凌駕する知識を得たリオでも、説明できない点が多々ある。
時空を操ることはオドの操作とマナへの干渉が複雑すぎて精霊術では不可能とされているが、精霊の民は魔術でそれを成功させた。
とはいえ、転移魔術を込めた転移結晶で大陸の端から端へと一瞬で移動することはできるが、世界を跨いで移動することは流石に不可能である。
いや、座標を設定できれば理論上は可能なのかもしれないが、他の世界に座標を設定する方法がわからないのだ。
仮に座標を設定したとしても、世界を跨ぐのに必要なオドの量を考えると実現可能性は恐ろしく低いだろう。

「ごめん。断言はできないけど、かなり難しいと思う……」

悩んだあげく、リオはそう答えた。

「そんな……」

亜紀の表情が絶望に染まる。
いや、亜紀だけではない。
美春や雅人も強く衝撃を受けているようだ。

「けど、可能性はゼロじゃない。今回の事件は人為的に引き起こされたものだと思うから、その原因を突き止めればあるいは。それでも可能性は小さいけど……」

絶望した美春達の顔が見ていられず、リオは説明を加えた。
今回の事件を引き起こしたのは誰なのか。
シュトラール地方で起きた以上、容疑者として挙げられるのは人間族全てだ。
とはいえ、リオが知る限り人間族は時空魔術の実用化には至っていない。
シュトラール地方にリオがいなかった数年間で時空魔術の実用化に至ったとも思えない。
だから、可能性があるとすれば神魔戦争期のアーティファクトだろうとリオは考えている。
そのアーティファクトに組み込まれている術式を解明できれば何かわかるかもしれない。
とはいえ、アーティファクトに組み込まれた術式は複雑すぎて謎が多い。
人間族よりも遥かに魔術に明るい精霊の民が作りだす霊具にはアーティファクト級の代物が数多く存在するが、彼らでも解明できないアーティファクトは存在するのだ。
仮に問題となるアーティファクトを発見したとしてその原因を解明できる可能性はとても低いように思えた。

そもそも最大の謎は高校一年の序盤に失踪した美春が今この場に召喚されたという事実である。
複数の人間が失踪したあの事件は一過性のものだったが、当時は世間を賑わしたちょっとしたニュースとなった。
今の美春は高校生のままだ。
つまり、失踪した美春はこの世界に召喚されたということになる。
だが、そうなると今度は別の疑問が浮上してくる。
どうして美春の失踪よりも後に死んだリオの方が先にこの世界にやって来たのか。
違いがあるとすれば召喚と転生という差があるが、そこに時系列

のズレを生じさせる何かがあるというのか。
わからない。
色々と考えているうちに頭がこんがらがってきた。
疲れを吐きだすように小さく溜息を吐くと、リオは美春達を見つめて。
「その、俺に出来ることがあれば可能な限り協力しますから」
と、そう言った。
気休めの言葉をかけることしかできない自分の無力さが悔しい。
もし美春が何としてでも地球に帰りたいと言ったら――。
自分は彼女が地球に帰れるように協力するのだろうか。
それとも地球に帰りたがっている美春を引き留めようとするのだろうか。
リオはそんなことを思った。
「……ありがとうございます」
美春が精一杯の笑みを浮かべてリオの言葉に答える。
亜紀と雅人はまだ衝撃から立ち直ることはできていないようだ。
「とりあえず今はこれから先のことを考えましょう」
困ったように笑みをたたえると、リオは美春にそう語りかけた。
「はい」
美春が微笑して返事をする。

「まず、この世界の治安がとても悪いということは既に分かってもらえたと思います。言葉も通じない貴方達が自力で暮らしていくことがほぼ不可能だということも」

厳しい物言いになるが、リオは言葉を濁さずに言った。

美春の顔に緊張した様子が色濃く表れる。

何とか話を聞ける状態になったのか、亜紀や雅人もリオの言葉に耳を傾けていた。

「けど安心してください。たった一つの条件というかルールを守ってくれると誓えるなら、俺が貴方達のことを保護しようと思っていますから」

本心としては無条件で保護しても構わないと思っている。

だが、リオが置かれている現在の状況を踏まえると、守ってもらいたいルールがあった。

「ルール……ですか？」

おずおずと美春が尋ねる。

「はい。今後、俺に関する個人情報を俺の許可なく第三者に漏らさないことです。ただし、身の安全を害されそうな場合は漏らしても構いません。どうでしょうか？」

気負った様子もなく、リオが条件を提示する。

すると。

「……そんなことでいいんですか？」

呆気にとられたように、美春が答えた。
それでは実質的に美春達の負担は何もない。
美春の常識からすると、見知らぬ人間を三人もまとめて面倒を見るなんて生半可なことではない。
少なくとも、地球で暮らしている日本人が同じことを頼まれても、承諾の返事をすることはまずいないと思われる。
だからこそ、提示されたルールの軽さが意外過ぎて、美春は困惑してしまった。

「はい。それを順守してくれると誓ってくれるなら三人の衣食住の面倒は俺が見ます。俺が教えられる範囲でこの世界で生きていくために必要なことも教えます」
「それは……」

願ってもないことだ。
美春達からすれば本当に願ってもないことである。
だが、それではリオの負担が大きすぎやしないだろうか。
美春達はリオに縋るしか道は残っていないが、それではリオの負担が大きすぎて申し訳がない。
だが、今の美春達にできることが何もないのは事実だった。

「わかりました。そのルールを守ることを誓います。ハルトさんから受ける恩もいつか絶対に返します。なので、どうか私達を保護してください。お願いします」

いつかこの恩を返そうと心の中で強く誓って、美春は深く頭を下げた。
只々、深く、頭を下げた。
美春に続けて、亜紀と雅人も「お願いします」と、リオに頭を下げている。

「わかりました。頭を上げてください」

薄く笑ってそう伝えると。

「では、改めて簡単に自己紹介をしましょう。最初に伝えておくべきことがあります。……俺の名前はハルトと教えましたが、実は事情があってこれは偽名なんです。本当の名前はリオといいます。歳は十六歳です」

リオはこの世界の自分の本名を伝えることにした。

それが今の自分にできる精一杯の礼儀だと思ったから。

美春達はリオが偽名を名乗っていることを知り、目を丸くした。

「えっと、混乱させてしまって申し訳ありません。人がいない場所で俺をどっちの名前で呼ぶかは自由ですが、今後、外で俺を呼ぶ時は必ずハルトと呼んでください」

そういって、リオは小さく頭を下げた。

「えっと、わかりました。じゃあ、混乱するので、とりあえずハルトさんで統一してもいいですか？」

既にハルトという呼び方が浸透してしまったせいか、美春はそう答えた。

「わかりました」

返事をして、リオは小さく笑った。

リオからすれば今の自分はリオであるという意識が強いが、春人

も自分であることに違いはない。
そんな自分の名前を美春に呼んでもらえることは素直に嬉しかった。
「じゃあ私も自己紹介をしますね。私は綾瀬美春といいます。歳は同じく十六歳です。よろしくお願いします」
美春も改めてリオに自己紹介を行った。
「じゃあ私も――」
それに続けて亜紀と雅人もリオに自己紹介を行う。
「では、これから先、よろしくお願いします」
三人を見据えて、リオは言った。
「さて、まだまだ話すべきことはあるのですが、もうだいぶ暗くなってきました。いったん腰をゆっくりと落ち着ける場所に移動しましょう。今、家を出しますから」
既に周囲は闇に包まれ始めている。
いつまでもこんな場所にいてはどんどん気分も暗くなるだけだろう。
「え？　家……ですか？　出すって？」
亜紀が困惑したように尋ねた。
こんな何もない岩場のどこに家があるというのか。
美春と雅人も同じようで、不思議そうに周囲を見渡している。

「少し待っててください」

そんな彼女達の反応に苦笑し、リオは少し離れた場所に移動した。

適当なスペースを見つけると、地面に手を置き、精霊術で土を操作して、根切りして地盤を安定させていく。

そうやって家を設置する場所を確保すると――。

「解放（ディスチャージ）」

呪文を唱える。

すると、リオの眼前に巨大な空間の渦が巻き上がった。

時空の蔵には意思のない物の時間を止めたうえで収納することができる。

そして、収納されている物は所有者の任意で付近の場所に出現させることが可能であった。

それは家であっても例外ではない。

この旅に備えてリオは旅住まいとして一軒の家を建築していた。

それは、自然に溶け込めてそれでいて丈夫なようにと、岩を組み合わせて作った石の家だ。

建物自体に認識阻害の結界魔術が籠められた霊具となっており、家から半径五百メートル以内の空間に登録した居住者以外が立ち入ると、その瞬間に結界の範囲内の異常に違和感を抱かなくなる。

オドを視認でき、オドとマナの感知能力が高い精霊術師が相手だと、家を中心にして周囲を覆う結界魔術の存在に気づかれやすいが、そうでない生物との関係では非常に有効な防犯魔術である。

ただし、半径五百メートルを超える位置から結界内に意識が向いていると、結界に立ち入ったとしてもその効果は激減するため、設

置場所は選ぶ必要がある。
ちなみに霊具の効果は自由にオンとオフに切り替えることができ、現在は結界を作用させていない。
また、認識阻害の結界魔術以外にも何個か建物に魔術が込められている。

「な、何、これ……？」

暗くてよく見えなかったが、いつの間にか巨大な岩の集合物が現れ、亜紀が愕然と呟いた。
リオ達の目の前にある巨大な岩の集合物は最長部で二十メートル以上ある。
美春と雅人も唖然としており、そんな彼女達の反応にリオは苦笑した。

「これがこれから先に住むことになる家です。見た目はただのでかい岩ですが、中はそれなりに綺麗ですよ。入り口はこっちです」

そう言って、リオがすたすたと家の入口へと向かっていく。
その後ろ姿を三人が呆気にとられたように眺めていた。

第57話　事情説明　その二

傍目から見ると巨大な岩の塊にしか見えない岩の家だが、その中に入ると美春達は息を呑んだ。
まず視界に入ったのは開放感のあるリビングダイニングだ。
部屋の中央にはソファとラウンドテーブルが設置されており、部屋の片隅にはロフトへと続く階段がある。
魔道具が室内を明るく照らしており、奥にいくつもの扉が設置されているのが見えた。

「こっちのソファに座ってください」

率先して移動し、リオはリビングに設置してあるソファに座った。
美春達もおずおずとリオの対面に置いてあるソファへと腰を下ろす。

「では、話を続けましょうか」

言って、リオは三人を見渡した。
三人が話を聞ける精神状態であることを確認すると。

「俺が貴方達を助けたのは大規模な時空魔術の反応を察知したからです」

と、リオはそう言った。

「時空……魔術？」

美春達が揃って疑問符を浮かべる。
地球に魔術という言葉は存在していても、そういった技術が実際に存在するわけではない。
当然の反応だろう。

「ええ、この世界には魔術が存在します。魔術とは術式に魔力を流して世界の事象を改変する技術なんですが、口で説明しても抽象的でわかりにくいですよね。なので……」

言いながら、リオがテーブルに置いてあった筆記用具類から紙とペンを取り出し、幾何学文様を描いていく。

「極基本的なものですが、これが術式です」

紙に書いた図を美春達に見せると、それを机の上に置く。
美春達はその紋様を不思議そうに眺めていた。

「描かれている文字や図形の一つ一つに意味がありますが、今はその意味を説明することはしません。こうして描いた術式に魔力を流し込むと――」

術式を描いた紙に手を当て、リオはオドを流し込んだ。
すると、術式が光を発し、マナへの干渉が始まる。
幾何学文様の上に数センチの小さな水球が現れ、重力に従って落下すると、紙を濡らした。

「こうやって世界の事象が改変されます。これが魔術です。今のは水を生み出す魔術ですね。流し込んだ魔力の量が少ないため出来た水も少量でしたが」

三人は呆けたように水で濡れた紙を眺めていた。
ちなみに、今は何の触媒も用いないでただ術式を描いただけだが、触媒を用いることで同じ魔力の量でも魔術の効果はさらに高まる。
同じことは魔法にも言えることで、魔道士は触媒として良質な杖を持つことが多い。

「す……すげぇ！」

我に返り、真っ先に反応したのは雅人だ。
その眼を輝かせて、小躍りしそうなくらいに歓喜し、興奮を露わにしている。

「すげぇよ！　ハルト兄ちゃん！　なんだよ、これ！」
「うっさいわね。そんな大きな声を出さないでよ」

すぐ隣で大声を出す雅人を亜紀が不快げに睨んだ。
だが、雅人はそんな亜紀の咎めの視線を無視して――。

「だって亜紀姉ちゃん、今の見ただろ？　何もないところから水が現れたんだぜ！　魔術！　これが魔術だぜ！」

なんてことを、大声で語った。

「見たわよ。確かにすごかったけど、そこまで驚くほどのものじゃないでしょ」

亜紀は呆れたように答えた。
雅人の反応ですっかり冷めてしまったというのもあるが、この家の存在に対する驚きの方が勝っているのだ。
ちょっと水が現れたくらいで驚いてたまるものか。

亜紀はそう思った。
美春がそんな二人の様子を微笑ましそうに眺める。
「話を進めたいから雅人君もそろそろ落ち着いてくれるかな」
いまだにはしゃぐ雅人にリオが苦笑して呼びかける。
すると雅人は恥ずかしそうにはにかんだ。
「わかった。ごめん！」
頭を掻きながら謝罪する雅人に、リオは小さく笑みを送って応えた。
「今は俺が直接に魔力を送り込んだけど、勝手に魔力を吸い取ってくれるものもあるし、呪文を唱える必要があるものもある。まぁ、今はそれは置いておこうか。それで――」
順番を追って、リオが説明を続けていく。
「最初に言った時空魔術だけど、これは水を作る魔術とは天と地以上の差があるくらいに高度なものだと思ってくれ。時間や空間に干渉するのがどれだけ困難かは漠然と想像できるだろう？」
「……そうですね。普通にありえないだろうなって思うくらいには」
頭を抱えて亜紀が答えた。
「ああ、その認識でも構わない。ところで、地球には魔術が存在しないはずだし、君達は魔術を使うことができない。これもいいかな？」

言って、一瞬の間を置き、リオは同意を得るように三人を見つめた。
リオの視線を受けとめ、三人が小さく頷く。
「そうなるとほぼ疑いようのない結論を一つだけ導き出すことができる。それはこの世界の誰かが時空魔術を使って君達を召喚したってことだ」
そうやって自らの推論を述べる。
問題は誰が美春達を呼び出したかということだが、それはリオにもわからない。
「この世界に来る直前に何か異常はあったりしなかったかな。些細な事でも構わないから教えてくれないか？」
「心当たりというか、気がついたら草原に突っ立っていて……。あ、そういえば美春お姉ちゃんが光がどうこうって言っていたよね？」
亜紀は美春に視線を移した。
「うん。貴久君と沙月さん……、私達の知り合いから光の渦が一瞬で広がって、私達もそれに飲みこまれたような気がします。本当に一瞬だったから自信はないんですけど……」
「光の渦……」
おそらくは時空魔術に固有の現象だろうとリオは考えた。
口で説明してもらうよりかは実際に見せた方がてっとり早い。
そう考えると。
「それはこんな感じですか？　机の上をよく見ていてください」

言って、美春達の注目を机の上に集めた。

「解放（ディスチャージ）」

リオが呪文を唱えると、机上の空間が渦を巻いて小さく歪んだ。
ほんの一瞬で、机の上に茶器一式が出現する。
ポットの中には淹れたての紅茶が入っていた。
室内は魔道具が明るく照らしており、歪んだ空間は僅かだが灰色に染まったように見えたはずだ。

「っ、は、はい。い、言われてみれば、似た感じだったような……。もっと範囲は大きかったと思いますけど」

こくこくと勢いよく首を振って美春が答える。

「光の渦は男の人と女の人のどちらから現れていたか覚えていますか？」
「あ、えっと、二人から別々に渦が現れていたような気がします。それらがぶつかり合いながら私達の方に向かってきたんじゃないかと」
「なるほど……。どうぞ」

美春の受け答えを聞きながら、リオが四つのカップに注ぎ分けていく。
カップを渡していくと、三人は礼を言って受け取ったが、やや警戒したようにお茶を眺めていた。
その姿にリオが苦笑し、紅茶を口に含んで見せると、おずおずと三人も紅茶を飲み始めた。

「美味しい……」

紅茶を口にした瞬間、美春が目を見開く。
その姿を微笑ましく眺めると、リオは話を先に進めることにした。
「そうなるとその二人もこの世界にいる可能性は非常に高いですね」
「ほ、本当ですか！？」
亜紀が勢いよく身を乗り出して尋ねる。
リオは亜紀へと視線を向けて。
「えっと、おそらくね。そもそも召喚の対象はその二人だったんだと思う。君達は完全に巻き込まれたという形になるのかな」
と、そう答えた。
「巻き込まれた……。この世界にお兄ちゃん達がいる……」
ぼそりと亜紀が呟く。
「たぶんね。君達が離ればなれになったのは、二つの時空魔術が干渉しあって、転移先の座標がめちゃくちゃになったからだと思う」
亜紀の言葉を肯定するようにリオが説明を行う。
「じゃあ何処にいるかまでは……？」
「……正確な位置はわからないけど、おおよそどの国にいるかならわかるかもしれない」
リオは六本の光柱のどれかに美春達の知り合いが存在する可能性が高いと考えていた。

「っ、本当ですか！？」

亜紀の顔色がパッと明るくなる。

「ああ、ただ、すぐに見つけるのは少し難しいと思う。漠然とどこら辺に召喚されたのかしかわからないし、候補地が六個もあるんだ。その二人も既に動き回っているだろうし……」

困ったようにリオが答える。

あえて言わなかったが、もしかしたら美春達のように悪意のある者に捕まっている危険性もあるのだ。

「あ……」

その可能性に思い当たったのか、亜紀の顔色が再び不安げなものになった。

美春と雅人も沈痛な表情を浮かべている。

そんな三人を見つめると。

「……俺は訳があってここら辺の国を旅して回っているんだ。その過程で二人の情報を調べてみるよ」

と、リオはそう言った。

あれほど目立つ出来事だったのだ。

目撃情報だけでも多数寄せられるはずであるし、旅をしていれば何らかの情報が手に入るかもしれない。

「ありがとうございます。お願いします」

三人が深く頭を下げた。
だが、顔を上げた後も漠然とした不安に苛まれているようで、何となく気落ちしているように見える。
「さて、そうと決まれば食事にしようか。ご飯を食べなきゃ生きることもできないからね。これから料理を作るから」
暗くなった気分を入れ替えるように、リオが言った。
「一応、食材は一通りあるから、リクエストには応えられると思うよ。何がいいかな？」
せめて美味しい料理を食べさせてあげたい。
今の自分にはそれしかできないのだから。
三人はやや呆けたようにリオを見つめていたが――。
「え、あ、えっと……、私も手伝います！　その、二人の好みはよく知っていますし」
やがて美春が慌てて手伝いを申し出た。
「あ、はい。えっと、じゃあ、お願いしてもよろしいですか？」
思わぬ美春の申し出に、リオが僅かに硬直し、すぐに笑みを浮かべて答える。
「はい。頑張りますね！」
ぎゅっと手を握って美春は意気込んだ。

「あ、わ、私も手伝います！」

すると美春の横にいた亜紀も慌てて手伝いを申し出る。

「や、やめときなよ。亜紀姉ちゃんは料理下手なんだから。この前ハンバーグを作った時なんか黒焦げだったじゃん」

横から雅人が焦ったように亜紀に言った。

亜紀はムッとした表情を浮かべて。

「う、うるさいわね！　あれは偶々よ！　それにお兄ちゃんは美味しいって言ってくれたし！」

と、そう反論した。

「いや、兄貴のあれはどう考えてもお世辞だから。他の料理だって――」

だが、雅人も負けていない。

先ほどまでの雰囲気が霧散したようにわーわー騒ぐ二人。

いつの間にか場の雰囲気は明るくなり、リオと美春は亜紀と雅人を微笑ましく眺めていた。

亜紀を擁護しないあたり、美春から見ても亜紀はあまり料理が得意でないようだ。

「四人分の料理を作るだけだから、手伝いは美春さんがいれば大丈夫だよ。二人は先に風呂にでも入ってくるといい」

二人を宥（なだ）めるように、リオが提案する。

お風呂と聞いて亜紀が目を丸くした。

「お、お風呂まで付いているんですか、ここ？」

どんだけ快適な場所なんだろうか、この家は。

亜紀としてはあのまま草原で野宿をするのではないかと漠然と思っていた。

だというのに風雨を凌ぐどころか、家があって、風呂にまで入れるという。

驚きの連続で戸惑うばかりだが、風呂に入れるというのは非常に嬉しい。

「ああ、あそこの扉が露天風呂に繋がっている。タオルは脱衣所に置いてあるのを自由に使っていいよ」

なんて言われて――。

「え、あ、はい。じゃあお言葉に甘えて……。ありがとうございます」

亜紀はおずおずと礼を告げた。

「おー、ありがと！　ハルト兄ちゃん！」

横で何の疑問も抱いておらず、無邪気に礼を言った雅人のことが、亜紀は羨ましくなった。

「じゃあ、細かい道具とかの使い方を教えるから、とりあえずみんな付いて来てもらっていいかな？　美春さんもお願いします」

そのまま四人で風呂場へと移動し、置いてある魔道具や石鹸等の

簡単な使用上の注意事項を説明すると、亜紀から風呂に入ることが決まった。
雅人は先に家の中を探索したいようだ。
ちなみに、家の中には空間拡張の時空魔術が張られており、家の中の面積は岩のサイズよりもやや不自然に広くなっている。

「じゃあ、作りましょうか。最初に台所の使い方を簡単に説明しちゃいますね」

キッチンへ戻って来て、二人きりになったところで、リオが美春に話しかける。

「はい。よろしくお願いします！」

美春は丁寧にお辞儀をして返事をした。
そのまま調理器具の配置、調味料の保管場所、食材の冷暗所、火や水を出す魔道具の使い方などを美春に教えていく。
それから何を作るかを決めると、二人は調理に取り掛かった。
メニューは、ご飯、味噌汁、から揚げ、野菜炒め、きんぴらごぼう、おひたし、サラダと和食が中心となっている。

調理を始めてみると、不思議と、お互いがお互いの邪魔にならずに効率的に作業をこなしていく。
それが何となくリオには嬉しかった。
前世も含めて二十年以上前に離れ離れになってしまった少女とこうして肩を並べて料理をできているのだから。

ちらりと横目で美春を覗き見る。
リオが貸したエプロンを着けてすぐ隣にいる美春の姿はとても家庭的だった。

料理慣れしているようで、その動作には迷いがない。

「美春さん、料理がお上手なんですね」

「いえ、私なんか。ハルトさんこそお上手ですよ。男の人でこんなに料理ができる人は初めて見ました」

「俺は必要に駆られて覚えただけですから。大したもんじゃありませんよ」

「いえいえ、下処理がすごく丁寧ですし、気配りが行き届いているなって思いますよ」

「いや、それを言うなら――」

お互いを褒め合って謙遜する二人。

収拾がつかなくなり始めたところで顔を見合わせると、お互いに小さく噴き出した。

「えっと、何かわからないことがあったら言ってください」

「はい。今のところは大丈夫ですよ。ありがとうございます、ハルトさん」

くすくすと笑いながら礼を告げる美春。

「それに先ほどはありがとうございました」

「さっきですか？」

何について礼を言っているのかわからず、リオは首を傾げた。

「暗くなった雰囲気を払拭しようとしてくれたじゃないですか。ご飯を食べようって。すごく助かりました」

「ああ、別にそういうつもりじゃ……」

答えて、リオは気恥ずかしそうに笑みをたたえた。

「色々と気遣って頂きありがとうございます。私に出来ることがあれば何でも手伝いますから、言ってくださいね」

「……はい、ありがとうございます」

嬉しそうに笑みを浮かべてリオは返事をした。

☆★☆★☆★

その頃、亜紀は髪を結わいて、岩の露天風呂に身を沈めながら、ぼんやりと夜空を見上げていた。

今日は驚くことばかりだ。

異世界にやって来たかと思えば、奴隷にされかかって、だけどすぐに助けられて、挙句の果てにはこうして面倒まで見てもらって。

ただ一つ言えることは、リオには頭が上がらない。

それだけは確かだ。

「ハルト、かぁ。春人……」

その名前を呟き、亜紀は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

天川春人。

自分の兄だった人。

泣き崩れる母を捨てて家を出て行ったあの男の息子。

母を捨てて父に付いて行った人。

美春の想い人かもしれない少年。

様々な情報が頭の中で複雑に絡み合い、亜紀の心の中で名状しがたい感情が渦巻く。

亜紀は母が大好きだ。

優しくて、自分に愛情を注いでくれる。
離婚したのは母が悪いと聞いているが、離婚後、母はすごく苦しんでいた。
それを表には出さないようにしていたが、昼間は自分に笑みを向けて気丈に振る舞っていても、夜になると一人で泣いていることが多かった。
亜紀はそんな母の姿をまだ四歳になる前からずっと見守ってきたのだ。
亜紀が小学校中学年くらいの頃にようやく再婚して、ようやく夜に泣くことはなくなったようだが、それでもまだ立ち直れたかどうかはわからない。
そんな母を捨てて出て行ったあの男のことを亜紀はどうにも好きになれない。
あの男に付いて行った春人のことも気に食わなかった。
これは理屈なんかじゃない。
家の中では春人達の話題を出さないようにしているから、家族は亜紀が春人達を嫌っていることを知らないはずだ。

でも、美春だけは亜紀が春人を嫌っていると知っている。
嬉しそうに春人のことを話す美春の前で怒ってしまったことがあるからだ。
あんな奴のことなんて好きにならないで、と。
それ以来、美春は変わらずに亜紀と仲良くしてくれたが、春人のことを話すことはなくなった。
けど、もしかしたら、美春はまだ春人のことを好きなのではないか。
亜紀は漠然とそう思っていた。

美春は中学校時代から多くの男達に告白されてきたが、そのすべてを断っていた。

告白はしていなくとも美春のことを好きな男は多かったはずだ。
亜紀の兄である千堂貴久も美春のことを好きな人物の一人である。
貴久の美春に対する態度を見ていればすぐにわかる。
美春に他の男が近寄らないように平時から守護神の如く美春の傍にいるのだから。
告白を断り続ける美春を見て、周囲の者は美春が貴久のことが好きなんじゃないかと噂するようになったが、亜紀は何となくそうは思えなかった。

それは亜紀が春人という存在を知っているからだ。
亜紀は美春と春人がとても仲が良かったのを覚えている。
とにかく、やたらと距離が近く、仲が良かったのだ。
まるで新婚の夫婦のような雰囲気が二人の間にあり、妹である自分の入り込む隙間がなく嫉妬してしまうくらいに二人は仲良しだった。

だが、美春と貴久の間にはそういった雰囲気はないように思える。
そもそも美春が貴久と仲良くなったのは亜紀という存在があったからだ。
亜紀の母親が再婚した相手の連れ子が貴久と雅人である。
春人がいなくなった後も美春を姉のように慕っていた亜紀を経由して、貴久は美春と知り合ったのだ。
当時から亜紀は美春を姉として慕っていたため、貴久と雅人がそれに付随して美春と仲が良くなったのは自然なことだった。
貴久は美春に一目ぼれしたようで、以来、告白はしなくともずっと露骨にアピールし続けている。
亜紀としては兄である貴久を応援しているが、美春にとって貴久がどこまで特別な存在なのかはわからない。
だが、貴久はあれだけ一途に美春のことを想っているのだから、美春もそれに応えてくれればいいのにと思わずにはいられなかった。

少なくとも春人なんかには絶対に負けて欲しくない。

（そう、あの男の息子なんかに……）

久々に天川春人という存在を思い出してしまい、思わず亜紀は不機嫌になった。

（今日はハルトさんに申し訳ないことをしたな。……雅人の馬鹿がハルト兄ちゃんって連呼するからよ）

自分達を助けてくれたハルトが天川春人でないとわかっていても、その名前を聞くと複雑な感情が渦巻かずにはいられなかった。

大きく溜息を吐いて、その感情を吐きだす。

（……そういえばハルトさん、本名はリオって言っていたけど、どういうことなんだろ？）

ふと、亜紀はリオが偽名を名乗っていることを疑問に思った。

（うーん、個人情報は漏らさないでほしいって言っていたけど、聞いてもいいのかな？）

リオの情報を許可なく第三者に教えるなという約定を思い出し、必要以上にあれこれと聞いてもいいものか考える。

自分達のことを保護してくれるのはリオしかいない以上、あまりプライベートなことに突っ込んで気分を害させるのは上手くない。

それに、自分だって聞かれたくないことはあるのだから、好奇心で詮索しようとは思えなかった。

何かやんごとなき事情があるのかもしれない。

（……それにしても、お母さんにお父さん、心配してるよね）

この地にいない者達のことを想い、亜紀の表情が曇る。

もしかしたらもう二度と家族に会うことはできないのだ。

そう考えると非常に辛い。

（それにお兄ちゃんと沙月さんも……）

この世界にいるであろう二人の存在も心配だった。

沙月は貴久と美春の中学時代からの先輩だ。

歳は美春達の一つ年上で、次期生徒会長と目される程に優秀な人物で、有名な企業の社長令嬢である。

亜紀も何度か会話をしたことがあったが、隙のない完璧超人というイメージがあった。

この世界にやって来る前はたまたま下校が一緒になったのだ。

（それがこんなことになるなんて。まぁ沙月さんなら心配はなさそうだけど。あの人、何処に行っても順応できそうな気がするし……）

自分の知る沙月のイメージからすると、言葉が喋れない世界でも沙月なら何とかしてしまいそうに思えた。

（それにお兄ちゃんも優秀だしね。雅人と違って）

同じ兄弟でも出来がずいぶんと違うちぐはぐな二人を思い出し、亜紀は小さく笑った。

貴久も雅人も亜紀にとっては大切な兄弟だ。

雅人は少し憎たらしくて抜けているところはあるが、それでも大事な存在であることに違いはない。

亜紀の知る貴久は文武両道を地で行く人間だ。

優しくて、正義感が強くて、隙がないように見えるけど、雅人に似ているのか実はけっこう抜けているところもある。
それに美春のことになると、少しばかり嫉妬深くなるのが玉に傷かもしれない。
けど、それにしたって文句なしの理想の兄だった。

（うん、きっと無事だよ。それにハルトさんも探してみてくれるって言っていたし）

気分を入れ替えるため、顔の下半分を風呂の中に沈め、亜紀はじっと息を止めた。
そしてリオのことを思う。

（ハルトさん、すごく良い人みたいだし、大丈夫だよね）

美春と同い年で、整った顔立ちをしていて、非常に落ち着いた雰囲気がある。
パッと見ると強そうには見えないけれど、物凄い身体能力を持っていて、すごく頼りになる。
ちょっと色々と想像の斜め上を行くところがあるけれど。
亜紀はそういう印象をリオに抱いていた。

（美春お姉ちゃん、あの人のことをどう思っているんだろ。まぁ別人だし、名前が一致しているくらいでどうってこともないんだろうけど……）

と、そこで。

「ぷはっ」

息を止めるのが限界になり、亜紀が風呂から顔を出す。
大きく息を吸って、周囲に広がる風呂場を眺めた。
「それにしても、この露天風呂もたいがいおかしいわよね……。明らかに外から見た感じと中の面積が一致してないし」
規格外な設備に対する驚きと呆れから呆然と呟く。
露天風呂というだけあって、脱衣所は家の中にあるが、この風呂は屋外に設置されていた。
種類は岩風呂と檜風呂の二種類で、それぞれ湯の温度が異なる。
入り口にはリオの遊び心で暖簾がかかっており、まるで旅先で貸切のお風呂にでもやって来たような気分だ。
周囲を岩壁に囲まれていることから景観を楽しむことはできないが、天井は吹き抜けになっているので夜空を楽しむことはできる。
また、寒かったり、雨が降った時は、天井を覆うこともできるようにもなっていた。
ちなみに、霊具によってお湯が常に清潔な状態に保たれており、定期的に手入れをする以外は小まめな掃除をする必要はない。
浴槽の周りには木の板床が敷き詰められ、ちょっとした隠れ家みたいな雰囲気がある空間で、年甲斐もなく亜紀はわくわくしてしまいそうになった。
正直に言えばだ。
すごく心地良い。
だというのになんか釈然としない。
「もう、何があっても驚かないわ……」
引きつった笑みを浮かべ、亜紀はそう呟いた。
これまでに起きた常識外れな出来事の数々を思い出す。
人を二人も抱えて人間が出せるとは思えない速さで走る。

何もない空間から家やお茶を取り出せる。
露天風呂付きの隠れ家を持ち運んで野営をするのが、この世界の標準スタイルに違いない。
そう、この世界ではこれが普通なんだ。
そう思おう。

「はぁ、良いお湯……」

先ほど髪を洗った時に使ったシャンプーの甘い花の香りが鼻孔をくすぐり、亜紀は気持ちをリセットした。
気持ち良すぎてついつい長湯をしてしまったが、そろそろ出ないといい加減のぼせてしまいそうだ。
そう考えて、亜紀は風呂から上がった。
着替えを終えてリビングダイニングへと戻る。
キッチンを覗き込むと、リオと美春が仲睦まじく料理をしていた。

「……」

声を掛けようとしたが、何故かそんな二人の様子をじっと見つめてしまった。
何となく二人が一緒にいる後ろ姿にデジャブを感じたが、すぐにその既視感は消え去る。
小さく首を横に振ると。

「ハルトさん、お先にありがとうございました。すっごく良いお湯でしたよ」

明るい声で、亜紀はリオに話しかけた。

「ああ、それは良かった。じゃあ雅人君に入るように伝えてくれる

かな？」
「あ、はい。わかりました」
「あと、そこの箱の中に冷えた飲み物が入っているから自由に飲んでいいよ。コップはそこの棚に入っているから」
「あ、ありがとうございます」

おずおずと頭を下げて、亜紀は礼を告げた。
本当に至れり尽くせりだ。
そのまま雅人を呼びにいって風呂に入れさせると、亜紀はリビングでアイスティーを飲んで待機していた。

（良い香り。なんかトロピカルな感じだなぁ）

なんて、コップに入ったお茶の香りをぼんやりと楽しむ。
すると、やがて雅人が風呂から上がってきた。

「じゃあそろそろご飯にしようか」

ちょうど料理も出来あがったようで、リオが亜紀と雅人を呼び出した。
リビングダイニングには食欲をそそる香りが立ち込めている。
ずっと良い匂いだと思っていたが、何となく料理をしている二人に声をかけることができず、メニューを確認することはできなかった。
ソファから立ち上がってダイニングテーブルへ移動すると、そこには美味しそうな料理が拡げられていた。

「和食？」

出された料理の数々を目にして亜紀が固まった。

「うぉ、すげぇ美味そう！」

雅人が涎を垂らさんとばかりにテーブルの上のメニューを眺める。

「じゃあ食べようか。好きな席に座っていいよ」

それを合図に全員が席に座っていく。

亜紀、美春、その向かい側に雅人、リオという並びで座ることになった。

美春が味噌汁をよそって、リオがご飯を盛って配っていく。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

「いっただきま～す」

「いただきます……」

最初から何を食べるか決めていたのか、雅人が迷わずに唐揚げに箸を伸ばした。

ほくほくと湯気を立てる唐揚げを頬張り噛みしめる。

「んめぇ～！」

質の高い鶏肉で作った唐揚げの肉汁が口の中に広がり、雅人の顔が幸福に満ちた。

「この唐揚げ凄ぇ美味い！　表面はカリッカリで中はジュワ～ってしてる！　これ、美春姉ちゃんが作ったの？」

「ううん、これはハルトさんが作ったんだよ」

「そうなんだ。ハルト兄ちゃんすげぇなぁ。こっちのきんぴらごぼ

うも凄い美味いや」
「そっちは美春さんが作ったんだ。味と固さのバランスが絶妙だよな」

言って、リオも美春の作った手料理の味を堪能する。
白米との相性は抜群で、箸の進みも早い。
野菜炒めもシャキシャキでご飯によく合った。

「ありがとうございます」

照れたように微笑する美春。

「このお米も凄く美味しいですね」

野菜から食べていた亜紀がご飯を口にし、目を丸くして感想を述べた。
そう、白米の質が凄く良い。
さもありなん。
リオが持っているお米はドリュアスの協力を得て精霊の民の里で栽培されているものだ。
いくつか種類はあるが、その中でも日本人が好みそうな種類を選んで持ち運んでいる。
日本で長年を経て品種改良された米と比べても、これに勝るものはそうそうないと断言できる程に品質が高い。
この世界の人間族でこれほど美味い米を食べられるのはリオ達しかいないはずだ。
そもそもシュトラール地方では米が主食でないため一部の地域を除いて米の栽培はまったくされていない。
ごく少量だけ栽培されている米も、日本人が好みそうにない大粒で粘り気のないものだけで、サラダやスープの具材用に育てられて

いるだけだ。

「たくさんあるから遠慮しないで食べていいよ」

美味しそうにご飯を食べる亜紀を眺めながら、リオが微笑む。

すると、亜紀は嬉しそうに。

「はい！　ありがとうございます！」

と、そう返事をした。

これがこの四人の初めての食事である。

こんな幸せな時間がいつまでも続くのならば良い。

何も言うことはない。

食卓には終始、和やかな空気が流れていた。

第５８話　その後

夕食を食べ終えると、亜紀と雅人は精神的に疲れていたのか、すぐに眠り果ててしまった。
美春が風呂に入っている間に二人を寝室へと案内して眠らせると、リオは一人でリビングのソファに腰を下ろす。
そしてぼんやりと物思いにふけった。

考えるのはこれから先のことだ。
セリアに会い、復讐のために情報を集め、美春達の面倒を見て、美春達の知り合いを探す。
細かいことを含めれば他にもやるべきことはたくさんあるし、配慮しなければならないこともたくさんある。
だが、焦ってはいけない。
焦ったところで結果は付いてこないし、それどころかミスをしてしまう恐れすらある。
それが取り返しのつくミスならばいいが、取り返しのつかないミスを犯す危険だってあるのだ。

「……」

テーブルの上に置かれたアイスティーを口に含み喉を潤す。
金属製のグラスから右手にひんやりとした温度が伝わってくる。
リオはじっとその手を見つめた。

今日、リオはこの手で人を殺した。
生まれて初めて、人を殺した。
人を殺した罪悪感に苛まれている――なんてことはない。

残念ながら、今さらそんな感傷を抱くことはない。
それが誰であろうと、自分や身内を害しようとする存在であるのならば、それはリオの敵だ。
そう決めたのだから。

ただ、人を殺すことは気持ちの良いものではなかった。
綺麗なことでもなかった。
そんなこと、出来れば知りたくもなかった。
だが、この世界はそんなに優しい場所ではない。
出来ることならばこんな世界を拒絶してどこかでひっそりと暮らしたいけれど、それはできない。

リオはルシウスを許していない。
正しいか間違っているかなんて関係ない。
リオがそう決めたのだ。

そして、もう一つ、リオにはこの世界を拒絶できない新たな理由ができた。
この世界は美春達にとっては過酷な世界だ。
こんな世界から美春達を守る。
それが自分に課せられた新たな使命だった。

自分が復讐をしようとしているなんて、美春にはとても言えないけど、その決意は美春と再会した今でも変わらない。
けど、自分の前世のことと併せて、美春に想いを伝えようとするのならば、復讐のことも伝えなければならないのだと思う。
自分は人から恨まれるかもしれないことをするのだから。

いつか、いつか、復讐を終えて、やるべきことをすべて終えたら、悪意のない、ちっぽけな世界を創って暮らしたい。

美春がいて、自分がいて、少しの大切な人達が一緒にいる。
そんな小さな世界で暮らせれば、それで十分。
それで十分だから。
だから――。

と、そこで。
静かな室内に扉が開く音が響き渡り、リオは思考を中断してそちらに視線を移した。
そこには風呂から上がってきた美春がいる。

「ハルトさん、すごく良いお湯でした。ありがとうございます」

優しく笑って、美春がそう語りかけてきた。
リオも笑みを浮かべて。

「ああ、良かった。少し今後のことを話したいのですが、よろしいですか？」

と、そう答える。

「あ、はい。亜紀ちゃんと雅人君はひょっとしてもう眠っちゃいましたか？」
「はい。すごく疲れていたみたいですね。美春さんも疲れているようでしたら明日みんなと一緒に伝えようと思うんですが、年長者の美春さんには先に伝えておいてもいいかなと思いまして」
「あ、私は大丈夫ですよ。お願いします」

真面目な表情を浮かべて、美春が言った。

「じゃあ座っていただけますか？　今、飲み物を用意しますから」

新たなグラスを持ってきて、金属製のカラフェに入ったアイスティーを注ぎ、美春に渡す。

「美味しいです」

風呂に入って喉が渇いていたのか、少し多めにそれを口にすると、美春が嬉しそうに感想を告げた。

「それは良かった」

新たにアイスティーを注ぎ足すと、リオは美春に微笑んだ。

寝間着がないため、美春は鞄に入っていたジャージを身に着けている。

制服もそうだが、このジャージもリオは見覚えがあった。

かつて自分も通っていた学校のものなのだから当たり前なのだが、この場で美春がその姿でいるというのがリオとしては何とも新鮮である。

しかも、風呂上りであるためか、妙に色っぽい。

自分の使っているシャンプーと同じはずなのに、美春から漂ってくる甘い香りは全く別物に思えた。

僅かに緊張した心を落ち着けるように、小さく息を吸うと。

「えっと、じゃあ今俺がしていることと併せて、今後の方針なんかについて教えますね」

努めて、真面目な表情を浮かべて、リオは言った。

「はい。お願いします」

「現在、俺はベルトラム王国という国に向かっています」

「ベルトラム王国ですか？」
「はい。俺達が今いるのはセントステラ王国という国の国境付近なんですが、北西に向かうとベルトラム王国、北東に向かうとガルアーク王国という国にたどり着くと覚えておいてください」
紙とペンを取り出して簡単な地図を描き、現在地と周辺国の説明を行っていく。
「なるほど。こういう形になっているんですね。わかりました」
興味深そうに美春は地図を見つめた。
「ええ、では、俺がベルトラム王国に向かう理由について教えておきますね」
言って、リオはアイスティーを口に含んだ。
喉を潤すと、説明を続けるべく口を開く。
「実はその国では少し前にクーデターが起きたみたいなんですが、ちょっと昔お世話になった知人が暮らしているんです。その方の安否を知るためにその国に向かっているところでして」
「クーデター……。そんな国に行って大丈夫なんでしょうか？」
不穏な言葉に、美春が心配そうな表情を浮かべる。
「はい。クーデターが起きたのは上層部の中でのことなので、おそらくですが市井の治安はそこまで悪化していないはずです」
断言はできないが、そこまでひどいものではないはずだ。
国民の中で不安はあるだろうが、直ちにそれが治安の悪化につな

がるとは思えない。
とはいえ、今後の国政次第ではどうなるかはわからないが。
「ただ、行って帰って来るとなると、俺が一人で行動した方が色々と都合が良いので、美春さん達にはこの家で留守番をしておいてもらいたいんです」
「お留守番ですか？」
「はい。この家の中で隠れて住んでいる限りは滅多なことでは危険には遭いませんので安心してください」
リオは安心させるように美春に微笑んだ。
隠れ住むとなると人が来ない場所にこの家を設置する必要がある。
代わりに魔物や危険な生物が出現する可能性はあるが、その程度の生物ならば家の中にいれば安全である。
そういう風にこの家を作ったのだから。
「出発は数日後の予定で、出発後は遅くとも三日以内には戻って来るつもりです。面倒を見ると言っていきなり放置することになってしまい非常に心苦しいのですが……」
申し訳なさそうにリオが頭を下げる。
すると、リオに心配をかけないように。
「いえ、私達はハルトさんの言いつけ通りにこの家の中にいますから、ハルトさんは私達に構わずその人のところへ行ってきてください！」
意気込んで、美春はそう答えた。
「ありがとうございます。自分はこうやって度々、家を空けること

があるかもしれませんが、なるべく頻繁に帰って来るようにはしますので」

若干心苦しそうに、リオが言う。

「はい」

美春は力強く頷いた。

「それで、明日なんですが、近くの都市に行って美春さん達の日用品を買いに行こうと思っています。身の回りの物はすぐにでも必要になるでしょうから」

「あ、はい。ありがとうございます」

「ただ、言葉も喋れないまま三人を一緒に連れて都市に行くとなると少し不安なので、とりあえず美春さんを代表として連れて行くという形でよろしいでしょうか？」

「はい。私は大丈夫です」

「では、明日。朝食を食べたら出発しますので、そのつもりでよろしくお願いしますね」

「わかりました」

「それと、明後日からは俺が留守にする間に安心して定住できる場所を探そうと思っています。色々とタイトなスケジュールで不都合をおかけしますが、大丈夫でしょうか？　何か抱えている怪我や病気があったら教えてください」

もし何らかの持病があるというのならばそれを知っておく必要がある。

精霊の民の作った秘薬や霊薬があれば治せない病気はないと言ってもいい。

非常に貴重でおいそれと使うものではないが、美春達のためなら

ば安いものだ。
「いえ、不都合だなんてそんな。むしろ私達のせいでハルトさんに無理を強いているんですから、大丈夫に決まっています。私が知る限りみんな健康体なので問題ないですよ」
「そうですか。なら良かった。とりあえず俺が何度か行ったことのある都市も近くにありますし、ひとまず定住する場所はガルアーク王国にしようかと思っています」
「ガルアーク王国ですね。なるほど」
リオが描いた地図を眺めて、美春が呟いた。
「ちなみに移動は空を飛ぶことになりますので、時間はそこまでかからないはずです」
徒歩だとガルアーク王国に移動するだけで少なくない日数がかかる。
だが、空を飛べばゆっくりと飛んでも数時間でたどり着くはずだ。
三人を抱えて空を飛ぶのは初めてだが、自分の精霊術の技量的にできないことはないとリオは確信している。
安全面に配慮して移動速度は落とすし、命綱をつける必要もあるだろうが、問題はないだろう。
「え、そ、空ですか？」
美春が瞠目する。
「ええ、魔術とは少し違うんですが、空を飛ぶ手段もあると思ってください」
「えっと、わかりました……」

どのように空を飛ぶのか想像できず、美春が不思議そうに返事をする。

「まぁ、実際に飛んでみればわかると思います。少し怖いかもしれませんが、どうしても無理なようでしたら言ってください」

「わかりました」

美春が頷くと、二人の間に数瞬の沈黙が降りた。

所在なさげに視線を手元のグラスに向けるリオ。

既に話しておくべき会話は終えた。

美春も疲れているだろうし、このまま会話を打ち切ろうかと思っていると。

「……えっと、それでですね。ハルトさん」

美春がおそるおそる声を出した。

「あ、はい、なんでしょう？」

返事をして、リオはグラスから美春へと視線を戻した。

「鞄の中に入っていた金貨なんですけど、あれはどうしたらいいでしょうか？」

「ああ、あの金貨ですか……」

奴隷商が勝手に手渡してきた金貨は美春の鞄に入ったままだ。

色々と話が多くて後回しにしていたが、今になってそのことを思い出した。

「あれは美春さん達の活動資金としてください」
リオがあっさりとその所有権が美春達にあることを伝える。
すると、美春は大きく目を見開いて。
「えっと、私達は助けてもらっただけなので、あれはハルトさんが受け取るべきお金だと思うんですが……」
と、そう答えた。
「いや、被害者は美春さん達なんですから、あのお金は美春さん達のものですよ。慰謝料ってそういうものですし」
「でもハルトさんには助けてもらってばかりですし、私達じゃ持っていても使い道がありません。是非、ハルトさんにあのお金をもらってほしいんです」
決然と頭(かぶり)を振って、美春はそう主張した。
二人の視線が交差する。
なかなか譲りそうにない美春の意志がリオに伝わってきた。
「えっと、……じゃあ、お金は俺が預かりますけど、美春さん達に必要な生活物資を購入する時はあそこからお金を出すというのはどうでしょうか？」
そうやってリオが提案する。
「い、いえ、それじゃ結局、私達のお金になっちゃうんじゃ……？」
「あはは、バレちゃいましたか」
「えっと、これから私達に使うお金は貸したものとしてくれないでしょうか？　お世話になったお金はいつか働いてリオさんに返そう

と思っているんです」
「え、いや、別にそんなことをする必要はないですよ」
今度はリオが目を丸くする番だ。
「そういうわけにはいきませんよ。一方的にお世話になってばかりですから。お金で返せるものじゃありませんが、恩は返したいんです」
「なるほど……」
確かにリオが美春の立場にいたら働いてお金を返そうとするだろう。
だから美春の気持ちはリオにも良くわかった。
だが、リオとしてはあまり美春に恩を感じてもらいたくはない。
リオが美春に良くするのは当たり前のことなんだから。
そこで。
「えっとですね。俺が美春さん達を助けたのは理由があってのことなんです。そこまで恩に感じることはないんですよ？」
と、リオは少しおどけて言ってみせた。
「えっと、じゃあどういった理由で助けようと思ったんでしょうか？」
「それは……この地方で起きた出来事の情報が欲しかったからですかね」
リオがそう言うと、美春が僅かに眼を見開く。
「……普通はそれだけの理由でここまで良くしてくれませんよ。私

達が持っていた情報なんて全くなかったですし、やっぱりちゃんと恩は返したいです」

少し可笑しそう微笑んで、美春は言った。

「あ、いや、他にも理由はありますよ？」

「そうなんですか？」

「はい。そりゃあもう」

「何なんでしょうか？」

「えーと、美春さん達が日本人で懐かしかったからとか。他にも色々と……」

たどたどしく答えるリオだが、美春にはその言葉に何か深みがあるように思えた。

「色々ですか？」

「はい、まぁ……」

言葉を濁すリオ。

「えっとですね。じゃあお金は受け取りますが、それで恩は返したということにしておいてください」

「ですが……」

渋る美春。

どうやらリオが思っている以上に美春は恩に感じているようだ。

あるいは律儀な性格をしているのか、その両方か。

何となく今の美春の人柄が伝わってきて、リオは嬉しくなった。

「いえいえ、あのお金ってすごい大金なんですよ？　単純に日本円

で換算することはできませんが、その価値は軽く一千万円を超えるはずです。二千万円はいかないと思いますが」

きちんと枚数は数えていなかったが、ざっと見た感じそれくらいの量はあった。

「い、一千万円ですか……」

予想外に高い金額に美春が固まった。

当然と言えば当然だが、その価値をきちんと理解していなかったようだ。

「そういうわけです。あのお金を頂いて、他にもお金を受け取るなんてできませんよ。そういうことで納得してくれませんか？」

「えっと、本当によろしいのでしょうか？」

それでもまだ戸惑う美春に。

「よろしいです」

と、リオは少しふざけて言ってみせた。

美春は僅かに瞠目して。

「はい」

くすりと笑って答えた。

「そういうわけでお金の問題は今後一切気にしないでください。どうしても気になるようでしたら、家事なんかを少し手伝ってくれればそれで十分ですから」

「あ、はい。それは当然やろうと思っていたことなので、もちろん！」
「では、お願いしますね。俺が留守にしている間は美春さんがこの家の家主になってください」
「わかりました」
穏やかに微笑むと、美春は「でも――」と付け加えた。
「後になって何か必要なことがあったら何でも言ってくださいね。私にできることなら手伝いますから」
「はい。ありがとうございます」
リオも美春に微笑み返す。
「じゃあそろそろ眠りましょうか。美春さんも疲れているでしょうから」
「はい。ありがとうございます」
「部屋は亜紀ちゃんと別の部屋を用意したんですが、それでいいですか？」
「あ、はい。でも、個室を使っちゃって大丈夫なんでしょうか？」
「ええ、まだ空き部屋がいくつもありますから、問題ありません」
それから、美春を部屋に案内すると、リオも風呂へ入ることにした。
リオが風呂に入っている間に美春は眠りに就いたようだ。
そのままリオも寝室へと向かい、ドミニクが作った特大のベッドに背を預けた。
この家の中でもこの部屋にあるベッドだけはサイズが異様に大きく、十二畳もある部屋を埋め尽くす勢いでベッドが広がっている。
ドミニクが「ここがお前の部屋だからな。わざわざベッドまで作

ってやったんだ。他の部屋で寝るのは許さんからな」と念を押して言ってきたため、そのままこの部屋がリオの個室として決まってしまったのだ。
別に律儀に守る必要もないのだが、せっかくの厚意を無下にするのも何となく悪い気がして、リオはこうしてこのベッドの上で眠っていた。
最初は広すぎるベッドだと思ったが、こうして横になっていると何となく安心感を覚える。
いくら寝相が悪くても落ちる心配はないし、思わずゴロゴロしたくなってしまうこともあった。
今では普通のベッドで眠ると違和感を覚えるくらいだ。

「……」

眠る前に美春と会話をしたからだろうか、リオは何となく遠足を前にした夜の小学生のような気分になった。
寝静まった家の中でじっと暗い天井を見つめる。
こんな気分は本当に久しぶりだった。
ふと、前世で美春と一緒に行った遠足を思い出す。
あの日の前夜も寝付くことはできず、翌朝に早起きした美春に起こしてもらったことを思い出した。
その美春が今は同じ屋根の下で眠っているというのだから不思議な気分だ。
色々と考えているうちに、リオの意識が落ちていく。
そうしてその日は安らかに眠りに就いた。

そして翌朝。
岩の窓から朝日が差し込み、リオは眼を覚ました。
のろのろとした動きでベッドから降りて、部屋の外へと出ていく。
すると、リビングに食欲をそそる香りが充満していた。

（昨日作った料理を置きっ放しにしたっけか？）

なんて、寝ぼけた頭で考えて、キッチンへと向かう。
そこにはエプロンを着けて料理をする美春がいて――。
はたと、リオは硬直した。
一気にリオの思考が覚醒する。

「おはようございます。すみません。寝坊したみたいで」

慌ててリオは美春に声をかけた。

「おはようございます。まだ亜紀ちゃんと雅人君も眠っていますから。腕時計のアラーム機能を使って早起きしたんです」

と、美春は早起きした理由を語った。
この家にも時計はあるが、目覚まし機能はついていない。
そもそも時計は高級品で一般にはあまり出回っていないし、体内時計で生活することが染みついているからあまり問題もない。
リビングの時計を覗くと時刻は七時前だった。
昨日は少し眠るのが遅かったせいでゆっくりと眠ってしまったようだ。

「勝手にキッチンを使ってしまって申し訳ありません。今、朝食を作っているのでゆっくりしてください」
「あ、手伝いますよ。何か足りない食材とかあれば言ってください」

キッチンに置いてあったエプロンを着けて、リオが申し出た。
冷蔵魔道具の中にも食材は入っているが、大部分は時空の蔵の中で眠っている。

「あ、はい。えっと、主品に何を作ろうか迷っているんですが、それ次第ですかね」
「なるほど。じゃあベーコンエッグでも作りましょうか」
「あ、卵とベーコンがあるんですか？」
「はい。今、出しますから少し待っててください。『解放（ディスチャージ）』」

時空の蔵の中に眠っている食材を思い浮かべて、必要な量の卵とベーコンを取り出す。

「これを使ってください」
「あ、はい。ハルトさんって何でも持っているんですね」

感心したように美春が言った。

「あはは、何でもというわけにはいきませんけど、食材は色々と持ってますよ」

何となく照れくさくて、リオはそれをごまかす様に笑った。

「あ、そうだ。お昼から俺達は出かけますし、亜紀ちゃんと雅人君の昼食を作り置きしておきましょうか。俺はそっちを用意しますね」
「はい。じゃあ私は朝食の準備を続けますね」
「ええ、こっちは冷めてもいいようにお弁当にでもします」

そう決めると、リオも行動を開始した。
ただご飯を作るだけなのに、何故かそれが楽しい。
自分のご飯を作るのは味気ないものだけど、他の人のご飯を作るのは楽しかった。
それは美春が一緒にいるからだろうか。

クーデターとか、復讐とか、そんな暗い話は忘れて、今はそんなことは放っておいて。
リオは純粋に嬉しかった。
今、この瞬間だけは――。
それがすべてだった。

第59話　買い物

セントステラ王国とガルアーク王国の国境付近で、遥か空高くへと舞い上がった少年がいた。
少年の腕には一人の少女が抱えられている。

「わっ、すごい。本当に空を飛んでますよ、ハルトさん」

眼下に広がる絶景を見下ろしながら、少女――美春が声を漏らした。

「ええ、飛んでますね」

美春を抱えている少年――リオが微笑ましそうに答える。
だが、そんなリオの様子に気づくこともなく、美春は空から見える景色に見惚れていた。

「すごい。綺麗……。空から眺める景色ってこんなにも鮮やかなんですね」

と、感嘆の声を漏らす。

「ええ、空は何度飛んでも飽きませんね。色んな景色が楽しめますから」
「本当、これなら何度見たって飽きませんよ！」

言って、美春が純真な笑みをリオに向ける。

「それは何よりです」
それが嬉しくて、リオも美春に薄く笑みを浮かべた。
「あの山すごく大きいですね。あそこの湖もきらきらしていて綺麗……」
うっとりした様子で美春が呟いた。
視界に映る景色を捉えようと一生懸命に首と視線を動かしている。
「ええ、本当に綺麗ですね」
そう答えて、リオも周囲の景色に目を向けた。
雲の間から降り注ぐ日の光が、遠い山の稜線と湖の水面(みなも)を彩っている。
美春の言う通り、綺麗な景色だとリオは思った。
そう、きらめやかなその光景は本当に美しい。
美春には空は何度飛んでも飽きないと言ったけれど、今のリオはいつも以上に感動を覚えていた。
何を見ても物珍しいし、何を見ても新鮮で、心が踊って仕方がない。
それは美春が見ているものを自分も一緒になって見ているからだ。
いつもは何となく楽しんでいるだけの風景も、今日は見るものが多すぎて、何から見ればいいのかわからない。
こんな胸の高鳴りを覚えたのはいつ以来だろうか。
世界がこんなにも美しいものだと実感できたのは――。
生きる喜びを与えてくれる人が傍にいる。
ただそれだけで世界はこんなにも変わるのだ。

リオはそっと美春の顔を覗き見た。
今の美春は制服の上にリオが貸した厚いローブを着ており、リオが貸した予備の魔道具で髪の色も変えている。
だが、そこにいるのはまぎれもなく春人の知っている美春だ。

「すごい……」

興奮冷めやらぬ様子で美春が呟く。
先ほどまではそっとリオに抱き着いていただけだったが、感動のせいか、いつの間にか美春の腕の力が強まっていた。
ほんのりとした甘い香りと一緒に、美春の体温が厚いローブ越しにそっと伝わって来る。

「っ……」

それに気づくと、リオの心臓の鼓動は限界まで高鳴った。
思わず美春に伝わってしまっているんじゃないかとハラハラしてしまったが、美春は無邪気に流れていく景色を楽しんでいるようだ。
美春に聞こえないよう、リオは小さく深呼吸をする。
すると、そこで。

「私もいつかこうやって空を飛べるようになるんでしょうか？」

と、美春が尋ねてきた。

「空を飛ぶのは結構難しいんですが、努力すれば出来ますよ、きっと。言葉と一緒に時間がある時に教えますね」

小さく笑って、リオがそう答える。

「ありがとうございます」
美春は無邪気な笑みを浮かべて礼を告げた。
そうやって景色を楽しみ、会話を繰り広げているうちに、あっという間に目的の都市が見えてくる。

「あの都市が目的の場所です」
美春を連れてやって来たのはアマンドだ。
そこはガルアーク王国の高位貴族であるクレティア公爵家の才女リーゼロッテが治める交易都市である。
元々、ベルトラム王国との主な交易は領都において行われていたのだが、近年ではリーゼロッテの手腕もあってアマンドにその役割が移りつつある。

「えっと、足場が悪いのでこのまま抱きかかえていきますね」
直接に都市の中に降りるわけにもいかず、リオは付近にある人気のない森の中に着陸した。
ここから先は徒歩での移動になる。
当然だが道なんてものはなく、地面には鬱蒼と草や苔が生い茂っており、足場は悪い。
美春が履いているのは革靴だし、ローブの下はスカートだ。
足を傷つけさせるわけにもいかず、リオは美春を抱きかかえることにした。

「あ、はい。よろしくお願いします」
少し緊張した様子で美春が答える。

だが、それはリオも同じだ。
リオはちょっと焦って。

「行きましょうか」

と、そう言った。
別に空を飛んでいる時と距離は変わらないのに、地に足を着けただけで距離がぐっと縮まったような気がする。
何となくぎこちない空気が流れながらも、リオは軽快な足取りで森の中を進んで行く。

「わ、すごい。これも何かの魔術なんですか？」

先ほどからリオが軽く跳躍するだけ軽々と数メートルは進んでいる。
風の精霊術を使って揺れと衝撃を緩衝しているため、美春は揺りかごにでも乗っているような感覚だった。

「今は精霊術と呼ばれるものをものを使って身体能力と肉体を強化しています。後は風の精霊術を少し。さっき空を飛んだ時も風の精霊術を使っていました」
「魔術とは違うんですか？」
「うーん、最終的にやっていることは同じなんですが、違いますね」

そう言って、リオは続ける。

「魔術は術式を使って世界に干渉するんですが、機械的というか柔軟性に欠けているんです。発動させる事象を細かく操作したい時にはあまり向いていません」

魔術はマナへの干渉をすべて術式に任せているため、術者がオドを操作する以外にすることはない。
オドの量と操作によって微妙に術式によるマナへの働きかけに干渉することはできるが、精霊術とは比べ物にならないくらいに大きく劣る。

「まぁ詳しいことはいずれ教えますので、今は別物なんだくらいに思っておいてください」
「はい。すみません。移動中に話しかけてしまって」

申し訳なさそうに謝罪する美春。
リオの気が散ってしまったかと反省したのだろう。

「いえ、まだまだ余裕はありますから」

そう告げてから、二人の間に沈黙が降りた。
お互いに妙に距離感を意識してしまっているのか、何となく気まずい雰囲気が漂っている。
と、そこで、リオは一つの事実に気づいた。

（よく考えたらこれってデートなんじゃないか？）

本当に今更であるが、リオはとたんに顔を紅潮させた。
変な格好じゃないよなとか、何を話せばいいんだろうとか、いろいろと考えてしまって、ますます美春のことを意識し始めてしまう。
そんな動揺を振り払うように、リオが速度をわずかに上昇させる。
するとリオを抱きしめる美春の腕の力がそっと強まったことに気づいた。　ハッとしてリオは足取りを緩める。

「ごめんなさい。急に速度を上げてしまって」

苦笑して、リオが美春に謝る。

「あ、いえ。大丈夫ですよ」

美春はそっと笑みを浮かべて答えた。

「ありがとうございます」

美春の気遣いに礼を告げる。

胸の中をふっと涼しい風が吹き抜けたような気がして、少し冷静になれた気がした。

それから数分ほどで森を抜ける。

「見えましたね。ここからは歩いてもらっていいですか？」

街道を出た場所でリオは美春を地面に降ろした。

出会って間もない男女として適度な距離を保ちながら、二人は歩き始める。

とはいえ、道中はお互いに言葉を投げかけて、自然と会話に花が咲いていく。

会話が途切れそうになると、お互いに空気を読んで次の話題を振って、なんだかんだで上手いこと息が合った空気を醸し出していた。

都市の周囲に広がる穀倉地帯を抜けて、三十分ほどでアマンドへとたどり着く。

相変わらず都市の中は活気にあふれ、いたるところに露店が設置されて、どこもひっきりなしに客が訪れている。

まだ朝市をやっている時間のようで、人の数は非常に多かった。

「けっこう人がいるんですね」
意外そうに美春が尋ねた。
「都市の面積の割に人が詰まっていますからね。交易都市なので人の流通も多いですし、定住者の倍以上の人間がこの都市の中にいると思いますよ」
そんな風に都市の説明を行いつつ、人の波を掻き分けて、二人はゆっくりと歩いていく。
ふと、リオは飲み物を販売している露店を発見した。
「そうだ。ちょっと付いて来てもらっていいですか？」
「あ、はい」
そのまま美春を連れて、リオは露店に向かった。
「リンゴとオレンジのジュースを一つずつください」
言って、腰に下げた鞄の中から空の水筒二つを取り出し、小銅貨数枚と一緒に店員に渡す。
「はいよ」
すると、店員は慣れた手つきで水筒によく冷えたジュースを並々と注ぎ始めた。
「デートかい？　羨ましいねぇ。サービスしといたよ」
「どうも」

水筒を受け取り、照れくさそうに礼を言うリオ。

「……」

その様子を美春は黙って見つめていた。

そのままリオが美春のわからぬ言葉で店員の女性と何か会話をすると、リオは露店から美春に振り返った。

「どうぞ」

言って、リオは美春に水筒を差し出した。

「はい。どうも……」

不思議そうに受け取った水筒を眺める美春。

「その中にリンゴジュースが入ってます。喉が乾いたら飲んでください」

「あ、はい」

礼を告げて、美春は受け取った水筒をじっと見つめた。

その様子を見つめて。

「……あ、すいません。つい、勝手に頼んじゃって。もしかして他のジュースが良かったですか？」

リオがハッと気づいたように尋ねる。

「あ、いえ。リンゴジュース好きなので大丈夫ですよ」

美春は小さく笑って頭(かぶり)を振った。
「甘くてとっても美味しいです」
水筒に口をつけ、美春が嬉しそうに微笑む。
「ああ、良かった」
リオがホッと息を吐く。
「ハルトさんは何のジュースにしたんですか？」
「俺はオレンジジュースです」
「ハルトさんはオレンジジュースが好きなんですか？」
「まぁ大好きというほどでもありませんが。リンゴジュースも好きですよ」
と、優しげな笑みをたたえて、リオが答えた。
「ふふ」
すると可笑しそうに美春が笑った。
「どうかしましたか？」
不思議そうにリオが尋ねる。
「いえ、ちょっと昔のことを思い出してしまって。ごめんなさい」
くすくすと笑いながら、美春が謝る。
その表情はどこか懐かしそうだった。

ふわりと風が吹いて、その長い髪が揺れる。
リオは嬉しそうに微笑を浮かべて。

「そうですか」

と、答えた。
水筒に入ったオレンジジュースを飲み、その味を堪能する。
魔道具で冷やしてあるため、ひんやりとしてのど越しは最高だ。
採れたての新鮮な果実で作られた瑞々しい味わいが口の中に広がる。
それは苦くて、酸っぱくて、どこか懐かしい味がした。

「そろそろ行きましょうか。近くに良い店があるみたいなので」

軽く喉を潤したところで、リオは目的の店へと美春をエスコートし始めた。
店の位置は先ほどの露店の店員から聞き出してある。
数分も歩くとその店の建物が視界に入った。

「ここです」
「立派な建物ですね」

石造四階建ての店を見上げて、美春が言った。
大きさだけならばもっと大きい建物が地球には無数にある。
だが、この建物が放つ風格と重厚感は美春が日常的に目にしていた建物とは一線を画するように思えた。

「一流の商会が経営するお店ですからね。この都市の中だとかなり立派な建物に分類されると思いますよ。女性用の品はほとんどここで揃うみたいです」

この店はリッカ商会が経営しているらしく、自国と近隣諸国の女性に向けて様々な流行を生み出しているらしい。
ここに無ければ国内のどこにもないと言われるほどに幅広く商品を網羅しているようで、対象となる客層は主に富裕層以上である。
とはいえ、庶民の女性にとっても憧れであるらしく、お金を溜めてこの店へとやって来るのがこの都市の少女達の憧れだそうだ。

「女性向けのファッション店みたいなものでしょうか？」
「そうだと思います。入りましょうか」

美春と一緒に店の中へと足を踏み入れると。

「すごい……ですね」

リオが思わず尻込みしたように呟いた。
豊富な種類の商品とそれを吟味する大勢の女性の姿が視界に入ったのだ。
日本に行けばこれくらいの品数をそろえている店はショッピングモールにでも行けば何処にでもあるだろう。
だが、この世界でこれ程の品数をそろえている店は見たことがなかった。

「人が多いし、思ったよりも品数が豊富なんですね。これくらいの店が普通なんですか？」

予想以上の盛況ぶりに、美春も少し目を丸くして尋ねてきた。

「いや、ここまでにぎわっている店はあまりないと思いますよ」
「良い店なんですね」

「ええ」

頷くと、リオはそのまま店内をざっと眺めた。
女性向けの店ということなので、中にいるのは女性客ばかりだ。
中には女性の付き添いでやって来ている男の姿もあるが、ほとんどが居心地悪そうにしている。
リオもご多分に漏れず何となく気まずさを感じた。

「えっと、わからないこととか、通訳して尋ねて欲しいことがあったら呼んでください。俺は店の端っこで待機していますので、ゆっくり選んでくださいね」

商品に貼りつけられた木のタグに記載された文字の意味を一通り説明すると、リオは美春にそう伝えた。
いくら美春が言葉が喋れないとはいえ、男であるリオが一緒にいては選びにくいものもあるだろう。
選ぶだけなら言葉は喋れなくてもさして問題にはならない。

「はい。わかりました」
「洗濯は小まめにしますが、最初なので着替えは多めに選んでください」
「はい。じゃあ、行ってきますね」

そう言い残して、美春はおずおずと店内に出陣する。
リオはそんな美春の姿をそっと見守った。

「ハルトさん。とりあえず店の中にどんな品物があるか見て回ってもいいですか？　上の階にも色々とあるみたいですし」

一階を軽く一周すると、美春がリオの元へ戻ってきた。

「わかりました。一応、一階と二階は衣類を中心に扱っているみたいですね。三階は小物で、四階はランジェリーショップみたいです」
階段の傍に貼りつけられた案内板を読んで美春にその内容を伝える。
「そうなんですね。じゃあ上の階に行ってもいいですか？」
「はい。もちろんです」
それから美春はどんな商品が置いてあるのかをワンフロアずつ確認して回った。
リオも美春と一緒に上の階へと登って行く。
問題があるのは最上階のフロアだった。
「えっと、流石にランジェリーショップには付いて行きにくいので、ここで待っていますね」
気不味そうに苦笑して、リオが美春に告げた。
「は、はい」
美春が僅かに顔を赤らめて答える。
美春はそのまま上のフロアへと上がり、数分もすると下へと降りてきた。
「お待たせしました」
「はい。えっと、何か欲しいけど見当たらない商品とかありましたか？　あれば店員に尋ねますが」
「あ、いえ。大丈夫でしたよ。必要そうなものは全部ありましたの

で」
「それは良かった。じゃあ下のフロアから順に見ていきますか？」
「はい。お願いします」
それから二人は一階に戻った。
店内の端でリオが待機して、美春が自分と亜紀に必要な商品を真剣に選んでいく。
リオは美春の姿を遠くから眺めているだけで幸せなので、時間はいくらかかってもかまいやしない。
「あの、ハルトさん。時間がかかってしまいすみません。少しお聞きしたいことがあるんですがよろしいですか？」
しばらくすると美春がやって来て、リオに声をかけてきた。
「はい、なんでしょう？」
「えっと、このワンピースって寝間着用なんでしょうか？」
「えっと、ちょっと見せて頂いてもよろしいですか」
「はい」
受け取った商品に張り付けてある木のタグに書かれた説明をリオが読む。
「寝間着と部屋着を兼ねているみたいですね」
「あ、やっぱりそうなんですね。えっと、似合うでしょうか？」
言って、美春はワンピースを自分に身体に重ねた。
胸元にレースの付いたピンクの清楚なデザインだ。
正直に言えば何を着ても可愛いと思うが、このワンピースは美春のイメージに合っているように思えた。

「あ、はい。似合うと思いますよ」
「ありがとうございます」
恥ずかしそうにリオが感想を告げると、美春がそっとはにかむ。
「じゃあもう少し見てきますね」
「はい。四階まであるみたいですが、会計は階ごとに行うみたいなので、とりあえずこのフロアで買う物が決まったら持ってきてください」
「はい。わかりました」
それから美春が衣類を持ってきてはリオに質問をするということが何度かあった。
下の階から順に商品を購入していき、やがて四階で買い物をすることになる。
正直、ランジェリー売場に入っていくのは躊躇われたので、四階には美春一人で行ってもらうことにした。
何かあれば下に降りて来るように伝えて、リオは階段の踊り場で待機していると。
「えっと、ハルトさん。よろしいでしょうか？」
美春が困った顔で下へ降りてきた。
「あ、はい」
すぐ後ろには同じく困り顔の女性店員がいる。
おそらく会話が通じないのが原因だろう。

「すみません。彼女は少し離れた国からやって来て、ここら辺の国の言葉が喋れないんです」

機先を制してリオが店員に話しかける。

「あ、そうだったのですね。何かお困りの様子だったので声をかけてみたのですが、会話が通じなかったものでして。何やら下へ付いて来るように身振りで案内されたんです」

女性店員が安堵したように事情を説明する。

「そうだったんですか。ちょっと彼女に何があったか聞いてみますね」

店員の女性に断りを入れて、リオは美春に話しかけることにした。

「美春さん、何かお困りのことがありましたか？」

「あ、はい。えっとですね。ちょっと試着をしたかったんですが、どうすればいいかと思っていまして……」

非常に言いづらそうに、顔を紅潮させて、美春が答えた。

「ああ、なるほど……」

曖昧に笑みを浮かべて頷くと、リオは店員に向き直ってその旨を伝えた。

「もちろんかまいませんよ。よろしければお客様も一緒に来ていただけますか？　会話が通じないと少し困ることもありますので……」

「えっと、男の俺が入っても大丈夫なんでしょうか？」

「ええ、大丈夫ですよ。付添いの男性の方でも一緒に入って来る方はほとんどいないのですが、禁止はしておりませんので。それに事情が事情でございますから」
「わかりました……」

女性店員の言葉に従い、リオは意を決して四階へと立ち入った。
リオの姿を発見して女性客達が目を丸くしたが、美春と店員が一緒にいるおかげか、そこまで不快そうな視線を向けられることはない。
リオは必要な場合を除いて自ら話しかけることはなく、余所見をすることもなく、立ったまま黙って瞑想することにした。
そんなリオの様子を店員の女性が傍で微笑ましげに見守る。
女性店員が商品の説明を行い、それをリオが翻訳することが何度かあった。
そうしてようやく買い物を終えると。

「ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております」

店員から見送りの挨拶を受けて、リオと美春は荷物袋を手に店を後にした。
顔を赤くした二人の後ろ姿が何となく初々しくて、店員がニコニコと眺めている。

「次に来る時まで言葉を教えた方がよさそうですね」

気恥ずかしさから足早に店を立ち去ると、リオが苦笑してそんなことを言った。

「すみませんでした。ご迷惑をおかけして……」

顔を真っ赤にしたまま、しゅんとして美春が謝罪する。
「い、いえ、謝ることじゃないですよ」
リオが慌てて美春を宥める。
「でも……」
恥ずかしそうにもじもじと美春が身体を動かす。
「俺は本当に大丈夫ですから。美春さんに不快な思いをさせたんじゃないかと、こっちが心配しているくらいで」
「そ、そんなことはありませんよ！」
「はは、じゃあお互いにあまり気にしないようにしましょう」
「はい……」
美春は俯き気味に首肯した。
リオは困ったような笑みを浮かべると。
「じゃあ雅人君の服を買いに行きましょうか」
明るい口調で美春に語りかけた。
わざとぶって都市の景色に目をやると、そのまま美春を促すように歩き始める。
「はい」
小さく返事をすると、美春はその背中をそっと追いかけた。
数分ほど歩いて適当な店を見つけると、二人で雅人の服を選んでいく。

「これなんか良さそうですね」
雅人の服を選ぶにしても手を抜かず、美春は丁寧に服を選別していた。
リオをモデルにしていくつも服をコーディネイトする。
一通りの衣装を選び終えると。
「この服はハルトさんに似合いそうですよ」
リオに似合いそうな服を見つけて、美春がそれを勧めてきた。
「そうでしょうか？」
「はい。ちょっと上から合わせてみてもいいですか？」
「ええ。お願いします」
荷物袋を手にしたリオの身体に美春が服を重ねる。
「ほら、とっても似合うと思いますよ」
至近距離から無防備にリオに微笑みかける。
「は、はい。どうも……」
リオは僅かに顔を赤らめ礼を告げた。
「ちょうど普段着が不足しているんで、これ買ってみますね」
移動中はクロースアーマーを身に着けていることが多く、リオはあまり普段着を持っていない。

数少ない服もあまり考えずに旅先で選んだものばかりで、ワンパターンな配色のものが多かった。

「そうなんですか。なら、もう何着かあった方がいいんでしょうか？」

「そうですね。よろしければ選ぶのを手伝って頂けませんか？」

せっかくなので美春に選んでもらって普段着をいくつか増やそうと、リオは考えた。

「はい。私でよければ。それじゃあ……」

それから美春の主導でリオの服を選ぶことになった。

美春のセンスは明らかにリオよりも良く、色々とお洒落な服を持ってくる。

周囲には男女で来ている客も多く、男性の服を見繕っている女性も多い。

だが、リオと美春が美男美女の組み合わせであるためか、恋人同士でも二人に視線を奪われている者が何人かいた。

二人はそんな周囲の視線に気づくこともなく、じっくりと服を選んで、順調にリオのコーディネイトが進んで行く。

「良い買い物ができました。ありがとうございます」

小一時間で買い物を終えて、店を出ると、リオが美春に礼を告げた。

「いえ、私は選んだだけですし。それにすごい荷物の量になっちゃいましたね。持ちますよ？」

リオの両手いっぱいになった荷物を見て、美春が言った。
「そこはほら、俺の腕輪の中に収納すればいいですから。大丈夫ですよ」
おどけてリオが答える。
「まるで魔法の袋みたいですね」
言って、美春は可笑しそうに笑った。
「魔法の袋ですか？」
リオが不思議そうに尋ねる。
「昔読んだ絵本にそういう道具があったんです」
微笑を浮かべて、美春は説明を続ける。
「その袋には何でも入ってしまうんです。御馳走、お菓子、ジュース、それに玩具とか」
「まるで子供の夢を詰め込んだ袋みたいですね」
「そうですね。でも、ハルトさんの腕輪の中にも色んな物が入っているじゃないですか。その魔法の袋に似ているなって思ったんです」
「まぁ魔法みたいなものが込められた道具ですからね。……そうだ。人気のない場所で荷物を収納したら、少し遅いですが昼食を食べましょうか」
ちらりと都市にそびえ立つ時計塔に視線を送ると、昼食をとるには少し遅めの時間帯になっていた。

朝食を食べてから移動と買物で動きっ放しだったため、そろそろ腰を落ち着けたいところである。
いったん人気のない路地に移動すると、素早く荷物袋を時空の蔵へと収納していく。
再び大通りに戻り、手ごろな飲食店がないものかと都市を散策を始めた。

「この店にしましょうか」

飲食街にやって来ると、少しお洒落な店を発見した。
石造りの壁が美しい二階建てのレストランで、立地は飲食街の中でも都市の中心部にほど近い。

「雰囲気があって素敵なお店ですね。でも、ちょっと高そうですが、大丈夫なんでしょうか？」

他の飲食店よりも明らかに格式が高い雰囲気があるせいか、美春が戸惑い顔で尋ねてきた。
とはいえ周囲にはこの店よりも格の高そうな店がいくつかあり、最高級店というわけでもない。

「あんまり安い店だと柄の悪い客が多いですからね。安心をお金で買うようなものです。俺も初めて来たので味は保証できませんが」

別に無理をしてまで高い店に入る必要はないが、あまり安い店に連れて行くと昼間から酔っぱらっている客も多い。
リオ一人ならばともかく、美春が一緒にいるとなると酔っ払いに絡まれる危険性が高くなるだろう。
理由もなくトラブルに巻き込まれるおそれのある場所へ向かう必要はない。

「とりあえず入ってみましょう。もしかしたらドレスコードがあるかもしれませんが、今の格好ならよほど厳格じゃない限りは大丈夫だと思います」

そう言って、リオはレストランへと足を踏み入れた。

「エルベへようこそ。ご予約のお客様でしょうか？」

中に入ると制服を身に着けた案内係が声をかけてきた。

入口のロビーは明るく清潔な感じである。

「いえ。予約はしていないのですが、大丈夫でしょうか？　二人なのですが」

「はい。大丈夫でございますよ。では、こちらへどうぞ」

完璧な営業スマイルを浮かべた店員に案内され、二人は店の奥へと入っていく。

リオが予想した通り、店内に荒っぽい容貌の客はいない。

雰囲気も落ち着いていて、ゆっくりできそうだった。

「こちらの席でよろしいでしょうか？」

案内されたのは外の景色が楽しめる個室だ。

静かでプライベートな空間が演出されている。

「はい。問題ありません」

「ではどうぞ。こちらへ」

そのまま椅子へ案内されて、リオと美春は席に着いた。

「こちらがメニューとなります。本日のおすすめは昼限定のコース料理となっております」

メニューに目を通すと、お勧めのコースは、食前酒、前菜の盛り合わせ、パン、パスタ、肉料理、デザート、飲み物がセットになっているらしい。

料金は一人あたり小銀貨三枚で、安い食堂の定食を数十人前は食べられる値段だ。

「美春さんは何か苦手な物とかありますか？　コース料理を頼もうと思っているんですが。パスタと肉料理がついてきます」

「あ、はい。私は特に苦手な物はないので、ハルトさんにお任せします」

「アルコールは……飲めませんよね」

「あ、はい」

地球だと未成年だったため、美春は酒を飲んだことがないだろう。

この世界では美春も問題なくお酒を飲むことはできるが、まだ抵抗が強いはずだ。

「わかりました。では、パスタと肉料理を選んでもらってもいいでしょうか？」

「あ、はい。どんな物があるんでしょうか？」

「そうですね。まずパスタは三種類あって――」

メニューに書かれたパスタと肉料理がどのようなものなのか、リオが美春に教える。

パスタといえばトマトソースがすぐに思い浮かぶが、残念なことにシュトラール地方にはトマトが存在しない。

とはいえ、トマトは精霊の民で採れたものが時空の蔵の中にたくさん入っているので、食べたければ家で作ればいいだろう。
結局、リオと美春はそれぞれ違う味付けのパスタを選ぶことにした。

「では、こちらのコース料理を二つお願いします。食前酒なのですが、ノンアルコールのカクテルで何かありますか？」

リオが給仕係に声をかける。
教育が行き届いているのか、リオと美春が自分の解らぬ言語で会話をしていても顔色を変えることはなく、黙って話を聞いていた。

「はい。ございますよ。別料金となってしまうものもございますが、こちらが提供できる食前酒の一覧となっております」
「そうですね。では――」

落ち着いた口調でリオが店員に注文内容を伝えていく。

「かしこまりました。では少々お待ちくださいませ」

注文内容を確認すると、一礼して店員は立ち去った。

「ハルトさん慣れているんですね。こういったお店にはよく来るんですか？」

リオが堂々と店員と会話をしている姿を見て、美春が感心したように尋ねた。

「いえ、俺もこういった店に入るのは初めてですよ。前世ではちょっと高めのレストランでアルバイトはしていたので、何となく勝手

がわかっているというだけで」
「……前世、ですか？」
美春が不思議そうに首を傾げる。
「はい。そういえばそこら辺は詳しく説明していませんでしたね……」
「えっと、はい……」
たどたどしい日本語の発音から、美春は何となくリオが日本通の外国人なのかと思っていた。
亜紀からかつてリオが日本で暮らしていたと聞いているが、この世界の事情に妙に精通していることも含めて、リオの過去はほとんどが謎に包まれている。
不思議には思っていたが、リオに保護してもらう条件として提示されたルールを踏まえると、何となく尋ねにくいと感じていた。
だが、今の会話の流れならばリオの過去について尋ねることができるのではないか。
そう考えると、好奇心に突き動かされ、美春は勇気を振り絞ってみることにした。
「……あの、お聞きしてもいいことかわからないんですが、ハルトさんはどうしてこの世界にいるんでしょうか？」
遠慮がちに、美春が尋ねる。
リオは一瞬、目を見開いたが、すぐに懐古めいた笑みを浮かべると。
「それは俺もわからないんです。気がついたらこの世界にいましたから……」

そう答えた。
続けて「ただ――」と付け加えると。
「実はですね。驚かないで聞いてほしいんですが、俺は一度は死んだ人間なんです」
と、リオは苦笑しながら言った。
その言葉を聞いて、一瞬だけ固まると、美春が瞠目する。
「死んだ……。でも、ハルトさんはこうして生きていますよね？」
思考が追い付かず、美春が疑問符を浮かべる。
「俺が死んだ世界はここじゃありません。地球です。今はハーフ顔に近いですけど、前世は日本人だったんですよ。転生って言えばいいんですかね。気がつくとこの世界に生まれ変わっていたんです」
言って、リオはおどけたように肩を竦めて見せた。
「え、ええ？」
動揺を隠しきれない様子の美春。
俄かには信じがたい話だった。
だが、出会ってからまだ一日しか経っていないけれど、美春にはリオがこんな嘘を吐くような人間には思えない。
「だから、どうしてこの世界に生まれたのか、どうして前世の記憶があるのか、わからないんです」

リオが何も言えずに唖然としている美春に微笑みかける。
美春の動揺は予想通りだったし、リオにも伝わってきた。
もし自分が天川春人だということを伝えたらもっと動揺するはずだ。
だから、リオはそのまま美春が落ち着くのをじっと待った。
荒唐無稽な話だが、美春なら信じてくれる。
不思議とそんな気がした。

「そう……だったんですね。ご、ごめんなさい。変な事を聞いてしまって……」

少しずつ頭が冷静になって、美春は慌ててリオに謝罪した。
前世とはいえ自分が死んだ話をするのは不快なのではないか。
だからリオは自分の経歴についてあまり語らなかったのではないか。
そう考えたからだ。

「いえ、別に前世の俺が死んだことはもう気にしてないので……」

笑って、リオは小さく頭(かぶり)を振った。
確かに地球には家族がいる。
仲良くしてくれた友人もいた。
彼らのことを思い出すと、地球に全く未練を感じていないと言うことはできない。
だが、今はこの世界で大切な繋がりがたくさん出来た。
ならばそれでいい。
ここが自分のいるべき世界だ。
最近では心からそうやって思えるようになった。
それに今は目の前に美春がいる。
これ以上を求めるのは贅沢がすぎるというものだ。

「美春さん」

顔を深く覗き込むように見つめて、リオは美春の名前を呼んだ。

「は、はい」

美春は息を呑んで、リオを見つめ返した。

何故だろう。

心臓の鼓動が高鳴り、美春はリオに吸い込まれそうになった。

「いつか俺の前世のことを聞いてもらえませんか？　重たい話になると思います。けど、美春さんに聞いてほしいんです。お互いにもう少し状況が落ち着いたら、その時に……」

言って、リオは反応を窺うように美春を見据えた。

突然、何を言い出しているんだろうと思われているかもしれない。

だが、そう思っても言わずにはいられなかった。

「……はい」

じっとリオを見つめ返すと、美春は静かだが良く通る声で首肯した。

「ありがとうございます」

嬉しそうに笑みを浮かべて、リオは礼を告げた。

すると、そこで。

「失礼します。お待たせいたしました。こちらが食前酒となります」

給仕係が食前酒を持ってやって来た。
なかなか良いタイミングだったかもしれない。
もう少し早ければ中途半端なところで話を中断することになっていたのだから。
食前酒が配られ、店員が部屋から出て行くと。

「それは食前酒なんですが、ノンアルコールカクテルでして――」

先ほどまでの少し重たい空気を振り払うように、リオが淀みない口調で美春に配られた食前酒について説明を始める。
美春もそんなリオに合わせるように興味深そうに説明に耳を傾けた。
順次、食事も運ばれて、二人は穏やかな雰囲気の中で少し遅めのランチを楽しんだ。

第６０話　セリア＝クレールとの再会

美春と一緒に買い物を終えて岩の家へと戻った日の翌日、リオは三人を引き連れてガルアーク王国へと移動した。
アマンド付近に位置する森の中で隠れやすい場所を見つけると、そこを当面の間の本拠地と定める。
さらに翌日、リオは単身でベルトラム王国の王都へと向かった。
美春達がいる場所からベルトラム王国の王都まで、リオが全力で移動すれば数時間もかからずに往復できる距離だ。
とはいえセリアを見つけ出すのにどれくらいの時間がかかるのか不明であるため、最大で三日は家を空けると美春達には伝えてある。
日常生活に必要な物資はすべて揃ってるし、家に置いてある生活用の魔道具や霊具の使い方も説明してあるので、家の中で暮らすだけならば心配する必要はないだろう。
とはいえ、まだまだこの世界に来たばかりで美春達の不安も大きいはずだし、長期間にわたって家を空ければ心配もかけてしまうはずだ。
リオとしてはなるべく早くセリアの無事を確認し、早めに帰還したいところだった。

「あれは……」

ベルトラム王国の王都へと向かいながら、周囲に異常がないか気を配っていると、リオは地上に多くの人間が隊列を作って移動している姿を発見した。
少し気になり、その場でホバリングするように浮遊すると、精霊術で視力を強化し、目を凝らして、その様子を眺める。

「軍隊か？」

進行方向にはガルアーク王国がある。

国境にたどり着く前にベルトラム王国の都市があるが、さらにその先に進めばすぐにアマンドにたどり着く。

リオは顎に手を当て、考察するように地上を見下ろした。

「少し探ってみるか」

ゆっくりと地上へ降下し、部隊から少し離れた位置に着地すると、オドとマナを操作して、リオは自らの周囲にオドを帯びた風を幾重にも纏わせた。

すると、リオの姿が少しずつ周囲の風景と一体化していき、やがて周囲から完全に不可視となる。

これはオドを帯びた風を用いた光学迷彩の精霊術だ。

もっとも、音や気配まで遮断しているわけではなく、オドを視認できる者が目を凝らすと簡単に見えてしまうし、オドを視認できずともオドの知覚能力が高い者は違和感を覚えてしまう。

また、人にぶつかるなどして外部から衝撃を受けると迷彩が解けてしまうため決して油断はできないが、人間族に対しては有効な隠れ蓑となる。

術がきちんと発動していることを確認すると、リオは足早に軍隊へと向かった。

「もしかしたら本国と戦争になるんだよなぁ。本当に勝てるのかよ、俺ら」

行軍しながら会話をしている一般兵のグループを発見し、リオは耳を傾けた。

「だよなぁ。反革命軍なんて体裁をとっちゃいるが、俺達って要は反乱軍だろ。どっちが反逆者なんだよ」
「おい、馬鹿なこと言うんじゃねえよ。お偉いさんに聞かれたら鞭打ちもんだぜ」

兵士の一人が声を潜めて男達の会話を注意した。

「そうは言ってもよ。王都から逃げてるのは事実だろ？」
「……俺達にはフローラ様がいる。それに伝説の勇者も現れたんだ。そう悲観したもんじゃねぇさ」
「勇者か。なんか実感が沸かねぇな。伝説の存在が俺達と一緒にいるなんてよ」
「けどお前らもあの光の柱を見ただろ？　上層部から直々の通達だ。嘘とは思えないぜ」

リオは僅かに目を見開いた。

（勇者だと？）

勇者といえばお伽話の中に出てくる存在だ。
神々の遣いし使徒。
かつて魔族と戦った英雄達。
リオが知っているのはそれくらいの表面的な情報だけだった。

（あの六本の光柱が勇者を召喚したのか？）

男達の会話を聞く限りそうなるらしい。
しかも状況証拠からするとその可能性はかなり高いように思えた。
伝承では伝説の勇者は六人いたらしいから、光の柱の数とも一致する。

（光の柱が勇者を召喚したのだとすれば、みーちゃん達は勇者ではないことになるけど……）

光の渦に巻き込まれたという美春の証言とも一致する。

そうなると勇者は美春達の知り合い二人である可能性が高い。

「そもそも俺らは何処に向かってんだ？　ガルアーク王国なのか？」

リオが考え事をしている間にも男達の会話は進んでいた。

「俺らの大半は途中のロダン侯爵領で待機だろ。ガルアーク王国に行くのはお偉いさんと一部の部隊だけだ。流石にこの人数で他国を闊歩するわけにいかねえだろうからな」

「ガルアーク王国が味方をしてくれるのは確かなんだよな？」

「知るかよ。上からの通達通りなら、そうなんだろ」

「そうだとしたら少しは希望が持てるな」

「フローラ様がいるし、勇者まで現れたんだ。とりあえずは安泰って考えていいんじゃねぇか」

軽く一緒に歩くだけでもかなりの情報を収集することができる。

（ここにいるのはクーデターで没落した連中か。ガルアーク王国を味方につけたということは、本国の方とは敵対関係になるということか？）

かつてリオがシュトラール地方にいた頃はベルトラム王国とガルアーク王国は友好関係にあったはずだ。

この数年間で情勢に変化があったのかもしれない。

行き先がロダン侯爵領だというのならばガルアーク王国の中にま

で行くことはないし、戦争をしに行くわけでもないため、美春達に危害が及ぶ心配はしなくてもいいだろう。

（勇者が何者なのか少し調べておきたいな）

もしかしたら美春達の知り合いかもしれない。

そうでなくとも勇者という存在が何のために現れたのか知っておきたいという気持ちもある。

とはいえ、このままここにいても一般兵から大した話が出てくるとは思えない。

これ以上の話を聞きたかったら貴族や部隊の高官がいる場所へ忍び込む必要がありそうだ。

もしくはこのまま勇者の元へ行ってその顔を確認するか。

リオは逡巡（しゅんじゅん）した。

（それにここにいる人間達がベルトラム王国の反乱軍だというのなら……）

もしかしたらこの中にセリアもいるかもしれない。

セリアがどの派閥に所属しているのかは不明だが、探してみる価値はある。

リオは部隊の奥深くへと潜りこむことを決めた。

幸い休憩時間が重なったようで、部隊の動きが止まる。

その間にリオは内部へと侵入し、貴族や高官がいると思われる場所を重点的に探っていく。

（いないか）

意外なのか当然なのか、若い貴族や騎士の中にはリオがどこかで見たような顔がたくさんあった。

だが、セリアの姿だけは見つからない。

（残っているのはあそこだけだ）

最も厳重に警備が敷かれている馬車へと視線を向ける。

おそらくあの馬車の中にこの部隊の指揮官が乗っているのだろう。

（あの中に勇者もいそうだな）

今のところ勇者らしき人物の姿は見つかっていない。

いるとしたらあの馬車の中だろう。

リオが足を動かそうとしたその時。

「ん～！」

馬車の中から一人の青年が伸びをしながら姿を現した。

「あー、尻が痛いな」

と、尻を押さえながら一人の青年が顔を顰（しか）めて馬車から姿を現した。

彼は召喚された勇者の一人である坂田弘明だ。

弘明に後れてフローラとロアナも馬車から降りてきた。

「ヒロアキ様、少しはしたないですわ」

ロアナが僅かに顔を赤らめて弘明を諌めた。

そのすぐ傍にいるフローラも顔を赤くしている。

「あー、悪い悪い」

弘明はばつが悪そうに頭を掻いた。

（あれが勇者か？）

容姿は日本人、喋っている言語は日本語、身のこなしは隙だらけで平凡そのものだが可能性は高そうだ。

すると、そこで。

「勇者殿」

ユグノー公爵の息子であるスティアードが、数人の騎士を引き連れて、弘明のもとへとやって来た。

「ああ、えっと……」

顔と名前が一致しないらしく、弘明は首を傾げた。

「スティアード＝ユグノーです」

スティアードが微笑を浮かべて名乗りを上げる。

フローラといいロアナといい、ここら辺の人間のことはリオも覚えていた。

フローラはある意味でリオの生活を一変させた人物だし、ロアナはリオの同級生の中でも中心的な位置にいる人物だった。

スティアードにいたっては何かと自分に難癖をつけてきたことから嫌でも顔を覚えている。

ところで、リオはスティアードがラティーファの兄だということを知らない。

ラティーファが奴隷だった頃のことを話したがらないというのも

あるし、リオからも何となく聞きにくかったからだ。
もちろんリオを暗殺するようラティーファに命令した人物が誰なのかを聞きだそうとしたことはある。
だが、ラティーファはユグノー公爵の名前すら知らなかったため、結局、ユグノー公爵が黒幕だったということをリオは知ることはできなかった。
だから、スティアードがラティーファの兄であるという事実と結びつくこともない。

「ああ、ユグノー公爵の息子か。よろしくな。俺は坂田弘明、いやヒロアキ＝サカタだ」
「……よろしくお願いします。勇者殿」

スティアードは微笑を崩さず弘明から差し出された手を握った。

「で、何か用か？」
「ええ、実は是非とも勇者殿に稽古をつけていただきたいのです」
「稽古だって？」
「はい。せっかく伝説の勇者様が身近におられるのです。この機会にご教授頂きたいと思いまして」
「んー、そう言われても、俺の型は我流だから教えられることなんて何もないぞ」

弘明が困り顔を浮かべる。
我流以前に弘明は刀を握ったことがない。
それでもどこか自信が覗えるのは勇者の力が関係しているのか。

「私もヒロアキ様の戦う姿を見てみたいですわ」

すると、弘明の後ろに控えていたロアナがそう提案した。

「あー、まぁ、ロアナがそう言うんだったら……」
手合せするのも吝(やぶさ)かではない。
弘明はちらりとフローラにも視線を向けた。
「フローラ姫はどうだ？」
「あ、はい。私も見てみたいと思います」
「そうか。なら、やってみるのもいいかもしれないな。俺もどれくらい自分ができるのか確認してみたかったし」
場のお膳立てがされたことを確認し、弘明は頷いた。
どこからともなく自らの神装である刀を取り出す。
「決まりですね。では私の相手をお願いします」
一歩前に出て、スティアードが不敵に微笑む。
そのまま周囲の人払いをすると、二人は武器を構えて向き合った。
「いつでもいいぞ。俺の武器は刃引きした状態で具象化してあるから安心しろ」
弘明が刀を構えながら言った。
「それが勇者様の神装ですか……」
初めて見る刀という武器にスティアードが興味深そうな視線を送る。
切れ味は鋭そうだが、随分と脆そうだ。
だが、どんな見た目であっても神装であることに変わりはない。

スティアードは気を引き締めた。
「では、参ります！」
言って、魔法で強化した身体能力で、スティアードが弘明へと一気に迫る。
「おお、速いな！」
弘明は正面からスティアードの模擬剣を受け止めた。
そのまま鍔迫り合いをして二人の視線が交差する。
弘明はニヤリと笑みを浮かべると。
「おらぁ！」
叫んで、魔法で強化された力をものともせず、スティアードを押し返した。
たまらずスティアードの身体が吹き飛ばされる。
「くっ！　圧倒されただと？」
スティアードは驚愕した。
碌に筋肉もついていない身体つきからは想像もつかぬ馬鹿力だ。
「行くぜ！」
弘明が刀を振りかざして迫る。
「そのように大きな得物で！」

弘明の振るう刀の軌道を読み、スティアードは軽々とそれを躱した。
大振りになった攻撃の隙を見逃さず、スティアードがそのまま横薙ぎに剣を振るう。
「あぶねぇ！」
瞬間、弘明の身体が加速し、軽々とスティアードの剣を躱した。
「な、なんだと、馬鹿な！」
「今度はこっちの番だ！」
ぶおん、と空を薙ぐ音をたてながら、弘明の刀がスティアードを襲う。
「くっ」
かろうじて弘明の一撃を受け止めたスティアードだったが、そのまま大きく吹き飛ばされる。
追い打ちをかけるべく、弘明がスティアードへ迫った。
二人の戦いが少しずつ熱くなる中、周囲にいる者達も食い入るように模擬戦を眺めていた。
リオも遠くから黙って二人の戦いを見つめている。
（パワーとスピードはあるが刀の使い方と体さばきが滅茶苦茶だな）
リオが弘明に対して抱いた感想だった。
弱くはないが、現時点だとせいぜいが人間族の騎士一人程度の強さだろう。
素人なだけあって伸びしろはあるが、あまりセンスは感じられな

い。
刀の扱い方を知っている人間がこの世界にいるとは思えないし、あのままでは力任せに戦う戦闘スタイルを脱することはできなさそうだ。
普通の刀を使っていたらとっくに駄目にしているであろう乱暴な戦い方だった。
とはいえ完全な戦闘の素人が曲がりなりにもこの世界の騎士と一対一で戦えているのは驚異的である。

（あれが勇者の力なのか？　身体能力と肉体強度を強化しているみたいだが、あの刀になにかありそうだな）

同じ日本人でも美春達には弘明のような戦闘力はないはずだ。
それは弘明が勇者だからなのだろうが、弘明を勇者たらしめているのはあの刀なのではないかとリオは考えた。
弘明は日本語を喋っているはずなのに、この世界の人間と会話が成立している。
あの刀が弘明のオドを吸収して勝手に事象を引き起こしているのだろう。
まだまだ隠し玉はありそうだが、模擬戦でそれを使用するとは思えないし、これ以上ここにいても目立った情報が得られるとも思えない。
リオは踵を返してセリアの探索を再開した。

だが、結局、リオはセリアの姿を見つけることはできなかった。
無駄足になったようにも思えるが、勇者の一人について情報を得られたのは大きい。
弘明は美春達の知り合いではなかったが、他の勇者達を探していけばいずれは出会える可能性があることを知れただけでも収穫だろう。

とはいえ、セリアがいないというのならばもはやこの場に用はない。
ベルトラム王国の王都へ向けて、リオはその場を後にした。

☆★☆★☆★

ベルトラム王国へとたどり着き、リオが真っ先に確認したのが自らの指名手配の有無である。
ガルアーク王国内では配布されていないリオの指名手配書だが、ベルトラム王国内ではしっかりと有効なまま残っていた。
手配書には当時のリオの似顔絵が描かれており、他にその特徴が書かれている。

「面倒だな」

リオは小声で呟いた。
ベルトラム王国内限定でリオが指名手配がされている理由はいくつか考えられるが、それが正しい保証はないし、どうだっていい。
大事なことは今後もリオがリオとしてベルトラム王国内で活動することは避けた方がいいということだけだ。
とはいえ、今後、美春達に自分が指名手配犯であることを説明する事を考えると、少しだけ陰鬱な気分になる。
「実は指名手配されています」なんて、いくら無実とはいえ、説明するのは少し躊躇ってしまう。
しかし、今後も一緒に生活していくとなると、いつまでも隠したままでいるのは難しいだろう。
都市があるのにわざわざ人里から隠れるように住み続けていれば疑問に思われてもおかしくはない。
言葉を覚えれば必然的に美春達の行動範囲を広げていくことになるのだろうから。

小さく溜息を吐くと、リオは指名手配書が貼られた掲示板の前を立ち去った。

そのままリオは商業ブロックへと向かう。

最後にこの都市にいたのは三年以上も前のことだが、目に映る都市の景色に目立った変化はないように思える。

だが、リオは少し違和感を覚えていた。

クーデターが起きたばかりだというのに、都市の中が妙に活気に溢れているのだ。

いくら国王が変わっていないとはいえ、国の上層部を揺るがすほどの政変があったのであるから、普通は市勢にも影響が出そうなものである。

少し気になって、リオは露店で情報を収集してみることにした。

「この国では王城内にてクーデターが起きたと聞きましたが、随分と都市は活気に溢れているんですね」

多めに肉の串を注文すると、旅人を装って露天の女性に何気ない風に尋ねてみる。

「あー、まぁ、つい先日まではちょっと活気がなかったのは確かだね。でも、もうそんな空気は吹き飛んじまったよ」

と、露店を経営している女性は嬉しそうな笑みを浮かべて答えた。

「何かあったんですか？」

「何かって、勇者様が降臨したんだよ。その祝典が近々開かれるってんで、今はみんな浮かれているのさ」

「勇者ですか」

「ああ、あんたもお伽話くらい聞いたことがあるだろ。あの勇者さ。

先日、どでかい光の柱が立ち上がったのは見ただろ？　王城からもドでかい光が立ち上がってさ。あの光と一緒に勇者様がやって来たんだとさ！」

女性はずいぶんと興奮した様子だ。

リオとしてはあまり実感はないが、民にとって勇者とはそれほどに大きな存在だったということか。

それとも、普段魔法を目にすることのない者達があれほど大規模な現象を目にしたことが原因か。

「この国にも勇者が現れたんですか。それはめでたいですね」

「ああ、めでたいよ。これでこの国も安定するといいんだけどねぇ」

「そうですね」

小さく笑みを浮かべ同意すると、リオは肉を胃の中に入れて空腹を満たして、その場から立ち去った。

（この国にも勇者が現れたか。セリア先生を探すついでにこっちの勇者についても調べてみた方が良さそうだな）

そう決めると、まずはかつて自分が通っていた王立学院へと向かうことにした。

セリアがまだ講師業に就いているのならばそこにいるはずだ。

彼女ならば勇者について何か知っているかもしれない。

光学迷彩の精霊術を駆使しているため、リオにとっては日中であっても潜入は難しいものではなく、かつての記憶を頼りに図書館にあるセリアの研究室へと向かっていく。

（いない……）

だが、部屋の中にあった彼女の私物はすべて撤去されており、もぬけの殻になっていた。
一度、部屋の外に出て、あらためて扉を確認する。
扉にはセリアの名前が刻み込まれた木版が張り付けられていることから、ここが彼女の研究室であることは間違いなさそうだ。
（なら、どうしていない？　クーデターに関係があるのか？）
処刑、投獄というワードが頭にちらつき、リオは不安に駆られた。
すぐ側にある他の研究室の中に人の気配があることを確認すると、リオはその中へ入り込んだ。
「ん――」
突然、背後から扉の開く音がして、男性の講師が振り返ろうとする。
男が誰何（すいか）の言葉を口にしようとする前に、リオはその背後をとった。
「すみません。王立学院で講師をしているセリア＝クレールに用事があるのですが、彼女はどこにいらっしゃるのでしょうか？」
男の頭に軽く手を触れ、オドを流し込み、ほんの数秒で対象の体内のオドの流れを強制的に支配すると、男を解放し、リオは質問を投げかけた。
「ああ、セリア君を探しているのか。彼女は――」
すると、男は視点の定まっていない目でぼんやりとリオを見つめだし、自らがセリアに関して知っている情報のすべてを吐きだした。

今、講師の男の目にリオは映っていない。
リオに違和感を抱かぬように勝手に自己解釈して、何の警戒もなしに話し込んでいる。
それは精霊術による強力な幻術の一種で、認識阻害と似てはいるがより高度なものである。
術者は被術者がどのような幻像を見ているのかは知ることはできないが、術者にとって都合の良いように被術者に虚構の現実を見させることができる。
その反面、緻密なオドの制御力とマナへの干渉力を要するため、扱いは難しい。
あまり無暗に多用しようと思える手ではないが、こうして緊急時に尋問する際には非常に役立つ。
デメリットとしては、直接対象に触れて体内のオドを操作する必要があり、相手がオドの操作に長けている場合には簡単に妨害されてしまうということだ。
また、周囲の者が被術者のオドの乱れに気づいても簡単に解除されてしまうし、幻術をかけるのに成功したとしても、強い精神の持ち主には抵抗され、効果が減衰することもある。
さらに、術の継続時間もそこまで長いものでなく、幻術状態を持続させるためには定期的に対象に触れてオドの流れを操作し続けなければならない。
ゆえに、この幻術をかけるのならば、相手が油断していて、オドの操作に長けていないことが必要となる。
ちなみに、人間族ならば割と簡単にこの幻術をかけることができるが、精霊の民を相手にこれを成功させることはリオでも非常に難しい。
また、幻術から覚めた後はぼんやりとした状態になるという特有症状が現れるため、幻術の存在を知っている者は割と簡単に自身が幻術にかけられたことに気づく。

「ありがとうございます。助かりました。それでは失礼します」
「いや、気にしないでくれ」
お礼の言葉を残し、リオが部屋から立ち去る。
研究室に男の声が虚しく響き渡った。

☆★☆★☆★

ベルトラム王国の王城内にある庭園にて、ベルトラム王国史上有数の天才と名高いセリア＝クレールは物憂げな表情を浮かべて佇んでいた。

「セリア、どうしたんだい、こんな場所で？」

そんな彼女の背に軽薄そうな声がかけられる。
声の主に察しがつき、セリアは不快感を胸に押し込めたまま振り返った。
そこに立っていたのはシャルル＝アルボー。
現在、ベルトラム王国にて、国王フィリップ三世から任命を受けて国の執政を取り仕切っているヘルムート＝アルボーの息子である。

「研究の合間に風に当たりに来ただけですわ。ちょっと根を詰めすぎたみたいで」

視界に映った甘ったるい笑みに嫌気がさしながらも、セリアは完璧な微笑を浮かべて答えた。

「ああ、いつだって頑張りすぎなのは君の美点だ。少しは気が休まる時も必要だろうね。けど、僕という存在がいるのに、こんな場所に一人で気晴らしをしようと考えるのは感心できないな」

その笑顔にシャルルは気分を良くし、馴れ馴れしく彼女へ近寄った。
そして、若干の咎めを含んだ声色で、セリアへと語りかける。
「……ごめんなさいませ。貴方は忙しいかと思いまして」
セリアは底知れぬ拒絶感を抱いたが、困ったように曖昧な微笑を浮かべてそれを隠した。
それが今の彼女にできる最大の抵抗だ。
セリア＝クレール、彼女はベルトラム王国内ではフォンティーヌ公爵家に匹敵する魔道の名門クレール伯爵家の長女である。
近年、彼女が開発した新型の測定石は漠然とはいえ魔力総量の測定を可能とし、魔法学に革新的な発達をもたらしたと評されており、近隣諸国からも注目を集めていた。
そんな彼女は現在二十一歳で、貴族としての結婚適齢期は僅かに過ぎてしまったが、いまだに独身のままだ。
つい先日まで、そんな天才の功績を掠め取ろうと、ベルトラム王国内外を問わず、多くの貴族達が彼女に求婚するという事態が生じていた。
それに終止符を打った男がこのシャルル＝アルボーである。
歳は壮年で、既に六人の妻を持っており、有能なセリアを国内に縛り付けるため、ヘルムートの命令によりセリアを七人目の妻とすることが決められた。
対プロキシア帝国との関係において、もともとセリアの父であるクレール伯爵は中立派の貴族の一人であった。
だが、クーデターが起きた現在はヘルムートの勢力になし崩し的に組み込まれてしまっている。
そんな状態では父のクレール伯爵もヘルムートの要望を跳ね返すだけの影響力は持っていなかった。

「君のためなら大抵の用事は後回しにしてしまうよ、僕は」

周囲の庭園に広がる花の蜜よりも甘い台詞を、真顔で吐けてしまうこの男の神経に、セリアは鳥肌が立ちそうになった。

こんな男に自分の身体が近い未来に汚されるかと思うといっそ自殺したくなる。

だが、死ぬ勇気はない。

死にたくない。

まだ、生きたい。

やり残した研究はたくさんあるし、夢とか、やってみたいことだってたくさんある。

その一つが、普通に恋愛をして、普通に幸せな結婚生活を過ごすことなのだが、もはやその夢は崩れ落ちる寸前であった。

貴族として政略結婚が重要であることはわかっているが、こんな情勢でもなければセリアはそれを叶えるだけの影響力を持っていたのだ。

まぁ、その相手が見つからなかったからこそ、こうして適齢期を過ぎても独身なわけであるが。

「お上手ですのね」

身の毛のよだつ鳥肌を感じながらも、セリアは少し照れた風を装って、その言葉を口にした。

いやだ。

今すぐにもこんな国は出て行きたい。

それくらいに嫌気がさしているが、もし捕まって、セリアが自分の意思で逃亡したことが判明すれば実家の立ち位置は相当に悪くなるはずだ。

そうなれば家族にまで迷惑をかけることになる。

もし逃げるのならば、自分の意思で逃亡したと思われないように、誰の目にもとまらずに逃げ出す必要がある。
しかし、彼女にそんな力はない。
最近では情勢が情勢だからと理由をつけられ、重要人物であるセリアは王城で軟禁状態の生活を強いられ、護衛まで付いている。
こんな状態で人目に付かずに城から抜け出すのは不可能だった。
仮に逃げられたとしても貴族として育ってきた自分が一人で生きていけるとは思えない。
せめてもの腹いせに好き勝手に研究をしており、自分の功績が認められているからか、上層部は好きにやらせてくれているのが救いである。

「そういえば召喚された勇者様とそのお連れの皆様はどうしていらっしゃるのでしょうか？　まさか私の開発した測定石でも魔力が計測不可能とは思いもしませんでしたが……」

陰鬱な気分を忘れられるようにと、自らの知的欲求を満たすため、セリアはそんな質問を投げかけた。
研究をしている間だけは嫌なことを忘れていられるから。

「ああ、彼らは実に素晴らしいね。まだ幼いとはいえ、勇者の彼は落ち着いているし人格者だ。他の子達も言葉は通じなくとも健気に頑張っているよ」

セリアが恥ずかしがって、話題を逸らしたと勘違いしたのか、シャルルは自尊心を満たしたかのようにほくそ笑んだ。
そうしてベルトラム王国で召喚された勇者達の情報を口にする。
ベルトラム王国に召喚されたのは少年が三人に少女が二人、そのうち勇者だったのは一人の少年であった。
勇者は十七歳の少年で、物腰が柔らかく、金髪で見た目も非常に

整っており、周囲を惹きつける魅力を持っている。
突然の召喚に対しても深く混乱することなく事態を呑みこみ、王国へ協力してくれることを約束してくれたため、王城内での評価は非常に高い。
勇者と一緒に召喚された者達も神装はないが恐ろしい程の魔力を持っており、その魔力を活かすべく勇者と一緒に教育を受けさせているそうだ。

「じゃあ僕は仕事があるからそろそろ戻るよ。君もいつまでも外にいたら身体が冷えるから、早く引き上げた方がいい」

思考に没頭しながら適当に返事をしていると、シャルルがそんなことを言ってきた。

「わかりましたわ。もう少し風に当たったら研究室に戻ろうかと思っております」

美しい所作でセリアが返事をすると、シャルルは気障に笑ってその場から立ち去った。
その後ろ姿を眺めて、セリアが小さく顔をしかめる。
溜息を吐き、静謐（せいひつ）な空間を埋め尽くす花々を眺めると、セリアは自身の研究室へと戻ることにした。
そんな彼女の後を追うように無言で護衛の騎士が付いて来る。
この護衛の男のこともセリアは嫌いだった。
時折、顔を見つめられるくらいならまだいい。
それくらいならまだ我慢できる。
だが、この男は護衛の合間に胸やスカートにチラチラと視線を送ってくることが多い。
本人は気づかれていないと思っているのかもしれないが、セリアはそれに気づいていた。

自分はあまり男好きされる身体ではないとセリアは思っていたが、実際にこういった視線を送られて覚える生理的な嫌悪感はたまらなく不快である。
今も背後を歩く男の視線を臀部に感じ、セリアはげんなりとした気分になった。

「では私は研究に戻りますので」

少しばかりぶっきらぼうな声色で告げ、セリアは部屋の扉を閉めた。
部屋の中に入り、一人っきりになると、大きく溜息を吐く。
ガチャリ。
背後から閉めたばかりの扉が開く音が聞こえた。
扉を開けたのは護衛の男だろうか。
ノックもなしに扉を開けるとは何事だ。
セリアは不快気に振り返った。

「何か用……え？」

そこに立っていたのは見知らぬ少年だった。
人を安心させるような優し気な笑みを浮かべ、線は細いけどよく見ると精悍（せいかん）な体つきをしているのがわかる。
歳はまだちょっと若いかもしれないけど、正直、容姿はセリアの理想ど真ん中かもしれない。

「……護衛の騎士はどうしたのかしら？」

だが、だからといって無警戒に話しかけるわけにはいかない。
セリアは厳しい声色で男の素性を尋ねた。
もしかしたら自分を狙ってやって来た他国の間者かもしれない。

間者に見た目の良い男女を選ぶのは常套手段だ。
王城から出て行きたいとは思っているが、正直そんな出て行き方は勘弁したい。
行った先でどんな待遇が待ち構えているかもわからないのだから。
とはいえセリアは近接戦闘はからっきし向いていない。
反撃するなら魔法を使って攻撃することになる。
じりじりと後ずさり、セリアは少年から距離をとろうとした。
すると。

「護衛の人なら何の異常もなく警備をしていますよ。お久しぶりです、セリア先生」

少年が微笑を浮かべて耳通りの良い声でセリアに話しかけてきた。

「誰？」

セリアは何故か懐かしさを覚えた。
以前、これと似たような場面があったような、そんな気がした。
セリアが僅かに首を傾げる。

「リオです。こちらへ戻って来ましたので、少し挨拶にと思いまして」

苦笑しながらそう言うと、少年が首飾りをとった。
すると髪の色が瞬時に灰色から黒へと変わる。
そこにはセリアが良く知っている人物の面影を持った少年がいた。
数年見ない間にかなり成長したようだが、黒い髪だと、それがよくわかる。

「リオ……なの？　リオ！」

先ほどまで感じていた陰鬱な気分は一気に吹き飛んだ。
今はそんなことはどうだっていい。
目じりに涙を浮かべ、セリアはリオに抱き着いた。

第６１話　迫られた選択

「一度、手紙が来てからずっと連絡がなかったから心配していたのよ！」

セリアはリオの胸に身体を預けたままその顔を見上げた。

ぽかぽかとリオの胸を叩く。

「すみません。ヤグモからこっちに連絡を取る手段がなくて……」

リオが少し困ったように謝罪する。

既にリオがベルトラム王国を立ち去ってから三年以上の月日が流れている。

その間に手紙を送った回数は一度だけ。

セリアが心配するのも無理はないのかもしれない。

「そんなことわかっているわよ！」

セリアの声が室内にこだました。

部屋の外にいる騎士はリオの幻術によって異常がないものとして警備をしているはずだが、偶然に部屋の前を通りかかった者がいればセリアの叫びを聞きとってしまった可能性もある。

リオは少しだけ焦ったが、その心配を口にすることはしなかった。

自分の胸の中にいるセリアがあまりにも儚く思えてしまったから。

「ごめんなさい。心配をおかけしました」

「馬鹿、馬鹿」

力弱く呟いて、目尻に涙を浮かべ、セリアはリオの胸に顔を埋めた。

「よく帰って来てくれたわね」

トクン、トクン、とリオの胸の鼓動が伝わってきた。

温かくて、安心感がある。

セリアは心の底から胸を撫でおろした。

このどうしようもなく不安な状態において、リオがこうして会いに来てくれたことが、危険な旅に赴いたリオの安全が確認できたことが、どうしようもなく嬉しかったのだ。

リオが現れてくれた。

ただそれだけのことなのに、こんなにも安心できるなんて、セリアは自分自身のこととして驚いていた。

「でも、このタイミングで来るなんてずるいわよ」

ぼそりとセリアが呟く。

どういうわけか先ほどから全身が熱い。

いまだかつてない程の心臓の高鳴りをセリアは感じていた。

それは単にリオが帰って来て嬉しいからなのか、一瞬とはいえ立派に成長した姿に見惚れてしまったからなのか、それともこうして抱き着いてしまっているからなのか。

すべてが原因なのかもしれないが、今このタイミングでやって来たというのが最大の原因だとセリアは考えている。

だって、王城に軟禁され、親族を含めて周囲の人間との接触を断たれ、望まぬ結婚を強いられて。

セリアの心は張りつめて限界に近かったのだから。

そんな状態でこうしてリオがやって来てくれたら、安心したり、喜んだり、色んな感情が沸き上がっても無理はないと思うのだ。

今セリアがリオに抱き着いているのも、そうやって心を揺さぶられているからに違いない。
そう考えて、セリアは必死に自らの胸の鼓動を押さえつけようとした。

「タイミングですか」

不思議そうにリオが尋ねる。
今のセリアが何を考えているのかはリオにはわからない。
だが、今のセリアの様子と現在のベルトラム王国の時勢を考えると、ここ最近の彼女にはあまり良くない出来事が起こっていたのかもしれない。
何の前置きもなしにそこら辺のことを尋ねるのもどうかと思うが、今はあまり時間がなかった。
扉の前にいる騎士にかけた幻術は早ければ数十分ほどで解けてしまうし、誰かがセリアに用があって訪ねてくる可能性もある。
手短に話を終える必要があった。

「……この国の情勢は色々と聞きました。何やらだいぶ慌ただしいみたいですね」
「ええ……」

弱々しく微笑を浮かべて、セリアが相槌を打つ。

「シャルル＝アルボーという男と結婚すると聞きました。おめでとうございます、と言った方がいいんでしょうか？」

当時はあまり結婚する気はなかったセリアが結婚するというのだ。
そのまま祝福してよいものなのかどうか測りかねて、リオが困ったように尋ねる。

だが、案の定というべきか、セリアの顔が翳(かげ)って、リオはセリアが結婚を望んでいないことを察した。

「やめて。私はあの男と結婚なんてしたくないのよ！」

何故かリオに自分の結婚が知られることに底知れぬ抵抗感を覚え、セリアは今にも泣きそうな顔を浮かべて拒絶の言葉を口にした。

そう、リオの言葉はセリアの心に楔(くさび)のように打ち込まれているのだ。

「セリア先生……」

セリアの悲痛な叫びがリオの胸に突き刺さる。

リオは何も言うことができなかった。

安易な慰めの言葉をかけて事態が好転するというのならば、いくらでもそんな台詞を吐いてやろうとは思う。

だが、そんな言葉など何の意味もない。

セリアは賢い女性だ。

苦しみを誤魔化すどころか、かえって現実を実感させてしまうだけだと、リオは過去の経験から知っていた。

そうやってリオが困っていると。

「なんて、もうどうしようもないんだけどね。私は貴族だし、政略結婚くらい我慢しないといけないってことは理解しているの」

精一杯の笑みを浮かべて、セリアは強がった。

そもそも政略結婚は双方の家に利益があって初めて同意の下に締結されるものであるが、今回の事案は半ば脅迫により同意を取り付けたようなものだ。

しかも正妻ならともかくセリアは七人目の妻だ。

いくら適齢期を僅かに過ぎたとはいえ、名門伯爵家の令嬢に対し馬鹿にしているのか怒鳴り返したくなるような扱いである。
娘の結婚を望んでいたセリアの父も今回の結婚には甚だ不満を抱いており、心情としては親子共々その有効性について大いに異議を唱えたいところであった。
だが、現状においてこの国の権力を牛耳っている国粋主義者のアルボー公爵に逆らえば、最悪、クレール伯爵家は謀反の意志ありとしてお家の取り潰しをされかねない。
セリアは逃れられない運命に捕らわれていた。

「最後にこうしてリオに会えたんだもの。元気が出てきたし、我慢して結婚するわ」

セリアが寂しそうに微笑む。

「先生……」

一瞬、リオの喉元に「俺と一緒に来ませんか」という言葉が出かかった。
だが、果たして軽はずみにそんな言葉を口にしてもいいのか。
セリアが今置かれた状況を打開するためには結婚そのものをどうにかする必要があるが、単にセリアをここから連れ出せばいいというものではない。
貴族としての立場、周囲への影響、連れ出した後のセリアの生活、配慮しなければならないことはたくさんある。
もしかしたら取り返しのつかないことになる可能性だってあるのだ。
そうすることが本当に正しいのか。
間違っていたとしたら自分に責任はとれるのか。
そもそも彼女がそれを望むのか。

もしかしたらセリアは後悔するかもしれない。
そうなればリオも自らの行いを悔いることになるだろう。
逃亡した事実が明るみに出れば確実に厄介なことになる。
万が一の事態が生じた時、リオはセリアをずっと守り続けなければならない。
カラスキ王国でゴウキ達の同行を拒否したのは、他人の人生を抱え込むだけの覚悟がなかったというのもあったからではないのか。
そう考えると、安易にセリアを連れ出そうとしてはいけないような気がした。

「……」

黙って、リオはセリアの顔をじっと覗きこむ。
セリアも弱く微笑んでリオの顔を見つめている。
彼女は今にも消えてしまいそうで――。
そう考えると、リオの心の針は振りきれた。

「俺と一緒に来ませんか？」

リオは決然とその言葉を口にした。
そうだ、こんな場所にいてもセリアが幸せになることはない。
今のセリアを見て、リオは確信した。
それだけは確かだ。
となれば、リオが行うべきことはただ一つ。

「……え？　え？」

セリアが呆けたようにリオを見つめる。

「結婚が嫌なら逃げましょう。俺が先生をこの城から連れ出します

から」

セリアは自分が辛かった時期に味方になってくれた。
そんな彼女が今、辛い目に遭っている。
ならばリオは彼女の味方になろう。
深く考える問題じゃない。
このまま望まぬ結婚をして、生涯を終えるセリアの姿なんて見たくないのだから。
セリアが幸せになれる道を見つけ出してみせよう。
それが難しいことだとは理解している。
だが、それで問題は解決するというのならばやってみせよう。
後はセリアが逃亡を望むかどうかだけだ。

「リオ……」

一瞬、セリアは希望を抱いたような表情を浮かべた。
だが、すぐに苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ直すと。

「……駄目よ。もし途中で脱走が見つかって捕まりでもすればみんなに迷惑がかかるわ。その時、私は生き残れても貴方は確実に処刑される」

セリアはリオの提案を拒絶した。
心情はともかく、我が身可愛さに周囲の大切な者達に迷惑をかけるのは憚(はばか)られる。
誰にもバレずに逃げられれば真相は不明で処理のしようがないが、途中で捕えられた場合には言い訳のしようがない。
セリアの存在価値を考えれば家の取り潰しはないだろうが、クレール伯爵家の国内での立場はかなり悪くなるはずだ。
シャルルとの結婚がどうなるかはわからないが、最悪、家族を人

質にとられ、国のために、いや、ヘルムートのために、セリアは魔道具を開発することを強制されるかもしれない。
それに、ようやく生存を確認できたリオが自分のせいで殺されると思うと、計り知れない拒絶感を覚えた。

「見つからなければ問題はないのでしょう？」

だが、リオは不敵な笑みを浮かべてそう言ってみせた。
セリアが目を丸くする。

「いや、まぁ、それはそうだけど……。それがどれほど難しいことか分かっているの？　ここは王城の中なのよ？」
「ええ、ここは王城の中ですね。ところで――」

苦笑して、リオは話を続ける。

「先生はどうして俺がこの場にいるんだと思いますか？」
「え、あ……」

リオと再会できた嬉しさのあまり、セリアは真っ先に追及すべき疑問を忘れていたことに気づいた。

「リ、リオ、貴方、いったいどうやってここまで来たの？」

今、セリアがいるのはベルトラム王国の王城の深部に位置する一室だ。
城内には多数の騎士や兵士が巡回しており、そうでなくとも無数の宮廷貴族や使用人達がそこいらを歩き回っており、部屋の前には護衛の騎士まで存在する。
ここまで侵入するにはそういった者達の目を全て掻い潜る必要が

ある。
あらかじめ関係者として内部に潜入していたというのならともかく、完全な部外者が立ち入ることはほぼ不可能であると言ってよい。
仮に部外者だというのならば騒ぎが起きているはずだが、そういった様子は一切ない。
とはいえリオは指名手配されているはずだ。
もう三年以上前の手配だが、その効力は残っている。
本格的な捜査はされていないが、のこのこと現れれば拘束されるのは間違いない。
リオは成長しているし、素性を偽れば関係者として王城の中に入り込むことも可能かもしれないが、付き人もなしにこの場にやって来ているのはどう考えてもおかしい。
今のセリアを付き人なしで誰かと会わせるなど考えられないのだから。
だから、リオが関係者としてここにやってきたとは思えないが、セリアの常識がそんなはずはないだろうと強く主張している。
そんな真似が出来れば国王を暗殺することだって難しくはないのではないか。

「忍び込みました」

だが、セリアの疑問に、リオはあっさりと答えた。
それもセリアがありえないだろうと思っていた答えを。

「い、いや、いくら何でも……、どんな魔法よ、それは」

それならば正式な手続を経て客人としてここにやって来たと言われた方がまだ信じられる。
だが、状況証拠がそうでないと強く主張していた。
そうなると認めざるを得ない。

「リオ、貴方、本当に……」
愕然とセリアは呟いた。
セリアの知るリオは魔法を使えなかったはずだ。
すると身一つでこの中に忍び込んできたというのか。
それとも、おそらく髪の色を変えているあの首飾りのように、何らかの魔道具を使用しているというのか。
「信じてもらえたようですね」
リオは微笑を浮かべた。
「本当にどんな魔法を使ったの？　宮廷の警護に務める騎士や兵士の大失態よ、これ……」
事の重大性を把握しているセリアが真面目な表情を浮かべて尋ねる
リオは何かを考えるかのように口元に手を当てると。
「……こんな魔法ですかね」
と、そう告げた。
次の瞬間、小さく風が吹いたかと思うと、セリアはリオの姿を見失った。
目の前で話をしていたリオがいつの間にか姿を消していたのだ。
「……え？　リオ？」
突如、姿を消したリオの名前をセリアが口にする。

「こんなわけです」

続けて、リオの声が聞こえたかと思うと、小さく微風が吹いて、セリアはリオを認識した。

「ど、どういうわけ？」

唖然とセリアが呟く。

いったいどういうことか。

「今のは周囲に溶け込んで透明になる魔法みたいなものです」

落ちついた口調で語るリオ。

「と、透明になるって、そんな魔法は私が知る限り存在しないんだけど……」

「厳密には魔法じゃありませんから。魔法で同じことをしようと思っても難しいでしょうね」

リオがあっけらかんと聞き捨てならない言葉を告げると、魔法学者としてのセリアの好奇心が大いに刺激された。

「な、何それ？　どんな原理なの？」

「えっと、オド、魔力を込めた風を操って……って、今はそんな説明をしている暇はありませんよ」

勢いよく尋ねてきたセリアに押されて思わず説明しかかったが、リオは苦笑して首を左右に振った。

「え？　あ、あはは、ごめんなさい。つい気になっちゃって……」
我を失いかけていた自覚があったのか、セリアはばつが悪そうに笑って謝罪した。
魔法関係になるとすぐに夢中になってしまうのは今も昔も変わらないようだ。

「とりあえず先生一人を誰にも知られずにここから連れ出すくらいならどうってことはありません。だからもう一度言います。先生、俺と一緒に来ませんか？」

まるで軽く散歩にでも誘う風に、リオは言った。

「えっと、自分で言うのも何だけど、今の私、結構な重要人物よ？　もしリオが私を連れて逃げたことが明るみに出れば、今度こそリオは正真正銘の犯罪者にされてしまうわ」
「構いませんよ。どうせ王族殺人未遂の冤罪をかけられている身です。そこに貴族誘拐が追加されたくらいどうってことはありません。このまま先生が不幸になる方が問題です」
「リオ……」
「この国の外に出てしまえばベルトラム王国内で指名手配されようが関係ありません。それにそもそもセリア先生が失踪した件をベルトラム王国が公にするとは思えませんし」
「それは……そうかもしれないわね」

国内外問わず、セリアを欲しがる勢力はたくさんある。
そんな者達にベルトラム王国からセリアがいなくなりましたなどと伝えればどうなるかは予想に難くない。
そうでなくとも国の面子を考えれば国の重要人物が失踪ないし誘拐されたなどと馬鹿正直に公表できるものではない。

おそらく国は可能ならばセリアが失踪した事実を隠そうとするだろう。

「で、でも、ここから出られたとしても私はリオの足手まといになるだけよ。私、魔法以外には何のとりえもない女だし」

「知ってます。俺がいないと部屋の掃除もできませんでしたからね」

言って、可笑しそうに笑うリオ。

セリアはむぅと頬を膨らませた。

「私、ここを出たら行き場がなくなるのよ？　もしかしたら今後、一生リオの側に居続けるかもしれないわよ？」

「少なくともセリア先生が安心して暮らせる定住先を見つけるまでは一緒にいますよ。そこがシュトラール地方であるかどうかは保証できませんが」

「……そこは俺が先生を生涯をかけて養うくらい言ってほしいんだけど」

「あはは、すみません。無暗に先のことを確約できない性質でして」

ジト目のまま睨むセリアに、リオが苦笑して謝る。

「そうだったわね」

セリアはくすくすと笑った。

「後は一つだけ約束を守ってもらえれば、特に先生にしてもらうことはありません」

「約束？」

「はい。おそらく俺と一緒にいるうちに先生は色々と常識外れな出来事を垣間見ることになるかもしれません。説明できることは説明

しますが、先生が見知ったことを無暗に第三者に言いふらさないと誓ってください。もちろんセリア先生に身の危険が及ぶ場合はこの限りではありませんが」
「常識外れなことね……」

セリアがじっとリオを見つめた。
既にセリアはその一部を垣間見ている。
あれほどのことができたのだ。
おそらくあれ以上に驚くようなことも出来てしまうのだろう。
先ほど見せた透明になる魔法のようなものだって、貴族であり魔法学者であるセリアにはその有効価値がとんでもないものだとわかっている。
一般に知られればそれを再現しようと躍起になってリオを探そうとする者が現れるかもしれない。
リオもそこら辺のことを懸念しているのだろう。
セリアがそうやって納得をしていると。

「俺と一緒に付いて来るとなると先生が失うものも大きいはずです。リスクもあります。だから、無理やりに先生を連れて行こうとは思いません。俺に付いてくるかどうかは先生が決めてください」

そう言って、リオはセリアに手を差し出した。
セリアはその手を――。

「……行く。行くわ。私をここから連れ出して、リオ」

しっかりと掴みとった。
そこに躊躇いは感じとれなかったが、セリアのことだから何も考えていないことはないだろう。
即答したセリアに眼を見開いたが、リオはしっかりとセリアの手

を握り返した。

「じゃあ今すぐここから出ましょう。何か持って行くべき物はありますか？」

「部屋にある私物を持っていくと逃亡したと勘ぐられそうだから、持っていくとしたらこの部屋にある魔道具とその材料くらいかしら。それなら研究結果と一緒に拉致されたと思ってくれるだろうし。まぁ、一度に運べる量には限度があるから厳選しないといけないけど……」

語りながら悩ましそうに室内の魔道具を見つめるセリア。

室内には乱雑に無数の魔道具やその材料が置いてあり、分厚い本も大量に積まれている。

中にはそれなりに大きく重量のある物も存在するため、運び出すとなると選ぶ必要があるだろう。

セリアはそう考えていたのだが。

「全部持っていこうと思えば持っていけないこともありませんけど、どうします？」

リオが言葉を投げかけた。

「え？」

「いえ、必要なら部屋にある魔道具を全部持っていくこともできますけど、どうしますか？」

同じ内容の説明をリオが苦笑しながら行う。

「いや、持っていくったって、リオは手ぶらだけど、いくらなんでもそれは無理でしょ」

「ところがですね。自分にはこういうことができるんですよ。『保管（ストレージ）』」

部屋に置いてあった手ごろな魔道具に触ると、リオは時空の蔵を使用するべく呪文を唱えた。

瞬間、触っていた魔道具が歪み、その場から消失する。

セリアは唖然とした表情でその光景を眺めていた。

「今消えた魔道具が不要ならこの場に置いていきますが、必要ならばこのまま持っていきますのでご安心を。どうします？」

「……え、ええ、お願いするわ。ついでに部屋の中にある物は全て持っていってちょうだい」

引きつった笑みを浮かべ、セリアが答える。

思考を放棄したのか、少しばかり投げやりな口調になっている。

リオは言われたとおりに部屋に置いてある物を時空の蔵へと手当たり次第に収納していく。

あっという間に部屋の中が綺麗になって行き、やがてもぬけの殻となった。

この光景を見た者達はさぞ混乱することだろう。

現にセリアも大いに混乱しているところだ。

「じゃあ行きましょうか。ご両親とのお別れはよろしいですか？」

「……大丈夫よ。落ち着いた頃に手紙でも出すから」

セリアは寂しそうに微笑んで答えた。

「わかりました」

リオはセリアの手を握った。

「移動中は喋らないでくださいね。外からは俺達の姿は見えないはずですが、音や気配までは消せませんから」
「わかったわ」
「では行きましょう」

小さな風が吹いたかと思うと、セリアは周囲の光景が見えなくなった。
驚いて声が出そうになったが、リオの言いつけを守って口を閉じる。
リオには周囲の様子が見えているのか、迷うことなく歩を進めていく。
セリアはリオに手を引っ張られるがままに歩いた。
途中で誰かの喋り声が聞こえてくるが、誰もセリア達の存在に気づいている様子はない。
どうやら本当に透明になっているようだとセリアは思った。
後になって護衛の騎士は懲戒処分を食らうかもしれないが、散々視線によるセクハラをされた報いだと思えば心はあまり痛まない。
そうやって小一時間ほど歩くと。

「さて、もう大丈夫ですよ」

ようやくリオが口を開いた。
瞬間、一気に周囲の視界が開く。
いつの間にか城の外はおろか王都の外にまでやって来たようだ。
「こ、こんなにあっさり脱出できるなんて、本当にとんでもないわね」
顔をひきつらせて、セリアが呟いた。

「説明すると長くなりそうなので、移動の際にでも話しますよ。それよりですね。先生を抱きかかえて一気に移動しようと思っているんですが、よろしいですか？」

リオはそんなことを尋ねた。

「抱きかかえる？」

「はい」

さっさと王都から離れてしまいたいため、リオはこのまま空を飛んで立ち去るつもりなのだ。

「え、うん。別にかまわないけど……」

セリアは顔を紅潮させて答えた。

「じゃあ、失礼します」

リオがセリアの身体をそっと抱きかかえる。

セリアの身体は羽のように軽く、衣類越しに女性らしいしなやかさが伝わってきた。

「きゃ……。こ、これ、すごく恥ずかしいわね。おんぶの方が良くないかしら？」

「あはは、手を離されると危ないので、俺としては抱きかかえた方が安心でして。命綱を付ければ手放していても大丈夫なんですけどね」

「命綱？」

「すぐにわかりますよ。驚くと思いますが、人目にふれたくないの

で、上昇中はあまり大声は出さないでください」
「んん？　まぁ、よくわからないけど……。わかったわ」
されるがまま抱きかかえられたが、まさか空を飛んで行くとは思っていないセリア。
不思議そうに首を傾げていたが、リオのことを信頼しているため、そのまま承諾した。

「では、行きます」
「っ！」

リオが風の精霊術で空へと舞い上がる。
セリアの目が大きく見開いた。
ぱくぱくと口を動かしているが、言葉を失っているのか、リオとの約束を守ろうとしているのか、騒いだりはしない。

「もう喋っても大丈夫ですよ」

空高く舞い上がって人目につかないところまで高度を上げると、リオがセリアに語りかけた。
呆然と周囲の景色を眺めていたが、やがてセリアがゆっくりとリオに視線を移す。
そして、何度か深呼吸をすると。

「な、何よこれぇぇぇ！？」

セリアの心の叫びが空高くで響き渡った。
リオはセリアの反応が可笑しくて。

「これは精霊術というものです。先生も存在くらいは聞いたことが

あるんじゃないですか？」

笑いながら、そう答えた。

「せ、精霊術？　これが？」

「はい。術式も呪文の詠唱も必要としていないでしょう？」

「そういえば精霊術ってそういうものだったっけ。まさか本当に実在しただなんて……」

セリアは呆然と周囲を見渡した。

こんな光景は見るのは生まれて初めてだ。

インドアなセリアも流石に驚きと興奮を感じずにはいられない。

心なしかリオにはセリアの目が輝いているように見えた。

「先生、一つ聞いておきたいんですが、ベルトラム王国に召喚された勇者の名前を御存知ですか？」

「勇者？　たしかルイ＝シゲクラだったと思うけど……」

驚くセリアにリオが尋ねると、セリアがあっさりと情報を口にする。

仮に知らなかったとしたら後日に出直すつもりだったわけだが、二度手間になることは避けられたようだ。

「ルイ＝シゲクラですか。なるほど」

それは美春達の知り合いの名前ではない。

どうやらベルトラム王国の王都に召喚された勇者ではないようだ。

フローラ達の元に召喚された勇者を除くと、残りの勇者は四人。

このうちの二人が美春達の知り合いだとは思うが、二度も連続して外れてしまうと少しばかり自信を失ってしまう。

とはいえ考えられる限りで可能性が高いのは美春達の知り合いが勇者だということだ。
今後も可能な限りこうして勇者の情報を集めてみるつもりだった。
「勇者の名前がどうかしたの？」
不思議そうにセリアが尋ねる。
「実はですね。今、俺は勇者の召喚に巻き込まれたであろう子達と一緒に暮らしているんです」
「勇者の召喚に巻き込まれた？」
「はい。俺はほぼ間違いないと考えています。だからその子達から聞いた人物が勇者としてどこかに召喚されたのではないかと考えて探しているんです」
「……ということはこれからは私もその中に混ざって暮らすことになるってこと？」
「そうなります。後からの説明になって申し訳ないのですが……」
「いや、そりゃ時間もなかっただろうし、しかたないけど。どんな子達なの？」
少し興味深そうにセリアが美春達のことを尋ねる。
これから一緒に暮らすことになる同居人だと思えば当然の反応だろう。
「そうですね。三人いるんですが――」
リオは美春達のことを語って教えた。
美春と亜紀の存在を教えると少しだけセリアがムッとした表情を浮かべた気がしたが、セリアは何でもないと答える。
他にも岩の家に辿りつくまでに色んなことを語って、気がつけば

あっという間に移動を終えた。

第６２話　真っ白だった世界

美春達を残してベルトラム王国の王都へ向かったリオだったが、結局、その日のうちに岩の家まで帰って来ることになった。
時刻は夕暮れ時で、間もなく夜の帳（とばり）が降りようとしているため、家の周囲の森は薄暗くなっている。

「あの岩がこれから先生に住んでもらう家です」
「ず、ずいぶんと野性的な家ね」

認識阻害の結界魔術は領域に入った瞬間にセリアに発動したが、即座にリオがセリアの体内のオドを操作して解除する。
遠目から見れば大きな岩にすぎなかったが、近づいて見ると確かに家として加工されていることがセリアにもわかった。
とはいえ、岩の中に住むという発想がセリアにはなかったため、少し戸惑っているようである。

「まぁ、中は綺麗なので安心してください。入りましょうか。美春さん達に紹介しますから」

そう告げると、リオは着陸してセリアを地面に降ろした。

「う、うん」

空を飛んで移動する間にリオが置かれている状況は簡単にセリアに説明してあり、美春達と一緒に暮らしていることも教えてある。
家の扉の前に行くと、リオは室内にいる者を呼び出すために設置されてある魔道具に触れた。

それからすぐに一定のリズムで扉をノックし続ける。
これはリオが帰ってきたという合図だ。
「お帰りなさい！　ハルトさん！」
やがて内鍵の解く音が聞こえたかと思うと扉が開き、美春がリオを出迎えた。
リオがいないことに不安を覚えていたのか、予想以上に早い帰還に、美春は安堵しているようだ。
「はい、ただいま戻りました」
「あ、えっと、そちらの子は？」
リオの背後にいるセリアに気づき、おずおずと美春が尋ねる。
「彼女が俺がお世話になった知人です。ちょっと身の危険があったので保護して連れて帰ってきました。言葉は通じませんが、実はこれからこちらで一緒に住むことになりまして……。何の事前連絡もせずに申し訳ないのですが、よろしくお願いしてもいいでしょうか？」
「あ、はい。もちろんです」
リオが事情を説明すると、美春は少し緊張したようにセリアに頭を下げた。
セリアも微笑んで美春に頭を下げ返す。
「リオ、こちらの非常に可愛い御嬢さんが、貴方の言っていた勇者召喚に巻き込まれたかもしれない子なの？」
にこやかな笑みを浮かべて、セリアがリオに尋ねる。

表面上は穏やかなのに、何故か凄みを感じて、リオは思わず一歩後ずさりそうになった。

「あ、はい。えっと、彼女がミハル＝アヤセさんです」
「この子がミハルね。確か歳はリオと一緒だったかしら？」
「はい。そうなります」
「そう……。これからよろしくお願いしますって伝えてくれるかしら？」
「わかりました。その前に、とりあえず中に入りましょうか」

言って、リオは美春に視線を移す。
美春もセリアの妙な凄みを察したのか、少しだけ緊張の度合いが強まっているようだ。
だが、セリアもすぐに柔らかな笑みを浮かべ直したため、美春の緊張の色はすぐに消えていく。

「美春さん、とりあえず家の中に入りましょうか。彼女を紹介しますから」

リオとセリアの会話がわからずに黙って話を聞いていた美春に、リオが日本語で話しかける。

「はい。お茶を用意しますね」
「すみません。お願いします」

そのままセリアを連れてリオは美春と一緒に家の中へと入りこむ。
美春は真っ直ぐにキッチンへと向かい、お茶を淹れに行った。

「あ、ハルトさん。お帰りなさい！」
「おー、ハルト兄ちゃん、お帰り！」

リビングで亜紀と雅人の二人がくつろいでいた。
亜紀と雅人はリオの姿を見てホッとしたような表情を浮かべ、続けて後ろにいるセリアを見て目を丸くした。

「ただいま、みんな」

微笑を浮かべて、リオが帰宅の挨拶を告げる。

「実は二人にお知らせというかお願いがあるんだ。この人に関連することだけど、とりあえず紹介するから聞いてもらってもいいかな？」

「あ、はい」

亜紀と雅人がやや畏まった様子で姿勢を正す。

「セリア先生」

「あ、うん！」

興味深そうに家の内装に見惚れていたセリア。
リオに声をかけられて、ハッと返事をした。

「後で家の中を案内しますから、とりあえず今はこちらに座ってください」

「うん。お願いね」

リビングに設置されたソファにセリアを座らせ、その隣にリオも腰を下ろした。

「どうぞ」

あらかじめお湯を沸かしていたのか、美春がリビングにやって来て、お茶を淹れて回った。
お茶を淹れると、美春も亜紀の隣に腰を下ろし、机を挟んで二対三で向かい合う。

「いただくわ。……あら、美味しい。上手なお茶の淹れ方ね」

美春の淹れたお茶を優雅な所作で口に含むと、嬉しそうに顔をほころばせ、セリアが感想を述べた。

「美春さんの淹れたお茶が美味しいそうです」

それを翻訳してリオが美春に伝える。
美春ははにかんでそれに答えた。
そんな美春にセリアも微笑みかける。

「さて、それでは早速ですが、紹介しますね。彼女はセリア＝クレール。俺の古い知人で、幼少期にお世話になった人です」

事前に相談して素性を含めてセリアの本名はそのまま伝えることにした。
何も知らせずに問題が起きるよりかは、きちんと事情を説明しておいた方が問題に対処しやすいと判断したからだ。
セリアは優雅な所作で三人にお辞儀をする。
その可憐さに雅人が顔を赤くし、横から亜紀に肘で突っ込みを入れられていた。

「えっと、ハルトさんが幼少期にお世話になったんですか？」

と、不思議そうに美春が尋ねる。
傍から見るとリオよりも少し年下にしか見えないセリア。
年齢的には亜紀と同じかどんなに上でも一、二歳くらいの差しかないように見える。
そんな彼女にリオが幼少期に世話になったというのは少しばかり妙だった。

「ああ、彼女はこう見えて俺達より年上なんですよ。今はもう二十一歳です」

やや困惑している美春の意図に気づき、リオがセリアの年齢を口にする。

「え……、ええ！？」
「二十一歳……」
「マジか……」

一瞬だけ唖然とすると、美春だけでなく亜紀や雅人も驚きの声を上げた。
その美しさと風格は子供が醸し出すものではないが、セリアの見た目は幼児体型というか、とても二十歳を超えているようには見えない。
そんな三人の反応にリオが苦笑する。
ちらりとセリアに視線を送ると、セリアがリオだけに少し拗ねたような視線を送り返してきた。
言葉は理解できないはずだが、美春達の反応でおよそ会話の内容を掴めたのだろう。
思わず小さく吹き出しそうになってしまったところで、今度は凄みのある笑みを向けられた。

「先生が若いですねっていう話をしているんですよ」
弁明をするべく、リオが苦笑しながらセリアに語りかけると。
「……知ってるわよ」
と、ジト眼で睨み返して、セリアは答えた。
そんな二人のやり取りを美春達が興味深そうに眺める。
「すみません。話を戻しましょうか。俺が彼女と知り合ったのは七歳の時で、彼女は俺が通っていた学校で講師をしていたんです」
今度は美春達に向き直ってリオが話しかける。
「……先生ですか」
と、美春がオウム返しで口走る。
「先生……」
呟いて、亜紀がリオとセリアの間で視線を往復させた。
何となく二人の関係に興味があるようだ。
雅人はまだセリアに見惚れているようで、緊張した様子でちらちらと視線を送っている。
リオは何となく妙な空気が場に流れているような気がした。
その空気を上手く説明することはできないのだが。
考えても仕方がないと、小さく頭を振って、今はその小さな違和感を捨て置く。
「それでですね。実は彼女には少し込み入った事情がありまして。

これから一緒に暮らすことになる以上はみんなにも知っておいてほしいんです」

小さく咳払いをして、リオが語る。
すると三人の視線がリオに集まった。

「まず、彼女は貴族です」

セリアが貴族だと教えると、三人が僅かに瞠目(どうもく)する。
現代の日本に貴族は存在しない。
物珍しさに驚きと戸惑いが織り交ざった感情を覚えたのだろう。

「道理で雰囲気があるといいますか……」

美春が腑に落ちた表情を浮かべた。

「なんていうかお姫様みたいな人ですよね」
「いや、実際にお姫様なんじゃないの？」

亜紀と雅人もしっくりきたような反応を見せている。
セリアの背中まで真っ直ぐと伸びた髪は綺麗な白色で、肌理(きめ)細かい肌も透き通るように白い。
空色の瞳は宝石のように美しく、容姿も美姫という表現が相応しい程に整っている。
普段着として身に着けている白いワンピースドレスがお淑やかさを際立たせており、確かに傍から見ればどこかの国の美姫にしか見えない。

「確かに育ちは良いし雰囲気もあるけど、こう見えてかなり気さくな人なんですよ。だから構えなくても大丈夫です」

畏まった様子を見せる三人にリオが苦笑して説明する。
おそらく美春達はどのように接すればいいのか不安に思っているのだろう。
セリアの素の性格とずぼらなところを知るリオとしては美春達が感じている懸念が杞憂でしかないとわかっている。
ここら辺はこれから暮らしていくうちにお互いに慣れていくだろう。
自分も可能な限りフォローしていく必要があると、リオは気を引き締めた。

「それで彼女をここに連れてきた理由なんですが、現在、彼女は国で危うい立場に置かれていまして、つい先ほどまで軟禁されてそのまま政略結婚の道具にされかかっていたんです」

と、簡潔にセリアを連れてきた理由を説明する。
何も理由を告げずにいきなり連れてきた人間と一緒に暮らしてくれと頼んでも美春達を戸惑わせるだけだろう。
事情を知っておいてもらった方が一緒に暮らすうえで何かと接しやすいはずだ。
要は心構えの話である。
それに後々のことを考えると、それとなく事情を察してもらっておいた方が万が一の事態が生じた時に口裏を合わせやすい。

「それは……」

呆気にとられた様子で、美春達が言葉に詰まる。
無理もない。
日本で普通に暮らしていれば決して聞くことのないような話なのだから。

「政略結婚自体はこの世界に生きる貴族ならさほど珍しくはありません。必要性があってお互いの利害が一致して合意の上で行われることは多々あります」

まずは政略結婚というものがこの世界ではさほど珍しくないことをリオは語った。

「ただ、彼女の場合は少しばかり事情が特殊でして。軟禁されていたことから薄々とわかるかと思いますが、ほぼ強制的に婚約をとりつけられたんです。しかも、本来なら彼女の家柄や立場を考えれば有力貴族の正妻が妥当なところなんですが、今回は有力貴族の七番目の妻として結婚を強要されていました」

語って、リオは小さく溜息を吐いた。

「ひどい……」

どの点に特に衝撃を受けたのかは定かではないが、三人ともセリアの境遇に同情を寄せたようだ。

特に同性である美春と亜紀はかなり居たたまれない表情を浮かべている。

「流石に辛そうでして。そんな姿を見ていられなくなってしまい、こうして彼女を連れ出してきてしまったというわけです」

そうやってリオがセリアを連れてきた理由を説明すると。

「そんなの連れて来て当然だろ！」

「私もそう思います！」

間髪を容れずに雅人と亜紀が勢いよくリオの行動を支持した。
若すぎるゆえに少しばかり直情的な気がしないでもないが、その気持ちは嬉しい。
リオは二人に微笑み返すと。
「でも、いくら本人が望んでいたとはいえ、彼女がいた国からすれば俺がしたことは許せないことだ。彼女も自らの意志で逃亡したことがバレれれば実家の立場が相当悪いことになってしまう」
本人の同意があったとはいえ、高位貴族の婚約者を連れ去ったのだ。
しかもセリアは今のベルトラム王国においてかなりの重要人物である。
仮にリオが犯人だと知られれば敵対は免れないだろう。
他に上手い解決策がなかったとはいえ、少しばかり不道徳というか短絡的な行動であったことも否めない。
少なくともあの国の社会秩序を乱したことに変わりはないのだから。
とはいえリオはセリアを連れ出したことを後悔はしていない。
こうして連れてきた以上は美春達と同じように全力でセリアを保護するつもりだ。
「だから美春さん達にお願いしたいんです。今後、外に出ることがあってもセリア先生のことを誰にも話さないでくれませんか？」
言って、リオは深く頭を下げた。
三人を巻き込んでしまうのは不本意だが、知らないでいる場合に生じるであろうデメリットを考えると教えないでいることは望ましくない。

それに一緒に暮らす以上は美春達にも知る権利があるだろう。
雰囲気を察してリオの隣に座っていたセリアも頭を下げた。

「わかりました」
「はい！」
「俺もわかったよ！」

美春達がそれぞれしっかりと首肯する。
リオはさらに深く頭を下げると、

「少なくとも彼女が自分の意志で逃げ出してきたということは絶対に口にしないでください。万が一の時は俺が拉致したということにしますから」

と、強い意志を感じさせる声でそう語った。
本人の同意があるとはいえ、セリアを逃亡させるきっかけを作ったのは自分だ。
出来ればセリアの実家に迷惑をかけたくはなかった。
既に心配はかけてしまっているが……。

「それは……いいんでしょうか？　そのセリアさんにはそのことを……」

おそるおそる美春が尋ねる。

「言ってはいません。おそらく反対されるでしょうから」

ばつが悪そうに笑みを浮かべるリオ。
このことをあらかじめセリアに説明しても、反対されるであろうことはわかっている。

だから万が一の時は先んじて自白してそういった状況を作ってしまおうとリオは考えているのだ。

「ハルトさん……」

美春が心配そうにリオの名を呼んだ。

「まぁその万が一の時が生じないようにこちらで最善は尽くします。ここは別の国ですし、都市に出る時は変装をしてもらうことになりますから、滅多なことでは彼女の国の首脳部の人間に彼女の存在がバレることはありませんよ」

少し気まずくなった雰囲気を誤魔化すように、リオが明るく言った。

そのまま美春達に繕うように微笑みかけると。

「……わかりました」

不安そうではあるが、美春は頷いてくれた。

「私もわかりました」

続けて亜紀が頷く。

「俺もわかったよ。まぁ、言いふらそうにも言葉がわからないけどね」

「それは私達が言葉を覚えた後の話でしょ。外に出た時にベラベラと余計なことは喋るなってことよ。あんたが一番危ないんだから気をつけなさいよね」

「わ、わかってるよ、姉ちゃん」

おどけて答えた雅人に亜紀が口を挟む。
雅人はその自覚があるのか、たじろいで返事をした。
「でもよかったんでしょうか。私達にそんな話を教えてしまって」
美春が不安そうに尋ねた。
情報というのはそれを知る人が多ければ多い程に流出の危険性が高まる。
秘匿すべき情報を自分達に教えたことのデメリットについて心配しているのだろう。
「ええ、最初はセリア先生の名前も経歴もすべて偽って紹介しようとも考えたんですが、三人はこれから一緒に暮らす間柄になりますからね。嘘で塗り固めてもボロが出るだけです」
セリア自身も、嘘で塗り固めて生きてもストレスが溜まるだけだからと、素性を明らかにすることには賛成している。
「それに、あらかじめ知っておくのと知らないでいるのとでは緊急事態が生じた時の心構えが全く違います。三人には万が一の事態が生じた時の心の準備をしておいてほしいんです」
セリアと一緒にいるところを目撃されて、美春達に魔の手が及ばないとは限らない。
その時に何も知らないというのは流石に無防備すぎるだろう。
可能性は低いが、美春達が何かの拍子にセリアの素性を第三者から知らされた時に、うっかりとセリアの情報を漏らしてしまう可能性だってある。
考え出したらキリがないが、教えないなら教えないで生じるデメ

リットはいくつもあるというのがセリアの談だ。
もちろん教えたことによって生じるデメリットもあるが、それを踏まえた上での選択である。

「もちろん先ほども言った通り万が一の事態が生じないようにこちらで最大限の対策はとります。外に出かける時は変装しますし、名前も変えますから。万が一の事態に備えて今話したことを心の片隅で覚えておいてください」

肩を竦めながら、リオは再度の注意を促した。
美春達が少し緊張した様子でこくりと頷く。

「さて、それじゃ今度はセリア先生に三人のことを紹介しますので、少し彼女と話をしますね」

喉を潤すべくお茶を含むと、リオは隣に座っているセリアへと視線を移した。

「美春さん達に紹介を含めて先生の簡単な事情を説明しました。もちろん口止めも。今度は先生に三人の紹介をしますね」
「そう、ありがとうね。リオ」

セリアはリオに優しく微笑みかけた。

「いえ……。先生は俺にとって恩人ですからね」

恥ずかしそうにリオが告げる。

「……私、貴方にしてあげられたことなんてほとんどないわ。ここまでしてもらうことなんて……」

僅かに目を丸くすると、セリアは少し申し訳なさそうに答えた。
「そんなことはありませんよ。先生がいなかったらあの学院で俺は完全に一人でしたから……」
「けっこう　飄々（ひょうひょう）としているように見えたけど？」
「それは先生がいたからですよ。流石にあの環境で五年以上も独りぼっちは色々と精神的に辛いことになっていたと思いますから」
「……でも私は貴方の先生だったんだから、生徒のことを気にかけるのは当然よ」

嘘だ。
言って、セリアはそう思った。
他の生徒と比べて、セリアは明らかにリオに深く関わっていた
それはどうしてだったのだろうか。
当初は何となくだった気がする。
もう昔のことだからあまり思い出せないけれど。
セリアは少し原点を思い出してみたくなった。
そんなことを考えていると――。

「はい。だから先生には感謝しているんです。ありがとうございます」

リオは小さくはにかんで礼を告げた。
ふと二人の視線が交差すると。

「……どういたしまして」

セリアがリオから僅かに視線を逸らして答える。
その頬は僅かに紅潮していた。

薄く微笑んで、リオがちらりと美春達に視線を戻す。
すると三人はじっとリオとセリアの様子を眺めていた。
必然的に視線が重なると、サッと目を逸らされる。
どうしたのだろうか。
リオは僅かに首を傾(かし)げた。

「えっと、じゃあ今から三人のことを彼女に紹介しますね。まずは美春さんから」

いつまでも待たせたままでいるのも悪いと考え、リオはさっさと三人を紹介することにした。

「は、はい。よろしくお願いします」

少しぎこちない様子で美春が返事をする。

「セリア先生、先ほど紹介しましたが、こちらがミハル＝アヤセさん。年は十六歳です」

リオは美春の紹介を行った。
美春は窺うような視線をセリアに送って小さくお辞儀をした。
セリアが微笑を浮かべてお辞儀を返す。

「それでその隣にいる女の子がアキ＝センドウさん、年は十三歳です」

緊張した様子で亜紀がお辞儀をする。
セリアが微笑してお辞儀を返す。

「彼がマサト＝センドウ君、年は十二歳です」

雅人も緊張したようにお辞儀をする。
セリアが微笑してお辞儀を返すと、雅人は顔を紅潮させた。
その様子を横から機敏に察して亜紀がジト眼で雅人を見つめている。

「ところでね。ちょっと聞きたいことがあるんだけど……」

軽く紹介を終えたところで、セリアが横からリオの袖を引っ張った。
心なしか少し尋ねにくそうな表情を浮かべている。

「はい。何でしょう？」

と、リオがセリアの質問を促す。

「えっとね、どうして貴方は彼女達の言葉を喋れるのかしら？　何かの精霊術とやらを使っているの？」
「……まぁ当然に抱く疑問ですよね」

言って、リオは苦笑した。
それはリオがあらかじめ想定していた質問だった。
この場限りの嘘を吐くのならば精霊術を使っていると言って誤魔化せばいい。
だが、やがてセリアが美春達と意思の疎通ができるようになればバレてしまう嘘だ。
ここは正直に語るしかないところなのだろう。
とはいえ、きっかけが消極的な理由であることは否めないが、これは良い機会なのかもしれない。
かつてリオにとって世界は真っ白だった。

それは色が識別できないとかそういう話ではない。
この世界に生まれてからしばらくの間は、何を見ても、何を聞いても、リオは空々しいだけだった。
ルシウスへの復讐、美春への未練――。
それはきっと自分がそうした後ろ暗い感情だけに支えられて生きていたからだろう。
だが、いつからか世界に色を感じるようになった。
最初はほんの少しだったけれど。
それは確かに美しい色だった。
最初にその色を感じさせてくれたのはセリアだ。
けど、当時のリオはその色を心の底から楽しむだけの心の余裕はあまりなかった。
ベルトラム王国を出て、精霊の民の里で暮らして、ヤグモ地方へ赴きカラスキ王国で暮らして、少しずつ心にゆとりができて、少しずつ世界に色が増えていった。
まだ心の中に復讐というしこりは残っているけれど、美春と出会えた今では世界は美しい色彩で溢れている。
そうやって感じられるようになったのはこれまでに出会えた多くの人達のおかげだ。
だから、これは良い機会だと思う。
今までこんな自分に歩み寄ってくれた人達に、今度は自分から歩み寄るための。
これは最初の一歩だ。

「それはですね――」

打ち明けなければいけないからではない。
リオは自らの意志で望んで自分の秘密を打ち明けたいと思った。
この世界で初めて色を与えてくれたセリアになら、教えることに躊躇いはない。

信じてもらえるかどうかは怖いけれど、それでも前に進みたいから。

だから、少し恥ずかしそうに笑みを浮かべて。

「俺がもともとは彼女達と同じ世界で生きていたからです」

と、リオはそう答えた。

第63話　これから先の生活に向けて

「少し突拍子もないことを尋ねます。前世とか、人が生まれ変わるとか、先生は信じますか？」

落ち着いた声でリオが尋ねた。
普通ならば耳を疑うような話だ。
セリアは信じてくれるだろうか。
少し不安を抱いたが、それを隠し、リオは柔らかく微笑んでセリアを覗き込んだ。
セリアも大きな瞳でじっとリオの顔を見つめ返す。

「……信じるわ」

一瞬の沈黙、だが、即答だった。
その言葉に疑いはない。
リオにはそう思えた。
間髪をいれないセリアの返答に、僅かに眼を見開くと。

「ありがとうございます」

リオは微笑を浮かべて礼を告げた。

「俺達が初めて会った頃、先生は俺に違和感を抱いたんじゃないですか？」
「……そうね。たかだか七歳にしては異常なくらいに落ち着きすぎだとは思ったわ。孤児なのに妙に知識があるし、かと思えば偏りがあってちぐはぐなところも多かったし」

思い当たる節があるのか、考えるそぶりを見せながら、セリアは答えた。

「当然です。俺には前世の記憶があったんですから」

「前世の記憶……」

ぼそりとセリアが呟く。

「少し長い話になりますけど、聞いてください」

リオは語る。

自分は元々は地球と呼ばれる世界で学生として暮らしていたこと。

ある日、気がつくとベルトラム王国のスラムで今の自分として生きていたこと。

前世の記憶を取り戻してすぐにクリスティーナとフローラの誘拐現場に出くわして二人を助けたこと。

それからなし崩し的に王城で容疑者として捕えられたこと。

気がつけば王立学院に入学することになったこと。

「後はセリア先生もご存知の通りです」

言って、リオは小さく肩を竦めた。

「……私と出会った頃は記憶を取り戻したばかりだったってことよね。前世は何歳だったの？」

黙ったまま話を聞いていたセリアだったが、口元に手を当てて考えるそぶりを見せて、そう尋ねた。

「二十歳です」
「二十歳って、今の私とほとんど変わらないじゃない」
セリアが目を丸くする。
「まぁ前世の年齢を足すと先生よりも年上になりますね」
「年上……。だから……」
呟いて、セリアがまじまじとリオを見つめる。
視線を上から下へ、そして下から上へと戻し、最後にその顔に視線が固定された。
そうしてじっとリオの顔を見つめていると、リオが不思議そうにセリアの顔を見つめ返してきて。
「っ……！」
セリアは顔を赤く染めて、リオから視線を逸らした。
「どうかしましたか？」
リオが不思議そうに尋ねる。
「う、ううん！　何でもない！」
と、少し上擦った声でセリアが答える。
セリアは胸の鼓動が急速に高鳴り、全身が熱くなるのを感じた。
「そう……ですか。本当に大丈夫ですか？」
少し挙動不審なセリアの顔をリオが覗き込む。

「う、うん！　大丈夫よ！　ほら、ミハル達を待たせちゃ悪いし、早く話を進めてちょうだい」

向かいのソファに黙って座っている美春達に視線を移し、慌てた様子でセリアが言った。

リオも美春達に視線を移す。

言葉が解らず雅人は不思議そうな顔を浮かべていたが、美春と亜紀は少し気まずそうに笑みを浮かべていた。

「えっと、わかりました」

僅かに首を傾げて、リオが首肯する。

少しセリアの様子がおかしいように思えるが、本人が何でもないと言うのならばこれ以上は追及しにくい。

具合が悪いというわけではなさそうだ。

咳払いをして調子を整えたセリアを見て、リオは話を元に戻すことにした。

「と言っても俺から語ることはもうないんですけどね。とりあえずは俺が彼女達と同じ言葉を喋れる理由を納得していただけたでしょうか？」

「したわ。この世界に存在しない言葉を操ってあの子達と会話が成立している時点で状況証拠は揃っているし。それに、そうでなくとも……あ、えっと……」

努めて真面目な顔を浮かべて語るセリアだったが、途中でハッとして言いよどんだ。

「それに？」

不思議に思って、リオが続きを促すと。
「あ、えっと、リ、リオの言う事なら何だって信じちゃうからね、私。……な、なんちゃって」
と、顔を赤くして答えるセリア。
すると、リオは目を瞠(みは)って、
「えっと……どうも」
照れくさそうに礼を告げた。
数瞬の気まずい沈黙が二人の間に降りる。
「えっと、この話は他言無用でお願いします。人によっては異常者と思われかねませんから」
と、先に沈黙を破ったのはリオだった。
「う、うん。無暗に人に教える話ではないものね。わかったわ」
セリアもリオの話に合わせるように少し焦ったように答える。
「じゃあ、お願いしますね」
「ええ。それにしても言葉が通じないのは不便ね」
言って、セリアがちらりと美春達に視線を移す。
美春達は少し戸惑い顔で笑みを浮かべて応えた。
目は口ほどに物を言うという格言が存在するが、こうして視線だけのやり取りで交流を図るのは限界がある。

現状、美春達にとって最優先で行うべきは言語の習得だろう。

「はい。なるべく早く彼女達に言葉を教えるつもりです」

「そうね。私もその方がいいと思うわ。出来ることがあれば協力するから言ってちょうだい」

「助かります。言葉が通じなくともなるべく積極的に会話をするようにしてくれると嬉しいです」

「ええ、そうさせてもらうつもりよ」

リオだとどうしても日本語でコミュニケーションをとりがちになってしまうが、セリアとならばこの世界の言語で会話をするしかない。

セリアの言葉遣いは綺麗だし、良い話相手になってくれるだろう。

「じゃあ少しだけ教えておきたいことがあるので、彼女達と話をさせてください」

「わかったわ」

頷くセリアに目礼をすると、リオは美春達に視線を移した。

「三人ともごめんなさい。ちょっと話し込んでしまって」

と、頭を下げてセリアと二人っきりで喋っていたことを謝罪する。

「いえ、何か大切なことを話していたんですよね？」

柔らかい笑みを浮かべて、美春が答えた。

「はい。どうして俺達が言葉が通じるのか尋ねられてしまって。俺の前世について簡単に説明しました」

と、リオが事情を説明すると。

「えっと、教えてしまってよかったんでしょうか？　その、私達がいなければ教える必要はなかったことですよね？　……ごめんなさい」

美春が戸惑った様子で謝罪した。

リオが天川春人であったことを除いて、美春はリオが転生した話を簡単に聞いている。

そして、いつか聞いてほしい話があるとも言われた。

それがどんな話なのか、美春には想像もつかない。

だが、リオにとってはすごく大切で、軽く教える話ではないことはわかる。

そんな話を自分達の存在がきっかけで他者に話させてしまった。

それが申し訳なくて、美春はリオに頭を下げたのだ。

「いえ、セリア先生にはいつか話していたかもしれないことですから。これがきっかけになって良かったと思っています。美春さん達がいたからとかは関係ありません。だから気にしないでください」

美春を不安にさせないように、リオは軽い調子で語りかけた。

「はい……」

それでもまだ申し訳なさそうに俯く美春。

亜紀と雅人は、リオの前世について聞いていなかったため、あまり事情を呑みこめていないようで。

「前世って何だ？」

と、雅人が少し呑気な声で尋ねる。
横にいる亜紀が「うわぁ、それ聞けちゃうんだ」と少し引きつった声で呟く。
その反応でリオは二人が美春と同じ勘違いをしていることに気づいた。
そう、リオが転生者ではなく美春達同じ漂流者であると勘違いをしていることに。
「言っただろ？　俺は日本で暮らしていたって。俺は日本人だったんだ」
と、簡潔にその勘違いを訂正するべくリオが説明を行う。
「日本人……だったんですか？」
亜紀が少し呆気にとられたように尋ねる。
リオは傍目から見ると純粋な日本人には見えない。
顔つきは東洋と西洋の血が入り混じったようなハーフのようだし、魔道具により髪は灰色に変えてある。
それに長年のブランクにより操る日本語もどこか発音がたどたどしい。
「そうだよ」
ぎこちなく笑みを浮かべて、リオは頷いた。
少し遠くを見るような目つきで亜紀の顔を眺める。
「……」

亜紀も黙したままリオの顔を見つめた。
「だから日本語を喋れたのか。ずっと外国人か何かだと思ってたわ」
亜紀の隣にいる雅人が腑に落ちたような表情を浮かべた。
「確かにこの顔は日本人には見えないよな。けど本当の髪の色は黒なんだ」
言って、リオは首飾りを外した。
瞬く間にその髪の色が灰色から黒へと変化する。
「おぉ！　それも魔術か何かなのか？」
雅人が目を輝かせる。
「ああ、魔道具って言ってね。この首飾りに魔術が内蔵されているんだ。これには髪の色を変える魔術が込められている」
「へぇ、本当に便利だな。魔術って」
と、感心したように唸る雅人。
「ああ、きちんとした知識があれば色々とできるよ」
「いつか俺にも魔術を教えてくれよな！」
「先にこの世界の言葉を覚えないといけないけどな」
「あー、うん。そっちが先だよな……」
雅人が苦い表情を浮かべる。
この様子だとあまり勉強を好きではないようだ。

（大丈夫かな？　術式ってかなり複雑なんだけど）

そんなことを考えながら、渇いた笑みを浮かべ、リオが雅人に答える。

「それはそうとみんなに伝えておくことがあるんだ」

少し含みがある視線を送り、リオは三人に語りかけた。

美春達の意識が自分に集まったのを確認すると。

「おそらくだけど、みんなの知り合いが何をしているのか見当がついた」

と、そう言った。

「ほ、本当ですか？」

亜紀が驚きの声を上げる。

「ああ、確信は持てないけどね」

「お兄ちゃん達は何をしているんですか？」

「勇者……かな」

端的にその答えを示すリオ。

「……え？」

亜紀は耳を疑った。

いや、亜紀だけではない。

美春と雅人も亜紀の隣で目を丸くしている。

「勇者だよ。君の……お兄さんと沙月さんと言ったかな。その二人はおそらく勇者としてこの世界に召喚されている」
「勇者……」

呆然と亜紀が呟く。

「勇者ってゲームに出てくる主人公だよな？　マジで？」

雅人が僅かにひきつった笑みを浮かべて尋ねた。
俄かには信じがたい話だ。
無理もない反応だろう。

「たぶんね。現状だと可能性が一番高いと思う」
「まぁ兄貴ならなぁ」

それもありえるか、と言わんばかりに雅人は唸った。

「で、勇者って強いの？」
「俺も詳しいことはよくわからないけど、お伽話によるとかなり強いみたいだよ。少なくともそこら辺にいる騎士よりは強いはずだ。それに何らかの魔道具でも使っているのか、言葉も通じているみたいだしね」
「ええ、いいなぁ！　勉強する必要がないじゃん！」

雅人が羨ましそうに声を漏らす。

「そうなるね」

苦笑してリオが答える。

「それで、勇者は六人いるんだ。たまたま勇者二人の名前を知ることができたけど、君たちの知り合いじゃなかった。残り四人がどこにいるかは俺にもわからない」

言って、困り顔でリオは亜紀達に視線を送った。

勇者となるとどこかの国に所属している可能性は高いが、それも絶対とは言えない。

もしかしたら誰もいない場所に召喚されてそこら辺を放浪している可能性もあるのだ。

そうなるとそう簡単に見つけることはできないだろう。

（けど、いつまでも家族の安否が不明なままっていうのも不安だよな……）

大切な人がどこにいるのかわからないという不安な気持ちはリオも痛いくらいにわかる。

そんな気持ちを抱えてリオは、天川春人はずっと生きてきたのだから。

だから、リオとしてもできることならばなるべく早く亜紀達を知り合いに会わせてあげたい。

（でも、再会して、そうしたらみーちゃんはどうなるんだ？　そのまま別れる……のか？）

最悪の未来を想像して、リオは急に足場を失ったような感覚に襲われた。

美春と会えたことが嬉しくて、リオは今の今までその可能性を失念していたのだ。

そもそも美春にとって貴久という少年はどんな存在なのだろうか。

もしかしたら恋人なのだろうか。
そうではないかもしれない。
けど、リオは直感的に悟った。
その男は天川春人が高校に入学した時に見た美春の隣にいた人物だと。

（そういうことか……）

リオは自嘲めいた笑みを口元にたたえた。
その僅かな変化を隣からさりげなくリオの顔を覗いていたセリアは気づく。
だが、セリアは何か言葉をかけるでもなく黙っていた。
リオが何を思っているのかがわからなかったというのもあるが、美春達の不安そうな視線を受けて、その笑みはすぐに消えてしまったからだ。

「とりあえず俺も情報は探してみるけど、少し気長に待っていてほしい。遅かれ早かれどこかの国が勇者を囲っているのならその存在を公表するだろうから、基本的には待ちの姿勢にならざるを得ないんだ」

国が勇者を確保したのならば権威付けのために大々的に宣伝を行うはずだ。
そのタイミングは国次第だろうが、ずっと隠蔽したままということは考えにくい。
待っていれば勝手に勇者の噂は流れてくるだろう。
都市に行くたびに噂に耳を傾けていれば聞き逃すことはないはずだ。

「いえ、無理を言ってお願いしているのはこちらですから。お願い

します」

と、亜紀がリオに頭を下げて頼む。

「ああ、わかった」

答えて、リオは少し寂しそうな笑みを覗かせた。

「さて、とりあえず話しておかないといけないことはこんなところかな。これからは五人でこの家に暮らしていくことになるけど、よろしくな」

「はい。こちらこそよろしくお願いします！」

美春達も頭を下げる。

それを受けてセリアも笑みを浮かべて頭を下げた。

ひと段落したところで、リオがセリアに視線を向ける。

「話が終わりました。それで先生を部屋に案内しようと思うんですが」

「部屋って、個室をもらえるの？」

「ええ、部屋はまだ余っていますから、どうぞ」

「ありがとう。リオ」

セリアはフフッと嬉しそうに笑みを浮かべた。

「美春さん、申し訳ないのですが、セリア先生の部屋を用意したいので、夕食の用意を任せてもいいですか？」

「はい、任せてください！」

意気込んだように手を握って、美春が答える。

「お願いします」
そう言うと、リオはセリアに視線を戻した。
「じゃあ、セリア先生。部屋に案内しますので、付いて来てください」
「うん。よろしくね」
そのままリビングを立ち去り、リオはセリアを連れて空き室へと案内した。
「この部屋を使ってください」
「わぁ、結構広いのね。本当にこんなに良い部屋を一人で使ってもいいの？」
「はい。基本的に部屋の間取りはどこも同じですから」
「時空の蔵だっけ？　つくづく出鱈目な代物ね。こんな立派な家も持ち運べちゃうんだから」
興味深そうに室内を見渡すセリア。
快適な空間に申し分はないようだが、同時に驚きを隠せないようだ。
「研究室から持ってきた物で必要な品があればここに出しますけど、どうします？」
そんなセリアの反応に苦笑しつつ、リオが尋ねる。
「んー、上手く整理すれば全部入りそうね。とりあえず一通り出してもらってもいいかしら？」

「わかりました。一つ一つ出すので、必要な物があれば先に言ってください。配置も手伝いますから」
「ありがとう。それじゃあ――」

それから、一度、室内の家具を撤去し、リオはセリアの研究室にあった荷物を出していった。
まずは家具の配置を決め、その通りに設置していくと、魔道具や細かい荷物を出していく。

「この魔道具はどうしますか？」

黒い水晶型の魔道具を手にしてリオが尋ねる。

「ああ、それは……。そうだ」

セリアは何かを思いついたような表情を浮かべると。

「リオ、貴方の魔力がどれくらいあるか測ってあげるわ」

と、少し得意げな表情を浮かべてそう言った。

「魔力の量ですか？」
「ええ、私が開発した魔道具でおよその魔力の量を測れるようになったのよ。ちょっとその水晶に触れたままでいてちょうだい」
「ええ……」

自分の魔力総量に興味を覚え、リオは言われるがまま水晶に手を触れさせた。

「『計測（メジャー）』」

セリアが呪文を唱え、魔道具を起動させる。
すると水晶が光を放ち始めた。
「水晶の光の色と強さによっておおまかだけど魔力の量を測定することができるの」
自らが発明した魔道具の性能を語るセリア。
水晶は魔力の量によって黒、白、黄、赤、青、紫の濃淡によって十二段階で色が変化していく。
「ひとつ前のモデルはだいたい宮廷魔道士二百人ちょっとの魔力量が限界だったんだけど、勇者にそれを使ったら測定不能っていう結果が出たのよ。それでちょっと性能を引き上げて倍の四百人分くらいまで測定できるようにしたものを作ったんだけど、これあまり細かい数値を測るのには向いてないのよねぇ」
多量の魔力を測れるようになった代償として、細かな数値を測るのには向いていないのがネックなようだ。
しかし、現状だとセリアの手元にあるのはこれ一台なので、リオの魔力はこれを使って測るしかない。
「まぁこれしかないから我慢して。宮廷魔道士四百人分の魔力なんて馬鹿げた……え？」
薄黒、濃黒、薄白、濃白、薄黄、濃黄、薄赤と、セリアが喋りながらも水晶は急速に色を変えていく。
その変化にセリアが目を丸くする。
「嘘……。濃赤って約百八十人分よ。まだ上がるの……。濃青、二

百八十人分……」

やがて水晶は紫へと色を変え、測定限界値に到達したところで強い光を放ち初期の真っ黒な状態へと戻った。

唖然としていたセリアだったが、ぎぎぎと顔をリオへと動かすと。

「嘘ぉぉぉ！　測定不能って何よ！」

叫んで、四つん這いになって地面に膝をついた。

「あはは。故障……ですかね？」

苦笑しながらリオが尋ねる。

「んなわけないでしょ！　術式の数値をいじって、私が作ったのよ！　故障なんてありえないわ！」

勢いよく顔を上げて、リオの投げかけた質問を力強く否定するセリア。

「まぁ俺は人間族にしては魔力が多いみたいなんで……」

人間族にしては魔力総量が多いことは精霊の民の里で指摘されている。

とはいえまさか宮廷魔道士四百人以上の魔力総量があるとは思わなかったが。

「限度があるわよ、限度が！　私だって人間族にしては魔力はかなり多いのよ。それだってこの水晶で薄白が限界よ！　だいたい宮廷魔道士二十人分ってところなの！」

伊達に魔道の名家と呼ばれているわけでなく、セリアはベルトラム王国でも有数の魔力総量を持っている。
だが、リオはそんなセリアの少なくとも二十倍以上の魔力を持っているというのだ。

「ま、まぁ、休憩はここら辺で中断して、今は作業の続きをしましょうよ。俺の魔力量についてはそのうちきちんと調べることにしましょう」

押し倒すかのような勢いでリオに迫るセリアを宥(なだ)める。
現在ここにある装置だとリオの魔力量を測ることはできないのだ。
議論したところで何かがわかるわけでもない。

「むぅ。まぁ事実は事実だから認めざるを得ないけど……」

言って、ジトっとリオの顔を見つめるセリア。

「さて、この机はどこに置きましょうかね」

そんなセリアの視線から逃れるようにリオは作業に取り掛かった。
その後もリオは十秒ほどたっぷりとセリアの視線を浴び続ける。
やがて思わずといった感じでため息を吐くと、セリアも作業に加わった。
小一時間で作業は一段落し、その頃にはセリアもひとまず先の一件を忘れたようだ。
部屋に設置された椅子に座って、二人は向き合う。

「リオ、本当にありがとうね。一方的に私が貴方に迷惑をかけてしまうことになるけれど、私にできることなら何でもするわ。必要な

ことがあったら言ってちょうだい」

と、柔らかい笑みを浮かべてセリアが言った。

「いえ、先生はどっしりとこの家で構えていてください。俺は少しあちこち動き回るかもしれませんが、頻繁に帰って来るようにしますから」

「そう……。わかったわ。これからよろしくね」

「はい、よろしくお願いします。外を出歩けるように、近いうちに髪の色を変える魔道具を作っておきますから」

「あ、今、リオが使っている魔道具ね。たしかに髪の色が違うと印象はだいぶ変わるものね。お願いするわ」

「はい。出来あがったら身の回りの物を買いに都市に行きましょう」

「ええ」

などと、二人が話し合っていると。

「ハルトさん。夕ご飯ができましたよ」

開きっ放しになっていた部屋の扉から顔を出して、美春が声をかけてきた。

「すみません、美春さん」

リオが顔をほころばせて返事をする。

その隣でセリアはさりげなくリオの表情を窺っていた。

「セリア先生、夕飯ができたみたいなので頂きましょう」

「あ、うん。御馳走になるわ」

リオに声をかけられ、セリアがサッと笑みを浮かべて答える。
その時、チラリとセリアと美春の視線が重なった。
ニコリと笑みを浮かべる美春。
それに応えるようにセリアも笑みを浮かべる。
そんな二人のやり取りを見て、何か通じ合うものがあるのかとリオは思った。
僅かに首を傾げると。

「じゃあ御馳走になりますね、美春さん。セリア先生、行きましょうか」

リオは小さく笑みを浮かべて二人をダイニングへと促した。

第６４話　セリアの思い出

リオ達が暮らす家のダイニングキッチンには十人以上が一堂に会して食事をできるテーブルが置かれていた。
その上に美春の作った料理が広げられている。
セリアに配慮しているのか、今日の献立はライス、パン、ビーフシチュー、トマト煮のロールキャベツ、テリーヌ、サラダと洋食が中心となっていた。

「うわぁ、良い匂いね。これ、全部ミハルが作ったの？」

鼻をすんすんとひくつかせながら、セリアが尋ねる。

「ええ、美春さんは料理が得意なので、俺と分担して料理を作ってもらっているんです。今日は美春さんにお任せしてしまいましたが」
「へぇ、私も料理を習おうかしら？　早くミハルと仲良くなりたいし」

並べられた料理の数々に顔をほころばせながら、セリアは言った。

「それもいいかもしれませんね」

微(かす)かに笑みを滲(にじ)ませながら、リオは答えた。
料理を教えることは美春の会話の練習にもなるはずだ。
自分も間に立って、困った時は通訳をすればいいだろう。

「ハルト兄ちゃん。早く食べようぜ！」

既に席に着いている雅人が待ちきれない様子で口を開く。
リオは軽く笑って。
「ああ、ごめん、ごめん」
と、雅人に謝罪すると。
「セリア先生はこちらの席に座ってください」
自分の左隣の椅子を引いてセリアを勧めた。
ちなみに右隣は美春の席となっており、向かい側は亜紀と雅人の席となっている。
「ありがと」
ご機嫌な様子で礼を告げると、セリアが席に座る。
遅れて亜紀と美春がキッチンからやって来て席に着くと。
「いただきます」
食事が始まった。
「イタダキマス？」
と、セリアがリオに尋ねる。
セリア以外の全員が同じ言葉を発したことを疑問に思ったのだろう。
「これは食事をする際の挨拶みたいなもので、料理人や食材といった食事を与えてくれるすべてに感謝を捧げるんです」

首を傾げるセリアにリオが意味を教える。
すると。
「へぇ、私もやってみるわ。イタダキマス」
セリアも見よう見まねでそう言った。
それを見て美春達が嬉しそうに微笑む。
「じゃあまずはこのテリーヌから頂こうかしら」
ナイフとフォークを綺麗に使ってセリアがテリーヌを口に運んだ。
「素材の味が良い感じに生かしてあるわね。これは温サラダみたいに軽く焼いてあるのかしら」
笑みを浮かべて感想を漏らす。
貴族だけあってセリアはそこら辺の人間よりかは食通である。
美春の料理はそのセリアをして唸らせることができたようだ。
「じゃあ次はこっちのキャベツの煮物を頂こうかしら」
そう言って、ロールキャベツを口に含むと、セリアは目を丸くして硬直した。
「お、美味しい！　何この味付け！　すっごく濃厚！　中のお肉にチーズがとろけて最高ね！」
大絶賛するセリア。
リオが翻訳するまでもなく、セリアが料理を気にいったことがわ

かり、美春はそっとはにかんだ。

「この赤っぽい色は何なの？」

「それはトマトという食材の色ですね。こちらの地方にはありませんが、大陸の中央付近で採れる野菜です」

「へぇ、こっちのシチューもすっごく美味しいわね。お肉が柔らかくて味も染みてて文句なしよ。これならどの貴族だって気にいるわ！」

そう言って、太鼓判を押すセリア。

美春が褒められていることが嬉しくて、ついついリオの顔もにやけてしまう。

「ああもう！　お酒が欲しくなっちゃうわね！」

「それなら……良い酒がありますよ。『解放（ディスチャージ）』」

リオの傍らの空間が歪み、金属製の酒器が現れた。

お酒と聞いてセリアの目が輝く。

リオは美春達に視線を移し。

「セリア先生にお酒を振る舞おうと思うんですが、美春さん達も一口どうですか？」

と、三人に水を向けた。

シュトラール地方では食事の際には水よりも酒を飲む者の方が多い。

というよりも基本的に飲料可能な天然の生水が存在しないのだ。

最近では美春達に合わせてリオも酒を飲むのは避けていたが、セリアがいるのならリオも飲むのは吝（やぶさ）かではない。

「え？　お酒ですか？」
「はい。この世界は子供でもお酒は飲めるので。まぁ飲みすぎは良くないでしょうけど、試しに一口くらいならどうかなと思いまして」
美春達が身構えないように気軽に勧めるリオ。
「え、えっと、じゃあ一口だけ」
美春は少し悩んでいたようだが、せっかくの勧めを断るのも悪いと思ったのか、リオの誘いを受け入れた。
「あ、俺も飲んでみたい！」
「じゃあ私も……」
すると雅人と亜紀もそれに続いた。
二人とも興味があるようで、リオが出した酒器に興味を惹かれているようだ。
「わかった。じゃあちょっとだけ」
そう言って、金属製のカラフェの中に入っている良く冷えた酒を五つのグラスに酌み分けていく。
リオとセリアの分はなみなみと注いだが、美春達の分は本当に少しだけだ。
「では飲みましょう。乾杯」
グラスが全員に行き渡ったところで、杯を合わせて乾杯する。
美春達はおそるおそると言った様子で杯に口を近づけた。

「わぁ……」
「お、美味しい！」
「すげぇ、酒ってこんなに美味いもんだったのか」
美春達が目を丸くしてその感想を告げる。
続けて、香りを楽しんでうっとりとしていたセリアが酒を口に含んで。
「っ！　何よ、このお酒！　美味しすぎるわ！」
血相を変えて叫んだ。
リオが持っている酒の中で最高の酒は間違いなく霊酒だが、あれは度数が高いし量もそれほど多くない。
セリア達の酒の強さが分からない段階で無暗に飲ませる真似はしない方がいいだろう。
今飲んでいるのは精霊の民の里で作られた名酒の一つだが、霊酒でなくともその味は人間族が作る酒とは品質がけた違いである。
セリアの反応は当然であった。
「飲みやすいですがそれなりに強いお酒なので、あまり飲みすぎないでくださいね」
「そんなことよりこんな名酒どこで手に入れたのよ！　売れば金貨数枚なんて目じゃないわよ！」
人間族の世に出回っている最高級のお酒はせいぜいが金貨数枚という値段である。
だが、今飲んでいる酒にはそれ以上の値段が付くと、セリアは断言した。
「このお酒は人間族が作ったものじゃありませんからね」

「あー、なるほどね」

リオが精霊の民と交流があることは岩の家に辿りつくまでの間にセリアに軽く説明してある。

おそらくはそこで手に入れたものだろうとセリアは当たりをつけた。

セリアは酒の放つ甘い香りを鼻で深く吸い込むと。

「酒好きの貴族が知ったら血相を変えて交渉してくるわよ、これ。ううん、そうじゃなくても欲しがる人は絶対に多いわ」

と、顔をうっとりさせてそう言った。

「世に出すつもりはありませんけどね」

「ああ、こんな美味しいお酒を私達だけで飲むなんて、とんでもない贅沢だわ……」

嘆(なげ)く様にそう漏らすセリア。

同じくらいに美味しいお酒がまだまだ飲み切れないくらいにあるし、これ以上に美味しいお酒もあると言ったらとんでもないことになりそうだ。

リオは黙って美春の作ったビーフシチューを口にした。

柔らかく煮込まれたビーフシチューが素晴らしい味を滲(にじ)み出しており、リオは顔をほころばせる。

「さて今度はミハルの作ってくれた御馳走を楽しむ番ね。この皿に盛りつけられた白い粒は何なの？　麦……じゃないわよね？」

「それはお米ですね。色んな種類があって一概には言えませんが、そのままだと特に味は付いていないのが特徴です。なので他に味が付いた食事と一緒に食べるのが一般的な食べ方です」

「へぇ、じゃあ、まずは試しにそのまま……うん、確かに味は付いていないわね。何かと一緒に食べた方が良さそう。あ、このキャベツの料理と一緒に食べると良い感じね。シチューのお肉にも合いそう」

にこにこと笑って食事を楽しむ。

そんな感じで終始セリアは美春の作った料理に舌鼓を打っていた。

食事を終えると今度はお風呂だ。

「こちらが脱衣所になっています。浴室はあの扉の向こう側です」

浴槽文化のないセリアに風呂の使い方を教えるべくリオが案内をする。

「ずいぶんと立派な脱衣所ね。この分だと浴室もかなり大きいのかしら。思ったんだけど、この家って見た目よりも広くない？」

きょろきょろと脱衣所の室内に視線を送りながら、セリアが尋ねる。

「ああ、それは室内を広げるように空間魔術をかけてあるからですね。構造上、広げられる面積には限度がありますが、けっこう便利なんですよ」

と、リオが何の気なしに答えると。

「く、空間魔術ね。これも精霊の民って人達に教えてもらったってわけか。人間族がいかに遅れているかが実感できるわ」

セリアが顔を引きつらせた。

「俺も最初はその利便性に感動しましたよ。じゃあ浴室に移動しましょうか」

浴室の扉を開き、中に入るようにジェスチャーで促す。

「ありがと」

小声で礼を告げ、浴室の中へと入ると。

「な、何これ？　すご！　これが浴室なの？」

セリアは思わずと言った感じで叫んだ。

「あれは浴槽と言いまして、先に身体を洗った後にあの中のお湯に浸かって身体を温めるんです」

「人間族のお風呂とはだいぶ違うのねぇ」

岩で囲まれた広い浴室を見渡すと、セリアは感慨深げに息を吐いた。

シュトラール地方には秘境にある温泉を除いてお湯に浸かるという習慣がない。

セリアも温泉という存在は知っているが、実際に浸かったことはなく、初めての体験に随分と興味を引かれているようだ。

「一度体験すると病みつきになると思いますよ」

にやりと笑って、リオが言う。

そのまま室内の洗い場に視線を向けて。

「あそこで髪と身体を洗ってください。設置されている魔道具の水晶に手を触れるとお湯が出てきます。石鹸は五種類ありまして、それぞれ役割は――」

と、セリアに浴室に設置された魔道具や石鹸の使い方を教えていく。

「使い方はこんなところですかね。岩風呂と檜風呂は湯の温度が違うので、気分で好きな方に入るといいですよ。後は実際に体験してみてください。俺は部屋に戻りますので」

「ええ、ありがとうね」

そのまま二人で脱衣所に戻り、リオは自室へと戻り、セリアだけが残った。

脱衣場に鍵をかけると、身に着けたワンピースを脱いで、簡素な綿の下着姿になる。

その下着も脱ぎ去ると、背中まで伸びた白いストレートヘアがばさりと流れた。

室内に人はいないのだが、裸のまま広い脱衣場にいると何となく気が落ち着かない。

セリアはそそくさと浴場へ向かった。

「たしかにこのお湯の中に身体を埋めたら気持ちよさそうね」

思わず白く湯気が立ち昇る浴槽にざぶんと飛び込みたい衝動が沸き起こったが、まずはリオに言われたとおりに髪と身体を洗うことにする。

「うわぁ、液状の石鹸なんて初めて見たわ。しかも凄く良い香り」

セリアは石鹸の品質の高さに驚きを覚えた。
そう、まず、匂いが違う。
人間族の社会に広く出回っている石鹸は軟石鹸と呼ばれる柔らかいもので、匂いもあまり良いものではない。
だが、リオが用意してくれた石鹸は思わず鼻で息を吸い込みたくなるような優しく甘い花の香りがする。
最近になってリッカ商会が発明したという硬石鹸よりも断然にこちらの方が良い。

「五種類すべてリオが作ったって言っていたけど、この作り方を教えるだけでとんでもない額の収入になりそうね。まぁあの子はそんなことはしないんだろうけど」

リオは地位とか名声とかよりも平穏を選ぶタイプだ。
教えるとしても自分の名は絶対に出すことはしないように思えた。
ちなみにこの家に置かれている石鹸はどれも精霊の民の里でしか採れない材料を用いているため、人間族に製法を教えたところで生産することはできない。
その品質は精霊の民のお墨付きで、シュトラール地方で作られている石鹸など比べるのもおこがましいくらいに良質である。
なお、カラスキ王国でユバの村に教えた製法は、精霊の民で作られているものよりグレードは落ちるが、生産性に富んだものだ。

「さて、身体はこんなものでいいのかしらね」

泡立てた石鹸で身体の隅々まで優しく洗ったところで、魔道具の湯口から流れるお湯をかけて泡を流す。
この時点で肌がいつもよりつやつやになった気がした。

「次は顔か。えっと、これかな」

桶に入れておいたぬるま湯を顔にかけると、洗顔用と書かれた容器を取って、その中から適量の石鹸を手につけた。

そのまま泡立てた石鹸を顔につけて擦らないように優しくマッサージしながら洗っていく。

「うわぁ。気持ちいい」

顔に付着した汚れが洗い落とされ、肌に潤(うるお)いが残ったままハリがあるような感じが残る。

「で、次は頭か。えっと、まずはシャンプーで、次にトリートメントっていうのを使うんだっけ」

まずはシャンプーで髪を丁寧に洗うと、その後にトリートメントを髪の中間から毛先にかけて馴染ませた。

「これでいいのかしら？」

リオに言われた通りに蒸しタオルで長い髪と頭を包むと、そのまま湯船に浸かった。

「うああ……」

悶えるような声がセリアの口から漏れる。

「凄く気持ちいい。こりゃ癖になるわね」

心地良い脱力感が全身を包み込む。

目を瞑って口元までお湯に浸かると、全身を弛緩させる。
空を見上げると綺麗な星々が視界に映った。
セリアの顔には微笑みが浮かんでいる。
「綺麗ねぇ。つい半日くらい前までこの世の最後みたいに思っていたのが嘘みたい」
ふと、セリアはリオと仲良くなるきっかけとなった時のことを思い出した。
場所はベルトラム王国王立学院の図書館棟。
時期はリオが入学してから一ヶ月くらいが経過した頃だったろうか。
（あら、あの子……。またいるわね）
いつも研究室に引きこもっているセリアだったが、こうして本を探しに書籍室へとやってくることが多い。
そこでセリアはリオが一人で黙々と本を読んでいる姿を目にした。
セリアはリオがこうして図書館で本を読んでいる姿をよく目にする。
とはいえ、当時のセリアはまだリオとの接点は少なかった。
だが、リオが入学してすぐに算術の記号を教えて、その時に尋常じゃない速度で暗算をこなしていく姿が印象的で、セリアはリオのことを覚えていた。
（いつも本を積んでいるけど、何の本を読んでいるのかしら？）
こうして頻繁にその姿を目にすると、流石に少し気になる。
いつもは遠目から眺めているだけだったが、セリアはリオにそっと近づいた。

（あれ、寝てる？）

近づいてみると、リオは本を手にしたまま安らかに寝息を吐いて眠っていた。

机の上にはびっしりと文字が書かれた紙が何枚か置いてある。

（本を読みながら文字の勉強をしているのかな）

セリアはそう推測した。

読んでいる本は児童向けの学術書のようだが、机の上には文字の教科書と辞書や図鑑が置かれている。

おそらくわからないことを適宜調べながら本を読んでいるのだろう。

（そういえばこの子って孤児だったんだっけ）

と、リオの境遇を思い出す。

元が孤児ならば常識なんてほとんど身に付いていないはずだ。

いくら児童向けの本とはいえ、読むのはかなり苦労するだろう。

（でも、この子って文字は読めなかったはずよね。一か月前は算術の記号さえ知らなかったくらいだし。まさか……）

たった一ヶ月で本を読めるくらいに文字を習得したのだろうか。

それも独学で。

セリアはそのことに気づいた。

（でもそうしないと授業に置いていかれちゃうわよね……）

王立学院は貴族達が通う学び舎だし、講師達も暇ではない。
元孤児の少年がわからないと言ったところで授業のペースを遅らせたり内容を簡単にすることはないだろうし、わざわざ元孤児のために授業外で時間をとって教えるような真似もしないだろう。
だから、リオが授業に付いていけなければ放置されてどんどん授業は先に進んでいくはずだ。
セリア自身も研究が忙しくてそれほど意識はしてなかったが、少し考えればそんなことは容易に想像できた。

（独学なのにたった一ヶ月でこれを……。すごい頭の良い子なのね。これなら算術を身に着けていたのも納得ができるのかしら？）

置かれていたメモの一枚を取って、セリアはじっとその内容を読みこんだ。
字は綺麗だし、書かれていることに無駄はない。
しかも読み直しやすいように工夫がされており、わかりにくいところには詳しく説明が書かれている。
中には自作の単語帳まであった。

（疲れちゃったのかしら。まぁ授業が終わってからずっとここで本を読んでたら無理もないか）

安らかな寝顔は非常に整っているが、すごく無邪気に見える。
セリアはくすりと笑みを浮かべると。

「ほら、こんなところで寝てると風邪をひくわよ」

リオの肩をゆすった。

「……ん、……セリア先生……ですか？」

「あら、覚えていてくれたのね。貴方はリオだったかしら？」
眠気眼のリオに、セリアはにぱっと笑ってみせた。
「はい。そうですけど……」
何か用でしょうか、と言いたげな視線をリオはセリアに向けた。
「休憩がてらちょっとお茶でもしない？」
「え、でも……」
「いいから、付いてきなさい」

セリアは戸惑うリオの手を引っ張った。
少し照れくさくて、リオの顔から視線を外す。
どうしてこんな大胆な真似をしたんだろうか。
今思い返してもそう思う。
けど、この時、こうして良かった。
本当にそう思う。
そうしなければリオと仲良くなることはなかっただろうから。
これをきっかけにセリアはリオと一緒にお茶を良く飲むようになった。
気がつけば毎日のようにリオと会うようになって、色んなことを話すようになる。
あっという間に時間は過ぎていって、リオが冤罪をかけられて国から逃げなければならなくなった時はとても衝撃を受けた。
リオが去ってから、セリアとリオの繋がりは切れていたが、リオのことはセリアの中で良き思い出として心に刻まれ続けた。
リオからもらった手紙も実は肌身離さず持ち歩いて、嫌なことがあるとその手紙を読んで気持ちを入れ替えるようにしていたのだ。

「あの手紙をずっと持ち歩いていたって教えたらどんな顔をするのかしら」

フフッとセリアは笑いを漏らす。

セリアにとってリオは単なる一生徒ではない。

若くして王立学院の講師になったせいか、嫉妬もあり、セリアには友人と呼べる人物がほとんどいなかった。

そんな生活の中で唯一の気を許せる話し相手がリオだったのだ。

冤罪で国を追われたリオを見送ることしかできなかった当時の自分の無力さを嘆く日もあった。

ひょっとしたらもう二度と会えないんじゃないかと想う日もあった。

それでも、唯一の繋がりであるリオの手紙を捨てることなんて出来なかった。

いつか再会できるんじゃないか。

セリアはそう望んでいたから。

だから、セリアにとってリオは、弟のようで、友人のようで、そんな大切な存在だった。

けど、今は少し違うかもしれない。

いや、今でもそういった存在であることに変わりはないけれど、少し違う感情が芽生え始めている。

上手く言葉にできないが、セリアはそんなことを感じていた。

今もリオのことを思うとドキドキする。

結婚なんてしたくないと思っていた頃の自分が今の自分を笑ってしまうくらいに。

研究漬けの自分が今の自分をどんな乙女なのかと突っ込んでしまいたくなるくらいに。

「本当にリオには感謝しないとね」

自分に会いに来るために、嫌な思い出しかないベルトラム王国に戻ってきてくれた。
もしかしたら国を敵に回すかもしれないのに、自分の危機を知ったら迷わずに力を貸してくれた。
セリアとリオの繋がりはたった五年と少しの間しかなかったのにだ。

「……そろそろ頃合いかしらね」

少し湯船に浸かりすぎたかもしれない。
最後に髪に馴染ませたトリートメントを流して、簡単に身体を洗うと、セリアは風呂場を後にした。

「リオ、良いお湯だったわよ。ありがとうね」

着替えを終えてリビングへ戻ると、美春達と紅茶を飲んでお喋りをしていたリオに、セリアは僅かに頬を紅潮させながら礼を告げた。

第６５話　情報収集

セリアがリオの家で暮らすようになった翌日、リオはセリアと一緒にガルアーク王国南西端に位置する交易都市アマンドへと訪れた。

「初めて来たけど随分と綺麗で活気のある都市なのね」

興味を惹かれている様子で周囲を見渡しながら、セリアがリオの隣を歩く。

ちなみに今のセリアはリオが作った魔道具で髪の色を白から金髪に変えている。

パッと見ただけだとリオですら見間違えるくらいにセリアの雰囲気は変わっていた。

「ええ、クレティア公爵の令嬢であるリーゼロッテという人物がこの都市の改革を推し進めたみたいですよ」

アマンドが栄えている理由を告げるリオに。

「へぇ、実は私の友達がその公爵令嬢に仕えているのよね」

と、セリアが何気なく話題を振る。

「そうなんですか？」

「ええ、本当はベルトラム王国の名門騎士の娘だったんだけど家が没落しちゃってね。王立学院も中退して、何とか王城で女官見習いとして仕えていたんだけど、風当たりが強くて辞めちゃったのよ」

ベルトラム王国だけというわけではなく、基本的にこの世界の人間族の国においては身分が絶対だ。
すべての貴族がそうというわけではないが、身分を笠に着て身分のない者に威張り散らす者は大勢いる。
特に貴族やそれに準じる者が多くいる場所においてはその傾向が顕著であり、リオがいた王立学院や王城といった場所はその最たる例だ。

「確かに没落した家の出だと風当たりは強そうですね」
「うん。けど、凄く優秀な子だったのよ。王立学院時代じゃ筆記と魔法は私が首席だったけど、その子は中退するまで武術だけは断トツで不動の首席だったんだから」
「それはすごい」

と、感心したようにリオが言う。
王立学院では有事の際に備えて最低限の護身術として女性も武術を習うことになっているが、本格的に修練に打ち込む令嬢は少ない。
せいぜいが体型作りの軽い運動程度にしか捉えられておらず、周囲の雰囲気もあって女性の身で武術で上位に名を連ねる成績を収める者はほぼいない。
ましてや首席となるとかなり稀有な存在だろう。

「ええ、結局ベルトラム王国に嫌気がさして冒険者になったんだけどね。実力は折り紙つきだからあっという間に頭角を現したみたい。ガルアーク王国で活動しているところをここの令嬢にスカウトされて定職に就いたらしいわ」
「最近でも交流があったんですか？」
「うん。実はリオの手紙を届けてくれたのがその子でね。軟禁されるまでは定期的に手紙のやり取りしていたのよ」
「なるほど……」

小さく頷きつつも、セリアの言葉に妙な違和感を覚える。
リオは僅かに首を捻ると。
「たしかに俺はリッカ商会に手紙の配送を依頼しましたが……」
言いかけて、考えるそぶりを見せた。
「どうかした？」
リオの様子を不思議に思って、横からリオの顔を覗き込み、セリアが尋ねた。
「いえ、セシリアのご友人は冒険者としての腕を買われてこちらの公爵令嬢に雇われたんですよね？」
セリアの偽名を呼びながら、リオが語る。
アマンドを訪れるにあたってセリアには偽名を決めてもらっている。
セシリアというのは少し安直な気がしないでもないが、あまり本名と違いすぎると認識できないからこれでいいと本人が申し出たため、この名前が採用された。
閑話休題。
「そうよ。それがどうかした？」
「いえ、確かにリッカ商会はクレティア公爵令嬢の息がかかった商会ですが、そんな腕利きの部下をただの宅配業務に従事させるのかなと思いまして」
と、リオは違和感を覚えた理由を口にした。

「ああ、そういえば仕事で王都に立ち寄ったついでみたいなことを言っていたわね。彼女が私の知り合いだから上司から手紙の配送を任されたみたいよ」
「そうだったんですか」

表面上は納得したような声を出しながらも、リオは何となく釈然としない気持ちを抱いていた。
セリアの話を前提にすると、彼女にリオの手紙を配送するように依頼した人物はセリアとその知人の関係を知っていたことになる。
貴族に配送する手紙ならば配送人に相応の人物を選ぶのはわかるが、知り合いとはいえわざわざ武闘派の人間を選んだのは少し腑に落ちない。
セリアの知り合いはクレティア公爵令嬢から直々にスカウトされた人物だという。
もしかしたらセリアの知人に手紙の配送を依頼した人物はクレティア公爵令嬢なのではないか。
そんなことを思い、ふと、一人の少女がリオの頭に浮かんだ。

（いや、これ以上は憶測になるだけだな）

不確定なピースが多すぎてパズルの絵柄が見えてこない。
そう考えて、リオがひとまず思考を中断すると。

「自由奔放な上司だから苦労が絶えないってアリアも嘆いていたわ」

と、セリアが可笑しそうに語った。
どうやらアリアという名前の人物がセリアの友人らしい。
何となく聞き覚えがあるような気がしたが、リオは思い出すことはできなかった。

すぐに気のせいかもしれないと思い直し、リオは小さく頭(かぶり)を振る。
「今を時めくリッカ商会ともなると人使いが荒いのかもしれませんね。それとも人使いが荒いのはクレティア公爵令嬢なのか」
言って、リオは気を取り直す様に悪戯めいた笑みを浮かべた。
「こらこら、滅多な事を言わないの。貴族は耳聡い生き物なんだからね」
言葉ではそう言いつつも、セリアもリオと同じように悪戯っぽい笑みを浮かべていた。
貴族は名誉を大事にする生き物だ。
平民が公衆の面前で表だって貴族を侮辱すれば殺されても文句は言えない。
とはいえ貴族のいない場ではこうした冗談めいた軽口くらいはよく囁かれている。
「セシリアが言うと重みがありますね」
リオが苦笑して言う。
「ちょっとそれどういう意味よ？」
綺麗な笑みを浮かべて尋ねるセリア。
リオは苦笑を浮かべたまま。
「あはは。深い意味はありませんよ。それはそうと、ひょっとしてセシリアはその友人に会いたかったりします？」

話題を逸らす様にそう言って、セリアを見やった。

「うーん、まぁ会ってみたい気持ちはあるけど、今のところは様子見かしら。一応アリアはガルアーク王国の貴族に仕えているからね。ベルトラム王国に対するガルアーク王国の態度が確定するまでは保留しておくわ」

セリアがそう言うと、リオは満足そうな笑みを浮かべて。

「わかりました。会いたくなったらいつでも言ってください。可能な限りは取り計らいますから。懸念事項を踏まえての判断は基本的にセシリアに任せます」

と、そう告げた。

クーデターが起きたことにより政情が不安定とはいえ、現時点ではまだ友好国であるベルトラム王国に恩を売るために、ガルアーク王国の貴族に仕えるアリアが主の命により友人であるセリアの身柄を確保する可能性は十分にあり得る。

うかつな行動をとることはできないが、セリアの行動の自由は可能な限り確保したいというのがリオの本心だ。

セリアならばうかつな真似をすることはそうそうありえないので、信用もできる。

「あら、信用してくれているのね」

嬉しそうに微笑むセリアに。

「友人との接触を完全に絶たせたら、あのまま軟禁された状態と変わりありませんしね。身の危険が生じるリスクが許容範囲内なら、セシリアの行動の自由を制限する理由はないですよ」

と、リオが肩を竦(すく)めて答える。

「ありがとう。もしかしたらその子を経由してその公爵家の令嬢が後見人になってくれるかもしれないし、万が一の時は頼ってみるのもいいかもしれないわね」

「まぁ信頼できる後ろ盾があった方が行動しやすいのは確かですね。一方的に頼りきりになるのは問題ですが」

「そこは私を交渉カードにしてくれていいわよ。こう見えて各国が欲しがる魔道学者だからね、私」

セリアが少し得意げに語る。

「条件が良くてセシリアもそれを望むのならばともかく、交渉材料は俺の方で用意しておきますよ。セシリアは気楽に構えていてください」

そう言って、リオはセリアにそっと微笑みかけた。

「……ありがと」

少し強い午前の日差しの下、僅かに顔を紅潮させて、セリアが礼を告げる。

そこで、目的の店が視界に入ってきて。

「さて、そろそろ目的の店に着きますよ。必要な日用品はあそこで揃うはずです」

と、リオはそう言った。

「やっぱり大きな店ね。リッカ商会と言えばベルトラム王国の貴族の女性達にも人気のあるブランド店よ。質がいい分そこそこの値段がすると思うけど、本当にあそこの店でいいの？」

久々の外出に心が躍っているのか、セリアが嬉しそうな笑みを浮かべる。

「ええ、お金ならかなり余っていますから。どうせなら品質の高い物の方がいいでしょう。美春さん達の衣類もリッカ商会で買い揃えていますから気にしないでください」

「そういえばリオって国から結構な額の金貨を支給されていたんだっけ？　そのお金ってまだ持ってるの？」

「ええ、逃走時に必要な物資を買う以外はほとんど使わなかったので、現金だと魔金貨数枚分のお金を持っています。旅をしている間に倒した魔物の魔石も大量に持っていますので、それを売れば一生働かなくても大丈夫です。むしろ使い切れません」

「……ひょっとしてそこら辺の貴族よりも裕福なんじゃないの？」

セリアが呆れたような視線をリオに向ける。

「貴族の収入がどの程度なのか知りませんので何とも言えませんが」

「下級貴族だと金貨四十枚くらいが年収よ。魔金貨が一枚もあればその年収を上回るわ。あの家も高位貴族の屋敷よりずっと快適だし、食生活もずっと豊かだし、甲斐性がありすぎよ」

くすくすとセリアは笑った。

「セシリアを連れ出す時に言ったでしょう。常識外れなところが多々あるって」

リオが小さく肩を竦める。

「ええ、良い意味で常識外れなことだらけだったわね。お陰様で今は人生最高に快適な生活を満喫させてもらっているし、本当にリオには感謝しているわ」

そうやって会話をしているうちに店の前にたどり着く。

二人は立ち止まり、何となく視線を合わせる。

すると、お互いに口元がほころんでいることに気づき、フッと笑みを強めた。

「では、後で合流しましょう。色々と入り用でしょうし、買い物は二時間くらいでいいですか？」

「ええ、それだけ時間をもらえれば大丈夫だと思うわ」

セリアは言葉が通じるので、何かわからないことがあれば店員に尋ねることができる。

少しずぼらなところもあるが、仮にも貴族ならば平民よりは買い物慣れをしているだろうし、お金は十分に渡してあるので問題はないだろう。

「いえ、俺も用事がありますから。一階のフロアにいてくれれば迎えに来ますので」

「わかったわ。それじゃあ気をつけてね」

「はい。セシリアも」

別れの挨拶を告げて、セリアが店の中へと入っていくのを見守る。

店内に入り終えたところで、リオは自らの所用を済ませるべく移動を開始した。

まず向かうのは人気のない路地裏だ。
周囲に人の気配がないことを確認して、軽く一息。
小さく目を瞑ると、リオの顔が光に覆われ、その容姿が瞬く間に変化していく。
次の瞬間には、リオとは容姿の異なる成人男性がその場にいた。
リオが行ったのは精霊術による変化だ。
やっていることは髪の色の変化と同じだが、容姿を変化させる方が難易度は比較にならない程に高い。
変化の術はオドとマナの操作が複雑で扱いにくい上に、常時オドを操作してマナに干渉する必要があるため、気を抜くとすぐに術が解けてしまう。
なので、永続的に変化を行うのならば魔道具か霊具を作成する方が効率的であるが、一時的に変化を行う分には精霊術で事足りる。
戦闘中はともかく、都市の中で行動するくらいなら術が解ける心配はないので、リオは精霊術で変化を行うことにした。
小さく深呼吸をすると、リオは意識を切り替え、路地裏から立ち去った。

アマンドの商業区画の中でも飲食街の少し奥外れにある酒場にリオはやって来た。
まだ昼間だというのに酒場の中には冒険者の風貌をした男達がたむろして騒いでいる。
リオは迷うことなく真っ直ぐにカウンターへと向かった。

「蒸留酒でおすすめを頼む」
「飲み方は？」
「任せるよ。ただ、ちょっと強めが良いな」
「わかった。任せな」

言葉少なげに会話を終えると、店主は注文の酒を作るべく作業に

取り掛かった。
年の頃は中年で、長年の経験を経た熟練の手付きには一切の無駄がない。
「ところで、お前さん、見ない顔だね。余所の都市からやって来た冒険者かい？」
手持無沙汰に椅子に座るリオに店主が世間話を振ってきた。
「ああ、ちょいと人探しをしながら各地を旅していてな。そうだ。マスターに心当たりはないか？　ルシウスっていう冒険者なんだが」
普段とは口調を変えて、無頼（ぶらい）の冒険者を装い、リオが尋ねた。
リオが冒険者の多い酒場を選んだのは情報の収集を行うためだ。
こういった酒場を経営するマスターならば情報屋に似た役割を担っているだろうと判断したのである。
「ふむ。どの程度の情報が欲しいんだ？」
予想的中（ビンゴ）　。
当たりを引くまでそれらしい店を片っ端から回ってみる予定だったが、初っ端から目的の店に辿りつけるとは幸先がいい。
リオは小さくほくそ笑んだ。
「簡単な人物像と出来れば所在を頼む」
「……小銀貨一枚ってところだな」
「ああ、頼む」
こういった活動は初めてのことだが、リオはポーカーフェイスでスッと小銀貨を一枚を差し出した。

手元にきっちりと小銀貨を収めると、店主は淡々と説明を開始する。

「ルシウス。一級冒険者。専門は傭兵業。指揮している傭兵団『天上の獅子（ザ・グリフォン）』は無敗で最強の傭兵団の一角に数えられるくらいに有名だな。戦士としての実力は超一流。とまぁここまでは表向きによく知られている客観的に確定している情報だな」

店主はここでいったん言葉を切る。

冒険者は六段階に階級分けがされており、最下位にいるのが五級の冒険者であり、数字が減るごとに上位の冒険者となる。

一級の上にいるのが特級の冒険者であるが、名誉階級的な意味合いが強く、その数は非常に少ない。

それゆえ、実質的には一級が最高位のランクとなる。

それはともかく、差し出された酒の香りを楽しみながら、リオは黙って店主の説明を聞いていた。

話を続けてくれと言わんばかりに店主に視線を投げかける。

店主は小さく頷くと話を続けた。

「この業界じゃハッタリをきかせるのは当たり前だからどこまで本当かは知らねぇが、やっこさんはもともとはベルトラム王国で『王の剣』の候補者に選ばれたほどの使い手だったという噂を聞いたことがある」

その話にリオが小さく目を見開く。

『王の剣』とはベルトラム王国の国王に認められた最高の剣士に与えられる称号である。

リオが知る限りではかつての『王の剣』は近衛騎士団長であるアルフレッド＝エマールであったはずだ。

その前の『王の剣』が誰であったかは覚えていない。

店主はリオの反応を機敏に察し、小さく笑うと。
「まぁそれを裏付けるくらいには強いってことだ」
と、そう付け加えた。
「活動範囲は転々としているが、ガルアーク王国で活動していた時期もあった。ここ最近は活動の噂を一切聞かないんだが、大規模だろうが小規模だろうが戦争をやってるところには高確率で出没するから、戦争中の国に行けば会えるんじゃねぇかな」
どうやら居場所については大した情報は持っていないようだ。
最近は活動の噂を聞かないというのが少し気になるが、ヒントは戦争だという。
話を聞く限りではまるで戦争中毒者のようだ。
いや、傭兵なんてそんなものなのかもしれない。
表情には出さず、リオは内心で小さく舌打ちをした。
「なるほどな。それで、近々、戦争が行われそうな国に心当たりはあったりするか？」
リオはじっと店主を見据えた。
店主は小さく肩を竦(すく)めて。
「最近じゃどこもきな臭いことになっているぜ。大国で戦争をおっぱじめてもおかしくないのはプロキシア帝国かベルトラム王国らへんだな。相手がどこの国になるかは知らんが、もしかしたらこの国になる可能性もある。小国だとガルアークの北方に行けばプロキシア帝国とガルアーク王国を背後に小競り合いが日々生じているよ」
「なるほどな。助かったよ」

と、リオは小さく礼を告げた。
「いや、料金分の仕事をしただけだ」
店主が誇り気に答える。
リオは薄く笑って酒の入った杯を飲み干した。
「この店の他のお勧めをもう一杯頼む」
「ああ、任せときな」
追加でもう一杯を注文し、リオは店主との会話を続けた。
とりあえずルシウスに関する話は聞けたが、他にも聞きたいことはある。
特に勇者に関する情報だ。
だが、店主は勇者について詳しい情報をまだ仕入れることはできていないようだった。
知ることができたのは光の柱が立った方角くらいだ。
勇者召喚がされてから数日しか経過していない現在では無理もないのかもしれない。
「御馳走さん。酒、良い仕事してるぜ。また来るよ」
「おう、金払いの良い奴はいつでも歓迎だぜ。最近じゃ情報屋を相手に値切る阿呆が多いからな」
「そいつは長生きできそうにないな」
「まったくだ」
視線を交わし、ニヤリと笑いあうと、リオはテーブルに代金を置いて酒場を立ち去った。
それから、セリアとの合流までまだ時間が余っていたため、都市

の中を散策して買い物を行う。
時間がやって来て、セリアと合流すると、リオは帰宅した。

第６６話　こんな世界で出会えた君は？

セリアが岩の家に暮らすようになってから数日が経過し、この数日間でリオは美春達にこの世界の言葉を教え始めた。
昨日もほぼ一日かけて三人に基礎を教え込み、セリアの協力も得てスパルタ教育を行ったところだ。
並行してセリアの研究を手伝ったりもしている。
何だかんだでリオは忙しくも充実した毎日を送っていた。
そんなある日の早朝。

「ん……」

岩を切り取って作られた小さな窓から、爽やかな朝日が差し込み、リオはぼんやりと目を覚ました。
薄っすらと目を開くと天井が視界に映る。
この岩の家を作って以来、リオは旅先でも安心して眠れるようになって、昨晩もぐっすりと眠ることができた。
ドミニクの作成した特製の幅広いベッドの上で、リオはのろのろとした手付きで毛布と上掛けをめくろうと手を動かす。
すると、その時だ。
手に何か柔らかいものが触れた。
毛布や上掛けとは違う。
ベッドのマットレスでもない。
もっと弾力がある。
手のひらに収まるくらいで、少し冷たい。
小さく手を動かすと、何とも気持ちよい感触が手に伝わって来た。
何だろうか。
その正体を探るべく、リオはぎこちなく手を動かした。

すると――。

「ん……」

衣擦れする音と一緒に少し艶めかしそうな女性の声が聞こえてくる。

「すー……、すー……」

続いて、すぐ側で穏やかな寝息が聞こえることに気づき、ぎぎぎ、とリオは横に視線をやる。

すると、すぐ隣にぐっすりと眠りこんでいる一人の少女がいた。

年齢はリオと同じくらいだろうか。

実在感が薄いというか、透明感が強いというか、神秘的な雰囲気と美貌を醸し出している。

長い桃色の髪の美少女だ。

いや、物凄い美少女である。

「ん……」

少女はもぞもぞと動き、ぎゅっとリオの部屋着を掴んできた。

そのままリオに顔を寄せてくる。

少女の寝息が耳元に吹きかかった。

リオの思考が一気に覚醒する。

「……」

至近距離から呆然と少女の顔を見つめると、リオは身体から力を抜いて再度ベッドに体重を預けた。

そうして目を瞑る。

（夢か……。俺はまだ眠っているんだ。そうに違いない）

なんて、現実逃避するように自己暗示をかける。

だいたい、いくらぐっすり眠っているからといって、見知らぬ人間の気配を察すれば目を覚ますはずだ。

少し平和ボケしすぎているのだろうか。

いや、そもそもリオが家の周囲に張り巡らせた侵入者探知の結界魔術に部外者がひっかかった反応はない。

それなのに気づかなかったのだから、きっと夢に違いない。

そう考えて、目を瞑る力を強める。

ゆっくりと一分ほど時間が経ったところで目を開けると、おそるおそると空いている手で毛布と上掛けをめくった。

そこにはさらにありえない光景が広がっていて――。

雪のような白い素肌、非常にバランスの良い女性らしいなめらかな肢体、ふわりと柔らかそうなふくらみ――。

つまり、全裸の美少女がいた。

「っぇえええ！？」

リオが仰天して大声を出す。

目が覚めたら裸の美少女が隣で眠っているなんて。

こんな経験は二度の人生を通しても初めてのことだ。

リオの声で目が覚めたのか、少女が気だるげに身体を動かした。

その動きが妙に色っぽくて、リオは顔を紅潮させ、サッと視線を逸らす。

「ん……」

少女は無表情なままぼーっとした目でリオのことを見ている。

リオの全身に冷や汗が流れた。
なんで、どうして、俺は全裸の美少女と一緒に眠っているんだ。
心の中でそう叫ぶ。

「ど、どうしたんですか！　ハルトさん！？」

すると、美春が部屋の中に慌てた様子で入って来た。
部屋の防音性は万全だが、扉が少し開いていたため、リビングの方にまでリオの大声が響いたのだろう。
お世話になってばかりは悪いと考え、美春は気を利かせて誰よりも早起きして朝食の準備をしていたのだ。
チュニックドレスの上に身に着けたエプロンがすごく似合っていて本当に可愛らしい。
だが、今はそんな美春に見惚れている場合ではない
美春はぽかんとした表情で、部屋着姿のリオと全裸の美少女を眺めていた。
慌ててリオが毛布を少女に被せたがもう遅い。

「き、きゃぁ！」

今度は美春の声が部屋の中に響き渡った。
無理もない。
誠実そうな恩人が、自分達の気づかぬ間に全裸の美少女を連れ込んで、一夜を共にしていたというのだから。
リオからすればそんな事実は存在しないはずなのだが、美春からすればそんな事実が存在したようにしか見えない。

「ち、違うんだ！　みーちゃ、美春さん！　これは――」

最悪だ。

リオは慌てて釈明しようとするが、上手い言葉が出てこない。
思わず昔の呼び名で呼びかけてしまいそうになったくらいに混乱している。
すると桃色の髪の美少女が無表情のままリオにぎゅっと抱き着いた。
リオに寄り添い、不思議そうな表情で美春のことを見つめている。
その姿を見て、美春の顔がさらに真っ赤に染まった。

「す、すみません！　勝手に扉を開けちゃって！」

慌てて頭を下げて、美春が扉を閉める。

「誤解で……」

リオの弁明の声が虚しく部屋に響き渡った。
残ったのはリオと桃色の髪の少女だけだ。
リオががっくりとうなだれる。

「何事よ、リオ？　なんかミハルの悲鳴が聞こえたんだけど」

すると、今度は寝不足な表情でセリアが室内に入って来た。
おそらく徹夜明けなのだろう。
その後ろで美春が慌てた様子でセリアを制止しようとしていた。
拙い言葉で必死に「駄目、駄目」と呼びかけ続けている。
だが、どうやら一歩間に合わなかったらしい。
セリアの視界にもばっちりと二人の姿が収められることになった。

「は、はは……」

引きつったリオの笑い声が室内に虚しく響き渡る。

毛布一枚で身体を隠した美少女が、ベッドの上でリオに寄り添っていた。
隙間から覗ける地肌がセリアの妄想を掻きたてる。

「ふ、ふふ……」

顔を赤らめつつも、セリアは表情を取り繕って微笑を浮かべた。
結果、二人の笑い声が謎のハーモニーを奏でることになる。
ただし、その笑い声に込められている各々の感情は異なるが。

「お楽しみのところを失礼したみたいね」

そう言い残し、セリアはやや乱暴に扉を閉めた。
扉の外で美春とセリアがどのような空気を共有しているのかが気になったが、今はそれどころではない。

「……えっと、君は誰？」

盛大に顔をひきつらせ、リオが尋ねた。
本音としては今すぐ美春とセリアを追いたいが、この見知らぬ少女をこのまま捨て置くこともできない。
といっても、まだ頭が混乱していて何を聞けばいいのかわからず、漠然とした質問を投げかけることしかできなかった。

「私は春人と契約している精霊だよ？」

なんて、首を傾げて、澄んだ雫のように透き通る声で、少女が答える。
どこか無機質だが、綺麗な声だった。

「え、あ……契約……そうか、契約精霊。君が……」

その言葉で一気にリオの頭が冷静になる。
ハッと顔つきを変えて、リオは少女の顔を見据えた。
改めて見ると、異常なくらいに整った顔つきをしている。
まるで一流の芸術家が生涯を賭しても生み出すことが叶わぬくらいに。
彼女の美しさは、幻のように、儚げで、いつ消えてもおかしくないような気がした。
今まで美春以外の女性に見惚れたことなんてないが、その強い想いがなければ思わずこの少女の美しさに吸い込まれそうになっていたかもしれない。

「どうして今になって目覚めたのか聞いてもいい？」

――時が来たからだよ。
一瞬、目の前にいる少女の声が聞こえた気がした。
リオが目を丸くして少女を見つめる。
だが、少女はゆっくりと首を振って――。

「わからない」

そう、答えた。
相変わらず無表情なままだが、どこか寂しそうな声色だ。
すると、すっと手を伸ばし、リオの手を掴みとった。
――温かい。
そんな呟きが聞こえたような気がした。
少女はホッとした表情を浮かべたように見える。

「えっと、じゃあ君の名前は？」

「名前もわからない」
真紅の瞳を悲しげに揺らして、少女は答える。
「名前もわからないって。じゃあ、何ならわかるのかな？」
戸惑いがちにリオが尋ねる。
「私は春人の側にいる。だから、名前が欲しい」
自分の側にいる。
それは彼女がリオの契約精霊である以上は当たり前のことなのかもしれない。
自身でも気づいていないが、リオは当然のように少女の同行を認めていて、そのことに抵抗感は抱かなかった。
それに、名前がないのは不便だ。
だが、今のは質問の答えになっていない。
まぁ漠然とした質問をしたリオにも非はあるのだが。
「えーと、そういうことじゃなくて、君がどんな精霊なのかとか、どうして俺と契約しているのかとか、教えてほしいなって」
もちろん、尋ねれば何でも答えてもらえるなんて思ってはいないが、知らぬ間に自分の契約精霊になった彼女には説明する義務があると思うのだ。
しかし、彼女は本当に何もわかっていないようで、困ったような雰囲気がリオに伝わってきた。
そんな少女を見つめて、リオが小さく息を吐く。
「名前か……。そういえばなんで俺の名前は知っているの？」

今気づいたが少女は先ほどからリオのことを春人と呼んでいる。
それはどういうことなのか。
そう思って、リオは少女が春人の名を知っている理由を尋ねた。

「だって、春人は春人だよ？」
「いや、そういう意味じゃなくて……」

天然な様子で意味深な発言をする少女。
リオはじっと彼女を見つめた。
少女も黙ってじっとリオを見つめている。
どれ程見つめ合っていたのか、最初に折れたのはリオの方だった。

「えっと、名前が欲しいって、俺に名づけてほしいってこと？」

こくりと少女は頷いた。

「そう言われてもな……」

リオが言葉に詰まる。
いきなり名前をくれと言われてもそう簡単に思いつくものでもない。
それにそんなに簡単にあげてもいいものではないように思えた。
だが、名前がないと今後、困ってしまうのは確かである。

「少し考える時間をもらってもいいかな？」

リオは困ったようにそう尋ねた。

「うん」

こくりと、少女が頷く。

「それで……その……当たり前だと思うけど、服は持ってないんだよね？」

今も上掛けと毛布の下が全裸であることを想像し、思わず顔を紅潮させてリオは尋ねた。

「服……」

ぽつりと呟くと、小さな光が溢れ、少女がおもむろに毛布と上掛けをめくる。

「わっ、ちょ！」

慌てたようにリオが視線を少女から視線をそらす。

そうやって壁をじっと眺めていると――。

「これでいい？」

なんて言葉がすぐ隣から聞こえて、リオはおそるおそる首を動かした。

視界に衣類らしきものがちらりと映り、意表を衝かれたように少女に視線を向ける。

そこにはフリルの付いた清楚な黒いワンピースを身に着けた精霊の少女がいた。

「え、なんで……？」

正直に言えば凄く可愛らしい。
だが、それよりも疑問の念の方が強かった。
いつの間にか少女はリオの手を握っていて――。
「オドとマナで編んだ」
少し冷たい声で、そう言った。
「え、あ、さっき布団から漏れた光はそういう……」
納得したように言葉を漏らす。
だが、リオにもちょっとやり方はわからない。
オドとマナで服を作る。
そんなことができるのか？
疑問に思ったが、今は先に解決すべき問題がある。
「とりあえず、み……美春さんの誤解を解きたいんだけど、事情を説明するから協力してもらってもいいかな？」
先ほどの出来事を思い返して、一気に気分が重くなり、力弱く呟く。
協力してもらうといっても、一緒に傍にいてもらうだけで、説明をするのは主にリオの仕事になるのだろうが。
「……わかった」
数瞬の間を置いたが、リオの困った様子が伝わってきて、少女は小さく頷いた。
どうやら悪い子ではなさそうだ。

「えっと、君が俺の前世についてどれくらい知っているのか今は聞かないけど、とりあえず黙っていてほしい。いつか、俺が自分で彼女達に伝えるから」

小さく息を吐き、リオは少女にそう伝えた。
少女はどういうわけか自分の前世のことを知っているようだ。
うっかり美春にそのことを語られるとリオとしては困ったことになる。

「わかった」

感情の薄い声で少女が返事をする。
本当にわかっているのか。
まぁ悪い子ではなさそうだし、大丈夫だろう、たぶん。
リオはそう思って、この少女のことを信じることにした。
というよりも信じるしかない。

「じゃあ行こうか」

リオは少女を伴って、ラウンジに足を踏み入れた。
扉から出て行くと、キッチンの中で美春が気まずそうに料理をしている姿が視界に映る。
セリアはニコニコと笑みを浮かべてリビングのソファで美春の淹れた紅茶の香りを楽しんでいた。
よく見るとカップを持つ手が震えているのだが、それに気づけるほどの余裕はリオにもない。
どうやら亜紀と雅人はまだ起きていないようだ。

「えっと、二人とも！　おはようございます！」

硬いが良く通る声で、リオが語りかけた。

「おはよう、リオ」

相も変わらずニコニコしたまま、セリアが答えた。

何を考えているのかは読み取れないが、少し寒気を感じるのは気のせいだろうか。

「お、おはようございます！　えっと、今、朝食を準備していますから、少し待っていただけますか？」

続けて、リオの方を見ることはなく、美春がキッチンの中から矢継ぎ早に答える。

こちらは顔を真っ赤にさせており、あたふたとしているのが丸わかりだ。

「あの！　少し話を聞いてもらってもいいですか？　彼女のことなんですけど」

背後に控えている少女に視線を移し、まず美春に対し、リオが言った。

続けて、同内容の言葉をセリアに投げかける。

すると、美春とセリアの視線が精霊の少女に集まった。

思わずその美しさに見惚れたのか、二人とも目を瞠（みは）っている。

水を打ったような静寂――。

「えっと、なんでしょうか？」

「ええ、もちろん説明して頂きたいわね」

しばらくして、気を取り直し、二人が各々別の言語で返事をする。

美春はともかく、セリアはリオにジト目を向けてきた。
ここはしっかりと説明しなければ。
そう決めると、リオは小さく深呼吸をして、口を開いた。
「まずは美春さんから説明してもよろしいですか？」
説明の順番を伺うべく、セリアに尋ねる。
「ええ、先に目撃したのはミハルだものね。しっかりと説明してあげて頂戴」
少女の無機質な雰囲気に毒気を抜かれたのか、少し疲れたように、小さく溜息を吐いて、セリアが答える。
リオはセリアに礼を告げると、美春に向き直った。
「以前、精霊という存在について簡単に説明したと思うんですけど、彼女がその精霊なんです」
「彼女が精霊……ですか？」
美春は契約精霊の少女へと視線を移した。
人間離れした美しさを放っているが、彼女はどう見ても人間にしか見えない。
二人の視線が重なる。
「美春……」
と、精霊の少女が美春の名を呼んだ。
「あ、はい。私は綾瀬美春です。えっと、貴方は？」
「私は名前がないの」

寂しそうに呟くと、少女は名前を持つ美春を羨ましそうに見つめた。

「お聞きの通り、彼女には名前がありません。どういうわけか彼女は俺の身体の中でずっと眠っていたんですが、彼女がどんな存在なのかは俺もまだよくわかってなくて」

いまだ自身でも事情はよく呑み込めていないが、リオは必死に説明を行い美春に訴えかけた。

「わかっていることは彼女が俺と知らない間に契約していて何らかの繋がりがあることくらいで。今朝目覚めたら、彼女が実体化して俺の傍にいたんです。これくらいしか説明できることはないんですが……、ご理解いただけたでしょうか？」

一通り説明を終えると、おそるおそる美春の顔を覗き込む。

「えっと、……何となくですが、事情は把握できたと思います」

すると美春がゆっくりと言葉を紡いだ。

「信じて……くれるんですか？」

「はい。その子の様子を見ていれば何となくわかります。それにハルトさんは理由もなく嘘を吐く人じゃないと思いますから」

そっとはにかんで、美春が答える。

「あ、ありがとうございます！　や、やましいことはなかったので！」

精霊の少女に視線を向けながら、リオが熱く語った。
特に後半部分を。
すると美春はくすくすと笑って。

「はい、わかりました」

と、頷いた。
ようやくリオはホッと一息。
身体から力が抜けて数秒ほど立ち尽くした。

「えっと、それにしてもすごく可愛い精霊さんですね」

ちらりと少女に視線を向けながら、あからさまに気が抜けた様子のリオに美春が語りかける。
すると、黙ったままでいた少女が不思議そうに首を傾げた。

「もう話はいい？」

と、どういうわけか少女は日本語を使って尋ねた。
そういえば最初、見た目からリオはシュトラール地方の言葉で喋りかけたが、少女はシュトラール地方の言葉を普通に喋っていた。
それなのに今は日本語も喋れている。

「え、君、俺達の会話を理解できたの？」

そのことに気づいて、リオが目を丸くする。

「うん、春人が喋れる言葉は全部喋れるよ」

あっけらかんと少女が答える。

「……」

リオは呆気にとられて言葉を失った。

理由を聞きたいのはやまやまだけど、尋ねても「わからない」という答えが返ってくるのが何故か目に見える。

「精霊ってすごいんですね……」

美春は精霊なら何が出来ても不思議ではないと思っているのか、純粋に感心しているようだ。

リオは小さく溜息を吐くと。

「えっと、じゃあ、次はセリア先生に説明をしないといけないので。美春さん……と君も少し待っていてくれるかな」

と、そう言った。

精霊の少女がこくりと頷く。

同じように美春も頷いて。

「あ、はい。じゃあ私は朝食を作っておきますね」

と、そう答えた。

「すみません」

美春に謝り、リオがセリアへ視線を移す。

「話は終わったみたいね。納得のいく説明をしてくれるのかしら？」

腕を組んでむっとした表情を浮かべるセリア。
「俺の知っていることはすべて説明しますので、それで勘弁してください」
リオは思わず苦笑を浮かべた。
美春への説明が無事に終わったおかげか、先ほどまでの余裕のなさはいつの間にか消えており、リオは落ち着きを取り戻していた。
（美春に説明する時は焦ってたくせに）
それが少しばかり悔しくて、セリアの頬がちょっとだけ膨れる。
「ええ、よろしくね」
けれどセリアは強がって不敵な笑みをリオに向ける。
こんな態度しかとれない自分は可愛らしくないなと、セリアは思った。
（リオって美春のことをどう思っているのかしら？　って、いけない、いけない。今はこの子のことを聞かないと）
思考が脇道に逸れかけたところで、セリアは意識を精霊の少女に戻した。
リオが美春のことをどう思っているのかも大事だが、突如として現れたこのとてつもない美少女のことも大事だ。
いったいリオとはどういう関係なのか。
先ほど見た毛布一枚の煽情的な少女の姿を思いだし、セリアは顔を赤らめた。

すると、そこで。

「まず、彼女は精霊です」

リオが説明を開始した。

「え……？」

セリアの思考が停止する。

まるで初球から決め球を投げられたような気分だ。

「精霊ってあらゆる生物の高位存在とか言われるアレよね？」

とはいえ、流石というべきか、すぐに気を取り直すと、セリアはリオに質問を投げかけた。

「はい。そういった存在と思って頂いてけっこうです。人間族で実際に精霊を目にしたことがある人はほとんどいないと思いますが、精霊の中には人と契約を結ぶ存在がいます」

「契約？」

「人と精霊の結びつきを強めて助け合う関係だと思ってください。精霊は人が保有するオド……魔力をもらい、その代わりに人は精霊から手助けをしてもらえたりします」

「興味深い話だけど今は置いておくわ。話の流れからして、その子はリオと契約をしている精霊ということになるのかしら？」

「その通りです。流石ですね」

少し情報を提示するだけで的確にこちらの意図を理解してくれる。

実に話しやすい相手だ。

「お、煽(おだ)てようったって、その手には乗らないんだからね！　なんでこの子はあんな恰好でリオの部屋にいたのよ？」

リオの言葉が嬉しくて、つい丸め込まれてしまいそうになったが、まだ少女があんな恰好でリオの部屋にいた理由を説明してもらってはいない。

「それは俺もよくわかっていないと言いますか。この子は俺と契約状態のままずっと深い眠りに就いていたんです。今朝、俺が目覚めたらいつの間にかこの子が俺のベッドにいまして……」

「ふーん、本当に？」

じろりとリオを睨むセリアに。

「本当です」

リオはきっぱりと答えた。

「やましいことがあったんじゃないの？」

「な、ないですよ……」

ちらりと少女の裸体やら胸の感触やらが少しばかり鮮明によぎったが、あれは不可抗力だ。

そう言い聞かせて、リオは冷や汗を流しながら頭(かぶり)を振った。

「ふーん……」

セリアがジト眼でリオを見つめる。

「あはは……。まぁ後は信じてもらうしかないんですが。どうして

も信じられないならこの子からも話を聞いてみてください」
「……いいわよ。信じてるから」

少し拗ねたように視線を逸らし、セリアはぼそりと呟いた。
リオの言っていることを疑うつもりはない。
セリアはリオならば無理やり女の子に迫るような真似はしないと信じているからだ。
けれど、信じることはできても気に食わないものは気に食わない。
この感情が嫉妬であることは何となくセリアもわかっていたが、生まれて初めて抱いた感情に折り合いをつけることはなかなかどうして難しいものである。

「まぁよくよく考えると明らかにおかしな状況だしね」

言って、心を落ち着かせるべく、セリアは美春が用意してくれた紅茶を口に含んだ。

（私って嫉妬深い性格なのかな？　うう、いけないわ。心を落ち着けないと）

そう考えて小さく深呼吸をすると。

「それで、この子の名前はなんていうのかしら？」

セリアは少女の名前を尋ねた。

「実はこの子には名前がないんですよ」
「そうなの？」
「はい。本人がそう言っているので」
「うーん、でも名前がないのは不便じゃないかしら。何か良い名前

をつけてあげないと」
「彼女も名前が欲しいみたいで、何にしようかと考えているところです」
「名前なんて感覚的なものだからね。多少は安易に思えてもしっくりくればそれでいいものよ。そんなに難しく考える必要はないと思うけど。貴方はどんな名前がいいの？」

ちらりと精霊の少女に視線を移し、セリアが尋ねた。
少女は少し黙って。
「春人がつけてくれる名前ならなんでも」
と、そう答えた。
「随分と愛されているじゃない」
セリアが半目でリオに視線を送る。
「あはは」
リオは困ったように笑って応えた。
「えっと、もう少し方向性を教えてくれると助かるんだけど、好きなものとかさ」
と、リオが少女に聞くと。
「……春人が好きだったり大切だったりするもの」
少女はそう答えた。

「俺が好きだったり、大切だったりするもの……」
真っ先に頭の中に思い浮かんだのは美春だ。
だからだろうか。
すぐに一つの名前が頭の中に思い浮かんだ。
「アイシア……とか？」
アイシアとは精霊の民の古い言葉で温かい春を意味する言葉だ。
美春の春という文字から連想した名前である。
彼女の髪の色は桜の花びらのように優しいピンクの色をしているし、不思議と合っているように思えた。
「アイシア。それがいい」
すると精霊の少女は即答した。
「いいの？　みんなと考えて他にもいくつか候補を考えるけど……」
「ううん。アイシアがいい」
少女は目覚めてからあまり感情を表に出していない。
だというのに、この時だけは珍しく少女の意志がしっかりと感じられた。
「まぁ、君が気に入ってくれたならいいんだけど……」
リオが少し意外そうに少女を見つめる。
すると、一瞬だけ、リオは少女が嬉しそうに微笑んだように見えた。

「じゃあよろしく。アイシア」
「うん。よろしく。春人」
こくりと頷くアイシア。
「私はセリア＝クレールよ。よろしくね、アイシア」
「よろしく。セリア」
相変わらず無機質だが透き通るような綺麗な声で、アイシアはセリアにも挨拶を告げた。
「じゃあ朝食の時に改めてみんなに紹介するよ」
まだアイシアの会っていない住人が二人いる。
これからこの家で暮らすことになるのなら紹介は必須だろう。
「うん。亜紀と雅人」
「二人のことも知ってるんだ……」
アイシアは何を知っていて、何を知らないのか。
少し調べる必要がありそうだ。
そう考えて、リオがアイシアに質問を投げかけようとしたところで。
「おはようございます」
亜紀が眠そうな顔でリビングに姿を現した。
「おはよー」

ほぼ同時に雅人もリビングへと姿を現す。
「あれ、その人は……？」
すぐにアイシアの存在に気づき、亜紀が疑問符付きの声を出した。
「ああ、この子は――」
リオが亜紀たちにアイシアを紹介しようとする。
と、そこで。
「ハルトさん、ご飯ですよ」
朝食を作り終えた美春がやって来た。
「あ、亜紀ちゃんと雅人君起きたんだね。おはよう」
「おはよう。美春お姉ちゃん」
「おはよー。美春姉ちゃん」
それは、いつもの朝、いつもの光景だった。
今日からここに暮らす住人が一人増えたけれど、それは変わらない。
そんな様子をリオは微笑ましげに眺めた。
いつの間にかアイシアがリオの隣にいて、ちらりとアイシアの顔を見やる。
（よくわからないことばかりだけど）
そう、結局、アイシアが目覚めたというのにまだまだわからない

ことだらけだ。
彼女が起きたら聞いてみたいことがたくさんあったというのに、世の中なかなか上手くいかないものである。
だが――。
「それも悪くないかな」
嬉しそうに口元に笑みをたたえて、リオはそう呟いた。

第67話　波瀾が終わって

アイシアが目覚めたその日、夕食を食べ終え、風呂に入り、夜の帳(とばり)が下りた頃、

「今日はここまでにしてそろそろ眠りましょうか」

シュトラール地方の標準語のレッスンに区切りがついて、程よく睡魔が襲ってきたところで、リオが美春達に告げた。

今日の講師役にはアイシアにも参加してもらっている。

アイシアはリオと同じくシュトラール地方の標準語と日本語を喋れるため、リオの補佐役を務めてもらうことになったのだ。

彼女は口数が少ないので教師役には不向きだが、聞かれたことにはきちんと答えてくれるので会話相手としては不足がない。

むしろわからないことは日本語で質問もできるため、立派にサポート役を務めたのだった。

「はい。今日もありがとうございました」

慣れない言葉の学習に疲れた様子の美春達。

ぺこりと礼儀正しくお辞儀をする美春と亜紀に対して、雅人はぐったりとして机の上に突っ伏した。

「お疲れ様。アイシアも」

リオが美春達とアイシアを労(ねぎら)う。

「うん」

アイシアはこくりと頷く。
その姿を見て、リオがそっと笑みを浮かべた。
今日はアイシアが目覚めたことによって多少の騒乱はあったが、何とか平穏に一日を終えることができたようだ。

「セリア先生はもう少し起きていますか？」

ソファに座って紅茶を飲みながらゆったりと本を読んでいるセリアに、リオが尋ねる。

「ええ、私はもう少し起きているわ。先に寝ていてちょうだい」

ちらりとリオに視線を移し、セリアは微笑を浮かべた。
セリアは夜更かしをすることが多い。
今日もこのまま夜中まで本を読んでいるのだろう。

「わかりました。夜更かししすぎると健康に悪いですから早めに寝てくださいね。それではまた明日」
「ええ、おやすみなさい」

セリアと就寝の挨拶を交わすリオ。

「美春さんもおやすみなさい」
「はい、おやすみなさい」

続けて、美春とも就寝の挨拶を交わす。
亜紀と雅人はキッチンで冷たい飲み物を飲んでいるようだ。
後は各々が好きなタイミングで寝室に向かうだろう。

「アイシアもおやすみ。部屋はさっき教えたから大丈夫だよね？」
すぐ傍にいたアイシアにリオが声をかけると、
「うん」
アイシアは小さく頷いた。
そもそも精霊にどの程度の睡眠が必要なのか、その生態系は謎に満ちているが、アイシアにも個室を与えてある。
ちなみに食事は食べる必要はないらしいのだが、食べて魔力に変換することもできるそうだ。
「今日はもう寝ても大丈夫だよ。俺はそろそろ寝ようかと思ってるけど、アイシアはどうする？」
「うん、私も寝る」
どうやらアイシアも眠るようだ。
「そっか。じゃあまた明日。おやすみ」
「うん。おやすみ」
アイシアとも就寝の挨拶を交わし、薄く微笑みかけると、リオは踵を返した。
そのまま寝室へと向かい、部屋の扉に手をかける。
すると、そこで、
「……って、ちょっと待ちなさい！」
セリアがギョッとした様子でリオを呼び止めた。
大声を出したセリアに目を丸くして、リオが振り返る。

美春達も何事かとセリアを見やった。

「そこはリオの部屋よ。アイシア」

どうやらセリアが呼び止めた相手はアイシアだったようだ。

アイシアはさも当然のようにリオのすぐ後ろに立っていた。

「アイシア？」

目を瞠(みは)って、リオがアイシアに呼びかける。

非常に気配が薄く、これといった害意も感じないため、リオ自身もまったく気づけなかったのだ。

そのあまりにも自然な動きは周囲の者達が違和感を覚えないくらいに馴染んでおり、声をかけたセリアも思わずそのまま見送ってしまうところだった。

「えっと、もしかして部屋の場所を忘れたとか？」

「ううん。覚えてる。でも寝るのは春人と一緒」

と、さも当たり前のように答えるアイシア。

「なっ……」

リオが口をぱくぱくとさせる。

一瞬呆気にとられて、すぐに頭を抱えたくなった。

「いや、そういうわけにもいかないというか……」

困ったようにリオが答える。

「そ、そうよ！　駄目よ！　け、結婚もしてない若い男女が同じ部屋で寝泊まりするなんていけないの！」

セリアもソファから勢いよく立ち上がって声高に口を挟んできた。すると、アイシアは不思議そうに首を傾げて、

「どうして？」

と、端的に尋ねた。

「うっ……」

あまりにも純粋な目でアイシアが不思議そうに見つめてきたため、セリアは思わず言葉に詰まった。

だが、すぐに気を取り直すと、

「ど、どうしてもよ！　だいたいどうしてリオと一緒に眠るのよ？自分の部屋があるでしょう？」

と、強く反論した。

「精霊は契約者からオドの供給を受けている。距離が近いほどその効率は良くなる」

「なっ……」

なるほど。

確かに理に適っている。

だが、道徳的には問題ありだ。

それに自分を差し置いてリオと一緒に眠るなんてずる――、いやこれは倫理の問題である。

セリアは年長者として風紀の乱れを取り締まらなければならないのだ。
自らにそう言い聞かせて、セリアは断固として徹底抗戦を行うと決意した。
「四六時中リオからオドを供給されないといけないの？」
だとしたら確かに考慮に値する。
だが、そうでないというのならば寝る時まで一緒にいさせるのは認めがたい。
「ううん」
返ってきた答えはノーだった。
セリアは小さく息を吐いて、
「だったら自分の部屋で眠りなさい」
と、そう告げた。
「より快適な環境で眠りたいと思うのは人間が有する原始的な欲求のはず」
だが、ここで引き下がるアイシアではなかった。
「あ、貴方は精霊でしょう？」
精霊にもそんな欲求があると言うのか。
いや、確かに知的生命体である以上はそういった衝動が生じてもおかしくはないのかもしれないけど。

「精霊だって眠る。居心地が良い方が好き」

そんな二人の言い争いを顔をひきつらせて見つめるリオ。

いつの間にか雅人がすぐ傍に近寄ってきていて、

「ハルト兄ちゃん……、アイシア姉ちゃんと一緒に寝るのか？」

と、不安と憧憬（しょうけい）の混ざった声色で尋ねてきた。

アイシアとセリアの会話は理解できていないのだろうが、場の雰囲気から事情を察したようだ。

無理もない、と言うべきか、雅人はアイシアを強く意識していたりする。

それはもう挨拶をした時に思わず「すげぇ、綺麗だ……」などという台詞が口からポロッと漏れてしまうくらいに。

きっと一目惚れというやつなのかもしれない。

ちなみに、その時、すぐ傍にいた亜紀から「あんた一目惚れしすぎ」という呆れのこもったお言葉とともにわき腹にエルボーをもらっていたりもする。

「いや、寝ないよ」

リオはこめかみを押さえて答えた。

すぐ側には美春と亜紀がいて、リオに同情めいた苦笑をたたえている。

「でもアイちゃんも譲りそうにないですよね」

食ってかかるセリアをのらりくらりと交わしているアイシアを眺めて、美春が言った。

喋っている内容はわからないが、二人の様子を見る限りではセリアの説得が難航しているのは一目瞭然である。
ちなみにアイちゃんというのはアイシアのことだ。
美春はアイシアのことをそう呼んでいる。

「そう……ですね」

依然として二人の論争は続いている。
リオは頭痛がより強くなったように感じた。
とはいえいつまでもこのまま放置するわけにもいかない。
そう考え、リオはアイシアとセリアのもとへ歩み寄ると、

「二人とも、少しいいですか？」

やや悄然（しょうぜん）とした様子で声をかけた。

「ちょうど良かったわ。リオからも言ってやりなさい」

セリアがリオに助力を願う。
リオは小さく頷くと、

「アイシア、セリア先生が言う通り親しくない男女が一緒に寝るのはあまり好ましくないことなんだ」

アイシアの説得に加わることにした。

「春人と私は親しくない？」

ぼんやりとリオを見つめて、アイシアが尋ねる。
その瞳には寂しそうな感情が浮かんでいるように思えた。

「いや、親しくないことはないけど、俺達はまだ出会って間もないというか……」

リオは思わず言葉に詰まった。

「出会って間もない……」

ぼそりとアイシアが呟く。

「よくわからない」

続けて、アイシアはゆっくりと首を振った。

「うーん」

リオが困ったように呻(うな)る。

一定の関係にない男女が一緒に眠るのが好ましくないというのは人間社会の中で共有されている常識だ。

精霊の彼女には理解しにくいのかもしれない。

アイシアは言葉を喋れるけど、情感とか道徳といった人間社会の常識に欠けている面があるように思える。

とはいえ、きちんと説明して理解してもらえれば話は通じるのだ。

問題はどうやってそこら辺のことを上手く説明するかである。

「セリアもちゃんとした理由を言わないで駄目って言う。どうして春人と一緒に寝ちゃ駄目なの？」

特に親しくもない若い男女が一緒に寝てはいけない。

その帰結を導く前提常識が欠けている以上、頭ごなしに一緒に寝

てはいけないと伝えても論理に飛躍があり納得はしにくいのだろう。

「それは……」

しかし、その理由を説明するために生々しい話をするのは憚(はばか)られる。

おそらくはセリアも同じ壁にぶち当たったのだろう。

「説明できないなら春人と一緒に寝る。行こう。眠い」

アイシアは言葉に詰まったリオの腕を掴んだ。

そのままリオがいつも眠る寝室へと歩き始めたところで、

「だぁぁ！　もういいわ！　こうなったら私も一緒に寝る！」

と、セリアが特大級の爆弾を投下した。

「え、ええ？」

リオが唖然とした面持ちを浮かべる。

それはもっと不味いのではないだろうか。

いや、確実に不味いだろう。

「何よ。アイシアとは一緒に寝るのに文句あるの？　わ、私は何かあったらいけないと思って監視するんだからね」

ジロリとリオを睨むセリア。

捨て鉢になっているのか、セリアの目は妙に据わっていた。

リオの背筋に冷たい汗が流れる。

「いや、文句があると言いますか」

問題が大有りでしょう。

そう突っ込みたかったが、セリアの雰囲気がリオに有無を言わせなかった。

「ほら、行くわよ」

アイシアの反対側に回って、セリアがリオの腕を掴む。

いけない。

このままじゃ本当に三人で川の字になって眠ることになってしまう。

そこでようやくリオは反論する踏ん切りがついた。

「ちょ、待ってください！　先生はまだ寝ないんじゃないんですか？」

「う、煩いわね。気が変わったのよ」

顔を紅潮させて、セリアが言い放つ。

リオは自分の顔が引きつるのを感じた。

何とかしなければ――。

「……そうだ！　アイシアは霊体化できるんだよね？　じゃあ霊体化した状態で眠ればいいんじゃないかな」

思考を巡らせ、咄嗟に思いついたアイデアを、妙案だと言わんばかりにリオは告げた。

「霊体化？」

セリアが訝(いぶか)しげに首を傾げる。

「今アイシアはこうして実体化していますけど、精霊は霊体化することができるんです。基本的に精霊は人前に姿を現すのを嫌いますから」

そう、精霊は人前に姿を現すのを避ける傾向にある。

とはいえ、中にはドリュアスのように人と交流を行っている精霊もいるので、絶対に姿を現したがらないというわけではないのだが。

現にアイシアも契約者であるリオはおろか美春達の前にも平然と姿を現している。

「つまり人の姿じゃなくなるってこと？」

「と言うよりこの世の物理法則から干渉を受けない存在になると言った方が正確でしょうか」

リオがそう言うと、セリアは手を口元にあてて悩むそぶりを見せた。

「なる……ほど。それなら……まぁ、いい……のかしら？」

納得したような、納得していないような、微妙な表情を浮かべて、言いよどむセリア。

そもそも実体化して一緒に寝ることが問題なのか、実体化していなくとも一緒に寝ること自体が問題なのか、リオも問題の核心をいまいち掴み切れてはいない。

リオとしては本来なら一人で眠るのが望ましいのだ。

だが、背に腹は代えられない。

自らの安眠と美春からいらぬ誤解を受けることを避けるためにも、二人と一緒に眠ることだけは絶対に避けなければならなかった。

だから、チャンスは今しかない。
リオは一気にたたみかけることを決めた。
「アイシアもそれでどうかな？　霊体化した状態でならセリア先生も納得してくれるみたいなんだけど」
セリアが心の底から納得していない様子であることはリオにもわかっていたが、リオはアイシアに問いかけた。
「わかった」
すると、アイシアがこくりと頷く。
そのままスッと姿を消すと、契約者であるリオ以外にはアイシアの姿が認識できなくなった。
「……これが霊体化したってこと？」
アイシアが突然に姿を消したことに目を丸くし、セリアが尋ねた。
「はい。今もすぐ側にはいるんですけどね。この状態からさらに契約者の体内に潜りこむことができるみたいです」
リオがアイシアの現状を伝える。
「えっと、これなら問題はないですよね？」
そのまま小さい息を吐いて、リオは言葉を続けてセリアに問いかけた。
「ぐ……」

口元をひきつらせ、セリアは言葉に詰まる。
そのまま目を閉じてしばし葛藤しているような表情を浮かべると、やがて観念したように、
「はぁ、わかったわよ」
と、小さくうなだれて言った。
その言葉でホッと安堵の息を吐くリオ。
しかし、そこで、
「でもいつの間にか実体化して一緒に眠って今朝みたいなことになるのは駄目なんだからね」
スッと目を細めて、セリアが言葉を続ける。
「ええ、もちろんです。アイシアには俺からも言い聞かせておきますから」
リオは力強く頷いた。
何かあってたまるものか。
今朝のような心臓に悪い出来事はリオとしても避けたいところなのだから。
「何よ。私とは一緒に眠れないってこと？」
リオがホッとしている一方で、セリアが口をもごもごさせている。
その言葉とは裏腹に、セリアも安堵していたりするのだが。
そんなセリアの声が耳に届くことはなく、リオは寝室へと足を運び、リビングから姿を消した。

リオは寝室に入ると、ベッドの上に寝転がって暗闇に染まった天井をぼんやりと眺めた。
眠気はすっかり覚めてしまい、代わりに精神的な疲労だけが蓄積している。
その根源ともいうべき精霊の少女はリオの体内で沈黙しており、室内にはリオ一人しかいない。

「はぁ……」

今日一日を振り返って、大きく溜息を一つ。
すると、そこで、

『春人』

と、アイシアがリオの心に語りかけてきた。
心の中に響いた美声に驚き、リオが目を見開く。
アイシアはさらに続けて、

『心の中で私に呼びかけて。そうすれば伝わるから』

そう告げてきた。

――こうかな？

リオは言われたとおりにおずおずと心の中でアイシアに呼びかけてみる。

『うん。そう』

返ってきたのは肯定の返事。
どうやら霊体化しているアイシアとは念話のようなもので意思の疎通を図れるらしい。
――どうかした？
この一日を通してわかったことだが、アイシアは寡黙な性格をしている。
というよりも感情が物凄く希薄であると言った方が正しいかもしれない。
言葉が通じて事象の意味を理解できても喜怒哀楽といった感情はほとんど表に出さないし、自分から他者へ不必要に言葉をかけることもない。
とはいえ、一緒にいて沈黙が苦になるというわけではないのだが。
こうして語りかけてきたということは何か用があるのかもしれない。
ちょうどいい。
自分からもあらためてアイシアに先ほどの件を言い聞かせておかなければ。
リオがそう考えていると、
『私に教えてくれる……？』
唐突にアイシアがそんなことを言ってきた。
――何を？
少し意外に思いながら、リオがアイシアの言葉を促す。
自分の体内にいるからだろうか、リオはアイシアの感情が僅かに揺らいだように感じた。

その感情を一言で表すのなら戸惑いという言葉がふさわしいように思える。

『人がどういう生き物なのか。私、知りたいの。春人のことも』

その瞬間、リオは自分の中にいるアイシアの存在がざわめいたのを感じた。

この感情は何なのだろう。

例えるのなら――。

――いいけど、教えられるかな。俺に。

リオは少し自嘲めいた笑みを漏らした。

人はどんな生き物なのか。

ひどく醜悪（しゅうあく）な面があるし、その一方で美麗（びれい）な面もある。

両者は矛盾しているようで、裏表の関係にあるようにも思えた。

リオにはそんな人間が傲慢な生き物に見えて仕方がない。

そう思って、ひどく癇（かん）に障（さわ）って、リオは唇を噛んだ。

『できるよ。春人ならできる。春人と一緒にいれば何だって叶う気がするの』

相変わらず感情のこもっていない声。

だが、気がつけば、ぽかぽかとリオは胸が温かくなるのを感じた。

つい今しがた感じていた胸のざわめきが嘘のようだ。

温かい。

まるで子守唄を謡ってくれているような。

そんな気分だ。

気がつけば睡魔に誘われて、リオは間もなくして安らかな眠りに落ちた。

第68話　その頃　その一

プロキシア帝国――かの国こそシュトラール地方の北方に君臨する軍事大国である。
その規模に反して成立から四十年程の非常に若い国であり、その歴史を一言で表すのならば戦乱が相応しい。
初代皇帝ニドルは土地の痩せきった貧しい小国で孤児として生まれた。
成長した彼は傭兵の職に就くと、類稀なる武力をもって頭角を現す。
瞬く間に自らが所属していた国の王権を奪うと、凄まじいカリスマにより僅か一代でプロキシア帝国を築きあげた傑物である。
かつては群雄割拠の地であった北方に多数存在していた小国を次々と攻め落とし、今もなお領土を広げている。
その戦力の中核を担うのが亜竜によって構成される最強の竜騎士団だ。
精強な竜騎士達による電撃戦を得意とし、これまでにプロキシア帝国によって攻め落とされた小国の数は二十を超える。
しかし、プロキシア帝国軍を支える最強の戦士は竜騎士団には存在しない。
そう、武によって身を立てたニドルこそが今も昔も帝国最強の存在なのだ。
六十代に突入した彼の肉体は今もなお老いることなく巌（いわお）のような巨体を誇り、その肉体によっておびただしい数の兵達を屠（ほふ）ってきた。
その武功は広大なシュトラール地方中に響き渡っており、現在、間違いなくシュトラール地方最強の一角に数えられる男であろう。
「よう、ニドル。どうだ、調子は？」

帝城の一角で眼下に広がる帝都の光景を眺めるニドル――、そんな帝国において最高にして最強の存在に対して気安く声をかける人物がいた。

「ふん、つまらんな。張り合いのない国ばかりだ」

声の主を確かめることなく、帝都を見下ろしながら、ニドルは不機嫌そうに鼻を鳴らした。

彼は求めているのだ。

血の滾るような闘いを、命が燃え尽きるような争いを、死に祝福された戦場を。

「そう言いなさんな。最高の舞台を演出するには下準備ってもんが必要だ。今は前座で無聊（ぶりょう）を慰めておけ」

ニドルの後ろに立つ男がくつくつと愉悦に染まった笑みを漏らす。

「貴様の言う演出とやらは小細工を弄することなのか？」

「小細工ってのは言い方が悪いな。正面から叩き潰すのも美味ぇが、世の中にはもっと極上な勝利の美酒ってもんがあるんだ」

男がおどけた口調で反論する。

ニドルは薄く眉を顰（ひそ）めて、

「やはり貴様とは趣味が合わん」

と、そう言い放った。

男が含みのある笑みを浮かべる。

「ま、見ておけ。欲望と絶望に染まった大舞台を用意してやるさ。全ては――」

興が乗ったのか、男が揚々とそう言いかけると、

「滅多なことは口にするな」

それを封じるように、ニドルがきつい口調で言い放つ。

「へいへい。相変わらずお固いねぇ。……ところでどうすんだ？ベルトラム王国との関係は。俺はそっちには関与してねぇけど」

男が肩を軽く竦(すく)めて、ニドルに尋ねる。

「こちらからも親善大使を送り返したところだ」

端的に答えるニドル。

「はっ、いずれ滅ぼす国を相手によくやる」

言葉とは裏腹に、男は愉快そうな笑みをたたえていた。

「それだけは同意できる」

言って、ニドルはフッと笑みをこぼした。

その男の名はニドル＝プロキシア。

シュトラール地方の北方を支配する皇帝であり、後の歴史でこの時代の重要人物として数えられる者の一人だ。

時はシュトラール地方に勇者が召喚されて二週間が経過した日のことであった。

☆★☆★☆★

それから十日後、ガルアーク王国北西部の国境付近に位置する砦にて。

「な、なんだ、あれは？　魔道船？」

兵士として見張りの任に就いていた男の一人がはるか上空を飛行する巨大な物体を目にして、呆然と呟いた。

その漆黒の体躯は遠目からでも容易に見てとれる。

「なっ……」

男の声に反応して同僚の兵士がちらりと空を仰いだ。

唖然として、口をぱくぱくと動かす。

驚きのあまり声が出てこないのだ。

「っ、り、竜だぁ！」

何度か息を吸い込むと、兵士はようやく声を出した。

その声に気づいて砦で見張りの任に就いていた兵士達がちらほらと上空に視線を移す。

「じ、冗談を言うな！　こんな場所に竜がいてたまるか！」

泡を食った勢いで男が同僚に掴みかかる。

「知るかよ！　大きいから竜なんだろ！　あれが竜じゃないってんなら何なんだよ？」

兵士が怒鳴り返す。
人に使役されている一部の亜竜はともかく、純粋種の竜を実際に見たことがある者はほとんど存在しない。
とはいえその姿形は古くから伝わるお伽話でしばしば描かれていることから非常に有名である。
もちろん種類によってシルエットはだいぶ異なるが、今空を飛んでいる生物は幼少期に兵士が絵本で見た竜種と酷似していた。
それも飛び切り悪名の名高い黒竜である。

「ああ、ああ、畜生。ふざけんな！　こっちに来たら一巻の終わりだ！　来るな！　来るなよ！」

男が拝むように天に祈る。
竜と思しき生物を目撃した他の兵士達も似たようなことを叫んでいた。
彼らの精神は恐慌状態に陥っている。
遠目から見てもわかるくらいに大きな存在の竜なのだ。
仮に竜でなくともあれ程の巨体を誇る生物が戦闘態勢の整っていない状態で砦に襲い掛かって来たらひとたまりもない。
最悪、純粋種の竜ならば戦闘態勢が整っていたとしても勝つことはできないのだが。

「行っちまった……」

兵士達の祈りが届いたのか、黒竜に類似した生物は真っ直ぐと北から南の方角へと空を飛んでいった。
呆然とその光景を眺めながら、多くの兵士達が力が抜けた様に崩れ落ちる。

「報告した方がいいんだよな？」
「……なんて報告するんだよ？」
「竜が空を飛んでいたって」
「信じてくれるかね？」

ガルアーク王国の西部に現れた黒竜の噂は魔道通信機を使って各都市に伝達される。
その後の目撃証言が一切なかったために噂はやがて鳴りを潜めたが、ガルアーク王国の各都市ではしばらくの間、警戒態勢が敷かれることになった。

☆★☆★☆★

さらに十日後、六勇者がシュトラール地方に召喚されてから一ヶ月以上が経過したある日。
リーゼロッテ＝クレティアが暮らす交易都市アマンドの邸宅に客人が訪れていた。
客人の正体はベルトラム王国反革命軍の上層部に位置する者達、すなわち第二王女フローラ、ユグノー公爵、フォンティーヌ公爵令嬢ロアナ、そして勇者である坂田弘明（さかたひろあき）の四名である。
立場的に無視できぬ大物の賓客達をリーゼロッテが直々にもてなすために、邸宅の食堂では静かな会食が開かれていた。

「素晴らしい料理の数々でした。やはり本場で頂くパスタは一味も二味も違いますね」
と、料理を食したフローラが満足げな笑みを浮かべて告げる。
「御身にお褒め頂き祝着（しゅうちゃく）至極にございますわ。我が家の料理長に代わりまして厚くお礼申し上げます。フローラ王女殿下」

恭しく礼を告げるリーゼロッテ。
他国の王族に対して礼は尽くしているが、必要以上に萎縮した様子はまったく感じられない。
その堂々たる立ち振る舞いをユグノー公爵はほうと息を吐いて見つめていた。

「ああ、まさか異世界でパスタを食べられるなんて思ってもみなかったぜ。この世界に来て食べた中じゃ間違いなく一番美味かった。今まで食べてきた食事が別物に思えるくらいにな」

フローラの隣に座る弘明も満足そうに感想を漏らした。
弘明は出されたパスタを二杯ほどお代わりしている。
これで不味いと言われても説得力がないという食べっぷりだ。

「気にいって頂けたようで何よりです。勇者様は異世界の出身と伺っておりましたゆえ、お気に召していただけるか不安でしたので」

にこりと微笑を浮かべてリーゼロッテが返す。

「そう謙遜する必要はないぞ。俺のいた世界と比べるとこの世界の料理は劣っているが、今日食べた料理は俺の世界の料理と勝るとも劣らないからな」

ご満悦な様子で出された料理の数々を批評する弘明。
弘明がリーゼロッテ邸で食べた料理の数々はパスタを始めとして好みの味付けが多かった。
召喚されてから移動中は碌な料理を食べていなかったし、道中で滞在していたロダン侯爵領の都市で出された料理もここで食べた料理には何歩か劣る。

正直、この世界の料理にはあまり期待していなかったのだが、ここに来て弘明はその考えを改めた。

「パスタはこの都市の名物なんだってな。実は俺がいた世界にこれと同じ食べ物があるんだ。他にも使われている食材が色々と共通していたりする。世界が違っても食べる物にあまり変化がないというのは正直ありがたい」

「まぁ。そうなのですね。我々も同じ人間のようですし、生態系にそれほどの違いはないのでしょうか？」

リーゼロッテが目を丸くし、口元に手を当て驚きを表す。

やる者によってはわざとらしい所作でしかないが、リーゼロッテがやると上品な育ちの良さが伝わってくる仕草に感じられる。

その様（さま）になっている姿に弘明は思わず見惚れてしまった。

すると、そこで、

「ヒロアキ様」

にこりと笑みを浮かべて、ロアナが弘明の名前を呼んだ。

「あ、ああ。なんだ？」

と、少し上擦った声で弘明がロアナに返す。

「リーゼロッテさんのご質問にお答えしてさしあげないと」

笑みを崩さず、ロアナが言葉を付け足す。

弘明は小さく咳払いをすると、

「あー、そうだな。と言っても俺にもよくわからん。俺がいた世界

と同じ生き物もいるようだが、ロアナ達の話を聞く限り俺の知らん生き物もいるしな」

答えて、少しばつが悪そうにロアナとフローラを見やる。

二人とも食後の紅茶の香りを楽しんでいるようだ。

小さく溜息を吐く弘明。

「興味深いお話ですね。勇者様のいた世界がどのような場所だったのか」

そう尋ねると、にこやかな笑みを浮かべたまま、リーゼロッテの瞳がスッと鋭くなった。

そんな彼女の微細な変化に気づくことはなく、弘明はリーゼロッテへと視線を戻す。

「この世界よりは文明が進んでいるぞ。俺がいた国は日本というんだが、その世界の中でも随分と進んだ国だったな」

「日本ですか。一つ疑問なのですが……」

悩むそぶりを見せながら、小さく首を傾げると、リーゼロッテは言葉を続けた。

「どうして勇者様は我々と会話が通じるのでしょうか？」

「ん？　どういうことだ？」

リーゼロッテの疑問に弘明から疑問符付きの声が返ってくる。

「いえ、異世界の国の言語がそのままこの場所で通じるなんて不思議じゃありませんか」

「なるほど。たしかにな……」

ようやく腑に落ちたように納得する弘明。

「どういうことでしょうか？」

その一方で、隣に座っていたフローラが不思議そうに尋ねた。

「言語の発生起源にはいくつもの仮説がありますが、全く異なる場所で同じ言語が発達するということはほぼありえないのですよ。ましてや勇者様がいらっしゃったのは異世界ですから」

「なるほど……」

リーゼロッテの説明に、フローラが感心したように頷く。

「でも弘明様はこうして私達と同じ言葉をお使いになられているではないですか。それは同じ言語が発達したということではなくて？」

そこにロアナが会話に入り込む。

きっと彼女は実証主義者なのだろう。

リーゼロッテはちらりとロアナに視線を向けると、「やはり他の人にはそのように聞こえているのね。なるほど……」と小さく呟いた。

その声を聴きとれた者はいない。

「そうなのかもしれませんね。まぁ考えても答えが出る問題はありませんし。おかしなことを伺ってしまい申し訳ありません」

無邪気な笑みを浮かべながら、リーゼロッテが謝罪の言葉を告げた。

「いや、俺も不思議には思っていたからな。最初にこの世界に召喚された時はお約束と思ってさほど気にはしなかったが」
「お約束ですか？」

小さく首を捻って、リーゼロッテが尋ねる。

「あー、俺がよく読んでいたネット……物語にこういった世界にトリップする話が山ほどあってな。その中で山ほど使い古された設定を揶揄してお約束とかテンプレとかで言ったりしてるんだ」
「まぁ。勇者様は読書家でいらっしゃったのですね」

と、リーゼロッテが合いの手を入れるように弘明を褒める。

「あー、いや、まぁ、それほどでもないがな」

謙遜しつつ、弘明ははにかんだ。
それからしばらくリーゼロッテの巧みな話術により、弘明が気持ちよさそうに次々と話の引き出しを披露していく。
リーゼロッテはころころと表情を変えて楽しそうに弘明の話を聞いていた。
そうしてあっという間に時間は過ぎていき、

「あら、もうこんな時間になってしまいましたのね。勇者様のお話が興味深くてついつい聞きいってしまいましたわ」

ちらりと時計に視線を移すと、様式美ともいうべき所作でリーゼロッテが告げた。

「そうなのか。残念だな。その、もう少しリーゼロッテと話をしていたかったんだが」

まだまだ話足りないといった様子で、弘明が残念そうに顔をしかめた。

「うふふ。ユグノー公爵からお話があると伺っておりますから、そちらもお話しないといけませんので」

そう言って、リーゼロッテは残念そうな表情を浮かべて小さく頭を下げた。

「申し訳ありません。ユグノー公爵。ついお話に夢中になってしまって」

続けて、ユグノー公爵に謝罪の言葉を送る。

「いやいや。事前に食事中にするべき話ではないと告げたのは私だからな。フローラ王女殿下や勇者殿も十分に満足していただけたようだし、君はホステスとして場を盛り上げる役目を果たしただけだ。私も興味深い話が聞けたし、何の問題もないよ」

言って、食事中は聞き役に徹していたユグノー公爵が薄く笑みを浮かべて頭(かぶり)を振った。

「そう仰っていただけると嬉しいですわ。ありがとうございます」

にこりと笑みを浮かべて、礼を告げるリーゼロッテ。

そう、リーゼロッテは王女と勇者の一行を歓待するために十分なもてなしをしたといえる。

ユグノー公爵は内心でリーゼロッテの能力の高さに舌を巻いていた。

こちらの訪問を察して日程を調整するため事前に使者を寄越した手際の良さ、貴族でも日常的に食することは出来ぬ程に質の高い超一流の食事を手配したこと、相手方の求めるものに気づいて満足させる接客能力。
いくら貴族として教育を受けてきたとはいえ、いまだ十五歳の少女がこなすにはなかなかどうして難しい。

（噂に違わぬ才女ということか。ロアナ君も中々の才媛だが、彼女と比べると分が悪い）

ユグノー公爵はリーゼロッテの評価を上方修正した。
同時に警戒度も上がる。

「さて、話というのは他でもない。非常に厚かましくも恥知らずなのだが、リーゼロッテ君にお願いがあってな」

とはいえ警戒しているだけでは虎の子を得ることはできない。
ユグノー公爵は臆することなく話を持ち出した。
厚かましさは貴族のお家芸だ。
油断すれば言質を取られずるずると相手のペースに引きずり込まれる。

「あら、そうなのですか。何のお願いでしょう？」

僅かに眼を見開き、リーゼロッテは驚いてみせた。

「リーゼロッテ君に我々の支援をお願いしたいのだ」
「支援と言いますと、反革命軍をでしょうか？」
「うむ。その通りだ」
「なるほど。軍事的な支援でしたらお父上にお願いする方がよろし

いと存じますが？」

納得したように微笑み、リーゼロッテが語る。

実際、リーゼロッテは一介の公爵令嬢にすぎない。

アマンドの代官であること以外に政治的な実権は一切有していないのだ。

とはいえ、そのことはユグノー公爵も当然わかっている。

「軍事的な支援は求めていないよ」

ユグノー公爵は苦笑しながら答えて、

「我々が求めているのは経済的な支援だ」

と、そう続けた。

「経済的な支援ですか」

リーゼロッテは笑みを浮かべながらもユグノー公爵をじっと見据えた。

「リーゼロッテ君をリッカ商会の会頭と見込んでの頼みだ。資金、物資、リッカ商会が有するガルアーク王国内の繋がり。そういったものを我々のために用いてくれる気はないかね？」

リッカ商会は近隣諸国に名を轟かせる超一流の商会だ。

貴族はおろか民衆の心を巧みに鷲掴みする商品を次々と産み出し、その経済的な影響力は国内に留まらず諸外国にも及んでいる。

そんなリッカ商会をわずか十五歳の少女がたった一代で築き上げたのだ。

その影響力は下手な小国の比ではない。
今や近隣の大国ですらリッカ商会には強く出ることができないだろう。
それゆえ、リーゼロッテを味方に付けることは、ある意味でガルアーク王国から軍事的な支援を受ける以上の旨味があるとユグノー公爵は確信していた。

「答えを申し上げる前に一つ伺います」
「何だね？」
「この場にいらっしゃることからすると、勇者様は反革命軍に所属したと見なしてもよろしいのでしょうか？」

尋ねて、リーゼロッテはちらりと視線を弘明に向けた。
フローラ達の証言以外に弘明が勇者だということは証明の仕様がない。
とはいえ重要人物であるフローラ達の言葉は立派な証拠になる。
その言質をとるために、リーゼロッテは尋ねたのだ。

「うむ。勇者殿は我々と行動を共にしてくれるそうだ」

ユグノー公爵が深く頷く。
リーゼロッテがフローラにも視線を向けると、フローラも首肯した。

「まったく、俺は平和にのんびりと暮らしたいだけなんだがな」

やれやれと小さく溜息を吐き、弘明は肩を竦めた。
そんな彼の反応にリーゼロッテはフフッと小さく笑みを浮かべると、

「いくつか条件を呑んでくださるのならばお受けしましょう」

と、そう答えた。

「ほう。意外だね。正直、渋られるかと思ったのだが……」

ユグノー公爵が警戒を込めた視線をリーゼロッテに送る。

「あら、リッカ商会は慈善事業ではございませんが、メリットさえあれば支援を行わせてもらうのは当然ですよ」

「メリットかね」

「はい。それはこちらで提示する条件をご覧になっていただければご理解いただけるかと。こちらが条件を記載した書類となります」

そう言って、リーゼロッテは一枚の羊皮紙をユグノー公爵に差し出した。

「フッ、流石だな。あらかじめこちらの意図を見越していたということか」

リーゼロッテはユグノー公爵が助力を願い出てくることを事前に予見して、その助力を呑むための条件まで考えていたのだ。

（これほどの能力を持った者が男として生まれなかったことが悔やまれるな）

何が起きようと利益を見出して稼ぐ。

それが一流の商人というものである。

だが、超一流の商人は何が起きるかを事前に見越しておき、時にはその流れすら作り出してしまう。

リーゼロッテは間違いなく超一流の商人だ。
そして海千山千の貴族どもに引けを取らない貴族である。
ユグノー公爵はそう判断した。

「ガルアーク王国の上層部はフローラ王女が次代の王位に就くことを望んでいます。私の父上もそうです。娘の私がその流れに反するのはよろしくないでしょう。利害が一致する限り助力するのは当然ですわ」
「そうか。後は我々が条件を呑むかどうかだが……」

スッと目を細めて、ユグノー公爵は羊皮紙を眺めた。

「いかがでしょうか？　フローラ王女殿下」

一通りその条件を頭の中に入れると、ユグノー公爵はフローラにお伺いを立てた。

「えっと……ユグノー公爵の判断に任せます」

羊皮紙に目を通しても、フローラは提示された条件の旨味を十分に判断することはできなかった。
そのことはユグノー公爵にももちろんわかっている。
リーゼロッテと同じだけの判断能力を同年代の少女に期待するのは酷だろう。
実際、ユグノー公爵もフローラにそのような能力を求めてはいない。
だが、反革命軍のトップはフローラなのだ。
そのフローラを無視してユグノー公爵が独断で条件を呑むことはできない。

「かしこまりました」

ユグノー公爵が差し戻された羊皮紙を恭しく受け取る。

「彼女が我々に支援するメリットとはどのようなものがあるのでしょうか……」

自らの能力の無さを不甲斐なく思い、フローラがボソリと呟いた。

隣に座っていた弘明がその言葉を耳聡く捉える。

「んー、アマンドはベルトラム王国と国境を接しているからな。俺達が敗れるのはリーゼロッテにとっても面白くはないんだと思うぞ」

と、弘明が自らの意見を語る。

「流石ですわ。ヒロアキ様」

すかさずロアナが弘明を褒め称える。

その間にリーゼロッテとユグノー公爵は支援に関する契約条件について話し合っていた。

その日、弘明達一行はリーゼロッテの屋敷に滞在し、翌日、ガルアーク王国の王城へ向けて出発することになる。

そして、翌日、アマンドを立ち去ったフローラ達を見送ると、リーゼロッテは屋敷の執務室で配下のアリアと向き合った。

「ユグノー公爵の相手はなかなか疲れたわね。けっこうなタヌキおやじよ、アレ」

と、側近であるアリアに愚痴を漏らす。

「お疲れ様でございました。王女殿下や勇者はどうだったのですか？」

感情を窺わせない面持ちでアリアが尋ねる。

これも主のために行うストレス発散の一環だ。

「王女殿下はまぁ典型的な箱入りのお嬢様って感じかしら。勇者も平凡な青年って感じね。ちょっと軽率な発言が多かったり、先入観が強い性格をしているけど、却って転がしやすいわ。ユグノー公爵としては扱いやすい手駒を手に入れて万々歳ってところじゃないかしら」

「相変わらず辛辣な鑑定眼をお持ちでいらっしゃいますね」

「別に嫌っているわけじゃないのよ。好き嫌いの感情を別にして、相手の良いところと悪いところをピックアップして人格を分析するのはもはや癖みたいなものだから」

そう、相手がどのような人物なのかを正確に見極める観察眼は貴族社会で生きていくには必須のスキルだ。

そして、趣味の合わない相手でも、蔑んだり嫌悪することなく、必要とあれば笑顔で相対して喜ばせる発言だってする。

それも貴族に求められる重要な資質の一つだ。

お互いを繋ぐ強固な鎖は利害のみ、そこに好き嫌いといった感情を持ちこむ者は貴族として上手く生きていくことはできない。

それがリーゼロッテの持論である。

とはいえ、リーゼロッテも人間である以上、完全にそれを実践するのは難しかったりするのだが。

それに、嫉妬や憎悪といった負の感情で動く貴族が幅を利かせているケースも多く、それが非常に厄介だったりするのだが、今は省略しておく。

「お話を伺う限りだと、勇者は幼稚な人物に映りますが？」
「あら、貴方だって十分に辛辣じゃない」
リーゼロッテはくすくすと笑うと、
「まぁ幼稚かどうかはともかく、彼にとっては遊び感覚の延長なんでしょうね」
と、そう言葉を付け足した。
「遊び感覚ですか？」
「そう。まぁ私だけしか知ることができないし、上手く説明もできないんだけどね」
リーゼロッテは小さく息を吸うと、
「自分の行動に責任を持つことを求めるのは少し酷かもしれないわ」
と、そう漏らした。
弘明はやや上から目線で、優劣をつけたり、物事を否定したりする傾向があるが、自分の気に入っている物事に対しては保護意識が強く執着心を見せる。
煽(おだ)てに弱く、得意な話題を振られると嬉しくなって語りすぎてしまうタイプだ。
おそらくあまり世間に関わっていなかったのだろう。
リーゼロッテから見た弘明はそのように映った。
「扱いやすい反面、ユグノー公爵は彼を慎重に扱わないとね。って、まぁ私がそこまで心配することでもないか。彼にやさぐれてもらっ

ちゃうと私も困るけど、公爵なら十分にわかっているでしょうし」

今は順風満帆にお膳立てがされているから問題はないが、経験上、ああいう手合いは躓くと他者に責任を転嫁して投げやりになることが多い。

そうなるとリーゼロッテとしても少しばかり困る。

――だが、

「勇者なんてイレギュラーな要因、いなかった方が良かったのかもしれないわね」

小さく嘆息すると、リーゼロッテは痛々しそうな面持ちでぼそりと呟いた。

第69話　心構え

言葉を習い始めてから一ヶ月もすると、美春達はシュトラール地方の言語でも簡単な意思の疎通くらいなら行えるようになり、リオは美春達に護身術と精霊術を教えることを決めた。

といっても、精霊術に関しては体内のオドの流れを感知する段階から始めて、オドの操作、オドの視認、マナへの干渉とやるべきことは多い。

魔法を教えるだけなら簡単なオドの操作までこなせるようになればいいので時間は大幅に短縮できるが、精霊術を教えるとなると初歩的な術を使うだけでも習得期間は短く見積もっても半年はかかるだろうとリオは見込んでいる。

もちろん美春達の才能によりその期間は前後するが。

最初の修行はかなり地味だし、感覚的な問題でやることも多くないので、目に見えた成果が出るのはまだまだ当分先のことになるだろう。

それゆえまずは護身術を重点的に教えることを決める。

美春と亜紀に関してはごく簡単な棒術と体術を教えることが決まったのだが、

「俺、剣術を習ってみたい！」

という雅人の強い要望により、雅人に対しては剣術を教えることが決まる。

そんなわけで訓練用の剣や棒を購入するために、リオは美春、アイシア、セリア、亜紀、雅人の五人を引き連れてアマンドへと訪れた。

アイシア、亜紀、雅人については今回がこの世界で初めての外出

であり、亜紀と雅人は前日からだいぶ興奮していたようだ。
今回の外出は亜紀や雅人のストレス発散も兼ねているが、これだけ大所帯での外出は初めてであるため、リオとしては不安が大きい。
なにせ女性陣については全員が揃って人の目を惹く容姿であるから、ぞろぞろと都市の中を歩けばいらぬ注目を集める可能性が高いだろう。
そこで、少しでも不安を減らすために、リオは彼女達にフード付きのローブを着こんでもらうことにした。
万が一顔がさらけ出された時、美春達の黒髪が少し目立つということもあり、髪の色を変える魔道具も渡してある。
移動はアイシアの協力を得て精霊術で空を飛んでアマンドの傍までやって来た。
付近で人気のない場所に降りると、街道に合流して都市に向かって歩いていく。

「うおお！　すっげー！　ゲームみたいな街だ！」

都市の外観が見えてくると、雅人が感極まったように叫んだ。

「あんたＲＰＧだっけ？　大好きだもんね」

やや呆れた声で後ろを歩いていた亜紀が言う。
今の隊列はリオと雅人が先頭を歩き、真ん中に美春と亜紀が、最後尾にセリアとアイシアがいて歩を進めている。

「まあね。実際の街の風景はこんな感じなんだな。へぇ～」

雅人は目を輝かせて都市の景観を楽しんでいた。
一度は奴隷にされかけて、この世界の危うさはその身をもって味わったはずなのだが、喉元を過ぎて熱さを忘れたのだろう。

今はお遊び感覚というか、少し気が抜けているように見える。
日本の都市に出かけるくらいならそれでもいいのだが、今から行く場所は日本の都市とは比較にならないくらいに犯罪が起きやすい場所なのだ。
都市は犯罪の温床である。
メインストリートならせいぜいスリに注意するくらいで、生命や身体の安全に関わる犯罪に出くわすことはあまりない。
だが、路地裏に行けば暴行、傷害、脅迫、強要、恐喝、強盗なんかは日常茶飯事である。

「何度も言ったけど、都市の中は危険がたくさんある。別行動するとしても、不用意に路地裏に行かないこと、それとスリにも注意すること。人とぶつかった時は財布が盗まれていないか確認するんだ」

リオは直前になって改めてその危険性を美春、亜紀、雅人の三人に訴えかけた。
以前に美春を連れてきたときは四六時中リオが一緒にいたが、今日は人数も多いせいで全員に対して十分に注意を向けきることはできないかもしれない。
アマンドの治安は他の都市に比べれば格段に良いが、今はまだまだ発展途上で人口の増加に対応しきれていない感がある。
必然的に職に窮(きゅう)する者が増え、犯罪発生率も上がっているはずだ。
かつて孤児としてスラムで生きていたリオにはわかる。
生活に困窮して職や住居を持たない人間は生きることに必死だ。
おのぼりさん感覚で街の中をきょろきょろと眺めていたら格好のカモ扱いされるだろう。
ましてやこの場にいるのは全員が女子供にすぎない。
スリ程度ならまだいいが、女性に関しては強引に路地裏や宿屋へと連れて行かれることだってある。
美春達には都市が危険な場所だと認識し、心構えをしてほしかっ

た。

「はい。気をつけますね」
「わかりました！」
「了解！」

と、美春達はしっかりとした声で返事をした。

「美春さん。少しでも危ないなと思ったらすぐに俺に知らせてください。俺がいない時はセリア先生かアイシアにでも」

念を押して年長者の美春にそう告げる。

「わかりました」

美春はリオと目を合わせ深く頷いた。

リオは頷き返すと、

「セシリア、アイシア。不用意に人が少ない場所には行かないようにしてくださいね」

最後尾を歩いているセリアとアイシアに振り返って、シュトラール地方の言語に切り替え、話しかけた。

セシリアというのは外出する際に取り決めたセリアの偽名だ。

「ふふ、心配してくれてありがとう。でも万が一の時はリオが守ってくれるんでしょ？」

セリアは僅かに眼を見開くと、リオの意図を察して嬉しそうに微笑んだ。

「もちろんそうしたいですが、心構えの問題です。セシリアたちの買い物中は別行動になりますし、店の外には出ないようにしてください」

苦笑してリオが返す。

もちろんリオが一緒にいれば問題が起きても対処できるが、今日、女性陣の買い物中、リオと雅人は別行動する予定だ。

美春達が買物をする場所は女性向けの専門店だけだが、最悪、それ以外で不意に離ればなれになる可能性だってある。

「わかってる。美春達のことは私が守るわ。私だって『身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）』は使えるんだから、そこら辺のゴロツキには負けないわよ」

と、セリアが細腕でこぶを作る仕草をして見せる。

「それはそうなんですが……」

セリアの言うように、魔法で身体能力を強化できるのならば、そこら辺のゴロツキに負ける心配はないのだが、それでも不安になってしまうのは幼く見えてしまうセリアの容姿ゆえだろうか。

「春人、私も美春達を守る」

いつの間にかリオのすぐ傍にやって来ると、腕を引いて、静かだが良く通る声で、アイシアが言った。

相変わらず無表情というか、虚ろな表情をしているが、何となく言葉通りの意志が伝わってきて、

「わかった。よろしく頼むよ、アイシア」

口元に微笑を浮かべ、リオは答えた。

「ちょっと。私の時よりすんなりと信用しすぎじゃない？」

セリアも一歩前に出て、ムッとした様子でリオに語りかける。

「あはは。こう見えてアイシアは高位の精霊ですからね」

たしなめるようにリオが言った。

高位の精霊であるアイシアは精霊術の本家本元ともいうべき存在だ。

リオから供給されているオドを用いれば自由自在に精霊術を操ることができる。

その気になればセリアが比較にならないくらいの戦闘能力を内に秘めているはずなのだ。

「ふーん、この子ってどのくらい強いのかしら？」

どうやらセリアはアイシアの実力に興味を惹かれたようだ。

「どうなんですかね。その気になればちょっとした自然災害を起こせるんじゃないかと」

何気ない様子でリオが語る。

「し、自然災害？」

するとセリアの顔が盛大に引きつった。

「まぁ俺が必要な量のオドをすぐ傍で供給する必要はありますけどね。離れ離れの状態だとせいぜい……」

言いながら、リオが口元に手を添えて考えるそぶりを見せる。

「せ、せいぜい？」

セリアはごくりと唾を呑んだ。

「まぁ最上級魔法くらいの精霊術しか使えないんじゃないでしょうか？」

「そ、それでも十分すぎる威力よ！　それになんで疑問形なのよ？」

泡を食ったようにセリアが叫ぶ。

最上級魔法といえば発動に時間がかかるが、威力は折り紙つきの広域殲滅魔法が代表的だ。

戦場で使われる際には一撃で平均三百人程度の犠牲者が生じ、密集地帯に放てばその被害者はさらに増える。

消費される魔力は膨大で、普通の魔道士では使用に必要な魔力を保有していないため、不足している魔力を補うために大量の魔石を用意する必要がある大魔法だ。

人間族にしては桁外れに魔力の多いセリアでも魔石なしだと一発撃てば魔力が枯渇して倒れてしまう。

しかも術式適合率が低いために使用者は少なく、軍部では治癒魔法の使い手以上に重宝される存在である。

「いや、俺を基準にして考えたんですけど、俺も上級魔法以上の規模で攻撃的な精霊術を使ったことはないものでして。どれくらいのオドが必要でどれくらいの威力が出せるのかはわかんないんですよね」

実際に全力で使ったことがないのに正確な威力を知ることはできないのだろう。
つまり今リオが告げた回答は控えめに言ってということだ。
しかもリオの魔力は無尽蔵にあるといってもいい。
二人が一緒になったらどれ程の威力がある精霊術を使うというのか。
セリアはいっそう顔を青ざめさせた。
「いい、アイシア？　都市の中じゃ絶対に全力で精霊術を使っちゃ駄目よ！」
焦った様子でアイシアの説得にかかるセリア。
リオならば意味もなくオーバーキルを行うことはないだろうが、アイシアは目覚めたばかりで少し危なっかしいところがあるように思える。
もしかしたら加減が効かないんじゃないか。
セリアの言葉に、アイシアはきょとんした表情を浮かべた。
リオはそんな彼女の反応に苦笑し、
「そうだね。それにこっちの地方だと人間で精霊術を使える人はいないから使うと目立つ。よほどのことがない限り、精霊術を使うにしても身体能力か肉体の強度を強化するくらいに留めておいた方がいい」
と、横から言葉を挟むことにした。
魔法を使用すると術式が中空に浮かび上がり微細な光とともに事象が発動する。
精霊術は術式が浮かび上がらない代わりに微細な光と一緒に事象が発動するだけだ。

それゆえ基本的には同じ事象を発動させても見る者が見れば違いは一目瞭然である。
とはいえ、身体能力や肉体の強度を強化するだけなら事象が外部に見える形で発動することはないため、傍目から見ても精霊術を使用したとはわかりにくい。
護身の意味で使うには最適の精霊術だろう。

「わかった」

アイシアがこくりと頷く。
そんな話をしているうちにリオ達はアマンドへとたどり着いた。
最初に向かったのは以前に美春やセリアを連れてきたリッカ商会の女性向けの専門店だ。

「それじゃあ後で迎えに行きますから」
「ありがと。じゃあ行ってくるわね」

セリアに引率を任せ、美春、亜紀、アイシア達と別れる。
四人が店に入っていくのを確認すると、

「じゃあ行こうか」

リオは隣に立っている雅人に声をかけた。
美春達が買い物をしている間に武具屋に行って雅人の装備を買うのだ。

「おう、よろしくな。ハルト兄ちゃん」

雅人が嬉しそうに無邪気な笑みを浮かべて返事をする。
これから何を買うのかわかっているのだろうか。

小さく嘆息し、リオは武器屋へ向けて足を進めた。
そうして武器屋を巡ること数店、中々これはと思える剣に巡り合うことができずにいると、
「なぁ、ハルト兄ちゃん。無理して良い剣を買わなくても俺なら大丈夫だぜ？　最初は安物の方がいいんじゃないのか？」
雅人が遠慮がちにそんなことを言ってきた。
「自分の命を懸けるものなんだ。出来るだけ良い物を見繕った方がいい。幸いお金に余裕はあるしね」
リオは真剣な面持ちで、安物ではなく良質な剣を選ぼうとする理由を説明した。
弘法筆を選ばずという言葉があるが、同じ実力を持った者同士ならばより良い武器を持っている方が勝つのが道理だ。
遠慮しているのかもしれないが、安物でかまわないという発言は、自分の命を安く見積もっているか、命を懸けることを想像できていないという証拠である。
そして、おそらく雅人は後者だろう。
「いいか。雅人。俺は君に剣術を教える。それは何かを殺すための技術だ。その対象には人間も含まれる。そして、君が剣を振るう時、君は人の命を奪うために自らの命を懸ける必要がある。相手だって殺されたくはないだろうからね。だから君に誰かを殺し殺される覚悟がないのなら、俺は剣術を教えることはできない」
今が良い機会だと考え、いったん立ち止まり、リオは雅人にそう語りかけた。

「え、あ……ハルト……兄ちゃん？」

スッと変わったリオの雰囲気に、雅人が返す言葉もなく狼狽えた。

今、雅人の目の前にいるリオは普段とは別人のように優しさが消えている。

ざわりと心臓が騒ぎ、雅人は急に足場を失ったような感覚に襲われた。

「そう、言いたいんだけどね。あいにくとこの世界は命が軽い。君が誰かを殺そうと思わなくとも、誰かが君のことを殺そうとするかもしれない。この世界に来て最初に遭遇した連中のことを思い出すといい」

小さく嘆息し、リオは言葉を続ける。

「その時、俺が傍にいてあげられればそれでいい。けど、常にそうだとは限らない。だから俺は君に命を懸ける覚悟がなくとも剣術を教える。君には自分の身を、そして君にとって大切な人を守る術を身につけておいてほしいんだ」

「あ、お、俺……」

雅人はぎりりと歯を食いしばった。

ぎゅっと拳に力を入れ、顔を伏せる。

ひどく葛藤している様子がリオに伝わってきた。

「今はそんな覚悟はなくてもいいさ。こう言われたからってすぐに命を懸けることができる奴はきっと心が壊れている」

感情を殺したように冷たく、リオはそう言い捨てた。

雅人が目を丸くして顔を上げる。

しかし、リオは優しく微笑んでいて、

「ま、とりあえず俺は君に剣術を教えるってことだ。難しい話はこれくらいにしておこう。もし俺が美春さんや亜紀ちゃんの傍にいない時は雅人が二人を守ってあげてくれ」

軽く雅人の頭の上に手を乗せると、明るい声色でそう告げた。

「あ、ああ！　任せてくれよ！　ハルト兄ちゃん！」

一瞬、雅人は呆けたようにリオの顔を見つめると、パッと笑顔を浮かべて答えた。

「よし。じゃあ次の店に行こうか。さっきの店で聞いた話だと次の店はオーダーメイドもやってるらしい。腕だけならこの都市で一番だそうだ」

そう言うと、リオは少し足早に再び歩き始める。

雅人は嬉しそうにその背中を追った。

第７０話　武器選び

リオと雅人は古くて、薄暗い、手狭な武器屋へとやって来た。
おそらくカウンターの裏には鍛冶場があるのだろう。
奥から店内へと炭の焦げ付いた香りが漂ってきている。

「いらっしゃいませ！」

カウンターには見習いの弟子と思われる少年が一人――、歳は雅人と同年代か少し上といったところだろう。
少年はリオと雅人が店の中に入って来るなり、パッと笑みを浮かべ元気よく挨拶をしてきた。

「今日はどんなご用でしょうか？」

と、少年は営業スマイルを浮かべリオに用件を尋ねてきた。
他の店ではこうして店に入るなり客に直接話しかけてくることはなく、基本的に最初のうちは放置されるのが通常である。
こうやって声をかけてくるのは狭い店内のせいか、少年が営業熱心なのか、そのいずれかだろう。

「この子に合う片手用の剣を探しているんですが」

リオが手短に要望を告げる。

「なるほど。店内に置いてある片手剣はそちらのコーナーに設置されているものがすべてです。他にもオーダーメイドも受け付けております。お客様は当店は初めてのご利用でしょうか？」

「はい。そうです」
「なるほど。オーダーメイドは親方の面接を受ける必要があるんですが、そちらをご希望ですか？」
「そうですね。とりあえず店頭に並べられている物で彼に合うものがあればそちらをと思っていますが……」

ちらりとリオが店頭に並べらている片手剣に視線を送る。

「なるほど。では、まずはそちらをご自由にご覧ください」
「ええ、そうさせてもらいます」

リオは愛想笑いを浮かべて答えると、片手剣が設置されている店の一角へと移動した。
数はそれほど多くないが、一本一本、剣を手に取り、鞘から抜いて、目で見、じっくりと吟味して品定めをしていく。
その様子を黙って雅人と店員の少年が眺めている。
やがて壁に飾られていた一本のシンプルなデザインの剣を手にして鞘から抜くと、リオはスッと目を細めた。
その片手剣は薄く青みがかかった鈍い輝きを放っている。

「雅人、この剣を持ってみてくれ」

軽く素振りをすると、リオは雅人にそう語りかけた。

「おう」

緊張した表情で剣を受け取る雅人。

「これまでの店で持った剣と比べて握り具合はどうかな？　重くない？」

と、リオが尋ねる。

「おお？　ちょっと重いけど、悪くはない……ような気がするような？」

雅人が不器用な手つきで剣を軽く振ってみる。

些細な感触だが、何となく手にしっくりくるような気がした。

とはいえ本当に言われてみればというような感覚にすぎないのだが。

「そうか。じゃあとりあえずそれは保留にしておこう。残りを見てみるからちょっと待っていてくれるか？」

そう言ってリオは再び残りの片手剣を片っ端から吟味し始める。

店番の少年が興味深そうにその様子を眺めていた。

「よし、その剣にしようか」

一通り店内にある片手剣を吟味し終えると、リオは先ほど保留した剣を購入することを雅人に告げた。

「すみません。あの棚に飾られている剣を購入したいのですが」

先ほど保留にした剣に視線を移し、リオは店員の少年に購入の意思を伝えた。

「あの剣でよろしいのですか？」

少年がリオに尋ねる。

「ええ、お願いします」

リオが迷う素振りもなくそう告げると、

「えっとですね。すみません。その剣を売るにはちょっと親方の許可を得ないといけない決まりになっていまして、よろしいでしょうか？」

従業員の少年が申し訳なさそうにそう答えた。

「許可ですか？」

思わぬ展開にリオが眼を丸くする。

「はい。本当にすみません。お願いしてもよろしいでしょうか？」

言って、店番の少年は深く頭を下げた。

「別にかまいませんが……」

「ありがとうございます！　すぐに連れてきますので！」

そう告げると、少年は急いだ様子でカウンター裏の工房に駆け込んだ。

一分もしないうちに白髪と皺（しわ）の目立つ体格の良い初老の男性が現れる。

煤（すす）で薄汚れた作業着を着込んでおり、一仕事終えたところなのか、顔には大量の汗を貼りつけていた。

この男がこの武器屋の店主であり、裏にある鍛冶場の親方なのだろう。

親方と思われる男はリオの全身をじろりと眺めると、
「お前さんか。俺の剣を買いたいってのは？」
少しぶっきらぼうに、そう尋ねた。
「ええ、そうです。正確には俺ではなく、この子のためにですが」
「ほう」
親方はジロリと雅人に視線を送った。
雅人がたじろいだ様子で後ずさる。
親方はリオが買おうとしている壁に飾られた剣に視線を移すと、
「どうしてそいつを選んだ？　他に見栄えの良い剣はたくさんあるはずだが」
そう尋ねてきた。
「意匠にこだわりはなく、シンプルな基本型のブロードソードですが、良い剣です。この店の店頭に並んでいる片手剣の中だと間違いなくこれが一番だと感じました」
言葉少なにリオはこの剣を称賛した。
「ほう。わかるのか？　その剣の材質は？」
「純アダマンタイト鋼」
「付与されている術式の種類は？」
「頑強、軽量、鍍金（めっき）、風属性の付与」
親方から投げかけられる質問にリオが手短に答えていく。

「なるほど。その歳で随分と良い眼は持っているようだな。頑強、軽量、鍍金(めっき)はともかく風属性の付与まで見抜くとは。すまんが、少し手を見せてくれ」

満足げにそう告げると、親方はリオの手をスッと掴もうとしてきた。

サッと手を避けることもできたが、リオはされるがままに親方に手を差し出す。

親方はリオの手を掴みじっと見つめると、

「良い手だ。毎日剣を振らなきゃこうはならねぇ」

ニッと渋い笑みを浮かべて、上機嫌そうにそう告げた。

「どうも」

リオが苦笑して親方に答える。

「ちっと興味があるんだが、良ければお前さんがどんな剣を使っているのか見せてもらってもいいか？」

尋ねて、親方がリオの腰に差してある剣にちらりと視線を送った。

グリップのガードの中央には綺麗な輝きを放つ宝石のような石――精霊石が組み込まれている。

加えて綺麗な装飾が施されてはいるが、親方にはそれが儀礼用の装飾剣だとは思えなかった。

「それは……、わかりました」

リオは一瞬躊躇ったが、黒ごしらえの鞘からミスリル製の剣を抜き、親方に差し出す。

「すまん……なっ……」

その剣の刀身を目にして、大きく目を丸くしたのも束の間、親方はリオの剣が放つ神秘的な白銀の輝きに言葉を失った。

「おい、こりゃ何の金属を使っているんだ？　鋼鉄、それに鋼鉄とアダマンタイト鋼の合金ともまた違う。……まさかミスリルか？」

心を奪われたように剣を見つめる。

剣に用いられている金属の材質を鑑定していると、ハッと表情を変えて、親方が尋ねた。

ミスリルとはまたの名を魔法銀といい、強度だけならアダマンタイト鋼の方が優れているが、非常に軽く、魔力伝導性に優れた金属である。

人間族にはその産地も製法も知られておらず、存在する極少数のミスリル製の武具が出回っているだけで、まさしく伝説の金属だ。

その一つ一つに高確率で人間族では再現不能な魔術が込められており、人間族の間で市場に出回れば伝説の武具として青天井の値段が付けられる。

「これにはどんな魔法が込められているのか、聞いてもいいか？」

声を絞り出すように親方は尋ねた。

「頑強と鍍金（めっき）の術式が込められています」

「ミスリルならもっと魔法を込められそうなもんだが、二つだけか。それは意図してのもんか？　この剣はいったいどこで？」

と、親方がリオを質問攻めにする。
頑強は物体の強度を頑丈にする魔術であるが、耐久限界を超える衝撃を受ければ剣は折れるし、手入れをしないで放置したまま使えばそのうち刃こぼれもしてしまう。
鍍金（めっき）というのは金属の腐食を防止するものであるが、血のりで錆びにくいというだけで、ずっと放置したままでは少しずつ劣化していくため、小まめに油を塗ってやる必要がある魔術である。
いずれも人間族の間で広く出回っている魔術であり、少し高級な武具なら当たり前のように備わっている魔術だ。
同じ物質に複数の魔術を込めることは可能だが、物質の適性によって込められる魔術の数には限度がある。
限度を超えて魔術を込めると、物質が術式を通して流れる魔力の負荷に耐え切れず脆くなってしまうため、魔装や魔道具を作る際にはその物質の耐久度を考慮する必要があるのだ。
ミスリルは魔装や魔道具に適した素材であり、魔力耐久度がこの上なく高い金属として知られている。
稀に市場に出回るミスリル製の武器は例外なくアーティファクトであり、高位の術式が込められていることから、親方はリオが持っているミスリル製の剣にありふれた二つの魔術しか込められていないことを疑問に思った。
「はい。その剣に込められている術式は確かに頑強と鍍金（めっき）の二つだけです。俺は制作者ではないので意図してのものかどうかは知りません。入手経路は知人から譲り受けたとしか言えませんが」
一部に嘘を織り交ぜ、重要な情報を伏せて、リオは答えた。
「ひょっとしてその知人が製作者なのか？」
「いえ、違います」

「……そうか」

顔に落胆の色を浮かべ、親方ががっくりと肩を落とす。

同じ鍛冶師としてこれほどの剣を打つ人物を知りたいというのは本能的な欲求である。

とはいえ、最初から期待はしていなかったのか、親方はリオの言葉をそのまま鵜呑みにして信用した。

「余剰領域に追加で術式を込めて魔剣にする気はないのか？」

「良い術式があればとは思っているんですが、なかなか巡り合えなくて」

そうやってリオがうそぶく。

実はこの剣には親方にも告げていない術式が一つ組み込まれている。

剣に使用者の精霊術を取り込ませる術式で、人間族の間には出回っていないものだ。

「まぁせっかくのミスリル製武具だ。アーティファクトのような古代魔道具に込められているような術式と比べると、現代に出回っている術式を込めるのはちと勿体なく感じるかもな」

人間族の間に一般的に出回っている武具用の術式は、あらかじめ火、水、氷、風、雷といった一つの属性を付与するものである。

古代魔法具（アーティファクト）の中にも同じように属性を付与する術式はあるが、その性能は現代術式とは比べ物にならないくらいに高い。

「ええ。……ところで、そちらの剣を売っていただくことは可能なんでしょうか？」

ちらりと壁にかけられた剣に視線を移し、リオが尋ねた。
「ん、おお。すまんな。鍛冶師をやって三十年以上だが、これほどの剣に出会えたのは初めてでな。つい我を失っちまった」
話を脇に逸らしてしまっていることを自覚したのか、親方はバツが悪そうに謝罪した。
「確かその剣はその小僧のためのものなんだったか？」
「ええ」
「デザインは無骨だが、実はその剣は俺が作った中でも中々の一品でな。オーダーメイドで剣を作るために客の目を確かめる試金石として使っているんだ。だから、売るにしても相応の使い手に持ってもらいたいところなんだが……」
親方はじろりと雅人に視線を送った。
「うっ……」
その迫力に押されて、雅人がびくりと震える。
「素人のガキが初めて持つ剣にしては過ぎた代物だが、まぁいい。お前さんがその小僧を指導するというのなら売ろう。だがな、良い剣を見せてもらった礼として代金は勉強させてもらうが、それでも高いぞ？」
と、窺うように親方がリオの顔を見やる。
「おいくらでしょうか？」
「そうさなぁ。本当は金貨四十枚ってところなんだが、三十五枚で

どうだ」

金貨三十五枚といえば下級貴族の年収に匹敵する金額だ。

純アダマンタイト鋼は熟練の職人でなければ加工が難しく、珍しい鉱石でもあるため、特段この値段が高すぎるというわけではない。

「わかりました。お願いします」

そう言って、リオは迷うことなく財布から金貨を三十五枚、取り出した。

「お、おう……」

躊躇うことなくあっさりと金額分の貨幣を出したリオに親方が目を瞠(みは)る。

「驚いたな。その若さで随分と稼いでいるようだ。お前さん、貴族……ではなさそうだな。ひょっとして名の知れた冒険者か？　ここいらじゃ見かけたことはないが」

「いえ、各地を旅しながら魔物を狩ってお金を稼いでいるんです。普段はあまりお金を使うこともないものですから」

「ほう、冒険者になればもっと稼ぐこともできるだろうに」

「お金はそれほど必要じゃありませんし、しがらみも多そうですから」

薄く苦笑し、リオは肩を竦(すく)めた。

「なるほどな。まぁ俺も人のことを言えた義理じゃないが、そういうのはわからんでもない。その剣の手入れが必要ならいつでも持ってこい。格安で請け負ってやる」

「ありがとうございます。そのうちこの子に代剣も用意しようと思っているので、その時もこちらでお世話になるかもしれません」
「わかった。その時はそのガキの力量次第だが、オーダーメイドで作ってやらんこともない」
「ええ、その時までに鍛えておきますよ」

親方は深く頷くと、

「モンド！　商売成立だ。その剣をお渡ししろ！」

弟子の少年にそう呼びかけた。

「はい！」

大きく返事をし、少年が棚から剣を取り外した。

「では、どうぞ。お受け取りください」

言って、少年がスッとリオに剣を差出す。

「ありがとう」

リオは剣を受け取ると、それを雅人に手渡した。
雅人は嬉しそうに剣を受け取る。
大事そうに剣を抱え、自分の腕に納まったそれに見惚れていた。

「それでは。失礼します」

喜ぶ雅人の姿に小さく笑みを浮かべると、リオは親方達に別れの挨拶を告げて、踵を返した。

「行こう、雅人」
「おう！　ありがと！　ハルト兄ちゃん！」
雅人が元気よく礼を告げる。
「ありがとうございました！　またのお越しを！」
立ち去るリオと雅人の背中を弟子の少年が威勢よく見送る。
店を出ると、晴れ空から陽光が降り注ぎ、リオと雅人の瞳を刺激した。
眩しそうにスッと目を細める。
「後は盾を買わないとな」
それから、リオと雅人は他に必要な装備を購入しに行き、美春達を迎えに行った。

第71話　おめかし

リッカ商会が経営する女性向けの専門店にて。

「あの、美春お姉ちゃん。これ、私には可愛すぎる気がするんだけど……」

試着室の中で、もじもじと姿見の前に立つ少女が一人。

そこにはピンクのワンピースドレスを着た亜紀の姿があった。

「そんなことないと思うよ。すごく可愛いもん」

にこにこと笑みを浮かべて、美春が亜紀を褒める。

お世辞ではない本心が伝わって来て、亜紀が恥ずかしそうに頬を染めた。

「本当にこれを着たまま行かないと駄目なのかな？」

と、亜紀が上目づかいで美春の顔を覗き込む。

「駄目だよ。せっかくハルトさんが買ってくれるんだから。それに外を歩く時は上にローブを着てもいいみたいだから、ね？」

可愛い妹分の頼みではあるが、美春はくすくすと笑みを浮かべて首を振った。

この後、美春達はこの都市で有数のレストランで昼食を食べることが決まっている。

この日に美春達を連れてアマンドへ訪れることを見越して、リオ

があらかじめ席を押さえておいたのだ。
普段はあまり外出する機会がないことから、こういった際には少しでも楽しいひと時を過ごしてほしい。
そんな思いから、料理の質はもちろん、食事中に無粋な輩に絡まれずにプライベートな空間で食事を摂ってもらおうと、個室席を予約してある。
ところが一つだけ問題となってくるのがドレスコードであった。
お忍びで来る客もいることからあまり厳格ではないし、美春達が着ているリッカ商会ブランドの衣類なら追い返されることもないのだが、美春達は家着を念頭に置いた普段着しか持っていない。
そういった格調の高い店に行くにあたって着る服としてはやや場にそぐわない感があるのだ。
男性であるリオや雅人はともかく、女性である美春達にあまり気恥ずかしい思いをしてもらうのはリオの本意ではない。
そこで、せっかくだから、この際にと、リオは美春達に少しフォーマル向けの衣装を購入してみてはどうかと伝えてみた。
美春達も女の子だ。
必要以上に着飾りたいとは思わないが、お洒落に憧れのある年頃である。
自分達のことを慮(おもんぱか)ってくれ、好きな服を選んでいいと言ってくれたリオに対して、申し訳なく思う反面、素直に喜びも感じていた。
そんなわけで美春達はリオに感謝しながら、各々、外出用の一張羅を選んでいるところだ。
美春は存外早く気にいった白のワンピースドレスが見つかり、既に購入したうえで身につけていた。
その隣にはアイシアが黒のワンピースドレスを着てぼんやりと立っている。
アイシアは自分で衣類を自由に編むことができるが、彼女も専用のドレスを購入していた。
そのドレスを選んだのは美春である。

ドレスを買うと告げられてもぼんやりと店に立ち尽くしていたアイシアを、美春が手を引いて連れ回したのだ。
ちなみにアイシアが編んだ服はオドとマナで編まれており、アイシアが霊体化すると一緒に霊体化してしまう。
早めにドレスを選んだ美春とアイシアであったが、亜紀とセリアはドレス選びに難航していた。
より正確には、セリアは候補がいくつかあって決めあぐねているのだが、亜紀は見慣れない服ばかりで目移りして困っている、と言った方が正しい。
セリアはともかく亜紀はそういったフォーマルな社交向けの服を着たことがないからだ。
そんな亜紀を見かねて、美春は亜紀のドレス選びを手伝ってあげることにした。
もちろん美春もドレスを着た経験はないが、亜紀に似合うイメージは長い付き合いでよく心得ている。
亜紀に似合いそうなドレスを何着か見繕うと、試着室で店員に着替えを手伝ってもらうことにした。
そうして現在に至る。

「でも、いいのかな？」

着飾った自らのドレスをじっと見下ろし、亜紀が呟いた。

「どうしたの？」

亜紀の雰囲気が僅かに変化したことを察し、美春が尋ねる。

「きっとこのドレス、すごく高いよね？　都市の中で歩いている人の服を見たけど、私達がふだん着ている服もかなり質が良いものみたいだし……」

この都市にやって来て、亜紀は都市に暮らす人々の衣類が自分達よりもずっと粗末なものであることを感じていた。
基本的に平民は新品の衣類というものを滅多に購入せず、着れなくなった衣類を再利用して自作したり、誰かの使い古したものを着ることが多い。
加えて、服の素材も美春達がリッカ商会で購入したような上等なものでなく、持っている服の数も少ないときている。
そんな数少ない衣類を何年にもわたって着回しているため、全体的にほつれや縫い直しの跡が目立ち、薄汚れたボロボロの服を着ている者が多くなるのだ。
それに比べて美春達の持っている普段着は素材もデザインも洗練されており、見た目も新品同様である。
外を出歩く時に身につけている全身を覆うローブこそ質素なものであるが、それを脱げば富裕層なのかと見間違えられるだろう。
今まで何気なく与えられた衣類を着ていたが、ここに来て亜紀は自分がどれだけ恵まれた生活をしていたのか知るに至ったのである。
そして、この分だとおそらくは普段の食事もものすごく良いものを食べさせてもらっているのだろうと薄々感づいてしまい、急に申し訳なさが沸き上がってきたのだ。

「うん……。私達はハルトさんのおかげで何不自由なく生活させてもらっているんだよ。その上こんな贅沢までさせてもらっちゃって、私もすごく申し訳ないと思ってる」

と、亜紀に言い聞かせるように美春が言った。

「そう思っているからこそ、美春お姉ちゃんは私達の分まで働いてくれてるんだよね？」
「ううん。私はできることをしているだけだから……」

と、美春は苦笑して首を振った。
美春は家での掃除、洗濯、炊事を積極的に買って出ている。
朝は誰よりも早起きしているし、たまにリオが留守をしている時は美春がいなければ家事は何も回らないほどだ。
そうやって今までは日本にいた頃と生活水準が変わっていなかったために何となく実感が薄かったが、こうして都市へ来たことをきっかけに亜紀も本当に異世界にやって来たのだと強く思えてきた。

「そんなことないよ。私や雅人なんか何もできてない。それに美春お姉ちゃんがいるからこそ私達はこんな世界に来ても安心していられるんだから」
「私なんか何もできてないよ。全部ハルトさんのおかげだよ」
「そんなことないと思うけど、でも、ハルトさんに出会ってなかったらって思うと本当にゾッとするね」

危うく奴隷にされかけた当時のことを思い返し、亜紀は軽く身震いをした。

「あのね……、どうしてハルトさんは私達にここまでしてくれるのかな？」

続けて、亜紀はおもむろにそう尋ねた。
美春は目を瞬(まばた)き、「え？」と、亜紀に視線を送る。

「だって、ここまでしてくれる理由がないもん。だから、どうしてなのかなって……」

と、少し戸惑い顔で理由を説明する亜紀。

「それはハルトさんが優しい人だからじゃないかな」
と、美春が迷うことなく告げた。
「美春お姉ちゃんはハルトさんのことをそう思っているんだ……」
「うん。そうだけど……、亜紀ちゃんはハルトさんが優しくないと思っているの？」
僅かに目を丸くし、美春が尋ねる。
「ううん。そんなことはないと思うけど。なんかハルトさんのことがよくわからないっていうか……」
口ごもるように語尾を弱く呟き、亜紀は美春から目を逸らすように頭(こうべ)を垂れた。
そう、確かにリオは優しいと思う。
それだけは間違いない。
だが、なんというか、リオには頑なに一線を引いているところがあるように思える。
人との距離に敏感というか、パーソナルスペースが広いというか、どこか侵しがたい領域が存在するのだ。
亜紀達はリオの過去もリオの前世もよく知らない。
リオが語ってくれないというのもあるし、何となく亜紀達から尋ねにくいというのもある。
そのせいか、一ヶ月も一緒に過ごしているというのに、何となくリオに近寄れた気がしない。
今の距離感にどこか違和感があるのだ。
亜紀はそのことについて何とも名状しがたい感情を抱いていた。
「亜紀ちゃんは不安なのかな？　ハルトさんのことをよくわからな

いことが」

ぽつりと美春がその理由を尋ねる。

亜紀は美春の顔を見上げると、

「不安……なのかな？　美春お姉ちゃんはハルトさんのことをどう思っているの？」

おずおずとそう尋ねた。

「私？　私は……不器用だけどすごく優しい人だなって思っているよ。それに……」

美春が途中まで言いかけて、途切れる。

「それに？」

亜紀が尋ねると、

「えっと、あのね。私、ちょっと変な事を言うけど、怒らないで聞いてくれるかな？」

美春は亜紀を窺うようにおそるおそる話を持ち出した。

「え、うん……」

亜紀が訝(いぶか)しげに首を傾(かし)げる。

「何となくハルトさんはハル君に似ているなって……」

美春がぼそりと呟く。
その言葉は確かに亜紀の耳に届き、ハッと顔つきを変える。
「な、何を言っているの？　そんなわけないじゃない！」
語気を荒めて、亜紀が言った。
すぐに何事かと周囲の者達が美春達に視線を送ってきたことに気づき、慌てて亜紀は申し訳なさそうに頭を下げた。
周囲の人間の注意が美春達から外れる。
「ねぇ、美春お姉ちゃん。あんな人、もう会えるかどうかもわからないんだよ。いつまであんな人のことを覚えているの？　あっちだって美春お姉ちゃんのことなんかもう覚えてないと思うよ」
少し咎める口調で、饒舌に亜紀が語りかける。
美春が春人のことを話したのは随分と久しぶりだ。
それは亜紀のせいだけど、春人の話題はタブーのように避けられていたから。
だというのにここにきて美春は春人のことを口にした。
いったいどういう心境の変化なんだろうか。
けど、一つだけ、亜紀は確信した。
天川春人という存在は今もなお綾瀬美春の心の中に残り続けていると。
「そう、だよね。ごめんね。急に変なことを言って」
美春が申し訳なさそうに謝罪する。
「謝らないでよ……」

と、亜紀はそっぽを向いて言い捨てた。
すると、そこで、
「春人は貴方達のことをすごく大切だと思っている」
と、横から沈黙を貫いていたアイシアがそう語りかけてきた。
「アイちゃん？」
目を瞬(まばた)き、美春がアイシアの名を呼んだ。
亜紀と一緒になって急に会話に入ってきたアイシアを見やる。
「けど、春人は怯えている。本当の自分を曝(さら)け出すことを。自分が醜いんじゃないかって、恥じている」
戸惑う美春達を置いて、アイシアが淡々とした口調で語り続ける。
その言葉の真意を美春達は掴みかねていた。
いったい何を言っているのだろう。
けど、とても大事なことを言っているように思える。
「好きにならなくてもいい。けど、嫌いにはならないであげて。春人はそれを一番怖がっているから」
どうしてか、その物言いは美春達の心に奥深くまで響いた。
言い終えて、アイシアは再び黙り始める。
そのままじっと美春達を見つめていた。
「それってどういう……」
困惑した様子で亜紀が尋ねようとすると、

「お待たせ。私はこの紫のドレスにしてみるわ。って、どうかした？」

そこに着替えを終えたセリアがやって来た。

美春達の間に気まずさとは違う微妙な雰囲気が漂っていることに気づき、目を丸くする。

「あ、えっと、なんでもありません」

拙い言葉で亜紀が答える。

まだまだ亜紀は流暢にシュトラール地方の言葉を操ることはできないし、聞き取りも十分にできるわけではない。

それでも何となくセリアが何を言っているのかくらいは理解できる。

とはいえ、「どうかしたのか？」というセリアの問いに対して満足に説明する会話能力がないため、とっさに何もなかったと答えてしまったわけだが。

「そう？　そろそろハルトが来る頃よ。せっかく着飾ったんだから驚かせてあげましょう」

と、嬉しそうにセリアが語った。

すべてを聞き取れたわけではないが、誰を思ってその笑顔を浮かべているのかくらいは読み取ることができる。

「あ、ハルト！　どう、似合ってるかしら？」

やがてそのお目当ての人物が迎えに現れると、セリアの笑みはいっそう強まった。

思わず同性の亜紀が見惚れてしまうくらいだ。

（セリアさんはハルトさんのことが好きなんだろうなぁ）

セリアの喜ぶ顔を見て、亜紀がぼんやりと考える。

リオはセリアの着飾った姿を目にすると「似合ってますよ。綺麗ですね」と口にした。

セリアは満更でもなさそうだ。

（ハルトさんはセリアさんのことをどう思っているんだろう）

最初、セリアを家に連れてきた時、亜紀は二人の関係を恋人に近い何かだと勘繰った。

だが、リオはセリアのことを純粋に教師として尊敬しているように思える。

そこに恋愛感情はあるのだろうか。

何となくそんなことを思っていると、

「亜紀ちゃんもすごく似合っているよ。気にいってくれたかな？」

リオが亜紀に話しかけてきた。

「あ、はい。ありがとうございます！　こんな良い服を買って頂いて」

ぼんやりと考え事をしていたところに急に話しかけられ、亜紀がおずおずと返事をする。

「かまわないよ。今後、正装する必要があったらその服を着るといい。成長したらまた別の服を買おう」

と、リオが微笑ましげに言う。

「はい！」

亜紀が嬉しそうに返事をする。

続けて、ちらりとリオの傍でアイシアやセリアのドレス姿に見惚れている雅人の姿が視界に映り、亜紀は小さく溜息を吐いた。

「うちの愚弟は良い剣が見つかったんでしょうか？」

「ああ、良い剣が見つかったよ」

「すみません。良い物を買って頂いた上に弟のお世話まで任せちゃって」

礼を述べて、亜紀が深くお辞儀をする。

「いや、必要な買い物だからね。俺も色々と見て回れて楽しかったし」

リオは笑顔を浮かべて頭（かぶり）を振った。

「そう、ですか。良かったです」

リオの言葉が嬉しくて、亜紀が笑みを浮かべる。

同時に、ふと先ほどの美春の言葉が亜紀の脳裏をよぎった。

リオが天川春人に似ていると。

まだ幼い頃に見た曖昧な兄の姿が頭の中に思い浮かび、亜紀は僅かに顔を顰（しか）めた。

「どうかした？」

そんな亜紀の些細な変化に気づき、リオが不思議そうに尋ねる。
「あ、いえ！　何でもありません！」
焦ったように亜紀が首を左右に振った。
「そう？　じゃあ、目立っているみたいだし、そろそろ出ようか」
言って、苦笑しながらリオが店内を一瞥する。
先ほどから着替えを終えた美春達は店員と客の注目を集めていた。
中にはカップルで来店中の客もおり、特にアイシアの容姿に見惚れた男達が連れの女性から非難の言葉を耳元で囁かれているが、その効果の程は定かではない。
「外は寒いし、目立つから、ちゃんとローブは着た方がいい」
いつの間にか亜紀のローブを持ってきて、リオがドレスの上からふわりと着せた。
まるで実の兄のように気遣ってくれるなと、亜紀は思った。
その瞬間、亜紀の中で何かがすとんと落ちる。
同時に突拍子もない想像をしてしまった。
「えっと、はい！」
だが、すぐにそれを振り払うように、亜紀は力強く返事をする。
（馬鹿だな、私）
亜紀は苦笑をたたえた。

何を考えているんだろう。
ぼんやりと覚えている幼い頃の兄の姿をリオに重ねるなんて。
きっと美春が変な事を言ったからだ。
絶対に、そうに違いない。
亜紀は少しばかり不機嫌そうに嘆息した。

第７２話　同窓者達の乱入

リオは美春達を連れてアマンド有数のレストランへとやって来た。仕切りにより個室仕立てにされたオープンテラスの席へと案内され、今は各々会話を楽しみながら、そこでランチ用のコース料理を食べている。

天気は良く、風が涼やかに頬を撫で、柔らかな日差しがテラスへと降り注ぐ。

「んー、悪くはないけど、私はハルトやミハルが作った料理の方が好きかな。この肉料理だって悪くはないけど、いつも食べている味付けと比べると大味に感じちゃうし」

メインの肉料理を食べつつ、普段食べているリオや美春の作る和洋中色とりどりの味付けがされた料理を思い出し、セリアが言った。

「ありがとうございます。けど流石に専門の料理人には負けますよ」

セリアの称賛を嬉しく思いながらも、リオは控えめに謙遜した。

「そりゃあ料理人としての完成度だけで言ったら宮廷に勤める専門家の方が上なのかもしれないけど、料理自体の完成度は二人の作る物の方が上よ？」

と、貴族として多くの美食を食べ慣れたセリアが忌憚のない感想を告げた。

美食とはすなわち贅沢である。

新しい食材、新しい調味料、そういったものを用意し、組み合わ

せ、試行錯誤をしたうえで、美食は誕生していく。
それゆえ、必然的に美食を生み出す主体は富裕層の下に勤める料理人となりやすく、民間の料理人は富裕層の雇う料理人が生み出した美食の調理法が市井に広まるのを待つしかない。
そうやって美食は民間に広がっていき、長い年月をかけて少しずつ美食としての完成度を高めていくことになる。

「それは俺達の知っている料理を生み出してくれた先達のおかげですよ。俺達はレシピを土台にして料理を作っているだけですから。そのレシピを再現できる豊富な食材と調味料があるからというのも大きいですね。同じ条件を満たせば専門職の方々に負けるでしょう」

ところが、リオと美春は既に地球で長い歴史をかけて研磨された美食のレシピを知っている。
しかも大陸中を旅して手に入れたリオの食材と調味料の数々はシュトラール地方では入手できないものも多い。
だから、貴族であるセリアがこれまでに食べてきたどの料理よりも完成度の高い料理を作れてしまうのだ。

「へぇ、ハルトやミハル達のいた世界って食文化が進んでいたのね。どんな世界だったのか聞いてもいい？」
「俺が元々いた世界ですか……」
顎に手を当て、リオは言いかねた。
「ごめんなさい。ひょっとしてあんまり話したくない？」
と、リオの様子を窺うようにセリアが尋ねる。
「いえ、大丈夫ですよ。何から喋ろうかと思いまして。そうですね

……」

そう言って、リオは苦笑を浮かべて頭(かぶり)を振ると、

「良い世界だったと思いますよ。国によりますが、俺がいた場所は豊かな生活が保障されていましたし、美味しいものがたくさんありすぎて飽食の時代なんて呼ばれ方もしていましたね」

と、そう語った。

「飽食の時代……。あんなに美味しい料理をミハルくらいの年齢の子が作れちゃうんだものね。他にもまだ私の知らない料理がたくさんあるんでしょう？」

「そうですね。まだまだ山ほどありますよ。土台のレシピを色々とアレンジすることで全く別な料理にもなりますし、これからも色々と作りますから。楽しみにしていてください」

「ええ、楽しみだわ。昨日のお酒も美味しかったし」

うっとりとした面持ちで昨晩飲んだお酒の味を思い出すセリア。

リオと一緒に暮らすようになってからというもの、セリアは毎晩のように王侯貴族でもまず飲めないような美酒を御馳走になっている。

セリアは別に酒好きというわけでもないし、量もそれほど飲むわけではない。

だが、今では毎晩のようにお酒を飲むのがすっかり一つの楽しみになってしまっていた。

「いつも飲んでいるお酒は完全にこの世界のものですけどね。お酒に関して言えばこの世界の方が格段に上だと思ってます」

「あら、そうなの？」

「ええ、俺も元の世界で最高級と呼ばれるお酒を飲んだことはないので確かなことは言えませんけど。いつも飲んでいるお酒に適うものが元の世界にあるとは思えませんね」
「へえ、まぁ確かにいつも飲んでるお酒より美味しいお酒があるって言われてもちょっと想像がつきにくいかもしれないわね」

と、セリアが納得の声を漏らす。
精霊の民の里で作られる酒の数々はまさしく美酒という表現が相応しい。
薬について豊富な知識を有するエルフは酒の製造にも長けており、もともとドワーフや獣人の各種族が保有していた秘蔵の酒の製造法を知ることでより優れた酒を生み出すことと相成った。
その味わいたるやシュトラール地方に暮らす人間族はおろか地球にある数々の名酒も霞むほどである。
そんな酒を日々飲んでいるセリアとしてはこれ以上の品が早々に存在するとはちょっと思えないくらいであった。

「はい。と言っても、まだとっておきがいくつかあるんですが、そちらは量がそれほど多くないので特別な行事の際にでも出すとしますね」
「凄く興味があるけど、お楽しみはとっておかないとね」

などと、リオが隣に座っているセリアと二人で話をしていると、ふと、リオは斜め前方に座っている亜紀から視線を感じた。
実は先ほどから何度かリオは亜紀の視線を感じとっており、リオが亜紀へ視線を送ろうとするたびにサッと目を逸らされていたりする。

「どうかした、亜紀ちゃん？」

今回はたまたま視線が合ったため、何かあるのかと尋ねてみた。

「あ、いえ、何でもないです！」

慌てた様子で亜紀が頭(かぶり)を振る。

「ならいいんだけど……。具合が悪かったり、何か苦手な料理とかあったら言っていいんだよ？」

本人が何でもないというのならばそれ以上追及するのも気が引ける。

一応、体調が悪いのかどうかだけ確認してみることにした。

「はい。本当に大丈夫です」

と、特に無理した様子もなく、笑顔を浮かべて、亜紀が答える。

どうやら本当に大丈夫らしい。

亜紀は小さく嘆息すると、以降、リオに視線を送ることは止めたため、それ以上はリオも気にすることはなかった。

それからしばらくの間はアットホームな空気の中でそれぞれが食事と会話を楽しんでいたのだが、ある時、建物の内部から少しばかり慌ただしい様子がリオ達のいるテラスにまで伝わってきた。

「……ちょっと騒がしいですね。何かあったんでしょうか？」

静謐(せいひつ)な店内の空気にそぐわない店内の様子に、テラスの入り口の一番近くに座っている美春がそう言った。

「そうですね。暴力沙汰というわけではないみたいですけど……」

と、リオが美春の疑問に答える。
激しい物音がするというわけではなく、無遠慮に大きな声で喋っている者がいるため、静かな通路に声が響き渡っているのだ。
その喧噪の正体は少しずつリオ達がいる空間へと近寄ってきていた。

「ほら、ここがこの店で一番人気の席なんですよ」
「えー、すごい良い眺め！」
「素敵。一度でいいからこのお店で料理を食べてみたかったの！」

やがてその喧噪の主達がリオ達のいるオープンテラスへと姿を現す。
入ってきたのはリオとほぼ同年代の男性が二人、そして二人を挟むように密着した若い女性が四人。
煩かったのは女性達の場違いな黄色い声によるものだろう。
侵入者達はリオ達がいることも構わずにプライベートな空間にずかずかと立ち入って来た。

「ほう、なるほど。悪くない眺めだ。溜まった鬱憤を晴らすにはもってこいといったところかな。スティアード君」
「ええ、まぁ悪くはないと思いますよ」

男二人は騎士風の仕立ての良いクロースアーマーを身につけ、腰には質の良さそうな剣を差している。
そんな男性二人の姿を目にし、リオとセリアが目を見開く。
二人はかつてのリオの同級生であったアルフォンス＝ロダンと、一つ下の学年で何かとリオに突っかかってきたスティアード＝ユグノーであったからだ。
実はこの二人はアマンドに立ち寄ったフローラの護衛として同行していたりする。

今はフローラ達がリーゼロッテと会談中であり、今日は彼女の屋敷に滞在することが決まっているため、休暇と称して都市で女遊びに繰り出していたのだ。

「お客様、困ります。こちらのスペースは現在この場にいるお客様方がご利用中でございまして」

そんな乱入者達を制止するべく、支配人と思われる初老の男性が狼狽した様子で諌めの言葉を投げかける。

「それはこちらで話をつけると言っただろう？　俺はこの店で一番の席を用意しろと言ったんだぞ？　彼女達はこのテラス席がこの店で一番の席だと言っているんだがな」

だが、アルフォンス達がそれを聞き入れる様子はない。
おそらくは身分を盾に金銭で解決しようと考えているのであろう。
実際、これまでもベルトラム王国内で似たような専横をまかり通してきたがゆえの蛮行である。
そんな彼らの態度を頼もしく思っているのか、取り巻きの女達もふてぶてしく笑みを浮かべて佇んでいる。

「こちらは人気の席となっておりまして予約を頂かないと案内することが難しくなっております。先にご案内した席は現在当店で埋まっていない席の中では一番の席にございます。どうかそちらでご納得いただけないでしょうか？」
「駄目だな。決めたぞ。俺達はこの席に座る」

事情を説明する支配人。
だが、連れ合いの女性達に良いところを見せようとしているのか、アルフォンスは決然と頭（かぶり）を振った。

そのままアルフォンスは席に座るリオ達へと視線を移すと、

「なぁ、君達……」

声をかけようとして、言葉を失った。

室内にいた美春達の容姿に目を奪われたのだ。

アルフォンス、そしてスティアードは特にアイシアの美貌に目が釘付けになっている。

アイシアの美貌は貴族として数多の美女を見てきたスティアードとアルフォンスですら拝んだことのない程に神秘的な美しさだった。

「こ、これはこれは。非常に美しく、可憐な御嬢さん」

ごくりとつばを飲み込むと、アルフォンスが芝居がかった態度でキザな言葉を口にした。

だが、すぐに自己紹介を忘れていることに気づくと、

「ああ、失礼。俺としたことがとんだ粗相をしてしまったね。これほど美しい御令嬢方に出会ってきちんと挨拶もしないなんて」

そう言って、大仰に首を振って遺憾の意を表明する。

「俺と彼は隣国ベルトラム王国の貴族でね。俺はアルフォンス＝ロダン。ロダン侯爵家の者だ。で、彼はスティアード＝ユグノー。何とユグノー公爵家の嫡男なんだよ」

自分達の家柄に誇りを持っているのか、アルフォンスが自信満々の笑みを浮かべて自己紹介をした。

アルフォンスの横ではスティアードが満更でもない笑みも浮かべている。

二人ともリオに対しては色々と差別的な感情をぶつけてきたのだが、髪の色を変えているからか、男の顔などいちいち覚えていないのか、二人がリオやセリアの正体に気づいている様子はない。
セリアについても髪の色を変えて変装しているからか、それともアイシアに見惚れているからか、気づく様子は一切ない。
スティアードに至ってはセリアに憧れていた節があったとリオは記憶しているのだが。
そんな二人にリオは不快感よりも呆れのこもった視線を送った。
「で、どうかな。よければ一緒に食事なんて。きっと楽しいひと時を提供できると思うけど」
男であるリオや雅人を無視して、主に女性陣に視線を送り、アルフォンスが言った。
連れ合いの女性達はばつが悪そうに後ろで佇んでいる。
事態に付いて行けず、困惑する美春、亜紀、雅人の三人。
セリアは深く嘆息し、アイシアに至っては興味がなさそうに料理を食べている。
「断る。さっさと部屋から出ていってくれ。煩くて敵わない」
六人を代表してリオがにべもなく断りの言葉を返した。
手をサッサと振って出ていけと促す。
そんなリオの態度にスティアードとアルフォンスが不快そうに顔を歪めた。
「君には聞いてないよ。俺は彼女達に聞いているんだ」
スッと笑顔を浮かべ直すと、アルフォンスはアイシアに近寄り、手に口づけでもしようと思ったのか、気品のある動作でアイシアの

手を取ろうとする。

「止めて。触らないで」

だが、驚くくらいに冷たい声を出して、アイシアはアルフォンスを拒絶した。

サッと手を引いて、僅かに眉を顰(しか)める。

「なっ」

そんなアイシアの反応にアルフォンスが動揺する。

これまでに彼はこの笑顔と挨拶のキスで何人もの女性を落としてきたのだ。

貴族のたしなみとして、高位の者から手の甲にキスを求めた時、女性は特別の事情がない限りそれを受け入れなければならない、という慣例がある。

だから今回も当然のようにアイシアは自分に手の甲を差し出してくれると思っていた。

あわよくば自分の整った容姿の虜にしてやろうと考えて。

だが、アイシアはそれを無視したことになる。

やり場のなくなった自らの手を所在なさげに彷徨わせると、アルフォンスはやむなく手を引込めた。

「ははは。連れが失礼しましたね」

そんなアルフォンスを見て、スティアードが愉快そうに笑いながらアイシアに謝罪の言葉を送る。

「アルフォンス先輩にはいつも女性に対して少しばかり馴れ馴れしすぎると言っているんです。どうか許してやってください」

スティアードがやれやれと首を横に振る。
そんなスティアードの言葉にアルフォンスが僅かにムッとした表情を浮かべた。
しかし、そこでムキになって食い下がるのはみっともないと考えたのか、困ったように苦笑して肩を竦めてみせる。

「さて、御嬢さん。よろしければお名前を聞かせてもらってもよろしいでしょうか？　せっかく女神のように可憐な貴方と出会えたのに名前も知らずにいるなんて、僕には耐えられそうにありません」

と、スティアードが歯の浮くような台詞を告げる。
アルフォンスもかなり容姿は整っているが、スティアードもそれに負けないくらいに整った容姿をしていた。
もっとも、アルフォンスはどちらかというと精悍な顔つきをしているタイプの男だが、スティアードは貴公子然とした美しい顔の持ち主だ。
ゆえにスティアードも自らの容姿にはひとかたならぬ自信を持っていた。

「……」

だが、アイシアはスティアードを一瞥することもなく沈黙を貫いた。

「っ……」

完全に無視されていることにプライドを刺激されたのか、スティアードが顔を引きつらせる。
そんなスティアードの姿にアルフォンスは僅かに溜飲を下げたよ

うだ。
とはいえ、上級貴族であるアルフォンスとスティアードの面子をこうも潰されては面白くはない。
「ははは。中々強情な御嬢さんのようだ。美しいバラには棘があるということか。だが、その反応はちょっといただけないな」
と、笑顔を浮かべながらも、咎めの色がこもったやや強い口調で、アルフォンスが言った。
この店でこうして食事できるということは良家のお嬢様方なのかもしれないが、上級貴族である自分達ほどではないと、アルフォンスは無意識に信じ込んでいた。
そもそも他国の貴族にすぎないスティアードとアルフォンスがガルアーク王国内でどれほどの権力を行使できるのかは大いに疑問はあるのだが。
「悪いが彼女は突然に無作法者が乱入したことで気分を悪くしたようだ。二度しか言わない。御帰りはあちらだよ」
リオは席から立ち上がりアイシアの前に割り込むと、害意を見せ始めたアルフォンスに、強く呆れのこもった声でそう告げた。
図々しくも人が食事をしている場に乗り込んできて同席している女性を口説き始めるなど、明らかに他人を見下しているとしか思えない。
そもそもリオは支配人の男性の仲裁を期待していたのだが、男性は現段階で下手に両者を刺激しては不味いと考えているのか、狼狽した様子で事態を静観している。
せっかくの楽しいひと時を台無しにした無礼な輩に席を譲ってやる道理はなく、ましてやこのまま好き勝手を許してやるつもりもなく、リオは毅然とした態度で彼らに向き直った。

そんなリオの態度にアルフォンスとスティアードが目に見えるように気に食わなさそうな表情を浮かべた。

「そもそも君は誰なんだい？　彼女達との関係は？　こちらが名乗ったんだ。そちらも名乗るのが筋だろう」

「はは……」

リオは思わず失笑してしまった。

そっちが勝手に名乗っただけだろうに。

そう考え、内心で盛大に溜息を吐く。

「無礼者に名乗る名前はないな。俺は彼女達の保護者みたいなものだ」

そんなリオの態度に小馬鹿にされたと思ったのか、アルフォンス達は眉を顰(ひそ)めた。

「ふん、名乗る名前もないとはどうせ大したこともない家なのか、それとも恰好からして少し稼いでいる冒険者風情だろう。背伸びしたくなる気持ちはわかるが、高位の貴族に対して随分と偉そうな口を聞くじゃないか。身分相応に野蛮なようだ」

リオが大した身分の者でないと当たりをつけ、明らかに見下したような視線でリオを睨みつける。

仮にリオの身分が相応に高かったとしても、ここまでコケにされて引き下がることはできない。

「レストランでは静かにするという子供でも分かるマナーも守れない輩に対しては十分すぎるくらいに丁寧に対応したつもりなんだがな」

深く嘆息し、リオが言った。

「なんだと……？」

その言葉でアルフォンスとスティアードの表情が凍りつく。
怒鳴りこそしないものの、剣呑な空気をまき散らしてリオを睨みつける力を強めた。

「そこまで言うからには覚悟ができているんだろうな？」

腰の剣に手をかけ、アルフォンスとスティアードがいつでも抜刀できるように構える。
そんな二人の様子に美春や亜紀がびくりと体を震わせた。

「ハ、ハルト……」

後ろから小声でセリアがリオの偽名を呼ぶ。
アルフォンス達は聞き取れなかったが、リオはその声をしっかりと聞いた。

「大丈夫ですよ」

答えて、リオは美春達を安心させるように優しく微笑みかけた。

「随分と余裕があるようだが、彼女達を置いてそこの小僧と一緒に今すぐここを立ち去るというのなら見逃してやる。ああ、そうだ。ついでに後ろにいる彼女達をお前に貸してやるよ。商売女だが、冒険者風情の貴様にはお似合いだろう？」

小馬鹿にしたようにアルフォンスが言った。
その言葉で彼らの背後にいる少女達に動揺の色が走る。
ピリピリとした場の空気に耐え兼ねているのか、僅かに怯えたように身を震わせていた。

「随分と陳腐な脅し文句を言うんだな」

にこりと笑みを浮かべ、リオが告げた。

「良い度胸だ」

それが開戦の合図だった。
腐っても二人は騎士である。
流れるような動作で抜剣すると、リオを斬り捨てるべく剣を振ろうとした。
が、一閃。
後出しでリオが剣を抜き放つと、閃光のような斬撃がスティアードとアルフォンスの剣に吸い込まれるように襲いかかった。
リオの剣はまるでバターでも切り取るかのようにスティアード達の剣の刃を切り裂いていく。
やがて切断された剣の刃は、誰も傷つけることもなく、音をたてて床に突き刺さった。

「なっ」

目の前で起きた光景にスティアードとアルフォンスの目が愕然と見開かれる。
美春達も今起きた現象に目を疑うように瞬(しばた)いていた。
かちり、とリオが剣を鞘に収める音が響き渡る。
そこでようやくリオを除いてその場にいた者達は正気を取り戻し

た。

「なん、だと……。アダマンタイト製の剣が……」

人間族の手による生産品の中では最高の硬度を誇るアダマンタイト製の剣が易々と切断された。

尋常でない速度の斬撃。

目で追うことすらできなかった。

つまりここが戦場ならばスティアード達は切り倒されていてもおかしくないということだ。

刃を失った不格好な剣を眺めながら、二人は屈辱でぶるぶると身体を震わせた。

「ふ、ふざけるな！　貴様！　何だ！　その剣は？」

黒ごしらえの鞘に収まったリオの剣を睨みつけながら、アルフォンスは喚(わめ)いた。

おそらくは魔剣。

それも相当に高位の。

だが、リオはそんな疑問に答えることもなく、小さく嘆息すると、

「いいから本当に帰れよ、もう。次は首を飛ばすぞ」

小声で二人だけに聞こえるように、感情を込めずにそう呟いた。

「っ……！」

明確な死のビジョンが脳内に浮かび上がり、スティアードとアルフォンスの背筋が凍りつく。

「ふざ、けるな……」
「貴様、殺す。殺すぞ。絶対に殺す……」

二人は明確な敵意を持ってリオに恨み言をぶつけた。
リオが怯むことなく興味なさげに二人を見つめ返す。
やれるものならやってみればいい。
こっちは逃げようと思えば何処にだって逃げられる。
それに本気で殺しにかかって来るというのならばその前に殺す。
一応、相手も貴族だし、美春達がいる手前、無暗に殺すことは躊躇われたが、美春達がいない時に都市の外で殺せば足がつくこともない。
自分達がさして眼中に入っていないことに気づき、スティアード達の感情がいっそう逆撫でされる。
こんな屈辱は生まれて初めてだった。
端整な顔が歪むほどに憎悪の色を顔に浮かべて、二人がリオを睨みつける。
まるでリオの顔を頭の中に刻み込むかのように。
すると、その時、

「そこまでです。何があったのか、事情を伺ってもよろしいでしょうか？」

リオ達がいるテラスに妙齢の女性の声が響き渡った。

第73話　事情聴取

リーゼロッテ＝クレティアの腹心――アリア＝ガヴァネスは氷のように冷たく美しい美貌を崩すことなく嘆息した。

せっかく午前中に地獄のような仕事の量をこなして、これからリッカ商会の経営する国内でも有数のレストランで少し遅めのランチタイムと洒落込もうとしていたところに、面倒な報告が上がってきたからだ。

アリアはリーゼロッテの片腕としてリッカ商会の中でも広く顔が知られている。

偶々アリアがレストランで食事を摂っていたところに、支配人でも解決できなさそうな事件が発生してしまったため、これ幸いにと彼女に問題を解決してもらおうと従業員の娘が気を利かせて報告してきたのだ。

アリアにとってはいらない気の利かせ方であったが。

日頃の殺人的な仕事のスケジュールを切り詰めに切り詰めて、ようやく確保した貴重なランチタイムなのだ。

こんなことならレストランで食事を摂るのではなく、リーゼロッテの屋敷で昼食にすれば良かった。

まあ屋敷に残っていたところで何らかの仕事が上がってくる可能性が高いと踏んでいたからこそ、逃げ出すようにレストランまでやって来たのだが。

「つまり、貴族の客が我儘を言い始め、制止しても止まらず、挙句、他のお客様が食事をしているテラスに図々しくも入り込んだと？道理で騒がしい声が聞こえたかと思えば……」

焦っているのか要領を得ない少女からの報告を受け、事実を要約

して確認するべく、アリアは目の前にいる従業員の少女に質問を投げかけた。

「は、はい！　そうです。支配人が何とか制止しようとしたんですが、その貴族の方達は言うことを聞かなくて……。今も不穏な雰囲気になってるんです。取り巻きの女の人達もなんか感じが悪かったですし、あんな客初めてですよ！」

と、憤りを露わにするように従業員の少女が答える。

聞けば何やらこのレストランで貴族が問題を起こしたというのではないか。

この時、アリアは瞬時に余所からやって来た貴族が問題を起こしたのであろうと当たりをつけた。

アマンドの代官に任官した当初こそリーゼロッテは親のすねを齧(かじ)った我儘な令嬢と陰で蔑まれてはいたが、現在のアマンドにリーゼロッテに歯向かう貴族はいない。

目まぐるしくアマンドを発展させ続ける才覚、リッカ商会という国内最大規模の商会の経営、その他諸々の手腕から、リーゼロッテが単なる我儘娘ではなく非常に有能な人物であるということは既に周知の事実となっているからだ。

商人は信用が第一であり、嘘と取決めの違反を最も嫌う。

リーゼロッテが商会を経営する以上、代官として公平を失する真似をすれば商人としての信用も失いかねない。

そして、一度、信用を失えばその信用を取り戻すことは非常に難しい。

だからリーゼロッテは公平な代官として知られている。

もちろん背後に止むごとなき事情があれば見えない形で多少の融通を利かせるが、表向きは公平さを保つよう取り繕っているのだ。

リーゼロッテは自らが赴任するまでの間に手ひどく横領や汚職に手を染めた貴族達を反抗の芽を潰したうえで粛清した。

公務の公正を図ることで商人としても公正であることをアピールする一種の見せしめだ。
その結果、彼女は代官としても一商人としても信用を勝ち取った。
平民に対しても分け隔てなく接することから、今のリーゼロッテはこの都市の商人を含む平民の間ではまるでアイドルのようにもてはやされていたりもする。
そんな経緯もあって、今のアマンドにいる貴族は彼女に心から忠誠を誓っているか、酷く恐れている者だけだ。
そんな彼女の膝下で暮らす貴族がこのアマンドで目立って問題を起こす確率は極めて低い。
だから、アリアは最初に報告を聞いた時、余所から訪れた貴族が何かしらの問題を引き起こしたのだろうなと冷静に判断した。
それもリーゼロッテの噂を知らないであろう貴族だ。
以上を前提に、アリアが把握しているアマンドに滞在中の国内外貴族の脳内リストと照らし合わせると、被疑者となる者は自ずと絞られてくる。
可能性が一番高いのはベルトラム王国からやって来ている貴族の者だ。
あの国の貴族はアリアも実体験として知るところであるがプライドが非常に高い。
もはや見栄と言った方が適切かもしれない。
ガルアーク王国も他国のことを言えた口ではないが、ベルトラム王国はお国柄なのか貴族の沽券を特に大事にする。
極限状態において、名を捨てて実ではなく、実を捨てて名を取ることがしばしばある程だ。
だからこそあの国の貴族は対処法を間違えると扱いが面倒である。
その反面、対処法さえ知っていれば扱いやすくもあったりするのだが。
とはいえ一概に論じることはできない。
中には例外だっていて、そういった存在がしばしばベルトラム王

国の政治に幅を利かせることが歴史的に多かったのだから。

「しかし仮にベルトラム王国の貴族というのならば自らの置かれた状況も理解できていない愚か者としか思えませんね。ああ、せっかくもぎ取った休憩と御馳走だというのに……」

抑揚のない声でそう言うと、まるでこの世の終わりだと言わんばかりに、アリアは嘆かわしそうに首を振った。

眼前には出来あがったばかりの豪華な食事の数々。

ゆっくりと休憩時間を取って昼食を摂るなんて滅多にない千載一遇のチャンスだ。

それなのに喧嘩の仲裁をしなければならないなんて――。

許すまじ。

まったくもって一向に気が進まない。

「そ、そんな悠長なこと言わないで早く助けてください！　このままじゃ支配人も私達も首になっちゃいますよ！　せっかく昇給のチャンスが回ってきたのにぃ！」

少女は神にでも拝み倒すように懇願した。

こうして事件当時にレストランにいた以上、後々、自らの主に報告が上がることを考えると、アリアも知らぬ存ぜぬを貫き通すには少々都合が悪い。

しかも話を聞く限りだと一介の支配人には少しばかり荷が重いはずだ。

被疑者は腐っても他国の上級貴族、下手をすれば首が飛びかねないし、店の立場も悪くしかねない。

目の前の少女に頼まれたからではなく、自らの主の運営する商会と非常に恣意的な理由のため、アリアは重い腰を上げた。

「わかりました。部屋はどちらですか？　案内してください」
「は、はい！　こちらです！」
アリアの言葉に少女がパッと表情を明るくする。
少女に案内されるまま、アリアはテラス席へと向かった。

「ふざ、けるな……」
「貴様、殺す。殺すぞ。絶対に殺す……」
テラスのすぐ前まで来ると、何やら穏やかでない声が聞こえてきた。
この三下の盗賊としか思えない発言をしているのは加害者と被害者のどちらだろうか。
そもそもアリアは急いで来たということもあり、問題を引き起こした加害者が貴族としか聞いておらず、被害者の方の身分を聞いてはいない。
剣呑な場の雰囲気からすると、どちらかが実力行使にでも出たのだろう。
まったくどうしてよりにもよって自分の休憩中にこんな程度は低いくせに厄介さだけは悪質な面倒事が舞い込んでくるのだろうか。
アリアは小さく溜息を吐くと、
「そこまでです。何があったのか、事情を伺ってもよろしいでしょうか？」
テラスに躍り出て、良く通る声でそう尋ねた。
その場にいる者達の視線が一気にアリアに集まる。
テーブルに座っている者が五人、そんな彼らを守るべく立ち塞がる黒衣の剣士が一人、騎士風の男が二人、水商売人と思われる女が四人、そして端っこに所在なさげに佇んでいる支配人が一人。

支配人はアリアの顔を見るとあからさまにホッとしたような表情を浮かべた。
一瞬、席に座っていた金髪の少女と視線が合うと、少女がどこか驚いたような顔を浮かべたことから、アリアは何となく違和感を覚えたものの、すぐに当面の問題に意識を向ける。

（下手に介入して取り返しのつかないことをしてもらうよりはマシなはずなんですが、どうにも頼りないですね）

と、アリアは内心で少しばかり支配人の不甲斐なさを嘆いた。
代官としてのリーゼロッテに傍付きとして仕える侍従隊の面々はアリアが自ら教育を行っていることにより、ギリギリ及第点を与えられる程度にはなっている。
だが、幅広く事業に手を付けているリッカ商会にとって、有能な人手の不足は悩みの種だ。
このレストランの支配人も無能というわけではないが、こういった貴族関連の問題に対しても毅然（きぜん）と対応してくれるとかなりありがたい。

「この男が俺達に無礼を働いたんだ！」

突然、リオを指差し、アルフォンスが大声でアリアに告げた。
その手には刃を根元から失った剣の柄が握られている。
ちらりと床に落ちている剣の刃が視界に入り、アリアは僅かに目を見開いた。
が、些細な動揺を表にほとんど出さず、スッとアリアの視線がリオに移る。
リオは動じた様子もなくアリアを見つめ返した。
見つめ合うこと数瞬、アリアは視線をアルフォンスに戻すと、まずは被疑者と思われる者達に尋問を行うべく、

「失礼ですが貴方は？　私はアリア＝ガヴァネス。アマンドの代官であるリーゼロッテ＝クレティア様の下に勤める侍従長にございます」

その素性を尋ねるとともに、自己紹介を行った。

ガヴァネス家は元ベルトラム王国の貴族の端くれであったが、とっくに没落した家の名前など、放蕩息子であるスティアードやアルフォンスの頭の片隅にもない。

他方でリオは何となくアリア＝ガヴァネスという名に聞き覚えがあると頭の中で記憶を探っていた。

そしてすぐに思い至った。

確か以前にセリアが言っていたクレティア公爵令嬢の下に仕えている友人がアリアだと言っていたが、もしかしたら彼女がそうなのかもしれない、と。

実はそれよりも以前にリオは一度だけアリアと出会ったことがあるのだが、それはリオが前世の記憶を取り戻した頃の話だ。

その時はアリアもベルトラム王国の王城で女官見習いをやっていた頃である。

名前だけでなく、どこかで見た顔のような気もしたが、今はそのことを捨て置き、アリアがセリアの友人だということだけを踏まえて、内心で僅かにアリアに対する警戒の度合いを強めた。

「む、そうか……。俺はアルフォンス＝ロダンだ」

ムスッとした面持ちでアルフォンスがその素性を明らかにする。

アルフォンスとしては一方的にリオを悪者扱いしようとしていたのだが、あまりにも冷静なアリアの対応に意表を突かれてしまった。

侍従長と言えば高位の貴族の補佐をする側近中の側近だ。

その仕事内容は幅広く、権限も大きい。

それほどの人物がこの場に現れたとなると、アルフォンスやスティアードの独壇場というわけにはいかない。
非常に良い女だとは思えたが、アルフォンスは何となくアリアが邪魔者に思えた。

「そちらの殿方の素性をお伺いしても？」

アリアは続けてスティアードに視線を移し、その素性を尋ねた。

「スティアード＝ユグノーだ」

ふて腐れた様子でスティアードが答える。
既にリオ達に名乗りを上げてしまった以上、ここで偽名を述べるわけにもいかない。
あまりにも冷静なアリアの対応に、何となく調子外れな展開だと、スティアードも思い始めていた。

「なるほど。ベルトラム王国の名門貴族の方でいらっしゃいましたか。確かにお二方のクロースアーマーに刻まれた家紋には見覚えがあります」

僅かに微笑を浮かべ、アリアが言った。

「そうか。そうだろう？　僕達は名門貴族の者なんだ。だというのにその平民の男が僕達に無礼を働いたんだ！」

ここで自分達の家柄がこの場でも通用するとでも思ったのか、スティアード達の顔色が僅かに明るくなった。
調子を取り戻したのか、再びリオの非難を始める。
リオはつまらなさそうにその様子を眺めていた。

「無礼な真似と仰いますと？」

周囲の光景を見るから何となく事情は察することができるが、アリアはあえてスティアードの口からその事実を告げさせようとした。

「それは……だな。こいつが挑発的な態度をとってきたんだ！」

スティアードが言いよどみながらも説明をした。

確かにスティアード達にしてみればリオの態度は鼻につくものが多かったが、客観的に貴族に対する対応として度を越えて悪質な言動は特に行っていなかったからだ。

ゆえに具体的に何が無礼だったかを言い表すことはできず、スティアードは曖昧に答えることしかできなかった。

「流石にそれだけでは何とも……。もう少し具体的に無礼な真似とは何かをご説明願いたいのですが？」

「もちろんある！　が、無礼な真似は無礼な真似だ！　貴様が知る必要はない！」

尋ねたアリアに、スティアードは怒鳴り返してきた。

自分達は高位の貴族なのだ。

何処にも非などない。

何があろうと平民は黙って貴族の言うことに従えばいいのだ。

貴族に従わない平民はそれだけで犯罪者である。

そんな平民の命を奪ったところで何が悪い。

いや、罪がなくとも平民一人くらいの命を奪ったところでどうして咎められなくてはならないのか。

そうだ。

自分は悪くない。

悪いのはこの優男だ。
ばつの悪い思いから一転して、スティアードは理不尽な方向に感情が傾きつつあった。
隣にいるアルフォンスが横目に入ると、どうやら彼も似たような心境にあることを悟る。
といっても、二人とも興奮して一時的に破れかぶれな精神状態になっているだけにすぎないのだが。
冷静になった時にどう思うかは彼ら次第である。

「現場の状況から察するに、貴方達は彼に無礼打ちもしくは決闘によって制裁をしかけようとしていたが返り討ちに合った、という認識でよろしいでしょうか？」

仕方なくアリアが何が起きていたのかを推論した上で尋ねることにした。

「……そ、そうだ」

そう答えるスティアードの頬は引きつっていた。
素直に自分達が返り討ちに合った事実など認めたくもないが、事実は事実だ。
無礼打ちというのは、貴族の名誉が平民によって汚された場合に、貴族の名誉を回復するために名誉を汚した平民を切り殺してもかまわないという制度だ。
基本的にシュトラール地方のこの時代には全国レベルで適用される国が制定した法律というものは非常に数が少なく、都市ごとに領主が独自にルールを定めたり、慣習法を明文化したりしている。
無礼打ちという制度は細部こそ異なるが、ほとんどの国の法律で定められている数少ない普遍的な制度であった。
これは実にとんでもない制度に思えるが、難癖をつけてこの制度

が濫用されないように歯止めとなる要件が存在している。
まず、口論で侮辱的な言動を行った程度では名誉が汚されたと判断されることはなく、貴族の面子を潰す程に屈辱的な言動が行われたうえで平民が謝罪しなかった場合でなければ名誉が汚されたと判断されることはない。
また、当事者から独立した第三者となる目撃証人が存在しなければならないとされている。
そして、無礼打ちをするためには現行犯でなければならず、後日になって証人を連れて来て過去の発言を咎め無礼打ちをする事は許されない。
無礼打ちを適用できない場合には同意の下、決闘によって紛争を解決することになる。
とはいえ、無礼打ちには抜け道も存在しており、貴族にとって非常に有利な制度であることは否定できないのだが。
現に要件を満たしていなくとも、適法な無礼打ちとして処理されたり、見逃されたりして、平民を殺した貴族が何の御咎めもなしとされるケースは多々ある。
そこら辺はその現場を管轄する王侯貴族次第であり、今回はリーゼロッテの裁定下にあった。
ちなみにスティアード達はベルトラム王政府からは逆賊扱いされているが、ガルアーク王国は正式に彼らをベルトラム王国の貴族として扱っている。
無礼打ちは他国の領域下であっても行うことはできるが、その場合は自国で行うよりも少しばかり要件が厳格になるのだが、そこら辺の要件の詳細をスティアード達はあまり理解していない。
「なるほど。では、無礼打ちの要件は満たしておりましたか？」
淡々とした口調でアリアはスティアード達に尋ねた。

「それは……だな……」

アルフォンスが答え渋る。

リーゼロッテの重臣と思われるアリアが現れた以上、下手な嘘は己の首を絞めかねない。

なぜならリオがしたことと言えば少し挑発的な態度だったことくらいで、明らかに無礼打ちの要件は満たしていないのだ。

いくら貴族とはいえその程度の理由で無礼打ちとして斬り殺そうとするのは少し大げさにすぎる。

むしろ正直に話せばリオは被害者、逆に店内で好き勝手に振る舞った挙句に人殺しまでしようと暴れたスティアード達が加害者になってしまうだろう。

周囲には証人が多数おり、現段階では裏で手を回している余裕もない。

下手な発言をして周囲の供述と矛盾点が出てくると厄介な事になる。

かつてのベルトラム王国内であったのならば後からいくらでも事実を捻じ曲げてリオに罪を着せることはできたのであろうが、他国の領域で大して後先を考えずに斬りかかったのはかなり軽率であった。

だが、この期に及んでもスティアード達は軽率な行動をしてしまったと反省するどころか不満しか抱いていない。

そもそも軽率だったともさして思っていなかった。

どうして上級貴族の自分達が、と憤るだけである。

「父上！　父上に報告しろ！」

やがて苦し紛れにそんなことを言いだす。

「もちろん報告はさせていただきます。ですが、先に事情をお伺い

しないことには報告のしようがありません」
冷たく答えて、アリアは頭(かぶり)を振った。
「なっ、ふざけるな！　そんな話が通るか？　僕は公爵家の嫡男なんだぞ！」
滅茶苦茶な事を言い出すスティアードにその場にいる者達が冷めた視線を送る。
スティアードやアルフォンスはこれまで父親の権力に胡坐をかいて座ってきた。
それは先のクーデターが起きるまで二人の父親は国内で絶対的な有力貴族であったからだ。
今まで父親の名前を出せば通らなかった話はなかったし、ベルトラム王国内では色々と好き勝手やってきた。
今回くらいの問題なら何の御咎めなしで済んだのだ。
だというのに今回はいつもと調子が違う。
彼らのテリトリーならば適当に難癖をつけて斬り殺して、後でどうにでも言い繕って事実を曲げることも出来たのだろうが、他国の、しかも息をかけることが難しい多数の目撃者がいるこの場では、そんな無理は通らない。
父親の権力がさして及ばない他国で問題を起こせば自国よりも融通が利かないのは当たり前なのだ。
だが、長年にわたって他人に尻拭いをさせる生活が当たり前となっていた彼はそこら辺のシビアさに無頓着であった。
「ここアマンドに滞在している以上はリーゼロッテ様の定めた秩序に従ってもらう必要があります。今は私が事情を聴取しますが、場合によってはこの件はリーゼロッテ様の預かりとなることでしょう」
「くっ……」

ここでようやくスティアード達は自分達が明確に不利な立ち位置に立たされているのではないかと悟り始めた。
ひょっとしたら不味いのではないか、と。

「そもそも無礼打ちは平民が貴族の名誉を汚した場合に行うことが認められておりますが、彼は本当に平民なのですか？」

スッと目を細めると、アリアはリオに視線を向けて、そう尋ねた。

「そ、そうだ！」

と、リオが答える前にアルフォンスが断定する。

「本当なのでしょうか？　貴方のお名前と素性を伺っても？」

そんなアルフォンスを無視して、アリアがリオに尋ねる。

「さて、どうでしょう？　素性はともかく名前を答える必要性はあまり感じませんね」

だが、小さく肩を竦め、リオが落ち着いた口調で答えた。
予約している時に名前を告げている以上、アリアには後で簡単に分かることだろうが、スティアード達の前で安易に偽名を教えるつもりにはなれない。

「それはどうして？」

「加害者の前で名前を告げる愚は犯しませんよ。被害者は明らかにこちらですから。そこの二人は食事の場に乱入して来たかと思えば連れの女性を口説き始めたんです」

やや辟易とした口調でリオが自らの言い分を告げる。
スティアードとアルフォンスは呪い殺すかのようにリオを睨みつけた。
貴様が大人しく死んでおけばこうはならなかったものを――。
そう言いたげに顔を歪めて。
リオはそんな視線を涼しげに無視して、
「しかも何度もこちらから退室を促しても出ていくことはありませんでした。挙句の果てには問答無用で斬りかかってくる始末です」
と、スティアード達がやらかした事実を簡潔に説明した。
「なるほど。確かに恨みを買っている相手に自らの個人情報を教えたくないというのは当たり前ですね。まだ彼達には名を教えてはいませんでしたか。では後で教えていただけますか？」
「ええ、わかりました。ちなみに自分はただの平民です」
予想外にアリアには話が通じそうなため、リオは内心で意外に思っていたりする。
店側がスティアード達に傾きそうであれば、今回の事件を引き起こしたのはこの店の不手際によるところが大きいと弾劾するつもりだったが、そのカードを切る必要はまだなさそうだ。
他にも色々と手段は考えていたが、それらも必要なさそうである。
一方で、リオが平民だと確定し、スティアード達の侮蔑の視線が強まった。
「ありがとうございます」
アリアはリオに礼を告げると、スティアード達に視線を向けて、

「仮に彼の話が事実だとすると、貴方達は難癖をつけて無礼打ちという制度を濫用したと捉えられても仕方がありません。決闘を仕掛けて受理されたというわけでもないのでしょう？」

と、そう告げた。

アリアは既に従業員から発端となる事の経緯を大まかに聞いていたが、先のリオの供述はそれと一致している。

ゆえに今のところアリアの天秤はスティアード達に非がある方に大きく傾いていた。

第７４話　自白

「お二方にお尋ねします。貴方達は無礼打ちを行うことが難しいと認識したうえで彼に斬りかかりましたか？　彼が行った無礼な真似について何か言及したいことがあればどうぞ仰ってください」

リオの供述と従業員の供述を踏まえ、アリアはスティアード達が無礼打ちの要件を満たしていなかったものとして扱い、話を進めることにした。

「っ……」

アリアの質問に、スティアードとアルフォンスが言葉に詰まる。

二人は無礼打ちの名を借りて気に食わない平民を斬り殺そうとした――、すなわち無礼打ちという制度を濫用しようとしたのだ。

無礼打ちの濫用は貴族の名誉を汚すものとして、法律によって罰則が科せられると定められている。

ちなみに、その刑罰は短期間、牢獄で拘留を行うというものであるが、既遂の場合を除いて、その刑を裁判によって言い渡すためには被害者の告訴を必要とする。

「……」

額に冷や汗を浮かべ、明らかに狼狽した様子で、スティアード達が沈黙を貫く。

本音としては無礼打ちの濫用なんて当たり前のように認めていることだろうと叫びたいところであった。

無礼打ちを濫用できないこの都市こそがおかしいのだ、と。

だが、それでは自ら無礼打ちを濫用したと認めるようなものだ。
かといって正直に話しても無礼打ちを濫用したことを認めることになってしまう。
嘘を吐くには証人が多すぎるし、手回しをする時間すらない。
もはや勢いだけで強引に話を押し通すのは不可能であった。
こんなはずではなかったというのに――、ぎり、とスティアード達が歯を食いしばる。

「困りましたね。こうなるとこの場では私だけでは判断しかねますので、今すぐにでも屋敷に赴いてリーゼロッテ様のご判断を仰がなければならなくなるのですが……」

頬に軽く手を添えて、アリアが言った。
スティアード達がだんまりを決め込むというのならば話が進むことはないため、アリアの発言は至極当然の帰結なのだが、

「ま、待て！　父上にはこの件を報告するな！」

と、スティアードが慌てた様子でアリアを制止した。
先ほどまでは父親の助けを求めようと喚(わめ)いていたというのに、いきなり矛盾する内容の言葉を叫ぶとは、いったいどういうことか。
アリアは僅かに目を見開き、驚いたようにして見せた。

「おや、それはどうしてですか？」

と、妙に芝居がかった風に尋ねる。

「父上……は、今、交渉の席に着いている。あまり心労をかけるわけにはいかない……」

スティアードが苦々しい表情でそう答えた。
流石に今回の事件がいつもと具合が違うことを、スティアードも薄々と察し始めている。
父であるユグノー公爵に今回の事件の顛末を報告すれば、もしかしたら頭を悩ませることになるのではないか、もしかしたら怒らせてしまうのではないか。
そう思えてきてしまい、急に父に頼ることに躊躇いを覚えてしまったのだ。
今、リーゼロッテの屋敷には父であるユグノー公爵がいる。
過去にフローラが崖から落ちかけた事件で大失態を晒した時以来、スティアードは父からの覚えがあまり良くない。
だというのに、ユグノー公爵は政務にかまけてスティアードにあまり目を向けることもなく、教育や面倒を家臣に任せ、スティアードに名誉挽回の機会が与えられることはなかった。
そのストレスと反抗期でスティアードは王立学院内での素行を悪くしていったのだが、それでもユグノー公爵がスティアードに目を向けることはなく、現在に至っている。
いつもなら今回のような事件が起きた程度ではユグノー公爵から問題視されることはない。
だが、現在、ユグノー公爵はここで重要な会談に臨んでいる最中だ。
そんな中で他国の領土で素行不良を理由に問題を引き起こしたなどと知られたら、少しばかり不味いのではないだろうか。
ひょっとしたら自分は意図せずして父親の顔に泥を塗りたくっているのではないか。
ようやくそのことに思い至ったのだ。
もはや手遅れだというのに――。
だが、それでもスティアードは気づくことができた。
だからこそ恐れてしまうのだ。
もしかしたら自分は父親に見限られるのでは、と。

家督の承継権を少し歳の離れた弟に譲らなければならないのではないか、勘当されて追放されるのではないか。
最悪の未来が次々と脳内に浮かび、スティアードは一種の恐慌状態に陥った。

「はぁ……、はぁ……」

急に動悸がしてきて、スティアードの息が荒くなる。
不味い。
何としてもこの件はこの場だけの話にしなくては。
スティアードは必死に考える。
だが、アリアはそんなスティアードの心情を知ってかしらでか、

「おや、どうやら気分が優れない御様子。可愛い御子息の一大事となればお父上も御心配なさることかと存じます。やはりここは屋敷の方に出向いてリーゼロッテ様に御報告した方がよろしいでしょうか。ちょうどユグノー公爵も今はリーゼロッテ様とご会談の最中でしょうし」

と、演技がかった口調でそう言ってみせた。
スティアードが苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

「このまま黙っておられては頭打ちで、これ以上は話が進みません。後はこの場にいる方々から証言を頂く程度で、口裏を合わせないように後で個別にと考えていたのですが……」
「……っ」

びくりとスティアードとアルフォンスが肩を震わせる。
この中で最優先で説得すべきなのは支配人だが、この場にいないだけで他の従業員にも目撃者はいたかもしれない。

しかも店側にもある程度は迷惑をかけた以上、大金を握らせるか圧力をかけなければスティアード達の味方をしてくれる可能性は薄い。
もっとも、リーゼロッテが経営するリッカ商会がそのような賄賂染みた真似を許容することはありえないのだが。
そうなると、個別に取り調べられれば、本当にスティアード達の悪事が表沙汰になりかねなかった。

「……めろ。……やめろ！」

と、なりふり構わず、スティアードが大声で叫んだ。
その姿に室内にいる者達が目を瞠（みは）る。

「は、はは……。おい、何が望みだ？　取引しようじゃないか。金か？　いいぞ、金貨なら腐るほどある。僕は上級貴族だからな。いくらでもやる」

発狂したように語るスティアードに、あからさまに場の空気が白けた。
スッと目を細め、リオがスティアードを見つめる。

「おいおい。本気になるなよ。未遂だったんだ。このくらいのことで」

そう語るスティアードは引きつった笑みを浮かべていた。

「スティアード様」

と、アリアが横から良く通る声で呼びかけた。
スティアードがビクリと身体を震わせて、アリアに視線を移す。

「な、何だ？」
「落ち着いてください。まずは何があったのか、仰っていただかないと。皆様は混乱しておいでです」
スティアードの隣には呆気にとられた表情を浮かべるアルフォンスがいる。
流石の彼もスティアードの変化には戸惑いを感じていたのだ。
目を見開いて自分を見つめるアルフォンスの姿に、スティアードは僅かに冷静さを取り戻した。
「あ、ああ……」
消沈した様子でスティアードが返事をする。
「僭越ながら私が推察した状況を申し上げます。お二方はその事実に相違がないか、『はい』か『いいえ』に準じる言葉でお答えください」
アリアとしてもこれ以上、徒(いたずら)に時間を消費していくのは面白くない。
さっさと話を先に進めるために、スティアード達の自発的な供述を待つのではなく、積極的に尋問を行うことにした。
「まず、貴方達は当店に来店すると案内された部屋が気に食わなかった」
「あ、ああ……」
「そこでこのテラス席に座るためにこの場へいらっしゃった」
「ああ」
「するとここに先客となる彼達がいた」

「そうだ……」

淡々と質問を投げかけるアリアに、スティアードとアルフォンスがぼそぼそと返事をする。

流石にスティアード達も居たたまれない気持ちになっているのか、素直に質問に答えていく。

完全に誘導尋問になっているが、スティアード達が自ら供述しない以上はこうする他にない。

「彼達を退かせて自分達がこの席に座ろうとしたところ、好みの女性がいたことから声をかけた」

「ああ……」

「一度は女性に袖にされたが、それでも貴方達は女性に声をかけ続けた。この際、そこにいる彼の制止を受けたが、それを無視した」

「……そうだ」

僅かに言いよどんだが、それでもスティアード達は首肯した。

「彼と言い争いになり、思わず剣を抜いてしまった。この際、無礼打ちの要件を満たしていないことを認識していた」

「っ……」

スティアード達の表情が明らかに変わる。

流石に自らの失態を自白する真似は躊躇われるのだろう。

「どうかしましたか？　早くお答えください」

アリアが冷たい視線を二人に向ける。

まるで言い逃れを許さないと言わんばかりに。

「……条件がある。本当のことを言えば父上には報告しないと約束しろ」

と、ここにきてスティアードがいきなりそんな条件を提示する。

縋るようにアリアを見つめ、瞳で必死に訴えかけていた。

「お、おい。スティアード君」

条件付きとはいえ自白することに躊躇い、焦ったようにアルフォンスがスティアードに呼びかけた。

「穏便に今の事態を解決するにはもはやこれしか方法はありません」

と、スティアードは忌々しそうに呟く。

「くっ……」

アルフォンスも他に良い打開策が思い浮かばなかったのか、悔しそうに呻(う)めき声を漏らした。

そんな二人の姿を見つめて、

「いいでしょう。私から貴方のお父上に今回の件を報告しないと誓います」

アリアがすんなりと頷く。

「ほ、本当か？」

と、表情に生気を取り戻し、スティアードが尋ねた。

アルフォンスも横で顔を明るくしている。

「ええ、ですから早くお答えください」

さっさと話せと、アリアが促す。

そう、確かにアリアは約束した。

彼女の口からユグノー公爵に今回の件を報告しない、と。

だから、アリアがリーゼロッテに今回の件を報告し、その上でリーゼロッテがユグノー公爵に今回の件を伝えることは何の問題もない。

だが、心理的に動揺している時に光明を与えられたことにより、一時的に正常な思考能力を失い、スティアード達がそれに気づくことはなった。

リオはそれに気づき、内心でアリアの強かさに苦笑していたが。

セリアも呆れたように苦笑を浮かべていた。

「……僕達がそいつに……その……斬りかかったというのは本当だ。そいつの挑発的な態度に腹を立てて、最近はストレス溜まっていてカッとなったというか」

と、スティアードはばつが悪そうにぽつりぽつりと自白をした。

しかし、さりげなく非がリオにもあったと主張することを忘れていないあたり、神経が図太いというべきだろう。

彼らのストレス原因は勇者である坂田弘明にあったりするのだが、それを知る者は彼ら二人しかいないし、二人もそれを語ることはしない。

「なるほど。ちなみにどうして床に剣が突き刺さっているのか伺っても？」

「それは……。そいつが反撃したんだ。気がつくと俺達の剣が切られた」

悔しそうにアルフォンスが語った。
騎士にとって剣は命である。
そんな大切なものをあっさりと両断され、挙句、生殺与奪まで握られたような気分を味わわされたのだ。
先ほど抱いた屈辱感がぶり返してきたのである。

「剣を切った……ですか。つかぬことを伺いますが、お二方の剣はアダマンタイト製ですよね？」
「ああ、そうだ……」
「なるほど……」

スッと目を細めて、アリアが両断された剣の切断跡を凝視する。
綺麗な切り口だ。
おそらく文字通り両断したのだろう。
リオの腕が立つのか、はたまたとんでもない魔剣を持っているのか、あるいはその両方か。
アリアは浮かび上がった疑問をとりあえず捨て置いた。

「失礼しました。話を戻しましょう。つまり、貴方達は無礼打ちの要件を満たしていないことを認識していたのですね？」

アリアが問題の核心を突く質問を再び投げかける。
スティアードは躊躇いつつも、

「……ああ」

と、そう答えた。

「わかりました。ご協力感謝します」

言って、アリアがスティアード達に頭を下げると、

「貴方から何か仰りたいことはございますか？」

リオを見やって、そう尋ねた。

アリアとしては立場上、公平を期するため、リオの意見をくみ取らないわけにはいかない。

リオは小さく頷くと、

「まずは謝罪を要求したいですね」

と、端的にスティアード達に謝罪を要求する。

「なんだと？」

すると、アルフォンスの怒りの声が周囲に木霊した。

第７５話　謝罪

「貴様、下民の分際で調子に乗るなよ？　謝罪をしろだと？」

リオを睨(にら)みつけ、アルフォンスが言い放った。

「当たり前でしょう。先に挑発してきたのは貴方達です。こちらは高いお金を払ってまで手に入れた貴重なひと時を邪魔されたんですよ。非常に不快な思いもしました。人に迷惑をかけたら謝る。子供でも分かることでしょう」

ひどく呆れた口調でリオが答える。

アルフォンスはその言葉に蔑(さげす)みの色を感じとり、ひどく憤った。

「ふざけるな！　俺達は貴族だぞ？　それくらい我慢するのは平民の側だろうが！」

我慢できずにアルフォンスが叫ぶ。

先ほどから何なのだ、この男は。

名前を隠しているような卑怯な奴。

ことごとく人の感情を逆なでしてくる。

道端で貴族に声をかけられたら下賤な平民は必死に頭を下げて媚びへつらえばいいのだ。

それは至極当然の事である。

同じく道端に佇む平民の中に良い女がいたら声をかけるのも当たり前の事だった。

女なら喜んで身体を差し出すのはもはや天命と言ってもいい。

今回は偶々場所がレストランだっただけだ。

そこに何の違いもない。
だというのに、この男は従わないどころか、挑発までしてくる。
やはり斬り殺した方が良かったのではないか。
そうやって理不尽なことを考え、アルフォンスの怒りがぶり返してきたところで、

「ア、アルフォンス先輩！　待ってください！」

焦ったようにスティアードがアルフォンスを制止した。

「気持ちはわかりますが、その発言は不適切です。ここは穏便に済ませないと。ここさえ切り抜ければいくらでもやりようはあります」

ひそひそと小声でアルフォンスに語りかける。

「くっ……」

アルフォンスは悔しそうに眉を顰めた。
荒く息を吐いて怒りを誤魔化す。
それを確認すると、

「そうだな。僕らが悪かったのは……認めよう。どうだ今回の件はこれで一件落着ということで？」

一切の心がこもっていない謝罪の言葉を口にして、スティアードは早々に話をまとめようとした。
そんな二人の反応に、リオは、やはりかと、内心でため息を吐いた。
この二人は反省なんかしていない。
今はこの場を凌ぐことだけを考えている。

先の無礼打ちの濫用はリオが反撃したことにより未遂となっているから、二人はリオが告訴しなければ裁判にかけられることはない。
確かに無礼打ちの濫用が未遂に終わった場合、被害者は濫用を働いた貴族を訴えることができる。
だが、罰則が短期間の拘留にすぎないため、実際には牢獄から出てきた貴族の仕返しを恐れて、告訴に踏み切る者は少ない。
だから二人はリオが告訴をするはずがないと高を括っているはずだ。
恐れているのは告訴ではなく、今回の件が知られることでユグノー公爵の怒りに触れることなのだから。
この場を上手く切り抜けたら、おそらく二人は店を出たリオに――いやアイシアに再度ちょっかいをかけてくる可能性がある。
店を出た後でなくとも今後ほとぼりが冷めた頃に手を出してくるかもしれない。
それは少しばかり面倒である。
幸いスティアード達の注目はアイシアに集中していたため、美春達にはさほど注意は向かっていない。
そうなると、美春達に意識が向かないように、今は可能な限り自分にこの二人の怒りを集めておく必要があるだろうと、リオは考えていた。
その上で彼らが今後リオ達に悪事を働かないように予防する必要がある。
既に落としどころは考えてあった。
ゆえに後はそれに向けて上手く会話を誘導するだけである。
それを考えながら、リオはゆっくりと首を振ると、

「話になりませんね」

と、静かだが力強い口調で言った。

「こちらは殺されかけたんです。今のは謝罪にすらなっていません。そもそもこのまま貴方達を無罪放免にするのも納得ができませんね」

リオは淡々とした口調でスティアード達を挑発するように語った。

「貴様ふざけるなよ！　何様のつもりだ？　それこそ平民が口出しをすることではない！」

と、アルフォンスがリオを怒鳴りつける。

スティアードも信じられないような目つきでリオを見つめていた。

せっかく話が上手くまとまりかけていたというのに、何を言っているのだ、この男は、と。

きっと自分達に逆らう平民など初めて目にしたのだろう。

「被害者でしょうね。あいにくと俺は『絶対に殺す』と言われた相手をこのまま野放しにしておけるほどに出来た人間ではありません。枕を高くして寝ることができませんからね」

リオがそう告げると、スティアード達は先の発言を思い出した。

確かにそう言ったのは彼らだ。

二人は眉をひそめると、親の仇のようにリオを睨む。

リオはそんな彼らの恨みがましい視線を無視して、

「貴族が無礼打ちを濫用した場合には罰則があったかと存じますが、彼らにその裁判と執行はないので？」

と、アリアに視線を送り、尋ねた。

「はい。無礼打ちが未遂の場合、被害者からの告訴があれば裁判を行う決まりになっております」

「なるほど。未遂とはいえ理由もなく殺されかけたんです。まさか無罪ということはありませんよね？」

仮にスティアード達の裁判が開かれれば、彼らが牢獄送りになって臭い飯を食べることになるのは必至だ。

目撃証人は複数人いるし、彼らは自白までしてしまったのだから。

「貴様に僕達を裁く権限などない！」

と、スティアードがリオに食ってかかった。

冗談ではない。

せっかく上手く話がまとまろうとしていたところだったのだ。

それをこんなどこの馬の骨ともわからない男に邪魔をされてたまるか。

そもそもこの男は妙に気にくわない。

連れている女達はスティアードですら早々お目にかかることのないレベルの美少女ばかりだ。

特に桃色の髪の少女など今後の人生においてこれ以上に美しい者と出会うことはないと断言できる程に容姿が整っている。

言っていることも、考えていることも滅茶苦茶だが、スティアードの中で呪詛めいた感情が渦巻きだした。

そのすべてがリオに向けられる。

「貴方がどうしても彼達を訴えるというのなら、私としては止めることはできませんが……」

言って、アリアがちらりとスティアード達に視線を送る。

二人は明らかにリオに敵愾心を抱いていた。

リッカ商会の会頭であるリーゼロッテとしてはともかく、アマンドの代官であるリーゼロッテとしては、このままスティアード達が

短期間とはいえ牢獄に入ってしまうのはあまり上手くない。
スティアードの父親であるユグノー公爵はベルトラム王国の反革命軍の実質的な指導者だ。
仮にスティアード達が罪を犯して牢獄に捕えられたという噂が広まれば、ユグノー公爵の面目は潰されることになる。
その程度のスキャンダルと言ってしまえばその程度のスキャンダルだが、今後の展開を考えると、ガルアーク王国の貴族であるリーゼロッテとしてはユグノー公爵にこんなつまらないことで躓いてもらうのは面白くない。
今後のガルアーク王国とベルトラム王国反革命軍の関係を考えれば、彼女にとっては可能な限りユグノー公爵を利用し尽くすのが最善なのだから。
かといってリオの意向を完全に無視してユグノー公爵のためにスティアード達に肩入れすることもできない。
今回の事件は店の支配人が直ちに仲裁を行わなかった点について、明らかにリッカ商会側に落ち度がある。
レストランには他にも客はいるのだ。
騒ぎを聞きつけてすぐに噂は広まっていくだろう。
だというのに、リッカ商会がスティアード達、ひいてはユグノー公爵が有利になるように味方をすると、公平さを欠き、商会のブランドイメージが損なわれる恐れが出てくる。
つまり、スティアード達の処遇は生かさず殺さずの状態にしておき、かつ、リオに納得してもらう必要があるのだ。
その上でリーゼロッテがユグノー公爵に貸しを作ることができれば、ようやくお釣りがくるといったところか。
（とはいえどうしたものか。脳はないくせに立場だけはある貴族というのは本当に厄介ですね。扱いだけは難しい）
仮にリオが今回の事件を告訴するとなると、リーゼロッテとして

はスティアード達を裁かざるをえない。
そうなるとスティアード達は牢獄に入ることになり、今回の事件は表沙汰になるだろう。
ユグノー公爵の顔には泥が塗られることになり、ベルトラム王国反革命軍の士気や統率に支障が生じるかもしれない。

（……本当に頭が痛い）

アリアは頭を抱えたくなった。
事を上手くまとめるためには何とかリオに告訴を取り下げてもらう必要がある。
そのための着地点はどこか、アリアがそんなことを考えていると、

「ふ、ふん、どうやら状況を分かっていないようだな。僕はユグノー公爵家の嫡男だ。仮に僕を訴えたとしたらユグノー公爵家を敵に回すと思えよ」

リオを睨みつけ、スティアードが喚(わめ)いた。
言葉だけを聞くと強気な態度に思えるが、スティアードの声は明らかに上ずっている。
ただの虚勢にすぎないのは丸わかりだった。
そんな脅しに屈するはずがなく、リオは黙ってスティアードを見つめ返す。
だからどうした、と。
状況を理解できていないのはスティアードの方である。

「き、貴様……本気か？」

ごくりと唾を飲み、スティアードが明らかに狼狽した様子を見せる。

その真意を探るべく、リオの目を覗き込んだ。
すると、ぞくりと身体が震えて、スティアードは思わずリオから視線を外してしまった。

（何だ、この男の目は？）

まるで人を人とも思っていないような。
ゴミでも分別するような。
スティアードを一人の人間として見ていないような。
さして興味を持っていない、そんな目だ。

（……これは父上とっ）

実際に視線を向けられているというのに、リオの目はスティアードを見ておらず、別の何かを見ていた。
どうしてこの目ができるのだろうか。
かつてスティアードがフローラを崖に弾き飛ばしてしまい、ユグノー公爵がその後始末をした時、スティアードはユグノー公爵から今のリオと似た目で見つめられたことがある。
その時、まるで自分のすべてを否定されたような錯覚をスティアードは抱いた。

（この男は何を見ている？）

スティアードは無意識のうちに身体をぶるぶると震わせていた。
かつての父の目と重なり、リオを恐れたのだ。
それは何をしてでも己のエゴを貫き通すと決めている目だった。
今後のリオ達の平穏な生活にとってスティアード達がどれだけの障害となりえるのか。
リオは今、それを分析することにしか興味はない。

そこに感情は挟んでも情は挟まない。
必要なら下手な加減はしない。
決してブレてはいけない。
そのようにリオが決めたのだから。
それは覚悟だ。
今のスティアードが決して持っていないもの。
それがわからないから、いや、その片鱗をかつてユグノー公爵の中に垣間見たことがあるからこそ、スティアードはリオを怖く感じた。
視線を逸らした先にはアルフォンスがいる。
彼はまったくリオのことを怖く思ってはいないようで、不機嫌そうにリオを睨んでいた。

「っ……」

スティアードの顔が引きつる。
不味い。
この目をしている奴はやると言ったら本当にやる。
今ここでリオを下手に刺激したら確実に自分達の未来は明るくない。
何となく、本能で、そんな予感がした。
だが、それが理解できたからといって何をすればいいというのか、スティアードにはそこから先がわからない。
そもそもきちんと謝るという発想が出てこないのだ。
すると、そこで、
「貴方は絶対に彼らを訴えるつもりですか？　仮に裁判を行い刑を執行したとしてもせいぜい牢獄で短期間、謹慎させるだけですよ？」
と、横からアリアがリオに尋ねてきた。

そもそも無礼打ちの濫用が未遂で終わることは滅多にないが、まったくないというわけでもない。
とはいえ、被害者が無礼打ちを濫用した貴族を訴えた場合、訴えられた貴族の恨みを買うことが多いことから、一介の平民はもちろん、財力や武力のある平民であっても、徒(いたずら)に貴族の恨みを買うことを恐れて告訴をしない者がほとんどである。
そのことをわかっているのかと、アリアは遠まわしにリオに尋ねた。

「別に手段は何だってかまいやしないんですがね。自分はこちらの身の安全さえ確保できればかまわないので」

落ち着いた口調で、リオがそう答える。
ここでスティアード達を牢獄にぶち込めば、彼らの恨みを買うことはもちろんリオも理解していた。
仮にそうなっても別にリオだけならば何も問題はない。
ここでスティアード達を見過ごしたところで、将来的に彼らがリオに何かを仕掛けてきたとしても、返り討ちにすればいいだけなのだから。
リオだけならばスティアード達を脅威に思うこともない。
だが、美春達がいるとなると話は別だ。
今後スティアード達と活動範囲が被ると、美春達の身に危険が降りかかる恐れが発生する。
それはリオにとって明確なウィークポイントとなりえた。
だから後顧の憂いを絶つためにもリオはあえて積極的な行動に出ているのだ。
完全に予防するにはここで彼らを殺して禍根を絶つのが効果的なのかもしれないが、流石にそれは現実的な手段ではない。
結論から言ってしまうと、今回の事件の着地点について、リオには一つの考えがある。

それにはアリア――というかリッカ商会の協力を得る必要があった。
先日セリアを救出する過程でリオが見つけたベルトラム王国の反革命軍という集団の存在、その構成員であるスティアードとアルフォンスが今このアマンドにいる意味、昨今の国際事情、リッカ商会がガルアーク王国の貴族であるリーゼロッテの息がかかった商会であること――。
これまでの会話からアリアの人となりもおよそは把握することができた。
確証はないが、上記の要素を踏まえると、アリアが今何を考えているのかは予想できる。
そして今の状況を見てアリアがどのような行動に出るのかも――。
だからリオは演じる。
アリアがリオの望むとおりに動くように。

「なるほど。では、彼らがきちんと謝罪をし、今後、貴方達に手出しをする恐れがなければ訴えることはしないと？」

リオの発言を吟味した上で、アリアがそう提案した。

「本気でその保障が得られるのならいいんですけどね。あいにくと俺はそこまで人を信用できません。一度、敵意を見せてきた相手は特に」

小さく肩をすくめて、にべもなく却下すると、リオは僅かに目を細め、アリアを見やった。

「ならばリッカ商会が間に入って和解の契約書でも作りましょうか？　彼らが貴方達に謝罪し、今後、貴方達に手を下すことはしないと。万が一、彼らが貴方達の身に危険を及ぼそうとした場合に備え

て、罰則を定めておけば滅多なこともできないでしょう。罰則の実効性はリッカ商会が保障します」

アリアの言葉に、リオが僅かに眼を見開いてみせる。

その瞳は僅かに愉快そうな光を覗かせていた。

リッカ商会に仲裁人となってもらい、その仲裁の効力を保障してもらう。

それがリオが望んだ展開だ。

果たしてアリアは完璧なまでリオの思惑通りの提案をしてくれた。

スティアード達のような貴族に約束を順守させるためには、おいそれと約束を破れないように、対等もしくはそれ以上の社会的影響力が必要となる。

リオ個人にはそれはないが、リッカ商会にはそれがあった。

リッカ商会が絡んだ仲裁を反故にすれば、リッカ商会の顔に泥を塗ることになりかねないし、頑なに罰則を拒むなどすれば商会を敵に回すことにもなりかねないだろう。

リオ個人がスティアード達に今後の手出しを禁じるよりかは、ずっと抑止的な効果があるはずだった。

「おや、それは……ありがたいですね。よろしいのですか？」

と、リオが意外そうに尋ねる。

「はい。こちらもお客様である貴方達にご満足いただける食事と空間をご提供いたすことができなかったという負い目がございます。こちらの不手際がなければ、本来、貴方達にご迷惑をおかけすることもなかったと考えておりますので。当然の事後処理だとお考えください」

と、アリアがリッカ商会の負い目を口にして助力の理由を告げた。

最悪の場合はリオからリッカ商会側の不手際を突いて協力を要請することも考えていたのだが、リオは今後リッカ商会にアフターケアをしてもらわなければならない立場にある。
クレーマー染みた行動をしてリッカ商会の心証を下げたり、無理に頼み込んで借りを作るような形になるのはあまり面白くはなかった。
ゆえにリオはアリアから仲裁を申し出てくれるように、スティアード達と対立の姿勢を貫いたのだ。
やりすぎないよう、あくまでも落ち着いて、冷静な態度で。
その目論みは見事に功を奏することと相成った。

「なるほど。では、お願いします」

良い解決策が見つかったと、笑みを浮かべ、リオがアリアにお願いをする。
そんなリオをアリアが静かに見つめた。

（もしや……この少年は私から仲裁を申し出るのを待っていた？）

アリアの立場を考えると必然の行動であり、彼女としても理想的な話の流れになったのだが、あまりにも話の流れがスムーズすぎやしないだろうか。
打てば響くようなリオの反応に、アリアは些細な違和感を覚えた。
ちらつかせた告訴をあっさりと取り下げたのもこれが狙いだったのでは。
そう考えたが、何はともあれ、ありがたいことに変わりはない。
アリアはすぐにその違和感を捨て置くと、まとまりかけた話に薄く口をほころばせ、スティアード達に視線を向けた。

「おい！　ふざけるなよ！　俺はそんなの認めないぞ！」

が、当然の如く、アルフォンスが異議を唱えた。
アリアが内心でため息を吐く。
そんな彼の反応に、リオも呆れたように首を振ると、
「どうやら本当にご自分の立場を理解できていないようだ」
と、アルフォンスにそう告げた。
「お話を伺う限り、貴方達としては今回の件が親族の方に知られると不味いのでしょう？」
スッと目を細め、リオがアルフォンスを見据える。
その視線を受け止めると、アルフォンスは僅かに怯んだ。
「今ここで俺が貴方達を訴えれば、間違いなく今回の件は最悪の形で貴方達の親族に伝わるでしょうね。逆にこの話を呑めば少なくとも今回の件が最悪の形で話が伝わることだけは免れることができる。まぁ揉め事を起こした事実が伝わること自体はもう避けられないかもしれませんが」
スティアード達が牢獄に入るのか、入らないのかでは、問題の大きさが全く異なってくる。
仮に彼らが牢獄に入った場合、今回の事件は公然の事実となるだろう。
そうなれば世間や反革命軍に対するユグノー公爵の面子は丸つぶれだ。
他方で彼らが牢獄に入らない場合は今回の事件を内々に処理することもできる。
スティアード達は丸く収まっていると考えているのかもしれない

が、今回の事件をユグノー公爵に伝えるかどうかはリーゼロッテ次第だ。
前者と後者でどちらが穏便に事を済ませられ、どちらがスティアード達にとって有利なのか、本当にわかっているのかと、リオは視線で問いかけた。
「俺はどっちだってかまわないんですよ。好きな方を選んでください。ただ、どちらとは言いませんが、一方を選んだ場合、勘違いをして胡坐をかいて、狼藉を働いたツケの代価はさらに高くなるでしょうね」
と、リオが最後通告を言い渡す。
「くっ……」
アルフォンスの顔が悔しげに歪んだ。
理性としてはリオの話を呑んで頭を下げた方が賢いというのはわかっている。
だが、先ほどまで蔑み、殺意まで抱いた相手に、頭を下げるなんて、精神的な抵抗が大きすぎた。
「条件を確認しておくと、このテーブルに座って食事を摂っていた全員に謝罪をして和解の契約書にサインをするというのなら、俺は貴方達を訴えることはしません。契約書の中身についてはきちんと取り決める必要があると考えていますが」
葛藤するアルフォンスにリオが説明を付け足す。
すると、そこで、
「その、悪かった！　悪かったな。僕は謝るぞ。和解の契約書とや

らも書いてやろう」

と、スティアードが矢継ぎ早に言った。

言葉だけの謝罪。

誠実さのかけらもない。

もしかしたらスティアードにとってはこれが生まれて初めての謝罪なのかもしれなかった。

だが、リオはそんな事情は考慮しない。

「せめて頭くらいは下げてもらいたいものですね。ああ、それと言葉遣いも訂正してください」

と、リオは冷めた口調でそう言った。

スティアードの頬が引きつる。

何という屈辱だろうか。

名門貴族たる自分が平民の男に頭を下げるなんて。

損得勘定優先で謝罪の言葉を述べたスティアードも、流石に血が煮えたぎりそうな程に怒りを抱いた。

だが、ここは謝らなくてはならない。

さもないと牢獄にぶち込まれて、歴史と名誉のあるユグノー公爵家の名に泥を塗りたくることになる。

そう考え、スティアードは身体を震わせて、しばし沈黙すると、

「……すまな……あ、いや、すみま……せん……でした。本当に悪かった……です。申し訳ありません……でした」

と、ぎこちなく謝罪の言葉を紡ぐ。

スティアードは必死だった。

父親への恐怖がプライドを乗り越えさせたのだ。

「ス、スティアード君……」

隣でリオに頭を下げる一つ年下の後輩の姿を目にし、アルフォンスが痛々しい声を漏らした。

「ほら、俺だけじゃなく、テーブルに座っている皆さんにも謝ってください」

と、リオがスティアードのプライドに追い打ちをかけるように告げた。

今回の件で一番迷惑を被っているのは間違いなく女性陣である。

謝罪すべき相手は彼女達だと、リオは考えていた。

「すみま……せんでした。先ほどは失礼な真似を……」

そう言って、スティアードがテーブルに座る美春達に頭を下げる。

美春達は少しばかり居心地が悪そうに頭(かぶり)を振った。

「アルフォンス先輩も皆さんに謝罪を……」

スティアードが消沈した声でアルフォンスに語りかけた。

その言葉でアルフォンスがハッと表情を変える。

後輩にここまでさせて、先輩の自分が頭を下げないのばつが悪い。

心情としては絶対に謝りたくなどはないが、ここで騒ぐのはみっともなく思えた。

視線を彷徨わせ、往生際が悪いように俯いたまま黙りこくると、やがてぼそりと謝罪の言葉を口にする。

「も、申し訳なかった……」

短く、震えた声の謝罪。
その声に込められた感情は屈辱の二文字が相応しい。
アルフォンスはリオ達に向かって頭を下げた。

第76話　リーゼロッテの憂鬱

リッカ商会のレストランでリオとスティアード達が和解の契約を結んだのを見届けると、アリアはリーゼロッテが暮らす屋敷へと帰還した。

リーゼロッテはまだフローラ達と会食中であるようだ。

先の一件は迅速に伝えるべき事柄であることは確かだが、対処法を考える時間も必要だし、スティアード達との口約束もある。

この後フローラ達一行は屋敷に一泊していくことから、アリアはリーゼロッテに先の一件を耳に入れるのは会食を終えた後にすることと決めた。

会食が終わるまでの間、アリアは先の一件の報告書を作成し、迅速に自らに割り振られた業務の処理も行っていく。

侍従長である彼女でなければ処理できない案件もあるし、ただでさえ膨大な書類の山が待ち受けているのだ。

欲を言えば台無しになったランチタイムを少しでも埋め合わせるために、優雅に食後のティータイムといきたいところであったが、先の一件で相当に時間を浪費してしまったため、時間は少しも無駄にはできない。

しばらく黙々と作業をこなしていると、部下から会食が終わったと報告が上がってきて、アリアは主の執務室へと向かった。

「お疲れ様でございます。リーゼロッテ様」

ノックをして、入室の許可を得ると、アリアが深くお辞儀をして告げた。

「あら、アリア。どうかした？」

気の知れた重臣の来訪に、リーゼロッテが笑顔を咲かせる。
「はい。すぐにお伝えすべき案件が一つございます」
そう言って、アリアは小さく嘆息した。
「何かしら？」
スッと表情を鋭くして、リーゼロッテが思考回路を切り替える。
そこには会食中に見せたおっとりとした非常に可愛らしい令嬢の姿はない。
相応に長い年月を一緒に過ごしているせいか、リーゼロッテは感情が希薄な部下の面持ちからあまり良くないニュースがあるようだと察する。
「現在アマンドに滞在しているベルトラム王国所属の貴族二名がリッカ商会の経営するレストランで問題を起こしました。騒動の主はユグノー公爵家の嫡男、及びロダン侯爵家の次男です」
と、アリアが端的に報告を行う。
「何ですって？」
やや調子外れな声をリーゼロッテが漏らす。
騒動の主はよりにもよってベルトラム王国反革命軍の中でも最高位の幹部に相当する人物達の息子だという。
そんな二人が問題を起こしたとはあまり穏やかな話ではない。
この大事な時勢にいったい何をしてくれたというのだろうか――、
そう考え、リーゼロッテは悩ましげに左手で顔を押さえた。

「私も心底、彼らの頭を疑ったのですが、紛れもない真実です」
言って、アリアが嘆かわしそうに首を振る。
「それで、一体何をやらかしたのかしら？」
具体的な事件の経緯を聞くのは躊躇われるところだが、立場上、聞かないわけにもいかない。
リーゼロッテはおそるおそる質問を投げかけた。
「レストランでお食事をされていた他のお客様方の席に乱入し、その場にいた女性を口説こうとしたところ、口論に発展し、最終的には難癖をつけて無礼打ちの濫用を行おうとしました」
リーゼロッテはがくりと身体のバランスを崩した。
「な、何てことをやってくれたのかしら。その物言いからすると事件は未遂で終わったのよね？」
「はい。仰る通りです」
アリアの答えに、リーゼロッテがホッと息を吐く。
既遂ならば問答無用で牢獄送りだ。
未遂ならば被害者の告訴次第で牢獄送りは見送ることができる。
ガルアーク王国としても、リーゼロッテ個人としても、ユグノー公爵にはこれから頑張ってもらわなくてはならないのだ。
そんな人物の息子が、よりにもよって貴族の名誉を汚したとして牢獄送りになるなど、あまりにも世間体が悪すぎるだろう。
貴族というのは外聞を大事にする以上、現時点で反革命軍の士気に影響が出るようなスキャンダルは面白くない。

「二人の身柄は？」
「身元が確かであることから逃走の恐れは低いと判断し、滞在中の宿に監視を置くだけに留めております」
「被害者はどうしているのかしら？」
「事件の発生後、加害者の貴族二名を告訴する姿勢を見せておりましたが、私から仲裁を申し出たところ告訴を取り下げました。こちらから同行を願い出たのですが、どうやら今日は所用があるようでして、無理に引き留めることはしませんでした。代わりに後日、屋敷にいらっしゃる予定です」

リオは和解の契約書を作り終えると、それ以上の面倒事を避けるために同行は拒絶した。
リオはリーゼロッテが転生者である可能性が高いと踏んでいる。髪の色は変えているため、遠目ではわからないだろうが、仮に彼女が元日本人であるというのなら、美春達と対面すれば高確率でその顔の作りに既視感を覚えるだろう。
その時、どういった事態になるかは予想がつかない以上、リオは出たとこ勝負で美春達を連れてリーゼロッテの屋敷へ赴くことを拒んだのだ。
アリアとしてはリオにも同行してほしかったのだが、リオ達は被害者であり、店側にも落ち度があったため、権力でゴリ押しすることはしなかった。
とはいえ、セリアとアリアの関係や、勇者についてより詳しい情報を得るため、リオとしてもリーゼロッテかアリアと簡単に面識を持っておくことは悪い選択肢ではない。
そこで、後日、リオだけが顔を出すことを条件に、あくまで善意の申し出という形で、その場を立ち去ることにしたのだった。
「その際、食事の代金はサービスし、再度、ご来店して頂いた際に

も優遇させて頂くことを確約しておきました」
「よろしい。アリアがその場にいたのならこちらで出来る限り精一杯の対応してくれたでしょうからね。ご苦労様。とりあえず首の皮一枚で繋がったというところかしら」

ホッと息を吐くと、リーゼロッテが言った。

「それにしても無礼打ちの濫用が未遂で終わるなんて珍しいわね。どういう経緯で未遂に終わったのか教えてくれる？」

無礼打ちの濫用は平民が死亡するか重傷を負った場合に限って既遂となるのだが、そもそも無礼打ちを濫用する貴族は殺すつもりで平民に斬りかかっている。
一応、平民の側に正当防衛は認められているが、未遂で終わる事案というのは非常に少ない。

「未遂に終わったというよりは、被害者の少年が未遂に終わらせたという表現が正しいかもしれませんね。どうやら被害者の少年が斬りかかってきた件（くだん）の貴族二人の剣を切断したようでして」

と、アリアが事件が未遂に終わった一番の理由を説明する。

「……は？　え、ええ？」

リーゼロッテが目を丸くした。
彼女もガルアーク王国の王立学院時代に護身程度の剣術は修めているし、現在もアリアに稽古をつけてもらい、自衛のために剣術を習っている。
だからこそ剣を切断するという離れ業のとんでもなさを理解できた。

強度を度外視して量産性を重視した鋳型(いがた)製の剣ならともかく、腐っても高位の貴族が持つ剣だ。
おそらくは最高級品のアダマンタイト鋼を鍛えた剣を所持しているはずであるが、アダマンタイト製の剣は一流の職人が鍛錬すれば岩を切っても刃こぼれしないと言われるほどの頑強さを持っている。
そんな剣を切断したというのだ。
しかも二人分もである。
間違いなく偶然ではなく、狙ってやったものだろう。
とてもではないが、たとえ同じアダマンタイト鋼製の剣を与えられたとしても、リーゼロッテでは再現できる芸当ではない。
とてつもない腕力で剣身の部分を横から叩きつければ可能かもしれないが、訓練を受けた貴族を二人も相手にして、戦闘中にそれを行うのは神業といってもいいだろう。
いや、もしかしたら名のある魔剣を持っていればもっと容易に可能なのかもしれないが。

「えっと、その被害者の少年は魔剣でも持っていたの？」

努めて、冷静さを取り繕うと、リーゼロッテは現実性の高い疑問に絞って尋ねてみた。

「はい。切断痕を見る限り、叩き割ったというよりは鋭利な刃物で文字通り切り裂いたと判断しました。おそらくは恐ろしい程に切断性を向上させる魔術が込められた魔剣でしょう。とはいえ、身のこなしと気配からすると、かなりの技量を持っていることも窺えましたが。魔剣と技量、両方があってこその芸当でしょうね」

と、アリアは観察した事実に評価を付け加えて答えた。
リーゼロッテはアリアの実力を高く評価している。
彼女以上の使い手は近隣諸国を探し回っても見つけることはでき

ないだろうと断言できるくらいに。
そのアリアが言うのだから信憑性は高い。
リーゼロッテは小さく呻(うな)り、
「なるほど。凄腕の剣士かしら？　けど、おかしいわね。そこまでの芸当ができる魔剣持ちの冒険者が近くにいるなんて、私の情報網にはないんだけど。しかもその人物は若いんでしょ？　どういった人物なの？」
と、被害者であるリオの素性に探りを入れた。
「名前はハルトというらしいのですが、近隣で名を轟かせている冒険者に同名の人物はおりません。歳はリーゼロッテ様と同じか、僅かに上といったところでございましょう」
「ハルト……」
その名を呟き、リーゼロッテが少し遠い目をして黙り込んだ。
「心当たりがございましたか？」
アリアが尋ねると、リーゼロッテは苦笑を浮かべながら頭(かぶり)を振った。
「いいえ、ないわ。……となると、全くの無名か、それとも偽名か、そもそも冒険者ではないか。可能性として考えられるのはこの辺りかしら」
「一応、部下を使ってギルドに問い合わせてみましたが、該当する人物に心当たりはいなかったようです。もっとも、心当たりがあったとしてもこの都市のギルドが素直に教えてくれるかはわかりませんが……」

「ちょっと興味を惹かれるわね」

そう言って、リーゼロッテが愉快そうな笑みを浮かべる。

「仮に冒険者だったとして、これ以上、有望な冒険者を引き抜くと、本当にギルドから嫌われますよ？」

やや呆れのこもった声でアリアが言った。

「大げさね。私は勧誘しているだけで無理に引っ張っているわけじゃないわ。どうするかはその冒険者次第よ。それに無暗に勧誘しすぎないよう気をつけてはいるわ」

と、可笑しそうにリーゼロッテが答える。

「お嬢様のスケジュールにも合うよう、その少年には五日後の昼にこの屋敷にお越しになるようお願い申し上げておきました。その時にでもお声をかけるだけしてみてはどうでしょうか」

アリアは小さく嘆息すると、そう語った。

「流石ね。貴方がそこまで言う人物ですもの。それほどの人材なら是非とも把握しておきたいし、もう少しどんな人物なのか話を聞かせてもらえる？」

こちらの反応を予想してあらかじめ取り計らってくれたことを嬉しく思い、リーゼロッテが満足げに頷く。

「顔つきはこの周辺の国の人間とは少し異なっておりましたね。おそらくは異国の人間かと。他に五人ほどお連れの人物がおりました

が、こちらも人種はバラバラでした」
「へぇ、移民のグループなのかしら？　だとしたら無名なのもわからなくはないけど」
「会話の矢面に立っていたのは件（くだん）の少年だけでしたが、言葉遣いは流暢でした」
「なるほどね。人間的にはどのような人物なのかしら？」

リーゼロッテがリオの人間性を尋ねる。

「基本的には温厚で礼儀正しい人物だと考えられます。明るいわけではありませんが、人当たりは良く、他者に物怖じすることもありません。冷静で落ち着いており、頭の回転も速いタイプと存じます」
「ますます冒険者にしておくにはもったいない人材ね」

アリアの人物評価に、リーゼロッテが感心したように言う。
冒険者というのは基本的に荒くれ者ばかりだ。
粗野で短気な乱雑者が多く、無計画というわけではないが大雑把であり、教養を身につけている者も少ない。
それでも実力があれば問題はなく、活かしどころはあるのだが、より求められているのは人格的にも優れた人間である。

「他に気になる点は何かあった？」
「私の考えすぎなのかもしれませんが、どうも話の流れを被害者の少年に誘導されていた節がありまして……」

リーゼロッテの問いかけに、少し戸惑った様子でアリアが答える。

「どういうこと？」
「今回、スティアード＝ユグノー及びアルフォンス＝ロダン両名を店の支配人が制止しきれず、事前の仲裁を怠った点にリッカ商会の

落ち度がありました。そこで、私の裁量でリッカ商会から仲裁を申し出ることにしたのですが……」

アリアは当時のことを思い出す様に思案顔を浮かべると、僅かに言いよどんだ。

「考え直すと、そこに辿り着くまでの流れが妙にスムーズだったといいましょうか。まるでこちらの意図と置かれている状況を察して、その少年が会話の方向性を誘導していたのではないかと感じまして」

「そう感じた理由は？」

「感覚的なものによるところが大きいのですが、違和感を覚えたきっかけは、仲裁の話が出ると被害者の少年があっさりと告訴を取り下げたことでしょうか」

「ふーん、それだけじゃ何とも言えないけど……。貴方の直感は当てになるからね。それが事実なら大したものだわ。昨今の国際状勢なんかにもそこそこ明るいことを意味するわけだしね」

会話の流れというのは水物だ。

同じ話題でも伝え方や提案する者によって捉えられる印象は大きく異なってくるし、相手が望む話題であってもタイミングを間違えたり下手な出し方をすると食いつかれないこともある。

だが、相手の考えていることを踏まえて、話者が会話の流れをある程度操作することができるのも事実だ。

リーゼロッテとしては口数が多いタイプが必ずしも会話上手であるとは思っていない。

会話の流れを掴んで的確に話題を提供したり、相槌を打ったり、自らの意見を述べたりと、そういったスキルを持った人間こそが会話上手だと考えている。

とはいえ、日常的な会話をするならともかく、交渉においてそういった手管に長けた人物同士が会話をすると非常に疲れることにな

るのだが。

「まぁいいわ。それで、仲裁というと、具体的にどんなことをしたのかしら？」

「基本的には両者の和解の過程を見守ることに終始するよう専念しました。おおまかな和解契約の内容は、スティアード＝ユグノー及びアルフォンス＝ロダンの両名から、被害者であるハルトという少年及び彼に関わる人物に対して、直接的、間接的を問わずに、今後一切の手出しを禁止するというものです。違反した場合には両名の悪事をリッカ商会が持つ伝手を使って公表し、さらに罰金が魔金貨で五枚科せられます」

なお、この契約においては、やむを得ない場合を除いて接触も極力避けることとされている。

罰則は故意と過失の有無を問わずに科せられることになるが、契約に違反しているかどうか、相手方の嘘を判定するため、契約書には魔術が込められた特殊な紙が用いられることになった。

これは契約者の血を契約書に染みこませることによって、契約者が契約条件に違反しているのか、嘘を吐いているかどうかを明らかにするというものだ。

「効果的だけど、なかなかえげつない罰則ね。恥の公表って貴族にとってはお金よりも痛いわよ。その契約に違反したらユグノー公爵の顔まで潰れかねないじゃない」

契約に違反した場合の罰則の内容を聞いて、リーゼロッテが僅かに顔を引きつらせた。

契約内容さえ履行すれば問題はないが、下手な手段に出られることを想像すると少しばかり怖い。

「申し訳ございません。仲裁者という建前上、第三者性を保つため、過度に一方に口出しをするのは憚(はばか)られましたので。加害者の貴族二名があまりにも冷静さと交渉能力に欠けていたのもありますが、基本的に和解の方向性を見出して経過を見守ることしかできず……、言い訳にしかなりませんね」

「いえ、仕方がないわ。相手が貴族となれば確実に安全を確保しておきたかったのでしょうしね」

「こちらがその契約書の写しとなっております」

そう言って、アリアは主に和解契約書の写しを差し出した。

リーゼロッテがそれを受け取り、サッと目を通す。

「呆れた。一方的に禁止条項を呑みこんでるだけじゃない。これじゃその気になれば被害者側は何の罰則もなしに今回の件を流布することだってできるわよ」

スティアード達にとっては穴だらけの内容に、リーゼロッテが顔を顰(しか)める。

契約書の作成にあたっては、可能な限り自分に有利な条項を盛り込み、予見不能なあらゆる争いが後になって発生しないよう備えておくのが常道だ。

中には解釈の余地を残しておくべき条項もあるが、基本的には争いの発生を防ぐためにも解釈の余地はあまり残しておかない方が好ましい。

リーゼロッテからすれば、契約条件を徹底して煮詰めない者は先の見通しを甘く見ていると言わざるを得ない。

今回作成された和解契約書においては、リオにとって有利な条項が徹底して盛り込まれているのに対し、スティアード達に有利になる条項はまったくと言っていいほどに定められていなかった。

スティアード達は商人ではなく貴族なのだが、これではあまりに

もお粗末である。

「一名は火遊びが過ぎて事の重大さを認識し萎縮していたようですが、もう一名は怒りのあまり冷静さを失っておりました。この内容で異存はないのか両者に確認を入れたのですが、貴族側の二名があっさりと同意し、契約は成立してしまいました。相手の少年も少々呆れていたようですね」

もちろんそうでない者もたくさんいるが、貴族の中には往々にして契約を結ぶのが下手な者がいる。

名誉と見栄とかそちらの方にばかり意識が向いて、交渉において実利に固執することを嫌う者が多いのだ。

この契約書を見る限りは、スティアード達にもそういった節があるのかもしれない。

「契約書の内容を見る限り無駄に争いを起こしたがる人間には思えないけれど、こうなると無暗にその件を口外しないように、彼に頭を下げて口止めをお願いした方がいいかもしれないわね。本当はそういった真似はしない方が公平なんでしょうけど」

そう言って、リーゼロッテは深く溜息を吐いた。

彼女の睨む通り、リオにそれを行うつもりない。

また、それをなしうるだけの伝手も影響力も持ってはいない。

だが、そんなことをリーゼロッテは断言できないし、仮にそうだからといって立場上、完全に放置しておいていい問題でもないだろう。

「はい。むしろその件をお願いするために彼をお呼びたて致しましたから。理性的に対応すれば話の通じる方とお見受けしましたので、あまり心を悩ます必要はないと存じますが」

「貴方がそう言うのならそうかもしれないわね。けど、このハルトという人物は中々の曲者よ。短時間で考えたにしては契約書の条件が良く煮詰められているわ」

そう言って、リーゼロッテは契約書の写しを掲げた。

契約書にはリーゼロッテが思いつく限りの問題に対処するべく丁寧に条項が盛り込まれている。

この国で用いられている和解契約書のひな型とは少し異なるが、彼女から見ても隙のない良い契約書であると思えた――、少なくとも一方の立場から見ればだが。

むしろ参考にするところが多いくらいである。

「はい。本人は平民を自称しておりましたが、能力的に考えると、お忍びで旅をしている異国の貴族や豪商の子弟という可能性が高いかもしれません。もしかしたら連れの中に貴族がいて、その少年は護衛を務める人物という可能性もあるかと」

「なるほどね。承知したわ」

リーゼロッテはこれまでの報告を振り返り、それらを吟味するように深く頷いた。

「ユグノー公爵には早まった真似をしないように、きちんと今回の件を伝えておいた方がよろしいでしょう」

「ええ、そうするわ。報告は以上かしら？」

「はい。こちらが今回の事件の詳細をまとめた報告書となっております。ユグノー公爵にご説明される際にご参考になさってください」

アリアが書類一式を差し出す。

「ありがとう。相変わらず仕事が早いわね」

それを受け取ると、実務的な話が一段落したことで、リーゼロッテの雰囲気が柔らかくなり、優秀な部下を労うように柔和な笑みを浮かべた。

「親が有能でも子が有能とは限らない、か。まぁ歴史的に世襲制の国で証明されていることよね」

リーゼロッテがあっけらかんと語る。

「仰せの通りでございます。が、それを貴族であるリーゼロッテ様が仰ってしまいますか」

アリアは苦笑しながら同意した。

「あら、貴方だって元は貴族でしょう」

「そうでございましたね。とはいえ昔のことです」

特に懐かしむ様子もなく、アリアはあっさりとした反応を見せる。

「相変わらず淡白ねぇ」

と、今度はリーゼロッテが苦笑を漏らした。

「さて、それじゃあ私はこの報告書を読んで、ユグノー公爵のところに参るとしますか。お疲れ様、アリア。もう仕事に戻っていいわよ」

軽く無駄口を叩いて気分転換をしたところで、リーゼロッテは仕事の再開を宣言した。

「はい。それでは失礼します」

深くお辞儀をして、アリアは主の執務室から立ち去る。

一人で部屋に残されたリーゼロッテは、窓辺に映る湖畔の景色に視線を送った。

「まぁ今回の件は前向きに考えれば嬉しい誤算ってところかしら。ユグノー公爵に対して貸しができるしね」

そう呟き、小さく嘆息すると、淑女然とした仕草で優雅に冷めた紅茶を口に含み、リーゼロッテは報告書に目を走らせた。

第77話　悪魔の囁き

早朝、ベルトラム王国へと繋がるアマンド付近の森の中の街道にて。

「糞が！」

アルフォンス＝ロダンは悪態を吐きながら、一人で馬を歩かせ、ロダン侯爵領へと向かっていた。

アマンドが存在するクレティア公爵領とベルトラム王国に存在するロダン侯爵領とは国境を挟んで隣り合っている。

アマンドは周囲を小さな湖と広い森に囲まれているが、交易都市として周辺の街道の整備は整っていることから、ロダン侯爵領まで馬で進めば二日もあればたどり着く距離だが、まだ都市を出たばかりで道のりは長い。

季節的にまだ冬は過ぎておらず、外套越しに肌寒さが伝わってくる。

とはいえ、上を見上げれば広い空が視界に映り、今日は快晴と非常に心地の良い天気なのだが、アルフォンスの機嫌はそれらを楽しむ余裕もない程に悪かった。

それもこれもすべては昨日の出来事が原因だ。

思い出すのも忌々しいことだが、リッカ商会のレストランで揉め事を起こしたアルフォンスは、リオと和解契約を結んだ。

契約書の作成にあたっては腹が立つあまりに投げやりになり、アルフォンスはリオに言われるが通りに条件を呑んだ。

あんな下民を相手に張り合うのもプライドが許せなかったというのもある。

スティアードはスティアードで消沈しており、この悪事が親にバ

レた時のことを想像しているのか、ほとんど話は耳に入っていなかったようだ。
契約書を作成すると、アルフォンスはその場にいた商売女の一人を連れてスティアードと一緒に宿へと戻った。
スティアードはそんな気分ではないようだったが、アルフォンスはそのまま自室へとこもり、その怒りを発散するように商売女に自らの欲望をぶつける。
そのまま疲れ果てて眠ってしまったアルフォンスだったが、ユグノー公爵の使者を名乗る男が宿に現れると、眼を覚ました。
何となく嫌な予感はしたものの、流石のアルフォンスもユグノー公爵からの使者を追い返すことはできない。
どうやらスティアードも一緒に呼び出されていたようで、言われるがままにスティアードと一緒にユグノー公爵の下に参上したのだが、

「この愚か者が！」

部屋に入るなり、アルフォンスとスティアードはユグノー公爵に怒鳴りつけられた。

「女遊びの最中に立ち寄ったレストランでさらに別の女を口説こうとして口論した。挙句の果てに他国の領域で無礼打ちの濫用を行い、危うく牢獄に入りかけただと？　失望を通りこして呆れかえったわ！」

ユグノー公爵が怒りの理由を告げる。

「ひっ」

あまりの剣幕にスティアードとアルフォンスの二人が情けない悲

鳴を漏らす。
アルフォンスはどうしてこの場に呼び出されたのかを察した。
同時に、どうして先の事件がユグノー公爵に伝わっているのかを予想し、答えに辿りつく。
あの場にいた人間でユグノー公爵に今回の事件を報告できる人間など一人しかいない。
アルフォンスの脳内には氷のように冷たく美しいとある女性の能面が浮かび上がった。

「あ、あの女。公爵には報告しないって……」

ぶるぶると身体を震わせながら、アルフォンスがぼそりと呟く。
あの女――、アリアは約束したではないか。
ユグノー公爵には先の事件を報告しない、と。
こうして怒鳴りつけられることになるということは、アリアは約束を破ったのだろう。
たかが侍従の分際でふざけた真似をしやがってと、アルフォンスの中で沸々と怒りが沸き上がる。

「あの女だと？　まさかリーゼロッテ嬢のことか？　彼女をあの女呼ばわりとは、何様のつもりだ？」

アルフォンスの声を聞き漏らさず、ユグノー公爵は底冷えするような声で詰問した。
どうやらユグノー公爵はアルフォンスが言う「あの女」をリーゼロッテと勘違いしたようだ。

「あ、いえ。事情を聴取した侍従が『私からユグノー公爵には今回の件を報告しない』って……」

慌てて、アルフォンスが弁明を行う。
それは馬鹿正直に自分達が隠蔽工作を図ったと口を滑らしたようなものだ。
ユグノー公爵は二人が一丁前に今回の件を口止めをしようと画策していたことを察し、そのあまりにも杜撰（ずさん）な手口に呆れ返った。
「その侍従は何も嘘は言っておらん。この件を私に報告したのはリーゼロッテ嬢だからな」
と、ユグノー公爵がアルフォンスの勘違いを正す。
「ど、どういうことですか？」
だが、アルフォンスはこの期に及んでも自らの危機管理能力の甘さに気づくことはなく、ややふて腐れた様子でユグノー公爵に食ってかかった。
「言葉の綾をつかれたのだろう。口約束、しかも言質もとらぬとは。いくら王立学院のぬるま湯で過ごしてきたとはいえ、仮にも貴族だろうに、何とも不甲斐ない。いや、同じ自国の貴族として恥ずかしい……」
このような交渉能力しか持たない者が未来のベルトラム王国を担う人材かと思うと、情けなくて仕方がない――、そう言わんばかりに、ユグノー公爵は顔を押さえた。
そのままスティアードとアルフォンスに対してあからさまに侮蔑のこもった視線を送る。
その気迫に、屈辱よりも恐怖が勝り、二人はサッと視線を逸らした。

「しかもあの契約書は何だ？」

ジロリと睨みつけ、ユグノー公爵はアルフォンス達が作成した和解契約書について言及した。

「契約書の写しは見た。一方的に相手が提示した禁止条項を鵜呑みにし、相手に対してこちらから情報の開示を禁止する条項を付け加えることすらしていない。あれでは今後弱みを握られたままではないか」

と、アルフォンス達が作成した契約書の不備を指摘する。

「え……？」

ユグノー公爵の怒りの理由が解らず、二人が疑問符を浮かべる。

そんな彼らの反応に、ユグノー公爵が苛立ったように息を吐く。

「あの契約書の文面からすると、正攻法で交渉して口止めをしようにも、貴様らの関係者である私からも不用意な接触は禁止される。かといって、下手な手段に出ればこの契約書の罰則に触れかねん。加えて拡張解釈の歯止めがない条文の文言。どうぞ脅してくださいと言っているようなものだな」

契約書の文面を思いだし、ユグノー公爵は眉を顰(しか)めた。

「あ……」

漠然と契約書の中身を思いだし、ユグノー公爵の言葉と照らし合わせ、アルフォンスがポツリと声を発した。

ユグノー公爵は小さく舌打ちをすると、

「だが、良かったな。貴様らの不始末はリーゼロッテ嬢が行ってくれるそうだ。後日、被害者と面会して今回の件を口外しないように頼んでくれるらしい。その意味がわかるか？　他国の貴族に自国の貴族の不始末の面倒を頼まねばならん意味が？」

冷たい声で淡々と詰問する。

「リーゼロッテ嬢から話を伺った時は恥ずかしくて顔向けもできなかったわ。貴様ら二人の軽率な行動が原因で、ただでさえ我々は不利な立場に置かれているというのに、余計な借りを作ってしまったのだ。自陣の恥を見せたうえでな。わかっているのか？」

睨みつけるユグノー公爵の視線から逃れるように、二人は黙って首を垂れた。

スティアードは父の怒りに怯えてビクビクしている。

他方で、アルフォンスは屈辱から来るどす黒い怒りでわなわなと身体を震わせていた。

「何とか言ったらどうだ！　スティアードよ？」

「は、はいぃ！」

急に名指しで指名され、スティアードが上ずった声で返事をする。

「貴様はかつて大きな失敗を犯したはずだが、過去から何も学んでいなかったようだな。私は二度目はないと言ったはずだが？」

「あ、いえ、これは……その……」

言い訳の言葉を口にしようとするが、上手い説明が出てこず、スティアードが口ごもる。

「言い訳など聞かん！　二度はないと言った。貴様からユグノー公爵家の家督承継権を剥奪する」

家督の承継――、すなわち爵位の承継は、心身の故障という特別の理由がない限りは、基本的にその家の長男が承継するのが慣例である。

それ以外の理由で長男以外の者が家督の承継者として指名されたり、一度与えられた家督の承継権を剥奪されるということは、貴族生命に関わる程の不名誉とされていた。

「そ、そんな……」

スティアードの顔が絶望に染まる。

「ふん、だが、現時点で我が家の恥を公表することは避けなければならん。運が良かったな。内々的に家督の承継権は剥奪するが、一応は今後も騎士として使ってやる」

小さく鼻を鳴らすと、ユグノー公爵は語った。

「ほ、本当ですか？」

スティアードの顔に僅かに生気が戻る。

そんな息子の反応にユグノー公爵は嘲笑をたたえた。

「ふん、せいぜい今まで貴様を育てるのにかかった金額分くらいは働け。スティアード、貴様は宿で待機していろ」

まるで物を見るような目つきで、ユグノー公爵は言った。

「は、はい！」

スティアードは怯んだ様子は見せているものの、ぶんぶんと勢いよく首を縦に振った。

ちらりとユグノー公爵の視線がアルフォンスに移る。

「さて、アルフォンス君。他家の貴族である君の処遇については私の一存では決めかねる。既にお父上には私から手紙を送っておいた。君は心労が溜まったという名目で領地に戻り、処遇を聞いてくるといい」

特に興味もないといった風に、あっさりとした口調で、ユグノー公爵が告げた。

その言葉が信じられず、アルフォンスがあんぐりと口を開ける。

「以上だ。今回の件は誰にも口外するなよ。二人とも出ていって構わんぞ」

「しょ、承知しました！　し、失礼します！」

スティアードが率先して部屋から立ち去ろうとする。

「そ、そんな馬鹿な！　俺はフローラ王女殿下の親衛騎士ですよ！　いったい何の権限があって！」

だが、アルフォンスは感情的になってユグノー公爵に反論した。

「私は出ていけと言った」

静かに、だが良く通る声で言って、ユグノー公爵は無機質な視線

をアルフォンスに送った。

「っ……」

思わずアルフォンスが言葉を失う。

それが悔しくて身体が震えたが、それ以上はユグノー公爵に逆らうこともできず、スティアードに連れられて部屋を後にするしかなかった。

その後ろ姿を怜悧な視線でユグノー公爵が見つめていたのは誰も知らない。

そうして現在に至るわけだが、

「ああ、糞が！　糞が！　糞がっ！　あの腐れ公爵が！　人を見下したように睨みつけがって！」

以上のような出来事があり、アルフォンスの機嫌は朝から最悪だった。

先ほどからムシャクシャして何度も喚き散らし、怒りの原因である人物達の文句を口にしている。

静かな森の中にアルフォンスの声が響き渡るが、周囲に人は誰も見当たらない。

いや、仮に周囲に人が見えたとしてもアルフォンスは怒鳴り散らしていただろう。

「俺は何も悪いことなどしていないというのにっ！」

アルフォンスは手綱を握る力を強め、ぎり、と歯を食いしばった。

自分を虚仮にした連中が許せない。

アリアも、ユグノー公爵、あの平民も、みんな自分を見下している。

王立学院では優秀な成績を修めていた自分をだ。

「糞っ、糞が、糞が、糞がぁ！」

森の中で一人叫ぶ。

目の前で命乞いをしている人物達の姿を想像し、アルフォンスは慈悲もなく斬り殺す自分の姿を想像した。

いや、アリアに限ってはその前に別の使い道があるかと、アルフォンスは暗い笑みを浮かべた。

そうやって虚しい方法でしか自らのストレスを発散させることができないのだ。

下衆な欲望で頭の中を染め、そうやって怒りを発散させなければ、今すぐにでも都市に戻って彼らを殺してしまいそうだった。

すると、そこで、

「おはようございます。騎士様」

アルフォンスに声をかける男がいた。

びくりと、アルフォンスが身体を震わせる。

どういうわけか、いつの間にかアルフォンスの眼下に一人の男が立っていたのだ。

いくら街道を移動しているとはいえ、盗賊、魔物、獰猛な獣など危険には事欠かない。

騎士であるアルフォンスならそこいらにいる野盗や魔物に後れをとることはないが、何が襲ってきてもいいように、怒りながらも周囲に気は配っていたのだ。

むしろ襲いかかって来たら積極的に斬り殺してやろうという心づもりで。

左右から襲われる危険性に備えて横目で森を眺めてはいたが、前方にもきちんと視線は送っていた。

だというのにアルフォンスは目の前に現れるまでこの男の存在に気づくことはできなかった。
そのことにアルフォンスが不気味さを覚える。

「何だ、貴様は？」

尋ねて、警戒しながら探るような目で男を観察する。
どうやら一人で街道を歩いているようだが、男は黒いローブを纏うだけで大した荷物は持っていない。
歳は三十代の中ごろといったところか、顔つきはそこそこ整っているが、若干青白く不健康そうだ。

「これは、これは。私はレイスと申しまして、ただのしがない旅の商人にございます。はい」

慇懃な所作でレイスと名乗った男が自己紹介を行う。
アルフォンスと視線が合うと、レイスはにやりとした。

「はっ、卑しい商人風情か。去れ。俺は気分が悪い」

レイスがただの商人にすぎないことを知ると、アルフォンスが明らかに蔑みのこもった声でそう言った。

「おや、どうかなさいましたか？　御気分がすぐれないのでしょうか？　こう見えて私めは商人にございますから、お役にたてると存じますが？」

遜(へりくだ)った口調でそう言いながらも、ずい、と、レイスが前に出る。
レイスは軽薄そうな笑みをたたえていた。

「必要ない！　薄気味の悪い野郎だ。行け！　さっさと去れと俺は言ったはずだ！」

レイスを薄気味悪く感じ、アルフォンスが怒鳴った。

「いえいえ、そうは仰らず、実は今の貴方様に相応しい商品があるのですよ」

アルフォンスの怒声に気圧されることもなく、レイスは飄飄（ひょうひょう）とした様子で話を切りだした。

「何ともふてぶてしい。流石は卑しい商人……、何だ、それは？」

レイスを嘲（あざけ）ようとして、アルフォンスが鼻で笑うと、レイスが懐から黒い宝石のような石を取り出した。

その石は不気味な黒い光を放っている。

「どうぞじっくりご覧になってください」

脳に溶け込むような、甘い、甘い、麻薬のように甘美な響きがアルフォンスの頭の中に浸透した。

「……ぁ」

アルフォンスは気がつくと、意識が吸い込まれるようにその石に目を奪われていた。

黒い、暗い、奈落の底のような、闇の宝石に。

「ほほほ。不思議な石でございましょう」

レイスが愉快そうに笑っている気がした。
アルフォンスの瞳が正気の光を失っていく。
「素晴らしい。やはりこの石は貴方に相応しいようだ。良い負の感情を発散していただけはある。こんな遠くまで飛んできた甲斐もありました」
レイスが何かを言っているが、アルフォンスの意識はぼんやりとしていて、耳には入ってこなかった。
「この石を貴方にあげます」
どうしてか、アルフォンスにはその言葉だけは理解できた。
くれる。
この宝石を俺にくれる。
「俺にくれるのか？」
「ええ、今の貴方の願いを叶えてくれるかもしれませんよ。その前に私のお願いを聞いてもらいますけどね」
アルフォンスの意識が加速度的に朦朧（もうろう）としていく。
だというのに五感が鋭敏になっていくのを感じる。
ふと、血の香りが漂ってきて、アルフォンスの鼻を刺激した。
よく見ると、男の黒いローブには、返り血のようなものが染みこんでいる。
いったい誰の血だろうか、いや、そんなことはどうでもいい。
願い、アルフォンスのそれは――。
「殺す。あの都市の、あいつらを……。俺を馬鹿にした……」

ゾッとするような冷たい声に、レイスはニヤリと陰鬱な笑みを漏らした。

「実にシンプルですね。だが、それがいい。私の願いとも一致しそうです。契約成立ですね。ほら、どうぞ。飲んでください」

ふわりとレイスの身体が宙に浮かび上がり、馬上のアルフォンスの耳元に近づきそっと囁いた。

そのまま雑な手つきでアルフォンスの顔を無造作に掴む。

反対の手には黒い宝石が握られていた。

レイスが宝石をアルフォンスの口に突っ込み無理やり飲ませる。

「ぐっ……」

口の中が熱いが、レイスが強引に唇を塞いでいるため、吐きだすことも叶わない。

呼吸が苦しくなり、耐えられずに、アルフォンスはやがて宝石を飲みこんでしまった。

すると、腹の奥底がかっと熱くなる。

やがて全身にその熱が伝わっていき、思わず吐きだしそうになってしまった。

「ほら、吐かないで。飲んでください。吐いたら貴方もう死にますよ。

飲んで。……早く。早く。早く。早く。飲みなさい」

レイスが呪詛のごとく耳元で囁き続ける。

やがてアルフォンスの表情から異物を嘔吐しそうとする気色が消え去った。

それを確認して、レイスが満足そうに笑う。

まるで玩具を与えられて喜ぶ無邪気な少年のように。
だが、どうしてだろうか。
その笑顔はまるで人の不幸を弄(もてあそ)ぶ悪霊のようだった。

第７８話　逆さま

リッカ商会のレストランで一室を借りて、リオはスティアード達と協議を行い和解契約書を作成した。
契約書を作り終えて美春達が待つテラス席に戻ると、リオは場に重い空気が漂っていることに気づく。
どうやらリオの帰りを心配しながら待っていたようだ。もっともアイシアだけはいつもと変わらない様子だったが。
セリアは状況の推移を心配し、リオに交渉を任せきりにしたことを申し訳なく思っていたようだが、日本人である美春達からは漠然と怯えた様子が伝わってきた。
それも無理はないだろう。
つい最近まで日本で平和に暮らしてきた彼女達からすれば、レストランの中で絡まれて刃傷沙汰になりかけるなんて、初めての経験なのだろうから。
この世界に来てすぐに、美春達は危うく奴隷にされかけた。
だが、彼女達にとっては色々と未知の出来事が起こりすぎたことから、一度抱いた危機感もすぐに薄れてしまい、現状を理解することで精一杯だったはずだ。
その後もリオのおかげで快適かつ平穏な生活が続いたし、言葉を学ぶことに手いっぱいで外に出る機会もほとんどなかった。
だから、今回の件はあらためて危機感を抱く良いきっかけとなったのだろう。
リオは早速、雅人に剣術を教えることを決意した。
翌日、アマンドから南西に位置する森の中にある開けた空間において、リオと雅人が向き合っている。
美春達にも棒術を教えるのだが、先に雅人に剣術を教えることにし、その様子を見てみたいという要望に応え、家の前には二人一緒

に座れるハンギングチェアがいくつか設置されていた。
「今日はいきなりだけど模擬戦をする。型と足の運び方なんかは次回から教えるから。その前に軽く準備運動をしよう」
「おっす！　お願いします！」
リオの言葉に雅人が少し緊張した様子で返事をした。
実戦においては準備運動をする暇などないが、今は訓練である以上、怪我のリスクを下げるためにも必要な作業である。
張り切った様子で準備運動を行う雅人の様子を、リオも軽く準備運動をしながら見つめていると、
「あの、ハルトさん。あまり危ない真似はしないでくださいね」
美春がおずおずとリオに声をかけてきた。
「はい。ちょっと手荒くなるかもしれませんけど、なるべく怪我はさせないように気をつけます」
美春は雅人に怪我をさせないようにお願いしているのだなと考え、リオは安心させるように笑顔を浮かべて返事をした。
二人が持っているのは実剣である。
いざとなれば精霊術で治療できるが、リオも好き好んで心臓に悪い光景を見せたいわけではない。
少し考えているところもあり、訓練中は雅人を甘やかさないと心の中で決めてはいたが、流血は極力避けようとリオは意識を引き締めた。
「雅人君もですけど。ハルトさんもです」

盲目的に自らは怪我をしない立場だと思い込んでいたリオに、美春がそんなことを言ってきた。

「私達が……雅人君が剣を習うことは必要だと思います。けど、その……、本当に危ないことはしないでくださいね。あの、無理を言っているのはわかっているんですけど、怪我だけはしないでほしいというか、えっと……」

きちんと考えがまとまる前に、衝動でリオに話しかけてしまったせいか、上手く自分の気持ちを伝えることができず、美春は言葉に詰まった。

剣を握るリオの姿を見て、何故か不安になり、気がつけば足を運んでいたのだから。

ふと、昨日、自分達の前で気丈に振る舞っていたリオの姿が美春の脳裏によぎる。

その時のリオはとても頼りがいがあったけど、遠い、とてつもなく遥か彼方の存在に思えた。

だというのに、美春はその後ろ姿に一人の少年の姿を見出してもいる。

（亜紀ちゃんにあんなことを言った後だったからかな……）

美春はアマンドの衣装屋で亜紀に伝えてしまった言葉を思い出した。

――何となくハルトさんはハル君に似ているなって……。

あの時どうしてこの言葉を亜紀に送ったのか、それは美春自身にもわかっていない。

ただ、リオと一緒にアマンドへと最初に訪れた時以来、美春は何

となくリオに自分の幼馴染の姿を重ねあわせるようになっていた。
きっかけは二人で都市の中を歩き回っている時に、道端でデジャヴを感じたことだろうか。
――昔、この人とこうして一緒に歩いたことがあるような気がする。
身に覚えはないはずなのに、この時、美春は天川春人の存在を思い出した。
それから、買物をして、一緒に下着を買う時はすごく恥ずかしかったけど、楽しいひと時を過ごすことができた。
そうして食事をして、リオの前世について少しだけ話を聞かせてもらう。
リオは前世で大学生だったという。
名前は知らない。
詳しい話はいつか状況が落ち着いたら話すと言っていたからだ。
他に知っていることといえばレストランでバイトをしていたということくらいか。
あとは幼い時にこの世界で前世の記憶を取戻し、以来、一人で各地を旅してきたということは漠然と聞いていた。
本当の名前はリオだそうで、普段はハルトという偽名を使っている。
ハルト――、この偽名も美春がリオを春人と重ねあわせるようになった理由の一つだ。
一度リオと春人が似ていると思い始めてからは、折に触れて美春はリオを意識するようになる。
そして、あり得ないことだと理解しながらも、考えるようになった。
もしかしてリオは天川春人が生まれ変わった人物なのではないか、と。

二人の雰囲気が何となく似ているから、もし天川春人が成長したら、こんな人になっているんじゃないかと想像してしまったから。
だが、リオと春人は別人のはずなのだ。
そもそも二人の年齢は一致しないのだから。
美春と同い年の春人と前世で大学生だったリオ、どう考えても計算が合わない。
美春も思い切ってリオの前世の名前を聞いてみようと思ったことはあるが、答えを聞くのは怖かった。
リオから前世の話をいつか聞かせてもらうと約束していたというのもある。
だが、何よりも、もしかしたら二度と地球に戻れないかもしれないのに、春人がこの世界にいないと確定させてしまうことはとてつもなく恐ろしかった。
七歳の頃の思い出だけど、美化しているのかもしれないけれど、春人のことを思うと、美春はいつだって胸がぽかぽかと温かくなるのだ。
その想いは今もまったく変わらない。
だから、美春は無意識のうちにリオに春人を重ねあわせるだけに留めていた。

――帰りたい。帰りたいよ。ハル君……。お母さん、お父さん。

この世界に来て、そう思い、一人で枕を濡らした夜は決して少なくはない。
だが、その翌朝、ハルトことリオの顔を見ると何故か安心することができた。
どういうわけかリオがとても身近な存在に感じられて、そこにいるだけでホッとすることができたのだ。
まるで昔からずっと一緒にいたような、そんな包容力がある。
きっと春人とリオはそういうところが似ているのだろうと、美春

は思った。
リオに春人を重ねあわせるなんて、リオに対しても春人に対しても、とても失礼なことだとわかっているのに……。
昨日、スティアード達と対面した時にリオが覗かせた横顔に、美春は胸の奥がぎゅっと痛くなるのを感じた。
その時のリオはひどく冷たい形相を浮かべていたけれど、美春には必死に何かを堪えているかのように痛々しくも見えた。
セリアはそんなことはなかったと思うと言っていたけれど――。
怖かった。
まるで知らない人に豹変してしまったように見えたリオの中にいる春人の面影が。
その時のリオは明らかに美春が重ねあわせていた天川春人とは別人だった。
美春が重ねあわせていた春人という存在が、リオの中から消えてしまうような――。
そんな気がして、ゾッとするくらいに、心が、身体が、騒いだ。
ちょっと不器用だったけど、底抜けに優しかった、思い出の中にいるあの人がいなくなってしまう。

――いやだよ、行かないで！

今、剣を握って雅人と接しているリオを見て、美春は思わず自らの思いを吐露しそうになった。
昨日ほど冷たい顔はしていないけれど、今のリオは少しピリピリしている。

「美春さん？」

いつの間にか泣きそうな顔になって、黙りこくっていた美春に、リオが声をかけた。

「えっと、ごめんなさい……。急に黙ってしまって」
心配するように顔を覗き込むリオに、美春は精一杯の笑みを浮かべて頭(かぶり)を振った。
「体調が悪かったら家の中でゆっくり休んでいてください。その、少し過激な内容になるかもしれませんから」
サッと美春の目から視線を逸らし、リオが曖昧な笑みを浮かべる。
美春はそんなリオの笑顔に陰りを見出した。
とても痛々しくて、何かを耐え忍ぶような――。
そんなリオの顔は見たくない。
「ハルトさん」
美春が不安げにリオを呼ぶ。
このままだとリオの中にいる春人が本当にいなくなってしまう気がする。
衝動的に手を伸ばしかけて、だが、しかし、ぎゅっと堪えた。
ああ、駄目だ、この人は春人ではないのだからと、そう思って。
思わず自分の弱さが嫌になる。
「はい」
美春に呼ばれて、リオはしっかりと返事をした。
僅かに覗かせた美春だけにわかる痛々しい笑みを打ち消して。
「えっと、ハルトさんも怪我をしちゃダメですよ?」

咄嗟に美春の口から出てきた言葉はそんな台詞だった。
美春が困ったように微笑する。

「はい。わかりました」

と、苦笑しながら頷くリオ。
すると、そこで、

「おーい、ハルト兄ちゃん！　準備できたぜ！　いつでもオッケー！」

少し離れた位置で準備運動をしていた雅人が、元気よくリオを呼んだ。

「ああ、今行くよ」

返事をして、リオが一歩前に出る。

「それじゃあ行ってきます」

僅かに強張った声でそう言うと、リオは美春の傍から立ち去った。
周囲の開けた空間で雅人と向き合う。

「剣の扱いには注意しないといけないけど、身体の力は抜いた方がいい。変に力が入ると動きが固くなって危ない。実剣を使うんだからな」

力が入った様子の雅人を目にして、リオが言った。
雅人はアマンドで購入した片手剣と盾を装備しており、身体には革製の軽鎧も身につけている。

リオの手にも片手剣と、普段は使わない盾が握られていた。
本来リオは盾を使わず、空いている手は格闘を行うことを前提に、丈夫なグローブだけを装着することにしている。
ゆえに盾を用いた戦闘スタイルはリオの専門ではないが、今は雅人を指導するために全く同じ装備で立ち会っているのだ。
片手剣と盾の組み合わせはシュトラール地方における標準的な剣術スタイルであり、国によって細部の違いはあるが概ねその基本は共通している。
どこの国の騎士や兵士も片手剣と盾の組み合わせた剣術は習うことになっており、それだけ使用者も多く、リオも王立学院時代に習っていたことから他人に教えることは可能だ。
こうした剣術は基本的には対人戦を前提に考案されているが、魔物や野生の獣を相手にするにあたってまったく無駄になるというわけではない。
もちろんサイズや稼働部位の動きに違いがあったり、大型の魔物を相手にするには両手剣や槍の方が向いているが、戦闘の基本を学ぶには正統派の剣術が適している。

「片手剣と盾の組み合わせの最大の利点は攻防のバランスが優れていることにあるんだけど、実際に体験してみた方が早い。好きなように俺に攻撃してくるといい」

そう言うと、小さく息を吸い、リオは完全に意識を切り替えた。
ぞわり。
殺されるはずはないのに、明確な死の匂いを感じて、対面する雅人の肌が粟立(あわ)つ。

「っ……」

リオは左足を前に出して、右足を後ろに引いた。

必然的に盾を構えた左手が前面に出る。
定石とも言える隙のない構えだった。
対する雅人は両肘を持ち上げる形でややファイティングポーズに近い構えをとっている。
両脇ががら空きになっており、かなり隙が多い。

「どうした？　早く来い」

リオが冷たい声で言い放つ。
ちくり、ちくりと、雅人の胸が痛む。
ちょっと準備運動をしただけなのに、動悸が止まらない。

「うああ！」

突如、叫びながら、雅人がリオに突撃した。
だが、怖気づいたのか、リオのすぐ傍に来ると急に立ち止まってしまう。
リオが醸し出す訓練とは思えぬ緊迫した実戦の空気、使い方次第で容易に人を殺せる実剣の重み、その全てが雅人の動きを鈍らせているのだ。

「どうした？　遠慮しなくていい。剣を振っていいぞ。今の雅人じゃどう足掻こうと俺を傷つけることはできないからな」
「っ……。らぁ！」

リオの言葉に挑発されたのか、雅人が大きく振りかぶって斬りかかった。
それは斬るというよりかは叩くと言った方が正確かもしれない。
左上から迫り来る雅人の剣撃に対して、リオは焦ることなく前に出て、その勢いを利用し盾で雅人の剣を弾き返した。

その衝撃で雅人の手から剣が零れ落ちる。

「ぐっ」

「動くな！」

リオが叫ぶ。

いつの間にか無防備になった雅人の喉元に、リオの剣が突きたてられていた。

ごくり。

すぐ傍に死が迫っていることを強く感じ、雅人が思わず唾を飲み込む。

「握りが甘い。教えた通りに握れ。それと今の自分の動きの何が悪かったのかよく考えるんだ。剣を拾っていいぞ。もう一度、俺に斬りかかれ」

鋭利な声でそう言い捨てると、リオは剣を引いた。

普段のリオとまったく異なる雰囲気に、雅人が気圧される。

訓練前からリオの空気の変化を感じていた美春だけでなく、亜紀やセリアもリオの雰囲気がいつもと違うことに気づいたようで、少し怯えた様子がリオにも伝わってきた。

横目で不安そうな美春の顔が映る。

リオはそっと下唇を噛みしめた。

「どうした？　早く拾え」

キュッと胸を締め付けるような思いを無視し、呆然とその場で立ち尽くす雅人に、リオが言った。

「っ……」

びくりと雅人の身体が震える。
すぐ傍に落ちている剣に視線が向くが、身体は動かない。
「俺が剣を買う前に言ったことを思い出せ。俺は何を教えると言った？」
底冷えするような冷たい声でリオが言った。
これは遊びではない。
強くそう意識づけるように。
実際、雅人が遊び感覚でいるようなら、リオは剣術を教えるつもりはなかった。
「……人殺しの技術……です」
おずおずと雅人が答える。
雅人はまるで親か教師にでも理不尽な理由で叱られた子供のように萎縮していた。
言葉遣いもいつもの気さくなものとは変わっている。
そこには今まで死を意識したことすらない十二歳の子供がいた。
「半分正解だ。殺す対象は人だけじゃない。襲いかかってくる生き物は全て殺さないといけない。わかったら剣を拾え」
「は、はい……」
返事をすると、雅人は地面に横たわっていた自分の剣を拾った。
震える手で剣を構えると、リオに向き直る。
「そんなに腰が引けてちゃ相手が素手でも負けるぞ。まだ握りも甘い」

無造作に近づくと、軽く剣を振り払い、リオは雅人の手から剣を弾き飛ばした。
どすり、と吹き飛んだ剣が雅人の背後の地面に突き刺さる。
「もう一度だ。拾え」
「ぁ……ぅ……」
雅人が消え入りそうな呻(うめ)き声を漏らす。
「早く」
リオがそう言うと、雅人が怯えた様子でそそくさと剣を拾う。
それから、雅人が剣を構えて弱腰で斬りかかってきては剣を弾き、隙を見せては剣を喉元に突きつけ、リオは雅人を嬲(なぶ)り続けた。
何度も繰り返すうちに雅人も少しずつムキになっていき、遠慮がなくなり始める。
「あああ！」
悔しいのか、怖いのか、雅人は泣きながら剣を振るっていた。
目には大量の涙を垂れ流し、鼻水を垂らして、それでも剣を振るっている。
見よう見まねでリオの動きを取り込んでいるのか、隙も少しずつ減っていた。
「そうだ。盾は打撃にも用いることができる。だが、不用意に振りまわすな。死角を増やすだけだ」
そう言いながら、リオは雅人の死角に剣を走らせ、喉元に剣を突

きつけた。
雅人の動きが停止する。
「う……」
雅人が悔しそうに呻(うな)る。
仕切り直すべく二人が距離を取ろうとすると、
「あ、あの！　ハルトさん！」
亜紀が大きな声でリオに呼びかけた。
「どうかした？」
チラリと視線を送り、感情を押し殺した声でリオが尋ねる。
「あ、えっと、もう少し手加減してあげてもいいんじゃ……。剣術って型とかあるんですよね？　先にそっちを教えた方がいいんじゃないですか？」
リオの気迫に怯んだものの、亜紀は睨み返してそう言った。
亜紀は弟の痛々しい姿を見て、居ても立ってもいられなかったのだろう。
殺伐とした雰囲気を放つ今のリオに物怖じせずに意見できるだけでも大したものだ。
普段は憎まれ口を叩いていても、それだけ雅人のことを大切に思っている証拠である。
「悪いが、今教えているのは型以前の問題だ」

リオはきっぱりと頭(かぶり)を振った。
「じゃあ何を教えているんですか？　これじゃ弱い者いじめですよ！」
亜紀がリオに食ってかかる。
「雅人だって怖がってます！」
続けてそう言って、雅人を指差す。
よく見ると、その身体はがくがくと小さく震えていた。
「雅人、もう止めたいか？」
リオがそう言うと、雅人はぴくりと身体を震わせた。
「止めたいのなら止めてもいい。これに耐えられないなら実戦は無理だからな」
言って、スッと目を細め、リオは雅人を見やった。
水を打ったような静寂が流れる。
亜紀だけでなく美春やセリアもアイシアも黙って雅人を見つめていた。
何かを言おうにも口を挟めるような空気ではない。
「……る」
雅人がぼそりと呟く。
「……やる！」

キッとリオを睨み、今度は叫ぶ。
リオは小さく嘆息すると、
「そういうわけだ。悪いがここで中断するわけにはいかない」
と、亜紀に向けて言った。
「っ……」
亜紀は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。
何かを言おうとしたが、雅人が睨みそれを封じる。
そうして再びリオと雅人は模擬戦を始めた。
雅人の体力に限界がきたところで、今度は美春達に護身程度にと棒術を教えることになる。
雅人の時とは異なり、まずは型からじっくりと教えることにしたのだが、亜紀はそれが気に食わなかったようだ。
自分にも雅人と同じように模擬戦をしてくれと食ってかかってきたが、リオはそれを断った。
少々ご機嫌斜めな亜紀の様子を見かねて、セリアがアイシアを引き連れて一緒に棒術を習うと言いだすと、亜紀も黙らざるを得なかったようで、渋々引き下がる。
亜紀は中々に筋が良く、先の試合を見たせいか好戦的だったが、美春は根が優しすぎるせいか、あまり棒術の才能はないようだ。
セリアは予想通りというか、かなりの運動音痴で、四人の中だと一番才能がなかった。
魔法で身体能力を上げればそれなりにはなるのだが、体を鍛えていないために肉体へのダメージが大きく無理はできない。
予想外に一番の才能を見せたのはアイシアである。
どういうわけかアイシアは棒の扱いに手慣れており、精霊術によ

り強化された驚異的な身体能力と肉体の強度も相まって、リオですら手を焼く程の強さを発揮した。
そんなこんなで訓練を終えて、すぐに夕食の時間がやって来たが、何となくギスギスした空気のまま就寝時間を迎える。
それから、リオがリーゼロッテに会うためにアマンドへ向かう日が来るまで、毎日、訓練を繰り返したものの、何となくギクシャクした日が続いた。

☆★☆★☆★

最初の訓練を行った日の夜、リオはベッドの上に寝転がってぼんやりと天井を眺めていた。

「嫌われたかな」

深く溜息を吐くと、リオがボソリと呟く。

『そんなことないよ』

霊体化しているアイシアの声がリオの脳内に響いた。
体内にいるせいで姿は見えないけれど、小さく頭(かぶり)を振るアイシアのイメージがリオの頭の中に浮かんだ。
すると僅かに胸が軽くなった気がした。

「そう……かな」

不安そうなリオの声が室内に響く。

『必要なことだったんでしょう？　戦えば死ぬかもしれないって教えておくことが』

抑揚はないが、リオをいたわる雰囲気がアイシアの声から伝わってきた。

「そうだね。本当はみーちゃん達みたいに型からきちんと教えて、その上で模擬戦をさせた方がいいんだろうけど。雅人にだけはなるべく早い段階で実戦の空気を知っておいてほしかった」

躊躇なく自らの命を奪いに来る相手と対峙した時の感覚を。

恐怖で身体の動きが鈍るあの感覚を。

それらを知って実戦に臨むかどうかで生存確率は大きく異なってくる。

最初から何らかの武術を身につけていて、格下が相手だというのなら、そのような状態でもある程度は動けるだろう。

身体に染みついた動きは嘘を吐かないから。

だが、雅人達は弱すぎる。

日本で何か格闘技を習っていたわけではないし、まだ魔法や精霊術だって使うこともできない。

セリアの発明した魔道具で大まかな魔力量を計測してみたところ、雅人達はこの世界に生きる人間族とは比較にならない程の魔力、すなわちオドを有していたが、リオのように最初から精霊術を扱う才能は持っていなかった。

精霊術を扱うためには相応の訓練を積む必要がある。

体内にあるオドの感知する訓練、体外へオドを意図的に放出する訓練、体外に放出されたオドを感知する訓練、体内のオドを制御する訓練、オドを視る訓練、空気中に漂うマナを感知する訓練、オドを操作しマナに干渉して事象を発動させる訓練。

オドの制御以下の過程を省略ないし大幅に術式に依存するのが魔法を含む魔術であり、魔法を扱うだけなら長くとも数か月の訓練で済む。

他方で、精霊術を扱うとなると才能次第では数年の年月も要する。
リオの場合は高位精霊クラスのアイシアと先天的に契約状態にあったことから、何の訓練もなしに精霊術を扱うことができたが、リオが精霊術の才能に目覚めたのは記憶を取り戻した時である。
記憶を取り戻すまで精霊術を扱えなかった理由は判明していないが、おそらくはアイシアもリオの記憶が覚醒するまで完全に睡眠状態に陥っていたのが理由だとリオは踏んでいた。
それはさておき、雅人達が正攻法で精霊術を学ぶとしたら、どんなに才能があっても習得に半年はかかるだろう。
実戦で使用することを考えるとさらに半年は必要かもしれない。
この世界において魔法もしくは精霊術を扱えることは絶対的な強者であることを意味する。
つまり、魔法か精霊術を身につけるまでの間、美春達は圧倒的な弱者の地位に立たされたままこの世界で暮らさなければならないのだ。
雅人達に誰かを殺すつもりはなくとも、誰かが雅人達を殺そうとするかもしれない。
今後、外を出歩くとしたら、そういった事態が生じない保証はないのだ。
もし、その時、その場に、自分がいなかったら、雅人達は自分で自分の身を守るしかない。
リオは雅人達には死んでほしくはなかった。
だから、リオは雅人に剣術を教え、美春と亜紀に棒術を教えることにしたのだ。
――じゃあ何を教えているんですか？　これじゃ弱い者いじめですよ！
そう言った亜紀の怒りの顔が、その後ろにいた美春の泣きそうな顔が、リオの脳内にこびりついている。

嫌われたってかまわない――、それで美春達の生存確率が上がるのなら。
そう考えて心を鬼にしたのに、実際に嫌われたかもしれないと思うと怖くて仕方がなかった。
雅人にだけ人殺しの技術を教えて、美春達には自衛の技術しか教えていないのは、リオのエゴだ。
美春達には人殺しの苦行を負ってほしくないという。
雅人には、能書きを並べて口で説明することもなく、実際に殺すくらいの心構えで向き合った。
言葉で伝えようとしても甘えが出てしまうし、きっと十分にこの世界の厳しさを伝えきることはできないだろうから。
万が一の時は雅人に率先して美春と亜紀を守ってほしいから。
他方で、リオは美春達に棒術を教えることを選んだ。
だが、殺すつもりで向き合うことはしなかった。
もちろん棒術でだってやりようによっては人を殺すことはできるが、殺傷性だけなら槍の方が高いのだ。
仮に地球に帰るかもしれない時のことを考えて、美春達にはできるだけ人殺しをしてもらいたくないと本能的に忌避感を抱いているのだろう。
リオは自嘲的な笑みを漏らした。
きっと美春達は今すぐにでも地球に帰りたいと思っているかもしれない。
こんな世界にいるよりも地球に帰る方が美春達にとっては確実に幸せに生きていられるのだから。
（それなのに俺は自分の気持ちを伝えてみーちゃんをこの世界に引き留めようとしているのか）
どこまでいっても自分のことしか考えていないことが嫌になる。
今すぐにでも美春に気持ちを伝えたいし、地球に帰ってほしくも

ない。
彼女のことが好きだから。
美春には何があっても手を汚してほしくない。
汚れるのは自分の役目だから。
それらは押し付けという名のエゴだ。

『ねぇ、春人』

ふと、アイシアの声がリオの頭の中に響いた。
その声に反応して、ぴくりとリオが身体を震わせる。

『春人は美春に自分の気持ちを伝えるのが怖いの？』

まるで今のリオの気持ちを見透かしたかのように、アイシアがそんなことを聞いてきた。

「怖くないよ。気持ちは伝える。タイミングは色々あってちょっと計りかねているけどね」

間髪入れずに、僅かな苦笑を漏らしながら、リオが答えた。

『じゃあ春人が怖いのは貴方が変わってしまったから？』

ぞくりとして、リオは目を見開いた。
あえてぼかした自分の深層心理を見透かされて。

「……そう、かもね」

数瞬の間をおいて、ゆっくりと頷く。
復讐に燃える自分を、必要とあらば人も殺す自分を、既に人を殺

している自分を、まだ美春達には見せていない醜悪な自分を――。
美春は知ったらどう思うのだろうか。
復讐のためならどんな地獄でも進むと、覚悟ならもう決めたはずなのに、唯一それだけは怖かった。

「けど、気持ちは伝える」

今度は決然とした声だった。

『じゃあ美春が地球に帰りたいと言ったら、春人は手伝う？』

ざわりと、リオの胸が再び騒いだ。
だが、リオはその気持ちを振り払い、

「手伝うよ」

と、そう答えた。

『じゃあ美春が他に好きな人がいて、その人のために帰るって言ったら、それでもいいの？』

いつにも増して冷たい声で、アイシアが尋ねる。

「嫌だけど……いいよ。それがみーちゃんの幸せにつながるなら」

感情を押し殺したリオの声。
自分の中にいるアイシアの揺らぎが伝わってきた気がしたが、リオはそれを無視した。

『春人……』

無機質な声なのに、リオには何故かアイシアの声が涙ぐんでいるように思える。
だが、何かを悟ったような表情を浮かべると、リオはそっと笑った。
「大丈夫だよ」
そう、呟いて。

第７９話　転生者の会合

リオはリーゼロッテの屋敷へと一人で訪れた。
彼女の屋敷はアマンドに隣接する湖を一望できる湖畔の丘にあり、ちょうど都市の中心から北東部に位置する。
色合いは白を基調とした木造の優雅な豪邸で、いかにも貴族の住居らしい風格を漂わせていた。
邸宅の周囲には平面幾何学式庭園が広がっており、庭を囲うように立派な塀がそびえ立っている。
屋敷の周辺は富裕層の居住区となっているようで、スペースにはゆとりがあり、開放感に溢れる空間が広がっていた。
周囲に広がる湖を見渡せば背後に浮かぶ森や山とのコントラストが非常に美しく、散歩をしたら随分と気持ちが良さそうである。

「初めまして。私はハルトと申します。こちらはリーゼロッテ＝クレティア様がお住まいになるお屋敷でしょうか？」

殷懃に口上を述べると、リオは門番の兵士に屋敷の主の名を尋ねた。

「はっ。さようでございます」

質の良さそうなコート状のクロースアーマーを身に着け、腰に品のある片手剣を下げているリオの姿を目にすると、若い門番の兵士が畏まった様子で敬礼した。
おそらくは貴族かそれに準じる人物と思ったのだろう。

「ハルト様。お話は伺っております。どうぞこちらへ」

と、思いきや、どうやら既に話が伝わっていたようだ。
門番の兵士は簡単なボディチェックを行ったものの、剣を預かることはなく、リオを庭の中へと招き入れた。
パッと見て警備の兵が少ないことから、武装した人間を中に招き入れても大丈夫なのかとリオは考えたが、どうやら一見すると人の見えない場所に警備の人材が配置されているようだ。
不必要に客を威嚇しないための措置だろう。
庭に視線を滑らせると、至る所からそれとなく様子を窺われていることに気づく。
門番の兵士は庭に控えていた侍従二人に口頭で事情を説明すると、リオに礼をして門へと戻った。
そのまま若い侍従が案内を引き継ぐ。

「初めまして。ハルト様。私は当屋敷の侍従でコゼットと申します。こちらは侍従見習いのクロエにございます」
「よ、よろしくお願いします！」

コゼットと名乗った侍従はリオよりは年上だが、二十歳手前といったところだろうか。
容姿は整っており、街中で見かければ確実に男達からナンパされるであろう美貌を持っている。
コゼットは自らとクロエと呼ばれた少女の挨拶を行うと、深くお辞儀した。
クロエも可愛らしい容姿をしているが、リオよりも若く、歳はラティーファや亜紀と同じくらいだろうか。

「ええ、よろしくお願いします」

リオは一瞬、クロエの顔に見覚えがあり、視線を固定したが、違

和感を覚えられぬようすぐに目礼した。
クロエも先ほどからリオの顔を直視し、どこか不思議そうに見つめていたが、客に対して失礼な態度だと思ったのか、少し緊張した様子を見せながらもぺこりと頭を下げた。

「アリアより話は伺っております。リーゼロッテ様が此度の件を謝罪申し上げたいとのことです。ご昼食の用意がございますので、どうぞごゆるりとお過ごしくださいませ」

と、コゼットが言う。

「予想しておりましたが、リーゼロッテ様にお目通りが叶うとは恐縮ですね」

少し意外な風にリオが語ってみせる。

「はい。リッカ商会の会頭として直接にお会いしたいとのことでして。どうか過度に緊張なさいませんよう。主もそのようにお望みでいらっしゃいますので」
「さようですか。承知しました」

リオは小さく微笑を浮かべ、承諾の返事を述べた。
その悠々とした態度に、コゼットが極僅かに目を丸くし、リオに気取られぬよう、ほうっと息を漏らす。

「では、こちらになります」

コゼットはそう言うと、リオを案内し始めた。
屋敷に入ると、明るく、白く、開放感があり、シンプルな美しいデザインの内装が目に入ってくる。

リオとしては華美に装飾した重厚感のあるデザインよりは、こちらの方が趣味に合う。
そうして屋敷の内装を横目で楽しみながら歩いていると、

「こちらでございます」

コゼットとクロエがとある部屋の前で立ち止まった。
ゆっくりと扉を開けて、部屋の中に入る。
そこは少人数用の食事にと作られた食堂であった。
部屋の中は広すぎず狭すぎずと、少人数で食事をする分には快適な広さで、品の良い家具や小物が設置され、室内の空間を彩っている。
果たして、そこで、リーゼロッテ＝クレティアは品のある笑みを浮かべてリオを出迎えた。
そのすぐ後ろにはアリアが控えている。

「よくいらっしゃいました。ハルト様」

ドレスの裾をつまんでお淑やかに一礼するリーゼロッテ。
まだ幼さを残しながらもややおっとりとした彼女の顔立ちは、見る者を魅了する気品と愛くるしさを併せ持っていた。
身に纏っているダークブルーを基調としたドレスは、細身ながらに芸術的にバランスの整った身体のラインを強調させており、初心な男も女慣れした男も思わず虜にしてしまいそうな艶やかさを醸し出している。
そんな淑女然とした彼女の姿を目にし、リオが僅かに目を見開く。
だが、その理由は決して目の保養になるからではない。

（ああ、やっぱりそうか）

頭の中で欠けていた複数のパズルのピースがぱちりとはめ込まれ、その全体像がリオの脳内に浮かび上がった。
リオはこの少女と一度だけ対面したことがある。
シュトラール地方でもあまり見かけることがない綺麗な水色の髪、生まれ持った天性の美貌、何よりも、ただそこにいるだけでにじみ出るような気品。
数年前、ベルトラム王国を立ち去ってから未開地に入るまでの間に、リオが出会った人間の数は非常に少ない。
まともに会話をした人間は手で数えられるくらいだ。
ゆえに記憶違いということはないだろう。
そう、リーゼロッテはかつてリッカ商会の店舗でリオを接客した少女であった。
どうして数年前に彼女が一般の店員に混ざって接客を行っていたのかは不明だが、案外、その見た目とは裏腹に悪戯心のあるお転婆な少女なのかもしれない。

（厄介だな）

この屋敷に来てから、リオが一度でも面識を持ったことのある数少ない人物と、既に二人も遭遇している。
いったいどういう巡りあわせなのだろうか。
何か予感めいたものを感じずにはいられない気がする。
先ほど出会ったクロエも何となくリオの容姿に既視感を抱いたようだが、どうやら見覚えがあるのはリーゼロッテも同じようだ。

「えっと、どこかでお会いしたことがありませんでしたっけ？」

と、小さく首を傾げながら、リーゼロッテが尋ねた。
彼女も伊達に若くしてリッカ商会を一流の商会に成長させたわけではない。

貴族としても商人としても人の顔と名前を覚えるスキルは必須だ。
今までに数えきれないほどの人間と出会ってきた彼女ではあるが、重要人物達の顔と名前は正確に覚えるようにしていた。
リオの場合は重要人物であったというわけではないが、シュトラール地方では極めて珍しい黒髪をしていたことや、貴族然とした教養も持ち合わせていたことから、それなりに強く印象付けられていたりする。
ゆえに、髪の色が変わっただけにすぎないリオに対して強い既視感を覚え、リーゼロッテは不思議そうにリオの顔を見つめていた。
ここで年頃の男ならば、彼女に会った記憶になくとも「会ったことがある」、と答えてもおかしくはなさそうであるが、

「公爵令嬢である貴方とお会いしたのは初めてと記憶しておりますが……」

リオはとっさに言葉の綾をついてとぼけた。
ここで素直に答えて、かつてセリアに送った手紙のことを思い出され、その関係にまで言及されても面倒であると思ったからだ。
後になってリーゼロッテが思い出したら「まさか公爵令嬢が職員として働いているとは考えもしなかった」とでも答えておけばいいだろう。

「そう……ですよね。申し訳ありませんでした。ご存知かもしれませんが、私はリーゼロッテ＝クレティアと申します。このアマンドの代官であり、リッカ商会の会頭を務めております。以後、お見知りおきを」

違和感は抱いているようだが、それ以上詮索するのは失礼と考えたのか、リーゼロッテは頭（かぶり）を振って自己紹介を始めた。

「これはどうもご丁寧に。ご挨拶が遅くなり申し訳ございません。お初にお目にかかります。リーゼロッテ様。御前に侍りますはハルトと申します。この度は御身の御厚意に心より感謝申し上げます」

言葉遣いには相応の敬意は込めているものの、それ以外の何かを込めた様子はなく、リオが落ちついて名乗りを上げる。

そのまま恭しく首を垂れると、その堂に入った姿にリーゼロッテが感心したように小さく息を吐いた。

「よしてください。ご迷惑をおかけしたのはこちらなのですから。今、この瞬間、私はクレティア公爵家の長女ではなく、リッカ商会の会頭としてこの場に立っております。先日は我が店の不手際により御気分を害されたことと存じます。誠に申し訳ありませんでした」

リーゼロッテはゆっくりと頭を振ると、リオに先の一件の謝罪を申し入れた。

そうして、この瞬間だけはクレティア公爵家の立場を捨て置き、深く頭を下げる。

「ご容赦ください。和解にご助力くださったことにより、私は既にリッカ商会から十分にお気持ちを頂戴しております。その上でリーゼロッテ様から直々に謝罪のお言葉を頂戴してしまっては誠に心苦しく存じます」

リオが平民であり、リーゼロッテが公爵家の人間であることを考えれば、文句なしの対応と言っていい。

ここで被害者の立場に胡坐をかいて多少尊大な態度をとったところで不敬になることはないが、かといって何の考えもなしに高圧的に出るのはただの恥晒しである。

保身のために被害者の立場を維持しつつも、今後の関係を考えて

厄介者扱いされないために相手方の立場を最大限に敬うのが無難であろう。

「こちらこそ恐縮です。今後は二度と先のような一件を起こさぬよう肝に銘じる所存ですので、手前どものレストランを今後もご利用いただけますと幸甚(こうじん)です」

「接客業は後手に回らざるを得ないことが多々あるかと存じます。特に客同士の問題は悩ましいことでしょう。あのレストランのサービスに不満はありません。この都市に立ち寄った際にはあらためて利用いたしますことを誓いましょう」

「そう仰っていただけると嬉しい限りです」

ホッとしたように微笑み、リーゼロッテは再度、頭を下げた。

「いつまでも立ち話をさせてしまうのも心苦しいですわ。さ、どうぞおかけください。月並みですが謝罪の意味を込めて御食事を用意いたしましたので」

自己紹介からの流れで始まった先日の一件についての話が落ち着いた頃合いを見計らうと、リーゼロッテはリオに椅子へと座ることを勧めた。

リオの傍に控えていたコゼットがスッとテーブルに近づき椅子を引く。

リーゼロッテに小さく目礼をして、リオは席に座った。

シュトラール地方においては、貴族から食事時の前後に招かれるということは、「そのまま食事でもどうですか？」と誘いを受けることを意味する。

実際に訪問して食事時になった際には、必要以上に形だけ謝絶する姿勢を見せずに、軽く礼を告げて食事を摂るのが暗黙のマナーだ。

昼時に招待しておいて食事を出さなかったり、昼時に招待されて

おいて食事を拒んで帰ることは、失礼な行為とされている。
もちろん招待された時に断りを入れておけば話は別であるが。
もっとも平民はそういったマナーを知る由もないのだが、リオはベルトラム王国の王立学院で貴族のマナーについても学んだことがあったため、それを知っていた。

「ご丁寧に痛み入ります。ご挨拶のしるしとして、これをどうぞ」

そう言って、リオはリーゼロッテに見えるように小さな酒樽を掲げた。

「そちらは？」

主であるリーゼロッテがその中身を尋ねる。

「私が所有しているお酒が入っております。リーゼロッテ様のお口に合うかは自信がありませんが、中々の一品ですのでよろしければお飲みください。甘めのお酒なので食後酒として飲まれるとよろしいでしょう」

中に入っているのは精霊の民が作った酒の一つだ。
どこぞの酒好きなエルダードワーフが飲み切れないくらいに酒を渡してくれたために、リオの時空の蔵の中にはまだまだ大量の酒が眠っている。

「まぁ、嬉しいですわ。私もお酒は嗜みますのよ。甘いお酒とは興味があります。ありがたく頂戴いたしますね」

礼を述べて、リーゼロッテが無邪気に可愛らしい笑顔を見せる。

「せっかくですから今日の御食事の後に頂いてもよろしいでしょうか？」
「はい。もちろんです」

先の謙遜とは裏腹に、リオは渡したお酒の味には絶対の自信を持っている。
貴族として極上品を知っていたであろうセリアをして極上品以上の品と言わしめた酒だからだ。もっとも精霊の民が作る酒としては標準的な品なのだが。
とはいえ、人間族が作るお酒しか飲んだことのないリーゼロッテの気を引くには十分だろう。
これまでに客観的に得られた情報を踏まえると、リーゼロッテは貴族としてはかなり良識的な人物だ。
先の一件の和解契約書の効力をきちんと保障してもらうためにも、心証を良くしておくに越したことはないだろう。
本当は米、醤油、味噌なんかを渡しても彼女の注目を大きく引き付けることができると踏んでいるのだが、シュトラール地方のどこで栽培しているのか尋ねられても答えにくいし、他にも情報を秘匿する上で不都合な点が多い。

「クロエ、ハルト様に頂戴したお酒を食後に配膳してくれるかしら？」
「はい。お嬢様。承知しました」

答えて、クロエが酒樽を持っていったん下がっていく。
リーゼロッテは再びリオに視線を戻すと、

「先の一件でハルト様が連れていらした方々はお見えにならないと伺いました。本来ならば直接にお会いして謝罪のお言葉をお伝えするべきなのでしょうが、よろしければ私からの謝罪の言葉をお伝え

くださりますか？」

まずは様子見程度にと、この場にいない美春達の存在に言及した。

「承知しました。あまり多人数で参上してもご迷惑をおかけすると考えたのですが、確かにお伝えしましょう」

リオがしっかりと諾了する。

「ご遠慮なさらなくとも良かったのですよ？」

心苦しそうな面持ちを浮かべ、リーゼロッテがリオの顔を覗き込む。

「いえ、これまで貴族の方にお会いする機会がなかった者ばかりですから、参上するのは恐縮だと申しておりました。こちらの地方で用いられている言葉に不慣れな者もおりますので。御配慮痛み入ります」

リオは微笑を浮かべて頭を下げた。

「そうなのですか？　そういえばハルト様のお顔も近隣諸国の系統とは少し異なるように思えますが、まるで母国語のように堪能でいらっしゃいますよ」

シュトラール地方には各国で通じる標準語が存在し、後は個々の地方ごとに言語が発達している。

「私は生まれが近隣の国でしたから」

「あらまあ、そうだったのですね。では、お連れの方々の中に故郷

の知り合いがいらっしゃるのでしょうか？」
「はい。そんなところです」
曖昧に肯定して、リオが頷く。
すると、そこで、
「お待たせいたしました」
いったん退出したクロエを含む侍従数名が食卓に料理を運んできた。
まずは食前酒とともに前菜のテリーヌとサラダが配膳されると、二人が食事を開始する。
食前酒は発泡性のワインで、アルコールの低いドライなやや甘い味わいのオーソドックスなものであった。
グラスの脚を持って乾杯をすると、食前酒の味を楽しみながら、テリーヌやサラダを舌に運ぶ。
オードヴル用の小さなナイフとフォークを使い上品に食べる様子を見て、リーゼロッテが感心したような視線を送る。
「あの、興味本位な質問で大変恐縮なのですが、ハルト様は冒険者の職に就いていらっしゃるのでしょうか？　こういう言い方をすると冒険者の方々に失礼なのかもしれませんが、ハルト様は冒険者とは思えぬほどにマナーが洗練されているようにお見受けしたもので」
と、リーゼロッテがリオの職を尋ねた。
こうした席においては、食事の内容やマナーの美しさはもちろん、それらから派生した話題を尋ねることは特段失礼に当たるわけではないから、リーゼロッテの質問は十分にマナーの範囲内である。
「いえ、私は冒険者ではございませんよ」

リオは薄く笑みを浮かべて頭(かぶり)を振った。
「恥ずかしながら、各地を旅しておりまして、魔物を倒しては魔石を売って、風来坊のような生活をしております。マナーは過去に通っていたとある国の教育機関で身に着けたものです」
リーゼロッテからこういった質問が来ることはあらかじめ想定済みだ。
ゆえに、すべてを教えるわけではないが、リオは嘘は含めず、あえてぼかして事実を伝えることにした。
「あら、そうだったのですか。それは立ち入ったことを伺ってしまい……、申し訳ありません」
「いえ、もう昔のことですから」
特に気にした様子もないといった風にリオが薄く笑う。
「ではこちらには旅の途中に立ち寄ったということでしょうか？」
「はい。最近はガルアーク王国の中を旅していたのですが、アマンドは非常に居心地が良いですね」
「まぁ、ありがとうございます。そう仰っていただけると光栄ですわ」
リーゼロッテが嬉しそうに微笑む。
だが、すぐにその表情に影が差すと、
「ですが、最近、少しばかり気になることが起きてまして。アマンド周辺の魔物が活発な動きを見せているのです。これまで定期的に冒険者の部隊を派遣して間引いてきたのですが、ここ最近になって

冒険者の失踪も増えてるようでして」

リーゼロッテは物憂げにアマンド周辺で起きている悩みの種を口にした。

「魔物の活発化ですか。初耳ですね」

リオが暮らしているのはアマンドから南西の森の中であるが、異変を察知したことはない。

家の周辺には結界魔術がかかっていることから、基本的に魔物が立ち入ってくることはないし、アマンドへ来る時は空を飛んで来てしまうため、魔物と遭遇することもほとんどないからだ。

「ええ、巷では少し前に目撃された黒い竜がこの森の近くにいるからだなどと騒がれておりますね。魔物達の動きが活発なのも竜を恐れているからではないかと。原因は現在調査中ですが」

「黒い竜ですか？」

と、リオが訝しげに尋ねる。

リーゼロッテが「あら」と少し意外そうな声を上げた。

「御存じありませんでしたか？　約十日前にガルアーク王国の領土内で一体の黒い竜が空を飛ぶ姿が目撃されました。足取りは掴めておりませんが、飛行していた方角的にはちょうどアマンドがありまして。アマンドでは目撃証言もないため、この付近にその竜がいるのではないかと騒がれているのです」

「なるほど、そういう話でしたか」

リーゼロッテが丁寧に情報を教えてくれたことで、リオにも少しずつ事態が呑みこめてきた。

「目立って行方不明者が出始めたのはここ十日ほどです。ゴブリン程度なら問題はないのですが、オークやオーガの姿も散見されると報告が挙がっております。他にも魔獣種の魔物も多数確認されておりますので。まだ街道沿いでの被害はありませんが、外を出歩くようでしたら頭の片隅に留めておいてください」

ゴブリン、オーガ、オーク――、いずれも二足歩行の人型をした魔物だ。

多少の知恵はあるのか、簡単な武具を持ったり衣類を身に着けてはいるが、言葉は通じず、凶暴かつ好戦的な存在である。

厳密にはゴブリンとオーガが鬼人種とされ、オークが豚人種とされているが、いずれも人間族の女を好んで子を孕ませようとする。

ゴブリンならば武装した大人でも相手をすることができるが、オーガやオークとなると素人が武装した程度ではとても敵わない。

「承知しました。貴重な情報をお教えいただきありがとうございます」

礼を告げて、リオは小さく目礼した。

現在の居住地に異変は見られないが、あまりにも魔物の活動が活発になっているようなら住む場所を変えるか、こちらから打って出て周辺にいる魔物を大々的に狩った方がいいかもしれない。

そう考えながら、リーゼロッテに礼を告げると、リオは会話をしている間に配膳されたパンとスープに口をつけた。

スープを飲み終えると、タイミング良く冷えた白ワインがグラスに注がれる。

すぐにクリームソースのパスタも運ばれてきて、それに合うように計算された白ワインを口にし、しばし歓談を楽しむ。

やがて肉料理が運ばれ、それを引き立てる絶妙な赤ワインと一緒

に楽しむと、あっというまに食後酒とデザートの時間がやって来た。
「実に素晴らしい料理の数々でした。料理長の腕が非常に良いのでしょうね」
「ありがとうございます。料理長に代わりましてお礼申し上げますわ」
そんな会話をしていると、デザートのお菓子と一緒にリオが持参したお酒が配膳された。
リーゼロッテはグラスに入った酒の香りを上品に嗅ぐと、
「こちらは果実酒でしょうか。気高く甘い芳醇な香り。ああ、素晴らしいですね。香りだけでこのお酒がどれだけ素晴らしいものかわかります」
うっとりしたように感想を告げた。
そのまま吸い込まれるように食後酒を口に含むと、
「っ……！」
その目を大きく見開いた。
感動のあまり身を震わせ、思わず目を輝かせる。
あまりの美味さにしっかりと味わう前に酒を飲みこんでしまったほどだ。
味を楽しむことも忘れて飲み干したことを後悔して、再度、酒を口に含む。
グラスに入っている量はそれほど多くないため、じっくりと舌の上で転がしながら、その味わいを楽しんだ。
「度数はやや高めで重厚。なのに水の如くスッと飲める口当たりで

すね。私の知る限りで最高のお酒に勝るとも劣らない味わいです。が、このようなお酒に心当たりはないのですが……」

酒の余韻にひたりながらも、ようやく冷静さを取り戻すと、リーゼロッテは小さくコホンと咳払いをして感想を告げた。

これまでに相当な数の高級酒を味わって生きてきたリーゼロッテであるが、今飲んだ果実酒はそれらの中でも群を抜いている。

これほど上質なお酒ならば酒好きな貴族に売れば金貨十枚くらいの値段がついてもおかしくはない。

いや、上手いこと希少価値を付けたりやオークションを利用したりすれば、その価格はさらに上がるだろう。

他にも重要人物達への贈り物として利用できたりと、値段以上の活用の仕方が色々と思い浮かぶ。

だが、机の上に置かれている酒樽には産地や生産者を示す刻印が焼きこまれていないため、そこだけは疑問に思った。

「それは祝着でございますね。献上した甲斐があるというものです」

僅かに愉快そうな笑みを漏らし、リオが言った。

「あの、ハルト様。これほどのお酒をいったいどちらで？」

何でも不用意に質問を投げかけるのはマナー違反であるためしないが、こうして話題のきっかけとなっている以上は尋ねずにはいられない。

リーゼロッテはやや身を乗り出して質問を投げかけた。

「それは私の知り合いが自作したお酒です。人間嫌いで市場には流出させていない品なんですよ」

「なるほど。道理で樽に刻印が焼きこまれていないわけですね。そ

の方を紹介していただくわけにはいかないでしょうか？」
「申し訳ありませんが。人間と関わるのが嫌で、人里から隠れるようにして暮らしているくらいに筋金入りですからね」
言って、リオは苦笑しながら、小さく肩を竦(すく)めた。
「そう……ですか」
リーゼロッテの顔が曇る。
だが、教えられないと言われても、これほどの酒をそう簡単に諦めることはできそうになかった。
「では、ハルト様に仲介人を依頼してこちらに卸してもらうことはできませんか？　これほどのお酒でしたらこの樽の量で仲介料と合せて金貨十枚はお支払いします。取り分に関しましてはそちらの判断にお任せ致しますが」
ゆえに妥協点として最初に考えられる案を提示してみることにした。
「そう、ですね。安定供給できる保証はありませんし、極少量で良いというのなら、了承してもらえる可能性はあるかと思いますが……。情報の秘匿は絶対条件になるでしょう」
リオは条件を厳しくし、控えめに肯定的な返事をするだけに留めた。
ちらりとリーゼロッテを見やり、その反応を窺う。
「はい。少量であってもかまいません。是非、お願いします。情報の秘匿はもちろんですし、むしろこのお話を他の方に持って行かな

いことをお約束していただければ、ハルト様個人にも仲介料とは別に追加で謝礼をお支払いしましょう」

リーゼロッテは専属契約を結ぶべく、リオに口止め料まで支払うと言う。

予想通りというべきか、予想以上にというべきか、彼女は随分とこの酒の価値を高く評価しているようだ。

「承知しました。ご返事にひと月ほど時間を頂くかもしれませんが、よろしいでしょうか？　とりあえずお話だけは伝えてみますので」

確約することはせず、リオは前向きに検討する姿勢を示した。

「ええ、問題ございませんわ。料金と謝礼につきましては正式に契約が成立してからということでよろしいでしょうか？」

「はい、かまいませんよ。返事を御報告する際にはこちらへ直接に伺ってもよろしいでしょうか？」

「そうですね。お願いします。ただ、私は基本的にアマンドに滞在しているのですが、都市の外へ行くことも多いものでして。不在に備えて、侍従にも話を通しておきます」

「かしこまりました」

こうして二人の間で仮の交渉が成立した。

リーゼロッテは満足そうな笑みを浮かべると、再び食後酒を口に含んだ。

リオもグラスを口に運び、思惑通りの展開になったことに喜びを感じながら、その酒の味を楽しむ。

その後はしばらく歓談を楽しみ、小一時間ほど経過する。

すると、ふとリーゼロッテが申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「ハルト様。最後に一つだけお願いがあるのです」
「何でしょうか？」
リーゼロッテの雰囲気が変わったことを察し、リオも真面目な表情を浮かべる。
「お願いというのはハルト様が被害者となられた先の一件についてです」
「あの件が何か？」
「はい。現在、我が国の隣国であるベルトラム王国にてクーデターが起きたという事実はご存知でしょうか？」
「ええ、存じ上げておりますが……」
「ならば話は早いですね。現在、我がガルアーク王国はベルトラム王国の反革命軍を支援しております。そして、先の一件でハルト様に害をなそうとした貴族達は二人とも反革命軍の指導者的立場に位置する人物達の子弟です。ここまで申し上げればお話はご理解頂けるでしょうか？」
「なるほど。和解契約の効力を覆したいとでも仰いますか？」
リオは面白そうに笑みを浮かべて、そう尋ねた。
「まさか。あの契約の罰則はリッカ商会の名において執行いたします。ただですね。これはリッカ商会の会頭ではなく、この国の一貴族としてのお願いになるのですが……」
言って、リーゼロッテが小さく嘆息する。
「あの契約書はハルト様が先の一件を口外することについては何も制約されておりませんよね？　それでハルト様に無暗にあの件を他言されてしまうと、反革命軍とそれを支持するガルアーク王国とし

ては少々困ってしまうことになりまして……」
「そういうことでしたか」
リオは口元に浮かべていた微笑を引っこめ、再び真面目な顔つきを浮かべた。
顎に手を当て、考えるそぶりを見せると、
「指導者的地位にいる人物の子息がくだらない騒ぎを起こして牢獄に入りかかった。世間体はあまりよろしくありませんね。つまり、先の一件を黙っていてほしいということでしょうか？」
と、そう尋ねた。
「はい。お話が早くて助かります。仲裁した立場にありながら、こうして一方の側の代理人となってお願いをすることは好ましくないとは思うのですが……」
「あの契約書の効力だと彼達の保護者もこちらには接触しづらいでしょうからね。お話はわかります。私も彼達の浅慮さには少し呆れたものですから。心中お察し申し上げます」
そう語りながら、リオが小さく苦笑する。
リーゼロッテも苦笑して、同意するように頷くと、
「お願いをご承諾いただけるのでしたら、私への貸しにしていただいてかまいません。この件に見合う範囲で私から何らかの形で借りをお返しいたしますので」
と、そう言った。
「……なるほど。こちらからのお願いもご承諾いただけるのでした

ら、そのお願いを聞き入れてもかまいませんよ。それで貸し借りはなしにしていただいてもかまいません」

僅かに思案した様子を覗かせると、リオは条件付きで肯定的な返答を行った。

「そのお願いとは？」

「今後、万が一の事態が起きた時、私が指定する人物達を保護して頂きたいのです。保護する人数は最大で五人まで。保護してもらいたい時は私か被保護者達から保護を申し出ると思います。どうでしょうか？」

リオの言葉に、リーゼロッテは一瞬、考え深い顔を覗かせると、

「なるほど。その保護対象となる方達の素性を伺っても？」

と、そう尋ねた。

「レストランで私と一緒にいた五名です。そのうちの一人は他国の貴族ですが、他の者達は平民です」

リオが端的にそう告げると、

「なるほど……、貴族ですか。つまりは匿わなければならない事情をお持ちということですか？」

リーゼロッテは瞬時に事情を察し、スッと目を細めてリオを見つめた。

「はい。そうなります。申し訳ありませんが、名は伏せたままにさ

せていただきます。何なら条件を煮詰めるために契約書を作成してもかまいません」
「そうですね。もう少しお話を伺いたいですし、お願いします」
秘匿したい事情があるというのならば、契約を締結もしてない段階で名を伏せたがるのは十分に理解できるが、何も聞かずに契約を結ぶのは軽率である。
リーゼロッテとしては可能な限り情報を引き出したいところだ。
それから、さらに一時間ほど、リオとリーゼロッテは話し合いをすることになる。
ピリピリした様子はないが、二人は忌憚なく堂々と交渉を行った。
「ふふ、今日は本当に素晴らしい時間を過ごすことができました。実のあるお話もできましたし、今後も末永くよろしくお願い致しますね」
果たして二人の間で契約が締結された。
契約成立時にはお開きの時間になってしまったのだが、別れの挨拶を告げるリーゼロッテは中々にご機嫌な様子である。
「はい。本日はお招き頂きましてありがとうございました。こちらこそどうか今後ともよろしくお願いします」
リオも満足そうに笑みを浮かべて別れの挨拶を告げた。
今日は軽く面識を持つだけに留めておこうかと思っていたのだが、予想以上に収穫を得ることができた。
これで万が一の時はリーゼロッテに美春達の保護をお願いすることができるようになったのだから。
「それでは」

「ええ、またお会いできますことを心よりお待ちしておりますわ」
屋敷の前で握手を交わすと、リーゼロッテは立ち去るリオを見送った。
「さて、ナタリー」
リオの姿が消えたところで、リーゼロッテは一人の女性の名を呼んだ。
「はい」
すると、見送りの侍従の中から一人の女性がスッと姿を現した。
「尾行して簡単にハルトさんとその周辺人物の情報を集めてきてちょうだい」
「承知しました」
主の命に従い、ナタリーはリオが立ち去った方向に早足で向かった。
「スカウトはなされなくてよろしかったのですか？」
どんどん小さくなっていくナタリーの後姿を眺めながら、背後に控えるアリアが尋ねた。
「今日のところはね。今後も確実に会うことにはなるでしょうし。冒険者でもないそうだから、焦る必要はないわ。一応の人柄も知れたし、それなりに得る物もあったからよしとしておきましょう」

有事の際には訳ありの貴族と平民を匿う契約はしてしまったものの、今日の面談でリオからもたらされたものは多い。
最大の収穫はあの美酒だろう。
セリア達の詳しい情報を伏せたまま保護を依頼する代償として、リオは他にも販売できるお酒を複数種類、それも一定量、贈与すると告げた。
リーゼロッテとしては美酒はあれ一つだと考えていたのだが、まさか同等の味の酒が複数種類もあるとは考えてもいなかった。
あの酒の利用価値を考えると、相当に魅力的な条件である。
おまけに酒の販売の仲介も積極的に頼み込んでくれると確約し、仮に仲介が成立しなくとも自分が貰い受けた酒を定期的に卸してくれるとなれば、訳ありの貴族を一人くらい世間の目に触れぬよう匿ってもお釣りがくる。
本当はまだまだ酒の種類はあって、中には秘蔵の霊酒もあるのだが、そんなことも知らず、リーゼロッテは小さくほくそ笑んでいた。

第８０話　忍びよる魔の手（前書き）

今回は過激な戦闘描写があるかもしれません。

第８０話　忍びよる魔の手

リオがリーゼロッテの屋敷を離れてから少し後、アマンド西部の門付近に異形の集団が現れた。
異形と言っても姿形は人間に近く、少し薄汚れてはいるが衣類も纏っている。
だが、彼らの容姿は明らかに人間ではなかった。
一体一体の容姿は異なるが、その数は十体。
視点が定まっているとは思えぬ真っ白な眼球、灰色に染まりきった皮膚、背中に生えた蝙蝠のような翼、間近で確認すればどう見ても人間でないことは明らかだ。
交易都市であるアマンドは基本的に人の流入出を制約しない。
東西にある門の近くには兵士の詰所が置かれ、門には常時、見張りの兵士が待機しているが、一部の例外を除いて通行人に対して検問を行うことはしない。
人が多すぎて個別に検問を行うことは現実的ではないし、人を自由に出入りさせた方が、都市経済の活発化に繋がるからだ。
ちなみに現在でも拡張中である都市の周辺には囲いの柵が設置されているが、その気になれば柵を乗り越えることは可能である。
それはさておき、見張りの兵士達は現在、森の中から現れた異形の集団を目にして、遠巻きながら明らかに動揺した様子を見せていた。
すると、異形の集団の近くを、たまたま魔物の狩りから帰ってきた冒険者達が通りかかる。
「ちっ、今日はツイてねぇな。せっかく大人数でパーティを組んだってのによ。魔物が全然いやしねぇ。魔物は増えたって話じゃねぇのかよ」

「ハッ、おおかたテメェの息が臭くてゴブリンも逃げたんじゃねーのか」
「んだとぉ？」

憎まれ口を叩きつつも、ゲラゲラと活気のある笑い声が響き、剣呑な空気が流れることはない。
これがこの冒険者達の日常的なやりとりなのだろう。
この瞬間はまだ幸せな日常が続いていたはずだった。

「っ！」

だが、およそ十メートルほどの距離に突っ立っている異形の集団に気づくと、冒険者達の動きがギョッとして完全に硬直する。
ジロリと真っ白な眼球で睨みつけられたような気がして、ぞくりと身体が震えあがった。

「お、な、なんだ、お前ら？」

やがて冒険者の一人が異形の集団に誰何（すいか）する。
眼球や肌の色、それに背中の翼はともかく、顔付きから体格まで一応は見た目が人間に近いせいか、人の言葉が通じるのではないかと思ったのだろう。

「……」

だが、異形の集団は恐ろしい程に静まり返り、言葉を発することなく、冒険者達を見つめていた。

「ま、魔物か？」
「こんな魔物は見たことがないぞ」

魔物かと思ったが、冒険者達は今までこんな魔物に遭遇したことはなかった。
沈黙を貫く異形の集団を前にして、剣を抜くべきか、このまま話しかけるべきかと困惑していると、

「え？　あ、ああ！」

後ろにいた冒険者の一人が大声を出して、際立って体格の良い一体の個体を指差した。

「も、もしかして……お前、ジーンか？」

どうやら異形の集団の中に見慣れた男の面影を有する個体がいたらしい。
肌の色が違いすぎるせいでよく見なければわからない程度なのだが、男は長年の付き合いでそれに気づいた。

「ジ、ジーンだと？」
「いや、あいつは一週間くらい前に行方不明になったんじゃ……」

困惑の色を見せる冒険者達。
ジーンと呼ばれた個体は自らを呼んだ冒険者達をジロリと凝視した。

「はは、なんだよ。ジーン、妙に凝った仮装だな。冒険者を止めて旅芸人にでもなろうってのかよ」

引きつった笑いを浮かべて、冒険者の一人がジーンと呼ばれた個体に話しかけた。

仮装にしては妙に生々しい姿ではあるが、人間は常識外の出来事に遭遇すると無理やり常識に当てはめて考え込もうとする生き物である。
ゆえにその男は心の中で警鐘を響かせながらも、相手がジーンという自らの知り合いであると信じて話しかけることにした。

「あ？」

だが、一瞬、ジーンと呼ばれた個体の目が赤く光ったように見えて、冒険者達が疑問符付きの言葉を発する。
その次の瞬間、異形の集団は一斉に行動を開始した。
肉体の限界を超えて魔法で身体能力を強化したような速度で、一息に冒険者達に迫る。
瞬く間に接近すると、一体の個体が全力で一人の冒険者の胴体を殴りつけた。

「ごっ」

そのまま拳に体重を乗せると、冒険者の身体に風穴が空く。

「グ、グハ、グハハハハッ」

ソレは不気味な声を上げて高らかに笑った。
その笑い声は明らかに人間のものではない。

「え？　あ？　っふ」

身体を貫かれた男が恐る恐る眼下を見下ろす。
何をされたのか、一瞬、男にはわからなかった。
だが、ソレは愉悦に染まった笑みを浮かべると、現実を教えこむ

ように――、

「ガガガ」

ざく、ざく、ざく、と尖った爪で抉るように男の腹を突き刺した。

「お、おっふ。あ、あああ、あああああ！」

腹部を包み込むような生暖かい感触に、男が絶叫する。

混乱しているのか、顔を前後にガクガクと震わせているが、やがてその動きも止まり、男の命はこと切れた。

あまりにも猟奇的な殺人劇に、言葉を失い、呆然と立ち尽くしていた冒険者達だったが、

「てっ、テメェ！」

ようやく目の前の存在を敵と認識した。

各々が剣を抜き、ソレに斬りかかる。

「がぁっ。てぇ……」

だが、冒険者達の持っていた剣は弾かれてしまった。

灰色の皮膚は鉄のように硬質化しており、男達が装備している安物の剣では刃が通らないようである。

有効打を与えるには、冒険者達が全力の一撃を叩きこむか、魔法で身体能力を強化する必要があるだろう。

だが、男達は身体強化の魔法を使うことはできなかった。

「な、何だ、テメェら！」

堪(たま)らず、答える可能性など皆無に近いのに、再び冒険者達が誰何(すいか)する。
すると、ニヤリとソレが笑ったように見えた。

「ガ……」

異形のソレ――、その正体は果たして魔物であった。
千年以上前に起きた神魔戦争期より姿を現した超常生命体。
その生態系は不明で、魔石を核として生きており、死ぬと魔石を残して跡形もなく消滅する人の敵。
では、魔物の討伐を生業とする冒険者達ですら目にしたことがないこの魔物の正体は何なのか。
それは屍食鬼――、人を喰らう元は人であった魔物で、人を喰らい続けなければ弱っていずれ活動を停止する呪われた存在――、グールである。
知能は低いが一応は自我があり、狂ったように人を襲い喰らっていく、それがグールだ。

「グガッ」

生理的な嫌悪感を誘う声を漏らすと、残りのグールも一斉に行動を開始した。
すべての個体が冒険者達に迫る。
冒険者達は慌てて武器を構えると、躊躇せずに迫り来る魔物達に斬りかかった。
だが、斬れない。
刃は間違いなく届いているのに、生半可な力では打撃程度の攻撃にしかならないのだ。

「グガガ」

苛烈な反撃が冒険者達を襲い、やすやすと人間の身体を破壊していく。
冒険者達の数は十二人、グールの数は十体だが、数の利が有利に働くことはなかった。
まるで地獄絵図のような虐殺が一方的に繰り広げられる。

「っごほ……」

そして、今、吐血の音が響き、さらに一人の命が失われた。
飛び散る血飛沫（ちしぶき）、充満する血の香り、周囲に轟（とどろ）く絶叫。
元が人間とは思えぬ怪力でグール達は冒険者達を蹂躙していた。
固い皮膚により守られた手で殴ればそれはハンマーの如き鈍器となり、鋭い爪の生えた手を突き刺せばそれは槍となり、単純に掴み握るだけでそれは万力となる。
グール達は自らの武器をいかんなく使用して冒険者達をなぎ倒した。

「あ……、お、あ……」

あまりに凄絶な光景に、門番の兵士達の動きが固まる。
中には直視に耐え兼ねて嘔吐する者まで現れた。
完全に頭が追い付かない。
総毛立つような恐怖だけが感じとれた。
あれでは戦いにすらなっていない。
やがてその場にいた冒険者達が死に絶えると、グール達の視線が都市の門に向けられる。

「ひっ……」

ぞくり。
本能的な死の予感が兵士達に襲い掛かり、思わず悲鳴を漏らした。
都市の門から百メートルほどの距離に連中はいる。
あの身体能力では数秒ほどで埋まってしまう距離だ。

「っ……ぁ……」

兵士達がそれぞれが何かを言いかけたが、喉に詰まった。
怖い、殺される、殺される、死ぬ、死ぬ、殺される、怖い、死ぬ、殺される、怖い、死ぬ。
頭の中を死と恐怖のイメージが覆い尽くす。
ところが、グール達は兵士達に興味を失ったようで、殺したばかりの冒険者達を貪り始めた。
――お前達などいつでも殺せると、そう言わんばかりに。
それはまるで捕食者と餌の関係だ。
その光景にとてつもない吐き気を覚える。
その時、がさりと、グール達のすぐ側にある森の木々が揺れた。

「ゲゲッ」

中から現れたのはゴブリンだった。
いや、ゴブリンだけではない。
後続から次々と魔物達が姿を現していく。
オーク、オーガ、ヘルハウンド、マッドボア、ベアコング、ハンタースネーク――、人間族の領域に生息しているよく知られた魔物の大集合である。
その総数は目測で数えきれない。
おそらくはこの付近の森に暮らす魔物をほとんどかき集めたのではないだろうか。

「ほ、ほ、ほほほほ、報告だ！　ランス！　お前は詰所にこの事を報告しに行け！」

そこでようやくその場にいた隊長格の兵士が泡を食ったように叫んだ。

こんな軍勢の魔物に攻められれば、アマンドの全兵力をかき集めなければ対抗できない。

加えてあの灰色の化物達に襲われたら――。

都市の壊滅――、最悪の結末が脳裏をよぎる。

「は、はい！」

恐怖で竦んだ兵士達だったが、隊長が叫んだことにより、ようやく頭も体もぎこちなくだが動き始めた。

指示を受けた見習いの兵士が飛ぶように都市の中へと走っていく。

殺した冒険者達の死骸を貪り食うグール達とは裏腹に、その他大勢の魔物達はアマンドに向けて進撃を開始した。

（早く態勢を整えてくれよ）

去りゆく新人の背中を目にし、隊長は内心でそう呟いた。

決してただでは死んでやらない。

一体でも多くの魔物を殺して、一分一秒でもこの場を死守しなければ――。

兵達はみなこのアマンドという都市が好きだった。

リーゼロッテが治めるこの都市が、他の都市よりもずっと暮らしやすいこの都市が、平和なこの都市が――。

理不尽にすら思えるこの状況に直面して、兵達は自らの使命に遵守して、身命を賭すべく覚悟を決めた。

☆★☆★☆★

「あのグール達の指揮は任せましたよ。アルフォンス君」

慌てふためく兵士達の様子を少し離れた森の中から眺めながら、黒いローブを着たレイスが愉快そうに言った。

「三分の一の適合率をクリアして集めた貴重な個体達なんですから大切に使ってください。彼らも餌に飢えているでしょうから、食事を摂らせたら行動を開始するように」

「ワカッタ」

アルフォンスと呼ばれた存在が荒々しく呼吸をしながら返事をした。

その個体的特徴はグールと似ているが、皮膚の色は漆黒であり、他の個体とは決定的に異なる。

レイスの言葉を理解できるだけの知能も有しているようだ。

「他の魔物達は陽動です。好きに動かせておけばいいでしょう。併せてグールを五体、都市の中に放って一緒に陽動として使いなさい。貴方は時間を置いて戦力をおびき出したら、残りのグールを率いて代官のリーゼロッテを殺しに行くこと。いいですね」

「アア。絶対ニ殺ス。リーゼロッテ、アノ公爵、アノ女、アノ男」

不気味な声に怒気を込めてアルフォンスが答えた。

理性を失ったようにしか見えない真っ白な眼球は、いったい何を捉えているのだろうか。

それを知る者は本人だけだ。

「まぁこの戦力で都市に暮らす令嬢一人も殺せなかったら君はかな

りの無能です。それでは、私は所用がありますのでこれで。せいぜい頑張ってくださいね」

そう言って、踵(きびす)を返すと、レイスはふわりと宙に浮かんだ。

そのままかつてアルフォンスという人間だったグールの前から飛び去ると、アマンドから南西の方角へと向かう。

「はぁ、やっぱり強化体でもグールはグールですね。頭が悪いのが欠点だ。まぁ彼の場合は元があまりよろしくないのかもしれませんが」

嘆息すると、レイスが面倒くさそうにぼやく。

そのまま南西の方角をスッと目を細めて睨みつけると、

「今はあちらにいる存在の方が気になります」

と、そう言った。

第８１話　騒乱のアマンド

アマンドが西門から魔物の襲撃を受けた時から、少し時刻は遡る。
今から訪れる混乱が嘘のように、都市の中は大勢の人で賑わっていた。
都市の通りにはいくつもの露店が並んでいる。
リオはそれらを眺めながら、時には足を止めて、買い物を楽しむ振りをしていた。
そんな真似をする理由は一つ。
ひっそりと自らを尾行する存在を察知したからだ。
おそらくはリーゼロッテの配下だろうと、リオは踏んでいる。
彼女の立場を考えれば、契約関係に立つ相手の素性くらいは詳しく知っておきたいはずだ。
そして、リオの素性を証明する身分証のようなものが存在しない以上、リーゼロッテの側で独自に情報を収集するしか方法はない。
ゆえにリオは屋敷を出た段階で尾行がないか警戒していた。
すると、案の定、屋敷を離れてから間もなくして、自らを追跡し始める存在に気づく。
気配を消して周囲に溶け込む技術は中々のものだが、相手の誤算はリオの警戒範囲が常人のそれを大きく超えていたことである。
人の少ない高級住宅街から尾行を開始したことも悪手であった。
流石のリオも人ごみに紛れて尾行を開始されたとしたら発見は難しかったはずだ。
先ほどからうろうろと市場を見て回ったが、ずっと一定の距離を保って貼りつかれていることから、行き先がたまたま一致しただけという可能性はないだろう。
リオは自らが尾行されていると断定した。
とはいえ、保険をかけて二重に尾行を行っている可能性もある以

上、相手が一人と決めつけるのは早計である。
いざとなれば人のいない場所に駆けこんで、精霊術で姿を消して都市を抜け出すこともできるが、あまり行動に不可解な点を残して情報を与える真似はしたくない。
適当に時間を置けば人間の集中力などすぐに限界が来る以上、自然に見失うような形で監視を撒くことくらい容易いはずだ。
そう考え、もう少し散策を続けようと決めたところで、都市の中に鐘の音が鳴り響いた。

「お、おい。これって……」
「あ、ああ……」

その鐘の意味を理解しているのか、リオの周囲にいる群衆の中には示し合わせたように顔を見合わせる者達がちらほらと見受けられた。
鐘の音とともに、怒号が、悲鳴が、罵声が遠くから聞こえてくる。

「や、やばいのか？」
「何があったんだ？」

一時的に都市に滞在している者は鐘の意味を理解できていないようだが、周囲の喧騒によって危機感を抱き始めた。
しばらくすると、流れるように西側から大量の人が押し寄せてくる光景が見えて、あっというまに一帯が騒然となっていく。

「お、おい、あれ……」
「やだ、怖い」
「逃げろ……」
「逃げろ！」

波に押されるようにして、次々と走り出す市民達。
群集心理から、それまで平静を装っていた者達まで、恐慌状態に陥ってしまったようだ。
交易都市であるアマンドは人の流入が多く、例日のように市が開かれ、広場や路地には出店が立ち並んでいる。
店が人を呼び、リオがいる路地にも買物目当てで散策している人間が大勢いるのだ。
それだけの人間が一斉に走り出せば、どうなるかは結果を見るまでもない。
路地の中は瞬く間にごった返して、群衆は先を競い、東を目指した。

「逃げろー！」
「どけ！」

我先にと人を押しのけながら進む人々から逃れるように、リオが冷静に通路の端へと寄っていく。
警報の鐘が鳴り響き、群衆が避難しているということは、おそらく何らかの外敵が都市の西門に現れたのだろう。
ならば既に都市の兵士や冒険者達も迎撃に出ているだろうし、すぐにこの場に魔物が魔物がやって来ることはないはずだ。
ここで人波に紛れてしまっては、かえって動きにくくなるだけだと判断し、リオは一先ずは様子を見ることを決めた。
ついでに自らを尾行していた者の正体を確認するべく、視線を張り巡らせる。
すると視線の先にリーゼロッテの屋敷の者と思われる侍従の恰好をした女性がいることに気づく。
侍従の服を着ているだけでは尾行を証明する何の証拠にもならないが、顔を覚えることはできた。
女性は突発的に起こったパニックを受けて、尾行を続行するべき

かどうか、僅かに葛藤しているようだ。
だが、やがて何かを決意したような表情を浮かべると、人波から逃れるように通路の端へと避難した。
おそらくはリオと同じことを考えたのだろう。
他にも同じ判断をして通路の端に避難した者がちらほらとおり、そのいずれもが武装している人間であった。
都市の兵士もいるが、冒険者らしき恰好をした者達もいる。
数分ほど時間が経過し、ようやく人の流れが落ち着き始めたところで、

「よし、アマンド兵士団集合！」

突然、上質な装備を身に着け、端整な顔つきをした男性兵士が、きびきびとした声を出して、周辺にいた兵士達に招集をかけた。
すると近くにいた五人ほどの都市の兵士達が素早く集合し始める。
一緒にリオを尾行していた侍従――、ナタリーもその場に駆け寄った。

「冒険者の諸君も集合してくれたまえ！」

続けて、周囲に散らばっている冒険者達にもお呼びがかかる。
付近にいた総勢十名ほどの冒険者達が機敏に動き出した。
リオは面倒事に巻き込まれる前に立ち去ろうとしたのだが、

「おーい、そこの坊主！　君も冒険者だろ。早くこっちに来てくれないか？」

端整な顔つきの男性兵士がリオの背中に声をかけた。
兵士でも冒険者でもないのに都市の中で武装する人間など極めてまれな存在であり、男性兵士もその先入観からリオを冒険者と断定

したのだろう。
やむを得ず、リオがそちらに顔を向ける。
すると、男性兵士が愛想の良い笑みを浮かべて手を振っている姿が見え、リオは小さく嘆息しながら歩み寄った。
集合に遅れているリオに対して、兵士や冒険者達から不機嫌そうな視線が向けられる。

「坊主は新人か？　冒険者は緊急時に滞在する都市の兵士として臨時採用される決まりになっているだろ。こういう時は素早く行動してくれないと周囲に迷惑がかかるぞ」

と、咎めるのではなく、諭すような口調で男性兵士が言った。
冒険者ギルドが存在する都市に外敵の襲来があった場合、代官はその都市に滞在している冒険者達に対して緊急依頼を発動することができる。
その依頼の内容は極めてシンプル――、都市の防衛だ。
理由もなく緊急依頼を断れば罰則が科せられ、最悪のケースではその都市から追放処分を受けることになるのだが、冒険者でないリオはそんな規則の存在は知らない。

「自分は冒険者ではないのですが」

と、リオは端的に自らの身分を打ち明けた。
心証は悪いだろうが、詳しく説明するより、こう言った方が手っ取り早いだろう。
すると男性兵士が困ったような表情を浮かべる。

「え、あー、そうなのか？　冒険者のタグは……着けてないようだが。そうか。なるほど……」

ちらりとリオの首筋に視線を移すと、男性兵士が悪びれたように言った。
冒険者は首に冒険者ギルドに所属していることを示すタグを身に着けることが義務付けられている。
タグには冒険者の個人情報が記載されており、身分を偽る意図でタグを外すと重い罰則が科せられる決まりとなっていることから、安易に嘘を吐く者はいない。
仮にリオが嘘を吐いていたとしても、今後もこの都市で活動するようなら、後になってギルドに照会すればすぐ判明することである。
この場にいる冒険者達に顔見知りはいないようだし、指揮官の男はリオの話が本当であると信じることにした。

「そうか。引き止めて悪かったな。早く逃げるといい。出来れば逃げ遅れて襲われている市民がいたら助けてくれると助かる」

男性兵士は肩を竦めると、リオにそう伝えた。

「ええ、承知しました」

リオは小さく嘆息し、頷いた。
そのまま踵を返して立ち去る。

「けっ、腰抜け野郎が……」
「まぁいいだろ。ビビっている奴がいても役にはたたねぇからな」
「あんなもやし小僧がいても足手まといになるだけだ」

そんなリオの背中に、冒険者達から口々に揶揄する声が向けられた。
むろん彼達とて好き好んで戦いたいわけではない。
だが、武器を持ち戦いに身を置く職に就いてしまった彼達からす

れば、戦闘すべき場面で真っ先に逃げ出すことは周囲から後ろ指をさされる程に恥ずべき行いであるという共通認識がある。
ゆえに、冒険者ではないとはいえ、仮にも武装していながら立ち去ろうとする姿を見て、やっかみからリオを臆病者と蔑むのも無理はなかった。
口にこそ出さないが、冒険者だけなく、兵士やナタリーもどこか釈然としない表情を浮かべている。
冒険者達の声は聞こえていたが、リオは眉を顰めることもなく、真っ直ぐと歩を進めた。
リオとしては周囲の目なんてどうでもよいのだ。
そんなことよりも美春達の方が心配なのだから。
美春達はアマンドからはそれなりに離れた場所にいるが、危険が及ばないという保障はない。
護衛としてアイシアがいることから滅多なことでは万が一の事態が生じることはないだろうが、それでも徒に時間を消費したい気分でもなかった。

「兵士でも冒険者でもない以上、彼に戦闘を強制することはできない。気持ちはわからんでもないが、その感情は敵さんにぶつけろ」
まとめ役の男性兵士が困ったように苦笑し、不満を抱く者達を宥める。
そのまますぐ傍に控えていた侍従――、ナタリーに視線を送ると、
「さて、ナタリーちゃん。情報が不足しすぎているが、とりあえず俺はこいつらを指揮して西門から都市の中心部に通じる大通りへ向かう。君はリーゼロッテ様に報告を」
そう言って、話を切りだした。

「はい。了解です。元よりそのつもりでしたが、マティスさん、御武運を」

敬礼して頷くと、ナタリーは毅然とした笑みを浮かべた。

「おお、いいねぇ。可愛いナタリーちゃんに応援されたとなると、俄然やる気が出るよ」

マティスと呼ばれた男がおどけたように肩を竦める。

朗(ほが)らかに笑うその顔は軽薄にも見えたが、不思議と人を不快にさせるものではなかった。

「はいはい。馬鹿なことは侵入者を撃退した後に言ってください。私は急ぎますので、一足先に行かせていただきますよ。『身体強化(ハイパーフィジカル)魔法(アビリティ)』」

呪文を唱え、魔法陣の光が身体を覆うと、ナタリーは疾風ともいうべき速度でその場を後にした。

「流石、侍従隊の子なだけはあるねぇ。俺らも頑張らないと」

ひゅうと小さく口笛を吹くと、マティスはにやりと笑みを浮かべた。

「よーし、野郎ども！　まずは中央広場に向かう。行くぞ！　付いて来い！」

と、マティスが大きく呼びかける。

すると、「おう！」と、兵士と冒険者達は力強く返事を重ねた。

☆★☆★☆★

先ほどまでいた都市の西側寄りの通りを離れ、リオは中央広場までやって来た。

都市の各地で魔物との戦闘が繰り広げられているが、西門から真っ直ぐに伸びている中央広場手前の大通りには防衛線が敷かれ、総勢で二百人近い兵士と冒険者達が魔物と乱戦を繰り広げている。

「おらおら、どんどん殺していくぞ！　オーガは二対一、オークは三対一になるように連携を組め！　自信のない奴とあぶれた奴はゴブリンを狙え！　殺した魔物の魔石の回収は後回しだ！　人型以外の魔物は冒険者連中に任せろ！」

そこに部下の兵士や冒険者達に怒号を浴びせるように指示を下す指揮官と思われる男性兵士がいた。

精悍な身体つきをした壮年の男性兵士は歴戦の風格を漂わせている。

数は魔物の方が多いが、上手く指揮を行い、通路の狭さを上手く活用し、流入を食い止めているようだ。

とはいえ、流石にそのすべてを防ぐことはできていないようで、討ち漏らしている魔物が少しずつ都市の奥へと向かっている。

仕方なくリオも移動する片手間で襲いかかってくる魔物達を斬り殺していく。

戦闘員以外には人をほとんど見かけないが、魔物はリオの予想以上にアマンドの奥深くにまで侵入しているようだ。

先ほどからリオも何度か魔物に襲われており、すべて一刀の下に斬り伏せているが、防衛線を抜けた魔物の数が減ったようには思えない。

「ちっ」

緑色のゴブリン数体が襲いかかってきたため、小さく舌打ちをしながら、リオは剣を振って斬り殺した。
出来ることならば完全に人気（ひとけ）のない場所に移動し、精霊術で空を飛んで立ち去りたいところだが、戦闘中とはいえ空を飛べば目立つ。
精霊術で身体能力と肉体の強度を強化し、足早に進んで行くしかないだろう。
おそらく東門は人でごった返していることから、適当に都市周辺の柵を飛び越えて抜けるのが一番だ。
そうして斬っても斬っても姿を現す魔物に辟易としているうちに、ようやく魔物の数も減ってきたのだが、

「や、こ、こないで！　あっち行って！」

リオは十歳くらいの少女がゴブリンやオークと対面している姿を目撃してしまった。
何やら地べたに倒れて苦しんでいる女性を守るように立ち塞がっている。

「ミレーユ、逃げなさい！」

女性の両脚にはゴブリンが放った木の矢が突き刺さっており、身動きがとれないようだ。

「だ、駄目だよ！　お母さんも一緒に逃げないと！」

ミレーユが肩越しに倒れる母の姿を確認する。
突き刺さった矢を抜こうにも激痛が邪魔をして上手く力が入らないようだ。

「私はもう歩けないの。ね、お願い。逃げて。お母さんなら大丈夫だから」
「っ、駄目だよ！　絶対に逃げないんだから！」
必死に逃走を促す母親に、ミレーユが泣きそうな声で反論する。
そんな彼女にゴブリンとオーク達が醜悪な顔を愉快そうに歪めて近づいていく。
その距離が残り数歩となり、目の前に立ちつくすオークの巨体に、ミレーユが恐怖で顔を引きつらせると、
「ゴフッ」
背後から一足で間合いを詰め、リオがオークの首に足刀を叩き込んだ。
強烈な蹴りによって、体長二メートル半を超えるずんぐりとしたオークの巨体が、砲弾のように軽々と吹き飛んでいく。
「へ……？」
目の前にいた巨体が一瞬で姿を消し、ミレーユが間の抜けた声を出す。
「ガッ」
続けて、リオは残りのオークの胴体に掌底を叩きこんだ。
オークの巨体が数メートルほど浮き上がり、地面に崩れ落ちる。
今度はゴブリン達の腕を乱雑に掴むと、明後日の方向に投げ捨てた。
高位置から地面に叩きつけられた衝撃で、ゴブリン達が痛みで悶絶する。

それぞれ当たり所が悪かったのか、やがて息絶えると、魔物達の身体がサラサラと灰になり、魔石を残して完全にこの世から消滅する。

リオはそれを確認すると、

「大丈夫か？」

そう言って、ミレーユに怪我がないか、目視でサッと確認する。

「は……い」

ミレーユはぽかんとした表情でリオの顔を見つめていた。

そんな彼女を尻目に、リオが倒れている女性に歩み寄る。

「……矢を抜いて治療します。少し痛いですけど我慢してください」

リオは女性の顔に僅かな既視感を抱いたが、すぐにそれを放棄して、そう伝えた。

「は、はい」

女性の返事を聞くと、リオはふくらはぎと太ももに突き刺さっていた木の矢を抜いた。

「っ……」

女性が痛みで顔を歪める。

「『治癒魔法（ヒール）』」

リオは小さく穴の開いた女性の脚に手をかざすと、カモフラージュ用の呪文を口にし、精霊術で手早く治療を開始した。
魔法陣が発生しない以上、女性が魔法に対して多少なりとも知識を有していれば違和感を覚えるだろうがやむを得ない。
幸い女性は痛みで目を瞑っており、ミレーユは背後で不安そうにその様子を眺めているせいで、魔法陣が浮かんでいないことには気づいていないようだ。
そうして二十秒ほどかけて完全に治癒を終えると、
「これで大丈夫です。本当は走るのは控えた方が良いんですけど、緊急時ですから止むをえませんね。とりあえず立てますか？」
と、そう語りかけた。
「は、はい。ありがとうございます！　何と礼を申し上げればよいのでしょうか……」
女性が恐縮したようにリオに頭を下げる。
すると、そこへ、
「レベッカさん。どうかしましたか？」
リーゼロッテの屋敷へ帰還する途中のナタリーが通りかかった。
レベッカと呼ばれた女性がぺこぺことリオに頭を下げる姿を見て、僅かに警戒したような視線をリオに向ける。
「このお兄ちゃんが魔物達から助けてくれたんだよ！　お母さんの怪我も治してくれたの！」
そこでミレーユが横から嬉しそうに事情を説明した。

興奮して飛び跳ねるその姿に、ナタリーが呆気にとられたような表情を浮かべる。

「えっと……」

訝しげにリオを見やるナタリーだが、地面に転がる数本の木の矢、出血の跡、そしてミレーユの様子を見る限りは嘘を言っているとは到底思えない。

しばし視線を彷徨わせ、状況を整理し終えると、

「そ、そうだったのですか。申し訳ありません！　あ、いえ、ありがとうございました！」

ナタリーは何故か謝り、続けて礼を告げた。

謝られたことに「ん？」と、リオが僅かに首を傾げる。

リオはナタリーが自分を尾行していた存在だと気づいているが、ナタリーはリオに尾行が気づかれていたとは思ってもいないはずだ。

ひょっとして尾行していたことでも謝っているのだろうかと考えたが、それは違うだろう。

実を言えばナタリーはリオのことを誤解していたのだ。

先ほどのリオとマティスとのやりとりはナタリーもすぐ傍で見ていたのだが、仮にも武装している身でありながら、都市の一大事に手助けをする気がゼロとしか思えない発言をして、逃げるようにその場を後にした薄情者――、それがナタリーがリオに対して抱いた印象である。

もちろん、それが八つ当たりに近い不満だとわかってはいるが、ナタリー個人としてはあの状況下でほとんど葛藤する様子も見せず、あっさりとあの場を後にしたリオのことはあまり好ましくは思えなかった。

だが、今のミレーユの話を聞く限りだと、リオがしたことは薄情

者がする行いとは正反対の行動である。
必死にリオに頭を下げるレベッカの姿を目にし、もしかしたら良からぬことをしようとしているのではないかと邪推してしまった自分を恥じて、ナタリーは慌てて勘違いしてしまったことに謝罪、もとい都市の住民を守ってくれたことに礼を告げたのだった。

「いえ、たまたま通りかかっただけですから」

まさか誤解されていたとは露にも思っていないが、小さく苦笑し、リオは頭(かぶり)を振った。

「それじゃあ俺はこれで。貴方達も東門に避難するのなら一緒に来ますか？」

何となく微妙な雰囲気が漂い始めたことを察し、リオはナタリーに断りを入れてさっさとその場を後にしようとした。
ついでにレベッカとミレーユの二人に声をかける。
出来れば人と一緒に行動などしたくはないが、流石にこの親子二人を放置して自分一人で先を進む真似ができる程にリオも非道ではない。

「あ、待ってください！」

呼び止めようとナタリーがリオに声をかけたその瞬間――。
リオは背後から急接近する気配を察知した。
とっさに振り返ると、そこには灰色の肌をしたグールがナタリーに襲いかかろうとしている姿が映る。

「危ない！」

リオは叫ぶと同時に駆け出し、グールとナタリーの間隙に潜りこんだ。
反応する間もなく動いたリオにナタリーが「え？」と疑問符付きの声を上げる。
鋭い爪を用いた貫手でナタリーの心臓を突き破ろうとしていたグールの手を掴み、思いきり捻ると、リオはその勢いを利用し相手の体勢を崩して投げ飛ばした。

「ガッ……」

水平に飛ばされ、やがて地面に落下すると、グールの口から小さく呻(うめ)き声が漏れる。
リオに捻られた腕は人体構造上ありえない曲がり方をしていたが、グールはその腕を掴むと無理やり向きを正した。
そうしてみるみるうちに損傷が修復していく。

「な、なんですか。あの化物は……」

その光景を目にし、呆然とナタリーが呟く。
リオは油断なくグールを見据えたまま、

「さて、俺も知りませんが、おそらくは魔物でしょうね。厄介なことにどうやらまだまだ元気なようです」

面倒くさそうに、そうぼやいた。
肩越しにちらりと後ろを確認すると、レベッカとミレーユが不安そうに寄り添っている姿が見える。
リオは小さく嘆息すると、

「貴方は後ろの二人の護衛を。アレの相手は俺がします。ダガーを

装備しているということは少しは戦えるのでしょう？」

決然とした表情で、ナタリーに言った。

「で、ですが、あの魔物は明らかに他の個体とは異なります。とんでもない身体能力と治癒能力を持っているようですし、二人で連携して戦った方が……」

ナタリーが眉を顰(ひそ)め、とっさに反論した。

彼女は侍従ではあるが、戦闘訓練も受けていることから、そこいらの騎士に負けないくらいの強さはあると自負している。

だが、先ほど一瞬だけ見えたグールの速度は、魔法で肉体の限界ギリギリまで身体能力を強化したくらいのものであった。

加えてあの再生能力である。

勝てないとは思わないが、初見の相手である以上、他に何らかの厄介な能力を持っていないとも限らない。

ゆえに、ここは安全策をとって、慎重を期して戦うべきだろうと判断したのだが、

「まぁ、あれくらいなら大丈夫でしょう。お互いの戦闘スタイルも知らない状態では連携のしようもありません。様子を見て危なそうだったら援護してください」

リオはナタリーに向かって、心配無用とばかりに飄飄(ひょうひょう)と答えた。

ちょっと散歩にでも行くと伝えるように、気軽に言って見せたリオに、ナタリーがぽかんとしてしまう。

すぐに悩ましげな表情を浮かべ、心の中で葛藤すると、

「……わかりました。ではお任せします」

ナタリーは断腸の思いでリオにグールの相手を任せることにした。
リオの発言内容には一理あったし、レベッカ達の護衛が必要なのも事実であるからだ。

「ええ、貴方は後ろにいる二人に危害が及ばないように、よろしくお願いします。他に魔物が襲い掛かってこないとも限りませんから」
「はい。承知しました」

答えて、ナタリーは背後にいるレベッカとミレーユを見やった。
二人は後輩の家族であり、ナタリーも個人的に付き合いがないわけではない。
何よりも彼女の主であるリーゼロッテの大切な市民達だ。
絶対に守らなければ――。
生真面目なナタリーは言われた通り、絶対に二人の身を守ると心の中で誓った。

「お兄ちゃん頑張って！」
「ああ」

リオがひらひらと手を振り、ミレーユに応える。
グールは完全に腕の回復を終えたのか、警戒したようにリオを威嚇していた。
だが、リオは悠然とグールに歩いて近づいていく。
ナタリーはそんなリオの背中をじっと見つめていた。
彼ならば大丈夫かもしれない――。
鍛えた兵士や冒険者達と比べると少し華奢な身体だが、どうしてだろうか。
ナタリーの目にはその背が絶対的な安心感をもたらしてくれるように映った。

第８２話　迎撃に備えて

アマンドの中央広場からやや東に進んだ路地で、リオは灰色のグールと戦っていた。

「つ、強い……」

目の前で繰り広げられている一方的な戦いを目にして、ナタリーが呆然と呟く。

リオは腰に差した剣を抜かず、驚異的な身体能力で動き回るグールを体術のみで軽々と圧倒していた。

既にグールの身体には着実にダメージが蓄積しており、最初のうちは驚異的な治癒能力でダメージを負った部位や骨折した箇所を修復していたのだが、その動きもかなり鈍くなっている。

リオは魔法を使用していないが、かなりの身体能力を見せており、おそらくは何らかの魔道具を使用しているのだろうと、ナタリーは判断した。

実際にアーティファクト級の武具の中には使用者の身体能力や肉体の強度を高める業物が少なからず存在する。

それよりも疑問なのは、どうしてこれほどの実力差があるにもかかわらず、明らかに手加減をするような真似をして戦っているのかということであるが、その疑問はすぐに氷解した。

「すごい！　お兄ちゃん強い！」

ナタリーの後ろでは、ミレーユが興奮しながらリオの戦う姿を眺めていた。

リオとグールの戦いは大立ち回りをしている演劇のようにしか見

えないが、普通はミレーユくらいの子供が魔物と戦う姿を見れば、その後の人生にトラウマを抱えてもおかしくないくらいに凄惨な光景を目の当たりにすることになる。
具体的には、人や魔物の身体が吹き飛び、血飛沫(ちしぶき)が周囲に降り注ぐ、そんな光景だ。
骨を折るように投げ技を仕掛けたり、的確に人体の急所に打撃を打ち込んだりと、リオの攻撃は容赦がないが、グールは一見すると綺麗な身体を保っていた。
それこれもミレーユの情操に配慮しているのだろう。
生死がかかった魔物との戦いで、そういった配慮ができる程にリオとグールの実力差は圧倒的なのだ。

（しかし、だからと言ってアレを相手に素手で戦うのは……）

同じ真似が自分にできるだろうかと問いかけ、ナタリーは背筋に冷や汗を浮かべた。
グールの動きは単調だが、それを補って余りあるほどの身体能力と治癒能力を持っている。
生身でグールの攻撃を受ければほぼ間違いなく致命傷を負うはずだし、ダメージを与えてもしぶとく回復していく姿はじわじわと戦意を削いでくるだろう。
それでも武器があれば治癒能力が追い付かなくなるくらいにダメージを与えることはさほど難しくはないが、素手でそれを行うとなると一度のミスも許されない高度な戦闘技術が必要となるはずだ。
それを易々とやって見せるリオの実力と胆力はナタリーではとても計り知れない。

「ガッ……」

ナタリーがあれこれ考えて愕然としているうちに、またしてもリ

オがグールを遠くに投げ飛ばした。
ビクビクとのた打ち回りながら、折れた両脚を使って何とかグールが立ち上がる。
好戦的な気勢はみられるものの、おそらくもう戦闘を継続することができないくらいに内臓も骨も痛めつけられているのだろう。
グールはフラフラとたたらを踏んでいた。

（とんでもないタフさだな）

リオは内心でグールの生命力と頑強な肉体にほとほと呆れていた。
斬撃は試してみないことにはわからないが、身体は硬く、打撃に対してはあり得ない程の耐久力を持っているようだ。
動きは単調であるが、身体能力と治癒能力も驚異的であるため、体術だけで戦うとなると中々に厄介な相手である。
だが、グールの実力も対処法もおよそは見当がついた。
そろそろ幕引きだと、そう言わんばかりに、リオはゆっくりとグールに歩み寄る。
グールは血を吐きながら、リオを威嚇するように力弱く呻(うな)った。
しかし、リオは止まらない。
相手が動き出そうとしたタイミングで、一気に間合いを詰めると、ナタリー達の死角となるようにグールの前に立ち塞がる。
リオはグールの顎の先端を掴むと、強化した腕力で思いきり首の骨を折った。

「ガッ」

鈍い悲鳴とともに、痛々しい骨折音が響き渡る。
流石に身体中にダメージを負った状態で首の骨を折られたため、グールの身体が地面に沈み、そのままぴくりとも動かずに硬直した。
リオは油断なくグールを見下ろす。

その正体が本当に魔物ならば、グールはこのまま灰になって魔石だけを残して消滅するだろうと考えて――。
果たして、息絶えてから数秒後、鍍金（めっき）が剥がれるように、グールの皮膚がボロボロと崩れ落ちる。
背中に付いていた羽も千切れ、やがて人肌が露わになり、リオは小さく目を見開いた。

「人間……なのか？」

ぼそりと呟く。
その容姿は確かに人間のものと酷似している。
いや、人間そのものだった。
まるで元々は人間だった者がグールに変化したとでもいうような――、そんな突拍子もない考えが頭の中に浮かぶ。
だが、次の瞬間、グールの死骸が急速に干乾びて、音をたててボロボロと灰になり崩れ始める。
それは魔物が死んだ時に起きる特有の現象だった。
しばらくして完全に崩れ去った残骸にキラリと一つの石が残る。
まるで濃紫色のサファイアのような宝玉――、魔石だ。
だが、通常の魔物が残す魔石とはサイズも内蔵している魔力の量も異なったため、リオは驚きで目を瞠（みは）った。
すると、そこで、

「お疲れ様でした。お見事です。やはりソレは魔物だったのですね？」

やや申し訳なさそうな声色で、ナタリーがリオの背中に声をかけた。
おそらくリオ一人に戦わせてしまったことを心苦しく思っているのだろう。

「ええ、どうやら魔物だったようですね」

リオは振り返ると、そう答えて、ナタリーに魔石を見せた。
魔石を残すということは魔物であるという何よりの証明だ。
そのはずなのだが、先ほどグールが消滅しかかる前に見せた人間のような姿が、リオの脳内に焼きついて離れない。

「随分と大きな魔石ですね。やはりそれだけ強力な魔物だったということでしょうか」

ナタリーはグールが最後に見せた人間の姿に気づいていないのか、興味深そうに魔石を覗き込んでいた。

「そう、でしょうね」

と、リオが歯切れの悪い返事をする。
しかし、物珍しい魔石に注意を惹かれ、ナタリーがリオの声色の変化に気づくことはなかった。

「とりあえずさっさとこの場から離れましょう」

頭(かぶり)を振って脳内の疑問を振り払うと、リオが告げた。
この場所に新手の魔物がやって来ない保証がない以上、今は考え事をしている場合ではない。

「はい。そうですね」

ナタリーが頷き、賛同する。
リオはナタリーと顔を見合わせると、

「それでは。俺はこれで。彼女達は俺が東門まで連れて行きますから」

そう言って、目礼をし、踵を返した。

これ以上の面倒事に巻き込まれるのは御免だが、無力なレベッカとミレーユを捨て置くのも後味が悪い。

ゆえに、必要な会話をすることを避け、二人を連れてさっさとその場を立ち去ろうとしたのだが、

「え、あ！　え、ええ。あ、ちょ、ちょっと待ってください！」

あまりにも淡白な別れの言葉に、ナタリーは慌ててリオを呼び止めた。

「先ほどの魔物について主……、リーゼロッテ＝クレティア様にご説明願えないでしょうか？　屋敷ならば安全ですし、ここからなら東門に向かうよりは早く着きますので」

堰を切ったように捲し立てるナタリー。

彼女からすればグールという未知の魔物をリーゼロッテに報告するのは必須である。

グールの魔石を提示して、可能ならば戦闘を行った者の口から直接に語ってもらうことが望ましい以上、リオの同行は欠かせなかった。

そうしたナタリーの職責は理解できるのだが、

「ちなみに……拒否権は？」

僅かに辟易とした顔を覗かせて、リオが尋ねる。

「申し訳ございません。その場合は緊急事態につき代官権限を代理行使して強制的に招致します」

僅かに顔を強張らせて、ナタリーが語る。

その選択は本意でないのか、声に苦々しそうな響きが混じっていた。

もっとも、強制的に招致すると言っても、ナタリーにはリオを連行する実力も自信もないのだが。

しばし逡巡すると、リオは嘆息し、

「承知しました。参りましょう」

観念したように、そう答えた。

☆★☆★☆★

現在、リーゼロッテが暮らす屋敷は、戦場のような慌ただしさに見舞われていた。

それもこれもアマンドの西の門から大量の魔物の群れが流れ込んできたことに起因する。

「重傷者は治癒魔道士の下へ。魔力回復用に魔石は常に補充しておきなさい。逃げ遅れた避難民の受け入れは屋敷の大広間にて行います。誘導はスムーズに行うように！」

屋敷の庭では、侍従のコゼットが屋敷に勤める兵士や使用人達にテキパキと指示を下していた。

庭に設置された臨時の野外病院には、怪我をした兵士や冒険者達がひっきりなしに運び込まれている。

また、魔物に襲われるなどして東門へ逃げそびれた一部の民間人が保護を求めてやって来ていた。
ちなみに、多少のパニックがあったものの、民衆の避難がほぼ完了したことは確認済みである。
幸い都市に暮らしている人間には緊急時に備えて警戒訓練を施していたことから、狂乱状態に陥ることはなかったようだ。
リーゼロッテは執務室の窓から目まぐるしく人が動き回る庭の様子を苦々しい面持ちで眺めていた。
しばらくして深く溜息を吐くと、

「それで、各地の戦況はどうなっているのかしら？」

リーゼロッテは振り返り、背後に控えていたアリアに尋ねた。
屋敷の執務室は臨時の対策本部室とされ、今はアリアから状況の報告を受けている最中である。

「はっ。侵入してきた魔物の数は最大で千体には及ばないものと考えられます。その大半が西門から侵入し、都市の中心部に向かっています」

アリアが落ち着いた口調で淡々と報告を行う。

「中央広場の手前にてそれを迎え撃つべく、アマンド兵士団と冒険者の混成部隊が魔物の大軍と交戦中です。数ではこちらが劣りますが、戦況は何とか五分五分に保っているようです。パトリック団長が素晴らしい働きをしているようですね」

よどみなく説明を続けるアリア。
リーゼロッテは神妙な面持ちを浮かべ、黙って話を聞いている。

「避難民が集まる東門の付近にも兵力を集中させております。討ち漏らした少数の魔物が流れ込んでくることもあるようですが、一応は問題なく撃退できているようです」

リーゼロッテは苦々しく嘆息し、顔を強張(こわば)らせた。

少数とはいえ東門まで魔物の到達を許しているとは由々しき事態である。

早急に魔物を殲滅する必要があるだろう。

「兵士団からいくつかの遊撃隊を編成して東門の付近を巡回させておりますが、こちらは人手不足で十分な人員を確保できていないとのことです」

そこまで伝えると、リーゼロッテが状況を受け入れて整理する時間を作るべく、アリアはいったん言葉を止めた。

「……報告ご苦労様。およその戦況は理解したわ。他に伝えておきたいことはあるかしら？」

リーゼロッテが尋ねると、

「はい。気になる点が一つ。実は正体不明の魔物が現れたという報告がありまして……」

アリアは頷き、やや躊躇いがちに言った。

「正体不明の魔物？」

と、リーゼロッテが訝しげな声を漏らす。

「はい。ゴブリン、オーク、オーガのいずれとも異なる人型の魔物のようです。何やら都市の襲撃時に姿を見せ、とんでもない強さで冒険者達を惨殺したようですが、今のところ都市の中で同様の個体が現れたという報告は上がっておりません」
「新種の魔物ということかしら？」
「おそらくは。もっとも、目撃した兵士で生存者が一人しかいないため、確定情報とまでは言えませんが……」
「なるほど……。警戒しておくに越したことはないわね」

そう言って、リーゼロッテは何かを考えるように目を瞑った。

「いずれにせよ、今は都市への被害を最小限に抑えることを最優先で考えましょう。都市の中に強い魔物が現れる恐れがあるというのなら尚更よ」

再び目を開くと、何かを決意したように、リーゼロッテがスッと顔を引き締める。
そのままアリアの顔を正面から見据えると、

「アリア、貴方は中央広場に向かいなさい。そしてその場にいる魔物達を殲滅して来てちょうだい」

リーゼロッテはそう告げた。
敵の主戦力は中央広場前に存在することから、可能な限り迅速にその場にいる魔物を殲滅する必要があるだろう。
敵の主力には自陣の最大戦力をぶつける――、極めて単純明快な戦術だが、利には適っている。
被害の拡大を最優先で阻止すべき以上、今は戦力を出し惜しみしている場合ではない。
リーゼロッテの手駒の中で最強にして最優の存在であり、氷のよ

うに冷たく美しい美貌を持ち合わせる絶対の切り札。
本人が聞けば淑女に対して何を言うのだと怒るかもしれないが、アリアは一騎当千の強さを誇る傑物だ。
彼女ならばたかだか千の魔物くらいに引けを取ることはないだろうと、リーゼロッテは全幅の信頼を抱いている。

「仰せのままに」

首を垂(こうべ)れて、アリアは承服した。

「武器庫からフラガラッハを持っていくといいわ」

リーゼロッテは物憂げな微笑を浮かべて頷くと、そう告げた。
フラガラッハとはリーゼロッテが所有するアーティファクト級の魔剣だ。
装備者の魔力を用いて身体能力と肉体の強度を高め、切断力を極限まで鋭くし、切った傷の治癒を妨害する魔術が込められており、値段をつけるとすれば魔金貨数百枚は下らない。
アリアが装備すればまさしく鬼に金棒となろう。

「それと侍従隊の面々から治癒魔法の使い手と屋敷の護衛に必要な人員を残して、残りは都市の各部に遊撃要員として放ってちょうだい。情報収集に向かって帰還していない侍従も護衛の人員に含めていいわよ」

続けて、リーゼロッテが命令を付け足す。
アリアは僅かに逡巡すると、

「畏まりました。ならばリーゼロッテ様の護衛にはコゼットを残しましょう」

落ち着いた声色で、そう告げた。
コゼットは屋敷に仕える侍従の中でもアリアに次ぐ実力の持ち主だ。
アリアが屋敷から離れてしまう以上、コゼット以外にリーゼロッテの護衛を任せられる人材はいなかった。

「ええ、そうして頂戴」

リーゼロッテがよどみなく首肯する。

「それでは失礼いたします」

恭しく礼をすると、アリアは執務室から立ち去った。
リーゼロッテが部屋の中に一人残される。
冷めた紅茶を飲み、喉を潤すと、ややあって大きな溜息を一つ。

「とりあえず態勢は整えられたけど、やられたわね。まさか魔物が群れを成して都市を襲ってくるなんて」

リーゼロッテは顔を曇らせて、つぶやきを漏らした。
神魔戦争期ならともかく、神聖歴が始まって以降、魔物が大規模な群れを成して人間を襲ったという話は歴史上、数えるくらいしか発生したことがない。
そもそも魔物の生態系や行動には不可解な点が多く、高度な知性を兼ね備えた存在もいないため、謎に包まれている点が多々あるのだ。
今回、アマンドを襲っている原因として考えられるのは、やはり十日ほど前に確認された黒い竜が原因なのだろうか、それとも別の原因があるのか。

「何にせよ、今の事態を乗り越えた後のことを考えると頭が痛いわね」

☆★☆★☆★

燦々と陽光が降り注ぐ穏やかな昼下がり、アマンドの南西部に位置する森の中で、雅人は黙々と剣を振っていた。

反復練習は欠かせないものだと教えてくれた師であるリオの言葉を信じ、この数日間で学んだ型をひたすら繰り返す。

すぐ傍では亜紀も棒を振って身体を動かしている。

そんな二人の様子を椅子に座りながら眺める美春、セリア、アイシアの三人。

美春が先ほど家事を終えて、休憩がてら二人をお茶に誘ったのだ。

その間に美春はセリアに会話の練習に付き合ってもらい、時折アイシアが二人の間に入って通訳を行う。

ここ最近ではよく見られる光景である。

実に平和なひと時であったのだが、徐にアイシアが立ち上がった。

その視線は鋭く、誰もいないはずの森の中をスッと目を細めて見つめている。

「どうかした、アイシア？」

不思議そうにセリアが尋ねた。

「変な気配が魔物を連れてこっちに向かって来てる」

と、アイシアが端的に状況を報告する。

セリアは一瞬、呆けた顔を浮かべた。

だが、すぐにその意味を理解すると、息を呑んで、

「本当なの？」

やや狼狽えたように尋ねた。

この家は結界によって侵入者が入ってこないよう守られているはずなのだが、本当だとしたら一大事だ。

「間違いない。何か嫌な気配が魔物を誘導してる。このままだと十分くらいでここに来る」

アイシアは確信を持った様子で断言した。

そもそもどうしてアイシアが見えない場所にいる魔物の存在に気づくことができたのかは不明だが、精霊である彼女にはセリアでは想像もつかない索敵方法があるのかもしれない。

「セリアは美春達と一緒に家の中に隠れていて」

アイシアが美春、亜紀、雅人の三人を連れて家の中で隠れているように指示する。

セリアは顎に手を当て、考えるそぶりを見せると、

「駄目よ。美春達に隠れてもらうのは賛成だけど、私も一緒に戦うわ」

決然と、そう答えた。

一瞬、アイシアが僅かに目を丸くする。

「リオがいない間の留守くらい守ってみせないとね。貴方には勝てないだろうけど、私、こう見えてけっこうすごい魔道士なんだから。手助けくらいはするわよ」

そう言って、セリアが微笑みかける。
アイシアはすぐには決断せず、じっとセリアを見つめると、
「わかった」
こくりと頷いた。
そのままアイシアが美春に視線を送る。
「美春。雅人と亜紀の二人を連れて家の中に隠れて。近くに魔物が来ているから。たぶんここを襲おうとしている」
アイシアがそう告げると、美春はハッと表情を変化させた。
胸を締め付けられるような感じがして、きゅっと唇を噛みしめる。
自分は何をすればいいのだろうか、自分に何かできることはないだろうか――、恐怖も動揺も冷めない頭の中でそんなことを考えた。
だが、美春にできることなど何もない。
せいぜいがアイシアの邪魔にならないように家の中に隠れているくらいだろう。
それが事実だ。
「はい。雅人君と亜紀ちゃんに伝えてきますね」
それを理解し、美春は精一杯の笑みを取り繕って答えた。
そのまま足早に雅人達のもとへ駆け寄り、手短に事情を説明する。
「アイシア姉ちゃん！」
すると雅人が神妙な面持ちを浮かべて走って来た。
雅人は美春の制止も聞かずやや興奮した様子を見せている。

「なぁ、俺も戦うよ」
そう言いながら、雅人は覚悟を込めてアイシアを見つめた。
だが、アイシアはきっぱりと首を振ると、
「駄目」
と、そう答えた。
雅人がやや面食らったように立ちすくむ。
「な、なんでだよ。この剣に込められている魔術を使えば俺だってそれなりに戦えるぜ！」
手に持っている剣を掲げて、雅人が叫んだ。
雅人が持つ剣にはリオが精霊石を埋め込み、追加でいくつか戦闘向きの魔術を込めていた。
雅人の剣ほどではないが、美春や亜紀の棒にも実戦用に魔術を込めてある。
いまだ魔力を扱うことのできない雅人達のために、魔術の発動は呪文方式が採用されており、決まった呪文を唱えれば勝手に剣が使用者の魔力を吸い上げて効果を発動させる仕組みとなっている。
実際に雅人はリオが監督する傍でこの剣に込められた魔術を使用したことがあった。
この剣の真の力を解放すれば、雅人でもそこいらの魔物には負けないくらいに戦うことはできるだろう。
だが――、
「それはその剣が強いだけ。貴方が強いわけじゃない」

アイシアがあっさりと言い、雅人は怯んだ。
「で、でも……、俺は……」
胸がもやもやして、雅人は剣を掴む拳を握りしめた。
「今はまだ貴方が戦う時じゃない」
声を震わせる雅人を見下ろし、アイシアが言った。
「でもセリア姉ちゃんは戦うんだろ？」
尋ねて、雅人は縋るようにアイシアの顔を見上げた。
「セリアには私の隣で攻撃魔法を撃ってもらうだけ。そもそも魔物を近づけさせないから。貴方が剣で戦う必要はない」
理路整然と答えるアイシアの言葉に、雅人はいよいよ言葉に詰まった。
女性であるアイシアとセリアの二人を戦わせて、男の自分が隠れているなんて……。
名状しがたい悔しさを覚え、ぎり、と、雅人は歯を軋(きし)ませた。
「雅人君」
困ったように呼びかけると、美春はそっと雅人の手を引いた。
逆の手には亜紀の手が握られている。
美春に手を引かれながら、亜紀は不安そうに雅人の顔を見つめていた。
雅人が顔を背けるように俯き、美春が二人の手をぎゅっと握る。

その顔を強張(こわば)らせながら、雅人と亜紀は手を引かれて黙って家の中に入った。

☆★☆★☆★

リオは再びリーゼロッテの屋敷へと戻って来た。

（まさか今日のうちに戻ってくることになるとはな）

自嘲と言っていい笑みを浮かべて、リオは慌ただしく人が動き回る屋敷の庭を見渡した。

するとあくせく働くクロエの姿が目に映る。

「お母さん！　ミレーユ！」

リオ達が庭の中に入ってきたことに気づくと、クロエが慌てて駆け寄ってきた。

「あ、お姉ちゃんだ！　久しぶり！」

えへへと笑みを浮かべて、ミレーユがクロエに抱き着いた。

布越しに妹の温もりを感じとり、クロエがホッと安堵する。

「無事で良かった。でも、何でお母さん達がここに？」

一緒にいるリオとナタリーに会釈すると、クロエが尋ねた。

「お二人は魔物に襲われているところをこの方……ハルト様に助けて頂きました。リーゼロッテ様にご報告したいこともあり、お越し頂いているところです」

尋ねられたレベッカに代わって、ナタリーが手短に事情を説明する。
その説明にクロエが目を見開く。
「あ、ありがとうございます！」
すぐに事情を呑みこんだのか、慌ててクロエはリオに頭を下げた。
「いえ、たまたま通りかかっただけですから」
リオが苦笑を浮かべて頭（かぶり）を振る。
どうやらレベッカはクロエの母親で、ミレーユはクロエの妹のようだ。
道理でレベッカの顔には見覚えがあるわけだなと、リオは内心で苦笑した。
このレベッカはかつてリオがアマンドに滞在した時に宿泊した宿屋を経営していた女将なのだから。
確か旦那がいたはずだが、今は考えても詮無いことだ。
「クロエ、貴方は二人を屋敷の中に招き入れた後に仕事に戻りなさい」
と、ナタリーがクロエに命令を下す。
「ありがとうございます、先輩！」
クロエが安堵のこもった笑みを浮かべて返事をする。
ナタリーは微笑を浮かべて頷き返すと、

「ハルト様、お待たせしてしまい申し訳ありません。時間もございませんので、すぐに主の下へ案内いたします」

リオに頭を下げ、そう告げた。

ちなみに、リオとナタリーはここに来るまでの間に簡単に自己紹介を済ませてある。

お互いにまったくの初対面であるという建前上、茶番ではあるが、リオがリーゼロッテと面識を持っているということも伝達済みだ。

「ええ、よろしくお願いします」

リオはこくりと頷き、ナタリーに案内されて、リーゼロッテの下へ向かった。

第８３話　戦闘開始

リーゼロッテは屋敷の庭園に野外病院として設置された天幕の中にいた。
彼女の眼下には、目を瞑り歯を食いしばって苦しむ兵士が横たわっている。
その腹部は血で真っ赤に染まっていた。
「ぐっ……痛ぇ……」
負傷した兵士が患部を抑えて呻き声を漏らす。
「ほら、治療するから動いちゃ駄目よ。……『治癒魔法（ヒール）』」
そう言って、リーゼロッテは傷口に手をかざした。
続けて、呪文を唱えると、掌の先に小さな魔法陣が浮かび上がり、そこから癒しの光が漏れて、瞬く間に傷口を癒していく。
「大丈夫よ。すぐに治療は終わるから。ほら、痛くない、痛くない」
治療中も患者に声をかけてリーゼロッテが励ます。
一分もしないうちに傷口は完全に塞がり、真っ青に染まった兵士の顔にも少しずつ血の気が戻り始めた。
「これでもう大丈夫よ」
額に浮かんだ汗を拭うと、リーゼロッテが言った。
兵士が恐る恐る目を開ける。

一瞬、ぼんやりとリーゼロッテの顔を見つめると、

「っ、え、あ！　り、リーゼロッテ様？」

度肝を抜かれた様子で兵士が叫んだ。

痛みを堪えるので精一杯だったせいか、今まで治癒魔法をかけていたのがリーゼロッテだとは露にも思っていなかったのだろう。

「あ、痛っ！」

兵士は慌てた様子で身体を起こそうとしたが、腹部を襲う鈍い痛みで顔を歪めた。

リーゼロッテがそんな兵士の身体をそっと押さえつけ、優しくベッドの上に横たわらせる。

「こーら。まだ傷口が塞がったばっかなんだから、お腹に力を入れるんじゃないの。けっこう深い傷だったんだからね」

普段よりも気さくな口調で、リーゼロッテが告げる。

「へ、あ、あ、ありがとうござい……ます」

リーゼロッテに見惚れて緊張しているのか、兵士が明らかに狼狽えた様子でお辞儀をする。

「ほら、男ならシャキッとしなさい！」

リーゼロッテはくすりと笑うと、兵士を叱咤した。

「は、はい！」

兵士が慌てて返事をする。

「よろしい。しばらくはそのまま安静にしていなさい」

リーゼロッテが満足げに頷く。

彼女は今、屋敷に仕える治癒魔道士達と共に、負傷した者達の治療を行っている。

ガルアーク王国の王立学院を飛び級で卒業し、リーゼロッテは天才魔道士としても名が知られていた。

あいにくと剣の才能にはそれほど恵まれなかったが、リーゼロッテは常人とは比べるべくもない豊富な魔力を有し、あらゆる魔法を習得できる適性を持っていたのだ。

とはいえ、仮にも公爵家の令嬢である彼女が直々に負傷兵に治癒魔法を使用することなど一般的には考えにくいことだ。

だが、リーゼロッテはお高く留まることなく、額に汗を浮かべて治癒魔法をかけている。

時には兵士を優しく励まし、時には兵士を叱咤する姿は、負傷した兵士達の士気を確実に高揚させていた。

中には治癒が不完全であるにもかかわらず、胸を打たれて即座に戦場へ戻ろうとする者までいる程だ。

そんな彼女に背後から近づき、声をかける人物がいた。

「リーゼロッテ様」

声に反応して振り返った先には、リーゼロッテにとって直属の部下であるナタリーが佇んでいた。

何故かその隣には尾行を命じたリオまで一緒にいるではないか。

「あら、ナタリー……、ハルト様。如何なさいましたか？」

リーゼロッテは僅かに硬直すると、二人に用向きを尋ねた。
「早急にお伝えすべき案件があります。強力な未確認の魔物を発見しました。ハルト様がその魔物と交戦し倒したため、お越し頂きました」
代表して単刀直入に話題を持ち出すナタリーに、リーゼロッテは少しばかり目を鋭くした。
すぐにリオへと身体の向きを整えると、
「それは……日に何度もお運び頂き、申し訳ございません」
リーゼロッテは恐縮そうに謝意を表した。
「いえ、結構ですよ。とはいえ、あいにく野暮用がございまして。ご報告いたしましたら、すぐにお暇(いとま)させて頂きますことをお許しください」
不快感を抱かせないよう、適度に言葉を選びつつも、リオは先だってきっぱりと急いでいる事実を伝えた。
「大変お忙しいところ、お骨折り頂くことを強要してしまい申し訳ございません。重ね重ねお詫び申し上げます」
リーゼロッテが改めて頭を下げる。
「いえ、ことがことですから。手短にお済ませくだされば結構ですので」

言って、リオは小さく首を振った。

「承知しました。とはいえ立ち話もなんですから、そちらにお掛けください」

と、野外病院の片隅に設置された座椅子に、リーゼロッテが視線を向ける。

今はあの場が即席の対策室にもなっているのだろう。

そうして三人は手早く席を改めることにした。

☆★☆★☆★

アマンドの南西にて、優に百を超える魔物がひしめき合い、美春達が隠れている岩の家に迫っていた。

オーガ、ヘルハウンド、マッドボア、ベアコング――、群れの中にはアマンドを襲っている魔物の中でも特に手ごわいとされている個体ばかりが見受けられる。

「うわぁ、本でしか見たことはなかったけど、あれマッドボアにベアコングよね。こんなに大勢の魔物に囲まれて大丈夫なのかしら、アイシアさん」

文献などで伝え聞く中でも特に厄介とされる魔物がうじゃうじゃといることから、引きつった笑みを浮かべて、セリアがアイシアに問いかける。

「大丈夫。今から大きな精霊術を使って春人に合図をするから、打ち合わせ通り目を瞑って」

そう告げると、アイシアが上空にスッと右手をかざす。

次の瞬間、光が爆発した。
天空を穿つように光の柱が出現し、オドとマナの奔流を一帯にまき散らす。
柱は一瞬で消滅し、周囲を包み込んでいた光も瞬く間に消滅した。
「今ので春人に伝わったはず」

アイシアが今使った精霊術はあらかじめリオとの間で取り決めておいた狼煙のような伝達手段だ。
敵に対して光柱は目くらまし以上の役割は存在しないが、オドとマナの奔流を利用し、半径五十キロ程度の距離までリオに対して異常が発生したことを伝えることができる。
ただし、それなりのオドを消費してしまうため、リオと離れた状態だと乱発はできない。
後ろの方に控えていた魔物はともかく、前方に出ていた魔物は突然の閃光に視界を奪われ、無力化されていた。
おそらく一時的に失明している個体もいるだろう。

「今から私は防御に専念する。打ち合わせ通りセリアは魔法で魔物を攻撃して」
「了解よ！」

セリアが小気味の良い返事をすると、周囲に突風が巻き起こり、巨大な暴風の結界がアイシア達を包み込む。
「『多重土槍魔法（マルチアースランス）』」

大地に手を触れて、セリアが呪文を唱えると、前方で群れていた一部の魔物の真下に大きな魔法陣が浮かび上がった。
間髪をいれずに、まるでヤマアラシのように無数の土槍が地面か

ら生えて、魔物達を突き刺す。
視界を奪われて動けない魔物達は、発動までの僅かな時間で攻撃範囲から脱出することは適わなかった。

「ギャァ」

魔物達から雄たけびのような悲鳴が漏れる。
土の槍は魔物達を刺し殺すと、結晶のように砕け散った。

「グガァッ！」

魔法の範囲外にいた後方のオーガが怒り心頭に木の槍をセリアに向けて投げつける。
槍は真っ直ぐと伸びていき、そのまま飛んでいけばセリアの華奢な胴体を貫くように思えた。
だが、次の瞬間――、

「ガッ？」

槍の軌道が大きく弧を描くよう逸れて、明後日の方向へ飛んでいく。
家を守るように展開された暴風の結界が槍の軌道を大きく逸らしたのだ。
乱気流の如き鉄壁は近づく存在すべてを拒絶する。
すると、突如、暴風の結界から魔力を帯びた風の刃がまき散らされた。
魔力を帯びた風の刃は的確にオーガの首を刈り取り、他にも魔物達の身体を正確に捉えていく。

「グ、グギ……」

中には接近しようとしていた魔物もいたが、その刃の犠牲となり、身体が一刀両断にされる。
一体、また一体と魔物達の死骸が増え、既に三十以上の魔物が死滅し、魔石と化していった。

「頼もしい限りね！」

頬を緩ませて、セリアが力強く言った。
防御に専念すると言っておきながら、アイシアはきちんと攻撃までこなしている。
眼前にはいまだ百の魔物が押し合っているが、少しも身の危険を感じることはない。
戦闘において後衛型魔道士は率先して排除されるのが鉄則なのだが、これならばセリアも安心して魔法を使えるというものだ。
術者の眼前に魔法陣が浮かびあがり事象を発動させるタイプの魔法は風の結界により阻害されてしまうが、術者が任意に魔法陣の発動地点を指定する魔法ならば一方的に攻撃を行うことができる。
魔法陣の遠隔発動は非常に高度な技術なのだが、天才と呼ばれたセリアならば難なくそれを実行できるのだ。

「『氷柱雨魔法（アイシクルレイン）』」

手のひらを空にかざし、セリアが呪文を唱える。
すると、数秒後、魔物の頭上に魔法陣が浮かび上がり、鋭い氷柱（つらら）が降り注いだ。

「グガッ」

一カ所にまとまり怯んでいた魔物達の身体を串刺しにすると、氷

の槍は脆く砕け散った。
その後も家の周囲に被害が出ないように使用する魔法に気をつけながらも、範囲攻撃の魔法を使用して一気に魔物の数を減らしていく。

「けっこう数が減ったわね」

周囲を見渡しながら、セリアが呟いた。
既に魔物の群れは当初の半分以下にまで数を減らしている。
この調子でいけばせいぜい後十分もしないうちに殲滅できるはずだ。

「こいつらはいったい何なのかしら？　こんな数の魔物が襲ってくるなんてただの偶然とはとても思えないけど。結界は発動したままなんでしょう？」

隣にいるアイシアに、セリアが顔を曇らせながら尋ねる。

「ううん。誰かが少し離れた場所から結界を中和している。今は一時的に結界が無効化されていると思っていい」

アイシアはきっぱりと首を振って返答した。

「ということは、これは誰かが意図的に引き起こした事態ということね。何が目的で、どうやって魔物を嗾けたのかは知らないけど、随分とふざけた真似をしてくれるじゃない」

セリアが口を尖らせながら言った。

「そいつは遠くから私達の様子を窺ってるみたい」

「ふーん。何が目的なのかしら？」
「さあ？　ここにいる魔物を倒してから確かめる？」
精霊術を維持したまま、涼しい顔でアイシアは首を傾(かし)げた。
「そうね。リオがいないし、深追いはしたくないけど。放置はできないわね」
言って、セリアは「はぁ」と、ため息を吐いた。
「ん。じゃあさっさとここの魔物を倒す」
アイシアが小さく頷く。
すると、周囲を覆う風が吹き荒れて、魔力を帯びた風の刃が再び飛び散った。
悲鳴のような声を上げながら逃げ回っているが、風の刃は無慈悲に魔物達の命を刈り取っている。
「はぁ、自信を無くすわね。リオもこのくらい簡単にできちゃうのかしら？」
呟いて、セリアが苦笑を漏らす。
天才魔道士などと言われても自分では到底アイシアのような真似はできない。
リオから話を聞いた限りでは、魔法と精霊術は似て非なるものであるため、やむを得ないのだが、仮に自分が精霊術を使えるようになってもアイシアのような真似はできないのだろう。
そもそも既に魔法を習得してしまっているし、人間族の領域で暮らすのならば精霊術は使いにくいため、セリアは余り精霊術を学ぶ気はないのだが。

王立学院にいた頃からリオは精霊術を扱えたという。
あれ程に周囲の貴族達から魔法が使えないと虚仮にされておきながら、学院時代に一度も表だってその力を用いずに、周囲の目をくらまして精霊術を隠していた精神力には恐れ入る。

（けど私にくらい教えてくれてもよかったのに）

無理はないのだが、隠し事をしていたことが何となく気に食わなくて、拗ねてみせたくなる。
五年以上を経て築き上げたリオと私の信頼関係はその程度のものだったのか、と。
けど、リオがちゃんと強かったのだということを改めて知れて、戦闘中だというのに、セリアはなんだか妙に嬉しくなってしまった。
すると、そこで、

「ギャッ」

やけっぱちになって突っ込んできた魔物達が、ごう、と突風に吹かれて、空高く舞い上がった。

「このくらい春人もできる」
「頼もしい限りね」

ぽつりと答え返したアイシアに、セリアはフッと笑みを浮かべた。

☆★☆★☆★

レイスはアイシア達が戦う姿を上空から窺うように覗き見ていた。
「うーん。やはりあの程度の魔物達じゃ相手にもなりませんか。強

い精霊の気配を感じて来てみましたが、まさか人型の精霊がこんな場所にいるとは」

スッと目つきを細め、アイシアを睨みつけるように見やる。

「契約者なしにあれだけの力を振るえているとは考えにくいですが、魔法を使っているあの魔道士は契約者ではないでしょうし、あの家の中に隠れているんでしょうかねぇ」

顎に手をそえて、考えるそぶりを見せながら、レイスが呟いた。

仮に人型精霊が十全に力を活用できる程の魔力を供給できる者と契約を結んでいたらかなり厄介である。

しかし、あの程度の魔物の群れを威力偵察としてぶつけただけでは、その力の底まで覗き見ることはできない。

せいぜいが契約者から魔力の供給を受けているのだと窺えたくらいだ。

真の力を確認するためにはレイスが自ら出向く必要があるだろう。

「けど、ちゃんとした契約者がいたら私の手に負えそうにありませんからねぇ。そういう存在がいることを知れただけで良しとしましょうか。相手もこちらに気づいているでしょうし、もう少ししたら逃げましょう」

嘲(あざけ)るような笑みを浮かべると、レイスは今しばしアイシアの力を観察することにした。

☆★☆★☆★

「貴重な情報を御教示くださりありがとうございました」

リオからあらかた必要な話を聞き終えると、リーゼロッテは深くお辞儀した。
毅然に振る舞ってはいるものの、その顔には僅かな疲労の色が窺える。
それも無理はない。
正直、新たに現れたグールという魔物は悩ましい存在であった。
生身の人間を遥かに凌駕する身体能力、異常な回復能力、好戦的で凶暴な気質。
それらを総合して発揮される戦闘能力も決して無視できるものではないが、リーゼロッテからすれば最も厄介なのはそこではない。
真に悩ましいのはグールが死ぬ間際に人の姿を露見させたということだ。
人間が魔物になる――、それが本当だとしたら実に由々しき問題である。
魔物になる条件が解らなければ突発的にそこら辺にいる人間が魔物になる可能性も否定はできないし、元に戻す方法だって知ることはできない。
情報を得るために検死しようにも、グールは魔石を残して灰となり消滅しているし、残った魔石も大きさと純度が高いという以外はいたって普通の代物にすぎないため、完全に手詰まりなのだ。
魔物の討伐が完了していない段階で、憶測で話を進めても意味はなく、結果、精神的な疲労と不安の種だけが残り、額を曇らせることになる。
「お陰様で同様の魔物が都市の中に現れた時の対処法を迅速に通知することができました」
そんな杞憂を打ち消す様に、リーゼロッテは精一杯の笑みを浮かべて言った。
既に手遅れになっている箇所もあるかもしれないが、手遅れにな

ってはいない箇所だってある以上、完全に放置することができる問題ではない。
現在、都市を防衛する各地にグールの情報を伝達するように言い含め、ナタリーは下がらせてある。
今頃は伝書鳩を用いて都市の各地に情報を発信し終わっている頃だろう。

「いえ、お役にたてて何よりです」

と、リオが頭(かぶり)を振って御礼の言葉に受け答える。
必要な話を終えた以上、徒(いたずら)にこの場で長居しても彼の精神衛生上好ましくはない。
ゆえに、帰宅のタイミングを見計らっているのだが、リーゼロッテから助けを求めるような視線がそれとなく向けられているのは、リオの気のせいだろうか。
リーゼロッテからすれば、今は猫の手でも借りたいような状況のはずだ。
とはいえ、リオは冒険者でもこの都市の兵士でもない以上、この状況で戦闘を強制することはできない。
交渉を持ちかけようにも最初にリオの方から予防線を張るように断りを入れられてしまったため、おそらく話を持ち出しにくい空気になってしまったのだろう。
リオはそんな事情を見透かしているのか、いないのか、

「それでは私はこれで」

そう言って、物憂げな面持ちを覗かせるリーゼロッテから、すげなく視線を逸らした。

「はい。付近の住宅街に魔物は侵入してないようですが、外は危険

です。あいにく屋敷の警備も不足しており、護衛をお付けすることもできないのですが……」

やや消沈したようにも見えるリーゼロッテには悪いが、アイシアが護衛にいるとはいえ美春達の安否が気にかかる以上、リオからすれば必要以上にアマンドの防衛に手を貸すつもりはない。

「いえ、結構ですよ。お気持ちだけ頂戴します」

そう告げると、リオは腰を浮かせて座椅子から立ち上がった。

「お気をつけください」

「ええ。では、いずれ、また改めて」

別れの言葉を残し、リオは野外病院の天幕を後にした。

舗装された庭の道を歩く後ろ姿をリーゼロッテが見送る。

そうしてお互いの距離が二十メートルほど離れたところで、

「て、敵襲です！　敵襲ー！」

門を見張っていた兵士が声を張り上げて庭の中に飛び込んできた。

リーゼロッテがハッと表情を変える。

屋敷の空気も一気に慌ただしくなった。

兵士は屋敷の庭にいる者達に警戒を促すべく、必死に叫び注意を向けさせている。

そうして門から庭の中へと入って来た兵士が、リオに近づいてきたその時、

「こちらに接近してくる魔物がっ」

兵士が何かを伝えようと叫んだ。
が、黒色のグールが一瞬のうちに空から降って来ると、兵士の身体を軽々と横薙ぎに吹き飛ばしてしまった。
少し遅れて蝙蝠のような背中の翼を羽ばたかせて、舞い降りてくる五体のグール達。
あまり上手く飛ぶことはできないのか、飛行して来たというよりかは跳躍していると言った方が正確である。

「雑魚ガ」

黒いグールはゲラゲラと不気味な笑いを漏らしながら、吹き飛んだ兵士を見やっている。
今の一撃で即死したのか、兵士の身体はピクリとも動かない。
リオはその光景に薄く眉を顰(ひそ)めた。

「ン。ンン？」

ふと、目と鼻の先にいたリオの姿が黒いグールの視界に映る。
すると、何を思ったのか、愉快そうに口元を釣りあげた。

「ク、クハ、クハハ、クハハハハハ！」

黒いグールが狂ったように高らかな笑いを漏らす。

「オ前ェ、ドウシテココニイル？」

投げかけられた疑問に、リオが首を傾(かし)げる。
こんな存在と面識を持った覚えはリオにはないからだ。

「チッ。糞ガ。俺ノコトナド眼中ニモナイッテカ」

舌打ちをして、黒いグール――かつてアルフォンスという男だった存在は忌々しげに顔を歪めた。
今の彼は魔物になり人間とは別な存在に作り変えられており、親しい者が凝視して初めてわかるくらいに顔つきも禍々しく変わってしまっている。
ゆえにリオがアルフォンスのことを認識できる道理などないのだが、そんなこともわからぬ程に彼は精神が汚染されてしまったのかもしれない。
すると、そこで、

「あれは……」

南西の森から光の柱が立ち上る光景が見えて、リオは目を瞠(みは)った。
少し遅れてオドとマナの波を感じとる。
するとリオの顔がとたんに引き締まり、視線を鋭くした。

「フン。余所見トハ余裕ダナ。マァ、イイ」

アルフォンスが不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「オイ。ソコノ二体、アソコニイル女ヲ捕ラエテコイ。俺ガ殺ルカラ殺スナヨ」

背後にいるグール二体に、アルフォンスは顎(あご)をしゃくり指図した。
その様子をリーゼロッテは遠くから警戒したように眺めている。

「残リノ三体、俺ヲ援護シロ。行ク……ッ。逃ガスナ！」

眼前で話し続けるアルフォンスを無視するように、リオは強化し

た身体能力を駆使し突如として横に駆けだした。
即座に反応してアルフォンスも動き出す。
残りのグール達も先の命令通りに行動を開始した。
三体のグールはアルフォンスと一緒にリオを追跡し、二体のグールがリーゼロッテを捕らえるべく走り出す。

「させません！」

リーゼロッテに迫るグール達を妨害するように、護衛として傍に戻っていたコゼットとナタリーが間に潜りこんだ。
かくして侍従二人とグール二体の戦いが始まる。

「チッ、チョコマカト！」

その一方で、面倒な戦闘を避けるべく、躊躇なく逃走を選んだリオだったが、アルフォンス率いるグール達の妨害は思った以上に鬱陶しかった。
アルフォンスは他のグールよりも身体能力が更に高く、精霊術で身体能力とは別に肉体の強度も高めているリオに匹敵する速度で迫ってくる。
元々屋敷から出るにはアルフォンス達の脇を抜けていく必要があったという位置関係上、僅かな移動距離のロスによって先に動き出したリオが追い付かれてしまったほどだ。

「ちっ」

僅かに気が急いて、リオが舌打ちをする。

「クハ、クハハ、クハハハ！　怖イカ？　命乞イヲシロ。ソウスレバ助ケテヤラナイコトモナイゾォ？」

そう言いながらも、アルフォンスは鋭い爪を突き立ててリオの身体を貫こうとしている。
アルフォンスが追い付いて攻撃を仕掛けてきたことにより、他のグールもすぐにリオに追いつき攻撃を加えてきた。
計四体のグールに包囲され、リオが忌々しげにため息を吐く。

「オ前ガ連レテイタ女達ハドウシタ？　アノ女達ヲ差シ出セバオ前エヲ助ケテヤロウ。何、安心シロ。玩具ニシテタップリト可愛ガッテヤル」

サディスティックな笑みを浮かべて語るアルフォンスに、リオが微かに眉を顰める。
嵐のように激しいグール四体の攻撃を捌き、防戦に追い込まれていたリオだったが、バックステップを踏んで距離を保つと、剣を抜いた。

「フン、闘ウ気ニナッタカ。愚カナ」

ピリピリと威圧感を放つリオの気迫を肌で感じ、アルフォンスは不快そうに目を吊り上げた。

「……」

黙ったままグール達を見据え、リオが一歩前に足を踏み出すと、戦いは始まった。

第８４話　立ちはだかるもの

それは一瞬の出来事だった。
対峙するグール達に向かって足を踏み出したと思った瞬間、ふわりと風が吹き、リオの姿がブレて、アルフォンスの視界から消える。

「ッ！」

グールになったことにより強化された五感を最大限に発揮し、とっさに視線を彷徨わせたが、リオの姿を捉えることができない。
どこだ？
アルフォンスは本能的に身の危険を感じ、遥か後方へ飛び立った。
羽をはばたかせ、上から地面を見下ろすと、最後尾に立っていたグールの背後に回り込んだリオの姿が見える。
刹那、グールの首が吹き飛んだ。
遅れて噴出音が鳴り響き、人のモノとは思えぬどす黒い液体を周囲にまき散らし、頭部を失ったグールの肉体がずしりと地面に昏倒する。

（何ガ起キタ？）

いや、答えはわかっている。
剣閃を目で追うことはできなかったが、間違いなくリオの斬撃によるものだろう。
だが、一連の動きを目で捉えることができなかった。
気がつけば動き始め、気がつけば接近を終えて、神速の如き斬撃をグールに打ち込んでいたのだ。

「後ロダ！」

叫んで指示を送ると、グール達が慌てて振り返る。
が、アルフォンスが気がつくと、リオは最初に立っていた位置に戻っていた。
当然、振り返った先にリオがいないことから、グール達は困惑した様子を見せる。
その隙を突いて、再びリオが接近を仕掛けた。
スッと緩く剣を構えたかと思うと、予備動作を一切感じさせずに移動を開始する。
まるで花びらが舞うような美しい動作に、ごくり、とアルフォンスは唾を飲み込んだ。
だが、殺してやりたい程に憎い相手に目を奪われた事実に気づき、額に青筋を立てる。

「ッ……」

視線を彷徨わせていたグールの背後に回り込むと、さらにもう一体、その首を斬り飛ばす。
その姿を目にして、アルフォンスはぎりと歯を噛みしめた。
まともに動ける灰色のグールは残り一体。
肉体に命令を送る脳が身体と分離されてしまっている以上、首を斬り飛ばされて地面に倒れているグールはもはや動かぬ人形と大差ない。
さしものグールも首を斬り飛ばされれば、せいぜい数十秒程度で死に絶える。
即座に首と肉体を繋げてやればその回復能力を発揮して切断面を癒着させることが可能だが、そんな真似をしている間に自分が斬り殺されてしまいそうで躊躇する。

「グガァ！」

そうこう考えている内に残ったグールがリオに気づいて襲い掛かった。

「馬鹿ガ！　止メロ！」

咄嗟にアルフォンスが配下のグールを止めようとする。

だが、その動きはもはや止まらなかった。

全身の筋肉を唸らせ、リオの側面へ潜りこむ。

それは獲物を狩る獣のように素早く、しなやかな体捌きだった。

常人ならば反応することさえ叶わぬ超高速の一撃。

その鋭く長い爪は正確無比にリオの身体を貫こうとした。

が、リオにはその一連の動きが、余裕を持って対処できるくらいに、ハッキリと見えている。

身体能力が強化されるとともに、リオの動体視力や反応速度も生身の人間と比べ物にならぬ程に強化されているからだ。

迫り来る貫手に対して、リオは一歩横にずれることで対応した。

「ッ？」

結果、その攻撃は空振りに終わる。

リオは横から油断なくその動きを観察すると、虚空を貫いたグールの腕をあっさりと斬り飛ばした。

腕を切断された事実をグールが認識するよりも先に剣を引き戻すと、加えて真横に一閃。

グールの胴体を易々と分断した。

数瞬遅れて、グールの腕と身体が土埃を上げてドサリと地面に崩れ落ちる。

それでも地面を這いつくばるグールであったが、リオが首を切り

落とすとダメージ過多で死に絶えた。
リオと相対してまともに動ける個体はもはやアルフォンスただ一人。
まだ戦闘が開始してから三十秒も経過していない。

「馬鹿ナッ！」

驚愕のあまり、アルフォンスが叫ぶ。
自分は生まれ変わったのだ。
忌々しい連中を殺すために。自らを見下した輩にこの世すべての恥辱と苦痛を与えるために。愉悦と快楽に赴くがままに。
見る世界すべてが違って見えて、まさしく最高の気分であった。
強靭な肉体とそれを振るうに値する力も手に入れ、今の自分が負けることなどありえない。
自らこそが食物連鎖の頂点に立ち、有象無象はすべて自分の足もとにひれ伏すことになる。
その第一歩として、新たな覇道を邁進するために、今回の襲撃はまさしく最高の晴れ舞台になるはずだった。
リーゼロッテを見つけ、徹底的に凌辱しつくしたうえで殺す。
自らを虚仮にした連中を見つけだし、己の力を見せつけたうえで殺す。
そうなるべき、そうなるはずであったのだ。
だというのにどうしてコイツは邪魔をする。
貴様はボロ屑のような姿になってあの女どもをおびき寄せる撒き餌になればいいのだ。
今のアルフォンスは本能の赴くがまま生きており、理性というタガが外れた精神状態にあった。
自分こそがルールであり、道理であり、理屈である。
だから、自分の思い通りにならないことが許せない。

（アア、ソウダ。コノ男ニアノ女達ハモッタイナイ）

ゆえにアルフォンスの中で次第にどす黒い感情が渦巻いてくるのは必然のことであった。

恐怖も憎しみによって流されてしまう。

先ほどまで脅威に思っていたリオのこともさして恐ろしく感じない。

どうしてこんな矮小な存在を高尚な自分が恐れなければならないのだ。

分不相応に生きている愚民風情に。

思い出すのは最高の職人が生涯を賭しても生みだすことが叶わぬであろう美しさを持ったアイシアのことだ。

不躾にも自分の手を跳ねのけた厚顔無恥な女であったが、あの容姿は今も心に焼き付いて離れない。

他の女達も妾にしてやっても良いと思えるくらいにはみな美しかった。

半死状態のこの男を連れていけばきっと良い顔をするだろう。

アルフォンスはニタァと顔に愉悦に染まった笑みを浮かべた。

「ク、クフ、ククク、クハハハハ」

気でも触れてしまったような笑い声を漏らすアルフォンスに、リオが訝しそうな視線を送る。

が、疑わしく思ったのも束の間。

アルフォンスが電光石火の如くリオに向かって駆け出す。

不意を打つような急接近にも動じず、右足を前に出して腰を捻ると、リオは剣を後ろに流し、低く下段に構えた。

次の瞬間、二人の姿が重なり――。

☆★☆★☆★

リオがグール達と戦う様子を見て、リーゼロッテは思わずごくりと唾を飲み込んだ。
強い。それも圧倒的に。
その姿を完全に目で捉えることはできていないが、傍から見ていて無駄な動きが一つもない。
自然体で力の抜けた構えをとりながら、リオは短時間で次々とグールを屠っている。

（ハルト様がいらしてくれて助かったわ！）

自分の予想を超えるリオの強さに驚くとともに、リーゼロッテの中で己の強運に歓喜が込み上げてきた。
屋敷に現れたグールは全部で六体。
仮に六体が揃ってリーゼロッテに襲い掛かっていれば、ほぼ確実に彼女はグールの手に落ちていただろう。
だが、そのうちの四体はどういうわけかリオに襲いかかり、リーゼロッテに向かってきたのは二体だけだ。
おまけにリオを襲ったグールは既に三体が屠られており、残ったのは変異種と思われる黒いグールのみ。
変異種は通常の個体よりも上の強さを持っていることから厄介なのだが、リオの強さを目の当たりにしているリーゼロッテからすれば不安材料になりえそうにはなかった。

（こちらはまだ一体も倒せていないけれど、流石にアレと同じ強さを発揮しろだなんて要求するのは酷よね）

リーゼロッテの前方では、短槍を装備したコゼットに、二本のダガーを構えたナタリーが、グール二体と相対していた。
彼女達もリオのおかげで余裕をもって戦闘を行うことができてい

る。
リオの戦いと見比べると児戯に見えてしまうが、二人も決して弱いわけではない。
接近戦だけに限定すればリーゼロッテでは敵わないし、彼女に仕える侍従の中でも上位の強さを持つ二人なのだから。
魔法で底上げしたことにより身体能力はほぼ互角、技量は本能に従うグールよりコゼット達に大きく軍配が上がる。
アダマンタイト鋼製の装備ならばグールの鋼皮にも有効打を与えることも可能だ。
グール達の驚異的な回復能力と鋼鉄のような皮膚は厄介だが、一対一で戦う限り、グールの回復能力を上回るダメージを与えるのも時間の問題だろう。

（っ！　動いた！）

そして、今、リオと黒いグールの戦いは終着の時を迎えようとしていた。
黒いグールが奇怪な笑い声を高らかに漏らすと、突如としてリオに飛びかかったのだ。
荒々しい獣の如く迫るグールを相手に、リオは明らかにカウンターを狙った構えをとる。
二人の姿がクロスする瞬間、リオは脚を右に捌いて、グールの拳を紙一重で避けた。
当たれば岩をも砕く漆黒の拳が、リオの左腕スレスレの位置をかすめて通る。
リオはすれ違いざまに下段に構えた剣を後ろから前へと引き上げると、グールの胴体に目がけて逆袈裟切りを放った。
紫電一閃。
振り上げられた剣はスッと滑らかに黒いグールの身体を斜めに両断した。

が、分断された上半身が地面に崩れ落ちようとしたその時、黒いグールがけたたましく吠える。
恐ろしい生命力であった。

「なっ」

思わずリーゼロッテの口から驚愕の声が漏れる。
黒いグールは半身が崩れ落ちる勢いを利用して身を捻ると、神経が通う右腕を用いてリオに貫手を放った。
執念の一撃が正確無比にリオの心臓を背後から狙い撃つ。
瞬間、黒いグールがニチャリと禍々しい笑みをこぼしたのが見えた。

「危ない！」

咄嗟にリーゼロッテが叫ぶ。
が、リーゼロッテが声を張り上げた瞬間には、既にリオは回避運動を終えていた。
残像でも残ったのではないかと思わせる軽快なフットワークで足を運ぶと、振り向きざまに返す刀でグールの首を一文字に跳ね飛ばす。
移りゆく視界に首を失った自らの肉体が映り、黒いグールは現実を悟った。

「ク……ソガァァァ！」

それが死に際に放った言葉だった。
怒りの形相を浮かべたまま地面に崩れ落ちたところで、ようやく黒いグールが絶命する。
上半身を失ってもびくびくとのたうっていた下半身も動きを停止

して、その全身を覆っていた漆黒の鍍金(めっき)が剥がれ落ちていく。
だが、今際(いまわ)の際(きわ)を見届けることなく、リオは屋敷の外へ向けて駆けだした。

「あ、ハルト様！」

とっさに呼び止めたリーゼロッテだったが、リオは振り向くこともせずに走り続けている。
その場に残されたのは既に魔石となったグール達のなれの果てだけだ。
少しばかり普段のリオからは想像できぬ焦燥した感じが覗けて、リーゼロッテは意外そうにその後ろ姿を眺めていた。

☆★☆★☆★

そして、時は少し遡る。
アマンドの中央広場にて、アリアは迫り来る魔物達を次々と斬り殺していた。
ガラス細工のような絶世の美貌、雪のように白く淡い繊細な肌、そんな彼女の容姿は戦場においても一際(ひときわ)に周囲を圧倒する存在感を放っている。
彼女が屠った魔物の数は既に百を超えているが、その侍従服には血の一滴すら染みついていない。
ふと、アリアの姿が男達の視界から消えると、次の瞬間、いくつもの魔物の首が宙を舞った。
呆然と仲間の首が斬り飛ばされていく光景を眺める他の魔物達だったが、アリアの剣筋により次々と魔物の首が斬り飛ばされていく。
傍から見ると猟奇的な光景にしか見えないが、周囲の者達は男女問わず目を奪われている。
それはまさしく女神の舞であった。

「相変わらずアリアちゃんは美しいねぇ」

そんなアリアの活躍を見て、おどけた声色で軽口を叩く者がいた。
アマンド兵士団に勤める兵士長の一人であり、兵士団最強の存在でもある男、マティスだ。
路地で先を急ぐナタリーを見送ると、マティスは兵士と冒険者を引き連れて中央広場へと駆けつけた。
後から参戦したアリア程の勢いはないが、彼が屠った魔物の数も既に百を超えようとしている。
アリアとマティス、アマンドでも一、二を争う強者達が参戦したことにより、中央広場の戦況は揺るぎないものとなった。
この場にいる魔物達が殲滅されるのも時間の問題だろう――。
そう思われたその時、広場の片隅に灰色のグールが二体現れ、広場で戦っていた兵士と冒険者達に襲い掛かった。

「な、なんだこいつ？」
「ば、化物だ！」

新種の凶暴な魔物の乱入により、一時的に戦線が混乱する。
遠目からその強さを確認したアリアは僅かに瞠目すると、マティスに声をかけた。

「マティスさん。私は新手の魔物を殺してきますので、この場はお任せします」
「任された。けど、俺のことは呼び捨てにしてくれって言ってるじゃない」

戦闘中とは思えぬ場違いな軽口に応えることはせず、小さく嘆息すると、アリアは広場の片隅で猛威を振るっているグールの傍へと

駆けよった。
接近と同時にリズミカルに剣を振るうと、その首を斬り飛ばす。
凶暴な未知の魔物を前にしながらも、アリアは普段通りの無表情で淡々と魔物を屠っていた。
彼女から見ればゴブリンもグールも等しく殲滅すべき魔物にすぎないのだから。
飛び交う鮮血が着衣に付着するより前に距離をとると、アリアはもう一体のグールに接近した。

「ッ？」

突如として接近してきたアリアにグールがびくりと反応する。
だが、次の瞬間にはまた一つ、宙を飛ぶ首が増えていた。

「ふむ。これが例の正体不明な魔物とやらですか。確かに数が揃うと厄介ですね……」

嘆息し、地面でのたうつグールに止めを刺すと、残った魔石を拾う。
万が一、群れを成してグールが屋敷に襲い掛かったとしたら、今の屋敷の戦力では防衛は難しいはずだ。
ゆえに、本音としては今すぐにでもリーゼロッテの下へ馳せ参じたいところだが、今のアリアはリーゼロッテ直々の命令を受けてこの場にやって来ている。
その命令内容は広場にいる魔物の殲滅。
護衛として屋敷には人員を残している以上、中途半端な仕事をして帰還すればリーゼロッテからの叱責は免れないだろう。
今のアリアの仕事は魔物の群れをこれ以上先に進ませないことであり、そうすることがリーゼロッテの安全にも繋がる。
まさか魔物達の狙いがリーゼロッテであり、押しかけている魔物

達はすべてが陽動であるとは想像できるはずもなく、アリアはこの場に留まることを決めた。
しかし、グールの存在が気にかかる以上、リスクの管理も必要ではある。

「グレース」
「はっ」

アリアが名前を呼ぶと、近くにいた一人の侍従が返事をした。

「この場は私がいればもう十分です。貴方はこの場にいる侍従隊の半数を率いて屋敷に戻り、リーゼロッテ様の護衛に務めなさい。この魔石を残した魔物が群れて屋敷の方に行くと事です。残りの侍従は遊撃要員として都市の中に放ちなさい」
「承知しました！」

小気味よく返事をすると、グレースと呼ばれた侍従は即座に行動を開始した。

「さて、私はこの場にいる魔物を速やかに排除することにしましょう」

そう呟くと、アリアは今もなお広場で猛威を振るう魔物の軍勢に視線を移した。

☆★☆★☆★

リーゼロッテの屋敷を出ると、リオは即座に都市を出て空へと飛び上がった。
瞬時に雲の近くまで上昇すると、風を操ってぐんぐんと急激に加

速していく。
直進だけを考えて、とっさの制御も利かぬ程の速度で真っ直ぐに家へと向かっていくと、いつもの四分の一以下の時間で家の近辺へと戻ってきた。
そうして遥か遠くから岩の家を視界に映した時、強化された視力でアイシア達の無事な姿を確認することができ、ホッと息を吐く。
だが、何やら家の周りは荒れているようだ。
まるで戦闘でも起きたような――。
と、その時、リオは家の方角からアマンドへと向かってくる飛行物体を目にした。
相手もリオの姿に気づいたようで、そのまま鉢合わせることになる。
リオからすれば驚いたことに、相手は黒いローブを羽織った男であった。
見た目は人間で、リオと同じで空を飛んでいる。

「おやおや、貴方は……」

驚いているのは相手も同じようで、僅かに目を見開きながら興味深そうにリオを見つめている。

「空を飛べる程の精霊術士。なるほど、貴方があの人型精霊の契約者ですか」

と、男――レイスは得心したように呟いた。
強化したリオの聴力はその音を漏らさず拾う。

「どういう意味だ？」

スッと目を細めて、リオが尋ねる。

「おぉ、怖い怖い。そんな眼で睨まないでくださいよ。心配せずともあちらの家に暮らしている方々は全員が無事ですから」
飄々(ひょうひょう)とした口調で語るレイスに、リオは眉を顰(ひそ)めた。
「あんた、あの家に何の用があった？」
硬い声色でリオが不審な点を問いただす。
「何の用もございませんよ。私はただの通りすがりです」
肩を竦(すく)めて、レイスが頭(かぶり)を振る。
「……悪いが、信じられないな」
たとえ確たる証拠がなくとも、そんな言葉に惑わされることはなく、リオは油断なくレイスを見据えた。
すると、そこで、
――春人。
アイシアからリオに念話が繋がった。
おそらくリオが交信可能範囲に入って来たのを察したのだろう。
（アイシア。大丈夫か？）
隙のないようレイスを観察しながらも、リオはアイシアに応えた。
――さっき家が魔物に襲われた。けど、みんな無事だから安心し

て。たぶん春人の前にいる相手がけしかけたんだと思う。家の結界もそいつに中和された。

美春達の無事が確定し、リオの中で心の靄(もや)が完全に消え去った。

だが、アイシアからレイスが黒だという情報が伝えられ、その目つきが険しくなる。

――気をつけて。そいつから何か嫌な感じがする。人間じゃないかも。

と、警戒を促すアイシア。

(わかった。こいつは俺が何とかする。アイシアはそのままそこに。他にこいつの仲間がいるかもしれないから)

リオは頷き返すと、アイシアに美春達の護衛を継続して任せることにした。

――わかった。

アイシアから返事が戻ってきて、念話はそこでいったん終了する。

「魔物をけしかけてあの家を襲わせた理由を教えてもらいたい」

言い逃れを許さぬ毅然とした態度でリオはレイスに詰問した。

「おや、もうそこまでバレてしまいましたか。ふーむ……」

と、顎に手を当てて考えるそぶりを見せるレイス。

「どうでしょう？　正直に話す代わりにこの場は私を見逃していただくというのは」

やがて開口すると告げたのはそんな言葉だった。

「それは理由次第だな」

低く抑えた声でリオが答える。

「ですよねぇ」

くつくつと苦笑を漏らすと、レイスは先を続けた。

「ま、いいでしょう。私はあちらにいる力の強い精霊に興味を持っただけですよ。威力偵察をして邪魔になりそうなら排除をと思ったのですが、この場を見逃していただけるのでしたら、私から貴方達に危害を加えることはしないと約束しましょう」

そう言って不敵な笑みを浮かべる。

「私からということは、あんたに仲間がいたら意味のない約束だな」

「そうなっちゃいますねぇ」

人を食ったような声色で頷くレイス。

「……今アマンドが魔物に襲われているのもあんたが関係していそうだな」

リオはアイシアの証言から得られた情報を元に推測した事実を尋ねた。

極僅かではあるが、レイスがスッと目を細める。

「当たりか」

リオは僅かなレイスの反応を肯定と断じた。

「仕様がありませんね。まぁ、私の手の者を含めまして、貴方達を襲わないということは確かに約束しますよ。邪魔さえしなければという条件が付きますが、積極的に危害を加える真似はしません」

と、先ほどよりも譲歩した条件を提示するレイス。

「なので、どうでしょう？　この場を見逃していただくとともに、アマンドが魔物に襲われた件の黒幕が私だったことを秘密にしてもらうのは？」

続けて、そんな提案を付け加えた。

「魔物を操れるような輩とまともに取引をする気はないな。この場であんたを拘束してもっと情報を聞きだす。その上で始末した方が安全だろう？」

苦笑交じりに首を振るリオ。

だが、その目は笑っておらず、刃物のように鋭い眼光でレイスを見据えていた。

「そうなってしまいますか。となると私としては逃げる選択肢を採った方が賢そうですね」

リオからの容赦ない敵意の視線を受け止め、レイスはさも困窮し

たように肩を竦(すく)めた。
「逃がすと思うか？」
「うーん、どうでしょうねぇ。やってみないことには何とも……」
お互いに口調は緊迫したものではないが、その場にはまさしく一触即発の雰囲気が漂っている。
数瞬の後、先に動いたのはレイスの方だった。
爆発的な加速を得ると、瞬時に四十メートル程の距離を移動する。
が、リオも難なくその速度に追いつき、レイスの背後に付いた。
「驚きました。貴方、本当に人間ですか？」
いったん停止すると、レイスが僅かに目を丸くして尋ねる。
「それはこっちの台詞だ」
リオは胡乱(うろん)気に眉を顰(ひそ)めて尋ね返した。
「……なるほど。どうやら本当にただの人間のようだ」
窺うようにリオを凝視していたレイスだったが、得心したように呟いた。
だが、その面持ちにはやや驚愕の色が浮かんでいる。
「このままでは逃げられそうにありませんね」
レイスが悩ましげに言葉を漏らす。
「なら、こんなのはどうでしょう？」

そう言うと、レイスの周囲に数多の光球が出現し、一斉に放たれた。
その一つ一つが微誘導されて、緩く弧を描くようにリオに襲いかかってきている。

「ちっ」

小さく舌打ちをすると、リオはスッと目を細めた。
そうして視線を動かし、迫り来る光球の一つ一つを漏らさずに捕捉する。
次の瞬間、リオはランダムに軌道をとって、とんでもない反応速度で眼前へと迫った光球をすべて躱していった。

「お見事」

完全に対処しきったリオの手並みを称賛すると、レイスは第二波の光球を放った。
数は先ほどの倍はある。
今度はバレルロールを行い、リオが迫り来る光球を避けていく。
当たりそうになった光球も、精霊術で暴風を巻き起こし、弾き飛ばしてしまった。

「ほう」

その離れ業に攻撃を仕掛けたレイスも息を吐いた。
第三波の光球を放つが、リオは無造作に見えながらも、巧みに光球を躱して前へと前進している。
目にもとまらぬ速さでリオが迫ると、レイスは素早く飛びのこうとした。

だが、リオの動きの方が速く、その膝がレイスの胴を蹴り飛ばす。
ミシリと骨が軋む音が響いた。

「っ……」

蹴られた勢いで真っ直ぐとレイスが眼下の森の中に吹き飛び、それを追うようにリオも素早く飛翔する。
すると森の中から先ほどの光球よりも一際（ひときわ）大きな光弾がいくつか飛んできた。
とっさに身体を捻り初弾を躱すと、リオは剣を抜いて多めに魔力を流し込んだ。
リオの魔力に反応して剣が強く光り輝く。
飛んできた光弾をその剣を使って薙ぎ払うと、リオは速度を緩めずに真っ直ぐ降下した。
すると、森の中からレイスが飛び出してくる。
レイスは右手に魔力を集めて、手刀を模（かたど）ると、リオに正面から挑んだ。
次の瞬間、空中で二人が交差して、レイスの腕が斬り飛ばされて宙を舞う。
レイスは即座に斬られた腕を掴みとると、リオから距離を保って対峙した。

「いやはや参りました。まさかこれほどとは……」

陰鬱に微笑みながら、レイスがリオに賛美の言葉を贈る。
岩を砕くような蹴りを胴体にもらったダメージ、斬り飛ばされた利き腕、今のレイスは満身創痍のはずだ。
だというのに、その顔には苦痛の色がまったく浮かんでおらず、気持ちの揺れが全くと言っていいほどに読み取れない。
実に不気味な男であった。

「もう投降したらどうだ？　腕の治療もくっつけるのなら早い方がいいだろう」
「投降したいのは山々なのですが、あいにくとのっぴきならない事情がございまして。それに投降したとしても情報を吸い出したら処分されるのでしょう？」

と、レイスがこの期に及んでも鷹揚に語る。
だが、断じて増長しているわけではなく、ましてや気が触れているというわけでもない。
その口調には精神的な余裕を感じさせる何かが覗えた。

「……」

その真意を見極めようと、リオが冷ややかにレイスを直視する。
圧倒的に優位なのはリオのはずなのだが、何か嫌な感じがした。
情報は聞きだしたいが、これ以上この男と会話を続けても、相手の術中に嵌(はま)ってしまうだけのような――。
生かしたまま拘束することを目標として戦闘を行ってきたリオだったが、己の直感に従い最悪レイスを殺すことも視野に入れた。
口さえ利ければいいのだ。腕や脚を残しておく必要はない。
それでも無力化できずに口を割らず、反撃するようならばもはや殺すまで。
元より相手は美春達に魔物をけしかけ危害を加えようとした男だ。
今更殺しを行うことに是非などない。

「おお、怖い怖い」

そんなリオの方針の変化を機敏に読み取ったのか、レイスは大仰におどけてみせた。

その口元には不敵な笑みが刻まれている。
「ふむ、冷静な人ですね。どうやらこれ以上は本当に生命に関わりそうだ」
人を食ったような態度もすべては計算ずくだったのか、レイスは挑発に乗らないリオに感心したような視線を送った。
「下手に貴方へ手を出すのは本当に怖そうです。こちらの邪魔にしかなりそうにありませんしね。お互いに今日のことは忘れようじゃありませんか」
残った左肩を竦めて告げるレイスであったが、もはや真意を判ずるまでもない。
時間を稼ぐような会話の引き延ばしもこの男の術中だと断じて、リオは精霊術で周囲の大気を操り烈風をレイスへと叩きつけた。
「むっ」
僅かにレイスのバランスが崩れ、その動きに鈍りが出る。
それを見逃すリオではなかった。
風の噴流を生み出して自らを加速させると、一気にレイスへと差し迫る。
すると、その時、
「っ！」
リオはとっさに噴流を生みだし、飛び跳ねるように自らの軌道を逸らした。
一瞬の後、リオが通過するはずだった箇所を図太い灼熱の閃光が

通り過ぎる。

「あれは……」

閃光が飛んできた方向に視線を走らせると、遥か遠方に黒い竜が滞空していた。

おそらく今の閃光は竜のブレスだろう。

レイスがにやりとほくそ笑む。

「ようやく助けも来てくれたようですので。それでは、私はこれで失敬しますよ」

そう言い残すと、レイスは颯爽と逃走を開始した。

「っ、待て！」

慌ててリオが追いかけるが、それを妨害するようにレイスが無数の光球をばら撒いてきた。

それだけならさして脅威でもない。

二、三発が当たったところで、多少速度が停滞するとはいえ、周囲を覆う精霊術の暴風で弾き飛ばすことが可能だからだ。

だが、遥か彼方から黒竜が放ってくる閃光は決して無視できない。

数こそ単発だが、当たれば暴風で軌道を逸らすこともままならない程の威力が込められている。

しかも狙いはかなり正確で、軌道こそ直線的だが、閃光を放つ口の向きを変えることで、放射中もある程度の微調整が可能らしい。

閃光を避けることに専念するあまり、いくつかの光球に被弾してしまい、リオの速度が落ちていく。

そうして僅かにバランスを崩したところを見計らって、リオ目がけて閃光が放たれた。

「ちっ」

やむを得ずにその場で停止すると、リオは正面から竜のブレスを迎撃することにした。

右手に膨大な魔力を瞬時にかき集めて、精霊術で純粋なエネルギーに変換すると、迫ってきた閃光を明後日の方向へとはたき飛ばす。

遠目からレイスが目を瞠(みは)る姿が見えたが、今から追いつくことは不可能だろう。

追い打ちに雷撃の精霊術を放ったが、巧みに躱されている。

黒い竜も旋回すると、レイスとは別の方向に飛び去ってしまった。

遠い空に消えていく二つの影を見据えて、リオが深く溜息を吐く。

そうして臨戦態勢を解くと、リオは岩の家へと引き返したのだった。

☆★☆★☆★

それから一か月が経過する。

リオは美春達のもとを極力離れないようにして、アイシアと共に守りを固めたが、このひと月の間は先の騒動が嘘であったかのように穏やかな日々が続いた。

家の中に隠れていたとはいえ、すぐ間近に魔物達が迫ってきたことに何か感じるところがあったのか、雅人はより真剣に剣術の訓練に取り組むようになっている。

それは亜紀も同様で、やや過激とも言える雅人の訓練内容に口を挟むことはなくなったし、少し気恥ずかしそうではあったがリオに頭を下げてもっと鍛えてくれるように頼んできた。

この二人は少し意気込みすぎなところがあるようにも思えたが、そこは何とか美春が舵をとっている。

そうして瞬く間に過ぎた一ヶ月であったが、つい先日になってガ

ルアーク王国は勇者の存在を公表した。
その勇者の名前は皇沙月（すめらぎさつき）、美春達の知り合いと同名の存在であることから、間違いなく本人だろう。
現在、ガルアーク王国内は彼女の噂で持ちきりである。
魔物の撃退に成功したアマンドであったが、その被害は決して無視できるものではない。
都市の西部には魔物に襲われた被害の爪痕が至る所で見受けられ、現在は復興作業を行っている最中である。
だが、実に千年以上の時を経て再び現れた勇者召喚の吉報に、アマンドのムードも実に明るいものとなっていた。
リーゼロッテとの面会を果たすべく、ひと月ぶりにアマンドに訪れたリオは情報収集を行い、彼女の存在を知る。
そうであるならば、すぐにでも美春達を沙月に会わせてやりたいところだが、沙月の居場所は王城である以上、正攻法で会うとなると何らかのコネクションが必要となる。
非正規の手段として美春達を連れて王城の侵入することもできなくはないが、会った後のことを考えると色々と面倒だ。
何か良い策はないものかと思考を張り巡らせていると、リオはリーゼロッテの屋敷に辿りついた。
アポイントメントは一か月前に彼女と会った時にとってあり、用件は酒の供給に関する契約の報告だ。
ついでにいくつか試飲用の酒を持参している。
リーゼロッテは復興作業中で疲れているのではないかとも思ったが、リオが姿を現すと満面に笑みを浮かべて出迎えた。
ひとまず契約の品である精霊の民産の酒を差し出すと、リオはリーゼロッテから屋敷の中へと招かれることになる。
世間話を兼ねて、主にリオが屋敷を立ち去った後の話をすることになったのだが、酒を引き渡し、一通り事の顛末を聞き終えたところで、

「ハルト様が倒した魔物の魔石なのですが、是非こちらで買い取らせて頂けないでしょうか？　図らずも屋敷の危機を救って頂くことになりましたし、お値段の方は精一杯勉強いたしますので」

と、リーゼロッテはリオの倒したグール四体の魔石を譲ってくれないか打診してきた。

「ええ、別にかまいませんが……」

すんなりと頷くリオ。

そもそもあの時は家に戻ることに必死で、グールの魔石のことなど頭の中になかったのだ。

リオからすれば捨てたも同然で、リーゼロッテがその所有権をリオにあると認めているのは意外ですらあった。

「ありがとうございます！」

嬉しそうに頷くリーゼロッテ。

リオとしても喜ばしい臨時収入である。

「しかし魔石の買取額に色を付けるだけでは謝礼としては不十分でございますね。他に何かお礼ができればと考えているのですが、何かお望みなどありませんか？」

「謝礼ですか？」

思いがけないリーゼロッテからの申し出に、リオが目を丸くする。

「はい。ハルト様が屋敷に現れた魔物を撃退してくださったおかげで、当方の被害は最小限で済みましたから」

リオが相手をしていたグールだけを倒すと即座に立ち去ってしまったことに思わないところがないわけでもないが、それでも助かった部分の方が圧倒的に大きい。
都市の中に散らばっていたグールはアリアを始めとする腕利き達がすべて排除してくれたが、戦力が不足していた屋敷に現れたグールはリオの協力がなければ撃退することができなかったのだから。

「そうですか。なるほど……」

何かを考えるように顎先に手を当てると、リオは唸った。
別にリオはリーゼロッテを助けるためにグール達を倒したわけではない。
ゆえに恩に着せるつもりはなく、本来ならばお礼を受け取るつもりもあまりないのだが、ふと妙案を思いついた。
僅かに逡巡してその案の妥当性を考えてみたが、悪くない選択肢であるように思える。
そう考えて、

「では、お願いしたいことがございます」

リオは凛とした声で話を切りだした。
決然とした視線と物言いを受けて、どのような要求が来るのかと、リーゼロッテが姿勢を正す。

「私をガルアーク王国の勇者に会わせて頂きたいのです」

果たしてリオから告げられた意外な申し出に、リーゼロッテは目を見開き、やや呆けた顔を浮かべたのだった。

第８５話　勇者と会うためには

「我が国の勇者様にお会いになりたい……ですか？」

静謐（せいひつ）な応接室の空間にリーゼロッテの心地よいソプラノ声が響いた。

「はい。その通りでございます」

耳触りの良い声でリオが肯定する。

「……不躾な質問で恐縮ですが、それは何故でしょうか？」

僅かな間を置き、リーゼロッテが尋ねた。

皇沙月（すめらぎさつき）――、最近になってガルアーク王国に登場した勇者であり、最重要人物でもある女性だ。

大した素性も知れない一般人が会いたいと言ったところで、当然ながらそう簡単に会える人物ではない。

今や時の人である彼女に何の用があるというのか、その真意を見極めるべく、リーゼロッテは僅かに目を細めた。

「会って話したいことがあるからです」

真っ直ぐとリーゼロッテを見つめ返し、リオが答える。

「その内容をお聞かせ頂くわけには？」

表情、仕草、声からして嘘は言っていない。

そう判断すると、リーゼロッテはリオに問いかけた。
だが、リオは頭(かぶり)を振って、
「恐れ入りますが、詳しい話の内容を申し上げることはできません。まぁ半分は興味本位の物見遊山のようなものとお考えください」
と、そう回答した。
リーゼロッテは目を瞑り、しばし沈黙する。
「……結論から申し上げますと、ハルト様を勇者様にお引き合わせすることは可能です」
再び目を開くと、生真面目な表情を浮かべてから、しかる後、厳かに告げた。
だが、続けて済まなさそうな面持ちを浮かべると、
「しかし、大変心苦しいのですが、私の立場上、あまり素性の知れぬ人物を勇者様に会わせるわけにもいきません」
リーゼロッテはそう言葉を付け足した。
今の彼女はリオのことをほとんど何も知らない。
何となく表面的な人となりはわかる。近隣諸国で生まれたとも聞いた。
だが、リオが具体的にどんな生まれなのか、どこかの国や組織に所属しているのか、過去にどのような道を歩んできたのか、背後の人物関係に問題はないのか――。
リーゼロッテはそういったリオの経歴について何も知らないのだ。
それらを知るにはあまりにも付き合いが浅すぎる。
マナーや言葉遣いなどからリオは平民とは思えぬ教養を身につけていることが窺えるし、グールとの戦闘からそこいらの騎士が裸足

で逃げ出すほどの強さを誇ることもわかっている。
こうした技能は決してそこら辺にいる一介の平民が持ち合わせているものではない。
だからリーゼロッテはリオがやんごとない生まれなのではないかと睨んでいるのだが、いかんせんリオは謎が多いために推測の域を出ないままだ。
もちろんリーゼロッテも個人としてはリオのことを信じたいとは思っている。
だが、ガルアーク王国の貴族としては安易に信じることはできない。
仮に二人を引き合わせて沙月に何かあれば、リーゼロッテの責任問題を越えてガルアーク王国の国益を害しかねないからだ。
リオは沙月に話があるという。
普通に考えれば異世界から現れた沙月に話すことがあるとは考えにくいのだが、いったいリオは沙月に何の話があるというのか。
もし本当の狙いが沙月と話をすること以外にあるとすれば――。
ガルアーク王国が勇者の存在を公表したのはつい最近のことだが、その存在はこれまで公然の秘密であった。
だから他国の人間であっても少し耳が良ければガルアーク王国に勇者がいることを知るのはさほど難しくはなかったという背景がある。
仮にリオが他の国に所属しているとしたら、沙月の暗殺を企てているとしたら、暗殺が目的でなくともスパイを行おうとしているとしたら、リオを沙月に近づけるわけにはいかない。
リーゼロッテが瞬時にそこまで思考を巡らせたところで、
「それは当然のことかと存じます」
リオが同意の言葉を返す。

「ですが私にガルアーク王国の勇者様を害する意思はございません。何なら牢屋に拘束して入れられた状態で話をしても結構です」

そのままリーゼロッテの目を真っ直ぐに覗き込むと、リオは言葉を付け加えた。

（こちらが何を懸念するのかは見透かした上で発言しているというわけね。つまりこれは自分が潔白であることの遠まわしなアピール……）

そう考えて、リーゼロッテはリオの視線を正面から受け止めた。そのままじっとリオの顔を見つめ返すと、口元に苦笑を覗かせる。ややあって小さく嘆息すると、

「ハルト様にそこまで仰ってもらえたとなると信じざるをえませんね。わかりました。一対一での対面は少々難しいですが、お二人をお引き合わせいたします」

と、リーゼロッテが告げた。

リオがスパイだと仮定して、潜伏先からあえて注意を惹いた上で信頼を勝ち取るというやり方もないわけではない。

だが、これまでの客観的な行動からして暗殺者やスパイである危険性は低いだろう。

その僅かな危険性と先の一件における恩を秤にかけ、リーゼロッテはリオを信じることにした。

「よろしいのですか？」

少しばかり意外そうな面持ちでリオが尋ねる。

「はい。近々ガルアーク王国の王城で勇者様のお披露目会が開催されます。そこには国内の貴族はもちろん国外からも大勢の来賓をお招きすることになっているのですが、私の権限でその場に一名くらいなら外賓をお招きすることができます。一対一の面談とはいかないのですが、いかがでしょうか？」

「願ってもないことです。是非よろしくお願いいたします」

リーゼロッテの提案に、リオは恭しく頭を下げた。

「承りました。では、そのように手配いたしましょう。日程はちょうど一ヶ月後となっておりまして、当日は私にお付き添い頂くことになりますが、何かご質問はおありでしょうか？」

リーゼロッテからの質問に、リオは僅かに逡巡する素振りを見せると、

「そうですね。では、確認させて頂きたいことがございます。王都までの移動はリーゼロッテ様にお供させて頂くことになるのでしょうか？」

リーゼロッテに質問を投げかけた。

「そうですね。ご都合がよろしければそのようにお取り計らい頂けないでしょうか？」

「承知しました。よろしくお願いいたします」

それからいくつかの事項を確認し終えると、話は酒の供給に関する契約に移った。

「一年に二回。ご希望の酒を決まった量だけリーゼロッテ様の下へ

お運びするということでいかがでしょうか？　先日に決めた通り、契約は一年間を期限とした更新制で、更新を行う場合は当事者のいずれかから期限の半年前までに申請を行うということで。私から他の方に業として酒を供給することはいたしません」

既に契約書の雛型は完成しているため、確認の意味を込めて条件を提示する。

「はい。お酒の製造に関してはシーズンもあるでしょうから、結構ですよ。ですが輸送に関してこちらからお手伝いさせていただくことは本当にないのですか？」

値段が値段ゆえに注文するのは極少量の酒になるが、それでも運送には馬車が必要になるだろう。

馬車というのは整備や馬の手入れを小まめにしなければならない関係上コストがかかり、商人でもなければ個人で所有する者は少ない。

そこでリーゼロッテは運送の際には御者付きで馬車を貸し出すと提案したのだが、リオはそれを断っていた。

「ええ。問題ありません。とはいえ、こうして契約が成立段階に入った以上は、こちらの運送手段を明らかにしておいた方が望ましいかもしれませんね。ですが、出来れば現時点ではリーゼロッテ様以外に申し上げたくはないのですが……」

そう告げると、リオはちらりと室内に黙って控えているアリアとナタリーに視線を移した。

秘密主義も行き過ぎれば不信を買うだけだ。

リーゼロッテからの信頼を得るには、差支えのない範囲でなるべく情報を開示することが望ましいだろう。

とはいえ、リオが持つ時空の蔵は公に存在が知られれば良からぬ輩を引き寄せることになりかねないため、教えるのならば信頼すると決めた相手に限定することが望ましい。
だからこそ一先ず教える相手はリーゼロッテに限定するべきだ。

「……なるほど。アリア、ナタリー、二人とも一度部屋の外に出ていきなさい」

顎に手を当て、考える素振りを見せると、リーゼロッテが言った。
護衛を残さずに密室で二人きりになって会うなど非常にリスクの高い行為だ。
ゆえに僅かに目を見開くアリアとナタリーだったが、

「畏まりました。扉の前にて待機いたします」

そう告げて、スッと頭を下げると、扉の外へと出ていった。

「不躾なお願いをお聞きくださり、ありがとうございます」

小さくお辞儀してリオが礼を告げる。

「結構ですよ。ですが、運送手段を伏せておきたいという理由について、早速ですがお聞かせ頂けますか？」
「承知しました。私は時空の蔵と呼ばれるアーティファクトを所有しております。手短にご説明いたしますと、荷物を時間的、場所的に隔離された亜空間に収納することができるという代物です」

その説明にリーゼロッテが目を瞠る。

「荷物を収納できる亜空間……ですか？　今のお話からすると収納

された荷物、例えば食物を腐らずに保存しておくことも可能であると？」
「ええ、その通りです」
流石のリーゼロッテも目に見える形で驚きを露わにしてしまった。本当だとすれば商人からすれば喉から手が出るほどに欲しいものだ。
話を聞いただけでは眉唾物（まゆつばもの）の道具だが、この状況でリオが嘘を吐く必要は皆無である。
「実際にお見せいただくことはできませんか？」
「もちろんです。では、実際に時空の蔵からこの場に荷物を取り寄せましょうか。『解放（ディスチャージ）』」
リオが時空の蔵を発動させる呪文を唱えると、応接室の机の上に小さな空間の渦が巻き起こり、小さく切り分けられたチョコレートの載っかった皿が現れた。
リーゼロッテはもはや驚きを隠そうともせずにその様子を食い入るように見つめている。
「ほ、本当のようですね」
「ええ、よろしければどうぞ。自家製の生チョコです。お口に合うかどうかはわかりませんが」
リオは備え付けのフォークでひんやりと冷えた生チョコを口に運ぶと、リーゼロッテに皿を差し出した。
「では、お一つ頂戴しますね。……っ、これは！」
おずおずと生チョコを頬張ると、リーゼロッテは目を見開いた。

「……香り高いチョコレートですね。口いっぱいに上品な甘さが広がります」

自然と笑みを浮かべて感想を告げるリーゼロッテ。

「お口に合ったようで良かったです」

お菓子の作り方は精霊の民の里でハイエルフの少女オーフィアから教えてもらったものだ。

以前に美春と一緒に作ってセリアや亜紀から大絶賛を受けたもので、今出したのはその時に余った分を保存しておいたものである。

「しまう時は『保管（ストレージ）』と唱えます」

リオがそう告げると、皿を包み込むように空間の渦が巻き起こり、スッと皿が姿を消した。

「あ……」

消えてしまったチョコレートを目にして、リーゼロッテが残念そうな声を漏らす。

その姿にリオはくすりと笑った。

「『解放（ディスチャージ）』」

再びリオが呪文を唱えると、チョコレートの載っかった皿が机の上に現れる。

「よろしければどうぞ」

リオは改めてチョコレートをリーゼロッテに差し出した。

「あ、ありがとうございます」

顔を紅潮させながらリーゼロッテが礼を述べる。

上手く隠してはいるが、その目は嬉しさで輝いていた。

心理的に食べやすいようにとリオがチョコレートをつまむと、リーゼロッテも手を伸ばし始める。

「ほんのりと後を引く甘さがたまりません」

口に含んだチョコレートの味に可愛らしく顔を緩ませるリーゼロッテ。

そんな彼女の反応に、リオは柔らかな笑みを浮かべたのだった。

☆★☆★☆★

「沙月さんの居場所がわかりました」

リーゼロッテとの対面を終えて帰宅すると、リオは美春達に沙月の居場所が判明したことを伝えた。

リビングのソファにはリオ、美春、亜紀、雅人の四人が座っている。

「本当ですか？」

美春達がパッと晴れやかな表情を浮かべる。

「はい。予想通りといいますか、やはり勇者になっているようです。

彼女はここガルアーク王国の王城にいます」

と、リオは今の沙月が何をしているかを教えた。

「勇者かぁ……。良いなぁ」

勇者という響きに憧れている風に、雅人がぽつりと呟きを漏らす。

まだまだお年頃なせいか、そういった存在に無条件で憧れを持っているのだろう。

とはいえ、リオとしては彼女が置かれている立場を想像すると少しも羨ましくはないし、何とも厄介な立場にいてくれたものだと思わずにはいられなかったりする。

「あんたガキね」

やれやれと呆れたように、亜紀が嘆息する。

「いいじゃねぇか。姉ちゃんだってまだ子供だろ」

雅人は口を尖らして反論した。

平常運転な二人に見えるが、その表情はいつも以上に明るい。

魔物が襲来してからここ一ヶ月は家に閉じこもって言葉の学習や剣術に棒術の習得に専念していたことから、ようやく舞い込んだ吉報にホッと一安心することができたのだろう。

美春も二人の様子を嬉しそうに見つめている。

「ちょっといいかな？」

そのまま二人の間で恒例のじゃれ合いが発生しかけたところでリオが言葉を挟む。

「あ、はい。ごめんなさい」
「わりぃ」
ばつが悪そうに謝罪する亜紀と雅人。
リオは小さく首を振って問題ないと伝えると、
「居場所が分かった以上、早速みんなをその沙月さんと会わせてあげたいんだけど……、彼女の立場上そう簡単に会うことはできない。わかるかな？」
「ん？　普通に会いに行けばいいんじゃないのか？　門番の人に事情を説明すればいいだけだろ？」
首を傾げて雅人が尋ねる。
「……そんなに簡単にいくかな？」
すると、ぽつりと美春が疑問を呈した。
「無理とは言いませんが、考えなしというか博打的な要素が強いです。それにリスクも高い」
と、リオが難色を示す。
美春達はもちろん、長年この世界で暮らしているリオも、ガルアーク王国での身分は平民と変わらない。
そんな者達が会いたいと言ったところで、国賓として王城に滞在している沙月と簡単にお目通りが叶うことはないだろう。
城の門番に事情を説明したところで門前払いされる可能性の方が高い。

「リスクって？」

雅人が尋ねた。

「良くて魔力の豊富なみんなが国の魔道士として囲われて利用されるくらいかな。最悪のケースを考えると、沙月さんに命令を従わせるための保険として君達を人質にとる」

「っ……」

辛辣なリオの予想に美春達が顔をひきつらせた。

美春達の魔力はこの世界で暮らす人間族の比ではなく、魔道士として育てて使うだけでもその利用価値は非常に高い。

勇者である沙月との関係も踏まえて、そう簡単に死なせるような危険な場所には向かわせないだろうが、王侯貴族の中には権力争いで美春達を利用しようとする者もいるだろう。

そう考えると、正規の手段で会うにしても、考えなしに美春達を沙月のもとへ連れて行くわけにはいかない。

「いくら何でもそんな真似は……しない、ですよね？」

おずおずと亜紀が問うた。

「どうかな。この世界に人権なんて認められていないからね。民衆のために権力を歯止めするシステムもない。だから権力さえあれば弱者に何でも言うことを聞かせられる。権力者が集まる場所は窮屈で住みづらい場所だよ」

困ったように微笑して、諭すようにリオが答える。

冗談ではないということが伝わってきて、亜紀は息を呑んだ。

「で、話はここからが本題だ」

亜紀達を見渡すと、リオが話を切りだした。

「実は一ヶ月後にガルアーク王国の王城で勇者のお披露目パーティが開かれるらしい。俺はその会に招待してもらえることになったんだけど……」

そこまで言うと、リオはいったん言葉を切って小さく息を吸った。

「俺はそこで沙月さんに会って話をしてこようと考えている。それで可能ならばみんなが沙月さんと会えるように取り計らおうと思っているんだけど、みんなは留守番をしていてくれないかな？」

流石のリーゼロッテもさして素性も知れぬ一般人をぞろぞろと沙月のお披露目会に招くことはできず、出席できるのはリオだけだ。

そういった夜会に出席するとなると色々と作法を身につけていなければならないのだが、貴族の学び舎に通っていたことのあるリオはともかく、美春達はそういった作法は何も知らない。

そんな状態で無理を承知で強引に夜会に連れていくのは得策ではないだろう。

「それはもちろんと言いますか。私達のためにハルトさんに面倒事を押し付ける形になってしまい……、その、申し訳ありません」

美春は恐縮した様子でリオに深く頭を下げた。

きっと美春達だけではスムーズに事態を進めて沙月と面会する段取りをつけることはおろか、こうしてまともに生活をしていることすらできなかっただろう。

恩は返すどころか溜まっていく一方で、それが申し訳なくて、も

どかしくもあった。

「面倒だなんてことはありませんよ」

そう言いながら、リオはいつの間にか空になっていたカップに紅茶を注いだ。

かぐわしい香りが漂ってきて、気分をリラックスさせてくれる。

顔を上げると美春が済まなそうな表情を浮かべていて、リオは小さく微笑んだ。

「俺が沙月さんのお披露目会に出席している最中は、美春さん達にも宿をとって王都に滞在してもらおうと思っています。期間は二週間もかからないはずです」

「あ、はい。わかりました」

美春が返事をすると、亜紀と雅人もこくりと頷いた。

すると、そこで、

「あの、お兄ちゃんの詳細はまだわからないんですよね？」

と、亜紀がおずおずと尋ねてきた。

「ごめん。貴久君だったかな。彼の消息はまだ掴めていない。沙月さんが勇者になっている以上、彼も勇者になっている可能性は高いと思うけど……」

「そう……ですか」

「噂レベルだけど、ガルアーク王国の南にあるセントステラという王国にも勇者が存在するという情報が流出している。貴久君も国に所属しているのなら、いずれ沙月さんみたいに存在が公表されると思うよ。何か情報が入ってくればすぐに伝えるから」

「はい。よろしくお願いします！」

亜紀がぺこりと頭を下げる。

何はともあれ、沙月の所在と安全を知ることができただけでも、美春達の不安の種も半分は解消されたことになる。

後は亜紀と雅人の兄である千堂貴久の安否であるが、リオが彼の居場所を知るのはもう少し先のことであった。

☆★☆★☆★

立てかけた梯子（はしご）から岩の家の屋根に登り、美春はぼんやりと夕暮れに染まった空を眺めていた。

地球にいたままではそうそうお目にかかることはできないであろう綺麗な空である。

ふわりと吹いた風に揺られて、美春の長い髪が波を打つ。

「……と見たかったな」

風が奏でる森のざわめきに、美春の呟きが吸い込まれる。

凛としたその瞳には薄っすらと涙が浮かんでいた。

「……さん？」

下の方から声が聞こえた気がして、慌てて涙をふき取ると、美春は屋根の端まで歩いて眼下を見下ろした。

「ハルトさん……」

そこには美春を見上げるリオの姿があった。

リオの眼差しを受けて、美春の綺麗な目が見開かれる。

そのままじっとリオを見つめていると、

「寒くないですか？」

美春の身を案じるように、リオが言葉を投げかけてきた。

季節は春前で、夕方となればまだまだ冷え込む時期だ。

美春はシンプルなレースの付いた黒いチュニックワンピースを着ているだけだから、風邪を引かないかとリオは心配したのだろう。

「はい。少し夕焼けを眺めていただけですから、大丈夫ですよ」

美春が穏やかな微笑を浮かべて答えた。

「ハルトさん。いつもありがとうございます」

続けて、背筋を引き伸ばし、真摯（しんし）な表情を浮かべると、美春がリオに礼を告げる。

「はい……？」

何に対して礼を言われたのか疑問に思って、リオは首を傾（かし）げた。

「ふふ」

その様子を見て、美春がくすりと笑う。

リオは思わずそんな彼女に見惚れてしまい、馬鹿みたいに突っ立ったまま、声も出せずにじっと美春を見つめていた。

「きゃ」

その時、周囲に少し強い風が吹いて、美春が小さく悲鳴を漏らした。
美春のスカートが悪戯に揺れて、リオの視界に純白の布切れが映る。
「へ」
と、二人の声が重なる。
「っ……」
すぐにリオが顔を赤く染めて視線を逸らす。
「ふ、ふぇ？」
美春のすっきりとした頬も、夕焼け空のように真っ赤に染まっていた。
慌ててスカートの裾を押さえるが、リオの反応からして見られてしまったのは明白だ。
「お、お、お、お見苦しいものをお見せして……」
くるくると目を回して美春が物凄い勢いで頭を下げた。
「い、いえ、俺の方こそすみませんでした！」
所在なさげに視線を外したまま、リオも謝罪の言葉を口にする。
「うう～」

リオが横目でちらりと美春を見やる。
美春は僅かに顔をうつむけ、恥ずかしさで身体を震えさせながら、自分の足元を見つめていた。
その仕草はリオの――。
いや、天川春人のよく知る幼馴染のものとまったく変わっていなかった。
すると再び強い風が吹いて、美春があたふたとスカートを押さえる。

「は、早く下に降りた方がいいですよ。もう暗くなりますし、風も吹いてきたようなので」

上ずった声でリオが告げる。

「は、はい！　そうします！」

気が動転しているせいか、美春がぎこちない動作で足を動かす。
リオはサッと背を向けて、明後日の方向に視線を走らせた。

「きゃ」

背後から美春の悲鳴が聞こえて、リオはとっさに振り返った。
すると躓(つまづ)いて転びそうになっている美春の姿が視界に映る。

「あ、危ない！　みーちゃ……！」

バランスを崩す姿を見て、リオは無意識のうちに幼い頃の呼び方で美春を呼びかけてしまった。
とっさに口を噤(つぐ)み、身体能力を強化して屋根の上に飛び移ると、そのまま美春の身体を抱きかかえるようにしてそっと支える。

「あう……」

目を瞑って身体を硬直させていた美春だったが、リオの胸に顔を押し付けられてびくりと反応した。

「大丈夫ですか？」

美春の顔を覗き込んでリオが尋ねる。

「は、はい」

おそるおそる目を開くと、美春はこくりと頷いた。

ぱちぱちと瞬(まばた)きをしてリオの顔を見つめる。

「良かった……」

リオがホッと息を吐く。

形の良い鼻梁(びりょう)に長い睫毛(まつげ)に彩られた美春の美貌(びぼう)が至近距離からくっきりと視界に映る。

腕の中で身体を小さく強張らせている様子は小動物のようだった。

「えっと、その……」

じっとリオの顔を見つめている美春だが、どことなくその顔が赤い。

「どうかしました？　足でも捻ったとか？」

美春の顔色を機敏に察して、リオが安否を再確認する。

「あ、いえっ、そのっ、あのっ……えっと……」
しどろもどろに言葉を紡(つむ)ごうとする美春。
その顔はますます赤くなっている。
「あ、ごめんなさい！」
いつまでも密着したままでは恥ずかしいだろう。
顔を赤くするのも当たり前だ。
それに気づいて、リオは慌てて美春から距離をとった。
「あ……」
美春の口から小さな声が漏れた。
伸ばしかけて、引っこめたようにも見えた手で、所在なさげに衣類を正す。
そのまま美春は様子を窺うように、そっと上目づかいでリオの顔を見上げた。
それは思わず男の保護欲をくすぐる様な素振りで、意識してこれをやっているのならば罪作りだが、そういうわけではない。
美春があまり男慣れしていない感があることはこれまで生活で何となく察していることから、リオは無意識でやっているのだろうと判断した。
「……」
二人の間に何となく気まずい沈黙が流れる。
その間にも断続的に微風が二人の周囲を吹き抜けていた。

「くしゅん」

ふと、美春が可愛らしいくしゃみをする。
リオはその様子を目にすると、自らの首元に巻かれていたストールに視線を移した。

「えっと、寒いですから……」

そう言って、身に付けていたストールを外して、美春の首に巻きつける。

「あ、ありがとうございます……」
「い、いえ……」

二人は照れくさそうに頬を染めた。

「温かいですね」

そっと首元のストールを両手で握りしめて、顔に引き寄せると、美春が言った。

「そう言えば美春さんはマフラーやストールを持ってなかったですよね。もうすぐシーズン外になっちゃいますけど、今度外出する時に買いに行きましょう。男用ですけど、良かったらその時までそれで間に合わせてください」
「え、あ、はい。いいんですか？」
「ええ、その、俺はまだ何個か持ってますから」

そっとはにかんでリオが告げる。
しかし、ちょうど太陽は地平に落ちかかっており、周囲は急速に

夜へと移り変わっていたため、美春にはリオの表情はあまりよく見えなかった。
そのまま無言の時間が十秒ほど流れて、
「あ、あの！」
徐に美春が口を開いた。
「は、はい」
リオが姿勢を正して返事をする。
「あの、ハルトさん、さっき……」
何かを探ろうと話しかけた美春だったが、後半になるにつれて尻すぼみになっていく。
二人の間にある一メートルほどの空間が見えない壁となって、美春の声を遮った。
「美春さん？」
「あ、いえ。何でもありません」
微笑を浮かべて、美春は言葉を呑みこんだ。
「そう、ですか？」
「はい。家の中に戻りましょう。そろそろ雅人君がお腹を空かせているでしょうから」
「そうですね」
くすりと笑ってリオは同意した。

「そういえば雅人君がラーメンを食べたいと言っていたんですけど……」
「じゃあ今度作ってみましょうか。凝ったスープは作るのが難しいでしょうけど。あ、こっちの世界だとラーメンはカムタンというんですよ」
そんな会話を繰り広げながら、二人は完全に周囲が闇に包まれる前に家の中へと戻った。

第８６話　正装の購入と決断と

ガルアーク王国の王都へと出発しなければならない期日が迫ってきたある日のことだ。
沙月のお披露目を兼ねた夜会用の正装を購入するため、リオはセリアと一緒にアマンドへと訪れた。

「うふふ」

と、隣を歩くセリアのご機嫌はすこぶる良い。
セリアは外出用に魔道具で髪の色を変えているせいか、普段とは少し雰囲気が異なって見える。
るんるんと鼻歌交じりで隣を歩く姿はなんだかとても可愛らしかった。
そんな彼女の姿に、リオはちょっとだけ微笑むと、

「すみません。俺の買い物に付きあわせてしまって」

と、セリアに話しかけた。

「え？　ううん。いいのよ。引きこもってばかりだと身体に悪いし。やっぱり外を歩かないとね」

思わず「おお」と、リオが感嘆の声を漏らしてしまいそうになる。
引きこもりを地で行くセリアからは想像もできないくらいに健康的で前向きな発言だ。
最近も彼女は部屋に閉じこもって研究漬けの日々を過ごしていた。
普段からこうして運動するように心がけてくれればいいのに――。

そう思って、ちらりと横目でセリアを眺めると、彼女はにこにこと微笑んでいた。
そんなセリアが何を考えているかというと、
（せっかくリオと二人きりのチャンスなんだから。今日という日を生かすわよ！　何だかんだで二人きりで外出した機会って一回しかなかったし、しかもその時は別行動だったし……）
と、内心で強く意気込んでいた。
十代半ばにも達していない少女と言っても差支えのないくらいに若々しい見た目をしているセリアは二十一歳の乙女である。
遅れて咲いた初恋相手の隣を歩き、今日の彼女はいつにも増してときめいていた。
そんなセリアの心情はつゆ知らず、
「でもなんだか新鮮ですね。こうしてセシリアと二人だけで一緒に都市の中を歩くのって。昔は研究室で会うことが多かったですし」
リオが少し懐かしそうに言った。
突然に声を掛けられて、セリアがびくりと震える。
「えっ？　ええ、そ、そうね。あの頃はよく紅茶を淹れてもらってたっけ。えっと……」
意気込みすぎているのか、隣を歩くリオのことを意識してしまい、セリアの声が半音高くなってしまう。
願ってもない二人きりの状況で、喋りたいことはたくさんあったはずなのに、想いが声にならない。
何とか平静を装おうとはしているが、顔が熱くなっているのが自分でもわかる。

こほんと咳払いをして何とか落ち着きを取り戻すと、セリアはリオに言葉を送ることにした。

「ところで夜会にはどんな正装を着ていくつもりなの？　ハルトなら燕尾服とか似合うと思うけど」

「実は俺、服を吟味して選ぶのがどうも苦手で。いつも何となくで服を買ってきたものですから。だからセシリアに選んでほしいなと思いまして」

と、窺(うかが)うようにリオが答える。

今日こうしてセリアを連れてきたのは貴族として夜会に幾度も出席してきた彼女が頼りになると考えたからだ。

一緒に正装を選んでほしいとは言ったものの、リオとはしてはあまり自分の服のセンスに自信がないため、完全にセリアに選んでもらいたかったりする。

「うん。それは構わないけど、私でいいの？　ミハルも良いセンスをしていると思うけど……」

そう言ってから、小声で「リオ、ミハルと仲が良いし」とぼそりと呟く。

だが、その声がリオの耳に届くことはなかった。

「はい。セシリアなら夜会の経験も豊富でしょうから。それに服のセンスも良いと思いますよ。セシリアなら俺に合う服を選んでくれるかなと思ったからこそ頼ったんです」

「そ、そう？　ありがとう……」

セリアは気恥ずかしくなってしまい、かぁっと顔を赤らめて礼を言った。

あまり口数が多い人間ではないが、リオは意外とストレートに感情を表現してくる。
不意にドキリとしてしまうことも多く、こうしてドギマギしてしまうこともよくあった。
しかし、いつも自分ばかりがドキリとさせられるのは少し悔しい。
「じゃあ早く行きましょう。ほら」
偶にはこちらからドキリとさせてやろうと考え、セリアは思いきってリオの手を掴んだ。
そうしてすたすたと歩き始めるが、その足取りは普段の彼女よりも妙に速い。
そんなセリアに引っ張られてリオも歩く。
「ちょっとセシリア。歩くの速くないですか？」
「は、早く行きましょうって言ったでしょ。男の子なんだから情けないこと言わないの」
大人の余裕を見せつけるどころか、若干しどろもどろになりながら、セリアが返す。
ゆっくりと歩けるものか。
隣に並んで横顔を見られたら、顔が真っ赤に染まっていることがバレてしまう。
リオと手を繋げた喜びと気恥ずかしさが相まって、セリアは絶妙な幸福感に浸っていた。
自分からリオをドキリとさせてやるという当初の思惑は吹き飛んでいたりする。
そんな感じで歩きながら、二人が訪れたのは上流階級向けの衣類を取り扱う衣装屋であった。

「さ、選びましょうか。その前にまずはサイズを測らないといけないかしら」

お目当ての店に足を踏み入れると、セリアが弾んだ声で言った。

正装の販売もしており、どうやら既製品の販売だけでなくオーダーメイドも受け付けているらしい。

先ほどからずっと繋がれたままの手を引いて、セリアはリオと一緒に店の奥に入っていく。

「いらっしゃいませ。当店へおいでいただき、ありがとうございます。本日はどのようなご用でしょうか？」

店が製作したであろう正装を着た男性の店員が二人を出迎える。

「夜会用に彼の正装を買いに来たの。まずはサイズを測ってもらえるかしら？」

買物に慣れた感じでセリアが答えた。

「畏まりました」

それからリオは店員に体のサイズを測ってもらうことになった。

正確なサイズを測るために試着室に入り、半裸になって大人しく採寸される。

サイズを測ったのは若い女性店員なのだが、僅かに顔を赤らめているせいで、リオまで恥ずかしくなってしまう。

（働き始めて日が浅いのか？）

などと考えるリオ。

それから店員が部屋の外にいるセリアへとサイズを伝えて、その間にリオは服を着ることにした。
どうせすぐに試着をするのだからと元から着用していた服をすべて着ることはしない。
薄着姿で試着室から出ると、既にセリアは商品の選別を開始していた。
良さそうな服を見つけては何やらブツブツと呟き、服を両手で持ってかざしてじっと見つめている。

「あ、ハルト、出てきたのね」

リオに気づき、セリアがパッと笑顔を咲かせた。
それから吟味中のテイルコートを持ってくると、

「はい。じゃあまずはこれを着てみて」

そう言って、リオに差し出してきた。

「はい。わかりました」

受け取った服を持って試着室に戻ると、リオは手早く着替えを始めた。

「着替えました」

試着室を仕切る布を開き、リオが告げる。

「うん。なるほどね。似合っているわよ」

セリアがじっとリオの全身を見渡すと言った。

その言葉が嬉しくてリオが微笑む。
リオとしてはもうこの服でもいいんじゃないかと思ったのだが、
「さ、じゃあどんどんいってみましょうか。まだまだ候補はたくさんあるからね」
と、セリアが新たな燕尾服を差し出して告げる。
どうやら先はまだ長そうだ。
服を受け取り、リオは苦笑して再び試着室へと戻った。
それからリオはセリアの着せ替え人形の如く試着を繰り返す。
既に自分でも何回着替えたのかわからない数の服を試着している。
服を選ぶセリアの表情はとても楽しそうで、なんだかリオまで楽しくなってきた。
（今の生活を楽しんでもらえてはいるのかな）
うきうき気分で新たな服を吟味するセリアを見て、リオは思った。
今の生活に不満を抱いているか、ストレスが溜まっていたら、ああいった顔はできないだろう。
「うん。すごく似合っているわよ」
リオが最終的に購入を決めたテイルコートを纏うと、セリアがうんうんと深く頷きながら言った。
「どうも……」
姿見に見慣れない自分の姿を見て、リオがむず痒そうに礼を言う。
普段とは違う格好をするというのはなんだか妙に気恥ずかしいものだ。

オーソドックスなダークカラーのジャケットとパンツ。上着は後裾が長く、ツバメの尾のように長く割れている。
上着の下に真っ白なベストを身に着用し、ウィングカラーのシャツに、首には黒のネクタイを結ぶ。
若者向けにお洒落な装飾が施されてはいるが、シンプルで上品な雰囲気を醸し出していた。

「ありがとうございました。またのお越しを」

店員に見送られて、二人が店の外に出る。

「ねぇ、ハルト。私ね。一度、お忍びでベルトラム王国の実家に行ってみようと思うの」

帰宅する道すがら、決意めいた表情を浮かべて、セリアがおずおずと言ってきた。
リオが目を丸くしてセリアを見やる。

「あ、勘違いしないでね！　今の生活に不満があるわけじゃないのよ！　何一つ不自由のない生活を送らせてもらって、ハルトには本当に感謝しているの！」

と、慌ててセリアが語る。
リオは一先ず彼女の話をすべて聞いてみることにした。

「ただね。当たり前だけど実家には何も言わずに逃げ出しちゃったし、手紙を一度送っただけで何の連絡もしてないから。流石に心配をかけすぎているんじゃないかなと思って……」

リオの反応を窺(うかが)うように告げるセリア。

「忙しい時期にごめんなさい！　ハルトには迷惑をかけないように、貴男が夜会に参加している間に私一人で行くつもりだったんだけど、なかなか言い出せなくて……」

そう言って、セリアは申し訳なさそうにリオに頭を下げた。

「お話はわかりましたけど、水臭いですよ。セシリア」

リオは小さく嘆息すると、やや呆れのこもった声色で言った。

「言ってくれればいくらでも協力しますから。遠慮なんかしないでください」

と、セリアの顔を覗き込み、言い聞かせるようにゆっくりと語る。

「う、うん。ごめんなさい……」

「謝らないでください。というよりも俺の方から気遣ってあげるべきでした。こちらこそすみません」

「リ……、ハ、ハルトは悪くないってば！　これは私の我儘なんだから！」

思わずリオの名で呼びそうになってしまったセリア。

周囲には人も少ないため、そこまで神経質に偽名で名を呼ぶ必要はないのだが、セリアは慌てて口を噤(つぐ)み、ハルトと呼び直した。

「セシリア、家族が家族のことを心配するのは当たり前のことです。これは我儘の範疇(はんちゅう)には入りませんよ」

と、リオが頭(かぶり)を振って言う。

「けど困りましたね。送りたいのは山々なんですけど、夜会が終わった後の方が時間的に都合が良いかもしれません」

いくらセリアの実家とはいえ、今の彼女は逃亡中の身だ。
流石に正面から堂々と実家に帰ることはできないだろう。
忍び込むのならばリオかアイシアの協力が必要になる。
また、正面から帰ったところで、その後すんなりとこちらに戻ってくることができる保障もない。
セリアを心配した両親がそのまま彼女が外に出ていくことを反対するかもしれないからだ。
心配のあまり怒っている可能性だってある。
あまり考えたくはないがセリアを軟禁したり、当初の政略結婚を強要したりするおそれだってあった。
それゆえ、出来ればリオも一緒に行って陰から見守るか同席したいところであるが、どれほど時間がかかるのかわからず、途中でセリアを放って帰ってくるわけにもいかない以上、一緒に行くのならば夜会が終わった後の方がいいだろう。

「俺が夜会に行っている間にアイシアに送ってもらって密会に協力してもらうという手もありますけど……」

そうなると美春達は三人だけで王都の宿屋で寝泊まりしなければならなくなる。

「……美春達を三人だけで宿屋に泊らせるのは不安よね？」

と、リオの懸念を察して、セリアが尋ねてきた。

「……はい。そうですね」

「私も心配よ。あ、でも……」
言って、セリアは何かを思いついたような表情を浮かべた。
そうしてから口元に手を当てて、考える素振りを見せる。
「あの子達のことを思うのならば良い経験にもなるかもしれないわね」
逡巡しつつもセリアが語る。
「良い経験……ですか？」
「ええ、基本的にあの子達って常に傍に守ってくれる誰かがいるじゃない。僅かな時間とはいえ三人だけで生活することで得られるものはあると思うの。王立学院でやる野外演習と似ているのかしら。ほら、野外演習の時って教師が傍にいない状況で生徒達だけで行動するじゃない？」
ふと思いついた考えの意図を説明するセリア。
要はこの機会に精神的に自立するための社会経験を積めるということだ。
確かに思い返せばこの世界にやって来てからあの三人だけで行動を認めたことはほとんどない。
一度だけ、リオがセリアを連れてくるときに三人で留守番をしたくらいだろうか。
とはいえあの時は周囲にまったく人がいない状態での留守番で、外界と関わりを持つ心配はする必要がなかった。
都市の中で実際に三人だけで生活する場合とは状況がまったく異なる。
皮肉なことに美春達を鳥籠で囲うように保護したままでは、彼女達の精神的な成長を促せないことは事実であろう。

「確かに……仰る通りですね」

一理あると考え、リオは頷いた。

「まぁ高級な宿屋に泊まっていれば普通は危険な事態は起きないんじゃないかしら。少なからず私達以外の人と触れ合うことにはなるけどね。でも、そういう経験を積ませることが目的よ」

美春達はこの世界でリオやセリア以外の人間ときちんと会話をしたことがない。

最近は普通に日常会話をできるようになってきたし、スパルタだが習得した言語を実地で使用する良い訓練にもなる。

セリアが語る通り、普通に過ごしていれば危険が及ぶ可能性はほとんどないことから、この機会に美春達にこの世界の人間達が暮らす中で生活させてみることは悪くない選択肢のようにも思える。

「仮に変な輩が因縁をつけてきても、こないだ貴方から受け取ったペンダントを提示すればよっぽどの世間知らずでもない限り引き下がるはずよ」

ペンダントというのはリオがリーゼロッテとの間で結んだ美春達の保護に関する契約を証明する物品だ。

そのペンダントにはリーゼロッテの庇護下にあることを意味する紋章が刻まれており、これを提示すれば無条件に彼女に保護してもらうことができるというものである。

その紋章はクレティア公爵家の家紋と酷似しており、この国に生きる有力者であってもそれを提示されたら正面から歯向かおうと考えることはしないだろう。

「あのペンダントは本当に緊急時に使用してほしいといいますか。いや、まぁ今想定している事態は緊急時なのかもしれませんけど……」

「リスクを恐れていたらリターンは得られないものよ。今回のケースで考えられるリスクなんて無視できる程度に微々たるものだと思うけど。私の件とは切り離して、貴方が試してみようと思うのなら、家に帰ってからあの子達の意志を確認してみたらどうかしら？」

「そう、ですね……。聞くだけ聞いてみましょうか」

可愛い子には旅をさせよ、ともいう。

タイミングを窺ってリオが王城を抜け出し美春達の様子を見に行ってもいいし、何なら最初の数日はセリアとアイシアを一緒に滞在させて様子をみさせてもいいだろう。

リオはしばし逡巡すると、悩ましげではあるが、検討の意志を示した。

「ふふ、相談ならいくらでも乗ってあげるから、じっくりと考えてみなさいな。最終的に貴方が下した判断なら私は尊重するわ」

「ありがとうございます」

リオは穏やかに微笑んで礼を告げた。

「さて、じゃあ話を変えましょうか。どうなの？　マナーは学院で習ったでしょうけど、夜会なんて初めての経験でしょ？　自信はあるの？」

少し重くなった空気を明るくするように、セリアが努めて明るく言った。

「どうでしょうか。もう何年も実践していないので不安ではありま

すね」

リオが苦笑して答える。

「うーん。ハルトなら言葉遣いは問題ないでしょうけど、よかったら私が細かい作法をレクチャーしてあげましょうか？　ダンスなんかも自信がなければ教えるけど」

セリアも伊達に高位貴族の令嬢であったわけではない。

引きこもり体質な彼女ではあったが、貴族間の交流を完全に絶つことはできず、夜会に出席した経験はそれなりにあるのだ。

そんなセリアにマナーを教えてもらえるとなれば百人力である。

「助かります。お願いできますか？」

「うん、任せなさい！」

セリアが慎ましやかな胸を張って答える。

リオの役に立てることが嬉しいのか、その表情は実に晴れやかであった。

第87話　いざガルアーク王国の王都へ

美春達をガルアーク王国の王都へと移動させると、今度はリーゼロッテと一緒に王都へ向かうため、リオはとんぼ返りでアマンドへと戻ってきた。

一先ず、美春、亜紀、雅人の三人だけで宿屋に泊るという話は保留されることになり、アイシアとセリアも王都へ同行している。

三人だけの宿泊が認められるかどうかは、周囲の治安や宿屋の客層といった安全面において問題がないと判断できるかどうか次第だ。

いずれにしろアイシアには王都の滞在中にやってもらうかもしれないことがあるため、セリアにはベルトラム王国行きを今しばし待ってもらうことになった。

仮に美春、亜紀、雅人の三人で宿屋に泊まることになっても、宿泊日数は一日から長くともせいぜい数日程度になる予定だ。

今回の王都滞在は美春達の身につけた言語能力が日常生活においてどこまで通用するのかを実践する試験的な意味合いも兼ねている。

リオを除く五人の話し合いで、宿屋の人間とのコミュニケーションは率先して地球出身組が行うと決まった。

今の美春達は世間知らずで、籠の中で生きる鳥のようなものだ。

たとえ三人だけで宿泊することがなくとも、都市の中で暮らすことは美春達にとって良い経験となるだろう。

心配しているリオとは裏腹に雅人は乗り気で、三人だけで滞在できたらいいなと心を躍らせていたりする。

そうして雅人からの強い申し出もあり、条件付きではあるが、リオも断腸の思いで美春、亜紀、雅人の三人で宿に滞在することに同意することになった。

暴行、傷害、窃盗、恐喝、強盗、詐欺、略取、誘拐、強姦――、そうした犯罪は都市の中であっても起きることは特に珍しいことで

もない。
ゆえにこの世界で生きる人間は犯罪を日常茶飯事な事象として受け入れ、犯罪と隣り合わせの生活を送っている。
有効な自衛方法は犯罪に遭遇しないように意識して行動することであり、都市の中で暮らしている者ならば普通は身につけている感覚である。
いずれも美春達が都市と関わって生きていく可能性があるのならば知っておかないといけないことだ。
リオはそういった感覚を五人に対して懇切丁寧に語っておいた。
美春、亜紀、雅人の三人はもちろん、セリアは貴族の箱入り娘であるし、アイシアも精霊で人間の感覚には疎いところがあるからだ。
もっとも、美春達が滞在する宿屋の警備には国も関与しており、見張りの兵士が配置されていて、周辺の治安は良い。
宿から離れて無暗に治安の悪い区画に移動しなければ危険は少ないだろう。
値段的に客層も富裕層がメインとなっているが、富裕層向けの宿屋といっても所詮は宿屋だ。
地方都市ならともかく、一方的に絡んで相手を悪役に仕立てることができるくらいの権力を持っている者が滞在する施設ではない。
それでもそういった貴族が絶対に宿泊してこない保証はないが、そこまで考えていたら何もできやしない。

（大丈夫だ。ちゃんとみんなを信じよう）

アマンドにある閑静な住宅街を歩きながら、既に別行動している五人のことを想い、リオは小さく嘆息した。
これからリオはしばらくの間リーゼロッテと一緒に過ごすことになる。
その間はガルアーク王国の王都までの移動はもちろん、滞在中もリーゼロッテの目の届く範囲で行動しなければならない。

下手に放置して不審な行動に出ないか監視する意味合いもあるのだろう。
リオも必要な場合を除いて不用意に独断で行動することを控えようと決めていた。

「ハルト様。ようこそお越しくださいました」

リーゼロッテの屋敷に赴くと、侍従のコゼットがリオを出迎えた。
両手でロングスカートの生地を軽く掴んで、優雅に一礼する。
その所作は慎ましやかで上品なものであり、白と黒のコントラストで彩られた清楚なメイド服を着ているのだが、コゼットの生まれ持った女性的な魅力もあって大人の色香が漂っていた。

「こんにちは。コゼットさん」

既に何度か対面していることもあり、リオも自然体で挨拶をする。

「はい。こんにちは。今日もこうしてハルト様のご尊顔を拝しまして私は幸せ者ですわ」

と、悪戯っぽい笑みを浮かべながら、コゼットが言った。

「お上手ですね。私もコゼットさんにお出迎え頂き非常に嬉しく思っていますよ」

即座にリオが微笑を浮かべて返す。

「まぁ、ありがとうございます。さ、どうぞおあがりください。これから先のスケジュールや連絡事項について説明申し上げますので」

コゼットに案内されて、リオはリーゼロッテの屋敷の中へと入っていった。

☆★☆★☆★

リーゼロッテの屋敷にある侍従の控室にて。
コゼット、ナタリー、クロエの三人が備え付きのソファに座り休憩をとっていた。

「ハルト様。中々の難敵ね」

冷めた紅茶を口にすると、徐(おもむろ)にコゼットがそんなことを言いだした。
その発言にナタリーが目を丸くして、

「ちょ、貴方！　もしかしてハルト様を狙っているの？」

と、慌てた様子で尋ねた。
コゼットは与えられた仕事を完璧にこなし、職務態度も極めて良好な侍従として知られている。
接客態度は柔らかく、親しみやすく、優雅であり、その容姿も美女ぞろいのリーゼロッテの侍従隊の中でもかなり整っており、男好きする魅力的な身体つきもしていた。
それゆえ、客としてやって来た男性の中にはコゼットに粉をかけてくる者も少なくない。
コゼットはお眼鏡に適った男性から声をかけてくるように、仕事に影響が出ない範囲でさりげなく仕向けることがある。
客がコゼットを気にいった場合には、彼女の気を引こうと有利な条件で取引をしてくれることもあるため、リーゼロッテもコゼットの男好きな性格を知りながら放置しているのが現状である。

「あら、当然じゃない。端整な顔立ち、気品と教養を感じさせる立ち振る舞い、それにアリア並みの強さ、あんなに良い男を放っておくなんて女が廃るわよ」

しれっと答えて、コゼットがナタリーに視線を送る。

「ハルト様はリーゼロッテ様の大事なお客様なのよ。下手に手を出して怒らせたらどうするのよ」

リーゼロッテの屋敷に客が訪れる場合、あらかじめ来客の重要度、性格、好みといった情報が侍従達に通知される決まりとなっている。先日のアマンド襲撃の件により、現在のリオはリーゼロッテの中でＶＩＰ扱いされており、侍従達には最高のおもてなしをするようにと通知されていた。

「私の職務内容には男性客の人物像を把握することも含まれているのよ。ハルト様と適度にお近づきになることも仕事のうちよ」

「た、確かにそうだけど……。貴方の場合、お近づきになる意図によこしまなものが含まれてるじゃない！」

「あらあら、相変わらず貴方は真面目ねぇ。そんなんだからいつまで経っても男の一人もできないのよ」

と、飄々（ひょうひょう）とした口調でコゼットが応じる。

「話を逸らさないで！　私達はお客様をおもてなしする侍従にすぎないのよ。不用意にお客様に手を出すなと言っているの。そ、それに貴方だって今は男はいないじゃない」

「一直線に恋に突っ走る少女じゃあるまいし、私が男女関係で下手を打つわけがないでしょ。仕事に影響が生じない線引きくらい心得

ているわよ」

と、コゼットは鷹揚(おうよう)に語った。

事実、これまでコゼットは客とお近づきになっても仕事に悪影響を生じさせたことはない。

コゼットのことを気にいっている客は多く、生じさせた影響はリーゼロッテにとっては好ましいものばかりである。

「で、でもハルト様は年下なのよ？」

「やっぱりお堅いわねぇ。大人の男女関係に数歳くらいの年齢差は関係ないじゃない」

コゼットが蠱惑的(こわくてき)な微笑を浮かべてうそぶく。

そんな二人の舌戦に新人のクロエが興味深そうに耳を傾けていた。

「お、大人の男女関係……」

そう呟いて、ごくりと唾を呑みこむクロエ。

「てっきり貴方もハルト様のことを狙っていると思っていたのだけれど、違ったのかしら？　でも経験値不足なナタリーの手におえる相手じゃなさそうだし、そっちの方が良いのかもしれないわねぇ」

意味深長な言葉を語りながら、コゼットがちらりとナタリーに視線を送る。

「ど、どういう意味よ？」

「言葉通りの意味よ。最初に言ったでしょ。ハルト様、中々の難敵だって」

勝ち誇ったように言われて、それ以上は素直に追及するのも癪で、ナタリーは言葉に詰まってしまった。

「ど、どういう人なんですか。ハルト様って？」

すると、今まで黙って話を聞いていたクロエが横から合いの手を入れてきた。

「女慣れしているというわけじゃないけれど、女性に対して物怖じはしない殿方ね。気さくで話しやすい人でもあるけれど、人との距離には敏感なようでパーソナルスペースは広いみたい。ああいう手合いはガードが固いけど、親密な相手のことはとても大切にするタイプよ」

コゼットはフフッと笑うと、僅か数回ほど接して分析したリオの人物像を述べた。

「相変わらず見事な観察眼ね。男に限定してだけれど」

ナタリーがしらっとした表情でコゼットを見やる。

「ありがとう。褒め言葉として受け取っておくわ」

にこりと笑みを浮かべてコゼットが礼を言う。

「あ、あの。じゃあどうすればハルト様みたいな人と仲良くなれるんでしょうか？」

と、おそるおそる尋ねるクロエ。

「ハルト様みたいな人ねぇ。ひょっとしなくてもクロエもハルト様を狙っているわけね」

言って、コゼットがニヤニヤと笑みを浮かべる。

「ち、違っ！　あの、私は母と妹を助けてもらったから。その、お礼を言いたくて！」

クロエは顔を真っ赤にしてあたふたと手を動かした。

必死に「本当ですよ！」と弁明するクロエを「わかってるわよ」と微笑ましく宥(なだ)めるコゼットとナタリー。

そうしてクロエが落ち着きを取り戻したところで、会話が本来の話題に戻る。

「意外と正面からぐいぐいと攻めれば邪険にはされないと思うわ。けど、私達の立場上それは難しい戦法ね。となると残った手段はコツコツと接触する機会を増やして親しくなっていくしかないわけだけれど……」

と、そこでコゼットはいったん言葉を切った。

「けれど……？」

ナタリーとクロエの声が重なる。

「そこから先は恋愛経験値の差がモロに出ちゃうのよねぇ。礼を失しない範囲で親密に接して、向こうからこちらに食いついてくるように振る舞っていかないといけないわけだから。だからナタリーじゃ難しいと言ったのよ」

愉快そうにコゼットが語り、ナタリーはムッとして口をすぼめた。
「グイグイと攻める……。恋愛じゃなくてお礼を言うだけなら……」
クロエがぼそりと呟いたが、その声はコゼットとナタリーの耳には届かなかった。
「ごめんなさい。怒らないで。リーゼロッテ様との関係も踏まえて、軽はずみな気持ちで焦って手を出すべき相手じゃないって伝えたかったのよ」
その様子を見てコゼットがナタリーへと素直に頭を下げる。
「そのくらいわかっているわよ」
「そうね。けど恋は盲目って言うじゃない？」
そう言って、さりげなく何やら考え事をしている様子のクロエを見やるコゼット。
見られた当の本人はともかく、ナタリーはその視線から意図するところを察した。
コゼットは口元に微かな苦笑を浮かべると、
「だから、本気で狙いたいなら相談に乗るわよ」
朗(ほが)らかにそう言い放った。
ナタリーが小さく溜息を吐く。
いい加減なように見えてこうして遠まわしに気配りをしているところが、中々どうしてコゼットの憎めないところである。
おそらく今までの会話はまだ十三歳と幼い新人のクロエに対する教育の一環だろう。

実際に現時点でクロエがリオに惚れているかどうかは不明ではあるが、その可能性は低くない。
コゼットと一緒に働くようになってそれなりに長いが、ナタリーが彼女とここまで大した喧嘩もせずに何だかんだ仲良くやってこられた所以だろう。

「もちろん私もあわよくばって形で狙わせてもらうんだけどね」

加えて、コゼットが悪びれもせずに明け透けと付け足す。
前言撤回。
やっぱり気に食わないかもしれない。
そう考え直して、ナタリーは小さく嘆息した。

☆★☆★☆★

快晴の春空の下、波の代わりに雲と風を切って、一艘（いっそう）の船が大空を進んでいた。
船体に鉄のプレートを貼りつけた木造の帆船（はんせん）状の形をしており、揚力（ようりょく）を得られるようにと側面には翼が取り付けられてある。
それは神魔戦争期に作りだされたアーティファクト、魔道船であった。
現存する数はシュトラール地方全土にわたって数百は下らないと言われているが、燃料となる魔石を大量に必要とし、船の機関を始めとした心臓部の整備も現代の魔法知識では困難な個所が多いため、一隻一隻に青天井の値段がつけられる代物だ。
所有者であるリーゼロッテに伴い、リオは魔道船に乗っていた。
そもそも一般人が搭乗できる乗り物ではなく、これまでに見たことはあったが、実際に乗船するのは初めての経験だ。
アマンドを離れて北東に進んで行くと、ガルアーク王国の王都が存在する。

最初はてっきり移動は馬車だと考えていたリオであったが、魔道船のおかげで快適な空の旅を満喫することができそうであった。

「魔道船の居心地の良さに驚いております。思った以上に揺れないものなのですね」

「快適に感じてくださっているのならば何よりです」

船内の一室で、リーゼロッテとお茶を飲みながら、リオは雑談に花を咲かせていた。

屋敷の中のように広々としているわけではないが、ゆったりとくつろぐには十分なスペースが確保されており、お洒落なインテリアに飾られてアットホームな空間が演出されている。

「それにしても素晴らしいケーキですね。ハルト様がお作りになられたのですか？」

リーゼロッテがご満悦な表情を浮かべて、上品だが愛らしい所作でリオと美春が作ったパウンドケーキに舌鼓を打つ。

「ええ、お気に召して頂けたようで何よりです」

言って、リオが微笑を浮かべて目礼する。

「ハルト様はお料理がお上手なのですね。先日に頂いたチョコレートも大変美味しゅうございました。こちらのケーキもしっとりとした生地に上品な甘さのチョコレートが重なって最高の一品に仕上がっていますよ」

リオの向かいに座るリーゼロッテはにっこりと微笑んでいた。

嫌みのない本心からと思わせる綺麗な笑顔だ。

前にチョコレートを渡した時にもリオは感じていたが、どうやらリーゼロッテは甘いものに目がないようである。

（この子も俺やラティーファと同じで生まれ変わったのだとしたら、前世はどんな子だったんだろう）

こうして頻繁に会う機会が増えたせいか、ふとリオは思った。

そんなことを考えながら紅茶の香りを楽しんでいると、リーゼロッテと視線が重なる。

彼女は何か言いたげにリオを見つめていた。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いえ。その……」

と、リーゼロッテは言いよどんだ。

「何か仰いたいことがあるのでしょうか？　よろしければお聞かせください」

リオが水を向けてみると、リーゼロッテは躊躇（ためら）いがちに口を開いた。

「その、こうして何度もまみえているのに、あまりハルト様のことを存じ上げないなと……」

薄っすらと頬を桃色に染めて、リーゼロッテは少しだけうつむいた。

どうやらリーゼロッテもリオと似たようなことを考えていたようだ。

二人の関係を言い表すならビジネスな結びつきになるわけだが、

質問とは暗に相手方に返答を強要する行為である。
それゆえビジネスシーンにおいては相手方に対してプライベートな質問をすることは避けるのがマナーである。
特に目上の相手に質問をしようものなら、失礼な行為として気分を害されることも少なくない。
これまで二人は必要以上にお互いのプライベートを詮索する真似はしなかったのだが、こうして日常的に顔を合わせるようになって二人の距離も少しずつ縮まってきている。
より親密な関係を築こうと考えるのならば、ここいらが今後の二人の関係を決める分水嶺(ぶんすいれい)となることだろう。
そこでリーゼロッテは思い切って自分から足を踏み込んでみることにしたのだ。
男なら思わず自分語りを始めてしまいかねない彼女の可憐な仕草であったが、

「なるほど。仰る通りですね」

リオは落ち着いた口調で相づちを打った。
今後のビジネスパートナーとしてリオもリーゼロッテに対してまったく関心がないというわけでもない。
望むところというわけでもないが、今の流れは悪い話ではなかった。
それから二人はしばしお互いの自己紹介を含めて少しずつ身近な話をし始める。
特に盛り上がりを見せたのが紅茶に関する話題であった。

「ブレンドティーはセンスも要求されて私にはハードルが高いのですが、フレーバードティーは嗜(たしな)む程度に自作しておりますよ」
「まぁ、是非ハルト様がお作りになられた紅茶を頂きたいですわ」

王立学院時代にはセリアの紅茶好きの影響を受けて付き合わされたり、精霊の民の里ではオーフィアが開くお茶会に招かれたりと、リオは何かと紅茶に触れる機会が多かった。
そうして周囲の人間に付きあって紅茶を飲んでいるうちに一端(いっぱし)の紅茶通になってしまったのだ。
今では茶葉をブレンドしたり、茶葉にフレーバーをつけたりして、オリジナルのお茶を自作するようにもなっており、美春と一緒に新しく何種類か試作品を製作中でもある。
対するリーゼロッテもリオ以上に紅茶が好きなセリアに負けない程の紅茶好きであり、共通の話題を見つけてからはそれが会話の糸口となって話が更に弾み出した。

「そうですね。いくつか持参しているものがございますので、よろしければ後ほどお試しになってください」
「まぁ、楽しみにお待ちしておりますね」

そう言うと、紅茶のカップに口をつけ、リーゼロッテは悪戯っぽく笑みを浮かべた。
それからしばしの間、歓談を行うと、解散の時間がやって来る。

「それでは失礼いたします。楽しいひと時を過ごさせていただきました」
「それは私から申し上げたい言葉ですわ。アフタヌーンティーにお付き合いくださりありがとうございました。間もなく到着の時刻かと存じますので、部屋に戻るか外の景色でもご覧になってお待ちくださいませ」

そう言って、笑顔の挨拶を交わすと、リオはリーゼロッテの部屋を後にする。
甲板に出ると空から差し込む陽光はもう朱に色を変えつつあると

ころであった。
遥か彼方の地平に浮かぶ夕日が色鮮やかに光り輝いている。
大陸の遥か彼方まで見渡すことができる景色はまさしく絶景の一言が相応しい。
地表には山がそびえ、峡谷が刻まれ、森が広がり、湖がはびこり、野があって、川が流れている。
ぽつりぽつりと散在する矮小(わいしょう)な都市の姿を眺めていると、自分がちっぽけな存在に思えてしまいそうだった。
それは吸い込まれてしまいそうなくらいに綺麗で、とても幻想的な光景である。
魔道船から眺める景色にたそがれるのもそこそこに、リオは自室に向かって踵(きびす)を返そうとした。
その時だった。

「あ、あの！　ハルト様！」

緊張して硬くなった少女の声を耳にし、リオが反射的に立ち止まる。
声の主に振り返ると、そこにはリーゼロッテのお付きとして同乗しているクロエが佇んでいた。
年齢は亜紀と同じくらいだろうか、まだあどけなさの残る表情はどこか強張っているように見える。

「クロエさんでしたか。こんにちは。どのようなご用でしょうか？」
ゆっくりと近づいてくるクロエに薄く笑みを貼りつけて会釈すると、リオは柔らかな口調で用向きを尋ねた。

「は、はい。あの……」

クロエは何やら意気込んでいるのか、気を張った様子で深呼吸をすると、

「先日はありがとうございました！」

リオに向かって勢いよく頭を下げた。

「はい。えっと、レベッカさんとミレーユちゃんのことでしょうか？」

クロエからお礼を言われて、リオに思い当たる節は一つしかなかった。

おそらく先日アマンドを襲撃した魔物に襲われていたクロエの母と妹を助けた件だろう。

「は、はい。私、あの時はお母さ……母と妹のことが心配でいてもたってもいられなかったんです。ハルト様が二人を連れて屋敷にいらっしゃった時はすごく安堵しました」

と、カチコチと緊張した様子を見せながら、クロエが当時の心境を語る。

年齢が近いせいか、その姿は何となく亜紀やラティーファと重なった。

「それから詳しい話を母から聞いて、もしハルト様が通りかからなかったらと思うとすごく怖くなってしまって……」

あの時、リオがあの場を通っていなければ、クロエの母レベッカと妹ミレーユは間違いなくゴブリンとオークに嬲(なぶ)り殺されていただろう。

後からナタリーが通りかかったとしても、その時には既に手遅れになっていたであろうことは確かだ。
一歩間違えれば最悪の結果が待ち構えていたことから、クロエはリオに大きな恩を感じていた。

「だからちゃんとお礼を言いたかったんです！　本当にありがとうございました！」

クロエは不器用ではあるが、清々しいくらいストレートに感謝の気持ちを言い表してきた。

「いえ、お二人ともご無事で何よりですよ。その後、お変わりはありませんでしたか？」

と、リオがレベッカとミレーユのその後の様子を尋ねる。

「はい。母も妹も元気です。二人とも是非ハルト様に何かお礼をしたいと申してました」
「いえ、お気持ちだけで結構ですよ。屋敷へ移動するまでの間に十分お礼のお言葉も頂戴しましたし。お気遣いなさいませんよう」
リオは頭(かぶり)を振って、やんわりとお礼の申し出を断った。

「い、いえ！　駄目です！　きちんとお礼をさせてください！」

だが、予想外にクロエが食い下がる。
リオは僅かに呆気にとられてしまった。

「あ、も、申し訳ございません！」

熱くなってしまった自覚があったのか、クロエは慌てて謝罪した。

「いえ、構いませんが……」

少しばかり気まずい空気が流れる。

「申し訳ございません。私、きちんとお礼と謝罪の言葉を言えないですごく後悔したことがあって……。こういう時はちゃんとお礼を言おうって決めていて……」

ばつが悪そうに顔をうつむけ、クロエは尻すぼみに弁明した。

「そうだったんですか……」

少しばかり過剰とも言えたクロエの反応を見る限り、それだけ過去の行いを悔いているのだろうか。

一度しか会ったことはなかったが、クロエはもっと気さくで明るい少女だったとリオは記憶している。

初めて会った時は、明るい笑顔を浮かべて、少し強引なくらいに腕に抱き着いて客引きをしてきたはずだ。

もちろん今のリオとクロエの関係は当時とは異なるし、あまり馴れ馴れしく接するわけにもいかないのだろうが、今の彼女からはかつてを思わせる底抜けの明るさをあまり感じられない。

単に数年の間で成長してそういった気質が鳴りを潜めていったのか、過去の事件で少しばかり人との距離に敏感になってしまったのか、あるいは他に理由があるのだろうか。

だが、そこは自分が踏み込むべき領域ではない――、リオはそんなことを思って、

「先ほども申し上げた通り、もうお礼の気持ちはきちんと受け取り

ましたよ」

と、諭すように言った。

「きちんと言葉で表して頂いたおかげで、クロエさんの気持ちは伝わってきましたから」

続けて、リオが言葉を付け足す。

「は、はい」

「あまり気負わずに『ありがとう』『ごめんなさい』と一言だけ告げるだけで十分なんじゃないでしょうか。クロエさんが緊張しすぎると、相手も何だろうと緊張してしまいますから」

「一言だけ。『ありがとう』『ごめんなさい』……」

何か思うところがあるのか、クロエがそれらの言葉を何度か繰り返し呟いた時――。

「王都だ～！」

甲板に乗組員の声が響き渡った。

第８７話　いざガルアーク王国の王都へ（後書き）

魔道船は１４話で名前だけ登場しております。

第８８話　クレティア公爵家での晩餐

リオ達を乗せた魔道船は午前中にアマンドを出発すると、北東に進んで僅か半日足らずでガルアーク王国の王都へと航行した。
魔道船の最大速力はおよそ百十ノットほどだが、通常航行時は燃費の関係でその半分以下の速度で移動する。
全力で飛行する時のリオ程ではないが、かなりの移動速度であった。

「見えたぞ～！　王都だ！　もうすぐ王都に到着するぞぉ！」

マストの見張り台に立っていた船員の声が甲板に響き渡る。

「どうやら王都に到着するようですね。あれが王都みたいですよ」

既に甲板からも遠目に王都の姿を確認することができる。
リオが真向かいに立っていたクロエに言った。

「あ、はい。綺麗……ですね」

同意しながら、クロエは甲板から見える王都の景色に目を奪われていた。
都市の中で一際（ひときわ）に巨大な白亜の建造物こそがガルアーク王国の王城だ。
王都の周辺には穀倉地帯や果樹園が広がっており、王都の暮らしを支えていることが窺（うかが）える。
噂を聞きつけたのか、王都の景色を眺めようと少しずつ人が現れて、甲板が騒がしくなってきた。

「では、下船の準備がありますので。私は一度、部屋に戻りますね」
「はい！　ありがとうございました！」

クロエに見送られて、リオは踵を返して甲板から立ち去った。
それから十分ほど航行すると、魔道船は王都の東に位置する巨大な湖へと着水することになる。
魔道船は陸にも着地はできるが、専用の港があるのは海や湖などの水場であることがほとんどだ。
南西から進行してきた魔道船はいったん王都を通り過ぎ、東の湖上空へと侵入した。

「おもか～じ」
「おもか～じ」

ブリッジに船長と操舵手の声が響き渡る。
船長の号令を復唱すると、操舵手は舵輪を右に回した。

「面舵十五度」

と、操舵手が告げる。
魔道船は右へ回頭していき、大きく弧を描くように王都へと旋回し始めた。

「戻～せ！」
「舵中央！」

魔道船が王都の港へと向かい始めたところで、船長の号令に従い、操舵手が舵輪をゼロ度に戻す。

「取舵(とりかじ)に当て！」
「取舵(とりかじ)七度！」

今度は僅かに舵輪を左に回すと、右に旋回していた船の勢いが殺された。

「針路、二百七十度、よ～そろ～」

船長が希望の進行方向を告げる。

「よ～そろ～、針路、二百七十度」

要望通りに針路をとったところで、操舵手(そうだしゅ)が報告を行った。

「微速前進、微速下降」
「微速前進、微速下降、よ～そろ～」

湖の西端に位置する王都の港へと近づいてきたところで、魔道船がゆっくりと下降していき、少しずつ眼下の湖との距離が縮まっていく。

「総員、着水の衝撃に備えよ！」

伝声管に向けて艦長が叫ぶ。

魔道船は吸い込まれるように湖に着水すると、周辺にざぶんと波をまき散らした。

そのまま水上を移動して港へ到着し、乗組員と待ち構えていた者達が手際よく上陸作業を開始する。

放られたロープで港と船とを固定させると、タラップが取り付けられて船の乗降が可能となった。

「リーゼロッテ様！　準備完了です！」
甲板からその様子を眺めていたリーゼロッテに船長が告げた。
「みんなお疲れ様。後はアマンドへ帰るまで羽を伸ばしてちょうだい」
「野郎ども！　聞いたな！　休暇が欲しけりゃさっさと仕事を終わらせるぞ！」
「おう！」
船上に乗組員達の声が響き、きびきびと行動を開始する。
リーゼロッテは微笑ましげに彼らを見送った。
「さ、ハルト様。準備が完了しましたのでどうぞこちらへ」
そう言って、リーゼロッテはリオを伴い下船した。
二人を警護するようにお付きの侍従であるアリア、コゼット、ナタリー、クロエの四人が歩く。
するとドックで壮年末期と思われる男性が近づいてきた。
筋骨隆々の肉体から只ならぬ武人であることが窺(うかが)えるが、その恰好は軍人ではなく家令や執事の装いである。
「リーゼロッテ様、ご無沙汰しております」
恭しく礼をすると、男はリーゼロッテに声をかけた。
「あら、リカルド。相変わらず元気そうね。貴方がこの場にいるということはお父様とお母様も既に王都にいらっしゃっているのかしら？」

知った仲といった様子でリーゼロッテが気さくに応答し尋ねる。
どうやらリカルドと呼ばれた男とは知り合いのようだ。
おそらくはクレティア公爵家に仕える者だろうとリオは当たりをつけた。

「はい。お二方ともリーゼロッテ様との再会を心より待ち望んでおいでになります」
「そう。パスカル兄様はともかくジョルジュ兄様もいらしているのかしら？」
「ジョルジュ様はフィアンセの方の家へといらっしゃっております。勇者殿のお披露目会にはお越しになると仰っておられました」
「そう。わかったわ。じゃあ早速だけど屋敷に向かおうかしら」
「御意に。ところで、恐れ入りますが、そちらの御仁がハルト様でいらっしゃいますか？」

リーゼロッテの隣に立つリオに視線を移すと、リカルドが尋ねた。
「ええ、こちらの方が先日アマンドが襲われた時に私の窮地を救ってくださったハルト様よ」

と、リーゼロッテがリオを紹介する。

「はじめまして。ハルトと申します。以後、お見知りおきを」

失礼のないよう丁寧にお辞儀をして、リオは名乗りを上げた。

「おお、お初にお目にかかります。お話は伺っておりますぞ。リーゼロッテ様をお救いくださりありがとうございました」

リカルドが友好的な笑みを浮かべてリオに礼を告げる。
当たり前なのかもしれないが、リオの存在は先日のアマンド襲撃の件と共に伝えられているようだ。

「いえ、私は自分に向かってきた魔物を斬り捨てただけですので」
「お嬢様をお救いくださった事実に変わりはございませぬ。失礼、申し遅れました。私はリカルドにございます。リーゼロッテ様のお父上であるセドリック＝クレティア様に家令としてお仕えしております。どうぞよしなにお願い申し上げます」

挨拶をして、リカルドが礼儀正しく頭を下げる。

「はい。こちらこそよろしくお願いいたします」

と、リオもお辞儀して返した。

「それではどうぞお越しください。こちらです」

それからリカルドの先導で移動することになり、一行はクレティア公爵家の王都別邸に向かうことになった。
港から貴族街までは近い。
というよりも港から王都の南東に位置する王城まで直通の大通りが伸びており、その間に貴族街があるのだ。
他にも随所に軍関係の施設が建設されており、王都の東側には厳重な警備が敷かれている。
あちこちに石造りの重厚な建物が立ち並び、周囲は閑静な空気に包まれていた。

「見えてきました。あちらがクレティア公爵家の王都別邸にございます」

クレティア公爵家の王都別邸は貴族街の中でも王城に最も近い位置にあった。
敷地を囲う立派なレンガ塀の中央には豪華な装飾が施された堅牢（けんろう）な鉄門が設置されている。
門と塀のはるか向こうには比較的真新しい芸術的で荘厳な白亜の建築物がそびえ立っていた。
内装にもさぞかし凝った装飾が施されていることだろう。
敷地に入ると建物へと続く道と手入れの行き届いた平面幾何学式の庭園が目に入り、門から屋敷に辿りつくだけでもちょっとした距離がある。
周囲に並ぶ貴族の邸宅と見比べても、クレティア公爵家の王都別邸が一際に豪華であることは間違いない。
それだけクレティア公爵家が栄えているという証左であろう。

「お屋敷といいこのお庭といい荘厳の一言に尽きますね。圧倒されて思わず目を奪われてしまいました」

と、リオは敷地を含む屋敷を目にした感想を告げた。
本音を言うと、自分が実際に住むのなら、気疲れしてしまうような芸術的なデザインよりもシンプルなデザインの方が好みだったりする。
ただ、芸術的な意味合いで鑑賞するのならば、目の前にある屋敷が素晴らしい建築物であると思うのも事実であった。

「ふふ、この屋敷は父上の指揮で建築されたのですけれど、私としては居住するには少し派手かなと思っているんです。ただ家の力を誇示するためにも王都には相応の屋敷を作る必要がありまして。貴族社会の面倒なところですね」

リーゼロッテが少し茶目っ気のある笑みを浮かべて言った。
「……お察しします。そう言えばアマンドにあるリーゼロッテ様のお屋敷はシンプルなのに美しいデザインのものでしたね。実は私も実際に住むのならばあちらのデザインの方が良いなと思いました」
リオが苦笑して答える。
「そうですね。私も流石にこうした家に定住すると気疲れしてしまいそうです」
リオの返答に、リーゼロッテが小さく微笑んで同意する。
それから屋敷に入ると、やはり内装にも目を惹く豪華な装飾が施されていて、リオは感嘆の意味を込めて小さく嘆息した。
エントランスホールも彫塑(ちょうそ)的で、部屋それ自体が一つの芸術作品であるように見える。
そのまま石造の白壁に囲まれた通路の中を歩いていき、リオは食堂へと案内された。
「こちらにおかけになってお待ちくださいませ。このまま晩餐会となります。ただいまリーゼロッテ様のご両親をお呼びいたしますゆえ」
食堂に入ると、家令のリカルドが椅子に座るようリオに促した。
「承知しました」
リオが頷き、椅子に腰を下ろす。
一方で、リーゼロッテはそのまま座らずに、

「ハルト様、私も少々失礼いたしますね」
と、いったん退室する旨を告げてきた。
「はい。畏まりました」
リオが答えると、リーゼロッテは専属の侍従四人を付き従えて部屋を立ち去った。
リカルドも一緒に部屋を立ち去り、代わりに屋敷の侍従がやって来る。
「失礼いたします」
侍従は優雅な所作で黙々と紅茶を淹れ始めた。
その様子を横目に、リオは黙って室内を観察している。
実に豪勢な作りの食堂であった。
室内にはアンティーク調の家具が設置され、大きめの窓にはステンドガラスがはめ込まれて室内を彩っている。
「どうぞお召し上がりください」
侍従がスッと紅茶の入ったカップをリオに差し出す。
「それでは。どうぞごゆるりとなさってください」
そう言い残すと、侍従はリオから離れて部屋の隅に立ち去ろうとした。
「ありがとうございます」

リオが微笑を浮かべて礼を告げる。
本来ならば招かれた客が侍従の行動に礼を言ったりする必要はなく、客が貴族ならば礼の言葉を口にしようとすら思わないだろう。
とはいえ、リオは別に貴族というわけではなく、貴族として振る舞うつもりもないため、普通に礼を述べることにした。
ちなみに屋敷の者達にはリオのことはリーゼロッテの恩人であると伝えられており、その身分については特に知らされていなかったりする。
あまり礼を言われ慣れていなかったせいか、侍従は僅かに目を丸くすると、微笑を浮かべて頭を下げてきた。
それから待つこと十分と少し。
リオは食堂に人が近づいてくる気配を察知した。
部屋の扉が開かれると、中に数人の人物が入って来る。
目を引くのは先頭に立つ壮年の男性と女性、そして、その後ろを歩くリーゼロッテであった。
そのさらに後ろにはリカルドやアリアが気配を薄くして控えている。
僅かな時間で着替えを行ったのか、リーゼロッテは目の覚めるような純白のドレスを身に付けていた。
即座に椅子から立ち上がり、リオが姿勢を正してお辞儀する。

「やぁ、君がハルト君だね。ようこそ、我がクレティア公爵家の王都別邸へ。歓迎するよ。私がリーゼロッテの父セドリック＝クレティア公爵である。
その年齢は四十代半ばほどではあるが、若々しくリーゼロッテの父であることも納得できる程の美男子であった。

先頭を歩く男性が響きの良い明朗な声でリオに声をかけてきた。
彼こそがリーゼロッテの父親であるセドリック＝クレティア公爵である。
その年齢は四十代半ばほどではあるが、若々しくリーゼロッテの父であることも納得できる程の美男子であった。

「お初にお目にかかります。私はハルトと申します。この度はお屋敷にお招きいただきましてありがとうございました」
慇懃な所作と口調でリオが挨拶をする。
セドリックは晴れやかな笑みを浮かべて、
「話は聞いているよ。先日はリーゼロッテを助けてくれたようだね。とても感謝しているよ。君がいなければ娘の身に危険が生じたと聞いている」
と、気さくに言った。
「その件につきましては偶々その場に居合わせただけにございます。私は襲いかかってきた魔物を倒しただけですので」
リオが苦笑して頭(かぶり)を振る。
「ははは、君が私の可愛いリーゼロッテを助けてくれたのは事実だよ。話は聞いた。我が国に現れた勇者様のお披露目会に参加するようだね。王都に滞在する間は我が家でゆっくりとくつろぐといい」
「ありがとうございます」
セドリックからの厚い感謝の気持ちが伝わってきて、リオは深く頭を下げて礼を告げた。
事前にリオについて説明は受けていたようだが、大貴族の娘が素性もよく知れぬ風来坊を連れてきたところで、心から良い顔をできる父親は多くないだろう。
どうやらセドリックは人柄が良く、懐(ふところ)の深い人物のようだ。
とはいえ、流石は公爵というべきか、リオは気さくな笑顔の裏に

歴戦の貫禄も感じとっていた。

「貴男(あなた)、私もリーゼロッテの恩人にお礼を伝えたいですわ。彼に紹介してくださいませ」

と、セドリックの横に立っていた女性が言った。

リーゼロッテと同じ薄い水色の髪に、深い青色の瞳をしており、非常におっとりとした美人の女性だ。

「ああ、ジュリアンヌ。すまないね」

セドリックは朗らかな笑顔を浮かべて言うと、

「ハルト君、紹介しよう。彼女は私の妻でリーゼロッテの母親であるジュリアンヌだ」

リオに向き直って、ジュリアンヌと呼ばれた女性の紹介を行った。

「ふふ、こんにちは。ジュリアンヌ＝クレティアと申します。娘を助けてくださったようでありがとうございます。心よりお礼申し上げますわ」

紹介を受けてジュリアンヌが丁寧に挨拶を行う。どうやら彼女がリーゼロッテの母親であるらしい。

確かに髪の色といい、瞳の色といい、育ちが良さそうで優しそうなおっとりとした顔立ちといい、見れば見るほどにリーゼロッテにそっくりである。

年齢はわからないが、傍から見ると二人が姉妹にしか見えない程にジュリアンヌは若々しく見える。

「初めてお目にかかります。ハルトと申します。恥ずかしながらジュリアンヌ様をリーゼロッテ様のお姉様なのではないかと勘違いいたしました」
「まぁまぁ、お上手ですのね」

ジュリアンヌは頬を染めてはにかみながら、少しだけうつむいた。

「ははは、そうだろう、そうだろう。ジュリアンヌは美しいからな」

見る者を惹きつける眩しい笑顔を浮かべ、ご機嫌な様子でセドリックが同意する。

「もう、貴男(あなた)ったら……」

ジュリアンヌが頬に手を当てて顔をそむける。
その仕草は非常に可憐で彼女に似合っていた。
それにしても随分と仲が良いというか、まるで新婚のように初々しい夫婦である。

「申し訳ございません。ハルト様。この二人はいつもこのような感じなのですよ。見ている方が恥ずかしいくらいで、仲が良すぎて私が立ち入る隙がないほどです」

二人のやり取りを後ろから眺めていたリーゼロッテが苦笑しながら語りかけた。

「夫婦の仲が円満なのは素晴らしいことだと思いますよ」

と、リオが微笑ましげに答える。

「おぉ、君もそう思うかね。実に見どころがある青年だな」
セドリックが響きの良いテナーボイスでリオを褒める。
「恐縮です」
リオは小さく会釈して礼を述べた。
セドリックはそんなリオの顔をじっと見つめると、
「ふむ、では夕食を食べながら少し話をしようか。まずは座ろうじゃないか。身内だけの晩餐会だ。堅苦しいのはなしでいこう」
と、そう言った。
「食前酒はお飲みになりますか？　度数の低いものから高いものまでご用意しております」
リオやクレティア公爵家の面々がテーブルにつくと、侍従達がやって来て食前酒を飲むか聞いてきた。
一緒に食前酒のリストも差し出される。
「お願いします。ではワインベースのカクテルを頂けますか？」
「承(うけたまわ)りました。しばしお待ちくださいませ」
小さくお辞儀をすると、侍従が静かに立ち去る。
それからすぐに前菜と一緒に食前酒が運ばれると、リオをもてなす晩餐会が始まった。
セドリックが巧みに会話を誘導し、ジュリアンヌがころころと笑い、それに釣られてリオやリーゼロッテの顔にも笑みが浮かぶ。
次第に酒もまわって気分が高揚してきたのか、

「どういうわけかリーゼロッテは私やジュリアンヌとは違って気の強い子に成長してしまってね」

と、セドリックは徐(おもむろ)にリーゼロッテについて語り始めた。

「お、お父様？」

リーゼロッテが意表を突かれたような表情を浮かべる。

セドリックはにっこりと微笑むと、向かいに座るリオに視線を向けて口を開いた。

「貴族として生きていくには人脈というものを無視することはできない。それはわかるかな？」

「ええ、存じております」

リオが小さく頷く。

「家と家の繋がりはその人脈を形成する最たる例だね。つまりは結婚だ。

結婚は家を存続させるためにも、人脈を形成させるためにも、貴族として避けることが難しい社会的な事象だ。

だから貴族は政略結婚をする。政略結婚をするためにお見合いをする。たとえ当人同士にその気がなくともね」

そう言って、セドリックは少し困ったように笑みを浮かべた。

「リーゼロッテもその例外ではなかった。公爵家ともなると様々な家からお見合いの申し込みが来る。それも幼少期の頃からね。

まぁ顔合わせみたいなものだよ。貴族社会で円満な関係を維持し

たいのなら、そのすべてを断るのは悪手だ。
リーゼロッテはご覧の通り目に入れても痛くないくらいに可愛いからね。それはもう沢山の家からお見合いの話が舞い込んだものだよ。
もちろんすべての話を受けるのは難しいから、その中から断りにくい話だけを受けてリーゼロッテにお見合いをさせたんだ」
話を聞きながら、リオがちらりとリーゼロッテに視線を送ると、彼女は恥ずかしさで顔を紅潮させ身体を震わせていた。
「八歳のころだったかな。リーゼロッテが私の執務室に来て言ったんだ。『十二歳までに王立学院を高等部まで飛び級で卒業したら私のお願い事を聞いてほしい』とね。そのお願い事というのが商会の設立と領都の経営を認めてほしいというものだった」
「お、お父様、そろそろ別のお話を……」
リーゼロッテが引きつった笑みをたたえて話を逸らそうとする。
目の前にリオがいるためか、はしたなくて強気な態度に出ることはできないようだ。
「あらあら、いいじゃない。恩人であるハルト様に貴女の良いところ知ってもらう良い機会よ」
ジュリアンヌが微笑ましそうにリーゼロッテを制止する。
それ以上はリーゼロッテも食い下がることはできず、小さく嘆息して観念した。
セドリックはフッと笑みを浮かべて愛娘の様子を確認すると、
「当時のリーゼロッテはまだ八歳だ。いきなりそんなことを言い出すなんて何事だろうと驚いてね。私は理由を聞いたんだ。すると彼

女は何て言ったと思う？」

そう尋ねて、愉快そうにリオを見つめた。

「『お父様、私は望まぬ相手との政略結婚をしたくありません。自分の結婚する相手は自分で選びたいのです。だから私は結婚相手を自分で決められるだけの力が欲しい。それが理由です』。

妙に鬼気迫る表情を浮かべて、彼女はそう言ったんだ。八歳の少女がだよ？」

ややあって笑いを堪えられなさそうに語ったセドリック。

「我が子ながら気が強いというか、気風が良いというか、感動してしまってね。私は二つ返事で頷いてしまったんだ。そしてこの子はそれを有言実行した。僅か二年半でね」

「素晴らしいお嬢様なのですね」

言って、リオは小さく微笑んだ。

「わかるかい？　私達にはもったいないくらいに本当に優秀で可愛らしい娘だよ」

セドリックが実に誇らしげな表情を浮かべる。

だが、すぐに哀愁めいた表情を覗かせて、

「だからこそ普段は離ればなれに暮らしているのが不安なのだけれどね。ついこないだもアマンドに魔物の群れが押し寄せたというじゃないか。

竜によって魔物が刺激されたことが原因と言われているが、まぁ竜なんて天災のようなものだからね。娘の成長を促すためには仕方

ないのかもしれないが……」
と、セドリックが少し寂しそうに語る。
そのまま小さく嘆息すると、彼は姿勢を正してリオへと向き直った。
「君は並々ならぬ腕を持つ剣士だそうだね。リーゼロッテから信頼できる人物であるとも聞いたよ」
「身に余るお言葉です」
リオは小さくお辞儀をして答えた。
「少し警戒させてしまったかな？　別に取って食おうしているわけじゃない。もし警戒しているというのならば心配は無用だ。ただ、ちょっとお願いがあってね」
「と、仰いますと？」
特に身構えることはせず、リオは話だけでも聞いてみることにした。
「仕事柄というか立場柄というか、この子のことを良く思う人物は大勢いるんだが、同じくらい妬んだり嫌ったりする者も多くてね。よければ今後もこの子と仲良くしてやってくれないだろうか？」
「……はい。それはもちろんですが、お願いとはこのことでしょうか？」
しばしの沈黙の後、リオがやや拍子抜けした風に尋ねた。
予想としてはもう少し突っ込んだ内容のお願いとやらが来ると思っていたのだ。

「ああ、そうだよ」

と、セドリックはにこやかな笑みを浮かべた。

ぱちくり――と、リオが瞬(まばた)きを一つ。

「承知しました。私の方こそ今後とも末永くお付き合いさせていただきたく存じますので、どうぞよろしくおねがいします」

セドリックに薄く微笑み返し、リオはそう告げたのだった。

第８９話　それは呪縛のように

それはリオが夜会へと向かう日の前夜のことだった。
王都の人間がすっかり寝静まってしまった深夜。
既にガルアーク王国の王都に滞在してから数日が経過し、ようやく宿での生活にも慣れ始めて、少しずつ緊張もとれてきた。
まだ少し慣れないベッドに背を委ね、王都の宿屋に滞在している美春達も眠りに就いていた頃――、綾瀬美春は夢を見た。
セピア色の風景の中で、見覚えのある少年と少女が向き合っている。
見覚えがあるのは当たり前だ。
二人は幼馴染で、少女の方は美春本人なのだから。
夢の中だというのに、妙に頭は冷静で、意識がはっきりとしている。
美春は幼き日の自分と幼馴染の少年とが向き合う姿を横から眺めていた。
間違いない。
今見ている夢は美春が過去に体験した出来事を再現している。
それはある夏の日のことだった。
燦々（さんさん）と日差しが降り注ぐ――、そんな日の甘酸っぱい出来事。
美春は思う。
あの頃の自分は気が弱くて、泣き虫で、幼馴染の少年の傍に付いて回るのが当たり前の日々だった、と。
人見知りが強くて、当時は少年以外に友達らしい友達もいなかった。
だからそれは当然だったのだろう。
幼馴染の少年が自分の前から消えてしまうと知り、当時の美春がわんわんと泣き出してしまったのは。

夢の中の美春は泣きながら必死に幼馴染の少年に抱き着いていた。
泣き止まない幼い自分とは対照に、夢の中の幼馴染の少年は気丈に美春を励ましている。
思い返せば幼馴染の少年はいつも傍にいて、いつも優しくて、誰よりも美春のことを守ってくれていた。

「次に会ったら結婚しよう！」

いつまでも泣き止まない美春に、幼馴染の少年が決然と呼びかけた。
絶対に迎えに行くから、と。
幼い美春がぼーっと幼馴染の少年の顔を見上げている。
横から見ている美春もなんだか恥ずかしくなってしまって、もじもじとうつむきながら二人の様子を道路の隅から眺めていた。

「……する。する。結婚する！」

夢の中の幼い美春が輝かんばかりの笑顔を浮かべて答える。
別れ際には思いきって幼馴染の少年にキスまでしているではないか。
果たして今の自分にそんな真似ができるだろうか。意外とこの頃の自分は大胆だったのかもしれない。
なんだかまたしてもちょっと恥ずかしくなってきてしまった。夢の中だというのに頬が赤くなるのを感じてしまう。
そのまま夢は進行していき、幼い美春が車で立ち去る少年を見送るシーンになった。
幼い美春は去りゆく車に向かって必死に手を振っている。
美春の人生で、この日ほど嬉しかった日はない。そして、この日ほど悲しかった日はない。
だが、この日から美春が前向きに強くあろうと誓ったのは確かな

のだ。
そして、美春は良いお嫁さんになろうと努力する。
いつか彼が迎えに来てくれると信じて――。

（あれ？）

テレビ番組のチャンネルを変えたみたいに、美春の見ている場面が急に切り替わった。
ゆっくりと目を見開き、眼前に広がる光景を見る。
そこに幼馴染の少年がいた。
まるでダイジェストのようにシーンが移り変わっていく。
しかし、いずれも美春の知らない場所が舞台となっていて、少年の隣に美春はいなかった。
変わりゆくシーンの中で、少年は何やら一生懸命に色んなことに取り組んでいる。
勉強、家事の手伝い、農業の手伝い、武道と、少年は直向きに努力していた。
その姿が微笑ましくて、美春はつい夢の中の少年を応援してしまう。
少しずつ少年が成長していく。
何やら少年は美春と会うために努力しているらしい。

「次に会ったら結婚しよう！」

それは何の拘束力もない、淡く儚い約束だ。
将来がどうなるかなんて全く知らない少年と少女が交わした誓い――。
普通は成長とともにそんな約束を忘れてしまうか、憶えていても守ろうなんて思わないのかもしれない。
だが、夢の中の少年は愚直なまでにその約束を果たそうと努力し

ていた。
すべては美春のために――。
たとえ自分の願望が創りだした夢の中の出来事だとしても、美春はその事がとても嬉しかった。
ひょっとしたら現実の彼もこうして努力していたのかもしれない。
そう考えるとついついはにかみ、頬が緩んでしまいそうになる。
だが、もし本当にそうだとしたら、これから先、自分は少年と再会することができるのだろうか。
地球ではない、どこか遠い世界にやって来てしまった自分が――。
美春は名状しがたい不安を覚えてしまった。
そうしている間にも場面は移り変わっていく。
いつの間にか少年は今の美春と同じくらいの年齢になっていた。

（やっぱり女の子にモテるのかな……）

夢の中の少年はとても格好良く成長している。
昔の面影を残していて、本当にこんな風に成長しているんじゃないかと思えるほどだ。
驚くことに少年は美春と同じ高校に進学するらしい。

（本当にそうなら良かったのにな。一緒に高校に通って……）

もし同じ高校の同じクラスに在籍していたら、その時は伝えたいことがいっぱいあったのだ。
だが、現実はそう上手いものではなく、かつて美春が在籍していたクラスに少年はいなかった。
美春がこの世界にやってきたのは入学してから間もない頃だ。
まだクラスメートと仲が良くなる前で、同じ中学から一緒に入学した者達以外には友達といえる人間もいなかったが、流石に同じクラスに在籍していれば気づいていたとは思う。

（まだほんの数か月前の出来事なんだよね）

そう、美春達がこの世界にやって来てからまだ数か月しか経っていない。

あっという間だったが、とても密度の濃い時間だったと美春は思う。

あのまま地球にいたら今頃は夏休みだったのではないだろうか。

（帰れる……のかな？）

先の見えない不安を打ち消すように、美春は強く頭（かぶり）を振った。

目の前の光景に集中する。

どうやら少年は見事に美春と同じ高校に合格し、入学式の日がやって来たようだ。

ほんの数日も通っていないけれど、そこは間違いなく美春が通っていた高校だった。

少年は自分のクラスを見つけようと校舎の庭に設置された掲示板に視線を走らせている。

ふと、少年の視線がある一点で固定された。

（あ、自分のクラスを見つけたのかな）

夢の中とはいえ、自分と同じクラスだったら、それはとても嬉しい。

美春は胸を高鳴らせながら、そっと少年の隣に立ち寄り、その視線の先に書かれている名前を見ようとした。

（え……私の名前？）

どうやら少年は美春の名前を発見して視線を止めたようだ。
確かに美春は最初のクラスに在籍しているから、少年が自分の名前よりも先に美春の名前を発見したことは不思議でない。
少年は目を丸くしてじっと美春の名前を見つめている。
口元にはそっと微笑を覗かせていた。
それから少年は自分のクラスを発見し、周囲にきょろきょろと視線を走らせた。おそらく美春がいないか探してみたのだろう。
だが、入学式のために周囲には大勢の人がおり、少年はやむを得ずその場を後にした。

（えっと、この日は貴久君と雅人君が寝坊して、登校するのが遅れちゃったんだよね……）

現実に準拠するのならば、おそらく美春がこの場にやって来るのは入学式開始の割とギリギリの時間だろう。
美春は千堂家の三人――貴久、亜紀、雅人と一緒に登校するのが慣習となっていた。
もともとは亜紀と二人で小学校に登校していたのだが、そこに途中から亜紀の母の再婚相手の連れ子である貴久と雅人が加わるようになり、それが慣習化したのだ。
どうせ夢なのだから、現実通りじゃなく、都合良く同じ時間にやってくればいいのに――、変なところで融通が利かない夢である。
美春は思わず苦笑してしまった。
そして、入学式が始まる。
そこで美春の中学時代からの先輩である皇沙月（すめらぎさつき）が新入生歓迎の挨拶をしていた。
沙月は学園の生徒会長を務め、全校生徒の顔的存在なのだ。
才色兼備の秀才で、学業も運動も常にトップの成績をとり続け、周囲からは憧れの的として注目を浴びている。

（流石だなぁ、沙月さん）

新入生達は男女問わずみな沙月に対して羨望の眼差しを向けていた。

美人なのに格好が良くて、凛々しくて、同性なのに思わず憧れてしまう輝きがある。

少年も沙月に見惚れているのだろうか。

そんなことを思い、美春はおそるおそる視線を少年に向ける。

だが、少年は何やら美春がいるクラスの方を気にしているようで、沙月の挨拶は耳に入っていないようだ。

沙月のことなど見向きもしていない。

声は出ないけれど、それが嬉しくて、美春は思わず可笑しくなってしまった。

それから、少しばかり退屈な校長の話も聞き流して、美春は少年の横顔を眺めることにする。

入学式が終わり、少し長引いたホームルームも終わると、少年は真っ先に美春がいる教室へと向かった。

去り際に傍に座っていた男女混合のグループからカラオケに誘われていたが、少年は丁重にお断りしていたりする。

美春の教室の前で立ち止まると、少し緊張しているのか、少年は小さく深呼吸をした。

（頑張って！）

美春は少年の隣に立って心の中で応援の声を送った。

これから少年と再会するであろう夢の中の自分が少し羨ましい。

なんだか傍から眺めている美春も少し緊張してきた。

美春のクラスも既にホームルームを終えたようだが、大半の生徒はまだ教室に残っており、廊下までがやがやと喧騒を響かせてお喋りに花を咲かせている。

開きっ放しになっている教室の扉からそっと中の様子を窺(うかが)う。
きょろきょろと教室を眺めていたが、すぐに目当ての人物を発見して視点を固定させた。

（あ、いた。私だ……）

そこに座っていたのはまぎれもなく美春だった。
何を考えているのか、美春はぼんやりと椅子に座って前を見ている。

（うう、私浮いてるよぉ……）

既にできあがっているいくつかのグループが仲良く談話する中で、美春の周囲には空白地帯が出来あがっていた。
人見知りの強い性格は昔とあまり変わっていない。
初対面の相手と話すのはどうも緊張してしまい得意でないのだ。
相手が女性ならば必要に応じて自分から話しかけたり話しかけられたりしてもあまり緊張することはないが、男性相手だと話しかけることはもちろん話しかけられても言葉に詰まってしまい会話に困ることがよくあった。
幼馴染の少年が転校して以降の小学校時代によく男子生徒からちょっかいを受けることがあったことや、今の世界に来る直近の頃に街中を歩いていると馴れ馴れしく男性から話しかけられたことが異性に苦手意識を持っている原因かもしれない。
中学時代からは亜紀の義兄と義弟である貴久や雅人くらいとしか話すことがなかったことも異性にあまり免疫を持っていない理由の一つだろう。
美春にとって妹分である亜紀と一緒に過ごすうちに必然的に一緒に行動する機会が増えて慣れていったが、年下の雅人はともかく、貴久とは出会った当初は多少なりとも苦手意識を持っていたという

経緯もあったりする。

（そう言えばハルトさんと話した時はあまり緊張しなかったな……）

初めて出会ったのが緊急時だったということもあるが、その後の生活において二人きりで話す時もさして緊張することはなかった。

それは美春が無意識のうちにリオと春人を重ねあわせていたからなのかもしれないが――。

「すみません。あの子って綾瀬美春さんですよね？」

少年が教室の入り口付近で喋っていた女子生徒の一人に尋ねた。

「え？　……あ、ああ、えっとどうだろう。あ、ちょっと名簿で確認してくるんで待っててくれます？」

声をかけられた女子生徒は少し目を丸くして少年に答えた。

そのまま教卓に置いてある名簿と座席表のもとへと向かう。その間に残った女子生徒達が興味深そうに少年の名前やらクラスを尋ねていた。

「ただいま！　待たせてごめん。さ、帰ろうか。亜紀や雅人を迎えに行こう。あっと、……沙月さんからメールが来てる」

すると、そこに一人の青年がやって来て、親しげに美春に声をかけた。

彼こそが亜紀の義兄である千堂貴久（せんどうたかひさ）だ。

貴久が教室に入ってきたことによりクラス内の女子生徒達が僅かに色めき立った。

貴久は長身で整った顔つきをしており、人当たりの良さそうな雰

囲気を放っている。
入学初日にして女子生徒から目をつけられたのは当たり前なのかもしれない。

「ああ、やっぱり付き合ってるのかなぁ。千堂君とあの子」
「美男美女でお似合いの二人だよねぇ」
「恋人同士で同じ高校に入学するとかマジ羨ましいんですけど！」

などと、女子生徒達が姦(かしま)しく噂話に花を咲かせている。
その光景を目にして、少年はやや呆気にとられたような顔を浮かべていた。

（え、あ……）

嫌な予感がして、美春は血の気が引いた。
確かに今の二人のやり取りを見ると恋人のように見えてしまう。
入学初日だからと、亜紀と雅人も交えて一緒に帰ろうと約束をしていただけなのに。
もしかしたら少年は勘違いしてしまったのではないか。
すると、そこに、

「あの子が綾瀬さんですよ」

と、名簿と座席表を確認していた女子生徒が戻ってきて、少年に告げた。

「……そうですか。ありがとうございます」

少しぎこちない笑みを浮かべて、少年が礼を告げる。
そのまま踵(きびす)を返すと、少年は美春のいた教室から立ち去ろうとし

た。

（ち、違っ！　ま、待って！）

慌てて美春は呼び止めようとしたが、言葉が出てこない。

この夢の中では考えることはできても、登場人物に干渉することはできないのだ。

尋ねるだけ尋ねて立ち去ろうとしたため、その場にいた女子生徒達も呼び止めようとしたが、少年は「ごめんなさい。急いでいるので」とだけ言ってその場を後にした。

（違う。違うの。ねぇ、お願い！　待って！）

すがりつくように呼びかけるが、少年の足取りが止まることはない。

少年は苦虫を噛み潰したような顔を浮かべていた。

その横顔に美春は心臓を締めつけられるような感覚を覚える。

すると、またしても夢の場面が変わってしまった。

今度は少年が暮らすアパートが舞台となっているようだ。

引っ越したばかりなのか、あまり生活感のない部屋の中で少年はぼんやりと寝転がって天井を眺めている。

先ほどからずっとこの調子だ。

いったい何を考えているのだろうか。

無表情なその顔からは一切の感情が読み取れない。

美春はいたたまれない気持ちで少年の様子を眺めていた。

だが、ここが夢の中だからか、美春は重大な出来事を失念していた。ほんの数日後に待ち構えているそれはすぐそこに迫っているのに――。

何度目だろうか。

プツリと場面が切り替わった。

いったいどれだけ時間が進んだのだろう。
少年は先ほど美春が見た時よりもすっきりした顔を浮かべている。
まるで何かを決意したかのような――。
どうやら今は高校に通学する時間帯のようだ。
少年は新品の制服で身を包んで通学路を歩いている。
間もなくして学校に到着すると、少年は美春のいる教室へと赴いた。
きょろきょろと視線を走らす。
だが、どうやらまだ美春は登校していないようだ。
小さく嘆息すると、少年は一度教室に戻った。
そのまま場面が切り替わる。今度はお昼休みの時間だった。少年はまたしても美春のいるはずの教室を訪れたが、やはり美春はいない。
そうして何度か場面が切り替わり、似たようなシーンを繰り返したところで、少年は美春が学校を休んでいる事実を教室にいた生徒から聞いた。
どうやら欠席に関して何の連絡もないらしい。
その話を聞いて、少年が少し不安そうな顔を覗かせる。

（もしかして――）

嫌な予感がして、美春は顔を引きつらせた。

（この夢って私がいなくなった後の話なんじゃ……）

ぞくりと、背筋が凍るような感覚が美春を襲う。
もしそうだとしたら――。
先を想像するのが怖い。
嫌だ。
見たくない。

これから先は見たくない。
見るのが怖い。
だが、無情にも淡々と夢は進行していく。
ある日、美春を含む一部の生徒が失踪した事実が生徒に向けて明らかにされた。
その一人は生徒会長の沙月であったことから、校内では既にかなりの噂が横行していたため、学校側もこれ以上は隠しておくことができないと判断したのだろう。
この日を境に少年はほとんど笑顔を見せることがなくなる。
校内では美春達の失踪の理由について好き勝手な噂が飛び交ったが、生徒達もすぐに興味をなくしていった。
行方を探そうにもたかが高校生の少年に出来ることなど何もなく、やり場のない感情を抱えたまま、悶々とした日々を過ごすことになる。
美春は顔を背けることも出来ず、飛び飛びに変わりゆく少年の日々をただ眺めていた。
失踪した美春のことなど忘れて楽しく人生を謳歌(おうか)してくれたらどんなに気持ちが楽になったことだろうか。
自分を忘れて他の女性と親しく過ごす姿を見せつけられるのは辛いが、自分のことを引きずったまま生きる姿を見せつけられるのはもっと辛かった。

（まだ続くの……？）

夢の中の少年――いや、青年は東京の大学に進学した。
どうやらこの夢はまだ終わらないようだ。
いったいどこまで続くのだろうか。まるで彼の生涯をダイジェストでまとめたようなこの夢は――。
彼の傍には誰もいない。
青年は何度か女性から告白を受けたこともあるようだが、そのす

べてを断り続けていた。
一人暮らしをして、アルバイトをして、傍から見ると充実した大学生活を過ごしているようにも見えるけれど、青年は人と距離を置くようにして生活を送っている。
それでも道端で困っている老人を手伝ってあげたり、バスで乗り過ごして泣きそうになっていた少女を助けてあげたりと、生来の彼の優しさは残っていて、そういう姿を見せつけられる度になんだか美春はやるせない思いに駆られた。
会話が出来なくたっていい。自分の存在が気づかれていなくたっていい。ここが夢の中だとしても、それでも彼の傍にいたい。
美春は覚悟を決めて青年の生きざまを眺めることにした。
変化のない日々が続く。
すごく、とてつもなく、途方もなく長い夢に感じる。
それは悲しい物語だった。
挫折して、絶望して、苦悩して、何の当てもなくただ生き続けるだけの話。
せめて最後はハッピーエンドになって欲しい。
自分でなくてもいい。青年が誰かと結ばれて、幸せに生きていく未来を匂わせるような終わり方であってほしい。
だが、美春の願望が叶うことはない。

（あ……、あ、あぁ……）

青年が乗ったバスが事故に遭ってしまった。
そう、あっけなく、青年は死んでしまったのだ。
即死――、絶対にそうとしか思えないくらいに凄惨（せいさん）な光景だった。
青年が座っていた席の位置はもはや原形を留めていない。
横転してグシャグシャになったバスの残骸の一部が血で紅く染まっている。

（い、嫌……。嫌、嫌、嫌ぁぁぁぁぁ！）

美春は夢の中で絶叫し、

「っ！」

そこで目が覚めた。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

目覚めと同時に、美春は強い動悸を感じ、軽い過呼吸になってしまった。

寝汗でびっしょりと寝間着を濡らし、どくんどくんと張り裂けそうなくらいに心臓が鼓動している。

生きた心地がしないくらいに全身が冷たかった。

身体の震えが止まらない。

美春は半身を起こすと、上掛けをぎゅっと手繰り寄せて、暗闇の中をじっと眺めた。

「夢……だよね」

ぼそりと呟く。

そう、夢。これは夢だ。

夢に違いない。

そうでなければあまりにも彼が救われない。

あんな――。

あれでは、まるで――。

（私のせいなのかな……。私が泣き止んでれば、あんな約束しないで……）

幼い頃の約束など、普通は成長と共に風化していくものだ。
律儀にその約束を果たそうとするなんて、愚か者か異常な人間のすることなのかもしれない。
だが、少年も美春もその淡い約束を拠り所として真っ直ぐに成長してきた。
美春は少年を待ち続けて、少年は美春を追い続け、美春が失踪した後もその影を追い続けて――。
もしかすると少年にとってあの約束は呪縛だったのかもしれない。
あの時、美春が泣き止んで綺麗に別れを済ませていれば、少年はあんな約束を言いださなかったのではないか。
そうすれば少年が約束に縛られて生きることはなかったのではないか。
美春はそう思ってしまった。
そう、あそこまで彼を不幸にしてしまったのは――。

「私が我儘を言ったからなのかなぁ……」

その言葉を口にして、美春はぽろぽろと泣き出してしまった。
あれがただの夢だということはわかっている。
だが、ただの夢のはずなのに――。
あれは本当に起きる出来事なのではないかと――。
まるで偏執病（パラノイア）にでもかかったように、美春の脳裏に青年の最期が刻み込まれてしまった。

「……誰？」

すぐ傍で布擦れの音が響いて、美春は暗闇に向けて反射的に誰何（すいか）した。
この方向に眠っていたのは確か――。

「美春」
「アイ……ちゃん？　起きてたの？」
果たしてそこにいたのはアイシアだった。
黒いワンピースを着ているせいか、闇に紛れてアイシアの存在感はいつもよりさらに希薄になっている。
音もなくスッと近づいてきて、アイシアはそっと美春の頬を撫でた。
温度を感じない冷たい手だ。
だが何故だろう。
なんだか美春はぽかぽかと温かい気持ちになれた。
すぐに心地よい眠気が襲ってきて、美春の意識が急速に途切れていく。
「おやすみなさい。美春」
今度は良い夢が見れますように――。
至近距離でアイシアがそう呟いた気がして、美春は安らかな眠りに就いた。

第９０話　遭遇

沙月のお披露目を行う夜会の当日。
今宵、リーゼロッテに同伴してもらい、いよいよリオはガルアーク王国の王城へと赴くことになる。
現在時刻は夕方に差し掛かり始めた頃合いで、雲一つない東の空には満月が浮かんでいた。
クレティア公爵邸の庭に豪華な作りの馬車が二台停まっている。
そのうちの一台にはリオとリーゼロッテが、もう一台にはセドリックとジュリアンヌが乗車するのだ。

「それじゃあ娘のエスコートをよろしく頼むよ、ハルト君。何しろこの子が異性を引きつれて夜会に出席するのは初めての経験だからね」

と、乗車を前にして、セドリックが朗らかな笑みを浮かべてリオに語りかけた。
絶対にというわけではないが、夜会が開かれる場合にはパートナーとなる異性を同伴して出席することが慣例となっている。
未婚者の場合は両親に随伴することもできるが、一定の年齢に達するとパートナーを同伴させる者が増えてくるのだ。
未婚の男女がパートナーを同伴させることは己の沽券に関わってくる。
要は服や宝石と同じで、自らを飾りたてるアクセサリーみたいなものだ。
特に男性の場合は成人になってもパートナーを連れてこない者は半人前扱いされる風潮がある。
体面や品位を大事にする貴族として夜会に出席する以上、パート

ナー選びが重要な意味を持ってくることは想像に難くないだろう。
ちなみに、婚約者同士ならばともかく、一緒に出席した者達は夜会の間もずっと行動を共にしなければならないというわけではなく、適当に折を見て別行動をすることができたりする。

「畏(かしこ)まりました。不肖の身ながら、お嬢様の隣に立つ者として恥じないよう頑張ります」

控えめな笑みをたたえて、リオが答えた。
リーゼロッテはガルアーク王国の公爵令嬢であり、近隣諸国に名を轟かせるリッカ商会の会頭でもある。
しかも彼女はこれまで異性と一緒に夜会に出席したことがないと言うではないか。
正直、リオとしては、リーゼロッテのパートナーとして一緒に夜会へ赴くことにはかなり気が引けた。
無名の存在にすぎない自分が彼女のパートナーとして同伴すれば、間違いなく夜会に出席する貴族達からいらぬ注目を集める未来が透けて見えるからだ。

（だが必要なことだ。仕方ない）

そう言い聞かせて、リオは内心で小さく嘆息した。
別に何も悪いことばかりではない。
リーゼロッテと行動を共にすることによって、夜会で勇者である沙月と接触をとりやすくなることは確かだからだ。

「そう言ってくれると嬉しいよ。何、ハルト君ならリーゼロッテの隣に立っても見劣りすることはない。もしかしたら良い婚約者が見つかったと思われるかもしれないね」

からかうような笑みを浮かべて、セドリックが語る。
隣に立つジュリアンヌも面白そうに微笑んでいた。
「はは……」
リオが苦笑を浮かべて応じる。
「ハルト様、あまりお父様の仰っていることに耳を傾けなくとも大丈夫ですよ。いつもの戯言(たわごと)ですから」
やや呆れのこもった視線をセドリックに送りながら、リーゼロッテが言った。
「ははは、手厳しいな。僕は大事な可愛い娘の心配をしているだけだというのに」
ややおどけたように言って、セドリックが小さく肩を竦(すく)める。
「お戯れもほどほどにしてください。まったく」
「娘が初めて家に連れてきた男の子だ。好奇心を抑えられなくもなるさ」
「もう、あまり私に恥をかかせないでください。申し訳ございません。ハルト様」
小さく嘆息すると、リーゼロッテはリオに向き直り頭を下げた。
「いえ、何も問題はございませんよ」
リオは微笑ましげに頭(かぶり)を振った。

「ありがとうございます。さ、では。どうぞ馬車にお乗りになってくださいませ。お供いたします」
「ええ、承知しました」

リオがこくりと頷く。
そのままセドリックとジュリアンヌに目礼をして、リオはリーゼロッテと一緒に公爵邸の庭に控えていた豪華な作りの馬車に乗りこもうとした。
すると、そこで、

「二人とも今日は楽しむといい。せっかくの機会なのだからね」

と、セドリックが二人の背中に優しく語りかけた。

「ありがとうございます」
「はい。お父様」

ぴたりと動きを止めると、リオとリーゼロッテがそれぞれ趣の異なる笑みを浮かべて返事をした。
リオが浮かべているのが純粋に好意的な笑みだとすると、リーゼロッテは仕方がないなと思わず微笑んでしまっている感じである。
そうして今度こそ二人がクレティア公爵邸の庭に控えていた豪華な作りの馬車に乗りこむ。
中には既に御者と護衛を兼ねたお付きのアリアが乗車している。
窓には東の空に昇る丸い月が薄っすらと浮かぶ光景が映っていた。

「それでは出発いたします」

御者が告げると、リオ達を乗せた馬車が王城へ向けて出発した。
周囲に王城へと向かう馬車は見当たらず、静寂な貴族街に車輪の

音がガラガラと響き渡る。
貴族の馬車で城門がごったがえさないよう、貴族の家格に応じて登城の時間帯が決められているからだ。
国内の貴族としては最も家格の高いクレティア公爵家の面々は遅れて会場入りすることになっており、リーゼロッテの客として来場するリオもそれに伴って入場することになる。

「ハルト様はテイルコートがとてもお似合いですね。ハルト様の魅力が存分に引き出されておりますよ。ご新調されたのですか？」

道中、走る馬車の中で、リーゼロッテが尋ねた。

「ええ、あまりこういった服は着なれないものでして。知り合いに選んでもらったんです」
「そうなのですか。とても良いセンスをお持ちの方なのですね。貴族は華美な色を好む方が多いのですが、私は落ち着いた黒が一番好きなんです」
「月並みな言葉しか思い浮かばず恐縮ですが、リーゼロッテ様もとてもお美しいですよ」

そっとはにかみながら、リオもリーゼロッテを褒める。
今のリーゼロッテは彼女の美しさを十二分に引き出す愛らしい装いをしていた。
背中まで伸びた水色の長髪をアップスタイルで整えた髪型、それを束ねるバラの装飾が施されたヘアブローチ、髪の色に合わせた淡い水色のドレス、背中には同じくバラを思わせる大きなリボンが付いている。
スカートは地面に伸びてふわりと広がり、まるで妖精のように可憐な雰囲気を醸し出していた。
夜会の会場へと入れば間違いなく男達の視線を釘付けにすること

だろう。

「まぁ……、ありがとうございます」

リーゼロッテは僅かに目を丸くしてリオの顔を見つめると、そっとはにかんで礼を述べた。

彼女にとって容姿を褒められることなどさして珍しいことではない。

それこそ今までに対面した男性の貴族達から長ったらしい世辞と一緒に腐るほど「綺麗だ」とか「美しい」とか「可愛らしい」と言われてきた。

そのほとんどが劣情や懸想の念がこもった視線と共に投げかけられてきた口説き文句だったのだが、今のリオは実に紳士的で、そういった下心的な意味合いがまったく感じとれない。

かといってお世辞で褒め言葉を口にしたわけでもなさそうで、リーゼロッテは珍しく自らの容姿を褒められ純粋に嬉しいと思ってしまった。

すると、そこで馬車が停止する。

「城門に到着いたしました。ただいま御者が入城の手続を行っております」

御者台に座り周囲を警戒していたアリアの声が車内に響いた。

どうやら馬車が王城の門へと到着したようだ。

今宵は城の警備も厳重になっているようで、開きっ放しになっている窓からはちらほらと巡回中の兵士が歩いている姿が見える。

「クレティア公爵家の方々ですね。確かに確認いたしました。どうぞお通りください」

外から兵士の畏まった声が微かに響いてきた。
すぐに城門が開く音が聞こえてきて、馬車が動き出す。
こうしてリオはガルアーク王国の中心へと入り込むことになった。

☆★☆★☆★

ガルアーク王国の王城に隣接するように建設されている社交館――、今回、沙月のお披露目が行われる夜会の会場となる施設であり、薄藍色の壁を基調に各部が黄色の装飾で彩られた華麗な館だ。
到着してすぐに会場入りするのではなく、リオはクレティア公爵家の面々と一緒に控え室へと案内された。
来場の順番にも作法があり、その順番がやって来るまで待機することになったのだ。
室内には華美な調度品が並び、品の良い芸術品が飾られている。
そんな部屋の中でリオはセドリック達と談話をしていた。

「夜会は数日にわたって開催されるとのことですが」
「ああ、西のベルトラム王国の政権が不安定となり、北方のプロキシア帝国との睨み合いが続くこのご時世に、何を呑気な事をと思うかもしれないがね」
セドリックが苦笑を浮かべて答える。
「こんなご時世だからこそ人々には吉報が必要であるとも思われます。暗い世上の噂ばかりでは士気も下がることでしょう」
慇懃に微笑み返し、リオが言った。
「その通りだね。実際、勇者殿のお披露目は国民の士気を高揚させることをも狙いとしている。もっともこの夜会に出席する貴族にと

ってはそれだけで済む話ではないのだけれどね。色々と複雑な事情が入り組んでいる」
「会の趣旨通り社交の意味合いもあるのでしょうが、牽制と様子見も兼ねているといったところでしょうか？」
あまり生々しい話をする場でもないと考え、リオは少しはぐらかす様に自らの考えを述べた。
「ほう……」
セドリックが興味深そうに息を吐く。
どうやら今のリオの発言に感じるところがあったようだ。
そのままリオの顔を覗き込むと、セドリックは口を開いた。
「ハルト君は我が国の世情についてどこまでご存知なのかな？」
「あいにく近隣諸国との関係を含めて世間話として語られている程度のことしか存じません」
リオは苦笑を浮かべて頭（かぶり）を振った。
実際、リオはガルアーク王国についておよその外枠程度のことしか知らない。
「なるほど。やはり君は聡明なようだね。何となくだがリーゼロッテが目をつけた訳がわかった気がするよ」
僅かに目を細めて顔を覗き込むと、セドリックはリオに微笑みかけた。
「それは買いかぶりすぎかと。私はありきたりな事を述べたにすぎません」

「そうかもしれないね。だが、そうでないとも言える。
一介の市民はおろか、そこいらにいる貴族でさえ今ハルト君が言った言葉の意味を理解している者は少ないと私は考えているよ」

少し意味深長な言葉を告げるセドリック。
何と答えたらいいものか、リオが少し困ったところで、扉をノックする音が室内に響き渡った。

「おや、時間かな。まだ少し早い気もするけど」

言って、少し意外そうな表情でセドリックがドアを見やる。

「失礼します。クレティア公爵閣下」

丁重ではあるが少し焦りを感じさせる口調の言葉と共に扉が開いた。
すぐに扉の前で部屋の警備をしていた兵士が入ってくる。

「ベルトラム王国の勇者様がリーゼロッテ様に是非ご挨拶をと仰っておりまして……。フローラ王女殿下とフォンティーヌ公爵家のロアナ様とご一緒にいらっしゃっているのですが……」

と、困り顔を浮かべて告げた。
その知らせに室内にいた一同が僅かに目を見開く。

「ああ、なるほど。それほどの方々がお越しになられたとあっては追い返すわけにもいかないね。構わないよ。お通ししたまえ」
「はっ！」

堂に入った敬礼をすると、兵士は部屋の外へ出て、外で待機して

いた三人を招き入れた。

「よう、リーゼロッテ」

ベルトラム王国の反革命軍――今となっては革命軍に立場を変えているが――、の下に召喚された勇者、坂田弘明（さかたひろあき）はリーゼロッテを目にすると室内に入ってくるなりご機嫌な様子で挨拶を述べた。

夜会に出席するため、彼は金の刺繍の施された立派な白のテイルコートを着ている。

今回の夜会には近隣諸国からも外賓が招待されており、その中に弘明達も含まれていたのだ。

もっとも、弘明達はここ一ヶ月ほど国賓としてガルアーク王国の王城に滞在し続けていたのだが。

ちなみにユグノー公爵はベルトラム王国内の本拠地であるロダン侯爵領に行き来したりしている。

少しばかり馴れ馴れしすぎる挨拶ではあったが、クレティア公爵家の面々は笑顔を崩さずに弘明を迎え入れた。

「お久しぶりでございます。ヒロアキ様。私のために足をお運びくださりありがとうございます」

代表して訪問されたリーゼロッテがにこりと顔に笑顔を浮かべて挨拶を返す。

「ああ、聞いたぜ。アマンドは大変だったようだな。無事だとは聞いていたが、事件後はずっと会えなかったし、心配してたんだぞ」

「申し訳ございません。代官として後処理に追われてなかなかアマンドを離れることもできなかったものでして」

「そうか、まぁ、なんだ……。こうして無事な姿を見れたわけだからな。それで良しとするさ」

「ふふ、ヒロアキ様は相変わらずお優しいのですね」
思わず異性を惹きつけてしまうような微笑を浮かべて、リーゼロッテが礼を告げる。
弘明はこの時初めて彼女のドレス姿を間近でじっくりと見つめることとなった。
前回に会った時よりもお洒落で可愛らしいリーゼロッテの晴れ姿に弘明が思わず顔を赤くする。
「んん、それにしても随分と似合っているじゃないか」
小さく咳払いをして、弘明は少しどぎまぎとした口調でリーゼロッテを褒めた。
ちらちらとリーゼロッテのことを見つめてはいるが、意識してしまっているのか、目を合せないようにしている。
「ありがとうございます。これ、お気に入りのドレスなんです」
「あー、そうか。その、可愛いと思うぞ」
「ふふ、お上手ですね」
周囲の者達のことを忘れて話に没頭する弘明だったが、リーゼロッテはくすりと笑うと、フローラとロアナに視線を移した。
「フローラ王女殿下。再びお目にかかれましたこと、光栄に存じます」
と、リーゼロッテがドレスの裾を掴んで、恭しく挨拶を告げる。
「はい。お久しぶりです。貴重な団らんの時間に押しかけてしまい申し訳ありません」

フローラは控えめに微笑んでから、申し訳なさそうに謝罪した。
今の彼女は紫色のドレスを身につけ、薄紫の長い髪をハーフアップに束ねている。
その姿はリーゼロッテに勝るとも劣らない程に可愛らしかった。

「そのようなことはございませんよ。フローラ様のご来訪ならいつでも大歓迎です」
「そう言ってくださると幸いです」

フローラが安堵したように笑みを浮かべる。
それからリーゼロッテは弘明とフローラの背後に控えるロアナに視線を移した。

「ロアナ様もお久しぶりですね」
「ええ、お久しぶりです。先日は御屋敷にお招きいただきどうもありがとうございました」

ロアナは黄色いドレスの裾を摘まんでお淑やかにお辞儀をした。

「いえ、素晴らしいひと時を過ごさせていただきました」

リーゼロッテもドレスの裾を掴んで上品にお辞儀を返す。

「遅ればせながら本日私がお供している方々を紹介いたしますね。まずこちらが私の父であるセドリック、そして隣にいる女性が母のジュリアンヌです」

リーゼロッテはひとまず両親であるセドリックとジュリアンヌの紹介を行う。

「お初にお目にかかります。リーゼロッテの父、セドリック＝クレティアと申します」
「妻のジュリアンヌです。初めまして。お会いできて光栄ですわ」
穏やかな笑みをたたえて、セドリックとジュリアンヌが簡単に自己紹介を行う。
「初めてお目にかかります。フローラ＝ベルトラムです。どうぞよしなにお願いします」
「ロアナ＝フォンティーヌと申します。以後お見知りおきを」
フローラとロアナが淑女然と挨拶を返す。
「あー、っと、ヒロアキ＝サカタです。どうぞよろしく」
二人が挨拶を行っていく姿を見て、少し緊張した様子で弘明が頭を下げた。
場の雰囲気を察したのか、普段の明け透けな彼から想像できないくらいに大人しくなっている。
まるで借りてきた猫のようだ。
「ははは、どうかそう緊張しないでください。ヒロアキ殿」
と、セドリックが弘明に語りかけた。
「えっと、すみません。どうも敬語ってやつは苦手で。最近はフローラやロアナ達から言葉遣いについて注意を受けているんだ……ですけどね」

ばつの悪そうな笑みを浮かべて、弘明が小さく頭を下げた。
その傍でフローラは困ったように笑みを浮かべ、ロアナは小さく嘆息している。

「勇者様は異界よりいらっしゃったと伺っております。まだ何かと不慣れなこともおありでしょう。今はこちらでの暮らしに順応なさるとよい」
「あー、はい。そう言ってくれると助かります」

言って、弘明はぽりぽりと頭をかいた。
そこでまだ紹介が終わっていないリオにフローラ達の視線が移る。

「彼は私の恩人でハルト様です。今回はそのご恩を返すためにこの場にお招きいたしました」

と、リーゼロッテがフローラ達に向けてリオの紹介を行う。
リオは内心で感じていた驚愕を見事に隠し、愛想笑いを貼りつけていた。
まさか旧知の人物とこうしてまみえることになるとは思いもしなかったが、下手にボロを出すわけにもいかない。

「初めまして。ご紹介に与かりました。ハルトと申します。皆様にお目にかかることができ、光栄に存じます」

胸にそっと右手を添えて、リオが礼儀正しく口上を述べる。
家名を名乗らないことにロアナが僅かに目を細めたが、時と場合によっては世を忍び家名を名乗らない貴族がいないわけでもない。
リオが貴族なのか、仮にそうだとしても今がその時と場合なのかの判断はつかないが、慇懃な言葉遣いと所作からおそらくは貴族だろうとロアナは内心であたりをつけた。

「いったい何の恩人なんだ？」
と、弘明が一歩突っ込んだ質問を投げかける。
「先のアマンドの一件はヒロアキ様もご存知でしょう。その際にお力をお借りしたんです」
リーゼロッテは少しはぐらかすように答えた。
「へぇ」
と、弘明が何やら見定めるような視線をリオに投げかける。
リオは微笑を浮かべてその視線を受け止めた。
「よろしくな。ヒロアキ＝サカタだ。一応、勇者をやっている。歳は俺より少し下ってところか。俺は十九歳だが」
「よろしくお願いします。ヒロアキ殿。私は十六歳です」
「じゃあロアナと同い年だな。フローラの一つ上だ」
そう言って、弘明はちらりとフローラ達に視線を移した。
「ん？　どうした、フローラ？」
何やらフローラはリオの顔をじっと見つめていた。
例えるなら何かがしっくりとこないような表情を浮かべている。
「あ、いえ。すみません。その、以前どこかでお会いしたことはありませんよね？」

おずおずとフローラが尋ねた。

「いえ、記憶にはございませんが」

リオは表情を変えずに頭(かぶり)を振った。

「そう、ですよね。すみません。おかしなことを言ってしまいました」

フローラが少し落胆したような笑みを浮かべる。

（もしかして俺の正体に気づきかけているのか？）

リオは微笑を浮かべたまま背筋に冷や汗をかいた。

ロアナは特にリオのことを気にした様子はないが、フローラはまだ窺(うかが)うようにリオの顔を見つめている。

傍からだとフローラが端整なリオの顔立ちに見惚れているようにも見えるが、何となく二人の間に異様な雰囲気が漂った。

「あー、どうかしたのか？　フローラ。そんなにじろじろと見たらハルトも困るぜ」

少しばかりつまらなさそうな表情を浮かべて、リオとフローラの間に弘明が割り込む。

「す、すみません」

フローラがハッとして謝罪を行う。

それから会場入りするまでの間しばし弘明達も交えて歓談を行うことになったが、フローラは露骨にならないように時折リオのこと

を見つめていた。

「クレティア公爵閣下。お時間です。どうぞお越しください」

やがて会場入りの時間がやって来たことを知らせる兵士がやって来る。

「さて、名残惜しいですが続きはまた後ほど会場で。私達は一足先に会場の方に足を運ばせていただきます」

軽く手をかかげて兵士に少し待つように合図を送ると、セドリックがフローラ達に目礼して告げた。

「長居してしまいすみませんでした。公爵のお話が巧みで時間を忘れてしまったようです」

フローラが代表して話す。

「身に余るお言葉を頂戴し光栄です」

セドリックは深々と頭を下げた。

一同が腰を下ろしていたソファから立ち上がる。

「それではお先に失礼いたします」

去り際にそう告げると、リオ達は夜会の会場へと向かった。

第９１話　夜会の風景

雲一つない綺麗な空に満月が浮かんでいる夜。
誰もが思い思いに着飾り、夜会の会場となるホールには千人にも及ぶ貴族が一堂に会していた。
天井の高いホールの最大収容人数は二千人を超えるが、ゆとりを持って夜会を行うのならば半分程度の人数が丁度良いようだ。
広々としたホールの中は込み合っている印象を与えない程度に賑わっている。
今宵、国内外から集まった貴族達はまさしく各々の国で中枢に位置する家の者達であった。
こうして今回の夜会に参加できるということはそれだけで一種のステータスであり、参加できない大勢の貴族から嫉妬や羨望を集めることになる。
床、壁、天井のあらゆる場所にはこれでもかと豪華な装飾が施されており、光を灯す魔法が込められたシャンデリアならばそれだけで豪邸が建つだろう。
集まっている人間も会場となる施設も超一流、そのことが参加者の優越感をくすぐってやまない。
そうして彩(いろど)られた空間のいたるところで、国や派閥ごとにグループを形成したり、今宵だけはそういった垣根を意識せずに人が集まったりして、談義に花を咲かせている。

「いよいよ我が国の勇者様のお披露目ですか」
「噂ではまだ十七歳の少女だとか」
「何やら非常に美しいお方だと伺いましたぞ」
「ほう、楽しみですな。若い者など婚姻を結ぼうと躍起になるのではないですかな」

世間話、自慢話、腹の探り合いをするような話と様々な会話が繰り広げられているが、最も多いのは今日の主賓である皇沙月（すめらぎさつき）に関する噂話だ。

つい最近まで沙月に関する具体的な情報は国の心臓部に座る者達だけの間で共有されてきたため、その情報は一般にはほとんど出回っていなかった。

それだけに彼女には多大な関心が寄せられ、貴族達は今日という日の夜を今か今かと待ちわびてきたのである。

「ところで本日はベルトラム王国革命政府の下に舞い降りた勇者様も参加なさるとか」

とある場所に集まっていたグループの貴族がそんなことを言った。

「ああ、彼ですか」

と、即座に反応する貴族が一人。

彼はユグノー公爵が執政を行っているベルトラム王国の革命政府からやって来た人物であった。

「おお、貴方はベルトラム王国革命政府から招待された方でしたな。既に勇者様とお会いになられたので？」

「ええ、一度だけお目通りさせていただきました」

そう答える男性貴族は少し得意顔を浮かべている。

「ほう、どのような御仁だったのですか？」

代表して一人が尋ねると、興味深そうな視線が弘明と会ったこと

があるという男性貴族に集まった。

「中々に強い個性をお持ちになっているようでしたが、まだまだ若い青年……と言ったところですかな。異界よりいらっしゃったせいか、まだこちらの世界については世間知らずなご様子でした」

「ははは、となると今は色々と学んでもらう時期ですかな。我が国のためにも素晴らしい勇者様になってもらいたいものですが」

「ご安心ください。幸い我が国の勇者殿は博識ではありますが、柔軟な思考も持ち合わせているようでした。ユグノー公爵も素晴らしい勇者だと褒めておいでです。

それにフローラ王女殿下とフォンティーヌ公爵令嬢の献身的な支えもあってか、我々の考えに賛同なさってくれているようでして」

と、男性貴族は自陣と弘明との関係が良好であることを説明した。

「ほう、それは良い話ですな。若い美姫二人の支えがあるとなれば奮い立つのが男というものですからな。ゆくゆくは救国の勇者として後世に名を残すことでしょう」

「仰る通りです。そのためにも我らが手を取り合い、勇者殿を相応しい舞台へと導かなくてはなりません」

などと、場所によってはちらほらと弘明に関する話題もあがっている。

今回の夜会はベルトラム王国革命政府からやって来ている者達にとってはおあつらえ向きなピーアールの舞台でもあった。

沙月と比べて弘明はその存在が秘匿されていることもないため、積極的にプロパガンダに利用され始めているようだ。

「ははは。そのためにも我等自身がより精進しなければなりませんな」

「ええ、勇者様からの覚えが良くなれば、それだけ導きやすくもなるというもの。今夜は是非とも勇者様にお近づきになりたいところですな」

周囲の貴族達が笑顔で頷く。

その仮面の下にはギラギラとした権力欲が隠れており、中には今夜のうちに勇者と親しくなろうと意欲を見せる者もいた。

勇者はシュトラール地方で崇(あが)められている六賢神の使徒という神聖な存在である。

権威付けに利用するには打ってつけの人材であり、自らの派閥に取り込めば他の派閥を出し抜いて一気に権力闘争のレースでトップに躍り出ることができるのだ。

それゆえ取り入る隙さえあれば積極的に取り入っていくつもりなのだろう。

「そういえばそろそろ我が国の貴族が出そろう頃合いですかな」

と、ガルアーク王国の貴族が言った。

「先ほどグレゴリー公爵家の方々がいらっしゃいましたから、次はクレティア公爵家の方々でしょう」

「おお、聞いたことがありますぞ。かの家の繁栄ぶりは羨ましい限りですな。ご息女が誕生なされてからは特に躍進が目覚ましいそうで」

「才女リーゼロッテ嬢ですか。才色兼備とはまさしく彼女のことを意味する言葉なのでしょうな。いまだ婚約者がおらず、クレティア公爵家とお近づきになるには格好のお相手といえますが……」

「今となってはそこいらにいる若造では少しばかり高嶺の花すぎますな。求婚の噂は絶えず伺いますが、いったいどのような御仁が彼女の心を射止めるのやら」

と、クレティア公爵家に関する話も話題に上がってくる。
リーゼロッテに関しては国外の知名度も高く、国内の貴族で知らぬ者はもぐりと言える程で、少なからず注目を集めている人物の一人となっていた。
そんなわけで彼女の婚約者が誰になるのかは定番の噂話となっているのだ。
すると、その時、

「クレティア公爵家並びにその御客人、御来場！」

会場を警備する騎士の声がホールに響きわたった。
国内の貴族としては最も大物であるクレティア公爵家の名が告げられたことで、ホールの貴族達が一瞬で静まり返る。
彼らが登場すれば今宵の夜会に出席するガルアーク王国内の貴族はすべてが出そろったことになり、残るのは国外からやって来る外賓の一部、ガルアーク王国の王族、そして沙月だけだ。
そうして訪れた数瞬の静寂の後――、

「……先ほどの騎士は御客人と言いましたかな？」
「ええ、確かにそのように聞こえました」

ホールの各地でひそひそと小声で喋る者達が現れ始めた。
現在のガルアーク王国において最も栄えている家はどこかと聞かれれば、間違いなくクレティア公爵家の存在が語られることになるだろう。
つまりはガルアーク王国内で最も動向が注目されている家であるということだ。
そんなクレティア公爵家がこの重大な夜会に個人的な客人を招いてやって来るというのである。

この場に集まっている者達は貴族の中でも情報に聡(さと)い者達ばかりであるから、関心を寄せないわけがない。
必然的にホール内にいた貴族達の大半が派閥を問わずに壇上の扉へと視線を集中させた。
その中でもクレティア公爵の派閥に属する貴族達が、速やかに壇上からホールに伸びる階段の付近へと集まり、畏(かしこ)まりながらその登場を待ち始める。
やがて扉が開き、件のクレティア公爵家の面々が入場してきた。

「……おぉ」

ややあって微(かす)かなざわめきがホールの中に広がっていく。
人々が発した声には驚きの色がこめられていた。
それも無理もないだろう。
いつもならば決して見られないはずの光景がそこにはあったのだから。
まず先頭で入ってきたのがセドリックとジュリアンヌ、この二人は何も問題はない。
歳を重ねてもなお若々しさを誇る美男美女の組み合わせに見惚れる淑女紳士がいて、連れのパートナーから嫉妬の視線を浴びせられている光景がちらほらと見えるが、問題と言えばその程度のことだ。
続けて入ってきたのがリーゼロッテの兄ジョルジュ＝クレティアとそのフィアンセであるコレット＝バリエである。
別室にてコレットの両親であるバリエ侯爵夫妻と一緒に過ごしていた二人であったが、会場入りの際には一緒に入場することになっており、つい先ほどセドリック達に合流したのだ。
公爵夫妻に負けず劣らずの相思相愛ぶりで知られる二人は次代の公爵夫妻として注目を集めているが、今の彼らに注目している者は会場の中にはいなかった。

「やはり注目を集めてしまっているな……」

会場に漂う戸惑いの空気を機敏に察しとり、ジョルジュは苦笑を漏らした。

「無理もありませんわ。私もまだ驚いていますもの」

コレットが小声で同意する。

現在ホールにいる貴族達の視線が自分達の後ろにいる二人に向けられているだろうとわかっているからだ。

そう、今、ホールの中にいる貴族達をどよめかせているのは他でもない。

一人はジョルジュの妹であり、コレットの義妹になるだろうリーゼロッテ――、現在のガルアーク王国内で最も高嶺の花と評されており、今までに浮いた話の一つも噂になったことがない鉄壁の美少女である。

そしてもう一人、会場の貴族達の視線は彼女の隣で仲睦まじく腕を組んでいる男――リオに向けられていた。

この登場の仕方はどう考えてもリーゼロッテがリオを今宵のパートナーとして扱っているようにしか見えない。

今までに夜会へパートナーを連れてきたことがなかった、あのリーゼロッテがである。

それだけ彼女が夜会にパートナーを連れてきた意味合いは大きかった。

国内外を問わずリーゼロッテを自分の妻にと考えている貴族は多い。

それも当然だろう。

見る者を惹きつける可憐な容姿、男性を引き立てる柔らかな人柄、名家クレティア公爵家とのコネクション、近隣諸国に名を轟かせるリッカ商会――、リーゼロッテと結婚すればそのすべてが手に入る

のだから。
それゆえ縁談の申し込みは常に絶えなかったのだが、彼女はこれまでにそのすべてを断り続けてきた。
それどころか夜会へパートナーを連れてくることさえなかったのだ。
近頃ではリーゼロッテが同性愛者なのではないかと密かに噂する者達まで現れ始めたのだが、その予想は見事に裏切られることになった。

「……誰かあの青年をご存知で？」
「いえ、私は存じませんな」
「私もです。彼は一体……」
「髪の色はともかく顔立ちはややエキゾチックな感じがしますな」
「となるとどこか異国の御仁でしょうか」

ひそひそと会場の男性陣が見定めるような視線を送りながらリオのことを噂する。

「あら、素敵な殿方ですわね」
「本当、どこの家の方でしょうか？」

その一方で、若い令嬢達の中にはリオに好奇の視線を投げかける者もいた。
艶(つや)やかな髪をなびかせ、切れ味のある中性的な容姿に微笑を貼りつけ、堂々とした態度でゆっくりと壇上から伸びる階段を下りるその姿は貴公子然としている。
貴族達から浴びせられる遠慮のない視線に気後れしている様子は一切感じられず、リーゼロッテの隣に立っても引けを取らない風格があった。
実に堂に入った立ち振る舞いである。

「クレティア公爵閣下、ご機嫌麗しゅう」
階段を下りると早速クレティア公爵に話しかける者がいた。
やや細身でスラリと背の高い壮年の男性だ。
「これはバリエ卿。いつも息子が世話になっております。今回の王都滞在中も随分と良くしてもらったようで」
セドリックは微笑を浮かべて応じた。
どうやら目の前にいる男はジョルジュのフィアンセであるコレットの父親のようだ。
その隣にはコレットの母親と思われる女性がそっと控えている。
「何を仰いますか。こちらの方こそいつも娘が世話になっておりますぞ。ジョルジュ君は実に良く出来た御子息でいらっしゃる。彼の義父になれると思うと私も鼻が高い」
コレットの父親は親しげな笑みを浮かべてそう答えると、ちらりとリオに視線を送った。
「ところで閣下。何やら本日は新しい御客人をお連れのようで。是非とも私どもにご紹介頂けないでしょうか？」
「ははは。どうやら会場にいる多くの方々が彼に注目しているようですね」
セドリックが愉快そうに笑って答える。
「無理もありますまい。ご息女のパートナーとなれば我が国の若い貴族の男達は黙っておりませんぞ」

と、何やら愉快気に二人が語っていた。
どうやら今の会場の空気を楽しんでいるようだ。
「ハルト君、紹介しよう。彼はリオネル＝バリエ侯爵。我が息子ジョルジュのフィアンセであるコレット君のお父上だよ。
バリエ卿。彼はハルト君といいまして、リーゼロッテの個人的な恩人であり友人です」
「ほう、個人的な友人ですか」
意味深長な物言いに、リオネルが興味深そうにリオを見やる。
「初めまして。ご紹介に与(あずか)りました。ハルトと申します。バリエ侯爵閣下にお目にかかれて光栄に存じます」
挨拶をして、リオは恭しく礼をした。
「うむ。初めましてだな。会えて嬉しいよ」
リオネルは愛嬌(あいきょう)のある笑みを浮かべると、サッと手を出して握手を求めた。
「ありがとうございます」
リオが素早く手を差出しリオネルの手を握る。
「紹介しよう。私の妻のカミーユだ」
視線を交わして頷くと、リオネルは隣に立っていた女性をリオに紹介した。

「初めまして。カミーユと申します」
微笑を浮かべて淑女然とスカートの裾を摘まむカミーユ。
「初めまして。お会いできて光栄です」
リオはそっと胸に右手を添えてカミーユにお辞儀した。
「もう少し君と話してみたいところだが、他の者達も閣下に挨拶をしたいようだ。君にも興味を持っている者が多そうだからね。私はいったん下がらせてもらうとするよ。それでは、失礼」
その場にいた他の持達に目礼をして簡単に挨拶をすると、バリエ侯爵夫妻はその場を後にした。
「では父上、私とコレットも挨拶に回ってきますので、これで」
そう言い残してジョルジュとコレットも立ち去っていく。
その場に残ったのはクレティア公爵夫妻とリーゼロッテとリオの四人となった。
が、すぐに入れ替わるように他の貴族達が近寄ってくる。
貴族達は最初にセドリックとジュリアンヌに声をかけるのだが、当然のようにリーゼロッテとリオにも声をかけてきた。
普段ならば少しでもリーゼロッテと親しくなっておこうと熱心にアプローチをかけてくる者が続出するのだが、本日は少しばかり毛色が違っている。
貴族達はみなリオに興味を持っているようで、誰もがリオのことを知ろうと紹介を求めてきたのだ。
その度に同じ挨拶を繰り返すことになるわけだが、こうした場に

慣れているリーゼロッテはもちろん、リオも辟易した様子は見せずに笑顔で対応していた。
とはいえ、現在、二人の目の前にいる紳士は少しばかり曲者であった。

「おお、そのような経緯があったのかね。まさに君はリーゼロッテ嬢の恩人というわけだな」

ご機嫌な笑みを浮かべてそう言ったのは、でっぷりとした腹を突きだしている小太りな男性だ。
年齢は四十代半ばといったところで、ガルアーク王国で公爵位を保有する大物貴族である。

「さぞかし腕が立つのであろう。是非、君の剣技を一度この目で拝見したいな」

と、顔に笑みを貼りつけながら、クレマン＝グレゴリー公爵は言った。
だが、その瞳は油断なくリオを観察しようとしている。

「良い機会に恵まれましたら」

リオは内心で小さく嘆息すると、控えめに微笑をたたえて当たり障りのない返事をした。
大抵の貴族はリーゼロッテへの挨拶や売り込みを兼ねてリオにも簡単に探りを入れてくるのだが、クレマンは果敢にもストレートに探りを入れてくる。
普通ならば一、二分程度で会話を済ませて目上の者に順番を譲るのがマナーなのだが、あいにく彼より上の身分の者は今ホールの中にはいない。

セドリックとジュリアンヌとは既に別行動をしており、援護をしてくれる者もおらず、それが災いしてリオとリーゼロッテは既に十分近くクレマンの相手をする羽目になっていたのだ。
その間にクレマンは弁舌をふるってリオの情報を聞きだしていた。
忌憚なく踏み込んでくる大胆さといい、あえて場の空気を無視する面の皮の厚さといい、さらには粘り強く饒舌な口舌といい、流石は百戦錬磨の貴族といわざるを得ない。
与えた情報は元から教えても構わないと思っていたものであったが、なんと言うべきかクレマンは話をしていて非常に疲れる相手であった。

「その機会が来ることを待ち望んでいるよ。君とは親しくなっておきたい」
「さように仰ってくださり光栄に存じます」
恭しく(うやうや)答えて、リオはちらりと隣に立つリーゼロッテに視線を移した。
彼女は彼女でクレマンの妻の相手をしており、こちらの会話に参加する暇はない。
クレマンの妻もなかなかのしたたか者のようで、冷笑を浮かべてリーゼロッテと喋っている。
すると、そこで、

「勇者ヒロアキ＝サカタ様、ベルトラム王国第二王女フローラ＝ベルトラム殿下、並びに外賓の方々の御来場となります！」
弘明とフローラを始めとするベルトラム王国からの重要な外賓が会場入りすることを知らせる声がホールに鳴り響いた。
「おお、ようやく勇者殿の一人がいらっしゃるようだ」

クレマンが好奇の視線を壇上の扉へと向ける。
「ところでリーゼロッテ嬢は既にサカタ卿とお会いになったとか？」
続けて、クレマンがリーゼロッテに水を向けた。
「はい、何度かお目通りさせていただきました」
「ははは。何やら彼は随分と君のことをお気に召しているご様子だったよ。流石は我が国きっての才女と呼ばれているだけはある。勇者殿も君の手にかかれば一人の純情な青年になるといったところかな？」
「まぁ、そのようなことはございませんわ。私などグレゴリー閣下に比べればまだまだ赤子のようなものですもの」
感情を読み取りにくい微笑を貼りつけて、お互いに視線を交わし合う。
そうこうしているうちに壇上の扉が開き、弘明一行が会場に姿を現した。
まずはユグノー公爵を始めとするベルトラム王国勢の有力貴族達が現れた。その中にはユグノー公爵の息子であるスティアードの姿もある。
その姿を発見し、リオは僅かに目を細めてスティアードの様子を眺めた。
遅れて弘明が胸を張って誇らしげに扉から姿を現す。その両隣にはフローラとロアナを侍らしていた。
「ほう……、噂に違わぬ美姫ですな。ベルトラム王国の第二王女殿下は」
「ええ、ですが、反対側を歩く御令嬢も中々の逸材ですな。王女殿

下と並んでも遜色がない程です」
「確か彼女はフォンティーヌ公爵家のご息女では？」
ホールにいる貴族達の視線は弘明達三人に集中していた。
中でも比較的歳の若い男性貴族達はフローラとロアナに熱い視線を送っている。
リーゼロッテの時もそうであったが、やはり見目（みめ）の整っている女性には視線を奪われてしまうのが男の性なのだろう。
「ハルト様、是非ご紹介したい方がいらっしゃいますので、お越しください。閣下、失礼いたします」
弘明達の登場で会場の空気が変わったことを幸いに、リオとリーゼロッテはクレマン達の相手を切り上げることにした。
「おお、長く引き留めてしまって悪かったね。息子も君に会いたがっていたよ。この会場にいるから是非会ってやってくれ」
「畏まりました。機会がありましたら是非」
愛想笑いを浮かべて言うと、リオはリーゼロッテに連れられテラスの付近へと向かうことになった。
「お飲み物はいかがでしょうか？」
「頂きます」
行きがけに給仕からドリンクをもらって、喋り続けて酷使した喉を潤す。
リオは銀製のグラスの中でよく冷えたカクテルを飲み干した。
色は黄色でややどろりとしている度数低めの甘めのお酒である。

「ハルト様、お疲れではないでしょうか？」
「いえ、まだまだ問題ございませんよ」
リオは気さくに笑って頭（かぶり）を振った。
「グレゴリー公爵は賑やかな方だったでしょう？　ああ見えてかなり油断ならない人なんですよ。お気に召さないことがなかったらいいのですけれど」
困ったように笑みを浮かべてリーゼロッテが語る。
「親しみやすい御仁でしたね。セドリック様とタイプこそ違いますが、話術に長けたお方だなと思いました」
「彼は父とは異なる派閥に所属している方なんです。敵対こそしておりませんが、友好的というわけでもありません。おそらく私が連れてきたということでハルト様に興味を持たれたのでしょう」
「道理で色々と気さくにお尋ねになられたわけですね」
リオは苦笑を浮かべて答えると、ちらりとホールの中に視線を巡らせた。
会場はずいぶんと盛況な様子で、今は新たに場に姿を現した弘明達へ挨拶を行おうと多くの貴族達が群がっている。
どうやら各々が会の趣旨通りにパーティを満喫しているようだ。
「ところで紹介したい方がいらっしゃるというのは……？」
「ふふ、あの場を抜け出すための口実です。まだまだ先は長いですからね。休憩をとりたいなと思っていたんです」
答えて、リーゼロッテは悪戯っぽく笑ってみせた。

「やはりそうでしたか」

リオも可笑しそうに笑って答える。

テラスのあたりは人も多くない。

小休憩をとるにはうってつけの場所だろう。

「もうすぐ王族の方々と勇者様がいらっしゃるはずです。その時にご挨拶に伺うつもりですから、よろしければ勇者様と接触を図ってみてください」

「承知しました」

リオが小さくお辞儀をして礼を述べる。

「ところでアマンドのレストランの一件でいざこざがあった貴族の一人をお見受けしたのですが……」

と、リオは先ほど見かけたスティアードのことをリーゼロッテに話してみた。

一応、情報は共有しておいた方がいいだろう。

「なるほど。その後どうしているかは伺っていなかったので、もしかしたらと思ってはいたのですが……。申し訳ございません」

リーゼロッテは即座に話の意図を呑みこんだようだ。

「いえ、この場へやって来たいと申し出たのは私の方ですし、彼がこの場にいるのは不可抗力の事態でしょう。どうかお気になさらず」

「ありがとうございます」

礼を告げるリーゼロッテに、リオは微笑を浮かべて頷いた。

「契約書のこともありますし、彼が何かしでかすことは考えにくいのですが、何かあれば御相談させていただきたいのです。よろしいでしょうか？」
「はい。もちろんです。私の方でもそれとなく注意しておきますので、何かあれば仰ってください」

今度はリーゼロッテがしかりと頷く番だ。

「申し訳ございません。御面倒をおかけしてしまい」
「そのようなことはございませんよ」

と、リーゼロッテが頭（かぶり）を振る。
それから二人はしばし会場の隅で歓談することになった。
リーゼロッテに遠目から国内外の有力貴族を簡単に教えてもらうことになり、リオは勢力図と人間関係図を頭の中に入れていく。

「まもなくフランソワ＝ガルアーク国王陛下、並びに勇者サツキ＝スメラギ様の御入来となります！」

やがて呼び出しの騎士が夜会の主催者と主賓の到着が近いことを告げた。

「時間のようですね。お越しください。陛下と勇者様をご紹介いたしましょう」
「はい。よろしくお願いします」

そうして二人は壇上の付近に向かって歩き始めた。
ちょうど壇上から伸びる階段の下までやって来たところで、いよいよ主役の登場となる。

「国王陛下、並びに勇者様、御入来！」

場の雰囲気が急速に畏まり、人々が神妙にその登場を待つ。

リオとリーゼロッテも敬服の構えをとって、そっとうつむきながら登場を待つことにした。

そして遂に壇上の扉が開く音が静寂なホールに響き渡る。

「一同、面を上げるように、とのことです！」

現れた国王の言葉を近衛の騎士が代わって伝えた。

許可を得たことで人々が好奇心を抑えられぬように壇上へと視線を走らせる。　リオも壇上をじっと見上げた。そこには国王を始めとする王族の姿がある。

そしてその中にスラリとした黒髪の少女が立っていた。

ぴんと背筋を伸ばし、周囲の王族に引けを取らぬ存在感を放っている。

そう、彼女こそリオがこの場へやって来た目的の人物、皇沙月（すめらぎさつき）であった。

第９１話　夜会の風景（後書き）

今回は夜会ということで新しく登場する貴族も多いため、簡単な人物紹介を載せておきます。よろしければご参照ください。

セドリック＝クレティア：リーゼロッテの父
ジュリアンヌ＝クレティア：リーゼロッテの母
ジョルジュ＝クレティア：リーゼロッテの兄
コレット＝バリエ：ジョルジュの婚約者、リーゼロッテの義姉になる人物
リオネル＝バリエ：コレットの父親、侯爵
カミーユ＝バリエ：リオネルの妻、侯爵婦人
クレマン＝グレゴリー：ガルアーク王国の大物貴族の一人、公爵
スティアード＝ユグノー：リオにアマンドのレストランで絡む。つい最近まで謹慎していた。
フランソワ＝ガルアーク：ガルアーク王国の王様

第９２話　ファーストコンタクト

ホールにいる誰(だれ)もが凛として壇上に立つ沙月に注目している。
まだあどけなさは残すものの、その整った容貌はただ美しいだけでなく、凛々しくて、思わず周囲の視線を吸い寄せてしまう魅力があった。
沙月は透明感のある白い素肌を純白のドレスで包んで、艶(つや)やかな長い黒髪をゆるく編んでサイドスタイルでまとめている。
その瞳には力強い意志を感じさせる槍のように鋭い光が映っていた。

（一応、俺の通っていた高校の生徒会長だったんだよな？）

リオは精霊術で視力を強化し、薄く目を細めて沙月の顔を眺めた。
美春から聞いた話だと沙月は春人と同じ高校に通っており、学年は一つ上で、生徒会長まで務める聡明な生徒であったそうだ。
実家は大企業を経営する名家で、生徒会長を務めるだけの優秀な成績を誇り、スポーツも万能な文字通り文武両道な才女、その知名度は高く、校内ではちょっとしたアイドルであったらしい。
もっとも、春人が入学して間もなくこの世界へと転移したこともあり、美春達から沙月の情報を聞くまでリオはまったく知らなかったのだが――。
入学式の生徒会長挨拶の時に遠目で顔くらい見たのかもしれないが、主観記憶で十数年もの時間が経過しているのだ。
現時点でリオが見覚えがないのも無理はない。
今の沙月は微笑を浮かべているものの、そこから感情を読み取ることはできなかった。
まるで自らの感情を隠すように仮面でも着けているかのようだ。

「皆よくぞ集まってくれたな。祝着(しゅうちゃく)であるぞ」

と、壇上の高みから、国王フランソワ＝ガルアークが右手を掲げて告げた。

低く、落ち着いてはいるが、渋みがあって良く通る声だ。

「こうして国内外から大勢の者達を集めたのは他でもない。皆も知っての通り紹介したい人物がいたからだ」

言って、フランソワは斜め後方に立つ沙月を見やった。

「紹介しよう。彼女こそ我がガルアーク王国に舞い降りた勇者――、サツキ＝スメラギ殿だ」

フランソワの紹介を受けて、沙月が微笑を浮かべて一礼する。

すると途端に会場に「おお！」とざわめきの声が響き渡っていく。

「美しい」

「いやはや流石は勇者様ですな」

「あの純白の輝き。まさしく天使だ」

「彼女こそまさしく我らが勇者」

ざわざわとホールのあちこちがさざめく。

予想以上の美貌ゆえか、エキゾチックな黒髪の物珍しさもあるのか、特に若い男達が色めいているようだ。

中には大仰に愛の告白にも似た芝居くさい台詞を吐く者までいる。

そんな沙月達の様子を目にして、坂田弘明は少しばかり気難しそうな表情を浮かべていた。

「ヒロアキ様、いかがなさいましたか？」
隣に立つ弘明の僅かな表情の変化を機敏に察しとり、ロアナがささやくように尋ねた。
「いや、随分と派手な演出だと思ってな。会場の連中はみんな沙月に注目している」
と、周囲の者達の様子を見渡しながら、弘明が言った。
ロアナは微笑を浮かべると、
「何を仰いますか。物珍しさもあって今はあの方が一時的に脚光を集めているだけのこと。この場にいる者達は同じくらいヒロアキ様にも注目しておりますわ」
弘明の耳元でそうささやいた。
「あー、まぁ、な。俺としては注目なんざ集めたくはないんだがなぁ」
不本意だと言わんばかりに、やれやれと弘明が苦笑する。
「あら、つい先日、正式に我々と道を共にしてくださると仰ったばかりではないですか？　貴方様自身が勇者であることをお認めになられた以上、今後はこれまで以上の注目がヒロアキ様に寄せられますわよ」
と、ロアナが悪戯めいた笑みをたたえて弘明に告げた。
これまで暫定的にフローラ達と行動を共にしていた弘明であったが、つい最近になって正式に勇者としてフローラ達に協力すること

を約束したのだ。
この世界へと最初にやって来た頃は勇者として振る舞うことにどこか否定的な態度を見せていた彼であったが、この数か月で勇者となる決意を固めたようだ。

「今更そんなみっともない真似はできねぇよ。約束したろ。お前のことは俺が守ってやるって。……あー、男に二言はないからな」

少し気恥ずかしそうに言い放つと、弘明は小さく肩をすくめた。

「ありがとうございます。ならば私は微力ながらお傍でヒロアキ様をサポートいたしますわ」

そう言いながら、ロアナが弘明の腕を掴む。
弘明はフッと笑みを浮かべると、反対側の手でロアナの手に重ねた。

（最初は気楽な冒険者にでもなってハーレムでも築こうかと思ったもんだが、今となってはロアナの傍を離れたいとはまったく思えねぇな。まだまだガードは固いけどフローラだって捨てがたい。
まぁ冒険者になったところで今より良い暮らしが待っている保証はないしな。それに勇者ルートってのもお馴染みの展開ではある）

などと自らの心境の変化を見返して、弘明は感慨深げに苦笑を漏らした。
すると、その時、

「静粛に！　国王陛下の御前であるぞ！」

なかなか鳴りやまないざわめきを見かねて、国王に仕える近衛騎

士が大きく声を響かせた。
それで喧騒は収まり、弘明とロアナも内緒話を打ち切る。
二人は壇上に立つ沙月達に視線を戻すことにした。

「よい。皆が歓喜するのも無理からぬことだ」

フランソワが愉快そうな笑みとともに告げた。

「実に千年以上の時を経て舞い降りた勇者殿だ。もしかすると六賢神からの福音やもしれぬのだからな。
それに今宵は朗報もある。知っている者は多いはずだが、この場にはもう一人の勇者もやって来ている。勇者ヒロアキ＝サカタ、フローラ王女、そしてユグノー公爵よ。こちらへ」

フランソワが弘明達を壇上へと呼び寄せる。

「はい」

弘明が少し緊張した声色で返事をした。
あらかじめ打ち合わせで教えられていた通りの展開ではあるが、これだけの人数に注目される機会など地球で暮らしていた頃の彼にはなかったのだ。
少なからず緊張するのも無理はないだろう。

「さて、まずはベルトラム王国の第二王女であるフローラ殿下の名代ユグノー公爵から重大な発表があるそうだ。皆の者、心して聞くように」

弘明達が壇上に登ってきたところでそう告げると、フランソワは一歩下がった。

代わりにユグノー公爵が壇上の階段を一段降りて、ホールの貴族達を見下ろす。

「ご紹介に与かりました。ギュスターヴ＝ユグノーと申します。陛下が仰いましたように本日は皆様に重大なお知らせがございまして、この場をお借りしてご報告させていただきます」

恭しく礼をして名乗りを上げると、ユグノー公爵は粛々と弁舌をふるい始めた。

「まず、先刻ベルトラム王国において奸臣ヘルムート＝アルボーめがクーデターを起こし、不遜にもフィリップ三世国王陛下を傀儡として政権を握ったことは皆様もご承知のことと存じます。

確かな証拠はございませんが、これまでにアルボー公爵に関しては北方のプロキシア帝国と内々に通じていたという情報が寄せられておりました。

状況証拠からしても我々は彼が黒である可能性が限りなく高いと踏んでおります。また、これが事実だとすれば彼はベルトラム王国の国土を売り渡した売国奴ということになります。

そうでなくともクーデターという手段に訴えて政権を奪取したこと、また国王陛下を蔑ろにする彼の行いは到底看過することはできません」

と、ユグノー公爵が遺憾そうな面持ちを浮かべて語った。

会場の貴族達は国籍を問わず固唾を呑んで耳を傾けている。

小さく息を吸い込むと、ユグノー公爵は再び重々しい口調で語りだした。

「誠に遺憾ながらクーデターに際して国王陛下を始めとする多くの王族の方々をお救いすることは叶いませんでした。

が、幸いクーデター当時に王立学院にてご勉学に励まれていたフローラ王女殿下だけは何とかお救いすることができました。
そこで私はアルボー公爵の悪政を潔(いさぎよ)しとしない同志を募り、フローラ王女殿下を伝統あるベルトラム王国の象徴とすることで、かの者達を取りまとめることにしたのです。
我々の活動目的は王国の政権を王族の正当な統治者に明け渡し、古き良きベルトラム王国を復活させることにあります。そう、我々はベルトラム王国の王政復古という大いなる目的のために立ち上がったのです。
そこで、ただいまをもって私は宣言します。ここに現ベルトラム王国の特別政府『レストラシオン』を結成することを」

ここでユグノー公爵はいったん言葉を切った。
フランソワは再び一歩前に出ると、

「そして我がガルアーク王国は『レストラシオン』の設立を正式に承認することをここに宣言する」

と、ユグノー公爵の言葉を引き継ぐように語った。
これまで革命軍という非公式な立場に立たされていた彼らであったが、正式に組織が設立され、その存在が表向きに公認されたことで「おお」と会場の中にどよめきが広がっていく。

「組織の盟主にはフローラ王女殿下がお就きになり、私はこれまで通りその世話役に徹することになります。そして勇者であるヒロアキ＝サカタ殿も正式に我ら『レストラシオン』に協力してくださることを確約してくださいました」

告げて、ユグノー公爵が弘明へと手を向けると、会場にいる人間の視線が弘明へと集まった。

弘明はニッと笑みを浮かべ、右手を挙げて視線に応える。
リオはそんな彼を観察するように眺めていた。

（不敵だな）

自信に満ちた弘明の表情を目にして、リオが思う。
この瞬間に弘明は公にベルトラム王国の政権をめぐる争いに身を投じることが確定した。
そう、もう幕は開いてしまったのだ。
ユグノー公爵は様々な下準備を整えて弘明を引き返せないところにまで引きずり込んだのだろう。
金、女、権力、地位、名誉――、甘い言葉と共にこれらを使えばいまだ年若い弘明の思考を誘導することくらい造作もなかったはずだ。
ゆえに弘明はもう完全に後戻りはできない。
前進するしかない。
正直な考えを言えば、リオはフローラ達が再び光を浴びることはないだろうと思っていた。
混乱した今のベルトラム王国の状態で、古き良き過去の栄光を取り戻そうなどと世迷言を唱えたところで、ここまで衰退した彼らが再び蘇ることなどありえない。
そのはずだった。
だが、運命の悪戯か、フローラ達の下に勇者である弘明が現れた今となってはその大義も現実味を帯びてくる。
無論まだ困難であることに変わりはないのであろうが。
何はともあれ、弘明が何らかの使命を感じているのかはともかく、今後は勇者なんていう大それた役割の責任が彼に降って注ぐことになるだろう。
ユグノー公爵も弘明を自らの政争に巻き込み二度と離そうとしないはずだ。

弘明は覚悟を決めてそれを受け入れているというのか。それとも事態をよく呑み込めていないだけか。

（まぁどうでもいいことか。それよりも問題は沙月さんだ）

そう、今は弘明のことを気にかけている場合ではない。

リオは突き放すように視線を弘明から沙月へと移した。

弘明と同じ問題は沙月にも付いて回る。

ガルアーク王政府の名の下に勇者となることを公示してしまった以上、沙月がこの国と、そしてこの世界と深く関わりを持つことになるのは必至なのだ。

沙月は地球に戻りたいと思っているのか、それともこの世界で勇者として成し遂げたいことがあるのか、今の沙月が美春達に再会したらどうなるのか。

慎重に事を運ぶ必要はあるが、美春達が沙月との再会を望んでいる以上、こちらからアプローチを仕掛けるしか手段はない。

要は出たとこ勝負になるということだ。

（いいさ。出たとこ勝負なのはこれまでもずっとそうだった）

ベルトラム王国の王立学院に入学した時も、ラティーファを精霊の民の里に送り届けた時も、両親の軌跡を辿るようにヤグモ地方へと赴いた時も、ルシウスへの復讐を果たそうとしている今だってそうだ。

世の中は自らのあずかり知らぬ不確定事項だらけなのだから、神でもない限り未来で何が起こるのかなんて知ることはできない。

目的を定め、人事を尽くし、後はただ前進あるのみ――、それだけだ。

ゆえに今は自分がなすべきことに集中すればいい。

まずは沙月が何を思っているのか、それを探るためにも接触を図

る必要がある。
その時は近い。

「ここで私からも重大な発表がある。勇者サツキ＝スメラギを擁する我が国は、同じく勇者ヒロアキ＝サカタを擁するベルトラム王国の特別政府『レストラシオン』と正式に同盟を締結することにした」

壇上に立つガルアーク王国の国王フランソワはここぞとばかりに高々と宣言した。

「六賢神の使徒である二人の勇者の隣を歩む我々の未来は明るいことだろう。
そこで勇者達よ。改めて問いたい。汝らは我らが進む先に付いてきてくれるか？」

続けて、フランソワが沙月と弘明に向き直って尋ねる。
その言葉に反応して沙月はピクリと微かに眉を動かした。
だが、すぐに表情の変化を消し去ると、

「……はい。貴方達が正しい道を進む限り、私、皇沙月は微力ながらご助力することを約束いたします」

沙月はよどみなく答えた。
人々から視線を向けられていることには慣れているのか、緊張した様子は見てとれない。
そんな沙月を歓迎するように、会場に拍手が鳴り響いた。
続けて会場にいる者達の視線が弘明へと集まる。

（あー、お願いする立場なんだからもう少しモノの言い方ってのがあるだろうに。国王って生き物は偉そうで好かんな）

内心でそんなことを思う弘明。
国王である立場ゆえか、フランソワの尊大な物言いは彼の癇に障ったようだ。
弘明は見下されるのが嫌いだった。
だが――、

「えー、わかりました。貴方達の行いが正しい限り、私も貴方達に協力することを誓わせてもらいましょう」

鷹揚（おうよう）に頷き、弘明も答える。

（てか、王政で国王が偉ぶることができるのって国王が一番権力を持っているからだろ。
六賢神の使徒で神に選ばれた勇者の俺はそれ以上の権威がある。
そうなるとへりくだるのも癪だが……、ここは下手に出ておくのが心の広い対応ってもんだ）

自らにそう言い聞かせて、弘明は己の感情に折り合いをつけたのだった。
周囲の視線が集まっている時にそんなことを考えられるとは、意外と彼は大物なのかもしれない。
そんな弘明のぼやきを知る由もなく、会場にいる者達は二人の勇者を祝福するように拍手を鳴り響かせていた。

「以上だ。それでは今宵の夜会を存分に楽しむとよい」

フランソワがそう告げて、夜会は正式に開始された。
会場内が喧騒を帯び始め、各々が思い思いに行動を開始する。

「ではハルト様、早速ですが勇者様の下へといらっしゃいますか？」
「ええ、お願いします」

リオもリーゼロッテに連れられ、沙月と会うべく早速行動を開始した。

別行動中のセドリック達とは別に二人だけで壇上へと昇っていく。

この壇上に上がるにあたっても地位や順番に関して暗黙のマナーがあるのだが、公爵令嬢であるリーゼロッテに連れられているリオならば開始直後であっても問題なくそこへ移動できる。

どうやらリオ達が一番乗りのようだ。

「フランソワ国王陛下、ご機嫌麗しゅうございます」

まずはリーゼロッテが国王であるフランソワへと華麗に挨拶をした。

すぐ傍には沙月、弘明、フローラ、ユグノー公爵などの他にガルアーク王国の王族の姿もある。

一同は歓談をしているようであったが、真っ先に参上したリーゼロッテに気づくと、彼女を知る者達は晴れやかな笑みを浮かべて歓迎した。

「おお、リーゼロッテか。久しいな。アマンドの一件は聞き及んでいる。災難であったな」

代表してフランソワがリーゼロッテに話しかける。

「ご心配をおかけいたしまして誠に申し訳ございませんでした。再び陛下のご尊顔を拝する名誉に恵まれましたこと光栄に存じます」

そう告げて、両手を下腹部の前に合わせて置き、リーゼロッテは

厳(おごそ)かに頭を下げた。

「よい。そなたの無事な姿を見られて幸いであった。して、そちらの者はそなたのパートナーであるか？　珍しいこともあるものだと好奇心を抑えられなくてな」

「はい。彼はハルト様といいまして、アマンドの一件で私の命をお救いくださったのです。

ハルト様には返しきれぬほどの御恩を賜ることになりました。今日はそれに報いるためにと考えまして、恐れながらも私のパートナーとしてお越しいただいたのです」

「ほう、その方はハルトと申したか。大義であったな」

ちらりとリオに視線を移すと、フランソワが告げた。

「もったいなきお言葉。本来ならば僕(やつがれ)のような下賤(げせん)な者がこの場に立つことは許されざる所業でありますが、陛下のご尊顔を拝する幸せを頂戴しましたこと、恐悦至極にございます」

リオは恭しくひざまずくと、顔をうつむけて答えた。

「よい、許す。面を上げるがよい」

慣れたようにフランソワが告げる。

「はっ。格別のご高配を賜(たまわ)り恐縮です」

リオは立ち上がると左手を腹に添え、右手で心臓を掴むように握って胸に当てた。

貴族社会では一般的に知られた最上級の敬服の姿勢である。

右手で己の急所である心臓を握りしめ、左手で腹に添えることで

武器を持たずに無抵抗であることを示すのだ。
「ふむ、良い面構えをしているな。が、少し見慣れぬ顔つきをしておるが、出身はどこだ？」
「……生まれた地となるとベルトラム王国にございます。とはいえ数年前より、かの国を離れて旅をしておりますが」
その言葉にベルトラム王国勢であるフローラやユグノー公爵は僅かに表情を変えた。
あまり彼女達の注目を集めたくはないが、一部素性を明かしているリーゼロッテも隣にいるため、嘘を吐くわけにはいかない。
「ほう、そうなると両親は別の国の出身というわけか。どこの国の出なのだ？」
「ここより遥か東方に位置するヤグモ地方、その中にあるカラスキ王国にございます」
「おお、ヤグモ地方か。国交は絶えて久しいが、我が国にも伝承は残っておるぞ。まさか中央の未開地を乗り越えてシュトラール地方に移住する猛者がいるとは思わなんだ」
ひとまずは素性を明かすことで警戒心を解くことはできた。
ヤグモ地方の話を出すことで興味も惹けたようだ。
なかなか良い流れである。
「なかなか面白い話を聞かせてもらったな。礼を言おう。もう少し話を聞きたいところなのだが、機会があればまた話を聞かせてくれ」
時間の関係もあり、フランソワもこの場ではこれ以上深く立ち入ることはしないようだ。
少し名残惜しそうに、話はそこで打ち切られた。

「もったいなきお言葉にございます」
リオが慇懃(いんぎん)に頭を下げる。
「陛下、せっかくの機会にございます。よろしければサツキ様にご挨拶をしてもよろしいでしょうか？」
言って、リーゼロッテはリオに向けて横目で小さくウインクした。
それに気づきリオが口許に小さく笑みをこぼす。
「うむ、そなたもサツキ殿に会うのは初めてのことであったな。私から紹介しよう。
サツキ殿、彼女はリーゼロッテ。我が国の重臣であるセドリック＝クレティア公爵の一人娘だ」
と、フランソワは直々にリーゼロッテをすぐ傍にいた沙月に紹介した。
「初めまして。沙月様。リーゼロッテ＝クレティアと申します。お会いできて光栄ですわ」
リーゼロッテは微笑を浮かべて名乗りを上げると、沙月にサッと手を差し出した。
他の者達と異なりリーゼロッテが沙月の名を呼ぶ声のアクセントは微妙に異なっているように聞こえた。
その違いをうっすらと感じ取ったのか、沙月がじっとリーゼロッテの顔を見つめる。
「……ええ、初めまして。サツキ＝スメラギです。よろしくお願い

します」

沙月はその手を握り返すと、にっこりと笑みを浮かべて挨拶を返した。

「紹介いたします。彼は私のパートナーであるハルト様です」

今度はリーゼロッテがリオを沙月に紹介する。

「はると？」

和名のようにも聞こえる名前に、沙月は小さく呟きを漏らした。

「初めまして。ハルトと申します。勇者である沙月殿にお会いすることができ光栄に存じます」

妙にこなれた発音で沙月の名前を呼ぶと、リオは沙月に手を差し出した。

その発音の違いには沙月だけでなく、リーゼロッテも微(かす)かに目を丸くしている。

沙月は微笑を浮かべてリオの手を握ろうとした。

「ええ、よろしくっ……」

言いつつリオと握手をしたところで、沙月がハッと目を見開く。

瞬時にきょろきょろと視線を走らすと、ややあって食い入るようにリオの顔を見つめだした。

傍からだと少し挙動不審に見える。

「どうかなさいましたか？」

落ち着いた口調でリオが尋ねると、沙月は我に返ったようにぎこちない笑みを浮かべた。

「いえ、ごめんなさい。なんでもありません。えっと、貴方の名前が祖国の響きに似ているので少し懐かしくて……」

手は握ったまま、「こほん」と可愛らしく咳払いをすると、沙月は小さく頭(かぶり)を振って答えた。

気のせいか少し声が上ずっているように聞こえる。

「そうなのですか？　この辺りの国では少し珍しいかもしれませんが、それでもまったく聞きなれない名前の響きというわけでもないのですよ。

ああ、そういえば私の両親の祖国では一般的な響きだったとか」

リオがそう告げると、沙月はスッと目を細めた。

「へぇ、少し興味がありますね。近いうちに貴方の祖国について話を伺ってみたいです」

言いながら、沙月が少しジトっとした目でリオを見つめる。

「ええ、機会がございましたら。挨拶でお忙しいとは思いますが、もし夜会の最中にお手すきの時間がございましたら是非お声をおかけください」

そう語るリオはにこりと曇りのない笑みをたたえていた。

「ええ、是非そうさせてもらいますね」

是非という部分を強調し、沙月もにこりと笑みを浮かべて返す。
すると、そこで、
「おーい、お前ら。いつまで手を握りあっているんだ？」
手を握ったままの二人を見かねたのか、弘明が横から口を挟んできた。
「これは失礼しました。どうも沙月様とは初めて会ったような気がしないものでして」
沙月を握っていた手を放し、リオが苦笑しながら謝罪した。
「あら、奇遇ですね。私もですよ」
沙月がすかさず悪戯めいた笑みを浮かべてリオの言葉に同意する。
妙な意気投合ぶりを見せる二人に、周囲の者達は僅かに意表を突かれているようであった。
「サツキ殿がそのような表情を見せるのは初めてのことであるな。どうやら本当に気が合うようだ。人の巡り会わせとは不思議なものであるな」
と、フランソワが感心したように語った。
周囲の者達もやや戸惑いながら頷き、それを肯定する。
「ハルト様、そろそろ下へ戻りましょうか」
僅かとはいえ呆気にとられていたのはリーゼロッテも同じであっ

たが、落ち着いた口調でリオに語りかけてきた。
まだまだこの場にいる者達に挨拶をしたいと思っている者達は大勢いるため、これ以上会話を長引かせるのはあまり好ましくはないのだ。

「はい。承知しました」

リオは即座にリーゼロッテの申し出を承服した。

「それでは陛下、名残惜しいですが一先ずこの場は失礼いたします」
「うむ。またそのうちゆっくりと語り合うとしよう。セドリック達も含めてな」
「はい。喜んで」

リーゼロッテは最上の笑みを浮かべて首肯した。
そうして二人はその場を後にする。
そんな二人の――、いや、リオの背中を、沙月は少し考えるような面持ちを覗かせながらじっと眺めていた。

第９３話　差し出すその手

沙月への挨拶を終えて階下のホールへと戻ると、リオとリーゼロッテは貴族達から再び声をかけられることになった。
人の数が多いこともあり、それぞれが手短に二人への挨拶を済ませていく。
そうして群がる貴族達の数も少しずつ減ってきた。

「それではリーゼロッテ様。ごきげんよう。セドリック公爵閣下にもよろしくお伝えくださいませ」
「ええ、承知しました。それでは」

別れの挨拶を済ませて、二人が相手をしていた最後の貴族が立ち去っていく。
いったん貴族の波が止んだところで、リーゼロッテはちらりと横目で隣に立つリオを見やった。

「ハルト様、サツキ様へのご用件はもうお済みになったのですか？
何かお話しになりたいことがあると仰っていましたが……」

わざわざ夜会に出席してまで沙月と話したいと言っていたのだ。
何か重要な話があると考えるのが普通なのだが、先ほどのリオは沙月とごく簡単に挨拶を済ませただけである。
ずっと握手を続けてはいたが、不自然に会話を引き延ばすような真似は見受けられなかったし、沙月に何かを伝えようとしていたというわけでもない。
となればリオはまだ沙月に伝えるべきことを伝えていないのではないか。

リーゼロッテはそう考えた。
それにリオが先ほど沙月を呼んだ時に聞こえた名前の響きはいったい――。

「実を申せばまだまだお話ししたいとは思っております。ですがこうしてお会いできたこと自体にも意味があるのです。なので要件は既に済んだと言えるかもしれませんね」

リオが煙に巻くような言い方をして答える。
リーゼロッテはその言葉の真意を一瞬では掴みかねた。
いや、たとえ時間をかけたとしても真意を見抜くことはできないのかもしれない。
今の彼女がそれをするには圧倒的に情報が不足しすぎているのだから。
だが、上手く言葉で説明はできないが、何かが引っかかる。
リーゼロッテはそう思った。
しかし、今はその答えを導き出す時間ではないだろう。

「わかりました」

結局、リーゼロッテはこの場でそれ以上深く追及することはしなかった。

「もう少ししたらダンスの時間になるはずです。その時はよろしければ私と一曲踊ってくださいませんか？」

もやもやした考えを打ち消すように、やや困ったような笑みを浮かべると、リーゼロッテが尋ねた。
基本的にダンスは男性から申し込むのがマナーだが、お互いの関係によっては女性から誘ってもマナー違反となるわけではない。

「ええ、喜んで」
リオは即座に頷いて即答した。
すると、そこで、
「よろしいかしら？」
リーゼロッテと向き合うリオの背後から、二人に声をかける人物がいた。
ベルトラム王国フォンティーヌ公爵家の令嬢であるロアナである。
「これはロアナさん。ごきげんよう」
先に気づいたリーゼロッテが小さく会釈して返事をする。
「こんばんは、ロアナ様」
リオも振り返って挨拶の言葉を口にすると、小さくお辞儀をした。
「ええ、ごきげんよう。お二人とも――」
「なっ、き、貴様は！」
ロアナが何かを言いかけたところで、それに被せるように大きな声が響いた。
付近にいる者達が何事かと声の主に視線を向ける。
リオもその人物――スティアード＝ユグノーのことをやや呆気にとられたように見つめていた。
「ど、どうして貴様がここにいるッ？」

スティアードは敵愾心のこもった口調でリオに問いただした。
「どうしてと仰いましても、ご覧のとおり今回の夜会に参加させていただいております」
リオは動じることはせずに苦笑を浮かべて答えた。
それが癇に障ったのか、スティアードの目つきが険しくなる。
「私がご招待したのです。貴方のことは伺っておりますよ。スティアード＝ユグノーさん」
リーゼロッテはすかさずスティアードに状況を説明した。
スティアードはやや憮然とした表情を浮かべると、
「……君は？」
と、リーゼロッテの名前を尋ねた。
「これはご挨拶が遅れてしまい申し訳ございません。私はリーゼロッテ＝クレティアと申します。以後お見知りおきを」
「っ……。君がリーゼロッテか。噂はかねがね聞いたことがある」
自己紹介をされてリーゼロッテの素性を理解したのか、スティアードは僅かに顔をひきつらせた。
ガルアーク王国の中でも有数の大物貴族であるクレティア公爵家の一人娘、近隣諸国にまで名をとどろかせる才女、若くしてリッカ商会の会頭を務めるガルアーク王国の重要人物――。
そして、スティアードが以前に問題を引き起こしたアマンドの代官でもあり、そのトラブルの際にリオとの間で締結された契約の効

力を保証する立場にいる人物でもある。
そんな彼女がリオをこの夜会へと招待したとなれば、少なくとも二人が一定の近しい間柄にあることは確かだ。
スティアードも流石にその意味がわからないわけではない。

「話がいまいち見えないのですが、ハルトさんはスティアード君とお知り合いなのですか？」

と、事情を掴めずに置いてけぼりを食らっていたロアナが横から尋ねた。

「あ、いや、それは……えっと……その……」

正直に当時の状況を説明することもできず、スティアードは思わず言葉に詰まってしまった。

「お知り合い、といいますか。あまり大きな声では申せませんが、以前アマンドでお二方の間でちょっとしたトラブルが生じてしまいまして。
ハルト様はその被害者です。その際にお二方の間で結ばれた和解契約の立会人をリッカ商会が務めさせていただきました。
そのご縁で私はこうしてハルト様と親しくさせていただいてもおります」

リオの口から語らせるのも角が立つと考え、リーゼロッテは当時の経緯をロアナへと簡単に説明した。

「この大事な時に何をしているのですか、貴方は……。何か申し開きはできるのでして？」

呆れと侮蔑のこもった視線を隠そうともせずスティアードに浴びせて、ロアナが尋ねた。

「くっ……」

スティアードは恥ずかしそうに顔をうつむかせ、拳を震わせている。

その反応でロアナは事件の非がスティアードにあるものと断じた。

「申し訳ございません。身内の者がご迷惑をおかけしました」

困ったように嘆息（たんそく）すると、ロアナは事情を確かめるよりも先にリオへと頭を下げることにした。

リッカ商会が和解の立会人となっている以上、事実関係に疑義を挟み込む真似はしたくないし、あえてスティアードを庇（かば）おうとしてリーゼロッテやその恩人であるリオの心証を悪くするのも得策ではない。

「いえ、もう済んだことですから。契約さえ守っていただければ問題はございません」

と、リオが頭（かぶり）を振って答えた。

契約内容を簡潔に要約すると、被害者であるリオとその関係人物に対して、直接的、間接的を問わずに、スティアードから今後一切の手出しを禁止する――こうなる。

恣意的に解釈すれば、リオに接近しようとするだけで契約に反したと言えそうであるし、偶然とはいえこうして対面していることでグレーゾーンに足を踏み込んでいると言えなくもない。

リオも好き好んでスティアードと再会したいとは思っていなかったが、今こうして出会っているのは不可抗力であるし、スティアー

ドが大人しくしているというのならば、リオはあえて当時のことを咎めて糾弾しようとは思っていなかった。
相手がこちらの立場――というよりも美春達を害しようとしないのならば、もはや彼のことなどどうでもいいからだ。

「本当に申し訳ございません。重ね重ね謝罪申し上げます。スティアード、あなたの口からも今一度この方に謝罪なさい」

と、頭を下げたまま、ロアナが言った。
スティアードが明らかに不服そうな顔を浮かべる。

「なっ！　どうして僕がこいつに！　契約も結んで、もう済んだことですよ！」

スティアードは叫ぶように反論した。

「そういう問題ではありません。貴方に非があるというのならば、今の貴方の態度は決して褒められたものではなくてよ。これ以上、恥の上塗りをしたくなければ今すぐに謝罪なさい」

大きくため息を吐くと、ロアナが言う。
その言葉にスティアードが身体を震わせ、不愉快そうに眉根を寄せた。
感情的になりロアナの言葉など聞き入れる様子はない。
そのままスティアードが怒気を強めていくかのように思えたその時のことだ。

「私はもう気にしておりませんよ。ロアナ様、どうかその辺で彼を許してあげてください」

二人の様子を見かねて、リオがロアナを諌(いさ)めた。

「っ……、貴様……」

スティアードはじろりとリオを睨(にら)んだ。

頭を下げたくもない相手に庇われる以上の屈辱はないだろう。

リオもそんな彼の気持ちを察することができないわけではないが、いつの間にかリオ達は周囲にいる者達の注目を集めていた。

遠目から興味深そうに様子を窺(うかが)っている者達がちらほらと散見される。

これ以上大きく騒ぎ立てるのは少しばかり具合が悪いだろう。

「そう、ですわね。申し訳ございません。感謝します」

周囲の空気を機敏に察したのか、ロアナもそれ以上はスティアードに謝罪を促すことは止めることにした。

そのまま再度リオへと深く頭を下げる。

「どうしたのかね？」

そこへ周囲の人垣(ひとがき)を抜けてやって来る者達がいた。

その中心人物であるギュスターヴ＝ユグノー公爵がリオ達に声をかける。

「あっ、ち、父上……」

自らの父の姿を発見し、途端にスティアードの顔色が目に見えて悪くなる。

「ロアナ君、いったい何があったというのかね？」

顔面蒼白になったスティアードを冷たく一瞥(いちべつ)すると、ユグノー公爵がロアナに尋ねた。

「私も詳しいことは存じないのですが、何やらスティアード君が過去に彼との間でトラブルを起こしたようでして。謝罪するように促したのですが、スティアード君が拒みまして……」

困ったようにロアナが答える。

「アマンドのレストランでの一件です。ユグノー公爵閣下」

と、リーゼロッテがユグノー公爵に告げた。

それですぐに得心が行ったのか、

「なるほど。そういうことでしたか。これは愚息が失礼しました。ハルト君と言ったね、申し訳ない」

ユグノー公爵は即座にリオへと謝罪の言葉を送った。

「いえ、私は気にしておりませんので」

笑みを貼りつけて答えたものの、予想外の展開にリオは内心で辟易(へきえき)とし始めた。

正直ベルトラム王国の人間たちとはあまり関わりを持ちたくはないというのに、先ほどから連続してベルトラム王国の人間と対面しているからだ。

それも上層部に位置するような人間ばかりとである。

「スティアード。私に恥をかかせるな。そう言ったはずだったな。

今すぐ謝罪しろ」

実の息子に視線を送ることなく、ユグノー公爵が冷たく言い放った。

スティアードの身体がびくりと震える。

「せ、先日はご迷惑をおかけしました……」

ややあって上ずった声でスティアードが呟いた。

「……申し訳ございません」

そうして絞り出すように謝罪の言葉を口にすると、スティアードがぺこりと頭を下げる。

周囲には決して少なくない人の目もある。

リオはスティアードの性格をおよそでしか知らないが、おそらく彼にとっては耐え難い屈辱だろう。

「え、ええ。契約通りあのような真似を二度としないでくだされば結構ですので」

僅かに引きつった笑みをたたえながら、リオは頭(かぶり)を振った。

あまりにもみじめな姿に、スティアードのことが流石に不憫(ふびん)に思えてきたのだ。

「君にはきちんと謝罪したいと思っていた。君さえよければいずれあらためて謝罪の場を用意しよう」

実の息子が頭を下げている横で、何を考えているのか計り知れない笑顔を貼りつけながら、ユグノー公爵は言った。

「いえ、お気になさらず。閣下もお忙しいでしょうから」

リオは社交辞令でもその申し出を受け入れることはしなかった。のこのこと相手の用意した領域に入り込めば何をされるかわかったものではない。

ないとは思うが息子が結んだ契約を煩わしく思って始末しようとしてくるか、それともリーゼロッテとの関係も踏まえて利用や勧誘をしようとしてくるか、いずれにせよ純粋に謝罪が目当てではないだろう。

必要性があるのならばともかく、怖いもの見たさで彼らと繋がりを得ようとするほどの冒険心をリオは持ち合わせていなかった。

「ふむ。まぁこちらは謝罪をする立場だからね。無理強いはしないよ。考えるだけ考えておいてくれたまえ。それはそうと、もうすぐダンスの時間だね。よければ後で我が国の令嬢達とも踊ってやってくれたまえ。君ほどの男性と踊れるとなれば彼女達も喜ぶだろう」

不必要に食い下がることはせず、ユグノー公爵はあっさりと話題を変えてきた。

やや拍子抜けの感はあるが、それならそれで面倒な断りの言葉を言う必要もない。

「ええ、あいにく最初のお相手はリーゼロッテ様の先約がございますので、その後に機会がありましたら喜んで」

その程度なら構わないだろうと、リオが首肯する。

夜会のダンスシーンにおいて未婚の若い男性が女性を誘わず踊りに参加しないことはあまり褒められた真似ではない。

絶対にというわけではないが、最低でも一人とダンスを踊ってお

かないと周囲への面目が立たないのだ。
できれば二、三人と踊っておくとなお好ましい。
なので、リオとしてはあまり気乗りしないのだが、社交辞令的な意味合いで承服することにした。

「おお、そうかね。ならばせっかくの機会だ。我が国の令嬢を紹介しておこうか」

言って、ユグノー公爵は背後へと視線を流した。
そこにはコバンザメのごとくユグノー公爵に付き従う男性貴族達とその娘の令嬢達がいる。
いったい今日だけで何人の貴族と知り合いになったのだろうか、まだまだ貴族達の自己紹介は延々と続きそうだ。
リオは内心で溜息を吐くと、それをおくびにも出さないで笑みを貼りつけた。
隣にいるリーゼロッテもご同様である。

「初めまして。ブラント伯爵家のエリーゼと申します」
「私はアルベルト伯爵家のドロテアですわ」

そう言って、一人ずつ令嬢達が自己紹介を行っていく。
年代はいずれの令嬢もリオやリーゼロッテと同じ程度だ。
もしかしなくとも中には王立学院時代にリオの旧友であった者もいたりする。
エリーゼとドロテアなどがまさしくそうで、いずれもロアナの派閥に所属していたとリオは記憶している。
みな綺麗どころばかりで、口調や仕草も慎ましやかで上品なのだが、その目には興味と好奇心の強そうな光が満ちていた。

「ご丁寧にありがとうございました。皆様のご尊顔とご尊名、確か

に記憶いたしました」

社交的な笑みを浮かべてリオが小さく会釈する。

適当に愛想を振りまくのにもだいぶ慣れてきたものだ。

「ははは。良かったな。ハルト君は今回の夜会でも密かに注目されている人物だ。顔を覚えてもらって損はないぞ」

冗談めかして言っているが、ユグノー公爵の目は笑っていない。

それはどれほどの利用価値があるのか、リオを見定めようとしている目であった。

令嬢達は嬉しそうに微笑んで、ユグノー公爵の言葉に頷き同意している。

「私が、ですか？　ご冗談を」

リオは意外そうにユグノー公爵に尋ねた。

「何を言うか。リーゼロッテ嬢のパートナーであるというだけでも、多くの注目を惹きつけることになるのだよ。しかも君はまったくの無名の存在だというではないか。興味を持たない方がおかしいさ」

「……なるほど。そうかもしれませんね」

リオはフッと苦笑を漏らして同意した。

妬み、出世、保身――、この夜会に参加するような貴族はより強い権力を持つ者の周辺に対しては常に目を光らせている。

自意識過剰なことはわかっているつもりだったが、ひょっとしたら自身が思っている以上にリオは注目されているのかもしれない。

もっとも、いくら注目されたところで自分に取り入る意味など何もないのだから、ただの注目損にしかならないのに――。

そう考えるとこうして貴族達と交流を持つこともただの茶番にしか思えなくもない。

「おっと、そろそろダンスの時間のようだね」

会場内にいる演奏者達が準備を終えたのを見計らって、ユグノー公爵が言った。

「リーゼロッテ様。早速ですが、私と一曲いかがでしょうか？」

リオは微笑を浮かべると、隣に立つリーゼロッテへと手を差し出した。

「ええ、もちろんです」

リーゼロッテが嬉しそうに頷き、その手をそっと掴み返す。

「ユグノー公爵閣下、それでは失礼いたします」

リーゼロッテがユグノー公爵に向き直って言った。

「ああ、私はこの場から君達の踊りを見させてもらうとするよ」

小さく会釈して別れの挨拶を済ますと、二人は手を握ってホールの中心にあるダンススペースへと移動した。

ほぼ同じタイミングで何組かペアがやって来て、踊り始める準備を整えている。

「ほう、リーゼロッテ嬢のダンスですか」

「お相手は例のパートナーの青年ですな」

「これは面白そうだ。少し見させてもらうとしましょう」
リオとリーゼロッテが踊る姿を見てみようと、ダンススペースの周りにはちらほらと人垣(ひとがき)が出来始めた。
誰もが興味深そうに二人の様子を眺めている。
スペースの中央にたどり着くと、二人はダンスを踊るべく抱き合うように密着した。
「何だか見られていますね」
遠慮なく浴びせられる視線を感じとり、リオが苦笑しながら言う。
「ふふ、そうですね。見られるのは嫌ですか？」
そう尋ねて、リーゼロッテは息がかかるほどの至近距離からリオの顔を見上げた。
「嫌というわけではありませんが、慣れなくてむず痒(がゆ)いです」
「緊張していらっしゃるんですか？」
「リーゼロッテ様のお相手ですからね。緊張もしますよ」
「意外です。なんというかハルト様はそういった感じが全然見受けられませんから」
「だとしたらこの夜会で腹芸が上手くなったのかもしれませんね」
などと会話をしているうちに演奏が始まる。
それに合わせて二人はステップを踏み始めた。
「お上手ですね」
と、リーゼロッテがリオのダンスを褒める。

「きっとお相手が良いのでしょう」
「……本当にお上手です」

リーゼロッテはそっとはにかんだ。

「うーむ、やはり美男美女はただ踊っているだけで絵になりますな」
「いやいや、絵になるのはあの青年が上手にリードしているからでしょう」
「ふむ、リーゼロッテ嬢も上手く息を合わせておりますぞ」

ここでみっともないダンスを披露していようものなら嘲笑(ちょうしょう)の的にされていたのであろうが、二人のダンスの評価は上々だ。

「あーあ、挨拶が長引いたせいで出遅れたな。せっかくロアナに付き合ってもらって踊りの練習をしたっていうのによ」

二人がダンスする様子を、弘明も人垣(ひとがき)に交じって眺めていた。
つい先ほどまで挨拶に来る貴族達の相手をしていたせいで休む暇もなかったのだ。
慣れない環境に置かれていることで、少しばかり疲労とストレスが蓄積し始めている。

「まだまだ先は長いですよ。えっと、次の曲になったら私と踊ってください」

弘明がほんの少しだけ不機嫌になっているのを機敏に感じとり、行動を共にしていたフローラが隣でおずおずと言った。

「おう、そうだな。それにロアナとも踊らないとな。えっと……」

頷きながら弘明が会場に視線を走らせる。
「お、いたな。フローラ、あっちへ行こうぜ」
少しして目的の人物を発見すると、弘明は軽快な足取りで移動を開始した。
どうやらロアナは同年代の貴族の令嬢達に混ざってダンスを眺めているようである。
そこではひそひそと令嬢達が姦(かしま)しく会話に花を咲かせていた。
「あの中だとハルト様が抜きんでていいですわねぇ」
「本当、どうせ政略の道具にされて近づくならああいった貴公子然とした人がいいですわ」
「落ち着いた雰囲気が好印象ですよねぇ。余裕があるといいますか」
どうやらダンスを踊っている男達の品評を行っているようだ。
「貴方達、はしたなくってよ」
すぐ傍で繰り広げられる淑女らしからぬ会話に呆れて、ロアナが嘆息(たんそく)しながら注意する。
「えー、でもロアナ様もハルト様は良いと思いませんか？」
と、とある令嬢が少し口を尖(とが)らせて尋ねた。
先ほどリオに挨拶をした令嬢の一人――エリーゼだ。
「……私は見た目だけで殿方を好きになったりはしませんわ」

ロアナが毅然と答える。

「えー、そりゃ地位や財力は大事ですけど、容姿も良いに越したことはないですよぉ。どうせなら両方兼ね揃えている相手が良くないですか？」

「否定はしませんが、理想ばかり追い求めるのはよしなさい。結局は権威や財力に勝る殿方の魅力はないのですから」

「その割にはさっきからハルト様のことをじっと見つめているではないですか？」

エリーゼがニヤリと笑って茶化すように告げる。

「なっ、私はそのようなつもりで彼を見ているのではありませんわ！」

ロアナは慌てた様子で顔を紅潮させた。

「わかってますわよ。本命は勇者様で、ハルト様は目の保養ですよね。勇者様と結婚できれば将来は安泰ですものねぇ」

ドロテアはすかさずエリーゼに援護射撃を行った。

「もう、知りませんわ」

ロアナは顔を膨らませてそっぽを向いた。

そう言いながらも視線は気づかぬうちにリオを追いかけている。

「よう、ロアナ。あー、なんだ、ハルトとリーゼロッテが踊るところを見ていたのか」

そこへ弘明がやって来た。
ロアナがホールの中央で踊るリオへと視線を送っていることに気づき、無意識のうちに少しだけムッと口を尖らせる。
「ええ、お二人の踊りが優雅でとてもお上手だと思ったものでして。弘明様もお手本にするといいですわよ」
「あー、そうだな」
「そろそろ今演奏されている曲が終わります。フローラ王女殿下の次は私と踊ってくださいませ」
「おう、いいぞ。けど、俺がフローラと踊っている間、ロアナはどうすんだ？」
「ヒロアキ様以外の殿方と最初に踊るわけにはいきませんわ。私はこの場でお待ちしております」
その言葉で弘明は満足そうに笑みを浮かべた。
「あー、そうかそうか。いいぜ。じゃあその後にリーゼロッテを誘ってみるかな」
「ならば私の方からお声をかけておきましょう。ちょうど演奏が終わりましたから、ちょっと行ってきますわね」
「ああ、よろしくな。行こうぜ、フローラ」
そう言い残して、弘明はフローラを連れてダンスをするため立ち去った。
二人の背中を見送ると、ロアナは息を吐き、中央のダンススペースから戻ってきたリオとリーゼロッテの下へと歩みだす。
「ハルトさん、リーゼロッテさん。お疲れ様でございました。お二人とも素晴らしいダンスでしたわよ」
「あら、ロアナさん。ありがとうございます」

リーゼロッテが微笑を浮かべて礼を告げた。
リオも小さく会釈して礼を言う。
ロアナは少し困ったように微笑むと、

「実はヒロアキ様が是非リーゼロッテ様と一曲踊ってみたいと仰っていまして、貴方ほどの女性となれば他の殿方の相手でお忙しいとは思いますが、後ほどお相手になっていただけないでしょうか？」

リーゼロッテに向けてそう尋ねた。

「ええ、もちろんですよ。勇者様と踊れる名誉を賜(たまわ)り光栄です」

リーゼロッテが微笑んで頷く。

「ありがとうございます。ヒロアキ様に代わりましてお礼申し上げますわ」

ロアナはぺこりと頭を下げた。

「では、いつまでも私がリーゼロッテ様を拘束するわけにはいきませんね。私は少し一人で行動しますので」

二人の会話を見守っていたリオがそんなことを言った。
ダンスも始まったこの時間帯になると、一緒にやって来たパートナーと別れて行動を始める者も増えてくる。
そろそろリオもリーゼロッテと別行動する頃合いだろう。

「そんな。ハルト様のお陰様でかつてないほどに楽しい夜会を過ごすことができましたから」

「そう仰ってくださると男冥利に尽きます」
リオは薄っすらと微笑んで礼を述べた。
「それではまた後ほど合流しましょう。帰りも馬車をご用意しましたので」
「はい、お世話になります。それでは」
そう言い残すと、リオはリーゼロッテと別れた。
「あ、ハルト様よ」
「次は誰にお声をかけられるのかしら？」
会場の雑踏の中を歩いていると、令嬢達のそういったささやきが聞こえてくる。
今回の夜会でリオも随分と顔が知られてしまったようだ。
現在は踊りを楽しむ時間帯であり、こうして注目されている状態で誰にもダンスを申し込まずに、いつまでも一人でうろうろと歩き回るのは何とも居心地が悪い。
とはいえ見知らぬ女性に声をかけて踊りを申し込む気にもなれなかった。
今は二曲目の踊りが始まっているので、そちらを眺めるフリをして時間を稼ぐのがいいだろうか。
そんなことを考えていると、
「あのぉ、ハルト様」
リオに声をかけてくる者達がいた。
先ほどユグノー公爵と一緒に行動していた令嬢達だ。

「はい、なんでしょうか？」
リオは愛想笑いを浮かべて応じた。
「えっと、先ほどは自己紹介だけでしたので、もう少しハルト様とお話がしたいなと思いまして」
「確かエリーゼ＝ブラント様でしたね。私のような者にそう仰ってくださるとは光栄です」
「まぁ名前を憶えてくださったのですね。ありがとうございます」
嬉しそうにエリーゼがお礼を言う。
「ええ、先ほど自己紹介してくださいましたから」
「あら、エリーゼだけずるいですわ」
と、エリーゼの隣に立っていた令嬢が僅(わず)かに口を尖らせて言った。
「もちろん貴方様のお名前も憶えておりますよ。ドロテア＝アルベルトお嬢様」
困ったように苦笑して、リオがドロテアの名前を言う。
「まぁ、まさか全員の名前を覚えたのですか」
「いえ、まぁ本日お会いした方々全員というわけにはいきませんが、印象に残っている方々の名前はできるだけ覚えるように頑張りました」
「あら、どのように印象が残ったのか気になりますわ」
「皆様お綺麗ですから」
苦笑しながらリオが答える。

「まぁ、お上手ですのね。ずいぶんと女性慣れしていらっしゃるのかしら？」

エリーゼとドロテアを筆頭に、令嬢達が色めき始める。

満更でもなさそうなあたり、自分達が美しいという自負があるのだろう。

だが、リオはとても言えなかった。

まさかエリーゼとドロテアがかつてリオと同じ学院に通っていたクラスメートであり、名前を聞いて顔を見て二人のことを思い出したとは。

というよりも王立学院時代にエリーゼからは密かに言い寄られたことがある。

遠回しに袖にしたら手ひどい噂を流されるようになったが。

「そのようなことはございませんよ。恥ずかしながらこんなに多くの女性に囲まれるのは初めてのことでして。少し緊張しているくらいです」

そう、もしかしたら自分の素性がバレてしまうのではないかと思うと余計に緊張してしまう。

リオは内心で冷や汗をかき、少しだけ引きつった笑みを浮かべていた。

何とかしてこの場にいる令嬢達と距離を取りたい。

そう思ったところで、

「ようやく見つけたわよ。ハルトさん……だったわね」

突然、リオは背後から声をかけられた。

振り返ると、そこには一人の女性が立っている。

純白のドレスに身を包んで、ピンと背筋を張り、やや好戦的にも見える目つきでまっすぐとリオを見つめていた。
リオも彼女の視線を受け止めてまっすぐと見つめ返す。
「是非、私とも一曲踊っていただけないかしら？」
凛（りん）とした声が響き渡る。
ちょっとだけ目を見開くと、リオは顔をほころばせて頷いた。
「……ええ、喜んで。沙月様」
そう答えて、この夜会へとやって来た目的の人物――皇沙月（すめらぎさつき）へと、リオは恭（うやうや）しく手を差し出した。

第９４話　密談

リオが差し出した手をじっと見つめると、沙月がその手を掴む。
エリーゼやドロテアを含めたベルトラム王国の令嬢達はやや呆気にとられた様子で二人のやりとりを眺めていた。

「失礼します」

沙月に向けて一言、そう呟くと、リオがくるりと反転して令嬢達に向き直る。

「皆様、申し訳ございません。勇者様からお誘いを頂戴しましたので、一曲お相手を務めさせていただくことになりました。この場を立ち去るのは大変名残惜しいのですが、失礼させていただきます」

困ったように笑みをたたえて、リオが令嬢達に告げる。
それでようやく令嬢達は我に返った。

「ゆ、勇者様直々のお誘いとあらばお断りするわけにはまいりませんわねぇ」

エリーゼがぎこちない笑みを浮かべて答える。
先にリオへ声をかけたのは自分達だ。
確かに立場的に勇者である沙月の方が格上であるのは自明ではある。
だが、それでも自分達が狙いをつけていた男を横からかっさらわれていくのは女として面白くない。
本来ならばこのまま自分たちの誰かがリオと一緒に踊っていたか

もしれないのだから。
というよりもそれが目的で彼女達はリオに近寄ったのだ。
しかし、だからといって、淑女として表だって目くじらを立てるわけにもいかない。

「え、ええ、まだまだハルト様とはお話ししたいのですけれど、そういうことでしたら」

ドロテアも引きつった笑みでエリーゼの言葉に同意した。
他の令嬢達も似たように首肯していく。

「そのように仰ってくださること、大変嬉しく思います。また後ほど機会がありましたら、私から皆様に声をおかけすることをお許しください」
「ええ、もちろんですわ」

令嬢達がリオの言葉に相づちを打つ。
社交辞令なのかもしれないが、気の利いたフォローがあれば彼女達の面目も立つというものだ。
仮に何のフォローもなしに立ち去られていればこの場にいる令嬢達の不興を買うことになっていただろう。
主に沙月が――。

「申し訳ありません。彼とは少し話したいことがありまして」
そう言って、沙月も申し訳なさそうに謝罪の言葉を口にした。

「そんな。お気になさらないでくださいませ。勇者様のお望みとあらば私達は喜んでこの場を引かせていただきますから」
「ありがとうございます」

令嬢達に礼を告げて、沙月はリオと共にその場を後にした。
二人が並んで歩く。
その距離は内緒話ができるくらいに近い。
「声をかけてくれてありがとうございます。よく一人で行動できましたね？」
と、リオが盛況な周囲の喧騒の中で沙月だけに聞こえるように言った。
「そうね。大変だったわ。一人で抜け出して行動するのは」
「でしょうね」
リオが苦笑を浮かべて同意する。
こうして二人で並んで歩いているだけでも目立って周囲の視線を集めてしてしまうのだ。
主賓である彼女が一人で歩いていれば、行く先々で声をかけられたはずである。
それらをすべてを愛想良く断るのはかなり大変だったことだろう。
「すみませんでした。あの場にいる人達に聞かせたくない話なので」
「ええ、わかっているわ。だからこそお望み通りキミを訪ねてきたの。さっきはビックリしたんですから。教えてもらうわよ。キミが美春ちゃ――」
沙月が何かを言いかけたその時のことだ。
「ま、待ってくれたまえ！　サツキ！」

ホール中央のダンス広場へと移動する道すがら、沙月を制止する声が鳴り響いた。

「見つかっちゃったか」

嘆息して、沙月が呟いた。

その声色には少し面倒くさそうな感情がこめられている。

「どうかしたの？　ミシェル」

沙月が振り返って声の主に尋ねた。

そこには背の高い優男風の青年が立っている。

リオの見間違いでなければ、先ほど挨拶をしたガルアーク王国の王族の中にいた人物のはずだ。

確か沙月のすぐ傍に立っていた男である。

年齢はリオや沙月よりも少し上といったところか。

彼の名はミシェル＝ガルアーク、正真正銘ガルアーク王国の王子だ。

「どうかしたのじゃないさ。ちょっと目を離した隙に急に姿を消してしまうんだから。心配したんだよ。君が迷子になったんじゃないかって」

と、ミシェルが沙月に語りかける。

「ならないわよ。私をなんだと思っているの？」

沙月が口を尖(とが)らして答えた。

「そんなことを言って君は一度城の中で迷子になったことがあるじ

ゃないか。勝手に城の中を探検しようとして」
「この世界にやって来た最初の頃の話でしょ」
沙月が小さく嘆息する。
「それで、用がなければもう行きたいんだけれど？」
「行くってどこへ……？」
「これからこの人と一緒にダンスを踊るの」
沙月は惚れ惚れするような笑みをにっこりと浮かべてリオを見やった。
「ダンス……？　この男と……かい？」
ミシェルが呆然した様子でリオの顔を見つめる。
「ええ、そうよ」
きっぱりと沙月が肯定する。
「な、何を言っているんだ。君は勇者なんだから最初に踊る相手はちゃんと選ばないと……」
「あら、彼じゃ駄目なのかしら？　かなり格好良いと思うのだけれど」
そう言って、沙月は悪戯めいた面持ちでリオに一歩寄り添った。
二人の肩が触れそうなほどに近くなる。
「なっ……」

ミシェルは大きく目を見開いた。
そしてすぐにリオをじろりと睨む。
「君は……リーゼロッテがパートナーとして連れてきた人物だったね」
少し意外なことにミシェルはリオのことを覚えていたようだ。
「はい。ハルトと申します」
リオは苦笑をたたえながら名を述べた。
少し面倒な状況に内心で嘆息(たんそく)して。
「リーゼロッテといい、サツキといい、こういう男がいいのか？」
ムッとした表情でぼそりとミシェルが呟く。
別にミシェルの顔は不細工というわけではない。
むしろ完璧といっていいくらいに整っている。
顔の両側面に流れるウェーブのかかったブロンドのミディアムヘアは多くの女性の視線を惹きつけることだろう。
ただ、細見ではあるが身体つきがしっかりしているリオと比べると、すらりとしていてやや貧弱なイメージを与えるかもしれない。
もっとも、王族であるのならば必ずしも身体を鍛える必要もないため、筋肉質でないのはやむを得ないのかもしれないが。
「彼の顔つきって私の祖国の人間と少しだけ似ているのよ。言ったでしょう。私は元の世界に帰りたいって。そのためならどんな些細なヒントだって見逃せない。貴方達は私が元の世界に帰る協力をしてくれるんでしょう？」

途端に真顔を浮かべると、沙月はそう告げた。
「そ、それは……。け、けど、顔つきが似ているからって、君が元の世界に帰るためのヒントになるとは限らないんじゃ……」
押された様子でミシェルが答える。
「あら、ひょっとしたら彼の遠い祖先が私の元の世界の人間かもしれない可能性だってあるじゃない」
「そ、そうなのかい？」
ミシェルがリオに尋ねた。
「私の祖先のことについて詳しいことは存じません。ですが、勇者様は私の故郷の地について興味をお持ちのようなので、私の知る限りのことをお伝えしようと思っております」
リオが落ち着いた口調で沙月の話に合わせる。
「っ……。で、でも別にダンスを踊る必要はないだろう？　他にそういった機会をセッティングすることだって……」
一瞬、言葉に詰まりかけたが、それでもミシェルは食い下がった。どうやら沙月がリオと最初に踊ることは承服しかねるようだ。
すると、そこに、
「あら、いいじゃないですか。お兄様。私は勇者様がその殿方とダンスを踊ることに賛成ですよ」
一人の少女が現れ、ミシェルに向けてそんなことを言った。

年齢はリオと同じか、それと少しだけ年下といったところか。
その容姿は実に可愛らしい。
茜色のかかったセミロングのブロンドヘアは鮮やかで、フリルの付いた可愛らしいドレスの上からでもスタイルが整っているのがわかる。

「シャ、シャルロット……。君まで……」

ミシェルは困惑したような表情でシャルロットと呼ばれた少女を見やった。

「勇者様はお兄様のものではないですし、婚約者でもないのですから。お兄様が束縛なさる道理はありませんし、無理にそうなさっては勇者様も気疲れしてしまうはずですよ」

と、シャルロットが沙月を援護する旨の発言をする。

「そうよ。私は勇者になることには同意したけど、正当な理由もなく行動を束縛されることまで同意した覚えはないわ」

沙月はそれに便乗した。

「くっ……。でも僕はサツキのためを思って……」
「この数か月間ずっと王城の中で閉じこもって一部の人間とだけしか接触していなかったんですもの。外の方と触れ合うのは勇者様にとって良い刺激になるのではないでしょうか？」

シャルロットが理路整然と告げる。
周囲に味方もいない状態でここまで言われてしまっては、これ以上食い下がるのも見栄えが悪い。

ミシェルはそう思ったのか、
「……わかった。君がサツキと踊るのを認めよう」
渋々といった感じで頷いた。
シャルロットは嬉しそうに笑みを咲かせると、
「それでこそ私のお兄様ですわ！　代わりといってはなんですがお兄様は私と一緒に踊ってくださいな」
そう言って、じゃれる風にミシェルの腕に抱きついた。
「シャルロット……。わかったよ、それじゃあ一曲踊ろうか」
仕方がないと言わんばかりに小さく息を吐いて、ミシェルが言った。
シャルロットが「ありがとうございます！」と答える。
「ありがとね、シャルちゃん」
片目で小さくウィンクしながら、沙月が小声でシャルロットに礼を告げた。
「いえ、別に。素敵なお方ですね。ダンス、楽しんできてください」
ちらりとリオに視線を向けると、シャルロットが言った。
「別にそういうのじゃないんだけどな」
沙月が困ったように苦笑する。

「それではお兄様、早く行きましょう！」
にっこりとほほ笑んでミシェルの腕を掴むと、シャルロットはすたすたと歩き出した。
「よかったんですか？」
二人の後姿を見守りながら、リオが沙月に尋ねた。
「何が？」
「いえ、何やら王族の方だったようなので、お誘いを無下にしてもよいのかなと」
「いいのよ。不必要に邪険にして関係を悪化させるつもりはないけど、今は彼の相手をするよりキミの話の方が聞きたいから」
真面目な表情を浮かべて沙月が答える。
こうして彼女がリオの話を聞きたがるのには理由がある。
そう、リオは先ほど沙月と握手した際にある精霊術を行使した。
それは自己の心の声を相手に伝えるという一種の念話術だ。
精霊契約を結んでいるアイシアとのように一定の距離が離れていても双方向で念話ができるわけではない。
肉体的な接触が不可欠であり、相手も同じ精霊術を使えない限り、一方的な通話しかできないという制約が存在するものだ。
それゆえ、使用できる場面は限定されているが、内緒話をするには便利な精霊術である。
「聞きたいことはたくさんあるけど、まずは聞かせてちょうだい。貴方が美春ちゃん達を保護しているという話……本当なの？」

尋ねて、沙月がリオの瞳ををじっと覗き込む。
嘘は見逃さない。
そういった気概が感じられる。

「ええ、本当です」

リオは沙月の瞳を見つめ返した。
二人の眼差しが虚空でぶつかり合う。

「身の安全は？」
「もちろん無事ですよ。今も元気にこの世界で暮らしています」

リオがそう答えると、沙月はスッと目を細めた。

「現状で私が貴方の話を信じられる根拠って、キミが美春ちゃん達の名前を知っていることしかないのよね。だから私はキミを信じるしかない。けど相手の素性も目的もわからないまま盲目的に信じることなんてできないわ」
「なるほど。仰る通りですね」

深く頷いて、リオが相づちを打つ。

「なら最初にこうして私と接触を図っているキミの目的を聞かせてくれないかしら？　どうしてキミは私と美春ちゃん達を会わせようとするの？」

沙月は落ち着いた口調で尋ねた。

「それは構いませんが、そうですね――」

リオは少し考えるそぶりを見せた。
目的は何かと聞かれても、リオはすべて美春達のために行動しているにすぎない。
今、沙月はリオのことを見極めようとしている。
どのようにそれを伝えれば信じてもらえるのだろうか。
考えてみたが、言葉を並べるよりも、ありのままのことを伝えた方がいいのかもしれない。

「美春さん達が貴方と会いたがっていたから……ですかね。俺個人の目的というのは別に……」

ややあってリオはそう答えた。

「美春ちゃん達が私に会いたがっているから？」
「はい」

リオが即答する。

（完全な善意から行動してるっていうわけ？　まぁ、絶対にありえないわけじゃないと思うけど……）

沙月が見た限りだと、リオが嘘を吐いているようには思えない。
だが、ちょっと人が良すぎやしないだろうか。
勇者である自分の利用価値は沙月も理解しているつもりだ。
この世界に来てから、そしてこの夜会でも、沙月を利用しようといろんな人間が近寄ってきた。
そのせいか沙月は自分でも気づかぬうちに少し疑り深くなっていたりする。
この夜会に参加できるということは目の前にいる青年も権力と何らか形で関わりを持っているはずだ。

果たしてそういった人間が打算なしの善意で自分に近寄ってくるだろうか。
離れ離れになった友人同士の再会を手助けするために、身を粉にして動き回るのだろうか。
何か前提条件を見落としているような気がする。
それを見極めるため――、

「ふ～ん、なるほどね……」

沙月はぐいっとリオに顔を近づけた。
そして尋ねる。

「……それだけ？」

と。

「ええ、それだけです」

リオが大きく頷く。
それからリオは視線だけで簡単に周囲を見渡した。

「ところで――」
「……何？」

沙月が可愛らしく首を傾(かし)げる。

「少し周囲から注目を集めすぎているみたいです。距離を取った方がよろしいかと」

少し戸惑ったように笑みを浮かべて、リオが言った。

沙月が顔を近づけてリオの顔を覗き込んだせいで、今の二人の距離はかなり近い。
あと一歩でキスでもするのではないか、そう思えてしまうくらいに密着している。

「なっ……」

唖然として、沙月は慌てて周囲に視線を送った。
リオに意識を取られるあまり、どうやら外部への意識がおろそかになっていたようだ。
周囲にいる大勢の者達が自分達に好奇の視線を向けていることを認識し、沙月の顔がかあっと紅潮してしまう。
強い羞恥心が全身を突き動かし、沙月がとっさにササっとリオから大きく一歩距離を取る。
その様子を見てリオは少し可笑しそうに笑った。

「……何よ？」

沙月がジト目でリオを睨む。

「えっと、そろそろ次の曲の演奏が始まるみたいなんですが、行きませんか？」

小さく咳払いをしてから、リオが提案した。

「……そうね」

少しぶっきらぼうに答えてリオから視線を外すと、沙月はすたすたとダンスの広場へ向けて歩き出したのだった。

☆★☆★☆★

ホール中央のダンススペースのすぐ傍には、次にダンスを踊る者達が控える待機場がある。

そこにはリーゼロッテやロアナの姿もあった。

沙月がリオと一緒に待機場へと入ってくると、その場にいた者達が急速にざわめき始める。

「注目はされてるみたいだけど、キミがいるおかげで周囲から気安く声をかけられないのは楽ね。今は誰からも話しかけられたくないし、適当に笑って話し込んでいるフリをしましょう」

無遠慮に浴びせられる視線に疲れた様子で、沙月が呟いた。

幸い今のところは周囲から距離を取られてはいるが、沙月に声をかけようと思う者がいつ現れるともわからない。

今日の主賓は沙月であり、この夜会に参加する誰もが沙月とコンタクトを取りたくて仕方がないと言っても過言ではないのだ。

「ええ。そうですね。ところで少し伺いたいことがあるんですが、よろしいですか？」

「え？　うん、構わないけど……」

「沙月さんはどうして勇者になろうと思ったのかなと思いまして。お聞かせいただけないでしょうか？」

沙月がこの世界で何をしようとしているのか、リオはそれを知りたかった。

美春達から聞いた人物像とこれまで話した印象からでは考えにくいが、沙月が勇者になって富や名声を集めるだけ集めたいという俗な願いを隠し持っていないとも限らない。

仮にそういった願いを抱いているとしたら、美春達が持っている

膨大な魔力には利用価値が出てくる。
あまり疑いたくはないが、リオは沙月に潜在的にでも美春達を利用するつもりがあるのかを確かめたかった。
「……別に勇者なんてやりたくないわ。なりたくもなかった」
真面目な顔つきを浮かべると、沙月が言った。
「では……どうして？」
「……私はね、地球に帰りたいの。大切な家族がいる、友達がいる、やり残したことが沢山ある。それがいきなりこんなわけのわからない世界に呼び出されて、周りには知っている人が誰もいなくて、知らない顔をした人達がみんな私のことを勇者様って言う……」
そこまで語って、沙月は小さく溜息を吐いた。
「この世界に来た最初の頃はさ。私、自分に起きたことが受け入れられなかったの。
簡単に事情を説明してくれた王城の人達に、すぐに元の世界に帰してくださいって頼み込んだけど、方法はわかりませんって言われて……。
恥ずかしい話だけどそれからしばらくの間は使い物にならなかったわ。
与えられた王城の部屋に引きこもって、しばらくして本当は城の人達は私が帰る方法を知っているんじゃないかと疑心暗鬼になって、それを探ろうと城の中をこっそり歩き回ったりもした」
当時のことを思い出したのか、沙月がきゅっと歯を食いしばる。
彼女が置かれていた客観的な状況を考えれば、口で説明されるだけでは想像もできないくらいに辛い日々だったのかもしれない。

複数人で転移してきた美春達と違って、沙月は本当に一人ぼっちだったのだから。

「けど、最近になってかな。少しずつ冷静になってきて、このまま無駄に時間が過ぎていくことがすごく怖くなったの。

ひょっとしたら私このままこの世界でお婆ちゃんになっちゃうんじゃないかって……。

それでようやく『何かしなきゃ！』って前向きに物事を考えられるようになったのかな。地球に帰るための手段を探そうって思った。たとえそれが無駄に終わるとしても、何もしないまま諦めるなんて絶対に嫌だったから。

けど、私一人じゃできることなんて知れているじゃない？　だからこの国の力を借りようと思ったの。幸い向こうは私を勇者として利用したがっていたから、勇者をやる代わりに私が元の世界に戻るための手助けをしてくれって頼み込んだの。

こんな感じかな。私が勇者をやる志望理由」

言って、沙月がリオに力弱く微笑みかける。

それは、とても気丈だけれど、とても儚(はかな)い笑みだった。

「……すみません。話しにくいことを伺ってしまって」

「いいのよ、別に。今の私を美春ちゃん達に会わせていいのか、試していたんでしょ？

どうやら信じられないのはお互い様みたいね。今の質問で貴方が美春ちゃん達のことをちゃんと考えてくれているということは何となくわかったわ」

沙月の問いに、リオは僅かに目を丸くした。

驚いたことに沙月はリオの意図を見抜いていたようだ。

どうやらかなり優れた洞察力を持っているようである。

「で、どうなのかな？　試験の結果は。合格？」
沙月がじっとリオの顔を覗き込む。
リオは口元に笑みを浮かべると、
「……ええ、貴方を美春さん達にお引き合わせします」
と、そう答えた。
「そろそろ次のダンスが始まるようですね。続きは踊りながら話しましょうか」
ちらりとダンスホールの様子を窺うと、リオが言った。
そして沙月へと手を差し出す。
「そうね。一応、元の世界で社交ダンスの経験はあるけど、こっちの世界のダンスとはステップが微妙に違うの。リードしてもらってもいいかしら、ジェントルマン？」
そう言ってリオの手を掴むと、沙月は楽しそうに小さく微笑んだ。
「ええ、喜んで。レディ」
リオもにっこりと笑って頷き返す。
すると、その時、ホールに拍手が鳴り響いた。
フローラが少しミスをしたようだが、ダンスを終えた弘明とフローラを称賛しているようだ。
会場にいる多くの者達が二人に注目しているらしい。
だが、リーゼロッテを含むダンスの待機場にいる者達は、弘明と

フローラの組み合わせよりも、リオと沙月の様子を注意深く観察していたのだった。

☆★☆★☆★

「あー、二人とも。良かったら俺と踊らないか？」

弘明はご機嫌な様子でフローラと一緒に待機場に戻ってきた。
そのままリーゼロッテとロアナにダンスを申し込む。

「はい、そのためにロアナさんとヒロアキ様をお待ちしておりました」

「ええ、ですがいくらヒロアキ様といえども一度に私達二人と一緒に踊るのは不可能ですわ。お身体は一つしかないのですから。どうぞ先にリーゼロッテ様と一緒に踊って来てくださいませ」

お淑やかに微笑んでロアナがリーゼロッテに順番を先に譲る。

「そうだな。じゃあリーゼロッテ、踊ろうぜ」

「はい。それではお言葉に甘えて。失礼します」

リーゼロッテはにこりと笑って頷いた。
そこにリオと沙月が通りかかる。

「って、沙月と……ハルトじゃんか。よお」

弘明が二人に声をかけた。

「これは皆様、お揃いで」

極めて高貴で美少女な三人を侍らせる弘明の姿はリオと沙月以上に目立っている。
リオは四人の姿を視界に収めると、瞬時に笑みを浮かべて挨拶をした。
沙月も愛想笑いを浮かべて会釈する。
エスコートするように沙月の手を握るリオの姿を見ると、弘明はフンと鼻を鳴らした。

「へぇ、リーゼロッテの次は沙月かよ。随分と仲良さそうじゃねぇか。見た目通りに色男な奴だ。なぁリーゼロッテ」

と、妙に鼻につく笑みを浮かべて弘明が言う。

「え、あ、はい。えっと……あはは」

リーゼロッテが困ったように苦笑して同意する。
リオと視線が合うと、「すみません」と口を動かして、リーゼロッテは周囲に悟られぬよう少しだけ頭を下げた。
リオが微笑を浮かべて小さく頷きを返す。

「だが無名の奴が分不相応に目立ちすぎるのは感心しないぜ。俺の世界にこんなことわざがある。出る杭は打たれる、ってな。度が過ぎると鼻につくぞ」

小さく肩をすくめて、弘明が語る。

「ご忠告痛み入ります。未熟者の身ゆえ、大変勉強になります」

答えて、人当たりの良い笑みを浮かべながら、リオは深く頭を下げた。

随分と上から目線で語られているが、素で良かれと思ってアドバイスしているのか、意図的にあてこすっているのか、リオにはわからない。
だが、王立学院時代には貴族の子弟達からさんざん皮肉や嘲笑を浴びせられていたのだ。
仮に弘明が意図して皮肉を言っているのだとしても、この程度でリオが気分を害されるはずもなかった。

「ああ、気をつけろよ。よし、じゃあ踊るか。リーゼロッテ」

そう言うと、弘明はリーゼロッテの肩に手を回した。

「えっと、はい。喜んで」

僅かに身を固くしたが、リーゼロッテが美しく微笑んで頷く。
弘明は去り際にちらりとリオの顔を見やって、フンと笑みを漏らすと、身を翻(ひるがえ)した。
そのまま二人でダンスを踊るスペースへと歩み出す。
すると、リオの隣で不機嫌そうな呟きが響いた。

「何、あれ？　すごい偉そう。降って湧いた勇者の地位がそんなに立派なわけ？」

弘明の態度に何か思うところがあるのか、沙月が彼の背中を睨む。
当初は呆れ顔で弘明の言動を見守っていた彼女であったが、次第に怒りが湧き出てきたようである。

「失礼しました」

そう告げて、ロアナが深く頭を下げる。

そのまま気まずそうに立っているフローラに視線を移すと、
「フローラ様、こちらで弘明様のダンスをご覧になりませんか？」
ロアナはフローラを誘った。
「あ、はい。えっと……」
頷きながらも、フローラはその場を離れるべきか迷ったように足踏みをした。
そのままリオとロアナの間で視線を往復させると、
「す、すみませんでした。ご気分を害されたでしょうか？　何やら勇者様は不慣れな夜会にお疲れのご様子で……」
やがて決意したようにぺこりとリオに頭を下げた。
「別にフローラ様が謝罪なさることじゃないと思いますけど」
沙月が口を尖らせて答える。
「あう。す、すみません。えっと……」
びくりと震えて、フローラが萎縮したように縮こまる。
「だからフローラ様が謝罪なさる必要はないですよ」
今度は苦笑しながら、沙月がフローラに言った。
リオはフローラの様子を眺めながら、

（不器用で気が弱いところは昔と変わっていないんだな）

内心でそんなことを思った。

そもそも王族がそう簡単に他者へ頭を下げるべきではない。

謝罪の言葉は口にしても、特に悪いと思っていないような偉そうな態度をとればいいのだ。

フローラは王族としては少し優しすぎるのかもしれない。

リオはそう考えた。

とはいえ、別にそのことを彼女に伝えるつもりはない。

だが、これ以上フローラがリオと沙月の前で申し訳なさそうに萎縮している姿を衆目に晒（さら）すのは不味いだろう。

臣下の身分ゆえに沈黙を貫いて言葉を挟みかねているようだが、ロアナからも少し焦燥している様子が感じられる。

ここは謝罪相手であるリオが事態の収拾を図るしかなかった。

リオは内心で小さく嘆息すると、

「お止めください。私は気分が悪くなどなっておりませんよ。フローラ王女殿下にそのような真似をさせてしまっては弘明様のご忠告通りの事態になりかねません。

どうかお気になさらず。御身はロアナ様とご一緒にヒロアキ様のダンスをご覧になってください」

そう語って、恭しく跪（うやうや）（ひざまず）いた。

「は、はい。……ありがとうございます」

フローラがしょんぼりとお礼の言葉を告げる。

「さぁ、フローラ様。どうぞこちらへ」

今度こそロアナに誘(いざな)われて、フローラはゆっくりと歩み出した。
去り際にロアナが小さくリオに向かって腰を折る。
「私達も行きましょう、ハルト君。もう踊りが始まるみたいだし」
気持ちを入れ替えるように小さく嘆息すると、沙月が言った。

第９５話　倫理の狭間

夜会の会場となっているホールの中では優雅な舞曲が奏でられていた。
ダンスの広場では多くの男女がペアになって踊りを披露している。
その中にはリオと沙月以外にも、弘明とリーゼロッテ、ガルアーク王国の王族であるミシェルやシャルロットの姿もあった。
注目すべき人物が多いせいか、ダンスを見物している人の数はかなり多い。
リオと沙月はお互いの手を優しく重ね合わせ、息のかかる距離まで身を寄せていた。

「そういえばまだ沙月さんの意志をちゃんと確認していませんでしたね。貴方も美春さん達に会いたい。間違いありませんか？」

軽やかに、そして優雅にステップを踏みながら、リオが呟いた。

「……そうね。会えるものなら会いたいけど」

と、沙月が少し物憂げに答える。

「なら話は簡単です。そのための段取りを話し合いましょう」

そう語るリオの口調は気軽なものであった。
すると沙月が僅かに目を細める。

「随分と簡単に言ってくれるけど、今、私が置かれている立場をわかっているのよね？」

「ええ、勇者として王城に暮らしている。行動の自由は可能な限り尊重されるが、何かしようとすれば間違いなく監視がつく。こんなところですか？」

答えて、リオが小さく肩をすくめる。

「……その通りよ。なら、どんなプランがあるのか聞いてもいい？」

「そうですね。沙月さんが美春さん達に会いたいと言えば、国は間違いなく再会を許してくれそうなものですが……」

リオがそこまで言うと、沙月の顔に落胆の色が浮かんだ。

リオは優しく微笑むと、

「ですが、どうやら沙月さんはそれが嫌みたいですね？　実は俺も同じです。危惧しているのは美春さん達が政治的な取引材料にされることでしょうか？」

と、沙月の心を見透かしたかのように尋ねた。

その表情はどこか穏やかである。

「なるほどね。だから、こうしてキミが一人で私に接触を図ってきたということなのかしら？　けど……、そこまで理解してくれているなら、私と美春ちゃん達が会うことの難しさもわかっているはずよね？」

沙月が警戒と戸惑いが半々で混ざり合った表情を浮かべる。

一瞬、リオが美春達を取引材料にして沙月に何らかの交渉を仕掛けてくるのではないかと思ったのだ。

仮に美春達をガルアーク王国で保護するとなれば、リオは勇者である沙月の友人を保護した恩人となる。

となればリオはその功績を自らの手柄にして出世することができるだろう。
リオの隠れた狙いは美春達を上手く利用して出世することなのではないか。
一瞬とはいえ沙月はそう勘繰ってしまったのだが、やはりリオも美春達を国の政争に巻き込むのは反対らしい。
状況証拠からして話の筋は通っているのだが、そのまま素直に信用してもいいのかどうかは別問題である。
沙月にはリオの考えをすべて読みとることなどできないし、話を鵜呑みにして騙されましたでは冗談にならないのだから。
しかし、それでも沙月から踏み込まなければ、美春達の情報を得られないのも事実であった。

「ええ、もちろんです。あまり時間もないので、簡潔に言います。正攻法で会うのを避けたいというのなら、残された手段は一つしかありません」

言って、リオは沙月の背中へと右手を回し、その細身を軽く引き寄せた。
そして耳元でささやく。

「国に隠れて密会しましょう」

沙月は目を見開いた。
リオの言葉が彼女の脳内に何度も響き渡る。

「密会って……。それこそ本気なの？　仮にも今、私が暮らしているのは王城よ？　お城の中で生活を監視されているに等しいのに密会だなんて無理よ」

少しだけ語気を強めて沙月が反論する。

「別にお城の中で会わせようとは考えていませんよ。沙月さんには城を抜け出してもらおうと思っています」

「城を抜け出すって……どうやって？」

「そこは現在の沙月さんに対する監視体制次第ですかね。お尋ねしますが、沙月さんは睡眠時まで室内を監視されていますか？」

リオの質問に、沙月は思案顔を浮かべた。

「……あまり想像したくないけど、されてない……と思うわ。何度か眠れずに深夜まで起きていたこともあるけど、少なくとも就寝時以降に誰かが訪ねてくることはなかった。室内を盗み見ていることもないはずよ」

しばし逡巡して沙月が答える。

「なら狙い目は深夜ですね」

間髪を容れずにリオが告げた。

「そりゃ抜け出すなら深夜なんだろうけど……無茶よ。確かに、夜中なら寝ている姿まで監視はされてはいないだろうけど、それでも部屋の外には護衛がいるし、城の中にだって警備の兵士がうようようと巡回しているのよ？」

と、半ば反射で沙月が語る。

「もちろん。そんなことは百も承知ですよ」

沙月が語る危険性は当然リオも共有しているし、決して軽視しているわけでもない。
いかにリオといえども王城への侵入はそう簡単に決めて行いたいものではないのだ。
潜入時は周囲を警戒して神経を尖らせる必要がある。
また、人間の中にも魔力の感知がずば抜けて高い者もいることから、隠密用の精霊術を使おうにも周囲に漂う魔力の残滓で異変に気づかれるおそれだってある。
異変に気づかれれば間違いなく騒ぎになってしまうはずだ。
騒ぎになっても逃げ出すこと自体はさほど難しくないかもしれないが、代わりに以降は侵入して沙月に会うことがさらに困難になるだろう。

「ですが、そこら辺はなんとかします。虎穴に入らずんばというやつですね」
「な、なんとかって……」

沙月は頭を抱えたくなった。
こうもあっさりと言われてしまうと、それ以上の反対意見を述べる気も失せてしまう。
というよりも話の展開が急速かつ突拍子がなさすぎて、頭の処理速度が追いついていない。

「時間も押してますし、とりあえず沙月さんの部屋の位置だけ教えてもらってもよろしいでしょうか？　今夜、満月が南の空に浮かんだ頃に伺いますから」

投げかけられた質問に、沙月はマヒした思考回路で僅かに逡巡した。
リオの脳内にある侵入プラン、それに美春達のことについても尋

ねたいことは色々とあるのだが、舞曲の演奏時間は刻一刻と終わりに近づいている。
残り時間で納得のいく答えをすべて問いただすことは無理だろう。
踊りを終えた後もリオとばかり長々と喋っているわけにもいかない。
そうすれば周囲からいらぬ不興を買うことになってしまうだろうから。

「……そこまで言うのなら、王城の東西南北に四つの尖塔(せんとう)があるでしょ？　その東側の最上階よ」

葛藤の末、沙月は自分の部屋の位置をリオに教えることにした。
どんな方法で侵入してくるのかは知らないが、美春達に関する情報を得る魅力には抗いがたい。
沙月はまだリオの素性すら知らない状態で、こんな短い時間では言葉以外に信じられるものは何もないが、ここまで話してみた限りで少なくともリオが理知的な人間であることは窺(うかが)えた。
リスクはあるがリターンと秤にかけて信用してもいいだろう。
だが、美春達の情報を入手することに気を取られ、いまいち計画の実現可能性も明確に見えてこないせいか、沙月は一つだけ見落としていた。
王城への侵入行為が判明すれば死罪にもなりうる重罪であることを。
つまりはリオが明確に法を破る行いを企てているということを。
それは平時における沙月の規範意識なら強い抵抗感を抱くものである。
だが、この時点では沙月が規範に直面して、反対動機を形成することはできなかった。
要は話の勢いに流されてしまったのである。

「話が早くて助かります。一応、断っておきますが、密会はそう何度も行える面会手段ではありません。あくまでも仮の処置です。再会したうえで今後どうしたいのかは話し合ってお互いの意志を確認してください」
「そうね。一緒にいるべきか、別々にいるべきか、答えを出さないといけないか……」
言って、沙月は小さく嘆息(たんそく)した。
「……はい。答えを出さないといけません」
リオがぼそりと呟く。
「え？」
声質の冷たさに沙月は思わず息を飲んで、ハッと顔を見上げた。
だが、何やらリオはやわらかく微笑んでいる。
あまり人間臭さが感じられない、感情を隠した聖職者のような笑み。
その笑みを見て、何だかこの人のことは信用はできそうだと思った。
しかし、何だかリオという人間のことはいまいち掴みきれない。
そんな得体の知れなさを、沙月は同時に感じた。
打算というものを一切感じられないからだろうか。
行動の背後に打算がある人間ならばこんなことは感じないはずだ。
拍子抜けというか、なんだかすごくちぐはぐな感じがする。
沙月は内心で小さく嘆息(たんそく)すると、
「……まだキミのことを完全に信用したわけじゃないけど、お礼を言わせてちょうだい。ありがとう」

リオの瞳をじっと見つめて、お礼の言葉を口にした。
もしかしたらリオの心の内を覗き込んでみたくなったのかもしれない。
自分から歩み寄らなければ、相手の心を窺(うかが)い知るなんてできやしないのだから。

「いえ、俺は自分のしたいことを行っているだけですから」

答えて、リオは困ったように微笑んだ。

「そう」

短く言うと、沙月はリオに身体を預けるように歩み寄って、左手をそっとリオの頬に添えた。
そうして少し楽しそうな笑みを浮かべると、さらに至近距離からリオの顔を覗き込む。

「おお！」

お手本のフォームとは異なるが、それは扇情的なのに美しい動作だった。
観客の視線が二人に釘付けになる。
くるくると、回転しながら、二人がリズミカルかつ優雅にステップを刻んでいく。

「何だか楽しそうですね」

リオが尋ねた。
先ほどまで張りつめていた沙月の雰囲気が少し変わった気がした

のだ。

「そうね。折角少しは気の知れた相手と踊っているんだから、この後うじゃうじゃとダンスを申し込まれないように、キミと情熱的なダンスを踊ってみようと思ったの」

と、沙月が悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「俺は男除けですか？」

リオは苦笑した。

「そうよ。面倒でしょ、戻ってまたすぐにダンスを申し込まれるのも」

答えて、沙月はちょっと頬を赤らめると、リオから視線を外した。何だかんだでこうして密着するのは少し恥ずかしいのかもしれない。

「沙月さんと踊りたいと思う人は大勢いるはずですよ」

「嫌よ。知らない人と踊るのってあまり好きじゃないの」

沙月が小さく溜息を吐いた。

「俺も知らない人ですよ」

「キミは……まぁ色々と私のことを驚かせてくれたしね。最初に握手した時だっていきなり頭の中で声が聞こえて驚いたし。何だかお騒がせな人って感じかしら。その埋め合わせはしてくれてもいいと思わない？」

そう言って、沙月が愉快そうな笑みを浮かべてリオを見る。

「それは手厳しいですね」

視線が重なり、二人がくすりと笑う。

それから間もなくして、舞曲の演奏が終了する。

見物人から最も称賛の拍手が送られたのは、弘明とリーゼロッテではなく、ミシェルとシャルロットでもなく、リオと沙月の二人であった。

それを面白くなさそうに見つめる人間も一部いたが、以降も夜会はつつがなく進行し、初日は終わりを迎えた。

☆★☆★☆★

夜会が終わると、リオはリーゼロッテと一緒に滞在先であるクレティア公爵邸へと戻る。

帰宅の際にはリーゼロッテが何かをリオに尋ねたそうにしていたが、リオはあえてそれを無視した。

リーゼロッテも無遠慮に話を聞き出すことはせず、就寝時間を迎える。

そうして深々と王都の夜が更けていく。

やがて満月が南の空に浮かんだ頃、クレティア公爵邸にいる大部分の人間が寝静まった頃合いを見計らい、リオは屋敷を抜け出すことにした。

クレティア公爵邸の警備は厳重である。

屋敷に侵入するにしても、屋敷を抜け出すにしても、最大の障壁はリーゼロッテの侍従であるアリア＝ガヴァネスであった。

アリアが気配に敏感であるのは確認済みだ。

昨晩、屋敷を抜け出すための下見を兼ねて、リオは夜風にあたりながら修業をする体（てい）でこっそり庭に出てみたのだが、さりげなくア

リアも庭に出てきてリオに声をかけてきたのである。
アリアは何やら感心したような目つきでリオが模擬剣を振るう様を眺めていた。
とはいえ流石のアリアも夜を徹して起きているというわけではないようであった。
リーゼロッテの身の回りの世話をするという仕事柄、アリアの就寝時間は割と早めである。
もとよりこの世界に生きる人間の就寝時間は現代社会に生きる日本人よりもかなり早い。
灯りの費用も馬鹿にならなかったり、朝早くから準備をしなければならない仕事が多いからだ。
閑話休題。
リオは黒装束を着込むと、夜闇に紛れて王城へと向かった。
月明かりが王城を照らし、城内の随所には薄っすらと魔道具の明かりが灯っている。
時刻はとっくに深夜に突入しているが、他国からの外賓も迎えて、現在、ガルアーク王国の王城には普段以上に厳重な警備が敷かれていた。
城内は静まり返っているが、分厚く高くそびえる堅牢な城門と城壁には多数の兵士が配置され、ネズミ一匹の侵入も許さぬように神経を尖らせている。
こんな状況で誰にも見つからずに部外者が城に忍び込むのは、常人でなくとも至難の業である。
だが、音も立てずに空を飛べるとなれば話は別だ。
夜間に空を飛行する魔物や生物を警戒して、兵士達は目と耳を研ぎ澄ませてはいるが、流石に羽音も立てずに暗闇に紛れた飛行物体を発見するのは困難である。
沙月の部屋は王城にそびえる高い尖塔の最上階であるという。
それゆえ、精霊術で空を飛べるリオにとって、忍び込むことはさほど難しいことではなかった。

☆★☆★☆★

沙月はワンピースの寝間着を身に着けて、体育座りでベッドの上に座り込み、南のバルコニーから覗(のぞ)ける満月をじっと眺めていた。

（……本当に来るのかな？）

リオは満月が南の空に浮かんだ頃合いに向かうと言っていた。

今はちょうど満月が南の空に浮かんでいる。

夜会が終わり、冷静に考えてみて、沙月はやはり侵入は無理なんじゃないかと思うようになったのだが、宣言通りならリオはいつ来てもおかしくはない。

（修学旅行で男女の部屋を行き来する生徒がいたけど、こんな気持ちだったのかしら？　何だか今ならその気持ちがちょっとわかるかも……）

沙月は口許に小さな笑みを覗(のぞ)かせた。

何故だか不思議と胸がドキドキと高鳴る。

隠れて何かいけないことをしているせいか、アドレナリンが放出しているのだろう。

高校では周囲から良い子ちゃんと言われていた彼女にとっては初めての経験であったが、沙月は自らの高揚感をそう理屈づけた。

（いけないこと、か。そうよね。忍び込むといってもバレたらかなり不味いわよね。下手すると死刑とかになるんじゃ……）

王族が暮らす城に無断で侵入しようというのだ。

挙句、勇者である沙月を連れ出そうとしている。

ひょっとしなくとも、ガルアーク王国の法に照らせばまぎれもない犯罪行為だろう。
日本ならば住居侵入は軽い罪だが、この世界で王族の暮らす城に侵入する行為が軽い罪とは決して思えない。
間違いなく重罪だろう。
最悪、死罪だってありえる。
ふと、沙月はそんなことを想像してしまった。

「っ……」

美春達の情報に意識を奪われていたり、話の現実味が薄いと思っていたせいで、感覚がマヒしていたが、沙月は冷や水を浴びせられたような気になってしまった。

（本当に来る……のかしら？　冗談？　でもあれだけ自信満々だったし……）

沙月は先ほどまでとは明らかに異なる心臓の高鳴りを覚えた。
今まで彼女が法を犯したことはない。
日常生活では社長の娘として周囲の目を気にしながら生きろと教えられてきた。
高校では生徒会長として周囲の模範でなければと自分に言い聞かせてきた。
そうやって彼女は日本で育ち生きてきたのだ。
規範意識など人それぞれであろうが、沙月は法やルールを破るというタブーに対して、一般人よりも強い抵抗感を覚えずにはいられなかった。
ましてや死刑に値しうる禁忌となれば猶更である。

（塔の中には警備の兵士が何十人も巡回している。この部屋の外に

も兵士が何人かいる。彼はどうやって来るつもりなの？　内通者がいる？　でも深夜にフリーパスでこの部屋まで案内できる人間なんて……）

リオがこの部屋へとやって来る方法を模索する。
だが、常識的に考えて導き出される答えは一つしかなかった。
不可能だ、と。
塔の中を移動すれば必ず巡回している兵士の目につく。
部屋の前にいる兵士は正当な理由なしに部屋の中に人間を通すことはしないだろう。
深夜となればその正当な理由も大幅に限定されてくる。

（まさか塔の中にいる兵士を気絶させるわけないわよね？　そんなことしたら後で大騒ぎになるし……。けど、他にどうやってこの部屋に入ってくる手段が……っ！）

そこまで考えて、沙月はハッとした表情を浮かべた。
そして窓が開きっぱなしになっている南のバルコニーを見やる。

（まさか塔の壁をよじ登るなんて真似はしないわよね？）

塔の高さは数十メートルもある。
よもや塔の壁をよじ登ってくることはないと信じたいのだが――、

（……結局、私はどうしたいのよ）

色々と頭の中がごっちゃになってきて、沙月は自分の心が何だかよくわからなくなってきた。
法を犯すのには抵抗がある。
だが、美春達には会いたい。

方法は二つ、自分が会いに行くか、美春達に来てもらうか。
仮に美春達をこの城に呼ぶにしても、事前にリスクについてきちんと話し合いたい。
呼べば美春達に迷惑をかけるかもしれないから、来るなら危険があることを承知で来てもらいたい。
そして、その危険があることは自分の口から伝えたかった。そうしないことは卑怯に思えてしまうから。
でも、どうやってその話し合いを行えばいいというのだ。
リオが提案した通りルールを破って美春達に会いに行くか、侵入できるというのなら手紙でも書いてリオに届けてもらうか。

「はぁ……」

答えが導き出せず、沙月が小さく嘆息する。
結局はリオに頼らざるを得ないのがもどかしい。
すると、その時、ふわりと何処からともなく南側のバルコニーに人影が現れた。
次の瞬間、ひゅるりと音を奏でて、ふわりと優しい風が室内に舞い込んでくる。
風は部屋の隅々まで撫でまわすように行き渡ると、循環してバルコニーへと戻っていった。

「……え？」

室内に舞い込んだ不可思議な風の動きに、沙月が困惑する。
月明かりに薄っすらと照らされてはいるが、真っ暗で人影の正体はわからない。
かろうじて黒っぽい服を着てフードを被っているのだけはわかった。

「失礼します。探知の……魔法を使いました。扉の外に警備の兵士はいるようですが、室内が監視されている様子はありません。迎えに上がりました」

すると室内に若い男性の小さな声が響いた。
声の主がスッと室内に入ってくる。

「……ハルト君、よね？」

沙月は身構えて、おそるおそる尋ねた。

「はい。そうです」

聞き覚えがある声だ。
沙月はホッと息を吐いた。
だが、すぐに胸の中で罪悪感が込み上がってきて、

「本当に……侵入してきたのね……」

沙月が少し苦々しい声で言った。

「ええ、言ったでしょう。なんとかするって」

そう答えるリオの声は落ち着いていた。

「そうだけど、一人でここまで忍び込んだの？」
「はい」

事も無げにリオが返事をする。

「……キミ、本当は他国のスパイとかじゃないわよね？　こんな暗闇の中で壁をよじ登ってくるなんて、誰にもできる真似じゃないでしょう？」

沙月が訝しげな視線をリオに送る。

真っ暗闇の中で塔の壁をよじ登り数十メートル上の最上階にまで忍び込んでくるなど、常人に為せる業ではない。

それを可能とするのはそういった仕事を専門とする厳しい訓練を積んだ者だけなのではないか。

映画やドラマの見すぎなのかもしれないが、沙月はそんなことを思った。

「違いますよ。正真正銘、ただの一般人にすぎません」

リオが苦笑して首を左右に振る。

「いやいや、ただの一般人はそう簡単に王城に侵入なんてできないから……」

沙月は顔を引きつらせた。

「確かにそうかもしれませんね」

リオがフッと笑みを浮かべて同意する。

「……」

沙月はリオの言葉に何も返さず、室内に数瞬の沈黙が降りた。

「……ねぇやっぱり止めない？　もしこのことがバレれば君は死刑

になるかもしれない。今なら引き返せるし、そんなリスクを冒すわけには……」

やがて沙月が気まずそうにそんなことを語り始める。

暗闇の中ではあったが、リオは何となく沙月から放たれる後ろめたい雰囲気を感じとった。

そして沙月がこの状況で何を思っているのかも薄々と察する。

「もしかして怖くなりましたか？」

と、リオは淡々とした口調で尋ねた。

「っ……」

図星を言い当てられ、沙月が思わず息を飲む。

「すみません。説明が不足していましたね。

俺が城へ侵入する行為は明らかに罰せられるべき行為ですし、勇者である沙月さんが城から抜け出す行為は……罰せられることはないでしょうが、道徳的にはルールに反する行いかもしれません。

別に挑発するつもりはありませんが、罪を犯してまで美春さん達に会うつもりがないのならば引き返してくださってもかまいませんよ。

貴方が望んで、美春さん達も望めば、彼女達を城に呼ぶことだってできますから。俺が急ぎ足であることは確かですし」

そう語って、リオが沙月が立っている方向をじっと見据える。

暗闇でお互いの顔すらくっきりと認識できないのに、沙月は何だかリオに心の底を見透かされたような気がしてならなかった。

「……キミは間違っていると思わないの？　罪を犯してまで美春ちゃん達に会うことが」

沙月がおそるおそる尋ねる。

心臓がどくんどくんと鼓動を鳴らしていた。

「間違い……ですか。よくわかりませんが、特にそのようなことは思いませんね。後になって悔いが生じないよう、必要に応じて最善の手段を選ぶ。もちろん自分の倫理観が警鐘を鳴らさない範囲での話ですが、それだけです」

リオの答えは実に淡白なものだった。

それは必要性さえ認められれば国が定めた法を犯すことも躊躇（ちゅうちょ）しないと言っているも同然である。

事実、今のリオは実際にガルアーク王国の法を犯しているのだから。

これまでの会話で沙月はリオのことを理性的な人間だと受け止めていたのだが、そんなリオに対する印象が塗り替えられた瞬間であった。

「今の事態はキミの倫理観には抵触しないの？」

「していたらここに来ていませんよ」

平然と答えて、リオが苦笑いを浮かべる。

「キミは……そこまでわかっているのに……」

罪悪感に苛（さいな）まれた様子で、沙月がぽつりと呟く。

自分の行いが違法であることを認識しながら、あえてそれを踏み越える。

これまで沙月はそんな真似をしようと思ったことはなかった。

「軽蔑しますか？」

と、リオが静かに尋ねる。

「っ……。そんな……こと……」

沙月は自分の頬がカッと熱くなるのを感じた。

嘘だ。そんなことがある。

そう、沙月はリオのことを軽蔑しそうになってしまったのだ。

必要とはいえ、こうもあっさりと犯罪を行ってしまうリオのことを。

リオが自らの常識の外にいる人間にしか見えなかったから。

しかし、そのことをリオ自身に見透かされてしまい、沙月は何だか急に恥ずかしくなってしまった。

（今、彼がここにいるのはどうして？　美春ちゃん達のため、私のためでしょ。彼自身のためじゃない。なのに彼はここにいる……。選択肢を提示してくれた。なのに私は……）

本当に軽蔑するべきは自分だ。

無関係のリオにここまでお膳立てをしてもらった。

なのに、止める機会はあったのに、土壇場になって危機感を覚えて自己保身に走っている。

自分の事なのに、安全地帯からあれこれ考えるだけで、何も行動に移していない。

沙月はそんな自分がたまらなく恥ずかしかった。

「軽蔑すべきは私ね……」

ぼそっと呟いて、沙月は自嘲(じちょう)した。
だが、すぐに真面目な表情を浮かべ直すと、
「ごめんなさい。私を美春ちゃん達に会わせてください。お願いします」

深々とリオに頭を下げた。
まだ罪を犯すことは正しくないと感じている自分がいる。
それは確かだ。
だが、それ以上に美春達に会いたい。
そう思うことが間違いだとも思えなかった。
もちろんずっと密会を続けていくことは無理だろうし、問題を先延ばしにしているだけなのかもしれない。
でも、一先ずは何の気兼ねなしに美春達と会えるのだ。
これ以上に最高な再会があるのだろうか。
その機会を目の前にいる少年が用意してくれた。
ならば自分はこの少年に感謝しなければなるまい。
軽蔑するなどもっての他だ。
沙月はそう思った。

「……いいんですか？」

リオが少し意外そうに尋ねる。

「うん。だって美春ちゃん達に会いたいもの。会って話したい。キミはその場を用意してくれたんでしょう？」
「ええ、まぁ、そうなんですが……」

そう答えるリオの声は少し歯切れが悪い。

おそらく沙月の態度の変化に戸惑っているのだろう。
「私は美春ちゃん達に会いたい。その気持ちに嘘は吐けない。吐きたくない。後で悔いが残らないようにね」
そう語って、沙月は穏やかな笑みを浮かべた。
リオが僅かに目を見開く。
「悔いが残らないようにですか？」
「うん。キミの言葉だけどね」
「そうですか」
その理由は何故だかリオの心にシンプルに響いた。
「だからお願いします。今更手のひらを返すようで本当に申し訳ないのだけれど、私を美春ちゃん達のところに連れて行ってください」
と、沙月が真摯（しんし）な表情を浮かべてリオに語りかける。
「わかりました」
少しだけ口元をほころばせて、リオは言った。
「けど、今更ですが、先ほど沙月さんが言ったように俺がスパイだって可能性もありますよ？　それでも構わないんですね？」
尋ねて、リオは沙月を見据える。
すると、沙月はくすくすと笑いだして、
「何言っているのよ。スパイがそんなこと言うはずがないと思うん

だけど？」

と、そう答えた。

「そういう作戦かもしれませんよ？」

「その時はその時よ。全力で抗わさせてもらうから」

答えて、沙月が小さく肩をすくめる。

リオは微笑を浮かべてそれに応えた。

「わかりました。なら行きましょう。美春さん達の場所へ」

「うん。お願いします。……でも、キミどうやって塔の壁を登ってきたの？　帰りも塔の壁を降るわけよね？」

と、沙月はリオがこの部屋までやって来た手段を尋ねる。

塔の高さを考えると、正直なところ壁を伝って降りるのはご遠慮願いたい。

だが、リオから返ってきた答えは沙月の予想に大きく反していた。

「登ってきたんじゃありませんよ」

「え？」

一瞬、言葉の意味が理解できず、沙月が首を傾(かし)げる。

「降りてきたんです」

沙月の気のせいか、そう答えるリオの声は少し愉快そうに聞こえた。

☆★☆★☆★

バルコニーで沙月を抱えると、リオは夜の帳(とばり)が降りた暗闇の空へと大きく舞い上がった。
二人の身体がふわりと浮きあがっていく。
（う、嘘？　何で飛んでるの？　浮力？）
重力の法則を完全に無視した現象に、沙月が目を疑う。
静かに、だが急速に、二人の身体は大空へ舞い上がった。
「うっわー！　嘘！　すごい！」
見る見るうちに王城の姿が小さくなったところで、沙月が堪(こら)えきれずに感嘆の声を漏らす。
遥か眼下の王城には小さな灯りの色がぽつぽつと見えるが、沙月の声など城に届きもしないだろう。
「すごい！　すごい！　ねぇ、すごいよ！」
沙月が歓声を上げる。
今まで彼女が見たことがないくらいに空が近かった。
上を仰げば無数の星がキラキラと浮かんでいて、下を見渡せば満月の光が優しく世界を照らしている。
それが無性に楽しくて、嬉しくて、仕方がなかった。
「ねぇ、見える？　ほら！　あそこ、星が綺麗、月が近い！」
沙月が無邪気に笑って、子供のようにリオの服を引っ張った。
「ええ、見えていますよ」

今までに何度も見た光景である。
リオは苦笑して答えた。
「ふふ、そうだよね。知ってるか。ふふふ」
沙月は実に楽しそうに笑っていた。
まるで今まで抑圧されていたストレスから解放されたように。
リオがそっと沙月の顔を覗き込む。
その表情はこれまでリオが見た彼女の中で最も純粋で無邪気なものだった。
夜会で大衆に見せていた気丈な彼女の面影はみじんも感じられない。
そう、リオの腕の中にいるのは見た目通り歳相応の、どこにでもいる普通の少女だった。
「ん？　何？」
自らに向けられた視線に気が付くと、沙月は嬉しそうにリオへと身を寄せて尋ねた。
「楽しそうですね」
リオが尋ねると、
「うん、楽しいよ！」
沙月は少しだけ気恥ずかしそうに、だが満面の笑みで答えた。
「けど、ちょっと寒いかな」

今のシュトラール地方は時期的に春を迎えているが、夜の肌寒さは日本と比べものにならない。
しかも上空ともなれば骨に凍みるような寒さが容赦なく襲い掛かる。
リオから借りた外套を上に羽織っているとはいえ、その下に着ているのはただの寝間着だ。
いくら興奮してアドレナリンが出ているとはいえ、沙月が寒いと感じるのも無理はなかった。
「合流地点までもう少しですから、ちょっとだけ我慢してください」
「ええー？」
と、沙月が少し拗ねたような声を出す。
「仕方がないなぁ。じゃあ急行便でお願いね」
沙月はリオに寄り添った。
「暖かい」
そう、呟いて。
そんな彼女にとって夢のような時間はあっという間に終わりを迎えることになる。
「着きましたよ」
王都を抜け出した空域に進んだところで、おもむろにリオが到着を告げた。

「そうなの？　ここ、森の中みたいだけど……」
沙月が地面に着地する際に周囲を見渡しながら、おずおずと言った。
ここら辺は王都の周辺に広がる穀倉地帯からさらに進んだ森の中にある開けた空間である。
こんな森の中に美春達がいるというのだろうか。
奇跡のようなフライトを終えて、沙月の頭が少しずつ頭が冷静になってきた。
（やっぱりこれって罠なんじゃ……）
不安に押されて、沙月がたらりと冷や汗を流す。
その時のことだ。
「沙月さん！」
沙月の名を呼ぶ声が響いた。
反射的に沙月がそちらへ視線を送る。
すると暗闇の中で複数の人影が近寄ってくるのが見えた。
聞き覚えのある声、懐かしい声。
暗闇の中だけど、沙月にはわかる。
そう、すぐ目の前に、美春、亜紀、雅人の三人がいるのが。
「みんな……」
沙月が感慨のこもった声を漏らした。
間違いない。
それはまぎれもなく沙月の友人達である。
そうして果たされる感動の再会のはずなのだが、何やら美春達が

残り数歩というところで足を止めてしまった。

「ん？　どうしたの？」

微妙な距離感の理由を尋ねて、沙月が首を傾げる。

美春達はそれぞれ窺うようにリオと沙月を眺めていた。

何となく雅人はにやにやとしているのがわかるし、亜紀は気恥ずかしそうな笑みを浮かべているのが薄っすらと見える。

そして、美春は僅かに困惑したように、ぎこちない笑みを浮かべていた。

何かがおかしい。

そう思って、沙月は自分の姿を確認してみることにした。

「あ……」

そうして気がついた。

リオが沙月をお姫様抱っこしているという事実に。

安全に運ぶためにある程度密着するのはやむを得ないのだが、それにしたって二人の距離は妙に近かった。

それは沙月がリオに抱き着くような恰好をしているのが原因である。

「ねぇ、いつまで抱えているつもり？」

尋ねて、沙月はジト目でリオを見つめた。

「えっと、そうしたいのは山々なんですが、手を放してほしいなって……」

乾いた笑いを漏らしながら、リオが答える。

そこでようやく沙月は自分の方からリオに寄り添っていた事実に気づいた。
興奮していたせいか、無意識のうちに無防備になっていたようだ。
「っ……！」
沙月が慌ててリオの身体に回していた手を放す。
すると、リオはすぐに沙月を地面へと降ろした。
沙月がリオからサッと距離を取る。
この状況で何と開口すればいいものかわからず、少し微妙な沈黙が降りた。
やがて小さく咳払いをすると、
「えっと、やっほ。みんな元気だった？」
そう言って、沙月は誤魔化すような笑みを浮かべた。

第９５話　倫理の狭間（後書き）

第９６話　同郷人達の再会と話し合い

「立ち話もなんですから、ひとまず中に入りましょう」

その場にいたアイシアとセリアの紹介を簡単に済ませると、リオは席を改めることを提案した。

ちなみにセリアに関しては説明も面倒であったので、念のために偽名のセシリアとして紹介している。

岩の家については、あらかじめ王都の宿屋から美春達を連れ出した時に、この場に設置しておいたのだ。

「家って？　こんな森の中に？」

それらしき建築物が見当たらず、沙月がきょろきょろと周囲を見渡す。

美春や亜紀は沙月の反応を微笑ましげに見ていたが、雅人だけは少し得意げな表情を浮かべていた。

「こちらです。沙月さん」

そう告げて、リオを先頭にその場にいた者達が歩き出す。

「い、岩？」

暗闇の中に巨大な岩が鎮座しているのを発見すると、沙月は戸惑いの声を漏らした。

「はい。この中が家になっていまして、ここが玄関です」

リオは木製の扉を開いて、岩の中へと入った。
扉を開けると、室内から外へと明るい光が漏れる。
「へぇ、本当に家になってるんだ。面白いわね」
興味深そうに玄関周りを観察しながら、沙月が家の中へと入る。
だが、彼女が余裕を保っていられたのはそこまでだった。
「は……？」
玄関の扉をくぐると、沙月が呆気にとられた表情を浮かべる。
そこには想像以上に快適そうな生活空間があった。
まず視界に映ったのが実に広々としたリビングルーム。
靴を脱ぐスペースとして土間はあっても、リビングとの間に仕切りはない。
伝統的な和風建築とは異なっているが、室内の雰囲気をあえて表現するのならモダンな空間といった感じか。
沙月が暮らしているお城の部屋のように、格式や高級感に溢れているわけではなかった。
だが、ドワーフが技術を振るって建築し、設計にはリオも関わっているため、日本人が暮らしてもさして違和感を覚えないであろう内装になっている。
清潔で居心地の良さそうな室内には、品質の良い家具がゆとりを持って設置されていた。
「靴は脱いでもらってもいいですか？　そちらが靴箱になっているので」
「あ、……はい」

リオに言われるがまま、沙月はおずおずと靴を脱いだ。
そうして靴箱に靴を収納したところで、あらためて室内を見渡す。
「お城の部屋より快適そうなんだけど。どこの最高級ホテルのスイートルームよ、ここ……」
顔を引きつらせて、沙月はぼそりと呟いた。
そんな呟きが聞こえていたのか、
「だよなぁ。六人で暮らしているのにまだ部屋が余ってるもん」
うんうんと頷きながら、傍にいた雅人がしみじみと語った。
そんな雅人に美春と亜紀も同意するように頷いて、
「あはは。ここに住み慣れちゃうと王都で泊まっている宿屋の部屋が狭く思えちゃうかもね」
「うん。ご飯もここで食べた方が美味しいし」
などと、語り始めた。
「一応、王都で有数の高級ホテルなんだけどね、私達が泊まっている場所って。言っておくけど、あのホテルの部屋は貴族が暮らす家のそれと大差ないくらいには快適よ」
と、後ろからセリアが苦笑しながら補足した。
この家の建設に大きく関与した精霊の民の里に暮らすドワーフ達が聞けば、「当然だ」とさぞかし得意げな顔をして頷くだろう。
「へ、へぇ……。そう、なんですか」

沙月はもはや理解が追い付かず、部屋の内装を見渡しながら、上の空で相づちを打つことしかできなかった。

「いつまでも立ち話をするのもなんですから、座ってください。積もる話もあるでしょうし、地球出身の四人でゆっくりとどうぞ。今、紅茶とお菓子を用意しますから」

立ち尽くした沙月へリオが言う。

「セシリアとアイシアは別件で話したいことがありますから、俺の部屋で待っていてくれますか？」

「はーい。行きましょ、アイシア」

「うん」

セリアがアイシアと一緒にリオの部屋へと向かう。

だが、セリアは扉の手前で何かを思い出したように足を止めると、

「あ、ハルト！　紅茶は例のアレがいいな。わかってると思うけど熱々でね！」

と、ご機嫌な笑みを浮かべて、去り際にリクエストした。

「わかりました」

リオは快く頷き、キッチンへと歩き出す。

「あ、ハルトさん、私も手伝います」

すると、タイミングを窺(うかが)っていたように、美春が手伝いを申し出た。

「美春さんは沙月さんと一緒にゆっくりとくつろいでいてください」
リオが頭(かぶり)を振って提案を断る。
だが、美春は既に動き始めていて、
「そんなわけにはいきませんよ。それに二人で作った方が早いですから。手伝わせてください」
そう言って、キッチンまでやって来てしまった。
キッチンの前でリオと美春が向かい合う。
「えっと、じゃあお願いしてもいいですか？」
ちょっとだけ照れたような表情を覗かせると、リオが言った。
「はい」
嬉しそうに美春が頷く。
そうして二人はキッチンに入って、お茶の準備を始めた。
その連携は随分と様になっている。
結局、リビングに残されたのは沙月、亜紀、雅人の三人だけだった。
「沙月姉ちゃん、座ろうぜ」
そう言って、雅人がフロアコーナーのソファに座る。
亜紀も一緒に腰を下ろした。
（何か思った以上にみんな順応してるわね。私、これでも少しは身

構えてやって来たのに）

先ほどまで存分に夜間飛行を楽しんでおいて今更だが、何だか空回りしたような気がして釈然としない。

色々と聞きたいことはあったが、何だか素直に尋ねるのも癪（しゃく）な気がして、沙月は肩を落としながらソファに座ったのだった。

「あ、すごい。ふわふわしてる」

☆★☆★☆★

リオと美春がキッチンから戻ってきた。

白陶器製の茶器一式を使って、テーブルの上に人数分の紅茶を用意していく。

「沙月さん、夜明け前には城に戻ります。危なくなったらお伝えしますので、とりあえず時間は気にしないでゆっくり語らってください」

「あ、うん。えっと、ありがとう……」

少し緊張しているのか、沙月がおずおずと礼を言う。

美春達と話していればそのうち普段通りになるだろう。

リオはそう判断して、微笑を浮かべて応じた。

「いえ、それじゃあ俺はこれで」

そう言って、リオが自らの部屋へと戻っていく。

やがてリビングに残ったのが地球出身の四人だけになったところで、

「えっと、亜紀ちゃんと雅人君にはもう言ったけど、あらためてお久しぶり。美春ちゃん。元気そうで何よりよ」

と、沙月が美春達に話しかけた。

「はい。沙月さんもお元気そうで良かったです」

美春が柔らかな表情を浮かべて答える。

「うん。元気よ。まぁ、特にすることもなく、ずっとお城の中にいたしね。それにこうして美春ちゃん達とも会えたし」

沙月が微笑みかけると、美春達は照れ臭そうにはにかんだ。

「それでね。楽しくお話ししたいことは色々あるんだけど、先に必要なことを話さない？　時間は限られているし」

と、時間を有効活用するべく、沙月が提案する。

「はい。えっと、じゃあ何から喋りましょうか？」

美春が小首を傾(かし)げて尋ねた。

「うーん、そうね。とりあえず貴方達がこの世界に来た時の状況と、これまで何があったのかを教えてくれないかな？」

「……はい」

頷くと、美春はそっと目を瞬(まばた)いた。

「えっと、私達も突然のことでよくわからなかったのですが――」

当時のことを思い出し、小さく息を吐くと、美春は語った。
気がついたら平原にいたこと、道なき道を進むと奴隷商人の傭兵に遭遇したこと、そのまま拉致されて奴隷にされかけたこと、偶然リオが通りかかって助けてくれたこと、それからリオが美春達を保護してくれたこと、そうして今日に至るまでにあったことを――。
沙月は話の腰を折ることはしないで、黙って美春の話に耳を傾けていた。
疑問は浮かび尋ねたいことも色々とあったが、まずは何があったのかを通して知りたかったのだ。
そうしてすべての話を聞き終えると、沙月は沈痛な面持ちを浮かべる。

「ごめんなさい。美春ちゃん達がこの世界にやって来たのって、勇者として召喚された私に巻き込まれたから……よね。まさか奴隷にされかけていたなんて……」

言って、沙月は頭を下げた。
どうやら美春達に降りかかった不幸な出来事の責任が自分にあると考えているようである。
美春達は一瞬だけきょとんとした表情を浮かべると、

「そんなことないですよ！」

声を揃えて否定した。
沙月の身体がびくりと震える。

「でも……」

沙月の口から消え入りそうな声が零(こぼ)れ出た。

「沙月さんだって巻き込まれただけじゃないですか。謝られる理由なんてありませんよ」

美春が語った。

「そうだぜ。沙月姉ちゃんが負い目を感じる必要なんかねーよ」

「二人の言うとおりです」

雅人と亜紀も美春に続いて語る。

「でも私が一緒に居なければ貴方達が巻き込まれることはなかったかもしれないのよ？　私達がこの世界にやって来たのは聖石（ブレイブストーン）が勇者を呼び出したからだもの……」

「それは語っても仕方がないことです。自分が勇者としてこんな世界に召喚されるなんて知りようがないんですから」

美春はゆっくりと頭（かぶり）を振って答えた。

「美春ちゃん……」

沙月がやるせない表情できゅっと唇を噛む。

「美春姉ちゃんの言う通りだって。それにハルト兄ちゃんの話だと俺達が離れ離れになったのは事故みたいなもんだって言ってたし、事故なら防ぎようがねーよ」

雅人も励ますようにそんなことを言った。

すると沙月が訝しげな表情を浮かべる。

「えっと……それってどういうこと？」

その疑問を解消するべく、沙月は雅人に質問を投げかけた。

「え？　あー、えっと……。なんだっけ。難しい話でよく覚えてねぇや。亜紀姉ちゃん、パス！」

バツが悪そうに笑うと、雅人は亜紀に説明を頼んだ。

どうやら細かい話は覚えていないようである。

「え、わ、私？　えーっと……」

突然に水を向けられた亜紀も咄嗟のことで慌ててしまう。

そんな二人の反応を横から見て、美春は優しく微笑んだ。

「詳しい原理はよくわからないんですけど、どうもこの世界に来るにあたって沙月さんと貴久君の二人を召喚する魔術が同時に発動したことが離れ離れになった原因らしいです」

そして美春が説明を引き継ぐ。

「私と貴久君を召喚する魔術？」

「空間に干渉して離れた場所に移動する魔術があるみたいです。私達が呼び出されたのはその一種だとか」

「へぇ、初めて聞いたけど、やっぱりそういう魔術があるんだ」

沙月は興味深そうに頷いた。

「はい。それで私達ってこの世界に来る直前まで一緒にいたじゃないですか。発動した魔術は二つで、沙月さんと貴久君を別々に呼び

出すものです。
二人はそれぞれ呼び出された先に移動することができたみたいですが、傍にいた私達三人は二つの魔術に巻き込まれることになってしまった。
それらが相互に干渉しあって近くにいた私達が転移する座標がズレてしまったとか……」
と、美春が以前にリオから聞いた説明を自分なりに噛み砕いて伝える。

「それはつまり私とは別に貴久君も勇者として召喚された可能性があるってこと……よね？」
「はい。そうなんじゃないかって、ハルトさんは言っていました。もっとも二人に発動した魔術を目撃したのが私しかいなかったので、私の見たことが正しければという話ですが……。沙月さんは召喚される直前にどんな風に感じましたか？」
「私は周囲の景色がぐにゃりって歪んで見えたわね。まるで空間が渦を巻くみたいに」
「それが魔術が発動した証らしいです。同じ現象が沙月さんとは別に貴久君を中心にして起こっているのを見たんです」
「なるほど、そういうことだったのね」

沙月は何かが腑に落ちたというような表情を浮かべた。

「ありがとう。すごく興味深いことが聞けた」
「いえ、私はハルトさんの受け売りにすぎませんから」
「ふーん、そうなんだ。……彼が何者なのかはちょっと気になるんだけど、これ以上話が脱線するのは好ましくないか」

そう言って、沙月が苦笑する。

続けて、少し真面目な顔つきを浮かべると、

「ごめんなさい。ありがとう。どっちの言葉を言えばいいのか、ちょっとわからないんだけど、貴方達に会えて本当に良かった。

私はこの世界に一人でやって来たからさ。最初は私だけがこんな世界にやって来たんじゃないかって思って絶望したの。

でも、他に召喚された勇者の一人が日本人だってことを知って、もしかしたら美春ちゃん達もこの世界にいるんじゃないかってずっと思っていた。

不安だったわ。だから、彼――ハルト君が貴方達の名前を出して保護していると言った時はすごく驚いた。そして同時にすごく嬉しかった。無事でいてくれて本当にありがとう」

沙月は心の底から安堵したように語った。

「はい。私達もすごく嬉しいです。ハルトさんが沙月さんの居場所がお城だって教えてくれた時はどうやって会えばいいのかと思いましたけど、沙月さんと渡りをつけてくるって言ってくれて……」

美春が少し照れくさそうに言った。

「そっか、彼にはずいぶんと助けられちゃったわね」

「はい、本当にハルトさんには随分と良くしてもらっています。何もかも任せきりで……」

言って、美春が申し訳なさそうに微笑む。

「ちゃんとお礼をしないとね」

「はい」

美春は力強く頷いた。

「それにしてもこれまで辛かったでしょう。よく亜紀ちゃんと雅人君を支えてあげたわね。偉いわよ、美春ちゃん」

沙月が隣に座る美春の手をぎゅっと握る。

美春は慌てて首を左右に振った。

「いえ、私なんか何もできなくて……」

「そんなことないと思うわよ。まったく見知らぬ土地で傍に自分の知っている人がいるっていうのは、それだけで安心できるものなんだから。ましてやそれが自分よりも年長者なら。ね、二人とも？」

と、沙月が亜紀と雅人を見やって尋ねた。

「はい！」

「うん！」

亜紀と雅人が声をそろえて頷く。

「美春姉ちゃんが別の馬車に乗せられてどっかに行った時はもう駄目かと思ったぜ。亜紀姉ちゃんなんか泣いていたしな」

すると雅人がそんなことを語り始めた。

「なっ！　そ、そんなことないわよ！」

隣に座っていた亜紀が過敏に反応する。

「嘘だぁ。取り乱して泣きそうな感じで騒ぎまくってたじゃん」

「そんなことないってば！　だいたい――」
雅人がぺらぺらと亜紀の話を始めて、亜紀が慌ててそれを制止しようとする。
そうしていつものように軽い兄弟喧嘩に発展しかけたのだが――。
「ふ、ふふ……、あはは」
何だか可笑しそうに、沙月がくすくすと笑い始めてしまった。
呆気にとられて、亜紀と雅人が口論を中断する。
「えっと、沙月さん？」
隣に座っていた美春が沙月に尋ねた。
「ふふ……。あー、可笑しい。笑ってごめんなさい」
ひとしきり笑い終えると、沙月が笑ったことに対して謝罪する。
「いや、いいけど。何が可笑しかったんだ？」
と、雅人が尋ねる。
「だって日本にいた頃はこうして二人が喧嘩する姿を見かけたなと思って。久々に見たら嬉しくて、何だか可笑しくなっちゃった」
沙月は急に笑い始めた理由を説明した。
「あー、なるほどなぁ」
「あはは」

雅人と亜紀がバツが悪そうに苦笑いする。

「確かにそうですね。いつもならヒートアップしすぎたところでお兄ちゃんか美春お姉ちゃんが止めてくれましたけど」

亜紀が少し寂しそうな表情を覗(のぞ)かせる。

「最近はハルト兄ちゃんと美春姉ちゃんの役目だなぁ」

雅人はしみじみと語った。

「そう……。貴久君の居場所はまだわからないのよね？」

亜紀の表情の変化を察し、沙月が尋ねた。

「はい。ハルトさんが探してみてくれているようなんですけど……。沙月さんの方は……？」

頷き、美春が尋ね返す。

「わからないわ」

沙月は申し訳なさそうに頭(かぶり)を振った。

「そうですか……」

美春が少し落胆した様子で返事をする。

雅人も残念そうに溜息を吐いており、亜紀はしょんぼりとした様子でうつむいていた。

沙月はそんな三人の反応を確認すると、
「けどね。さっきの話を聞いて、一つだけ有力な可能性があるかもしれないって思ったわ」
と、そんなことを言った。
「ほ、本当ですか？」
亜紀が勢いよく腰を持ち上げる。
「落ち着いてちょうだい。可能性はあると思っているけど、確証はない話なの」
「そ、それでもいいです！　教えてください！　お兄ちゃんはどこに？」
亜紀は藁（わら）にもすがる気持ちで尋ねた。
「セントステラ王国よ。ここガルアーク王国の南にある国。知っているかしら？」
「はい。ハルトさんに教えてもらいました」
亜紀が即答する。
「そう言えばハルト兄ちゃんが言ってたな。そこの国にも勇者がいるかもしれないとか」
リオの言葉を思い出すように雅人が言った。
「あら、知っているんだ。なかなか情報通ね。今ガルアーク王国の

王城で私が主賓となっている夜会が開催されているのは知っているのよね？　実はその夜会にセントステラ王国の勇者も招待したみたいなの。まぁ、まだ来ていないんだけどね」

と、沙月が苦笑しながら語る。

もしかしてその勇者が貴久なのではないかと期待を抱いたが、亜紀は「まだ来ていない」という発言でがっくりとうなだれた。

だが、沙月はそのまま話を続けることにする。

「セントステラって国は随分と閉鎖的な国らしいのよ。一応、使者は送ったらしいんだけど、返事は保留されたままなの。いつもなら返事を保留なんてしないで断るらしいんだけどね。

で、使者の持っている親書には私の存在が記載されているわ。もし貴久君がセントステラ王国の勇者ならその親書を読んでいるはずよ。ならやって来てくれると思わない？」

尋ねて、沙月はにやりと笑みを浮かべた。

「は、はい！」

顔を持ち上げて、こくこくと亜紀が頷く。

「夜会は三日にわたって開催されるから、まだ可能性はあると思うの。例外はあるらしいけど、連日して夜会が開催される場合って、他国は初日から招待されても遠慮して二日目以降に出席することもよくあるみたいだし」

そう、国が連日して夜会を開催する際、他国の人間を招待する場合には、相手国との関係や国の格に応じて、招待する日程をずらすことがしばしば行われている。

初日から招待する国、二日目以降から招待する国という風にだ。
今回は自国の貴族に優先して沙月と関係を持たせるため、初日から招待される国は厳選されており、ベルトラム王国の特別政府とセントステラ王国だけであった。
ちなみに明日以降は近隣の小国からも多くの人間が出席する予定になっている。

「ほ、本当ですか！」
「うん。まぁ絶対に参加するかはわからないんだけどね。でも、王族の人に聞いた話だと、セントステラ王国って閉鎖的だけど敵対もしていないらしいから、出席してくれる可能性はあると思うわ」
「もしかしたらお兄ちゃんとも……」

亜紀は希望に満ちた表情を浮かべた。
沙月は数秒ほどそんな彼女の顔を見つめると、

「……それでね。ちょっと貴方達に聞きたいことがあるの」

そう切り出して、美春達に真剣な眼差しを送った。

「はい。なんでしょう？」

美春がやや身構えて答える。

「もし貴久君が見つかった場合、貴方達はそれからどうしたいと思っているのかしら？」

と、今後の美春達の行方について、沙月は核心を突く質問を投げかけた。

「どうしたいって、もちろんお兄ちゃんと一緒にいたいです！」

亜紀が誰よりも早く自らの意志を表明する。

「まぁ、そうだよなぁ」

雅人も亜紀に続いた。

その一方で、美春は何か言いたそうな表情を浮かべていたが、亜紀と雅人の話を眺めているだけで、口を噤(つぐ)んでいた。

沙月はそんな三人の様子を見渡すと、

「そう……。それは彼――ハルト君と別れるってことかしら？」

そう尋ねたのだった。

「え……」

沙月に投げかけられた質問に、亜紀と雅人が硬直する。

ただ、二人とは対照的に、美春だけは物憂げな表情を浮かべていた。

「な、なんでハルト兄ちゃんと離れることになるんだよ！？　よくわかんねぇ。いったいどうしてそうなるんだ？」

慌てて立ち上がり、雅人が尋ねる。

「聞き方が悪かったかもしれないわね。貴方達は近い将来に貴久君と会えるかもしれない。そうなった時にハルト君と貴久君、どちらに保護してもらうつもりなのかしら？」

と、沙月はあくまでも冷静に質問を投げかけた。

「だ、だから、それとハルト兄ちゃんと離れることになる意味が……」

沙月の雰囲気に気おされて、雅人の声が尻すぼみになっていく。

「だって、仮に、貴久君が勇者だったら、私と同じように国に所属している可能性が高いわ。そうなれば今頃、貴久君はどこかの国の中枢に位置する人間になっているはずよ。今のところ一番可能性がありそうなのがセントステラ王国ね」

と、沙月がそんなことを語った。

雅人が不安そうに沙月を見つめる。

沙月は雅人の返答を待たずに、先を続けることにした。

「つまり、貴久君に保護してもらうことは、彼が所属する国に保護してもらうことと同義になる。そうなった時、ハルト君が貴方達と行動を共にする理由はある？」

沙月は落ち着いた口調で質問を投げかけた。

「あ、あるよ！　ハルト兄ちゃんは俺の剣の師匠なんだ！」

雅人が声を張り上げて答えた。

「そう、剣術を教えてもらっているのね。身を守る術は身につけておいた方がいいわ。けど、ハルト君が雅人君の師匠であることと、ハルト君が貴方達と一緒に貴久君のいる国に所属するかどうかは別問題よ」

言って、沙月が雅人をじっと見据える。

「な、なんで？」

「日本の義務教育じゃないの。ハルト君には彼の人生がある。彼の立ち位置がある。それに、もしかしたら何かやらなければいけないことがあるかもしれない。いつまでもみんなで仲良く同じ場所を進みましょうというわけにはいかないのよ。わかるでしょう？」

沙月は子供を諭すように優しく語りかけた。

「っ……」

感情はともかく理屈では理解できたのか、雅人が言葉に詰まる。

「あ、あの。なら貴久お兄ちゃんが私達のところに来てもらうとか……」

そこで隣に座る亜紀がおずおずと呟いた。

「そこは国との取り決め次第だけど、一度、勇者として国に所属した以上、アルバイト感覚で気安く辞められると思う？」

「です、よね……」

最初からわかっていたのか、亜紀がしょんぼりとうな垂れるように頷く。

「いきなり変なことを言ってしまってごめんなさい。でもね。こうして私と出会えたように貴久君とも近いうちに会えるかもしれないの」

「お兄ちゃんと近いうちに……」

亜紀は言葉の意味を噛みしめるように呟いた。

「二人は貴久君の妹と弟でしょ。なら、いつか再会できた時に一緒に居たいと思うことはとても自然な選択肢だと思うわ。

けどね、安易にその選択肢を選ばないでほしいの。その理由は貴方達の身の安全にも関わってくることだから」

「……私達の身の安全ですか？」

尋ねて、亜紀は首を傾(かし)げた。

「ええ、さっき言ったでしょう。国に保護してもらうことと同義だって。勇者っていうのはすごく面倒な立場なの。

実質的な権能はないけど、国政には大きな影響を及ぼしうる。だから多くの人間が勇者を利用しようとしてくるわ。

その勇者の周りに人質としてちょうど良さそうな人間が転がりこんできたら、どうなるかは漠然と予想できない？」

「……どう、なるんでしょうか？」

「それはその国によるとしか言えないけど……、何もない限りは優しくしてくれるはずよ。けど、いざという時になったら手のひらは返してくるかもしれない」

沙月の脳裏には色々と嫌な予想が思い浮かんだが、あえて具体的な想像を語ることは避けた。

二人くらいの年齢の子に聞かせるには刺激が強すぎる。

「いずれにせよ、この世界は日本ほど優しい場所じゃないわ。今はハルト君に守ってもらっているけど、お城に行ったら人間の汚い面を色々とみることになるかもしれない。危険が待ち構えているかも

しれない。それでも貴方達は貴久君の下に行きたい？」
「……」
亜紀と雅人は即座に答えることができなかった。
それぞれ何を考えているのかはわからないが、少し思いつめたような表情を覗(のぞ)かせている。
「聞いておいてなんだけど、別に今すぐに答えを出さなきゃいけない問題じゃないわ。すぐに答えが出る問題だとは思っていないもの」
亜紀と雅人は意表を突かれたように、「え？」という表情を浮かべた。
「本当はね。貴久君が現れなくとも、私はガルアーク王国に頼んで貴方達のことを保護しても構わないと思っているの。ううん、むしろ一緒に居たいと思っている。もちろん貴方達が望むのならば、という話だけれどね」
「そっか、そういう選択肢もあるのか……」
と、雅人が得心したように呟いた。
「うん。けど、さっき教えた危険は私のところにやって来ても生じるわ。すごく自分勝手だとは思うけど、私は地球に帰ることを前提に勇者をやるって契約を国と結んでいる。言うならば勇者は腰掛けね」
語って、沙月が小さく自嘲(じちょう)をたたえる。
「でも、それでもガルアーク王国は私に勇者をやってもらいたかった。私もこの世界で生きて地球に帰るためにはガルアーク王国の勇

者になることが必要だった。そういう微妙な思惑を相互に抱いた状態で今の関係が成立しているの。この意味がわかる？」

沙月が美春達に問いかける。

「えっと、……沙月さんは地球に帰りたい。ガルアーク王国は沙月さんに勇者をやってもらいたい。だから、本当はガルアーク王国は沙月さんには地球に帰らないでいてもらいたい」

美春が思案顔を浮かべて答えた。

「その通りよ。だから、貴方達がガルアーク王国に来てくれるのならば、私の人質として利用される危険性を孕んでいると思ってちょうだい」

そう言って、沙月は美春達に困ったように微笑みかけた。

「ハルト君、貴久君、私、それぞれ別の立ち位置で生きているわ。みんなで一緒にいましょうっていうのは少し難しいかもしれない。悩ましい問題だとは思うけど、そのことを頭の片隅に置いといてほしいの。

もうその問題に直面はしているし、少なくとも答えを出すまではハルト君に甘えっぱなしになっちゃうけど、もう少し考える時間は必要でしょう？」

と、沙月は亜紀と雅人に優しく尋ねかけた。

二人がこくりと深く頷く。

「貴方達のことを必要としている人がいる。貴方達と一緒に居たいと思っている人がいる。

そういった人達の言葉に耳を傾けることは大切よ。困った時はサポートだってしてあげる。それはハルト君や貴久君も同じだと思う。
でも、貴方達の人生なんだから、貴方達自身でよく考えて、自分の気持ちに悔いがないように答えを出してほしい……かな」

そっとはにかんで、沙月が言った。
それから少し照れ臭そうに視線をさまよわせると、

「と、まぁ、美春ちゃんは私が言ったお節介の意味を理解していたような気がするんだけど、どうかな？」

美春に視線を定めて、沙月が尋ねた。

「あ、いえ。私は……その、漠然とですけど、こうして沙月さんとも会えたし、これから貴久君も見つかったらどうなるんだろうって……」
「そう、答えは見つかっているの？」
「えっと……」

ちらりと亜紀と雅人を見やると、美春は困ったような笑みを浮かべた。

「一応、見つけてはいるのかな」

沙月が微笑を浮かべて答える。

「そっか……、じゃあこの話は止め！　せっかく再会できたのに、何か変な空気にしちゃってごめんね！　別々にいる限り、私はそう頻繁に貴方達と会えそうにないからさ。悔いのないように思いついたことは伝えておこうと思ったの」

僅かに顔を紅潮させて、沙月が手振りで話の中断を促す。
話を終えて、落ち着いたことで、気恥ずかしくなってしまったようである。
美春達はそんな沙月の様子をくすくすと笑って見つめていた。
良い感じに場の雰囲気が和んだようだ。

「はい、じゃあ小難しい話はここらへんにしておいて、何か楽しい話でもしましょう。私の話をしてもいいんだけど、お城に引きこもってばかりだったから大した話もないしなぁ……。部屋は立派なんだけど、何だか息苦しくて窮屈なのよねぇ。それに比べてここはいいわ。なんだかすごく落ち着く」

と、お城での生活を思い出し、沙月はげんなりと溜息を吐いた。

「確かにもうここが我が家って感じになってるかもなぁ。久々に帰ってきたって気がするもん。あー、せっかく戻ってきたんだから風呂にでも入るかぁ」

雅人がのびのびと腕を伸ばして言った。

「いいわね。お風呂！　手と足を伸ばしてゆっくりとお湯に浸かりたいなぁ。日本の湯船が懐かしい」

と、寂しそうな表情で沙月が同意する。

「あ、お風呂、ありますよ。檜風呂と岩風呂が。みんなで入りませんか」

妙案だと言わんばかりに亜紀が告げる。

「あー、いいわねぇ。檜風呂と岩風呂なんて最高の組み合わせじゃない」

沙月が色良い声で答えた。

「ま、マジで！　みんなで入るの？」

と、雅人がドギマギした様子で尋ねる。

「ハルトさんならまだしも、アンタはカウント外に決まってるでしょ！」

亜紀は即座に雅人の頭を小突いた。

「痛ぇーなぁ。冗談だよ」

「嘘、鼻の下が伸びて、目がいやらしかったわよ。そんな目で私達を見ないでくれる」

頭を押さえる雅人を、亜紀がシラッとした視線で睨む。

「いやぁ、美春姉ちゃんと沙月姉ちゃんはともかく、亜紀姉ちゃんの裸なんて……。あ、いや、嘘です！　殴らないで！」

途中まで言いかけると、雅人が顔を青ざめさせて勢いよく顔を左右に振った。

亜紀が細い腕を持ち上げて、ぷるぷると震えながら雅人に振りかぶっている。

「あはは。じゃあ、ハルトさんにお願いして入りますか？」

と、美春が提案した。

「うん。できるのなら……って、ちょっと待って！」

沙月がハッとした表情を浮かべて言った。

「えっと、はい……」

美春が疑問符を浮かべて沙月の顔を見る。

「……本当にあるの？　お風呂が？」

尋ねて、沙月はごくりと唾を呑みこんだ。

「は、はい。ちょっとした温泉みたいな浴場がありますよ」

妙な迫力を感じ取って、美春がこくこくと頷く。

「お、温泉ですって？」

その時、ぎらりと、沙月の目が光った。

☆★☆★☆★

美春達が風呂に入るかどうかで盛り上がる少し前、リオは自室でアイシアとセリアの二人から近況を聞いていた。

ベッドには二人が座っており、リオが向かい合うようにして椅子に座っている。

三人のすぐ傍には小さな机が置かれていた。

その上にある三つのカップがゆらゆらと湯気を放っている。
「王都の宿屋に滞在している間、何か変わったことはありませんでしたか？」
紅茶に口をつけて小さく息を吐くと、リオが尋ねた。
「別に何も」
と、まずはアイシアが結論だけを簡潔に述べる。
不愛想にしか見えない無表情ではあるが、それが普段通りのアイシアだ。
それが何だか可笑しくて、リオはくすりと笑った。
「最初は緊張していたみたいだけど、良い感じに都市の生活に慣れたみたいよ。私達も付き添って安全な区域を散歩したりしたし。あ、もちろんフードは被ったわよ」
アイシアとは対照的に、セリアが具体的な情報も混ぜて答える。
その表情や仕草に不安やストレスといったものは見当たらない。
「そうですか。ありがとうございます。二人とも」
いつもと変わらない二人の様子に、リオが嬉しそうに礼を告げる。
何だかこうして話をしているだけで、久しぶりにホッとすることができた気がした。
「リオこそ大丈夫だった？　何か嫌なこととかなかった？」
尋ねて、セリアはじっとリオの顔を覗き込んだ。

「はい。問題はありませんでしたよ。けど、やっぱりみんながいる家が一番落ち着きますね」

リオが微笑みながら頷く。

「えっと、そう？　ミハル達もそう思っていると思うわよ」

セリアが少し照れた様子で告げた。

「そうですか。良かったです」

答えて、リオは紅茶の入ったカップをそっと見下ろした。

そうして口元に安らかな笑みを薄っすらと覗(のぞ)かせる。

「そう言えば、返答が遅くなってしまいすみませんでした。セリア先生がご実家に帰られる話をしたいのですが、よろしいですか？」

数秒ほどカップを見つめていたかと思うと、リオは顔を上げてセリアを見やった。

「あ、うん」

不意打ち気味に視線が重なり、セリアが少し上ずった声で返事をする。

どきりと心臓が高鳴り、何だか顔が少し熱くなったのを感じた。

「やはりご自宅へのご挨拶には俺も同行させてください。お急ぎとは思いますが、もう少し時間を頂戴してもよろしいでしょうか？」

その言葉でセリアは落ち着きを取り戻した。
そう言えば、結局、セリアがベルトラム王国の実家に一度戻るという話は保留にされたままであった。
リオに迷惑をかけないためにも単身で実家に戻ろうと考えていたセリアであったが、いったん別行動したい旨を申し出たのがガルアーク王国の王都にやって来る直前のことである。
リオはセリアに同行したいと告げたのだが、ベルトラム王国の実家に戻ってどの程度の時間を要するのかが予測がつかなかったため、あらかじめスケジュールが決まっていた夜会への出席を優先させてもらっていたのだ。

「えっと、急いでいるってわけじゃないけど……いいの？」

と、セリアがおずおずと尋ねる。

「いいのも何も、先生をこの家に連れてきたのは俺ですよ。俺もご一緒させていただくのが筋というものです」
「で、でもあの城から抜け出そうと決めたのは私よ。それにひょっとしなくとも一緒に行けばリオに迷惑をかけちゃうと思うし……、これって私の我儘みたいなものだし……」

尻すぼみにセリアが語る。

「前にも言いましたが、何も迷惑ではありません。セリア先生をベルトラム王国から連れ出したのは、俺が考えて、俺が決めた行動なんですよ？　なら、その責任は俺も負うべきです。大切なご息女を拉致してしまったんですから」
「ら、拉致じゃないわよ！　私が同意したんだから」

拉致という言葉に反応して、思わずセリアが叫ぶ。

リオは困ったように微笑むと、

「けど、ご実家にはそのように見えているかもしれません。事情を説明するために手紙を送ったとはいえ、検閲を警戒してほとんど何も説明に必要な経緯は書けなかったのでしょう？」

と、そう答えた。

セリアが送った手紙は家族だけがセリアとわかるように書かれた文章が記載されている。

だが、不必要なことを書いて検閲されれば差出人がセリアであると特定される恐れもあると考え、大した情報を書くことはできずにいたのだ。

「う、うん」

「ならセリア先生が拉致されたと考えていても何もおかしくはありませんよ。そうでなくたってセリア先生が何をしているのか、きっと心配しているはずです。だからこそセリア先生も一度ご実家に帰ろうと考えたのでしょう？」

「うん……」

セリアは力弱く頷いた。

「なら俺も一緒に行かせてください。セリア先生のご実家にご心配をおかけしたことの謝罪はいつかしなければいけないと考えていましたから」

リオが落ち着いた声で語りかける。

「やっぱり迷惑をかけちゃうなぁ……」

苦笑を浮かべて、セリアは誰にも聞こえない声でぼそりと呟いた。
心情としてはこれ以上リオに迷惑をかけるのはかなり不本意なのだが、感情的になって助けを断っても益になることは何もない。
実際、リオが来てくれれば非常に心強いと思う自分もいる。
セリアには返す言葉もなかった。

「セリア先生？」

何を呟いたのかと、リオが小首を傾げる。

「……もう。これじゃどっちが先生かわからないわね。そう言ったの」

セリアは少し嬉しそうに微笑むと、そう言った。

「一応、精神年齢は俺の方が上なんですよ」

僅かに目を丸くすると、リオが冗談めかして言う。
セリアはこくりと頷き、姿勢を正すと、

「リオ、ありがとう。よろしくお願いします」

そう言って、リオに深く頭を下げたのだった。

第９７話　お風呂

日本に暮らす女子高生であった皇沙月（すめらぎさつき）がこの世界にやって来てから三か月以上が経過した。

そんな彼女が日常生活において抱く最大の不満がお風呂である。

王城となればもちろん専用の浴場施設が備わっているのだが、浴場には底の浅い浴槽があるだけで、洗い場という髪や身体を洗うスペースが存在しない。

身体や髪は浴槽の中で洗い、湯に浸かることを目的としていないため、浴槽の底を深くする必要がないのだ。

このように浴槽一つでお風呂がすべて完結してしまうという関係上、必然的に浴槽を利用するごとにお湯を入れ替えることになり、浴槽のサイズもそれほど大きくはできない――というよりも無駄に大きくする必要があまりない。

もちろん、お城の浴場となれば身の回りの世話をする者が同室するため、部屋の広さはそれなりに確保してあるのだが、浴槽自体は比較的こじんまりとしている。

ちなみに、専用の浴場施設を備えているのは王侯貴族が暮らす邸宅くらいで、平民の家になると大きな風呂桶を適当な室内に置いて、そこで髪と身体を洗うのが一般的だ。

お風呂でお湯を贅沢に使用することに慣れている日本人からすれば、耐え難いと感じる者がいてもおかしくはない生活文化であろう。

加えて、十七歳の少女と言えば花も恥じらう乙女であり、お風呂が大好きなお年頃でもある。

沙月もその例に漏れず長風呂を習慣としていた。

つまるところ、沙月は飢えていたのである。

一日の疲れを湯船の中で解消することに――。

温かいお湯に浸かって、ゆったりと手足を伸ばすことに――。

その快感を、忘れられずにいたのだ。
しかし、だからといって、個人的な我儘で高い工事費用を払わせ、王城の浴場施設を造り変えることなどできるわけもない。
その結果、この数か月間、沙月は風呂に入る度にげんなりと溜息を吐き、悶々とした日々を過ごしてきた。
この点、この世界に来て初日から温泉気分を味わえた美春達には少し想像しがたい苦痛なのかもしれない。
もっとも、ここ最近で王都の宿屋に泊るようになって、ようやく文化的な衝撃を受けてはいたのだが。
それはさておき、今の沙月にとって、温泉のようなお風呂があるとは誠に聞き捨てならない話であった。
是非とも家主と交渉してお風呂に入る許可を得なければ――。
そう決意したところに、タイミング良くリオがお茶を淹れ直しに来た。
この状況、実に僥倖（ぎょうこう）である。
沙月はとっさにソファから腰を浮かせると、素早くリオに近寄った。

「ねぇ、ハルト君。頼みがあるんだけど」

と、沙月がにっこりと満面の笑みを浮かべて言った。
すぐ傍のソファでは美春達が苦笑いを浮かべて様子を見守っている。

「えっと、はい。なんでしょう？」

妙な迫力を感じ取り、リオが一歩後ずさる。
その手には空になったティーポットが握られていた。

「お風呂を……貸してほしいの」

神妙な顔つきで沙月が頼みこむ。
まるで魔王退治にでも赴く勇者の如き決意を、リオは彼女から感じとった。

「は、はい。どうぞ」

そんな謎の迫力に圧倒されながらも、リオが頷いた。
すると途端に沙月の表情がパッと明るくなる。

「本当？　いいの？」
「はい、大丈夫ですよ。別にお風呂くらい勝手に入ってもよかったのに」

リオが苦笑しながら答えた。
この家の住人である美春達が一緒にいるのだから、別にお風呂くらい勝手に入ってもらっても特に気にするようなことではない。
だが、沙月は整然と頭(かぶり)を振って、

「何を言っているのよ。人様の家でお風呂を借りるんだから、きちんと家主様の了承を得るのが筋ってものでしょう」

と、さも当然とばかりに語る。
随分と律儀な人だなと思い、リオはそっと微笑んだ。

「了解です。じゃあ、お風呂場はあそこの扉の向こうなので、美春さん達に案内してもらってください」
「やったぁ！」

家主の了承を得たことで、沙月がグッと拳に力を込めて喜びを表

現する。

「じゃあ美春ちゃん、亜紀ちゃん、行きましょう」

沙月が振り返って、美春と亜紀に言った。

「洗い場のシャワーが二つしかないですから、沙月さんは先に美春お姉ちゃんと入ってきてください。せっかくなので私はセシリアさん達も呼んで後から行きます」

と、亜紀が応じる。

お風呂場のスペース的にこの家に今いる女性達が全員で入ってもゆとりはあるのだが、身体を洗い流すための魔道具の数が不足していた。

もともとこの家はリオが当分の間一人で暮らすことを前提に作られた家であったため、そこら辺は設置が遅れているのだ。

「ありがとう亜紀ちゃん。じゃあ沙月さん、行きましょうか」

美春が頷き、先に沙月を案内することになった。

「どうぞごゆっくり」

とんとん拍子で話が決まっていく様子を微笑ましげに眺めながら、リオはその背中に声をかけたのだった。

☆★☆★☆★

「……広い」

浴場に入ると沙月が呟いた。
脱衣所の入り口に設置された暖簾(のれん)を見かけた時は思わず「ここは旅館か！」と叫んでしまいそうになったが、そんなことはもはや些(さ)事(じ)にすぎない。
そう、夢にまで見た理想郷が目の前にあるのだから、今はどんなことだってスルーしてみせる。
そう思えるくらいにこの家の浴場は素晴らしかった。
何よりも魅力的なのは、岩風呂と檜風呂という二つの浴槽が設置されているということである。
生活用の室内とは異なり、壁は岩肌がむき出しになっており、まるで洞窟の中にある温泉にやって来たような気分だ。
給湯口からはお湯が贅沢にどばどばと流れ出ており、湯船からは透き通ったお湯がなみなみと溢れそうになっている。
浴槽からは湯気が立ち上っており、視界に薄っすらと靄(もや)がかかっているのも実に素晴らしい。

「温泉にやってきたみたいですよね」

と、美春が微笑みながら言った。

「……うん。最高」

沙月が気も漫(そぞ)ろといった風に返事をする。

「こちらへどうぞ。お風呂の使い方を説明しますから」
「あ。うん、よろしくね」

美春に案内され、まずは洗い場へ向かうことになった。
洗い場の壁には鏡が埋め込まれ、鏡の下にある台座には様々なバスアメニティが置かれている。

二人は台座の前にある風呂椅子に座った。

「お湯を出すにはその水晶に触れてください。触れる時間によってお湯が出てくる時間を調整できるんですけど、ちょっと触れるだけでも十秒はお湯が出続けますから」

そう言って、美春が台座に埋め込まれた水晶に触れると、鏡の上に描かれた幾何学文様の陣が光を放ち、そこからシャワー状にお湯が溢れ出てきた。

ちなみに、本来ならばシャワーとして利用できるほどのお湯を継続的に作り出すには相応の魔力量を消費することになるが、そこら辺は家の心臓部に組み込まれた精霊石の補助もあって効率性が上がっている。

他にもこの家に組み込まれている魔道具はこの精霊石の補助を受けていたりする。

「へぇ、面白そう」

沙月も水晶に触れてみると、頭上からシャワーが流れてきた。

「適温ね。お城にもこれがあれば便利なのになぁ……」

と、羨ましそうに沙月が呟く。

「とても便利ですよね。私もハルトさんから魔術を教えてもらっているんですけど、まだまだわからないことだらけで……」

「へぇ、そんなことも教えてもらっているんだ」

沙月が感心したように声を漏らす。

「はい。言葉とか、魔術とか、護身術とか、他にも色々と」
「そうなんだ。彼ってけっこう多芸なのかしら？」
「だと思います。料理もすごく上手ですし、ここにある石鹸類も全部ハルトさんが作ってくれたんですよ」
と、台座の上に並んだ石鹸類を眺めて、美春が言った。
「驚いた。……本当に多芸なのね」
「すごいんですよ？　日本で使っていたシャンプーやトリートメントより品質がずっと良いんです」
「本当？　楽しみ。お城で使っている石鹸はあまり肌に合わないから」
言って、沙月が小さく嘆息した。
あまり贅沢は言えないが、普段使っている石鹸類は日本で利用していたものと比べると品質が低い。
常識的に考えれば王族が使用している石鹸よりも良い石鹸を他の人間が使用するなど考えにくいのだが、この家に入ってから沙月の常識は何度も覆されている。
これほどのお風呂があるのだからと、沙月の期待値はぐんぐんと上昇していた。
それから美春が石鹸の種類を説明し、身体を清めることにする。
「そう言えばこうして美春ちゃんと二人でお風呂に入るのって初めてよね」
沙月が泡だった石鹸で身体を洗いながら、ご機嫌な様子で言った。
「そうですね。何だか不思議な感じがします。異世界でこうして一緒にお風呂に入れるなんて」

「ねー。ふふ、何か嬉しいな」

嬉しそうに微笑んでから、沙月が横目で美春の裸体をちらりと覗き見た。

「うん」

頷き、やがて観察するよう見つめだす。

当然、美春がその視線に気づくことになった。

「ふーん」

と、沙月がニヤリと笑みを浮かべる。

「え、えっと、何でしょうか？」

美春が恥ずかしそうに両手で身体を隠した。

「美春ちゃんって身体の線がスラッとしていて綺麗よね。肌もスベスベしてそうだし」

と、沙月からの不意打ちの発言。

「え、ええ？」

美春の顔は熟れた桃のように真っ赤になってしまった。

恥ずかしそうにもじもじと身体を動かす。

「そういう初心（うぶ）でお淑やかな反応が女の子らしくていいのよねぇ、美春ちゃんは」

沙月がうんうんと感慨深そうに頷く。
続けて、
「えい！」
と、素早く美春の背後に回り込み、胸のふくらみに触れた。
「きゃ！　さ、沙月さん？」
沙月が悪戯をしたことで、美春が身をよじらせた。
「く、くすぐったいですよ！　やめてください！」
自分から身体を動かしたことで、さらにくすぐったくなるという悪循環に陥る。
「だって、美春ちゃんが動くから」
「さ、沙月さんが変なところを触るからですよ！」
「ええー、いいじゃない。私たち以外誰もいないんだし」
沙月の手がわきわきと動く。
「も、揉まないでください！」
美春が顔を紅潮させて言った。
「はーい」
返事と同時に、沙月の手がぴたりと動きを止める。

だが、その手は美春の胸に固定されたままだ。
「う……、えっと、あの……」
首を動かし、美春がちらちらと背後に視線を送る。
「どうしたの？」
尋ねて、沙月がぴくりと泡の付いた両手を動かす。
「ひゃう。あ、あの手と……あ、泡が……」
美春がびくんと身体を震わせて呟く。
「手と泡が……何？」
沙月が蠱惑的な笑みを浮かべて尋ねる。
「そ、その、く、くすぐったいです……から。離してください」
小さく身体を震わせ、途切れ途切れに息を切らせながら、美春が懇願した。
「あー、もう！　美春ちゃん可愛すぎ！」
沙月が美春の身体をぎゅっと抱き寄せた。
「さ、沙月さん……」
身体を強張らせ、美春が困ったように呟いた。

だが、沙月は素知らぬ顔で、
「ねぇねぇ」
と、耳元でささやく。
「は、はい？」
美春がおそるおそる返事をした。
「美春ちゃん、襲ってもいい？」
「だ、ダメです！」
美春が堪らず叫ぶ。
「あはは、冗談よ、冗談。あー、面白かった」
あっけらかんと答えて、沙月があっさりと距離を取る。
その表情には実に清々しい笑顔を浮かんでいた。
「むぅ、……沙月さんって時々いじわるですよね」
そう言って、美春はジト目で沙月を見つめた。
「そりゃあ久々に美春ちゃんと会えて嬉しいんだもん。思わずスキンシップをとりたくなっちゃった」
と、沙月が悪びれた様子もなく、ストレートに感情を表現して答える。

「う……」

美春は何だか気恥ずかしくなってしまった。
サッと顔をうつむかせ、沙月から視線を逸らす。
それから数秒ほど沈黙が続いて、

「……ありがとね。美春ちゃん」

ぽつりと沙月が言った。

「……えっと、何がですか？」

横目で沙月の様子を窺(うかが)いながら、美春が尋ねる。

「うーん。美春ちゃんが美春ちゃんでいてくれて、かな？」
「えっと……はい」

またしても美春がうつむく。
よくわからないが、このタイミングでこういうことを面と向かって言うのはずるい。
美春はそう思った。

「さて、じゃあそろそろお待ちかねのお風呂に入るとしますか！」

それから身体を洗い終えたところで、いよいよ湯船に浸かることになった。
最初に選んだのは岩風呂の方である。

「くああ……」

沙月は乙女の恥じらいも忘れて、悶えるような声を口から漏らした。

「やっぱこれよね。湯船に浸からなきゃお風呂に入ったとは言わないわ」

軽く体を伸ばして、沙月が気持ちよさそうに息を吐いた。

「ふふ、そうですね」

美春がにっこりと笑みを浮かべて頷く。

すると、その時、お風呂場の扉が開く音が響いた。

「あら、亜紀ちゃん……とセシリアちゃんだっけ？」

美春と沙月が身体を洗い終えるタイミングを見計らっていたのか、亜紀とセリアが一緒に浴場へやって来た。

「随分と綺麗な子よね、セシリアちゃん。ハルト君の知り合いなのよね？」

と、沙月がセリアの裸体を目にして、惚れ惚れと語る。

魔道具で髪の色を変えてある美しい金髪に、肌理（きめ）細やかな肌、低身長ながらに女性らしさも感じる身体つきは芸術品のようであった。

「はい。そうですよ。でも、ああ見えて歳は私達よりも上なんです」

沙月がセリアの年齢を勘違いしていることを察し、美春が答えた。

「え、嘘？　私はてっきり亜紀ちゃんより少し上くらいなのかなと」

案の定、沙月は目を丸くした。

「ですよね。最初に聞いた時は私達も驚いたんです」

美春がふふっと微笑みながら同意する。

「そうなんだ。へぇ……なるほど……」

呟いて、沙月は何かを考えるようにセリアのことを眺めると、

「……ねぇ、ハルト君って何者なの？　色々とあって素性は聞きそびれたままなんだけど、ガルアーク王国の貴族かと思えばそうでもないみたいだし。かと言って他の国に所属しているというわけでもないのよね？」

と、おもむろにリオの素性を尋ねた。

美春がぱちくりと目を瞬(まばた)く。

「えっと、そうだと思いますけど、ごめんなさい。実はハルトさんのことは私達もあまりよく知らなくて、各地を旅しているということだけしか……」

そう答えて、美春が申し訳なさそうに頭を下げた。

美春達は第三者にリオの素性を語ることを禁止されている。

このルールもあって、美春達から積極的にリオのことを深く知ろうとすることは憚(はばか)られていた。

だが、美春達が知っている事実の中でも、リオが偽名を用いていることや、リオの前世が日本人であったことなどは安易に口外していい事実とは思えない。

どこまで語っていいものかと瞬時に悩んだ末、まさか嘘の情報を教えるわけにもいかず、美春は予防線を張ることにしたのだ。

「へぇ、そうなんだ」

小さく唸って、沙月は興味深そうに目を細めた。

そうして再び思案顔を浮かべる。

「じゃあ彼の素性は置いておくとして、ちょっと気になるんだけど、どうしてハルト君って美春ちゃん達にここまで良くしてくれるのかしらね？」

「どうして？」

美春が沙月の言葉を復唱して尋ねた。

「だって、何の見返りもなく貴方達を無償で保護し続けているんでしょう？　こうして私達が再会するために尽力までしてくれている。そう簡単に見ず知らずの人間のためにできることじゃないわ」

と、沙月が自らの考えを述べる。

美春はなるほどと深く頷いた。

「そう、なんですよね。ハルトさん、すごく優しくて……」

言って、美春が申し訳なさそうな表情を覗(のぞ)かせる。

「ふーん」

沙月はちらりと美春の全身を一瞥(いちべつ)すると、

「一応、念のために訊(き)いておくけど、美春ちゃん、彼に何か変なことはされてないのよね？」

と、少し真剣な顔で尋ねた。

「変なことですか？」

美春が不思議そうに小首を傾(かし)げる。

「ほら、あれよ……。えっと……身体を要求されたり、とか？」

と、沙月が少し顔を赤らめて言う。

「かっ……」

すると美春の顔が一気に紅潮した。

「ハ、ハルトさんはそんな人じゃありません！」

湯船から立ち上がり、美春が言う。

沙月は少し呆気にとられたように美春の顔を見上げた。

「ふふ、今の反応で彼の人柄についてはおよその確証が持てたわ。やっぱり悪い人でないことに間違いはないみたいね。亜紀ちゃん達に見られているし、早く湯船に浸かり直したら？」

と、沙月が笑いながら告げる。

「あ、はい」

美春は亜紀達に向けてぺこりと頭を下げると、慌てて湯船の中に戻った。

「あれ、アイシアさんだっけ？」

ほぼ同時に、またしても浴場の扉が開いて、今度はアイシアが一人で中に入ってきた。

スタスタと浴場の中を歩き、洗い場へ移動すると、セリアの横にある空いていた腰掛けに座る。

次の瞬間、何もない頭上に水が現れたかと思うと、ざばりとアイシアの全身を洗い流した。

「え、何あれ？　何もないところからお湯が出たんだけど……。何か魔法を使ったの？」

一連の光景を見ていた沙月が目を丸くして尋ねる。

「あ、あはは……。アイちゃんはちょっと特別で……」

美春は苦笑いを浮かべて、はぐらかすように答えた。

「ずっと気になっていたんだけど、あのアイシアって子、綺麗すぎじゃない？　なんて言うか女の色気がないわけじゃないんだけど、性別を通り越した透明感があるっていうか、次元が違うというか……」

沙月が吸い込まれるように、じっとアイシアを見つめる。

「そうですね。アイちゃんはちょっと神々しいっていうんでしょうか。人間じゃ敵いそうにないというか……。って、何を言っている

のかわからないですよね。すみません」
「ううん。何となくわかる気がする。なんか芸術品みたいな美しさがあるのよね。セシリアさんも人形みたいに可愛いけど、アイシアさんの場合は本当に人形みたいに無機質というか」
小さく頭(かぶり)を振りながら、沙月が語る。
視線を感じ取ったのか、アイシアがチラリと沙月を一瞥(いちべつ)したが、すぐに興味を失ったようで黙々と身体を洗い始めた。
美春がその様子を眺めて、
(うーん、改めて考えるとアイちゃんって精霊なんだよね。食事も食べるし、お風呂にも入るから違和感がなかったけど)
と、内心でそんなことを考える。
別に精霊は食事をとる必要もお風呂に入る必要もないらしいのだが、本人の要望もあってアイシアは美春達と同じように人間らしい生活を送っていた。
それが馴染みすぎて不思議に思うことはなかったが、改めて考えるとなかなか興味深く思える。
「なんか彼の周りって綺麗な子ばかりよね」
ふと、嘆息交じりに沙月が言った。
美春はハッと我に返り、
「そうですね。アイちゃんもセシリアさんもすごく綺麗ですから。亜紀ちゃんも可愛らしいですし」
と、反射的に肯定した。

「うん。それに美春ちゃんもね」
にこりと笑って、沙月が付け足した。
一瞬、きょとんとした美春だったが、
「え、ええ？　そんなことないです。私なんか全然！」
言葉の意味を理解し、ぶんぶんと勢いよく首を横に振る。
「何言ってるのよ。中学時代、美春ちゃんってすごくモテてたじゃない」
「モ、モテたことなんてないですよ。私、地味だったし」
とんでもないと言わんばかりに、美春が首を左右に振る速度を上げた。
およそ自覚のないその反応に、沙月がやや呆れたような視線を投げかける。
「成績優秀、可愛くて、気立ても良い。おまけに調理部で料理が美味しいとくればモテない方がおかしいわ。実際、私の同級生でも美春ちゃんのことを可愛いって言っている男子はいたしね。家庭的で奥さんが似合いそうって評判だったわよ」
沙月が中学時代の美春を取り巻く恋愛事情について語った。
「う、嘘ですよ。そんな話は初めて聞きました」
と、美春が訝(いぶか)しげに言った。
だが、沙月は追い打ちをかけるように、

「美春ちゃんって一年の時に保健委員だったでしょ。怪我の手当てをしてもらってコロッときちゃう男子が多かったみたいよ。具体的に誰とは言わないけどね」

と、より具体的に説明を付け足した。

「……あの、えっと、本当、ですか？」

意外そうに、美春がおそるおそる尋ねる。

「本当だけど、ひょっとしてあまり嬉しくはない？」

恥ずかしそうにするわけでもなく、ただただ困惑した表情を見せるだけの美春に、沙月が訊いた。

「あ、いえ……、嬉しくないわけじゃない……と思うんですけど、その、お付き合いとかはできませんし……」

顔をうつむかせ、美春が申し訳なさそうに語る。

「あらら、完全に脈なしなのね。まぁ無理もないか。美春ちゃんには意中の彼がいるものね」

語って、沙月は好奇の視線を送った。

「え……？」

疑問符を浮かべて、美春がまじまじと沙月の顔を見返す。

沙月は妙に自信に満ちた顔つきを浮かべていた。

「え……あ、あの……」

美春が消え入りそうな声で呟いた。

もしかして本当に知っている？

どうして？

次々と疑問が生じてきたが、それよりも強い羞恥心がこみ上げてきた。

次の瞬間、美春の頬が一気に紅潮する。

「やっぱり、その反応は当たりね」

「え、あ、し、知ってるんですか？　何で？　誰にも言ったことがないのに……」

「そりゃあ、わかるわよ。その反応を見ればね」

と、沙月が悪戯っぽく笑う。

「え……？　……あ！」

美春は自分が鎌をかけられたのだと悟った。

「沙月さん、騙しましたね？」

美春がムッと頬を膨らませる。

「ごめんなさい。でも、別に鎌をかけたわけじゃないわよ。中学時代からの関係だもの」

沙月が可笑しそうに笑って弁解する。

「……」

そう言われると、自分はそんなにわかりやすい人間だろうかと、美春は不思議に思った。
だが、余計なことを言って情報を与えたくないため、顔を赤らめたままうつむいて沈黙を貫く。
「もどかしく思って見ていたんだけど、その様子なら大丈夫なのかな。というよりも私が知らない間に付き合っていたりする？」
「……？」
話の意図するところが読み取れず、美春が内心で首を傾(かし)げる。
だが、意中の相手がいると知られてしまったことが恥ずかしくて、美春はさして気に留めることもしなかった。
「ねぇ、どうなの？　美春ちゃん？」
じりっと近寄り、沙月が尋ねる。
「し、知りません！」
答えて、美春はぷいっとそっぽを向いてしまった。
もしかして沙月はまたしても鎌をかけようとしているのではないか？
だとしたらこれ以上は墓穴を掘るわけにはいかない。
咄嗟(とっさ)にそう判断したのだ。
「もう、怒らないでよ。美春ちゃん」
美春の反応が可愛らしくて、ついつい加虐心を刺激するのだが、沙月はぐっと堪えて、美春のご機嫌をとることにした。

後輩達の恋愛事情はまた今度訊けばよい。
今はこんな世界でようやく出会えた友人とスキンシップをとりたいだけなのだから。
それから沙月の美春に対するご機嫌取りは亜紀達が湯船に浸かりに来るまで続くことになった。

第９８話　三人目の……

結局、女性陣の入浴は想定以上の時間がかかり、リオと雅人が風呂に入り終えた頃には王都へ戻らなければならない時間となってしまった。

今はこっそりと美春達を王都の宿屋へ送り届け、沙月を王城へと連れ戻しているところである。

「長居しちゃってごめんね。色々と話しておきたいことはあったんだけど、居心地が良すぎちゃった……」

と、バツが悪そうに笑みを浮かべながら、沙月が言った。

「いえ、大丈夫ですよ。いつでも会えるわけではありませんが、また会って話せばいいだけです」

答えて、リオが小さく首を横に振った。

見知らぬ世界で果たした久々の再会だ。

語りたいことは山ほどあるだろう。

「うん。そうよね」

そっと微笑みながら、沙月が頷く。

そして、数秒の沈黙が訪れた。

沙月は先ほどから何かを言いたそうな雰囲気を放っていたのだが、このことを伝えたかったのだろうか。

そんな疑問がリオの頭をもたげたところで、

「……美春ちゃん達に今後の話をしたわ」
小さく息を吐くと、沙月がぼそりと呟いた。
リオは逡巡するようにそっと目を瞑ると、
「そうですか」
と、そっけなく相づちを打った。
「聞かないの？　何を話したのか？」
おずおずと沙月が尋ねる。
「およその見当はつきますから」
苦笑しながらリオが答えた。
何故だか沙月の目にはその顔が少しだけ寂しそうに映った気がした。
「そっか……」
と、沙月が呟く。
二人の間に再び沈黙が降りた。
「すみませんでした。ずっと伝えないといけないと思っていたんですが、俺は状況に流されてしまって言えませんでした」
リオが低く抑えた声で申し訳なさそうに言う。
こんな時になんて伝えればいいのか、気の利いた言葉が一言も思い浮かんでこない。

それゆえに自らの思うことを言い訳がましく表現することしかできなかった。
そんなリオの言葉に、沙月が少し不満そうな顔を浮かべる。
「それは仕方ないと思う。一緒に暮らしている相手に『いつかここを出ていくつもりはあるか』なんて話しにくいのは当然だもの。相手が大事な人であればあるほどにね」
沙月がきっぱりと首を横に振って告げた。
「……そうかもしれません。でも、やっぱり逃げてきた事実に変わりはありませんから」
リオが自嘲(じちょう)をしながら語る。
「責任感が強いんだ」
「……我が身が可愛いだけですよ」
などと、二人が言葉を応酬させた。
沙月はほんの一瞬だけ微笑みを見せて、
「キミには本当に感謝してる。でも、こうして私が現れたことで止まっていた事態が動き出したんだもの。その責任くらい私にもとらせてほしいわ」
と、そう言った。
「……」
刹那の逡巡を経て、リオは反論しかけた言葉を呑みこんだ。

これ以上は掘り下げても栓のないことである。
おそらく互いに譲らない展開が待ち受けているだけだろう。
「それよりも大切なことは今後どうなっていくのかってことよ。いつまでもこのままってわけにもいかないでしょう？」
同じことを考えているのか、沙月が口を開く。
リオはゆっくりと頷きながら、思考を切り替えた。
「そうですね。ですが、急いで答えを出す必要があるわけでもありません。焦りはミスの元ですから。それに周りも置いてけぼりをくらうかもしれない」
どんなことにも時間はかかる。
ならば焦りは禁物――、時間をかけることができる問題ならば、落ち着いて確実に答えを出せばいい。
一人で勇み足になって先に進んでも、周囲が付いてこられるとは限らないのだから。
それがリオの考えだ。
「そうね。私も美春ちゃん達と一緒に進んで、一緒に答えを出せたらいいなと思っているわ」
「そのためのサポートはしますよ」
と、リオが優しく語りかける。
「……ありがとう」
沙月がうつむき、小さくお礼の言葉を口にした。

「でもね。美春ちゃん達とのことはキミの問題でもあるでしょう。だから私はキミとも二人だけで話をしたいと思っているの」
「俺ともですか？」
「うん。だって、夜会の時は時間制限があってあまり話はできなかったし、お城を抜け出した後もすぐに美春ちゃん達の場所に着いちゃったから、色々と話したりないことがあると思わない？」

茶目っ気のある笑みを浮かべて、沙月が尋ねる。
リオは少し考えるように視線をさまよわせると、
「そうですね。沙月さんは空を飛ぶのに随分と夢中だったみたいですから」
と、可笑しそうに同意した。
「う、うるさいわね。初めてああやって空を飛べば誰だって興奮するわよ。今は落ち着いているでしょ」
沙月が顔を赤らめてそっぽを向く。
しばらくして、視線だけをリオに戻すと、
「ねぇ、キミは何者なの？」
ぼそりと、そう呟いた。
「……俺が何者か、ですか」
リオが途端に真面目な顔つきを浮かべる。
だが、すぐに柔らかな表情に改めると、

「それはまた随分と哲学的な問いですね」
そう言って、沙月に微笑みかけた。
「そうね。でも仕方ないと思わない？　知れば知るほどキミが何者なのかよくわからなくなってきたんだから」
沙月が静かに語る。
誤魔化されたりはしない。
そういった意気込みを宿していた。
「そうなんですか？」
「そうよ。最初はキミのことをリーゼロッテという子の協力者くらいに思っていたの。実はあの子のこともちょっと気になっていたから、そっち関係で接触してきたのかなとも思ったの。
けど、何だかキミは単独で動いているように見えたし、実際にどこかの勢力に所属している風にも見えない。だから、私の中でキミという存在のことがよくわからなくなっちゃっているのよ」
リオは僅かに目を細めて、その話を聞いていた。
沙月がリーゼロッテのことをどう思っているのかについては僅かに興味を惹かれるが、話が脱線するだけなので、今は意図的に意識の端に捨て置く。
「まぁ、彼女には好意で夜会に招いていただいただけで、俺はただの取引相手にすぎませんからね」
「となると、夜会でリーゼロッテさんが言っていた通りの関係ってことかしら？」
「ええ」

リオが静かに頷く。

「そっか。でも、私が知りたいのはそこじゃないの」

「俺が美春さん達に害悪が及ぼしうる人物なのか、ということですか？」

リオが尋ねると、沙月はそっと頭(かぶり)を振った。

「違うわ。ここまでキミのことを見てきたけど、美春ちゃん達に害悪を及ぼそうとする人だとは思えない」

「それは……光栄ですね」

リオがそっと頬を緩めて礼を言う。

「しかし、だとするとわかりません。沙月さんはいったい俺の何が知りたいのですか？」

「お城に着くまであまり時間もないし、まどろこっしいのは嫌いだから単刀直入に訊(き)くけど、キミ、日本語を喋れるでしょう？」

尋ねられると、リオは目を丸くした。

だが、すぐにその理由について思い当たったのか、

「ああ、美春さん達から聞いたんですか？」

と、まずは可能性が高い方に絞って訊(き)いた。

もしかすると美春達が自身の秘密を漏らしたかもしれないということについて、リオが特に不快感を抱いている様子はない。

既に沙月はリオに関する情報を多少なりとも仕入れているのだから、不自然に隠蔽しようとすれば却って好奇心を刺激することになるだけだ。

話の流れによってはある程度の情報は語らざるを得ないだろう。
「違うわ。美春ちゃんはキミのことをよく知らないって言っていた」
「では、どうして？」
「美春ちゃん達がこの世界にやって来た頃の話を聞いて、不思議に思ったからよ」
「何をでしょうか？」
「美春ちゃん達は言葉が通じなかったせいで奴隷にされそうになったと言っていたわ。そこをキミに助けてもらって、この世界の言葉もキミに教えてもらったって」
「なるほど。それでピンときたというわけですか」

リオが得心したと言わんばりに頷く。
それだけの情報を与えられれば、疑問を抱いても不思議ではない。
「ええ、美春ちゃん達がこの世界に来てからたったの三か月ちょっとしか経っていないんだもの。教材付きで講師がいたか、魔法でも使わない限り、この短期間に知らない言語を日常会話に支障がないレベルで習得するなんて不可能よ」
「ボディランゲージで意思疎通を開始するところから始めたら、日常会話が成立するまで気が遠くなるような時間が必要になりそうですものね」

リオは苦笑しながら同意した。
「ええ。でも、美春ちゃん達はまだ言葉を学習中って言っていたし、魔法の線は自動的に省かれたわ。あとはお互いに通じる言語が何だったのかだけど、美春ちゃん達が使える言語なんて限られてるわ。
一番可能性が高いと思えたのが日本語だったというわけ。付け加えるなら、あの和のセンスを感じさせるお風呂もヒントになってい

たわね」

と、沙月が自らの推理を述べる。

「ご名答です」

リオは特に隠し立てすることもなく、沙月の推測を肯定した。

「えっと、隠しているというわけじゃないの？　たぶんだけど、美春ちゃん達にはキミに関する情報を無暗に言いふらさないように頼んでいると思ったんだけど……」

沙月が意外そうに尋ねる。

「ええ、その通りですが、よくわかりましたね？」

頷いて、リオは沙月に感心の視線を送った。

「これでも美春ちゃんとはそこそこ付き合いが長いの。中学時代は一緒に生徒会役員をやったこともあったしね。何となくあの子がキミに関して何かを隠しているってことはわかったわ」

「なるほど。流石は生徒会長だったというわけですね」

と、リオが冗談めかして褒める。

「……関係ないわよ。それに無暗に言いふらしていいような事実でもないじゃない。そんなことをよりも訊きたいことがあるの」

沙月が気恥ずかしそうに語った。

「質問の内容はおよそ見当がつくんですが、先だって俺に関する情報を秘匿するという条件を呑んでもらってもかまいませんか？」
「もちろんよ。最初からそのつもりだったわ。というよりも貸しにしてもらってかまわないから」

リオの条件は想定済みだったのか、沙月が鷹揚（おうよう）に頷いた。
それどころか貸しにしていいとまで言っている。

「貸しですか？」
「うん。今の私じゃすぐに何かしてあげられるわけじゃないから、今後何かあった時に可能な範囲でキミの手助けをさせてもらうわ」
「大げさですね。別にそんな風に考える必要はないんですが……」

リオが困ったように応じた。

「駄目よ。美春ちゃん達を保護してもらった件、こうして美春ちゃん達と会わせてもらった件、それに……」

沙月は少しムキになって反論しかけたが、途中で不自然に言葉を途切らせる。

「それに？」

不思議に思い、リオが尋ねた。

「……な、何でもない。キミにはたくさんの恩があるっていうことよ」

沙月は頬を赤らめて言うと、リオから視線を外した。
これ以上尋ねたところで話は聞き出せそうではない。

それに無理に聞き出すことでもないだろう。

「そうですか。沙月さんがそう言うのなら心に留めておきますね」

リオが少し可笑しそうに微笑んで言った。

すべては美春達のために良かれと思ってしたことだ。

恩に着せるためにした行動ではない。

だが、沙月が感謝してくれるというのならば、素直に気持ちは受け取っておきたかった。

「そうしてちょうだい。借りを作りっぱなしというのは性に合わないしね」

言って、沙月が肩をすくめる。

「では話を本題に戻しましょうか。沙月さんが知りたいのは地球に帰る方法を俺が知っているのかですよね？」

と、リオがストレートに本題を尋ねた。

「……まぁ、突き詰めて言うとそうなるわね」

こくりと沙月が頷く。

「ならば、隠し立てすることでもないので、結論から言います。俺は貴方が地球に帰るための方法を知りません」

「そう、やっぱり知らない……か」

沙月は少しだけ残念そうであった。

そもそもリオが地球へ帰還する方法を知っていれば、美春達はと

っくに地球に帰っているはずである。
制約があってすぐに帰れない可能性もないわけではないが、それならばとっくにその情報が開示されていてもおかしくはない。
そんなわけで最初から過度の期待は抱いていなかったのだが――。
それでも心のどこかで地球に帰るためのヒントが得られるかもしれないと期待していた面があったのも事実だった。

「その上で何か知りたいことがあればお答えします。残念ながら地球に帰るためのヒントになるとは思えませんが」

あまり期待を持たせないよう、リオが前もって釘を刺す。

「とりあえず、何時、どうやって、この世界にやって来たのか知りたいんだけど……。えっと、キミって日本人のハーフかクオーター……だよね？」

リオの顔を覗き込んで、沙月が尋ねた。
パッと見た感じだと、リオの容姿は人種的に日本人のそれに近い。
今は魔道具で髪の色を灰色に変えているが、黒くすればより日本人の容姿に近づけることができるだろう。
とはいえ、生粋の日本人として見るには、それでも少しばかり無理がある。
せいぜいがハーフかクオーターといったところだ。
沙月もそう考えたのだが、

「その点について大きな誤解があるようですね。俺はこの世界で生まれ育った人間です」

リオはそう答えて、頭（かぶり）を振った。

「え……、そう、なの？」

と、沙月が訝(いぶか)しそうに首を傾(かし)げる。

では、なぜ日本語が喋れるというのだろうか。

「はい。出身はベルトラム王国。このことは沙月さんもいる前で自己紹介した時に言ったことですが、覚えていますよね？」

「……ええ。確かに言っていた……わね」

沙月はこくりと小さく頷いた。

「それは真実です。俺には紛れもなくこの世界で生まれて育ってきた記憶がある」

何となく解せない物言いであったが、沙月はひとまずリオの話を聞いてみることにした。

「けど、俺にはもう一人の記憶があります。日本という国で暮らしていた男の記憶が」

リオが淡々と語る。

「え？　日本で暮らしていた……記憶？」

想像の斜め上を行く説明に沙月の思考が鈍る。

順を追って言葉の意味を噛み砕いてみたが、導き出される答えは一つしかなかった。

「つまり、生まれ変わった……ってこと？」

と、沙月がリオの説明を一言で要約する。
とはいえ少しばかり自信がなさそうであった。
「はい。その通り、だと思います」
リオはひょいと肩をすくめて頷いた。
「今はこの世界の人間だけど、その前は日本人……だったの？」
「そうだと思います。だから日本語が喋れて、美春さん達にこの世界の言葉を教えることができました」
「そう、なんだ……。そういうこと……」
ぽつりと言葉を漏らして、沙月はしばし呆然と宙を見つめていた。
「信じられませんか？」
「信じる……しかないわよね。そもそも私自身も異世界に来るっていうあり得ない体験をしているわけだし。よく考えれば生まれ変わりくらい普通……な気がする」
沙月が悩ましげに語る。
「そうよ。もう空だって飛んでるんだし、そもそも私がこの世界の言葉を理解していることも不思議な現象なんだから、この世界なら何が起こったって信じるしかないわよね」
片手で頭を押さえて、沙月が自らに言い聞かせるようにぶつぶつと呟く。
常識が納得を妨げてはいるようだが、何とか理解はできたようだ。
「まぁ荒唐無稽な話ですからね。普通は『はい、そうですか』と納

得できなくて当然だと思いますよ」
リオが苦笑しながら言った。
「ごめんなさい。取り乱しちゃったわね。何だかこの世界に来てから常識外のことが起こりすぎていて、状況を理解するのにも一苦労なことが多いの」
小さく咳払いをして、沙月が謝罪する。
「お察しします」
「……ありがとう」
気恥ずかしそうに沙月が礼を言う。
だが、何となくバツが悪く感じているのか、
「ところで、一つ聞きたいんだけど、あのリーゼロッテという子もひょっとしたらキミと同じで、地球から生まれ変わった人間なんじゃない？」
と、沙月は素早く話題の転換を図ってきた。
「ええ、間違いなくそうでしょうね。やはり気づいていましたか？」
「うん。やっぱり……って感じかな」
沙月が腑に落ちたような表情を浮かべる。
「どうして気がついたのか、訊いてもいいですか？」
「あの子が会頭を務めるリッカ商会ってあるでしょう。そこが次々と発売している女性向けの流行商品が日本でありふれた物ばかりな

んだもの。まずはそこで怪しいと思うのは当然ね」

と、沙月がリーゼロッテを怪しく思っていた理由を語った。

確かに女性である沙月なら、リッカ商会が販売している女性向けの商品を利用する機会は多いだろう。

「他にも何か理由があるんですか？」

「ええ、それだけだとちょっと決定打には欠けるからね。一番の理由はふとした日常会話がきっかけだったの」

言って、沙月は少し得意げな笑みを浮かべた。

「この世界の人が喋っている言葉って明らかに日本語じゃないのよ。なのに私には日本語で聞こえる。口の動きは明らかに日本語じゃないのにね。逆に私が喋る日本語はこの世界の言葉で聞こえているらしいけど……と、まぁ、そこは置いておきましょうか」

話が脱線しかけたところで、沙月が本線に戻す。

「口の動きを見ているとね。気がついたのよ。リッカ商会の製品の中でも特定の商品を口にするときだけ、口の動きが聞きなれた名称と完全に一致しているということに。この世界の他の固有名詞はまったくそんなことはないのに、リッカ商会が作っている商品だけは口の動きと聞こえる言葉の響きが完全に一致していたの。そんな偶然がいくつもあれば流石に怪しいと思うでしょう？」

「確かに、そうかもしれませんが……、よく見ていますね」

リオは沙月の観察力の高さに感心した。

「まぁ、自分に起きた不思議な現象の検証くらいはしないとね。と

はいえ、いまだに原理はよくわかっていないんだけど」
謎の翻訳能力の正体を測りかねて、沙月が溜息交じりに語る。
「おそらくは勇者が持つ神装に備わっている古代の魔術の効果でしょうね。伝説通りなら神が作った武器らしいですから、現代魔術では説明するのも再現するのも難しいでしょう」
「神装、か。私も持ってはいるけど、これもよくわからない代物なのよねぇ」
と、沙月が少し口を尖らせて言った。
「普段は持ち歩いていないんですか？」
リオは一度だけ弘明が太刀の神装を使うところを隠れ見たことがある。
弘明が武器の名称を叫ぶと、どこからともなく太刀が現れたのだ。
確かあの時は弘明とスティアードと模擬戦を行っていた。
だが、弘明が身体能力に物を言わせているだけで、技量があまりにもお粗末だったため、いまいち勇者の凄さを実感できていなかったりする。
「ああ、普段は概念武装として勇者の体内で霊体化？　ってのをしているらしいわ。
この世界に来た最初の晩に何か夢を見てさ。その中で変な光が使い方を一方的に説明してきたの。
実体化して呼び出すと、その持ち主に相応しい形状の武器になるんだけど……正直さっぱりよ」
「なるほど。霊体化……ですか。空間魔術で呼び寄せるわけではないと」

神装を呼び寄せた理屈に納得がいき、リオが興味深そうに頷いた。
「ちなみに沙月さんはどんな武器をお持ちなんですか？」
「私は短槍よ。日本では薙刀を習わされていたから、その応用で扱えるし、まぁ、ありがたいと言えばありがたいわね」
沙月が小さく肩をすくめてから、そう答えた。
「ところで、話は戻るけど、日本語もこの世界の言葉も喋れるキミには私の言葉って何語に聞こえているの？」
話題が神装から沙月の身に宿った不思議な通訳能力に戻る。
「今はこの世界の言葉で聞こえていますね。ただ、脳の意識を日本語に切り替えると、日本語で聞こえますよ。急に切り替えると違和感がすごいですが……」
そう答えて、リオは苦笑いを浮かべた。
「へぇ、そうなんだ。じゃあ美春ちゃん達もそんな感じなのかな？」
「だと思います。セシリアとアイシアが一緒にいた時はこの世界の言葉で喋っていたみたいですけど、沙月さんと一緒になった時は日本語に戻したんじゃないですか？」
「みたいね。口の動きに違和感がなかったもの……って、もうお城に着いちゃうわね」
会話をするために少しゆっくりと空を飛んでいたのだが、岩の家を設置した場所から城までの距離はそれほどあるわけでもない。
話し込んでいるうちにあっという間に王都へ到着してしまった。

周囲はまだ薄暗いが、東の空の地平線には薄っすらと日の光が溢れている。

「綺麗……」

遠方の景色に視線を移し、沙月が感慨深そうに呟いた。

その呟きに応えるためか、リオがお城の遥か上空で停止する。

そのまま二人は黙って地平線を眺めていた。

「これで一先ずはお別れです。また今夜の夜会で会いましょう」

たっぷりと景色を堪能すると、リオが告げた。

「夜会じゃ話しにくいことがまだまだたくさんあるんだけど、まぁいいわ。とりあえず今夜もキミに話しかけるから、お相手よろしくね？」

と、からかうような目つきで沙月が言う。

「あまり過度に接触を図られると周囲の注目を浴びて困るんですが……、適度にお願いします」

リオが苦笑して頼んだ。

「それは無理な話なんじゃないかなぁ。昨日のうちに十分目立ったみたいだし、今日も私がキミに語りかければ注目されることは間違いないと思う」

言って、沙月が面白そうにくすくすと笑う。

沙月の身体が小さく震えるのがリオの腕に伝わってきた。

「はは……」

リオは乾いた笑みを浮かべると、軽く脱力した。
沙月がそんなリオの顔をじっと見つめたかと思うと、

「その、ありがとね」

そう告げて、すぐにそっぽを向いてしまった。
はて、とリオが沙月に眼を向ける。

「何がですか？」

いったい何に礼を言われたのだろうか。
その疑問を声に出して、リオが尋ねた。

「色々と。美春ちゃん達のこともそうだし、その、私個人のことも……」

と、少し聞き取りにくい小さな声で、沙月が口早に答える。
そのまま小さく咳払いをすると、彼女は少し真面目な顔を浮かべた。

「私、この世界のことが大嫌いだった。つい昨日まではね。だから早く帰りたくて仕方がなかった」

ぽつりと沙月が語りだす。

「けど、今は少し違うの。帰りたいと思う気持ちに変わりはないけど、少しはこの世界のことが好きになれた。そんな気がする」

心なしかそう語る沙月の口許は少しだけ緩んでいる。
リオにはそのように見えた。
「美春さん達のおかげでしょうか？」
リオが訊いた。
沙月は一瞬だけ微笑みを見せると、
「うん。美春ちゃん達と再会できて、自分でも不思議なくらいに心に落ち着きが生まれたから」
そう答えた。
だが、続けて、すぐに、
「でも、それだけじゃない。半分は美春ちゃん達のおかげだけど、残り半分はキミのおかげ」
と、言葉を付け足す。
「キミが美春ちゃん達のことを教えてくれた。色々と話しを聞かせてくれた。外へ連れ出してくれた。空を飛ばせてくれた。美春ちゃん達に会わせてくれた」
「……あまり大したことはしてないと思いますが」
少し考えてから、リオが言った。
「そんなことないわよ。今思い返してみると、キミと一緒にいた時間は楽しかったと思えるもの」

語って、沙月が口元をほころばせる。

「夜会に参加する直前まで精神的な余裕なんてなかったけど、キミと初めて会った後から、光明？　目標？　……何て言うか、この世界で初めて希望を持てたのよ。

心のどこかではずっと後ろ暗い気持ちになったままだったのに、気がついたら前を向こうと思えていた」

数秒ほど、沈黙が続いて、沙月が再び口を開く。

「で、極めつけに空を飛んだらさ。この世界がすごく大きくて綺麗に見えたの。それに比べてうじうじと悩んできた私はすっごく矮小な存在に思えてさ。ちょっと吹っ切れたというか、少しはこの世界のことを好きになろうと思えたの」

言い終えると、沙月はじっとリオの顔を覗き込んだ。

「……それは良かったですね」

フッと笑みを浮かべて、リオがそっけなく一言を返す。

沙月は少しだけムッと口を尖らせると、

「他人事みたいに言っているけど、キミのおかげなんだからね。もうちょっと何か別な反応があってもいいんじゃないかな？　私、今すっごく恥ずかしいんだけど」

ジト目でリオを睨む。

「あはは……。こう、面と向かって感謝を告げられると小恥ずかしいものでして。沙月さんって意外と素直なところがあるんですね」

リオは少し困ったように思案顔を浮かべると、冗談めかして言った。

「う、うるさいわね！　だから言いたくなかったの！」

沙月の頬が真っ赤に紅潮する。

「別にそこまで無理をしてお礼を言わなくても大丈夫でしたよ。沙月さんの気持ちは既に十分に伝わってきましたから」

リオが口をほころばせながら告げる。

「お礼を言わないままなんて恥ずかしいと思ったの！」

言って、沙月はまたしてもぷいっとそっぽを向いた。

妙なところで生真面目というか、難儀な人だ。

リオはそう思った。

だが、

「良いと思いますよ。沙月さんのそういうところ。好感が持てます」

「むぅ……」

沙月が小さく口を尖らせる。

「それじゃあ、そろそろ沙月さんの部屋に戻りましょうか。そろそろ日が昇りますし」

「……うん。お願い」

沙月が少し拗ねた口調で言うと、下降に備えてリオの服をぎゅっ

と掴む。

「承知しました」

丁寧に返事をすると、沙月を抱いたまま、リオが上空から静かに下降していく。

すたりと王城のバルコニーに着地する音が小さく響いた。

続けて沙月も地面に降りると、少しばかり形容しがたい雰囲気が二人の間に漂う。

「じゃあ、またね。ハルト君。ありがと」

そう言って、気恥ずかしさを誤魔化すように、沙月がそそくさと室内に戻る。

リオはその後ろ姿をくすりと笑って眺めた。

「ええ、それでは」

そう言い返すと、沙月の返事を待たずに、リオがふわりと飛び立つ。

新鮮な夜明け前の空気を大きく吸いながら、空へぐいぐいと上昇していった。

地上からでは正確に目視できない距離にまで到達すると、

「アイシア、いるんだろ？」

と、おもむろにリオが呟いた。

すると、どこからともなくアイシアが姿を出現させる。

おそらくは霊体化して姿を消していたのだろう。

「わかっていたの？　わたしがいること」
小首を傾げて、アイシアが尋ねた。
「俺達は契約によって結ばれ、感応しあっているみたいだからね。近くにいれば何となくわかるよ」
と、リオが優しく答える。
「そう……」
アイシアが短く相づちを打つ。
数瞬の沈黙が降りたところで、何となく話題に困ったのか、リオが懐からペンダントを取りだして、アイシアに差し出した。
「さっき渡しそびれたんだけど、これを美春さんに渡しておいてくれないかな？　使い方は後でまた説明するけど――」
リオが途中まで語りかけたところで、
「誕生日プレゼント？　美春への」
と、アイシアが言葉を被せた。
シュトラール地方の暦で言えば今は春であり、時期的にちょうど美春の誕生日と重なる。
それを察しての発言であろう。
リオは意外そうにアイシアを見つめ返したが、
「違う。これはただのお守り……かな。作るのに苦労したけどね。今回のように長く別行動することもあるかもしれないし、作ろうと

思ったんだ」

ゆっくりと首を左右に振って、言った。

そして、すぐに、

「沙月さんと会うまで踏ん切りがつかなったけど、誕生日プレゼントも渡すことにした。今日買ってくる。その時に言うよ。俺のこと」

と、続ける。

「そう」

アイシアが短く頷いた。

リオは数秒ほどアイシアを見つめてから、

「……ありがとう」

と、口許に微かな笑みを浮かべて、礼を述べた。

アイシアが不思議そうな表情を浮かべる。

「心配して来てくれたんだろう？」

と、リオがお礼の言葉を口にした理由を説明する。

「心配……？」

何かを思案するように、ぼそりとアイシアが呟いた。

「わからない」

続けて、そう一言漏らす。
相変わらずの無表情だが、アイシアは少し困惑してるようだ。
まるで自身が抱いている感情を理解していないような。

「そっか……」

――なら、どうして君は俺のところへ来たんだ？
優しい目つきでアイシアのことを見つめながらも、リオがその言葉を口にすることはなかった。

「けど――」

言いながら、何か戸惑いを振り切るように、アイシアが小さく首を左右に振る。

「けど？」
「春人と一緒にいたかった。だから来た」

意味深長で不明瞭な理由。
だが、同時に、この上なくシンプルで、明快な答えでもあった。

「そっか、ありがとう。アイシア」

リオは再度お礼の言葉を口にした。

☆★☆★☆★

それから、アイシアと別れてクレティア公爵邸に戻り、僅かな仮眠をとると、リオは睡眠不足を感じさせずに起床した。
夜会の間までは特に用事もないため、リオが朝食の際に午前中か

ら王都の市場へと繰り出したい旨をリーゼロッテに伝える。

「なるほど、お買い物ですか。ではナタリーを案内にお付けいたしますね」

リーゼロッテが侍従の一人であるナタリーをリオの案内につけた。ちなみに、自らに案内の役目が回ってこなかったことで、同じ侍従のコゼットが秘かに歯ぎしりしていたことは一部の同僚しか知らなかったと明記しておく。

王都の店は全く知らなかったし、行き先が女性向けの店だったので、ナタリーに案内をしてもらうことはリオとしてもありがたい。

そうして二人は王都の市場へと繰り出した。

帯剣している以外は私服姿のリオと業務用のエプロンドレスを身に包んだナタリーの組み合わせは少しばかり目立っていたが、傍から見れば富裕層の子弟がメイドを引きつれて買い物をしているようにしか見えない。

いくつか案内されたお店を巡り、じっくりと品物を吟味したところで、リオは目当ての品を購入した。

「お礼に昼食でもどうでしょうか？」

案内のお礼を兼ねて、リオが昼食を二人でとろうと提案する。

「そんな滅相もございません。使用人風情の私が主のお客様とお食事をご一緒するなど……」

自らの立場を踏まえ、謹んで辞退しようとしたナタリーであったが、最終的にはリオの説得もあって一緒に昼食を済ませることになる。

リオが適当に選んで入ったのはかなり良い値段のする一流どころ

のレストランであった。
ナタリーも一度は入店してみたいと思っていた店であったが、仕事の関係で休みもなく、王都に来る機会もほぼないため、半ば諦めかけていた店でもある。
折よく舞い込んだ絶好の機会に、ナタリーは内心で秘かに歓喜した。
仕事の付き合い、かつ年下とはいえ、異性と一緒にである。
仕事ばかりで男っ気のないナタリーが舞い上がるのも無理はない。
ちなみに、料金は自分で支払おうとしたのだが、リオが注文後にさりげなく席を離れた際に会計を済ませており、その目論見は儚くも崩れ去ることになる。

「申し訳ございません。ご馳走になってしまい……」

食事を終えて、店に出たところで、ナタリーがすまなそうに腰を折る。
味は語るまでもなく美味しかったし、接客態度は良好で、店内の雰囲気も非の打ちどころがない。
加えて、同席相手のリオが聞き役に徹して、言葉巧みに反応を返してくれたおかげで、時間も忘れて非常に気持ちよく喋ることができた。
ここ最近では珍しく充実して楽しいと思えたひと時であったことは間違いない――、のだが、すっかり楽しんでしまったことについて、ナタリーは忸怩(じくじ)たる気持ちを抱いていた。
本来ならばゲストを楽しませるのは接客する側の務めなのだから。

「いえ、ナタリーさんのおかげで楽しいひと時を過ごすことができました。お店も案内してもらいましたし、とても助かりましたから。そのお礼です」

と、リオがにこやかに笑み浮かべて礼を言う。

「それではお屋敷に戻りましょうか」

そう言うと、リオが身を翻(ひるがえ)し、屋敷への道を歩き始めた。

ナタリーがその背中にぺこりと頭を下げて、リオの後ろを静かに付いていく。

それから屋敷に帰った後も時間は平穏に過ぎていき、いよいよ夜会二日目の始まりを迎える時間が到来した。

何やら昨晩と比べて夜会に出席している者達は少しばかり地に足がつかない雰囲気を放っている。

「少し会場の雰囲気が騒がしいですね」

会場を見渡しながら、リオが言った。

その隣には同伴しているリーゼロッテがいる。

「新しい勇者様の出席が急遽決まったからだと思います」

と、リーゼロッテが会場の雰囲気が落ち着かない理由を口にした。

「新しい勇者様ですか？」

リオが興味を惹かれた様子で尋ねた。

「はい。セントステラ王国と言って、普段はあまり他国の行事に顔を出さない国なんですけどね。そこの国にもこの夜会の招待状を送っていたんです。

どうやらその国の勇者様が是非参加したいと仰られたようでして、この夜会へいらっしゃる運びとなったようです」

「なるほど。道理で……」

リオが得心したように呟く。

「お城に出席の通知が届いたのが今日の午前中のことでしたので、おそらく耳の早い方々が色々と噂しているのでしょう。間もなく会場にお越しになると思います」

「……そうなんですか。どのようなお方なのでしょうね？」

リオはセントステラ王国の勇者について探りを入れてみることにした。

「若い男性の勇者様みたいですね。お名前はタカヒサ＝センドウ様だとか」

「タカヒサ＝センドウ……」

瞬間。

リオは胸の内がざわりと騒いだような感覚に襲われた。

その名前には聞き覚えがある。

当たり前だ。

千堂貴久――。

亜紀と雅人の兄であり、もしかしたら美春にとって特別な異性にあたるかもしれない人物の名前なのだから。

第９９話　夜会二日目　前編

シュトラール地方の最東端に位置するガルアーク王国。
その近隣に位置する大国が三つ――、西のベルトラム王国、南のセントステラ王国、北西のプロキシア帝国である。
ガルアーク王国、ベルトラム王国、セントステラ王国が長い歴史を持つ大国であるのに対し、新興国家であるプロキシア帝国はシュトラール地方北部に乱立していた小国家群を次々と侵略し、その規模を急速に拡大した。
これを見かねたベルトラム王国並びにガルアーク王国という二大国が同盟関係を結んで牽制を図り、国際的なパワーバランスが膠着（こうちゃく）し、緊張状態が生まれたのがここ数十年の話である。
ところが、最近になってベルトラム王国内でクーデターが起きたことでその国際関係に刺激が加えられることになった。
しかもそのクーデターの背後にはプロキシア帝国の陰が見え隠れしていたという情報もまことしやかに世間に出回っている。
ガルアーク王国王政府が現ベルトラム王国王政府に見切りをつけ、フローラを盟主に添えた『レストラシオン』を迎え入れたのがクーデターの起きた直後のことであった。
それゆえ、現在のシュトラール地方東部は火種が燻った状態にある。
シュトラール地方の北東部には多くの小国家が存在しているが、これらの国にとって昨今の国際状況は決して他人事ではない。
仮に本格的に開戦されれば巻き込まれることは必至で、現に大国の代理として小競り合いを繰り広げてきた小国も中にはある。
そんな国際世情の中で開催されたガルアーク王国主催の夜会、そして勇者である沙月のお披露目は、近隣の小国からも大きな注目を集めていた。

今宵、夜会に招かれた小国はいずれもガルアーク王国の息がかかっている国であり、現在、会場となるホールの中では各国から招いた外賓の紹介が行われている。
基本的に格下の国が各上の国の夜会に招かれた場合には、大使として王族を寄こすのが慣例的なマナーとなっており、現在ホールで紹介されている者達はいずれも王族ばかりであった。
ちなみに紹介の順番は国力の強弱や外交関係によって暗黙の内に決められている。
そうして各国から来場している王族達が壇上で順次紹介されている中で、とある小国の王女が紹介される番となった。

「ルビア王国、第一王女殿下、シルヴィ様のご入来となります！」

と、紹介役の騎士が告げた瞬間、ホール内にいる貴族達がざわめきだす。
その直後、壇上の扉から一人の少女が姿を現した。
背後には五人の従者達を引きつれている。

「っかー！　姫騎士キタコレ！　マジモンだよ！　やっぱファンタジー世界に来たんだから姫騎士を見ないとなぁ」

と、異様なテンションで舞い上がっている人物が壇上の裏で一名待機していることはさておくとして、ホールの中にいる貴族達の視線は紹介されたばかりのシルヴィ王女に寄せられた。

「姫騎士シルヴィ王女殿下のご登場ですか」
「何とも凛々しいお方ですな」
「ええ、勇者サツキ様にも引けを取らないようにお見受けします」
「戦場の花を飾るに相応しい秀麗なお方であらせられる。兵達の戦意高揚にはうってつけでしょうな」

などと、男性陣の噂話も他の小国の王族が紹介された時よりも幾分か熱が入っている。
なお、一部の若い少女の中には熱い視線を送っている者もいた。
シルヴィ＝ルビア、小国ルビア王国の第一王女として生まれた少女であり、その見た目から年齢は十代後半といったところである。
女性にしてはすらりと高い身長、美麗で凛々しい顔立ち、肩まで伸びたブロンドヘア――、実に人目を惹きつける魅力に溢れた人物だ。
妙齢の女性らしい柔らかな身体つきをしているが、その身のこなしからはどこか力強い武人めいた雰囲気が感じとれる。
身に着けている純白のドレスには武骨とも見えるシンプルな黒の装飾が施されており、腰に帯剣でもすれば儀礼的な戦装束になりそうであるが、それが彼女の雰囲気に良く似合っていた。

「皆様、随分と賑わっていらっしゃいますね。シルヴィ王女殿下には何か人気の秘訣があるのでしょうか？」

と、世間話程度の関心を抱いた様子で、リオがリーゼロッテに尋ねた。
おや、と、リーゼロッテがリオに視線を向ける。

「ハルト様はご存知ありませんでしたか。シルヴィ王女殿下は近隣諸国では名の知れたお方なのですよ。その最大の理由が王族でありながら騎士としてお振る舞いになられていることです。普通の国では少し考えにくいことなのですが、姫騎士と呼ばれて親しまれていらっしゃるようですね」
「なるほど……。騎士として振る舞われるお姫様がいらっしゃったとは、寡聞（かぶん）にして存じませんでした」

と、リオが興味深そうに言う。
人気の秘訣は物珍しさもさることながら、シルヴィが誇る美貌や風格によるところも大きいのかもしれない。
「腕の方はかなりのものと伺ったことがありますが、英雄的な活躍をしているというわけでもありませんからね。貴族として社交界に関わっていなければお聞きになられたことがないのも無理はないかと」
二人がそんな話をしている間に、紹介が終わったシルヴィは壇上の隅へと移動していた。
それからも幾つかの小国の王族が紹介され、いよいよ大国からの外賓を紹介する番となる。
紹介されるのは初日から出席している現ベルトラム王国特別政府である『レストラシオン』の首脳陣と、二日目から出席することになったセントステラ王国の大使達だ。
「セントステラ王国よりお越しくださいました。勇者タカヒサ＝センドウ様、並びにリリアーナ第一王女殿下のご入来となります！」
最初に紹介されたのはセントステラ王国の面々であった。
普段は他国との交流を控えている国の登場ということもあり、会場にいる者達が大きな関心を寄せ始める。
今か今かと大使達が壇上に姿を現すのを待っていると、ようやく入り口となる扉が開いた。
「おお！」
壇上の扉から姿を現した二人の男女に、会場にいる者達の視線が釘付けとなる。

リオもスッと目を細め、壇上にいる少年――千堂貴久の姿をその目に収めた。

（彼が……）

どこか見覚えのあるのは気のせいではないだろう。
会ったことはない。
話したこともない。
だが、少しだけではあるが、遠目から見たことはある。
その時の記憶は今も色あせることなく、リオの脳裏に鮮明に焼き付いていた。

「彼がセントステラ王国の勇者殿ですか。実に見栄えのする青年ですな」
「ええ、堂々としていて、覇気を感じます。加えて容姿も良いとくれば非の打ちどころがない」

ホールの各地で勇者である貴久を見定めるような会話が繰り広げられる。
貴久がその身に纏っているのは青を基調に白銀の意匠を凝らした儀礼服であった。
身長は百七十センチ後半と、僅かにリオよりも低い程度か。
はっきりと整った顔つきをしており、短髪の髪を爽やかにセットし、胸を張って会場にいる者達に笑顔を振りまいている。
その姿はまさしく好青年や貴公子といった表現が相応しい。

「それにしても……セントステラ王国の王女殿下は実にお美しい方ですな」
「ええ、美姫とは聞いていましたが、まさかこれほどとは……」

一方で、貴族達の視線は貴久の隣を歩く少女にも向けられていた。
リリアーナ＝セントステラ――、セントステラ王国の第一王女であり、貴久のパートナー兼世話役として同行した人物だ。
輝くような金髪のロングヘア、淡く薄い黄色のドレス、おっとりとした優しい顔立ち、育ちの良さを感じさせるお淑やかな所作はまさしく理想の美姫を体現していると言っても過言ではない。
外見的な美しさだけならばフローラも決して引けはとらないが、彼女と比べてどこか堂に入った社交的な存在感をリリアーナは醸し出している。
その天使のような可憐さに会場にいる男性貴族達は揃って息を呑んでいた。

「それにしても同行している者達も皆可愛らしい淑女ですな」
「ええ、実に花がありますな。いやはや何とも……」

貴久とリリアーナの背後には十人にも及ぶ配下が控えているが、そのほとんどが年若い少女達であった。
他国の大使として王族に同行している者達が男性ばかりであることと対比するとかなり目立つ。

「続きまして、ベルトラム王国特別政府『レストラシオン』、勇者ヒロアキ＝サカタ様、並びに、フローラ＝ベルトラム第二王女殿下のご入来となります」

紹介を受けて、弘明とフローラを始めとする『レストラシオン』の首脳陣が姿を現した。
が、昨晩の内に紹介を済ませてしまったことや、貴久とリリアーナの登場により、完全に注目を奪われてしまった形になる。
会場のざわめきは昨日ほどのものにはならなかった。
弘明が少し不満そうに唇をムッとさせて会場を見渡す。

続けて、いまだに注目を浴びている貴久を睨むように視線を送る。
すると、リリアーナが視線に気づき、にこりと弘明に笑みを送ってきた。

「っ……」

弘明がハッと目を丸くして、しかるのち顔を赤らめて硬直する。
にへらとだらしない笑みを浮かべると、小さく会釈した。
それから、隣にいるフローラのことも忘れて、弘明がちらちらとリリアーナに視線を送る。
沙月とガルアーク王国の王族が姿を現すと、夜会の二日目が正式に始まりを迎えた。

☆★☆★☆★

夜会も始まり、歓談の時間に入り込んだ頃。

「ハルト君」

どこからともなくそそくさと姿を現し、沙月がリオに話しかけた。

「これはサツキ様」

驚いたような表情を浮かべて、リオが恭しく頭を下げる。

「ご機嫌麗しゅう存じます、サツキ様」

リーゼロッテも可憐に挨拶を行った。

「御機嫌よう、リーゼロッテさん。少し彼をお借りしてもよろしい

でしょうか？」

と、沙月が単刀直入に用件を切り出す。

今は少しばかり予想外の事態が発生している。

もともと沙月がリオに話しかける予定にはなっていたが、貴久の件で話し合っておく必要があると考えているのだろう。

「はい。もちろんですが、お二人は随分と親しくなられたのですね？」

リーゼロッテが意外そうな顔で訊(き)いた。

「はい。彼の両親が暮らしていた故郷の話をお聞きしたのですが、話しているうちにちょっと意気投合しちゃいまして。昨日はあまり話すこともできませんでしたし、もう一度お話をしたいなと思っていたんです」

と、沙月が笑顔で答える。

「ハルト様のご両親が暮らしていた故郷のお話ですか。……その、よろしければ私もお聞かせ願えませんか？　異邦の地には私も少し興味がございまして」

窺(うかが)うようにリーゼロッテが尋ねた。

リオと沙月が何を話したのかはもちろん気になるが、無遠慮に他人の会話の内容を詮索するのは淑女の振る舞いではない。

とはいえ、指をくわえて二人が親密になる様を眺めていられるほど、リーゼロッテという少女は慎ましやかな性格をしていなかった。

ならば自分も会話に加えてもらえるようお願いしようと思い至ったというわけだ。

それにこの夜会の期間を利用してリオと親しくなっておきたいという気持ちもある。

「え？　ああ、そうですね。えっと……」

返事に困り、沙月がちらりとリオに視線を送った。

（……俺にどうしろと？）

リオが笑みを貼りつけたまま視線を受け止める。

ここでリーゼロッテに付いてこられると、本題を話すことができず困ってしまうのは明らかだが、まさか素直に「ご遠慮ください」と伝えるわけにもいかないだろう。

この程度の頼みを拒否する上手い理由も即座には思いつかなった。

となればリーゼロッテの頼みを受け入れるのが自然な流れだ。

ただ、沙月と情報を共有して今後の方針を検討したいのは事実である。

とくれば、別な口実を適当に作って、僅かでもいいから時間を作るしかない。

そう判断して、

「ええ、大した話をできるわけでもありませんが、私は構いませんよ。ご興味がおありでしたら是非」

リオが一先ず快く承諾する。

沙月もそうせざるを得ないことを理解しているようだが、少しもどかしそうな表情を浮かべていた。

「ただ、その前に昨日サツキ様から個人的に尋ねられた件でお話をしてもよろしいでしょうか？　少しばかりプライベートに関わる話

でして。長くとも二、三分で終わると思うのですが……」

リオが申し訳なさそうに語って、小さく頭を下げた。

そのままチラリと沙月を見やる。

視線が重なり、沙月が一瞬だけ目を見開くが、

「えっと、そうね。確かに聞かれるとちょっと恥ずかしい……かも」

少しぎこちない笑みを浮かべて即座に同意した。

「これは失礼いたしました。なら私は少し離れておりますね」

口許に手を当て、上品に驚きを表すと、リーゼロッテが言った。

今の話の流れで会話に加わろうとするのは、よほど神経が図太い人間か、話を全く聞いていなかった者くらいだろう。

リーゼロッテは控えめに微笑んで言うと、数歩ほど距離を取った。

「ありがとうございます」

リオと沙月が軽く頭を下げる。

除け者にするような形になってしまい多少の罪悪感は覚えたが、素早くリーゼロッテから会話を聞かれない位置まで歩く。

「よくもまぁ咄嗟にあんな機転が利くわね。まったく白々しさを感じなかったわよ」

と、沙月が半ば呆れのこもった声で言った。

「世知辛い世の中ですからね。処世術です」

リオが苦笑して語る。

「お褒めの言葉は嬉しいですが、時間がありません。早速ですが本題に入りましょう」

「そうね。……もうわかっていると思うけど、セントステラ王国の勇者。彼が亜紀ちゃんと雅人君のお兄さんよ」

「ええ、知っています。もう彼とは接触を図ったんですか？」

「一応ね。でも美春ちゃん達のことはまだ話してないわ。キミの了承を得る必要があると思ったし、すぐ傍にお姫様がいて二人きりで話すこともできなかったから。簡単に顔合わせをして、また後でゆっくり話そうと言ってそれきり」

「そうですか……。俺としては沙月さんに教えて実兄である彼に教えない理由はないと考えています。もちろん慎重に事を運んだ方がいいとは思いますが」

リオが緩やかな口調で語った。

「そうね。その通りね。私も同じ考えだけれど……」

頷き、沙月が思案顔を浮かべる。

続けて、数瞬の逡巡を経て、

「おそらく貴久君は三人と一緒にいたいと強く思うはずよ。彼は何というか、家族愛の強い子だから。亜紀ちゃんのことも雅人君のこともとても大切にしているわ」

と、少し困ったように語った。

それでリオは沙月が何を懸念しているのかを察する。

「美春さん達には国に所属した勇者と一緒に行動することの危険性

を既に伝えたんですよね？」

と、リオが尋ねた。

「……うん」

「なら後は当人が何を望むかですよ。貴久さんもその当人に含まれます。俺達が懸念していることを伝えて、彼を含めた当人達がどう思うのかに任せるしかありません。俺が沙月さんにしたことと同じです。美春さん達は沙月さんに会いたがっていましたから」

言い聞かせるように、リオがゆっくりと語る。

リオは千堂貴久という人間がどのような人物なのかをまったく知らない。

だが、亜紀や雅人が慕っているのだから、悪い人間ではないのだろうと思っている。

それに、何よりも、二人にとって貴久は兄なのだ。

会うのが自然、会いたいと思うのが当然である。

美春だってきっと会いたいと思っているに違いない。

であれば、彼女達の再会を手助けしてやるのが自分の役目だと、リオは己の心に決めていた。

まるで籠の中に鳥を閉じ込めているようで、理由をつけて本人達の意志を無視する真似はしたくなかったから。

「そう、よね。とりあえずは状況を説明して、美春ちゃん達に会ってもらうしかないか。ちょっと老婆心が強すぎたかな」

語りながら、沙月が困ったように眉尻を下げる。

「キミにはまた迷惑をかけることになっちゃうけど、昨夜のように密会のセッティングを頼めるかしら？」

「もちろんです」

微笑を浮かべて、リオがこくりと首を縦に振った。

「ただ、彼と二人きりでのコンタクトは俺よりも沙月さんの方がとりやすいはずです。そちらはお願いできますか？」

「それは構わないんだけど、夜会の最中は基本的にお姫様と一緒に行動しているみたいだからね。狙うとしたら昨日みたいにダンスの時間がいいかしら？」

「そうですね。あとは夜会が終わった後に同郷人同士でゆっくりと語らいたいとでも言えば時間は作り出せるかと。二人きりの面会が許されるかは別として、表だって友人同士の再会に水を差す真似はしにくいでしょう」

「そうね。そっちも後で試してみるわ。ゆっくりと喋れる時間が作れれば儲けものだし」

言って、沙月がフフッとほくそ笑む。

「それでは話はここまでということで。できれば彼とダンスを踊った後に二人で声をかけてくれますか？」

「そこはお姫様のガード次第だけど、やってみるわ」

そこまで語ると、二人が身を翻(ひるがえ)してリーゼロッテに向き直った。

「お待たせして申し訳ございません。リーゼロッテ様。話が終わりました」

「そんなことはありませんよ。無理を言ってお話をお願いしたのは私なのですから」

リーゼロッテが優しい声で告げた。

リオが小さく会釈して応じる。

「では、私の両親が暮らしていた故郷の話をいたしますね」

それからリオは沙月とリーゼロッテにヤグモ地方に関する話をすることにした。

語った内容は表面的な情報だけであったが、沙月もリーゼロッテも特に興味を抱いた話が食文化に関する話である。

「主食となる穀物は稲と呼ばれる植物の種を脱穀したものですね。他にも穀物を発酵させた液体や固形物を調味料として使ったりしています」

と、リオが語る。

言うまでもなく、これらは米、醤油、味噌である。

沙月とリーゼロッテの目に好奇の光が灯った。

「……たぶんだけど私の祖国にあった食材と同じ物な気がする」

沙月がぼそりと言う。

「そうなのですか？　米、醤油、味噌という食材なんですよ。米は炊いて食べるのが一般的ですが、他の食材と一緒に炒めて味を付けたりすることもできます」

と、リオがカラスキ地方の言語でそれらの固有名詞を発音する。

神装により特殊な翻訳能力を与えられている沙月は即座にその意味を日本語として理解した。

「ああ、やっぱり！　同じよ。この世界にもあるんだ」

沙月がパッと明るい表情を浮かべる。
もしかしたらこの世界でも和食が食べられるのではないかと期待したのだが、
「残念ながらシュトラール地方では流通していない食材なんですけどね」
リオが苦笑してその希望を潰す。
落胆の色を隠せず、がくりとうな垂れた沙月であったが、
「……あの、リーゼロッテさんが経営している商会でそういった商品を扱っていたりは？」
尋ねて、すがるような視線をリーゼロッテに送った。
「……おそらくですが穀物の種を加工した食材については心当たりがあります。ただハルト様が仰いましたような調理方法――炊いて食べられている食材ではありませんね」
リーゼロッテが残念そうに首を左右に振った。
実を言えば、一時期、リーゼロッテもこれらの食材を得ようと腐心したことがあったりする。
まず、広大なシュトラール地方を探して、米だけは何とか見つけることができた。
シュトラール地方では主穀の中でも麦類の栽培が盛んであり、稲の栽培はごく一部でしか行われていないのだが、リッカ商会の伝手を使えば発見するのもさほど困難ではない。
そうして手に入れた念願のお米であったが、結果はリーゼロッテが満足できる品ではなかった。

一部の地域で例外的に栽培されている米は大粒種で粘り気がほとんどなく、その調理用途はサラダやスープの具材として利用されることが主であるからだ。
つまり日本人が好むような白米として食べるには全く適していない。
それでもおかゆとして食べるのであればと、リーゼロッテは密かにアマンドで栽培を行っていたりする。
一方で、醤油と味噌については発見することが叶わなかった。
一応、再現を試みようとしてみたこともあるのだが、製造に必要な菌の種類も入手法も不明であった以上、すぐに断念することになる。

「そうなのですか。普通に炊いた米それ自体には味はないらしいのですが、粘り気があるといいますか、柔らかくて、つやもあり、味の濃いおかずと一緒に食べると相性が抜群なようですよ」

と、リオが沙月とリーゼロッテの食欲を掻き立てるようなことを語る。

「……っ」

女性陣二人が揃ってごくりと唾を呑んだ。
リオから食に関する話を聞いて、故郷の味を思い出したのだろう。
長いこと異邦の地で暮らしていると、ふとしたことで故郷の味が恋しくなるというのは無理もないことだ。
リオも実際に経験したことがあったことがあるからよくわかる。
今、この二人の前で、普段から毎日のようにそれらの食材を使った料理を食べていると教えたらどうなるのだろうか。

（何か面倒くさいことになる気がする）

シュトラール地方で手に入らない食材を持っていると説明したところで、その入手経路を説明することを考えると非常に面倒くさい。
それを説明するとリオがどのようにヤグモ地方まで移動しているのかについても言及しなければならなくなる。
一瞬、教えてあげてもいいかなと思ったが、リオは教えることはしなかった。
だが、二人の美少女が少し遠い目をして、食欲をそそられたように唇をキュッと動かすところを見ていると、形容しがたい罪悪感が湧いてくる。
ちょっと意地悪をしてしまったかもしれない。
そう思って、せめてもの罪滅ぼしとして、

（まぁ、機会があったら作ってあげよう……かな）

と、リオは内心でひっそりと誓った。
すると、そこで、

「沙月先輩」

と、沙月の名を呼ぶ声が響いた。
この会場で沙月のことを先輩付けで呼ぶ人間など一人しかいない。
リオ達が身体の向きを変えて声の主に視線を送る。

「急に消えちゃうから驚いたんですよ。まだ話したいことがあったのに」

果たしてそこに立っていたのはセントステラ王国の勇者である千堂貴久であった。
その隣には同王国のリリアーナ王女が寄り添っている。

また、付近には数名の令嬢達が距離を保って静かに立っていた。
ほぼ同じタイミングで、
「サツキ、また君は勝手にいなくなって……」
ガルアーク王国の第一王子であるミシェル＝ガルアークもやって来た。
その隣には第二王女であるシャルロット＝ガルアークもいる。
「よう。何してるんだ、揃いも揃って」
加えて、止めと言わんばかりに、坂田弘明とフローラ＝ベルトラムまで姿を現す。
運命の悪戯か、夜会に出席している三勢力の勇者と王族がそろい踏みしたことになる。
何となく厄介なことになりそうな気がして、リオはひっそりと息を吐いたのだった。

☆★☆★☆★

どうしてこうなったのだろうか。
現在、リオは自らが置かれた状況に内心で苦悩していた。
ちらりとホール中央にあるダンススペースの待機場に視線を送ると、そこには沙月と貴久が二人で何やら話し込んでいる姿が見える。
沙月と貴久が旧知の仲であることは既に一部の者の間では既知の事実となっていた。
ゆえにああして二人でダンスを踊ることは何ら不自然ではない。
顔を突き合わせた一同で簡単に会話をした後、沙月がダンスに誘ったところ、貴久はあっさりと申し出を了承したのだった。
それはリオとしても都合の良い話の流れであったのだが――、

（何で俺がこの場にいるんだ？）

その場に残されたリオは名状しがたい場違い感を味わっていた。

その理由は一緒に会話をする羽目になったそうそうたる顔ぶれが原因である。

坂田弘明、フローラ＝ベルトラム、リリアーナ＝セントステラ、シャルロット＝ガルアーク、ミシェル＝ガルアーク。

勇者が一名、大国の王族が四名。

そもそも王侯貴族が集う夜会に出席していること自体が場違いなのかもしれないが、このメンバーの中に交じるのは少しばかり度が過ぎていやしないだろうか。

非公式とはいえリオ自身も遠い異国の王族であったりはするのだが、本人の中でそんな自覚は欠片も持ったことがないため、意味のない事実である。

少しでも付き合いのあるリーゼロッテが隣にいるのがせめてもの救いだった。

もっとも彼女自身も大貴族の令嬢なのだが――。

「君は随分とサツキと仲が良くなったみたいだね。名は何といったかな？」

ガルアーク王国の第一王子であるミシェルがリオに尋ねた。

「ハルトと申します、殿下」

にこりと笑みを貼りつけ、リオが名乗る。

ミシェルはふむと値踏みをするような視線を送ると、

「……そうか。君と話をしてサツキも良い気分転換になったみたい

だ。今日の彼女はいつもより明るいように見えた。よかったらまた彼女の話し相手になってやってくれ」

少し気難しい形相でそう述べた。

「はっ。御意に」

恭しい所作で承服しながらも、リオは内心で意外さを感じずにはいられなかった。

ミシェルは自分と沙月の付き合いをあまり好ましく思っていないのではないかと考えていたからだ。

「何やらハルト様のご両親はヤグモ地方からの移民だったとか。サツキ様とお会いになる際は私やお兄様にもお話を聞かせてくださいな」

と、シャルロットが明るい笑みを浮かべて付け加える。

「畏まりました。仰せのままに」

さしたる義務を課せられるわけでもないのだ。

王族にこの程度の頼みごとを乞われて断ることは難しかった。

社交辞令的な意味合いで頼んだのかどうかはシャルロットのみぞ知るところであるが、今後、登城が認められ沙月との交流が持ちやすくなるかもしれないと考えれば存外悪い話でもない。

「その際はリーゼロッテも来て頂戴ね。また一緒にティータイムを楽しみたいわ」

「ありがとうございます。喜んでお供いたします」

などと、リオやリーゼロッテがガルアーク王国の王族二人と会話をしているすぐ傍では、弘明が果敢にリリアーナに話しかけていた。

「ヒロアキ様は愉快な殿方なのですね」

言いながら、リリアーナがくすくすとお淑やかに笑う。

「そうか。こんな話でいいならいくらでもしてやれるぞ」

弘明が嬉しそうにへらへらと笑って言った。

何を喋ってもリリアーナが楽しそうな反応を返してくれるため、弘明の語り口もいつも以上に冴えている。

「ではもっとお話しをお聞かせくださいな。私、世間知らずな箱入りの娘ですから、こうしてヒロアキ様と気兼ねなくお話しできるだけでとても幸せですの」

「あー、そうかそうか。とはいえ何から話したらいいものか……」

どうせなら面白いと思ってくれるような話題を提供したいところだが、いざ意気込んで面白い話をしようと思うと何も出てこないものだ。

そうして何を話そうかと弘明が悩んでいると、

「ではフローラ様がお聞きになられて面白いと思われたお話をお聞かせくださいませんか？」

弘明の隣で黙って話を聞いていたフローラを気遣ったのか、リリアーナが提案した。

「わ、私がですか？　えっと、そうですね……」

突然に水を向けられたことで、フローラが返答に窮する。
困ったように思案顔を浮かべると、
「……あの、ヒロアキ様が暮らしていた世界の浴場に関するお話は興味深いなと思いました」
やがておずおずとフローラが言った。
「あー、風呂か。この世界の人間は湯船に浸からないからなぁ」
弘明が感慨深げに語る。
「お風呂ですか。そういえばタカヒサ様も――」
と、リリアーナが何かを言おうとしたその時のことだ。
「ぞ、賊だ！」
ホールのどこかで、悲鳴にも似た大声が上がった。

第１００話　夜会二日目　後編

歓迎されない来客の訪問に、ホールの中がドッと騒がしくなる。

「こっちだ！」

「こっちにもいるぞ！」

賊が現れたのは二か所、二グループであった。

ある者達は扉から、ある者達は窓の外から、敏捷な身のこなしで次々とホールの中に侵入していく。

その顔には白い仮面を、その身体には黒い装束を着用している。

「うわぁぁぁぁ！」

瞬く間にパニックに陥る付近の貴族達。

波のように混乱が伝播していく。

「来るな！」

「逃げろ！」

我先に逃げようと押し合い、会場の中がごった返す。

「お静かに！」

「通してください！　賊を撃退します！」

人垣に押されて、ホール内を巡回していた警備の騎士達も満足に動くことはできないようだ。

騎士達は非常時に備えて訓練を行っているが、会場にいる多くの

貴族はそうでない。
もちろん中には戦闘訓練を受けていたり、箔付けに軍役に就いていたことがある者もいるが、それらは少数派である。
パニックを起こした群衆が合理的に動かないことなど自明であり、有事の際に対処が後手に回らざるをえないのは必然であった。
そもそも城の警備をすり抜け、何の前触れもなく会場の中にまで部外者が押し寄せることが異常なのだ。
異常事態が起きても未然に防げるよう、厳重な警戒態勢は会場の外に敷かれているのだから。
出席者は厳重に管理され、見栄えの関係から会場の中には必要最小限の騎士が配備されているだけである。
となれば、内通している者が存在して、賊を招き入れたと考えるのが自然だろう。
だが、今は犯人を明らかにする場合ではない。

「計画通りに行動しろ。散開！」

各グループのリーダーと思しき人間が号令し、賊が二人一組になって散り散りになっていく。
こんな大それた犯行をしようとしているのだ。
選りすぐりの手練れ達が、あらかじめ状況をシミュレートし、訓練を行ってきたのだろう。
ゆえに、その行動に迷いは一切感じられない。
今は混乱により生じた一瞬の隙を突かれただけ――。
もたもたしていれば警備の騎士達が自由を取り戻し、賊の迎撃に回るのも時間の問題である。
しかし、賊達にとってはこの僅かな時間が勝負どころであった。
常人を軽く凌駕する身体能力で、賊達が一直線にホールの中を駆け抜ける。

「ひぃぃ！」

賊達の進行を手助けするように、貴族の人垣が綺麗に割れていった。

騎士達は貴族の波に押され、賊達は出来上がった道をすいすいと走り抜けていく。

中には何とか人垣を抜けて、賊の進行を妨げようとする騎士もいたが、

「がっ」

胸を賊のナイフで一突きされ、地面に倒れる。

なまじ個々の戦闘能力が高いだけに、独自の裁量で動き回っていた騎士達であったが、今はそれが災いしていた。

一人の騎士に対して二人一組の賊が完璧に連携していくため、局地的な多勢に無勢を強いられる形になっているのだ。

しかも賊一人一人の戦闘能力は騎士と互角以上である。

そうして人ごみを抜けた少数の騎士も邪魔になるようであれば迅速に処理されていく。

ちなみに、ガルアーク王国の会場警備隊を除いて、ホール内には武器の持ち込みがすべて禁止されている。

といっても警備の騎士達が持っている武器も非殺傷を前提とした棍棒とナイフだけだ。

長物は人ごみの中で振り回しにくいというのもあるが、これは原則として捕縛することを念頭に置いているからである。

事前に十分なシミュレーションとトレーニングを積んだ手練れの賊達に対し、混乱を突かれた防衛側が圧倒的に不利なのは明らかであった。

賊達は騎士達が満足な対応をしてくるまでの僅かな時間を有効に活用し、全力で目的地へと駆けている。

彼らが向かう先は――、

「お、おい、連中こっちに向かってきてるぞ！」

弘明が上ずった声で叫んだ。

そう、賊達はリオ達がいる場所に集結しつつあった。

（狙いはこの場にいる人間か？）

リオは瞬時にそう当たりをつけた。

とはいえ、狙われる理由がある人間を特定するには候補が多すぎる。

大国の王族達か、勇者である弘明か、あるいは大貴族の娘でありリッカ商会の会頭でもあるリーゼロッテか。

迷うそぶりも見せずにピンポイントに向かってくるあたり、密かに目当ての人物の動向を監視していたのかもしれない。

「な、何だ？　警備の兵達は何をしている？」

ヒステリックな調子を帯びた声で、ミシェルが言った。

「お、お兄様」

シャルロットがおびえた様子でミシェルに寄り添う。

見渡す限り様々な方位から賊達が迫っていた。

「くっ！　全方向から来るぞ！　円陣を組め！」

付近で秘かに王族の警護をしていた騎士五名が円陣を組んだ。

ざっと見ただけでも、賊の数は軽く十人を超えている。

迎撃側の人数が不足しているのは明らかだった。
騎士達の表情に強い焦りの色が浮かぶ
「皆様は我々の後ろで一か所になって固まってください！　決してその場を動きませんよう！」
一人の騎士がそう言って、円陣の内部に避難するよう促す。
弘明と会話をしていたリリアーナのすぐ傍には、いつの間にかセントステラ王国の令嬢三人が接近していた。
「リリアーナ様、こちらへ」
「は、はい」
セントステラ王国の令嬢が落ち着いた声で呼びかけ、リリアーナを円陣の中心部へと連れ込む。
そこには既にミシェル、シャルロット、リーゼロッテ、リオの四人がいた。
「じょ、冗談じゃねぇ！　どーすんだよ。うじゃうじゃ来てるぞ！」
一方で、弘明はその場に立ちつくし、顔面蒼白になって叫んだ。
明確に敵意をもって迫りくる賊達。
時折、気まぐれに行っていた接待染みた模擬戦とは訳が違う。
そもそも弘明がこの世界に来てから本気で戦闘訓練を行ったことはなかった。
日本に暮らしていた時だって何か武道を習っていたわけではないし、暴漢に襲われたこともない。
言うならばこれが彼にとって生まれて初めての実戦。
勇者になって特殊な力を得たとはいえ、刃物を持った相手が一斉に迫ってくれば恐怖を覚えない方がおかしいだろう。

「ヒ、ヒロアキ様。この場にいては騎士の方々の邪魔になります。早く後ろへ避難しましょう」

フローラが慌てて呼びかけるが、弘明は硬直したままだ。
視界は極端に狭まり、足が震えている。
フローラの言葉なんて聞こえていやしない。

「リーゼロッテ様は王族の方々と一緒に後ろへ。私は騎士の方々の援護に回ります」

リオが落ち着いた声でリーゼロッテに言った。
発言と同時に前へと踏み込む。
別にこの場にいる王族達を護衛する義理などないが、王族を見捨てて自分一人だけ逃げ出せば後で何を言われるかわかったものではない。
それに護衛の騎士達による防衛ラインを抜かれれば流石にリオも戦わざるをえなくなる。
だが、防衛ラインを抜かれた状態で戦えば混戦になるのは必至だ。
ならば自分から先に打って出た方が状況は幾分かマシになる。
そう判断してのことだった。

「っ、ご武運を！」

リーゼロッテがリオの背中に声をかける。
リオの強さを実際に目にした彼女からすれば、防衛に回ってくれるのはとても心強い。

「これから我々で『魔力障壁魔法（マジックバリア）』を張ります」

と、セントステラ王国の令嬢が言った。

「私も手伝いましょう」

すかさずリーゼロッテが名乗り出る。

『魔力障壁魔法(マジックバリア)』とは、文字通り魔力の障壁を張って外部からの攻撃を防ぐ魔法だ。

防御性能は込めた魔力と展開面積に左右され、持続して使用するには魔力消費量が多く、使いどころが難しい魔法であった。

だが、援護の騎士が到着するまでの時間稼ぎが必要な今の状況には相応しい魔法だろう。

四人で薄く広く展開すれば簡易バリケードになる。

「ヒロアキ様！　フローラ王女！　はやくこちらへ！」

もたもたしている二人を見かねて、リーゼロッテが叫んだ。

弘明の身体がびくりと震える。

ちらりと背後を見ると、まとまって避難している者達の姿が見えて、

「に、逃げろ、逃げろ！」

と、弘明が身を翻(ひるがえ)して、叫びながら走り出した。

「きゃ！」

振り向き際に弘明とぶつかり、フローラが姿勢を崩す。

その時、すぐ傍では既に戦いが始まっていて――。

☆★☆★☆★

「助太刀します。連携はできませんので、遊撃要員として」
王族達を守るように円陣を組んでいた騎士達の隙間に潜り込むと、リオが手短に言った。
リオが入ったことによりカバーできる範囲が広がる。
「っ、助かります！」
間に入られた左右の騎士二人の顔に歓喜の色が宿る。
「俺は目の前に来た二名を」
リオはそれだけ言い捨てると、踏み込んで目の前に迫っていた賊二人との距離を詰めた。
もちろん精霊術でこっそりと身体能力を底上げすることは忘れていない。
「弓！」
二人一組で行動していた賊の一人が叫んだ。
彼らはどこにも弓など装備していない。
（フェイク？　仕込み武器？　いや――）
次の瞬間、賊二人が縦一列になって――、
「ふっ！」
先頭に立った賊が右手でナイフを突きだした。

が、リオが冷静に左手で払いのける。
そのまま流れるように身体を動かし、右手で相手の腹部に強烈な打撃を打ち込んだ。

「っが……はっ」

男の口から声にならない悲鳴が漏れ、その身体が崩れ落ちる。
と、同時に、すぐ後ろから次の賊がスッと姿を現し、襲い掛かってきた。
二段構えの必殺コンビネーションなのだろう。
おそらく「弓」という号令はあらかじめ決められたフォーメーションの合図と判断した。
倒れた男の背後から放たれた追撃が不意打ちとなってリオに襲い掛かる。
その手にはナイフが握られていた。
心臓をめがけた死角からの強烈な突き。
当たれば即死は免れないだろう。
だが、リオは焦ることなく、少しだけ身体を横にずらした。
賊の放った突きがスレスレの位置で空を切る。

「なっ！」

仮面の下から漏れる驚愕の声。
リオは側面に位置をとり、素早く賊の手を掴み捻った。
そのまま身体を引っ張り、足を引っ掛けて体勢を崩すと、賊の身体をくるりとひっくりかえす。
宙で回転した賊の胴体に肘を打ち下ろすと、

「がぁ……っ」

賊の身体が勢いよく地面に叩きつけられ、意識を失った。
接敵からここまで僅か数秒の出来事である。
一瞥(いちべつ)して相手が意識を失ったことを確認すると、リオは油断なく付近で戦っている騎士を見やった。
既に何人か援軍が来ているようだが、一人で賊と戦っている者もいる。
リオの左側にいた騎士がまさしくそうであった。
相対した賊二人のうち何とか一人目を撃退したようだが、騎士の右腕にはナイフが突き刺さっている。

（援護するのはこっちか）

瞬時に判断し、リオが横から加勢しようと思ったその時、

「きゃ」

右腕を刺された騎士の背後で、フローラが弘明とぶつかり姿勢を崩した。
弘明は振り向き際にフローラにぶつかったことに気づかず、リーゼロッテやセントステラ王国の令嬢達が築いている最終防衛ラインの中に避難していく。

「くっ、限界です！　防壁を張ります。『魔力障壁魔法(マジックバリア)』」

弘明が駆け込んできた直後、セントステラ王国の令嬢達とリーゼロッテは『魔力障壁魔法(マジックバリア)』を使用した。
避難していた王族達と弘明を囲うように魔力の障壁が展開される。

「ちっ」

舌打ちをして、騎士の防衛ラインを突破した賊数名が後一歩というところで足を止める。
展開面積が広いことから障壁を壊すことはさほど難しくはないが、それでも時間は消費してしまう。
その間に追撃の騎士達が迫って来てしまった。
一方、その頃、

「ぐっ」

背後から聞こえたフローラの悲鳴に一瞬だけ、負傷した騎士の意識が奪われてしまった。
その隙を突いて、対面していた賊が負傷した騎士を思いきり突き飛ばす。

「きゃっ」

騎士の身体がフローラにぶつかり、二人して倒れこむ。
『魔力障壁魔法』で足を止めた近くの賊が三名もフローラへ向かって走り出した。

（一先ず狙いを彼女に絞ったか）

負傷した騎士を突き飛ばした賊も含めて、計四人の賊が無防備に倒れるフローラを確保せんと接近する。
一番近くにいるのは騎士を突き飛ばした賊だった。
咄嗟に精霊術で脚力を強化すると、リオがその男と距離を詰める。

「っ！」

後一歩というところでリオに邪魔をされ、賊の男が息を呑む様子

が伝わってきた。
怯んだ隙に相手の装束を掴んで、リオが男の体勢を崩す。
そのまま右手後方から近寄っている一人の賊にめがけて、思い切り男の身体を投げ飛ばした。
とんでもない勢いで男は吹き飛び、見事に接近していた賊の身体にヒットする。

「ぐあっ」

ぶつかった衝撃を支えることができず、二人の賊がまとめてリーゼロッテの展開する魔力障壁に叩きつけられ崩れ落ちる。
リオはサッと身を反転させて、左側からフローラに襲い掛かる二人の賊に向き直った。
強く地面を蹴って、フローラと賊二名の間隙（かんげき）に入り込む。

「相手をするな」

一人がそう言うと、賊達は迷うことなく左右に分断した。
リオがどちらか一人に対応している間に、もう一人がフローラにたどり着こうという作戦だろう。

「私が盾になる！　君は構わず一人に狙いを定めてくれ！」

と、フローラと一緒に倒れてしまった騎士が叫んだ。
文字通り身体を張って賊の一人を食い止めるつもりなのだろう。
見上げた騎士道精神である。
そんな心意気はリオにはないが、感心はした。
同時に死なせたくないとも思う。

「っ……」

リーゼロッテが『魔力障壁魔法(マジックバリア)』をキャンセルして攻撃魔法を使うか悩むそぶりを見せたが、外せば他の人間を巻き込みかねない。
相手は高速で走り回っているため、外す可能性の方が高いのだ。
隙間ができてリーゼロッテの場所から賊がなだれ込んできては元も子ない。

「リーゼロッテ様はそのまま『魔力障壁魔法(マジックバリア)』を」

そう叫ぶと、リオは迷わず一人の男に狙いを定めた。
リーゼロッテの顔から悩みが消える。

「ふっ」

フローラの護衛を諦めたのかと、狙われた賊が勝ち誇ったように鼻を鳴らした。
だが、その次の瞬間、

「なっ？」

賊の視界からリオの姿が消え去り、驚愕の声を漏らした。
実際にはリオが素早く地面すれすれの位置まで潜り込んでいただけなのだが、僅かとはいえ油断した男にはリオの姿が消えたように見えたのだ。
その隙にリオが相手の片足を強引に掴み取る。
そのまま精霊術により強化した腕力をもって無理やり足をすくうと、男をもう一人の賊に向けて投げ飛ばした。

「はっ」

先ほど似たような手で吹き飛ばされた賊達の姿を見ていたのか、賊は余裕をもって飛んできた男を避けた。
だが、それによってフローラへと近寄るのが遅れてしまう。
その間にリオが賊に近寄り、進路を妨害してしまった。

「ちっ」

分散してフローラを狙う目論見が阻止されたことで、賊の男が小さく舌打ちした。
二人が数歩ほどの距離で向かい合う。

「計画は失敗したようだな。他の連中も半数以上が捕縛されたみたいだし、投降したらどうだ？」

と、リオが冷たい声で尋ねる。

「任務を果たせぬ時点で我らに待っているのは死のみだ！」

叫ぶと同時に、賊がリオめがけて突進してきた。
まさしく玉砕覚悟である。
ナイフを用いた目にも留まらぬ三連撃。
胸、腕、腹。
切り裂かれた空気がヒュッと風切音を鳴らす。
リオは素早く手を踊らせ、そのすべてを鮮やかにいなした。

「くっ」

男の口から苦しそうな声が漏れる。
今の攻撃は男が放てる全力の攻撃であったが、リオにはまだまだ余裕が感じられるではないか。

が、その時、周囲の状況を確認するためか、ちらりとリオが視線を動かした。

（若いな！　油断したか！）

その隙を賊の男は見逃さない。

瞬時に間合いを詰め、リオの胸を突き刺そうとした。

しかし。

リオは最初から攻撃が来ることを予期していたかのように、ナイフを握っていた男の拳を跳ね上げた。

「なっ！」

男が唖然とする。

そのままリオに手を絡め取られると、手首を捻られ、思わずナイフを手放す。

どういうわけか、そのまま体の動きを制され、あっという間に地面にひっくりかえってしまった。

リオは倒れた男を抑え込むと、

「終わりだ」

と、戦闘の終了を告げた。

「くそっ」

それでも賊の男が暴れようとする。

しかし、リオが首筋に手刀を叩き込むと、かくんと崩れ落ちた。

リオがすくりと立ち上がる。

（……後は大丈夫そうだな）

周囲の戦況を判断して、リオはもはや自分の出る幕はないと判断した。

増援の騎士達が集結し、周辺にいた賊達はあらかた地面に伏している。

結局、王族は一人も害されることはなかったようだ。

あとはこの国の人間に任せて、生け捕りにされた賊達から事情を聴取し、情報を吸い出すだけなのだが、

「がっ……あっ！」

突如、リオが気絶させた賊が苦しみだした。

「おい。大丈夫か？」

慌てて声をかけるが、賊の男は胸を押さえて、小刻みに身体を痙攣（けいれん）させたかと思うと、完全に動きが停止してしまった。

リオが男の容体を確認し始めるが、呼吸は停止し、瞳孔は開きっぱなしになっており、心臓も鼓動していない。

おそらくだが、死んでいる。

どうして？

致命傷になる攻撃は与えなかったはずだ。

となれば、何らかの内的あるいは外的な要因があったと考えるのが自然である。

リオは傍に落ちていたナイフで素早く男の衣類を切り裂いてみた。

すると、男の胸のあたりに、複雑な術式が刻まれているのを発見する。

「これは……禁呪か……？」

禁呪――、使用を禁止され、研究すら重罪として処罰される封印指定の魔術、中には存在すら知られていないものもあるが、いずれも効果は悪質なものばかりである。
男の身体に刺青のように刻まれた術式が本当に禁呪であるかどうかは知らない。
だが、その効果は禁呪に指定されていてもおかしくはないくらいに危険な魔術であった。
ちなみに、肉体に術式を取り込んで術者が任意に魔術を発動させる技法を魔法と呼ぶが、術式を取り込むのは肉体の内部である。
肉体の表面に刺青として術式を刻みこんで魔術を発動させる場合は魔法にカテゴライズされない。

「……」

数秒ほど厳しい顔つきで賊の亡骸を見つめると、リオは小さく息を吐いて周囲を見渡した。
どうやら他の場所でも一斉に賊達が苦しみだしたようで、既に戦闘は終了したようだ。
騎士達はいきなり絶命した賊達を唖然とした表情で見つめている。

「あの、大丈夫ですか？　痛みはとれましたか？」

リオのすぐ傍でフローラの声が響いた。
どうやら負傷した騎士に『治癒魔法（ヒール）』をかけているようだ。
いつの間にかリーゼロッテが寄り添い、無防備なフローラを守るように周囲を警戒している。

「はっ、この程度の傷ならば……」

畏まった様子で騎士が答えた。
王族に手ずから治療を施してもらえる者などそうはいない。
緊張してしまうのも無理はないだろう。

「もう大丈夫です。ありがとうございました」

男性騎士はふらりと立ち上がると、緊張した動作で敬礼する。

「良かった……」

フローラがホッと息を吐く。
騎士の治療が無事に終了したことを確認すると、リーゼロッテはすぐにリオのもとへ駆け寄った。

「ハルト様。ご無事でしたか？」

無事なのは戦闘を見ていたからわかることだが、リーゼロッテは尋ねずにはいられなかった。

「ええ、私は見ての通り無傷ですよ」

答えて、リオが肩をすくめる。

「良かった。そちらの賊は……？」
「死んでいますね。胸に術式が直接刻み込まれていました。おそらくは禁呪の類ではないかと」

と、リオが自らの検分した情報を伝えた。

「そうですか……」

リーゼロッテが難しい顔を浮かべる。
続けて、真面目な顔つきに改めると、
「ハルト様、助かりました。貴方がいなかったらフローラ様だけでなく、ミシェル様、シャルロット様、リリアーナ様にも害が及んでいたかもしれません」
と、リーゼロッテがリオに向かって深々と頭を下げた。
「礼には及びません。パートナーの女性を護衛することも男性の務めでしょう？」
言って、リオが穏やかに頬を緩める。
リーゼロッテは僅かに目を丸くすると、
「私のパートナーがハルト様で本当に良かったです」
嬉しそうに微笑んで、そう言った。
「あ、あの、すみませんでした！　私のせいでご迷惑をおかけしてしまい……」
フローラがゆっくりと立ち上がり、申し訳なさそうに頭を下げた。
「そのような――」
リオが返事をしようとしたその時のことだ。
「フローラ、大丈夫だったか？」

弘明がやって来て、フローラの両肩をガッと掴んだ。
フローラの身体がびくりと震える。
「は、はい。ハルト様と騎士の方が助けてくださったので……」
「そんなことよりどうして転んだんだ？　心配したんだぞ？」
叱りつけるような口調で弘明が言った。
「す、すみません。私、昔から間が抜けていて……」
非難されたと思ったのか、フローラがしゅんとうつむく。
「あー、まぁ……無事だったから良かったけどな」
と、弘明が少しバツが悪そうな口調で告げる。
少なくとも我を失い逃げ出してしまったことは自覚しているのだろうか。
そんな彼らの寸劇を脇に、リオは他の賊達も死んでいるのかを確認しに行ってしまった。
「あ……」
リオにお礼を言いそびれたフローラが消え入りそうな声を漏らした。
「手伝います」
伏した賊達を一か所に集めていた騎士達に混ざって、リオも作業に加わった。

リオが倒した賊が六人、負傷した騎士が倒した一人、他にも七人の賊がいたようで、合計で十四人もの賊達が捕縛されたことになる。

「リーゼロッテもこっちに来いよ。まだ賊がいるかもしれないからな。後ろに下がっていれば安全だ」

近くでリオ達の作業を見守っていたリーゼロッテに弘明が声をかけた。

「いえ、私は……」

言って、リーゼロッテがリオを一瞥した。

だが、弘明は彼女の手を掴むと、

「いいから。無理をしなくていいんだ」

と、そう言って、くいっと腕を引っ張った。

咄嗟(とっさ)には対応できない力加減だったのか、

「っ」

小さな痛みを感じて、リーゼロッテが微かに顔を歪める。

男である弘明からすればさして力を入れたつもりはなかったのだろう。

弘明がリーゼロッテの表情が変化したことに気づくことはなかった。

「は、はい」

結果、やむを得ず弘明に手を引かれるがまま、リーゼロッテは後

ろへ下がることにした。

「しかし……すさまじい捕縛術でしたね。訓練された手練れの賊を六人も相手にして素手で圧倒するとは……」

と、腕を負傷した騎士がしみじみと語った。

六人という数字は賊の半分近くである。

「ははは、下手に援護しては邪魔になりそうな勢いでしたな」

「素晴らしい活躍でした。貴方がいなければ取り返しのつかない被害が出ていたことでしょう」

「その歳でそれ程の腕が立つとは才能だけでなく修練も積まれているのでしょうな」

リオの戦闘を見ていた騎士達がわやわやとその武功を称賛し始める。

騎士達は皆若いが、リオよりは年上の男達である。

だが、その口調には強い敬意がこめられていた。

すると、そこへ、

「ハルト君！」

と、リオの名を呼ぶ女性の声が響いた。

リオのことを君付けで呼ぶ女性などそうはいない。

というよりも思い当たる候補は一人しかいなかった。

振り返るよりも前に声の主を特定すると、

「サツキ様、無事だったんですね」

リオが柔らかな口調で言った。

沙月が不安そうな表情でリオに迫る。
「私は襲われていないもの。大丈夫よ。そんなことよりハルト君こそ、大丈夫だった？　怪我とかしてない？」
おそるおそるリオの身体を触りながら、沙月が焦燥した様子で尋ねる。
「ご覧のとおり無傷です」
「そっか、良かったぁ」
リオの両腕を掴み、沙月がほっと息を吐く。
一気に力が抜けてしまったようだ。
そんなに自分を心配してくれたのだろうかと、リオは少しだけ目を瞠(みは)った。
「もう、心配させないでよ」
「すみません」
リオが苦笑して謝る。
「ははは、姫様の登場ですな」
と、傍で二人のやり取りを見ていた騎士の一人が言った。
周囲の騎士達も賛同するようにどっと笑い始める。
「ち、違いますから！　そういうのじゃありませんから！」
沙月が顔を赤くして否定した。
鎮圧も終わってすっかり緊張の糸が切れたのか、つい先ほどまで

襲撃者が現れたとは思えないくらいに和やかな空気が出来上がっている。
警備の者達からはともかく、出席していた王侯貴族から目立った被害が出ていないのも影響しているのかもしれない。
賊の目的が王族に絞られていたおかげか、襲撃者を除いて奇跡的に死者もゼロである。
だが、襲撃者達に限れば死人が出た事態であるのも事実であった。

「えっと、それでこの人達は……？」

落ち着いたところで、ちらりと地面に伏した賊達の亡骸を見やり、というよりも必然的に視界に入り、いたたまれない表情で沙月が尋ねた。
仮面を取られ、苦しみに満ちた形相で地面に転がる姿を目の当たりにし、冷や水を浴びせられたように思考が冷静になったのだろう。

「残念ながら……」

リオが小さく頭（かぶり）を振る。

「そっか……」

沙月は顔を曇らせ、一瞬、泣きそうな顔を浮かべた。
十人を超える屍（しかばね）が転がっている光景を見てしまったのだ。
これだけ生々しい死体を見るなんてこれが生まれて初めてのことである。
怖くなったのか、沙月はぎゅっとリオの服の袖を掴みだした。

「行きましょうか」

間に入って沙月の視界を遮ると、リオが優しく語りかけた。
「うん……。ごめん。ちょっとだけ、腕借りてもいい？」
青ざめた顔で沙月が訊いた。
勇者をやっていれば、やがて死体を見慣れることになるかもしれない。
そんな当たり前のことは沙月も理解していただろう。
しかし、日本で平和に暮らしてきた十七歳の少女に対して、理解から進んで、いきなり受忍まで求めるのも酷な話である。
想像と現実とではまったく違うのだから。
「はい」
頷き、それ以上は何も言わず、リオはそっと腕を差し出した。
「ありがとう」
沙月がそっとリオの腕を掴む。
「沙月先輩」
うつむき気味になって歩き始めると、目の前で沙月の名が呼ばれた。
沙月がゆっくりと顔を上げる。
そこには千堂貴久が立っていた。
隣には怯えた様子のリリアーナがそっと寄り添っている。
沙月とは別に真っ先にリリアーナの安否を確認しに行ったのだろう。

「えっと、貴久君……大丈夫なの？　ちょっと顔色が悪いけど」
「大丈夫です。その、彼が……そうなんですか？」

青ざめた顔で貴久が尋ねた。
だが、訊かずにはいられない。
そういった表情だ。

「うん」

沙月がこくりと頷く。

「そう、ですか……」

貴久の瞳が小さく揺れる。
その心の内にどのような感情を秘めているのか。
リオにはわからなかった。

「どうも、初めまして。千堂貴久といいます」

名乗りをあげて、貴久がぺこりと頭を下げた。

「ハルトと申します。初めまして」

リオも簡単に自己紹介を返す。
それからすぐにその日の夜会は中断されることが知らされた。
最終日となる明日の夜会が開催されるかは追って知らせるとのことだ。
こうして自己紹介以上の会話をすることはなく、リオと貴久との初会合は終わりを迎えることとなった。

第１０１話　貴久の気持ち

賊の襲撃後、夜会は中断されることになった。
実行犯である賊達が禁呪により死亡してしまったため、犯行動機や黒幕に繋がる情報を得ることはできていない。
だが、賊を城内に招き入れた者が存在することはほぼ確実視されている。
自国の人間に裏切り者がいたのか、あるいは招待された国に所属する人間の仕業なのか。
いずれにせよガルアーク王国は顔に塗られた泥を拭って名誉を挽回しようと躍起だ。
とはいえ、王城内には様々な国に所属する人間が招待されている以上、疑り出せばどの勢力に所属する者にも容疑をかけることができてしまう。
国にできることといえば、城内の警戒度を最大限にまで引き上げることくらいしかなかった。
お城の中には準戦闘態勢で兵士が配置され、外部からの侵入者に目を光らせているのはもちろん、城内の人間が不審な行動に出ないように監視も行っている。
客人が城内を出歩くには届出という名の許可を必要とし、城に勤める人間であっても不必要に出歩けば兵士に誰何（すいか）されるほどだ。

「はぁ……」

厳戒態勢の敷かれたお城の中にある立派な客室の中で、疲れを吐き出すように息を吐く音が響いた。
溜息を漏らした人間――リオが豪華なベッドの上に腰を下ろしている。

賊の撃退に大きく貢献したことを褒め称えられ、リオはクレティア公爵邸ではなく、王城に宿泊することが決まった。
一人部屋とは思えぬ程に広い客室を用意され、快適で、悠々自適と何不自由なく過ごすことができる環境にいるのだが、リオが気を休めることはできていなかった。

（まさか世話役まで与えられるとは）

リオがちらりと壁際に視線を送る。
そこには女中が二名控えていた。
いずれも歳は若く、見た目も美しい。
客人の世話は下働きを担当する下女と呼ばれる下女中ではなく、上女中の仕事だ。
彼女達はおそらく行儀見習いで城に仕えている貴族の娘なのだろう。

（……予定が狂うな）

天井を仰ぎながら、リオが内心でぼそりと独りごちる。
扉の外には多数の兵士が見回りをしているだろうし、室内には見知らぬ他人が二人もいて、こんな状態ではこっそりと部屋を抜け出すこともできやしない。
多少の制約はあるものの、客人が城内を出歩くことは認められているが、リオが城内を出歩こうとすれば、漏れなく彼女達が一緒に付いてくるだろう。
沙月に会いに行くのならば正面から堂々と訪ねるしかない。
とはいえ、現時点でリオから沙月の部屋へ訪れるだけの表向きな口実がないのだが。

（別に容疑者扱いされているわけじゃないだろうけど、どうしたも

んか）

いくら恩人とはいえ、現状、国からすればあまり素性の知れない人間を一人で歩かせるわけにもいかないのだろう。

世話役達はリオが勝手な動きをしないように観察する役割も担っているのかもしれない。

このままリオが寝る時まで同室するとは思えないが、監視体制を完璧に把握していない以上、就寝時以降も不審な真似は可能な限り控えるのが無難だ。

この厳戒態勢の中で不審行動に出たことが判明すれば、それだけで賊の件に絡めて追及されるおそれもあるのだから。

しかし、他方で、事を急がなければならないのも事実だった。

沙月はガルアーク王国で勇者をやっており、貴久はセントステラ王国で勇者をやっているのだ。

貴久が帰国してしまえば、今後、全員が一緒に集まって話し合える千載一遇のチャンスがいつ訪れるかはわからない。

明日の夜会が開催されるかは現時点では未定であるが、いずれにせよ貴久がガルアーク王国に滞在する期間は限られている。

その間に色々と上手くやらなければならない。

（落ち着け。状況を整理しよう）

今後の展開の予測を立てるためにも、冷静になって分析する必要がある。

まず問題となるのは沙月が貴久にどこまで伝えたのかということだ。

（彼と最後に会った時の様子を見る限り、俺が美春さん達を保護していることはもう伝えてあるはず……）

リオは貴久とお互いに自己紹介をする前に、沙月と貴久が意味深長な会話をしていたことを思い出した。
あの時、貴久はリオを指して沙月に何かを尋ねていた。そして沙月はそれを肯定した。
この会話からリオが美春達を保護していることを貴久は知っていると予想できる。
だが、沙月と貴久が別行動を開始してから、賊が襲撃してくるまで、時間にして十分も経っていない。
その間にどこまで伝えることができたのか。
不確定事項が多すぎて、リオの中で焦燥感が押し寄せる。
だが、焦ったところで事態が好転するわけでもない。
賊の襲撃によってリオの予想とは異なる展開で事態が進行しているが、人生にイレギュラーは付き物だ。
人が人である限り、この世に起きるすべてのことを予想できるはずもないのだから。

（最低限、俺ができることはした。もしかしたら沙月さんが何か行動を起こしている可能性もある。大人しくこの部屋で待つしかない）

リオから沙月に会う口実を作るのはともかく、勇者である立場を利用すれば、沙月からリオに会う口実を作るのはさほど難しいことでもないだろう。
沙月からリオに会うべく行動を始めているかもしれないし、貴久と会っている可能性だってある。
状況を把握しないまま下手に動くのはリスクが大きい。
そう考えて、リオは意識を切り替えることにした。
できることならば横になって身体を休めたいところだが、見知らぬ女性が二人もいる部屋の中でくつろぐことなどできるほどリオの神経は図太くない。

（……ん？）

ふと、リオは女中達から自らに視線が寄せられていることに気づいた。

物憂げな顔で天井を見上げるリオの横顔を、好奇のこもった目でじっと見つめていたのだ。

リオは女中達に視線を向けて、

「どうかしましたか？」

と、そう尋ねた。

女中達はハッとした表情を浮かべると、

「い、いえ。なんでもございません。失礼しました」

と、顔を赤らめ、慌てて頭（かぶり）を振る。

「そうですか……」

そこで会話が終了する。

会話が持たない。

というよりも気まずい。

（何か話した方がいいのか？　と言ってもな……）

彼女達の側から客に話しかけるのはマナー違反だが、客であるリオから話しかけるのならば話は別だ。

だが、女中に接待された経験など皆無に等しいため、リオはこういう状況で何を話せばいいのかわからなかった。

しかも相手は女中とはいえ、おそらく貴族の令嬢だ。

対するリオはただの平民。
身分的に上の人間が下の人間に尽くす。
何ともあべこべな状況である。
そうしてリオが妙な居心地の悪さに悩んでいたその時、部屋にノックの音が鳴り響いた。
「ハルト様、よろしいでしょうか？」
ドア越しに男の声が聞こえた。
「はい。少しお待ちください」
答えて、身を起こし、リオが立ち上がった。
「私が扉を開きます。ハルト様はそちらでお待ちくださいませ」
客に仕事を奪われるという本末転倒な事態を避けるため、女中がリオを制止し、小走りで扉へと向かう。
扉を開けると、そこには城の騎士が立っていた。
廊下には巡回中の衛兵達の姿も見える。
「何のご用でしょうか？」
女中が騎士に用向きを尋ねた。
「はっ。セントステラ王国の勇者、タカヒサ＝センドウ様がハルト殿との面会を望んでおられます。ご同行願えますか？」
機敏に敬礼を行い、騎士が通りの良い声で告げた。

「タカヒサ殿が私に、ですか？」
部屋の中で話を聞いていたリオが訊く。
「はっ。『話をしたい』とのことです」
「なるほど」
このタイミングで貴久から呼び出される理由があるとすれば、思い当たる節は一つしかない。
だが、貴久はどこまで状況を把握しているのだろうか、沙月も一緒なのだろうか。
リオの頭の中でそんな疑問がもたげたが、
「承知しました。案内をお願いします」
頷き、リオは貴久がいる場所へと向かうことにしたのだった。
☆★☆★☆★
女中一名を引きつれ、もう一人を留守番に残し、リオは貴久が宿泊している部屋の前までやって来た。
扉の前には騎士服を身に着けた少女が二人立っている。
歳はリオと同年代くらいと言ったところか。
一人は小柄で、もう一人は女性平均よりやや高いくらいの身長である。
小柄な少女はリオの顔を見ると、
「あー、さっきの強い人だぁ！」
と、少し間の抜けた声で、そう言った。

「こら、アリス！」
「す、すみませーん。キアラ先輩」
叱られて、アリスと呼ばれた小柄な少女が慌てて謝罪する。
キアラと呼ばれた少女がにっこりと迫力のある笑みを浮かべてアリスをにらんだ。
意訳すると、「謝る相手は私じゃないでしょう？」となる。
「す、すみませんでした！」
アリスがリオにぺこりと頭を下げる。
「同僚が失礼しました。申し訳ございません」
キアラもアリスに続いて謝る。
「いえ、問題ございませんので」
リオが特に気にした様子もなく頭（かぶり）を振った。
「ハルト様ですね。タカヒサ様とリリアーナ王女殿下がお待ちになっております。少々お待ちください」
そう言うと、キアラは扉に向き直ってノックした。
（リリアーナ王女もいる？）
想定外の人間がいることに、リオがちょっとだけ面くらう。

「ハルト様がご到着になりました」
「どうぞお入りください」
室内から男性の声が響いてくる。
「許可が下りました。どうぞお通りください」
扉を開けると、キアラが入室を促した。
「では私はこの場でお待ちしております」
リオに付いてきた女中が言った。
流石に他国の王族がいる部屋にまで付いていく真似はできないようだ。
「承知しました。それでは行ってまいります」
リオは身を翻(ひるがえ)すと、貴久達が待つ部屋へと歩き出した。
「失礼します」
言って、リオが室内に入る。
そこは高級感のあるクラシックホテルのような造りで、内装はリオが泊まっている部屋と変わりはない。
だが、室内面積は貴久の部屋の方がだいぶ広いように思える。
ベッドの数も何台かあることから、多人数で宿泊するために造られた部屋なのだろう。
部屋の中央に設(しつら)えられていた木製のテーブル。
そこに貴久とリリアーナが座っていた。
すぐ傍には騎士服を着た女性と、エプロンドレスを着た侍女と思

しき少女がいる。

「よく来てくれました。ありがとうございます」

椅子に座っていた貴久が立ち上がり告げた。

リリアーナも席を立ち、にこやかにリオに微笑みかけている。

「いえ、暇を持て余していましたので」

リオがほがらかに笑みを浮かべて応じる。

だが、内心で疑問符を浮かべ、

（いったい何の用だ？）

と、そんなことを思い、少しだけ目を細めた。

部屋の中で待ち受けていた人物は貴久を含めて四人。

沙月の姿はなかった。

美春達の件について話をするというのなら、貴久以外の人間が三人もいる理由がわからない。

「どうぞ座ってください」

貴久がリオに向かい側の席に座るよう勧めた。

この状況は少しばかり解せないが、

「失礼します」

軽く一礼して、リオは素直に従うことにした。

キアラがリオの椅子を引く。

「ありがとうございます」

リオがキアラに礼を告げ、着席した。

一礼し、キアラが部屋の外へと出ていく。

全員が着席したところで、侍女がお茶を用意し始める。

「ハルト様、先ほどはありがとうございました。おかげで助かりましたわ」

にこにこと純真可憐な笑みを浮かべながら、リリアーナが礼を告げた。

「僕からも礼を言わせてください。リリィを守ってくれたようで」

貴久も深く頭を下げて、お礼を言う。

二人とも強い感謝の念が感じられる真摯（しんし）な態度だった。

「いえ、私は自分に襲いかかってきた賊を撃退しただけですから。リリアーナ王女殿下の身に危険が及ばずに済んだのは、お付きの皆様やこの国の騎士の方々のおかげでしょう」

リオが小さく首を左右に振って語る。

呼び出されたのは先ほどのお礼を言うためだろうか。

それならリリアーナ達が同席している理由もわからないでもない。

「いえ、ハルト様がいらっしゃらなければ、私も襲われていたかもしれませんわ。もっとご自分のなされたことに誇りをお持ちくださいませ」

くったくのない笑みを浮かべて、リリアーナが言う。

「私には身に余るお言葉です」
リオが愛想笑いを浮かべて告げた。
「謙虚なのですね」
「いえ、そのようなことは」
リオはゆっくりと頭(かぶり)を振った。
「そろそろ先輩……沙月さんも来るはずです。話はそれから」
と、貴久が言ったちょうどその時、部屋の中に扉をノックする音が響いた。
「サツキ様をお連れしました」
「来たみたいですね。どうぞお入りください」
貴久が言うと、素早く侍女が動き、扉を開ける。
すると沙月が姿を現した。
室内にいた三人の姿を視界に収め、沙月の目が小さく見開く。
「……どうも。こんばんは」
入るなり目を丸くし、しかるのち沙月がぺこりと小さく会釈する。
リリアーナは笑みを咲かせてそれに応えた。
「こんばんは。お呼び立てしてすみません、先輩。どうぞ座ってください」

貴久が沙月に席を勧める。

「ありがとう。失礼するわね」

頷き、沙月がおずおずとリオの隣にある空席に座った。

一緒に入って来たキアラは沙月が座るのを手伝うと、またしても部屋の外へと出て行った。

「フリル、お茶を淹れたらヒルダと一緒に退室なさい。タカヒサ様がお二方に大切な話をしたいとのことですから」

と、リリアーナが人払いを命じる。

「畏まりました。姫様」

フリルと呼ばれた侍女が粛々と返事をした。

ヒルダと呼ばれた女性騎士は微かに不満そうな顔を浮かべたが、異論を唱えることはせずに黙ったまま背後に立っていた。

それから一分ほどでお茶を淹れ終えると、ヒルダとフリルが退室し、部屋にはリオ、沙月、貴久、リリアーナの四人が残されることになった。

室内に数秒の沈黙が訪れる。

ややあって、

「お二人を呼び出したのは他でもありません。その……今後の三人のことです」

申し訳なさそうな表情を浮かべて、貴久が話を切り出した。

「今後の三人？」

沙月が訝しげに復唱した。

「……彼、ハルトさんが保護している三人の事です」

勘違いの余地がないよう、リオを見やって、貴久が断言した。

「ちょ、ちょっと待って。……教えちゃったの？　お姫様に」

沙月が泡を食ったように反応する。

リリアーナはセントステラ王国の王族にあたる人間だ。

つまり、彼女に知られるということは、彼女の背後に控えるセントステラ王国にも知られたことを意味する。

リオと沙月が視線を送ると、リリアーナは少し困ったように微笑んでいた。

リリアーナが何かを口にしようとしたその時、

「すみませんでした」

机にぶつかるスレスレの位置まで、貴久が頭を下げた。

「先輩から聞かされた懸念はもっともだと思いました。俺もあの三人が政治の取引材料にされるなんて考えたくもない」

罪悪感に押しつぶされそうな声で貴久が語る。

「なら……どうして？　お姫様に教えるなら、せめて事前に相談くらいしてほしかったんだけど……」

僅かに顔をしかめながら、沙月が呟いた。

「申し訳ございません。私が無理に尋ねたのですわ。夜会の後になって憔悴(しょうすい)したタカヒサ様のことを不安に思ったのです」

貴久の代わりに、リリアーナが申し訳なさそうな声で答えた。

「リリィは悪くないです！　それは俺がっ！」

机をたたくようにして立ち上がり、貴久がリリアーナを庇う。

そうして少しばかり場の空気がヒートアップしたところで、

「落ち着いてください」

と、リオが冷静に告げた。

室内にいる他の三人の視線がリオに集まる。

「話してしまったものは仕方がありません。ですが、どうして話してしまったのか、貴久殿がどうしたいのか、順を追ってご説明ください」

語って、リオがそのままリリアーナに視線を向ける。

「リリアーナ王女殿下。夜会が終わった後、タカヒサ殿が憔悴なさったとのことですが、何があったのですか？」

リリアーナの話を聞く限り、貴久が憔悴した原因はそのまま貴久がリリアーナに美春達のことを話した理由に繋がるように思える。

リオはそれを知りたかった。

「それは……」

貴久が言葉に詰まり、苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。

「おそらく心配で仕方がなかったのかと。この世界に来た当初、タカヒサ様はご家族やご友人のことを憂(うれ)いて、ひどくお悩みになっておりましたわ。元の世界には大事な人達がいるのだと。

それから、元の世界に戻る方法がないと知り、絶望もしました。ここ最近は随分と明るくなりましたが、その方々がこの世界にいらしているというお聞きになって、居ても立ってもいられなくなったのでしょう」

リリアーナが貴久の様子を見かねて、滔々(とうとう)と語る。

「そもそも我々が今回の夜会に出席したのも、タカヒサ様のご友人であるサツキ様がガルアーク王国にいらっしゃるという情報を得たからです。

サツキ様と別行動をして、賊が襲ってきた後に、急にタカヒサ様の顔色が悪くなったものでして、もしかしたらお知り合いの方々の情報を得られたのではないかと尋ねたのです」

「……なるほど」

リオが納得したように頷く。

一応、話の筋は通っているし、理解できない話でもなかった。

家族、恋人、友人、そういった最愛の者達から引き離される心の痛みは想像に難くない。

春人の両親が離婚した時、せっかく再会できた幼馴染が失踪した時、リオの母親が殺された時、この世界に転生して記憶を取り戻した時――。

春人は、リオは、少なくとも四回はその喪失感を味わっているのだから。

個人差はあれど、まるでごっそりと心臓を取り除かれてしまったかのような心の痛みからは、そう簡単に立ち直れるものではない。
相手のことを強く思えば思うほどに、その痛みは一入(ひとしお)強くなることだろう。

「つまりタカヒサ殿はミハルさん達が地球にいると思っていたわけですか。ですが、最近になってサツキ様の情報を得て、ひょっとしたらミハルさん達もこの世界に来ているのかもしれないと思ったと。そして、そのことをリリアーナ王女殿下にお話になった」

一緒にいた人間が傍にいなくなって、自分一人だけが異世界にやって来てしまったとしたら、不安に思って心理的に不安定になるのは無理もない。
沙月もそうだったのだから。
きっと現実世界に強い未練があったのだろう。
そして、もしかしたらその未練は美春達の存在なのかもしれないと、リオは思った。

「……はい。そうです。彼女は俺に協力してくれると言ってくれたので……」

貴久が戸惑いと悩みを織り交ぜた複雑な顔で肯定した。
貴久や沙月がこの世界にやって来てから既に三か月以上が経過している。
その間に少しずつ精神的なダメージから回復したのだろう。
だが、そんな時に隣国に沙月も召喚されていたという情報がもたらされ、沙月からは美春達に関する情報がもたらされた。
きっと動揺したに違いない。

(まぁ、彼が動揺するのは予想はできていたことだ)

そう、程度の差こそあれ、貴久が美春達の存在を知って衝撃を受けることは事前に予想できていたことだ。
計算外な点があるとすれば、予想の範囲を超えて貴久がショックを受けすぎたということか。
美春達の情報を掴んだとたん、動揺を隠しきれず、リリアーナが異変に気づくきっかけを与えてしまった。
彼女に尋ねられ、秘密を貫き通すことができず、秘密を漏らしてしまった。
それらは貴久の弱さがもたらした結果なのかもしれない。
あるいは、弱みを見せてしまうことができるくらいに、貴久がリリアーナのことを信頼しているか。
だが、貴久はまだ高校一年生になったばかりの少年なのだ。
十五歳、十六歳程度の少年なんて脇が甘くて当然、感情を抑えて振る舞えというのは酷な話なのかもしれない。

（俺の予想が甘かったか。自分が大丈夫なことが他人も大丈夫とは限らない。……いや、常にリリアーナ王女が傍にいる以上、いつ教えても同じ結果になっていた可能性は高い）

そう結論を出して、リオが小さく嘆息する。
じっと考え込むように机の上に置かれた茶器を眺めていたリオだったが、ふと隣から視線を感じた。
何やら沙月がすがるような視線をリオに寄こしている。
これで良かったのだろうか、と。
それに気づき、リオは柔らかな笑みを浮かべると、

「タカヒサ殿はどうしたいとお考えなのですか？」

と、そう尋ねた。

知られてしまった以上は貴久を咎(とが)めても仕方がない。
生産的な話をするためにも、リオはひとまず貴久の意志を確認することにした。

「……俺はあの三人を保護したいと思っています。俺がこの手でみんなを守りたい。悔いが……ないように……」

ぎゅっと拳を握りしめ、貴久が言った。
この答えは十分に予想の範囲内である。

「なるほど。では、仮にあの三人がお城での生活に不安を抱いているとして、付いていくのが怖いと答えたら、貴方はどうしますか？」

そう尋ねるリオの口調は実に淡々としたものであった。
貴久が僅かに目を丸くする。

「そんなことはありません。きちんと説得します」

貴久の語気が少しだけ強まった。
亜紀や雅人とは妹弟(きょうだい)なのだ。
見知らぬ他人から一緒にいようとすることをとやかく言われる筋合いはない。

「説得するのとお城での生活が安全と言えるかは別問題でしょう？」
「リリィなら大丈夫です！　俺は彼女のことを信頼しています。リリィは王族だけど、俺の理解者だ。あの三人を政治の道具にさせないように協力してくれると言ってくれました」
「その言葉を保障できる根拠は何ですか？」
「彼女は王族です。俺も勇者だ。俺達が協力すれば国内で口出しできる貴族なんていない！」

リオの言葉に揺さぶられ、貴久が少しずつ熱くなって反論する。
随分と強い自信を持っているが、具体性には欠ける。
「どうやら貴方はリリアーナ王女殿下を強く信頼しているようですね。ですが、私もサツキ様も殿下のことはほとんど何も存じておりません。お二人がセントステラ王国でどのような立場にいるのかも」
つまりは「信用できない」と、リオは遠回しに言っているのだ。
面と向かって言ってしまえばリリアーナに対する不敬罪になりかねないため、それをストレートに口にすることはしなかったが。
「っ……それは……」
何となくリオが言わんとしていることを察したのか、貴久は言葉に詰まった。
だが、苦虫を噛み潰したような表情を浮かべると、
「話せば……みんなと会って話せばわかります」
やがて、じっとリオの顔を見据えて、貴久が言った。
リオは小さく溜息を吐くと、
「サツキ様、どうするべきだと思われますか？」
と、隣に座って思案顔を浮かべていた沙月に尋ねた。
「お姫様に知られてしまった以上、もう賽（さい）は投げられたわ。彼の意志も決まっている。なら後は美春ちゃん達の意志次第……だと思う」

軽い頭痛がしているのか、沙月が左手で頭を抱えながら答える。
亜紀と雅人の兄である貴久に面会を認めないだけの権限が血縁者でもない自分達にあるのだろうか。
そう悩んだ挙句、沙月が出した答えだった。

「問題はどのようにして会うかですね」

リオが肩をすくめて言った。

「どのようにって……そうね、それが問題ね」

沙月が反射的に「昨日と同じように」と言ってしまいそうになったが、口を噤んで、問題を提起するにとどめる。
流石にリリアーナの前で城を抜け出して会えばいいとは言えるはずもなかった。
まさか他国の王族を連れて城を抜け出すわけにはいくまい。
それに今夜のお城の警備はかつてない程に厳重だ。
灯りの量を増やし、上空への警戒も強めている。
リオも世話役が同伴しているし、今回ばかりは密会にも反対であった。

「お二人はいつ帰国されるのでしょうか？」

と、リオが貴久とリリアーナに尋ねた。

「残念ながら長居はできません。滞在を引き延ばす理由ができれば別ですが、夜会が終了すれば帰国することになっております」

リリアーナが答える。

「なるほど。そうなるとますます揃って再会するのは難しそうですね」

言って、リオは小さく嘆息(たんそく)した。

「あの、みんなは今どこにいるんですか？」

貴久がおもむろに尋ねる。

「この王都にある宿屋に宿泊しています」

「宿屋って……警備は大丈夫なんですか？」

貴久の眉根にしわが刻まれる。

「富裕層が泊まる高級宿です。すぐ傍には見回りをする兵士の詰所もあって、兵達が常に巡回している。そんな場所で問題を起こそうとする愚か者はそうそういません」

リオが落ち着き払った声で答えた。

（それに強力な護衛も一緒にいるしな……）

美春達と一緒にいるアイシアやセリアのことを考え、強い安心感を覚える。

だが、現時点でアイシアやセリアの情報は伏せておきたい。

セリアはお忍び中の身なのだから。

「でしたらお城に呼び寄せてみてはどうでしょうか？」

リリアーナがおもむろに提案した。

リオと沙月が目を見開く。

「お城に……ですか」

リオが渋い顔を浮かべた。

城に呼び出してしまえば、美春達が勇者と密接な関係にあることが公に露呈してしまう。

だが、密会が封じられている以上、貴久が美春達と会う手段は正面から会うことしか残されていないことも事実だ。

美春達がそれを望むならば、考慮の余地はあるかもしれない。

個人的には心理的な抵抗を覚えたが、感情とは切り離して、リオはそう考えた。

「さっき賊の襲撃があったばかりですよ？　二度目の襲撃があるかもしれないのに……」

と、沙月が自らの危惧したところを述べる。

「流石に賊が二度目の襲撃を行うことはないかと」

リリアーナがきっぱりと告げた。

「どうしてですか？」

疑問に思い、沙月が尋ねる。

「手練れを集めて、策を練って、警戒態勢の隙を突いて、それでも失敗したのです。目立った痕跡も残さず、あれだけの犯行を行える者達です。少なくとも近日中に二回目の襲撃を行うほど考えなしではないでしょう。ガルアーク王国も警戒を強めましたから」

と、リリアーナが自らの考えを述べた。
その点についてはリオも同じように考えている。
相手が警戒している時に奇襲を仕掛けるのは戦術的に下策だ。
奇襲は相手の油断をついてこその奇襲なのだから。
そもそも城の内部に潜り込んで王族を害しようとする大それた計画に、第二波を想定して補欠の人員を用意しているとも思えない。

「なるほど。確かに……」

沙月が納得したように唸った。

「しかし、現状で城内に共犯者が潜んでいる危険性は排除できていません。その点についてはどのようにお考えなのでしょうか？」

リオがリリアーナに尋ねる。

「ご懸念は理解しております。まず、私から申し上げることは、セントステラ王国第一王女リリアーナが責任を持って三人を保護することを誓わせていただく、ということです」

真面目な顔つきを浮かべ、リリアーナが答えた。

「具体的にはどのように保護していただけるのでしょうか？」
「私とタカヒサ様の世話は国から連れてきた信頼できる者だけに行わせております。優秀な護衛騎士達も複数連れております。なので、私達の部屋に連れてきてもらえれば、外部から関与するリスクは大きく減らすことができます」

貴久とリリアーナが滞在するこの部屋にはガルアーク王国とは別

に独自の警戒態勢が敷かれていることから、確かに部外者が関与する隙はないように思える。
内通者が潜伏している城内で安全を確保するための必要十分な処置といえるだろう。
リオは逡巡するように顔をしかめると、
「……私個人はあまり気乗りしません。ですが、ミハルさん達に意志を確認して、王城に来たいというのならばそれでもかまわないと考えております」
と、そう言った。
「なるほど。サツキ様はいかがでしょうか」
「私も……あまり気乗りはしないです」
「それはどうしてでしょうか？」
リリアーナが訊いた。
「不慣れなお城での生活を強要されるとなれば心労が生まれます。それに外部からの干渉も予想されます。彼女達を王城に呼ぶとなれば、城主である国王に説明を行わなければなりませんから」
沙月が答える。
が、その反論は織り込み済みだったのか、
「仰る通り、王城へ招く以上、陛下にお伺いを立てることは避けられません。それに陛下がお三方に会いたいと仰られましたら、王女にすぎない私に止める術はございません。
ですが、それは我々の方から出向いたとしても同じことですわ。この国の勇者であるサツキ様や外賓である我々が外を出歩こうとす

れば、間違いなく護衛が付きますから。そのような状態では密会することも叶わない以上、陛下に事情を説明することはやはり避けられぬことかと」

と、ほとんど間を置かず、リリアーナは答弁した。

勇者二人が一緒に外出する理由など簡単に作り出せるものではない。

それを行うとすれば素直に美春達のことを打ち明けなければならないだろう。

美春達の情報を国に公開した場合、王城の内部と外部のどちらで面談を行うのが安全かといえば内部だろう。

「それはそうなんですけど……」

沙月としては何とか国に情報を公開せずに、面談を行うことが可能な方法はないかと模索せずにはいられない。

ネックとなるのは夜会が終了してしまえば貴久がセントステラ王国へと帰国してしまうということだ。

時間が押しているという状況が選択肢の幅を著しく狭めている。

「ハルト様が保護されているお三方の中にはタカヒサ様のご妹弟(きょうだい)がいらっしゃると伺いました。ご家族に会いたいというタカヒサ様のお気持ちも慮(おもんぱか)ってはくださらないでしょうか？」

リリアーナが真摯(しんし)に訴えかけた。

「それはもちろんです。私達が懸念しているのは彼女達の安全ですから」

沙月が即答し、リオも隣で頷いた。

「彼女達を王城に招くという意見には賛同します。ですが、代わりに誓ってくださいませんか？　仮にあの子達が貴久君と一緒にいる道を選んだとしても、本人達の意志に反して政治の道具とさせないよう努力すると」

沙月が難しい顔を浮かべて言った。

「私も同じです。何をするにせよ、三人の意志を尊重することを約束していただきたい。それがミハルさん達を王城へ招く条件です」

リオからも条件を提示する。

王族に向かって約束を強いるなど不敬なこと甚だしいが、リオはそれでも言わなければならなかった。

今のリオでは美春達とは強い繋がりもなく、踏み込む領域ではないことは明らかだが、それでも――。

「誓います。俺は誓います。会って話がしたい。政争なんかに巻き込む真似はしない」

いたたまれない表情を浮かべていた貴久であったが、ここぞとばかりに必死に誓約した。

「私も誓いましょう。私はタカヒサ様の意志に従うのみですから」

胸に手を当て、リリアーナも落ち着いた口調で宣言する。

リオはじっと二人の瞳を覗き込んだ。

「……承知しました。王城へ来るか、明日までに彼女達の意志を確認します。午後からは国王陛下との謁見もありますので、午前中の

間に済ませ、この部屋へとご報告に伺います」

賊を撃退した件で、明日の午後に、リオは国王フランソワ＝ガルアークと謁見することになっていた。

午前中ならば同行者付きかあるいは単独で外出の許可も下りよう。

リオならば勇者や王族よりも行動の自由が認められやすい。

その間に宿屋に近づき、知り合いがいるからと適当に理由を作るか、アイシアと念話で接触を図ればよい。

「ありがとうございます」

貴久とリリアーナが礼を告げる。

そんな二人が喜ぶ顔を見て、リオの中で理屈と感情がせめぎあう。

リオの心は複雑に蠢(うごめ)いていた。

第１０２話　選択肢

それは最終日の夜会が開催される日の午前中のことだ。
王都近郊の天気は快晴。
手すきの騎士が一人護衛につけられることになったが、知り合いに会いに行くという名目で、リオの外出許可はあっさりと下りた。
麗らかな春の日差しが降り注ぐ中、リオが護衛の騎士を引きつれて王都の街中を歩いている。
護衛の騎士はリオもまったく見知らぬ人物というわけではなく、賊の襲撃があった際に身を張ってフローラを守ろうとした若い男だった。
名をカイルというらしい。

（それじゃあアイシア。手はず通りに頼む）

右隣を歩くカイルを尻目に、リオは離れた場所にいるアイシアと念話で交信していた。

――わかった。今セリアとそっちに向かっている。このまま行けばすぐに接触できる。

リオが語りかけると、すぐにアイシアから反応が返ってくる。
アイシアと念話が可能な距離まで接近し、彼女を経由して簡単ではあるが美春達に事情を説明していたのだ。
貴久が美春達に会いたがっていること。
すぐに貴久と会うためには美春達から王城へ出向く必要があること。
お城に出向けば王侯貴族から注目を寄せられるであろうこと。

美春達のことを政治的に利用しようとする輩が近寄ってくるかもしれないこと。
今後、貴久と沙月と一緒に会える機会はいつ訪れるかはわからないこと。
再会後も貴久や沙月のいずれかと一緒にいるかどうかは美春達の意志を尊重すること。
そして――。
不安に思うのならば貴久や沙月と会うだけ会って、しばらくは自分と一緒にいても構わないこと。
伝えるべきことはすべて伝えた。
あまり時間はないが、少しでもゆっくりと考える時間を与えたかったことから、美春達にはそのまま宿屋に待機してもらうことになる。
しかし、知り合いに会うという名目で外出した以上、誰にも会いに行かぬままでいるわけにもいかない。
そこで、美春達が宿屋で話し合いをしている間に、リオはセリアと会ってカモフラージュを行うことにした。
リオと感応状態にあり位置を把握できるアイシアがいれば、街中で偶然を装ってセリアと遭遇することなど造作ない。

（ああ、見えた）

遠目から二人の姿を発見し、リオがアイシアに伝えた。
アイシアが白いワンピースの上にフード付きの黒いケープを被って顔を隠しているのに対し、セリアはレースの付いた可愛らしいピンクのチュニックワンピを着ている。
いつも通りのことであるが、セリアは白い髪の色を魔道具で金髪に変えていた。
その若々しい容姿と相まって、年齢は十代中盤くらいにしか見えず、良いところの御嬢さんといった感じだ。

――じゃあ私は美春達のところに戻るから。

リオがセリアと遭遇したところで、アイシアの念話が脳内に鳴り響いた。

視線の先にいるアイシアが身を翻(ひるがえ)して踵(きびす)を返す。

(ありがとう)

リオが礼を言って、そこで念話は終了する。

どうやらセリアもリオの姿を視界に収めたようで、僅かに目を丸くすると、うきうきと小走りで近づいてきた。

「ハルトじゃない。久しぶりね！　王都にはいつ来たのよ？」

あたかも久々に出会った友人のように、セリアがリオに話しかける。

「お久しぶりです。セシリア。王都に来たのは数日前のことです」

「そうなの？　ならもっと早くに顔を見せなさいよね」

セリアが自然体でムッと可愛らしく頬を膨らませた。

即興で打ち合わせたとは思えない程に見事な演技である。

とはいえ、怒っていることは伝わるのだが、何故か全く迫力がない。

隣にいるカイルなどは、セリアの可憐な振る舞いに軽く忘我の表情を浮かべていた。

「色々と用事があったものでして。行き違いにならないで良かったです。これから会いに行こうと思っていたところでしたから。お出

かけですか？」
「ううん、今なら大丈夫だけど、ちょっとお話できたりする？」
打ち合わせ通りの流れで、セリアが提案する。
「ええ、大丈夫ですよ。ちょっとお待ちください」
そう言って、リオが横にいるカイルを見やった。
「カイル殿、彼女が私の知り合いなんです。どこか店に入って話をしてきてもよろしいですか？」
「は、はっ、承知しました。自分は付近で待機しておりますので！」
カイルが慌てて右手を握りしめ、胸に当てて言った。
これがここいらの国では一般的な敬礼である。
「ありがとうございます。ではセシリア、行きましょうか」
「うん。でも、連れの人は放っておいていいの？」
「大丈夫です。彼は俺の護衛でして。言ったでしょう。これからセシリアに会いに行こうと思っていたって」
「そう？　まぁ、大丈夫ならいいけど、そこら辺も含めて話を聞かせてちょうだい」
それから、リオとセリアは手ごろな喫茶店に入った。
外の喧騒が響く、見通しが良いテラス席に座って、二人が向き合う。
カイルは同席しないで、店の外から二人の様子を眺めていた。
流石に会話の内容を聞くことはないようだ。
「突然すみませんでした。少し事情が込み入っていまして」

注文を終えて、二人きりになったところで、リオがセリアに謝罪した。

「ううん、大丈夫よ。まさか騎士を同伴してくるとは思わなかったけどね」

「実は訳があって今は王城に客人として宿泊しておりまして、彼はその護衛です」

リオが苦笑して、簡潔に事情を説明する。

「お城の客人？　クレティア公爵家のじゃなくて？」

「はい。昨晩から王城に宿泊することになりました。まぁ、事情はまた今度説明します」

賊の襲撃があったと言ってセリアに心配をかけたくはない。

そう考えて、リオは話を逸らすことにした。

「そう？　問題ないならいいけど……今はミハル達の件が先かしら」

「はい。お伝えした通り、美春さん達の探し人が見つかりました。沙月さんと連携して彼に事情を説明したのですが、少しイレギュラーな事態が起きてしまいまして」

語って、リオが困ったと言わんばかりの表情を浮かべる。

「すぐに彼と会うためにはミハル達の存在を国に知らせないといけない状況になっちゃったってところ？」

と、セリアが大まかな事情を集約して尋ねる。

「はい。一人部屋の沙月さんと違って、貴久さんのすぐ傍には常に王女様とお付きの人間達が付いていることが痛いですね。城に滞在することで俺の行動の自由がだいぶ制限されてしまったことも厄介ですが」

嘆息しながら、リオが答えた。

「なるほどねぇ」

と、セリアが得心したように頷いた。

「ただ、何よりもセントステラ王国の第一王女に美春さん達の存在が知られていることが最大の問題なんですけどね。幸い今のところは他言しないでくれるようですが」

リオが言うと、セリアが瞠目（どうもく）する。

「あちゃー、王族に知られちゃったの？　そりゃあ厄介ね。信用できる人物なのかしら？」

「……一応は。とはいえ完全に信用することはできませんが」

セリアの問いに、リオが数瞬の間を置いて首肯する。

昨晩、貴久とリリアーナの両名はリオと沙月に対して誓った。

この先、仮に貴久が美春達を保護した場合、彼女達の意志を尊重し、政治的な道具として利用されないよう努力することを。

しかし、正直なところ、亜紀と雅人の血縁者である貴久はともかく、リオはリリアーナのことを信用しきれていなかった。

国のトップである国王ならまだしも、ただの王女にすぎない彼女が必ずしも政治的なしがらみに抗えるわけではないのだから。

とはいえ、リリアーナが大国の王族である以上、邪険に扱えるは

ずもない。
最低限リリアーナのことを信用するためには背後にいるセントステラ王国に同内容の誓約をしてもらう必要があるが、それは現段階では実現不可能な話である。
結果、不敬スレスレの行いではあるが、妥協点として彼女に努力義務を負うことを誓ってもらって、暫定的に信用することにしたわけだ。

「とはいえ、亜紀ちゃんと雅人にとって貴久さんは兄にあたります。家族がお互いに再会を望んでいるのに、外野が必要以上に口を挟んで結論を出すことが正しいとも思えません」

リオは亜紀や雅人のことを保護しているのであって、奴隷として所有しているわけではない。
何より兄である貴久は亜紀と雅人に関して正当な保護権を主張できる立場にいる。
離れ離れになった家族同士が再会するべきか否か。

「彼女達にはすべてを知って、その上で判断を下す権利と義務がある」

リオが毅然(きぜん)とした口調で言った。
再会した先に危険を孕(はら)んでいるとしても、それでも家族がお互いに強く会いたいと望んだとしたら――。
その選択肢を選ぶことが正解なのか過ちなのか、それは血縁者でもない者が主体となって答えを出す問題ではない。
そんな思いがリオの中にあった。

「だからリスクを承知で貴久さんと会いたいのか、美春さんも含めて三人の判断を信じて尊重することにしました」

「正論……だと思うけど、貴方はそれでいいの？」
尋ねて、セリアが窺(うかが)うようにリオの瞳を覗き込む。
「……それは俺が決める問題じゃないですよ」
少しだけ寂しそうに微笑んで、リオが言った。
その答えにセリアが小さく嘆息(たんそく)する。
「……昔から思っていたけど、ハルトって人間関係に対して現実的というか、すごくドライよね」
やがてセリアがそんなことを語り始めた。
リオがきょとんとした表情を浮かべる。
「もっと……こう……周りに依存するというかさ。その――」
「お待たせしました！　ご注文の品になります」
セリアが何かを伝えかけたところで、店員の女性が愛想良く注文の品を運んできた。
「どうぞ！」
見事な営業スマイルを浮かべて、彼女が金属製のティーポットに入った紅茶を陶器製のカップに注いでいく。
おかげで会話の流れが完全に断ち切られてしまった。
「どうも」
苦笑してリオが礼を述べる。

大事なところで話を中断されて、セリアが店員の女性をジトッと見つめた。
だが、それがすぐに逆恨みだと思ったのか、溜息を吐いて視線を解いてしまう。
しばし微妙な沈黙が二人の間に流れた。
「……いただきましょうか？」
「うん……」
リオが提案して、二人が温かい紅茶に口をつけた。
そうして喉を潤すと、
「なんにせよ。私が宿を出る前の様子だと、ミハル達も悩んでいたわよ」
ややあって、セリアが言った。
「……そうですか」
リオの頬が物憂げに下がる。
「もしミハル達が王城に出向くことになったとしたら、その場合の予定を訊いてもいいかしら？」
「俺はいったん王城へ戻って登城の段取りを整えてきます。その後、国の人間と一緒に出向いて美春さん達を迎えにくることになるかと」
「了解。私にできることはある？」
「いえ、大丈夫です。今、ガルアーク王国の城にはベルトラム王国の人間が大勢いますから、セシリアはアイシアと一緒に留守番をお願いします」

と、リオが首を左右に振って告げる。
流石にセリアをガルアーク王国の王城へと連れて行くわけにはいくまい。
今、あの城の中にはベルトラム王国の貴族も大勢いるのだから。
セリアは一瞬だけ目を見開くと、
「そっか。お城にはベルトラム王国の人達がいるんだ……」
呟いて、少しだけ顔を曇らせた。
リオがそんなセリアの表情の変化を機敏に察する。
「中には王立学院で俺と同期の人間もいました」
と、おもむろにリオが語りかけた。
セリアがぎょっとする。
「大丈夫だったの？　気づかれたりしなかった？」
「はい。素性が割れることはありませんでしたよ。ただ、フローラ王女からどこかで会ったことがないかと尋ねられた時はひやりとしましたが」
そう語るリオの口許（くちもと）は苦笑するように微妙な形で曲線を描いていた。
「そう、フローラ王女が……。意外かもしれないけど、殿下は人の本質を見る素晴らしい観察眼をお持ちだわ。貴方の雰囲気で何となく違和感を覚えられたんじゃないかしら」
「そう、なんでしょうか？　ちょっと想像しにくいですが……」
リオはフローラに対して物静かで引っ込み思案な少女という印象

を抱いていた。
王族とは思えないくらいに腰も低い。
いつもおどおどした態度で、どこか人の顔色を窺っているような節がある。
もしかしたらセリアの言う観察眼とはそういったところを指しているのかもしれない。
そう思った。

「少しわかるような気もしますね。勘も鋭そうではありました」
「でしょう？」

と、少し誇らしげに、セリアが言った。

「セシリアこそよく見ているじゃないですか、生徒のこと」
「え？　うーん、まぁこう見えても教師歴は長かったからね。何年も生徒と接しているうちに少しずつ……ね」

セリアが少しだけ照れ臭そうにはにかむ。
だが、その笑顔は少し寂しそうでもあった。

「気になりますか？　ベルトラム王国のことが」

じっとセリアの瞳を覗き込んで、リオが訊いた。
セリアは少し面食らったような表情を浮かべたが、

「まぁ……そうでもないわよ」

と、そっけなく答えた。
そんなセリアの反応に、リオが小さく息を吐く。

「王城にいるベルトラム王国の貴族達はフローラ王女を盟主に添えて、レストラシオンという特別政府を正式に設立しました。勇者であるヒロアキ＝サカタも擁してはいますが、実質的に舵を握っているのはギュスターヴ＝ユグノー公爵のようですね」

リオが唐突にベルトラム王国の現状を語り始める。

「……へぇ、そうなんだ？」

台詞とは裏腹に、セリアが興味を惹かれた様子を見せた。

やはり祖国のことは気になるようだ。

「加えて、一昨日の夜会で、ガルアーク王国はレストラシオンと連携を組むことを正式に表明しました。クーデター以降、ベルトラム王国本国とガルアーク王国の二か国は表向き同盟関係を維持したままでしたが、両国の同盟が破棄される日も近いでしょう」

ベルトラム王国の特別政府であるレストラシオンを公式に支持すると表明した以上、ガルアーク王国がベルトラム王国本国との同盟関係を維持することは名実ともに不可能となった。

ここ最近は沈黙したまま動きを見せていないベルトラム王国本国であるが、自政府の承認を得ていない特別政府が正式に誕生してガルアーク王国と同盟を締結したとなれば、今後きな臭い空気が漂うことは避けられないだろう。

「っ、そう……」

祖国を巡る暗澹とした情勢に、セリアが息を呑む。

「これまで通りベルトラム王国本国は目立った動きを見せてはいな

いようですね。内乱で二分し国力が低下した状態にありますから、荒事は避けたいと思っているのでしょう」
「まぁ……、今のベルトラム王国の状態でガルアーク王国と戦争はしたくないでしょうね。北方にはプロキシア帝国もいるし。あの国がこの情勢でどう動くかは読めないもの」

眉間にしわを寄せて、セリアが語る。

「そうですね。その牽制の意味を込めて、ガルアーク王国は今回の夜会で勇者であるサツキさんの存在を大々的に公表したんでしょうが……」

途中まで言って、リオが言葉を不自然に切る。
リオの脳裏には昨晩に起きた賊襲撃の件がよぎっていた。
昨今の国際世情を鑑(かんが)みると、このタイミングでガルアーク王国を刺激するような真似をするとなれば、背後にいる黒幕はプロキシア帝国かベルトラム王国本国のいずれかである可能性が高い。
ガルアーク王国内に二か国のスパイが潜り込んでいたか、夜会に招待した国々の王侯貴族の中に二か国の息がかかった人物がいたか。
そこまで考えて、リオが思考を打ち切る。
どちらにせよ自分には関係のないことだと思ったからだ。

「当面は三国が牽制しあう形で冷戦に発展するんじゃないか、というのが俺の予想です。クーデターの背後にはプロキシア帝国の影がちらついていたという話もありますが、ベルトラム王国本国も素直にプロキシア帝国に恭順するとは思えませんしね」
「……そうね。今リオから聞いた話を前提にすると、私もそう思う」

セリアが少し難しい顔をして首肯する。

「確かクレール伯爵領はベルトラム王国東部に位置していましたよね。付近にはレストラシオンの本拠地であるロダン侯爵領もあります。そのことも踏まえてご実家に戻る心構えをしておくとよいでしょう」

語って、リオが困ったように微笑んだ。

「……それって……」

リオから差し向けられた視線に、セリアが困惑した表情を浮かべる。

「貴方を助ける時、言ったでしょう？　俺はセシリアには幸せになってほしいんです。だから貴方が幸せになる居場所があるのならいつでも言ってください。そのための助力は惜しみませんから」

少しだけ照れくさそうにはにかんで、リオが告げる。

それは、つまりは――。

リオが言わんとするところを薄々と察して、セリアが目を丸くする。

「今回の件が片付いたら予定通りクレール伯爵領へ向かいましょう。おそらく数日中には出発できると思いますので、それまでアイシアとお待ちください」

普段通りの柔らかい口調で、リオが言った。

「……うん。ありがとう……」

何だか無性に泣きたくなってきたが、セリアはぎゅっと唇を噛み

しめて、頷いた。
別に脅迫まがいの政略結婚から逃げ出したことに後悔はない。
だが、国が大きく二つに分裂しているというのに、家族がそんな国で貴族の役目を果たしているというのに、自分だけがのうのうと幸せに日々を過ごしてもいいのだろうか。
今までセリアは心の中で常にそんな疑念を抱えていた。
自分としては上手く隠して暮らしていたつもりだったが、この話の流れだとリオにはすべて見透かされていたのだろう。
その上で今リオは背中を押してくれているのだと、セリアは気づいた。
後悔しないよう、好きな道を選べばいいと。
選択肢を提示してくれた。
今、美春達に対してしていることと全く同じだ。
セリアが名状しがたい感情を抱く。
と、その時、

――春人、美春達が貴久と会うことを決めた。

リオの脳内にアイシアの声が響いた。
突然に語りかけられるこの感覚は何度経験しても慣れるものではないなと、リオが苦笑する。

（……わかった。これから先生と別れてお城に戻る。今度はお城の人間を引きつれて宿屋へ戻ってくると思うから、アイシアは先生と一緒に別行動してくれ）

――わかった。

念話を終えて、短い沈黙が二人の間に降りた。
一秒、二秒。

そうして、

「美春さん達が貴久さんと会うことを決めたようです」

少し硬い声で、リオが言った。

第１０３話　巡り会う者達

リオは王城へ戻ると、貴久とリリアーナに美春達が登城する気があることを伝えた。
歓喜した貴久に祝福の言葉を贈ると、リリアーナが迅速に行動を開始する。
流石は大国の第一王女というべきか、瞬く間に手回しを行い、美春達の登城を認めさせるべく、フランソワとの会談の機会を設けてしまった。
会談は原則として傍聴が自由に認められている謁見の間ではなく、内々に話を進めるためにもフランソワの執務室で行われことになる。
リオ、沙月、貴久、リリアーナの四人が足を運び、その場でフランソワに説明を行うことになった。
美春達と貴久や沙月との関係、リオが美春達を保護してきたこと、貴久と沙月が美春達に会いたがっていること、そのために美春達をお城へと呼びたいこと、今後どうするべきかを話し合って決めたいこと――。

「用向きは理解した。彼女達を王城へ招き、タカヒサ殿とリリアーナ王女の客室に滞在することを許可しよう」

話を聞き終えると、フランソワが張りのある深い声で言った。
流石に勇者二人と他国の王族から直訴されれば、すんなりと要望は通るようだ。
望み通りの展開に、貴久が安堵の笑みを浮かべる。

「ただし、条件がある」

と、フランソワが言葉を付け足す。
真面目な顔つきで話を聞いていた沙月であったが、その眉がピクリと動いた。
「条件でございますか？」
リリアーナが動じた様子もなく尋ねる。
「うむ。そうだな……、まず、その方、ハルトと言ったな」
深く頷くと、フランソワがリオを見やった。
「はっ。左様にございます」
いきなり名指しで呼ばれたリオであったが、腰が据わった様子で返事をする。
「サツキ殿の友人を保護したこと、大義であったな。サツキ殿を擁(よう)する我が国にとっても、タカヒサ殿を擁するセントステラ王国にとっても大きな実益をもたらした。これで勇者殿方の心の問(つか)えも取れたというものだろう」
と、フランソワがおもむろにリオのことを褒めだした。
「そうであるよな？　リリアーナ王女よ」
「はい、仰せの通りかと」
無垢な笑みを浮かべて、リリアーナが同意する。
「改めて言おう。ハルトよ、大義であった」

「身に余るお言葉にございます」

いまいち読みにくい話の流れではあったが、リオは平静を保ったまま、恭しく謝辞を述べた。

「ふむ、そこでだ」

フランソワが不敵な語調で告げる。

「午後からの謁見にて、賊討伐の件に加え、此度の一件の功績についても公式に礼を告げることにした」

それはつまり、美春達の存在を城内で公にするということである。

貴久は抵抗感を表すように、ムッと表情をしかめた。

長きにわたって滞在するならばともかく、お城に呼んですぐに知らせるべきとは思えなかったのだ。

「王様、それは――」

咄嗟に反論の言葉を発しようとした貴久であったが、フランソワが手を挙げてそれを制止した。

「無論、彼女達をあまり人目に触れさせたくないと考える勇者殿方の懸念は余も理解しておる。だがな、かと言って、全くその存在を秘匿しようとすることも悪手なのだぞ？」

滑らかに、そしてよく通る声で、フランソワが語る。

「多数の人間が歩き回る城内で……それも国賓の宿泊する部屋に客を呼び寄せるとなれば人目を避けることは困難だ。それは理解して

いるであろう？」
「それは……、フードで顔を隠すとかすれば……」
もっともなフランソワの指摘に、貴久がたどたどしく意見した。
「無論、余が衛兵に命令すれば、顔を隠した者でも城内の素通りは可能だが、それでは却(かえ)って悪目立ちするのではないか？　貴族達の目と耳の良さをあまり侮らぬ方がいい。不審な点に誰かが気づけば、その後は噂が流れるのは早いぞ」
「でも……、気づかれるのは仕方がないとしても、存在を明らかにすることとは話が別なのでは？　わざわざ教えてあげる必要なんてない。黙っておけばいいはずです」
「だからこそ、そこが問題なのだ」
ここぞとばかりに言って、フランソワが含みのある微笑を浮かべる。
「完全に隠し通せているのならばともかく、暗に知られている秘密は不信と不満を生む。無暗な干渉をなくしたいのなら、適度に情報を開示しておくことも必要だろう。人は好奇心を満たされれば満足する生き物であるからな」
「……」
貴久はまだ納得しかねている様子だが、フランソワの言葉に押し黙った。
（まぁ、こうなるよな）
黙って話を静観していたリオであったが、特に今の状況に不満を覚えているわけではない。

美春達を城に呼べば城主である国王の横やりが入ってくることは十分に予想できたことだ。
今の展開は十分に想定内であるし、許容範囲内でもあるため、特に口を挟む気もなかった。
沙月やリリアーナが特に異論を唱えず、黙って話を聞いているのは同じように思っているからだろう。
ただし、リオの場合は、この場にいる人間達との間に明確な身分の差があるため、勝手に会話に割り込むことができないというのもあるが。

「それに昨日は賊の襲撃もあったばかりだ。今、城内の空気は張りつめている。だからこそ明るい知らせを貴族達に知らせてやりたいのだ。どうか承知してはくれぬか？」

止めと言わんばかりに、フランソワが告げる。

「そう、ですね。そういうことでしたら……。ただ、謁見の場に彼女達を呼び寄せる真似はやめてくれませんか？　彼女達の意志に反して王侯貴族がいる場に連れ出したくありませんから」
「もちろんだ。余とて勇者殿方の連れ合いを晒し者にする気はないからな」

貴久の言葉に、フランソワが厳かに頷いた。

「ありがとうございます」

ようやく気が済んだのか、貴久が得たりやおうと礼を言う。

「うむ。まあ、可能ならば今宵の夜会に参加してもらえればと思っているが、本人達の意志もあるからな。今後どうしたいのかも含め

て、連れ合い方を交えて存分に話し合うとよい」
「……はい、もちろんです」
貴久は顔を引きしめ、決然と首肯した。
（食えない王様だ）
と、リオが内心で独りごちる。
フランソワは嘘は言っていないが、本当のことを言っているとも思えなかった。
日本にいれば中学校を卒業して高校に入学したばかりの貴久と、国王になるべくして生まれ育ち教育を受けて人生経験を積んできたフランソワ――。
どちらが弁舌に長けているかなど比べるべくもない。
とはいえ、積極的に何かを企んでいるわけではないだろうし、美春達に害悪が及ぶ真似をしようとしているわけでもないのだろう。
勇者と真っ向から対立する真似は国王として最も避けなければならない事態なのだから、そこは嫌というほどに理解しているはずだ。
だが、できるだけうまく立ち回って、あわよくば美味しいところを持っていこうとしているように思えた。
まあ、ともあれ、これで美春達を城に呼ぶために必要な段取りがほぼ済んだことになる。
後は細かい事務的な処理を行い、美春達を城へと呼ぶだけだ。
それから、しばし必要な会話を行い、会談後、リオが騎士数名を引きつれて、宿屋にいる美春達を迎えに行った。
☆★☆★☆★
美春、亜紀、雅人の三人が遂にガルアーク王国のお城へとやって来た。

案内先は貴久とリリアーナが宿泊する客室。
そこで、貴久と沙月、そしてリリアーナが待ち構えていた。
美春、亜紀、雅人、沙月、貴久――、地球から召喚されて離れ離れになった五人が、この世界で初めて一堂に会した瞬間である。

「お兄ちゃん！」

部屋に入り、貴久の姿を発見し、亜紀が歓喜の声を上げた。

「亜紀……、みんな！」

貴久が感極まった顔つきを浮かべる。

「お兄ちゃん！　お兄ちゃんだ！」

亜紀が小走りで駆け寄り、貴久に近寄った。
貴久が両腕を広げ、亜紀を受け止める。

「亜紀、良かった……。良かった！」

言いながら、貴久が亜紀をぎゅっと抱きしめる。

「あはは、苦しいよ。お兄ちゃん」

自らも貴久のことを抱き返しながら、亜紀が言った。

「っと、ごめん」

慌てて貴久が亜紀を抱きしめる力を緩める。
しかし、今度は、亜紀が貴久に抱き着く力をより強めた。

「んふふー、お兄ちゃんだ」

と、貴久の胸に顔をうずめながら、亜紀が言った。

（……こんな表情もするのか）

心底嬉しそうに貴久に甘える亜紀。

普段はどちらかというとクールというか、口数が少なく人見知りな亜紀の姿を目にしているせいか、リオは少しだけ驚いていた。

「亜紀、元気だったか？」

「うん……、元気だったよ。お兄ちゃんは？」

腕の中の亜紀がうるんだ目で貴久を見上げた。

これまで感じてきた不安と悲しみ。

その抑圧からようやく解放されたのだ。

「俺も元気だ。みんなのことだけが気がかりだったけど、会えて良かった……」

会いたかった。

愛おしい者達がすぐ目の前にいる。

触れられる。

ただただ、それが嬉しかった。

貴久はそれが嬉しくて、仕方がなかった。

「えへへ……」

亜紀はしばらく貴久に抱き着いたままであったが、ひとしきり兄

とのスキンシップに満足すると、僅かに顔を紅潮させてそっと後ろへ身を引いた。

「雅人も元気だったか？　もっと近くに来いよ。よく顔を見せてくれ」

亜紀の背後に立っていた雅人に視線を送り、貴久が語りかける。

「いいよ、俺は。恥ずかしいだろ」

抱き着かれては堪(たま)らないと、雅人が照れくさそうな笑みを浮かべてぶっきらぼうに言った。

久々に目にした弟の反応に、貴久が優しく顔をほころばせる。

「良かったね。みんな」

仲睦まじい兄弟三人の様子を見守りながら、美春が優しく微笑んだ。

「えへへ、うん！」

喜色満面の笑みで頷く亜紀と異なり、貴久と雅人は顔を見合わせ、気恥ずかしそうにはにかんでいた。

「雅人、少し大きくなったか？　立派になったな」

まじまじと雅人の姿を見つめながら、感心したように貴久が言う。

「ん、そうか？　まぁ成長期だからな」

自分の手足を見ながら首を傾げ、雅人が答える。

「そうか」

フッと笑みを浮かべ、貴久は雅人の肩にぽんと手を触れた。
そのまま数歩離れた位置に立つ美春へと視線を移す。
貴久はそっと目を瞑り、息を吐くと、決然と美春に近づいた。

「……会えて、良かった」

言って、貴久が唐突に美春を抱きしめる。
すると、その場にいた者達がそろって目を丸くした。

「え……？」

あまりの突然のことに、美春も不意打ちを食らってしまったようだ。
美春の身体は硬直し、数瞬の間、されるがまま抱きしめられていた。
だが、ふと、ある時。

「ぁ……」

美春が大きく目を見開いた。
その視線の先に貴久は映っていない。
映っているのは美春にとって幼馴染の少年、天川春人――の幻影。
つい最近見たばかりの夢で、成長していた彼が、悲しそうな目で美春を見ていた気がした。
それは夢の中で起きた出来事なのに、何故だか今も鮮明に美春の記憶に残っている。

その悪夢が凝縮されたように一瞬でフラッシュバックしたのだ。
やがて我に返った美春は色を失って、

「っ、や！」

反射的に貴久を突き放した。
明確な拒絶。
普段の柔和な美春からは想像もできない反応に呆然としつつ、貴久が一歩、二歩と後ろへ下がる。
貴久は目を瞬(しばたた)かせると、

「え、っと……」

貴久は愕然(がくぜん)と自らの両腕を見下ろした。
まだ柔らかな美春の温もりが残っている。
決して嫌がらせ目的で抱きしめたわけではない。
再会できたことが嬉しくて、堪(たま)らなくて、感情が高ぶって、気づいたら身体が動いていたのだ。
だが、結果的に美春を嫌がらせてしまったことに気づき、貴久はひどくショックを受けた。

「あ、その……」

突き飛ばしてしまったことを悪く思っているのか、美春が済まなそうな表情を浮かべる。
だが、美春はすぐに貴久から逃れるように視線をさまよわせた。
怖い。
何故だか怖くて堪らなかった。
そうして、ふと、リオと視線が重なる。
どこか陰(かげ)りはあるが、リオは取り乱した美春を案じるように優し

い顔つきを浮かべていた。
その表情は夢の中の春人にとても似ていて、
「え……、あ、は……る、くん」
夢の中の春人の顔が、リオの顔に重なったような気がした。
次の瞬間、美春の顔がサッと青ざめる。
「ち、違う。違うの！」
心臓が凍りついたような感覚に襲われ、気がつけば、何かを否定するように、美春は叫んでいた。
突然に大きな声を出した美春に、その場にいた者達が目を丸くする。
「ど、どうしたの？　美春ちゃん、大丈夫？」
沙月が明らかに冷静さを欠いた美春の両肩を掴んで、落ち着かせるように声をかけた。
それで美春はハッと我に返り、目を瞬(しばた)かせた。
身体が鉛のように重い。
だが、頭が急速に冷静になってくる。
いったい何をしているのだろうか、自分は――。
美春は急速に気恥ずかしくなり、忸怩(じくじ)たる思いを抱いた。
「その……すみません！　驚いちゃって……」
美春が申し訳なさそうに謝罪する。
「本当？　気分が悪くなったとか？」

訊(き)いて、沙月が美春の顔をじっと見つめた。
「い、いえ、そんなことないです」
美春がぶんぶんと首を左右に振る。
その顔色は少しだけ青白い。
しばし、二人の視線が重なり続けた。
「そっか、まぁ、いきなり抱きつかれれば無理もないか」
やがて、苦笑して言うと、沙月がジロリと貴久を睨(にら)んだ。
「貴久君。美春ちゃんと再会できて嬉しいのはわかるけど、女の子はデリケートなのよ。扱い方がまるでなってないわ。ただでさえ美春ちゃんは大人しい子なんだから」
「す、すみません。亜紀と抱き合った直後だったからというか、その、雰囲気に押されたというか、すごく嬉しくて、衝動的に……」
貴久が顔を真っ青にしてしどろもどろに謝罪する。
「まぁ、気持ちはわかるけどね」
沙月が憮然と溜息を吐く。
「もう大丈夫、美春ちゃん？」
美春の肩に手を回すと、沙月が改めて顔を覗き込んで尋ねた。
「はい。その、本当に驚いただけで……、いきなりで混乱しちゃっ

たというか」
「そっか……」
沙月がじっと美春の顔を見つめる。
美春もじっと沙月の顔を見つめ返した。
先ほどの顔色の悪さはもうなくなっている。
どうやら本当に驚いて少し混乱しただけのようだ。
それがわかり、沙月はほっと息を吐いた。
「その、ごめん！　本当に！」
不必要な弁明はせず、貴久が美春に深く頭を下げた。
「う、ううん。私こそごめんね。思いきり突き飛ばしちゃって……。痛くなかった？」
美春がいたわるように突き飛ばした部位を見る。
「いや、全然。そんなに力はこもってなかったし。そんなことより俺の方が悪かったから！　本当にごめん！」
勢いよく頭（かぶり）を振って、貴久が謝罪する。
「うん。その、私も大丈夫だから……」
慎ましい微笑を浮かべて、美春は貴久の謝罪を受け入れた。
だが、何となく微妙な空気が二人の間に流れる。
亜紀がそんな二人のやり取りをやるせない思いで見つめていた。
「ねぇ、お兄ちゃん。なんかしばらく見ないうちに大胆になったね。

前は美春お姉ちゃんの手すら握れなかったのに」

と、努めて明るく、亜紀がニヤリと笑みを浮かべて茶化した。

言われて、貴久が顔を真っ赤にする。

そんな言い方をしたら自分が美春のことを好きなことがわかってしまうではないか。

「なっ、ばっ！　亜紀！　そ、それは……」

慌てて弁解しようとしたが、上手い言葉が出てこない。

おそるおそる美春に視線を送ると、不思議そうに首を傾げていた。

視線が合い、美春が愛想笑いで口許（くちもと）をほころばせる。

そんな美春の表情を見て、貴久は胸が強く締めつけられるような気持ちになった。

二度と会えないと思っていた絶望から解放され、喜びのあまり衝動的に美春を抱きしめてしまった貴久。

彼が美春と出会ってからもう数年が経つが、これまで貴久は美春のことを好きでいながらも面と向き合う勇気がなかった。

もちろん、希望的観測にすぎないのかもしれないが、美春が自分のことを嫌ってはいないとは思っていたし、美春と一番仲が良い男は自分だという自負もあった。

中学に入って以降は、少しずつ周りの男子達も美春のことを意識するようになって、危機感を覚え、告白しようと思ったことも何度もある。

ひょっとしたら告白したら普通にオーケーしてくれるかもしれない。

そんな淡い妄想を抱いたこともある。

だが、貴久は知っていた。

自分と初めて会うずっと前から、美春が亜紀のことをずっと優しい笑顔で見守り続けてきたことを。

亜紀も美春のことを実の姉のように慕っていることを。
そして、そんな二人がお互いの関係をとても大事にしていることも。
だからこそ、自分が美春に告白してしまうことで、亜紀と美春の関係を崩してしまうことが怖かった。
元からあった二人の仲に雅人と一緒に入り込んで、その関係を維持しようと頑張ってきた。
そうして四人でいる時間は、とても居心地が良くて、幸せだったから。
まだ告白しなくとも、すぐに付き合えなくても、それでも構わないと思って、流されるように日々を過ごしてきた。
そんな幸せな日々はずっと変わらずに進んでいくと思えたから。
だが、ある日、貴久はたった一人でこの世界へと召喚されてしまう。
その時、つい先ほどまであった幸せな場所が奪われたことを知り、貴久はただただ絶望した。
見知らぬ人間、見知らぬ景色、見知らぬ環境、見知らぬ常識に、貴久は自暴自棄になってしまいそうにもなったが、そんな自分をリリアーナが癒してくれた。
彼女のおかげで少しずつ元気を取り戻していき、ようやくこの世界に慣れてきたところで、貴久は地球にいた頃の夢を何度も見るようになる。
自分がいて、美春がいて、亜紀がいて、雅人がいて、みんなが笑っている。
それはとても優しくて、とても幸せな夢だった。
だからこそ貴久は再び切望するようになる。
みんなに会いたい。
美春に会いたい。
会うことが出来たなら、もう怯まない。
何が何でも、今度は美春達のことを離して堪るものか。

そんな想いを吐露すると、リリアーナは貴久に協力してくれることを確約してくれた。
どんな些細な情報でも手に入ったらすぐに伝えると。
貴久は強く歓喜し、リリアーナに強く感謝した。
彼女のことを強く信頼するようになった。
いつの間にかリリアーナも美春達と同じくらいに大切に思うようになっていた。
そんなある日、リリアーナが約束通り手に入れた情報を教えてくれた。
隣国にあるガルアーク王国にて開催される夜会で、皇沙月（すめらぎさつき）という勇者のお披露目を行うということを。
そして、今日に至る。
失ったはずの未来。
それを前にして、美春達のことを絶対に離すものかと、貴久は再び想いを固めた。
もう気遅れなんてしない。
衝動的に美春を抱きしめてしまったのは、そんな強い気持ちの現れである。
だが、冷静になって考えると、いきなり抱きしめてしまったのは本当にやりすぎだったと、猛省した。
湧き出てくるのは気恥ずかしさと罪悪感。
だが、不思議と後悔はしていなかった。
今後は逃げずに直視しようと、今なら思えるのだから。

（温かかったな……）

美春とあんなに密着したことなど初めてのことだった。
押せば簡単に倒れてしまいそうな華奢（きゃしゃ）な身体。
柔らかな黒髪から放たれるふっと鼻をくすぐる甘い匂い。
きょとんと目を見開き、至近距離から自分の顔を見上げている可

愛らしく整った容貌。
愛(いと)おしかった。
その感覚が今もなお鮮明に身体に残っている。
一瞬のことだったが、どうせならちゃんと感触を味わっておけば良かったのでは――。
（っ……何を考えているんだ！　俺は！）
とんでもなく不埒(ふらち)なことを考えてしまい、貴久が激しく自省する。
亜紀は顔を真っ赤にしてうつむいた貴久の顔をまじまじと見つめると、
「んふふー」
と、実にご満悦な様子で、微笑んだ。
その笑顔を見ていると、貴久は何だか力が抜けてしまった。
この後、美春にもう一度ちゃんと謝ろう。
貴久はそう決めた。
すると、その時、
「お話し中に申し訳ございません」
と、リオが語りかけた。
室内にいる者達の注目がリオに寄せられる。
「私はこれから陛下との謁見に参らねばなりませんので、これで失礼させていただきます。細かい話はまた落ち着いた時にでも」
柔らかな笑みを浮かべて、リオが言った。

「ごめんなさい。私も謁見の間に行かないといけないから、また後で話しましょう」
「私も参ります。外には護衛の騎士もおります。お世話役にフリルを置いていきますから、どうぞごゆるりとお待ちくださいませ」
沙月とリリアーナもリオと一緒に謁見の間へと向かうことを告げる。
貴久と美春達はこの部屋で留守番だ。
「それでは……。また後ほど」
告げて、リオは美春達に微笑みかけた。
美春、亜紀、雅人。
三者三様に少しずつ異なる表情を浮かべているが、恐怖や不安といった感情は見受けられない。
どこか安堵している様子も伝わってくる。
そんな美春達の表情を見ていると、きっとこうして会えたことは間違いではなかったのだと、そう思えた。
ふと、リオと沙月の視線が重なる。
沙月も四人が再会できたことを良かったと思っているのか、穏やかな表情を浮かべていた。
「謁見が終わったらすぐに戻って来るからね。みんなでゆっくり話しましょ」
「はい！」
沙月が語りかけると、元気な返事が戻ってきた。
「行きましょうか」
「ええ」

頷き、リオ達が退室しようと身を反転させた。
すると、その時のことだ。
「ハルトさん！　……あの……」
貴久がリオを呼び止めた。
「はい。何でしょう？」
ぴたりと足を止め、リオが振り返る。
「その、……すみませんでした！　昨日は熱くなってしまい、失礼なことも言ってしまいました」
言って、貴久が深く頭を下げた。
リオはきょとんとした表情を浮かべると、
「そのようなことは……。大切なご家族のことです。離れ離れになって会えないとなれば不安に思うのは当然のことでしょう。熱くなるのも無理はありません。むしろ私の方こそ申し訳ございませんでした」
そう言って、貴久に頭を下げ返した。
「いや、ハルトさんは謝るようなことは何も……」
戸惑い、貴久が否定する。
「いえ、会ったばかりの人間が踏み込むべき領域を越えていたこと

は確かです。兄である貴方を試すような発言をしてしまった」

と、リオが静かに告げた。

見た目の若さにそぐわぬリオの落ち着き払った対応に、貴久は驚いたように目を丸くする。

大人だ、それに比べて自分は――。

と、忸怩(じくじ)たる思いを抱き、貴久は唇を噛みしめた。

「……謝るべきことはそれだけじゃありません。みんなを保護してくれた件でもお礼が遅れてしまった。……ありがとうございました。みんなを無事に保護してくれて、こうして俺達が再会できるように尽力してくれて」

強い感謝の念を言葉に乗せて、貴久が再び頭を下げる。

リオはゆっくりと頭(かぶり)を振って、

「みんなが喜んでいるのならそれでいい。それだけです」

言いながら、リオが貴久の背後にいる美春達に微笑みかけた。

視線が重なり、美春達が照れ臭そうにはにかむ。

「ありがとうございました！　ハルトさん！　本当に……」

美春達が強い感謝の気持ちを込めて、リオに頭を下げた。

リオが穏やかに頷いて応じる。

その様子を見て、四人の間に強い信頼関係があることを貴久は悟った。

だが、どうしてだろうか。

原因は不明だが、胸の内が微(かす)かにざわめくのも感じてしまった。

貴久が慌てて首を左右に振って、その感情を振り払おうとする。

「それでは。遅れるわけにもいきませんので、これで失礼します」

突然に首を振り始めた貴久のことを不思議に思いながらも、時間に押されて、リオはいよいよ部屋を後にすることにした。

「はい、ありがとうございました」

貴久は妙な胸騒ぎを押し殺し、立ち去るリオの背中に頭を下げ続けた。

第１０４話　美春達の気持ち

リオ、沙月、リリアーナの三人が謁見の間に向かった後、貴久が滞在する部屋で四人の男女が腰を落ち着かせていた。
勇者である千堂貴久、その義妹である千堂亜紀、弟の千堂雅人、三人にとって友人にあたる綾瀬美春。
地球にいた頃は当たり前のように一緒にいた四人が、こうして一堂に会することができた喜びを噛みしめるように、たくさんのことを語り合う。
自分達はまた会うことができたのだ。
一度は離れ離れになったものの、絶望的な状況の中でも無事に生き延びることができて、こうしてまた出会えた。
それはまるで運命のようだと。
そう思って、貴久はただただ感謝の念を抱いていた。

「そうして私達はこの三か月間、ハルトさんと一緒に暮らしてきたの」

亜紀が主体となって、およそ数分間で、この数か月間の出来事を語った。
今、貴久に教えたことは本当に表面的なことだけだ。
話しても構わないこと、できれば話さないでもらいたいこと、絶対に話さないでもらいたいことは、事前にリオから教えられている。
その範囲で矛盾が生じないように、亜紀なりに話のつじつまは合わせてあった。
ダイジェストで語られた話を聞き終えると、貴久が一瞬だけやるせない表情を浮かべる。
自分の手で美春達を守ることができなかったことが悔しかったの

だ。
どうして美春達を助けたのが自分ではなくハルトだったのか、と。
「良かった。みんなが奴隷なんかにならなくて……」
そもそも貴久は奴隷制度に対して強い抵抗感を抱いていた。
人の命を物扱いして、所有権の客体とするなんて。
そんな原始的で野蛮な制度は貴久の考える正義に真っ向から反するものだ。
この世界の文明レベルからすれば必要性があることは理解できたが、納得はしきれていない。
目の前にいる三人が奴隷になってこき使われている姿を想像するだけでもぞっとする。
特に女性である美春や亜紀がどんな目に遭うか。
単にバイアスがかかっているだけかもしれないが、欲望に歪んだ貴族に玩具(おもちゃ)にされてしまうのではないか。
想像して、貴久の顔が一気に青ざめた。
「っ……」
とてつもない動悸(どうき)と吐き気を覚える。
身体が熱いのに寒い。
何故か身体が震えていた。
それを抑えるために、貴久が唇をぎりっと噛みしめる。
「お兄ちゃん、大丈夫？」
亜紀が顔色の悪い貴久を案じた。
「あ、ああ……」

貴久が真っ青な顔で頷く。
何とか笑顔を取り繕って頷こうとしたが、不可能だった。
「貴久君、大丈夫？」
「ああ、顔色が悪いぜ？」
美春と雅人も貴久のことを心配するように声をかけた。
「大丈夫、大丈夫だから」
何とか引きつった笑みを浮かべて、貴久が虚勢（きょせい）を張る。
はっきり言って、説得力はまったく感じられない。
「そんなことより、ハルトさんがいてくれて本当に良かったな」
それは貴久の本心のはずだ。
だが、その言葉を口にするだけで――。
どうしてこんなにも胸が締めつけられるのだろう？
どうしてこんなにも自分が惨めに思えるのだろう？
それは嫉妬と自己嫌悪だった。
自身で美春達を助けることができず、リオが美春達を助けてしまったことが悔しくて、リオに嫉妬し、自身の不甲斐なさを嫌悪している。
しかし、貴久がそれを自覚することはできない。
そんな感情を抱く一方で、リオには美春達を救ってくれたことで確かに感謝の念を抱いているのだから。
「うん、ハルトさん。ちょっと怖い時もあるけど、すごく優しくしてくれたから」

「そうそう、料理も上手いしなぁ。男で美春姉ちゃんと同じくらい料理が上手いなんてすげぇよ！」

亜紀と雅人がリオのことを褒め称える。

「わ、私は全然下手だから。ハルトさんすごいんだよ？　手が大きいのに指先がすごく器用で、知識も経験も豊富だし……」

雅人に持ち上げられて、美春の白い頬が熟した桃のようにそっと染まる。

今の会話で美春達がどれだけリオのことを慕っているのかはわかった。

それだけでリオが悪い人間ではないのだろうと思える。

だが、それ以上はもう、美春達がリオと仲良くしている話を聞きたくはなかった。

聞く余裕なんてなかった。

自分の代わりにリオが三人と一緒に居て、いかに幸せな時間を過ごしていたかなんて、貴久は聞きたくも信じたくもない。

自信が持てないのだ。

美春達が地球にいた頃と変わってしまったように思えて。

なのに自分は地球にいた頃と大して変わっていないように思えて。

まるで置いてけぼりにされてしまったような気分だ。

不安で不安で今にでも消えてしまいたい。

リリアーナに頼ってしまいたくなる。

だが、

（駄目だ！　俺は誓ったんだ。いや、改めて誓わないといけない。もう、みんなを離さない。みんなのことは俺が守って見せる！）

貴久は精一杯の勇気を振り絞って決意を新たにした。

失ったはずの未来がようやく戻ろうとしているのだ。
それを二度も失うなんて真似は絶対にしたくない。

「なぁ、これからのことなんだけど……」

と、三人を見渡しながら、貴久が言う。
すると、一瞬、美春達の目が少しだけ陰(かげ)ったが、貴久はそれに気づかず、先を続ける。

「また後で話し合いをするときにも伝えるけど、みんな……俺のところへ来てくれないか？　これからはずっと一緒にいたいんだ。これから先は俺がみんなのことを守る。守って見せるから」

貴久がすがるような声で言った。
室内に数瞬の静寂が訪れる。

「どう、かな？」

尋ねると、貴久が自らの隣に寄り添って座る亜紀に視線を移した。

「あ、えっと……ね」

亜紀が即答しかねて、返事に詰まった。
その目は愁(うれ)いに満ちいている。

「どうしたんだ？」

言いよどむ亜紀に、貴久が不安そうに訊(き)いた。
亜紀は躊躇(ためら)いがちな表情を覗(のぞ)かせると、

「せっかく会えたんだし、やっぱり私はお兄ちゃんと一緒にいたい。……けど、いいのかな？　ハルトさんにたくさんお世話になったし、このまま離れ離れになって……」

おずおずと、そう答えた。

兄である貴久と一緒にいたい。

それは嘘偽りのない本心だ。

リオや沙月から聞かされた話を踏まえて、亜紀が自身の中で出した結論でもある。

だが、同時に釈然としない気持ちも抱えていた。

この数か月間、リオとずっと一緒に暮らしてきて、今では一緒にいることが亜紀にとっても当たり前になってしまっている。

これで「はい、さようなら」と言われてもまったく想像がつかない。

それに、リオには散々お世話になったのだ。

このままあっさりとリオのもとを離れるのは少し不義理ではないか。

亜紀はそのように思ってもいた。

「え？　あ、いや、それは……」

予想外の返答に、貴久が言葉に詰まってしまった。

亜紀達は無条件で自分の下に来てくれると、無意識のうちに盲目的に信じていたのだ。

まさか付いてくるのを渋られるなんて、想像もしていなかった。

（それだけ彼が亜紀達の中で大きな存在になっているというのか……）

貴久が己の内に湧き上がった名状しがたい感情を紛らわすように、

力を込めて拳を握りしめた。
たった三か月しか離れていなかったのに、何故だかその時が悠久のように感じられる。
まるで侵しがたい不可視の壁が出来てしまったようだ。
「もちろん……ハルトさんにはお礼をしようと思っている。何なら彼にも一緒に来てもらえばいい」
と、貴久がどこかきまりが悪そうに言葉を発した。
彼自身も亜紀が言っていることの意味が理解できないわけではない。
言われるまでもなくリオには何かお礼をしたいと思っていたのだから。
「うん。ハルトさんも一緒にいられたら、いいなとは思うけど……」
亜紀が言葉を濁して返事をする。
何故だろう。
自分でもよくわかっていないのだが、亜紀はリオがこの場にいる四人の輪の中にいる姿を想像することに本能的な忌避感を覚えていた。
だからだろうか。
リオが自分達と一緒に貴久の下に付いて来てくれるイメージがまったく湧かないのは。
「そうか……。二人は……、二人はどう思っているんだ？」
不安そうに声を絞り出して、貴久が向かいに座る雅人と美春を見やる。

「あー、俺もハルト兄ちゃんとは別れたくないんだよな。亜紀姉ちゃんの言っていることもあるし、まだ剣だって習っている途中だしな」

バツが悪そうに、雅人が答えた。
貴久が驚いたように目を見開く。

「け、剣を習っているのか？」

そんな馬鹿な。
雅人はまだ十二歳になるかならないかの子供なのだ。
そう考え、慌てて、貴久が訊いた。
この世界の剣術といえば人殺しを前提とした実戦のための技術である。
自身もお城で剣術を習っていることから、それはよく理解していた。
そんな生々しい戦闘技術を雅人も習っているという。

「おう、護身用にな。実剣だって買ってもらったんだぜ。お城に入る前に預けたから今は持ってないけど」
「なっ……」

あっけらかんと語る雅人に、貴久が絶句する。
雅人は地球にいればまだ小学生をやっている年頃。
大人と同じように道徳的判断なんてできないのだ。
それなのに実剣を持たせて剣術を教えるなんて――。
日本人として平和に育ってきた貴久の倫理観に著しく抵触することだった。

「お前が本物の剣を持つのは駄目だ。雅人はまだ子供なんだぞ」

兄として、貴久が反射的に冷たい声を出す。
雅人のことは自分が守ってやらないといけない。
戦う必要なんてないのだ。

「何言ってんだよ。じゃあ大人になったら習えってのか？　そこらへんに魔物がいるような世界なんだぜ」
「そんな危ない場所に自分から行く必要はない！」
「はぁ？　都市の中にまで魔物が大量に押し寄せてくるような世界だぜ。自分の身くらい自分で守れるようにならないと駄目だろ」
「だから俺が守ってやるって……。ちょっと待て。都市の中に魔物が押し寄せた？　まさかみんなも襲われたのか？」

雅人が放った衝撃の発言に面食らって、貴久が咎めるように尋ねた。
大切な弟達が自分の知らないところで生死を賭けるような暮らしを送っているなんて、到底看過できない事態だ。

「……俺達は守ってもらっただけだよ」

唇を尖らせて、悔しそうに雅人が答えた。
岩の家のことも含めて、セリアやアイシアのことは言わないでほしいとリオからは頼まれている。
ゆえに言葉を濁すしかなかった。

「けど守ってもらうだけじゃ駄目だって思ったんだ。最初はゲームとかスポーツ感覚で習ってみたいと思っていたけど、今は違う！」
「そんなの当り前だ！　ここはゲームの世界じゃない！　人を殺すための技術なんだぞ。実戦で剣を振るう時は誰かを殺すってことだ」
「知ってるよ！　ハルト兄ちゃんが教えてくれたからな。まだ実戦

は早いからって、戦わせてもらってすらいねーよ。けど守ってもらってばかりは嫌なんだ！」
「っ……、殺されるかもしれないんだぞ！」
「んなこと知ってら！」

売り言葉に買い言葉で、二人の間で険悪な空気が流れ始める。
聞き分けのない弟に焦れる貴久と、兄からの押しつけに反発する雅人。
貴久は弟を守ってやりたいだけ、雅人は誰かに守られてばかりいるのがいやなだけ、よくある兄弟喧嘩と構造は似ていた。
貴久の中でじりじりと不安が刺激されていく。

「やっぱり俺と一緒に来い。そんな危ない生活させられるか。お城にいれば安全だ」

保護者としての責任感から、貴久がそんなことを言った。

「はぁ？　やだよ。剣を習っている途中だって言ったろ」

雅人が即座に反対の声を出す。

「そんなのお城でだって習える。ちゃんとした騎士から教わればいい」
「やだね。俺はハルト兄ちゃんがいい」

両者一歩も譲らずに、睨(にら)むように見つめあった。

「ね、ねぇ。やめてよ！　二人とも」
「そうだよ。折角、再会できたんだから」

争う二人の兄弟を止めるべく、亜紀と美春がとりなそうとした。
「兄貴が聞き分けないだけだろ」
ふん、と顔を逸らして、雅人が言い捨てる。
「……二人からも言ってやってくれないか？」
鬱憤（うっぷん）を晴らすように嘆息して、貴久が言った。
「確かに……最初は私も雅人が剣術を習っている姿を見るのは嫌だったし、今もあまり見たくはないけど……」
亜紀が言葉を濁して返事をする。
正直なところ、亜紀は雅人が剣術を習っている姿を見るのが苦手だ。
普段はすごく優しいのに、剣術を教えている時のリオは怖いから。
だが、最近ではリオが雅人に厳しく剣術を教えている意味も理解できるようになっていた。
一度だけ家の傍まで押し寄せてきた魔物達の姿を見たら、理屈とか道徳とかは吹き飛ばざるをえなかったから。
何よりも雅人自身が望んで剣術を習っているということを亜紀は知っている。
だから、亜紀の中には姉として雅人の意志を尊重してやりたいと思う気持ちが芽生えていた。
しかし、他方で、貴久が心配する理由もわからないわけではない。
いったいどちらの意志を尊重すればいいのだろうか。
亜紀は即座に答えを出すことができなかった。
「……まさか亜紀達も剣術を習っているのか？」

表情を凍りつかせて、貴久が亜紀と美春に尋ねた。
「私達は習ってないよ。その……習っているのは棒術と簡単な護身術だけ」
ううん、と首を左右に振って、亜紀が否定する。
「そうか……」
貴久が僅かに安堵した表情を浮かべた。
どうやら棒術程度なら抵抗感はそこまで覚えないようだ。
刃物を扱うかどうか、さらに突き詰めれば人殺しを前提としているかどうか、それが彼の中で大きなラインとなっているのだろう。
「とにかく、みんなには俺と一緒に付いて来てほしい。俺がリリィと協力してみんなのことを守るから」
強い決意を秘めて、貴久が今一度言った。
地球にいた頃のように、一緒にいて、仲良く笑って、優しく幸せな時間を共有したい。
リリアーナのことも美春達に紹介しよう。
彼女ならみんなと仲良くやっていける。
誰も邪魔する者はいない。
邪魔もさせない。
セントステラ王国に戻って、みんなで。
胸を焦がすような貴久の願望――。
「ごめんなさい。私は貴久君には付いていけない」

その望みを断ち切る別れの宣告を、悲しげに、だがきっぱりとした表情で、美春が言った。
ずっと好きだった少女に虚(むな)しく拒まれてしまったことで、貴久の頭の中が真っ白になる。
「な、何で……？」
貴久が憔悴した声を漏らした。
どうして――。
地球にいた時はいつも四人で一緒だったじゃないか。
あのまま続くはずだった四人の未来。
時を巡り、世界を巡り、失われた未来がようやく戻ろうとしているのだ。
それなのにどうして？
「ごめんね。私はハルトさんのところに残るから」
美春が辛そうな声で答えた。
その答えが、貴久の希望を打ち砕く。
美春は選ぶというのか。
これまで何年もずっと一緒にいた幼馴染の自分よりも。
たった三か月程度しか付き合いのない人間のことを――。
「よ、ようやくみんなで一緒になれるんだよ？」
泣きそうな声で貴久が訊(き)いた。
「私だってみんなと一緒にいたいよ」
「なら、一緒に――」
「貴久君が言うみんなの中に、沙月さんは入っているの？　ハルト

さんは入っているの？」
「……え？」
美春の言葉に、貴久が呆けた表情を浮かべた。
「……今の私達じゃみんな一緒にはいられないよ。わかっているんでしょう？」
美春が寂(さみ)しそうに言葉を紡ぐ。
貴久はセントステラ王国に所属して、沙月はガルアーク王国に所属して、リオにはリオの暮らしがあって――。
誰かに付いて行くということは、誰かと別れなければならないということだ。
その選択次第で誰かを傷つけてしまうかもしれない。
だが、それでも選ばなければならない時がある。
その時が今なのだと、考えて考えて、既に美春は答えを出していた。
沙月の居場所をリオに教えられた時から、何となくこんな日が来るんじゃないかと、ずっと一人で悩んできたのだ。
そして、いつかその時がきたら、自分の出した答えを伝えなくてはいけないとも思っていた。
「そんな、そんなはずはない」
貴久が反射的に答える。
すると美春が、何となく悲しそうな笑みを浮かべた。
「そんなことあるよ。こうして貴久君や沙月さんと会うのだってすごく大変だったんだよ？」
「た、大変って……何が？」

「全部ハルトさんのおかげなんだよ。私達が再会できたのは。私達は何もできないから、すごい負担をハルトさんにかけちゃった」
「それは知ってるよ。だからこそ彼にはちゃんとお礼をして、その上で――」
「そのお礼は私が自分でしたいの」

貴久の台詞に、美春が言葉を被せた。

「ここまでしてもらって、こんなにハルトさんに迷惑をかけて、他の人にお礼をさせるわけにはいかない。もちろんハルトさんが今後も一緒にいても構わないって言ってくれたらの話だけど……」

貴久は黙らざるを得なかった。
美春を引き止めたいのに、今の彼女を引き止める言葉が見つからない。
今の美春は躊躇(ためら)いはあるものの、覚悟を決めた顔をしていた。
こんな美春の表情を、貴久は初めて見る。

「これが私の気持ち……」
儚(はかな)げな笑みを覗(のぞ)かせながら、美春が少し硬い声で言う。
その声からは強い意志が感じられた。

「でもね、亜紀ちゃんと雅人君まで私と付き合うことはないから……」

美春から優しく微笑みかけられて、亜紀と雅人が息を呑んだ。

「……美春お姉ちゃん」

亜紀が泣きそうな顔で美春の名を呼んだ。

「みんなは兄弟だから。一緒にいられるなら、一緒にいた方がいいと思うの。もちろん私が決めることじゃないけど……」

上手く気持ちを言葉にできないのか、美春がもどかしそうな顔つきで告げた。

「私はちゃんと考えて答えを出したけど、感情的になって、焦って答えを出すことだけはやめてほしいの。少なくとも今の貴久君と雅人君みたいな風に喧嘩して答えを出すのは駄目。……ね？」

美春が優しくなだめるように、千堂家の兄弟三人に言った。

ついカッとなってしまったことを反省しているのか、雅人がバツが悪そうな表情を浮かべる。

「美春姉ちゃんが言うなら……まぁ、考えてはみるよ」

と、ぶっきらぼうに雅人が答えた。

「貴久君も。一方的に叱りつけるだけじゃ雅人君はわかってくれないよ？」

「それは……わかってるけど……」

そういうことじゃないんだ。

俺は君とも一緒にいたいんだ。

君がいなきゃダメなんだ。

胸がひどくざわめいて、貴久は思わず叫んでしまいたくなった。

「とりあえず今日はもうこの話はしないことにしない？　せっかく

みんなで会えたばかりなのに、喧嘩してる姿を見せたら心配させちゃうよ。今日はゆっくり考えて、心を落ち着けて、また明日に話し合おう。ね？」

今の状態で話し合ったところで、冷静に話し合えるはずもない。
一先ずお互いの考えは伝えたのだ。
その上で少し考える時間が必要だと、美春は思った。

「う、うん。そうだね！　せっかくみんながそろったのに、こんな風に険悪な空気をまき散らしちゃダメだよ。ね、雅人も、お兄ちゃんも」

美春の提案に、亜紀が無理に明るく振る舞って賛同した。
このままじゃ駄目だと、亜紀も思ったから。
亜紀が隣に座る貴久の手をぎゅっと握りしめた。

「亜紀……」

貴久と亜紀の視線が重なる。
貴久は今にも泣き出しそうな赤ん坊のような目をしていた。
そんな兄を見て、亜紀の胸が締めつけられそうになる。

「お兄ちゃん。私は一緒に付いていくから……。みんなで一緒になれる方法を考えよ？　ね？」

ぼそりと、貴久にだけ聞こえる声で、亜紀が言った。

「……ありがとう。ありがとう」

亜紀の言葉で、儚(はかな)く見えた貴久の瞳に希望の光が灯った。

そうだ。
まだ決まったわけじゃない。
何か方法はあるはずだ。
自分は誓ったばかりじゃないか。
もう、みんなのことを離さない、自分が守ると。
だというのに、こんなことで弱音を吐いてはいけない。
美春が言う通りまだ再会できたばかりなのだから。
まだ時間はある。
焦って答えを出してはいけない。
亜紀がいれば、リリアーナがいれば、きっと何とかできるはずだ。
勇者の自分ならば、きっとそれができる。
絶対に――。

第105話　謁見

高々な天井を誇る謁見の間にて、貸与された騎士用の儀礼服に身を包み、リオがフランソワ＝ガルアーク王と対面していた。
室内には多数の王侯貴族が派閥や勢力ごとに参列し、荘厳（そうごん）な雰囲気が漂っている。
中には沙月やリリアーナだけではなく、リーゼロッテや彼女の父セドリック、さらにはフローラやユグノー公爵の姿もあった。
他にも夜会でリオが対面した貴族達がちらほらと散見される。
この場にいる全員がこの謁見を傍聴しに来た者達だった。
そんな中でリオが美春達を保護してから沙月と会うに至るまでの経緯を一通り語っている。

「――以上、私は勇者様方のご友人三名を保護し、今回の夜会に至るまで彼女達を保護し続けてきました」

堂々と論じると、リオがフランソワに向けて首（こうべ）を垂れた。

「ハルトよ。離れ離れになった勇者殿方のご友人を保護し、再会を果たすために尽力したそなたの功績は極めて大きい。大義であったな」

壇上の玉座に座るフランソワが尊大な口調でリオを褒め称える。

「陛下、よろしいでしょうか？」

会話の流れが途切れたところを見計らって、ふくよかな一人の男性貴族が発言の許可を求めた。

ガルアーク王国で名を馳せる大貴族、クレマン＝グレゴリー公爵である。

「よい、許す」

フランソワがクレマンの発言を許可する。

ちょうどクレティア公爵家の向かい側で謁見を傍聴していた彼であったが、発言の前にちらりとセドリックとリーゼロッテの二人に視線を移した。

「ハルト殿が勇者殿方のご友人を保護した功績、確かに素晴らしいものだと感銘いたしました。しかし、一つだけ疑問がございます。何故、彼は国に知らせず、独自でご友人方の情報を勇者殿へお知らせしようと考えたのでしょうか？」

と、クレマンが質問を提示した。

「だそうだが、その真意を聞かせてもらっても構わぬな？」

フランソワがリオへと呼びかける。

「はっ、私はただただ下賤な平民にすぎません。そんな私が闇雲に今回の件を国に上申したところで、信用されるとは思えませんでした」

「まぁもっともであるな」

フランソワがリオの言葉に同意した。

身分社会を是とするこの世界において、身分はそのまま信用と発言力に繋がる。

何の地位も持たぬリオが突然に「勇者の友人を保護しています」

と訴えたところで、まともに取り合ってくれる王侯貴族は少ないだろう。

「何よりご家族と引き離され、ご友人と引き離され、彼女達は心に大きな不安を抱えておりました。加えて彼女達はシュトラール地方の言葉を理解することすらできなかった」

淡々とした口調でリオが語ると、謁見の間が僅かにどよめいた。

「待て、ハルトよ。言葉が通じないというのならば、どうしてそなたはご友人方と意志の疎通ができたのだ？」

それは最もな疑問であった。

勇者以外の人間は言葉が通じないということは、下手に伏せておいてもすぐに判明する不自然な情報である。

「私の両親が暮らしていたヤグモ地方には不思議な魔道具が存在します。それを使ったのです」

リオはあらかじめ質問を想定していたように、なめらかな口調で回答した。

「ほう。どのような魔道具なのだ？」

「私も詳しい原理や製造法は存じておりません。その効果はお互いの思考を限定的にではありますが、相手に伝達できるというものです」

「なんと……便利なものだな」

フランソワが思わず感心したように声を漏らす。

他の王侯貴族達も含めて半信半疑といったところだが、この場に

ヤグモ地方に行ったことがある人間が存在しない以上、リオの言葉を反証できる者はいない。

「それを用いてシュトラール地方の言葉を教えることにしました」
「ふむ、その魔道具は現物があるのよな？」
「残念ながら……。両親の形見の品だったのですが、魔道具自体に寿命がきていたようで、彼女達が言葉を覚え始めた頃には壊れてしまい……」

済まなさそうな表情を浮かべて、リオが言った。

「む、そうか……。形見となれば貴重な品だったのであろう？」
「いえ、もともとは両親がシュトラール地方に移り住んだ時に使用した魔道具のようです。道具本来の役目を果たして壊れたのならば本望でございましょう」
「なるほどな……。まぁ、この話はここまでにしておくとしよう。話が逸れてしまった。どこまで話したものだったか。ご友人方が不安を抱いていたというところまでであったな」

言って、フランソワがじっとリオを見つめた。

「左様にございます。彼女達が一時的にしろ精神的に不安定であったことは自明でした。そんな状態で私が彼女達の身柄を第三者に引渡してしまっては、不安を煽(あお)るのではないか。そう恐れたのです」

と、リオが一切のよどみが感じられない口調で説明を行う。

「そこで私は直接に勇者様に彼女達の情報を知らせたいと愚考しました。幸いリーゼロッテ様とお近づきになる幸運に恵まれたものですから。詳しい時系列は先に申しあげた通りにございます。以上で

す」

そこまで理由を語ると、リオは再び首を垂れた。

「余は話に矛盾点はないように思えたが、見上げたものではないか。のう、クレマン？　今の話に何か疑問点はあったのか？」

フランソワは含みのある笑みを浮かべると、クレマン＝グレゴリー公爵に水を向けた。

「いえ、ございません」

感情を読み取りにくい曖昧な笑みを浮かべて、クレマンが否定した。

「ならば勇者殿方のご友人を保護した功績について正式に礼を述べねばならないな。見ず知らずの者達を保護するなど、ましてや言葉も通じぬ者を保護しようと思うなど、誰にでもできることではない」

フランソワがふむと大仰に頷き、告げた。

「ハルトよ。勇者殿二人のご友人達を保護したこと、大義であったな。褒めてつかわす」

「身に余るお言葉を賜り、恐縮至極にございます」

カーペットの上で跪きながら、リオが恭しく謝辞を述べる。

「リーゼロッテよ。そなたのことも褒めねばならぬな。ハルトのような傑物を発掘したそなたの慧眼、相も変わらず見事であるようだ。流石はセドリックの……、いや流石はリーゼロッテ＝クレティアで

あるな」

実に愉快そうな笑みを浮かべて、フランソワはリーゼロッテのことも褒めた。

彼女がいなければリオが沙月と接触を図ることが難しかったことは明らかである。

偶然が重なったとはいえ、リオの才覚を発掘したことで、大きく国益に繋がる結果をもたらした。

その功績を褒め称えたのである。

「恐悦至極にございます。陛下」

リーゼロッテはドレスの裾をつまみ、淑女然とお礼を告げたのだった。

☆★☆★☆★

一方で、沙月はフランソワに褒められるリオとリーゼロッテの姿を傍から感心したように眺めていた。

今のところ、彼女の出番はリオの説明に相違点がないかを確認されたくらいだ。

（大したものね。国王を相手にああも見事に立ち回れるなんて）

リオが元日本人であるということは既に本人から聞いているし、リーゼロッテが元日本人であったであろうことも半ば確信している。

一国の王を相手にして、細かい作法は抜きにしても、敬意を払ったうえで臆することなく会話ができる日本人などそうはいないだろう。

二人ともすっかりこの世界の住人になっているのだなと、沙月は

改めて実感せざるをえなかった。

（……って、リーゼロッテさんもそうだけど、ハルト君もひょっとしなくとも私より年上なんだよね？）

はて、と沙月が想像をめぐらす。

前世が何歳だったのかは知らないが、今の外見年齢を合算すると、どう見ても二人は沙月よりも年上ということになる。

（それにしては私、ハルト君にちょっと馴れ馴れしすぎじゃない？）

これまでの会話でリオと接していた時の言動を思い出す。

どう考えても年上の人間に対して語りかける口調ではないのではなかろうか。

うん、馴れ馴れしすぎる。

沙月はそう思った。

見た目が自分と同年代だからと、油断していたのだ。

初っ端の出会いから念話で驚かされたり、美春達との件でだいぶ心情を吐露（とろ）してまったことも大きく影響していたりする。

（う……、どうしよう。次からは敬語で喋った方がいい……のかな？）

フランソワからの言葉に丁寧に応じるリオの姿を眺めながら、沙月がそんなことを思った。

相手が年上ならば相応の敬意を払って接しようというのが沙月の基本的なスタンスだ。

そうであるならば、今後は前世分の精神年齢を踏まえて人間関係を構築した方がいいのではないだろうか、と、沙月はそう考えた。

（妙に落ち着いた雰囲気を放っているし、色々とそつの無い子だなとは思っていたけど、そういうわけだったのね。なるほど……）

考えれば考えるほど、リオのことを大人の異性として意識してしまう。

何だか沙月はもやもやとしてしまって、

（もう！　何で私がこんなに悩まないといけないのよ！　黙ってたのはハルト君なのに）

半ば逆恨みに近い感情を抱き、思わずジトっと謁見中のリオを睨んでしまった。

そうして沙月があれこれ考えている間にも、

「さて、勇者殿方のご友人を保護したこと以外にも、我が国はハルトに大きな恩がある」

謁見が恙無（つつがな）く進行していく。

「ハルトは昨晩の賊の撃退にも大きく貢献し、武功を挙げたのであるからな。功績に対しては恩賞をもって報いるのが古来よりのしきたりだ」

どうやら話題は昨晩の賊撃退の件に移ったようだ。

「どうだ、ハルトよ。この国に仕える気はないか？　我が国にはそなたを騎士として取り立てる用意があるが」

「え……？」

思わぬ話の流れに、沙月が小さく声を漏らした。

（ハルト君がこの国に仕える？）

その意味を咀嚼（そしゃく）する。

彼がガルアーク王国に仕えるとなれば、今後も何かとリオと会いやすくなるだろう。

勇者の権限を使えば傍に置いておくことも難しくはない。

ふと、そう思い至って、沙月がリオを見やった。

☆★☆★☆★

「格別のお引き立てを賜（たまわ）り恐悦至極に存じます。ですが、私のような未熟者には力不足の大役にございます。ご意向に沿えず大変恐縮ですが、お話をお受けすることはできかねます」

角が立たないよう、リオがやんわりと断りの口上を述べた。

「ほう？　騎士になるつもりはないのか？　相当な実力者と聞き及んでいるが」

意外そうにフランソワが尋ねる。

沙月に恩を売って、ひいては国に恩を売って、あわよくば出世を狙っているのではないかとも考えていたのだが、その予想が外れた形になった。

「はっ、我が身は非才ゆえ」

リオがへりくだって答える。

「ふむ、そうか……。ならば何か望みはあるのか？　申してみよ」

顎(あご)を手でなぞり、フランソワが尋ねた。

「此度の件で私が恩賞を賜(たまわ)るほどの働きをしたとは思えませぬ。賊を撃退できたのは現場にいた騎士の皆様のお力があってこその話。可能ならば恩賞を辞退させていただきたいと愚考しております」

リオがあっさりと恩賞を辞退したことで、謁見の間は大きくざわついた。

「ほう、恩賞はいらぬと申すか？」

フランソワの目に好奇の光が灯(とも)る。

「はっ、左様にございます」

と、何の未練も躊躇(ためら)いも感じさせず、リオが短く答えた。

当たり前だ。

国から与えられる地位や財産で、リオが欲しいと思う物は何もないのだから。

何より金や地位のために美春達を保護したと思われるのが嫌だった。

今回の恩賞は美春達の件と賊を撃退した件とで厳密に区別して与えられるものではないのだ。

あまりにも欲に対して淡白に見えるリオの回答に、フランソワが目を丸くする。

「……くっくっくっ、金も地位もいらぬと申すか。とても平民とは思えぬ立ち居振る舞いといい、実に面白い男だ」

フランソワが堪えきれない様子で、実に愉快そうに笑い始めた。
普通は騎士道を掲げる騎士ですら恩賞は欲しがるものだ。
何の欲も出さずに恩賞を断った人間など、決して短くない彼の国王人生の中でも見たことがない。
フランソワにはリオという人間の本質が見えなかった。

「よし、決めたぞ。そなたに名誉騎士の称号を授けよう」

ひとしきり笑って落ち着きを取り戻すと、フランソワが言った。
室内が大きくざわめく。

「はっ？　しかし、私は……」

話の流れが見えず、リオが戸惑いの言葉をもらす。
名誉騎士がどのようなものかは知らないが、騎士の称号を冠するからには貴族として扱われるのではないだろうか。

「なに、我が国に対して義務が生じるものではない。自国民に限らず国で武功を挙げた者を称えて贈呈する当代限りの称号のことだ。普通の騎士と異なり俸禄が出るわけではないし、国の臣下になるわけでもない。言うならば名誉職にすぎん。だが、国内では我が国の貴族と同列に扱われる。必要な手続を踏めば登城することも可能だ」

不審に思ったリオの考えを読んで、フランソワがつらつらと説明を行う。
彼の話を聞く限りでは、外国人に対しても贈呈することが可能な爵位のようである。

「私は得体のしれぬ人間です。そのような者に単独で登城が可能な肩書を与えるのは……」

「よい。もう決めたことだ。武功を挙げた者に恩賞を与えないなど、我が国の沽券にも関わることだからな。王族の命を救う働きをしたのだ。
ミシェルやシャルロット、クレティア公爵家からだけでなく、セントステラ王国を代表するリリアーナ王女やレストラシオンを代表するフローラ王女からも、そなたに十分な恩賞を与えるようにと強い要望が上がってきておる。素直に受け取るがよい」

辞退しようとしたリオであったが、フランソワがにべもなく恩賞を押しつける。
フランソワの態度は強硬だ。
国王が既に決定してしまった以上、リオがその決定を覆すことは叶わないだろう。

（沙月さんに会いやすくなることを考えれば登城できるのはありがたいが……）

リオが悩ましげな表情を覗(のぞ)かせる。
正直、気が進まなかった。
だが、

「ありがたき幸せ……」

リオは内心で嘆息しながら、謝辞を述べることにしたのだった。
ちなみに、名誉騎士の重みはリオが考えている以上に大きい。
名誉騎士とはフランソワが言った通り武功を挙げた人間に与えられる称号であるが、騎士の称号が付くといっても一般の騎士爵とはまったく異なる。
序列として国に縛られない以上、軍属になるわけではなく、その行動が国に縛られることもない。

だが、有事の際には通常の騎士と同じように現場の兵をその場で指揮監督する権限も認められており、最大で小隊規模の人員を率いることもできる。

つまりは、特権を与えられた信任の名誉職ということだ。

義務は課さないが特権は与えるという性質上、通常の騎士とは比べ物にならないくらいに叙任のハードルが高い。

武功及び人格に問題なしと国王直々に認められなければ決して与えられることのない称号であり、贈呈の対象が外国人となる場合には審査のハードルはさらに上がる。

それゆえ、名誉騎士の称号を冠する者には畏怖と羨望が寄せられるため、室内にいる貴族達が驚くのも無理はない。

中には反射的にリオが名誉騎士に叙任されたことに不満を抱いた貴族もいた。

だが、勇者の友人を保護し、三カ国にも及ぶ大国の王族達を狙った賊の半数近くを撃退し、フローラに至ってはリオが直接に助けたと言っても差支えのないという事実の数々。

これらを鑑(かんが)みると、正面から異論を唱えることも難しい。

何よりも助けられた当の王族達から恩賞を与えるようにと連名で要望が上がってきているのだから。

結局、不満を抱いた貴族達も静観することしかできなかった。

「名誉騎士には通称を与えるのが習わしになっておる。そうだな……」

ふむと唸って、フランソワはリオを見据えた。

思案顔を浮かべ、やがて何かを思いついたようにニヤリと笑うと、

「よし、これからそなたは《黒の騎士》と名乗るがよい。黒は何色にも染まらない。風来の身であるそなたに相応しいだろう」

尊大な口調で、そう言った。
国王から通称を与えられることも名誉騎士が羨まれる理由の一つなのだが、

（黒……の騎士？）

意表を突かれて、リオの顔は思わず呆けてしまいそうになった。
数瞬程、リオの思考が完全に停止する。
それから僅かに冷静さを取り戻したところで、その名を改めて頭の中で復唱した。
黒の騎士――。
何なのだろうか。
その小恥ずかしく、不名誉な称号は。
黒の騎士だなんて、恥ずかしくて誰にも名乗りたくないし、呼ばれたくもない。
だが、そんな感情はおくびにも出さず、

「はっ、謹んで拝命いたします」

と、リオは折目高（おりめだか）に受け答えた。

（……厄日なんだろうか）

どうしてこうなったのだろうか。
どこかで疫病神にでも憑りつかれたとしか、リオには思えない。
首（こうべ）を垂れた状態でさりげなく室内を見渡すと、部屋の片隅にいる沙月と視線が重なった。
沙月はくすくすと笑いをこらえるように、口許（くちもと）に手を当てている。

（笑っているし。楽しんでいるな）

何となく沙月が愉快そうに思っていることを察し、リオが深くうな垂れた。

「それと今後は家名を名乗ることを許す。期限は定めぬゆえ、好きなものを考えるとよい」

「……御意に」

「正式な叙勲は今宵の夜会にて行う。そのつもりでな。以上だ」

それで謁見はお開きとなる。

この後の夜会でまたしても晒(さら)し者になるのかと、ぼんやり考えながら、リオは予想外の顛末(てんまつ)に深く脱力したのだった。

第１０６話　謁見後（地図付き）

謁見後、リオはリーゼロッテ＝クレティアに誘われ、彼女と対談することになった。
沙月からも美春達の部屋へ一緒に行かないかと提案されたが、彼女には一人で美春達の部屋へ向かってもらっている。
リーゼロッテには今回の件で伝えておきたいことがあったのだ。
そうしてやって来た場所は王城の談話室。
登城が認められている貴族ならば申請することで誰もが利用できる個室である。
そこでリオがアンティーク調のソファに座ってリーゼロッテと向き合っていた。
傍らでは彼女の侍従にして侍女の役目を果たすアリア＝ガヴァネスが黙々とお茶の用意をしている。
アリアは見事なまでに存在感を消しており、室内の主と客に対して違和感を与えない。
まさしく侍従の鏡であった。

「失礼いたします」

迅速に、かつ、丁寧に工程を完了させ、アリアがお茶を差し出してきた。
軽く一礼すると、静かに部屋の隅へと移動する。
そうして対談の準備が整うと、リーゼロッテが開口した。

「ハルト様、まずは名誉騎士へのご就任おめでとうございます」
「ありがとうございます。正直、身に余る大役だと恐縮しているのですが……」

礼を述べて、リオが困ったような表情を浮かべた。

「ですが上手く活用すれば利点も多いと存じますよ？」

小首を傾げ、リーゼロッテが語る。

国に属さないとはいえ、これからリオはガルアーク王国内で正式に貴族として扱われることになるのだ。

シュトラール地方において身分の差は絶対――。

中にはリーゼロッテのように平民に対しても分け隔てなく接する貴族はいるが、それは圧倒的に少数派だ。

相手が平民というだけで見下す貴族はいるし、実際に貴族というだけで様々な面で平民よりも優遇される。

今日からリオもそんな貴族の一員に仲間入りするのだ。

しかも、そこいらにいる木端貴族とは訳が違う。

通常の貴族とは序列も扱いも異なるが、名誉騎士といえば軍関係に明るい貴族からは特に羨望を寄せられる称号である。

国王直々に実力と功績を認められたというネームブランド、単なる名誉職の範囲を超えて与えられる特権的地位――。

いずれも持っていて損はないものばかりで、貴族というだけでガルアーク王国内での行動がしやすくなることは間違いない。

デメリットらしいデメリットといえば、対外的に名誉騎士であることを活用しすぎると、次第にしがらみが生まれて国に縛り付けられることにもなりかねないということだろうか。

（まぁ、ハルト様に名誉騎士として活躍してもらって、既成事実を作らせることも陛下のお考えなのでしょうけどね。他にも狙いはいくつかあるようだけれど……）

それらはあくまでリーゼロッテの分析にすぎないが、おそらくリ

オならば薄々と感づいているだろう。
ゆえにリーゼロッテが自らの考えを口にする真似はしなかった。
「ええ。かと言って貴族として何かをしようとも思いませんが」
と、リオが落ち着いた声で告げる。
「そうなのですか？　ハルト様ならば貴族として一廉（ひとかど）になることは間違いないと確信しているのですが」
おや、と、リーゼロッテが目を瞠（みは）ってみせた。
「買いかぶりすぎです。貴族の皆様とのお付き合いは平民出身の私には荷が重い。今回の夜会で身に染みました」
「作法に問題はまったくございませんでしたが……」
「表面を取り繕ったハリボテにすぎません。細かく見られるとすぐにボロが出ますので」
苦笑し、リオが頭（かぶり）を振る。
「ふふ、ご謙遜を」
言って、茶目っ気のある笑みを浮かべると、リーゼロッテが優雅に紅茶を口に含んだ。
（考えれば考えるほどに気になるのよね……）
リーゼロッテはリオという存在に強く興味を惹かれていた。
今、彼女の目の前にいる少年は、以前とある国の教育機関に通っていたという。

リオの出生地がベルトラム王国であることからすれば、そのとある国とはベルトラム王国である可能性が高い。
ベルトラム王国に国営の教育機関は王立学院しか存在しないが、私営の塾になると一気にそこそこの数に膨れ上がる。
平民であるというリオの言葉を信じるのならば、おそらくは私営の塾に通っていた可能性が高いが、その中でも貴族の作法を教えるような教育機関となればだいぶ数は限られてくる。
通える人間は平民の中でも富裕層に位置する家の者くらいだ。

（移民の子が富裕層のための私塾に通う？　ありえないわけじゃないけど……）

リーゼロッテがいくら考えたところで答えは出ない。
リオは彼女の目の前で涼しい顔をして紅茶を飲んでいた。
思わず根掘り葉掘り訊きたくなる衝動に駆られるが、流石にそれは下世話すぎるというか、淑女にあるまじき行動だろう。
探りを入れるような質問を投げかけることはできるが、リオに警戒されるのはリーゼロッテの本意ではない。
結局、リオから語ってくれるのを待つことしかできなかった。

「ともあれ、今後、何かお困りのことがございましたら是非ご相談ください。私でよろしければお力になりますので」

ティーカップを丁寧にソーサーの上に置くと、リーゼロッテが告げた。

「ありがとうございます」

清楚な笑みを浮かべる彼女に、リオが礼を言う。

「お礼を申し上げるのは私のほうです。昨夜の夜会で目立った被害がなかったのはハルト様がいたからこそ」
「いえ、そのようなことは――」
「ございますよ。純然たる事実です。狙いを絞って襲いかかってきた賊に対して、会場に分散していた護衛の騎士達は不利を強いられておりました」

リオが否定しかけたところで、リーゼロッテが言葉をはさむ。
狙われた王族達を護衛していた騎士が五人しかいなかったのに対し、襲撃してきた賊の数が十四人。
その戦力差はおよそ三倍である。

「どれほど過小評価してもハルト様がお一人で騎士数人分の働きをなさったことは事実です。おかげで応援の騎士達が駆けつける十分な時間ができ、あの場にいた王族の皆様をお救いすることができました」

整然と語るリーゼロッテ。

「もちろん私も助けられました。これで私はハルト様に二度も命を救っていただいたことになりますわ。ありがとうございました」

リオからの反論が出なくなったところで、リーゼロッテがきちんとお礼の口上を述べる。

「平素よりリーゼロッテ様にはお世話になっております。この程度はおやすい御用ですよ。むしろ申し訳ございませんでした」

少し困ったように笑みを浮かべて、リオが言った。
逆に謝罪を受けたことで、リーゼロッテが顔に疑問符を浮かべる。

「サツキ様のご友人に関する情報を伏せていたことです。今回の件でリーゼロッテ様を利用してしまい、結果的に騒ぎにもなってしまいました」

と、リオが謝罪を行った理由を説明する。

リーゼロッテは合点がいったようだが、ゆっくりと首を左右に振った。

「貴族ならば心の中で意図を秘めて誰かに近づくことなど日常茶飯事です。確かに事実を知り驚きましたが、私に何か害が生じたというわけではありません」

貴族はお互いに利益を得られるからこそ関係を築くのであり、打算を含まない交流関係など極めて稀なことだ。

何しろ結婚ですら政略によって成立するのだから。

結果的に害悪をもたらされたのならともかく、自分との交流で相手が利益を得ることにいちいち目くじらを立てていては貴族として生きてはいけない。

「むしろハルト様がご活躍なさったおかげで、私まで陛下からお褒めのお言葉を賜(たまわ)りました。ですので、どうかお気になさらず」

そう言って、リーゼロッテが少し悪戯っぽい笑みを漏らした。

「お役にたてたのならば幸いですが……」

「はい。それはもう」

リーゼロッテが満足そうに頷く。

リオが黙礼して返した。

「それにしても、言葉も通じない見知らぬ少年少女。よく保護しようとご決断なさりましたね」
「幸い形見の魔道具がありましたから。途方に暮れて荒野を歩いている彼女達を見捨てることはできませんでした」
「ご立派です。その魔道具の効果をいまいち理解しかねているのですが、それを用いて彼女達に言葉を教えたということでしょうか？」
「ええ、あいにく口では説明しにくいのですが、この三か月間でだいぶ上達しましたよ。今はもう日常会話に支障はないかと」

リオがしれっと嘘で塗り固めて、リーゼロッテの質問に答える。

「ヤグモ地方には随分と便利な魔道具が存在するのですね。ひょっとするとハルト様は勇者様達の世界の言葉を話すことができるのでしょうか？」

尋ねると、リーゼロッテがリオの顔をじっと見つめた。

「ええ、多少は」

リオが曖昧な笑みを浮かべて首肯する。

「なるほど……」

意味深長なニュアンスを持たせて、リーゼロッテがつぶやいた。

「ご興味がおありなのですか？」

窺(うかが)うように視線を送って、リオが尋ねる。

「はい。自分の知らぬ世界がある。そう考えると……」

答えて、リーゼロッテが少しだけぎこちない笑みを浮かべる。

リオは柔らかな微笑を浮かべて返すと、

（一応、魔道具の話は信じてもらえたんだろうか）

そう考えて、紅茶を口に含んだ。

最近では美春達も日常会話が成立する程度にシュトラール地方の言葉を操れるようになったが、まだまだ発音につたない部分がある。

それゆえ、美春達が母語としてシュトラール地方の言葉を喋っていないことは、少し会話をすれば簡単にわかってしまう。

そうなると自動的に浮かんでくる疑問点が、リオがどのようにして美春達と意思の疎通を図ったか、ということになる。

最も単純明快な答えはリオが日本語を喋れるということであるが、今度はどうしてリオが日本語を喋れるのかという疑問が湧いてしまう。

真の意味でこの世界の人間が相手ならばともかく、地球出身の者達が相手になると誤魔化すにも難易度が上がってくる。

もしかしてリオは――ハルトと名乗るこの男は、日本に暮らしていたことがあるのでは？

かつて地球に暮らしていた者達が、自身の境遇と照らし合わせ、そう考えても不思議ではない。

現時点でリオの前世が日本人であったことを知っている者は、アイシア、セリア、美春、亜紀、雅人、沙月、ラティーファの七名。

自分以外にも転生者が存在する可能性はリーゼロッテやラティーファと出会った時から考慮に入れていたが、勇者が登場し始めた今となっては転移者が存在することも考慮に入れなければならない。

今後、リオが転生者であるという事実が先の七人以外の者に知られることによって、その後の展開がどのように推移していくのか、

どのようなメリットやデメリットが生じるのかは予想がつきにくい。
ゆえに、必要性があるのならばともかく、わざわざ自分から転生者であることを大々的に知らせる気にはなれなかった。
「ところで、サツキ様のご友人方はアマンドでの暮らしに何かご不満を抱いていらっしゃらなかったでしょうか？」
さりげない話題転換を装って、リーゼロッテが問うた。
彼女の発言の裏に隠された懸念、それを――、
（まぁアマンドには地球産の品物が溢れているからな）
リオは瞬時に見抜いた。
アマンドに溢れる地球産の品々。
その大半にはそのまま日本語の名称が与えられている。
神装による自動翻訳によって違和感なくこの世界の言葉が日本語に翻訳されている勇者達であっても、沙月が行ったように、口の動きから発音を察することは可能だ。
ましてや、ゼロからこの世界の言葉を学んだ美春達であれば、リッカ商会が生産した製品名を耳にすれば日本語が用いられているという異変に気づいて当たり前である。
実際、美春達はその異変に気づいているのだから。
リーゼロッテほど聡明な人物であれば、この状況で自身の秘密をいつまでも隠し通せるなどと、事態を楽観視しているわけもないだろう。
それを踏まえたうえで――。
さて、自分は何と答えるべきだろうか、と。
リオは即座に思考した。
「ええ、素晴らしく快適な暮らしを送ることができたのではないか

と」

と、リオがとぼけた笑みを浮かべて答える。

リーゼロッテはじっとリオの顔を見据えると、

「……ならば良いのですが」

と、含みのある笑みを浮かべて言った。

二人が視線を交わしあう。

（疑っている、か）

と、リオがリーゼロッテの心情を推察した。

無理もない。

リオがアマンド付近で活動していたことは彼女に知られている。

そうでなくともリッカ商会の製品はガルアーク王国中に流通しているのだ。

とくれば、リオに保護されていた美春達が、リッカ商会の作った地球産の商品に触れていないと考える方が不自然だろう。

だとしたら、美春達の間でいくつもの疑問が生じているであろうことも、それらの疑問を美春達がリオに伝えているであろうことも容易に想像できる。

どうして日本語名の製品がこの世界にあるのか、それを作るリッカ商会とは何なのか、リッカ商会を運営するリーゼロッテ＝クレティアとは何者なのか。

もちろんリーゼロッテはスポンサーなだけで、彼女以外にかつて日本人であった者がそれらをこの世界に導入した可能性もないわけではない。

リーゼロッテと出会った当初は先入観で彼女が転生者だと決めつけていたが、実例が存在する以上、勇者達が登場する以前にもこの

世界に転移者が存在した可能性はゼロではないからだ。
だが、真っ先に疑いの槍玉に挙げられる人物はリーゼロッテであるし、事実がどちらであろうと、リッカ商会の裏に秘密が隠されていることに変わりはない。
ゆえに、リーゼロッテは疑っているのだろう。
そして、警戒しているのだろう。
今、自分の目の前にいるリオのことを。

（いつかは確信を抱く事実だ。ある程度、本当のことを伝えて、疑念を払拭しておいた方がいいのかもしれない）

リオとしてはこの場で白を切ることもできるが、確実にリーゼロッテの中で不信の種が残ることは予想できる。
自身の秘密を知りながら、知らんぷりを貫く人間を、警戒しない者はいないのだから。
もっとも、その秘密にどれだけの意味と価値があるかはリオも計りかねている。
とはいえ、彼女は貴族であり、商人でもあるのだから、不確定な要素を残して自身の身を危険にさらす確率を僅かでも上げる真似は嫌うかもしれない。
そういった懸念を抱いた上で、リーゼロッテが今後どういった行動に出るのか、腹の内で何を考えているのか。
いずれにせよ、秘密を秘密のままにしておきたいのならば、口止めを図ろうとしてくるだろう。
もしかしたら沙月や美春達に自身の秘密を打ち明けて口止めを依頼するかもしれないし、あるいは秘密が漏れるのを恐れて彼女達を消そうとすることだってありえる。
リーゼロッテが何の穢(けが)れもない綺麗な善人であるとはリオも考えていない。
味方につければ頼もしいが、敵になれば厄介な存在になることは

間違いない。
無暗に挑発するのは悪手だし、現状、彼女とは良好な関係を築いているのだから、可能ならばこのままの関係を維持するのが好ましいことは確かだ。
リーゼロッテが貴族であり、商人でもある以上、切れない関係と利益がある限り裏切るおそれは低い。
これまでの関係で把握した彼女の人柄も踏まえて、リオもそれだけは信用できた。

「サツキ様のご友人は三名。そのうち二人は女性ですが、彼女達はリッカ商会の製品を非常にありがたがっておりましたよ」

リッカ商会は手広く商品を取り扱っているが、中でも女性を対象にした商品はかなり充実している。
生産体制と流通網が完璧でないがゆえに各地での需要と供給が一致しきっていないが、アマンドであれば手に入らない商品はほとんどない。
リオがアマンド付近で根城を張り続けていたのもそういう経緯があったからだ。

「それは嬉しい限りです。お客様にお喜びいただけたとなれば商人冥利に尽きますから」

感情の読み取りにくい微笑を貼りつけ、リーゼロッテが応じた。

「特にリッカ商会が販売している製品の一部には彼女達も大変驚かれておりました」
「なるほど……」

言って、リーゼロッテがスッと目を細める。

「何か秘密があるのではないかと不思議に思われたようですが、それに関して何も他言しないよう伝えておきました。彼女達はそれを了承しております」

何が秘密なのかを意図的にぼかして、リオが告げた。

すると、リーゼロッテが虚を突かれたように目を丸くする。

「それは……どうしてでしょうか？」

「無暗に口外することでデメリットこそ生じますが、メリットは何もございませんので」

「デメリット……ですか？」

尋ねて、リーゼロッテが小首を傾(かし)げてみせた。

「私が以前リーゼロッテ様と結んだ契約のことですよ」

と、リオがほのめかす。

「……先の契約で有事の際に保護してもらいたい方々とは、やはりサツキ様のご友人方だったということでしょうか？」

「ええ、五人のうち三人が。勇者の友人である彼女達は非常に不安定な立場に置かれることが予想されます。なので味方は多い方が良い」

滔々(とうとう)とリオが語る。

リーゼロッテは真剣な面持ちでその話を聞いていた。

「だからこそ、今後、有事の際にはリーゼロッテ様の力が及ぶ範囲で彼女達のことを保護していただきたいのです」

「それは……もちろんです。そういう契約ですからね」
然りと、リーゼロッテが頷く。
「ありがとうございます。彼女達の保護をお願いしているということもありますが、今後もリーゼロッテ様とは良き契約相手でいたい。それが嘘偽りのない私の本心です」
「契約相手ですか」
その言葉の意味を咀嚼(そしゃく)するように、リーゼロッテが口にした。
「私は商人ではありませんが、利益が人と人を強く繋げるという絆だということは理解しております。そして今、私達は契約によってお互いに利益をもたらしている」
そう語ると、薄く笑みを浮かべて、リオはリーゼロッテを見据えた。
リーゼロッテもじっとリオの顔を見つめ返す。
やがて何かが腑に落ちたのか、
「……なるほど。商人としてはこの上なく説得力のあるお話です」
リーゼロッテが口許(くちもと)に愉快そうな笑みをたたえた。
先ほどまで見せていた警戒の色合いもだいぶ薄まっている。
「というわけで、私は今の貴方との関係を崩すことを望んでおりません。少々不本意ですが、本日付で貴族にもなってしまったことですしね。貴方ほどのお方とは是非、懇意(こんい)にしておきたい」
言って、リオが小さく肩をすくめる。

「そういうことでしたら。もとより私もハルト様とは良き契約相手でありたいと強く思っておりますので……」
「ならば話は早い。私もリッカ商会の商品に関する秘密を他言しないことを誓いましょう。そこから派生して何かを詮索する真似もいたしません」
「……私としてはありがたいお話です。ですが、本当にお訊きにならないのですか？　その秘密を、その先にある真実も」
「ええ、近隣諸国にも名を馳せる大商会の秘密など、私の手に余りますからね。知ったところで何ができるというわけでもありません」
リオが苦笑しながら頭を振る。
リーゼロッテはいたずらっぽく笑みを浮かべると、
「それは残念です」
と、そう告げたのだった。

第１０６話　謁見後（地図付き）（後書き）

これまでに何度かご要望がございましたので、シュトラール地方の地図を描いてみました。
ペイントすらほとんど使ったことがないので、未熟な点や作中との矛盾点があるかもしれませんが、イメージの参考になれば幸いです汗
なお、あまりにもひどい場合は修正して掲載し直すことがありますので、そちらもあらかじめご了承ください。

<ｉ１３５１２８｜１３４２３>

第１０７話　リオの気持ちと、夜会三日目の始まり

リオとの面談を終え、王都にあるクレティア公爵邸に帰宅すると、リーゼロッテは休息を兼ねて自室に引きこもることにした。
現在、室内にいる人間は気心の知れたアリアのみで、リーゼロッテも完全にオフモードになっている。

「うー、疲れたぁ」

部屋着用の動きやすいワンピースに着替えると、ふかふかのベッドの上に倒れるように飛び込む。
ここ最近は王都での夜会に出席するために色々とハードスケジュールだったため、流石のリーゼロッテも疲れがたまりきっているのだ。

「幸せぇ」

枕に顔をうずめて、リーゼロッテが実に幸せそうな顔を覗(のぞ)かせる。
淑女(しゅくじょ)としての仮面を外した彼女の素の表情を知る人間は非常に少ない。
アリアはその数少ない人物の一人であった。
それゆえリーゼロッテが気を休めて油断している姿を見ても顔色を変えることはない。
もっとも、初めて目にしたとしても、アリアならば軽く目を見開く程度の驚きしか見せないのだろうが。

「お疲れ様でございます。夜会が始まるまで仮眠をとられますか？」

気を抜いた主の可愛らしい姿を微笑ましく見守りながら、アリアが尋ねた。

「うーん。いいわ。少し考え事もしたいし」

普段よりも間延びした声で返事が戻ってくる。

仰向けになりがてら近くに置いてあったクッションを手に取ると、それを抱きしめ、リーゼロッテは天井を仰いだ。

「ハルト様のことでございましょうか？」

「その通り。さっきの面談は得られたモノが多かったわ。それだけに……ねぇ……」

答えて、リーゼロッテが物憂げに溜息を吐く。

「何か不都合がおありでしょうか？」

「不都合はないわ。今後も継続して良好な関係が築けそうだし」

先の面談で述べた通り、リーゼロッテは今後もリオとは懇意（こんい）にしておきたいと思っている。

それは紛れもない本心であった。

確かに自らが抱える最大の秘密を知られてしまったことは不都合と言えなくもないが、その点に関してはさして気に留めていなかったりする。

（そもそも商品名に日本語を用いたのは私と同じような境遇に置かれた人へのメッセージも兼ねていたわけだし。そのまま転移してくる人がいるなんて少し予想外だったけれど）

リーゼロッテがそう考えると、

「では何かご不満な点が？」
アリアが澄(す)んだ声で訊(き)いた。
「ここらでハルト様ともう少し距離を近づけることができればと思ったんだけど、結局は現状維持になっちゃったのが……ねぇ」
歯がゆそうにぼやいて、リーゼロッテが小さく嘆息する。
彼女はだいぶ前からリオのことを勧誘したいと目をつけていた。
それは何もリオが極上な酒を製造する職人との橋渡し役として貴重な契約相手となっているからというだけではない。
温厚でありながら冷静で理知的な人柄、平民の身でありながら貴族にも通用する教養、上限は未知数だが最低でも騎士数名を相手取って圧倒できる戦闘能力、さらには空間を操作して大量の荷を収納できるアーティファクト級の魔道具――。
はっきり言って野に放っておくにはもったいなさすぎる人材である。
「確かに彼は普段リーゼロッテ様がお相手なさっている貴族や商人とはだいぶ毛色が異なるようにお見受けしました。対応も変わってきましょう」
「そうなのよ。あの人ってお金や地位で動く人じゃないのよね」
ベッドから上半身を起こすと、リーゼロッテが悩ましげな顔で同意した。
「ですが名誉騎士に就任した以上、今後、彼を勧誘しようとする貴族達が増えるのではないでしょうか？」

今回の一件でリオの存在と実力が夜会に出席した王侯貴族の間で大々的に知れ渡ったことは明白だ。
加えて、名誉騎士にまで叙任してしまった。
そんな人物がどこの勢力にも所属せずにうろついていれば、勧誘を受けない方がおかしい。
とはいえ、他国、特にガルアーク王国から見て格下の国からは声をかけづらくなったはずでもあった。
国に仕えないとはいえ、ガルアーク王国の名誉騎士となったことで、リオとガルアーク王国との関係は強まったのだから。
それでも粉をかけようとする国が現れてもおかしくはないが、ガルアーク王国に対して一定の配慮を行う必要が生まれたことになる。
「ええ、だからこそ距離を近づけたかったのよ。まったく、最初にハルト様の実力を見出したのは私なのに……」
むぅ、とリーゼロッテが唇を尖らせる。
これまで彼女はリオに対する勧誘行為を自粛してきた。
それはリオを自陣に引き入れるための明確な勝算がなかったからだ。
もちろん勧誘するだけならばタダであるが、リオの性格を考えると何度も勧誘を行うと距離を取られることが予想できたというのもある。
そこで、あえて勧誘をしないでリオの警戒心を解き、距離を縮める戦法をとり続けてきた。
だというのに、この段階で他の王侯貴族達に動かれるのは少し――いや、かなり面白くない。
リオがうんざりとして王侯貴族から距離を取る可能性が上がるし、狙っていた獲物を横からかっさらわれることになりかねないのだから。

「しかし、国王陛下からの勧誘を断ったのです。そう簡単に誰かの下に仕えることはないのでは？」
「私もそう考えてはいるけど、可能性がゼロというわけじゃないわ」
これからリオは本人の意志に関わらず様々な王侯貴族と交友を持つことになるだろう。
中にはリオを満足させる何かを提供できる者がいてもおかしくはない。
「陛下直々のご勧誘を断ったのです。金や地位で動かないことは明白。陛下がなさったように権力で半ば強引に引き込んでしまうという手もありますが……」
「悪手ね。今回の件は例外。必要性と許容性があったからこそ、陛下もハルト様を名誉騎士に叙任されたんですもの」
必要性に関しては複数列挙できるが、大きな狙いの一つに美春達を保護したリオを褒め称えて形式的にでも国に引き入れることで、リオの功績をガルアーク王国の功績にもしてしまおうというものがあった。
今回、褒美としてリオを名誉騎士に叙任したことで、美春達の保護に関して争いが生じた場合に、ガルアーク王国が一枚噛みやすくなったのは明らかだ。
亜紀と雅人に関しては家族である貴久が名目的に第一順位の保護権を主張できるが、単なる友人にすぎない美春に関しては沙月と貴久とで保護権の優先順位に差異はない。
形式的に最優先されるべきは美春の意志であるが、話が拗(こじ)れた場合の保険にはなるだろう。
「とまぁ、それはともかく、いっそダメもとで一度だけ勧誘してみるのもアリかなとは思ったけど、せめて何らかの交渉カードは用意

しておきたいと思ってね」

人間は利益と感情で動くという矛盾を孕(はら)んだ生き物だ。

ゆえに人を動かすには利益を提供するか、感情を刺激することが必要になる。

だが、リオが金や地位といった利益で動かないことは先刻承知済みだ。

他に人を、リオを動かせそうなものといえば――。

「思い切って色仕掛けしてみるというのも面白いかもしれませんね」

ぽつりと、アリアがそんなことを呟いた。

「い、色仕掛け？」

リーゼロッテがぎょっとしたようにアリアを見やる。

「ええ、いつの時代も歴史に名を残す殿方を動かしてきたのは女性と言われているくらいですから」

本気なのか冗談なのか、落ち着き払った声でアリアが言う。

「色仕掛け……ねぇ」

リーゼロッテが疑心的な色を帯びた声を漏らす。

確かに女性の強みは男性との人間関係において強力な武器となる。

それは彼女も重々承知していた。

（でもハルト様って色仕掛けで動きそうな人でもないのよねぇ。あのコゼットがさりげなくアプローチしているみたいだけど、結果は

芳(かんば)しくないみたいだし）

リーゼロッテが抱える侍従達は代官や商会の仕事を補佐するだけでなく、侍女の役目も果たすことから、性別はすべて女性で統一されている。

身分ではなく純粋に資質に重きを置いて審査を行い、リーゼロッテが直々に選んだ精鋭達であるから、人格的にも能力的にも優秀であることは言うまでもない。

採用後は一人一人にみっちりと教育を施し、仕事をするうえで必要十分な教養を身に着けさせてもいる。

おまけに、誰もが年頃の若い少女や女性ばかりで、系統こそ異なるが綺麗どころばかりだ。

もちろん能力だけでなく容姿面でも優れている者達を集めているのにはちゃんと理由がある。

貴族としても、商人としても、リーゼロッテと交渉関係に立つ相手はその大半が男性となるのだ。

実力に加えて、女性の強みを生かせるようであれば、交渉で有利になるのは自明――。

ならば、女性の甘い言葉で交渉を有利に運べるようであれば使わない手はない、というのがリーゼロッテのビジネスポリシーであった。

相手が度を越えたセクハラを行うような人物であればその限りではないが、交渉相手が侍従達の中にお気に入りの子を見つければ、それとなくその侍従を交渉の担当にするくらいは当たり前のように行っている。

そのおかげかどうか明確な根拠はないが、リッカ商会の営業力は他の追従を許していない。

そんなわけでリーゼロッテは自らに仕えてくれる侍従達に大きな信頼と誇りを抱いており、重客であるリオの接待も安心して任せることができている。

リオも思春期真っ盛りの青年だし、同年代のうら若き少女達に尽くされれば悪い気はしないだろう。
もしかしたら侍従達に恋心を抱いてくれるのでは――。
と、そんなふうに淡い期待を抱いていた時期もあった。
だが、淡い期待は幻想のままというのが現状である。
まぁ、そうなれば儲け物程度の考えで、過度の期待はしていなかったのだが。

「ハルト様の心を動かせそうな子がいるというの？」
「侍従の中だとコゼットやナタリーあたりが親しいようですね。ハルト様の接客はあの子達が担当することも多かったので。ですが、色仕掛けが成功する可能性は低いでしょう」
「まぁ、そうでしょうね」

リーゼロッテがさもありなんと頷く。
侍従の中に可能性のある子がいるのなら、リーゼロッテが把握していないはずがないのだ。

「となれば、ここはリーゼロッテ様の出番となりましょう」

と、アリアがおもむろに特大の爆弾発言をした。

「わ、私？」

リーゼロッテが思わず上ずった声を出す。

「現状、私共の手勢の中でハルト様と親密な関係を築いている女性となると、リーゼロッテ様の右に出る者はおりません」
「え？　ええ？　いや、でも……。侍従の子達の方が……」

リーゼロッテが顔に疑問符を浮かべ、尻すぼみにつぶやいた。
「自信をお持ちなさい。うじうじと悩んでばかりではせっかくのリーゼロッテ様の持ち味も生かせません」
と、アリアが悩み顔のリーゼロッテに喝を入れる。
「貴方は私が知る限りで最高の淑女(しゅくじょ)です。賢く、気高く、誇り高い。それでいて殿方を立てることができる女性らしさも持ち合わせている」
「あ、ありがとう……」
アリアからの賞賛の言葉に、リーゼロッテが頬を赤らめて礼を言う。
「色仕掛けをしろと申し上げましたが、別に女性の魅力を使って彼を籠絡(ろうらく)しろというわけではありません」
ゆっくりと頭(かぶり)を振って、アリアが語る。
何も彼女はリーゼロッテにハニートラップを仕掛けろと言っているわけではない。
リオがその程度で動くような相手でないことはアリアも承知していた。
「時には駆け引きで動きにくい人間もいる。まさしく彼がその手合いでしょう」
リーゼロッテは黙ってアリアの話に耳を傾けていた。
「実利で動かぬ相手ならば人間としての魅力で惹きつければいい。

リーゼロッテ＝クレティアという人物をハルト様に知ってもらうのです。貴方という人間の魅力を知ればおのずと人は集まるのですから。私がそうであったように」

淡々と語るアリア。

付き合いの長いリーゼロッテがようやく判別できる程度のものでしかなかったが、アリアの口許は微かにほころんでいる。

「諫言、失礼いたしました。ただ、ハルト様相手には下手な小細工を弄するよりも、真っ直ぐと向き合うことこそが肝要だと愚考します」

そう告げて、アリアは深く一礼した。

「……そうね。貴方の言うとおりだわ」

苦笑し、リーゼロッテが小さく嘆息する。

「ありがとう。少し焦りすぎていたみたい。貴方のおかげで冷静になれたわ」

安らかな微笑を浮かべると、リーゼロッテがアリアに礼を告げた。

（今後は今まで以上に真摯に向き合っていくしかないわね。今の契約関係を維持しつつ、地道に関係を深めていく）

アリアの言う通り、リオのようなタイプの人間とは、損得勘定を抜きにして一人の人間として親しくなるのが正解なのかもしれない。

貴族として、商人として、人と接してばかりいたリーゼロッテであったが、ここにきて久々にそういった対人関係の築き方もあるの

だと初心にかえることができた。

（本当は今回のお礼もしたいのだけれど、普通に申し出ても断られちゃうでしょうしね。ならいつかハルト様がお困りの時に助けを申し出るとするかしら）

身内以外の人間を相手にして、こんな風に誰かと向き合おうと思えたのはいつ以来だろうか。

そう考えて、

（ひょっとしたら立夏（りっか）だった頃の私以来かもしれないわね）

ノスタルジアな笑みを覗（のぞ）かせると、リーゼロッテはベッドに横になりそっと目を瞑った。

☆★☆★☆★

一方で、リーゼロッテとの面談を終えた後、リオは王城の通路を一人で歩いていた。

（沙月さんは美春さん達の場所に行ったんだろうか）

道すがら、そんなことを考え、僅かにリオの足取りが鈍る。

美春達が滞在している場所は貴久が泊まっている部屋だ。

おそらくはそこで仲良く歓談しているのだろう。

自分も美春達がいる場所に行きたい。

一瞬、このまま美春達がいる部屋に行って、すべてを吐き出したい衝動に駆られた。

だが、逸（はや）る心を落ち着けるように大きく息を吐くと、リオは貸し与えられた自室へと歩を進めた。

確かに、美春達には話したいことが、話さなければならないことが沢山ある。
しかし、時、場所、手段も考えず闇雲に伝えても、美春達を悪戯に混乱させるだけということは容易に想像できる。
だから焦ってはいけない。

（明日には今後のことで話し合いになるはずだ。伝えるなら今晩中にしないと。それまでに……）

何を、どうやって、伝えるのか。
考えて、考えて、リオは既に決めていた。
もちろん美春に対する想いはきちんと自分の口で言葉に出して伝えるつもりだ。
だが、口頭ではきちんと順序立てて伝えることが難しい事柄もある。
だから、リオは手紙を書いてみようと思った。
前世の自分と深い関わりを持つ美春と亜紀はもちろん雅人にも。
それを今夜、渡すのだ。
告白をしたうえで。
二人きりになるタイミングがあれば、それが決行の時だ。
なければ作る。
もしかしたら事実を教えることで嫌われるかもしれない。
ひどく自分勝手なことをしてきたし、しようとしているのだから。
だが、それでも前に進むと決めた。
今更、引き返すつもりなどない。

（ずっと逃げてきたからな、今まで……）

ここで美春に告白できなかったら、天川春人だった時と何も変わらないままだ。

薄く自嘲(じちょう)すると、リオは足取りを速めて、どんな手紙を書こうかと思案を巡らせたのだった。

☆★☆★☆★

ガルアーク王国はテロリズムに屈しないという不屈の精神を持つ国であるようだ。

昨晩の賊襲撃により参加者に被害が出なかったことも開催に踏み切った一助になっているのかもしれないが、最終日となる三日目の夜会は恙無(つつがな)く開催されることが決まった。

賊の侵入経路となった出入り口と窓の付近には強固な警備を敷き、他にも会場内への出入りが可能な個所には多数の兵士が配置されている。

もはや強行突破でもしない限り会場の中にまで賊が侵入することは完全に不可能だろう。

最終日となる今日は参加者の個別紹介も必要ないため、開幕の儀は前二日間に比べて簡略に進められている。

その代わりに二つの重大発表が行われることになった。

「我がガルアーク王国は隣国セントステラ王国との間で防衛同盟を締結すべく水面下で交渉を行っている。外交大使であるリリアーナ第一王女とな」

フランソワの発言に会場内は一瞬だけ静まり返る。

が、そのすぐ後に大きくざわめきだした。

どうやらこの場にいるほぼすべての王侯貴族達が初耳であったようだ。

セントステラ王国はシュトラール地方東部で有数の大国であるが、ここ最近は閉鎖的で他国との国交を嫌っていた。

そんな国が隣国に位置する同じ大国のガルアーク王国と防衛同盟

を結ぶというのだから、さして政治方面に興味のない王侯貴族であっても例外なく驚きを見せている。

「静粛に！」

司会進行役の男の声で会場内が静まり返った。

それを確認して、

「一応、経過は順調でな。この場を借りて近隣諸国の者も含めて告知することにした。このままいけば近いうちに正式な締結が行われるだろう」

フランソワがしたり顔でさらりと追加発言を行う。

それから、場内に再びどよめきが広がっていく。

ホールに漂(ただよ)う雰囲気は不安からくる動揺というわけではなく、幸先の明るそうなニュースに対して戸惑いながらも期待を寄せているといった感じである。

次第に会場内にいた王侯貴族達は興奮の色合いを見せ始め、新たな同盟関係成立を前祝いするかのように会場内に拍手が鳴り響いた。

「それでは、引き続き、開幕の儀を進行いたします。次は名誉騎士の叙任式となります。新任の騎士となる方は昨晩、賊の撃退に大きく貢献なさったハルト卿です。彼は陛下より黒の騎士の二つ名を賜(たまわ)りました」

司会の男が朗々と説明を行うと、会場の貴族達が関心を引かれた様子で壇上に視線を送り始める。

「昨晩の大捕物(おおとりもの)は見事だったようですな」

「彼一人で騎士並みの強さを誇る賊達を六人も撃退したとか」

「それは……見事ですな。この目で見ることができなかったのが悔やまれる」

ざわざわと各地でリオに関する話が繰り広げられる。

「黒の騎士ハルト卿、どうぞこちらへ！」

「はっ！」

機敏に返事をしたリオがフランソワの立つ壇上の先端まで移動する。

リオはシンプルな白い文様が刻まれた儀礼用の黒い騎士服を身に纏っていた。

黒の騎士の二つ名を与えられたことで貸し与えられた物だ。

これは間に合わせの品にすぎないが、夜会が終わった後にはフランソワから正式に名誉騎士としての正装が下賜（かし）されることが決まっている。

そんなリオの後姿を壇上の後ろから美春達が眺めていた。

夜会への出席は任意とされた美春達であったが、王城へ来ることを許可してくれたフランソワに対する礼の意味を込めて、結局、夜会へ出席することになったのだ。

美春、亜紀、雅人の三人のすぐ傍では、沙月、貴久、リリアーナの三人がガードを固めている。

そして、今行われている叙任式の中で、美春達のことも簡単に紹介されることが決まっていた。

そこで、夜会の作法も知らぬ美春達に配慮して、王侯貴族の側から美春達に声をかけることは控えるようにと、フランソワから注意が呼びかけられる予定となっている。

「ハルト兄ちゃんかっけー……」

と、叙任の儀を受けるリオの姿を食い入るように見つめながら、目を輝かせた雅人がつぶやいた。

「後でハルト君にも言ってあげなさい。きっと喜ぶから」

悪戯っぽく笑みを浮かべて、沙月が雅人に語りかける。

「おう、そうだな！」

雅人が元気よく頷いた。

「その時の顔は見物ね。スマホの電池が残っていれば映像で残せたのに……」

「さ、沙月さん」

ぼそりとつぶやく沙月に、美春が困ったような表情を見せる。

一方、美春達とは少し離れ場所では、

「く、黒の騎士……。くそ！　自分に与えられたら悶(もだ)えそうなくらい恥ずかしいけど、カッコいいと思う自分がいる！」

ぶつぶつとつぶやきながら、坂田弘明(さかたひろあき)が複雑な表情でリオの叙任式を眺めていた。

「ヒロアキ様、何を仰っているのですか？」

フローラが顔に疑問符を浮かべて尋ねる。

「あー、何でもない。あいつの二つ名に関してちょっと……な。可笑しいというか、羨(うらや)ましいというか」

苦笑して悩ましげに語る弘明。

「はぁ……」

フローラはきょとんと小首を傾(かし)げた。

「ところであちらにいらっしゃる勇者様達のご友人方もヒロアキ様と同じ世界に暮らしていた人達なのですよね？」

「ん？　あー、そうだな。弟と妹はともかく、残りは仲良し高校生グループってところか。ちっ、リア充共め」

話題転換とばかりにフローラが水を向けると、弘明が少しだけ忌々しそうに語った。

「あの、ヒロアキ様も混ざってお話にならないのですか？」

「はぁ？　いやだよ。俺はあいつらとは知り合いでもなんでもないし」

あからさまに興味がないような、それどころか辟易(へきえき)とした様子で、弘明が答える。

「なんだ、フローラ。あいつらと話したいのか？」

弘明がフローラにしらけた視線を向けて訊(き)いた。

「あ、いえ、その。ヒロアキ様が暮らしていた世界の人達はどういう方々なんだろうなと思いまして……」

フローラが弘明の反応を窺(うかが)うように語る。

「大したことないぞ。ああいう青臭い仲良しごっこをしてる連中なんて。どうせ上辺だけの関係だ。あの女共も男勇者を巡ってドロドロしてんだ、きっと」

弘明が表情を消して冷めた声で吐き捨てる。

「そう、なのでしょうか……」

仲睦(なかむつ)まじそうに小声で会話をしている沙月達の姿を見て、フローラがつぶやく。

だが、隣にいる弘明から感じられる雰囲気が明らかに普段とは異なる気がして、それ以上フローラが何かを語ることはしなかった。

そうしている間にも、勇者の友人を保護し、賊の撃退に大きく貢献したリオの功績が大々的に褒め称えられ、新たな名誉騎士の誕生が盛大に祝福されていたのだった。

第１０８話　君に

開幕の儀を終えると、遂に最終日の夜会が開始された。

「おお、これは黒の騎士殿ではないか」

「ハルト卿、楽しんでおられますかな」

「是非、ハルト卿に娘を紹介したいのですが」

リオがホールの下へと降りたところで、多くの者達から話しかけられることになる。

英雄として仕立てあげられ、新たに誕生した名誉騎士と懇意(こんい)になっておこうという打算を孕んでいるのだろう。

腹の底で何を考えているは知らないが、語りかけてくる者達はみな友好的だ。

中には遠回しに縁談を申入れてくる貴族までいる。

貴族達は親しげにリオのことを‘黒の騎士’か‘ハルト卿’と呼び、黒の騎士と呼ばれるたびにリオの中で精神的な何かがガリガリと音を立てて削られていく。

名前に敬称が付けられるようになったのは、リオが国に仕えないとはいえ貴族となったからである。

そんなわけで名誉騎士となったリオのもとには所属国を問わずに多くの貴族達が押し寄せていた。

（これじゃ自由に動き回ることもできやしない）

顔に愛想笑いを貼りつけているものの、リオは身動きをとれないことを歯がゆく思っていた。

さりげなくホール内に視線をさまよわせ、離れ離れで行動してい

る目的の人物達を探す。
今朝、美春達の登城許可を求めた際に、フランソワが可能なら美春達にも夜会に出席してもらいたいと告げたことはリオも記憶していた。
だが、美春達が参加を決めたと知ったのは夜会が始まってからである。
おそらくは自分が別行動している間に話し合いをして決めたのだろうと、リオは考えた。
幸い沙月や貴久が一緒にいるおかげか、美春達はさほど緊張した様子はないようだ。

（本当は美春さん達に合流したいところだけど……）

自らの周囲を取り巻く貴族達を尻目に、ちらりと隣に立つ女性に視線を送る。
今宵そこに立っているパートナーはリーゼロッテではなかった。
国王フランソワ＝ガルアーク直々の指名により、彼の愛娘であるシャルロット＝ガルアークがリオのパートナーとなったのだ。
シャルロットは昨晩リオが賊から守った王族の一人であった。
流石に国王の命令を無視することもできず、リオは急遽シャルロットと一緒に夜会に出席することになったというわけである。

「ハルト様、ハルト様」

と、何かある度に人懐っこい笑みを浮かべて、シャルロットがリオの名前を呼ぶ。
その度にリオは腕を引かれていた。
年齢がリオよりも年下であることも関係しているのかもしれないが、兄であるミシェルに懐いているように、元から甘えん坊なのだろう。

その気質はリオに対してもいかんなく発揮されている。

「ハルト様」

「はい、何でしょう？」

「たくさんお話をして喉が渇きませんか？」

先ほどから挨拶をしっぱなしのリオを気遣ったのか、一息ついたところで、シャルロットがそんなことを言った。

「これは失礼しました。給仕の方から飲み物を頂いてきましょう」

「ふふ、私が取ってまいりますわ」

喉が渇いているのはシャルロットも同じだろう。

そう考えて、リオが動き出そうとすると、シャルロットが先に給仕のもとへ歩き始めた。

「どうぞ」

小動物のように可愛らしい歩みで戻ってくると、果実酒の入った銀製のグラスをリオに差し出す。

「ありがとうございます」

リオがお礼を告げて、グラスを受け取った。

「ハルト様、乾杯しましょう」

「はい。乾杯」

「乾杯」

グラスを軽く持ち上げ、微笑み、目と目を合わせる。

そうしてから杯の中に入った果実酒を口に含んだ。
「ふふ、美味しいですけれど、何だか軽く酔ってしまったかもしれませんわ」
上品に手を頬に添えて、悪戯っぽく微笑んで、シャルロットが言った。
「どうかご無理はなさいませんよう。お身体に障るようでしたらいつでも仰せつけください」
「ありがとうございます。ですがこれくらいなら大丈夫ですよ」
そうやって二人で会話をしていると、リオは六人の男女が近寄ってくる光景を視界に収めた。
互いの声が届く距離まで接近すると、白いドレスを着た、茶のかかった黒髪の女性が言ってくる。
「ハルト君」
最初にリオに声をかけた人物は沙月だった。
沙月のすぐ後ろには美春、亜紀、雅人、貴久、リリアーナの姿があり、それぞれが正装で身を包んでいる。
貴久はリオと視線が合うとぎこちない笑みを浮かべ、リリアーナは普段通りの柔らかな笑みでリオに会釈してきた。
一方で、美春、亜紀、雅人の三人は着慣れぬ晴れ姿に少し気恥ずかしそうにしている。
「これはみなさん。おそろいで……」
微笑を浮かべてそう応じながらも、リオは息を呑みそうになって

しまった。
その原因は視線の先にいる一人の少女、綾瀬美春だ。
美春のことは既に遠目から目にしていたが、間近で見ると思わず見とれてしまわざるをえない。
身に纏(まと)えば妖精のように可憐に見える淡い桃色のロングドレス、長い黒髪はゆったりと右側の首筋におさげで束ねられ、清楚な雰囲気を醸(かも)し出している。
この三日間で美しいともてはやされる数多くの令嬢達を目にしてきたが、美春は誰よりも華やかで、誰よりも可愛らしく、誰よりも美しかった。
そうして僅かばかりに硬直していたリオであったが、シャルロットがその様子を機敏に察し、リオの横顔を隣から覗(のぞ)きこんだ。
だが、すぐに今度は美春達の方を向くと、
「皆様、ご機嫌麗(きげんうるわ)しゅう。ガルアーク王国第二王女、シャルロット＝ガルアークですわ」
シャルロットがそう言って、ドレスの裾をつまみ、可憐にお辞儀した。
視線を上げると、美春の顔をじっと見つめて微笑みかける。
「はい。美春＝綾瀬と申します。よろしくお願いします」
少し緊張した様子でぎこちなく微笑み返すと、美春が礼儀正しく自己紹介を行った。
この世界の流儀に沿っているのか、名前を先に名乗っている。
「シャルちゃん。既に貴久君とリリアーナ様のことはご存知だと思うけど、この三人が私の友人達よ。美春ちゃんは自己紹介したけど、女の子が亜紀ちゃんで、男の子が雅人君。二人とも貴久君の妹弟(きょうだい)な

の」

遅れて、沙月が亜紀と雅人の紹介を行う。

「はい。よろしくお願いしますね」

シャルロットは亜紀と雅人にも笑顔で挨拶を行った。

「よ、よろしくお願いします」

亜紀と雅人が緊張しているのか、少し硬い表情でお辞儀をする。シャルロットの洗練された王族の雰囲気に圧倒されたのか、その可愛らしい容姿に見惚れているのか、もしかしたら歳が近いことも影響しているのかもしれない。

「亜紀ちゃんはシャルちゃんと同い年になるのかな。雅人君は一つ下ね。美春ちゃんは私の一つ下だから、ハルト君と同じ歳よ」

と、沙月が美春達の年齢を説明していく。

「ミハル様、アキ様、マサト様ですね。確かに覚えましたわ。どうか仲良くしてくださいな」

「はい、もちろん」

無垢な笑みを浮かべて語りかけるシャルロットに、亜紀と雅人が返事をした。

そうして同年代の幼年組が触れ合う光景を、残りの面々が微笑ましく眺めていると、

「それにしても、黒の騎士，様は随分と人気者だったみたいね。夜

会が始まってからずっと人だかりができていたじゃない」

何かを思い出したかのように、沙月が言った。
その表情はニヤリと面白そうに笑っている。
一瞬、思わず顔を引きつらせそうになったリオであったが、

「……それは私の人気などでなく、ひとえにシャルロット王女殿下の美しさに惹きつけられたのでしょう」

見事に事務対応の笑みを貼りつけて、さらりと返す。
リオが見せた予想外のスルースキルに、沙月は目を丸くし、しかるのちスッと目を細めた。

「まぁ、お上手ですのね」

すぐ傍で話を聞いていたシャルロットが嬉しそうに破顔する。

「ハルト兄ちゃん、黒の騎士なんてかっこよすぎだろ！　ずるいよ！」

と、実に晴れ晴れとした曇りなき表情で、雅人が話に加わった。

「あ、ああ。ありがとう……」

あまりにも無垢な賞賛の言葉に、リオは今度こそ顔を引きつらせてしまう。
すると、沙月が堪(こら)えきれなさそうに、ぷっと小さく噴き出した。

「本当、素敵ですよ。ハルト様」

シャルロットも雅人に便乗してリオを褒める。
日本に暮らす思春期以上の年齢に達した男女ならばともかく、純然たるこの世界の人間である彼女が、痛々しい二つ名にむず痒さなど感じているはずもなかった。
ゆえにその言葉は雅人と同じく純粋な賞賛の意味しか持ち合わせていない。
仮の話だが、すぐ傍でニヤニヤしている沙月さえいなければ、リオも素直にその言葉を嬉しく思えていたのかもしれない。

「……ありがとうございます」

実にこそばゆそうに、リオが礼を告げる。
シャルロットはリオに黒の騎士という二つ名を与えたフランソワの娘だ。
恥ずかしくて嫌だとは口が裂けても言えなかった。

「それにしてもハルト君、シャルちゃんとすっかり仲が良くなったみたいね」

きちんと引き際は心得ているのか、沙月が話題を変えるように話を振る。
すると、シャルロットが満面の笑みを咲かせて、

「はい、それはもう。ハルト様は紳士的で優しくて、新しいお兄様ができたようです」

と、そう言って、リオの腕にしなだれかかった。
程度の差こそあれ、その場にいた者達が目を丸くし、興味深そうに沙月とシャルロットの会話に耳を傾け始める。

「……へぇ、良かったじゃない、ハルト君。可愛い妹ができて」

数瞬の後、普段よりもわずかに冷ややかな声色で、沙月が告げた。

その表情は穏やかな笑みを浮かべているのだが、気のせいなのか、リオが妙なプレッシャーを感じとる。

「お戯(たわむ)れを。私ではミシェル様には遠く及びません」

背筋に冷たい何かを感じながらも、見事な胆力で平静を装い、リオが頭(かぶり)を振った。

「ふふ、ハルト様はお兄様とはまた違った魅力をお持ちですから」

ぴたりとリオの腕にくっ付きながら、シャルロットが楽しそうに語る。

沙月がしらーっと目を細め、すぐ傍では美春もシャルロットに密着されるリオにじっと視線を注いでいた。

（何だ、この空気は？）

リオは場に漂(ただよ)う妙な雰囲気を感じとったが、その原因がまったくわからない。

本能的にわかったことは、このままシャルロットとくっ付いたままでいることが駄目だということだ。

とはいえ、相手が王族である以上、無理に手を振りほどくわけにもいかない。

「ふーん、ハルト君の魅力かぁ。どんなところなのかしら？」

「そうですね。頼もしく傍にいるだけで安心感を与えてくれるところでしょうか」

「……なるほどね。確かにわかる気がするけど」

ムッとはしたものの沙月が納得顔を浮かべ、傍に立っていた美春も同意するように小さく頷いている。

ただ、美春を含めて、日本出身組は少し意外そうに沙月のことを見つめていた。

何というか、今の沙月は歳相応に少女らしい豊かな感情を見せている。

それが珍しかったのだ。

日本にいた頃、貴久達を含む周囲の生徒達にとって、沙月はおよそ欠点らしい欠点のない少女だった。

ゆえに、周囲からは優等生の烙印（らくいん）を押され、自然と生徒会長にまで祭り上げられ、結果的に少し声をかけづらい人物像が出来上がる。

もちろん話しかければ親しく対応してくれるのだが、本心を見せないというか、線を引いて、あまり感情的にならない冷静な人物というイメージがあった。

それは沙月が周囲からの期待に応えようと、己の素の部分を近しい者にすら見せないように装っていたからだったのだが、今の沙月はかなり自然に感情を表に出している。

「そうでしょう」

言って、シャルロットがすり寄せるように自らの顔をリオの腕に預けた。

すると、リオの腕を睨む沙月の目つきが一段と険しくなる。

美春の視線もさりげなくではあるが、凝視するようにじじーっとリオの腕に注がれていた。

リオは今すぐにでもこの場を離れたい衝動に駆られたが、シャルロットがきっちりとリオの腕をホールドしている。

不味い。

本能でそう感じたリオが何とか自由になれる口実を見つけるべく、視線をさまよわせた。
すると、シャルロットの手に空のグラスが握られているのを見つける。

「シャルロット様、グラスを拝借してもよろしいでしょうか？」
「はい。どうぞ？」

シャルロットが不思議そうにしながらもリオの言葉に従う。
「空になったとはいえ、中に残った水滴が飛び散ってはせっかくの綺麗なドレスが汚れてしまいます。返してきましょう」

グラスを受け取ると、リオがさりげなくシャルロットから距離を取る。
そうして二人の身体が密着状態から解放されたところで、

「あら、流石は紳士ね。気が利くわ、ハルト君」

途端、口許（くちもと）を僅かに緩ませ、沙月が感心したように言った。
その影響なのかはリオにはわからないが、先ほどまで場を支配していた妙な空気も嘘のように霧散（むさん）している。
代わりにシャルロットが少しだけつまらなさそうな表情を浮かべていたが、それに気づく者はいない。

「いえ、大したことでは……」

苦笑して言い返すと、リオは近くを歩いていた給仕に近寄りグラスを返却した。
よくわからないプレッシャーから解放されたことで、少し離れた

場所でほっと安堵の息を吐く。

（よし、戻るか）

戦場にでも戻るかのような意気込みで、リオが元の位置へと歩き出す。

「美春さん、楽しんでいますか？」

戻ってくると、リオは真っ先に美春の背中に声をかけた。

グループに交じりながらも会話を見守っていた彼女の身体がびくりと震えて振り返る。

どうしたのだろう、とリオがその顔を覗きこんだ。

美春はちょっとだけ照れたように微笑むと、

「えっと、緊張はしていますけど、何とか」

と、おさげの毛先をイジりながら、首肯した。

そのまま二人が少しだけグループの輪から抜け出す。

貴久が少しだけ気にしたそぶりを見せたが、声をかけて即座に呼び戻す真似はしない。

「良かった。無理して参加したのではないかと心配したのですが、杞憂（きゆう）だったようですね」

「はい。ここで出席しておけば王様に感謝の意を表明できるし、その方が後々に楽になるからってリリアーナ様が言ってくれたので」

「なるほど……」

少しだけ思案顔を浮かべたが、ふむ、とリオが納得したように頷く。

「ともあれ雅人と亜紀ちゃんも楽しんでいるみたいですね」

言って、リオが亜紀と雅人を見やった。

二人は楽しそうに笑いながら、その場にいる者達と話をしている。

「二人とも夜会に参加するって決まった時はちょっと興奮していたんですよ。直前になった途端に緊張し始めたようですけど」

くすくすと可笑しそうに美春が言った。

「二人らしいですね」

リオが小さく笑いながら相づちを打つ。

久しぶりに美春と二人きりで会話をしたが、それだけで楽しく感じている自分がいることに、リオは気づいた。

「何だか美春さんとこうして話をするのは久しぶりな気がします」

と、リオが思ったことを何となく口にする。

実際、一緒に暮らしていても、二人きりになる機会はあまりない。

最後に二人で話をしたのは、王都に来る前に最後の食事を作った時のことだろうか。

「ですね。……実は私、ハルトさんに声をかけられた時、少しだけ緊張しちゃいました」

ちょっとだけ気恥ずかしそうにはにかんで、美春が言った。

「そうなんですか？」

「はい。少し会わなかったせいか、お城でのハルトさんは普段と少し違った気がして、何というかすごく洗練されているなと思ったんです。遠い存在になっちゃったというか……」

自らの気持ちを探るように、美春が語る。

王侯貴族を相手にして臆した様子もなく堂々と対応するリオの姿は、美春の見慣れたリオとは異なったように見えたのだ。

何というかすごく大人っぽかった。

「そんなことないですよ」

リオが困ったように頭(かぶり)を振る。

一瞬、その朽葉色(くちばいろ)の瞳が、何だか美春には儚(はかな)げに見えたような気がした。

それは錯覚(さっかく)だったのだろうか。

美春にはわからない。

「はい。ハルトさんとこうして話して、それがわかりました」

リオの瞳を窺(うかが)うように、美春がゆっくりと頷く。

目の前にいるのだから当然と言うべきか、リオも美春の瞳を見つめていた。

数秒ほど、二人が何となく黙って見つめあう。

「う……」

次の瞬間、頬に少しだけ赤みがかかり、美春がリオの瞳から目をそらした。

うつむき、急にそわそわし始める。

おさげの毛先をイジりながら、少しだけ視線を上げると、リオは

美春のことをじっと見つめていて、

「……美春さん」

と、深く静かな声で、美春の名を呼んだ。

「は、はい。何でしょう？」

上ずった声で返事をすると、美春が恥ずかしそうにリオを見上げる。

リオは真っ直ぐに、美春へと真摯な視線を向けていた。

美春の心臓が大きく跳ね上がる。

（な、何、どうしたの、私……）

美春が自らの内面で起きている変化に戸惑う。

何なのだろう、この感情は――。

よくわからないが、リオの顔を見ていると、何だかとても緊張する。

それだけは確かだった。

「ちょっと二人だけで話しませんか？　バルコニーあたりで」

困ったような笑みを浮かべて、だが決然と強い意志を感じさせる声で、リオが言った。

少しばかり予想していたタイミングと異なるが、今は美春と二人きりになる絶好のチャンスなのではなかろうか。

そう思ったのだ。

（あれこれ理由をつけて逃げるのは止めだ）

確かに勝手に抜け出すのはあまりよろしくない。
だが、リオに与えられた時間と機会が有限である以上、今を逃すと今夜また二人きりになれるタイミングを作れるかどうかはわからない。
今夜中に告白すると決めた以上、チャンスがあればそれを逃すつもりはなかった。
今が駄目なら再度チャンスを見つけてチャレンジすればいい。
「どうでしょうか？　大事な話があるんです」
返事を促すように、リオが訊いた。
「その……実は私からもハルトさんにお話があって。大丈夫ですよ」
こくりと、美春が頷く。
「じゃあ決まりですね。行きましょうか。……雅人」
背後から小さな声でその名を呼んで、リオが雅人を呼び寄せる。
「ん？　どうした、ハルト兄ちゃん？」
振り返って、雅人がリオと美春に歩み寄る。
「美春さんとちょっとこの場を離れるけど、すぐに戻って来るから、誰かが気づいたら心配しないように伝えてくれるか？　話を中断させるのも悪いからさ」
と、もっともらしい理由をつけて、リオが言った。

幸い他の面々は一時的に会話にふけっているようで、リオが察知できる範囲で強く意識を向けている者はいない。
上手く抜け出せば気づく者はいないはずだ。
行き先を告げていない以上、誰かが追ってくるおそれも小さい。

「ああ、いいよ」

雅人が二つ返事で了承した。

「ありがとう。それじゃあ、ちょっと行ってくる」

そうして、リオと美春がこっそりとその場を抜け出した。
だが、上手く意識を向けずにリオと美春の動向を密かに観察していた少女が二人いて――。
一人は愉悦(ゆえつ)に染まった笑みを口許に覗(のぞ)かせ、もう一人は感情を窺(うかが)わせない眼差しでその後ろ姿を視界に収めていた。

☆★☆★☆★

リオと美春が休憩用に開放されているバルコニーへとやって来た。
入り口には見張りの兵士が配置されている。
だが、人脈を形成する絶好の場である夜会で、わざわざ人のいない場所に移動する物好きはいないようだ。
ホール内の喧騒が寂しく響いており、中で行われている絢爛(けんらん)な夜会もどこか遠くでの出来事のようのようだった。
バルコニーに吹く爽やかな夜風が、会場内で溜めこんだ二人の身体の熱を涼しく冷ましていく。
奥へと進み、リオと美春が手すりの近くで並んで立った。
実に静かで、落ち着いたムードのある場所だ。
そうして二人きりになったところで、

「うわぁ、空、綺麗。吸い込まれそう……」
と、感嘆(かんたん)したように、美春が思わずつぶやいた。
ふと上を仰げば、満天の星空が見える。

「まるで星降る夜ですね」

一緒に星空を見上げて、リオがぽつりと言った。
すると、美春がきょとんとした表情を浮かべて、

「ふふ、詩的な台詞ですね」

小さく笑い、さりげなくリオを見やる。
すると、目が、合った。
リオも美春を見ていたのだ。
月明かりに照らされているため、相手がどんな表情をしているのかはお互いにわかる。
リオは優しげに微笑をたたえ、美春は気恥ずかしそうにはにかんでいた。

「美春さん、ドレス、すごく似合っていますよ。綺麗です」

と、リオがストレートに美春の晴れ姿を褒める。
とてもシンプルで、その言葉は美春の心に深く響いたのだが、

「……へっ？」

美春の顔が一気に紅潮した。
途端に心臓がバクバクと音を立て始めたのがわかる。

誰に向けて言われた台詞なのか、本当にその相手に向けて言われた台詞なのか、その発言の意図が何なのか。
混乱した頭で、美春が考えた。
この場にはリオと自分以外に誰もいない。
となると、今の台詞は美春に向けて言ったと考えるのが普通なわけで――。
実際、リオは「美春さん」と言ったわけで――。

「あ、ありがとうございまひ……ぅ」

動揺して舌が回らず、美春が恥ずかしさから顔をうつむける。
その顔は限界まで赤くなっていた。
リオはそっと微笑を浮かべると、

「美春さん」

うつむく美春の名を呼び、その手をそっと取った。

「は、はい」

真っ赤な顔を下げたまま、もじもじと美春が返事をする。
美春がおそるおそる顔を上げると、リオの顔が至近距離まで接近していた。
リオが一歩、美春との距離を詰めていたのだ。
たったの一歩だけ――。
だが、その一歩で、二人の距離は限りなく近くづくことになった。
リオが真っ直ぐと美春の瞳を覗き込む。
すると、小さな美春の身体がふるふると震えた。

「……」

しばし無言の時が流れ、やがてリオの口がゆっくりと動くのが、美春の視界に映った。
そうして放たれたリオの言葉は――。

「美春さん、好きです」

不意を打つ、美春への愛の告白だった。

「貴方のことが大好きです」

続けてリオが告げると、美春の身体が驚いたようにびくりと震えた。
頭の中が真っ白になる。
どくん、どくんと、心臓が破けてしまいそうなくらい早く鼓動していた。
ぽかぽかと温かい。
リオの手は少し硬くて、とても大きくて、そこから全身に熱が伝わっていき、身体の奥まで暖かくなっていくのがわかった。
まるで自分の体内に火が灯ったようだ。
熱い吐息が感じられるくらいにリオの顔が近い。
美春は思わず身じろいでしまった。
すごく恥ずかしいけど、視線を逸らすことができない。
美春の瞳に映るリオの瞳は不安げに揺らいでいた。
だが、そんな不安を断ち切るように、

「綾瀬美春さんが大好きです」

何度も重ねて口にする、リオから美春へのシンプルな愛の言葉。
もはや誤解の余地もない。

それだけにリオの気持ちが強く、真っ直ぐと美春の心に伝わってきた。

「あ、あう……」

何度も「好き」と連呼されたことで、美春が顔を真っ赤にして、口をパクパクと動かす。

これまでの人生で告白された経験は何度かあったけれど、こんなにも深く心に響いて、こんなにも動揺したことは初めてのことかもしれない。

いや、一度だけあった。

そう、あれは七歳の頃、春人から約束の言葉をもらった時のことだ。

「美春さんとずっと一緒にいたい」

リオは美春の手を掴んだまま、決して離そうとはしなかった。

美春は異性との接触が苦手だ。

幼少期からまぎれもなく美少女だった美春は、春人と別れて以来、周囲の少年達からからかわれるようになった。

理由は単純。

それまで防波堤の役割を果たしていた春人が転校してしまったから。

少年達は美春に恋心を抱いていたのだ。

だから好きな子に意地悪をしようという幼少期の男子特有の行動をとってしまった。

悪質ないじめに発展するようなことはなかったが、美春は引っ込み思案な性格をしていたため、表だって文句をいうことはせず、我慢して静かに毎日を過ごしていた。

春人との思い出や約束を思い返せば大して辛くはなかったから。

中学生になった頃からはそれまでと異なったアプローチをしてくる男子生徒が増えたが、いきなり手のひらを返されたようで美春の中で男子生徒に対する苦手意識が消えることはなかった。
ゆえに美春は異性に対してパーソナルスペースが広い。
距離を詰められれば露骨に距離を取る真似はしないが、さりげなく離れようとはする。
ごく最近、貴久にいきなり抱きつかれた時に混乱して突き飛ばしてしまったが、春人以外の異性と触れ合いたくないという忌避感もあるのかもしれない。
だから、今こうしてリオに手を握られていることもいけないはずなのだ。
なのに、不思議と嫌な感じがしなくて、むしろ素直にそれを受け入れている自分がいて、美春は自身の感情を掴みかねて困惑していた。

「寝ても、覚めても、生まれ変わっても、ずっと貴方のことが好きでした」

と、一言一言を、リオがしっかりと丁寧に語る。

「俺は美春さんに伝えたいことが――。伝えなければならないことがあります」

決然とした顔つきのリオだが、何故か怯えているようにも見えて、美春は胸が締めつけられるような感覚を抱いた。
美春がリオに握られていた手をぎゅっと握り返す。
一歩前に踏み出せばキスができそうなくらいにリオの顔が近い。
すると、リオがやわらかく微笑む。
安堵したようで、優しくて、照れたようで、困ったようで、美春にとっては何故か懐かしい面影を強く感じる笑みだった。

数秒ほど黙り、お互いの瞳を見つめあう。

「もしかしたら覚えていないかもしれないけれど、あの日、貴方にとっては九年前――」

「美春お姉ちゃん？　いるの？」

リオが何かを言いかけたところで、バルコニーにとある少女の声が響き渡った。

声の主は亜紀だ。

少し焦燥した声で美春の名を呼んでいる。

その後ろには不安げな顔で手を引かれた貴久がいて、二人で手すりの近くまで駆け寄ってきた。

やがてリオと美春の姿を視認して、

「美春……お姉ちゃん？」

亜紀が目を丸くして美春の名を呼んだ。

そこではリオと美春が至近距離まで接近していて、美春がぎゅっとリオの手を握りしめている。

まるで恋人同士が互いを愛（いつく）しんでいるように見えた。

「えっと……」

二人の手と顔を見て言いよどんでから、亜紀が何かに気づいたように慌てて背後を振り返った。

そこには貴久が立ちすくんでいて、色んな感情を堪（こら）えるような顔で、じっとリオと美春を見つめていた。

「あ、その……。これは……」

自分からリオの手を握りしめていたことに気づき、美春が我に返ったように慌てて手を離す。
流れに身体をゆだねてしまうことが自然な気がして、先ほどは無意識のうちにリオの手を掴んでしまった。
だが、こうして雰囲気がリセットされると、とてつもなく照れ臭くなってしまったのだ。

「どうしたんですか？　慌てたご様子ですが……」

と、リオが落ち着いた声で亜紀と貴久に尋ねた。

「えっと、二人がどこかに行くって雅人が言ってたから、探しに……」

亜紀が気まずそうに答える。

「すぐに戻ると言ったんだけど、マサトが伝え忘れたのかな？」

しょうがないなと、リオが事も無げに苦笑しながら言う。

「あ、いや、雅人もそう言っていたんですけど……。心配で……」
「昨日あんな事件があったばかりですから。ちょっと動揺しちゃいまして」

貴久が少しだけ硬い声で、しかし顔には笑みを貼りつけて、亜紀の説明を補足した。

「そ、そうだよ。心配したんだから」

貴久の反応を意外そうに見ながら、亜紀が美春を見て頷く。

「ごめん。俺が連れ出したんだ。ミハルさんと少し話がしたかったから」
「……話、ですか？」
素直に謝罪を申し入れたリオに、亜紀がおずおずと訊いた。
「うん。今後のことについて少し。ミハルさんには先にどうしても伝えておきたいことがあったから。本当はみんなにも話さないといけないことがあるんだけどね」
困ったように笑みをたたえて、リオが答える。
「そう、なんですか……」
そう言われてしまうとそれ以上は詮索もしにくい。
「美春さん。渡したい物があります。図々しい話ですが、さっきの続きはその後でもよろしいでしょうか？」
リオが小さな声で美春にだけ聞こえるように、そう言葉を付け足す。
美春はハッと目を見開いて、リオを見やると、小さく「はい」と応じた。
すると、そこで、貴久と亜紀の背後から、遅れて他の面々がやって来る。
「ハルト様、心配したのですよ？」
小走りでリオの横まで駆け寄り腕をとると、底抜けに明るい声で、

シャルロットが言った。

「申し訳ございませんでした。少しミハルさんにお伝えしたい話があったもので。すぐに戻るつもりだったのですが……」

「いいですよ。代わりに私とダンスを踊ってくださいな」

嬉しそうにリオの顔を見上げて、シャルロットがお願いした。

リオがちらりと美春を見やり、視線が重なる。

すると、美春が困ったようにリオに微笑みかけてきた。

リオは思わず吐きそうになった溜息をぐっと堪(こら)えて、

「……はい」

と、諦めの色を帯びた微笑を浮かべ、頷いたのだった。

それから、リオはシャルロットに拘束されることになる。

リオはほとんど自由に行動することもできないまま、三日目の夜会は平穏に進行し、幕引きの時間を迎えることになった。

第１０９話　近くて、遠い

最終日の夜会も幕引きとなったわけであるが、王侯貴族が主催する夜会においては入場時だけでなく退場の際にもマナーがある。
基本的にまずは重要な外賓から先に、続いて自国の王侯貴族で身分が上の者から順番に会場を後にしていくのだ。
大国に所属する弘明やフローラ、貴久やリリアーナ、そして貴久と一緒に夜会に出席している美春達は真っ先に退場することになった。
一通り他国の重要人物が退席すると、今度は国内の人間で身分が高い者が出ていく番となる。
勇者である沙月や王族であるシャルロットは優先して退場することが認められており、シャルロットのパートナーとして出席していることから、リオも彼女達と一緒に会場を後にすることになった。
会場の外に出ると世話役の少女達が控えており、リオ達がいる方へと足早に歩み寄ってくる。
この後は解散して各々の部屋へと戻ることになるのだが、自然とすぐそこにある分岐地点までは帰路を共にすることとなった。
次第に会場の入り口から漏れる喧騒が程遠くなり、解散地点へやって来たところで、三人が立ち止まる。

「お疲れ様でございました。ハルト様、サツキ様」

シャルロットがリオと沙月を見やって持ち前の明るい声で言った。

「ええ、お疲れ様、シャルちゃん。やっぱり疲れるものね、人が大勢いると」

応じて、沙月が疲れを吐き出すように小さく嘆息(たんそく)する。
「素晴らしいひと時をありがとうございました。シャルロット王女殿下」
シャルロットに視線を向けて、リオが小さく会釈した。
すぐ傍では沙月がちらりとリオに視線を向けている。
「ねぇ、ハルトく――」
「ハルト様、もしよろしければ、これから私と少しお話をしませんか？」
意を決したように沙月が言いかけたところで、シャルロットが先んじて提案する。
機先を制されたことで、沙月が軽く目を丸くした。
「……ええ、シャルロット様のお誘いとあれば、少しならば」
リオが穏やかな声で応じる。
相手が王女である以上、明確な先約があるなど例外的な場合を除いて、お誘いに対して拒否権はないものと思っていい。
が、すぐ傍では沙月が二人の会話を聞いており、眉をぴくりと動かしていた。
「良かった。まだまだ話し足りないと思っていたんです。場所は私の部屋ということで」
嬉しそうに語るシャルロットに、リオと沙月がぎょっと目を見開く。
常識的に今の時間帯は男性が女性の部屋を訪れるにしては少しば

かり遅い。
そもそも男が一人で王女の自室に行くこと自体がタブーなのではないか。
リオと沙月がそんな共通認識を抱く。
だが、そんな二人の心情を知ってかしらでか、
「では、ハルト様、行きましょう」
言って、シャルロットが親しげにリオの腕を取る。
「サツキ様はお疲れとのことですから、どうぞごゆるりとお休みになってくださいませ。それでは、失礼いたしますね」
可愛らしく微笑んで告げると、シャルロットがリオの腕を引いて踵(きびす)を返した。
流れるような一連の展開を呆然と見つめていた沙月であったが、
「なっ！　ちょ、ま、待って！」
慌てて、二人を呼び止めた。
すると、最初から声をかけられることを予想していたように、シャルロットがぴたりと足を止める。
「はい、何でしょうか？」
にこりと笑みを浮かべて、シャルロットが訊(き)いた。
「こ、こんな時間に女の子が自分の部屋に男の子を呼ぶのは、か、感心しないかな。うん」

普段はキリッとした沙月にしては珍しく、少し動揺したふうに言う。

「ふふ、大丈夫です。ハルト様は実の兄のようなお方ですから」

リオの腕を引き寄せ、シャルロットが告げる。

すると、ぴくぴくと、沙月の眉が小刻みに動いた。

「だ、駄目よ。可愛い女の子と二人きりになってハルト君が理性を失うかもしれないでしょ。年長者として不純異性交遊は見逃せません」

沙月がきっぱりと断言する。

「不純異性交遊……ですか？　ですが私はハルト様とお話をしたいのですが……」

困ったと言わんばかりに、シャルロットが首を傾(かし)げた。

「べ、別に話しちゃダメってわけじゃないのよ。ただこんな時間に二人きりで会うのはちょっといけないことかなと思っただけで。ねぇ、ハルト君。お兄さんならそう思うわよね？」

沙月がそう語りかけて、リオに視線を移す。

言っていることには心底同意できるのだが、何故だかリオはものすごいプレッシャーを感じた。

「は、はい。そうですね。流石にシャルロット王女殿下の私室で二人きりというのは……。できれば場所を変えるか、他の方もご一緒にいらしてくれた方が……」

背中に冷たい汗を流しながら、リオが答える。

「なるほど。でしたらサツキ様もいらしていただけませんか？」

けろりとした様子でシャルロットが提案した。

「う、うん。まぁ、そういうことなら、仕方ないわね。私も行くわ」

シャルロットからの誘いに、沙月がうんうんと頷き了承する。

内心でホッと安堵しながらも、どうしてこんなに安心しているのだろうと不思議に思ったが、沙月は一先ずその疑問を頭の隅へと追いやった。

それから、沙月が着替えるためにいったん自室へと戻り、ついでにリオも自室へと戻り、着替えてから改めてシャルロットの部屋へ向かうことになる。

それなりに動きやすい儀礼用の騎士服を着ているリオはともかく、身動きがとりにくいドレスを着たままの沙月ではくつろぐことができないからだ。

そうしてそれぞれ着替えを終えると、シャルロットの部屋で夜会の二次会が開催されることになったのだった。

☆★☆★☆★

その頃、美春達は自室に戻って、既に着替えを済ませていた。

リリアーナはこの後もフランソワとの対談があるようで、貴久が国王の執務室にまで送り届けている。

一方で、生まれて初めて出席した夜会に疲れたのか、雅人と亜紀は緊張の糸が切れたように眠気に襲われているようだ。

「おやすみ、姉ちゃん達」

眠気眼で大きなあくびを一つして、雅人が自らに割り当てられたベッドルームへと向かう。

貴久達が宿泊している部屋にはリビングルームとは別に、寝室が何部屋か備え付けられている。

「おやすみなさい」

美春と亜紀が雅人の背中に声をかけた。

そうして雅人が寝室に入ったところで、

「私達も寝る？」

と、亜紀が美春に尋ねた。

「ううん。私はまだ少しだけ起きてようかな。まだあまり眠くないし」

「お兄ちゃんが戻って来るのを待ってるの？」

「う、うん。亜紀ちゃんは眠いって言っていたでしょ。我慢しないで眠っててていいよ」

美春がぎこちなく微笑んで答える。

一瞬、亜紀は思案顔を浮かべると、何か良いことを思いついたように、

「そう？　じゃあ先に寝てようかな……」

表情をほころばせて、そう言った。

「うん。おやすみなさい」
「おやすみ。お兄ちゃんによろしくね」

亜紀が嬉しそうに笑みを漏らして、なめらかな身のこなしでベッドルームに入っていく。
そうして一人リビングに取り残されたところで、美春が小さく息を吐いた。
部屋の中央に置かれた椅子に座って、誰かの来訪を待つようにじっと扉を見つめる。
一秒、十秒、一分と時間が流れていく。
すると、美春がおもむろに立ち上がり、そわそわとした様子で部屋の中を歩き始めた。
部屋のあちこちをうろうろと回りながら、先の夜会での出来事を思い出す。
場所は月が浮かぶ星空の下、静かなお城のバルコニーでのことだった。

（私、告白されたんだよね。ハルトさんに……）

その時、リオは真剣な眼差しで美春を見つめていた。

――綾瀬美春さんが大好きです。

何度も好きと言ってくれて、定番というかありきたりかも知れないけれど、余計な情報をすべて捨象した、シンプルでストレートな告白だった。
中学に入って以降は美春も何度か告白されたことがある。
恥ずかしそうに下を向いて告白する人がいたり、自信がないのか遠回しに告白する人がいたり、命令口調で告白する人がいたり、あれこれ好きな理由を告げたうえで告白する人もいたり――。

その誰よりも、リオからの告白は、心に響いた。
打てば響く、その言葉が相応しいくらいに。
人によるかもしれないが、思わず嬉しいと感じてしまうくらいに。
まるで世界で自分だけが特別な存在になってしまったと勘違いしてしまうくらいに。
自分のことが本当に好きなんだという気持ちが、純粋に強く伝わってくるものだった。

（まだ心臓がドキドキしてる……）

そっと自分の胸に両手を当て、美春が心臓の鼓動を確かめる。
どくん、どくんと、心臓が飛びだしそうで、胸のあたりから全身に熱が伝わっていく感覚が治まらない。
美春は胸が苦しくなって立ち止まり、顔を赤くして、ほうっと熱い吐息を漏らした。

（来ないのかな、ハルトさん）

夜会が終わってからそこそこ時間は経ったけれど、いったいハルトさんは何をしているんだろう。
そう考えて、美春がじっと部屋の扉を見つめる。
だが、いくら待ってもリオは来ない。

――渡したい物があります。図々しい話ですが、さっきの続きはその後でもよろしいでしょうか？

バルコニーにぞろぞろと亜紀達が来た直後、リオが美春だけに聞こえるようにそう言った。
渡したい物とは何なのだろうか、いつそれを渡しに来てくれるのだろうか、話の続きとは何なのだろうか。

美春は気になって仕方がなかった。

――寝ても、覚めても、生まれ変わっても、ずっと貴方のことが好きでした。

その言葉が美春の脳裏に何度も響いている。

（生まれ変わってもって、言ったよね……）

それは、つまり、リオが前世で美春と会ったことがあるということだろうか。

この世界で初めて出会った時、リオはハルトと名乗っていた。

その響きは美春にとってとても懐かしくて、心の中で恋焦がれている天川春人と同じ名前でもあった。

それがきっかけで、リオと春人を重ねたこともある。

だが、それは単なる偶然で、そんなはずはないと強く自戒していた。

だって、今頃、天川春人は地球にいるはずなのだから、ありえないのだ。

天川春人がこの世界で生まれ変わって、何年もかけて成長しているなんて、あるはずがない。

リオを天川春人と同一視してはならないと、ずっと、ずっと、そう思っていた。

そんな真似をしてしまえば、二人に失礼だから。

でも、もしかしたら、リオは、ハルトは幼馴染の天川春人なのではないのか。

いつか夢の中で死んだ春人が、今のハルトに生まれ変わって――。

夢の中で起きた出来事がそのままあったと信じるなんて、非論理的なことこの上ないけれど、先の告白を契機に、美春はそのようにも思い始めていた。

（わからない。ハルトさんは……はるくんなの？）

美春は混乱し、部屋の中でぽつんと立ち尽くしていた。
まるで迷子になった、子供のように。
けど、もし、リオが天川春人なら――。
もしそうなら、伝えたかったことがたくさんあるのだ。
言葉では語りきれないくらいに。
だから、明確な答えが欲しい。
早くリオに会って、話の続きがしたい。

――もしかしたら覚えていないかもしれないけれど、あの日、貴方にとっては九年前。

肝心なところで亜紀がやって来て言葉を被せたため、言葉がほとんど聞こえなかったけれど、ハルトはその答えを言おうとしていたのではないか。
美春の脳裏にどこか怯えた瞳をしていたリオの顔が思い浮かんだ。
そうして悩んでいると、がちゃりと部屋の扉が開いた。
ぶるりと身体を震わせて、美春が視線を向ける。

「……ただいま。起きていたんだ」

入ってきたのは貴久だった。
目を丸くし、美春に語りかける。

「うん……。お帰りなさい」

告げて、美春が力が抜けたように息を吐いた。
安堵したような、落胆したような、そんなふうに。

「亜紀達は？」
「寝ちゃったよ。慣れない場所でずっと立っていたせいか、すごく疲れたみたい」
「そっか……」

しばし、沈黙が降りる。
会話が続かず、何となく気まずい空気が流れた。
「お茶、淹(い)れようか？」
美春がぽつりと尋ねる。
「あ、うん。頂きます……」
貴久が頼むと、美春は室内の簡易キッチンに足を運んだ。
数分で作業を終わらせると、リビングにお茶を運ぶ。
「どうぞ」
「ありがとう……」
コトリとテーブルの上にお茶が置かれると、貴久がカップを取って口に含んだ。
「……美味しい。フリルが淹れたみたいだ」
目を丸くして、貴久が感想を告げた。
フリルとはリリアーナの侍女のことだ。
以前、貴久はフリル以外の者が淹れたお茶を飲んだことがある。
だが、その者が作ったお茶は普段フリルが淹れているお茶よりも

味が劣るとはっきりわかるくらいに違いがあった。
使っている茶葉に違いはなかったのに。
「美味しい淹れ方を教えてもらったから……」
美春が照れくさそうにはにかんで告げた。
「……ハルトさんに？」
貴久が硬い声で訊く。
「うん」
頷いて、美春がやわらかく微笑んだ。
「そっか……」
貴久が痛々しい笑みを浮かべた。
そうしてぽつりぽつりと会話をしながら、十分ほど時間が経って。
そのうち会話もなくなって、さらに十分くらいの時間が流れた。
「ねぇ、そろそろ寝たら？」
ある時、気まずさに耐えかねて、貴久がおもむろに提案した。
「……うん。でもあまり眠くなくて。貴久君は？」
「俺はリリィが帰ってくるまで起きていようかなって……」
「そうなんだ。仲が良いんだね、リリアーナ様と」
美春がそっと微笑んで告げる。

「いや！　……まぁ、うん」
咄嗟(とっさ)に否定しかけたが、脳裏にリリアーナの笑顔がチラついて、貴久はおずおずと首肯した。
そんな貴久の反応に、美春が目を丸くする。
「どうしたの？」
美春が可笑しそうにくすくすと笑った。
「なんでもないよ……。もう寝た方がいい。眠れなくても横になっているだけでもいいみたいだから」
貴久が言うと、美春は逡巡するような表情を見せたが、
「うん。そう、だね……。一応、ベッドで横になってみようかな。おやすみなさい」
躊躇いがちに頷いて、亜紀が眠っているベッドルームへと歩き出したのだった。
☆★☆★☆★
シャルロットの部屋で夜会終了後に開催された二次会は小一時間以上に渡って続いた。
歓談は終始和やかな空気で繰り広げられ、お開きの時間になっても名残惜しそうにするシャルロットの提案により、明日の午前中も歓談の予定を入れられることになる。
そうしてリオと沙月がお疲れの様子でシャルロットの部屋を後に

し、二人きりになったところで、
「ねぇ、今から美春ちゃん達の部屋に行ってみない？　話したいこととかあるでしょ？」
と、おもむろに沙月が訊(き)いた。
「ええ、できれば今晩中に行きたいなと思っていましたので。ただ、今の時間だともう寝ているかもしれませんが」
困ったような表情を浮かべて、リオが答える。
「ハルト君が随分とシャルちゃんに懐かれたからね」
少しだけ唇を尖らせて、沙月が言う。
「そう、なんですかね？　やっぱり」
「何言っているのよ。どこからどう見ても懐かれているじゃない」
少し自信なさ気に尋ねるリオに、沙月が呆れた視線を向けた。
「そうされる心当たりがないものでして……」
「賊に襲われそうになったところをハルト君に助けられたわけだからね。自分を守ってくれる異性のことはカッコよく見えるものなんじゃない？」
少し突き放すように言って、沙月が反応を窺(うかが)うようにリオを見やる。
「いや、助けたというなら、他に騎士の方々もいたじゃないですか。

だから心当たりがないなって……」
「あー、うん。なるほど……ね」
天然にも思えるリオの返答に、沙月が苦笑いを浮かべた。
そのまま沙月がまじまじとリオの顔を見つめたが、リオの気のせいか、少しばかり目つきがジトッとしているように思える。
「まあ、いいけどさ。どうする？　行くの、行かないの？」
ややあって小さく嘆息し、沙月が改めて尋ねた。
「行ってみましょうか。渡しておきたい物もありますので。一度、俺の部屋に寄ってもいいでしょうか？」
リオが即答する。
「もちろん」
沙月が頷き、二人は美春達のもとへと赴くことになった。
☆★☆★☆★
「これはサツキ様にハルト様。何かご用でしょうか？」
美春達が宿泊している部屋の前まで来ると、貴久とリリアーナの護衛を務める女性騎士達がリオと沙月に話しかけてきた。
「貴久君達に会いたいんですけど、取り次いでいただけますか？」
「畏まりました。少々お待ちくださいませ」

沙月が用向きを告げると、女性騎士の一人であるキアラが「失礼します」と言って室内に入っていった。
その場に残されたのはリオと沙月、そしてもう一人の護衛騎士であるアリスである。
周囲にはガルアーク王国の衛兵も見張りをしていた。
扉が閉まり、数十秒ほど経ったところで、再び扉が開く。

「お待たせしました、先輩」

そう言って、姿を現したのは貴久だ。
一瞬、貴久が何かを勘ぐるようにリオと沙月の間で視線を交互させる。
だが、すぐに少し疲れた様子で微笑みかけてきた。

「夜遅くにごめんなさい。本当は夜会が終わってすぐ来たかったんだけど、ちょっと野暮用があってね。まだ美春ちゃん達は起きている？」

沙月が申し訳なさそうに尋ねる。

「……すみません。慣れない夜会で疲れたのか、もう眠っちゃって」

貴久が顔を曇らせて答えた。
亜紀と雅人は夜会から帰ってくるとすぐに眠りに就き、今頃はすやすやと深い眠りに入っていることだろう。
だが、美春に関しては、少しそわそわした様子で、つい先ほどまで起きていた。
何となく二人でいるのが気まずくて、貴久がもう眠ったらどうかと声をかけると寝室に入ったが、まださほど時間は経っていない。
だから、もしかしたらまだ眠りに入っていないかもしれないし、

声をかけたらすぐに目覚めるかもしれないのだが、貴久はそのことを口にしなかった。
口にするのが怖かった。
「ありゃりゃ、来るのが少しだけ遅かったか。残念」
と、沙月が残念そうに苦笑する。
もしかしたらもう眠っているんじゃないかと予想していたため、さして落胆した様子もないようだ。
「ええ、すみません……」
気まずい顔で貴久が頭を下げた。
「別に貴方が謝ることじゃないでしょ。貴久君は一人で起きていたの？」
沙月が苦笑して尋ねる。
「はい。少しリリィが王様と面談していまして。彼女が帰ってくるまでは起きていようかと……」
こくりと頷く貴久。
「なら明日の午後にまた出直すしかありませんね」
言って、リオが小さく肩をすくめた。
「そうしましょうか」

嘆息しながら沙月が頷き、
「明日の午前中に何かあるんですか？」
と、貴久が尋ねた。
「うん、ちょっとシャルちゃん……シャルロット王女とお茶する予定が入っちゃってね。午後にはこっちに顔を出せると思うわ」
「実は俺達も雅人達のために明日の午前中は魔道船の見学をするつもりなんです。先輩達も一緒にと思ったんですが、無理そうですね」
「そうなっちゃうかな。ごめんなさいね」
「いえ、雅人が興味を持って、急に決まった話でしたから」
貴久が苦笑して頭（かぶり）を振る。
「サツキさんはそっちに参加しても大丈夫ですよ？」
少し残念そうに語っていた沙月に、リオが言った。
すると、沙月はジトッとした目をリオに向けて、
「キミはシャルちゃんと二人きりがいいの？」
と、そう尋ねた。
「いや、そういうわけじゃないですけど……。明日は今日みたいに夜に会うわけじゃないですし、サツキさんもずっとみなさんと一緒にいられるわけじゃないんだから、無理して俺に付き合う必要はないかなと」
わずかにたじろいだ様子で、リオが弁明する。

沙月は想定外なことを言われたとばかりに目を丸くしたが、
「べ、別に無理して付き合っているわけじゃないから、いいのよ」
と、気恥ずかしそうに視線を逸らし、告げた。
「そ、そんなことより！　本当はこれから美春ちゃん達がどうしたいのか、それを訊きたかったのよ。どうなの？　貴久君、もう話はしたの？」
頬を赤くして、沙月が話題を変える。
本来なら日中に尋ねておくべき件だったのかもしれないが、沙月はこの話題をあえて避けていた。
何となく一人だと意志を確認するのが怖かったというのもあるし、話を聞くのならば関係者であるリオと一緒がいいと思っていたというのもある。
美春達もその話を遠ざけるように話題を選んでいたのは幸いだったのだが、なかなかリオが忙しく、結局こんな時間になってしまったというわけだ。
「えっと、一応は。色々とみんな不安に思うところはあるみたいですけど、前向きに考えてくれているみたいで……」
突然の話題に一瞬だけ顔を強張らせると、貴久が少し硬い声で答えた。
一見すると普通の調子を取り繕っているが、貴久の心臓はすごくドキドキしている。
全身の血が沸騰しているように、体が熱い。
それは咄嗟に事実に反することを言ってしまったからだ。
確かに美春達とは既に話をしてある。

だが、一緒に付いてきてくれると言ってくれたのは亜紀だけで――。
雅人とは兄弟喧嘩をして――。
美春は明確にリオに付いていきたいと自分の意志を表明して――。
話し合いの結果は決して貴久にとって前向きなものとはいえなかった。

「雅人とはちょっとだけ喧嘩しちゃいましたけど、亜紀はこれからずっと一緒にいたいって言ってくれて……」

美春に関する話は伏せて、貴久が言い訳がましく説明を付け足す。
後ろめたそうに、視線をリオから外して。
確かに、貴久はリオに強い感謝の念を抱いている。
だが、リオと美春を引き合わせたくないとも心の中で思っていた。
だから、この場ではまだ美春の意志を教えたくない。
要は嫉妬しているのだ。
美春が選んだリオに対して、夜会で美春と上手く二人きりになったリオに対して、自分の知らぬ間に美春と親密な関係を築き上げたリオに対して――。
夜会でリオと美春が二人きりでバルコニーにいる姿を目撃して、貴久は己の心の闇に潜んでいた嫉妬心にようやく気づいた。
そんな自分がみっともなくて仕方がない。
とはいえ、美春は渡したくないけれど、恩人であるリオに対しても悪いと思う気持ちもある。
それに、大好きな美春のためにも、一緒にみんなでいられる方法を考えようと言ってくれた亜紀のためにも、貴久は何とかしなければという義務感に駆られていた。
それはもはや強迫観念と言ってもいい。
そのためにはどうすればいいのか、やれることは少ないけれど、貴久なりに考えてみたことがある。

「そっか……」

沙月が溜息を吐くようにつぶやく。

しばし、沈黙が落ちた。

すると、そこで、

「……あの、ハルトさん」

声を絞り出すように、貴久がリオに呼びかける。

「はい？」

「ハルトさんは……、この夜会が終わった後の予定とか決まっていたりしますか？」

「ええ、王都を離れて西へ向かうつもりですが」

貴久の質問にリオがあっさりと答えた。

「じゃあ……、その後にでもセントステラ王国に来ませんか？　その、みんなもハルトさんとも一緒にいたいみたいなので……」

リオが自分の場所に来るなら美春も一緒に来てくれるのではないか。

それが貴久の出した答えだった。

それはリオを利用しているだけだ。

みっともない真似だと、自分でもわかっている。

だが、みじめでも、みっともなくてもいい。

好きな人と一緒にいられるのならば。

泥臭くあがいてでも、美春を振り向かせてみせる。

そう思ったのだ。

「みんなが、俺と……。そうですか」
驚いたように小さく目を丸くすると、しかるのちリオが口許を少しだけほころばせた。
だが、その瞳は後ろめたそうに少しだけ揺れている。
すると、そこへ、
「あら、私だってみんなと一緒にいたいのは同じなんだけど？」
くすっと笑みを浮かべて、沙月が言葉を挟んだ。
「ええ、セントステラ王国とガルアーク王国は防衛同盟を結ぶみたいですから、お互いに会いやすくなるはずです」
「敵国同士にならなくて本当に良かったわね。これからはお互いに勇者の地位をふんだんに利用して、状況を打開していきましょう」
「はい」
貴久が力強く頷く。
「じゃあ今日はそろそろお開きかな。あまり遅くまで立ち話しちゃ悪いし、この世界は朝も早いしね」
軽く両手で伸びをして、沙月が提案した。
続けて、ふと、何かを思い出したようにリオを見やると、
「あ、そうだ。ハルト君、美春ちゃん達に渡しておきたいものがあったんでしょ？　貴久君に渡しておいてもらえば？　せっかく部屋に寄って取ってきたんだし」

沙月がそう言った。
すると、リオが思案顔を浮かべて、
「そう、ですね……」
と、肯定とも否定とも言い難い返事をした。
「何を渡すんですか？」
首を傾(かし)げて、貴久が訊(き)く。
「……手紙です。伝えておきたいことはたくさんあるんですけど、あいにく口下手でして」
苦笑いを浮かべて、リオがおずおずと答えた。
「へぇ、手紙か……。古風だけど、何か良いわね。この世界だと一般的なんでしょうし」
沙月が意外そうに目を丸くすると、感心したように告げた。
「なるほど……。じゃあ俺が渡しておきましょうか？」
と、貴久がおずおずと提案する。
リオに対する罪悪感からくるせめてもの罪滅ぼしのつもりだった。
「えっと……」
「自分の手で直接渡したい？」
逡巡した様子を見せるリオに、沙月が隣から尋ねてきた。

「……ええ。ですが、できれば早いうちに読んでもらいたいなとも思っていまして」

リオが苦笑して語る。

きちんと決めてはいないが、美春達が今後どうしたいのかについて、明日の午後になれば全員で話を聞くことになるのだろう。

既に貴久とは暫定的に話をしたそうだし、もしかしたら美春達はもう決断しているかもしれない。

でも、リオが書いた手紙を渡せば、その決断が変わる可能性もある。

手紙に書いた内容を考えると、読んでから心を整理する時間は必要だ。

だから、美春達と話し合うまでの間に、リオは余裕を持たせて手紙を渡しておきたかった。

本当は今晩中に自分の手で美春達に手紙を渡しておきたいところだったが、シャルロットの相手をしているうちに美春達は眠ってしまったらしい。

となると、明日の朝のうちに渡すのが理想的だ。

シャルロットとの歓談は朝食を終えた後だから、彼女の部屋に移動する途中にもう一度だけ立ち寄ってみるのがいいかもしれない。

「ご迷惑かもしれませんが明日の朝、もう一度伺ってもよろしいでしょうか？」

その時に美春達が起きて部屋にいれば手渡しすることも可能だろう。

それでもタイミングが合わなければもはや貴久に頼むしかない。

「……はい、大丈夫ですよ。九時過ぎから外に出ちゃいますが」

少し気が引けたものの、貴久が素直に了承した。

「わかりました。シャルロット様とのお茶会が同じくらいに始まるので、その前に伺います」

そうして話がまとまり、明日の朝にもう一度、リオがこの部屋へ訪れることが決まったのだった。

第１１０話　手紙

翌朝、リオが宿泊する客室にて。
時刻は朝八時過ぎ。
さして見知らぬ女中二人がすぐ傍にいる慣れない状況の中で、リオが朝食を済ませたところだ。
身分や混雑する時間帯によっては個室での食事が制限されることもあるが、基本的に王城での食事は個室と食堂のどちらで摂ることも許されている。

「ハルト様、お茶をご用意いたしましょうか？」
「ええ、お願いします」

そうして同年代の少女にお茶を淹(い)れてもらっていると、部屋の扉がノックされる音が響いた。
迅速に女中が扉を開きに行き、すぐに畏まって対応する声が聞こえてきて、

「おはようございます。ハルト様」

と、そう言って、シャルロットが中に入ってきた。

「シャルロット王女殿下……。おはようございます」

呆気にとられながらもリオが朝の挨拶を行う。

「何のご用でしょうか？」

お茶会はシャルロットの部屋で行われる予定だ。
ゆえに彼女がリオの部屋を訪れる理由に心当たりがない。
「午前中は私とお話をする約束でしたでしょう？　少し早いですがお迎えに伺ったのです」
用件を尋ねられると、シャルロットが愛嬌のある笑みを浮かべて答えた。
リオが室内の時計を見やる。
シャルロットとの談話は朝九時からの予定だ。
本来なら予定時刻までまだ一時間弱はある。
いくら王城内が広く、移動に時間がかかるとはいえ、少し早いと言うにはいささか無理があるような気がしないでもない。
が、王女にそんなことを言っても詮(せん)のないことだろう。
「なるほど……。ご足労いただき恐縮です」
思いがけぬ来訪の理由であったが、リオが無難に対応する。
「ふふっ、私がお会いしたかったから伺ったのですよ。どうかお気になさらず。よろしければこのままサツキ様のお部屋にも伺いたいのですが、いかがでしょうか？」
「ええ、構いませんが、少し寄りたい場所があるのです。先にそちらの用件を済ませてもよろしいでしょうか？」
「もちろんですわ」
シャルロットがにっこりと微笑んで頷いた。
「それでは準備をしますので、少しお待ちください」

そう告げると、リオは昨晩の内に時空の蔵から取り出しておいた三通の手紙を取りに行った。

☆★☆★☆★

王城の廊下をすたすたと二人の男女が並んで歩いている。

リオとシャルロットだった。

「ふふっ」

リオの腕を掴みながら、シャルロットが嬉しそうに笑みを浮かべている。

対照的に朝から気疲れし始めているリオであった。

「シャルロット様、あまりこうして密着されるのは……」

「お嫌でしょうか？」

上目づかいでリオの顔を窺(うかが)い、シャルロットがストレートに尋ねる。

「嫌というわけではありませんが、周囲の方々に勘違いされてしまうのでは？」

「勘違いさせておけばいいではありませんか」

そう言って、愛らしい笑みをたたえるシャルロット。

「あはは……」

リオは顔を引きつらせながら、苦笑する。苦笑するしかなかった。

確かにシャルロットはリオに懐いているように見えるし、沙月も

何だかんだで彼女には妙に甘いところがある。
だから、単に無邪気で、甘え上手なだけで、決して悪い子ではないのかもしれない。
だが、リオはまだシャルロットに対する警戒心を拭えきれずにいた。
幼くとも彼女も王族なのだから。
若い王侯貴族は精神的に未熟であるがゆえに、自らに与えられた権力を過信しているのか、傍若無人になりやすいきらいがある。
目下の者には自分勝手で無遠慮な言動が目立ち、己の要望が当たり前のように通ると考えており、自分の意志が尊重されないと途端に不機嫌になる――くらいならまだ可愛いものだ。
適当にあしらって地雷を踏むと、癇癪(かんしゃく)を起こしかねない者がいるし、逆恨みして悪質な嫌がらせをしてくる者もいる。
特に相手の性別が女性である場合は本当に厄介で、リオもベルトラム王立学院時代によく学んでいたことだ。
シャルロットの年齢は十三歳、ちょうど多感な時期である。
ゆえに、シャルロットという少女の人間性も把握しない段階では、下手な対応はできない。
不興を買って騒ぎになれば、客としてお城に居づらくなるかもしれないのだから――、まぁ、流石に不敬罪になることはないだろうが。
それに、シャルロットが何かしらの思惑があってリオに接近している可能性も考慮しなければならない。
リオに彼女を近づけさせたのは国王であるフランソワだ。
あの国王は油断ならないとリオは思っている。
美春達と交友を持ち、沙月とも急接近しているリオを利用しようと考えていても不思議ではない。
シャルロット自身に思惑がなくとも、フランソワから何かしらの命令を受けている可能性はゼロではないだろう。
そうだとすれば本当に厄介なことこの上ないが。

「タカヒサ様に御用がおありなのですか？」
「いえ、用があるのは私が保護していた三人の少年少女です」
「まぁ、そうでしたか。綺麗でとても可愛らしい方ですよね、ミハル様」
屈託のない表情でシャルロットが言う。
「ええ……、そうですね」
掛け値なしの本心であるが、素直に同意するのも何となく気が引けて、リオがためらいがちに頷いた。
シャルロットがにこりと笑ってリオの反応を窺う。
そうして会話をしているうちに、美春達が宿泊している部屋の前にたどり着く。
護衛の騎士達の姿は見受けられない。
（留守なのか？）
疑問に思ったが、小さく息を吐いて、扉を静かにノックした。
コンコン。
『馬鹿、お兄ちゃんのえっち！　デリカシーがないよ！』
室内から漏れる亜紀と思しき少女の声で、ノックの音がかき消された。
『わっ、待って、亜紀！　ごめん、ごめん！　覗こうとしたんじゃないから！　雅人もいるだろうからって、ま、雅人は。いないの！？』

『雅人なら暇だから、お城を見てみたいって外に出て行っちゃったよ！　もう！』

室内から慌ただしい喧騒が伝わってきて、

「何やら取りこんでいらっしゃるようですね」

シャルロットがきょとんと目をみはる。

「みたいですね。……もう一度だけノックしてみましょうか」

リオが苦笑しながら言った。

ここは空気を読んで出直すべきかもしれないが、リオとしてはこのタイミングを逃すわけにはいかない。

今度は少し強めにノックしてみた。

『も、申し訳ございません。少々お待ちくださいませ』

少し余裕のない声で返事が戻ってくる。

『タカヒサ様、お客様です。おそらくハルト様かと』

『わ、わかった。すぐ出るよ。亜紀、ちょっと待っててくれ。落ち着いてからまた話そう』

扉の向こうで何があったのかは知らないが、会話の流れからすると貴久が亜紀を怒らせてしまったのだろう。

たっぷり十秒ほど経って、慌ただしく部屋の扉が開いた。

そうして現れたのは貴久、キアラ、そしてアリスの三人だ。

「お待たせして申し訳ございません。ちょっと取りこんでいま……

して……」

バツが悪そうに苦笑していた貴久であったが、上機嫌でリオの腕を組んでいるシャルロットを発見すると、目を丸くして硬直した。

「おはようございます、タカヒサ様」

シャルロットがにっこりと貴久に微笑みかけた。

「え、ええ、おはようございます。シャルロット王女」

貴久がおずおずと返事をする。

「お忙しいところ申し訳ございません。予定時間より早く伺ってしまい恐縮なのですが、ミハルさんはいらっしゃいますか？」

と、リオがすまなそうに謝罪し、訊(き)いた。

「あ、えっと……。どうだろ。雅人が外に出ちゃっているみたいで、もしかしたら一緒に行っちゃったかも……」

「ミハル様ならマサト様を追いかけていきました。付き添いにヒルダがいます」

あやふやな貴久の説明を、キアラが補足する。

「あはは……。だ、そうです。実は俺も部屋に戻ってきたばかりで、亜紀ならいるんですけど……」

貴久が引きつった笑みを浮かべながら言った。

「アキちゃんだけですか」

リオが思案顔を浮かべる。

亜紀にも手紙は書いてあるが、リオとしては真っ先に手紙を渡すべき相手は美春と考えていた。

亜紀は天川春人のことを嫌っている節があるので、リオの前世を伝えることでどんな反応を見せるのか予想がつかないからだ。

だから、まずは美春に手紙を読んでもらって、その上で亜紀に手紙を渡すかどうか判断してもらうつもりでいた。

最初に亜紀に手紙を読ませることは正しいのだろうか。

正直、リオには判断しかねる。

亜紀が前世の自分に対してどのような心証を抱いているのか、リオはほとんど何も知らないのだから。

要は怖いのだ。

そうしてリオが逡巡していると、

「九時過ぎ……遅くとも半までには戻ってくるはずです。昨日も言いましたけど、魔道船の見学があるので」

貴久がそう言い添えた。

「なるほど……」

と、リオが嘆声染みた言葉を漏らす。

どうも昨晩からあまりタイミングがよろしくないようだ。

お城に滞在しているせいで行動の自由が制約されていたり、美春と別の部屋になっているせいで会おうと思った時に会えなかったり――。

だが、リオの調子を狂わせている最大の原因は別に――いや、隣にいる。

リオは目を転じてその原因たる人物をちらりと見やった。
シャルロットがリオの視線に気づき、愛らしい笑みを向ける。
（昨晩はこの子のせいで美春さんが先に眠っちゃったし、今朝もこの子のせいで美春さんとすれ違いになっているし……）
いっそ社会的な立場を無視してシャルロットを邪険にしたい衝動に駆られるが、ぐっと堪（こら）える。
（むしろ昨日のうちに告白できただけでも良しとするべきなんだろうか）
昨晩の夜会で告白していなければ、こうしてシャルロットの邪魔が入り、告白できぬまま今日の午後になって、美春達との話し合いに突入していたはずだ。
その話し合いには美春以外にも亜紀がいて、沙月がいて、貴久がいて、雅人がいて、リリアーナがいて、他にも部外者がいる可能性もある。
そんな状態で告白するのは流石に御免こうむりたいたい。
二人きりになれるかどうかもわからないし、亜紀がどんな反応を見せるかわからないし、話し合いをする空気でなくなるかもしれないし、ましてや告白なんてするような雰囲気ではなくなるおそれもあるし、既に美春達が決断を下し終えている可能性だってあるし、そのまますぐお別れになることだってありえるのだから。
そうして数瞬ほど逡巡していると、
「アキ様がいらっしゃるのならば、ハルト様の御用をお済ませになりませんか？　タカヒサ様もお忙しいでしょうから」
シャルロットがリオに用事を済ませるよう促す。

「ええ……」

笑みを浮かべて首肯しながら、

（どうする……）

リオが脳内で状況を整理し始めた。

考えられる選択肢は五つ。

ここで貴久に手紙を預けるか、亜紀を呼び出して手紙を渡すか、この場に居座ってギリギリまで美春達の帰りを待つか、当てもなく美春を探しに行くか、午後になって美春達と話し合いをする時に手紙を渡すか。

正直、手紙は午前中に読んでもらいたい。

手紙の中身を読むことで美春達は確実に混乱してしまうだろうから、話し合いをするまでに考える時間を入れておきたかった。

沙月とシャルロットとのお茶会の開始時刻は九時ぴったり、他方で美春達がこの場に戻ってくる時間は遅くとも九時半。

時刻は既に八時半に差しかかっており、広い場内を歩いて沙月を迎えに行く関係上、そろそろこの場を離れないといけない。

また、シャルロットとの同伴や沙月の迎えを除外して、九時前ギリギリまでこの場で待っていたとしても、美春達が戻ってくる保証はない。

最も無難な選択肢は――。

「……タカヒサさん、手紙を渡してもらってもよろしいでしょうか？」

観念したように小さく嘆息すると、リオが貴久に依頼した。

「もちろん構いませんけど、じゃあ亜紀を呼んできますね」

そう言って、貴久が身体を反転させて扉を開けようとする。
宛先人が部屋の中にいるのだから、呼び出せばいいだろう。
そう思っての行動だ。
だが、

「いえ、待ってください」

リオが制止すると、貴久が動作を停止してリオを見やった。

「三通とも最初は美春さんに手紙を渡して読んでほしいんです。アキちゃんとマサトにはその後に渡すよう伝えてくださいませんか？」

少し気が引けた様子で、リオが説明する。

「……はい、わかりました」

説明の真意を掴みかねてはいるようだが、貴久が素直に了承した。
リオから渡された三通の手紙には、シュトラール地方の言葉で宛先人名が書かれてあり、宛先人以外の者が開封しないように封蝋(ふうろう)もしてある。
ありえないとは思うが、沙月がいる前で手紙の話はしたし、シャルロットも傍で見届けている以上、後で渡した渡していないと言い争いが生じることもないだろう。

「よろしくお願いします。それでは、また午後に伺いますので。今度はサツキさんと一緒に」
「ええ、お待ちしております」

貴久と頷きあうと、リオがシャルロットに視線を向ける。

「シャルロット様、私用でお待たせしてしまい、大変申し訳ございませんでした」

「いえ、いいのですよ。それより早くサツキ様の下へ行きましょう。ひょっとしたら入れ違いになってしまうかもしれませんから」

シャルロットが嬉々としてリオの腕を掴んで引っ張り始める。

そうして、リオはその場を後にしたのだった。

☆★☆★☆★

立ち去ったリオとシャルロットの姿が見えなくなったところで、

「何が書いてあるんでしょうねぇ～。恋文かなぁ」

と、呑気（のんき）にも思える明るい声で、少女騎士のアリスが言った。

貴久がハッとして、手に持った手紙を凝視する。

「アリス、はしたないわよ」

先輩騎士のキアラがアリスをたしなめた。

一見するとお淑やかな雰囲気を持っているが、何というかキアラには独特の迫力がある。

「え～。だって気になるじゃないですか」

「だからといって他人の手紙を詮索するものじゃありません」

「あ、ということは、キアラ先輩も気になるんですね」

「本当に口の減らない子ねぇ」

「あはは……」

キアラが放つ無言の圧力に押されて、アリスが冷や汗を浮かべる。
「でもタカヒサ様も気になっているみたいですよ。あの幼馴染の女の子のこと、絶対好きですよね。そこにリリアーナ様が入ったら禁断の三角関係に……」
「こら、だからそういう下世話なことは……」

ひそひそとキアラとアリスが喋る。
しかし、貴久には二人の会話などこれっぽっちも聞こえていないようで、黙って両手に持った手紙を見つめていた。
すると、その時のことだ。
亜紀しかいないはずの扉ががちゃりと音を立てて開いた。
貴久がびくりと身体を震わせて、反射的に手紙を懐(ふところ)に隠そうとする。
だが、急いでいたせいか、手紙は素直に懐には入らず、三通ともすっぽ抜けて地面に落下し始めた。
咄嗟(とっさ)に手を動かして格闘し、貴久が宙を舞う手紙をまとめて腹部に抱えようとする。
すると、ぐしゃっとした嫌な感触はしたものの、二通はキャッチに成功した。
残り一通はキアラの足元にひらりと舞い落ちている。
不味い、そう考えて、貴久が慌てて地面に落ちた手紙を拾おうと身を屈(かが)めた。
すると、今度は腹に抱えていた手紙まで落としてしまう。
「わっ、とっ！」
貴久が自らの足元に落ちた手紙二通を右の手のひらで押さえつけるようにして乱雑に掴んだ。

続けて、左手でキアラの足元にある手紙も掴もうとしたが、こちらは先んじて彼女が手紙を拾っていたおかげで事なきを得る。
亜紀は挙動不審な貴久のしゃがんだ後ろ姿を目を丸くしながら見ていて、

「お兄ちゃん、何しているの？」

と、不思議そうに声をかけた。
声に反応して貴久が立ち上がり、状態も確認しないで手紙を背後に忍ばせる。
そうしておそるおそる振り返ると、

「えっと、亜紀、どうしたんだ？」

引きつった笑みを浮かべて、尋ねた。
先ほどある理由で亜紀を怒らせてしまった貴久であるが、今はそれよりも後ろの手に隠している手紙を見つけられやしないかと気が気でない。

「別に。……ハルトさんが来たみたいだから、挨拶しようかなって」

少しぶっきらぼうに亜紀が答えた。
どうやらまだ先のアクシデントを怒っているようだと、貴久が判断する。

「あ、ああ。もう行っちゃったけど、午後にまた沙月先輩と来るって言ってたな」
「そう……」

と、そっけなく亜紀が言う。

（不味い。ハルトさんとの約束もあるけど、今、亜紀にこの手紙を見せるわけには……）

緊張して手に汗を握り、後ろに隠した手紙をぎゅっと掴む。

手紙の状態を確認するように指を動かすと、何かがボロッとはがれたような気がした。

貴久のすぐ背後ではキアラが手紙に視線を送りながら顔を引きつらせ、アリスが「おおっ」と目をみはっている。

「そういえば何か拾っていたの？　地面にうずくまっていたけど」

「い、いや、そんなことはないよ」

貴久がぎこちなく笑って誤魔化す。

手紙を握る力がさらに強まった。

「そうなの？　……何か隠してない？」

亜紀が訝（いぶか）しそうに貴久を見つめた。

「だから、そんなことはないって」

貴久が上ずった声で否定し、後ろめたそうに視線を逸らした。

全身に冷たい汗が流れる。

すると亜紀は「あ……」と何かに気づいたような表情を浮かべた。

「さ、さっき見たことは忘れてよね」

羞恥（しゅうち）で顔を赤くし、亜紀が貴久をジトッと睨（にら）んだ。

「さっき……？　あ……」

訊き返してから、すぐに貴久が気づく。

そして、思い出してしまった。

朝から国王との会談に向かうリリアーナを送り届けて、部屋へと戻ってきた時のことだ。

リビングルームに美春達がいなかったため、貴久は美春と亜紀が寝ているベッドルームにノックをしないで入り込んでしまった。

すると、そこでは部屋着から余所行きの服に着替えている最中の亜紀がいて、貴久は義妹のあられもない姿を目撃してしまったというわけである。

「も、もちろんだよ」

ぶんぶんと貴久が勢いよく首を縦に振った。

「だ、だから忘れてって……」

顔を真っ赤にし、亜紀の視線の鋭さが増す。

「あはは……」

そんなことを言ってもきっかけを与えたのは亜紀の方なのだから、少しくらい思い出すのは不可抗力なのではないか。

そう言いたかったが、貴久は引きつった笑いを浮かべるだけだった。

根本的にはノックもせずに女性の寝室に入り込んだ自分が悪いのだから。

「そりゃあ私は人様に見せつけられるような立派な身体はしてない

けどさ。もしあの場に美春お姉ちゃんもいたら、ちょっと弁護できなかったよ」

ブラが必要ないくらいの胸しかない亜紀と違って、美春は小柄ながらもそれなりに女性らしい身体つきをしている。

「う……」

貴久は思わず言葉に詰まった。

「まぁ美春お姉ちゃんは優しいから、許してくれるかもしれないけどさ」

「は、反省してます。ホントに」

貴久がぺこぺこと頭を下げる。

「まぁ、いいけど……。それよりさ。ハルトさんのこと、今は美春お姉ちゃんも雅人もいないから言うけど」

と、亜紀がおもむろに話を持ち出した。

本当は貴久と二人きりになってこの話をするため、亜紀は雅人を外に行くよう仕向け、美春にその保護を押し付けたのだ。

だというのに肝心の貴久のせいでだいぶ遠回りしてしまったような気がして、亜紀が盛大に溜息を吐く。

「あ、ああ」

突然に変わった話題に、貴久が表情をこわばらせる。

「私ね。考えたんだけど、ハルトさんにも私達と一緒に来てもらえ

ばいいんじゃないかなって思うの。そしたら美春お姉ちゃんも一緒に来てくれるだろうし」

それは必然的と言うべきか、貴久が出した結論と同じものであった。

「ああ、俺もそう考えた。だから昨日言ったんだ。ハルトさんに」

貴久がこくりと頷き、告げた。

「え、そうなの？　いつ？」

「夜みんなが眠った後」

「そうなんだ……。ハルトさん何だって？」

「夜会が終わったら西の方で用事があるみたいなことを言ってた。亜紀は何か知らないか？」

貴久が尋ねると、亜紀が思案顔を浮かべる。

「ううん。長い間ずっと同じ場所で暮らしていたし、どこかに用があるとは言ってなかったけど……。アマンドに用があるのかな？」

亜紀がそう言うと、貴久は顔に疑問符を張りつけた。

「アマンド？」

「うん。私達がずっと暮らしていた都市だよ」

「ああ、そこか……。一応、その用が終わった後でもいいからセントステラ王国に来ないかって彼には言っておいた。ちゃんとした返答はまだもらっていないけど、感触は悪くないと思う」

「そっか。それならハルトさんがその用事を済ませている間は美春お姉ちゃんに私達と一緒に来てもらうよう説得できるかもね」

亜紀の言葉に、貴久がきょとんと目を丸くする。
「ああ……そっか、そういうふうに説得もできるのか。すごいな、亜紀は……」
自分は精神的な余裕の無さから視野が狭まって、そこまで発想が及ばなかった。
「少し考えればすぐに思いつくことじゃない。余裕なさすぎだよ、お兄ちゃん。今日の午後、ちゃんとその話をしなきゃだね。私が協力してあげるから」
と、得意げに亜紀が言う。
「そうだな……」
貴久が少し嬉しそうに頬を緩めた。
「それよりも、もしそうなったらその間にちゃんと美春お姉ちゃんの心を掴むんだよ。もう離しちゃだめだからね」
「は、離しちゃだめって……。な、何を言ってるんだよ。俺は、そんな……」
貴久が顔を赤くして、話を濁(にご)そうとした。
ひょっとしたら妹に自分の好きな人がバレているのではないかと気が気でない。
そんな貴久の反応に、亜紀が大きく溜息を吐く。
「言っておくけど、お兄ちゃんが美春お姉ちゃんのことを好きって、

私、知ってるからね。丸わかりだよ」
「え、な、なんで？」
隠すことも忘れて、貴久が愕然（がくぜん）と尋ねた。
ちなみに今の二人の会話は日本語で行われている。
なので、すぐ傍で話を聞いているキアラとアリスは、神装による翻訳魔術が働いている貴久の言葉はともかく、亜紀が何を言っているのかはわからなかった。
「なんでって……。普段の態度を見ればバレバレだかんね。いつも美春お姉ちゃんと一緒にいようとする割には、妙に二人きりになるのを避けようとする節があるし、ちょっと二人きりになると気まずそうにしてたり、視線も合わせないようにしてるし」
亜紀が呆れたように語る。
全部、図星だった。
シャイなのだ、要は。
大好きなのに、相手を避けてしまう。
二人きりになると、とたんにそっけない態度をとってしまうこともある。
「し……仕方ないだろ。普通の男ならそんなもんだよ」
一瞬だけ面食らったものの、貴久が恥ずかしそうに言い捨てる。
亜紀は小さく嘆息すると、
「気にならないの？　ハルトさんと美春お姉ちゃんのこと。昨日の夜会でいなくなった時さ。何を話していたのか」
じっと貴久を見つめて、そう問うた。

「それは……」

そんなことは、貴久も強く思っている。

昨晩、リオと美春が何を話していたのか、気になって仕方がないのだ。

だが、訊けるはずもなかった。

「私は訊いてみたんだけど……」

「な、何だって？」

亜紀の発言に意表を突かれ、貴久がぎょっとする。

「な、何を話したって？」

「別に大したことは話していないって。その前に私達が来ちゃったから……」

「そ、そうなんだ……」

貴久が脱力するようにホッと息を吐いた。

「でも、あの二人、ちょっと怪しくない？」

「いや、ま、まぁ……、どうだろう……。ハルトさん、良い人みたいだからな」

亜紀の質問に、貴久が余裕のない笑みを浮かべて答えをはぐらかす。

そんな兄の態度に、亜紀が不満そうな表情を見せる。

「言っておくけど、ハルトさん、すごく良い人だよ。ちょっと不器用だけど優しいし、カッコいいし、頼りになるし、料理もできるし。

それに……」

貴久の不安心を煽ろうと、そこまで言って、亜紀が顔を曇らせた。

ふと、脳裏にかつて兄だった春人の存在がチラついてしまったのだ。

「それに？」

ごくりと唾を呑んで、貴久が尋ねる。

亜紀は躊躇（ためら）いがちに、

「ううん。美春お姉ちゃん、好きな相手がいるかもしれないけど、その男のことを忘れて、もしかしたらハルトさんのことを好きになっちゃうかもしれないなって……」

と、そう言った。

すると、貴久が鈍器で頭を打ち付けられたような衝撃を受ける。

「好きな人……いるの？　美春に？」

貴久が顔面蒼白になって尋ねた。

「いや、まぁ、うん。たぶんだけど……」

忌々しそうに顔をしかめて、亜紀が頷く。

「そう、なんだ……」

貴久はショックを受けて消沈してしまった。

「で、でも、その男はもう美春お姉ちゃんの前に現れることはないから。今はお兄ちゃんにもチャンスがあるんだよ！」

亜紀が貴久を奮い立たせる。

「だからここで逃げるのだけは絶対にダメ！　確かにハルトさんには恩があるけど、あの二人の間にぐいぐい食い込んでいくくらいじゃないと。後で後悔しちゃうよ！」

まくしたてるように語りかける亜紀。

「亜紀……」

妹からの激励に、貴久が元気づけられたように声を震わせた。

「……そうだな。頑張ってみるよ。ちょっと自信がついた」

「うん、頑張って！　お兄ちゃん！」

言って、亜紀がぎゅっと拳を握る。

「ありがとう」

貴久が亜紀に微笑む。

すると、その時、

「タカヒサ様……そろそろ……」

キアラが少し焦燥した声で告げた。

その視線は貴久が後ろ手に隠した手紙に向けられている。

「え？」

何か用事はあっただろうかと、貴久が疑問符を浮かべた。

が、呑気に会話をしている場合ではないと、キアラから暗に視線で訴えかけられ、ようやく得心がいく。

「あ、ああ……そうですね。亜紀、ちょっと先に部屋に戻ってくれないか？　俺は用事があるんだ」

どぎまぎした口調で貴久が語る。

「うん、わかったけど……。早く帰ってきてね？」

「も、もちろん」

去り際にそんな会話をして、亜紀は部屋の中へと戻ったのだった。

「あのぉ、どうするんですか？　それ」

亜紀が部屋の中に入ると、アリスが訊(き)いて、貴久の手に握られた手紙を指差した。

「う……」

おそるおそる自分の手に握られた手紙を見て、貴久の顔が盛大に引きつる。

二通ともぐしゃりと折れ曲がり、しわくちゃになって、封蝋(ふうろう)もバキっと割れていた。

「ど、どうしよう……」

青ざめた顔で、貴久が救いを求めるようにキアラを見つめる。
「ど、どうしようって。可能な限り修復して、事情を説明したうえで、ミハル様達に渡すしかないんじゃないでしょうか？　ハルト様にも謝罪なさらないと」
動揺する貴久に、キアラが悩ましげに告げた。
「です、よね……」
「貸してください。これでは中の手紙もくしゃくしゃでしょう。封蝋も役割を果たしていませんし、まずは一度取り出して、ちゃんと伸ばさないと。壁を使いましょう」
本当は部屋の中に入って作業をしたいところだが、中には亜紀がいるし、部屋の前から離れて部屋の警備をおろそかにするわけにもいかない。
キアラはやむを得ずこの場で作業を行うことを決めた。
「……お、お願いします。俺もやりますから」
言って、貴久が封筒を一つキアラに手渡した。
「アリス、貴方はタカヒサ様を手伝いなさい」
貴久から封筒を一つ受け取り、キアラが言う。
「はーい。貸してください。タカヒサ様」
「ありがとう」
貴久が気まずそうな表情で亜紀宛ての封筒から手紙を取りだし、

アリスに手渡した。
案の定と言うべきか、中に入っていた手紙までしわくしゃになっている。
「破かないようにしてくださいね。決して読んではいけませんよ」
自然とキアラが作業を指揮することになり、手紙を破かないように指示を出し、テキパキと行動が開始された。
力を入れすぎず、丁寧な手つきで、しわくちゃになった封筒と手紙を伸ばしていく。
アリス、貴久、キアラと三人で並んで、廊下の壁を利用して手紙のしわを伸ばす作業は傍から見ると少し滑稽だ。
（これは誰宛ての手紙なんだろうか）
封筒に出来たしわを伸ばしながら、貴久がそんなことを思う。
そこにはシュトラール地方の言葉で亜紀の名前が書かれていた。
もっとも、会話はできても、シュトラール地方の言葉で読み書きできない貴久では、何が書かれているかは理解できないのだが。
貴久の左隣では、アリスが亜紀宛ての封筒に入っていた手紙のしわを伸ばしていた。
「んー、全然解読できませんね、この文字」
アリスが手紙のしわを伸ばしながらつぶやいた。
「こ、こら、アリス！　人様の手紙を盗み見るんじゃないって言ったでしょ！」
美春宛ての封筒のしわを伸ばしていたキアラが慌てて喝を入れる。

「えー、だって視界に入っちゃうんですもん。それに何が書かれているかもわかりませんよぉ。どこの小国の民族文字ですか、これ？　共通語で書けばいいのに」

ぶつくさと言いながら、アリスが手紙のしわを伸ばしていく。

「裏面にしてしわを伸ばすとかあるでしょうに……。この子は……」

嘆かわしそうにキアラがぼやいた。

シュトラール地方には共通語と呼ばれる言語が広く普及し、大半の国で公用語として用いられている。

が、一部の国や地域では共通語以外の言語も発達を見せており、共通語とは別に公用語として定められている場合もある。

書かれている文字は理解できないであろうが、左右にいる二人の会話につられて、貴久はついアリスが持つ手紙へと視線を向けてしまった。

「え……？　日本……語……」

目に映った文字を目にして、貴久が戸惑いの声を漏らす。

てっきりシュトラール地方の言葉で手紙が書かれているかと思ったが、そこに書かれている文字は確かに日本語だった。

この世界に来てからは読んだり書いたりすることはなかったが、貴久にとってはよく見慣れた文字である。

「あれ？　タカヒサ様、この字が読めるんですか？」

「え……、あ、いや、うん……」

貴久が戸惑い顔で頷き返す。

（何でハルトさんが日本語で手紙を書いているんだ？　亜紀達から簡単に習ったとは言っていたけど、たった数ヶ月でこれほどの文章を……）

その手紙にはパッと見で、日本語を数か月くらい軽く学んだ程度では到底書くことができそうにない文章が並んでいる。

ちなみに、文法的にはシュトラール地方の言語と共通点の多い日本語であるが、語彙の複雑さや文字の多さから、習得難易度は間違いなく日本語の方が高い。

無意識のうちに目に入ってしまった一文から察するに、アリスが手にしている手紙は亜紀に向けて書かれたものらしい。

正直、気ならないと言えば嘘になる。

つい誘惑に駆られて視線が文章を追ってしまいそうになるが、

（だ、駄目だ！　読んじゃいけない！）

大きく頭（かぶり）を振って、貴久は手紙から視線を外そうとした。

貴久のモラル意識が反対動機を形成したのだ。

犯罪にはならないだろうが、他人のプライバシーを侵害するなんて駄目だ――と、そう思って。

だが、久々に目にした日本語の文章があまりにも意外だったのか、貴久は無意識のうちに視線を動かしてしまった。

伊達に貴久も地元で有数の進学校に進学したわけではなく、手紙に書かれた文の意味を瞬時に読み取ってしまう。

そうして、つまみ食いするように視界に映った文章が、貴久の心を大きく揺さぶってしまった。

「え……？」

貴久の顔が凍りついたように表情を失う。
偶然に視界に入れてしまったのはほんのわずか。
だが、驚愕で思考が鈍るほどに、読み取ってしまった文の内容は衝撃的だった。

「亜紀の……兄？　前世？」

呆然とした眼差しで手紙を見下ろしながら、貴久がぽつりとつぶやく。
手紙にはハルトこと天川春人なる人物が、亜紀の兄だったと書かれている。
それだけなのだが、貴久にはまるでわからなかった。
何かの読み間違いではないかと、じっと手紙を凝視（ぎょうし）してしまう。
けど、そこに書かれていた文章は貴久が理解した通りのもので――。

「……ちょっと貸してくれるかな？」
「へ……？　あ、はい」

貴久に言われるがまま、アリスは呆気にとられた様子で手紙を渡してしまった。
ごくりと唾を呑んで、貴久が手紙を読み始める。
何故この世界の人間であるハルトが亜紀の兄なのか。
意味がわからない。
心拍数が増加し、脳内でアドレナリンが分泌されていく。
それが劇薬（げきやく）となって、他人の手紙を盗み見るという罪悪感すら薄めてしまう。
貴久は無言のまま、食い入るように手紙を読みこんでいた。
アリスは呆気にとられた様子で貴久を見つめており、キアラは貴久があまりにも堂々と手紙を読んでいたせいか気づくのが遅れてし

まう。

「え？　あ、タ、タカヒサ様！　何をなさっているんですか？」

ようやく気づいたところで尋ねたが、貴久はせわしなく視線を動かしていた。

時には驚きで目を見開き、一度ですべての事実を受け止めきれないのか、その意味を咀嚼（そしゃく）するように何度も何度も読み返している。

「タカヒサ様、いけません。おやめください」

キアラが顔を青白くして注意する。

だが、もう手遅れだった。

貴久は既に手紙に書かれた内容を理解し終えている。

今は少しずつ手紙に書かれた内容を受け入れ始めているのか、顔がだんだんとこわばり始めていた。

「なん、だよ……これ」

そうつぶやいてから、貴久がキアラの足元にそっと置かれていた手紙に視線を移す。

それは美春宛ての手紙だった。

貴久がしゃがんでスッと手を伸ばす。

気がつけば、身体が動いていた。

好奇心という名の誘惑に突き動かされて。

「あ、だ、駄目です！　タカヒサ様！」

貴久の手を阻止しようとキアラも咄嗟に屈（かが）んだが、果たして一瞬の差で手紙を掴みとったのは貴久であった。

「き、貴族が封をした手紙を宛先人以外の者が勝手に開封することは犯罪なんですよ？　ましてや中の手紙を読むなどと……」

立場上、勇者である貴久に逆らうことはできないが、キアラがきっぱりと正論で説き伏せようとする。

だが、既に手紙を読むことに集中しており、貴久は聞く耳を持たない。

力強く手紙を握りしめているため、無理に取り返そうとすることもできなかった。

「か、返してください！　本当に犯罪になっちゃうんですよ！」

周囲に視線を配りながら、キアラがあたふたと声を潜めて告げる。

「先輩、手遅れですよ。最初の一通はもう読んじゃっているんだし」

事態の深刻さを理解していないのか、アリスの呑気な声が虚(むな)しく響いた。

キアラは青ざめた表情で、引きつった笑みを浮かべて、

「もう、知りませんよ。どうなっても……」

と、そう、つぶやいたのだった。

☆★☆★☆★

綾瀬美春さんへ。

昨晩は誠に身勝手で中途半端な告白をしてしまい、いたずらに美

春さんを混乱させる結果になってしまったと、深く反省しております。
本当に申し訳ありませんでした。

勝手ついでで大変恐縮なのですが、これから昨晩伝えきれなかったことを伝えさせてください。
ただ、おそらくですが、これから書く文面にはあまり面白くない話が含まれているはずです。
本当は伝えるべき事柄ではないのかもしれません。
伝えることで美春さんを困惑させてしまうだろうから。
けど、それでも、伝えたい、伝えなければならない。
だから、俺の自己満足にすぎないのかもしれないけれど、この手紙を書こうと決意しました。

でも、もし途中で読むべきではないと判断したのなら、最後まで読む必要はありません。
本当に自分勝手な話ですが、その時は、この手紙のことも、俺のことも忘れて、貴久さん達と一緒に暮らすなり、地球に帰る方法を探してください。
できる限り協力をするつもりですが、今後は俺に関わらないでほしいのならば、意図的に美春さんに近づくことはしないと約束します。

それでは、前置きが長くなってしまいましたが、これから順を追って書いていきます。

まず、既に薄々とお気づきかもしれませんが、俺は前世で美春さんと会ったことがあります。
前世の俺の名前は天川春人、貴方の幼馴染でした。
幼い頃に俺が呼んでいたみーちゃんというあだ名を言えば信じて

もらえるでしょうか？
美春さんは俺のことをはるくんと呼んでくれていたと記憶しています。

俺が天川春人として美春さんと一緒にいたことがある期間は人生で二度ありました。
まず、小学校に入学したくらいまでの七年間、そして高校に入学した直後の本当に極僅かな時間です。
もっとも、高校の頃は俺が一方的に美春さんのことを見かけただけなんですが。

覚えているでしょうか？
俺の隣には美春さんがいて、美春さんの隣には俺がいる。そんな当たり前の日々が続いていたことを。
だからなのか、俺は美春さんのことが大好きでした。どうしようもなく、馬鹿みたいに、貴方のことが好きでした。
でも、そんな日々が続いたのは小学校に入学した直後までだった。
俺は引っ越しをして、美春さんとは離れ離れになってしまって、以降は連絡がとれなくなってしまって。

美春さんにとっては九年前のことでしょうか。
俺達は別れ際にある約束を交わしたはずです。
子どもの頃にした約束なんて、普通は成長するうちにどうでもよくなって忘れたり、諦めてしまうものなのかもしれません。
ましてやそれを叶えようなんて、愚かなのかもしれないし、異常なのかもしれない。

でも、美春さんとの約束は天川春人にとって拠りどころでした。
貴方のことが好きだったから。
美春さんの笑顔がもう一度見たかったから。

美春さんとの思い出は俺にとってかけがえのない宝物だったから。

当時の俺はまだ小学生で、具体的に何をどうすれば美春さんとまた会えるかなんて、遠い将来のことなんて、まったくわからなかった。

けど、頑張れば会えると思ったんです。

そして、何でもいいから頑張らないと、美春さんの存在がさらに遠くなってしまうような気がした。

だから、俺は美春さんとの再会を願って、ただその一心で馬鹿みたいに色んなことに取り組みました。

そうやって成長して、少しは頑張った苦労が報われたのか、俺は美春さんと一緒に暮らしていた街にある高校に進学することができました。

美春さんも進学した高校です。

そこで偶然に美春さんが同じ高校に進学したと知って、貴方の姿を見つけて、身体が震えてしまったことを今でも覚えています。

けど、美春さんの隣で知らない少年が親しそうにしていて、とても情けないことに、天川春人だった俺は怖くなって逃げ出してしまった。

もしかしたら美春さんは俺のことなんてとっくに忘れているんじゃないだろうかって。

そうして俺が逃げている間に、美春さんは急に消えていなくなってしまいました。今だからわかることですが、この世界に転移したのでしょう。

美春さんが失踪して以来、俺はずっと後悔したままでいました。

貴方に自分の気持ちを伝えなかったことを。

そうやって悔いながら生きて、死んで、この世界に生まれ変わりました。

だから、ひどく驚いたけど、本当に嬉しかったです。
とても過酷なこの世界で貴方に出会えたことが。
もう二度と美春さんに会うことはないだろうと思っていたから。
歓喜しそうなくらいに嬉しかった。

なのに、俺はまた美春さんから逃げだしてしまった。
気持ちを伝えないで後悔するのは嫌だ。
そう思っていたはずなのに。
怖くなってしまった。

前世でも、今世でも、俺は臆病で、無気力で、そのくせ自分勝手で、意地汚くて醜(みにく)い人間です。
時を重ねて、想いを重ねて、追い求めてきた淡い夢が砕け散って、それでも未練がましく砕けた夢や希望にすがって生きてきた。
そのくせ希望が消えてしまうことが怖くて、迷って、勇気を出せなくて、ウジウジと悩んでばかりいる。

俺は、天川春人は既に死んだ人間です。
何が起きているのかは俺自身にも理解できていませんが、天川春人という人間は美春さんが日本で失踪した四年後に交通事故で死んだ。
そして、死んだはずの天川春人はこの世界でリオという名の孤児に生まれ変わった。
だから、今は事情があってハルトと名乗っていますが、この手紙を書いている俺は天川春人ではありません。
肉体は別物だし、天川春人を構成していた記憶や人格も、混ざりものとして存在しているだけで。

この世界に生まれ変わった時、俺は不思議なくらいに自分がリオであるという事実を受け入れていました。
もちろん自分が天川春人だったという自覚もありますが、やはり今の俺が天川春人だとは思えない。
いくら記憶や人格は残っていても、記憶を取り戻してからの九年間で、天川春人という人間はまったくの別人に変わってしまったから。

今の俺は傷害とか、殺人とか、手を振るうことで相手の身体や生命を脅かすことがわかっていても、必要だから、たったそれだけの理由があれば、ためらいなく手を動かせてしまうようになってしまいました。
考えることはリスクとリターンだけで、それらを秤にかけるだけで、倫理的な抵抗は度外視して物事を考える時があります。
実際、そうして人を傷つけたり殺したりしたことがあるし、他にも日本人なら倫理的に忌避感を抱くであろう行為を行ったこともあります。
復讐したいと思っている男もいます。
おそらくその人物に会えば、俺は必要がなくとも相手を殺そうとするでしょう。
その男のことが殺したいくらいに憎いから。
そんな自分が醜(みにく)くて、どこか壊れているとわかっていても、変わろうとはまったく思えない。
もう後戻りはできないし、俺自身がそんな自分を既に受け入れてしまっているから。

だから、最後に見た時から何も変わっていなかった美春さんにこの世界で出会えた時、俺はどうしようもなく怖くなってしまいました。

前世の俺は本当に天川春人だったんだろうか。
その人格と記憶は誰かに与えられた偽物なんじゃないか。
仮に俺の前世が天川春人だったとしても、今の自分は前世の自分とは別人なんじゃないのか。
変わり果てた俺が貴方のことを好きでいる資格があるのか。
死んだ人間が生きている人間のことを好きでいてもいいのか。

要は自分という存在がよくわからなくなったんです。
美春さんのことを好きだと思う気持ちは確かにある。
でも、天川春人だった頃の俺はほとんど何も残っていないから。
貴方への想い以外は、何もかも天川春人ではなくなっているから。
肝心なその想いですら混ざりモノなんじゃないのかと、心のどこかで疑ってしまったから。
怖くて仕方がなかった。
事実を打ち明けることで、貴方に拒絶されてしまうんじゃないかと。
美春さんが俺という人間を知れば嫌われるんじゃないかと。
そうやって恐れて、怯えて、流されるまま自分の気持ちも前世のことも隠して、俺は美春さん達と生活を送ることを選んでしまった。

伝えたい、伝えなければ何も変わらない。それはわかっていました。そうしないと貴方がいつかまた俺の傍からいなくなってしまうことも。
でも、仮初めの生活だとわかっていても、それが不謹慎だとわかっていても、俺は美春さん達との生活が幸せだった。
想いを伝えたら、ようやく掴めた仮初めの幸せすら、すべて嘘みたいに消えてしまいそうで、すごく怖かった。

結局、美春さんに自分の気持ちを伝えるのはこんなギリギリにな

ってしまったけど、同じ過ちだけは二度もしたくありませんでした。
貴方は地球に帰りたいと思っているかもしれない。
他に好きな人がいるかもしれない。
それでも、自分勝手でも、美春さんがまた俺の前から消えて、気持ちを伝えないで後悔することだけは、最初から諦めてしまうことだけは嫌だから。
絶対に後悔することだけはもうわかっているから。
また気持ちを伝えられずに美春さんがいなくなって後悔するなんて、もう一度あの気持ちを味わうなんて、絶対に嫌だった。
それは美春さんに嫌われることよりもずっと怖いことだと思ったんです。

だから、告白するなら、真っ先に美春さんに好きだという気持ちを伝えたかった。
気持ちを伝えずに後悔しないよう、まずは美春さんに好きだと伝えたかった。

それに、貴方と一緒に過ごした時間は短かったけれど、気づくこともできたんです。
俺の気持ちが誰のものなのかは関係ない。
天川春人だとか、リオだとか、そんなことは関係なく、俺は美春さんのことが好きなんだと。
そんな簡単なことに気づくのに随分と時間がかかってしまったけれど。
美春さんのおかげで、気づくことができました。
なので、あらためて言わせてください。
俺は美春さんが好きです。

かつての約束はもう果たせなくなってしまったけれど、これから先も俺と一緒にいてくれないでしょうか？

神聖暦千年、春の月、某日。

リオ／天

川春人

追伸　次に会えた時、美春さんに誕生日プレゼントを渡させてください。

第１１１話　黒の騎士、その名は

手紙に書かれたすべての文章を読み終えた時、貴久は呆然と立ちすくんでいた。
頭の中が真っ白になりかけていて、口の中に苦いものが広がるのを感じる。

「なん、だよ。これ……」

貴久の顔が凍りついたように固まり、絞り出すように震える声が上がる。
何が何なのかまるでわけがわからなかった。
揺らぐ心を抑えることができない。
もう何年も一緒にいるのに、知らなかったのだ。
美春に自分以外の幼馴染がいたことも。
亜紀に自分以外の兄がいたことも。
そんな過去を抱えている素振りなんて、美春も亜紀もまったく見せていなかったから。
この世界に来るまで。
失うことなど、考えたこともなく。
与えられたもののことを何も知らず、何の疑問も抱かず。
誰かに守られて。
幸せだけを享受（きょうじゅ）して日々を過ごしてきた貴久には――。

「あ、あのタカヒサ様？」

尋常でない様子の貴久を心配して、キアラが声をかける。
が、彼女の声が貴久に届くことはない。

（彼は美春の幼馴染で、美春が好きで、亜紀の兄だった？）

貴久が虚ろな目で思考する。

かつて天川春人であったリオが美春に告白したという。

もしかしたら美春の好きな人物とは天川春人のことなのではないか。

だから美春は無意識のうちにリオに天川春人の面影を感じているのではないか。

貴久はふと、本来自分がいるべき立ち位置に、リオがいる姿を想像した。

美春がいて、亜紀がいて、雅人がいて――。

「っ……！」

ひどく不快な拒絶感に襲われた。

事実を事実としてイメージしようとすることができない。

したくもない。

リオが、ハルトが、あんな人間が美春達のすぐ傍にいるなんて――。

「卑怯……そう、卑怯だ。卑怯じゃないか。彼のしていることは……」

貴久がおもむろに独りごちり始める。

「彼は嘘を吐いていた。美春と亜紀を騙していた」

恩で美春を縛ろうとしている――、同情で美春を引き止めようとしている――、表向きは『美春達の意志を尊重する』なんて耳触り

の言葉を口にしておいて、その実は美春の意志を誘導しようとしていた。
そう、リオは美春達を騙し続けてきたのだ。
美春達を裏切っていた。
なんて自分勝手な人間なんだろうか。

「必要だからって人を傷つける？　人を殺す？　ありえないだろ。そんなの！」

次第に感情が高まり、貴久が唾棄（だき）するように吐き捨てた。
必要だからといって人を殺せるような神経がまったく理解できない。
仮にも日本人だったというのなら、普通は必要があるからといってそう簡単に人を殺すことなんてできないだろう。
日本では正当防衛だって人を殺せば社会的に後ろ指を指されることもあるのだ。
生きるために必要ならば人を殺せるだなんて、そんな簡単に割り切ることは絶対に間違っている。
そんな人間に共感はできないし、美春達が言う良い人という評価にも違和感がある。
ましてやそんな人間が美春達のすぐ傍にいると思うと不安で仕方がない。
そうして強い軽蔑（けいべつ）の念が、貴久の中で渦巻いていった。
沸き立つ感情を抑えきれない。
混乱して、興奮して、頭がくらくらする。
まるで天地がひっくり返ってしまったようだ。
だが、それでも、はっきりと認識できる想いがあった。

「美春が人殺しなんかと一緒にいるなんて、許されるはずがない」

ぼそりと貴久はつぶやいたのだった。

☆★☆★☆★

貴久が苦虫を噛み潰したような顔で廊下に立ち尽くしていると、声をかける人物が現れた。

「タカヒサ様、どうかなさったのですか？　このような場所で三人そろって……」

侍女のフリルを引きつれたリリアーナだった。

フランソワとの面談を終えて、部屋へと戻るために廊下を歩いていると、貴久の姿を目撃し近寄ったのだ。

「ああ、リリィ……。もう終わったんだ」

リリアーナの存在に気づきはしたものの、貴久の反応は鈍い。

心ここにあらずといった感じだ。

「ええ、後は正式に同盟締結の調印を済ませるだけでしたから……。キアラ、何かあったのですか？」

貴久に語りながら、リリアーナがキアラを見やり、状況を確認するべく尋ねる。

「も、申し訳ございませんでした！　リリアーナ様。実は――」

キアラが青ざめた顔で謝罪すると、リリアーナに事情を説明し始めた。

主観的な評価は捨象（しゃしょう）し、客観的な事実の経過に絞って報告を行っ

ていく。
そうしてキアラが説明を終えると、リリアーナは悩ましげに嘆息(たんそく)した。
「手紙の修復を図ろうとした心意気は……まぁ、咎(とが)めはしません。ただ、結果論になりますが、杜撰(ずさん)な対応であったと言わざるをえませんね」
と、リリアーナが苦い顔つきで、キアラの非を責めるように言う。
「本当に申し訳ございませんでした！　まさか封蝋(ふうろう)を割ってしまうなどとは思わず、過失とはいえタカヒサ様が犯罪に該当しかねない行為をしたなどと知られれば、国際問題に発展しかねないと考え、混乱してしまって……。それにこのような事態に立ち会ったこともなく……」
手紙を開封した時点で中身を見られたという推定はどうしても働いてしまう。
ならば、くしゃくしゃになった手紙をそのまま返すよりは、あらかじめ可能な限り修復した方が謝意が伝わると、キアラは考えたのだ。
だが、後になって冷静になって考えてみると、実際に手紙を取り出したことは明らかに悪手だったと言わざるをえない。
「まだ騎士になって日の浅い貴方が経験不足であることは百も承知のことです」
王族であるリリアーナの近衛騎士は家柄よりも性別、武力、忠誠といった項目を重視して選ばれている。
女性の騎士はもともと数が非常に少なく、結婚してしまえば引退

してしまう者も多い。
そのため、年齢の若い者ばかりになってしまうことはやむを得ない人事でもあった。
とはいえ、性別が同じで年齢が近い方が何かと都合が良いというメリットもあるのだが。

「ですが、貴方が王女である私専属の近衛騎士であるという事実は変わりません。今回のように想定外の事態が起きたとしても、完璧な対応をすることが要求されるのです。こういうケースには落ち着いて対処しろと教わったはずでしょう？」

目上の人間が目の前で客観的に犯罪に該当しかねない行為を堂々と行い始めたら、動揺するのも無理はないことなのかもしれない。
何よりキアラは騎士で、武官であっても文官ではないので、今回のようなケースの対処は専門外と言えなくもないだろう。
だが、それでも王女の側近として仕えている以上は、常に完璧な仕事が要求されるのは当然のことだ。

「はい……」

キアラが消沈した様子で首を垂れる。
結果が伴っていない以上、「落ち着こうとはしていました」などと反論することなどできるはずもなかった。
口でなら何とでも言えるのだから。

「規則を重んじる真面目な性格は貴方の長所ですが、短所でもあります。マニュアル外の事態が起きると途端に融通が利かなくなる傾向が見られますよ？」

そういう人間は概して他人が自分と同じ価値観を共有して決まっ

た通りに動くものだと錯覚していることが多い。

「はい……」

「まぁ、本来ならば真っ先に事態を報告すべき私が不在であったが故の行動でもあったのでしょうが……、反省点は今は捨て置きましょう。それよりも――」

言って、リリアーナが貴久に視線を移す。

キアラが叱責されている姿を見て少しは冷静になっていたのか、貴久は顔をしかめながら、バツが悪そうにしていた。

「タカヒサ様」

凛と良く通る声で名前を呼ばれると、貴久の身体がびくりと震えた。

「今の話はお聞きになりましたか？」

「……うん。ごめん。でもキアラは悪くないんだ」

貴久が申し訳なさそうに頷き、告げる。

「いえ、今回の事態はキアラの責任でもあります」

リリアーナがきっぱりと頭（かぶり）を振った。

「悪いのは俺だよ。キアラを叱るなんて理不尽だ」

自分のせいでキアラが怒られるなんて嫌だ。

そう思って、貴久が反論する。

「キアラには私の不在時にはタカヒサ様の補佐を命じていました。いくら勇者とはいえタカヒサ様も私達のようにミスはすることでしょう。それを補うために私達は存在しているのです」

いつもならば無条件で貴久の意見を尊重するリリアーナであったが、今回はにべもなく貴久の主張を否定した。

「……でも、それでも俺が悪い。キアラは悪くないよ！」

貴久がムッとした表情で言う。

「タカヒサ様……」

リリアーナが困ったように嘆声を漏らす。

今まで彼女は可能な限り貴久の意志を尊重し続けてきた。

まだ大人になりきれていない子供ゆえに人生経験が不足していることも関係しているのだろうが、熱くなると考えるよりも先に感情が言動に現れてしまうのは貴久の悪い性質だ。

本人もそれを薄々と自覚しているようだが、それでこれまでの短い人生で取り返しのつかない致命的な失敗したこともなかった。

ゆえに貴久はそんな己の気質を直そうとは思っていなかったようである。

リリアーナもそんな貴久の一面を好ましいものとしても捉えていた。

だから、早急に矯正しようとは考えていなかったし、王女として与えられた役割上、貴久を引き込むために彼にとって都合の良い存在を演じてきた面がある。

だが、今回ばかりはこれまでと同じようにはいかない。

勇者だから何をしてもいいなどと、貴久をそんな傲慢な人間にさせるつもりはリリアーナにはないのだから。

勇者を国に引き込むことを重視するあまり、傲慢（ごうまん）になってもらっては、最終的に国のためにはならないのだ。
何よりリリアーナも必要な場合を除いて権力ですべてを解決するという力技をあまり好んでいない。
それに、今回は力技で解決するのが悪手だと考えてもいる。
ここがセントステラであれば色々と融通も効くのであろう。
しかし、被害者であるリオはガルアーク王国の貴族であるし、ガルアーク王国内ではリリアーナも自由に権力を振るうことはできないのだから。

「親告罪ではありますが、貴族の書いた手紙の封を故意に破くことは犯罪です。それをご理解なさっていましたか？」

落ち着いた声で、リリアーナが尋ねた。
貴族が書いた手紙の中には重要な機密事項が書かれていることが多いため、故意によって手紙の封が破かれた時点で機密が侵害されたものと擬制され、処罰の対象とされている。
害された秘密の程度が著しい場合には死罪に値するほどの重罪となってしまうし、そうでなくてもプライバシーを侵害するという側面があるから道徳的に褒められた行いでもない。
なお、開封された手紙の内容を勝手に他者に伝えたりした場合は開封行為とは別に処罰の対象になっていたりする。

「え……？」

予想外の言葉に、貴久が動揺したように目を丸くする。
確かに他人の手紙を勝手に開けることはいけないことだ。
でも、それが犯罪になるなんて――。
封を破いてしまったのは不可抗力で、手紙の文章が目に入ってしまったのも不可抗力。

確かに、そこから手紙の内容を読み込んでしまったのは過失かもしれないけれど――。
などと、貴久が反射的にそんな自己弁護を内心で行いかける。
だが、すぐに気づく。
――だ、駄目です。貴族が封をした手紙を宛先人以外の者が勝手に開封することは犯罪なんですよ？
亜紀の手紙を読んだ時はともかく、美春の手紙を読む時、ひどく動揺したキアラから明確に犯罪になると諫言(かんげん)されていたことを。
「……あ」
「どうやらご理解なさっていたようですね」
言って、リリアーナが深く息を吐く。
「いや、でも……。わざと破ったわけじゃないし」
納得がいかない様子で、貴久が表情を曇らせる。
今回の事態はあくまで過失によるものだと、強く思っているのだ。
だから、貴久には罪を犯していたという意識がなかった。
「確かに処罰されるのは故意による開封行為となります。今回のような過失による開封行為を処罰することはできないでしょう。ですが、タカヒサ様は開封後に修復の意図を越えて手紙を読まれてしまいましたね？」
「っ、それは……」
おっとりとした普段の調子とは異なるリリアーナの声色に、貴久が臆(おく)した様子を見せる。

「タカヒサ様が手紙を読んだ事実が明らかになれば、開封行為自体が故意であったと推定が働き処罰の対象となることでしょう。このままハルト様が訴え出れば、裁判が行われることになります。それを防ぐためにはハルト様から許しをもらう他にありません」

味方になってくれるはずのリリアーナから突き放すように言われ、貴久は思わず息を呑んだ。

「裁判って、そんな大げさな……」

「大げさかどうかは手紙の内容次第と被害者の意志次第ですが……、タカヒサ様は勇者であらせられますので、仮にハルト様が訴え出たとしても、政治的な事情が働き責任を問うことはできないでしょうね」

勇者に国の裁判権は及ぶのか。

根本的にはこの問題が争点となるのであろうが、これすらも政治的な事情で判断が回避され、最終的に貴久が刑事責任を追及されることはないはずだ。

他に問題が生じるわけでもなくめでたしめでたし、とここがセントステラ王国内であればそうなったのであろうが、ガルアーク王国内での出来事になるとそうは問屋(とんや)が卸(おろ)さない。

仮に裁判が起きれば、おそらくガルアーク王国に対して借りを作ることになってしまうことは容易に想像がつく。

そうならないためにも、正式にリオに謝罪を行い、告訴しないように頼む必要があるだろう。

「で、でも、そ、そんな危険な代物なら、貴族の手紙なんて誰も預からないんじゃ……。今回みたいに過失で開封したら厄介だし」

貴久が釈然(しゃくぜん)としない様子で口を開いた。
開封すればどうなるか、何の説明もなしに手紙を預けるなんて、なんて不親切なんだろう。
そもそも美春のことは俺だって好きなのに、恋敵にあんな内容の手紙を預けるなんて無神経すぎる。
自分の手で手紙を渡せば良いのに、どうして俺に預けたのか。
そもそも美春はリオの下に残ろうとしていたのだし、美春はリオのことが好きなのだ。
焦って渡さずとも自分で手紙を渡すことはできた。
なのに急ぐように手紙を渡そうとした理由がまるでわからない。
と、先の手紙の内容を思い出して眉をひそめながら、貴久が今回の一件とは別に逆恨みに近い感情をリオに抱く。

「今すぐにハルト様のもとへ謝りに参りましょう。私も一緒に頭を下げますから」

リリアーナが優しい声で提案した。
まるで悪いことをしでかした子供の反省を促すように。

「いや……」

貴久が露骨に心理的な抵抗を露わにした。
リリアーナがスッと目を細くする。

「では、どうなさるというのですか？」
「それは……」

貴久が返事に詰まる。
リオに謝罪すれば美春達にもこの手紙の内容が伝わることだろう。
もしこの手紙を美春に渡してしまったとしたら？

その先を想像して――。
駄目だ。
と、貴久が強い拒否感を覚える。
許してはいけない。
許されるはずがない。
だって、リオは嘘つきで、人殺しなのだ。
リオは美春達のことを助けて、生きる術すら持たない美春達を保護し続けてくれた。
美春達もリオには強い感謝の念を抱いている。
だから、貴久もリオに一緒に来てくれないかと誘いもした。
そうすれば美春も来てくれるだろうから。
美春とリオの距離が接近していることは薄々と感づいてはいたけれど、嫉妬してはいけないと感情を抑えようとしてきた。
なのにリオは裏切っていた。
歪んだ復讐心に捕らわれた人殺しだった。
そんな危険な男が美春と一緒にいたいなどと、虫のいい話が通るはずがない。
人を殺したことのある汚れた手で、美春を幸せにできるはずが、美春と一緒にいる資格があるはずがないのだ。
美春を近づけるわけにはいかない。

「まさか事実を隠せと？」

僅かに顔をしかめ、リリアーナが訊(き)いた。

「彼は……危険だ」

貴久が渋面(じゅうめん)で答える。
リリアーナはその返答の真意を計りかねたが、貴久が言外に問いを肯定していることだけはわかった。

「仮に私がタカヒサ様に協力して事実を隠そうとしたところで、いつか必ず綻びが出るはずです。そのようなこと、私が申し上げるまでもなくおわかりでしょう？」

事実を隠すとなれば美春達がリオと接触する前に国に連れ帰るしかない。

だが、それはこの場限りの時間稼ぎにしかならないだろう。

無理に連れて帰ろうとすれば美春達が抵抗して騒ぎになるかもしれないし、上手く騙して連れて帰れたとしてもいつかは騙されていたことに気づく可能性が高い。

それに、リオが貴久に手紙を渡したことはシャルロットが目撃していたし、沙月もリオが手紙を渡そうとしていたことは知っている。

後日、沙月が美春達と会えば隠蔽（いんぺい）した事実を知りかねないし、同盟国になったばかりのガルアーク王国との関係すら悪化しかねない。

「それでも……。きっとその方が美春達のためになる」

貴久が僅かに自信なさげにつぶやいた。

「彼は誠実さを持って私達に、いえ、タカヒサ様がミハルさん達と会うことをお許しくださいました。なのに貴方は犯した罪を隠蔽するという不誠実極まりない仕打ちをもって彼に応えるというのですか？」

リリアーナが問いかける。

リオは貴久のことを亜紀や雅人の兄として信頼してくれたのに、貴久は罪を犯してまでその信頼を裏切ってしまった。

悪いのは貴久を信頼して手紙を手渡したリオか、リオの信頼を裏切って勝手に手紙を読んだ貴久か。

どちらなのか、と。

「リ、リリィ……。それは違う」

リリアーナの真摯な訴えが、貴久の胸に深く突き刺さる。

彼女だけは自分の味方でいてくれると、貴久は心のどこかで当たり前のように思っていたのだ。

なのにどうしてわかってくれない？

いや、リリアーナは知らないだけだ。

リオが美春達を騙してきたということを――。

「ち、違う、違うんだ……。彼をみんなと、美春と会わせちゃいけないんだ」

何とか事情を説明しようと、貴久が必死に訴えかけようとする。

だが、リリアーナは悲しそうに瞳を揺らすと、

「タカヒサ様、私達はハルト様に約束したはずです。ミハルさん達の意志を尊重すると。それすらも裏切られるのですか？」

貴久の顔を深く覗きこみ問うた。

「違う。意志が、その意志が……誘導されているのが問題なんだ！美春達は騙されている！」

「意志が……誘導されている？」

穏やかならざる貴久の物言いに、リリアーナの反応も僅かに変わる。

もちろん貴久の言い分を聴かなければ詳しい事情を判断できない。

だが、突っ込みすぎれば手紙のプライバシーを侵してしまうこと

になりかねない。
普段は凛と咲いた花のようなにこやかな笑みを覗かせているリリアーナであったが、この時ばかりは逡巡するような表情を覗のぞかせていた。

「……彼がみんなと一緒にいることで不幸になるかもしれない」

貴久が内容をぼかすようにして告げた。
天川春人は過去に死んだ人間だ。
でも、綾瀬美春は今を生きている。
なのに、死んだ人間が生きている人間のことを好きになるなんて、許されるはずがないだろう。
幸せになれるはずがない。
死はそんなに軽いものじゃないはずだ。
リオにはその意識が欠けている。
美春だって春人が死んだことを知れば悲しむだろうし、あえて春人の過去を伝えるなんて、そんなの春人の、いやリオの自己満足にすぎないだろう。
貴久が己の中でそう理屈づける。

「間違っている。そう、間違っているんだ。彼のしていることは間違っている……」
「その手紙にそれだけの秘密が書かれていたのですか？　知ればミハルさん達が不幸になると？」
「うん……」

貴久が首肯した。

「そうですか……」

その文章を、その手紙をどのような意図で書いたのか、それは書いた本人しか知らないことだ。
どのような受け取り方をするのかは読み手次第――。
今回、手紙に書かれた事実に主観的な評価を与えて結論を出しているのは貴久である。
だから、本当は貴久が言うような危険なんてないのかもしれない。
リリアーナはそう思った。
とはいえ、もしかしたら本当に貴久の言う通りの危険がある可能性だってある。
下手をすると美春達の生命、身体、精神に害が及ぶ危険性が――。
しかし、それはリリアーナ自身も手紙を読まなければ判断できないことだ。

「ではハルト様の下へ参り、謝罪をしたうえで、その真意を訊いてみましょう。タカヒサ様の仰る害意がハルト様にあるのか」

謝罪は必須、そのうえで真相を詳らかにするのはリオがいる場所だ。
この場で部外者が勝手に詮索するべき事柄ではない。
仮に貴久が間違っていれば事態は悪化するだけなのだから。
リリアーナはそう判断した。

「だ、駄目だ！　それは駄目だ！」

貴久が色を失い叫ぶ。
そんなことをすれば美春が――。

「どうかなさいましたか？」

傍を巡回していた騎士が歩み寄って来て、尋ねてきた。

先ほどから声を荒げて廊下で喋っているため、他国の王族と勇者とはいえ不審に思ったのだろう。

「いえ、なんでもございません。どうぞ警備に戻ってくださいませ」

「……承知しました。現在、城内は物々しくなっておりますゆえ、不審な行動はお控えください」

「ええ。わかっております」

リリアーナが笑みを浮かべて言うと、騎士は深く突っ込むことはせずにその場を立ち去った。

「タカヒサ様、あまり大きな声はお出しにならないでください。今、お城の警備は準戦闘態勢で敷かれており、兵士達は皆殺気立っています。それにアキちゃんに気づかれますよ？」

「ご、ごめん。でも駄目なんだ。彼を美春に近づけちゃいけない」

「つまり……ハルト様に事実を伝え、謝罪されるおつもりはないと？」

「……ごめん」

貴久が後ろめたそうに視線をそらした。

「謝罪すべき相手は私ではありません」

リリアーナが嘆息しながら告げる。

「俺は、俺は……」

貴久が何かを言おうとするものの、すらすらと言葉が出てこない。何から、いや何を喋ればいいというのだ。

「彼が美春達を――」

それでも貴久が説明しようとすると、

「お待ちください。今それを私が知るわけにはいきません。当事者の許可があるまでその手紙の内容は差出人と宛先人だけのものです。無闇に口外すれば今度こそ犯罪になってしまいますよ？」

リリアーナがストップをかけた。

貴久が面食らう。

「先にハルト様に手紙を渡せないのなら、今からミハルさん達に手紙を渡しませんか？　その上で彼女達に判断してもらうべきとも思うのですが……」

手紙が及ぼす影響に関する貴久の主張には、彼の主観による評価が多分に含まれているはずだ。

貴久が評価した結論と美春達が評価して出す結論が必ずしも一致するとは限らない。

リリアーナはあくまでも冷静にそう考えていた。

だが、

「だからそれが駄目なんだ！」

と、貴久が悲痛な面持ちを浮かべて声を荒げた。

「タカヒサ様。ハルト様に謝りたくもない。ミハルさん達に手紙も渡したくない。そんな都合の良い真似ができるとお思いですか？ハルト様から手紙を預かったのでしょう？」

「でも、そうしないと……」

美春が善人の皮を被った人殺しのもとへ行ってしまう。
貴久がそう言いかけたが、リリアーナに止められて、それを口にすることはできない。
どうしてわかってくれないんだ？
いつもなら俺の言うことを何でも信じてくれたのに、なぜ？
貴久の顔が今にも泣き出しそうに歪む。
彼の脳裏を支配するのは美春を奪われるという恐怖とリオへの軽蔑だけだった。

「タカヒサ様、貴方はミハルさん達のことを大切に思っているのでしょう？　ならば信じてさしあげませんか？　ミハルさん達のことを。そしてミハルさん達が信じているハルト様のことも。私は信じております」

リリアーナがやわらかく語りかける。

「どうしてそんな簡単に大して知らない他人のことを信じられるのさ？」

貴久が疑心的な表情で尋ねた。

「ミハルさん達がハルト様を信頼しているからです。タカヒサ様はミハルさん達を信頼されているのでしょう。大事な人が信頼している人の事ならば、私はできる限り信じたいと思っておりますから。タカヒサ様もそのようにしていらっしゃると思っていたのですが……」

確かにこの手紙を読むまではリオのことを信じようと思っていた。
だが、今は――。

「それは……」

後ろめたそうに逸らしていた視線をリリアーナに向けると、貴久が唖然と言葉を呑んだ。

目の前にいる彼女はいつものように優しく微笑んでいる。

しかし、今のリリアーナから感じられる雰囲気はいつもとはまるで異なるように思えた。

貴久のよく知る無邪気で和やかな優しいリリアーナではない。

今の彼女は人の上に立って導く指導者としての顔をしていた。

「私はタカヒサ様を信頼しております。この三ヶ月間、伊達(だて)に貴方の側にいたわけではありません。王族として多くの人間と接してきた私だからこそわかるのです。貴方は未熟な面もあるけれど、決して悪い人ではないと」

「リリィ……」

たった三ヶ月で俺の何がわかるんだと、貴久は言わなかった。

「ミハルさん達が信頼しているタカヒサ様だからこそ、ハルト様はタカヒサ様に手紙を託したのではないですか？」

「そんなこと……」

貴久が辛そうに表情を歪める。

「おそらくハルト様は私のことを完全に信用しきってはおりません。ですが、アキちゃんやマサト君の兄としてのタカヒサ様のことは信用されていると思いますよ。こうして再会を許してくれたことが何よりの証拠のはずです」

リリアーナが柔らかく微笑んだ。
美春達が望んだから、沙月も望んでいたから、リオは彼女達と貴久を信じたのだろう。
そうでなければ、美春達のことも、貴久のことも信用していないのなら、自分の考えだけを信じて、リオは独自の判断で美春達を連れてガルアーク王国から立ち去っていたはずである。

「貴方は信じられませんか？　大事な人達が信頼している人のことを」
「……」

貴久が苦々しい表情で黙り込む。
本当に今の自分の考えは正しいのか？
心の内に微かな疑問が芽生え始めたが、苦悩を捨てきることができない。
嫉妬も合わさってリオに対する複雑な不信感を拭うことができないのだ。
人の心はそんなに都合良くできていない。
そんな貴久の戸惑いを察しているのか、

「謝りましょう。ハルト様に。信じましょう。皆さんのことを」

リリアーナがたたみかけるように言った。

「……駄目だ。……やっぱり駄目だ」

貴久が震えた声で告げる。

「タカヒサ様……」

リリアーナが顔を曇らせて、
「……ならば私はタカヒサ様の代わりにありのままの事実をハルト様にお伝えしに参らねばなりません。何も今回の出来事はタカヒサ様とキアラだけの責任ではありませんから、私も謝罪を行います。その後、ミハルさん達にも事実をお伝えせざるをえません」
と、そう宣言した。
「リリィ！」
最も待ち望んでいなかった言葉に、貴久がハッとして悲痛に叫ぶ。
すがるような目つきでリリアーナを見つめた。
何故そんなことを言うんだ、と言わんばかりに。
「タカヒサ様、どうか私にそのような真似はさせないでくださいませ。私はタカヒサ様の口からお伝えになってほしいのです」
リリアーナが真摯に訴えかける。
貴久は追い詰められたように顔を歪めた。
数秒ほど、二人が黙って見つめ合う。
「なら、なら……」
やがて貴久が焦燥した様子で口を動かし始めた。
次の瞬間、
「俺は勇者を止める！　止めて美春達を連れていく！」
貴久が怯えたように宣言した。

「なっ……」

貴久の衝撃の発言に、流石のリリアーナも驚愕して目を見開く。

黙って話を聞いていたキアラとアリスも呆気にとられている。

「我が国の勇者になってくださると、私に仰ってくれたではないですか。私と一緒に国を良くしてくれると……。あの誓いは、あの誓いすら嘘だったのですか？」

リリアーナが悲しそうに言う。

「嘘じゃない！　嘘になんかしたくないし、させないでほしい！　俺だってそんな真似はしたくないんだ。でもっ……！」

貴久が必死にわめいた。

「こうしなきゃ駄目なんだ。平気で人を殺すような男の側なんかに、美春達をいさせるわけにはいかない！」

貴久の発言に、リリアーナの表情にわずかに動揺の色が走る。

――平気で人を殺すとはいったいどういうことか？

リリアーナは貴久とジッと視線を交わして、しばし逡巡（しゅんじゅん）すると、

「直近の発言は聞かなかったことにしておきます。……が、ご自身の発言に実現可能性があるとお思いですか？　勇者を止めて、ミハルさん達を連れて生きていくと？」

と、そう尋ねた。

「やるさ。いや、やらないといけないんだ」

貴久が気負うように答える。

不安定で、危うい。

己の考えが絶対に正しいと信じきっているのか、耳を貸そうとするつもりはまったくないようだとリリアーナは判断した。

今の状態では多少時間をかけたところで説得できるかはわからないし、このままでは自棄(やけ)になって暴走しかねない。

「……現実はタカヒサ様がお考えになっているよりもはるかに過酷なことでしょう。仮にその選択肢を選べば、そう遠くないうちに後悔する時が必ずくるはずです」

「……やってみなければわからない」

「やらずともわかりきっていることです」

リリアーナがばさりと切り捨てる。

「そんなことはない。リリィも知っているだろう。勇者としての俺の力は。俺の力なら大切な人達を守ることはできる」

「単純な力だけでは守れないものもあるのです。私が言うのもなんですが、王侯貴族はそういった手管(てくだ)に長けていますから。自らの利益のためになるのなら、どこまでも非情になりきれる者も中にはいるのです」

「……これ以上はお互いに平行線だよ、リリィ。君が言うような事態に俺はさせないし、このまま美春達を彼に会わせるわけにもいかない。リリィが邪魔をするというなら、俺はこのまま亜紀を連れて美春達も一緒に連れて行く」

貴久が言外にこれ以上は話を続けるつもりはないと匂わせた。

いつ美春と雅人がこの場に戻ってくるかもわからない。

その目からは最悪、手荒な真似も辞さないという不穏な決意が感じられる。

「リリアーナ様……」

物々しい雰囲気を察して、キアラとアリスが一歩前に出た。

「おやめなさい」

リリアーナが二人を制止する。

「タカヒサ様、譲ってくださるおつもりはないのですか？」

「……ない。俺はみんなを守らないといけないから。みんなが安全に生きていけるように」

貴久が苦々しい顔つきで、静かに語った。

リリアーナが悩ましげに顔を歪め、

「それは……。タカヒサ様の……」

何かを言おうとして、中断した。

それを口にしてしまえばこれまで築いてきた貴久との関係が完全に決裂してしまうように思えたから。

リリアーナが小さく息を吸い、数秒の沈黙が降りて、

「いえ、そうですね。……わかりました。タカヒサ様の要求に従いましょう」

ぽつりと、言った。

その声は小さく震えている。

本当にそれでいいのか？
と、――そう自身に問いかけるように。

「リリィ……」

貴久がホッと安堵したように息を吐いた。

「ただし、いくつか条件があります。それを絶対に破らないと約束していただきます。今後似たようなことは繰り返させはしません。万が一そうなった場合やタカヒサ様が仰ったような事実が存在しない場合には、私は容赦なく罰を与えます。後になって決して後悔してはなりません。それを身命に賭して誓ってでも貴方はこの選択肢を選び取りますか？」

覚悟のほどを問うように、リリアーナが冷ややかに尋ねる。
一瞬、貴久はその迫力に押されかけたが、

「……選ぶ。美春達が安全に暮らしていけるのならば」

決然と誓いの言葉を告げた。

「その言葉、確かに承(うけたまわ)りました。決して違えませぬよう」

リリアーナが静かに言う。
それから小さく深呼吸をすると、

「では、時間がないので詳しい条件は後ほどお伝えしますが、まずはそちらの手紙を渡してください。こちらで処理しますので」

続けて、そう語りかけた。

「この手紙を？」
「ええ、いかように処分なさるおつもりだったのですか？　中途半端な仕事をされても困りますので、こちらで処理したいのですが」
おずおずと訊(き)いた貴久に、リリアーナが整然と答える。
「いや、でも……」
「その手紙をこちらで処理することも私がタカヒサ様に協力する条件とさせていただきます。時間がないのでお早めにご決断ください」
「……わかった」
どこか渋る様子を見せていた貴久であったが、結局は急かされて手紙を渡すことに同意した。
リリアーナは協力してくれるのだし、どうせ彼女ではこの手紙を読むことはできやしない。
貴久から手紙を受け取ると、リリアーナがそのまま傍に控えていた侍女のフリルに手紙を手渡す。
「フリル、わかっていますね？」
「はい、姫様！」
フリルが元気よく頷き、手紙を懐(ふところ)に仕舞いこむ。
リリアーナはそれを確認すると、貴久に視線を戻した。
「タカヒサ様、必要な段取りをご説明します。三人のうち誰かの協力が必要不可欠となりますが、説得できる方はいらっしゃいますか？」
「……亜紀なら、俺が頼めば、たぶん」

少しだけ気おじした様子で貴久が答えた。
「では説得をお願いします」
「わ、わかった。やってみる」
「お願いします。では――」
☆★☆★☆★
リリアーナから必要な段取りを聞くと、貴久は即座に部屋へと戻った。
途中で美春達が戻ってきて話が中断しては不味いため、そのまま亜紀をリリアーナの寝室へと連れていく。
「亜紀、話があるんだ」
貴久がおもむろに開口した。
同席しているリリアーナは少しだけ難しい顔をしてじっと黙している。
「うん……。どうしたの？」
何となく重たい雰囲気を感じとったのか、亜紀がおずおずと尋ねた。
「実は今日の昼にこの国を出ることになった」
貴久が端的に告げる。
すると、亜紀が目を丸くした。
「ええ？　ご、午後はハルトさんと沙月さんに会うんじゃないの？」

「ごめん。無理になったんだ」
動揺した様子の亜紀に、貴久がバツが悪そうに言う。
「無理になったって、まだ話もまとまっていないのに……」
亜紀が戸惑い顔を浮かべる。
「なぁ亜紀、俺と一緒に来てくれないか？」
すがるような顔つきで、貴久が単刀直入に訊いた。
「も、もちろんお兄ちゃんとは一緒にいたいけど……」
話が唐突すぎるのか、流石に亜紀の反応は鈍い。
「なら頼めないか？」
貴久が焦燥した形相で頼みこむ。
「……美春お姉ちゃんと雅人はどうするの？」
亜紀にはまるで話がわからなかった。
あれほどみんなで一緒にいることにこだわっていたというのに、
まさかこの二人をガルアーク王国に残していくというのか。
それとも今からでも説得しようというのか――、雅人はともかく、
美春は明確にリオの下に残ると言っているのに。
「連れて行く」

貴久が硬い声で告げると、亜紀が愕然(がくぜん)と息を飲んだ。

「ど、どうやって？」

「それを亜紀に協力してほしいんだ。頼めないか？」

「ええ？　む、無理だよ」

流されがちに見えて、美春は一度自分で決めたことは簡単に譲らないところがある。

とても昼までに二人を説得できるとは思えない。

「頼む！　あまり時間がないし、亜紀しか頼れる相手がいないんだ」

「で、でも、協力って言われても何をすれば……」

貴久が必死に頭を下げると、亜紀が気後れした様子ではあるが協力する姿勢を見せた。

「まずはこれから俺とリリィと一緒に王様に挨拶をしてほしいんだ」

「お、王様に？」

「ああ、亜紀は基本的にその場にいるだけでいいから」

不安げな亜紀に、貴久が語りかける。

「……美春お姉ちゃん達は？」

「戻ってきたら部屋を移動するからって言って、荷物をまとめてもらう」

「だ、騙して連れて行くの？　ハルトさんと沙月さんは？」

亜紀がどぎまぎして尋ねる。

そんな真似、あの二人が聞いたら黙っているはずがない。

まだちゃんとした話し合いだってしていないのだから。

「……大丈夫だ。後日、沙月先輩と……ハルトさんにも、セントステラ王国に来てもらうことにするから。話し合いはその時にできる」

貴久が気まずそうに視線をずらし、争点をそらすように答えた。

だが、亜紀はそれでリオと沙月がこの話に関与していないと察する。

「ハルトさんと沙月さんに何も言わずにお別れなんてできないよ。心配させちゃうよ？」

「だから心配させないように、亜紀には王様の前で話がまとまったと言ってほしいんだ。あと、二人を納得させるために手紙を書いて欲しい」

「そんな……」

「昨晩、みんなが俺と付いてきてくれそうだって、沙月先輩とハルトさんには言っておいた。亜紀が手紙を書けば信じてくれると思う」

「そんなこと……言っちゃったの？」

今日の午後になればわかるような一時しのぎの嘘だったはずだが、確かにそれならリオと沙月を納得させることはできるかもしれない。

亜紀からの手紙だけでなく、王に挨拶もすれば平穏に去って行ったことになるから、説得力も増すだろう。

だが、それでも話が急すぎるし、そんな不義理を働くような真似をしていいのだろうか。

亜紀はひどく思い悩んだ。

「頼む！　俺はもう帰らないといけない。でも、せっかく再会できたのに、このままたお別れなんて嫌なんだ。次はいつ会えるかもわからないのに！」

貴久が必死に頭を下げて訴えかける。

「お兄ちゃん……」

腰を低くした兄の姿を見て、亜紀は何だかいたたまれない気持ちになってしまった。

このまま貴久と別れたくないのは亜紀だって同じだ。

大切な家族とようやく再会できたのだから。

それに貴久にとって美春は初恋の相手だ。

きっかけは一目惚れだったかもしれないけれど、貴久は出会ってからずっと美春のことを好きでい続けてきた。

単純に容姿だけで美春のことを好きというわけではないし、その想いが本物であることに間違いはない。

だから亜紀には貴久の気持ちが痛いほどに理解できた。

「……わかった。いいよ。お兄ちゃんに協力する。私にできることなら」

じっと頭を下げ続ける貴久に、亜紀が思わず流されてしまい折れた。

いまだ悩ましげな表情を浮かべてはいるものの、明確に協力することを宣言する。

「亜紀……！　ありがとう！」

貴久の表情がパッと明るくなる。

「でも、ちゃんとハルトさんと沙月さんを説得して、なるべく早く二人に会えるようにしてね。いくら緊急で帰らないといけないからって、そのままじゃみんなは絶対に納得してくれないと思うから」

亜紀が最低限譲れないラインを明らかにした。

「……ああ、そうだな。ハルトさんは用次第だと思うけど、沙月先輩とはなるべく早く再会できるように取り計らってもらうよ。なぁ、リリィ」

言って、貴久が少し気まずそうにリリアーナに水を向けた。

「……はい。国同士の関係もございますが、同盟国となりましたので、善処します」

リリアーナが粛々（しゅくしゅく）と首肯する。

「ありがとうございます」

亜紀がおずおずと礼を言う。

リリアーナは少しだけぎこちない笑みを浮かべて返すと、

「それではタカヒサ様、あまり時間もございませんので。必要な説明に入りたいのですが……」

と、そう話を切り出す。

だが、貴久が僅かに逡巡した表情を見せて言った。

「ごめん。最後に一つだけ。なあ、亜紀、いいか？　まったく関係のない話なんだけど……」

「うん、いいけど？」

亜紀が小首を傾（かし）げて応じる。

貴久は妙に尻込みしながら、
「天川春人なのか？」
ぼそっと、そう尋ねた。
「え……？」
あまりにも予想外な名前が聞こえたせいか、亜紀が呆然と顔に疑問符を浮かべる。
貴久の隣ではリリアーナがピクリと表情を動かしていた。
「美春の好きな人。その、もしかしたら天川春人っていうんじゃないのか？」
貴久がおそるおそる質問を補足した。
すると、亜紀は今度こそ質問の内容を理解したようで、
「な、なんでお兄ちゃんがその人のことを知っているの？」
泡を食ったように詰問し始めた。
その目つきは少しばかり、いや、だいぶ険しい。
「いや、まあ……」
不快さを隠そうともしない亜紀の反応に、貴久が呆気にとられた様子で言葉を濁す。
「もしかして美春お姉ちゃんに直接聞いたんじゃ……」

亜紀が情報の出処を特定しようとする。
「いや……、昔聞いたことがあるんだ。親父から。その、亜紀のお兄さんだったんだろ？」
貴久が誤魔化すように嘘を吐くと、
「違う！」
亜紀が断言した。
「あんな奴、兄なんかじゃない！　私のお兄ちゃんは貴久お兄ちゃんだけだから、やめて！　そんなこと言わないで！」
ひどく怯えて焦燥した様子の亜紀に、貴久がびくっと震えた。
やや斜に構えている面はあるが、大人しい亜紀からはまるで想像できない反応である。
それだけ亜紀にとって、天川春人という存在は明確な地雷なのかもしれない。
貴久が悟った瞬間だった。
同時に亜紀にあの手紙を見せなくてやはり正解だったのかもしれないと自信が湧いてくる。
貴久は気づかぬうちにホッと安堵していた。
「亜紀……。ごめん。変なことを聞いた。忘れてくれ」
すまなそうに貴久が言う。
「あ、ううん。ごめん。私の方こそ……、急に叫んで」

亜紀もハッと我に返り、バツが悪そうに謝罪する。
リリアーナは目を丸くして二人の様子を見つめていたのだった。

☆★☆★☆★

午後、昼過ぎ。
シャルロットとの昼食を終えると、リオは沙月と一緒にその足で美春達がいるはずの部屋に向かった。
扉の前にはフリルが一人で待ち構えており、顔パスで室内に通されることになる。

「お待ちしておりました。どうぞ座ってください」

貴久の言葉とともに、一同がリビングの中央に置かれた椅子に腰を下ろした。

「美春ちゃん達はいないの？」

人の気配が感じられない室内を見渡しながら、沙月が尋ねる。
すると、一瞬、貴久が少しだけ顔をこわばらせて、

「すみません。実は急遽（きゅうきょ）セントステラ王国に帰国しなければならないことになりまして……」

と、そう答えた。
一拍置いて、リオと沙月が呆気にとられたように、きょとんと目を丸くする。

「えっ？　そうなの？　な、なんで？」

沙月が泡を食ったように訊(き)いた。
「詳しいことは機密で言えないんですが、実は新たに成立した防衛同盟の件で早急に……」
貴久が硬い声で答える。
すると、沙月が納得しかねた表情を覗(のぞ)かせた。
「機密って……」
それだけの説明ではまるで要領を得ないではないか。
とはいえ、国の機密と言われてしまえば、尋ねたところで教えてくれるとも思えない。
沙月は戸惑い顔を浮かべた。
「……美春ちゃん達のことはどうするつもりなの？」
冷静たらんと心を落ち着け、沙月が最も肝心な質問を投げかける。
「俺と一緒に帰国してくれることになりました」
貴久が静かに告げた。
ということは、つまり――。
「じゃあ今、美春ちゃん達は……？」
沙月が焦った様子で尋ねる。
「荷物をまとめて、先に魔道船に向かったところです」
「そんな……」

突然の展開に沙月の心がひどく揺さぶられた。
まさか話し合うどころか、何の挨拶もなしに行ってしまうというのか。
美春達が、本当に？
確かに、昨晩、美春達が貴久に付いて行くことに対して前向きであるという話は聞いていたけれど――。
せめて一言くらい挨拶があってもいいのではないのか。
それだけ急いでいるということなのだろうか。
と、沙月が疑問に思う。
それはリオも同じだった。

「いきなりそんなことを言われても……」

必要な手順が省略されすぎていて、話を受け入れる心の準備ができていない。
こういった大事な話はもっと前もって伝えてくれないと。
まさか貴久が嘘を吐いているとは思っていないが、話を信じるに足る証拠がなく、現実味が湧かない。

「ごめんなさい。ギリギリまで待ってはみたのですが、出国手続の関係であの三人は先に送らないといけなくて」

流石に悪いと思っているのか、貴久が気まずげに謝罪の言葉を口にした。
主に沙月に視線を向けて――。

「まぁ、確かに私の方もなかなか一緒にいられる時間を作れなかったから、まだ時間はあると思ってちょっと油断していたし……」

沙月が渋々と語る。
昨日の夜の時点では今日の午後に全員で集まって話をすることになっていた。
だから、セントステラ王国へ帰らなければならないという話が出たのは本当に突然の事なのだろう。
でも、それなら、シャルロットの部屋にまで足を運んで知らせてくれれば良かったのに――。
沙月がそんな不満を覚えた。

「すみません。本当につい先ほど決まったことで、本国の事情で予定を変更してしまうことになってしまい……」

貴久が弁明すると、

「……そうなんですか？」

沙月が貴久の隣に座るリリアーナに尋ねた。

「はい。本国から緊急で連絡が届きまして。魔道船の見学を終えて、貴族街の見学も行っていた最中だったので、ちょうどお昼前の事でしょうか」

と、リリアーナが説明を補足した。
その表情はどこか申し訳なさそうで、そして悩ましげにも見える。

「本当に急なことだったんですね……」

沙月が嘆息するように言う。
昼前ならまださほど時間は経っていない。

「先ほど急ぎフランソワ陛下の下へ謝罪と別れのご挨拶に伺いました」
「先に亜紀が準備を終えていたんで、一緒に挨拶に行ったんです。美春と雅人には部屋で荷物の準備をしてもらって。もしかしたら先輩達が来るかもしれなかったし」
リリアーナの言葉を引き継ぐように、貴久が説明を補足する。
「そう、なんだ……」
沙月がどこか事態を受け入れきれていない様子でつぶやく。
確かに、昨晩、貴久から話を聞いて、美春達がセントステラ王国に行くかもしれないと予想はしていた。
だが、もう少し、せめてあと一日くらいは、美春達とゆっくり語り合う時間があると思っていたのだ。
もとより美春達が考えて出した答えならば、沙月も無理に引き留めるつもりはない。
最初から美春達の意思を尊重しようとリオと決めていたことだし、昨晩、貴久から話を聞いた後に、帰り道であらためてリオと確認していたから。
だから、今日この時間に、美春達と一時の別れを惜しむことになるかもしれないと覚悟はしていた。
勇者としての立場はあるけれど、お互いの居場所が分かっている以上、会おうと思えばまた会えるだろうから。
寂しくないと言えば嘘になるが、また会えるとわかっていて、ちゃんとお別れを済ませば、そう辛くなることはないだろうと思っていた。
だが、流石にこれほど急に別れが来てしまうとは――。
「挨拶くらいしたかったのに、次にいつ会えるかは不明確だし……」

言いながら、沙月が憮然(ぶぜん)と唇を尖(とが)らせた。
別に怒っているというわけではないが、ちょっと不満を抱いているのだ。

「実は亜紀が手紙を書いてくれたんです。急いでいたんで、大したことは書けなかったみたいですが……」

言って、貴久がこのタイミングで亜紀の手紙を取り出した。
封筒には確かに亜紀の字で日本語で沙月が宛先人として書かれており、封蝋(ふうろう)で封がされている。

「……見せて」

封筒を受け取ると、沙月が封蝋(ふうろう)を外した。
そうして中から手紙を取り出すと、リオと一緒に見られるように手紙を広げる。
短時間で書いたのか手紙の文面は簡易であるが、亜紀なりに丁寧に書こうとしている雰囲気が伝わってきた。
手紙には美春達も別れを惜しんでいること、別れの挨拶も言えずにセントステラ王国へ向かってしまうことの謝罪、そう遠くないうちに会えるようだから心配しないでほしい旨等が記載されている。
沙月が素早く視線を動かし、およそ数十秒で手紙を読み終えると、

「亜紀ちゃん……」

と、少しだけしんみりとした声を出した。
沙月の手がいとおしむように手紙を握る。
だが、ややあって、何かに気づいたように首を傾(かし)げると、

「でも、これ……、私に向けて書かれた手紙？」

と、そうつぶやいた。

手紙には沙月の名前こそ書いてあるが、リオ――ハルトという名前は一度も書かれていなかったのだ。

「ええ。二人別々に手紙を書こうとしていたんですが、時間がなかったので……。なので、ハルトさんには直接、メッセージを預かっています」

貴久がややこわばった笑みを浮かべて言う。

「メッセージ、ですか」

リオがぼそりとつぶやいた。

「はい。その、手紙の件もありますので、二人きりの方がいいですか？」

と、貴久が遠慮がちに提案する。

リオが即座に得心し、ちらとリリアーナに視線を送った。

一方で、話の流れがいまいち掴めていないのか、沙月は顔に疑問符を浮かべている。

「失礼ですが、お二人は手紙の内容について？」

「……リリィは何も知りません」

リオが尋ねると、貴久が頭（かぶり）を振って告げる。

「なるほど。では、この場で一つだけ確認させていただいてもよろ

しいでしょうか？」

と、リオが言う。

すると、貴久がぴくんと肩を震わせた。

てっきりリオは沙月にこの話を聞かせたがらないと思っていたのだ。

貴久にとって沙月に詳しい話を聞かれるのは少しばかり都合が悪い。

後日、沙月が美春達に会った時にややこしい事態になりかねないからである。

そもそもリオが美春達に手紙を送ったことさえ知ってもらいたくはない。

だが、不自然に話を隠すわけにもいかなかった。

「はい、何でしょう？」

訊(き)いて、貴久がゴクリと唾を呑んだ。

いったいリオは何を確認しようというのか。

心臓の鼓動が速まるのを感じる。

「三人はちゃんと手紙を読んでくれましたか？」

リオが貴久の瞳を深く見据えて問うた。

すぐ傍にはリリアーナだけでなく沙月もいる。

仮にこの場でイエスと答えたら、後になってノーだったと言い逃れすることはできなくなるだろう。

だが、イエスと答えざるをえない。

少しは読んだ時の反応も伝えた方がリアリティがあるだろうか。

そんなことを考え、貴久は天川春人の名を出した時に見せた亜紀の反応を思い出した。

「ええ……。とても驚いていました。特に亜紀は……その……取り乱してしまったというか……」

顔をこわばらせ、貴久がたどたどしく答える。

「そうでしたか……」

リオが納得したように言った。

沙月はいまだに核心を察することはできずにいたが、リオが美春達に手紙を渡したのであろうことは理解できたようで、黙って話に耳を傾けている。

「……亜紀がどんな反応を見せるか、わかったうえで手紙を渡したんですか？」

リオの反応に、貴久が思わずムッとした様子で尋ねた。

「ええ、漠然と予想はしていました」

リオが弱々しく微笑んで頷く。

その笑顔は残酷にさえ写った。

貴久だけでなく、リリアーナですらも息を呑んでしまうほどに。

亜紀がどんな反応を見せるかはリオも薄々と予想していたことである。

わかったうえで手紙を渡して、亜紀が予想通りの反応を見せた。

それだけのことだ。

そして、それでも渡そうと思った。

「っ……」

悪びれた様子はなく、落ち着き払ったリオの態度に、貴久が息を呑んだ。
心の中に沸き起こる不快さを確かに感じる。
おそらく――。
いや、間違いなく――。
理屈なんかじゃなく、この男とは相いれることができない。
貴久はそう思った。

「それではメッセージを伺ってもよろしいですか？」

リオが尋ねた。

「ええ……。では、あちらの部屋へ行きましょうか」

そうして、リオと貴久は寝室へと席を改めたのだった。

☆★☆★☆★

そこはつい昨日まで貴久が寝泊まりしていたベッドルームだ。

「雅人はともかく、美春も亜紀も貴方にはもう会わないそうです」

リオと二人きりになったところで、貴久が硬い声で告げた。
声色に突き放すような冷たさが含むのを抑えられない。
だが、それだけでリオは得心した。
美春達がリオに会わない理由など二つに一つしかない。
会いたくないか、会うことができないか。
亜紀の協力を得て、滞在国の王と平穏に別れを済ませ、沙月に別れの手紙を送っている時点で、前者と考えるのが自然な状況はお膳

立てされていた。
加えて言うならば、貴久から聞いた亜紀の反応が実にもっともらしかったということも状況の信憑性を補強している。
「そうですか……」
リオが陰りのある笑みを覗(のぞ)かせ、嘆声を漏らした。
そうしてから、貴久をじっと見つめて、
「つかぬ事を伺ってもよろしいでしょうか？」
ぽつりと、訊(き)いた。
「はい」
貴久が重い声で頷く。
「タカヒサさんはミハルさんと付き合っているんでしょうか？」
リオが尋ねると、貴久が意外そうに目を丸くした。
自分と美春がそんなふうに思われていたことが意外だったのだ。
貴久は僅かに動揺したものの、
「……そうです。付き合っています」
と、気がつけば反射的にリオの質問を肯定していた。
「なるほど……。昨晩の夜会であったことは美春さんから聞きましたか？」
「……告白されたとだけ」

貴久が憮然(ぶぜん)と返答した。

「すみませんでした。恋人に言い寄る男がいると聞いて、心中穏やかではなかったでしょう？」

「いえ、まぁ……」

貴久が顔をしかめて返答を濁す。

「俺が言うべき事柄じゃないのかもしれませんが、ミハルさん達のことをよろしくお願いします」

「……もちろんです。これからは俺が三人のことを守ります」

感情を抑えるように努めて、貴久がきっぱりと言い切る。

「よろしくお願いします」

リオが丁寧な口調で言って、頭を下げた。

「っ……、貴方は……」

この期に及んでも動じた様子を見せないリオに、貴久が苛立ったように語気を荒げた。

どうしてそんなに簡単に諦められるのか。

プライドがないのか。

美春のことを好きなんじゃないのか。

かき回すだけかき回して、そんな聖人みたいな態度をとって、いったい何がしたかったというのだ。

反論の一つでもすればいいのに――。

これじゃまるで腑抜けだ。

だが、

「ぁ……」

リオの拳が力強く握りしめられていることに気づき、貴久は言葉を呑んだ。

感情を押し殺しているのだと、知ってしまった。

すると、今度は途端に罪悪感が押し寄せてくる。

貴久は気まずそうに視線を逸らして、

「じゃあ、それだけなので……」

と、会話を打ち切ろうとした。

「美春さんは他には何か言ってませんでしたか？」

だが、リオが尋ねかける。

「……ごめんなさいと」

「そうですか……。伝言ありがとうございました。それでは」

後ろめたそうに立ち尽くす貴久を背にして、リオは先に歩き出し、リビングルームへと続く扉を開けた。

それから数分ほど別れ話を兼ねて必要な会話を済ませると、貴久達は急いだ様子で城を立ち去って行ったのだった。

☆★☆★☆★

慌てて帰国する貴久達を城門まで見送ると、

「見送りに行かなくて良かったんですか？」
リオが隣に立つ沙月に訊いた。
「うん。まぁ私は手続の関係でこれ以上先へは行けないだろうしね。今から許可を取りに行っても遅いだろうし」
「なるほど」
リオが頷き、しばしの沈黙が降りて、
「……ねぇ、これで良かったんだよね？」
沙月がおそるおそる疑問を口にした。
「良いも悪いも本人達が望んで貴久さんに付いていきましたからね」
言って、リオが肩をすくめる。
「確かに、そう、なんだけど、ちゃんと話もできないまま別れちゃったのよ？　正直、何が何だか……」
沙月が釈然としない様子を覗かせた。
どうにも事態が急展開すぎる。
まるで必要なイベントをスキップしてエンディングを迎えたような――。
問題を解く過程を省略して解答だけを与えられたような――。
そんなえも言われぬ消化不良を起こしてしまった。
現実なんてそういった事象ばかりだと考えてしまえばそれまでなのかもしれない。
だが、本来なら踏むべき手順を省略されてしまった身としてはい

まいち納得がいかなかった。
いくらまた再会できることが約束されているとしてもだ。
「だいたい国の機密って何なのよ？」
沙月がワケがわからないという表情になる。
最低限の説明と挨拶だけして、さっさと立ち去られても、別れた実感なんて湧きようがない。
本当ならば今頃は美春達と歓談していたはずなのだから。
沙月は苛立たしげに嘆息した。
「沙月さんはまたみんなと会えるじゃないですか」
リオが沙月をなだめるように語りかける。
すると、沙月が思案するようにしばらく黙り込んだ。
やがて、ふと突然に、
「……決めた！　私、できるだけ早く美春ちゃん達の後を追うわ！　王様に掛け合ってみる」
と、沙月が決然と宣言した。
突然の事態に困惑しているのはきっと美春達も同じに違いないのだ。
相手の置かれた状況を知ろうともせず不満ばかり言うのは性に合わない。
ならば自分から会いに行って話をすればいいはずだ。
そうと決まれば話は早い。
「ねぇ、ハルト君も一緒に行きましょう！　このままこんなモヤモヤした状態でいたくないもの」

と、沙月がリオに提案する。
だが、リオは穏やかに首を左右に振って、
「すみません。俺は一緒に行けないんです」
と、静かに答えた。
期待が外れて、沙月が面食らう。
「な、なんでよ？　気にならないの？　美春ちゃん達のこと！」
沙月が勢い込んで尋ねた。
その目はジトッと不満を訴えている。
「……俺は済ませないといけない用事がありますので」
正面から答えずに、リオがはぐらかすように告げた。
「用って昨晩、言ってたやつ？　西の方に行かないといけないって……」
「ええ、知人との約束ですので。先延ばしにするわけにもいかないんです」
「だったらそれが終わった後でもいいじゃない。別に私と一緒じゃなくたっていいわ。行ってあげましょうよ」
沙月がなおも食い下がって語りかける。
「……でも、俺はもうみんなに会わない方がいいですから」

リオが寂しそうに笑みを浮かべて言った。
その笑顔には言葉以上の説得力がある。
「な、なんでよ？　そんなはず……」
戸惑い尋ねる沙月に、
「振られちゃいました。美春さんに。告白したんですけどね」
リオがさらりと告げた。
「え……？」
沙月の表情が凍りつく。
だが、そんな彼女の動揺に気づかず、リオがさらに続けて語る。
「付き合っていたんですね。貴久さんと美春さん。ご存知でしたか？」
「え、ああ、う、うん。中学時代から噂されていたみたいだし、付き合っててもおかしくはないなと思っていたけど……」
戸惑い顔を浮かべて、沙月が上ずった声で答えた。
「やっぱりそうでしたか」
沙月が言うのなら、いよいよ間違いはないのだろう。
美春はもともと貴久のことが好きで、リオの告白を受けることはできなかった。
そういうことなのだろう。

「勝負が決まる前に告白して、振り向かせようとしたんですが、最初から勝負は決まっていたみたいですね」

リオが自嘲するように口許を小さく歪ませる。

昨晩、美春が貴久に付いてこうとしているという話を聞いた時に、薄々と予想はしていた。

告白してみたものの、既に手遅れなのかもしれないと。

いや、美春と貴久が付き合っているかもしれないと思っていたのは前世からのことだ。

天川春人が後悔し続けてきたのは美春に想いを伝えることができなかったということである。

だから、仮に美春が貴久と付きあっているとしても、告白しようと決めて、春人は生きてきたのだ。

その気持ちはリオになった後も変わらずにいたはずだった。

けど。

それでも、自分の前世のことを打ち明ければ、万が一にでも可能性があるかもしれないと淡い希望を抱いてしまった。

早く伝えたい。

早く伝えなければならない。

今日の午後になれば別れ話をされて、本当にすべてが手遅れになってしまうような気がしたから。

その思いに突き動かされて――。

リオは焦ってしまった。

美春の口から別れの言葉を告げられる前に、どうしても手紙を送りたかったのだ。

「難しいものですね。人に想いを伝えるのって」

その声は疲れ切った響きを含んでいた。

理屈でああだこうだ手順を考えたところで、現実で役立つことは

少ない。
いざという場面になると、緊張して冷静な思考を保つことも難しくなる。
表面を取り繕うだけで精一杯だ。
「ハルト君……」
沙月がリオをいたわるように声をかけた。
「すみません。変なことを言って」
穏やかに微笑んで、リオが謝る。
しかし、その拳は力強く握られていた。
「そう言えば沙月さんには言っていませんでしたね。貴方にはちゃんと説明しないといけない」
今後、美春達に会うというのならば、知っておいた方がいいのかもしれない。
だからリオは沙月に教えることにした。
「俺の前世のことを――」
☆★☆★☆★
国王の執務室にて、リオはフランソワ＝ガルアークと面談していた。
フランソワは上座に置かれた豪華な座椅子に深く腰を下ろしており、そのすぐ傍には壮年の近衛騎士が一人たたずんでいる。
下座ではリオが椅子に腰を下ろし、他にも若い近衛騎士が何名か

控えていた。

「陛下、このたびは拝謁の栄を賜り恐悦至極に存じます」

リオがフランソワに恭しく挨拶の口上を述べる。

「うむ。よくぞ参った。シャルロットが随分と世話になっているようだな」

フランソワが愉快そうに笑みを浮かべて言った。

「恐れ多いことでございますが、シャルロット様には格別のご厚情を賜っております」

「ははは、サツキ殿とも随分と親しくなったようではないか。そなたさえ良ければ今後も定期的に城に顔を出し、二人の話し相手になってやってくれ」

「はっ。不肖の身ではありますが、お二方のお望みとあらば……」

と、リオが慇懃に返しながら、

（この王様が命令してシャルロット王女に動かせていたんだろうな）

リオがフランソワの策を推察した。

実際にその真意を尋ねることなど不敬甚だしいことであるため、答えは目の前に座る歴戦の国王のみぞ知ることだが、いくつか思い当たる節がある。

今やリオは名誉騎士となり形式的にはガルアーク王国の一員となった。

そんなリオと沙月の仲を近づけることで、ガルアーク王国が沙月を縛り付けようと目論んでいるとか――。

そのためにシャルロットはフランソワに命じられてリオと沙月の仲を近づけるように動いていたとか――。

今思い返せば、夜会二日目の時点でシャルロットとミシェルがリオに友好的に接近してきたのも、その一環だったのかもしれない。

ミシェルなど、初日ではリオと沙月が一緒にダンスを踊ることを快く思っていなかったはずなのに。

他にも監視の目があったり、見えないところで手回しがあった可能性もある。

意思を尊重するという建前があったとはいえ、美春の身柄を素直にセントステラ王国へ明け渡したのは少しばかり意外であったが、ひょっとしたらリリアーナとの間で防衛同盟締結の件とは別に裏取引があったのかもしれない。

やはり相当な食わせ物なのだろう、この人は、と、リオはそう思った。

そして、これだから王侯貴族とはあまり関わりたくないと呆れがちに思う。

何事も起きぬよう無難に立ち振る舞っていても、気がつけば王侯貴族に利用価値を見出され、思惑に乗せられ、動かされているのだから。

スティアードやアルフォンスといった十代の若い貴族は己に与えられた権力を過信して行動しがちであるが、二十代、三十代と歳を重ねていくにつれてそういった手合いも減っていく。

一流の王侯貴族は手回しを悟られぬよう狡猾に人を動かしているものだ。

そうして利用価値がある者から巧みに搾り取り、相手が思惑に乗せられたことに気づいた時には、既に手遅れになっていることがほとんどである。

顔に友好的な笑みを貼りつけ、右手で握手を求めながら、左手にナイフを隠すくらいの芸当は平気でやってくるのだから。

「それで、今日はどのような用で余に見(まみ)えに来たのだ？」

リオが自身の意図を察していることには気づいているのか、いないのか、フランソワが尊大な言葉遣いで語りかけた。

ここでリオが恨み言の一つをつぶやいたところで何かが変わるわけではない。

むしろ王に喧嘩を売ったとして、いらぬ因縁を吹っかけてくるおそれすらある。

「我が身を名誉騎士に叙任くださった返礼の品を献上しに参上しました。それと家名も考えましたので、そのご報告を」

と、リオが愛想笑いを貼りつけ、用件を切り出す。

「ほう。家名も気になるが、その手にした品がそうであるか？」

「はっ。陛下は愛酒家であらせられると伺いましたので、ヤグモ地方から伝わる酒を持参いたしました。お口に合うか不安ではありますが、現時点では市場に出回っていないため、非常に珍しい品であることは保証いたします」

リオがそう言うと、フランソワの瞳に好奇の色が灯った。

「ほう。随分と粋な計らいをするではないか。それは楽しみであるな」

「恐れ入ります。実はこちらの品はリーゼロッテ様がご経営なさっているリッカ商会に卸(おろ)すことも決まっておりまして、お気に召しましたら、今後はそちらの伝手(つて)でご入手なさることも可能となります」

「なるほどな。リーゼロッテが扱う酒となればますます期待が持てるではないか。市場に出回る前に飲めるというのも興が乗る。近いうちに飲んでみるとしよう」

「ありがたき幸せ」

今回リオがフランソワに献上した酒は、精霊の民の酒造知識とカラスキ王国の酒造知識を借りて、リオなりにアレンジして作った酒である。

なのでヤグモ地方から伝わる酒というのもあながち間違いではない。

「うむ。して、家名は何と名乗るつもりなのだ？」

大仰に頷いて尋ねると、フランソワが真っ直ぐとリオを見下ろした。

家名は貴族の顔ともいうべき重要な役割を果たす。

リオはこれまで偽名としてハルトという名前を用いていた。

最初は死んだ人間の名前を名乗ることに微かな抵抗感を抱いていたものの、偽名として使用するのならば、却（かえ）っておあつらえ向きかもしれないと思い使うこと決めた経緯があったりする。

こうして偽名で爵位をもらってしまっていることも、止むにやまれぬとはいえ、あまり好ましい事態ではないのかもしれない。

だが、ここで家名を報告して、フランソワに裁可されれば、以降、ハルトの名は家名と共に偽名ではなく、正式な通名として扱われることになるだろう。

そして、その家名を何にするか、家名を決めろと言われた時、リオの脳内で即座に一つの候補が思い浮かんでいた。

だが、本当にその名前を用いていいのか。

リオは悩んでもいた。

それを名乗ってしまえば、本当に死者が蘇ってしまうような気がしたから。

肉体を失い記憶という曖昧なものしか拠りどころのない自分が本当に天川春人だったのか、アイデンティティが揺らいで、自信がな

かったから。
しかし、美春に告白をして、手紙を書いて、あまり難しく考える事柄でもないのかもしれないと、ある程度は吹っ切れることもできた。
大事なのは自分が何者なのかではなく、自分の気持ちだと思えたから。
だから、リオは名乗る。

「アマカワ――」

リオが短く告げると、聞き慣れぬ響きに、フランソワが小さく目をみはった。

「今後はハルト＝アマカワと名乗ろうと考えております」

続けて、決然とした口調で宣言する。
フランソワはスッと目を細めて、リオの顔を凝視した。
ややあって、フッと笑みを浮かべると、

「よかろう。ハルトよ、ガルアーク国王フランソワの名において、そなたにアマカワの家名を名乗ることを正式に許可する」

フランソワがリオにアマカワ姓を名乗ることを許可した。

「心より感謝いたします。フランソワ国王陛下」

リオが深々とフランソワに頭を下げる。
神聖暦一〇〇〇年、春、某日。
この日、この時より、リオは名実ともにガルアーク王国の名誉騎士となる。

黒の騎士、ハルト＝アマカワが誕生した瞬間であった。

第１１１話　黒の騎士、その名は（後書き）

今回は１話あたり文字数が過去最多となりましたが、第５章はここで終わりです。大変モヤっとする展開になってしまい、申し訳ございませんが、ここまでご覧くださり、ありがとうございました。

書籍版では９巻と１０巻がちょうど夜会編に該当しますが、書籍版はＷｅｂ版とは内容が大きく異なっているので（４章に該当する４巻以降は特に）、また違った展開がご覧になれます。Ｗｅｂ版の話は以降も続いていきますが、このＷｅｂ版の展開に納得できない方は書籍版をご覧いただくとよろしいかもしれません。

第112話　出発後

「して、今後の予定は決まっているのか？」

リオにアマカワの家名を名乗る許可を与えると、フランソワが尋ねた。

「西へ赴いてみようと考えております」

リオが答えると、フランソワが「ふむ」と一呼吸おいた。

「そもそもお主はアマンド近郊で活動していたのであったな」

「はい、左様でございます」

「クレティア公爵領に立ち寄ることがあればセドリックかリーゼロッテの下へ立ち寄るがよい。用が重なるようであれば魔道船で王都へ一緒に来るよう伝達しておく」

魔道船を用いれば通常運航でもアマンドからガルアーク王国の王都まではせいぜい数時間程度の距離しかない。

一方で地道に街道を歩いて進めば、両者の距離は片道で二週間弱といったところだ。

リオならば魔道船よりも早く空を飛ぶことはできるが、フランソワがそのことを知るはずもない。

「お心遣い、心より感謝いたします」

「よい。先も言ったがサツキ殿とシャルロットのためにも定期的に顔を出せ。寂しがってしまうからな」

念を押すようにフランソワが言った。

「承知いたしました。善処します」

内心で嘆息しながら、リオは慇懃(いんぎん)に答えたのだった。

☆★☆★☆★

リオがフランソワと謁見をする少し前のことだ。

ガルアーク王国王都東部の湖畔にある港にて、セントステラ王国の魔道船三艇が停泊していた。

貴久やリリアーナが乗船している魔道船には侵入者が忍び込まないよう、警備の騎士達が神経を尖らせている。

その中には二人一組のペアとなって船の周辺を歩き回っていたキアラとアリスの姿もあった。

「アリス、船の内部、及び周辺に異常な魔力反応はありませんね？」

「ありませんよー。いたらとっくに教えてますって」

キアラが尋ねると、呑気な声でアリスが言う。

「魔力感知ができる者は貴方しかいないのです。ミスは二度と許されません。もっと気を引き締めなさい」

「はーい。わかってますよぉ。でも私って働きすぎだと思うんですよね。というわけで休息を欲しています」

などと、アリスはのんびりとした様子を見せているが、今この魔道船に不用意に人が忍び込もうとすることは非常に難しい。

肉眼で騎士達が目を光らせているのはもちろん、アリスがおかしな魔法や魔道具が使われていないか探っているからだ。

魔法を使用するのに必要な技能は二つ、精霊の民の間ではオドとも呼ばれる魔力の感知と操作である。
ゆえに、魔法が使える人間族ならば魔力の感知は可能だが、普通は一定量以上の魔力に触れでもしない限り、空気中に漂う魔力を察知することはできない。
ましてや事象化すらしていない純粋な魔力エネルギーそのものを視認することなど不可能だ。
こういった高い精度での魔力感知と純粋な魔力の視認は、何らかの魔力異常を察知するうえで非常に役立つ上に、精霊術を習得するうえで必須の技能でもある。
だが、人間族はこれらの技能を効率的に習得するために必要な修行ノウハウを知らない。
基本的に魔法を使用する際に高い精度での魔力感知と純粋な魔力の視認は要求されないからだ。
無論、精霊術を使えるようきちんと長い訓練を積めば人間族でも習得は可能なのだが、あいにくと現在のシュトラール地方に精霊術は普及していない。
精霊術よりもより容易く習得が可能な魔法という技術が大々的に普及してしまったため、習得難易度が異常に高い精霊術の需要が駆逐されてしまったのが原因だ。
もっとも人間族の中にも極稀に精霊術に高い素養を持つ天才が存在する。
そういった例外的な人間が才能と多少の訓練で高い精度での魔力感知や純粋な魔力の視認を可能としてしまう。
訓練の過程をすべてスキップして精霊術を使えるようになってしまったリオは例外中の超例外であるが、アリスも例外寄りに位置する人間であった。
要人の暗殺の際における潜入や隠密には特殊な魔道具が用いられることも多いため、アリスのような素質を持つ者はどこの国でも護衛役として非常に重宝されている。

もちろん、巧妙に魔力を隠蔽して魔術や精霊術が使用されていたり、触れ合うくらいの至近距離にならなければ発動に気づかないような極小出力の魔力で魔術等が使用されている場合もある。
だが、彼女の傍で不用意に魔術や精霊術を発動させれば、発動時に放出される魔力の波を即座に察知されることだろう。
幼くしてその才能を開花させ、名家の長女でありながら王女の騎士として育てられることになったアリスであるが、今ではリリアーナの近衛騎士として欠かせぬ人材であった。

「出発したら国に着くまで休憩してもいいそうです。それまで我慢なさい」
「はい、はい。わかりました」

多少、上下関係や規律に緩いところはあるが。

「はいは一度で十分です」

少しピリピリした口調でキアラが言う。

「はーい。……もう。これが最後の仕事だからって、イライラしなくてもいいのに」

アリスがぼそっとぼやく。

「何か言いましたか？」
「いえ、何も！」

ジロリと睨むキアラに、アリスがぶんぶんと首を振る。
出発の合図が甲板に響き渡ったのはそんな時の事であった。

☆★☆★☆★

魔道船内部にある豪華な造りのサロンで、美春、亜紀、雅人の三人が貴久達の到着を待っていた。

所用で貴久が遅れると告げられ、美春達は先に見学を済ませ、この場で長らく語り合っていたのだ。

だが、一向に貴久がやって来る様子はない。

「なあ、兄貴はいつくるんだ？　腹減っちまったよ。なぁ、美春姉ちゃん」

雅人が愚痴るように言った。

「え？　あ、う、うん。何かな？」

じっと椅子に座っていた美春がハッとして訊き返す。

「いや、腹が減ったなって。……なあ、やっぱり具合が悪いんじゃないのか？　なんか朝からぼーっとしてて変だぞ？」

雅人が言う通り、美春は少し上の空といった感じで、午前中からずっと落ち着きがない。

話しかければ応答はしてくれるのだが、こうして話を聞いていないことが何度もあったのだ。

とりあえず相づちは打ってくれるため、話だけがどんどん進んで、後になってようやく自らの置かれた状況を把握できていないことに気づくことがしばしばあった。

精彩さを欠いているというか、まったくもって普段の美春らしくない。

「ううん。大丈夫だよ。心配かけてごめんね」
否定して、美春が儚げに微笑む。
「まぁ、ならいいんだけど。亜紀姉ちゃん、兄貴はいつ来るんだ？」
貴久とリリアーナが到着したら、魔道船で遊覧飛行しながらランチタイムと告げられているが、時刻は既に昼下がりに突入している。
食べ盛りである雅人の胃袋は声高に空腹を訴えていた。
「わからないわよ。すぐに用事を済ませてこっちに来るって言ってたから、そろそろ来るんじゃない」
どこか気まずそうに視線をそらして、亜紀が答える。
貴久に頼み込まれて協力した亜紀であったが、何も知らない美春と雅人を目の当たりにすると罪悪感がひしひしと押し寄せてきた。
美春達はこの後すぐにセントステラ王国に向けて出港することを知らない。
事実を知れば今すぐにでも船を抜け出してお城へ戻ろうとするだろうか。
（お兄ちゃん、ハルトさんと沙月さんに事情を説明したのかな？）
貴久から説明を受けたところによると、可能な限り早くリオと沙月にもセントステラ王国に足を運んでもらうよう頼むことになっている。
いったい貴久はどんな話を二人にしているのだろうか。
（やっぱり私も残った方がよかったのかも……）

貴久から美春達を魔道船に引き止める役目を任された亜紀であったが、自分がこの場にいる必要性は特に感じない。
美春達では無暗に船内をうろつくことはできないし、そもそも貴族街を出歩いて王城にたどり着くことすらできないのだから。
この場にいても不安な気持ちが押し寄せてくるだけである。
ならばいっそ貴久のすぐ傍にいたかった。
そうして亜紀が心を悩ませていると、

「きゃ……、揺れてる？」
「地震か？」

船内に軽い振動が走った。
魔道船の核となる動力機関が起動したのだ。
亜紀と雅人が突然の揺れに目を丸くする。

「でも、ここ湖の上だよ？」

美春がつぶやいた。

「船の上って揺れないのか？」
「……たぶん。どうだろう？」

雅人の質問に、美春が自信なさげに答える。
すると、次の瞬間、僅かに揺れが強まったかと思うと、乗っている船が動き出した感覚が僅かに伝わってきた。

「なあ、この船、動いてないか？」

雅人がサロンを見渡しながら言った。
だが、あいにくと室内には船外を見晴らせる窓がない。

「うん、動いているみたい。貴久君が来たのかな？」
美春が頷き告げた。
魔道船による遊覧飛行は貴久が来るまでお預けとなっているはずである。
だから、もしかしたら貴久が来て遊覧飛行が始まったのではないかと思ったのだ。
「なんだよ、出発する瞬間はデッキにいたかったのに」
などと雅人が不満を口にすると、重力に引きずられ、上昇にあたって生じる負荷が押し寄せてきた。
「お、おお、なんか不思議な感じだな。ちょっと外に出てみようぜ」
そう言って、雅人がサロンの扉へ歩き出す。
「あ、ちょっと！　駄目よ、雅人！」
亜紀が慌てて雅人を呼び止める。
すると、そこで、サロンの扉が開いた。
現れたのは貴久だけだ。
「なんだよ兄貴、空を飛ぶ瞬間くらいデッキに出させてくれよ」
と、いきなり現れた貴久に、雅人が口を尖らせて言う。
「悪い。ちょっと話があるんだ。座ってくれないか？」
「でも、もう空を飛んでるんだろ？　早く見学したいんだけど」

「見学はなくなった。今はセントステラ王国に向かっている」
貴久が硬い声で告げた。
そわそわした様子を見せていた雅人であったが、何を言われたのか理解できなかったのか、一瞬だけ呆けた表情を浮かべる。
すぐ傍では美春が「え？」と、動じた様子を露わにしていた。
「は？　何言ってんだよ？」
「帰国することになったんだ。今はセントステラ王国に向かっている。みんなにも一緒に来てもらうことになった」
「ちょっと何言ってるかわからないんだけど」
雅人が訝しそうに顔をしかめた。
「だから今からそれを説明する。まずは座ってくれないか？　ついでに食事にしよう」

☆★☆★☆★

一同がサロンの卓につくと、温かい食事が即座に運ばれてきた。
ガルアーク産の子牛を用いたホワイトシチュー、焼き立てのパン、オムレツ、キノコのソテー、色とりどりの野菜サラダ。
美味しそうな匂いが鼻を刺激し、雅人の空腹が刺激される。
聞きたいことは山ほどあるが、せっかくの食事を冷ますのももったいないと考え、雅人は少し遅めのランチへと即座に手を伸ばした。
何とも雅人らしいというか、空腹という本能的な欲求に抗えない雅人に、美春が思わず苦笑する。
話を切り出そうにも、食事をしている彼の前で行ってもいいものか。
そうやって美春が逡巡していると、

「それで、セント、せんと――」
「セントステラ王国だよ」
国名を思い出せずに言いあぐねる雅人に、美春が教えた。
「そう。セントステラ王国に帰るってどういうことだよ？　ハルト兄ちゃんと沙月姉ちゃんはどうしたんだよ？　この船に乗っているのか？」
と、パンをほおばりながら、雅人が質問攻めをする。
どうやら話は話で訊きだすようだ。
「この船には乗っていない。後日、セントステラ王国に来てもらうことになった」
「は、はぁ？　なんでだよ？　聞いてないぞ」
予想外の展開に、話の流れに頭がついていかない。
「ご、午後はハルトさん達と会うんじゃないの？　約束したんでしょう？」
美春が慌てた様子で訊いた。
貴久が顔をしかめたくなったのを必死に堪える。
「ごめん。無理になったんだ。だからこうしてセントステラ王国に向かっている」
「……え？」
貴久が済まなそうに言うと、美春が表情を凍らせた。

次の瞬間、
「う、嘘！　嘘でしょ？」
美春が取り乱したように叫んだ。
「え？　船？　セントステラ王国に向かっているの？　なんで？」
「み、美春お姉ちゃん、どうしたの？」
普段の美春では想像できない取り乱し方に、亜紀が驚いた様子で言った。
雅人も目を丸くして呆けている。
美春がへたりと椅子の上に座り込んだ。
――そんなことあるはずないのに、どうしてこんなことになっているの？

ただただその疑問だけが頭の中に浮かぶ。
昨晩、美春は一睡もできずにベッドの中で考え事をしていた。
いや、考え事をしていたのはつい先ほどまでずっとだ。
ハルトは天川春人なのか。
仮に自分が想像した通りの事実が存在するとしたら？
その答えを知りたい、知らなければならない。
でも、ハルトが見せてくれた色んな側面、その中には、時折、恐ろしいくらいに冷酷と思える部分が覗けたこともあって――。
自分が想像している事実が存在しないかもしれないと思うと、その答えを知る時が迫っていると思うと、怖がっている自分がいて、思わず逃げ出したくなってしまって――。
ハルトと会うまでに、少しでも心を整理しようと時間を置いてみたけど、心は整理されるどころか混乱する一方で――。

美春は頭の中はどんどんぐちゃぐちゃになってしまっていた。
けど、それでも、魔道船から降りればハルトに会えると、怖くはあったけど、同時に期待してもいたのだ。
ハルトに会えると想像するだけで心臓が高鳴って、胸が苦しくなるけど、それでも会わなければならない時がやって来るはずだった。
なのに、そのハルトが他の用事を優先させたなんて、そんなはずがない。

「嘘だよ。そんな、そんなはずが……、そんなはずないの！」

ハルトは告白してくれた。
渡したい物があると言ってくれた。
なのに、どこかへ行ってしまうなんて、そんなはずがない。
美春は名状しがたい焦燥感に襲われていた。

「本当だよ」

貴久が言うと、美春の華奢な身体がびくりと震える。
ほんの一瞬だけ逡巡するような表情を浮かべると、

「……降りなきゃ」

美春がぼそりとつぶやいた。

「え？」

隣に座っていた亜紀が首を傾(かし)げる。
すると、美春がおもむろに立ち上がった。
そうして慌てた様子で扉へと走り出す。

「ちょ、美春お姉ちゃん！　ま、待って！　どこに行くの？」
亜紀が慌てて後を追いかけ、美春が扉を開けたところで取り押さえる。
本当に美春らしからぬ行動だった。
いったいどうしたというのだ。
「放して！　お願い！　早く降りないと！」
美春が焦ったように叫ぶ。
「む、無理だよ！　この船、空を飛んでるんだよ！」
そんな馬鹿な真似を許せるものかと、亜紀が言う。
「だって、私、残るって言ったよ！　ハルトさんのところに。なのにどうして何の説明もなしにこんな状況になっているの？」
いまだ状況の把握すら満足にできていないが、納得できるはずがない。
「そうだよ。何があったのか、説明してもらうぜ。兄貴。納得できない理由ならすぐに戻してもらうからな」
雅人も顔をしかめて美春に賛同した。
「大丈夫だ。また会える。沙月先輩とその話を済ませてきたんだ。了承ももらっている」
美春達の反応は想定済みだったのか、貴久がさほど動揺した様子

は見せずに語る。
この発言で一応は雅人だけでなく美春も話を聞く姿勢を見せた。
美春にしては珍しい真剣な剣幕で貴久をじっと見つめている。
「了承って、なんで俺達に黙ってそんな話をしてるんだよ？」
「……ごめん。それについては悪いと思っている。急ぎの用事が出来て時間がなかったんだ」
貴久がバツが悪そうに謝罪した。
「急ぎの用事って、なんで俺達が無理やりそれに付き合わされているんだよ？　ハルト兄ちゃんと沙月姉ちゃんに別れの言葉すら言えてねえぞ」
「……ごめん。みんなと別れたくなかった」
貴久が頭を下げると、雅人が顔をしかめて舌打ちする。
「それを言われると困るというか、弱るんだけど、……順序ってもんがあるんじゃねーの？」
「本当にごめん」
正論を述べて非難する雅人に、貴久が苦い表情を浮かべた。
それを見かねて、
「わ、私がお兄ちゃんと相談して一緒に決めたの！」
亜紀が慌てた様子で会話に割って入った。
「亜紀姉ちゃんまで絡んでいたのかよ……」

と、雅人が呆れた様子を見せる。

「亜紀には俺が頼んでお願いしたんだ。俺は兄なんだ。お前たちを保護しないといけない。治安も良くない世界で離れ離れに暮らしているなんて耐えられなかった……」

この想いに関しては嘘は吐いていない。

「そうだよ。お兄ちゃんが帰っちゃったら折角会えたのにまたバラバラになっちゃうんだよ？」

亜紀が即座に貴久を援護する。

「そりゃ……そーだけどさ」

釈然としない様子で、憮然と口を尖らせる雅人。

雅人だって何も望んで貴久と離れ離れになりたいわけではない。

昨日は勢いで喧嘩してしまったが、一日考えて何か上手い方法はないかと彼なりに模索したのだ。

「沙月姉ちゃんは無理かもしれないけど、せめてハルト兄ちゃんには一緒に来てもらうようにできなかったのかよ？」

いったいハルトはこの件についてどう考えているというのか。

「……一応、誘いはしてみた。でも、先に片づけないといけない用事があるって断られた」

その発言に、美春と雅人が目を見開く。

そんな話をしていたこと自体が初耳だったからである。

「アマンドの方に戻らないといけないみたい。でも、用事を済ませたら来てくれるんだよね、お兄ちゃん？　沙月さんも」

亜紀が説明を補足し、貴久に訊いた。

彼女も貴久が悪くならないようにと必死だ。

「ああ。相応の準備が必要になるみたいだけど、ガルアーク王国の許可が下りれば沙月先輩も来られるみたいだ。ハルトさんの方は用事がどのくらい時間がかかるのかはわからないけど……」

と、貴久がそう答える。

「ハルトさんは……」

美春が絞り出すように声を出した。

「ハルトさんは何か言ってなかった？」

「……みんなのことをよろしくお願いしますって」

「他には？」

と、美春のすがるような眼差しに押されて、

「また……会えるからって」

貴久はつい希望を持たせるような言葉を告げてしまった。

なんて中途半端な真似をと悔いる。

「……行かなきゃ」

「え？」

ぼそっとつぶやいた美春の声が聞き取れず、貴久が疑問符を浮かべた。

「私、行かなきゃ。ハルトさんのところに」

美春が思いつめた表情で言う。

「無理だよ。この魔道船は時速百キロで空を飛んでいるんだ」

貴久が突き放すように告げる。

「お願い、貴久君。今すぐ引き返すか、私を降ろして」

美春が声を震わせて懇願した。

「ごめん。それはできない」

貴久が苦々しく顔を歪めて、頭(かぶり)を振る。

「ど、どうして？」

「離れたくないんだ。俺は美春と離れたくないし、美春のことを守ってやらなきゃと思っている」

貴久が自らの気持ちを吐露(とろ)した。

それは遠回しな告白に聞こえなくもない

「わ、私はそんなこと頼んだ覚えはないよ！」

美春が感情的になって、普段よりもずっと強い口調で言い返す。

彼女がこんなふうに誰かに自分の意見を主張することなんて滅多にない。
亜紀や雅人は驚きで呆気にとられており、言い返された貴久も僅かにたじろいでいる。
だが、貴久は決然と美春を見つめ返して、
「けど、現にハルトさんに守られなければ、美春はこれまで生きてこれなかっただろう？　この世界で自分一人で生きていけるのか？」
と、そう訊いた。
「それは……」
美春が返答に窮する。
今の彼女が誰かに守ってもらわなければこの世界で生きていく力がないことは事実だ。
そんなことは美春自身が一番よく理解している。
「亜紀も、雅人も、美春のことも、誰かが守ってあげないといけない。そうだろ？」
「そう、だけど……」
「その役目は俺がやりたいんだ。俺じゃ駄目なのかな？」
イエスか、ノーか、貴久が選択肢を突きつける。
「貴久君が駄目とか、そういう問題じゃなくて、私は……」
なんて言葉で言い表したらいいのか、上手い表現が見つからない。
美春はそれがひどくもどかしかった。

「ハルトさんじゃないと駄目な理由があるのか？」
「ハルトさんには恩があるから……」
「彼は別に恩返しなんか望んでいない。ガルアーク王国からも、セントステラ王国からも、美春達を保護した件で国からの恩賞の申し出も断ったくらいだ。恩に縛られないでほしい。そういうことじゃないのか？」
「……別に恩に縛られているわけじゃないよ。そうじゃなくとも私はハルトさんと一緒にいたいの」

一緒にいたい。
その言葉が一番しっくりきた。
貴久がひどく衝撃を受けたように顔を歪める。

「それは美春がハルトさんを好きだから？」
「好きとか、嫌いとか、私はそういう気持ちでハルトさんと一緒にいようと決めたんじゃないよ……」

美春が悲しそうに瞳を揺らす。

「じゃあどうして？」
「どうしてって……」

そんなことは美春本人にだってわからない。
もしかしたらハルトが自分の幼馴染だからかもしれないから？
ハルトの前世を知りたいから？
確かにそれもあるのかもしれない。
だが、仮にハルトが自分の幼馴染でなかったとしても、美春はハルトの傍に残る道を選ぶだろう。
最初からそう決めていたのだから。

「なあ、俺達はいつか地球に帰るかもしれないんだ。そのことはわかっているよな？　まさか地球に帰るつもりはないなんて思ってないよな？」

そうやって必死に語る貴久を、美春が黙して見つめていた。

「彼と一緒に暮らす先に美春が地球に帰る未来はあるのか？　地球でやりたいこととかあるんじゃないのか？」

言い切ると、貴久がじっと美春を見据える。

「……わからないよ」

ぽつりと美春が言った。

「え？」

「戻れるかどうかもわからないのに、他の人のことも、自分のことも……今なにが起きているかもわからないのに、そんな先のことはわからないよ」

美春が訴えかけるように語る。

貴久は唖然と反論の言葉を呑んだ。

亜紀や雅人もいたたまれない顔つきを浮かべている。

「……でも、今更引き返すわけにはいかないから。沙月先輩が来るまで、少し考える時間があったほうがいい。また後で話そう」

ややあって苦し紛れにそう言い捨てると、貴久は立ち上がり、部屋を後にするため歩き出した。

「貴久君！」

美春の呼び止める声が室内に響き渡る。

貴久は一瞬だけ足取りを緩めたが、迷いを振り捨てるように扉を開くと、そのまま退室してしまった。

「タカヒサ様」

サロンを出ると、リリアーナが騎士のヒルダと侍女のフリルを引きつれて立っていた。

「リリィ……」

リリアーナは静かにまっすぐと貴久の顔を見つめている。

貴久が気まずそうに視線をそらす。

「帰国したら三人の部屋を用意できるかな？」

「もちろんです」

「じゃあ、お願い。それじゃ、少し一人になりたいから」

呼び止められることを恐れるように、貴久は立ち去った。

☆★☆★☆★

フランソワの執務室を出て自室へ戻ると、リオの部屋の中で沙月が待ち構えていた。

既に女中がもてなしていたようで、じっと目をつむって椅子に座り、難しい顔でお茶を飲んでいる。

その身には白を基調とし、黒い装飾が刻まれたドレス状のクロースアーマーを着込んでいた。

「サツキさん。いらしていたんですね」
リオが声をかけると、沙月が真剣な眼差しを向けてきた。
「お帰りなさい。待っていたわよ」
「はい……。ただいま戻りました」
沙月とはフランソワと会う前に話をしたばかりだ。
その時にした話が話であったために、何となく重い雰囲気になる。
「これからちょっと付き合ってほしいの。時間はいいかしら？」
「ええ、構いませんが」
「なら決まりね。ついて来て」
そうして沙月に連れられ、リオは部屋を後にしたのだった。

☆★☆★☆★

時は少しさかのぼる。
城門で帰国する貴久達を見送った後、リオは貸し与えられた自室へと沙月を招いた。
お城の尖塔上層に宿泊している沙月の部屋とは異なり、リオが宿泊している部屋はお城の低階層にあるため、城門から移動するならこちらの方が近い。
低階層の壁はとても厚く窓は小さく作られているため、室内にいくつかある小さな正方形の窓から薄っすらと春の日差しが入り込んでいるが、室内を照らしているのは魔道具により作られた明かりである。
リビングにある椅子に腰を下ろし、沙月と二人きりで向かい合う。

「早速だけど、城門で言っていたキミの前世のことを聞かせてもらえるのかしら？」

沙月が単刀直入に尋ねると、リオがこくりと頷いた。

「俺の前世は天川春人という名の日本人でした」

「天川、春人……？　じゃあ今のキミの名前は？」

「この世界では俺の本当の名前ではありません。本当の名前はリオといいます」

リオが言うと、沙月がちょっとだけ首を傾げる。

「偽名……とは少し違うのかしら。どうして前世の名前を名乗っているの？」

当然の疑問だろう。

「詳しい説明は省きますが、俺は色々と面倒な過去を持ち合わせていまして。リオという名で活動するのは少しばかり都合が悪いんです」

「都合が悪い？」

「……ええ、まったくのとばっちりなんですが、昔とある国でちょっとしたいざこざに巻き込まれたことがありまして、リオという名を名乗るのは少し都合が悪いんです」

と、リオが事実をぼかして伝えた。

「なるほど……、でもキミの顔を知っている人はいるんじゃない？　その、大丈夫なの？」

沙月が心配そうに尋ねる。

「ここ数年ほど、俺はヤグモ地方まで旅していましたからね。成長した俺の顔を見てもすぐに同一人物だと気づく人はそうそういないんじゃないでしょうか。現に気づかれたこともありません」

一名、勘の鋭い少女がいたが。

「そっか……。なら、いいわ。それで、どうしてその天川春人だったキミのことを話そうと思ったのか、訊(き)いてもいいのかしら？」

リオは一つ一つ大まかに語った。

天川春人と綾瀬美春との関係。

千堂亜紀との関係。

それらを踏まえた上で自分の想いを伝えるべく、夜会で告白したことを。

沙月は小難しい顔をしてその話を聞いている。

「――じゃあキミは美春ちゃんを探して同じ高校に入ったの？　私と同じ高校に通っていたってこと？」

リオの話を聞き、沙月が信じられないといわんばかりに驚いた様子で尋ねた。

「まぁ同じ高校に通うとは知りませんでしたけど。一応、沙月さんの後輩になるんですかね」

リオが苦笑しながら答える。

「後輩……。キミが私の……」

沙月がいまいち実感が湧かないふうにつぶやく。

だが、やがて何かに気づいたように、沙月が首を傾(かし)げた。

「……ちょっと待って。おかしくない？」

「時系列がですか？」

リオが落ち着いた声で訊(き)いた。

「う、うん。春人君は大学生の時に亡くなったんでしょ？　それでこの世界に生まれ変わった。今の君は……」

「十六歳ですが、記憶が戻ったのは七歳の時です」

「……どういうこと？」

沙月が訝(いぶか)しげに漏らす。

「それは俺にもわかりません。ただ……」

言いかけて、リオが途中で言葉を切った。

「いえ、なんでもありません。そんなことより、話を本筋に戻してもいいですか？」

「うん……。キミは美春ちゃんのことが前世から好きで、告白、したんだよね」

「ええ」

リオが大人びて見える笑みを浮かべて首肯した。

「……いいの？　キミはこれでいいの？」

ぽつりと、沙月がつぶやくように尋ねる。
「何がですか？」
「行っちゃったのよ！　美春ちゃん、好きなんでしょう？　亜紀ちゃんだって、妹なんでしょう？」
叫ぶように語って、沙月がやるせなさそうに顔を歪める。
「ええ。だから打ち明けました。伝えた方が良いと思ったことはすべて」
リオが落ち着いた声色で答えた。
「伝えて、駄目だったからって、はい、わかりましたって、そんな簡単に諦められるものなの？　キミの気持ちはその程度の重さしかないの？」
「寂しくないって言えば嘘になりますけど、好きな人の恋なら応援するしかないですよ。亜紀ちゃんのことも、相手が嫌がっているのに無理に会おうとは思いません」
リオが妙に達観した笑みをたたえて言う。
「手紙……。あの手紙に書いたの？　キミの前世のこと」
沙月がぽつりと訊いた。
「はい」
「じゃあ……美春ちゃん達が貴久君と一緒に帰国したのは、その手紙を読んだことも関係しているの？」

「ええ、おそらくは」
「美春ちゃん達、何だって？」
「もう会えないと」
リオが淡白に告げると、沙月が表情を歪めた。
「嘘よ！」
沙月が叫んだ。
「嘘、ですか？」
「うん。美春ちゃんはそんなことを言う子じゃない」
「自信たっぷりですね」
断言する沙月に、リオが苦笑して言う。
「キミは信じられないの？　美春ちゃんのこと」
「信じていますよ。だから美春さんが安易にその結論を出したんじゃないだろうって思います。俺の自己満足で嫌な想いをさせてしまったとも」
リオがそう語ると、沙月が苦々しい表情を浮かべた。
「……ハルト君、ドライだってよく言われない？」
「そう言っていた人が一人いましたね」
リオの脳裏にセリアの顔が浮かぶ。
「一つ疑問なんだけど、どうして告白した時に手紙を渡さなかったの？」

「ちょうど渡そうと思ったタイミングで皆さんがバルコニーに来てしまったものですから」
「ああ、なるほど……。私達が邪魔しちゃったのか、ごめん」
と、沙月が申し訳なさそうに謝罪する。
「別に沙月さんが悪いわけじゃないですよ。雅人には心配しないでくれと言ったんですが、存外早く皆さんが探しに来て少し驚きました」
「確かシャルちゃんが二人がバルコニーの方に行くのを見たって言ったのよ。それで貴久君と亜紀ちゃんが動き出しちゃって……」
「なるほど」
リオが当時の状況を想像し、苦々しく笑みをたたえた。
「でも何となくわかったわ。キミが早めに手紙を渡そうとしていた理由が。渡したのは今朝になって？」
「ええ、美春さんが一時的に留守だったので、結局、貴久さんに渡してもらうことになりました」
「そうなんだ……。なら別に無理にシャルちゃんに付き合う必要もなかったのに」
と、沙月がそんなことを言った。
「一介の新人貴族が王族の誘いを断るわけにもいきませんよ。身分社会ですから」
「まぁ、そうだけど……。会社でいう仕事の付き合いみたいなもの、か。むぅ……」
何かが気にくわないのか、沙月が唇を尖らせる。

取引先との付き合いがあるからと、幼い頃に父親から自分との約束をすっぽかされた過去の体験を思い出してしまったのだ。
成長した今では理解できなくもないが、あまり好ましい出来事だとは思えずにいた。

「ハルト君なら夜中にでもこっそり忍び込んで手紙を渡せたんじゃない？」

と、沙月が不満そうに尋ねる。

「無理ですよ。尖塔の上層階にある沙月さんの部屋と違って、下層にある俺の部屋には外へ出入り可能なテラスがないんです。開錠して扉を開けて廊下に出れば、その時点で見張りの衛兵に必ず気づかれます。ただでさえ城内で俺の行動は監視されている節がありましたし、そうでなくともお城の中には警戒態勢で警備が厳重でしたから」

外敵の侵入経路を限定するため、通常、お城の低階層には換気用に作られた人の出入りが不可能なサイズの窓しか備わっていない。

「あー、もう！　ならいっそ口で伝えなさいよね！」

と、沙月が憤慨しながら言う。

「……沙月さんは何に拘(こだわ)って怒っているのですか？」

と、リオが不思議そうに尋ねる。

「美春ちゃん達の反応がわからないことよ！　キミの言うこともわかるけど、それでも私は美春ちゃんが何も言わずにキミのもとを立

ち去るような子とは思えない。面と向かって話をした方が良かったんじゃないの？」

沙月が咎めるように言った。

確かに話が拗(こじ)れるのは目に見えていたのかもしれない。

美春はともかく、亜紀は感情的になって、話したいことも話せなくなる可能性が高かったのだろう。

だが、それでも、口で伝えた方が良いと、沙月は思った。

「そう、ですね。美春さんに告白する時に、そうしようとはしたんですが……」

言いながら、リオが口許に自嘲(じちょう)を覗かせる。

「その前に私達がバルコニーに乱入しちゃったのか」

自力で解答にたどり着き、沙月が盛大に溜息を吐く。

リオは告白して、前世のことも口頭で簡単に伝えて、その上で手紙を渡そうとしていたのだ。

だが、その前に貴久達がバルコニーにやって来て、タイミングを逃してしまった。

そういうことだろうと考えて、沙月がもどかしそうな表情を浮かべる。

しばし、二人の間に沈黙が降りた。

「それで……まだ肝心なことを聞いていないわ」

やがて、ぽつりと沙月がつぶやいた。

「何でしょうか？」

「どうして私にこの話をしようと思ったの？」
訊いて、沙月は真剣な眼差しでリオの顔を覗きこむ。
「次に美春さん達と会った時に、俺のことには触れないでほしいんです」
リオが簡潔に答える。
すると、一瞬、沙月は何を言われたのかわからず、呆けてしまった。
「……どういうこと？」
「美春さん達から俺の話題を振ってくるのならともかく、沙月さんからは俺の話題を振らないでほしいんです」
「どうして？」
沙月の表情がこわばる。
「そうすることで美春さん達に嫌な思いをさせてしまうかもしれませんから」
「そんなことっ！」
言いかけて、沙月が苦々しく言葉を呑んだ。
弱々しく笑みを浮かべているリオの顔を見ていると、息が詰まりそうになってしまった。
自分が熱くなっているのがよくわかる。
沙月は荒々しく嘆息して心を落ち着けると、
「……ねぇ、美春ちゃんが貴久君のことを好きかもしれないって、知っていたのよね。なのにどうして告白しようと思ったの？」

ややあって、そう尋ねた。

「結果はわかっていても、何も伝えないで生きていくよりはマシだと、そう思ったからです。前世の俺はそうして後悔して生きていましたから」

「……そっか。じゃあ、この世界で再会してすぐに美春ちゃんに告白しなかったのはどうして？」

「色々と理由はありますが、怖かったからです。自分が本当に天川春人だったのか、仮にそうだとしても今の自分に天川春人の何かが残っているのか」

「……どういうこと？」

沙月がいまいち理解しかねたふうに首を傾げた。

「それを証明する客観的な証拠が何もないですから。自分の前世が記憶通りの人間だったかなんて、どうやって証明すればいいんですか？」

リオが淡々とした口調で尋ねる。

「それは……」

沙月は即座には返答しかねた。

「まぁ、それはあくまできっかけにすぎません。要は自信が持てなかったんです。仮に自分の前世が天川春人だったとしても、今の俺は肉体的にまったくの別人ですし、価値観もだいぶかわってしまったから、そんな自分に自信が持てなくて、それが怖かった。まぁ、

沙月さんと会って話して、ようやく決心がついたんですけどね」
言って、リオが小さく肩をすくめる。
「じゃあ……キミは納得しているというの？　これで、こんな終わり方でいいというの？」
「……ええ」
わずかに間を置いて、リオが首肯した。
「本当に？」
「できなくたって、するしかないんです」
疑心的な沙月に、リオがきっぱりと言いきる。
沙月は悲しげに表情を曇らせた。
「……ごめん。私ならそんなふうには割り切れないと思う」
「そりゃあ人によって価値観はそれぞれでしょうから。沙月さんはそれでいいと思いますよ。でも、美春さん達にこの件を追及することは止めてほしいんです。お願いします」
リオが深く頭を下げて頼む。
沙月は視線をそらして黙殺した。
「それともう一つ。これはお願いというか、提案なんですが」
「……何？」
沙月がおそるおそる尋ねる。
「今後、俺達は少し距離を取った方がいいかもしれません。今日以

降はこうして会うことも避けた方がいいです」
沙月はきょとんとした表情を浮かべると、
「な、何でよ？」
泡を食って訊(き)いた。
「俺という存在がガルアーク王国に利用されている節があります。あまり親しくなりすぎると、取りこまれかねませんよ？」
リオが冷ややかに告げると、沙月は愕然と息を呑んだ。
「そんなこと……」
沙月が言葉に詰まる。「ない」とは言いきれなかったのだ。
実際、今、沙月がこの国の貴族の中で最も親しい相手は断トツでリオである。
ガルアーク王国の人間と一定以上親しくせずにこの数か月を過ごしてきた沙月であったが、美春達と再会したことによって風向きは少しずつ変わり始めている。
「フランソワ国王陛下の思惑がわからない以上、当面は距離を置いた方がいいのではないでしょうか？」
警戒を促すリオの発言に、沙月が躊躇(ためら)いをたたえた眼差しを向けて返す。
「少し……考える時間を頂戴」

そう言うのが精一杯だった。
「わかりました。俺は明日にでも王都を発ちますので」
告げて、リオが席を立とうとする。
「待って！」
沙月が呼び止めた。
「何でしょう？」
「少しだけ聞かせて」
「はい」
リオが腰を下ろし、再び目の前にいる沙月と向き合う。
「……キミは清算しようとしているんだよね？」
ぽつりと、沙月が尋ねた。
「清算……ですか？」
リオが小さく首をひねる。
「美春ちゃん達との関係。何もなかったことにしようとしているってワケ？」
沙月が言うと、リオが目を見開いた。
「……ええ、そうですね」

答えを返すのに、わずかに間があったのを、沙月は見逃さない。
「自棄になっているわけじゃないのよね？」
「違いますよ」
今度は決然とした口調で返された。
「そう……。ありがとう。それじゃ、また後で」

☆★☆★☆★

リオは沙月に連れられ、お城にある広大な練兵場にやって来た。
いたる場所で騎士や兵士たちが訓練にいそしんでいたが、二人が姿を現すと、慌てた様子で位の高そうな騎士数名が駆け寄ってくる。
その中にはリオの知り合いの騎士であるカイルもいた。

「これはサツキ様にハルト卿。お待ちしておりました」
「突然にごめんなさいね。お願いした件なんだけど――」
「既に準備はできております。少々お待ちを」
沙月が事情を説明し、壮年で年長の騎士がスムーズに対応する。
どうやら事前に何らかの打ち合わせをしていたようだ。
「おい」
「はっ」
壮年の騎士が呼びかけると、カイルともう一人の若い騎士が急ぎ足で走りだした。
そうしてすぐに訓練用に作られたグレイブと呼ばれる木製の短槍

二本を抱えて戻ってくる。
グレイブの長さはゆうに二メートル強はあり、二メートル半には少し届かないといったところだ。
一人の騎士がグレイブを沙月に手渡し、もう一人の騎士がリオにもグレイブを手渡す。
大した説明もされずにこの練兵場へ連れてこられ、武器を握らされたわけだが、その動機や狙いはともかく、何が行われようとしているのか、ここまできて予想がつかないリオではない。
「さ、ハルト君、試合をしましょうか」
不敵な笑みを浮かべて、沙月がニコリと告げたのだった。

第１１３話　気にくわないから

場所はガルアーク王国王城の練兵場。
リオは木製の短槍を掴み、沙月と向かい合っていた。
「あの、どうして試合をするんでしょうか？」
手にした槍の握り心地を確かめながら、リオが苦笑し尋ねる。
「気にくわないからよ」
沙月がムスッと答えた。
簡潔だがいまいち要領を得ない。
リオは追加で質問を送ってみることにした。
「えっと、何がでしょう？」
「ハルト君！」
答えて、沙月がビシッとリオを指差す。
「はは……」
呆気にとられ、リオが思わず引きつった笑みをたたえる。
沙月は目をスッと細め、
「ハルト君が美春ちゃんのことを好きな気持ちはよくわかったけど、最初から駄目かもって諦めていたのが気にくわない。駄目なら駄目で仕方ないって、一人で自己完結して納得しているところも気にく

わない。キミの都合も言っていることも理解できるけど、理性で納得はできても、感情では納得できない！」

よほど不満に思っていたのか、唇を尖らせて一気にまくしたてた。

「……それで、試合を？」

「そう。色々と考えがまとまらなくてモヤモヤしているの。私、感情を引きずるのってあまり得意じゃないし、でも、何かきっかけがないとこのモヤモヤは晴れそうにないし、キミに言われたことの答えだって出せそうにないし。……だから、試合。試合するの！」

そこまで気持ちを吐き出して少しはすっきりしたのか、沙月は深く息をついた。

正直、理由になっていない。

だが、沙月が試合を行おうとしている動機を、リオは何となく察することができた。

「なるほど」

口許（くちもと）に小さな微笑をたたえ、リオが頷く。

「私なりに色々と考えてみたけど、ハルト君は一方的に言いたいことを言ってさ。何かだんだん腹がたってきて。だから、身体を動かしてスッキリさせたいの。いいでしょ、付き合ってもらっても？」

「いいですよ。でも、大丈夫なんですか？　勝手にこんな真似をして」

沙月は勇者だ。

明確に序列を決められているわけではないが、勇者と言えば権威的には国王と同等以上に位置付けられてもおかしくはない。

そういった事情がある以上、沙月と試合をして怪我でもさせてしまえば事だろう。
たとえ多少の怪我なら魔法で治癒できるとしてもだ。
「かまわないわよ。城から勝手に出ないのなら、いちいち行動を制約される覚えはないし」
沙月があっさりと言い放つ。
リオは少し意外に思ったが、勇者である沙月本人が許可を出すのならば問題はないのだろう。周囲にいる者達が止める様子もない。
それどころか、話を聞きつけたのか、既に周りに人だかりができ始めているではないか。
神魔戦争の歴史で語られている勇者として今世に召喚された沙月、『黒の騎士』となり一気に知名度を上げたリオ――この二人の組み合わせが注目を集めないはずがなかった。
中には騎士をはじめとする武官ではない貴族の姿まである。
「あ、槍は使える？　美春ちゃん達に棒術を教えていたって聞いてはいたけど」
「ええ、一応は」
「なら問題ないわね。言っておくけど、私が女とか勇者だからって手加減はしちゃ駄目だからね。接待試合は認めません」
と、沙月がきっぱりと釘を刺す。
「はい、わかりました」
リオが苦笑して頷いた。
「で、審判役の人だけど……」

言って、沙月が周囲を見渡し、一人の騎士に視線を向けた。
「えっと、カイルさんでしたよね。審判役を頼んでもよろしいでしょうか？」
沙月が審判役に指名したのはカイルだった。
夜会で賊の襲撃を受けたことをきっかけに、リオとも面識がある青年だ。
「はい、喜んで！　ルールは騎士の練習試合と一緒でよろしいでしょうか？」
勇んで首肯し、カイルが尋ねる。
「私は構わないけど。ハルト君、ルールの説明は？」
「お願いします」
「では、自分が説明いたします」
リオが頼むと、カイルが名乗り出る。
「時間制限はなし。一本勝負。寸止めで決定的な状況に持ち込むか、顔面以外の部位に有効打を当てた方の勝利とします。武器を手放しただけでは敗北となりませんのでご注意ください。以上が基本的なルールとなります」
「承知しました」
カイルの説明を頭に叩き込み、リオが頷いた。
「なお、魔法と魔道具の使用は身体能力の強化に限って可とするこ

ともできますが……」
「あ、私はアリがいいかな」
と、沙月がリオの反応を窺(うかが)いながら要望を告げる。
「俺は構いませんよ。ただ、身体強化の魔法は使えないので、魔道具を貸していただけるとありがたいです」
人間族の前で精霊術を使うことは極力避けたいため、リオは身体能力の強化ができる魔道具の貸出しを頼むことにした。
身体能力を強化する魔法として『身体強化魔法(ハイパーフィジカルアビリティ)』が存在するが、この魔法は騎士であれば誰もが利用できるというわけではない。
魔法を使用するためには術式契約によって体内に術式を取りこむ必要があるが、個々の術式を取りこむにあたっては難易度や適性というものが存在するからだ。
つまり、魔力の操作が未熟だったり、適性がなければ術式契約は成功しない。
そういった者達のために開発されるのが魔法と同じ効果を秘めた魔術を封じた魔道具であった。
ただし、魔法が使用者の任意である程度の出力調整ができるのに対し、魔道具で魔術を発動させると一部の例外を除いて出力調整ができないというデメリットが存在する。
「では、こちらをお使いください」
あらかじめ準備していたのか、カイルはリオに指輪を差し出した。
「ありがとうございます。『身体強化魔術(ハイパーフィジカルアビリティ)』」
リオが礼を告げ、受け取った指輪を装着する。

続けて呪文を唱えると、指輪から術式が浮かび上がり、リオの身体を包み込んだ。

「準備ができたみたいね。早速、試合と行きたいんだけど、一つ言っておくことがあるの」

「はい、何でしょう？」

「神装の身体強化って魔法よりも性能が良いみたいなのよ。私の意志に呼応して勝手に身体が強化されちゃうみたいでさ。一応、意識してセーブはできるんだけど、白熱すると難しいというか」

「問題ありませんよ。実戦では条件が完全に互角なことなんてまずありませんから」

「……へぇ、流石、実戦経験のある人の言葉は違うわね」

あっさりと流したリオに、沙月が感心したように目をみはる。

「そんな大したものじゃありません。……始めましょうか、カイルさん」

翳（かげ）りを含んだ笑みを浮かべてかぶりを振ると、リオは試合の開始を促した。

「はい。サツキ様も準備ができたようでしたら、試合を開始します」

「私もかまわないわ」

沙月が首肯したのを確認し、カイルが口を開く。

「それでは、両者、距離をとって武器を構えてください」

カイルの言葉に従い、リオと沙月が十メートルほどの距離を取って向かい合う。

二人は揃いも揃って左足を一歩前に出し、手にした短槍を中段に構えた。
あらゆる動きに転じやすく、攻めと守りの両方に適した基本となる構えだ。

「それでは――」

カイルが空に向けて手を高く挙げる。
数瞬の後、

「はじめ！」

大きな声で叫んで、カイルが手を振り下ろした。

「やあっ！」

掛け声と同時に、沙月が地面を蹴り、爆発的な加速を生み出してリオに接近する。
射程に入ると同時に最速の突きをリオにお見舞いした。
が、リオが冷静に槍を絡め、綺麗にいなしてしまう。
一帯からどよめきの声が上がり、沙月の顔にも驚愕の色が浮かぶ。

「先手必勝と思って一撃を放ったんだけど、流石ね」

迅速にバックステップを踏んで距離をとってから、沙月が言った。

「速かったですよ。でも当てるつもりはなかったでしょう？」

リオが落ち着いた声で答える。

「侮(あなど)ってもらわれたら嫌だからね。私の実力は知らないだろうし、油断しているようなら目を覚ましてもらおうと思ったんだけど……、いらぬ心配だったみたいね」

沙月はくすりと微笑んだ。

「ええ、悔いが残らないようにどうぞ」

リオが薄く笑みをたたえて告げる。

「そう？　じゃあ、いくわよっ！」

槍と槍の先端が触れ合うかどうかの距離を保ったまま話していた二人であったが、沙月が一歩前に踏み込んで槍を動かし、リオの槍をはじいた。

戦闘再開だ。

二人が強化された身体能力で存分に槍を振るい打ち合う。

（身体能力が上がっているのに、動きが雑じゃない。綺麗な槍捌きだ）

と、リオが沙月の技量に感心する。

確か沙月は薙刀を習っていたと言っていたはずだ。

基本が身に付いていないと、魔法や精霊術で身体能力を上げても十全に技術を発揮することは叶わない。

身体能力が上がった者同士の戦闘は高速で動き回ってナンボといった面があるため、足の運びに関して必ずしも基本が通じない場合もあるが、基本的には基礎が物を言う。

グレイブは薙刀と形が似ているおかげか、それも幸いしているのだろう。

時には槍を薙ぎ、時には槍を突き、時には槍をいなし、時には走り回る。
高速かつ高度な槍の応酬を目の当たりにして、周囲のギャラリーもどよめきながら二人の試合を見守っていた。

「やるじゃない！」

沙月が声を弾(はず)ませて言った。

「ありがとうございます。沙月さんも素晴らしいですよ」

息切れもせずにリオが告げる。
沙月はフッと笑みを浮かべると、

「まだまだ余裕みたい、ね！」

連続の突きをお見舞いすることで応じた。
一息で五突きという怒涛のラッシュがリオに襲いかかる。
だが、リオはゆっくりと後退しながら、冷静にそれらを捌(さば)いた。
最後に放たれた突きを見切って受け流すと、左手を石突(いしづき)の少し上まで滑らせ、槍を振るって足払いを仕掛ける。

「っと！」

槍を受け流され多少バランスを崩していた沙月だったが、咄嗟(とっさ)にジャンプして躱(かわ)す。
リオの槍が虚空を振り払った、が。ぴたりと動きが止まったかと思うと、くるりと向きが回転し、沙月に向かって吸い込まれるように再接近した。

「きゃ！」

とっさに槍を構え、沙月が下から迫ってきたリオの攻撃をかろうじて受け流す。

だが、反動で身体が軽く吹き飛び、勢いが余ったまま地面に着地した。

沙月が勢いを殺すようにバックステップを踏んで、リオから距離をとろうとする。

しかし、リオは一気に間合いを詰め、沙月に連続の突きを見舞わせた。

「くっ」

沙月がリオの目をじっと見据え、両手で槍を動かし攻撃を捌(さば)いていく。そうして無数の突きを受け流しながら、何とか足運びを整える。

すると、リオが突きを引くと見せかけて、フェイントで槍を横に振るった。

横から迫りくる槍を、沙月は姿勢を低くしてひらりと避ける。そうしてから、カウンターで素早い突きをリオに放った。

リオが柔軟な足の運びで身体を動かし、スレスレの位置で突きを避ける。

「おお！」

瞬きの隙すらないような凄まじい槍撃の応酬に、周囲の観客達の視線にも熱がこもっていく。

「なんと互いに見事な槍捌き」

「サツキ様だけでなく、ハルト卿も見事だな。互角の戦いではない

か」
「いや、サツキ様が押されているようだ」
などと、周囲にいるギャラリーが好き勝手に講評をたれていく。
「なんか見世物みたいになっているわね！」
言って、沙月が上段から槍を振り下ろす。
だが、リオは沙月の槍を上段で受けて器用に力をいなし、明後日の方向へと捌(さば)いてしまった。
勢い余って沙月の槍が地面に押し付けられる。
「お喋りしている余裕があるんですか？」
「っ、やってくれるわね！」
沙月は慌てて槍を上に振るい、リオの胴を薙ぎ払おうとした。
しかし、リオは軽く跳躍し、空中でくるりと身を翻(ひるがえ)すと、曲芸染みた動きで沙月の槍を避けてしまった。
それから着地するまでの一瞬の間に、がら空きになった沙月の胴めがけて槍を薙(な)ぐ。身体の動きと槍の動きを連動させた見事な一撃だ。
「きゃ！」
本能的な危機感を覚えて、沙月が勢いよく飛び退いた。
刹那、リオの槍が部分鎧を装着した沙月の胴をかする。
沙月は距離をとって地面に着地したところで、
「なーんか、余裕って感じね」

と、小さく息をついて、ちょっとだけ拗(す)ねた口調で言った。
「そんなことはありませんよ」
槍を構えたまま、リオが苦笑してかぶりを振る。
「いや、手を抜いているってわけじゃないんでしょうけど、何か余裕を感じるし」
沙月がジトっとした視線をリオに向けた。
「沙月さんだって力をセーブしているじゃないですか」
「そうなんだけど、肝心の実力と経験値に大きな差を感じるのよ。正直、身体能力が同じなら普通に戦っても私に勝ち目はないと思う」
「意外ですね。沙月さんともあろう人が最初から勝利を諦めちゃうんですか？」
そう言って、リオは不敵に微笑み沙月を見据えた。
「ぶ、分析よ、あくまでも分析！　勘違いしないでよね、一泡吹かせてやるんだから！」
沙月が意気込み、槍を構える。
「では、試合続行と行きましょう」
そう言って、リオは前へと足を踏み出した。
槍を握る沙月の手に力がこもる。どんな攻撃にも対応できるよう、身体の力は抜いて意識をリオに集中させた。

「甘いわよ！」

叫んで、沙月が完全にリオが間合いに入るよりも先に槍を突きだす。

突き終えた瞬間にはリオの胴にクリーンヒットする絶妙な一撃だ。

しかし、リオが自在に槍を振るって、軌道を逸らす。

だが、沙月もその程度で怯んだりはしない。

小刻みに突きと薙ぎのコンボを放ち、数瞬の間、沙月がリオを圧倒するように攻撃を加える時間が流れる。

ある時、沙月がやや大振りに槍を横に薙いだ。

リオが姿勢を下げてそれを避ける。

だが、沙月はあらかじめそれを予想していたのか、焦ることなく槍の軌道を変えて、姿勢を下げたリオに向けて槍を振り直した。

しかし、リオはふわりと跳躍すると、空中で沙月の槍の太刀打ちを踏みつけ、そのまま体重を下に押し込み、槍の頭を地面に押さえつけてしまった。

その神業的な動きに、「おお」と周囲にどよめきが生じる。

次の瞬間、リオは沙月の左首筋にゆっくりと槍を突きつけた。

どのように見ても勝敗が明確についたのは明らかだ。

沙月は一瞬だけ呆けた表情を浮かべると、

「……負けたわ」

と、自らの負けを認めた。

「勝者、黒の騎士、ハルト卿！」

カイルがリオの勝利を宣言する。

すると、静まり返っていたギャラリーが、歓声を上げ始めた。

「ありがとうございました」
リオが軽く一礼して試合終了の挨拶を告げる。
「ありがとうございました。……あーあ、結局、勝てなかったか」
妙にすがすがしい声で、沙月が言った。
「いえ、ヒヤッとしましたよ。時間が経つにつれて上手くなっているのがわかりました」
「うん、なんかこの試合で強くなれた気がする。身体を動かしたら少しスッキリしたし」
そう言って、沙月が軽く伸びをする。
「なら良かったです。すみませんでした。俺のせいで……」
微かに表情を曇らせ、リオが告げた。
「まぁ、モヤモヤしたのは確かだけど、ハルト君が謝るべき理由はないわ。こうして付き合ってもらったしね」
苦笑し、沙月がかぶりを振る。
「考えはまとまりそうですか？」
「あー、うん。そのことなんだけど、さ。今日の夜、私の部屋で食事しない？　その時に話をするから」
「ええ、構いませんよ」
「本当？　じゃあ、決まりね」

リオが首肯すると、沙月は薄く微笑んだ。
「はい。……なら、そうですね。品目を減らすように伝えてくださいますか？　普段の半分くらいで。お腹も空かせておいてくれると助かります」
口許に手を当て逡巡（しゅんじゅん）すると、リオが言った。
「え？　うん。いいけど……どうして？」
「それはその時のお楽しみです」
きょとんと首を傾げる沙月に、リオが愉快そうに笑みを浮かべて告げた。

☆★☆★☆★

沙月との試合を終えると、リオはクレティア公爵邸へと足を運んだ。
リーゼロッテとは事前にアポイントを取っていたため、スムーズに面会が認められる。
応接室に案内されると、そこにはリーゼロッテだけでなく、彼女の両親であるセドリックとジュリアンヌの姿もあった。
リオが三人と向き合う形でソファに腰を下ろすと、面談が開始される。
「明日、王都を出立することにしました。短い時間でしたが、クレティア公爵家の皆様には本当にお世話になりました。ありがとうございます」
と、リオがまずはお礼とお別れの挨拶を口にした。

「いや、大したことは何もできなかったが、楽しいひと時を過ごすことができたよ。君さえ良ければ魔道船で私の領地まで送迎しようとも思っていたんだが……」
「申し訳ございません。ありがたいお話なのですが、所用もございますので」

と、リオが折り目正しく誘いを断る。

「そうか。通常の貴族と序列こそ異なるが、君はもう我が国の貴族だ。貴族として何を為すのも為さないのも君の自由だが、良ければ今後もお付き合いいただけると嬉しいよ」

滑(なめ)らかに、よく通る声で、セドリックが語った。

「恐れ入ります。実は貴族としての家名が決まりましたので、今日はそのご報告も兼ねて伺(うかが)ったのです」
「ほう、それはめでたいね。何という家名にしたんだい？」

セドリックが興味深そうに訊(き)いた。

「アマカワです。ハルト＝アマカワ、今後はそう名乗ることにしました」
「ほう、アマカワ、か。聞きなれない響きだが、不思議と耳に馴染む。良い家名だね」
「ありがとうございます。珍しい響きなのは、両親の故郷で用いられている言葉を参考にしたからでしょう」

リオがしれっと偽の答えを口にする。

「ああ、君のご両親はヤグモ地方のご出身だったね。なるほど、ならば納得も……ん？」

カチャリと紅茶のカップがティーソーサーにぶつかる音が鳴り響き、セドリックが話を中断する。

音をたてた張本人――リーゼロッテに周囲の視線が集中した。

「どうしたんだい、リーゼロッテ？　珍しいね」

紅茶を飲む際にカチャカチャと音をたてるのはマナー違反とされている。

普段は完璧に作法を踏まえて優雅に紅茶を嗜（たしな）むリーゼロッテらしかぬミスに、セドリックが目をみはって尋ねた。

「あ、いえ……、申し訳ございませんでした。とんだ無作法を……」

リーゼロッテがぎこちない笑みを浮かべて謝罪する。

「それは構わないが、具合でも悪いのかい？」

と、セドリックが愛娘を心配する。

「大丈夫です。ちょっとうっかりしてしまったようです」

「ふふ、ハルトさんの前だから緊張しているのかしら？」

かぶりを振ったリーゼロッテに、ジュリアンヌがお茶目な笑みを浮かべて言った。

「あ、あはは、お母様……」

リーゼロッテが苦笑いを浮かべて言葉を濁(にご)す。

「……まさかね」

リーゼロッテの口が小さく開いたのを、リオは見逃さなかった。

第１１４話　沙月の気持ち

リオはディナーのために沙月の部屋へと訪れていた。
大きく豪華なテーブルに座り、沙月と向かい合う。
室内にいる人間はリオと沙月の二人だけだ。
本当はＶＩＰの食事中となれば給仕が控えているのが一般的だが、プライベートな時間がなくなることを嫌い、沙月は付近に人を置くことはしていない。
卓上には豪華な料理が並べられているが、その品目は見るからに少なく、お腹いっぱいに食べるにはちょっと物足りなさそうに見える。

「言われた通り献立を削って食事の量を減らしてもらったけど、春人君これで足りる？」

小首を傾(かし)げ、沙月が窺(うかが)うようにリオの顔を覗(のぞ)きこんだ。

「ええ、むしろ多すぎるかもしれません。『解放(ディスチャージ)』」

リオが愉快そうに笑みを浮かべて呪文を唱えると、卓上の空きスペースに出来たての料理が盛られた皿と鍋が現れた。

「うっそ……」

目と口を開けて、沙月がぽかんと机の上を見つめる。
だが、漂い始めた料理の匂いに気づくと、ハッと顔つきを変えた。

「って、これって！」

「はい、和食です」
「和……食……」
「それが炊き立ての白米、そっちがけんちん汁、こっちが煮物で、これが長芋のわさび漬けですね」
唖然と硬直している沙月に、リオがメニューの解説を行う。
しばしすると沙月は目をキラキラと輝かせて、
「た、食べていいの？　これ、ほ、本物よね？　本物の和食よね？」
ずいっと身を前に突きだして、そう尋ねた。
「はい。夜会で沙月さんが和食を食べたそうにしていたので。今回の件のお詫びも兼ねて、どうぞ」
と、リオが笑顔で言うと、
「あ……、あ、ありがとう！　春人君、好き！」
沙月が嬉しそうに礼を告げた。
「大げさですよ」
言って、リオが苦笑する。
「そんなことないわ！　大好……って、ち、違うわよ！」
反射的に言葉を紡いだ沙月だったが、途中でその意味に気づき慌てて発言を否定した。

「す、好きっていうのは、そういう意味じゃなくて！　料理、そう！　料理のことよ！　勘違いしちゃ駄目なんだからね！」

と、沙月が顔を真っ赤にして発言を訂正する。

「はは、わかっていますよ」

「もう！　ホントに違うんだからね！　わかっているの？」

可笑しそうに笑うリオを、沙月がジト目で睨(にら)む。

「わかっていますから。それより、冷めないうちに早く食べましょう」

リオが笑いを堪(こら)えて告げる。

「う、うん。そうね。折角の食事だし……」

それ以上ムキになって否定しても墓穴(ぼけつ)を掘(ほ)るだけと判断したのか、沙月はリオの提案に乗ることにした。

リオが白米とけんちん汁をよそって、沙月に配膳する。

準備ができたところで、二人が声を揃えて「いただきます」の言葉を口にした。

「美味しい……」

熱々のけんちん汁を一口すすると、沙月がぼそりと呟いた。

懐かしい故郷の味が舌から全身にじんわりと染み渡り、ホームシックで渇きかかっていた沙月の心を潤(うるお)していく。

それから、沙月は黙々と食事を口に運び、舌鼓(したづつみ)を打つことを繰り返し続けた。

やがて、食卓の上に並べられた料理が綺麗に片づけられると、
「食べるのに夢中になっちゃうなんていつぶりだったかな。ついつい食べすぎちゃったよ。ご馳走様、春人君」
嬉しさと哀愁(あいしゅう)が混在した面持ちで、沙月が言った。
「なら、作った甲斐があります」
「春人君、いつもこんな料理を持ち歩いているの？」
「ええ、普段作りすぎて余った料理を色々と」
「まぁ、家を持ち運びしているくらいだもんね。温かい食べ物を持ち運んでいても、今更驚いたりはしないけど……」
そこまで語って、沙月はちらりとリオを見た。
「キミ、夜会で話した時、お米も醤油も味噌も、シュトラール地方には流通していないって言ってなかったっけ？」
「流通していないのは本当ですよ」
「……じゃあどうして春人君は持っているのかな？」
「細かいことはいいじゃないですか」
沙月から向けられる意味ありげな視線を、リオは苦笑して流そうとした。
「いや、よくないから。日本人としてこれだけの品を捨て置けないから。入手ルートがあるなら、教えてほしいくらいよ！」
つい先ほど食べた和食に用いられていた食材は、そのどれもがお嬢様育ちの沙月の舌をも唸らせるほどに上質な品々であった。
もちろん作り手の腕も良いのだろうが、食材も最高級品でなけれ

ばあの味はアマチュアには出せないと断言できる。
だから、できることなら、いや、是が非でも、沙月は常食としてそれらを手元に確保しておきたい欲求に駆られた、が。

「……実をいうと、すべて俺がシュトラール地方の外に出向いて仕入れてきたものなんです。なので、市場には流通していません」
「う……。ちなみに、その生産地はこの国からどれくらいの場所にあるのかな？」
「ここから遥か東のヤグモ地方……おそらく徒歩で数年はかかるんじゃないかと。膨大な魔力に物を言わせて身体強化をして進めば大幅な時間の短縮は可能ですが、道中はひたすら道なき道を進むことになりますし、危険も大きいです」
「そりゃ無理だわ……。よくそんな場所に行ったわね」

がっくりと肩を落とし、沙月が言った。

「ご存知の通り俺は空を飛べますからね。人より魔力も多いですから、現代日本人がヨーロッパに旅行する感覚で行けるんです」
「ああー、なるほど。しかも春人君、四次元収納できるもんね。輸送にあたって積載量の制限もないのか。なんかずるいわね……」

沙月がむうっとした感じで唇を尖らせる。

「すみません。『時空の蔵』のことを含めて、俺は色々とこの地方では入手不可能な品を保有しています。なので、これ以上のことは可能な限り隠しておきたいんです。不必要に見せびらかして第三者から目をつけられたくはないので」

と、リオが申し訳なさそうに語る。

「うん、キミ、規格外すぎるわ。正直、私なんかよりずっと利用価値があると思う」

この世界の常識を覆す圧倒的な機動力と輸送力。

権力者ならば喉から手が出る程に欲しがるだろう。

正直、米や醤油に味噌を譲ってくれと言いたい気持ちは山々だが、それを言えばリオに迷惑をかけることになるのは容易に想像がつく。

情報漏えいの観点から言えば、こうして沙月に和食を食べさせること自体が好ましくなかったはずだ。なのに、リオは沙月に和食を食べさせてくれた。

沙月はその信用を裏切りたくはない。

とはいえ、残念な物は残念だ。

「となると、この味を日常食として味わうことはできないのかぁ……。うう、こんな美味しい食べ物があるってわかっているのに」

沙月は未練がましく嘆息した。

「本当にすみません。いっそ食べなかった方が良かったりしましたか？」

リオがすまなそうに尋ねる。

「いや、それはないから！　こんなに美味しい物を知らずに生きているなんて人生損しているもの。そりゃ頻繁に食べられないのは残念だけど、またこっそり食べさせてもらえばいいんだし。春人君家のお風呂もつけて、ね？」

語って、沙月が窺うようにリオの顔を見る。

「……そうですね。機会があれば」

一瞬、リオは困ったような顔をしたが、すぐに誤魔化すような笑みを浮かべ直した。

すると、何かを察知したのか、

「やだ！」

突然、沙月が叫んだ。

リオがわずかに目を見開く。

「沙月さん？」

「やだよ。このままお別れなんて嫌。春人君、また会ってくれるんだよね？　ちゃんと約束してよ、ね？」

と、沙月が悲痛な表情で尋ねた。

縋（すが）るような目つきでリオを見つめる、が。

「……」

リオは黙って見返すだけだった。

「な、何よ、何なのよ？　何も話してくれないで、こっちの気持ちも考えないで、自分一人で全部決めちゃって！　もう会わない方がいいだなんて。これはお別れの晩餐なの？」

沙月が小さなその手で机をたたき、立ち上がる。

「私は嫌よ！　これっきりだなんて。美春ちゃん達とのことは関係なく、今後もキミとは友達でいたい！」

「友達、ですか？」

リオが小さく目をみはる。

「そうよ、友達よ！　まだ出会ったばかりだけど、私はそう思っているわ！　春人君だってそう思っていてくれているだろうって信じていた。違うの？」

「……いえ。ありがとうございます、沙月さん」

かぶりを振って、リオは嬉しそうに少しだけ口許をほころばせた。

沙月が自分のことをそんなふうに思っていてくれたなんて、申し訳ないと同時に嬉しいと思う気持ちが溢れ出てきたのだ。

「だったら、今後は疎遠になろうだなんて、そんな哀しいことは言わないでよ！」

沙月が怒った様子でリオに語りかける。

リオを心の底から友達と思っているからこそ、沙月はここまで強く憤りを感じているのだろう。

せっかく仲良くなって、これからもっと仲良くなっていくはずだったのに、いきなりリオからもう会わない方がいいだなんて言われたら、ショックを受けて哀しい気持ちになってしまうのも無理はない。

「王様に利用されかねないから距離をとろうなんて、そんなの建前でしょ？　本当は美春ちゃん達の事があるから、私とも距離をとろうとしているんじゃないの？」

「……」

図星なのかもしれない。

リオは咄嗟(とっさ)に言い返すことができず、言葉に詰まってしまった。
沙月はムッとした顔つきになり、
「ふざけないでよね。こっちの気持ちを無視して、自分一人で答えを出して、そんなの許さないんだから。もう会わない方がいいなんて絶対に認めない。それが私の意志よ！」
決然と、そう告げた。
リオの胸の内に、抗いがたい迷いが生じる。
ここで沙月とも距離を置けばもう美春達との繋がりは完全に途絶える――、心のどこかでそう思っていたことは確かだった。
でも、沙月は美春達を理由に距離を置くのは止めろと言った。すべてはリオの都合で、自分一人で考えて答えを出すのは一方的だとも言った。
まったくもってその通りだ。
沙月が言うことは正しい。
本当に身勝手で、自分という人間が嫌になってしまう。
でも、沙月はそんな自分を友達だとも言ってくれた。
そんな資格があるかは甚(はなは)だ疑問だが、それに応えたいと思う自分がいる、
だから――。
相反する理性と感情を抱えながら、リオはひどく悩ましげに顔を歪ませた。
「……わかりました」
こくりと、リオは頷いたのだった。
☆★☆★☆★

リオが沙月と夕食をとっている頃。
ガルアーク国王フランソワは自らの執務室に第一王子ミシェルと第二王女シャルロットを呼び寄せていた。
此度の夜会で気になった件があったかどうか報告をさせるためだ。
そうして二人が夜会であった出来事をフランソワの前で一通り語り終えると、
「父上、本当にハルトをこのまま自由に動かせてよろしいのですか？」
ミシェルがおずおずと尋ねた。
「かまわん。本人が国に仕えるつもりがないのだ。好きにさせろ」
フランソワがあっさりと一蹴する。
「しかし、僭越（せんえつ）ではありますが、サツキの友人達をセントステラ王国へ身柄を譲り渡した今、サツキをこの国に縛り付ける保険がないのでは？」
「保険としては奴を名誉騎士にしたことで十分だ。幸いサツキ殿とあの男の仲は極めて良好なようであるしな。のう、シャルロットよ？」
「はい、お父様。サツキ様はこの数日間で見間違えるくらいに明るくなりましたわ」
シャルロットがにこやかにほほ笑んで首肯した。
「ならば良いのですが……」
釈然としない様子ではあるものの、ミシェルが納得してみせる。

リオと沙月の仲がどのくらい発展したのかは強く気になるところだが、私的な好奇心に従ってこの場で確かめるべき事項ではないと考え堪(こら)えた。
フランソワの命令に従い二人の仲を近づけるように動いていたのはシャルロットであるから、後でそれとなく訊(き)いてみればいい。
そうしてミシェルが心の中で小さく揺れ動いていると、

「此度の夜会の隠れた目的は先に言った通りだ」

フランソワがおもむろに言った。

「サツキの興味を惹く者がいるようであれば観察し利用する……ですか？」
「そうだ」
「しかし、そうであるならばサツキの友人達の方が利用価値は高いのでは？」
「ふむ、セントステラ王国との防衛同盟締結にあたって、サツキ殿のご友人方の扱いに関していくつか必要な事項を条約に盛り込みもしたが――」

フランソワはそこまで語って、一息おいた。

「どうであろうな。友人の関係がそうであるように、男女の関係もまた水物なのだ。たった数日過ごした相手よりも十年の付き合いがある友人の方が必ずしも親しいと言えないのが人間だ。存外、サツキ殿のハルトへの想い入れは強いようであるぞ？」

愉快そうな笑みを浮かべて、フランソワが語る。
すると、ミシェルが少しだけ悔しそうに顔をしかめた。

「優先されるべきは国益だ」
「……わかっております」
淡々と告げたフランソワに、ミシェルが硬い声で返事をする。
「ならば、わかるな？　勇者は六賢神の使徒とされる存在、取りこめば万能薬となるが、扱いを間違えると毒にもなる」
「無論です。だから勇者であるサツキの意志は最大限尊重しなければならないのでしょう？」
「その通りだ」

感情を押し殺して語るミシェルの言葉を、フランソワが大仰に頷いて肯定した。
シュトラール地方の人間族は六賢神と呼ばれる多神を信仰している。
魔法を始めとする様々な技術を与えてくれた六賢神なくして、シュトラール地方に暮らす人間族がここまで発展することはなかったからだ。
ゆえに、シュトラール地方に存在する数多くの国王達は、六賢神の神威を借りることで――六賢神由来の品を国宝としたり、自国に関係した伝承を語ったりすることで――、国の権威を正当化するよう努めてきた。
ちなみに、シュトラール地方においては、国から独立した司祭組織や階級は存在せず、教皇のような神の意志を代理する者も存在しない。
各々の国における王こそがその国における信仰の首長であり、祭祀を司る神官達はみな国に所属することになる。
そうした宗教事情は大国であるガルアーク王国においても何ら変わりはない。
つまり、フランソワの立場は、あくまでもガルアーク王国におけ

る信仰の首長として、六賢神の神威を借りて統治を行っているということになる。
一方で、沙月は統治するための権力こそ持ってはいないが、六賢神の使徒として神威をそのまま体現する存在だ。
とくれば、統治者である王が、勇者である沙月が持つ宗教的かつ政治的な価値を、是が非でも手中に収めたいと考えるのは必然であろう。
国が勇者を擁することになれば、自国の権威と威信を高めることに直結するのだから。
ゆえに、可能な限り沙月を強く国に縛り付けることが必要となる。
とはいえ、仮にも神威を借りている権力者が、神威を体現する勇者を権力で無理やり縛り付けるというある種の自殺的な矛盾行為に踏み切ることが言語道断であることは自明だ。
国の方針と沙月の意志とが相反した場合であっても、友人を人質にとるという真似はもろ刃の剣として本当に最後の最後までとっておかなければならない。
というよりも、そういった力技に頼るのではなく、国の方針と沙月の意志をいかに上手く迎合させるかが、統治者であるフランソワの手腕が問われるところであろう。
そのためにも沙月の信頼を勝ち取る必要があったのだが、沙月がつい最近までガルアーク王国を警戒している節があったことはフランソワも十分に理解していた。
フランソワはこれまでに沙月の警戒心を解きほぐすための懐柔策をいくつか実行してきたが、今回の夜会もその一環として開催されたものだったのだ。
結果、沙月はリオや美春達と出会ったことによってかつてないほどに明るく柔らかくなってきている。狙いは十分に果たされたと言っていいだろう。
「サツキ殿に惚れたそなたの気持ちは親ながらに応援してはやりた

いが、今後はお前の個人的な恋慕(れんぼ)で状況をかき回してもらいたくもない」
「っ……、ご存知だったのですか？」
ミシェルが大きく目を見開く。
「お前にサツキ殿と親しくなり信用を得るよう命じたのは余だぞ？　見抜けぬと思ったか？　惚れさせるどころか、逆に惚れてしまうとは少し想定外であったがな」
「……申し訳ございません」
「別に謝る必要はない。一応、分はわきまえていたようだからな。だが、シャルロットが嫉妬しておったぞ。お前が相手をしてくれなくなったとな」
くつくつと愉快そうに笑いながら、フランソワが言った。
ミシェルがハッとしてシャルロットを見やる。
「そうだったのかい？」
「もう、知りませんわ」
シャルロットは拗(す)ねたようにぷいとそっぽを向いた。
「ごめんよ、シャルロット」
「構いませんわ。お兄様よりハルト様の方がお優しいですから」
「き、君まであの男が良いというのかい？」
ミシェルが慌てて尋ねる。
そんなふうに兄が取り乱す様子を見て、シャルロットがフフッとほくそえんだ。

「サツキ様にお兄様を取られた私の気持ちが少しはお分かりになりましたか？」
「……う。わかったよ。あまり僕を困らせないでくれたまえ」
ミシェルがバツが悪そうに苦笑する。
そんなシスコンとブラコンの気がある兄妹二人に、
「兄妹喧嘩はそこまでにしておけ。余も忙しいのでな。続きをやるならば後にしろ」
フランソワは呆れがちに声をかけたのだった。

第115話　いざ、出立

翌朝、沙月はリオの部屋に押し寄せていた。

「ねぇ、春人君、パン一個とソーセージ全部食べてくれない？」

並べられた食事を目にして、沙月がおずおずと尋ねる。

ふんわりと焼き上がった温かい丸パン、牛肉と野菜のスープ、ソーセージ、スクランブルエッグ、新鮮なフルーツ。

沙月のリクエストで朝食は比較的質素なメニューになっているのだが、それでも庶民から見れば比較にならないくらい豪勢な朝ご飯だ。

使用されている材料も一級品ばかりである。

「残すのなら頂きますよ」

リオは快く了承（こころよ）した。

すると、沙月がパッと晴れやかな笑みを浮かべる。

「ありがと。残しちゃうのももったいないからさ。お城の食事ってどうも油っぽいというか、味が濃いというか、しつこめなのよね」

と、沙月がお城での食事に対して不満を口にしながら、スッとリオに皿を差し出した。

「ただでさえ女性は朝食が少なめですもんね」

言いながら、リオがお皿に載っていたパン一個とソーセージ数本

を頂戴する。
「私はこれでも同年代だとけっこう食べる方なのよ。そもそも朝食を抜く子だっているし、飲み物にフルーツかヨーグルトだけって子も多いんだから」
「それでよく昼まで持ちますよね」
「そこは、まぁ、女の子の意地じゃないかしら？」
「なるほど」
根性論的な回答に、リオは苦笑しながら感心した。
「じゃあ、そろそろいただきましょうか？」
喋りながらパンとソーセージの支給を終えると、沙月が提案する。
「ええ、それじゃあ――」
「いただきます」
二人が視線を交わし、言葉を重ねた。
静かに両手を合わせてから、カトラリーを手にする。
「昨日の夜も思ったけど、春人君、食べ方が綺麗よね」
沙月が感心したように言った。
「いえ、沙月さんが上品に食べるものですから、少し緊張しているといいますか。普段よりも行儀よく食べるよう心かげています」
「そうなの？」
「はい。ただ、昨夜の沙月さんは黙々と食事に集中していましたけど、今日の方が落ち着いていますね。会話をする余裕もあるみたい

ですし」

口許(くちもと)にからかうような笑みを貼りつけ、リオが言う。

昨晩の沙月は久々に口にした和食を前に、それはもう夢中になってご飯を食べることに集中していた。それでもがっついているようには見えなかったあたり、彼女の育ちの良さが現れているのだが。

「う、うるさいな。昨日は久々の和食だったから、特別だったの！」

そう言って、沙月がべっと小さく舌を出す。気恥ずかしさを誤魔化すように手早くカトラリーを動かし、スプーンでスープを口に含んだ。

「それで、今日、お城を出たらどこに行くの？」

ややあって、沙月が照れ臭さを誤魔化すように話題を変えた。

「西に向かいます。知人との約束があるので」

リオが大人しくその話題に乗っかる。

「そっか。危ない真似はしちゃ駄目よ」

「ええ、できるだけ善処します」

リオが首肯すると、沙月は手の動きを止めて、

（できるだけ善処、か。この人の性格だと、言っても聞かないんだろうなぁ。まぁ、変なことに巻き込まれないように祈るしかないか）

ジトッとリオを見つめた。

リオが沙月の視線に気づき、不思議そうに首を傾げる。
沙月は小さく吐息を漏らすと、

「それでさ、春人君が旅立つ前に、私が思っていることを言ってもいいかな？　昨日の話の続き。美春ちゃん達のこと、私が考えて感じたことを伝えたいの」

訊いて、リオの瞳を真っ直ぐ覗きこんだ。

「はい、構いませんよ」

沙月の瞳を見つめ返し、リオが頷く。
すると、沙月はおずおずと語り出した。

「キミが考えて決めたことを間違いだと決めつけるつもりはないわ。でも、最後にもう一度だけ訊かせてほしいの。ハルト君は、今の状況に納得できている？」

「ええ」

リオが躊躇わずに首肯する。

「本当に？」

沙月は一度唇を噛んでから、再度追求した。

「はい」

間髪を容れずに頷くリオに、沙月が窺うような視線を向ける。
だが、その目つきや仕草から心の揺らぎは全く感じられない。

「そっか……」

そうして相づちを打つ沙月の表情は、いまだに何かを承服しかねているように見える。

「納得できないのは沙月さんの方みたいですね」

小さく苦笑し、リオが言った。

「だって……」

沙月が消え入りそうな声を出す。

「俺は恋人がいるかもしれない……いえ、恋人がいる人を好きになってしまった。美春さんは貴久さんと付き合っている、そうなんでしょう？」

「そう、だけど……」

「なら、俺がしたことは横恋慕になります。恋人がいるのに他の人と付き合うことができないのは当たり前です」

「……」

確かにリオの言う通りだ――そう思って、沙月は言葉に詰まった。恋人がいて、他の人から告白されたとして、沙月ならばその気持ちに応えることはできないから。

それをすれば二股――つまり、浮気になってしまう。

日本人である沙月の価値観からすれば、普通は二股されて快く思う人間はいないと思えた。

「美春さんが貴久さんの恋人なのかもしれないってことは覚悟していました。けど、それでも俺は自分の気持ちにケリをつけたかった。

だから告白したんです。そして、だからこそ俺がしていいのはそこまでなんです。自己満足のためにそれ以上踏み込むわけにはいきません」

リオに正面から言われ、沙月はキュッと唇を噛みしめた。

そして、ぽつりと口を開く。

「……キミが言っていることは正しいと思う。理性的で、相手の事を考えた大人の判断だと思う。でも――」

喋りながら、沙月の語気が強くなる。

「私としてはちゃんと向き合って、とことん話し合ってほしい。たとえ美春ちゃんがキミの気持ちに応えられないとしても。ハルト君も、美春ちゃん達も、私にとっては大切な友達だから。ちゃんとした話し合いを避けたまま、お互いの心に溝なんか作ってほしくない」

「それは……」

今度はリオが言葉に詰まる番だ。

そんなリオに、沙月がストレートに自分の想ったことを伝える。

「感情に任せて何も考えずに動き回るのはただの子供だけど、考えすぎて行動に移せないのは、悪い言い方をすると、ヘタレっていうのよ」

歯に衣着せぬ沙月の物言いに、リオがわずかに面食らう。

「……手厳しいですね」

と、リオは自嘲気味に呟いた。

「そうよ、生徒会長だからね。迷える後輩には助言しないとね」

言って、沙月がフッと微笑む。

「でも、勘違いしないでほしいの。私の意見を押しつけようってわけじゃないから。春人君が春人君の考えを私に示したように、私も私の考えを示しただけ」

視線を交えながら、リオは沙月の話を真面目な顔つきで聞いていた。

「私は応援するよ。ハルト君が考えて、本当に良いと決めたことを応援する。あまり寂しいことは考えないでほしいけど、その決断が何であれ、ね」

「沙月さん……」

そして、数瞬の沈黙が降りる。

じっと見つめあう二人だったが、ふと気恥ずかしくなったのか、沙月が少しだけ照れ臭そうに頬を染めてそっぽを向いた。

「まぁ、そういうことだから。一つの意見として受け取ってちょうだい」

「はい。ありがとうございます」

リオが頷くと、沙月はこほんと咳払いをして、

「それと、今後、私が美春ちゃん達と会った時、無暗にキミ達の仲を引っ掻き回すような真似はしないって約束する。でも、私はちゃんと美春ちゃん達の話も聞きたい。だから、それを許してほしいの」

少しだけ唇(くちびる)を尖らせ、そう言った。
今回の美春達の態度について、沙月にはどうしても腑に落ちない点がある。
春人と亜紀の確執は置いておくとして、いくら貴久と付き合っているところに春人から告白されたからといって、美春が何も告げずにリオの前から立ち去るような薄情な真似をするとは思えないのだ。
本当は美春もリオと――いや、幼馴染である春人と向き合って話をしたかったのではないか。
でも、止むに止まれぬ理由があってセントステラ王国に向かわざるを得なかったのではないか。

（それだけの理由があるはずなのよ……。急いで帰らないといけなかった理由が）

そんなことはリオも百も承知なのかもしれないが、沙月はリオが実際に積極的な行動に移ることはないだろうと睨(にら)んでいる。
これまで話を聞いた限り、リオはどこか自分の中で線引きして、とどまっている節があった。
口で説明している理由はもっともらしく正論である――いや、それも理由の一部であることに間違いはないのだろう。
だが、根っこにある本音はどこか別の場所にあるように思えてならない。
リオは妙に自分に自信がないというか、どこかで他人を信用していないというか、何か翳(かげ)を感じさせる側面があるのだ。
まだ出会って間もないが、沙月はリオのそんな屈折した本質を漠然(ぜん)と見据えていた。
そして、こうも思っていた――リオが肝心なところで自らのエゴを突き通しきれないのは、そんな根っこの部分が大きく影響しているのではないか、と。

リオの過去に何があったのか、そのすべてを沙月は知らない。
でも、そんなの関係ない。
（私は私が思った通りに動くまでよ）
自分がリオや美春達の代わりに動かなければと、沙月はそんな使命感に駆られていた。
何が沙月を突き動かしているのか、それは沙月本人もちゃんと理解はしきれていない。
だが、少なくとも今の状況に納得できていないということだけはハッキリとわかる。
「で、どうなの？」
逡巡（しゅんじゅん）するような表情を浮かべて黙していたリオに、沙月が焦れて返事を催促した。
「……はい。わかりました」
ややあって、リオが観念したようにゆっくりと頷く。
「よろしい」
沙月は満足げに微笑むと、再び手にしたカトラリーを動かし始める。
リオも苦笑してそれに倣（なら）い、それから和やかな朝食の時間が流れた。
そうして朝食を済ませ、食後のお茶を飲むと、
「そろそろお暇させていただいてもよろしいでしょうか？　午前中

に王都を出なければならなくて」

リオが出発の時間が迫っていることを打ち明けた。

「もちろん。付き合ってくれてありがとね。すごく楽しかった」

「俺もです。またいつか会いましょう。必ず」

と、リオが穏やかな笑みを浮かべて告げる。

沙月は一瞬だけ呆けた表情を浮かべて、

「……うん。また会いましょう！」

すぐにはにかみ、嬉しそうに頷き返したのだった。

☆★☆★☆★

ガルアーク王国の王都ガルトゥークは、東部にある湖を背景に、ブロックごとにいくつかの城壁と市門が設置されている。

まず、巨大な湖と接し高位の王侯貴族が暮らす最東ブロック――通行許可が与えられた者でなければ出入りすることができない厳重警備区域だ。

続いて、低位の貴族や市民が暮らす中央ブロック――出入りには市門で一定の通過税を納めることが必要となる区域である。

美春やセリアが滞在していたのはここ中央ブロックにある宿屋であった。

なお、西ブロックなる区域も存在するが、ここには市門の中で暮らすことができない者達が暮らしており、城壁は存在せず、出入りは完全に自由なのだが、治安はあまりよろしくない。

リオは別れを済ませて王城を立ち去ると、中央ブロックにある宿屋に接近した。

そこで宿の中にいるアイシアに念話で出発を伝え、セリアと一緒に西ブロックへと来るよう呼び出した。
そうして一足早く中央ブロックを後にすると、門を出た付近でアイシアとセリアの到着を待つ。
すると、三十分もしないうちに二人がやって来た。
――春人。
アイシアの念話が脳内で鳴り響き、リオが周囲に視線を走らせる。
そして、すぐにそれらしき人物を発見した。
アイシアもセリアもそれぞれ黒と白のフード付きのローブを羽織っており、人目を惹く容姿を隠している。

「その恰好を見るのも何だか久しぶりな気がするわね」

会話ができる位置まで接近すると、旅装束姿のリオを見やり、セリアがどこか嬉しそうに言った。

「そうですか？」

リオが自分の格好を確認し、首を傾(かし)げた。
今のリオは黒飛竜と呼ばれる強力な亜竜の革を用いた薄くて丈夫な軽鎧とロングコートを装備し、腰には精霊の民の技術で特殊な加工が施されたミスリル製の剣をたずさえ、鎧の下にはミスリル繊維のクロースアーマーを着込んでいる。
確かにセリアの前で最後にこの格好をしたのはわりと前の事だったかもしれない。
リオがそう考えていると、

「それで、ミハル達はどうしたの？」

セリアが周囲を見渡しながら、おずおずと尋ねてきた。

「美春さん達はセントステラ王国へ行きました」
リオが少し気後れしたような表情で事実を伝える。
すると、セリアは小さく目をみはって、
「そっか。行っちゃったか……」
しんみりとした顔つきで、嘆声を漏らした。
「すみません。セントステラ王国の方々が緊急で帰国することになりまして、お別れをする時間すら作れないで」
「別にハルトが謝ることじゃないわよ。ミハル達が登城するのが決まった時から、そうなるかもしれないって、何となく感じてはいたしさ」
「そうなんですか？」
訊(き)いて、リオがセリアの反応を窺(うかが)う。
「まぁ、悩んでいる様子は伝わってきたからね。それに、付いていった人はアキとマサトにとっては家族なんでしょう？」
「はい」
「なら、仕方ないわよ。家族、って――」
妙に悟ったふうに語るセリアを、リオは意外そうに見つめていた。
すると、セリアが可愛らしく小首を傾(かし)げて尋ねる。
「どうしたの？　私の顔、何か付いている？」
「いえ、意外と達観しているんだなと思いまして」

リオが苦笑しながら、かぶりを振って言った。
セリアは空を仰ぎ考えるそぶりを見せると、
「うーん、まぁ、私とリオだってこうしてまた会って一緒にいるわけだし。上手く言えないけど、もう絶対に二度と会えないってわけでもないと思うから、かな。そりゃ驚いたし、寂しいけど、何となくまた会えると思えるの」
自身の心を探るように言葉を紡(つむ)いだ。
「なるほど」
それも一つの物の考え方なのだろう――リオは感心したように唸(うな)った。
「うん、それに――」
言いにくいことを告げるかのように、セリアが悩ましげに口許を歪める。
「それに？」
リオが先を促す。
すると、おもむろにアイシアがスタスタと近寄ってきて、リオの手をぎゅっと握った。
セリアがギョッと目をみはる。
「えっと、アイシア？」
アイシアは折に触れてこうしてリオの手を握ってくることがよく

ある。
その度にリオの瞳を深く覗きこみ、すべてを見透かされるような錯覚(さっかく)をリオは抱いていた。
だが、不思議と嫌な気はしない。
そうしてリオとアイシアが至近距離からじっと顔を見つめあっていると、いつの間にかセリアが横に回り込み、リオの服の袖をくいっと引っ張った。
「ちょっと、何、二人の世界を築いてるのよ？　私を放置しないでよね」
言って、セリアがリオの顔をジトッと見つめた。
「いや、二人の世界と言われましても……」
「行こう。春人」
たじろいだリオの手をアイシアが引っ張り、そのままスタスタと歩き始める。
「……ちょ、待ちなさいよ！　もう！」
唖然と二人の後姿を見つめていたセリアだったが、慌ててその後を追いかけた。
「ところで、アイシア、いつまでリオの手を握っているの？」
ちらちらとアイシアに握られたリオの手を見やり、セリアが尋ねる。
「駄目？」

「い、いや、駄目っていうわけじゃないけど……」

正面から尋ね返されて、セリアが返事に詰まる。

「セリアも春人と手を繋ぎたいの？」

きょとんと首を傾げ、アイシアが訊いた。

「なっ、ち、ちが！　違うし！　貴方達が手を繋いでいると、私一人だけ浮いちゃうじゃない」

セリアが泡を食って顔を真っ赤にし否定する。

「だったらセリアも春人と手を繋げばいい」

（そこはアイシアが手を離す選択肢もあるんじゃないだろうか？）

リオはそう思ったが、アイシアがしっかりとリオの手を握っているため、さりげなく手を離すことはできない。

「それは……」

もごもごと呟き、セリアがアイシアと手を繋いでいない方のリオの手をちらりと見る。

「いや、それは流石に色々と問題があるんじゃないかな。アイシア」

三人並んで手を繋いでいる姿を想像し、流石にそれはないだろうと、リオが口を挟んだ。

「じゃあ、セリアが諦める？」
「いや、それは……。アイシアも手を離す、とかさ」
と、リオが何とか説得を図ろうとする。
「私は春人と手を繋いじゃ駄目なの？」
「う……」
アイシアの純真無垢な瞳で見つめられ、リオは思わず「駄目じゃない」と答えそうになってしまった。
すると、セリアが焦ったような顔になり、
「い、いいわ！　私もハルトと手を繋ぐから」
そう言って、空いているリオの手を握った。
「ちょ、先生」
「い、いいでしょ。アイシアはよくて、私は駄目なの？」
セリアが頬を紅潮させ、矢継ぎ早に言い放つ。
「駄目……じゃないです」
恥ずかしさを押し殺すように薄っすらと目じりに涙をためているセリアの顔を見ていると、リオは駄目と言うことはできなかった。
リオががっくりと肩を落とす傍らで、セリアがホッと息をつく。
「じゃ、じゃあ、行きましょうか」
声を弾ませてそう言うと、セリアがリオの手を引っ張る。

反対側の手もアイシアが引っ張って、都市の外に出て空を飛ぶまで、三人は手を繋いで並んで歩くことになった。

第116話　その頃　その二

リオがガルアーク王国を出立した日の昼。
ベルトラム王国特別政府『レストラシオン』に所属する勇者――坂田弘明（さかたひろあき）はフローラと共にクレティア公爵邸を訪れ、リーゼロッテと昼食をとっていた。
絶妙な焼き加減によりふっくらと焼き上がった極上の霜降りステーキに、弘明がナイフを通す。
スッと切り離したステーキを口に含むと、噛まずとも口の中で肉がじゅわっととろけ、肉汁の旨みが口の中でどんどん溢れていった。
「相変わらずリーゼロッテのところの料理は美味いな。このステーキも良い肉を使っている。素材の味を生かすために、塩と胡椒だけで味付けをしているあたり評価は高いぞ」
静かに目を閉じ、弘明がしみじみと語った。
その言葉にリーゼロッテが微笑む。
「お褒めに与（あず）かり光栄です。ヒロアキ様は美食家ですので、ご満足いただけるか不安だったのですが、ホッとしました」
「文句なしだよ。と、言いたいところだが、これほどの肉を使ったステーキとなると米が欲しくなるのがな……」
と、弘明がわずかに物足りなさそうな表情を覗かせる。
「ふふ、ヒロアキ様は美味しいお料理を召し上がると、いつもお米が欲しいと仰いますね」

弘明の隣に座っているフローラがくすくすと笑って語った。
「まぁ、慣れ親しんだ主食だからな。一日に一度は食いたくなるだろ」
言って、弘明が少し照れくさそうな顔をする。
リーゼロッテは少しだけ得意げな表情を浮かべると、
「実は今日のメニューにお米を使った料理をご用意してあるのです」
と、そう打ち明けた。
「何、本当か？」
弘明が目をみはり尋ねる。
「はい。アリア」
リーゼロッテが頷き、傍に控えていたアリアに目配せして合図を送る。
すると、アリアが一礼して配膳台へ向かった。
弘明とフローラの視線がそちらに引き寄せられる。
「ほぉ、これは……リゾット、か」
アリアが配膳した皿の上に乗せられた料理を目にし、弘明が目を光らせた。
「そのお米はシュトラール地方の一部の地域で栽培されている稲を取り寄せ、我が商会で栽培したものでございます。麦の代わりに粥

にして食べるのが一般的なようなので、そのように調理させました」
「あー、パラパラして粘り気が少ない品種ってことか。確かに、そうなると白米として食べるのには向いてないな」
弘明が納得顔で語る。
「これがお米なのですか、私は初めて見る食材です」
フローラがリゾットに物珍しげな視線を向けた。
というよりも、そもそもフローラは脱穀した麦すら見たことがない。
脱穀した麦も米のように粥にして食べられてはいるが、粥はパンを食べることができない下民の食べ物だ。
お嬢様育ちのフローラが口にしたことなどあるはずもない。
「レシピがあまり知られていないのか、王侯貴族が好んで食べる食材ではないですからね。こちらは試行錯誤して既存のレシピにアレンジを加えた調理法です。どうぞ召し上がってください」
リーゼロッテの言葉に、弘明とフローラがスプーンを使ってリゾットを口に運ぶ。
「これは……」
弘明とフローラは驚き目を見開くと、
「美味いな」
「美味しいです」
思わず口元を緩め、そろって感想を口にした。

「口の中いっぱいに広がるクリーミーなバターとチーズの風味。濃厚だがこってりしすぎない絶妙な味付け。適度にまぶした胡椒が良いアクセントになっている」

弘明が得意顔で解説を行う。

「流石です。本当に舌が肥えていらっしゃいますね」

リーゼロッテが言うと、弘明は気を良くしたように笑みを浮かべた。

「まぁな。俺は食にはうるさいぞ。その俺が太鼓判を押してやる。これは美味いぞ。レシピを広めればヒットするんじゃないか？　なぁ、フローラ」

「はい。以前、頂いたパスタも美味しかったですが、こちらもそれに負けないくらい美味しいです」

水を向けられ、フローラがこくこくと小動物のように頷く。

「ありがとうございます。よろしければお米を差し上げましょう。博識なヒロアキ様ならば様々なレシピをご存知でしょうし、色々とお試しになってはいかがでしょうか？」

「本当か？　面白そうだ。やってみるか」

リーゼロッテの提案に、弘明は乗り気な様子を見せた。

「ありがとうございます。リーゼロッテ様」

フローラがぺこりと会釈してお礼を言う。

「いえ、お気になさらず。ただ、代わりといってはなんですが、お米料理のご感想を『レストラシオン』の皆様に宣伝していただければ幸いです」

言って、リーゼロッテは少しだけ茶目っ気のある笑みをたたえた。

「はい、もちろんです！　そうだ！　サツキ様もヒロアキ様の同郷人と伺いましたし、この味を教えてさしあげたら喜ぶんじゃないでしょうか？」

名案だといわんばかりに、フローラが提案する。

「そうですね。サツキ様もお米が恋しいようでしたので、近いうちにお招きできればなと考えております」

「素敵ですね。私もサツキ様とはお話をしてみたかったのですが……」

「確かお二方の滞在期間はもう少しございましたよね？　ならその間にお茶会でもいかがでしょうか？　サツキ様もお誘いしてみますので」

「本当ですか？　嬉しいです。是非、お願いします！」

リーゼロッテの申し出に、フローラはパッと顔を輝かせてから、

「あの、ヒロアキ様もご一緒にいかがですか？」

ちらりと隣の弘明を見やり、そう尋ねた。

「あー、俺は別にいいや」

弘明が面倒くさそうにかぶりを振る。

「えっと、でも……」

「いいだろ？　別に話さなければならないこともないし。そもそもお茶会って男が参加するような場でもないだろ？」

戸惑いの色を見せるフローラに、弘明がきっぱりと告げた。

（冗談じゃない。顔が良いのは認めるが、ああいう気が強そうで口うるさそうな委員長タイプの女は苦手なんだよ。属性は盛れば良いってもんじゃない。それに、せっかく異世界に来たんだ。よく知りもしないリアルの連中とわざわざ関わりを持つのもめんどくせぇっての）

内心で、そんなことを思いながら。

「そう言えば昨日、サツキ様がハルト様と試合を行ったとか。お二人はご覧になったのでしょうか？」

気まずくなりかけた雰囲気を察し、リーゼロッテが話題を振る。

「はい。素晴らしい試合でした。お二人ともすごい速さで動き回っていて。ですよね、ヒロアキ様？」

「あー、まぁ、それなりに見れる試合ではあったな。手加減していたとはいえ、勇者の沙月が負けたのはいただけないが。俺の評価まで下がる」

憮然（ぶぜん）と溜息をつき、弘明がフローラに応じた。

「どうしてサツキ様が手加減していると？」

リーゼロッテが興味深そうに尋ねる。
「勇者が本来の力を解放して戦ったらとんでもないことになるだろうからな。なんでもありの状態で戦ったら負けることなんてないさ」
弘明が誇らしげに語ると、リーゼロッテが小さく目をみはった。
「すごい自信ですね」
「当たり前だ。俺達勇者は自然を支配するからな。対人戦闘はおろか、対軍戦闘でも負けようがない」
「自然を支配する、ですか？」
「ああ、俺達勇者が持つ神装は特別製でな。例えば俺の『八岐大蛇（ヤマタノオロチ）』は水を掌（つかさど）る力を宿している」
言って、弘明は口許（くちもと）に不敵な笑みをたたえた。
「『八岐大蛇（ヤマタノオロチ）』とは？」
「ん？　ああ、俺の神装の名前だ。俺の世界では水神として知られている存在でな。本当は神装に名前なんてないんだが、名前を付けた方が武器として具現化する際に出しやすいんだ」
「神装にそのような秘密が……。しかし、ヒロアキ様はどうしてそのような事をご存知なのですか？　最初から神装に関して知識を有していたと？」
「あー、この世界に来て最初の夜に変な夢を見てな。それで色々と教えてもらったというか、起きたら神装に関する情報が無意識下に伝達されていたというか。まぁ、わかるんだ、使い方が」
と、いまいち要領の得ない説明を行う弘明。

「なるほど……。大変興味深いお話を伺えました。ありがとうございます、ヒロアキ様」

リーゼロッテは思案顔を浮かべていたが、すぐに笑みを浮かべ直し、お礼の言葉を口にしたのだった。

☆★☆★☆★

そして、その頃、場所は変わってガルアーク王国の王都から北部へと伸びる街道にて。

透き通るような碧空（へきくう）の下、質の良さそうな数台の馬車が、ルビア王国に向かって進行していた。

周囲には武装した騎士や兵士が護衛として歩を供にしている。

中でも飛びぬけて豪華に飾り立てられた馬車の中に、純白の騎士服に身を包んだ少女と、全身を黒づくめのローブで覆った男が座っている。

少女はルビア王国第一王女シルヴィ――姫騎士として名が知られている女傑である。

男はその素性が謎に包まれた存在レイス――リオとも因縁のある男だ。

御年一七歳になるシルヴィは、彫刻のように気品のある顔を不機嫌そうに歪ませ、目の前にいるレイスを睨みつけていた。

「約束通り貴様らに協力した。早く妹を……エステルを返してもらおうか」

「んー、ですが計画は失敗しちゃいましたからねぇ」

シルヴィが冷たい口調で言うと、レイスが下卑た笑みをたたえてかぶりを振った。

「ふざけるな！　約束が違う！」

シルヴィが憤(いきどお)りを隠さず怒鳴る。

すると、レイスは大仰に両手を上に掲(かか)げ、肩をすくめて、

「おや、これは心外ですね。妹君を返してほしくば我々に協力しろとは申しましたが、それで妹君を返すとは一言も述べた覚えはないのですが……」

飄々(ひょうひょう)とした口調で、そう言った。

「貴様、本当にふざけるなよ。こちらがどれだけ危ない橋を渡ったと思っている？　挙句の果てにあのような事件まで起こしおって……」

「なに、ちょっとした余興じゃないですか」

レイスがおちょくるような声を出して笑う。

「余興だと？　大国の王族の命を狙うことが余興だというのか？」

シルヴィが柳眉(りゅうび)を吊り上げて聞き返す。

「ええ、別に命を狙っていたわけではないのですが、退屈な夜会の暇つぶしにはなったでしょう？」

「そんなことがあるものか！」

「それは残念ですね」

レイスはくつくつと笑みをこぼした。

「なあ……、身代金なら払う。貴様のことも口外しないと誓う。だ

からエステルを返してくれないか？」
人を食ったような態度のレイスに、シルヴィが神妙な顔つきで頼み込む。
「身代金を要求するならとっくにしてますよ。私がそんなものを欲してないことくらいおわかりでしょう？」
「……なら何が望みだというのだ？　人質ならエステルの代わりに私がなってやってもよい。第二王女であるエステルよりは第一王女である私の方が利用価値は高いだろう？」
「人質とはエステル王女のように、か弱い女性がなるものですよ。貴方のような強い女性は我々では持て余してしまいます」
レイスが言うと、シルヴィが忌々しそうに顔をしかめた。
「エステルは無事なのであろうな？」
「ええ、もちろんです。彼女は実に健気な少女ですね。なかなかそそります、はい」
言いながら、レイスが不気味な笑みを口許にたたえる。
「……下衆が。エステルに何かしてみろ。生きていることを後悔させてやる」
シルヴィが底冷えするような声で告げた。
「おお、怖い、怖い。こうして協力関係を続けている限り、滅多なことはしませんよ。私達は共犯者。仲良くしようじゃありませんか」
清々しいくらいに空虚な笑みを浮かべ、レイスがにこやかに返す。

「ふん……」

シルヴィは不快そうに鼻を鳴らして、馬車の窓の外を見やる。

（待っていろ、エステル。何としても私が助けてやる。だが、どうすれば。こんな時、あの男、レンジならどうするのだろうか……）

姫騎士と呼ばれた少女の脳裏に浮かんだのは一人の少年の顔だった。

☆★☆★☆★

美春達がセントステラ王国に向かって数日が経ったある日。

千堂亜紀は夢を見ていた。子供の頃の夢――今からもう九年も前、春人と亜紀の両親が離婚する前の夢を。

亜紀は思う――あの頃の自分はお兄ちゃん子であり、お姉ちゃん子であった、と。

当時の天川家は両親が共働きで子供達にあまりかまってやることができなかった。

そんな天川家の両親の代わりに幼い亜紀の面倒を見ていたのが年上の春人と美春だったのだ。

だから、亜紀が春人と美春をお兄ちゃんお姉ちゃんと慕うのは当たり前の事だったのかもしれない。

春人と美春はいつも仲良しで、亜紀から見て二人は理想の兄と姉だった。

仲が良すぎて時折二人だけの空間を築くこともあったが、そうして二人が幸せそうに遊んでいる姿を見るのが亜紀自身たまらなく好きだった。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん」

ふと気づくと、夢の中で、幼い亜紀は春人と美春を求めて呼んでいた。

不思議だ。

普段ならその人物を少しでも連想するだけで嫌悪感があふれ出てくるのに、今は少しも嫌な感じがしない。

亜紀の目の前にはぼんやりとした幼い春人と美春の姿があった。

周囲は漆黒の闇に覆われているが、亜紀達がいるところだけ白い空白の空間となっている。

すぐ傍には幼い日に春人や美春と一緒に遊んでいたおままごとの道具もあった。

三人でおままごとをする時は春人と美春が夫婦役で、亜紀は常に娘役がいいと率先して申し出ていた記憶が懐かしい。

そうすれば二人に甘えられるから――、二人に甘えられるのは亜紀だけの特権だったのだ。

となれば、この状況で亜紀がしたいことは一つしかない。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、おままごとしよ！　私、子供の役ね！」

こう言えばいつだって春人と美春は応じてくれる。

「いいよ」

「やろう、亜紀ちゃん」

ほら――春人と美春が笑みを浮かべ、首肯してくれた。

三人一緒、笑顔で仲良くおままごとをする。

こんな幸せな時間がいつまでも続けばいいのに――、そう思って、

「今日はこのまま三人でお泊りしたいなぁ」

亜紀がおもむろに呟いた。
すると、春人と美春が顔を見合わせる。
「駄目だよ。明日はお休みじゃないだろ」
と、春人が困り顔で亜紀の説得を試みた。
「ええ～、でもぉ。お兄ちゃんとお姉ちゃんと三人で並んで寝たいよ」
亜紀が寂しそうな声音(こわね)でしゅんとする。
春人とも、美春とも、亜紀はずっと一緒にいたいのだ。
嫉妬するくらい仲良しな二人だけど、決して亜紀をのけ者にせず、優しく受け入れてくれる二人と。
「うーん。でもお泊まりしていいのは次の日がお休みの日だけだからなぁ」
「ハルくん、何とかならないかな？」
悩ましげに語る春人に、美春がおずおずと頼んだ。
「みーちゃんがそう言うんなら、何とかしたいけど……」
春人は逡巡(しゅんじゅん)するように唸ると、
「じゃあ今日は俺の部屋で一緒に寝るか、亜紀？」
と、そう提案した。

「え、いいの？」
亜紀の表情がパッと明るくなる。
「いいけど、亜紀、いつも父さんと母さんと一緒に寝てるだろ。夜中に起きて泣かないか？」
「な、泣かないもん！　お兄ちゃんが一緒に寝てくれるなら大丈夫だもん！」
「じゃあ、いいよ。一緒に寝ようか、亜紀」
顔を赤くして恥ずかしそうに否定する亜紀に、春人が微笑みかけた。
すると、二人の会話を横で眺めていた美春が、
「ず、ずるい。亜紀ちゃん……」
ぼそりと、呟いた。
「みーちゃんまで亜紀と一緒になってどうすんだよ」
春人が苦笑し呆れ顔を浮かべる。
「むぅ、そうだけど……」
「じゃあ次の休みの日はみーちゃんがうちに泊まりに来いよ」
「本当？」
「ああ本当だよ」
「えへへ」
美春は嬉しそうに顔をほころばせた。

「その時は私も一緒に寝ていい？」
亜紀がおそるおそる二人に尋ねる。
すると、春人と美春は笑顔で声をそろえて、
「うん、いいよ」
そう、答えたのだった。
「えへへ～、約束だよ」
「ああ、約束だ」
「お兄ちゃんも、お姉ちゃんも、ずっと私と一緒にいてね」
亜紀が無邪気に顔をほころばせてお願いする。
「わかったよ」
「うん、一緒にいるよ。亜紀ちゃん」
春人と美春が笑顔で頷いたところで、突として周囲が完全に漆黒の闇に覆われた。
自分以外は何も見えない。
「お兄ちゃん？　お姉ちゃん？」
亜紀が不安そうに二人を呼んだ。
「亜紀ちゃん」
すると、暗闇の中で美春の声が聞こえた。

（ああ、美春お姉ちゃんだ……）

亜紀がホッと安堵した。

――美春お姉ちゃんは約束を破らなかった。お母さんが離婚した後も私の傍にずっといてくれた。ふさぎ込んでいた私の手を握って一緒に寝てくれた。

――アイツとは違う。三人で一緒に寝てくれるって、言ったのに。ずっと一緒にいてくれるって、約束してくれたのに。

そんな想いが心の内から溢れ出てくるのが抑えられない。

どうしようもなくイライラしてしまう。

無論、亜紀だってわかってはいるのだ。

この感情が逆恨みだということくらい。

でも、感情と理屈は違う。

「亜紀ちゃん」

ゆさゆさ。

「亜紀ちゃん、起きて……亜紀ちゃん……」

ゆさゆさ、ゆさゆさ。

誰かが亜紀の身体を揺さぶっている。

「嘘つき」

亜紀は思わず呟いて、

「え……？」

ぱちりと、目を開けた。

美春の漏らした戸惑いの声が耳に届き、視界いっぱいに光が広がっていく。
そこは美春と亜紀に貸し与えられたセントステラ王国王城のとある一室。
そして――。
「美春お姉ちゃん……」
美春が心配そうに亜紀の顔を覗きこんでいた。
「おはよう。気分でも悪い？　少し顔色が悪いけど」
「おはよ。大丈夫だよ。それより私、何か言ってた？」
亜紀がおそるおそる尋ねてみた。あんな夢を見ていたのだ。何か変なことを口走っていなければいいのだが。
「え？　……ううん。特には」
美春が小さく首を横に振った。
「本当に？」
「うん、本当だよ」
「そっか……」
安堵し、亜紀がそっと息をつく。
「朝ご飯の準備ができたんだけど、もう食べられる？」
「ありがとう。美春お姉ちゃん、その恰好……」
宮廷のエプロン服を身に着けた美春を見て、亜紀が目をみはる。

「お城にただで住ませてもらうわけにはいかないし、何か手伝わせてくれってリリアーナ様にお願いしたの。そしたら亜紀ちゃんや雅人君の世話をしてくれないかって仰ってくれて。その方が二人もいいだろうからって」

現在、美春は国賓(こくひん)としてこのお城に滞在している。

ゆえに、衣食住のすべては無償で提供を受けることができる立場にいるのだが、美春は頑(かたく)なにそれを断っていた。

「そう、なんだ。確かにその方が私達も気楽だけど……」

美春の説明に相槌(あいづち)を打ちながら、亜紀はつい先日に起きた騒動を思い返していた。

時は魔道船で美春達がセントステラ王国に到着した後にまで遡(さかのぼ)る。

その日、一同がお城に案内されると、貴久と美春との間で再び一悶着があった。

魔道船の中であった口論を踏まえれば当然に予想がついていた事態だ。

ガルアーク王国に戻りたいと主張する美春に対し、それは駄目だと頑なに拒む貴久。

互いに譲らない二人であったが、貴久が引かず、美春が単独でガルアーク王国に戻るのは実質不可能である以上、どちらが折れる定めにあるかは一目瞭然(いちもくりょうぜん)である。

結果、美春は自らの意志に反してほぼ半強制的にセントステラ王国のお城に国賓待遇で軟禁されることになってしまった。

当然、美春と貴久の関係はこの上なく悪化しており、現在は冷戦状態となっており、ここ数日は互いに一度も口をきいていない。

貴久も美春の事もとても大切に想っている亜紀は二人の仲をハラハラしながら見守っていたのだった。

「ねぇ、美春お姉ちゃん、お兄ちゃんのこと、嫌いになっちゃった？」
「……すごく怒ってはいるけど、嫌いにはなってないよ」
亜紀がおずおずと尋ねると、美春が普段よりも硬い声色で答えた。
本気で怒っているのがハッキリとわかる。
そもそも優しい美春が本気で怒っているところ自体、長い付き合いのある亜紀でも見たことはない。
「あ、あのね、お兄ちゃんも意地悪して美春お姉ちゃんがガルアーク王国に戻るのを反対しているわけじゃないと思うの。お兄ちゃん、美春お姉ちゃんのことを心配しているから」
「そんなことはわかっているよ。でも、ごめん。納得できないの。今は私自身、気持ちの整理ができないし」
そう語る美春の顔は少しだけ強張っていた。
「でも、ハルトさんも沙月さんも了承済みの話だって言っているしさ。いずれこの国に来てくれるみたいだし、もう二度と会えないわけじゃないんだから、大丈夫だよ」
美春の怒りを鎮(しず)めようと、亜紀が必死に語りかける。
だが、美春はぎこちない笑みを浮かべると、
「ごめんなさい。亜紀ちゃん。この話はここまでにしよう。雅人君を呼んでくるから、三人で朝ご飯を食べようか」
貴久に関する話を打ち切った。

「うん……」

亜紀が返事をすると、美春は「じゃあ……」と言い残し、足早に部屋から立ち去ってしまった。

部屋に一人取り残され、亜紀が扉を見つめながら、「はぁ」と深く溜息をつく。

（このままじゃ駄目だ。どうしてこんなことになっちゃったんだろう。私が二人の仲を取り持たなきゃ……）

亜紀の心は曇りに曇っていた。

☆★☆★☆★

その日の昼、場所はセントステラ王国のとある屋外稽古場。

貴久と雅人は訓練用の剣を手に取り、模擬戦を行っていた。

片手剣に盾を装備した雅人に対し、貴久は片手半剣を両手で掴んでいるだけだ。

既に模擬戦が始まってから一分ほどが経過している。

一見すると体格で勝る貴久が圧倒しているように見えるが、雅人は盾を上手く用いて見事に貴久の攻撃を捌いていた。

「マサト様はこの世界に来る前に剣術を習っていたのですか？　タカヒサ様は剣術を習っていなかったとのことですが」

リリアーナの護衛騎士であるヒルダが目をみはりながら、一緒に試合を観戦していた亜紀に尋ねた。

「いえ、雅人も剣術を習い始めたのはこの世界に来てからです」

「ほう、彼に剣を教えたのは……」

「ハルトさん、私達を保護してくれた人です」
「なるほど。例の黒の騎士殿か。彼が鍛えたとなれば納得はできる」
そう呟きながら、ヒルダは感心したように雅人の動きを見つめていた。
弟に高い評価が与えられていることに内心で驚きながら、亜紀が二人の試合を見守る。
と、その時のことだ。
ここまで貴久の手の内を確かめるように守りに専念していた雅人だったが、勝負に出た。
「行くぜ、兄貴！」
貴久が振り降ろした剣の軌道を盾でいなすと、雅人は一気に間合いを詰めた。そのまま貴久の懐（ふところ）に潜（もぐ）り込む。
「させるか！」
貴久が身体を捻転（ねんてん）させ、剣を振るう。
その切っ先は空気を切り裂き、雅人に向かって力強い軌跡を描く。
だが、雅人が瞬時に盾を構え、前へとさらに加速すると、インパクトのタイミングをずらして、貴久の出足を潰してしまった。
貴久が小さくよろめく。
「上手い！」
模擬戦を観戦していたヒルダが思わずといったふうに呟いた。
少しでもタイミングが出遅れていれば雅人の身体が吹き飛ばされて勝負は決まっていたはずだ。
普通は迫りくる攻撃に驚き身体が硬直して反応が遅れてしまうも

のだが、それを見誤らずに、かつ、臆さずに前に足を踏み出した胆力は見事なものである。
よほど実戦を重視した訓練を受けて戦闘慣れしているのか、それとも生来の度胸が備わっているのか、いずれにせよ、ヒルダは雅人にさらに高い評価を与えていた。

「はぁっ！」

雅人が叫びながら盾を構え直して、体当たりするように貴久にぶつかりに行く。
体格で劣る雅人だが、剣を受け流されてフラついていた貴久の体勢を崩すのは容易かった。

「くっ！」

後ろに突き飛ばされながら、貴久が苦し紛れで剣を水平に振るう、が。

「狙いが甘いぜ、兄貴！」

雅人は屈(かが)むように鋭く足を踏み込みこんで、盾を使って貴久の剣を下から上に向けてパリィした。
そのまま雅人が貴久に向けて剣を突きだし、貴久の胸元を的確にとらえようとする、が。

「ま、まだだ！」

タイミング的に防御が間に合う時間的な余裕はなかったはずだが、貴久が後出しで剣を振るった。
尋常ならざる速度で貴久の剣が振るわれ、雅人の剣にぶつかる。

「痛っ」

力負けした雅人の剣が吹き飛ばされ、くるくると回転しながら、空を舞った。

数瞬の時を経て雅人の剣が地面に転がり落ちる。

それを確認すると、雅人は貴久をジロリと睨(にら)みつけた。

「おい、兄貴。最後、身体能力を強化したろ。反則だぞ！　最初にルール決めたろ」

と、雅人が貴久を非難する。

今の勝負、貴久が身体能力を強化していなければ、勝っていたのは雅人のはずだったのだ。

「あ、いや……すまない。つい、熱くなってしまった」

貴久がバツが悪そうに謝罪する。

「ちぇ、まあいいけどよ。でも、兄貴の反則負けだぜ。いいよな？」

「ああ、いいよ。お前の勝ちだ」

「なら、約束は守ってもらうぜ。美春姉ちゃんにちゃんと頭下げてこいよ。ハルト兄ちゃんはもう出発しちまっているだろうし、沙月姉ちゃんは近いうちにこっちにくるみたいだから、今更あっちの国に戻ってもあんま意味はないかもしれないけど、駄目だの一点張りじゃ納得なんかできねーだろ」

気後れした表情を浮かべる貴久に、雅人が正論で抗議する。

「……わかっているよ。ちゃんと謝る」

貴久は気まずそうに視線をそらすと、そう答えた。
そんな兄の反応に雅人が小さく眉をひそめる。
「ちっ、約束だからな」
念を押すようにそう言うと、胸の内のモヤモヤを晴らすように、雅人は剣の素振りを開始した。

第117話　クレール伯爵領都『クレイア』の異変

「ええ、名誉騎士になったの！？」

ガルアーク王国の王都を出発し、空を飛んでクレール伯爵領へと向かう最中、リオはセリアにガルアーク王国の名誉騎士になったことを伝えた。

リオとしては伝えておいた方がいいかなくらいの気持ちで口にした事実だったのだが、あまりに意外だったのか、セリアがギョッと目を見開いている。

他方で、すぐ隣を飛んでいるアイシアは特に反応を見せていない。

「はい、何というか、成り行きで」

二人の反応の差が何となく面白くて、リオはくすりと微笑を浮かべた。

「な、成り行きって、成り行きでなれる地位じゃないでしょ！　いつ、いつの話？」

飛行しながら移動する都合上、空を飛べないセリアはリオに抱えられているのだが、セリアはリオにぐっと顔を近づけた。

「夜会の最終日、つい先日のことです」

驚きのあまりやや冷静さを欠いているセリアに、リオが落ち着いた声で答える。

「あっ……」

距離が近づきすぎていることに気づき、セリアがポッと頬を赤らめた。

適切な距離を即座に取って小さく咳払いを一つ打つと、微妙に上ずった声で追加の質問を送る。

「め、名誉騎士ってそう簡単になれるものじゃないと思うんだけど……。何があったの？」

「夜会で賊の襲撃がありました。狙いは王族だったみたいなんですが、たまたまその場に居合わせた関係上、撃退に協力しまして」

と、リオは簡単に名誉騎士に就任した経緯を説明した。

「夜会に賊が襲撃って……物騒ね。でも、数カ国もの王族の命を救ったのなら、相応の恩賞が与えられてしかるべき、か。それにしたって異国の人間にポンと叙任する地位じゃないはずだけど……」

口許（くちもと）に手を当て、セリアがふむと思考を廻（めぐ）らせる。

「ですね」

リオが小さく肩をすくめ首肯した。セリアが語る事実は重々承知済みである。名誉騎士という称号はおいそれと与えられるものではないのだ。

確かに先のリオの功績を考えれば与えられることが絶対におかしいとまでは言いきれないのだが、フランソワの曲者っぷりを考えると何か狙いがあるような気がしてならない。

とはいえ、今のところはこれといった害悪が生じているわけでもなし。沙月のためというのならばともかく、積極的にあの国のため

に動いて仕えるつもりは少しもない以上、自由にやらせてもらうだけだと、リオは考えていたりする。
と、ちょうどその時、はるか遠方にクレール伯爵領の領都らしき建造物群が視界に入ってきた。
ほぼ同時にアイシアがリオの名を呼ぶ。

「春人」
「わかっている。先生、いったんここで降ります」

アイシアに応じ、リオがセリアを抱えたまま眼下の森の中に着陸した。アイシアもそれに続く。

「どうしたの？」

森の中に着地してから、セリアが疑問を口にした。

「都市の付近を何かが飛行しています。このまま接近すると発見されるおそれがあるので降りました」
「魔道船でも飛んでいたの？」
「いえ、たぶん何かの生き物です。魔物ではないと思いますが……」
「ふーん、なるほど」

セリアが興味深そうな顔を覗かせる。魔物ではないと聞いて、緊急性はそれほど高くないと判断したようだが、気にはなるようだ。

「ここからは走っていきましょう。ここまで来ればすぐに到着できるはずです」
「それはいいんだけど、私じゃ貴方達のスピードに付いて行けないと思うわよ」

セリアはいわゆる運動音痴だ。
万能型魔道士（オールマイティウィザード）として数多くの魔法を習得していることから、魔法で身体能力を強化することはできるが、それでもリオやアイシアのような人外染みた動きには付いて行けない。
というよりも、そもそもの問題として、魔法で強化した身体能力を脳が処理しきれないのだ。
身体能力はとにかく強化すれば良いというものではない。強化された身体能力をコントロールして動き回る運動センスが必要となる。
セリアにはそういった資質が圧倒的に不足していた。こんな足場の悪い森の奥深くでランニングなど論外である。

「俺がこのまま先生を抱えて走りますよ。空を飛ぶより揺れますが、ご了承ください」
「う、うん。お願い、します」

リオの腕の中で身を縮まらせ、微妙にしがみつく力を強めながら、セリアが頷く。
その頬は少しばかり赤く染まっていた。

☆★☆★☆★

それから、半刻もしないうちに、リオ達は目的地にたどり着いた。
クレール伯爵領、領都クレイア――、ベルトラム王国の東部寄りに位置し、ガルアーク王国へと通じる主要な街道が通る地方都市だ。
リオも訪れるのは初めてである。
人口は五万人、地方都市としては中堅以上の規模を誇り、東西の重要な交易地点として機能している。

「あれ、ベルトラム王国の空挺騎士団よ。なんでこんな場所にいるのかしら」

街道に躍り出て都市のすぐ傍までやって来ると、セリアが空を仰ぎ言った。ちなみに街道に出る少し前にお姫様抱っこの状態は解消されている。

都市付近の上空を徘徊しているのは、グリフォンという生物にまたがったベルトラム王国の空挺騎士達であった。

グリフォンは天上の獅子とも呼ばれており、竜種を除けば空の覇者の一角として名が上がり、非常に高い知能を有している。

気性が荒く、主に山岳地帯に生息しているが、一部の国では人に飼いならされて乗用獣となっており、上半身が猛禽類の姿をしているせいか、「キュアア」と甲高い鳴き声をするのが特徴だ。

ちなみに、リオの母の仇であるルシウスが率いている傭兵団の名前にも、グリフォンの名が採用されていたりする。

「確かに妙ですね。虎の子の空挺騎士団を王都から派遣するということは、よほどの事態があったということでしょうか」

そう言うと、リオは上空を仰ぎながら、考えるそぶりを見せた。

「えっと、どうする？」

都市を遠目で見やりながら、セリアがおずおずと尋ねる。

「とりあえず中に入ってみるしかないでしょうね。何か異変がないか、都市の中を歩いて回ってみましょう」

「うん！」

セリアが意気込んで頷いた。やはり都市の中で何が起こっているのか、気になるのだろう。

「アイシアは霊体化して俺の中で待機してくれるかな？　万が一の事態になった時の保険として」
「わかった」
手短に返事をすると、アイシアがスッと姿を消してリオの中に同化する。
「じゃあ行きましょうか」
そうしてリオとセリアは二人で都市の中に向かって歩きだした。
☆★☆★☆★
そして、現在地は都市城壁外部のとある広場。
顔を隠したフードの中から、セリアが都市の中を見渡した。
「あまり活気はないわね。というより……」
「失業者か、移民か……住む家のなさそうな人が多いですね。それに、城壁の外だっていうのに、巡回している兵の数も多い」
城壁の外部は都市の税金が大幅に免除されているため、どこの都市でも平時ならば露店が立ちならび、にぎわいを見せるのが通例である。
だが、リオ達が見渡せる限り、立ち並ぶ屋台の数は少なく、買い物に訪れている人の数も少ない。
住む家を失ったのか、広場の端にある空きスペースに腰を下ろしている家族やグループが大勢いた。
「しかも巡回しているのが領兵だけじゃないわ。国軍所属の兵士もだいぶ混ざっているみたい。何なのよ、いったい……」

故郷の雰囲気が変化していることに少なからず動揺しているのか、セリアの顔色は優れない。
本来、城壁の外はある種の自由地帯となっているため、権力者も基本的には不干渉だ。
なのに、ちらほらと視界に映るのは武装した兵ばかり。大別して二種類の軍装を身に着けており、それぞれの所属を示す紋章が刻まれていることから、セリアが言う通り国軍の兵士も混ざっているようだ。
領主となった貴族には領地の自治権が与えられているが、各領地の防衛は王軍の兵士と領地の私兵とが共同して行っている。
だが、基本的に平時は両者の職場が重なることはあまりない。王軍の役割は各領地の街道に設置された砦や関所の防衛と地方領主軍の監視にあるからだ。
ゆえに、戦時中でもない限り都市部の防衛はもっぱら領兵の役目とされており、王軍が介入することは基本的にはありえない。
今の都市内部の状況は少しばかり異質であった。

「戦争が始まったという話は聞いてませんし、兵士に関して考えられるのは、何かを捜索しているのか、あるいは何かを警戒しているのか――」

言って、リオがちらりとセリアに視線を移した。
考えつく範囲で捜索対象の可能性としてまず浮かび上がるのが、現在失踪中であるクレール伯爵家の令嬢である彼女だ。
しかし、セリアが王城から姿を消して既に三か月以上が経過している。
となると、捜索が行われているにしても、ここまで大量の人員を動員しているとは少しばかり考えにくい。
ならば、他の誰かを捜索しているのだろうか。

あるいは、未知の何かを警戒しているという可能性もある。

「いずれにせよ、フードで顔を隠していると職務質問をされかねません。痛くもない腹というわけではありませんが、ここは却(かえ)って堂々と顔を出した方がいいかもしれませんね」

髪の色は魔道具で変えてあるから、フードを取ってもすぐに気づかれる可能性は小さい。リスクとしては許容範囲内だろう。

「そうね、顔を出して歩きましょうか」

微かな逡巡の末に頷き、セリアはフードを外した。すると、魔術で白から金へと色を変えられた髪が露わになる。

「セシリアは城壁の中、特に領館の近くには顔を出さない方がいいかもしれませんね」

「うん」

いくら実家に戻るとはいえ、今のセリアは失踪中ということになっているのだ。堂々と領館に出向くわけにはいかないだろう。

王都に滞在していることが多かったとはいえ、故郷にはセリアの顔を知る者も多いはずである。特に富裕層が暮らす城壁の中には、セリアに親しい者や実家に仕える陪臣が出歩いている可能性も高い。パッと見では気づかないだろうが、城壁の外を出歩くよりはリスクが格段に上がるはずだ。

そんなわけで、ここに来るまでの間に、屋敷に忍び込むことで、セリアの父と内密に再会を果たすという方向で話がまとまっている。

あとは実際に忍び込めそうかどうか、リオが下見をするだけだった。

「城壁の外で休憩用に宿をとりますから、そこで休んでいてくれますか？　その間に俺が城壁内部で情報を集めますので」
「うん。でも、もう少しだけ城壁の外を歩いてみてもいいかな？　この都市に暮らす人たちの様子を見てみたいの」

頼んで、セリアが窺うようにリオの顔を見上げる。
故郷に暮らす民の暮らしぶりがどうなっているのか気になる気持ちは、わからないでもない。

「構いませんよ。ただし、俺の傍を離れないでください」
「もちろん！　ありがとう、ハルト」

リオが首肯すると、セリアは嬉しそうに口許（くちもと）をほころばせた。

「それで、どこか見てみたい場所はあるんですか？」
「えっと、城壁の外は私もほとんど出歩いたことはないんだけど、とりあえず一通り見て回りたいなって……」
「なら、城壁の外の区域をぐるりと回ってみましょうか。行きましょう」

そうして二人は城壁の外を歩き出したのだった。

☆★☆★☆★

そして、半刻ほどの時が過ぎる。
リオ達は城壁の外に暮らす人々の暮らしぶりを見て回った。
そうして歩き回り気づいたのは、思った以上に住居不定な人間の数が多いということだ。
ちょっと路地裏に入り込めば、生気を失った顔つきの者達が壁に寄りかかり、腰を下ろしている。

人々の暮らしを観察するように視線をさまよわせているセリアに、探るような視線が向けられることが何度かあった。
そんな視線に気づかないセリアの代わりに、リオが冷めた目つきで見返す。
すると、リオの腰に差した剣の効果も相まって、住人達はすぐに視線を霧散させた。
だが、ある時、地面に座っていた一人の少年がおもむろに立ち上がった。年頃は十歳程度といったところか。
リオは少年の動きを察知していたが、とりあえず放置して様子を見てみることを決める。
少年はリオとセリアの死角に入るように歩を進めると、ある地点から小走りで駆け寄りセリアにぶつかった。

「す、すみません」

わざとらしく転び、ふらふらとした足取りで立ち上がり、少年がぺこりと頭を下げる。

「あ、いいのよ、別に。大丈夫だった？」

ぶつかってきたのは相手だというのに、セリアは少年を優しく気づかった。

「はい。それじゃ」

少年は手短に返事をすると、素早く立ち去ろうとした、が――。

「っ……」

リオが少年の腕をしっかりと掴み取り、

「セシリア、懐(ふところ)の財布を確認してください」
と、セリアに言った。
「え？」
頭上に疑問符を浮かべているものの、言われるがまま懐を探るセリア。
「あ……」
セリアはすぐに財布がなくなっていることに気づいた。
「この人から盗んだものを返してもらおうか」
リオが冷たい声で少年に告げる。
「え？　な、何のことでしょう？」
少年は上ずった声でとぼけた。
「そっちの手に隠し持っている財布のことだ」
リオは小さく溜息をつくと、少年を引き寄せた。そうして少年の手からサッと上質な革の財布を掴みとる。
現行犯だ。普通に考えれば言い逃れはできない、のだが。
「か、返せ！　それは俺んだ！」

少年は泡を食ったように叫び、必死の形相でリオに掴みかかろうとした。
だが、その手はあっさりとリオに掴まれ、逆手に捻られて取り押さえられる。

「がっ」

少年の顔が苦痛で歪む。

「ちょ、リ、ハ、ハルト」

一瞬、『リオ』の名で呼びそうになってしまったが、セリアが不安そうに『ハルト』と呼び直した。
だが、リオは応じることはせず、少年を軽く突き飛ばし解放する。
少年はバランスを崩して転んでしまった。

「このまま立ち去れば見逃してやる」

リオが剣呑な雰囲気を纏(まと)い、冷たい声で言い放つ。
基本的に城壁の外で起きたスリ程度で官憲は動かない。
自衛は各個人の務めであり、私的制裁も是とされる。
仮に少年がスリを仕掛けたのが気性の荒い冒険者であったのならば、気が済むまでぶん殴られていたであろう。
ゆえに、リオがこの程度で済ませているのは――少年にとってかなり運が良い――温情的な対応である。
だが、普段のリオからは想像がつかない感情の希薄な態度に、セリアはひっそりと息を呑んでいた。
すると、彼我の力量差を悟ったのか、少年が怯えたふうにびくりと身体を震わせる。
少年がもともと自分が座っていた付近を見やった。

そこには大人数人が固まって座っていたが、少年から視線を向けられるとサッと視線を逸らしてしまう。
どうやら少年の保護者かお仲間のようであるが、見捨てられてしまったようだ。

「く、くそ……」

少年が地べたをはいずりながら立ち上がり、よろよろとした足取りでその場から立ち去っていく。
その後ろ姿はひどくみじめに映った。

「行きましょう」

リオがセリアの手を掴みとり、足早に歩き始める。

「ね、ねぇ、ハルト……」

しばらく手を引かれて歩いたところで、後ろを気にした様子のセリアがリオの背中に声をかけた。
何故だか胸が息苦しくて、声をかけずにはいられなかったのだ。
リオは足を止めると、困った顔つきをして振り返った。

「さ、さっきのことだけど……」
「すみません。俺がしたことは人として間違っているのかもしれない。でも、あの場でああする以外にありませんでした」

確かに、あの場で少年に施しでもしていたら、周囲の者達がこぞって集まっていた可能性が高い。
そんなことはセリアにもわかっている、だが――。

「……何か、できることはなかったのかな？」

そう思わずにはいられない――セリアはそんな後味の悪さを覚えていた。

「セシリアは優しいですね」

王立学院に通っていた頃も、孤児だったリオに優しく接してくれたのはセリアだけだった。だから、先のような出来事にも胸を痛めるのだろう。

「そんなことないわ」

セリアが苦々しく否定する。

今の自分では貴族として困っている民衆の一人すら救うことができやしないのだ――セリアは己の無力さを嘆いた。

「正しい行いが常に正しい結果をもたらすとは限りません。あの場で彼だけに施しを与えていれば、付近にいた人達が一気に押し寄せてきたはずです」

食い詰めた人間に余裕はない。

救いがあればそこに群がる。

気まぐれな施しがあれば、理不尽に怒り、不公平だと叫ぶ。

遠慮とか配慮とか、そんな気配りはしない。

彼らは救いという結果だけを求め、本能のまま感情を口にしているだけだ。

それが群れた相手であればなおさらである。結果に満足すれば文句は言わず、結果に納得できなければ不満を言う。いちいち相手にしていたらきりがない。

ゆえにリオは突き放すような態度をとった。やれることをやっただけだ。
結果、セリアには嫌な思いをさせてしまった。
セリアは悄然（しょうぜん）と押し黙っている。

（ままならないな）

リオは小さく息をつくと、

「そろそろ宿に向かいましょうか」

そう提案した。

「うん。ごめんね。変なこと言って……」
「いえ」

うつむきしおれるセリアに優しくかぶりを振ると、リオは宿を探して再び歩き出した。
それから城壁の外にある宿屋の中では比較的マシなランクの宿屋で二人部屋をとると、リオは情報を収集しに都市の内部に潜り込んだ。
しかし、思った以上に有益な情報を得ることはできず、屋敷周辺の地理や警備状況を確認すると、リオは宿へと戻り、セリアと合流することにしたのだった。

☆★☆★☆★

「屋敷の警備はだいぶ厳重でした。領軍だけでなく、王軍も警備に加わっているようです。都市の状況がおかしいのは明らかですが、予定通り潜入してみますか？　もちろん、時期を置いて潜入する選

択肢もありますが」

屋敷の下見を終え、セリアが休憩している宿屋へ戻ると、リオが尋ねた。

「……潜入が可能なら、行ってみたい、かも……。でも、発見されるリスクが高いなら無理をする必要はないわ。透明になる精霊術だって、絶対に安全ってわけじゃないんでしょう？」

セリアが遠慮がちに語る。これまでに目にした都市の状況を踏まえて、この地で何が起きているのか気になっているのだろう。

ちなみに、光学迷彩の精霊術は外部からの干渉に弱い。

強い風が吹いたり、走ったりして強い空気抵抗が生じたり、人や物に衝突してしまうと空間に揺らぎが生じてしまうのだ。

ゆえに、物に触れようとしたり、人の密集地帯を通るなど、物理的な接触を避けられない場面では、使用が制限されてしまう。

「そうですね。透明になって庭に忍びこむだけならさほど難しくはないんですが、屋敷の中に入るのはちょっと難易度が高いかもしれません。主だった出入り口は固められていて、警備の隙間があまりなかったので」

例えば、今回の潜入先が巨大な城ならば却(かえ)って入り込む隙間を見つけやすい。

だが、貴族の邸宅レベルだと、サイズが小さくなる分、隙間を見つけにくくなるのだ。

リオとしては、寝室にでも窓があればそちらから潜入をしようと思っていたのだが、窓を開けるのに光学迷彩の精霊術を解く必要がある。

また、屋敷の周りには篝火(かがりび)が焚(た)かれているため、宙に浮いている

人間がいれば嫌でも人目に付いてしまう。

「そっか……」

「まぁ、万が一発見されても、こちらの素性は掴まれていませんし、逃走ルートが確保されているなら、とりあえず忍び込んでみる価値はあると思いますよ」

表情を曇らせるセリアに、リオが気軽に考えるよう情報を付け加えた。

仮にこちらの素性と居場所を突き止められた状態であったならば、捜査の手が及んだ際にアリバイを工作する必要が生じる。

だが、そういった諸々のリスクがないのなら、大胆な行動が可能というわけだ。

「……庭に入るのがそれほど難しくないのなら、侵入ルートにアテはあるわ。庭に屋敷の地下へ通じる隠し通路があるの。家の者だけが知っているね」

「それは……俺が知ってしまってもいいんでしょうか？」

隠し通路の存在を明らかにしたセリアに、リオがおそるおそる訊いた。

「あまり良くないかもしれない……んだけど、リオだからいいわ。信用しているもの。言いふらさないでね」

言って、セリアがフッと微笑んだ。本当にリオを信用しているのが伝わってくる、温かい笑みだった。

「はい」

リオは少し照れくさそうにはにかんだ。

☆★☆★☆★

そして、草木も寝静まった深夜。

リオはセリアを連れてクレール伯爵家の館に潜入していた。一時的な休憩先として借りた宿は、足が付かないように引き払ってある。

小高い丘の上にある敷地内には篝火(かがりび)が焚(た)かれていた。

随所に巡回の兵士達が歩き回っており、並みの使い手では庭に侵入すること自体が不可能にすら思える。

とはいえ、精霊術で空を飛べてしまうリオならば、夜闇に紛れて開けた庭の空間に忍び込むこともさほど難しくはなかった。

問題は何らかの魔力感知を可能とする人員が待機していたり、魔術結界が施されていたりする場合である。

だが、それらはいずれも希少性が高かったり、運用性に難があったりするし、万が一、発見されたとしても、そのまま飛んで逃げてしまえば犯人として捜索の手が及ぶおそれもない。

虎穴に入らずんば虎児を得ず。リスクとしては許容範囲内だ。

現在、リオが光学迷彩の精霊術を駆使して裏庭を歩き回っているが、屋敷の人間に気づかれた様子はない。

裏庭は正面ほど警備の人員が多くなく、セリアに先導され、リオがその背中を追う。

「こっちよ」

光学迷彩で姿は偽装できても、声までは隠せないため、セリアが小声で喋った。

「確か、この辺りに……」

庭の端にある噴水のすぐ近くにやって来ると、セリアが石畳の地面をまさぐる。
水飛沫(みずしぶき)が飛び散り、光学迷彩の膜に接触すると、空間に揺らぎが生じた。

（不味いな）

周囲に人がいないことを確認し、リオはいったん光学迷彩を解いた、ところで、

「あった。よいしょ！」

セリアが隠し通路への入り口を発見したようだ。
両手を用いて地面を操作してから、引き戸のように地面を引っ張った。
だが、非力なセリアでは重い石の床を動かすことはできない。

「手伝います」

小さな隙間ができたところでリオが手を差しこみ、一気に床を引っ張った。すると、屋敷の地下へと続く階段が現れる。

「あ、ありがと……」
「いえ、人が来る前に早く入りましょう」
「うん」

二人は地下へと続く階段を下りた。
リオが開いた床を元に戻している間に、セリアが壁に備え付けられている魔道具による明かりを灯(とも)す。
そうして地下通路が明るくなったところで、二人は歩を進めた。

少し歩いたところで屋敷の地下に行き当たったのか、開けた空間に躍り出る。
正面奥には上に続く階段、左右にはいくつかの扉があり、リオが物珍しそうに辺りを見やった。

「ここは……」
「ちょうど屋敷の地下らへんよ。緊急時の居住空間にもなっているの。まぁ、今は誰もいな……」

などと、リオとセリアが話をしていると、扉の一つがおもむろに開く。
扉の中から現れたのは鋭く美しい顔をした少女だった。
薄紫色の長いストレートヘア、深みを帯びた紫の瞳、気品を感じさせる優美な目鼻立ちをしており、平民の少女が醸し出す素朴な美しさや可愛らしさとは異質な雰囲気を纏(まと)っている。年頃はリオと同じくらいか。
少女は紫を基調にした可愛らしい貴族服を身に着け、その上から純白のポンチョを羽織っていた。
通路にリオ達がいることに気づき、少女が愕然(がくぜん)と目を見開く。
リオはとっさにセリアの姿を隠し、庇うように前に足を踏み出した。

「っ、ヴァネッサ！」

少女が叫ぶと、扉の中からさらに別の女性が姿を現した。年頃は二十代半ばくらいだろうか。騎士服を身に着け、腰には細身の剣を差している。
女性騎士はリオを視界に収めると、

「何者だ？」

鋭い形相を浮かべ、臨戦態勢で身構えた。

第１１８話　地下室での攻防

ヴァネッサと呼ばれた女性が突如としてリオに向かって踏み込んだ。
殺害の意図はないのか、武器は抜いていない。
だが、その瞳には剣呑な光が宿っている。
リオが目を見開く。と、同時に、迎撃行動に移るべく、自らも前に足を踏み出した。
次の瞬間、二人の姿が重なり合う。ヴァネッサがリオに掴みかかり、取り押さえようとした。
しかし、パシン、という音をたて、その腕が軽くいなされてしまう。リオはいなした腕をそのまま絡め取り、関節を極めようとした。
だが――、

「っ！」

ヴァネッサが慌てて腕を振り払い、逆の手をリオの腹部へと突きだす。
しかし、リオは突きだされたヴァネッサの拳を横から殴りつけ、軌道を逸らしてしまった。

「セシリア、後ろの通路まで下がってください！」
「ヴァネッサ、どきなさい！」

リオと薄紫髪の少女が同時に叫び、声がぶつかり合う。
いち早くヴァネッサが反応し、バックステップを踏んだところで、
「《光弾魔法（フォトンバレット）》」

薄紫髪の少女が右手を構え、呪文を詠唱した。
少女の手の先に小さな術式が浮かび上がり、そこから光弾が三発続けて連射される。
魔力をエネルギー化した高速の光弾が、リオに向かって真っすぐと突き進んだ。
生身の人間に当たっても死に至る可能性は低いが、当たり所が悪ければ骨折か気絶するくらいには一撃一撃に威力がこめられている。
リオは咄嗟に精霊術を行使し、身体能力と肉体の強度を上げた。特に両手には多めに魔力を集中させて強化の度合いを強めている。
少女が放った魔力の弾丸――、それらすべてがリオの目には視(み)えていた。
腕、肩、胴体と、リオの動きを無力化することを目論んだ的確な狙いである。
しかも、リオが避ければ後ろに控えているセリアに直撃してしまう。
複数の弾丸すべてを視線で追いながら、無駄のない攻撃に内心で感心し、リオが両手を躍らせる。すると――、

「なっ……」

衝撃音をまき散らしながら、少女の放った魔力の弾丸すべてが霧散した。
あまりの離れ業に、セリアも含め室内にいた者達が驚愕する。その隙を見逃さず、リオが地面を強く蹴って前進した。
反応が出遅れたヴァネッサの背後に一瞬で回り込み、羽交い絞めにしてがっちりと関節を極めてしまう。
そのまま、リオは薄紫髪の少女とセリアの間隙(かんげき)に潜り込んだ。

「クリスティーナ様！　私にかまわず、この男を！」

ヴァネッサが目の前にいる薄紫髪の少女に向けて叫ぶ。
人質にされるくらいなら死を選ぶということなのだろう。見上げた騎士道精神である。

「……え？」

ヴァネッサの叫んだ名前に反応したのか、リオの背後からセリアが戸惑いの声を漏らした。
クリスティーナ――、その名前はリオも聞き覚えがある。ベルトラム王国の第一王女と同じ名前だ。
クリスティーナ＝ベルトラムといえば、かつて彼女の講師であったセリアだけでなく、リオとも少なからず接点のある人物である。
もちろん同姓同名の人物なだけである可能性もあるが、この地下空間で隠れるように暮らしていることを考えれば、確信めいた何かを感じずにはいられない。
リオはクリスティーナと呼ばれた少女に観察するような視線を向けた。言われてみれば、目の前にいる少女は、リオの脳裏にある数年前のクリスティーナの姿とどこか重なる。

（これは……また面倒なことになりそうだな）

嫌な予感を抱き、リオが小さく息をつく。
目の前にいる少女がクリスティーナ＝ベルトラムだとして、何故こんな場所にいるのかは欠片ほどの興味もない――と言えば嘘になるが、個人的には捨て置いても構わない程度にどうでもいいことである。
いや、むしろどう転んでも面倒事の予感しかしないため、できれば以降の接触を完全にお断りしたいというのが本心だ。
しかし、今の状況で何の接触も持たずにこの場をやり過ごすのは、

少しばかり無理がある。
背後にはベルトラム王国の貴族であるセリアがいるし、実家の隠し部屋に自国の王女が隠れていたとなれば、立場上、捨て置くことはできないだろう。
とくれば、自分は下手に出しゃばらず、判断と対応をセリアに任せるのが吉――、リオは瞬時にそう考えた。
幸いというべきか、クリスティーナはいつでも魔法を発射できるように手を構えているものの、人質にとられたヴァネッサを見て躊躇っているようだ。話し合いを持ちかければ戦闘を治めることは可能だろう。
すると、ヴァネッサは自分が足を引っ張っていることを察したのか、

「くっ……殺せ！」

と、悔しそうに口ずさんだ。
リオが呆れ顔を浮かべ、「そんなつもりはない」と口にしようとした、その瞬間。
ガタン。
今まで閉まりっぱなしだった扉の一つがおもむろに解放され、そこから十代半ばの少年二人が出てきた。
驚くべきことに、その人種的な特徴はリオも良く知る日本人と酷似している。

「……な、何ですか？　いったい何が……」

寝ぼけ眼だった少年達だが、場の状況を把握しきれず、すぐに戸惑い顔を浮かべる。
リオは彼らの顔を見てわずかに目を見開いたが、

「全員動かないでください」

油断せず、すぐに牽制の言葉を口にした。

場に一触即発の張りつめた空気が流れる。

新たに現れた少年二人がごくりと唾を呑んだ。何だかよくわからないが不味い状態にあることは間違いない――、と、そう思って。

「セシリア、こちらへ」

「う、うん」

リオが後ろに下がっていたセリアを近くに呼ぶ。

「この場の判断は任せます」

「わかったわ。ありがとう」

真剣な顔つきで頷き、セリアがリオの背中からひょっこり顔を出した。そして、クリスティーナの顔をまじまじと見つめる。

すると、相手が第一王女本人だと確信したのか、ハッと表情を改めた。

「クリスティーナ様」

セリアが跪(ひざまず)き、臣下の礼をとる。

「……誰？」

クリスティーナが頭上に疑問符を浮かべた。

「クレール伯爵家長女のセリアでございます。殿下、ご無沙汰しております」

セリアの発言により、目の前にいる薄紫髪の少女が、クリスティーナ＝ベルトラム本人であることが判明した。
成長期を迎えたことでその美しさにはますます磨きがかかり、身体から充溢（じゅういつ）する覇気も増している。
まさかの人物との対面に、リオが思わず渇いた笑みを浮かべてしまう。
他方で、セリアが素性を明かして敬意を示したことで、クリスティーナの表情から敵意が抜け落ちる。
「セリア先生ですか？　その髪の色？　それに、貴女は行方不明になっているはずじゃ？　どうしてこちらに？」
クリスティーナが目を丸くして尋ねた。
「この数か月間、世を忍んで潜伏しておりました。騒ぎが落ち着いた頃合いを見計らい、父と密会すべくこの地下通路から屋敷に忍び込もうとしたのですが……」
と、セリアが真相を濁（にご）しつつ事情を説明する。
その一方で、一触即発の状態が解消されたことを確認し、リオがヴァネッサの拘束を解いた。
「失礼いたしました。無礼をご容赦ください」
「いや、先に襲いかかったのはこちらだ。その、今は誰かに見つかるわけにはいかなくてな。すまない」
リオとヴァネッサが謝罪の言葉を送り合う。
その間にクリスティーナとセリアも情報のやり取りを行っていた。

「しかし、よく警備をかいくぐれましたね。捜索部隊が周辺をうろついているはずですが」

と、クリスティーナが驚きの念を込めて質問を送る。

「それはまぁ、大変でしたが何とか。それよりも捜索部隊ですか？まさか姫様の？」

「……ええ、城から抜け出してきたのですが、あいにく追っ手に追いつかれて身動きが取れなくなっている状態です。クレール伯爵家に多大なご迷惑をおかけしていますが、お許しください」

大変だったけど何とか侵入できたら苦労はしないのだが、クリスティーナはとりあえず話を先に進めることにした。

「いえ、姫様の一大事とあれば、是非もありません」

いまだ事情は呑み込めていないが、セリアがかぶりを振って応じる。

セリアの父であるクレール伯爵は、王族への忠誠心が高い親王派に所属している。アルボー公爵派ともユグノー公爵派とも異なるいわば第三の派閥だ。

今ではアルボー公爵の派閥に好き勝手されているはずだが、第一王女であるクリスティーナの危機に頼られたとあっては、父も匿(かくま)うくらいのことはするだろう――そう考え、セリアは今の状況にとりあえず納得した。

「貴女に心からの感謝を。どうか立ち上がってください」

「はっ、失礼します」

クリスティーナが語りかけると、セリアが立ち上がる。

それを確認し、クリスティーナが言葉を続けた。

「お互い色々と訊きたいことはあるのでしょうが、先にそこにいる彼の素性をお訊きしてもよろしいですか？」

言って、素性の知れぬリオに鋭い視線を向けるクリスティーナ。

「えっと、彼は……」

何と説明したらいいものか咄嗟には決めあぐね、セリアが返事に詰まった。すると――、

「殿下、よろしければ手ずから自己紹介をする無礼をお許しいただけないでしょうか？」

リオが恭しく右手を胸に当て、発言の許可を求めてみせた。

「……構わないわ」

クリスティーナがこくりと首肯する。

「ガルアーク王国名誉騎士、ハルト＝アマカワでございます。故あってセリア様の護衛を務めさせていただいております。以後、お見知りおきを」

リオが自己紹介をすると、クリスティーナとヴァネッサが目をみはった。

「ガルアーク王国の名誉騎士がどうしてこんな場所に……」

ヴァネッサがぼそりと呟き、

「その身分を信じるに足る証拠はあるのかしら？」

と、クリスティーナが問うた。

「こちらが陛下より賜った名誉騎士の徽章でございます」

リオは襟元につけた徽章を示した。

「ヴァネッサ、確認して頂戴」

クリスティーナに命じられ、ヴァネッサがリオの襟を確かめる。

「失礼する。……確かに。名誉騎士の徽章かはわかりませんが、ガルアーク王家の紋章が刻まれています」

「そう。いいわ。信じましょう」

そう言って、クリスティーナはリオを凝視した。

そして、何かしっくりこない感じで首を傾げると、

「貴方……、どこかで会ったことある？」

と、そう尋ねた。

「……いえ、そのような記憶はございませんが」

リオがしれっとかぶりを振る。見事なポーカーフェイスだ。

（姉妹そろって勘が良いな……）

リオは以前フローラにも同じ内容の質問を投げかけられたことを思い出した。
すぐ傍ではセリアがわずかに顔を強張らせ、
「殿下、立ち話もなんですし、席を改めて本題に移りませんか？確かそちらがダイニングになっているはずですので」
と、即座に話題を変えようと動きを見せた。
クリスティーナがその提案に乗っかる。
「ええ、そうですね」
こうして、いったん場所を移すことが決まったタイミングで、
「ならば、私は席を外しましょう」
と、リオがすかさず申し出た。下手な機密でも知って身動きがとりづらくなる真似は避けたい――そう考えての行動だ。
だが、クリスティーナはリオに視線を向けると、
「いいえ、できれば貴方も席に加わってほしいのだけれど」
かぶりを振って、そう告げた。
「ですが、私は部外者なのでは？」
リオがささやかな抵抗を試みる。
さわらぬ神にたたりなし――、リオとしては迂闊に第三国の機密情報に触れて、半強制的に引きずり込まれることだけは避けたいと

ころだ。
クリスティーナに他国の貴族であるリオに命令する権限はないが、この場はベルトラム王国の領土内である。国際関係を考慮すると、下手に波風を立てるのも上手くはない。
もっとも、今のクリスティーナが置かれている状況を踏まえれば、リオをどうこうできるだけの権力も影響力もあるとは考えにくいのだが。

「貴方がガルアーク王国の貴族で、その年齢で名誉騎士に叙任されるほどの人物であるなら問題はないわ。セリア先生が頼るほどの人でもあるみたいだしね」

そう言って、クリスティーナがセリアを見やる。
リオとセリアの関係についてそれとなく探りを入れているのだろう。
さて、どうしたものか――と、リオが逡巡する。
すると、リオの顔を窺っていたセリアが、クリスティーナに向かって再び跪いた。その横顔は真剣だ。

「……殿下。確かにハルトは信頼できる人物ですが、私の大切な恩人であり、面倒事に巻き込みたくはありません。聞いて引き返すことのできない情報をお話になるのであれば、彼が席を外すことをご容赦願いたいのですが……」

と、王族に物申す無礼を承知で、セリアが願い出る。
クリスティーナはわずかに目を丸くすると、

「すみません。私が軽率だったようですね。知られて困ることを話すつもりはありませんし、彼を無理やり面倒事に巻き込むつもりもありません。ただ、ガルアーク王国の情勢を知りたいんです。無論、

教えていただける範囲で構いませんが」

苦笑を浮かべ、そう語ってみせた。

王族のクリスティーナにそう言われてしまうと、身分上、セリアがこれ以上強く出ることは難しい。

セリアは申し訳なさそうにリオを見やった。その視線に気づき、リオが極わずかに微笑む。

リオとしては今のやり取りで確認したかった事項を把握することはできたため、できれば遠慮したいという心情から、同席しても構わないという程度には心境が変化している。

「承知しました。であれば、私も同席いたしましょう」

心の中でセリアの援護に感謝しながら、リオがそう答えた。

「感謝します。では、移動しましょうか。ヴァネッサ、貴女も来なさい。と、その前に、ヴァネッサの紹介を忘れていましたね。先生はヴァネッサの事を……」

と、クリスティーナがセリアに水を向ける。

「はい。存じております。家の付き合いがございましたので」

「なるほど、先生のご実家とヴァネッサの家は同じ派閥に所属していますものね。じゃあ、ヴァネッサ。アマカワ卿に自己紹介をして差し上げなさい」

クリスティーナが命じると、ヴァネッサが「承知しました」と頷き、口を開いた。

「ヴァネッサ＝エマールと申します。先ほどは失礼しました。改め

て謝罪させていただきたい」
「エマールといえば、あの『王の剣』アルフレッド卿のご家族ですか？」

リオがわずかに目をみはった。現『王の剣』といえば、母の仇（かたき）であるルシウスとその座を巡って鎬（しのぎ）を削りあった人物かもしれないからだ。

「ええ、アルフレッド＝エマールは私の兄です。兄のことをご存じで？」
「いえ、直接の面識はございません。ですが、この近隣で剣を嗜（たしな）む者の中に、かの御仁を知らぬ者はいないかと。有名なお方ですので」

そう答えながらも、実はアルフレッドと会ったことがあるリオ。誘拐されたクリスティーナ達を助け、牢獄で尋問を受けていた時のことだ。もっとも、当時のリオは自分の会った相手がアルフレッドだと知りはしなかったが。

「そうか……」

ヴァネッサが少し誇らしげに、それでいて翳（かげ）りのある笑みを口許にたたえる。

「話が逸れてしまいましたね。申し訳ございません。私はハルト＝アマカワと申します。先ほどは失礼しました。どうぞよろしく」

リオは胸元に右手を添えて、軽く会釈した。
そうして二人が自己紹介を終えたところで、クリスティーナが口を開く。

「それじゃ、行きましょうか」

一同が頷き、食堂がある扉に向かって歩き始める。

「あのぉ、俺達は……」

完全に放置されていた少年二人のうち、一人がおずおずと声をかけた。

クリスティーナは彼らを一瞥(いちべつ)すると、

「貴方達は部屋に戻っていいわよ」

あっさりとした口調で、そう告げた。

「あ、はい。わかりました」

質問をした少年が所在無さげにこくりと頷く。

「クリスティーナ様、彼らは？」

尋ねて、セリアがちらりと少年二人に視線を向ける。

「彼らは……。何というか、勇者召喚に巻き込まれてこの世界にやって来た者達です。詳しい事情を説明すると長くなるのですが……」

クリスティーナが額(ひたい)を押さえ、悩ましげに語った。

「なるほど。では、そちらも含めて、続きはダイニングの方で」

「ええ、そうしていただけると助かります」

今度こそ一同はダイニングルームへと向かい、リオも三人の背中を追った。

（妙なことになったな）

予想だにせぬ展開に移行しつつある現状に、リオは違和感にも似た奇妙な感覚を覚えていた。

第１１９話　地下室での話し合い

ダイニングルームに入ると、リオは率先して給仕役を申し出て、簡易キッチンへと向かった。あくまでも自分は第三者にすぎないという姿勢をアピールするための行動である。

といっても、ダイニングルームと簡易キッチンは繋がっているため、聞こうと思えば話の内容は筒抜けだ。

「先生はお父上にお会いになりたいとのことですが、クレール伯爵ならば明朝早くにこの地下室へ降りてくるはずです。今は屋敷内にも捜索隊の面々が宿泊しているらしく、身動きがとりづらいようなので」

と、まずはクリスティーナが開口し、セリアが知りたがっている情報を教えた。

「なるほど。王都にいたら無駄足になるとも思ったのですが、幸いでした。となると、父がこの場へ来るのを待った方がよさそうですね」

「はい。時間はたくさんありますので、その間に色々とお話をお聞かせいただけると嬉しいです」

そこまで話し合うと、二人はじっと視線を交えた。

「と、仰いましても、何からお話をすればよろしいでしょうか？」

クリスティーナの出方を探るように、セリアが開口する。

「そうですね。気になるのはどうしてお互い城を抜け出したのか、ということになるのでしょうか？　私が知る限り、城の中では先生が拉致されたのではないかという噂が広まっていましたが」
「拉致されたわけではありません。私は自分の意志で城を抜け出しました」
「その理由を伺っても？」

尋ねて、クリスティーナが真っ直ぐとセリアを見据えた。
視線が重なり、セリアが微妙にすまなそうに顔を曇らせる。

「……恥ずかしながら、私が城を抜け出したのは、貴族として課せられた使命から逃げたかったからです」
「それはシャルル＝アルボーとの政略結婚からでしょうか？」
「はい。時には望まぬ相手と結婚しなければならない。それが貴族の女性に課せられた使命だと理解はしています。ですが、それでも、私は彼との政略結婚に納得することができませんでした」

頷き、セリアが重々しく語った。

「まぁ、当然でしょうね。私は正しい判断だと思いますよ」

クリスティーナがあっさりとセリアの選択した行動を支持してみせる。
セリアは意外そうに目をみはった。クリスティーナがくすりと微笑み、言葉を続ける。

「確かに、私達は立場上、自由に婚約相手を選ぶことはできません。ですが、それは家のため、ひいては国のためになるからです。そういった実利が認められない――いえ、むしろ害悪となる政略結婚に順守するだけの価値はありません」

「姫様は私と彼が政略結婚することが国にとって害悪になると？」
害悪とまで言い切ったクリスティーナに、セリアがその意味を尋ねた。
「というよりも、あの男の存在が今のベルトラム王国にとって害悪そのものです。先生もそう思っていたからこそ、城から抜け出したのでは？」
「……間違っている、とは考えていました。結果を残しているとはいえ、強引すぎるやり方すべてが」
「自信がなかったのですか？」
「間違っているかどうか、決めるのは私ではありませんから」
セリアが曖昧（あいまい）な笑みをたたえる。
「では、後悔していたんですか？　お城を出たことを」
「いえ、後悔だけはしていません」
今度はきっぱりとかぶりを振るセリア。すると、クリスティーナはフッと笑みを浮かべ、
「なら、いいじゃないですか」
と、そう言った。
「無論、貴族の中にはセリア先生が決断した行動を否定する者もいることでしょう。けれど、アルボー公爵のやり方が間違っていると思った。城を出ることが正しいと思った。その意志を貫いた。後悔はしていない」

語って、クリスティーナが深紫の瞳を真っ直ぐとセリアに向ける。
セリアもじっとクリスティーナを見つめ返した。

「なら、本当にその決断が正しかったのか、判断されるのはこれから先のことです。そして、判断するのはこの国で生きる我々……、少なくとも、私個人は先生のご決断を支持しますよ」
「そう仰っていただけると、幸いではありますが……」

セリアがやや反応に困ったような笑みを浮かべる。

「大事なのは今後セリア先生が何をしたいのか、ということでは？こうしてこの屋敷に戻ってきたということは、我が国の貴族であることを放棄したというわけでもないのでしょう？」
「それは……その資格が今の私にあるのか……」

クリスティーナの質問に、セリアが困り顔を浮かべて答えた。

「あら、私はその資格があると思いますよ。私も逃亡し潜伏中の身の上ですが、王族であることを放棄したつもりはありません。すべてはこれから先、王族として何をするのか、そしてどんな結果を残すのか――すべてはそこにかかっていると私は考えています」
「……なるほど」

決然と語ってみせたクリスティーナの言葉に、セリアが唸るように頷く。
セリアも同じようなことは考えていたが、自信を持てずにいた。
対するクリスティーナは強い自信と覚悟を感じさせる。
決して悩んでいないというわけではないのだろう。王女という立場を自覚したうえで逃げるように城から抜け出しておいて、何も悩まずにいられるはずがない。

悩まずにいられるとしたらよほど向う見ずなお気楽者か、ただの世間知らずくらいだ。
そして、クリスティーナがそのどちらでもないことを、セリアは知っている。
では、いったいクリスティーナはどうして城を出ようと思ったのか――、セリアはそれを知りたくなった。

「クリスティーナ様、私からも質問をよろしいでしょうか？」
「はい、構いませんよ」

セリアに声をかけられ、クリスティーナがよどみなく応じた。

「姫様はどうしてお城を発とうとお考えになったのでしょうか？」
「アルボー公爵にとって私が邪魔になった――、いえ、私に利用価値がなくなったからです。身の危険も感じたため、王城を発つことを決意しました」

あまり穏やかではない物言いに、セリアの顔がわずかに強張る。

「まさか、アルボー公爵が姫様の御身に危害を加えると？」
「ええ、今のあの男ならやりかねません。召喚された勇者を取りこみ、王族に対する遠慮もなくなりつつあります」
「しかし、アルボー公爵が姫様のお命を害するだけの理由が……」
「あの男は野心家です。現王族を除外し、アルボー公爵家から次代の王を輩出しようと目論んでいるのでしょう」
「だから、それで姫様を亡き者にするとでも？　そんなことをしてもあまり意味はないのでは？」

ベルトラム王国の王位は世襲制だ。
王位継承権が高い者から順に次代の王となる資格があり、王位継

承の絶対条件としては国王の直系子孫であることが要求されており、嫡出子孫と男系子孫が優先して高い承継順位を獲得していくことが国法で決められている。

死亡、放棄、剥奪といった事由で王位継承権が消滅するか、女系の嫡出子孫しかいない状態で新たに男子の嫡出子孫が産まれない限り、王位継承の順位が覆されることはありえない。

現在は国王フィリップ三世と正妻ベアトリスとの間に産まれたクリスティーナとフローラが第一王位継承権と第二王位継承権をそれぞれ保有しており、その下に側室との間にできた子供達が名を連ねている。

アルボー公爵の末娘も側室の一人としてフィリップ三世に嫁いでいるが、その間に生まれている子の継承順位はかなり低い。

しかも、高位の継承権を持つ者が新たに子をなしてしまえば、下位の王位継承者の順位は下がってしまうため、上の順位の者を一人二人を殺すことに大した意味はない。

それでも暗殺を試みた例が過去になかったわけではないが、暗殺により順位が上昇して利益を受ける者達は怪しまれて当然の立ち位置に置かれてしまうし、後に禍根を残しかねない両刃（もろは）の剣である。

加えて、ベルトラム王室の権威は六賢神の神威に裏打ちされたものであるため、王族に危害を加えることは神に対する反逆に等しい。

いくら実権を握りつつあるとはいえ、正当性を確保するためにも、最低限順守すべき社会的な体裁を無視していいという話にはならないのだ。

だからこそ、アルボー公爵は――武力を背景にしてはいたものの――国王フィリップ三世から実権を平和的に譲り受けたという形式をとり、王位の簒奪（さんだつ）までは行ってはいなかったりする。

なのに、ここに来て、そのラインを踏み越え、アルボー公爵が王族に危害を加えることも厭（いと）わないようになったとなれば、穏やかな話ではない。

「ええ、確かにセリア先生のおっしゃる通りです。今までならば、あの男の野心を実現することは難しかった」

言って、クリスティーナは深く溜息をつく。

「しかし、何か事情の変化があったと？」

セリアがごくりと唾を呑むと、クリスティーナがこくりと頷いた。

「業腹（ごうはら）ですが、勇者が召喚されたことにより、あの男の野心が実現される可能性が出てきました。あの男は自分の孫娘を勇者の正妻として婚約させようとしています。その間に産まれた子を次世代の王として擁立（ようりつ）する腹積もりなのでしょう」

クリスティーナがそう語ると、セリアの顔が盛大に引きつる。

「アルボー公爵の孫娘というと、ロリス様ですか？　確かに、それなら可能性は……。しかし、国が二分しますよ。国法を無視して既存の王位継承順位を覆そうなんて」

本来ならば第一王女のクリスティーナ、次点で第二王女のフローラが勇者と契りを交わし、王室の権威をより高めるのが正当な道筋だ。

勇者は六賢神の使徒であり、国王と同等以上の権威をその身に宿しているため、下手に王位継承権の低い者と婚約させてしまうと、その子孫にも次代の王と並ぶだけの権威が生まれてしまいかねないからである。

実権や地位を有していない相手と結ばれると言うのであれば、大した実害は生じないのだが、実権や地位を兼ね揃えた相手と婚約するとなると、相応の配慮をしなければややこしい事態になりかねな

い。
　そして、クリスティーナが語る通りならば、今のアルボー公爵にはそんな配慮をする気はさらさらなく、孫娘と勇者を婚姻させ、その子孫を次代の王に推そうと考えているわけで――。
　そうであるならば、確かに彼の存在は国にとって害悪と断言しても差支えはないのかもしれない――と、セリアは瞬時に考えた。

「もうベルトラム王国は二分されています。そして、だからこそ、アルボー公爵は私が勇者と近づくことを恐れているんです。勇者が召喚されて以降、私はほとんど自由な行動を認められていませんでしたから」

　語って、クリスティーナが怒りと呆れの織り交ざった笑みを口許(くちもと)に覗かせる。

「私が国を離れている間に、そのように深刻な事態に進展していたのですね。無知蒙昧(むちもうまい)な自分が恥ずかしい限りです」

　忸怩(じくじ)たる想いを抱いているのか、セリアが顔をしかめた。

「お話中のところ申し訳ございません。温かいお飲物の用意ができました。どうぞ」

　すると、そこで、簡易キッチンからリオが戻ってきた。
　トレイの上には陶器製のティーカップが四つ――、そこから柑橘系の甘い蜜の香りが漂ってくる。
　セリアはそっと深呼吸し、暗くなった気分を落ち着けた。

「ありがとう、ハルト。これは……」
「ホットレモネードです。はちみつとすりおろしたリンゴも混ぜて

あります」
「美味しそうね。ありがたく頂くわ」
セリアが柔らかな笑みを浮かべた。見る人を安心させるような癒し系の笑顔だ。
「はい、熱いので火傷しないように気をつけてください」
リオがにこりと微笑んで言葉を返し、それぞれの席に配膳していく。
「ありがとうございます。よければ貴方も座ってください。アマカワ卿」
と、クリスティーナがリオに声をかけた。
「失礼します」
頷き、一言断ってから、リオがセリアの隣に腰を下ろす。
「毒は入っていないはずですが、毒味はどうぞご自由に。何なら私がしてもかまいませんが」
続けて、リオが対面に座るクリスティーナとヴァネッサに毒味をするか尋ねた。
初対面のリオが作った飲み物であり、王族であるクリスティーナが口にする物である以上、毒味が行われる必然性は高い。
クリスティーナ達も毒が入っていると思ってはいないだろうが、こういうのはお約束というか、形式的に踏襲するべき儀式のようなものである。

そこで、自分から提案することで、リオは毒味をしやすい空気を作り出すことにしたのだ。

「心遣い、痛みいる。それならば私が――」

「いいわ。頂きましょう」

毒味を行おうとしたヴァネッサを捨て置き、クリスティーナが何の躊躇(ちゅうちょ)もなくカップに口をつけた。

「あら、美味しいわね」

目をみはり、クリスティーナが感想を口にする。

「ひ、姫様！」

呆気にとられていたヴァネッサだったが、慌てて抗議した。

「かまわないわよ。彼が私達を殺そうと思っているのなら、とっくに殺しているわ。最初に遭遇した時の戦闘でそれを行うことはできたもの」

「それは、そうですが……」

かぶりを振って整然と語るクリスティーナに押され、ヴァネッサが言葉に詰まる。

「私はセリア先生を信用しているわ。彼女が重用している人物ならば、信用するわよ」

器が大きいと言うべきか、思い切りがいいというべきか、クリスティーナがさらりと言ってのけた。

「……承知しました」

小さく嘆息し、ヴァネッサが折れる。そっとカップに口をつけると、予想外の甘みが舌に広がり、目を丸くした。

「ところで、アマカワ卿。いくつかお話を伺ってもよろしいかしら？」

クリスティーナがリオに視線を向け、話を切り出した。

「無論です。私に答えられる範囲でなら、ですが」

ひょいと小さく肩をすくめ、リオが首肯する。

「感謝します。では、まず貴方とセリア先生の関係について。こうして護衛を務めているということは、セリア先生が王城を脱出したのは貴方が関与していると考えてもいいのかしら？」

「ええ、セリア様は私の恩人です。その恩を返すため、私が王城からの脱出を手引きしました」

「私がハルトに頼んだのです。クリスティーナ様」

セリアが城を抜け出した責任が自分にあるかのような話しぶりでリオが語ると、セリアが言葉を付け加えた。あくまでも自分の意志で王城を出たというスタンスを貫きたいのだろう。

「……なるほど。では、セリア先生を連れだした件に、ガルアーク王国は関与していないと？」

尋ねて、クリスティーナはリオの顔をじっと見据えた。

「はい。というよりも、私がガルアーク王国の名誉騎士に叙任されたのはつい先日の事ですので、関わりようがありません」

リオがあっさりと首肯してみせる。

「貴方が名誉騎士になったのは最近の事なのですか？」

クリスティーナは少し意外そうに目をみはった。だが、次に続くリオの言葉で、その表情は更なる驚愕の色に染まる。

「ええ、ほんの数日前の事です。それ以前は平民、浪々の身でございました」

「……平民？　それにしては、随分と教養に溢(あふ)れた立ち振る舞いをしているけれど。そこいらの貴族の子弟と比べてもそん色はないですよ」

と、リオの立ち振る舞いを褒めるクリスティーナ。

「身に余るお言葉、光栄です」

リオは小さく頭を下げて、愛想笑いを浮かべた。

（平民だった。そして、セリア先生が恩人。……でも、先生は学院に籠(こも)りがちだったし、どこで関係を持ったのか。領地に帰省していた時？　それとも――）

探るような視線をリオに向けながら、クリスティーナがどこか釈然としない思いを抱く。

「ねぇ、あまり関係のないことだけど、貴方とセリア先生はいつ知り合ったのかしら？」
「今から十年近く前のことでしょうか」
「十年近く前……」

その頃の自分はベルトラム王立学院に入るか入らないか程度だっただろうか、色々と未熟で、そのくせ周囲からもてはやされ、自分にできないことなどないと勘違いして傲慢になっていた頃でもあった――と、クリスティーナがそんなことを思う。
まさしく若気の至りで、あまり思い出したくない忸怩（じくじ）たる過去だが、今は関係のないことだ。
なので、クリスティーナは微妙に顔をひそめながらも、そっと心の奥深くに眠る記憶の扉を閉めた。

「どうかなさいましたか？」

彼女のわずかな表情の変化を察し、リオが尋ねる。

「……いえ、何でもありません」

クリスティーナはゆっくりとかぶりを振った。
ハルトとセリアの関係について気にならないと言えば嘘になるが、今は話を脇に逸らして脱線している時間はない。
また、あまり根掘り葉掘り訊（き）きすぎて下手にハルトの気分を害するのも上手くないし、それ以上の詮索はぐっと抑えることにする。

「話を元に戻しましょうか。ガルアーク王国の関与がなかったとして、貴方は完全に個人でセリア先生の救出を行ったというの？」
「はい。その通りです」

リオが即答し頷く。

「お城の警備状況を考えると、ちょっと信じられないのだけれど……、こうしてこの場にも侵入を果たしている以上、信じざるをえないのかしら。その方法は気になるところだけれど」

語って、クリスティーナがスッと目を細める。

「そこは秘密とさせていただけると助かります。色々と危ない橋も渡りましたので」

クリスティーナの間接的な情報開示要求をしれっと拒否し、リオは正面から彼女と視線を交えた。

「……わかりました。まぁ、いいでしょう。そのおかげでセリア先生がこの場にいるのですから、不問とします」

数秒ほど見つめあうと、クリスティーナが深く息を吐いて折れる。

「ご厚情、痛み入ります」

礼を言って、リオは軽く頭を下げた。

「代わりと言ってはなんですが、ここ最近のガルアーク王国の情勢を聞かせてくれないかしら？　差支えのない範囲でかまわないから」

「承知しました。そうですね。では、つい先日、ガルアーク王国のお城にて、近隣諸国の来賓を招いて、勇者サツキ＝スメラギ様のお披露目が行なわれたのですが、ご存じでしょうか？」

リオは先の夜会に関する情報を教えることにした。クリスティー

ナが興味を示す。

「いいえ、初耳ね。お城では外部の情報が統制されていたから。貴方はその夜会に出席したの？」

「ええ。アルボー公爵に反抗しているベルトラム王国の方々もいらしていましたよ。今は『レストラシオン』という組織を名乗っておりますが」

反アルボー派の存在と『レストラシオン』の存在に反応し、クリスティーナの眉がぴくりと動いた。

「『レストラシオン』、実質的な指導者はユグノー公爵といったところかしら。フローラは……」

「お元気そうでしたよ。幸運に恵まれ私もフローラ様とお話しをする名誉を賜(たまわ)りました。今は勇者ヒロアキ＝サカタ様と行動を共にしていらっしゃるようです」

おそるおそる投げかけられた質問に、リオが安らかな笑みを浮かべ回答する。すると、クリスティーナはホッと安堵の息を漏らした。

「そう、無事なのね。ならいいわ」

ややそっけなく言ってはいるが、口許(くちもと)がわずかに緩んでおり、嬉しそうなのが伝わってくる。

それだけ妹の事を大切に想っているのだろう。

クリスティーナはかつてリオのクラスメイトであった少女だが、こうしてまともに会話をした機会は一度もない。

今こうして話しているのがリオだと知れば、どんな反応をするのかはわからないが、当時は寡黙(かもく)でツンとしていたため、こうして何気ない優しさを覗かせるのは少し意外に思えた。

「それにしても、やはりフローラ達の下にも勇者が召喚されていたのね。ルイ＝シゲクラ、ヒロアキ＝サカタ、サツキ＝スメラギ。これで判明している勇者は三人。あとはセントステラ王国にも聖石があったはずだけど……」
「はい。セントステラ王国にも勇者様が召喚されています。名はタカヒサ＝センドウ様ですね」

と、リオは貴久に関する情報をクリスティーナに伝える。

「……もしかしてセントステラ王国の勇者まで夜会に出席したのかしら？」

目をみはり、驚きを露わにするクリスティーナ。閉鎖的なセントステラ王国までもが動きを見せたことを意外に思ったのかもしれない。

「ええ。ガルアーク王国、ベルトラム王政府の反抗勢力『レストラシオン』、セントステラ王国。勇者を擁（よう）するこれら三勢力が、この夜会で関係を強めたことになります」
「ちょっと軟禁されている間に、ずいぶんと国際情勢は変わりつつあるみたいね。今の事態……特にフローラの下に勇者が召喚されたことは、アルボー公爵にとって面白くないのでしょうけど……」

言いながら、クリスティーナが物憂げな表情を覗かせる。

「これから先、ベルトラム王国本国と『レストラシオン』、両者の対立関係はいっそう強まるでしょうね。『レストラシオン』の背後にはガルアーク王国も控えている。アルボー公爵が殿下の捜索に血眼になっている理由にも納得がいきます」

リオがそう言うと、黙して話を聞いていたセリアがふと口を開いた。

「しかし、そうなると一つ気になることがあるのですが……」

「何がでしょう？」

クリスティーナがちらりとセリアに視線を向ける。

「捜索隊の人員がこの付近にいるということは、姫様達の足取りはほぼ掴まれているということでしょうか？」

セリアの質問に、クリスティーナはこくりと頷いた。

「おそらくは。私達を秘密裏にお城から連れ出したことで、クレール伯爵に謀反の容疑がかかってしまったようです」

済まなそうに顔を曇らせ、クリスティーナが語る。

「姫様の逃亡は父が主導したのですか？」

「計画を立てたのは私の父です。今の親王派で頼れる存在がクレール伯爵しかおらず、私をフローラのもとへと送り届けるようにと。伯爵の協力を得て何とかこの地まで逃げてくることはできたのですが、身動きがとれなくなりこの地下室で隠れるようになったのがほんの数日前の事でした」

「……色々と今の状況に合点がいきました。そうなるとこの地下室も完全に安全とは言いきれなさそうですね」

そう言って、険しい顔つきになるセリア。

「今は捜索隊の人員が屋敷に滞在しているらしく、隠し部屋の存在には薄々気づいているみたいです。伯爵が上手く躱(かわ)してはいるようですが、痺れを切らして強引な捜索を開始するのも時間の問題でしょう」

そう語ると、クリスティーナは深く溜息をついた。

「……姫様はいかがなさるおつもりで？　このままこの場所に潜伏し続けるのでしょうか？」

「それをどうするべきか、ちょうど悩んでいたところでした」

発見されないだろうという希望的観測に従いこの場に留まるか、リスクを承知でこの場を抜け出し先に進むか。

前者は希望通りに物事が進めば時間を喰う以外は万事上手くいくが、希望は希望でしかない。捜索がどれだけ長期化するかは不明だし、仮に捜索の手が及んできた際には逃げ場が塞がれてしまい、その時点でゲームオーバーになりかねないことが予想される。

他方で、後者は脱出時に発見されるおそれが強いが、抜け出してしまえばある程度は自由に動き回ることができる。人目を避けて上手く進めば目的地にたどり着けば、徒(いたずら)にこの場に留まるよりは有効に時間を活用できるだろう。

いずれにせよ、出るか留まるか、メリットとデメリットを利益衡量し、決断するのはクリスティーナだ。

「なるほど……」

小難しい顔をして頷くセリア。その横顔を、リオは黙って眺めていた。

「ところで、セリア先生、今更ですがその髪の色はいかがなさった

のですか？　先生の髪は綺麗な白だったと記憶しているのですが」
ふと思い出したように、クリスティーナがそんな質問を投げかける。
「あ、えっと、これは……」
やや動じた様子で、セリアがリオに視線を向けた。リオがこくりと頷くと、小さくホッと息を吐いて口を開く。
「魔道具で髪の色を変えているのです」
「その魔道具の入手先を伺っても？」
今のやり取りでおよその察しはついているのかもしれないが、クリスティーナはあえて尋ねた。
「私が作ったのです。殿下」
セリアの代わりに、リオが答える。
「髪の色を変える術式は一般に流通しているものなのでしょうか？　私が知る限り、ベルトラム王国内では目にしたことはないのですが」
シュトラール地方には数多くの術式が流通しているが、そのすべてが一般に公開されているわけではない。
中には一部の集団に秘匿され、あるいは個人に秘匿され、秘密裏に管理されている術式も存在する。
そういった術式を用いた魔術は秘術として扱われ、安易に外部に漏らされることはない。

ゆえに、その価値は時に計り知れないほどに高くなる。千年以上にも及ぶシュトラール地方の歴史上、一つの秘術を巡って小国同士で戦争が生じたこともあったほどだ。

「でしょうね。少なくとも一般に流通している術式を用いて作ったものではありません。いわゆる秘術にあたるものです」

「……無礼を承知でお願いしますが、同じ魔道具を四つほど融通していただくことはできないでしょうか？　無論、しかるべきお礼はします」

クリスティーナが単刀直入に話を切り出した。

髪の色を変えることができる魔道具――、逃走中の彼女からすれば喉から手が出る程に欲しい代物だろう。

クリスティーナの薄紫色の髪はベルトラム王国でも珍しい色合いだし、ダイニングの外にいる日本人二人組の黒髪もシュトラール地方では珍しいため、外部を出歩けばこれ以上ないほどに目立ってしまうからである。

何も髪の色を変える手段は魔道具だけではない。

だが、一般に普及している塗料を使用した髪染めは不自然な色合いになりやすいし、カツラも見た目があからさまに不自然になってしまうため、変装手段として用いるには向いていない。

ところが、今目の前にいるセリアは天然の地毛と言われても気づかないほどに自然な色合いを醸し出している。追跡する側もまさかこれほど精密に髪の色を変えることができるとは思いもしないであろうほどだ。

「そうですね。魔術契約書を用いていくつか条件を呑んでいただけるのであれば、期間限定で貸し出すことも吝(やぶさ)かではありません」

リオが不確定な条件付きで申し出を受け入れる姿勢を見せた。

今後、万が一の事態が生じた時のことを考えれば、交渉用のカードとしてクリスティーナに貸しは作っておくことは悪くない選択に思えたからだ。
ちょうど美春達が使っていた魔道具と緊急時用の予備がいくつか残っているし、手間はかからない。
なお、魔術契約書にはいくつか種類があるが、今はその説明を割愛する。

「本当ですか？」

条件というのは気になるが、クリスティーナの表情がほころんだ。

「ええ、条件に関しては後程。他に話しておきたいことがあれば、先にそちらをお話しください」

条件を煮詰めるのは話がすべて出尽くしてから――そう考え、リオはいったん話題を切って先を促した。

「であれば、今、私から言いたいことはあと一つでしょうか。セリア先生――」

そう言って、クリスティーナが真っ直ぐとセリアを見据える。その先に続く台詞は――、

「私と一緒に『レストラシオン』へ同行していただけないでしょうか？」

案の定というべきか、セリアを自身の下に勧誘する言葉だった。
その申し出を予想していたのか、セリアに動じた様子はない。だが、ひどく悩ましげに顔を曇らせている。

「……少し考える時間を頂けませんか？」

逡巡し、セリアが即答を控えた。視線を向けてはいないが、隣に座っているリオをそれとなく気にしているようだ。

一方で、クリスティーナの表情は実に涼やかである。

「無論です。今日はこの辺りにしておきましょうか。明朝にはクレール伯爵が地下へ降りてくるはずです。答えを聞くのは伯爵と話をした後でも構いませんので」

「格別のご配慮、ありがとうございます」

セリアはクリスティーナにぺこりと頭を下げた。

第１２０話　迫られた決断

クリスティーナとの話し合いを終えた後、リオとセリアは残っていた地下の空き部屋に移動し、ベッドに座りながら二人で向かい合った。

リオは髪の色を変える魔道具を着用したままだが、セリアは一時的にそれを外している。

「ねぇ、リオ。私……」

思いつめた顔で、セリアがおもむろに口を開く。すると、彼女の心中を読みとっていたかのごとく、リオが先んじて言葉を被せた。

「クリスティーナ王女に付いていきたいんですよね？」

「え？　あ、いや。それを悩んでいる、というか……」

少なからず動揺したのか、セリアがしどろもどろに返事をする。

リオは優しい顔で笑みを浮かべた。

「先生の人生です。悔いがないよう、先生が思った通りに行動してください。そのために俺は先生をあの城から連れ出したんですから」

「……リオ」

きゅっと唇を噛みしめ、セリアがぽつりとリオの名を呟く。彼女がリオと行動を共にするようになってから数ヶ月――、疲弊した心を休めるには充分な時間が経過している。

当時は軟禁に近い生活を強いられ、半ば強制的に政略結婚を強いられ、何も先が見えない日が続いたが、国を離れたことで見えてき

たことは多い。
貴族として生まれ育ったセリアにとって、貴族としての義務感や責任感を忘れ去ることは困難だ。
だが、一時的とはいえ貴族のしがらみを捨て去り、リオと過ごすことに安らぎと幸せを感じる自分を見出してもいて――。
「仮に私がクリスティーナ様に付いていったら、リオとは別行動になるんだよね？」
窺うように視線を向けて、セリアが質問を投げかける。
「残念ながら。俺はベルトラム王国に仕えることはできません」
首肯し、リオが申し訳なさそうに語った。
「……やっぱりリオはベルトラム王国のことは嫌い？」
質問に対する答えを予想しているのか、セリアがおそるおそる尋ねる。
「この国が嫌いというよりは、この国に生きる王侯貴族の方々にあまり良い感情は抱いていませんね。もちろん、セリア先生だけは例外ですが」
困ったように苦笑し、リオは自らがベルトラム王国に対して抱いている複雑な感情を説明した。
「……そっか。ごめんね。変なことを訊いて」
「いえ」

リオが首を横に振ると、数瞬の沈黙が降りて――。
「あのね、リオ。私、貴方に何かしてあげられることはないかな？」
何かに堪えきれないように、セリアがそんなことを言い出した。
「どうしたんですか？　いきなり」
突然の申し出に、リオが目を丸くする。
「だって、私、リオに与えられてばかりだもの。私から貴方に何もしてあげられてないわ」
すまなそうに顔を歪ませ、うつむくセリア。
「そんなことはありません。学院に通っていた頃、俺は先生に何度も助けられました」
否定し、リオがゆっくりと語った。
「それこそ、そんなことないわよ。私、特別なことは何もしていなかったし……」
「特別でしたよ」
「え？」
リオが端的に告げると、セリアがきょとんとする。
「俺にとって先生は特別な存在でした。だって、先生だけは孤児だった俺に優しくしてくれて、先生と一緒にいた時だけは心が安らぎましたから。それって特別な存在ですよね？」

と、リオは当時の気持ちをストレートに語った。

「え、あ、いや、その……。どう、だろ……？」

セリアがとたんに顔を赤くし、あうあうと口を動かし、下を向いてしまう。すると、リオは緩やかに口許（くちもと）をほころばせた。

「先生は当時のまま、どっしり構えて、あの頃のようにいつも笑顔でいてください。それなら、俺からは特に何も言うことはありませんから」

「う、うん」

なおもうつむいたままのセリアだったが、消え入りそうな声で小さく首を縦に振った。

「……まぁ、あくまでも俺の願望です。記憶の片隅にでも留めておいてください。少し押しつけがましかったですね。すみません」

はにかみ、リオが照れくさそうに言葉を追加する。

「そ、そんなことない！　嬉しいもん！　努力してそうするものじゃないかもしれないけど、そうなれるよう努力する！」

バッと顔を上げて立ち上がり、飛びかかるような勢いで、セリアが言った。そのままベッドに座ったリオの肩に手をかける。

すると、リオが少しだけ驚いたようにビクリと身体を震わせた。背の低いセリアだが、少しだけ彼女がリオを見下ろすような形になった。

セリアがごくりと唾を飲む。

「あ、あのね！　リオ！」
「は、はい」
決然とした顔つきで、セリアが声を出した。その勢いに押されながら、リオが返事をする。
「えっと、あのね。私、私もね。私にとっても、リオはね。リオは……」
セリアが小さな身体を震わせながら、どぎまぎと口を動かす。あまり要領をえない彼女の言葉を、リオは黙って聞くことにした。すると――。
「春人」
突然、無機質なアイシアの声が室内に響いた。
リオとセリアの身体がびくりと震える。ほぼ同時に、アイシアが実体化してすぐ傍に姿を現わす。
「アイシア？」
「話がある。ちょっといい？」
「え？　ああ、うん。いいけど」
呆気にとられリオが頷くと、アイシアはリオのすぐ隣に腰を下ろした。いつものことだが、その距離は密着しそうなほどに近い。
「ねえ、アイシア――」
セリアが静かで冷たい声を出した。リオが何故か妙な悪寒を感じ

る。

「ん？」

可愛らしく小首を傾げるアイシア。

「ひょっとして貴方、今の話を聞いていた？」

「聞いていた」

「くっ……（この子の存在を完全に失念していたわ！）」

何もこのタイミングで出てこなくてもいいものを――、狙って出てきたのか、天然なのか、感情が希薄なその表情からは判別がつかないが、セリアはそう思わずにいられなかった。

（あ、でも出てきてくれて助かったのかしら？　私、勢いに任せてすごく恥ずかしいことを口走ろうとしてたし……）

同時に、妙にホッとしている自分もいて、セリアは複雑な気持ちになってしまう。すると、なんだかとても恥ずかしくなってきて、

「ア、アイシアの話は何なのよ？　明日は朝早くにお父様が来るみたいだし、仮眠をとらないといけないんだから！」

薄っすらと頬を赤らめ、そんなことを言いだした。

と、その時のことだ。部屋の外から、何か石の扉が開くような音が小さく聞こえてきた。

リオ達が地下室に侵入する時に石の床を開いた音と似ている。

「アイシア、ひょっとして話って……」

「うん、上から誰か来る」

リオの問いかけに、アイシアがこくりと頷く。そのまま再び霊体化して姿を消すと、リオとセリアの間に緊張が走った。
クレール伯爵が地下へ降りてくるのは明朝のはずだ。いったい誰が降りてきたというのか。
リオが静かにベッドから立ち上がり、足音を殺して扉の近くへ歩み寄り、腰に装着したダガーに手を伸ばす。
外部に慌ただしい気配はなく、待つこと十数秒――、部屋の扉をノックする音が響いた。

「……ヴァネッサです。実はクレール伯爵が降りてきまして。今からダイニングルームで話をすることになりました」

ドア越しにヴァネッサの声が聞こえて、リオが小さく息をついた。臨戦態勢を解除し、セリアを見やると、こくりと頷かれた。

「承知しました。すぐそちらに伺います」

☆★☆★☆★

リオとセリアがダイニングルームへ向かうと、そこにはクリスティーナとヴァネッサの他に一人の男性が椅子に腰を下ろしていた。
かの人物こそセリアの父――ローラン＝クレール伯爵だ。細身で少し小柄だが、威厳と覇気を感じさせる若々しいナイスミドルである。
どうやらクリスティーナがローランに何かを説明をしようとしていたところだったようだが――。

「……ん？」

室内に入ってきたセリアを視界に入れると、ローランがギョッと目をみはる。

「せ……セリアちゃん！？　なんでここに？」

と、ローランが素っ頓狂な声を出す。

（セリアちゃん？）

一瞬、リオは自分の耳を疑った。

「あはは、ご無沙汰しております。お父様」

苦笑しながら、セリアがローランに語りかける。すると、ローランは両手を広げ立ち上がり、セリアに抱き着いた。

「げ、元気だったかい？　セリアちゃんが失踪した後、セリアちゃんの書体で書かれた差出人不明の手紙がうちに届いたけど、心配したんだよ」

「申し訳ございませんでした。手紙には最低限の情報しか書くことができなくて……。ご覧の通り、私は無事です」

どうやらセリアは父からだいぶ溺愛されているようだ。

見た目から受けとった第一印象とは大きく異なったが、ローランが悪い人物ではなさそうだとリオは判断した。

「むむむ。姫様にお伝えしなければならない情報もあるのだが……」

ローランが悩ましげな顔つきになる。セリアがお城を出てからどうしていたのか、何故この場にいるのか、訊きたいことは山ほどあ

るに違いない。
「本当に時間がないのでなければ、先にセリア先生とお話をなさってください。せっかくの親子の再会ですから」
ローランの心情を察し、クリスティーナが語りかける。
「……いえ、姫様へのご報告を先に」
逡巡の末に、ローランが決断した。どうやらそれ程に緊急事態らしい。
それを察し、クリスティーナが身構える。
「わかりました。あまり良い知らせではなさそうですが、お聞かせください」
「はい。それが、王都から追加で捜索隊が送られてくるようでして。おそらく陛下発付の捜索令状をこしらえてくるはずです。そうなればこの地下室を解放しなければなりません」
と、ローランが難しい顔つきで説明を行う。
その内容は、クリスティーナにとっては死刑宣告にも等しかった。
いや、クリスティーナだけではない。クレール伯爵家にとっても家の存続がかかった一大事である。
この地下室にクリスティーナがいることが判明すれば、クレール伯爵家もクリスティーナ達も一巻の終わりなのだから。
だが、ローランもクリスティーナも動揺したり自棄になったりせず、表面上は落ち着いているように見える。
諦めてはいない――、いや、諦めるわけにはいかないのだ。
「……追加の捜索隊が来るのはいつでしょうか？」

「陛下が時間をお稼ぎになっているはずですが、流石に限界でしょうな。早ければ明日の午前中にでも現れることでしょう」
「となると、すぐにでもこの地下室を出て行く必要がありそうですね」

震えた声で、クリスティーナが言った。その実現がどれだけ困難か、彼女自身もよく理解しているのだろう。

「ええ。日が昇れば否応に目立ってしまいますからな。屋敷の庭には私の手が及ばない人員も徘徊しておりますが、夜間はその数も少ない」

語って、ローランが複雑な表情を浮かべる。条件が良い夜間であっても、屋敷からの脱出は困難に思えたからだ。
出て行くという結論を出したはいいが、確率の高い手段に見当がつかない。

「……アマカワ卿。髪の色を変えるという先の魔道具、すぐにでも貸していただくことはできないでしょうか？」

クリスティーナがリオを見やり、縋(すが)るように尋ねた。

「……可能です。予備を取ってきますので、いったん部屋に戻ってもよろしいでしょうか？」
「無論です」
「それでは、失礼します」

そう言い残して、リオが部屋を出て行く。

「セリア先生。今のうちにクレール伯爵に何があったのか教えてあ

げてください。それと、急かすようで申し訳ございませんが、先ほどのお返事もお聞かせ願えると幸いです」
「……承知しました」

クリスティーナの要望に応え、セリアはこれまでに起きた出来事をローランに語ることにした。

☆★☆★☆★

「むぅ……。にわかには信じがたい話だが、セリアちゃんの言うことなら、信じるしかないな」

黙って話を聞いていたローランだったが、セリアが事情を説明し終えると、渋い顔つきで口を開いた。
既にダイニングルームへと戻ってきたリオにちらりと視線を向ける。

「君がセリアちゃんを助けてくれたわけか。ハルト＝アマカワ卿。まずは礼を言わせてもらいたい。ありがとう」

ローランは椅子から立ち上がると、右手を胸に沿えてリオに頭を下げた。
もしかしなくとも罵倒されてもおかしくはないと覚悟していただけに、リオが妙な居心地の悪さを覚える。

「いえ、それは、その、私は取り返しのつかないことをしてしまったので。むしろご心配をおかけしてしまい、申し訳ございませんでした」
「まぁ、確かに、相手がアルボーの倅（せがれ）でなければ、魔法で消し炭にしていたかもしれないが」

「は、はは」

物騒な発言に、リオが引きつった笑みを漏らす。

ローラン＝クレールといえばベルトラム王国で有数の大魔道士だ。その気になれば人間一人くらいは容易く消し炭に出来るだろう。もちろん相手がリオでなければ、だが。

「お父様、勘違いしないでください。城を脱出すると決断したのは私です。その責任はハルトではなく、私にあるんです。咎めるなら私にしてください」

セリアがムッと唇を尖らせて語る。

「いや、セリアちゃんは悪くない！」

「じゃあ、ハルトも悪くありませんよね？」

「も、もちろんだとも」

ローランはセリアの論法にあっさりと降った。

セリアが嬉しそうで、それでいてどこか寂しそうな笑みを浮かべる。

そして――、

「……お父様、私は姫様に付いていきます」

決然とした表情で、セリアが言った。

「行くな、と言っても、意味はないか」

どこか諦めたふうにローランが返した。公には失踪中となっているセリアがこのまま屋敷の地下室にいると不味いのはクリスティー

ナと同じだ。

「はい。お城を出てから、私は心のどこかでずっと悩み続けてきました。このままでいいのだろうか、と。その悩みの答えを見つけるために、ハルトに我儘を言って、こうしてこの地へ連れてきてもらったんです。少々想定外な事態に直面しましたが、却(かえ)って決心がついたかもしれません」

「そうか……」

ローランが渋い顔つきになる。

セリアはローランにそれ以上の言葉をかけることはせず、クリスティーナに向き直った。

「クリスティーナ様。これが私の返答でございます」

「ありがとうございます。正直、先生ほどの魔道士が同行してくださると、非常に助かります。生き延びて、この恩には必ず報いますので」

そう言って、王族であるクリスティーナがセリアに深々と頭を下げた。

「光栄です。……殿下。少し、ハルトとお話をしてもよろしいでしょうか？」

「もちろんです」

クリスティーナの許可を取り、セリアがリオと話をする時間を捻出する。

「セリアお嬢様」

聞きなれない呼び方でリオに声をかけられ、セリアがくすりと笑ってしまう。

「ハルト。ごめんなさい。貴方に相談もせず、勝手に話を決めてしまって。私の都合で、いつも貴方を振り回してしまっているわね」

そう語って、とても申し訳なさそうに顔を歪めるセリア。

「そんなことはありませんよ。貴方に恩を返すために、好きでやっていることですから」

リオが微笑し、かぶりを振る。

「ありがとう。……ハルトならそう言ってくれるってわかっていたわ。だから、私はいつまでも貴方に甘えてずるずると頼り続けてしまったんでしょうね。ズルいと思っても、貴方に甘えているのはすごく居心地が良かったから。……でもね、もうハルトにはたくさんの恩を返してもらったわ。私が貴方にしてあげたこと以上にね」

言って、セリアが優しく微笑んだ。そして、言葉を続ける。

「だからハルトは逃げてちょうだい。今からでも遅くはないわ。貴方一人ならどうにでもできるでしょう？」

もちろん、リオがアイシアを呼び出し、二人で精霊術を自在に行使すれば、地下にいる全員を連れても脱出はさほど難しくないのかもしれない。

だが、セリアはリオが精霊術を人前で使いたがっていないことを知っている。

また、安易に精霊術を人前で使わない方が良いとも思っている。

だから、それを利用して助けてくれと頼む真似はしない――するわけにはいかなかった。

「確かに、できるでしょうね。でも、俺が今この状況で貴方を置いて一人で脱出すると思いますか？」

何を言っているんだと言わんばかりに、リオが呆れ顔を浮かべる。

「でも、貴方は……」

ベルトラム王国の王侯貴族を嫌っているのでしょう？――喉まで出かかった言葉を、セリアは辛そうに呑みこんだ。

「貴女が仰りたいことはよくわかります。そして、その考えはおそらくそう間違ってはいません――」

今のリオにはセリアを助ける理由はあっても、クリスティーナを助ける理由はない。そんな義理もない。

「――でも、だからといって、俺が貴方を見捨てる理由にはならないんです」

リオが安らかな顔でそう言うと、セリアは涙腺が刺激されて、思わず目がうるっとしてしまった。慌てて両目を拭う。

「だからこそ、私は貴方に逃げてほしいの。これ以上、貴方に頼っちゃいけないの。頼りたくはないの」

「では、俺がいなくともこの屋敷から無事に脱出し、『レストラシオン』に合流できると？」

「……うん」

数瞬の間を置いて、セリアがこくりと頷いた。
「嘘ですね。無理です」
「そんなことない。できるわ」
リオにあっさりとできないと言われ、セリアがムッと反論する。
「貴方は人を殺したことがないはずです。そして、それはクリスティーナ様も同様。おそらく一緒に行動している黒髪の二人も同じでしょう。対人戦闘の訓練を受けているのはヴァネッサ殿だけ。まともな戦闘要員は一人だけです。そんな五人でぞろぞろと動き回れば否応なしに目立つことでしょう」
整然とセリア達の戦力状況を分析するリオ。
「リスクを軽減するためには、班を分けて人員を分散するか、陽動役を用意する必要がある。さて、貴方はどんな作戦を立てているのですか？」
「……私が陽動役をやるわ」
「論外ですね。貴方が捕まれば、ご実家に迷惑がかかりますよ。何故、貴方がこの場にいるのか、どう説明しますか？」
「それは……捕まらないもん」
「いえ、貴方は確実に捕まります」
「捕まらないわよ。なんでわかるのよ？」
セリアがムキになって尋ねる。
「貴方は運動音痴で、逃げ足が遅いですから」
「っ……」

リオが穏やかな笑みを浮かべて語ると、セリアは返答に詰まってしまった。

「な、何よ！　いいの！　ハルトはいらないのよ！　さっさとどっかに行っちゃってよ！」

セリアが自棄っぱちになって叫ぶ。意図的に嫌われるようなことを言ってしまう。

「ええ、行きますよ」

「っ……」

リオが首肯すると、セリアはハッとして顔を歪めた。

「でも、それは貴方を無事に『レストラシオン』まで送り届けたらです。せめてそこまでは面倒を見させてください」

「貴方が、頼むことじゃないでしょうに……」

「そうですね。なので、これで断られたら、勝手に陽動をすることにします」

「馬鹿……」

そう呟くと、セリアはがっくりと肩を落とした。これ以上何を言っても無駄だと観念したのかもしれない。

「というわけです。クリスティーナ様、私の力は必要でしょうか？」

と、リオがクリスティーナに視線を移し尋ねた。

「願っても無い話です。現時点で私からは何も見返りは用意してあ

げられないのだけれど、構わないのかしら？」
「構いません。魔道具貸与の件と合わせて、魔術契約書でいくつか条件を飲んでいただければ」
「承知しました。では、必要な作戦を立てた後、契約を結びましょう。先ほどの話ぶりからすると、貴方なら私達をこの都市から脱出させてくれると考えていいのかしら？」

スッと目を細め、クリスティーナが期待を込めて問いかける。

「ええ。私が陽動役を引き受けます。外で派手に騒ぎを起こして目一杯注意を引きつけ、警備を手薄にしますので、その隙に屋敷を抜け出してください」

完全にリオ個人の実力頼りの作戦に、セリア以外の面々が息を呑んだ。

「……ハッキリ言うが、今回に限って言えば陽動は捨て駒がやる役だぞ。私は人員を動かすことはできん。外には戦闘訓練を受けた騎士や兵士が多数いる。生きて捕まれば拷問を受けるだろう。捕まれば死を覚悟しなければならない。本当に君ならできるのかね？」

と、黙して話を聞いていたローランが言葉を挟んできた。

「できます。ただ、犠牲者が発生するかもしれないのと、一時的に都市機能がマヒするかもしれませんので、それらの点はご承知いただきたいですが」

リオが躊躇（ちゅうちょ）なく首肯すると、ローランが愉快そうな笑みをこぼした。

「……とんでもない自信だな。よかろう。多少の都市への被害は目を瞑(つむ)る。可能ならば領民への被害は抑えてほしいが、無理は言わん。存分にやりたまえ」

これである程度は暴れても罪に問われないお墨付きを、領主から直々にもらったことになる。

後は綿密に作戦を立てるだけだ。

「ありがとうございます。では、詳細を練りましょうか。まず――」

☆★☆★☆★

作戦を実行する直前、黒装束に着替えてローブを羽織ると、リオはローランから呼び出しを受けた。

「アマカワ卿……いや、ハルト君」

「何でしょうか？」

神妙な顔つきのローランに、リオがやや身構えて視線を据える。

「君を男と見込んでのことだ。……セリアちゃんのことを守ってやってほしい。頼む」

そう言って、リオに深く頭を下げるローラン。

「言われるまでもありません」

リオはきょとんとした表情を浮かべると、すぐに微笑し、力強く頷いた。

当たり前すぎて、言われるまでもないことだ。だが、セリアの父

であるローランに頼ってもらえたことは素直に嬉しかった。
「……そうか。ならば、これを受け取ってくれたまえ」
そう言って、ローランがずっしりと中身の入った小袋を差し出す。
「これは？」
「路銀が入っている。道中、何かと物入りになるかもしれんだろう？　余った分は君の報酬として受け取ってくれ。仕事に見合った対価とは言えないだろうが、そちらは生きて後日再会できた時にでも都合しよう」
「いえ、それは……お受け取りいたしかねます」
心苦しそうに語るローランに、リオが困り顔で受領を拒否する。
「いいから、受け取りなさい。せめて旅の費用くらいは負担させてくれたまえ」
ローランは半ば無理矢理リオの手に小袋を握らせた。
「……余った分はセリアお嬢様にお渡ししますので」
「ふっ、君もなかなか頑固な男だな。最近の若い者にしては見どころがある。本来ならば酒でもゆっくりと飲みかわしたいところだが、そろそろ時間だ。行きたまえ」
「はい。失礼します。……それでは」
そう言い残して、リオは屋敷の庭に通じる階段を登り始めた。
天井の隠し扉を小さく開けて、精霊術を用い周囲を探索する。付近に警備の隙間ができたタイミングで扉を全開にして、素早く外に躍り出た。

そのまま巡回する兵達の僅かな隙間を縫うように、見事な動きで瞬く間に歩を進めると、木を利用して軽業師のような動きで高くそびえる屋敷の塀を越えてしまう。

「実力は本物のようだな。なかなかの好青年なようだが、セリアちゃんを泣かしたら承知せんぞ」

扉を閉めて地下に戻ると、ローランがぼそりと呟く。

それから、都市のほぼ中心部の遥か上空に、炸裂音を撒き散らしながら一発の閃光弾が打ち上げられたのは、ほんの数分もしないうちのことだった。

第１２１話　クレイアからの脱出

場所は都市中央に位置するクレール伯爵邸の門付近。
上空に打ちあがった閃光弾の光で、都市一帯が昼間のように明るくなった。
すると、屋敷に滞在している兵達がざわざわと騒ぎだす。
「おい、なんだ。明るいが、もう日が昇ったのか？」
「わ、わかりません！　あの光の玉がいきなり空に現れて」
騒ぎを聞きつけ、仮眠をとっていた年配の兵が屋敷の門に設置された詰所から現れた。
何が起きているのかを聞き出しているが、納得のいく答えなど返ってくるはずもない。
と、そこで、門に向かって近づいてくる人影が一つ。
「誰だ？」
兵士の一人が人影に気づき、大声で誰何（すいか）した。
「……女？」
そこには全身をローブで覆った年若い少女が立っていた。フードを被っていないため、その顔が露わになっている。
上空で輝く閃光弾に照らされて、薄紫色の髪がキラキラと光っていた。
「あの、髪の色は……」

「あ、ああ、通達があった王女様じゃないのか。薄紫色の髪をした少女を見つけたら保護しろって」

幻想的な少女の美しさに見惚れて、兵達が呆然と立ち尽くしている。

そうして兵達が動揺し右往左往しているうちに、少女がくるりと踵(きびす)を返す。

ほぼ同時に、上空に打ち上げられた閃光弾の光が、急速に弱まって消滅した。周囲に再び夜闇が降りる。

「ま、待て！　あ、いや、お待ちください！」

兵達が慌てて呼び止めるが、少女の歩みは止まらない。暗闇の中へと煙のように消え去ってしまった。

「や、屋敷の中にいる兵達を呼び出してこい！　追うぞ！」

「は、はい！」

年配の兵士がハッとして指示を出すと、若い兵士達が駆け足で屋敷に向かって走り出す。

そんな彼らのやりとりを、薄紫色の髪をした件(くだん)の少女が上空から眺めていた。

（アイシア。屋敷の中の兵士達をおびき寄せる。しばらく屋敷の周りをうろついて、それから北ブロックまで逃げてくれ）

少女――アイシアの脳裏にリオの声が響く。薄紫色の髪は一時的に精霊術で色を変化させたのだ。

（わかった）

無機質な声で応じると、アイシアは再び地上へと降り立った。

☆★☆★☆★

城壁内部の北ブロックにて――、身体強化を施したリオが、城壁内部に立ち並ぶ建物の上を飛ぶように走っていた。

「急げ！　まだそう遠くには行っていないはずだ。北門から逃げようとするかもしれん。付近を徹底的に探すんだ！」

地上の通路には、深夜だというのに、無数の兵達が慌ただしく駆けずり回っている。

アイシアの陽動に釣られて、城壁内部にいる兵士達が北ブロックまで誘導されているのだ。

リオは二人一組で行動中の兵士を発見すると、そちらへ向けて勢いよく跳躍した。

風の精霊術を巧みに操り着地音を消し去る。静かに着地すると、兵達に気づかれるよりも先に打撃を打ち込んだ。

「ぐぁっ」

「がっ」

兵士二人が一瞬で昏倒し、通路に倒れてしまった。すぐ側には彼らが装備していた鉄製の警棒が転がっている。

リオは転がっている警棒を発見し拾い上げると、右手に握って装備した。

警棒の握り心地を確かめ、適当に振るって慣らす。そうして警棒を手に馴染ませると、再び跳躍して屋根の上へと姿をくらました。

その後、少数で行動していた兵達を数カ所で気絶させて騒ぎを大

きくすると、北門へと向かい――。

（春人）

リオが北門の近くの物陰に隠れていると、アイシアが実体化して姿を現した。

「お疲れ様。今からそこの門を開けるから、適当に人目に付くように脱出してほしい。アイシアの仕事はそれで最後だ」

そう言って、リオが物陰から篝火（かがりび）で照らされた北門に視線を移す。そこには北門からの脱出を警戒しているのか、案の定、通常よりも多くの兵士が警備に押し寄せていた。

「わかった」

アイシアがこくりと頷くと、リオがローブのフードを深く被り直す。

直後、リオは何の躊躇（ちゅうちょ）も感じさせずに、北門に向かい真っ直ぐと走りだした。

亜竜の革で作られたブーツが地面を踏み鳴らし、弾丸のように門番達に向かい突き進んでいく。そうして一瞬で距離を詰め終えると、兵達に認識の余地すら与えず素早く警棒を振るった。

「ぐあっ」

五人いた門番のうち三人が吹き飛び意識を失う。

「は、え、あ……？」

残った兵士二人がようやくリオの存在に気づいたが、既に時遅し。眼前でその姿を見失ってしまったかと思うと、背後から衝撃を感じ、一瞬で意識が暗転してしまう。

（開門装置は詰所の中だな）

我が家の扉を開けるように、リオが門の横に併設された詰所の中に入っていく。

中には控えの兵士が一人だけいたが、速やかに気絶させて門を開放する装置をいじりだす。

ややあって大きな音と共に北門が開門し始めた。

門が開く音を聞きつけ、付近が一気に騒がしくなる。

「おい、門が開いているぞ！」

「門番が倒れている。下に女の子がいるぞ！」

人間が一人通れるほどに北門が解放されたところで、リオが念話でアイシアに指示を出す。

（行くんだ、アイシア。頃合いを見計らって俺に合流してくれ）

（わかった）

合図に従い、アイシアが駆けだす。彼女が北門を抜けてその背中が見えなくなるよりも先に、リオは小屋を後にして南ブロックへと向かった。

☆★☆★☆★

リオとアイシアが陽動を開始してから十数分後。

セリア達はクレール伯爵邸の塀（へい）を乗り越え、無事に屋敷の敷地内

から脱出していた。
「どうやらだいぶ上手く陽動してくれているみたいですね。まさかこんな簡単に屋敷を抜けられるなんて……」
クリスティーナがローブのフードを深く被りながら、感嘆した様子で周囲を見渡す。
屋敷の庭も、その周辺も、ほんの数十分ほど前とは比べ物にならないほどにがら空きとなっている。
おかげで隠密に関して素人のクリスティーナ達でも簡単に警備の隙間を縫って脱出することができた。
こうして屋敷を抜け出すことができた以上、以降は万が一発見されたとしても、クレール伯爵家に及ぶ実害の程度はだいぶ減ったことになる。
既に魔道具で髪の色も変えてあるので、仮に都市の中で職務質問を受けても即座に素性が判明するリスクも大幅に軽減した。
リオが主導して立てた計画も所詮(しょせん)は青写真にすぎないと期待半分に考えていたクリスティーナだったが、予想以上の成果に少しずつ希望の念が沸き起こってくる。
「ハルトなら確実に仕事をこなしてくれます。我々は南門へと向かいましょう」
「……信頼なさっているんですね、彼を」
リオを信じきって行動しようとするセリアに、クリスティーナが好奇心を込めた視線を向けた。
「できない理由がございませんので」
気恥ずかしそうに、それでいて申し訳なさそうに、セリアが少し

だけ微笑む。
正確にはリオとアイシアと協力しているからこそ信頼がさらに強まっているのだが、アイシアの存在をクリスティーナ達は知らない。
「なるほど……。では、彼の作ってくれたこの好機を逃さないためにも、先を急ぎましょうか」

色々と気になることはあるが、あいにく今は呑気に話をしている時間的な余裕はない。
時間が経てば北ブロックに集中している兵士達が戻ってきて、都市全体で警戒体制が強化されることだろう。
平時なら朝になれば門は開くが、このような事件が起きてしまった以上、明日から城門の出入りが厳しく制約されることは容易に想像がつく。
無論、ほとぼりが冷めるまでクレイアの城壁内部で姿をくらますという選択肢もないわけではないが、今後は捜索要員の大幅な増員もされるはずだ。
クリスティーナが北門から都市の外へ脱出してしまった可能性が浮上したからには、捜索範囲は都市の外にも及ぶことだろう。
領都の中でのんびり潜伏している間に周辺の警戒態勢をがっちり固められてしまっては後手に回る一方である。
ゆえに、都市を脱出して先へ進むのならば、相手の不意を突いた今をおいて他にない。
クリスティーナ達は先を急ぐことにした。
そうして進むこと数分。
現在、城壁内部にいる兵士の大半は北ブロックに動員されているため、南ブロックに兵の姿はほとんど見当たらない。
一方で、城壁内部の南ブロックは歓楽街となっているため、深夜でも出歩いている一般住民はそこそこいたりする。
付け加えて言うのならば、先ほど打ちあがった閃光弾の影響で普

段より騒がしくなっているのだが、普段の雰囲気を知らぬクリスティーナ達がそれを知ることはなかった。
南門付近まで走らず、だが速やかにやってくると、クリスティーナ達の足が止まる。

「流石に門番は残っているようです。あとはどうやってあの門から出て行くかですが……」

物陰に隠れ、ヴァネッサが渋い顔つきで封鎖された南門を睨んだ。
都市の中心部を覆う城壁の高さは軽く十メートルはある――、身体強化魔法を使ってもそう簡単に飛び越えられる高さではない。
城壁の外へ出るのならば門を開けて通っていくしかないだろう。
幸い北ブロックの陽動が功を奏しているおかげで、今は南門の警備が手薄になっている。
これなら門を正面突破することもできそうだと、ヴァネッサが考えていると、

「遅くなりました」
「っ……！」

突然、背後から声をかけられた。
クリスティーナ達の身体がびくりと震える。声が聞こえた先に視線を向けると、黒いローブに身を包んだリオが立っていた。

「まったく気づきませんでした。見事な足運びですね。ヴァネッサですら気づかないなんて」

クリスティーナが感心した口調で語る。すると、ヴァネッサが少しだけ悔しそうに顔を歪めた。

「驚かせてしまったようですね。申し訳ございません」
苦笑し、リオがバツが悪そうに謝罪する。
「いえ、心強い限りです。お越しいただいて早速ですが、あの門を通過する手立てはあるのでしょうか？」
「正面突破しましょう。北門を解放したので、今ならこちらは手薄なはずです」
リオが簡潔に答えると、クリスティーナが目をぱちくりとさせた。
「本当に北門を解放してきたのですね」
「計画を立案する際に申し上げたでしょう？　追っ手の戦力を分散させるためにも、複数の城門を解放することは必須条件だと」
「確かに仰る通りですが、具体的な手段は教えて下さらなかったではないですか」
苦笑しながら語るリオに、クリスティーナがやや呆れのこもった視線を向ける。
今のクリスティーナが向かう先は『レストラシオン』の勢力圏以外にはありえない。それは追跡側も重々に承知しているはずだ。
そして、この領都クレイアから『レストラシオン』の勢力圏へ向かうためには、北あるいは東へと伸びる街道を通っていくのが最短ルートとなる。
北門から出て行ったという事実が残れば、追跡する側もクリスティーナが北に向かって逃走したのだろうと疑わずにはいられないことだろう。
もちろん、北門を出て城壁の外部をぐるっと回っていけば、東西南北どの街道に向かうこともできるが、それすらも陽動なのではと疑心暗鬼に追い込むことができる。

「その辺りを詳しく説明している時間がございませんでしたので。まぁ、今もあまり時間がございませんので、早速ですが開門しましょう」

まるで買い物を決断するようなノリでそう言い残すと、リオは南門へ向かって歩き出した。

「え……、あ……」

「ハルトなら大丈夫です」

あまりにも堂々としすぎていて、クリスティーナが声をかけそびれる。すぐにセリアから太鼓判を押され、固唾を呑んでその様子を見守ることにした。

「おい、止まれ！　夜間は門の出入りは禁止だ。フードを取って顔を見せろ」

二人いる門番の一人がリオに気づき、不審がって呼び止める。

「どうしても急いで門の外に出なければならないのです。駄目でしょうか？」

「駄目だ。夜間の出入りは領令で禁止っ！」

ダメもとで交渉する体（てい）で話しかけていたリオであったが、ある程度接近すると、一気に距離を詰めて門番の腹部に膝蹴りをお見舞いした。

蹴られた門番が宙に浮かび上がり、力を失ってドサリと地面に倒れる。

残った片割れの門番は唖然とその光景を眺めていた。

「なっ……。き、きさっ……がっ！」

何か喚こうとした門番の懐に一瞬で潜り込むリオ。そのまま胴にめがけて頂肘（ちょうちゅう）をぶちかますと、相手の身体が勢いよく吹き飛んだ。

それから詰所にも休憩中の兵士がいないか確認しに入ったが、中に兵は一人もいなかった。控えの兵士も北ブロックに回しているのだろう。

そう判断し、リオは詰所から出て、手振りでクリスティーナ達を呼び寄せた。

「今から門を開けます。今のうちに魔法か魔道具で身体能力を強化しておいてください」

「わかりました」

リオからこの後の作戦行動を簡単に再説明され、クリスティーナ達が緊張した面持ちで首肯する。

「貴方達はこの剣を。いざという時は、自分の身は自分で守ってください」

リオが門番達が装備していた剣を剣帯ごと拾い、黒髪の少年二人に手渡した。

「は、はい……」

ここまで緊張した面持ちでひたすら黙りこくっていた少年達だったが、いっそう顔を強張らせて剣を受け取る。

「では、門を開けます」

「お願いします」

リオは再び詰所の中に入り、必要な操作を行って門を解放した。すると、周囲に開門の音が大きく響き渡る。

「門が開いているぞ！」

「下にいる門番はどうした？」

城壁の上で見張りをしていた兵達が開門の事実に気づき騒ぎだす。

「行ってください！」

リオが指示を飛ばすと、クリスティーナ達が走り出した。リオも後を追いかけ、六人分の足音が城壁外部に広がる夜の街中に響き渡る。

いくら身体能力を強化して走っているとはいえ、稼げる距離はたかが知れているため、速度を緩めるわけにはいかない。

そうしてひたすら走り続け、ようやく街並みが途切れる場所までやってくる。

タイミングが悪いというべきか、日の出の時間が近いようだ。東の空が薄っすらと明るくなり始めていた。

最大の難所は都市の周囲に広がる麦畑である。今の季節はちょうど種まきが始まる前で、見晴らしの良い平野状態になっているのだ。

ここら辺に来ると、普段から身体を鍛えているリオとヴァネッサ以外はだいぶ疲れてきたようで、息切れが激しくなっていた。

可能ならばもう少し時間を稼いだ方がいいかもしれない――、リオはそう判断した。

「俺は追っ手の出足を止めます。夜が明けたら、昼過ぎに、南の街道を進んだ最初の宿場町の手前で落ち合いましょう。街道を外れた

小道の先に泉があるはずです」

麦畑の中ほどに来ると、リオがおもむろに叫んだ。

「ならば、私も！」

ヴァネッサがすかさず殿(しんがり)の協力を申し出る。他の四人は走るのに精一杯で、喋る余裕はなさそうだ。それでもまだ余裕があるのはクリスティーナだろうか。

「貴女はクリスティーナ様達の護衛と、逃走の指揮を。先発の追っ手は足の速い少数が突出して出てくるはずです。攪乱(かくらん)したら俺も即座に立ち去りますので」

「……くっ、承知した」

思い悩んだ表情を見せたヴァネッサだったが、素直に頷いた。

「それでは、ご無事で！」

そう言って、リオが立ち止まり振り返る。ローブの中からダガーと使い捨ての手投げナイフを取り出すと、両手に装備した。

「ハ、ハルト……。ぜ、絶対、絶対、待ち合わせ場所、来るのよ！はぁ、はぁ……。お願いだから！　じゃないと、はぁ、私……」

背後からセリアの声が聞こえてきた。息も切れ切れに、必死に叫んでいる。まだ薄暗くてよく見えないが、その顔は今にも泣きそうに歪んでいた。

リオが右手を大きく振って応じ、それ以上の返事は待たずに、改めて都市に向き直る。

それから、クリスティーナ達が街道の伸びる森の中に隠れて後ろを振り向いた時、ちょうどリオが追っ手達と向き合っているところだった。

☆★☆★☆★

クリスティーナ達を追ってきた者達の人数は十人程度だった。
リオの予想通り彼らは南方面に差し向けられた追っ手の先発隊であり、全員が騎士服を着用している。
いずれも魔法か魔道具で身体能力を強化しているのか、鍛え上げた肉体のスペックを限界ギリギリまで引き出して走ってきたようだ。

（流石に予備兵力は残しておいたか。しかし騎士分隊とは……）

当たり前だが職業軍人のように身体を鍛えている人間とそうでない人間とでは引きだせる身体能力の限界に差が出てくるため、あのままセリア達が走っていても追いつかれていたかもしれない。
どうやら足止めを試みて正解だったと、リオは考えた。

「止まれ！」

堂々と街道を封じるように立っていたリオに呼び止められ、騎士達が一斉に足を止める。

「……貴様、何者だ？　ここで何をしている？　フードを取れ」

先頭に立つ隊長格の騎士が、剣呑な声でリオに誰何（すいか）した。

「あんたらを待っていた。少し訊（き）きたいことがあってな」

リオは質問には答えず、何か意図があるかのように、あえて思わせぶりな台詞を口にした。

「何？」

目的は足止めか？――隊長格の騎士が訝しげにリオの背後を見やったが、そこには広大な麦畑と森が広がっているだけで人影は見当たらない。

「……まぁいい。この場でのんびり会話をしている時間はないんでな。死なない程度に痛めつけてやる。口を割るなら早い方がいいぞ」

「こちらとしても質問をするのにそんなに人数はいらない。あんただけで十分だ」

嗜虐的な笑みを口許に刻んで語る隊長格の男に、リオが右手に持ったダガーを向けて挑発的な言葉を返す。

すると、隊長格の騎士が眉間に皺を刻み、

「……やれ」

冷たい声で、開戦の指示を下した。背後の騎士達が一斉に動きだす。

リオも姿勢を低くし、地面を強く蹴った。突風の如き速度で騎士達に突っ込みながら、左手に握った手投げナイフを放り投げる。

すると、薄暗闇で反応が遅れたのか、手投げナイフは先頭にいた騎士の首筋に綺麗に突き刺さった。

「ぐっ……」

ナイフが刺さった騎士がバランスを崩して倒れる。だが、他の騎

士達に動揺した様子はない。
流石に戦闘慣れしている――冷静にそう分析し、リオは腰に忍ばせたもう一本のダガーを左手で抜き放ち、逆手に握って装備した。
両手にダガーを一本ずつ。いわゆる二刀流だ。あえて剣を用いて戦わないのは、こちらが剣士だという認識を与えないためである。

「囲め！」

騎士達は多対一の必勝戦法に従い、リオを取り囲もうと散開しようとした。だが、リオが変速的に加速し、騎士達が散らばるより先に接敵する。

「なっ……」

想定外の速度に不意を突かれ、流石の騎士達にも動揺が走った。
疾風迅雷。リオが流れるような、舞うような、曲芸染みた動きで、跳ねながら騎士達の間を疾駆する。
囲ませる隙など与えない。すれ違いざまに両手両足を躍らせ、確実にダメージを与えていく。
騎士達も剣を振るって攻撃を加えようとするが、彼らの描く剣の軌跡がリオを捉えることは適わない。

「くそっ、なんだこいつは！」
「つ、強い！」

薄暗い闇の中でアクロバットに動きまわるリオに翻弄されて、騎士達が浮き足立っているのが伝わってくる。
ただ一度リオとすれ違っただけで、ある者はダガーで斬り伏され、ある者は勢いよく蹴り飛ばされ、騎士達はおよそ半分にまでその数を減らしていた。

それから、互いに向き直り、睨みあったかと思うと、リオが予備動作もなく横に飛ぶ。

「な、なに？」

一瞬、リオが消えたように見えて、騎士達の反応が出遅れる。

次の瞬間、消えたはずのリオが側面から突っ込んできた。並んで立っていた騎士二人の隙間を跳躍しながら通り過ぎ、空中で逆さの姿勢でそれぞれに喉元に一撃を加え戦闘不能に追い込む。

「舐めるな！」

着地際を狙って、騎士の一人が背後からリオに向けて剣を振るった。

だが、リオが跳躍して身を捻り、それを躱(かわ)す。回転の勢いを利用して空中でダガーを振るい、振り向きざまに相手を斬り伏せてしまった。

これで残った騎士は三人だけ。距離をとって戦闘を眺めていた隊長格の騎士一名と、平隊員の騎士二名である。

「お、おい！　さっさとそいつを始末しろ！」

隊長格の騎士が泡を食ったように叫んだ。

命令の内容が「痛めつけろ」から「始末しろ」に変化しているが、一個分隊で歩兵中隊を軽く圧倒できるだけの戦力を誇る騎士達があっという間に壊滅状態に陥ったことを考えれば、妥当な判断といえる。

だが、残った騎士二人でリオを始末できるかどうかは別問題である。

「っ……はあああ！」

命令を受けた騎士の一人が大声を張り上げながら、リオに斬りかかった。

リオが逆手で握った左手のダガーを振るい、精霊術で強化した腕力で騎士の剣を弾き飛ばす。

まるで鉄の壁でも斬りつけたような反動を感じ、騎士は手の痺(しび)れと鈍い痛みで顔を歪めた。

リオが硬直した騎士へと歩み寄る。無造作に左手で下から上に向けてダガー振るうと、柄頭(つかがしら)で相手の顎(あご)を打ち砕いてしまった。

「ぁっ……」

声にならない悲鳴が聞こえたかと思うと、最後に残った平隊員の騎士がリオにめがけて水平に剣を振るった。

リオが低くしゃがんでそれを躱(かわ)す。カウンターで横薙ぎにダガーを振るうと、太ももを切断した感触が手に伝わってきた。

そのまま地面に膝を着いて倒れる騎士の顔面に膝蹴りをお見舞いして気絶させる。

隊長格の騎士は唖然とその光景を眺めていたが、

「……ふ、ふざ、ふざ、ふざけるな！　貴様ら、立て！　何をしている！？」

部下達が文字通り全滅させられた事実を受け入れられないのか、ヒステリックに喚き散らした。

「う、うう……」

既に死んだ者もいるが、何人か虫の息で生きている者もいるよう

だ。
負傷した箇所を抑え、苦しそうに呻(うめ)いている。
あまり気分のいい光景ではない。リオは僅かに顔をしかめ、ぎりっと歯を噛みしめた。だが、すぐに表情消し去り、隊長格の騎士を見据える。
「くっ……」
隊長格の騎士は突然、来た道を逆走して都市に向かって逃げだした。瞬く間に味方が全員やられたことで物怖じしたのだろう。
リオが右手を振るいダガーを投げつける。
「ぐあっ」
男の右足にダガーが深く突き刺さった。そのままバランスを崩し、無様に転んでしまう。
リオはローブのフードを深く被り直すと、ゆっくりと男へ歩み寄った。
「ま、待て！　こ、殺さないでくれ！　身代金ならいくらでも払うぞ！　私はアルボー公爵家の者だ！」
隊長格の男が必死に助けを乞い始める。騎士の誇りをかなぐり捨てた非常に情けない行動だ。
「……アルボー公爵家だと？」
相手が予想外に大物な家名を名乗ったことで、リオが半信半疑で訊(き)いた。

「そ、そうだ！　次男のシャルル＝アルボーだ！」

キザったらしい顔で誇らしげに語る自称シャルル＝アルボー。
シャルル＝アルボーといえば、セリアを七人目の妻として娶ろうとしていた男ではないか。

（こいつがセリア先生の婚約者だった男？　……まぁいい）

今は証明する手段が何もないし、本人確認をしている時間もない。リオは手早く用事を済ませることにした。
一定の役職にいると思われるこの男に、こちらがクリスティーナとは無関係だと匂わせるための情報を持ち帰ってもらうのだ。

「ならば質問に答えろ。国の兵士まで動員して、貴様らは何を警戒していた？」

見下ろしながらダガーを突きつけ、リオが尋ねる。すると、男が不思議そうな顔をした。

「な、何を言っている？　わ、我々は拉致された王女殿下を捜索していたんだ。貴様はその協力者なのだろう？」
「王女殿下の拉致だと？　そんなことは知らないが、……そういうことか」

初耳だとでも言わんばかりに訝しんでみせると、リオが思わせぶりに納得した様子を見せつける。

「ど、どういうことだ？　お前は何者だ？　クリスティーナ王女とヴァネッサ＝エマールはどこにいる？」

この状況で好奇心を抑えきれず質問ができるとは、大物というか、小物というか、なかなかに良い性格をしていると、リオは感心した。

「さてな。とりあえず俺とは無関係だ。そんなことより俺の質問に答えてもらおうか。あんた、ルシウスって男を知っているか？」

撹乱がてら、リオがかねてより調べておきたかった情報を尋ねてみる。

以前セリアにもそれとなくルシウスという男を知っているか訊いてみたことはあったが、彼女はルシウスについて何も知らなかったのだ。

「ル、ルシウスだと？　……も、もしや没落したオルグィーユ家の嫡男だった男のことか？」

シャルルがギョッと目をみはり、おそるおそる訊いた。

「オルグィーユ家。昔の家名は知らないが、かつてはベルトラム王国で『王の剣』に名が上がるほどの使い手だと聞いたことがある。そいつか？」

「な、ならその男で間違いないはずだ！」

こくこくと頷くシャルル。

「その男が今何をしているか、あんたは知っているか？」

「な、何故そんなことを訊く？」

「いいから質問に答えろ。訊いているのはこっちだ」

「し、知らん！　傭兵になったとは聞いたが、最後にあの男を見たのは十年以上も前だ。どうして今更になって奴の名前を……。ま、まさか貴様、あの男の依頼で動いているのか？　よもや没落の件で

我が家を恨んでいるのではあるまいな？」
「……さてな」
少々錯乱気味なシャルルからの質問に、リオは底冷えするような声で答えをはぐらかした。
どうやらシャルルの実家は過去にひどくルシウスの恨みを買うような真似をしたようだ。
ルシウスの過去を知るシャルルに質問したいことは色々と思い浮かぶが、あいにくゆっくりと話をしている時間はない。
（……頃合いか）
そう判断し、リオはダガーを握る手に力を込めた。
「悪いが、あんたはもう用済みだ」
「ま、待て！　ふざけるな、話が違う！　質問には答えたぞ」
「ああ、そういう話だったかな」
泡を食って異議を唱えるシャルルに、リオが人の悪い笑みを向ける。
別に質問に答えれば助けてやると明確に約束したわけではないし、そんな期待を守ってやる義理もない。
とはいえ、せっかくひと芝居打ったのだから、仕事はしてもらわなければならないだろう。
リオが左手で握ったダガーを無造作に振り上げると、
「ひっ！」
シャルルが情けない声を出して目を瞑（つむ）った。
すると、リオがするりと足を動かし、シャルルの背後に回り込む。

右手で頭部を掴むと、魔力を流しこみながら脳を揺らしにかかった。

「くあっ」

シャルルが一瞬で意識を刈り取られて気絶する。

リオはシャルルの太ももからダガーを抜き放った。失血死してしまわないよう、応急処置で軽く血止めをしてやる。

意識を保っている者はもういないが、他にも助かる見込みのある騎士には精霊術で簡単に傷口を塞いでやった。

とはいえ、下手な手加減をせずに攻撃したし、所詮は血止めの応急処置にすぎない。

比較的軽症なシャルル以外の騎士達が助かるかどうかは、どれだけ早く救助が来るか次第だろう。

「どうして助けるの？」

いつの間にかリオの背後に立っていたアイシアが尋ねた。

「どうしてだろうね」

リオが振り返らずに、自嘲（じちょう）をたたえ答える。

アイシアはそれ以上何かを尋ねることはせず、黙って治療を手伝い始めた。

そうして二人が黙々と作業を行い、治療を施し終えると、リオが小さく息をついて開口する。

「行こうか。少し場所を変えよう」

「わかった」

直後、二人が地面を蹴ってその場を後にする。

「アイシア、ここら辺にしよう」
しばらく走り続けて森の中に姿を隠すと、リオが言った。
「うん」
頷き、立ち止まると、アイシアがリオの手をぎゅっと掴む。
「どうかした？」
リオが目を丸くして訊いた。
アイシアが小さく首を左右に振る。質問に言葉で答えることはしない。リオの手は握ったままだ。
「そっか……」
リオがアイシアの手をおずおずと握り返す。
ぽかぽか。手から伝わる熱で、なんだか冷えきった心が温かくなった気がした。
「今ならセリア達にすぐ追いつけるよ？」
どうする？――と、アイシアがリオの顔を覗き込む。
「……いや、人数分の旅の道具を揃えておくよ。歩いて旅をしないといけなくなったしね。アイシアは距離をとって先生の護衛を頼んでもいいかな？」
「わかった」

リオが今後の方針を示し、アイシアがこくりと頷く。

「それじゃあ――」

リオは名残惜しそうにアイシアの手を放し、

「――ここからは別行動だ」

と、そう告げた。

「うん」

アイシアが頷いたのを確認し、リオが地面を軽く蹴る。その身が風に包まれて、瞬く間に空高くへと舞い上がった。アイシアもリオとは別方向に向かって飛翔する。

別々に飛び立った二人の姿が、夜明け前に広がるラピスラズリの空に、ほどなくして溶けこんだ。

第122話　その頃　その三

クリスティーナ達がクレイアを脱出した日の朝。
シャルル＝アルボーはクレール伯爵邸の敷地内にある迎賓館で目を覚ました。
意識が覚醒した直後は記憶もおぼろげであったが、気絶している間にあった事態の進展を部下から説明されると、すぐに何があったのかを思い出す。
以降、捜索本部となる一室で、部隊指揮と書類整理に追われ続けていた。
あえて詳細に語るまでもないだろうが、今、シャルルの機嫌は最悪である。そこいらの貴族よりも遥かに高貴な生まれの自分が、素性も知れぬ他者に怯えてしまった――それは彼にとって絶対に看過できない屈辱的な汚点なのだから。
ゆえに、可能ならば今すぐにでも自らを脅かした存在の素性を割りだし、八つ裂きにしてカタルシスを得たいところであった。
だが、今の彼にはクリスティーナの捜索という重大な任務が与えられている。また、怒りで我を見失い任務を放棄するほど、シャルル＝アルボーという男は愚かでもない。
だから、シャルルは自家の繁栄のために復讐感情をグッと押し殺し、クリスティーナの捜索を第一に考え行動することにした。
まず最初に彼が行なったことは情報の集約と分析である。
有力な証言を片っ端から集めさせ、クリスティーナが逃亡した可能性が高いと判断し、逃げた方角を絞り出す。
また、北ブロックと南ブロックで生じた人的な被害状況に大きな差異があったことや、シャルル自身が実際にリオと接触して得た感触から、北と南で起きた事件がまったくの別件である可能性も視野に入れた。

そうしてある程度の目星を付けると、限られた人的資源を有効に活用し、優先順位の高い事柄に捜索の人員を振り分けていく。
そんな最中の事だ――シャルルが滞在している捜索本部の扉がノックされた。

「入れ」

シャルルが扉の外に声をかける。
すると、警備の兵士が入室してきた。一礼し、用件を伝達するべく口を開く。

「シャルル様。近衛騎士団団長アルフレッド＝エマール卿がお越しです。いかがなさいますか？」
「ようやく来たか。愚図めが。さっさと入れろ」

シャルルが不機嫌そうに顔をしかめ、入室を促す。

「はっ！」

兵士が機敏に返礼し、外で待機していたアルフレッドを招き入れた。
すると、たくましい身体つきをした壮年の美男子が室内に入室してくる。
彼こそヴァネッサ＝エマールの兄であり、現『王の剣』として、ベルトラム王国最強の剣士として王に認められた男――アルフレッド＝エマールだ。
アルフレッドは華美な騎士服の上に蒼い軽甲冑を身に着け、腰には美しい宝石のような石を柄（つか）にはめ込んだ剣を携（たずさ）えていた。

「失礼する。遅くなってすまなかったな」

入室するや否やアルフレッドが謝辞の口上を述べた。とはいえ、その顔つきはさして申し訳ないとは思っていなさそうなほどに涼しげである。

「ああ。貴様がグズグズしているうちに、こちらでは大問題が発生中だ」

「そうらしいな。何があったのか、委細を聞かせてもらいたい」

嫌味を隠そうともせず口にして叩きつけたシャルルだったが、アルフレッドがしれっと受け流して説明を促す。

すると、シャルルが小さく眉をひそめた。だが、今はいちいち話の腰を折っている時間はない。

「緊急事態ゆえに、手短に伝達を行う。昨夜、クレール伯爵邸の門付近にクリスティーナ王女らしき少女が現れた。その後、北門と南門が順次強行突破され、それぞれ何者かが脱出したことが明らかとなっている」

「つまり、そのどちらからクリスティーナ王女殿下が城壁の外へ逃げた可能性があると？」

「……ああ。北門から出て行ったのが薄紫色の髪をした少女だったそうだ」

「なるほど。当然、捜索は続けているのだろう？」

「当たり前だ。逃走直後の今で馬鹿正直に街道を進んでいるとは思えないが、既に空挺騎士団を先行させて北と東と南の街道を封鎖させてある」

言って、シャルルが机に広げられた地図上の封鎖地点を指差した。

「森の中に逃げこまれたのなら、そう簡単には見つからないぞ？」

「わかっている。だが、所詮(しょせん)は旅に不慣れな足の遅い女子供だ。そう遠くまで行けはせんだろうよ。既にいくつもの部隊を編成し、北から東にかけて広がる森の中を捜索させている」
「……南は街道は封鎖しただけか？」
「現時点では、な。対処したくとも手元にいる捜索部隊だけでは人手が足りん。城壁外部に潜伏している可能性も捨てきれんしな。ある程度の人員は都市に残す必要があるだろう。だから、クリスティーナ王女の向かう先を考え、北と東を優先させている」
「ふむ……」

シャルルの説明に、アルフレッドが小難しい顔を浮かべた。
確かに、クレール伯爵領の北東に位置するレストラシオンの勢力圏内に向かうのならば、北か東を進んでいくのが最短ルートである。
だが、だいぶ遠回りにはなるが、迂回して南を進んでも向かうことが不可能というわけではない。

「ほぼ南を手薄にしてしまうのも、あまり得策とは思えないが……」
「わかっている。少数ではあるがそちらにも部隊を編成して捜索に当てるつもりだ。……もっとも、南の門が強行突破されたのは、クリスティーナ王女の逃走とは別件かもしれんがな」

付け加えるように後半部分を語って、シャルルは忌々しそうに顔を歪ませた。

「何故そうだと言える？」
「……北と南で人的な被害状況がまったく異なるのだ。北は死傷者を出さないように逃げた配慮が窺(うかが)えるが、南ではそのような配慮が見受けられん。おかげで数名の騎士が殉職した」
「何？　殺したのは男か、女か？」

まさかヴァネッサが殺したというのか？――アルフレッドが耳を疑う。
年齢こそ離れてはいるが、妹の性格は兄である彼がよく知っている。
ベルトラム王国の騎士達は等しく王族の貴重な財産だ。
ゆえに、親王派として王族に高い忠誠心を持つヴァネッサが、安易に必要のない犠牲を同輩から出すとは思えなかった。
「……男だ。得体の知れぬな。私が率いる騎士一個分隊が軽くあしらわれてしまった」
シャルルの発言に胸をなでおろしたアルフレッドだったが、今度は新たな疑問が浮上してくる。
「騎士一個分隊を軽くあしらっただと？　それほどの腕を持つ人物となると、だいぶ候補が絞られてくるはずだが。姫様に協力している我が国の騎士の可能性はないのか？」
「騎士？　騎士だと？　あんな野蛮な戦い方をする者が騎士であってたまるか！　あれはごろつきの戦法だ！　我が国の騎士の中であんな戦い方をする者に私は心当たりなどない！」
イライラとシャルルが吐き捨てる。
剣ではなくダガーを装備し、行儀悪く蹴り技も使う――およそベルトラム王国の騎士達が扱う格式高い正統派剣術とはかけ離れた戦い方だ。
そんな野蛮な剣術の使い手に手玉にとられたことが、騎士としてのシャルルの自尊心を大きく傷つけているのかもしれない。
「訓練された騎士達を、ごろつき如きが易々（やすやす）と倒せるとは思えんが」

アルフレッドが話半分に受けとめ反論する。
「わかっている。だから得体が知れないと言った。クリスティーナ王女かクレール伯爵が協力を求めた可能性がないとも言いきれんが、状況的にそんなツテがあったとも思えんしな」
既に都市の冒険者ギルドに照会し、腕利きの人物のピックアップを行ったが、それらしき人物の記録は見つからなかった。
「王族誘拐幇助の件でクレール伯爵はあくまでも容疑者にすぎない。クロと決めつけて物事を語るのはいささか不謹慎だぞ。それとも言い逃れを許さぬ決定的な場面を押さえたというのか？」
シャルルの推理に、アルフレッドが眉をひそめて意見した。
「貴様がもう少し早く捜索令状を持ってきていれば、状況も違ったかもしれないんだがな」
言って、シャルルが大きく舌打ちをする。すると、部屋の扉がノックされる音が響いた。
「入れ」
「レイス様がお越しです。面会をお求めですが、いかがなさいますか？」
一人の騎士が入室して来て、用向きを伝える。すると、シャルルが大きく目を見開いた。
「何？　すぐにご案内しろ。粗相のないようにな」

騎士が「はっ」と敬礼し、足早に室内から立ち去る。
「誰だ？」
アルフレッドが来訪者の素性を尋ねた。
「私の客人だ。かねてより付き合いのあるな」
「今は軍事機密について話し合っている最中なんだが？」
言外に部外者を呼んでもいいのかと尋ねるアルフレッド。
「重客だ。無下に扱うわけにはいかん」
シャルルが強い口調で言い放つと、アルフレッドが小さく嘆息した。すると、そこで、再び部屋の扉がノックされる。
「レイス様です」
「お通ししろ」
シャルルが促すと、すぐに扉が開いた。そこからひょろりとした身体つきの男が入って来る。レイスだ。
「これは、これは。シャルル様。ご無沙汰しております。お変わりありませんか？」
レイスが病的に青白い顔に愛想笑いを貼りつけ、恭しくお辞儀する。
「お久しぶりですな、レイス殿。相変わらずのようで何よりです。しかし、よく私がここにいるとおわかりになりましたな」

シャルルが気心の知れた相手に向けるような笑みを浮かべた。
「実は王都に向かう道中、こちらの都市に立ち寄りましてね。ご領主にご挨拶をと思ったのですが、シャルル様もいらっしゃると小耳に挟んだものですから」
「おお、それはわざわざご丁寧に。とはいえ、せっかくお越しいただいて申し訳ないのだが、今は少々取りこんでいましてな」
「ふむ。もしやそちらの騎士殿とお話中でしたかな？」
レイスがスッと目を細め、アルフレッドを見やる。
「ああ、そやつは一時的に私の部下となった男でしてな。アルフレッド、自己紹介をして差し上げろ」
と、シャルルが気を良くした様子でアルフレッドに命じた。
「お初にお目にかかる。ベルトラム王国近衛騎士団長アルフレッド＝エマールだ」
「おお、貴方があの名高い『王の剣』であらせられましたか。ベルトラム王国にかの武人ありと、お噂は聞き及んでおります」
レイスがやや芝居がかったように驚き、握手を求める。
「身に余る評価だ。私はただの剣にすぎない」
アルフレッドはそっけなく謙遜して、レイスの手を握り返した。
すると、まるで死体のように冷たい感触が伝わってきて、小さく目を見開く。
レイスはアルフレッドを見据え、薄気味悪く微笑むと、

「ご挨拶が遅れました。わたくし、プロキシア帝国の外交官を務めているレイスと申します。どうぞよしなに」

と、そう名乗りを上げた。

「プロキシア帝国の……」

現在、ベルトラム王国とプロキシア帝国は同盟関係にある。こうして外交官が国の中に立ち入ることもあるだろう。

とはいえ、どうにもアルフレッドには目の前にいるレイスが胡散臭い男に見えて仕方がなかった。まぁ、思っても口や態度に出す真似はしないが。

すると、レイスがおもむろに開口する。

「ところで、何やら都市の中がただならぬ雰囲気でしたが、何か事件でも発生したのですかな？」

「……実は付近を重罪人が逃げ回っておりましてな。この都市の中に潜伏していると睨んでいたのですが、昨晩、何者かの手により内部から城門が突破されてしまったのです」

今のクレイア内部の状況は明らかに異質である。まさか何もないと答えて誤魔化せるはずもない。

シャルルは伝えても構わない一部の事実を掻い摘まんで教えることにした。

クリスティーナ捜索の件を隠すカモフラージュとして、南門で起きた事件のことを語る。

「ほう、それは物騒な話ですな。シャルル様とアルフレッド様が直々に動かれるとなれば、よほどの大罪人とお見受けしますが」

「ええ、追跡の過程で何名か騎士からも犠牲者が出ております。賊は南の街道に逃亡した可能性がありますので、レイス殿もお気をつけください」
「ご忠告痛み入ります。しかし、手練れぞろいのベルトラム王国騎士を複数名もあしらうとは。いったい何者なのか、興味を惹かれますね」

レイスが感心し、目をみはる。

「……傭兵崩れの殺人鬼でしょう」
「決めつけて事に臨むのは軽率だぞ」

やや不機嫌そうに語ったシャルルに、黙って話を聞いていたアルフレッドが言葉を挟んだ。

「決めつけではない！　あの男は……！」

シャルルが語気を荒げ、憤りをグッと抑え込むように言葉を呑んだ。

「あの男は？」
「……ルシウスと、関わりがあるかもしれん」

と、決まりが悪そうに呟くシャルル。
すると、面白い名前を聞いたと言わんばかりに、レイスが「おや」と小さく唸(うな)る。
一方で、寝耳に水だったのか、アルフレッドは目を白黒させていた。

「ルシウスだと？　どうしてあいつの名前が出る？」

「賊の男と剣を交えた際に訊(き)かれたのだ。ルシウスという男を知っているかと」

ぽつりと語るシャルルの言葉に、アルフレッドが渋い顔を浮かべる。

「ルシウスといえば傭兵団『天上の獅子(グリフォン)』の頭目と同じ名前ですが、お二方は知己(ちき)がおありで？」

瞳に好奇の色を潜ませて、レイスが尋ねた。

「レイス殿もご存じでしたか。まぁ、奴はかつては我が国の貴族だった男ですからな」

シャルルがバツが悪そうに答える。すると――、

「……ふむ、何やら立ち入った事情がありそうですな。第三者の私が深く追及するのも無粋というもの。お二方の職務をこれ以上邪魔するわけにもいきませんし、私はそろそろお暇(いとま)させていただきましょう」

レイスがさも空気を読んだかのように申し出る。

「都市に滞在するなら客室を用意させるが……」

「いえ、先を急ぎますので、このまますぐに発つことにしますよ。どうかお気遣いなく」

「そうか……。大したもてなしもできず、本当に申し訳ない。また機会があればゆっくりと語らい合おう」

「ええ、喜んで。それでは」

空虚な笑みを浮かべ頷くと、レイスは部屋から立ち去った。

☆★☆★☆★

そして、レイスが立ち去った後。

「それで、南方面の捜索はどうするのだ？　兵が足りぬと言うのなら、私が出向いても構わないが」

「駄目だ。貴様の単独行動を認めるわけにはいかん。私と一緒に行動してもらうぞ」

アルフレッドの申し出を、シャルルがばさりと切り捨てる。

「随分と信用されていないようだな」

アルフレッドが自嘲（じちょう）気味に言った。

「当たり前だ。此度の件では貴様の妹が関与しているのだからな」

「……身内から出た錆びだ。この目にヴァネッサの姿を収めることがあれば、私が処理しよう」

「無論だ。そのために貴様を呼び出したのだからな。『王の剣』に選ばれたその力を私のために使ってもらうぞ」

そう言って、シャルルが嘲笑（ちょうしょう）を浮かべる。

「……ああ」

アルフレッドがこくりと頷く。

「わかっていると思うが、今回の貴様の働きにエマール伯爵家の未

来がかかっていると思え。妙な真似をすれば……」
「……承知している」
脅すような声色で語るシャルルに、アルフレッドは感情を押し殺したように首を縦に振ったのだった。

☆★☆★☆★

クレイア近郊にある森の中に、四人の人影があった。
一人は黒いローブを身につけたレイスだ。他の三人は冒険者然とした格好をしている。
何やらレイスが三人の男達に話をしていたようで――、
「ではよろしく頼みますよ。相互に連絡を密に取り合い、迅速かつ柔軟に事の対処に当たるように」
「はっ！」
冷淡な声でレイスが命じると、三人がそれぞれ別の方向に向かって散開した。
「あの方の名前を出したゴロツキですか。騎士数名を殺すほどの技量となると少し気になりますねえ。よもや本人が差し向けたとは思えませんが……」
一人残されたレイスがぽつりと呟く。
「まぁ、シルヴィ王女の件も兼ねて、結果待ちですね。私も先を急ぐとしましょうか。あちこち行ったり来たりと、まったく中間管理職というのも大変だ」

そうぼやくと、レイスは軽く地面を蹴った。その身体がふわりと宙へ舞い上がる。
向かう先は西――ベルトラム王国・王都ベルトラントがある方角だった。

☆★☆★☆★

さらに場所は変わり、ガルアーク王国、王都ガルトゥーク。
王城の尖塔上階にある客室には、『レストラシオン』の勇者である坂田弘明（さかたひろあき）が滞在していた。
上質なソファの左右にフローラとロアナの二人を侍らせ、ギュスターヴ＝ユグノー公爵と向き合っている。

「で、話ってのは何なんだ？」

と、弘明がユグノー公爵に訪問の理由を尋ねた。

「はい。実はヒロアキ様にもそろそろ身を固めていただきたいと考えておりまして」

ユグノー公爵の意外な発言に、弘明が思わず目をみはる。

「身を固める……結婚しろってことか？」
「左様でございます」

微笑を浮かべ、大きく頷くユグノー公爵。

「結婚ねえ。俺がいた世界じゃ、結婚にはまだまだ早すぎるくらいなんだが」

少し億劫(おっくう)そうに語る弘明。日本で生まれ育ち、まだ十九歳にすぎない彼にとって、結婚という言葉は重く聞こえるのかもしれない。

「まだ結婚が早いというのなら、婚約でも構いません。いかがでしょうか？」

「婚約か。うーむ、それなら、まあ……」

渋々、承諾の意思を見せる弘明。

「しかし、何だって急にそんな話が出たんだ？」

「実は先の夜会以降、ヒロアキ様へ国内外問わず数多くの令嬢からお見合いの申し出がありましてな」

「あー、なるほどなあ。ここいらで俺の婚約を公表することで周囲を牽制しようって腹積もりか」

ユグノー公爵の説明も半ばに、弘明が得意顔を浮かべて語った。

「相変わらずのご明察ぶり、恐れいります」

「まあこの程度は普通だろ。そうおだてるな。そんなことより、いったい俺と誰を婚約させるつもりなんだ？」

尋ねて、弘明がちらりと左右に座るフローラとロアナに視線を向ける。自分が婚約するとなれば、普段から世話役として傍にいるこの二人が候補に挙がると思ったからだ。

フローラが緊張した面持ちでそわそわしているのに対し、ロアナは凛とした姿勢で前を向いていた。

「やはり勇者様の正妻になるとなれば相応の身分が求められますので、私はフローラ様をと考えております」

ユグノー公爵が滔々と答える。

「ふうん、フローラはそれでいいのか？」

弘明が横を見やり、フローラに訊いた。

「え？　あ、はい。頑張ります！」

びくりと震え、勇んで首を縦に振るフローラ。

（頑張ります、ねえ。……ぶっちゃけ女としての魅力はロアナやリーゼロッテの方が上なんだよなあ。それと最近会ったリリアーナもか。トークが上手いし、何より男への気配りが上手いあたりわかっているというか、ポイントが高い）

と、弘明がフローラの顔をじっと見据え、自身の中における女性陣の格付けを行う。

（フローラも顔は文句無しなんだが、一緒にいても話は弾まないし、それだけなんだよなあ。魅力のないヒロインの典型的なタイプっつーか。ま、一夫多妻の正妻にするなら、こういう控えめな女の方がやりやすいんだろうが）

下手に正妻に嫉妬でもされて、あれこれ自身の女関係に口出しされても目障りなことこの上ない――、と弘明は考える。

その点、自己主張をしないフローラならば、きちんとわきまえてくれることだろう。

それに、なんと言っても――、

（まぁ、異世界に来たからには姫属性もお約束だ。正妻としてのブ

ランド価値も高いしな。他の男にくれてやるとかありえないし、いいだろ）

やっぱりフローラは捨て難かった。

「フローラがいいんなら、婚約しても構わないぞ」

弘明があっさりとした口調で、軽く決断する。

「おお、誠ですか？」

ユグノー公爵が嬉しそうに頬をほころばせた。

「ああ。ただし、今後は誰を俺の嫁にするかは基本的に俺が決める。無論、そっちの意向も聞いてはやるが、あまり口うるさく指図するなよ。ストレスが溜まるからな」

と、弘明が自らの主張をオブラートに包まず口にする。

せっかく我を押し通せる立場にいるのだから、言いたいことはハッキリと言って釘を刺しておかなければならない――それをしないで不利益を被る奴はただの阿呆だ、というのが弘明の自論だ。

「承知しました。とはいえ、恐縮ですが、可能なら今寄せられているお見合いを何件かお受けしていただきたいのですが……」

「あー、なるほどねぇ。あまりこういうモテ方はしたくないんだが」

畏（かしこ）まった物言いをするユグノー公爵に、弘明がやれやれと首を横に振る。

「ヒロアキ様の魅力を考えれば、妻になりたいと考える女性が星の

数ほどいるのも当然のことですわ」
隣に座るロアナがおもむろに言葉を挟んだ。
「へぇ、ロアナもか？」
ニヤリと笑みを浮かべ、弘明が尋ねる。
「もう、言わせないでくださいまし」
ロアナが気恥ずかしそうに頬を赤らめ、ぷいっと顔をそむいて見せる。
（ははん、可愛い奴め）
弘明は満足げに微笑むと、ユグノー公爵に向き直った。
「で、さっきの話だと国内外問わず申し込みがあると言っていたが、諸外国からはどこら辺の大物から縁談が持ち込まれているんだ？」
「大国ですと、ガルアーク王国からは公爵家を筆頭に、他にもいくつもの名家から申し込みが届いております」
「ほう、ガルアーク王国の公爵家っていうとリーゼロッテからか？」
弘明が嬉しそうに頬を緩め、期待を込めて質問する。
「いえ、今のところクレティア公爵家から縁談の申し込みは届いておりません」
「何？　そうか……」
ユグノー公爵から返ってきた答えに落胆する弘明。

（あー、リーゼロッテなら二番目か三番目の席を用意してやってもいいんだが、あまり遅いようだとその席も埋めちまうかもなぁ）

興がさめたとでも言わんばかりに、弘明は少しだけ眉根を寄せた。リーゼロッテから求愛されていない事実が気にいらないのだ。

「今後も見合いの申し出は増えることでしょう。そのすべてと対面することは難しいでしょうが、必要ならば家柄も加味して手前で候補を吟味いたしますので、仰せつけください」

ユグノー公爵に言われて、弘明は少しだけ考えるそぶりを見せた。

「あー、そうだな。まぁ、せっかく申込んでもらったんだ。家柄で落選するような子でも、パーティでも開けば全員とお見合いできるんじゃないか？」

そうすれば会場に男は自分一人だけというハーレム状態である。その中から好みの子を選んでみるのも面白そうだ――と、弘明が考える。もしかしたらダイヤの原石がいるかもしれないのだから。

「流石、ヒロアキ様はお心が広い。では、なるべく多くのご令嬢にお越しいただけるよう、諸々の手配を精一杯努力させていただきます」

ユグノー公爵が恭しく頭を下げる。しかし、その口許には微かな冷笑が刻まれていた。

第１２３話　合流、宿屋にて

リオは精霊術で空を飛び、クレール伯爵領の西隣にある領の都（みやこ）へとやって来た。
わざわざクリスティーナ達とは別方向に向かったのは、およそ捜索の手が及ばないこの土地で、旅に必要な物資を買い揃えるためである。
購入する物資は食料がメインだ。
もちろん『時空の蔵』の中には有り余るほど食料が入っているが、シュトラール地方では手に入らない食材も多く含まれている。そこで、一部の品を除いて別途用意することにしたのだ。
幸い魔法を使える面々が多いため、火や水で困ることはないだろう。
他に必要な物資は調理器具や衣類といったところか。
時刻はまだ朝だったが、腹ごしらえを兼ねて朝食を食べ終えた頃には、既に多くの店が営業を開始していた。
早速買い物を始めるリオだったが、流石に六人分の物資を買い揃えるとなると一筋縄ではいかない。
そこで、都市の中で荷を運ぶための馬を借り、上手く人のいない路地裏に入り込んでは『時空の蔵』の中へと荷物を収納していくことにした。
そうして一通りの買い物を終えた頃には昼前になっていたため、待ち合わせの時刻に遅れぬよう、都市を後にする。
街道をしばらく進むと、森の中に侵入して精霊術で空へと飛びあがった。移動中は特に問題も起きず、待ち合わせ場所の泉へ時間に余裕を持って到着する。
リオは泉の傍にあった木に背中を預け腰を下ろすことにした。そこで、セリア達の到着に備えて、あらかじめ先ほど購入した荷物を

用意しておく。
待つこと一時間半――、リオはおもむろに空を見上げた。すると、空からアイシアがふわりと舞い降りてくる。
「春人、もう少ししたらセリア達が来るよ。今のところ追っ手が迫っている様子はない」
と、着地するなり開口して、アイシアが必要な情報の伝達を行った。
「そっか。ありがとう、アイシア」
「うん」
返事をしながら、アイシアがリオの隣に腰を下ろす。そのまま、こてりと首を傾け、リオの肩に寄りかかった。
「疲れたかな？」
「うん。眠い」
アイシアが目を閉じながら返事をした。
「そっか、お疲れ様。セリア先生達が来るまで、寝てていいよ」
「うん……」
既に睡眠モードに入っているアイシア。すぅ、と、穏やか寝息がすぐに聞こえてきた。
（このまま寝るんだ。……まぁ、いいか）
本当なら霊体化して体内に入ってもらえば人目につくことはない

のだが、あまりにもアイシアの寝顔が安らかで、起こすのをつい躊躇ってしまう。
何故だか隣にアイシアがいると、リオも心がとても落ち着く。結局、セリア達が来る前に起こしてあげればいいかと、リオはアイシアをそのまま寝かせてあげることにした。
その間、精霊術で周囲全方向に魔力を込めた微風を撒き散らし、半径数百メートル圏内の索敵を行う。
一箇所に留まり継続して索敵を行うのなら探知用の結界魔術を使った方が色々と効率は良いのだが、アイシアが肩に寄りかかっている状態では結界を設置することもできない。
とはいえ、リオ程の精霊術士ならばたいした手間でもないため、休憩がてらのんびりと空を仰ぎながら、木漏れ日を肌で感じていた。
すると、十分もしないうちにセリア達と思しき存在を感知する。

「アイシア、来たみたいだよ」
「……ん」

リオがアイシアに声をかけると、彼女の姿がすうっと消えた。同時に肩に感じていた心地よい重みが消える。

「ハルト！」

ややあって、泉から街道へと続く小道から、セリアの声と共にクリスティーナ達が姿を現した。

「お待ちしておりました」

やや疲れ気味な五人組を見渡し、リオが涼しい顔で挨拶をする。

「……これでも急いで来たのだけれど、私達より先に着いているな

んて、いつ追い抜かれたのかしら？」

クリスティーナが不思議そうに尋ねた。

「私は街道を進まなかったので。一応、旅に必要な物資の購入も済ませてしまいました」

答えて、リオがはぐらかす様な笑みをたたえる。

「……なるほどね。本当に頼りになるわ」

周囲に置かれた複数のバックパックに視線を向けると、クリスティーナは観念したように苦笑した。

「とりあえず宿場町の中に入る前にローブの下に着ている服を着替えてしまいましょう。人数分の旅装束を用意しました。サイズが合わないようであれば後で買い直しますので、仰ってください」

今のクリスティーナ達はローブの下に貴族服や騎士服を着ている状態だ。

万が一、宿場町の中に兵隊がいて職務質問でも受けようものなら、ややこしい事態になることは避けられない。

「そうね、変装するなら早い方がいいか。ヴァネッサ、着替えるわよ」

宿場町の中に入る前に着替えを済ますメリットを瞬時に察したのか、クリスティーナがそう言った。

☆★☆★☆★

「おお、極上の美少女達がすぐそこで……」

着替えをするために木々の中に立ち入っていく女性三人の後姿を眺めながら、黒髪の少年二人のうち一人が嘆かわしそうに日本語で呟いた。すると、片割れの少年が呆れ顔を浮かべる。

「先輩、いいから早く着替えませんか？　お姫様達が戻ってきちゃいますよ」

「浩太(こうた)は男のくせにロマンをわかっていないな」

「ロマンって、まさか着替えを覗(のぞ)く気ですか？」

すぐ傍にいるリオをちらりと見やった後に、浩太と呼ばれた少年が先輩に懐疑的な眼差しを向ける。

「違う！　すぐそこで美少女達が着替えを行っているという事実が重要なんだ！　色々と妄想が捗(はかど)るだろう？」

「もう黙ってください」

などと話をする二人を、リオは木を背に座りながら苦笑気味に眺めていた。すると――、

「まったく浩太は……。ハルトさんならこのロマンをわかってくれますよね？」

と、浩太の先輩が反応を窺(うかが)うようにリオに水を向けた。

浩太がギョッとした表情を浮かべる。

「……残念ながら、俺も浩太さん寄りの立場ですね」

一瞬の間を置いて、リオが少しぎこちない日本語で答えた。

「や、やっぱり日本語を喋れるんですか？　その名前と苗字。日本人……なんですよね？　僕達と同じで勇者の召喚に巻き込まれたんですか？」

浩太が上ずった声で、堰を切ったように次々と質問を投げかける。

「落ちついてください」

「あ、すみません」

リオが冷静な声で告げると、浩太がハッと我に返り謝罪した。

「とりあえずクリスティーナ様達が戻ってくる前に着替えてください。話はそれからにしましょう」

「そう、ですね。わかりました」

そして、数分後。

「まずは自己紹介から始めませんか？　色々とゴタゴタしていましたからね」

浩太達が着替えを終えたタイミングで、リオが提案した。

ちなみに今の浩太達は旅向けの装束を身につけている。

「そうだね。言われてみれば自己紹介がまだだったっけ」

浩太がリオの提案に乗っかった。

「では、まずは俺から。既にご存じかもしれませんが、ハルト＝ア

マカワといいます。年齢は十六歳です」

リオがシュトラール地方式に名前から自己紹介を行うと、浩太達は少しだけ腑(ふ)に落ちない表情を浮かべた。

だが、とりあえずは自己紹介を先に済ませてしまう。

「……そっか。じゃあ僕と同い年か、一個下になるのかな？　僕は村雲浩太(むらくもこうた)。今年で十七歳だ」

「でしたら俺より一つ年上になりますね。俺は今年で十六歳なので。よろしくお願いします」

言って、リオが手を差し出した。

「よろしく」

浩太も手を差し出し、二人で握手を交わす。

「それで、この人は僕の先輩なんだけど……」

続けて、浩太が隣に立っている先輩に自己紹介を促した。

「俺は斉木怜(さいきれい)です。学年は浩太の一つ上だけど、今はまだ十七歳かな。たぶん。何しろ日付がわからないからね。よろしく」

「ええ、よろしくお願いします」

リオは怜とも握手を交わした。

「まぁ、自己紹介としてはこんなところかな。できればさっきの浩太の質問に答えてもらいたいんだけど」

と、怜が単刀直入に話を切り出す。

「わかりました。まず、確かに俺は日本語という言語を喋れます。でも、俺は日本人ではなくこの世界の人間です」

「え……？」

リオの言葉が予想外だったのか、怜と浩太が耳を疑い硬直する。そこで、余計な質問が寄せられる前に、リオは先手を打って説明を行うことにした。

「実はこの数か月ほど、勇者に巻き込まれて異界から召喚された方々と一緒に過ごしていたものでして。こちらの言葉を教えている過程で日本語を覚えたんです」

リオが美春達と一緒に過ごしていたことは既に公知の事実だ。この点に関してはあえて嘘をつくメリットはない。

「やっぱり僕ら以外にも召喚されている人達がいたのか……」

浩太達の興味は《どうしてリオが日本語を喋れるようになったのか》ではなく、《自分達以外にもこの世界にやって来た日本人がいたのだ》という点に向けられた。

「お二人はご存じなかったのですか？」

「うん。何しろこっちの世界の言葉を覚えるのに精一杯だったしね。情報収集のしようがなかったんだ」

「……ちなみにお二人はどうやってこの世界の言葉を習得されたのですか？」

「勇者に選ばれた友人だけ何故か言葉が通じたからさ。彼に協力してもらって地道に頑張った」

「なるほど」

まぁ、それしか方法はないだろう。言葉が通じなければ日常生活すらまともに送れない。文字通り必死になって言葉を覚えたはずだ。

「ところで、一つ訊きたいんだけど、ハルト君の名前と苗字はシュトラール地方のものなのかな？　僕らの暮らしていた国の名前や苗字と響きが似通っているんだけど」

と、浩太が窺うような視線をリオに向ける。

「……この名前と苗字はヤグモ地方、俺の死んだ両親が暮らしていた故郷のものです」

わずかな間を置いて、リオが答えた。

「あ、ごめん！　変なことを訊いて。僕らの世界に帰るヒントがないかなって思ったんだけど」

両親が死んだと聞いて、浩太が慌てて謝罪する。

「いえ、お気になさらず。あまりお役には立てそうにはありませんが」

「そんなことはないよ。ヤグモ地方。この世界の地理を習った時に名前だけは聞いたんだ。いつかそっちに行ってみるのもいいかもしれない。ですよね、先輩？」

「ああ、そうだな。ちょっと気になるかも」

浩太に話題を振られ、怜が頷いた。

すると、そのタイミングで、着替えをしていたクリスティーナ達

が戻ってくる。
三人とも質の良さそうな旅装束姿だ。
「来たみたいですね。この話はまた今度にしましょう」
「うん」
そうしてリオ達は話を打ち切った。
「お待たせして申し訳ない。こちらも着替えが完了した。遅くならないうちに宿場町へ向かおう」
ヴァネッサが提案し、一同は街道沿いに発展した宿場町へと向かったのだった。

☆★☆★☆★

「……これが……今日の宿泊先？」

宿屋を見上げながら、クリスティーナがぽつりと呟く。
外観は木造三階建て――そこそこ歴史を感じさせる雰囲気を醸し出している。リオから見ればそこまでボロくはないが、クリスティーナから見ればボロ家も同然だろう。
というより、姫として生まれ育ったクリスティーナはそもそも宿屋に泊ったことすらないのかもしれない。宿場町の中では比較的マシなランクの宿屋であるが、彼女はどこか呆然とそのたたずまいを眺めていた。
「最高級というわけではありませんが、宿場町の中にある宿屋の中ではマシな方に分類されるはずです。ティナお嬢様にご満足いただけないことは重々承知しておりますが、旅の途中はなにとぞご寛恕

ください」

クリスティーナの横から、リオが恭しい言葉遣いで語りかけた。

ちなみに、旅の途中は本名で呼びかけるわけにもいかず、クリスティーナのことは偽名で呼ぶと決めてある。また、素性を偽るための設定も考えてあった。

「べ、別に不満なんてないわ。いいわ。入りましょう」

クリスティーナが頬を赤らめ、率先して足を動かした。物珍しそうに宿屋を見上げている姿を見られて、恥ずかしいと思ったのかもしれない。

リオ達が苦笑してその後を追いかける。そうして宿の中に入ると、受付に中年の男性が一人で座っていた。

「ご主人、こちらに滞在したいのだけれど。人数は六人よ」

先の失態を払拭しようと思ったのか、クリスティーナが物おじせずに交渉を開始する。

「へ、へぇ。一番安上がりなのは相部屋に泊っていただくことでさ」

美しいクリスティーナの顔だちに面食らったのか、店主と思しき男性が上ずった声で答えた。

「相部屋？」

「他の客と同じ部屋に寝泊まりするということです」

頭上に疑問符を浮かべたクリスティーナに、リオがすかさず説明を行う。

「……それは流石に勘弁してほしいわね」

クリスティーナが微妙に顔を引きつらせた。

「ええ。ですから部屋ごと借りてしまいましょう。ご主人、相部屋ではない部屋を借りたいんだが、空き部屋はあるか？」

と、リオが店主に愛想良く語りかける。クリスティーナはバトンを渡して一歩下がると、興味深そうにやり取りに耳を傾け始めた。

「ありますが、あいにくうちは五人部屋が最大でして。へへ」

店主が媚(こ)びた営業スマイルを浮かべて答える。リオ達のことを上客と判断したのだろう。

「なら二部屋ほど都合してほしい」

「へい。料金は小銀貨二枚でさ！」

「受け取ってくれ。釣りはいらない」

言って、リオはカウンターの台に大銀貨を一枚置いた。

「へ？」

店主がきょとん目を丸くする。

「実は後ろのお嬢様二人は裕福な商家の育ちなんだが、雲隠れの旅をしていてな。まぁ半ば実家公認なんだが、よからぬ輩が手を出さないとも限らない。それはいわゆる口止め料ってやつだ。ご主人も面倒事は嫌だろう？」

リオが店主にそっと顔を近づけて冷たくささやく。すると、店主はいっそう媚びた笑みを浮かべた。

「へ、へへ。そ、そういうことでしたら。へへ、誰が来ても何も言いませんぜ。へへ」

「ああ、そうしてくれ。お互いのためにな。場所さえ貸してくれれば特に気づかいはいらない」

「なら食事はどうしやす？　パンとチーズなら無料ですが。麦酒と葡萄酒は有料ですぜ」

「そうだな、追加でいくつか食事を用意するから、調理場だけ貸してほしい」

「へい。厨房は勝手に使ってくれてかまいませんぜ」

「悪いな。ありがとう」

「いえいえ。部屋は二階に昇って右の通路を進んだ一番奥の二つになりやす。どうぞ使ってくだせえ」

大銀貨の輝きににこやかな笑みを浮かべながら、店主が言った。

「ああ」

リオがこくりと頷き、背後を振り返ると、

「部屋がとれました。こちらです」

そう言って、一同で手配した部屋へと向かう。

すると――、

「これが五人部屋ですって？　ベッドが四つしかないじゃない！それに内鍵だってないわ！」

借り受けた部屋の中に入ると、クリスティーナが悲鳴にも似た声を出した。
そこには木製テーブルが一つと、同じく木製のベッド四台が所狭しと部屋の奥から並べられている。
彼女が王城でいつも寝ていた特注サイズのベッドとは比べることすらおこがましいほどに粗末なベッドだ。

「一人で一つのベッドを使うことを前提にしていないのでしょう。横に並んで、五人で詰めて寝るんです」
「……嘘、でしょう？」

クリスティーナが愕然（がくぜん）とリオの顔を見やる。

「残念ながら本当です。ベッドがあるだけでも、かなり条件は良い方なんですよ」

リオが苦笑して語る。
確かに、この宿屋の品質は都市にある宿屋のそれと比べると、平均かその少し上程度にすぎない。
だが、所詮（しょせん）ここは旅の中継地点として発展した宿場町であり、この町の中ではこの宿屋が間違いなく上位のランクに位置するのだ。
一応、他に富裕層向けの宿屋がないこともないのだが、そういった宿屋は支配階級層との結びつきが強い。
権力者から逃走中の身で宿泊すれば真っ先に足がついてしまうだろうと考え、今回はあえてこの宿屋を選んだというわけだ。

「じゃあ俺達はこれで。向かいの部屋にいますが、極力出歩かないようにしてください。変な輩に絡まれても面倒ですから」

クリスティーナやセリアほどの美少女が不用意に出歩けば、あまり品のよろしくない輩に口説かれることは必至だ。
とりあえず夕食の準備もあるため、リオは男性陣と一緒に退室しようとした。だが、

「ちょ、ちょっと待って！　部屋割りはどうするの？」

と、セリアが慌ててリオを呼び止める。

「男性と女性で分けようと思っているのですが……」

何か不都合があるのかと、リオが不思議そうに答えた。

「ご、護衛が必要じゃありませんか、姫様？　この部屋、鍵もないですし」

セリアが不安そうに提案する。
ガルアーク王国では美春達と宿屋に泊っていた彼女だが、その宿屋の防犯体制は十分に行き届いていた。対してこの宿屋は色々と杜撰で、軽いカルチャーショックを受けているのだろう。

「……そうですね。確かに。ヴァネッサだけだと不安ではありますが」

クリスティーナもセリアに共感しているようだ。
とはいえ、そうなると男性三人のうち一人に同室してもらうことになる。
父親以外の異性と同じ部屋で寝たことなどないクリスティーナからすれば、いささか抵抗を感じずにはいられなかった。

「大丈夫ですよ。部屋は別々ですが、よからぬ輩に夜這いはさせませんので」

と、リオが安心させるよう穏やかな口調で言う。

しかし、実際に見知らぬ男が部屋の中に入ってきたらと想像すると、クリスティーナの身体はおぞましさで微かに震えた。

「あの、できればアマカワ卿も私達と一緒にこの部屋に泊まっていただきたいのですが」

「え？　自分がですか？　いや、しかし……」

まさかクリスティーナの口からそんな言葉が聞けるとは思っていなかったため、リオが面食らってしまう。

岩の家で美春達と一緒に暮らしていた頃も、リオはセリアと同じ部屋で眠ったことはない。並べたベッドで同衾（どうきん）するとなれば、気後れするのも無理はなかった。

困り顔でヴァネッサを見やると、深く頷き返される。

（その頷きはどういう意味なんですかね……）

どうにか辞退できないかと、リオは冷や汗を流した。王侯貴族の淑女達の中に男が一人で混ざって眠るなど、想像するだけで居心地が悪そうだ。

「そういうわけだから、貴方達は二人でもう一つの部屋を使ってくれるかしら？」

リオの懸念も余所に、クリスティーナが話を進める。

「くっ、差別だ！　イケメン許すまじ……」

「せ、先輩。そういうのは恥ずかしいですからやめてください」
怜がぼそりと呟くと、浩太が慌てて釘を刺した。
「いや、こういうのはお約束かと思って」
怜がしれっと答え、浩太ががっくりと肩を落とす。
「イケメン？　何なの、それ？」
しっかり怜達の会話を聞いていたのか、クリスティーナが尋ねた。
「あ、えっと、容姿の優れた男性のこと……です」
浩太がバツが悪そうに単語の意味を説明する。すると、クリスティーナがくすりと上品に笑った。
「ああ、そういうこと。確かに、貴方達の中だとアマカワ卿が抜きんでて格好いいわね」
「め、面と向かって言われるとショックだな。浩太よ」
「先輩、本当にもうやめてください……」
浩太は恥ずかしそうに顔をうつむかせた。

☆★☆★☆★

二時間後。
クリスティーナ達が泊まる部屋の机上には、作りたての料理が盛られた木製の食器が所狭しと並べられていた。
サラダ一つとっても綺麗に盛り付けられており、柔らかそうな牛

肉のシチューなど見ているだけでよだれが出てきそうだ。

「美味しそうな匂いね。まさかこんなに美味しそうな料理が出てくるとは思わなかったわ」

言って、クリスティーナが嬉しそうに頬をほころばせる。歩きっぱなしで疲弊した肉体は切実に空腹を訴えているのだろう。

「お口に合うかはわかりませんが。どうぞ召し上がってください」

リオの言葉を合図に、みんなが一斉に食事を開始する。浩太と怜は小さく「いただきます」と言っていた。

料理を口に含むと、すぐに歓声が上がる。

「うわぁ！　これ美味しい、すごく美味しいよ！　ハルト君！　お城で食べた料理より美味しいかも！」

柔らかく煮込んだ牛肉のシチューを一口飲んだ瞬間、浩太が目を輝かせた。

「ありがとうございます。皆さん歩き疲れているでしょうから、少し濃いめに味付けしました」

言って、リオがはにかむ。

「ふむ、城に仕える料理人と比肩する腕かもしれん。宿から支給されたパンが残念だと思っていたが、このシチューに合せて食べると相性は抜群だ」

「本当。お腹も膨れるし、一日の疲れが吹き飛ぶわね」

ヴァネッサが惜しみなく称賛の声を上げ、クリスティーナも満足そうに頷いている。

「ふふ」

みんなから褒めちぎられているリオだが、当の本人よりも隣に座るセリアの方が皆の反応に対して誇らしげで嬉しそうだった。

「本当に助かるわ。ヴァネッサの料理も美味しいのだけれど、豪快というか大味だものね」

ヴァネッサを見やり、クリスティーナは可笑しそうに微笑んだ。

「わ、私は騎士が戦場で食べる料理しか習っていなかったんです」

ヴァネッサが頬を紅潮させる。

それから就寝時間を迎えるまで、ワイワイと賑やかな夕食が繰り広げられた。

☆★☆★☆★

そして、翌朝。

（春人、そろそろ朝だよ。起きて）

リオは体内で霊体化しているアイシアに起こされた。

ゆっくり瞼（まぶた）を開くと、暗闇の中に見慣れぬ天井が薄っすらと視界に映る。

（ありがとう、アイシア）

アイシアに礼を告げると、リオは上掛けの毛布をめくって上半身を起こそうとした。

（ん？）

右腕に微かな重みを感じて、そちらを見やる。すると、セリアがリオの袖をぎゅっと握りしめていることに気づいた。

すやすやと寝息をたてながら眠っているその寝顔はとてもあどけなくて、リオと同年代か少し年下の少女にしか見えない。

（意外としっかりと握られているな）

袖を握るセリアの手を無理やり引っぺがそうと思えばやれないこともないが、リオは小さく声をかけて離してもらうことにした。

「セシリア、ちょっと手を離してください」

「んぅ……」

セリアは小さく唸（うな）りはしたものの、すー、すー、と可愛らしい寝息を立てているだけだ。起きる気配はない。

「セシリア。お願いします。手を放してください」

もう一度声をかけて、リオがセリアを起こそうと試みる。

（そういえば先生、朝は弱いんだっけか）

普段から寝起きのセリアはほとんど使い物にならないことを思い出す。

そこで、今度は上掛けの上から小さく肩を揺すってみることにした。
ゆさゆさ。
「んー？」
セリアが眠そうな声を出して、小さく身じろぎをする。
「セシリア？　起きましたか？」
「んー、起きたよぉ」
むにゃむにゃと口を動かしながら、セリアがぱちぱちと眠そうに瞬きをする。
「おはようございます」
だいぶ寝ぼけているようだが、意思の疎通は可能だと判断し、リオが目覚めの挨拶を告げた。
「んー、リオだぁ。おはよー」
薄っすらと目を開けて視界にリオを収めると、セリアが嬉しそうに微笑んだ。本当に寝ぼけているのか、「リオ」と名前を呼んでいる。
リオは慌ててクリスティーナ達を見やったが、まだ眠っているようでホッと息をついた。
すると、直後、セリアがもぞもぞと上掛けから身を乗り出し、リオの胴体に抱きつく。
「ちょ、セシリア？」

リオがギョッとして身体を強張らせる。
これではさっきより状況が悪化しているではないか。
上掛けの下のセリアは可愛らしいネグリジェ一枚しか着ていない。
小柄で華奢な彼女だが、ちゃんと女性らしい身体つきをしており、柔らかな感触と体温が直に伝わってきた。

「んふふふ～」

セリアは再び目を瞑(つむ)ると、幸せそうに微笑みながら、すりすりと自分の顔と身体をリオにこすりつけた。

「あの、セシリア。ちょっと……起きてください。お願いします」

なんだかドギマギしてしまい、リオがやや焦った様子でお願いする。
セリアの両肩を掴み、少し強めに身体を揺すった。
すると、セリアの意識が少しずつ覚醒していき、今度はぱちりと目を開く。
セリアは至近距離からリオの顔を見上げると、しばし時間が停止したように硬直した。ややあって――、

「……ふぇっ？」

セリアがビクッと身体を震わせた。

「な、ななな、なんでリオがここにいるの？」

泡を食ったようにパクパクと口を動かすセリア。
リオは苦笑し、説明を試みることにした。

「おはようございます。昨日、護衛を兼ねて、同じ部屋に寝ることになったじゃないですか。先生を起こそうとしたんですが、どうやら寝ぼけていたみたいで……」
「そ、そっか。そうね、そうだったわね」

セリアがようやくリオと一緒に寝ることになった昨夜の経緯を思い出す。

「それと、名前の呼び方に気をつけてください」

リオがセリアの耳元でそっとささやいた。

「あ、ご、ごめん！」
「いえ、こちらこそすみません」

顔を赤くしてハッと謝るセリアに、リオもバツが悪そうに謝罪する。

「あ、謝らないでよ。寝ぼけていた私が悪いんだから」

セリアがもじもじと気恥ずかしそうに言った。
相手が気の強い女性なら、理不尽だが引っぱたかれても文句は言えない場面だろう。

「いえ、その……」

セリアがおおらかな女性で助かった――と、リオは胸をなでおろした。
すると、自分の胸元で恥ずかしそうにもじもじとしているセリア

が天使に見えて、ついくすりと笑ってしまう。

「な、何を笑っているのよぉ！」

セリアの頬がさらに紅くなり、クリスティーナ達も起きたのは言うまでもない。

第１２３話　合流、宿屋にて（後書き）

突然ですがこのたび『精霊幻想記』の書籍化が決定しました。
これもひとえに皆様のご愛顧とご支援によるものと、厚くお礼申し上げます。ありがとうございます！
書籍化情報の詳細は私のマイページに更新した最新の活動報告をご参照ください。
それでは、今後も『精霊幻想記』をお楽しみいただければ幸いです。よろしくお願いします！

第１２４話　レストラシオンへの旅路

リオとセリアがクレール伯爵領に到着する少し前。セントステラ王国・第一王女リリアーナの私室にて。

リリアーナは人払いを行ったうえで、美春を呼び寄せていた。

美春とリリアーナが椅子に腰を下ろして向き合う。その用件はというと、

「日本語を教えてほしい、ですか？」

頷きはしたものの、美春が不思議そうに首を傾げる。

リリアーナが日本語を習いたがる理由がどうも見いだせないのだ。日本語なんてこの世界の言語ですらないのだから。

「今のところ、我が国にミハルさん達以外で勇者召喚に巻き込まれた方は確認されておりませんが、今後も現れないとは限りません。なので、国の中に一人くらいは異世界の言葉を使える人間がいた方がいいと判断したのです。お願いできないでしょうか？」

美春の心中を察したのか、リリアーナが丁寧な口調で理由を説明する。

「そういうことでしたら、私でお役に立てるのなら喜んで」

美春はすんなりと納得したのか、深く追及することはせず、承諾の意思を示した。

「ありがとうございます。それで、実はもう一つお願いがあるので

すが、私がミハルさんから日本語を習っていることは、アキちゃんやマサト君も含め、他の方々には秘密にしてほしいのです」

と、リリアーナがそんなことを願い出る。すると、美春はまたしても不思議がった。

「短期間で覚えて、皆様を驚かせてあげたいですからね」

付け足すように言って、リリアーナが若干の翳(かげ)りを含んだ笑みを覗かせる。

美春はリリアーナの微妙な表情の変化をそれとなく察したが、その裏に潜む機微まで汲み取ることはできなかった。

「なるほど……。わかりました」

「これでミハルさんは私の先生になりますね。よろしくお願いします」

おそるおそる頷く美春に、リリアーナが誤魔化すように微笑んで頭を下げる。

「せ、先生……ですか？　私がリリアーナ様の……」

美春の声が上ずった。あらためて先生などと言われてしまうと、責任重大に聞こえてしまう。教える相手が第一王女となればなおさらだ。

「あまり堅苦しく考えず、ご友人とお茶でも飲むようなつもりでお相手していただけませんか？」

「が、頑張ります」

美春が緊張した面持ちで首肯すると、リリアーナはくすりと笑みをたたえた。

「それでは、明日から今日と同じ時間に私の部屋にお越しください。訪問の理由として名目上、私の専属侍女であるフリルの下で仕事を学んでいただくということにいたしますが、よろしいでしょうか？」

「はい。食事時の前後以外は仕事もありませんので」

亜紀や雅人の世話を買って出ている美春だが、現状、食事時以外に大した仕事は与えられていない。

リリアーナもそこら辺を承知した上で頼んでいるのだろう。

「では、早速ですが明日からよろしくお願いいたします。使いとしてフリルを送りますので」

言って、リリアーナはフリルを見やった。

「よろしくお願いいたします。ミハル様」

フリルが恭しく頭を下げる。

「い、いえ、こちらこそ！」

美春は慌てて椅子から立ち上がり、フリルに頭を下げ返した。

「とりあえず今日はこのままお茶にお付き合いいただけませんか？ミハルさんとはゆっくりお話をしてみたかったんです」

それから、美春はリリアーナとお茶を飲み、親交を深めることになる。

☆★☆★☆★

リオがセリア達と合流してから二日が経過した。
今はクレール伯爵領・領都クレイアから南に伸びる街道を南下しているところである。
もう少し進むと関所が見えてくるはずだ。その関所を越えて山々を抜けると、東へと続く街道の分岐点がある。
だが、リオ達はそのまま関所へは向かわず、おもむろに街道の脇に広がる山林の中へと入っていった。
隊列は先頭にヴァネッサ、その後ろに浩太（こうた）、さらに後ろにクリスティーナとセリア、そしてリオと怜（れい）が殿（しんがり）という並びで歩いている。

「あの、街道から外れても大丈夫なんですか？」

森の中へ入り、道なき道を進みだすと、浩太がきょろきょろと視線をさまよわせながら尋ねた。
今の季節は春で、まだ午前中だが、森の中は軽く木漏れ日が差し込む程度なので、薄暗くて涼しいくらいだ。

「あのまま歩くと山岳地帯に突入した辺りに関所があるのよ。私達が逃げたから、今はそこで検問が敷かれているかもしれないの。最悪、封鎖されている可能性もあるし、避けて通れるなら避けた方が安全でしょう？」

後ろからクリスティーナが説明してやる。

「な、なるほど。でも森の中は危険なんじゃ……」

薄暗い草木の空間に怯えているのか、浩太はどこか及び腰だ。

「無論、危険だ。道に迷いやすくなるし、魔物や獣なんかに遭遇する危険も格段に増す。だが安心しろ。関所を迂回すれば街道に戻る」

と、先頭で話を聞いていたヴァネッサが、後ろを振り返らずに説明を付け足す。

当たり前だが、街道を外れてしまえば、そこは完全に野生の土地となる。

そして、旅において街道を外れる行為がいかにリスキーかは、殊更に語るまでもないだろう。

道なき道を進むのはそれだけで大変な労力だし、移動に時間はかかるし、遠回りになりやすい。

また、ヴァネッサが語ったように魔物や獣に襲われるリスクもある。

それに、毒蛇やヒルのように、個体としての戦闘力はさほど高くはないが、厄介な生物が森の中にはいくらでもいるのだから。

「ま、魔物に獣……」

浩太はごくりと唾を呑んだ。

「今ならまだ街道へ引き返せるけど、お城に戻りたい？」

怖じけづいた浩太を見かねて、クリスティーナが問いかける。

「い、いえ、城には戻るつもりはありません。僕は自分から望んでお城を出てきたんですから」

浩太はわずかに顔をしかめ、思いつめた表情を浮かべた。クリスティーナがスッと目を細める。

「そう。なら、気を引き締めてちょうだい。貴方の腰に差した剣は飾りじゃないのよ。アマカワ卿とヴァネッサがいるとはいえ、万が一の時には貴方達にも戦ってもらうことになるのだから」
「……はい」
浩太が静かに頷く。その横顔は心なしか先ほどよりも怯えの色が抜けているように見えた。

☆★☆★☆★

「クリスティーナ様。ここらで少し休憩しましょう。近くに水場もありますので」
森の中でちょうど休憩に良さそうな泉を発見すると、ヴァネッサが提案した。時刻はちょうど昼時。だいぶお腹も減り始めている頃合いだ。
「そのまま食べるのも味気ないので、携行食を使って簡単に料理しますね。セリアお嬢様。魔法で水を出してもらってもいいですか？」
と、リオが携行食の調理を申し出る。
「うん。いいけど、……お嬢様っていうのは止めない？　何かすごく恥ずかしいんだけど。ぞわっとするっていうか」
答えて、セリアがこそばゆそうにはにかんだ。
「……しかし、何とお呼びすれば？」

ちらりとクリスティーナ達を見やり、リオが困り顔で尋ねる。
実は他の面々がいる手前、リオはいまいちセリアとの距離感を掴みかねていた。そんなわけで、ここに来るまでの間、少しばかり慇懃にセリアと接するように心がけていたりする。

「そ、そりゃあ、ほら、今までみたいに。……普通に『セリア』って、呼び捨てでいいからさ」

と、セリアがややドギマギした口調で語った。すると、リオが微妙に戸惑いの色を見せる。

「今までみたいに、ですか？　ですが……」

呼び捨てでというと、リオが『セシリア』と偽名で彼女に話しかけている時のことを指していることになるはずだ。
だが、リオが『セリア』と本名で彼女に話しかける時は、『先生』と敬称を付けるのが慣例となっている。
なので、『いつもみたいに』と言われても、そんな『いつも』は存在しないことになってしまう。
しかし――、

「い、いいから！　ほら！　呼ばないと水を出してあげないわよ！」

微かに頬を紅潮させて、セリアがまくしたてた。

「……わかりました。じゃあ、セリア。水をお願いします」

苦笑し、リオが折れる。すると、セリアは嬉しそうに微笑んだ。
そんな二人のやりとりを見て、クリスティーナ達が密かに好奇の視線を向ける。

「よし、じゃあ鍋を出してちょうだい！」

セリアが言うと、リオは「はい」と頷き、背負っていたバックパックを地面に降ろした。

続けて、バックパックの外側に縄で固定していた鍋を取り外し、セリアの前に置く。

「お願いします」

「うん。《水創生魔法（クリエイトウォーター）》」

セリアが鍋の上に手をかざして呪文を唱える。すると、小さな魔法陣が浮かび上がった。そこから蛇口をひねったように水がジャバジャバと溢（あふ）れ出す。

リオは鍋を簡単に水洗いしてから、中に水を入れた。ほんの十秒ほどで十分な水が溜まる

「待っててね。調理台も作っちゃうから。……《土壁魔法（アースウォール）》」

セリアは近くの地面に触れると、呪文を唱えた。

前方の地面に魔法陣が浮かび上がり、正方形状に土が隆起（りゅうき）する。

「相変わらず器用に魔法を使いこなしますね」

リオが感心した口調で言った。

《土壁魔法（アースウォール）》は使用者が魔力制御をすることでサイズ、形、強度、耐久性をある程度は調整できるが、今セリアが作ったものと同じ代物を作るのは簡単そうに見えて難しい。

そもそも戦闘用の魔法であるため、こういった用途で使われることは想定されていないのだ。

この点、こういった細かい芸は精霊術の方が向いている。魔法のように術式という制約に縛られないからだ。

「任せなさい。これでも魔法の講師だったし、功績が認められて魔導士爵の位も持っているんだからね」

と、セリアが少し誇らしげに語る。リオの役に立てていることが嬉しいのかもしれない。

「ありがとうございます。料理は俺が作りますから、セリアは皆さんと協力して食卓と椅子を作ってもらってもいいですか？　終わったら休憩して構いませんので」

「うん、任せて！」

セリアが嬉しそうに頷いて、とことこと小走りで駆け出す。

リオはバックパックから薄くて軽い金属板を二枚取り出した。それぞれ板の表面には同じ文様の術式が刻まれている。

続けて、セリアに作ってもらった調理台の上に金属板を敷くと、ひょいと鍋を掴み、片方の金属板の上に設置する。

板の周りに何個か魔石を置いていくと、術式が魔石の魔力を吸収して光を発し、熱を放出し始めた。ちなみに、この板は魔道具で、魔石の数を調整することで熱量を操作することができる。

バックパックからフライパンや食材も取り出せば、調理の準備は完了だ。

鍋のお湯が沸くまでの時間を利用し、リオが調理を開始する。

まずはフライパンの中に植物油と香辛料に、移動中に森で拾った食用のキノコをちぎって投入した。

それから鍋のお湯が沸騰し始めると、干し肉をナイフで切り取って投入する。また、フライパンのキノコをしんなりと炒めたところで、中身を皿に移し替えた。

そうして、リオが調理を開始してから短くない時間が経過すると――、

「手慣れているんですね」

ふと、背後からクリスティーナが近寄ってきて、感心した顔つきで語りかけてきた。

「ええ、長く旅をしている間に色々と。……もうすぐ出来ますから、どうぞ皆様と一緒にお座りになってお待ちください」

リオがちらりと後ろを見やり応じる。とはいえ、あまり会話をする気がないため、それとなく会話を切り上げようとした。

だが、クリスティーナは引き下がらずに、

「ありがとうございます。貴方がいるおかげで本当に助かっているわ」

と、突然、リオに感謝の言葉を伝えた。

「いえ、まぁ、成り行きですから。お気になさらず」

リオが居心地悪そうにかぶりを振る。リオとしてはあくまでもセリアのために色々と便宜を図っているわけで、結果的にクリスティーナを助けているにすぎないからだ。

「セリア先生のため、ですか？」

やや躊躇（ためら）いがちに、クリスティーナが踏み込んで質問を投げかけた。

「……はい。そうです」

リオがわずかな間を置いて、しっかりと頷く。すると――、

「なるほど……」

クリスティーナの表情が微かに曇(くも)った。

調理に集中して前を向いているリオに彼女の表情は窺(うかが)えない。リオは自分から何かを語ることはせず、黙々と調理を行っていた。

そうして、しばし無言の時間が流れる。

しかし、クリスティーナがその場を離れることはない。リオが調理を行う様を後ろから黙って見つめている。

（何か話でもあるのか？）

付かず離れずの位置に立つクリスティーナの気配を背中でひしひしと感じ、リオは妙な居心地の悪さを覚えていた。

とはいえ、既に料理は終盤に差し掛かっている。今は、フライパンで炒めた押し麦をお湯で煮込んでいるところだ。

意識を取られてせっかくの料理を台無しにするわけにはいかない。

まぁ必要以上に意識する必要もないか――と、リオは淡々と料理を続けることを決意する。だが、

「あの、ところで、何を作っているんですか？」

クリスティーナが会話の糸口を探るように、質問を投げかけてきた。リオが微かに戸惑いながらも応じることにする。

「粥(かゆ)と呼ばれる料理の一種です」

「粥、ですか？」

クリスティーナがリオのすぐ隣に立って、フライパンの中を興味深そうに覗きこんだ。

肩越しにさらりと伸びる長い髪を上品に右手でまくし上げると、優しい香（こう）の匂いがふわりとリオの鼻孔をくすぐる。

「あまり貴族の方が口にする料理ではないので、ご存じないのも無理はありません。押し麦を油で炒めてから、こうしてお湯を足しながら煮込んでいくんです」

「良い香りですね。食欲が湧いてきます」

すんすんと小さく鼻を動かし、クリスティーナは顔をほころばせた。

「野外料理なので凝ったものは作れませんし、お口に合うかもわかりませんが……。完成です」

言いながら、リオが最初に炒めておいたキノコを投入する。その上に細かく刻んだチーズをまぶせば、大麦のチーズリゾットが完成だ。

あとはリゾットを作る片手間に作っておいた干し肉と野草やキノコの入ったスープもある。旅の最中に野外で食べる料理としてはご馳走だろう。

「そんなことはありません。美味しそうですよ」

「ありがとうございます。あちらで食べましょうか」

リオが料理をしている間に、セリアの主導で他の面々が立派な食事スペースを用意してくれていた。土系統の魔法を上手く使ったの

か、簡易の食卓と椅子が作られている。

「運ぶの、手伝いますね」

クリスティーナはそう言うと、リオが止めるよりも先にスープの入った鍋の取っ手を掴んでしまった。そのままセリア達がいるテーブルへと移動していく。

（手伝いたかった……のかな？）

ぼんやりとクリスティーナの背中を眺めながら、リオはそんなことを思った。

☆★☆★☆★

「この後の進行方向も確認しがてら、少し付近の様子を見てきます。遅くとも三十分くらいで戻りますので」

一足先に昼食を済ますと、そう言い残して、リオが一人でふらりと森の中に消えていった。

「アイシアは魔物とか危険な獣が現れないか、この辺りで見張ってもらってもいいかな？　襲ってきそうだったら水際で追い払ってほしい」

クリスティーナ達の視界に映らなくなったあたりで、リオが霊体化しているアイシアに語りかける。

すると、アイシアが実体化して姿を現した。

「うん、いいよ」

「いつもありがとう。アイシア」

リオが柔らかく微笑み、軽く頭を下げる。

すると、アイシアは不思議そうに首を傾げた。どうしてお礼を言われるのかわからない――とでも言いたそうに。

「……この旅が終わったら、一度、精霊の民が暮らす里に向かおうか」

リオは気がつけばそんな言葉を口にしていた。

精霊の民の里にならドリュアスもいる。もしかしたらアイシアのことも何かわかるかもしれない。

本当はもっと早くに確かめておくべきことだったのかもしれないが、今までは美春達を保護したり、こうしてセリアを送り届けたりと、身動きが取れずに後回しにしていた。

いつもアイシアにお世話になりっぱなしだが、こちらから何かしてあげられているわけでもないし、せめてのんびりとした時間くらいは作ってあげたい。

なので、アイシアへの恩返しを兼ねて、精霊の民の里へ戻ってみるのは良い案に思えた。

「精霊の民が暮らす里……春人の大切な人達が暮らしている場所？」

「うん。そうだよ」

「じゃあ、行ってみたい」

アイシアはこくりと頷いた。

「そっか。みんなに紹介するよ、アイシアのこと」

最後に里を訪れてからまだ半年も経っていないが、もう半年近く

も過ぎてしまったという感はある。
そもそもリオはルシウスの手掛かりを掴みにシュトラール地方へ戻って来たのだ。
なのに、今のところあまり進展は見られない。
もちろん美春達と一緒に暮らしていた頃から定期的に近場の都市を回って情報を追ってはみたが、どこに行っても似たような情報しか得られないのだ。どうも最近は表舞台には現れていないようである。
まぁシュトラール地方は広いし、暮らしている人間の数も多い。もともとすぐに見つけられるとは思ってもいなかった。
生きているのなら殺さなければという確かな目的意識はあるが、死んでいるのならそれでもいい。あんな男のために、周囲を見失い、気が狂うほど先を急ぐつもりはないのだから。
ゆえに、リオに焦燥感はなく、ひどく冷めた殺意の炎を胸の内に抱き続けていた。

「じゃあ、行ってくる。あまり時間もないしね」
「うん。行ってらっしゃい」

アイシアの見送りを受けて、リオが地面を強く蹴る。風のようにするすると木々を走り抜け、適当に背の高い木を見つけると、瞬く間に昇りつめた。
そこから、さらに精霊術で浮遊し、位置と方位を確認しながら、次に滞在する宿場町を探す。
（あそこなら、道にさえ迷わなければ夕方前に到着できそうだ。野宿はみんなの体力的にきついだろうし）
リオは関所を抜けた先の谷あいに伸びる街道上に、目的の宿場町があるのを発見した。

仮に森の中で迷ってしまえば野宿は避けられない。もちろん準備は整えているが、セリアのことを考えればできる限り宿に泊まらせてあげたかった。

となれば、あまり時間は無駄にできない。リオは木から降りることにした。

続けて、足場の良さそうなルートを探して、森の中を再び疾駆し始める。

道中、魔物や危険な獣を発見すれば、露払いのために間引くか追い払うことも忘れない。

二十分足らずでざっと森の中を走破すると、今度は空を飛んでセリア達がいる近くまで戻ることにした。所要時間は森の中を走った時の三分の一以下だ。

リオが森の中に着陸し、セリア達と合流するべく歩き出す。

（確かこの川沿いに……。近くにいる、アイシア？）

付近にアイシアがいるだろうと考え、リオは念話を飛ばした。念話が可能な範囲内にいるのならすぐに返事が戻ってくるはずだ。

（いるよ。食事を食べた近くにある泉。川沿いに下っていけば着くはず）

（そっか。じゃあ、そっちに行くよ）

アイシアから返事が戻ってきたため、リオは深く考えずに川の流れに沿って歩き出した。

川の流れの終着点付近に茂（しげ）みがあったので、かき分けて進んでいく。そうやって少し歩くと開けた空間に出る。泉だ。

そこには裸体の美少女が二人いて――、

「……へ？」

想定外の光景に、リオが思考停止に陥る。思わず呆けた声を出してしまった。
二人の美少女のうち、一人はふわりと伸びた白い髪、もう一人はスッと伸びた薄紫色の髪をしている。つまり、セリアとクリスティーナだった。
小柄で妖精のように愛らしいセリアに、すらりと彫刻のように線の美しいクリスティーナ。リオはしばし呆然と立ち尽くしてしまった。
すると――、
（春人）
突然、アイシアに念話で話しかけられ、リオの身体がびくりと震えた。慌てて背後を振り返る。そこには実体化したアイシアがぽつりと立っていた。
慌てて泉に視線を送る。幸いクリスティーナ達には気づかれていないようだ。
（ば、場所を変えよう。アイシア、こっちに）
リオはアイシアを連れて、そそくさとその場を後にした。
（こんな場所で水浴びなんかしないでくれよ……）
と、心の中でそんなことを思いながら。
☆★☆★☆★
アイシアと合流すると、リオは浩太（こうた）や怜（れい）がいる場所へ戻った。

「何をしているんですか？」

泉の回りに生えている茂みに潜り込もうとしていた浩太達を見つけ、リオが尋ねる。

「え、あ！　ハ、ハルト君！　ち、違うんだ！　僕は先輩を止めようとして！」

浩太が慌てて弁明する。一方で、怜は「あはは」とバツが悪そうに笑っていた。どうやら覗(のぞ)きを企てていたようだ。

リオが思わず呆れてため息をつく。だが、過失とはいえ既にうら若き高貴な乙女達のやわ肌を覗いてしまった以上、自分に彼らを咎(とが)める資格などないと考え、非難することはしなかった。

「覗きに命まで賭(か)けるのは賢い選択とは言えませんね。それ以上進んでヴァネッサ殿に見つかる前に、引き返すことをお勧めします」

「いやあ、命を賭けるって、流石にそれはないでしょう」

真面目な顔つきで忠告するリオに、怜が茶化して告げる。

「残念ながら、時と場合によって、この世界で人の命はとても軽くなるんです」

リオの答えは無情だった。

☆★☆★☆★

時は少し遡(さかのぼ)り、リオ達が領都クレイアを出発した日の夕方。

場所は変わってベルトラム王国。クレール伯爵領の南部に隣接す

る領のとある宿場町にて。
この宿場町の付近は山に囲まれ、谷あいに街道が通っているため、歩いて移動するならば必ず通る必要があるという地点に位置する。
人口はおよそ二百人だが、街道を行き来する人で最低でも倍以上の人間が常に町の中に滞在している。街道沿いには宿やら商店やらが並び立っており、中にはもちろん酒場もあるわけで――。

「かっー！　一仕事した後の麦酒はたまんねぇな！　おう、お前ら！　今日は俺の奢りだ。ガンガン飲めや！」
「安い麦酒しかねえけどな！」
「何言ってやがる。この安酒が良いんじゃねえか！」
「違えねえ！」

この宿場町の近隣で一仕事を終えた冒険者達が集まる酒場があった。中ではガハハと下品な笑い声が飛び交っている。
冒険者という職業人は概して荒くれ者と見られることが多い。もちろん中には気の良い者も相当数いるのだが、モラル意識の低い者達の素行が悪目立ちしているからだ。
とはいえ、ある程度は仕方がない面もある。
冒険者はどこに行っても腐るほどいるが、その行動範囲は意外と狭い者が多い。そして、狭い社会で力を生業に生きているからこそ、「舐められた負け」「強い奴が偉い」という原始的な発想が共通認識として自然と形成されていく。虚勢を張ってでも力を誇示しなければ、信用を失い周りから格下として扱われてしまう。
だから、態度がでかいからとか、舐めた口をきいたからとか、目つきがきにくわないからとか、良い大人が些細な理由で簡単にケンカをおっぱじめる。
弱そうな新参の同業者が現れたら絡んで、自分の力を仲間や周囲にアピールするなんてことも平気で行う。

「ん？」

ある時、冒険者達の酔いが回ってきたあたりで、酒場の扉がおもむろに開いた。店内にいる冒険者達の視線が引き寄せられる。

入ってきたのはいわゆる冒険者然とした一人の男だった。マントを羽織り、革の鎧を身に着け、腰には剣を差している。年齢は二十代後半あたりか。

「あん？　見ねえ顔だな」

と、皆に酒を振る舞っていた男が呟いた。

別に余所の冒険者がこの宿場町をまったく通らないというわけではない。

だが、この酒場はこの宿場町をテリトリーとして活動している冒険者達がたむろする場所である。

なわばり意識の強い土着の冒険者達のホームにわざわざ足を踏み込むとなれば、新しくこの宿場町を拠点として働くにあたって挨拶に来たか、わざわざケンカを売りに来たか、何も知らずに酒場を訪れた愚か者なのか、三つに一つしかない。

しかし、酒場に入ってきた男は周囲の視線を気にした様子もなく、どこか覇気に満ちた表情でカウンターにドカッと腰を下ろした。

「肉料理と麦酒を頼む」

カウンターに大銅貨を三枚置いて、男が料理と酒を注文する。すると、店内の冒険者達が気にくわなさそうに男を睨(にら)んだ。

「あ、ああ」

店内の剣呑(けんのん)な空気を察し、店主が上ずった声で頷く。

そして、酒を振る舞っていた男が何人かの冒険者に目配せをして一斉に立ち上がる。冒険者達は男を囲うように両脇の空き椅子に座った。

「よう、兄ちゃん。度胸あるなあ。俺らに挨拶もなしに注文とは。この酒場がこの町を縄張りとする冒険者達の馴染みだって知ったうえで来たのか？」

挑発的な笑みを浮かべながら、酒を振る舞っていた冒険者が男の肩に手を回す。

「ああ、そうだ。貴様らに依頼があってな」

と、男は意に介した様子もなく応じた。

「あん、依頼だあ？　ギルドを通さねえってことか？」

少し意外な話の流れに、冒険者達が怪訝（けげん）な顔つきになる。

「ギルドの支部がないこんな田舎じゃよくあることだろう？」

「まぁ、そうだが……。つまり、滞在員に話を通さない類の仕事か？」

一応、冒険者ギルドの支部がない地でも、ある程度の人口がいる宿場町のような場所には仕事を管理・斡旋（あっせん）する滞在員が派遣されるようになっている。そして、この宿場町にも滞在員が派遣されていた。

「その分、報酬は弾む。仕事を受けるなら、これは前払い分だ。こちらの望んだ結果を出せばその三倍の額を払おう」

言って、男は大銀貨の詰まった袋をカウンターに置いた。

「こ、この三倍だと？」

近くにいて大銀貨の袋が見えた冒険者達がざわつく。「大銀貨が山ほど入っているぞ」と店内に一気に情報が伝播（でんぱ）した。

「……あんたの素性を聞きたい」

皆に酒を振る舞っていた冒険者が、酔いも醒めた顔つきで尋ねる。

「それは仕事を受けたらの話だな」

「なら、仕事の内容を教えてくれ。金払いがいいのはわかったが、何の仕事かわからない依頼を受けたくはねえや」

ここら辺のリスク管理ができるのは、ある程度ベテランの冒険者である証（あかし）だ。

「なに、ちょっとした人探しだ――」

答えて、男は口許に怪しげな笑みを刻んだ。

「――相手が誰かはわからない、な」

第１２４話　レストラシオンへの旅路（後書き）

【６章の重要登場人物】

・リオ（天川春人）

本作の主人公。

前世の幼馴染である綾瀬美春に長らく惚れていたが、この世界で再会した後も死んだ自分にアイデンティティの揺らぎを感じて想いを伝えることはしなかった。

だが、美春達と親しい沙月と出会い、美春の恋人候補であった貴久までもが登場し、状況に押される形で告白を決意する。

しかし、身動きが取りづらい状況や、貴久の暴走によりすれ違いが生じたまま美春達と決別することになった。

結局、復讐の道を歩む自分に強い引け目があったのか、想いを伝えただけで満足し、貴久経由で偽りの美春達の意思を伝えられただけで、あっさりと引き下がってしまう。

・アイシア

リオの契約精霊。

リオの過去や、リオの前世である天川春人のことまで知っている節がある。

精霊としての格が高いうえに、すごく強い。

・セリア

学院時代のリオの恩師。シャルル＝アルボーの元婚約者。

ベルトラム王国が誇る天才魔道士だが、

脅迫によりシャルルとの婚約を迫られ、王城に軟禁されていた。

リオに連れられ王城を脱出して以降は平穏な暮らしをしていたが、貴族としての義務感を捨てきれず密かに悩んでもいた。

・クリスティーナ
ベルトラム王国の第一王女で、学院時代のリオのクラスメイト。
幼少期に誘拐されたところをリオに助けられたが、当時はヒステリックな性格で助けてくれたリオにビンタをぶちかました。
とはいえ、もともと聡明な子供だったらしく、成長とともに少しずつ思慮深い性格になっていった。
学院時代はリオと関わらないように徹底して距離を置いていたが、知らぬ間に再会した今は……。

・ヴァネッサ＝エマール
クリスティーナの護衛騎士であり、ベルトラム王国最強の騎士であるアルフレッドの妹。

・村雲浩太
勇者召喚に巻き込まれた日本人。ちょっと内気そうなごく普通の高校生。

・斉木怜
勇者召喚に巻き込まれた日本人。浩太の先輩で、ひょうきん者な普通の高校生。

・シャルル＝アルボー
典型的な貴族気質の男。セリアの元婚約者。
見下した相手には驕ったような態度をとるが、女性に対しては気障な一面を見せることも。

・アルフレッド＝エマール
ベルトラム王国最強の騎士。
冷静で武人気質な性格をしており、『王の剣』の称号を国王直々

に与えられている。

第125話　レストラシオンへの旅路　その2

その日、リオ達は関所を迂回すると、順調に山林地帯を抜け出し、何とか夕暮れまでに次の宿場町にたどり着いた。

「よ、ようやく着いた」

宿場町の入り口が見えた辺りで自然と立ち止まり、村雲浩太（むらくもこうた）が疲労困憊といった様子で呟く。

「きょ、今日は森の中を歩いたせいか、疲れ方が半端ないな。どれくらい歩いたんだ？」

浩太の隣を歩く先輩の斉木怜（さいきれい）が息絶え絶えに応じた。

クレール伯爵領、領都クレイアを出発してから既に二日が経過している。その間、ひたすら歩き続けてきたのだから、現代日本で暮らしてきた普通の高校生である彼らが疲弊するのも無理はない。

とはいえ、実際には、浩太達よりも、温室暮らしのクリスティーナやセリアの方が体力的に大きく劣ることは明らかだろう。

だが、クリスティーナもセリアも弱音を吐かずにここまで健気に歩いてきている。今は二人とも水筒を口につけて水分補給をしていた。

「一日に人が歩いて移動できる平均的な距離は三、四十キロ前後と言われています。ただ、今日は森の中を歩いたので、せいぜいその半分といったところでしょう」

怜の疑問に、リオが涼しい顔で答える。

「つまりたったの二十キロですか……」

車ならせいぜい数十分程度で移動可能な距離に、浩太は顔を引きつらせた。

すると――、

「おそらくレストラシオンの本拠地まで二、三週間はかかる。まだまだ先は長いぞ。明日も移動だ」

と、クリスティーナの護衛騎士であるヴァネッサが横から言葉を挟んだ。

「はい……」

浩太は重たく頷くことしかできなかった。

「というわけで、早く町の中に入って、今日の宿を確保しましょう。夕飯は消化に良いものを作りますから、早めに寝てください」

リオが苦笑交じりに声をかけると、一同は宿場町へと続く残りわずかな道程を歩き出した。

そして、宿場町の中に入るや否や、リオは微かな違和感を覚える。視線を感じたのだ。

（ん？）

視線を感じた先を見やると、宿場町の門付近に冒険者数名がたむろしており、何となく門の外から現れたリオ達の様子を窺っているような節があった。

別に冒険者などどこにでもいるし、そこら辺で仕事終わりの冒険者が集うのも珍しい光景ではない。土着の冒険者であれば部外者に多少の好奇心を寄せることもあるだろう。
もしかしたら官憲のいない宿場町の警備を、彼らが行なっている可能性だってある。

「見られている？」

クリスティーナがぼそりと呟いた。隣を歩くヴァネッサも警戒の度合いを強めている。視線に気づいたのは彼女達も同様なようだ。

「視線を合わせないようにしてください。喧嘩っ早い連中なので、難癖をつけられても面倒です。不必要に隙を見せなければ、基本的に絡んでくることはないでしょう。付いて来てください」

一同に聞こえるよう、リオがすかざず呟いた。そのまま先頭に立って足早に歩き、宿場町の奥へと入っていく。
宿場町は街道上に形成されるので、町の中は一本道となっている。背後に意識を集中したまましばらく歩くと、冒険者達から感じる視線が霧散した。

「宿の手配をしてきます。皆様はこちらでお待ちください」

そう言って、リオは手ごろな宿屋の中に入っていく。
その後、昨日と同じように店主に口止めをすると、個室を貸し切って宿屋に宿泊することになった。

◇　◇　◇

リオ達が訪れた宿場町のとある酒場にて。

店内にはこの町を拠点とする冒険者達が毎晩のように集っているが、今日は普段よりも閑散としている。
そんな店の隅っこで、二人の男が酒を飲んでいた。
一人は三十代半ばの冒険者――この宿場町を拠点に活動している冒険者達のまとめ役をしている人物――で、もう一人は二十代後半の冒険者である。

「で、どうだった？　今日の具合は？」

二十代後半の冒険者が、テーブルの対面に座る三十代半ばの冒険者に尋ねた。

「あんたが睨んだ通り、北の関所での検問が厳戒になったせいか、今は一時的に往来が減少している。今日、北側からこの宿場町に訪れた旅人は合計四組。その中であんたの提示した条件に合致しそうな奴がいそうなところに声をかけさせている。今は夕食時だ。宿の食堂か近くの酒場で適当に情報をチラつかせているだろうよ。次第に報告が来るはずだ」

と、三十代半ばの冒険者が淡々と報告する。

「そうか」

二十代後半の冒険者は短く相づちを打ち、テーブルの上に置かれた食事を口に運んだ。

「……なあ。こんな仕事で本当にあんな大金を受け取っていいのかよ、アレインさんよ？」

と、三十代半ばの冒険者がおもむろに口を開く。

「まだ仕事は終わっていないのに気が早いな」

アレインと呼ばれた二十代後半の冒険者が口許に苦笑を刻んだ。

「まぁ、その通りなんだがよ。こんなの、人数が必要なだけで、そこいらの駆け出し冒険者にでもできるような仕事じゃねえか」

三十代半ばの冒険者がバツが悪そうに頭を掻く。

「そう思うか？」

アレインが口許にニヤリと含む笑いを浮かべた。

「けっ、試すような物言いはよしてくれ。あいにく俺はこの歳で四級止まりなもんでね。二級冒険者様のお考えはよくわからんよ」

三十代半ばの冒険者が不機嫌そうに顔をしかめる。

「そいつは悪かった。俺の方が歳下なんだ。別に無理して卑下する必要はないんだぜ？」

語って、アレインはひょいと肩をすくめた。

「ふん、年齢は関係ねえよ。それに、依頼者には最低限の敬意を払うのが冒険者ってもんだろ」

「ご立派なことで」

アレインがそう言うと、酒場の扉が開き、大勢の冒険者達が入ってきた。

「おう、お前ら。どうだった？」
入店してきた者達に、三十代半ばの冒険者が気安く声をかける。
「駄目だな。保留中の一組を除いて全部外れだと思う」
「保留中の一組？」
三十代半ばの冒険者が訝しげに訊いた。
「オリン達のとこだよ。なあ？」
尋ねられた冒険者が、オリンという十代後半の青年を先頭に立つ若手冒険者のグループを見やる。
「ええ、接触できなかったんです。宿屋の中にはいるんですが、何でも調理場で自炊して、貸し切った個室で食事しているらしくて」
「ほう。つまり、人目を避けているということか？」
オリンの報告を受けて、アレインが興味深そうに質問した。
「いや、そこまではわからないんですけど……」
「あん、宿屋の店主に探りを入れなかったのか？」
「入れましたよ。でも、店主も大したことは知らないらしくて……」
三十代半ばの冒険者から不機嫌そうに尋ねられ、オリンが弁明する。
「ちっ、使えねぇ。どうせテメェらのことだから中途半端な訊き方をしたんだろ」

「そ、そんなこと！　あ、でも。全員フードで顔を隠していましたね。どうです？」

頭ごなしに非難され、オリンがムッと反論した。

「どうです、じゃねえよ。そんなの都市の中を歩いている姿を見れば一発でわかるだろうが。得意顔しやがって」

そうして、三十代半ばの冒険者がオリンを叱りつけると、

「まあいいさ。明日、そいつらがこの宿場町を出て行く時にまたチャンスはある。その時に接触すればいい。その時は俺も同行しよう」

アレインが横から言葉を挟み、すまし顔で麦酒を口に含んだ。

◇　◇　◇

翌朝、リオ達は宿屋を後にして、宿場町の外に向かって歩いていた。

ちなみに、リオとヴァネッサを除く一同は、疲労が蓄積して眠りが深かったため、宿を出る時間が少し遅くなっている。

進行方向に向かって町の門付近にやって来ると、

「よお、あんたら。見たところ、旅人だよな」

どこからともなく冒険者数名が姿を現し、リオ達に声をかけてきた。

「……その通りだが、あんたらは？」

リオが先頭に立ち、一行を代表して答える。
一方、背後にいるヴァネッサ達がやや警戒した様子で身構えた。
「おっと、別に喧嘩を吹っかけようってんじゃねえ。ちょいと訊きてえことがあってな」
と、三十代半ばの冒険者が両手を肩の位置まで上げて、無抵抗をアピールして言う。
「急いでいるんだ。時間がかかるようなら遠慮願いたい」
リオが予防線を張り、警戒の眼差しを冒険者達に向けた。
「いや、すぐに終わる。お前さん。いや、お前さん達の中に、ルシウスって男を知っている奴はいるか？」
「……同じ名前の男は知っているが、同一人物かどうかはわからない」
一瞬の間を置いて、リオが返答する。あまりにも予想外な名前が出てきたため、思考が停止しかけたのだ。
知らないと答えることも考えたが、ルシウスの名を出されては好奇心を押し殺すことはできず、それとなく話を聞きだそうとする。
「おお、そうか。俺が言っているのは、あの『天上の獅子団』の団長ルシウスだよ。一級冒険者のな。どうだ？」
三十代半ばの冒険者が確認するように質問した。
「……ああ、有名な男だからな。知っているよ」

リオが微かに思案したうえで首肯する。
ルシウスについては、美春達と一緒に暮らしている間に一人でアマンドの近隣を回り調べてみた。
最近では活動を停止しているものの、その存在は『天上の獅子団』とともに、冒険者界隈ではそれなりに知られている。
ゆえに、肯定したところで、さほど不自然ではないだろう。

「そうか。足止めして悪かったな。もう大丈夫だ」
「……もういいのか？」

存外あっさりと話が終わり、リオは拍子抜けした。

「ああ、あんたらが目当ての人間じゃないってわかったからな」
「どういうことだ？」

リオが訝しげに男を見つめる。

「あー、あまり詳しいことは言えないが、人を探しているんだ。俺らは使いでな。依頼主の探し人らしい人物に手当たり次第声をかけているってわけだ。で、その探し人なら当然あってしかるべき反応があんたらからは見受けられない。まあ、そういうことだ」

と、三十代半ばの男は思わせぶりな回答を口にした。

「……つまり、その依頼者がルシウスということか？」
「そいつは答えられねえよ、悪いがな。守秘義務ってもんがある」

三十代半ばの冒険者がきっぱりとかぶりを振る。

（どうする？）

リオが内心で焦燥し、歯がゆい想いを抱いた。
根掘り葉掘り訊きだすのは不自然だし、訊いたところで答えてくれるとも思えない。こんな往来では強引な手段に訴えるのも論外だ。
そもそも今はそんな時間もない。リオは逃亡中のセリアを護衛しているのだから。

（俺が一人で残って調べるか？　霊体化させたアイシアを付いて行かせれば、合流は後からでもたぶん可能……いや、駄目だ。細かな進行ルートは場当たり的に決めている。森の中に入ることもあるし、待ち合わせもせず合流するのは不自然になる。そもそも先生達に何て説明して残る？）

リオが冒険者達と見つめあったまま硬直し、数瞬ほど悩み続づける。

「ハルト、どうかしたの？」

背後からセリアが小声で語りかけてきた。

「いえ、何でもありません。行きましょうか」

リオは背後を見やり、かぶりを振った。後ろ髪を引かれる気持ちだが、異変を察せられないよう、平静を装う。

「じゃあな、兄ちゃん達。呼び止めてすまなかった」

そう言い残し、冒険者達は立ち去った。
リオがもどかしそうに彼らの後姿を眺める。

「ルシウス、か。まさかその名前をこの場所で聞くことになるとはな」

ヴァネッサがぼそりと呟いた。

「貴方も知っているの？」

隣に立っているクリスティーナが小さく目をみはり訊く。

リオはさりげなく耳を澄ませる。

「ええ、まあ。その人物は没落した我が国の貴族ですから」

と、ヴァネッサが歯切れの悪い口調で答えた。

「そうなの？　私は知らないけど」

「まだ私が新人だった頃。もう十年以上も昔の話です。当時はかなり噂になりましたが、ひ……ティナお嬢様がご存じないのも無理はありません」

「へぇ……まあ、いいわ。その話はまた今度。今は急ぎましょう」

これ以上この場でするべき話でないと考えたのか、そう言って、クリスティーナは出発を促した。そのまま、一同が町の外へ向けて歩き出す。

すると、その時――、

（春人、私がこの町に残るよ。探せばいいんでしょう？　ルシウスへの手掛かりを）

と、脳内にアイシアの声が響いた。

（……アイシア）

リオが歩き出した足を止め、戸惑い顔を浮かべる。

正直、頼みたいという気持ちが強い。

人目を惹く容姿にしろ、寡黙な性格にしろ、アイシアが聞きこみ調査には向いていないことは明らかだが、霊体化して連中の周囲をうろつかせれば、簡単に情報を盗み聞きできるのだ。

だが、その仕事をアイシアに任せていいものかとも思う。

これはリオ自身の問題なのだから、頼れば少なからずアイシアを共犯者として巻き込んでしまうことになる。

（いいんだよ）

アイシアが優しく言った。

（……え？）

（春人は気に病まなくていいの。私に任せて、貴方は先に行って）

霊体化して姿は見えないけど、目の前でアイシアが微笑んだ気がした。パスを通じて、彼女がすぐ傍にいるのがわかる。

「どうしたの、ハルト？」

少し先で、セリアが振り向いてリオに話しかけてきた。

（ほら、セリアが変に思うよ？）

アイシアに促され、リオがぎこちなく歩き出す。

「すみません。何でもありませんから」

セリアの隣に並ぶと、リオは精一杯の笑みを浮かべた。

「そう？」

セリアが小首を傾げ、リオの顔を覗きこむ。

「ええ」

と、リオは頷きながら、

（……ごめん、アイシア。霊体化した状態で、しばらくこの男達の傍にいてもらってもいいかな？）

アイシアに念話を送った。同時に、「行きましょう」とセリアに促し、歩き始める。

（いいよ）

すぐにアイシアから肯定の返事が戻ってきた。

リオの顔つきが申し訳なさそうに曇る。

（ありがとう。でも、いくら俺達がパスで繋がっているとはいえ、互いに移動した状態であまり離れすぎると、合流するのは面倒になる。だから、有益な情報を手に入れたかに関わらず、三日間を目安に、引き上げてほしい）

（うん、わかった）

その言葉とともに、アイシアは霊体化した状態のままリオの体内から抜け出した。

（アイシア、実体化して何か行動を起こす必要はない。安全が第一だ。万が一、不測の事態が生じたら、すぐに戻ってくること。それだけは約束してほしい）

勝手なことを言っている――と、リオはそう思いながらも、今はアイシアに頼るしかなかった。

（大丈夫だよ）

と、アイシアが抑揚のない返事をする。

（……）

リオは名状しがたい不安を抱いたが、返す言葉が見つからず、前に向かって歩き続けた。

すると――、

（ありがとう、春人）

アイシアから念話が飛んできた。

リオが一瞬、呆けた顔を浮かべ、すぐに目をみはる。

（……どうしてアイシアがお礼を言うのさ。お礼を言うのは俺の方だろ？）

と、念話でアイシアに尋ねたリオだったが、

「ハルト、本当に大丈夫？　ひょっとして疲れている？　貴方一人に負担がかかっているし、無理はしないでいいのよ？　体調がおか

しいと思ったらすぐに言ってね？」

隣を歩くセリアから心配そうに声をかけられた。黙ったまま歩いているリオの横顔を不安そうに見上げている。

「体調は本当に大丈夫です。ごめんなさい、少し考え事をしていまして」

セリアにまで心配をかけさせるわけにはいかない――そう考え、リオは意識を切り替えた。

セリアとの会話を邪魔しないようにしているのか、アイシアから返事はない。

「……本当、無理しちゃ嫌だからね？　いい？」

「はい。ありがとうございます」

リオが少し微笑ましげに礼を言う。

「な、なんで笑うのよ？」

「いえ、何だかセシリアが先生っぽく見えたもので。新鮮といいますか」

つい、懐かしくなってしまいました――リオはその言葉を呑みこんだ。

だが、セリアはリオが言わんとしたことを的確に察したのか、照れ臭そうに頬を赤らめる。

「そ、そりゃあ、本業は先生ですから。それらしいことも口にするわよ」

「そうでしたね」

リオが懐古的な笑みをたたえる。その後、町の外に出るまで、リオがアイシアと意思疎通を図ることはなかった。

◇　◇　◇

アイシアは霊体化した状態で、遠目からリオの後姿を眺めながら、

（春人が私のことを大切に想ってくれているから）

先ほどのリオからの問いかけに、ぼそりと答えた。

だが、その想いが念話となり、リオに届くことはない。意図的にリオに伝えなかったのだ。

（セリア、春人をお願い）

そう願って、リオ達の姿が見えなくなったところで、アイシアは踵を返した。

霊体化した精霊は物理法則の干渉を受けない。あたかも無重力下にいるごとく、宙に浮き上がり、先ほどリオ達に話しかけてきた男達が立ち去った方に向かう。

（いた、さっきの男）

リオと会話をしていた三十代半ばの冒険者の顔を見つけ、アイシアはその後を追った。

男達を追って脇の袋小路に入り込む。

すると、そこには、他にも大勢の冒険者達が集まっていた。

合流してメンバーがそろったのか、男達がおもむろに会話を始める。

「連中はどうだったんだ、アレインさんよ？　連中、件の人物について知ってはいても、必要以上に情報を吸い取ろうとはしてこなかったようだが……」

と、三十代半ばの冒険者が窺うように尋ねた。

「……少し気になるな。あの方の事を知っている時点で候補者には上がる。とはいえ、情報を吸い出そうとはしていたが、引き下がるのも早かった。ふむ……」

何かが引っかかっているかのように、アレインが思案顔を浮かべる。

「なら、どうするんだい？」

「……一応、暫定的に契約完了で構わん。条件付きだが、報酬は渡そう」

アレインは頷くと、懐から大銀貨がぎっしりと詰まった袋を取り出した。それを見て、　冒険者達が色めき立つ。

「ほう、思いきりがいいねえ。本当にいいのかよ？」

「構わん。元より必ず見つけだすことを前提にしていないからな。それに、条件付きと言っただろう？」

そう言って、アレインは小さく肩をすくめる。

「まぁ、そうだったな。で、その条件とやらは？」

「今後もこの宿場町を通る男の旅人にそれとなく声をかけてほしい。これまでと同様、こちらから迂闊に情報を口にはするなよ？　それ

でも交渉を試みようとする者が現れたら、理由を問いただしたうえで、今日から一週間の期間、待てるか尋ねろ。それまでに俺はこの町に戻ってくる。有益な結果を残した奴には追加で報酬を支払うことを約束しよう」
「……ほう、そいつはありがてえな。そんな仕事でいいなら喜んでやるぜ」

冒険者達が意欲的な姿勢を見せる。
正直、今回の依頼は話が美味すぎるくらいに美味しいのだ。金払いがいいことは確定しているし、現段階で断る理由はなかった。

「そうか。なら、頼んだぞ」
「了解、了解。じゃあ、念のため、大銀貨の枚数を数えさせてもらうぜ」
「わかっている。急げよ」
「まあ、焦るなや。へへ」

冒険者達は胡坐をかいて地べたに座り込み、布を敷いて大銀貨をぶちまけた。手早く大銀貨の枚数をカウントしていく。
そして、十数秒後、

「合計で大銀貨二百枚。確かに頂戴したぜ。アレインさんよ」

と、三十代半ばの冒険者が上機嫌に告げる。

「そうか。なら、俺は行かせてもらうとしよう」

アレインは黙ってその場を後にすると、リオ達も出て行った南門に向かい歩き出した。
一方、アイシアは立ち去るアレインと冒険者達を交互に見やって

いる。

（……あいつがルシウスの探し人を探させている依頼主？　なら、ここにいる冒険者は関係ない？　あいつに付いて行けばルシウスの情報が手に入る？）

今のやり取りだけでは内容が抽象的で、重要な情報を得ることはできなかった。わかったのはこの場にいる冒険者達を雇っていたのが、立ち去っていく男だということだけだ。

残った冒険者は二十名弱――これがこの町を拠点に活動している冒険者総員である。

「たった……これだけ？　俺達だけ取り分が明らかに少ないじゃないか！？」

その時、若い冒険者が憤る声が響いた。声の主はこの町で最も若手の冒険者パーティのリーダーであるオリンだ。

どうやら報酬の配分でもめているらしい。

アイシアがちらりと地面に置かれた布を見やると、オリン達パーティには八枚の大銀貨が配分されていた。

彼らが受け取った大銀貨は着手金も併せて合計で二百枚――二十人弱の冒険者で分配すれば一人十枚強は貰える計算になる。

なのに、オリン達はパーティ四人でたった八枚の大銀貨しかもらえていない。これでは一人二枚の計算となる。とんでもないピンハネだ。

「お前ら、結局、大した仕事してねえだろ。担当した連中に声すらかけられなかったんだからよ」

語って、三十代半ばの冒険者が煙たそうな視線をオリン達に向け

た。

「し、仕方ないだろ！？　個室に籠っていたんだから！」

「だったら部屋に押し掛けるくらいの根性は見せろって話だろうが。まあ、お前らじゃ大切な情報を見過ごしていたかもしれないからな。会わなくて正解だったぜ」

「ふざけるなよ……」

オリン達が怒りで身体を震わせる。

「あん、文句あんのかよ？　多数決で決めたことだぜ、ルーキーさん達。報酬がもらえるだけありがたいと思えよ」

「……ぐっ」

他の冒険者達から剣呑な視線を向けられ、オリン達が押し黙る。

彼らはまだ若く、冒険者としての等級も低く、この町で活動を開始してから日も浅い。

ゆえに、年上の冒険者達から理不尽な扱いを受けても、逆らえるだけの力があるはずもない。

アイシアは彼らのやりとりを尻目に、この場に残っても意味はないと考え、立ち去ったアレインを追いかけることにした。

袋小路を出ると、そう遠くない場所に目的の人物を発見した。適度に距離を保って、尾行を開始する。

すると、ちょうど町の南門を出た辺りで、

「ま、待ってくれ！」

と、後ろから走ってきて、アレインに声をかける者達が現れた。

「お前は……オリンとかいったか。どうした、報酬をピンハネでも

されたか？」
尋ねて、アレインが微かな嘲笑をたたえる。
図星を突かれ、オリン達は悔しそうに顔を歪めると、
「なあ、何か仕事をくれないか！？　何でもする！」
必死な形相でアレインに頼み込んだ。
「大きく出たな。何でもするとは。簡単に口にしていい言葉じゃないぞ」
「俺達は成り上がりたいんだ！　こんな小さな宿場町で、あんな底辺の連中に舐められたまま終わるつもりはない」
オリンが勇んで語ると、背後の青年達も「そうだ！」と血気盛んに首肯する。
「……お前らは連中と直接コンタクトをとってはいないんだったか？」
思案顔を浮かべると、アレインが尋ねた。
「ああ」
オリンがこくりと頷く。
「なら、いいだろう。十分で支度を整えて、この場に戻ってこい。そうしたら仕事を与えてやる」
「本当か！？」
「ああ。わかったらさっさと行け。俺は待たされるのは嫌いなんだ」

アレインがしっしと手を振り、行動を促す。

「わ、わかった！　行くぞ、お前ら！」

オリン達は駆け足で自分達が拠点としている宿屋に走っていく。

「愚かだが、扱いやすくて助かるな」

アレインは冷笑を浮かべ、オリン達の後姿を眺めていた。

第１２６話　レストラシオンへの旅路　その３

「お前らの仕事は簡単だ。前にいる連中を尾行しろ。見失わないよう付かず離れず距離を保ってな。別に存在を気づかれても構わんが、自分達から接触を持とうとはするな。話しかけられても、普通の旅人のふりをしろ。以上だ」

オリン達が宿場町の門に集まったところで、アレインが説明を行った。

「ああ、わかった」

オリン達が頷くと、アレインの口許が微かに上がる。

「よし。なら、早速だが、連中を追いかけてもらう。これより南に進むと南と東に続く分岐点があるのは知っているな？」

「もちろん。そこら辺は余裕で俺らの活動領域だ」

「じゃあ、そこまで進んだらお前らはあえて連中とは別方向に進め。その後、数分程歩いたら休憩して待機していろ。とりあえず、そこまでがお前らの仕事だ。その間、俺は別行動させてもらうが、後で合流する」

「了解した」

オリンが即答した。依頼の大枠はいまだに理解できないが、簡単な仕事である。

「何か訊いておきたいことはあるか？」

「いや……」

微かに逡巡したが、オリンはかぶりを振った。心情的にはこのまま報酬の話に移りたいところだが、頼んで仕事を請け負っている立場では切り出しにくい。

「そうか。言った通り、俺は少し野暮用がある。戻るのは少し時間がかかるかもしれん。日が暮れるまでには戻るが、少し長めに待ってもらうかもしれない。まぁ、そこら辺は臨機応変に対処してくれ」
「わかったよ」
「じゃあ、また後でな」

そう言い残すと、アレインは再び町の中に向かって歩き出した。

（これは……どっちを追いかけよう？　春人に知らせるべき？）

早足で街道を南下するオリン達の後姿を眺めながら、アイシアが思案する。

（ううん。あっちは放置しても害悪はないはず。なら、私はあいつを追いかけるべき）

そう判断を下すと、アイシアは再びアレインを追いかけることにした。

◇　◇　◇

その頃、クレール伯爵領、領都クレイアにて。
クリスティーナ捜索隊の指揮官――シャルル＝アルボーは、セリアの父ローラン＝クレールから貸し与えられた執務室に籠り、四百名からなる二個中隊の指揮に追われていた。

「まだ見つからないのか、クリスティーナ王女は！？　役立たず共めがっ！」

執務机を乱雑に叩き、シャルルが怒鳴る。

対面に立つアルフレッド＝エマールは微かに顔をしかめ、

「兵達はお前の指揮通りに動いている。北と東の街道は封鎖し、捜索も森の中にまで行わせている。だが、それらしい痕跡は見当たらないそうだ」

と、淡々と報告を行った。

「本当にちゃんと調べているんだろうな？　見落としがありましたなどと、後で判明しようものなら冗談では済まぬぞ？」

「人事は尽くしている」

「なら結果を出させろ。結果が出なければ過程に意味などない」

シャルルが苛立ちを隠そうともしない物言いをする。

「命じられたまま動いている兵に責任はない。結果に対して責任を負うのは指揮を行う上官の役目だ」

「……私の指揮が悪いとでも言うつもりか？」

「そうではない。部下に責任を押し付けて、当たり散らすのは止めろと言っているだけだ」

アルフレッドが歯に衣着せぬ反論を行うと、シャルルは剣呑な目つきでアルフレッドを睨んだ。

「なんだと？」

「落ち着け。少し見方を改める必要があるかもしれん」
「……どういうことだ？」

シャルルは小さく舌打ちをして、アルフレッドに尋ねる。

「南の街道だ。最初に言ったが、そちらから逃亡した可能性がないわけではない。今は手薄になっているが、まだ遅くはないだろう。捜索隊を編成して送るべきではないのか？」
「……駄目だ。人員が足りん」
「何故だ？　日が経てば移動範囲は広がっていくぞ。それこそ人員が足りなくなる」

語りながら、アルフレッドはありえないと言わんばかりに目をみはった。

「まだ三日しか経っていない。北と東の捜索をおろそかにして、逃げられては話にならん」

シャルルがそれらしい理由を挙げて反論する。

「馬鹿な。ほぼ手薄な南から逃げられる方がお粗末だろう。お前も指揮官ならば切り替え時を見誤るなよ、シャルル」
「うるさい！　指揮官は私だ。上から目線で私に指図するな。今回に限っては貴様は私の補佐役にすぎんのだぞ？　余計な口出しは止めろ！」

アルフレッドに諭され、シャルルがヒステリックに喚き散らす。
その発言にはシャルルがアルフレッドに対して抱いている歪な劣等感が透けて見えた。

「……私は忠告したぞ？」
「安心しろ。貴様に責任を押し付けることはない。私の方針に反対した以上、功績が貴様の物になることもないだろうがな」
「そうか。それならそれで構わん」

アルフレッドは思わず眩暈がしそうになったが、頭を抑えることでかろうじて堪えた。
シャルルが気にくわなさそうにアルフレッドの仕草を見つめる。
結局、シャルルが南に向けて捜索隊を放ったのは、さらに数日が経過した日のことだった。

◇　◇　◇

クレール伯爵領、領都クレイアから少し南下すると、人口千人ほどの小さな都市がある。
そんな小都市のさびれた酒場を、一人の男――アレインが訪れた。
アレインは店内を見渡すと、おもむろに隅にあるテーブルへと歩き出す。そこには三十前後の冒険者風の男が二人座っている。

「よう、ヴェン、ルッチ。こんな昼前から酒場に入り浸りとは、良いご身分だな」
「早かったな。アレイン。まさかもう任務が終わったのか？」

座っていた男二人の内、中肉中背の人物――ヴェンがアレインの皮肉に気安く応じた。

「ふん。終わるわけがないだろう。俺の任務が一番面倒なんだ。情報交換がてら、どうせサボっているお前らを手伝わせに来たんだよ」
「情報交換には賛成だ。だが、俺らはサボっていたわけじゃねえぜ。待機していたんだ。何があってもいいようにな」

大柄な男――ルッチが鷹揚に頷き、にやけながらアレインに反論する。
すると、そこへ――、
「旦那、注文は？」
不愛想な店主が注文を聞きにやってきた。
「麦酒だ。お前らは？」
「俺達もお代わりを頼む」
アレインが大銅貨一枚を店主に投げ渡し、ヴェン達も一緒に注文を告げる。
「あいよ」
店主は大銅貨を受け取ると、のっそりとカウンターに戻り、酒を注ぎ始めた。
「まあ、座れよ。酒が来たら、一杯飲みながら話をしよう」
ヴェンに促され、アレインが腰を下ろす。
程なくして店主が麦酒を運んでくると、アレイン達は互いが得ている情報を交換し始めた。
「やはりクレイアに滞在している国軍が何かを捜索しているのは明白だな。北と東の街道及び近隣の森にかけて、数百人単位で部隊が展開中だ」

と、ヴェンが麦酒を口にして語りだす。
続けて、ルッチもぐびりと杯を呷ると、
「気になるのは団長の名を口にしたとかいう賊との関連性だ。レイス様が聞かれた話によれば南に逃走したようだが、南の様子はどうなんだ、アレイン？」
そう尋ねて、アレインを見やった。
「南側は完全に手薄だな。街道の先にある関所こそ検問が敷かれているが、お粗末なもんだ」
「となると、国軍の捜索対象とその賊は別件なのかねえ。まぁ、そもそもそいつに関する話自体がガセって可能性も無きにしも非ずだがな」
ふむ、と、あごの無精髭を撫でるルッチ。
「いや、ガセの可能性は低いだろう。捜索部隊の指揮官がレイス様に偽の情報を掴ませるにしても、わざわざ団長の名前が出てくるのは不自然だ」
アレインはきっぱりとかぶりを振った。
「俺もアレインの考えと同じだ。捜索部隊の連中を観察した限り、どうも賊を追っているという雰囲気ではない。おそらく捜索の過程で捜索部隊に被害を与えたのだろうが、連中の捜索対象とは無関係だと判断されたんだろう」
ヴェンが言葉を挟み、自らの意見を述べる。

「どうして無関係だと判断できんだよ？」
「そんなこと、俺が知るか。そもそも連中が何を捜索しているのかすらわからないんだからな」
ルッチが疑問を口にすると、ヴェンはあっさりと一蹴した。
「じゃあどうする、国軍の兵士を拉致って訊きだすか？」
「それも一つの手だが、最終手段だ。時期尚早だな。もう少し隠密に情報を収集してからでも遅くはない」
「面倒なんだよなあ。そういう裏方の仕事って。あんだけ大規模に動かれると、行動しづれえし」
ヴェンが語った方針に、ルッチは頭を掻いて、あからさまに億劫そうな表情を浮かべた。
「だったら俺と来いよ。南の街道沿いにある宿場町に網を張って、人海戦術を仕掛けているが、人手が必要なんだ。捜索部隊の調査はヴェンに任せておけば大丈夫だろう」
と、アレインがルッチを勧誘する。
「賊の手掛かりを掴めたのか？」
ヴェンが興味深そうに尋ねた。
「確信は持てないが、候補者はいる。ま、外れの可能性も高いがな」
「ここに戻ってきて大丈夫なのかよ？」
と、ルッチがアレインに訊く。

「問題ない。金で冒険者を雇っている。といっても、早く戻るに越したことはないからな。あまり時間はない」
「行ってやれ、ルッチ。こっちはもう俺一人で十分だ」

ヴェンがアレインを手伝うようルッチに促す。

「まあ、いいぜ。騎士複数人に被害を出した奴だ。なかなかの手練れと見た。もしかしたら腕試しができるかもしれねえしな」
「まぁ、状況次第だな。レイス様は何者か調べろとのご命令だが、ターゲットとの接触は必須ではない」
「おう、わかっている。まあ、やりようはいくらでもあるだろ。それに、本人かどうか確認するためにも、実力は確かめなきゃならねえしな」

ルッチはそう語ると、麦酒を飲み干し、ニヤリと笑みを刻んだ。
アレインがやれやれと嘆息する。
そんな彼らのやり取りをすぐ傍で立ち聞きする者がいた。

(やっぱりここにいる男達はルシウスと繋がっている。それに、レイス。そいつがこの男達に指示を出している存在)

アイシアである。
霊体化した状態でアレイン達の会話を盗み聞きしていたのだが、まさかガラ空きの店内で会話が筒抜けだとは彼らも思ってはいまい。

「じゃあ、そろそろ行くぞ。ルッチ」
「おう。どんくらいで着くんだ？」
「グリフォンを飛ばせば一時間半くらいの距離だ」

アレインがルッチを引きつれ、店を後にする。そのまま彼らは都

市の外に出て、近くの森に移動し、使役していたグリフォンに乗っかり飛び立つ。

（春人に知らせよう）

アイシアも彼らを追って、リオがいる方角に向かい飛び立った。

◇　◇　◇

場所は変わり、少しだけ時は遡る。

宿場町を後にしたリオ達は、レストラシオンの本拠地に向かうべく街道を歩いていた。

「ハルト殿……」

ある時、ヴァネッサが他の者達に聞こえないよう、少し低い声でリオに語りかけた。

「後ろを歩いている冒険者達のことですか？」

リオが声を抑えて尋ねる。

「そうだ。気がついたらあの位置にいた。後ろから歩いて我々に追いついたのだろうが、以降は今の距離を付かず離れず維持し続けている。妙だとは思わないか？」

「確かに妙ですが、我々を付け回していると決めつけるには少し根拠が弱いですね。尾行するにしては色々と杜撰すぎますし、自衛のために街道では他の旅人と距離を置いているだけという可能性もあります」

「ふむ、確かに……。しかし、鬱陶しくはあるな」

ヴァネッサは思案顔で頷いた。
すると――、
「どうかしたの？」
クリスティーナ達が話に加わってきた。
「決して後ろを振り返らず、話をお聞きください。実は我々の後方を冒険者のパーティが歩いておりまして」
ヴァネッサが警戒を促しながら答える。
「いつの間に……」
クリスティーナ達は気づいていなかったのか、小さく目をみはった。
「三十分くらい前でしょうか。宿場町を出て一時間くらい経過した辺りからです」
「尾行されているの？」
リオが説明すると、クリスティーナがやや警戒した様子で尋ねる。
「可能性は低いですが、ゼロというわけでもありません。とはいえ、尾行されているにしても、その理由は不明ですが……」
「私を追いかけているということはありえないのかしら？」
「ありえないとは言えませんが、それにしては堂々と歩きすぎているといいますか。こそこそしている感じではありませんね。尾行するにしてはお粗末すぎて不自然なくらいです」

クリスティーナの質問に、リオが苦笑しながら回答した。
「となると、ただの旅人の可能性の方が高い、か」
セリアがぼそりと呟く。
「そういうことです。もう少し進むと、南と東に別れる分岐点があったはずです。我々は東に向かいますが、そこを過ぎても後ろを付いてくるようなら、何らかの対処を行いましょう」
「わかったわ」
リオが対処案を提示すると、クリスティーナ達は揃って頷いた。
それから、リオ達は数十分ほど歩き、街道の分岐点にやってくる。そこで、当初の予定通り、街道の東へと入っていくと、少し歩いた先で休憩をとることにした。これなら後ろを歩いてくる冒険者達に視線を向けても不自然ではないだろう。
街道沿いの岩場に腰を下ろし、冒険者達がやって来るのを待つ。
「……行っちゃったわね」
冒険者達が真っ直ぐと街道を南下していくと、セリアが拍子抜けした声で言った。
「まだ油断するのは早いです。もう少し休憩して、様子を見たら、出発しましょう。彼らが戻ってこないとも限りませんので」
リオが警戒したまま注意を呼びかける。
しかし、その後も、通り過ぎた冒険者達が引き返してくることはなかった。

◇　◇　◇

その日の夜。
リオ達は次の宿場町に到達すると、いつものように宿を手配し夕食をとっていた。
すると、ある時――、

（春人、戻ったよ）

アイシアの念話が脳内に響いた。

（早かったね。大丈夫だった？）

リオが微かに目を丸くし、応答する。

（うん。少し話したいことがある）
（……わかった。実際に会って話そう。実体化して南門の近くで目立たないように待っていてくれるかな。すぐに行くから）

リオは少しだけ思案すると、宿の外でアイシアと落ち合うことを決めた。

（了解）

アイシアの簡明な返事とともに、リオが口を開く。

「少し外で情報を収集してきます。皆さんは宿の中で休憩していてください」

そう言い残すと、リオは宿屋を後にした。
南門の付近までやって来ると、どこからともなく、フードのローブで顔を覆ったアイシアが現れる。
「少し人がいない場所に行こうか」
「うん」

リオはアイシアを引きつれ、人気のない袋小路に足を運んだ。そこから大きく跳躍して空を飛び、夜闇に紛れて宿場町の外へ繰り出す。
近くの台地に行くと、『時空の蔵』の中から岩の家を出して、話し合うことにした。

「ここなら誰にも話を聞かれることはない。聞かせてくれるかな。アイシアが何を見聞きしたのか」

机の上に冷えたお茶を用意すると、ソファに座り、リオがおもむろに尋ねる。

「あの後、冒険者の男達を追った。春人達に声をかけたのはあの宿場町を拠点にしている冒険者達。彼らを雇ったのが三十前後くらいの男。アレインと呼ばれていた」
「アレイン……聞いたことがないな」
「おそらくアレインとルシウスは別人物。アレインをさらに使役している存在がいる。名前はレイスと言っていた」
「レイス……。やっぱり聞いたことがないな」
リオが思案顔を浮かべる。こちらも聞いたことがない名前だった。
「アレインにはレイス以外にもルッチとヴェンという二人の仲間が

いた」
「ごめん。その二人の名前もわからないや」
「本題はここから。結論から言うと、アレイン達がルシウスと関係している可能性は極めて高いと思う」
アイシアが抑揚のない声で告げると、リオの顔つきが微かに強張った。
「……その理由を聞かせてほしい」
「アレイン達は人を探している。でも、相手が誰かはわかっていない。たぶんだけど、その相手というのが、春人のことなんだと思う」
「それはどうして？」
と、リオが訝しげに訊く。
「あいつらはレイスの命令を受けて、クレイアで騎士達に被害を与えて、逃走した男を追っているらしい。その男は団長の名を口にしていたと言っていた。その団長というのがルシウスだと私は思った」
アイシアは淡々と自らの推理を述べた。
「確かに、その団長がルシウスだと仮定すると、俺ならその条件に合致する。というより、俺以外に合致しそうな人物はそういないか」
リオが得心がいったようで、苦笑交じりに語る。驚きはそれほど感じられない。むしろ驚くほどに心は冷静だった。
「そう」
アイシアは短く頷くと、机の上に置かれた冷たいお茶入りの金属

製のグラスを口につけた。カランと、氷が崩れると音が響く。
「ルシウスの名を出したうえで、探し人を探していると言っていたのは、相手の反応を探るためってところかな。けど、随分と効率が悪いことをする」
「見つかれば儲け物くらいの感じだったけど、アレイン達は可能性がある相手を片っ端から調べようとしているみたい。春人も連中の数少ない候補者になっている。でも、確信はされていない」
「なるほど……。あの宿場町でのやり取りで何かを感じとられたか」
まさかルシウスの名を出したことで噂を呼び、期せずしてルシウスの関係者を呼び寄せることなろうとは――。
奇妙な巡り会わせに、リオは冷たい笑みを口許に刻んだ。
「けど、そうなると連中は捜索部隊から情報を得たということになるね。それも指揮官クラスから」
リオの脳裏に、セリアの婚約者だったシャルル＝アルボーの存在がよぎった。
「アレイン達は捜索部隊と直接の面識はないと思う。別行動中のレイスが面識を持っているみたい」
と、アイシアがレイスの存在を示唆する。
「レイスか。覚えておくよ。……ところで、アレイン達が俺に注目しているということは、俺達の足取りを追跡していると考えていいのかな？」
「うん。冒険者を雇って旅人のフリをさせて、春人達を追跡させていた。街道の分岐点で春人達とは別方向に向かうように指示を出し

ていたけど」
「……今日俺達の後ろを歩いていた奴らか。確かに街道の分岐点でどっちに進むかわかれば、そこからどの程度進むかは把握できるな。ということは――」
「うん。私は先回りして来たけど、アレイン達もいつこの宿場町に追いついてもおかしくはない。連中はグリフォンを使役しているから、空を飛んで移動できる」
「そうか。おかげですごく有益な情報が得られたよ。ありがとう、アイシア」

微笑を浮かべ礼を告げると、リオはソファから腰を上げた。

「アレイン達はどうするの？」
「……少し泳がせようと思う。今セリア先生と別行動するわけにはいかないし、その方が情報を得られそうだ」

アイシアの疑問に、リオが微かに逡巡して答える。

「なら、私は今後もアレイン達の動向を探ればいい？」
「お願いできると、すごく助かる」
「じゃあ、任せて」
「……ありがとう。とりあえず、今夜は霊体化して俺の体内でオドを回復してくれるかな。連中の動向を観察するのは明日からでいいから」
「うん」

頷くと、アイシアは立ち上がってリオに歩み寄った。そして、おもむろにリオの手を掴み、ぎゅっと握りしめる。

「おやすみなさい、春人」

「おやすみ、アイシア」

眠そうな顔をしているアイシアに、リオがどこか困り顔で微笑み頷いた。

次の瞬間、アイシアの姿がスッと消えて、霊体化してリオの体内に入る。

（……俺は酒場に行くかな。一度この町でしっかりと情報収集しておこう）

軽く伸びをして身体をほぐすと、リオは家の外に向かって歩きだした。

第１２７話　レストラシオンへの旅路　その４

アイシアがリオに合流した翌日。
リオ達はクレール伯爵領を脱すべく、街道を東に向かって歩いていた。
そんなリオ達を観察する男が、遥か上空に一人――ルッチである。
現在、ルッチはアレインと別行動中で、グリフォンの背に乗り、単独でリオ達を監視している最中だ。
ちなみに、アイシアがリオに状況報告を行っている間に、アレインは冒険者達を引きつれてさらなる人探しに繰り出している。
鳥にしか見えないくらいの距離を保ったうえで、雲に紛れてリオ達を尾行しているが、ぴったりとアイシアに二重尾行されているため、情報は筒抜けである。
とはいえ、そんなことはつゆ知らず、

「ちっ、つまんねえなあ。アレインと合流すりゃちっとは楽しめると思ったのによ」

ルッチが欠伸交じりにぼやいた。
現時点における彼の役割はリオの実力や周辺情報を洗い出すことにあるが、アレインから街道の移動中は直接的な接触を禁じられている。
移動中にしっかりとパーティの分析しておくようにとのことだ。
その中には当然、リオ達の力量の把握も含まれている。
普段の身のこなしから戦闘の心得があるかどうかくらいはわかるが、実際の力量を測るため、少なくとも戦闘しているところを見ておきたかった。
とはいえ、街道を旅していれば魔物や野盗に襲われることもある

が、そう都合よく望んだタイミングで出てきてくれるものではない。
かれこれ二時間は黙々と歩き続けるリオ達を観察し、ルッチはだんだんとじれったくなり始めていた。
「あー、いい加減、面倒だな。先回りして魔物でも引っ張ってくるか？」
と、物騒なことをぼそりと呟くルッチ。
思い立ったが否や、グリフォンを操ってリオ達の進行方向へ先回りしに行く。
そうして数分ほど移動すると、
「おっ」
上空から俯瞰するルッチの視線が、街道脇に広がる森の中に魔物の群れを捉えた。オークだ。
（あそこにいる奴が聞いた通りの実力なら、あの程度はあしらえるか？　まあ、けしかけてみるか）
魔物は人が姿を見せれば勝手に襲いかかってくる。トレインするのは容易だろう。
決断と同時に、ルッチはグリフォンを下降させた。

◇　◇　◇

リオ達は東に延びる街道を歩いていた。
喋ることで余計な体力を消費すると学んでいるおかげで、会話は必要最小限に抑えられている。
また、連日の徒歩旅にそろそろ疲れが蓄積しているせいで、リオ

とヴァネッサ以外の足取りは重そうだ。
ある時、不意にリオが立ち止まった。少し遅れて他のメンバーも足の動きを止める。
「魔物？」
旅の途中に何度か魔物に襲われたことがあったので、セリアが動じることなく背後から尋ねた。
「ええ、おそらく」
「少し慌ただしいな」
喋りながら、リオとヴァネッサが腰に差した剣に手を添え、厳しい顔つきで道の両脇に茂る森を睨む。
木々に隠れて魔物の姿は見えないが、次第にセリア達の耳にも騒々しい鳴き声が聞こえてきた。
そして、十秒ほど経って木々がざわめき、オーク達が慌ただしく姿を現す。
身長二メートルほどの巨体が十近く。太い木の枝をごく簡単に加工したような棍棒や槍を手にし、腰には荒い革製の腰巻を身につけている。
オーク達は街道に躍り出ると、何かを探しているかのように、キョロキョロと周囲を見回していた。
すぐにリオ達の姿を発見すると、騒がしく鳴き声をあげて戦闘態勢に身構える。
「オークの群れか。ゴブリンはいないようだが、少し数が多いな。接近されると面倒だ」
互いの距離は百メートルと少し。動きだしたオーク達を見据えな

がら、ヴァネッサが言った。
魔法等を使えない限り、オークは武装した軍の兵士であっても驚異的な相手となる。
確実に被害を出さずに封殺するなら、三人でかかれと言われているほどだ。
「ですね。攻撃魔法を打ち込んで、怯んだ隙に畳み掛けるとしましょう。私が前に出ますので、ヴァネッサ殿は撃ち漏らした敵の始末を」
旅の途中における主な戦闘指揮はリオに任されているため、前衛、中衛、後衛に別れて戦うべく、リオが指示を出す。
「承知した！　セリア君、ハルト殿の指示に従い、攻撃魔法を頼む」
「わかりました。いつでもいいわよ、ハルト」
セリアは前に足を踏み出し、リオの隣に並んだ。
「では、合図と同時に多重雷槍魔法（マルチサンダーランス）を打ち込んでください」
「ええ！」
そうこうしている間にもオーク達はリオ達と距離を詰めている。
両者の距離が約五十メートルになったあたりで、
「今です！」
「《多重雷槍魔法（マルチサンダーランス）》」
リオの合図と同時に、セリアが両手をかざし、魔力を操り呪文を詠唱する。
すると、術式となる魔法陣が彼女の眼前に複数浮かび上がり、そ

こから同じ数の雷槍が射出された。
雷槍は瞬く間に突き進み、避ける間もなくオーク達の身体を貫く。
瞬間、雷槍は霧散し、雷撃となってオーク達の身体に襲いかかった。

「グギ！」

焦げ臭いにおいを撒き散らしながら、四体のオークが倒れる。
同胞が昏倒したことで、他のオーク達が微かに怯む。
オーク達が微かに足を動かす速度を緩めた瞬間、リオの剣がオーク三体の首を斬り飛ばした。
宙を舞うオークの頭部は、視界に映る光景の変化に不思議そうな表情を浮かべている。

「見事……」

まさに電光石火。死の瞬間すら認識させぬ鮮やかな強襲に、ヴァネッサは息を呑んだ。
リオの右手に握られた片手半剣の刀身は眩く鋭い白銀の光を放ち、柄に埋めこまれた宝石もキラリと輝いている。
残ったオークは一体。
数で勝っていた自分達が気がつけば自分だけ――、最後の一体となった彼は、すぐ傍に貧弱な人間族の姿を見つけ、怒り狂ったように手にしていた棍棒を振るった。
しかし、リオが半歩横にずれることで、オークの握った棍棒は無残にも大地を砕くに終わる。
リオはスッと前に足を踏み込むと、すれ違いざまにオークの巨体を袈裟斬りにして、分厚い肉の鎧を両断してしまった。
次の瞬間、リオの背に立つオークは地に伏して倒れると、一瞬で絶命して魔石を残して消滅してしまう。

「……流石ね」

危機感など微塵も感じなかった戦闘が終わり、クリスティーナが小さく漏らす。

リオはかろうじて息が残っているオーク数体に止めを刺しながら、魔石を回収して回っていた。

「行きましょう」

ヴァネッサに促され、クリスティーナ達がリオに近づく。

そんな一部始終を上空から観察していたルッチは、鋭い目つきでリオを見つめていた。

◇　◇　◇

その日の晩、クレール伯爵領の小さな都市にて。

喧騒感溢れるとある酒場で、レイスとヴェンが顔を合わせていた。

「ご苦労様です、ヴェン。ところで、アレインはともかく、ルッチの姿も見えませんが……」

と、レイスが任務中のヴェンを労いつつ、この場にいない面々について尋ねる。

「こっちは粗方情報収集が終わったんで、ルッチはアレインの手伝いに出向いています」

「なるほど。ならば、まずは貴方から話を聞くとしましょう」

「ええ、まずクレイアに滞在中のベルトラム王国軍の動きについてですが――」

ヴェンはクレイア周辺で見聞きした出来事をレイスに報告し始めた。

「ふむ、間違いはなさそうですね。彼らが捜索しているのはベルトラム王国の第一王女でしょう」

報告を聞き終えたレイスがぽつりと呟くと、ヴェンがギョッと目をみはる。

「連中の探し人はそんな大物だったんですか。通りでピリピリしているわけだ」

「ええ、ベルトラム城も浮き足立っていましたからね。しかし、捜索は続行中。国軍はまだ王女を発見できていないわけですか。なるほど、なるほど」

現状を把握し、レイスはニヤリと薄気味悪い笑みを口許に刻む。

「北と東を重点的に捜索している理由もわかりましたね。第一王女の狙いは第二王女との合流なんでしょう。国軍はそれを阻止したいというわけだ」

ヴェンが得心顔で語る。

クレール伯爵領からレストラシオンの国内拠点であるロダン侯爵領へ向かうには、クレイアから北と東に伸びる街道を進むのが合理的だ。

南から向かえないこともないが、旅にかかる時間は倍以上になるだろう。

「第一王女と国軍の思惑はその通りでしょう。……とはいえ、南の街道をほぼ放置しているのもあまり得策とは思えませんが、指揮官

があの男ですからねえ」

と、シャルルの人物像を思い浮かべるレイス。

プロキシア帝国の外交官としてそこそこ付き合いがあるため、ある程度の人柄は把握している。決して能力値は低くないが、自尊心と猜疑心で視野が狭くなりがちな男だ。

（万が一、レガリアが持ち出されていようものなら、現状でフローラ王女に続けてクリスティーナ王女にまで離反されるのはあまり上手くありませんね）

微かにスッと目を細めるレイス。

「……確か北門の襲撃があったのは、我々が訪れた日の前夜でしたか？」

レイスはしばし思案すると、言葉を続けてそう尋ねた。

「ええ、その通りです」

聞きこみ調査の結果と照らし合わせ、ヴェンが頷く。

「となると、あの方の名を出した賊が南門を襲撃した日時と被りますね。クリスティーナ王女の逃走との関係性も考慮して、少し精査する必要がありそうです。やれやれ」

レイスは大仰に嘆息した。それを見て、ヴェンが苦笑しながら口を開く。

「では、私はいかがすればよろしいでしょうか？」

「貴方は現状維持でクレイアに滞在している国軍を監視しなさい。私はアレインに指示を出してきます」
「承知しました」
ヴェンが恭しく首肯する。
「それでは、私は忙しくなりますので、これで」
そう言い残すと、レイスは立ち上がり酒場を後にした。
（いっそのこと、保険として居場所が割れているフローラ王女だけでも処理しておきたいところですね。事故が望ましい所ですが、こないだの襲撃で警備も厳重になったでしょうし。さて、どうしたものか……）
物騒な謀略を考えながら、レイスは都市の外へ向かって歩いていく。
そうして人気のない都市外部の森に入り込むと、レイスは宙に浮かび上がり、南南東へ飛び去った。

第１２８話　密談と密談

ヴェンと別れ、レイスが南南東に向かい飛び去った日の翌朝。
レイスはアレインが暫定的な活動拠点としている都市を訪れ、とある宿屋の食堂で彼と密会していた。

「首尾はどうですか、アレイン？」
「団長のことを知っている奴はけっこういたんですが、どいつもこいつも大したことはありませんね。とても騎士を襲って数人も負傷させることができるような連中じゃありませんでした。一応、引っかかるところがある旅人達が一組だけいたんですが……」

食堂で朝食を食べている冒険者達に紛れ、レイスとアレインが密談を繰り広げる。

「ふむ、どこが引っかかったのですか？」
「団長のことは知っていても、食いつきが悪かったんです。こちらが突っ込むとあっさりと引き下がったんですが、まったく興味がないという感じでもなかった。他は団長の名に反応して、得意顔で食いついてくる奴らばかりだったんですがね……。申し訳ございません、手ごたえがいまいちで」

感触が思わしくないことを残念がっているのか、アレインはバツが悪そうに返答した。

「なに、それらしい人物は見つけたのでしょう？　候補者の数は絞れているんです。むしろ経過は順調と言っていい。貴方はよくやっていますよ」

「ありがとうございます」
「事実です。それで、貴方にやってもらいたいことができました」
語って、レイスは空虚な微笑をたたえる。
「……何でしょうか？」
レイスがこういった顔つきになる時は決まって重要な案件を依頼してくるので、アレインは微かに表情を引き締めた。
「そう身構えないでください。今の任務に少し内容を付け足すだけですから」
「と、いいますと？」
「貴方はベルトラム王国の第一王女を知っていますか？」
「ええ、まあ俺はベルトラム王国の生まれですから、名前くらいは。確かクリスティーナでしたか」
「正解です。今から語る話はベルトラム王国内部では公然の秘密なのですが、実はそのクリスティーナ王女が王城から脱走しました」
レイスがしれっと情報を口にすると、アレインがギョッと目をみはる。
「つまり、もしかしなくとも、クレイアに滞在しているベルトラム王国軍が捜索しているのは……」
「十中八九、クリスティーナ王女でしょう」
「あー、俺らが陰で引っ掻き回しといて何ですが、この国もそろそろ限界なんじゃないですかねえ」
と、アレインは苦笑交じりに語った。
だが、レイスはゆっくりとかぶりを振る。

「国という生き物はそう簡単には滅びませんよ。しかし、現状でアルボー公爵に政治的な痛手を負ってもらっては困ります。わかりますか？」
「ええ、そりゃあ、まあ、もちろん」
「理解が早くて助かります。本題はここからです。現状、クレイアに滞在しているベルトラム王国軍は北と東の街道をくまなく捜索していますが、クリスティーナ王女は発見されていません。他方、我々がいる南の街道は国軍にはほぼ放置されている。間違いありませんね？」
「はい、そうです」
「となると、今後、あちらの捜索状況が思わしくなければこちらの街道にも捜索部隊が送られてくる可能性はあります。ですが、その時点ではもはや手遅れでしょう。これ以上時間が経てば、発見は限りなく困難になることが予想されますから」
「でしょうね」

アレインは苦笑いをたたえて首肯した。何しろ時間が経てば経つほどに、移動可能な範囲は広がっていくのだから。

「そこで、貴方には万が一の保険として、この付近でクリスティーナ王女の足取りを探ってもらいたいのです」
「それは構いませんが、では、今の任務は後回しってことですか？」
「いえ、絶対にとは言えませんが、私達が探している人物とクリスティーナ王女が無関係であるとも限らない。むしろ関係していると疑ってかかるくらいが丁度いい」

彼らが探している人物とは、もちろんリオのことだ。所詮は勘にすぎないが、レイスの勘はずばり正鵠を射ていた。

「……つまり、並行して調べればよいと？」
「そういうことです。高確率でお供を従えているでしょうから、複数人で行動していることでしょう。その中に団長の名を口にした人物もいるかもしれない。狙い目は人目を忍んでいる旅人達です」
レイスが語ると、アレインはおもむろに思案し――、
「……その条件に合致する旅人に心当たりがあります。全員がローブで顔を隠していたんでね」
と、そう答えた。
「ほう。その方々は今どちらに？」
レイスが小さく目をみはり、ニヤリと口許に笑みを刻む。
「ルッチに追わせています。ここから少し南下した街道の分岐点を東に向かいましたので、今頃はグリフォンで数時間程度の距離にいるんじゃないかと」
脳内でリオ達の移動距離を計算し、アレインが答える。
「なるほど、東ですか。仮にそのグループに第一王女がいるとした場合、ロダン侯爵領入りが目的なのでしょうが、そこから途中で方向転換をして最短距離で北に向かうのか、東のガルアーク王国を迂回して進むのか……。後者だと厄介ですね」
レイスはスッと目を細め、ぶつぶつと呟きながら思考を開始した。その間に、アレインが果実水の入ったカップを掴み、口に運び喉を潤す。

そうして、たっぷり十数秒ほど経過すると――、

「アレイン、とりあえず貴方はルッチと合流なさい」

と、おもむろにレイスはアレインに命じた。

「御意に」

アレインは命じられるがまま首肯する。それが彼の役割だからだ。

「多少強引な手段に訴えてもやむをえません。クリスティーナ王女がいるのかどうか、ルッチが追跡している旅人達を調査しなさい」

「……仮に黒だった場合、対処法はどうしましょうか？」

「なに、野暮用を済ませ次第、私も貴方達に合流します。かかって数日ほどでしょうから、指示はその時に出します。仮に私が戻るよりも先に、その人物達がガルアーク王国の国境を越えそうな場合は、貴方の判断で越境を阻止してかまいません。ま、おそらくは大丈夫でしょうが」

飄々とした口調でレイスが流麗に語る。

「畏まりました。では、また数日ほどは別行動ということで」

頷くと、アレインはスッと立ち上がった。そのまま踵を返し、店の外へ向かって歩いて行く。

その背中に、レイスが「頼みましたよ」と、声をかける。

（当たれば儲け物、というところですかね。あの男にもそれとなく情報を提供してあげるとしましょうか）

レイスもおもむろに立ち上がる。結局、出された朝食にはほとんど手をつけないままだった。

◇　◇　◇

レイス達が密かに行動を開始した日の晩。

リオ達はようやくクレール伯爵領を脱し、東に隣接している領地のとある都市を訪れていた。

既に国軍の捜索範囲は脱したため、これまで泊まってきたような安宿ではなく、少しランクの高い宿屋に滞在している。

これまでの旅路で溜まった疲れをきちんと回復してもらおうという腹積もりもあった。

ちなみに、リオ達を尾行しているルッチに動きはなく、現在もアイシアがマンツーマンで二重尾行中であり、何か動きがあればすぐに知らせてくれる手はずとなっている。

宿屋の一階は広々とした小奇麗な食堂になっているが、客の人目に触れないようにするため、食事は特別料金を支払って部屋で食べることになった。

「悪くはないけれど、アマカワ卿が作る料理の方が美味しいわね」

宿の給仕がテーブルに置いた料理に口をつけると、クリスティーナが感想を呟いた。

「恐縮です」

リオが小さくはにかんで頭を下げる。

「本当、ハルト君が作る料理の方が美味しいよ。僕達の舌にも合うっていうか」

「確かに、この世界の料理って大味なんだよな。美味い料理は美味いんだけど脂っこい感じがして、毎日食べていると飽きてくるんだよなあ」

村雲浩太とその先輩、斉木怜が、うんうんと頷きながらクリスティーナに賛同する。

そこからヴァネッサが浩太達が日本で食べていた料理に興味を持ち、会話が広がっていく。

すると――、

（春人、尾行してきたルッチという男に、アレインという男が合流した。今、春人達が泊まっている宿屋のすぐ傍にある宿でチェックインしている）

突然、アイシアの声がリオの脳内に響いた。

（……狙いはわかる？）

リオが微かに目を細め尋ねる。

（連中の春人探し、他にめぼしい候補がいなかったみたい。春人がクレイアで騒ぎを引き起こした人物だと仮定して行動している。ルッチが春人達とオークの戦闘を見ていたから、春人の強さで信憑性が上がったらしい。春人のことは面白そうだから、勧誘でもしてみようかって話をしている）

（……勧誘？　あいつらの傭兵団に、俺を？）

アイシアから返ってきた説明に、リオは一瞬、思考が停止しかけた。続けて、思わず顔をしかめそうになる。

（うん。強い人間は大歓迎らしい）
（なるほど……）

そういうことなら、注目を惹くため、あの戦闘はルッチに見せつけた甲斐はあったのかもしれない。
とはいえ、リオからすればルシウスの関係者が近づいてくるのは大歓迎だが、クリスティーナ達を引きつれて逃走中の今は少しばかりタイミングが悪い。
とりあえず相手の出方を窺ってみるか、それとも先手を打って単独行動で電撃戦を仕掛けるか、そう考えたところで――、

（それと、クリスティーナの逃走に関しても、クレイアで暴れた春人が関与しているんじゃないかと疑っている）

アイシアはさらに重要な情報を告げてきた。
意外な情報に、リオの思考がまたしても停止しかける。

（……北と東の街道をいくら探したところで成果が出るはずもない。そろそろクレイアにいる連中も考えを改める頃だと思っていたけど）

まさかベルトラム王国軍以外の者がクリスティーナ関連で歩み寄ってくるとは――本当にアレイン達の狙いは何なのだろうかと、リオは考える。

（……連中がクリスティーナ王女をも探そうとしている理由はわかる？）

ややあって、リオが訊いた。

（わからない。クリスティーナがレストラシオンに合流すると、あ

いつらにとって不味いから、阻止しようとしているということだけ）
（本当に何者なんだ、そいつらは……）

ルシウスは有名な傭兵だが、長らく表舞台から姿を消している。
だが、ここにきて彼の関係者を発見した。これまでに得た情報通りなら、おそらくアレイン達はルシウスの傭兵仲間というか、傭兵団の部下だろう。
そんな彼らが、クリスティーナがレストラシオンに合流することを阻止しようとする理由は何なのか。彼らは国際政治に関わる立場にでもいるということだろうか。
だとすれば、ルシウスが率いる『天上の獅子団（ザ・グリフォン）』は、どこかの国に雇われている可能性も出てくるが……。

（連中、近いうちに行動を起こそうとしている。今すぐに何か荒事を起こそうという感じじゃないけど、気をつけて）
（わかった。注意しておくよ。アイシアも何かあったら教えてくれ）
（うん）

リオの中で形容しがたい不安がこみあげてきたが、抑揚のないアイシアの返事が戻ってくると、微かに心が安らいだ。
翌日、リオ達は宿を出発し、レストラシオンの拠点であるロダン侯爵領への旅路を再び消化し始めた。

第１２９話　前哨戦

アレインがルッチと合流してから数日後。
リオ達はベルトラム王国とガルアーク王国の国境付近にそびえる峠に位置する交易都市にまで足を運んでいた。
都市に着くや否や、リオを先頭に城壁外部に存在する宿屋街へ向かう。毎日休むことなく一日当たり平均数十キロという距離を歩き続けてきたので、夜は完全に休息の時間に充てたいのだ。
リオの隣にはセリアが寄り添うように歩いており、その後ろにヴァネッサとクリスティーナが、さらに後ろには浩太と怜が歩いている。無暗に人前で顔を出さないようにと、皆がフードを被っていた。
まだ日は暮れていないので、都市内部には多くの人が出歩いており、人波を縫うように進んでいく。

「随分と人が多いわね」

お姫様育ちのクリスティーナが物珍しそうに周囲を見回す。
旅の間に各地を転々としてきたが、回ってきたのはいずれも宿場町や小都市だけだった。また、王都で暮らしていた頃は学院と王城の間を行き来するくらいで、滅多に城下町に繰り出すこともなかったから、人ごみが物珍しいのだろう。

「ここはガルアーク王国との貿易で栄える交易都市の一つですからね。離れ離れにならないよう、気をつけて――」

と、隣を歩くヴァネッサが、注意がてらクリスティーナに説明していると――、

「きゃ」

クリスティーナが人ごみに紛れて現れた大柄の男性と衝突した。
というより、男性の方からぶつかってきたと言った方が正しい。
クリスティーナの死角から足早に迫ってきたので、回避し損ねてしまったのだ。
ほぼ同時に、男が抱えていた木箱が転げ落ち、その中からガシャンと、陶器が割れるような音が響く。

「ひっ、だ、大丈夫ですか？　お嬢様！？」

一瞬、「姫様」と呼びそうになったヴァネッサだったが、慌てて「お嬢様」と呼び直し、クリスティーナの安否を確かめる。

「……ええ、大丈夫よ」

クリスティーナはよろめきながらも、自らの無事を告げた。
だが、一方――、

「大丈夫ですか、兄貴？」
「おうおう、痛えな。こりゃ駄目だ。取引用の商品が駄目になっちまった。どうしてくれんだ、てめえ」

舎弟と思しき青年二人に気遣われながら、ぶつかった男性がわざとらしくクリスティーナに因縁をつけだす。
すると、異変を察した通行人達が、波紋のように素早く綺麗に距離を置き始めた。一帯に小さな空白地帯ができあがり、何事かと注目が集まる。
絡んだ男達は腰に帯剣し、荒事に慣れた冒険者か傭兵崩れのゴロツキといった恰好をしていた。

「何よ、そっちがぶつかってきたんじゃない」
クリスティーナがムッとした口調で反論した。もしぶつかっていたのが妹のフローラだったら、反射的に謝っていたかもしれない。
「ああん？　てめぇ、女か？」
ぶつかった大柄の男がスッと目を細め、フードを被ったクリスティーナを凝視する。
「貴様」
ヴァネッサは反射的に腰に差したナイフに手を添えて、クリスティーナと男達の間隙に潜りこんだ。
「おうおう、物騒だな」
ぶつかった男が嬉々と笑みを刻む。だが、その目は油断なくヴァネッサと背後にいるクリスティーナを見つめている。
他方、リオもセリアを背に、一連のやりとりを冷静に観察していた。
（きたか）
一見すると男達は典型的な当たり屋だが、リオは彼らの素性について確信に近い心当たりがある。
レイスの命令を受けてリオ達を尾行しているアレインとルッチだ。二人の行動はアイシアに監視させているため、基本的に情報は筒抜けである。

いわく、アイシアからの情報によれば、彼ら二人はこの都市でリオ達と接触を図ろうとしていたという。また、そのために二人は一時的に別行動を開始し、ルッチがこの都市に先回りしているとも報告を受けていた。
ちなみに、アレインはリオ達が都市に着くと同時に独自に行動を開始したため、今、アイシアにそちらを優先して尾行させている。
ゆえに、仮に目の前にいる男がアレインならば、アイシアから何かしらの連絡があるはずだった。
にもかかわらず、アイシアから何の連絡もない時点で、今クリスティーナに強引に絡んできている大柄な男がルッチだと、リオは断定した。
無論、本当に単なる当たり屋の可能性もゼロではないが……。

「セシリア、ティナお嬢様の横に」

リオはセリアに危害が及ばないよう、クリスティーナの隣に行くよう小声で指示を出した。

「う、うん」

セリアがおずおずと頷き、小走りでクリスティーナの横に並ぶ。
他方、浩太と怜は完全に置いてけぼりで、立ち尽くしたまま身動きがとれずにいる。だが、下手に動かれても面倒なため、却(かえ)ってリオにはありがたい。
リオはおもむろに歩きだし、ヴァネッサの隣に並ぶと、

「落ち着いてください」

と、冷静な声で言いながら、一触即発なヴァネッサを宥めた。

「ハルト殿、しかし……」

ヴァネッサが絡んできている男達を油断なく睨みながら、殺気立った様子で難色を示す。

おそらく事前に今の事態を防止できなかったことに苛立っているのだろう。

とはいえ、ルッチの足の運び方や気配の消し方は相当に上手かった。

リオですら衝突する直前まで存在を察知できなかったのだから、ヴァネッサが事前にルッチの当たり行為を防げなかったのはやむをえないだろう。

「まだ肩がぶつかっただけです。ソレを抜くのは早い」

リオが忠告するように語った。

本当ならば王族であるクリスティーナに当たり屋まがいの真似をしかけている以上、男達はこの場で殺されても文句は言えない。自殺行為だ。

だが、あいにく今の彼女は身分を隠しているから、権力者として振る舞うわけにはいかない。

リオに諭され、そのことを悟ったのだろう。ヴァネッサは渋面を浮かべつつも準戦闘態勢を緩めた。

「すまない。頭が冷えたよ」

「いえ」

などと、ヴァネッサとリオが小声でやりとりをする。

「おうおう、なんだ、ぞろぞろと。俺はそこの姉ちゃんに用があるんだ。どいてもらおうか」

リオ達のやりとりを眺めながら、大柄な男が威嚇するように言った。

「ぶつかってきたのはそっちだろう」

リオが冷たい声で返す。

「ああん？　こっちは懐に抱えていた大事な商品が割れちまったんだ。弁償してもらわねえと気が済まねえな」

と、大柄な男は典型的な当たり屋のようなことを言う。

もしかしたら演技などではなく、本当にただの当たり屋なのではないかと疑ってしまうほどに慣れた口上だ。

「なるほど。ちなみに、その商品とやらは、その木箱に入っているのか？」

尋ねながら、リオが地面に転がっている木箱を見やった。

「おう、陶器製の茶器よ。金貨五枚で転売する予定が入っていたんだ。どうしてくれる？」

男が木箱を拾い上げ、蓋を開けて中身をリオ達に見せつける。確かに中には割れた茶器一式が入っていた。

「……あれが、金貨五枚？　嘘よ、安物じゃない」

原形を留めている部分のデザイン等をまじまじと凝視して、茶器の鑑定眼に長けたセリアが不快気に呟く。それは見る者が見れば一

目で安物だとわかる代物だった。
「なるほど。じゃあ、あんたの主張は金貨五枚を弁償しろってことか？　その額さえ払えば、一切の異論はないと？」
と、リオが相手が求める要求を決め打ちで淡々と尋ねる。
「……まあ、そうなるな」
事務処理的なリオの対応に、大柄な男は少し警戒した様子で答えた。一方、舎弟の青年二人は不気味なほどに黙って状況を傍観している。
「言質は取ったぞ」
言いながら、リオが懐から金貨五枚を出す。
「ちょ、ハ、ハルト！？　払う必要ないわよ、あんな粗悪品に、金貨五枚だなんて！」
セリアが泡を食って叫んだ。だが、驚いたのは彼女だけではない。クリスティーナ達や野次馬はもちろん、仕掛けた側にいる舎弟の青年二人もギョッと目を丸くしている。
一見して冷静さを保っているのは、リオと仕掛けた張本人である大柄な男だけだ。
「どうした？　受け取らないのか？」
と、リオが不敵な声色で尋ねる。ローブのフードに隠れて、男達から表情は窺えないが、ひょっとしたら嘲笑でも浮かべているので

はないだろうか。

「……おい、オリン。受け取ってこい」

しばしの間を置いて、大柄な男が不機嫌そうに舎弟の一人に指図した。

「は、はい！」

オリンと呼ばれた青年が我に返り、慌ててリオに歩み寄る。震えた手で金貨五枚を受け取ると、大柄な男の下におずおずと戻った。

「ちっ、行くぞ」

小さく舌打ちをして、大柄な男が踵を返す。自分から額を提示して貰う物を貰ってしまった以上、流石にこれ以上の難癖はつけられないのだろう。

舎弟の青年二人があたふたと大柄な男の後を追いかける。

「我々も行きましょう」

リオも身を翻し、宿屋へと向かい歩き出した。クリスティーナ達がそそくさとその後を追いかける。

リオがフードの下から進行方向にいる野次馬達を一瞥すると、恐れおののいて綺麗に道が開いた。

「あの、アマカワ卿、ごめんなさい。その、私のせいで……」

しばらく歩くと、クリスティーナが申し訳なさそうに謝罪し始める。

「いえ、城門の近くとはいえ、城壁の外ですし、これだけ人が多い場所ですから、治安が悪いのは当然です。さっきは偶々運が悪かっただけだと思って、綺麗に気持ちを入れ替えましょう」

リオがどこかバツが悪そうに応じた。連中を呼び寄せた契機に自分が関係していることから、後ろめたい気持ちがあるのだ。

「……ええ。えっと、ありがとう」

クリスティーナが少し照れ臭そうに礼を述べる。

「いえ」

リオは微苦笑し、少しそっけなくかぶりを振ると、おもむろに周囲に視線を巡らせ始めた。さっきのやりとりを見て、他に似たような真似をしだす愚か者が出てこないように、と。

そんなリオの姿を見て、クリスティーナはさらに話しかけづらくなってしまう。

すると、今度は遠慮がちにセリアがリオに声をかけた。

「ねえ、ハルト、別にさっきの連中にお金を払う必要はなかったんじゃない？」

「……あの場で騒ぎが大きくなって、官憲に出てこられても面倒でした。今の状況下ではできる限りこの国の権力者と関わり合いになりたくはないでしょう？」

と、リオが困り顔で表向きの理由を説明する。

「むう、そうだけど……」

セリアは納得がいかなそうで、唇を尖らせていた。

「えっと、だから手っ取り早く相手の要求を呑んで、あの場を収めたってこと？」

浩太が脇からおそるおそる尋ねる。

「そうなります」

リオはこくりと頷いた。

先の連中がルッチ達であることはほぼ間違いない。オリンという名前はアレインが雇った冒険者だとアイシアからも報告を受けている。

おそらく先ほどの接触は威力偵察のつもりだったのだろう。

目立つリスクは承知で、こちらのメンバー構成や人間関係を大まかに探り、素性を見定める。その上で当たりの可能性が高いと判断したら、もしかするとさらにその先まで踏み込んできたかもしれない。

しかし、相手のペースに乗せないため、早々に流れを断ち切ったので、相手の思惑を空振りにすることができた――はずだ。

となれば、前哨戦はリオの勝ち。二度目に姿を現すとしたら、次はさらに直接的な示威行為に出てくる可能性が高い。

少なくとも人前で仕掛けてくることはないだろう。次に何か仕出かすとしたら、おそらく都市の外になるはずだ。

「あと少しです。ガルアーク王国の領土に入ってしまえば、ベルトラム王国軍が表だって国軍を侵入させることはできない。頑張りましょう」

宿屋が密集している区画にやって来ると、リオが言った。クリスティーナ達が気を引き締め、深く頷く。
レストラシオン本拠地への旅路は、山場を迎えようとしていた。

◇　◇　◇

その日の夕方、ルッチはオリン達を引きつれ、都市の城壁外にある寂れた宿屋を訪れていた。
宿屋の中に入ると、カウンターの椅子に座っている老人がルッチ達をジロリと睨むが、声をかけることはしない。ルッチ達も特に気にした様子はなく、宿屋の奥へと入っていく。
迷いのない足取りで二階の角部屋に移動すると、ルッチが規則的に扉をノックする。すると、古びた木の扉がギイッと音をたてながら開いた。
そこから二十代後半の男――アレインが現れる。

「入れよ」
「おう」

アレインに招かれ、ルッチが軽快な足取りで室内に入る。その後をオリン達が続く。室内にはアレインの他に、オリンと一緒に冒険者パーティを組んでいる青年が二人いた。

「で、どうだったんだ、そっちの首尾は？」

ルッチがドカッと椅子に腰を下ろすと、アレインも椅子に座って尋ねた。
オリン達は立ったまま部屋の隅に移動している。

「駄目だ。当たり屋に扮して絡んだところまでは良かったんだが、

あっさりと金を払って場を収められた。少しは渋ってくれればやりようはあったのによ」

舌打ちをして、ルッチが不機嫌そうに答えた。

「ほう、金を払ったのか？　少しも渋ることなく？」

「ああ、鎌かける暇も、脅迫する隙もなかった。金貨五枚の値を提示しても躊躇なくぽんと一括だぜ？　十枚にしときゃよかった」

「馬鹿野郎。額の問題じゃねえだろ。それより、他に何かわかったことはないのか？」

愉快そうに笑って、アレインが訊く。

「他にわかったことと言えば、連中の間に主従を匂わせる関係があったってあたりか。主人はたぶん年頃の女だぜ」

「そうか。……金貨五枚を躊躇なく支払ったってことは、街中でのトラブルを避けたかったからとも受け取れるが、そんだけの資力があって、腕利きの剣士や魔道士まで抱えている、か」

と、先日、ルッチが目撃したリオ達の戦闘場面の報告を思い返すアレイン。

「お目当ての可能性は、かなり高いと見ていいんじゃねえか、どうすんだよ？　そろそろ頃合いなんじゃねえか？」

思案顔を浮かべるアレインに、ルッチが期待を込めて尋ねた。

「そうだな、明日、仕掛けるぞ。今のところレイス様からの連絡はないが、ここらが限界だ。必要な人員は追加で雇ってきた。そいつらと合せて、ざっと三十近くってところか」

アレインがオリン達を見やり、決断を下す。すると、ルッチがグッと拳を握りしめ、「よっしゃ！」とガッツポーズをとる。

「あの、別に危ないことはしないですよね？　……犯罪とか」

少し離れた位置で話を聞いていた雇われ冒険者のオリン達だったが、どこか物騒な話し合いに、代表のオリンがおずおずと脇から質問を投げかけた。

「あん？　まあ、嫌なら抜けてもいいぜ。その分、報酬は差っ引かせてもらうがな」

当たり屋まがいの行為に加担しておいて、何を今さら――と思いながら、ルッチが薄ら笑いを浮かべる。

「……あ、明日の仕事を手伝えば、報酬に色を付けてもらえるんですか？」

「まあ、そうさな。お前らには色々と動き回ってもらったしな。手伝うなら、今までの報酬とは別に、さっきの金貨五枚をやるよ」

「ほ、本当ですか！？」

気前の良いルッチの提案に、オリン達が顔色を変えて食いつく。

「やろうぜ、オリン」と、仲間の青年達が焚きつける。

アレインとルッチは顔を見合わせ、嘲笑を浮かべた。安いモラルだな、と。

それから、オリン達はすぐに明日の企てに参加する意思を表示した。そして、アレインとルッチがリオ達を襲う段取りを話し始める。

（ここまで、おおよそ春人の読み通り）

室内にいた不可視の少女は、無感情な表情で室内の談合を見つめていた。

◇　◇　◇

翌朝、リオ達は都市を出て、ガルアーク王国の国境に続く東の街道を進みだした。

天気は快晴。都市を出て峠から麓（ふもと）に向かって数時間も街道を歩くと、国境がだいぶ近づいてくる。

とはいえ、ここから先は真っ直ぐ街道を歩くわけにはいかない。麓にある渓谷には砦を兼ねたベルトラム王国の関所が設置されており、出入国を管理しているからだ。

砦さえ越えてしまえば丘陵地帯が広がっている。街道沿いに背の低い丘や大きな岩がちらほらとあるため、見晴らしはそれほど良くはないが、簡単に街道を抜け出すことが可能だ。無論、見つかれば犯罪になるが。

砦がある辺りから一時間も歩けば、ベルトラム王国とガルアーク王国の国境を越えることができるだろう。

リオ達は途中で休憩するフリをして街道の人通りが途切れるのを待つと、おもむろに街道を抜け出し、脇に広がる山林に潜り込んだ。

（春人。そこから少し進んだ先に川が流れている。そこにかかる橋の付近で待ち伏せるみたい）

砦を迂回して山林を抜け出すと、交信可能な範囲内に入ったのか、アイシアから念話が届く。

（了解。昨日の報告通りだね）

アレインがこの辺りを拠点としている冒険者や傭兵を雇ったことや、襲撃の計画内容は、アイシアから確認済みだ。

（どうする？　かなり遠回りになるけど、空から見た感じ、迂回することもできるよ？）

（いや、このまま進んで橋に向かうよ。迂回したところでそっちにはグリフォンがいるだろう？　また別の個所に先回りされるだけだ。それに――）

（それに？）

リオが少し間を置くと、アイシアが訊いてきた。

（これ以上付きまとわれるのも面倒だ。ここで相手から情報を吸い出しておこうと思う。連中の相手は俺が引き受けるから、アイシアは入れ替わりで霊体化したまま、先生達の護衛を頼めるかな？万が一の事態に備えてね）

（……わかった。春人、気をつけてね）

（ああ、大丈夫だよ）

どこか心配そうなアイシアに、リオが気安く答えてみせる。

そこから、十数分ほど歩くと、件の川が見えてきた。橋を渡るべく、街道に近づいていく。

そして、橋が見えてくると――、

「皆さん、余計な会話をしている暇はないので、今から俺が言うことを黙って実行してください」

と、リオがおもむろに言った。

クリスティーナ達が何事かと耳を傾ける。

「あの橋の周りに何者かが待ち伏せています。敵ではない可能性もありますが、敵である可能性もある。なので、俺が合図を出したら、身体能力を強化して、あの橋を駆け抜けてください。何があっても決して足を止めないこと。いいですね？　わかったら軽く咳払いをしてください」

リオが余計な問答を許さない物言いで命じる。すると、一同はおずおずと咳払いをし始めた。

「相手が追跡してくるようなら、俺が足止めを行います。その場合は今日の目的地で合流しましょう。イレギュラーがあった場合は、可能な限りお互いに三日を限度に待つことにして」

リオがしれっと指示を付け足す。一瞬、セリアが何か言いたそうな気配を見せたが、ヴァネッサに肩を掴まれ、グッと抑えた様子が伝わってきた。

そうこう会話をしている間に、橋は目前に迫っている。

そうして、橋に足を踏み入れた瞬間――、

「今です！」

と、リオが指示を出した。

すると、クリスティーナ達が一斉に呪文を詠唱し始め――、

「《身体強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）》」

身体能力が強化されるや否や、一斉に走り出し、長さ十数メートルほどの橋を瞬く間に駆け抜けた。

第１３０話　戦闘開始

リオの合図に従い、クリスティーナ達が凄まじい速度で街道の小橋を駆け抜けていく。

「なっ！？」

付近に立ち並ぶ岩や木々の陰から、驚愕した襲撃者達の声が漏れ出る。

奇襲を仕掛けようとしていた相手に何故か動きを察知され、逆に先手を打たれたのだ。驚かないわけがない。

だが、そんな中で真っ先に我に返った人物がいた。

「追え！」

と、アレインが焦れた声で指示を飛ばす。

とはいえ、襲撃者達は顔を見合わせ走り出したが、動きはどこか鈍い。追おうにも普通に走って追いつける速度ではないからだ。

身体能力を強化できる者がいないため、瞬く間にクリスティーナ達と距離が開いていく。

「ちっ、ルッチ！」

「おう！」

アレインの掛け声にルッチが応じ、二人が走り出した。何か呪文を詠唱したわけではないが、二人の速度は異常なほどに速い。

すると、たったの数秒ほどで、クリスティーナ達との距離が目に見えて縮まっていった。

最後尾を走るリオがちらりと背後を確認し、微かに目を見開く。
（速いな。あれは《身体能力強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）》だけで出せる速度じゃない）
リオが見た限り、アレインとルッチは人間の肉体が耐えうる限界を超えて身体能力を引き出していた。
おそらく何らかの魔術的な手段を用いて、肉体の強度も強化している可能性が高い。無論、精霊術で肉体の強度を強化している可能性もゼロではないが。
（他の襲撃者達ともう少し引き離しておきたかったけど、ここら辺が限界か）
そう判断し、リオは走る速度を緩めた。完全に停止すると、振り返り、腰に掛けた鞘から剣を抜き放つ。
（アイシア、先生の護衛を頼む）
（わかった）
リオが念話で呼びかけると、アイシアが即座に応答した。霊体化したまま、クリスティーナ達の後を追いかけていく。
そうして街道上を走り去っていくクリスティーナ達の背中が小さくなっていくと、すぐにアレインとルッチがリオのもとにたどり着いた。
アレイン達が街道上で立ち止まり、リオと向かい合って対面する。
「何か用か？」
リオが少し億劫そうに問いかけた。すると、ルッチが不敵な笑みを刻み、口を開く。

「お前、俺のことは覚えているか？」
「ああ、そこの峠にある都市で絡んできた品のない蛮族だろ？」
「てめえ……」

リオがひょいと肩をすくめ、挑発交じりに答えると、ルッチが不機嫌そうに顔をしかめた。

二人のやりとりを見て、アレインが「ははは」とおかしそうに笑う。

「笑うんじゃねえよ、アレイン」
「ふてくされるなよ。お似合いだぞ、ルッチ」
「ふん」

ルッチは鼻を鳴らすと、ジロリとリオを睨んだ。

「で、結局、何の用なんだ？　ぞろぞろと傭兵崩れの野盗を率いて」

息を切らせながら追いついてきた襲撃者達を見据えながら、リオが改めて問いかける。

「まあ、そう急ぐなよ。お前と、お前と一緒にいたベルトラム王国の王女に用があるんだ」

スッと目を細め、アレインが語った。

「俺に用があるのはともかく……、ベルトラム王国の王女と一緒にいた覚えはないんだが」

リオは首を傾げ、そ知らぬふりを決め込んだ。見事なポーカーフ

エイスである。

「まあ、訊いて素直に教えてもらえるなんて端から思っちゃいない。お前はさしずめ王女の護衛役ってところか。流石はシュトラール地方有数の大国、腐りかけでも王族には優秀な配下が揃っているらしい」

アレインは感心した顔つきを浮かべ、フードを被ったリオを見つめた。

（別に俺は王女の護衛役じゃないけどな）

中(あた)らずと雖(いえど)も遠からずなアレインの推察に、リオは思わず内心で苦笑する。

「王女の話は置いておくとして、丁度いい。俺もあんたらに用があったんだ――ルシウスのことでな」

リオがルシウスの名を口にすると、アレイン達はあからさまに警戒した顔つきを浮かべた。

「……アレイン、ちっとばかし予定と状況は異なるが、分担に変更はない。こいつは俺にやらせてもらうぜ。お前は王女を追えよ」

ルッチが腰に差した剣を抜き、低く抑えた声でアレインに指示を出す。

「殺すなよ。そいつからは詳しく話を訊く必要がある」

アレインはそう言うと、予備動作を最小限にして、いきなり駆け

出した。物凄い速度でリオを迂回するように走る。
リオは瞬時に反応し、アレインの進行方向に割り込もうとした。しかし、ルッチが二人の間隙に潜り込んで、リオの前に立ちふさがる。
リオは軽くため息をついて、足を止めた。
「わりいな。言っただろ。お前の相手は俺がさせてもらう。って、待てよ、こら！　話を聞きやがれ！」
ルッチが喋りだした瞬間に、リオが刹那の隙をついて再び走り出す。
しかし、ルッチも油断したようで気は抜いていなかったのか、わずかに出遅れはしたものの、何とかリオに追いすがった。懐から手投げナイフを取り出し、リオの背中に投げつける。
リオは背中に目でも付いているかのように、横に跳躍して躱した。
「はっ、てめえ、古代魔道具級（エンシェントアーティファクトクラス）の魔剣か魔道具（アーティファクト）を持ってんだろ？　その速度は現代に普及している魔術で出せるもんじゃねえからな」
再び足を止めたリオに、ルッチが言う。
彼が言う通り、古代魔道具（エンシェントアーティファクト）の中には、《身体能力強化魔術（ハイパーフィジカルアビリティ）》よりも上位の身体強化魔術が込められている物も存在する。
とはいえ、リオは精霊術で身体強化を行っているので、ルッチの推測は厳密には間違っているのだが、引き起こしている現象自体に差異はない。
「あいにくだが、俺の剣にも同等の魔術が込められている。条件は同じ。逃がさねえぜ」
ルッチは好戦的な笑みを浮かべ、得意顔で語った。こうしている

間にも、リオとアレインの距離はどんどん開いていく。

（よく喋る奴だ）

リオは小さく息をついた。そして、次の瞬間、予備動作なしにリオの姿がルッチの視界から消える。直後、その場には一陣の風だけが残った。

「なにっ！？」

ルッチが慌てて視線をさまよわせる。すると、彼を置き去りにして、アレインの前にまで回り込もうとしているリオの姿を見つけた。

「アレイン！」

「っ！？」

ルッチの叫び声に反応し、アレインがギリギリのタイミングで咄嗟に回避行動をとる。

「まだ話は終わってないからな」

言いながら、リオがアレインに斬りかかった。

「ちっ！」

アレインが舌打ちをして、剣を抜き放つ。後退しつつ、迫りくるリオに応戦する。瞬時に無数の剣閃が飛び交うが、アレインは防戦一方だ。明らかにリオに押されている。

「ぐっ」

隙を突かれて放たれたリオの回し蹴りを咄嗟に腕でガードすると、アレインの身体が軽々と吹き飛んだ。着地先でバランスを整えようとするが、リオからさらに追い打ちをかけられる。

「させねえよ！」

そこにルッチが割り込んで、リオに襲いかかった。リオが足を止め、バックステップを踏んで距離をとる。

「ルッチ、二人でやるぞ！　こいつ、団長並みだ！　俺らどっちかだけじゃ手に余る」

「ちっ、わーったよ！」

アレインが指示を出すと、ルッチが不承不承頷いた。すると、二人は途端に連携して動き始める。

「気をつけろよ、アレイン。ネタはわからねえが、そいつ予備動作なしにすげえ加速するぞ」

「なら絶対に動きを止めるなよ、囲め！」

「たりめえだ！」

情報交換をしつつ、リオを囲うように走り、ひたすら動き回るアレイン達。

（個々の実力は高いし、連携も取れている。殺さずに捕獲するとなると、少し面倒だな）

一方、リオは冷静にアレイン達の実力を分析していた。

流石に上位の身体強化魔術が込められた古代魔道具（エンシェントアーティファクト）を持っている

というだけあって、その動きはそこらにいる騎士とは比較にならないほどに速い。
通常戦闘速度で見るならば、リオと比べてもそん色はないだろう。あくまでも通常戦闘速度で比較するならば、だが。
そうして、リオを翻弄するように、周囲を駆け回っているアレイン達をよそに――、

（人前であまり精霊術を多用したくはないんだが、この状況でそうも言ってられないか）

リオは半ば野次馬と化した襲撃者達を見やると、小さく嘆息した。

◇　◇　◇

リオがアレイン達と戦闘を繰り広げている一方で。
クリスティーナ達は街道上を疾駆していた。全力疾走ではないものの、息を切らせ、足を止めずひたすら走り続けている。

「はぁ、はぁ……」

このまま進めばあと少しで国境を越えて、ガルアーク王国に突入できるのだ。それはベルトラム王国軍の活動範囲から抜け出したことと同義である。気が急くのは無理がなかった。
とはいえ、セリアの顔色はあまり優れない。遥か後方ではリオが一人で野盗と戦っている――そう思うと、とてつもない罪悪感と不安が込みあがってくるのだ。
リオの実力に疑いの余地はないが、心配なものは心配だし、何もかも頼りきりで、ただただ申し訳なかった。
すると――、

（セリア）

「ひゃん！？」

突然、脳内にアイシアによく似た声が鮮明に響き、セリアは素っ頓狂な声を出した。走りながら、びくりと体を震わせる。

（落ち着いて。私、アイシア）

再び脳内にアイシアの声が響く。セリアはきょろきょろと周囲を見渡したが、どこにもアイシアの姿はない。

「だ、大丈夫ですか？　セリアさん？」

すぐ傍を走っていた浩太が、息も絶え絶えに、何事かとセリアに尋ねる。

「え、ええ。大丈夫よ。ごめんなさい。何でもないの、走りましょう」

セリアは精一杯の笑みを浮かべ、かぶりを振った。

（落ち着いた？　今、貴方の頭の中に直接話しかけている。セリアから私にメッセージを伝えることができるから、念じてみて）

アイシアの声がまたしても脳内に響く。

（お、驚かせないでよ！　っていうか、なに、これ、なんなの？）

セリアは心の中で盛大に叫んだ。

（一時的にセリアとパスを繋げた。今はセリアが意識的に伝えようと思ったことがそのまま私に伝わるようになっている）

と、アイシアが淡々とした口調で説明する。

セリアはなんだか突っ込む気勢をそがれてしまった。

（ま、また随分と便利な能力ね。貴方、今どこにいるの？）

（セリアのすぐ傍。春人からセリアの護衛を頼まれたから）

（ああ、なるほど。貴方がいたから、リオは野盗の襲撃を事前に察知できたわけね）

（……そういうこと）

襲ってきたのはただの野盗ではないのだが、詳細を説明するわけにはいかないので、アイシアは首肯した。

（……リオは大丈夫なのかな？　結局、残っちゃったけど）

（うん。大丈夫）

（そっか、良かった）

アイシアの返答に、セリアがホッと胸を撫で下ろす。

（それより、こっちの方が厄介かも）

（……どういうこと？）

（進行方向の近くに嫌な気配が急に現れた）

（嫌な気配？）

突然の不穏な話に、セリアが訝しそうに尋ねる。

（魔物と似ているけど、もっとどす黒いし、何か違う。前にアマン

ドの近くで現れた気配と同じかも）
（それって……）
（春人の留守中に魔物を操って私達を襲わせた男のこと）
（そんなこともあったわね。でも、どうしてこんな時に、こんな場所で……。私たちを狙っているの？）

当時の出来事を思い出しつつ、セリアが険しい顔つきになる。

（……わからない。でも、このまま行くとそいつと出くわす危険が高い。だから、私が先行して露払いをしてこようと思う）

アイシアはセリアの疑問に対し思い当たる所があったが、さりげなく話を逸らすことにした。

（……そう、わかったわ。一つ訊いておきたいんだけど、近くに魔物はいないわよね？）

こないだのように魔物をけしかけて襲われたら厄介だ――セリアは真っ先にその危険を予見し、尋ねることにした。

（たぶんいない。この辺りは地形に起伏があるから、探知の精霊術でも探しにくいけど、半径一キロくらいに不特定多数の魔力反応が固まって集まっている場所はなかった）

アイシアもそこら辺の危険性は予見していたようで、あらかじめ探知の精霊術を使っていたようである。

（は、半径一キロ……。それだけわかれば十分よ。ありがとう。貴方にも危険な目に遭わせちゃうけど……）
（セリアが気にする必要はない。貴方を守るのは、春人のためでも

あるから……。そんなことより、いくつか魔力反応が点在はしているから、油断はしないで。私がこの場を離れると、もうセリアと念話はできなくなる）

（……わかったわ。気をつける）

セリアが表情を引き締めて首肯する。

リオもアイシアもいなくなれば、クリスティーナを守れる存在がヴァネッサと自分だけになるのだ。

浩太と怜もいるが、彼らはいたって普通の少年にすぎない。当てにするべきではない――そう思って。

（じゃあ、ちょっと行ってくる）

アイシアは抑揚のない声でそう言い残すと、霊体化したままセリア達の進行方向に先行した。

セリアには見えていないが、軽々と空を飛んであっという間に立ち去ってしまう。

（今、何が起きているの？　リオ、アイシア……、貴方達は何か知っているの？）

と、取り残されたセリアが疑問に思う。

しかし、その思考内容がアイシアに伝わることはなかった。

第１３１話　暗躍する黒い影

それは奇妙な感覚だった。どこか懐かしいような、それでいて絶対に相いれないとわかる。不気味な気配だった。

空を切り、突風のごとき速度で飛翔する。アイシアは霊体化を解き、実体化して妙な気配のもとへと向かっていた。

そして、瞬く間に目的の相手と遭遇する。全身を黒いローブで覆った男が、ぽつりと背の低い丘の上に立っていた。

「お待ちしておりました。こうして直にお会いするのは初めてでしたね。私、レイスと申します。どうぞよしなに」

男――レイスは底冷えするような声で自己紹介をすると、丁寧に頭を下げる。

「……貴方の部下を使って私達を追い回していたみたいだけど、何の用？」

尋ねて、アイシアはぼんやりとした瞳でレイスを見据えた。

「その様子だと、やはりアレイン達を通じて色々と情報が洩れていたようですね。やれやれ。私のミスでした。この場に貴方がいるとなると、契約者さんはアレイン達のところに？」

質問に答えると、レイスがわざとらしく溜息をついて尋ね返す。

「答える必要はない」

アイシアはにべもなくかぶりを振った。

「ははは、つれないですね。こちらは自己紹介までしたというのに」

「貴方はアマンドで魔物を操って私達を襲ってきた。信用して情報を教えるはずがない」

「ああ、そういえば貴方とは一度アマンドの近郊でニアミスしたことがありましたね。あの時は単なる興味本位だったのですが、実は貴方に興味がありまして、こうしてアプローチを仕掛けているというわけです」

と、レイスがにこりと空寒い笑みをたたえてうそぶく。どこまで本当のことを言っているのかまったく掴めない。食えないしゃべり口調だ。

「用件があるならさっさと言って」

アイシアが表情を変えずに告げた。

「……精霊は時を重ね、格が高くなるほどに我が強くなり、見た目も性格も人に近づくものですが、貴方は随分と我が希薄ですね。まるで生まれたての精霊のようだ」

語りながら、レイスは少し思案気な表情を浮かべる。

「だったら何？　人型の精霊はみんな貴方みたいになるのが普通なの？　なら私は今のままでいい」

と、アイシアが極微かに不快な念を込めて言う。

「ははは、きちんと自己主張はするようですね。ちなみに、私は精

霊ではありませんよ。似て非なる存在です。まあ、親類だとでも思っていただければよろしいかと」
「……そう。これ以上時間を無駄にする気はないから、最後に一つだけ訊いておく。ルシウスはどこにいるのか、話して」

アイシアが訊くと、瞬間、レイスの表情がわずかに変わって、

「……やはりクレイアでクリスティーナ王女の捜索部隊に被害を与えたのは貴方達でしたか。それこそ答える必要はないのですが、こうして質問をしているということは、アレイン達を通じて情報が漏れているのでしょうね、やれやれ」

そう言って、大仰に嘆息した。

「喋る気がないのなら、力づくでも訊きだす」

と、アイシアが驚くほど冷淡な声で言う。

「まあ、そう焦らないでください。あの方は神出鬼没ですからね。今どこにいるかは私にもわからない、とだけ言っておきましょう。これでご満足いただけますか？」
「……教える気がないということはわかった」
「本当にわからないのですが、まぁ、今頃は北方のどこかにいるんじゃないでしょうか。あの方も私に負けず劣らず暗躍がお好きですからねえ」

レイスはニタリと笑って、小さく肩をすくめる。

「……そう。ならいい」

そう言うと、アイシアはさっさと踵(きびす)を返してしまう。
「おや、もう行かれるのですか？」
そんな彼女の背中に、レイスが意外そうに声をかける。アイシアがぴたりと立ち止まった。
「貴方が私に用がないのなら、私がこの場にいる必要もない」
「ルシウス様のことをお尋ねにならないので？」
「これ以上訊いても、貴方が本当のことを話すとは限らない。時間の無駄」
アイシアはきっぱりと言った。
「力づくでも訊きだすのではなかったので？」
「今の私に与えられた役割は貴方を捕縛することではない。貴方が私達を邪魔をしないのなら、時間を消費してまで相手をする必要はない」
「なるほど。冷静ですね。とはいえ、これは困りました」
と、レイスが余裕を感じさせる様子で息をつく。途端、彼の全身からとてつもなく強大な圧力が膨れ上がった。
アイシアが素早く振り返り、レイスを見やる。すると、レイスの足元にある影が、急速に周囲の地面に広がっていくのが視界に映った。
直後、影の中から巌の大剣を手にした漆黒の牛頭巨人(ミノタウロス)と、翼竜(ウィングリザード)という飛行型の亜竜によく似た生命体が数体ずつ出現する。
「せっかくですから、私のコレクションと少し遊んでいきませんか？」

レイスがニタリと笑って言う。
次の瞬間、出現した魔物達がアイシアを囲むように動き出した。

◇　◇　◇

他方、アイシアから数キロほど離れた地点では、リオとアレイン達との戦闘も繰り広げられていた。
速度で圧倒するリオに翻弄されないよう、アレイン達が立ち止まらずに走りまわっている。接近しすぎず、慎重を期して戦う姿勢が見て取れた。

「おい、てめえら！　黙って突っ立ているだけじゃ後払いの報酬は払わねえぞ！　多少の怪我は問わねえ、そのローブ野郎を捕縛しろ！」

と、ルッチが野次馬と化した周囲の襲撃者達を怒鳴りつける。
半ば呆然とリオとアレイン達の戦闘を眺めていた彼らだったが、ルッチの言葉でハッとしたように武器を握り直した。
しかし、積極的にリオに襲いかかろうとする者はいない。

「野郎は化け物だが、一人でこの人数を食うのは無理だ。てめえらが介入すりゃ勝てる！」

叫びながら、ルッチがリオに向けてナイフを投げつける。ほぼ同時にアレインも緩急をつけるようにリオへ向けてナイフを投げる。
リオは複数方向から迫りくるナイフを剣で軽々と打ち払った。

「何のために頭数を揃えたと思っていやがる、かかれ！　奴を生け捕りにした奴には三倍の報酬を支払うぜ！」

三倍の報酬という言葉に、襲撃者達がピクリと反応を見せる。互いに顔を見合わせると、何人かが堰(せき)を切ったように勇んで動き出した。やや遅れて他の多数が手柄を得ようと走り出す。

それを見て、アレインとルッチはニヤリとほくそ笑んだ。二人は金で雇った襲撃者達が団結したところでリオを捕縛できるとは心にも思ってはいない。

ただ隙を作ってくれればそれでいいのだ。アレイン達にとって彼らは捨て駒に過ぎないのだから。

（やっぱりこうなったか）

リオは小さく嘆息した。

アレイン達から情報を訊きだすにしても、周囲の襲撃者達は邪魔でしかない。こちらの戦闘を見て臆するならさっさと逃げてほしかったが、襲ってくるのならばさっさと蹴散らした方が手っ取り早い。

そう考えて、リオは右手で剣を握ったまま、左手で腰の鞘からダガーを抜き放つ。手にした剣とダガーを構えると、襲撃者達を見据える。

他方、ひとたび戦意を奮い立たせた襲撃者達は、群集心理と相まって臆することなくリオに向かって襲いかかった。

長棍(クォータースタッフ)を手にした者達が、リーチを活かしてリオを囲い込もうとする。有象無象とはいえ、全方向から襲いかかられては、流石のリオも立ち止まって応戦するわけにはいかない。

リオは先手を打って、襲撃者達の中に潜り込んだ。敵の真っただ中に入るなり、身近にいた相手をダガーの柄頭で遠慮なく殴りつけて悶絶させる。

すると、襲撃者達は慌てて長棍や重戦槌(クォータースタッフ)を振るった。

だが、リオは軽やかに殺到する攻撃を躱しながら、すれ違いざまにカウンターを叩きこんでいく。

無数の相手を瞬く間に滔々(とうとう)と蹴散らしていくと、次第に襲撃者達に怯えの色が浮かびだした。
そうして、十分に実力差を知らしめて、襲撃者達の戦意を削ぐことに成功すると――、

（あと一押しだな）

リオは大きく跳躍して、群衆からいったん距離を取った。そこでダガーを腰の鞘に収め、片手半剣を両手持ちで構えて、再び襲撃者達と向き合う。
続けて、リオは手にした剣に魔力を流し込んだ。
すると、刀身が淡い光を放ち始める。距離は十メートル近く離れているが、襲撃者達は警戒し、あからさまに浮き足立った。
リオが振り払うように剣を真横に薙ぐ。
直後、前方に向かって暴風が一直線に吹き荒れる。ハンマーで打ち付けられたような衝撃が全身に襲いかかり、襲撃者達は悲鳴を上げながら後方へ吹き飛ばされていった。
着地の衝撃と相まって、大半が気絶して意識を失う。運良く後方に控えていた数名は意識を保っているが、もはや完全に戦意は失っていた。怯えた様子で必死にリオから距離を取ろうとしている。
リオが死に体の襲撃者達を一瞥したその時、脇から忍び寄る影があった。ルッチだ。
ルッチは間隙を突くように斬りかかったが、リオは難なく対処する。
キィンと剣がぶつかり合う高い音が周囲に響いた。
「てめえの魔剣は風を操るってわけか。はっ、急加速する原理がわかったぜ」
つばぜり合いをしながら、ルッチが苦々しい笑みを刻んで言う。

実際のところ、あらゆる事象を引き起こしているのは剣ではなく、術者であるリオ自身なのだが、ルッチは上手い具合に勘違いしたようだ。
狙い通りの展開に、リオが小さくほくそ笑む。

「舐めやがって」

ルッチは不快気に言うと、果敢にリオに斬りかかった。
飛ぶように突進し、間合いを詰めて剣を振るい、何とかリオを釘付けにしようと試みる。
しかし、リオは後退しつつ綺麗に攻撃を受け流していく。やがて余裕が生まれると、カウンターで攻撃に転じようとした。
と、そこで、アレインが死角を突いて、ルッチと挟撃するように背後からリオに襲いかかる。
しかし、リオは忽然と二人の目の前から姿を消してしまい、一陣の風だけが残った。

「アレイン、後ろだ！」

いち早くリオがアレインの後ろに回り込んでいるのを察し、ルッチが叫ぶ。
アレインがとっさに反応して身を転じる。しかし、同時にリオの飛び蹴りを脇にくらって、勢いよく吹き飛んだ。

「ぐっ……」

アレインは軽く十メートルは跳躍したものの、受身を取ってダメージを最小限に抑えた。
魔道具（アーティファクト）で肉体を強化していたこともあって、戦闘不能に陥ることだけは避けたのだ。とはいえ、何とか立ち上がったものの、疲弊し

ているのが見てとれるほどにふらついている。
一方、リオは着地してバランスを整え、油断なくルッチに向けて剣を構え直していた。
「ちっ」
ルッチが顔をしかめて舌打ちする。リオとの戦闘継続が可能なのはもはや彼一人だけしか残っていない。
「邪魔者は消えた。大人しく投降して、ルシウスについてお前が知っている情報を教えるなら、命までは奪わない。どうする？」
周囲を見回しながら、リオが言った。
「はっ、そうしたいのは山々だが、あいにく上司の情報は売らねえ主義でな」
アレインと二人がかりでようやく時間稼ぎができる程度だったのだ。自分一人になった以上、もはや勝機がないことは十分に承知している。
しかし、ルッチは虚勢を張って強がった。
「なら、後でお前の相方にも訊いてみるさ」
「無駄だぜ。アレインだって情報は売らねえ。そんな真似するくらいなら死を選ぶ」
「そうか。意外と人望があるんだな」
リオが微かに不快そうに言う。
「怖えだけだよ。何だ、てめえ、団長に恨みでもあんのか？」

「……さあな」
「はん、たまにいるんだよ。お前みてえな奴がな。実際に団長の前に復讐に現れた奴が何度かいた。けど、そいつらは例外なく後悔して死んでいったぜ。大人しく生きていた方が良かったってな。てめえもせいぜい後悔して死ぬことだな」
と、ルッチは嘲笑うように語る。
「しないさ」
リオがかぶりを振って、ルッチに向かって間合いを詰めだした。
「くそが……」
強がりは言っても、状況は絶望的だ。このまま戦闘を続行したところで、自分に勝ち目はない。ルッチがそう思った。その時のことだった。
ルッチの視界の端で、人影が急速にリオに向かって迫るのが見えた。
ギィンと、金属同士がぶつかり合うような甲高い音が響く。
いつの間にか一人の男が、リオへと斬りかかっていた。リオが乱入者の剣をつばぜり合いで受け止めている。
リオは剣を力強く振り払って、乱入者を弾き返した。
「ヴェン！　てめえ、どうしてここにいる！？」
ヴェンと呼ばれた乱入者が地面に着地すると、ルッチが目をみはって尋ねる。
「レイス様からのお達しだ。お前らの援軍に行けとな。探すのに手

間取った。それにしても随分とボロボロじゃないか」
「……うるせえ。って、野郎！」

ヴェンとルッチが武器を構えながら情報を共有していると、リオがアレインに向かって猛スピードで駆け出した。
ルッチ達も反射的に走り出したが、リオに追いつくことは敵わない。

「がっはっ」

リオは一瞬で距離を詰め終え、アレインの鳩尾（みぞおち）に頂肘（ちょうちゅう）を打ち込んで気絶させた。
ルッチとヴェンがリオと数メートルの距離を置いたところで停止する。

「ヴェン、野郎の狙いは団長の情報だが、強すぎる。アレインはもう駄目だ。口封じに始末して、とんずらこくぞ」

と、ルッチが顔をしかめて言った。
しかし、ヴェンはきっぱりとかぶりを振る。

「駄目だ、レイス様がぎりぎりまで時間を稼げだとよ」
「マジかよ……」

レイスの命令は絶対だが、リオの実力を知っているため、ルッチがあからさまに気が引けた様子を見せた。

「お前がそこまで嫌がるってことは、やっこさん、どうやら相当ヤバそうだな」

リオとにらみ合ったまま、ヴェンが苦笑する。

「まあな」

ルッチが不機嫌そうに頷く。すると――、

「襲ってくるというのなら、もう手加減はしないぞ？　一人いれば事足りる」

気絶したアレインを担いだまま、リオが冷淡な声で告げた。

下手に戦闘を継続すると、二人そろって気絶したアレインを殺しにきかねないので、威嚇を狙っての発言だ。

「こちらとしても残念だが、そういうわけにはいかねえみてえでな。これやると身体が痛くなるから嫌なんだが……、《身体能力強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）》」

ルッチは億劫そうな表情を浮かべると、身体能力強化の呪文を詠唱した。ほぼ同時に、彼の全身を覆うように魔法陣が展開される。

魔道具による身体強化と魔法による身体能力強化の二重がけ――ルッチの切り札なのだろう。

隣にいるヴェンも同じ魔法を詠唱すると、二人そろって左右に走り出した。

◇　◇　◇

その頃、クリスティーナ達は国境に向かって先を急いでいた。

街道を少し外れ、周囲に人目がないことを幸いに、ヴァネッサが指揮をとって前へ前へと進む。

しかし――、

（何だ、この胸騒ぎは……）

ヴァネッサは妙な緊張感を味わっていた。

国境を越えるまで後少し。クレール伯爵領の領都クレイアからここに来るまで、捜索部隊に見つからず、旅路は順調そのものである。

先ほどは妙な手合いに待ち伏せされていたが、おそらくは野盗の類だろう。街道上で仕事のない傭兵等が野盗と化すのは別に珍しくない。

とはいえ、念のために情報は欲しい。本当にただの野盗だったのか。

だから、リオが足止めを兼ねて残ってくれたのはありがたかった。今のところ後方から追ってが迫ってくる気配はないし、リオの実力ならば十分に信頼できる。

後は自分達が国境を越えてガルアーク王国に入ってしまえば、ベルトラム王国の捜索部隊に怯える必要はなくなる。

そう、後はもう国境を越えるだけなのだ。

追撃の危険を減らすために街道を走っていない関係上、国境を越えたかどうかの判断はしづらいが、今いる丘陵地帯を抜ければ完全にガルアーク王国の国境内にいることになる。

安全圏まであと少し、もう少し。

ヴァネッサはそう信じて、今は一秒でも早く国境を越えようと、急ぎ足で前進することだけを考えていた。

しかし、妙な胸騒ぎはいっこうに収まらない。

（何か見落としているのだろうか）

と、ヴァネッサがそう思った矢先のことだ。

遥か上空から鳥が鳴くような甲高い声が聞こえてきた。少し遅れて、風を切るような羽ばたく音も聞こえてきて、六匹のグリフォン

がクリスティーナ達の周囲を囲むように舞い降りる。
すると――、
「止まれ。フードを取って顔を見せろ」
とあるグリフォンに跨った男が、低い声で命令した。
クリスティーナ達がやむを得ずぴたりと足を止める。だが――、
「なっ……」
グリフォンに乗って声をかけてきた男の顔を見て、硬直した。
「ははは、レイス殿の情報通りだな。どうした？　早くフードを取れ。こんな街道を外れた場所で何をしている？　ん？」
と、嫌味ったらしい声で、別の男が言う。
すると、セリアの身体がびくりと震えた。
「シャルル、まだ確認はとれていないが、相手は――」
「黙れ、アルフレッド。そんなことはわかっている。だからさっさと確認を済ませてしまおうというのだ。おい、貴様ら、早くフードを取れ」
アルフレッドと呼ばれた男に注意されると、シャルルと呼ばれた男がうっとおしそうに顔をしかめた。
続けて、ニヤリとほくそ笑んで、クリスティーナ達にフードを取るように命じる。
「馬鹿な……どうして、ここにいる？」

ヴァネッサが焦れた様子で呟く。目の前にいるアルフレッド＝エマールは彼女の実兄なのだ。

他方で、フードの下にあるセリアの顔も青ざめていた。アルフレッドと一緒にいるシャルル＝アルボーは、かつてセリアの婚約者だった男なのだから。

第132話　激闘

レイスの合図と同時に、呼び出された魔物達が一斉に動き出した。
中でも一体の牛頭巨人（ミノタウロス）が、真っ先にアイシアへと襲いかかる。瞬時に彼女の眼前に移動すると、巌（いわお）の大剣を勢いよく振り下ろす。
すると、ドォンという衝撃音が鳴り響いた。周囲の地面がひび割れ、確かな手ごたえがミノタウロスの手に伝わる。
しかし、巌の大剣はアイシアの身体を押し潰してはいない。なんと、アイシアを覆うように展開された不可視の壁が、剣を阻んでいるのだ。

「ガッ！？」

ミノタウロスが剣を押し込もうと、その剛腕に力を必死に込める。だが、剣を手にした腕がブルブルと震えるだけで、剣は一ミリも前に進まない。
その一方で、アイシアは眼前のミノタウロスを冷めた目つきで見据えた。続けて、ゆっくりと手を前方に向けてかざす。
次の瞬間、アイシアの手先から衝撃波がほとばしる。ミノタウロスの巨体が十メートル以上も吹き飛ばされた。
レイスは「ほう」と、感心したように目をみはると――、

「まだまだ控えはいますよ。どうしますか？」

と、嘲笑（あざわら）うように言った。
すると、空を飛翔する翼竜（ウィングリザード）に似た生物達が、アイシアをめがけて大きく口を開く。そこから炎熱のブレスが次々と射出される。
無数のブレスがアイシアめがけて降り注いだ。しかし、アイシア

は軽快な足取りで、乱れ降るブレスを避けてしまう。
そこへミノタウロス達が襲いかかり、怒涛の波状攻撃を仕かけた。
だが、アイシアは決して焦らない。軽く跳躍しながら襲ってきた一体のミノタウロスとすれ違うと、サッと顔面に手を触れ、一瞬で頭部を氷結させてしまった。
直後、ミノタウロスの巨体が、音を立てて地に沈む。

「……翼竜はブレスを吐かないはず」

アイシアは己の中にある知識と照らし合わせ、頭上を飛ぶ翼竜に似た何かが翼竜ではないことを確信した。

「元、翼竜ですよ。少し改造してみました」

呟くアイシアの声を拾ったのか、レイスが愉快そうに答える。アイシアは微かに顔をしかめたが、レイスを見やることなく魔物達の対処に当たる。

「加減はしない」

そう言うと、アイシアは自身の周囲に光球の魔力弾を無数に発生させた。
ややあって、魔力弾の半数が光線と化して、上空を旋回する翼竜もどき達を薙ぎ払うように射出される。決して少なくない数の光線が翼竜もどき達に直撃した。

「グガッ」

光線が直撃した翼竜もどき達が、大きくバランスを崩す。そのまま何体かは地上へ落下したが、残りはかろうじて体勢を取り戻して

飛行を再開した。どうやら衝撃以上のダメージは与えられなかったようだ。

（竜種の皮膚はオドを弾く。亜竜種も竜種ほどではないけど、その特性を備えている？　なら――）

と、アイシアが冷静に分析し、自身も空へ向けて飛び立とうとすると、地上に残っていたミノタウロス達が慌ててアイシアに襲いかかる。

アイシアは残っていた魔力弾の矛先を、迫りくるミノタウロスたちへと変更した。翼竜もどき達の場合と異なり、光線となった魔力弾はミノタウロス達に有効なダメージを与えていく。

ミノタウロスも硬質な皮膚を有する魔物だが、二、三発も胴体に当たれば致命傷になるようだ。生命力を失い、魔石を残し灰と化していく。

そうして、少しずつミノタウロス達は数を減らしていった。

上空を飛ぶ翼竜達の相手は少し面倒だが、脅威というほどではない。アイシアが魔物達を一掃するのも時間の問題だろう。

しかし――、

「流石は人型精霊。一筋縄ではいきませんね」

レイスは戦闘の様子を眺めながら、小さく嘆声を漏らした。

直後、彼の周囲に影が広がる。そこから二足歩行の骸骨戦士（スケルトンウォリアー）達が無数に湧き出てきた。

全身が真っ黒。姿形は人型だが、悪魔のように禍々（まがまが）しい。両手には暗黒の剣と盾を装備している。薄気味悪い存在だった。

（……増援のつもり？）

アイシアは魔物達の攻撃を躱しながら、骸骨の軍勢を一瞥した。そして、軽く腕を一払いする。すると、烈風が巻き起こった。
魔力で形成された巨大な風の斬撃が、数多の骸骨達を薙ぎ払う。
骸骨戦士達は軽々と吹き飛ばされた。だが、レイスだけはふわりと宙に浮かび上がると、風の斬撃を難なく躱す。

「この程度で自分を倒せると思うとは心外……といったところですかねえ」

レイスが愉快そうに呟く。眼下には烈風によって薙ぎ払われた骸骨戦士の残骸が文字通りバラバラになって散らばっているが、彼の表情から余裕が消え去ることはない。
アイシアはそんなレイスをちらりと見やったが、黙々と戦闘を継続している。空を高速で旋回している翼竜もどき達よりも先に、数が少なくなった地上のミノタウロス達を片付けることにしたようだ。
風の刃で新たに一体のミノタウロスの首を至近距離から切り飛ばす。
すると、アイシアは残る一体のミノタウロスを見据えた。上空から翼竜もどき達のブレスが降り注ぐが、軽々と舞うように躱していく。
アイシアは余裕を持って着地すると、残る一体のミノタウロスをめがけて駆けだした。
だが、そこに空からレイスが割り込む。と、同時に、無数の魔力弾がアイシアに降り注いだ。レイスが着地際に放ったものである。
アイシアはとっさにバックステップを踏んで、落下してきた魔力弾を避けた。
直後、レイスが空に向けて右手を掲げる。すると、周囲に散らばっていた骸骨戦士達の残骸が、ドス黒い瘴気状の霧となって、レイスの眼前に集結した。
霧は瞬く間に姿を変えていく。フォルムは先ほどまでと同様、二

足歩行の人型。だが、サイズも、禍々しさも、先ほどよりも遥かに上回っている。
ミノタウロスをも上回る巨躯に、巨大な片手剣、さらに頑強そうな盾と鎧を装備していた。空を飛ぶのか、背中には羽まで生えている。まさに悪魔か堕天使のような外見だ。
巨大な骸骨の騎士は、ミノタウロスをも上回る速度でアイシアに接近すると、数メートルはある片手大剣を軽々と振るう。
アイシアは不可視の障壁を展開し、真っ向から斬撃を受け止めた。
ほぼ同時に、カウンターで真正面に向けて衝撃波を放つ。ドォンという轟音が鳴り響いた。
しかし、巨大な骸骨の騎士は微かに後退しただけで、吹き飛ばされてはいない。手にした盾で衝撃波を防いだのだ。

（今の私が作り出せる最強の使い魔（ファミリア）。これで少しは時間が稼げそうですかねえ）

レイスはニヤリとほくそ笑み、再び宙に浮き上がる。そのまま上空に向かって高度を上げると、再び戦闘を静観し始めた。

◇　◇　◇

ルッチとヴェンは散開して左右に分かれると、時間を稼ごうとリオの出方を伺い始めた。だが、二人揃って怪訝な表情を浮かべている。

（野郎、どうしてアレインを手放さねえ）

と、ルッチが抱いた疑問を、援軍に来たヴェンも同じように抱いていた。
リオは先ほど気絶させたアレインを担いだままなので、あからさ

まに隙だらけなのだ。自分達を油断なく見据えているが、動き出す様子はない。

（どういうつもりか知らねえが、やることに変わりはねえ）

ルッチはそう決めて、小さく舌打ちすると、ヴェンに向けてハンドサインを送る。近づくな、遠距離からの攻撃に専念しろと。

「おい、ヴェン。野郎は魔剣で風を操る。真空波を生み出すのと、風で急加速するのは確認した。二重強化で身体能力を限界以上に上げた状態でも対応できるかわからねえ。気をつけろよ」

そう言うや否や、ルッチは懐からナイフを取り出し、リオに投げつけた。

「《光弾魔法（フォトンバレット）》」

ヴェンも呪文を詠唱して、リオめがけて挟み打つように魔法を放つ。左右から無数の刃と魔力弾がリオに襲いかかった。

しかし、次の瞬間、リオは自身を起点に、密かに練り込んだ魔力を解放し、暴風をドーム状に展開する。

吹き荒れる嵐は瞬く間に周囲へ拡散し、ルッチ達の攻撃を弾き飛ばしてしまった。

不意の出来事に、ルッチ達の顔色が変わり、硬直する。それは絶望的な隙となった。

暴風の壁がルッチ達の姿を飲み込む。同時に、周囲で負傷していた他の傭兵達も、無慈悲に巻き込んでいく。

そして、無事に二本足で立っているのは、リオだけとなった。もしかしなくとも今ので死者も出たかもしれない。

周囲の惨状を見回し、リオが微かに顔をしかめる。だが、小さく

嘆息すると、地に伏したルッチのもとへと赴いた。

「うっ……」

うつ伏せになったルッチを足で仰向けに転がすと、小さな呻き声を漏らす。

（気を失っているか。あっちはまだかろうじて意識があるようだけど）

リオはルッチの首根っこを掴むと、乱雑に引きずって、うつ伏せに倒れるヴェンに近づいた。

自らの頭上にリオが近づいてくることを察し、ヴェンが顔をしかめる。

リオは引きずっていたルッチをヴェンの眼前に投げつけると、

「いくつか訊きたいことがある。答えろ」

と、そう尋ねたのだった。

◇　◇　◇

一方、時は少しだけ進み、アルフレッドやシャルルがクリスティーナ達を包囲した直後。

周囲をグリフォンに囲まれていたクリスティーナ達だったが――、

「セリア君、グリフォンを狙ってくれればそれでいい。相手の機動力を奪えるか？」

ヴァネッサが隣に立つセリアに小声で尋ねた。「乗っている騎士

ごと殺してくれ」と頼まなかったのは、人殺しを経験したことがないであろうセリアに攻撃を躊躇させないためだ。

「は、はい。できます、たぶん」

セリアが上ずった声で答える。

「助かる。では、セリア君は私が合図したら攻撃魔法を。　その後、姫様達と一緒に国境に向かって逃げるんだ。姫様達も。よろしいですね？」

囁（ささや）くように、しかし、有無を言わせぬ口調で、ヴァネッサが命じる。

今は話し合いをしている時間はない。ヴァネッサは最低限の指示を出すと、即席の計画を実行するべく覚悟を決めた。

ここまでシャルル達が現れてから、三十秒程度しか経過していない。

「おい、何をこそこそと話している？　早くフードを取れと……」

「今です！」

シャルルが焦れた様子で喋りかけたところで、ヴァネッサが合図を出した。

「《多重土壁魔法（マルチアースウォール）》」

セリアが慌てて呪文を詠唱する。直後、彼女を起点に地面に巨大な魔法陣が浮かんだ。

グリフォン達の真下から、地面が縦長に勢いよく隆起する。

「なっ！？」

真下から突き上げられるような衝撃を受け、グリフォンに乗っていた騎士達がバランスを崩した。全員がそのまま転落してしまう。

だが、ただ一人、アルフレッドだけはとっさにグリフォンを操ると、急上昇させて下方からの攻撃を躱してみせた。そのまま表情を消し去り、眼下のセリア達を見下ろしている。

「っ、逃げてください！」

ヴァネッサが叫んだ。

すると、クリスティーナ達は《身体能力強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）》の呪文を詠唱し、堰を切ったように駆け出す。

「くっ、おい！　アルフレッド、何をしている！？　早く追いかけろ！　奴らを捕らえろ！」

シャルルが泡を食ったように叫んだ。グリフォンから転げ落ち、地面に這いつくばっている。

アルフレッドは嘆息すると、グリフォンを飛ばしてクリスティーナ達を追った。その飛行速度は速く、じわじわと距離を縮めていく。

「させるものか！　《身体能力強化魔法（エンチャントフィジカルアビリティ）》」

ヴァネッサも急加速し、鞘のロングソードを抜き放つと、大きく跳躍する。そのまま高度を低くして飛翔しているアルフレッドに斬りかかった。

だが、アルフレッドも鞍に備え付けたロングソードを抜き、ヴェネッサめがけて振り払う。

剣と剣がぶつかり合い、ヴァネッサが軽々と吹き飛ばされる。

圧倒的な膂力の差に顔をしかめながらも、ヴァネッサは何とか着地した。そして、クリスティーナ達に注意を呼びかける。

「後ろです！」

「え？」

ヴァネッサの叫び声に反応して、後列を走っていたセリアが背後をチラリと見やる。すると、すぐそこにアルフレッドが迫っていることに気づき、ギョッと目を丸くした。

「エ、《乱風刃魔法（エアカッター）》」

セリアが慌てて手をかざし、呪文を詠唱する。すると、手の先に魔法陣が浮かび、そこから無数の小さな風の刃が射出された。

「《光弾魔法（フォトンバレット）》」

少し遅れてクリスティーナもアルフレッドの存在に気づき、狙いを定めて呪文を詠唱し、魔力弾を連射する。

二つとも殺傷力は低いが、発動速度が速く、連射も可能な攻撃魔法だ。空を飛んで直進してくる存在を威嚇するには十分な弾幕が張られた。

アルフレッドはグリフォンを操作し、魔法から逃れるように横へ旋回していく。ある程度飛んで射程から逃れると、グリフォンから飛び降りて地面に着地した。

そのままグリフォンは空を飛び、後方でもたついているシャルル達のところへ戻っていく。

一方、体勢を立て直したヴァネッサが、着地したばかりのアルフレッドに斬りかかった。

「今のうちにお逃げください！」
攻撃を加えながら、ヴァネッサが呼びかける。クリスティーナ達は顔を歪めながらも走りだす。
アルフレッドは手にした剣で余裕をもってヴァネッサの攻撃を受け止めていた。刹那のつばぜり合いの後、軽くバックステップを踏む。
すると、ヴァネッサが微かに前のめりになる。
「力みすぎだ」
生じたわずかな隙を突いて、アルフレッドが悠然と剣を振り払う。ヴァネッサはとっさに反応して後ろに下がった。
だが、アルフレッドの剣が、彼女の着ていたローブのフードを掠める。厚手のローブだったが、紙のようにめくり取られ、ヴァネッサの顔が露になってしまった。
すると、アルフレッドが微かに目をみはる。
「お前は……何だその髪は？　染めた？　いや……どうでもいい。こうなった以上、私はお前を手にかけなければならない、ヴァネッサよ」
思案顔を浮かべるアルフレッドだったが、すぐに表情を引き締め直す。
ヴァネッサはギリと歯噛みし――、
「どうして、どうして貴方がここにいる！？　王の剣である貴方が！」
と、叫びながら、斬りかかった。

「……陛下直々のご命令だからだ」
ヴァネッサの剣を受け流しながら、アルフレッドが答える。
「そういうことではない！　いや、それが陛下の真意だと、本当にお考えなのか！？　兄上！」
「お前と話すことなどない」
アルフレッドはにべもなく言うと、ヴァネッサの剣を絡め飛ばした。
「くっ」
「終わりだ」
無手となったヴァネッサの首筋に剣を突きつけながら、アルフレッドが言う。そこにシャルル達がようやく追いついた。
「でかしたぞ、アルフレッド！　その逆賊はこいつに任せて、お前は早く王女殿下を追いかけろ。他の者は殺すなよ」
シャルルは同行していた騎士の一人にヴァネッサの拘束を命じると、アルフレッドにクリスティーナ達の追跡を命じる。
迫りくる騎士達に抵抗を試みたヴァネッサだったが、複数人の男を相手に瞬く間に制圧されてしまう。
アルフレッドは小さく息をつくと、クリスティーナ達が逃走した国境方面に向かって走りだした。その速度は魔法で身体能力を強化したクリスティーナ達の倍はある。
その後、すぐにシャルルも何人かの部下を引き連れて後を追うと、その場にはヴァネッサと彼女を見張る騎士だけが残された。

◇　◇　◇

「き、来た！　う、後ろから！」

浩太が叫んだ。走りながらビクビクと後ろを確認していたため、最初に気づくことが出来たのだ。彼の視線の先には、猛追してくるアルフレッドの姿がある。

セリアはそれを確認すると、

「《雷撃雨魔法（サンダーレイン）》」

呪文を詠唱した。

ややあって、セリアの遥か頭上に巨大な魔法陣が浮かび上がり、そこからアルフレッドの眼前に向けて数多の雷が射出される。

雷はアルフレッドの進行先にある地面を穿ち、土埃を大きく巻き上げた。

「ここは私が食い止めます。姫様達は逃げてください」

と、セリアが覚悟を決めた表情で言う。

「ぼ、僕も手伝います！」

浩太も泡を食ったように名乗り出た。

だが、セリアはにべもなくかぶりを振る。

「無理よ。本業のヴァネッサさんが敵わないんだから、貴方がいても足手まといになるだけ。行きなさい」

「でも！」

「いいから！」

喋りながらも、セリアは魔力を操作し、休むことなく頭上の魔法陣から雷を射出し続けている。

「姫様、本当にこれでいいんですか！？　ヴァネッサさんは、どうなるんです？」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、浩太がクリスティーナに問いかけた。

クリスティーナがキュッと唇を噛み締める。そして、おもむろに足を動かした。スッと動き、セリアの隣に並ぶ。

セリアはハッとクリスティーナを見つめた。

「相手はアルフレッド。このまま逃げ切れる保証はありません。なら、この場で彼と戦って、活路を見出します」

と、クリスティーナが決然と言う。

「姫様……。わかりました」

セリアは一瞬、逡巡した後、腹をくくった。

「なら僕も戦います」

浩太も勇んで宣言する。

「……じゃあ、俺も。頑張るか。浩太だけに任せるわけにはいかないしな」

取り残された怜が嘆息して、意思表示する。
そうして、一同はアルフレッドと戦う覚悟を決めた。
「なら、貴方達二人は左右を警戒してちょうだい。私と先生で前方に弾幕を張るわ」
クリスティーナが浩太と怜に指示を出す。　それに従い、浩太達は即座に陣を敷いた。
派手に魔法を連射したせいか、前方は土埃で視界が遮(さえぎ)られている。だが、セリアの牽制攻撃が功を奏しているのか、今のところアルフレッドは襲いかかってこない。
だが、油断は禁物だ。
と、そこで、煙に紛れてアルフレッドが姿を現し、
「き、ぐっ」
左を見張っていた怜が攻撃を受けた。警告の声を出そうとしたところで、鳩尾に拳を打ち込まれ悶絶する。
すると――、
「う、わああ！」
浩太がアルフレッドを見やり、叫びながら飛びかかった。
しかし、アルフレッドは浩太の鳩尾にも打撃を打ち込み、あっさりと悶絶させてしまう。
日本人の少年二人は瞬く間に撃沈した。
「この二人が城から抜け出した勇者の友人か？　なら――」
アルフレッドはうずくまる浩太達を一瞥してから、クリスティー

ナとセリアを見据えた。
二人の身体がビクリと震える。
だが、セリアは勇気を振り絞って、クリスティーナを庇うように前に立った。そして、呪文を詠唱する。
「ア、《地牢魔法(アースプリズン)》」
セリアの呪文詠唱に反応し、地面に魔法陣が浮かび上がった。
しかし、アルフレッドが地面に剣を突き刺すと、魔法陣はすぐに消滅してしまう。
「無駄だ。この剣は魔力を吸い取る」
そう言って、アルフレッドは悠然と歩きだした。二人と間合いを詰めていく。
「《風弾魔法(ブラストショット)》」
セリアはそれでも諦めず、呪文を詠唱し、風の衝撃弾を放った。
しかし、アルフレッドは腕に装着していた盾を振るって、風弾を明後日の方向に薙ぎ払ってしまう。
「……君は何者だ？　手練れの魔道士のようだが、戦闘経験は不足しているように見える。攻撃に人を殺す覚悟が感じられない」
アルフレッドが尋ねるが、セリアは何も答えない。
すると、そこへ、シャルルが騎士を引き連れて現れた。
「よし、追いつめているな」

倒れている浩太と怜の姿を確認し、シャルルがほくそ笑む。
「そこの魔道士よ。フードを取れ。この私に地面を這いずらせたのだ。許さんぞ」
続けて、シャルルはセリアに向けて、フードを取るように命令した。
しかし、セリアが自主的にフードを取ることはない。
シャルルは舌打ちすると――、
「おい、アルフレッド」
顎をしゃくって、アルフレッドに指示を出した。「力づくでフードを外せ」ということなのだろう。
アルフレッドが小さく嘆息し、剣を握り直して歩きだす。セリアとクリスティーナはじりじりと後退した。
だが、アルフレッドが間合いに入り、セリアのフードを切り取らんと剣を振るう。
セリアはビクリと硬直し、目をつむった。
すると、一陣の風が彼女の頬を撫でる。ほぼ同時に、金属がぶつかったような甲高い音が響いて――、
「っ……」
セリアが恐る恐る目を開く。
すると、そこにはリオが立っていた。
剣を構え、アルフレッドの剣を受け止めている。
「すみません。遅くなりました」

第133話　VSベルトラム王国最強

セリアが目を瞑った刹那に、リオがアルフレッドの剣を受け止める。

一瞬の後、セリアはおそるおそる目を開くと、

「り……お？」

呆然とリオの背中を見つめ、擦れた声を漏らした。

動転して自分の名を呟いてしまった彼女に、リオが小さく苦笑する。だが、すぐに手にした剣に力を込め、アルフレッドを押し返した。

アルフレッドが無言でバックステップを踏み、リオから距離をとる。

「後ろに下がってください。すぐに終わらせます」

リオがアルフレッドの顔を見据えながら、後ろに立つセリアに向けて言った。アルフレッドも警戒した様子でリオを見つめ返している。

「う、うん。姫様、こちらに」

セリアはハッと我に帰ると、リオの指示に従うべく、慌ててクリスティーナに促した。

「し、しかし、相手はアルフレッドです。いくらアマカワ卿とはいえ……」

アルフレッドの実力を評価しているのか、責任感からか、クリスティーナが狼狽えながら難色を示す。

「大丈夫です、ハルトなら。私達じゃ足手まといに――」

などと、セリアがクリスティーナを説得しようとすると、

「……く、くくく、ははは！　これは傑作だ！」

シャルルが堪えきれない様子で、高らかに笑いだした。アルフレッドの後方からリオを睨み、言葉を続ける。

「貴様、馬鹿か？　状況を理解できていないのか？　こちらには精鋭の騎士が揃っている。単純に数も上だ。それをすぐに終わらせる、だと？　それもたった一人で？　道化か、貴様？」

圧倒的優位に思える今の状況に酔っているのか、シャルルが鷹揚に語った。アルフレッドを除いた他の騎士達も弛緩した顔つきになっている。

すると、セリアが白けた眼差しでシャルルを睨んだ。すぐ隣に立つクリスティーナも似たような視線をシャルル達に向けている。

だが、それでもシャルルの弁舌は止まらない。

「だが、あながち間違いとも言えんかもしれんな。確かにすぐに終わる。惨めな貴様の敗北っ！？」

得意気に喋るシャルルだったが、途中でギョッと目を見開く。

突然、リオが瞬間移動したかのように姿を消したのだ。かと思えば、次の瞬間にはアルフレッドの眼前に迫っていて――、

「っ！？」

アルフレッドが反射的に剣を構え、リオが手にした剣を打ち払う。
すると、両者が軽くノックバックした。
アレイン達では反応しきれなかった速度に対応されたことで、リオが微かに驚きの色を瞳に覗かせる。刹那、スッと目を細め、アルフレッドが手にした剣を見やった。

（あの魔剣、強力な身体強化魔術が込められているな）

適当に後退して距離を取ったところで、リオが冷静に相手の戦力を分析する――アルフレッドはあの魔剣で自身に強力な身体強化を施しているのだろう、と。
古代魔道具（エンシェントアーティファクト）級の魔剣には、《身体能力強化魔術（ハイパーフィジカルアビリティ）》よりも高位の身体強化魔術が込められていることが多い。
その効果の度合いは個々の魔剣によってバラツキがあるが、リオの速度に対応してみせた以上、アルフレッドが所有している魔剣はかなり高位のものであることが窺える。
そして、何よりも脅威なのは、その魔剣を操るアルフレッド本人だ。

（何より剣を使う本人が強い。見切りが半端じゃないな）

対人戦闘において、『見切り』は基本であり、奥義でもある。通常、人が身体を動かす際には肉体に力を込める必要があるが、その力の動きさえ読み取ってしまえば、相手の行動を予見できてしまうからだ。
とはいえ、見切りの目はそう簡単に鍛えられるものではないし、天賦の才によるところも大きい。

また、フェイントを混ぜたり、脱力して力の動きを最小限にして、見切らせないための技術も存在する。
この点、リオの高速移動法は、脱力して力の動きを最小限にする技術と風の精霊術を応用し、リオが独自に会得した移動術だ。その最大のメリットは、肉体の予備動作をほぼゼロにしたまま、強制的に加速が可能な点にある。その移動速度と相まって、まさに瞬間移動したかのように見せることが可能というわけだ。
しかし、完全に力の動きをゼロにできるわけではない。だから、条件さえ揃えば、わずかな力の予兆を見切られてもおかしくはないだろうと、リオも考えてはいた。実際、ウズマやゴウキならば、見切って対応してくることは訓練で確認済みだ。
とはいえ、その条件を満たす人物などそうはいないと、リオは思っている。
ゆえに、リオは目の前にいる人物を即座に特定した。

（アルフレッド――間違いない。王国最強の騎士）

アルフレッドという名にはリオも聞き覚えがある。そう、かつてルシウスと『王の剣』の座を争った人物の名だ。
リオは実力からして目に前にいる人物が『王の剣』本人だと確信した。
流石と言うべきか、実力的には自身が知る限りでトップクラスであり、間違いなくゴウキやウズマに並ぶ。このレベルの相手と命のやりとりをするのは、リオも初めてのことだ。
試合のようにルールという制限はなく、何をしても許される殺し合いという名の闘争。
そんな状況下に置かれて、リオに恐れはあっても、遅疑（ちぎ）は存在しない。あれば命取りとなることを知っているからだ。
だから、初撃の衝突から、わずか数瞬の間を経て、およそ相手の戦力を見積もると――。

リオは間合いの外にいるアルフレッドに向かって、何の躊躇も感じさせずに強く足を踏み込んだ。アルフレッドも同様にリオへ向かって地面を蹴る。
リオとアルフレッドの二人が、互いの動きを見切り、それでもその先を行かんと剣を振るう。直後、互いの剣がぶつかり、火花を散らした。

「こ、殺せ！　構わん、アルフレッド。殺せ！　人の話も聞かん、その卑怯者に現実を知らしめてやるのだ！」

完全に置いてけぼりにされたシャルルだったが、リオの実力を目にし慌てて喚き散らす。
だが、リオやアルフレッドがシャルルの声に耳を傾ける様子はない。両雄の間では壮絶な速度の剣撃が飛び散っていた。
真っ向切っての正面衝突だ。その剣速はリオとアルフレッド以外の者の目にかろうじて捉えることができる程度で、甲高い金属音とともにせめぎ合っている。

「うっ……」

遥か高次の戦闘に気圧され、シャルルが一瞬、息を呑む。
だが無理もない。その場に居合わせた他の騎士達も、セリアやクリスティーナも、苛烈な斬撃の応酬に等しく圧倒されているのだから。
身動きすら取れず、声を挟む余地すらない――ように思えた。
ところが、やはり空気を読めない男が一人いた。

「な、何だ、何者なのだ？　あの男は！？　どうしてアルフレッドと互角に戦える！？　我が国最強の剣士だぞ！　国宝を、『断罪の光剣（フラッシュジャッジメント）』を装備しているのだぞ？」

しばし圧倒された後、シャルルが堰(せき)を切ったように叫ぶ。それで、その場の騎士達がハッと我に返る。それはクリスティーナやセリア達も一緒だった。

「う、後ろに下がりましょう。コウタ君とレイ君を連れて、今のうちに。距離を取らないと巻き添えになります。姫様は先に安全地帯へ」

セリアは上ずった声で言うと、地に伏せる浩太達を避難させるべく動きだした。まずは近くにいた浩太に近づく。身長差はかなりあるものの、魔法で強化された身体能力で何とか肩で抱えることができた。

「私も手伝います」

クリスティーナは自分一人で先に安全地帯に避難するでなく、率先して怜の救出に動き出した。急いで怜に駆け寄ると、肩で抱える。

セリアは少しでも早くクリスティーナに安全圏に避難して欲しかったが、今は問答している時間すら惜しい。戦闘のもつれでいつ巻き添えを食らってもおかしくはないのだから。

リオの邪魔にならないようにするためにも、早く距離を取らなければと、セリアはそのことだけを考えて行動していた。

その数メートル傍で、リオとアルフレッドが苛烈な剣戟を繰り広げている。刃が交差し、絡み合うように互いの剣が交じり、弾かれる。その度に火花が散り、ほんの数秒の間で十数合にも及ぶ速度で斬撃が飛び交っている。

（……妙だな）

背後のセリア達を巻き込まぬよう、慎重に戦闘を運ぶリオだったが、その脳裏には微かな当惑があった。
アルフレッドが積極的な攻勢に出てこないのだ。
とはいえ、リオに対処するのに手一杯かといえば、そうでもない。少なからず打ち合えば相手の力量も見えてくるものだが、アルフレッドはまだ余力を残しているように思える。
しかし、それならばそれでリオにとっては好都合だ。このままセリア達の避難が完了するまで、戦いの余波が彼女達に及ばぬよう、足止めに専念することにした。
互いに足を止め、その場に留まり、しばし牽制し合うような攻防が続く。
そうして十数秒ほど打ち合うと、ようやくセリア達が一応は巻き込まれる危険が少ない範囲にまで避難した。
そして、一連の動きを遠目から眺めていたシャルルは顔をしかめて、

「ちっ、アルフレッドの役立たずめが。まあいい、奴があの男を押さえているうちに、王女殿下を保護するぞ。貴様ら、付いてこい」

と、部下の騎士達に命令した。シャルル達がリオとアルフレッドを迂回するように動き出す。
リオはシャルル達の動きを横目で見やった。リオの注意が微かにシャルル達に移った隙を狙い、アルフレッドが剣を横に薙ぐ。
しかし、リオはサッと身を屈めると、スレスレの位置でアルフレッドの剣を躱してみせた。同時に、剣に魔力を流し込む。
すると、リオの魔力に反応して、剣に刻まれた術式が淡く光りだした。

「っ、避けろ！」

アルフレッドがリオの剣の変化を機敏に察し、シャルル達に向けて叫ぶ。
リオは姿勢を低くしたまま、シャルル達目がけて剣を振るった。虚空を切り刻んだリオの剣だが、振り払われると同時に暴風が吹き荒れる。
シャルル達は反応しきれず、暴風によって数メートルほど吹き飛ばされた。が、そこそこダメージは与えたものの、戦闘不能に陥った者はいない。

（流し込んだ魔力が少なかったか）

精霊術の威力は魔力量によって左右される。アルフレッドとの戦闘の合間を縫って一瞬で発動した精霊術では少しパワー不足だったようだ。
だが、それでも足止めには成功した。シャルル達は転倒し、打撲で身体を痛めている。

「死にたくなければ余計な動きはするな！」

アルフレッドがシャルル達に向けて叫んだ。

「なっ！　く……」

瞬間、シャルルの顔が赤く染まり、怒声を発しかける。その男を押さえるのが貴様の仕事だろう、と。
しかし、余計な言葉を発して、これ以上巻き添えを食らっては堪らない。
シャルルは悔しげに数十メートルほど離れたクリスティーナを見据えた。そして、再び視線をリオとアルフレッドに戻す。
そこでは今もなお死闘が繰り広げられている。割って入る余地な

どない。
いや、それどころか、先ほどまでは前哨戦だと言わんばかりに、二人のギアが目に見えて上がっている。セリア達が安全圏に避難したことで、リオが少しずつ身体強化の度合いを上げていき、アルフレッドもそれに追従するように身体強化の度合いを上げているのだ。
勝負のフィールドも広がり、次第に縦横無尽に動き回って、衝突を繰り返している。
しかし、しばらくすると、

「……馬鹿な？　押されているだと？」

呟き、シャルルがギリと歯を噛み締める。
そう、戦況はリオにとって有利なものに変化し始めていた。
勝負のフィールドが広がったことで、リオが風の精霊術を用いた移動術を多用するようになったのが原因だ。
この移動術の難点は速度が速すぎて小回りが利かないことにあるため、動き回っていたり、ある程度距離を保って戦っている場合にこそ真価を発揮する。
ゆえに、移動に十分な領域が四方八方に確保されたことで、リオがスピードでアルフレッドを圧倒し始めたのだ。
魔剣による強力な身体強化と自前の技量によって、何とか致命打を避けてはいるものの、先ほどからアルフレッドにとって危うい場面が続いている。しかし、それでも彼の目から闘志は失われていない。
また、リオも欠片の油断もしてはいなかった。不利な状況下でも起死回生を狙うアルフレッドの不屈の瞳に畏敬の念すら抱いている。
リオはしばし撹乱するように周囲を動き回ると、あるタイミングで突然に脇からアルフレッドに襲いかかった。
が、アルフレッドはそこから驚異的な反射速度で反応してみせる。反転しながらサッと身を屈め、振り払われたリオの剣をスレスレの

位置で避けてしまった。続けて姿勢を崩したまま、カウンターで剣を振るう。
リオは速やかにバックステップを踏んで剣撃を避けた。しかし、振り払われたアルフレッドの剣は魔力を帯びており、直後、光の斬撃が放たれる。

「っ！？」

リオは微かに目をみはると、自身の剣にも魔力を込め、飛んできた斬撃を薙ぎ払った。

（あの魔剣の効果か）

込められた魔力を熱量エネルギーに変換し、斬撃として放出する。今の一撃の威力は下位の攻撃魔法を少し上回る程度だったが、魔力を込めればその分だけ威力が上がるといったところかと、リオは当たりをつけた。
次の瞬間、アルフレッドが空を切るように剣を何度も振るう。すると、リオに向けて無数の光の斬撃が飛びかかる。リオは風の精霊術で加速し、すぐにその場を離脱した。
光の斬撃は音速を超え、雷にも迫るかと思える速度で飛び交うが、リオの身体を捉えることはない。
数回ほど斬撃を放ち、魔力の浪費を嫌ったアルフレッドは攻撃を停止した。かと思えば、そこへリオが正面からアルフレッドに向かって突っ込む。
すると、二人は剣を構え、裂帛の気合いとともに強く踏み込んだ。魔力が込められたのか、両者の剣は淡く輝いている。
刹那、両者が剣を振るい、二人の姿が重なった。衝撃波を周囲に撒き散らし、鍔迫り合いを興じる。
次の瞬間、リオが真上に向けて剣を振り払った。精霊術で突風を

放ち、アルフレッドの身体ごと遥か上空に打ち上げる。

「むっ？」

グングンと地面から離れていく感覚に、アルフレッドがわずかに目を丸くする。

このまま地面に落下すれば、いくら身体強化で肉体が丈夫になっているとはいえ、重傷は免れない。どころか、最悪、死すらありえるだろう。それを防ぐためには、着地の瞬間に光の斬撃を地面に叩きつけ、落下エネルギーと相殺する必要がある。

しかし、それを行えば、着地時に隙が生まれてしまうことは必至だ。リオ相手にそれは致命的な命取りになりかねない。

（やむをえん）

さすがに危機感を抱いたアルフレッドだったが、冷静に状況判断を済ませると、腹をくくり、一か八かの大勝負に出ることにした。剣を強く握りしめ、魔力を流し込んでいく。

すると、先程までとは比べ物にならないほどに、アルフレッドの剣が強く発光し始めた。

（あれは……不味いな）

リオが表情を険しくする。着地と同時に落下エネルギーを相殺するにしては、込められた魔力が多すぎるのだ。

アルフレッドの瞳はただ一点、リオだけを見据えている。何らかの攻撃を狙っているのは明らかだった。

（迎え撃つ）

遠くへ避難して攻撃を躱すこともできるかもしれないが、そうすればアルフレッドの隙を突けなくなり、振り出しに戻る。リオは次の一撃で勝負をつけることにした。リオの剣にも並々ならぬ魔力が注がれ、強い光を発し始める。

互いに剣を握りしめ、相手に狙いをつけると、二人は魔力を解放した。アルフレッドの剣からは光の奔流が、リオの剣からは吹き荒れる竜巻が放たれる。

次の瞬間、互いの攻撃が衝突し、大爆発のごとく閃光と暴風が辺りに拡散した。

「きゃっ」

衝撃の余波に吹き飛ばれそうになり、距離を保って戦闘を見守っていたセリアとクリスティーナが悲鳴を漏らす。

（な、なんて戦いなの。これがリオの本当の力……）

本気を出したリオの戦闘を初めて目の当たりにし、セリアが心を奪われたように愕然とする。

リオはかつて王立学院で魔法が使えない落ちこぼれだと見下されていた。

だが、そんな評価に何の意味もない。現にリオはベルトラム王国最強の騎士と互角以上の戦いをしている。

「アマカワ卿……、アマカワ卿は無事でしょうか？」

ちょうどリオ達が戦っていた辺りを見つめながら、クリスティーナが心配そうに呟いた。爆心地一帯には風が吹き荒れ、砂埃が舞いあがっているため、何も見えない。

「たぶん……。ハルトは剣で風を操りますから、あの吹き荒れる風の中でも吹き飛ばされていることはないはずです。あ……」

セリアが答えていると、突然、爆心地に風が渦巻き、煙が急速に晴れていった。視界が良好になっていく。

そこには無傷で立っているリオと、武器を手放し倒れているアルフレッドがいた。

第１３４話　戦闘終了

リオとアルフレッドが大技を撃ち合い、互いの攻撃が衝突すると、閃光と暴風が爆発したように吹き荒れた。
砂埃が巻き起こり、爆心地一帯の視界が遮られる。
だが、ややあって爆心地の中心から渦巻くように風が吹き上がった。砂埃が巻き上げられ、急速に視界が晴れていく。
そこには武器を手放してうつ伏せに倒れるアルフレッド＝エマールと、右手に剣を握ったまま平然と立つリオがいた。

「くっ……」

アルフレッドが力を込めて立ち上がろうとする。だが、その身体は震えており、明らかに動きが鈍っていた。
リオは左手に魔力を帯びさせながら、すかさずアルフレッドに接近すると、頭部を上から押さえつけて、精霊術で強引に意識を奪う。
続けて、コートの内側から金属製の手枷を取り出すと、アルフレッドの手を後ろに回して装着させた。屈んだ姿勢から立ち上がると、ちらりと背後を振り返る。
そこにはクリスティーナが呆然と立ち尽くしており、セリアもやや呆けた顔でリオを見つめていた。
リオは視線が合ったセリアに一瞬だけ顔をほころばせると、硬直したようにたたずんでいるシャルル達に向き直る。歩いてアルフレッドの剣を回収すると、シャルル達から十メートルほどの距離で立ち止まった。

「全員、武器を捨てろ。身の安全の保障をできる権限は俺にないが、抵抗すればこの場で殺す」

非情なリオの勧告に、シャルル以外の騎士達が顔面を蒼白にする。この場には気絶したアルフレッドとシャルルを除いて六人の騎士がいるが、王国最強の騎士であるアルフレッドを真っ向からねじ伏せたリオを相手にするには心もとないと感じているのだろう。

他方、シャルルはたっぷり数秒もぽかんと口を開けていたが――、

「ふ、ふざけるな！　そんな条件で投降できるものか！？　貴様ら、命令だ。生死は問わん。奴を無力化しろ！」

と、我に返ったように喚き散らす。

すると、騎士達が逡巡しながらも抜剣した。勝ち目が薄いとわかっていても、上官の命令には歯向かうことはできないのだろう。

だが、リオは風の精霊術を発動して、一瞬でシャルルの眼前に移動すると――、

「戦闘継続の意志があるなら、あんたから殺すぞ？　その次に指揮権限がある奴も同じなら、そいつも殺す。あまり手間はかけたくないが、そっちがその気なら仕方ない。最初に死ぬのはあんただ」

左手で握ったアルフレッドの剣をシャルルの喉元に突き出して、剣呑な声で脅した。

「ぐっ……。ま、待て！　殺すな、話せばわかる！」

途端、シャルルが上ずった声でリオを制止する。

「……部下の命は犠牲にできても、自分の命は犠牲にできないか？」

リオが嘲るように言うと、シャルルの顔が紅潮しかけた。だが、

怒りで喚き散らすことはせず、表情を引きつらせて開口する。
「こ、こちらはヴァネッサ＝エマールの身柄を確保している。だから取引っ！？」
「さぞ良い剣のようだが、試し切りでもしてみようか？　いや、試し打ちか？　この剣に込められた魔術の威力はあんたも見ただろう？」
　虚勢を張って取引に持ち込もうとしたシャルルだったが、リオは躊躇なくアルフレッドの剣を喉元に食い込ませた。剣が魔力を帯びて強く発光し始める。
「ひっ。わ、わかった！　投降だ！　投降する！　だからその剣を引っ込めろ！　き、貴様ら、武装を解除しろ！」
　シャルルはその表情を凍りつかせ、泡を食ったように降参を宣言した。すると、その場にいた騎士達が次々と装備していた武器を地面に投げ捨て始める。
　リオは一先ずアルフレッドの剣に込めた魔力を霧散させることにした。だが、その切っ先はシャルルの喉元に固定させたままだ。そして――、
「おい、そこのあんた」
　と、リオは右手で握った自分の剣を鞘に収めながら、一番近くにいた騎士に呼びかけた。
「……わ、私か？」
　話しかけられた騎士が臆した様子で返事をする。

「そうだ。武器を回収してそこへ集めてくれ。急いでな。……それと、他の連中はそっちに集まって、こちらに背を向けたまま両手を挙げてくれ」

リオが頷き、他の騎士達にも淡々と指示を出していく。

騎士達は言われたとおりに行動を開始した。すると――、

「さて、シャルルと言ったな。あんたにいくつか質問する。俺の手元を狂わせたくなかったら、正直に答えろ。まず、あんたが連れてきた仲間は全部で何人だ？」

リオが騎士達の動きを横目で捉えながら、シャルルに尋問を開始する。

「……わ、私を含めて十人だ」

「この場には八人しかいないが？」

「一人はヴァネッサ＝エマールを拘束している。もう一人は連れてきたグリフォン達の世話をさせているんだ！」

「ヴァネッサさんはどこにいる？」

「す、すぐそこだ。走って一分もかからない」

シャルルはひんやりと食い込む剣先の感覚に怯えながら、リオの質問に答えていった。そうしているうちに――、

「……おい、終わったぞ」

武器を回収していた騎士が、作業を終えてリオに声をかけてきた。さらに、セリアが居ても立ってもいられない様子で駆け寄ってきて――、

「あ、あの！」

と、背後からリオに声をかけた。

「どうかしましたか？」

シャルルを見据えたまま、リオがセリアに返事をする。

「う、うん。あの子のことなんだけど……」

あの子とはアイシアのことだが、セリアはシャルルの前であえて名前を出すことはしなかった。フードの下から不安そうに、歯がゆそうにリオの背中を見据えている。

「……大丈夫です。今はこの場を何とかしましょう」

リオは一瞬だけセリアに振り返ると、優しく笑みを浮かべてみせた。少し離れた場所に立つクリスティーナと視線が合ったが、すぐにシャルルへと視線を戻す。そして、アルフレッドの剣を引っ込めると――、

「がっ！？　……うう」

シャルルの胸元を乱雑に掴んで姿勢を崩し、足払いをして地面に転ばせた。コートから手枷をもう一つ取り出すと、シャルルの手首に嵌めて拘束する。

「付いてきてくれますか？」

「う、うん」

淡々と作業をこなすリオの背中を見守っていたセリアだったが、自分が呼びかけられると上ずった声で返事をした。無様に寝転がるシャルルを憐れそうに見下ろしながら、緊張した足取りでリオの後を追いかける。

「あんたは他の騎士達と一緒に待機だ」

「……わかった」

リオに命令されて、武器を回収させられていた騎士がおずおずと歩きだす。そうしてアルフレッドとシャルルを除いた騎士達が一か所に集められた。

「よし。じゃあもっと密集して固まってくれ。お互いが触れ合うくらいにな。……そうだ、そのまま動くなよ。……セシリア、少しいいですか？」

騎士達が密着するほどに固まったことを確認すると、リオが小声でセリアに話しかける。

「うん、なに？」

「土魔法でそこの騎士達を閉じ込めてください。規模は連中をギリギリ収容できる程度で構いませんが、強度は頑丈に。それと、上部に人が抜け出せない程度の空気口を作っていただけると助かります」

「……わかったわ。任せて」

リオに頼られると、セリアが小さく深呼吸をして頷く。それで心を落ち着けたのか、表情から硬さが抜け落ちた。

「ありがとうございます」

「お礼を言うのはこっちの方よ。ありがとうね、ピンチを救ってくれて」

セリアは申し訳なさそうにかぶりを振って、微かな憂いを帯びた笑みを浮かべる。

「いえ、貴方が無事でよかったです」

「なっ……、う、うん」

セリアはリオの真っ直ぐな言葉を不意打ち気味に受け止めると、やや気恥ずかしそうに首肯した。

すると、突然――、

（……春人、ごめん）

と、リオの脳裏にアイシアの声が響いた。感情表現の希薄な彼女だが、その声はいつにも増して沈んでいる。

（アイシア……、無事だったのか。良かった。謝るのは俺の方だよ。アイシアこそ、大丈夫だった？）

アイシアの声を聞くと微かに硬直したリオだったが、すぐに気遣うように返事をする。

（……うん）

（なら本当に良かった。アイシアは今どこにいる？　こっちに来れるかな？）

（もう春人が見えるところにいる。どうすればいい？）

（とりあえずヴァネッサさんを救出する必要がありそうだ。すぐ近くにいるだろうから、アイシアは霊体化したまま引き続きセリア先

生達の護衛を頼めるかな？）
（……わかった。ごめんなさい。もうセリア達の傍から離れない）
（もういいから。セリア先生を守ろうとしてくれたんだろう？　反省点はまた後で確認しよう）
（うん）

リオはアイシアの返事を聞くと、セリアの横を通って――、

「アイシアの無事が確認できました。俺はシャルルに案内させてヴァネッサさんを保護してきます。セシリアはその間に負傷した二人の治療をお願いできますか？　すぐに戻りますから」

傍で寝転がるシャルルを見下ろしながら、そう語った。

◇　◇　◇

その後、リオはシャルルに案内させ、ヴァネッサが拘束されている場所へと向かった。そこでは――、

「おい、先ほどの爆発はどういうことだ！？　まさか貴様ら姫様を亡き者にするつもりだったというのか！？」

と、ヴァネッサが見張りの騎士二人に事情の説明を求めていた。爆発とは言うまでもなく先ほどのリオとアルフレッドの大技が衝突した際に生じた衝撃を指している。だが――、

「貴様が知る必要はないことだ、黙っていろ！」

騎士達はどこか焦りを帯びた声で、ヴァネッサの要求を一蹴していた。そんな彼らのすぐ傍では、負傷したグリフォン達がのんびり

と腰を下ろして休んでいる。

「おい、どういうことだ？　本当にクリスティーナ王女を殺したのか？」

「俺が知るか。だが、シャルル様……いや、アルボー公爵家にとってはここでクリスティーナ様に死んでいただくのが都合の良い筋書きなのかもしれない」

「ばっ、滅多なことを言うな！　俺はごめんだぞ、王族殺しの罪を背負うなど」

「俺だってごめんだ！　というより、そのためのスケープゴートがそこにいる女なんじゃないのか？　もしかするとアルフレッド様だって……」

などと、騎士二人はヴァネッサを完全に放置して、ひそひそと憶測を交えた討論を繰り広げていた。

「おい、何を話している！？　私にも事情を説明しろ！　これはどういうことだ？　何が起きている！？」

ヴァネッサが事情の説明を求め、必死に訴えかける。しかし、騎士達はもはや取り合う気すらないようで、ヴァネッサの叫びをスルーしていた。

「くっ、殺せ……。ならせめて殺してくれ。頼む、騎士の情けだ」

やがてヴァネッサが項垂れてそんなことを言い出す。捕まった状態で自分が生きていては色々と迷惑がかかると考えたのかもしれない。

騎士達はバツが悪そうにヴァネッサから顔を背けた。すると、リオに捕縛されたシャルルが姿を現し、状況が一変する。

「し、シャルル様！？」

騎士達は泡を食ってシャルルの名を叫んだ。
ヴァネッサも釣られてそちらへ視線を向けて――、

「なっ……、は、ハルト殿！？　どうしてここに！？」

と、面食らって尋ねる。

「ご覧の通りです。貴方を助けにきました。……おい」

リオはヴァネッサに告げると、先を歩かせているシャルルの背中に剣を突き出した。

「そ、その女を解放してやれ」

シャルルが怯えた顔でヴァネッサの解放を騎士達に命じる。

「はっ……？　い、いえ、しかし……」
「いいから早くしろ！　命令違反で処罰するぞ！」
「は、はっ！」

命令された騎士達は戸惑い顔で微かな抵抗をみせたが、シャルルに怒鳴りつけられると即座に行動を開始した。そうして瞬く間にヴァネッサが解放される。

「ヴァネッサさん。その二人を拘束してください」
「わ、わかった……」

リオが指示して、今度はヴァネッサが騎士達を拘束していく。

「なあ、ハルト殿。これはいったい……？」

言われるがまま騎士達を拘束していたヴァネッサだったが、いよいよ耐えかねて事情の説明を求めた。

「連中の撃退に成功しました。コウタさんとレイさんが負傷しましたが、大事ないです。どうぞご安心を」

「……ど、どういうことだ、兄上は？」

ヴァネッサが動揺した面持ちで尋ねる。撃退された存在の中にアルフレッドがいるとは想像できなかったのだ。だが――、

「無力化しました」

「なっ……」

リオが端的に事実を告げると、ヴァネッサは思わず絶句してしまった。にわかには信じがたいが、こうしてリオがこの場にいるのが何よりの裏付けとなる情況証拠である。

「気絶させて大人しくしてもらっていますが、命に別状はないはずです。その点もご安心を」

「い、いや。そういうわけでは……。は、ハルト殿が倒したのか？あの兄上を？」

「はい。そうです」

「そ、そうか……」

ひどく取り乱していたヴァネッサだったが、リオに落ち着いた調子で頷かれると、ごくりと唾を飲みこんだ。

「連中の足を奪って、あちらへ戻ります。そこのグリフォン達を鹵獲・処分しましょう」
「ああ……」
ヴァネッサが惚けた顔で頷く。それから、リオ達は二体だけ残して四体のグリフォンを処分すると、セリア達がいる場所へと戻った。

◇　◇　◇

「姫様！　よくぞご無事で！」
ヴァネッサがクリスティーナの姿を確認し、慌てて駆けだす。
「ええ、アマカワ卿のおかげでね。貴方も無事でよかったわ」
クリスティーナはわずかに相好を崩してヴァネッサに応じた。
「いえ。兄上を抑えることが叶わず、姫様を危険な目に遭わせてしまいました。面目次第もございません」
「いいわよ。相手はあのアルフレッドだったんだし、結果に問題はなかったんだから」
「……その件についてなのですが、兄上は本当に負けたのでしょうか？」
忸怩たる表情で俯いていたヴァネッサだったが、アルフレッドの名前が出ると恐る恐る事の真否を尋ねる。
「ええ、アマカワ卿が倒したわ。信じられないでしょうけれど、その……凄い戦いだったのよ」

言って、クリスティーナはちらりとリオに視線を向けた。リオはセリアと仲睦まじげに話しながら諸々の準備を整えている。

「彼は本当に何者なのでしょうか？　その強さはもちろん、普段の立ち居振る舞いといい、つい最近まで平民だったとは到底思えません。セリア君とどこで面識を得たのかも。確か十年ほど前に面識を得たと言っていましたが……」

ヴァネッサは堪らず疑問を口にした。だが――、

「無用な詮索は止めなさい。今は彼の素性を気にしている場合じゃないわ。そこにいる男から色々と話を聞かないとね」

クリスティーナがにべもなくかぶりを振って、所在なさげにたたずむシャルルへと視線を向ける。

「くっ……」

シャルルは気まずそうに視線をさまよわせた。

「お久しぶりね。シャルル卿。ご機嫌はいかがしら？」

クリスティーナは髪の色を変える魔道具を外し、ローブのフードを脱ぐと、見惚れるような作り笑いでにこやかにシャルルへと声をかけた。

「お、お久しぶりです。クリスティーナ王女殿下。ご機嫌麗しゅう存じます」

「麗しくないわよ。貴方のせいでね。先ほどは随分なご挨拶だった

じゃない。問答無用でこの私を捕縛しようとするなんて」
「……そ、そちらのフードで貴方様が王女殿下ご本人だと見分けがつかなかったものでして。緊急事態だったため、僭越ながら使命のためにも職務をまっとうさせていただきました」
「緊急事態、ね。どのような緊急事態だったのかしら？」

クリスティーナは淡々と尋問を行う。対するシャルルは明らかに臆していた。

「……そこのヴァネッサ＝エマールがクリスティーナ王女殿下とレガリアを強奪し逃亡を図ったと」
「ふうん、そう。貴方達の中ではそういうことになっているの。……じゃあ、貴方の使命とやらを聞かせてもらってもいいかしら？」
「……それは無論、姫様の身柄とレガリアの保護です」

シャルルが答えると、クリスティーナが芝居がかった様子で目をみはる。

「あら、私の身柄を保護してくれようとしていたのね。でも、お生憎様、私は自らの意志でこの場にいるの。行き先は貴方も知っているのでしょうけど、フローラともう一人の勇者がいる場所よ」
「さ、然様でしたか……」

と、シャルルは消え入るような声で頷いた。

「貴方が焦る気持ちがわかったわ。二つの聖石が勇者召喚によって消滅した今、国に残されたレガリアは一つだけだものね」

そう言って、クリスティーナがにこやかに微笑む。レガリアとはすなわち王権の象徴である。

「さ、然様です！　いくらクリスティーナ王女殿下とはいえ、レガリアを陛下に無断で持ち出すことは認められておりません。今すぐに私と一緒に王城へとお戻りいただけないでしょうか？　陛下も御心を痛めておいでです」

シャルルはここぞとばかりに力強く語ってみせた。

「相変わらず口のよく回る男だけど、やっぱり焦っているみたいね。少し早とちりしているんじゃない？　いつ私がレガリアを持っているなんて言ったかしら？　まあ仮に国の正当な後継者である私とフローラに唯一のレガリアを持って勇者に合流されると、貴方の実家にとってはとても面白くないんでしょうけれど」

「こ、これは異なことを。そのようなことはございません」

挑発するように語るクリスティーナに、シャルルは作り笑顔を浮かべてかぶりを振る。

「……まあ、いいけどね。とりあえず、貴方とアルフレッドにも私達に同行してもらいましょうか。話はその間に聞いてあげるわ。それと、私を襲った件の処分も目的地に着くまでの間は保留にしてあげる」

要するに体の良い捕虜になるということだ。腐ってもアルボー公爵家の人間である以上、人質としての価値は高い。

「ぐっ……」

シャルルは何か言いたげにしていたが、唇を噛みしめて堪えていた。すると、そこへセリアがリオを連れてやってくる。

「クリスティーナ様、出発の準備が整いました。コウタ君とレイ君も直に目を覚ますと思います」
「ありがとうございます。では、彼らが目を覚ましたら出発しましょうか」

などと、クリスティーナとセリアが言葉を交わすと――、

「姫様、他の騎士達はいかがなさいますか？」

と、ヴァネッサが尋ねた。

「この場に置いていくわ。そんなにぞろぞろと連れていっても管理できないしね。あまり意味はないかもしれないけど、貴方の罪を否定するように伝えさせておきましょう」
「ご厚情、痛み入ります」
「当然のことよ。貴方はよくやってくれているしね」

クリスティーナはどこか申し訳なさそうに首を左右に振る。

「恐れ入ります。……グリフォンを二体鹵獲しましたので、シャルルを紐づけて歩かせましょう」

言って、ヴァネッサはクリスティーナに深く頭を下げた。すると――、

「……出発の前に一つ。その男に尋ねておきませんか？　どうして私達の居場所がわかったのか」

リオがシャルルを見やりながら、おもむろに提案する。

「そうね。もちろん聞かせてくれるわよね、シャルル卿？」
クリスティーナは有無を言わせぬ物言いでシャルルに水を向けた。
「じょ、情報が入ったのです。クリスティーナ王女殿下に似た女性をそこの街で見かけたと」
シャルルがややどぎまぎした様子で答える。
「私に似た女性って……。街中で素顔を見せた覚えはないし、変装もしていたのだけれど、どこの誰が言ったのかしら？」
「それは……極秘の情報網からです」
「それを教えなさいと、私は命じているのだけれど？」
言い渋るシャルルに、クリスティーナが冷たい眼差しを送る。
「い、いえ。それは……」
「どうして貴方がそこまで情報源を隠そうとするのか知らないけれど、貴方が言いたくないというのなら、貴方の部下かアルフレッドに訊くまでね」
「ぐっ……」
シャルルはひどく逡巡した顔つきになると、とうとう重い口を割ることになった。
「し、知り合いの外交官です」
「外交官？　名前と所属国は？」
クリスティーナは訝しげに質問する。

「……名はレイス殿。所属はプロキシア帝国です」

シャルルが答えると、リオの表情が微かに強張った。

（……アイシア。君を襲った男は確かにレイスと言ったんだよね？）

（うん。配下に春人を襲わせて、セリア達から分断させたのもその男）

（わかった。また後で話をしよう）

（うん）

などと、リオはアイシアと秘密裏に念話のやり取りを行う。

「……貴方が言い渋るわけね。プロキシア帝国の外交官がどうして貴方と密に連絡を取り合っているのか、少し詳しく事情を聴く必要があるかしら。その男の情報を鵜呑みにしてこの場へやってきたあたり、随分と信頼しているようだしね」

言って、クリスティーナは冷めた視線をシャルルに向ける。

「べ、別にやましいことは何もしておりません！　痛くもない腹を探られたくないだけです。内憂で国が荒れている今、私は少しでも国交関係が良くなればと！」

「だからかつての仮想敵国の外交官に国内を好きなように闊歩させているというわけかしら？　その男、どうやって逃亡中の私の素性を知ることができたのかしらね？　随分と我が国の情報収集に熱心みたいだけど」

「そ、それはっ……！」

クリスティーナの咎めるような物言いに、シャルルが熱くなって

反論の言葉を探そうとする。だが、咄嗟には上手い糸口が見つからなかったのか、言葉に詰まってしまう。

「まあ大人しくしているのなら、移動中の命の安全は保障してあげるわ。まだ目的地は先だし、快適な旅路とは言えないけどね。ヴァネッサ」

「はっ！」

クリスティーナの声に呼応して、ヴァネッサが動きだす。シャルルの手枷に鎖と紐を備え付けると、グリフォンの背にある鞍と結びつけてしまった。

「き、貴様！　よくもアルボー公爵家の私にこのような仕打ちを！」

「黙れ、護送用の馬車すらないのだ。我慢しろ」

騒ぎ立てるシャルルだったが、ヴァネッサは気絶しているアルフレッドの手枷にも同じように鎖と紐を備え付けていく。だが、アルフレッドは目覚める様子がなかったので、そのまま鞍に乗せて縄で縛って固定する。

それから間もなくして、リオ達はベルトラム王国とガルアーク王国との国境に向かった。

◇　◇　◇

「ぐっ……ここは？」

ベルトラム王国最強の騎士――アルフレッド＝エマールは、揺れるグリフォンの背中で目を覚ました。身体を起こそうとしたが、紐で背中に固定されているのか、首しか自由に動かすことができずに断念する。

「兄上、目を覚まされたか」

グリフォンに並んでアルフレッドとシャルルの様子を油断なく見張っていたヴァネッサだったが、アルフレッドが起きたことに気づいて声をかける。

「……ヴァネッサか。ここはどこだ？」

アルフレッドは状況を即座に理解したのか、脱力し落ち着いた声でヴァネッサに質問した。

「……ガルアーク王国の国境にある関所に到着するところです。貴方は負けました」

ヴァネッサが少し警戒した声色で答える。

「わかっている。いや、そうか……。私は負けたか」

言って、アルフレッドは憑き物が落ちたような笑みを口許に覗かせた。

「兄上にはシャルルと共に我々と同行してもらうことになった。妙な真似は控えていただきたい」

「剣を失った今の私にできることなどない。好きにするといい。どこへでも付いていこう」

「……そうか。色々と話を聞いておきたいところだが、関所に着いた。後で姫様の前で話をしてもらう」

「了解した」

そうしてアルフレッドが上空を仰ぎながら頷くと――、

「止まれ！」

と、進行方向から声が響いた。関所を守る兵士のものだ。

リオ達が立ち止まり、グリフォンも歩みを止める。

「……怪しいな。貴様ら何者だ？　そこの連中はフードを取れ」

関所の門にたたずんでいた兵士の一人が近寄ってきて、訝しそうにリオ達に誰何した。

先頭に立つリオはフードを外しているが、クリスティーナやセリアはフードで顔を隠しているし、後ろには罪人のごとくグリフォンに紐づけられたシャルルがいるから、怪しまれるのも無理はない。

だが――、

「ガルアーク王国名誉騎士ハルト＝アマカワと申します。関所を通って国内に入りたいのですが、何か手続は必要ですか？」

リオが素性を明らかにすると、兵士の顔つきが明らかに変わった。

「し、失礼しました！　貴族の方でしたか。身分を証明する物はお持ちでしょうか？」

「陛下より賜った名誉騎士の徽章です。これで大丈夫でしょうか？」

リオがローブを捲って、襟元に着けた徽章を見せる。

「も、もちろんです！　どうぞお通りください！」

兵士は萎縮した様子でリオに通行許可を与えた。サッと後ろに引

いて、リオ達が通れるように道を開ける。

「お、おい、いいのか。せめてもう少し検査するなり、隊長に許可を仰いだ方が」

「馬鹿、知らないのか？　名誉騎士と言ったら伯爵相当の地位だぞ。後で何かケチでもつけられてみろ。俺らの首くらい簡単に飛ぶぞ」

「なっ……」

などと、控えの兵士が許可を与えた兵士に話しかけて、ひそひそとやりとりを行う。

（……なんだかんだでこういう時は肩書きはあった方が便利だな。まあ、普段は空を飛んで越境するから必要ないけど）

リオは微苦笑し、貴族社会における身分の有用さを再認識した。

その後、すぐに無事に関所を越えて、ガルアーク王国の領土に入ると――、

「これでベルトラム王国軍から表立って追跡を受ける危険は無くなりました。まずは少し北上したところにあるアマンドという都市に寄ってみませんか？　知り合いの貴族の方がいるので、レストラシオンの情報を聞けるかもしれません」

と、リオが提案する。

レストラシオンの本拠地はベルトラム王国の北東部にあるロダン侯爵領だが、フローラがそこにいるとは限らない。二度手間になることを避けるためにも、居場所を踏まえた上で向かう方が効率的だろうと考えてのことだ。

「アマカワ卿に頼りきりで心苦しいのだけれど、お願いしてもいい

かしら？」

クリスティーナが申し訳なさそうに頷く。

そうして、リオ達は一先ずアマンドを目指すことになった。

第135話　手がかりと足がかり

リオ達はガルアーク王国最南西部の国境付近に位置する都市を訪れていた。

まずは宿を手配すると、取り調べを兼ねてアルフレッドとシャルルの見張りをヴァネッサ達に一任する。その間にはリオはセリアと一緒に都市の中で買い物に繰り出すことになった。目的はアマンドまでの交通手段を手に入れるためである。

というのも、ガルアーク王国の領土に入った以上、もはやベルトラム王国軍の捜索を気に病み人目を忍ぶ必要がなくなった。なので、ここから先の移動は馬車を用いることが決まったのだ。

ちなみに、アイシアは念のために霊体化させたまま宿屋に残ってもらっている。

「浩太さんや怜さんと一緒に宿で待機していてもよかったんですよ？　旅の疲れが残っているでしょう」

と、リオが隣を歩くセリアに語りかける。

「大丈夫。それほど疲れていないし、シャルル……あの男の近くにはあまりいたくないからさ。移動中はずっとフードを被りっぱなしだったし、部屋に閉じこもりっぱなしっていうのもね」

セリアは苦笑してかぶりを振った。

「ならいいんですが……、やはりあの男にセシリアの素性は伏せたままに？」

「今のところはね。これから先、あの男の扱いがどうなるかはわか

らないけど、実家に迷惑がかかるかもしれないし」
「わかりました。道中は色々と窮屈な思いをするかもしれませんが、協力します。何か不便なことがあったらいつでも言ってください」
「……うん、ありがと」

礼を言って、セリアは照れくさそうにはにかんだ。

「じゃあ、馬車を買う前に、息抜きがてら少し寄り道をしましょうか。ここまで張りつめっぱなしでしたからね。何かご要望はありますか？」

リオが相好を崩し、そんな提案をする。すると、セリアはわずかに目を丸くしてから、おずおずと口を開いた。

「え？　そう？　……じゃあ、リオと少しゆっくりお話がしたいかな」
「俺とですか？　そりゃ時間が許す限りはいくらでも付き合いますけど、そんなことでいいんですか？」

今もしているじゃないですか――と、リオが窺うようにセリアを見やる。

「う、うん。だってここ最近、二人きりで話をすることってなかったじゃない。周囲には他の人達がいたし、そういう空気じゃなかったというか」

セリアはやや上ずった声で語った。

「確かに……。なら、久しぶりにお茶でも飲みましょうか。近くに良い店がないか、探してみましょう」

リオは頷くと、喫茶店を探すべく周囲を見回し始める。

「うん！」

セリアは嬉しそうに返事をして、弾んだ足取りでリオの隣を歩いた。

◇　◇　◇

その後、セリアと穏やかなひと時を過ごし、馬車を購入すると、リオはクリスティーナ達が滞在する宿屋へと戻った。

「ただいま戻りました」

リオがノックしてクリスティーナ達がいる室内に入室する。そこではクリスティーナとアルフレッドが涼しい顔をしている一方で、何故かヴァネッサが渋面を浮かべているのが印象的だった。

「お帰りなさい、アマカワ卿。ちょうど良かったわ。貴方の話も聞きたかったの。少しいいかしら？」

と、クリスティーナがリオを迎え入れ、しれっとした面持ちで尋ねる。

「ええ、構いませんが……」

リオは室内の雰囲気をそれとなく探りながら首肯した。

「なら、腰を下ろしてちょうだいな。……ヴァネッサ、貴方はあの

二人の代わりにシャルルの見張りでもしていなさい」
「……しかし、姫様」
ヴァネッサが目をみはり、咄嗟に食い下がろうとする。しかし――、
「いいから。少し頭を冷やしなさい。他の二人にも休んでもらう必要があるでしょう？」
「……承知しました」
にべもなくクリスティーナに命じられると、ヴァネッサは渋々と退室した。
室内にはリオ、クリスティーナ、アルフレッドの三人だけが残される。
「それで、お話というのは？」
椅子に座ってクリスティーナに向き合うと、リオが用向きを尋ねた。
「アルフレッドのことよ。色々と取り調べをしたのだけれど、実際の行動と聴取した内容とにズレがあると感じたの。ご覧の通り、貴方に倒されてからは随分と大人しくなっているし、シャルルがいないところでは色々と協力的になってもいるけれど……。いまいち真意を測りかねている、といえばいいのかしら」
クリスティーナはちらりと脇に視線を向け、下手に身動きが取れないように拘束されているアルフレッドを見やった。
「と、仰いますと？」

「アルフレッドは私を実力行使で捕らえようとしたわ。立ちふさがった実の妹であるヴァネッサのことを手にかけようともしたし、貴方と激戦まで繰り広げた。でも、それは本意ではなくて、そうしなければならない事情があったから。こうして捕縛された以上は私の好きなように処分してほしい。シャルルがいないところで、本人がそう言ったの」

「なるほど……。ちなみに、その事情とやらを伺っても？」

リオがアルフレッドを見やりながら、クリスティーナに尋ねる。アルフレッドは感情の読みにくい顔つきで沈黙を貫いていた。

「一つはシャルルに従うように王命を受けていたから。もう一つは国内でのエマール家の立ち位置が危うくなっていて、シャルルに従わないと家の存続が危ぶまれたから。端的に言うとそんなところね」

アルフレッドには貴族として国内での立場があった。その立場を保つためにも、表面上はシャルルに恭順する姿勢を見せておく必要があったのだろう。だが、そのシャルルと共に捕まった時点で、アルフレッドの立場は捕虜へと変わった。

なので、少なくともシャルルがいる前以外では、当のシャルルに配慮する必要がないというのは理解できる。実際、アルフレッドはクリスティーナに協力的な姿勢を見せているという。

「つまり、シャルル卿に従っていたのは本意ではなかったと。とはいえ、ここで翻意してしまっては、王命に背くことになると愚考しますが……。一応、陛下はアルフレッド卿に殿下の捕縛をお命じになったのでしょう？」

と、リオは率直に自らの所感を述べた。

「そうね。王の剣であるアルフレッドにとって王命は絶対よ。捕虜になった今この時も、その王命は有効であってしかるべき。形式的にはね」
「……クリスティーナ王女殿下は、アルフレッド卿が殿下の捕縛以外にも王命を与えられているはずだと？」
「その通りよ。熱くなったヴァネッサの前では聞きそびれちゃったけどね」

頷いて、クリスティーナが小さく肩をすくめる。

「なるほど……。しかし、となると、このまま私が耳に挟んでいい話にも思えません。やはり今からでもヴァネッサ殿と入れ替わった方がいいのでは？」

やんごとなき話の流れを察し、リオが申し出た。

「構わないわ。今のヴァネッサは少し冷静さを欠いているから。もちろんここで見聞きしたことをあまり他言してほしくはないけれど、話の内容如何で貴方に不利益を課すような真似はしないと約束する。だから、お願いできないかしら？」

クリスティーナはかぶりを振って、やや遠慮がちにお願いする

「……承知しました。そういうことでしたら」

リオは微かに逡巡すると、笑みを取り繕って頷いた。すると――、

「ありがとう。……そういうわけよ。アルフレッド、聞かせてちょうだい。貴方はお父様からどのような役割を与えられたのかしら？
単純に私を捕縛しろと命じられたわけでもないのでしょう？」

クリスティーナがアルフレッドに水を向ける。

「……出発にあたり、陛下からはこう仰せつかりました。シャルルに付いていき、己が使命を……クリスティーナ王女殿下をお守りしろと」

「……それだけ？」

アルフレッドが硬い声で答えると、クリスティーナは怪訝そうに顔を曇らせた。

「はい」

と、わずかに逡巡した面持ちで頷くアルフレッド。

クリスティーナはやはりたっぷり逡巡して――、

「……つまり、どういうことなのかしら？」

と、そう尋ねた。

「陛下より賜わった私の責務は貴方をお守りすることです」

そんな要領を得ないアルフレッドの回答に――、

「その割には随分と容赦がないように感じたのだけれど。アマカワ卿が現れなければ、私は確実に貴方に捕縛されていたはずよ。まさか、あの後、翻意してシャルルを裏切るつもりだったとでも言いたいのかしら？」

クリスティーナは微かな苛立ちを込めて問いかける。

「……」

しかし、アルフレッドは何も反論しない。視線を下に向け、何か堪えるように黙っている。

すると、クリスティーナはその美貌をしかめて――、

「黙っていてもわからないのだけれど。何とか答えなさいよ。つまり、私を保護して王城へ連れ帰るのが貴方の使命だったというわけ？」

と、やや棘のある声で訊いた。

「クリスティーナ王女殿下。国王陛下の真意は私などにはお察ししかねますが、貴方が王城を発たれたのはどうしてですか？」

リオが見かねてクリスティーナに質問する。

「っ……、わかっているわ。わかっています」

クリスティーナはキュッと唇を噛んで頷いた。自分に城から出て行けと命じたのは、他ならぬ父だ、と。

だからこそアルフレッドの真意を測りかねて苛立っているのだが、リオの発言でとりあえずクリスティーナは落ち着きを取り戻した。

「出過ぎた真似を、失礼いたしました」

リオが畏まって謝罪の言葉を口にする。

「……いえ、おかげで少し冷静になれたわ。知らぬ間に熱くなって

いたみたい。ありがとう」
「お礼を賜わるようなことは何も」
クリスティーナが忸怩たる面持ちで礼を言うと、リオはゆっくりとかぶりを振った。
「……実際に剣を交えたアマカワ卿の意見を聞かせてくれないかしら？　アルフレッドの真意がどこにあるのか」
と、クリスティーナは小さく息をついてリオに尋ねる。
「少なくとも今この時点で嘘は言っていないように思えます。ただ、参考になるかはわかりませんが、戦闘中、アルフレッド殿の動きに何か迷いのようなものを感じました」
リオは落ち着いた声で語った。
「……本当に？　とても手を抜いて戦っていたようには見えなかったのだけれど」
クリスティーナが訝しげな表情を浮かべる。
「確かに手は抜いていなかったはずです。ですが、出しうるすべての手札を出し切っていたわけでもなかった――というより、攻めきろうとしなかったとでも言えばいいんでしょうか」
「……どういうこと？」
「単純にクリスティーナ王女殿下を捕らえることが目的なら、殿下達が避難を始めた時点で攻めに踏み切るべきだったんです。人質の一人でもとれば状況は一変する。なのに、アルフレッド卿は殿下達の避難が完了するまで攻勢に回ろうとはしなかった。それどころか、

どこか余力を残しているとすら感じました」
「……仮にそうだとしても、アルフレッドは何を迷っていたというの？」

クリスティーナは逡巡した顔つきで質問した。

「おそらく――クリスティーナ王女殿下を保護して王城へ連れ戻すか、そのまま付き従って行動を供にしながら貴方を守るのか――ではないでしょうか。アルフレッド卿の供述通りなら、陛下が下した命令は少し抽象的なように思えます。どちらとも解釈できますから」

リオが考えるようにそこまで語ると、クリスティーナはハッと目を見開いた。同時に、アルフレッドの表情もピクリと動く。

クリスティーナはアルフレッドの表情の変化を見逃さずに捉えたのか、じっとその顔を見つめている。

確かにクリスティーナを連れ戻したいのならはっきりと連れ戻せと命令すればいいのだ。守れ、という表現はいまいち不明確である。

「アルフレッド卿も一人の人間です。王に忠誠を誓った王の剣とはいえ、家族を始め他にも守らなければならない存在がたくさんいるのでしょう。だから、軽率に動くわけにはいかず、どう動くべきか迷っていた。おそらくですが、陛下もそれを踏まえてどちらとも取れる命令を下したのではないかと」

と、リオは追加でそう語った。

「……なるほどね」

頷き、クリスティーナはキュッと唇を噛みしめる。

「とはいえ、おそらく今のアルフレッド卿はクリスティーナ王女殿下に後ろめたい気持ちを抱いているのではないでしょうか。責務と私情を秤にかけてしまったことを。殿下に自身の処分をお任せしたのも、そういった念から発した言葉ではないかと」

リオは言葉を選ぶようにクリスティーナに語りかけた。

「……アルフレッドが私に処断されることを望んでいると？」

「断言はできません。あくまでも第三者的な立場にいる私の推測にすぎませんから」

リオは困ったように笑みを浮かべ、かぶりを振る。

「どうなのかしら、アルフレッド？」

クリスティーナがアルフレッドを見やって問いかけた。

「……いえ、私は……」

アルフレッドはバツが悪そうに視線を逸らし、言葉に詰まった。しばし沈黙が下りる。すると――、

「もういいわ。貴方の処分は捕虜のまましばらく保留するから。我慢しなさい」

と、クリスティーナが嘆息して言う。

「……承知しました」

アルフレッドは所在なさげに頷いた。

「アマカワ卿、ありがとうございました。おかげで色々と冷静に整理することができたわ」

礼を言って、クリスティーナはリオに小さくお辞儀する。

「おやめください。大したことはしていません」

「そんなことはないわ。貴方がいなければ、こうして私がここまでたどり着くことはできなかったもの。とっくに王城へ連れ戻されていたはずよ。旅を終えたら、きちんとした形でお礼をさせてちょうだい」

「私はあくまでもセシリアの付き添いにすぎません。お礼ならば彼女へ」

リオはきっぱりとかぶりを振った。

「まあ、もちろん彼女にもお礼はしたいのだけれど……」

クリスティーナはどこか悩ましげに顔を曇らせる。

「今はアマンドへ向かうことだけを考えましょう。馬車を買いましたから、明日からの旅路は少し楽になるはずです」

「……ええ、そうね」

「それでは、私はこれで。シャルル卿のいる部屋へ、アルフレッド卿をお連れします。殿下もお疲れでしょうから、自室にお戻りになるとよいでしょう」

と、リオはさっさと話を切り上げ、立ち上がった。

◇　◇　◇

その日の晩、フロアごと借り切った宿の一室で、リオはアルフレッドとシャルルの二人を見張っていた。
魔封じの枷と呼ばれる魔道具で魔力を封じ込め、物理的に拘束もして動きは取れないようにしているが、念には念を込めてである。

「くそっ！　どうして私がこのように粗末なベッドで……」

シャルルがぶつぶつと不満を漏らしながら、ベッドに横たわっている。自分が捕虜になった事実を受け入れられないのか、心ここにあらずでずっとこんな調子だ。
アルフレッドは沈黙を貫いており、他方で――、

（精霊に似て非なる存在、か。レイスという男……得体が知れないな。こちらの行動をも把握していたみたいだし、どうしてそんな男がプロキシア帝国の外交官をやっているんだか。本当に何者なんだろう）

リオはリオでアイシアと念話で情報交換の真っ最中だったりするので、室内にはシャルルの愚痴ばかりが響いていた。
今のリオはアイシアからレイスに関する話を聞いて、考察しているところだ。

（ごめん、こちらの行動が読まれていたのは、私の存在が感知されたからだと思う。精霊同士は霊体化していても互いにその存在を感知できるけど、強力な精霊ほど存在感も強くなるから……。それに、私が戦っている間に空を飛んで逃げていったから。捕まえられなかった）

と、リオの脳裏にアイシアの申し訳なさそうな声が響く。悔いて

いるのか、いつにも増して饒舌だった。

（いや、何を目的に行動を共にしているのかは確かに気になるけど、レイスがあの男――ルシウスと繋がりがあるとわかっただけでも僥倖だよ。それに、強力な魔物を使役していたんだろう？　どんな手を隠し持っているかもわからないし、罠の可能性だってあった。深追いはしないで正解だ。こっちこそアイシアにばかり面倒な役割を押しつけて……ごめん）

リオがアイシアを気遣うように語り、謝罪する。

（私は大丈夫）

アイシアは端的にそう言った。

（ありがとう。……結局、橋で待ち伏せしていた連中からは大した情報を得られなかったから、今はアイシアの情報だけが頼りだ）

アレイン、ルッチ、ヴェンの三人と彼らに雇われた冒険者達を撃退したリオだったが、結局、大した情報を引き出すことはできなかった。

セリアがアルフレッドを牽制するために放った《雷撃雨魔法（サンダーレイン）》の轟音を察知したからだ。極度の緊張状態にあったセリアがリオを呼び寄せることを意図して強力な魔法を放ったわけではないが、リオがアレイン達と戦闘していた地点までさして距離がないのが幸いだった。

リオは即座に取り調べを中断し、アレイン達を放置したまま慌ててセリアのもとへ駆けつけたというわけである。すべての戦闘が終了した後、アレイン達を放置した地点にアイシアへ飛んでもらいはしたものの、そこには雇われた冒険者達がいただけだった。

（レイスはルシウスが北方のどこかにいると言っていた。どうする？）
（どこまで信じていいかは疑問かな。レイスがプロキシア帝国の外交官というのはわかったけど、ルシウスもプロキシア帝国にいるとは限らない。けど、今はそんな手がかりでも行動せずにはいられない……。だから、アイシア、その……）

と、リオが言いよどむと――、

（わかっている。私なら急いで精霊の民がいる里へ行かなくても大丈夫だから。先にそっちを優先しよう？）

アイシアが抑揚のない声でそう言った。

（……ありがとう、本当に。なら、セリア先生を送り届けたら、北方に向かってみようか）
（うん）

リオが提案すると、アイシアが短く返事をする。そこで会話は途切れ、リオは小さく息をついた。そして、しばらくして――、

「……少年、一ついいだろうか？」

と、ベッドに腰を下ろしていたアルフレッドがおもむろに口を開いた。

「何でしょうか？」

リオがアルフレッドを見据え返事をする。

「君はベルトラム王国の人間か？　クリスティーナ王女殿下はアマカワ卿と呼んでいた。だが、そのような家名の貴族に心当たりはない。君ほどの実力を持った者が完全に無名だったとは思えないが、少し気になった」

と、アルフレッドが質問を口にすると――、

「そ、そうだ、貴様だ！　貴様さえいなければ、このようなことには……！」

シャルルも勢いづけられたように言葉を発した。先の戦闘終了後からどこかリオのことを恐れている節のあるシャルルだが、アルフレッドが口を開いたことで便乗したのだろう。

「……買いかぶりすぎですね」

リオは苦笑してかぶりを振る。だが――、

「し、質問の答えになっていない！　貴様はベルトラム王国の人間なのか？」

シャルルが上ずった声で食い下がった。

「だったらどうするんです？」

「ど、どうもしない」

リオが訊くと、シャルルが怯む。すると――、

「その男のことだ。弱みがあるのなら握っておこうとでも考えてい

るのだろう。少年、答えたくないのなら答えなくてもいい」
アルフレッドが嘆息して言葉を挟んだ。
「アルフレッド！　き、貴様、そ、そのようなことあるはずなかろう！」
明らかに動揺した様子のシャルル。
リオは呆れたように笑みをこぼすと――、
「答える代わりに、こちらからも訊きたいことがあります。貴方達がその情報を知っていて、私に教えてくれるのなら、答えてもいい。どうします？」
と、交換条件を持ち出した。
「内容による。流石に国家機密を訊かれれば答えることはできない」
アルフレッドは冷静に回答する。
「ある男の現在の所在を知りたいだけです。おそらく貴方達がご存じの」
「……誰のことだ？」
「ルシウス＝オルグィーユという男です。かつて王の剣の候補だった」
リオがルシウスの名を告げる。
すると、アルフレッドは目を見開いた。
「ま、まさか貴様、あの時の！？　クレイアで我々を襲った男だな

！　ルシウスのことを訊いてきただろう！」

シャルルが得心したのか、泡を食ったように叫ぶ。

「そうだとしたら？」

リオは落ち着いた声で訊き返した。

「き、貴様のせいで私の部隊は小さくない損害を被ったのだ！　私の部下だって死んだ！　私の顔に泥ばかり塗りおって、くそ！」

「そちらに作戦があったように、こちらも作戦があって行動していました」

「なんだと！？」

淡々としたリオの返事に、シャルルが食ってかかろうとする。だが――、

「止めろ、シャルル。武装し、互いに大義を抱いた上で戦ったのだ。ならばたとえ誰かが死んでも、どちらからも文句は言えない」

「ぐっ……」

アルフレッドに諌められ、シャルルが渋面を浮かべた。すると、アルフレッドはリオを見据え、開口する。

「少年。過去のことならばともかく、あの男が今どこで何をしているのかは知らない」

「そうですか……、残念です。まあ、私のことは機会があればクリスティーナ王女殿下から伺うことができるでしょう」

さほど期待はしていなかったが、リオは少しだけ落胆したように

声のトーンを下げた。

「……君は奴とどういった関係なのだ？　過去のことでよければ私が知っていることを話すが？」

「古い知り合いで、腐れ縁のようなものですが……、別にあの男の過去が知りたいわけではないので、遠慮しておきます」

窺うように提案してきたアルフレッドに、リオは苦笑してかぶりを振る。

そして、ややあって――、

「早く寝た方がいいですよ。明日からまた移動が始まりますから」

と、リオはそっけなく告げた。その後、室内には再び静寂が戻る。

翌朝、リオ達は都市を発つ。アマンドに到着したのは、数日後のことだった。

第１３６話　今日より明日へ

現在、リオはクリスティーナとセリアを引きつれ、アマンドにあるリーゼロッテ邸を訪れていた。残りの面々は手配した宿屋に待機させている。

そして、リオが精霊の民に作ってもらった黒亜竜製の装備を身に着ける一方で、クリスティーナとセリアは貴族服を着ていた。

「貴方は……ハルト様ですね。ようこそいらっしゃいました」

軽く面識のある門番の兵士がリオに気づき、笑顔で歓迎の言葉を投げかける。

「お世話になっております。急な訪問で誠に申し訳ないのですが――」

「ハルト様！」

リオがアポなしの訪問を詫びて用件を明らかにしようとすると、敷地内から女性の声が聞こえてきた。

声の主は仕立ての良い侍従服を着用した十代後半の美人で、見苦しくない動作で素早く駆け寄ってきている。

リオは近づいてきた女性がリーゼロッテの侍従の一人、コゼットだと気づくと――、

「こんにちは、コゼットさん」

と、にこやかに挨拶した。

「お久しぶりでございます。ようこそおいでくださいました」
コゼットはロングスカートの布地を両手で軽く摘まみ、淑女然と挨拶を返す。だが、リオの背後にいるクリスティーナとセリアの顔を目視すると――、
（すごっ……。リーゼロッテ様並み。身なりからして、貴族？）
二人の美しさに、小さく目をみはる。容姿には自信のあるコゼットだが、クリスティーナとセリアの二人には敵わぬと即座に直感した。
正直、リオと二人の関係が気になったが、そんな内心はおくびにも出さず――、
「恐れ入りますが、本日はどのようなご用件でいらっしゃいますか、ハルト様？」
と、用向きを尋ねる。
「ご多用のところ誠に申し訳ございませんが、リーゼロッテ様にお会いしたく参上しました。お時間を頂戴したいのですが、ご都合のよろしい日時にご予約を頂けないでしょうか？」
「なるほど……。今ならすぐにお会いになれるかもしれません。確認しますので、とりあえずどうぞ中へお入りください。ご案内いたします」
「ありがとうございます。今日はこちらの二人をリーゼロッテ様にご紹介したいと考えておりまして、とりあえずは重要人物である……とだけ。お手数をおかけしますが、よろしくお願いします」
と、リオはクリスティーナとセリアを見やり、含みを持たせた言

い方で面会の目的を打ち明けた。

「……承知しました。そのように主に伝えさせていただきます。では、こちらへ」

コゼットは恭しく頷くと、リオ達を案内するべく歩き始める。道中、ちらりと背後を振り返ると――、

「ところで、ハルト様。伺いましたわ。名誉騎士になられたとか。おめでとうございます」

と、恭しく祝いの言葉を贈る。

「ありがとうございます」

リオが小さくはにかんで礼を言う。その後、控え室に案内され、リオ達は十分もしないうちにリーゼロッテと面会することになった。

◇　◇　◇

リオ達が控え室から応接室に案内されると、そこにはリーゼロッテが待ち構えていた。すぐ傍には侍従長であるアリア＝ガヴァネスの姿もある。

「ようこそおいでくださいました、ハルト様……いえ、アマカワ卿」

リーゼロッテは淑女然とした所作でリオにお辞儀をした。アリアもそれに倣う。あえてアマカワ卿と呼び直したのは、見ず知らずの変装したセリアとクリスティーナの存在を意識しているからだろう。

「本日は突然の参上にもかかわらずご対応いただき、誠にありがとうございます。リーゼロッテ様」

リオは恭しく頭を下げて応じた。クリスティーナとセリアもそれに続く。

「アマカワ卿のご来訪とあらば、いつでも大歓迎です。どうぞ、まずはお座りください」

リーゼロッテに促され、リオ達は応接用のソファに腰を下ろした。すると、アリアがスッと動いてお茶を淹れ始める。そして――、

「こうしてアマカワ卿とお会いするのは王都の夜会の時以来ですね」

と、リーゼロッテが穏やかな笑みを浮かべて開口した。

「まだそんなものでしたか……」

まだ夜会の時からおよそ一カ月程度しか経っていない。だが、ずいぶん中身が濃い一カ月だったなと、リオは苦笑する。

「その御様子ですと中身の濃い月日を過ごされたようですね」

リオの顔色を窺い、リーゼロッテが言った。

「ええ、それなりに。実は今もその延長線上におりまして……、コゼットさんから既にお聞き及びのことと存じますが、本日はこちらの二人をリーゼロッテ様にご紹介したく参上しました」

リオが左右に座るクリスティーナとセリアを見やりながら答える。

「……拝見したところ、お二人とも貴族のご令嬢のようですが。込み入ったお話がおありでしたら、アリアは外させた方がよろしいでしょうか？」

リーゼロッテはクリスティーナとセリアの格好や立ち居振舞いからその素性を推測すると、窺うように申し出た。

「いえ、構わないとのことです。それに、二人のうち一人は、アリアさんのご友人ですから」

言って、リオはちらりとセリアを見やる。

「アリアの……ですか？」

リーゼロッテは小さく目をみはり、アリアに視線を向けた。

お茶を淹れ終えて脇に移ったアリアだったが、水を向けられてセリアの顔を見やる。すると、どこか既視感があったのか、微かに目を細めた。

「私よ、アリア。セリア＝クレール」

セリアは苦笑すると、装着していた首飾りを外した。瞬間、魔道具によって変化していた髪の色が白銀に戻る。ついでに変装用に結んでいた髪を解いた。

「セリア……ですか。驚きました」

普段は寡黙なアリアだが、目を見開いて呟く。

「ええ。久しぶりね。……リーゼロッテ様におかれましてはお初にお目にかかります。ベルトラム王国クレール伯爵家長女、セリア＝クレールと申します。諸事情がございまして、素性を伏せたまま参上した無礼をお許しくださいませ」

セリアはアリアに微笑みかけると、リーゼロッテに折り目正しく頭を下げた。

「……ガルアーク王国クレティア公爵家長女、リーゼロッテ＝クレティアと申します。ベルトラム王国の天才魔導士と名高いセリア様にお目にかかれて光栄ですわ。……以前、風の噂でセリア様が失踪なさったと伺いましたが、それが真実なら、素性を伏せておく必要があったであろうことは重々認識しております。どうかお気になさらず」

リーゼロッテは意表を突かれたものの、流石というべきか取り乱すことなく挨拶を返した。

冷静に考えればリーゼロッテにしても失踪中とされているセリアに堂々とやってこられても困るだけだ。情報というのがどこから漏れるかわからない以上、どこに目撃者がいるかもわからないのだから。変装してやってきたのはリーゼロッテに対する配慮でもある。

髪の色を変えた魔道具の正体についてはかなり気になったが、話の腰を折るわけにもいかないので、現時点では言及せずに頭の隅に留めておくだけにした。

「驚かれたことと存じますが、諸々の事情は追って説明いたします。今はこちらのお方の紹介もさせていただきますよう、お願い申し上げます」

と、リオはリーゼロッテの心情を気遣いながら、クリスティーナ

の紹介に話の流れを持っていこうとする。

「承知しました。お気遣いいただき、ありがとうございます」

リーゼロッテはにこやかに笑みを浮かべてみせると、リオに礼を言った。すると――、

「お取り次ぎいただき感謝します、アマカワ卿。ここは私から自己紹介させていただいてもよろしいかしら？」

と、クリスティーナが表情を引き締めて申し出る。

「仰せのままに」

リオは恭しく頷いた。

「私はクリスティーナ＝ベルトラム。ベルトラム王国の第一王女です。貴方とは外交の場で何度かお会いしたことがありましたね。レディ・リーゼロッテ」

クリスティーナはセリアと同じように首飾りを外すと、束ねていた髪を解いた。すると、彼女の髪が薄紫色に戻って、ふわりとなびく。

「っ……拝謁の栄を賜り、光栄です。クリスティーナ王女殿下」

リーゼロッテは先ほど以上に面食らったものの、なんとか表情を引き締めて敬意を込めた挨拶を返した。

「そう硬くならず、楽にしてください。本日は貴方にお願いがあっ

て参った身です。そのためにアマカワ卿にも並々ならぬご助力を賜わりました」

クリスティーナが笑みを取り繕ってかぶりを振る。

「……と仰いますと？」

「そうですね。まずはどうして私が今ここにいるのか、そこから話させていただいてもよろしいでしょうか。少し長くなりますが……」

「もちろん構いません」

と、リーゼロッテは何の迷いも覗かせず首肯してみせる。もちろん内心では色々と考えていることはあるが、今は何よりもクリスティーナの話を聞いて情報を収集するべきだと判断したからだ。

それから、クリスティーナの口から諸々の事情がざっくりと語られることになる。その目的を含め、ベルトラム王国城を発ち、クレール伯爵領にたどり着き、そこからリオの助けを借りてここアマンドにやってきたことを。

ちなみに、同行者の面々に関する事情についてあれこれ説明すると話がややこしくなるので、現時点では存在も含めて伏せることにした。

「……なるほど。ご事情は把握いたしました。それで、お願いというのは何でしょうか？」

リーゼロッテは話を聞き終えると、脱力するように息をついてクリスティーナに水を向ける。

「私をレストラシオンの面々にお取次ぎいただけないでしょうか？フランソワ国王陛下へご挨拶に伺いたいとも思っておりますが、できれば貴方からそのための根回しも。もちろん体制が整い次第、

正式に使者をお送りしますが、何しろ今の私はまったくの無力な存在です。ゆえに、今の段階からガルアーク王国の才女と名高い貴方にご助力いただきたいと考えました。お願いできるでしょうか？」

クリスティーナは自身が置かれた現状を踏まえ、リーゼロッテに依頼内容を打ち明けた。

「光栄です。そういうことでしたら、私を頼ってくださった殿下のためにも、喜んで尽力させていただきます」

リーゼロッテは快くクリスティーナの申し入れを受け入れる。

「ありがとうございます。レディ・リーゼロッテ」

「いえ、こちらとしても殿下と繋がりを得られるという益のあるお話ですので、お気になさらず。……それはそうと、レストラシオンの方々の消息ですが、フローラ王女殿下はおそらく王都で勇者ヒロアキ＝サカタ様と行動を共にしているのではないかと。最近は勇者様が色々なお相手とお見合いをなさっているとかで」

クリスティーナに礼を言われると、リーゼロッテはかぶりを振って話題を変えた。

「……となると、フローラもその候補に挙がっているということかしら？　いえ、むしろもう婚約しているのかしらね」

クリスティーナはフローラも勇者『坂田弘明』の婚約者候補になっているのではないかと即座に思い当たった。

というより、既に婚約していてもおかしくはない。その背後にユグノー公爵の影がちらついているのはあまり面白くはないが、有効な手であることは間違いないから。

「まだ公にはなっておりませんが、仰る通りかと」
「……そう。貴方から見て、勇者ヒロアキ＝サカタはどのような人物かしら？　よろしければお聞かせ願いたいのだけれど。もちろん決して他言はしません」

クリスティーナは弘明の人物像をリーゼロッテに尋ねた。姉としてはやはり気になるのだろう。

「……精彩を放つと申しますか、堂々としていらっしゃって、何事にも物怖じしないお方ですね。知識の引き出しも多く、論理的に物事を考えるのがお好きなようで、しっかりとご自分の意見をお持ちです」

リーゼロッテは言葉を選ぶように坂田弘明という人間を言い表した。

（言い得て妙だな）

リオは以前に接した弘明のイメージを思い返しながら、上手い表現だなと密かに感心する。

「……貴重なご意見をありがとう。おおよその人物像はいくつか思い浮かびました。後は実際に自分で会って判断するとします」

クリスティーナは必要以上に先入観を持つ気はなかったのか、簡単な印象を聞いただけで存外あっさりと引き下がった。

「お礼の言葉を頂くようなことは何も。それはそうと、直近のご予定はどのようにお考えでしょうか？　ユグノー公爵なら現在はロダ

ン侯爵領にいらっしゃるかと存じますが」

現状、レストラシオンの代表はフローラだが、所詮はお飾りにすぎない。実質的な代表者はユグノー公爵が務めているので、色々と話を通すのならばフローラよりも先にユグノー公爵と会っておくのが合理的である。

「私はいったんロダン侯爵領へ向かおうと思います。ただ、ガルアーク王国の王都からフローラだけでもこちらへ来るように、使者を出していただけないかしら？」

「承知しました。では、王都へ向けて使者を出しましょう。フローラ様宛に書簡をおしたためになりますか？　ご要望とあらば場所と道具一式をご用意いたしますが」

と、リーゼロッテは申し出た。

「そうですね。では、お願いしてもよろしいでしょうか？」

「お任せください。それと、本日は我が家にお泊まりくださいませ。長旅の疲れがとれるよう、精一杯おもてなしいたしますので」

「……ありがたいお話ですが、実は都市の宿屋に他にも連れが五人ほど滞在しておりまして」

「でしたら是非ともお連れの方々もお呼びくださいな。八人程度ならまったく問題ございませんので」

「少し訳ありな者達ばかりで、さらにご迷惑をおかけするかもしれません」

クリスティーナが思案顔で遠慮がちに言う。

「でしたら尚更です。まだまだ色々とお話を伺う必要がありそうですから」

「……感謝します。レディ・リーゼロッテ」

気前よくかぶりを振ったリーゼロッテに、クリスティーナは礼を言って感謝の意を示した。すると――、

「私が宿屋に向かって皆さんをお連れしましょう。その間に殿下は書簡をお書きになってはいかがでしょうか？　セリア様もアリアさんと積もるお話があるでしょうし。同行者の事情もこちらで簡単に説明しておきます」

と、リオが気分転換ついでにといった体（てい）を装い申し出る。

「……そうですね。お願いしてもよろしいでしょうか？」

クリスティーナは微かに迷ったようだが、提案を受け入れた。

「お任せください」

リオが恭しく頷く。

「ならアリア、殿下が落ち着いて書簡をおしたためになれるよう、そちらの書斎にご案内してさしあげなさい。道具の準備もね。その後、セリア様をおもてなしするとよいでしょう」

リーゼロッテは応接室にある扉を見やって指示を出した。その扉はゲスト用の書斎へと繋がっており、廊下からではなく今いる応接室を経由しなければ入ることができないように作られている。手紙を書くにはうってつけの環境だろう。

「畏まりました。クリスティーナ王女殿下、どうぞこちらへ」

アリアが迅速に行動を開始し、書斎へとつながる扉を開ける。

「別にこの場で書いても構わないのですけれど……、確かにそちらの方が環境は整っていそうですね。お言葉に甘えさせていただきます」

クリスティーナは開放された扉から覗ける書斎を見やると、相好を崩して立ち上がった。書斎の中に入っていき、応接室のソファからも見える執務椅子に腰を下ろす。その一方で――、

「リーゼロッテ様、少しよろしいでしょうか？」

リオがソファから立ち上がって、リーゼロッテに語りかけた。

「ええ、構いませんが……」

リーゼロッテが頷き、立ち上がる。そして――、

「セリア様。リーゼロッテ様と個人的なお話もありますので、私の口から同行者の事情を簡単にご説明した後、宿屋へ向かいます。その間はどうぞごゆっくりお待ちください」

リオが立ち去り際に、畏まった口調でセリアに声をかけた。リーゼロッテがいる前なので、慇懃な言葉遣いを心掛けているのだ。

「……はい。承知しました」

個人的なお話とやらは少し気になったが、セリアはちょっとだけむず痒そうに首肯した。

◇　◇　◇

「……アマカワ卿。お話というのは？」

部屋を出て二人きりになったタイミングで、リーゼロッテがリオに尋ねた。

「今からこちらにお連れする殿下の同行者の方々についてです。まず、五名中三名はいずれもベルトラム王国の貴族の方々です」

と、リオが同行者に関する話をし始める。

「なるほど。となると、私も存じている方々かもしれませんね」

「ええ。大物ばかりですので。一人はシャルル＝アルボー、アルボー公爵家の人間です。もう一人がアルフレッド＝エマール、ベルトラム王国の『王の剣』と呼ばれる人物です。そして、三人目がヴァネッサ＝エマール、アルフレッド卿の妹です」

「……何と申しますか、それはまた、本当に大物ばかりですね」

やや困惑気味に笑みを取り繕うリーゼロッテ。どうしてクリスティーナに同行してこんな場所までやってきたのか、見当もつかない面々だ。特にシャルルなどは立場的にクリスティーナと実質的な対立関係にあるといってもいいくらいである。

「事情が込み入っているのはここからです。ヴァネッサ卿は殿下の護衛役として同行しているのですが、他の二人は捕虜として同行させています」

「捕虜……ですか？」

「ええ。道中で殿下を捕縛しようと襲撃してきましたので、撃退し

ました」
「……なるほど」
あまりにもあっさりと事実を告げるリオに、リーゼロッテはなんとか頷き、話を呑み込んでみせた。
（……戦力状況的にアマカワ卿が撃退したのよね？　あの王の剣を）
王の剣であるアルフレッド＝エマールの存在はもちろん彼女もよく知っている。ガルアーク王国を含め、近隣諸国で最強の人物を決めるとなれば確実に名前が挙がるほどの人物だ。
だが、衝撃は大きいが、信じがたいというわけではなかった。リーゼロッテは実際にリオが戦うところを目の前で目撃したことがあったから。
むしろそれほどの実力を持った相手を撃退するほどの力量を秘めたハルト＝アマカワという人物にこそ、リーゼロッテは強く興味を引かれてならない。いったい何者なのか、リーゼロッテ自身もまだまだ知らないことばかりである。
いや、一つだけ知っている、というか、気になっていることはある。
（アマカワ卿。ハルト。ハルト＝アマカワ。天川春人……。あの人と同じ名前。あの時は偶然かとも思ったけど、本当に偶然？）
リーゼロッテは窺うようにリオの顔を見つめた。だが――、
「アルフレッド卿に関しては協力的な態度をとっていますが、シャルル卿はあからさまに不服そうにしております。現状はまだ様子見ですので、軟禁するような形で話を進めていただけると助かります。よろしいでしょうか？」

リオは滔々(とうとう)と説明を続ける。

「……ええ、お任せください。屋敷の中にはおあつらえ向きの部屋もございますから」

リーゼロッテはゆっくりと頷き、気持ちを入れ替えようとした。すると――、

「よろしくお願いいたします。それと、残りの二名について、僭越ながらお知らせした方がよいと判断した情報がございます」

リオが話題を変えた。

「と、仰いますと？」

「その二人は十代後半の少年なのですが、二人とも勇者様と同じ世界から召喚された方々だそうです。それとなく情報交換をしましたが、前に私が保護した方々と同じ国の出身なはずです」

リオは浩太と怜の存在をリーゼロッテに打ち明ける。

「……なるほど。事前にお知らせいただき、ありがとうございます」

リーゼロッテは少なからず意表を突かれたが、同時にリオが自分を部屋から連れ出した意図もようやく得心した。自分に配慮してくれたのだろう、と。確かにセリア達の前ではしてほしくはない話だ。

「いえ、互いに困惑してしまってもご面倒かと存じましたので」

何にどうして困惑するのかは、浩太達が日本人であることと、リ

ッカ商会が生産している商品の秘密とが関係しているが、リオはあえて言葉を濁した。

「ご配慮感謝します」

リーゼロッテが微かな逡巡を覗かせながら、改めて礼を言う。その瞳はやはり窺うようにリオの顔色を捉えていた。

だが、リオはリーゼロッテの視線に気づきながらも、意図的にそ知らぬふりを決め通し――、

「そちらの二人と面会を望まれるようでしたら、私に仰せつけください。殿下達に事情は伏せたまま、お取次ぎいたしますので」

しれっと、そんなことを言った。

「では、後ほど……お言葉に甘えさせていただくかもしれません」

「畏まりました。それでは、私はお迎えに参りますので……」

思案顔のリーゼロッテを残し、リオはその場から立ち去ろうとする。だが――、

「……あの、お待ちください」

リーゼロッテがかすれた声でリオを咄嗟に呼び止めた。

「どうかなさいましたか？」

リオが立ち止まって振り返る。

リーゼロッテは躊躇いがちに何か言いたそうな顔をしていたが、ややあって思いきったのか――、

「つかぬことを伺いますが、アマカワ卿は、ハルト様は、前世というものを信じますか？」

リオに向けてそんな質問を口にした。

第137話　それぞれの今後

「……前世、ですか。それはまた、随分と漠然とした問いかけですね。私の思い違いでなければ、前世とは今の自分が誕生する前の世のことを指しているのでしょうか？」

リオは目を見開いてみせると、窺うように質問を返した。不意打ちの質問に対して、少しでも考える時間を稼ごうとしての対応である。

「はい、仰る通りの意味です」

リーゼロッテはこくりと首肯した。その瞳はどこか怯えたようにリオの顔色を窺っている。

（この質問……俺が転生した人間だと、確信に近い何かを抱いているのか？　もしくはそれとは関係なしに打ち明けようとしているか……。いずれにせよ、その意図は何だ？）

と、リオは咄嗟に考えたが、冷静に考える時間すらない。ゆえに、答えなど思い浮かぶはずもなく――、

「……形而上的（けいじじょう）な論題ですが、否定はできないのではないでしょうか？　とはいえ、客観的に証明もできませんが」

と、無難な答えを返すことしかできなかった。流石に「はい、信じます」と二つ返事で答えるのは軽率であろう。

質問の意図すら読み取れていない現状では警戒してしかるべきだし、もう少し踏み込んで話を聞く必要がありそうだ――と、そう考えて。

「証明……ですか。確かに客観的に証明することはできないかもしれません」

「リーゼロッテ様は信じていらっしゃるのですか？」

表情を曇らせたリーゼロッテに、リオが尋ね返す。

「……はい。信じます」

リーゼロッテは静かに、だが力強く頷いた。だが――、

「まるで確信しているかのような仰いようですね」

と、リオが踏み込むように言うと、リーゼロッテは困ったように笑みを浮かべる。そして――、

「……申し訳ございません。立ち話で繰り広げる談義ではございませんでしたね。私としたことが、少し疲れているようです。困惑させてしまったかもしれませんが、また機会を頂ければ、この件についてお話をしてもよろしいでしょうか？」

リーゼロッテは目を瞑り、小さくかぶりを振ると、少しばつが悪そうに語った。

「ええ、構いませんが……」

突然、手のひらを返したように話題を引っ込めたリーゼロッテに、

リオが躊躇いがちに頷く。
今は少し冷静になったのか、先ほどまで感じられた戸惑いや揺らぎのようなものは感じられないが、そもそも普段から冷静なリーゼロッテらしからぬ態度だったことは確かだ。まるで衝動的に訊かずにはいられなかったかのような。
だが、先の物言いからすると、場を再セッティングして再び切り込んでくる可能性は非常に高いように思えた。おそらくその時はすべてを打ち明けてくるかもしれない。
だから――、

（……彼女との付き合い方について、次に何があっても動揺しないよう、一度きちんと考えた方がよさそうだな）

今までリオは自分から積極的に距離を詰めることはしなかったが、リーゼロッテから積極的に距離を詰めてくるというのなら、以降の二人の関係は変わらざるをえず、リオも必然的に対応を迫られることになる。
ならば、もちろんリーゼロッテの出方次第だが、メリットとデメリットを熟考し、場合によっては互いの秘密を共有することも視野に入れておく必要があるだろう――と、リオは考えた。
風来坊だった以前ならばともかく、今のリオはリーゼロッテとそれなりの信頼関係を形成しているのだから。

「それでは、どうぞよろしくお願いいたします。アマカワ卿。あまり遅くなっても殿下達にご心配をおかけしますね。必要ならばお供をお付けしますが……」
「いえ、お気持ちだけ頂戴します。それでは……」

リオは社交的な笑みを浮かべて頷いてみせると、踵を返して歩きだした。すると、近くにいた侍従が近寄って来て、屋敷の外まで案

内される。
その後は特に問題もなく、ヴァネッサ達をリーゼロッテの屋敷へと誘導することになった。

◇　◇　◇

その日の晩、リーゼロッテから夕食を振る舞われると、リオはクリスティーナの部屋に呼び出されていた。
なお、別の部屋ではリオの紹介でリーゼロッテが浩太と怜に会っていたりするのだが、それはまた別の話。

「お越しいただきありがとうございます、アマカワ卿」

ソファに対面して座ると、クリスティーナがリオに頭を下げる。
すぐ傍にはヴァネッサが立ったまま控えていた。

「いえ。どうぞお気になさらず」

リオは落ち着いた所作でかぶりを振る。

「こうしてお呼びしたのは、アマカワ卿に正式にお礼を言いたかったのと、いくつか今後に関するお話があったからです。まずは、おかげ様で無事にロダン侯爵領へ向かう算段がつきました。クレティア公爵令嬢が魔道船で送迎してくださるとのことです」

夕食時、クリスティーナはリーゼロッテと二人きりで個人的に食事をしていた。その時に色々と話をしたのだろう。

「それは重畳（ちょうじょう）です。その気になれば明日にでもロダン侯爵領へ着くことができるのではないでしょうか」

「ええ。出発は明後日になりましたが、当初の予定よりだいぶ早く到着できそうです。これもアマカワ卿にお取次ぎいただいたおかげです。ありがとうございました」
「重要な役割はリーゼロッテ様が担っておりますから」

と、リオは謙遜する。

「いえ、伝手がなければ彼女に会うことすら難しかったでしょう。そもそも会うことを選択肢に入れていたかもわかりません」
「……なるほど。では、恐れながら、ありがたくお言葉を頂戴します」
「はい。ですが、お礼の言葉だけではなく、貴方には相応の報酬を支払わなければなりません。何度も言いましたが、貴方という存在なくして私が今この場所にいることは決してなかったでしょうから」
「以前にも申しましたが、お礼ならばセリアへ」

褒賞の話題を切り出したクリスティーナに、きっぱりと予防線を張るリオだが――、

「そういうわけにも参りません。絶望的な状況だったクレイアからの脱出を成功させてくれただけでなく、アルフレッドを退けてもくださいました。他にも色々と助力していただきましたが、二度も窮地から救っていただいたのです。お礼の押し売りになってしまいますが、それほどの恩人に何も謝礼を支払わないとなれば王族の沽券にかかわります」

クリスティーナとしても簡単に引き下がるわけにはいかない。

「無論、殿下のご事情は理解しておりますが……。では、具体的にどのような報酬を賜わることになるのでしょうか？」

と、リオが尋ねると――、
「それをご相談させていただきたかったのです。あいにくと今は持ち合わせがなく、私個人でも与えられるものといえば勲章か下位の爵位しかないのですが、ロダン侯爵領に着けば事情も変わってきます。ですので、何か欲しいものがあれば仰っていただけると幸いです」
クリスティーナがどこか申し訳なさそうに表情を曇らせながら尋ねた。
第一王女である彼女には一定の制約はあるものの叙任や叙勲の権限が与えられているが、リオがそれらを望まないであろうことはこれまでの旅の付き合いで薄々と察しているのだろう。
「……では、つかぬことを伺いますが、殿下は今後の本拠地をどちらに構えるおつもりでしょうか？」
と、リオがおもむろに尋ねる。
「定期的にガルアーク王国の王都を訪れることになるはずですが、本拠地はロダン侯爵領になるはずです」
「それでは、セリアも今後はそちらに？」
「……ええ。そうしていただくつもりです」
話の流れをいまいち掴みかねているのか、クリスティーナが窺うように頷く。すると――、
「でしたら、褒賞に見合う範囲で、本拠地に彼女が住める邸宅を下賜していただくことはできないでしょうか？」

リオはそんな願いを申し出た。

「……それでは彼女に対する褒賞になってしまうではありませんか。それに、元より彼女には今後の活動にあたって褒賞とは別に相応の支援を行うつもりです。私がスカウトしたのですから」

言って、クリスティーナは悩まし気に表情を曇らせる。

「なるほど。つまり彼女が衣食住に困ることはないと？」

「ええ。貴族として体裁がとれる程度の生活は保障します」

リオの質問に、クリスティーナは断言して首肯した。

「でしたら、彼女の生活がより盤石になるよう、私が提示する条件をいくつか呑んでいただけませんか？　どうしても私に褒賞を与えたという形が必要になるのなら、彼女に下賜する家の名義を私のものにしていただければと」

「……確かに、そういった形をとるのなら、体裁的に問題はありませんが」

クリスティーナは何か言いたげに言葉を詰まらせる。

「どうしてそこまで、とお考えですか？」

と、リオは自ら踏み込んで尋ねた。

「……ええ、まあ。本当にそれでよろしいのですか？」

クリスティーナは言葉を濁すように頷き、おずおずと尋ね返す。

「構いません。幼少期、私はあまり恵まれた環境で育ってきませんでした。いえ、彼女と出会って色々と気にかけてもらえた分だけ、恵まれていたのかもしれません。そう思えるくらいには、良くしていただきました。だからです。彼女にはそれだけの恩があります。……それに、本当にそれでいいのか判断するのは、私が提示する条件をお聞きになった後でも遅くはありませんよ？」

リオはクリスティーナを見据え、不敵に微笑みながら告げた。

「……承知しました。では、その条件とやらを伺ってもよろしいでしょうか？」

クリスティーナが嘆息がちに頷き、窺うように尋ねる。

「詳しい内容は後ほど文章に起こして提示いたしますが、大まかに申しますと、彼女の意志を尊重する、身体の自由を拘束したり、行動を無理強いをしない、日常的な生活における身の安全を保障する、私に彼女と自由に面会する権限を頂戴したい、といったところです」

具体的には、本人の同意なしに政略結婚をはじめとする政治の道具として利用するな、身の回りの世話は本当に信用できる人間に行わせろ、などといった内容をリオは要求するつもりである。

言葉にすれば当たり前で簡単なことに思えるが、セリアほど魔道士として有用な存在を魑魅魍魎が跋扈する貴族社会で政治的な道具として利用させるな、という条件はなかなかに難易度が高い。

「随分と慎重……いえ、過保護なんですね」

「そうでもありません。私はずっと傍にいることはできませんから」

「……やはりセリア先生を残して行かれるのですか？」

「はい。定期的に顔は出すつもりですが」

リオが微妙に憂いを帯びた声で首肯する。

一応、クリスティーナの庇護下に置いておくことは確約させるし、他にも可能な範囲で手は打つつもりだが、別行動中は目が届かなくなることに違いはない。

とはいえ、心配なあまり、セリアを俗世から隔離して閉じ込めるわけにはいかないし、本当に安全だと判断できるまでずっと四六時中セリアの傍に居続けるわけにもいかないだろう。

いや、下手をすれば絶対に安全と断言できることなんてないかもしれない。

だが、そこまで考えていたら現実的に何もできなくなるし、精神衛生的に健全でもない。結局はどこかで割り切るしかないのだ。

「なるほど。では、ロダン侯爵領までは一緒にお越しいただくということでよろしいですか？」

「はい。よろしくお願いいたします。明日中に条件をまとめた文章をお渡ししますので」

リオは小さくお辞儀する。

「承知しました。ロダン侯爵領に到着後、正式に誓約書を作成しますので、そこまでお待ちいただけると幸いです。私個人だけでなく、レストラシオンという組織にも同様の誓約書にサインするように取り計らいますので」

「恐れ入ります」

◇　◇　◇

その後、リオが退室すると――、

「……よろしかったのですか？　彼ほどの人物をこのまま見逃して。セリア君をだしに使えば、彼を我々の同士に引き込むこともできたのでは？」

背後に控えていたヴァネッサが、クリスティーナに問いかけた。

「それでも彼は動かないわよ。セリア先生に協力する理由はあっても、私達に……ベルトラム王国に協力する理由はないもの」

と、クリスティーナはわずかに歯噛みして言う。

「……私にはわかりません。その二つに差があるのか」

ヴァネッサは思案顔でかぶりを振る。ベルトラム王国に協力することが、そのままセリアのためになると考えているのだろう。

「少なくとも今できる最良の選択肢は、彼からの信頼を勝ち取ることよ。今後の行動でね」

そう言うクリスティーナの横顔には、微妙に後ろ暗そうな翳（かげ）りが差していた。

◇　◇　◇

一方、リオがクリスティーナの部屋から退室して、廊下を歩いていると――、

「あ、ハルト君」

浩太と怜の二人とすれ違った。
「そちらも今お帰りですか？」
リオが二人に声をかける。
「……うん。リーゼロッテさんと話をしてきて」
「そうですか」
リオは短く頷くだけで、話の内容に触れようとはしなかった。だが、浩太と怜は互いに顔を見合わせると――、
「実は色々と話をしたんだけど……、ハルト君にも相談できないかなと思って。僕達だけじゃ少し先行きが見えないというか、どうすればいいかわからなくて」
浩太がそんなことを言い出した。
「……俺にですか？　構いませんが、少し場所を移しましょうか」
「じゃあ、僕たちの部屋に」
「ええ」
そうして、リオは浩太達の部屋に向かうことになった。
◇　◇　◇
さらに一方、リーゼロッテは応接室にアリアを呼び寄せ、お茶を飲んで一息ついていた。
「流石、素晴らしいチョイスね。心が落ち着くわ」

淹れてもらったお茶を口に含むと、リーゼロッテが満足そうに感想を呟く。

「本日はそういった気分かと存じましたので。そちらの茶葉を選びました」

「本当に流石ね」

「主の心と身体を万全の状態に整えるのが私の仕事ですので」

アリアが淡々と告げる。すると――、

「……今日の私、変だったかな？」

リーゼロッテがおずおずと訊いた。

「普段よりも少しばかり精彩を欠いていたように思えますが、取り立てて問題視するほどではなかったかと。あくまでも私がお見受けした範囲では、ですが。本日は私がお傍に居ない時間もございましたので……」

アリアが傍に居なかった時間は、リーゼロッテがリオと二人きりで話をしていた時と、浩太と怜を呼び出して三人だけで話をしていた時のことだ。

その間に何かあったのではないかと勘ぐっているアリアだが、リーゼロッテの様子がおかしくなったタイミング的に、何かあったとすればリオと話をしていた時のことだろう予想している。

とはいえ、それについてあれこれ詮索するのは侍従の領分を越えているので、求められてもいないのに言及することはしないが。すると――、

「……もしかしてさっきの二人と何かあったと思っている？　別に、何かあったわけじゃないわよ？　ほら、私達が知らない世界から勇者と一緒に召喚された二人なわけじゃない。だから、ちょっと話をしてみたかったというか。まあ、今後の身の振り方についても訊いてみたりはしたけど……」

リーゼロッテは己の内を必要以上に見透かされた気がしたのか、いつにも増して饒舌に語った。

（私が気にしているのは、そちらの方々との会話ではないのですが。まあ、触れずにおくとしましょうか）

アリアはそう考えて、口許に微かな笑みを刻んだ。

「然様でございますか」

「……むう。なんか笑ってない？　そういうアリアこそどうだったのよ、久しぶりの旧友との再会は？」

「おかげ様で久しぶりにプライベートな時間を満喫できました。お気遣いいただきまして、ありがとうございます」

そうして、リーゼロッテはしばしリラックスしたままアリアと会話を繰り広げた。

◇　◇　◇

そして、時は少しだけ進む。リオは浩太達の部屋で二人から相談を受けていた。その内容はずばり彼ら二人の今後について――。

ひょっとするとリーゼロッテの秘密について打ち明けられるのではないかと少なからず身構えていたリオだが、とりあえずの予想が外れてホッと安堵する。

「なるほど。つまり、今後お二人がどうするべきか悩んでいると。俺はてっきりクリスティーナ王女殿下と行動を共にしていくものだと考えていましたが……」

話を聞き終えると、リオが二人の反応を窺うように言った。

「いや、僕達がそもそもお姫様達と行動を共にしていたのは成り行きというか、単にあれ以上お城に居たくなかったからで……」

「城に居たくなかった、ですか」

「う、うん。まあ、その……」

リオに突っ込まれると、浩太はバツが悪そうに視線を逸らす。

「えーと、まあ、浩太は色々あったんです。今はあまり思い出したくもないだろうから、落ち着くまでは深く聞かないでやってくださいな」

怜は肩をすくめて、浩太を気遣うようにそんなことを言った。すると、浩太が「別に僕は気にしてなんか……」と言うが――、

「わかりました。……しかし、浩太さんはともかく、怜さんはどうしてお城を抜け出したんですか？」

聞かれたくないことは誰にだってある――そう考えて、リオは素直に頷いた。そして、話題をさっさと怜に関する話に移してしまう。

「うーん。俺は浩太の付き添いというか、便乗しただけなんだけど。まあ、お城の中は居心地が悪かったというか、退屈だったというか……」

言って、怜はぽりぽりと頭を掻いた。

「……お二人が今後についてノープランなのはよくわかりました。そこのところをリーゼロッテ様に突っ込まれて困ってしまったと」

「まあ、平たく言うと、そうなるかな。城を抜け出して、ここまで旅するので精一杯だったし」

リオが苦笑して言うと、怜がのびのびと頷いた。

（なんというか、怜さんはマイペースな人だな。主体性があるんだか、ないんだかよくわからない）

それがリオの怜に対する人物評価だった。のほほんとしているとでも言えばいいのだろうか。まるで高校生の進路相談でも聞いているかのようだ。実際、二人とも高校生だったからあながち間違いでもないのだが。

「とはいっても、お二人に与えられた選択肢はそう多くはないのでは？　クリスティーナ王女殿下から何か言われていたりは……？」

「付いてくるなら仕事をくれるとは言っていたかな。幸い僕らは人よりも魔力は多いみたいだし、一応、向こうの世界で教育を受けていたからね。特に計算分野に関してはこっちの世界の貴族以上に優れた能力があるみたいだから、待遇は良くしてくれるらしい」

リオが質問すると、調子を取り戻した浩太が答える。

「なるほど。今は人手不足でしょうから、事務処理能力に長けた優秀な人材は確かに重宝されるでしょうね」

リオが自身の考えを伝える。

「まあ、俺達も今までの付き合いから姫様が嘘を言っていないというのはわかります。けど、このままなし崩し的に付いていってもいいものかなと思いましてね」

と、怜は思案顔で言った。

「……仕事の当てはあるんですか？　コネでもない限り、残された選択肢は冒険者くらいですよ？」

リオがそう言うと――、

「冒険者って、やっぱり冒険するのかな？」

浩太が訊いて、好奇の視線をリオに向ける。怜も同じだ。

「どのようなイメージをお持ちなのかはわかりませんが、楽な仕事ではありませんよ？　収入は安定しませんし、身体が資本ですから、体調を崩せば収入が途絶えます。仕事の内容は街中の肉体労働もあれば、都市の外に出て薬草の採取があったり、魔物の討伐があったり、時には傭兵として戦うこともあるとか」

「……でも、やりがいはある仕事なんだね？　中にはかなり稼ぐ人もいるって」

「いることはいるでしょうが、ほんの一握りです。時には命の危険すらある仕事ですよ？」

「う、うん。それはもちろんわかっているけど……」

そういう年頃なのか、浩太は冒険者という職業に興味を持っているようだ。リオはそれを察し――、

「……もしかして冒険者になることも視野に入れているんですか？」

と、そう尋ねた。

「いや、まあ、うん。一つの選択肢として……。この先、レストラシオンって組織に所属したとして、その組織がどうなるのかも先行きは見えないわけだし……。仮に所属しても、自由に活動することだってできなくなるかもしれないから」

浩太はおずおずと頷く。

「それはそうですが……、まさか怜さんも？」

リオが怜を見やって訊いた。

「いや、なんというか……興味がなくはないかな。……その、男なら憧れるというか。まあ、それでも俺は堅実に生きたい派だけど」

怜はバツが悪そうに肯定してから、自身の考えを述べた。

「……個人的には堅実に生きることをお勧めしますが、いずれ冒険者になるにしても当面の間の生活費は蓄えておくべきです」

「それは……うん。わかっている」

リオが正論を述べると、浩太が自分に言い聞かせるように頷く。

「ですから、その意味でも当面の間はクリスティーナ王女殿下のお世話になってみてはどうでしょうか？　もちろん雇用条件を確認する必要はありますが」

結局、リオとしては無責任なことは言えず、無難なプランを提示することしかできなかった。

「……そうか、そうだね。すごく参考になった。もう少し先輩と話し合って考えてみるよ。ありがとう、ハルト君」

浩太がお辞儀してリオに礼を言う。

とりあえず、こうしてこの場は収まったが、二人がこの先どんな選択をするのか、ちょっぴり危なっかしく思ったリオだった。

◇　◇　◇

リオは浩太達との話を終えると、今度こそ自分に貸し与えられた部屋へと戻ってきた。そうして、部屋の前まで歩いてくると――、

「あ、ハルト。お帰り！」

部屋の前でセリアが立っていた。リオを見つけると、パッと表情を明るくして駆け寄ってくる。

「……ええ。どうしたんですか、こんなところで？　もしかしてずっと待っていたとか？」

リオは目を丸くして質問した。

「ううん。今来たところ。アイシアがそろそろリオが戻ってくるって教えてくれたからさ」

きょろきょろと周囲を見回して誰もいないことを確認すると、セ

リアが「えへへ」と笑みをたたえて言う。
「なるほど。立ち話もなんですから、とりあえず部屋の中へどうぞ。お茶を用意しますから」
「うん。でも、ハルト……、ちょっと疲れている？」
セリアがリオの顔色を下から覗き込んで問いかける。リオは内心で流石、良く見ているなとセリアに感心すると――、
「大丈夫です。先生の顔を見たら元気が出ましたから」
そう言って、元気であることをアピールしてみせた。実際、色々な人物と話をして気疲れしていたが、セリアの顔を見てホッと心が安らいだのは事実だ。
「な、何を言うかな。この子は……」
セリアは顔を赤くして俯いてしまう。
「入りましょう。どうぞ」
リオは扉を開けると、入り口の横に待機してセリアの入室を促した。
セリアが先に入室し、リオも遅れて入ると、部屋の扉を閉める。そうして、室内に二人きりになった――と、思いきや、アイシアがおもむろに実体化して現れた。
「アイシア、先生の護衛役。ありがとう」
リオが現れたアイシアに礼を言う。

「セリアの言う通り。春人、顔色が少し良くない」
アイシアはそう言うと、リオの頬をそっと撫でた。至近距離からじっとリオの顔を覗きこむ。
「……大丈夫だよ。長旅だったし、今日は色々とあって、少し疲れただけだから。二人の顔を見て、元気が出てきた」
「そう……」
アイシアは頷いたものの、やはりどこか憂いを帯びた視線でリオの顔を見据えている。その手はリオの頬に触れたままだ。
「ちょ、ちょっと！　じゃあ、お茶、お茶を飲みましょう！　疲れた時こそお茶を飲んでリラックスしないと！」
セリアがあたふたと言って、リオの腕を引っ張る。
「……ええ。色々と良い茶葉が揃っているので、何個か試してみましょう。美味しいのを淹れますね」
旅立つまでにあと何回、セリアにお茶を淹れられるだろうか――そんなことを考えながら、リオが頷いて歩きだす。
アイシアはそんなリオの横顔をじっと見つめていた。

第138話　迂闊な縁？

二日後の朝、リオ達はリーゼロッテ所有の魔道船でアマンドを発ち、ロダン侯爵領の領都ロダニアへと向かった。
昼前には目的地であるロダニアに到着し、都市に隣接する湖に着水する。そのまま水上を移動し、都市の港に到着すると、船乗り達が素早く下船の準備を済ませた。
すると、護衛騎士のヴァネッサがクリスティーナをエスコートしながら、タラップを渡って港に降りる。そこにはレストラシオンに所属する高位の貴族達がずらりと並んでいた。昨日のうちにリーゼロッテが先遣隊を飛ばし、クリスティーナの訪問を伝えていたのだ。
貴族達はヴァネッサの背後にクリスティーナの姿を確認すると、敬意を示すべく一斉に胸元に手を当て、恭しく頭を下げた。

「ようこそお越しくださいました。クリスティーナ王女殿下」

出迎えの貴族集団の中から、ユグノー公爵が一歩前に出て、歓待の挨拶を告げる。

「お出迎え、大義でした。ユグノー公爵」

と、クリスティーナが涼しげな声でユグノー公爵達を労う。
髪の色に合わせた薄紫色のドレスを纏った彼女の姿は、なんとも美しく、なんとも清楚で、王族としての華やかな風格さえ感じられる。取り立てて愛想を振りまいているわけではないが、特に若年の男性貴族達は彼女の美貌に視線を奪われていた。
ただ、それは十メートルほど後方に控えた浩太や怜も同じだ。旅の間にクリスティーナのことはわりかし見慣れていたはずの彼らだ

が、こうして王女として公の場に出た姿を目の当たりにすると、その存在感は圧倒的で、やはり王女様なんだなと再認識していた。

「もったいないお言葉でございます。我ら一同、殿下がお越しになるのを心よりお待ちしておりましたゆえ。クリスティーナ王女殿下がお越しになったとお聞きになれば、フローラ王女殿下もさぞお喜びなることでしょう」

と、ユグノー公爵がにこやかに笑みをたたえて言う。

「フローラには既にレディ・リーゼロッテから使者を送っていただきました。早ければ数日中にこちらへ来るのではないかしら」

「それは僥倖でございます。こちらからも迎えの船をお出ししました。……さて、このまま殿下に立ち話を強いるわけにもまいりませんな。一先ず場所を移しましょう。歓待の用意もございます」

「ええ。大まかな事情は先行して送った書簡の通りよ。重客の方々にもお越しいただいているから、手厚くもてなすように。それと、捕虜の軟禁もね」

「御意に」

ユグノー公爵は短く頷くと、クリスティーナの背後で連行されているアルフレッドとシャルルに視線を向けた。

二人ともベルトラム王国内では名の知れた大物だ。ましてやアルフレッドは王国最強の騎士であり、そんな存在がいったいどうやって拘束されたのかと、貴族達は強い好奇の視線を向けていた。

だが、アルフレッドはそれらの視線を受け流し、堂々と佇んでいる。その一方で――、

「くっ……」

シャルルはバツが悪そうに、貴族達からの視線を逸らした。

「連れていけ」

ユグノー公爵は微かな嘲笑を口許に刻むと、背後に視線を向けて、控えの騎士達に対し指示を出す。

「はっ！」

数名の騎士が動きだし、アルフレッドとシャルルのもとへと移動する。そして、護送役のリオとアリアから二人の身柄を預かった。

「世話をかけたな、少年。アリア君」

身柄を引き渡す直前に、アルフレッドがリオとアリアに向けてぼそりと呟く。

「……いえ」

リオとアリアは声を揃えてかぶりを振った。すると――、

「……おお、リーゼロッテ君。それに、アマカワ卿も。二人には大きな借りができてしまったな。大したもてなしはできないが、歓待の用意がある。とりあえず今日のところはゆっくりと羽を伸ばしてくれたまえ」

ユグノー公爵がタイミングを窺っていたように、他国の貴族であるリーゼロッテとリオに声をかけた。最初からさりげなく周囲に視線を走らせて、同行者の顔ぶれを確認していたのだ。

「私は殿下をアマンドからここへお連れし、あとは臨時の渉外役を請け負ったにすぎません。アマンドまでの道程ではアマカワ卿が大層ご活躍なさったとか。ですので、お礼ならばアマカワ卿へ」

リーゼロッテが愛想笑いを浮かべて謙遜する。すると――、

「そうか。アマカワ卿には先の夜会でフローラ王女殿下を救っていただいたばかりだというのに、クリスティーナ王女殿下まで救っていただくことになるとは……。不思議な縁があるものだな」

と、ユグノー公爵がやや仰々しく言ってみせた。

「偶然です」

リオが苦笑して、首を左右に振る。

「……どういうこと？　アマカワ卿にフローラを助けていただいたの？」

クリスティーナは目を丸くしてリオに尋ねた。

「ええ、まあ。夜会でちょっとした騒ぎがございまして」

そういえばそこら辺の経緯は説明してなかったと、リオがぼかして答える。すると――、

「賊の侵入事件がありましてな。その際にフローラ王女殿下が狙われたのです」

すかさずユグノー公爵が補足した。

クリスティーナはハッと目を見開くと、即座に事情を呑み込み――、

「……そう。そうだったの。アマカワ卿、ありがとうございます。何とお礼を言えば……」

恐れ入った面持ちで、リオに語りかける。

「どうぞお気になさらず。その一件がきっかけで名誉騎士に叙任していただきましたので」

「なるほど……。そういうことだったのね。色々と得心しました」

クリスティーナは小さく息をつき、腑に落ちた表情を浮かべた。

「ふむ、積もる話はおありでしょうが、そろそろ移動しましょう」

ユグノー公爵が移動を促す。それで一同はようやく移動を開始した。

◇　◇　◇

その後、リオ達はロダン侯爵が自宅の隣に保有する迎賓館の一室で、手厚い歓待を受けることになった。

旅疲れが溜まっているだろうクリスティーナ達に配慮して堅苦しい会食にはせず、参加メンバーも極力少なめにして、レストラシオンからはユグノー公爵とロダン侯爵を筆頭に、選ばれた一部の貴族とその親類のみが参加することになる。

また、調理人やらメイドやら楽士やらもいるので、広々とした会場が閑散とするわけではなく、和気あいあいとくつろげるような雰囲気の立食パーティとなっていた。

とはいえ、一部の面々の間では油断なく情報のやり取りが行われており、会場の一角ではユグノー公爵がクリスティーナとセリアの二人と会話を繰り広げている。

「いやはや、まさかセリア君まで現れるとは思ってもいなかったよ。しかもあのシャルル＝アルボーと一緒に現れるとはね。政略結婚を強制されていたと聞いたが……」

と、ユグノー公爵がセリアに水を向けた。すると――、

「こちらで極秘裏に救出しました。先生はあの程度の男に嫁がせるには惜しい人材ですので」

と、クリスティーナが率先して答える。だいぶ内容をぼかした回答だが、下手に打ち明けても説明が面倒なので、気を回したのだろう。

「ははは。確かに彼にはもったいない才媛ですな、セリア君は」

ユグノー公爵は嘲笑しながら同意した。流石のユグノー公爵もクリスティーナに対しては空気を読まざるをえない。

「いまだ本国政府に籍を置いているクレール伯爵にご迷惑をかけるわけにもいきませんので、詳しい事情は伏せ、レストラシオンが先生を拉致する形で召喚したということで対外的にも対内的にも処理します。よろしいですね？」

「御意に」

などと、クリスティーナ達がやりとりを行う。

その一方で、リオやリーゼロッテに対しては、ベルトラム王国の

貴族達からおもてなしという名目のアプローチが行われていた。
リオには貴族の令嬢が、リーゼロッテには貴族の嫡男が重点的に群がっている。近隣諸国の令嬢の中でも図抜けて優秀で、見目もたいそう麗しいリーゼロッテはもちろんのこと、先の夜会でフローラを救い、名誉騎士にまで成り上がったリオも、本人の意志とは無関係に名が売れているのだ。
そんなリオがひょんな縁から今度はクリスティーナの護衛まで立派に務めた――王国最強のアルフレッドを倒した――というのだから、ベルトラム王国の貴族達からの注目度が格段に強まっているのも道理であろう。こうした宴席は貴族にとって出会いの場であるということもあって、各々がしたたかにリオとリーゼロッテにアピールを続けていた。
なお、もちろん近くには彼らや彼女達の父母もいるのだが、計算高いのか、リオ達からは適度に距離を保っていたりするので、こういった趣向にはすっかり慣れきっているリーゼロッテはともかく、リオとしてはちょっとばかり困った事態となっていた。もちろん表面上は完璧に対応しているが。
そして、さらに一方、会場の別の場所では、浩太と怜が豪華な料理に手を伸ばしていた。

「うーむ、美味い。だが、ここでも格差があるぞ。浩太」

と、怜が令嬢達に囲まれるリオを眺めながら言う。

「まあ……ハルト君、実はけっこうすごい貴族みたいですし。同性から見てもかっこいいですし、僕らを気絶させたすごい騎士も倒すくらいに強いみたいですから」

浩太が苦笑して応じる。

「止めろよ、聞いてて惨めになるだろ」
「いや、だって先輩が話を振るから……」
「それはともかく、ここまで付いてきちゃったけど、どうするんだよ、俺達？」

怜が綺麗に切り分けられたステーキを頬張りながら尋ねた。
すると、浩太は微かに顔を曇らせて――、

「……正直、このままここにいても、お城にいた頃から何かが変わるような気はしません。確かに、ハルト君が言ったように、しばらくはここで働かせてもらった方が無難なのかもしれませんけど」

と、そう答えた。

「……まあ、環境的に城にいた頃を思い出しちゃうのかもしれないが、あの二人はいないわけだし、別に働くくらいはいいんじゃないの？　背に腹はかえられないし」
「それは、まあ、わかってはいるんですけど……」
「ま、もう少し考える時間はあるだろうから、追い出される前に答えを出せばいいさ。それにしても、そろそろお腹も一杯になってきたな」

怜は小さく肩をすくめると、綺麗に平らげた皿を近くの机の上に置いた。すると――、

「お二方とも、少しよろしいですかな？」

と、二人に声をかける人物が現れた。人数構成は壮年の貴族の男性が二人と、娘と思しき若年の可愛らしい令嬢が二人である。

「あ、はい。なんでしょうか？」

怜が反射的に姿勢を正して応じる。

「なに、お二人とお話をしてみたかったものでしてな。私は男爵のディルク＝ダンディと申します。そして、彼は男爵のジルベール＝ベルモンド。私とは縁戚の関係にあります」

「えっと、私はレイ＝サイキと申します。彼は自分の後輩でして、コウタ＝ムラクモといいます。どうも初めまして」

ダンディ男爵がベルモンド男爵を交えて自己紹介を行うと、怜がシュトラール地方流におずおずと挨拶を返した。浩太が後ろで「よろしくお願いします」とやや緊張した面持ちで頭を下げている。

「ははは、そう身構えないでください。そうだ、お二人に我々の娘をご紹介しましょう。ほら、ご挨拶なさい」

言って、ダンディ男爵は自分達の娘に水を向けた。すると、背後に控えていた可愛らしい少女二人が前に歩み出る。

「ローザ＝ダンディと申します」

「ミカエラ＝ベルモンドと申します」

ローザとミカエラがお淑やかに頭を下げた。

二人とも怜や浩太よりも少し年下といったあたりか。系統こそ異なるものの、その顔立ちは実に整っており、それぞれが清楚で物静かな雰囲気を醸し出している。

すると――、

「どうも、初めまして。私のことはレイとお呼びください」

怜は気取った声色で語り、紳士的にお辞儀してみせた。だが、男の性(さが)か、その視線は開放的なドレスの胸元に吸い寄せられている。特に、年齢に反してやや不相応にふくらみのあるローザに対して――。

（おおお、浩太！　俺らの時代が来たぞ！）

怜が頭を下げたまま歓喜の表情を浮かべ、ちらりと浩太に視線を向ける。

（先輩、恥ずかしいですから。止めてください。ほんとに）

豹変しかかっている怜を恥ずかしく思ったのか、浩太は顔が引きつりそうになるのを精一杯に堪えて笑みを取り繕った。

だが、怜の態度を好ましく思ったのか、ローザとミカエラはくすりと笑みをこぼしている。

「それでは、どうぞよろしくお願いいたします、レイ様。我々のこともどうぞファーストネームでお呼びくださいな」

「ええ、喜んで。ローザさん、ミカエラさん」

ローザがにこやかに申し出ると、怜は鷹揚に頷いた。

「ムラクモ様のこともお名前でお呼びしてもよろしいでしょうか？」

ミカエラが窺うように浩太に問いかける。

「あ、はい。別に、大丈夫ですけど……」

浩太は少し緊張した様子で首肯した。

「ありがとうございます。よろしくお願いしますね、コウタ様」

「はい、こちらこそ……」

ミカエラからにこやかに語りかけられ、浩太がわずかに息を呑む。

それから、しばらく一同で雑談に花を咲かせる。流石は貴族というべきか、男爵や令嬢達の巧みな話術により、緊張気味な浩太も少しずつ柔らかくなっていき、特にミカエラと親しくなっていった。

そして、ある時――、

「それにしても俺らなんかとばかりこんなに話していていいんですか？　正直、重要人物でもありませんよ」

ふと、気づいたように、怜が問いかけた。

「ははは。お二人が重要人物ではないなどと、そのようなことはございませんよ。最初の方は随分と熱心にお食事を楽しまれていたようですからな。声をかけにくかったのでしょう。実際、我々はずっと話しかける機会を窺っておりましたぞ？」

と、ダンディ男爵が物柔らかに笑って語る。

「な、なるほど……。これはお恥ずかしい」

怜は気恥ずかしそうな面持ちで納得した。貴族達から声をかけられらなかったのは、自分達の行動にも問題があったと自覚したからだ。浩太も顔を赤くして頷いている。

「ただ、同行していらっしゃった方々がいささか豪華すぎるのも事

実ですな。クリスティーナ王女殿下やクレール伯爵家のセリア嬢はもちろん、ガルアーク王国の大貴族であるクレティア公爵家のリーゼロッテ殿や、名誉騎士のアマカワ卿までいらっしゃる。いずれも名の知れた御仁ばかりだ」

と、ダンディ男爵が語ると――、

「男爵達は王女殿下達にご挨拶に伺わなくともよろしいのですか？」

浩太がクリスティーナやリオ達を見やりながら尋ねた。

「我々は貴族といっても吹けば飛ぶような末端です。同じ貴族でも、自分よりも位の高い方々にはそう気軽に声はかけられませんよ。傍から見ると和気あいあいと歓談しているように見えるかもしれませんが、こういった催しには会話の順番や作法など、細かいマナーがあるのです」

ベルモンド男爵が苦笑しながら答える。謙遜して言ってはいるが、本当にただの末端貴族がこの場に来られるはずもない。ダンディ男爵もベルモンド男爵も下位貴族でありながら一定の役職に上りつめている傑物であり、この場への参加が認められた極少数の存在である。

「……なるほど。大変なんですね」

「その点、俺らは貴族ではありませんからね。どうぞ息抜きがてらお相手してください」

浩太が粛々と納得すると、怜が冗談めかして言った。

「おかしなレイ様」

ローザがくすりと笑う。すると、そこへ――、

「どうやらお二方にもお楽しみいただけているようだな」

一人の男性貴族がやってきた。声をかけられた日本人二人組はともかく、男爵達は素早く畏まってみせる。

「ええと、どちら様でしょう？」

見知らぬ人物の登場に、怜が首を傾げると――、

「レイ殿。こちらにおわす方はこの地の領主でいらっしゃるロダン侯爵です」

ダンディ男爵がやや焦燥した声でロダン侯爵を紹介した。参加するパーティの会場提供者であり、ましてや大物貴族の顔を知らないなど、本来ならばかなりの粗相であるからだ。

だが、ロダン侯爵は特に気にした様子もなく――、

「ああ、皆、楽にしてくれて構わんよ。そういう席でもないからな。お二人には申し遅れましたが、私はジョージ＝ロダンと申します。どうぞ以後、お見知りおきを」

気さくに笑って、浩太と怜に自己紹介をした。

「ああ、これはとんだご無礼を。失礼いたしました。私はレイ＝サイキと申します」

怜がすかさず謝罪し、自己紹介をした。

「コウタ＝ムラクモです。よろしくお願いします」

浩太も慌てて名乗る。

「勇者様と一緒に召喚されたというお二人にお会いできて光栄ですな」

「いやいや、私らはただの出がらしのお茶というか、勇者のおまけみたいなものなので」

ロダン侯爵が二人を持ち上げると、怜がへりくだってかぶりを振った。

「ははは、そう謙遜なさいますな。聞きましたぞ、お二人とも元の世界では教育を受けていたとか。それに、魔力が潤沢で魔道士として恵まれた才能もあると」

「いやあ、まあ、それほどでも……」

怜と浩太が困り顔で苦笑する。日本では普通の高校生にすぎなかった自分達の能力は、本人達が一番よく理解しているのだ。この世界に来てからは色々と持ち上げられることも多かったが、それは周囲の平均的なレベルが下がっただけで、自分達のレベルが上がったわけではないだろう、と。

実際、これまで自分達よりも地頭の良さそうな存在とはいくらでも出会ってきたし、身近で一緒に行動もしてきた。それに、魔道士として恵まれた才能があると言われても、目の前でセリアが使っていたようなとんでもない魔法はまだ使えないし、アルフレッドには一瞬で気絶させられたし、ましてやリオと正面から戦ったところで絶対に勝てるとも思えない。

「どうもお二人は謙遜がすぎますなあ。優秀なお二人の今後には大きく期待しているのですが、あまりプレッシャーを与えるのも考え物ですか。本日のところはどうぞパーティを楽しんでいってください。素敵な出会いもあるかもしれませんぞ？」
「ははは、素敵な出会いなら既にありました」

ロダン侯爵が冗談っぽく笑って言うと、怜がローザをちらりと見やって調子よく返した。

（先輩は可愛い子に良くされると、すぐに調子に乗る）

また悪い癖が出たと、浩太が小さく嘆息する。いつものことなのだが、今回ばかりは軽率だったかもしれない。
ロダン侯爵は笑顔をたたえながら、鋭い輝きを一瞬だけ目に灯すと――、

「ほう、それは僥倖ですな。まあ、今後、お二人が我々に協力していただけるのなら、相応のポストが用意されることでしょうから、早いうちに身を固めていただくのもよいかもしれません。気にいった令嬢がおりましたら、果敢に攻めてみるのも手ですぞ？　まあ、競争相手がいたり、婚約者がいたりする場合もありますがな」

と、そう語った。

「確かに、お綺麗な方だと競争が激しそうですね。ローザさんやミカエラさんも」

怜がロダン侯爵の話題に食いつきつつ、ローザやミカエラに水を向ける。すると――、

「親馬鹿と思われるかもしれませんが、器量は良いですから、縁談も多いです。ただ、理想の条件に合致するお相手は見つかっておりませんな。可愛い愛娘ですから、やはり理想的な結婚相手を見つけてやりたいのが親心なのですが……」

当のローザではなく、父親のダンディ男爵がどこか物憂げに語った。

男爵令嬢が高位の貴族と結婚しようとする場合、たとえ見た目が良くとも傍妻(そばめ)や老いぼれた貴族の後妻として迎え入れられることが大半である。上昇思考の強い貴族にとって、本妻との結婚は付加価値目当てでするのが一般的だからだ。現当主が一定の役職に就いてはいるダンディ男爵家やベルモンド男爵家であっても、このことに変わりはない。

「うーむ。でしょうね。これほど可愛らしいのですから。となると、例えば俺がローザさんのお相手として名乗りを上げたところで論外というわけですね。いやはや残念だ」

怜がうんうんと深く頷き、大仰に残念がってみせる。

実際、ローザの容姿がもろに好みであり、「残念」と口にした怜だが、内心ではそれほど未練を感じていなかった。何しろ今まで女性から好意を抱かれた経験などないので、最初から自分がローザのような育ちの良い美少女に好かれると考えていないからだ。こうして楽しくお喋りができ、面識を持てただけで、調子に乗るほど大満足しているというわけである。

「ははは、それは少し早計かもしれませんな。どうだ、ローザ。レイ殿はこう仰っているが？」

ダンディ男爵は愉快そうに笑うと、ローザに水を向けた。

「嬉しいですわ。レイ様は面白い殿方ですから」
ローザが満更でもなさそうに答える。
「ほう……。でしたら、どうでしょう。レイ殿。後日、我が娘と個人的に会ってやってくれませんか？　まずはもう少し互いのことを知る必要があるでしょうからな」
「……え？　あ、はい。……いや、え？」
ダンディ男爵に訊かれると、怜は呆然と頷いた。そして――、
（え？　あれ、これ……デートの約束をしたのか？　もしかしてワンチャンある？）
と、遅れて状況を理解すると――、
「よろしくお願いいたします、レイ様」
ローザが嬉しそうに、そして、可愛らしく頭を下げた。
「あ、いや……こ、こちらこそよろしくお願いします。ローザさん」
怜が上ずった声で挨拶を返す。
（え、えらいことになった……）
と、そんなことを思いながら。

第１３９話　出発に向けて

歓待パーティの後、リオはセリアを連れて――というより、セリアがリオに付いてきて――貸し与えられた自室へと戻った。なにやら話があるとのことだ。まあ、リオからも少し訊きたいことがあったので、ちょうどよかったのだが。

ちなみに、本当は部屋と一緒に身の回りの世話をしてくれるメイドも貸し与えられたのだが、身の回りのことは自分ですると、退室してもらっている。

「お茶を淹れますね。先生はそこに座ってください」

リオは部屋の中に入ると、すぐにセリアをもてなす準備を始めた。だが、セリアはソファには座らず、リオと一緒に簡易キッチンに向かうと――、

「ありがとう。ごめんね、リオも疲れているのにおしかけちゃって」

と、リオに語りかける。

「俺は少し前に参加した夜会でちょっとは耐性がついたので。先生こそああいった催しに参加するのは久々だったでしょうから、疲れたのでは？」

リオは実際には気疲れしていたものの、強がってみせた。そして、お湯を温めながら尋ねる。

「まあ、確かに疲れたけど、知り合いの人も多かったから。会うの

も久しぶりだったし、色々と新鮮だったわよ」

セリアは柔らかく微笑み、小さく肩をすくめる。

「なら、よかったです。パーティの最中はあまり話せませんでしたから、実は少しだけ心配していました」

言って、リオが安堵の笑みをたたえた。

結局、色んな貴族が終始ひっきりなしに話しかけてきたので、リオはあまり自由に動き回ることができなかったのだ。

まあ、セリアはセリアで色々と大事な話をしていたようだから、傍に居続けるわけにもいかなったのだが。

「……リオ、ずっと女の子達に囲まれていたもんね」

と、セリアがリオの反応を窺うように話題を振る。セリアはセリアでリオのことをしっかりと見ていたようだ。すると――、

「心配で、先生ばかり見ていましたけどね」

リオが微苦笑して、間を置かずに返す。

「……え、う、うん。そっか、あはは」

セリアは面食らい、上ずった声で頷いた。

縁談でもあったのではないかと訊いて、リオがどんな反応を見せるのか見てみたかったのだが、思いもよらぬ反応を見せてしまったのは自分の方だった。幸いリオはお茶を淹れる作業に集中しているので、赤くなった自分の顔を見られてはいないようだが。

恥ずかしくて、言葉が出てこない。そうして、セリアが顔を赤く

したまま俯いていると――、
「できました。ソファに移動しましょうか。アイシアは寝ているのかな？」
と、リオが言った。
現在、アイシアは霊体化してリオの体内にいるが、起きているのか、眠っているのかは契約者であるリオ自身にもわからない。
起きていれば声をかけることで反応があるはずなのだが――、
「……」
あいにくとアイシアからの応答はなかった。
「寝ているみたいですね。じゃあ、二人で飲みましょうか」
「……うん」
リオは自然体で微笑むと、ソファに移動して腰を下ろす。セリアはおずおずと頷き、ぎこちない足取りでリオを追いかけて向かいに座ると――、
「えっと、私の仕事が見つかったから、最初に報告しておくね。レストラシオンに所属する貴族の子弟向けにアカデミーが新設されたらしいの。とりあえずは研究者として活動しながら、そこで講師業もやることになったわ。もしかしたらガルアーク王国の王立学院にも出向くことになるかもしれないけど」
と、自分の仕事が見つかったことをリオに報告する。
「なるほど。まあ、先生なら職に困ることはなさそうだと思ってい

ましたが、胸のつかえがとれました。先生の講義を受けられる生徒達が羨ましいです」

リオは朗らかに相好を崩した。

「あはは、もう私がリオに教えられることなんてないわよ」

言って、セリアが哀愁を帯びた笑みを覗かせる。

「そんなことはありません。先生には今も昔も教えてもらってばかりです」

「……私だってそうよ。リオには教えてもらってばかりで、助けてもらってばかり。これまでだって、今度だって……。クリスティーナ王女殿下から聞いたわよ。私のために色々と動いてくれているんでしょう？」

リオがかぶりを振ると、セリアが申し訳なさそうに話を持ちだした。

「……余計なおせっかいだったかもしれませんが、心配だったもので。なら、俺がレストラシオンから屋敷をもらい受ける話は聞きましたか？」

と、リオは微妙に気恥ずかしそうに苦笑し尋ねる。

「うん、聞いた。……そこに私が住むことも。明日にでも譲渡予定の屋敷に案内してくれるって。すぐに住めるそうよ」

「それは良かった」

どこか悩まし気に頷くセリアに、リオが微笑みかけた。

「良くないわよ。またリオに借りができちゃった」
「俺は貸しだなんて思ってません。形式を整える関係で一度俺に所有権を経由する形になりましたが、実質的に屋敷は先生の物なんですから。諸々の手続きを済ませたら書類一式を先生にお渡ししますので――」
「待って、ちょっと待って。名義はリオのままでいいから、書類一式もリオが保管していて。お願いだから！」
滔々と語るリオに、セリアが慌てて言葉を挟む。
「ですが……」
「屋敷はリオが手柄を立てたからこそ貰える物なんだから、リオの物よ。私が貰うわけにはいかないわ。私は住む場所を用意してくれただけで十分なの。稼いだお金で賃料だって払うから。だから、ね？　お願い」
リオが難色を示そうとするが、セリアが力強く訴えかける。
「別に賃料はいらないんですが」
「ダメよ、ケジメだから。ちゃんと払わせて」
セリアはきっぱりとかぶりを振った。
「……わかりました。先生がそう仰るのなら」
「うん。一通りの手続が済んだら、きちんと契約を交わしましょ。リオが旅立つ前に」
「……はい、そうですね」
と、リオは微妙に物憂げな声で頷く。すると――、

「……ねえ、覚えている？　昔、貴方がベルトラム王国を出ていく前に、私の部屋を訪れてくれた時のこと」

セリアが儚げに微笑み、少し気恥ずかしそうに語りだした。

「ええ、覚えています」

リオは当時の光景を思い浮かべるように目を瞑ると、ゆっくりと頷く。

「あの時は悲しいお別れだったけど、今度はそうじゃないわ。そうでしょう？」

尋ねて、セリアはリオの顔を窺うように見つめた。

「はい。今度は正々堂々と、定期的に顔を出します」

「約束よ？　名義上だけとはいえ、この都市にリオの家ができるんだから」

と、セリアはリオに言い聞かせるように語りかける。だが――、

「少し違います。先生がいるから、会いに来るんです。いなければここに用はありません」

リオは微笑して、首を横に振った。

「へ……あ、えっと、うん」

セリアが微かに頬を紅潮させて、恥ずかしそうに頷く。そして―

―、

「そ、それならいいんだけど、私が言いたいのは、今度は前向きにお別れしましょうってこと！　だから、やり直しをしましょう。悲しい思い出にはしたくないし、あの時みたいに……、今度は明るく、前向きに！」

と、上ずった声で、やや勇み足に言った。

「やり直し、ですか？　あの時みたいに？」

いまいち要領を得ないセリアの物言いに、リオが首を傾げる。

「う、うん。別れ際に、その……抱きしめてくれたでしょ？　だから……、ほら、ちょっと立って」

セリアは恥ずかしそうに語ると、立ちあがってリオに近づいた。

「えっと……、はい」

リオがやや困惑した様子で立ち上がる。すると――、

「そ、そのままじっと立っていてね」

セリアはおずおずとリオの胸元に顔をうずめた。そのまま自分の身体をそっとリオに預ける。

（……あの日のやり直し、か。確かに、先生がこうして抱きしめてくれたっけ。あまり明るい思い出ではなかったから、上書き……みたいなものなんだろうか）

リオは微苦笑すると、そっとセリアの背中に手を回した。すると、セリアがリオを抱きしめる力が少しだけ強まる。
セリアの温もりはあの日と同じで、相変わらず心地よかった。
「リオはあの時よりだいぶ大きくなっちゃったわね」
と、セリアがリオを見上げてはにかむ。
「先生はさらに小さくなった気がします」
「もう……貴方が大きくなりすぎたのよ」
悪戯っぽく笑ったリオに、セリアが呆れがちに返した。そして――、
「他の人がいる前ではこうして別れを済ますことはできないだろうから、まだ少し早いけど言わせてね。……リオ、行ってらっしゃい。気をつけて」
セリアは安らかに見送りの言葉をリオに贈った。
「はい。行ってきます」
リオも安らかに微笑んで頷く。
この日、セリアと済ませた別れの挨拶は、温かな思い出としてリオの脳裏に刻まれることになった。
◇　◇　◇
その後、セリアがリオの部屋から退室すると――、

「……春人」

すぐにアイシアが実体化して現れた。

「アイシア……、起きていたんだ。おはよう」

リオが小さく目をみはる。起きていたのなら出てくればいいのにとも思ったが、出やすい雰囲気でもなかったかもしれないし、もしかするとリオがセリアと一緒にいられる時間が残り少ないことを慮(おもんぱか)って、気を遣ってくれたのかもしれない。

「ねえ、春人。セリアのことが心配？」

アイシアは突然にそんなことを尋ねた。

「……アイシアに隠し事はできないか。心配だよ」

リオは微苦笑し、観念したように頷く。すると――、

「私、残るよ。春人がセリアのことが心配なら、私がセリアの傍にいるよ？」

と、アイシアが申し出た。

「……それはアイシアに悪いよ。いつも俺の都合で君を振り回している。本当は里に向かうはずだったのに、今度は北へ向かうことになったし」

リオは微かに目を丸くしたが、すぐ後ろめたそうにかぶりを振る。

「私が里に行けないのは別に構わない。レイスの情報は漠然としているし、真偽もわからないけど、古くなった情報に価値はないから。だから、たとえ小さな可能性でも、北へ向かうのならなるべく早い方がいい。里に行ったら、戻ってくるのに二週間はかかる。その間にルシウスが北からいなくなる可能性だってある。そうしたらこんな小さな情報だって二度と得られなくなるかもしれない」

アイシアはいつにも増して言葉多めに語った。相変わらず、抑揚のない声だが。

「……そうだね。でも、それでも俺の感情を優先させていることは確かだ。確定情報に基づいているわけでもなく、君を振り回していることに違いはない」

と、リオは悩ましそうに言う。

「情報が確定しているかどうかなんてどうでもいい。確定情報を得られる保障もない。問題は春人がどうしたいのか。北へ向かいたいのなら向かえばいい。セリアが心配なら私を使えばいい。春人はどうしたいの？」

アイシアは淡々と、リオの心を見透かしているように尋ねる。

「ベルトラム王国の貴族は油断ならない。ずっと先生の傍にいることはできなくても、もうしばらくは様子を見た方がいいとは思っているよ。……でも、先生だって立派な貴族だ。王都にいた頃のように立場が弱いのならともかく、今はそうじゃない。先生の扱いに関して誓約書にサインしてもらうよう取り計らった。なら、信じて任せてもいいとも思っている」

リオが悩ましげに自分の気持ちを語った。
「しばらく様子を見た方がいい思っているのなら、私を使って。春人」
アイシアは平たい声でそんなことを言う。
「……たまにわからなくなる。どうしてアイシアはそこまで俺のためにしてくれるのか」
そう言って、リオが窺うような視線を向けると――、
「私は春人のために存在しているから」
アイシアが端的に答える。
「……今までに聞いた答えと、あまり変わらないね」
「言って、春人がどうしたいのかを」
苦笑するリオに、アイシアは結論を迫る。
（確かに先生のことだって心配だ。それに、理屈ではわかっているんだ。アイシアの正体を知るためにも、さらにはレイスという得体の知れない存在の正体を探るためにも、早いうちに里へ向かった方がいいって）
と、リオは思う。だが、それでも――、
「一カ月……、最長で二カ月、セリア先生の傍に居てもらってもい

いかな？　その間にここへ戻ってくるから」

と、リオは言った。すると――、

「わかった。セリアのことは私に任せて。今度は何があっても離れない」

アイシアはただただ綺麗な声で即答したのだった。

◇　◇　◇

翌日の昼過ぎ。

リオとセリアはロダン侯爵に案内されて、領館からほど近い屋敷を訪れていた。周囲には付き添いの警備兵やらメイドやらもおり、さらにはクリスティーナまでもが同行している。

一行（いっこう）が敷地の入り口となる門の前で馬車から降りると――、

「ここがすぐに入居できる屋敷の中で最も条件の良い物件でございます。ここからは歩きながら案内いたしますので、ご足労を願います。さあ、どうぞこちらへ」

と、ロダン侯爵が言って、先導して門をくぐる。敷地の入り口から丘の上の屋敷へと伸びる道の先には、貴族が一人で暮らすにはいささか以上に大きな豪邸がそびえていた。周囲には手入れが行き届いた美しい自然庭園までもが広がっている。

（屋敷があるのは丘の上。敷地に入るための門は一つ。一応、簡単に侵入しづらいようには作られているな。敷地内の見晴らしもそこそこ良いし、魔術結界を張れば夜間の侵入者探知もできる）

リオは油断なく立地条件を観察しながら、ロダン侯爵の後を付いていく。

「なにぶん今はレストラシオンに所属する貴族の大半がこのロダニアに屋敷を構えておりますのでな。新規に屋敷も建築しているおかげで、土地不足が問題となっております。なので、あいにくとここも敷地面積が少々手狭となっているのですが、その他の条件は領内でも有数と言っていいほどに恵まれております」

一行を引き連れて屋敷へと続く道を歩きながら、ロダン侯爵がロダニアの物件事情とここの物件の価値を語る。

（警備の観点からすると、これでも広すぎるくらいだけど……立地的には許容できる範囲か。貴族的な世間体もあるし、あとは先生が気に入ってくれればいいかな）

と、リオが考えているうちに、屋敷の玄関にたどり着いた。その後も、ロダン侯爵の案内で屋敷の中を見て回る。

屋敷の中は使用人が住まうことを前提に、家族で住んでも余裕があるほどに部屋が余っており、内装もしっかりとお金をかけられていることが窺える作りとなっていた。

物件の譲渡にクリスティーナが関与している以上、ロダン侯爵の面子的にも下手な屋敷は提供できないのだろう。領内でも有数の好条件という言葉に嘘はないようだ。

「ハルト、どうかな？」

一通り屋敷の中を歩き回ると、セリアがリオに訊いた。

「いいと思います。ただ、住むのはセリアですから、貴方の意見を

優先してください」

リオが肯定的な意見を述べる。紹介された物件が好条件であることに間違いはないし、無料で物件を貰う以上、あまり我儘も言えない。

「ハルトがいいなら、私もいいと思う。というより、本当に立派な屋敷よ、ここ。領主以外に領都でこんな立派な屋敷を持てる貴族なんてそうそういないわ」

と、セリアが感心した様子で言うと――、

「ははは、セリア君にそう仰っていただけるのなら幸いですな。クリスティーナ王女殿下はいかがでしょうか？」

ロダン侯爵が鷹揚に語って、クリスティーナに水を向ける。

「……お二人とも問題がないのでしたら、私からは特に」

クリスティーナはリオとセリアを見やりながらかぶりを振った。本当に褒賞はこれでいいのかという気持ちはまだあるが、当の本人達が構わないと言っているのなら、無理に押し付けるわけにもいかないだろうと思って。

「なるほど。では、こちらの物件をアマカワ卿に譲渡するということでよろしいですかな？」

「はい。恐れ入りますが、よろしくお願いいたします」

ロダン侯爵が尋ねると、リオが二つ返事で頷いた。

その後、速やかに契約が結ばれ、その日のうちに諸々の手続も済

まされ、契約書や権利証が作成されることになる。また、事前にリオがクリスティーナとレストラシオンに突き出した要求書――主にセリアの身柄に関する取扱いを内容とする――も受諾され、誓約書を作成してサインされることになった。これで少なくともレストラシオンの人間が表立ってセリアの身柄に害意を及ぼすことはできなくなったことになる。

屋敷には必要な家具が最低限揃っているので、早速、明日からセリアが屋敷で暮らすことが決まり、この日はとりあえず解散となった。

第１４０話　出発、そして――

レストラシオンから屋敷を貰い受けた日の二日後、リオは昨日からセリアが暮らし始めた自分の持ち家を訪れていた。

ちなみに、一応、屋敷の所有者はリオだが、婚約者でもない男が未婚の貴族女性の家に寝泊まりするわけにはいかないと、ロダン侯爵領の迎賓館に滞在していたりする。

今日、屋敷を訪れたのは、セリアと正式に屋敷の賃貸借契約を締結するためだ。

「これで屋敷の賃貸借契約を正式に締結したことになるわね。契約書を無くしちゃダメよ？　なんてね。気をつけるのは私の方か」

セリアは作成した契約書にサインすると、どこか寂しそうに微笑んだ。

「あまり散らかさず、しっかりと保管場所を用意しておいてください。本当は信用できる人間が先生の世話役に就いてくれるとありがたいんですが……、やはり難しそうですよね？」

リオはくすりと笑うと、窺うように尋ねる。

「うーん……、候補の人員はいくらでもいるらしいんだけど、気を許せる相手を見つけるのは難しいわね。とはいえ、あまり我儘も言っていられないし、そこら辺をどうにかするのは家主となった私の仕事だから、リオは気にしないでいいわよ。屋敷に結界も張ってくれたし、当面は一人暮らしでもいいから」

セリアは苦笑して、小さく肩をすくめた。すると――、
「そのことなんですが、屋敷……というより、先生の警護役に関してお話があります」
リオが真面目な面持ちで話を切り出そうとする。
「……何かしら？」
尋ねて、セリアは姿勢を正した。
「実は俺が旅に出ている間、先生の傍にはアイシアに残ってもらおうと思っていまして」
「え？　アイシアに？」
「はい。霊体化したアイシアに傍にいてもらえば安心でしょう？」
「……安心は安心だけど、アイシアは契約者の貴方から魔力の供給を受けているんでしょう？　長い間離れても大丈夫なの？　何より、リオにもアイシアにも悪いわよ」
と、セリアは顔を曇らせる。
「実体化しなければ激しい魔力消費はないはずですし、魔力の補給に関しても考えがあります。それに、これはアイシアから言い出してくれたことなんです」
「……アイシアから？」
リオがどこか困り顔で言うと、セリアが意外そうに目を見開く。
すると――、
「春人がセリアのことを心配しているから、私が残ればいいって言

っただけ」

アイシアがおもむろに実体化して、そんなことを言った。

「あはは……、だそうです。しまらない話ですが」

リオが苦笑して、ひょいと肩をすくめる。

「アイシア、リオ……」

セリアは名状しがたい想いで二人の名を呟いた。

「このロダニアはレストラシオンの本拠地ですが、それでも人の出入りはあります。都市の中に密偵が紛れ込んでいる可能性はもちろん、組織の中にまで入り込んでいる可能性だってあるはずです。潜入先で大胆な強硬手段に出るとは考えにくいですが、先生は国内の重要人物ですから、何が起きるかはわかりませんし、最初のうちは特に不安なはずです。違いますか？」

と、リオは自身の考えを述べてから、セリアに問いかける。

「……そうね。クリスティーナ王女殿下達にも同じことを言われたし、私もそう考えている。少しも不安がないと言えば嘘になるわ」

「でしたら、最初だけでもアイシアに護衛を頼んでください。もちろん周辺に警護の人員が配置されるんでしょうが、アイシア以上の適任はいないはずです」

バツが悪そうに頷くセリアに、リオが言う。

「確かにアイシアが傍に居てくれたらすごく心強いけど、そうした

ら結局、貴方達に頼っちゃうことになるし……」

セリアはひどく悩ましげな面持ちを覗かせた。

「私は構わない」

アイシアが即答する。

「俺もアイシアが構わないのであれば。……本当は俺が傍に居てあげられればいいんですが、少し所用がありまして。すみません」

一方、リオがどこか後ろめたそうに語る。すると――、

「リオが謝ることなんて何もないわよ。貴方には貴方の事情があるんでしょうし、……何をしようとしているのかはわからないけど、何か目的があって一人で動いているんだなってことはわかっているつもりだから」

セリアがリオの顔色を窺うように、気遣って言った。

「先生……」

「むしろ申し訳ないのはこっちよ。私なんかの世話でリオに時間を取らせちゃって、貴方の負担になっているから」

「そんなことはありません」

リオは即座に否定する。

「貴方ならそう言うんでしょうね。……でも、私はリオに大きな恩があると思っているの。たくさん養ってもらって、申し訳ないと思ってもいる。だから、私に手伝えることがあったら、遠慮なく言う

のよ？　私にできることなら何だってするから」

セリアはやや呆れがちに嘆息して言うと、優しくリオに微笑みかけた。

「……はい」

リオは安らかに相好を崩して頷く。

「それで、ここにはどのくらいで戻ってこられそうなの？」

二人でしばし見つめ合うと、セリアは微妙にはにかんで尋ねた。

「最長で二カ月。早くて一カ月です。アイシアの魔力供給に関しては、霊体化した状態で日常的に消費する分には特に問題ありません。問題は実体化した時なんですが、念のためにこちらを」

そう言って、リオは机の上に金属製のブレスレットと小袋を置いた。すると、セリアの視線が机上に引き寄せられる。

「……これは？」

「ブレスレットは魔道具です。埋め込まれているのは精霊石で、魔道具の核になっているのですが、あらかじめ魔力を補給しておくことで、いざという時に吸い出して使えるようにもなっています。魔道具としての本来の機能は、魔術……それと魔法の威力を増幅して強化するというものです。これを使えば少ない魔力で高威力の魔法を使用可能になるでしょう」

「魔法の威力を増幅って、古代魔道具級（エンシェントアーティファクトクラス）の代物じゃない……」

リオから魔道具の効果を説明されると、セリアが顔を引きつらせ

た。

「今はそっちの機能のことはいったん置いておきましょう。確かに先生の魔力は人間族にしては破格なほどに膨大ですし、アイシアと一時的なパスをつなぐことで魔力を供給することもできます。ただ、それでも実体化したアイシアを使役するにはいささか心もとないはずです」

「まあ……、そうでしょうね」

セリアが歯噛みして同意する。リオの魔力が底知れずに膨大なせいで実感が薄いが、霊的存在が実体化して顕現するという超自然的な事象を引き起こすなど、実体化を維持するだけでもかなりの魔力を消費するであろうことは想像に難くない。ましてや戦闘で精霊術を使えば魔力消費量は加速度的に増えていくのだから。

一応、アイシアは自前で相当量の魔力を蓄えておくことができるらしいが、契約者から離れた状態で実体化を維持したまま生活をすれば、一カ月程度で魔力残量は怪しくなるという。

「なので、その不足分をこの魔道具に埋め込んだ精霊石で補ってもらおうと考えました。おそらく先生数人分の魔力が込められていますから、アイシアが本気を出して戦闘しても耐えられるはずです」

「す、数人分って……。自信を失うわね」

「それだけ作るのに苦労した一品です。かなり質の良い精霊石を使用していますから。本当は他にも先生に作っておきたい魔道具があったんですが、ストックの関係でそれはまた今度ということで」

と、リオは苦笑して言った。

「あはは……、こうしてリオへの恩が積み重ねられていくのね」

がっくりと項垂れて苦笑いを覗かせるセリアに――、

「えっと、それで、こちらの小袋ですが……」

リオがおずおずと声をかける。

「う、うん。何が入っているの？」

「クレール伯爵から預かった路銀の残りです」

そう言って、リオは貨幣がぎっしり詰まった小袋をセリアに差し出した。

「え？　あ、お父様から……。こんなに受け取っていたの？」

セリアがギョッと目を見開く。

「はい、全部で金貨二百枚ほどの貨幣が詰まっています。どうぞ受け取ってください」

「……ダメよ。これはリオが受け取って。お父様もそう言っていたんじゃない？」

セリアはきっぱりとかぶりを振って、貨幣の詰まった小袋をリオに押し戻した。

「さて、どうでしたでしょうか？　確かレストラシオンでの先生の活動資金として役立てろとのことでしたが……、いずれにせよ俺には必要のないお金なのでいりません。先生はしばらく色々と物入りでしょう？　お父上のお金ですから、遠慮なく使ってみては？」

「……じゃあ、借りておく。きちんと返すから」

セリアはしらばっくれるリオをたっぷりジト目で見つめると、少し拗ねたように唇を尖らせて、お金を受け取った。このままだと水掛け論になるのは必至だし、この場で何と言おうとリオがお金を受け取らないのは自明だから。

「はい」

リオは朗らかに首肯した。

◇　◇　◇

そして、翌日。いよいよリオが出発する日がやってきた。時刻は午前中。アマンドまではリーゼロッテの魔道船で送ってもらうことになり、都市に隣接する湖の港を訪れている。

港には主だった顔ぶれが見送りに姿を現しており、今はクリスティーナが代表してリオに声をかけているところだ。

「結局、貴方には大した恩を返すことができませんでした。アルフレッドの剣も返していただくことになりましたし」

と、クリスティーナがどこか物憂げな面持ちで言う。

「業物の剣なら間に合っていますし、国宝の剣を簡単に頂戴することもできません。どうかあの剣に相応しい使い手にお与えください」

リオは苦笑してかぶりを振った。

アルフレッドを倒したことで拾った剣はその後もリオが預かり続けていたのだが、出発を前にリオから返還を申し出ている。クリスティーナはリオになら与えてもいいと言ったのだが、リオはその申し出を恭しく辞退したのだ。

剣を受け取ることで貴族社会からレストラシオンとの結びつきが過度に強いものだと勘ぐられても面倒だし、剣自体を狙って不届き者に襲われる危険性もあると考えたから。

「……わかりました。では、セリア先生にお会いになる際はこちらのブローチを提示して貴族街にお入りください。通行手形の代わりとなります」

「……承知しました。ありがたく頂戴します」

リオはクリスティーナから恭しくブローチを受け取った。ブローチにはクリスティーナが公的に用いる紋章と同じデザインが施されているが、リオが知る由もない。

受領まで一瞬の間を要したのは、ブローチに通行手形以上の役割が込められているのではないかと勘ぐったからだ。だが、公衆の面前で理由もなしに王女からの贈り物にケチをつけるような真似はできず、大人しく受け取る以外に道はない。

ブローチについて深く尋ねることで藪蛇となっても困るし、失礼な行為に当たりかねないので、リオはさっさと話題を変えることにした。知らぬが仏である。

「それはともかく、コウタ君のことはよろしいのですか？　このままアマンドへ連れていってしまって」

と、リオは一緒に見送られる側にいる浩太をちらりと見やって訊いた。何やら浩太は昨日のうちにロダニアから出ていくと意思表明をしたらしい。

一方で、怜はロダニアに残ることになっており、見送る側にいたりする。別に喧嘩をしているというわけではなさそうだが、リオはどこかバツが悪そうな雰囲気を二人から感じ取っていた。

「それが彼の意志だというのなら、こちらから引き止める真似はしません。とはいえ、戻ってくるようなら受け入れる用意があるとは伝えました。後は彼次第です。今後は一先ずアマンドで活動するとのことでしたから、レディ・リーゼロッテにそれとなく気を配っていただくようお願いしました」

クリスティーナは微妙に憂いを帯びた面持ちで語った。心配はしているが、あくまでも強制はしないというのが彼女のスタンスらしい。

「……なるほど。承知しました」

リオが小さく息をついて頷く。気持ちとしてはリオもクリスティーナと似たように考えている。何かと危なっかしく感じてはいるが、ああ見えて頑固なところがあるようだし、中途半端におせっかいを焼いても逆効果だろう、と。

「……もしアマカワ卿の目の届く範囲で困っているようであれば、アドバイスだけでもしていただけると助かります」

「あまりアマンドにはいられませんが、畏まりました」

申し訳なさそうにお願いしてきたクリスティーナに、リオは微苦笑して応じた。

その後まもなく、リオ達はロダニアを出発する。あらかじめセリアとの別れはきちんと済ませていたので、最後は軽く言葉を交わしただけで別れを済ませた。また、ヴァネッサや怜とも別れの言葉を交わすと魔道船に乗って、その日の昼過ぎにはアマンドに到着することになる。

◇　◇　◇

そして、時は少しだけ進み、翌日の夕方。ロダニアの湖に一隻の魔道船が不時着した。不時着した船は傷んでいたものの、レストラシオンが所有するものだと旗からすぐに判明する。ロダニアの貴族街は瞬く間に騒ぎとなった。

迅速に指揮を執って救助の人員を向かわせるクリスティーナ。魔道船には顔面を蒼白にした乗組員達がいて、怯えた様子で身体を震わせていた。

救助隊の隊長は一先ず保護を優先し、魔道船の乗組員達を港へ輸送しながら事情を聴取することになる。すると、魔道船の船長から告げられた事実に、大きく衝撃を受けることになった。

救助隊が魔道船の乗組員達を連れて港にたどり着くと、そこにはクリスティーナとレストラシオンの重鎮達が待ち構えていて――、

「何があったのか、報告しなさい」

と、クリスティーナが直々に命令した。救助隊の隊長はひどく戸惑った様子を見せたが、意を決したのか――、

「せ、船団を組んでフローラ王女殿下をロダニアへ護送していたところ、く、黒い竜の襲撃を受けたとのことです。他の護衛船は……ぜ、全滅。彼らが乗っていた船だけがかろうじて逃げることができたと」

と、上ずった声で報告した。

瞬間、クリスティーナは高所から落下するような感覚を覚える。平衡感覚を失い、まるで天と地がひっくり返ったような衝撃を受けた。頭が上手く働かない。

「……全滅？　フローラは？　フローラはどうなったの？」

クリスティーナは何とか頭の中に思い浮かんだ質問を口にした。
だが――、
「ふ、フローラ第二王女殿下がお乗りになっていた船は、真っ先に撃墜されたと……」
返ってきた答えは、ただただ非情だった。

第１４１話　その頃　その四

場所はガルアーク王国城。リオ達がリーゼロッテ所有の魔道船に乗り、ロダン侯爵領の領都ロダニアを出発した日の午後のことだ。

勇者・坂田弘明は、ガルアーク王国の大貴族であるグレゴリー公爵家の令嬢――リゼット＝グレゴリーが主催したお茶会に参加していた。

参加者は主催者のリゼットと、その取り巻きの令嬢達、そして主賓としてお呼ばれした弘明、さらにはつい先日に弘明の婚約者となったばかりのフローラ＝ベルトラムと、付き添いとして同行したロアナ＝フォンティーヌである。つまり、男性の参加者は弘明のみ。お茶会が始まり、お決まりの挨拶を終えたところで――、

「伺いましたわ。ヒロアキ様とフローラ様はご婚約なさったとか。おめでとうございます」

リゼット＝グレゴリーが、弘明とフローラへにこやかにお祝いの言葉を贈る。すると、他の令嬢達も口々に「おめでとうございます」と言いだした。

「ああ。まあ、ありがとう、と言っておこうか」

弘明は少し照れくさそうに、満更でもない様子で頭を掻く。一方で、フローラは「ありがとうございます」と折り目正しく頭を下げていた。

「勇者様の正妻の座を射止めるだなんて、素敵ですわね。まず間違いなく、フローラ様は後世にも名を残されるのではないでしょうか

？　憧れますわ」

リゼットはすかさず弘明とフローラを持ち上げる。すると――、

「あー、でも俺、正妻とか側室って表現は嫌いなんだよなあ」

弘明は芝居がかった仕草でかぶりを振った。

「あら、どうしてでしょうか？」

リゼットは興味深そうに目をみはって質問する。

「だって、自分の女に順番をつけるってことだろ？　俺は平等に接したいし、順番に縛られたくもない。他にも身分とかあれこれ面倒くさいルールが発生したりとかな。息苦しくて堪ったもんじゃない」

「まあ。では、ヒロアキ様と結婚した女性は等しく寵愛を受けることができると？　博愛主義でいらっしゃるのですね」

「うーむ、まあ、博愛主義っていうのは少し違うかもな。俺はルールとかしがらみが嫌いなだけだ。妻同士の仲が悪かったりとか、後妻は肩身が狭くなるとか、一般的な王侯貴族の家だとそういうのがあるんだろ？　嫌いなんだよな。女同士で勝手に派閥を作って、男を巡ってギスギスいがみ合うの。それで被害を被るのは部外者というか、当の男だったりするしな」

などと、弘明が面倒くさいと言わんばかりに、自論を語ると――、

「なるほど。恐れながら、ヒロアキ様の人となりが少し理解できた気がしますわ」

リゼットはにこにこと笑みをたたえて、ヒロアキに語りかけた。

「ほう。どういう人物に映ったのか、興味があるな」
弘明はニヤリと不敵に笑みを刻み、リゼットを見つめ返す。
「ふふふ。でも、私の見当違いでしたらお恥ずかしいですから、もう少しヒロアキ様のことをよく知りたいですわ。お聞かせいただけないでしょうか？」
リゼットは照れくさそうに微笑すると、上目遣いで弘明の顔色を窺う。すると、弘明は上機嫌に頷いた。
「まあ、やぶさかではないが、せっかくこういった趣向の席を用意してもらったんだ。俺もここにいる全員の話が聞きたい」
「それはもう、この場にいる子達は喜んで話したがりますわ。ねえ？」
リゼットは満面の笑みをたたえて、その場にいた令嬢達を見やる。すると、令嬢達はそっとはにかみ、お淑やかに頷いてみせた。
「じゃあ、聞かせてもらうとするかな」
と、悪い気はしない弘明である。
その後、お茶会は大きく盛り上がり、夕暮れ間近まで話に花を咲かせることになった。だが、それでもまだまだ話し足らず、弘明の提案により、その場の流れで次のお茶会をすぐにでも開くことが決まり、結果、三日後に次のお茶会が開催されることになる。
◇　◇　◇

そして、お茶会を終えて、弘明達が城内に借り受けている自室へと向かう帰り道。

「あ、あの、ヒロアキ様」

フローラがおずおずと弘明に話しかけた。

「ん、何だ？」

弘明はご機嫌な声色でフローラを見やるが――、

「その、明日はお姉様のところ、ロダニアに向かうのですよ？　三日後に次のお茶会に参加すると仰っていましたが……」

フローラが弘明の顔色を窺うように言った。

明日、ガルアーク王国の王都を出発して、ロダニアへ向かい、三日後には再びガルアーク王国の王都に戻るとなると、かなりの強行日程となる。用向きはまだわからないが、三日後に戻ってこられるとも限らないのだから、安易に予定を決められてしまうとフローラとしては少しばかり困ってしまう。まあ、性格的に強くは言い出せないのだが。

「ん、あ、ああ。そうか、そういやそうだったな」

弘明はつい忘れていたかのように頷くと、バツが悪そうに頭を掻いた。

「そ、そういやそうだったって……」

フローラは何か言いたげに口ごもってしまう。

彼女のもとにクリスティーナからの知らせが届いたのはつい数日前のことだ。本当ならば知らせを聞いてすぐにでも飛んでいきたかったが、弘明が今日のお茶会に参加したがっていたため、水を差すわけにはいかないと、はやる気持ちを抑えて、このお茶会が終わるのを待っていた。

もちろん簡単に事情は説明したが、弘明は予定を強いられることを嫌うところがあるから、強く言い含める真似はしなかった。だが、それゆえに弘明はさして気にも留めなかったのかもしれない。もう少し念を押すように言っておくべきだったのだろうか。フローラはそんなことを思ってしまう。すると――、

「んー、てか、それって俺も行くことになっていたのか？　確かに話は聞いていたけどよ。一緒に行くとは言ってなかったよな？」

弘明が億劫そうに尋ねる。

「……はい。その、絶対に行かなきゃいけないということは……ないんですが」

フローラはやはり強く言いだせず、言葉を濁してしまう。もちろん彼女としては一緒に来てもらうつもりでいたが、そんな趣旨の発言を一度もしなかったことも事実だから。

「急ぎの用事ってわけでもないんだろし、そのうちフローラの姉さんの方からこっちに来るんだろ？　なら、俺が会うのはその時でもいいよ。まあ、早く姉さんと会いたいっていうフローラの気持ちはわかるから、ロダニアへ行ってくるといいさ。こっちはロアナがいれば大丈夫だしな」

弘明は言い訳するように語ると、黙って話を聞いていたロアナを

見やる。

「……はい。ヒロアキ様の補佐は私にお任せくださいな、フローラ様」

ロアナはごくわずかに逡巡したようだが、すぐに鷹揚に頷いてみせた。

「わかり……ました。では、ヒロアキ様のことをよろしくお願いします、ロアナ」

フローラはやや気落ちした様子で頷く。こんなことなら最初からもっと早く会いに行っていればよかったかもしれないと、そう思って。すると――、

「あら……、こんにちは」

ガルアーク王国の勇者、皇沙月とすれ違う。沙月は汗をぬぐいながら通路を歩いていたが、弘明達の姿を確認すると立ち止まって挨拶した。

「これは勇者様」

フローラとロアナが沙月に気づき、恭しくお辞儀をする。

一方で、弘明も沙月の存在に気づくと――、

「あー、お前か。なんだ、槍なんか握って。訓練でもしてたのか？」

と、沙月の姿を見据えながら問いかけた。

「ええ、そうです」

一応、年上の弘明に対し、沙月はやや硬い口調で頷いてみせる。

「ふーん。女だってのに、わざわざご苦労なことで」

「……あいにく行動の自由があまりないので。部屋の中に引きこもっていても身体がなまりますし」

沙月は弘明の物言いに何か含むものを感じたが、受け流して通り一遍な言葉で応じた。この二人、同じ勇者として面識もあるし、同郷人というだけあって親しくなってもよさそうなものだが、実に微妙な距離感がある。

「おーおー、お転婆だねえ」

「そういう貴方は今日も女の子達と会っていたんですか？　それらしい子達とさっきすれ違いましたけど」

「ああ。まあ周囲が俺に群がってくるもんだからな。これも勇者のお勤めってやつだ。お前が言う通り身動きはとりにくいし、勇者の辛いところだ」

弘明はそう言って、やれやれと嘆息した。

「その割には随分と楽しんでいるように見えますけど……」

沙月は怪訝な眼差しを弘明に向ける。すると――、

「おいおい、俺だって日本で育った普通の青年だぜ？　ハーレムを築くのにも抵抗はあるし、人並みに悩みだってあるさ」

弘明はニヤリと口許を緩めると、心外だと言わんばかりにかぶり

を振った。

「へえ……」

「そういうお前もこの世界の令嬢達を見習って、少しは女っぽく振る舞った方がいいんじゃないか？　せっかくモノは良いんだから、こう、お淑やかにな。地球でも、こっちの世界でも、我が強い女は煙たがられるぜ？」

「うるさい。セクハラ野郎」

と、沙月はぼそりと呟く。

「あん？」

弘明は訝しそうに目を細めた。

「いえ、ご忠告どうも。それじゃあ、私はこれで。フローラ姫、ロアナさん、二人ともご機嫌よう」

沙月は可憐な笑みを浮かべて、フローラとロアナに会釈すると、そのまますたすたと立ち去ってしまう。

フローラとロアナは見惚れたように目をみはっていたが――、

「やだねえ、何をピリピリしているんだか」

弘明だけはどこか辟易と、遠い眼差しで沙月の後ろ姿を眺めていた。

◇　◇　◇

そして、翌日。フローラは弘明とロアナをガルアーク王国に残し、

ロダニアへ向かうことになる。ガルアーク国王のフランソワに挨拶すると、護送船と一緒に王都を出発した。
乗船後、フローラは一人になりたいから、ロダニアに到着したら教えてくれと船長に言って、魔道船の貴賓室に籠ると――、

「お姉様と会えるのは嬉しいけど……。それほどにお父様の立場が悪くなっているということ、なのかな？」

と、家族のことを考え、物憂げな表情を浮かべた。
そもそもフローラをユグノー公爵と一緒に王都から出奔させたのは、他ならぬ彼女の父であるフィリップ三世である。
フィリップ三世は急激に変化しつつあった当時の情勢を察し、聖石を持たせたフローラを密かにユグノー公爵に託したのだ。表向きはユグノー公爵がフローラを連れ出したということにして――、その狙いは万が一に備えて、正当かつ高位の王位継承権を持つ王族の所在を分散させることにある。
それが今になって最高位の王位継承権を持つクリスティーナがレストラシオンのもとに姿を現したとなれば、それだけの事態が起きた、あるいは起きようとしているのではないかと、流石のフローラも薄々と勘ぐってしまわざるをえない。
とはいえ、いや、だからか、そのどちらであるにせよ、今は――、

「早くお姉様に会いたい」

フローラは早くクリスティーナに会いたかった。最後に彼女と会ったのはもう半年ほど前のことか。自分のことを誰よりも可愛がってくれる実姉（じっし）のことを、フローラは心の底から大切に思っている。

「でも、怒られるかな？」

少しも成長できていない今の自分を見たら、姉はどう思うだろうか――、そんな思いがあって、フローラは不安そうに呟いた。
正直、クリスティーナと会うのが少しだけ怖い。国のために何かしたいと思っても、何もすることができず、周囲に流され続けている自分を見たら、流石に失望されるかもしれないから。すると――、

「失礼しますよ」

軽薄そうな声と一緒に、室内の扉がガチャリと開いた。

「えっ？」

フローラがビクリと身体を震わせて扉を見やる。王族が滞在している部屋の扉をノックなしに開けるとは、いささか以上に不作法だ。
そうして扉から入ってきたのは、黒いローブを纏った二人だったが、フードで顔を隠していて、顔は確認できない。

「あ、貴方達は誰ですか？　扉の外に護衛の騎士の方達がいるはずですが……」

フローラは怖気づいたように問いかける。

「護衛の騎士ってのは、こいつらのことですかね？　おい」

男の一人が、もう一人の男に顎をしゃくって指示すると――、

「ええ。……よいしょ、と」

もう一人の男が億劫そうに、ぐったりと気絶した護衛の騎士二人を室外から運び入れた。

「っ！？」

フローラが怯えてソファから立ち上がる。

「ははは。怖がってやがる。で、こいつがベルトラムの姫さんなのか？」

軽薄そうな声の男は愉快そうに笑うと、騎士を運び入れた男に尋ねた。

「ええ、その通りですよ。フローラ＝ベルトラム。第二王女です」

騎士を室内に運び入れた男が慇懃な口調で答える。

「美姫だと聞いていたが、まだ尻の青いガキだな」

と、軽薄そうな声の男は、粗野な言葉遣いでフローラを評した。

「おやおや。人間の中にはこのくらいの年頃の少女を好む方も大勢いるのでは？」

「はっ、俺の好みじゃねえな」

などと、二人の男はフローラを置いてけぼりにして会話を繰り広げる。

「あ、あの……」

フローラはおずおずと、なんとも場違いな雰囲気を放つ二人に声をかけようとした。だが――、

「で、勇者は？」

と、粗野な言葉遣いの男は、室内を見回しながら、慇懃な口調の男に問う。

「どうやらいないようですね。神装の反応も感じられませんし」

「ちっ、せっかく勇者と戦えると思ったのによ」

慇懃な口調の男が答えると、粗野な言葉遣いの男は拍子抜けした様子で舌打ちした。二人ともフローラの存在など完全に無視している。

「こちらとしては騒ぎが大きくならないので、むしろ非常に助かるのですが……。どうも貴方がいると調子が狂いますね。いきなり現れたと思えばこちらの仕事に同行するなどと」

慇懃な口調の男は呆れがちに嘆息した。

「あっちの仕事が存外早く終わったもんだからな。上司としてお前さんの仕事を視察しに来てやったというわけだ」

「貴方は神出鬼没すぎます。そもそも普段からご自分の管轄にいたのかすら怪しい。……ああ、そういえば、少し前に貴方のことを知る人物と会いましたよ。あまりよろしい感情を抱いていないように思えましたが」

と、慇懃な口調の男が思い出したように言うと――、

「ほう……」

粗野な言葉遣いの男は、好戦的な声色で興味を示した。すると――、

「あ、あの！」

流石に痺れを切らしたフローラが、彼女にしてはかなり大きな声を出して自分の存在を主張する。

「あん？」

粗野な言葉遣いの男は、剣呑な声色でフローラに反応した。すると、フローラは怖じ気づいたように身を震わせたが――、

「い、今の私の声を聞いて、船に乗っている方達が異常を察してすぐにここへ来るはずです。フ、フードを外してください」

と、震えた声で、二人の男に警告した。すると――、

「……ふっ、はははは」

粗野な男がおかしそうに笑いだす。

「な、何がおかしいんですか？　状況をわかっているんですか？」

フローラは正気を問うように尋ねた。

「もちろん、理解していますよ。フローラ＝ベルトラム第二王女殿下」

粗野な言葉遣いの男は、口調を改めて頷く。

「ひ、悲鳴を上げます」
「どうぞ、ご自由に。こういう時は確認をとる必要なんてありません」

粗野な言葉遣いの男はにこやかに告げた。

「っ……あ、た……助けて！」

フローラは身が竦むような恐怖を覚えたが、かろうじて声を張り上げる。その悲鳴は開きっぱなしの扉を抜けて、通路にも響いたことだろう。

だが、待つこと十数秒。人が現れる気配はまったくない。フローラは今か今かと扉の先を見据えていたが、やがて不安そうに視線をさまよわせて、再び眼前にいる二人を見やった。

「いかがなさいましたか、王女殿下？」

粗野な言葉遣いの男は慇懃に問いかけると、フローラに向かってゆっくりと歩きだす。

「ち、近寄らないでください」

フローラは泣きそうな声で訴えた。

「近寄るな？　どうして？　下々の人間はご自分の命令を聞くのが当然だとでも？」

粗野な言葉遣いの男はフローラをからかうよう、大仰に不思議がってみせる。

「そ、そんなこと……。そもそも、貴方達の目的は何なのですか？」
「ははは、鈍いですね。死んでもらいにきたんですよ」
「死ん……でもらう？」

先ほどからどくんどくんと心臓が強く高鳴り続けていたフローラだが、今度は心臓を鷲掴みにされたような感覚を覚えた。

「ええ。正確には事故死に見せかけて死んでもらう、ですがね。貴方が城の外に出てくれたので助かりました。出先ならいくらでも事故死を演出できますからね。……とはいえ、流石に大変だったんですよ。騒ぎを起こさず、警備の人間をすべて始末して、ここまで潜り込むのは」

と、粗野な言葉遣いの男は自らの目的を告げる。

「そんな……。あ、貴方達。まさか船の人達を……？」

フローラは嫌な予感を覚えたのか、顔面蒼白になった。

「ああ、いえいえ。もちろん生きている人間もまだいますよ。船を動かす人間は残っていないとね。それに、他の船にも手は出していませんから、そのうち異変に気づく者も現れるかもしれません。とはいえ、遅かれ早かれほとんどが死にますから、他の者達のことはどうぞご心配なく」

と、粗野な言葉遣いの男は、晴れやかに語る。すると――、

「さっさと用事を済ませませんか？」

もう一人の男が嘆息して促した。

「相変わらず遊びがあるようで、せっかちな野郎だな、お前さんは。せっかくの王女だ。普通に殺すのも味がない。それに、このまま生かしておけばいずれ役に立つんじゃないのか？」

と、粗野な言葉遣いの男が、ちらりとフローラを見やりながら言う。

すると、フローラの身体がビクリと震えた。粗野な言葉遣いの男は、そんなフローラの反応に嘲笑を刻むと――、

「ははは、王女殿下。今、もしかしたらすぐには殺されないかもしれないと思ったでしょう？　安心なさいましたか？」

と、愉快そうにフローラに問いかけた。

「っ……」

自分の心を見透かしたように語られ、フローラは押し黙ってしまう。八割の恐怖と二割の悔しさが複雑に絡み合って、身体を震わせながら男達から視線を逸らした。

「おやおや、少しからかいすぎましたかね」

粗野な言葉遣いの男は小さく肩をすくめる。そして、今度こそフローラのすぐ目の前まで接近すると――、

「護身の魔法くらい使わないんですか？」

腰の鞘から漆黒の剣を抜いて、フローラに問いかけた。

「う……」

フローラはハッと手を動かしたが、すぐに手の動きを止める。
人に向けて攻撃魔法を放つことに心の底で抵抗を抱いているというのもあるが、魔法を使ったところでどうにかなる相手だとは到底思えないのだ。男はあまりにも堂々としすぎているし、既に間合いに入られている。呪文を唱えようとした瞬間に斬り殺されるだろう。

「おやおや、お優しいですね。こんな最低な男にも情けをかけていただけると？」

粗野な言葉遣いの男は、自分が圧倒的優位に立っていることを自覚したうえで、滑稽そうに尋ねる。

（殺すなら早く殺せばいいのに、楽しんでいるんだ。この人……）

フローラは流石に自分が馬鹿にされているのだと察した。そして、もう自分の命が助からないであろうことも。だから――、

「……そうじゃありません。私を殺すなら、好きにしてください。でも、他の方々に手は出さないと誓ってください。そうでないなら、抵抗します」

フローラは覚悟を決めて、せめて男に屈しないよう、自らの意志を示した。男に向けて手をかざしたまま、じりじりと後ずさりする。
すると、粗野な言葉遣いの男はきょとんと目を丸くした。そして、すぐにはフローラとの間合いは詰めずに――、

「……く、ははは、まさかこの期に及んで乗組員の心配をするとは。

いやはや、予想外と申しますか、お見それしました。泣いて命乞いするのを期待していたんですがね」

感心したように語って、おかしそうに笑いだした。

「……な、何がおかしいんですか？」

フローラは目の前にいる男が何を考えているのか理解できず、さらに後ずさりする。

「いえ、別に。少し……、いえ狂おしいほどに、貴方という人間に興味が湧いただけです。このまま殺すのが惜しく思えてきました」

と、粗野な言葉遣いの男が言うと――、

「お待ちくださ――」

慇懃な口調の男が、少し慌てたように何か言おうとする。だが、粗野な言葉遣いの男がそれを手で制すと、慇懃な口調の男は溜息をついて引き下がった。

「……だったら、このまま今すぐに帰ってください」

フローラは二人の男を見据えながら、突き放すように要求する。だが――、

「あいにくそれはできない相談でしてね。ですが、貴方が抵抗しないというのなら、他の乗組員を助けるのも吝かではありませんよ」

粗野な言葉遣いの男は残念そうにかぶりを振ったものの、フロー

ラの要求を部分的に受け入れる姿勢を示した。そして、懐に手を入れて、拳ほどの赤いクリスタルを取りだす。

「……本当ですか？」

フローラは訝しそうに、粗野な言葉遣いの男を見つめる。

「ええ、本当です」

粗野な言葉遣いの男は、少しも逡巡せずに頷いてみせた。だが――、

「……正直、信用できません」

フローラは目の前にいる男を少しも信用することができない。いや、そもそも本当に他の乗組員達を殺すつもりなのだろうか。いったいどうやって？　こうして話しているうちに、頭の中をぐるぐると回るように色んな考えが浮かんでくる。

「ははは。では、どうします？　ご自分が条件を提示できる立場だとでも？　信じるかどうかはご自由ですが、他の船も含め乗組員達の命は私の思うままです。貴方がここで納得しないのなら、本当に皆殺しにしますよ。あまり渋られても困るので三秒以内に決めてもらいましょうか。決められない場合は殺すということで。三、二――」

「わ、わかりました。待って、待ってください！　信じます、信じますから！　だから、誓って……、誓ってください」

粗野な言葉遣いの男が急かすようにカウントダウンすると、フローラは慌てて頷いた。遊ばれているとわかっていても、頷かざるを

えない。すると――、

「ええ、誓いましょう。乗組員の命を助けると」

粗野な言葉遣いの男は、実に晴れやかな声で頷いてみせる。

「……ありがとうございます」

フローラは泣きそうな声で礼を言うと、ゆっくりと手を降ろした。そのまま項垂れ、自らの死を待つ。約束を守るつもりなんかないのかもしれないが、抵抗すれば確実に破られることだけは確かだから。

「ははは、実に高貴なお方ですね。そんな貴方に敬意を表して、特別におまけを付けてあげましょう。運が良ければ助かるかもしれませんよ？」

「……おまけ？」

上機嫌に笑う粗野な言葉遣いの男に、フローラは疑問符を浮かべる。次の瞬間――、

「こういうことです。《転移魔術（テレポート）》」

粗野な言葉遣いの男は、フローラに向けて赤いクリスタルを投げた。そして、空間魔術の呪文を詠唱する。直後、クリスタルを起点に空間が歪み――、

「……え？」

不思議そうに首を傾げたフローラが、その場から姿を消した。

「……可哀想に。貴方に気に入られなければ楽に死ねたものを。どこへ飛ばしたのですか？」

慇懃な口調の男が、強い呆れを帯びた声で尋ねる。

「俺がいた北東のパラディア王国の、そこら辺の森にいるんじゃないか？」

と、粗野な言葉遣いの男はしれっと答えた。

「……パラディア王国、うちの国が支援している紛争地帯の中心にいる国じゃないですか。ただでさえ身一つだというのに、敵国の背後にいるベルトラム王国の王女と知られたらどうなることやら」

「冥土の土産代わりに、良い社会勉強になるだろう？　次に会った時にどんな視線を向けてくるか、見ものだな」

慇懃な口調の男は嘆かわしそうに肩をすくめると、粗野な言葉遣いの男はくつくつと笑いを抑えて言った。

「そういう悪趣味なことばかりしているから、貴方に恨みを持つ人間が増えていくんです」

「人からの恨みは人生のスパイスだからな。まあ、そんなことより、もうここに用はないだろ。さっさと始末しようや。早くアレを呼びだせよ」

「もちろんそのつもりですが、一応、貴方は乗組員達の命を助けると約束したのでは？」

「おいおい、全員に手を出さないと誓った覚えはないぜ。もとより一隻は残す予定だろ？」

「なるほど。では、呼び出しがてら帰るとしましょうか」

そう言って、慇懃な口調の男は踵を返す。
「ああ、そういや面白そうなことを言っていたな。俺を知っている奴がどうとか」
粗野な言葉遣いの男も歩きだすと、ふと思い出したように尋ねる。
「ええ、とても強い方ですよ。アレイン達が三人がかりで手も足も出なかったらしいですから。私も一度だけ交戦したことがありますが、やはり手も足も出ませんでした。おまけに人型の精霊と契約もしています」
「……ほう、ずいぶんと面白そうな奴だな。どこにいるんだ？」
「ベルトラム王国の第一王女と行動を共にしていましたが、今も一緒にいるかどうかはわかりません。私の表向きの所属も知られているでしょうし、貴方が北にいるかもしれないと情報を匂わせたので、案外、そっちに移動しているかもしれませんね」
「そうか……。まあ飛ばした姫さんの様子も見ておきたいしな。先にパラディアに向かうとするか。ま、俺を捜しているのなら、そのうち会えるだろ」
「では、私もルビア王国に用があるので、途中までご一緒しましょう」
などと、二人の男は散歩にでも行くような雰囲気で言葉を交わしあう。
そして、数分後、一体の竜らしき怪物が艦隊を襲撃する。フローラを護送していた魔道船と護送船の艦隊は、たった一隻を残して、すべてが轟沈した。

第１４２話　アドバイス

フローラが転移魔術でパラディア王国のどこかへ飛ばされる前日の午前中、リオはリーゼロッテ所有の魔道船に乗って、アマンドに向かっていた。道中、リーゼロッテに招かれ、浩太と三人でお茶を飲むことになる。

「ハルト様は今後の予定はお決まりなのでしょうか？」

会話の最中、リーゼロッテが水を向けると――、

「ええ。少し急ぎの用事がありまして、今日か明日にでもアマンドを発つ予定です」

リオはどこか申し訳なさそうに頷き、急いでいることを告げた。

「そうですか……」

と、リーゼロッテは微かに顔を曇らせる。すると――、

「お話があるのでしたら、また後日、腰を据えてゆっくりできれば幸いです。もちろん、すぐに済むお話なら今日明日にでも構いませんが」

リオがリーゼロッテの心情を察して語った。話というのは言うまでもなく、つい先日、リーゼロッテがリオに対して突発的に打ち明けようとした前世に関する話のことだろう。

「……いえ、そうですね。では、またの機会ということで」

リーゼロッテは思案顔を浮かべると、向かいに座るリオに恭しく頭を下げる。すると、浩太は二人の間に漂う微妙な空気を察したのか、窺うように隣に座るリオの顔を見やった。

リオは浩太の視線に気づくと、微苦笑し――、

「浩太さんはこれからどうなさるつもりなんですか？　アマンドで活動を？」

と、浩太に話題を振り、お茶の入ったカップを丁寧な手つきで口に運んだ。

「あ……、うん。ハルト君には勧められなかったけど、アマンドで冒険者になってみようかなと思って……。その、ごめん。せっかくアドバイスしてもらったのに」

浩太は微妙にバツが悪そうに答える。

「浩太さんの人生なんですから、浩太さんが自分で決めた道を進んでいくべきです。デメリットを踏まえて、それでも冒険者になると、納得して覚悟を決めたのでしょう？　俺にできるのはアドバイスをして注意を促すことだけです」

リオは浩太の意思を尊重しているのか、他人の人生に過度な干渉をするつもりもないのか、かぶりを振って語った。

「……うん」

と、浩太は神妙に頷く。

「……なら、まずは冒険者ギルドの登録から始めないとですね。他にも最低限の装備と道具を整える必要があります。これは旅慣れしている者のおせっかいですが、よろしければアマンドの到着後に少し助言いたしましょうか？」

リオはそんなことを申し出た。短い間とはいえ、浩太とは一緒に旅をした仲だ。クリスティーナから可能ならばアドバイスをと頼まれてもいるし、これから過酷な道を進もうとしている相手に、せめて最低限の助力くらいはと思ったのかもしれない。すると――、

「あ、ありがとう。心強いよ！」

浩太はパッと顔色を明るくし、嬉しそうに礼を言った。

◇　◇　◇

その後、小一時間もしないうちにアマンドに到着すると、リオ達は港の桟橋を渡ったところで立ち止まった。そして――、

「では、この場でお別れということでよろしいのでしょうか？」

と、リーゼロッテがリオと浩太に尋ねる。彼女の周囲にはアリアを筆頭とする侍従数名が同行していた。

「ええ。この後、実際に店を回ってみますので。お送りいただき、ありがとうございました」

「ありがとうございました！」

リオが頷いて礼を言うと、浩太も勢いよく頭を下げる。すると―

―、

「浩太さん。何か困ったことがあれば屋敷にお越しください。私にできることがあれば、力になりましょう」

リーゼロッテが浩太を見やって、そんなことを言う。

「は、はい。ありがとうございます。リーゼロッテさん」

浩太はやや緊張した様子で、リーゼロッテに頭を下げた。

「それでは、失礼いたします。ハルト様も、またお会いできると幸いです」

「ええ、また伺わせていただきます」

立つ鳥跡を濁さず――、リーゼロッテは貴族服のスカートの裾を掴んで上品にお辞儀すると、優雅な足取りで立ち去っていく。そして――、

「ナタリー、クロエ」

リオ達から距離を置いたところで、侍従の二人に声をかける。

「はい！」

ナタリーとクロエは声を揃えて返事をした。

「とりあえず数日。この都市で彼の暮らしが落ち着くまで様子を見守ってくれる？　ハルト様が傍にいれば大丈夫でしょうけど、すぐに出発しちゃうでしょうからね。必要ならハルト様にだけはそれと

なく事情を説明してもいいわ。後で応援も一人送るから、困っているようならさりげなく接触して支援してあげて」

リーゼロッテはそんな命令を二人に下す。

「承知しました」

ナタリーは恭しく頷いた。

「よろしくね」

「はい。それでは、参りますよ、クロエ」

「はい、先輩！」

リーゼロッテに見送られ、ナタリーが後輩のクロエを引き連れて歩きだす。その頃、既にリオ達も移動を開始していた。

◇　◇　◇

約十分後。リオは浩太を連れて、アマンドの冒険者ギルドを訪れていた。まずは身軽なうちに冒険者登録を済ませてしまおうと考えたのだ。まあ、一人では不安なのか、浩太からギルドに同行してほしいと強く頼まれたのがきっかけだが。

「じゃあ、俺はここで待っていますので、どうぞ登録してきてください」

ギルドの建物の中に入ると、リオが浩太に登録を促す。リオ自身は冒険者登録をするつもりがないので、本当にただの随伴である。とはいえ、質の良い装備で武装していることもあり、年齢にそぐわぬ戦士としての風格を放っていて、あたかも若年の腕利き冒険者で

あるかのように周囲の目には映っていた。

「う、うん。行ってくるよ」

腰に剣を一本だけ携えた浩太が、おずおずと歩きだす。小心者なせいか、本当は窓口まで一緒に同行してもらいたかったが、自分から登録したいと言い出したのだから、あまり甘いことばかりも言っていられないと、男として最低限の意地を見せたのだ。

「あ、あの。冒険者登録をしたいのですが……」

浩太はちょうど空いていた窓口にたどり着くと、ギルドの受付嬢に用向きを打ち明ける。受付嬢の年齢は浩太と同じくらいだろうか。少し目つきはきついが、綺麗な顔だちをしている。

「……畏まりました。最初に個人情報の登録を行います。文字は書けますか？」

受付嬢は浩太の髪や顔を微かに見つめると、事務的に説明を開始した。

「あ、はい。一応は、書けます」

「では、こちらの用紙に必要な情報をお書きください」

「わかりました」

浩太が必要事項を用紙に書き始める。受付嬢はそんな浩太をどこか物珍しそうに見つめていた。すると――、

「あ、お前は！？」

ギルドのホール内に大きな声が響き渡る。すると、浩太の身体がビクリと震えた。浩太が恐る恐る振り返ると――、

「え……、あ、ハルト君？」

そこには、リオを指差して、目を見開いている冒険者がいた。浩太は思わず手の動きを止めて、そちらに意識を奪われてしまう。すると――、

「おい、お前。こないだ魔物の襲撃があった時に逃げ出した野郎じゃないのか？」

リオを指差していた男が、怪訝そうな顔つきでリオに問いかけた。

「……その前に、誰ですか、貴方は？」

リオがどこか面倒くさそうに訊き返す。

「ここの冒険者だよ。お前、こないだアマンドに魔物が襲撃してきた時、冒険者じゃねえとか言って逃げだしただろ？　俺はその場にいたんだ！」

男が憤った様子で説明すると、一緒にいた冒険者達が「あの時の野郎か」と眉をひそめる。

「ああ……」

と、リオは得心した。そういえばそんなこともあったな、と。

「てめえ、やっぱり冒険者だったんじゃねえか！？」

冒険者ギルドに冒険者然とした格好でいる――そのことが何よりの証拠だと、男は語気を荒めた。

「違いますよ。タグはつけていなかったでしょう？」

リオは面倒くさそうに、嘆息してかぶりを振る。すると――、

「あ、あの、いいんですか、あれ？」

浩太が一部始終を見やりながら、恐る恐る目の前にいる受付嬢に訊いていた。

「何がですか？」

受付嬢は淡々とした口調で訊き返す。

「いや、止めなくてもいいのかなって。ケンカ……ですよね？」

「気性の荒い人間が多いですからね。あれくらいのケンカなら日常茶飯事です。というか、あの程度でいちいち仲裁している暇もありませんし、ひどい刃傷沙汰にでもならない限り放置するのが暗黙の決まりです」

と、受付嬢はしれっと答えた。

「え、ええ？」

浩太が困惑した声を出す。周囲の受付の人間を見回してみるが、またかと嘆息している者が何人かいるくらいで、それぞれが特に気にした様子もなく作業している。すると――、

「止めたいのなら、貴方が介入しても構いませんよ。お知り合いなんですか？」

受付嬢が浩太にそんなことを言った。

「え……あ、いや……その」

浩太は思わず顔を引きつらせて、言葉に詰まってしまう。

「まあ、罰則があるので、酔っ払いでもなければ最後の一線を越える人は滅多に現れません。決闘という制度もありますが、ここアマンドでは利用条件が厳しいですし」

受付嬢は小さく嘆息すると、やや呆れがちに説明する。そうしている間にも、冒険者達の怒りの矛先は鋭くリオに向けられていた。

「あの時、大怪我した奴が何人もいたんだ！　それでも逃げ出す真似はしなかった。他の冒険者を背中に自分だけ逃げ出せば、同業者から最低な臆病者だと蔑まれるからな」

と、リオを蔑む男は声高に主張する。もしかすると実際に怪我をした仲間でもいて、不公平に思っているのかもしれない。とはいえ、男には大きく勘違いしている点が一つある。

「ですから、俺は冒険者ではないんですがね」

そう、リオが本当に冒険者ではないということだ。それどころか、身分的には貴族にあたる。だが、一度決めつけた以上、そうに違いないと思い込んでいる者の勘違いを正すことは難しい。

「けっ、タグを外して隠し持ってたんだろ？　拠点として登録している都市以外でなら、知り合いにでも会わねえ限りそうそうバレねえもんな。本当に潔白なら、持ち物検査でもさせろよ。後ろめたいことがないならできるだろ？」

男はリオの主張を無視して、一方的に自分の主張だけを押し付けて話を進めようとした。後ろめたくないなら調べさせろ、調べさせないということは後ろめたいのだろう、と。自分が糾弾する立場になっていることから、気が大きくなっているのかもしれない。

ちなみに、冒険者ギルドに登録した冒険者は、拠点として活動する都市に登録情報を記した書類を提出し、それとは別に自らの冒険者情報を刻んだタグを装着して携帯しなければならない。

故意にタグを外したり、他人のタグを着用したりして、必要な時に冒険者の身分を偽ることは罰則の対象とされているが、それでもバレるリスクが低いと考え、タグを取り外したり、他人のタグを使って身分を偽ったりする者は後を絶たない。

「縁もゆかりもない赤の他人を相手に、いちいち義務のない行為をするほど暇でもないので。信じていただけないのならそれで構いません。どうぞお帰りください」

リオは男の主張をまともに取り合わず、飄々とかぶりを振った。そして、面倒くさそうに嘆息して、男達から視線を外す。

「……何だと？」

まったく自分のことを相手にしようとしないリオに、糾弾していた男が剣呑な声を出す。さらには――、

「何様だ、こいつ？」
「開き直りやがった……」
「クソガキが。立場をわかっているのか」
などと、周囲の冒険者達も不機嫌そうに顔をしかめ始めた。すると――、
「お、お待ちください！」
と、微妙に慌てたトーンの声が響いた。リオが声を発した人物へと視線を向ける。そこには、クロエを引きつれたナタリーが立っていた。
「……どうしたんですか？　こんなところで」
リオは微かに目を見開いたが、薄々とナタリー達がこの場にいる理由を察したのか、微苦笑して尋ねる。
「す、すみません。その、コウタ様の生活が安定するまで、主から密かに見守るよう仰せつけられておりまして……。最初は建物の外にいたのですが、途中でクロエに様子を見に行かせたら、ハルト様が冒険者達に難癖をつけられていると聞きまして」
ナタリーはひそひそと小声で、ややバツが悪そうに事情を説明した。遅れて登場したのは、侍従服を着て二人でギルドの中に入れば目立つと嫌ったからだろう。
「いえ、別に謝っていただくことは何も。そのまま見守っていただいてもよかったんですが……」
「そ、そういうわけにはまいりません」

リオが困り顔で言うと、ナタリーが慌ててかぶりを振る。そうして、二人が親しげに話をしていると――、

「おい。クロエちゃんだぞ。レベッカさんの娘の」

「隣にいるのはナタリーさんだろ？　あの時、その場にいたはずだぞ。どうして親しげに話してやがる」

「あん？　メイド服を着ている二人か？　誰なんだよ？」

「馬鹿野郎。二人ともリーゼロッテ様の屋敷に仕える人間だよ」

周囲にいる冒険者達が、リオ達を見やりながらひそひそと小声で話し始める。すると、ナタリーはリオに因縁をつけていた冒険者達を鋭く見据えて――、

「こちらにおわす方は我が国の国王陛下から直々に叙勲された貴族であり、我が主の大切な客人でもあります。ゆえに、相応の理由もなく、その名誉を故意に貶める発言は重罰の対象にもなりえます。以降の発言にはくれぐれもお気をつけください」

と、そう語った。

直後、リオに因縁をつけていた男達の顔色が途端に青ざめる。中でも率先してリオを罵っていた男は目に見えて狼狽していた。

「う……、あ、いや」

「それで、何を言い争っていたのですか？」

視線を泳がせる男達に、ナタリーが冷たく問いかける。すると――、

「別に、大したことではありませんよ。先日、アマンドに魔物が襲

来した際に、私が冒険者でないことを理由に徴兵を断ったことを非難されまして。どうも私が本当は冒険者なのではないかと疑っているようです」

リオが肩をすくめ、男達の代わりに答えた。さして気にしてはいないと笑みを取り繕う。

「……なるほど。そうなんですか？」

ナタリーは微妙に決まりが悪そうに得心すると、男達に質問した。当時の自分も少なからずリオの行動に思うところがあって誤解していたせいか、すぐに事情を呑み込めたようだ。

「う……」

男達は押し黙って視線を逸らす。

「この方は逃げ出したわけではありませんし、冒険者でもありません。あの時は然るべき所用があって行動していたとのことです。それに、あの後、都市の市民を救出し、一人で正体不明の強力な魔物を何体も撃破しています。我が主のリーゼロッテ様もこの方に助けられました。立てた武功の程度で言えば、間違いなく先の一件で一、二を争うでしょう」

ナタリーは今後も似たような事態が起きぬよう、周囲の者達にも聞こえるように説明した。

「くっ」

糾弾する側からされる側に回り、男達は苦虫を噛み潰したような

顔を浮かべる。

「ハルト様、この方達の処遇はいかがなさいますか？　処罰をお望みなら、ギルドに呼びかけて身柄を押さえさせますが」

と、ナタリーがリオを見やって尋ねる。すると――、

「ま、待ってくれ！　あの時、もっと罵っていた奴はたくさんいた！」

リオを糾弾していた男が泡を食って叫んだ。

「……だから？」

ナタリーが溜息をついて訊く。

「どうして俺達だけ！？　それに、そもそもはっ……！」

リオを糾弾していた男は、被害者意識を滲ませて訴える。途中、リオを見やって何か言おうとしたが、それを言ったらさらに自分の首を絞めることになりかねないと思ったのか、グッと言葉を呑んだ。おそらくリオの方にも問題があったはずだと言いたいのだろう。

「少し早とちりしているようですが、私は貴方達をどうこうしようとは思っていません。わざわざ大事にして、時間を割いている暇もありませんので。なので、以降、私に関わらないというのなら、この一件は捨ておいて構いません」

リオは男達を見やりながら嘆息すると、最後はナタリーに向けてきっぱりと言った。

「……承知しました。だそうですが、貴方達はどうするのですか？」

ナタリーはリオに向けて深く頭を下げると、男達を見やって問いかける。

「す、すみません……でした。仲間があの件で大怪我をしたもので、つい、カッとして」

リオに因縁をつけた男は目を落として謝罪した。すると、一緒に行動していた者達も呼応して謝り始める。

「謝罪の意思を受け取りました。それでは、さっさと立ち去ってください……ああ、いえ。私が立ち去るとしましょうか。外で待っていますので、用が済んだら出てきてください」

リオはさりげなく浩太を見やりながら、大きめの声でそう言い残すと、建物の外へと歩きだした。ナタリーとクロエが慌ててその後を追いかける。すると――、

「確かクロエさんのご実家は宿屋でしたよね？」

建物の外に出たタイミングで、リオが不意にクロエに尋ねた。

「あ、はい」

クロエがおずおずと頷く。

「問題がなければ、コウタさんをそちらの宿屋に泊まらせても構いませんか？　クロエさんのご実家に宿泊するのなら、お二人も任務

を遂行しやすいでしょう？」
「なるほど、確かに……」
リオが提案すると、ナタリーが目をみはる。
「あの、うちは構わないというか、むしろ助かると思います」
と、クロエも前向きに頷いた。
「では、そういうことにしましょう。俺の方で話を誘導しますので」
そうして、本人の知らぬ間に、浩太がアマンドで滞在する宿屋が決められることになる。

◇　◇　◇

そして、数分後、浩太がギルドの建物から出てきた。近くにいたリオを見つけると、慌てて駆け寄ってくる。
「あの、ハルト君！」
「冒険者登録はできましたか？」
意気込んで語りかけてきた浩太に、リオが尋ねた。
「あ、うん。できたけど……」
機先を制され、浩太は勢いを失って首肯する。
「それはよかった」
「うん。よかった……んだけど、そうじゃなくて。その、さっきは

ごめん！　僕、見ていただけで……」

浩太は忸怩たる面持ちで、リオに謝罪した。

「……いえ、あそこで浩太さんに介入されても余計に面倒なことになっていたといいますか、そもそも浩太さんが責任を感じるべき案件でもなかったじゃないですか」

リオはぱちりと目を丸くすると、申し訳なさそうに笑ってかぶりを振る。

「いや、でも……」

浩太は複雑な面持ちを浮かべ、申し訳なさそうにしていた。

「……浩太さん。冒険者として活動していくのなら、自分で解決できない問題にやたらと首を突っ込むべきではありません。非情に思えるかもしれませんが、それも処世術といいますか、長生きするコツです。冒険者として生きていくのなら、時には自分の力で解決できない依頼だってあるかもしれませんよ？」

リオは困ったように息をつくと、言い聞かせるように語る。

「……うん」

「冒険者の仕事をしていけば、ああやって人から恨みを買うこともあるかもしれませんし、ある程度、図太くなった方が色々と気疲れしないで済みます。まあ、浩太さんが俺を助けようと思ってくれた気持ちは素直に嬉しいんですが……、すみません。説教臭くなってしまいましたね」

項垂れるように頷いた浩太に、リオは笑みを取り繕って謝罪した。
「……いや、そんなことはないよ。すごく勉強になる。色々と思うところがあるというか……、反省点を突き付けられたみたいで、身に染みた」
浩太は自虐的に苦笑すると、ため息混じりにかぶりを振る。
「なら、よかったです。それはそうと、こちらにいる二人はリーゼロッテ様に仕える侍従の方達でして」
リオは場の雰囲気を変えるように、傍に控えていたナタリーとクロエの紹介を試みた。
「あ、うん。見かけたことはあるから」
「ナタリーと申します。どうぞお見知りおきを」
「クロエと申します。よろしくお願いいたします」
浩太が頷くと、ナタリーとクロエが恭しく自己紹介する。
「こ、こちらこそ、よろしくお願いします」
「実はクロエさんのご実家が宿屋を経営されているそうで、浩太さんがこれから泊まる宿屋にどうかなと思ったんですが、どうでしょう？」
可愛らしい女性二人に挨拶されて、緊張気味に応じる浩太に、リオがすかさず水を向ける。
「あ、うん。どうしようかと思っていたから……ありがたいかも」

浩太はおずおずと頷いた。

「なら決まりですね。遅くなって宿が埋まってしまってもいけませんし、買い物の前に手配してしまいましょうか。クロエさん、案内をお願いしてもよろしいですか？」

「はい、お任せください！」

リオに話を向けられると、クロエが力強く首肯する。そうして、リオ達はクロエの母が経営する宿屋へと向かった。

その後、買い物を済ますと、リオもクロエの母が営む宿屋で一泊することになる。そして、翌日の午前中、リオは浩太に見送られてアマンドを発ち、北方に存在するプロキシア帝国に向けて出発した。

第１４３話　潜入、プロキシア帝国

翌日、リオはアマンドを出発すると早速、プロキシア帝国に向かった。目的はもちろんルシウスの手がかりを掴むためだ。
ルシウスがプロキシア帝国に所属する人間なのかどうかはわからないが、レイスがプロキシア帝国の大使を自称しているとわかった以上は、捨ておくことができない土地であろう。上手く潜入して、国の上層部にいる人間から情報を吸い出すことができれば儲けものである。
リオは風の精霊術で空を飛び、帝国中央部に位置する帝都ニードガルトに向けて進んでいく。
道中、いくつかの都市に立ち寄って、ルシウスが率いる傭兵団の情報を収集してみたものの、有力な情報を得ることはできず――、そうして、アマンドを出発した三日後、リオは帝都ニードガルトにたどり着いた。

（城が遠い……。都市の面積は結構広そうだ。帝国を自称するだけはある）

都市の近場から歩き、城壁外の区域から帝都に立ち入ると、リオは遥か遠くにそびえる帝国城を見上げる。視界に映る帝国城は実に雄大で荘厳華美であった。
とはいえ、今リオがいる城壁外部の都市整備は乱雑で、どんよりとした空気が漂っている。

（とりあえず城壁内部に向かうか）

リオは一先ず帝都の中心部に向かうことにした。

そうして歩くこと小一時間。適当な露店に立ち寄って帝都の情勢を確認すると、城壁に設けられた門の一つにたどり着く。そして入都税を支払い、城壁内の領域に足を踏み入れる。

すると、城壁内はあからさまに城壁外と住む世界が違っていた。城壁外も城壁に接近するにつれて生活ランクが上がっていくことが窺えたが、城壁の内部に入ると目に見える形で暮らしぶりが豊かであることが感じられるのだ。

歩いている人々の衣類はもちろん、顔つきに覇気があるし、至る所に露店が繰り出していて、活気で溢れている。さらには、たたずむ建物も綺麗で、きちんと都市整備も施されており、兵士が随所を巡回していた。

どこの都市も少なからず城壁の内部と外部で住む世界が分けられているものだが、ここまで城壁の内部の開発を優先して力を入れている都市も珍しいかもしれない。あたかも傭兵出身の皇帝ニドル＝プロキシアの生き様を示すがごとく、弱肉強食の住み分けがなされていた。すると――、

「……ん？」

ふと視線の先に捉えた帝国城の外観に、リオは微かな違和感を覚える。気になって魔力を見透かすように目を凝らしてみると、帝国城をすっぽり包み込むように円柱状の魔術結界が張り巡らされていることに気づいた。

（何の結界だ？）

リオは目をみはると、思案顔を浮かべる。

そもそも結界魔術は術式構造が複雑で、シュトラール地方の魔術水準ではまだ十全な実用化が難しいとされている魔術である。それでも中には古代魔道具を部分的に解析して限定的に実用化にこぎつ

けている国もあるが、継続して魔力源を確保するコスト面に難点があることから、大規模な結界魔術となると使用を断念せざるをえないのが現在のシュトラール地方における各国の一般的な状況だ。日常的に使用されているのはせいぜい小規模なもので、要人のごく近辺を囲う程度のものであろう。

しかし、今、帝国城を囲っている魔術結界は、明らかに大規模結界に分類されるものであった。精霊の民の里で使用されているものにはまだまだ及ばないが、シュトラール地方の一般的な結界魔術の水準は明らかに上回っていることが窺える。

（侵入者探知の効果があるのは間違いなさそうだけど……やっかいだな。他にも効果があるかもしれないし、近くで結界を調べようにも日中は警備の目がある。夜まで待つか）

リオは微かに顔を曇らせると、やはりあの男――レイスが関係しているのは間違いなさそうだと考え、小さく嘆息した。試しに城の中に潜り込んでみようと思ったが、あれではなかなか骨が折れそうだ。

その後、リオは適当な宿屋を手配すると、後で問題になった時に不自然に思われない程度に城の様子に関して聞き込み調査をすることにした。

◇　◇　◇

そして、帝都の民衆が寝静まった深夜。

結局、あれから大した情報は何も得られていない。さらに何日かかけてじっくりと調査を行ってもいいが、伝手がなければ何か情報が得られる可能性は低い。

結局、リオが選んだのはハイリスクハイリターンな方法だった。自室の窓からこっそりと宿屋を抜け出すと、黒い装束を纏って行動

を開始する。
目指すは帝国城――、城壁内部に存在する城壁をいくつか乗り越え、順調に帝都の奥へ進んでいく。夜の帝都、特に城壁内の住宅街はしんと静まり返っており、時折巡回している兵士以外に出歩く人の姿は見当たらなかった。
すると、貴族街を抜けて帝国城に接近したある地点から、とたんに街並みが途切れ、代わりに見晴らしのいい石畳の広場に出る。広場の先には分厚く高い石壁に覆われた帝国城がそびえており、リオは広場に踏み入る直前でぴたりと歩みを止めた。

（篝火が焚かれているし、巡回している兵士の数が多いな。結界の範囲もちょうど城壁を覆うように計算されて展開している。とりあえず城の周りをぐるっと回ってみるか？）

可能性は低いが、結界のほころびがあるかもしれない。そう考え、リオは結界が展開している城の付近を回ってみることにした。まずは地上を走り回り、突破口を捜してみる。
しかし、隙らしい隙は見当たらない。少なくとも地上から結界に探知されずに侵入することはできないだろう。
となると、残るは空からの侵入を試みるか、結界に干渉して無効化するしかない。とはいえ、後者の選択肢はなるべくとりたくはなかった。下手に結界に干渉すると、結界の種類によっては即座に察知されかねないからだ。ならば、先に空からの侵入を試みてみるしかない。
リオはふわりと空に舞い上がると、結界よりもさらに高度をとって、帝国城を俯瞰することにした。すると――、

（結界の上部に微かなほころびがあるな。もちろん罠の可能性もあるけど……）

魔力が行き届いていないのか、結界の上方に通り抜けられそうな隙間を発見する。
罠の可能性もあることから、結界の性質を調べた方がいいようにも思えるが、それこそが狙いで、待ち伏せを受けて攻撃される危険もある。
とはいえ、他に侵入可能な経路らしい経路は一つも見当たらなかったし、限られた一部の者だけが知る隠し通路が存在しない限りは、見落としもないはずだ。
明日以降に新しい侵入経路が都合よく出来ると考えるのは楽観的すぎるし、今ここに存在する結界の隙間が一時的な不具合で、明日には埋まっている可能性もある。
リオはしばし逡巡すると――、

（入ってみるか）

結界の隙間を縫って、中に入ることにした。もとより多少のリスクは承知で、いざとなれば手荒に調査することも念頭に置いているのだ。もしかしたらこの城の中にルシウスのことを知っている人物がいるかもしれない以上、ここで臆するわけにはいかない。
庭の中は警備の兵士が多いため、とりあえず屋根の上に降りると、闇に紛れて城内に入り込む。まずは可能な限り城内の構造を把握しておく必要があるだろう。
そうして、リオは灯りの消えた上層階の窓から城内に入り込む。続けて、室内に誰もいないことを確認し、巡回の兵士がいることを警戒しながら、恐る恐る通路に躍り出ると――、

（……誰もいない？　魔力探知系の魔道具もなさそうだけど）

通路にも見張りの兵士が一人もおらず、リオは目を丸くする。
城内は灯りもなく真っ暗で、不気味なほどに静まり返っていた。

サッと目を凝らしてみるが、探知系の魔術によって発生するだろう魔力の痕跡が滞留している様子もない。

（外庭にはあれだけ見張りの兵士がいたのに……やっぱり罠か？）

と、一瞬そう思ったリオだが、今のところは騒ぎになっている雰囲気が微塵もないので、気にしすぎなのかもしれないと考え直す。

とはいえ、なんだか妙に調子が狂う。警邏（けいら）の人間が一人もいないなどと、まるで誘い込まれているような錯覚すら覚える。

だが、リオはかぶりを振ると、もう少し城内を調べてみることにした。巡回の兵士は見当たらないが、念には念を入れて、堂々と歩く真似はしない。

なお、帝国城は厳密にはいくつかの館によって構成されているが、現在地は本館――玉座の間や執務室、会議室等、主に行政・軍事の公務で使用される施設が密集している建物――の上層である。

普通の王城ならば本館に城内の兵士の詰め所もあるはずなのだが、やはり誰もいないのか、人の気配はまったく感じられない。

（とりあえず下の階に降りてみよう。誰もいなければ別の建物だ）

おそらくどこかに居館――皇族や王城勤めの貴族が暮らす館――となっている建物が少なくとも一つ以上はあるはずである。

上手く潜入できれば、そこにいる人間から情報を吸い出せるかもしれない。今回、リオの狙いは兵士ではなく、一定の地位にいると思われる人物だ。そういった人物の方が顔は広いだろうから、当たりを引く可能性は高い。

とはいえ、今リオがいる建物に兵士以外の誰かがいる可能性もあるので、道中、めぼしそうな部屋に侵入を試みてみることにした。だが、厳重に鍵がかけられている部屋ばかりで、中から人の気配も感じられない。

結局、リオは先へ進み、下の階層へと降りていくことにした。
本館は防衛の観点から一階と二階に出入り口が設けられていないのが通常なので、出入りするには他の館と橋で繋がっている三階の出入り口を通らざるをえない。
リオの場合は適当な窓から抜け出し、空を飛んで他の館に忍び込むこともできるが、今は城内の構造を確認する必要もあるので、今回は歩いてみることにした。闇に潜むように、慎重に歩を進めていく。
すると、他の建物への連絡通路となっている三階の橋の上に、ようやく見張りの兵士を発見する。他の建物に繋がる橋は全部で五つ。そのうち四つ橋が見張り番によって守られている。
潜入する側からしてみたらあまりありがたくない事実だが、リオはようやく発見した兵士の姿になんだか妙に安堵してしまった。とはいえ、次に移動する建物をどこにするか、すぐに意識をそちらに切り替える。そして――、

（一応、先に警備が手薄な方を潰しておくか。そっちの構造も把握しておこう。妙にでかいけど……）

悩んだ結果、先に警戒が薄い建物を探索することにした。警戒の程度からして誰かいる可能性は低そうだが、構造だけでも把握しておけば、後々役に立つかもしれない。
そうして、リオは静かに、素早く、橋を渡って移動する。すると、そこは――、

（……なんだ、ここは？　訓練場？　いや、闘技場か？）

円形の闘技場らしき建造物だった。天井は吹き抜けになっていて、月明かりが薄っすらと屋内を照らしている。今リオがいる場所はちょうど観客席の上方らしい。眼下にはフィールドと思しき野晒しの

地面が広がっていた。

（まあ、ここに見張りは置かないか。この様子だと中の構造を確認する必要もないかな）

リオは興味を失うと、踵を返していったん本館へ戻ろうとする。だが――、

「っ！？」

侵入時から精霊術の身体強化でずっと研ぎ澄ませていたリオの感覚が、微かな気配を察知した。直後、気配の主がリオに接近する。

リオは慌ててその場から飛び退いた。すると――、

「ほう、闇に紛れた余の微かな気配を察したか。流石、結界を潜り抜けてここまで侵入してきただけはある。余はニドル＝プロキシア。この国の主だ。歓迎するぞ、不埒な侵入者よ」

そこには、プロキシア帝国初代皇帝の名を自称する――厳のような男が、晴れやかな笑みをたたえて立っていた。

第１４４話　ニドル＝プロキシア

リオは突然に襲い掛かってきた巌のような男を、フードの下から訝しそうに見つめていた。

「どうした、皇帝を拝み、畏怖でもしたか？　好(よ)い、発言を許すぞ。何か申し開きはあるか？」

ニドル＝プロキシアを自称した男は両手を広げると、リオに対して尊大に問いかける。その右手には、普通ならば両手剣として扱うような黒い刀身の大剣が軽々と握られていた。

「……どうして俺が結界を抜けて侵入したことがわかった？」

リオは目の前にいる男をあえて皇帝とは見なさず、質問をもって質問に応えた。

「ふはは、皇帝を相手に顔を隠し、あまつさえその不敬な物言い……。まあ、好いがな。とはいえ、そのようなことをわざわざ賊に教える道理もない」

ニドルは愉快そうに笑うと、にべもなくかぶりを振る。

（……だろうな。そんなことはどうでもいい。それよりニドル＝プロキシア。この男がこの国の皇帝？）

元より素直に教えてもらえるとは思ってもいなかったが、目の前にいる人物がニドル＝プロキシア本人なのか、リオは半信半疑だっ

た。すると――、

「貴様が素性を明かさぬというのなら、余は力を以って屈服させるのみであるな。覚悟は好いか、下郎？」

ニドルはそう言うと、自然体で剣を構える。

同時に、リオも淀みなく懐からダガー二本を抜き放った。そして左右で逆手と順手に握って臨戦態勢をとる。すると、ややあって――、

「ふはは、暗殺者か、盗人か、果たしてそれとも……まあいずれでも好い。今の余は実に気分が好い。ここまで侵入できた賊は貴様が初めてゆえ、褒美を取らせてやるのも吝かではないぞ？　見事、余を打ち負かした暁には、この首を下賜してやっても構わん」

と、ニドルは目をみはって言うや否や、いきなりリオに斬りかかった。

（速い！）

リオはニドルの身体能力に目をみはると、自らも直進して正面からニドルを迎え討つ。ニドルが軽々と振り下ろした大剣を掻い潜ると、すれ違いざまにニドルの太ももを斬りつけた。しかし、金属音に似た音が響き、ダガーはあっさりと弾かれてしまう。

（金属鎧は着ていない。鎖帷子（くさりかたびら）か？　いや、今の手応えはもっと……）

と、リオは微かに息を呑んだが――、

「ふはは、好い、好いな。余をさらに楽しませると好い」

言って、ニドルは考察する時間すら与えずリオに攻撃を加える。大柄な体躯には似つかわしくない動きで、コンパクトに大剣を振っていく。すると、ニドルが大剣を振るう度に、観客席がクラッカーのように削り取られていった。

だが、リオは軽業師のような動きで、鮮やかにニドルの攻撃を躱している。そうしながらも縦横無尽に動き回り、次第に戦闘の舞台は観客席から眼下のフィールドへと移っていく。

「思った以上に素早い。業腹ではあるが、これは速さで勝負するのは少し分が悪いか？」

と、ニドルは口許を緩めて呟いた。開けた平地では機動力を活かせる分、障害物や段差がある観客席よりも格段に動きやすくなる。

直後、リオはフェイントをかけるように左右に疾駆しながら、正面からニドルに接近し始めた。だが――、

「ふん！」

ニドルは大剣を思いきり地面に叩きつける。すると、インパクトの箇所を起点に、黒焔（こくえん）が爆発したように生まれ前方へと拡散していく。

（なんだ、この焔（ほのお）は……？）

リオは瞬時にバックステップを踏んで距離を取ると、訝しそうに黒焔を見据えた。

「ふむ、素早い上に反応もいい。だが、余の剣は邪竜の焔を操る。

鎮火するのは容易くないぞ？」

ニドルは感心したように唸ると、横薙ぎに大剣を振るう。すると、黒焔が真一文字に射出され、フィールドを焼き払った。

「……ふむ。もう少し加減をするべきではないのか？」

目の前一帯が黒焔に覆われ、ニドルが呆れがちに呟く。そして――、

「余と対等、あるいはそれ以上に剣を交えられる相手は久しかったゆえ、もう少し楽しみたかったのだが、臆病な竜だな。貴様は……」

と、そう呟いた直後、黒焔の中からいきなり風の砲弾が飛び出てくる。風の砲弾は黒焔を吹き飛ばし、それどころか黒焔を取り込みながら、一直線にニドルへと襲いかかった。

「むう！」

ニドルは咄嗟に大剣を振るう。風の砲弾は大剣と接触すると、ニドルの腕にぎしぎしと圧力をかけ、びりびりと大気を揺らした。

ややあって、ニドルが黒焔を帯びた風の砲弾を打ち払う。すると、いつの間にかリオがニドルの懐に潜り込んでいた。

「見事！」

ニドルは恍惚めいた笑みを口許に刻むと、反射的に迎撃態勢を取る。だが、先手を取ったのは奇襲を仕掛けたリオだった。

リオは懐に潜り込んで大剣を握ったニドルの間合いを殺すと、トリッキーな動きで左右のダガーを振るいながら、ニドルを圧倒し始

める。
月明かりに照らされ、リオのダガーが幾度も煌めいた。そうしてニドルの手足に斬撃が的確に撃ち込まれる。とはいえ――、
（着用しているクロースアーマーの材料に秘密がありそうだな。亜竜の皮膚でも斬りつけているみたいに硬い）
リオの攻撃は斬撃というよりは、むしろ打撃として機能していた。ニドルの衣服はダガー程度の刃を弾いてしまうのだ。もっとも、服を通してダメージは確実に蓄積しているはずである。急所への攻撃は警戒しているようだが、行動不能に陥るのも時間の問題であろう。
「ふはは、このままでは余の敗北も時間の問題か。好い、好いな。実に好い。血湧き肉躍る。命の危険を感じるとは、こういうことか。そうか、思い出してきたぞ」
ニドルは窮地に立たされているにもかかわらず、大声で無邪気に笑った。まるで心の底から純粋に戦いを愛しているかのように。
すると、リオはニドルという男の人間性を測りかねたのか、どこか警戒しながら攻撃を加え始める。
「どうした、余の命を奪う好機であるぞ？　一気に首を取りにくると好い。余が弱るのを待っても後悔するだけだ……が、ああ、もう遅い」
ニドルは自分を早く殺せとリオを急かしたが、ふと残念そうに表情を曇らせる。直後、ニドルが手にした大剣と身体から、黒い魔力が焔のように吹き荒れた。
リオは反射的に後ろに下がる。すると――、

「残念ながら、時間切れだ。もう抑えられん。早く逃げた方が好いぞ」

と、ニドルが嘆息して言う。吹き荒れる黒い魔力の奔流は、ニドルが持つ大剣へと禍々しく集約していく。

（あの魔力は不味い）

リオは背筋にひやりとしたものを感じ、自らも咄嗟に体内で魔力を練り上げた。すると――、

「……ほう」

ニドルは目を丸くし、驚愕を覗かせる。そして、ニイッと好戦的に口許を歪ませた。そうしている間にも、吹き荒れる黒い魔力の奔流はニドルの大剣に集約し――、

「では、勝負だ」

ニドルは正眼に構え、ゆっくりと大剣を振り下ろした。刹那、リオに向かって膨大な黒焔の奔流が放たれる。闘技場内も漆黒の闇に覆われた。

しかし、リオはリオでニドルに劣らぬ膨大な魔力を練り上げていたのか、自らに迫りくる黒焔に向けて怯まずに手をかざす。すると、次の瞬間、リオの手から白い光が吹き荒れた。

白い光の奔流は、ダイヤモンドダストの如き輝きを放ちながら真っ直ぐと突き進み、黒焔と衝突する。直後、眩い光が闘技場内を照らし、冷気を帯びた暴風が周囲に吹き荒れた。

ニドルが放った黒焔は蝕まれるように凍りついていく。さらには、いつの間にかリオがニドルの背後に迫っていて――、

「……ふむ、いささか急な幕引きではあったが、これほどの高揚感を覚えたのは何時ぶりであろうか。大義であった。楽しめたぞ。余は約束をたがえぬ主義ゆえ、褒美を取らせよう。何が望みだ、余の命か？」

首筋にダガーを突き付けられたニドルが、ぽつりと語った。

「……別にあんたの命に興味はない。欲しいのは情報だけだ」

リオは微かな間を置くと、要求を突きつける。ニドルに対して殺害を最優先に攻撃を仕掛けなかったのは、そもそもの目的が情報収集だからだ。

現状はいささか以上に想定外な事態ではあるが、相手がこの国の王であるというのならば、むしろ都合は良い。ルシウスのことも知っている可能性は高いだろう。

「……ほう？　では、貴様の問いに対して余が正直に答えることを褒美として望むと？」

ニドルは意外そうに目を見開き、リオに問いかけた。

「そうなる」

「はっ、好かろう。申せ。見張りの兵士共が駆けつける前にな」

リオが頷くと、ニドルは堪らず笑みを溢して命じる。

「……ルシウスという名の傭兵を捜している。この国の人間であるのなら、知っている情報を教えてほしい」

「ふ、ふはははは！」

ニドルは大声を出して笑った。
「……何がおかしい？」
リオが怪訝な顔つきで訊く。
「なるほど。貴様、あの男を捜しているのか、それでこんな場所まで潜り込んできたと。見上げた行動力よな。くっくっくっ」
「……つまり、あんたはあの男のことを知っていると？」
「ああ、知っていることは知っている。この国に所属する人間ではないがな」
「では、どういう関係だ？」
「余はこの国の王であり、あの男は名の知れた傭兵団の長。契約関係にあったとしても不思議ではあるまい」
と、ニドルは愉快そうに、それでいて堂々と答える。
「ならば、レイスという名の男は知っているな？　この国の大使として動いている男だ」
「……ほう、レイスのことも知っているのか。確かに、あの男を大使に任命したのは余であるが」
「レイスとルシウスの関係は？」
微かに目をみはったニドルに、リオは淡々と質問した。
「ルシウスにレイスの護衛を任せたこともあるが、余は臣下の交友関係に興味はない。レイスがこの国に戻ることはほとんどないゆえ、尚更にな。戻ってきたところで、またどこぞへとふらりと姿を消していくような男だ。まあ、徒党を組んで色々と動いてはいるようだ

が……。ふむ、貴様の狙いはルシウスとレイス。どちらにあるのだ？　今この場で余が教えてやれるのは一人の情報だけであるぞ？」
「……あんた、今の状況を理解しているのか？　訊いているのは俺だ」

リオは静かに手を動かし、ニドルの喉にダガーを当てる。

「急くな、小僧。直に警邏の兵士共が駆けつけると言っているのだ。余計な話をしている暇はあるまい？」
「ならば、ルシウスの居場所を教えろ。知っているのならな」
「……パラディア王国。その国は日常的に隣国と紛争を行っているのだが、我が国が背後で支援している。東の小国だ、知っているか？」
「名前を聞いたことはある」
「ならば話は早い。今より一年ほど前か。それまで奴はわが国と契約していたのだが、次の仕事先としてパラディア王国を選んだ。余が内密に推薦状をしたためたゆえ、王室と結びつきを持っているはずだ。……第一王子ならば何か知っているやもしれんな」

ニドルはそう答えると、小さく肩をすくめた。

「……」

リオは沈黙し、思案顔を浮かべる。ニドルは自発的に供述してはいるが、信用するに足る証拠がない以上、口から出まかせを言っていないとも限らない。果たしてこのままこの場を後にしてもよいものか、リオが逡巡していると――、

「まあ、信じる信じぬは貴様の勝手よ。だが、どうする？　余が奴の所在に関して知っていることをすべて話した以上、既に褒美は取

らせたことになる。これより先は素直に協力してやる義理もないぞ？　ちょうど警邏の兵士共が集まってきたようだしな」

と、ニドルが不敵な笑みを刻んで語る。その言葉通り、闘技場へ通じる通路から騒がしい物音が聞こえてきた。

（これ以上の長居は確かにリスクが高い、か）

リオはわずかに眉をひそめると、撤退を決断する。すると――、

「ああ、それと、帰るのなら不用意に結界と接触せず、侵入箇所から帰った方がいい。これも信じるかどうかは貴様の自由だがな」

ニドルが思い出したように付け足した。同時に、ニドルの体内からぞわりと魔力が膨れ上がる。リオは反射的にバックステップを踏んで距離を取ると、即座に駆け出して脱出を開始した。

（何なんだ、あの男は？）

リオは走りながら跳躍して観客席に上がると、名状しがたい不気味な感覚を覚え、ちらりと眼下のニドルを見やる。

ニドルは不敵な笑みをたたえて、リオを見上げていた。

「あそこにいるぞ！」

「速い！」

「他にもいるかもしれん！　陛下をお守りしろ！」

などと、兵士達は慌ただしく動き回り、統率のとれた動きでリオの包囲とニドルの警護を開始する。

だが、リオは追従を許さぬ速度で疾駆すると、観客席から吹き抜

けの天井へと軽々と跳躍した。

「な、なんという身体能力だ……」

「ただの身体能力強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）で出来る動きじゃないぞ」

兵士達は唖然と足を止め、リオを見上げる。

リオは最後にニドルを見下ろすと、闘技場の外へ飛び降りるようにして、追手の兵士達の視界から姿を消しさった。すると――、

「と、飛び降りた！？」

と、兵士達は目を丸くして呆気に取られる。リオはその隙に風の精霊術で急上昇し、結界の隙間から脱出を図った。その一方で――、

「そう怒るな。確かに強いが、余はあの男のことは好かん。仮に死んだとしても、代わりを探せばいいのであろう？」

ニドルは愉快そうに笑って、一人でたたずみながらそんなことを呟いていた。

第１４５話　それぞれの動向

ニドル＝プロキシアとの戦闘後、リオは帝国城を脱出すると、すぐさま宿屋の自室に戻った。そのまま朝を迎えると、何食わぬ顔で宿を引き払い、帝都を後にする。

次に向かう先はプロキシア帝国から見て東方に位置するパラディア王国だ。パラディア王国はガルアーク王国から見て北方に存在する小国地帯の一国家であり、慢性的に近隣諸国と小競り合いを行っている紛争地域でもある。

情報の出所と入手した時の状況を考えると信憑性に疑いは残るが、傭兵のルシウスが活動の場として選ぶこと自体は特に不自然ではない。何はともあれ他に目立った情報がない以上、とりあえずはパラディア王国へ向かってみるしかなかった。

（皇帝の話だと第一王子なら何か知っている可能性があるらしいけど……。問題はどうやって接触を図るかだな）

ガルアーク王国の名誉騎士であることを明示すれば面会くらいはできる可能性もあるが、目的が目的だし、下手に貴族の立場で問題を起こしたくもない以上、正規の手続きで面会を申し込むのはあまり上手くない。

となると、侵入して接触を試みるしかないのだが、そう簡単にいくとも思えなかった。

確かに城内に侵入すること自体は不可能でないだろうが、王族となれば私室の警護は厳重であることが予想されるからだ。

部屋の前には見張りがいるだろうし、下手をすると部屋の中に見張りがいる可能性もある。また、妻子がいれば同衾しているかもしれないし、人次第だが侵入者対策であえて窓がない寝室に寝泊まり

する王侯貴族も珍しくない。

（とりあえず侵入してみるか。チャンスが見つかるまで粘って、臨機応変に接触を試みるしかない）

リオは一応の方針を決めると、微妙に飛行速度を上げた。小国家が乱立する地帯だし、一度も訪問したことがない土地なので少しは道に迷うかもしれないが、今日明日中にはパラディア王国にたどり着くことができるだろう。柄にもなく動悸にも似た高揚感を覚えていたリオだった。

◇　◇　◇

場所は大きく変わって、セントステラ王国城、第一王女であるリリアーナの私室にて、美春はリリアーナにマンツーマンで日本語を教えていた。

現時点で美春達がセントステラ王国に連れてこられてから、既に一カ月近くが経過している。

「それにしても日本語とは難しい言語なのですね。ある程度学習が進んできたからこそ、改めて実感しました。発音はもちろん、文字の多さ、同音異義語の多さ、それらに含まれた歴史的背景、文法、そして細かなニュアンスを含んだ類似表現の数々、本当に奥が深いです。日常的な読み書きと会話ができるようになるのは果たしていつになることやら……」

授業が一区切りついたところで、リリアーナがしみじみと語る。

「いえいえ、リリアーナ様はすごい勢いで習得されていると思いますよ？　話し言葉はともかく、私達日本人でも綺麗で読みやすい文

章を書くのは難しいですし、きちんと理解していない単語や表現もたくさんありますから、そう気負わずとも大丈夫です」

美春は微笑してかぶりを振った。

「ありがとうございます。素晴らしい師に恵まれましたからね、頑張ります」

リリアーナもフフッと微笑む。

実際、彼女の学習速度は目覚ましい。王族であるがゆえに勉強時間は限られているが、学習意欲は旺盛で、地頭もかなり良いのか、その理解力と暗記力は図抜けている。

現時点でひらがなとカタカナはもちろん、小学校低学年で習うような簡単な漢字も暗記しており、今は様々な単語や基本的な定型表現を次々と吸収しているところだ。ここから先はさらに成長速度が上がっていくことだろう。

「あはは、私は素人同然の先生なので……。日本語の文法や教え方をきちんと学んだこともありませんし、厳密には間違っていることを教えている可能性もあります。それでもリリアーナ様が短期間でここまで日本語を習得できたのは、やはりリリアーナ様の才能によるところが大きいと思います。どういうことを学んでいきたいのか、私はリリアーナ様のリクエストに沿って教えているだけですからね」

言って、美春は微苦笑する。

「確かにミハルさんは専門家ではないのでしょうが、私は貴方に何かを教える才能はあると思っていますよ。実際、日本語とこの世界の言葉との違いをわかりやすくご説明なさっていますから」

「それは……たぶんハルトさんのおかげです。わかりやすく教えて

もらったので、私はそれを応用しているだけで……」

誰かに日本語を教えた経験のない美春がまがりなりにもリリアーナに言葉を教えることができているのは、リオからこの世界の言葉を効率的に教えてもらった経験があったからだ。だが、リリアーナに讃えられると、美春は微妙に表情を曇らせてしまう。

「申し訳ございません、ご不快な思いをさせてしまったようですね」

リリアーナは美春の表情の変化を敏感に察したのか、すまなそうに謝罪の言葉を口にした。

「あ、いえ、別に不快というわけでは……」

美春はハッと顔色を変えてかぶりを振る。すると――、

「以前にも申し上げた通り、タカヒサ様は何か理由があってミハルさん達を我が国へとお連れになりました。その理由は私にも仰っていただけておりませんが、今のあの方は随分と意固地になっていらっしゃいます。まるで子供のように」

リリアーナが滔々と語りだした。

「はい……、それは承知しております」

美春は歯がゆそうに頷く。

貴久は今の今に至ってもまだ美春達に事情をきちんと説明していない。そのせいか雅人も含めて貴久との関係は日増しにギクシャクとしており、亜紀が両者を仲介しようとあくせく奮闘しているのが現状である。

「タカヒサ様をお止めすることができなかった私が申せた義理ではございませんが、恥を承知で改めてお願い申し上げます。……今しばらくお時間を頂けないでしょうか？　必ずやミハルさんが納得できるだけの情報を提示できるように取り計らってみますので」

リリアーナはそう言うと、美春に対して深々と頭を下げた。

「い、いえ、そんな、リリアーナ様に頭を下げていただかなくとも」

美春は慌ててリリアーナを制止しようとする。

「いいえ、現状に至るまでの経緯の落ち度はこちらにあり、我が国がミハルさんに対して不誠実極まりない真似を働いていることも自明のことです。挙句、ミハルさんの寛容さに一方的に甘える始末。私程度の頭でも下げなければ示しがつきません」

リリアーナはそう言いながらも、じっと頭を下げ続けていた。

すると、美春が同じ部屋に黙ってたたずんでいる侍女のフリルに救いを求めるように視線を向けたが、黙って首を左右に振られただけだった。

ややあって、美春は恐る恐る――、

「リリアーナ様、頭をお上げください。……一つだけ伺ってもよろしいでしょうか？」

と、そう訊いた。

「はい、何なりと」

リリアーナは決然と首肯する。

「その……、どうしてリリアーナ様は貴久君の我儘を聞いているのでしょうか？　彼が勇者だからですか？」

美春はリリアーナの顔色を窺うように問いかけた。

「……仰せの通り、彼が勇者であるからというのが理由の半分です」

「じゃあ、残りの半分は……」

ぽつりと答えたリリアーナに、美春が追加で尋ねる。

「勝手ながら、あの方のことを信じたいから……でしょうか」

リリアーナはそう答えると、少し切なそうに微笑んだ。

すると、美春は微かに目を見開き――、

「リリアーナ様は……」

貴久のことが好きなのだろうか――と、そんなことを思ったが、尋ねることはできなかった。そうしているうちに――、

「これはタカヒサ様の我儘であると同時に、私の我儘でもあります。仮にタカヒサ様に非があるようでしたら、私にできうる限りの謝罪をさせていただく所存です。だから、タカヒサ様に対する当面の対応は私にお任せいただけないでしょうか？」

リリアーナがそんなことを言いだす。

「……はい、わかりました、よろしくお願いいたします」

美春はたっぷり逡巡し、しかる後、ゆっくりと頷いた。今の美春は貴久から避けられてしまっているし、正直、貴久が何を考えているのか、もうわからなくなっている。ここ最近では顔を合わせてもまともに会話をすることすらできないくらいだ。

「ありがとうございます。何かわかれば嘘偽りなくお伝えしますので。今後も当面はこのまま私に日本語を教えていただけると幸いです」

「はい、もちろん」

「……良かった、本当に」

美春が快く承諾すると、リリアーナはほっと安堵の息をつく。そして――、

「ふふ、ホッとしたら喉が渇いてきました。フリル、お茶を淹れてくれますか？」

と、侍女のフリルに指示を出した。すると――、

「畏まりました」

フリルが恭しく頷き、お茶を淹れる準備を開始する。

「では、そろそろ授業の再開をお願いしてもよろしいでしょうか、ミハル先生」

リリアーナは雰囲気を変えようと思ったのか、優しく微笑むと、畏まった口調でお茶目にそう言ってみせた。

「……えっと、はい。お任せくださいませ、姫様」

美春は一瞬目を丸くした後、自然と自身も芝居がかった口調で応じた。そのまま二人で顔を見合わせると、どちらからともなく、おかしそうに微笑み合う。

「きっかけは好ましいものではなかったかもしれませんが、私は貴方と出会えて良かったと思っております、ミハルさん」

リリアーナはひとしきり微笑むと、嬉しそうにそんなことを語りだす。

「その、私もリリアーナ様とお会いできて良かったと思っております」

美春はやや気恥ずかしそうに同意した。リリアーナは王族なのに一緒にいても気疲れしないというか、不思議と波長が合うような気がするのだ。まるで数年来の友人であるかのように。だから、もしリリアーナもそう思っているのだとしたら嬉しい。そう思った美春だった。

すると、リリアーナは何か話を切り出したそうに美春を見据え――、

「ありがとうございます。……ところで、ミハルさん。一つお願いがあるのですが、お聞きいただけないでしょうか？」

と、ややぎこちなく、話を切り出した。

「はい、何でしょうか？」

「ミハルさんが持っている辞書を何日かお借りしたいのですが……、

ご許可を頂けないでしょうか？」
「私の辞書……これですか？」
美春は小首を傾げて、手元に置いてあった小型の国語辞典を手に取る。この世界に召喚された時に持っていた学生鞄の中に入っていたものだ。
「はい。今の私ではまだ何が書いてあるのかは理解できないでしょうが、漢字の成り立ちを聞いたら興味が湧きまして、どのような文字があるのか見てみたいのです。気になった文字があればそこから覚えてみるのも面白そうだと思いまして」
「なるほど、確かに興味を持ったことから覚えた方が習得も早いかもしれませんね。……構いませんよ。では、今日はいつもと宿題を変えてみましょうか。辞書の中から気になった文字や単語をいくつか探してみてください。次の授業の際にその意味をお教えしますので」
美春はふむふむと頷くと、リリアーナに国語辞典を貸し与える許可を与えた。
「ありがとうございます。頑張って勉強いたしますね。……ミハルさんのためにも」
リリアーナは微妙に翳（かげ）りを帯びた笑みをたたえると、美春に礼を言う。だが、尻すぼみに呟いた言葉が、美春の耳に届くことはなかった。
◇　◇　◇
そして、さらに場所は変わってガルアーク王国城。演習場の一角

で、皇沙月が練習用の槍を黙々と振っていた。だが、その表情はどこか物憂げである。
というのも、つい先日、ガルアーク国王フランソワから直々にお言葉を頂戴したからだ。竜が現れたため、しばらくは魔道船を運航させることができなくなった、と。
現在、ガルアーク王国を含めた近隣諸国は魔道船の運航を自粛する方向で動いており、いつになったら自粛が解消されるかはまったく見通しが立っていない状況だという。
せっかくセントステラ王国を訪問に向けてフランソワに相手国との交渉を依頼していたのに、話を進められなくなってしまった。
（結構な数の犠牲者が出たって話だし、あの王女様も……大丈夫かしら？　あんなに大人しくてか弱そうな子なのに……）
実際に何度か顔を合わせて話をしたこともあるフローラのことを考えると、沙月はなんともやりきれない気持ちになってくる。色々な考えや思いが胸の内に押し寄せてきて、槍を握る手にも次第に力がこもってきた。
（そもそも勇者って何なのよ？　勇者なら竜くらい討伐するものなんじゃないの？）
こういう時のために存在する勇者なのではないか、とも主張してみたが、案の定というべきか、もっともらしい理由をつけて消極的な回答が戻ってきただけである。
（結局は体の良い神輿ってことなのかしらね。……まったく、こんな時に現れるなんて、色々と空気が読めない竜）
勇者とは神威を象徴する存在だ。国の権威が神威によって根拠づ

けられている以上、国としてはせっかく抱えた勇者にいなくなられては困るのだろう。
ゆえに、安易に外出許可を与えることはないだろうし、ましてや危険な化物の討伐になんてそう簡単に行かせるわけがない。
確かに沙月としても安易に危険な化物討伐のお鉢を次々と回されては困るが、今回ばかりは居ても立っても居られなかった。実際に自分が竜を倒すとなったとして、怖くないといえば嘘になるが、それ以上にじっとしているのはどうも性分に合わないようだ。

「ああ、もう！」

沙月はやるせなさをごまかすように、力強く槍を振り下ろした。
そのままぴたりと槍の穂先を止めると、小さく溜息をつく。そして――、

「どこに行っているのよ、ハルト君」

不安そうな声で、自らの心情を吐露(とろ)した。

第１４６話　フローラの受難

リオがアマンドを出発してプロキシア帝国へ向かった日の午後。パラディア王国のとある森の中に、フローラが転移していた。

「えっ！？」

フローラは一瞬で景色が変わったことに愕然とすると、びくりと身体を震わせる。きょろきょろと視線をさまよわせるが、鬱蒼と茂った草木が視界に映るだけだ。

（ど、どこ？　どこなのですか、ここは？　あの人が魔力結晶らしき石を私に放り投げて……、何か強力な空間魔術が込められた魔道具だったのでしょうか？）

と、フローラは混乱しながらも、状況の整理を試みる。彼女の常識で真っ先に思い当たったのが、何かしらの超常的な空間魔術が込められた魔道具を使ったということだった。

（でも、人を転移させる空間魔術は失われた古代魔術のはず。そんな魔術が込められた魔力結晶型の魔道具をあっさりと使うなんて……）

魔力結晶に魔術を込めて魔道具として用いる場合、消費した魔力を新たに注ぎ足すことは難しいし、内包した魔力を使い切った時点でその魔力結晶は消滅してしまうことから、その魔道具は魔力を使い果たした時点で使い捨てが前提となる。無理に魔力を込めようとすれば魔力結晶に込められた魔術が消滅してしまうのだ。

（そもそもどうしてあの人は私をあの場で殺さなかったの？　私を殺しにきたと言っていたのに……、なぜ私をこんな場所に？）

フローラは改めて周囲を見回してみるが、近くにあの男達の姿は見当たらない。自分のもとに現れた男達の目的はいったい何なのか。まるでわからなかった。混乱した頭でしばし呆然と立ち尽くす。

とはいえ、いつまでもこの場にじっとしているわけにもいかなかった。行動の自由が与えられているのならば、思い浮かぶ選択肢は一つしかない。

（とにかく、ここがどこなのかを調べて、レストラシオンの拠点に戻らないと……）

フローラは焦るように帰還を決意した。そして、あてもなく、自信もなく、根拠もなく、この薄暗い森の中から脱出することを目指して歩きだす。

そうして歩くこと、およそ数十分――、フローラはただでさえ歩き慣れぬ森の地面を、歩行には適さないヒールのついたおしゃれな靴で踏みしめていく。その身体を覆う高価なドレスの裾はすっかり土色に汚れていた。

（……森の出口が全然見えない。どれくらい歩いたんだろう？　まさか森の奥に向かっているわけじゃない……よね？）

不安にさいなまれ、呆然と途方に暮れるフローラ。しかし、時間が経ったことで少しは冷静に思考する精神的な余裕も生まれていた。というより、何かを考えて気を紛らわせていないと、不安で仕方がない。

（今頃は大騒ぎになっているんだろうな。……あの人は約束を守ってくれたのでしょうか？）

と、フローラは残された魔道船団の乗組員達のことを考える。

現れた男の一人はフローラが抵抗しなければ乗組員達の命を救うと約束したが、本当に約束を守ってくれるのかどうかはわからない。だが、それを確認する術がない以上、今はその言葉を信じるしかなかった。

（せっかくお姉様ともやっと会えそうだったのに……。会いたい、早くお姉様と会いたい）

姉クリスティーナに対する想いも強まっていく。それから、フローラは姉と再会したい一心で、黙々と足を動かし続けた。

◇　◇　◇

そして、時は少しだけ進み、翌日の夕刻間近。場所は変わってパラディア王国城。粗野だが整った顔つきの壮年男性が、第一王子デュラン＝パラディアと対面していた。

「それで、今日はどのような面白い悪巧みを持ちかけにきたのだ、ルシウスよ？」

デュランは両椅子に薄着の美女を侍らせながら、訪問者の男性――ルシウスに対して尊大に問いかける。

「ははは、まるで俺がいつも悪巧みを持ちかけに伺っているかのような仰いようですな」

「さして相違あるまい。先の戦で我が軍の勝利が揺るがぬものとな

った以上、今の貴様が仕事を求めて俺のもとを訪れる必要はない。仕事以外で貴様が俺のもとに現れるのは、悪巧みを持ちかけてくる時と決まっている」
「まあ、間違ってはおりませんな」
頷いて、ルシウスはにやりと口許を歪めた。
「ならば早く申せ。今はもう俺が出張るほどの戦もなく、退屈なのだ」
デュランは大柄な体躯をずいと前のめりにしてルシウスを急かす。すると――、
「実は宝探しをしようと思っているのですが、殿下もご一緒にいかがと思いまして」
と、ルシウスはにこやかに語った。
「……宝探しだと？　我が国に何か眠っている宝があると？」
「ええ、それはもう極上の。いくつか条件を呑んでいただきたいのですが、発見した宝は殿下がお好きなように使っていただければと考えております」
訝しそうに目を細めたデュランに、ルシウスは鷹揚に頷いて語る。
「ふん。何を企んでいるのかはわからぬが、その口ぶり、その宝とやらが何かを知っているような申しようだな」
「ええ、宝を解き放ったのは他ならぬ私なもので。きっと殿下もお気に召すことだろうと考え、こうして参上しました。ただ、そのお宝はあいにくと生き物でして、早めに探して入手なさらないと逃げ

られてしまう恐れがございます。……これ以上の詳細は、いつも通り正式に交渉に入り次第、お教えするということで」

と、ルシウスは慣れた口ぶりで説明すると――、

「ふっ、いいだろう。交渉だ。お前らは去れ」

デュランは上機嫌に頷いた。侍らせていた女性達をすげなく追い払うと、女性達は衣類を羽織ってそそくさと退室していく。そうして室内に残ったのが二人だけになると――、

「では、お宝の内容をお教えしましょう」

ルシウスは満を持して宝探しの詳細を語り始めた。

◇　◇　◇

その頃、フローラはいまだにパラディア王国某所の森の中をさまよい続けていた。当初は不安や姉に会いたい想いで足を動かし続けていたが、時間が経つにつれて肉体的な疲労がだいぶ蓄積してきている。

（うう、足が重い。お腹が空いたよ。まだ森の外に出られないの？　もうだいぶ暗くなってきたし……、どうしよう？　学院の時に習った知識だと、こういう時は完全に暗くなる前に寝床を確保しないといけないんだよね？　でも、野営の道具なんて持っていないし……）

と、心の中で泣き言を漏らし続けるフローラ。歩けども歩けども脱出できない広大な森に、肉体だけでなく精神的な疲労も相当に蓄

積し始めていた。
視界に映るのは相も変わらず木々ばかり。とはいえ、森の光景にも変化は少しずつ生じている。日が傾くにつれて、森の中も加速度的に暗くなってきているのだ。つい先ほどまでは森の奥の方まで見渡せていたのに、今は手前の方でもだいぶ薄暗い。

（動物の鳴き声も聞こえる。危険そうな獣の声は聞こえないけど……怖い）

非日常的な薄暗い空間の中だと、ただの小動物の鳴き声でさえ不気味に聞こえるのだから不思議だ。このままだと森の中で野宿するしかなさそうだが、それだけは何としても避けたかった。怖くて怖くて堪らない。足はだいぶ重たくなってきているし、靴擦れをして痛くもなっているが、時折、治癒魔法で誤魔化しつつ、フローラは早く森から出たい一心で前へ前へと足を動かしていた。
しかし、それが悪手となっていることを、フローラはさして強くは実感していない。自然の中で野営する際の鉄則として完全に暗くなる前に野営の準備を終えなければならないということを知識としては知っていても、体験として身に染みてはいないからだ。
だから、明確な見通しも保険もないまま、まだ大丈夫、もしかしたら完全に暗くなる前に森の外へ出られるかもしれない、という甘い考えを抱いてしまう。
もちろんフローラだって学院時代には野外演習に参加した経験はあるものの、所詮は人員も試験場も装備もすべてがお膳立てされた形だけの演習にすぎない。第二王女の彼女はただ同行しているだけで、特に何か作業を割り振られたわけでもなかったので、役立つ経験として何かが残ることはなかったのだ。
そうして、フローラは最悪な状況へと知らぬうちに突き進んでいく。数十分もしないうちに日が急速に傾いていき、気がつけば森の中も真っ暗になってしまった。想像以上に真っ暗で、何も見えない。

それが怖くて堪らず、フローラはひたすら移動の継続を試みた。

「《発光魔法(ラディエーション)》」

暗くて先が見えにくくなってくると、流石に呪文を唱え、光と熱を放つ魔法を使用する。すると、眩い光が前方を強く照らした。

光量を調節し、程よい明るさに抑えると、フローラは再び移動を再開する。真っ暗になった森の中で、不自然な光を発したまま、一人でとぼとぼと歩いていく。

それからどれほどの時間が流れたのだろうか。森の外に出られる気配は少しもない。フローラの疲労も流石に限界を迎えようとしていた。真っ暗な闇の中で至近距離から光源を浴びているせいか、目がちかちかとして集中力も削がれてきている。

それでも重い足を引きずり、惰性で前へ前へと歩いていたが――、

「きゃっ！？」

フローラはとうとう草木に足を奪われ、前のめりに転んでしまった。その拍子に魔法の光が消滅してしまう。

「うう、いたた……」

フローラは華奢な腕で自らの身体を支え、何とか体勢を戻そうとする。綺麗なドレスもすっかり汚れてしまったが、暗闇の中ではそれを視認することすらできず、彼女が気づくことはない。すぐには立ち上がる気力も湧かなかった。

フローラはそのまま両手を突いて地べたに座ると、呆然と暗闇の中を見回す。すると、あまりにも暗すぎる空間に自分が置かれていることをようやく気づいた。一、二メートル先にある木でさえ朧(おぼろ)にしか見えない。

歩いている時は気づかなかったが、身動きせずにいると、虫の鳴き声が小さく響き渡っているのが聞こえてくる。ひんやりと涼しい風が吹く度に、ざわざわと木々が揺れているのもわかった。すると――、

（どうしよう……？）

と、フローラは放心状態で途方に暮れる。森から出なければと頭で漠然と考えるが、その方法がまるでわからない。これだけ歩いても出られなかったのだ。本当に出ることはできるのか、不安の入り混じった疑問を覚えてしまう。

（もう歩けないよ）

フローラは緩慢な動きで立ち上がろうとしたが、すぐに断念した。まるで錘（おもり）でも装着したように身体が重いのだ。どうやら思った以上に疲労が肉体に蓄積しているようだと、ようやく自覚する。

フローラの心はだいぶ折れかけていた。少なくとも今晩中に森の外に出ることはもう無理だと強く理解させられている。恐怖を覚えて行動に移す体力も気力もない。もうこのままずっと座っていたい気分だった。だから――、

（とりあえず明るくなるまで待たないと……）

休んで体力の回復を図ろうと、フローラはぼんやりと考える。今の自分にできることはもうそれくらいしかないのだから、と。

（喉が渇いたな）

フローラはぼんやりとそう考えると――、

「《水創生魔法(クリエイトウォーター)》」

ぼそりと呪文を唱えて、手元から水を出した。じゃばじゃばと溢れる水に顔をつけ、そのまま顔を洗って喉を潤す。そうして、フローラはしばし無心に水を求め続けた。

「ぷはっ……」

十秒ほど夢中になって水を飲み続けると、ようやく息継ぎをする。水を飲んだおかげか、少しだけ体力と気力が戻った気がした。そして――、

「びしょびしょになっちゃった。……休む場所を変えないと」

水を出したせいで地面が水浸しになっていることに気づくと、重たい身体に鞭を打って立ち上がる。

「《発光魔法(ラディエーション)》」

フローラは再び魔法で灯りを作ると、休めそうな場所を探しにのろのろと歩きだした。そして、数分後、適当な木の根っこを今日の寝床として選ぶ。地面には枯れ葉が散乱しているので、少しはクッション的な役割を期待できそうだった。

「よいしょ……。《治癒魔法(ヒール)》」

フローラはゆっくりと地面に腰を下ろすと、こてりと木に体重を預けて寄りかかる。そして、靴擦れした足に治癒魔法をかけると、続けて疲労が蓄積している手足にも治癒魔法をかける。治癒魔法で

は筋肉痛や肉体の疲労を完全に抑えることはできないが、かけないよりはマシな程度には効果があるからだ。そうして一通りの作業を終えると――、

（疲れた……）

頭に思い浮かんだのは、その一言だけだった。それから一分もしないうちに強い眠気が襲ってきて、フローラはうつらうつらと舟をこぎ始める。やがて無意識に瞼を閉じると、彼女の意識は瞬く間に闇に呑まれた。

◇　◇　◇

そして、翌朝。

「ん……」

肌寒さを覚えて、フローラの意識はぼんやりと覚醒する。ゆっくりと目を開くと、視界に森の風景が映った。

（……そっか。私、結局、あのまま寝ちゃって……。寒いな）

と、フローラは自分が置かれた状況をぼんやりと思い出す。

なんだか妙に肌寒かった。身体が気だるく、節々に鈍い痛みを感じる。毛布もかけないで眠っていたのだから当たり前だった。

しかし、フローラは全身の倦怠感を堪えて、何とか身体を動かそうとする。だが――、

「……痛っ！？」

実際にのそりと身体を動かすと、首筋にちくりと鋭い痛みを覚えた。

「な、何！？」

びくりと身体を震わせ、反射的に左手で首筋を払うフローラ。すると、何かを吹き飛ばした感触が左手に伝わってきた。飛んでいった何かを視線で追いかけると、そこには一匹の蜘蛛がいて――、

「ひっ！？」

フローラの頭は一気に覚醒した。瞬時に状況を理解すると、みるみると顔が青白くなる。

「やっ！　やっ！　やっ！　やだぁ！」

他にも身体に纏わりついた虫がいるんじゃないかと考え、フローラは慌てて全身をはたき始めた。ドレスの下も含めてくまなく身体をはたいていく。

そうして身体の隅々まで入念にまさぐった結果、接触していた虫がとりあえずは先ほどの蜘蛛一匹だけだと知ると――、

「……もうやだよぉ」

と、フローラは泣きそうな声を出した。そして、その後も入念に身体をはたくと、今度は痛みを感じた首筋の箇所を恐る恐る触ってみる。

「よかった、血は出ていない」

首筋に血液は付着していないことを知り、フローラはほっと胸を撫で下ろした。だが、このまま気を抜くわけにもいかない。

「……早く行こう。森の外に出ないと」

フローラは一秒でも早く森の外へ出るべく、すぐに移動を開始した。お腹は空いているし、全身の疲れは色濃く残っているが、贅沢は言っていられない。

「……あれ？」

ふらふらとした足取りで数十分ほど歩くと、フローラは軽いめまいを覚えた。空腹時の運動による貧血だろうかと見当をつけるも、ふらついた身体に鞭を打ってそのまま足を動かす。そして、さらに小一時間が経過すると――、

「え……、あれ……森の外？」

視界の奥に木々の切れ目が見えた。

（……森の外に出られるの？）

と、フローラは呆気に取られたように立ち尽くす。しかし、ややあってハッと顔つきを変えると、足早に歩きだした。そして――、

（出られる。森の外に出られる。誰かすぐ傍で人が暮らしていればいいんだけど……）

そんなことを思いながら、ようやく森の外へ出る。森の外は穏やかな丘陵地帯となっていて、そこそこ見晴らしは良かった。

すると、フローラは森から遠く離れた場所に、村らしき建造物があるのを発見する。

「む、村だ。あれ、村だよね。良かった……」

フローラは安堵のあまり、崩れるようにその場で座り込んでしまった。だが――、

「……行かなきゃ。お姉様のところへ」

しばらくすると、フローラはおもむろに立ち上がる。そして、身体に残っているわずかな元気を捻りだし、のろのろとした足取りで村へと近づいた。

第147話　フローラの受難　その2

フローラは丘陵地帯に広がる村へとのろのろとした足取りで向かった。そうして二十分ほどかけてようやく村の領域にたどり着く。
村の中は実に物静かで、淡々と農作業をしている村民の姿がちらほらと視界に入る。村人の顔つきにあまり活気はなく、長閑（のどか）というよりは、寂れていると表現した方が的確かもしれない。
フローラが村のあぜ道を進んで居住区域に近づいていくと、次第に農作業をしている村民達からじっと窺うような視線を向けられた。

（声……かけにくい）

フローラは排他的な村の雰囲気を感じとり、ついつい物怖じしてしまう。だが、ここで引き返すわけにはいかなかった。勇気を出して自分から村人達へと近づいていく。

「あ、あの、すみません」

と、緊張した声色で二十歳くらいの村人男性に声をかけるフローラ。

「……ああ、いや。どなたで？」

村人は挙動不審に周囲を見回してから、じろりとフローラの容貌を見据えると、続けて視線を外してぼそりと呟いた。

「え……？　あ、あの、えっと実は従者と離れ離れになってしまいまして、ここがどこか教えてもらえないでしょうか？」

フローラは男の声がよく聞き取れなかったのか、一瞬きょとんとした顔になる。だが、すぐに顔つきを変えると、精一杯の社交的な振る舞いで用向きを明らかにした。そして、男の小さな声を聴き取るため、微かに距離を詰める。

「……じゅ、従者？　もしかして貴族様で？」

男は相も変わらず小さな声で呟くと、訝しそうにフローラの外見を見やる。すっかり薄汚れているが、フローラが着ているのは高そうなドレスである。それに、フローラは男が今までに目にしたことがないほどに美しく可愛らしかった。村に住まうガサツな女達とは大違いだ、と男は密かに思う。

「あ……、はい。えっと、そのようなものです」

正確には王族だが、フローラは曖昧に濁して頷いた。

「へえ、なるほど……」

村人の男は改めてフローラをまじまじと見やる。

「それで、その、ここがどこなのか教えていただけないでしょうか？」

フローラは男の無遠慮な視線に気が引けたものの、笑顔を取り繕って尋ね直した。

「パラディア王国のどこか……、王都が東にあるそうですが。外のことはよくわからんです」

「パラディア王国……ですか？　えっと、確か……」

男が漠然とした現在地を告げると、フローラは唖然と目を丸くする。パラディア王国といえばベルトラム王国から見て遥か北東に位置する小国だ。フローラも国名を聞いたことくらいはあるが、あまり詳しいことを知らない。とはいえ――、

（どうやって帰ればいいんだろう……）

ベルトラム王国からの漠然とした距離を知っているだけに、フローラは途方に暮れてしまう。少なくとも着の身着のままの彼女が一人で歩いて帰れるような距離ではない。

「……どうかしたんで？」

男は呆然自失としているフローラを訝しく思ったのか、小さく低い声で呼びかけた。

「あ、いえ、その……どうやって帰ろうかなと思いまして」
「どこに行きたいんで？」
「……ベルトラム王国です」
「ベルトラム王国……知らねえ」

目の前にいる二十歳くらいの青年は国名すら知らないようだ。シュトラール地方有数の大国も、田舎の小国に住まう農民にとっては蚊帳の外の存在なのだろう。すなわち、ベルトラム王国では第二王女の地位にいるフローラの影響力も、この場では何の役にも立たないことを意味する。

「村長なら何か知っているかもしれねえ。案内します」

男はそう言うと、鍬(くわ)を抱えて歩きだした。

「あ、その……お願いします」

フローラはやや呆気に取られると、男の背中に向けてぺこりとお辞儀をして、足早に後を追いかける。そして数分後、フローラは村の最奥部にある村長宅へと案内された。

「村長に事情を説明する。少し待っててくだせえ」

村人の男性はそう言い残すと、一人でさっさと家屋に入っていく。フローラは言われるがままその場に待機することにした。

村長宅は木造の二階建て家屋で、村の中では最も立派な建物だが、王女として城で育ったフローラからすれば他の家とさして違いがあるようには見えないのかもしれない。とはいえ、初めて目にする農民の暮らしぶりを、フローラは物珍しそうに眺めていた。

そうして、フローラが興味深そうに村の家屋を眺めながら待機していると――、

「村長が会うそうです。中へ」

フローラを案内した男が出てきて、中に入るよう招き入れる。フローラは「はい」と頷き、恐る恐る家屋の中へと入っていった。すると、入ってすぐの居間で、村長と思しき中年の男性が腰を低くして出迎える。

「これは……ようこそ。この村の村長を務めさせていただいております。貴族様だそうで、大まかな話はドンナーから聞きました」

村長は薄汚れたドレス姿のフローラを視界に収めると、微かに硬直して目をみはった。とはいえ、伊達に村長をしていないのか、すぐに笑みを取り繕ってフローラを歓迎する。
ドンナーとはフローラを案内した若い男性のことだろう。フローラを村長のもとへ案内した今も、この場に留まっている。すると――、

「おい、ドンナー。後は私が引き受ける。お前はもう仕事場に戻っていいぞ」

長老がドンナーに語りかけた。

「いや、俺は……」

ドンナーはぼそりと呟き、何か言おうとする。その視線は窺うようにフローラに向けられていた。

「なんだ、貴族様に何か言いたいことがあるのか？」

長老がドンナーに訊く。だが、ドンナーはさっと視線を逸らすと、そのまま黙って家の外へと出ていってしまった。

「すみませんな。寡黙な男で。体つきもでかいので、村の若い女達も不気味がってあまり近寄らんのです。っと、貴族様に申しても詮無い話でしたな。では、早速ですが、詳しい話を聞かせていただいてもよろしいですかな？　どうもドンナーの話は要領を得ていなかったもので」

そう言って、村長は苦笑する。

「あの、私はフローラといいます。ベルトラム王国へ向かいたいのですが……」

フローラは何をどう説明すればいいのかわからず、自らの名を告げると、漠然と目的を打ち明けた。

「……ベルトラム王国ですか。名前は聞いたことがありますが、どちらにある国でしたかな？」

「確かここから南西の方角だと記憶しています」

「なるほど。南西、南西ですか。そっちには確かルビア王国がありましたが……、うちの国とは慢性的に戦争状態にあるらしいですからなあ。街道が閉鎖されている可能性もありますぞ？　まあ、貴族様なら通れるのかもしれませんが」

と、窺うようにフローラへ視線を向ける村長。ちなみに、ルビア王国はかねてよりベルトラム王国とガルアーク王国が共同して支援している小国である。

「戦争……、この国はルビア王国と戦争をしているのですか？」

フローラは物知り顔で取り繕うことはせず、世情に疎い一面を覗かせた。すると――、

「……ええ。戦争といっても小競り合いばかりらしいですがな。今は他の近隣の国と大きな戦争をしているそうで。まあ、我が国では当たり前の話なのですが」

村長は観察するようにフローラを見据えて説明する。

「あ、その、私はこの国の貴族ではないもので……」

流石に自分が怪しまれていることを察したのか、フローラは焦ったように弁明した。

「なるほど……道理で。失礼ながら少し不審に見えました。疑問に思っていることもあるのですが、お尋ねしてもよろしいですかな？」

村長はどこか納得した様子を見せると、じっとフローラを見据えて問いかける。

「……何でしょう？」

「我が国の貴族でない貴方が、どうして我が国のこんな田舎に一人でいらっしゃるので？」

「それは、その、旅の途中で遭難してしまいまして……」

フローラは緊張した面持ちを浮かべると、後ろめたそうに視線を逸らして答えた。正直に説明しても話がややこしくなりそうで、というより信じてもらえそうになくて、気が引けてしまったから。それに、何より――、

（ルビア王国はベルトラムの友好国だったはず。そのルビア王国と交戦中のこの国で私がベルトラム王国の王女だと知られるのはどうなんだろう？　もうベルトラム王国に向かっているという話はしちゃったけど……）

と、フローラはそんな危惧を抱いた。すべてを素直に説明するとなれば、フローラがベルトラム王国のやんごとなき身分に属する人間だと説明せざるをえなくなるだろう。果たしてそれでいいものか、フローラには正確な判断がつかなかった。

「遭難……、それでそのような格好をされているというわけですか。なら、今頃は貴方様がいなくなったことで騒ぎになっているのでは？」
「……はい、おそらくは」
「貴方様の従者は近くにおられないので？」
などと、村長はフローラの状況に探りを入れていく。フローラの話を完全に信じるか、半信半疑といったところか。
「……わかりません」
フローラは弱々しくかぶりを振った。
「ははあ、なるほど。大変ですなあ」
村長は呑気に頷いてみせて、フローラの現状に同情する。
「……はい」
フローラは意気消沈して首を垂れた。人がいる場所に行けばなんとかなるかもしれないと楽観的に考えていたが、これでは自らが置かれた状況が最悪だということをより正確に再認識させられただけだ。すると――、
「まあ、一番無難な選択肢はここらを治める貴族様に相談することですかね。あいにくと一介の村長にすぎん私の力が及ぶところではありません」
村長はパラディア王国の貴族の世話になるよう、フローラに勧めた。

「……考えてみます」

と、フローラは結論を濁して頷く。その顔色は優れない。パラディア王国の貴族に助けを求めれば政治的に利用される恐れがあると、流石のフローラにも予想がつくのだろう。

「まあ、今日の所は我が家に泊まっていかれるとよろしい。貴族様に満足していただけるようなもてなしはできませんが、温かい食事くらいはお出ししましょう。その間にどうなさるかご決断を」

村長は小さく嘆息すると、とりあえずはフローラをもてなす意思を表明した。真偽不明な点があるとはいえ、一応は相手が貴族らしい身なりをしている以上、無下に扱うわけにもいかないと思ったのだろう。どのような交友関係を持っているのかはわからないのだから、後で手痛いしっぺ返しを喰らう恐れだってある。

「……あ、ありがとうございます！」

フローラは微かに呆けた顔を浮かべると、嬉しそうに頭を下げた。昨日からずっと何も食べずに歩き回っていたのだ。生まれて初めて野宿を体験した今、屋根のある場所で寝られるだけで僥倖だった。

すると、フローラと村長が話をしている居間に面した玄関の向こうから、ガタンと大きく物音が鳴り響く。

「っ！？」

フローラは物音に反応し、びくりと身体を震わせた。慌てて玄関に視線を向けると、ボロくなっている扉が外れていて、村人と思しき若い男達が群がっていた。

「やべっ！」

と、村の男達は揃って顔を引きつらせる。かと思えば、薄汚れているとはいえドレス姿のフローラと視線が重なると、それぞれが「おお」と瞠目した。

「な、何をしておる、貴様ら！　仕事へ戻らんか！」

村長は慌てて男達を怒鳴りつける。すると、男達は一目散に駆け出して、仕事場へと逃げ出した。その中にはドンナーの姿もある。

村長は深く溜息をつくと――、

「も、申し訳ございません。とんだ無礼を」

やや委縮した様子でフローラに頭を下げた。男達が好奇心でフローラの姿を一目でも見ようとやって来たのは一目瞭然である。今の騒ぎでフローラの不興を買ったのではないかと恐れたのだろう。

「いえ、特に気にしていませんが、それより彼らは何か用があったのでは？」

フローラは男達が自分を見に来たとは微塵も思っておらず、不思議そうに村長に尋ねた。

「はあ……いえ、そういうわけではないと思うのですが。気にされていないようでしたら、大丈夫です。少々時間はズレておりますが、お食事になさいますかな？」

浮世離れしたフローラの反応に困惑した村長だが、藪蛇にならな

いようさっさと話題を変えてしまう。今はまだ午前中だが、朝食というには少しばかり遅く、昼食というにはいささか早すぎる時間帯である。

「あの、お腹は減っているのですが、少し休ませていただいてもよろしいですか？　あまりゆっくりと眠れなかったもので、まだ疲れが残っていて……」

「確かに、少し顔色が悪いようですな。畏まりました。家内に部屋を用意させますので、休まれるとよろしいでしょう」

その後、長老の妻に寝床を整えてもらい、フローラは深い眠りへと就いた。

第１４７話　フローラの受難　その２（後書き）

本日（６月１日）、書籍版「精霊幻想記　４．悠久の君」の発売日を迎えました。活動報告を更新しましたのでよろしければご覧くださいませ。

追伸：さらに活動報告を更新しました（６月３日）。「精霊幻想記　外伝　セリア先生編」の連載がスタートしたので、よろしければご覧くださいませ。

第１４８話　フローラの受難　その３

正午の昼休み。フローラが訪れている村の一角に、若い男達が集まっていた。その中にはフローラを案内したドンナーの姿もある。

「おい、本当か！？　村長の家にすげえめんこい子が来ているって！」

駆け足で新たに現れた男数名が、既に集まっている男達に血相を変えて語りかける。

「ああ、本当だ。ドンナーが家に案内したそうだ。貴族様らしいぜ。すげえめんこかった」

既に集まっていた男達を代表し、一人の若者が得意気に答えた。

「おおお、マジかよ！　ドンナーもたまにはいい仕事するじゃねえか」

「まったくだ。あのドンナーが」

「しかしよく女と喋れたな。しかもめんこい子と」

などと、男達はいい歳をして子供っぽく盛り上がる。とはいえ、少しばかり馬鹿にされているドンナーはあまりいい顔をしていない。

「いいなあ、俺らも貴族の姫様を見に行きてえよ。村の女共とは比べ物にならないくらい可愛いんだろうなあ」

「当たり前だろ。俺らとは食ってるものも育ちもちげえって」

「実際やばかったぜ。同じ生き物とは思えないくらい顔の作りが整

っていた」
「あー、ならよ。今から行ってみるか！？」
フローラを見に行ってみようかと、男達はその場の勢いで盛り上がった。だが――、
「止めとけ、止めとけ。さっき見に行ったら親父にどやされたからな」
先ほど得意気に答えた二十歳くらいの若者が、ひょいと肩をすくめてかぶりを振る。
「はあ？　くそっ、見に行くなら俺らも呼べよな、ウィル」
と、フローラの容姿を覗き見できなかった男達は、不満そうに顔を曇らせた。
「まあそう言うなよ。また会う機会はあるはずだって」
ウィルと呼ばれた若者は軽い調子で男達を宥める。だが――、
「お前は家に帰れば会えるからだろ、ウィル」
「そうだ。俺らはこの機会を逃したら二度と貴族の姫様と会えねえかもしれねえんだ」
「ああ、くそ。俺も貴族の姫様とお近づきになりてえよ」
「いっそのこと夜這いでも仕掛けてみるか？」
「馬鹿！　貴族様だろ、手荒なことはできねえよ」
などと、村の男達は冗談半分に、口々に不満を並べていた。

「ははは、お前ら……」

ウィルと呼ばれた青年は呆れたように微苦笑する。

「あー、くそっ、ウィルは家に帰ったらあの貴族様と同じ席で飯を食えるのかよ」

「貴族様と良い仲になったりしてな」

「少し世間知らずな雰囲気があったからなあ。困っているところを助けたら案外俺らにもチャンスがあるかもしれないぜ」

「ウィル、抜け駆けはなしだ。後でちゃんと俺らに紹介しろよ」

村の男達はそう言って、ウィルに向かってぐいぐいと迫った。

「お、おう。わかった、わかった。なるべくお近づきになれるように頑張ってみるよ。……って、どうしたんだよ、ドンナー。そんなジッと睨みやがって」

引き気味に頷いたウィルだったが、ドンナーからじろりと見つめられていることに気づくと、訝しそうに眉を顰める。

「……別に。なんでもねえ。仕事に戻る」

ドンナーはそう答えると、鍬を握って一人で農地へ続く道を戻り始めた。「最初にあの子を助けたのは俺だ……」と、面白くなさそうに呟きながら。

◇　◇　◇

そして、夕方近く、フローラは村長に貸してもらった寝室のベッドでぼんやりと目を覚ました。

「んう……」

薄らと目を開けると、薄暗くて見慣れぬ木製の天井が視界に入る。

（そうか。私、村に迷い込んで、寝床を用意してもらって……、なんかぼーっとする？）

おぼろな思考回路でなんとか現状を認識すると、フローラは妙な息苦しさを覚えた。なんだか妙に熱っぽい。それでもとりあえずは起床を試みると――、

「痛たた……」

筋肉痛に似た痛みが身体の節々に走った。筋肉が強張っているのがよくわかる。

（風邪……なのかな？）

フローラは以前に風邪を引いた際の症状と類似しているとあたりをつけた。それでも億劫な身体に鞭を打って立ち上がると、のろのろとした足取りで部屋から出る。

今フローラがいる場所は建物の二階だ。貸し与えられた寝室を出ると、すぐ目の前に一階へと続く階段がある。壁を支えにゆっくりと階下へ向かうと――、

「親父、貴族の姫様はまだ起きないのか？」

「俺が知るか。朝からずっと眠っている。だいぶお疲れだったみたいだからな」

「ちゃんと俺のことを姫様に紹介してくれよな。出来の良い息子だ

ってよ」
「馬鹿野郎。お前なんか相手にされるもんか。くれぐれも粗相をするなよ。貴族様の機嫌を損ねれば最悪、村が滅びかねんからな」
などと、村長と息子のウィルが会話をしていた。
「あ、あの……」
フローラは所在なさげに声を出し、自らの存在をアピールする。すると、村長親子はハッと顔色を変えて佇まいを改めた。
「こ、これは貴族様！　お見苦しいところを、大変失礼いたしました」
「俺はウィルといいます、貴族の姫様！」
村長とウィルはそれぞれ思い思いに語って頭を下げる。
「あ、はい。えっと、その……、そこまで畏まらずとも。フローラといいます」
フローラは二人の過敏な反応に面食らうと、ウィルに対して律儀に名乗った。
「フローラ様、なんと清楚で素敵なお名前だ……」
と、ウィルは感極まって目を瞑る。
「それにしても貴族様、なにやら朝より顔色が悪いようですが……」
村長は息子に呆れの視線を向けると、息子が粗相のボーダーライ

ンを越えぬうちに話題を逸らした。

「はい。どうやら風邪をひいてしまったようで……」

フローラは自らの体調が芳しくないことを素直に告げる。

「なるほど、それは困りましたな……」

と、思案顔を浮かべる村長。その一方で――、

「なら体調が戻るまで家に泊まればいいですよ」

ウィルは気さくにそんな提案をした。

「お、おい、ウィル」

厄介事の種を抱えると思ったのか、村長は慌てて難色を示す。だが――、

「いいだろ、親父。確かに食い扶持は増えるが、どうせ部屋は余っているんだ。困っているフローラ様を放ってはおけないだろ」

と、ウィルは毅然と主張する。

「あの、すみません。お礼なら必ずしますので、体調が回復するまで泊めていただけないでしょうか？」

フローラも深くお辞儀をして、この家に泊めてもらえるよう頼んだ。貴族に真っ向からお願いされれば、流石の村長も首を横に振ることはできない。

「……承知しました。あいにくと村の生活は貧しく、大したおもてなしはできませんが、我が家でよろしければ滞在してください」

村長は小さな溜息混じりにフローラ滞在を許可した。すると、ウィルが「よし！」とガッツポーズを取る。

「あ、ありがとうございます。ウィル様も」

フローラはほっと安堵の息をついて、礼を言った。

「や、やだな。ウィル様だなんて……」

ウィルが照れくさそうに頭を掻く。

「家内に病人食を用意させましょう。部屋に運ばせますので、戻ってお休みください」

村長は小さく嘆息すると、部屋に戻って安静にするようフローラに言った。

「はい」

フローラは素直に頷き、部屋へと引き下がる。結局、その後も体調は優れないままだったが、その日の晩は特に何事もなく過ぎた。

◇　◇　◇

そして、翌日の正午。ウィルは昼休みの時間を利用して村の若い男達とにぎやかに会話を繰り広げていた。話題はもちろんフローラ

のことである。

「それで、どうだったんだ、ウィル？　貴族の姫様とはよ」

男達が身を乗り出してウィルに尋ねる。

「あー、フローラ様のことか」

と、ウィルはどこか嬉しそうにフローラの名を口にした。

「フローラ様ぁ？　てめえ、名前を教えてもらったのかよ！？」

「そりゃ同じ家にいて会話をしたんだから、名前くらい訊くだろ、普通？」

血相を変えて詰め寄る男達に、ウィルが微苦笑して返す。

「くそっ、自分だけ良い思いしやがって」

「そうだ、そうだ」

などと、男達が悔しそうにしている中――、

「フローラ様はどうなったんだ？　いつまで村にいる？」

ドンナーがぼそりと尋ねた。

「ん？　ああ、なんか風邪を引いたみたいでよ。少なくとも回復するまでは家に滞在することになったんだ」

ウィルは少し得意気にフローラの現状を語ってみせる。

「なに、病気なのか！？」
「育ちが良い人はお身体も弱いんだろうなあ」
「大丈夫なのか！？」
男達はハッとして、フローラの身を案じた。
「大丈夫、大丈夫。ただの風邪だって」
ウィルは軽い調子でかぶりを振る。
「そんなことお前にわかるんか？」
「いや、わからねえけど……、なんか必死だな、お前ら」
と、憐れむように男達を見据えるウィル。
「何ぃ？」
「ま、まあまあ、気持ちはわかるからさ。それより聞いてくれよ。保守的な親父の奴、面倒事の臭いを感じたのか、フローラ様を遠回しに早く出ていかせようとしてよ。俺がびしっと言ってやったんだ。家に泊めてやればいいじゃねえかってよ。そしたらフローラ様、俺のことウィル様なんて呼んでくれたんだ」
ウィルは眉を染めた男達を宥めると、得意気に語って聞かせた。
すると――、
「ちっ、だらしねえ顔しやがって……」
ドンナーが苛立ちを隠さずに呟く。他の男達も微妙に白けた眼差しをウィルに向け始める。そして――、

「おい、ウィル。抜け駆けはなしだぞ？　わかってんだろうな？」
男の一人が念を押すように言った。
「抜け駆けって……、同じ家で暮らしてんだから、必要最小限の会話はするぜ？　フローラ様の看護もしなきゃいけえしな」
と、ウィルが肩をすくめて言うと――、
「か、看護だと！？　てめえ、何か変なことしてんじゃねえだろうな！？」
「フローラ様と二人きりなのか！？」
「フローラ様はどんな服を着てるんだ！？」
などと、男達が慌ててウィルに詰め寄る。娯楽など何もないこの村の男達にとって、いきなり現れた高貴な身分に属する可愛らしいフローラは注目の的なのだろう。
「ま、待て、待て！　お前ら、落ち着け！」
ウィルは流石に看過できなかったのか、大きな声を出して男達を鎮めた。すると――、
「……見舞いに行く」
ドンナーがぼそりと呟く。
「……見舞い？　はっ、どういう風の吹き回しだよ、ドンナー。お前、今まで村の女が病気で寝込んでも見舞いになんか行ったことねえじゃねえか」

ウィルは目を丸くしてドンナーを見やると、しかる後、にやりと笑みを浮かべた。

「う、うるせえ！　行くったら、行くんだ！　見舞いだ」

「そ、そうだ、見舞いだ、見舞い！　見舞いに行かせろよ！」

ドンナーが上ずった声で怒鳴り散らすと、村の男達もドンナーに賛同しだす。

「ちっ、駄目だ、駄目だ。お前らの汚え菌が移ってフローラ様がさらに具合を悪くしたらどうする？　フローラ様の看病は俺がする」

ウィルは舌打ちし、にべもなく男達を一蹴する。しかし――、

「横暴だぞ！　自慢するだけしやがって」

「そうだ、お前だけずりいぞ！　一人で良い思いしやがって」

「俺がフローラ様を最初に助けたんだ！」

「俺らに紹介するって言ったろ！？」

ドンナーを含む男達は不満そうに食い下がった。

「う、うるせえ！　今のフローラ様は外出禁止なんだ。お前らを合わせるわけにもいかねえし、親父も認めねえよ！」

ウィルは村長である父の名を持ち出して、男達の訴えを棄却する。結局、その後もウィルが男達に対して首を縦に振ることはなかった。

第１４８話　フローラの受難　その３（後書き）

リオがセリアと別れてプロキシア帝国へ向かうことを決めて、リーゼロッテの魔道船でロダン侯爵領を出発した日（１４１話）を起点（１日目）とした時系列表を作りました。よろしければ記憶喚起にご覧ください。

<ｉ２０１３８５｜１３４２３>

第１４９話　パラディア王国城と村の様子

プロキシア帝国でニドルと戦った日の晩から数えて二日目の午後、リオはパラディア王国の王都を訪れていた。湖畔に広がる城下町の様相はありていに言えば平凡で、大国の地方都市程度の賑わいを見せている。商業区域の道端には、声を張り上げる商人や買い物客の姿があちこちで見受けられた。

（普通……だな）

それがリオの抱いたこの国の王都に対する第一印象である。プロキシア帝国城での戦いの後にニドルから得た情報によれば、このパラディア王国が今のルシウスの仕事先であり、第一王子とも繋がりを持っている、とのことだが――。

情報の出所が出所なだけに罠の危険性はあるし、話半分にしか信用はしていないが、他に目立った情報がない以上は、調べないわけにもいかない。

（日が暮れたら、早速、城に潜り込んでみよう）

リオは湖畔の小高い丘にそびえる王城を見据えた。高く堅牢な城壁に囲まれたその佇まいは城というより砦に近く、ベルトラム王国やガルアーク王国といった大国の王城と比べるとだいぶこじんまりとしている。

もしかしたら今この時、あの城の中に、母の仇であるルシウスがいるのかもしれないと思うと名状しがたい気持ちが胸にこみ上げてくるが、リオは小さく深呼吸をして自らを落ちつけた。

◇　◇　◇

そして、日が暮れた薄暮（はくぼ）。

パラディア王国城は侵入者を拒むように、堅牢な城門と城壁によって堅く閉ざされた。城内には随所に篝火が焚かれ、昼間以上に多くの番兵が徘徊するようになり、厳めしい警備体制が敷かれている。

リオは地上からの侵入は骨が折れると判断すると、闇に紛れて空を飛び、パラディア王国城の屋根に降り立った。黒い覆面と装束を着用し、気配と物音を消すことで見事に暗闇と一体化し、ひっそりと移動を試みる。とりあえず屋根伝いに城の庭の様子を観察しつつ、侵入できそうな窓を探すことにした。

基本的にお城は防衛の観点から低層に窓を作らないように設計されているものだが、パラディア王国城は要塞的な造りであるせいか、高層であっても侵入できそうな窓は少ない。時折、良さそうな窓を見つけるが、内鍵で閉められているものばかりだった。

とはいえ、探せば侵入経路はあるもので――、

（この見張り台から入り込むか）

リオは見張り台として使用されている尖塔から城の中に入り込むことにした。ただ、見張り台の中には二人の番兵が見張りに立っているし、城内の通路に巡回の兵士がいる可能性もあるので、不用意に侵入するわけにもいかない。

そこで、リオは周囲の空気に自身の魔力を浸透させ、風の精霊術を行使して周囲から不可視になる特殊な空間を形成した。ただし、物音や放出している魔力は誤魔化すことはできないし、急速に動くとほころびが生じてしまうため、慎重に進む必要がある。

とっかかりを掴んで壁を伝い、そっと見張り台の中に忍び込むと――、

「ん？」

侵入時のわずかな着地音を捉えたのか、近くの番兵がぴくりと反応した。しかし、開けた見張り台の中に自分達以外の誰も見えないことを確認すると、すぐに意識を逸らしてしまう。

リオは着地したまま数秒間そのままうずくまると、おもむろに立ち上がり、番兵の隙間を縫うように見張り台の中を歩いて、城内へ忍び込んだ。そして――、

（ここからが勝負所だ。とりあえず第一王子の部屋か所在を探ろう）

と、気を引き締める。

兵士が徘徊する城内を姿をさらしたまま堂々と歩き回るわけにはいかないが、王城の中となれば魔力に対する感度が高い魔道士が勤めているかもしれないし、場所によっては魔力反応を探知する魔道具や結界が仕掛けられている危険もあるだろう。人の気配を探り、不審な魔力反応を探知して、時には姿を消したり、姿を現したりと、警備の目を上手く掻い潜って情報を収集するのが腕の見せ所だ。

何度か他国の王城に忍び込んだ経験もあるので、リオも慣れたものである。こういった潜入時にはある程度の思いきりも必要であると割り切っているのか、過度に臆することなく足を動かし始めた。

尖塔の階段を下りて、本城へとたどり着く。途中、巡回している兵士とすれ違う時は精霊術で姿を消したり、物陰や天井に潜んだりと、臨機応変に対応した。

（大国の王城ほど広くない分、見張りの配置に無駄がないな）

と、リオはそんなことを考えながら、城内を闊歩する。まずは城内の構造と警備の様子を把握するため、あちこち歩き回ってみることにした。見張りの兵士が多い区画を記憶し、建物の造りなども踏

まえて、位の高そうな人物がいそうな場所に目星をつけていく。
そうして、一通り城内を歩き回ると、リオはその後の行動を決めるべく、いったん人気のない場所で作戦を立てることにした。

（王族が住まうのはおそらく本城の高層階だけど……、問題はどうやって部屋の中に入り込むかだな）

流石のリオも見張りの兵士が立っている閉ざされた扉の中へ入ることは難しい。もちろん多少の異変を察知されても構わない覚悟で透明化して扉を開けることはできるが、誰もいないのに勝手に扉が開けば確実に騒ぎになるだろう。リオとしては騒ぎになるのはあまり面白くない。

（一度外に出て、窓を調べてみるか？）

だが、内鍵で閉ざされている可能性は高いし、貴人の部屋には人が出入りできるほど大きい窓がないこともある。下手に開けようとしたり、精霊術で中を探ろうとしたりして、中にいる者に気取られても面倒である。

（それか誰かが適当な部屋に出入りするのを待つか）

それが最も無難だが、どれだけ時間がかかるかはわからないし、どの部屋に目当ての第一王子がいるかもわからないので、効率は悪い。霊体化できるアイシアがいればだいぶ潜入は楽になるのだろうが、今はロダン侯爵領でセリアと一緒にいる以上、ないものねだりはできない。結局――、

（……もう少し城内を歩いて、第一王子の情報を探ってみるか。会話を盗み聞きすれば、部屋の位置もわかるかもしれない）

急がば回れ。リオはゆっくりと、確実に情報を収集するべく、第三の選択肢を選んだ。
今まで歩き回った範囲で人が多く集まっている区画へ移動するべく、いったん本城の下層へ向かう。本城の下層は城に仕える使用人や兵士達の待機場にもなっているので、色々な話を聞きだすことができるだろう。
すると案の定、下層では色んな噂話を聞くことができた。空き時間を持て余している使用人達はゴシップに花を咲かせる以外に娯楽などないのか、暇つぶしにあれこれ喋っている。
例えば、リオからすればどうでもいい同僚内のネガティブな噂話をしていたり、城内に住まう王侯貴族達のやんごとなき噂話などをしていたり。話題を誘導できないのが難点だが、城内の世情を知るのにはだいぶ都合がよかった。
小一時間も話を聞いているうちに、リオは第一王子の名がデュランだと知る。今いる兵士達の休憩所では、ちょうどデュランに関する噂話が繰り広げられていた。リオはようやく掴めそうな第一王子の手がかりに、そっと耳を傾ける。すると――、

「デュラン様が連れていた新しい女を見たか？　城下で有名な宿屋の看板娘らしいぜ」

ある兵士が好奇心を滲ませて、他の兵士達に話題を振った。

「あー、またか。いいよなあ。とっかえひっかえ女を変えられてよ」

と、別の兵士は羨ましそうに言う。また――、

「まったくだな。俺も権力者になりてえよ。浮気も公認なんだろ？」
「浮気も何もお前はそもそも独身だろ。浮気を夢見る前に嫁さんを

見つけろよ」
「う、うるせえな。仮にの話だよ、仮にの話」
などと、他の兵士達も話に加わって、談笑する。
「まあ、英雄色を好むというからな。デュラン様の戦働きは凄まじいし、周りも滅多なことは言えないんだろう」
「後腐れないよう、基本的には飽きたら解放するって話だしな。今度の女はどれくらいで飽きられるか、賭けるか？」
と、一人の兵士が賭け事を提案すると――、
（だいぶ女癖が悪い王子らしいな）
リオはそう思った。
「でも、デュラン様、懇意の傭兵と手勢を連れて外出されたって話だぜ。いつ帰って来るんだか」
兵士が「懇意の傭兵」と言うと、リオはぴくりと反応する。
「ふーん。何かあったのかね？　今は特に大きな争いもないって聞いたけど。デュラン様が出張るような問題が起きたのか？」
一人の兵士が世間話のつもりで話題を振ると――、
「知るかよ。西の街道へ向かったとか聞いたが……」
訊かれた兵士はひょいと肩をすくめ、かぶりを振った。リオはそんな兵士達の会話を受けて――、

（懇意の傭兵と一緒に西の街道へ向かった……。ということは、今、この城に第一王子はいないのか？）

と、思案顔を浮かべる。

気になるのは会話の中で語られた「懇意の傭兵」という存在だ。もしかしたらその傭兵がルシウスなのではないかと、リオはそんなことを思った。

◇　◇　◇

一方、フローラが滞在している王国西部のとある農村で。時刻は夕方。リオがパラディア王国城へ忍び込む少し前のことだ。

フローラが熱を出してしばらく村に滞在することが決まった日の晩から、既に四日が経過している。だが、フローラの熱は一向に下がる気配を見せず、それどころかだいぶ症状が悪化していた。

「はぁ、はぁ……」

と、フローラの息遣いは荒く、高熱と筋肉痛と関節炎に身体を蝕まれ、まともに動くことすら一苦労の状態である。当然のように寝たきりの生活が続いているが、慢性的な身体の痛みによって熟睡することもままならない。

村長の息子であるウィルはそんなフローラの部屋に病人食を運び、少し強めに扉をノックして――、

「フローラ様、食事をお持ちしましたが……、入ってもいいですか？」

と、扉越しに室内を窺うように声をかけた。

「……あ、はい。ありがとうございます」

フローラは痛みを堪えつつベッドの上で半身を起こし、苦しそうな声でウィルに応じる。すると、扉が開いて、トレイを持ったウィルが姿を現した。

「どうも、おはようございます、ですかね？」

「はい、おはようございます。先ほどまで眠っていたので」

首を傾げたウィルに、フローラは精一杯の笑みを取り繕って答える。まだ他人に心配をかけないよう振る舞う程度の気力と余力はあるようだ。もっとも、顔色があまり優れないため、空元気なのは丸わかりだが。

「熱、下がりませんね？」

ウィルはフローラの顔をいたたまれない面持ちで見やると、己の不甲斐なさを押し殺すように問いかけた。

「……はい。ごめんなさい、ご迷惑をおかけして」

フローラは申し訳なさそうに、弱々しく謝罪する。

「い、いえいえ、迷惑だなんてとんでもない！」

ウィルは慌ててかぶりを振ると――、

「ただ、あまり具合が悪いようでしたら、薬師もいないこの村ではどうしようもないのではないかと、親父がうるさくてですね。領主

の貴族様を頼った方がいいんじゃないかと言っていまして……」

どこか言い訳がましく、そんなことを言った。すると、フローラはただでさえ悪い顔色をさらに青ざめさせて――、

「す、すみません、今はこの国の貴族の方を頼るわけにもいかなくて……」

と、後ろめたそうに言った。

「も、もちろんフローラ様が望むならという話なんで、そんな顔をしないでください！　親父には上手く言っておくんで、こんな家でよければいくらでも滞在してくださいよ。フローラ様なら大歓迎なので！」

ウィルはフローラを気負わせないよう、泡を食って訴えかける。

「……ありがとございます」

フローラはどこかホッとしたように、頭を下げた。すると――、

「ああ、そうそう。そういえばフローラ様が家に泊まった次の日から、村の野郎共がフローラ様に会いたがって仕方がないんですよ」

ウィルは気まずくなった空気を払拭しようと、明るく振る舞って思い出したように話題を振る。

「そうなのですか。では、私も元気になったら、皆様にお会いしたいです」

フローラは熱っぽい顔で、なんとか明るい笑みを浮かべた。

「はは、でも下品な野郎ばかりなんで、止めた方がいいかもしれません。特にドンナーって覚えてますか？　最初にフローラ様を家へ案内した不細工な野郎です」

「あ、えっと、この家に案内してくださった方のことなら。体格の大きな方ですよね？」

ウィルが軽い調子でドンナーを貶めるようなことを言うと、フローラはどこか困った様子で応じる。

「そう、そいつです。そいつなんかフローラ様の見舞いに行くって言いだして聞かないんですよ。普段は村の女が病気になってもそんなことを言わないような奴なのに。他の連中もそれに感化されて、悪乗りしちゃいまして」

「あの、風邪を移すわけにはいかないので、あまり長くお話をするわけにはいきませんが、それほど心配してくださっているのなら、少しだけなら……」

人がいいフローラは無理を押してそんなことを言った。

「え？　あー、まあ、そのお気持ちだけで大丈夫ですよ。お身体が悪いんですから、無理をしないで休んでください。連中には言っておくんで、喜ぶと思います」

まさか村の男達に見舞いに来てもいいと許可するとは思っていなかったのか、ウィルは苦笑して軽く流してしまう。

「……では、よろしくお伝えください。ご心配くださり、ありがとうございますと」

フローラは微かに逡巡したようだが、確かに自分の体調がかなりよくないことは自覚しているので大人しく頷いた。本当はこうしてウィルと話をしているだけでも辛いのだが、生来の気質で、自分のためを思って親切にしてくれている相手を無下にすることはできずにいたりする。

「わかりました。……あっ、そうそう。病人食を持ってきたんで、どうぞ食べてください。あまり美味くはないと思いますが」

「そんなことはありません。美味しいですよ。せっかくお母様が作ってくださったのですから」

本当は既に味覚もだいぶ麻痺しているが、フローラはゆっくりとかぶりを振った。

「……はは、フローラ様は本当にお優しいなあ。あっ、食事はここに置いておきますので」

ウィルはフローラに見惚れたように瞠目すると、気恥ずかしそうに食事が乗ったトレイをベッドの傍の机に置いた。

「はい、ありがとうございます。早速、頂ますね」

と、フローラは淑やかに頷く。そして、食事をとるため、汗ばんだ髪をそっと束ねた。片側で髪をまとめると、フローラのうなじが露わになる。

ウィルはそんなフローラの仕草をごくりと唾を飲んで見つめていたが――、

「……じゃ、じゃあ、俺はこれで。何かあったら……ん？」

ハッと我に返り、サッと視線を逸らそうとする。だが、名残惜しそうに視線を向けたフローラのうなじに痣のようなどす黒い跡があることに気づくと、スッと目を細めた。

「……あの、何か？」

フローラはじっと見つめられていることに気づくと、恐る恐るウィルに尋ねる。

「ああ、いえ。何でもないです！　何かあったら呼んでください。すぐに駆けつけますので！　それじゃあ」

ウィルはびくりと身体を震わせ、慌ててかぶりを振った。そのまま踵を返すと、退室際にフローラのうなじを凝視して――、

（……何の跡だ？　フローラ様は気づいていない、のか？　火傷か、古傷みたいなもんか）

ぱたんと、部屋の扉を閉めた。

◇　◇　◇

それから、ウィルが階段を下りて、一階の居間へ戻ると――、

「おい、ウィル。貴族様の様子はどうなんだ？」

ウィルの父である村長が待ち構えていて、質問をしてきた。

「ん？　ああ、まだ熱は下がっていないみたいだけど、特に変わら

ねえよ」

またかと、ウィルは半ばうんざりとした心境でおざなりに答える。

面倒事の種になりかねないと思っているのか、ウィルの父親はフローラが村に滞在することをあまり快く思っていない。それに、フローラが得体の知れない病気を患っているものだから移されることを恐れているのか、「お前の発言で長期滞在することになったのだから、お前が責任を取って世話をしろ」とフローラの看護を押し付けて、母や兄妹達にはなるべく接触させない徹底ぶりだ。

それでいて事あるごとにフローラの様子を尋ねてくる小心者な父親のことを、ウィルは煩わしく思っていた。

「……まだ熱が下がらないのか。何か妙な病気にでもかかっているんじゃないだろうな？」

と、ウィルの父親は疑わしそうに問いかける。

「知るかよ。だが、俺は熱を出してないぜ？」

「……そのようだな。まあいい。それで、ここの領主様を頼ってはどうかとちゃんと伝えたんだろうな？」

「伝えたけど、体調が回復するまで待ってほしいだとよ」

ウィルは眉をひそめ、ぶっきらぼうな口調で言う。すると――、

「それはおかしいだろう」

と、村長は語気を強めて断言した。

「何がだよ？」

「どうして同じ貴族様を頼るのを嫌がる？　何か隠しているんじゃ

ないだろうな？」
「はあ？　嫌がる、隠している？　何をだよ？」
ウィルは憤りを露わにして訊き返す。
「こんな村で療養するより、同じ貴族様を頼った方がいいに決まっている。お抱えの薬師もいるだろうしな」
「そりゃ……熱が下がらなきゃ、移動もままならないからだろ」
「とはいえ、こちらから貴族様の屋敷に出向いて、助けを求めることはできる。そうすれば薬師をよこしてくれるかもしれんぞ？　そこら辺のこともきちんと説明したのだろうな？」
「してねえよ。失礼になるから、貴族様に異を唱えるような真似だけはするなって親父が最初に言ったんだろ。そこら辺を深く追求するのは失礼じゃねえのかよ？　それに、そこまで気になるんなら、親父が自分で訊いたらどうだ、え？」
と、そんなウィルの挑発的な物言いに――、
「……ぐっ、訊けないから何か隠しているのではないかとお前に訊いているのだ。何かそういった節はないのか？」
村長は苛立たしそうに尋ね返した。
「さあな」
「おい、ちゃんと答えろ。何か問題が起きてからでは遅いのだぞ」
おざなりに答えたウィルに、村長はきつい口調で念を押す。すると――、
「……ちっ、貴族様だから、病気を移されるのが怖いから。親父は

少し気が小さすぎるんじゃないのか？　疑り深すぎだろ」

ウィルは侮蔑の念を隠さずに語った。

「お前が能天気すぎるのだ。鼻の下を伸ばしおって、この馬鹿者が」

「なんだと！？」

村長が負けじと言い返すと、ウィルも熱くなって息巻く。

「大きな声を出すな。落ち着け。貴族様に聞かれるだろうが」

村長は厳しい声色で戒めた。

「ぐっ……」

「いいか。俺には村長としての責任があるんだ。変な病気を移されて村に蔓延らせるわけにはいかないし、何か問題を起こして村に目をつけられるわけにもいかん」

「はん、村長の親父が病気になるわけにはいかねえってか？」

「そうだ。単純に我が身が可愛いからではない」

ウィルが見下すように訊くと、村長は即答する。

「ちっ、じゃあ問題って何だよ？　フローラ様はお優しいぜ。村人のちょっとした粗相くらいで目くじらを立てる子じゃねえよ。どんな問題が起きるってんだ？」

「例えばあの貴族様が突然に死んだらどうする？　誰が責任を取る？」

「うっ……」

村長が答えると、ウィルは思わず言葉に詰まった。

「それに、病気の件は一先ず置いておくとしても、他にもあの貴族様には不審な点がある。下手に追及すると失礼だから追及はしておらんがな。お前はそうは思わんのか？　まあ、思っていないのだろうな」

そう言って、村長は呆れたようにウィルを見つめる。

「……何がどう不審だってんだ？」

ウィルはムッとして訊き返す。

「他国の貴族様がこんな田舎の村で遭難していること自体がだ。仮にも貴族様が失踪すれば大問題になるはずだろう。それこそ捜索隊が編成されてもおかしくはない。だというのに、この村へ捜索隊が現れる様子はない。あの貴族様が村へ来てからもう五日目だぞ？　領主様に頼るのを先延ばししている節があるし、何か問題を抱えているのではないか？」

「それは……」

村長が己の腹の内を打ち明けると、ウィルはまたしても言葉に詰まってしまう。心ではそんなことはないと強く思ったが、理屈で言い返すことはできなかった。

「確かにあの貴族様はお優しいのだろう。学のない村人がちょっとした粗相を働いた程度で打ち首にするような方ではないと思っているさ。だがな、あの貴族様が何か問題を抱えていて、この村がそれに巻き込まれたらどうする？　厄介事の種はなるべく抱えておきたくないのだ」

「……じゃあ、どうするってんだよ？」

ウィルは苦々しい顔つきで質問する。

「どうしようもないから困っているのだ。表面上は優しそうとはいえ、痛いところを追及されれば流石に怒りを買うかもしれんからな。正直、領主様を頼るしかないと思っている」

村長は深くため息をついて答えた。すると――、

「おいおい、まさかフローラ様に無断で領主様を頼ろうってんじゃないだろうな？」

ウィルはハッと顔色を変える。

「……もちろんその時は俺から確認を入れるつもりだ。このまま熱が下がらないようならな」

村長は微妙に間をあけて、どこか含みのある物言いで告げた。

「な、なら数日。せめてあと数日くらいは待ってあげてくれよ」

と、ウィルが焦ったように懇願すると――、

「……なら、約束しろ。あの貴族様に惚れるなとは言わんが、間違っても下手なすけべ心を出して恋仲になろうなどとは考えないとな。深入りはするな」

村長はスッと目を細めて、警告するように語りかけた。

「は、はあ、突然、何を言ってんだよ！？」

ウィルは面食らい、思わず顔を赤くするが――、

「真面目な話だ。約束できるというのなら、あと数日は熱が下がるのを待ってやると言っている。それと、何かおかしな兆候があればすぐ俺に伝えること。どうなんだ？」

村長はいたって真面目な顔つきで問いかけた。

「う……、わ、わかったよ」

ウィルは気恥ずかしそうに頷く。

「約束したからな？　あと、この際だから浮足立っている他の若い男共にも同じことをよく言い聞かせておけ。お前達と貴族様とでは住む世界が違うのだとな」

と、村長は戒めるように語る。

「……ああ」

ウィルは住む世界が違うと断言されたことに眉を顰めながらも、しぶしぶと頷く。失念しているのか、連想するに至っていないのか、フローラの首筋にできていた痣に言及することはなかった。

第１５０話　ルシウス＝オルグィーユ

リオがパラディア王国の王都にたどり着いた翌日の夕方前。まだ太陽が空に昇っている頃のことだ。王都から見て西部に位置するとある村の広場に、村人達が集められていた。

村人達の顔色は優れない。その原因は彼らを囲む武装した十数名の男達にある。武装した男達はその大半が騎士服を着ており、剣呑な雰囲気を放っていた。

そんな中で――、

「なあ村長、本当にドレスを着た少女に心当たりはないんだな？」

嗜虐的な笑みを浮かべた壮年の男――ルシウスが、中年の男性に漆黒の剣を突きつけて尋ねる。ルシウスはお揃いの騎士服を着た他の男達とは異なり、独自の戦闘服を着ていた。騎士服のように上等な服ではあるが、その装備は軍人というよりどこか冒険者や傭兵に近い。

「は、はい！　知りませぬ。そもそもこの一週間の間に外部から村を訪れた者がおりませんので！」

村長と思しき男性は訴えるように、必死に答えた。

「嘘をつくと村のためにはならないぞ？」

ルシウスは人が悪い笑みを浮かべて、これ見よがしに周囲の村人達を見回す。すると、村長は顔色を真っ青にして――、

「う、嘘をつくなど、とんでもないです！　本当に知らないんです！　し、信じてください、何でもしますので、どうか穏便に！」

と、拝むように懇願した。

「……そうか。まあ、知らないのならしょうがない。冴えないおっさんをいじめても面白くはないしな」

ルシウスは小さく息をつくと、やれやれとかぶりを振って剣を引いた。

「おお、それでは……」

村長の顔に希望の光が灯るが――、

「今夜はこの村に滞在させてもらう。ああ、一応、村の捜索をさせてもらうぞ」

ルシウスがそう告げると、村長の顔は微妙に引きつった。心情的には一難去ってまた一難といったところか。だが――、

「は、はい。それで疑いが晴れるのなら、喜んで。お気のすむまでご探索ください」

村長はあくまでも事態を前向きに受け止め、捜索を受け入れる意思を表明した。

「……殿下、どうやらこの村も外れみたいです」

ルシウスは面倒くさそうに溜息をつくと、背後に控えていたパラ

ディア王国の第一王子デュランに語りかける。すると――、

「おい、ルシウス。本当にこんな田舎にいるのであろうな？」

デュランは眉を顰めて問いかけた。

「もちろん。私は殿下との悪巧みで嘘はつかない主義ですよ？　森の近隣で探索していない村がまだいくつかあります。明日には見つかることでしょう」

と、ルシウスは平時よりも慇懃な口調で答える。

「なら、よいがな……」

デュランは憮然と息をついた。

「……やれやれ、気の短い第一王子はご不満だ」

ルシウスは小さく肩をすくめ、ぼそりと呟くと――、

「というわけだ。見張りを何人か残して、お前達は村の中を捜索してこい。……それと、おい、村長。殿下がお泊りになる施設を用意しろ」

周囲に控えていた騎士達に捜索を命じ、村長に滞在用の施設を用意するよう指示を出した。

◇　◇　◇

その後、時刻は夕方。すっかり日が暮れてきて、空もだいぶ薄暗

くなってきている。そんな中、ルシウスは一人で村を抜けだしていた。村周辺に広がる農地を出て、街道外れの荒野に躍り出る。すると――、

「こんな時間にどこへ行こうというのですか？」

どこからともなく接近してきて、ルシウスに声をかける男――レイスが現れる。

「てめえの気配がしたから、来てやったんだろうが。ルビア王国に用があるんじゃなかったのか？　どうしてここにいやがる？」

持って回った会話が面倒くさいのか、ルシウスは単刀直入に用件を訊いた。

「いえね。実はルビア王国でシルヴィ王女と会った後から、ずっとつけられていまして」

レイスは嘆かわしそうに答える。すると――、

「……つけさせているの間違いだろう？」

ルシウスはニヤリと笑みを刻んだ。

「ええ、そうとも言います。ですが、相手が問題でして。下手をすると私一人の手には余りそうなので、万全を期して貴方のお力をお借りできないかと」

「お前の手に余る？　俺を探していたとかいう、例の野郎か？」

「いえ、別人です。おそらくは勇者の一人ではないかと。貴方、ちょうど勇者と戦いたがっていたでしょう？」

レイスはそう訊いて、フフッと微笑する。

「……勇者？　面白いな。だが、時間はとれねえぞ？　王子のお守り……案内役があるからな」

ルシウスは好戦的な顔つきを浮かべた。

「構いません。すぐに終わらせましょう。相手は私を視認できる範囲で、付かず離れずの距離を保っています。作戦は……」

レイスが思案顔を浮かべ、作戦を語ろうとすると――、

「その推定勇者はルビア王国の王女が雇ったのか？」

ルシウスが尋ねた。

「いえ、殊妹（ことと）のことに関して、シルヴィ王女はそこまで大胆でも間抜けでもないでしょう。とはいえ、無関係とも思えません。おそらくは王女の異変を察知して、その上での独断行動でしょう」

レイスはかぶりを振って答える。

「はっ、随分と向こう見ずで自信家な奴だな。そういう手合いなら、こちらから堂々と接近してみるか」

ルシウスは愉快そうに笑うと、そう提案した。すると、レイスはフッと口許をほころばせて――、

「仰せのままに」

と、恭しく頷いた。

◇　◇　◇

数カ月以上も前。菊地蓮司（きくちれんじ）は日本のとある都市に暮らしていた高校生だった。それがどういうわけか気がつけば異世界のルビア王国という国にある森の中にいて、本人も知らぬ間に勇者としての力を与えられていたのだが、間もなくして、自分がとんでもない肉体と魔力を手に入れたらしいことに気づく。

そして、異世界に召喚されてからほんの短い間、蓮司は森の近くにあった村で暮らすことになる。たまたま森の中で獣に襲われていた村の少女を助けてやったところ、その流れで必要な常識を身に着けるために村に住まわせてもらうことになったのだ。

だが、代わり映えのしない村での生活は蓮司にとって面白いものではなかった。加えて、蓮司の小柄な日本人の体形と髪の色はどうにもトラブルを巻き込みやすく、村の男達からちょっかいを出されることもしばしば。そういった手合いを例外なく黙らせて、平凡な日々を過ごしているうちに、蓮司は冒険者の存在を知る。

力を最も評価され、一獲千金の収入が入り、自由にその日暮らしを享受できる。それは蓮司の性に合っているように思えた。

だが、唯一の心残りは村で一緒に暮らしている少女のことである。少女は村人達から慕われており、村で一番の器量と評判だが、数年前に家族を病気で失い、以降は蓮司が現れるまで一人で暮らしていた孤独な子だった。蓮司はそんな彼女との暮らしだけは、退屈な村の中でも悪くないと心のどこかで思っていたのだ。

そうして、いつまで村にいるのか、冒険者を目指して村を出ていくべきなのか、蓮司は悩むことになる。村にトラブルが舞い込んできたのは、そんな時のことだった。

視察のため村へやってきた代官の目に、日本人である蓮司の姿が

止まる。居丈高に語りかけてきた代官に対し、蓮司はへりくだる姿勢も見せずに粗野な言葉遣いで応じた。
すると、案の定、代官は蓮司に嫌悪感を示し、謝罪と態度の改善と要求した。だが、蓮司は取り合うことはせず、歯に衣着せぬ物言いで生まれだけで威張っていると代官を侮辱する。
そうして蓮司と代官一行の間に剣呑な空気が漂ったところで、蓮司と一緒に暮らしていた少女が謝罪をするべく慌てて介入して――。

（俺としたことが、つまらないことを思いだしたな）

現在地はパラディア王国の西部、ルビア王国との国境に近いとある村からほど離れた丘陵地帯である。蓮司は遠くにたたずんで会話をしているレイスをぼんやりと見据えながら、ふと思い出した過去に小さく舌打ちをした。
今の蓮司は冒険者である。束縛を嫌い、力を振るって、収入を得て、自由にその日暮らしを謳歌する無頼。
勇者としての力を秘めた蓮司は瞬く間に冒険者として頭角を現し、ルビア王国内では良くも悪くも少し名の知れた冒険者となっていた。
今、蓮司がレイスを追っているのは、他ならぬシルヴィ＝ルビア第一王女の異変を察知したからだ。世間知らずで怖いもの知らずな蓮司の気質がシルヴィの肌に合ったのか、蓮司はとある依頼がきっかけでシルヴィとちょっとした親しい仲になっていたりする。
そんな蓮司は数日前、依頼で訪れていたとある都市でシルヴィと再会した。人の機微には疎い蓮司だが、その時のシルヴィの顔色はひどく悪く、焦っているように見えた。どうしたのかと尋ねても何もないと答えるだけ。
面倒事に首を突っ込むのは蓮司の性分ではない――と、少なくとも本人はそう思っている――が、蓮司は無性にシルヴィのことが気になり、彼女の動向をこっそり探ることにしてみた。そして、レイスと密会したシルヴィの悩みの一端を知ることになる。

気がつけば密会は終わっていて、蓮司はレイスの後を追いかけていた。驚くことにレイスは空を飛んでいたが、蓮司の肉体と身体能力も並ではない。幸運なことにレイスは小まめに休憩を取っていたので、尾行するのはさほど難しくはなかった。

（もう日も暮れて暗くなるが……何を話しているんだ？　話している相手の男も奴の仲間か？　だとしたら、もしかしてこの近くに……）

蓮司は神装の力により身体強化を施し、大幅に底上げされた視力で遠くにたたずむレイスと相手の男――ルシウスを睨む。

（あの二人の他には誰もいない。これは好機と考えるべきか？）

問答無用に奇襲をして制圧し、奴ら自身の身柄を逆に人質としてしまえばいいのではないか？――と、そんな考えが蓮司の頭をもたげる。すると――、

（っ！？　動きだした！）

レイスがルシウスと一緒におもむろに歩きだした。日常会話でも繰り広げるように談笑して、蓮司が潜む位置に近づいてきている。

（……こっちに向かっている。たまたまか？）

互いの距離は目算で数百メートルはある。

（大丈夫。気づかれていないはずだ。むしろ下手に動いて逃げれば気づかれる恐れがある。ならば、こちらから仕掛けて機先を制するべき、か？）

蓮司は無駄に驚いたり怖がったりすることはせず、右手に神装――槍斧（ハルバード）を呼びだした。そして、左手で懐から投擲用のダガーを取り出すと、左右の獲物をギュッと握り、いつでも戦えるように身構える。

すると、レイスとルシウスは数分ほどで蓮司のすぐ傍に近寄ってきた。既に辺りはだいぶ薄暗い。

（本命はシルヴィと話していた相手の男。なら、最初に狙うのはもう一人の男だ！）

岩陰にひっそりと隠れていた蓮司だったが、そう決めると、ルシウスめがけて左手で握ったダガーを勢いよく放った。狙うは胴体。当たり所が悪ければ致命傷になるだろうが、行動不能にするつもりで投げたのだから、最悪死んでも構わない。

ダガーは吸い込まれるように、ルシウスの胴体へと突き進み――、

「何っ！？」

次の瞬間、甲高い金属音が響き渡る。ルシウスが一瞬で抜いた黒い刀身の剣によって弾かれたのだ。蓮司は唖然と目を丸くする。

「ははは、会話すらせず、いきなり不意打ちか。思いきりは随分と良いようだ」

ルシウスは愉快そうに笑った。

「……お前達、何者だ？」

蓮司は平静を装い、質問を投げかける。

「おいおい、相手が誰かわからないのに攻撃したのか？　チビのくせに、だいぶ頭のぶっとんだガキだな」

ルシウスは目をみはり、嘲笑った。

次の瞬間、蓮司は眉をひそめ、懐から新たなダガーを取りだし、ルシウスめがけて放り投げる。だが、キンと甲高い金属音が鳴り響き、ダガーは弾かれてしまった。

「はっ、感情で行動する抑えのきかないガキかよ！」

ルシウスは冷ややかに笑うと、蓮司に向かって駆けだす。

「ふっ！」

蓮司は手にしたハルバードを構えると、応戦するべく振り払った。直後、甲高い金属音が響き渡る。

「ほう、身体強化は見事だな。流石は神装を手にした勇者といったところか」

「……っ！？」

ルシウスがハルバードに剣を押し付けながらニヤリと笑うと、蓮司が愕然と目を開く。

「図星か」

「……なんのことだ？」

「下手な演技は止めておけ」

白を切ろうとした蓮司だったが、ルシウスはつまらなさそうに告

げて――、

「俺は楽しく戦えればそれでいいんだ。お前の力を見せてみろ。せいぜい楽しませろよ？」

と、嘲笑して、バックステップを踏んだ。

「ふん、ならばお前に力の差というものを教えてやろう」

蓮司は不愉快そうに鼻を鳴らすと、ルシウスに接近しながら豪快にハルバードを振り回し始めた。蓮司の身長を上回る巨大な槍斧が、乱雑無数の軌道を描きルシウスへと襲いかかる。だが――、

「おうおう、教えてくれや」

ルシウスは鮮やかな足さばきで攻撃を躱していく。蓮司のハルバードは地面だけをガリガリと削りとっていた。すると――、

「ちっ！」

と、蓮司は舌打ちをして、ハルバードをさらに高速に回転させて振り回し始める。しかし、それでもルシウスは全ての攻撃を余裕をもって回避していた。

「はっ、宝の持ち腐れだな。体捌きも足運びも強化された身体能力任せ。使い手の技量は随分とお粗末らしい！」

ルシウスは蓮司の攻撃を掻い潜ると、剣を鋭く横に薙いだ。

蓮司は咄嗟に柄で受け止めると――、

「なんだと？」

後退しつつ眉をひそめる。ルシウスの言葉に強くプライドを刺激されたようだ。蓮司はこの世界に来てから一度も戦闘で負けたことはない。我流とはいえ自在にハルバードを振り回せるようになり、舞うような鋭いコンビネーションで数多くの敵を屠ってきたのだ。だが――、

「お前、我流だろ。確かにその膂力で振るわれるハルバードは脅威だが、動きに癖と無駄が多すぎるんだよ。もう慣れたわ」

ルシウスは見飽きたと言わんばかりに語って、蓮司に向かい突っ込んでいく。すると――、

「ほざくなよ、雑魚が！」

蓮司は息一つ乱さず、ハルバードを振るう速度を上げた。

「ほう、まだ上がるのか」

ルシウスは感心して目をみはる。

「今まで相手にした雑魚どもには加減をしていても十分だったんでな」

蓮司はそう言って、嘲笑を刻んだ。だが――、

「そうかそうか。だが、動きが雑なことに違いはないぞ？」

「何、っ！？」

ルシウスは蓮司のわずかな隙を突いて懐に潜り込み、すれ違いざまに足払いをかけた。すると、蓮司は派手にすっころぶ。

「おい、レイス！　勇者ってのはこんなもんなのか？」

ルシウスは拍子抜けした様子で、距離を保って観戦していたレイスに声をかけた。

「いえいえ。そんなことはないはずですよ。彼が持っている神装も何らかの力を操るはずですが、どうも温存しているみたいですねえ」

レイスは小さく肩をすくめて答える。

「あん？　おいおい、お前、この期に及んで温存とか。様子を見るのもいいが、実力差を感じ取ったら加減なんかするなよ。俺が殺す気だったらとっくに死んでいるぜ？」

ルシウスは小馬鹿にするように、ちょうど立ち上がった蓮司に語りかけた。

「……できれば生け捕りにとも思っていたんだが、もういい」

蓮司が真顔でぼそりと呟く。直後、彼を起点に魔力を帯びた強力な冷気が周囲に漂い始めた。

「ほう……」

「どうやら彼の神装は冷気を操るようですね」

などと、ルシウスとレイスは小さく目をみはる。その次の瞬間、蓮司は急激に加速して走りだした。その速度は先ほどまでよりもさ

らに速い。
蓮司は一瞬でルシウスに接近すると、物凄い勢いでハルバードを振り下ろした。
「少しはマシになったな」
ルシウスは剣を構え、真っ向から蓮司の斬撃を受け止める。
「黙れ」
蓮司は不愉快そうにそう言って、とんでもない膂力でルシウスを押し飛ばす。
「ははは！　まだまだこんなもんか、おい！？」
ルシウスは興が乗ってきたのか、愉快そうに蓮司を煽る。すると、蓮司はいっそう顔をしかめて、ルシウスに襲い掛かった。
小柄な蓮司が振るう巨大なハルバードには、少しでも受け方を間違えればルシウスの身体が吹き飛ぶほどの力が込められている。《身体能力強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）》しか使えない並みの騎士が相手ならば、身体能力の差で瞬く間に勝負がついていることだろう。
だが、ルシウスの剣にも古代魔道具級の身体強化魔術が込められているのか、蓮司の動きに対応し、攻撃を捌いている。
「はっ、スピードとパワーは認めてやるよ。その馬鹿みたいな魔力量もな、勇者君」
「……」
ルシウスが挑発するが、蓮司は黙ってハルバードを振り回し続けている。その視線は油断なくルシウスの剣を見つめていた。

「……ふん」

ルシウスはスッと目を細めると、冷ややかに鼻を鳴らして蓮司の攻撃を受け流し続ける。それでも蓮司はハルバードをとんでもない速度で振り回し、攻撃を加えていく。

すると、ややあって、蓮司はいったん攻撃を止めると――、

「そろそろか」

ぼそりと呟いた。

「あん？」

と、ルシウスが首を傾げると――、

「その剣をよく見てみるんだな」

蓮司は鷹揚に告げた。ルシウスが嘆息して剣を見下ろすと、刀身がいつのまにか凍りつき始めていて――、

「グローブをしていて剣を握る感覚の変化に気づかなかったのか？　これ以上、俺のコキュートスと打ち合えば、剣を握るその手が凍傷で使い物にならなくなるかもな。いや、その前にいつ刀身が折れてもおかしくないはずだ」

蓮司は勝ち誇ったように語りかけた。

「……コキュートス？　お前のハルバードの名前か？」

ルシウスは訝しそうに尋ねる。

「そうだ」

「はーん、なるほどな。そいつは高く売れそうだ」

「無理だな。これは俺以外の誰も使うことはできない。俺専用の武器だ」

蓮司はにべもなくかぶりを振った。

「そうか、そいつは残念だ。まあ、無駄話は終わりにして、さっさと再開といくか」

ルシウスはおざなりに残念がると、刀身が凍りつきだしている剣を握り直す。

「……話を理解できなかったのか？」

蓮司は目を丸くして問いかけた。

「あ？」

「お前に勝ち目はもうないと言っているんだ。投降して情報を吐け。もっとも、用があるのはそっちにいる男だがな」

そう言って、蓮司がレイスを見やると――、

「おいおい、そいつは気が早すぎるだろ。こっちはまだ戦えるぜ？」

何を言っているんだと、ルシウスは呆れたように蓮司を見据えた。

「……何？」

「まあ、やってみりゃわかる。くだらねえ解説でいちいち腰を折りやがって、興がさめる野郎だな。行くぞ」

ルシウスは嘆息すると、急加速して蓮司に襲いかかる。

「ちっ、実力差も見抜けないバトルマニアめが！」

蓮司はくるくるとハルバードを振るって、ルシウスの剣撃を受け止めた。

「はいはい。頭の固いお子様だなと！」

と、ルシウスは面倒くさそうに軽口を叩きながら、蓮司と武器をぶつけ合う。そうしている間に、ルシウスの剣はどんどん凍りついていって――、

「終わりだ」

蓮司はわずかに距離を取ると、今度は急加速して、ルシウスの剣を折るべく最速の一撃を放った。一閃。蓮司はすれ違いざまに目にも止まらぬ力の斬撃をルシウスの剣にぶつけようとする。

直後――、

「ふっ」

蓮司は勝ち誇ったような笑みをたたえて――、

（少し力を込めすぎたか？）

やれやれと、軽く脱力する。武器同士が接触する直前の光景は確

かに目撃した。だが、普段以上に力を解放して斬撃を放ったせいか、叩き切った感触がまったくしなかったのだ。
いや、叩き割るというよりは、文字通り切り裂いた。それほどに鋭い一撃だったのだろうと、蓮司が満足げに得心していると――、

「……？」

ドスリと、背中から腹部にかけて、何かが突き刺さったような感覚を覚えた。違和感を抱き、おもむろに腹部を見下ろすと――、

「……何、だと？」

自分の腹からルシウスの黒い剣が飛び出ているのが見えた。次の瞬間、背後から力強く剣が抜き放たれると、少し遅れて蓮司の服が血の色で染まっていく。
蓮司はハッとして背後を振り返った。すると、少し離れたところで、ルシウスが小馬鹿にしたような笑みを浮かべて立っていて――、

「馬鹿な？」

蓮司は愕然と目を見開いた。ルシウスの剣は折れるどころか、先ほどまでこびり付いていた氷までなくなっているのだ。

「ははは、少しはマシな面になった」

ルシウスが愉快そうに笑うと――、

「油断しないでください。勇者はその程度では戦闘不能になりませんよ。下手に覚醒されても面倒ですから、早く気絶させてください。おそらく傷も回復してしまうはずです」

レイスがすかさず注意を促す。
「わかっているよ」
ルシウスは頷くと、蓮司に急接近して――、
「がっ！？」
剣の柄頭で思いきり蓮司のあごを下から打ち払った。すると、蓮司の身体は軽々と浮かび上がり、少し遅れて地面に落下する。だが――、
「ぐっ……」
蓮司は意識を失わず、起き上がろうと地面を這いつくばった。
「呆れるほど丈夫な野郎だな。顎を砕くつもりでぶっ放したんだが、手足の一、二本、斬り飛ばしておくか？」
というルシウスの質問に――、
「いえ、運ぶのが面倒ですし、胴体にいくつか穴をあけておく程度で十分でしょう。失血過多になれば流石に気を失うかもしれません」
レイスはかぶりを振って、指示を出した。
「なるほどな」
ルシウスは何の躊躇もなく、蓮司の背中に剣を突きさす。突きさ

す。すると――、

「がっ！？　あっ、がっ、や、めろ！」

蓮司は血反吐を吐きながら訴えた。

「安心しろ。勇者ってのはそう簡単には死なないらしいからな」

ルシウスはそう言いながら、もう一度、蓮司の背中に剣を突きさす。そして、止めと言わんばかりに、力強く頭を踏みつけた。

「がっ、あ！」

蓮司はそのままがくりと力を失い、うつ伏せのまま倒れてしまう。

「お見事。ようやく気絶したようですね」

レイスはぱちぱちと虚しく拍手をして、ルシウスに歩み寄った。

「……はっ、お粗末な茶番だったな。素人に毛が生えた程度のガキが不相応な力を扱っていただけじゃねえか。これならお前一人でも十分にあしらえただろう？」

ルシウスは拍子抜けしているのか、若干不機嫌そうに問いかける。

「勇者を侮ってはいけませんよ。彼はまだ神装の力を使いこなせていないだけでしょうから。追い詰めすぎれば、覚醒や暴走をされた危険もありました」

「はっ、ならいっそのこと、覚醒なり暴走させた方が面白かったかもな」

レイスが淡々と説明すると、ルシウスが興味深そうにうそぶく。
「そうなっていたら本気で洒落になりませんよ。我々二人でも手に余っていたかもしれませんし、少なくとも貴方がいた村にまで被害が出ていたことでしょう」
「はーん、こんな小僧がなあ」
ルシウスは疑わしそうに、ボロボロになった蓮司を見下ろした。
「ま、何にせよ助かりました。後はこちらで処理しますので、貴方はどうぞお戻りください。第一王子を待たせているのでしょう？」
レイスはそう言いながら、蓮司を抱きかかえる。
「うっ……」
普通ならば既に死んでいるはずのダメージを負っているはずだが、気絶しているだけなのか、蓮司は小さく呻き声を漏らした。
「おうおう、輸送中に暴れられて噛みつかれないよう、気をつけてな」
ルシウスはひらひらと手を振って見送る。
「ええ、ご心配には及びません。それでは」
レイスはそう言い残すと、ふわりと跳躍して空へと飛び発った。

第１５１話　急転

ルシウスが蓮司と戦っていたその頃、フローラの容態は悪化の一途をたどっていた。

（……どうしよう）

と、慢性的な頭痛に蝕まれた脳で、フローラはぼんやりと考える。日増しに体調が悪くなっているのが、自分でもよくわかっていた。しかも、日を追うごとに体調が悪くなるペースが明らかに速まっている。焦燥せずにはいられなかった。

そんな中――、

「フローラ様、食事をお持ちしましたよ」

扉越しに村長の息子であるウィルの声が聞こえた。だが、ぼうっとしているせいか、フローラがすぐに気づくことはない。

「……フローラ様？　寝ています？」

すぐには返事がなかったため、ウィルが少し強めにノックして、改めて呼びかけると――、

「……っ、は、はい」

フローラはハッとして返事をした。すると、扉がガチャリと開く。

「あ、起きていたんですね」

ウィルは明るい顔つきで姿を現した。
「すみません。少しぼーっとしていました」
「やっぱりまだ熱が下がりませんか……」
フローラが申し訳なさそうに謝罪すると、ウィルも表情を曇らせる。昨日、父親と口論して、あと数日は様子を見るという話になったばかりだというのに、熱がいっこうに下がる気配がないというのはだいぶ好ましくない。
（……親父との話、フローラ様に伝えるべきか？　あと数日で体調が回復しないようなら、ここを治める貴族様を頼るって）
伝えればおそらくフローラは難色を示すだろう。それくらいの予想はウィルにもつく。だが、伝えなければフローラを騙すことにもなりかねない。
なので、どちらに転んでもフローラに納得してもらうことは難しいように思えた。どうするべきか、ウィルが逡巡していると――、
「……どうかしましたか？」
フローラがおずおずと尋ねる。少しでも体を動かすと身体が痛むのか、首を傾げるだけでもその動きはぎこちない。
「あ、ああ、いえ。……たくさん食べて、早く治してくださいね」
ウィルは本当のことを言いだすことができず、どこか後ろめたそうにかぶりを振った。しかし、食事が乗ったトレイを、ベッド脇の机に置こうとすると――、

（昨日、首筋にあった痣。……昨日より大きくなっていないか？
いや、痣なのか、これ？）

フローラの首筋に黒い痕を発見して硬直する。昨日は正面から見ただけでは髪に隠れて痕が見えなかったが、今日は髪で隠し切れないくらいに痕が首の前方にも広がっているのがわかった。

「……あ、あの」

ウィルにじっと首筋を見つめられ、フローラはどこか気恥ずかしそうに胸元を隠す。まさかドレスを着て眠るわけにもいかず、今は少しサイズが大きい借り物のシャツを着ているので、上から覗き込まれると胸元の隙間が危ういのだ。

「あ、いえ、その、違うんです！　そうじゃなくて！」

ウィルはフローラの仕草が意図する意味を理解すると、顔を赤くして身振り手振りで否定した。凝視していた箇所は首筋だが、フローラからすればそんなことはわからない。それにウィルとしても最後の方は胸元に視線が向いていなかったとも言い切れない。

「は、はい。わかっていますので」

フローラは胸元を隠して、首の痕は隠さないまま、頬を紅潮させて頷いた。その仕草は彼女が首の痕を自覚していないことを示唆するようにも思えて――、

（気づいていない、のか？　病気……なのか？）

と、ウィルはふとそんなことを思った。だが、今は気まずすぎて、これ以上ここにいることは憚られる。なので――、

「は、はは。とりあえず、食事はここに置いておきますので。それじゃ！」

ウィルはそう言い残して、逃げるように退室した。

扉が閉まると、ホッと安堵の息をつくフローラ。正直、気まずかったというのもあるが、昨日ほどウィルの相手をしていられる体力的な余裕がないのだ。その一方で――、

（……病気だったら、不味いかもしれない）

ウィルは部屋の外で、小難しい顔を浮かべていた。基本的には能天気なウィルだが、明らかに何らかの症状を示唆するあの痕を見た後では、流石に不安がよぎったようだ。感染型の病気なら、最悪、村中に蔓延する危険もある。

（……親父に報告するべきか？　どうする？　いや、しなきゃいけないんだよな。いけないんだけど……）

フローラの顔が脳裏によぎると、何故か悩んでしまう。そんなウィルが決断を下すのは、翌日のことである。

◇　◇　◇

そして、翌日の早朝。

村の農地にはこれから仕事を行おうと村人達が姿を見せており、その中にはウィルやドンナーを始めとする働き盛りの若い男達の姿もあった。

（……やっぱり親父に言うしかないか。フローラ様の調子だってずっと悪いままだし、貴族様に助けを求めるしかない、んだよな）

ウィルはフローラの容態で一晩中頭を悩ませ、ようやく考えをまとめていた。すると――、

「おい、ウィル。朝から随分と上の空じゃねえか。またフローラ様のことを考えているのか？　いつも自分だけ良い思いをしやがってよ」

同年代の男達がぞろぞろと集まってきて、ウィルに話しかける。

「お前ら、人の苦労も知らないで。……いや、あー、実はな。フローラ様の体調があまり良くなくてよ」

ウィルは呆れ顔を浮かべて溜息を吐きかけたが、悩み疲れて弱気になっているのか、男達に相談を持ちかけた。

「何！？」

男達は揃って顔色を変える。そして――、

「どういうことだ！？」

「そんな具合が悪かったのか？」

「詳しく教えろよ」

などと、ウィルに詰め寄った。特にドンナーなどは血相を変えてウィルに掴みかかって肩を揺らしている。

「お、落ち着け！　お前ら、ちゃんと説明するから！　特にドンナー、てめえは馬鹿力なんだから少しは加減しやがれ！」

ウィルが大声を出すと、男達の気勢が弱まった。そうして全員が落ち着いたタイミングで、ウィルは自分が抱えていた悩みを詳しく男達に説明する。男達は黙ってウィルの話に耳を傾けだした。

「それで悩んでいたんだ。親父に報告するかどうか。フローラ様はあまり領主様を頼りたくないみたいだからよ」

一通りの事情を説明し終えると、ウィルは小さく溜息をつく。すると――、

「あー、そもそもよ。どうしてフローラ様は領主様を頼りたくねえんだ？」

とある青年が不意に質問する。

「わかんねえ。藪蛇になりかねないから、あまり余計なことは詮索するなって親父に言われたんでな」

ウィルはまたしても嘆息してかぶりを振った。

「なるほどなぁ……」

男達は揃って思案顔を浮かべる。ややあって――、

「お貴族様の考えなんて俺らにはわからねえけどよ。もしかしたら悪い貴族に狙われているんじゃねえか？　うちの領主様がそうかはわかんねえけどよ」

他の青年がそんなことを言った。

「……あー、やっぱりお前もそう思うか？」

ウィルは苦笑いを浮かべて同意を求める。お約束といえばお約束だが、だからこそ彼らでも思いつく展開なのかもしれない。

「だったら領主様を頼らねえ方がいいんじゃねえか」

ドンナーがぼそりと呟く。

「いや、そうと決まったわけじゃねえだろ。フローラ様には今更だと訊きにくいし、それにこのまま村にいても回復しそうにねえし、流行り病だったら不味いし……」

と、ウィルは頭を掻きながら、領主を頼らざるをえないような事情ばかりを挙げる。

「ふん、要するにびびってんのか。てめえ一人で責任を取れなくなったから、急に態度を変えやがって」

「はあ？　びびってねえよ」

ドンナーが鼻で笑うと、ウィルは眉をひそめて言い返した。

「ならフローラ様に言えばいいじゃねえか。あと数日、体調が回復しないようなら領主様を頼るってよ。そのうえで何か困り事があるのか訊けばいい」

「妙な詮索はするなって話だろうが。それを訊けたら苦労はしねえよ。話がこじれたらどうする！？」

ウィルは半ば怒鳴るように反論する。だが、ドンナーも負けてはいない。

「だからびびっているって言ってんだ。今まで俺らを蚊帳の外に置いておいてよ」

ドンナーは歯に衣着せずに嫌みを言うと、留飲を下げたように嘲笑した。

「……てめえ、喧嘩売ってんのか？」

ウィルの顔はあからさまに怒りで引きつる。周囲の男達は二人の口論に何を思っているのか、黙って話に耳を傾けていた。

「ふん、最初に俺らを突き放したのはお前だろ」

「それはお前らが押しかけたら迷惑になるからだろうが」

「都合の良い時だけ自分を特別扱いすんなって言ってんだ」

ドンナーはそう言って、ジロリとウィルを睨む。

「てめえ……、フローラ様のことに関しちゃ妙に饒舌じゃねえか。じゃあ、お前ならフローラ様を守ってやれるのかよ？」

ウィルは相当頭に来たのか、勃然（ぼっぜん）と挑発するように問いかけた。

「ふん、臆病で行動に移せないお前よりはできる」

「てめえ！」

ドンナーが冷ややかに答えると、ウィルがドンナーに殴りかかろ

うとする。すると――、

「おい、止めろ、止めろ！」

流石に周りの男達がウィルを止めにかかった。

「放せよ、お前ら！」

ウィルは制止を振り切ると、ドンナーに接近したが――、

「ぐっ」

どんと、思いきり突き飛ばされてしまった。体格で圧倒的に勝るドンナーに真っ向から力勝負で挑んでも、ウィルに勝ち目はない。

「ふん、口先だけで非力なお前が俺に勝てるわけがないだろ。フローラ様を守ることだってできねえ。そもそも最初にフローラ様を案内したのも俺だ」

ドンナーはそう言って、勝ち誇ったようにウィルを見下ろした。

「っ、じゃあ、お前がやってみろや！　どうせお前も何もできやしねえんだ！　今のフローラ様の状態を知らないからそんなことが言えるだけなんだからな！　領主様を頼る以外にもう方法はねえんだよ！」

たとえそれがフローラの意向に副(そ)わないとしても――と、ウィルは殺気立った眼差しでドンナーを睨みつけ、感情に任せて喚き散らす。

「……ふん」

ドンナーはムッと顔をしかめ、ウィルを睨み返した。その顔つきは剣呑で、何を考えているのかは窺えしれないが、ウィルのことを好ましく思っていないことは確かだ。そうして、しばらくすると、ドンナーは不意に踵を返して、歩きだした。

「あ、おい。どこに行くんだよ、ドンナー！」

村の男が咄嗟に問いかけると――、

「……もう仕事が始まるぞ」

ドンナーはわずかに後ろを見返し、ぼそりと答え、そのまま立ち去ってしまう。ウィルを含めた他の男達は、そんなドンナーの背中をきまりが悪そうに見つめていた。

◇　◇　◇

それから、ドンナーはウィル達を背にして、あたかも仕事に向かったかのように装うと、農地から村の中心部へ向かって真っすぐと歩き始める。

途中、村人の壮年男性とすれ違うと――、

「あれ、ドンナーじゃないか。どうしたんだ？」

と、声をかけられた。ドンナーの家は村の中心部にはなく、村の外れに位置している。これから仕事が始まるというのに、村の中心部に向かう理由が思い当たらなかったのだろう。

「……ちょっと農具の調子が悪いんだ」

ドンナーはどこか後ろめたそうに視線を逸らし、手にしていた鍬(くわ)を掲げた。

「はーん。そうか。早く戻れよ」

壮年の男性は特に気にした様子もなく呼びかける。微妙に言葉足らずだし、愛想も感じられなかったが、ドンナーは村人からそういう人物だと認識されているので、特に不思議には思わなかったようだ。

「ああ……」

ドンナーは小さく息をついて頷くと、そのまま移動を再開する。

すると――、

「そうだ、ドンナー！」

壮年の男性がふと思い出したようにドンナーを呼び止めた。

「……なんだ？」

ドンナーがビクリと身体を震わせて振り返ると――、

「若い女達が怖がるから、気をつけろよ」

壮年の男性はおかしそうに笑って語った。

「……」

ドンナーは顔をしかめて舌打ちすると、そのまま黙って歩きだす。壮年の男性は笑いながら農地へと歩きだした。

（どいつもこいつも馬鹿にしやがって）

と、ドンナーは腹立たしそうに、力強く地面を踏んで歩を進める。村の中では誰もがドンナーのことを見下している。女達は不気味がって近寄らないくせに、裏では陰口をたたいている。そんな被害妄想がとめどなく溢れ出てきて止まらない。だが――、

（見てろ。俺だって……。俺が助ける。もうウィルの野郎には任せてられねえ。やってやるよ、ウィル）

見返してやる。いや、見返してやりたい。ウィルばかり特別なのは許せない。ただの調子がいい軽い男だというのに、村長の息子というだけで、村の女達からもちやほやされている。後からしゃしゃり出てきたくせに、自分だけフローラと親しくなっている。最初にフローラに話しかけられたのは自分なのに――。

と、そんなことをあれこれ考えている間に、ドンナーは村長宅にたどり着いた。すわった目つきで村長宅を見据えると――、

（今は朝の見回りに行っているはずだ。不審に思われる前に、俺も早く戻らねえと）

こっそりと、村長宅に近づいた。村長自身にも、その家族にも、それぞれ村の仕事が割り振られている。役職がら村長だけは日中でも自宅に滞在していることもあるが、外で仕事をしている時間も多い。特に午前中は外出することが多いと、ドンナーは知っていた。

とはいえ、今はフローラが滞在しているから、一人は常に留守番

を残しているかもしれないと、玄関の戸をそっと開けて家の中の様子を窺う。

（よし、居間に人はいねえな。入るか）

居間に人がいないことを確認すると、ドンナーは素早く家の中に入った。家の中はしんと静まり返っている。

（確か二階に客室があったはずだ）

村長宅には何度も訪れたことがあるので、家の構造は把握している。ドンナーは勝手知ったる足取りで二階へ上がった。

そして、いくつかある客室の中で、唯一、扉が閉じられていた部屋の前に立つと、トントンと、扉をノックする。声を聞き漏らさないよう、耳を研ぎ澄ませると――、

「……はい。村長様、ですか？」

ややあって、少し苦しそうな少女の声が聞こえてきた。フローラだ。

ドンナーはガチャリと扉を開ける。すると――、

「……え？」

フローラは熱っぽい顔つきで、ビクリと身体を震わせた。

（おお……）

ドンナーは感極まって息を呑む。村の女達とは違う目で自分を見てくれた、可愛らしいフローラのことがずっと忘れられなかった。

その彼女が今目の前にいるのだ。最初に会った時よりも少しやつれてみえたが、そんなことは気にならないくらい美しかった。村の女達とは全然違う。

「えっと、貴方は確か……ドンナーさん、ですか？」

フローラはドンナーのことを覚えていたのか、恐る恐るその名を呼ぶ。

「お、俺のことを覚えているんですか？」

ドンナーは嬉しさのあまり、グイっと前のめりになる。

「……は、はい。最初に案内してくださった方、ですよね？　何のご用でしょうか？」

そう尋ねるフローラの顔色は優れない。本当は今すぐにでも横になりたいぐらいに具合が悪かった。だが、まがりなりにも王女である彼女の育ちがなんとか踏み留まらせている。

「み、見舞いに来ました」

ドンナーは上ずった声で答えた。

「お見舞い……そうなのですね。ありがとうございます」

フローラはどこか嬉しそうに礼を言う。だが――、

「あ、いや、その、あと、実は話が」

ドンナーは見舞い以外にも用件があると打ち明ける。

「お話、ですか？　……なんでしょう？」

フローラは悩ましそうに尋ねた。頭がぼーっとしてあまり会話をする余裕はないのだが、人がいいせいか邪険にはできない。

「……フローラ様、このままだと領主様のところへ連れていかれます」

「え？」

ドンナーが意を決して話を切りだすと、フローラは面食らって硬直する。

「村長とウィルがそういう話をしているんです。でも、フローラ様はあまり領主様を頼りたくなさそうだから、何か事情があるんじゃないかって疑っていて」

「う……。そ、そういうわけでは、ないのですが……。その、疑っていらっしゃるのですか？」

フローラは顔色を悪くして、言葉に詰まると、おずおずと質問した。ただでさえ生来の人の良さもあって嘘をつくことに抵抗感があるというのに、今は病気で頭も回らない。口から出まかせで言い訳を口にすることはできなかった。

「……詳しいことは知らねえですが、普通なら領主様を頼るはずだって。村長は早ければ明日にでも領主様のところに使いを出すみたいです。そうなったら領主様が来るかもしれません。……どうします？」

ドンナーはそう言って、じっとフローラの顔色を窺う。

「ど、どうしましょう、か。体調が良くなれば、すぐにでも出ていくのですが……」

フローラは明らかに狼狽していた。すると――、

「で、出ていくって、どこへ行くんです！？」

ドンナーが泡を食って質問する。

「え？　あの、祖国へです。周囲や家臣に迷惑をかけているでしょうから……」

フローラは鼻息の荒いドンナーに目を丸くして答えた。

「そ、祖国……。で、でも具合が悪くて、今は旅なんてできないんですよね？」

「……はい」

「で、領主様のところにも行きたくない？」

ドンナーはフローラが聞かれたくないであろうことをぐいぐいと尋ねる。とはいえ、支援国の敵国に所属する貴族に身柄を押さえられるリスクが迫っていると知ってしまった現状では、フローラとしても村長たちの動向に探りを入れておきたい。

「はい……。その、行きたくないというか、政治的な理由で、もしかしたらだいぶ迷惑をかけてしまうかもしれないので」

フローラは弱々しく首肯した。すると――、

「だ、だったら、病気が良くなるまで俺の家に匿いましょうか？見つかったら不味いんで、物置になるかもしれないですけど」

ドンナーがそんな提案をする。

「え？　いや、あの、でも……」

フローラは突然の提案に呆気に取られ、目をみはる。いったい何が狙いのなのか、どうしてドンナーがそんな提案をするのか、想像がつかなかった。

「どうです？」

ドンナーは妙案だろうと言わんばかりに回答を迫る。

「ですが、ドンナーさんにご迷惑をおかけしてしまうので……」

フローラは悩ましそうにかぶりを振った。果たして上手くいくのか、上手くいっても迷惑をかけるのではないか、そんな懸念を抱いたのだ。だが――、

「迷惑じゃねえです！」

と、ドンナーは力強く訴えた。

「あ、あの、家の方が来てしまいますよ？」

「あっ、いや、今は誰もいないはずですから。ですが、早くしないと村長が帰ってきちまいます。そうなったらもう抜け出すチャンスはないかもしれないですよ？　なんで、行くなら早いうちに」

「……駄目です。私は病気で動けませんから」

フローラは申し訳なさそうにかぶりを振る。

「い、いいんですか？　領主様のところへ連れていかれても？」

ドンナーは歯がゆそうに問いかけた。

「……はい。やむを得ません」

フローラは静かに頷く。すると、ドンナーは焦燥した面持ちを浮かべて――、

「痛っ……？」

フローラに迫り、袖の上から腕を掴んだ。フローラは痛みで顔を歪ませ、ドンナーの突然の行動に疑問の眼差しを向ける。

「……」

ドンナーは思いつめた顔でフローラを見下ろしていた。すると――、

「あ、あの……放してください。痛いですから」

フローラはどこか怯えを孕んだ眼差しでドンナーに呼びかける。

「あっ、いや、その……行きましょう！」

ドンナーは慌てて手を放すが、なおもフローラに行こうと語りか

けた。だが――、

「……ごめんなさい。行けません」

フローラは申し訳なさそうに、どこか突き放すように、ゆっくりとかぶりを振る。

「そんな……」

ドンナーはまるでこの世の終わりのような顔になり、しばしその場に立ち尽くした。

「……情報を教えてくれたことには感謝しています。ですが、どうかもうお帰りください」

と、フローラは気まずそうにドンナーに語りかける。

「っ……でも、俺は！」

ドンナーはびくりと身体を震わせると、とっさに食い下がろうとした。しかし――、

「……ごめんなさい。気分が優れないんです。本当にお帰りいただけないでしょうか？」

フローラは辛そうに顔を歪め、ドンナーに語りかける。

ドンナーは小さく身体を震わせていたが、フローラの意思が固いと感じ取ったのか、駆け出すように踵を返して、そのまま部屋から出ていってしまった。部屋の中に再び静寂が戻る。

「……ごめんなさい、ドンナーさん。でも、ありがとうございました。どうして貴方がこのことを私に教えてくれたのかはわからないけれど……」

フローラはいなくなったドンナーに対し、申し訳なさそうに謝罪と感謝の言葉を告げた。ややあって――、

「痛っ……」

布団をめくり、ベッドから降りようと試みる。だが、ひどい筋肉痛や関節痛に似た痛みが身体に走り、辛そうに顔を歪めた。

（何とか、何とかしないと……。何か方法は……）

フローラは平時の半分も回転していない思考回路で、どうするべきかを考えていた。

◇　◇　◇

そして、小一時間も経過した頃。

村の農地ではウィルやドンナー達が黙々と農作業に取り組んでいた。

終始不機嫌そうなウィルに対し、ドンナーはすっかり気が抜けた様子で、漫然と肉体を動かしている。他の男達は二人の間に漂う何とも微妙な温度差と空気を感じ取り、窺うような視線を向けていた。すると――、

「あん、村長じゃねえか。随分と慌てているみたいだが……」

とある青年が血相を変えて近づいていてくる村長を発見する。

「おい、ウィル！」

村長は息を切らして駆けつけるなり、ウィルの名を呼んだ。

「何だよ、親父。そんなに焦って」

ウィルは怪訝な面持ちで問いかける。すると――、

「……フローラ様がいなくなった。お前、どこにいるか知っているか？」

村長はすっかり青ざめた顔で、そんなことを言った。

第１５２話　窮地の来客

村長がフローラの失踪に気づいて騒ぎだす少し前。
フローラは誰に気づかれることもなく村を抜け出し、一人で街道を歩いていた。その足取りは非常に遅く、おぼつかない。
元より体調は最悪だったが、久々に立ち上がって動きだしたせいなのか、具合は一気に悪化し始めていた。

「っ……う……」

身体中が痛くて、熱い。一歩進むごとに声にならない呻きが漏れて、そのまま倒れそうになる。村を出た辺りから、意識もはっきりとしない。
だが、フローラはそれでも歩みを止めなかった。敵国の人質になるわけにはいかないから。なれば国に多大な迷惑をかけることになるから。
人質になるくらいなら、人知れず死んだ方がいい……のだろう。でも、死にたくはない。死ぬのは怖い。ベルトラム王国へ戻りたい。戻らなければならない。
そうして、ぐるぐると色んな考えや感情が頭の中で循環し、フローラの身体を突き動かしている。
とはいえ、気力よりも先に肉体と体力が限界を迎えることになる。身体が動かない。いや、動いているのだろうか。それすらもわからない状態になると――、

「う……」

フローラは足の力が抜けて、街道上でドサリと倒れてしまった。

（……あ、れ？）

平衡感覚が麻痺しているからか、思考が鈍っているからか、視界が変わり、頬に地べたの固い感触を覚えると、自分が転んだことにようやく気づいた。

（起き、ないと……。お姉、様に会いたい）

フローラは立ち上がろうと考えたが、立ち上がることはできなかった。姉のクリスティーナに会いたいが、凄まじい倦怠感で意識が霞んでいく。

どうすればいいのか、もう何もわからなくなってしまった。

◇　◇　◇

その頃、リオはルシウスの足取りを追ってパラディア王国の王都を出発し、王国の西部――、フローラが滞在している村の近くまで迫っていた。

（早ければ今日にでも遭遇できるかもしれない）

リオは確実にルシウスに近づいていることを確信していた。王城での調査により入手した情報により、ルシウスは第一王子のデュラン＝パラディアと騎士の一個分隊を引きつれて、五日前に西部のとある森へ狩りに向かったとの情報を入手している。

その移動手段は馬。具体的な狩場は明らかにしないまま出発したようだが、パラディア王国の面積は狭い。向かった方角と一日の移動距離さえわかっていれば、聞き込み調査で行き先を特定して追いつくことも可能だろうと考え、追跡を開始した。

街道沿いに空を飛び、移動先に該当しそうな都市や村で地道な聞き込み調査を行い、手当たり次第に候補を潰していく。既に昨日までの調査で移動ルートをかなり詳細に絞り、それらしい一団の足取りを掴んでいた。

ゆえに、おそらくはもう目と鼻の先までルシウスの背後に接近している。リオはそう考えて小さく深呼吸をすると、今新たに訪れた村の住民へと歩み寄る。

田畑で作業をしていた住民の男は、腰に帯剣しているリオの存在に気づくと、窺うような視線を向けるが――、

「少しよろしいでしょうか？　ここ数日の間、この村に騎士の一団がいらっしゃいませんでしたか？」

リオは臆することなく、慣れた口調で問いかける。

「……いや、えっと、どちら様で？」

住民の男はやや警戒した様子で、リオの素性を尋ねた。

「私は城に仕える者でして。彼らの足取りを追っているのです」

と、リオは人当たりの良い笑顔を浮かべて、偽りの自己紹介をする。その効果は抜群だ。

「あ、ああ、なるほど。お城の方でしたか。確かにいらっしゃいましたよ。ドレスを着た少女を捜しているとかで、この村の近くにある森の周辺の村々を一つずつ調べているみたいです」

住民の男はリオに訊かれるまでもなく、ぺらぺらと事情を語りだした。城の人間に失礼があってはいけないと考えてのことだろう。

「……なるほど。そうでしたか。ご協力、感謝します」

リオは一瞬、目を見開くと、人当たりの良い笑みを浮かべ直して礼を言った。

（ドレスを着た少女？　狩りに向かったんじゃないのか？）

そんな疑問を抱いたが、目の前にいる村人に訊いたところで答えが出る質問ではない。あまりあれこれ尋ねれば却って不審がられる恐れもある。

「どうやら無事に追いつけそうです。急いでおりますので、これで」

リオは軽く頭を下げると、踵を返して村の外へと歩きだした。そのまま人気がない場所まで移動すると、空へと飛び発つ。

（この森の周りにある村か）

上空から俯瞰すると、結構広いことが窺える。森を囲うようにいくつもの村が点在しているようだ。とはいえ、空を飛んで調べていけば、小一時間もかからず一周できるだろう。

リオは早速、次の村に向けて飛び発った。

◇　◇　◇

そして、時は少しだけ進み――。

「捜せ、捜せ！」

村人達は総出で村中を駆け回り、失踪したフローラを捜していた。村の広場で村長がそわそわと村人達の報告を待っている。だが――、

「……駄目だ。やっぱり村の中にも農地にもいねえよ、親父」

と、ウィルや村に散っていた他の男達が息を切らして、報告に戻ってきた。

「となると、やはり外に出てしまったか……」

村長はそう呟いて、歯がゆそうに思案顔を覗かせる。

「どうしてそう思うんだ？　本当にフローラ様が自分から外に出て行ったのか？　相当具合が悪かったんだぞ？」

ウィルは切羽詰まった面持ちで尋ねた。

「……実は、書置きがあった。お世話になりました。ありがとうございます、とな」

村長はややバツが悪そうに顔を曇らせ、事実を口にする。本当は書置きと一緒にフローラが身に着けていたドレスと宝石類の一部が謝礼代わりに置いてあったのだが、その事実を口にすることはしなかった。

「何だと！？　じゃあ、本当に出ていっちまったのかよ！？　どうしてちゃんと見ていなかったんだ！？」

ウィルは訊きながら、村長に掴みかかる。

「そ、その可能性が高いというだけだ。外出できるような体調でなかったのだから、まさか外に出て行くとは思うまい。それに、肝心なのはどうして出ていったのかだ。無理を押して出ていったからには、何か理由があるはずだ。その心当たりはないのか？」

村長は上ずった声で弁明し、問い返す。

「そんなの知らねえよ！　フローラ様が村から出て行ったっていうんなら、俺は街道を捜してくるぜ！」

ウィルはそう言って、早速行動を開始しようとするが――、

「落ち着け！　街道は村から南北と西に延びているんだぞ。どっちへ進んだかも確証はない。お前一人で捜す気か？　どうして出ていったのかもわからんのに」

村長が慌ててウィルを呼び止める。

「それでも捜すしかねえだろうが！」

「少しは考えてから行動しろと言っているのだ！　まだそう遠くへは行っていないはずだ」

などと、親子喧嘩を始めるウィルと村長。すると――、

「なあ、誰かが連れ出したという可能性はないのか？」

とある村人の男が言った。

「……それは村人の誰かが、ということか？」

「まあ、そういうことになる」

村長が水を向けると、意見を述べた男はぎこちなく頷く。あまり村人を疑いたくはないのだろう。

「……可能性は否定できんが、フローラ様の書置きがあったと言っただろう。そもそもどうして村人がフローラ様を村の外へ連れ出す必要がある？　誰かいなくなった者でもいるのか？」

「あー、そういう話は聞かないな」

意見を述べた男はかぶりを振って、頭を掻く。

「……とはいえ、何か手がかりを見逃している可能性もある。思い付きでも構わん。何か心当たりがある者がいれば、報告するように。フローラ様がいなくなったのはおそらく仕事が始まる前後の時間帯だ」

村長はそう言って、周囲に集まっている村人達を見回す。すると――、

「仕事が始まる前後の時間……。あっ、そういえば……！」

とある壮年男性が、ふと思い出したように口を開いた。

「なんだ？」

と、村長が壮年男性に水を向けると――、

「……ああ、いや、仕事が始まってみんなが農地へ出張っちまったくらいの時間帯に、ドンナーが農地から村へ戻っていったなと思って。何か異変はなかったのか？」

壮年男性はそう語って、近くで黙ってたたずんでいたドンナーを見やった。すると、ドンナーはビクリと身体を震わせる。また――、

「……ドンナーが？」

ウィルを始めとする若い男達が、訝しそうにドンナーを見やり始めた。

ドンナーは後ろめたそうに視線を泳がせると――、

「い、いや。俺は何も知らねえ。すぐに農地へ戻ったからな」

上ずった声でかぶりを振る。だが――、

「……おい、ドンナー。てめえ仕事に行くとか言って俺らと別れなかったか？　それに、今朝は随分と息巻いていたくせに、今は随分と静かじゃねえか」

ウィルが疑わしそうに、ドンナーに語りかけた。

「べ、別に、そんなことはねえ。ちょっと農具の具合が悪かったから、替えに戻っただけだ」

ドンナーはどぎまぎと答えて、そっぽを向いてしまう。

「……お前、まさかあのことをフローラ様に言ってねえだろうな？　それでフローラ様が……」

「知らねえ！　俺は何も知らねえぞ！」

ウィルが訝しそうに問い詰めると、ドンナーは焦り顔でかぶりを

振る。すると――、

「……どういうことだ、ウィル？」

傍からやりとりを眺めていた村長が、事情の説明を求めた。だが――、

「……ちっ、何でもねえよ。やっぱりこれ以上、呑気に話をしていても埒が明かねえ。フローラ様が街道へ行ったっていうんなら、俺はそっちを捜してくるぜ。親父が反対しようとな」

ウィルはバツが悪そうに言って、今度こそ踵を返そうとする。

「……別に捜索に反対しているわけではない。村の周りで死なれても困るからな。やむを得ん。手分けをして村から続く街道を調べるぞ。俺も行く」

村長は溜息をついてウィルを呼び止めると、自らも捜索に加わる意思を表明した。

◇　◇　◇

その後、村人達は総出で、村から伸びる街道の捜索を開始した。村長、ウィル、ドンナーを含めた面々は南へ伸びる街道を進み、フローラの姿を捜す。そうして、村を出てからしばらくすると――、

「……おい！　あそこに人が倒れていないか！？　あ、おい、ドンナー！」

ウィルが人影らしき存在を発見して声を挙げると同時に、ドンナ

ーが勢いよく駆け出した。ウィルも慌ててその後を追いかける。

「フローラ様！」

そこに倒れていたのは、やはりフローラだった。村人が着るような粗末な服の上から、外套代わりに上掛けの薄い布団を羽織って蹲っている。

「はぁ、はぁ……」

フローラの顔は赤く、額にはびっしょりと汗が滴（したた）っている。その吐息も荒い。おそらくは上掛けの下に来ている服も汗でびっしょりと濡れているのだろう。

「フローラ様、大丈夫ですか！？　病気で動けないって、言ったじゃないですか！？」

まずはドンナーが駆けつけ、フローラに声をかける。すると――、

「っ、やっぱりテメエが……。どけ、ドンナー！　フローラ様、意識はありますか！？　俺です、ウィルです！」

ウィルが割り込み、ドンナーを突き飛ばした。うつ伏せの状態から仰向けにしてやり、フローラに声をかける。

「あ、う……」

フローラはわずかに反応してみせた。だいぶ朦朧としているようだが、かろうじて意識はあるらしい。そこへ、さらに村長と他の村人達が遅れてやってきた。

「これは……」

村長は倒れたフローラを見下ろすと、あまりの状態の悪さに息を呑む。

「おい、親父！　フローラ様、まだ意識があるみたいだ。村へ運ぶぞ」

ウィルは泡を食って村長に提案した。だが――、

「……」

村長は黙って何も応えない。スッと目を細め、じっとフローラの首筋を凝視している。

「おい、親父！　ちっ、おい、フローラ様を運ぶぞ、お前ら！」

ウィルは舌打ちをすると、周囲で息を呑んでいた男達に呼びかけた。男達はハッと我に返り、フローラに近づこうとする。すると――、

「待て、病気が移るかもしれん！」

村長が男達を呼び止めた。

「……そ、そんなことを言っている場合かよ！？」

ウィルは思わずカッと顔色を変えて怒鳴るが――、

「……その首筋の痣のような痕は何だ？　そんな目立つ痕、最初に村へ来た時にあったか？」

村長は低く冷たい声で、フローラの首筋をスッと指差した。そこにはどす黒い痣のような痕がある。

「うっ……」

村人達はフローラの首筋にある痣に気づくと、顔を引きつらせて硬直した。

「こ、これは……！」

ウィルは思わず言葉に詰まる。

「ウィル。お前、知っていて黙っていたな？」

「違う！　今日にでも伝えようと思ったんだ！　最初は古傷かと思ったけど、痣の痕が大きくなっているから、おかしいなと思って！」

村長が責めるような視線を向けると、ウィルは泡を食って弁明した。

「高熱に全身の関節や筋肉の痛み。これだけならただの風邪とも言えるが、黒い痣があるとなれば話は別だ。思いつく症例にいくつか心当たりがある」

そう言って、村長が思案顔を浮かべると――、

「し、知っているのか！？　フローラ様がかかっている病気のこと！？」

ウィルが救いを求めるように訊いた。

「……そのうちの一つに、不治の流行り病として大量の死者を出したものがあると聞いたことがある。俺も行商人から伝え聞いたことがあるだけだから、詳しいことは知らんがな」

「なっ……」

村長が微妙に間を置いて答えると、ウィルと村人達は顔を引きつらせて言葉を失う。

（森の中に類似の症例を引き起こす毒蜘蛛がいたはずだが、あの蜘蛛は夜行性だ。村にまで姿を現すことはまずないが……、仮に毒蜘蛛の仕業だとしても、解毒剤もない。他の知らない病気の可能性もある。どっちにしろ、これではもう助かるまい。うちの村で貴族を死なせるわけにはいかんし、感染症にかかった疑いがある人間をまた村へ持ち帰るわけにもいかん）

と、村長は村の立場を第一に考えると――、

「……帰るぞ」

周囲に村人に、村への帰還を促した。

「なっ、フ、フローラ様はどうするんだよ！？」

「……村に致死性の感染症にかかった疑いのある人間を連れていくわけにはいくまい。ここへ置いていけ……、と言いたいところだが、村の近くの街道に放置するわけにもいかんか。森の入り口まで運ぶぞ」

動転するウィルに、村長は冷徹に判断を下す。

「お、おい！」

ウィルは気がつけば村長に掴みかかっていた。だが――、

「ウィル！　理解しろ！　これが村のためなのだ。お前はこの貴族様のために、最悪、うちの村人が死んでも構わないというのか？」

「っ……」

村長に強く一喝されると、ウィルは押し黙ってしまう。

「……お前達、早く済ませるぞ。ドンナー、お前が一番力があるのだ。運べ」

と、村長は近くで呆然と佇んでいたドンナーに水を向けるが――、

「お、俺、嫌だ。運びたくない」

ドンナーは臆したようにかぶりを振った。

「ちっ、独活（うど）の大木が。ならお前達が運べ」

村長は面倒くさそうに舌打ちすると、他の男達に命令する。

村の男達はおっかなびっくりとフローラを抱きかかえると、病気を恐れているのか、汚いものを扱うように、街道の外れにある森の入り口まで運んだ。

「……可哀想に。こんなにめんこい女の子が……」

とある村人の青年が、苦しむフローラの顔を見て、ごくりと唾を飲むが――、

「止めろ、止めろ。病気にかかってんだ。ここでいいだろ。早く済ませちまおうぜ」

他の青年が怯えた様子で処理を促した。ややあって、男達はフローラの身体を乱雑に森の入り口に向けて放り投げる。

「うっ……」

フローラの小さな悲鳴が口から漏れたが、早く立ち去りたがっていた村人達の耳に届くことはなかった。

（誰か、たす、けて……）

◇　◇　◇

それから、村人達はすぐに村へと向かう。道中、村長がフローラのことは忘れろ、最初からあんな貴族は村に来ていなかったことにすると、念を押して注意を行う。村人達の顔色は終始、後ろ暗そうだった。

そうして、村人達が村の農地にまで戻ってくると、とある村人と一緒に、パラディア王国の騎士服を着て、馬に乗った第一王子デュランの一行が待ち構えていて――、

「あ、あの男が村長です！」

騎士達と一緒にいた村人が、怯えた様子で村長を指差した。すると、騎士達の中から壮年の男性、ルシウスが抜け出してきて――、

「ようよう、あんたが村長か。村が騒がしいところに押しかけてすまんな。先に出会った村人に色々と尋ねたんだが、どうも怖がられていてな。話にならなくて困っていたところだ」

と、妙に親しげに声をかけてきた。

「……こ、これは騎士様。うちの村人が失礼いたしました。こんな辺境の村にどのような御用でしょうか？　お話でしたら我が家へご案内いたしましょう」

村長はごくりと唾を飲むと、焦り顔を浮かべてルシウスに対しへりくだる。ルシウスはそんな村長や村人達を馬上から見下ろし、人を食ったような嘲笑を浮かべると――、

「ああ、実は人を捜していてな。ドレスを着た少女がこの村に来なかったか？　名前はフローラ。いや、もしかすると偽名を使っている可能性もあるんだが……」

と、村を訪れた用向きを明らかにした。

第153話　遭遇、そして――

「ドレスを着た少女……ですか？」

村長は青ざめた顔で、ルシウスに訊き返す。すると――、

「ああ、年頃はちょうど十代半ば。髪の色は薄紫色。王侯貴族にしては人が好さそうで、柔らかな物腰をしているんだが……」

ルシウスはフローラの人物像を語ると、鋭い眼差しで村長を見やる。

「……」

村長はまさしく顔面蒼白だった。

「どうした？　顔色が悪いな、村長。仕事をほっぽり出して、村人総出で動き回っている理由と、何か関係があるのか？」

ルシウスは人が悪い笑みをたたえて、村長の顔を覗きこむ。

「い、いえ！　これは、その……何と申しますか、その、実は……」

と、村長がたどたどしく弁明しようとすると――、

「まあまあ、そう焦るな。少しじっくりと話もしたいしな。こちらの用件の説明がてら、まずはあんたの家に向かおうじゃないか。実はそちらにおわす方こそ、この国の王族でな。まさか立ち話をさせ

るわけにもいくまい？」

ルシウスは第一王子のデュラン＝パラディアを見やり、鷹揚に村長に語りかけた。

「お、王族……王子様なのですか？」

村長は硬直し、デュランを見やる。

「ふん」

デュランは冷ややかな笑みをたたえ、村長の顔を見据えた。

「ひっ……」

村長は怯え、思わず後ずさる。周囲の村人達もただならぬ悪寒を覚えているのか、顔が引きつっていた。

「ははは、第一王子殿下はああ見えて気さくなお方でな。そこいらの農民に作法を要求するほど無粋な方ではない。とはいえ、先の少女に対する関わり如何によっては、その身の安全を保障することもできないが……」

ルシウスはそう語って、発言内容と矛盾した笑みをたたえる。

「っ……、いえ、ですから、その……まずは我が家へ」

何をどう対応するのが正解なのか、まったくわからない。村長はすっかり憔悴した顔つきで、ルシウス達を自宅へ誘った。

「そうか。じゃあ、案内してくれ。殿下、行きましょう……っと、お前らは外で待機だ。せっかくだから、村の中を見学させてもらうといい」

ルシウスは気さくに頷くと、デュランと周囲の騎士達に話しかけた。

「はっ！」

騎士達がどこか愉快そうな笑みをたたえて返事をすると――、

「構わないな、村長？」

ルシウスが村長に尋ね、暗に村の中を捜索させろと事後承諾を求める。

「は、はい。構いません。で、では、こちらへ……」

村長はぎこちなく頷くと、ふらついた足取りで歩きだした。そして、立ち去り際、自分達が戻ってくる以前にルシウス達と一緒にいた村人の男を見やり、言外に問いかける。

お前はどこまで話をしたのか、と。しかし、視線を向けられた村人は怯えた様子で顔を背けてしまった。

ルシウスとデュランはそんなやりとりを冷ややかに見守りながら、村長の後を追う。すると――、

「お、親父、俺も行くよ！」

ウィルが同行を申し出た。

「お、お前は来なくてもいい！」

村長はすかさず同行を拒否するが――、

「まあまあ、そう言いなさんな、村長。親父ってことは、あんたの倅（せがれ）なんだろ？　次期村長の候補として、社会経験を積ませてやるのが親心ってもんだ。違うか？」

ルシウスがウィルの同行に許可を出す。

「し、しかし、恥ずかしながら礼儀をわきまえておらず、無礼な真似をするのではないかと……」

「なに、言っただろう？　殿下は気さくなお方だとな。無知な農民の少し不躾な態度くらいで無礼打ちをするような御仁ではない。かく言う俺も貴族ではなく傭兵なんだ。礼儀など気にはしない」

焦燥して抵抗する村長に、ルシウスはしれっとかぶりを振った。

「……わかりました。寛大なお心遣い、誠にありがとうございます」

村長は項垂れるように頭を下げて礼を言うと、ウィルを見やり、余計な発言はするなよと、視線で念を押す。

かくして、村長、ウィル、ルシウス、デュランの四名が村長宅へ向かい、その場には騎士と村人達だけが残されることになった。

「まずはその少女の素性から説明するとしようか。本名はフローラ＝ベルトラム。ベルトラムという名称に聞き覚えはあるか？」

と、ルシウスは道すがらフローラについて詳細を語りだし、斜め前方を歩く村長とウィルに問いかける。すると――、

「……その、名前だけは。南西にベルトラム王国という国があると聞いたことはありますが」

村長が強張った声で答えた。

「ああ、まさにその大国の名称だ。このパラディア王国と交戦関係にあり、南西に位置するルビア王国は知っているな？　その敵国であるルビア王国を長きにわたり支援してきた影の大国がベルトラム王国だ。ここまで言えばその少女の素性についても見当がつくだろう？」

ルシウスはご機嫌に頷き、淀みない口調で水を向ける。

「まさか……そのベルトラム王国の王女様、なのでしょうか？」

村長は青ざめた顔で答えた。

「ああ、そのまさかだ。交戦国の背後に控える大国の王女がどうしてこの国にいるのかには、のっぴきならない事情があるんだが、パラディア王国としてはその存在を捨て置くことはできない。というより、ぜひともその身柄を確保したい。わかるな？」

「……は、はい。それはもちろん。色々と利用できる、ということでしょうか？」

要するに人質として扱いたいのだろうと、村長は理解して確認する。

「ああ。流石に村長ともなると、話が早くて助かる」

「い、いえ……」

満足そうに称賛してくるルシウスに、村長は上ずった声でかぶりを振った。

「それで、そのフローラ王女だが、この村の傍にある森の付近に潜伏していることはわかっている。ただ、森の周囲にはいくつも村があるからな。一つずつ回って情報を調べているところだ」

「な、なるほど。既にいくつか村を回った後でしたか」

「ああ。ところが、なかなか目当ての情報にたどり着けず難儀しているところでな。森からそう遠くへ移動できるはずもないし、どこかの村へ立ち寄っているはずなんだが……」

ルシウスはそう語って、わずかに間を置くと――、

「考えたくはないが、もしかすると故意に匿っている村でもあるのかもしれないな。かの王女は近隣諸国では美姫として名を馳せている。訳ありの貴族として振る舞えば、初心な村の男をたぶらかして手玉に取るくらい訳はないだろうしなぁ。そうは思わないか、坊主？」

持って回った言い方で続きを語り、黙って歩いていたウィルに向けて不意に問いかけた。

「……あ、いや、どうでしょう、か？　まだ回っていない村もあるのなら、そこにいるのかもしれませんし」

ウィルはびくりと身体を震わせると、ぎこちなく首を傾げて答える。その顔色は不安そうで、まさか？とでも言いたげに、だいぶ青ざめていた。その一方で――、

「っ……」

村長がしまったという顔つきで、横目でウィルをジロリと睨む。今のウィルの言い回しでは、暗にこの村にフローラが来ていないと言っているようにも聞こえるからだ。

「そうだな。まだ回っていない村もある。俺達も無暗な殺生はしたくない。そう願うとしようか」

ルシウスは空虚な笑みをたたえて同意した。

（馬鹿者め。迂闊な発言をしおって……）

村長は歯がゆそうに思案する。幸いフローラは村の中にもういないから、白を切り通すのも一つの選択肢だ。他方で、万が一の事態を考えると、素直に打ち明けた方がいいようにも思える――のだが。素直に打ち明けたところで口封じに殺されるのではないかという危惧もあって、恐ろしくて二の足を踏んでしまう。もはや一介の村長に抱えられる事態ではなくなっていた。そうこうしている内に、村長宅が見えてくる。

「わ、我が家です。粗末な家ですが、お入りください。ウィル。お前はお二方の馬を厩舎（きゅうしゃ）に繋いでおくのだ」

村長はウィルに指示を出すと、玄関の戸を開けて、恐る恐るルシウスとデュランを促した。

「すまんな」

ルシウスとデュランの二人は馬から降りると、ウィルにリードを

託す。

「い、いえ、お預かりします」

ウィルは畏まってリードを受け取る。受け取り際にルシウスと視線が合うと、後ろめたそうに俯いた。

「殿下、入りましょう。……それと、ああ、村長。悪いが家の中を検(あらた)めさせてもらってもいいか？　念のために、な」

ルシウスはフッと口許を緩めると、デュランと一緒に村長宅へ入っていく。そして、村長に対して、家の捜索許可を求めた。

「……は？」

村長は不意を打たれて硬直するが――、

（っ、不味い！　部屋にドレスと宝石が……）

フローラが謝礼として置いていったドレスと宝石の存在を思い出し、思いきり焦燥した顔つきになった。

「どうした？　構わないな？」

ルシウスはうすら寒い笑みをたたえ、村長に問いかける。

「あ、いえ、その、散らかっておりますので……」

村長は苦しい言い訳を口にすることしかできなかった。

「大丈夫だ。気にはしない。殿下はこちらでお待ちください」
ルシウスはそう言い残すと、ずかずかと家の奥へと歩きだす。直後――、
「お、お待ちください！」
村長が慌ててルシウスを呼び止めた。
「どうした？　何か見られたくないものでもあるのか？」
ルシウスは笑いを堪えるように問いかける。
「その、すべてお話しします。その少女のことについて……」
村長はすっかりやつれた顔で、観念した。すると――、
「あー、存外あっさりと口を割っちまいましたね」
ルシウスが何処か残念そうに言って、頭を掻く。その一方で――、
「やはりこの村にいたか。この賭け。俺の勝ちだな」
デュランがフッと口許をほころばせて、ルシウスに語りかけた。
「……」
村長は呆然と二人のやりとりを眺めている。
「察しが悪いな、村長。上手く隠しきれているとでも思っていたの

か？　村の様子がおかしい時点で、何か隠しているのは丸わかりだったぜ？　隠している対象が何なのか、俺と殿下と賭けていたというわけだ」

ルシウスは嘆息して、村長にネタを明かした。

「そんな……」

と、村長が思わず言葉を失っていると――、

「フローラ王女はどこにいる？　何があったのか、包み隠さず報告せよ。簡潔にな。これ以上、隠し立てするようなら、貴様の首を刎ねる。覚悟して答えよ？」

デュランが冷たい声で言い放つ。

「む、村に来た時には何か病気にかかっていたようでして、わが村に滞在していただくことになったのです！　それから、領主様を頼るように進言させていただいたのですが、今朝、気づいたらいなくなっておりまして！」

村長は慌てて事情を説明し始めた。

「……ふん。それで村の様子が騒がしかったというわけか」

「ま、そんなことだろうとは思ったが……、その口ぶりだとまだ発見には至っていないということか、村長？」

と、ルシウスはデュランに続いて得心すると、村長に尋ねる。

「い、いえ……、発見はしたのですが、もはや我々の手には負えぬ

と判断し、その……」

村長は目を泳がせて、言葉を濁す。

「くっ、ははは、見捨てたのか！　ええ、おい！？」

ルシウスは愉悦に満ちた笑い声を上げた。

「……はい」

村長は消え入りそうな声で頷く。その顔色は今日一番に蒼白だった。すると――、

「……まだ息はしているのだろうな？」

デュランが剣呑な声で問いかける。

「ひっ」

村長は怯えて身を震わせた。

「あー、殿下はお怒りのようだな。そこんところ、どうなんだ、村長？　まだ息をしてりゃ何とかなると思うんだが……」

ルシウスは頭を掻いて、どこかバツが悪そうに村長に訊く。

「お、おそらくは……。た、ただ、正確な見分けはつかなったのですが、おそらくは毒蜘蛛に噛まれて体調を崩しているのではないかと、つい先ほど気づきまして……」

村長はともすると裏返りそうな声で答えた。

「毒蜘蛛？」

「噛まれると黒い痣ができる蜘蛛がいるのです。む、村に現れることはまずないのですが、それがかなり遅効性の毒でして、解毒剤もないので……」

「あー、アレか。個体数は少ないはずなんだがな。また面倒なのに……。で、噛まれてから何日が経った？　噛まれた場所は？」

ルシウスは毒蜘蛛の正体に見当がついたのか、面倒くさそうに尋ねる。

「む、村に来てからちょうど六日が経過しております！　痕があったのは首筋です！」

「……首筋か。歩き回って毒のめぐりが早くなっていそうなのが厄介ですが、手持ちの解毒用魔術薬（ポーション）で何とかなりそうですな」

村長が答えると、ルシウスは思案顔を浮かべてデュランに説明する。

「そうか。なら、さっさと案内させろ」

「そういうわけだ。まあ、万が一の時は覚悟しておけよ、村長？　あんたの首一つ、いや、この村に暮らす者達の首程度で済めばいいがな……」

デュランに促され、ルシウスが脅しをかけると――、

「は、はい！　直ちに！」

村長はこくこくと勢いよく頷いた。そこへ――、

「殿下、ルシウス様」

玄関から一人の騎士が現れて、ルシウス達に声をかける。

「あ、どうした？」

「村を抜け出して南の街道へ進む村人が二名いましたので、後を追わせています。一人は村長の息子と思しき青年です。何やら随分と慌てておりましたが……」

ルシウスが応じると、騎士がどこか嘲笑を含んだ声で速やかに報告を行う。

「ははは、だそうだが、これはどういうことかな、村長？」

ルシウスはにやりと笑みを浮かべて、村長に問いかける。

「まさか……。す、すぐに案内いたします！」

村長はハッと顔色を変えると、泡を食って移動を促した。

◇　◇　◇

それから、数分後。村から南へ伸びる街道に、息を切らして走る二人の青年――ウィルとドンナーがいた。

「ドンナー。てめえにゃ、言ってやりてえことが、山ほど、あるがな。まずはフローラ様を助けるのが先だ！」

と、ウィルは途中ですれ違い合流したドンナーに語りかける。

「わかってる！　でも、本当なのか、フローラ様が人質にされるって？」
「ああ、フローラ様は敵国の王女様なんだとよ！」
「王女様……。でも、どうすんだ？　フローラ様、病気なんだろ？　俺らじゃ……」

ドンナーは歯がゆそうに顔を曇らせた。

「でもでも、うっせえよ！　やるしかないだろ！？　このままだとフローラ様が人質として連れていかれるんだぞ！？」
「うっ……」

ウィルが一喝すると、ドンナーは押し黙ってしまう。すると――、

「……実際、別の場所にフローラ様を隠して時間を稼いで、その間に助ける手段を探すしかねえよ。あの貴族様達なら何か知っているかもしれないし、薬でも持っているかもしれねえからな。それを訊きだすか、いざとなったら持っている薬を奪う」

ウィルが焦燥し、思いつめた面持ちで呟く。完全に出たところ勝負の案だった。ウィルもドンナーもそのことはわかっているのか、以降は口数もなくなり黙々とフローラがいる場所を目指して足だけを動かす。そうして――、

「確かあそこだ！」

二人はフローラを遺棄した場所へと戻ってきた。街道を抜けて森に近づくと、木々の茂みを見回して――、

「いた！　フローラ様だ！　フローラ様！」
「なに！？　フローラ様！」

ドンナーがフローラを発見した。
ウィルも慌てて駆け寄り、二人でフローラに声をかける。しかし――、

「うっ……。はぁ、はぁ……」

フローラは微かに反応したものの、もはや意識を保っているのかもわからないほどに衰弱していた。その顔は真っ赤で、吐息もかつてないほどに荒く、びっしょりと汗も流している。だが、それでも確かにまだ生きてはいた。

「っ、くそっ、すみません。フローラ様……」

ウィルは忸怩たる面持ちでフローラに謝罪の言葉を投げかける。

「は、早く運ぶぞ。温かいところへ」

ドンナーは泡を食って、そんなウィルを急かした。今は一刻も争う事態だ。

「……わかっている。村へ戻るしかない、か」

言って、ウィルは苦々しい顔になる。村へ戻れば騎士達が徘徊しているからだ。街道からそのまま戻っていけばすぐに見つかるだろう。来る時だって農地から抜け出して来たのだから。

「農地から入って、俺の家に行こう。村の端っこだから、行きやす

い」
「わかった。運ぶぞ、お前は脇から足を持て」
ウィルはそう言って、後ろからフローラの上体を抱えた。そして――、
「こうか？」
ドンナーが脇からフローラの足を抱えると――、
「そうだ。立つぞ。……っと、よし、行こう。お前が先頭だ」
二人がかりでフローラの上体と脚を抱えて立ち上がった。そのままフローラの足を進行方向にして歩きだす。しかし、森から離れ、ある程度、街道へ近づいたところで――、
「ま、待て！　馬の足音だ！　誰か来る！　しゃがめ！」
街道から馬の足音が聞こえてきた。ウィルとドンナーは慌てて屈んで身を潜める。
だが、馬の足音は迷うことなく、二人がいる場所に接近してきていて、二人の眼前で立ち止まった。馬上には騎士達が乗っており、その中でも先頭にはルシウスがいて――、
「ようよう、先に王女様を確保してくれたのか？　ご苦労だったな」
と、底意地の悪い笑みをたたえて、語りかけてきた。
「うっ……」

ウィルとドンナーはしゃがんだまま硬直する。すると、後部に控えていた馬から、騎士に運んでもらった村長が降りてきて――、

「……ウィル。お前がここまで愚か者だったとは思わなかったぞ」

と、苦虫を噛み潰したような顔で、ウィルに語りかけた。

「まあまあ村長。そう言いなさんな。二人は輸送役を買って出てくれたんだろうよ。せっかくだ。そのまま村まで運んでもらおうか。っと、その前に容体の確認と解毒が先か」

ルシウスは飄々と村長を宥めると、軽やかな身のこなしで馬から降りた。そして、フローラに向かって歩きだす。

「ふむ……」

第一王子のデュランも馬から降りて、フローラに歩み寄った。だが――、

「……臭い。饐(す)えた匂いがするな」

デュランはそうぼやいて、顔をしかめ、足を止める。

「くっ、ははは。そりゃあ何日も風呂になんか入ってないでしょうからねえ。こんなに汗もかいているし、そら臭いでしょうよ。おう、姫様。意識はありますか？　臭いそうですよ」

ルシウスはずかずかとフローラに近づくと、頭を掴んで語りかけた。

「うっ、う……」

フローラの身体が微かに身じろぐ。そして――、

「あー、一応、意識はあるみたいだな。羞恥心でも覚えているのかね。確かに首筋に……」

と、ルシウスが慣れた様子で容体を確認していると――、

「おい」

静かな、だが不思議とよく通る声が、その場に響いた。

「……あ？」

ルシウスは声が聞こえた方を見やり、訝しそうにスッと目を細める。そこには、黒髪で、十代半ばの若い少年がいつの間にか立っていた。すると――、

「……貴様、いつからそこにいた？」

デュランが剣を抜き、剣呑な声で少年を誰何（すいか）する。周囲の騎士達も剣を抜き、警戒した様子で臨戦態勢になった。

だが、少年――リオはデュランの質問には答えず――、

「あんたはルシウス、ルシウス＝オルグィーユか？　……いや、確認するまでもないな。その醜悪な面を忘れるはずがない。俺を覚えているか？」

スッとルシウスを指差して、問いかけ自答した。

「黒髪……。勇者？　いや……、その顔立ちは、ヤグモの……。お前、まさか……リオ、か？」

ルシウスはおもむろに立ち上がると、油断なく腰の剣を抜いて、じっとリオを見据える。だが、ややあって、愕然と目を見開いた。

「……そう、リオだ。あんたを殺すために、ここまで来た」

リオはそう言って、腰の剣を抜き放つ。

「くっ、あっはっは……。そうか、そうか。生きてたか、あの時の鼻たれが。いや、生きていてくれたか。俺の思い描いた通りに！」

突如、ルシウスは心底愉快そうに笑い、高らかに語った。

「……」

リオは黙って、無感動にルシウスを見つめている。デュランや周囲の騎士達も黙って、リオとルシウスのやり取りを眺めつつ、様子を窺っていた。

すると、ルシウスは小さく鼻を鳴らして――、

「あー、あの女。そう、アヤメな。あいつは良い女だったぞ。俺の良い糧になった」

これ見よがしにリオを挑発する。だが――、

「言い残すことはそれだけか？」

リオが淡々と問いかける。

「……はっ、いい感じに胆(きも)が据わっているじゃねえか。殺意がピリピリと伝わってきやがる。……いいぜ、十年ぶりってところか。久しぶりにおじさんが遊んでやる、来いよ！」

ルシウスは周囲の騎士やデュランに手出し無用と左手を動かし制止すると、愉快そうに笑ってリオを誘った。

すると、直後、リオが剣を振り終えて、ルシウスの背後に立っていて――、

「っ？」

ルシウスはリオが視界から姿を消したことに気づくと同時に、自らの体幹がわずかに崩れたことを自覚した。正確には、左半身が軽い。

その理由は、ルシウスの左腕が宙を舞っていることと関係している。少し遅れて、その左腕が地面に落下すると――、

「一人で遊んでいろよ」

底冷えするような、リオの声が響いた。

第１５４話　蹂躙

「な、に？」

ルシウスは地面に落下した自分の左腕を見て、愕然と目を見開いた。と、同時に、熟練の戦闘経験で反射的に背後のリオに向けて剣を振るう。

しかし、その斬撃がリオの身体を捕らえることは叶わず、虚しく空を切り割く。リオはバックステップを踏んで距離を取り、冷たい眼差しでルシウスを見据えていた。

（馬鹿な？　反応できなかっただと？　……この俺が）

ルシウスは少なからぬ衝撃を押し殺しつつ、剣呑な目つきでリオを睨む。決して油断はしていなかった。いつでも応戦できるよう、臨戦態勢でいたのだから。

それなのに、不意を突かれた。正眼に剣を構えていなかったら、真っ先に首を斬り落とされていても不思議ではない。

久々に味わった死の感覚に、名状しがたい苛立ちを覚える。と、同時に、先の動きのカラクリを突き止めようと、冷静に頭を回転させると――、

「っ！？」

リオが真正面から、再び急接近してきた。だが、今度は先ほどよりも速度が遅い。速いには速いが、反応はできる速度である。

真正面から突っ込む場合は、衝突を危惧して風の精霊術による加速を抑える必要があるからなのだが、今のルシウスがそこまで思い

至ることはない。
ルシウスは左腕を失った状態での応戦を余儀なくされた。両手で握られたリオの剣を、右手だけで握った剣で受け止める。
「ぐっ……」
瞬間、圧倒的な膂力の差を感じ取り、ルシウスは力を受け流そうと、咄嗟にバックステップを踏んだ。すると、リオが即応して、ルシウスを追撃した。
（速え！　なんつう馬鹿力だ！　なんだ、このとんでもねえ身体強化は！？）
リオから溢れ出る魔力の余波を目と肌で感じ取り、ルシウスは焦燥する。直後――、
「がっ、はっ……」
槍のように鋭い蹴りが伸びてきて、ルシウスの鳩尾を的確に打ち抜いた。咄嗟に身体強化で肉体の強度を強化するが、尋常でない衝撃が腹部に伝わってきて、肺の中に溜まっていた空気が漏れ出る。ルシウスの身体は蹴りの衝撃で軽々と吹き飛んでいった。
「ふ、ふはは！　ルシウス、貴様、なんという化物に恨まれているのだ！？　本当に人か、ソイツは！？　余裕ぶっている場合ではないのではないか？」
傍から今のやり取りを眺めていたデュランが、高らかに笑ってルシウスに問いかける。

「……さて、どうでしょうかねえ」

ルシウスは地べたを転がりながら受け身を取って素早く立ち上がると、消え入りそうな声で小さく答えた。当初の人を食ったような雰囲気は完全になりを潜めており、何があっても対処できるよう、ただただ神経を研ぎ澄ませる。すると――、

「っ、くっ……」

リオが追撃を仕掛けてきた。正確で迅速無比な連撃がルシウスに襲い掛かる。リオの動きは冷たく淡々とした殺意だけがこめられていた。

ルシウスはかろうじて、リオの斬撃をいなしていく。かと思えば突然、ルシウスの周囲の地面が槍状に隆起し、その胴体を貫こうと突き出てきた。ルシウスは咄嗟に反応し、街道を背にして後方に向けて飛び上がる。

直後、リオの周囲に無数の光球が生まれた。リオがルシウスに向けて軽く手をかざすと、光球は複雑な軌道を描いて一斉にルシウスへと襲いかかる。

「ちっ！」

ルシウスは小さく舌打ちをすると、手にした黒い刀身の剣を大振りに振り払った。すると、刀身から闇が膨れ上がって周囲へ広がり、迫りくる光球をすべて呑み込んでしまう。

リオは微かに目を細めてその光景を捉えると、いまだ空中に留まるルシウスに向けて手をかざす。次の瞬間、リオの手先から衝撃波の砲弾がほとばしった。

不可視の一撃は正確にルシウスの胴体を捉えようとしていたが――、

「見えてんだよ！」

と、ルシウスは叫んで、垂直に剣を振り下ろした。ルシウスの剣から闇の斬撃が伸びて、衝撃波を迎撃する。少し遅れて、ルシウスが着地しようとすると――、

「次から次へと……」

着地地点の地面が槍状に隆起し、再びルシウスの胴体を貫こうと飛び出てくる。さらに、リオは事前に上空に向けて無数の光球をばらまいており、ルシウスに向けて光弾の雨が降り注ごうとしていた。休むことのない波状攻撃がルシウスに襲いかかる。

ルシウスは一方的な遠隔攻撃にさらされ、対処に追われることになった。まずは足元の攻撃に対処するべく、地面に向けて剣を振り払う。闇の斬撃は隆起してきた土槍を綺麗に抉りとった。そして、続いて上空の光弾に対処するべく剣を振り払うが――、

「ぐっ……」

剣を振り払うのとほぼ同時に、光の雨がルシウスに降り注いだ。闇の斬撃は光弾を部分的に呑み込むが、すべてを消し去ることはできず、それどころかリオが追加で光弾を射出していたのか、次々と降り注いで地面を砕き粉塵が巻き起こる。

ほぼ同時に、リオがルシウスごと土煙を吹き飛ばそうと、強力な暴風を放った。煙を面で覆うような風の障壁が、煙の中にいるルシウスに向かって突き進んでいく。

すると、瞬く間に土煙は吹き払われ、元いた場所からルシウスの姿も消えていた。

「っ！？」

周囲にいる騎士達にウィル、ドンナーに村長は、程度の差こそあれ、ルシウスが吹き飛んでいったであろう街道の方を唖然と見つめている。ただ、デュランだけは痛快そうな笑みを浮かべて、リオを眺めていた。すると――、

「……」

リオが無言のまま身を捻り、誰もいない背後へ向けて剣を振るう。かと思えば、甲高い金属音が響き渡る。リオの背後の空間からは闇が溢れ出ており、そこから黒い刀身の剣が突き出ていた。リオが事前に闇の魔力反応を察知し、剣を振るって迎撃したのだ。

完全に初見殺しの攻撃だったが、リオには通用しなかった。魔力に対する感覚がこの上ないほどに研ぎ澄まされているからこそ為せる芸当である。すぐにルシウスの剣は引っ込み、同時に闇も消え去った。

リオは先ほどから自身の魔力を混ぜた微風を周囲に放っており、ルシウスの居所を正確に掴んでいた。森から少し離れた場所へと鋭く視線を向ける。そこには――、

「はぁ、はぁ……」

息を切らして、膝をついているルシウスがいた。地面に剣を突きさして、ふらついた身体を支えている。

（くそが……どうなってやがる？　ゼンの野郎も相当な精霊術の使い手だったが、こいつほどじゃなかった。動きにも無駄がねえ。全身から溢れるアホみてえな魔力といい、勇者なんて目じゃねえぞ、こいつの強さは）

完全に想定外の強さだった。そう、リオの強さは明らかに人が努力で到達できる限界を超えている。もはや人の領域にいないと表現してもいい。既に人の領域を越えたはずの自分すらも凌駕している。と、ルシウスは血が不足している頭でぼんやりと考えた。

（……ああ、くそが。短距離でも全身を転移させると、クソみてえに魔力を喰らいやがる。内臓もいかれている。血も足りねえ。まずは腕を……）

ルシウスは顔をしかめてリオを睨み返すと、ふらつきを装ってさりげなく地面に突き刺した剣から闇を展開させて――、

「っ！」

だが、その目論見はリオに阻止される。リオはルシウスの考えを見越していたかのように一瞬で移動し、地面に転がっていたルシウスの左腕を拾い上げた。

「ひっ」

転がっていた左腕の傍で硬直していた村長が怯えた声をあげる。リオは怯える村長に一瞥もくれることなく踵を返すと、そのままルシウスへと一瞬で接近した。そして――、

「放っておいても出血多量でこのまま死にそうだな。それでも傷口を塞がないということは、腕を癒着させる手段があるからそれをしたくない、ということか？」

と、ルシウスの思惑を見透かしたように、淡々と質問を投げかけ

る。

「はっ、答えたら返してくれるのかよ」

「いや」

リオはにべもなく否定すると、ルシウスの左腕を軽く上に放った。直後、強力な業火を生みだして、左腕を灰塵に変えてしまう。

「……くそがっ、悪趣味な野郎だ」

ルシウスは忌々しそうにリオを睨んだ。

「俺の目の前で母さんを殺したあんたほどじゃない。言っただろう？　あんたを殺すって。出し惜しみはしない。あんたに苦痛を味わわせて、そのうえで跡形も残さず殺してやる……。そろそろ終わりにしよう」

リオはそう言い捨てると、剣に魔力を流し込む。言葉通り、リオはもはや周囲の目など気にしていなかった。普段は徹底して人前で多用しない精霊術も、何の躊躇もなく次々と使っている。

「……させるかよ」

と、ルシウスは強がって虚勢を張るが、言葉とは裏腹に行動に移そうと試みることはしない。下手に動こうとすれば、下手に魔力を発すれば、即応されて出先を潰されるからだ。既に万策尽きたと言っても過言ではない。この場にいるのがルシウスだけならば――、だが。

「……」

リオは背後から迫りくる無数の存在を感知し、咄嗟に横へと大きくステップを踏んだ。すると、今まで静観していたデュランと騎士達が間に割って入り、ルシウスを守るように陣を形成していく。

「はは、助けていただけると信じていましたぜ、殿下」

ルシウスは飄々とした態度を装って、介入してきたデュランに語りかける。

「ふん、貴様が生みだした因縁の後始末だと思って静観していたが、あいにくとこのまま死なれても少しだけ困るのでな。それに何より……」

デュランはそう応じると、不敵な笑みをたたえてリオを見据えて――、

「どれほどのものか、あの男に少し興味がある」

と、うそぶいた。

「ありがたいですが、死んでもしりませんぜ」

「ふん。引き際は心得ておる、と言いたいところだが……」

デュランは思わず微苦笑した。先ほどからリオが視線で問いかけているのだ。邪魔をするのか、と。

（戦狂（いくさ）いの俺を臆させるとは、痛快な）

デュランは小さく武者震いをすると――、

「そういうわけだ。我々はこの男に加勢させてもらうぞ、小僧」
と、そう宣言した。
「邪魔をするなら退かすまでだ」
「散開して前方から囲め！」
リオとデュランの声が重なる。と、同時に、騎士達が一斉に動きだして、扇状にリオを囲みだした。リオが操る精霊術による広範囲攻撃を警戒しているのだろう。
だが、リオは包囲を恐れず、迷わずデュランの背後にいるルシウスに向けて直進した。
「ふん、迷わずこ奴の首を取りにくるか。しかし！」
デュランは苦々しい笑みをたたえ、リオを迎え撃つべく身構える。すると、その全身から大量の魔力が噴き出て、両手で握る二メートルはあろう大剣へと集約されていく。それで身体強化が施されたのか、大剣を軽々と両手で振るって――、
「ぐっ……」
リオと真正面から剣をぶつけ合った。だが、デュランの巨躯は大きく後ずさり、そのまま吹き飛ばされそうになる。
（何という膂力。俺の魔剣は身体強化に特化した古代魔道具だというのに、それすら凌駕するというのか……。だがっ！）
いったい何の仕掛けがあるというのか、そんな疑問が脳裏をかす

めるが――、

「一瞬の足止めには成功したぞ！」

デュランは自らの目的を達したと言わんばかりに、雄叫びを上げた。直後、周囲を囲んでいた騎士達の半数が、左右と背後から一斉にリオへ襲いかかる。だが――、

「ぐっ」

リオを起点に、左右と後方へ衝撃波の暴風が吹き荒れた。襲いかかってきた騎士達は瞬く間に吹き飛んでいき、周囲に控えていた残り半数の騎士達の一部を巻き込む。しかし、それでも無事だった騎士達はすぐさま、リオへ追撃を仕掛けた。二段構えの一斉包囲だ。

「あいにくと狩りには慣れていてな！」

と、リオの眼前に立つデュランが、勝利を確信して笑みを刻むが――、

「何っ！？」

騎士達の眼前に一瞬で土壁が隆起すると、愕然と目を見開いた。リオに襲い掛かろうとしていた騎士達は、いきなり目の前に現れた土壁に減速が効かず――、

「がっ」

魔法で身体能力を強化していたであろう速度で勢いよく土壁に衝突して、そのまま昏倒してしまう。

（……これほど強力な身体強化を全身に施す魔力と、先の風を操った魔術で消費した魔力、そこへさらにこれだけの土壁を展開する魔力も同時に練り上げていたというのか。……呪文も使わずあれこれと面妖な。どれだけの魔道具を所持しているというのだ！？）

デュランは唖然と息を呑んだ。すると、そこへ――、

「っ！」

後方で左腕の止血を行っていたルシウスが、黒い刀身の剣で闇を操り、先ほどと同じように背後からリオの胴体めがけて剣を突きさそうとした。

だが、リオはその場で高く跳躍すると、鮮やかに不意の一撃を躱してしまう。そのまま背後に展開した土壁の上に着地すると――、

「芸がないな」

風の精霊術で急加速し、デュランの頭上を飛び越え、ルシウスの胴体を苦もなく貫いてしまった。

「ぐっ……、はっ、がは……」

ルシウスは苦しそうに咳込んで、肺の空気を吐きだす。そして――、

「ぐっ！？」

左足の膝と剣を手にしていた右手をリオに思いきり踏みつけられると、苦痛で顔をしかめた。膝と拳の骨を砕かれ、堪らず剣を手放

してしまう。

（ふざけやがって……。この、俺がっ……）

リオは右手で剣を腹部に突きさしたまま、無感動に地面に転がるルシウスを見下ろしている。直後――、

「がっ！？」

ルシウスは全身に走った激痛に、呻き声を上げた。

（何だ？）

と、疑問を抱く間にも――、

「ぐぁっ！」

断続的に激痛が全身を駆け抜ける。ルシウスの腹部に刺さった剣に、リオが電流を注いでいるのだ。身体を麻痺させて、身動きすら取れなくなるように。

「てっ、め、え……がぁ！」

ルシウスは憎悪の念を燃やして、頭上のリオを睨んだ。だが、リオは眉一つ動かさず、無慈悲にルシウスを蹂躙し続けている。すると――、

「動くな！」

と、リオが叫ぶ。しかし、その言葉は、決してルシウスに向けら

れたものではなく――、

「っ！」

背後に控えるデュランに対しかけられたものだった。デュランはびくりと身体を震わせて、その場で立ち止まる。

「動くなよ。用があるのはこの男だ。あんたじゃない。自分の身を差し出してまでこの男を救う意義でもあるのか？」

リオはデュランに一瞥もくれることなく、ただ警告の言葉だけを送った。

「……」

デュランは何も応えず、小難しい顔を浮かべて思案する。だが、ややあって、デュランは手にしていた剣を握る力を弱めた。

（くそがっ……。せめてレイスの野郎がいりゃ……）

ルシウスはこれ以上のデュランの助力が望めないことを察し、顔をしかめる。二人の関係はあくまでもビジネスパートナーだ。何かと気が合うからつるむことはあるが、強固な信頼関係で結ばれているわけではない。状況が悪くなれば、契約関係は打ち切られるのが道理。

（こんな、ところで、俺が死ねるはずがねえっ）

ルシウスは諦めていなかった。全身が痺れている。頭がぼやける。すると――、

「……父さんも、あんたが殺したのか？」

リオが不意に口を開き、ルシウスに問いかけた。

「……は、はっ、だったら、どうする？」

「あんたを殺す。それだけだ」

ルシウスが不敵に挑発すると、リオは腹部に突きさした剣を思いきり捻った。

「ぐはっ……。痛えだろう、がぁっ！」

リオはさらに剣を捻る。

（くそ野郎が、蹂躙は俺の十八番だってんだ！　腹が熱い、血が足りねえ！）

ルシウスは全身が焼き切れそうな痛みを覚えたが、必死に苦痛を堪えた。自分が略奪・蹂躙される側に回るなど、認めるわけにはいかないから。

略奪と蹂躙こそが彼の存在意義なのだ。そのためならどんなに卑怯で外道な手段でも使ってみせる。虚勢だって張ってみせる。今までだってそうして生きてきたのだ。だから――、

「へ、へっ」

ルシウスは気がつけば笑っていた。脳と胸の内を占める憎悪の籠った憤りとは裏腹に、にやりと、彼は笑った。

「……」

リオは微かに眉をひそめると、ルシウスの腹部から剣を抜き放つ。すると――、

「ごほっ、ごほっ」

どぷりと、ルシウスの腹と口から血が溢れかえった。

リオはまさに死に体なルシウスを見ろして、剣を握るその手にギュッと力をこめる。

（こいつが……）

母さんを殺した。おそらくは父さんも殺したのだろう。

と、リオはその事実を今ここで、改めて思い返す。すると、心の中に、激しい復讐の焔が燃え上がってきた。同時に、母アヤメとの懐かしい思い出を思い出す。

失ってしまった幸せ。もう取り返すことはできない日常。自分には決して向けられなくなってしまった愛情。復讐の道を歩みと決めて、捨て去った何かがある。壊れてしまった自分もいる。それらすべてはこの男に起因するのだ。

だから、死に瀕しているルシウスの姿を見ても、リオは少しも憐れだとは思わなかった。許すことはできない。引き返すこともできない。生きていれば必ず殺すと、そう決めたのだ。

そう、だから――。

リオはおもむろに剣を振り上げた。もう二度と目の前にいる男の顔を見なくて済むようにと、塵一つ残さぬだけの威力を込めた攻撃を放つと決める。

「っ……なんという」

リオの剣に魔力が集約されることで放たれる眩い光に、傍から眺めていたデュランは思わず息を呑んだ。

（……これがこ奴の最期か。存外、あっさりとした幕引きよな。いや、それだけこの小僧の強さと覚悟が凄まじいということか）

そうして、永い数瞬が過ぎて――、

「……」

リオはルシウスと距離を置いてから、剣を振り下ろした。

「くそがあああああ、そうだ、てめえの親父を殺したのも俺だ！
リオぉぉぉぉぉぉっ！」

ルシウスは己の死を感じ取ったのか、苦し紛れの雄叫びを上げた。その直後、凄まじい熱量を伴った光の奔流が、ルシウスに降り注ぐ。ルシウスは光に呑み込まれ、壮絶な断末魔の叫びをあげた。

リオの剣が放つ光は、王の剣であるアルフレッドが使用していた聖剣による光撃と類似している。眩しい光が、絶え間なく一帯を包み込む。

光の奔流はしばらくルシウスが横たわっていた地点を覆い続けると、次第に弱まって収束していく。そして、その場にあったすべてを、文字通りこの世から消滅させた。

もはやそこに地面はない。ルシウスの姿も見当たらない。ただ、光の奔流によって削り取られた虚ろな深い穴だけがある。

その穴はまるで今のリオの心境を表しているかのようだった。リオは瞬き一つせず、静かにルシウスがつい先ほどまで存在していたはずの穴を見下ろしている。そして――、

（終わった……、終わったよ）

と、心の中で呟いた。誰に向けて呟いたのかは、本人にしかわからない。

復讐の達成感などなかった。むしろ喪失感に似た何かがあって、そこから深い闇が溢れている。

だが、確かにこれはリオが望んだ結果なのだ。リオが進むと決めた道の終着点なのだ。だから、後悔はなく――、

「……帰ろう」

リオはぽつりと呟いた。

こんな自分に帰るべき場所があるのか、帰ってもいいのか、それはわからない。

けれど、それでも自分の帰りを待ってくれている人がいて――。

帰りたいと思う自分もいるのだから。

第155話　戦闘後の一幕

リオは空を見上げると、小さく息をついておもむろに背後を振り返った。そこにはパラディア王国の第一王子であるデュランが立っており、リオが撃退した騎士達が横たわり、激しい戦闘の爪痕が残っている。また、少し離れた場所には、ウィル、ドンナー、村長の三人が立っていた。

（……どうしたもんか）

と、リオはややバツが悪そうに思案した。このまま素知らぬ顔で立ち去るのがベストなのだろうが、すぐ傍にいるデュランがそれを許してくれるだろうか。そうして逡巡しながら、その場にいる面々に視線を走らせると――、

（……え？）

苦しそうに息をついて、地べたに倒れるフローラの顔が視界に入り、ギョッと目を見開く。フローラとは少し前に夜会で遭遇したことがあるし、つい最近まで姉のクリスティーナと行動していたこともあって、その人目を引く整った容貌には見覚えがあったのだ。しかし、そのあまりにもみすぼらしいその格好に――、

（いや、でもこんな場所に一人でいるはずがない……よな？　村の女の子……か？　何で倒れているんだ？）

と、半信半疑に、考え直す。だが、それでもそこに倒れている少女は、あまりにもリオが見知っている王族の少女――フローラ＝ベ

ルトラムと外見的な特徴が似ている、というより酷似しすぎていた。
一応、本人かどうか確認するべく、リオがおもむろに歩きだそうとすると――、

「……貴公、名はリオといったな」

不意に、デュランがリオに語りかけた。

「……ええ」

リオはぴたりと足を止めると、やや警戒してデュランに応じる。
すると――、

「……パラディアに、いや俺に仕える気はないか？」

デュランは突然、そんなことを言いだした。

「……は？」

リオは思わず呆気に取られ、面食らう。

「俺に仕えないかと提案している。金か、地位か、女か？　どれでも、俺に用意できる最高のものを与えてやるぞ？」

デュランはいたって真面目な面持ちで、リオをスカウトし始めるが――、

「いえ、お断りしますが」

リオはきっぱりと即答して断った。

「むっ、……まあ聞け。何を突然言い出すのかと思っているやもしれんが、俺はいたって真面目に提案している。貴公と敵対する意思もないことを宣言しよう」

デュランは堂々と語って、食い下がる。

「……」

リオは反応に困っているのか、警戒しているのか、黙ってデュランを見据えている。すると――、

「なに、こう見えて目端は利く方でな。彼我の実力差、いや戦力差は理解している。突撃と玉砕の意味をはき違えるほど愚かではないし、奴に義理立てして貴公に襲い掛かるほど熱い男でもない。そもそも奴にそんな義理もないしな」

と、デュランは鷹揚に語ってみせた。

「……思惑が読めないのですが」

リオは小さく嘆息し、口を開く。

「俺と奴の関係は一国の王子と傭兵の関係にすぎんと言っているのだ。少なからず気が合うところもあったし、今後の取引関係の継続も予定としてありはしたが、人から恨みを買うような男であることは重々承知していたのでな。奴が殺されたのは、奴が弱かったからに他ならん」

デュランはリオの警戒を解くべく、最初にしっかりと自らの立ち

位置を明らかにした。

（……この男、この国の王子なのか？）

リオはデュランの素性に意表を突かれると――、

「正直、あの男と気が合うという時点で願い下げですね」

にべもなくかぶりを振った。

「はっ、俺もその男と同様に外道を歩む畜生とでも思っているか？違うぞ。俺が歩まんとするのは覇道だ。欲しければ奪うし、力こそ正義という意味でルシウスとは価値観を共にするが、奴ほど趣味は悪くないし、悪食でもない。まあ、暴君気質であることは否定せんがな」

デュランはそう語って、にやりと笑みを刻む。

（どうも調子が狂うな）

と、リオは一先ず剣を腰の鞘に収めると――、

「畜生だったとはいえ、顔見知りを殺した見ず知らずの男を、よくもまあすぐに召し抱えようと思いますね？」

億劫そうに頭を掻いて、問いかけた。物好きな王子もいたものだと。

「たわけ、清濁併せ呑んでこその覇道であろう。それに、弱き者が嫌いというわけでもないが、俺は強き者が好きだ。欲してもいる」

「……どうして強い人材を求めるのですか？」
「戦争だ」
リオが興味本位で尋ねると、デュランは力強く即答した。
「戦争、ですか」
「ああ、我が国は小国だ。だからこそ他国に舐められないだけの力がいる。俺一人で雑兵千人以上の働きはできるが、他国にも腕に覚えのある者はいるだろうし、圧倒的な物量には勝てんからな」
デュランは首肯して力説する。
「然様ですか」
リオはそっけなく頷いた。だが――、
「その点、貴公は一人で戦場を覆しかねんだけの戦力を秘めていると俺は睨んでいる。仕えぬとも、我が覇道に手を貸す気はないか？大国は格式や伝統にうるさいが、我が国のような小国は実力主義でいくらでも駆け上がれるぞ？」
と、デュランは特にリオの態度を気にした様子もなく、言葉を続ける。
「残念ながら、その覇道とやらに興味はないので」
リオの答えは変わらなかった。戦争などする気はないのだから。
「……貴公、それほどの力を手にしておいて、覇道も思いのままであろうに、あえて王道を進むと？」

デュランはもどかしそうに問いかける。
「覇道も王道も進む気はありません」
「なに、では世事に興味がないと？　世捨て人にでもなるつもりか？」
「どうでしょうね」
リオは苦笑すると、話は終わりだと言わんばかりに歩きだし、地面に倒れているフローラに歩み寄った。
「……ふむ。復讐を遂げて、憑き物が落ちた、といったところか」
デュランはスッと目を細め、リオの背中を見つめる。
「元よりこんな性格ですよ」
リオは苦笑して答えると、フローラの前で立ち止まった。すぐ傍にはウィルにドンナー、村長の三人が立っていて――、
「う……」
どこか怯えた様子で、リオを見つめた。
（やっぱり、フローラ王女……だよな？）
リオはウィル達の視線を受け流し、しゃがんでフローラの顔を凝視すると、倒れている少女がフローラ本人だと認識した。そして――、

「この子は？　どうしてこの村に？」

と、すぐ傍にいるウィル達に問いかける。

「あ、いや、その……」

ウィル達は緊張して言葉に詰まった。すると――、

「貴公、その娘の素性を知っているのか？」

デュランがリオに声をかける。

（……なるほど。彼女がこの王子がここにいる理由か。何が起きたんだ？）

リオはデュランの質問から、その背景の一端を推測すると――、

「……見知らぬ顔、というわけではありませんね。困ったことに」

と、やや間を置いて、答えた。

「ほう……。そういえばルシウスはベルトラム王国の出身であったな。ということは、そなたもベルトラムに縁のある人物である可能性がありそうだ」

デュランはフローラを知るというリオの発言から、その出自に探りを入れる。

「さて、どうでしょう？」

リオはポーカーフェイスで応じると――、

（ひどい熱だな。首筋に痣がある。何だ、これは、病気か？　いや……）

フローラの身体を抱えて、容体の確認を始めた。

「フローラ王女。意識はありますか？」

「はぁ、はぁ……」

吐息が荒く、返事はない。現時点で意識を保っているかは怪しいが――、

（さっきの戦闘は認識していたのか？　俺の名前を聞かれて気づかれた可能性もあるけど……）

と、リオは思案する。気づかれていたとすると少しばかり面倒だが、このまま放置して置き去りにするのも目覚めが悪い。すると――、

「森に棲む蜘蛛の毒にかかっているそうだ。貴公が殺したルシウスが解毒用の魔術薬（ポーション）を持っていたのだがな。先の一撃で奴もろとも消失したであろうよ」

デュランがどこか愉快そうに、フローラが苦しんでいる原因を告げた。

「解毒用の魔術薬（ポーション）なら俺も所持しています」

リオは嘆息して答える。

「ほう、つくづく便利な奴。助けるというのか？　それでどうする？」

デュランはいっそう、愉快そうな笑みを強めて尋ねた。

「……国まで連れていきます」

「ふむ、元より俺はその王女が目当てでこの場まで足を運んだわけだが……、まあ、よかろう。連れていくがいい。面白い見世物の礼だ。止めはせぬ」

リオがやや億劫そうに答えると、デュランは存外あっさりとリオの決断に許可を与える。

「よろしいんですか？」

と、リオは意外そうに目を丸くした。パラディア王国とベルトラム王国の関係はリオもそれとなく承知している。そして、フローラが持つであろう利用価値も。だから、正直、少しは食い下がられるかもしれないと思っていたのだ。

「……ふん。仮に俺が貴公を止めようと思っても、実力でも権力でも止めることはできまい。手慰みに敵性国家の王女を飼うのも一興かと思ったが、興もさめた。誘いをかけたルシウスも死んだことだしな」

デュランは小さく鼻を鳴らすと、やや面白くなさそうに語った。

「……では、気が変わらぬうちに連れていくとしましょう。これを……」

リオは不思議と口許をほころばせると、フローラをいったんその場に残し、デュランに歩み寄った。そして、懐から木製の瓶を取り出す。

「何だ、これは？」

デュランはじっと木製の瓶を見据えた。

「傷口を塞ぐ治癒用の魔術薬（ポーション）です。即効性はありませんが、飲めば体内の傷の回復も早まるはずです。彼らに使ってあげてください」

リオはそう言って、地面に転がっている騎士達を見やる。

「……いらん。敗れた相手に塩を送られるなど、戦士の恥だ」

デュランは小さく鼻を鳴らして、かぶりを振った。だが――、

「そう仰らず。あの時は手加減できなかったので。幸い死人はいないようですが、放置すればどうなるかわかりません。できることなら命までは奪いたくないんです。それとも、無事な治癒魔法の使い手でもいるのですか？」

リオは苦笑し、木製の瓶をデュランに差し出す。

「……ふん、あたかも人が変わったようなことを言う。戦闘中の容赦のなさが嘘のようではないか。……いいだろう。なら受け取ってやる。だが、その代わり、もし再び見（まみ）えることがあれば、一席付き合え」

デュランはフッと笑うと、リオの手から瓶を掴み取った。

「……一席、ですか？」

リオは不思議そうに首を傾げる。

「その時は貴様を客人として迎え、もてなしてやると言っているのだ。気が変わっていれば、俺に仕えるなり手を貸すといい」

どうやらまだリオを勧誘するつもりでいるようだ。なかなかに抜け目ない。

「……考えておきましょう」

リオは苦笑すると、フローラを抱きかかえようとした。正直、あまり長居はしたくない。すると――、

「ま、待ってくれ！　あ、いや、待ってください！」

ウィルが慌ててリオを呼び止める。

「何か？」

リオはフローラを抱きかかえるのを止めて、ウィルを見やった。

「あ、いや、その……。フ、フローラ様を……」

「こ、このまま別れたくねえ！」

ウィルが言葉に詰まっていると、ドンナーが便乗して叫ぶ。

「……失礼ですが、貴方達はこの子にどのような関係が？」

リオは落ち着いた声で問いかける。

「む、村で暮らしていたんです！　迷い込んできたのを、保護して！」

ウィルは意を決して事情を説明した。

「なるほど……。彼女の素性も知っていると」

リオがなんとなく事情を把握し、得心すると――、

「おい、俺の采配でその男の帰還を許したのだ。どうして貴様らが口を挟む？　挙句、保護しただと？　土壇場になって見捨てようとしたの間違いであろう？」

デュランが剣呑な声で、ウィルとドンナーに語りかけた。

「ひっ！」

ウィルとドンナーは怯えて顔を引きつらせる。体格的にデュランとドンナーは同じ程度だが、先の戦闘を見て腕っぷしで敵うなどとは死んでも思えなかった。

「彼女には帰るべき場所があります。俺にも時間はあまりない。残念ながら彼女が目を覚まして貴方達と別れを済ますまで待つことはできません」

リオはデュランの怒りを鎮めようと、すかさずウィル達に語りか

ける。

「うっ……」

ウィルとドンナーはすっかり委縮して押し黙ってしまった。表情からして何か言いたそうな雰囲気は伝わってきたが、それ以上、二人が口を開くことはなく――、

「お二人のことは私から彼女に伝えておきましょう。お名前を伺っても？」

と、リオが提案して尋ねた。

「……ウィルです」

「ドンナーです」

二人はおずおずと名を告げる。

「確かに、承りました。じゃあ……これを」

リオはいったん立ち上がると、懐から小袋を取り出し、ウィルに手渡す。

「……これは？」

「彼女の代わりに謝礼を。金銭が入っています」

「べ、別に金が欲しくて助けたわけじゃっ！」

ウィルは泡を食って叫んだ。

「とはいえ、彼女が何かと迷惑をかけた謝礼は必要でしょう。お礼

を渡しそびれたことで、後で気に病むかもしれません」
リオは整然とした口調で語る。
「うっ……」
ウィルは何も言い返せなかった。すると――、
「だ、だったら俺も連れていってくれ！」
と、ドンナーが訴えて――、
「な、何を言っているのだ、馬鹿者！？」
村長が唖然とし、血相を変えて叫んだ。
「くっ、くくく。くだらぬ三文芝居だが、なかなかどうして見どころがあるではないか」
デュランは傍からウィル達のやり取りを眺め、愉快そうに笑っている。
「……連れていくことはできません」
リオは小さく溜息をつくと、きっぱりとかぶりを振った。だが――、
「ですが、ベルトラム王国はここより南西に存在する国です。今の彼女はロダン侯爵領の領都ロダニアという都市に本拠を構えていますから、俺もそこまで彼女を連れていくつもりです。旅する資金も

必要ですし、遠く危険な旅になりますけどね」

と、言葉を続ける。それは暗に後から追いかけるのなら好きにすればいいと言っているようにも聞こえた。もっとも、追いかけてきたところで会える保障などないから、明言はしないが。それを踏まえて好きにしろ、ということだろう。それだけの想いがあるのなら。

ウィルとドンナーは呆けた顔を浮かべていた。

「息災でな」

デュランはフッと笑みを刻んで、リオの背中に声をかける。

「失礼します」

リオはそう言い残すと、今度こそフローラを抱きかかえ、街道に向かって軽やかに駆け出した。その動きは非常に緩やかだが、信じられないほどの速度が出ており、瞬く間に遠くへ消えていく。

デュランはそんなリオの後ろ姿を眺めると――、

「……ふん。奴の一撃を受けた反動でまだ両手が痺れておるわ」

と、鼻を鳴らして呟いた。

（結局、奴がベルトラム王国に所属しているのかはわからず終いであったな。あのような闘神がいる国とは好んで戦をしたくないものだが……）

あまたの戦を潜り抜けてきたデュランであるが、正直、戦場でリオと出くわしたくはなかった。まともに相対すれば命の保証はないだろうと思えるほどに。

（ちょうど落ち着いている頃合いだ。ルシウスが言っていたでかい戦がいつ始まるのかはわからぬが、今のうちに各地の大国の動向に探りを入れてみるのもよいかもしれんな。奴の所属も何か掴めるかもしれん）

デュランは鋭い目つきでそう考えると――、

「おい、貴様ら。すぐに村へ戻って男共を連れてこい。負傷した者達を運ばせる。宿舎の用意もしておけ」

と、傍にいた村長達に声をかけた。

「……へ？」

呆気に取られたウィルとドンナーとは対照的に――、

「は、はい！　直ちに！　お前達、付いてこい！」

村長は真っ先に返事をして、村へと駆けだす。

「お、おい！　親父！」

ウィルとドンナーは戸惑いながらも、すぐに駆け出して村長の跡を追いかける。一人残ったデュランは、周囲に横たわる騎士達を見回すと――、

「不甲斐ない連中だ。少し鍛え直してやるとするか」

リオから受け取った木製の瓶を手にして、騎士達の治療を開始し

た。

◇　◇　◇

一方、戦闘直後にまで時間は遡り――。

リオ達が戦闘を繰り広げていた地点から、一キロほど離れた薄暗い森の奥には、レイスが一人でぽつりとたたずんでいた。その手にはルシウスが使用していた剣が握られていて――、

「肉体は一瞬で消滅してしまいましたか。この剣も後少し回収が遅れていたら、破壊されていたかもしれませんね。まったく、とんでもない威力だ」

と、レイスは珍しく顔を曇らせて呟く。

（困りますね。これは少しばかり困った事態になってしまった。彼にはこれからも色々と働いてもらうつもりだったというのに……）

レイスはそう考えて、じっと剣を見据えると――、

「しばらくは手持ちの駒でなんとかするとしますか」

嘆息して、握っていた剣を手放した。剣は重力に従いスッと落下していく。だが、そのまま切っ先が地面に突きささることはなく、レイスの足元に広がっていた底なし沼のような闇へ、どぷんと吸い込まれてしまった。

（それにしても黒髪の精霊術士、ですか。思い当たる人物が一人いますが……、髪の色は違いますし、精霊の気配もありませんでしたね）

遠めなので顔もよく見えませんでしたし、と、レイスは思案顔を浮かべたまま、その場に立ち尽くして――、

（しかし、あの黒髪の精霊術士が私の知る人物と同一だとしたら、厄介ですね。思った以上に厄介だ……）

しばし物思いにふける。

（しかし、かといってこのままだと、フローラ王女は無事なままレストラシオンへと帰還されてしまう。何のために邪黒飛竜（イビルブラックワイバーン）を出張らせてまで魔道船を襲ったというのか。それもこれもあの男の気まぐれが原因だというのだから、まったく……）

レイスはくつくつと、狂気を孕んだ愉悦の笑みをたたえた。

計算違いばかりだ。そう、計算違いな事態が立て続けに起きている。そして、その計算違いを直に引き起こしているのは、間違いなくあの黒髪の精霊術士だった。

（大人しく帰らせるわけにもいきませんし、少しは爪痕を残しておきたいところですが……）

生半可な戦闘要員を多く用意したところで、一方的な返り討ちに遭うのは目に見えている。だが、それでも、このまま大人しく引き下がるのはあまり上手くはなかった。

ゆえに、レイスはしばし思案すると――、

「……とりあえずは、捕らえた勇者と姫騎士の二人を動かしてみるとしますか」

次善策を思いつき、そのための駒を選定した。

第１５６話　第二王女様の看病

リオはデュラン達と別れると、街道を通らずに南西へ向かった。
フローラの容態がかなりよろしくない以上、今は緊急事態だ。
近くの都市や村を探して移動している余裕があるかはわからないし、仮に連れて行ったところで、見るからに重病なフローラを受け入れてくれるかどうかもわからない。かといって、デュラン達がいる村に戻るのは、話がさらにややこしくなりそうなので論外である。
なので、余計なことを考えるよりも先に、手早く休める場所で治療を行うことにした。しばらくして、人気のない岩場まで移動すると――、

（この辺りでいいか）

リオは立ち止まる。そして、足から地面に魔力を流し込み、精霊術で地盤を整えると――、

「《解放魔術（ディスチャージ）》」

左腕に装着した時空の蔵を使用し、岩の家を出した。

「よいしょ、っと」

リオはフローラを抱えたまま器用に扉を開けると、家の中に入る。

「はぁ、はぁ……」

フローラは今もなお、苦しそうに息をついていた。

「まずは薬か。あとは身体を綺麗にして、寝る場所を用意して、温かくしないと……」

と、リオは呟き、すべきことを列挙していくが――、

（エルフ製の秘薬なら回復するはずだ。問題はどうやって綺麗にするかだけど……）

緊急事態とはいえ、意識のない王族の少女を裸にして洗うのは気が引ける。かといって、野ざらしのまま寝転がっていたからか、何日も同じ格好をしていたのか、今の格好はあまり衛生的ではない。

リオは悩ましそうに顔を曇らせると――、

「とりあえず薬を飲ませよう」

まずは薬を飲ませることにした。考えがあるのか、そのままお風呂場へ移動すると、洗い場のタイルの上にタオルを敷いて、いったんフローラをその上に寝かせてやる。そして――、

「《解放魔術（ディスチャージ）》。……フローラ王女、水と薬を飲みますよ。起きてください」

時空の蔵から水が入った小瓶とエルフ製の秘薬が入った小瓶を取り出すと、少し強めに声をかけて、上半身を起こしてやった。

「うっ……」

と、微かに反応があったところで――、

「フローラ王女、水と薬です。口に入れます」

リオは気道を確保してやり、まずは水が入った小瓶をフローラの口にあてがった。すると――、

「……っ」

フローラは少量だが、なんとか水を嚥下(えんげ)する。

「お見事。今のは水です。次は薬を飲ませますから、少しずつで構わないので、頑張って飲んでください」

リオは続けて、秘薬が入った小瓶を口許にあてがってやった。

「っ……」

フローラは少しだけ秘薬を嚥下する。

「はい、少し休みます……。はい、飲みますよ」

リオはそうやって、時間をかけて薬を飲ませ続けた。数分ほどで必要な量を飲み終えると――、

「次は服と身体を洗います。このままお湯を流して石鹸で洗いますけど、驚かないでくださいね」

次はフローラの服と身体を洗うことにした。秘薬に即効性はないが、これから時間をかけて確実に体内の毒素が中和されていくはずだ。あとは様子を見るしかない。これで駄目なら霊薬を飲ませることになる。

「あ……」

フローラは目を瞑ったまま、首肯するように項垂れた。

「じゃあ、お湯をかけます」

リオはそう言うと、精霊術でお湯を作り出し、フローラの身体を包み込んでやる。お湯を操作し、まずは身体を温めながら、服と全身を濯(ゆす)ぐことにした。

（精霊術の使用に気づかれない分、意識がない方がありがたいか）

リオはそんなことを考えて――、

「そのまま楽にしていて構いませんよ」

と、そう告げた。フローラはすっぽりと顔だけ出して、されるがままお湯に包み込まれている。

一分後、リオはいったんお湯をどかすと、新しくお湯を作り直して、そこに石鹸を混ぜ込んで泡立てた。お湯を操作し、優しく、丁寧に服ごと身体を洗っていく。

最後に髪を洗い、顔も拭いてやると、洗浄は完了した。そして――、

「次は乾燥か……」

今度は身体を冷やさないよう、すぐに乾燥を開始する。

具体的には、衣類に手を触れ、そこから精霊術で水分を吸い取っていく。本当は衣類が傷みやすいので繊細な服には好ましくないが、

今着ている服は村人の服なので、そこは気にしなくても構わない。
そして、濡れた髪には精霊術で温風を当ててやり、時間をかけて乾かしてやると――、

「……終わった」

繊細な作業に神経を使ったのか、リオは疲れを吐き出すように息をついた。薬を飲んで、身体を綺麗にしたおかげか、先ほどまでよりもフローラの顔色は少しだけ良くなった気がする。

「後は寝かすだけ……。余っている部屋を使えばいいか」

どれくらい眠るかはわからないが、最低でも数日は安静にしてもらう必要があるだろう。目を覚ます前に容態が落ち着くようなら、途中で都市に移送してもいいかもしれない。

(俺の名前を聞いていたのか、戦闘を目撃していたのか、目を覚ました時にそれとなく確認しないとな……)

リオはそんなことを考えながら、寝室へと移動する。それから、ベッドの上で横にしてやると、フローラはそのままぐったりと体重を預けてしまった。どうやらもう眠っているらしい。
リオは布団をかけつつ、そんなフローラの顔を見下ろすと、首筋に視線を向けて――、

「……首筋に痕が残らなければいいけど」

ぼそりと、そう呟いた。

第157話　第二王女様のお目覚め

リオがルシウスと戦いを繰り広げ、その場に居合わせたフローラを救出してから二日後の朝。パラディア王国南西部のとある街道、そこから外れた岩場にて。

リオは周囲の岩場に紛れるように設置した岩の家で、フローラの看護を行っていた。

といっても、基本的には気絶したように眠り続けているフローラの容態に異変がないか、見守っているだけだ。

朝目覚めると、フローラを寝かせている寝室へ移動する。すると、フローラはすやすやと寝息を立てて、ベッドで横になっていて――、

（だいぶ長く眠っているけど、熱はもうない。これならそのうち目を覚ましそうだ）

と、リオはフローラの額に手を当て、その容体を確かめた。エルフ製の秘薬が効いているのか、顔色もだいぶ良くなっている。そして――、

（それに、首筋の痣も昨日よりかなり引いている……。これなら痕も残らないかな？）

フローラの首筋から顔と胴体へと侵食しかけていたどす黒い痣も、だいぶ小さくなっていて、色素も薄まっていた。となれば、後はもう、目を覚ますのを待つだけである。

（さて、朝ご飯でも作るかな）

リオは軽く伸びをしてまだ寝起きの身体をほぐすと、フローラが眠る寝室を後にした。

◇　◇　◇

それから、数十分後。

「ん、う……」

寝室に一人で眠るフローラの身体が、もぞりと身じろぎした。

意識が覚醒したのだ。フローラはぼんやりと、重たい瞼（まぶた）を開けてゆく。室内を照らしている魔道具の光はリオによって薄めに調節されているが、長い眠りに就いていた彼女にとっては眩いのか、ぱちぱちと瞬きをして目を細める。

（ここは……？）

見慣れぬ天井が視界に映った。続けて、視線を動かして室内を見回すと、小奇麗な居住空間が映る。

（どこ？　私……）

どうして眠っていたのだろうか？　フローラは白濁とした思考回路で、記憶を振り返る。

（確かお姉様に会いに行こうとして……）

魔道船の中に現れた見知らぬ男二人に、襲われたのだ。そして、パラディア王国の森に飛ばされた。

「っ！？」

フローラは慌てて身体を起こそうとする。だが、身体が重い。まるで鉛が纏わりついているようだ。動かそうとすれば反応はするが、思うように持ち上がらない。

フローラはいったん起き上がることを諦め、代わりにもう一度、室内をよく見回した。すると――、

（誰も……いない）

部屋の中にいるのが自分だけだと確認し、脱力する。動きだすのは、今の状況をもう少し整理してからでも遅くはなさそうだ、と考えて。

（私、村にいて、黙って村から抜け出そうとして……）

力尽きて、倒れた。そこへ村人達がやって来て、危険な病気にかかっていると判断されて、一度は見捨てられた。それで村の青年達に運ばれて、森の入り口に捨てられてしまった。ぼんやりとだが、すべて覚えている。すると――、

「……」

フローラは名状しがたい心理的な胸の痛みに襲われて、顔を曇らせた。

村の人達を責めるつもりはない。自分は一方的に迷惑をかけてしまったのだから、恨むのは筋違いだと、そう思っている。

強いて恨むとすれば、一人では何もすることができない弱い自分だろう。情けなくて、不甲斐なくて、惨めな自分が悪い。そんな自分が堪らなく嫌だった。

だが、今は打ちのめされ、感傷に浸っている場合ではない。何がどうなって自分がここにいるのか、考えなければならない。

（ここは村長さんの家じゃ……ないよね？　パラディア王国に暮らす貴族の人の邸宅、なのかな？）

フローラは立派な部屋の作りや家具を見て、そう思った。やはり自分は捕まってしまったのだろうか、と。

だとしたら、考えられる最悪の展開になっている可能性が高い。待っているのは、人質として利用される未来だけなのだから。

（……そうだ。私、森に捨てられたけど、あの後、誰かが戻ってきた。それで、私を森の外へ運び出してくれて……、ウィルさんとドンナーさん、だったのかな？　でも、すぐにあの男の人の声が聞こえた、私をこの国に飛ばした男の人の声が……）

と、フローラはどんどん記憶をたどっていく。

森から連れ出されてしばらくすると、自分をパラディア王国へ飛ばした男の声が聞こえたことはよく覚えている。その男にひどいことを言われたことも。王族として生きてきた彼女の今までの人生で、最も惨めな体験だった。

だから、あの時、フローラは確かに絶望した。もう駄目だと思った。諦めの念すら抱いた。死にたいとすら思った。でも――、

（……その後、さらに誰かが来たような？）

そう、他の誰かの声が聞こえた。それでフローラは最後の力を振り絞って、薄っすらと目を開けたのだ。

そこには、自分をパラディア王国へ飛ばした男と対峙している、黒髪の少年がいた。だいぶ記憶は怪しいけれど……。その黒髪の少

年が――、

「そう、……オだ。あんたを殺すために、……来た」

――と、言っていた、気がする。

（……黒髪）

顔はよく思い出せない。でも、黒い髪だったことは確かだ。その彼が、鋭い声で、自分を貶めた男と対面していた。

その後、自分を貶めた男の高笑いが聞こえてきた気がするが、そこで意識が完全に途切れてしまった。だから、覚えているのはここまでだ。だが――、

「……り、お？」

フローラは気がつけば、ぽつりと口を動かしていた。あの時、黒髪の少年は「リオ」と名乗っていたのではないだろうか。よく聞き取れなかったけど、そんな気がして、フローラはぶるりと身体を震わせる。

リオ――今もなお、フローラの記憶の片隅にしっかりと刻まれている少年の名だ。その記憶の中の彼が今、強く連想された。

ぼんやりと目にした少年が同じ黒髪だったからだろうか？

わからない。わからないけど、そう思わずにはいられない。だから――、

（私が気を失った後、どうなったんだろう？）

と、強く気になったフローラだった。だが――、

「っ！？」

ぐううと、かつて聞いたことがない悲鳴を上げて、フローラの胃が空腹を訴える。室内には誰もいないはずだが、フローラは気恥ずかしそうにお腹を抱えた。すると――、

「……良い匂い」

空腹を刺激する良い匂いがほのかに漂ってきた。どうやら部屋の扉がわずかに開いているらしい。そこから漂ってきているのだろう。

「っ……」

フローラはごくりと、唾を飲んだ。そういえば寝起きだからか、異様に喉も渇いている。というより――、

（……あれ？　お腹が減っている？）

そう、お腹が減っている。熱を出してから、ずっと食欲がなかったのに……と、フローラはハッと気づいた。そういえば、起きる前より身体の調子もずっといい。

（熱が……ない？）

ぐったりとした疲労感はあるが、熱に伴う寒気や頭痛がしなくなっている。

「治っている……？」

完治しているのかはわからない。だが、良くなっているのは確か

だ。
フローラは呆けた顔を浮かべると、しかる後、今一度、立ち上がってみようと決意した。両手に力を込めて、ぐいっと半身を起こそうと試みる。
だが、やはり鉛のように身体が重い。それでも、すぐには諦めず、なんとかベッドの外へ這い出る。そして、地面に足を着けると――、
「きゃっ！？」
フローラは立ち上がろうとして、転んでしまった。足に力が入らないのだ。
どうして？――と、疑問が浮かんだが、今はそれどころではない。転んだ衝撃で、決して小さくない物音が立ってしまった。
（どうしよう？　どうしよう？）
フローラはパニックになり、慌ててベッドに上ろうとする。だが、少しして、キィと部屋の扉が開く音が響いた。
フローラはびくりと身体を震わせる。恐る恐る扉を見やると――、
「……おはようございます」
そこには、灰色の髪をした少年が立っていた。
◇　◇　◇
「……おはようございます」
灰色の髪をした少年――リオは、ベッドの傍で倒れるフローラを発見すると、目を丸くして声をかけた。

「あ、その……おはよう、ございます」

フローラはどぎまぎと返事をする。

「お目覚めのようですね。……起きられますか？」

リオは扉の横に設置された魔道具を操作して室内の灯かりを強くすると、フローラに歩み寄って、そっと手を伸ばした。

「……ありがとうございます」

フローラは眩しさで目を細めつつも、礼を言いながらリオの手を掴む。軽く引っ張ってもらって、そのまま起き上がろうとするが――、

「っ、きゃ！？」

力が入らず、そのままリオの脚にもたれかかってしまった。

「大丈夫ですか？」

リオは面食らってフローラを案じる。

「は、はい！　ご、ごめんなさい！　力が入らなくて、その！」

フローラは慌てて起き上がろうと身じろぎした。あたふたと手を動かし、リオの腰を掴んで立ち上がろうとする。だが、余計に体勢が際どくなっていく。

「落ち着いてください。抱きかかえますから、失礼いたしますね」
リオは苦笑交じりに嘆息すると、フローラを抱きかかえて持ち上げた。
いわゆるお姫様抱っこである。ここでフローラはようやくリオの顔をじっくりと見つめるに至った。至近距離から視線が重なると――、
「す、すみません！」
と、フローラは頬を紅潮させて謝罪する。
「いえ、ベッドに寝かせますね」
リオは落ち着いた声でかぶりを振って、フローラをベッドまで運んでやった。そのままそっと、マットレスの上に降ろしてやるが――、
「……」
フローラがじっとリオの顔を見つめたまま、ギュッと服を掴んでいる。
リオは離れることができず――、
「どうかなさいましたか？」
と、困り顔で尋ねた。
「あっ、いえ、その、貴方はアマカワ卿……、ハルト様ですか？」

フローラは恐る恐る尋ね返す。

「……ええ、覚えていてくださり、光栄です」

リオは微かに間を置いて、恭しく頷く。

「あの、貴方が……私を助けてくださったのですか？」

フローラはリオの顔を覗きこんで尋ねた。

「ええ。覚えていらっしゃいませんか？」

リオは淀みなく首肯して、尋ね返す。

「……はい。記憶が、ぼんやりとしていて、あまり……」

フローラは顔を曇らせて首肯した。ただ、その瞳は真っ直ぐと、今もリオの顔を窺うように捉えている。

「無理もありません。すごい熱でうなされていましたから」

リオはフローラの記憶が曖昧なことを確信すると、心の内でこのままハルトとして振る舞うことを決めた。

「あの……、でも……、いえ、何があったのか、教えていただけないでしょうか？」

フローラは何か訊きたそうに口ごもると、そんなお願いをする。

「ええ、構いませんよ」

リオは二つ返事で了承した。すると――、

「っ！？」

ぐううと、フローラのお腹が再び悲鳴を上げる。直後、フローラは顔を真っ赤にして、硬直してしまった。室内に漂っていたややぎこちない空気が霧散してしまう。

リオはくすりと口許をほころばせると――、

「とりあえず食事にしましょうか。すぐに準備いたしますので」

と、提案する。

「す、すみません！」

フローラは慌ててリオの服から手を離し、お腹を押さえた。それでようやくリオに自由が戻る。

「いえ。失礼いたします」

リオは踵を返し、キッチンへと向かった。

だが、フローラはそんなリオの背中をじっと見つめていて、頬の紅潮がわずかに引いてくると――、

「……似ている？」

ぼそりと、呟いた。

第１５８話　第二王女様の今後

リオが朝食を用意しに退室した後、フローラは最後に意識を失う前に見た――気がする黒髪の少年のことを、悶々と考えていた。

（リオ様、なのかな？　でも、髪の色が違うし……）

ついさっき、ハルトは自分がフローラを助けたと言っていた。となると、最後に意識を失う前に目撃したのはハルトだ。髪色は灰色だから、黒髪に見えたのはフローラの見間違いだった可能性が高い。

だが、ハルトはどことなくリオに似ている気がする。というより、そんな気がしてならない。だから、フローラはつい当時のリオの容姿を頭の中に思い浮かべて、ハルトの容姿と重ね合わせてしまう。

リオはちょうど成長期真っ盛りに突入する手前にいなくなってしまったから、今に至るまでの間に身長も顔つきも声もだいぶ男性的になっているのだろうが、ハルトみたいに成長しているのではないだろうか。とはいえ――、

（……わからない。もう少し、詳しく話を聞いてみないと）

自分が意識を失っている間に何があったか、フローラはまだ話を聞いていない。現在地はパラディア王国なのか、村人達はどうなったのか、自分をパラディア王国へ飛ばした男はどうなったのか、そもそもどうしてハルトがあの場に現れたのか、訊きたいことは山ほどある。それに――、

（もしかしたらアマカワ卿以外にリオ様がいる可能性もある……のかも？　私の勘違いな可能性だって……）

と、フローラは思った。当時、あの野外演習の後に捜索隊が編成されたが、崖の下にリオの遺体は見つからなかったという。となると、リオが生きている可能性は高い。
それなのに、リオがベルトラム王国の王立学院に戻ってこなかったのは、自分の扱いを知ってしまったからだろう。指名手配まで受けてしまったのだから。
そんなリオが今、ベルトラム王国関係者の前に好き好んで姿を現すはずがない。というより、リオが生きているとしても――、
（……私なんかと関わりなんか持ちたくない、はずだよね。詮索しちゃいけないのかな？）
と、フローラは思い至る。果たして安易にその正体を突き止めようとしてもいいのだろうか？　仮にフローラが意識を失う前に見た少年がリオだったとして、自分はどうしたいのか？　フローラにはわからない。しかし――、
（……それでも、本当にリオ様なら）
フローラは逸る気持ちを抑えられず、忸怩たる想いで顔を曇らせる。理由は上手く言語化できない。だが、それでも訊きたいと思う気持ちが込み上がってくることが、何故か抑えられなかった。
そうして、フローラの理性と感情がせめぎ合っていると――、
「っ！？」
トントンと、室内にノックが響き渡る。フローラの身体はびくりと震えた。

◇　◇　◇

「食事の用意ができました」

リオはそう言って、フローラのベッドの隣に設置されたテーブルの上にトレイを置く。

「あ、ありがとうございます」

フローラは恐る恐る礼を言って、リオの顔をそっと窺った。

「まだ体調が万全ではないでしょうし、胃に負担がかからないように、軽いものを作ってみました」

リオが鍋の蓋を取る。すると、中に封じ込められていた香りがふわりと立ち込め、フローラの鼻孔を擽った。あれこれ思い悩んではいるが、今のフローラは極限の空腹状態にある。美食への誘惑を断ち切ることはできず――、

「……良い匂い。これは？」

フローラは思わず目をみはり、鍋に視線を吸い寄せられた。

「粥です。王族の方が口にするような料理ではないのかもしれませんが」

と、リオは説明する。

「粥……。いえ、最近、食べたことがあります。勇者様がお暮しになっていた世界の食材に似ているからと、勇者様が手ずからお作り

になっていましたので」
「それは重畳。でしたら私の説明は不要ですね。お注ぎいたします」
「……は、はい。お願いします」
フローラはごくりと唾を飲んで首肯した。その視線はやはり鍋へと吸い寄せられている。
「ああ、一応、毒見が必要でしたら、私がさせていただきますが……」
リオが思い出したように、念のため、毒見を申し出ると――、
「い、いえ、大丈夫です！」
フローラはとんでもないと言わんばかりに、強くかぶりを振った。
「畏まりました。それでは、熱いのでお気をつけください」
リオは椀にお粥をよそって、注意を促す。お椀の中身は少なめの穀物に豆腐、細かく刻まれた鶏のささみ肉と白髪ねぎによって具材が構成されている。そこに少量の白ゴマがまぶされて、塩ベースと思しき透明のスープを彩っていた。
「はい！」
フローラは美しい椀の中身に目を輝かせると、嬉しそうに首肯する。おずおずと手を伸ばして、椀の取っ手を掴む、が――、
「あう……」

椀を持ち上げようとするその手は、ぷるぷると震えている。自力で持ち上げられないことはなさそうだが、少しばかり危なっかしい。

「……あまり力が入りませんか？」

リオはスッと目を細め、フローラの手元を見やる。

「は、はい……」

フローラは不安そうに頷いた。

「毒の後遺症かもしれませんね」

「え……？」

リオが理由を推測すると、フローラは呆然と疑問符を浮かべる。

「森に棲む蜘蛛の毒にかかっていると伝え聞いておりますが、ご存じありませんでしたか？」

「……は、はい。熱だと思って、あっ、でも、もしかしてあの時の蜘蛛、かも？　朝、森の中で朝起きたら、首筋がチクッとして……」

呆け顔で頷くフローラだったが、蜘蛛を見つけてパニックに陥った時のことを思いだすと、ハッと顔色を変えた。

「……おそらくはそれが理由だと思います。攻撃的な蛇や蜘蛛は毒を有していると聞いたことがありますから」

と、リオは首肯して語る。一瞬の間があったのは、フローラが一人で森の中で眠っている光景を想像して、流石に痛ましい気持ちになったからだ。いったいどうしてそんな目に遭っていたというのか、

と。

「だから私、症状がどんどん悪くなって……」

フローラの顔は真っ青になる。

「遅効性の厄介な毒だったせいか、発見が遅れたみたいですね。とはいえ、手持ちの魔術薬（ポーション）で解毒いたしましたので、どうぞご安心を」

リオはフローラを落ち着かせるべく、柔らかい声で告げた。

「……あ、ありがとうございます」

フローラは心底ホッとしたように息をつくと、深々と、何度もリオに頭を下げる。

「いえ。お気になさらず、体調の回復にお努めください。一応、お椀は持てるようですし、後遺症に関してはもう少しだけ様子を見てみましょうか」

リオは微笑してかぶりを振った。

「……はい」

フローラはリオの顔をじっと見つめ、少し気恥ずかしそうに頷く。すると――、

「というわけで、とりあえずそのお椀をお貸しいただけますか？」

リオがベッドの傍にある椅子に座って、フローラに手を伸ばした。

「……はい、え？」

フローラは言われるがままリオにお椀を差し出すも、すぐに不思議に思って小首を傾げる。

「恐れながら給仕させていただきます。少し冷めて、ちょうど食べ頃かもしれませんね。熱いようでしたら仰ってください」

と、リオは自らの行為が意味するところを説明しながら、木製のスプーンで中身を掬って、フローラの口許に運んでいく。

「え！？」

フローラは顔を真っ赤にして面食らった。

「今の状態では手を動かして召し上がるのも一苦労でしょう？」

「は、はい……」

リオが問いかけると、フローラは気恥ずかしそうに頷くが――、

「あの、では、お願い……します」

覚悟を決めたのか、目を瞑って、小さく口を開いた。その頬は熟れた桃のように紅潮している。目を瞑ったままでは、食べづらい気がしないでもないが――、

「では、入れますよ？　口に当てます」

リオは何も突っ込まず、断りを入れてから、そっとスプーンをフ

ローラの口許にあてがってやった。この歳になって子供みたいな真似をしてもらうことが、恥ずかしいのだろうと思ったから。

「はむっ」

フローラは小動物のように口を閉じて、もぐもぐと咀嚼する。ややあって――、

「美味しい……」

パッと目を見開き、ごくりと飲み込んだ。

「それは良かった。たっぷりと召し上がってください」

リオはくすりと笑うと、丁寧な手つきで次の一口をスプーンに掬い、お椀を下に添えてフローラの口許に運んでやる。

「……はい」

フローラはおずおずと頷いた。恥ずかしそうに頬は赤らめたままだが、今度は目を閉じることはしない。目のやり場に困ったように視線をさまよわせながらも、上目遣いにリオの顔を見つめて、スプーンを口の中に入れてもらった。

「熱くはありませんか？」

ちょうど咀嚼が終わったタイミングで、リオが尋ねる。

「は、はい。ちょうどいいです。本当にすごく美味しくて、アマカワ卿が作ったのですよね？」

「ええ、一人で各地を旅しているものでして、よく料理を作っています」
「そうなのですか。各地を……」
フローラは関心を示したように目をみはった。すると――、
「そのおかげで偶然にフローラ様の窮地に遭遇することができました」
と、リオが告げる。
「……あの、それでは、やはりアマカワ卿が私を助けてくださったのですよね？」
フローラは恐る恐るその事実の再確認する。
「はい、然様でございますが……」
リオは首肯して、質問の先を促すべく首を傾げた。フローラが何かを訊きたそうだったから。すると――、
「私の記憶だと、村の方々の他に、私を捕まえようとしていた人達もいたはずなのですが、彼らはどうなったのでしょうか？　色々と気になりまして……」
フローラが質問の意味を補足する。まあ、当然の疑問だろう。
「では、恐れながら給仕しながらお話をさせていただいても？」
「はい、もちろんです」

リオは食事と事情の説明を併行して行うことにした。
フローラはやや硬い声で頷く。すると――、
「畏まりました。結論から申し上げると、フローラ様を捕らえようとしていた者達にはお引き取り願いました」
リオは過程を省き、まずは端的に結論から語った。
「それは……、どのように？」
フローラは小首を傾げて尋ねる。あの状況で大人しく帰ってもらえたとは思えないのだ。
「無論、戦闘を経てです」
リオが静かに告げると――、
「っ、それは、私のために危険な真似を……」
薄々と予想はしていたのであろうが、実際に戦闘があったと聞いて、フローラの顔つきが変わった。
「いえ、私の目的は元より別にあったと申しますか、あの場にいたとある男にあったものですから。仮にフローラ様があの場にいらっしゃらなくとも、戦闘は発生していたことでしょう」
リオはバツが悪そうに苦笑して、かぶりを振る。
「えっと……、では、本当に偶然だったのですね」
「ええ。フローラ様を捕らえようとしていたのはパラディア王国の

王子が率いる部隊でしたが、私が追いかけていた男はその王子に雇われていた傭兵でした。私はその男のことをずっと探していたんです。最近になって、その男がパラディア王国にいると知りまして」

「……どうして、その男の人を？」

フローラがリオの顔色を窺いながら、恐る恐る質問すると――、

「……両親の仇だからです」

リオがやや硬い声で答えた。

「っ、す、すみません。立ち入ったことを訊いてしまい……」

フローラは慌てて謝罪する。

「いえ、もう終わったことですから。それに、その辺りのことを教えないまま、円滑にご説明することもできないでしょう？」

リオは諦観の笑みをたたえて、フローラの顔を見据えた。リオとしても中途半端に情報を伏せることで、あれこれ下手に勘繰られても面倒である。この辺りのことは包み隠さずに説明すると、あらかじめ決めておいたのだ。だが――、

「あの、その……」

フローラは返答に窮してしまう。重たい事実を何のためらいもなく突きつけられて、躊躇しているのだろう。

「最終的に私が傭兵の男を仕留めたことで、王子が率いる部隊とは手打ちと相成りました。戦闘の過程で王子の部隊にも相応の被害を

与えましたので、当面は彼らからの追手を心配する必要はないかと……。どうぞ」

リオはそんなフローラの心情を知ってか知らずか、さらに詳細に経緯を語った。そして、タイミングを見計らっていたかのように、フローラの口許にスプーンをあてがう。

「……はい」

フローラはこくりと頷き、スプーンを口に含んだ。

「それと、村人の方達とも一応は円満に別れましたので、そちらもご安心を。ウィルとドンナーという二人が、フローラ様のことを心配していましたよ」

リオはさらに、村人達のことを教えてやる。

「そうですか、あのお二人が……」

フローラは複雑そうに顔を曇らせた。

「何か気がかりでも？」

「……いえ、色々とご迷惑をおかけしてしまったなと。書き置きと一緒に、村長様の家にお詫びの品を置いてはきたのですが、きちんとお別れはしませんでしたし」

「お詫びの品を……」

リオはわずかに目を丸くする。謝礼の名目でリオも決して少なくない金銭をウィルに渡してきたからだ。とはいえ、あの時のウィルの様子だとフローラが残していたお詫びの品とやらに気づいていた

様子はない。となると――、

（あの場には村長もいた。黙っていたのか？）

と、リオはやや呆れがちに想像した。まあ、あの場ではそれを言いだせる雰囲気でもなかったのだろうし、それを話し合っていたところで余計に話が面倒になっていただろうから、黙って貰っておいてくれた方がありがたい。だから――、

「でしたら、何も問題はないでしょう。念のため、私からも多めに貨幣を渡しておきましたから」

リオはやや呆れがちに微笑して、フローラを励ました。

「えっ、そ、そうだったのですか？　申し訳ございません、本来ならば無関係のアマカワ卿にご負担をおかけしてしまい……」

フローラは事実を知り、慌てて頭を下げる。

「いえ、あの場から円滑に立ち去るための名目でもあったので、お気になさらず。どうぞ」

リオは軽い調子で言って、かぶりを振った。そして、再びフローラの口許にスプーンをあてがう。

「あの……、はい」

フローラは申し訳ないと思うと同時に、なんだか子ども扱いされているようで、恥ずかしそうにスプーンを口に含んだ。

そして、ここぞとばかりに、リオの顔をおずおずと見つめると―

――、

（やっぱり、似ている？）

と、そんなことを思う。

学院時代にリオと話したことなんて本当に数えるほどしかないのだが、学院内でリオを見かける度に、気がつけばその姿を視線で追っていた。ずっと話してみたかったからだ。立場や周囲の目など気にせず、話してみたかったから。リオに憧れていたから。

だから、もしかしたら成長したリオかもしれないと思う人物が現れた今、フローラは数年ぶりに当時の感情を鮮明に取り戻していた。目の前にいる相手のことを強く知りたいと思う。

だが、フローラがあまりにもまじまじと見つめているものだから――、

「……あの、どうかなさいましたか？」

リオが戸惑い顔で首を傾げた。

「あっ、いえ、その、そ、そういえば、ここはどこなのでしょうか！？」

フローラはハッと我に返ると、思いついた質問をあたふたと口にする。

「パラディア王国の南西部のとある岩場です。ここはそこにある私の隠れ家でして、まあ、さらに南西に進むと、ルビア王国があります」

リオは岩の家の情報は適当にはぐらかして、現在地の情報だけを

伝えた。

「パラディア王国……」

フローラは顔を曇らせる。徒歩で移動するとなると、ベルトラム王国までの距離は生半可ではないからだ。すると――、

「……私からもいくつか、伺ってもよろしいでしょうか？」

リオが質問の許可を求めた。

「はい、もちろん」

フローラは二つ返事で了承し、質問する側が変わる。

「どうしてフローラ様はパラディア王国にいらっしゃるのでしょうか？」

リオはまず、フローラがパラディア王国にいる理由を尋ねた。すると――、

「……姉に会うため、魔道船に乗ってガルアーク王国からロダニアへ向かっていました。ところが、船の中で私の部屋に侵入してきた二人組の男性がいまして……、最初は私のことを殺しにきたと言っていたのですが、不思議な石を放り投げられて、気がつけば一瞬でパラディア王国の森へ飛ばされてしまいまして」

と、フローラは順を追って、説明する。

「不思議な石で、一瞬でパラディア王国へ？　その、殺しにきたの

に？」

リオは怪訝そうな顔を浮かべた。

（転移魔術が込められた結晶か？　そんな物まで所持しているのか。けど、殺すだけならわざわざパラディア王国へ飛ばす理由はない）

と、考えながら。

「えっと、このまま殺すのが惜しくなったとか、おまけがどうとか言って、運が良ければ助かるかもしれない、と。おそらくは空間魔術が込められた古代魔道具（エンシェントアーティファクト）だと思うのですが……」

フローラはおずおずと当時の状況を語る。

リオは微かに目を見開くと――、

「その魔道具を使った人物の名前はご存じですか？」

と、尋ねた。

「いえ……。あっ、でも、私が村の外で最後に意識を失う前に、パラディア王国の王子と一緒に行動していた傭兵ではないかと。くろ……アマカワ卿が討たれたという、ご両親の仇の……」

フローラはそう語って、恐る恐るリオの顔色を窺う。

「……然様ですか。確かに、あの男なら気まぐれでやりかねませんね。人を騙して陥れることに喜びを感じる、醜悪な性格をしていますから」

リオは得心し、不快そうに顔をしかめた。

「……」

フローラは何か訊きたそうな面持ちを覗かせるが、口を開くことはしない。ただ、薄々と目の前にいるリオの両親がそうやって殺されたのだろうと、想像した。

「失礼いたしました。恐れながら最後にもう一つだけ、ご質問をお許しください」

リオは苛立ちを吐き出すように小さく息をつくと、恭しく頭を下げて最後の質問の許可を求める。

「何でしょうか？」

フローラが承諾すると――、

「最低でもあと数日はこちらで養生なさるとして、その後、フローラ様はどうなさるおつもりですか？」

リオは落ち着いた声で、フローラの今後の動向を確かめた。

「それは……、お姉様に会いに、なんとかロダニアへ行こうと思っています……」

フローラは悩ましそうに答える。お姫様育ちの彼女にとって、容易な旅にならないことは、その身をもって体験済みだからだ。

リオもそのことは聞くまでもなく承知している。実際、パラディア王国で為す術もなく野垂れ死にそうになっていた。だから――、

「……よろしければロダニアまで、私がお連れしましょうか？」

リオはそう申し出た。過去を振り返ると少し形容しがたい複雑な想いはあるが、元より送り届けるつもりでフローラをあの状況から助け出したのだから、きちんと役目を果たすつもりで。だが――、

「えっ……？」

フローラは呆けた顔でリオを見つめる。まさしく不意を突かれたといった感じだ。それがリオには少し意外で――、

「では、どのようにロダニアへ向かうつもりなのですか？　お金と、移動手段と、道中の身の安全の確保と、旅慣れしていないフローラ様には色々と荷が重すぎるのではないかと愚考いたしますが……」

と、リオは問いかけた。予想としてはそのまま当然のように護衛をお願いしてくると思っていたのだが、他に何かしらの当てでもあるのだろうかと不思議に思う。すると――、

「あの、ですが、アマカワ卿に悪いので、これ以上のご迷惑をおかけするわけには……」

フローラはひどく申し訳なさそうに語って、いたたまれない様子で俯いた。

「いえ、元より知り合いに会うため私もロダニアへ向かう予定ですので、そこまで重く受け止めていただかなくともよろしいのですが……。それとも、他にお考えがおありですか？　ならば無理にとは申しませんが」

リオはフローラがそこまで遠慮する理由がいまいちわからず、その出方を探るように顔色を窺う。一瞬、もしかしたら警戒されているのかなとも思ったが――、

「その、お金は……、所持している物を処分すればなんとか工面できると思うのですが、考えというほどの案は、そのお金で案内役と護衛を雇うくらいしか。同盟国のルビア王国まで行けば、助力を請うこともできるでしょうが……」

と、フローラが口にした案を聞いて、それはないのかなと判断する。

「ルビア王国を頼るのはともかく、冒険者の類を護衛として雇うなら、お勧めしかねますね。高い金額を提示すれば実力者を雇うことはできるかもしれませんが、相手の人間性は保証できませんし、下手をすると素性を勘ぐられる恐れもあります。ここはまだパラディア王国内ですよ？」

リオは半ば呆れた様子で難色を示すと、最後にバツが悪そうに言う。下手な人物を護衛に雇えば、却ってフローラの身に危害が加えられかねない。

「それは、そう、なのですが……」

と、歯切れの悪い物言いをするフローラ。

「私のことは信じられませんか？」

リオが思いきって尋ねてみると――、

「……へ？　い、いえ、そんなことは！　アマカワ卿は信頼できる人物だと思います！　で、でも、信頼できるお方だからこそ、頼るわけにはいかないといいますか……！」

フローラは血相を変えて、慌てて主張した。

リオはその勢いに目を丸くすると――、

「……でしたら、私を頼っていただけませんか？　ここでフローラ様を放置すれば、クリスティーナ様のお怒りを買ってしまいそうなので。それに、私の知り合いにも顔向けができません」

くすりと笑って、そう語りかける。

フローラは「うっ」と、言葉に詰まってしまった。そして――、

「お姉様と……、お知り合いの方、ですか？　我が国の貴族の方でしょうか？」

と、恐る恐る尋ねる。

「はい。クレール伯爵家の、セリア様です」

「え、セ、セリア先生ですか！？　セリア先生がロダニアに！？」

リオがセリアの名を告げると、フローラは目を見開く。

「ええ、実はクリスティーナ様をロダニアまで護送するにあたって、私もお手伝いをさせていただきまして、セリア様も同行なさっていたんです」

「アマカワ卿が……、お姉様とセリア先生をロダニアまで？」

フローラは目をぱちくりと瞬いて訊いた。

「はい。エマール伯爵家のヴァネッサ卿もいらっしゃいますよ。現状だと証明はできないのですが……、いえ、確か通行証の代わりにと、別れ際にクリスティーナ様からブローチを賜わりました。何ならご覧になりますか？」

「え、あ、はい……」

リオが水を向けると、フローラは呆け顔で首肯する。

「では、取ってきましょう。鍋の中身も少し冷めてしまったので、温め直してきますね」

リオはそう言い残すと、トレイを持ってスッと立ち上がった。そして、フローラの返事を待たず、そのまま退室していく。

「お姉様と、セリア先生を、アマカワ卿が……」

フローラはなお呆然した面持ちを浮かべたまま、ぼそりと呟いた。それだけ今の話が、リオがクリスティーナやセリアと関わりを持っていることが、衝撃的だったのかもしれない。

◇　◇　◇

そして、数分後、リオはブローチと温め直した鍋を持参して、フローラのもとへ戻る。

「どうぞ」

と、リオは机の上に鍋が乗ったトレイを置くと、フローラにブロ

ーチを提示する。

「これは、お姉様の……」

フローラはブローチを受け取ると、愕然と目を見開いた。ややあって、ちらりとリオの顔を見やって――、

（王家の、お姉様の紋章が入ったブローチ……。お姉様が自分の紋章が入った私物を渡すほどに、アマカワ卿は信用されているんだ）

と、そんなことを考える。普通、王族は自分の紋章が入った私物を無暗に誰かには渡さない。渡すとすれば、よほどに信に値すると判断された人物だけだ。ましてやあのクリスティーナが貴族とはいえ他国の人間にそんな物を渡すなんて、かなり意外だった。

（お姉様もアマカワ卿がリオ様かもしれないって、思っているのかな？　その上でこれを渡した？）

もしかしたら既に二人の間でその事実が共有されている可能性だってある。もっとも、仮にそうであるのならば、既にその話はしてくれている……だろうと思うが、少し自信は持てない。

（いや、でも、アマカワ卿がリオ様と決まったわけでもないし……）

そう、現状ではそもそも本当にハルトがリオかどうかすらわからない。単なるフローラの思い込みかもしれないのだ。

そうして、色んな考えや疑問が頭をもたげて、フローラが延々とリオの顔とブローチに視線を行き来させていると――、

「信じていただけましたか？」

リオが流石に痺れを切らし、微苦笑して水を向ける。

「そ、それは、最初から、はい！」

フローラは慌てた様子で、こくこくと頷いた。すると――、

「では、改めて伺いましょう。よろしければロダニアまで、フローラ様をお連れしましょうか？」

リオは姿勢を正し、再度、落ち着いた声でフローラに問いかける。

しばし、フローラは葛藤し、忸怩たる面持ちを覗かせたが――、

「……お願い、します。このご恩は必ず、私自身が必ず、お返しすると誓います。だから、どうか私をロダニアまで連れていってください」

フローラは深々と頭を下げた。今度は恩を仇で返すような真似はしない、他人任せにもしない――と、そう誓って。

「畏まりました。お任せください。では、出発の前に体調を戻さなければなりませんね。お話はいったん中断して、しばし食事に集中しましょうか。今度は冷めないように」

リオは恭しく頷いた。そして、微笑しながら、食事の時間にしようと提案する。

「……はい！」

フローラは元気よく返事をした。

「では、どうぞ」

そう言って、リオは粥を掬ったスプーンをフローラに差し出す。

フローラは上品にスプーンを口に含んだ。そして――、

「……美味しいです」

と、泣きそうな声で、嬉しそうに言う。

「ありがとうございます。デザートにリンゴを摩り下ろしたジュースもございますので、しっかりと召し上がってください」

久しぶりに満足に食事をできているのかもしれない――リオはそう思って、優しくフローラに語りかけた。

第１５９話　服が綺麗になった理由

フローラをロダニアまで送り届けることが決まり、朝食を給仕し終えると――、

「それでは少しお待ちください」

「はい」

リオは食後のお茶を淹れに、いったんキッチンへと戻った。フローラはそんなリオの後ろ姿を、やや緊張気味に見送ると――、

（……美味しかったな、アマカワ卿の手料理）

小さく息をついて、肩の力を抜く。そして、久しぶりの満腹感に口許をほころばせ、至福の余韻に浸り始めた。

一時は毒に全身を蝕まれて、野たれ死にそうになっていたのだ。それが温かくて美味しいご飯を食べさせてもらって、暖かくて快適な部屋でリラックスできているのだから、幸せを感じないはずがない。

しかも、もしかしたらリオかもしれない人物に優しくしてもらって、たくさんお喋りもできている。本当にリオなのだとしたら、学院時代には想像できなかったことだ。

それが堪らなく嬉しくて――、

「ふふふ」

フローラは声を抑えきれずに微笑んだ。

どうして自分ばかりがこんな目にと思ったこともあったが、今は

こんなに幸せでいいのだろうかと思えるくらいには、心が満ち足りている。
もちろんリオのことも、今後のことも、考えるべき事柄はたくさんあるが、せめて療養させてもらっているこの時だけは、この幸せに浸っていてもいい……はずだ。

（本当に夢みたい、あんなにひどい目に遭ったのに……）

フローラはふと、ここ最近の出来事を振り返る。着の身着のまま森をさまよい野宿して、高熱にうなされて、ルシウス達に身柄を狙われたことを。すると――、

――くっ、ははは。そりゃあ何日も風呂になんか入ってないでしょうからねえ。こんなに汗もかいているし、そら臭いでしょうよ。おう、姫様。意識はありますか？　臭いそうですよ。

意地悪く高笑いをする、ルシウスの声が脳裏に響いた。

「っ……」

フローラはその時の羞恥心と恐怖心を思い出し、びくりと身体を震わせる。今思い出すだけでもトラウマになりかねないほどに嫌な出来事だった。だが――、

（駄目だ。せっかく助けてもらったんだから、楽しいことを考えないと）

嫌な思いを振り払うように、フローラは強くかぶりを振った。もっと明るいことを考えるべきだと、大きく深呼吸をして、心を落ち着かせる。

そうして、嫌な記憶を頭の隅に追いやるように、深呼吸を繰り返して呼吸を整えるが、何か大切なことを見過ごしている気がした。そう、乙女の尊厳に関わるような……。すると――、

（……あれ？）

フローラはふと気づいたように、すんすんと鼻を動かした。
別に変な臭いがするわけではない。だが、フローラはそれでもすんすんと鼻を動かし続ける。それから、しばらくすると、とたんに硬直して――、

「っ！」

フローラの顔は一気に赤くなった。
直後、フローラは自分が着ている服――ちょうどお腹らへんの生地――を慌てて顔に手繰り寄せ、すんすんと臭いを嗅ぎ始める。

（変な臭いは……、しない、よね？）

と、それを確認し、まずはホッと安堵の息をつく。もしも変な臭いがしていて、リオに嗅がれていたらと想像すると、恥ずかしくてたまらなかった。
だが、すぐに沸き起こってくるのが疑問だ。ルシウス達はフローラのことを臭いと言っていた。それはフローラ自身も聞いていたから覚えている。
なのに、今は特に鼻を刺激するような臭いは感じられない。少なくともフローラが嗅ぎとれる感じでは、だが。

（私の鼻がおかしくなっているわけじゃない、よね？）

フローラは服の生地を掴んだまま、再びすんすんと鼻を動かす。しかし、やはり変な臭いがするというわけではない。というより、むしろ――、

「良い、匂い？」

そう、ほんのりと良い香りがする。それに――、

「服が綺麗になっている？」

フローラは小首を傾げて、自分が着ている服を見つめた。着ている服は村にいた頃と変わっていない。だが、どことなく綺麗になっている気がするのだ。

となると、導き出される事実は――、

「……アマカワ卿が、洗ってくださったんだ、よね」

それしかない。

服を洗ったということは、身体も洗ったのだろうか。身体を洗うには、普通ならば服を脱がす必要があるわけで、あられもない姿をさらすことを意味する。

つまりは、もしかしたらリオに見られてしまったのかもしれないわけだ。自分の裸体を。全裸、あるいは半裸など、成長してからは父親にすら見せたことがないというのに……。

「っ……！？」

フローラはその事実を推測すると、照れくさそうに頬を赤らめた。だが、不思議と嫌な感じはしない。そう、少なくとも生理的な嫌悪感はない。思考が麻痺しているのだろうか。と、そう思ったが―

――、

「……っ、アマカワ卿に、私！」

そんなことはなかった。

そうであるのなら、羞恥心でこんなに全身が火照っているはずがない。そう、フローラの顔は一気に紅潮している。顔と全身から火が出てしまいそうなほどに、恥ずかしさを覚えていた。どきどきと胸の高鳴りが止まらない。

（ど、ど、どどど、どうしよう！？）

フローラは瞬く間にパニックに陥ってしまう。

これならばやはり変な臭いがしていた方がよかったかもしれない――と、お腹周りの生地を掴んで再びすんすんと鼻を動かすが、やはりほのかに良い香りしかしてこない。

でも、変な臭いを嗅がれるよりは、やっぱり良い香りを嗅いでもらった方がいいのかもしれない。でも、でも……と、フローラの思考は二転、三転していく。もはやオーバーヒート寸前だった。

（見られちゃったのかな？　見られちゃったんだよね、たぶん。うう、どうしよう……）

フローラは捲り上げたお腹の生地をギュッと掴んだまま、ぴたりと硬直してしまう。お腹の肌が露出したまま服の臭いを嗅ごうとしているので、ちょっと危うい格好になっている。

すると、トントンと、扉をノックする音が響く。だが、フローラは思考に没頭しているのか、一向に気づく様子はない。部屋の扉はずっと開きっぱなしになっているので、外から中は丸見えだ。

扉の外にはリオが所在なさげに立ち尽くしていて――、

（……もっと強くノックした方がいいのか？）

と、困り顔で、引きつった笑みを浮かべている。お茶を淹れて戻ってみれば、フローラが自分の服を捲し上げているものだから、堂々と入っていくことができないのだ。

そう、リオは既に室内の光景をばっちりと目撃してしまっている。知らぬはフローラだけだ。リオは今もなお顔を真っ赤にして匂いを嗅ぎ続けているフローラの様子を、扉の外からそっと窺うと――、

「……フローラ様、お茶をお淹れしました。中へ入ってもよろしいでしょうか？」

少し大きめの声で入室の許可を求めた。

「……へ？」

フローラは流石にリオの声に気づいて我に返ると、部屋の扉が開きっぱなしになっていることにも気づく。

「お茶をお淹れしましたので、中へ入ってもよろしいでしょうか？」

リオはフローラが自分の声に気づいたことを察すると、改めて部屋の中へ向けて声を発した。

「ひゃ、ひゃい！」

フローラはびくっと身体を震わせて首肯する。

リオはふうっと小さく息をつくと――、

「失礼します」

きちんと断ってから、入室する。その間に衣類の乱れを整えているだろうと思ったのだが――、

「……」

フローラはいまだに服を捲し上げたままだった。ほんのりと頬を紅潮させたまま、気恥ずかしそうにリオに視線を向けている。

「……っ、お着替え中でしたか？」

リオは咄嗟に視線を逸らす。着替えなんて用意していないので、着替えをしているはずがないのだが、他に上手い台詞が見つからなかった。

しかし、それでようやく――、

「え？　あ……！？」

フローラは自分が何をしていて、リオにどう見られているのかを察する。もしかしなくとも自分はすごく変な子に思われているんじゃないだろうか。そう思って、顔を真っ赤にすると――、

「こ、これは、違うんです！」

フローラは捲し上げた生地を慌てて元に戻しながら、上ずった声で弁明を開始した。

「……ええ、承知しております」

リオは何と応じればいいのかわからず、とりあえずフローラの弁を認める。

「わ、わかるんですか？」

フローラは意表を衝かれたように、目を見開く。

すると、リオは悩みに悩む。フローラの行動の一部を見ていたから、何となく臭いを気にしているのであろうことはわかっている。だから――、

「いえ、その……、お着替えをご所望ですか？」

と、ぎこちなく答える。流石に「服の臭いが気になりますか？」と率直に尋ねることはできなかった。

「い、いえ、そ、そういうわけではないのですが、わ、私の服は……、ア、アマカワ卿が洗ってくださったのですか？」

フローラはあたふたとかぶりを振ると、もじもじと気恥ずかしそうに尋ねる。

「……はい。恐れながら、治療にあたって衛生面にも気を配る必要があると愚考しましたので」

リオはやむを得ず首を縦に振った。

「あ、ありがとうございます……。その、変な臭いはしなかったですか？」

フローラは顔を真っ赤にして礼を言うと、リオの顔色を窺うよう

におずおずと質問する。

「……はい、そのようなことはございませんでしたが」

真実はともかく、リオはポーカーフェイスを装ってかぶりを振る。体臭よりも先に意識がない状態で身体を洗われた事実を気にするべきではないかとも思ったが、藪蛇なので突っ込むことはしない。

「……ほ、本当に？」

フローラは恥ずかしそうにしつつも、じっとリオの顔を見つめた。

「ええ」

リオは笑みを取り繕って首肯する。他にどんな顔をすればいいのかわからないのだ。

「よ、よかった……、あっ、でも……」

フローラはホッと安堵の息をつく。だが、すぐに何かに気づいたのか、再び頬を赤らめだした。そして、リオの顔をちらちらと窺う。そうして、フローラが慌てふためいているせいか――、

（意外と表情豊かな子だな）

リオは却って冷静に、フローラのことを分析していた。物静かで控えめな子という印象を抱いていたが、案外そんなことはないようだと、ややバツが悪そうな顔で認識を改める。すると――、

「あの、その、服と一緒に、私の身体も、その……」

フローラが消え入りそうな声で呟いた。リオはしっかりとその声を聴き取る。

追及されたとあれば、白を切るわけにもいかないのだろう。

「看護の一環とはいえ、意識のない間に王族の方の裸を盗み見れば問題になると、服を着ていただいたまま洗わせていただきました。誓っていかがわしい真似はいたしておりませんが……」

信用するかどうかはフローラ次第だ。

「そ、そうでしたか……。ありがとうございます」

フローラはひどく恥ずかしそうに俯き、礼を言った。どうやら納得はしてくれたようだ。いや、もしかすると、深く尋ねるに尋ねられないだけかもしれないが。

「いえ、まだ体調が万全でないのでお風呂に入っていただくわけにはいきませんが、後でお湯とタオルをお持ちしましょう。女性用の服は持ち合わせがないので、着替えは私の服になってしまいますが……」

リオはあえてそれ以上の弁明はせず、話を流すように提案した。すると――、

「は、はい！　ぜひ、お願いします！」

フローラはそそくさと頭を下げる。リオの顔を直視することはできないのか、そわそわと視線をさまよわせていた。

第１６０話　出発

フローラが目を覚ましてから、二日が経過した。毒の後遺症なのか、一時的に全身の筋力が衰えていたフローラだったが、なんとか自分一人で食事を口にし、寝室の中を歩き回れる程度には、順調に回復している。

そこで、今日からは寝室の外に出て、日常生活に支障がないのか、試しに確認してみる運びと相成った。

ドワーフ達力作の岩の家は、王族のフローラから見ても高い居住性を誇るのか、興味深そうに住宅内を見回していたが、中でも最も強い関心を示したのが、お風呂である。

「使い方は以上ですが、何かご質問はおありですか？」

リオは浴場にある魔道具や石鹸類の使い方を含めて、お風呂の入り方をフローラにレクチャーすると、脱衣所へ移動しながら問いかけた。

「あ、いえ、大丈夫……です」

フローラは周囲を見回しながら、恐る恐るかぶりを振る。浴場施設に意識を奪われているのか、気もそぞろと言った様子だ。

リオはタオルと一緒に、フローラの着替えとして自分のシャツと上着を籠に入れると――、

「では、タオルと着替えはこちらに置いておきますね。何かあれば……、そうですね。大きな声でお呼びください」

思案顔を浮かべて、語りかけた。もしかすると王族の入浴には手伝いがいるのが当たり前なのかもしれないが、流石にリオが一緒に入るわけにはいかないだろう。使い方だけ説明して、あとは自分で入ってもらうことになる。

「は、はい。ありがとうございます」

フローラはやや緊張気味に首肯した。

「では、失礼いたします。どうぞごゆっくり」

リオはそう言い残すと、静かに脱衣所から立ち去っていく。フローラはそんなリオの後ろ姿を眺めて、完全に脱衣所から退室していくのを確認すると――、

（……なんか緊張しちゃう）

小さく息をついて、脱力した。岩の家にいるのはリオ――ハルトとフローラだけなので、この二日間で色々と話す時間はあったのだが、距離が縮まった気はあまりしない。

（もっとお話ししたいのに……）

そもそもハルトから何か距離や壁のようなものを感じるからというのもあるが、フローラ自身、ハルトを前にすると、上手く言葉が出てこないのだ。話をしてみたい気持ちはあっても、何を話せばいいのかがわからない。

異性と話をするのが苦手と言うのもあるが、ハルトが相手だと普段以上に上手く喋れないのがわかる。口下手な自分がもどかしかった。

（お姉様やロアナだったら、もっとうまく喋れているのかな）

と、フローラはそう思って――、

「はあ……」

今度は大きくため息をつく。広々とした脱衣所にぽつりと立ち尽くす姿は、寂しげだった。それから、しばらくすると、おもむろに服を脱ぎ始める。

借りているリオの服はぶかぶかで、上半身のシャツだけですっぽりとフローラの上半身から膝上のあたりまでを覆っていた。

「……よいしょ」

着慣れていないせいか、それを脱ぐ動作は微妙にぎこちない。あいにくと今は一着しかない下着は洗濯中なので、服を脱げばそのまま全裸となる。成長期真っ盛りの身体は女性的で、艶めかしい。

フローラは服を脱ぎ終えて棚にしまうと、とことこと歩きだして、浴場へ向かった。扉を開放すると、そこには――、

「うわあ……、やっぱりすごい」

豪勢な浴場施設が広がっていた。奥行きが広く、高い天井に、岩肌がむき出しになった壁。石のタイルが敷かれた広々とした洗い場の奥には、これまた広々とした浴槽が控えている。王族のフローラがこれまでに使用してきた浴場施設が、貧相に見えるほどの立派な造りだ。

吐湯口（とゆぐち）からはお湯が止めどなく供給されており、湯船からは白い湯気が立ち上って、浴場内に漂っている。

（どうやってこんな立派な施設を岩場に作ったんだろう？）

と、フローラは圧倒されながら室内を見回す。

リオからはあまり詮索や吹聴はしないでほしいと、やんわりと告げられている。助けてもらっている身分で首を横に振ることなどできるはずもないが、これだけの施設を目にしておいて、好奇心を完璧に押し殺せというのも酷な話だ。気にならないはずがなかった。

とはいえ、今はそんなことを考えるよりも――、

「まずは髪と身体から洗うんだよね」

早くここのお風呂に入ってみたい欲求の方が強かった。リオに教えてもらった手順通り、髪と身体を洗ってから、お風呂に入ることにする。お湯を出す魔道具の使い方や、色々と置かれた石鹸の用途は教えてもらっているが――、

「わっ、お湯が出た！」

「わっ、この石鹸、すごく良い匂い！」

などと、フローラは新しい物に触れる度に、驚きの声を上げて、嬉しそうに顔をほころばせる。わしゃわしゃと泡立つ極上の石鹸が、優しくフローラの髪と身体を包み込んだ。

そうして、たどたどしい手つきで、全身をくまなく綺麗にすると、いよいよ湯船に浸かってみることにした。こんなに広くて深いお湯の浴槽に浸かるのは、フローラも初めての経験である。恐る恐る足から身を沈めていくと――、

「っ、ぁっ……」

ちゃぷん。あまりの気持ちよさに、フローラは艶めかしい声を上げる。正直、最高だった。ぽかぽかと、身体の内側まで温かくなっていくのがよくわかる。

（……これがヒロアキ様が仰っていた浸かるお風呂なんだよね？）

そういえばと、フローラは以前に弘明が「たまにはゆっくりと湯船に浸かりたい」と、言っていたことを思いだす。確かにこれは癖になりそうだ。

（気持ちいい……）

フローラは全身の力を抜いて、お湯の温かな感触に身を委ねた。本当は湯船に髪をつけない方がいいのだが、そこら辺の知識は男性のリオには欠けていて、説明されていなかったのか、ぷかぷかと長い髪が浮かんでいる。フローラは自分の髪を手で掬い取って弄ぶと――、

（もっとお話したいな。アマカワ卿……ううん、ハルト様と）

再び、リオのことを考える。この二日間、二人だけで暮らしていて、フローラはハルトにリオの面影を強く感じていた。

いったんハルトのことをリオと思ったからだろうか。顔つきだけでなく、仕草や口調など、何から何までリオのように見えてしまうのだ。ハルトがリオなのか、確認したい気持ちが、日に日に強まっていくのを感じる。

だが、果たしてそれは叶うのだろうか。それを望んでもいいのだろうか。フローラにはわからない。でも、ハルトがリオなのかを抜きにしても、ハルトとは色々と話をしてみたいとも思っている自分も確かにいた。

そうして、あれこれハルトのことを考えていると――、

「……っ」

気がつけばぼうっとしていて、フローラはハッと我に返った。

（そろそろ出ようかな）

そう思って、おもむろに立ち上がると――、

「っ！？」

すっかりのぼせてしまったのか、眩暈を覚える。二本の足で立つことができず、再び湯の中に座ってしまった。

（あれ、これ大丈夫なのかな？）

と、フローラは不安になる。これまでの人生でのぼせるという経験が皆無だったせいか、これが毒の後遺症なのではないかと、危惧したのだ。

視界は真っ白になりそうなほどにぼやけて、心臓がばくばくと鼓動している。フローラは堪らなく不安になって――、

「あ、あの！　アマカワ卿、いらっしゃいますか？」

少し大きめの声を出して、リオを呼んだ。浴場内にフローラの声が響き渡る。しかし――、

「……」

リオからの反応はない。

「あの、アマカワ卿……、ハルト様、いらっしゃいませんか？　ハルト様、ハルト様？」

フローラは再び大きな声で、リオを呼んだ。だが、やはりすぐにはリオがやって来ることはなかった。

「……ハルト様ぁ」

フローラは消え入りそうな声で、不安そうにリオの名を呟く。すると、しばらくして、脱衣所の入り口の扉が開く音が聞こえてきて――、

「……フローラ様、恐れながら、お呼びでしょうか？」

リオが脱衣所と浴場の扉の前までやってきて、扉越しにはっきりとした声色で、フローラに語りかけた。

「は、はい！　よかった……」

フローラはパッと表情を明るくし、心底ほっとしたような声を出す。

「いかがなさいましたか？」

リオは少し心配そうに、フローラに問いかける。

「あ、あの、実は強い眩暈がしてしまいまして、視界がぼーっとして、立ち上がることができなくて……。毒の後遺症か何かでしょう

か？」

フローラはお湯に浸かった状態で自らの症状を説明すると、不安そうに尋ね返した。すると――、

「……恐れながら、それはのぼせられたのではないでしょうか？」

リオがやや拍子抜けしたような口調で、おずおずと語る。

「……のぼせる？」

フローラは不思議そうに小首を傾げた。

「はい。熱いお湯に長く浸かっていると、体内で血液の循環が活発化しまして、頭に血が上ってしまうんです。それが原因で立ち眩みや眩暈を覚えることを、のぼせるといいます」

と、リオはすらすらと、のぼせた際の症状を語る。

「え、あ……、えっと、その……、じゃあ、毒の後遺症では？」

フローラは困惑気味に尋ねた。

「絶対に違うとは断言できませんが、おそらくは違います。ひょっとしなくとも、長い間、湯に浸かられていて、急にお立ちになろうとしたのでは？」

リオが回答して、逆に訊き返すと――、

「……は、はい。実は……」

フローラは恥ずかしさで顔を真っ赤にして頷いた。とはいえ、熱々のお湯に全身で浸かるタイプのお風呂が一般的でないシュトラール地方では、のぼせるという症状を体験したことがなくとも無理はないのかもしれない。ましてやフローラは箱入りのお姫様なのだから。

「急な血圧の変化に、脳がびっくりしたんでしょうね。大丈夫、一時的な症状ですので、ご安心ください」

リオはフローラを安心させるように、優しく語りかけると――、

（世話の焼けるお姫様だな）

と、おかしそうに口許をほころばせる。扉の向こう側では、今もなおフローラが湯に浸かっていて、顔を真っ赤にしているのだが、リオが知る由はない。すると――、

「あの、では、どうすればよいのでしょうか？　お風呂からは出た方がいいですよね？」

フローラが恐る恐る質問した。

「はい。ただ、焦らず、ゆっくりとお動きください。あと、お風呂の外に出たら、床に座るか横になるか、とにかく低い姿勢でじっとしてください。そうすればすぐに回復するはずです」

と、リオはのぼせた時の対処法を教えてやる。

「わ、わかりました」

フローラは早速、リオに言われたとおりに行動を開始することにした。おずおずとお湯の中を動いて、湯船から出ると、ぺたりと地面に座り込む。湯船から出る際に、やはり強い眩暈を覚えたが――、

（……すぐにって、どれくらいだろう？）

フローラはふと、そんなことを思った。二十秒くらい待って、試しに立ち上がろうとしてみる。

（もう立てる、かも？）

なんだかいけそうな気がした。ぐっと力を込めて、立ち上がってみる。すると、先ほどのような強い眩暈はもう感じなかった。

「あの、ハルト様、治りました！」

と、フローラは嬉しそうに報告する。リオは名前で呼ばれている事実に、今更ながらわずかに目を丸くしたが――、

「……それは良かった。湯冷めするといけませんので、軽くお湯で身体をお流しになってから出られるとよろしいですよ」

フッと微笑して応じた。フローラ自身、緊急時の流れで無意識にリオのことをハルトと呼んでいるのかもしれない。

「はい、ありがとうございます！」

フローラは元気よく返事をした。

「それでは、失礼いたしますね」

リオはそう言い残すと、踵を返して静かに立ち去っていく。ややあって、脱衣所の扉が閉まる音が聞こえてきた。すると――、

「……あっ」

フローラの顔が微妙に紅潮する。よくよく冷静に考えると、裸のまま、薄い扉の向こう側にいるハルトと話をしていたのだ。それがなんだか無性に恥ずかしく思えてしまった。そして――、

（……あれ、そう言えば私、アマカワ卿のことをハルト様って言っちゃった？）

ふと我に返り、先ほどまでの自分の発言を振り返る。緊急事態で心細くなっていたのか、大胆な発言をしてしまったが、今になると途端に恥ずかしく思えてくる。

（な、馴れ馴れしかったかな）

と、頬を染めるフローラ。悶えるように自分の身体を軽く抱きしめると、桶でおもむろにお湯を掬って、身体にかけた。そのまま、とぼとぼと脱衣所へと向かっていく。

それから、脱衣所に戻ってタオルで身体を拭き、置いてあったリオのシャツと上着に着替えると、意を決してリビングへと向かう。そこにはリオがいて――、

「あ、あの、ハ、ハルト様、良いお湯でした。先ほどは、その、ありがとうございます！」

フローラはぎくしゃくと、リオに礼を言う。もはやアマカワ卿とは呼ばなかった。恐る恐るリオの反応を窺うと――、

「いえ、身体が冷えるといけないので、温かいお茶をご用意しました。どうぞ召し上がってください」

リオは特に気にした様子もなく、微笑してかぶりを振る。ふと覗かせたその笑みは、かつての学院時代に、リオがセリアに向けていたもののように見えて――、

「は、はい。頂きますね」

フローラはハッと目を見開き、気恥ずかしそうに頷いた。

◇　◇　◇

そして、さらに二日後。いよいよリオとフローラがベルトラム王国に向けて出発する日がやってきた。岩の家の外に出ると――、

「わあ、岩でできた家だったんですね。だから、岩場に……」

フローラが興味深そうにその外観を見上げる。何気にフローラが家の外に出るのは、体調が回復してから今日が初めてのことだ。リオはそんなフローラを見据えると、思案顔を浮かべて――、

「……はい。では、出発の前に、まずはこちらへお越しいただけますか？」

そう言って、おもむろに歩き始める。

「……はい？」

フローラは疑問符を浮かべつつも、てくてくとリオの後を追いかけた。ちなみに、今のフローラはリオに借りたシャツの上に、これまたリオに借りた外套を羽織っている。

（どこへ行くんだろう？）

と、フローラが首を傾げて、岩の家から五十メートルほど離れると――、

「少々こちらでお待ちください。あの隠れ家を隠してきますので。すぐに戻ります」

リオがフローラに語りかけた。

「え？　あ、はい」

フローラはおずおずと頷く。それを確認すると、リオは一気に駆け出して岩の家の方向へ戻っていった。それから、一分もしないうちに、リオは戻ってくる。

「あれ、もうよろしいのですか？」

フローラは不思議そうに尋ねた。

「ええ。あの家は少し特殊でして、恐れながらその秘密はお教えできないのですが……」

と、リオは少しバツが悪そうにはぐらかす。
「い、いえ。尋ねませんし、口外もしません。そういうお約束ですから！」
フローラは慌てて語った。
「恐れ入ります。それでは、今度こそ出発しましょうか。まずは手ごろな都市へ移動して、そこでフローラ様の服を買いましょう」
「すみません、何から何まで……」
「いえ、お気になさらず」
リオは飄々（ひょうひょう）とかぶりを振ると――
「とりあえず、当面の移動は私がフローラ様を抱えて走らせていただきますが、よろしいでしょうか？　病み上がりで歩き回るのは大変でしょうし、その方が早く着くと思うので」
と、フローラに提案した。本当は空を飛んだ方が早いが、流石に空を飛べることは伏せておきたい。
「……え？　あ、はい。もちろん！」
フローラは一瞬、呆けた顔を浮かべたが、こくこくと頷きだす。確かに、それが合理的だと思ったから。とはいえ――、
「では、失礼いたしますね」
リオが抱っこするべく、すぐ傍にまで近づいてくると――、

「っ……」

フローラは緊張し、微かに身体を強張らせた。

「えっと、本当に抱きかかえてもよろしいのでしょうか？」

リオはフローラの緊張を察したのか、おずおずと確認する。

「は、はい、大丈夫です！　あっ、でも、その、重いかもしれませんが……」

フローラはあたふたと頷いた。

「大丈夫ですよ。では、今度こそ失礼いたしまして……」

リオは微笑してかぶりを振ると、あっさりとフローラの華奢な身体をお姫様抱っこしてしまった。

「あう……」

フローラの顔は一気に赤く染まっていく。

「スピードは控えめにいたしますが、移動中はしっかりとお掴まりください」

と、リオが注意事項を告げると――、

「は、はい」

フローラは恐る恐る頷き、リオの黒いコートをギュッと掴む。

「えっと、よろしければ抱きしめるようにしていただいた方が安全かなと」
「へ！？　あ、は、はい！　こ、こうですか？」
リオが困り顔で言うと、フローラはおっかなびっくりとリオに抱き着く。
「はい、結構ですよ。では、出発させていただきますね」
「お、お願いします」
リオはフローラの返事を確認すると、身体強化を施して軽々と駆け出した。
「わわわ」
フローラは思わずリオに抱き着く力を強める。
「しばらくこのまま走ってみますが、怖かったら仰ってください」
「はい！」
リオが呼びかけると、フローラは力強く返事をした。そうしている間にも、瞬く間に景色が変わっていく。まるでリオの足か背中に羽でも着いているように、ふわりふわりと進んでいた。
「す、すごい！　すごいです、ハルト様！」
フローラは興奮気味に叫ぶ。
「お楽しみいただけているようで何よりです」

リオは穏やかに口許をほころばせる。まだまだ速度を上げることはできるが、景色を楽しむのならば、この程度がいいだろうと考えて。

そうして、二人の旅は順調な始まりを迎えているように思えた、のだが――、

「……ようやく出発ですか。それでは、私も参りましょうか」

遥か上空から、豆粒ほどにしか見えない地上のリオ達を俯瞰しているレイスがいた。

第１６１話　それぞれの想い

岩の家を出発してから、小一時間が経過した現在。リオとフローラはパラディア王国南西部のとある都市に接近して、街道付近の岩陰に潜んでいた。

リオはフローラをいったん地面に降ろすと――、

「フローラ様、都市に入る前に、少しよろしいでしょうか？」

と、語りかけた。

「はい、何でしょうか？」

フローラは小首を傾げてリオに応じる。

「これからフローラ様の旅支度を整えるため都市に入るのですが、念のため、変装なさっておいた方がよろしいのかなと思いまして」

「変装……ですか？」

「ええ、こちらの首飾りをご装着ください」

リオはそう言って、フローラに首飾りを差し出した。

「はい……、えっ！？」

フローラは不思議そうにしつつも、リオに言われるがまま首飾りを着用する。すると、薄紫色の長い髪が、瞬く間に水色へ変化した。そのことに気づき、フローラは目を見開く。

「髪の色を変える魔道具です。首飾りを外せば元に戻りますので、ご安心を」

と、リオが告げると――、

「そんな、魔道具が……、っ」

フローラは呆然と呟いた。だが、ややあってハッと目を見開き、吸い込まれるようにリオの灰色髪を見やり、続けて胸元へ視線を向ける。そして、リオの胸元、少なくとも外から目に見える範囲には、同じ首飾りが着用されていないことを確認した。

もっとも、リオはタートルネックの厚手なクロースアーマーを着用しているので、もしかしたら衣類の内側に身に着けているのかもしれないが。

リオはフローラの視線の動きに気づいたが――、

「……どうかなさいましたか？」

そ知らぬ振りを決め込んで、フローラを見つめ返した。

「あっ、いえ！」

フローラは慌ててかぶりを振る。

「一般には流通していない術式を使用した魔道具ですので、無暗に口外はなさらないでいただけると幸いです。流通させるつもりもございませんので」

「……は、はい」

リオが語りかけると、フローラはおずおずと頷く。

「それと、念のため、都市の中ではフローラ様のことを偽名でお呼びしてもよろしいでしょうか？　……そうですね、例えば『ローラ』など、いかがでしょうか？」
「……あ、はい。構いませんが、でも偽名を使うなら、元の名前と関係のない方がいいのでは？」

フローラは不思議そうに質問する。

「おそらく元の名前と何の関係もない偽名だと慣れるまで時間がかかるでしょうし、咄嗟には反応しづらいのかなと愚考しました。それに、確かに安直かもしれませんが、『ローラ』でもその弊害は多少なりともおありなのでは？　もちろん他の偽名がよろしいのであれば、そちらでお呼びしますが……」

と、リオが説明すると――、

「あ、なるほど。確かに違和感がありますね……」

フローラは目をみはって得心した。

「左様でございましょう。それに、いざ偽名を考えるとなると、案外難しいのではないかなと」

リオは微苦笑して語る。

「……はい」

確かにその通りだと、フローラは納得しつつ――、

（リオとハルトは、まったく関係のない名前……だよね）

と、そんなことを考える。髪の色を変える魔道具の存在を知ってしまったせいか、ここでも再びハルトがリオなのではないかという疑念がぶり返してきたのだ。

とはいえ、今、ハルトが語った理屈に準拠するならば、「リオ」という名前の人間が「ハルト」という偽名を用いるとは思いにくい、ように思えてくる。それとも、何らかの関係性や意味が込められているのだろうか。あれこれ勘ぐるが――、

（わからない）

考えているうちに、なんだかよくわからなくなってきた。すると――、

「……何か良い偽名をお考えですか？」

リオがフローラの顔をじっと見据えて尋ねた。

「あっ、いえ、そういうわけでは！　えっと、では、その……ローラでお願いします。あはは、違う名前を名乗るというのも、なんだか気恥ずかしいですね」

フローラはハッとしてかぶりを振ると、はにかみながらローラと名乗ることを決めた。自分ではない自分に変わるみたいで、なんだかこそばゆいのだ。だが、その一方で――、

「畏まりました、ローラ様」

リオは恭しく『ローラ』と、フローラを偽名で呼ぶ。そうやって、

何の臆面もなくリオに偽名で呼ばれたものだから――、

「は、はい……」

フローラは思わず頬を紅潮させて、照れくさそうに返事をした。

◇　◇　◇

それから、リオ達は都市に入り、真っ先に富裕層向けの衣類を取り扱っている洋服屋に向かった。そして、店の中で――、

「……あの、どうでしょうか？」

フローラは自分で見繕った旅装束を試着して、リオにその姿を見てもらった。

丈夫で、丈の長いワンピースに、膝上まで伸びる厚手のハイソックス、そして革のロングブーツ。シンプルだが動きやすくて、清楚で、可愛らしいデザインである。

「とてもお似合いでいらっしゃいますよ」

リオは鷹揚にフローラを褒め称えた。決してお世辞ではない。実際、すぐ傍にいる女性の店員も、接客を忘れてフローラの可愛らしさに見惚れている。

「ありがとうございます」

フローラは照れくさそうにはにかんだ。

「サイズはいかがでしょうか？　既製品ですので、よくご確認くだ

さい」
「えっと、たぶん大丈夫だと思うのですが……」
リオが問いかけると、フローラはその場で身体を捻って、動きやすさを確認する。その物言いは少しだけ自信がなさそうだ。着慣れないタイプの服なだけに、判断ができないのだろう。
「現時点で特に違和感がおありでないのでしたら、問題ございませんよ。候補の一つとして、キープしておきましょう。他にもいくつかご覧になってから、最終的に購入する品をお選びください」
「はい」
それから、フローラはしばらく試着を繰り返した。王族ともなると市井での買い物すら自由にできないからか、貴重な体験に目を輝かせて選んでいる。
リオはフローラから意見を求められるたびに、「お似合いですよ」と感想を口にした。服を見る目にあまり自信がないので、参考になるアドバイスができないのだ。
とはいえ、フローラは買い物が楽しいからか、リオに似合っていると言われるだけで、堪らなく嬉しそうな笑顔を覗かせている。そうして、一通りの試着を終えると――、
「どれがよろしいでしょうか？」
フローラがリオに尋ねた。
「そうですね。正直なところ、服のセンスにはあまり自信がないので、どれもよくお似合いだとしか……」
リオは困り顔で答えて、頭を掻いた。

「そんなことはないですよ。あの家の中でハルト様が着ていらっしゃった服はどれもとてもお洒落でした」

と、フローラは岩の家でリオが着ていた普段着を思い浮かべながら語る。どれも小奇麗で、リオによく似合っている服だと思ったから。すると――、

「ああ、あそこで着ていた普段着は、美春さ……いえ、他の人に選んでもらったものばかりなので」

リオは懐かしそうに微笑し、かと思えば、すぐに翳りを帯びた笑みを覗かせて答えた。そういえば、何度かアマンドに買い物へ行って、普段着を選んでもらっていたなと、懐かしそうに思い出す。

復讐を果たした今、ふと脳裏に浮かんだ彼女の顔は、とても眩しかった。私怨で人を殺し、血塗られた自分が薄汚く思えるほどに。

「……そう、なのですか」

フローラはリオの表情の変化から何かを機敏に感じ取ったのか、複雑な面持ちを浮かべた。そして――、

（ミハル……さん、確かハルト様が保護していた異界の女性の名前だった、よね？）

と、ガルアーク王国の夜会で美春を見かけた時の記憶を掘り返す。だが、実際に話をしたわけではないので、どのような人物なのかはわからない。

ただ、とても可愛らしくて、綺麗な女性だったことは記憶している。いったいリオとはどのような間柄だったのだろうかと、フロー

ラはなんだか無性に気になった。すると――、

「そういうわけなので、ローラ様がお気に召した品でよろしいと思いますよ。携行できる荷物の量を踏まえると、二着か三着がちょうどいいかと」

微妙な空気になってしまったことを察したのか、リオが話をまとめてしまう。

「……はい」

フローラはおずおずと頷く。だが、微妙に間を置いて――、

「でも、その、一着はハルト様が選んでいただけないでしょうか？」

と、そんなお願いをする。

「私が、ですか？」

リオは意外そうに目を丸くした。どうしてフローラがそんな申し出をしたのか、理由がわからなかったから。

「駄目、でしょうか？」

フローラはリオの顔色を窺うように尋ねた。

「いえ、そのようなことはございませんが……、承知しました。では、恐れながら、選ばせていただきます」

リオは戸惑いつつも、快く了承する。別に手間がかかるわけでは

ないし、自分が所属しない国とはいえ、王族の頼みとあらば、そう簡単に無下にはできない。何よりフローラが不安そうに見つめてくるから。すると――、

「ありがとうございます！」

フローラは嬉しそうに破顔した。

◇　◇　◇

場所は変わって、セントステラ王国。第一王女であるリリアーナの私室で、本日も美春による日本語レッスンが開催されていた。

椅子に座り、二人で向き合うと――、

「それでは、本日もよろしくお願いいたしますね、ミハルさん」

リリアーナが講師役の美春に深々と頭を下げる。

「はい、こちらこそよろしくお願いいたします、リリアーナ様」

美春も折り目正しくお辞儀を返した。だが、頭を上げて、真正面からリリアーナを見据えると、彼女の顔色が優れないことを察して――、

「……リリアーナ様、恐れながら普段よりもお顔の色が少しだけよろしくないのでは？　お加減はいかがでしょうか？」

リリアーナの身を案じた。

すると、室内にいる唯一の侍女、フリルが小さく嘆息して――、

「ほら、ミハル様もそう仰っているではないですか。私の目が節穴というわけではなさそうですよ。あまりご無理はなさらないでくださいませ、リリアーナ様」

と、リリアーナに諫言するように、開口する。どうやら美春と会う前に、フリルからも顔色が悪いと指摘を受けていたらしい。

「お加減が悪いようでしたら、今日の講義はお休みにさせていただきますよ？」

美春は心配そうに水を向けた。だが、リリアーナは少しだけバツが悪そうに笑みを浮かべると――、

「大丈夫、それには及びませんよ。実はミハルさんからお借りしている辞書の文字を見るのが面白くて、つい夜更かしをしてしまったんです」

大したことはないと、かぶりを振る。

「それは……、きちんとお休みにならないと。フリルさんも心配されますよ？」

美春は困り顔で、フリルを見やった。

「ええ、ミハル様が仰る通りでございます」

フリルは力強く賛同する。

「ふふ、ありがとうございます、ミハルさん。それに、フリルも。でも、本当に大丈夫ですから。この程度で弱音を吐いていたら、王

族としての公務も果たせませんもの」

と、リリアーナは惚れ惚れするような笑みで語った。

「一日程度の夜更かしなら、私も目をお瞑りいたしますが……」

フリルは小さく息をついて、嘆かわしそうに呟く。その口ぶりからリリアーナが何日も睡眠時間を削っていることが窺えるが、美春には聞こえない程度の声量に抑えられている。

「それはそうと、今日も辞書から気になる文字を探してみたんです。その意味を早くミハルさんに伺いたくて、教えてくださいな」

リリアーナはフリルに申し訳なさそうな笑みを向けつつも、明るい声でそう言って、一枚の紙を取り出した。この紙にリリアーナが気になった文字や単語が書かれているのだ。

「畏まりました。本日はどのような単語をお調べになったんでしょう、か……」

美春はリリアーナから紙を受け取り、記載された文字を眺めると、思わず硬直した。そこに『臆病』『無気力』『意地汚い』『醜い』『未練』『死』といったマイナスな意味を持つ単語ばかりが羅列されていたから。

「……どうかなさいましたか？」

リリアーナは恐る恐る尋ねて、美春の顔色をじっと窺う。

「あっ、いえ、お選びになった言葉の意味が、どれも暗いものばか

りだったので……」

美春は笑みを取り繕って、硬直した理由を語った。他にもリリアーナが選んだ言葉はたくさんあって、マイナスな意味を持たないものも交ざっているからただの偶然なのだろうが、無作為に選んで、マイナスな意味の言葉が最初に連続したのは少しすごいなと感心する。

「……まあ、そうなのですか？」

リリアーナはわずかな間を置いたものの、驚いたように目をみはってみせた。

「ええ。単語の数も多いので、とりあえず順番に意味をお教えしますね」

美春はさして気にも留めずに、その日の講義を始める。

「お願いいたします」

と、頭を下げるリリアーナの顔色はやはり悪く、その声色も微かに強張っているような感じがした。

第１６２話　その頃　その五

場所はパラディア王国の南西に位置する隣国のルビア王国。そこのとある廃村を、ルビア王国の第一王女シルヴィ＝ルビアが、侍従の少女を引きつれて歩いていた。

シルヴィと侍従の少女は冒険者ふうの剣士然とした格好をしており、剣呑な面持ちを浮かべている。二人はかつて村長宅だったと思しき寂れた家の前まで移動すると、扉の先で立ち止まった。そして――、

「シルヴィ王女殿下、ここは私が」

侍従の少女がそう呟いて、シルヴィを見やる。

「頼む、エレナ」

シルヴィは小さく頷き、侍従の名を呟いた。侍従の少女――、エレナはそれを確認すると、家の扉を一定の回数、淀みなくノックする。

すると、ややあって、家の扉がギイッと音を立てて開いた。そこから二十代後半の男性、アレインが顔を出す。

アレインはまず前に立つエレナの顔を一瞥し、続けて後ろに控えるシルヴィの顔を確認すると――、

「これはようこそ、お待ちしておりました。姫騎士と名高い殿下にお会いできて光栄ですな。どうぞ中へ」

慇懃無礼な口調と所作で、二人を家の中に誘(いざな)った。そのまま踵を

返して、さっさと中へと戻ってしまう。

「……ふん」

エレナはシルヴィの代わりに不機嫌そうに鼻を鳴らすと、ずかずかとアレインの後を追った。シルヴィも嘆息してそれに続く。

「まあどうぞ、適当なところにおかけください」

アレインはすたすたとリビングまで移動すると、シルヴィとエレナにそう告げた。室内にはどこから持ち運んできたのか、小奇麗な家具が設置されている。

エレナはやや意表を突かれたのか、物珍しそうに室内を見回した。すると――、

「こいつはどうも」

奥のソファでくつろいでいた二十代後半の大柄な男性、ルッチの姿を発見する。ルッチは軽薄な笑みをたたえて、エレナとシルヴィを歓迎した。

「ちっ」

エレナは明らかに不愉快そうに舌打ちする。だが、その一方で――、

「……あの男はどうした？」

シルヴィが淡々と室内を観察しており、アレインに問いかけた。

「あの男、ですか？」

と、アレインはとぼけてみせる。

「レイスのことだ」

シルヴィは微妙に語気を荒らげた。すると――、

「ああ、レイスの旦那なら火急の用事ができたらしく、ふらりとどこかへ行っちまいました」

ルッチがしれっと答える。

「何だと？　そちらの都合で呼びだしておいて……」

エレナは思わず怒気を発して抗議した。すると、アレインがやれやれと嘆息し――、

「まあまあ、そうカッカなさらず、指示なら我々が承っておりますので」

と、小さく肩をすくめて語る。

「ならば、私をこの場へ呼びだした理由をさっさと聞かせてもらおうか」

シルヴィはスッと目を細めて、アレインに水を向けた。

「あー、一つは抗議するため。もう一つはその代償にこちらの頼みを追加で聞いてもらおうってことでしょうかね」

「……抗議だと？」

アレインがぽりぽりと頭を掻きながら答えると、シルヴィは訝しそうな顔を浮かべる。

「いえね、実はシルヴィ第一王女殿下の妹君であらせられるエステル第二王女殿下を救出しようと、レイス様に襲い掛かった少年がいましてね」

「なん、だと……？」

シルヴィは寝耳に水だといわんばかりに、目を見開いて硬直した。

「おい、ルッチ。連れてこい」

「おう」

アレインが指示すると、ルッチはおもむろに立ち上がって隣の部屋へと向かう。それから、しばらくすると――、

「……おい、どういうことだ？」

シルヴィはなんとか困惑を押し殺して、アレインに尋ねた。

「ははは、あくまで白をお切りになりますか。まあ、ご覧いただいた方が、話が早そうですな」

そう言って、アレインが嘲笑をたたえると――、

「おらよ」

ルッチが隣の部屋から戻ってきて、手足を枷で拘束された少年―

―、菊地蓮司（きくちれんじ）を軽々と床に放り投げた。

「ぐっ……」

蓮司は小さく呻き声を上げて、無様に地面を転がる。

「なっ……レンジ！？」

シルヴィは連れてこられたのが蓮司だと察すると、愕然と叫んだ。

「っ……」

別にさるぐつわを噛ませられているわけではないのだが、蓮司は押し黙ってシルヴィから視線を逸らしてしまう。

「……おい、どういうことだ、これは！？」

シルヴィは思わずアレインとルッチを見やって説明を求めた。

「先に申し上げた通りですよ。そこの間抜けなガキがエステル第二王女殿下を救おうと、レイス様の後をつけていましてね。まあ、結果は返り討ちに遭って、今に至るわけですが。これ以上の説明がご必要で？」

アレインはくつくつと笑って、おかしさを堪えるように答える。

「なっ……」

シルヴィとエレナは堪らず言葉を失ってしまった。蓮司に視線を向けるが、視線を背ける彼に何を言えばいいのかわからないのか、

呆然と立ち尽くしている。

「で、その落とし前についてなんですが、具体的にはまだ決めかねていましてね。いくつかお願いを聞いてもらうつもりでいるんですが、とりあえずシルヴィ王女殿下にはしばらくこの家に暮らしていただいて、こちらの監視下に入っていただくことになりました」

アレインは淡々と語って、話を切り出した。すると――、

「……なっ、ふざけるな！　シルヴィ様を監視するため、このような家に住まわせるだと！？　貴様らと一緒にか！？」

侍従のエレナが我に返って、堪らず抗議する。

「ええ、その通りですが、何か文句でも？」

アレインは頷き、しれっと訊き返す。

「大ありだ！」

と、怒鳴るエレナ。すると――、

「おいおい、そっちの指示で俺らを出し抜こうとした、このクソガキの行動を見逃すと言っているんだ。不服ですか？」

ルッチが蓮司を足蹴にし、顔をしかめて反論した。

「そのような指示など出してはいない！」

エレナは反射的に否定する。

「ほう、そうなんですかね？　だとしたら、どうしてそこのガキはエステル王女殿下を救おうとしたのか……。どこから情報が漏れたんですかねえ？」

アレインは目をみはって、シルヴィ達に問いかけた。

「レンジ……」

シルヴィは苦虫を噛み潰したような顔で、蓮司を見やる。

「……」

蓮司は名前を呼ばれると小さく身体を震わせたが、相変わらず視線を逸らして沈黙を貫いていた。すると――、

「はっ、無駄ですぜ。このクソガキ、実力はともかく、プライドだけは超一流に高いようでしてね。自分の非を認めようとしねえし、ちっとも素直になりやしねえ。少しはしおらしい姿を見せれば、まだ可愛げがあるってもんなんですがね」

ルッチがそう言って、蓮司を蹴飛ばす。

「ぐっ……」

蓮司は身体を震わせて、ルッチを睨みつけた。

「おお、怖え怖え」

と、ルッチは愉快そうに嘲笑を刻む。

「その辺にしておけ、ルッチ。それで、どうなんですかね？　落とし前の一環として、しばらくこの家で暮らしていいただくという話は。ご了承いただけますか？　ああ、下手な真似をしないと誓っていただけるのであれば、家の中での行動の自由は許可いたしますよ」

アレインはルッチをたしなめると、改めてシルヴィに水を向けた。

「……私には王女としての立場がある。私の一存で決められることではない」

シルヴィは苦々しい顔で難色を示すが――、

「ははは、そうですか。なら、エステル王女殿下にそのツケを払ってもらってもらうとしますかね」

アレインは嘲(あざわら)うように、シルヴィを挑発した。すると――

「何だと！？　下種がっ、エステルに指一本でも触れてみろ！」

流石のシルヴィも激情する。

「はっ、何をご想像になっているのかは存じませんが、約束通り、エステル第二王女殿には何の危害も加えておりませんよ。少なくとも現時点では、ね」

アレインは含みを持たせた言い方をして、シルヴィを見据えた。暗に自分達の要求を呑まねば約束を反故にするぞと、脅迫しているようなものである。

「くっ……」

シルヴィは押し黙り、忸怩たる想いで拳を握り締めたが――、

「……わかった」

最後は首を縦に振った。

「よ、よろしいのですか、シルヴィ様？」

エレナが泡を食ってシルヴィに確認するが――、

「仕方がない」

シルヴィは言葉少なに、そう答えるだけだった。

（これ以上はもう、本当に駄目なのかもしれない。だが……）

と、蓮司を見やりながら、そう思って。

「くっ……」

エレナは堪らず憤り、非難するような眼差しで蓮司を睨みつける。蓮司は蓮司で現状に憤りを覚えているのか、複雑な面持ちで、小刻みに身体を震わせていた。

アレインはそんなシルヴィ達の反応を愉快そうに眺めると――、

「ご納得いただけたようで、何よりですよ。こちらとしても不幸な犠牲を出さずに済みますからね。まあ、ご安心ください。このまま大人しくこちらの指示に従っていただければ、エステル第二王女殿

下をお返しする日も近いとのことですので」

と、鷹揚に語った。

「……ふん。だといいがな」

シルヴィはさほど期待はしていないのか、不機嫌そうに鼻を鳴らす。すると――、

「おい、よかったな。お前の不始末のツケを、そこの第一王女様が肩代わりしてくれるってよ。その足りないおつむで現状と向き合った上で、よく感謝するといい」

ルッチがせせら笑いながら、眼下の蓮司に語りかける。

「……黙れ」

蓮司はぼそりと口を動かした。

すると、アレインが嘆息し、つかつかと歩きだして、蓮司に近づいていく。そのまま荒々しく蓮司の頭を掴むと――、

「で、お前さんはどうすんだ？　シルヴィ王女殿下との話もまとまったことだ。人質としての役目は終わったんだが……、このまま逃げたいか？」

と、焚きつけるように尋ねた。

「……なんだと？」

蓮司はジロリとアレインを睨み返し、訝しそうに訊き返す。

「なに、シルヴィ王女殿下に迷惑をかけたうえに、ここまで恥をかいたんだ。合わせる顔がないんじゃないかと思ってな」

アレインはどこか愉快そうに語った。

「っ……」

蓮司は激昂し、ギリッと歯を噛みしめる。

「ははは、いかにも怒っていますって、面をしてやがるな。だが、この世界、結果がすべてだ。だから、悪いのはお前さん。とはいえ、俺らも似たような経験をしたことはある。まあ、屈辱だろうよ。心中、察するぜ。悔しいよなあ？」

アレインは蓮司の顔を見つめ返し、口許に嘲笑を刻む。

「……何が言いたい？」

尋ねて、蓮司はじっとアレインの顔色を窺った。

「別に、俺はお前さんを労ってやっているだけだぜ？」

アレインはそう言って、蓮司の肩をぽんぽんと叩き、意味深長な笑みを覗かせる。そして――、

「そうさな。まあ、こんだけの面倒事を起こしちまったんだ。もうこの姫様方がいるこの国には居づらいだろうし……、いっそのこと、遠くの国に行ってみたらどうだ？　団長に負けたそうだが、そこそこの実力はあるようだしな。お前ならどこでだってそれなりに自由

にやっていけるだろうよ。そう思っているからこそ、冒険者になったんだろ？」

と、語りかける。周囲の人間に対して多大な迷惑をかけた人間に対して、逃亡を勧めること、それは悪魔の囁きだった。

自由と言えば聞こえはいいが、好き放題に振る舞って、自分から他人の問題に首まで突っ込んで、手に負えなくなったら逃げ出すということは、責任感の欠如に他ならないのだから。すると――、

「……」

蓮司の瞳が微かに揺らぐ。

アレインはそれを見逃さなかった。フッとほくそ笑むと――、

「どうだ？　この件から一切の手を引くって約束できるんなら、見逃してやってもいいぜ。もちろん約束を反故にするようなら、そこにいる姫様方や別にいる第二王女殿下にさらに迷惑がかかるわけだが、お前さんもそこまで馬鹿じゃないだろ」

と、蓮司に問いかける。だが――、

「おい、待て。何が狙いだ？　レンジ、そんな男の言うことに耳を傾けるな」

シルヴィが見かねて、二人の会話に割って入った。

「これはこれは、姫殿下もご無体ですな。現実を知って傷心中の少年に、鞭を打つとは」

アレインは少し芝居がかった口調で、異を訴える。だが――、

「黙れ！　貴様が勧めている生き方は無法者のそれだ。冒険者のそれではない。そこいらにいる野盗と何も変わらん。レンジ、逃げるな！　お前はそんな男ではないはずだろう？　初めて私と会った時に口にした台詞を忘れたとは言わせないぞ！？」

シルヴィはアレインの言を一蹴して、蓮司に力強く呼びかけた。すると、蓮司はビクリと身体を震わせて、ハッと顔色を変える。そして、ややあって――、

「……この俺をこんな目に遭わせているんだ。お前らは絶対に楽には死ねない。今更後悔しても、もう遅い。覚悟だけはしておけよ？　俺は貴様らのような人間のクズを殺傷することを躊躇しない」

蓮司は冷えた眼差しでアレインを睨み返し、啖呵を切った。

「はっ、思った通り、大概、自分本位なガキだな」

同じ穴の狢のくせにと、ルッチは面白がってぼそりと呟く。アレインもフッと笑って――、

「そうかい、そいつは残念だね」

ひょいと肩をすくめてみせる。だが、そう呟く彼の口許は、やはりほくそ笑んでいた。

◇　◇　◇

一方、場所は変わってベルトラム王国、レストラシオンの本拠地が構えられているロダン侯爵領の領都ロダニア。クリスティーナの

下にフローラ失踪の知らせが届いてから、約二週間が経過したある日のことだ。ロダニアの領館を、勇者、坂田弘明が訪れていた。
弘明は正式な面会の手順を踏まず、お供のロアナを引きつれ、ずかずかと執政室に向かうと――

「おい、ユグノー公爵、どういうことだ！？　フローラが失踪しただと！？　護送体制に問題があったんじゃないのか！？」

ノックもせずに荒々しく扉を開けて入室するなり、大声で叫んだ。だが、そこには名指ししたユグノー公爵だけでなく、ロダン侯爵を始めとするレストラシオン所属の高位貴族達が立ち並び、さらには最奥の執務椅子の横に立つクリスティーナが待ち構えていて――、

「……初めまして、勇者様。ようこそいらっしゃいました」

クリスティーナは弘明の乱暴な闖入（ちんにゅう）に微かに目を丸くしたものの、にこりと笑みをたたえて弘明を迎え入れた。
弘明は勢ぞろいで待ち構えていたクリスティーナ達を目にすると――、

「……ん、あ、ああ。お前は？　もしかして……」

流石に気勢をそがれたのか、臆したように立ち止まる。そして、最も位が高い人間がいるべき場所に、ユグノー公爵ではなく見慣れぬ顔のクリスティーナがいることに気づき、意表を突かれた。
とはいえ、クリスティーナの存在は事前に伝え聞いていたし、その容貌がフローラと似ていることから、すぐにその素性に察しがついたようだ。
一方、弘明の背後にいるロアナは、ややバツが悪そうに、所在なさげに立ちくしている。

「フローラの姉、クリスティーナ＝ベルトラムと申します。本来ならこのまま歓談といきたいところですが、あいにくと事態が切迫しております。そのご様子だと、現状をおおよそご存じのようですね？」

クリスティーナは弘明がペースを取り戻す前に、さっさと話を進めてしまうことにした。

「あ、ああ。フローラが乗った魔道船が襲われ、そのままフローラが行方不明になったと聞いた」

弘明はクリスティーナの顔をまじまじと見つめながら、ややぶっきらぼうな声で答える。勇者になってから数多くの美少女達を目にしてきたが、クリスティーナはその中でもトップクラスに美しいと思ったのだ。

「でしたら、残念ながら現時点で取り立てて目新しいご報告はございません。墜落（ついらく）した魔道船の所在地は既に突き止めたのですが、フローラの遺体が見つかっていないのです。周辺に人員を配置して、目下捜索中ですが……」

クリスティーナは努めて事務的な口調で事情を説明すると、最後に微かに顔を曇らせる。

「……そうか」

弘明は気丈に語るクリスティーナの容貌に儚げな翳（かげ）りを垣間見ると、思わず目をみはり頷いてしまう。本当は責任の追及を兼ねて文句の一つでも言ってやるつもりで、息巻いて乗り込んだのだが、流

石にそんな雰囲気ではなさそうだと空気を読んだのだ。すると――、

「無論、生存している可能性もございますが、事が事ゆえに、勇者様には最悪の事態をお覚悟いただく必要もございます」

クリスティーナが淡々と語りだす。

「う、む。まあ、な……」

弘明は苦々しい顔で首肯した。

「私としても今の状況でこのようなことを申し上げたくはないのですが、レストラシオンの代表としての責務もございます。今後の処理に支障が生じる恐れがございますので、フローラとの婚約はいったん白紙とさせていただいてもよろしいでしょうか？」

クリスティーナはいたたまれない面持ちで、さらりとフローラとの婚約解消を求めた。すると――、

「っ……」

ユグノー公爵を初め、その場にいた貴族達の顔つきが微かに強張る。だが、弘明に気づかれない程度にしか変化を見せなかったのは流石というべきか。

「は……？　いや、まあ、そうだな。仕方がない……のか？」

弘明は急な話に咄嗟には判断しかねたのか、曖昧に返事をしながら、意見を求めるように背後に控えていたロアナを見やった。

「そ、その……」

ロアナがその場での返答に窮すると――、

「挨拶が遅れたけど、貴方も久しぶりね、ロアナ」

クリスティーナがロアナに話しかける。

「は、はい。お久しぶりでございます、クリスティーナ様。再び御身にお目にかかることができ、恐悦至極に存じます」

ロアナはひどく恐縮した様子で、クリスティーナに頭を下げた。

「勇者様とフローラの補佐、大義でした。積もる話もありますから、貴方とはまた後ほどゆっくりと話すとしましょうか」

「は、はい」

クリスティーナに語りかけられると、ロアナは恐々とした様子で頷く。弘明はそんな二人のやりとりを眺めながら――、

（へえ、ロアナがここまで恐縮するってことは、けっこう怖い性格をしているのか？　まあ、かなりの美人だが、確かに顔の系統はフローラより鋭い感じだしな。フローラよりよっぽど王族らしいっちゃ、らしい雰囲気もある）

と、そんなことを思う。

「っと、話が逸れてしまいましたね。無論、勇者様にもお考えがおありでしょうから、今すぐにご返答いただきたいというわけでもございませんが、フローラとの婚約の件、お考えいただけると幸いで

す」

クリスティーナは早々に話を戻すと、深々と弘明に対して頭を下げた。弘明はそんなクリスティーナの丁寧な振る舞いに目をみはると――、

「ん？　あー、まあ……、そう、だな。仕方がないか。フローラのことは残念だが、政治的な処理が色々とあるんだろ？」

嘆息しながら、理解を示すように頷いてみせた。

（確かにフローラが無事でいる保証はない。というより竜に襲われたんだ。死んだようなもの……か。生きているかどうかわからない相手と婚約した状態を継続しても、他の相手との婚約に支障が出るだけだろうしな）

と、そう考えて。

「……恐れ入ります」

クリスティーナは刹那、冷めた眼差しで弘明を見据えると、再度、深々と頭を下げた。

（王族らしい王族に、ここまで丁寧に頭を下げられたのは初めてかもしれないな）

弘明はクリスティーナから誠意に似た何かを感じとったのか、内心で感心して――、

「まあ、そこまで気にする必要はないさ。辛いのは姉のお前も一緒

だろうしな。他の連中相手に弱いところは見せられないだろうし、俺でよければいくらでも話を聞いてやるぜ？」

小さく肩をすくめて、フッと笑って言った。

「……光栄なお誘いです。お時間がある時にでも、ぜひお食事を」

クリスティーナは愛想笑いをたたえて応じる

「ああ、そうだな。まあ、フローラのことが落ち着くまで、当分はロダニアに滞在することになりそうだしな」

弘明は満足そうに頷いた。だが――、

「ええ、お願いいたします。墜落事件以降、魔道船を襲った竜らしき生物の姿は目撃されておりませんが、まだこの辺りの国では魔道船の運航が自粛されておりますので。フローラに加えて、勇者様にまで何かが起きては、本当に取り返しのつかないことになってしまいます。……こちらへいらっしゃるために、かなりの無茶をなさったのでは？」

クリスティーナはスッと目を細めて、弘明に問いかける。

「ん？　あー、まあ、その竜とやらの目撃談はずっとなかったようだしな。大丈夫だろうと、俺が魔道船の船長にゴーサインを出したんだ。それに、勇者の俺が乗っているんだ。いざって時は、空を飛ぶトカゲ如き、訳ないぜ？」

弘明はバツが悪そうに視線を逸らすと、調子のいいことを言う。

クリスティーナは小さく嘆息すると――、

「こちらで安全の確認が取れるまで、以降は独断での外出をくれぐれもお控えください。理由は先に申し上げた通り、勇者様に何かがあってからでは遅いのです。それに、勇者様がこちらへいらっしゃるために、ガルアーク王国側にも少なからず配慮と負担を強いてしまいました」

念を押すように、弘明を注意した。

「あー、わかった、わかった。フローラが乗った魔道船が墜落したと聞いて、居ても立ってもいられなかったんだ。まあ、無理に魔道船を運航させたことは、悪かったと思っている」

弘明は億劫そうに弁明する。すると――、

「何卒、よろしくお願いいたします。……では、部屋を用意させますので、一先ずは休まれてはいかがでしょうか？　お疲れでしょう」

クリスティーナは弘明に退室を促した。

「ああ、そうだな。そうさせてもらおうか」

弘明はこれ幸いにと、話に乗っかる。

「それと、ロアナを少しお借りしてもよろしいでしょうか？　久しぶりに会うものですから」

「ああ、構わないぞ」

「ありがとうございます。では、ご案内を」

クリスティーナは礼を言うと、室内に控えていたメイドの女性を

見やった。
メイドの女性はその視線に応じて、速やかに動きだす。弘明はそのままメイドと一緒に部屋の外へ出ていってしまった。すると――、
「別にそう委縮する必要はないわよ、ロアナ」
クリスティーナがロアナに声をかける。ロアナは恐縮そうに立ちつくしていた。その顔色はかなり悪い。
「い、いえ。その……」
「フローラの一件について、貴方が自分にも責任があると思っているのならただの己惚れよ。竜にしろ、大型の亜竜にしろ、天災のようなものなのだから、貴方が同乗していたところで何かが変わっていたわけではないわ。まあ、伝承通りの力を持つ勇者の彼が乗っていたのならば、話も違ったのかもしれないけれど」
「は、はい……」
ロアナは相も変わらず委縮した様子で頷く。すると、そんな彼女の様子に、クリスティーナは小さく溜息をついて――、
「いくつか訊きたいことがあるの。素直に答えて頂戴」
と、そう言ってから、ロアナに質問を開始した。

第１６２話　その頃　その五（後書き）

今回は６章の中盤から終盤にかけて登場したアレインとルッチという男キャラが再登場しました（１３０話～１３２話でリオと戦って敗北したルシウスの部下達です（他にヴェンという男もいました））。

第１６３話　姉妹の現状

現在、ロアナ＝フォンティーヌは身をすくめて立ち尽くしていた。目の前の執務椅子には、自国の第一王女であるクリスティーナ＝ベルトラムが腰を下ろしている。

ロアナにとってクリスティーナは決して頭が上がらない存在だ。公爵家の娘であるがゆえに幼馴染として付き合うことを許されているとはいえ、高位の王位継承権を持つクリスティーナとの間には決して越えられない地位の差がある。何よりクリスティーナには温厚なフローラ以上に王族としての気品と覇気があった。

周囲には、クリスティーナの他にも、ユグノー公爵やロダン侯爵を初めとするベルトラム王国の高位貴族が立ち並んでいる。場の雰囲気はどこかピリピリと張りつめていた。そんな中――、

「では、複数の女性との政略結婚に関して、勇者様はどのようにお考えなのかしら？」

先ほどから、クリスティーナが淡々とロアナに問いを発している。

質問の内容はもっぱら弘明に関することだ。例えば、ガルアーク王国城でどのような生活を送ってきたのか、どうしてフローラと一緒にロダニアへやってこなかったのか等、弘明の人となりが推測できる質問があれこれ投げかけられている。

ロアナは針の筵（むしろ）に座らされる気持ちを味わっていて――、

「……非常に意欲的です」

と、強張った声で、クリスティーナの質問に答える。

「それはどのように？」
「例えば、先ほども申し上げた通り、連日、令嬢達のお茶会に参加して、結婚相手の候補となる貴族の令嬢達を選定なさっています。お眼鏡に適った方がいれば、積極的に個別のアプローチも仕掛けておいでです」
「つまり、周囲から政略結婚を求められているから、嫌々従っているというわけではないのね？　本心から複数の女性との婚姻を望んでいると？」

クリスティーナは落ち着いた声で問いかけた。すると――、
「は、はい。ただ、側室の序列付けに関しては難色を示していらっしゃいました。それと、来る者は拒まないとのことです。ある程度接した上で、ご自身が気に入られたらという条件付きですが……」

ロアナは恐る恐る回答する。そのあまりの節操のなさに――、
「……一応、確かめておくけど、複数人と政略結婚をすることで生じうる問題について、勇者様にはお伝えしているのよね？　正式な側室として婚姻関係を結べる人数が限られていることも含めて」

流石のクリスティーナもやや呆れた顔で訊いた。中には婚姻関係を結ばないで大勢の妾を囲う貴族も存在するが、婚姻関係を結んだ側室が複数人存在する場合には、通常は身分的な問題から側室間で序列が定められるし、序列に応じて実家が受けられる恩恵の程度も変わってくる。側室間の地位が均衡していると対立も生じうるし、要は、色々と複雑なのだ。
無論、側室全員の仲が良ければ様々なトラブルを回避できるかもしれない――実際にそういったケースも稀にある――が、実家の利害が絡んでくる以上、そう一筋縄にはいかない。抱えようとする側

室の人数が増えるのならば尚更だ。だからこそ、序列付けは大事になる。
しかし、弘明はそういった問題を軽視しているのか、そもそも知りすらしないのか、序列付けはしたくないという。
「む、無論です。ですが、しきたりや慣習に束縛されることを極度に嫌われると申しますか、常識に捕らわれない価値観をお持ちですので、あまり私から強くお諫めすることもできず……、場合によっては、婚姻関係を結ぶ必要がないともお考えのようです」
ロアナは冷や汗を浮かべて答えた。
「……まあ、そういった権力者がいないわけでもないけどね」
一夫多妻、あるいは一妻多夫を前提とした政略結婚は、政治的な必要性が認められているからこそ、合理性が認められている制度だ。必要性を越えて婚姻関係を結び過ぎれば、合理性まで失われてしまう。
とはいえ、歴史を紐解けば、数百人の側室や非公式の妾を抱えた王侯貴族の存在もそこまで珍しくもない。弘明の立場ならば同じことを実現することも可能だろうし、こんなことで勇者と波風を立てるのも好ましくはない。一応は看過できる問題だ。
だが、それでも嫌悪感を抱いてしまうのは、自分が女性だからだろうか。クリスティーナはそう思ったが――、
（大丈夫だと思える自信は何なのかしらね。現実を知らないだけなのかしら？　だとすれば……、まあ、いいわ）
すぐに折り合いをつけると、小さく嘆息した。そして――、

「……それで、もちろん貴方は、勇者様のお眼鏡に適っているのよね？」

と、ロアナに問いかけた。

「は、はい。恐れながら……」

ロアナはおずおずと頷く。

「なら一応、訊いておくわよ。いかに公爵令嬢の貴方でも、勇者様の側室となれば、形式的には中堅程度の立場に甘んじることになるかもしれない。それでも貴方は勇者様との結婚を望んでいる。そう考えて構わないのね？」

クリスティーナがじっとロアナを見据えて、滔々（とうとう）と尋ねると――、

「……はい、望んでおります」

ロアナは確固たる決意を秘めて、静かに頷いた。

「……そう。なら、フォンティーヌ公爵家の娘として、これからも貴方が勇者様のことを支えて差し上げなさい。最も身近で、理解ある立場の人間としてね」

と、クリスティーナは言って、小さく肩をすくめる。

「……は、はい！」

ロアナは力強く首肯した。

「手間を取らせて悪かったわね。もういいわよ、勇者様のところへお戻りなさい」
「はっ！」

クリスティーナが退室の許可を出すと、ロアナは畏まって頷く。それから、ロアナは恐々とした様子で踵を返し、扉へと向かった。だが、退室間際――、

「……ロアナ」

クリスティーナがロアナの背中に声をかける。

「は、はい！」

ロアナはびくりと身体を震わせて、立ち止まった。すると――、

「よければまた後で、話に付き合って頂戴。その時は旧友として、肩の力を抜いてね」

クリスティーナが素の表情を覗かせて、ロアナに語りかける。
ロアナは数瞬、呆けた顔を浮かべると――、

「……は、はい！　喜んで！」

ハッと顔色を変えて、返事をした。

◇　◇　◇

「失礼いたします」

それから、ロアナがおずおずと執務室から出ていくと――、

「……クリスティーナ様、恐れながら、伺ってもよろしいでしょうか？」

ずっと沈黙を貫いていたユグノー公爵が、口を開いた。

「何かしら？」

クリスティーナはしれっとした声で応じる。

「どういうおつもりで、勇者様とフローラ様のご婚約を解消なさったのでしょうか？　まだ行方不明の段階です。対内的にも、対外的にも、いささか時期尚早だったのでは？」

ユグノー公爵は単刀直入に質問した。すると――、

「不遜かもしれないけれど、勇者様の人となりと、現状をどのように認識なさっているのかを、確かめました」

クリスティーナは簡潔に答える。

「……お二人の婚約解消で、でございますか？」

ユグノー公爵は納得しかねるようだ。

「ええ。時期尚早だという判断もできないということが、結果的にわかったでしょう？」

と、クリスティーナが歯に衣着せずに告げると――、

「……しかし、実際に婚約解消に踏み切る必要はなかったのでは？」

ユグノー公爵は思わず言葉に詰まったが、しかる後、食い下がった。だが――、

「今の勇者様は成長中です。確かにレストラシオンにとって勇者様のご威光は不可欠ですが、だからこそ、成長を待つ必要があると私は考えます。それに、婚約していても実際に結婚するのはまだ先のこと。幸い我々に協力していただけることは公約してくださっているのですから、そこまで焦る必要はないでしょう。正妻の候補は我々の組織から出させていただくと、改めてご了承いただけばよいのです。私という選択肢も出てきたのですから」

クリスティーナは理路整然と回答する。

（無論、本人がフローラとの婚約維持を強く望むのなら、話は別だったけれどね。でも、彼はあっさりと解消を許可した）

と、冷めた思考で考えながら。

「……それはつまり、クリスティーナ様が勇者様とご結婚になる可能性もあるということでしょうか？」

ユグノー公爵はスッと目を細めて、深く落ち着いた声で質問した。

「当然でしょう。むしろ今となっては、第二王女のフローラよりも、第一王女の私が適任のはずです」

クリスティーナは自身の立場をも根拠として、然りと頷く。

（そう、もしフローラが生きているとしても、人身御供には私がなればいい）

と、そう思って。すると――、

「……確かに、仰せの通りでございますな。失礼いたしました、出過ぎた真似を」

ユグノー公爵はようやく引き下がった。

「構わないわ。反対意見は貴重だもの。これからも何か気づいた点があれば、忌憚のない意見を聞かせて頂戴」

クリスティーナはそう言って、にこりと笑ってみせる。

「御意に」

ユグノー公爵はクリスティーナの容貌に瞳を据えると、しかる後、恭しく頷いた。

（……やはりフローラ王女のようにはいかんか）

と、真顔で考えながら。

◇　◇　◇

一方、場所は変わって、パラディア王国内の南西部に位置するとある都市。

リオはフローラを連れて、宿屋を訪れていた。品質は中の上程度と、本来ならば王族のフローラが宿泊するような格を備えた施設ではない。
とはいえ、小国のパラディア王国の地方都市に、それほど上等な宿屋が存在するはずもなく、贅沢など言っていられない。もっとも、当のフローラにまったく気にした様子がないのが幸いだった。物珍しそうに宿屋の内観を眺めている。
リオはそんなフローラを背にして――、
「二人で泊まりたいのですが、部屋の空きはありますか？」
と、カウンターの店員に歩み寄って語りかけた。
「はい、ございますよ。相部屋でよろしいですか？」
女性の店員は美男美女のリオとフローラの組み合わせに軽く目をみはったが、営業スマイルを浮かべて鷹揚に受け答える。すると――、
「あ、相部屋？」
背後で話を聞いていたフローラの顔が紅潮した。だが――、
「いえ、二部屋でお願いします。出来れば一つは角部屋で、もう一つはその隣の部屋だと嬉しいのですが……」
リオはフローラの表情など知らず、自身が望む条件をきっぱりと伝える。
「あー、えっと、はい。ございますよ。ですが、何なら、最上階の

部屋をお使いになりますか？　料金は少し高くなりますが、リビングダイニングの他に寝室が二つありまして、うちの宿では最も良い部屋になります」

店員の女性はリオとフローラの顔を見比べながら、そう提案をした。表情に変化がないリオとは対照的に、フローラはホッとしたような、気恥ずかしそうな顔をしている。

（お忍びの貴族か、商家のお嬢様ってところかねえ。もしかすると駆け落ちの可能性も……）

と、店員の女性は二人の関係を勘ぐった。まあ、どっちにしろ上客には違いないので、何でもいいと考えて。

「……とりあえず、実際の内装を確認してから決めてもよろしいですか？」

リオは一瞬、思案すると、実際に部屋を確認してみることにした。

「もちろん」

店員はにこりと営業スマイルを浮かべて頷く。それから、早速――、

「こちらでございます」

リオとフローラは件の部屋へと案内された。

「……なるほど、確かに良い部屋ですね」

リオは室内を見回しながら、感想を口にする。

「そうでございましょう。主寝室には内鍵が付いておりますので、ワンルームの部屋を二つ借りるよりも、快適性は高いですよ」

店員はにこにこと解説を行う。

（ここなら同室でもフローラ姫のプライバシーは確保できるし、防犯面からも好ましい）

と、リオは室内を歩き回りながら考えて、簡単に部屋の造りを確認すると――、

「ローラ様はこちらの部屋で構いませんか？」

フローラを見やって、水を向けた。

「は、はい！　お任せします」

フローラはこくこくと頷く。となれば、話は早い。

「では、こちらの部屋を一泊で」

リオは店員の女性に契約の締結を申し出る。そうして、商談は成立した。

◇　◇　◇

そして、その日の晩。フローラは貴重な宿での宿泊体験を楽しんでいた。リオは小一時間で戻るからと、夕食を作りに宿屋の厨房へ

向かっている。
フローラはそわそわと室内を歩き回っていたが、しばらくすると椅子に座って、こじんまりとリオが淹れてくれたお茶を口にし始めた。すると、ノックの音が聞こえて――、

「あっ、はい！」

帰ってきた――と、フローラはびくりと立ち上がり、小走りでとたとたと扉へ近づく。

「ハルトです。夕食をご用意しましたので、扉を開けていただいてもよろしいですか？」

扉の向こうには、予想通りリオが控えていた。

「はい、少しお待ちください！」

フローラは嬉しそうに、たどたどしい手つきで扉を開放する。そこには、トレイを手にしたリオが立っていた。

「お待たせしました」

リオは少しおかしそうに微笑して語りかける。フローラがまるで主人の帰りを待ちわびていた子犬のようだったから。

「お帰りなさいませ。わっ、すごく良い匂いですね！」

空腹を刺激する香りが鼻孔をくすぐり、フローラは満面の笑みを浮かべた。

「それはよかった。とりあえず、中へ入りましょうか」
「はい！」

いつまでも扉の前に立っている意味もない。リオはフローラを促し、ダイニングテーブルへと足を運ぶことにした。
すると、リオは慣れた手つきで、料理が入った皿を机の上に並べていく。献立は消化しやすいようにと、柔らかくなるまで煮込んだリゾットに、添えつけにささみときのこのソテー、あとは野菜が入ったサラダと、具沢山のスープだ。

「美味しそうですね……」

と、フローラは感心して息を呑む。

「どうぞ、冷めないうちに召し上がってください」

リオはそう言いながら椅子を引いて、恭しく着席を促した。フローラは「ありがとうございます」と礼を言って、おずおずと着席する。

「では、私も失礼いたしますね」

リオはフローラの向かいの席に腰を下ろす。そうして、今夜も二人きりの夕食が始まった。

「ハルト様、今日の料理もすごく美味しいです！」

フローラは上品に料理を口に含むと、嬉しそうに感想を口にする。

「お口に合ったようで、光栄です」

リオは優しく口許をほころばせながら――、

（アイシアと約束した期日まであと半月はある。このまま陸路で移動しても、十分に余裕を持って到着できる）

ロダニアまでの所要時間を考える。そして――、

（ロダニアに到着したら、先生の様子を見て、今度こそ精霊の里へ戻らないとな。あとはその前に、リーゼロッテさんと沙月さんのところにも顔を出さないといけないか）

ロダニアに到着した後のことを考えた。

第１６４話　敵対者達

昼下がり。天気は晴れ。その日は絶好の旅日和だった。
リオは今日も今日とてフローラを抱え、ロダニアへ向かって街道外れの道なき道を駆けている。速度はだいたい馬を走らせている程度といったところだ。
全力を出せばさらに速度を出すことはできるが、フローラが怖がるといけないし、あまりに速度を出し過ぎると今度は魔力の消費量を心配されてしまうので、リオにしてはだいぶ緩やかに走っている。なので、リオの魔力が無尽蔵のようにあることを、フローラは知らない。

（アレはゴブリンか、無視だな）

リオは走りながら周囲に意識を向けて、油断なく索敵を行っていた。野生においては前後左右に上下、どこから脅威が襲ってきておかしくはない。狼の群れのように、足の速そうな害敵を目視すると、遭遇する前にさっさと迂回して無駄な戦闘を避けていく。
フローラはギュッとリオに抱き着きながら、興味深そうに変わりゆく光景を眺めていたが――、

「……あの、ハルト様」

ある時、リオに語りかけた。

「はい」

と、リオは短く応じる。

「もうルビア王国の中には入ったのでしょうか？」

フローラは小首を傾げて尋ねた。出発前におおよその現在地は聞いているが、移動ルートの選定は全てリオに一任している。いかんせん街道から外れた場所を走っているので、現在地がまったくわからないのだろう。

「ええ、もう入っていてもおかしくはないはずですよ。次に見える都市はルビア王国領に存在するものでしょうから、今日はそこで宿泊しましょう」

「わっ、そうだったんですね。わかりました」

フローラは元気よく首肯した。

それから、小一時間もしないうちに、リオ達は街道付近の荒れ地に躍り出る。道の脇から人が勢いよく飛び出てきては悪目立ちしてしまいかねないので、リオはいったん立ち止まって、ゆっくりと街道へ近づいた。すると――、

「街道を外れて移動しているのに、ハルト様はよく道に迷われませんね」

フローラが感心して言う。

「途中で高台を通った時に、日の位置からおおよその方向を確認していただけですよ」

リオはすぐに種を明かした。

「……確かにそうやって方向を確認することもできるとは習いましたが、地図もなしに迷わないのはすごいと思います。私なんか、運んでもらっているだけでしたから」

フローラは尊敬の眼差しで、リオの顔を見上げる。

「フローラ様も経験を積めば、身に付く技術ですよ。今日はもう直に目当ての都市につきますが、よろしければ明日以降、移動の際に確認の仕方をお教えしましょう」

「はい、お願いします」

リオが少しこそばゆそうに提案すると、フローラは嬉しそうに返事をした。そうして話をしている間に、街道へたどり着く。周囲に誰も人がいないことを確認すると――、

「では、向かいましょうか。遠目に目的の都市が見えているので、ゆっくり歩いてもすぐに着くはずです」

街道に合流して、リオが言った。

「あっ、では、ここからは私も歩きますね！」

フローラはパッと表情を明るくして、自分で歩くと張り切って告げる。

「畏まりました。では、今日のリハビリといきましょうか。歩くのが辛くなったら、いつでも仰ってください」

リオはそう言って、フローラを街道上に下ろしてやった。そして、フローラへとスッと手を差し出す。

「はい！」

フローラはどこか嬉しそうに首肯すると、そわそわとリオの手を掴む。まだ外で長距離を歩けるほどには体力も筋力も回復していないが、リハビリの名目で一日の間にこうして手を握ってもらいながら歩く時間を作ってもらったのだ。それがフローラの密かな楽しみだった。

「では、こちらへ。お供いたします」

と、リオは手を引っ張らず、言葉でフローラを誘(いざな)う。

「はい」

フローラは地面の感触を確かめるように、おずおずと歩きだした。リオはフローラが転ばぬよう、それだけに気を配り、あとは自分のペースで歩かせてやる。

一歩、また一歩と、フローラは自分のペースで歩いていく。そんなリオとフローラの様子を――、

（こちらの予想通り、ルビア王国内に入りましたか。今日の宿はおそらくあの都市でしょう。宿へ入るのを確認したら、いったんアレイン達の所へ戻るとしますか。姫騎士と見習い勇者にも動いてもらわねば……）

遥かに離れた上空から、レイスが観察していた。

（しかし、彼の警戒範囲の広さには恐れ入りますね。上空にもきちんと気を配っていますし、実に尾行がしづらい。お付きの契約精霊

がいないのと、陸路で移動してくれているのが幸いでした）

と、そんなことを考えながら。

◇　◇　◇

そして、その日の晩。リオ達がルビア王国内の都市に到着し、宿屋で夕食をとっている頃のことだ。場所は蓮司やシルヴィが滞在している廃村の邸宅。

邸宅内では基本的にシルヴィとエレナの二人が個室に引きこもっており、蓮司は拘束されたまま、シルヴィ達との接触は禁止されている。アレインかルッチのどちらかは常にリビングにいて、それぞれの動向を見張っていた。

現在、アレインは家の外に出ている。家の中にいるのは見張りのルッチと、後は蓮司にシルヴィ、そして従者のエレナだけだ。

ルッチは一人でリビングのソファに寝転がり、退屈そうに天井を仰いでいたが――、

「ん？」

外から同僚が迫ってくる気配を察知し、機敏に半身を起こした。すると、玄関の戸が、やや乱暴に開放される。そこには、案の定、ルッチの同僚であるアレインが立っていた。その表情はわずかに強張っている。

「おう、どうした？　随分とピリついてるじゃねえか」

ルッチはアレインの顔色を察し、訝しそうに尋ねた。

「……レイス様から連絡が来た」

アレインは剣呑な声で告げる。

「あー、で、何だって？」

あまり良くないニュースでもあったのかと予想し――、ルッチは頭を掻きながら、気乗りしない面持ちで訊いた。

「シルヴィ王女の出番が来た。俺らも動くし、予定通り、あの小僧にも動いてもらう。細かい指示は俺から伝えるが……、ああ、くそっ、いいか、落ち着いて聞け」

ルッチはひどく顔をしかめて語る。

「……何だよ？」

普段は冷静なアレインらしくない。ルッチはいよいよ不審に思った。すると――、

「……団長が殺された」

アレイン自身もいまだに報告すべき内容を受け入れがたいのか、たっぷり間を置いてから、心底口惜しそうに告げた。

「……あ？」

ルッチはアレイン以上に間を置いて、首を傾げる。

「団長が、殺された」

アレインは顔をしかめ、再び事実を告げた。二度目の間は、一度目よりは短い。

「……おいおい、何の冗談だ。団長が殺された？　冗談でも笑えねえぞ」

ルッチは乾いた笑みをたたえて言う。だが、その目は笑っていなかった。

「冗談じゃない。消滅させられたらしい。文字通り、肉体全てがな。跡形もなく吹き飛ばされたそうだ」

アレインが深く嘆息して言うと――、

「おい！」

ルッチが声を張り上げた。二人しかいないリビングの中に声が響き渡る。

「……あまり大きな声は出すな」

アレインは辟易とした面持ちで言った。

「うるせえ！　マジで言っているのか！？　あの団長がそう簡単にくたばるわけがねえだろうが？」

ルッチは殺気立って問いただす。

「ああ、そうだな、俺だって信じたかねえよ。だがな、レイス様が仰ったんだ、何度も言わせるな！」

アレインも苛立った様子で言い返した。すると――、
「っ……、糞がっ、マジかよ！」
流石のルッチも言葉に詰まる、しかし、目の前にいるアレインの真剣な表情を見て、信じざるを得ないと思ったのか、ひどく顔をしかめて、嘆かわしそうに叫んだ。
「……」
アレインは押し黙り、ギリッと歯を噛みしめている。すると――、
「……誰だ、誰が団長を殺りやがった？」
ルッチが怒りを込めて、静かに尋ねる。
「……あの野郎だ」
と、アレインは忸怩たる面持ちで答えた。
「あの野郎？」
ルッチが訝しそうに眉をひそめると――、
「団長を探っていた風の魔剣士。俺らを負かした野郎だ」
アレインはさらに情報を提示する。それで合点がいったのか――、
「なん、だと？　あのいけ好かねえガキか？」

ルッチはカッと目を剥き出して尋ねる。
「そうだ。あの時のガキが、団長を殺ったそうだ」
アレインは神妙に、深く頷いてみせた。すると――、
「……」
ルッチの身体がわなわなと震えだす。
「だが、喜べ。これから狙うのが、そのガキだそうだ。団長の弔い合戦になる」
「っ！？」
アレインが告げると、ルッチは思わず勢いよく立ち上がった。だが――、
「俺はこれからシルヴィ王女に話を伝えてくる。お前はその間に少し頭を冷やしておけ。詳しい話はその後でまた伝える」
アレインはそう言い残すと、すたすたと歩いて、シルヴィのもとへと向かってしまう。リビングにはルッチ一人が残された。
「団長、嘘だろ……」
ルッチは力なくソファに座り直すと、ぼそり呟く。怒りか、果たして悲しみか、その身体は今もなお小刻みに震えていた。
◇　◇　◇

それから、アレインはシルヴィとお付きのエレナが滞在している部屋へと向かった。

「入れ」

「失礼しますよ」

アレインがノックをして、入室すると――、

「先ほど随分と大きな声が聞こえたようだが、何かトラブルでもあったのか？」

シルヴィがスッと目を細めて問いかけた。

「……別に。ルッチの野郎が居眠りしそうになっていましてね。発破をかけてやっただけですよ。それより、殿下にご協力いただく時期になりました」

アレインは素知らぬ顔で白を切ると、用向きを明らかにする。

「レイスがやってきたか」

「ええ、ご明察の通りに。まあ、すぐにとんぼ返りしてしまいましたがね」

シルヴィが不機嫌そうに鼻を鳴らすと、アレインはひょいと肩をすくめた。

「それで、私に何をさせるつもりだ？」

と、シルヴィは単刀直入に尋ねる。

「近くの都市に殿下専属の騎士団が控えているのは把握しています。さしあたってはそこの連中を動かしていただきましょうか」

アレインは有無を言わせぬ口調で告げた。

「……何だと？」

従者のエレナが怒気を露わにして、眉をひそめると――、

「何が狙いだ？」

シルヴィが手を掲げてエレナを制し、落ち着いた声で尋ねる。

「別にどこかへ行って戦をしてもらうつもりはございませんよ。ただちょいとこの近くで検問を敷いてもらいたいと思いましてね」

アレインは飄々とした面持ちを取り繕って答えた。

「検問、だと？　人探しをしろということか？」

妙な話の流れに、シルヴィは怪訝そうに眉根を寄せる。

「ええ、その程度なら、殿下の権限で問題もなく人員を動かせるのでは？」

アレインは然りと頷き、シルヴィに水を向けた。

「誰を探している。何が狙いだ？」

「ははは、そいつはご協力を約束していただかないことには、ご説

明できませんな」
「……何もわからぬ相手のことなど探しようがない。協力する以上は、どのような人物を捜しているのか教えてもらうぞ」
シルヴィはわずかに思案すると、きつい口調で告げる。
「仰せのままに。ちなみに、伝令役はそちらの従者さんに行っていただきますよ。殿下はお留守番ですので、あしからず」
アレインはギラギラと輝く瞳に憎悪の念を孕ませつつも、芝居がかった所作で畏まってみせた。

第165話　セリアの日常

場所はロダニアの領館、その敷地内の離れに存在する施設の一室で、セリアは十代前半から半ばの子供達を相手に講義を行っていた。

今のロダニアはベルトラム王国本国から離反した貴族達の拠点となっている関係上、少し前まで王立学院に通っていた子弟達も数多く滞在している。そんなロダニアでも王立学院並みの教育をという名目で、セリアが講師として抜擢されたわけだが――、

「はい、それでは、今回の講義はこれまで。皆さん、本日もご清聴、ありがとうございました。……あはは」

生徒達からの反響は予想以上だった。セリアがその日の講義の終了を告げると、生徒達が盛大に拍手をし始める。中には立ち上がっている者もいた。

百人は入れる巨大な室内が満員になっているので、その光景はまさに圧巻である。講義を終える度に拍手をされるので、セリアがこそばゆそうにはにかんでいた。

ここまでセリアが人気を博しているのは、セリアが歴代最年少でベルトラム王立学院の講師となったという経歴もさることながら、実際に行われる講義の内容が大変わかりやすいこと、そして何よりもセリアの容姿がとても可愛らしいことが最大の理由であろう。その証拠に、生徒達もセリアが恥ずかしがるのを見たくて拍手をしている節がある。男子生徒達の中には、セリアに熱を帯びた視線を向ける者もいた。

だが、そんな中――、

「相変わらずとんでもない人気だなあ。あの人、本当にすごい人だ

ったんだな……」

つい先日からロダニアに暮らすことになった日本人の少年――、斉木(さいきれい)怜が、感心した面持ちで壇上のセリアを見つめている。すると――、

「当然ですわよ。クレール伯爵家のセリア様といえば、ベルトラム王国有数の天才魔道士ですもの」

怜の隣に座るダンディ家のご令嬢、ローザが怜に語りかけた。

「俺はそんなすごい人と一緒に旅をしていたのか」

怜はしみじみと呟く。

「ふふ、レイ様がどのようにセリア様のことを見ていらしたのか、少し興味がございますわ」

ローザはくすりと笑って言った。

「いや、なんというか、可愛らしい年下の女の子にしか見えなかったかな？　いや、俺よりも年上なんだけどね」

「あら、女性に対して年齢のことを言うのはマナー違反ですわよ」

「ははは、これは手厳しい」

などと、怜はマイペースに軽口を叩く。もともとは浩太と一緒にベルトラム王国城を飛び出した怜だったが、今では浩太とは別行動をとり、その代わりというべきなのか、ローザと行動を共にするようになった。

（しかし俺もすっかりロダニアの暮らしに順応しているな。ローザさんと結婚を前提にしたお付き合いまでしちゃって、魔道士になるために勉強までしているとは……）

怜はふと現状に至るまでの経緯を振り返り、なんだか不思議に思う。こうしてロダニアに残るにあたっては浩太と少しもめることになったのだが、後悔はしていない。むしろ今の生活に満足感すら抱いている。

（まあ、この世界で生きていくのなら、何らかの職には就かないといけないわけだし）

ロダニアに残っていなければ、おそらくは冒険者になるのが関の山だっただろう。何のコネもない人間が、見ず知らずの土地で何らかの職にありつけるほど、この世界は優しくはない。現に浩太は冒険者になる道を選んで、ロダニアを去っていった。

（俺はこうして組織に所属する方が食いっぱぐれないと思った。それだけだな、うん。まあ、それぞれの信じた道を進むしかない。浩太もそのうち顔を出すとは言っていたし）

と、生来のドライな思考回路でそう考える怜。元より彼は流されやすい性格をしている。ベルトラム王国城を出たのは浩太に付き添ってのことだし、ロダニアに残ることになったのはローザと懇ろな関係になれそうだったから――というより、実際になったから。

（日本で暮らしていたとしても、冒険者になっていたとしても、こんなに可愛くて献身的な子と付き合えることはなかっただろうしなあ）

だから、まあいいかなと思った、というわけである。怜はうんうんと頷きながら、ローザを見やった。すると――、

「どうかなさいましたか、レイ様？」

隣に座るローザが、不思議そうに怜の顔を覗き返してきた。

「いや、俺は幸せ者だなと思っただけだよ。こうしてローザみたいな可愛い子と、結婚を前提にしたお付き合いができているんだからね」

怜は今の自分の素直な気持ちを吐露する。そう、何よりローザは可愛かった。客観的な美しさで言えば一緒に旅をしてきたセリアやクリスティーナの方が上なのだろうが、ローザだって怜にしてみれば好みド直球に可愛い。そして、胸も大きい。これが大事だった。胸の大きさだけを見れば、セリアやクリスティーナよりもローザが勝っている。それに、セリアやクリスティーナは少し高嶺の花すぎるきらいがあって、そういう相手として現実味がない。

「幸せ者は私の方ですわ。レイ様のように立派な殿方と、こうしてお付き合いできているのですから」

ローザはそう言って、ぴたりと怜に寄り添う。

「どこぞの馬の骨とも知れない凡骨だけれどもね」

怜は自らを卑下するように、小さく肩をすくめた。すると――、

「あら、レイ様はご聡明ですし、何より素晴らしい魔道の才能をお持ちじゃないですか」

ローザは怜を持ち上げる。

「ははは、魔力の量がこの世界の人よりも多いってだけだけどね。せっかくの膨大な魔力も、魔道の技術を身につけないと宝の持ち腐れだ。だからこそ、こうして勉強に励んでいるわけだけど」

怜は鷹揚に笑いながら語った。実際、今の怜は天才魔道士のセリアよりも豊富な魔力を持っているが、技術面を踏まえれば、総合的な魔道士としての力量はセリアの足元にも及ばないだろう。

「私は信じておりますわ。レイ様がこの国で一番の大魔道士になると」

「なら、俺はその期待に応えないとね」

そうして、怜とローザはしばし二人で見つめ合った。いつの間にか教室内に残っている人間が自分達だけになっていることに気づかずに、と思いきや――、

「っと、そろそろ行こうか」

流石の怜も教室内が静まり返っていることに気づいたのか、微苦笑しながら言う。

「ええ、お供しますわ」

ローザはお淑やかに返事をした。

◇　◇　◇

一方、その頃、セリアはその日の講義を終えると、クリスティーナのもとを訪れた。講義を終えてそのまま帰路へ就こうとしていたところを、クリスティーナ付きの侍女に声をかけられたのだ。

「失礼いたします」

セリアは侍女に案内されてクリスティーナの私室に入ると、恭しくお辞儀をする。クリスティーナは上座の席に腰を下ろして、お茶を飲んでいた。向かいの席には誰か女性が座っているが、セリアの位置からだと背中しか見えない。

「急にお呼び立てしてしまい、申し訳ございません。ロアナにも先生と会わせてあげたくて、席を設けさせていただきました」

クリスティーナは静かに立ち上がると、セリアを歓迎した。ほぼ同時に、クリスティーナのお茶の相手、ロアナも立ち上がって、セリアに向き直る。

「あら、ロアナさん。お久しぶりね」

セリアは小さく目をみはって、ロアナに微笑みかけた。

「……お久しぶりです、セリア先生。こうして再びお会いできるとは」

ロアナは感極まった面持ちで、深々と頭を下げる。

「あまりのんびりとお茶もできないのですが、どうぞおかけください」

クリスティーナはそう言って、セリアも座るように席を勧めた。
「……ありがとうございます。お呼びくださり、光栄ですわ。では、失礼いたしまして」
セリアはにこやかに礼を言うと、クリスティーナの顔色を窺いながら、勧められた席に腰を下ろした。クリスティーナの顔つきは一見すると穏やかに見える。
こうしてセリアがクリスティーナと顔を合わせるのは、フローラ失踪の知らせがロダニアに届いてから初めてのことだが――、
（フローラ様が失踪なさってお辛いはずなのに……。ううん、だからこそレストラシオンの代表として、職務を完璧に務めなければいけないのよね。強いお方だわ）
セリアは今のクリスティーナの心情を察し、胸を痛めた。だが、顔を曇らせることはしない。こういったプライベートな時間だけが今のクリスティーナにとって癒しの時間となるのだ。その貴重な時間を使って自分とのお茶会をセッティングしてくれたクリスティーナの気持ちがわからぬセリアではない。
ゆえに、少しでもクリスティーナの気が紛れるようにと、セリアは普段通りに振る舞うことを即座に決めた。
それから、すぐにセリアの分のお茶とお菓子が用意されると――、
「では、始めましょうか」
クリスティーナの音頭により、お茶会が開始された。
「そういえばセリア先生とこうしてお茶を囲むのは、初めてのことですね。なんだか不思議な気持ちですわ」

と、ロアナは嬉しそうに微笑する。

「私も……と思いましたが、旅の間に何度もそういった時間はございましたね。アマカワ卿が淹れてくださったお茶は実にお見事でした」

クリスティーナはどこか懐かしそうに語った。

「そうでございましたね。ハルトは多芸ですから」

セリアはくすりと笑って言う。すると――、

「アマカワ卿、ですか？　えっと、あのガルアーク王国の名誉騎士でいらっしゃるアマカワ卿……でございますよね？」

ロアナは不思議そうに小首を傾げた。

「ええ、そうよ。貴方にはそこら辺の過程までは説明が届いていなかったのね。私とセリア先生をロダニアまで送り届けてくれたのが、他ならぬアマカワ卿なの。追手として現れたアルフレッドを退けてくださったのよ？」

クリスティーナはそう言って、少し翳（かげ）りのある笑みを口許に覗かせる。

「アルフレッド様を？　あの、王の剣の、アルフレッド様を……ですか？」

ロアナは大きく目をみはって、二度尋ねた。アルフレッドが追手

としてやってきたという事実も驚きだが、そのアルフレッドを退けたという話はさらに驚きだ。

「ええ、あのアルフレッドをよ。私もこの目で戦うところを目にしていなければ、信じられなかったでしょうけれど」

と、クリスティーナは微苦笑する。すると――、

「それにしても、ロアナさんもハルトのことをご存じだったのね？」

セリアが興味深そうに尋ねた。

「それは、もちろんですよ。アマカワ卿は平民の身で異例の名誉騎士に大抜擢されただけでなく、クレティア公爵家のリーゼロッテ様と個人的な交流があり、勇者サツキ様とも親しいということで、ガルアーク王国でも注目の人物でいらっしゃいますから……。しかし、いったいどういった経緯でアマカワ卿がお二人をロダニアまで護送されたのですか？」

ロアナはいまだに驚きの余韻を残しながらハルト＝アマカワという人物がどれだけ有名なのかを語ると、頭の中に思い浮かんだ疑問を口にした。

「……もともとアマカワ卿はクレール伯爵家と個人的な交流があったのよ。その関係でセリア先生とも交流があった。私が王都からロダニアへ逃亡するにあたってクレール伯爵の助けを借りたから、その縁でアマカワ卿を頼らせてもらうことになったの」

クリスティーナはセリアと相談して対外的に用意していたシナリオを滔々（とうとう）と語る。

「然様でございましたか……」

ロアナはすっかり信じきった様子で目を丸くした。元より彼女には王族であるクリスティーナの発言を疑う理由がない。すると――、

「というわけで、アマカワ卿はここロダニアでも注目の人物よ。一応、謝礼の名目でロダニアの邸宅を賞与したけれど、夜会での一件も踏まえて、我々は彼に大きな借りを作ってしまっている。その恩返しの一環として、彼と婚姻関係を結ぶべきと主張する声も上がってきているわ」

クリスティーナはやや辟易とした面持ちで言う。恩返しといえば聞こえがいいが、その実質がハルトという戦力を体よくレストラシオンに組み込んでしまうための足掛かりであることは目に見えているからだ。

とはいえ、そういった貴族達の声が大きくなるのも無理はない。何しろハルトは王の剣であるアルフレッドをも退けたほどの人物なのだ。その戦闘能力には戦術的な価値があるといえよう。

「あはは」

セリアはレストラシオンに所属する貴族達の思惑を見透かし、思わず苦笑してしまった。リオがレストラシオンの令嬢達と結婚することだけは、ありえないと思ったから。

「確かにアマカワ卿ほどの人物とは密接な縁を作っておきたいところですが……、爵位を下賜する、という選択肢はないのでしょうか？」

ロアナは思案顔を浮かべて問いかける。

「無理でしょうね。彼は一度、ガルアーク王国で騎士爵の下賜を断ったのでしょう？　もっとも、その結果として名誉騎士に叙勲されてしまったわけだけど……」

クリスティーナは初めから無理だと悟っているように、訊き返した。

「……では、クリスティーナ様の権限で、アマカワ卿を名誉騎士に叙任することはできないのでしょうか？」

ロアナは一つの選択肢として、別の可能性を尋ねる。爵位には義務が伴う以上、双方の合意がなければ下賜できないが、義務を伴わない名誉騎士であれば一方的に叙任することも可能だ。だが――、

「……できないことはないけれど、彼がそれを望むとも思えないですよね？」

クリスティーナは難色を示し、セリアに訊いた。

「ええ、仰せの通りかと」

セリアはややバツが悪そうに頷く。

「私としては彼が望まないことを無理強いしたくはないの。借りを返すつもりで却って迷惑をかけては、本末転倒でしょう？」

クリスティーナはまっとうな正論を語って、ロアナを見やった。

「……ええ。そこで婚姻関係を、という話になるのですね」

地位や金銭が駄目ならば、女で。いかにも貴族らしい交渉のやり口だ。流石のクリスティーナもそこまでは貴族達の動きを制限することはできないようである。ただ、ロアナは首肯しつつも、少し意外そうにクリスティーナの顔を窺った。

王族としてのクリスティーナならば、それでも合理的にハルトを名誉騎士に叙任する選択肢を選ぶように思えたからだ。

実際、第一王女の地位を持つクリスティーナならば、多少強引でもその地位を押し付けることができなくはない。とはいえ、それだけ筋を通して付き合いたい相手なのだろうと、すぐに思い直す。

「そうなるわね。正直、ぜひ我が家の娘をと主張する貴族も少なくないわ。その気になっている子も多いようだし」

クリスティーナは頷き、やれやれと嘆息した。

「……アマカワ卿は容姿端麗でいらっしゃいますからね。夜会に出席した令嬢達の間でも、浮かれている子が何人かおりましたわ」

ロアナも釣られて、やれやれと嘆息する。

（あはは、まさかリオがこの二人にここまで評価されるなんてね）

セリアはなんだか妙にこそばゆかった。だが、それでいて微笑ましそうに、クリスティーナとロアナの会話を眺めている。すると――、

「正直なところ、先生はアマカワ卿のことをどのようにお思いなのですか？　仮にレストラシオンに所属する貴族の令嬢からそういっ

た候補を見繕うとした場合、第一に選ばれるべきはセリア先生が相応しいと私は考えているのですが……」

クリスティーナがそんなことを言った。

「えっ！？」

セリアは思わず面食らってしまう。そして――、

（私がリオと……、結婚？）

白銀の花嫁姿になってリオと一緒にいる自分を想像し、堪らず頬を紅潮させてしまった。

「そのご様子だと、やはりアマカワ卿のことを憎からず思っていらっしゃるようですね」

クリスティーナはくすりと笑う。

「まあ、そうなのですか！？」

ロアナは興味津々といった面持ちで食いついた。普段は貴族の女性然としていても、こういった席ではやはり一人の乙女なのだろう。尊敬する恩師の恋愛事情は気になるようだ。

「う、ううん、ハルトとは、そういう関係では……」

セリアは気恥ずかしそうにかぶりを振る。

「まあ今の先生のお立場でご自由に婚姻も結べないのかもしれませ

んが、その気があるのでしたら、私から他の貴族達にそれとなく言い含めておきますので」

いつでも言ってくれと、クリスティーナは言外に語った。

「クリスティーナ様がこう仰っているのです。お慕いしているのでしたら、好機ですわよ、先生！」

と、ロアナはセリアに発破をかける。

「だ、だから、ハルトとはそういった関係じゃ……、そもそも一箇所に留まらない子ですし」

セリアはたじろいで弁明した。だが――、

「貴族ならば一箇所にとどまらず、あちこちに顔を出すのは当然のことではないですか。それに、お名前で呼ぶほどの仲なのにですか？」

ロアナはぐいぐいと問いかける。

「それはまあ、それなりの付き合いだから……」

と、セリアが答えると――、

「それなりの仲、というのが問題でもあるんです。今、先生はアマカワ卿の邸宅にお住まいになっておりますから、レストラシオンの貴族達も二人の仲を測りかねていまして」

クリスティーナがどこか悩ましそうな面持ちで言う。

「まあ、アマカワ卿の邸宅に、まあまあ」

ロアナは上品に口許を手で覆いながら、強く関心を示した。

「……」

セリアはいたたまれずに言葉に詰まる。

「今はそれが牽制となっていますが、本当にお二人の仲が何もないと思われるようであれば、痺れを切らして動きだす貴族も現れるはずです。そのことはご承知おきください」

クリスティーナはフッと笑みを浮かべると、やや困った面持ちで語った。

「……はい」

セリアは恥じらうように首肯する。それから、しばしハルトに関する話題が続き、瞬く間に時間が過ぎていく。

すると、ある時、室内にノックが響き、侍女がそそくさと入室してきた。

「姫様、勇者様がお越しです。ロアナ様が姫様とお茶をしているはずだからと」

侍女は粛々と用向きを語る。お呼ばれもせずに淑女達のお茶会に立ち入るなど、無粋の極みだが――、

「……そう、通していただいて構わないわよ」

クリスティーナは整然と告げた。

「えっと、でしたら、私はお邪魔になりそうなので、そろそろ失礼いたしますね」

セリアは空気を読んで、そう提案する。

「ええ、そうされた方がよろしいでしょうね。本日は素晴らしいひと時をありがとうございました、先生」

クリスティーナは申し訳なさそうに嘆息すると、セリアに小さく会釈した。

「こちらこそ、素敵な時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます、クリスティーナ様、ロアナさん」

セリアは折り目正しく、お辞儀し返す。

「本当に楽しかったですわ。よろしければぜひ、またお付きあいくださいな、セリア先生」

ロアナも口許をほころばせて、セリアに語りかけた。

「ええ、喜んで。それでは、ごきげんよう」

「はい、ごきげんよう」

そうしてお淑やかに別れを済ますと、セリアは侍女に案内されて退室することになった。侍女が扉を開けると、入れ違いに弘明が入室してくる。セリアはすれ違いざまに弘明にお辞儀をすると、その

まますたと歩いて立ち去ってしまった。
弘明は呆けた顔で立ち去るセリアの背中を見つめていたが、しばらくすると、クリスティーナ達のもとへと近づいてきて――、
「あー、今のは誰なんだ？」
と、開口一番にセリアの素性を尋ねる。
「セリア＝クレール様ですわ。魔道の名門として広く知られたクレール伯爵家のご令嬢にして、ベルトラム王国が誇る天才魔道士。クリスティーナ様や私の恩師でもあるお方です」
ロアナはやや困り顔で、セリアのことを教えてやった。
「恩師？　ロアナ達のか？　歳はいくつなんだ？」
弘明は大きく目をみはり、質問する。
「ヒロアキ様よりも二つ上、二十一歳です」
と、ロアナが答えると――、
「ははあ、合法ロリってやつか。で、天才魔道士と。いいな。どうせなら呼び戻して一緒にお茶しようぜ」
どうやら弘明のお眼鏡に叶ったようだが――、
「申し訳ございません。先生はお忙しいので、ご容赦ください。この後もアマカワ卿の邸宅へお帰りになって魔道の研究がございますので」

クリスティーナが事情を説明して、ご遠慮願う。

「アマカワ卿の邸宅？」

弘明は怪訝そうに首を傾げた。すると――、

「ハルト様のことです。ガルアーク王国の夜会でお会いになったでしょう？」

ロアナがすかさず説明してやる。

「ああ……、アイツか。なんでアイツの家がここロダニアにあって、セリアがそこへ帰るんだ？」

弘明はすぐに合点がいったようだが、再び疑問を抱いた。すると、今度は――、

「実は私やセリア先生がロダニアへ来るにあたって、ハルト様が護衛役を買って出てくださいまして、その謝礼としてロダニアの邸宅をプレゼントしたのです。セリア先生はアマカワ卿と親しい間柄ですので、アマカワ卿の邸宅に住まわせてもらっているというわけです」

クリスティーナが事情を説明してやる。

「あー、そういうことね、わかった。つまり、あの女はアイツのことを好いていると。なるほど、なるほど。じゃあ、いいや」

弘明は一気に興味を失ったのか、どこか不機嫌そうに言う。

（あーあ、せっかく目にかけてやろうと思ったのに、こぶつきとはね。他の男のことを思っているとか、そういう過去があるだけでも一気に萎えるんだよなあ。いらない情報だわ、がっかりだわ）

と、ひどく失望して、そんなことを考えながら。だが――、

「あら、もしかして私達がお茶のお相手ではご不満ですか？」

と、クリスティーナが微笑して言うと――、

「あー、いや、そんなことはないぜ。クリスティーナとはじっくり話をしたかったしな」

弘明は満更でもなさそうに、肩をすくめてみせる。クリスティーナだってセリアに負けず劣らずの上玉なのだから――。弘明はすぐに気持ちを入れ替えた。

◇　◇　◇

一方、その頃、セリアは帰路へ就いていた。一人で廊下を歩いていると――、

（セリア、春人と結婚したいの？）

突然、脳内にアイシアの声が響く。

「っ……」

セリアはびくりと身体を震わせた。そして――、

（ちょ、何を言っているのよ！？）

心の中で、慌ててアイシアに抗議する。今のセリアには常に霊体化したアイシアが護衛として付いているのだ。いきなり頭の中で声が響くことにも少しずつ慣れてきたが、今の発言は完全に不意打ちだった。

（さっきのお茶会でそんな雰囲気だったから）

（そ、そんなことないし！）

セリアは周囲に人がいないか、そわそわと確認しながら否定した。すると――、

（そうなの？）

アイシアのどこか訝しそうな声が脳内に響く。

（そうなの！　リ……、ハルトに言っちゃ駄目だからね！）

セリアは顔を真っ赤にして訴えた。

（わかった）

アイシアは意外とすんなり了承する。

（……）

セリアは少し予想外というか、拍子抜けしたが、もともとアイシアは淡泊な性格をしている。案外こんなものなのかもしれない。そ

う思って、小さく胸を撫で下ろした。

第１６６話　忍び寄る者達

現在地はルビア王国の南西部。あいにくと昨日は雨で移動ができなかったが、リオとフローラは順調にロダニアへの道程を消化していた。

時刻はまだ日が落ちる少し前で、まだまだ明るい時間帯である。とはいえ、野営をするにしても、都市に泊まるにしても、人工的な光源が都市の外にないこの世界においては、日が暮れる前に旅の移動を終えるのが鉄則だ。リオは渓谷の出口に存在する小さな宿場町をその日の滞在先として選ぶことにした。

「都市まであと少しです。大丈夫ですか、フローラ様？　昨日は雨だったので、場所によっては少し地面も湿っていますが」

と、リオは手を握って支えながら隣を歩くフローラに尋ねる。今は目と鼻の位置にある宿場町までのわずかな距離を歩かせることで、フローラに病後のリハビリをさせているところだ。

「はい。もっと歩けるくらいです！」

フローラは嬉しそうに微笑むと、元気に返事をする。

「それはよかった。ならそろそろ私の補助はご不要かもしれませんね」

リオはそう提案して、フローラの手を握った自分の手をわずかに掲げた。リハビリを開始した当初こそまだ歩くのがたどたどしかったが、今ではもうしっかりと歩いている。惰性で補助を続けていた

が、こうなるともはや手を繋いでいる意味はないように思えた。だが――、

「……え？」

フローラはこの世の終わりのような顔を浮かべると、少し遅れて、縋るようにリオの手を握る力を強める。

「えっと、まだ早いでしょうか？」

リオはやや面食らいながらも、フローラに確認した。

「あ、いや、その……は、はい」

フローラは慌てて俯き、気恥ずかしそうに頷く。

「……わかりました。では、まだこのままお供させていただきますね。まあ、今日はもうそろそろリハビリも終わりですが」

リオはそう言うと、微苦笑して前を見やる。もう数百メートル先には、宿場町の入り口となる門が控えているのだ。

「はい……」

フローラは少し残念そうに首肯する。それから、数分もしないうちに、リオ達は宿場町の入り口となる門にたどり着いた。

（……ん？）

リオは門の影に潜んでいた数人の女性騎士を発見する。全員が同

じデザインの騎士服を着ていたので、すぐにわかった。すると――、

「おい」

女性騎士の一人が近づいて、リオ達に声をかける。

「……何か？」

リオは警戒したものの、表向きは普通に応じた。

「若いな。歳はいくつだ？」

女性騎士は武人然とした口調でリオに問いかける。

「私は十六ですが」

「ほう。そちらは？　女か？」

リオが答えると、女性騎士は小さく目をみはった。そして、ローブを着て、フードを被ったフローラを見やる。

「あ、えっと……」

フローラは物怖じしたのか、いきなり水を向けられて小さくみじろぎした。

「彼女は十五ですが、それが何か？」

リオはフローラの前に立って代わりに答えてやると、流石に警戒心を滲（にじ）ませる。

「ああ、いや、すまない。警戒させてしまったか。我々は国に仕える騎士でな。私はエレナという。今はとある任についているんだが、それで、少し話を聞きたくてな」

エレナと名乗った女性剣士は自らの素性を明かすと、用向きを告げた。

「然様でございましたか。とはいえ、疲れているので早く宿へ向かいたいのですが」

リオはそれとなく協力に難色を示すが――、

「まあ、そう時間は取らせん。我々は討伐任務に就いていてな。この近隣に質の悪い追剥ぎが現れるという報告があったんだ。ここに来るまでの間に、そういった輩と遭遇したり、誰か不審な人物を見かけたりはしなかったか？」

エレナは一方的に説明すると、続けて質問を投げかける。

「いえ、見かけませんでしたが」

リオはエレナ達がこの場にいる理由に納得して、手短に答えた。この程度の質問なら答えた方が手っ取り早い。というより、権力者を相手に協力を拒否すれば、嫌がらせで難癖をつけられる恐れもある。

フローラはそっとリオの後ろにたたずみ、大人しくしていた。すると――、

「そうか……。ところで、探索と討伐に人員が必要でな。冒険者を雇うことが決まったのだが、君らの力も借りたい」

エレナはそんなことを言いだす。

「……申し訳ございません。我々は冒険者ではないので、ご協力はいたしかねます」

リオは自分達が冒険者ではないことをあかして、毅然とかぶりを振った。

簡単な質疑応答くらいなら協力するが、流石に野盗の探索と討伐にまでは協力してやる必要性はない。仮にリオが冒険者であるのなら正当な理由なしに公の依頼を断ることはできないが、冒険者でないのなら断っても特に問題はないはずだ。

「なに？　そんなりをしてか？」

エレナはリオのことを冒険者だと思っていたのか、意表を突かれたように訊いた。

「ええ。ただの旅人です」

リオは深々と頷く。

「旅人？　……だが、たった二人で旅をしているのだ。多少は腕に覚えがあるのではないか？」

エレナは食い下がるようにリオに問いかける。

「まあ、自衛をできる程度には」

リオは頷きつつ、何となく面倒くさそうな匂いを感じた。

「実は冒険者の数が足りていないんだ。この際、冒険者でなくとも構わん」

エレナは案の定、少し強引に要望する。だが――、

「申し訳ございませんが」

リオは慇懃な態度をとりつつも、きっぱりとかぶりを振った。すると――、

「……本当に冒険者でないのだろうな？」

エレナがリオ達の素性を疑りだした。もしかすると、依頼を断りたくてリオ達が素性を偽っていると考えたのかもしれない。

「ええ」

リオはきっぱりと頷く。

「では、タグを身に着けていないか、確認させてもらおうか」

エレナはリオ達の身体検査をすると言いだす。いつの間にかリオ達に対する職務質問のような形になっていた。

「まあ、構いませんが。早くしてください」

リオは露骨に嫌な顔をしながらも、仕方なく要望を受け入れてやる。ここで断ればさらに話がこじれるからだ。背負っていたバックパックを地面に降ろすと、外套を脱いでエレナの前に立つ。すると

――、

「う……」

そうしてリオがあまりにも堂々と対応するものだから、エレナはバツが悪そうに言葉に詰まる。流石にここまでしておいて嘘をついているとは思えなかったのかもしれない。あるいは、これでは自分達が一方的に難癖をつけているようなものではないかと気づいてしまったか。

「どうしたのですか？　調べるのなら、荷も確認するつもりなのでしょう？　最初に申し上げた通り、疲れているので早く宿に向かいたいんです。早く済ませていただけませんか？」

リオは慇懃な言葉遣いをしつつも、態度でしっかりと不満を訴える。

「っ、もういい。わかった。行け」

エレナはきまりが悪そうに、リオ達に立ち去る許可を与えた。すると、ずっと黙ったまま立ち尽くしていた他の女性騎士達が、どこか焦燥したような顔を浮かべる。

（……ん？）

リオは女性騎士達の表情の変化に気づいたが、それ以上はもう長居したくなかったので――、

「行きましょうか」

「は、はい」

荷を背負うと、はらはらと様子を見守っていたフローラを促し、さっさとその場から立ち去ってしまうことにした。

◇　◇　◇

それから、リオ達はその日の宿を探し始める。ただ、宿場町の中でランクの高い宿は先の騎士達に貸し切られているとのことで、適当な宿で角部屋を二つ借りて、別々の部屋を使うことにした。

もっとも、眠る以外の時間はリオがフローラの世話をしてやる必要がある。というわけで、二人は一先ずリオの部屋でお茶を飲んで休むことにした。すると――、

「あの、ハルト様」

フローラがカップを手にしながら、おずおずと開口する。

「はい、何でしょう？」

「先ほどの女性騎士の方々のことなのですが……」

リオが小首を傾げると、フローラは恐る恐る先の一件について触れた。

「何かご懸念がおありですか？」

「えっと、あれで大丈夫だったのかなと思いまして……」

「彼女達の討伐任務を手伝う必要があったのかといえば、冒険者でない我々が手伝う必要は皆無だったと思います。それに、我々は早くロダニアへ向かわなければならない」

「そう、ですよね。少しもめ事になりそうだったので、気になったといいますか、私達の立場と事情を明かせればよかったのですが…

…」

フローラは歯がゆそうに語る。

「確かに我々の素性を明かせば何の憂いもなく要求を断ることはできたのかもしれません。ですが、余計に面倒なことになる恐れもありました。事情を説明したところで末端の騎士の方々では対応しかねる状況ですし、判断を仰ぐためにどこか別の場所へ同行を要求されていたかもしれなかった。無論、フローラ様と特に親しい方がいらっしゃるのであれば、話は別ですが……」

いかにルビア王国がレストラシオンやガルアーク王国の同盟国とはいえ、いらぬ借りを作るのは好ましくない。頼るにしても相手は選ばなければならないだろう。例えばここがガルアーク王国のアマンドだったならば、リオはリーゼロッテに助力を乞っていたはずである。

問題はこのルビア王国がリオにとってよく知らぬ土地で、ろくに知り合いもいない場所だということだ。貴族といっても色々な手合いがいる。頼る相手を間違えれば、ややこしいことになりかねないのは明らかだ。

「いえ、私も特別に親しい方はこちらの国にはおりません。王族の方々ならば何名か顔を合わせたことはあるのですが……」

と、フローラは顔を曇らせて答える。

「なら、このままでも問題はないと思います。今すぐに魔道船を借りられるのならばともかく、先を急ぐだけならばこのまま私がロダニアまでお送りするのがおそらくは最速です。無論、護衛が私一人というのはご不安でしょうし、最終的にはフローラ様のご意思を尊

重いたしますが……」

リオはそう言って、フローラの顔色を窺った。すると――、

「あ、いえ。ハルト様の護衛を疑っているわけではないのですよ？だから、このままで大丈夫といいますか、というより、このままの方がむしろいいといいますか。あ、いえ、その、と、とにかく十分に安心しておりますので！」

フローラはあたふたと弁明すると、途中で余計なことまで言ってしまったと気づき、気恥ずかしそうに俯いた。

リオはそんなフローラを見て、くすりと笑うと――、

「……恐れ入ります。まあ、先ほどの件は少しだけ運が悪かったものとお考えください。思ったよりも素直に引いてくださったのが不幸中の幸いでした。中には権力を笠に着て言うことを聞かせるタイプの方もいらっしゃるでしょうから」

微苦笑し、言い聞かせるように語る。すると――、

「……申し訳ございません」

フローラは何か思うところがあったのか、リオの顔色を窺いながら何故か謝罪した。

「……どうしてフローラ様が謝罪なさるのですか？」

リオは不思議そうに尋ねる。あの女性騎士達の件に関して、フローラは何の関係もないはずだったから。だが――、

「あ、いえ、その、私も王族なので。権力を笠に着て横暴な真似をする王侯貴族の方々がいるのだと思うと、色々と不甲斐ないといいますか」

フローラが気にしたのは、リオが最後に言った言葉だったようだ。

「……別にフローラ様が権力を笠に着てこれまでに何かをなさってきたわけではないのでしょう？」

リオは何と言えばいいものか悩んだ様子で、そんなことを言う。

「そう、だと思いたいのですが、あまり変わりはないのかもしれません。私はいつも傍観して生きてきただけで、そういった方々がいると知っていても何もできなかったので……」

答えて、フローラは忸怩たる面持ちを覗かせた。

「……フローラ様がこれまでにどういった出来事をご覧になってきたのかは存じませんが、あくまでも他の王侯貴族は他の王侯貴族、フローラ様はフローラ様です。他の方々の言動についてまで、貴方様が深く気に病むことはないと思いますよ」

リオは言葉を選び、フローラを励ますように優しく語りかける。

フローラは一瞬、何か言いたそうな顔を浮かべたが――、

「……ハルト様のお言葉はとても優しくて、身に染みますね」

苦しそうに笑みを取り繕い、そんなことを言った。

◇　◇　◇

一方、同じ宿場町にある、リオ達が滞在している宿とは別の宿。そのとある一室で、ルビア王国の第一王女であるシルヴィの親衛騎士隊長――エレナが、レイスと向き合っていた。

「困りましたね。彼らを連れ出す口実がなくなってしまったとは……、これでは貴方達に検問を張ってもらった意味がなくなってしまうというもの。まさかこの程度の仕事もできないと思いもしませんでした」

と、レイスは憮然と息をつく。

「っ、仕方がないだろう。私は言われた通りの名目で話しかけた。だが、あの二人は冒険者でなかったのだ。連れ出す口実がない」

エレナはひどくバツが悪そうに弁明する。すると――、

「そこら辺は臨機応変にやっていただきたかったものですが、ま、仕方がありませんね。いいでしょう」

レイスは存外、あっさりと納得してみせた。

（やはりシルヴィ王女の親衛隊騎士達は高潔すぎて、こういった趣向には向かないようだ。まあ、最初から期待はしていませんでしたし、布石は打った。多少の手間はかかりますが、むしろこちらの方が都合が良かったかもしれませんね）

と、そんなことを考えて。だが――、

「……」

エレナにとってはそんなレイスが不気味で仕方がない。もっと咎められるなり、要求を突きつけられると思っていたのだ。一体何を考えているのか。

「彼らが滞在している宿はこちらで把握しておきました。実はシルヴィ王女やレンジ君も今はこちらの宿に滞在しておりましてね。今は貴方の部下のみなさんと顔を合わせているはずですよ。貴方もそちらに顔を出すといい。その後の指示は追って通達しますので」

「なに、シルヴィ様もあそこの廃村から連れ出したのか？」

レイスがとりあえずの指示を出すと、エレナが尋ねた。

「ええ、貴方がアレインとあの廃村を出たすぐ後、私とルッチと一緒にね。なので当然、皆この宿におりますが、そこはまあご愛敬ということで」

と、レイスは飄々（ひょうひょう）と答える。

「……姫様はどこの部屋にいる？」

エレナはあからさまに警戒している顔を浮かべて、シルヴィが滞在している部屋を訊いた。すると――、

「二階の角部屋です」

レイスは端的に答える。

「ふん」

エレナは不機嫌そうに鼻を鳴らすと、椅子から立ち上がったが――、

「……最後にもう一つ聞かせてもらいたい」

部屋を出る前に、レイスに水を向けた。

「おや、何でしょうか？」

レイスがにこりと応じると――、

「……貴様の指示で話しかけたあの二人は何者なんだ？」

エレナは思いきってリオ達のことを質問する。

「ははは、遠慮して訊かないのかと思えば、今頃それを尋ねますか。まあ、構いませんがね」

レイスは愉快そうに笑うと――、

「……彼ら、といいますか、彼こそが追剥ぎなんですよ。実に質の悪い、ね。貴方達も大事なものを奪われないよう、彼には気をつけた方がいいかもしれませんよ」

と、意味深長にうそぶく。その口許にはやはり不気味な笑みが刻まれている。

「……」

エレナは胡散臭そうに眉をひそめた。

第１６７話　雲行き

その日の夕刻。ルビア王国の第一王女であるシルヴィは、宿の私室で親衛隊騎士のエレナから直近の出来事について報告を受けていた。

「……その者こそが追剥ぎ？　レイスがそう言ったのか？」

シルヴィはレイスの指示でエレナが何をしていたのかを知ると、怪訝な顔を浮かべる。ちょうど今、宿場町の入り口で職務質問を行ったリオに関して報告を受けたところだった。

「はっ。確かに言っておりました。我々も大事なものを奪われないよう、気をつけた方が良いかもしれないと」

エレナは畏まって頷き、説明を補足する。

「ふむ、その少年はどのような人物であった？」

シルヴィはリオがどのような人物であったのかを尋ねた。

「外見年齢に反して、落ち着いた雰囲気がありました。また、育ちの良さが窺えましたが、世間知らずといった感じではない。私の職務質問に対する対応も毅然としたものでした。隙も見当たらなかったので、おそらく剣の腕も立つのではないかと」

「ほう、とても追剥ぎとは思えんな」

エレナがリオの第一印象を語ると、シルヴィは興味深そうに唸る。

「実際そういう手合いには見えませんでした。むしろ一緒に連れていた少女を護衛していたようにも思えます」
「そうか……」

と、シルヴィは思案顔で相槌を打つと――、

（レイスという男は実に胡散臭いが、意味もなくそのようなことを言う男とも思えん。我々の大事なものだと？　いったい何を意味している？　だが、あえて私の思考をそちらに誘導するのが狙いという可能性もある）

そう考えて、ちらりと室内の片隅を見やった。そこには一人用のソファが置かれていて、眉間に皺を寄せた菊地蓮司が座っている。

「レンジ、そなたはどう思う？」

と、蓮司に水を向けるシルヴィ。

「シルヴィ様、そのような男に話をお聞きになるのですか？　そもそもどうしてシルヴィ様のお部屋にいるのか」

エレナは盛大に顔をしかめて物申す。

「発言を許した覚えはないぞ、エレナ。黙っていろ。私が呼んだのだ。あの廃村ではろくに会話もしていなかったからな」
「っ……」

シルヴィがしれっと苦言を受け流すと、エレナは苦虫を噛み潰したような顔で押し黙った。だが、蓮司に対して苛立ちを帯びた視線

を向けることで、不満を訴えている。

「……」

蓮司は沈黙を貫き、うんざりしたような顔でエレナの視線を受け止めていた。

「どうした、答えてはくれぬのか？」

シルヴィは再び蓮司に問いかける。

「……どうして俺に尋ねる？　状況を悪くしたのは俺だ」

蓮司はムスッとした顔で答えた。

「その自覚があるのなら、この事態を解決するために何とかしようとは思わないのか？」

「……」

「……思わないか。まあ、そなたにとって我々はその程度の存在なのであろうな。最初に会った時、一緒に剣を交えて魔物を討伐した際には、そなたの戦いぶりを見て胸が躍ったものだが、すっかり腑抜けたものだ。いや、これが本当のそなたといったところか」

シルヴィはやれやれと溜息をつく。すると――、

「っ……！」

蓮司は流石に何か言おうとして顔を上げる。だが、シルヴィからじっと見つめられていることに気づくと、バツが悪そうに視線を逸らしてしまった。

「ここまで言われて何も言い返さぬか。初対面で王女である私に対しても、対等な口をきいていたのはどこの誰であったか……」
「っ……」

蓮司は下唇をギュッと噛みつつも、やはり何も言い返さない。

「最初に会った時、そなたは自分のことを世間知らずだと言っていたな。だから、物の言い方もわからぬと。普通、それでも王族や貴族に対してはそれなりに遜った態度をとろうとするのが常識的な在り方だが、そなたは上っ面だけ取り繕っているのが透けて見えるほどに不遜だった。挙句、私がそなたをスカウトすれば、俺は誰にも従うつもりはないと申す始末。……部下達は随分と顔をしかめていたが、私はそなたのそんな向こう見ずで唯我独尊な部分を買っていたのだ」

と、シルヴィは滔々と語ってみせた。

「……」

蓮司は随分と居心地が悪そうに押し黙っている。だから、シルヴィはさらに語ることにした。

「我が国が強き者を欲していると告げて、私がそなたをスカウトした時、そなたは『それはそっちの事情、俺には関係ない』と申したな？　そんなそなたに言わせれば、今こうして我々が困っているのも、それはこちらの事情で、そなたには関係のないことなのだろうな。とはいえ、それなら『どうしてそなたはそもそも私のために動いてくれたのだ？』と尋ねたいところだが……」
「……」

蓮司は忸怩たる面持ちで押し黙っている。

「……やはり、答えてはくれぬか」

シルヴィは強く落胆したように嘆息した。そして――、

「どうやら私の目が節穴だったようだな。もういい、そなたはもうこの宿場町から、いや、この国から出ていくといい。目障りだ」

と、蓮司に向けて言い放つ。

「シ、シルヴィ様！？」

エレナは泡を食って叫んだ。

「なんだ、そなたら親衛隊の騎士達はこの者のことをよく思っていなかったのであろう？　いい厄介払いができるではないか」

シルヴィはさも不思議そうな顔で言う。だから――、

「そ、それは……」

困惑するのは蓮司のことを嫌うエレナの方だった。それだけシルヴィが蓮司のことを気にいっていたから。すると――、

「レンジ、せめてもの情けだ。最後に忠告してやる。そなたは社会に溶け込んで暮らしながら、社会的なしがらみを忌避し、時に反社会的な言動をとることがある。そういった世間の波風を実力で跳ね飛ばすなり、ねじ伏せるのがそなたの生き方なのだろうがな。社会

的なしがらみを嫌っておきながら、社会的な恩恵に与ろうなどと、そんな都合のいい生き方がいつまでもまかり通ると思うなよ？」

シルヴィは蓮司に対してそんなことを言い始める。

「っ……」

蓮司はぎりっと拳を握り締めた。まるで自分という存在が全否定されたようだったから。微塵も敬意を抱いていない相手に遜（へりくだ）るなど、蓮司にとっては屈辱的なことだ。少し前までの自分にこんなことを言う相手がいたら、それこそ強気な態度で見下していたかもしれない。だが、今はそれができない。

「そなたよりも強い存在など、この世界には必ずいる。現にそなたは敗北した。個人ではそうおらずとも、人は集団になれば脅威だぞ？　見ろ。そなたはたった今をもって、我がルビア王国を敵に回した。もうこの国で生きていくことは叶わん。今後、我が領内でそなたの顔を見かけたら、私が容赦なく斬り捨ててやろう。我が国に多大なる被害を与えた大罪人としてな。覚悟しておけ」

と、シルヴィは苛立ちを隠さずに告げる。そして――、

「以上だ。行け。あの男共には私から何とでも説明しておいてやる」

蓮司に別れを告げた。

エレナはもはや何も言わず、目を瞑っている。彼女とて勝手な行動で状況を悪化させた蓮司のことを決して許していないのだ。それは他の親衛隊騎士達も同じである。金輪際、姿を見せぬというのなら、どことなり行ってもらった方がいいのかもしれない。今は蓮司に構っている暇はない。だが――、

「……」

蓮司は立ち上がらない。ひどく葛藤した様子で、拳を握り締めている。

「どうした、早く出ていかないか。それとも、この場で斬り捨ててほしいのか？」

シルヴィは冷ややかに問いかけた。すると――、

「……った」

蓮司はぼそりと口を動かした。

「何？」

シルヴィは怪訝な顔で訊き返す。

「……すまなかった。シルヴィの言う通りだ。何も言い返せない」

蓮司は一応は聞こえる声で謝罪した。

「だから何だというのだ？」

シルヴィは粛々と問いかける。

「……妹を助けるの、俺にも協力させてほしい。そのためなら何でもする。助けた後に今回の不始末も償うから」

蓮司は手酷く叱られた年齢相応の少年のように、随分としおらしい態度で答えた。

「……はっ、そなたもそのような顔をするのだな」

シルヴィは一瞬、呆けた顔をすると、思わず失笑する。

「シルヴィ様」

と、複雑な面持ちのエレナ。

「ああ、すまない。……だが、もういい。気持ちは嬉しいが、やはりそなたはここを去れ」

シルヴィは苦笑してエレナに謝罪すると、蓮司にそう言った。その声色は先ほどまでと打って変わって優しい。

「……な、なんで？」

蓮司は焦燥した顔になる。

「正直、そなたの力を頼りにしていたところはある。だが、そなたは良くも悪くも純粋で、ただの子供だったのだ。今、そのことに気づいてしまった。だからだ。そんなそなたを巻き込むわけにはいかない」

シルヴィは整然と語った。

「そんなことはないっ！　俺は十七だ！」

蓮司は心外だと言わんばかりに叫ぶ。日本ではともかく、十七歳といえば形式的にはこの世界ではとっくに成人扱いされる年齢である。かくいうシルヴィも十八歳だ。

「そんなことはあるさ。そなたはちぐはぐすぎる。出自は完全に謎に包まれ、強大な力を手にしておきながら、何かが致命的に欠けている。その不完全さが何かわからず惹かれていたのだが、存外、単純な話だったようだ」

シルヴィはそう言って、フッと自嘲(じちょう)めいた笑みを刻む。

「駄目だ、駄目なんだ！　ここで逃げだしたら、俺は一生後悔する！　俺が俺でなくなるんだ！」

蓮司は泡を食って訴えた。すると――、

「それはそなたの事情であろう。我々には関係がない」

シルヴィはかつて蓮司が口にした台詞を、そのまま蓮司に告げる。

「っ……！？　だが、俺の力は必要だろう！？」

蓮司は堪らず渋面を浮かべると、シルヴィに問いかける。それが蓮司の本音であり、強みでもあった。他人は許されなくても、自分は許されるという無意識な傲りでもある。自覚がなくとも自分は特別だと思っているのだ。だが――、

「そういう驕ったところが子供だと、言っているのだがな。今の私に、そなたを信用できると思うか？」

あいにくと蓮司の信頼は地に落ちていた。しかし――、

「次は絶対にしくじらない！　信じてくれ！」

と、蓮司は力強く訴える。

「そうそう次があると思うなよ？」

「っ……」

シルヴィが冷たく言い放つと、蓮司は思わず言葉を呑む。とはいえ――、

（正直、今の我々は自分達のことで手一杯だ。子供のお守りをしている余裕はない。だが、ここまで熱くなった男を突き離せば、また勝手に顔を突っ込まれるかもしれないという懸念もある。実力だけは備えているからな）

シルヴィは悩んでもいた。そんな蓮司を頼るべきか否か。正直、蓮司が秘めている戦闘能力は目をみはるものがある。それは純然たる事実だ。難点があるとすれば、扱う本人が未熟であるということ……。だから――、

「……仕損じれば、そなたは一生をふいにするかもしれんぞ？　ここで頷いた瞬間、そなたはもう引き返せなくなるかもしれない。後悔してももう遅い。その覚悟はあるのか？」

シルヴィは今一度、蓮司の覚悟のほどを尋ねた。

「……ある」

蓮司は静かに頷く。その瞳には強い決意が秘められていた。
シルヴィはじっと蓮司の顔を見つめ返す。あるいは、ここで断っておいた方がいいのかもしれない。そう思ったが――、

「……わかった」

シルヴィは深く息をつくと、腹を括って頷くことにした。

◇　◇　◇

一方、アレインとルッチはレイスの部屋に呼びだされていた。

「レイス様、いったい何の御用で？」

アレインは向かいに座るレイスの顔色を窺って質問する。

「……正直、誰に託すか悩んだのですがね。ルッチ、貴方がいいでしょう。これを」

レイスはそう言うと、おもむろに剣を取り出して机の上に置いた。
すると――、

「こ、これはっ……！？」

ルッチとアレインは剣を視界に収めて、愕然と息を呑む。

「ええ、それはあの方が使っていた剣です」

レイスはにやりとほくそ笑んだ。

「……これを、俺に？」

ルッチはおずおずと尋ねる。

「ええ。貴方が一番、適性が高そうなので」

「適性？」

「言うまでもないでしょうが、それは魔剣です。能力は少々特殊でしてね。強力ですが、扱うのに適性が必要なタイプの代物なんですよ。他の魔剣以上にね」

レイスはすらすらと説明してやった。だが、最後の台詞だけは何か含みのようなものがある。

「その適性が、俺に？」

ルッチは戸惑いがちに首を傾げた。

「ええ。貴方はあの方と気質が似通っていますからね」

レイスは鷹揚に頷く。

「でも、俺が団長の形見を……。他にも団員はいるし、いいんですかい？」

ルッチはレイスに尋ねながらも、隣に座るアレインを見やる。

「……まあ、いいんじゃねえの。ちと複雑だが、確かにお前は団長に似ているところがある。他の連中には後で俺から説明してやるよ」

アレインはやれやれと溜息をついて語った。

「お、おう……」

ルッチはどこかそわそわした様子で頷くと、そっと剣に手を伸ばす。すると――、

「とりあえずは馴染ませる必要があります。当分は肌身離さず装着しているように」

と、レイスはルッチに呼びかける。

「もちろん。団長の形見だ。死んでも放しませんぜ」

ルッチはへへっと笑った。

「よろしい。それでは、明日の段取りを伝えるとしましょうか。ヴェン達もエステル第二王女殿下を連れて、この町に着いたことですしね。準備は万端です」

レイスもにやりと、不気味な笑みを口許に刻む。

「これであの魔剣士にリベンジができるってわけだ」

ルッチは不敵にほくそ笑む。だが――、

「いえ、今回に限ってはそれが主目的ではありません」

レイスは粛々とかぶりを振った。

「何、どうしてですかい！？」

ルッチは泡を食って尋ねる。アレインもすっかりその気だったのか、目を見開いてレイスを見つめていた。

「もちろん彼を始末できるのであればそれに越したことはないのですがね。まあ、状況次第といったところでしょうか。せっかく生き残ったフローラ王女もいることですしね。彼女にも新たな利用価値が生まれました」

と、レイスは意味深長な物言いをする。その虚ろな瞳は遥か先を見据えていた。

◇　◇　◇

明朝、リオはフローラを連れて、宿の外へと出る。

「今日もよろしくお願いします、ハルト様」

フローラは宿の前で、ぺこりとリオにお辞儀をした。

「はい、お任せください。午前中には国境を越えられると思います。早速ですが、行きましょうか。とりあえずは町の外へ向かいましょう」

リオはフローラを誘(いざな)って、宿場町の外へと歩きだす。向かう先は昨日、入ってきた門とは逆の方向だ。

「はい！」

フローラは元気よく頷いて、リオの隣を歩き始める。

「ところで、フローラ様は朝がお強いのですか？」
リオはご機嫌なフローラを見て、ふと尋ねてみた。
「え？」
フローラは不思議そうに小首を傾げる。
「いえ、毎朝、元気そうといいますか、あまり眠そうには見えないので。旅の疲れは残っていないのかなと」
リオは朗らかに質問の趣旨を説明してやった。
「あ、いえ、どう、でしょうか？　強い、というわけではないと思うのですが……、ハルト様が運んでくださるので、私はそこまで疲れていないですよ」
と、フローラはこそばゆそうに語る。
「然様でしたか。なら、よかったです」
「ハルト様こそ、毎日たくさん走って、お疲れにならないのですか？」
リオが微笑すると、今度はフローラが不思議そうに尋ねた。
「鍛えておりますからね。それに、魔剣で肉体を強化すると、体力も底上げされますから」
そうして、二人は和やかに会話をしながら、宿場町の外へと向か

っていく。門の外を出て少し進むと、南西と南東へ続く街道の分岐点がある。リオ達が進むのはロダニアがある南西の方角だ。南東へ進んでしまうとガルアーク王国へ向かってしまうので、遠回りになってしまう。だが――、

「ん、あれは……？」

リオは街道の分岐点に人だかりを発見する。これからリオ達が進もうとする南西の街道には、昨日、リオ達に声をかけた女性騎士達が集まっていた。

第168話　誘導

リオは街道の分岐点、進行方向の道に集まっている者達が、昨日の女性騎士達であることに気づく。当然、女性騎士達もリオ達のことを視界に収めていた。その中からエレナが歩きだして、リオ達に近づいてくる。

（何だ？）

リオは接近してくるエレナを見据えながら、そんなことを思う。正直、少し警戒してしまったが、ここでいきなり引き返すのも不自然だ。というより、声をかけられて制止されるに違いない。

「昨日ぶりだな」

案の定、エレナは一定の距離になると、リオに声をかけた。

「その節はどうも」

リオは無難に応じる。

「悪いが、あちらの街道は通行止めでな。お前達はどちらへ向かうんだ？」

エレナは突然、リオに問いかけた。

「我々が行くのは逆の街道ですが、通行止めですか？　何故？」

リオはさらりと嘘をつくと、通行止めになっている理由を尋ねる。
「例の追剥ぎの捜索と関係している。これ以上は言えん。まあ、逆の街道を行くお前達には関係のないことだ。じゃあな」
エレナはそっけなく答えると、そのまま女性騎士達がいる場所へと戻ってしまう。
（追剥ぎが危険だから、街道を封鎖するということか？　よくわからないな）
リオはどうしたものかと考えながら、エレナの背中を眺めていた。すると――、
「……あの、ハルト様。南西の街道へ進むのでは？」
フローラがリオの背後から、恐る恐る声をかける。
「街道が塞がっているのなら、無理に押し通るわけにもいきません。少し面倒ですが、とりあえずは南東の街道を進んで、適当な場所で街道を外れて南西へ向かいましょう」
リオは小さく嘆息し、妥協案を提示した。
「でも、いいのでしょうか？　街道は塞がれているのに、その先へ進んでしまって……」
フローラは根が生真面目なのか、通行禁止の区域をこっそり通り抜けることにわずかな戸惑いを覚えたようだ。リオとしてはここに来るまでの間に何度も街道を無視してきたので、そんなことを気に

するのは今更である。とはいえ、明確に通行禁止になっているという違いは、フローラにとって無視はできない要素なのかもしれない。

「……おそらくは追剥ぎを警戒していて、何らかの作戦があると思うのですが、行動範囲は限られているはずです。迷惑がかからないよう、十分に距離をとってから南西の街道に合流しましょう。まあ、回り道をすると思ってください。道は通りませんが」

リオは空を仰ぎ、どこか困ったように語る。堂々と開き直ったり、ずる賢い説明をしたりしてはフローラの抵抗感を余計に煽るだけだと思ったから、問題の核心にはあえて触れない。

もとより下手に近い位置で南西の街道に合流しようとすると、作戦中の騎士達とかち合う恐れがあるから、適度に距離を置いてから向かうのが無難である。少し面倒になったが、特に支障はない。

「はい、わかりました」

フローラはくすりと笑うと、素直にリオの説明を受け入れた。

「では、行きましょうか」

そうして、リオ達は南東の街道へと歩きだす。その一方で、エレナは女性騎士達が集まっていた場所に戻っていて――、

「……これでいいのか？」

右手の森にそびえる木に隠れていた一人の男、ルッチに問いかけた。

「ああ、上出来だ。俺も所用があるからな。後はもう自由にしてく

れて構わないぜ」

ルッチはそう言うと、踵を返して森の奥へと向かっていく。

「なっ、おい！？」

エレナは慌ててルッチに声をかけた。

「あん？」

ルッチは億劫そうに振り返ると――、

「用があると言ったろ。あんたらもそこにいても、もうすることはねえぜ。何なら宿に戻ってもいい。じゃあな」

おざなりにそう言って、今度こそ東の森へと立ち去ってしまった。

「何だというのだ」

エレナは歯がゆそうに顔をしかめる。エレナ達に求められた仕事はリオ達を南東の街道へ向かわせることで、それ以外の情報は何も教えられていない。妙な胸騒ぎがした。それは彼女の部下達も同じである。

「隊長」

女性騎士達は困惑してエレナの名を呼ぶ。どうするべきか、判断を求めているのだろう。

「……連中が何か企んでいる可能性はあるが、情報が少なすぎる。

二人、シルヴィ様のもとへ伺い状況の説明を。宿に戻ってもいいとのことだしな。急げ」

エレナは逡巡したものの、即座に部下達へ指示を下す。

「隊長と残りの者はいかように？」

女性騎士の一人――、部隊の副隊長が硬い声で尋ねる。

「私は森へ入ってみる。シルヴィ様が直々にお越しになるか、報告に参上した者達がシルヴィ様のご指示を持ち帰るか、私が戻ってくるか、他の者達はそれまでここで待機だ。不測の事態が生じた際の判断は貴様に任せる」

エレナはそう説明して、副隊長の女性騎士に命じた。

「承知しました。お気をつけて」

副隊長の女性騎士は機敏に首肯する。

「ああ。任せたぞ」

エレナはそう言い残すと、静かにルッチが入っていた森へと歩を進めた。

◇　◇　◇

その頃、シルヴィ達が前日から貸し切っている宿場町の宿で。蓮司とシルヴィは見張りのアレインと一緒に、宿の食堂に待機していた。

「……なあ、シルヴィ、どうするつもりなんだ？」

蓮司は声を潜めて、シルヴィに問いかける。

「どうするとは？」

「連中、この宿場町で何かを企んでいるんじゃないのか？　どうして俺達はあの廃村から連れ出される必要があった？　お前の妹が関係している可能性もあるんだろう？」

と、蓮司は次々と現状に対する疑問を口にしていく。

「……それらの懸念はもっともだ。だが、何もわからぬ状況で下手な手を打つわけにもいくまい。最悪、すべてが台無しになる恐れもある」

「なら、ここでじっとしているのか？」

大人しくしているのは蓮司の性分に合わないのか、そんなことを尋ねる。

「……連中がここで何をしようとしているのか、少なくともそれを見極めるまでは動けん。おそらくはエレナ達に接触させた追剥ぎとかいう男が関係しているのであろうが、その人物が何者であるのかさえわからぬのだ。調べようにも行動は制約されているしな」

エレナは忸怩たる面持ちで答えた。

「連中は何をしようとしているのか、どうしてお前の親衛隊騎士達にそんな協力をさせたのか、その男が今の状況の鍵を握っている可能性はありそうだな。……ん？」

蓮司は食堂の端で眠そうに欠伸をするアレインを見やり、ぼそりと呟いた。すると、食堂へ一人の男が入ってくる。

「おい、アレイン」

入ってきた男は蓮司が見知らぬ人物だったが、アレインに対して名指しで声をかけた。

「アレは……」

シルヴィが入ってきた男を視認すると――、

「知っているのか？」

蓮司が訊いた。

「以前にレイスと一緒にいるのを見たことがある。確かヴェンと呼ばれていたはずだ」

「ヴェン……」

シルヴィがその名を告げると、蓮司は鋭い目つきでヴェンを見据える。

「おう、ヴェン。どうした？　お前は……」

アレインは何かを言おうとしたが、口を噤(つぐ)み、ちらりとシルヴィや蓮司のことを見やった。二人がいる前では話しにくい事柄なのだろうか。

「少し話がある。食堂の外へ行こう」

ヴェンはそう言って、アレインを外へ誘う。

「わかった。……少し食堂の外へ出てきますよ、お二人さん。妙な真似はしないように」

アレインは頷き、座っていたダイニングチェアから立ち上がった。そして、蓮司とシルヴィの二人を牽制する。

「ふん」

蓮司とシルヴィは不機嫌そうにそっぽを向いた。

アレインはやれやれと肩をすくめるが――、

「行くぞ、アレイン。急ぎの話だ」

ヴェンはそう言って、さっさと食堂の外へ出てしまう。

「おいおい、どういうことだよ？」

アレインはヴェンの背中に声をかけながら、食堂の外へ出ていった。

「あのヴェンとかいう男、焦っていたな」

と、蓮司は二人が食堂からいなくなったタイミングで言う。

「ああ。何か不測の事態でもあったようだ。話を聞ければいいのだが、果たして魔法で身体能力を強化して聞こえるものか……」

シルヴィは険しい顔で頷き、もどかしそうに語った。シルヴィは強力な身体強化魔術が込められた魔剣を所持しているが、宿の中では持ち歩くことをレイス達に禁じられている。魔法で身体能力を強化すれば多少は聴力も上がるが、魔剣の強化には及ばない。魔剣で強化しても室内のひそひそ話を聞き取れる程度なので、部屋の外に出られてしまえば打つ手はなしだ。すると――、

「俺に任せろ。盗み聞きできるかもしれない」

蓮司がここぞとばかりに申し出る。

「何？」

「俺のコキュートスは特別製だと、前にも言ったな？　手元に武器を顕現させずとも、強力な身体強化を施すことはできる。もっとも、連中はそのことに気づいていないようだが」

シルヴィが怪訝そうに首を傾げると、蓮司は得意気に笑みを刻む。

「なんと。……では、頼めるか？」

「ああ」

蓮司は力強く頷いた。

◇　◇　◇

一方、食堂の外では、アレインとヴェンが会話を繰り広げていた。

「で、どうしたんだよ？　お前は取引の担当だろ？　なんでここへ来た？」

と、アレインはヴェンに問いかける。
「問題が生じた」
「問題？」
「肝心のエステル王女が逃げ出した」
「なっ……！？」
アレインはひどく驚いたように声を荒げた。
「馬鹿野郎、声が大きい」
ヴェンは声を潜めて、アレインを叱責する。
「……取引はどうするんだ？　相手の男は女を連れて、もう宿場町を出て行ったんだろう？　ルッチの野郎が女騎士達を使って取引場所へ誘導したんじゃないのか？」
アレインは声を抑えて尋ねた。
「ああ、既に誘導済みだ。ルッチも予定通り、女騎士達を街道に残して取引場所へ向かった。今頃、女騎士どもは戸惑っているはずだが……」
「エステル王女が逃げ出したとなると、不味いじゃないか。街道に出られでもしたら、女騎士どもが見つけるかもしれんぞ」
ヴェンが何か含みを持たせて答えると、アレインは焦燥した声色で言う。
「ああ、だから急ぎの話と言っただろう。交換材料のエステル王女

がいなければ、取引は成立しない。ましてや相手に先に見つけられでもすれば、相手にとってあえて取引を行う必要性もなくなる。そうなれば、わかるな？」

ヴェンは食堂の入り口を見やりながら、どこか説明的な物言いで語った。

「わかることはわかるが、だったらこんなところで呑気に話をしている場合じゃないだろう」

アレインは言葉とは裏腹に、やや悠長な口調で問いかける。

「その通りだ。森へ向かうぞ。お前にも手伝ってほしい。詳しいことは移動しながら説明しよう」

「……食堂の二人はどうする？　俺まで出張ると、見張りはいなくなるぜ？」

「置いていって構わん。レイス様の指示だ。もとよりもう用済みらしい。このままこの宿場町に置いていくつもりだったらしいからな」

ヴェンはそう言って、ニヤリとほくそ笑む。

「なるほど、じゃあ行くとするか」

アレインも口許を緩めてほくそ笑むと、深々と頷いた。

二人は顔を見合わせると、食堂の入り口へと歩を進めていく。十秒もしないうちに、食堂の入り口にたどり着くと――、

「シルヴィ王女殿下、少し所用が出来た。席を外させてもらうので、しばしこの場で待機を」

アレインがシルヴィに語りかけた。
「……何だと？　どこへ行く？」
シルヴィは怒気を抑えているのか、剣呑な声で尋ねる。
「貴方がそれを知る必要はない」
アレインはフッと嘲笑すると、踵を返す。
「待て！」
蓮司は声を荒げてアレイン達を呼び止めた。
「止めろ、レンジ」
シルヴィは咄嗟に蓮司を宥める。
「だが……！」
「いいんだ」
憤る蓮司の手を、シルヴィはギュッと握って制止した。
「あいにくと急いでおりますのでね。それでは」
アレインはそんな二人を鼻で笑うように、今度こそ踵を返していく。そうして、アレイン達が立ち去ると、シルヴィは静かに立ち上がる。そして、食堂の外へと歩きだした。
「待て、どうするつもりだ、シルヴィ！？」

蓮司はすかさずシルヴィの背中に声をかける。

「奴らを出し抜く。より確証を得たいし、こちらの動きを気取られるわけにもいかんからな。今は後を追うしかない。蓮司、そなたは……」

シルヴィは務めて冷静に語ると、蓮司に振り返った。

「もちろん俺も行くぞ」

蓮司は意気込んで申し出る。

「……なら、私と共に来てくれ。騎士達と連携を取りたいところだが、やむを得ん」

シルヴィはわずかに逡巡したものの、今は時間がない。蓮司と二人で行動することを決めた。大急ぎで自分の部屋へ寄って魔剣を回収すると、そのまま二人で宿の外へと小走りで躍り出る。すると――、

「シルヴィ様！」

女性騎士二人と鉢合わせた。二人ともエレナの指示で宿に駆けつけたシルヴィの親衛隊である。

「お前達、どうした？」

シルヴィは意表を突かれて目を見開く。

「エレナ様の指示でこちらへ。実はご報告したいことが……」

女性騎士達は焦り気味に話を切りだした。

「待て。話は移動しながら聞く」

シルヴィはそう言って、北から南へと続く宿場町の通りを見渡した。すると、南の街道へ続く通りの先に、アレインとヴェンらしき男の背中を捉える。

「……行くぞ、付いてこい」

シルヴィはスッと目を細めると、南の街道へ向けて歩きだす。決して焦らぬよう、逸りそうになる足の動きを抑えるが――、

（おかしな雲行きになってきた。なんだ、この胸のざわつきは……？）

シルヴィの胸の内には、名状しがたい不安や疑念が渦巻いていた。

第169話　思惑と疑惑

シルヴィ達が宿場町の宿屋を飛び出した頃。リオはフローラを引きつれて、南東へ続く街道を歩いていた。街道の両脇は鬱蒼(うっそう)とした森に包まれており、しんと静まり返っている。

（質の悪い追剥ぎか。封鎖されていたのは南西の街道だったけど……）

リオは先ほど遭遇した女性騎士達のことを考えると、進行方向の右手に広がる西側の森をおもむろに見やった。

通常、宿場町のように数多く存在する小さな町においては、組織的な兵集団を満足に常置することはできない。そこで、一定の裁量を与えられた一人の兵士が領主から派遣されて、現地人や冒険者と協力して治安を維持するケースが一般的である。

それでも対応しきれないケースになると、領軍や場合によっては国軍が出張ってくるのだが、王城に仕える騎士団が担当するほどの案件となると、あまり穏やかではない。

（嫌な感じがするな）

リオは違和感にも似た名状しがたい胸騒ぎを覚えると、今度は隣を歩くフローラに視線を向ける。まだ街道の分岐点からあまり距離は置いていないが――、

「辺りに人気(ひとけ)もありませんので、そろそろいつものように移動をしましょうか。このままもう少し街道を進んだら、森を突っ切って南西へ向かいますので」

リオは後方を振り返っても誰もいないことを確認すると、フローラにそう提案した。いつものように、とは、リオがフローラを抱きかかえて走るという意味である。
女性騎士達が何らかの面倒な案件を抱えているのは間違いない。今は護衛対象のフローラがいる以上、さっさと立ち去ってしまうのが吉だろう。街道で身体強化を施して走るのは悪目立ちするのであまり好ましくないが、今は直感に従うことにした。

「……？　はい！」

これまで堂々と街道を走ってきたことがなかったため、フローラは少し不思議に思ったようだが、リオの発言を疑うことはなく笑顔で頷く。

「では、失礼いたしますね」

リオはそう言って、おもむろにフローラへ近づいた。

「はい。お、お願いします」

フローラおずおずと首肯すると、気恥ずかしそうに身体を強張らせる。リオに抱きかかえられるこの瞬間は、何度経験しても慣れないらしい。
一方、リオは慣れた手つきで軽やかにフローラを抱きかかえてしまう。フローラはリオの服をギュッと掴み、緊張してその身をリオに委ねた。

「お、重くないですよね？」
「ええ、大丈夫ですよ」

このやりとりも何度目になるかわからない。赤く頬を染めるフローラに、リオは苦笑して首肯する。だが――、

「た、助けて！」

突然、右手に広がる森の奥深くから、助けを求める女性の声が聞こえてきた。

◇　◇　◇

一方、シルヴィ達は宿を出て、アレイン達の追跡を開始していた。遥か前方を小走りで進むアレイン達の背中を追いかけながら、親衛隊の女性騎士二人から報告を受けると――、

「なるほど。ルッチという男は森の中へ入っていったか」

シルヴィは険しい顔を浮かべる。

「お前の部下が接触した追剥ぎとかいう男が、奴らの取引相手と見て間違いはなさそうだな」

と、シルヴィを見やって言う蓮司。

「……ああ」

シルヴィはわずかな間を置いて頷いた。返答に時間を要したその理由は――、

（少し状況が出来すぎてはいないだろうか？）

ふと、そんなことを思ったからだ。今までまったく居所を掴ませなかったエステルの所在がここにきて明らかになった。しかも、何らかの取引の交換材料にされようとしていると思えば、逃走してしまったという。加えて、レイス達にとっても不測の事態が発生して、シルヴィ達の監視が無くなった。

立て続けに入ってきた情報はどれも見過ごせないものばかりで、まさに千載一遇の機会が降ってきたとしかいいようがない。だが、少し都合が良すぎるようにも思えた。

（とはいえ、動かざるを得ない状況にあることは確かだ。これ以上はもう今の関係を引きずるわけにもいかない。仮にエステルのことを見捨てることになっても、レイス達との関係を清算せねばならない）

そう、もし本当に千載一遇の機会が訪れているのだとすれば、今を逃せばもう二度とチャンスはないだろう。現状では考えている時間も裏をとっている時間もないことも確かだった。すると――、

「シルヴィ、少し確認しておきたい」

蓮司が口を開く。

「何だ？」

と、シルヴィが訊き返すと――、

「最優先すべきはお前の妹の身柄の安全と考えていいのか？　連中よりも先に保護するのが理想だが、おそらく戦闘は避けられないだろう。その際の対応はどうすればいい？」

蓮司は淡々とした口調で問いかけた。

「……」

シルヴィはすぐには答えず、思案顔を浮かべる。すると――、

「奴らの戦闘能力は未知数だ。正直、手加減するくらいなら殺した方がいいと俺は思う。特に奴らが団長と呼んでいた男は危険だ。俺達が全力で戦っても勝てるかどうかは怪しい」

蓮司は殺害を視野に入れて提言した。強硬策にも思えるが、ルシウスとの戦闘では相手の身柄を確保しようと手酷い目に遭ったことから、己を戒めているのだろう。確かにエステルを救うだけならば、他の目的は作らずに敵は全て殺すのが最も確実である。

「……取り調べをするために可能ならば生かしておきたいが、全員を生かしたまま捕らえろなどと無理は言わん。下手に加減をする必要はない。それでも、レイスだけは生かしておきたいところだがな」

シルヴィはひどく悩ましそうに答えた。

「わかった。なら、取引相手の追剥ぎはどうする？　連中の話によると、そいつもお前の妹を狙っているようだが」

蓮司は続けて、一番の不確定要素ともいえるリオの存在に言及した。

「……状況的にエステルを狙っている恐れがあるようなら、敵と仮定せざるをえん。そなたが言う通り、エステルの身柄確保を最優先

とする」

シルヴィは悩ましそうにしつつも、毅然と答える。事情は聴取したいところだが、それは人質であるエステルを奪還できてからの話だ。レイス達と取引相手との関係性が不透明である以上は、容疑者を相手に悠長に状況を確認している暇はないし、後手に回るわけにもいかない。自分達がイニシアティブを握るためには、何かを犠牲にしなければならない状況だった。

「わかった。俺達以外は全員を敵と見なしていいわけだな。となれば話は簡単だ」

蓮司はそう言って、フッと好戦的な笑みを口許に刻む。だが――、

「ただし、他の連中が先にエステルの身柄を確保していた場合は、奇襲を前提に動く。その時は私の指示に従ってほしい」

と、シルヴィは注意事項を付け加える。

「なら、何としても俺達が先に身柄を確保する必要があるな」

蓮司は真剣な面持ちで、決然と告げた。すると、そこで――、

「連中の速度が上がった！」

と、シルヴィが顔色を変えて叫ぶ。遥か前方を進むアレインとヴェンが、ちょうど門を出た辺りで急加速したのだ。そのまま真っ直ぐ森の中へと入っていく。

「どうする、シルヴィ？」

蓮司は緊迫した面持ちで尋ねる。
「……後を追う。レンジは私と一緒に付いてきてくれ。そなた達は街道の騎士達に事情の説明を。しかる後、皆と一緒にエステルの捜索に加われ」
シルヴィはそう告げると、宿の部屋から持ち出した魔剣の柄を握ってその力を引き出し、身体強化を施して駆け出した。蓮司もその後を追いかけて駆け出す。
「≪身体能力強化魔法（ハイパーフィジカルアビリティ）≫」
女性騎士二人も魔法で身体能力を強化すると、街道の分岐点にいる親衛隊のもとへと駆け出した。
魔剣と神装で身体強化を施したシルヴィと蓮司はぐんぐん加速していき、アレイン達が入った森へと接近していく。そうして、ちょうど宿場町の外へ出た辺りで――、
「奴らの向かう先が件（くだん）の取引場所の付近だと思われる。森の中に入ったら、どんな些細な情報でも気がついたことがあれば教えてくれ」
シルヴィは駆けながら、隣を走る蓮司に語りかける。
「わかった」
蓮司は真剣な面持ちで頷いた。すると、南東の街道から激しい轟音が鳴り響く。
「っ！？」

シルヴィと蓮司はギョッと目を見開いて、音が聞こえた方角を見やった。すると、街道の分岐点からそう遠くない位置に、夜を貼りつけたような闇が膨れ上がっているのが見える。

「……あそこだ。行くぞ！」

シルヴィは数瞬その光景に釘付けになっていたが、最悪の状況を想定したのか、一目散に現場へと駆け出した。

◇　◇　◇

そして、時はシルヴィ達が街道の異変に気づく少し前まで遡り、場所は再びリオ達がいる森の街道へと移る。

「あの、今、森の中から女性の声が……？」

森の奥から聞こえた女性の叫びは、フローラの耳にも届いたようだ。フローラは少し怯えた様子で右手の森を見やる。

「……ええ、聞こえましたね。私の後ろへ」

リオは頷き、素早くフローラを地面へ降ろした。右手の森に向き直り、フローラを庇うように一歩前へ出ると、警戒して視線を森の中に巡らせる。

「誰か、助けて！　助けてください！」

助けを求める女性の声は、どんどん大きくなっていた。がさがさと草木や落ち葉を踏みしめる音も聞こえる。リオ達がいる場所に近

づいてきているようだ。

「あの、追剥ぎに襲われているのでは？」

フローラは恐る恐るリオに尋ねる。女性騎士達から追剥ぎの話を聞いていたことから、すぐに連想したのだろう。

「かもしれませんが……」

リオは含みを持たせ、部分的に肯定する。言葉では説明できないが、何か引っかかりを覚えているのだ。女性の気配が急に現れた気がしたのも気になった。だが、助けを求める女性はもうすぐそこにまで来ている。ややあって――、

「あっ！」

十代半ばの少女が、森の切れ目から街道へ飛び出てきた。年齢はリオやフローラと同じくらい。貴族の女性が着るような仕立てのいい服を着ている。

「……あ、た、助けて。助けてください！」

少女は森の外に出られたことに気づくと、呆けた顔を浮かべた。そして、近くに立つリオ達の姿を視認すると、藁にもすがる勢いで駆け寄る。ひどく怯えきっていて、焦燥しているのが見てとれた。

（貴族、か？）

と、リオは小さく目をみはる。何故この場に貴族らしき少女がいるのか、理由はわからない。だが、わざわざ女性騎士達が出張って

いたのは、十中八九この少女絡みだろう。

（また面倒そうな事態に鉢合わせたな）

疫病神にでも憑りつかれているのではないだろうかと、リオは思った。今すぐにでもフローラを抱えて、この場から立ち去りたい衝動に駆られたが、流石に薄情だろうか。一方――、

「貴方は……」

フローラは少女の顔を見て、呆け顔を浮かべていた。

少女はひどく怯えた顔でフローラを見つめ返していて、おずおずと小首を傾げている。今のフローラはフードを被っていて顔がよく見えない上に、そこから覗ける髪も色が変わっているから、仮に見知っている相手だとしても判別はできないだろう。

（もしかして知り合い、なのか？）

リオはその可能性に思い至った。だとしたら、どう対応させるべきか、咄嗟に思案する。

「あ、あの、私！」

少女はフローラからすぐに視線を外すと、リオに抱き着きつこうとした。

「っ、お待ちください」

リオはすんでのところで少女の身体を両手で押さえ、踏み留まらせる。だが、少女は切羽詰まった様子で、その整った顔を歪めてい

て――、

「わ、私、殺されてしまうんです！　魔力結晶型のおかしな魔道具を飲まされて、このままだと死ぬって。でも、貴方なら助けてくれるかもしれないって」

と、泡を食って要領の得ない説明をした。

（俺なら、助ける？　この子を？）

リオは訝しそうに疑問符を浮かべるが、少女は何故か必死に手を動かして、自分の衣類をはだけさせて胸元を露わにしている。

「ちょ……」

リオは少女の意味不明かつ大胆な行動に困惑し、慌てて胸元から視線を背けた。

「ハ、ハルト様」

フローラは顔を真っ赤にして、反射的にリオの背後から背中の服をギュッと握る。そのまま「見てはいけない」とでも主張するように、くいくいとリオの身体を後ろへ引っ張った。

とはいえ、その程度の力でリオが姿勢を崩すことはない。それどころか、リオは何かに気づいたように顔色を変えて、突然、目の前にいた少女の身体を大胆に抱き寄せた。

「きゃ！？」

少女は小さく悲鳴を上げて、上半身をさらけ出したままリオの胸

元に顔をうずめる。

「あう」

と、もどかしそうに唸るフローラ。しかし、リオは真剣な面持ちで西側の森を見据えていて、腰の鞘に収めた剣へと手を伸ばしていた。直後――、

「え！？」

フローラは愕然と目を見開き硬直する。西側の森の奥から、黒い闇の奔流が溢れ出てきたからだ。かと思えば、闇の奔流は森の草木を全て呑み込んでいき、雪崩のようにリオ達のもとへ押し寄せてくる。少し遅れて、轟音ともいうべき衝撃音が響きわたった。

「きゃあ！」

と、フローラと少女は堪らず目を瞑って悲鳴を上げるが、その声は轟音にかき消されてしまう。しかし、しばらくしても自分達の身に何も起こっていないことに気づくと、フローラ達は恐る恐る目を開けた。そこには、剣を構えて風の防壁を展開し、押し寄せる闇の奔流を防いでいるリオがいる。

（この攻撃は、あの男の……）

リオは風の防壁で攻撃を押し返しながら、迫りくる闇の奔流を見据えていた。眼前の闇に見覚えがあったから。そう、リオはごく最近、よく似た斬撃を放つ魔剣の持ち主と戦ったことがあるのだ。その魔剣の持ち主の名はルシウス、リオが殺した男である。

（まさか……、生きていたのか？）

と、そんな疑問がリオの頭をもたげる。果たして、今攻撃を加えてきている者の正体は――、

「は、ははは！　こりゃすげえ！　これが団長の力か！」

ルシウスの部下、ルッチだった。ルッチは森の奥で高らかな笑い声を上げながら、かつてルシウスが装備した剣を手に振るい、とめどなく溢れる闇の斬撃をリオ達にめがけて放ち続けている。

（くっ、流石に見えないか……）

リオは目を凝らして前方を見据える。だが、闇の奔流と轟音に遮られて、ルッチの姿と声を認識することはできない。

それから数秒もすると、闇の奔流は急速に勢いを潜めていき、ぴたりとルッチの攻撃は止んでしまった。つい先ほどまでリオとルッチの間に生い茂っていた森の草木は完全に消失しており、闇の奔流によって抉られた地面が一本の道を形成し、砂埃が舞い上がっている。

（邪魔だ）

リオは手にした剣を媒介に風の精霊術を発動させると、渦巻き状に風を全方向に放出し、砂埃を吹き飛ばした。すると、視界が綺麗に晴れていく。ここでようやく、リオはルッチの姿を視認した。とはいえ、今のルッチは黒いローブを着用して、顔もフードで隠しているため、その正体が誰なのかまでは判別できない。

「ちっ、化物め……」

ルッチはフード越しにリオの姿を視認すると、大きく舌打ちをして呟いた。リオは傷一つ負っていない。事前にレイスから言われていた通りの結果だが、ルッチは殺すつもりで攻撃したのだ。ルシウスのためにもせめて一矢は報いたかったが――、

（仕方がねえ。撤退だ）

ルッチはフードを深く被り直すと、速やかに森へと引き返し始めた。

だが、リオは即応して剣に魔力を込める。そして、一閃。ルッチ目がけて魔力で研ぎ澄ませた風の斬撃を放った。しかし――、

「はっ、この距離で来ると分かっている攻撃に当たるかよ！」

リオとルッチの距離はかなり開いている。魔剣で身体強化を施した人間であれば、十分に回避可能な間合いがあった。リオならば数秒もあればこの距離でも威力も速度も兼ねそろえた必殺の一撃を放つことができるが、あいにくとその余裕はない。加えて――、

（どうする、追うか？　いや……）

背後にフローラがいることが、リオの判断をわずかに鈍らせた。しかも、そこで――、

「きゃ……、だ、大丈夫ですか！？」

と、背後からフローラの悲鳴が上がる。先ほど助けを求めてきた少女が急に倒れてしまったのだ。フローラがその身体を慌てて抱きかかえようとしている。

「……見せてください」

リオは強く逡巡したものの、やむを得ず追跡を断念して、背後を振り返った。状況が読めない以上、下手にフローラをこの場に置いていくわけにはいかない。

「お、お願いします。あっ！」

フローラはこくこくと頷いた。だが、少女の胸元がいまだにはだけていることに気づくと、あたふたと衣類の乱れを整えようとする。しかし――、

「お待ちください」

リオは素早く身を屈めてフローラの腕を掴み、その動きを制止した。

「ひゃん！」

フローラはびくりと身体を震わせる。リオはそんなフローラを余所に、まじまじと少女の胸元を見つめだした。しかし、やましい気持ちがあってのことではない。そこには――、

「これは……」

子供の手のひらサイズほどの、小さな文様の術式が刻まれていた。

「……あっ！」

フローラも冷静になったのか、何らかの術式の存在に気づいたようだ。

（禁呪か？　死んで……は、いないな。脈はある。息もしている）

リオは淡々と少女の容態を確認していく。とりあえず生きていることを確認すると、ほっと息をつくが――、

（さっきの男の仕業か？　あの剣は、ルシウスが使っていた剣と同じだった……）

リオは先ほど攻撃を仕掛けてきた男のことを考え、顔を曇らせる。そして――、

（あの男は確かに殺したはずだ。なのにどうしてあの剣がある？　あの男が生きているとでもいうのか？　なら、狙いは俺……なのか？）

と、リオが状況を分析していると――、

「あ、あの、ハルト様。この方は……？」

フローラが恐る恐るリオに声をかける。

「……ご安心を。死んではいません」

リオは小さく息をつくと、静かにかぶりを振った。

「よ、よかった……。あ、でも、その……」

フローラはホッと安堵の息をつく。しかし、いつまでも少女の胸元をはだけさせたままでいるのは具合が悪いと思ったのか、気恥ずかしそうに頬を赤らめて、リオに上手く伝えようと試みる。

「……フローラ様はこの方、っ！？」

リオはフローラに何かを言いかけたが、突然、身体を捻転させた。そして、西側の森へと再び向き直る。直後、無数の魔力弾がリオに襲いかかった。

（何だ？）

リオは手にした剣に風を纏わせ魔力弾を薙ぎ払うと、攻撃が飛んできた方向を見やる。すると、地面を抉られて出来た森の通路から、女性騎士のエレナが素早く駆け寄ってきていて――、

「エステル様から離れろ、この下郎が！」

エレナは横殴りの要領で剣を振るい、リオに襲いかかった。その瞳はしっかりと胸元がはだけたエステルの身体を捉えている。リオのことを暴漢とでも勘違いしたのだろうか。

（本当に面倒くさい）

リオは嘆息し、的確に自分の剣で攻撃を受け止めると、激昂して接近することに夢中になっていたエレナにカウンターで足払いを仕掛ける。

「っ！？」

エレナはあっさりとバランスを崩してしまった。反射的に剣を地面に突き立てて姿勢を整えるが、致命的な隙を生んだことに変わりはない。

「少し落ち着いてください」

リオはそう言って、エレナの首筋に剣をあてがった。

「くっ……」

エレナは悔しそうに顔をしかめる。怒りで冷静さを欠いていたとはいえ、不意の奇襲にここまで見事に対応されるとは思ってもいなかった。今の短いやりとりだけでも、リオが戦い慣れていることがよく窺える。

（くそっ、エステル様、なんとおいたわしい……！）

エレナは強く憤りながらも、リオに対して強い警戒心を滲ませた。リオはそんなエレナに一先ず説得を試みようと、剣を首筋に添えたままため息混じりに口を開こうとするが――、

「少し状況を、っ！」

今度は脇から鋭い一筋の閃光が飛んできた。リオは必要最小限に剣を動かし、的確にそれを剣で薙ぎ払う。だが、かと思えば――、

「はぁっ！」

蓮司が猛然と現れ、手にした槍斧型（ハルバード）の神装『コキュートス』を豪快に振るう。リオは咄嗟に剣で蓮司の攻撃を受け止めると――、

（次から次へと）

咄嗟にステップを踏んで、蓮司の攻撃の威力を消し殺す。大きく吹き飛ばされたものの、ふわりと地面に着地した。

「……何？」

蓮司は今の一撃で問答無用に決めるつもりだったのか、見事に対応したリオに意表を突かれたようだ。同時に、強い警戒の念を抱く。ちらりとエステルに視線を向けると、胸元が露出した姿が視界に入り、盛大に顔をしかめた。それから――、

「レンジ！」

少し遅れて、シルヴィも姿を現す。気絶して寝転がるエステルの姿を目撃すると、リオに対し強い敵意を滲ませた。だが――、

（……れんじ？　日本人？）

と、リオはリオで蓮司の容貌を見て不意を打たれている。

一方、フローラは目まぐるしく変わっていく状況についていけないのか、視線を右往左往させていた。とはいえ、自分が足手まといになりかねないことは理解しているのか、下手に注目を集めずに大人しくしている。

「はっ！」

蓮司はリオめがけて、間合いの遥か外からコキュートスを豪快に横へ薙いだ。すると、おびただしい魔力が込められた冷気がリオの

足元を目がけて広範囲に射出される。リオを拘束するのが狙いなのだろう。

（随分と荒っぽい捕縛だな。下手すると重度の凍傷を負うぞ？）

リオはまるで容赦が感じられない蓮司の攻撃に面食らった。とはいえ、大人しく捕縛されてやる理由はない。リオは横へ跳躍すると、攻撃の有効範囲外へ素早く避難してしまった。蓮司が放った冷気は瞬く間に地面を凍らせていく。

（仕方がない）

リオは蓮司やエレナの背後にいるフローラの姿を見やると、穏便に事態を解決することを諦めた。

もしルシウスがこの襲撃に関係しているとしたら、この者達がルシウスと繋がっている恐れがあるし、フローラが狙われる恐れもある。いずれにせよ、何らかの罠を仕掛けられていると考えた方が良いだろう。

状況が完全に読めない以上、今は最優先でフローラの安全を確保する必要がある。そのためには、蓮司にフローラと分断されている今の立ち位置は上手くない。

話し合いによる解決を試みるのは、せめてフローラの身柄を確保してからだ。リオはそう決めると、体内で膨大な魔力を練り上げ、強力な身体強化を施して剣を構えた。

「不味い。エレナ、そなたはその場でエステルを！」

シルヴィはリオに交戦の意思があることを確認すると、エレナに命じて、自身は蓮司を助勢するべく行動を開始する。刹那、シルヴィはリオの容貌を改めて目にして妙な既視感を抱いたが、切迫した

状況にそれはすぐに霧散してしまう。かくして、二対一の状況が形成され、戦いの火蓋が切られた。
そして、一方、森の奥では――、

（思いのほか、スムーズに事態が推移しましたねえ。ここまでは私の出番もありませんでしたし、今回ばかりは彼の強さにも全幅の信頼が置けそうです）

レイスが思惑通りに進んでいく展開を観察していて、ほくそ笑んでいた。その周囲には、ルッチ、アレイン、ヴェンの三人が控えていて――、

「さて、我々の出番はここからですよ、三人とも」

と、レイスは上機嫌に呼びかけた。

第１７０話　二転三転（前書き）

登場人物の行動が入り乱れているので、キャラごとの状況や目的を簡単にまとめてみました。よろしければ記憶喚起にご覧ください。

＜ｉ２２７５７０－１３４２３＞

第１７０話　二転三転

ルビア王国の南西部、とある宿場町から南東へ伸びていく街道で。
リオはルッチからの一方的な魔力斬撃を浴びせられた後、エレナ、蓮司、シルヴィの奇襲を立て続けに受けていた。一連の攻撃を凌ぎ、三人と向き合って臨戦態勢に入ると――、

「不味い。エレナ、そなたはその場でエステルを！」

シルヴィが叫ぶ。と、同時に、リオはフローラに向けて一直線に駆けだした。だが、その進路上には蓮司が立ちふさがっている。

「っ、させるか！」

蓮司は槍斧（ハルバード）状の神装「コキュートス」で強化された身体能力でリオの接近に反応し、ハルバードを振り下ろした。すると、その先端から冷気が吹き荒れ、長さ一メートルほどの氷槍が複数生まれる。氷槍は勢いよく射出されて、リオに襲いかかった。
しかし、リオは顔色一つ変えずに、迫りくる氷槍に突っ込んでいく。直撃コースにある氷槍を見極めると、剣を振るって受け流し、必要最小限の動きですり抜けてしまった。

「な、何！？」

蓮司はここまで簡単に攻撃を受け流されると思っていなかったのか、面食らってわずかに硬直してしまう。リオはその隙に一瞬で駆け寄ると、刹那、至近距離から蓮司を観察した。

（やはり日本人。勇者なのか？　だとしたらこれが神装……）

リオは蓮司の顔とその手に握られたハルバードを見据えながら、剣の腹で思いきり胴体を打ち払おうとする。蓮司は慌ててリオの攻撃を躱そうとした。だが、蓮司が神装で強力な身体強化を施しているように、リオも自前の精霊術で強力な身体強化を施している。

「ぐっ」

と、焦燥した顔になる蓮司。直撃は免れないように思えた。しかし、いつの間にかシルヴィが蓮司の斜め後方数メートルの位置に控えていて――、

「油断するな、レンジ！」

シルヴィは数メートルの距離を開けたまま刺突剣状の魔剣を構え、リオに向かって虚空を突いた。魔剣の刀身は眩い光を帯びていて、その切っ先から鋭い光線が射出される。

「っ！」

リオは魔剣によるミドルレンジからの攻撃に瞠目しつつも、咄嗟にステップを踏んで光線を躱した。だが――、

「喰らえ！」

蓮司はここぞとばかりにハルバードを振りかぶった。渾身の叫びを上げながら、リオに全力の一撃を放つ。リオは反射的に剣を振るい、蓮司の攻撃を受け止めた。しかし、互いの武器がぶつかり合うや否や、蓮司の神装から膨大な冷気が吹き荒れる。

（これは……）

と、リオは微かに目を見開く。かと思えば、一瞬で空間が凍結していき、リオは氷塊に包み込まれてしまう。

「はああ！」

蓮司はリオを氷に包んだ後も、力強い雄叫びを上げて、神装に魔力を込める。必死だった。容赦する気は微塵もない。

「あ……」

為す術もなく戦いを眺めていたフローラだったが、流石に何とかしなければと足を動かす。だが――、

「動くな」

と、エレナがいつの間にかエステルの傍に駆けつけていて、鋭い声でフローラに釘を刺さした。そうこうしている間に、蓮司は小さく息をついて、ハルバードの矛先を地面へ降ろす。

「助かった、シルヴィ」

蓮司は背後を振り返り、シルヴィに礼を言った。

「いや、礼には及ばん。だが……、殺してしまったか、流石に」

シルヴィは蓮司に歩み寄ると、顔をしかめてリオを包み込む氷塊を見据える。

「……すまん、加減できる相手じゃなかった」

蓮司はバツが悪そうに謝罪した。

「まあ、やむを得、っ！？」

嘆息してかぶりを振ろうとしたシルヴィだったが、リオを包み込んでいた氷塊がピシリと音を立てると、ギョッと目を見開く。

次の瞬間、氷塊は粉々に崩壊してしまった。内部から渦巻き状の暴風が吹き荒れ、氷塊の破片を巻き込みながら上空へと舞い上がっていく。

「ば、かな……っ！」

蓮司は唖然とその様子を眺めていたが、暴風の起点から無傷のリオが姿を現すと、反射的に身体を動かしてリオに襲いかかろうとした。

しかし、機先を制したのはリオだ。リオは地面を蹴って一足飛びに蓮司へ近づくと、側頭部を狙って、蓮司を西側の森へと思いきり蹴り飛ばしてしまう。

「っ、ぐっ……」

蓮司は首筋にとんでもない衝撃を感じたかと思えば、立て続けに強い眩暈を感じて、急速に視界が真っ白になっていく。そのまま軽々と森へ吹き飛んでいった。

リオの蹴りには生身ならば首ごと頭部をもぎ取るほどの威力を込められていたが、強力な身体強化をしていれば死にはしないはずだ。運さえ悪くなければ……。すると――、

「はあっ！」

シルヴィが間髪を入れずにリオに襲いかかった。手にした魔剣で虚空を突き、至近距離からリオに光線をお見舞いしようとする。しかし、その光線がリオの姿を捉えることはない。

リオはシルヴィを無視してまっすぐとフローラに向かって駆け出していて、シルヴィの脇を通り過ぎようとしていた。シルヴィが放った光線はつい今しがたリオが立っていた空間を虚しく穿つ。

「ぐっ、させるものか……！」

シルヴィは即座にリオに向き直り、剣を振り直す。すると、またしても切っ先から光線が射出される。光線はシルヴィが振るう剣の軌道に従い、リオの身体を薙ぎ払おうとした。

しかし、リオは身を捻り、軽やかに光線を躱してしまう。そのままフローラとの距離を詰めていく。もう進行ルート上にリオとフローラを遮る人間はいない。と、思いきや――、

「させるか！」

フローラのすぐ傍で意識のないエステルを看護していたエレナが立ちはだかった。

「っ、頼む、エレナ！」

シルヴィは魔剣を構え、リオの背後から光線を放とうとしたが、すぐにリオの後を追いかけることを決める。エレナがリオの足止めをしている間に追いつくしかない。

「お任せください！」

エレナは決然と腰の鞘から剣を抜いていた。下手にリオに斬りかからず、シルヴィが追いつくまでの壁役となるべくその場に立ち止まる。

リオはエレナとシルヴィの目論見を瞬時に看破すると、躊躇なく前方へ突っ込んだ。身体強化を施した者同士の戦いはわずか一秒足らずが勝負を分ける。もはや足を止めている時間などない。

果たして、そのわずか一秒足らずのやりとりで、リオがエレナを制す。リオはエレナが振るった剣を鮮やかに弾くと、そのまま懐に潜り込んでエレナを拘束してしまった。その時点でシルヴィはリオの背後に迫っていて――、

「くっ、放せ！」

と、エレナは叫ぶ。

（ご注文の通りに）

リオはエレナの身体を盾にし、背後のシルヴィに向けて突き飛ばしてしまった。

「も、申し訳ございません！」

エレナは忸怩たる面持ちで真正面のシルヴィに謝罪する。リオはその隙にフローラのもとへ向かった。だが――、

「ええい！」

シルヴィは咄嗟に横へステップを踏んでエレナを避けると、最後

のあがきを見せる。魔剣を構え、リオの背中に無数の光線を放った。その射線上にはリオとフローラがいる。事情聴取のためにどちらか一方は生かしておきたいのだろうが、もはやなりふりを構っている余裕などないらしい。

「ハルト様！」

フローラはシルヴィの攻撃に気づき、慌てて叫んだ。すると――、

「な……」

フローラとシルヴィは絶句する。リオは背中に目でも付いているかのように振り返ると、何の迷いもなく剣を振るい、迫りくる光線を斬り落としてしまった。

そうして、シルヴィが呆然と立ち尽くしている間に――、

「ご無事ですか？」

リオはフローラのもとへバックステップを踏んで近づき、安否を尋ねる。

「……え、あ、はい、わ、私は。ハ、ハルト様こそ、ご無事なのですか？　先ほどの氷で、お、お怪我は？」

同じく呆然とリオの背中を見ていたフローラだったが、声をかけられハッと我に返ると、あたふたとリオに訊き返した。

「大丈夫です。油断を誘うため、氷の中で少し様子を窺っていたので。凍傷の心配はありません」

リオはフローラが無事なことを確認すると、フッと口許をほころばせて答える。今この時点をもって、形勢は完全に逆転した。奇襲を受けて後手に回っていた分の遅れは取り戻し、それどころかエステルという人質まで得た形になる。リオは実際に人質に使う気はないが、相手はそうは思っていないだろう。

（フローラ王女は奪還した。あちらの目的はおそらく気絶したこの子。なら、もう立ち去った方がいいのかもしれないけど……）

リオは油断なくシルヴィを見据えながら、この後の行動方針を考える。すなわち、この場からフローラを連れて逃げるか、シルヴィ達と対話を試みるか、戦闘を継続するか。

好んで面倒事に首を突っ込む気はさらさらないが、最初に森の中から攻撃を仕掛けてきた男の存在が気がかりだった。フードで顔は見えなかったが、その男が使っていた剣はルシウスの魔剣と酷似していたから。

（この人達の素性とルシウスとの関係は確認しておきたい）

そして、あわよくばその正体も――と、リオは考える。

「くっ……」

シルヴィは歯がゆそうに渋面を浮かべていた。投げ飛ばされたエレナも実に悔しそうにリオを睨んでいる。リオがシルヴィ達とその背後にいるかもしれないルシウスとの関係を測りかねているように、シルヴィ達もリオとレイス達との関係を測りかねているのだ。

だからこそ、シルヴィは多少強引でも奇襲を仕掛けた。何としても真っ先にエステルの身柄を確保する必要があったから。だが、奇襲に失敗した以上、後は事の成り行きに委ねるしかない。

（襲ってこない。狙いはやっぱりこの子か。なら、っ……！）

リオはエステルを見やりながら口を開こうとしたが、西の森から無数の魔力弾が飛び出てくるのを察知し、咄嗟に背後のフローラを抱えて跳躍した。

「きゃ！？」

と、フローラは小さく悲鳴を上げる。魔力弾は虚しく東の森へと消えていった。すると、西の森から三人の男が飛び出ててくる。

男達は颯爽と気絶したエステルのもとへ駆け寄った。そのままリオとシルヴィ達を牽制するように横たわるエステルを取り囲む。

続けて、西の森の中からもう一人、いや二人――、ぐったりとした蓮司を抱えたレイスが現れる。レイス達は全員がフードを外して、顔を曝け出していた。

「これはどういうことですかねえ、シルヴィ王女殿下？」

レイスは蓮司を地面へ投げ降ろすと、シルヴィに向けて問いかける。

「くっ……」

シルヴィは苦虫を噛み潰したような顔を浮かべた。

（シルヴィ王女？　……ルビア王国の王女か）

リオはシルヴィの名を聞いて、その素性を特定する。実際に顔を合わせたことはないが、リオが出席した先の夜会でシルヴィは外賓

として出席していたので、言われてみればどこか見覚えはあった。間違いはないだろう。
しかし、今、リオにとってよりインパクトが強い人物はレイス達だった。

（この三人、それにあの剣は……）

リオはルッチ、アレイン、ヴェンを見やり、続けてルッチの鞘に見覚えのある剣が収められているのを発見すると、スッと目を細める。
レイスがシルヴィを見据えている一方で、ルッチとアレインは恨みがましい目つきでリオを睨み返していた。ヴェンは反対側にいるシルヴィとエレナを牽制している。

（……恨まれているみたいだな）

リオはその原因を考える。三人はルシウスが設立した傭兵団に所属する面々だ。クリスティーナをロダニアへ送り届けるまでの間に返り討ちにした連中だが、その時のことを恨んでいるのか、それともリオがルシウスを殺したことを恨んでいるのか、もしくはその両方か、あるいは……と、リオが思考を巡らせていると――、

「だんまりですか。まあいいでしょう。今はあちらのお二人にも用があるのでね」

レイスはそう言って、リオとフローラに視線を向けた。

（あの男……）

リオもルッチ達から視線を外し、レイスを見つめ返す。顔と名前

こそまだ一致していないが、リオはレイスのことを知っている。
「……あんたとは一度、アマンドの近郊で会ったことがあったな」
と、リオはやや剣呑な声色で、レイスに問いかけた。そう、以前アマンドが襲撃された際、リオはアマンド近郊の上空でレイスと遭遇したことがある。
その時のレイスはセリア達が待機していた岩の家に魔物をけしかけ、姿をくらまそうとした。その際に上空でリオと交戦したのだが、見慣れぬ竜らしき存在の助けを借りて、逃走してしまった。
「おや、覚えていらっしゃいましたか。光栄ですね」
レイスは空疎な愛想笑いを浮かべる。
「忘れるはずがないだろう」
「おやおや、相変わらず怖いお方だ」
リオが鋭く告げると、レイスは小さくを肩をすくめた。
「こちらに手を出すつもりはないと、言っていなかったか？」
「ええ、私としても貴方とはなるべく関わりを持ちたくないのですが、どうも貴方は私どもが関わりを持とうとする人物の近くにいることが多いものでしてね」
と、レイスは嘆息交じりに言う。
「……ルシウスのことか？」
リオは微かな間を置き、ルシウスの名を出した。背後にルッチ達

がいる以上、ルシウスと無関係というわけではあるまい。

「彼のこともそうですが、例えばクリスティーナ王女のことでしょうか。貴方のおかげで彼女はロダニアへたどり着いてしまいましたからね。ああ、その節は貴方のパートナーのお世話になりましたよ。こちらの三人は貴方のお世話になったようで、随分と深い恨みを抱いておりますよ」

レイスは飄々と答えて、ルッチ達を見やった。ルッチ達は相も変わらず剣呑な目つきでリオを睨んでいる。

「……なら、あんたがレイスか」

リオはクリスティーナをロダニアへ送り届ける道中での出来事を思い出し、目の前にいる男の名前がレイスだと特定した。リオが『王の剣』アルフレッドと戦っている最中、アイシアはレイスと戦闘を繰り広げていた。その時の話はアイシアから聞いている。いわく、レイスはその時に自分を「精霊に似て非なる存在」と語っていた、と。

「ええ、彼女から話を聞いているようですね」

レイスは頷き、フフッと微笑した。

「……どうしてルシウスの剣がそこにある？」

リオは訊いて、ルッチの腰の鞘に収められているルシウスの剣を見据える。あの時、リオは魔剣を手にしたルシウスごと強力な魔力斬撃を放った。後に残ったのは大穴だけだ。

「ああ、どうやら貴方は彼に強い恨みを抱いていたようですね。ご安心を。彼の肉体は確かに貴方の手により消滅させられましたよ。ただ、彼が使っていた剣は特別製なものでして、私が回収させていただきました。今はそこにいるルッチに持たせているというだけです」

レイスはつらつらと説明する。

「……俺がルシウスを殺した現場にいたのか」

「そうなります。まあ、私が駆けつけた頃には、もう手遅れな状況にありましたが……。貴方が関わるといつも計算外な事態になるものですから、こちらも困っているのですよ。そちらにいらっしゃるフローラ王女のことも、ね」

レイスは嘆かわしそうに語ると、鋭い目つきでフローラを見やった。

（あの現場にいた以上、俺がフローラ王女を助けたことも知っているわけか）

リオは事情を得心し、わずかに眉をひそめる。だが――、

「な、何！？」

最も強く反応を示したのは、シルヴィだ。黙って話を聞きながら状況を整理していたが、ここでフローラの名が出るとは思ってもいなかった。この場にフローラがいる事実に、つい先ほどまで自分達が襲いかかっていた相手がフローラだという事実に、愕然とする。

現状は国際問題にもなりかねない事態だ。人違いなのではないかと、シルヴィはフードで覆われたフローラの容貌をじっと凝視する。

「っ……」

フローラは注目を集めていることに気づくと、居心地が悪そうに身じろぎした。リオはフローラを自分の背後へ移動させる。

「お久しぶり、というわけでもありませんね、フローラ王女殿下。ご機嫌麗しゅう」

レイスは恭しくフローラに語りかけた。だが――、

「……？」

フローラは心当たりがないようで、不思議そうに首を傾げている。

「覚えていらっしゃいませんかね？　ロダニアへ向かう魔道船で、お会いしたでしょう？　貴方をパラディア王国へ飛ばした人物と一緒にいた者ですよ」

レイスは滔々（とうとう）と以前に会った時の状況を語った。

「あ！」

それでフローラも得心したようだ。あの時はフードを被っていて顔がよく見えなかったが、確かに聞き覚えがある声をしている、と。

「申し遅れましたが、私、プロキシア帝国の外交官を務めております。レイスと申します」

レイスは悠長に自己紹介までした。すると――、

「ま、待て、レイス！」

シルヴィが慌てて待ったをかける。この状況は不味い、致命的に不味い――と、思って。

「おや、何でしょうか？　シルヴィ王女殿下」

レイスはにこりと軽薄な笑みを浮かべて応じる。

「ぐっ……、そ、そちらにいらっしゃる人物は本当にフローラ王女なのか？」

シルヴィはフローラを見やり、ひどくきまりが悪そうに尋ねた。今のやりとりでほとんど確信はしているが、聞かずにはいられなかった。

「あ、えっと……」

フローラは逡巡し、言葉に詰まってしまう。すると――、

「ははは、何を今更。先日のガルアーク王国の夜会では、フローラ王女を攫うために手引きまでしていただいたではないですか。我々の狙いはご存じなのでしょう？」

レイスが代わりに答え、やれやれと肩をすくめた。その口許には本当に人が悪い笑みが浮かんでいる。話をややこしくしようとしているのは明らかだった。

「そ、それは！　何を言う、貴様！？　どういうつもりだ！？」

シルヴィは慌てて弁明しようとした。だが、なまじ事実が混ざっているうえに、この時点で自分達がレイスと関係を持っていることはもはや隠しようがなくなっているから、質が悪い。それに、今のレイスはエステルと蓮司という人質を手中に収めている。

「私の狙いはフローラ王女ですよ。この際、抜け駆けをしようとした事実には目を瞑りましょう。この場を治めるのに協力していただけるのならば、エステル王女は後ほどすぐにお渡ししますよ。ただ、こちらの勇者の彼の処遇は本人も交えて要相談ということで」

案の定、レイスは蓮司が勇者であるといきなり告げたうえで、それとなく人質の存在をほのめかした。

（勇者の彼を気絶させてくれた上に、西側の森へ飛ばしてくれたのは嬉しい誤算でしたね）

と、ほくそ笑みながら。

「っ、貴様、知っていたのか……」

シルヴィは歯噛みし、苦々しく顔を引きつらせる。すると、そこへ――、

「シルヴィ様！」

リオとフローラが立つ背後の街道から、シルヴィ親衛隊の女性騎士達が続々と駆けつけた。

「どうやら増援の皆さんもいらしたようですね。では、お返事をお

聞かせ願いましょうか」

レイスは女性騎士達を見やりながらふふっと微笑し、シルヴィに水を向ける。親衛隊の面々はリオとフローラから距離を置いて立ち止まり、険しい顔でその場の様子を見極めようとしていた。

「……」

シルヴィはひどく逡巡していたが、ややあって、じろりとリオとフローラを見やる。すると――、

「ハ、ハルト様、私を置いていってください」

フローラは流石に状況が悪いと思ったのか、そんなことを言いだす。自分を囮にして、逃げろとでも言っているのだろうか。だが――、

「フローラ様、失礼します」

リオは小さく嘆息して、左腕でフローラをしっかりと抱き寄せた。

「へっ？」

フローラは呆けた声を出したかと思えば、リオに密着して顔を紅潮させる。

「しっかり掴まっていてください」

リオはそう言うと、右手で握った剣を媒介に風の精霊術を発動させた。暴風で自分達の身体を強引に押し上げ、頭上へと急上昇させ

ていく。

「きゃっ」

と、フローラは驚いて、反射的にリオに抱き着く。

「なっ！？」

シルヴィ達は唖然と頭上のリオ達を見上げた。リオは瞬く間に数十メートル上空まで浮き上がり、かと思えば、続けて暴風を操って、南西へと飛んで行ってしまった。すなわち、逃げた。

リオとしてはフローラを守りながらこの場の全員を相手にするとなれば、流石に面倒だ。とりあえず聞きたいことは聞けたのだから、これ以上はまともに付き合ってやる必要はなかった。

「ちっ」

と、ルッチ達は舌打ちをして、消え去るリオを見上げている。一方――、

「おやおや、逃げられてしまいましたか」

レイスは実に愉快そうな笑みを浮かべて、リオの逃走を静観していた。

第171話　道程、ロダニアへ

リオがフローラを連れて逃げ去ってしまった後。地上に残されたレイスが愉快そうに上空を見上げる一方で、シルヴィ達は呆け顔で空を見上げていた。すると――、

「おやおや、逃げられてしまいましたか」

と、レイスが呑気にも思える口ぶりで言う。

「……な、何を悠長なことを言っている！？」

シルヴィはハッと我に返ると、血相を変えてレイスに語りかけた。

「悠長なとは心外ですね。これでも困っているのですよ。なにしろ貴方達のせいでフローラ王女を逃がしてしまったのですからね。正直、空を飛んで逃げられたらどうしようもありません」

レイスはやれやれと応じる。

「っ……、今はそれよりエステルだ。エステルのことを返してもらおうか」

シルヴィは大きく深呼吸をして憤りを抑えると、ルッチ達に囲まれたエステルを見やりながら、その身柄の引き渡しをレイスに求めた。

「おや、では、こちらの彼の身柄は我々で確保してもよろしいんで

すか？」

レイスは気絶した眼下の蓮司を見やりながら、ニヤリと笑みを刻んで言う。

「レンジの身柄もだ！」

シルヴィはきつい口調で告げる。

「ははは。実に強欲なことだ。まあ、その前にとりあえず今後について語り合いませんか？　貴方達もフローラ王女を襲ってしまったんです。このままだと、ルビア王国の立場が悪くなることは予想できるでしょう？」

レイスはしれっと話題を逸らした。

「っ、貴様がそれを言うか！？」

シルヴィは流石に激高して叫ぶ。

「今回に関しては勝手に動いて状況を悪くしたのはそちらでしょう。大人しく宿で待機していれば、事が済んだ後にエステル王女の身柄も引き渡したというのに」

「嘘を吐くな！　なら、どうしてエステルがフローラ王女達の下にいた？」

「いえいえ、エステル王女は囮ですよ。フローラ王女とは知らぬ仲ではないでしょう？　危険な目に遭うことはないだろうと踏んで、利用させていただきました。そこへ貴方達が紛れ込んで、全てを台無しにしたというわけです」

レイスはもっともらしい弁明をして、仰々しく残念がってみせた。

「くっ……」

「まあ、約束ですからね。エステル王女の身柄はお返ししますよ。勇者の彼の身柄をどう扱うかも含め、この後の話し合いが済んだ後に、ね。ルビア王国にとっても悪い話ではないと思うのですが、いかがでしょうか？」

悔しそうに顔をしかめるシルヴィに、レイスはぬけぬけと提案する。

「人質を確保しておいて話し合いだと？　エステルが目の前にいる以上、このまま力づくで奪還してもいいんだぞ？　その上で貴様の首を手土産にレストラシオンに謝罪を申し入れる」

シルヴィは剣呑な面持ちで挑発した。

「その程度で謝意として受け取ってもらえるかは別として、そういう話でしたら、こちらもこの二人を人質として使いますよ？」

レイスはニヤリと笑みを刻み、間髪を入れずに挑発し返す。

「やってみろ。その時が貴様らの最期だ」

「ふふ、それは実に興味をそそられますが……、まあ、いいでしょう。では、まずエステル王女の身柄をお返しして差し上げなさい」

シルヴィが鋭い声で告げると、レイスは観念したとばかりにルッチ達に命令した。ルッチ達は指示に従いエステルをシルヴィの下へ運ぼうとするが――、

「貴様らはエステルに触れるな、エレナ！」

シルヴィはルッチ達を制止し、代わりに騎士隊長のエレナに運ぶよう促した。

「承知しました」

エレナは迅速に動きだし、エステルの下へ向かう。

ルッチ達はやれやれと両手を掲げて、無抵抗をアピールした。ちなみに、もともと上半身が裸だったエステルだが、先の戦闘中にエレナが衣類の乱れを整えている。その時点でエステルの胸に術式は浮かんでいなかったので、エレナはエステルが気絶していた経緯は知らない。

「エステルの容態はどうだ？」

「脈はあります。今は意識を失っているだけかと」

シルヴィが尋ねると、エレナが即答する。

「そうか……」

シルヴィは気絶したエステルの顔を見やり、小さく息をつく。

「このまま不毛なやりとりをしていても時間の無駄ですからね。とりあえず、話を進めさせていただきますよ。そのままお聞きください」

レイスはそう告げると、シルヴィの返事を待たずにさっさと話を切りだした。

◇　◇　◇

一方、場所はルビア王国南西部。国境付近の森。リオがシルヴィ達と戦闘を繰り広げた位置から、数キロの距離が離れた上空で。

リオは左腕でフローラを抱き寄せて、まっすぐ南西に向かって飛翔していた。フローラはリオの身体に必死にしがみついている。

フローラはリオの胸元に顔をうずめながらも時折、おっかなびっくりと周囲の景色を眺めようと試みていた。ただ、空気抵抗が凄まじいので、前を見るのすら一苦労だ。会話をするのも少しばかり難がある。

ちなみに、今はいつものように風の精霊術で特殊な空間を形成して飛翔しているわけではなく、右手で握った剣の切っ先から魔力の暴風を放ち推進力とし、空を突き進んでいる。なので、進む方向は微調整できるが、普段通り自由自在に飛び回ることはできない。

（……追ってくる気配はない。森を抜ける。そろそろ国境も近いはずだ。この辺りで着地するか）

リオは背後に追手の存在がいないことを確認すると、少しずつ飛翔する速度を緩めた。フローラもそのことに気づいたのか、恐る恐るリオの顔を見上げる。

「これから地上に降ります。少し荒っぽい着地になるので、しっかりと掴まっていてください。舌も噛まないよう、口をしっかりと閉じて」

リオは声を張り上げて、フローラに注意を促した。

「は、はい！」

フローラも声を張り上げ、こくこくと首肯する。リオはそれを確認すると、少しずつ速度と高度を下げ始めた。眼下の森との距離が詰まっていく。
だが、同時に森の切れ目も前方に見えていた。その先にはおよそ人の手が入っていない山地の麓がある。リオは適当な岩肌を着地地点として選ぶと、右手で握った剣を操作して速度と方向を調整し、そこを目がけてまっすぐに突き進んだ。

「っ……」

結構な速度で地面に落下していくものだから、フローラはびくりと身体を震わせる。リオはある程度地面と接近したところで、これまで後ろ向きに構えていた右手の剣を握り直し、地面に向けて振り下ろした。すると、切っ先から強力な暴風が吹き荒れる。
風はぶわりと地面に降り注ぎ、リオ達の落下速度を押し殺した。リオはそのまま地面に向けて風を放出し続け、緩やかな速度で地面へ接近していく。
そうして、地面に足を着けると――、

「もう大丈夫ですよ。無事、着地できました」

リオは目を瞑って抱き着いていたフローラに語りかける。

「は、はい……」

フローラは恐る恐る目を開けると、呆け顔で首肯した。

「ご自分で立てますか？」

リオはそう言って、抱き寄せていたフローラを一人で地面に立た

せようとする。

「……はい」

フローラはわずかにふらついたものの、きちんと自分の足で地面に立った。だが、その面持ちはやはり呆け顔で、焦点も明確に定まっていない。

「少し驚かせてしまいましたでしょうか？　緊急事態だったとはいえ、手荒な真似を働いてしまい、失礼いたしました」

リオは少しきまりが悪そうに、苦笑してフローラに謝罪する。

「あ、いえ……、そんな、ことは」

フローラはたどたどしく否定して、ぼんやりとリオの顔を見つめだした。すると、次第に切なそうに顔を歪めだす。

「……もしかしてご気分が優れませんか？」

リオはフローラを心配して尋ねた。

「い、いえ、違う、違うんです。そうじゃなくて、ごめんなさい。私のせいでまたハルト様にご迷惑をおかけして、私のせいであんな危険な目に遭わせてしまって、私、何とお詫びすればいいか……」

フローラは強い罪悪感に苛まれているのか、ひどく申し訳なさそうに語る。だが――、

「いえ、どうぞお気になさらず」

リオはさして気にした様子はなく、飄々(ひょうひょう)とかぶりを振った。しかし、フローラの表情は暗いままだ。またやってしまったとでも言わんばかりに、ひどく沈んでいる。

「申し訳ございませんでした、本当に、本当に……」

「そこまでお悔やみになる必要はないのですが。フローラ様が悪いわけではございませんので」

忸怩たる面持ちで首を垂れるフローラに、リオは苦笑して告げた。

「いえ、私のせいですよ。私がいたから、あのレイスという人は襲ってきたんです。そう言っていたではないですか」

フローラは自嘲気味にかぶりを振る。

「そうだとしても、やはりフローラ様が悪いわけではございません」

リオはきっぱりと告げた。

「……でも、今回だけじゃないんです。私がいるから、いつも誰かにご迷惑をおかけして。あの村でもそうでしたし、その前に魔道船だって襲われました。ハルト様の、貴方のことだって……」

と、フローラは泣きそうに顔を歪め、俯いて語る。だが――、

「迷惑ではございませんよ」

「……え？」

リオがはっきりと告げると、フローラは不意を打たれたように顔

を上げた。

「少なくとも私は迷惑だと思っていません。連中は私としても個人的に因縁がある相手です。その動きを知ることができたという意味で、先の戦闘は意味のあるものでした」

と、リオはフローラを言い聞かせるように語る。確かに、フローラからすれば、自分のせいで絶体絶命の窮地に追い込まれたのだと思っているのかもしれない。

だが、リオにとっては十分に対処可能な状況だったのだ。そして、実際に対処してみせた。巻き込まれたからこそわかったこともある。だから、面倒ではあったかもしれないが、迷惑だったというわけではない。

「……ハルト、様」

フローラはギュッと拳を握りしめ、強い罪悪感と自己嫌悪にまみれた面持ちを覗かせた。

「納得できませんか？」

リオは困り顔で問いかける。

「……私、昔から要領が悪くて、王女として自覚を持とうとしてもすぐ気が抜けて、甘くて、誰かに守ってもらうばかりで、現実も見えていなくて、駄目な子なんです」

フローラは強く己を恥じるように語った。

「……」

リオはなんと言えばいいのかわからず、黙って話を聞いている。

「今回だってそうです。自分のことで精一杯で、ハルト様に頼りきりで何の危機感も持ってなくて、あの魔道船の襲撃でどれだけの人に迷惑をかけたのか、今こうしている間にもどれだけの人に迷惑をかけているのかを考えようともしないで……。あのレイスという男の人と会うまで、想像すらしていなかったんです。ハルト様が氷に包まれた時だって、怖くて動けなくて……」

と、フローラは一通り己の不甲斐なさを吐露すると――、

「こんな私に王女の資格があるんでしょうか？　王女とは、何なのでしょうか？　私なんかが、このままロダニアに戻ったところで、また足手まといになるだけなんじゃ……」

ひどく弱々しく、自信のない声で疑問を口にした。果たして自分という人間は必要な存在なのだろうか、周囲から守ってもらう価値のある人間なのだろうか、と。

「……貴方は王女です。ベルトラム王国の第二王女、フローラ＝ベルトラム様です。貴方は王女として生まれてきた。その事実がある以上、資格など関係ない。貴方が王女であらせられる以上、それだけで利用価値があります」

「っ……」

リオがつらつらと語ると、フローラはびくりと身体を震わせた。まるでフローラという人間には価値がなく、王女としてのみ価値があると言われたようにも思えたから。だが――、

「ですが、生まれとか利用価値とか、そんなことは一切関係なく、貴方のことを必要としていて、貴方のことを心配していて、貴方のことを守ろうと思ってくれる人だってロダニアにはいるはずです。違いますか？」

リオは今度は少し優しい声色で、諭すように語って尋ねる。

「っ……、違、いません」

フローラはハッと目を見開くと、小さく口を動かした。

「その人達のためにも、貴方はロダニアへ戻らなければならない。違いますか？」

「……違いません」

今後は先ほどよりもしっかりと口を動かすフローラ。

「では、向かいましょう、ロダニアへ。あまりこの場でもたもたしてもいられません。魔剣で風を操って空を飛ぶのは魔力の消費も激しいので、ここからは走って国境を越えますから。少し急ぎますよ」

リオは決然とフローラを誘う。すると――、

「はい！」

フローラは静かに、だが力強い声で頷いた。

「では、失礼いたしますね」

リオは早速、フローラを抱きかかえようと近づく。だが、その前

に――、

「あの、ハルト様」

フローラは恐る恐るリオに声をかけた。

「何でしょうか？」

リオはフローラの前で立ち止まって小首を傾げる。

「ハルト様はどうして、私を助けてくださるのですか？」

フローラはリオの顔を見上げて尋ねた。

「……助けることができたから、助けたんです。貴方が王女であるかどうかは関係ありません」

リオはある程度正直に、自分なりの答えを伝える。

「ありがとうございます、ハルト様……」

フローラは切なそうに微笑むと、心底申し訳なさそうに、お礼の言葉を口にした。

「では、今度こそ、失礼いたします」

言葉通り、リオは今度こそフローラを抱きかかえる。

「お願いします、ハルト様」

フローラは芯のある声でリオに頼んだ。その視線は真っ直ぐと南西を見据えている。

「ええ、少し急ぎますので、しっかりと掴まっていてください」

リオはそう告げて、南西の国境へ向かって走りだす。二人がベルトラム王国のロダニアへたどり着いたのは、それから8日後のことだった。

第172話　ロダニア到着

時刻はお昼前、天気は快晴。場所はベルトラム王国北東部、ロダン侯爵領、領都ロダニア。リオとフローラはいよいよその目前の街道にまでたどり着いていた。

「ようやく、ですね」

と、リオはロダニアへ伸びる街道に躍り出ると、抱きかかえていたフローラを降ろし、進行方向にそびえる都市の外観を眺めながら言う。ロダニアは城塞都市として建築されているため、遠目から見てもその容相は重厚である。

「はい」

フローラはリオの隣に立って、感慨深そうに頷いた。

「行きましょうか。きっと騒ぎになりますよ」

リオはくすりと笑って、フローラに促す。

「できれば、あまり騒ぎにはしたくないのですが……」

フローラは困り顔で苦笑した。

「それは難しいのではないかと。ただ、お気持ちはわかりますので、一応、内々にクリスティーナ様に取り次いでもらえるよう、動いてみましょうか」

と、リオはロダニアを眺めながら告げる。
皆がフローラ帰還の事実を知れば、騒ぎになることは間違いない。とはいえ、最初からあまり騒ぎになっては、落ち着いてクリスティーナとの再会を果たすこともできないだろう。
家族水入らずの再会を果たしたいのならば、最初にフローラの帰還を知る者は可能な限り信用のおける人間に限定する必要がある。リオとしても色々と説明が面倒なので、最初に事情を報告する相手は最高責任者であるクリスティーナが望ましい。もちろん可能ならば、だが……。
実際にどういう運びになるのかは、完全に出たとこ勝負だ。ただ、リオとしては信用のおけるセリアに取り次いでもらうのが一番だと思っていたりする。

「はい、よろしくお願いいたします」

フローラはぺこりとお辞儀をして頷く。

「……ところで、フローラ様はともかく、私がこの格好でクリスティーナ様に会うのは流石に無礼でしょうか？」

リオはふと気づいたように、フローラに水を向けた。今のリオは旅装束なので、お世辞にも立場が上の貴人に会う格好とは言えない。この状況で細かいことだと思うかもしれないが、細かいマナーを気にするのが貴族という生き物だ。
例えるなら、ドレスコード付きのレストランでの待ち合わせに、ラフな格好で入店しようとするようなものであろうか。いくら中で待ち合わせをしていると告げたところで、店側に入店を断られるは自明だ。それが作法である。
とはいえ、それはただの口実で、自然な流れで家に立ち寄り、セ

リアの協力を仰ぐのが話題を変えた目的だったりする。

「あ、いえ、そんなことはないです！　私がいれば、大丈夫です！」

フローラはちょっと不味いかもといった顔を浮かべたが、すぐにかぶりを振った。

「ありがとうございます。ですが、いずれにしろこの格好は領館では悪目立ちすると思うので、いったん私の邸宅に寄らせていただいても構わないでしょうか？　おそらくセリア様もいらっしゃると思うので、取り次ぎをお願いできるかもしれません。まあ、そこまですんなりたどり着けたらの話ですが……」

リオはおかしそうに口許をほころばせると、素直に自分の意図を打ち明けた。場合によっては、貴族街の自宅にたどり着く前にフローラの存在が判明し、そのまま領館へ向かわなければならない可能性もあるが、そこら辺は臨機応変に、流れに任せるしかない。

「あ、そうですね。はい！」

フローラはそれですんなり納得できたのか、元気に頷く。

「では、とりあえずはそういう流れを目指してみましょう」

と、リオは話をまとめる。そんなわけで、領館に向かう前に、まずはリオの邸宅に向かうことが決まった。そして、それとは別に――、

（家に向かうまでの間にアイシアとセリア先生に、帰還したことを知らせないとな）

と、リオはそんなことを考える。パスが通じているアイシアならばここまで近づけばほぼ確実にリオの接近に気づいているのだろうが、自分から帰還を知らせておきたかった。
話すべき内容は事前に考えてあるが、もうすぐ遠隔の念話が可能な範囲に入ることになる。それまで、リオは何をどう伝えるべきか、改めて考えをまとめることにした。

◇　◇　◇

リオとフローラはロダニアの市内に入ると、まずはまっすぐ邸宅のある貴族街を目指した。セリアが邸宅にいるのかはわからないが、霊体化したアイシアは常にすぐ傍にいるはずだ。
一方、フローラは歩きながら、物珍しそうに市内を見回している。日頃、ロダニアにいても、貴族街の外に出ることなどなかったのだろう。自分が暮らす土地に住まう民の暮らしぶりは新鮮なようだ。

「ここは人も多いですから、迷子にならないよう、ご注意くださいね」

リオは微笑してフローラに注意を促した。

「は、はい。大丈夫ですよ」

フローラは注意散漫になっていたことを自覚したのか、頬を赤らめて首肯する。気持ちリオに歩み寄って、隣のポジションをしっかりと確保した。
そうして、貴族街にある程度、接近したところで――、

（アイシア、聞こえるかな？）

リオはアイシアとのパスの繋がりを意識して、遠隔の念話を試みた。現在地ならほぼ間違いなく貴族街の全域を念話圏内に収めているはずだ。

（お帰り、春人）

アイシアからすぐに返事が戻ってくる。もしかしたらリオからの念話をずっと待っていたのかもしれない。

（ただいま、帰ってきたよ。……おかげで、目的も果たすこともできた）

リオは帰還の挨拶をすると、わずかに間を置いて旅の目的を達成したことを告げた。事情を知っていて、セリアを守るために残ってくれたアイシアに伝えないわけにはいかない。アイシアはどんな返事をするのだろうかと、リオは流石に少し身構えたが――、

（なら、よかった）

アイシアは出発前と相も変わらぬ、抑揚のない調子で返事をした。

（……ありがとう。そっちは特に変わりはなかったかな？）

リオはそんなアイシアの声に癒され、微かに口許をほころばせて尋ねる。帰ってきたのだという実感が、なんだか急に湧いてきた気がした。

（うん。セリアの周りでは何も起きなかった）

と、アイシアは短く答える。セリアの周りでは、ということは、セリア以外の人間の周囲では何か起きたのだろうかと思ったが、すぐにフローラが失踪したことかもしれないと考える。いずれにせよ、アイシアの口ぶりからは特に問題視されていないことが窺えた。

（なら、俺もよかった。セリア先生はそこにいるのかな？）

（いる。今は家だけど、後で領館で講義があるらしい）

（そっか。……これから一度、家に向かうんだけど、俺も領館に行きたいんだ。クリスティーナ王女と会いたいんだけど、可能なら先生に取り次ぎをお願いできないかなと思っている。一人、屋敷に同行者を連れていくよ。事情は会えばわかると思うから）

リオはフローラの存在は伏せたまま、アイシアにセリアへの連絡をお願いした。事前にフローラがいることを伝えて身構えさせてしまうと、実際に会った時に不自然なアドリブになってしまうかもしれない。

それならば、実際に会った時に驚いてもらって、素のままのリアクションをしてもらった方がいいだろう。おそらくは盛大に驚くであろうセリアのことを想像すると、少しばかり申し訳ない気持ちが芽生えないではないが、やむを得ない。

（わかった。セリアに伝えておく）

（ありがとう。もうすぐ貴族街に着くから、改めて連絡するよ）

（うん）

と、アイシアは頷く。そこでいったん遠隔の念話は終了した。

◇　◇　◇

そして、リオ達は貴族街の入り口にたどり着く。貴族街は頑丈な

城壁によって覆われており、正攻法で中に入るには門を通る以外にルートはない。もちろん門の前には複数名の見張りがいるし、門も閉ざされているので、通行の許可がない者が立ち入ることはできない。

とはいえ、今のリオは貴族街の内部に邸宅を持つ立派な住人である。加えて、通行証代わりに与えられたクリスティーナの私物（ブローチ）もあるので、中に入る資格はあるはずだ。

（大丈夫だろう、……たぶん。なんとなく不安を覚えるのは、俺が小市民だからなんだろうか？）

リオはそんなことを考えながら、門へと歩いていく。ちなみに、リオはフードを外して顔を曝け出しているが、フローラはフードを被って、リオの背後にそっと立っている。

門番の兵士達は接近するリオ達の存在に気づくと――、

「止まれ」

当然、リオとフローラを呼び止めた。今のリオ達は貴族服とは異なる装いをしている――旅装束を着ていて、リオにいたってはバックパックを背負っている――ので、貴族街の住人とは思われなかったのだろう。

客として貴族街を訪れる人物だとしても、普通は馬車に乗っているのが一般的だ。先入観から重要人物であることを除外したのは無理もない。

「私はこちらの貴族街に屋敷を所有するハルト＝アマカワと申します。こちらは通行証代わりにと、クリスティーナ王女殿下から賜わったブローチなのですが……」

リオはそう言って、クリスティーナのブローチを提示する。すると、門番達はハッと顔色を変えた。そして、まじまじとブローチを見つめだす。すると――、

「こ、これは大変失礼いたしました！　ご尊顔を存じ上げなかったものでして、クリスティーナ様から通達を賜わっておりますので、どうぞお通りください！　おい、門を開けろ！」

門番の兵士達は急に畏まって敬礼をし、入門の許可を出した。

「どうも……、こちらの女性は私の連れなのですが、一緒に中へ入っても？」

リオはブローチの効果に軽く面食らいながらも、背後のフローラを見やって尋ねる。

「無論です！」

兵士達は即座に頷いた。そうこうしている間も兵士達はあたふたと開門作業を行っており、すぐに門が開け放たれる。

「では、こちらへ」

リオは背後のフローラを誘い、開放された門の中へ入った。

「……お勤めご苦労様です」

フローラは門を通りながら、門番の兵士達を労う。

「……どうも？　恐れ入ります」

兵士達は不思議そうな顔で会釈するが、フローラの正体を知っていたら、さぞ度肝を抜かれていたことだろう。

「声をかけられた相手がフローラ様だと知ったら、皆さん喜ぶと思いますよ？」

リオは兵士達をちらりと見やりながら、おかしそうに言う。

「そう、でしょうか？」

フローラは不思議そうに小首を傾げた。

「ええ、きっと」

リオは珍しく断言して微笑する。

「……ありがとうございます」

フローラは照れくさそうに礼を言った。

そうして、二人はロダニアの貴族街に足を踏み入れる。貴族街は実に閑静で、賑やかな城壁外部とは一風変わった雰囲気が漂っていた。

とはいえ、人通りが少ないというわけではなく、住人の女性貴族やその使用人と思しき者達の姿がちらほらと見受けられる。男性の貴族達はお勤めで領館へ繰り出しているのだろうか。また、巡回の兵士達があちこち歩き回っているので、治安はだいぶ良さそうだ。

「やはりこの格好は目立つみたいですね。急ぎましょうか」

時折、すれ違う者達から物珍しそうな視線を向けられると、リオは苦笑してフローラに呼びかけた。あまりうろちょろしていれば、不審者として呼び止められるかもしれない。

「はい」

フローラも向けられる好奇の視線に気づいているのか、少々居心地が悪そうに頷いた。それから、数分もしないうちに、二人はリオの邸宅にたどり着く。

「こちらはアマカワ卿の屋敷になっておりますが……、何か御用でしょうか？」

屋敷の門には見張りの女性兵士が二人いて、その一方がリオ達を呼び止めた。言葉遣いは慇懃だが、身なりが原因なのか、少しばかり警戒しているのが窺える。

（屋敷に警備の兵までいるのか……）

リオはやや面食らって、一瞬、立ち尽くした。これではまるで貴族の邸宅ではないか。すると――、

「お、おい！」

もう一方の女性兵士が、慌てて片割れの兵士を肘で小突く。

「ん、何だよ？」

小突かれた女性の兵士は小声で、不思議そうに首を傾げたが――、

「あ、貴方様がアマカワ卿なのではないでしょうか？　事前に伺っていた容姿と一致すると言いますか、その……」

女性の兵士はもう一方の兵士を無視して、リオの顔色を窺って尋ねる。

「はい、そうですが……、貴方達は？」

リオは頷き、一応、相手の素性を確認することにした。

「失礼いたしました。我々はクリスティーナ様の命により派遣され、屋敷の警護をさせていただいている者です」

女性の兵士はキリッと姿勢を正し、胸元に右手を当てて素性を明かした。門番の兵士が二人とも女性なのは、家の主が女性のセリアであるから配慮してくれたのだろうか。

「し、失礼いたしました！」

もう一方の女性兵士も慌てて姿勢を正す。

「そうでしたか。お勤め、ありがとうございます。旅より帰還したのですが、セリア様にご挨拶をと思いまして、中に入ってもよろしいですか？　こちらは私の連れです」

リオは背後のフローラを見やって、許可を求める。

「無論です！　どうぞ、お入りください！」

二人は声を揃えて即答した。一応、来客があれば主のセリアに報

告と確認をすべきなのだろうが、ほとんど顔パス状態だ。
「……どうも。ところで、セリア様は中に？」
いることはわかっているが、一応、リオは確認しておく。
「はい。午後から領館で講義があると伺っておりますが」
「わかりました。それでは。どうぞ、ローラ様」
リオはそう言うと、屋敷の中へ入るべく、背後のフローラをエスコートする。そのまま二人で門をくぐり、屋敷へと延びる通路を歩いていく。
「ありがとうございます。……ここが、ハルト様のお屋敷なのですね」
フローラはリオの邸宅の敷地内に入ると、興味深そうに屋敷と庭を見回した。
「私自身、実際に住んだことはないんですけどね。屋敷を賜わった二日後にはロダニアを出発してしまいましたし、屋敷はセリア様にお貸ししているので、その間の滞在はロダニアの迎賓館でさせていただいたんです」
と、リオも物珍しそうに屋敷を見回しながら言う。
「……そう、なのですか？」
フローラは不思議そうに小首を傾げた。

「やむにやまれぬ理由があるのならばともかくとして、未婚の女性貴族の家に男が寝泊まりしているのは流石に外聞が悪いと思いまして」

と、リオは微苦笑して、この家で暮らしていなかった理由を説明する。別々に暮らすことができるのならば、距離を開けておいた方が無難だろう、と。

「はい、それはまあ、確かに……」

フローラは納得こそしたものの、どこか釈然としていない面持ちを浮かべる。もっとも、本人にも理由はわからないのだが……。

そうこうしている間に、屋敷へだいぶ近づいていく。すると――、

「ハルト！」

屋敷の中からセリアが出てきた。事前にリオが帰ってきたことはアイシアから聞いているはずなので、再会のタイミングを窺っていたのだろう。

「お久しぶりです。ただいま、帰りました」

小走りで駆けよるセリアに、リオは朗らかに帰還の挨拶を告げる。

「うん、お帰りなさい！　それで、その、そちらは？」

セリアはわずかに息を乱していたが、嬉しそうにリオを歓迎した。思わず抱き着こうとしたが、すぐ傍にフローラがいる手前、自重して窺うような視線を向ける。

「……あまり驚かないでほしいんですが、フローラ様です。実は偶然、保護しまして。……フローラ様、フードを外していただけますか？　髪の魔道具はそのままで結構ですので」

リオはややバツが悪そうにフローラの素性を明かすと、フローラにフードを外すようお願いした。

「あの、お久しぶりです、セリア先生……」

フローラは恐る恐るフードを外して、セリアに挨拶をする。

「……」

案の定、セリアは硬直して、フローラの顔を見つめていた。

第173話　姉妹

「き、聞いてないわよ！」

セリアは泡を食って、リオに向けて叫んだ。

「そりゃあ、伝える方法がありませんでしたから」

リオは苦笑して応じる。アイシアの存在を知るのはリオとセリアだけだ。まさか内々に連絡を取り合っていたとは言えない。

「う……、そ、それは、そうだけど！　って、失礼いたしました、フローラ様。私、すっかり動転してしまって」

セリアはむうっと唇を尖らせたが、すぐにフローラに向き直ると、慌ててこうべを垂れる。

「い、いえ、申し訳ございません、驚かせてしまって……」

フローラもあわあわとセリアを制止した。

「あの、それでどういうことなのでしょうか？　この状況は……」

セリアはリオを見やり、説明を求める。

「先ほど申し上げた通り、偶然、遭難されていたフローラ様を保護したんです。パラディア王国で」

リオは改めて簡潔に状況を説明した。

「パ、パラディア王国！？　だいぶ北東の国じゃない。どうしてそんな場所に？」

セリアはギョッと目を丸くする。

「それは魔道船に乗っていたフローラ様を襲った者達の仕業なんですが、とりあえずクリスティーナ王女殿下にも状況をご報告したいので、お取り次ぎいただけませんか？　最初からあまり大きな騒ぎにはしたくないそうなので、できれば内々に。部外者の私よりはセリア様から話を通していただいた方が、円滑に事が進むと思いますので」

と、リオはフローラを見やって言う。セリアを相手に普段よりもだいぶ畏まった口調なのは、当然、すぐ傍にフローラがいるからである。

「……わ、わかったわ。緊急の謁見を申し込んでみる」

セリアは状況を呑み込むと、真面目な顔で頷いた。

「助かります。ところで、謁見の前に着替えたいので、部屋をお借りしてもよろしいですか？」

「もちろんよ。というより、ここは貴方の家なんだから、自由に出入りして」

と、セリアは快く受け入れる。

「ありがとうございます。できればフローラ様にもお召し物をご用

意したいのですが……」

リオは微笑して礼を言うと、フローラを見やった。当然、旅の間にずっと着ていた外套は脱ぐ必要があるとして、外套の下に着ている衣類も平民が着るにしては上等な服でしかないので、王族が普段着に使用する服としては論外である。

「そうね、私の服をお貸しできればいいのだけど……」

フローラとセリアでは色々とサイズが合わない。そう、色々とだ。どこが、とは考えてはいけない。ましてや、迂闊なことを言ってもいけない。口は災いの元なのだから。

「……」

リオは沈黙を貫いた。すると――、

「あの、私は今のままで大丈夫なので。領館に行けば私の着替えもありますから」

と、フローラは笑みを浮かべてやんわりと言う。彼女の場合、領館に移動すればいずれにしろ着替えることになるだろうから、そのわずかな道のりを移動するためだけに着替える必要性は高くない。

「……そうするしかなさそうですね。申し訳ございません。ご不便をおかけしてしまい」

セリアは申しわけなさそうに頭を下げた。

「いえ、ハルト様だけでも、お着替えくださいませ」

フローラはそう言って、リオを見やる。

「申し訳ございません。すぐに済ませますので、少々お待ちを」

と、リオは恭しくこうべを垂れた。

「じゃあ、空いている部屋へ案内するわ。このままここで立ち話をするわけにもまいりませんので、フローラ様もどうぞこちらへ。応接室へご案内いたします」

セリアはそう言って、リオとフローラの二人を屋敷の中へと誘(いざな)う。そうして、屋敷の中に入ると――、

「ハルトはここの部屋を使って頂戴」

セリアは途中で立ち止まり、リオに着替え用の部屋を貸し与えた。

「はい。ありがとうございます」

リオは礼を言って、空いている部屋に一人で入っていく。

「フローラ様はどうぞこちらへ。ハルトの着替えが済むまで、おくつろぎください」

セリアはフローラを引きつれ、そのまま応接室へと向かおうとした。すると――、

「セリア様、お客様でしょうか？」

給仕服を着た、三十歳前後の女性が現れる。そのすぐ傍には同じく給仕服を着た、十二、三歳程度の少女もいた。

「あら、アンジェラさん。ええ、この後すぐに出かけることになったんだけど、いったん応接室に向かうから、三人分のお茶の用意をしてくれるかしら？　それと、ハルト……男の人がそこの部屋で着替えているから、出てきたら応接室に案内してもらってもいい？」

セリアは柔らかい声で三十代の女性――アンジェラに指示を出す。

「ハルト様……、こちらの屋敷を所有されているお方ですね。畏まりました。じゃあ、ソフィがご案内してさしあげなさい」

アンジェラは恭しく頷くと、ソフィと呼ばれた十二、三歳程度の少女に命じる。

「はい！」

ソフィは元気よく頷いた。そのままリオが着替えをしている部屋の前に立つ。三十歳前後の女性もお茶の用意をするべく、すたすたと歩きだした。

「では、こちらへ」

セリアもフローラを連れて、応接室へと向かった。

◇　◇　◇

一方、リオはセリアに借りた部屋で一人、着替えを行っていた。

着替える服は黒飛竜（ブラックワイバーン）の革製の防具一式である。現状、リオが所持

する衣類というか装備の中では最上級の品だ。貴族服ではないが、作りは非常に良いので、代用品としては及第点である。

「春人、お帰りなさい」

リオが手際よく着替えていると、アイシアの声が室内に響いた。ほぼ同時に、リオのすぐ傍に、光の粒子が密集して、アイシアの姿を象る。

「……アイシア、ただいま」

リオは口許をほころばせて、アイシアに帰還の挨拶を告げた。

「部屋の外に人がいるから、静かな声で」

と、アイシアは口許に指を立てて、静かに言う。

「……留守中、先生の傍にいてくれて、ありがとう。おかげで何の心配もなく、旅をすることができたよ」

リオは微笑して頷くと、アイシアに礼を言った。

「大したことはしていない。一緒にいただけ。心配していたような事は何も起こらなかった」

「そっか。なら、次からは一緒に外に出られそうだね」

「うん」

アイシアはこくりと頷く。リオは会話中も着替えを済ませており、最後のコートを羽織った。

「詳しい話はまた後でしようか。待たせるわけにもいかないしね」
「また後で」

アイシアはそう言うと、スッと姿を消してしまう。リオは衣類の乱れを最終確認すると、歩きだして丁寧な手つきで部屋の扉を開けた。すると――、

「……お待ち、しておりました、ハルト様」

部屋の前で待機していた少女、ソフィと遭遇する。ソフィはリオの姿を見て一瞬、瞠目すると、そそくさとお辞儀する。

「えっと、君は……？」

リオは小首を傾げて、ソフィの素性を確認した。

「こ、この屋敷で働かせていただいております。ソフィと申します。セリア様のもとへご案内しますので、どうぞこちらへ」

ソフィは緊張気味に挨拶をすると、すぐに歩きだしてリオの案内を開始した。

「では、お願いします」

リオはそう言って、ソフィに案内を任せる。

「こちらです」

ソフィは応接室の前で立ち止まると、丁寧に扉をノックした。部屋の中から「どうぞ」とセリアの声が響いてくると、ソフィは静か

に扉を開く。

「失礼いたします。ハルト様をお連れしました」

ソフィはそう言って、リオを中に誘った。リオが室内に入ると、セリアとフローラの二人に見つめられる。

「あ、やっぱりその服にしたのね？」

セリアはリオの姿を視界に収めると、パッと笑みを浮かべて言った。

「ええ、貴族服は持っていないので。戦闘服ですが、一番上等なものを選びました。大丈夫でしょうか？」

「ええ。作りがしっかりしているし、よほどフォーマルな場でもない限りは大丈夫だと思うわよ。でも、ハルトも一応は貴族になったんだから、何着か買い揃えておいた方がいいわよ？」

「はい。わかってはいるんですが、どうもその手の店には足を運びづらくて」

と、リオは苦笑交じりに答える。

「じゃあ、今度、買いに行きましょうよ。一緒に選んであげるから」

「では、お言葉に甘えて。お願いします」

「うん、任せて」

セリアは嬉しそうに頷いた。フローラはそんな二人のやりとりを窺うように、そしてどこか羨ましそうに眺めている。すると、そこへ――、

「失礼いたします。お茶をお持ちしました」
お茶を用意したアンジェラが現れた。
「領館へ向かう前に、よろしければお召し上がりください」
セリアはそう言って、フローラにお茶を勧める。長旅で喉も乾いているだろうと思ったから。
「はい。それでは、ありがたく」
フローラはこくりと首肯する。そうして、水分補給を行った後に、三人は領館へ向かうことになった。

◇　◇　◇

ロダニアの領館はお城というか、砦のような造りになっていて、部外者が出入りできないよう、入り口となる城門の前には複数の兵士と騎士が門番として立っている。
本来なら、レストラシオンに所属する人物であっても、用もなく出入りできる場所ではないが――、
「これはセリア様ではございませんか。お勤めの時間はもう少し先と記憶しておりますが……」
門番の騎士とは顔見知りのようで、セリアの顔を見かけると、慣れた様子で声をかけてきた。
「実は姫様に緊急の謁見を申し込みたいと思いまして。ハルト……、アマカワ卿が帰還されたものですから」

セリアはそう言って、リオを見やる。

「初めまして。ハルト＝アマカワと申します」

リオは一礼して、自己紹介を行った。

「なるほど。一応、確認しておきますが、そちらの少女は……」

騎士の男性はちらりと、たたずむフローラを見やった。今のフローラはまだ髪の色を変えたままだし、服装も着替えていないので、王女だと気づかれることはない。

「やんごとない身分のお方です。少々事情が複雑でして、詳しくはクリスティーナ様にお伝えする所存です」

「……畏まりました。では、どうぞお通りください」

騎士は自分の職務権限では対応しかねると判断したのか、そのままリオ達を通すことにした。クリスティーナの采配によりセリアはもちろん、リオも要人として扱うよう厳命を受けているから。

「失礼いたします」

セリアはぺこりとお辞儀をして、領館の門をくぐる。リオとフローラもその後に続いた。その後は通路に迷うはずもなく、誰かとすれ違っても呼び止められることもなく、難なくクリスティーナの執務室へとたどり着く。セリアのおかげだ。

クリスティーナの執務室の前には、ヴァネッサと他数名の女性騎士が護衛に立っていた。

「これは、セリア君ではないか。それにアマカワ卿まで……」

ヴァネッサはセリアとリオの姿を視界に収めると、目をみはる。

「お久しぶりです。旅より帰還しましたので、ご報告がてら、クリスティーナ様にご挨拶をと思いまして」

リオは微笑してヴァネッサに応じた。

「そうか。変わりがないようで何よりだ。姫様もお喜びになるだろう。そちらの少女は……」

ヴァネッサは満足そうに頷くと、フローラを見やる。

「えっと……」

フローラはどうしたものかと、困り顔でリオを見やった。

「ここならばもう大丈夫かと。貴方様のご判断にお任せします」

リオはクリスティーナの執務室へと道を開けると、恭しく胸元に手を当て、フローラにこうべを垂れる。

「……はい。お久しぶりです、ヴァネッサ」

フローラは小さく深呼吸をすると、意を決して髪の色を変える首飾りを外した。直後、一瞬でフローラの髪は薄紫色へと戻る。

「な、っ……」

ヴァネッサ達は揃えて声を失ってしまった。自分とまったく同じ反応をしていると、セリアはおかしそうに口許を緩める。すると、ややあって――、

「フ、フローラ、様……！？」

ヴァネッサがぱくぱくと口を動かして、フローラの名を呼んだ。

「はい。ハルト様にお力添えいただき、無事に帰還しました。お姉様はそちらにいらっしゃいますか？」

フローラは扉を見やり、ヴァネッサに尋ねた。いよいよ扉のすぐ向こうにクリスティーナがいるかもしれないからか、心なしかそわそわしているのが見てとれる。

「しょ、少々お待ちください！　クリスティーナ様！　フ、フローラ様が！」

ヴァネッサは慌てて背後を振り返ると、ノックもなしに扉を開け放った。

「ちょ、ちょっと、ヴァネッサ、何のつも……り」

クリスティーナはいきなり扉が開いたことに驚き、流石に咎めようとした。だが、扉の先に立つフローラの顔を発見すると、尻すぼみに言葉を失う。

フローラも扉の向こうで、執務椅子に腰を下ろすクリスティーナの顔を見つけると――、

「お姉様……」

瞬間、はらはらと涙を溢した。そのままおもむろに足を動かし、のろのろと部屋に入って、クリスティーナに近づいていく。

「フローラ、フローラ……、フローラ！」

クリスティーナは呆然とフローラの名前を連呼すると、急いで執務椅子から立ち上がり、フローラへと駆けよった。そのまま二人はぶつかりあうように、互いの身体を抱きしめ合う。

「お姉様、会いたかったです！　ずっと会いたかったんです！　もう駄目かと思って、怖くて、私……」

フローラはとめどなく涙を流し、クリスティーナに抱き着いたまま頽(くずお)れる。

「フ、フローラ、大丈夫よ。私はここにいるわ」

クリスティーナはあわあわと狼狽え、泣き崩れたフローラをあやそうと訴えた。リオはそんな姉妹の再会を目にすると、そっと扉を閉めようとする。そうして、完全に扉が閉まる直前――、

（ア、アマカワ卿？）

クリスティーナはリオの顔を目にして、ギョッと目を見開いていた。リオはにこりとクリスティーナに笑みを向ける。

クリスティーナは何が何だかわからなかったが、とりあえずぺこりと会釈すると、改めてフローラの身体をぎゅっと抱きしめてやった。

「しばらくはこのまま。ご姉妹水入らずの再会ということで」

リオは完全に扉を閉めると、ヴァネッサ達に提案する。

「ああ、そうだな」

ヴァネッサは頷き、フッと口許をほころばせた。

第173話　姉妹（後書き）

今回のお話に登場したアンジェラとソフィは書籍版「精霊幻想記」の2巻と5巻に登場した母子です。どういう経緯でセリアに仕えるようになったのかは別途、地の文か会話文で説明が入る……かもしれません。

第174話　事情説明

「しばらくはこのまま、ご姉妹水入らずの再会ということで」

リオは執務室の扉を完全に閉めると、ヴァネッサに提案した。

「ああ、そうだな」

と、ヴァネッサは口許をほころばせて頷く。一方、セリアは柔らかな笑みをたたえていた。他の女性騎士達もうんうんと頷いている。とはいえ――、

「しかし、これはいったいどういうことなのだ、アマカワ卿？」

ヴァネッサは困惑した面持ちで、事の経緯（いきさつ）をリオに尋ねた。行方不明になっていたフローラが急に現れたのだから、事情の説明を求めるのは当然だろう。

「話すと長くなるんですが、旅先で偶然に遭難されていたフローラ様にお会いしました。おそらくはクリスティーナ様にも詳細をご報告することになると思いますので、詳しい話はその時に。セリアにもまだ詳細はお伝えしておりませんので」

リオは二度手間を避けるべく、だいぶ中身を省き、概要だけを語った。

「む、そうだな。ところでアマカワ卿……」

ヴァネッサは得心すると、少し距離を置いたところへリオを誘い出す。

「はい」

リオは頷き、ヴァネッサに付いていく。

「よかったのか、髪の色を変える魔道具を部下の前で使ってしまって？」

と、ヴァネッサは声を潜めて確認した。以前、リオから髪の色を変える魔道具を借りた際、クリスティーナ達はむやみやたらとその存在を第三者に口外してはならないという契約をリオと結んでいる。ただし、リオが許可した場合はその限りでない。

先ほどはリオの指示で魔道具を外したので例外に当たるのだろうが、ヴァネッサは一応、確かめておくことにした。

「ええ、構いませんよ。親衛隊の方々なのでしょう？」

「うむ。馬鹿だが裏表はない連中だ。口が堅いことは保証する。厳命すれば口外はしないだろう」

ヴァネッサは然りと首肯する。余談だが、この者達はクリスティーナとヴァネッサの後を追って独断で王都を出奔し、ロダニアまで駆けつけた猛者達だ。

「でしたら、一応そのようにお願いいたします。契約時にもお伝えしましたが、積極的に拡散しないのであれば、必要な範囲で情報を共有していただいても大丈夫です。ただし、約定通り製造法はお教えできませんので、あしからず」

と、リオは必要事項を再確認した。
「承知した。感謝する」
ヴァネッサは深々とリオに頭を下げる。
「いえ」
リオは微笑してかぶりを振った。
「では早速、部下達に……、ん、どうした、お前ら？」
と、ヴァネッサは部下達に指示を下そうと後ろを振り返る。だが、部下の女性騎士達からまじまじと見つめられていることに気づくと、訝しそうに首を傾げた。
「ヴァ、ヴァ……」
と、女性騎士達はぱくぱくと口を動かした。
「ヴァ？」
ヴァネッサは頭上に疑問符を浮かべる。すると――、
「ヴァネッサ隊長に春が来た！！」
女性騎士達は声を揃えて叫んだ。
「なっ……！」

ヴァネッサは呆気に取られ、言葉を失ってしまう。

「そりゃまあ女性騎士の中には生涯独身を貫く方もいますし？　お堅いヴァネッサ隊長は貴族として結婚適齢期を過ぎていらっしゃいますから、そういったつもりはないのかなと思いましたけど」

「ねえ、男っ気もないし、結婚は諦めているのかと思いましたけど」

「こんなに若くて凛々しい殿方と親しい間柄だったとは、お見それしました！」

「これはめでたいですね！　フローラ様のご帰還に次ぐくらいにはめでたいですね！　今宵はお祝いの席が設けられるでしょうし、盛大にお祝いしましょう」

などと、女性騎士達はわいわいと勝手に盛り上がった。ヴァネッサの顔は急速に赤く染まっていく。

「はは」

リオは下手に墓穴を掘らぬよう、さりげなくヴァネッサから距離を置いて、セリアに近づいた。セリアはくすくすと笑って、リオを隣に迎え入れる。

「え、ええい！　やかましい！　乙女か、貴様ら！？　私とアマカワ卿は十歳以上、年が離れているんだぞ！」

ヴァネッサは一喝して、女性騎士達を黙らせようとした。しかし、顔が真っ赤なので、まったく威厳がない。

「そもそも、騎士である私は女であることを捨てているのだ！　この歳で恋に現（うつつ）を抜かすなど！　あ、あるわけがあるまい！　アマカワ卿にも失礼であろう！　なあ？」

ヴァネッサは顔を赤くして訴え、リオに同意を求める。ここでリオに話を振るのは完全に悪手だ。

「別に私は失礼だとは感じておりませんよ」

リオは気まずく思いながらも笑みを貼りつけ、無難に答えておくことにした。まさか同意するわけにもいかない。

「っ……」

ヴァネッサは不意を打たれ、頬を紅潮させた。女性騎士達はにやりと笑みを浮かべる。

「皆さん、あまり上司をからかうものではありませんよ」

セリアはおかしさを堪えてやれやれと息をつくと、ヴァネッサをフォローしてやった。別に彼女達も本気ではないのだろうが、ヴァネッサが想定以上にこういったことに免疫がなさそうだったから（とはいえ、立場が入れ替わっていたら、セリアも似たような反応を見せたはずである）。それに、このままだとリオにも飛び火しかねない。

「失礼いたしました。アマカワ卿も申し訳ございません！」

女性騎士達は姿勢を正し、胸元に手を当て恭しく謝罪した。すると、執務室の扉がガチャリと開く。現れたのはもちろんクリスティーナだ。

「アマカワ卿、それとセリア先生も、中にお入りいただいてもよろ

しいでしょうか？　どうもフローラの話は要領を得なくて……」

と、クリスティーナはリオとセリアに呼びかける。

「承知しました」

リオとセリアは微笑して頷いた。

「ありがとうございます。……ヴァネッサ、貴方も入りなさい。それと誰か、ロアナにフローラが帰ってきたことを伝えてきて頂戴。あの子も心配しているでしょうから。勇者様が一緒にいらしたら伝えてもいいけど、他の人間にはまだ伝えないように」

クリスティーナはヴァネッサや女性騎士達にも指示を出す。

「畏まりました！」

ヴァネッサ達は即座に頷いた。

◇　◇　◇

それから、リオとセリアはすぐに執務室に入った。ヴァネッサも女性騎士達に必要な指示を出すと、その後を追う。

「どうぞおかけください」

と、クリスティーナはリオとセリアに席を勧める。

「失礼いたします」

リオとセリアは室内に設置された応接椅子に、並んで腰を下ろした。向かいの席にはフローラが座っていて、その隣にクリスティーナも座る。ヴァネッサは立ったまま傍に控えるようだ。

「それで、アマカワ卿。早速ですが、事の経緯をお聞きしてもよろしいでしょうか？　どうしてフローラが貴方と……」

クリスティーナは早速、リオに事のあらましを尋ねた。

「そもそも私がフローラ様とお会いしたのは偶然です。なので、それまでにフローラ様がご体験になった事実はご本人から伺ったお話になりますが……」

「お聞かせいただけないでしょうか？　フローラはご覧の通りですので」

と、クリスティーナはフローラを見やって言う。フローラは一応は泣き止んではいるようだが、クリスティーナにもたれかかりながら小さく身体を震わせている。目は涙で腫れているし、まだ整然と話をすることはできないだろう。

「承知しました。では最初に、フローラ様が魔道船でロダニアへ向かっていたことはご存じですよね？」

リオは順を追って説明することにした。

「ええ、私が呼びだしましたので……」

「道中、魔道船を襲った男達がいます。フローラ様はその男達の手により、パラディア王国へ飛ばされたそうです」

「……お、お待ちください。魔道船は竜らしき生命体に襲われて墜落したと報告がありました。人為的な襲撃も並行してあったという

のですか？」

クリスティーナは想定外の話に驚き、事実の食い違いを指摘する。

「竜らしき生命体、そういったお話は伺っておりませんが……」

リオは首を傾げて、フローラを見やった。

「……わ、私も存じません」

フローラはおずおずと語る。

「となると、その竜らしき生命体が現れたのは、フローラ様がパラディア王国へ飛ばされた後ということになりそうですね」

リオは出てきた情報から、時系列を推測した。

「フローラが飛ばされた……？」

クリスティーナはリオの発言に違和感を抱く。すると――、

「あの、お姉様、乗組員の方達は……？」

クリスティーナが疑問を口にするより先に、フローラが恐る恐る尋ねた。

「……一隻を残して、壊滅したわ」

クリスティーナはバツが悪そうに答える。ここで伏せても隠しきれない事実だ。教えるしかない。

「っ、そ、んな……」

フローラはショックを受けたのか、びくりと身体を震わせた。自分が抵抗しないという条件で乗組員の安全を保障してもらったというのに、一隻しか助からなかったとは……。あの交渉には何の意味もなかったというのか。

いや、薄々と予想はしていた。あの男は自分との約束を守ってくれないのかもしれないと。だが、そうだと思いたくなかったのだ。

フローラは忸怩たる思いに駆られる。しかし、竜らしき生命体に襲われたという話が引っかかってもいた。竜にしろ、亜竜にしろ、下位の亜竜を除いて、人間が使役できる存在ではないから。

となると、竜らしき生命体が魔道船を襲ったのは偶然なのだろうか。あの男達は嘘を吐かなかったのだろうか。フローラは頭がぐるぐるして、よくわからなくなってしまう。すると――、

「ところで、フローラがパラディア王国へ飛ばされたというのは？」

クリスティーナが歯がゆそうに尋ねた。フローラが放心している理由に見当はつくが、今は慰めるよりも事実を確認する方が先だ。

「話を伺った限り、転移魔術が込められた魔道具が使用されたようです」

リオは滔々（とうとう）と伝聞の事実を報告する。すると――、

「……転移魔術が込められた魔道具、ですか？」

クリスティーナが瞠目して瞬（まばた）く。空間魔術は現代魔術では再現が不可能な古代魔術だ。加えて、転移魔術は空間魔術の中でもひとき

わ高度とされている。
　そんな古代魔術が込められた古代魔道具など、クリスティーナですら見たことがない。驚くのも無理はないだろう。
「はい。一瞬で景色が切り替わったそうですし、事実としてフローラ様はパラディア王国にいらっしゃいましたから、間違いはないかと。詳しくは後述しますが、転移結晶を使用したのはルシウスという名の傭兵、そしてプロキシア帝国に所属するレイスという名の外交官も一緒にいたようです」
　リオはさらに驚愕の事実を口にする。
「……レイス。確かシャルルと繋がっている男の名前でしたね……。人に大型の亜竜を使役できるとは思えませんが、その二人の襲撃と完全に無関係とは思えませんね。亜竜騎士団が存在するプロキシア帝国の外交官が絡んでいるというのならば、尚更に」
　と、クリスティーナは後で捕虜のシャルルを呼び出して話を聞くことを内心で決めながら、険しい顔を浮かべて語った。
「……ええ」
　リオは微かに間を開けて頷く。一瞬、逡巡したのは、「精霊に似て非なる存在」とアイシアに自供したレイスの言を伝えるべきか悩んだからだ。
　とはいえ、そのことを伝えれば必然的に精霊の存在を明かす必要が出てくる。なので、この場では見送ることにした。
「しかし、次々と驚きの情報が出てきて、流石に混乱しそうです」

クリスティーナは頭を押さえ、苦笑いを浮かべた。いずれも俄かには信じがたい話だが、報告者はハルトだし、フローラが体験した事実だというのならば、疑うことなどできない。

「そもそもその男達はフローラ様を殺しに現れたそうです。にもかかわらず、男達はフローラ様をパラディア王国へ飛ばした。……その理由はわかりませんが、私の憶測であれば、申し上げることはできます」

と、リオは事実と評価を分けて報告する。

「お聞かせください」

クリスティーナはリオに説明を促した。

「おそらくはルシウスという男の気まぐれではないかと。刹那の快楽を追い求めるふざけた男ですので。実際、フローラ様が仰るには、転移結晶を使うにあたって一悶着あったようです」

リオはどこか冷めた面持ちで語る。身もふたもない話だが、それがすべてだ。

「……あの、ルシウスというのは、以前に我々がロダニアへ向かう際にも名前が出てきた男ですよね？　『天上の獅子団』という傭兵団の団長の……」

「はい」

クリスティーナが確認すると、リオはこくりと頷いた。

「確か、ヴァネッサもその男のことを知っていると言っていたわね。

その時は聞きそびれたけど、どのような男なのかしら？」

クリスティーナはその時のことを思い出し、ヴァネッサに尋ねる。

「私が知っているのは、その男がかつて我が国の『王の剣』の候補だったということだけです。その関係で兄上とは交流があったそうですが、家が没落したとかで、その……、詳しいことは存じません」

ヴァネッサは申し訳なさそうにかぶりを振った。

「『王の剣の候補』だった？　アマカワ卿はその男について、何かご存じなのですか？」

クリスティーナは目を見はり、リオにも水を向ける。

「ええ、私はその男のことをずっと追っていたので。だからこそ、パラディア王国でフローラ様をお救いすることができました」

と、リオは深く息をついて語った。

「……なるほど。奇しくもその男が橋渡し役となって、フローラはアマカワ卿と遭遇することができた、と。おおよその経緯は把握しました。ありがとうございます」

クリスティーナは一通りの大きな流れに得心したのか、ここでいったん礼を言う。パラディア王国に飛んだフローラがどんな目に遭ったのか、どうしてハルトはその男のことを追っていたのか、その後の顛末がどうなったのかはまだまだ尋ねる必要があるが、詳細を聞く前に前提となる情報は整理できた。

「いえ、色々と複雑に事情が絡み合っておりまして、上手くご説明できたのなら幸いです。まだまだご報告するべき事実はたくさんございますので」

リオは微苦笑してかぶりを振る。

「そのようですね」

クリスティーナは同調して笑みを覗かせた。

「まずはパラディア王国へ飛ばされたフローラ様がどのような目に遭われたのか、私がどのような経緯でフローラ様をお助けしたのか、とりあえずは時系列順にご説明するということでよろしいでしょうか？」

と、リオは語る順番を前置きする。

「……はい。そのようにお願いいたします」

クリスティーナはこくりと頷いた。

「承知しました」

リオも深々と頷くと、時系列順に話を始める。フローラがパラディア王国の森をさまよったこと、野宿をして毒蜘蛛に噛まれたこと、その後、なんとか近くの村にたどり着いたが、高熱を出して死にそうになったこと。時にはフローラ自身も説明に加わり、報告を行っていく。

そうして、報告を進めていくと――、

「フローラ様……」

フローラがあまりにも悲惨な目にあっていたものだから、セリアは沈痛な面持ちを浮かべる。

「なんとおいたわしい……」

ヴァネッサもいたたまれない面持ちで拳を握りしめていた。

「アマカワ卿がフローラを保護してくださったのが不幸中の幸いでした。もしも少しでも遅れていたらと思うと、ゾッとします。……しかし、アマカワ卿はどういった状況でフローラを発見したのでしょうか？」

クリスティーナはそう言って、隣に座るフローラの手をギュッと握りしめる。そして、リオがフローラを発見した時の状況を尋ねた。

「どうやら滞在なさっていた村を出られたらしく、ご意識を失っているところを発見したといいますか、その場に件（くだん）のルシウスがいたといいますか……」

と、リオはやや歯切れの悪い物言いで答える。そもそもリオはルシウスとの戦闘が終わるまで、フローラの存在に気づいてすらいなかった――とは少し言いづらい。

「どうして村を出たのよ、フローラ？」

クリスティーナは面食らってフローラに尋ねた。高熱でうなされている状態で外を出歩くなど、自殺行為に等しい。

「……あ、あの、滞在させていただいた村の村長さんが領主の方を頼ろうとしていたらしくて、パラディア王国はプロキシア帝国寄りの小国だと聞いていましたし、捕らえられたらお姉様にもご迷惑がかかると思って……」

フローラはひどくバツが悪そうに語った。

「……そういう時は、自分の身の安全を優先なさい。迷惑だとか、そんなことは考えなくていいの」

クリスティーナは肩を掴んで、フローラを諭す。王族としては理解できない行動でもないが、姉としては看過できない行いだ。自分の身を優先してほしいという気持ちの方が強かった。

「ご、ごめんなさい」

フローラは慌てて謝罪する。

「謝る必要はないのよ。怒っているわけじゃないの。心配しただけ」

クリスティーナはそう言って、フローラを抱きしめた。

「はい……」

フローラは涙ぐんで頷く。

「……話が逸れてしまい申し訳ございません。続きをお聞かせいただいてもよろしいでしょうか？」

クリスティーナはややあってフローラに抱きつくのを止めると、

リオに話の続きを促す。

「……おそらくですが、フローラ様はすぐに限界を迎えてしまったようです。村からそう離れていない場所で意識を失われた。そして、そこへパラディア王国の第一王子、デュラン殿下を引き連れたルシウスが現れた。私がその場にたどり着いたのは、そのすぐ後のことだと思います」

と、リオは淡々と続きを語る。

「パラディア王国の第一王子が、フローラを？」

クリスティーナは鋭い面持ちで訊いた。デュランは遠い小国の王族だが、噂くらいは聞いたことがある。戦士としては一流の強さを誇るが、女癖も悪い王子だと。

「どうもルシウスとは知らない仲ではなかったらしく、フローラ様の存在を知らされていたようです。それで、フローラ様の身柄を確保しようとしていたとか」

「……なるほど。ですが、どうしてルシウスという男はそこまで回りくどいことをしているのでしょうか？　転移結晶など使わず、そのままフローラをパラディア王国へ連れて行けばいいものを」

クリスティーナはデュランがフローラを狙った理由については納得がいったが、ルシウスの行動については理解しかねているようだ。

「……先ほど申し上げた通りです。すべてはあの男の気まぐれ。そういう人間なのです、ルシウスという男は。自分が楽しければ、平然と意味のない行いもします。あの男にとっては、余興みたいなものだったのでしょう。」

「……度し難くはありますが、その男がどういう人間か、ようやくイメージが固まった気がします」

随分とふざけた真似をする男だ。クリスティーナはルシウスに対する静かな怒りを胸の内で燃やした。

「ええ、あまりこういった表現は好きではありませんが、モラルなど持ち合わせていない外道だとお考えください」

と、リオは苦笑交じりに言う。復讐を果たした今、少しは冷めた目線でルシウスの存在を捉えることができるようになったが、その評価が変わることはない。

「……アマカワ卿とルシウスという男の関係を、お尋ねしてもよろしいのでしょうか？　無論、教えたくないというのであれば、無理にとはいいませんが」

クリスティーナは恐る恐る尋ねた。温厚なリオがここまで酷評するのだから、並大抵の関係ではないことは窺える。訊くべきか、訊かないべきか悩んだが、遠慮がちに訊いてみることにした。

すると、リオは一瞬、ちらりとセリアを一瞥（いちべつ）する。セリアはじっとリオを見つめていた。果たして、リオは小さく息をつくと――、

「……私の両親の、仇（かたき）だったんです」

腹を括って、事実を告げた。

「っ、申し訳ございません、立ち入ったことを伺ってしまい」

クリスティーナは慌てて謝罪する。

「いえ、答えたのは私です。むしろお気を遣っていただき、申し訳ございません」

リオは落ち着いた声で謝り返した。

「っ……」

セリアはぎゅっと拳を握りしめると、隣に座るリオの顔をじっと見据えた。すると、外からドタバタと足音が響いてくる。その直後、勢いよく執務室の扉が開放された。

セリアやフローラはびくりと身体を震わせ、執務室の扉を見やる。そこには――、

「おい、クリスティーナ！　フローラが帰ってきただって！？」

ロアナを引き連れた、弘明が立っていた。

第１７４話　事情説明（後書き）

３月１日の活動報告でお伝えした通り、ｔｅｎｋｌａ先生の体調不良によりコミック版「精霊幻想記」の連載が第３話で打ち切りとなりました。詳しくは２０１７年３月１日の活動報告をご覧ください。

第175話　嫉妬

「おい、クリスティーナ！　フローラが帰ってきただって！？」

弘明はノックもなしに執務室の扉を開けると、声を荒げて尋ねた。室内にいたフローラやセリアはびくりと体を震わせる。その一方で――、

「……勇者様、お静かにお願いします」

クリスティーナは小さく嘆息して、弘明に応じた。

「そんなことより……、フローラ！　無事だったんだな、よく帰ってきた」

弘明は一瞬で室内を見回し、クリスティーナの隣に座るフローラの姿を発見すると、ずかずかと室内に入り込んでいく。

「あ、ありがとうございます、ヒロアキ様……」

フローラはおずおずと礼を言った。

「ああ、フローラ様……、よくぞ、よくぞご無事で」

ロアナもフローラの顔を見ると、感極まってふらふらと部屋の中へと歩きだす。

「ロアナ、お久しぶりです」

フローラは嬉しそうに口許をほころばせて、ロアナに応じる。

「あー、で、いったいどういうことなんだ、これは？」

弘明は早速、状況の説明を求めた。

「遭難していたフローラを、アマカワ卿が保護してくださったんです」

クリスティーナは向かいに座るリオを見やり、端的に結果だけを告げる。

「……なに？」

弘明はここでようやくリオの存在に気づき、訝しそうに目を細めた。

「お久しぶりです、勇者様」

リオは静かに立ち上がると、胸元に手を当て恭しく弘明に頭を下げる。

「あー、お前か。夜会以来だな。で……、話が見えてこないんだが、どうして魔道船に乗って遭難していたフローラがこいつに助けられることになるんだ？」

弘明は少々おざなりにリオに応じると、クリスティーナを見やってより詳細な事情の説明を求める。

「……ちょうど今、その辺りの説明をアマカワ卿にしていただいたところです。最初からあまり大きな騒ぎにはしたくはなかったので、まだ他の誰にもフローラの帰還は伝えていないのですが、勇者様のお耳には他の誰よりも先にお届けするべきだと考え、内密にお呼びしました。これから勇者様にもご説明しましょう」

クリスティーナは小さく息をついて、弘明に語った。

本当はあまり呼びたくなかったが、少し前までフローラの婚約者であった男だ。後から他の者達と一緒に事後報告を受けるだけでは面白くないだろう。

というより、弘明の性格上、蚊帳の外に置いておくとヘソを曲げて拗ねかねない。まだ短い付き合いだが、クリスティーナは弘明のことをよく理解していた。扱いやすくはあるが、どんなことでも特別扱いしておかないとすぐに不満を溜める面倒臭くてデリカシーのない男だと。

「あー、そうだな。聞かせてもらおうか。ロアナも座れよ」

弘明は空いている椅子に腰を下ろし、ロアナにも席を促す。

「いえ、私はこの場に……」

ロアナはこの面々と一緒に腰を下ろすのは恐れ多いと思ったのか、畏まってかぶりを振る。だが――、

「構わないから、座りなさい。ロアナ」

と、クリスティーナ。

「……恐れ入ります」

ロアナは深々と頭を下げて、弘明の隣に腰を下ろした。リオも腰を下ろす。

「では早速、ご説明したいところですが、セリア先生はそろそろ講義の準備をされた方がいいのでは？」

クリスティーナは話を始める前に、不意にセリアに水を向ける。

「あ、はい。そういえば、そうでございます」

セリアは室内の時計を見やりながら頷く。

「この場はもう大丈夫ですので、どうぞ講義へ向かってください」

「……はい。お気遣いくださり、ありがとうございます」

クリスティーナが退室の許可を出すと、セリアはこくりと頷いて礼を言う。

「アマカワ卿はもう少しお付き合いいただいてもよろしいでしょうか？　そう長引かないとは思いますので」

と、クリスティーナはリオには残るよう、お願いした。

「無論です」

リオは鷹揚に首肯する。

「では、私はこれで。失礼いたします」

セリアはそう言って、リオを見やりながら立ち上がった。リオもセリアを見やり、また後で会おうとアイコンタクトを交わす。
それ自体は特に失礼にあたる行為ではないが、二人の親密さはだいぶ窺える。ロアナは興味深そうに目をみはり、リオとセリアを見やった。一方、弘明はつまらなさそうにその様子を見つめていて、フローラはどこか羨ましそうに眺めている。
他方、クリスティーナは旅の間にリオとセリアの親密さをよく理解していたので――、

「こちらの話が早めに終われば、先生のもとへアマカワ卿をお連れします。講義が先に終わるようであれば、よろしければまたこちらへお越しください」

二人の間柄を気遣って、セリアを見送った。

「承知しました。それでは」

セリアは申し訳なさそうに会釈すると、踵(きびす)を返して退室する。そうして、室内に残ったのはリオ、クリスティーナ、フローラ、ロアナ、弘明、ヴァネッサとなった。

「じゃあ、聞かせてくれよ」

と、弘明は説明を促す。

「アマカワ卿から伺った話の整理もしたいので、順を追って私からご説明します。何か齟齬や補足がございましたら、適宜、ご指摘いただけますか、アマカワ卿？」

クリスティーナはそう前置きして、リオを見やった。

「畏まりました」

リオは微笑して受け入れる。そうして、今度はクリスティーナが弘明やロアナに状況を説明することになった。

フローラが乗っていた魔道船が黒い亜竜らしき存在とは別に、傭兵ルシウスとプロキシア帝国の外交官レイスに襲撃されていたこと、フローラがパラディア王国の森に転移させられていたこと、その森で毒蜘蛛に噛まれて生死をさまよっていたこと。

それから、なんとか近くの村にたどり着いたが、パラディア王国の貴族に身柄を引き渡されそうになることを察すると、一人で村を飛び出したこと、だがすぐに力尽きてしまったこと、そのすぐ後にルシウスとパラディア王国の王子が現れて連れ去られそうになったこと、そして、そこへハルトが現れたこと。

他にも先ほどは語られなかった詳細な話に触れたりしつつも、ルシウスがハルトの両親の仇であることには立ち入らず、先ほどハルトが話してくれた説明を一通り終える。すると――、

「……なるほどな。まあ、話はわかった。俺と離れている間に、ずいぶんと大変だったみたいだな」

弘明はそう語り、フローラを見やって深々と息をついた。

「はい……」

フローラはぎこちなく頷く。

「毒蜘蛛の後遺症は大丈夫なのでしょうか？」

ロアナは不安そうにフローラの身を案じる。

「はい。ハルト様のお薬のおかげで。首筋に痣ができてしまったのですが、痕(あと)も消えて無事に回復しました」

フローラは痕があった首筋に触れながら、微笑して答えた。

「……」

弘明はフローラがリオのことを「ハルト様」と呼んでいることに気づくと、スッと目を細める。

「ありがとうございます、アマカワ卿」

ロアナはリオに対して深くこうべを垂れた。

「いえ」

と、リオは朗らかにかぶりを振る。

「……ですが、貴重なお薬だったのでは？　毒で生死をさまよったフローラを短期間で完治させたほどの効果です。強力な魔術薬(ポーション)なのではないでしょうか？」

尋ねて、クリスティーナはリオの顔色を窺う。

「まあ、それなりには。ですが、フローラ様のお命には代えられません」

魔術薬(ポーション)のことにはあまり深く触れたくないので、リオは無難に答えておくことにした。簡単に作れると答えて、製造法や入手経路を

尋ねられては困るから。

「……ありがとうございます。フローラをお助けくださったお礼はまた改めて、必ずいたします」

クリスティーナはそう言って、粛々とリオに一礼する。

「偶然の成り行きですので、お気遣いなく。それより、実はまだご報告していない出来事も一つございます」

リオはやんわりとかぶりを振ると、まだ報告すべき話があると伝えた。

「何でしょうか？」

と、クリスティーナ。

「……パラディア王国からロダニアへ向かう道中、ルビア王国へ立ち寄ったのですが、そこでプロキシア帝国の大使であるレイスが率いる傭兵三名と、ルビア王国の第一王女であるシルヴィ様が率いる騎士達に襲われました」

リオはまずは概要だけを伝える。

「……ルビア王国の、シルヴィ王女が、ですか？」

クリスティーナは面食らい、目を皿にしてリオの発言を確認した。ロアナやヴァネッサも唖然と目を瞬いている。

「はい。その時の状況が少し複雑だったのですが、襲撃の狙いがフ

ローラ様だったということはレイスの発言から明らかになっています。シルヴィ様は相手がフローラ様だと知った上で私たちを襲撃したわけではなさそうでしたが、レイスに協力していたことは間違いなさそうでした」

リオは頷き、より詳細に概要を語った。

「あー、ルビア王国のシルヴィ王女ってのは、確か夜会に出席していた姫騎士だよな？」

と、弘明は隣に座るロアナに尋ねる。

「……はい。ガルアーク王国や我がレストラシオンとは同盟関係にある国です」

ロアナは躊躇いがちに説明した。そんなルビア王国の第一王女であるシルヴィが、レストラシオンの象徴ともいえるフローラを襲撃したとなれば、実に穏やかではないから……。

「他にも以前、夜会でフローラ様を襲撃した賊を手引きしたのがシルヴィ様だったと、レイスは言っていました。確実とは申せませんが、その時のシルヴィ様の反応を観察した限りだと、後ろ暗いところがないわけではないのかなと……」

と、リオは事実に対する個人的な所感を述べる。

「それは、看過できないお話ですね。事実であるのならば、明確に国際問題として処理すべき案件です」

クリスティーナはそう言って、悩ましそうに顔を曇らせた。する

と――、

「お姉様、ハルト様のお話は本当です。街道を歩いていたら、問答無用でハルト様を狙って攻撃してきて、すごい数の騎士の方々に囲まれてしまったんです。それで、ハルト様が私のことを守ってくださって……」

フローラはクリスティーナがリオの発言をにわかには信じられないと思っていると判断したのか、リオの話を補強するように語る。

「もちろんアマカワ卿の話は信じているわ。貴方のことも。ただ、シルヴィ王女の意図を測りかねているのよ」

クリスティーナは微苦笑して、フローラに応じた。

「は、はい」

フローラは少し気恥ずかしそうに頷く。

「考えられるのは、レイスがルビア王国の第二王女であらせられるエステル様を人質として用いていたということです」

「人質、ですか。もう少し詳しく伺っても？」

クリスティーナはスッと目を細め、リオに尋ねる。

「私とフローラ様は街道を歩いていると不自然に脇の森から現れたエステル様と遭遇し、助けを求められました。エステル様はすぐに気絶されてしまい、状況はよくわからなかったのですが、そこをシルヴィ様の配下と思しき騎士の女性に勘違いされ襲われました。その後のレイスとシルヴィ様の会話で、エステル様の誘拐を匂わせる

発言もありましたので……」

と、リオはエステルの誘拐を裏付ける事実を語った。

「なるほど……」

クリスティーナは思案顔を浮かべて唸る。

「他にもシルヴィ様達はエステル様を救出するべく動いていた節がありました。ただ、他にも気になることはございまして、勇者様と思しきレンジという名の少年がシルヴィ様と一緒に行動していたんです。その身柄についてレイスとも話をされていました。援軍の騎士の方々が続々と駆けつけ、悠長に話を聞いている暇もなかったので、最後まで話を聞くことはできなかったのですが……」

リオはここで新たに蓮司の存在を明かした。

「……勇者様、ですか？」

クリスティーナは未知の勇者の存在に一瞬硬直し、なんとか口を開く。弘明、ロアナ、ヴァネッサも大きく目を見開いていた。

「はい。実際に交戦もしましたし、弘明様と同じ黒髪でしたので、間違いはないかと」

リオは頷き、弘明を見やる。

「あー、待て。名前的に俺と同じ世界の出身である可能性は高そうだが、勇者なら神装を持っているはずだが？」

と、弘明。

「はい。氷を操るハルバードを所持していました。魔法による身体能力強化を超える高い身体能力で動き回っていたので、おそらくは神装によって強化されていたのでしょう。無論、それが魔剣の類である可能性もございますが、レイスは『勇者』と口にしていたので……」

リオは蓮司が神装と思しき武器を所持していたことを報告する。

「……待てよ。状況的にお前は姫騎士と、その姫騎士が率いる騎士の部隊と、そのレイスって奴と、他にも傭兵に囲まれていたんだよな？　で、その上でさらに勇者の相手までしたと？」

弘明は懐疑的に語って、リオを見つめた。

「ええ、続々と増援が現れたので、同時に全員と戦闘をしたわけではありませんが。ただ、勇者様とシルヴィ様には同時に戦いました」

リオはこくりと頷き、当時の状況を教えてやる。

「倒したのか？」

「落ち着いて話ができる状況ではなかったのと、がむしゃらに攻撃を加えてきたので、勇者様のことは気絶させました」

「……にわかには信じられんな。本当に勇者だったのか、そいつ？　姫騎士ってのも魔剣を装備しているんだろ？　二対一で負けるとは思えん」

弘明は肩をすくめ、やれやれと語った。だが――、

「いえ、アマカワ卿も魔剣の持ち主です。そこのヴァネッサの兄であり、我が国最強の騎士と謳われたアルフレッドも倒されたお方です。その実力は確かなものだと、私が保証しましょう」

と、クリスティーナがリオの強さを語る。

「……ふーん」

弘明はまだ信じられないのか、はたまたクリスティーナがリオを庇うような発言をしたのが癇に障ったのか、面白くなさそうに唇を尖らせた。

「他にも、先ほどの話で名が上がったルシウスという男も名のある傭兵団の団長ですし、パラディア王国の第一王子も屈強な戦士として知られる御仁です。アマカワ卿は少なくともそういった者達を打ち負かせるだけの実力はあると、お考えください」

クリスティーナは弘明の態度を億劫に思ったが、整然と説明を追加する。

「……そういや、お前は沙月と模擬戦をして勝ったこともあるみたいだしな。あまりそうは見えんが、クリスティーナもこう言っているし、実際にフローラも連れ帰った。強いってことは間違いないんだろうな」

弘明はやはり面白くなさそうだが、とりあえずは納得してみせた。他の勇者が簡単に負けるようでは、自分の価値まで下がると思っているのかもしれない。

「恐れ入ります。混戦でしたから、運が良かったのでしょう」

リオは謙遜し、かぶりを振ってみせる。

「あー、まあ、そうだな。乱戦ってのが幸いしたんだろうな。勇者の真価はマップ兵器並みの広範囲攻撃にある。味方を巻き込んで攻撃するわけにもいかんからな。近距離で戦えばワンチャンあるだろう」

弘明はそれで納得したのか、大仰に頷いてみせた。すると、温厚なフローラだが、流石に少し何か言いたそうな顔を浮かべる。だが――、

「……いずれにしても、もう少し詳しいお話を伺ってもよろしいでしょうか？」

クリスティーナはこれ以上、話がこじれる前に、リオに水を向けた。

「無論です」

リオは快く了承する。

「ありがとうございます」

クリスティーナは胸を撫で下ろし、申し訳なさそうにリオに礼を言った。すると――、

「あー、少し難しい話になりそうだし、難しいことはクリスティーナとそいつに任せて、フローラは退散したらどうだ？　王族の姫がいつまでもそんなパッとしない格好をしているわけにもいかんだろ。

旅で汚れているんだろうし、まずはドレスに着替えてこいよ。改めて茶でも飲みながら、話をしようぜ」

弘明はいまだに旅服姿のフローラを見やり、そんなことを言う。

「……いえ、あの、これはハルト様に選んで買っていただいた品なので、私は、好き、なんです。似合わないでしょうか？」

フローラはギュッと自分の服を握ると、恐る恐る自分の意見を主張して尋ねた。

「……へえ。まあ、旅の間にずいぶんと親しくなったみたいだしな。なら、いいんじゃないの、オシャンティで」

弘明は少し意外そうに目を見開いたが、すぐに眉をひそめ、どこかおざなりに感想を口にする。

「でしたら、綺麗に洗って、大切に保管する必要がございますわね」

ロアナは咄嗟に空気を読んだのか、努めて明るい声で言った。

「……私がアマカワ卿から話を聞いている間に、フローラのことを任せてもいいかしら、ロアナ？　今日の夜にでも、フローラの帰還を祝う席を設けるから。主だった幹部はともかく、他の貴族達への説明はその時に行うわ。話を聞きつけた者がいたら、そう説明して面会は謝絶して頂戴」

クリスティーナは小さく嘆息し、ロアナに指示を出す。

「畏まりました。では、フローラ様、ヒロアキ様」

ロアナは恭しく頷くと、フローラと弘明に退席を促した。

「ああ」

弘明はスッと立ち上がる。一方――、

「……では、ハルト様、また後で」

フローラはリオに語りかけ、名残惜しそうに立ち上がった。

「ええ」

と、リオはどこか困り顔で頷き返す。

「……」

弘明は黙ったまま、じっとフローラの顔を見つめる。その瞳はリオしか映しておらず、弘明のことなど映してはいない。片思いの男性に胸を焦がす乙女の眼差しだった。

（っ……）

自分には見せたことがないフローラの表情を垣間見て、ざわりと強い胸騒ぎを覚える弘明。それは独占欲、すなわち嫉妬の念。そして、自分以外の男に好意を寄せているであろうフローラに対する、激しい拒否感と嫌悪感だった。

第176話　二人きり

弘明はスッと目を細め、やや険のある顔つきでフローラを見据えた。弘明の隣で立ち上がったロアナは、すぐにそのことに気づくと――、

「……さあ、フローラ様。どうぞお外へ」

率先して扉へと歩き出し、改めてフローラを部屋の外へと誘った。室内で待機していたヴァネッサもほぼ同時に歩き出し、部屋の扉を開ける。

「はい」

フローラはリオに向けていた視線を外すと、弘明の視線には気づかないまま扉へと歩き出した。一方――、

「……」

弘明は立ち去るフローラの背中を見据えながら、仏頂面で立ち尽くしている。

「ヒロアキ様、いかがなさいましたか？」

ロアナはフローラが扉までたどり着くと、さも不思議そうに弘明に声をかけた。

「……ああ」

弘明は平時より低い声で返事をして、憤りを吐き出すように嘆息して歩きだす。

「それではクリスティーナ様、アマカワ卿。失礼いたしました。また後ほど」

ロアナは弘明とフローラが部屋の外へ出ると、退室際に扉の前でクリスティーナとリオに頭を下げる。

「ええ、よろしくね」

「畏まりました」

クリスティーナが目配せして言うと、ロアナは深くお辞儀をして立ち去った。室内にはリオ、クリスティーナ、ヴァネッサの三人だけが残されるが――、

「ヴァネッサ、貴方は部屋の外で見張りをお願い。話が終わるまで誰も部屋の中に入ってこさせないようにね」

クリスティーナはヴァネッサにも退室命令を出した。仮にフローラの帰還を聞きつけた人間が現れても待たせておけ、と。

「はっ！」

ヴァネッサは機敏に返事をすると、すぐに部屋から出て行く。そうして、執務室の中に残されたのはリオとクリスティーナの二人だけとなった。

◇　◇　◇

一方、退室したロアナ達は館内の通路を歩いていた。

「ヒロアキ様、よろしければお先にお部屋へお戻りいただけますか？　フローラ様のお着替えが済みましたら、お迎えに参りますので」

ロアナは二人を先導して歩きながら、背後の弘明に語りかける。

「……あー、いや、いい。少し疲れたんでな。部屋で寝るわ」

弘明は白けた面持ちで、そっけなく応じた。

「え……？」

もともと退室して話をしようと提案したのは弘明だ。それが部屋を出た途端に百八十度、意見を変えたのだから、フローラは意味がわからず面食らってしまう。

「ですが……、いえ、畏まりました。ご気分が変わりましたら、フローラ様のお部屋へお越しください。他の者達はともかく、ヒロアキ様だけは通すように申しつけますので」

ロアナは弘明がご機嫌斜めな理由を察していたが、深入りすることを止めた。今はフローラの世話をするよう、クリスティーナから直々に頼まれているから。

（後でフォローする必要がございますわね）

ロアナはそう考え、悩ましそうに息を吐いた。

「じゃあな。先に行ってるわ」

弘明はそう言い残すと、一人でさっさと立ち去ってしまう。すると――、

「あの、ヒロアキ様はご機嫌が悪いのでしょうか？　私、何かいけないことをしてしまいましたか？」

流石のフローラも普段の弘明との違いに感づいたのか、不安そうにロアナに尋ねた。

「……いえ。フローラ様がお戻りになって、安堵されたのでしょう。精神的な疲れが晴れて、今度は肉体的な疲れが一気に押し寄せてきたのかもしれません」

ロアナは笑みを取り繕って答えると、「さ、こちらへ」と言ってフローラに移動を促す。おそらくは真実と思われる本当の理由を、フローラに告げることはできなかった。

◇　◇　◇

一方、フローラ達やヴァネッサが執務室を立ち去り、リオとクリスティーナが二人きりになると――、

「申し訳ございません。思ったことは口にする、というのが勇者様のご信条らしく、失礼な言動があったことと存じます」

クリスティーナは立場上、先の弘明の言動をスルーして話を再開することもできたが、あえてまずはリオに謝罪した。

「いえ、そのようなことは。問題意識の強さは王侯貴族の皆様を始めとする指導者に必要な素養でございましょう。素晴らしいご信条ではありませんか」

リオは畏まった口調で、愛想良く受け答える。

ハルトが立場上そう答えるしかないということはわかっていたが、あたかも本音のようにそう言い切っているものだから――もちろん実際に本音なのかもしれないが――、そこらの生来の貴族よりハルトの方がよほど貴族らしい素養を持ち合わせていると、クリスティーナは思った。

「……アマカワ卿も貴族ではありませんか」

「そういえば、そうでございましたね。私はそもそも貴族としての自覚が薄いものでして、恥ずかしい限りです」

クリスティーナがフッと笑って言うと、リオは朗らかに応じる。

「それこそ、そのようなことは決してないと思いますよ。私個人の見解ですが、アマカワ卿は貴族として持ち合わせるべき素養を十分にお持ちだとお見受けしております」

と、リオを褒め称えるクリスティーナ。

「……恐れ入ります」

リオは粛々とこうべを垂れた。ここまではおよそ予定調和の流れであるが――、

「それにしても、こうして二人きりでお話しするのは、随分と久しい気がしますね。覚えている限りで旅の間に何度か、それもごく短

い時間だけ。実質的には初めてと言ってもいいかもしれません」

クリスティーナは不意に、そんなことを言う。

「ええ、然様でございますね」

リオはいささか本題が読めず、頷きながらクリスティーナの顔色を窺った。すると――、

「実は勇者様をこの場にお呼びすれば、ああいう流れになって、アマカワ卿と二人で話せる時間を作れるかもしれないと、薄々予想しておりました。無論、勇者様には他の者達より先に状況を報告するつもりでしたが……」

と、クリスティーナは打ち明ける。

「……そうまでなさって、私とお話になりたいことが？」

「もちろん話したいこともあります。ですが、二人だけで落ち着いて話す機会が欲しかったと言った方が正確かもしれません。勇者様は気まぐれにこの部屋を訪れますから、下手に途中で来られるよりは自分でタイミングをコントロールしたかったという思惑もあり、今回はこの席を設けるために利用させていただきました。どうかこの話はご内密に」

リオが不思議そうに尋ねると、クリスティーナは悪戯っぽく笑って答えた。

「承知しました」

リオは得心し、くすりと笑って頷く。

「話というのは他でもありません。まずは何よりもフローラを救ってくださったことへ、心よりお礼を申し上げます。私のみならず、妹の窮地をお救いくださり、誠にありがとうございました」

クリスティーナは改まった面持ちを浮かべると、リオに対し深々と頭を下げた。

「クリスティーナ様、どうか頭をお上げください」

リオは目をみはって、クリスティーナに呼びかける。

「いえ、業腹ながら人前では軽率に頭を下げられない立場でして、実際にそうあるべく幼少期から教育を受けてきました。ですが、なればこそ貴方と二人きりのこの機会にきちんと頭を下げておきたいと考えました」

クリスティーナはリオに頭を下げたまま、粛々と語った。

「……お気持ちもお考えも承知いたしました。ですので、どうか、頭をお上げください」

リオは今一度、クリスティーナに呼びかける。

「はい」

クリスティーナはあまりリオを困らせたくはないのか、リオに自分の意思も表明できたことから、素直に頭を上げた。

「心臓に悪いので、以降はお控えいただけると幸いです」

と、リオは困り顔で言う。
「わかりました。……ところで、今回の件に対しては改めて謝礼を贈らせていただきますが、何かご要望はございませんか？」
クリスティーナはくすりと笑みを浮かべると、話題を変えてリオに問いかける。
「では、可能ならば辞退させていただければと」
「……そういうわけにも参りません。周囲からの突き上げもあるでしょうから」
リオが苦笑まじりに言うと、今度はクリスティーナが困り顔を浮かべた。
「突き上げ、ですか？」
と、リオ。
「実はレストラシオンの貴族の間で、アマカワ卿に自分の娘を預けたいという話がございまして……」
クリスティーナは悩ましそうに語った。
「それは、なんとも、光栄なお話ですが……」
リオは言葉を選んで、拒否しようとする。
「現状、そういった話は水面下のものですが、今回の功績が知れ渡

れば状況が変わることが予想されます。無論、アマカワ卿は名誉騎士とはいえフランソワ国王陛下の影響下にありますから、他国の貴族と婚姻関係を結ぶとなると、一定の配慮が必要となります。ですが、話だけでもと主張する声は上がることでしょう。それがアマカワ卿に対する謝礼となるのかどうかは別として、ですが……」

クリスティーナはそう語ると、最後に自嘲を覗かせた。

「……つまり、何か謝礼を受け取っておかないと縁談のお誘いを頂くことになる、ということでしょうか？」

リオは少しバツが悪そうに確認する。

「いえ、仮に謝礼を受け取ったとしても、縁談は舞い込んでくることでしょう。ですが、謝礼は受け取ったのだから、縁談までは受けられないという口実にはなりえます。そうであるのならば、私としてもフォローはしやすくあります。おためごかしで恐縮ですが」

と、クリスティーナは自分からおためごかしであることを認めて言う。フォローはリオのためを思っての行動でもあるが、実際はクリスティーナとしても煩くなりそうな貴族達に対する言い訳が欲しいのだ。

「とはいえ、そう簡単にいきますか？」

どっちみち面倒臭くなりそうな気がして、リオは尋ねる。

「謝礼として相応の何かを受け取っていただけるのであれば……。あるいは、いっそのこと心に決めた相手がいるとでも公言されますか？　実際にいらっしゃるのであればもちろん、そうでなくても一

定の効果はあると思いますよ」

貴族は一夫多妻制だが、少なくとも正妻狙いの者達はなりを潜めるだろう。クリスティーナはそっとリオの反応を窺った。

「……あいにくと、そういったお相手はおりません。ですが、それならば確かにある程度は効果がありそうですね」

リオはわずかに間を置いて、そう答える。

「はい。よろしければ問題が表面化する前に、ご一考ください。アマカワ卿であれば既にそういった誘いをお受けになったこともあるかもしれませんが、今夜のパーティでもそういった話を振る手合いが現れるでしょうから」

「承知しました」

「王侯貴族の婚約婚姻関係は色々と面倒でして、ご迷惑をおかけします」

クリスティーナはそう言って、疲れ顔を覗かせた。

「月並みな言葉で恐縮ですが、ご心労のほどお察し申し上げます」

と、リオは柔らかに口許をほころばせて告げる。

「ありがとうございます。実は失踪中にフローラと勇者様の婚約を破棄しておりまして、そちらも少なからず問題になるであろうことを考えると、気が重いんです」

クリスティーナは少しだけ弱音を吐いた。

「そう、だったのですか……」

リオは初耳の情報に目をみはる。単純に婚約関係を再構築すればいいのではないかと思ったが、そう簡単な話でもないのかもしれない。あるいは、当事者同士の機微が問題となるのか。いずれにしてもリオには関知できない問題だ。

「申し訳ございません。愚痴をお聞かせしてしまい」

クリスティーナは小さく息をつくと、気持ちを入れ替えて笑みを取り繕った。

「いえ。私でよろしければ、ご存分に」

と、リオは快く言ってみせる。

「……とても魅力的なお誘いですが、キリがなくなりそうなので、また後日、お話しさせてください。今は時間も限られておりますので」

クリスティーナは小さく目をみはると、少し嬉しそうに笑みを刻んだ。

「畏まりました。その際は仰せつけください」

リオはそう言って、恭しく胸元に手を添える。

「ええ。……それはそうと、今回の件はガルアーク王国へも知らせる必要があります」

今回の件とは、言うまでもなくフローラの帰還と、ルビア王国の背信疑惑についてだ。

「私は近日中にガルアーク王国へ向かう所存ですが……」

「でしたら、ご同行いただけませんか？　亜竜らしき生命体が魔道船を襲撃してから、魔道船の航行が著しく制限されているのですが、今回は頃合いです。私も一度、ガルアーク王国へ向かう必要はありますから、試験飛行をした後、向かってみようと思いますので」

「承知しました」

「ありがとうございます。アマカワ卿に同行していただけるのであれば、道中の旅路は安心できます」

クリスティーナは微笑して礼を言う。

「光栄です」

リオも笑みを浮かべて応じた。すると――、

「……ところで、思ったよりも早く話もまとまりましたし、まだ外に誰も来ていないようなら、セリア先生の講義を覗いてみませんか？　私がご案内しますので」

クリスティーナは突然、そんな提案をした。

「もちろん、お断りする理由はございませんが、よろしいのですか？　幹部の皆様へのご説明は……」

リオは意外そうに訊く。

「ええ、今日くらいは少し、羽目を外したい気分なので。ぜひ、お

付き合いください」

クリスティーナは悪戯っぽく笑う。

本当は幹部貴族への説明以外にも、ご機嫌斜めになっているであろう弘明へのアフターケアをするのが望ましいのかもしれない。

だが、せっかくめでたい出来事が起きた日なのに億劫な気持ちにはなりたくはない。もしも今の言葉を弘明が耳にしていたら、王族の自覚が薄いと苦言を呈していたことだろう。

その後、外のヴァネッサに確認をとると、幸いまだ誰も姿を現していないとのことだったので、リオはクリスティーナと一緒に、セリアの講義を見学することになった。

第177話　授業見学

場所はロダニアの領館。リオとクリスティーナはヴァネッサを引き連れて、敷地内の離れに存在する施設へ向かった。道中は面倒な貴族に呼び止められないよう、なるべく人目を忍んで歩き、目的の建物にたどり着く。

「確か、教室は二階の小会議室だったわよね？　いくつかあるって聞いたけど」

クリスティーナは建物の中に入ると、セリアが講義をしている教室の位置をヴァネッサに訊いた。

「いえ、参加希望者が増えたそうで、大会議室に場所を移ったとか」

と、答えるヴァネッサ。

「そう、それなら一つしかないわね。行きましょうか」

クリスティーナはすたすたと歩きだして、セリアがいる大会議室へと向かった。すぐに部屋の前へとたどり着く。

「……既に講義は始まっているようですね。後ろに回って入りますか？」

ヴァネッサは部屋の前方脇に位置する扉をわずかに開けると、中の様子を窺ってクリスティーナに尋ねる。部屋の作りは長方形で、セリアは前方に設置された教壇に立って現在進行形で講義を行なっ

ていた。

「いえ、前から入って、見学の許可を貰いましょう。最初は貴方が入って許可をもらってきてくれるかしら？」

と、クリスティーナはヴァネッサに頼む。急にクリスティーナが入っては騒ぎになることは間違いなしだ。後から入っても多少は騒ぎになるだろうが、備えはできる。

「畏まりました。では、少々お待ちください」

ヴァネッサは頷くと、すぐに扉を開けて、一人で中へ入っていく。

「……あら、ヴァネッサさん、どうかなさいましたか？」

セリアはすぐにヴァネッサの入室に気づいた。講義を中断し、用向きを尋ねる。

「講義中にすまない。実は外にクリスティーナ様とアマカワ卿がいらしていてな。セリア君の講義をご見学になりたいとのことなんだ」

と、ヴァネッサは端的に説明した。

「まあ」

セリアはぱちりと目を瞬く。

「構わないだろうか？　手数をかけて申し訳ないが、大丈夫なら生徒達に説明を頼みたい」

「ええ、もちろん構いませんよ。少しお待ちください」

セリアは快く了承すると、室内の生徒達を見回す。生徒達は何かあったのだろうかと、不思議そうにセリアとヴァネッサに注目していた。

「皆さん、今日はクリスティーナ様がこの講義の様子をご見学になりたいとのことです」

セリアが声を張り上げて告げると、教室内はざわりとどよめく。だが――、

「静粛に。日頃の講義風景をお見せする必要がありますから、情けない姿を晒してはいけませんよ？　気を引き締めて、騒がないように。わかりましたか？」

と、セリアはさらに声を張り上げて語る。生徒達は上手く矜持を刺激されたのか、張り切って頷きだした。

「流石、見事な手腕だな」

側からセリアを眺めていたヴァネッサは、感心してフッと口許をほころばせる。

「クリスティーナ様のおかげですよ。みんないいところを見せようと、張り切っているんでしょう」

セリアは照れ臭そうに言うと、「では、お呼びくださいませ」とヴァネッサに伝えた。

ヴァネッサは「ああ」と頷き、いったん室外へ出る。そして――、

「クリスティーナ様、アマカワ卿、セリア君の許可を得ました。どうぞお入りください」

そう言って、クリスティーナとリオを室内へ誘った。

「行きましょう、アマカワ卿」

「ええ」

まずはクリスティーナが歩きだし、リオがその後を追う。最後に入るのはヴァネッサだ。

そうして、三人で室内に入ると、百人はいる生徒達の注目を一斉に集めることになり、ざわりと教室内がどよめいた。

「おお……」

と、誰もがクリスティーナに敬意と憧れの眼差しを送る。だが――、

「……誰だ、あの男性は？」

「……アマカワ卿だな」

リオの姿も発見すると、生徒達は瞠目する。護衛のヴァネッサはわかるが、クリスティーナが同年代の男性を連れて歩くことなどまずないからだ。

リオが誰なのか、随所で囁かれる。しかし、中にはハルトの顔と名前を見知っている者もいるのか、その正体が特定されるに至った。

「ようこそいらっしゃいました、クリスティーナ様。それに、ハルトも」

セリアは朗らかに二人を歓迎する。

「少しお邪魔させていただきます。アマカワ卿にセリア先生の講義を見ていただこうと思いまして。私も昔のことを思い出しながら、先生の講義を見学させていただきたいんです」

クリスティーナはそう言って、フッと笑みを覗かせた。

「喜んで。私も張り切らないといけませんね」

セリアは嬉しそうに応じる。

「こちらのことは気にせず、どうぞこのまま続けてください」

「恐れ入ります。生徒達が使用しているスツールと同じ物しかないのですが、よろしければそちらにおかけください」

と、セリアは教壇の脇に置かれていた余分なスツールを指し示す。ちなみに、スツールとは背もたれのない簡素な椅子で、本来なら王侯貴族が好んで座るような代物ではないが、ここが臨時の教育施設である関係上、大量に必要とされて使用されていたりする。

「ありがとうございます。では、座りましょうか、アマカワ卿」

クリスティーナはリオを見やり、着席を促した。その間にヴァネッサがすかさず動き出して、二人分のスツールを適当な場所――教壇と生徒達の席から距離を置いた位置に設置する。

「……恐れ入ります」

リオは一瞬、クリスティーナの隣に座っていいものか悩んだが、

大人しく並んで座ることにした。王族直々の誘いを断るのも問題であるし、状況が状況だ。あまり授業を中断させるのは不味い。ヴァネッサは身分的な問題から部屋の端に移動し、立ったままでいるようだ。

「じゃあ、講義を再開します」

セリアは並んで座るリオとクリスティーナの姿を見やると、柔らかく頬を緩めて講義を再開する。それから、十数分……。

（まさかまた先生の講義を受けられるとは思わなかったな）

リオはどこか嬉しそうに、生徒達に教鞭をとるセリアを眺めていた。セリアの容姿がほとんど成長していないものだから、本当に当時に戻った気になる。

とはいえ、クリスティーナと一緒にセリアの講義を受けるというシチュエーションはかつての王立学院時代には想像すらできなかったから、なんだか妙に不思議な気持ちも抱いていた。

クリスティーナはお行儀よく座って、セリアの話にじっと耳を傾けている。今、部屋の中にいる生徒達は十代前半から半ばくらいの子供達で、リオやクリスティーナと同年齢の者もいる。中にはクリスティーナに見惚れている男子生徒がいたりもした。それほどにクリスティーナのたたずまいは美しく、気品を感じさせる。

（そういえば初めて会った時は、ビンタされたっけ。その時は随分とヒステリックなお姫様だなと思ったけど……）

成長したのだろう。今のクリスティーナからはそういった側面は見受けられない。というより、その時はフローラが誘拐されていたし、気が高ぶっていたのも無理はないのかもしれない。実際、ビン

タされたリオとしてはたまったものではなかったが……。
当時のことを今更になって掘り返すつもりはないが、リオはその時の出来事をふと思い出して、思わず苦笑してしまった。だが、すぐに気を取り直して、講義に集中する。
それから、しばらくすると――、
「……いかがですか、セリア先生の講義は？」
クリスティーナが不意に、小声でリオに尋ねた。
「素晴らしいですね。躓(つまず)きやすいところもしっかりと明示して、その上で順序立てて説明をしているので、とてもわかりやすいです。生徒達の視点に立っているのが窺えます」
と、リオも小声で答える。
「同感です。昔は私も生徒としてセリア先生の講義を受けていましたが、当時習ったことは今でもしっかりと覚えています」
「それはもとよりクリスティーナ様がご聡明であらせられる、というのも大きいと存じますよ」
「……そのようなことはありません。周囲よりも少しだけ要領が良いというだけで、勘違いをして、現実を素直に直視できなかった。そんなプライドだけは高い生意気な子供だったんです。成長するにつれて自分の未熟さと無力さを痛感するに至りました。今となっては反省と後悔の連続です」
クリスティーナは自嘲して静かに語ると、名状しがたい翳(かげ)りを帯びた面持ちでリオを見やった。
「当時のクリスティーナ様がどのようなお方だったのか、私は存じ

上げません。ですが、今の私が存じ上げるクリスティーナ様は険しい現実の壁と向き合い、それでも怯まずに壁を乗り越えようとしている、強いお方だとお見受けしておりますよ」

リオはゆっくりと語って、クリスティーナを見返す。

「……光栄です。今の私には過ぎたる評価ですが、いつか自分でもそう思えるように精進してみます」

クリスティーナはどこか忸怩たる面持ちを覗かせると、リオから視線を外した。

◇　◇　◇

そして、講義終了後。

「相変わらず素晴らしい講義でした。久しぶりにセリア先生の講義を受けることができて、初心に帰れた気がします」

クリスティーナはセリアのもとへ移動し、礼を言った。

「まあ、光栄です。ですが、少し大げさではないかなと」

セリアはこそばゆそうに微笑する。

「いえ、今日、アマカワ卿と一緒に先生の講義を受けることができてよかったです」

クリスティーナは柔らかく口許をほころばせ、かぶりを振った。

「……そういえば、講義中にハルトと少しお話をされていましたよね？」

セリアはリオの顔色を窺いながら、クリスティーナに尋ねる。

「すみません。煩かったでしょうか？」

「いえ、声は聞こえませんでしたので。何をお話しになっていたのかなと、少し興味を持ったくらいです」

クリスティーナが謝罪すると、セリアはそれとなく何を話していたのかを訊いた。

「……私が王立学院の生徒だった頃のことを少し。先生の講義を受けながら昔のことを思い出して、当時は未熟だったなと、アマカワ卿に話を聞いていただきました」

「まあ、そうだったのですか……。でも、クリスティーナ様は昔からご聡明でしたよ」

セリアは意外そうに目をみはったが、すぐにクリスティーナを褒め称える。

「セリアはこう仰っていますよ、クリスティーナ様？」

リオは悪戯めいた笑みを浮かべ、クリスティーナを見やった。

「……恐縮です」

クリスティーナはこそばゆそうにはにかむ。

「今日はクリスティーナ様の貴重なお話を伺うことができました。

セリアの講義を聞く機会もお与えくださり、ありがとうございます、クリスティーナ様」

リオはきまりが悪そうなクリスティーナのことを気遣ったのか、話題を変えて礼を言う。

「いえ、こちらこそ私の気分転換にお付き合いくださり、ありがとうございました」

クリスティーナは朗らかに礼を言い返すと――、

「……ところで、もう講義は終わったはずですよね？　生徒達は退室しないのですか？」

生徒達を見やりながら、不思議そうにセリアに訊く。既に講義の終了は宣言されているのに、まだ誰も教室から出て行こうとしないからだ。その場に大人しく座って、クリスティーナ達の会話を見守っている。

「あはは、クリスティーナ様のお話に興味があるのかもしれませんね。……あ、そうだ。せっかくなので、ハルトに会わせたい子がいるんです。この場でお呼びしてもよろしいでしょうか？」

生徒達の心情を察して苦笑するセリアだったが、ふと思い出したように、そんなことを言う。

「はい、無論です」

クリスティーナは二つ返事で頷いた。すると――、

「サイキ君、いるかしら？」

セリアは教室の生徒達を見渡し、とある生徒の苗字を呼んだ。

「サイキ……、怜さんですか？」

リオはその苗字から、セリアが呼ぼうとしている人物を特定した。

「ええ。ロダニアに残ることになって、魔道士になるべく今は私の講義を受けているのよ」

セリアはにこやかに頷いて語る。

「私も忙しくてなかなか会っていませんでしたが、彼は元気にやっているでしょうか？」

と、クリスティーナ。

「はい。いつもダンディ男爵家のお嬢さんと一緒に講義を受けているんですけど……、あれ、サイキ君？　今日はお休みかしら？」

セリアは今一度、教室の中を見渡して、怜を呼んだ。すると、生徒達の注目がとある一角に集まる。果たして、そこには――、

「レ、レイ様、流石にお呼ばれした以上は参上しないと」

ダンディ男爵家の令嬢、ローザがいて、焦りを帯びた声で怜に語りかけていた。怜は頭を低くして、身を潜めている。

「い、いや、こんな状況で出ていったら目立つじゃないか」

と、怜。

「こうしている方が目立ちますわ。ほら、周りの方々から見られておりますから、すぐに参上しませんと。クリスティーナ様をお待たせしては不敬ですわ」

ローザは変わらず焦燥した面持ちで怜に呼びかける。

「くっ、仕方がないのか。じゃ、じゃあ、ローザも一緒に来てくれ」

怜は覚悟を決めたのか、ローザの手を掴んで立ち上がった。

「ちょ、レイ様？」

ローザは腕を持ち上げられ、気恥ずかしそうにうろたえる。

「あ、いたのね。ちょっと来てくれるかしら」

セリアは怜の顔を見つけると、笑顔で呼び寄せた。

「行こう、ローザ」

怜はそう言って、ローザを立たせようとする。

「い、いえ。わ、私は畏れ多いので」

「ほら、いいから」

「レ、レイ様！？」

などと、慌ただしくしながら、結局、怜に連れていかれるローザ。

二人で会議室内を歩き、生徒達の注目を浴びながらクリスティーナ達のもとへ向かう。

「お久しぶりですね、レイさん。お元気そうで何よりです」

リオは怜が近づいてくると、自分から声をかけた。

「ええ、おかげさまで。お久しぶりです、アマカワ卿」

怜は胸元に手を当て、恭しくこの世界の貴族流の挨拶をする。

「……以前と同じ口調で構いませんよ。どうしたんですか、急に？」

リオは少しおかしそうに、怜に言った。

「あー、いや、ここは周囲の目もありますし、そういうわけには。アマカワ卿は他国の貴族ですし、伯爵相当の名誉騎士ですから」

怜は困り顔で応じる。

「今の彼はダンディ男爵家の令嬢と結婚を前提に交際しておりますから、色々と教え込まれているのでしょう。確かに以前のままでは、貴族として振る舞うには少しばかり問題がありましたから」

クリスティーナはフッと笑って、ローザを見やりながらリオに事情を説明してやった。ローザは恐縮しきって、所在なさげに立ち尽くしている。

「ということは、怜さんは貴族に？」

リオは目をみはって訊いた。

「一応、そうなります。準男爵の爵位をクリスティーナ様から頂戴しました」

「なるほど……。ということは、もしかしてそちらの女性が？」

「ええ、婚約者のローザです」

怜は頷き、隣に立つローザをリオに紹介する。

「は、初めまして。ローザ＝ダンディと申します。アマカワ卿のお話は、レイ様からかねがねお聞きしておりまして、その、お会いできて光栄です」

ローザはひどく緊張した様子で、自己紹介を行なった。

「そうでしたか。初めまして、ハルト＝アマカワと申します。レイさんにはロダニアまでの旅の間にお世話になりました」

リオは行儀よく挨拶を返す。

「いや、ほとんどアマカワ卿に頼りっぱなしだった気が……」

怜は苦笑して頭を掻いた。すると――、

「クリスティーナ様、いらっしゃいますか？　……おお、捜しましたぞ！」

会議室の前方の扉が開いて、ロダン侯爵が現れる。視線の先にすぐクリスティーナを発見して、歩きだした。

「あら、見つかってしまったみたいね」

クリスティーナは苦笑して、小さく肩をすくめる。

「そういえば、ハルトとのお話はもう終わったのですか？」

セリアはロダン侯爵が近づいてくる前に、クリスティーナに訊く。

「はい。一通りのことは。今夜はパーティを開きますので、ぜひセリア先生もアマカワ卿と一緒にいらしてください」

クリスティーナは頷き、にこやかにセリアをパーティに誘う。

「はい、喜んで」

セリアは微笑して首肯した。

「アマカワ卿はよろしければこの後はセリア先生と一緒にお寛ぎください。私はパーティの間まで、また忙しくなりますので」

クリスティーナは続けて、リオにそう告げる。

「承知しました」

リオは恭しく頷き、夜のパーティまでセリアと一緒に行動することになった。

第178話　パーティ開始

「それじゃあ、アマカワ卿、セリア先生。失礼いたしました。ご機嫌よう」

クリスティーナはそう言って、ロダン侯爵とともに退室する。リオ達は恭しく会釈をして、クリスティーナを見送った。その場に残されたのは、リオ、セリア、怜、ローザの四人だ。すると――、

「じゃあ、私達も解散しましょうか。いつまでもこの場にいても、生徒達が帰らないみたいだし」

セリアが教室内を見回して言う。クリスティーナが立ち去ったというのに、室内にはまだ生徒達が大人しく座って待機している。出て行くタイミングを見失っているのだろう。

「ですね。場所を変えて少し話しますか、怜さん？」

リオはくすりと笑って頷くと、怜に水を向けた。

「えっと……」

怜は即答はせず、ローザの顔色を窺う。

「この後のご予定はございませんわ、レイ様」

ローザはすかさず怜の背中を押してやった。すると――、

「大丈夫なようなので、ぜひ」
怜は乗り気な面持ちで申し出る。
「じゃあ、家(うち)に行きましょうか。領館からも近いし」
「はい」
セリアが提案すると、リオは微笑して頷く。そうして、一行はセリアが暮らす邸宅へと向かうことになった。

◇　◇　◇

そして、場所はセリアが暮らす邸宅に移る。怜だけでなく、ローザも引き連れて敷地の門に近づくと――、
「あれがアマカワ卿とセリア先生のお住まいですか。こりゃまた随分とでかい……」
怜は呆気にとられて、屋敷の外観を眺めた。
「私の住まい……というわけではないんですけどね。今はセリアにお貸ししているので」
リオは小さく肩をすくめ、セリアを見やる。
「……使用人を含めて、暮らしている人数が少ないから、だいぶもてあましているの。さ、入りましょう」
セリアは何か言いたそうな顔を浮かべたが、そのまま屋敷の門に近づいていく。すると――、

「お帰りなさいませ、セリア様、ハルト様」

門番の女性兵士達がリオ達を迎えた。

「ええ、お勤めご苦労様。こちらの二人は客人だから」

セリアはそう言って、背後に立つ怜とローザを見やる。

「畏まりました」

門番の女性兵士は恭しく頷く。リオ達はそのまま屋敷の敷地へと入っていった。すると、庭先でメイドのアンジェラと遭遇する。

「セリア様、ハルト様、お帰りなさいませ。お客様でしょうか？」

アンジェラは家主のセリアとリオに挨拶をすると、一緒にいる怜とローザを見やって尋ねた。

「ええ、お茶の用意をお願いしていいかしら？」

「承知しました。では、まずは応接室へご案内します。どうぞこちらへ」

アンジェラはそう言って、セリア達を家の中へと誘う。そのまま応接室へとスムーズに移動すると、お茶を用意しに退室した。

「ところで怜さんは今、どちらにお住まいなんですか？」

リオはセリアと並んで応接室のソファに腰を下ろすと、怜に尋ねる。

「今はローザの家のすぐ近くに、クリスティーナ様から住まいを無償でお借りしています」

怜は隣に座るローザを見やりながら答えた。

「そうでしたか。浩太さんが聞いたら驚くと思いますよ」

リオはくすりと笑って言う。

「あはは、まあこうなるだろうってことは、別れる前に言っておいたんで。あいつはちゃんと冒険者にはなれたんですか？」

「ええ、アマンドで登録をされたので、移動していなければ今もあちらで活動されていると思いますよ」

「そうですか。今はなかなか外へ出ることもできないもので。元気でやっているといいんですが」

怜は浩太のことを語ると、少しだけ寂しそうな顔を覗かせた。

「でしたら今度、立ち寄った際に様子を見てきましょう。そう遠くないうちに、アマンドにも向かう予定なので」

「本当ですか？　ありがとうございます」

リオが浩太の様子を見てくると告げると、怜は嬉しそうに礼を言う。その後、和やかに談笑をしていると、アンジェラが娘のソフィと一緒にお茶を持ってやってきた。

「失礼いたします。お茶とお菓子をお持ちしました」

アンジェラはそう言って、粛々と室内に入る。ソフィもお茶とお

菓子が載った配膳台を押して、静かにアンジェラの後を追った。

「……二人とも似ていらっしゃいますけど、ご姉妹ですか？」

怜はアンジェラとソフィを見比べると、ふとそんなことを言う。

「まあ、恐れ入ります」

アンジェラは瞠目し、嬉しそうに怜にお辞儀をした。

「ん？」

怜はどうしてお辞儀をされたのかわからず、不思議そうに首をかしげる。

「二人は親娘（おやこ）なのよ」

と、セリア。

「え？　なるほど、これは失敬。随分とお若いものですから、少し年が離れた姉妹なのかなと」

怜はあははと笑って、アンジェラを褒め称えた。

「光栄です」

アンジェラは照れくさそうに、今一度頭を下げる。

「しかし、本当にお綺麗ですね。娘さんも可愛らしいですし」

怜はさらにアンジェラとソフィを褒め称えた。すると――、

「レイ様、人様のお家(いえ)に仕えるメイドを口説かないでくださいまし」

私という存在がいるのですから――と、ローザは少しだけ唇をとがらせて、怜に釘を刺す。

「え？　いや、口説いたつもりはないんだけど、ははは、参ったな。家(うち)には住み込みのメイドさんがいないから、新鮮というか。あ、そういえば、クリスティーナ王女殿下がパーティがどうとか仰っていましたけど、今夜何かあるんですか？」

怜は弁明を試みたが、これ以上の墓穴を掘る前に、話題を変えてリオとセリアを見やる。

「……詳細は今日中に改めて発表されると思いますので、その時を待ってください。一応、今日は少し早めに帰った方がいいかもしれませんね」

リオはセリアと視線を合わせると、困り顔で説明した。

「なるほど……」

と、怜は好奇心を覗かせる。だが、空気を読んだのかそれ以上の追求をすることはしない。それから、小一時間ほど雑談を繰り広げたところで、今日はお暇することになった。

◇　◇　◇

怜とローザが帰宅した後、リオはセリアと一緒にパーティへ出席

する準備を進めた。といっても、することはパーティで着る正装を選ぶくらいで、リオが持っている正装といえばガルアーク王国の夜会に出席した時に着用した品しかない。
問題は女性のセリアで、こういった時に備えて何着か用意してあるドレスを着て、リオにどれが一番似合っているか、確認してもらうことになった。

「どう、かな？」

セリアは薄らと青みがかかった白系統のドレスを着用すると、その場でくるりと一回転のステップを踏んで、照れくさそうにリオに尋ねる。着替えを手伝っているソフィが「ふわあ」と、セリアに見惚れる一方で――、

「すごく綺麗ですよ。セリアは銀髪ですし、同じ系統の色合いか、桃か水色か、色素が薄めのドレスが似合うと思います」

リオは正直に思った感想を告げる。

「本当？　ありがとう。じゃあ、今日はこれを着ていこうかな。エスコートはよろしくね？」

セリアは微かに赤らんではにかむと、嬉しそうにリオにお願いする。

「はい。喜んで」

リオも嬉しそうに首肯した。すると、セリア達が着替えを行っている部屋の扉がノックされる。

「はい、どうぞ」

と、セリアが返事をすると、部屋の扉がゆっくりと開けられた。そこには、セリアの屋敷の警備を行っている女性兵士が立っている。

「……セリア様、たった今、クリスティーナ様からの使者がお越しになりました。日が暮れる前に迎えの馬車を出すから、パーティに出席する用意をして領館へ来てほしい、とのことです。……流石、お美しいですね」

女性兵士はドレス姿のセリアを見ると、見惚れたように目をみはった。だが、職務を忘れることはせず、すぐに畏まって用向きを告げて、その上でセリアに賞賛の言葉を贈る。

「ありがとう。わかったわ」

セリアは頷き、こそばゆそうに口許をほころばせた。

◇　◇　◇

そして、いよいよフローラの帰還を祝うパーティの時間が迫りくる。リオとセリアは送迎の馬車に乗って、領館の敷地へと入った。

「どうぞ、ご降車ください」

リオは先に降りると、恭しくセリアに手を差し出し、エスコートしてやる。

「ありがとう、なんだか新鮮ね」

セリアはこそばゆそうに礼を言った。リオとは長いつきあいだが、こういったパーティに一緒に出席するのは初めての機会だ。

「ですね。まさかセリアをエスコートする機会に恵まれるとは、思ってもいませんでした」

リオはおかしそうに同意する。二人が馬車から降りると、騎士の女性が近づいてきた。ヴァネッサの部下で、クリスティーナの親衛隊を務める一員だ。

「よくぞお越しくださいました、セリア様、アマカワ卿。ご案内いたしますので、どうぞこちらへ」

と、女性騎士は恭しく二人に申し出る。

「恐れ入ります」

リオは周囲を見回しながら、愛想よく応じた。領館の敷地内には多くの馬車が停車しているが、出席者と思しき貴族の姿はさほど見当たらない。おそらくは既に会場へ向かっているのだろう。リオとセリアは後発組ということになる。

社会的なマナーというか、目下の者が目上の者を待たせるのは好ましくないということで、こういったパーティには位の低い人間ほど率先して早く会場を訪れるのが一般的だ。大抵は開始時刻の一時間前までに会場を訪れるのが常識で、その時間帯は特に混みやすく、入場に時間がかかることもある。

クリスティーナが後発組になるようリオとセリアに迎えの馬車を寄越したということは、それだけ二人の立場や地位を重んじていることを意味していた。そのおかげでリオ達は一切の待ち時間なしで、ダイレクトに建物の中に入ることになる。そうして、案内されたの

は――、

「どうぞお入りください」

パーティ会場ではなく、クリスティーナとフローラがいる部屋だった。二人ともお揃いのデザインで、色違いの美しいドレスを着用している。

「お二人とも、ようこそいらっしゃいました」

「こ、こんばんは。ハルト様、セリア先生」

と、まずはクリスティーナがリオとセリアを歓迎した。フローラはちらりとリオを見やると、ぎこちない動作でぺこりとお辞儀をする。

「クリスティーナ様、フローラ様も、いったいこれはどういう……」

セリアはドレス姿の二人に迎え入れられて、強く瞠目する。てっきり直にパーティ会場へ案内されると思っていたから、どうしてこの場に案内されたのかわからなかったのだ。

「実はぜひ、お二人に我々と一緒に会場入りしていただきたいと思いまして」

と、クリスティーナはリオとセリアを呼び寄せた理由を打ち明ける。

「我々が、ですか？」

リオはぱちりと目をみはった。

「無論、無理にとは申しませんが、アマカワ卿はフローラを連れ戻してくださった立役者ですので」

クリスティーナはそう言って、リオの顔色を窺う。フローラも期待を帯びた眼差しで、リオを見据えていた。クリスティーナ達からすれば、立役者を立役者として扱わないわけにはいかないのだから、当然といえば当然の提案である。

「……畏まりました。身に余る光栄で恐縮ですが、精一杯務めさせていただきます」

リオは空気を読んで、恭しく依頼を引き受けることにした。

「ありがとうございます！」

フローラは元気よく、嬉しそうに礼を言う。クリスティーナはくすりと笑って、「ありがとうございます」とフローラに続いた。すると――、

「恐れながら、でしたらハルトはともかく、私は必要ない気がするのですが……」

セリアが控えめに問いを発する。

「先生がいらしてくれた方が、アマカワ卿への注目が和らぐのではないかと思いまして。無論、その分、先生にご注目が集まってしまうわけですが……」

クリスティーナは少し言いづらそうに答える。

「……そういうことでしたら、お任せくださいませ。失礼いたしました。出過ぎた真似を」

セリアはすぐにクリスティーナの意図を得心すると、畏まって頷いてみせた。すると――、

「よろしいのですか？　私のことなら、無理をしていただく必要はありませんよ？」

と、リオはセリアの顔を見やって言う。あまり自分と一緒にいては、婚期を逃すのではないだろうか、とは思っても言えなかった。クリスティーナやフローラがいるこの場で、今すべき話でもない。この件はまた改めて話をする必要がありそうだ。

「大丈夫よ」

セリアはえっへんと胸を張って告げる。

「……ありがとうございます」

リオは困り顔を浮かべつつも、セリアに礼を言った。

◇　◇　◇

一方、その頃。パーティ会場となるホールには、レストラシオンに所属する貴族達がこぞって集結していた。その中にはユグノー公爵やロダン侯爵、他にも怜やローザの姿もある。そして、坂田弘明とロアナの姿もあった。

「……おい、ロアナ。誰だ、あの男は？」

弘明はややぶっきらぼうな面持ちで会場を見回していたが、参加者の中に怜の姿を見つけると、目を見開いてロアナに尋ねる。

「おそらくレイ＝サイキ卿ですわ。クリスティーナ様と一緒に、本国の王城を抜け出してロダニアへ避難してきたとか。今は準男爵の位をクリスティーナ様から下賜されているはずです」

フローラとの再会から弘明のご機嫌がずっと斜めだったことに気を揉んでいたロアナだったが、質問を受けるとほっと胸をなで下ろし、粛々と答えた。

「はーん、初耳だな。準男爵、ねえ」

弘明はスッと目を細め、遠目に怜を見据える。

「彼もヒロアキ様と同じ世界のご出身、なのですよね？」

ロアナは弘明の顔色を窺って訊く。

「ん、あー、まあ、名前も見た目も冴えない純ジャパだしな」

と、弘明は微かな嘲笑を刻んで答える。

「じゅんじゃぱ、でございますか？」

ロアナは不思議そうに首を傾げた。

「あー、俺が暮らしていた土地で生まれ育った人間ってことだ」

弘明は少しばつが悪そうに、言葉の意味を説明してやる。

「然様でございましたか」

ロアナはにこりと笑みを浮かべた。

（……日本人っていうのはそれだけでうざいが、勇者じゃないし、鼻につくイケメンでもない。それなりに可愛い女を連れているけど、まあいいんじゃないの。準男爵なら分相応で。下手に出しゃばらないのならな）

弘明は怜のことを自分よりも明確に格下の存在だと認識したのか、フッと笑みを刻む。これまで地球出身の同郷人を毛嫌いする節がある弘明だが、むしろ今の彼にとってのストレッサーは他にあるのだ。と、そこで――、

「皆様、静粛に願います！　クリスティーナ第一王女殿下、並びにフローラ第二王女殿下。そして、今回の件の立役者であらせられるハルト＝アマカワ卿のご来場となります」

パーティ会場の司会進行役を務めるヴァネッサが、ホール内の階段上で声を張り上げて言った。すると、会場内の貴族達は一斉に静まりかえり、ヴァネッサのすぐ側の位置に設けられた豪華な扉に揃って視線を向ける。次の瞬間、その扉が静かに開け放たれた。

「おお！」

と、会場中がどよめく。開け放たれた扉からまず姿を現したのはクリスティーナ、続けてフローラ、そしてリオと、先ほどは紹介を

省かれたセリアが続く。
「フローラ様だ」
「本当にご無事だったのか」
「やはりお美しい」
「流石はベルトラム王国が誇る二大美姫であらせられますな」
などと、フローラの帰還の事実をその目で受け止め、ざわめく貴族達。その多くがクリスティーナとフローラの美人姉妹に目を奪われていた。一方――、
「いやはや、こういっては何ですが、セリア君もかなりのものですぞ」
「確かに、相変わらず可愛らしいですな」
「ともするとフローラ様よりも年下に見えますな」
セリアだって負けていない。表だってクリスティーナやフローラの名を出して比較してしまうと不敬になりかねないので控えめだが、貴族達から談笑混じりに賛美を集めている。そして――、
「正直、アマカワ卿が羨ましいですな」
「ええ」
「あの場に立つことを許されているのは、英雄の特権ですな」
などと、リオも注目を集めていた。美しく、可愛らしく着飾ったクリスティーナ、フローラ、セリアの三人と行動を共にしているのだから、羨望の眼差しを向けられるのは必至である。
すると、そんな中――、
「……ちっ」

弘明が階段上のリオやフローラを見上げながら、面白くなさそうに舌打ちを漏らした。

「ヒロアキ様、僭越ながら、今からでも遅くはありませんわ。あの場へお上がりになってはいかがでしょうか？」

ロアナは弘明の機嫌が再び下り気味になったことを察すると、すかさず提案する。そう、本当は弘明もあの場で一緒に立っているはずだったのだ。それを当の本人が辞退し、今はホールで他の貴族達に混ざっているのである。

「いや、俺が行く必要はないだろ。俺は何もしていないんだからな。フローラを救ったのはあの男だぜ？」

弘明は棘のある口調で言って、肩をすくめた。

「ですが、あの場にヒロアキ様がクリスティーナ様やフローラ様と一緒にいらっしゃることで、周囲に示せるものもあるのです」

ロアナはもどかしそうに説得を試みる。

（だったらもっと相応に俺を優遇しろって話なんだよなあ。他の野郎を持ち上げるための席で、俺の威光を利用されるのはまっぴら御免だわ。俺は待遇に見合った働きしかしないぜ）

弘明はそう考え、不機嫌そうに顔をしかめた。そして――、

「もう遅えよ、パーティも始まるみたいだしな」

弘明は顎をしゃくって、階段上のクリスティーナを指し示す。

「皆、突然の招集によくぞ集まってくれました」

クリスティーナは階段上のスペースで一階の面々を見下ろすと、静まりかえった会場に向けて、よく通る声で語りかける。そうして、フローラの帰還を祝うパーティーが始まった。

第179話　不満を孕んだパーティ

「皆、突然の招集によくぞ集まってくれました」

クリスティーナは階段上のスペースからよく通る声で告げると、会場内にいる参加者の貴族達を見下ろした。貴族達はしんと静まりかえって、クリスティーナが次の言葉を発するのを待っている。

「既に事情は知れ渡っているはずですが、この度、失踪していたフローラが無事にロダニアへと帰還しました」

クリスティーナはそう言って、隣に立つフローラに視線を向ける。嬉しそうにざわめく眼下の貴族達に、フローラはドレスの裾をつまんでお淑やかに笑ってみせた。

「それもこれもすべてはアマカワ卿のおかげ。この場を借りて、アマカワ卿には改めてお礼申し上げます。この度は誠にありがとうございました」

クリスティーナはそう言って、リオと向き合い会釈する。フローラも眼下の貴族達からリオに向き直り、今一度ドレスの裾を掴んで会釈した。リオは胸元に右手を添えて、恭しくこうべを垂れる。

「今宵はアマカワ卿へのお礼と、フローラの帰還を祝うべく、こういった席を設けました。ここしばらくは暗い雰囲気がロダニアに漂っていましたが、今夜は心ゆくまで楽しみましょう。早速ですが、乾杯へ移ります」

クリスティーナは開宴の挨拶を手早く区切ると、進行を乾杯へと移す。会場内にいる貴族達の手元には現在進行形で迅速に杯が行き届いており、階段上に立つクリスティーナ達のもとにも杯が届いた。そうして、会場内に杯が行き届いたのを確認すると――、

「それでは、乾杯！」

クリスティーナは高らかに杯を掲げ、乾杯の音頭をとった。

「乾杯！」

貴族達も意気揚々と杯を掲げ、乾杯の声を上げる。そして、近くに立つ者達と目線を合わせ、軽く杯を持ち上げて微笑し合う。すると、場内の雰囲気は一転し、参加者達は談笑を始めた。とはいえ、中には依然としてクリスティーナやリオに注目する者達もいる。

「ご同伴くださり、ありがとうございました。アマカワ卿、セリア先生」

当のクリスティーナはリオとセリアに視線を向けると、軽く杯を掲げた。

「こちらこそ光栄なお役目を賜り、恐悦至極に存じます」

リオは会場の視線を意識しているのか、慇懃な所作で綺麗に畏まって応じる。セリアもリオに倣い、慎ましやかに頭を下げた。

「お二人とも、頭をお上げください」

クリスティーナは間髪を入れずに告げる。

「恐れ入ります」

リオとセリアは粛々と頭を上げた。

「フローラも望んでいないでしょうし、今宵は無礼講ということで。少なくとも我々だけでいる間は、あまり堅苦しい所作のことは気にしないでください」

と、クリスティーナはフローラを見やりながら語る。

「はい！」

フローラは元気よく頷いた。

「……承知いたしました」

リオとセリアは顔を見合わせると、微笑して頷く。

それから、リオ、セリア、フローラ、そしてクリスティーナはしばし四人だけで談笑を楽しみ、約十分が経過する。すると、階段を上ってリオ達に近づく者達が現れた。ユグノー公爵やロダン侯爵を始めとする高位貴族の面々と、付き添いの子息・令嬢達だ。

通常、こういった場で最も目上の者や主賓に最初に声をかけるのは、次に位が高い者からというマナーがある。その点、ユグノー公爵とロダン侯爵は王族であるクリスティーナとフローラ、そして勇者である坂田弘明を除けば最も位が高い。

弘明といえば開始早々、クリスティーナ達がいる階段上の広場には目もくれず、ロアナを引き連れてレストラシオン所属の下位貴族の令嬢達に声をかけているし、真っ先に階段を上ったところで目く

じらを立てる者などいなかった。
ユグノー公爵とロダン侯爵はクリスティーナ達に近づくと、階段の途中で立ち止まって跪(ひざまず)く。他の貴族や付き添いの子息・令嬢達も一斉に畏まった（女性はドレスを着用しているので、跪いてはいない）。すると――、

「クリスティーナ様、フローラ様、お二人がお揃いになったお姿を再び拝(はい)することが叶い、恐悦至極に存じます。おくつろぎのところ大変失礼いたしますが、しばしのお目通りをお許しいただけないでしょうか？」

ユグノー公爵は一同を代表して、よどみなく語る。

「ええ、構わないわよ。立ち上がりなさい」

と、クリスティーナ。

「恐れ入ります」

ユグノー公爵達は今一度深くこうべを垂れると、粛々と立ち上がった。

「皆、パーティを楽しんでくれているようね」

クリスティーナは眼下のホールを見回し、フッと口許をほころばせる。参加者達の顔は明るく、思い思いにこの席を楽しんでいるようだ。

「当然でございましょう。先立ってはクリスティーナ様がロダニアへお越しになり、失踪なさっていたフローラ様も無事お戻りになっ

たのですから」

ユグノー公爵は上機嫌に語ると、立役者であるリオに視線を向ける。

「それもこれもアマカワ卿のおかげ。いやはや、卿には頭が上がりませんな」

ロダン侯爵はにこやかに微笑し、すかさず合いの手を入れるように告げた。リオは下手なことは何も言わず、笑みを取り繕う。

「ええ、アマカワ卿には返しきれぬ恩ができました」

クリスティーナは小さく息をつくと、リオを見やりこくりと同意した。

「となれば、また新たに謝辞を尽くさねばなりませんな。とはいえ、アマカワ卿には既に邸宅を贈呈しましたし、まさかここロダニアにもう一つ家を構えていただくわけにも参りますまいが……」

と、ロダン侯爵は愉快そうに笑って語る。

「ははは、少し気が早いぞ、ロダン卿。クリスティーナ王女殿下に何かお考えがあるやもしれん」

ユグノー公爵は諭すように言って、クリスティーナを見据えた。

（見事なまでに予定調和の流れね。アマカワ卿への恩賞をどうするべきか）

事前に誘導すべき話題は決まっていたのだろう。あわよくば婚約について話を持っていこうとするはずだ。クリスティーナはそう考え、気が重くなる。

「謝礼として具体的に何をすべきかは決めかねているわ。アマカワ卿のご意向を無視するわけにもいかないから」

クリスティーナは牽制するように、前もって用意しておいた回答を流暢に告げた。

「然様でございますな。まあ、恩賞の内容はさておき、アマカワ卿には私からも直接にお礼の言葉を伝えたかったのです。お許しいただけないでしょうか？」

ユグノー公爵はしれっと頷いてみせると、リオに礼を言う許可をリオ本人とクリスティーナに求めた。

「アマカワ卿が断らないのならば、私に断る理由はないわね」

クリスティーナはリオを見て、そう語る。

「無論、私もお断りする理由はございませんが……」

リオはどこか困ったように肩をすくめてみせた。

「では、この機会にありがたく。アマカワ卿、この度はフローラ王女殿下をお救いいただき、感謝の言葉もない。おかげでレストラシオンの士気はかつてないほどに高まっているよ。厚くお礼申し上げる。ありがとう」

ユグノー公爵は改めてリオに向き直り、慇懃な所作とともに礼の言葉を口にする。

「いえ、偶然の成り行きによるものですので、お役に立てたのならば何よりです」

リオは愛想良く応じて、かぶりを振った。

「ははは、やはりアマカワ卿はなかなかに恬淡（てんたん）な御仁だな。クリスティーナ様にフローラ様、我が国の王女殿下をお二人もお救いしたのだ。少しは若者らしく、いや、普通に誇ってもいいだろう」

と、ユグノー公爵は上機嫌に笑って語る。

「ですな。まさしく英雄に値する働きをしたといってもいい」

ロダン侯爵は深々と頷いて同意した。

「……恐れ入ります」

リオは返答に困っているのか、笑みを取り繕って応じる。すると――、

「しかし、偶然の成り行きであることに違いはないのだろうが、単に偶然という言葉で片付けるのは戸惑うほどに数奇な巡り合わせではあるね」

ユグノー公爵は「ふむ」と思案し、そんなことを言い始めた。

「私も他国の村でフローラ様をお見かけした時は、まさかと驚きま

した」

と、リオは話を合わせる。

「話は聞いている。ルシウス＝オルグィーユ……、まさか君が我が国の貴族だった男と因縁があったとはね。かつては王の剣の候補だったほどの男だ。とうに没落して我が国とはまったく無関係の人物だが、遠い身内の恥としてお詫び申し上げよう」

ユグノー公爵はそう言うと、リオに頭を下げた。リオがセリアの講義を聴き終えて別行動をしている間に、クリスティーナから色々と話を聞いたのだろう。

「滅相もない。ユグノー公爵閣下に謝っていただくことではございませんので」

リオは鷹揚にかぶりを振る。

「ははは。卿（けい）にそう言ってもらえると、胸のつかえも取れるというものだ。まあ、せっかくの明るい席だ。辛気くさい話はこの程度にするとしよう。……クリスティーナ様、フローラ様、後ろの者達にもご挨拶の機会を頂戴できないでしょうか？」

ユグノー公爵はちらりと背後に居並ぶ貴族達を見やると、クリスティーナとフローラに挨拶の許可を求めた。

「ええ、構わないわよ」

クリスティーナは二つ返事で頷く。こういった席で目下の者から目上の者に挨拶をするのは慣例行事だ。目上の者はひっきりなしに

声をかけられるので気が休まることはないが、よほど特段の事情がなければ断っていいものでもない。

「恐れ入ります」

ユグノー公爵は深くこうべを垂れた。すると早速、付き添いの面々の紹介へと移る。まずは各家の当主と思しき男性の高位貴族達がぞろぞろと近づいてきた。

「クリスティーナ様とフローラ様におかれましては、ご機嫌麗しく存じます」

「アマカワ卿とセリア君もご機嫌よう」

と、貴族達は最初に王族のクリスティーナとフローラに紋切り型の挨拶を告げる。続けてリオとセリアにも挨拶の言葉を送った。今度は後ろで待機している子息や令嬢達の番だ。

「こちらへ来なさい」

子息と令嬢達は各々の親に誘われ、静かに階段を上がると――、

「お久しぶりですわ。クリスティーナ様、フローラ様。ご機嫌麗しゅう存じます」

親達と同様、まずはクリスティーナとフローラに挨拶をした。

「ええ、ご機嫌よう」

クリスティーナとフローラは慣れた様子で子息や令嬢達に応じる。そして――、

「ハルト様、セリア先生、お久しぶりです」
「先生の講義、評判のようですね。私もまた受けたいですわ。学院時代を思い出します」

とある令嬢二人が、リオとセリアにいち早く声をかけた。

「あら、エリーゼさんにドロテアさん、お久しぶりね。二人とも……、クリスティーナ様がロダニアへいらした時のパーティで、ハルトと知り合ったのかしら？」

セリアは笑顔で令嬢達に応じると、小首を傾げてリオとの接点を確認する。エリーゼとドロテアはセリアの教え子であり、王立学院でリオのクラスメイトであった少女達だが、二人がリオの素性に気づいている様子はない。

「いえ、ガルアーク王国で開かれた夜会でお会いしたのです」

と、ドロテアはリオに視線を向け、嬉しそうに言う。

「そう、だったのね」

セリアはちらりとリオを見やって得心した。

「またお会いできて嬉しいですわ、ハルト様」

エリーゼはそう言って、じっとリオの顔を覗き込む。

「ええ、私もです」

リオは愛想笑いを浮かべて頷いてみせた。

「私もずっとお会いしたかったのです。ハルト様ったらどこでも人気者で、なかなかゆっくりとお話しする機会に恵まれないんですもの。今日はまた後で、ゆっくりとお話ししたいですわ」

ドロテアは小さく唇をとがらせ、エリーゼに負けじとリオに存在をアピールし距離を詰める。

「まあ、ドロテアばかりずるい。私もお話ししたいですわ」

エリーゼは拗ねた子供のように、上目遣いでリオに頼んだ。

「ありがとうございます、ドロテア様、エリーゼ様。叶うのならば喜んで」

リオはやや困ったように笑みを取り繕いながらも、社交辞令で頷いてみせる。

「まあまあ、楽しみですわ」

エリーゼとドロテアは声をそろえて喜んだ。

「ふふ、仲がいいみたいね」

セリアは思わず苦笑してしまう。二人ともかつては周囲の生徒達と一緒に元孤児のリオを白い目で見ていたというのに、今はリオの気を引こうと積極的に好意を示している。二人には少し悪いが、真実を知らないとはいえ滑稽に思えてしまった。

「だとしたら嬉しいですわ」
「ええ」
エリーゼとドロテアは満足そうに頷く。すると――、
「ははは、盛り上がっているようだね」
ユグノー公爵が他の令嬢を何人か従えて近づいてきた。
「はい。おかげ様で」
リオはいち早くその存在に気付き、微笑して頷く。
「エリーゼ君もドロテア君も、アマカワ卿と会えるのを随分と楽しみにしていたようだからね。そして、この子達もだ。時間が許す限り相手をしてやってくれたまえ」
ユグノー公爵はそう言って、自らの背後に立つ令嬢達に会話に加わるよう促す。いずれもクリスティーナとフローラへの挨拶を終えた者達だ。
「よろしくお願いします」
少女達はお淑やかに頭を下げて、リオの周囲に群がった。
「こちらこそ」
リオは見事に笑みを取り繕って、頷いてみせた。
「では、未婚の男女同士、弾む話もあるだろう。老人は立ち去ると

するよ」

ユグノー公爵はそう言い残すと、さっさと立ち去ってしまう。未婚の男女同士という部分を強調することで、話題を誘導しようとしている節が窺える。案の定、その後の話題は恋愛方面に自然と流れていった。

ある程度、話が盛り上がり始めたところで――、

「ところで、ハルト様はご結婚をお考えでないのですか？」

と、ドロテアが単刀直入に尋ねる。令嬢達の注目は見事にリオに集中した。

セリアも興味深そうにリオの横顔を覗く。

「……今のところは特に」

と、リオは微妙に間を置いて答えた。

「まあ、そうなのですか？」

エリーゼとドロテアを始めとする令嬢達はじっとリオを見つめる。それはセリアも同じだった。

「ええ」

リオは苦笑いを浮かべて頷いてみせる。すると――、

「アマカワ卿、セリア先生、少しよろしいでしょうか？」

クリスティーナがフローラを引き連れて現れ、リオとセリアに声

をかけた。二人の背後には所在なさげに立ち尽くす貴族の子息達がいる。彼らとの話を切り上げてきたのだろう。狙いはリオを令嬢達から引き離すことだ。

「これはクリスティーナ様、フローラ様」

リオは王女二人の登場を察し、恭しく応対した。セリアや令嬢達もすぐにこうべを垂れる。

「そろそろダンスの演奏が始まる時間です。今日の主賓はアマカワ卿ですから、お二人で踊ってきてはいかがかと思いまして」

クリスティーナはそう言って、リオとセリアを見やった。

「……私とハルトが、ですか？」

セリアは惚け顔でリオの顔を見て、ぱちりと目を瞬く。一方、フローラはクリスティーナの発言に意表を突かれたのか、びくりと身体を震わせていた。

「ええ。今宵のアマカワ卿のパートナーはセリア先生ですし、久しぶりに再会したのですから」

と、クリスティーナはフローラを横目に語る。

未婚の男性貴族がパーティに女性、すなわち異性のパートナーを引き連れて登場する意味はシンプルだ。相手と一定以上の関係にあることを示すこと。とはいえ、その一定以上の関係が具体的にどのような関係を意味するのかはさらに検討を要するため、この場にいる令嬢達はリオに近づき探りを入れていたわけだが……。

しかし、クリスティーナがこうして現れたことで、話の流れは変

わろうとしている。ここでリオがクリスティーナの提案に乗っかれば、令嬢達もリオの男女関係を探るのを中断せざるをえない。

「では、この機会にありがたく。セリア、私と踊っていただけませんか？」

リオは空気を読んだのか、セリアに対して恭しく手を差し出した。

「……ええ。喜んで」

セリアは手を伸ばし、そっとリオの手を掴んだ。令嬢達はなす術もなく、ジトッとした眼差しでその様子を眺めている。まさか王女が仕向けた流れに異議を唱えるわけにもいくまい。フローラもどこか羨ましそうにセリアの手を掴むリオを眺めていた。すると――、

「アマカワ卿。よろしければ、後でフローラとも踊ってあげてください」

クリスティーナはフローラの心情を慮ったのか、後でフローラの相手もしてくれないかとリオに頼んだ。本来なら身分が下の男性が王族の女性をダンスに誘うことはあまり好ましくないが、同じ王族の女性が促したとあれば例外である。というより、ここで断れば却って不敬になりかねない。

「もちろん、私でよろしければ喜んで。光栄です」

「っ！」

リオが首肯すると、フローラは嬉しそうに顔を明るくした。すると、ちょうど会場の隅に控える演奏者達がダンス用の曲を奏でるべく、調律を開始する。

「では、フローラ様。また後ほど参上します。行きましょうか、セリア」

リオは胸元に右手をそえて会釈すると、セリアを誘い階段を降りていった。すると、会場の注目がリオとセリアに集まる。ダンスの舞台となるホールの中央には何組ものペアがいるが、視線を釘付けにしているのはこの二人だった。

「よくよく考えてみると、公の場でセリアとダンスを踊るのは初めてのことですね」

リオはホールの中央でセリアと向き合うと、くすりと笑って告げる。

「そういえば、そうね」

そう答えるセリアの声は少し上ずっていて、照れくさそうだ。

「周囲の視線が気になりますか？」

と、リオは周囲のギャラリーを見回すと、はにかむセリアを見据えて可笑しそうに尋ねる。

「へ？　あ、ううん。そんなことはないわよ」

セリアは一瞬、不思議そうな顔を浮かべたが、すぐにかぶりを振った。

「そうなんですか？」

今度はリオが不思議そうな顔を浮かべる番だ。

「ええ……。リードしてもらってもいいかしら？」

セリアはリオの顔を上目遣いにじいっと覗き込むと、わずかに唇をとがらせて尋ねる。

「もちろん」

「よろしくね」

リオが微笑して頷くと、セリアは透き通るような笑みを浮かべた。それから、互いの手を取り合うと、身体が触れあうほどの距離に身を寄せ合う。リオはそっとセリアの腰に手を回した。

「っ……」

セリアはわずかに身体を震わせたが、優しい手つきでリオを抱き寄せ返す。すると、二人の準備が整うのを待ちわびていたかのように、まもなくして演奏が始まった。

リオはセリアをリードし、身体を揺らしながらステップを踏む。くるくると動き回りながらも、視界に映るのは互いの顔だけだ。ターンを踏む度に、セリアのドレスの裾は美しい花びらのようにたなびく。

しかし、気がつけば演奏は終わりを迎える。セリアにとっては無限に封じ込めておきたいほどに輝かしい時間だったが、体感的には刹那だった。ダンス中はすっかり二人の世界に入り込んでいたが、ふと拍手の音が鳴り響いていることに気づく。

「終わっちゃったか。残念。素敵な時間だったわ、ハルト」

と、セリアは言葉通り残念そうに言った。
「もう一曲、といきたいところですが、流石にマナー違反ですね。よろしければまた後で踊りませんか？」
リオは柔らかな笑みを口許に浮かべると、そう提案する。
「ええ、喜んで！」
セリアは満足そうに頷いた。そして――、
「さあ、上でフローラ様が待っていらっしゃるわ。参上しましょう」
と、階段の上を見やって言う。そこにはリオとのダンスを待ちわび、そわそわとたたずむフローラがいる。
「ええ」
リオはセリアの手を優しく掴むと、階段に向かってゆっくりと歩き出した。そして、ほぼ階段を上りきったところでセリアの手を離し、フローラと向かい合う。
「フローラ様、ぜひ一曲お相手いただけないでしょうか？」
リオはフローラの前で跪くと、粛々と手をさしのべた。
「は、はい。こちらこそ、よろしくお願いいたします！」
フローラは上ずる声を精一杯に抑えて、嬉しそうに首肯する。そ

の後、セリアの時と同じように二人で階段を降りると、間もなくして演奏が始まった。
フローラは演奏中、もじもじと恥ずかしそうにリオの顔を窺う。王族ともなればダンスは幼少期から完璧に身につけているようにも思えるが、緊張しているのか、少しばかりミスが目立ってしまう。とはいえ、その度にリオが巧みにフォローするので、傍から見れば実に優雅なダンスと相成った。
失踪して帰還したフローラと、その立役者であるハルト＝アマカワ。二人の組み合わせは会場中の貴族達の視線を集めていた。その中には勇者である坂田弘明の視線も含まれている。
しばらくして、二人のダンスが終わると、会場中に大きな拍手が鳴り響く。会場中の貴族達がリオとフローラのダンスに魅了されて、どよめいているのだ。そんな中――、

「……ふん」

と、弘明はつまらなさそうに鼻を鳴らし、階段を上ろうとするリオとフローラの背中をじっと見つめる。弘明の隣には気まずそうにたたずむロアナの姿があった。

◇　◇　◇

「ハルト様、ありがとうございました。私、何度かミスをしてしまって。でも、ハルト様のおかげでなんとかなりました！　すごく楽しかったです！」
フローラは階段を上りながら、興奮気味にリオに語りかける。
「いえ、フローラ様のおかげで素敵な体験をさせていただきました。お礼を申し上げるのは私の方です」

リオは微笑ましそうにフローラに応じた。それから、フローラはリオの隣を歩きながら、そわそわとリオの横顔を窺う。何か言おうとしては言葉に詰まるが、不思議と沈黙を気まずいとは感じなかった。そうして、すぐに階段の上で待つクリスティーナやセリアのもとにたどり着く。

「ありがとうございました、アマカワ卿。フローラも喜んでいるようです」

クリスティーナは優しい笑みをたたえて、リオとフローラを出迎えた。

「いえ、大変光栄なお役目を賜りました。お礼を申し上げるのは私の方です」

リオはそう言って、微笑んでかぶりを振る。すると――、

「あ、あの。よかったらお姉様もハルト様と踊ってみてはいかがでしょうか？」

フローラが思い立ったように、突然そんなことを言った。

「……私が、アマカワ卿と？」

クリスティーナはいかにも困惑した面持ちを浮かべると、ぎこちなくリオを見やる。周囲には着飾った少女達がリオと踊りたそうに様子を窺っている。可愛げのない自分なんかと踊っても迷惑をかけるだけと言わんばかりだ。

「はい。お姉様、普段はパーティでもあまりダンスを踊られませんし、せっかくの機会ですから、その……」

フローラはおずおずと発言の意図を語った。すると――、

「でも……」

クリスティーナは少し緊張した様子で、ちらりとリオの顔を見やる。

「クリスティーナ様にお許しいただけるのであれば、私は喜んで」

リオは空気を読んで、そう言った。

「……ええ、こちらこそ」

クリスティーナは珍しく気恥ずかしそうに頬を赤らめた。すると、階段を上って近づいてくる人物が現れる。弘明だ。

「あー、よう」

弘明はつかつかと歩いてリオ達の側で立ち止まると、すまし顔で一同に声をかけた。

「これは勇者様、お楽しみいただけているでしょうか？」

今になって現れた弘明に、クリスティーナは見事な笑みを浮かべて応じる。

「ん、あー、まあな。脇役なりに隅っこで楽しませてもらっていた

ぜ？　さっきもフローラとダンスを踊るところを見ていたしな。クリスティーナもそいつと一緒に踊るのか？」

弘明はそう言って、リオ、フローラ、クリスティーナを順繰りに見やった。笑みを取り繕おうとはしているようだが、目と口は笑っていない。

「はい」

クリスティーナは弘明の内心を見抜いているのか、いないのか、しれっと頷いてみせた。その表情からは何を考えているのかを窺うことはできない。

「ふーん、ずいぶんとチヤホヤされているみたいだな。ま、新たな英雄の誕生だしなあ」

弘明はスッと目を細めると、今度はリオに水を向けた。

「滅相もございません。英雄とは、勇者様にこそ相応しい称号ではないかと」

と、リオはよどみなく答える。

「謙遜するなよ。これだけ注目されているんだ。みんな気になっているんだろ。お前の真価をな。あまり騒がれるもんだから、俺も興味が沸いてきたんだぜ？　お前がどの程度のもんなのかをな」

弘明は「はん」と鼻を鳴らすと、不敵な眼差しでリオを見据えた。何を言おうとしているのか、弘明の話はいまいち要領を得ない。

「……恐れ入ります」

リオは警戒しつつも、無難に受け答えた。クリスティーナも弘明が何を考えてこの場に現れたのか、見極めようと動向を見守っている。その一方で、セリアとフローラはどこか心配そうにリオの顔を窺っていた。すると――、

「そこで、一つ余興を思いついたんだが……」

と、弘明は不意に口を開き――、

「俺とお前で決闘をしてみないか？」

何を考えているのか、リオに対し、突然の決闘を申し入れた。

第１８０話　殿下に、勝利を

「俺とお前で決闘しないか？」

弘明は気まぐれに現れたかと思えば、リオに決闘を申し入れる。直後、その場の空気は明らかに一変した。リオ、セリア、クリスティーナ、フローラと、その誰もが弘明の発言の真意を見極めようと押し黙る。だが、ややあって――、

「……お」

「お認めするわけにはまいりません」

リオが「お戯れを」と笑って答えようとすると、クリスティーナが機先を制するように断言した。

「……あー、クリスティーナには言ってないんだがな」

弘明はクリスティーナがリオを庇ったと思ったのか、面白くなさそうに言う。

「レストラシオンの代表としては決して他人事（ひとごと）ではございませんので」

と、クリスティーナはきっぱりと告げる。

「いやいや、余興と言っただろ？」

弘明は肩をすくめて応じた。平静を装おうとしているものの、ど

ことなくふてくされている様子が窺える。クリスティーナから見れば筒抜けと言ってもいい。

「余興、と仰いますか。……恐れながら諫言させていただきますが、勇者様はこのパーティがどういった席なのか、ご自分が何を仰っているのか、本当にご理解なさっておられますか？」

クリスティーナは弘明を真っ直ぐと見据えて問いかける。

「ほう、諫言ときたか……。当たり前だろ。フローラの帰還を祝う席だ。ついでに恩人のそいつを招いているんだろ」

弘明はフッと嘲笑を刻むと、得意げに答えた。だが――、

「どうやらご理解いただけていないようですね」

と、クリスティーナは嘆かわしそうに嘆息する。

「何？」

弘明はとたんに真顔になった。

すると、クリスティーナは間髪を入れずに口を開く。

「そもそもアマカワ卿はベルトラム王国の、いえ、レストラシオンの人間ではございません。恩人として、主賓として、この場にお越しいただいているのです。決して『ついでに』お招きしたわけではございません。この点、勇者様はレストラシオンを象徴する存在であらせられます。パーティを主催する側の貴方様が、主賓に対して決闘を申し込むことが傍から見てどれだけ失礼な行いなのか、本当におわかりですか？」

「……あー、どうやらクリスティーナは俺の発言の趣旨をはき違えているようだな。まあ、そんなにムキになるなよ。ちょっと必死すぎるぜ？」

弘明は真っ向から反論するのは分が悪いと思ったのか、クリスティーナから視線を逸らし、頭を掻いてバツが悪そうに語る。

「……発言の趣旨、でございますか？」

クリスティーナは必死になるのも当然だと言いたかったが、にこやかに笑みを貼り付けて訊いてみせた。

「ああ、そうだ。余興だと言ったろ？　仮にも王の剣とやらを倒したほどの男だ。そいつの実力はみんな気になっていると思ってな。そこで決闘をと思ったわけだ」

と、弘明は弁明するように語る。

「……決闘とは断じてそのように軽はずみに行うものではございません。貴族の名誉を、譲れない誇りを、時には命をかけて行う儀式です。決闘を申し込むことはすなわち敵愾心の表明に他なりません。ただの手合わせなどとは訳が違います。勇者様は譲れない何かを賭して、アマカワ卿と戦いたいのですか？」

クリスティーナは深く溜息をつくと、弘明の軽率な言葉選びを咎めた。本当は弘明が語った動機が建前であることは薄々と見抜いていたが、内心を証明することなどできない。下衆の勘ぐりになるだけだし、指摘しても詮無きことだ。

「あー、それは言葉狩りってやつだ。別に敵愾心があるわけじゃな

い。手合わせ程度の生半可な戦いじゃあ、そいつの真価を見定めることなんかできないんじゃないかと思っただけだ。伝説の勇者である俺と、王国最強の騎士を倒した英雄の戦いだぜ？　それこそ決闘という言葉が相応しいと思ってな」

弘明は自分の立場ならクリスティーナが強く咎めにくることがないと高を括っているのか、いい加減なことをもっともらしく語った。とはいえ、今回はクリスティーナも負けていない。

「……いずれにせよ、アマカワ卿に対して失礼であることに変わりはありません。勇者様はレストラシオンの象徴として組織に所属していただいているのですから、今はおもてなしをする側にいるのだということをご自覚いただき、レストラシオンの恩人に対して礼を失した行いは慎んでいただきたく存じます」

クリスティーナは正論をもって、弘明を咎めた。現状、レストラシオンの代表である彼女としては、勇者である弘明につまらないことで機嫌を害されるのは組織的に上手くないが、他国の名誉貴族であり組織の恩人でもあるリオに失礼な真似を働くのも同じくらいに組織にとって上手くない。

そもそも弘明が気分を害している理由は、リオに対する嫉妬に端を発している。フローラの気持ちが自分ではなくリオに傾きつつあるから、自分ではなくリオが主役のような扱いを受けているから、弘明はそれらが気にくわないだけなのだ。それは不当な感情に他ならない。

無論、弘明の場合は勇者であるというだけで不当な感情すら正当化されかねないが、今回は話が別だ。組織に大きく貢献してくれた外部の人物を蔑ろにするなど、組織の対外的な信用問題に関わりかねない。レストラシオンの代表としては捨て置くことなどできるはずがないし、クリスティーナ個人の気持ちとも合致していた。

「ふーん……」

弘明はやはり面白くなさそうに口を尖らせる。どんな理由があろうが、自分よりもリオを優先した事実は面白くはないのだろう。あるいは、自分の面子を潰されたと思っているのかもしれない。

「アマカワ卿、大変失礼いたしました。我々はもちろん、勇者様にも敵愾の念はないとのことです。どうかお許しいただけないでしょうか？」

クリスティーナは弘明のことを捨て置くと、組織を代表して粛々とリオに頭を下げる。公衆の面前で王族が頭を下げるなど、滅多にある出来事ではない。会場は大きくざわついていた。すぐ側にいるセリア、フローラ、ロアナも冷や冷やとした面持ちでその様子を見守っている。

「いえ、気にしておりませんので、どうか頭をお上げください」

リオは周囲の目を気にし、クリスティーナに頭を上げるよう促す。

「……恐れ入ります」

クリスティーナは緊張を吐き出すように息をついて、顔を上げた。そうして、事は丸く収まり、一応は最悪の事態を免れることができたように思えたのだが――、

「……じゃあ、改めて手合わせを申し込ませてくれないか？これは個人的な頼みだ」

弘明は今度は決闘ではなく、手合わせをリオに申し入れる。

「っ、勇者様！」

クリスティーナは流石に顔をしかめて、声を荒らげた。今までの話の流れを完全に無視する発言に、セリア達もギョッとして弘明の顔を見やる。

「おいおい、落ち着けよ。これは決闘じゃない。勇者の俺が、手合わせをしたいと頼んでいるんだ。余興のつもりで決闘を申し込んだのは軽率だったみたいだからな。いいじゃないか。な、ムキになるなって」

弘明は不機嫌を隠すように引きつった笑みを浮かべていて、軽い調子を取り繕う。

（ムキになっているのは、どこの誰よ。どうしても公衆の面前でアマカワ卿を負かして辱めるつもり？　なんて幼稚な……）

クリスティーナは弘明のゴリ押しに絶句し、歯がゆそうに言葉に詰まる。いくら論理的に訴えたところで、結論ありきで話を進めようとする今の弘明を納得させることなどできないと思ったから。

まさかここまで愚か者だとは思いもしなかった。こうなったら、後は弘明がなんと言おうと認めないと言い張る以外に道はない。もっとも、そうすれば確実に弘明とは険悪な雰囲気になってしまうのだろうが……。しかし――、

「承知しました。手合わせでいいのならば、お受けしましょう」

リオは険悪になりつつある空気を読み、弘明との手合わせを受け入れてやった。こんなつまらないことでセリアがいるレストラシオンという組織の体制を揺るがすのは事だし、ここまで粘着するような相手だ。適当に相手をして、満足させてやった方が後々の禍根もないと考えての判断である。

「っ、アマカワ卿……」

クリスティーナは名状しがたい表情を覗かせる。本来ならリオにとってこの手合わせを受け入れるメリットは何もない。受け入れなかったら受け入れなかったでデメリットはあるだろうが、クリスティーナはリオが自分の顔を立ててくれたのだろうと考え、もどかしそうに唇を噛んだ。

「ここまで強く私との手合わせを望んでくださるのです。お断りするわけにもまいりません」

と、リオは手合わせの誘いを受け入れる理由を告げる。仮にここで断れば、弘明との関係が悪化することは必至だし、今後も折に触れて粘着してきかねない。

（アマカワ卿が辞退すれば、逃げたとか、言い出しかねないわね。この勇者は……）

クリスティーナはそう考え、悩ましそうに額を押さえる。

「決まりだな。まあ、今日は酒も入っているし暗い。手合わせは明日でいいだろ」

弘明は満足そうに話をまとめた。自分の思惑通りに話が進んで、

ご満悦なのだろう。自分が負ける結果など、みじんも想像していないようだ。

「……承知しました。では、お二人の手合わせは私が仕切らせていただきます。勇者様は以降、これ以上の勝手な真似はお控えください」

クリスティーナは腹をくくって気持ちを切り替えたのか、弘明を見据えていやに淡々とした声色で告げた。

「あー、わかった、わかった。ちょっとした余興なんだ。そう、熱くなるなよ。まあ、クリスティーナはお怒りみたいだしな。この辺りで去るとしようか。明日を楽しみにしているぜ」

弘明はおざなりに応じると、さっさとその場から立ち去ろうとする。

「あ、その……」

ロアナはこの場に残るべきかどうか、咄嗟には決めかねて逡巡した。

「貴方はお供して差し上げなさい、ロアナ」

クリスティーナはそんなロアナの背中を押してやる。

「は、はい。失礼いたしました」

ロアナはクリスティーナとリオに向けて頭を下げると、小走りで弘明の背中を追いかけた。すると、クリスティーナは再びリオに向

き直る。

「本当に失礼いたしました、アマカワ卿。できれば内密にお話がしたいので、パーティが終わった後に少しだけお時間を頂戴できないでしょうか？」

クリスティーナは一気に気疲れしたのか、申し訳なさそうに謝罪し直し、リオとのパーティ後の個人的な面会を求める。話題はもちろん弘明の件についてだろう。リオとしてもクリスティーナと話はしておきたい。

「ええ、もちろん」

リオは二つ返事で頷いた。

◇　◇　◇

そして、恙無（つつがな）くパーティが進行し、終わりを迎えた後。リオは応接室のソファに腰を下ろし、クリスティーナと対面していた。セリアは着替えをしてまた戻ってくると言って、一人でいったん帰宅している。

「お疲れのところお呼び立てしてしまい、誠に申し訳ございません」

と、まずはクリスティーナが開口した。ちなみに、パーティで着用していたドレスではなく、普段着に着替えている。

「いえ」

リオは愛想良く笑って、首を横に振った。

「早速ですが、話というのは、勇者様との明日の手合わせについてです。私の力が及ばず、アマカワ卿にはご迷惑をおかけすることになってしまい、謝罪のしようもありません」

クリスティーナは単刀直入に用向きを切り出すと、何度目になるかわからない謝罪をリオにする。

「本当にお気になさらず。私との手合わせを強く望んでくださったようでしたし、私のせいで殿下と勇者様の関係を悪くさせてしまうわけにもまいりません」

と、苦笑してクリスティーナを立ててやるリオ。現状は身分差を踏まえても苦言の一つくらい呈することを許される場面だが、貴族としては実に好ましい回答だった。

理由はもちろん、セリアのためというのが大きい。クリスティーナはレストラシオンにおけるセリアの一番の後ろ盾なのだから、リオとしてはクリスティーナとの関係に禍根を残すよりは、積極的に恩を売っておくのが得策だ。

何よりここでクリスティーナを責めたところで、何かが建設的に変わるわけではない。クリスティーナが謝罪の念を示しているのならば、殊更に何かを主張する気にはなれなかった。とはいえ、そういった隙のなさが、時にはこの上ない糾弾となることもある。

「……ご配慮、痛み入ります」

クリスティーナは自らの力不足を恥じているのか、忸怩たる面持ちを浮かべた。リオが苦言を呈さないのは、あくまでも合理的な理由があるからだと気づいているからである。そこを勘違いして胡座をかけばどうなるか、わからぬクリスティーナではないし、今のリ

オ――、ハルト＝アマカワという他国の貴族は王族のクリスティーナでも安易に見下せるような相手でもない。

「そうお悩みにならないでください。勇者様のお望み通り、ただ単に手合わせをすればよろしいのでしょう？」

と、リオは特に気負うことなく言ってみせる。

「……その手合わせですが、アマカワ卿はわざと勇者様に負けるおつもりですか？」

クリスティーナはじっとリオの顔を見据えると、そんなことを訊いた。

「……恐れながら、わざと、とはどういう意味でしょうか？」

リオは笑みを取り繕って訊き返す。

「ここだけの話ですが、まともに手合わせをした場合、私はアマカワ卿が勇者様に負けるとは思っておりません」

「それは、大変光栄なご評価ですが……、勝負に絶対はございません」

断言しきったクリスティーナに、リオは困り顔を浮かべた。

「現にガルアーク王国の勇者様との手合わせでは、アマカワ卿が勝利されたのでしょう？　そして、フローラを連れてロダニアへたどり着くまでの間に交戦した勇者らしき少年も退けた」

「……ええ」

リオは躊躇いがちに頷く。隠しようもないし、隠しても仕方がない事実だ。

「私は勇者様……、サカタ様が気まぐれに行う模擬戦の様子を見たことがありますが、正直、アルフレッドと戦っていた時の貴方に及ぶとは到底思えません。無論、神装の力が強力なので、並みの騎士よりは強いのでしょうが、近接戦闘に限れば魔剣を所持する一部の実力者達には及ばないと私は分析しています。いかがでしょうか？」

と、クリスティーナは推察した上で問いかける。

「……勇者様が戦闘訓練を受けたことがないのであれば、ご明察の通りかと。神装に秘められた特殊能力を除けば、他に目立った効果は身体能力と肉体強度の劇的な向上だけのようですので」

効果の程度はまちまちだが、身体能力と肉体強度を強化する魔術は数多くの魔剣に込められている。強化魔術の条件を神装と対等に近づけられるのであれば、戦闘技術で覆すことは可能だ。

「こちらでも同じように勇者様と神装の力を分析しております。レストラシオンの騎士と何度も模擬戦を行っておりますが、どれも接待試合です。戦績は負けなしですが、おそらくは取りこぼしえた勝負もあったはずです。本人は自分の力量をきちんと自覚していないのでしょうが……」

「……然様でございますか」

リオは返事に困り、無難に相づちを打つ。すると――、

「急にこのような話をして、申し訳ございません。ですが、この話こそが私がこうしてアマカワ卿をお招きした理由なのです。ご迷惑

をおかけしている上でお願いをするのは大変心苦しいのですが、どうか明日の手合わせでは勇者様を負かしていただけないでしょうか？」

クリスティーナは不意に本題を切り出した。

「……理由をお聞かせいただけないでしょうか？」

リオは即答せずに、先に理由を尋ねる。

「恥ずかしながら、今の勇者様はいささか以上に増長しておられます。私がロダニアへ来るまでのユグノー公爵の方針でもあったのですが、少し甘やかしすぎてしまったようです。無論、組織のためを思うのならば、その方針が完全に悪かったと一概に断言することもできないのですが……」

と、クリスティーナは悩ましそうに語った。

「いかに王侯貴族の皆様といえど、神威の体現者とも言える勇者様に強く出ることができないのは、ある意味で仕方がないこととも存じますが……」

リオはレストラシオンの王侯貴族達をフォローしてやる。

「はい。ですが、程度の問題です。勇者様との関係が悪化するリスクを考えると踏ん切りがつきませんでしたが、今日の行いを見て、ようやく決心しました。勇者様のプライドを一度、へし折るべきだと」

クリスティーナはきっぱりと告げた。

「……」

リオはそれ以上、何も言うことができない。このまま弘明を放置していれば、遅かれ早かれより厄介な問題を引き起こすであろうことは予想できたから。

「今後もこれまでのように甘やかすことはもはや弊害にしかなりません。だから、アマカワ卿に勇者様を負かしてほしいのです。自分が絶対的に一番の存在ではないのだと、知らしめてほしいのです。下手な誰かに任せられる役目ではありません。我が国最強のアルフレッドを破り、武功によって立身出世を遂げているアマカワ卿にだからこそ、お願いしたいと考えました」

クリスティーナはそう言うと、粛々とリオに頭を下げる。自分が絶対的に一番の存在ではない。そんなことは現代社会に生きる人間ならば、成長の過程で誰もが悟ることだ。

だが、幸か不幸か、弘明は身分社会に紛れ込み、神の使徒にも等しい存在として祭り上げられてしまった。十九歳という年齢を考えれば、増長するのも無理はないだろう。

「そもそも勇者様が強引に申し込まれた手合わせです。アマカワ卿が勝利することで文句など言わせませんし、今後、アマカワ卿への愚かなちょっかいを出させないこともお約束します。お詫びとお礼も別途させていただく所存です。ですので何卒、ご一考いただけないでしょうか？」

クリスティーナはさらにそう付け足した。

「……具体的には、どのような勝利をお望みですか？」

リオはしばし押し黙ると、クリスティーナに尋ねる。

「勇者様に本気を出させ、その上で実力差を知らしめる勝ち方が望ましいと考えております」

瞬殺はせず、されども苦戦もしない。要は、真っ向から戦った上で、ねじ伏せろということだ。

「なかなかに無理難題を仰いますね」

リオは思わず苦笑してしまった。

「……流石に厳しいでしょうか？」

クリスティーナも学院時代に護身の戦闘訓練を受けたことはあるが、専門職ではない。自分が考えている以上に難しいことを頼んでいるのだろうかと、不安を覗かせる。だが、リオは「いえ」と、かぶりを振ると――、

「承知しました。献上することをお約束しましょう。殿下に、勝利を」

クリスティーナの頼みを聞き入れた。

第１８０話　殿下に、勝利を（後書き）

この『夏』から「精霊幻想記」の新コミカライズが始動します。担当してくださる漫画家は『みなづきふたご』先生です。詳しくは次の画像と更新した活動報告をご覧くださいませ。

<ｉ２４６５４５｜１３４２３>

第１８１話　リオＶＳ坂田

リオは明日の手合わせで弘明に勝利することを約束すると、クリスティーナと必要事項を話し合って、一緒に応接室から退室した。すると、扉の外で護衛のヴァネッサ達と一緒に待ち構えているセリアとフローラを発見する。

「これは……、皆様お揃いで」

リオは勢揃いした面子に面食らいつつ、一同に挨拶した。クリスティーナはフローラの顔を見つけると、嘆息して開口する。

「……フローラ。今日は早く寝なさいと言ったはずよ」

「あの、でも、ハルト様のことが心配だったので……」

と、フローラは決まりが悪そうに、この場にいる理由を語った。その心情はセリアも同じなのか、こくりと頷いている。

「恐れ入ります。ですが、ご心配には及びませんので、ご安心を」

リオはにこやかにかぶりを振って、フローラとその隣に立つセリアを安心させた。すると――、

「アマカワ卿は明日、勇者様と手合わせを行います。もう遅いので、今夜は解散したところです。一応、アマカワ卿のお部屋はご用意させておりますが……、セリア先生はアマカワ卿をお迎えに来られたのですか？」

クリスティーナは場の解散を促しつつ、セリアに問いかける。

「……その、はい。やはりハルトはあの家に滞在するべきだと思ったので」

と、セリアはリオの顔を窺いながら、しっかりとした口調で語った。フローラは目をみはって、リオとセリアの顔を見つめる。

「だそうですが、いかがなさいますか？」

クリスティーナはくすりと笑うと、リオに水を向けた。

「と、仰いましても……」

リオは困り顔で返事をはぐらかす。

「……アマカワ卿のご懸念は理解しておりますし、同意もできます。ですが、別に構わないのではないでしょうか？　お二人が親密な仲にあることはれっきとした周知の事実なのですから、世間体を気にして関係が歪む方が不自然です。たまにロダニアを訪れた際に滞在するくらいは許されて然るべきかと。何より、当のセリア先生が望んでいらっしゃるのですから」

クリスティーナはそう言って、セリアを見やる。

「はい」

セリアはその通りだと言わんばかりに、リオを見つめて深々と頷いた。

「……畏まりました。セリアがそれで構わないのなら」
「うん、決まりね！」
リオが観念したように首肯すると、セリアは嬉しそうに表情を明るくする。
「よろしくお願いします」
「じゃあ、帰りましょうか。殿下達をこれ以上お引き留めするわけにはいかないし、明日の手合わせに備えないと」
「はい」
と、リオはまんざらでもなさそうに口許をほころばせた。
「私達も行きましょうか、フローラ」
クリスティーナはリオとセリアのやりとりに微笑し、妹のフローラに声をかける。だが、フローラはどこか羨ましそうに、じっとリオとセリアのやりとりを眺めていて耳には届かない。
「フローラ？」
と、クリスティーナが声をかけ直すと――、
「……へ、あ、はい！」
フローラはハッとして返事をした。
「私達も行くわよ」
クリスティーナはやれやれと息をついて言う。

「は、はい」

フローラはリオとセリアを見やりつつ、こくりと頷いた。

「久しぶりに姉妹水入らずで一緒の部屋で寝るのだから、もう少し嬉しそうにしてほしいのだけれど。それとも、あまり嬉しくないのかしら？」

「そ、そんな、嬉しいです！　嬉しいですよ」

クリスティーナがくすりと笑って言うと、フローラは慌てて弁明する。

「そう。なら、今夜は色々と聞かせて頂戴」

「はい！」

今度はしっかりと頷いたフローラだった。

「それでは、クリスティーナ様、フローラ様。失礼いたします」

セリアは王女姉妹のやりとりを微笑ましそうに眺めると、別れの挨拶を告げる。

「はい。明日の正午にお迎えの使者を出しますので、よろしくお願いいたします。アマカワ卿」

「畏まりました」

クリスティーナが必要な事項を再確認すると、リオはスッとこうべを垂れて頷く。そうして、その場は解散することになった。

◇　◇　◇

帰り道。リオは馬車に揺られ、セリアが暮らす邸宅へ向かっていた。

「……」

馬車内にはリオとセリアの二人しかいないが、沈黙が降りている。セリアは心なしか何か言いたそうな顔で、向かいに座るリオの顔を眺めていた。すると――、

「今夜はお世話になりますね」

と、リオが口を開く。

「……今夜だけじゃないわよ。貴方が所有する家なんだから、ロダニアに滞在する時は好きに泊まっていいんだから」

セリアはわずかに口を尖らせて応じた。

「それは、ですが……」

リオは苦笑して難色を示す。懸念しているのはやはりセリアの将来だ。未婚の女性貴族の家に男が入り浸っていたら、縁談も舞い込まないだろう。

「……いいの。私、今さらお見合いとか、政略結婚なんてする気ないもん」

セリアはリオが何を危惧しているのかはお見通しなのか、そんな

ことを言う。貴族の女性としてはなかなかの問題発言だ。とはいえ、シャルル＝アルボーと半強制的に政略結婚を強いられた経緯を踏まえれば、理解できないわけではない。

「セリアの人生ですし、生涯独身を貫くのも一つの生き方だと思いますが……」

セリアはまだ若い。本当に生涯独身でいいのかと、リオは言外に視線で尋ねる。だが、セリアは慌ててかぶりを振り始めた。

「ち、違っ。べ、別に生涯独身を貫くとか、絶対に結婚をするつもりがないってわけじゃなくて、恋愛を経た上での結婚には憧れはあるというか。で、でも、よく知らない男の人とそういう関係になるの無理だと思うし……。って、い、いいのよ、別に私のことは！　それより、クリスティーナ様と何の話をしていたの？」

セリアは語っていて恥ずかしくなったのか、頬を赤らめて話を逸らす。

「明日の手合わせについてです。心配するようなことは何もないので、ご安心を」

と、リオはおかしそうに微笑み、ジト目で見つめてくるセリアに答える。

「そう……、実際、どうするつもりなの？」

セリアは真面目なトーンで問いかけた。

「どうするつもり、とは？」

「勇者様との手合わせよ。貴方なら勝てるんでしょうけど、だからといって安易に勝つわけにもいかないのかなって……」
「それは明日の手合わせをお楽しみに、としか」
リオは意味深長な笑みをたたえて告げる。
「ふーん」
セリアは上目遣いで、じっとリオの顔色を窺った。おそらくクリスティーナとの話し合いの内容も絡んでいるのだろうし、掘り下げて訊くのも躊躇われる。
「何度も繰り返しますが、セリアが心配することは何もない。それだけは確かです」
リオはセリアを安心させるよう、優しく口許をほころばせた。
「……そっか。わかったわ。ハルトがそう言うなら、信じる」
セリアはふうっと息をつき、納得してみせる。
「ありがとうございます」
リオは嬉しそうに相好を崩した。それから、馬車の中には再び、しばしの静寂が訪れる。ガタコトと車輪が回る音だけが鳴り響いた。すると、ややあって――、
「ねえ、ハルト」
セリアが意を決したように、口を開く。

「はい、何でしょう？」

リオはよどみなく受け答えた。

「……ううん。何でもないわ。明日の手合わせ、頑張ってね！」

セリアは一瞬、何か言おうとして逡巡したが、すぐに笑みを浮かべ直してリオを激励した。

「はい」

リオはセリアが何かを言おうとしたことを察しつつ、笑みを浮かべて頷く。すると――、

（春人の過去のこと、セリアは気にしているみたい。今日、春人の両親のことを聞いたから）

突然、リオの脳裏にアイシアの念話が響いた。

（……ありがとう、アイシア）

リオは困り顔でアイシアに礼を言うと――、

「手合わせが終わったら、ゆっくりとお話をしませんか？　今日は勇者様が執務室に入ってきて俺が外で何をしてきたのか、説明が中断しましたし、聞きたいことがあればお話ししますので」

と、目の前に座るセリアにむけて語った。

「……うん」

セリアはリオが気遣ってくれたことを察したのか、優しく微笑して頷く。すると、リオはおもむろに馬車の小窓から夜空を眺めた。

「今頃はクリスティーナ様とフローラ様も二人きりでお話しをなさっているかもしれませんね」

と、外を眺めながら語るリオ。

「ええ、そうね」

セリアは微笑ましそうに同意すると、リオと一緒に小窓の外に広がる星空を眺めた。

◇　◇　◇

そして、翌日の昼過ぎ。いよいよリオと弘明が手合わせを行う時がやってきた。場所はロダニア領館に隣接する練兵場。

城塞都市として発展したロダニアの練兵場は広々としており、普段ならば数多くの騎士や兵士達が訓練に勤しんでいる。しかし、今この時はリオと弘明の手合わせのために開け放たれていた。代わりに、見物の騎士や貴族達が練兵場の周囲へぞろぞろと押し寄せている。

リオはそんな中、ドワーフ製の剣を握りながら、練兵場の真ん中で弘明と向き合っていた。二人の間にはクリスティーナが立っている。

「あー、なんか随分とギャラリーが集まっちまったみたいだな。クリスティーナは怒っていたみたいだし、てっきり見世物にするのを

嫌って、ギャラリーなしでの手合わせになるかと思っていたんだが……」

弘明は太刀の神装『ヤマタノオロチ』を握りながら、満足そうにギャラリーを見渡した。

「既に至る所で噂になっているのです。非公開にすればいらぬ憶測を生みます。そして不満も。無論、勇者様が非公開を望まれるのならば、今からでも退去させますが……」

と、クリスティーナは特に怒った様子もなく、整然と語る。

「いや、このままでいいだろ。帰らせるのも面倒だ。それよりもさっさと始めようぜ」

弘明は自信に満ちた面持ちでかぶりを振ると、手合わせの開始を促した。弘明からすれば、ギャラリーがいる前でリオを倒す必要があるのだ。

「では、改めてルールの確認を。勇者様は神装を、アマカワ卿はご自身が所有されている魔剣をそれぞれ使用して構わないものとします。ただし、使用していい能力は身体強化のみ。神装や魔剣に秘められた別の能力を使用すればその時点で即失格としますのでご注意を。勝敗は相手が負けを認めるか、審判が決定的な形で勝敗が決したと判断するかのいずれかです。多少の怪我は許容しますが、対戦相手の殺害は論外です。双方ともよろしいですか？」

クリスティーナはすらすらと手合わせのルールを語る。

「無論です」

リオは即座に頷いた。一方――、

「ルールに異論はないが、審判は誰が行うんだ？」

と、尋ねる弘明。

「今、こちらへ参ります」

クリスティーナはそう言って、明後日の方向を見やる。そこには、リオ達に近づいてくる二人の人物がいた。

一人はヴァネッサ＝エマール、クリスティーナ専属の護衛騎士である。そして、もう一人はアルフレッド＝エマール。ヴァネッサの実兄で、ベルトラム王国の王の剣である人物だ。

「あれは、アルフレッド卿」

「どうして卿がここに？　捕虜となっているのでは？」

ギャラリーの中にはアルフレッドの顔を見知った者が多く、ざわりとどよめく。リオもアルフレッドの顔を確認すると、微かに目を見開く。

リオに敗れレストラシオンの捕虜となったアルフレッドだが、今は拘束されておらず、妹のヴァネッサと一緒に堂々と練兵場を歩いている。武装こそしていないが、騎士が好んで着るようなクロースアーマー風の貴族服を着用していた。

「……誰だ、あいつは？」

弘明はアルフレッドの顔を遠目に見つめると、訝しそうに首を傾げる。

「彼がこれから行われる手合わせの審判です」
クリスティーナはしれっと答えた。
「ふーん、ギャラリーが随分と騒いでいるようだが？　有名な騎士か何かなのか？」
「ええ。王の剣、私の父が選定した、ベルトラム王国で最高最強の騎士です」
「あ……、そいつは確か捕虜になっているはずじゃ？」
と、怪訝な顔つきを浮かべる弘明。流石の彼もアルフレッドの処遇は覚えていたらしい。
「お二人の手合わせとなれば生半可な実力の者に審判は務まらないでしょうから、特別に用意しました」
クリスティーナは近づいてくるアルフレッドを見やりながら、にこやかに語った。
「へえ、まあ、生半可な実力の奴に審判をしてほしくないってことは確かだが……」
弘明はスッと目を細め、アルフレッドの顔を見据える。
「ご覧の通り、武装はしておりません。拘束こそしておりませんが、魔力を封じる魔道具を着用させています。加えて、今の彼にはレストラシオンに抵抗する意思も、ここから逃亡する意思もございませんので、ご安心を。彼ならば中立、公正な審判を行ってくれることでしょう。剣で嘘をつけるほど器用な男ではありませんので」

クリスティーナは整然と断言した。審判としてアルフレッドのことを信用している事が窺える。

「ま、いいだろ。最強の騎士ってんなら、俺らの手合わせの審判として不足はない。任せてやろうか」

弘明はフッと笑みを浮かべると、上機嫌に肩をすくめた。

「では、アルフレッドも参りましたので。すぐに始めさせましょう。頼んだわよ、アルフレッド。中立、公正な審判をね」

と、クリスティーナは近づいてきたアルフレッドに語りかける。

「……御意に。中立な立場での、公正な審判をお約束します」

アルフレッドは恭しくこうべを垂れた。

「クリスティーナ様、どうぞこちらへ」

ヴァネッサはクリスティーナを連れて、その場から立ち去っていく。向かう先にはセリアやフローラがいた。

「では、双方。異論がなければ手合わせを始めさせていただきます。よろしいでしょうか？」

アルフレッドはクリスティーナとヴァネッサが十分な距離をとったことを確認すると、リオと弘明に問いかける。

「ええ」

「いいぜ」

と、リオと弘明は即答した。

「では、距離をとって構えて」

アルフレッドは淡々と手合わせの段取りを進行する。彼の登場に困惑した様子のギャラリーだったが、いよいよ手合わせが始まる雰囲気を察したのか、固唾をのんで様子を見守り始めた。

「ま、存分に戦ってくれていいぜ？　俺が勇者だからって遠慮する必要はない。瞬殺だけは勘弁してくれよ。少しは俺に本気を出させてくれ」

弘明は静まりかえっていくギャラリーとは対照的に、特に緊張した様子はなく、軽口をたたいてリオを挑発する。自分が勝つことをみじんも疑っていないようだ。

「恐れ入ります。胸をお借りするつもりで、戦わせていただきます」

リオは特に気負った様子はなく、自然体で受け答える。

（ま、反応すらさせず、速攻で終わらせるがな）

と、弘明は「ふん」と小さく鼻を鳴らすと――、

「いいぜ、審判。いつでも始めてくれ」

アルフレッドに試合開始を促した。

「では、今から十秒後に試合を始めます」

アルフレッドはそう宣言すると、「十、九、八……」と手合わせ開始のカウントダウンを始める。その間にリオと弘明はそれぞれ身体強化を施す。

そして、アルフレッドは「二、一」と口を動かすと――、

「始め！」

手合わせの開始を宣言した。

◇　◇　◇

「はああ！」

弘明は手合わせ開始の合図と同時に、速攻でリオに向かい突進する。その思い切りの良さは素晴らしく、目にもとまらぬ速度でリオへと迫っていく。

だが、動きが雑だった。突進する瞬間に弘明の全身が力んだのを、見逃すリオではない。動き出しさえ見切ってしまえば、対応するのは実にたやすかった。仮に魔法で身体能力を強化していただけだったとしても、反応することはできただろう。

弘明は上段から寸止めでリオに斬りかかるつもりだったが、リオは剣を構えてあっさりと弘明の攻撃を受け止めてしまった。

「な、にっ！？」

弘明は愕然と口を開く。まるで金属バットで衝撃を吸収する物体を思い切り叩きつけたような感触だった。弘明が斬撃に込めた力が見事に地面へと受け流された証左である。

すると、弘明は思わず太刀を握る手に込めた力を緩め、いったん身を引こうとしてしまった。瞬間、リオは押し相撲の要領で剣を振るい、怯んだ弘明を後方へと押し飛ばしてしまう。

「うおっ！？　っとと！」

弘明の体はふわりと宙を浮かぶと、バランスを崩して地面に降り立った。リオならばその隙に間合いを埋め返し、喉元に剣を突きつけることもできるが、あまりあっさりと勝負を決めてしまってはクリスティーナの要望に応えたことにはならない。

だから、リオは微笑して弘明を見据えた。弘明が自信満々に勝負を初撃で決めるつもりだったことは、リオも薄々と理解している。それをあっさりと防がれたのだ。弘明の性格を踏まえれば、思惑を見透かしたように不敵な笑みを浮かべるだけでも、挑発としては十分な効果を発揮するだろう。

「っ、野郎……！」

弘明は案の定、ムキになってリオに向かって再突進した。太刀を低く構え、地を這うようにリオへと接近していくと、思い切りよく斬りかかる。

しかし、弘明の太刀はリオの剣によってあっさりと弾かれてしまった。重い金属音が練兵場に響き渡る。だが――、

「っ、らああ！」

弘明は怯まない。太刀を握る手に力を込めると、思い切り刀を振り回し始めた。その速度はまさしく目にも止まらず、幾重もの剣閃がリオへと迫る。

だが、リオは弘明の攻撃をすべて見切り、剣を振るって淡々と斬

撃を弾き続けた。金属のぶつかり合う音が断続的に響き渡る。

「お、おお……」

ギャラリーは大半が言葉を失っていた。弘明が果敢に剣を振るっていることはわかるが、無数の斬撃は一撃としてリオに届くことはない。

リオは一所(ひとところ)に留まって、弘明に応戦していた。まるで壁でもあるかのように、弘明の太刀の侵入を阻んでいる。それは剣の結界だ。リオは弘明が振るう太刀の軌道をすべて見切り、攻撃を弾き続けている。

(動きは速い。けど、それだけだ)

そう、弘明はスピードこそ速いが、技術がまるで伴っていなかった。だから、何をしようとしているのか簡単にわかる。自分で処理しきれない身体能力を手に入れた戦士の典型例だ。リオは淡々と剣を動かしながら、弘明の実力をそう分析した。

現状、ギャラリーから見て攻めているのは弘明だが、弘明が押しているようには見えないことは明らかだろう。それを裏付けるかのように、弘明の顔つきは感情的になっており、対照的にリオの顔つきは落ち着き払っている。そもそもリオは手合わせが始まってからその場を動いてすらいないのだ。

だが、これだけではまだクリスティーナの要望に応えたことにはならない。リオはここからどのように手合わせを終わらせるかを考えた。

すると、弘明はいったんバックステップを踏んで、リオから距離をとる。そして、忌々しそうな顔つきでリオを睨んだ。

「おい。随分と涼しい顔をしているじゃねえか」

と、不愉快そうに言い放つ弘明。

「勇者様こそまだ本気ではないのでしょう？」

リオはしれっと弘明を挑発した。

「っ……、あー、まあ、俺の神装、ヤマタノオロチは特別製でな。身体強化を強くしすぎると騎士が俺の動きについてこられないから、自然と能力をセーブするようにしていたんだが、お前はそれなりに戦えるようだな。まあ、あくまでもそれなりにだが。いいぜ、リミッターを外してやる。本気でやろうか」

弘明はまんまと挑発に乗ったのか、饒舌に語って本気を出すと宣言する。今の発言は審判のアルフレッドも聞いているから、負けた時に本気を出していなかったと言い訳をすることもしづらくなった。

「では、お付き合いしましょう」

リオはそう応じて、自然体で剣を構える。まだまだ実力の底は見えない。

「はっ、その余裕がいつまで持つかなっ！」

弘明はそう言うや否や、リオに突進した。その速度は先ほどまでよりも一段と速い。しかし、動き出しを見切られていることに変わりはなかった。

リオはその場から動かず、再び弘明を迎え撃つ。速度が大幅に向上した弘明の攻撃にも難なく対応してみせた。

「っ……！」

弘明は初撃があっさりと防がれると、意外そうに目を見開く。だが、動きを止めることはせずに、先ほどと同じように剣を振り回して斬撃のラッシュを放ちだした。

だが、それらが一撃でもリオの身体を捉えることはない。やはり、あたかも不可視の結界でもあるかのように、弘明の太刀は弾かれてしまう。

「く、そがっ！」

攻撃が通る気がまったくしない。弘明はそんな感覚を抱くと、苛立たしそうに顔をしかめる。そして、神装でさらなる身体能力を引き出し、リオに斬ってかかった。

「流石ですね、まだ速度が向上するのですか」

と、リオは涼しい顔で弘明を賞賛する。ちなみに、リオは精霊術による身体強化を最初の状態から強めてはいない。弘明の動きが速くなったところで、二人の技術差が埋まったわけではないからだ。わざわざ強化の度合いを強めずとも、弘明をあしらうことは簡単だった。

とはいえ、リオの賞賛は本心からの発言である。リオも驚くくらいに、弘明の身体強化は強くなり続けているのだ。だが――、

「じゃあ、それにあっさり対応しているテメエは何だよ？　ああ！？」

弘明はリオの賞賛を本心によるものだと受け取らなかったようだ。声を荒げ、リオに食ってかかる。

「恐れながら、勇者様は身体能力に頼り切った戦いをしているようにお見受けします」

リオはよどみない口調で、弘明に足りていないものを暗に示唆してやった。

「っ、俺の剣術が駄目だって言いたいのか！？」

「いえ、勇者様の戦い方は剣術を会得した人間のものではありません。誰かに剣術を習ったことなどないのでしょう？」

「っ、黙れ！」

弘明は激高したのか、ひときわ強く剣を振り払った。しかし、あっさりとリオに太刀の軌道をずらされ、明後日の空間を空しく切り裂いて終わる。

すると、弘明はさらにムキになり、今まで以上に雑に剣を振り回し始めた。弘明が激高しているのはギャラリーから見ても明らかで、その理由がリオにあしらわれているからであろうということは一目瞭然だった。

「正直に申し上げましょう。私は弘明様を含め、これまでに三人の勇者様と武器を交えたことがありますが……」

リオは弘明の攻撃を受け流しながら、流麗に語る。

「黙れと言っている！」

弘明はリオが喋るのを阻止しようと、大声で怒鳴った。しかし――、

「弘明様が、最も弱いです」

と、リオは弘明に宣告する。

「テ、メェ……、今、なんて言った？　今、なんて言ったあああああ！？」

怒髪衝天（どはつしょうてん）。弘明は一瞬、真顔になると、しかる後、醜悪に顔をゆがめた。そして、今日一番の怒りを見せて、リオに斬りかかる。しかし――、

「な、にっ！？　っ……」

手合わせが始まってからほとんど動かなかったリオだが、ここでようやくその場から姿を消す。弘明は怒りで視界が狭まっていたこともあり、リオの姿をあっさりと見失ってしまった。

一方、リオは弘明の背後に回り込んでいて、背中から剣を突きつける。背後からチャキッと金属音が響き、弘明もその事実に気づいて硬直した。

「まだ続けたいというのならお付き合いしますが、これで終わりにしてもよろしいでしょうか？」

これ以上はやるだけ無駄だ。リオは言外にそう言わんばかりに、弘明に問いかける。

「っ……」

弘明はギリッと歯を食いしばった。よく映画などで背後から武器を突きつけられた時、自分ならば余裕で対処できるはずだと日頃か

ら思っていた弘明だが、現実は無情である。リオが自分を殺すことはないとわかってはいるが、ここからどうあがこうが状況が覆る気がしない。リオとの実力差を本能で感じ取ってしまったのだ。もはや動くことはできなかった。

また、既に勝負が付いていることは、ギャラリーの目から見ても明らかである。誰もがリオの実力を目の当たりにして、これならば王の剣であるアルフレッドに勝利したのも頷けると、息をのんでいた。すると――、

「そこまで！　この手合わせ、アマカワ卿の勝利とします」

審判のアルフレッドが手合わせの終了を宣言する。少し遅れて、練兵場には大きな歓声が響き渡った。

第１８２話　リオＶＳ坂田　ラウンドⅡ

「そこまで！　この手合わせ、アマカワ卿の勝利とします」

と、審判のアルフレッドは手合わせの終了を宣言する。

アルフレッドの声はギャラリーにまで届いたわけではない。だが、背中からリオに剣を突きつけられ、太刀を手にして硬直する弘明の姿を見れば、勝負がついたことは誰の目から見ても明らかだった。

ハイレベルかどうかはともかく、動きが速い見た目が派手な戦いは、日常に刺激がない文民の王侯貴族にとってはこの上ないストレス発散の娯楽となる。

勝者のリオを讃えるべく、練兵場には大きな歓声が響き渡った。とはいえ、ややあって興奮が冷めてくると、あのプライドの高い弘明が負けてしまって本当に大丈夫なのだろうかという不安や疑念もこみ上げてくる。

しかし、レストラシオンの最高責任者であるクリスティーナが上機嫌な笑みをたたえて拍手をしている姿を見ると、その懸念もとりあえずは霧散した。

「いやはや、見事な手合わせでしたな」

「ええ、アルフレッド卿を退けたというアマカワ卿の実力は本物だったということですか」

「とはいえ、勇者様も負けはしたものの、よく奮闘なさっていた」

「魔剣を所持して実戦慣れもしているアマカワ卿が相手では、いささか分が悪かったということなのでしょうが、実戦を視野に入れるのならば、やはり経験が不足していることが今後の課題になりそうですな」

などと、ギャラリーの貴族達は空気を読んでリオと弘明の両者を褒め称える。しかし――、

「ぐっ……」

弘明は全身を震わせながら、太刀を握る手にギュッと力を込めていた。遠くにいるギャラリーの歓声がリオだけを称えるように聞こえて、ひどく惨めな気分になる。こんな屈辱を感じたのは、この世界に来て初めてのことだった。一方、リオは静かに一礼をして、ギャラリーの歓声を受け止めている。

（野郎……）

弘明は恨みがましそうにリオを睨みつけた。観衆の面前で自分に恥をかかせたリオが許せない。リオは涼しい顔で手にした剣を鞘に収めようとした。すると――、

「っ、待てよ！　お前、この俺が勇者の中で一番弱いと言ったな？　俺はまだ全力を出していないぜ？」

弘明はいてもたってもいられなかったのか、衝動でそんなことを言う。

「……リミッターを外してやる。本気でやろうか、と仰っていたはずですが」

リオは鞘に剣を収めると、目をみはって応じた。戦闘中に弘明自身が大見得を切って宣言した発言だ。

「あっ、あれは……、剣技での戦いに限っての話だ！　勇者の真価

は神装の特殊能力を引き出してこそ発揮される。だから、俺は全力じゃなかったんだ！」

流石の弘明も自分の発言を覚えていたようだが、リオに指摘されるまでは完全に失念していたのか、ひどくバツが悪そうに弁明した。

とはいえ、それは負け犬の遠吠え、ただの子供の言い訳と何ら変わらない。弘明もそのことを薄々と自覚しているのか、身の置き所がなさそうにリオから顔を背けてしまう。

「つまり、剣技だけで戦うのであれば、あれが全力だったと？」

リオは弘明の駄々に呆れることはせず、真面目に問いかけた。まさしくリオの言う通りだったが――、

「っ……、俺はお前が勇者の中で俺が一番弱いと侮辱したことが許せないんだ！」

弘明は素直に頷くことができず、論点をずらして反論した。

「弘明様もご存じのお方でしょうから、あえて例に出しますと、仮に今の手合わせと同じルールで沙月様と弘明様が戦われた場合、勝利するのは十中八九、沙月様になるはずです」

「なん、だと？　俺が、あんな、女なんかに負けるって言うのか？」

リオが沙月を例に挙げて推測すると、弘明はわなわなと身体を震わせる。

「ええ、負けます。身体能力は同等でも、武器を扱う技量に大きく差がありますので。弘明様は身体能力に任せて闇雲にその剣を振り回すだけで、十全に使いこなせていないようにお見受けしました」

「神装の能力を使えば俺が勝つ！」
「結局はそこへ行き着くわけですか。神装の能力が同等だとすれば、武器を扱う技量で負けている以上、勝敗はそう簡単に変わらないと思うのですが……」
リオは流石に呆れを覗かせて語った。
「まあ、やってみなけりゃわからないわな」
と、弘明はムキになって言う。
（思った以上に強情だな。どこからこれだけの自信が沸いて出てくるんだ？　いや、単に見栄を張りすぎて引き下がれないだけか？）
だとしたら、リオの想像以上に弘明は面倒くさい男なのかもしれない。所詮は何度か会っただけの相手だ。リオが弘明の人柄を完全に把握していないのも無理はない。
とはいえ、このままだとクリスティーナの要望を十分に満たしたことにはならない懸念がある。リオはどうしたものかと考えながら――、
「然様でございますか。確かに、やってみなければわかりませんね。正しい戦い方を学ばれた方が強くなられるのではないかと愚考したのですが、弘明様に限ってはそうではないのかもしれません」
しれっとした口調で、そう言ってみせた。そして、鞘にかけていた手を離し、戦闘態勢を完全に解いてしまう。
「……待てよ。今度は俺の全力を見せてやる。第二ラウンドと行こうぜ？」

弘明はこのままで終わらせて堪るものかと、リオに再戦を申し込む。

「ははは、ご冗談を。それではルールの変更が必要不可欠となるではありませんか。クリスティーナ王女殿下がお許しになるはずがありません」

リオは審判役のアルフレッドを見やりながら、そう語る。

「俺は勇者だ。その俺が許す」

弘明はすかさず断言した。だが――、

「……」

リオは静かにかぶりを振ると、そのまま踵を返そうとする。

「っ、おい、逃げるのか！？」

弘明は焦り顔でリオを呼び止めた。このままでは自分が恥を掻かされただけだ。なんとしても自分の力をギャラリーに見せつけて、リオを負かすことでプライドを守る必要があった。

「逃げるも何も、今の手合わせは私の勝ちで終わったはずですが」

リオはこれ見よがしに肩をすくめる。勝者が逃げる道理などない、と。

「っ……、本当の力を解放した俺には勝てないからだろ？」

弘明は必死だった。リオを挑発しようと、子供みたいないちゃもんをつける。リオに話を誘導されているとも気づかずに……。

「では、次の手合わせで私が勝利した場合に一つ、勇者様に条件をお呑みいただけるのであれば再戦いたしましょう」

「……何だと？」

「この手合わせをお望みになっているのは他ならぬ弘明様です。クリスティーナ王女殿下のお顔を立てるためにも一度は無条件で手合わせをお受けしましたが、連続での手合わせを望まれるのであれば、そのくらいの褒美は頂戴したく存じます」

リオは手合わせを望んでいるのが弘明であることを指摘した上で、ここぞとばかりに条件を提示した。

「……どんな条件を提示するつもりだ？」

弘明は訊いて、警戒した面持ちでリオを睨む。

「別に弘明様に実現不可能なことをお願いするつもりはございません。それが実現可能かどうかも第三者に判断してもらっても構いません。ごく簡単なお願いです」

リオは無理難題をふっかけるつもりがないことを強調して、にこやかな笑みを浮かべた。すると――、

「……まあ、いいだろ。万が一、俺に勝てるんなら、その程度の頼みは聞いてやらんでもない」

弘明は神装の能力を発揮して戦いさえすれば負けるはずがないと

高を括っているのか、プライドの高さゆえに細かく確かめることを嫌ったのか、条件を呑み込んだ。そして――、

「そういうわけだ、審判。次は神装の能力使用もありで模擬戦をする。ああ、お前も魔剣の力を使用しても構わないぜ？　ま、神装には遠く及ばない性能だろうが……」

ふふんと笑って、アルフレッドとリオに語りかけた。

「……本当によろしいのですか、アマカワ卿？」

アルフレッドは小さく嘆息すると、リオに最終確認をする。

「ええ。悪いようにはしません」

リオはしっかりと頷いた。

「承知しました。それでは、双方、距離をとって構え直してください。神装と魔剣の能力使用もありとのことですが、加減にはくれぐれもご注意を。相手を問答無用で即死させる威力の攻撃はお控えください」

アルフレッドはリオに対して一礼すると、再び審判としての役目を全うする。

「承知しました」

「ま、肉体は強化されているわけだしな。生半可な攻撃じゃ動きを捕捉することもできん。相応の威力の攻撃は勘弁してもらうぜ。無論、殺さない程度にはきちんとコントロールするがな」

手短に頷くリオとは対照的に、弘明は念入りにグレーゾーンの線引きをした。

（まあ、ある程度は好きにやらせておくか）

その方が今度こそ後で言い訳もできなくなる。リオはそう考え、細かく異議を唱えることはあえてしなかった。すると――、

「どうやら神装の力を発揮した俺に勝てるつもりらしいが、俺が勇者の中で一番弱いと言ったあの発言、すぐに撤回させてやるぜ？」

距離をとろうと歩き出したリオの背中に、弘明が声をかける。

「それは楽しみです」

リオはフッと微笑して応じた。そして、セリアがいるであろうギャラリーの群れに視線を向ける。ギャラリーは再戦の流れに移っているらしいことを察して、少なからず困惑しているようだ。とはいえ、楽しみでもあるのか、浮き足立っているようにも見える。そんな中、セリアはクリスティーナやフローラのすぐ側に立っていて、ハラハラとした顔つきでリオを見つめていた。

「準備はよろしいですか？」

と、リオと弘明に確認するアルフレッド。

「いつでも構いません」

リオはセリアを見やって笑みを浮かべると、アルフレッドに準備が完了した旨を告げる。

「俺も構わん」

弘明も準備は完了したようだ。既に体内で魔力を練り上げていて、試合開始と同時に大規模な攻撃を仕掛けようとしている節が窺える。魔力を可視化できるリオには、弘明の体内からあふれ出ている魔力は丸見えだった。

すると、ややあって――、

「始め！」

アルフレッドが再び試合開始を宣言した。と、同時に、弘明は太刀を上空に向けて突き立てる。

「俺がこの太刀をヤマタノオロチと名付けた理由、見せてやるぜ！」

と、弘明が叫ぶと、切っ先から膨大な量の水塊が射出された。水塊はそのまま上空へと舞い上がっていき、五本の水流へと分裂していく。

（事象の規模は上級魔法に匹敵する。加減には気をつけろとアルフレッドさんが念押しして注意していたのに、本当にギリギリのラインを攻めるな。八岐大蛇は八つの首を持つ竜の怪物、だったか？けど、水流は五つに分裂した。八つの水流を放つから八岐大蛇なんじゃないのか？　それとも、能力を隠している？）

リオは前世で聞きかじったことがある八岐大蛇の伝承を思い出すと、弘明の能力を即座に分析した。一方――、

「ちっ……、やはりこの技は難易度が高いか」

弘明は上空へ舞い上がって分岐した水流の数を見て、不満そうに舌打ちをして呟く。本当はリオの推測通りに八つの水流へと分裂させるつもりだったが、弘明の技量が未熟で思った通りに事象を発動できなかったのだ。

とはいえ、五つの水流一つ一つの威力は、中級上位の攻撃魔法に勝るとも劣らない威力が込められている。水流が飛翔している速度を考えれば、肉体を強化していない生身の人間が当たれば即死は免れないだろう。五つの水流の先端は竜の顔を模倣しており、それぞれが意思を持っているかのように空でうねっている。

「っ……」

ギャラリーの王侯貴族達は誰もが竜を模した水流に圧倒されていた。

（対人戦闘の手合わせで使用する威力じゃないわ。何を考えているのよ、あの勇者は！？　いくら魔剣で肉体の強度を高めているからって、当たっても大丈夫なんでしょうね？）

クリスティーナは焦燥し、審判役のアルフレッドを見据える。アルフレッドもクリスティーナを見つめ返しており、無言でこくりと頷いていた。

「はっ、いくぜ！　今度こそ瞬殺されなきゃいいがな！」

弘明はどう猛な笑みを刻むと、剣を振り下ろす。その動きに応じるように、上空の水流も急降下を始め、リオをめがけて一斉に襲いかかった。

リオは五つの方位から迫る水流に視線を巡らせると、チラリと弘

明を見やった。

（本人は隙だらけだな。この隙に直接攻撃するか？　いや……）

ここまで隙だらけだと、罠の線も疑うべきだろう。完全にリオの思い過ごしだが、八岐大蛇の伝承と一致しない水流の数がリオを警戒させた。それに、あまりにもあっさりとした幕切れだと、弘明がまたしても駄々をこねかねない。なので、少し様子を見てみることにした。

直後、竜頭を模した水流がリオを飲み込もうとする。リオはギリギリまで引きつけると、超反応でその場を離れた。すると、一瞬遅れて、五つの水流がつい今し方までリオが立っていた位置で衝突して、盛大な衝撃音と共に水柱を上げる。そのまま水はコントロールを失って崩壊するかと思われたが――、

「はっ、躱したか。だが、こんなもんじゃないぜ！？　勇者が身を置く戦いのステージはお前ら凡人のそれとは違う」

弘明が剣を振るうと、衝突して爆散した水塊は再び五つの水流に分岐した。竜頭を模した五つの水流はそのまま上空へと舞い上がる。自分の力を思う存分に見せつけることができて先の戦いでの屈辱は忘れたのか、弘明はすっかり調子を取り戻していた。一方、リオは冷静に弘明が操る事象を分析していて、上空を飛翔する水流を見上げている。

（術者が事象を遠隔操作するタイプの攻撃か。精霊術と同じだ）

遠隔操作型の精霊術の弱点は術者が身動きを取りづらくなるということだ。技量が未熟だと操作するので精一杯で、歩くことすらできなくなってしまう。

「乗ってみろよ、このビッグウェーブに！　だが、迂闊に触れると溺死するぜ？」

弘明はリオを飲み込んでやろうと、安全地帯から巧みに水流を操作する。今度は五つ同時にリオを攻撃するのではなく、それぞれの水流が衝突しないようばらばらになって断続的な攻撃を加えようと試みた。

しかし、リオは軽やかに動き回り、水流を危なげなく躱していく。その様はさながら超スリリングな曲芸のようで、ギャラリーは見た目の派手さに次第に歓声を上げ始める。一方――、

（事象の規模が大きすぎて、人型の相手を攻撃するには不向きな技だな。馬鹿正直に突っ込んでくるだけで、動きも捻りがないから、簡単に対応できる。これなら津波を生み出して真正面から攻撃した方がまだいい）

と、弘明の攻撃を評価するリオ。見た目の派手さと一撃一撃の威力は確かに脅威だが、それ以外の部分があまりにもお粗末だった。一本一本の速度をもっと上げるか、自由自在にコントロールできなければ何の脅威でもない。

「ちっ！　羽虫みたいにすばしっこい野郎だ。矮小すぎるってのも問題だなあ、おい！　だが、避けるので精一杯ってところか？　さっきの発言を謝って負けを認めるなら、勘弁してやるぜ？」

弘明は飄々（ひょうひょう）と攻撃を躱すリオを見て忌々しそうに舌打ちをすると、嘲笑を刻んでリオに降参を勧告する。だが――、

「……」

リオは顔色一つ変えずに、黙々と弘明の攻撃を躱し続けていた。一応、弘明にまだ何か隠し球があるのではないか探るべく、あえて好きなように攻撃をさせる。そうして、しばし弘明の一方的な攻撃が続いた。

しかし、時間が経てば経つほどに、リオは無駄のない動きで弘明の攻撃を躱すようになっていく。弘明の攻撃パターンを完全に暗記してしまったのだ。次はどのように攻撃してくるのか、手に取るようにわかる。

（別の手を打ってくるわけでもない。これ以上は何もない、か。警戒する必要もなかったな）

これが弘明の全力なのだろう。リオはそう判断すると、そろそろ勝負を決めるべく行動を開始することを決めた。

（くそっ！　何で当たらねえ！？　やっぱり五本じゃ数が足りないのか？）

弘明はじれったそうな顔つきで、水流を操る。もっと必死に逃げ回る姿を想像していたのに、リオは難なく攻撃を躱し続けていた。当初こそ避けるので精一杯なのだと思っていたが、そんな様子は微塵もないので、流石に違和感を覚え始める。

しかし、時既に遅し。ある時、リオは攻撃を躱しながら、弘明をじろりと見据えた。

「っ！？」

弘明はリオと視線が合い、びくりと身体を震わせる。と、同時に、リオは弘明をめがけて走り出していた。弘明は慌てて水流を操作し、

リオの接近を妨害しようとする。
すると、五本ある水流の内、三本が上空で旋回して、左右と正面からリオに襲いかかった。水流はリオを飲み込むように衝突し、大量の水がぶつかり合って爆散する。

「やったか！？」

と、歓喜の声を上げる弘明。普段ならばそんなフラグを立てるようなことは言うなと説教をしているであろう台詞だが、この時ばかりは言わずにはいられなかった。
ギャラリーの王侯貴族はとんでもない水の衝撃波を目の当たりにして、ざわりとどよめく。しかし、その次の瞬間――

「っ……」

弘明は愕然と息を呑む。背後から腕が伸びてきて、自分の喉元に刃を押し当てられていることに気づいたのだ。もちろんその相手はリオである。

「大規模な事象の攻撃は死角が生まれやすい。使用する場面はよく考えた方がよろしいですよ。何か罠でもあるのかと思えば、本人もこうして隙だらけです」

と、リオは弘明の耳元で淡々と忠告した。すると――、

「っ、ぐっ……」

弘明は完全に言葉を失ってしまう。どう考えても決定的な敗北の瞬間だ。しかし、心がそう認識することを拒絶する。すると、怒りと悔しさが途端にこみ上げてきて、訳がわからなくなってしまいそ

うだった。暴れたくて仕方がないが、首元に押し当てられた刃がそれを許さない。
完全に弘明の負けだった。審判のアルフレッドもそのことを宣言しようと、手を振り上げて勝者であるリオを指し示そうとしたが――、

「きゃあああ！？」
「こっちに来るぞ！？」

突然、ギャラリーが悲鳴を上げる。弘明が操っていた五本の水流の内、残っていた二本がコントロールを失い、ちょうどギャラリーが集まる地点へ向かって自由落下し始めたのだ。

「勇者様、今すぐにあれのコントロールをしてください」

リオはすぐにそのことに気づくと、操作者の弘明にコントロールを促したが――、

「……あ？」

弘明はリオの声に耳を傾けるのが嫌なのか、鈍く反応する。拳を強く握りしめて俯き、わなわなと身体を震わせていた。その瞬間、リオは弘明を頼ることを諦める。今は一秒ですら惜しい。

「っ！」

リオは弘明の喉元から腰元に剣を戻すと、力強く地面を蹴った。向かう先はもちろんセリアがいるギャラリーのもとである。風の精霊術を即座に発動させて、最高速度まで一気に加速していく。
すると、リオは落下する水流を上回る速度でギャラリーの手前ま

で移動し、二つの水流に向き直った。リオが手にした剣はいつの間にか膨大な魔力を纏っていて、凝縮された暴風を帯びている。
ギャラリーはリオが一瞬で近づいてきたことに気づくと、揃いも揃って目をみはった。リオは剣を構えて水流の一つに切っ先を向ける。そして、刀身に纏わせた暴風を切っ先へと圧縮させていき――、

「っ！？」

風の精霊術でコーティングした魔力の流弾を、切っ先から射出した。魔力の流弾は目にも止まらぬ速度で飛翔し、迫りくる水流の竜頭と胴体を真正面から粉々に吹き飛ばす。そして――、

（もう一つ）

リオは残った最後の水流を見上げると、再び剣に暴風を纏わせた。そのまま地面を蹴って高く跳躍すると、暴風を剣の切っ先から射出して推進力とし、落下してくる水流へと接近する。
そうして、リオと水流の竜頭が空中で交差する直前、リオは下段から思いきり剣を振り上げた。と、同時に刀身にさらなる魔力を流し込み、暴風の威力を高める。その次の瞬間――、

「っはあああ！」

暴風を帯びて間合いを延長させたリオの剣と、水流の竜頭が真正面から衝突した。リオは圧倒的な質量の水流に押しつぶされないよう、精霊術で暴風を硬質化させる。そして、圧倒的な瞬間出力で水塊を吹き飛ばした。
すると、水塊は無数の水滴となって、周囲に吹き飛び落下し始める。

「《大風撃魔法(ビッグエアスラスト)》」

地上にいたセリアはクリスティーナやフローラの前に躍り出ると、上空の水滴めがけて風系統の攻撃魔法を使用した。直後、セリアの手元に巨大な魔法陣が浮かび上がり、そこから強力な風が広範囲に向けて射出される。無数の水滴は明後日の方向へと吹き飛ばされていった。少し遅れて、リオが地面に着地すると――、

「おおおお！」

ギャラリーから本日二度目の歓声が響き渡る。一方、弘明はいまだに練兵場の中央付近で所在なさげに立ち尽くしていた。

（疲れたな。本当に）

リオは弘明を見やると、苦笑して安堵の息をつく。すると、クリスティーナとセリアが小走りでリオに近づいてきた。フローラとヴァネッサもその後を追いかけて、リオのもとへ迫る。

「アマカワ卿、大変お手数をおかけしました」

クリスティーナは声が届く範囲まで近づくと、すかさずリオに声をかける。

「こちらこそ、お騒がせをしました」

と、頭を下げるリオ。

「いえ、見ていただけでもおよそ事のあらましは把握しておりましたので」

クリスティーナはそう言って、ひどく嘆かわしそうに顔を曇らせた。

「詳細は後ほどお話ししますが、神装や魔剣の能力使用もアリでの手合わせを行うことになりました。その結果がこれです」

「ごねたのは勇者様なのでしょう？　加減や制御を誤ったのも勇者様です」

「それは、アルフレッド卿からもお話をお聞きくださいませ」

リオはそう言って、審判役のアルフレッドといまだに立ち尽くしている弘明を見やる。

弘明はリオ達に視線を向けられたことに気づくと、びくりと身体を震わせた。自分のしでかした不始末によってあわや大惨事になりかけたことを理解しているのか、ひどくバツが悪そうに目を泳がせている。

「悪いことをした、という自覚はあるようですね」

クリスティーナはそう言って、大きく溜息をつく。

「最初の手合わせの最中に少しキツめの言葉を申し上げて、二度目の手合わせで私が勝利すれば一つ条件を呑んでもらうという約束を取り付けたのですが、今の手合わせが有効であるのなら、クリスティーナ様がその条件をお考えください」

と、リオ。弘明が今の出来事を受けて本当に反省しているのならば、少しは人の話に耳を傾けることもできるだろう。

「……そこまでご配慮くださり、誠にありがとうございます」

クリスティーナは深々と頭を下げた。

「いえ、どうぞ勇者様のもとへ」

リオはスッと手で示し、クリスティーナに弘明のもとへ向かうよう促す。

「恐れ入ります。後のことは私にお任せくださいませ。ヴァネッサ、貴方は親衛隊の子達と一緒にこの場の解散を促して。アマカワ卿とフローラ、それとセリア先生はこの場でお待ちください」

クリスティーナはリオに一礼すると、必要な指示を出して弘明のもとへ向かう。

「はっ！」

ヴァネッサも機敏に返事をすると、すぐに部下と一緒にギャラリーの誘導を始める。その場にはリオとセリアとフローラの三人だけが残されることになった。すると――、

「ハルト、怪我はない？　大丈夫？」

セリアがすかさず、リオの身を案じる。

「治癒しますので、痛いところがあれば仰ってください」

フローラもリオに歩み寄り、治癒を申し出た。

「ありがとうございます。ご覧の通り、無傷ですので」

リオは微笑して礼を言うと、身体を動かして無事であることを示す。すると、周囲にいた貴族や令嬢達がそそくさと近づいてきて、リオに声をかけてきた。だが――、

「皆さん、アマカワ卿はお疲れです。さあ、城内へお戻りを。クリスティーナ王女殿下のご命令です」

ヴァネッサはリオに人が群がろうとしていることに気づくと、そそくさと解散を促す。いずれもこの機会にリオとお近づきになろうと考えた者ばかりだが、クリスティーナ直々の命令という大義名分がある以上は、あからさまに不満を表明するわけにもいかない。そうして、人波はすぐにはけていった。

とはいえ、レストラシオンを代表する高位貴族であるユグノー公爵とロダン侯爵の二人はその場に残り、人波が完全にはけたタイミングでリオに近づいてくる。

「いやはや、見事な戦いだったよ、アマカワ卿。勇者様の実戦経験が不足していることを踏まえても、君ほどの使い手はそうはいないと確信できた」

「ええ、アルフレッド卿を退けたというその実力、確(しか)と目に焼き付けた。年甲斐もなく心が躍ってしまいましたな。いや、本当にお見事」

今回の手合わせについては様子見を決め込んでいたのか、終始傍観していた二人だったが、それぞれリオを賞賛し始めた。ある程度、状況が進行したこのタイミングで声をかけてくる辺り、実に抜け目がない。

「過分な評価を賜り、恐れ入ります」

リオは愛想笑いを貼り付けて、謙虚に受け答える。すると、クリスティーナが弘明と審判役のアルフレッドを引き連れて近づいてきた。

「アマカワ卿、お待たせいたしました。勇者様が今回の手合わせでお騒がせした件で、まずはアマカワ卿に謝罪したいとのことです。お時間を頂戴してもよろしいでしょうか？」

クリスティーナは開口一番に、そんなことを言う。

「……ええ、それは、もちろん構いませんが」

リオは頷きながらも、少しだけ意外そうに目を見開く。この短時間で弘明に謝罪を強いることができたとは、いったいどんな話を繰り広げてきたとのかと思ったからだ。あるいは、リオが思っている以上に弘明も反省しているのかもしれないが……。すると――、

「……悪かったな」

弘明は小声で、ぼそりとリオに謝罪して頭を下げる。だが――、

「勇者様、もう少し大きな声で。何が悪かったのか、ご自分で仰ってください」

と、クリスティーナは嘆息して弘明を注意する。

「……俺の不始末で、手間をかけさせた。一歩間違えれば大惨事になっていたと、クリスティーナに叱られた。調子に乗って、加減を間違えた」

弘明はそう言って、ギュッと唇をかみしめた。それが敗北の悔しさによるものなのか、自らの行いに対する後悔によるものかは、リオにはわからない。

「いえ、大事には至らなかったのが幸いでした」

とりあえず、リオは無難に応じることにした。

「本当に申し訳ございませんでした。大変勝手で恐縮ですが、今の勇者様は少なからずショックを受けているようですので、ひとまずこの場も解散させていただいてよろしいでしょうか？　もう少し、勇者様とお話もしたいので」

クリスティーナは弘明の代わりに話を進め、いったんこの場をまとめようとする。

「ええ、無論です」

リオは二つ返事で了承した。すると――、

「では、明日にでも使者を出しますので、今日のところはご自宅でごゆるりとおくつろぎください。屋敷まで送迎させますので。ヴァネッサ、すぐに馬車の手配を」

クリスティーナはさっさと話を進行させてしまう。今の状況で、ユグノー公爵達に介入する隙を与えたくないのだろう。

「はっ！　では、アマカワ卿、セリア君、どうぞこちらへ」

ヴァネッサもクリスティーナの意を汲んで、リオとセリアの案内をすぐに開始する。そうして、リオとセリアはいったん屋敷へと戻ることになった。

第183話　述懐（あとがき追記）

クリスティーナが弘明を引き連れてその場を立ち去った後、リオは他の面々に別れを告げ、セリアと一緒に屋敷へ帰宅した。帰宅後は普段着に着替え、二人きりでリビングでくつろぐことにする。

「お疲れ様でした、先生」

リオはソファに腰を下ろして手ずから淹れたお茶を口に含むと、向かいのソファに座るセリアに語りかけた。

「もう、それはこっちの台詞でしょ」

セリアは呆れがちにリオに応じる。

「いえ、顔色から少し疲れているのかなと思ったので」

「……まあ、気疲れはしたわね。勇者様が神装の能力を引き出してからは特に。見ていて冷や冷やしたし」

と、セリアは呆れの色を覗かせて、弘明の行いに苦言を呈した。

「あはは、アレは俺から挑発したところもあるので。肉体を強化していましたし、ああ見えて加減もされていたようなので、直撃しても死にはしない程度の威力でしたよ」

もっとも、生身の人間が直撃すれば即死は免れない威力ではあったが……。リオはそのことには触れず、飄々（ひょうひょう）と笑って語る。

「それにしたって……、まあ、貴方がそう言うならいいのかもしれないけど。クリスティーナ様からそれとなく話は伺ったわ。アレだけわかりやすく衆目に晒されて敗北すれば、流石の勇者様も言い訳はできないでしょうしね。神装のコントロールを誤って、最後はすっかり縮こまっていたし」

セリアは何か思うところがあるのか、ムッと唇を尖らせて語った。

「今頃はクリスティーナ王女殿下にこってり絞られていそうですね」

「当然よ。貴方に迷惑をかけただけで飽き足らず、危うく観客に被害が出かけたんだから。しっかりと叱ってもらわなくちゃ」

と、セリアはリオの代わりに憤る。

「まあ、あまりやりすぎるとクリスティーナ様と勇者様の関係が悪化しかねませんから、塩梅は難しいのかもしれませんが……」

「それは、そうだけど……。今回はクリスティーナ様もかなりお怒りのようだし、関係悪化のリスクも承知の上でしょうから、かなりきつくお叱りになると思うわ」

「では、勇者様のことは殿下にお任せしましょう。セリアも俺のためにそこまで怒らなくても大丈夫ですから、この話はこの辺りで」

リオはフッと優しく笑うと、弘明の話をあっさりと流してしまう。

「本当、ドライよね、貴方。……わかったわ」

セリアはジト目でじっとリオを見つめると、やれやれと嘆息して肩の力を抜いた。

「まあ、今は他に話したいこともあるので」

と、リオ。

「……話したいこと？」

セリアは微妙に身構えて、向かいに座るリオの顔をじっと見つめる。

「昔のこととか、ここしばらく何をしていたのかとか、少し俺のことを。あまり面白くない話になってしまうんですが、もしよかったら聞いてくれませんか？」

リオはじっとセリアを見つめ返して問いかけた。

「……う、うん。でも、いいの？」

セリアは恐る恐る頷いて訊き返す。学院時代で一緒にいた頃から、セリアはリオがスラム街で暮らしていた頃の話には触れないようにしていた。決してリオの過去が気にならないというわけではない。リオにとっては辛い過去だろうから、自分から訊きだす気にはどうしてもなれなかったのだ。

「ええ。昨日、フローラ王女殿下をお救いした経緯をクリスティーナ様にご報告した時に少しお話をしましたからね。こういった機会でもなければ、あまり話そうとは思わない気がするので。もちろん、セリアが聞きたくないのなら無理にとは言いませんが」

リオはそう語って、微かに翳（かげ）りのある笑みを覗かせた。だが――、

「聞きたい、聞きたいわ。リオのこと。聞かせて頂戴」

セリアはしっかりと自分の意思をアピールする。

「わかりました」

と、リオは頷くと――、

「俺がベルトラム王国の王立学院に入る前に、七歳までスラム街で暮らしていたことはご存じですよね？」

早速、話を始めた。

「……うん」

セリアはこくりと首を縦に振る。

「俺がスラム街で暮らすようになったのは、五歳の時です。その原因を作った男がルシウス。俺の両親を殺した男でした。ここまで言えば、おおよそのことはわかるでしょうか？」

と、リオはよどみなく口を動かす。あまり具体的に語りすぎると話が生々しくなるので、詳細な事実は捨象することにした。なので、話の流れはいたってシンプルだ。リオの中では既に完結した話だし、その声色にはまったく負の感情が込められていない。

「……リオはご両親を失って、スラム街で暮らすようになったのね」

セリアはキュッと唇を噛んだ。薄々と予想していたことだが、リオの口から実際に聞くとなんとも辛い気持ちがこみ上げてくる。

「はい。その後はなんとか七歳になるまでスラム街で生きて、ご存じの通り王立学院に入りました。そこから先はセリアもよく知る通りです。十二歳の時に両親の故郷へ向かって、色々と気持ちを整理しまして、シュトラール地方に戻ってきました。ルシウスのことを本格的に捜そうと思ったのは、その時からです」

リオはそう言って、ややバツが悪そうに肩をすくめた。

「そっか……。リオはその男のことを恨んでいたの？」

セリアはスッと目を閉じて心を落ち着けると、リオに尋ねる。

「スラム街で暮らしていた頃は強く恨んでいました。でも、成長して両親の故郷に行ってからは、気持ちに変化が生まれました」

「……許したわけではない、のよね？」

現にリオはルシウスを捜しだして殺したのだから。

「ええ、許せないと思っていました。でも、憎悪とか嫌悪とか、そういった感情とは少し違ったのかもしれません。上手く言葉にはできませんが」

と、リオは答えながら天井を仰ぐ。

「……どういうこと？」

セリアは訝しそうに首を傾げた。

「恨んでばかりでは疲れますからね。矛盾していたのかもしれませんが、俺の気持ちはもっと淡々としていたんです。復讐という目標

はありましたが、それはただ自分の醜い側面から逃げたくなかったからというか、気持ちに区切りをつけるために定めた目標だったからというか、理屈ではちゃんと説明できないんですが……」

リオは説明に困りながらも、吹っ切れたような笑みを浮かべる。すると――、

「醜くないわ」

セリアはすかさず、そう言った。

「……セリア？」

リオは驚き、はたと目を丸くする。

「貴方は醜くなんかないわ。私は貴方という人間を知っているもの。貴方が醜い人間だなんて、私は絶対に思わない。それだけは言わせて」

「……はい。ありがとう、ございます」

「……あっ、う、うん」

リオが呆け顔で礼を言うと、セリアはハッと頬を赤らめて恥ずかしそうに頷く。咄嗟に口から飛び出た言葉だったのだろう。ゆえに、それはセリアの本心だ。すると、二人の間になんともこそばゆい沈黙が下りる。

「……ご、ごめんなさいね。話の腰を折っちゃって。あっ、じゃあ、ロダニアに到着してリオがすぐに出発したのは、ご両親の仇がどこにいるかわかったから？」

セリアは沈黙に耐えかねたのか、話を先に進めるべく次の質問を口にした。

「……ええ。ずっと所在は掴めなかったんですが、セリアをロダニアに送り届ける過程でその手がかりを掴みました。道中で襲ってきた傭兵の男達がいたでしょう？　彼らがルシウスが組織している傭兵団の団員だったんです」

リオは優しく微笑すると、経緯を口にする。

「そう、だったのね……」

セリアは再びもどかしそうな顔つきになった。

（私、ずっとリオと一緒にいたのに、自分のことで精一杯で、全然そんなことに気づかなかった）

リオはすぐ傍にいたのに、そんな様子は少しも見せていなかった。一人でずっと抱え込んできたのだと思うと、セリアは無性にやるせない気持ちになる。

「そんな顔はしないでください。というより、黙っていてすみませんでした。積極的に人に教えることではないと思っていたといいますか、言ってはいけないことだと思っていたというか……」

リオは困り顔で頭を掻く。すべてが終わった今となっては不思議と心が落ち着いているが、当時は人を殺そうとしているのだと、親しい相手に自分の復讐心を打ち明けることはなかなかできなかった。

「う、ううん。いいの、謝らないで。わかっているから。あっ、で

も、アイシアはこのことを知っていた、のよね？」

セリアはあたふたとリオを制止すると、ふと思い出したように訊く。

「はい、知っていました。アイシアに隠し事はできませんからね」

リオは苦笑して頷いた。

「そう、よね。リオが出かけていた間、ずっと私の中で霊体化していたから、よくわかるわ」

セリアも苦笑して得心する。ここしばらくずっと一緒に暮らしていたからか、セリアも以前よりアイシアのことをよく理解できるようになった。だから、隠し事はできないのだということは強く同意できる。

「先生も何かアイシアに秘密を握られましたか？」

リオはくすりと笑い、興味深そうに尋ねた。

「へ……？　あ、いや、別に、そういうわけじゃないけど」

セリアは瞠目すると、上ずった声で否定する。すぐに思いついたのは以前、クリスティーナやロアナとお茶を飲んでいた時に、クリスティーナからリオの婚約相手はセリアが相応しいのではないかと言われた時の話だ。退室後、アイシアがセリアにリオと結婚したいのかと尋ねてきて、セリアは思い切り慌ててしまった過去がある。

（ま、まあ、あのときはきちんとアイシアに口止めをしたし。って、

何でこんな時にそんな話を思い出しているのよ、私は、もう！）

セリアはその時のことを芋づる式に思い出して、顔を真っ赤にしてしまった。

「……セリア？」

リオは不思議そうにセリアの顔を覗き込む。

「な、何でもない！　何でもないから！　というより、今は私達しかいないんだから、アイシアも出てきなさいよ。誰か来たら霊体化すればいいんだから」

セリアは慌てて誤魔化すと、霊体化しているアイシアを呼び出した。すると、リオのすぐ隣に光の粒子が密集し、アイシアが顕現する。

「先生と何か秘密の話をしたの、アイシア？」

リオは悪戯っぽく笑って、隣に座るアイシアに尋ねた。

「い、いいから！　そんな話をするために出てきてもらったんじゃないから。ダメよ、アイシア、リオに言っちゃ！」

セリアは恥ずかしそうにアイシアに釘を刺す。

「……うん」

アイシアはじっとリオの顔を見つめると、こくりと頷いた。

「そんなことより、話が随分と逸れちゃったじゃない。何を話していたんだっけ、もう！」

セリアはホッと息をつくと、わざとらしく話を戻そうとする。すると――、

「じゃあ、俺からも訊いてみたいことが一つ。いいですか？」

リオはとたんに真面目な顔をして、セリアに水を向けた。

「うん……。何？」

セリアは姿勢を正して、リオに訊き返す。

「セリアは、復讐がいけないことだと思いますか？」

リオは少し緊張した声色でセリアに尋ねた。すると、セリアは真剣な顔で考え始める。そして、しかる後――、

「……わからない。でも、私が知るリオはリオのままよ。だから、貴方の在り方は自然と尊重しようと思える。これじゃ、答えになっていない、かな？」

柔らかくはにかんで、小首を傾げてみせた。

「いえ、ありがとうございます、先生」

リオはそれがとても嬉しくて、ギュッと拳を握りしめる。でも、その気持ちを素直に表現することはなんだかいけないことのようにも思えて、感情に蓋をするように笑みを浮かべて礼を言った。

番外編・特別読み切り短編（前書き）

書籍版８巻の発売に伴い、以前にお蔵入りになった特典用の短編の公開許可を特別に頂戴しました。

お話の内容はメロンブックス様の特典ＳＳで掲載している「えれめんたる」シリーズに準拠しておりまして、「もしも美春が異世界に転移せず、春人と再会して、何故かセリア先生も地球にいて……」という本編の設定を完全に無視した世界観のお話です。

諸事情で没になった話なので、厳密には「えれめんたる」シリーズの世界線とも違う話なのですが、この機会でなければ永久に未公開になっていたかもしれない話ですので、よろしければご覧ください。

いませ（没ネタで続きはありませんので、その点はご了承ください）

番外編・特別読み切り短編

春の始業式を一週間後に控えたある日。
天川春人は新たに高校二年生になる少年だ。七歳までの幼少期を過ごした街に存在する進学校に通い、幼馴染と再会し、青春を謳歌している。
現在、春人は学校からほど近い１Ｋの賃貸マンションで一人暮らしをしている。昨日は実家から帰ってきて就寝も少し遅くなったので、疲れが蓄積していた。なので、普段よりもゆっくりと深い眠りに就いている。
時刻は午前十一時。

「すう」

と、春人はベッドに横たわり、穏やかな寝息を立てていた。そして――、

「すう、すう」

と、同じく穏やかな寝息を立てて、春人に密着しながら眠る少女が一人。少女は長く綺麗な桃色の髪をしており、何故かリクルートスーツを着用していた。

「ん……」

春人は軽く寝返りを打とうとすると、すぐ隣に誰かが寝ていることに気づく。

（……みーちゃん？）

寝惚けた春人は、ぼんやりと隣に眠る少女を美春だと思う。そういえば、今日は美春がお昼前から近所に住む小学生の遠藤涼音と、春人が通う高校に海外から赴任してきた講師のセリアを連れてくると言っていた。みんなでお弁当を作って、お昼から花見をするのだ。

冷静に考えれば、美春が春人の布団に潜り込むという大胆な真似などできるはずもないのだが、睡魔に襲われている春人が違和感を覚えることはない。

しかし、カチャと、玄関の扉が開く音がした。

（……あれ？）

春人はここでようやく違和感を抱く。この部屋の合鍵を持っているのは美春だけだ。今日はギリギリまで寝ているかもしれないから、自由に入っていいと事前に告げてある。

となると、今、部屋の鍵を開けたのは美春ということになるのだろう。では、現在進行形で隣に寝ているのは誰なのだろうか。

春人が鈍りに鈍った思考回路でそこまで考えると――、

「……ハルくん、まだ寝ている？」

美春が恐る恐る部屋の中へ入ってきた。その背後にはセリアと涼音の姿もある。セリアと涼音は「精霊の気配？」と呟くと、顔を見合わせ、不思議そうに室内を見回した。

「みー、ちゃん？」

リオは流石に思考が覚醒してきて、むくりと起き上がる。

「あ、起こしちゃった？　ごめん……へ？」

美春は申し訳なさそうな顔を浮かべたが、薄暗い室内に春人以外の人影を発見すると、ピタリと硬直してしまう。

「……ねえ、誰、その子？」

セリアは春人の隣で寝る少女を指差し、恐る恐る尋ねた。

「で、電気をつけますね」

涼音は慌てて扉の横にあった照明のスイッチを押す。すると、室内が照らされる。春人の隣で寝ている少女の姿も、くっきりと露わになった。

「すう、すう」

と、少女の穏やかな寝息が室内に響く。

「……」

少女以外の四人は揃って硬直していた。すると――、

「ん……」

少女が目を覚ました。眠たそうに目をこすり、むくりと上体を起こす。続けて、少女は不意に春人に抱き着いた。

「っ！？」

「……ど、どういうことなの！？」「どういうことなんですか！？」

美春、セリア、涼音の三人は、声を揃えて状況の説明を求める。

「え、いや、ええ！？」

混乱しているのは春人の方だ。昨夜は確かに一人で寝たはずなのに、なんで見知らぬ少女と一緒に眠っているのだろうか。

「これからは私も春人と一緒にいる。ここに暮らす」

少女は春人に抱き着きながら、春人と美春達にいきなり宣言する。

「だ、駄目だよ！」

美春と涼音は声を揃えて叫んだ。

「……ねえ、ここに住むって、貴方、家は？」

セリアは意外と冷静で、訝しそうに少女に問いかける。

「ここ。ちゃんと働いて、家賃を収めるから」

少女はそう答えて、春人の顔を見上げた。

「え、いや……」

突然すぎる展開に、いまだ混乱している春人。少女の外見年齢は春人と同じくらいだが、リクルートスーツを着ているということは、年上なんだろうかと疑問に思う。

だが、わからない。わかるはずもない。しかし、何かを言わねば

なるまい。果たして、春人の答えは――。

第184話　ガルアーク王国訪問

弘明がリオとの手合わせで騒動を起こした数日後。その夜のことだ。リオはロダニアの邸宅の食堂で、講義を終えて帰宅してきたセリアと夕食を摂っていた。ちなみに、食事中はメイドのアンジェラとソフィに給仕は不要と伝えてあるので、今はリオとセリアの二人きりだ。

「というわけで、私も一緒にガルアーク王国へ行けることになったの。よろしくね」

セリアはにこにこと嬉しそうに、リオに報告する。

「ロダニアでの講義は大丈夫なんですか？」

リオは小さく目をみはり、セリアに尋ねた。そう、いよいよ明日、リオはガルアーク王国の王都ガルトゥークへと向かうのだ。訪問の主たる目的は沙月と会うことだが、ガルアーク王国の名誉騎士である建前上、フランソワへの挨拶も目的の一つに含まれる。

移動はレストラシオンが所有する魔道船で、クリスティーナとフローラも同行することが決まっていたが、セリアはロダニアでの講義があるため、リオはてっきり留守になるものかと予想していた。

ちなみに、クリスティーナがガルトゥークへ向かうのは国王フランソワへ新たにレストラシオンの代表に就任した挨拶をするため、フローラがガルトゥークへ向かうのは失踪した騒動を受けての生存報告と事情説明をするためである。

「うん。ガルアーク王国からの帰還後に、集中講義をやることで調

整する形になったから。クリスティーナ様とフローラ様に付き添いという形で来てくれないかと頼まれたの」

と、セリアはご機嫌に語る。

「なるほど。そのお二人のお誘いとあらば、断るわけにもいきませんね」

リオは口許をほころばせて得心した。

「ええ。……あ、それでね。明日はガルトゥークへ向かう前にアマンドに立ち寄ることになったみたい」

「何かご用でもあるんですか？」

「安全確認のために飛ばした魔道船がアマンドまで足を伸ばしたらしいんだけど、リーゼロッテ様も同行することが決まったみたいなの」

「リーゼロッテ様が……」

「うん。フローラ様の生存も判明したし、ご挨拶がてらぜひ同行したいって。……あとはリオも同行するって聞いたら、話があるから会いたいって言っていたみたいよ？」

セリアはそう言って、リオの表情をそっと窺う。

「なるほど……。わかりました」

と、リオはわずかに思案して答える。リオが彼女と会うのは、クリスティーナをロダニアへ送り届けた時以来だ。その時、印象的だったのは――、

――つかぬことを伺いますが、アマカワ卿は前世というものを信

じますか？

と、リーゼロッテが不意に口にした台詞である。結局、その時はリーゼロッテの方から話を終わらせ、また機会があればという形で話題は流れてしまったが、もしかしたらこのガルトゥーク訪問の間に何かしらのアクションがあるのかもしれない。リオはそう予感した。そして――、

「それはそうと、ガルアーク王国へ向かった後のことですが、事前にお話ししたとおり知人への挨拶回りに向かおうと思うんですが、その前にこの家にお風呂を作ろうと思うんです」

リオは話題を変える。

「お風呂？」

セリアは目を見開き、関心を示した。

「ええ、留守中にセリアが入りたがっていたと、アイシアから聞いたので」

リオはくすっと笑って言う。

「も、もう。アイシアだって入りたがっていたのに」

セリアは恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「あはは、もちろんアイシアも入りたいって言っていましたよ」

（うん、入りたい）

リオがおかしそうに笑うと、アイシアの声が響く。

「で、でも、いいの？　リオが大変じゃない？」

と、セリアは向かいに座るリオの顔を見つめて尋ねた。

「いえ。必要な材料はガルアーク王国へ行っている間に揃えてもらうので、一週間から二週間もあれば作れると思いますよ。俺もこの家に暮らしている間はお風呂に入りたいですからね。岩の家の施設には及びませんが、楽しみにしていてください。」

リオは鷹揚に語る。岩の家に備え付けられた各魔道具は高純度の精霊石を動力源としているため常に潤沢な魔力が供給されている。そのため、水は出し放題、お湯も使いたい放題というシュトラール地方の水事情を完全に無視した生活環境が構築されているが、この家で似たような生活環境を構築してしまうと、色々と技術的な事情を探られかねない。よって、あえてスペックを落として、シュトラール地方の魔術水準でもなんとか再現できる程度の施設にする必要がある。

「……うん、ありがとう！」

セリアは幸せそうに破顔した。

◇　◇　◇

そして、翌日の午前中。リオがセリアと一緒にレストラシオン所有の魔道船に乗船すると、二人を乗せた魔道船はガルアーク王国を目指し、護衛船団と一緒にロダニアを出発した。

まず向かうのはアマンドで、リーゼロッテの回収を行う。そうし

てお昼前にアマンドへ到着すると、乗船準備を済ませていたリーゼロッテがすぐに乗船して、正午には王都ガルトゥークへ向けて出発することになった。

リーゼロッテが乗った船にはリオとセリア、クリスティーナにフローラも乗船しており、出発後はすぐに王女姉妹に招かれ、船内のサロンにて五人で歓談することになる。

室内にはセリア、クリスティーナ、フローラ、リーゼロッテの四人がソファに腰を下ろしていて、他には側近中の側近であるヴァネッサだけが壁際に控えている。

一方、リオは「ハルト様が淹れたお茶をまた飲みたいです」というフローラのリクエストに従い、歓談に臨む五人分のお茶をサロンに備え付けられた給湯スペースで用意することになった。

「お待たせいたしました」

リオは人数分のお茶を用意すると、四人が座るソファへと向かう。そして、ポットの中で頃合いに蒸れたお茶を、慣れた手つきでカップへと注いでいく。

「……流石、良い香りですね」

クリスティーナは立ち上る香りをスウッと吸い込むと、柔らかく相好を崩す。

「はい、幸せです」

フローラは頷き、幸せそうに顔をほころばせた。それから、リオは位の高いクリスティーナ、フローラ、リーゼロッテの順にカップを差し出していく。

「どうぞ」
「どうも、アマカワ卿」
「ありがとうございます、ハルト様」
などと、礼の言葉を口にするクリスティーナとフローラ。
「リーゼロッテ様も」
「恐れ入ります、ハルト様」
リーゼロッテも慎ましやかに会釈して礼を言った。
「どうぞ、セリア」
「ありがとう、ハルト」
セリアも自分の前にお茶が差し出されると、にこやかに礼を言う。そして、リオは最後に自分のお茶を机に置いて着席した。そうして、五人のお茶会がスタートする。
まずは熱いうちにお茶の香りと味を楽しみ、口々に感想を告げると――、
「……ところで、今回のガルトゥーク訪問には、勇者様はいらしていないのでしょうか？」
この場に弘明がいないことを不思議に思ったのか、リーゼロッテが尋ねた。すると、クリスティーナが少しバツが悪そうに苦笑して口を開く。
「誠に恥ずかしながら、勇者様にはロダニアで謹慎していただいております」
「謹慎……ですか？」

リーゼロッテはぱちくりと目を瞬いた。

「ええ。アマカワ卿に対し、いささか以上に礼を失した行動があったことと、神装の力を暴走させてあわや大惨事となりかけたので」

クリスティーナはこくりと頷く。そう、今回のガルトゥーク訪問にあたって、勇者である弘明はクリスティーナから留守を命じられていた。理由はリオとの手合わせで引き起こした騒動を受けての謹慎処分の一環である。

リオも手合わせをした翌日にはクリスティーナ直々に公式に謝罪を受けており、クリスティーナがいかに弘明の非行を重く受け止めているのかを説明した。

「……それは、なんと……」

リーゼロッテはなんと言えばよいものかわからず、ただただ瞠目する。

「フローラをお救いいただいた件でパーティを開催したところ、勇者様がアマカワ卿に決闘染みた手合わせを申し込みまして。その手合わせの際に勇者様が一度敗北。しかる後に神装の力を使えば負けないとごねだし、神装の力を使用した上で敗北。結果、制御を失った神装の攻撃によって観客に被害が生じようとしていたところ、アマカワ卿が魔剣を使用して被害を防いでくださりました。アマカワ卿には多大なご負担を強いることになり、重ね重ねお詫び申し上げております」

と、クリスティーナは事情を包み隠さず、掻い摘まんで説明した。そして、大きく溜息をつき、リオに小さく会釈する。

「私としては何か実害があったというわけでもありませんし、殿下にそう何度も謝罪していただくわけにもまいりませんので、どうかお気になさらず」

リオは苦笑してクリスティーナに応じた。

「頭が下がる思いです。とはいえ、いかに勇者様とはいえ、あらゆる好き勝手が許されるわけではないのだと知っていただく良い機会となりました。その意味でもアマカワ卿にはお礼を申し上げたいのです」

と、クリスティーナは語る。

「そのお言葉だけで十分でございますので」

リオは粛々とこうべを垂れてみせた。一方――、

（いつかはやらかすと思っていたけど、また見事な失態を犯したみたいね。まあ、なんとか取り返しがつく程度で済んでいるだけ、まだマシな方か。クリスティーナ様にとってはさぞ頭が痛い思いなんでしょうけど……）

リーゼロッテは話を聞きながら、そんなことを考える。立場上、リーゼロッテとしては弘明をけなすわけにはいかないし、かといってリオに災難でしたねなどと言えば間接的に弘明をけなすような意味合いになりかねないので、この話題に関してはもはや口を噤むしかない。だからか――、

「ともあれ、ハルト様のご活躍をお聞きになれば、フランソワ国王

陛下もさぞお喜びになることと思いますよ。ベルトラム王国から出奔なさったクリスティーナ様をお救いし、失踪なさったフローラ様をもお救いになったのですから。サツキ様もハルト様とお会いできるのを楽しみになさっているのではないかと」

と、リーゼロッテは明るい方向へ話題を変えた。

「そうであるのなら、光栄です。私もお目にかかれるのを楽しみにしておりますので」

リオは微笑してリーゼロッテに応える。

「私としてもサツキ様とお会いできるのは殊更に楽しみではあります。ガルアーク王国に召喚された勇者様がどのようなお方なのか、強く興味がありますので」

クリスティーナは沙月に興味があることを示唆した。沙月とは初対面であることに加え、他の国に所属している勇者のことはやはり気になるのだろう。

「私も夜会でガルアーク王国に滞在していた時はあまりお話をする機会に恵まれなかったので、できれば今回はゆっくりとお話をしてみたいです」

と、フローラも語る。彼女の場合、沙月と弘明の馬があまり合わず、互いに自分から近づこうとはしていなかった関係上、必要最小限の面識しかないのだ。

「礼儀正しく、親しみやすく、ご聡明な方ですので、お二人ならすぐに意気投合されるのではないかと」

リオは沙月の人物像を思い浮かべ、そう語った。実際、沙月は相応の礼を持って接してくる相手を見下したり邪険にするような性格はしていないので、クリスティーナやフローラならば親しくなろうと思えばすぐに親しくなることが可能であろう。弘明さえいなければ……。

「アマカワ卿がそう仰るのであれば、ますますお会いできるのが楽しみになりました」

クリスティーナはフッと口許をほころばせた。

◇　◇　◇

それから、数時間後、リオ達を乗せた魔道船はいよいよ王都ガルトゥークへ到着した。港へ魔道船を停泊させると、クリスティーナ達到着の知らせは可及的速やかに王城へと伝達される。

少し遅れてクリスティーナ達が王城まで足を運ぶと、一切の足止めを食らうこともなく、スムーズに城内の応接室へと案内されることになった。

現在はクリスティーナ、フローラ、セリア、リオ、リーゼロッテがソファに腰を下ろし、国王フランソワ達の到着を待っている。そうして、数分もすると、応接室の扉が開く。

そこから姿を現したのは、ガルアーク国王フランソワに、第一王子のミシェルと、第二王女のシャルロット。そして、ガルアーク王国に所属する勇者、沙月である。

リオ達は一斉に起立すると、フランソワ達を迎え入れた。すると――、

「いやはやよくぞお越しくださった、クリスティーナ王女、そして

フローラ王女よ」

フランソワはまず王女であるクリスティーナとフローラを歓迎する。

「突然に押しかけたにもかかわらず、陛下自らにご歓待いただき恐れ入ります」

クリスティーナは一同を代表し、丁寧に挨拶を告げた。

「なに、件の亜竜の騒ぎもあり、ここしばらくは他国からの賓客が途絶えておったのでな。久しぶりに王らしい外交業務もできて冥利に尽きるというものよ」

フランソワは鷹揚に応じる。

「亜竜の件では色々とお騒がせをしております。私がレストラシオンの代表に就任したご挨拶が遅れたことはもちろん、フローラのことも」

クリスティーナはそう言って、隣に立つフローラのことを見やった。

「クリスティーナ王女がレストラシオンの代表に就任したことはもちろん、フローラ王女の件も聞き及んでおる。災難ではあったが、こうして見(まみ)えることが叶ったことは僥倖だ。なにやらハルトが活躍したと耳にしておるぞ」

フランソワはそう語ると、愉快そうに笑みを刻んでリオに視線を向ける。

「はい。私もフローラも、アマカワ卿には返しきれぬご恩がございます」

クリスティーナは粛々とリオに対しこうべを垂れる。

「もったいなきお言葉にございます」

リオも深々とこうべを垂れ返した。

「色々と面白い土産話が聞けると思い、急ぎ駆けつけた次第だ。サツキ殿もハルトと再会できるのをずいぶんと待ち焦がれていたようだぞ」

フランソワはニヤリと口許を緩め、沙月を見やる。

「別に待ち焦がれていたわけではないけど、久しぶりね、ハルト君。ずいぶんと大活躍だったみたいじゃない」

沙月は少し気恥ずかしそうに唇を尖らせると、素っ気ない口調を装いリオに語りかけた。

第１８５話　話し合いと新たな恩賞（前書き）

つい先日、書籍版「精霊幻想記」の連載２周年を迎えました。それを記念してコミック担当のみなづきふたご先生が特別にイラストを描いてくださったので、本編をご覧になる前にぜひぜひご覧ください。どうぞ！

<ｉ２６６１４７｜１３４２３>

第185話　話し合いと新たな恩賞

「別に待ち焦がれていたわけではないけど、久しぶりね、ハルト君。ずいぶんと大活躍だったみたいじゃない」

沙月は少し気恥ずかしそうに唇を尖らせると、素っ気ない口調を装いリオに語りかけた。

「ご無沙汰しておりました、沙月様。お元気そうで何よりですが、お変わりはございませんか？」

リオは笑みを浮かべ、愛想良く受け応える。

「……ええ。訓練しかすることもなかったし、変わりがなさすぎて退屈していたくらいかな」

沙月はリオが様付けで呼ぶと微かに唇を尖らせたが、小さく嘆息してそう言った。

「サツキ殿はセントステラ王国と連絡を取りたがっていたのだが、亜竜らしき害獣に魔道船が襲われた一件を受けてあいにくと運行は停止中だったものでな。とはいえ、事故に遭ったフローラ王女が無事に発見され、こうして姿を見せてくれたのだ。我が国でも運行再開は頃合いであるな」

フランソワはすかさず沙月が退屈していた経緯を補足すると、魔道船の運行再開について前向きな姿勢を見せる。

「ぜひ、お願いします」

沙月は力強くお願いした。

「うむ。ともあれ、このまま立ち話というわけにもいくまい。色々と聞きたいこともあるゆえ、まずは腰を下ろすとしようか。皆、座るとよい」

フランソワはそう言うと、率先して椅子に腰を下ろす。続けて、リオ達も備え付けの椅子に腰を下ろした。すると――、

「早速ですが、勇者様にご挨拶をさせていただいた後、事務的なお話をよろしいでしょうか？　確度が低いものも含め、陛下のお耳にお入れしたい重要な情報もございますので」

クリスティーナが話を切り出した。

「ほう。構わんかな、サツキ殿？」

フランソワはリオと話したそうにしている沙月を気遣って尋ねる。

「ええ。もちろん」

沙月は二つ返事で頷いた。

「お初にお目にかかります、勇者サツキ様。ベルトラム王国第一王女、クリスティーナ＝ベルトラムです。そして、面識はおありでしょうが、妹のフローラ＝ベルトラムです。アマカワ卿の隣に座られているのはセリア＝クレール。我が国が誇る天才魔道士でございます」

と、クリスティーナは自分の側に位置する面々を沙月に紹介する。
「初めまして。お目にかかれて光栄です、クリスティーナ王女殿下。フローラ王女殿下もご無事で何よりです。……セリアさんも、お目にかかれて光栄です」

沙月はまずクリスティーナとフローラに挨拶をすると、セリアの顔に妙な既視感を抱き少しだけ不思議そうに首を傾げ、だが、にこやかに会釈した。
既視感があるのは当然で、沙月はリオに連れてもらってガルアーク王国城を抜けだして岩の家を訪れた時に偽名を名乗って変装していたセリアと会っていたのだ。

「はい、初めまして。勇者サツキ様。ベルトラム王国はクレール伯爵家の長女、セリア＝クレールと申します」

セリアは沙月のことをしっかりと覚えているが、話をややこしくするわけにはいかないので、この場で初めて会った体にして自己紹介をする。

「セリア＝クレールといえば我が国でも名の知れた魔道士だ。余も会えたことを嬉しく思う」

と、フランソワ。

「恐悦至極に存じます、陛下」

セリアは恭しくこうべを垂れた。

「クリスティーナ王女とフローラ王女は当然に知っていようが、息子のミシェルと、娘のシャルロットだ」

フランソワはミシェルとシャルロットのことを主にセリアに対して紹介してやる。

「第一王子のミシェル＝ガルアークだ。噂の天才魔道士がこれほど可憐な女性だったとは、驚きだよ」

「第二王女のシャルロット＝ガルアークでございます。お兄様とお歳が近いと聞いていましたが、ずいぶんとお若く見えますのね。同い年くらいに見えましたわ」

などと、ミシェルとシャルロットはセリアに挨拶をした。

「恐れ入ります」

セリアはこそばゆそうにはにかむ。そうして、挨拶もそこそこに行うと、すぐに本題へと移行することになった。

「まず、フローラが失踪した件についてですが、これは事故などではなく、人為的に引き起こされたものだということが判明しました。亜竜らしき害獣がこれに関与していたのかどうか半信半疑ですが、魔道船が墜落する直前に船内へ侵入者が押し寄せ、空間魔術が込められた古代魔道具を使用してフローラをパラディア王国へと転移させた、とのことです」

と、クリスティーナは最初に概要を掻い摘まんで説明する。

「……ハルトが救出したとのことであったが、そなた、パラディア王国におったのか？」

フランソワは突飛な話の経緯に目を丸くすると、リオを見やって尋ねた。

「はい。とある男の素性を追っていた次第でございまして」

リオは手短に答える。

「アマカワ卿が追いかけていた男こそが、フローラを拉致した張本人でした。名をルシウス＝オルグィーユ。かつて我が国で没落した元貴族の男で、天上の獅子団と呼ばれる傭兵団を統率していた男です」

クリスティーナはすかさず補足して説明した。

「……フローラ王女が乗る魔道船を襲った動機は私怨に基づくものか？」

フランソワはルシウスが没落した経緯から、そう推測する。

「可能性として否定はできないのですが、背後に見え隠れする動きもございまして、何かしらの目的があって行動していたのではないか、というのが当方の見解です」

「フローラ王女誘拐の一件にパラディア王国が関与していると？」

「いえ、アマカワ卿の証言から、パラディア王国が直接に関与していた可能性は低いと判断しております。おそらくはルシウスの側から、誘拐したフローラの取り扱いに関して何らかの約定を持ち掛けたのではないかと。現にパラディア王国の第一王子はルシウスが敗れるとすぐに手を引いたようです」

クリスティーナはリオを見やりながら答えた。
「話が込み入ってきたな。ハルトがどうしてパラディア王国にいたのか、なぜルシウスなる男を追っていた理由を聞かせてくれぬか？」
と、フランソワはリオに問いかける。
「……明るい話ではないのですが、私とその男の間に個人的な因縁があったからです」
リオは事情を大まかに打ち明けた。
「恨んでいた、ということか？」
「はい」
フランソワが確認すると、リオは躊躇わずに首を縦に振る。
「……」
殺伐とした話の経緯に、沙月は静かに息を呑んでいた。
「転移させられたフローラが毒蜘蛛に噛まれ、瀕死に伏していたところ、ルシウスがパラディア王国の第一王子を引き連れて現れた。そこへアマカワ卿も訪れ、交戦へと発展し、結果的にフローラを救出するに至った。大筋はこのようなところです」
と、クリスティーナは引き続き事情を説明する。
「なるほど、な。ずいぶんと数奇な巡り合わせであるが、フローラ王女失踪から救出に至るまでの流れはおおよそ理解した。またして

も手柄であったな、ハルトよ」

フランソワは愉快そうに笑みを刻んで得心すると、リオを褒めた。

「私はもともとルシウスに用があっただけですので、フローラ様をお救いしたのは偶然にすぎません」

リオは微苦笑してかぶりを振る。

「相変わらずよな」

と、フランソワは上機嫌に言った。一方、沙月は少し複雑そうな顔をしている。すると――、

「して、背後に見え隠れする動きとは何なのか、訊いてもいいだろうか？」

フランソワはクリスティーナに話の続きを促した。

「まず、プロキシア帝国がフローラの誘拐に関与していたことが明らかとなりました。ルシウス＝オルグィーユもプロキシア帝国側の人間であり、その関係で同盟国のパラディア王国を訪れたのではないかと」

「……ふん、なるほどな。それを裏付ける事実があると？」

クリスティーナがプロキシア帝国の存在を打ち明けると、フランソワはいささか面白くなさそうに眉をひそめる。

「はい。アマカワ卿がフローラを引き連れてロダニアへ帰還する折、プロキシア帝国に所属するレイスという名の外交官から妨害を受け

たそうです。また、フローラがルシウスによってパラディア王国へ強制転移させた際、レイスも一緒にいたとのことでした」
「フローラ王女が乗っていた魔道船は大型の亜竜らしき害獣に襲撃されたのであったな。プロキシア帝国は下位の亜竜を使役した空挺騎士団を有しているが……」
「考えたくはありませんが、プロキシア帝国が大型の亜竜をも使役する術を有している……という可能性も浮き出てきます」
「……で、あるな」

フランソワは思案顔で唸った。

「悪い知らせはもう一つ、いえ、二つございます」
「と、言うと？」
「一つ。ルビア王国がプロキシア帝国と影で結託している可能性が濃厚だということです。アマカワ卿とフローラがロダニアへ向かう折、レイスという男と一緒に第一王女のシルヴィ姫、並びにルビア王国騎士団が襲撃に加わってきたとか。また、その場には勇者と思しき少年も混ざっていたことをアマカワ卿が確認しております」

クリスティーナはガルアーク王国やレストラシオンと友好関係にあるはずのルビア王国が離反している話に言及する。

「……初耳、であるな。シルヴィ王女は先日の夜会にも出席していたと記憶しているが……」

フランソワは渋い顔を浮かべる。

「もう一つの悪い知らせこそ、その夜会に関連しています」
「ほう……」
「私はその時の夜会に参加しておりませんでしたが、二日目に賊が

会場に押し寄せる騒動があったとか。その賊を手引きした人物がシルヴィ王女であることを匂わせる会話が、シルヴィ王女とレイスの間で繰り広げられたそうです」

「穏やかではないな。いかに現状は友好国とはいえ、これが事実であるのなら、開戦の理由にもなりかねない話である。よくぞ伝えてくれた。ルビア王国へ探りを入れてみるとしよう。感謝する」

「いえ、今日、私がお伝えした情報を入手したのは、すべてアマカワ卿ですので」

クリスティーナはリオの手柄であることを強調した。

「うむ。聞くところかなりの手勢を相手にしたようだが、よくもまあ切り抜けてみせたものだ。相対した勇者殿に関する話は後ほど改めて聞くとして、そなたにはまたしても恩賞を与える必要がありそうだな」

フランソワはフッと笑みを浮かべ、リオを見やる。

「平にご容赦を。これ以上、欲するものはございませんので」

リオは苦笑してかぶりを振った。

「恩賞の与え甲斐のないところも相変わらずであるか。恩賞を断るのに容赦という台詞を口にするのもそなたくらいであろう。クリスティーナ王女も苦労したであろう？」

フランソワはくつくつと笑って、クリスティーナに水を向ける。

「はい。基本は断られてしまうので。ロダニアで邸宅をご用意させていただきましたが、それだけです」

と、クリスティーナは相好を崩して答えた。

「ほう。家を持ったのか？」

フランソワはリオが家を手にしたことに興味を持つ。

「はい。ロダニアを居住の地としているわけではないので、普段はそちらにいるセリアにお貸ししつつ、滞在中は利用させていただいております」

リオはセリアを見やりながら応じる。セリアはこそばゆそうにはにかんだ。

「彼女に……。そなたと何かしらの繋がりがあるのか？」

フランソワはリオとセリアの関係に興味を示す。

「恩人と申しますか、私を名誉騎士にしていただいた前から、個人的な親交があったものでして」

「ふむ、そうか……」

フランソワは相づちを打ちながら、思案顔で沙月に視線を向けた。そして――、

「では、この王城の傍にもそなたの邸宅を用意するとしようか。それを持って此度の件の恩賞としよう。ちょうど余が所有する物件が余っているのでな」

と、軽い調子でそんなことを言いだす。

「……は？」

リオは思わず目をぱちくりと瞬いた。

「その方が何かと便利であろう。サツキ殿も王城の中ばかりにいるのは退屈であろうが、個人的に交友のあるそなたの邸宅とあらば訪れるのに何の支障もあるまい？」

フランソワはそう語り、沙月の存在を持ち出す。沙月は突然の話の流れに、リオ同様「え……？」と呆気にとられている。

「ですが……、沙月様も若い女性でいらっしゃいますから、若い男の家を訪れるのは外聞がよろしくないのでは？」

と、リオは沙月の顔色を窺いながら語った。

「ならば、シャルロットも同行すれば良かろう。王都にいるのであれば、リーゼロッテが行くのもよいかもしれん。なあ」

フランソワはそう言って、シャルロットとリーゼロッテに水を向ける。

「まあ、素敵ですわね。私は喜んで」

シャルロットはにこやかに頷いた。

「……ご迷惑でないのなら、私も喜んで」

基本的にこの場では聞き役に徹していたリーゼロッテだったが、

話を振られるとリオの顔色を窺いつつ、微笑して首を縦に振る。

「むう……」

セリアはちょっぴり複雑そうな顔で、そっとリオの横顔を覗いた。また、第一王子のミシェルは何か思うところがあるのか、少しばかりムッとしているが、王の采配に口を出すつもりはないのか、グッと口を噤んでいる。すると――、

「決まりだな。数日内に空き物件の案内をさせる故、よければ沙月殿も一緒に、見て回るといい。よい気分転換となるだろう」

と、フランソワは話をまとめた。

「……ありがとうございます」

沙月はちらりとリオに視線を向けると、少し気恥ずかしそうに礼を言う。

「では、話の続きといこうか。もう少し事の委細を聞かせてもらいたい」

「畏まりました」

フランソワは満足そうにほくそ笑むと、話の流れを戻そうと舵を取った。それから、小一時間ほどは事情説明の時間が続き、情報の共有が行われることになる。

「さて、余とミシェルは執務がある故、そろそろ席を外さねばならん。シャルロット、後のことはそなたに任せるとしよう」

フランソワは十分に話を聞くと、退室するべく腰を上げた。

「承知しました、お父様」

シャルロットはにこりと笑みを咲かせて首肯する。

「うむ、任せた。では、行くぞ、ミシェル」

「はい、父上」

フランソワはそう言い残し、ミシェルと一緒に退室していく。室内に残ったのはリオ、セリア、沙月、リーゼロッテ、クリスティーナ、フローラ、シャルロットと、見事に高位の王侯貴族の女性ばかりである。すると――、

「では、天気もよいことですし、この場に残った皆様で一緒に、お外でお茶会といきましょうか。ご案内いたしますわ」

と、シャルロットが室内の面々を見回しながら提案する。そうして、リオは事の成り行きで、この場にいる少女達全員というなかなか珍しい組み合わせのお茶会に参加することになった。

第１８５話　話し合いと新たな恩賞（後書き）

みなづきふたご先生がバナーとして使えるイラストを描いてくださったので、新たにコミック版のページへの画像リンクとして利用してみました。このページの下にリンクがございますので、よろしければそちらからコミック版のページへ移動してみてください。

第１８６話　お茶会の水面下で（前書き）

みなづきふたご先生が「精霊幻想記」に登場するキャラ達の素敵なイラストを沢山描いてくださったので、この場でその一部をご紹介します（本編の世界観とは無関係のものも含まれております）！

<i２６８６０９|１３４２３>

<i２６８６１４|１３４２３>

第１８６話　お茶会の水面下で

場所はガルアーク王国城。ガルアーク国王フランソワや第一王子のミシェルが立ち去った後。限られた身分の者か、限られた身分の者に招待された者しか立ち入ることができない中庭で。

リオはシャルロットに案内されて、沙月、リーゼロッテ、セリア、クリスティーナ、フローラと一緒に、壁が吹き抜けとなっている屋外ラウンジを訪れていた。

「さあ、どうぞおかけくださいな」

と、シャルロットは一同に着席を促す。間もなくしてお茶とお菓子が運ばれてくると、極めて豪華なメンバーによるお茶会が開催されることと相成った。

「まあ、これはうちの商会で卸させていただいているお茶ですね」

出されたお茶を口にすると、リーゼロッテが即座に言い当てる。

「ええ。私のお気に入りの茶葉の一つなのよ」

第二王女のシャルロットは上機嫌に微笑んだ。

「リッカブランドのお茶はレストラシオンの中でも流行っているんですよ」

「私も執務の合間に楽しませてもらっています」

「光栄です」

フローラやクリスティーナも会話に加わり、お茶会では定番のやりとりから会話が広がっていく。女性勇者一人に王女三人、公爵令嬢に伯爵令嬢が参席しているお茶会は実に華やかで、年頃の少年や男性貴族ならば、今のリオが置かれている立場をさぞかし羨むことだろう。もしも同じ状況に置かれたならば、日頃の弘明がそうであったように舞い上がって饒舌になっていることかもしれない。

そんな中、肝心のリオといえばもちろん何も喋らないわけではないが、比較的寡黙で、お茶会が始まっても口数が多くなることもなかった。周囲が女性だらけであるという状況や自らの身分を踏まえているというのもあるが、それよりはリオという少年の気質によるところが大きな一因なのだろう。

女性陣が定番のやりとりで話に花を咲かせる様子を、じっと見守っている。とはいえ、ある程度話が弾んで、お約束な流れから話が逸れていくと、リオに話を振った少女がいた。

「ところで、ハルト様は今後のご予定は決まっていらっしゃるのかしら？」

シャルロットだ。

「ガルアーク王国での滞在が終わりましたら、荷の整理もあるので一度ロダニアへ戻らせていただき、その後は休養を取りがてら、しばらく会っていなかった知人のもとへのんびりと挨拶へ向かおうと思っております。それが終わったら、またこちらへ参上できればと」

と、リオはざっくりと今後の予定を語ると、「帰る家もご用意いただけるそうですので」と付け加える。

「なるほど……。とりあえずの急ぎの用はない、ということでしょうか？」

「はい」

リオはしっかりと首を縦に振った。

「でしたら、私やサツキ様のお相手もしてくださいな。ハルト様がなかなか顔をお見せくださらないものだから、寂しかったんですよ。ねえ、サツキ様」

シャルロットは可愛らしく首をもたげて、沙月に同意を求める。

「は？　い、いや、別に寂しいわけじゃなかったけど……、でも、そうね。次にまたふらりと姿を消したらいつ戻ってくるかもわからさなそうだし、ハルトがこの国にいる間に二人きりでゆっくりと話をさせてもらおうかしら。訊きたいこともあるし……」

沙月は上ずった声でシャルロットに応じたが、小さく嘆息してリオに視線を向けた。

「お手柔らかにお願いします」

リオはフッと口許をほころばせる。

「何よ、別に取って食おうとしているわけじゃないんだから」

沙月はリオの顔をじいっと見つめると、むうっと唇を尖らせて抗議した。

「亜竜の騒ぎを受けてミハル様達ともご連絡が取れず、サツキ様はずっと悶々とされていましたから。ハルト様ならミハル様達とも仲がよろしかったでしょうし、やはりミハル様達とまたお会いになり

たいでしょう？　また改めてサツキ様のお話を聞いてあげてくださいな」

と、シャルロットはにこやかに、リオに呼びかける。

「……承知しました」

美春の名が出ると、リオは微かに翳りを帯びた笑みを覗かせて頷いた。

「もう……」

沙月は少し気恥ずかしそうに、リオから視線を逸らす。一方、クリスティーナにフローラ、セリアの三人は少し興味深そうにリオと沙月のやりとりを見つめていた。もしかすると、想像していた以上にリオと沙月の仲が親しそうに見えたのかもしれない。

「でも、サツキ様とだけ二人きりというのは少し妬けますわね。ぜひ、私のお相手もしてくださいね。もちろん、二人きりで」

シャルロットはそう言って、悪戯っぽく微笑する。

「あまりからかわないでくださいませ、シャルロット様」

リオは苦笑してシャルロットに応じた。

「まあ、以前にも申し上げたではないですか。私、ハルト様のことは兄のように慕っているんです。少しは甘えさせてくださいな」

シャルロットはフローラやセリア、ひいてはクリスティーナやリ

ーゼロッテに沙月の反応を窺いつつ、くすりと茶目っ気のある笑みを浮かべてリオに言う。
フローラは少し焦ったような顔を覗かせて、リオの様子を窺っていた。セリアと沙月は少しむうっとした様子で、リオの顔を見つめている。一方、クリスティーナとリーゼロッテはポーカーフェイスで状況を静観していた。そうして、少女達から注目を集める中――、
「陛下のお許しもなく殿下と二人きりでお会いするというのは……、恐れ多いことです」
リオはいたって無難に回答し、シャルロットのキラーパスを見送ろうとする。が――、
「お父様ならきっとお許しくださるわ。新たに下賜されるハルト様の邸宅に伺っても構わないと仰っていましたし、それだけハルト様のことは高く評価なさっているのだから」
シャルロットはリオに対するフランソワの覚えが良いことをほのめかし、ぐいっとリオに迫った。
「それは、身に余る光栄です。では、陛下にお話を通していただけるというのであれば」
リオは困り顔で、条件付きの回答をする。
「ふふ、楽しみにしておりますね」
シャルロットは嬉しそうに口許を緩めた。その笑顔は実に愛らしい。沙月は自分が二人きりでリオと話をしたいと言ってしまった手前、口を噤んではいるが、じいっとリオを見つめていた。すると―

―、

「ハルト様、お二人に便乗する形になってしまいますが、私も王都に滞在している間にお時間を頂戴してもよろしいでしょうか？　以前にお話しした件で、改めてお話をできればと思いまして」

リーゼロッテがここで口を開いた。

「例の件……、ええ、承知しました」

リオは例の件でリーゼロッテの前世に関する話を連想し、すぐに首肯する。

「まあ、リーゼロッテには二つ返事で二人きりでの面会をお許しになるのね」

と、シャルロットは可愛らしく頬を膨らませてみせた。

「お許しください。リーゼロッテ様とはお仕事上の付き合いもございますので」

「なるほど。私と会うのは仕事、すなわち立場とは無関係だと。そういうことでしたら、納得するとしましょうか。ハルト様の新居選びもそうですし、楽しみが一つ増えましたわ」

リオが愛嬌笑いを浮かべながら理由を取り繕うと、シャルロットはふふっと相好を崩す。そして――、

「ふふ、ついつい、私達ばかりで話が盛り上がってしまいましたね。久しぶりにハルト様とお会いできたものだから嬉しくて、申し訳ございませんね」

シャルロットは主にフローラとセリアの顔を見やりながら、最後にクリスティーナに視線を向けて謝罪する。ロダニアにいる間、いくらでもリオと一緒にいる時間はあっただろうから、今度はこちらの番ですよ、という牽制なのだろう。

現状、ガルアーク王国側は勇者である沙月と、第二王女のシャルロット、さらには大貴族の令嬢であり、大商会の会頭でもあるリーゼロッテが、名誉騎士ハルト＝アマカワと懇意にしており、それだけ高く評価しているのだという情報を提示したことになる。

「……いえ、アマカワ卿はまたロダニアの邸宅へお戻りになるようですから、お話ならばその間にできることでしょう。ガルトゥークに滞在していられる時間は限られているのですから、せめてその間くらいはごゆるりと」

クリスティーナはロダニアの邸宅でリオと一緒に暮らしているセリアを見やりながら、にこやかにシャルロットに応じた。

「そう仰っていただけると嬉しいですわ。とはいえ、そうなるとやはりガルトゥークにもハルト様の邸宅はあって然るべきなのでしょうね。お父様も素晴らしいタイミングで恩賞をご用意くださったわ。どのように素敵な家を下賜していただけるのか、見学の際はよろしければ皆様もご一緒に。リーゼロッテもいらっしゃいな」

シャルロットはそう遠くない将来にガルトゥークにもリオの邸宅はできるのだと、ここで再確認する。そうなれば居住面での条件はフェアなのだから。

こうして、リオという少年との懇意さを競い合うやりとりが、さりげなく繰り広げられたのだった。

第１８６話　お茶会の水面下で（後書き）

最後に、みなづきふたご先生が描いてくださった別のイラストを（活動報告でさらに別のイラストも改めてご紹介予定です。いち早くご覧になりたい方は、みなづきふたご先生のＴｗｉｔｔｅｒアカウント（@ｋｕｓｏ６４）でも公開されておりますので、チェックしてみてください）！　急速に寒い季節になってきましたので、皆様、体調管理にはお気をつけくださいませ。

<ｉ２６８６１５｜１３４２３>

第１８７話　邸宅見学と、沙月とセリアとの話し合い（前書き）

ビジュアルもイメージしやすいように、よろしければ今回の話に登場するキャラの既出デザインをご覧ください（書籍版のものです）。

【セリア＝クレール】
＜ｉ１６１０２３－１３４２３＞

【皇沙月】
＜ｉ１９４７０６－１３４２３＞

【シャルロット＝ガルアーク】
＜ｉ２７９３８４－１３４２３＞

第１８７話　邸宅見学と、沙月とセリアとの話し合い

ガルアーク王国に到着し、沙月と再会した翌日。リオはガルアーク王国の役人に案内されて、フランソワから下賜される邸宅を訪れていた。そのすぐ傍にはシャルロット、クリスティーナ、フローラに、沙月とセリアにリーゼロッテの姿もある。

場所は王城の近く。ガルアーク王国の有力貴族達が邸宅を構え、クレティア公爵家の王都別邸も近所にある貴族街の中でも一等地中の超一等地である。

こうして邸宅を下賜されることになった表向きの名目はクリスティーナやフローラを救う過程で色々と入手した有益な情報に対する恩賞であるが、これほどの土地にある邸宅を用意した辺り、フランソワがどれだけリオのことを高く評価しているかが窺える。

「まあまあ、なかなか良いお庭ではありませんか。天気の良い日にお茶会を開いたら楽しそう。ねえ、ハルト様。まずは外をぐるっと回ってみましょうか」

邸宅の敷地に入ると、シャルロットは庭を見回しながらリオとの距離を詰める。密着したというほどではないが、肩が触れあいそうなくらいにはスペースが埋まっていた。

「ええ、そうですね」

リオは接近に気づきながらも、特に意識した様子もなくシャルロットに応じる。夜会の時はもっと密着されていたし、この程度の距離の詰められ方ならまだ気にするまでもない。王族のシャルロットが相手ではあまり強く言えないし、下手に諫言すると面白がって余

計に距離を詰めてきそうなので沈黙が吉と思っているのだろう。
沙月やリーゼロッテも夜会の時に積極的にリオと腕を組んでいた光景を目の当たりにしたからか、特に注意をすることもなくやれやれと小さく溜息をついている。とはいえ――、

（距離が近い……）

こういった光景を初めて目にするセリアからすれば驚きの事実だ。昨日と今日のやりとりでリオがシャルロットとも上手く関係を構築していそうなことには気づいていたが、まさか王族の立場にある少女がこれほど特定の男性に接近を許すとは思ってもいなかった。目を点にして、隣り合わせに歩く二人の後ろ姿を眺めている。
また、クリスティーナも親しげにリオに近づきだしたシャルロットの行動には意表を突かれたのか、わずかに目を見開いている。一方、夜会には出席してはいたフローラだが、ほぼ弘明と行動を共にしていてリオとシャルロットが二人でいる姿はあまり見かけなかったからか、あからさまに「えっ？」という表情を浮かべていた。

「ハルト君のことをお兄さんのように思っているみたいなんです、シャルちゃん」

沙月は微苦笑してセリア達に教えてやる。

「そうなのですか？　お兄様でしたらミシェル王子とも仲がよろしかったと記憶していますが……」

と、クリスティーナ。仲の良い実の兄が他にいるというのに、血の繋がっていない男性を兄のように慕うとはいったいどういうつもりなのか。

「もちろんミシェルお兄様のことも実の兄として慕っておりますわよ」

シャルロットはきちんと話を聞いていたのか、振り返って話に加わる。

「では、どうしてアマカワ卿のことを実の兄のように慕っていらっしゃるのですか？」

クリスティーナはその真意を見極めるように問いを投げかけた。

「ハルト様には夜会の時に賊の襲撃から救っていただいたご恩もありますから。その雄姿を間近で見て、とても頼もしいお方だなと思ったのです。これほどの若さで歴戦の戦士をも難なく下すであろう武を修めてらっしゃるなんて、尊敬に値するとは思いませんか？」

シャルロットは手放しでリオを褒め称える。

「確かに、アマカワ卿くらいのご年齢でこれほど突出した才を示す人物などそうはいませんね。普通ならばまだ半人前、一人前になっていればそれだけですごいことです」

この世界における成人年齢は十五歳だが、そのくらいの年齢で特定の分野で一人前になれる人間などそうはいない。

「そうでしょう？　それに、ハルト様は容姿端麗ですし、実に謙虚で紳士的でいらっしゃいますから」

シャルロットはふふっと悪戯っぽく笑って、自分の腕をリオの腕に絡める。

「……以前にも申し上げましたが、流石にこうして密着されるのは、周囲の方を勘違いさせてしまうのではないかと」

リオは流石に嘆息し、きまりが悪そうに苦言を呈した。

「勘違いさせておけばいい、とその時に申し上げましたわ」

と、シャルロットは可愛らしくうそぶく。

「ですが、お父上がご覧になったら良い顔をなさらないでしょう」

「それこそ問題ありませんわ。お父様は能力主義者なのです。もちろん権威も重視されますが、高い能力を持つ者のことを決して軽く扱うことはいたしません。この邸宅にだってサツキ様と遊びに行くよう仰っていたでしょう？　素敵なお家ですし、ハルト様がいらっしゃるのなら毎日、伺わせてもらおうかしら？」

国王であるフランソワの存在を持ち出すリオだったが、さらなる大義名分をシャルロットに与えるだけだった。すると、ここで沙月が言葉を挟む。

「こらこら、シャルちゃん、流石に毎日はハルト君に迷惑だと思うわよ」

「あら、その際はもちろん　サツキ様も毎日ご一緒にと思ったのですが」

「ま、まあ、迷惑にならない範囲で付きあってはあげるけど……」

自分も一緒にと言われ、沙月は声を上ずらせる。節度を守れというのが彼女の主張で、リオの家が近所にあればやはり遊びに行きたいという気持ちはあるらしい。

「サツキ様にご一緒いただけないのでしたら、私が一人で毎晩、ハルト様のもとを伺うことになりますが……。いっそのこと、そのまま泊まらせていただくのも面白いかもしれませんわね」

シャルロットはそう語り、年齢にそぐわぬ蠱惑的な微笑みを浮かべる。

「だーかーらー、毎日はハルト君に迷惑になるから、加減はしなさいって言っているの。しかもなんで夜なのよ？」

「あら、男女同士が逢瀬を重ねる頃合いといえば、夜というのが古来より芝居や小説の習わしでしょう？」

「いや、それは恋愛のお芝居とか小説だから。それに、その前提だと私まで夜に会いに行くことになっちゃうじゃない」

沙月は気恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「ふふ、ですから冗談です。私は王女ですもの。流石に婚約者でもない異性の邸宅へ一人で足繁く伺うことはできませんわ。まあ、サツキ様がお望みとあらば、お付き合いするのもやぶさかではありませんけど」

「……もう」

シャルロットがうそぶくと、沙月は少しだけ唇を尖らせる。続けてリオと視線が合うと、つんとそっぽを向いた。

（シャ、シャルロット様は、クリスティーナ様やフローラ様とはまた違った雰囲気のお姫様なのね。まあ、まだ十四歳らしいし……）

リオを取り巻く勇者と第二王女のやりとりをじっと眺めていたセ

リアだったが、なかなかの天真爛漫ぶりを発揮するシャルロットの姿を見て引きつった笑みをたたえる。
流石のクリスティーナも苦笑交じりにやりとりを静観していた。ただ、フローラは蚊帳の外から少しだけ羨ましそうに沙月達のことを眺めている。すると――、

「シャルロット様はああいうお方なんです。王族であらせられながら型にはまらない柔軟な思考をお持ちですので、私も幼少のみぎりから今のサツキ様のように振り回されることがよくありました」

と、リーゼロッテが溜息交じりに、セリア達に語りかけた。

「あら、型にはまらない柔軟な思考というのなら、私よりもリーゼロッテの方がよっぽど型破りだと思うのだけど。王族である以上、所詮、私はお城というかごの中の鳥だもの。自分の意思ではこのお城の外にすら出られないわ。リーゼロッテみたいに各地を飛び回って、婚約相手を決める自由だってないし」

シャルロットはすぐに背後を振り返り、会話に加わる。

「あはは……」

リーゼロッテは下手なことを言ってつけいられる隙を晒したくないのか、笑みを取り繕って誤魔化した。

「リーゼロッテ様は婚約相手をご自分で決める自由があるのですか？」

と、小首を傾げるセリア。

「え、ええ。リッカ商会の商売繁盛やアマンド発展の功績を認められまして」

リーゼロッテは他の王女達からも注目を浴びると、少しバツが悪そうに首肯する。

「リーゼロッテったら、そのために我が国の王立学院を飛び級で卒業したんですよ」

「べ、別にそのためだけというわけでは……」

シャルロットに話を振られ、リーゼロッテはあははとたじろぐ。飛び級をするには単純に成績が良いだけでは認められず、特定の分野で突出した才能を示す必要があるので、誰にでもできることではない。というより、数年に一人いれば多い。

「そうそう、飛び級といえば、セリアさんもベルトラム王立学院を飛び級で卒業されたとか。それだけの功績があり、我が国にも伝え聞くほどに目覚ましい研究成果をお残しになっているのなら、婚姻の自由くらいは認めてもらえるのでは？」

ここでシャルロットはセリアに水を向ける。一般的に女性の貴族に婚姻の自由は認められていないが、優秀な成果を残している女性は例外的な取り扱いを受けることもある。

「一応、認められてはいました。ですが、国内情勢が大きく変化しましたし、今は国元を離れ、実家と連絡を取ることもできないので……」

「事情が事情ですものね。流石に今の状況でご両親のご許可を得ずに婚姻を結ぶわけにもまいりませんか。とはいえ、情勢が安定するのをいつまでも待つわけにもいきませんし、妙齢の女性がいつまで

も結婚できないのも大変だわ。意中の相手もいるのでは？」

シャルロットはふむと唸って得心すると、セリアに問いかける。

「あ、いえ、それは、あはは……、ど、どうでしょう？」

セリアは一瞬だけリオに視線を向けて、すぐに視線をさまよわせ、しかる後、ぎこちなく首を傾げる。

「……なるほど。まあ、あまり詮索するのも無粋ですか。女性なら秘密の一つくらいあった方が魅力的に見えますからね。そうは思いませんか、ハルト様？」

シャルロットは実に面白そうにほくそ笑むと、再びリオの腕を掴み取って密着する。同意を求められたリオは、自然とその場にいる少女達から視線を向けられた。男一人という少しきまりの悪い状況で――、

「ええ、まあ」

リオはやや気まずそうに頷く。

「それはとても良いことが聞けました。今後の参考にさせていただきますね。っと、そろそろお庭をぐるっと一周するみたいですね。邸宅の中へ入りましょうか」

シャルロットはにこりと笑みを咲かせると、邸宅の中への移動を促す。それから、邸宅の中を確認して下賜される物件に問題点や不服がないことを確認すると、この屋敷は晴れてハルト＝アマカワ所有の不動産となったのだった。

◇　◇　◇

そして、その日の晩。沙月はリオとセリアを私室に招き、三人だけで食事をとることになった。リオとセリアが隣に座り、沙月と向かい合う形で腰を下ろす。

「本当によろしかったんですか？　私までお邪魔してしまって」

セリアは料理の並んだ食卓に着くと、沙月に尋ねる。

「ええ、セリアさんはハルト君の恩人だって聞いたので、ぜひお話を伺ってみたかったんです」

沙月はにこりとセリアに応えた。すると――、

「実は沙月さんとセリアは一度、会ったことがあるんですけど気づきませんか？」

リオが会話に加わる。

「え？　そうなの？　なんか既視感はある気がしたんだけど、でも……」

沙月はセリアの顔を見つめて、訝しそうに首を捻った。

「夜会の最中に一度だけ、岩の家に来たことがあったでしょう？　その時です」

岩の家で沙月が美春達以外で顔を合わせた人物は、セシリアと偽

名を名乗っていたセリアと、アイシアしかいない。

「岩の家に行った時って……あっ！　え、あ、えっと……、えっ、でも、髪の色が、それに名前もセシリアさんだったような……」

沙月はまじまじとセリアを凝視すると、すぐに思い当たったようだ。しかし、記憶の中のセシリアと目の前にいるセリアのビジュアルが異なるからか、戸惑っている。

「フランソワ国王陛下との会話でセリアが置かれている境遇にも簡単に触れられたでしょう？　覚えていますか？」

「ええ。ベルトラム王国で無理矢理政略結婚をさせられそうになったけど、クリスティーナ王女の指示で国を抜け出したって……」

「ここだけの話ですが、アレは対外的な説明で、保護していたのは俺なんです。沙月さんと会った時は説明をする時間もなかったので、一般に知られていない特殊な魔道具で変装していて、偽名を名乗ってもらっていました。ちなみに、俺の前世のこともセリアには簡単には伝えてあります」

と、リオはセリアにまつわる経緯や真相を説明した。

「そう、なんだ……」

セリアはよほどリオから信頼されているのだろうと、沙月は判断する。

「じゃあ、初めましてというわけでもないのか。なんだか不思議な気がしますけど……、改めてよろしくお願いしますね、セリアさん」

「はい、こちらこそ」

沙月とセリアは互いに少しだけはにかんで挨拶を交わす。その後はすぐに食事を開始して、しばらくは和やかに歓談が繰り広げられることになる。

そうして、一通りの料理を食べ終えると――、

「ハルト君の前世を知っているのなら、セリアさんも一緒に話をしたいことがあるんだけど……。もちろんハルト君がよければ、だけど」

沙月がセリアを見やりながら、話を切り出した。

「なんでしょう？」

と、リオ。

「美春ちゃん達のことよ」

沙月はきっぱりと告げる。

「……ですよね。セリアになら、構いませんよ」

薄々と予想はしていたのか、リオは苦笑して同意した。

「じゃあ、早速だけど……、セリアさんは美春ちゃん達がハルト君の前からいなくなったことについて、どう思っていますか？」

と、沙月はセリアに問いかける。

「……私はその時にお城にいたわけじゃないし、ハルトからも何があったのか詳しく話を聞いたわけじゃないんだけど……」

セリアはそう語りながら、思案顔になって――、

「アキとマサトにとって、セントステラ王国の勇者様はお兄さんなんだし、特にアキはお兄さんと一緒にいたがっていたから、付いていきたいと考える理由についてはなんとなくわかる……かな」

と、言葉を続けた。

「そう、なんですけど……」

沙月はそれだけでは納得がいかないらしい。

「それに、勇者のサツキ様はもちろん、貴族になった今のハルトの立場なら、また会えるんでしょう？　寂しくはあるけど、王侯貴族の世界に飛び込んだ以上は四六時中一緒にいられなくなるかもしれないことも当人達もわかっていただろうし、今生の別れというわけでもない。なら、本人達の選択を尊重してあげたいと思うわ。離ればなれになった家族と会いたいという気持ちは、私にもわかるし……」

と、セリアが唸りながら自分の考えをより詳細に述べていくと、沙月は次第に訝しそうな顔になり始めた。

「ハルト君ならまた会える、今生の別れ……？　ねえ、ハルト君。もしかしてキミ、肝心なところは何も説明していないんじゃないの？」

沙月はジロリとリオを見やる。

「何をもって肝心とするかによるとは思うんですが……」

リオはバツが悪そうに視線を逸らした。

「どういうことなの？」

セリアは疑問符を浮かべて質問する。

「美春ちゃん達、私にもハルト君にも黙って、いなくなっちゃったんですよ。しかも、ハルト君にはもう会えないって伝言を残して」

沙月は簡潔に当時の出来事を教えてやった。

「えっ、そうなの！？」

セリアは唖然とし、どういうことなのかとリオを見やる。

「その、当時はセリアもご実家のことで悩んでいたので、あまり悩ませるようなことは教えたくなかったといいますか……」

リオは少し後ろ暗そうに、セリアに答えた。

「また貴方はそうやって……。言ってよ、ミハル達は私の友人でもあるんだから。貴方ともう会えないって、どういうことなの？」

セリアはもどかしそうな歯噛みし、リオにさらなる説明を求める。もっとも、セリアはセリアでリオのことを気遣って深く詮索する真似をしなかったり、大事なことをリオに訊かれるまではなかなか言いださなかったりするので、似た者同士ではある。

「キミの口からちゃんと説明してあげるべきだと思う」

沙月はじいっとリオに視線で訴えかけた。

「……わかりました」

リオはたっぷり逡巡すると観念したのか深く息をつき、夜会の開催期間に何があったのかをセリアにも教えることにした。

前世で美春と幼馴染みだったこと、亜紀は幼少期に離ればなれになった妹だったこと、夜会で美春に告白したこと……。

そうして、一通りの説明を終えると――、

「な、なるほど……」

夜会の間にリオが美春に告白したと聞いて衝撃を受けたセリア。だが、他にも色々と衝撃的な事実の連続で、とりあえずは相槌を打つ。すると――、

「ここしばらく魔道船の運行が休止されていて、セントステラ王国へ行くことはできなかったけど、王様の話だと近いうちにガルアーク王国の魔道船の運行を再開するみたい」

沙月が不意に口を開いた。

「……それで？」

リオはじっと沙月を見据えて先を促す。

「ハルト君も私と一緒にセントステラ王国に行かない？　先に使者を送って了承を得る必要はあるみたいだし、早くても何週間か先に

はなるだろうけど……」

沙月は自分と一緒にセントステラ王国へ向かわないかと、リオを誘う。

「残念ながら」

リオは静かにかぶりを振った。

「私、けっこう待ったのよ。美春ちゃん達がセントステラ王国へ向かって、魔道船の運行が休止されている間、ずっと待っていた。で、出鼻をくじかれたわけだけど、一人で色々と考えた。キミがあちこち移動している間にね」

沙月はそう語ってジト目でリオを見つめる。

リオはきまりが悪そうに笑みを取り繕った。

「私ね、やっぱり美春ちゃん達は何の理由もなく、お世話になった人の前から勝手にどこかへ消えるような子じゃないと思うの」

「私もそう思う」

と、沙月が語り、セリアがすかさず同意する。

「……そうですか」

リオは少しだけ寂しそうな顔で相槌を打つ。

「そうですかって……。あのさ、キミだって本当は私と同じように思っているんじゃないの？　美春ちゃんがそんな失礼な真似をするような子に思える？　キミは美春ちゃん達のことを信じていないの

？」

沙月は言い逃れを許さないと言わんばかりに、リオの顔を直視した。

「その訊き方は少し卑怯じゃありませんか？」

リオは微苦笑して訊き返す。

「だって、そう思うんだもの。特に美春ちゃんとは中学時代に同じ生徒会役員だったこともある。あの子がどんな子なのかを理解して、その上で私から役員になってくれないかってお願いした。だから、あの子がどんな子なのか、理解はしているつもりよ」

と、沙月は毅然と語り――、

「ハルト君のことだってそう。まだとても短い付き合いだけど、この世界でどんな生き方をしてきたのかもわからないけど、これまでに私達のためにしてきてくれたことを見れば、キミがどんな人間なのかはよくわかる」

立て続けに、そう語った。

「大した人間ではありませんよ」

リオは自嘲気味に答える。

「……美春ちゃん達がいなくなった直後に話した時にも思ったんだけど、ハルト君って謙遜しているわけじゃなくて、やけに自己評価が低いよね」

「特別に低く見ているつもりはありませんが……」
「だから質が悪いのね」
沙月は大きく溜息をつくと、リオの顔をじっと見つめる。
「あはは……」
セリアは沙月の発言に共感するところがあったのか、苦笑した。
「話が脱線している気がするんですが」
リオは居心地が悪そうに、話を逸らす。
「そうね。美春ちゃんが恩人であるキミに黙ってどこかへ消えるような子だと思うのか、キミは美春ちゃん達のことを信じていないのか、聞かせてほしい」
「……以前にも似たような質問を受けましたけど、信じていますよ。美春さんはとても義理堅くて、優しい人だと」
沙月にじっと見据えられると、リオは観念して答える。
「その上で納得しているって、キミは言った。時間が経った今でもそうなの？」
「ええ、そうです」
リオはこくりと頷く。
「じゃあ、美春ちゃんのことはもう好きじゃないの？」
「嫌いなわけがないじゃないですか。ただ……」
「ただ？」

沙月とセリアはじっとリオの発言を待つ。
「今の気持ちはもう、恋愛感情とは違います。彼女が幸せなら、別にそれでいい」
と、リオは割り切ったように言う。美春に振られたことで、自分は未練を捨てきることができた。だから、復讐の道を突き進むことができたのだ。もしもあそこで美春と結ばれていたら、リオは手がかりを掴んでもルシウスのもとへ向かっていたかどうかはわからない。
「……」
沙月とセリアはもどかしそうに唇を噛んだ。
「二人とも、そんな顔はしないでください」
と、リオは沙月とセリアに呼びかける。
「……いつもこうなんですか、彼って？」
「うん。自分のことを多く語らない子だから……」
「苦労していそうですね、セリアさんも」
「あはは……、でも、リオにはたくさんお世話にもなっているから」
沙月が大きく嘆息すると、セリアは半ば諦観を帯びた笑みを覗かせた。
「……いいわ。私のすることに変わりはない。私は魔道船の運行が再開され次第、セントステラ王国へ向かうわよ。もちろん、不本意

だけど、キミとの約束はちゃんと守るから、安心して」

と、沙月は不服そうに告げる。約束というのは、沙月の側からリオに関する話をしないというものである。美春達がガルアーク王国をたった後に、リオと沙月の間で交わした取り決めだ。ただ、納得はしかねているのか、唇を尖らせている。

「ありがとうございます」

と、リオは少し気まずそうに礼を言う。

「でも、キミは今後、どうするつもり？」

「どうするつもりとは？」

「今後の予定よ」

「……とりあえず明日はリーゼロッテさんとも個人的にお会いする予定で、ガルアーク王国での滞在を終えたらロダニアで所用を済ませて、その後は一度、義妹（いもうと）やお世話になった人達がいる場所へ戻ろうと思っています」

リオは今後の予定を沙月に教える。

「ハルト君、妹さんがいたんだ……」

沙月は少し意外そうに呟く。セリアは知っていたので、特に驚いてはいないが、あまり詳しい話を聞かせてもらったことはないので、かなり興味はあるらしい。

「義理のですけどね。俺なんかに兄が務まらないくらい、良い子です。あとは祖父母や従姉もいるので、そちらにも顔を出してみようかなと」

リオはラティーファ達のことを思い出したのか、ここでようやく柔らかい顔になった。

「わかっていたつもりだけど、ハルト君はこの世界で生まれ育った人間なんだよね。だから、この世界に家族がいる」

と、沙月は悩ましそうに唸りだす。

「ええ。でも、それがどうかしましたか？」

リオは不思議そうに沙月の顔を覗き込んだ。

「美春ちゃん達がいなくなった直後に、ハルト君、言っていたよね。今の自分は肉体的に全くの別人で、価値観もだいぶ変わってしまった。だから、今の自分が天川春人と同一の存在だったのか自信が持てないって」

と、沙月が語ると――、

（そんなことを思っていたんだ……）

セリアはリオの秘められた内面を知り、瞠目する。

「……ええ、よく覚えていますね」

リオはリオで沙月が事細かに会話の内容を覚えていたことを知り、感心しているようだ。

「それだけ私にとっては重要な出来事で、君の発言も印象的だった

からよ。ハルト君が自分のことを変わってしまったと思っているのって、つまりはこの世界でキミが体験してきた出来事がそうさせているのよね？」

「……まあ、そうなるんでしょうか」

と、リオはおもむろに頷く。沙月の考察は当たり前の発想だが、普通ならあえてそこに触れて、他人の内面に踏み込もうとはするまい。それだけ沙月がリオという少年と真摯に向き合おうとしていることが窺える。

「恨んでいる人がいるって、昨日、王様や私がいる前で言っていたよね？　そのこともキミの価値観が変わってしまったことと関係しているの？」

沙月はリオの顔色を窺い、恐る恐る尋ねた。

「……そうです。あの場ではあえて表現を濁しましたが、復讐をしようとしていたんです、俺は。いや、復讐を果たしてきたといった方が正確ですね」

リオはそう言って、自らを卑下するように少しだけ嘲笑する。

「っ……」

ある程度は予想していたのか、沙月はギュッと口を閉じて感情を押し殺す。

「正当防衛でもなんでもない。ただの私怨で、俺は人を殺してきました。日本なら殺人犯です。日本人として常識的な感性を持ち合わせている人なら、社会的に後ろ指を指されて然るべき犯罪者だと考

える行いでしょう？」
「……」
沙月は押し黙ってしまう。日本社会の常識や風潮を前提に議論するのなら、そんなことはない、とは言えなかった。
「復讐以外で人を殺したこともあります。襲ってくる相手がいれば、自分を守るために相手を殺すことも手段に入れます。そんな人間とは相容れないと、日本で生まれ育った沙月さんなら思うんじゃないでしょうか？」
自分を守るために人を殺す。職業軍人や冒険者など、この世界で荒事を生業とする人間なら当然の選択肢として検討対象に入るが、日本人にとってはそうでない。そう思ったからこその、今の自分と天川春人は異なる存在だというリオの発言だったが――、
「それは違う！　少なくとも私はキミを軽蔑していないから！」
と、沙月は叫んで訴えた。
「……」
リオは少し驚いたのか、目を見開く。
「……ここは日本じゃないから。治安がすごく悪い世界だろうから、日本の常識は通じない。そのくらいは私もわかっているのよ。もちろん、だからといって今の私に人を殺せるとは思えないけど……」
と、沙月は言って――、

「けど、だからといって、ハルト君のことを軽蔑なんかしない。ハルト君がいなきゃ、私は美春ちゃん達と再会することはできなかったから。強く感謝してる。それに、ハルト君がした行為はこの世界では別に犯罪になる行為じゃないんでしょ？」

そう、言葉を続けた。

「……ええ、正当防衛が成立する条件は日本よりもだいぶ緩いですし、都市の中はともかく、都市の外での出来事には基本的に為政者もノータッチですから」

加害者や被害者の身分によって例外が生じることはあるが、例えば街道で野盗に襲われたから反撃して殺したと衛兵に言えば「災難だったな」くらいで終わってしまうだろう。都市の中で殺人事件が起きた場合も、為政者の方針にもよるが、周囲の目撃証言から正当防衛が成立することが明らかな場合は、裁判をするまでもなく解放されるケースもある。

リオの場合はフローラを救うという大義名分があった時点で、ルシウスを殺した行為は完全に正当化された。というより、自国にとって厄介な国際問題に発展しかねない事件や自国で指名手配を受けている悪質な犯罪者でもない限り、わざわざ自国の領域外で起きた事件を立件しようとする国などない。

「だったら、胸を張りなさいよ。ハルト君はこの世界の常識で後ろ指を指される生き方をしているわけじゃないんでしょ。キミの話を訊く限り、王女様を救う大義名分があったとはいえ、復讐はいけないことなんだと思っているんだろうけど……、その感性はすごく大事だとは思うんだけど……。なんというか……、ああ、もう、とにかく胸を張りなさい。私は貴方のことを軽蔑なんかしないし、貴方の在り方は尊重できるって思うから！」

沙月は上手く自分の意見を言語化できなかったのか、語っているうちに熱くなって結論だけ提示した。奇しくもその発言の趣旨は以前にリオがセリアに復讐のことを打ち明けた時に言ってくれた言葉と同じである。

「私もつい最近に同じようなことを言った気がするけど、サツキ様と同意見よ、リオ。貴方のことを軽蔑なんかしないし、貴方の在り方は尊重しようって思っている。生まれ変わる前の貴方のことを知っているわけじゃないけど、今の貴方だって立派よ。少なくとも私にとってはかけがえのない恩人で、大切な人」

セリアは胸元に手を当て、リオに呼びかけた。

「……ありがとうございます、二人とも」

リオはきゅっと唇を噛みしめていたが、やがて力を抜き、フッと口許を緩めて礼を言う。

「な、何を笑っているのよ、真面目な話をしているのに……」

沙月は気恥ずかしそうに頬を紅潮させ、そっぽを向いた。

「すみません」

と、リオは素直に謝罪する。

「ふふ」

セリアはくすくすと微笑した。一方、沙月は依然として気恥ずか

しそうに頬を紅潮させているが、ちらりとリオに視線を向けると――、

（ハルト君は日本人だった頃の感性を持ち合わせながら、日本人の感性とかけ離れた価値観も併せ持ってしまった。だから苦しんできたんだね。だから自分の評価がすごく低いんだね。美春ちゃんのことに関して諦めがよすぎる理由もわかった気がする）

と、考えた。美春のことを好きと告白しておきながら、どうせ自分なんかとはいない方が美春のためだと心のどこかで思っていたのだろう。だから、普通なら納得がいかない顛末でも簡単に納得してしまっている、と。それは日本人でありながらこの世界に転移してしまった沙月だからこそ推察できた視点だ。

「不器用な人だとは思っていたけど、私が思っていた以上に不器用な人なのかもしれない、ハルト君って」

沙月は大仰に溜息をつく。

「あはは、そう……ですかね」

「そうよ。だって、まだ美春ちゃん達と会うつもりはないんでしょ？」

「……ええ、まあ」

リオは気まずそうに首肯する。

「ほらね」

不器用な証拠じゃない、と言わんばかりに沙月は再び嘆息した。

そして――、

「セリアさんから何かハルト君に言っておくことありますか？」

と、セリアに水を向ける。

「……ハルトのこと、もっと聞かせてほしいかな。前世のことも、この世界で体験してきた私が知らないハルトのことも。その、普段はなかなか話してくれないし……」

普段は遠慮して訊くことができないから――と、そこまでは口にはしなかったが、セリアはこの機会に勇気を振り絞ってリクエストした。もしかしたら、つい先ほど、リオが美春に告白をしたという話を聞いたことも影響しているのかもしれない。

「あっ、それは私も聞きたいです。こういう機会でもないとハルト君からは何も教えてくれなさそうだし」

沙月も乗り気で便乗する。

「俺の話……」

「なんかしても面白くないっていうのは禁止よ？　それを決めるのは私達なんだから。面白いかどうかはともかく、ハルトの話を聞きたいの」

リオは辞退しようとしたが、セリアが言葉を被せてそれを封じた。

「ははは……」

と、具合が悪そうに笑うリオ。それを見て、沙月はくすりと笑う。

「流石、ハルト君のことをよくわかっているんですね。セリアさんとはまた改めて二人きりでハルト君のことを話してみたいです。どうですか？」
「はい、私でよろしければ喜んで」

セリアは沙月の誘いを嬉しそうに承諾した。それから、リオはセリアと沙月に自分の前世と今世にまつわる話を色々とせがまれることになる。それを断りきれず、リオは二人から寄せられる質問に受け答えることになったのだった。

第１８７話　邸宅見学と、沙月とセリアとの話し合い（後書き）

今年は「精霊幻想記」が『このライトノベルがすごい！２０１８』で読者票（ＨＰ票）４位にランクインさせていただくなど、貴重な経験を積ませていただいた一年でした。誠にありがとうございます。

第１８８話　天川春人（あとがきに世界地図を追加）

お城の尖塔最上階にある沙月の部屋で、セリアも交えて一緒に晩御飯を食べた翌日の午前中。

リオは国王フランソワから下賜された邸宅へと一人で（正確には霊体化したアイシアと二人で）赴いていた。どうやら昨日のうちに必要な家具が搬入されたらしく、今日からでも暮らすことが可能だと聞いてそれならばと足を運んでみることにしたのだ。

現状、リオには家臣が一人もいないし、屋敷に仕える使用人もいないので、広々とした屋敷の中はもぬけの殻である。

「ここなら実体化しても大丈夫だよ、アイシア。一緒に見て回ろうか」

と、リオが屋敷のリビングで声をかけると――、

「うん」

アイシアはスッと実体化して返事をした。

「最近はなかなか実体化できる時間を作ってあげられなくてごめんね、アイシア」

人目がありそうな場所では基本的に霊体化してもらったままなので、なかなかアイシアが実体化できる機会がなかったのだ。

「私なら大丈夫」

久しぶりに聞いたアイシアの生声はいつも通り静かで、心地よく響いた。

「今日はこの家にいようか。来客が来ない限りは二人でいられるから」

「うん」

「なら、とりあえず家の中を案内するよ。俺も改めてよく見ておきたいからね」

そうして、久々に二人だけで行動をすることになる。シャルロットに案内された際にも一通りの造りは確認したが、一つ一つの部屋を改めてじっくりと見て回ることにした。

「大きい家だね」

アイシアは通路を歩きながら、ぽつりと言う。

「だね。必要な家具もすべて設置済みだし」

至れり尽くせりだった。家具だけで金貨何枚するんだろうかと、つい考えてしまうほどに。

「ここには私と春人だけで住むの？」

「そうなるかな。現状、家臣を召し抱えるつもりはないし、使用人を雇うつもりもないから。まあ、ほとんど留守になるだろうけど」

とはいえ、ガルアーク王国に滞在している間は、ここが拠点になるのだろう。

「セリアはこの家に住まない？」

「先生……セリアは他国の貴族だからね。ロダニアで仕事があるだろうし」
「そう」
「滞在中に泊まってもらったり、遊びに来てもらう分には問題ないと思うよ。今日は王女殿下姉妹と一緒にガルアーク王国の学院に視察へ向かっているみたいだから。また誘ってみようか」
「うん」

アイシアはこくりと首を縦に振る。こうして穏やかに会話を交えながら、屋敷の中を巡る。部屋数が多すぎるから使う部屋をいくつか決めて、そこだけ手入れをすることになりそうだという話をしつつも、浴室には浴槽を設置しようと決めた。

「さて、お昼にはまだ少し早いし、次は庭でも見る？」
「うん」

家の中をあらかた見終えると、庭へ出てみようという話になる。王都の貴族街には国中の貴族達が居を構えている関係上手狭だが、それでもちょっとした散歩ができるくらいには広々としている。天気が良いから日なたぼっこするのもいいだろう。
そうして家の外に出て、庭をぐるっと歩き回る。リオはもともと口数が多い人間ではないし、アイシアは寡黙なので会話は少ないが、沈黙が続いても少しも気まずさはない。実に自然体だった。
一通り歩いて庭の池の側に置いてあったベンチに二人で腰を下ろすと、ぼんやりと庭の景色を眺める。すると、しばらくして――、

「誰か来た」

アイシアが不意に口を開き、屋敷の門へと通じる道を眺めた。

「ん、本当だ。来客かな？　ごめん、一応、姿を消してくれるかな？」

リオは立ち上がり、アイシアへ指示を出す。

「わかった」

アイシアは頷き、そのまま霊体化してしまう。リオはそのまま門へと向かい、敷地の外にいる人物を確認する。

そこには一台の馬車があり、門の前には公爵令嬢のリーゼロッテと侍女のアリアの姿があった。門の前には兵士すらいないので、どうやって中にいるリオへ訪問を伝えようか悩んでいたのかもしれない。

「これは、リーゼロッテ様」

リオは門へと近づき、自分からリーゼロッテに声をかけてみた。

「ハルト様、もしかしてこれからお出かけ、ですか？」

リーゼロッテはリオの方から出てきたことに驚いたのか、目を丸くして尋ねる。

「いえ。ちょうど屋敷の庭で日光浴をしていたら、門の方に人の気配がありましたので」

「な、なるほど……」

気配を頼りに来客を出迎えるとは、なんという門番いらずか。リオが姿を現す直前にアリアも「いらしたようですね」とリオの気配に気づいてはいたが、リーゼロッテからすれば雲の上の行いである。

「それで、何かご用でしたでしょうか？」

と、リオはリーゼロッテに用向きを尋ねる。

「突然、申し訳ございません。お城へ参上したところ、ハルト様がこちらのお屋敷にいると伺ったものでして。お時間がおありでしたら、少しお話をさせていただけないでしょうか？　無論、ご都合が悪ければ日を改めて伺います」

リーゼロッテは小さく深呼吸をすると、用件を切り出した。その眼差しはリオの顔色を窺うように向けられており、表情は微かに緊張しているようにも見える。

話と聞いてリオが真っ先に連想したのは、以前にリーゼロッテが自分から切り出した前世に関する話である。

――つかぬことを伺いますが、アマカワ卿は、ハルト様は、前世というものを信じますか？

国を飛び出したクリスティーナ達を連れてアマンドにある彼女の邸宅へ立ち寄った時のことだ。リーゼロッテはリオにそう尋ねた。結局、その時はリーゼロッテが自分の前世を打ち明けることも、リオが自分の前世を打ち明けることもなかったのだが――。

――また機会があれば。

前世に関する話をまたしたい。リーゼロッテはそう言っていた。だからだろうか、こうしてリーゼロッテが姿を現した話の内容が、十中八九、前世に関することだろうという予感があった。

「……承知しました。何もない屋敷ですが、それでもよろしければどうぞ中へ」

リオは柔らかく相好を崩し、快くリーゼロッテを歓迎する。

「恐れ入ります。アリア、じゃあ貴方は外で待機していてもらえるかしら？　ハルト様と二人だけでお話をしたいから」

リーゼロッテはぺこりと頭を下げると、傍に立つアリアに語りかけた。側近の従者は主人が求める限り訪問先でも身近に付き従うのが一般的な取り扱いだが（ただし、その場合でもホスト側は従者を客人としてもてなす必要はない）、そうでない場合は居場所がなくなるので適当な場所で待機させておくのが無難な取り扱いである。

「畏まりました」

アリアは粛々とこうべを垂れるが――、

「話が長引くかもしれませんし、家の中に部屋が余っておりますので、アリアさんはそちらで待機していてください。御者の方は馬車の管理をする必要があるでしょうから、車庫に併設されている門番用の小屋をお使いください。門の横に車庫がございますので、そちらへ」

と、リオはすかさず申し入れて、門の脇にそびえる車庫を手で指し示した。

「お心遣い、痛み入ります。では、アリア、付いてきなさい」

「はっ」

そうして、アリアもリーゼロッテと一緒に屋敷の中までは付いてくることが決まる。まずはリーゼロッテを応接室へ案内し、続けてアリアのことは待合室へと案内した。そのままキッチンへ向かうと、ものの数分でお茶とお菓子を用意する。

「では、アリアさんはこちらでお待ちください。よろしければお茶とお菓子をどうぞ」

リオは先にアリアが控える待合室を訪れると、お茶とお菓子が乗ったトレイを机の上に置く。

「……私などに、このような歓待はもったいないことでございます」

まさかお茶とお菓子まで用意されるとは思っていなかったのか、アリアは二度、三度ぱちくりと目を瞬いて言った。

「リーゼロッテ様にお茶とお菓子をお出しするついでですので、お気になさらず。アリアさんはセリアのご友人ですから。無下に扱うわけにもまいりません。お菓子は作りすぎて余っているので、たくさん召し上がっていただけると嬉しいです」

「お心遣い、誠に痛み入ります」

アリアは深々とリオに頭を下げる。

「それでは、リーゼロッテ様をお待たせするわけにもまいりませんので、私はこれで。ポットの中のお茶はちょうど飲み頃のはずですので。スプーンで軽く混ぜてください」

リオはそう言って、すぐに退室してしまう。アリアは一人待合室に残されると、机の上に置かれたお茶とお菓子に目線を落とした。

お皿の上には実に美味しそうなお菓子が並んでおり、ついつい口許がほころんでしまう。

「では、ありがたく」

アリアはそう呟いて、ポットの蓋を開けた。中では茶葉がまだジャンピングしており、実に心地よい香りが立ち上ってくる。

そんな香りをしばし堪能すると、カップを手に取った。お茶が冷めてしまわないようにカップもきちんと温められている。そうしてカップにお茶を淹れると、いよいよ口に含む。

「……素晴らしい」

お茶の淹れ方にはこだわりのあるアリアだが、リオが淹れたお茶は非の打ち所がない。使っている茶葉は実に質が良く、淹れ方も完璧である。これが執事か侍女の採用試験なら、文句なしに採用していたかもしれない。

そのまましばし多幸感の余韻に浸り、ほうっと感嘆の息をつくと、アリアは皿の上のお菓子に手を伸ばす。おそらくは自家製で、口に含んだ瞬間、押し寄せる幸福感。

「素晴らしい……」

重ね重ねしみじみと呟いたアリアの言葉が、静かな待合室の中に響いた。

◇　◇　◇

リオはアリアに給仕を終えると、今度はリーゼロッテが待つ応接室へと足を運ぶ。まずは給仕をしてお茶を差し出すと、下座に腰を

下ろした。
リーゼロッテはやはり少し緊張しているのか、その表情は微妙に固く、口数も余り多くはない。
「お待たせしました。では、お話を伺ってもよろしいでしょうか？」
リオは自分から話を振った。すると――、
「……以前、ハルト様がクリスティーナ様を保護されてアマンドへお立ち寄りになった際に、私からお伝えしたお話は覚えていらっしゃいますか？　前世というものを信じますか、と」
リーゼロッテは一瞬だけまつげを伏せて、少しだけ語気を弱めに語りだす。
「ええ。覚えておりますよ」
リオは小気味よく返事をした。
「その時、私は前世を信じると申し上げました。それには理由があるんです。突然の世迷い言に困惑していることと存じますが、もしハルト様も前世の存在を信じられているのであれば、私の話をお聞きいただけないでしょうか？」
そう語るリーゼロッテの声からは緊張が読み取れるものの、確たる決意も感じられる。
「……承知しました。お聞かせください」
リオは胡散臭そうな顔をせず、真面目な面持ちで頷く。

「私には、前世の記憶があります」

リーゼロッテは硬い声で告げた。リオの顔をまっすぐと見つめ、その表情に変化がないかを窺っている。だが、リオもそう簡単には内心を見抜かせない。

「信じましょう」

リオはリーゼロッテを直視して応じる。すると、リオを見つめ返していたリーゼロッテの瞳に、微細な驚愕の光が灯った。

「どうして、ですか？」

どうして、こんなにあっさりと信じてくれるのか？　リーゼロッテは期待を込めて問いかける。

「リーゼロッテ様のことはこの国の王侯貴族の中で一番に信用しておりますので」

「……ありがとうございます」

期待していた直接の答えとは違っているのか、リーゼロッテは少しもどかしそうに顔を曇らせるが、同時に少し照れくさそうに礼を言う。

「以前、夜会の開催期間に私が名誉騎士に叙任された直後に、リーゼロッテ様とリッカ商会が抱える秘密に関して少しだけお話をさせていただきましたよね」

「はい」

その時は美春達がリッカ商会の商品名が地球の言葉と同じであることに気づいていることを伝え、リーゼロッテとはこれから先も懇意にしたいと打ち明けて、その上で秘密に関して他言はしないと話をした。

リーゼロッテの側から秘密を知りたくはないのかと探りがあったが、リオからは踏み込まずに現状維持を選択したのだが――、

「リーゼロッテ様に前世の記憶があることが、リッカ商会の製品が抱える秘密そのものというわけですね」

今日のリオは自分から踏み込んだ。場合によっては、というより、もうほとんどリーゼロッテに自分の前世のことを伝えていいとすら思っている。

「その通りです。この世界の言葉を学ばれた美春様達がリッカ商会の商品を知って驚かれたのは当然ですね。私は美春様達と同じ世界で生まれ育った記憶がある。その記憶を頼りにリッカ商会で様々な商品を開発していたというわけです。ですが、美春様達からこの話を聞いていたのなら、可能性としてハルト様は私に前世の記憶があることを踏まえておられたのでは？」

「……ええ。あるいは、美春さん達のような方々をリーゼロッテ様が保護されていて知識を提供させているか、美春さん達の世界のことが記された書物でもお持ちなのではないかといった線も考えておりました」

「では、あの時、あえて真相に迫ろうとしなかった理由をお聞かせいただくことはできないでしょうか？」

リーゼロッテはじっとリオを見つめて尋ねた。

「リーゼロッテ様からすれば美春さん達は商売敵にもなりかねい存

在ですからね。無理に秘密を知ろうとすれば、脅しをかけているようにも捉えかねられない。だから、他言する気はないことを伝え、リーゼロッテ様と懇意にしたいという気持ちを強調するだけに留めておきました。実際、美春さん達は商売をする気はなかったので」

「……ご配慮、痛み入ります。ですがそれは、少なからず警戒の念もあった、ということでしょうか？」

「直截的に申し上げるのならば、そういった懸念もありました」

と、リオは包み隠さずに告げる。

「然様でございますか……」

リーゼロッテは苦いものを飲み下すように唸る。出会ってからさほど時間は経っておらず、お互いの信頼関係の形成が不十分であった以上は、どちらかが歩み寄ろうとしない限り、警戒して然るべき状況ではあった。ただ、リーゼロッテとしてはその時に勇気を出して歩み寄っておけばよかったのかもしれないという思いがあり、胸が詰まりかける。

「ですが、先ほど申し上げた通り、リーゼロッテ様のことはこのガルアーク王国の王侯貴族の中で一番に信用しております。だからこそ、お尋ねしたい。どうしてリーゼロッテ様は、私にご自身の秘密を打ち明けてくださろうと思ったのですか？」

リオはストレートに自分の心情を表明し、その上で核心となる問いを発した。

「……ハルト様にも、前世の記憶があるのではないかと思ったからです」

リーゼロッテは緊張で微かに表情を強張らせながらも、意を決したように答える。

「なぜ、そうお思いに？」

リオの声はあくまで悠然と響いた。

「心当たりがあったからです。私がこうして生まれ変わったのなら、私が死んだ交通事故で一緒に亡くなった方々が生まれ変わっていたとしても不思議ではない。その一人が貴方だと、ハルト様の名を知り、アマカワという家名を聞いて、確信に近い思いを抱きました。ただ、いざ目の前にすると踏ん切りはつかなかったのですが……」

そう語るリーゼロッテの声からは複雑な思いが読み取れる。一方――、

「私の家名と名前を聞いて、ですか……」

リオはわずかに目を見開き、驚きを示す。唯一、予想の範疇にない事実がリーゼロッテの口から語られたからである。それは、すなわち――、

「私が想定する人物と前世の貴方が同一人物であるのなら、私は前世の貴方のことを知っているんです、ハルト様。いえ、天川春人さん」

リーゼロッテは磁力に吸い寄せられるように、真正面に座るリオを凝視した。

第１８８話　天川春人（あとがきに世界地図を追加）（後書き）

ご要望に合った作中舞台の大陸地図です。ペイントを使用して手書きで作成した関係上、従前に作成したシュトラール地方一部の地図と細部の形が異なっているかもしれませんし、大陸全体を描写した関係上、細かな情報は記載されていません。また、書籍版を含めて今後、地理設定に変更が生じる可能性もあるので、その旨もご了承ください。Ｗｅｂ版の作中描写と矛盾した際は修正のために取り下げる場合がございます（未開地はもう少し横に広くなるかもです）。

＜ｉ２８８２６１―１３４２３＞

追記：説明線と文字なし版も載せてほしいとリクエストがあったので、掲載します。ただ、パソコンを使ってイラストを描いたことがなく、描くのに全神経を使っていて途中で画像を保存しておりませんでした。説明線と文字あり版の画像をペイントの消しゴムで消した関係上、細部の線も消えて書き直したので、形が微妙に変わったかもしれませんので、ご了承ください（線が微妙に消えてしまったところは気が向けば修正します……）。

＜ｉ２８８２６３―１３４２３＞

第189話　源立夏

「私が想定する人物と前世の貴方が同一人物であるのなら、私は前世の貴方のことを知っているんです、ハルト様。いえ、天川春人さん」

リーゼロッテはリオを見据え、そんなことを言った。

「……」

リオは即答はせず、考えをまとめるようにまつげを伏せた。

「……」

リーゼロッテは緊張しているのか、硬い表情でリオの応答を待つ。すると、ややあって――、

「確かに私には前世の記憶があります。天川春人といいました」

リオはローゼロッテが望むであろう答えを口にした。

「っ、やっ、ぱり……」

リーゼロッテはハッと息を呑んだ。その瞳は喜びで輝いているようにも、郷愁から潤んでいるようにも見える。

「リーゼロッテ様は前世の私のことをご存じとのことでしたが、先ほどの話だと同じ交通事故で亡くなられたんですよね？」

と、リオはリーゼロッテに確認する。

「はい。前世の私もあのバスに乗っていたんです。名前はその、源立夏（もとりっか）といったのですが……」

リーゼロッテはそう言って、リオの顔色を窺う。

「源立夏さんですか……。だから、リッカ商会なんですね」

リオは立夏の名に聞き覚えはないらしく、ここで初めてリッカ商会の名付けの理由を察する。

「……ええ。亡くなった時は女子高生でした。覚えていらっしゃいませんか？」

「そういえば、いらっしゃったような記憶が……」

リオは朧気に記憶を振り返った。

「直接の面識は……、ありませんでしたからね」

リーゼロッテは心なしか、少し寂しそうに微笑む。

「ですが……、天川春人の名はご存じだったのですよね？」

リオは不思議そうに首を傾げる。

「はい。えっと、前世の私が通っていた学校が、天川春人さん……先輩の通われていた大学の付属校だったのと、知り合いに、天川先輩のことを好きな人がいたもので」

リーゼロッテは視線を泳がし、上ずった声で答えた。

「……そう、でしたか」

リオは斜め上の回答が戻ってきて、軽く面食らってしまう。

「は、はい。それに……」

「それに？」

「あ、いえ……」

――本当は私自身も、中学の頃に天川先輩とお会いしたことがあって……。

リーゼロッテはそう言いかけて、言葉を飲み込んでしまう。リオは立夏のことを覚えていなかったようだし、なんだか妙に気恥ずかしかったから。

「……失礼しました。妙なことを訊いてしまい」

リオもなんだかおもばゆくて、バツが悪そうに謝罪した。

「い、いえ」

リーゼロッテは微かに頬を赤らめてかぶりを振る。アリアを初めとする侍女の面々がこの場にいたら、珍しいものが見られたと喜んでいたことだろう。

「……」

リオからも何か気の利いたことが言えるわけではなく、しばし無言の時間が続く。

「その、ハルト様」

沈黙を破ったのは、リーゼロッテだった。

「何でしょうか？」

「どうしてこんなに、前世の記憶のことをあっさりと認めてくださったのですか？」

訊いて、リーゼロッテはじっとリオの顔を見つめる。

「既に申し上げた通りですよ。リーゼロッテ様のことはこの国の王侯貴族で一番に信用しております。リーゼロッテ様ならばむやみに言いふらす真似はしないでしょう？　他言して欲しくはない事実ですから、誰が相手でも教えようとは思いません。あとは何よりも、思い切って前世の話を切り出してくださったリーゼロッテ様の思いを無下にはできなかったから、といったところでしょうか」

と、リオは正直に理由を打ち明けた。

「それは……光栄です」

「こちらこそ、伏せていた秘密を打ち明けてくださり光栄です」

リーゼロッテが少し気恥ずかしそうにぺこりと頭を下げると、リオはフッと笑みをこぼした。

「はい」

と、はにかんで応じるリーゼロッテ。

「こうして互いの秘密を共有し合ったことで一つ確認したいのですが、リーゼロッテ様はどうしてリッカ商会の製品名に地球の言葉を用いていらっしゃるのですか？」

リオは今度は自分から話を振る。

「もともとは自分と同じように前世の記憶を持つ方々がいるかもしれないと考えてのメッセージだったからです。まあ、地球から召喚された勇者様方が現れて、受け手となる人間が想定外に広くなってはしまいましたが……」

「……何の目的でメッセージを？　あの交通事故で亡くなった人物を対象にしていたということになるんですよね？」

「会ってお話をしてみたかったから、ですかね。地球の、少しでも自分が知っている人達と……。本当に私以外にも前世の記憶を持つ人はいるんだろうか。前世の記憶はまがい物で、私の頭がおかしくなってしまったんじゃないか。仮におかしくなかったとしても、私が想定している人達以外にメッセージが届くんじゃないか。そう思うと不安はありましたが」

と、リーゼロッテは遠い目で、きまりが悪そうに語った。要するに、寂しかったからということだろうか。ただ、不安に思うことも含め、気持ちは理解できる。

「そうでしたか……」

リオはぱちりと目を瞬くと、くすりと口許をほころばせた。

「ですので、ハルト様さえよろしければ、思い出話に付き合ってい

ただければと。前世で生きていた頃には、お話しできなかったことをたくさんお話ししてみたいんです」

それでリーゼロッテの目的は達成されるのだから。

「承知しました。私でよければ」

リオは快く了承した。それから、ぽつりぽつりと、二人でしばしとりとめのない話をする。春人は大学でどんな勉強をしていたのかとか、どんなアルバイトをしていたのかとか、立夏は高校でどんな部活や委員会に入っていたのかとか、何が好きだったとか、何が趣味だったのかとか、立夏がバスの中で実は人間観察をしていてよく一緒に乗っていた春人のことも見ていたのだとか。

「天川先輩はよく窓の外を見ていらっしゃいましたよね？　何を見ていらしたんですか？」

話の流れでリーゼロッテが天川春人のことを指して呼ぶ時は、天川先輩という呼称になった。

「良く覚えていますね。特には何も見ていなかったと思います。乗っている間はすることもなかったので」

「ふふ、そうだったんですね」

リーゼロッテはくすくすと笑って納得した。そして――、

「そういえば、私達が乗っていたバスに小学生の女の子も乗っていましたよね。よく三人だけで同じ時間帯のバスに乗ることがあったんですけど……」

話題は不意に、ラティーファの前世――遠藤涼音のことになる。

「……ええ。いましたね」

リオはあたかも記憶を振り返るかのように、わずかに間を開けて応じた。

「あの子ともいつかお話をしてみたいなと思っていたんです」

こうやって前世のことを振り返って話している時のリーゼロッテは、普段よりもあどけない表情を覗かせている。

「……実を言うと、あの子もこの世界で生まれ変わってはいます」

リオは思案し、そう打ち明けた。

「そうなんですか？」

リーゼロッテは強く瞠目する。

「ええ。ひょんなことから遭遇し、前世のことを知るようになりまして……。今は遠くに暮らしていて、簡単に会うことはできないんですが、いつかお連れすることもできるかもしれません。無論、本人が望めばになってしまうのですが、次に会う機会があればリーゼロッテ様のことをお伝えしてみます」

問題は色々とあるし、実現するかもわからないが、ラティーファにもそういった意思があるのであれば、遠い将来にでも実現はできるかもしれない。

「はい、ぜひ」

リーゼロッテは破顔してお願いした。

「承知しました」

リオはフッと笑みを刻んで首肯すると――、

「ところでリーゼロッテ様は、この後まだお時間はおありですか？」

と、唐突にリーゼロッテに尋ねた。

「はい。今日は休日としたので……」

リーゼロッテは頷きつつ、こてりと小首を傾げる。

「よろしければ昼食でもいかがですか？　私の手作りで恐縮ですが、せっかくなので懐かしい味をご馳走しますよ」

リオはリーゼロッテを昼食に誘う。

「懐かしい味、ですか……」

リーゼロッテは興味深そうに瞬きをする。

「ええ。何が出るかは実際のお楽しみですが、アリアさんの分も別にご用意するので、ご予定がなければぜひ」

「……恐れ入ります。では、お願いしてもよろしいでしょうか？」

そうして、昼食はリーゼロッテと一緒にとることが決まった。す

ると、リオは間もなくして昼食の準備を開始する。その間にリーゼロッテはアリアのもとへ向かい――、

「今日はこのままハルト様に昼食をご馳走していただくことになったわ。貴方もご相伴に与らせていただけることになったから、楽しみにするといいわよ。きっと珍しくて美味しいものを作っていただけるはずだから」

と、伝えた。

「それはなんと、光栄ですね……」

アリアは目を見はって口許をほころばせる。そして、リオに用意してもらったお茶とお菓子を見下ろしながら――、

（となると、ご用意していただいたお菓子をいささか食べすぎたのは尚早だったでしょうか……。いえ、これだけ素晴らしいお茶を用意されて、お菓子に手をつけないのは失礼というもの。日課の訓練の量を増やせば問題はないでしょう）

と、そんなことを思っていた。

◇　◇　◇

それから、小一時間ほど経過すると、リーゼロッテはアリアと一緒に邸宅の食堂へと案内されていた。

ダイニングテーブルの上には、葉が巻かれた挽肉の和風ハンバーグ、カリッと揚げたてのてんぷら、味が染みこんで柔らかそうな大根の煮物、香ばしく炒められたうどの皮のきんぴら、菜を使ったおひたし、たっぷりのショウガとネギで彩られた豆腐（と醤油らしき

液体）、箸休めの漬物数種と、見事に和風の献立が並んでいる。いくつかは時空の蔵に下準備を済ませた食材や作り置きを保存していた品もあるが、いずれもリオが調理した品だ。

「とりあえずすぐにお出しできる品を色々と作ってみました。お口に合うかはわかりませんが……」

リオはそう言いながら、炊きたての白米とお味噌の香りが上品に香るけんちん汁をよそっている。

「……」

リーゼロッテは目を点にして食卓を眺めていた。無理もない。長年、リーゼロッテが探し求めてきた食材がいくつも、当然のようにこのテーブルの上に並んでいるのだから。

「本当に珍しいお料理の数々ですね。大変美味しそうです」

アリアは興味深そうに目をみはっている。

「……想像の何倍も上を行く品の数々です。ハルト様もお人が悪い」

リーゼロッテは今すぐにでもリオに食材を譲ってほしいと訴えかけたい気持ちをグッと堪えて、なんとか言葉をひねり出した。

「以前、夜会の時にヤグモ地方の食材にご興味がありそうでしたので」

リオはくすりと悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「……ですね。覚えておいでだったとは、光栄です」
「ぜひ、温かいうちにお召し上がりください。アリアさんのお席もご用意しましたので。慣れると箸という道具を使うと食べやすいのですが、今日はナイフとフォークとスプーンをお使いください」

事前にアリアも一緒で構わないと話はしてあり、堅苦しい作法もなしという手はずになっている。

「はい。ありがたく。アリアも座らせていただきなさい」

リーゼロッテはアリアと一緒に椅子へ腰を下ろした。リーゼロッテのもとにもナイフとフォークとスプーンが置かれていたが、リオの気遣いなのかそれとは別に用意されていた箸をそっと手に取ると――、

「いただきます」

と、小さく口を動かす。まず手につけたのは、大根の煮物。柔らかい。スッと箸が通り、切りたいように分けることができた。リーゼロッテはアリアから見れば妙に慣れた手つきでそれを口へ運んだ。瞬間――、

「んぅ……」

あまりの懐かしい美味しさに、リーゼロッテは艶めかしい声を漏らしてしまう。その味を慈しむように、しばし押し黙る。アリアはそれを確認すると、主に倣ってナイフとフォークを使い切り分けた大根を口へ運んだ。

「っ……」

アリアはぱちぱちと瞬きをする。

「美味しいです、すごく……。どう、アリア？」

しばらくすると、リーゼロッテはほうっと息をついて言った。そして、アリアにも感想を求める。

「初めて味わう料理ですが、美味です。優しい味ですね。それでいて癖になりそうな」

アリアもお気に召したようだ。

「ありがとうございます。これといって召し上がる順番に作法はないので、お好きな品から召し上がってください」

リオは朗らかに礼を言うと、食事の続きを促した。

「恐れ入ります」

リーゼロッテは他の料理の味が気になるのか、そわそわと料理を眺める。次に手をつけることにしたのは、ショウガとネギが乗った豆腐。それにお醤油をかけて口へ運ぶ。

「んう……」

ついつい口許が緩んでしまいそうになるのを抑えられない。本当に懐かしい味を楽しむと、おひたし、和風ハンバーグへと順に箸を動かしていく。そして、お米を一口。

「ふふ」

リーゼロッテは幸せそうに笑みをこぼした。これだ。これが白米だ。モチッとしていて、つやがあって、ふっくらしている。リーゼロッテがシュトラール地方で探し求めてようやく手に入れたパサパサの米とは違う。口に入れた瞬間に美味しいとわかる。

そして極めつけは、けんちん汁である。それを口に含み、素材の味がたっぷりと染みこんだ味噌仕立ての汁の味を楽しむ。その後はもう無我夢中だった。礼儀は踏まえつつも、黙々と箸を動かし、恋い焦がれた和食を無心になって味わい続ける。

はしたないとわかっていても、ご飯とけんちん汁のおかわりを要求してしまったほどだ。アリアも便乗してしっかりとおかわりをもらい、主従で黙々とリオの料理を食べ続けていた。

リオは余計な会話は振らず、時折アリアが食べ方や調理法について不思議そうにしているのを見ると、その疑問を解消してやる程度に留める。

それからしばらくして食事を終えると――、

「……ご馳走になりました。とても幸せな一時でした。時間も会話も忘れてしまうくらいに」

リーゼロッテは少し照れくさそうに、可愛らしく会釈する。

「ご相伴に与り、至福の一時でございました。誠にありがとうございます、ハルト様。いえ、アマカワ卿」

アリアは深々とリオにこうべを垂れた。

「喜んでいただけて何よりです。近日中に王都を離れるかもしれないのですが、ご希望とあらばまたお作りしますので」

「はい、ぜひ！」

リーゼロッテはそれはもう嬉しそうに、間髪を容れずにお願いする。

「畏まりました」

リオも笑顔で快諾した。

「ですが、頂いてばかりというわけにもまいりません。ぜひ、このお礼をさせてくださいませんか？」

リーゼロッテはリオを見据え、お礼をしたいという確固たる意思を示す。

「いえ、お食事をご用意しただけのことですから」

リオはやんわりと断る。ただ――、

「お願いします。これだけの品を頂いて、感謝の気持ちをお伝えしたいんです」

リーゼロッテも簡単には引き下がらなかった。

「ですが……」

まさかお礼をさせてくれと請われることになるとは思っていなかったのか、リオは即座には決めかねる。

「私に何かできることがあればぜひ仰ってください」

と、リーゼロッテは積極的に申し出る。これが坂田弘明ならリーゼロッテにデートの一つでも要求しているところであろう。仮に今、リオがそう要求すれば、リーゼロッテは「はい、喜んで」と受け容れるかもしれない。ただ、当たり前かもしれないが、リオのお願いは異なるものだった。

「では、私が留守にしている間に、この家の定期的な管理をお願いできませんか？　陛下から家臣と一緒に使用人をつけてくださるというお誘いはあったのですが、現状ではどれくらいこの家に住むことになるかはわからず、お断りしてしまったものでして。信頼できる方にお任せできればとは思っていたんです」

下手に家来をもらってしまっては国との結びつきが強くなりすぎてしまうし、確実に王侯貴族の息がかかった人間を雇うのもなんだか気が引けてしまうという懸念もあった。それに、フランソワに任せるとなし崩し的に話を進められてしまうのではないか、と警戒していたりもする。その点、リーゼロッテならば信頼できる。

「畏まりました。そういうことでしたら、クレティア公爵家の使用人から信用できる人間を選定いたしましょう」

リーゼロッテは小気味よく請け負った。

「助かります。週に一度、見回りに来ていただく程度で大丈夫ですので」

「お任せください」

と、頷くリーゼロッテだが、実際には週に一度どころか毎日、邸宅を警備する人間を派遣させて、定期的に掃除もさせようと考えて

いたりする。それをリオが知るのは、まだ先の話であった。

第１８９話　源立夏（後書き）

以前に活動報告でも公開した書籍版にも登場する源立夏のキャラデザです（書籍８巻で初登場します）。

<ｉ２５７４５４｜１３４２３>

第１９０話　そして訪れた変化（前書き）

前回のあらすじ：遂にリーゼロッテの前世が判明し、二人で前世のことを話ながら食事をしたリオ。そこから１週間ほど時は経ち、リオはレストラシオンの本拠地ロダニアへと戻り――。

なお、Ｗｅｂ版９章は今回で終了し、次回から第１０章（あるいは間章扱い）へ突入します。本文をご覧になった後はよろしければあとがきもご覧ください。

第１９０話　そして訪れた変化

リーゼロッテとの会食を終えた後、リオは一週間ほどガルアーク王国に滞在すると、沙月と別れを済ませてセリアやクリスティーナ達と一緒にロダニアへと一時帰還した。

ちなみに、リーゼロッテはリッカ商会の仕事もあって、リオ達よりも早くにアマンドへと帰還している。

ロダニアへの到着後は、いよいよセリアが暮らしている邸宅のお風呂作りに着手することにした。必要な材料をロダニアで買い集め、工事に着手する。

リオの邸宅に何やら資材が運び込まれていることはちょっとした噂になったのか、領館で学生達に講義をしているセリアにも何か作っているのかと訊く者がちらほらといて、クリスティーナやフローラからも尋ねられることになる。

その度にセリアが「ちょっと浴場の改装を」と答えるのだが、それを聞くと貴族達の興味もすぐに消え去り、その後は特に尋ねられることもなくなった。

リオはひたすら邸宅に引きこもって日中は一人で工事をしていたので、外を出歩くこともまったくなく、すべてはセリアから伝え聞いた話である。

ともあれ、工事は順調に進んでいき、二週間が経過した。そんなある日。

「ようやくお風呂が完成しました。お湯さえ沸かせばすぐにでも入れますよ」

日が暮れる少し前、リオはセリアのもとを訪れて、浴場の改装工事が終わったことを報告した。ちょうど講義を終えて帰宅し、書斎

で研究を行っていたセリアだったが――、

「わ、そうなの！　ありがとう、お疲れ様！」

お風呂完成の報告を聞くと嬉しそうに笑みを浮かべ、椅子から腰を持ち上げた。

「せっかくなので、一番風呂はいかがですか？　講義と研究で今日もお疲れでしょう？」

と、リオはセリアに提案する。

「それは嬉しい……し、すごく魅力的な誘いなんだけど、私はいいからリオが先に入っていいのよ。毎日ずっと工事をしてくれて、リオの方が疲れていて当然なんだから」

セリアは困ったように言った。自分のために行動してくれていることは嬉しいのだが、もう少し自分のことも優先して欲しいというか、与えられてばかりで申し訳ないというか、自分からも何かしてあげられたらいいのにとか、そういった気持ちが色々と複雑にこみ上げてきたのだ。

「俺は大丈夫ですよ。この家に帰ってからも、夜中に抜け出して岩の家のお風呂に入ったりしていましたから、久しぶりのお風呂というわけでもありません」

と、リオは言うが――、

「それを言うなら私だって一緒に連れて行ってもらっていたし……、この家のお風呂はリオが一人で造ったんだから、一番風呂の権利は

リオにあると思うの」

セリアは一番風呂の権利をリオに譲ろうとする。

「先生に喜んでもらいたくて造ったわけですし、遠慮する必要はないんですが……」

「そ、そんなこと言われたって……」

臆面なく自分に喜んでほしかったと言われ、セリアは顔を紅くしてしまう。リオの言葉に何の嘘偽りもない本心だとわかってしまうから。

というのも、今度ロダニアを出てしまえば戻ってくるまでに時間が空いてしまうので、その間にセリアの生活を少しでも快適にしようと思ったからこそ、リオはお風呂場の改装工事を行ったのだ。

なので、今のリオはお風呂を造るためだけにロダニアに滞在しているわけで、工事が終わればすぐにまた旅立ってしまうとセリアは教えられている。

（どうしてこの子はここまで私のために色々としてくれるのかな。恩師だからって慕ってくれているけど、私からは何のお返しもできていないのに……）

浴場の改装工事が終わった以上は、またリオはすぐに旅立ってしまう。だから、その前に少しくらいは恩返したい。そんな思いが益々こみ上げてきた。だからか――、

「……そ、そんなに言うなら、じゃあ、一緒に入る？　せ、背中くらい流すから」

セリアは顔を真っ赤にして、上ずった声でそう言った。

「……え？」

リオはきょとんと目を丸くする。

「い、嫌じゃ無ければよ！　ア、アイシアも一緒にね！　アンジェラさんとソフィが起きている時間はまずいから、二人が寝た後になるだろうけど！」

セリアは赤面したまま一気にまくし立てた。一応、リオが造ったのは、五人くらいなら浸かれるくらいに大きな浴槽である。なお、アンジェラとソフィとは屋敷で働く使用人の親子だ。

「ええっと……」

突然の話すぎてなんと答えればいいのかわからず、リオは言葉に詰まってしまう。

「へ、変な勘違いはしないでね！　お風呂が出来上がった以上は、リオは明日にでも旅に出るんでしょ？　そうなったらまたしばらく会えなくなっちゃうし、さ、寂しいというか、リオにはお世話になりっぱなしだし、背中くらい流してあげたいなというか、なんというか、その……」

セリアは早口で語っていくが、次第に喋ることがなくなったのか、尻すぼみに声を小さくする。

「……お気持ちは嬉しいんですが、流石に先生も成人の貴族女性ですし、男の俺に裸を見せてしまうのはまずい気が……」

リオは精一杯思案し、常識的な回答をひねり出した。

「も、もちろんタオルは巻くわよ！　お、お風呂に沈む時はとるから、背中をむいてもらうことになるけど……」

「……」

咄嗟には言葉が出てこず、室内に短い沈黙が降りる。かと思えば――、

「私は一緒に入りたい。三人で入ろう」

アイシアがおもむろに実体化して、セリアの提案に乗っかった。

「アイシア……」

リオはギョッと瞠目する。

「セリアは春人に恩返しをしたい。でも、春人にしてあげられることがなかなか見つからない。気持ちを受け取ってあげるべき」

その言葉はセリアの心情の一面を的確に言い表していた。

「うっ、まあ、そうなんだけど……」

アイシアの発言を受けて、気恥ずかしそうに白状するセリア。ぼんやりとしているようで、ハッとするような洞察力を発揮することがある子だと、改めて感じていた。ともあれ、リオは改めて決断を求められることになる。結果――、

「……わかりました。先生が、本当に構わないのなら」

リオは悩ましそうに、首を縦に振った。

「……い、いい、わよ。も、もちろん」

リオと一緒にお風呂に入る。改めてその光景を想像するととんでもなく恥ずかしくなったが、ここで翻意することなどできるはずもない。セリアは上ずった声で承諾したのだった。

◇　◇　◇

そして、その日の深夜。

「……いいんだろうか」

リオは腰にタオル巻き、邸宅の浴室に一人で立っていた。この後、すぐにセリアとアイシアも来ることになっていて――、

「ちょ、アイシア！　ちゃんとタオルを身体に巻きなさい！」

アイシアが全裸で来ようとしたのか、脱衣所で騒がしく準備をしている。ちなみに、屋敷に仕えているアンジェラとソフィは邸宅の外にある小屋で親子二人だけで暮らしているし、警備の人間は外を厳重に警備しているので、よほど大きな声でも出さない限りは誰も屋敷には入ってこないだろう。

それから、長いような短いような、数十秒が経過すると――、

「お、お待たせ」

セリアとアイシアがバスタオルで身体を隠して、浴室に入ってき

た。

「……はい」

リオは二人から視線を逸らし、珍しく緊張気味に返事をする。

「……じゃ、じゃあ、背中を流すから。椅子に座って」

セリアも緊張しているのか、強張った声で言った。

「はい」

リオは心を落ち着けるべく、小さく深呼吸して風呂椅子に腰を下ろす。数秒ほどしてセリアとアイシアも歩き出し、二人で背後に座ったのがわかった。

「お湯を出す」

アイシアは桶を手に取ると、精霊術でそこにお湯を入れる。そして、セリアと順番に石鹸を取り、それぞれ手持ちのミニタオルを濡らして泡立てていく。

「じゃあ、洗うわよ。洗い足りないところがあったら言ってね」

セリアはそう言うと、左後ろから優しい手つきでリオの背中を洗い始める。右後ろにはアイシアがいて、同じくリオの背中を洗い始めた。

「……」

ごし、ごし。アイシアの口数が少ないのはいつものことだが、リオもセリアも緊張しているせいか、無言の時間が続く。しかし、しばらくすると――、

「……リオ、よく見ると目立たない傷が身体中にあるのね」

セリアがぽつりと口を開いた。

「幼少期にスラム街で暮らしていた頃の傷、ですかね。暴力沙汰も日常茶飯事だったので。でも、成長したおかげで、子供の頃よりはだいぶ目立たなくなりました」

あまり生々しく語りたくもないので、リオは何とも思っていないように軽く答える。

「そう、なんだ。消せればいいんだけど……」

セリアは傷跡にそっと手を触れた。治癒の魔法でも完全に再生してしまった傷を戻すことはできないのだ。

「貴重な霊薬を使えば消せないこともないみたいなんですが、いいんです。本当に特に気してないので」

「そっか……」

セリアはどんな思いを込めたのか、静かに相槌を打つ。その後は再び黙々と背中を流す時間が始まる。ただ、沈黙が気まずいということはなかった。

そうして、しばらくすると――、

「後ろはこれで大丈夫。前も洗う？」

と、アイシアが尋ねる。
「あはは、前はいいかな。自分で洗うから。二人も自分の身体を洗ってください」
リオは少しだけ気まずそうに笑って断った。バスタオルを巻いているとはいえ、正面にアイシアとセリアが来たら色々と目線のやり場に困りそうだったから。
「う、うん」
セリアも前まで洗うとは言いださず、素直に頷く。以降は各々、身体を洗い始め、リオは二人に先んじて髪も洗い始めた。そのままお湯で身体を洗い流すと、一足先に湯船へと浸かることになる。そして――、
「私達も入るわね、その……」
「後ろを向いています」
セリアとアイシアも身体を洗い終えて、お風呂に浸かることになった。
「……」
ちゃぷんと、お湯に入る音が聞こえてくる。そこから先はリオは後ろを向いたまま――、
「気持ちいいわね」
「はい」

「ありがとう、リオ。素敵なお風呂を作ってくれて」
「ええ」
「ふふ」

ぽつりぽつりと会話を交わす。やはり緊張していることは緊張しているのだが、居心地は悪くない。数十秒ほどだろうか、静かで、心地よい時間が流れた。アイシアは気持ちよさそうに目を瞑り、お湯の暖かさに身を委ねている。

「明日には出発する……のよね？」
「ええ、そうしようかと」
「そっか……」

などと、沈黙が続くかと思えば、不意に会話が発生する。

「それで、空間魔術を込めた魔道具を用意しました。使用している魔玉がそこまで大きくないので範囲は短いんですが、ペアで用意した魔玉を持つ俺を遠隔地から呼び寄せる魔術が込められています。使い方を書いたメモと一緒に後で現物を渡すので、万が一の時は使用してみてください。遠くにいる場合は魔力だけを無駄に消費する結果になっちゃうんですが……」

リオは良い機会だと、時間をかけて作成していた魔道具の存在を教える。

「ま、またそんな常識外れな品を軽々と……」

突然の申し出に、セリアは絶句しそうになる。魔玉とはすなわち精霊石のことだが、シュトラール地方の人間族が人工的に作り出せる品ではない。加えて、空間魔術など同じくシュトラール地方の現

代魔術では再現が不可能な魔術である。
ちなみに、魔力の可視化など、精霊術の基礎的な技術はセリアも習ってはいるが、シュトラール地方の現代魔術を大きく逸脱した魔術は習っていなかったりする。
その理由は、仮に使用できることが露見した場合に生じる身の危険を防ぐためだ。天才魔道士と呼ばれるセリアならば、知識さえ教えてもらえば空間魔術すらリオ以上に使いこなしてしまうかもしれないから。

「人に見せたりはしないでくださいね」
「当たり前よ」

セリアは呆れたように返事をする。そして、ジト目でリオの背中を見つめると――、

「早く帰ってきてよね。待っているから」

と、少しだけ唇を尖らせて言った。

「……ええ。最長でも三ヶ月くらい、だと思います」

リオはだいたいの目安を教える。

「最長で三ヶ月か……。わかった。また明日、出発の挨拶はするんだろうけど、行ってらっしゃい、リオ、アイシア。気をつけてね」

セリアはやれやれと息をつくと、二人に送迎の挨拶を告げる。

「はい」

柔らかなリオの声が、浴場内に響いた。

◇　◇　◇

翌朝、リオはセリアに見送られ、いよいよロダニアを出発する。街道を東に進んでしばらくすると、周りに誰もいないことを確認して、街道から外れる。そのまましばらく走ると不意に立ち止まり――、

「ここら辺でいいかな。行くよ、アイシア」

アイシアに呼びかけた。

（うん）

と、すぐにアイシアから念話で返事が来る。行き先は事前に伝えてあるから、それ以上の説明は不要だ。リオは懐から転移結晶を取り出すと、呪文を詠唱することにした。

「《転移魔術（テレポート）》」

瞬間、転移結晶を持つリオを起点に、空間が渦状に歪んでいく。行き先はもちろん、この転移結晶をリオに譲り渡した人物達が暮らす土地。すなわち、未開地にある精霊の民の里で――。リオは瞬く間にその場から消したのだった。

◇　◇　◇

景色が一瞬で変わる。リオは気がつくと、森の中に立っていた。すぐ傍には以前にヤグモ地方から精霊の民の里へ転移した時にも目

撃した泉がある。

「転移成功。出てきていいよ、アイシア」

と、リオが呼びかけると、アイシアがすぐに姿を現す。

「ここが精霊の民が暮らす土地？」

アイシアは周囲を見回して尋ねる。

「そうだよ。とりあえず、上空に行こうか」

「わかった」

そうして、二人は軽く地面を蹴って、精霊術で浮遊を開始した。そのままぐんぐんと上空へと躍り出ると、周囲を見渡す。

なお、向こうを出発したのは朝だ。時差があるのだろうが、こちらもまだ日が出ている。位置的にお昼くらいといったところか。

「最初は最長老様達がいる庁舎へ向かうよ。付いてきて」

「うん」

リオは庁舎として使用されている見覚えのある大樹を発見すると、そちらへと移動を開始する。転移完了時に発生したオドとマナの膨大な奔流で里の者達もリオが転移してきたことには気づいているはずだから、すぐに迎えの者達と鉢合わせるかもしれない。

案の定、庁舎へ近づいた辺りで、巨大な鳥の背中に乗って上空に躍り出てくる者達がいた。いずれもよく見知った少女達である。その中には――、

「やっぱり、お兄ちゃんだ！」

リオの義妹、ラティーファもいた。リオを発見すると、パッと顔を明るくする。ただ、リオの隣にいるアイシアの姿を発見すると、ぱちくりと目を瞬いてもいた。一緒にいる面々も同じ反応を見せている。

「俺の義妹のラティーファと、銀狼獣人のサラさん、ハイエルフのオーフィアさん、そしてエルダードワーフのアルマさんだ。アイシアのことを紹介するね」

リオは懐かしそうな笑みを浮かべて、アイシアに語りかけた。

「うん」

と、アイシアはいつも通り、抑揚のない声で返事をする。それから、すぐに上空で鉢合わせると――、

「ただいま、ラティーファ。皆さんも、お久しぶりです」

リオは呆気にとられた様子のラティーファ達に語りかけた。

「……お帰りなさい。その、すごく綺麗な人は？」

ラティーファはそっとアイシアの顔を覗く。

「俺の契約精霊……アイシアだよ。シュトラール地方へ行っている間に、遂に目覚めたんだ」

リオはアイシアのことを教えてやる。

「アイシア……様」

人型の高位精霊を目の当たりにしたからか、サラ達はハッと顔色を変えて頭を下げた。

「とりあえず下におりましょう。詳しい話は最長老様達も交えて」

どうせ最長老達にも事情を説明することになるので、とりあえず移動を優先させる。

「わ、わかりました！　エアリアル、地上に降りて」

オーフィアは少し慌てた様子で、自分の契約精霊に降下するよう指示を出す。降下している最中、ラティーファはちらちらとアイシアのことを見つめていた。どうやら兄と一緒にいる美少女、アイシアのことがかなり気になるらしい。

ただ、すぐに地上へ着地してしまったので、会話は発生しなかった。着地した庁舎前の広場には里の者達が大勢いて、リオの姿を発見すると「やっぱりリオか」と得心する。ただ、一緒にいるアイシアの姿を視認すると、目を丸くしていた。

「最長老様達は庁舎の中ですか？」

リオは周囲からの視線を浴びてちょっとだけ苦笑すると、サラ達に尋ねる。

「はい！　……あっ、それで、その、お伝えしないといけないことが……」

こくりと頷いたサラだったが、何かを思い出したのか、話を切り

出そうとした。しかし――、

「リオ様！」

という幼い少女の声が、周囲の民達の中から響いた。どこかで聞き覚えがあるような……。

（……リオ様？）

そんな呼び方で自分を呼ぶ者がいただろうか。そう思って視線を向けると、そこには駆けつけて現れたのか、息を切らした少女が二人いて――、

「コモモ……ちゃん？　サヨ、さんも……」

ヤグモ地方にいるはずの、ゴウキの娘コモモと、村娘のサヨが立っていた。

◇　◇　◇

一方、場所は変わりシュトラール地方、ガルアーク王国。ちょうどリオが精霊の民の里にたどり着いた頃の出来事である。

沙月はリオがガルアーク王国を出立した後、碌に挨拶もせずにいなくなった美春達と再会するべく行動を起こしていた。流石に何の事前通知もなくセントステラ王国を訪問することは出来ないので、国王フランソワにお願いして先触れの使者を魔道船で派遣してもらっていたのだが――、

「セントステラ王国から使者が戻ってきたんですか！？」

沙月は使者を乗せた魔道船が帰国したことを知ると、急いで国王フランソワの執務室へと向かった。

「うむ。戻ってはきた」

フランソワは小難しい表情を浮かべており、含みのある物言いで沙月に応じる。その手には華美な装飾が施された書簡が握られていて――、

「……何かあったんですか？」

沙月は嫌な予感を抱き、神妙な顔で尋ねる。

「口頭での伝言と共に、使者が書簡を持ち帰ってきた。書簡にはセントステラ王国の国璽（こくじ）と勇者タカヒサ殿の署名があるから、偽物ではあるまい。これが肝心の書簡なのだが……、内容をお伝えしてもよろしいだろうか？」

「……ええ、もちろん」

前置きするフランソワに、沙月は固い仕草で首肯した。

「心得た」

フランソワは仰々しく頷くと、厳かな口調で書簡を朗読する。果たして、その内容を要約すると――、

――勇者タカヒサ＝センドウ殿のご意向により、現状、我が国は勇者サツキ＝スメラギ殿のご来国を受け容れることはできない。状況が変わり次第、追ってご報告申し上げるので、それまで待たれたし。

と、いうものであった。

第１９０話　そして訪れた変化（後書き）

３月２４日より好評発売中の『魅了スキルでいきなり世界最強（ＭＦ文庫Ｊ様）』に続く形で、３月３１日に『精霊幻想記　１０．輪廻の勿忘草』が発売します。書籍版の内容はＷｅｂ版と大きく異なるので参考にはならないのですが、Ｗｅｂ版で波紋を呼んだ夜会編がこの１０巻で終わります。あらすじ付きのカバーイラストを貼り付けておきますので、ご参考までにご覧ください（Ｗｅｂ版の展開に納得できなかった方も、よろしければこの夜会編（９巻と１０巻）だけでもご覧くださいませ）。

＜ｉ２９５５２１―１３４２３＞

そして、『精霊幻想記１０巻』と『魅了スキル』の発売日が近いこともあり、両作品をご購入いただくと「リオとアイシアが『魅了スキル』の世界に迷い込むコラボ小説」をご覧になれます（文庫５０～６０ページ相当の文量です。精霊幻想記の読者の皆様にもお楽しみいただけるよう、『精霊幻想記』の謎といいますか、作品の世界観に関する考察要素も盛り込みましたので、ぜひぜひご覧いただければと）。

コラボ小説の閲覧方法や両作品の詳細などは直近の活動報告（２０１８年３月１５日更新）でご確認ください。

第１９１話　再会（前書き）

前回までのあらすじ：セントステラ王国訪問の許可を求めて使者を送った沙月だったが、貴久の意向により来国を拒否されてしまうことに。一方で、いよいよアイシアを引き連れて精霊の民の里へ帰還したリオは、サヨやコモモと再会して――。

第１９１話　再会

場所は精霊の民の里。リオはラティーファ達に出迎えられて里の庁舎前にある広場に降り立つと、もう半年以上も前にヤグモ地方で別れたはずのコモモとサヨと遭遇した。

「コモモ……ちゃん？　サヨ、さんも……」

あまりに驚いたものだから、思考が停止しかけて、改めて二人の顔をまじまじと見つめる。そこにいるのは確かにコモモとサヨだ。しばらく会わないうちに二人とも少し大人びたように見えるが、見間違えるはずもない。

キラキラと目を輝かせているコモモに対し、サヨは固唾を呑んでいるというか、少し緊張しているように見える。リオと視線が合うと、所在なさげに目線を逸らしてしまった。

（まさか俺を追ってきた……のか？）

リオは二人を見つめたまま、彼女達がこの場にいる理由を考える。ヤグモ地方を出て行く際に、祖父であるホムラからゴウキ達を家臣につけると言われ、乗り気なゴウキ達からも連れていって欲しいと頼まれたことを思い出しながら……。

だが、動機はともかく、精霊の民の里にたどり着いて滞在している経緯については見当がつかなかった。二人はカラスキ王国で標準的な着物ではなく、里で作られたであろう服を着ているし、こうして出歩いていることから里の人間から受け容れられていることが窺える。そのことに少しだけホッとしつつ……。

「……ゴウキさんはどちらに？」

リオは小さく息をついて心を落ち着け、ゴウキの居場所を確かめた。おそらくはリオが里へ戻ってきたことはゴウキ達の耳にも届いているだろう。

カラスキ王国を出立した際に二人の同行を拒否した手前、自分のことを追いかけてきて再会できたことを素直に喜んでしまうわけにもいかないというか、まずは情報の共有をするべきだと考えた。すると――、

「某（それがし）ならばここに……。もう少し驚かれると思ったのですが、いやはや流石ですな。どっしりと構えておられる」

広場に集まってきた住民の中から、ゴウキがスッと姿を現して近づいてくる。その背後には妻のカヨコもいた。

「驚いていますよ。なぜ、この場にいるんですか？」

リオはわずかな呆れを滲ませて問いかける。

「リオ様のもとへはせ参じる旅の途中に、たまたまこの里へたどり着きましてな。こうして滞在させていただいている次第でございます」

ゴウキはほんの少しだけバツが悪そうに答えた。だが、それでも――、

「同行はお断りしたはずですが？」

「ですから、同行は断念し、追いかけてきたのです」

と、言葉遊びの中に確たる意思を覗かせてリオに語る。

「……わかりました。ならば、お伝えしておく話がありますので、最長老様達のもとへ向かいましょうか」

リオは思案し、深く嘆息して告げる。そのやりとりをすぐ傍で黙って見守っていたサラ、オーフィア、アルマ、ラティーファだったが――、

「では、最長老様達のもとへご案内いたします。コモモとサヨも、どうぞこちらへ」

と、年長者のサラが提案する。リオはこくりと頷くと、一緒に行こうという意味を込めて隣に立つアイシアに微笑みかけた。

アイシアはこくりと頷き、移動する流れになると思われたのだが――、

「……それはそうと、リオ様。そちらの麗しい少女は？」

ゴウキがアイシアを見て尋ねた。コモモやサヨも気になっているのか、見惚れたようにアイシアのことを見つめている。

「名前はアイシア。私と契約している精霊です」

と、リオはアイシアを紹介した。

「精霊……でございますか。いや、この里に来てから日常的に目撃してはおりますが、まさか人型精霊とは……」

ゴウキはまじまじと目をみはる。精霊術が知られているヤグモ地

方だが、精霊の存在は一般的ではない。だが、それでもこの里に来てから精霊のことを色々と知るようにはなった。
人型になれるのは準高位以上の精霊だけであること。そして、精霊の民の間で準高位以上の精霊は神格化されて敬われていること……。

「アイシアは私と契約したままずっと眠りに就いていたんですが、少し前に目覚めました。彼女のことも最長老達にお話ししないといけないんですが、自己紹介だけ先にこの場でしちゃいましょうか」

リオはそう言って、アイシアを見やる。

「アイシア、よろしく」

と、アイシアは簡潔に自己紹介をした。

「これは……申し遅れました。某はゴウキと申します。背後におりますは妻のカヨコ、そこにいるのは娘のコモモと、傍仕え見習いのサヨです」

ゴウキはヤグモ勢を代表して各々の紹介を行い、恭しく頭を下げる。他の面々も紹介された順番に従ってこうべを垂れた。

「貴方達のことは知っている。春人の大切な人達」

アイシアは静かに告げる。

「おお、おお！　それは大変光栄でございますな。リオ様からお聞きになれておりましたか。……と、ハルト？」

嬉しそうに口許をほころばせたゴウキだったが、聞き慣れぬ名前を耳にして首を傾げた。

「シュトラール地方で活動するにあたってつけた私の偽名です。少し事情が複雑といいますか、その辺りのことは最長老様達のもとで」

そうして、リオ達は今度こそ最長老達のもとへ向かうことになったのだった。

◇　◇　◇

十数分後。庁舎の最上階、会議室として使用されている一室で、リオとアイシアは最長老達と着席しながら対面していた。

「まずはよくぞ戻ってきてくれた。歓迎するぞ、リオ殿」

と、三人いる最長老の一人、ハイエルフのシルドラがリオの帰還を喜ぶ。

「うむ、リオ殿の契約精霊……アイシア様もお目覚めになったことじゃしな。こんなに嬉しいことはない」

もう一人の最長老、狐獣人のアースラもうむうむと首を縦に振って同意した。

「にしても、こりゃまたずいぶんとお綺麗なお方だな。娘っ子どもも冷や冷やしているんじゃねえのか……っと」

三人目の最長老、エルダードワーフのドミニクはそう語り、ニヤリと笑って室内にいるサラ、オーフィア、アルマ、ラティーファを

見やる。が、親族のアルマにジロリと睨まれると、白々しく視線を逸らした。

「ありがとうございます。もう少し早く戻ってこられればよかったのですが、色々と立て込んでしまったものでして」

リオはそう言って、微かな翳(かげ)りを覗かせる。

「うむ。立て込んだというほどではないが、リオ殿が出ている間にこちらでも多少の動きはあった。知っての通りゴウキ殿達が里を訪れたわけだが……。困ったな。何から話をするとしようか」

と、シルドラはフッと笑って語る。長い眠りから目を覚ました人型精霊のアイシアのこと、リオが知らぬうちに里を訪れたゴウキ達のこと、そしてリオからの報告事項など、話をすることは多い。

「では、あまり長く時間もかからないと思いますし、私からの話はゴウキさん達への報告も絡むので、まずはアイシアのことから話をしますか？　シルドラ様達が知りたいのはアイシアの正体について、ですよね？」

リオはそう提案し、向かいに座る最長老達に問いかける。

「うむ。その通りだが、何かわかったのか？」

シルドラは目を見張って訊き返した。

「いえ、残念ながら。どうも記憶が曖昧なようでして、私と契約した経緯すら覚えていないようなんです。皆さんか、同じ人型精霊のドリュアス様なら何かわかるのではないかなと思ったのですが……」

リオはおもむろにかぶりを振って、アイシアに関する事情を大まかに打ち明ける。

「なんと……、記憶が曖昧ときたか。うーむ、我々もドリュアス様以外の人型精霊のことはよくわからぬのだが。となると、改めて場を設け、そこにドリュアス様にもお越しいただくのが一番か」

シルドラは大きく唸ると、アースラやドミニクと顔を見合わせて言う。すると――、

「はいはい、私ならここにいるわよ」

いつの間にこの部屋へやってきたのか、霊体化していたドリュアスが揚々とした声で語りながら、スッと姿を現したのだった。

第１９２話　万能型の人型精霊（前書き）

【久しぶりに登場するキャラの紹介】
ラティーファ：リオの義妹。狐獣人の女の子。かつてリオに奴隷から解放してもらった。リオのことが大好き。
サラ：銀狼獣人の少女。里の重役の娘。しっかり者の少女。だけど意外と負けず嫌い。
オーフィア：ハイエルフの少女。里の重役の娘。家庭的で温厚だが、からかい好きでお茶目な面も。
アルマ：エルダードワーフの少女。里の重役の娘。ちょっぴりツンとしたところもあるが、礼儀正しく、照れ屋な面もある。
シルドラ：里の最長老のまとめ役の老人（男）。ハイエルフ。温厚で理知的な人物。
アースラ：里の最長老を努める老人（女）。狐獣人。ラティーファの保護者。
ドミニク：里の最長老を努める老人（男）。エルダードワーフ。豪放磊落を地でいく。
サヨ：カラスキ王国の村娘だった少女。リオを追いかけて里までやってきた。気弱な少女だったが……。
コモモ：カラスキ王国の上級武士ゴウキの娘。父と共にリオを追いかけて里までやってきた。明るく可愛らしい容姿をしているが、脳筋な面も。
ゴウキ：カラスキ王国の上級武士だった男。国では超一流の手練れとして知られる武人。
カヨコ：ゴウキの妻。元は暗部の腕利き。昔はゴウキやリオの父と一緒にリオの母の警護を行っていた。

第１９２話　万能型の人型精霊

場所は精霊の民の庁舎。その最上階の一室で、ゴウキ達を交えつつ最長老達に帰還の挨拶を行ったリオ。話題は記憶が曖昧なままリオの契約精霊として覚醒したアイシアの素性に移るも、最長老達もその正体はわからず、同じ人型精霊のドリュアスならならば何かわかるかもしれないという話の流れになった。すると――、

「はいはい、私ならここにいるわよ」

霊体化したままこの部屋へやってきたのか、ドリュアスが不意に実体化して、リオ達の前にスッと姿を現した。

「おお、ドリュアス様。いらしたのですか」

最長老達はスッと頭を下げてドリュアスの来訪を歓迎する。

「お昼寝でもしようと思ったら、とんでもなく強い精霊の気配がいきなり現れたんだもの。びっくりして目が覚めちゃった。途中からだけど、話は聞かせてもらったわ。初めまして、私はドリュアスよ。同じ人型精霊と会えて嬉しいわ。よろしくね、アイシア」

ドリュアスはふふっと笑って、アイシアに語りかけた。

「よろしく。貴方が姿を現したら、急に強い気配を感じるようになった。不思議」

と、アイシアはこてりと小首を傾げて言う。

「そりゃそうよ。実体化してしまうと否応でも精霊の気配は強まっちゃうんだから。もしかしてその辺りのこともわからない？　精霊としてはわりと当たり前の知識なんだけど……」
「知らなかった」
アイシアはおもむろにかぶりを振った。
「そっか……、うーーん」
相槌を打ったドリュアスだが、悩ましそうに唸る。
「何か気になることでもあるんでしょうか？」
と、リオ。
「気になるというか、不思議なのよねえ。人型精霊っていうのはいきなり自然発生するものじゃないし、長い年月を経て何かしらのきっかけに恵まれてようやく昇格するものだから。普通なら昇格する前の記憶があってしかるべきなんだけど、その辺りの記憶がない上に、精霊として当たり前の知識も知らないとなると……。覚えていたのはアイシアって名前だけ？　精霊の民が用いる古い言葉だったと思うけど」
ドリュアスは思案顔で語り、アイシアに問いかける。
「ううん。覚えていたのは春人のことだけ。名前は春人に考えてもらった」
アイシアは静かにかぶりを振って答えた。

「……春人？」

ドリュアスは聞き慣れぬ名を耳にして、不思議そうに首を傾げる。同じくハルトという名を初めて耳にした最長老のアースラ達も似たような反応を見せた。

「ハルトというのは、シュトラール地方で活動するにあたって名乗っている私のもう一つの名前です。話が逸れるので、そこら辺の事情の説明はまた後で」

リオはすかさず説明を挟む。

「ふーん、そっか。なら、アイシアのことに話を戻すけど、アイシアって確か暖かな春とか、美しい春を指す単語よね？」

と、ドリュアスは話を振る。

「ええ、アイシアが目覚めたのが春だったので……、自然と頭に思い浮かんだといいますか、いいんじゃないかなと思いまして。アイシアも気に入ってくれたみたいなので」

リオは当時のことを振り返ったのか、ほんの少しだけ遠い目になった。

「ほほ、我々の言葉から名付けてくださったとは実に光栄なことじゃな」

と、狐獣人の老婆、アースラは朗らかに笑って言う。すぐ傍に並んで座る他の最長老、シルドラとドミニクは深く頷いて同意してい

た。すると――、

「私からも伺いたいのですが、精霊はどの程度の記憶を留めているのが一般的なのでしょうか？　先ほどドリュアス様は人型精霊になる前の記憶があって然るべきと仰っていましたが」

リオが質問を発する。

「難しい質問ね。私は私が見てきた精霊しか知らないから、正確な答えを与えることはできないんだけど……」

ドリュアスはそう前置きして、うーんと唸ると――、

「一般に精霊とは明確な自我を持ったマナだと言われていることは知っているわよね？」

と、リオに問いかけた。

「ええ」

「まず、低位の精霊は人間でいえば赤ん坊や幼児みたいなものなのよ。だから、自我があるといっても『ああしたい』『こうしたい』とか、その程度のもの。成長して格が上がったとしても記憶が残っていることは普通はない。記憶を残せるくらいに意思がハッキリしてくるのは、中位と呼ばれるくらいに力を持つようになってからっていうのが一般的なんじゃないかしら」

ドリュアスはそう語ると、「まあ、その中位の幅がこれまた広いんだけど」と笑って付け足す。そして――、

「だから、私もきちんと当時のことを覚えているのは中位の精霊に

なった頃から。まあ、当時の私は宿り樹から離れることが出来なくて、毎日日向ぼっこしていただけだし、よほど印象的な出来事でもない限りは細かな出来事は忘れちゃっているけどね」

と、少し懐かしそうな顔で語った。

「教えてくださりありがとうございます。そのお話を聞いた限りだと、確かにアイシアに過去の記憶が何もないのは特異に思えますね」

「ええ。単純な記憶喪失なのかとも思うんだけど……、気になるのはこの子が少し真っ白すぎるように思えるところなのよね」

「真っ白すぎる、ですか？」

リオはアイシアを見て、不思議そうに疑問符を浮かべた。アイシアもきょとんとした顔になる。

「無垢すぎるっていえばいいのかな？　精霊っていうのは長い年月を過ごすことによって我が強まり、個性も強くなっていくんだけど、アイシアってだいぶ感情が希薄な子に見えるなと思ったから。もちろん成長した結果としてそういう子になったっていう可能性もあるんだけど、こう、なんていうのかな。記憶がない状態と相まってより感情の希薄さが浮きだっちゃっているというか、人型精霊なのに人型精霊っぽくないというか……」

上手く説明することができないのか、口を結んで唸ってしまうドリュアス。確かにその表情を見ていると、アイシアよりもだいぶ感情が豊かに見える。

「なるほど……」

リオは得心し、アイシアを見やった。感情を表に出すドリュアス

とは対照的に、確かにアイシアは滅多に自分の感情を表には出さない。
だが、だからといってそれが不気味だということはない。むしろ長年一緒に過ごしてきたんじゃないかと錯覚するほどに、リオにとっては傍にいるのが自然な存在だ。
だから、ついつい頼ってしまうし、気づかぬところで支えられてばかりだし、甘えてしまうこともあるし、アイシアにだけ素の表情をさらけ出してしまうこともある。

「……」

アイシアは無言のまま、じっとリオの顔を見つめ返した。そのまましばし互いの視線がぶつかり合う。
リオからすればこうしていても目線のやり場に困ることはないというか、特に身構えることがなくて、なんとなくアイシアが何を考えているのかすらわかるような気さえする。そこにいるのが自然というのは、こういうところだった。
リオはそれを再確認したのか、くすりと口許をほころばせる。アイシアも心なしか表情が柔らかくなった気がした。すると――、

「じいいいいい」

リオは室内にいる者達――特に女性陣の視線を集めていることに気づく。特にラティーファは唇を尖らせており、コモモは私のことも見てくださいと主張するように目力を強くしており、サヨなどは羨ましそうな面持ちになっている。サラ、オーフィア、アルマの三人もそれぞれじっとリオとアイシアのことを見つめていた。

「ほほほ、契約者同士の関係は良好。どころか、熱々のようじゃのう」

アースラはからからと愉快そうに笑って言う。

「本当、私には契約者がいないから、少し羨ましいかも」

ドリュアスもそんなリオとアイシアを見て、微笑ましそうに語った。

「……もしかしたら里に来れば何かアイシアのことがわかるかもとも思ったのですが、ドリュアス様でもわからないとなるとお手上げですね」

リオは周囲から寄せられる視線から逃れるように、話題を逸らす。

「うーん、人魔戦争で失踪した高位精霊はもちろん、人型になれる準高位の精霊もおいそれといるもんじゃないし、過去にどこかしらで目撃されていたのなら何かしらの伝承が残っていてもおかしくはないと思うんだけどね。ちなみに、アイシアはどの系統を得意とする精霊なの？」

ドリュアスはアイシアの素性を特定できればと思ったのか、そんな質問を発する。

「全部」

アイシアはしれっと、そう答えた。すると――、

「ぜん……ぶ？」

質問したドリュアスを始め、最長老達も動揺したようにざわめく。

だが、リオとアイシアはどうして皆が驚いているのか理解できず、疑問符を浮かべる。

「……えっと、私の聞き間違えじゃなければ、あらゆる系統の精霊術が得意ってこと？」

ドリュアスはおずおずと質問し直した。

「うん。そう」

アイシアはこくりと頷く。

「……冗談よね？」

「本当ですけど。何か、おかしなことがあるんですか？」

ドリュアスにまじまじと見つめられて、リオは戸惑いがちに訊き返す。例えばリオ自身は万能型の精霊術士だし、この場にいるハイエルフのオーフィアだって万能型の精霊術士だし、この場にはいないがセリアだって万能型の魔道士だ。アイシアがあらゆる系統の精霊術を扱える精霊だとしても特に不思議はないと思ったのだが――、

「おかしすぎる。うーん、その辺りのことは知らなかったのか。そうね、じゃあ、オーフィア。説明を頼んだわ」

どうやらだいぶ特異な事例らしい。ドリュアスは細かな説明を面倒に思ったのか、室内に居合わせたオーフィアに説明を丸投げしてしまった。

突然に説明を求められたオーフィアだったが、即座に頭の中で説明事項をまとめあげたのか、動揺しつつもとりあえず開口してこう語る。

「え？　あ、はい。えっとですね……。人に得意不得意な精霊術の系統適性が存在するように、精霊にも得手不得手な精霊術の系統適性が存在するんです。ただ、人の場合は私やリオさんのように万能型の精霊術士が希にいて、例外が存在しうるんですけど、精霊の場合はその例外が存在しえないとされています」

それは何故なのか。リオが疑問に思うと――、

「精霊というのはこの世に存在する様々な事象を司る存在なんです。低位の精霊のうちは得意不得意が存在しない真っ白な状態の精霊もいるんですけど、格が上がるにつれていずれかの系統に開花して、その系統に特化していくようになります」

オーフィアはすらすらと続きを語った。

「万能型の精霊が存在しえないという、その帰結を導き出す根拠は何なんでしょうか？」

と、リオが理由を求めると――、

「長い歴史を経た経験則です。この里の歴史で今までに万能型の精霊が存在したという例外が観測されたことはありませんから。だから、例えば、ドリュアス様なら大地を操ることが得意で、私が契約しているエアリアルは風を、サラちゃんが契約しているヘルは氷を、アルマちゃんが契約しているイフリータは炎を操ることに特化しています。得意な系統以外の精霊術がまったく使えないというわけじゃないんですけど、得意な系統に比べるとその効用は大きく見劣りします。相性が良い系統ならいくつかの系統を使えることもあるんですけど、今は置いておきましょうか」

オーフィアはきっぱりと言い切って、現に存在する精霊達もいずれかの系統に特化している事実に触れた。

「……なるほど」

リオは得心して唸る。

「かつて六体いらっしゃったといわれる高位精霊様達でさえ、各々が得意とする六つの系統を専門に司っていたとされておるからのう。精霊は各属性に特化して人以上に術の系統に縛られる代わりに、人の身では到達が困難な領域の複雑な精霊術を使うこともできるんじゃが、あらゆる属性に特化した人型精霊様が目の前にいらっしゃるというんじゃから、そりゃもう驚きが大きいのう」

アースラは説明をまとめるように、話に加わった。

「皆さんが驚かれる理由がよくわかりました。以前に私がこの里で教わったのは精霊術に関する知識が主でしたからね。勉強にもなりました。ありがとうございます」

リオは朗らかに礼を言う。

「あの頃のリオ殿は色々と学んでおったからの。実際にアイシア様がお目覚めになったら色々と教えようと思っておったんじゃが、せっかく里へ戻ってきたんじゃからこの機会に色々と精霊のことを知るといい。アイシア様と同じ人型精霊のドリュアス様という特別講師もいらっしゃるわけじゃからな」

アースラはそう言って、ドリュアスを見やる。すると――、

「うん、決めたわ！　ねえ、リオ。二人だけで話をしてみたいし、ちょっとアイシアを借りてもいい？　この子のこと、色々と興味が出てきちゃったの。精霊のことも私がこの子に教えてあげるから」

ドリュアスが突然、そんなことを言う。同じ人型精霊に会えたことが嬉しいのか、キラキラと目を輝かせている。

「ええ。アイシアが構わないのなら」

リオはくすりと笑って頷く。

「私はいいよ」

アイシアは落ち着いた声で首を縦に振る。

「決まりね。じゃあ、早速だけど行きましょうか」

ドリュアスはにこやかにアイシアの手を握ると、部屋の外へ向かって歩きだす。人並み外れた美しさを持つ精霊の二人が歩く姿はなんとも周囲の目を引いた。特に精霊を信仰している精霊の民達からすれば神々しい光景にも映ったことだろう。室内にいる誰もがついつい視線を吸い寄せられ、立ち去る姿を見守っていた。

「なあ、俺らなかなかすげえ光景を目の当たりにしているんじゃねえのか？」

「そう思うのなら黙っておれ」

ひそひそとドミニクが呟くと、アースラが一蹴する。そうこうしている間にアイシアとドリュアスは部屋の外へと出て行く。すると、

ややあって――、

「では、話を進めるとしようか。リオ殿の報告が先か、ゴウキ殿達が里にいる経緯を説明するのが先か。そこから決めるとしよう」

最長老のまとめ役であるシルドラが口を開き、ゴウキ達のことを見やりながらそう話を切り出したのだった。

第１９３話　報告と勧誘（前書き）

【前回までのあらすじ】
里の面々の前でアイシアの紹介を行い、その正体がいまだ謎に包まれていることを打ち明けたリオ。大樹に宿る同じ人型精霊のドリュアスでさえアイシアの正体はわからなかったが、二人で話をしてみたいという彼女の提案により、庁舎の会議室を二人で退室していく。
すると、室内にはリオ、ラティーファ、サラ、オーフィア、アルマ、最長老三人、そしてヤグモ地方からやってきたゴウキ、カヨコ、コモモ、サヨが残ることになり――。

第１９３話　報告と勧誘

ドリュアスに連れられ、アイシアが退室していくと――、

「では、話を進めるとしようか。リオ殿の報告が先か、ゴウキ殿達が里にいる経緯を説明するのが先か。そこから決めるとしよう」

ハイエルフの最長老、シルドラが一同を見回しながら話の再開を促した。

「では、まずは某からリオ様にご説明申し上げましょう。まあ、おおよそはリオ様が想像されている通りでありましょうがな」

ゴウキがリオを見やりながら開口した。

「皆さんが私を追ってきたということはわかります。一緒に来ていただく必要はないと、きちんとお断りしたはずですが」

と、リオは溜息交じりに語る。

「同行は諦める、とは申しましたな。リオ様はお一人でシュトラール地方へ向かわれるとのことでしたので」

ゴウキはニヤリと笑い、当時の会話を振り返った。

「同行は禁止されたから、追いかけてきたと……。大変なんてものではなかったでしょう」

とんでもない積極性と行動力である。リオは呆れがちに溜息を一つ。
獰猛な生物が蔓延り、道なき道を進んできた。土地によっては過酷な気候だったり、年中、太陽が出ていなくて方角がわからなくなったりする場所もあるので、里へたどり着くだけでもかなりの日数を要したはずだ。

「まあ、大変であることは予想しておりましたが、おかげで良い修行になりました。幸い途中で離脱する者もおりませんでしたゆえ」

ゴウキは涼しい顔で答える。

「……相変わらずですね。死者が出なかったのなら何よりですが」

以前にも修行になると言っていたことを思いだし、リオはほんの少しだけつい口許をほころばせてしまった。本当に追いかけてくるなんてという呆れはまだあるが、生半可な気持ちで追ってきたのではないことは理解しているだけに、怒ることはできない。

「まあ、基本的には手練れしか同行させておりませんでしたからな。とはいえ精霊術の才があるとはいえ村娘のサヨにはちと辛い旅だったでしょうが」

ゴウキはそう言って、サヨを見やる。

「まさかサヨさんを連れてくるとは思いもしませんでした」

そうやってリオからも視線を向けられると――、

「っ」

サヨはサッと俯いてしまう。

「ずいぶんとリオ様のことを思っておりましたゆえ、某から声をかけましてのう。過酷な旅でしたが、弱音を吐かず健気に付いてきましたぞ」

「……」

ゴウキに当時の状況を語られると、サヨから気恥ずかしそうな、同時にバツが悪そうな空気が伝わってくる。

「このことを、ユバさんやルリは？」

リオは村長である自分の祖母と従姉の了解を得たのか、ゴウキに尋ねた。

「無論、了承は得て同行させております」

ゴウキがそう語っている間も、サヨは萎縮したように俯いたままだったが――、

「また後で話をしましょう、サヨさん」

「は、はい」

リオが声をかけると、顔を上げてこくこくと頷いた。

「それで、どうして皆さんがこの里にたどり着いたのか、詳しい経緯を伺ってもいいでしょうか？」

と、リオは続けて質問する。

「この里にたどり着いたのは完全に偶然ですな。我々がカラスキ王国を出立したのはリオ様が発たれた数日後のことでしたが、里にたどり着いたのはほんの一月ほど前のことでして……、まあ、色々とあって互いにリオ様と見知った仲であることが判明しましてな」
「リオ殿がそう遠くないうちにまたこの地へ帰ってくるであろうことを伝え、こうして客人として迎え入れたというわけじゃ」

などと、経緯を掻い摘まんで語るゴウキと狐獣人の最長老アースラ。

「なるほど……」

おおよそ想像したとおりだったのか、リオはそう言って納得した。が、少し物憂げな色が灯った眼差しでゴウキ達のことを見る。ここまで追いかけてきてくれたゴウキ達にルシウスへの復讐が叶ったことを伝えたら、どのような反応が返ってくるのだろうと少なからず不安に思ったのだ。この場には復讐のことを打ち明けていない里の面々もいる。

だが、もしかするとゴウキ達の口から里の者達にも復讐のことは伝わっているのかもしれない。彼らが自分を追ってきた理由とも深く絡む話なのだから。リオはそう思った。すると――、

「何か気になるところでもあるのか、リオ殿よ？」

シルドラがリオの機微を察して問いかける。

「……いえ、ありません。次は私がゴウキさん達へ報告する番ですね」

リオはゆっくりとかぶりを振って言う。
「話しにくいことなら、儂らは席を外してもよいぞ？」
と、アースラはリオを気遣って提案した。
「いえ、問題ありません。私が里へ戻ってきた理由とも絡みますので。皆さんはゴウキさんからどこまで私の話を聞かれましたか？」
リオはアースラ達に尋ねる。もしも復讐のことを聞いているのなら、その辺りの前提を省いて説明を行うことができると思ったからだ。
「流石、察しがよいのう。リオ殿の母君がヤグモ地方の王族であったこと、それがどうしてシュトラール地方で生まれ育つことになったのか、ゴウキ殿達がなぜリオ殿に強い忠誠心を抱いていて、その力になってやりと思っていることなど、色々と聞いたよ。リオ殿が辛い過去を抱えておるということもな」
アースラがやれやれと、苦笑交じりに答えた。
「では、私の母がとある男に殺されたということも？」
「……ああ、聞いた」
アースラが頷き、里の者達が微かに固唾を呑む。
「そうですか……」
リオはスッと目を閉じる。

「本人不在の場で色々と過去を掘り返すことになってしまったわけだが、ゴウキ殿達のことは責めてやらないでやってくれ。儂らがあれこれ詮索した結果じゃ。すまなかった」

と、プライバシーを侵害してしまったことを謝罪し、ゴウキ達に配慮してフォローするアースラ。

「いえ、気にしていませんので。お互いの素性もわからぬ状態で、両者が歩み寄る共通の話題は私以外にないでしょうから」

リオは穏やかに笑みをたたえて首を横に振った。領域内に人間族のゴウキ達が集団で立ち入ったとなれば、里からすれば決して穏やかな事態ではなかったことは容易に窺える。それこそ互いが敵ではないのだと信用するに足る証でもない限りは。

「ふむ、その辺りのこともお見通しか。過去にリオ殿が立ち入ってきた時の反省もあって、現場での話し合いはスムーズに進んだようでな。そこでリオ殿の名前が出てきて、儂らと対談することになったんじゃ」

「私がいたことで皆さんの間で不幸な行き違いが起きなかったのなら幸いでした」

リオはフッと笑ってそう言うと――、

「ともあれ、そこまで事情を把握されているようでしたら、端的に申し上げても大丈夫そうですね。ゴウキさん」

姿勢を正して、ゴウキに向き直った。

「はっ」

ゴウキは畏まって頷く。

「私が里へこうして戻ってきたのは、あちらで済ませるべきことを一通り済ませてきたからです。復讐は叶いました」

と、リオは包み隠さずに打ち明ける。

「なんと……」

ゴウキは大きく目を見開く。すると――、

「大変な思いをしてここまで足を運んでくださったのに申し訳ありませんが、皆さんが私の後を追う理由はもう存在しません。なので、ここで引き返してカラスキ王国へ戻られてはどうでしょうか？　カラスキ王国にも顔を出そうと思っていましたから、私と一緒に。空路で進めば徒歩で移動するよりは安全ですし、時間も大幅に短縮することができます」

リオはそう切り出して、ゴウキ達にカラスキ王国への帰還を促したのだった。

第１９３話　報告と勧誘（後書き）

やや文量が少なめで申し訳ないのですが、次話は早めに更新します。毎度、更新が遅くなってしまい誠に申し訳ございませんでした。宣伝も遅くなってしまい大変恐縮ですが、『精霊幻想記　１１．始まりの奏鳴曲』が９月１日に発売されます（と申しますか、早いところではもう発売されております）。

恒例のあらすじ付きのカバーイラストを貼っておきますので、どうぞご覧ください。詳細は最近の活動報告もご覧いただければと。９月８日に大阪でサイン会もやらせていただきます。

＜ｉ３２６５７４―１３４２３＞

また、『精霊幻想記』のドラマＣＤ化も決定しまして、１２月１日に発売される１２巻の特装版として収録されます（既に予約も始まっているのですが、こちらも詳細は直近の活動報告をご覧いただければと）。超豪華な担当声優の皆様も発表されましたので、この場でご紹介します。

リオ＝松岡禎丞さん
美春＝原田彩楓さん
セリア先生＝藤田茜さん
アイシア＝桑原由気さん
ラティーファ＝楠木ともりさん
リーゼロッテ＝東山奈央さん
沙月先輩＝戸松遥さん

第１９４話　再会の宴（前書き）

前回のあらすじ：どうやって精霊の民が暮らす里へたどり着いたのか、リオに報告したゴウキ。リオはそんな彼らに復讐を果たしたことを伝えると――、

第１９４話　再会の宴

「大変な思いをしてここまで足を運んでくださったゴウキさん達には申し訳ありませんが、私の後を追う理由はもう存在しません。ここで引き返してカラスキ王国へ戻られてはどうでしょうか？　ヤグモ地方まで私がお送りしますので。徒歩で移動するよりは安全ですし、時間も大幅に短縮することができます」

リオはゴウキ達にカラスキ王国への帰還を促した。

「……むう」

ゴウキは面食らったように目を丸くすると、しばらくして深く唸った。無理もない。少しでもリオの助力をできればと思って追いかけてきたというのに、当のリオは目的を達成してしまったというのだから。しかも、帰還という選択肢まで提示してきた。

「……」

リオは何も言わず、ゴウキがさらなる言葉を口にするのを待っている。

「一つ、伺いたいのですが」

ゴウキは低い声で開口した。

「何でしょう？」

「今後、リオ様はどこで、どのようにお過ごしになるおつもりなの

でしょうか？」
「……今後、ですか」
今度はリオが唸る番だ。おもむろに天井を見上げ、思案し始める。
ややあって――、
「恩師がいるので、シュトラール地方には折に触れて足を運ぶつもりです。ユバさんとルリに、お世話になった村の人達にも会いたいので、カラスキ王国のあの村にも定期的に顔を出せればと思っています。許されるのなら国王夫妻のもとにも」
と、語った。
「然様でございますか……。いずれかの土地で、一所（ひとところ）に定住されるおつもりはあるのですか？」
「どう、でしょうね。これまで通り、色んな場所に足を運ぶと思うので」
リオははぐらかすように答える。西のシュトラール地方と、東のヤグモ地方、そしてその間にある精霊の民の里。確かにこの三箇所を定期的に移動するとなると、一箇所に腰を落ち着けて暮らしにくいようには思える。
ただ、実際はどこかに腰を据えて暮らしている自分の姿を想像することができないというのが正直なところだった。
色んな土地を旅しては人と出会い別れてきた弊害なのだろう。ある程度住んでしまえばその地に馴染んでしまうのかもしれないが、その場所を離れて再び根無し草になることにさほど躊躇いがない。また会うことはできるのだから、と。
リオがそんなふうに思ってしまうのは、自分が人から強く必要とされることはないと思っているからなのか、あるいは復讐で人を殺

すような自分みたいな人間が人と関わってはいけないと心のどこかで自戒しているからなのか、はたまた人と一定以上に関わることを恐れているからなのか……。
いずれにせよ、あるいはそのいずれでないにせよ、リオという人間が抱える内向性が垣間見えたのは確かだった。それこそ放っておいたらふらりと消えて、またしばらくは姿を見せないのではないかと予感させる程度には。

「ふむ……」

最長老達、そしてゴウキはそんなリオの一面を目ざとく察したのか、思案顔で唸る。また、他の者達も何か感じるところがあったのか、じっとリオのことを見つめていた。すると――、

「私はお兄ちゃんと一緒に暮らしたい！　里の外に行かないでとは言わないけど……、そうでない間はずっと一緒に暮らそうよ！」

ラティーファが自らの存在を訴えるように、我慢できない様子で叫んだ。

「……ありがとう、ラティーファ」

リオは微かに目を見開くと、ほんの少しだけ困ったように笑みを浮かべて礼を言う。すると――、

「ここまで言われたんだ。兄貴として一緒にいてやらねえわけにはいかねえよなあ」

ドミニクがふふんと茶化すように言った。

「うむ」

シルドラもフッと笑って同意する。

「ええ、まあ……」

リオは躊躇いがちに頷く。

「何か急ぎの用事でもあるのか？」

アースラはそんなリオを見かねたように問いかける。

「……いえ、ヤグモ地方にも挨拶に行きたいなと思っていたくらいです」

わずかに間を置いて答えるリオ。

「なら、しばらくはまた里で暮らすとよい。いきなり答えを出せとゴウキ殿達に迫るのも酷であろうしな」

アースラはそう言って、ちらりとゴウキ達を一瞥する。

「いえ、リオ様へのお返事であれば既に気持ちは固まっておりますぞ」

と、ゴウキは確かな意思を滲ませて言う。

「聞かせていただけますか？」

リオはじっとゴウキを見据えて問いかける。

「僭越ながら、そも某らがリオ様の後を追ったのは今は亡きアヤメ様へ、そしてその忘れ形見であらせられるリオ様へ忠義を尽くさんと誓ったため。ルシウスめの生死など関係なく、リオ様に忠義を尽くすことこそが我が至上の喜びであり天命。リオ様のいらっしゃる場所とあらば大陸のいかなる場所でもはせ参じる所存でございますゆえ、リオ様がそこで定住なさるおつもりがない限り、カラスキに帰還するつもりは毛頭ございませぬ。恐れながら、某らも気持ちはラティーファ殿と同じ。リオ様のお側に控える栄を賜りたく存じます」

ゴウキは粛々と語り、リオにこうべを垂れた。妻のカヨコも静かに頷き同意し、すぐ傍にいる娘のコモモとサヨもぺこりと頭を下げる。

「と、言われましても……」

リオはバツが悪そうに、ほんの少しだけ後ろめたそうな翳(かげ)りを覗かせた。もちろんゴウキの気持ちは理解しているつもりだ。

が、正直、乗り気ではない。そのことはカラスキ王国にいた頃にも伝えたから、ゴウキ達も重々踏まえているはずだ。なのに、ゴウキ達はそれでも自分という人間に忠誠心を尽くそうとしてくる。

そんな相手にいったい何をどう伝えればいいというのか……。リオは自分の中で明確な答えを出すことができずにいた。迷いがあった。

「どうやら考えをまとめるのに時間が必要なのはリオ殿の方みたいじゃのう」

アースラはふむと唸って話に加わる。

「ま、ヤグモ地方に向かうのだって急いでいるってわけじゃねえんだろ。この場で今すぐに結論を出す必要はねえんじゃねえのか」

ドミニクがひょいと肩をすくめて言った。

「じゃな。まだ互いの近況を簡単に報告し合っただけじゃ。話し足りぬことも色々とあるじゃろう。焦らず、ゆっくりと、時間をかけて情報と気持ちを共有するのが肝要じゃ。しばらくはこの里で暮らしを共にして、色々と話をすればいい。リオ殿さえよければ、儂もリオ殿に関することをもっと知りたい」

「そうだ。何しろリオはてんで自分のことを話しやがらねえからな。辛い過去の一端を耳にしてしまった……ってことは抜きにしても、この部屋にいる連中はみんなお前さんのことをもっと知りたいと思っているはずだぜ。下世話な好奇心なんかじゃなくてな」

などと、アースラとドミニクは年長者として意見を述べる。

「……はい」

リオは間を開けてから、おもむろに首肯した。

「よし。なら……」

ドミニクは満足そうに頷くと、隣に座るシルドラを見やる。

「わかっている。宴であろう」

シルドラはやれやれと嘆息し、フッと笑って開口した。里の最長老として長い付き合いだからか、みなまで言わずとも言わんとして

いることは察してしまうようである。

「へへ、理解が早くて何よりだ。せっかくリオがアイシア様と一緒に帰ってきたんだからな。辛気くせえ話は抜きにして、まずは盛大に楽しむとしようぜ。暗い気持ちで考えても暗い結論しか出せねえ。まずは明るく楽しんでから、考えるのはそれからだ」

そうして、リオとアイシアの帰還を祝うパーティが催されることが決まったのだった。

◇　◇　◇

里の庁舎がある巨大な大木。その下層にはこれまでも宴会でよく利用されていた大食堂があり、パーティはそこで行われることが決まった。

夕刻には準備が整うと、先着で参加者を集って続々と住人が押し寄せることになる。リオの契約精霊であるアイシアが目覚めたこともあってか、新たな人型精霊の姿を拝もうと会場は大いに賑わっていた。

「では、そろそろ始めるとしようかの。みなの者、静粛に。主賓のお出ましじゃぞ」

司会はアースラが務めることとなり、参加者も集って空気が暖まったタイミングで舵を取りだした。食堂の扉に待機していたサラとオーフィアに視線を向けると、二人は扉を開放して――、

「おお……！」

主賓であるリオとアイシアが姿を現した。すぐ傍にはドリュアス

の姿もあり、三人で並んで登場すると会場が大きくどよめく。
「あらあら、今日はまたずいぶんと集まったわねえ。それだけアイシアが注目されているってことかしら」
食堂中の視線を集めると、ドリュアスは目をみはって言う。
「ドリュアス様も里の皆さんから強く信仰されていますから。一度に二人も人型精霊を拝めると聞いて駆けつけてくれたんじゃないでしょうか」
と、リオは微笑ましそうに推察して語る。
「なに言っているのよ。ここにいるみんなは、貴方にも会うためにわざわざ足を運んだんだから」
ドリュアスはやれやれとかぶりを振ってそう語る。そして――、
「今日の主賓は貴方とアイシアなんだから、少しはそれらしく振る舞いなさいな。アイシアも、せっかくだからリオにエスコートしてもらいましょう。ほら」
悪戯っぽく微笑んで、リオの腕を掴んだ。
「うん」
アイシアはこくりと首を縦に振り、ドリュアスの反対側からリオの腕を掴む。そうして瞬く間に両手に花の状態が形成されると、室内はこれまた「おおっ」と大きくざわめく。

「えっと……」

振りほどくに振りほどけず、ぎこちなく身体を強ばらせるリオ。希少かつ神聖な人型精霊二人に両腕を掴まれて寄り添われているのだから、室内の視線を独占することになるのは当然だった。

「むうう！」

食堂の出席者に混じって様子を眺めていたラティーファとコモモは、二人揃って羨ましそうに頬を膨らませている。

――後で私も同じことをさせてもらおう。

これといって意思の疎通を図ったわけではないが、同じ思いを抱いた二人だった。

「今宵はこちらにおわすリオ殿の帰還と、アイシア様のご来訪を祝ってこの席を設けたわけじゃが、ご本人達の要望もあって堅苦しい挨拶は抜きじゃ。こうしてご登場いただいたところで、早速乾杯といくかの。では、杯の用意を」

リオ達が食堂に用意されたステージに上ると、アースラが司会を務めて乾杯を促す。全員に杯が行き渡ったところで――、

「乾杯！」

いよいよ宴が始まった。すると早速、出席者達もリオやアイシアのもとへと足を運んで挨拶を開始する。

もともと口数が少なく、言葉足らずなアイシアだが、リオも話に加わることで上手く会話が弾んでいく。ドミニクも宴を盛り上げよ

うと騒ぎだし、食堂内は瞬く間に活気だった。
リオ達のもとには終始人が訪れ、笑い声が絶えないまま、瞬く間に時間が進んでいく。ただ、その一方で――、

「むう、お兄ちゃんとあんまりお話しできない」

久しぶりにリオと再会できて、甘えたい盛りなラティーファ。リオの周囲からいっこうに人垣が消えることがなくて、早く甘えたいとうずうずしているようだ。

「まあまあ、私達も後でたくさんお話しできるから」

すぐ傍にいたオーフィアはふふっと笑ってラティーファを宥める。

「そうなの？」
「うん。まだリオさんには内緒だよ？　実はね……」

ひそひそと耳打ちするオーフィア。ラティーファは大きく目を見開くと、それはもう嬉しそうに破顔してしまう。
他方、時を同じくして、折良く人がはけたリオのもとへ足を運ぶ総勢二十名ほどの一団がいた。ゴウキ、カヨコ、コモモ、サヨを含むカラスキ王国の一行だ。

「リオ様、某らも改めてご挨拶をよろしいでしょうか？　従者の者達も連れて参りましたので」

一行を代表して挨拶するゴウキ。

「ええ、もちろん」

と、リオはにこやかに応じた。背後に立つ者達の顔を見回すと、何度か顔を見た者達がいて――、

「シン……さん？」

中でもよく見知った顔を見つけて硬直する。カラスキ王国のあの村の住人、サヨの兄であるシンがしれっと一団の中に交ざっていたのだ。

「……よお」

シンはリオから視線を逸らし、バツが悪そうに挨拶する。と――、

「よお、ではないわ。リオ様に失礼であろうが。きちんと挨拶せんか」

ゴウキがゴツンとシンを小突く。

「い、痛えっ。……ぐっ、ど、どうも」

どちらかというとがさつでぶっきらぼうなイメージが強いシンだが、やや萎縮した様子でぺこりとリオに頭を下げる。この場にいるということは、ゴウキからリオの素性を聞いているのは間違いないのだろう。

「妹のサヨのためにと奮起し、半ば強引に我々に付いてきましてな。旅の間に稽古をつけつつ、今は従者見習いとして同行させております」

ゴウキは粛々とシンが付いてきたあらましを語る。

「なるほど……」

リオは小さく息をついて得心した。両親を亡くしているシンにとって唯一の家族がサヨだ。サヨがいて妹思いなシンがいないはずがないのは道理だった。

「向こう見ずで粗忽なところはありますが、なかなか根性はある男ですし、武芸の見所もまあ、それなりにございます。精霊術の素養もありますしな」

と、シンのことを一応は褒めるゴウキ。

「へへ」

シンはちょっぴり得意げにはにかむ。

「すぐに舞い上がるでないわ」

ゴウキはコツンと、先ほどよりも優しくシンを小突くと――、

「こほん。まあ、サヨも含め、一度三人で話をしてやってくだされ」

と、サヨのことも見やりつつ、リオに頼んだ。

「……わかりました。では、また明日にでも」

主賓として参加している宴の最中にこの場を抜け出すわけにもいかないので、リオはそう提案する。サヨはリオから視線を向けられると、ぎこちなく首を縦に振った。シンはそんな妹の姿を見てほん

の少しだけ口を尖らせるが、特に何か言うわけでもなく……。
その後は気を取り直して残りの面々からも自己紹介を受け、和やかかつ賑やかな雰囲気のまま、宴会は終わりを迎えたのだった。

第１９４話　再会の宴（後書き）

更新が遅くなり大変失礼いたしました。

第195話　ラティーファとアイシア

リオとアイシアの帰還と来訪を祝う宴がお開きとなり、会場となった食堂から人がはけていくと――、

「お疲れ様、お兄ちゃん」

ラティーファがリオに迫り、ご機嫌な声色で右腕に抱きつく。

「おっと……。ああ、お疲れ様」

リオは左手でラティーファの頭を撫でる。

「えへへ」

すりすりと、ラティーファは幸せそうに自分の顔をリオの腕にこすりつけた。すると、サラ、オーフィア、アルマに最長老の三人、ゴウキやコモモを初めとするヤグモの面々も近づいてくる。

「ほほ、宴の最中は他の者達がリオ殿と話ができるようにと、我慢しておったからの」

アースラがラティーファを見て、微笑ましそうに語りかけてきた。

「そうなのか？」

「うん！」

リオが見下ろして訊くと、ラティーファは嬉しそうに頷く。

「じゃから今夜はラティーファにたっぷり甘えさせてやってくれ」
「ええ。もう遅いですから、あまり夜更かししない範囲で」
アースラに言われ、リオは照れくささを隠すように釘を刺して首肯した。
「えー！　駄目だよ、今日はサラお姉ちゃんやコモモちゃん達も一緒にみんなで夜更かしするんだから」
と、ラティーファは可愛らしく頬を膨らませて抗議する。
「いや、それは無理だろ。他のみんなはお家に帰らないといけないんだから」
リオが諭すように言うと――、
「それなら大丈夫だよ。今日はお婆ちゃんの家でみんなでお泊まりするんだから」
ラティーファはそう言って、ふふんと得意顔になった。
「……え？」
初耳なんですが……。リオは面食らって硬直すると、そう言わんばかりにアースラの顔を見る。
「儂の家じゃが、今日からリオ殿とアイシア様に暮らしてもらうにしても、空き部屋が多いじゃろう？」

と、アースラは唐突に語り始めた。

「ええ、まあ……」

余りすぎているくらいに部屋の数はあったはずだと、記憶を振り返り頷くリオ。

「というわけで決まったんじゃよ」

「いや、必要な説明がだいぶ省かれている気がするんですが」

リオはすかさず突っ込む。いったい何がどういう経緯でそう決まったのか、まるで見えてこないのだ。すると――、

「あー、要するにアレだ。リオと久々に再会できて話をしたがっているのはラティーファだけじゃねえってことだろ」

エルダードワーフの最長老、ドミニクが会話に加わった。

「まあ、そういうことじゃな。何か問題があるかの？」

「ある、わけでは……」

ない、のだろうか？　最長老のアースラもいるわけだし、同じ部屋で眠るわけでもないのだろうし。まあ、同じ屋根の下に若い男女が一緒にいるのはどうなんだろうと思わないわけでもないが――、

「皆さんが構わないのなら、私からは別に……」

リオはサラやコモモ達の顔を見回しながら、そう言った。

「じゃあ、決まりだね！　今夜はみんなで同じ部屋に寝て、たくさ

んお話ししようよ！」

ラティーファはギュウッとリオの腕に抱きつく力を強める。

「って、こらこら。同じ部屋に寝るのは流石に駄目だ」

「えー、なんで？」

「未婚の若い男女が同じ部屋で眠るもんじゃない」

リオは嘆息し、きっぱりと告げた。

「むう……」

ラティーファはちょっぴり拗ねた感じで頬を膨らませる。と――、

「ふむ、ご兄妹の契りを交わされているとは伺っておりましたが、実に仲が良ろしいのですなあ」

ゴウキが興味深そうに口を開く。

「ええ」

リオはフッと笑ってラティーファの頭を撫でる。

「えへへ」

ラティーファは幸せそうにはにかんだ。そんなラティーファの姿を密かに羨ましそうに見つめるコモモ。

「コモモもリオ様とはたいそうお話したいと焦がれておりましたのでな。今宵はサヨと一緒にお預けしますゆえ、たっぷりとお話いた

だけると光栄です」

ゴウキはそう言って、ポンとコモモの背中を押した。

「はい！　よろしくお願いします、リオ様！」

コモモはリオの前に立つと、ギュッと両の拳を握って訴える。コモモの歳はラティーファよりもさらに一つ下だったろうか。あどけない瞳をキラキラと輝かせている。

「こちらこそ」

リオはくすりと笑って頷いたのだった。

◇　◇　◇

それから、アースラと一緒に家へ移動したリオ、アイシア、ラティーファ。サラやコモモ達はいったん自宅へ戻り、宿泊の用意を調え次第すぐに駆けつけることとなった。その間にお風呂に入ることにすると、まずはラティーファがアイシアと二人で浴室へ向かう。

「それじゃあ、私がお背中を流しますね」

ラティーファは浴室に入ると、アイシアに提案した。なんだかんだでまだ二人だけで話をした時間はさほど多くないので、口調はぎこちない。

「うん。じゃあ、その次は私がラティーファの背中を流す」

対するアイシアは普段通りの落ち着いた声色である。

「では……」

ラティーファは少し緊張しているのかおずおずとタオルに石鹸をつけて泡立てると、アイシアの背中をゴシゴシと洗い始める。

「洗い足りないところとかあったら言ってくださいね」

「うん」

「かゆいところとかありますか？」

「ないよ」

などと、時折ラティーファから質問を投げかけるが、基本的に寡黙なアイシアなので会話が発展することはない。

（うーん、アイシアお姉さん？　お姉ちゃん？　って、どんな人なんだろう？　すごく落ち着いている性格みたいだけど……）

ラティーファは手を動かしながら、そんなことを思う。アイシアについてわかっていることといえばリオの契約精霊であることと、大人しい性格をしているらしいこと、あとは……。

（とんでもない美人さんだよね……。お兄ちゃんのことはどう思っているのかな？）

幼子みたいにきめ細やかなアイシアの肌を眺めながら、ラティーファはリオとアイシアの関係性に思いを巡らせた。すると――、

「ラティーファ」

アイシアがラティーファの名を呼んだ。

「は、はい。何でしょう？」
ラティーファはびくりと身体を震わせて返事をする。
「そんなに緊張しなくて大丈夫だよ」
アイシアは首を少しだけ動かして、背後のラティーファに言った。
「は、はい……」
「口調も普段通りで構わないから」
「え、えっと……、は、はい。いや、う、うん？」
「うん、それでいい」
アイシアは淡々と頷き、視線を前に戻す。
「……あ、あの」
ラティーファはぱちぱちと目を瞬くと、やがて何かを決意したような顔で口を開く。
「何？」
「アイシアお姉ちゃんって呼んでも、いいですか？」
恐る恐る尋ねるラティーファ。
「うん、いいよ」
アイシアはほんの少しだけ口許をほころばせて頷いた。

「やった！　えへへ」

ラティーファは満面の笑みをたたえて喜ぶと――、

「あっ、そうだ！　アイシアお姉ちゃんに訊きたいことがあったんだ」

ハッと思い出したように語った。

「何？」

アイシアはわずかに背後を振り返って小首を傾げる。

「えっと、お兄ちゃんのことをハルトって名前で呼んでいましたよね？」

「うん」

「普段からずっとそっちの名前で呼んでいるんですか？」

「うん」

「それは……どうして？」

ラティーファは上手い訊き方が即座には思い浮かばず、シンプルに尋ねた。

「……春人は春人だから」

そう答えるアイシアの表情は普段以上に柔らかくて、だが背後にいるラティーファからでは覗くことはできなかった。ただ、その声色に何かしらの感情が込められているようには思えたのか、興味深そうに目を見はっている。

「……アイシアお姉ちゃんは、お兄ちゃんのことをどこまで知っているんですか？」

ラティーファはこみ上げてきた疑問をそのままに、唐突かつ衝動的に問いかけた。訊かずにはいられなかった。

「春人のことなら何でも。前世の貴方がバスの中で春人のことをいつも見ていたことも知っている」

と、アイシアは普段通りの抑揚のない声で答える。

「……そう、なんですね」

ラティーファは大きく目を見はり、かろうじて呟いた。

「うん。だから、春人が今のラティーファのことを大切に思っていることも知っている」

「っ……」

瞬間、ラティーファの口許はたまらず綻んでしまいそうになる。

「ラティーファにとって春人は大切？」

「もちろんっ！」

ラティーファは思わず身を乗り出して勢いよく肯定した。

「なら、その気持ちをこれまで以上に春人に伝えてあげて」

と、アイシアは優しい声色で言う。この言葉を真に受けすぎたラティーファが後ほど就寝時に頑なにリオと同じベッドで寝ようとし

て、一悶着が起きるのはともかく――、

「うんっ！　それももちろんっ！」

今この瞬間、ラティーファは元気いっぱいに頷いた。すると――、

「じゃあ、次は私がラティーファの背中を洗う番」

アイシアはスッと立ち上がり、ラティーファの背後に回る。

「えへへ、よろしくお願いします」

ラティーファ背後のアイシアを見上げ、ぺこりとお辞儀した。

「うん」

頷き、腰を下ろすアイシア。先ほどまで自分の背中を洗ってもらっていたタオルを受け取ると、いったんお湯で洗い流して再び石鹸で泡立て、ラティーファの背中を洗い始める。

その後もゆっくりと、断続的に会話は続いていき、ラティーファはすっかりアイシアと仲良しになってしまう。そうしてすっかり長風呂することになってしまうのだが、お風呂から出る頃にはさらに口調は砕けたものとなり、サラ達と接する時と同じようなものになっていた。

それから、二人がお風呂から出た頃にはサラやコモモ達が訪れ、リオも遅れてお風呂に入ると、その日の晩は少女達と一緒に遅くまで様々なことを語り合った。

第196話　サヨとシン

リオとアイシアの帰還を祝う宴があった晩の翌日。昨夜は宴の後にサラにオーフィアにアルマ、コモモとサヨがアースラの家に訪れて、夜遅くまで宴の二次会が行われた。

必然的に起床時刻は普段よりも遅くなり、リオはアースラの家に宿泊した面々と一緒に遅めの朝ご飯を食べた。

それから、お茶を飲んで一息つくと――、

「サヨさん」

と、リオははす向かいに座るサヨに声をかけた。

「は、はい。何でしょうか？」

サヨは名指しで呼ばれるとは思ってなかったのか、びくりと身体を震わせて返事をする。

（そんなに驚かなくてもいいのに……）

リオは少し目を丸くして、くすりと口許をほころばせた。そして――、

「シンさんも一緒に少しお話をしたいので、滞在している場所まで案内してくれませんか？」

と、サヨに頼んだ。

「……はい」

何かしらの大事な話をされるとでも思ったのだろうか、サヨは微かに息を呑んで頷いた。

「リオ様、お父様のところまで行きたいので、私もご一緒してもよろしいでしょうか？」

コモモがリオに申し出る。

「ええ、もちろん」

リオは二つ返事で首肯した。

◇　◇　◇

一時間後、リオはサヨとコモモと一緒に、ゴウキ達が里から借り受けている邸宅を訪れた。邸宅はアースラの家からもほど近く、歩いて二、三分の距離だ。

ちなみに、ラティーファやアイシアはアースラの家で留守番をしており、「サラお姉ちゃん達と一緒にお昼ご飯を作るからお昼過ぎには帰ってきてね」とのことだった。

「ん～、ふふ♪」

道中、ご機嫌に鼻歌を奏でるコモモ。

「嬉しそうですね、コモモちゃん」

リオは右隣を歩くコモモに問いかける。

「はい、それはもう！　こうしてまたリオ様のお隣を歩くことができているのですから」

コモモは満面の笑みで答えた。

「そうですか……」

屈託のない純粋な好意を向けられて、リオは少しこそばゆそうに応じる。

「あ、あそこがお父様達が里からお借りしている邸宅ですよ！」

コモモは前方に見えた大きなツリーハウスを指さすと、一人先に小走りで駆け出す。

「俺達も行きましょうか」

リオは左隣を歩くサヨに言った。

「はい」

こくりと首を縦に振るサヨ。そうして、リオはゴウキ達が暮らす邸宅へと歩いていく。コモモが先に家の中へ入っていくと、間もなくして――、

「これは、ようこそいらっしゃいました、リオ様」

ゴウキが玄関まで出てきて、リオに挨拶する。すぐ背後にはカヨコの姿もあった。

「こんにちは、ゴウキさん。シンさんも交えてサヨさんとお話をしたいと思いまして」

と、リオは隣に立つサヨを見ながら言う。

「然様でございますか。では、サヨよ、そなたはシンを呼んできなさい。今は裏庭で稽古をしているはずだ」

ゴウキはリオを邸宅内に招き入れつつ、サヨにシンを呼ぶよう指示を出した。

「はい」

サヨはゴウキに返事をすると、リオにぺこりと頭を下げてから立ち去っていく。

「リオ様はどうぞ中へ、落ち着いて話ができる部屋へご案内いたしましょう」

「ありがとうございます」

リオはゴウキに案内されて邸宅へ入っていく。

「昨夜はアースラ殿のお宅に泊まらせていただいて、どうだった、コモモよ？」

ゴウキは応接室の椅子に腰を下ろすと、サヨとシンが来るまでの間に隣に腰を下ろすコモモに訊いた。

「はい！　それはもう大変素晴らしい一夜でございました！　リオ

様ともお話しさせていただきました！」

コモモはきらきらと目を輝かせてはきはきと答える。

「そうか、そうか。それは良かったな。とはいえ、失礼はございませんでしたでしょうか、リオ様？」

ゴウキは嬉しそうに相槌を打つと、リオに尋ねた。

「いえ、まったく。久しぶりにコモモちゃんとお話ができて、私も楽しかったです」

リオはくすりと笑ってかぶりを振る。

「それは何よりでございます。娘が世話になりまして、誠にありがとうございました」

ゴウキは恭しく頭を下げた。すると、扉がノックされる音が響く。

「兄を連れて参りました」

扉の向こうにいるのはサヨだった。兄のシンを連れてきたらしい。

「うむ。入るとよい」

「失礼します」

ゴウキに促され、扉が開く。サヨは折り目正しくお辞儀をして入室する。シンもぺこりと会釈してその後に続く。

すると、カヨコも遅れて入ってきて、三人分の茶とお菓子をテーブルに並べる。

「では、某らは退散するとしよう。ゆくぞ、カヨコ、コモモよ」

ゴウキが立ち上がり、愛妻と愛娘と共に退室していく。そうして、室内に残ったのがリオとサヨとシンだけになると――、

「お二人とも、座りませんか？」

と、リオは部屋に入ったところで立ち止まっていた二人に声をかけた。

「……はい。ありがとうございます」

サヨが礼を言って、おずおずとリオの向かいに腰を下ろす。シンもサヨに続き、その隣に腰を下ろす。

「シンさんとは昨日はあまりお話しできませんでしたが、お久しぶりですね、本当に……」

二人が座ったところで、リオから口を開いた。

「……ああ、まあ」

シンはちょっぴりバツが悪そうに応じる。久しぶりに再会したリオを相手に何を話せばいいのかわからないというのもあるのだろうが、気恥ずかしさを覚えているようにも見える。

「お兄ちゃん、リオ様にその言葉遣いは失礼だよ」

サヨはすかさずシンに苦言を呈した。が――、

「構いませんよ、村にいた頃のままで」

と、リオが言う。

「そういうわけにもいきません。リオ様は王族なんですから」

「母が王族だった……というだけで、私は正式な王族ではありませんよ」

「ですが……。兄だけ粗暴な言葉遣いのままでは、リオ様に敬意を抱かれているゴウキ様達に顔向けもできません」

渋るサヨ。

「うーん、まあ、この話はこのくらいにしましょう。久しぶりに会った顔馴染みに対して急に以前と態度を変えるのは小っ恥ずかしいものです。ゴウキさん達がいる場でのことはともかく、今はどういった口調でも構いませんので。本題へ移りましょう」

リオはぽりぽりと頬をかいて語った。

「……はい」

サヨは頷きつつ、横目でシンを見る。「わかっているよね？　失礼な話し方をしちゃ駄目だからね」と、目線で釘を刺す。

「ん、んん。それで、話というのは何なんでしょう？」

シンは軽く咳払いをすると、口調を改めてリオに尋ねた。どうやら丁寧な言葉遣いでリオと接することを決めたらしい。

（……以前のままで構わないんだけどな）

と、リオはわずかに寂しく思いながらも――、

「どうしてお二人は村を出ることにしたのでしょう？」

二人の顔を見つめて問いかけた。

「それは……」

言葉に詰まるサヨ。

「わかっているんだ……でしょう？　うちの妹がおま……リオ様のことを好きだからですよ」

シンは少しムッとした口調でサヨの代わりに答える。少し素の口調が出ているのはまだ慣れていないからなのか……。

「お、お兄ちゃん！」

サヨは頬を紅潮させ、咎めるようにシンを見る。

「サヨさんのお気持ちに応えることはできないと、お伝えしたはずです。一緒にいることはできないと」

なのに、それでもサヨは村を出て、国を出て、危険な未開地にまで足を踏み入れて、リオを追ってこの里に来てしまった。

その理由は何なのだろうか。好きだから……という理由だけで納得してしまっていいものなのか、リオにはわからなかった。

だから、その答えを他ならぬサヨ自身の口から聞くことはできな

いだろうかと、リオはまっすぐと視線を向ける。

「……諦めることができなかったから、です」

気持ちに応えることはできないと改めてリオに言われて顔を曇らせたサヨだったが、やがてぽつりと言った。

それはすなわち、サヨは今もリオを好きだということだ。

「そう、ですか……」

リオは後ろめたそうに顔を曇らせる。相槌を打つ以外になんと言えばいいのか、何も頭に思い浮かんでこない。それは今も同じだからだ。やはり自分ではサヨの気持ちに応えることはできない。だから、一緒にいるべきでもない。そう思ってしまう。

だが、同時にサヨが眩しくもあった。その理由が何なのかはやはりわからないけれど……。

「リオ様のお気持ちは今も同じですか？」

サヨがおずおずと訊いてきた。

「サヨさんのお気持ちに応えることができないのかという意味であれば変わってはいません」

リオは申し訳なさそうに語る。

「っ、じゃあ、一緒にいることを、せめて後を追うことだけでも許してはくれませんか？」

サヨはきゅっと唇を噛むと、リオに尋ねた。

「……俺にはわかりません。どうしてサヨさんが諦めないのか、どうしてそこまで俺という人間を好きでいてくれるのか」

リオは逡巡した面持ちで、自信なさげに語る。自分が美春への思いを自分でも意外なほどあっさりと諦めてしまったからこそ、わからなくなってしまう。

本人が自覚しているかどうかはともかくとして、リオがサヨの気持ちに応えることができないのは、自分という人間に自信を持つことができないからなのだ。だから、サヨの気持ちに応える自信もない。

いや、サヨだけでない。ラティーファに、サラに、オーフィアに、アルマに、他の里のみんなに、自分に好意を向けてくれているたくさんの人達に、後ろ暗くて顔向けができない。復讐のためだけに生きてきたこんな自分が、と。

「それは……」

サヨは咄嗟には上手い言葉が出てこなかったのか、口を噤んでしまう。すると――、

「難しく考えすぎだろ……じゃないですかね」

シンがぶっきらぼうに話に加わった。

「……」

リオは何も言わず、シンが続きを語るのを待つ。

「こいつがお前……じゃなくて、リオ様のことを諦められないのは、

それだけ好きだって気持ちがそれだけ強いからじゃないんですかね。理由なんてそれだけでしょう。他に理由があるとすれば、こいつが馬鹿だからですよ。こっぴどくフラれたってのに、あんたを嫌いになることができなかった。ただの馬鹿なんですよ」

シンはふんと鼻を鳴らして語り、むすっとリオを睨む。

「お、お兄ちゃん！」

サヨは怒っているような、気恥ずかしそうな、いずれにしても顔を赤くしてシンを咎めた。

「もしそれで納得できないってんなら、本気で人を好きになったことなんてないんじゃないですかね。だから人から寄せられる好意を軽んじられるんだ」

と、シンはリオに言葉の刃を突きつける。グサリと音が響いたかのごとく、その言葉はリオの胸に深く突き刺さる。

「……かも、しれませんね」

瞠目してから、複雑に自嘲して頷くリオだが――、

「ですが、理解はできました。確かに、俺は難しく考えすぎていたのかもしれません」

そう語って、今度は苦笑した。

自分は復讐を試みている人間だ。復讐を果たした人間だ。だから、人に近づきすぎてはいけない。人を遠ざけるべきだと思っていた。人から好意を向けられるに値しない人間だと思っていた。人と向き

合うことが怖かった。
だが、それは少なからず人から向けられる好意を軽んじていることになるのではないかと、シンに言われてそう思った。
「では、シンさんはどうして、サヨさんについてきたんですか？」
リオはシンにも尋ねる。
「……馬鹿な妹だけど、こいつの家族は俺しかいないんだ。俺以外の誰かこの馬鹿の面倒を見てくれる奇特な奴が見つかってちゃんと嫁入りするまでは、一緒にいてやらないといけないって思っただけですよ。兄としての責任を果たしているだけだ……ですよ」
シンは照れくささを隠そうとしているのか、ぶっきらぼうに答えた。が、同時にすっきりしているようにも見えた。
というのも、リオがサヨをフッて里を出てから、ずっと言ってやりたいことを考え続けてきたのだ。それらを口にできて清々した。そう言わんばかりの顔をしている。
「お、お兄ちゃん……」
サヨは気恥ずかしそうに俯いてしまう。
「なるほど……」
リオは納得し、思わず口許をほころばせる。シンは良い兄だと、心の底からそう思ったからだ。己の復讐のためのラティーファをほったからしてあちこちで出回ってきた自分とは違う。同時に忸怩たる思いもこみ上げてきた。

（見習わないとな、俺も……）

こんな自分に兄の役が務まるのだろうかと、そういった思いはまだある。だが、それを含めての反省点だ。ここで逃げてはいけない。それを教えられた気がする。

「折に触れて外出はするかもしれませんが、当面は里を拠点に暮らさせていただくつもりです。よかったらまた村で暮らしていた頃のように接してもらえませんか？」

リオはほんの少し照れくさそうに、二人に頼む。怖がらずに自分を知ってもらおうと、そう思ったから。

「……はい！」

サヨはぱちぱちと目を見開くと、嬉しそうに返事をした。

第１９７話　転換

その日、リオはゴウキの家からアースラの家に帰ってみんなでお昼を食べると、ラティーファを自分の寝室に呼び出した。

「話って何、お兄ちゃん？」

ラティーファは不思議そうに小首を傾げる。

「大事な話、かな。あとで最長老様達にもお話しする前に、ラティーファには言っておこうと思って」

と、リオは少し遠い目で語った。

「……何のお話なの？」

ラティーファは恐る恐る質問する。またリオがどこかへ行ってしまうのではないだろうか？　そんな不安を漠然と抱いたのだ。が――、

「大丈夫。またどこか遠くへ旅立ってしばらく帰らないってわけじゃないから」

リオは優しく笑ってラティーファの不安を払拭してやる。

「そう、なんだ」

ラティーファはパッと嬉しそうに笑みを浮かべた。

「ああ。シュトラール地方にいた間に起きた出来事でまだ語っていないことを、伝えておこうと思ったんだ」

昨日、最長老やラティーファ達もいる前で語ったのは主にアイシアのことと、自分がルシウスに復讐を果たしてきたのだということだけ。勇者に関する話はまだ何もしていない。

「どんなことがあったの？」

「どこから話せばいいのかな……。今、シュトラール地方には勇者と呼ばれる人達が召喚されていて、少し騒ぎになっているんだ」

と、リオは話を始める。

「……勇者？」

ラティーファはぱちぱちと目を瞬いた。

「この里が精霊を神聖な存在として崇めているように、シュトラール地方の人達が六賢神と呼ばれる神様達を信仰しているのは知っているだろう？」

「うん」

「勇者っていうのは、その六賢神の使徒とされている存在なんだ。まあ、唯の人間なんだけど、神様の代理人とか、天使みたいに崇められる存在だって思っておけばいい。この里でいう人型精霊みたいなものかな」

「ふーん」

そういう人達がいるのかと、ラティーファはさほど興味は示さずに相槌を打った。しかし――、

「で、肝心なのはここからだ。その勇者達が召喚されたのは地球……それも日本からだったんだ」
「えっ！？」

リオが話を続けると、ラティーファはギョッと目を丸くした。

「シュトラール地方の伝承通りなら、現れた勇者の数はおそらく六人。少なくとも俺が知る五人は、みんな日本人だった。勇者の召喚に巻き込まれてやってきた人達もいたんだけど、その人達もみんな日本人だった」

ガルアーク王国に所属する皇沙月、レストラシオンに所属する坂田弘明、セントステラ王国に所属する千堂貴久、ルビア王国で遭遇した菊池蓮司、そしてベルトラム王国本国に所属しているとされるルイ＝シゲクラと呼ばれる人物。リオが知る勇者はこの五人である。

「……」

いきなりすぎる話に、ラティーファは言葉を失っている。

「やっぱり驚くよな」

リオは困ったように笑みをこぼす。

「うん」

少しは落ち着いたのか、こくりと頷くラティーファ。

「けど、もっと驚くのはここからだ」
「……何なの？」
「勇者の召喚に巻き込まれてやってきた人達の中に、前世の俺が知っている人達がいた。ラティーファにも話したことがある人達だ」
「……誰？」
ラティーファは息を呑んで尋ねた。
「俺が好きだった幼馴染の子と、俺の妹だった子。綾瀬美春さんと、千堂亜紀ちゃん。今はもう離れ離れになったけど、しばらく一緒に暮らしていたんだ」
リオは美春と亜紀のことをラティーファに打ち明ける。
「一緒に暮らしていたって……」
ラティーファは驚く一方だ。
「勇者召喚に巻き込まれて遭難しているところを、たまたま保護したんだ。この世界の言葉も知らない状態だったし、放ってはおけなかったから離れ離れになった勇者の友人達と再会できるまで面倒を見ていた」
「じゃあ、その人達は勇者のお友達と再会できたの？　だからお兄ちゃんから離れていったの？」
「ああ」
リオはおもむろに頷く。
「その人達は知らないまま離れていったの？　お兄ちゃんの前世のこと」

「……いや、別れる前に、最後には伝えたよ」

面と向かって告げる勇気はなくて、手紙だけど……。リオはそこまでは言わず、顔を曇らせながら首を縦に振った。

「知っていて、離れていったの？　……なんで？」

ラティーファはぱちぱちと眼を瞬いて、心底不思議そうに尋ねる。

「なんでって……」

リオは困り顔で言葉に詰まった。

「お兄ちゃんは……その幼馴染の人が好きだったんでしょ？　その幼馴染の人も、お兄ちゃんのことが好きだったんでしょ？　その亜紀ちゃんって子も、お兄ちゃんの妹だったんでしょ？」

と、今度はリオの反応を窺うように、ラティーファは訝しそうに尋ねる。

「……前世でのことさ」

リオはあたかも今は好きでないかのように言ってみせた。

「……嘘。じゃないけど、お兄ちゃん、またはぐらかしている」

ラティーファはむうっと唇を尖らせ、鋭く指摘する。自分が兄と慕う人は嘘を言わないが本当のことを言わない時が希にあると、ラティーファは理解しているのだ。

「……」

リオは笑みを取り繕うものの、上手い弁明の言葉が出てこず沈黙してしまう。すると――、

「その幼馴染の人はお兄ちゃんのことが好きじゃなくなったの？」

ラティーファが質問を続けた。

「そうなる、のかな。他に大切な人がいるんだ」

リオは少しバツが悪そうに答える。

「……お兄ちゃんよりも？」

「ああ」

「お兄ちゃんは、その人のことを好きだったんじゃないの？　ちゃんと想いは伝えなかったの？　諦めちゃうの？」

ラティーファは気になって仕方がないのか、リオを案じているのか、矢継ぎ早に質問した。

「好き……だったよ。正確には天川春人としてじゃなく、今の自分が好きになった。だから、自分の想いが天川春人とは関係ないんだって、その気持ちも伝えようと思ったよ」

「っ……」

リオが美春を好きになったと明確に聞いて、一瞬、息を呑んだラティーファだったが――、

「伝えなかったの？」

と、質問を続けた。

「……伝えた、かな？」

リオは誤魔化すように苦笑し、曖昧に頷く。

「なんで疑問形なの？」

ラティーファは釈然としない面持ちで首を捻った。

「どうしてだろうな……」

好きにはなった。だが、好きになるべきではないとも思っていた。自分は復讐のためだけに生きてきた空っぽな人間だから。

「むう……」

はぐらかさないでと、ラティーファはリオをジト眼で見つめる。すると、ややあって――、

「どっちみち、美春さんにも亜紀ちゃんにも愛想を尽かされちゃって別れたから、わからないかな」

リオはなんでもないふうに笑って答えた。まるで諦観の極致に達しているかのような、いや、端から諦めていたとさえ思えるような口ぶりである。

「なんでお兄ちゃんが愛想を尽かされるの？　その美春さんと亜紀ちゃんって人にとって、お兄ちゃんは恩人でしょう？　そんなのひ

どいよ」

ラティーファは憤りを滲ませて問いかけた。

「恩人だから、だというのは関係ないさ。そんな理由で人の気持ちを縛っちゃいけない」

リオはあくまでも落ち着いた声色で答える。

「でもっ！」

語気を荒らげるラティーファ。

「俺がどっちつかずなのがいけなかったんだ。迷いがあったのに、焦っていた。肝心なところで勇気を出せなかった」

と、リオは当時の自分を振り返ると――、

「だから、これでよかったんだ」

そう、吐露した。それは嘘偽りのない本心だ。我ながら心底臆病な人間だと思うが、関係が切れてしまったことでホッとしてもいる。だから、このまま少しずつ他の人からも距離を置いて、やがては一人になろうとさえ思っていた。だが――、

――本気で人を好きになったことなんてないんじゃですかね。だから人から寄せられる好意を軽んじられるんだ。

と、シンにガツンと言われて、このままではいけないと思うようにもなった。人間、そう簡単に生き方を変えられるとは思わないが、

それでも自分と懇意にしてくれている人達からは逃げるべきではない。そう思った。

「お兄ちゃん……」

ラティーファはなんとも言えぬ表情になってしまう。

「この出来事がきっかけ……というわけじゃないんだけど、変わろうと思った。もう遅いのかもしれないけど、頭の片隅でずっと復讐のことを考えて蔑ろにしてきたこととちゃんと向き合いたい。ラティーファともだ」

リオは勇気を出して言う。深いところでのとの向き合い方がわからない。だから、逃げてきたのだ。不器用であることを理由に、勇気を出してこなかったのだ。

「……」

ラティーファは面食らったように瞬きをした。

「今までは自分のことばかりで、出歩いてばかりの駄目で勝手な兄だったけど、またラティーファと一緒に暮らしてもいいか？　ちゃんとした兄らしく振る舞えるか、自信はない。というより、妹にこんなことを訊いている時点で兄として失格なんだろうけど」

リオは表情に不安を覗かせながらも、それを呑み込むように、おずおずと頼んだ。すると、ラティーファがハッと顔色を変えて椅子から立ち上がる。

「な、なに言ってるの！　当然だよ、そんなこと！　いいに決まっ

てるよ！　勝手なんかじゃない！」
「……ありがとう、ラティーファ」
泡を食って叫ぶラティーファに、リオは忸怩たる思いで礼を言う。
「違うよ、お礼を言うのは私の方なんだよ。お兄ちゃんがいるから、私は今ここにこうしていられるんだから」
ラティーファはもどかしそうに訴える。そんな表情はしないでほしい。だから、リオは無言で立ち上がると、ラティーファの頭をそっと撫でた。そして、潤んだ瞳で顔を上げたラティーファにこう告げる。
「明日はラティーファのしたいことをしようか。……何かしたいことはあるか？　行きたいところがあれば行ってもいいけど、どうだろう？」
里の中はもうどこも行き尽くしているかもしれないけれど――と、リオは内心で思いながらも言う。
「……いいの？」
ラティーファは小首を傾げて訊いた。
「ああ」
リオは力強く首肯する。
「じゃあ、あそこに行こうよ！　私とお兄ちゃんが前世のことを教えあった広場に。そこで日向ぼっこして、お兄ちゃんが作ったお弁

当を食べてのんびりしたい！」

ラティーファはパッと明るい笑みを覗かせると、嬉しそうにリクエストしたのだった。

◇　◇　◇

一方、場所は変わり、シュトラール地方の南東部に位置するセントステラ王国で。第一王女であるリリアーナ＝セントステラは自室で一人、暗澹（あんたん）たる面持ちで顔を伏せていた。

机の上には美春から借りた日本の辞書が開かれたまま置かれており、リリアーナの手には一通の手紙が握られている。

「……」

言葉はもう、ずっと何も出てこない。外で待機してもらっているフリルに人の出入りを禁止させてから、いったいどれくらいの時間が経ったのだろうか。

気分は最悪だ。最悪の気分だ。頭の中は何が何だかわからなくなるほどの罪悪感と後悔で埋め尽くされ、気がつくと我に返っては手紙の文面を読み返す。

――読み間違いなんてない。

そう、わかっているのに、何かの間違いであってほしいという願いを捨て去ることができない。だが、これは現実なのだ。

何度も辞書を引き、わからない言葉や文法があれば美春にそれとなく尋ね、自力で何度も何度も手紙を読み返した。

そして、読み返せば読み返すほどに読解の精度は上がり、読み間違いはないのだという確信が強まっていく。現実に引き戻されてい

く。
現実である以上は、向き合わなければならない。このままでは、破滅だ。隠し通せるはずがない。もう時間の限界である。
伏せられた秘密はやがて明るみになり、最悪中の最悪の結末にたどり着く。それを回避したところで、待ち受けているのはやはり最悪の展開で――、

「……やはり間違っていたのは貴方だったのですね」

リリアーナは様々な感情が混ざり合ったひどく複雑な面持ちで、不意に呟いた。自分はいったいどうするべきなのか。どうするのが王族として正しいことなのか。何をどうしたいと思っているのか。極限まで鈍った思考回路で長く長く思案する。
すると、しばらくしてリリアーナは立ち上がり、部屋の外へと通じる扉を開けた。外には侍女のフリルと護衛騎士のヒルダが控えている。

「フリル」

と、リリアーナは自らが信用できる数少ない少女の名を呼んだ。

「はい」

フリルはリリアーナを案じるような顔で、短く返事をする。いったい何を命じられるというのか、その用命を待つ。果たして――、

「ミハルさんをお呼びして」

と、リリアーナは美春をこの部屋に呼ぶようフリルに指示を出す。

「承知しました」

フリルはぺこりと頭を下げると、反転して歩きだす。

「ヒルダは引き続き、ミハルさん以外の人物をこの部屋に誰も立ち入らせないで頂戴」

「畏まりました」

ヒルダが恭しく頭を下げると、リリアーナは扉を閉めて再び部屋の中に戻る。が、椅子に戻って腰を下ろすことはせず、その場で立ち止まって遠い目になる。

「最後に、最後に一度だけ……」

リリアーナは何かに縋るように、ごくごく小さな声で呟いた。

第１９７話　転換（後書き）

１１月２７日（火）に漫画『精霊幻想記』３巻が発売されました。また、１２月１日（土）には小説『精霊幻想記』１２巻が発売されます（ドラマＣＤ付き特装版とドラマＣＤなし通常版とでカバーイラストが異なります）。

＜ｉ３４４７４９｜１３４２３＞

漫画３巻と小説１２巻をご購入くださった方を対象としたＴｗｉｔｔｅｒでキャンペーンも開催されますので、ぜひぜひご参加くださいませ（リーゼロッテが登場する番外編小説（７０００字弱）が無料でプレゼントされます。詳しくは活動報告かＴｗｉｔｔｅｒで）。豪華声優の皆様の寄せ書きサイン色紙プレゼント企画などもあります。

＜ｉ３４４７５０｜１３４２３＞

第１９８話　暴露（前書き）

【前回までのあらすじ】
遂にハルトから美春達に宛てられた手紙を解読したリリアーナ。
侍女のフリルに命じ、美春を自室へ呼び寄せると……。

第１９８話　暴露

場所はシュトラール地方の南東部に位置するセントステラ王国。第一王女であるリリアーナ＝セントステラの自室で。

「お話とは何でしょうか、リリアーナ様？」

本人たっての願いで、普段は給仕服を着てリリアーナ付の侍女として簡単な仕事をしている美春。小首を傾げて、自らを呼び出したリリアーナに尋ねた。

「……ミハルさん。いいえ、ミハル様」

リリアーナはあえて様付けで美春の名前を呼び直す。

「はい……」

美春は少し面食らったように目を瞬いて、しかる後、重たく頷いて返事をした。

「私は取り返しの付かないことに加担していたのだと、気づいてしまいました。いいえ、薄々と予感はしていたのです。到底許されることではありません。ですが、私はそれでも貴方に謝罪しなければなりません」

と、リリアーナは前置きしてから、深くこうべを垂れる。

「いったい何を……？」

「まずはこちらの辞書をお返しします」

リリアーナは美春から借りていた辞書をテーブルに置き、スッと差し出した。

「はい……」

美春は戸惑い気味に頷き、辞書を少しだけ自分の近くへ寄せる。と――、

「先の夜会でガルアーク王国を訪問した折、私はこれらの手紙をタカヒサ様から没収しました。その内容を確かめるために、日本語を勉強するという名目でミハル様から読み書きを習い、辞書をお借りしたのです」

リリアーナがそう付け加えて、三通の手紙をテーブルに置いた。

「……誰が書いた手紙、なんですか？」

嫌な予感がしたとでもいえばいいのだろうか。美春は恐る恐る尋ねた。

「ハルト様が、ミハル様達にです」

リリアーナは美春の予感を言い当てるように告げた。

「っ……」

瞬間、美春の表情が強張る。その眼差しは手紙に釘付けだ。

「碌な説明も受けずガルアーク王国から強引に連れ出されたことに、ずっと疑念を抱かれていたことでしょう。タカヒサ様の肩を持つ我々に対する行いに、不信感も抱かれたことでしょう。その答えに繋がる重大な手がかりが……、タカヒサ様が何を隠したかったのかが、その手紙に隠されています。どうぞ、ミハル様に宛てられた手紙をご覧ください」

「……」

リリアーナに促され、美春は息を呑みつつ手紙を手に取った。もともと耐久度の低い木綿の用紙であることを踏まえても、だいぶボロボロになっているのが見て取れる。

ただ、手紙には後からリリアーナが補正の意図で書き足しであろう宛名がシュトラール地方の文字で書かれているので、どれが誰宛のものなのかはわかった。　美春は無言のまま、手紙の文面に目を通す。その中身は日本語で書かれていて――、

「……っ」

美春は時に瞠目し、時に顔を曇らせ、次第に苦々しく唇を噛みしめ始めた。リリアーナはそれを直視し、罪悪感に塗(まみ)れた顔になる。だが、美春の表情の変化から視線を逸らさず、目に焼き付けるようにしっかりと見据えていた。

しばらくして、美春がすべての文面を読み終え、目の前に座るリリアーナに呆け顔で視線を向ける。

「……誠に申し訳ございませんでした。私は取り返しが付かないことを、人として最低な過ちを、決して許されるべきではないことを行ってしまいました。お詫びのしようもございません」

リリアーナは罪悪感に押し潰されるように、これでもかと深く頭

を下げた。

「いったい、何が……。何が起きたんですか？　どうして貴久君がこの手紙を？　どうしてこの手紙をリリアーナ様が持っていらしたんですか？」

美春はひどく焦燥した面持ちで、矢継ぎ早に疑問を口にした。伏せられていた情報が一気に開示されたのだ。だからこそ、混乱するのは道理である。悩んで、悩んで、今日に至るまで押し殺してきた疑念ともいうべき疑問がようやく解消されたのだから。

色んな思いや考えが頭に浮かんできて、美春は頭の中も目の前も、真っ白になってしまいそうだった。

「順を追って説明いたしますので、私の話をお聞きいただけないでしょうか？　嘘偽りなく、すべてをお話しすることを誓います。そのためにミハル様をこの場へお呼びしました」

リリアーナは胸元に右手を添えて、毅然と宣誓する。

「……わかりました。お聞かせください。お願いいたします」

多少は冷静さを取り戻したのか、美春は深呼吸をしてリリアーナに頭を下げた。

「すべては三日目の夜会を終えた翌朝に起きました」

リリアーナは感情を押し込めるように、淡々と語りだす。

「その日は……」

忘れるはずもない。記憶を振り返るまでもなく、美春はその日のことを瞬時に思い出した。

「ええ、ミハル様達を我が国へお連れするべく、ガルアーク王国を出立した日のことです。……あの日の朝、ミハル様とマサト様が客室を不在にしている間、タカヒサ様とアキ様が残っていたあの部屋へハルト様が来訪されました。用向きはその手紙をミハル様達に手渡すためです」

なのに、どうして今になって美春のもとに手紙が届いたというのか。あの夜会からもう何ヶ月も経過しているというのに……。

「その時、フランソワ国王陛下との謁見で私も客室を不在にしていたため伝え聞いた話になってしまうのですが、シャルロット王女殿下もハルト様とご一緒だったようです。そして、応対したのはタカヒサ様と、当時、私の護衛騎士として同行していたキアラとアリスでした。ミハル様とマサト様が不在だったため、代わりに手紙を渡して欲しいと託されたそうです」

ちなみに、先輩であるキアラは手紙の一件で重い懲戒処分を内密に食らうこととなり、今ではリリアーナの護衛騎士の地位を一時的に解任されている。後輩であるアリスは能力的に替えが効かないため、厳重注意と減給に留まった。

「そんなことが……」

あったなんて、と、美春は静かに息を呑んだ。その前日、夜会の最中に、ハルトから告白されたのだ。好きです、と。

あの時、ハルトはさらに何かを言おうとしていたが、結果的にそれは部外者の登場によって邪魔をされてしまった。もしかしたら…

…、いや、もしかしなくとも、ハルトはこの手紙に書かれていることを自分に伝えようとしていたのかもしれない。
美春は半ば確信するように、そう予想した。そして、こう思う。もし、ハルトが手紙を渡そうと持参した時、自分が部屋の中にいたら、こんなことにはなっていなかったのではないだろうか、と。

「手紙はミハル様、アキ様、マサト様のお三方に宛てられたものですが、ハルト様はまずミハル様に手紙をご覧いただきたかったようです。その上でアキ様とマサト様にミハル様から手紙を渡してほしいと言付かったとか……。この話を聞いた時、どうして順番を指定したのか少し不思議に思ったのですが、アキ様に宛てられた手紙を拝読したことでその理由に合点がいきました。アキ様は前世のハルト様の妹君だったのですね。そして、アキ様は前世のハルト様のことを毛嫌いしている」

だから、部屋の中に居る亜紀には手紙を託さずに、最初は美春に手紙を読んでほしいと順番を指定したのだろう。そうして、美春の判断と協力を仰ごうとしたのだ。亜紀に自分の前世のことを伝えても構わないだろうか、と。リリアーナはそう推察した。ハルトに前世があるという話は、にわかに信じられる話ではなかったが……。
口頭ではなく手紙という伝達手段を選択したのは、タカヒサやリリアーナと同じ客室に滞在することになった美春と個別に話をする時間を捻出しづらかったからだろうか？　あるいは、話の内容が荒唐無稽すぎて上手く説明できる自信がなかったからなのか、もしくは、面と向き合って話をするのが怖かったからなのか、それとも……。

「……」

美春は何を思っているのか、歯がゆそうに顔を曇らせている。

「タカヒサ様はハルト様から手紙を預かりました。シャルロット王女殿下がその場で見届けられた以上、隠蔽のしようがない事実です。なのに、タカヒサ様は隠蔽を図ろうとされてしまった……」

瞬間、リリアーナは苦々しい顔になる。

「きっかけはくだらない……。そう、本当にくだらないことだったのです。アキ様に手紙の存在を感づかれそうになり、慌てて隠そうとしたタカヒサ様が封蝋（ふうろう）ごと手紙を破損してしまい……、手紙を盗み見てしまわれた。そうして、強行を決意したのです。これらの手紙を隠匿し、ミハル様達をハルト様から遠ざけてしまおう、と」

と、リリアーナは己自身の罪を吐露するように語った。

「っ……」

美春は呼吸をするのも忘れてしまいそうなほどに、絶句する。

「日本語で文字が書かれていたから、中身が気になってしまった。気が動転して正常な判断能力を欠いていたから、冷静さを欠いていても仕方がない。そんな言い訳は通用しません。決して許されることでもありません」

そう語るリリアーナの表情は実に苦々しくて――、

「タカヒサ様は私にも手紙の内容を伏せたまま、こう仰いました。ハルト様は危険だ。ハルト様の行いは間違っている。ハルト様と一緒にいることで、ミハル様達は不幸になるかもしれない。手紙の存在は伏せておいた方が、ミハル様達のためになる、と」

と、言葉を続けた。

「そんなっ、そんなこと……！」

いまだ事実を知ることに精一杯で、頭がほぼ真っ白な状態が続いている美春だったが、声を大きくして反駁（はんばく）しようとした。どうして自分達を蚊帳の外に置いて、勝手にそのような事実の評価を行ったのか、と。

「タカヒサ様は、ミハル様達に手紙の存在が知られることを極度に恐れました。ゆえに、私が手紙の存在と事実を明らかにするのなら、勇者を辞めてミハル様達をどこかへ連れて行くと仰い始めました」

「そんな……」

美春は唖然と言葉を失ってしまう。

「私は……、事実の存在を公にすることができませんでした。王族として、あの場でタカヒサ様との関係が致命的に拗れる不利益を恐れ、タカヒサ様をお止めすることができませんでした。その時点で私も同罪です。私は、卑劣な女です」

リリアーナは強い自戒の念を表情に滲ませて言った。

「でも、リリアーナ様はこうして私に手紙を……。どうして、ですか？」

「手紙は私が処分すると騙して、タカヒサ様から受け取ったものです。手紙を解読したのも、こうしてミハル様に手紙をお渡ししたのも、すべて私の独断によるものです」

「どうして、手紙を解読しようと思われたのですか？」

「……私は王族として、第一王女として、個を犠牲にしてでも国を保つことの重要性を教えられ育ってきました。今でもタカヒサ様が勇者として我が国にいらっしゃるのは、ミハル様の犠牲があるからに他なりません。ですが、個を犠牲にしてでも裏付けられる正当性が本当にそこにあるのか、見極めたかったのです。見極めて、タカヒサ様の真意を確かめたかった……」

宗教的に計り知れない価値を持つ勇者が所属することは国の繁栄に繋がる。だが、手紙を盗み見て、あまつさえその存在さえ隠そうとした貴久の行いに、果たしてどれだけの正当性があるのか。リリアーナは疑問を抱いてしまったのだ。だから、見て見ぬ振りをすることは、できなくなってしまった。

「それと、これはタカヒサ様にもお伝えしたことなのですが、いつまでも隠し通せることではないと思った、というのも解読に踏み切った理由です。無理に隠そうとすれば必ず歪(ひず)みが生じてしまう。そして、その歪みは日増しに大きくなり、いつかは隠すことができなくなる。現にタカヒサ様とミハル様達の間には不和が生じておりますし、ガルアーク王国のサツキ様に不信感を抱かれて、事実が露呈するのも時間の問題でしょう。タカヒサ様自身も、日増しに増していく露呈のリスクに怯える毎日です。そして、皆様に宛てられた手紙を解読した今、私も……」

知ってはいけないことを知ってしまった。人の秘密を盗み見るということが、これほどまでに後味の悪いものだとは知らなかった。

「ガルアーク王国を出立する前に、タカヒサ様はハルト様とお会いになりました。ハルト様は、ミハル様達に拒絶されたとお考えのはずです」

「っ……」

美春は唇を噛み、ギュッと拳を握りしめる。

「事実を知った今、ミハル様は何を願いますか？　何を、どうされたいと思いましたか？　仰ってはいただけないでしょうか？」

リリアーナは単刀直入に問いかけた。

「私は、戻りたいです。ハルくんの……、ハルトさんのところへ」

美春は縋（すが）るように願いを口にした。

「承知しました。では、そのように取り計らいます」

リリアーナは粛々と、おもむろに頷く。

「……できるんですか？」

「難しくはあります。危ない橋を渡ることにもなります。ですが、なんとかします」

「……でも、貴久君や、国の人達に何を言われるか」

あまりにもあっさりと承諾され、美春は瞠目して尋ねる。国や貴久が賛成してくれるとは思えなかったからだ。リリアーナの一存で決められることとも思えない。しかし――、

「誰にも、何も、説明した上で出て行くつもりはございません。既にお伝えした通り、手紙を解読したのも、こうしてミハル様に手紙をお渡ししたのも、すべて私の独断によるもの。ミハル様をハルト様のもとへお連れするのも、すべて私の独断で行います。ミハル様をハルト様のもとへお連れする。今日この日より、私はそのために

行動いたします。リリアーナ＝セントステラの名にかけて、ミハル様の願いを実現してみせると誓いましょう」

リリアーナは決然と、そう宣言したのだった。

第１９９話　届かぬ思い（前書き）

前回のあらすじ：リオが残した手紙をいよいよ美春に開示したリリアーナ。すべての真実を知った美春は、春人に会いたいと心からの願いを口にして――、

第１９９話　届かぬ思い

セントステラ王国城、第一王女であるリリアーナの私室で。貴久によって隠匿された手紙を読み、ハルトに会いたいと願いを口にした美春。そんな彼女に――、

「誰にも、何も、説明した上で出て行くつもりはございません。既にお伝えした通り、手紙を解読したのも、こうしてミハル様に手紙をお渡ししたのも、すべて私の独断によるもの。ミハル様をハルト様のもとへお連れするのも、すべて私の独断で行います。ミハル様をハルト様のもとへお連れする。今日この日より、私はそのために行動いたします。リリアーナ＝セントステラの名にかけて、ミハル様の願いを実現してみせると誓いましょう」

向かいに座るリリアーナは、決然と宣言した。

「無論、アキ様やマサト様への対応をどうするのかについてはミハル様のご意志を尊重するつもりです。いつ手紙を渡すのか、そもそも渡さないのかについても」

「……はい」

リリアーナが付け加えると、美春は硬い表情で頷く。

「ただ、アキ様については一点、ミハル様にご報告しておかなければならないことがございます」

「何でしょうか？」

「ミハル様を我が国へお連れするにあたって、タカヒサ様は手紙の存在を伏せたまま、アキ様に協力を願いました。ミハル様とマサト

様を魔道船へ誘導するようにと」
「そう、だったんですね……」
美春は顔を曇らせて得心した。気づいていたようにも思える反応である。
「お気づきでしたか？」
「亜紀ちゃん、この国へ来てからずっと気まずそうにしていたので……」
そう言って、美春はこの城で暮らすようになってからの日々を振り返る。亜紀は美春と顔を合わせる度に何か言いたそうな顔をしていて、どこか後ろめたそうで、怯えたような顔をしていて、結局は口を噤んでいた。
（私は薄々気づいていて、亜紀ちゃんにそのことを言及しなかった。どうしてそんな真似をしたのって……。亜紀ちゃんと向かい合うことからずっと逃げてきた。ううん、ハルトさんのことだってそう。私が臆病で逃げ続けてきたから、こんなに遠く離れてしまった）
亜紀が間違っていると思っていても、見て見ぬふりをしてきたのだ。ハルトの前世を知らない状態でハルトから気持ちを伝えられた時も、目の前にいるハルトに惹かれながらも、ハルトではなく幼馴染である天川春人のことを考えてしまった。何かが変わり、大切にしてきたものが壊れてしまうことが怖かったから……。これは美春の弱さと言ってもいい。
こんな状況になるまで見て見ぬ振りをし続けてきたのだ。もう取り返しがつかなくなっているのかもしれない。だが、それでも――、
（私はもう逃げない。亜紀ちゃんからも、ハルトさんからも……。

誰かのことを理由にするんじゃなくて、自分のために。だから……！）

美春はまぶたを伏せて、深く息を吸ってから口を開く。

「リリアーナ様」

「はい」

リリアーナはしっかりと頷いて応じる。

「出発する直前で構いません。亜紀ちゃんと雅人君と三人でお話をする機会を頂いてもよろしいですか？　国を出てしまう前に、顔を合わせて話をしたいんです」

「畏まりました。お二人も同行されたいというのであれば、その際はお二人もお連れして国を出るとしましょう」

「……はい」

雅人はわからないけれど、たぶん、亜紀は来てくれないだろう。美春はそんな予感を抱きながら首肯した。そして――、

「本当は貴久君とも話はしておきたいんですけど……」

貴久のことを考え、美春は顔を曇らせる。国を出て行くと伝えれば、その時点で激しく反対されることが予想されるし、最悪、その時点で国の出奔が不可能になってしまうことだろう。

だが、それでも貴久は美春にとっては友人で、亜紀の兄なのだ。現状、貴久がした行いを許すことは到底できないし、貴久のために自分にできることも何もないが、だからこそ形容しがたいやるせなさがこみ上げてくる。

「……ミハル様が今のタカヒサ様とお話しをされても、余計に意固地になるだけでしょう」
「はい」
二人とも苦々しい顔で言う。
「……ただ、大変僭越ながら、もしお許しいただけるのであれば、タカヒサ様のことは私にお任せいただけませんか？」
リリアーナは逡巡しているのか、躊躇いがちに願い出た。
「リリアーナ様が貴久君とお話をされる、ということですか？」
美春はリリアーナの顔色を窺って訊く。
「はい。もちろん手紙のことやミハル様が国を出て行くつもりであることは伝えません。ですが、もしもタカヒサ様が現状を悔いておいでであるのなら、ご自分が誤ってしまったことをお認めになるのなら、それに越したことはありません。だから、最後に一度だけ、あの方とお話をしてみたいのです」
リリアーナはどこか不安にも見える表情で、その意図を語り――、
「これは、私の願いです。甘い女の我が儘と思ってくださって構いません。王女として……、いいえ、一個人としても、あの方のことは最後まで信じたいのです」
最後に、自らの思いを吐露した。その声は微かに震えている。
「リリアーナ様……。よろしいのですか？　本当に私を国から連れ

出してしまって……」

美春はリリアーナの心情を察したのか、息を呑むようにして問いかけた。

「はい。そのことに二言はございません」

リリアーナは自らの願いを口にした時と異なり、断固とした意思を覗かせる声で答える。覚悟が垣間見えた。

「……ありがとうございます」

美春は唇を震わせ、俯くように頭を下げる。

「お礼を仰っていただくことはございません。これは犯してしまった罪への償いにすぎないのですから」

リリアーナは困り顔で告げた。

「貴久君のこと、お願いいたします」

美春は謝意を示すように、深くこうべを垂れる。それ以上のことは、口にしなかった。今の自分が貴久にできることは何もないと思ったから。

「ありがとうございます」

今度はリリアーナが礼を言う。

「いえ、私の方こそお礼をおっしゃっていただくことは……」

ここで不意に、美春とリリアーナの視線が重なる。どちらともなく、ほんのわずかな笑いが零れた。

「ミハル様をハルト様の元へお連れするにあたっては、内々に出発することになるでしょう。ですから一週間、お時間を頂いてもよろしいでしょうか？　その間にすべての下準備を済ませます」

リリアーナは表情を引き締めて、そう告げる。

「はい」

美春はしっかりとした声色で返事をした。

「アキ様にマサト様へのお話は出発の直前に、私から場面をセッティングさせていただきます。私からタカヒサ様へのお話もその前後にいたします。急すぎる話となってしまうでしょうから、何をお話になるのか出発までにじっくりとお考えください」

迷いが残らないように……。リリアーナはそう言葉を続けた。

「わかりました」

「では、手紙はいかがなさいますか？　お手元に置いて自分で管理されたいというのであればお渡しいたしますが……」

「……いいえ。出発のその時まで、このままリリアーナ様が預かっていてくださいますか？」

リリアーナが訊くと、美春はおもむろに首を振る。

「承りました。では、この話は以降私から口にするまで、誰にも他

言なさらぬように」
「はい」
美春は緊張した面持ちでぎこちなく頷き、リリアーナと見つめ合う。こうして、この場での会話は終わりを迎えた。

◇　◇　◇

そして、一週間後の午前。リリアーナは貴久の部屋を訪れた。
「話ってなんだい、リリィ？」
貴久がやつれた顔で言う。ここ最近は部屋に閉じこもっている時間の方が多い。
「顔色があまり優れないようにお見受けします。きちんと食事は召し上がっていますか？　睡眠も十分にとっておいでですか？　体調に変化はございませんか？」
リリアーナは軽い嘆息を交えて問いかける。この問いを投げかけるのも、何度目だろうか。
「またその心配か……。大丈夫だよ。話がないなら出て行ってくれないか？」
貴久は億劫そうに顔を逸らして答えた。用がなければすぐに部屋の外へ出そうとするのも、いつものことだ。いつもならリリアーナもこれ以上は追求せず、黙って引き下がるようにしてきた。だが――、

「大丈夫には見えないからしつこく申し上げているのです」

今日は違った。

「……身体の具合が悪ければ今頃倒れているよ」

貴久は少し意外そうに間を空けてから応じる。不服よりも驚きが先に来た。

「悪いのは身体だけとは限りません」

「……どういう意味だい？」

ぴくりと反応する貴久。

「病は気から、とも言われております。タカヒサ様も心労が溜まっているから、顔色にそれが現れているのではないかと申し上げているのです」

リリアーナはズバリ指摘する。

「心労……？」

貴久は攻撃的な顔になってうそぶいた。

「ガルアーク王国でハルト様になさったこと、そしてミハル様達になさったことに罪悪感を覚えておいでなのでは？」

「どうして俺がそんなことをっ！？」

思わず声を荒らげる貴久。

「では、どうしてそこまで過敏に反応されるのですか？」

リリアーナは冷静な声音で尋ねる。

「ね、根も葉もないことを言われれば誰だって……」

貴久はまごついた後「誰でも驚いて動揺する」と答えた。

「なるほど。ハルト様の手紙を盗み見て、ミハル様達を魔道船に監禁する形で我が国へ招致したことは、タカヒサ様にとっては罪悪感を覚えるにたらない些事だということでしょうか」

「っ……」

貴久は絶句し、ぎゅっと下唇を噛む。ややあって――、

「誰も些事だなんて言っていない」

揚げ足をとって事実を評価しないでくれと、貴久はぶっきらぼうに付け足した。

「では、それが心労の原因であると？」

「別に心労なんて抱えていない」

「ならば、なぜずっと部屋に閉じこもっておいでなのですか？」

「……」

貴久は再び押し黙ってしまう。

「やはりタカヒサ様は罪悪感に押しつぶされそうになっているのではないでしょうか？」

「そんなことはない！」

意固地になって否定する貴久。

「ですが、ミハル様とも、マサト様とも、アキ様とも接触を避けておいでではありませんか。アキ様が日頃、タカヒサ様のお部屋を訪れたそうにしているのはご存じですか？　部屋の前まで足を運んでは、遠慮して立ち去ってしまうことが多いようですが」

「……」

貴久は肯定も否定もせず、苦虫を噛み潰したような顔になる。

「身近な方々の反応を予想しつつも気づかぬ振りをしているのは、お顔を合わせるのが後ろめたいからですか？」

淡々と尋ね続けるリリアーナ。

「っ……、さっきから誘導するように尋問しないでくれ。リリアーナの聞き方は卑怯だ！　俺にガルアーク王国でのことで罪悪感を抱いているって認めさせたいだけなんだろう？　その話をするだけなら、いい加減出ていってくれ！」

貴久はうんざりした顔で訴えた。

「そうやって逃げ続けて、いったいどれほどの時間が経ったとお思いですか？　今後もずっと逃げ続けるおつもりなのですか？　逃げ続けていればいつかミハル様達の方から追いかけてきてくれると、そんな都合の良いことをお考えだったりするのですか？」

「っ、いい加減に……っ！？」

ここで貴久は避け続けてきた視線をリリアーナに向けて、言葉を

失ってしまう。自分が視線を向けるよりも前から、リリアーナがずっと自分を見据えていたことに気づいたから。まっすぐ見つめてくるリリアーナの瞳が自分を責めているように思えて怖かった。

「貴方はひどく臆病な方なのですね」

リリアーナが悲しそうに言う。

「止めてくれ。俺を憐れむように、俺を見ないでくれ。もう出て行ってくれ……」

貴久が弱々しく呟く。

「……承知しました。では、これで最後です。この質問を最後に、もうこの件で貴方様に何かを求めることはいたしません。なので、最後に一つだけ、私の質問にお答えいただけませんか？」

そう語るリリアーナの声を聴いている内になぜか動悸がこみ上げてきて――、

「……いったいどんな質問を？」

貴久は恐る恐る訊いた。

「今からでもすべてを詳らかにして、ミハル様達にハルト様のもとへ向かう選択肢を提示するおつもりはございませんか？」

リリアーナは質問の内容を口にする。

「それだけはできないっ！　絶対に！」

貴久はひどく焦燥して答えた。瞬間――、

「然様ですか……」

リリアーナは涙を流さず、しかし悲しそうに首を縦に振った。そして、椅子から腰を上げる。

「それでは、失礼いたします」

そう言って、扉へ向かい歩きだすリリアーナ。だが――、

「個を犠牲にしてでも国を保つ」

不意に、貴久を振り返ってそんなことを言う。

「？」

疑問符を浮かべる貴久。

「それが王族としての正しい在り方だと、私は教わってきました」

リリアーナは首を傾げる貴久をよそに言葉を続けた。

「……何の話をしているんだ？」

「なんてことはございません。どうやら、私は王女失格のようです」

訝しそうに問いかける貴久に、リリアーナは儚げに笑ってから天井を仰いだ。

「……」

貴久は吸い込まれそうになるように、リリアーナに見とれる。ちゃんと彼女のことを見たのが、ずいぶんと久しぶりな気がした。しかし――、

「約束です。もうこの件でタカヒサ様のもとを伺うことはしません。それでは」

リリアーナはそのまま立ち去ってしまう。その直後……、ぱたんと、部屋の扉の閉まる音が虚しく響いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n1094bz/

精霊幻想記（Ｗｅｂ版）

2020年10月11日13時25分発行